User's Manual

32

Renesas RA4W1グループ

ユーザーズマニュアル　ハードウェア編

32-bit MCU
Renesas Advanced (RA) Family
Renesas RA4 - Efficiency Series

ルネサス エレクトロニクス
www.renesas.com

Rev.1.00　2020.08

ご注意書き

1. 本資料に記載された回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報は、半導体製品の動作例、応用例を説明するものです。お客様の機器・システムの設計において、回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報を使用する場合には、お客様の責任において行ってください。これらの使用に起因して生じた損害（お客様または第三者いずれに生じた損害も含みます。以下同じです。）に関し、当社は、一切その責任を負いません。
2. 当社製品、本資料に記載された製品データ、図、表、プログラム、アルゴリズム、応用回路例等の情報の使用に起因して発生した第三者の特許権、著作権その他の知的財産権に対する侵害またはこれらに関する紛争について、当社は、何らの保証を行うものではなく、また責任を負うものではありません。
3. 当社は、本資料に基づき当社または第三者の特許権、著作権その他の知的財産権を何ら許諾するものではありません。
4. 当社製品を、全部または一部を問わず、改造、改変、複製、リバースエンジニアリング、その他、不適切に使用しないでください。かかる改造、改変、複製、リバースエンジニアリング等により生じた損害に関し、当社は、一切その責任を負いません。
5. 当社は、当社製品の品質水準を「標準水準」および「高品質水準」に分類しており、各品質水準は、以下に示す用途に製品が使用されることを意図しております。

   標準水準：　コンピュータ、OA 機器、通信機器、計測機器、AV 機器、
   家電、工作機械、パーソナル機器、産業用ロボット等

   高品質水準：輸送機器（自動車、電車、船舶等）、交通制御（信号）、大規模通信機器、
   金融端末基幹システム、各種安全制御装置等

   当社製品は、データシート等により高信頼性、Harsh environment 向け製品と定義しているものを除き、直接生命・身体に危害を及ぼす可能性のある機器・システム（生命維持装置、人体に埋め込み使用するもの等）、もしくは多大な物的損害を発生させるおそれのある機器・システム（宇宙機器と、海底中継器、原子力制御システム、航空機制御システム、プラント基幹システム、軍事機器等）に使用されることを意図しておらず、これらの用途に使用することは想定していません。たとえ、当社が想定していない用途に当社製品を使用したことにより損害が生じても、当社は一切その責任を負いません。
6. 当社製品をご使用の際は、最新の製品情報（データシート、ユーザーズマニュアル、アプリケーションノート、信頼性ハンドブックに記載の「半導体デバイスの使用上の一般的な注意事項」等）をご確認の上、当社が指定する最大定格、動作電源電圧範囲、放熱特性、実装条件その他指定条件の範囲内でご使用ください。指定条件の範囲を超えて当社製品をご使用された場合の故障、誤動作の不具合および事故につきましては、当社は、一切その責任を負いません。
7. 当社は、当社製品の品質および信頼性の向上に努めていますが、半導体製品はある確率で故障が発生したり、使用条件によっては誤動作したりする場合があります。また、当社製品は、データシート等において高信頼性、Harsh environment 向け製品と定義しているものを除き、耐放射線設計を行っておりません。仮に当社製品の故障または誤動作が生じた場合であっても、人身事故、火災事故その他社会的損害等を生じさせないよう、お客様の責任において、冗長設計、延焼対策設計、誤動作防止設計等の安全設計およびエージング処理等、お客様の機器・システムとしての出荷保証を行ってください。特に、マイコンソフトウェアは、単独での検証は困難なため、お客様の機器・システムとしての安全検証をお客様の責任で行ってください。
8. 当社製品の環境適合性等の詳細につきましては、製品個別に必ず当社営業窓口までお問合せください。ご使用に際しては、特定の物質の含有・使用を規制する RoHS 指令等、適用される環境関連法令を十分調査のうえ、かかる法令に適合するようご使用ください。かかる法令を遵守しないことにより生じた損害に関して、当社は、一切その責任を負いません。
9. 当社製品および技術を国内外の法令および規則により製造・使用・販売を禁止されている機器・システムに使用することはできません。当社製品および技術を輸出、販売または移転等する場合は、「外国為替及び外国貿易法」その他日本国および適用される外国の輸出管理関連法規を遵守し、それらの定めるところに従い必要な手続きを行ってください。
10. お客様が当社製品を第三者に転売等される場合には、事前に当該第三者に対して、本ご注意書き記載の諸条件を通知する責任を負うものといたします。
11. 本資料の全部または一部を当社の文書による事前の承諾を得ることなく転載または複製することを禁じます。
12. 本資料に記載されている内容または当社製品についてご不明な点がございましたら、当社の営業担当者までお問合せください。

注 1.　本資料において使用されている「当社」とは、ルネサス エレクトロニクス株式会社およびルネサス エレクトロニクス株式会社が直接的、間接的に支配する会社をいいます。

注 2.　本資料において使用されている「当社製品」とは、注 1 において定義された当社の開発、製造製品をいいます。

(Rev.4.0-1　2017.11)

製品ご使用上の注意事項

ここでは、マイコン製品全体に適用する「使用上の注意事項」について説明します。個別の使用上の注意事項については、本ドキュメントおよびテクニカルアップデートを参照してください。

1. 静電気対策
   CMOS 製品の取り扱いの際は静電気防止を心がけてください。CMOS 製品は強い静電気によってゲート絶縁破壊を生じることがあります。運搬や保存の際には、当社が出荷梱包に使用している導電性のトレーやマガジンケース、導電性の緩衝材、金属ケースなどを利用し、組み立て工程にはアースを施してください。プラスチック板上に放置したり、端子を触ったりしないでください。また、CMOS 製品を実装したボードについても同様の扱いをしてください。
2. 電源投入時の処置
   電源投入時は、製品の状態は不定です。電源投入時には、LSI の内部回路の状態は不確定であり、レジスタの設定や各端子の状態は不定です。外部リセット端子でリセットする製品の場合、電源投入からリセットが有効になるまでの期間、端子の状態は保証できません。同様に、内蔵パワーオンリセット機能を使用してリセットする製品の場合、電源投入からリセットのかかる一定電圧に達するまでの期間、端子の状態は保証できません。
3. 電源オフ時における入力信号
   当該製品の電源がオフ状態のときに、入力信号や入出力プルアップ電源を入れないでください。入力信号や入出力プルアップ電源からの電流注入により、誤動作を引き起こしたり、異常電流が流れ内部素子を劣化させたりする場合があります。資料中に「電源オフ時における入力信号」についての記載のある製品は、その内容を守ってください。
4. 未使用端子の処理
   未使用端子は、「未使用端子の処理」に従って処理してください。CMOS 製品の入力端子のインピーダンスは、一般に、ハイインピーダンスとなっています。未使用端子を開放状態で動作させると、誘導現象により、LSI 周辺のノイズが印加され、LSI 内部で貫通電流が流れたり、入力信号と認識されて誤動作を起こす恐れがあります。
5. クロックについて
   リセット時は、クロックが安定した後、リセットを解除してください。プログラム実行中のクロック切り替え時は、切り替え先クロックが安定した後に切り替えてください。リセット時、外部発振子（または外部発振回路）を用いたクロックで動作を開始するシステムでは、クロックが十分安定した後、リセットを解除してください。また、プログラムの途中で外部発振子（または外部発振回路）を用いたクロックに切り替える場合は、切り替え先のクロックが十分安定してから切り替えてください。
6. 入力端子の印加波形
   入力ノイズや反射波による波形歪みは誤動作の原因になりますので注意してください。CMOS 製品の入力がノイズなどに起因して、V_{IL}（Max.）から V_{IH}（Min.）までの領域にとどまるような場合は、誤動作を引き起こす恐れがあります。入力レベルが固定の場合はもちろん、V_{IL}（Max.）から V_{IH}（Min.）までの領域を通過する遷移期間中にチャタリングノイズなどが入らないように使用してください。
7. リザーブアドレス（予約領域）のアクセス禁止
   リザーブアドレス（予約領域）のアクセスを禁止します。アドレス領域には、将来の拡張機能用に割り付けられている リザーブアドレス（予約領域）があります。これらのアドレスをアクセスしたときの動作については、保証できませんので、アクセスしないようにしてください。
8. 製品間の相違について
   型名の異なる製品に変更する場合は、製品型名ごとにシステム評価試験を実施してください。同じグループのマイコンでも型名が違うと、フラッシュメモリ、レイアウトパターンの相違などにより、電気的特性の範囲で、特性値、動作マージン、ノイズ耐量、ノイズ幅射量などが異なる場合があります。型名が違う製品に変更する場合は、個々の製品ごとにシステム評価試験を実施してください。

はじめに

1. このマニュアルについて

このマニュアルは主に、製品の概要、CPU、システム制御機能、周辺機能、電気的特性の仕様および使用上の注意事項で構成されています。このマニュアルはマイクロコントローラ（MCU）のスーパーセットの製品特性を記述します。お客様の製品によっていくつかの端子、レジスタまたは機能が存在しないものがある場合があります。使用できないレジスタが割り当てられているアドレス空間は予約されています。

2. 対象読者

このマニュアルは、本 MCU を使用したプログラミングアプリケーションを設計およびプログラミングするシステム設計者を対象としています。読者には、電気回路、論理回路および MCU に関する基本的な知識が求められます。

3. 関連ドキュメント

弊社では、本 MCU 用に下記のドキュメントを提供しています。

ドキュメントの種類	内容
データシート	特長、概要およびMCUの電気的特性
ユーザーズマニュアル　ハードウェア編	ピン配置、メモリマップ、周辺機能、電気特性、タイミング図、および動作記述などのMCU仕様
アプリケーションノート	テクニカルノート、ボードデザインのガイドラインおよびソフトウェア移行情報
テクニカルアップデート（TU）	制限や正誤表などの製品仕様に関する予備レポート

4. 数値の表記法

数値には、このマニュアル全体を通じて下記の表記法が用いられています。

例	内容
011b	2進数。たとえば、数値3を2進数で表記すると011bになります。
1Fh	16進数。たとえば、数値31を16進数で表記すると1Fhになります。場合によっては、C/C++フォーマットに基づいて、プレフィックス0xが付いた16進数が示されます。
1234	10進数。一般的に10進数には後付き記号を付けません。

5. シンボルの表記法

シンボルには、このマニュアル全体を通じて下記の表記法が用いられています。

例	内容
ICU.NMICR.NMIMD	機能モジュールのシンボル（ICU）、レジスタのシンボル（NMICR）、およびビットフィールドのシンボル（NMIMD）は、ピリオドで区切られます。
ICU.NMICR	機能モジュールのシンボル（ICU）とレジスタのシンボル（NMICR）は、ピリオドで区切られます。
NMICR.NMIMD	レジスタのシンボル（NMICR）とビットフィールドのシンボル（NMIMD）は、ピリオドで区切られます。
NFCLKSEL[1:0]	レジスタビット名において、角括弧内に記されたビット範囲は、その位置におけるフィールドのビット番号を示します。たとえば、NFCLKSEL[1:0]はNMI端子割り込みコントロールレジスタ(NMICR)の指定位置の2ビットフィールドを表します。

6. 単位記号

下記の単位記号は誤解を招くことがあります。これらの単位記号は、このマニュアル全体を通して下記の意味で用いられます。

例	内容
b	Bit
B	Byte この単位記号は、一般にMCUおよびアドレススペースのメモリ指定に使用されます。
k	1000 = 10^3 kは1024（2^{10}）を表すのにも使用されますが、この単位記号はこのマニュアル全体を通して1000（10^3）表すために使用されます。
K	1024 = 2^{10} この単位記号は、このマニュアル全体を通して1000（10^3）ではなく1024（2^{10}）を表すために使用されます。

7. 特殊用語

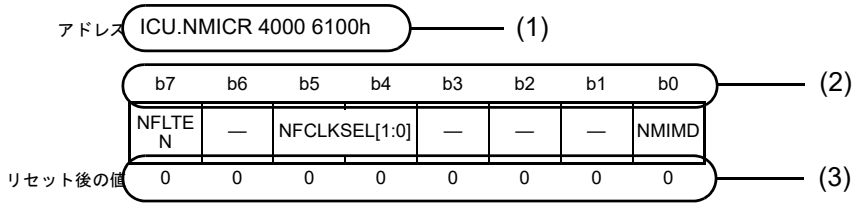
下記の用語には特殊な意味があります。

用語	内容
NC	非接続の端子。NCは、端子がMCUに接続されていないことを意味します。
Hi-Z	ハイインピーダンス

8. レジスタの説明

各章の「レジスタの説明」には、ビットの並びを示すレジスタ配置図と、各ビットの内容を説明するレジスタのビット機能表があります。これらの表で使用されている記号例については、以降の項で説明します。以下は、レジスタの説明および関連するビットフィールド定義の例です。

X.X.X NMI 端子割り込みコントロールレジスタ（NMICR）



(4) (5) (6)

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	NMIMD	NMI検出設定	0：立ち下がりエッジ 1：立ち上がりエッジ	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	NFCLKSEL[1:0]	NMIデジタルフィルタサンプリングクロック選択	b5 b4 0 0：PCLKB 0 1：PCLKB/8 1 0：PCLKB/32 1 1：PCLKB/64	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	NFLTEN	NMIデジタルフィルタ有効	0：デジタルフィルタ無効 1：デジタルフィルタ有効	R/W

(1) 機能モジュールのシンボル、レジスタのシンボル、およびアドレス割り当て

この部分には、通常、機能モジュールのシンボル、レジスタのシンボル、およびこのレジスタのアドレス割り当てが記載されます。たとえば、ICU.NMICR 4000 6100h は、割り込みコントローラユニット（ICU）の NMI 端子割り込みコントロールレジスタ（NMICR）がアドレス 4000 6100h に割り当てられることを表します。

(2) ビット番号

この番号はビット番号を表します。32 ビットレジスタの場合は b31 ～ b0 の順に、16 ビットレジスタの場合は b15 ～ b0 の順に、8 ビットレジスタの場合は b7 ～ b0 の順に示されます。

(3) リセット後の値

これらのシンボルや数字は、ハードリセット後の各ビット値を示しています。特に記載のない限り、値は 2 進数で示されます。

0：ハードリセット後、値は 0
1：ハードリセット後、値は 1
x：ハードリセット後、値は不定

(4) ビットシンボル

ビットシンボルは、ビットフィールドの略名です。予約ビットの場合は、— と表記されます。

(5) ビット名

ビット名は、ビットフィールドの正式名です。

(6) R/W

R/W 列は、そのビットフィールドが読み出し可能であるか書き込み可能であるかを示します。

R/W： 読み出しも書き込みも可能
R/(W)：読み出しも書き込みも可能。しかし、本ビットフィールドに書き込むにはいくつかの制限があります。制限の詳細については、それぞれのレジスタの説明または注釈を参照してください。
R： 読み出しのみ可能。書き込みは無効
W： 書き込みのみ可能。読み出し値は不定

9. 略称

このマニュアルで使用する略称が下表に示されています。

略称	内容
AES	Advanced Encryption Standard（高度暗号化標準）
AHB	Advanced High-performance Bus（アドバンストハイパフォーマンスバス）
AHB-AP	AHB Access Port（AHBアクセスポート）
APB	Advanced Peripheral Bus（アドバンスト周辺バス）
ARC	Alleged RC（Alleged RC暗号）
ATB	Advanced Trace Bus（アドバンストトレースバス）
BCD	Binary Coded Decimal（2進化10進数）
BSDL	Boundary Scan Description Language（バウンダリスキャン記述言語）
DES	Data Encryption Standard（データ暗号化標準）
DSA	Digital Signature Algorithm（デジタル署名アルゴリズム）
ECC	Error Correction Code（誤り訂正コード）
ETB	Embedded Trace Buffer（エンベデッドトレースバッファ）
ETM	Embedded Trace Macrocell（エンベデッドトレースマクロセル）
FLL	Frequency Locked Loop（周波数安定化ループ回路）
FPU	Floating Point Unit（浮動小数点ユニット）
GSM	Global System for Mobile communications（第2世代移動通信システム (2G) 規格）
HMI	Human Machine Interface（ヒューマンマシーンインタフェース）
IrDA	Infrared Data Association（赤外線通信協会／規格）
LSB	Least Significant Bit（最下位ビット）
MSB	Most Significant Bit（最上位ビット）
NVIC	Nested Vector Interrupt Controller（ネスト型ベクタ割り込みコントローラ）
PC	Program Counter（プログラムカウンタ）
PFS	Port Function Select（ポート機能選択）
PLL	Phase Locked Loop（位相同期回路）
POR	Power-on Reset（パワーオンリセット）
PWM	Pulse Width Modulation（パルス幅変調）
RSA	Rivest Shamir Adleman（Rivest/Shamir/Adlemanによる公開鍵暗号方式）
SHA	Secure Hash Algorithm（セキュアハッシュアルゴリズム）
S/H	Sample and Hold（サンプルアンドホールド）
SP	Stack Pointer（スタックポインタ）
SWD	Serial Wire Debug（シリアルワイヤデバッグ）
SW-DP	Serial Wire-Debug Port（シリアルワイヤデバッグポート）
TRNG	True Random Number Generator（真性乱数発生器）
UART	Universal Asynchronous Receiver/Transmitter（調歩同期式シリアルインタフェース）

10. 所有権通知

このマニュアルに含まれるすべてのテキスト、画像、写真、商標、ロゴ、挿絵、コンピュータコード（総称して「コンテンツ」）は、ルネサスが所有、管理、またはライセンス保持するものであり、トレードドレス法、著作権法、特許法、商標法、その他の知的所有権法、不当競争法で保護されています。このマニュアルに明示的に記述されている場合を除いて、ルネサスから事前に承諾書を得ることなく、このマニュアルの一部またはコンテンツを、公開または頒布目的で、あるいは営利目的で、コピー、複製、再版、掲載、開示、エンコード、翻訳、伝送すること、およびいかなる媒体においても配布することは禁じられています。

Arm® および Cortex® は、Arm Limited の登録商標です。CoreSight™ は Arm Limited の商標です。

CoreMark® は、Embedded Microprocessor Benchmark Consortium の登録商標です。

Magic Packet™ は、Advanced Micro Devices、Inc. の商標です。

SuperFlash® は、Silicon Storage Technology、Inc. の日本と米国を含むいくつかの国での登録商標です。

Bluetooth® は Bluetooth SIG, Inc. の登録商標です。

このマニュアルに記載されているその他のブランド名は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

特長 47

1. 概要 48

1.1 機能の概要 48

1.2 ブロック図 54

1.3 型名 55

1.4 機能の比較 56

1.5 端子機能 57

1.6 ピン配置図 60

1.7 端子一覧 61

2. CPU 64

2.1 概要 64

2.1.1 CPU 64

2.1.2 デバッグ 64

2.1.3 動作周波数 65

2.2 MCU の実装オプション 66

2.3 トレースインタフェース 67

2.4 JTAG/SWD インタフェース 67

2.5 デバッグモード 67

2.5.1 デバッグモード定義 67

2.5.2 デバッグモードの影響 68

2.5.2.1 低消費電力モード 68

2.5.2.2 リセット 68

2.6 プログラマモデル 69

2.6.1 アドレス空間 69

2.6.2 Cortex-M4 ペリフェラルアドレスマップ 69

2.6.3 CoreSight ROM テーブル 70

2.6.3.1 ROM エントリ 70

2.6.3.2 CoreSight コンポーネントレジスタ 70

2.6.4 DBGREG モジュール 71

2.6.4.1 デバッグステータスレジスタ（DBGSTR） 71

2.6.4.2 デバッグストップコントロールレジスタ（DBGSTOPCR） 72

2.6.4.3 トレースコントロールレジスタ（TRACECTR） 73

2.6.4.4 DBGREG CoreSight コンポーネントレジスタ 73

2.6.5 OCDREG モジュール 74

2.6.5.1 ID 認証コードレジスタ（IAUTH0 ～ 3） 74

2.6.5.2 MCU ステータスレジスタ（MCUSTAT） 75

2.6.5.3 MCU コントロールレジスタ（MCUCTRL） 76

2.6.5.4 OCDREG CoreSight コンポーネントレジスタ 76

2.7 CoreSight ATB ファネル 77

2.8 フラッシュパッチ & ブレークユニット 77
2.9 SysTick システムタイマ 77
2.10 CoreSight タイムスタンプジェネレータ 78
2.11 OCD エミュレータ接続 78
2.11.1 DBGEN 78
2.11.2 アンロック ID コード 78
2.11.3 OCD エミュレータ接続における制限 79
2.11.3.1 低消費電力モード中の接続開始 79
2.11.3.2 OCD モードにおける低消費電力モードの切り替え 79
2.11.3.3 OSIS におけるアンロック ID コードの変更 79
2.11.3.4 接続順序と JTAG/SWD 認証 79
2.12 参考資料 81
3. 動作モード 82
3.1 概要 82
3.2 動作モードの説明 82
3.2.1 シングルチップモード 82
3.2.2 SCI ブートモード 82
3.2.3 USB ブートモード 82
3.3 動作モード遷移 83
3.3.1 モード設定端子による動作モード遷移 83
4. アドレス空間 84
4.1 概要 84
5. メモリミラー機能（MMF） 85
5.1 概要 85
5.2 レジスタの説明 86
5.2.1 MemMirror 特殊機能レジスタ（MMSFR） 86
5.2.2 MemMirror イネーブルレジスタ（MMEN） 87
5.3 動作説明 88
5.3.1 メモリミラー機能動作 88
5.3.2 設定例 92
6. リセット 93
6.1 概要 93
6.2 レジスタの説明 97
6.2.1 リセットステータスレジスタ 0（RSTSR0） 97
6.2.2 リセットステータスレジスタ 1（RSTSR1） 99
6.2.3 リセットステータスレジスタ 2（RSTSR2） 101
6.3 動作説明 102
6.3.1 RES 端子リセット 102
6.3.2 パワーオンリセット 103
6.3.3 電圧監視リセット 104
6.3.4 独立ウォッチドッグタイマリセット 105

6.3.5 ウォッチドッグタイマリセット 105
6.3.6 ソフトウェアリセット 105
6.3.7 コールドスタート／ウォームスタート判定機能 106
6.3.8 リセット発生要因の判定 107
7. オプション設定メモリ 108
7.1 概要 108
7.2 レジスタの説明 109
7.2.1 オプション機能選択レジスタ 0（OFS0） 109
7.2.2 オプション機能選択レジスタ 1（OFS1） 113
7.2.3 MPU レジスタ 114
7.2.4 アクセスウィンドウ設定コントロールレジスタ（AWSC） 115
7.2.5 アクセスウィンドウ設定レジスタ（AWS） 116
7.2.6 OCD ／シリアルプログラマ ID 設定レジスタ（OSIS） 118
7.3 オプション設定メモリの設定方法 119
7.3.1 オプション設定メモリへのデータの配置方法 119
7.3.2 オプション設定メモリにプログラムするデータの設定方法 119
7.4 使用上の注意事項 119
7.4.1 オプション設定メモリの予約領域および予約ビットにプログラムするデータ 119
8. 低電圧検出（LVD） 120
8.1 概要 120
8.2 レジスタの説明 122
8.2.1 電圧モニタ 1 回路コントロールレジスタ 1（LVD1CR1） 122
8.2.2 電圧モニタ 1 回路ステータスレジスタ（LVD1SR） 122
8.2.3 電圧モニタ回路コントロールレジスタ（LVCMPCR） 123
8.2.4 電圧検出レベル選択レジスタ（LVDLVLR） 123
8.2.5 電圧モニタ 1 回路コントロールレジスタ 0（LVD1CR0） 124
8.3 VCC 入力電圧のモニタ 125
8.3.1 V_{det0} のモニタ 125
8.3.2 V_{det1} のモニタ 125
8.4 電圧監視 0 リセット 126
8.5 電圧監視 1 割り込み、電圧監視 1 リセット 127
8.6 イベントリンク出力機能 129
8.6.1 割り込み処理とイベントリンクの関係 129
9. クロック発生回路 130
9.1 概要 130
9.2 レジスタの説明 135
9.2.1 システムクロック分周コントロールレジスタ（SCKDIVCR） 135
9.2.2 システムクロックソースコントロールレジスタ（SCKSCR） 137
9.2.3 PLL クロックコントロールレジスタ 2（PLLCCR2） 138
9.2.4 PLL コントロールレジスタ（PLLCR） 139
9.2.5 メモリウェイトサイクルコントロールレジスタ（MEMWAIT） 140

9.2.6 メインクロック発振器コントロールレジスタ（MOSCCR） 143
9.2.7 サブクロック発振器コントロールレジスタ（SOSCCR） 144
9.2.8 低速オンチップオシレータコントロールレジスタ（LOCOCR） 145
9.2.9 高速オンチップオシレータコントロールレジスタ（HOCOCR） 146
9.2.10 中速オンチップオシレータコントロールレジスタ（MOCOCR） 147
9.2.11 発振安定フラグレジスタ（OSCSF） 148
9.2.12 発振停止検出コントロールレジスタ（OSTDCR） 150
9.2.13 発振停止検出ステータスレジスタ（OSTDSR） 151
9.2.14 メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR） 152
9.2.15 高速オンチップオシレータウェイトコントロールレジスタ（HOCOWTCR） 153
9.2.16 メインクロック発振器モードコントロールレジスタ（MOMCR） 154
9.2.17 サブクロック発振器モードコントロールレジスタ（SOMCR） 154
9.2.18 セグメント LCD ソースクロックコントロールレジスタ（SLCDSCKCR） 155
9.2.19 クロックアウトコントロールレジスタ（CKOCR） 156
9.2.20 LOCO ユーザトリミングコントロールレジスタ（LOCOUTCR） 157
9.2.21 MOCO ユーザトリミングコントロールレジスタ（MOCOUTCR） 158
9.2.22 HOCO ユーザトリミングコントロールレジスタ（HOCOUTCR） 159
9.2.23 トレースクロックコントロールレジスタ（TRCKCR） 159
9.2.24 USB クロックコントロールレジスタ（USBCKCR） 160
9.3 メインクロック発振器 161
9.3.1 水晶振動子を接続する方法 161
9.3.2 外部クロックを入力する方法 161
9.3.3 外部クロック入力に関する注意事項 161
9.4 サブクロック発振器 162
9.4.1 32.768kHz 水晶振動子を接続する方法 162
9.5 Bluetooth 専用クロック発振器 163
9.5.1 発振子を接続する方法 163
9.5.2 Bluetooth 専用クロック出力端子の接続方法 163
9.6 発振停止検出機能 164
9.6.1 発振停止検出と検出後の動作 164
9.6.2 発振停止検出割り込み 166
9.7 PLL 回路 166
9.8 内部クロック 167
9.8.1 システムクロック（ICLK） 168
9.8.2 周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD） 169
9.8.3 フラッシュインタフェースクロック（FCLK） 169
9.8.4 USB クロック（UCLK） 169
9.8.5 CAN クロック（CANMCLK） 169
9.8.6 CAC クロック（CACCLK） 170
9.8.7 RTC 専用クロック（RTCSCLK、RTCLCLK） 170
9.8.8 IWDT 専用クロック（IWDTCLK） 170

9.8.9 AGT 専用クロック（AGTSCLK、AGTLCLK） 170
9.8.10 SysTick タイマ専用クロック（SYSTICCLK） 170
9.8.11 セグメント LCDC ソースクロック（LCDSRCCLK） 170
9.8.12 クロック／ブザー出力クロック（CLKOUT） 171
9.8.13 JTAG クロック（JTAGTCK） 171
9.8.14 BLE のクロック 171
9.9 使用上の注意事項 172
9.9.1 クロック発生回路に関する注意事項 172
9.9.2 発振子に関する注意事項 172
9.9.3 ボード設計に関する注意事項 172
9.9.4 発振子接続端子に関する注意事項 172
10. クロック周波数精度測定回路（CAC） 173
10.1 概要 173
10.2 レジスタの説明 175
10.2.1 CAC コントロールレジスタ 0（CACR0） 175
10.2.2 CAC コントロールレジスタ 1（CACR1） 176
10.2.3 CAC コントロールレジスタ 2（CACR2） 177
10.2.4 CAC 割り込みコントロールレジスタ（CAICR） 178
10.2.5 CAC ステータスレジスタ（CASTR） 179
10.2.6 CAC 上限値設定レジスタ（CAULVR） 180
10.2.7 CAC 下限値設定レジスタ（CALLVR） 180
10.2.8 CAC カウンタバッファレジスタ（CACNTBR） 180
10.3 動作説明 181
10.3.1 クロック周波数測定 181
10.3.2 CACREF 端子のデジタルフィルタ機能 182
10.4 割り込み要求 182
10.5 使用上の注意事項 182
10.5.1 モジュールストップ機能の設定 182
11. 低消費電力モード 183
11.1 概要 183
11.2 レジスタの説明 188
11.2.1 スタンバイコントロールレジスタ（SBYCR） 188
11.2.2 モジュールストップコントロールレジスタ A（MSTPCRA） 189
11.2.3 モジュールストップコントロールレジスタ B（MSTPCRB） 190
11.2.4 モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC） 192
11.2.5 モジュールストップコントロールレジスタ D（MSTPCRD） 193
11.2.6 動作電力コントロールレジスタ（OPCCR） 194
11.2.7 サブ動作電力コントロールレジスタ（SOPCCR） 195
11.2.8 スヌーズコントロールレジスタ（SNZCR） 196
11.2.9 スヌーズ終了コントロールレジスタ（SNZEDCR） 197
11.2.10 スヌーズ要求コントロールレジスタ（SNZREQCR） 199

11.2.11 フラッシュ動作コントロールレジスタ（FLSTOP） 201
11.2.12 パワーセーブメモリコントロールレジスタ（PSMCR） 202
11.2.13 システムコントロール OCD コントロールレジスタ（SYOCDCR） 202
11.3 クロックの切り替えによる消費電力の低減 203
11.4 モジュールストップ機能 203
11.5 低消費電力機能 203
11.5.1 動作電力制御モードの設定方法 203
11.5.2 動作範囲 206
11.6 スリープモード 209
11.6.1 スリープモードへの遷移 209
11.6.2 スリープモードの解除 209
11.7 ソフトウェアスタンバイモード 211
11.7.1 ソフトウェアスタンバイモードへの遷移 211
11.7.2 ソフトウェアスタンバイモードの解除 212
11.7.3 ソフトウェアスタンバイモードの応用例 213
11.8 スヌーズモード 214
11.8.1 スヌーズモードへの遷移 214
11.8.2 スヌーズモードの解除 215
11.8.3 ソフトウェアスタンバイモードへの復帰 216
11.8.4 スヌーズモードの動作例 218
11.9 使用上の注意事項 221
11.9.1 レジスタアクセス 221
11.9.2 I/O ポートの状態 223
11.9.3 DMAC と DTC のモジュールストップ状態 223
11.9.4 内部割り込み要因 223
11.9.5 低消費電力モードへの遷移 223
11.9.6 WFI 命令のタイミング 223
11.9.7 スリープモード／スヌーズモード時の DMAC または DTC による WDT/IWDT レジスタの書き込みについて 223
11.9.8 スヌーズモードにおける発振器について 224
11.9.9 RXD0 の立ち下がりエッジによるスヌーズモードエントリ 224
11.9.10 スヌーズモードにおける SCI0 の使用 224
11.9.11 スヌーズモードにおける A/D 変換開始条件 224
11.9.12 スヌーズモードにおける CTSU の条件 224
11.9.13 スヌーズモードにおける ELC イベント 225
11.9.14 ADC140 に対するモジュールストップ機能 225
11.9.15 未使用回路に対するモジュールストップ機能 225
12. バッテリバックアップ機能 226
12.1 概要 226
12.1.1 バッテリバックアップ機能 226
12.1.2 バッテリ電源スイッチ 226

12.1.3 VBATT 端子低電圧検出 226
12.1.4 VBATT_R 低電圧検出 226
12.1.5 バックアップレジスタ 227
12.1.6 VBATT ウェイクアップコントロール機能 227
12.1.7 時間キャプチャ端子検出 227
12.2 レジスタの説明 229
12.2.1 VBATT コントロールレジスタ 1（VBTCR1） 229
12.2.2 VBATT コントロールレジスタ 2（VBTCR2） 230
12.2.3 VBATT ステータスレジスタ（VBTSR） 231
12.2.4 VBATT コンパレータコントロールレジスタ（VBTCMPCR） 232
12.2.5 VBATT 端子低電圧検出割り込みコントロールレジスタ（VBTLVDICR） 232
12.2.6 VBATT バックアップレジスタ（VBTBKRn）(n = 0 ～ 511) 233
12.2.7 VBATT ウェイクアップコントロールレジスタ（VBTWCTLR） 233
12.2.8 VBATT ウェイクアップ I/O 0 出力トリガ選択レジスタ（VBTWCH0OTSR） 234
12.2.9 VBATT 入力コントロールレジスタ（VBTICTLR） 234
12.2.10 VBATT 出力コントロールレジスタ（VBTOCTLR） 235
12.2.11 VBATT ウェイクアップトリガ要因イネーブルレジスタ（VBTWTER） 236
12.2.12 VBATT ウェイクアップトリガ要因エッジレジスタ（VBTWEGR） 236
12.2.13 VBATT ウェイクアップトリガ要因フラグレジスタ（VBTWFR） 237
12.2.14 バックアップレジスタアクセスコントロールレジスタ（BKRACR） 238
12.3 動作説明 239
12.3.1 バッテリバックアップ機能 239
12.3.2 VBATT バッテリ電源スイッチの使用法 241
12.3.3 VBATT 端子低電圧検出の手順 241
12.3.4 VBATT バックアップレジスタの使用法 242
12.3.5 VBATT ウェイクアップコントロール機能の使用法 243
12.4 使用上の注意事項 245
13. レジスタライトプロテクション 246
13.1 概要 246
13.2 レジスタの説明 247
13.2.1 プロテクトレジスタ（PRCR） 247
14. 割り込みコントローラユニット（ICU） 248
14.1 概要 248
14.2 レジスタの説明 250
14.2.1 IRQ コントロールレジスタ i（IRQCRi）（i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15） 250
14.2.2 ノンマスカブル割り込みステータスレジスタ（NMISR） 252
14.2.3 ノンマスカブル割り込みイネーブルレジスタ（NMIER） 255
14.2.4 ノンマスカブル割り込みステータスクリアレジスタ（NMICLR） 257
14.2.5 NMI 端子割り込みコントロールレジスタ（NMICR） 259
14.2.6 ICU イベントリンク設定レジスタ n（IELSRn） 260
14.2.7 DMAC イベントリンク設定レジスタ n（DELSRn） 262

14.2.8 SYS イベントリンク設定レジスタ（SELSR0） 263
14.2.9 ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ（WUPEN） 264
14.3 ベクタテーブル 266
14.3.1 割り込みベクタテーブル 266
14.3.2 イベント番号 268
14.4 割り込み動作 273
14.4.1 割り込みの検出 273
14.4.2 割り込み要求先の選択 275
14.4.2.1 CPU 割り込み要求 275
14.4.2.2 DTC の起動 275
14.4.2.3 DMAC の起動 276
14.4.3 デジタルフィルタ 276
14.4.4 外部端子割り込み 277
14.5 ノンマスカブル割り込み動作 278
14.6 低消費電力モードからの復帰 279
14.6.1 スリープモードからの復帰 279
14.6.2 ソフトウェアスタンバイモードからの復帰 279
14.6.3 スヌーズモードからの復帰 279
14.7 ノンマスカブル割り込みとともに WFI 命令を使用する場合 280
14.8 参考資料 280
15. バス 281
15.1 概要 281
15.2 バスの説明 283
15.2.1 メインバス 283
15.2.2 スレーブインタフェース 283
15.2.3 並列動作 284
15.2.4 エンディアン形式に関する制限事項 284
15.3 レジスタの説明 285
15.3.1 マスタバスコントロールレジスタ（BUSMCNT<master>） 285
15.3.2 スレーブバスコントロールレジスタ（BUSSCNT<slave>） 286
15.3.3 バスエラーアドレスレジスタ（BUSnERRADD）(n = 1 ～ 4) 287
15.3.4 バスエラーステータスレジスタ（BUSnERRSTAT）(n = 1 ～ 4) 288
15.4 バスエラー監視部 289
15.4.1 バスに生じるエラーの種類 289
15.4.2 バスエラー発生時の動作 289
15.4.3 不正アドレスアクセスエラーを引き起こす条件 290
15.4.4 タイムアウト 291
15.5 フラッシュキャッシュ使用時の注意事項 291
15.6 参考資料 291
16. メモリプロテクションユニット（MPU） 292
16.1 概要 292

16.2 CPU スタックポインタモニタ 293
16.2.1 レジスタの保護 295
16.2.2 オーバーフローエラーとアンダーフローエラー 295
16.2.3 レジスタの説明 296
16.2.3.1 メインスタックポインタ（MSP）モニタ開始アドレスレジスタ（MSPMPUSA） 296
16.2.3.2 メインスタックポインタ（MSP）モニタ終了アドレスレジスタ（MSPMPUEA） 296
16.2.3.3 プロセススタックポインタ（PSP）モニタ開始アドレスレジスタ（PSPMPUSA） 297
16.2.3.4 プロセススタックポインタ（PSP）モニタ終了アドレスレジスタ（PSPMPUEA） 297
16.2.3.5 スタックポインタモニタ検出後動作レジスタ（MSPMPUOAD, PSPMPUOAD） 298
16.2.3.6 スタックポインタモニタアクセスコントロールレジスタ（MSPMPUCTL, PSPMPUCTL） 299
16.2.3.7 スタックポインタモニタ保護レジスタ（MSPMPUPT, PSPMPUPT） 300
16.3 Arm MPU 301
16.4 バスマスタ MPU 302
16.4.1 レジスタの説明 304
16.4.1.1 グループ A 領域 n 開始アドレスレジスタ（MMPUSAn）(n = 0 ～ 15) 304
16.4.1.2 グループ A 領域 n 終了アドレスレジスタ（MMPUEAn）(n = 0 ～ 15) 304
16.4.1.3 グループ A 領域 n アクセスコントロールレジスタ（MMPUACAn）(n = 0 ～ 15) 305
16.4.1.4 バスマスタ MPU コントロールレジスタ（MMPUCTLA） 307
16.4.1.5 グループ A レジスタ保護（MMPUPTA） 308
16.4.2 動作説明 309
16.4.2.1 メモリプロテクション 309
16.4.2.2 レジスタの保護 311
16.4.2.3 メモリプロテクションエラー 311
16.5 バススレーブ MPU 312
16.5.1 レジスタの説明 313
16.5.1.1 メモリバス 3 アクセスコントロールレジスタ（SMPUMBIU） 313
16.5.1.2 内部周辺バス 9 アクセスコントロールレジスタ（SMPUFBIU） 314
16.5.1.3 メモリバス 4 アクセスコントロールレジスタ（SMPUSRAM0） 315
16.5.1.4 内部周辺バス 1 アクセスコントロールレジスタ（SMPUP0BIU） 316
16.5.1.5 内部周辺バス 3 アクセスコントロールレジスタ（SMPUP2BIU） 317
16.5.1.6 内部周辺バス 7 アクセスコントロールレジスタ（SMPUP6BIU） 318
16.5.1.7 スレーブ MPU コントロールレジスタ（SMPUCTL） 319
16.5.2 機能説明 320
16.5.2.1 メモリプロテクション 320
16.5.2.2 レジスタの保護 320
16.5.2.3 メモリプロテクションエラー 320

16.6 セキュリティ MPU 321
16.6.1 レジスタの説明（オプション設定メモリ） 322
16.6.1.1 セキュリティ MPU プログラムカウンタ開始アドレスレジスタ（SECMPUPCSn）（n = 0, 1） 322
16.6.1.2 セキュリティ MPU プログラムカウンタ終了アドレスレジスタ（SECMPUPCEn）（n = 0, 1） 323
16.6.1.3 セキュリティ MPU 領域 0 開始アドレスレジスタ（SECMPUS0） 323
16.6.1.4 セキュリティ MPU 領域 0 終了アドレスレジスタ（SECMPUE0） 324
16.6.1.5 セキュリティ MPU 領域 1 開始アドレスレジスタ（SECMPUS1） 324
16.6.1.6 セキュリティ MPU 領域 1 終了アドレスレジスタ（SECMPUE1） 325
16.6.1.7 セキュリティ MPU 領域 2 開始アドレスレジスタ（SECMPUS2） 325
16.6.1.8 セキュリティ MPU 領域 2 終了アドレスレジスタ（SECMPUE2） 326
16.6.1.9 セキュリティ MPU 領域 3 開始アドレスレジスタ（SECMPUS3） 326
16.6.1.10 セキュリティ MPU 領域 3 終了アドレスレジスタ（SECMPUE3） 327
16.6.1.11 セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ（SECMPUAC） 328
16.6.2 メモリプロテクション 329
16.6.3 デバッグに関する注意事項 330
16.7 参考資料 330
17. DMA コントローラ（DMAC） 331
17.1 概要 331
17.2 レジスタの説明 333
17.2.1 DMA 転送元アドレスレジスタ（DMSAR） 333
17.2.2 DMA 転送先アドレスレジスタ（DMDAR） 333
17.2.3 DMA 転送カウントレジスタ（DMCRA） 334
17.2.4 DMA ブロック転送カウントレジスタ（DMCRB） 335
17.2.5 DMA 転送モードレジスタ（DMTMD） 336
17.2.6 DMA 割り込み設定レジスタ（DMINT） 337
17.2.7 DMA アドレスモードレジスタ（DMAMD） 339
17.2.8 DMA オフセットレジスタ（DMOFR） 342
17.2.9 DMA 転送イネーブルレジスタ（DMCNT） 342
17.2.10 DMA ソフトウェア起動レジスタ（DMREQ） 343
17.2.11 DMA ステータスレジスタ（DMSTS） 344
17.2.12 DMACA モジュール起動レジスタ（DMAST） 345
17.3 動作説明 346
17.3.1 転送モード 346
17.3.2 拡張リピート領域機能 350
17.3.3 オフセットを使用したアドレス更新機能 352
17.3.4 起動要因 356
17.3.5 動作タイミング 357
17.3.6 DMAC の実行サイクル 358
17.3.7 DMAC の起動 359
17.3.8 DMA 転送の開始 360

17.3.9 DMA 転送中のレジスタ 360
17.3.10 チャネル優先順位 361
17.4 DMA 転送の終了 362
17.4.1 設定した総転送回数完了による転送終了 362
17.4.2 リピートサイズ終了割り込みによる転送終了 362
17.4.3 拡張リピート領域オーバーフロー割り込みによる転送終了 362
17.4.4 DMA 転送の終了に関する注意事項 363
17.5 割り込み 364
17.6 イベントリンク 366
17.7 低消費電力機能 366
17.8 使用上の注意事項 367
17.8.1 DMA 転送中のレジスタアクセスについて 367
17.8.2 予約領域への DMA 転送について 367
17.8.3 割り込みコントローラユニットの DMAC イベントリンク設定レジスタ（ICU.DELSRn）の設定 367
17.8.4 DMA 起動の保留／再開方法 367
18. データトランスファコントローラ（DTC） 368
18.1 概要 368
18.2 レジスタの説明 370
18.2.1 DTC モードレジスタ A（MRA） 370
18.2.2 DTC モードレジスタ B（MRB） 371
18.2.3 DTC 転送元レジスタ（SAR） 372
18.2.4 DTC 転送先レジスタ（DAR） 372
18.2.5 DTC 転送カウントレジスタ A（CRA） 373
18.2.6 DTC 転送カウントレジスタ B（CRB） 374
18.2.7 DTC コントロールレジスタ（DTCCR） 374
18.2.8 DTC ベクタベースレジスタ（DTCVBR） 375
18.2.9 DTC モジュール起動レジスタ（DTCST） 375
18.2.10 DTC ステータスレジスタ（DTCSTS） 376
18.3 起動要因 377
18.3.1 転送情報の配置と DTC ベクタテーブル 377
18.4 動作説明 379
18.4.1 転送情報のリードスキップ機能 381
18.4.2 転送情報のライトバックスキップ機能 382
18.4.3 ノーマル転送モード 382
18.4.4 リピート転送モード 383
18.4.5 ブロック転送モード 384
18.4.6 チェーン転送 386
18.4.7 動作タイミング 387
18.4.8 DTC の実行サイクル 389
18.4.9 DTC のバス権解放タイミング 389
18.5 DTC の設定手順 390

18.6 DTC の使用例 391
18.6.1 ノーマル転送 391
18.6.2 チェーン転送 392
18.6.3 カウンタ = 0 のときのチェーン転送 394
18.7 割り込み要因 396
18.8 イベントリンク 396
18.9 スヌーズ制御インタフェース 396
18.10 モジュールストップ機能 397
18.11 使用上の注意事項 397
18.11.1 転送情報の開始アドレス 397
19. イベントリンクコントローラ（ELC） 398
19.1 概要 398
19.2 レジスタの説明 399
19.2.1 イベントリンクコントローラレジスタ（ELCR） 399
19.2.2 イベントリンクソフトウェアイベント発生レジスタ n（ELSEGRn）(n = 0, 1) 400
19.2.3 イベントリンク設定レジスタ n（ELSRn）(n = 0 ～ 9, 12, 14 ～ 18) 401
19.3 動作説明 406
19.3.1 割り込み処理とイベントリンクの関係 406
19.3.2 イベントのリンク 406
19.3.3 イベントリンクの動作設定手順例 406
19.4 使用上の注意事項 407
19.4.1 DMAC または DTC 転送終了のイベントリンクを使用する場合 407
19.4.2 クロック設定について 407
19.4.3 モジュールストップ機能の設定 407
19.4.4 ELC 遅延時間 407
20. I/O ポート 408
20.1 概要 408
20.2 レジスタの説明 410
20.2.1 ポートコントロールレジスタ 1（PCNTR1/PODR/PDR） 410
20.2.2 ポートコントロールレジスタ 2（PCNTR2/EIDR/PIDR） 411
20.2.3 ポートコントロールレジスタ 3（PCNTR3/PORR/POSR） 412
20.2.4 ポートコントロールレジスタ 4（PCNTR4/EORR/EOSR） 413
20.2.5 ポート mn 端子機能選択レジスタ（PmnPFS/PmnPFS_HA/PmnPFS_BY）
(m = 0 ～ 5, 9; n = 00 ～ 15) 414
20.2.6 書き込みプロテクトレジスタ（PWPR） 416
20.3 動作説明 417
20.3.1 汎用入出力ポート 417
20.3.2 ポート機能選択 417
20.3.3 ELC のポートグループ機能 418
20.3.3.1 ELC から ELC_PORT1, 2, 3, 4 が入力された場合の動作 418
20.3.3.2 イベントパルスが ELC に出力された場合の動作 419
20.4 未使用端子の処理 420

20.5 使用上の注意事項 421
20.5.1 端子機能の設定手順 421
20.5.2 ポートグループ入力の使用手順 421
20.5.3 ポート出力データレジスタ（PODR）の概要 421
20.5.4 アナログ機能を使う場合の注意事項 421
20.5.5 入出力バッファの仕様 422
20.5.6 USB_DP 端子および USB_DM 端子の選択 422
20.5.7 USBFS/GPIO 機能を使用した P914 および P915 のプルアップ／プルダウン設定 422
20.6 製品ごとの周辺選択設定 423
21. キー割り込み機能（KINT） 429
21.1 概要 429
21.2 レジスタの説明 431
21.2.1 キーリターンコントロールレジスタ（KRCTL） 431
21.2.2 キーリターンフラグレジスタ（KRF） 431
21.2.3 キーリターンモードレジスタ（KRM） 432
21.3 動作説明 433
21.3.1 キー割り込みフラグを使用しない場合（KRMD = 0） 433
21.3.2 キー割り込みフラグを使用する場合の動作（KRMD = 1） 434
21.4 使用上の注意事項 436
22. GPT 用ポートアウトプットイネーブル（POEG） 437
22.1 概要 437
22.2 レジスタの説明 439
22.2.1 POEG グループ n 設定レジスタ（POEGGn）(n = A, B) 439
22.3 出力禁止制御の動作 440
22.3.1 端子入力レベル検出時の動作 440
22.3.1.1 デジタルフィルタ 440
22.3.2 GPT からの出力禁止要求 441
22.3.3 発振停止検出による出力禁止制御 441
22.3.4 レジスタによる出力禁止制御 441
22.3.5 出力禁止状態の解除 441
22.4 割り込み要因 442
22.5 GPT に対する外部トリガ出力 442
22.6 使用上の注意事項 443
22.6.1 ソフトウェアスタンバイモードへの遷移 443
22.6.2 GPT 対応端子の指定 443
23. 汎用 PWM タイマ（GPT） 444
23.1 概要 444
23.2 レジスタの説明 448
23.2.1 汎用 PWM タイマ書き込み保護レジスタ（GTWP） 449
23.2.2 汎用 PWM タイマソフトウェアスタートレジスタ（GTSTR） 449
23.2.3 汎用 PWM タイマソフトウェアストップレジスタ（GTSTP） 450

23.2.4 汎用 PWM タイマソフトウェアクリアレジスタ（GTCLR）.... 450
23.2.5 汎用 PWM タイマスタート要因選択レジスタ（GTSSR）.... 451
23.2.6 汎用 PWM タイマストップ要因選択レジスタ（GTPSR）.... 454
23.2.7 汎用 PWM タイマクリア要因選択レジスタ（GTCSR）.... 457
23.2.8 汎用 PWM タイマアップカウント要因選択レジスタ（GTUPSR）.... 460
23.2.9 汎用 PWM タイマダウンカウント要因選択レジスタ（GTDNSR）.... 463
23.2.10 汎用 PWM タイマインプットキャプチャ要因選択レジスタ A（GTICASR）.... 466
23.2.11 汎用 PWM タイマインプットキャプチャ要因選択レジスタ B（GTICBSR）.... 469
23.2.12 汎用 PWM タイマコントロールレジスタ（GTCR）.... 472
23.2.13 汎用 PWM タイマカウント方向、デューティ設定レジスタ（GTUDDTYC）.... 474
23.2.14 汎用 PWM タイマ I/O コントロールレジスタ（GTIOR）.... 476
23.2.15 汎用 PWM タイマ割り込み出力設定レジスタ（GTINTAD）.... 480
23.2.16 汎用 PWM タイマステータスレジスタ（GTST）.... 481
23.2.17 汎用 PWM タイマバッファイネーブルレジスタ（GTBER）.... 486
23.2.18 汎用 PWM タイマカウンタ（GTCNT）.... 488
23.2.19 汎用 PWM タイマコンペアキャプチャレジスタ n（GTCCRn）(n = A ～ F).... 488
23.2.20 汎用 PWM タイマ周期設定レジスタ（GTPR）.... 489
23.2.21 汎用 PWM タイマ周期設定バッファレジスタ（GTPBR）.... 489
23.2.22 汎用 PWM タイマデッドタイムコントロールレジスタ（GTDTCR）.... 490
23.2.23 汎用 PWM タイマデッドタイム値レジスタ U（GTDVU）.... 491
23.2.24 出力相切り替えコントロールレジスタ（OPSCR）.... 492
23.3 動作説明.... 495
23.3.1 基本動作.... 495
23.3.1.1 カウンタ動作.... 495
23.3.1.2 コンペアマッチによる波形出力機能.... 500
23.3.1.3 インプットキャプチャ機能.... 504
23.3.2 バッファ動作.... 506
23.3.2.1 GTPR レジスタのバッファ動作.... 506
23.3.2.2 GTCCRA、GTCCRB レジスタのバッファ動作.... 509
23.3.3 PWM 出力動作モード.... 515
23.3.3.1 のこぎり波 PWM モード.... 515
23.3.3.2 のこぎり波ワンショットパルスモード.... 517
23.3.3.3 三角波 PWM モード 1（谷 32 ビット転送）.... 520
23.3.3.4 三角波 PWM モード 2（山／谷 32 ビット転送）.... 522
23.3.3.5 三角波 PWM モード 3（谷 64 ビット転送）.... 524
23.3.4 デッドタイム自動設定機能.... 527
23.3.5 カウント方向切り替え機能.... 532
23.3.6 出力デューティ 0% および出力デューティ 100% 機能.... 533
23.3.7 ハードウェアカウントスタート／カウントストップ、カウントクリア動作.... 535
23.3.7.1 ハードウェアスタート動作.... 535
23.3.7.2 ハードウェアストップ動作.... 537

23.3.7.3 ハードウェアクリア動作 541
23.3.8 同期動作 544
23.3.8.1 ソフトウェアによる同期動作 544
23.3.8.2 ハードウェアによる同期動作 546
23.3.9 PWM 出力動作例 548
23.3.10 位相計数機能 554
23.3.11 出力相切り替え（GPT_OPS） 564
23.3.11.1 外部入力信号の同期および入力選択 567
23.3.11.2 入力サンプリング 567
23.3.11.3 入力相デコード 568
23.3.11.4 出力選択制御 569
23.3.11.5 出力選択制御（グループ出力禁止機能） 570
23.3.11.6 イベントリンクコントローラ（ELC）出力 570
23.3.11.7 GPT_OPS スタート動作設定フロー 571
23.4 割り込み要因 572
23.4.1 割り込み要因 572
23.4.2 DMAC/DTC の起動 575
23.5 ELC によるリンク動作 576
23.5.1 ELC へのイベント信号出力 576
23.5.2 ELC からのイベント信号入力 576
23.6 ノイズフィルタ機能 577
23.7 保護機能 578
23.7.1 レジスタの書き込み保護 578
23.7.2 バッファ動作の禁止 578
23.7.3 GTIOC 端子出力のネゲート制御 579
23.8 出力端子の初期化方法 580
23.8.1 リセット後の端子設定 580
23.8.2 動作中の異常による端子の初期化 580
23.9 使用上の注意事項 581
23.9.1 モジュールストップ機能の設定 581
23.9.2 コンペアマッチ動作時の GTCCRn レジスタの設定（n = A ～ F） 581
23.9.3 GTCNT カウンタの範囲設定 582
23.9.4 GTCNT カウンタのスタート／ストップ 582
23.9.5 イベントごとの優先順位 583
24. 非同期汎用タイマ（AGT） 584
24.1 概要 584
24.2 レジスタの説明 586
24.2.1 AGT カウンタレジスタ（AGT） 586
24.2.2 AGT コンペアマッチ A レジスタ（AGTCMA） 586
24.2.3 AGT コンペアマッチ B レジスタ（AGTCMB） 587
24.2.4 AGT コントロールレジスタ（AGTCR） 588

24.2.5 AGT モードレジスタ 1（AGTMR1） 590
24.2.6 AGT モードレジスタ 2（AGTMR2） 591
24.2.7 AGT I/O コントロールレジスタ（AGTIOC） 592
24.2.8 AGT イベント端子選択レジスタ（AGTISR） 593
24.2.9 AGT コンペアマッチ機能選択レジスタ（AGTCMSR） 593
24.2.10 AGT 端子選択レジスタ（AGTIOSEL） 594
24.3 動作説明 595
24.3.1 リロードレジスタおよびカウンタの書き換え動作 595
24.3.2 リロードレジスタおよびコンペアレジスタ A/B の書き換え動作 597
24.3.3 タイマモード 598
24.3.4 パルス出力モード 599
24.3.5 イベントカウンタモード 600
24.3.6 パルス幅測定モード 602
24.3.7 パルス周期測定モード 603
24.3.8 コンペアマッチ機能 604
24.3.9 各モードの出力設定 606
24.3.10 スタンバイモード 607
24.3.11 割り込み要因 607
24.3.12 ELC へのイベント信号出力 607
24.4 使用上の注意事項 608
24.4.1 カウント動作の開始および停止制御 608
24.4.2 カウンタレジスタへのアクセス 609
24.4.3 モード変更時 609
24.4.4 デジタルフィルタ 609
24.4.5 イベント番号、パルス幅、およびパルス周期の計算方法 609
24.4.6 TSTOP ビットで強制的にカウントを停止した場合 609
24.4.7 カウントソースとして AGT0 アンダーフローを選択した場合 610
24.4.8 I/O レジスタのリセット 610
24.4.9 カウントソースとして PCLKB、PCLKB/8、または PCLKB/2 を選択した場合 610
24.4.10 カウントソースとして AGTLCLK または AGTSCLK を選択した場合 610
24.4.11 クロックソースを切り替える場合 610
25. リアルタイムクロック（RTC） 611
25.1 概要 611
25.2 レジスタの説明 613
25.2.1 64Hz カウンタ（R64CNT） 613
25.2.2 秒カウンタ（RSECCNT）／バイナリカウンタ 0（BCNT0） 614
25.2.3 分カウンタ（RMINCNT）／バイナリカウンタ 1（BCNT1） 615
25.2.4 時カウンタ（RHRCNT）／バイナリカウンタ 2（BCNT2） 616
25.2.5 曜日カウンタ（RWKCNT）／バイナリカウンタ 3（BCNT3） 617
25.2.6 日カウンタ（RDAYCNT） 618
25.2.7 月カウンタ（RMONCNT） 618

25.2.8 年カウンタ（RYRCNT） 619
25.2.9 秒アラームレジスタ（RSECAR）／バイナリカウンタ 0 アラームレジスタ（BCNT0AR） 620
25.2.10 分アラームレジスタ（RMINAR）／バイナリカウンタ 1 アラームレジスタ（BCNT1AR） 621
25.2.11 時アラームレジスタ（RHRAR）／バイナリカウンタ 2 アラームレジスタ（BCNT2AR） 622
25.2.12 曜日アラームレジスタ（RWKAR）／バイナリカウンタ 3 アラームレジスタ（BCNT3AR） 624
25.2.13 日アラームレジスタ（RDAYAR）／バイナリカウンタ 0 アラームイネーブルレジスタ（BCNT0AER） 625
25.2.14 月アラームレジスタ（RMONAR）／バイナリカウンタ 1 アラームイネーブルレジスタ（BCNT1AER） 626
25.2.15 年アラームレジスタ（RYRAR）／バイナリカウンタ 2 アラームイネーブルレジスタ（BCNT2AER） 627
25.2.16 年アラームイネーブルレジスタ（RYRAREN）／バイナリカウンタ 3 アラームイネーブルレジスタ（BCNT3AER） 628
25.2.17 RTC コントロールレジスタ 1（RCR1） 629
25.2.18 RTC コントロールレジスタ 2（RCR2） 630
25.2.19 RTC コントロールレジスタ 4（RCR4） 633
25.2.20 周波数レジスタ（RFRH/RFRL） 634
25.2.21 時計誤差補正レジスタ（RADJ） 635
25.2.22 時間キャプチャコントロールレジスタ 0（RTCCR0） 636
25.2.23 秒キャプチャレジスタ 0（RSECCP0）／ BCNT0 キャプチャレジスタ 0（BCNT0CP0） 638
25.2.24 分キャプチャレジスタ 0（RMINCP0）／ BCNT1 キャプチャレジスタ 0（BCNT1CP0） 639
25.2.25 時キャプチャレジスタ 0（RHRCP0）／ BCNT2 キャプチャレジスタ 0（BCNT2CP0） 640
25.2.26 日キャプチャレジスタ 0（RDAYCP0）／ BCNT3 キャプチャレジスタ 0（BCNT3CP0） 641
25.2.27 月キャプチャレジスタ 0（RMONCP0） 642
25.3 動作説明 643
25.3.1 電源投入後のレジスタ初期設定の概要 643
25.3.2 クロックおよびカウントモードの設定手順 644
25.3.3 時刻の設定 645
25.3.4 30 秒調整 646
25.3.5 64Hz カウンタと時刻の読み出し 647
25.3.6 アラーム機能 648
25.3.7 アラーム割り込み禁止手順 649
25.3.8 時間誤差補正機能 650
25.3.8.1 自動補正 650
25.3.8.2 ソフトウェアによる補正 651
25.3.8.3 補正モードの変更手順 651
25.3.8.4 補正の停止手順 651

25.3.8.5 時間キャプチャ 652
25.4 割り込み要因 653
25.5 イベントリンク出力機能 654
25.5.1 割り込み処理とイベントリンク機能 654
25.6 使用上の注意事項 655
25.6.1 カウント動作時のレジスタ書き込みについて 655
25.6.2 周期割り込みの使用について 656
25.6.3 RTCOUT（1Hz/64Hz）クロック出力について 656
25.6.4 レジスタ設定後の低消費電力モードへの遷移について 656
25.6.5 レジスタの書き込み／読み出し時の注意事項 657
25.6.6 カウントモードの変更について 657
25.6.7 リアルタイムクロックを使用しない場合の初期化手順 658
25.6.8 クロックソースを切り替える場合 658
26. ウォッチドッグタイマ（WDT） 659
26.1 概要 659
26.2 レジスタの説明 661
26.2.1 WDT リフレッシュレジスタ（WDTRR） 661
26.2.2 WDT コントロールレジスタ（WDTCR） 662
26.2.3 WDT ステータスレジスタ（WDTSR） 665
26.2.4 WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR） 666
26.2.5 WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR） 666
26.2.6 オプション機能選択レジスタ 0（OFS0） 666
26.3 動作説明 667
26.3.1 スタートモード別のカウント動作 667
26.3.1.1 レジスタスタートモード 667
26.3.1.2 オートスタートモード 669
26.3.2 WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタへの書き込み制御 671
26.3.3 リフレッシュ動作 672
26.3.4 リセット出力 673
26.3.5 割り込み要因 673
26.3.6 ダウンカウンタ値の読み出し 673
26.3.7 オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係 674
26.4 ELC によるリンク動作 674
26.5 使用上の注意事項 674
26.5.1 ICU イベントリンク設定レジスタ n（IELSRn）の設定 674
27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT） 675
27.1 概要 675
27.2 レジスタの説明 677
27.2.1 IWDT リフレッシュレジスタ（IWDTRR） 677
27.2.2 IWDT ステータスレジスタ（IWDTSR） 678
27.2.3 オプション機能選択レジスタ 0（OFS0） 679

27.3 動作説明 682
27.3.1 オートスタートモード 682
27.3.2 リフレッシュ動作 684
27.3.3 ステータスフラグ 685
27.3.4 リセット出力 685
27.3.5 割り込み要因 686
27.3.6 ダウンカウンタ値の読み出し 686
27.4 ELC によるリンク動作 686
27.5 使用上の注意事項 687
27.5.1 リフレッシュ動作 687
27.5.2 クロック分周比の設定 687
28. USB2.0 フルスピードモジュール（USBFS） 688
28.1 概要 688
28.2 レジスタの説明 690
28.2.1 システムコンフィグレーションコントロールレジスタ（SYSCFG） 690
28.2.2 システムコンフィグレーションステータスレジスタ 0（SYSSTS0） 692
28.2.3 デバイスステートコントロールレジスタ 0（DVSTCTR0） 693
28.2.4 CFIFO ポートレジスタ（CFIFO/CFIFOL）
D0FIFO ポートレジスタ（D0FIFO/D0FIFOL）
D1FIFO ポートレジスタ（D1FIFO/D1FIFOL） 696
28.2.5 CFIFO ポート選択レジスタ（CFIFOSEL）
D0FIFO ポート選択レジスタ（D0FIFOSEL）
D1FIFO ポート選択レジスタ（D1FIFOSEL） 698
28.2.6 CFIFO ポートコントロールレジスタ（CFIFOCTR）
D0FIFO ポートコントロールレジスタ（D0FIFOCTR）
D1FIFO ポートコントロールレジスタ（D1FIFOCTR） 702
28.2.7 割り込みイネーブルレジスタ 0（INTENB0） 704
28.2.8 割り込みイネーブルレジスタ 1（INTENB1） 705
28.2.9 BRDY 割り込みイネーブルレジスタ（BRDYENB） 706
28.2.10 NRDY 割り込みイネーブルレジスタ（NRDYENB） 707
28.2.11 BEMP 割り込みイネーブルレジスタ（BEMPENB） 708
28.2.12 SOF 出力コンフィグレーションレジスタ（SOFCFG） 709
28.2.13 割り込みステータスレジスタ 0（INTSTS0） 710
28.2.14 割り込みステータスレジスタ 1（INTSTS1） 713
28.2.15 BRDY 割り込みステータスレジスタ（BRDYSTS） 716
28.2.16 NRDY 割り込みステータスレジスタ（NRDYSTS） 717
28.2.17 BEMP 割り込みステータスレジスタ（BEMPSTS） 718
28.2.18 フレームナンバレジスタ（FRMNUM） 719
28.2.19 USB リクエストタイプレジスタ（USBREQ） 720
28.2.20 USB リクエストバリューレジスタ（USBVAL） 721
28.2.21 USB リクエストインデックスレジスタ（USBINDX） 722
28.2.22 USB リクエストレングスレジスタ（USBLENG） 723
28.2.23 DCP コンフィグレーションレジスタ（DCPCFG） 724

28.2.24 DCP マックスパケットサイズレジスタ（DCPMAXP）..... 725
28.2.25 DCP コントロールレジスタ（DCPCTR）..... 726
28.2.26 パイプウィンドウ選択レジスタ（PIPESEL）..... 729
28.2.27 パイプコンフィグレーションレジスタ（PIPECFG）..... 730
28.2.28 パイプマックスパケットサイズレジスタ（PIPEMAXP）..... 732
28.2.29 パイプ周期コントロールレジスタ（PIPEPERI）..... 733
28.2.30 パイプ n コントロールレジスタ（PIPEnCTR）(n = 1 ～ 9) 734
28.2.31 パイプ n トランザクションカウンタイネーブルレジスタ（PIPEnTRE）(n = 1 ～ 5) 741
28.2.32 パイプ n トランザクションカウンタレジスタ（PIPEnTRN）(n = 1 ～ 5) 742
28.2.33 デバイスアドレス n コンフィグレーションレジスタ（DEVADDn）(n = 0 ～ 5) 743
28.2.34 USB モジュールコントロールレジスタ（USBMC）..... 744
28.2.35 BC コントロールレジスタ 0（USBBCCTRL0）..... 745
28.3 動作説明 747
28.3.1 システム制御 747
28.3.1.1 USBFS 関連レジスタへのデータ設定 747
28.3.1.2 コントローラ機能の選択 747
28.3.1.3 抵抗による USB データバス制御 747
28.3.1.4 USB 外部接続回路の例 748
28.3.2 割り込み 753
28.3.3 割り込みの説明 755
28.3.3.1 BRDY 割り込み 755
28.3.3.2 NRDY 割り込み 758
28.3.3.3 BEMP 割り込み 761
28.3.3.4 デバイスステート遷移割り込み（デバイスコントローラモード）..... 762
28.3.3.5 コントロール転送ステージ遷移割り込み（デバイスコントローラモード）..... 763
28.3.3.6 フレーム番号更新割り込み 765
28.3.3.7 VBUS 割り込み 765
28.3.3.8 レジューム割り込み 765
28.3.3.9 OVRCR 割り込み 765
28.3.3.10 BCHG 割り込み 765
28.3.3.11 DTCH 割り込み 765
28.3.3.12 SACK 割り込み 765
28.3.3.13 SIGN 割り込み 765
28.3.3.14 ATTCH 割り込み 766
28.3.3.15 EOFERR 割り込み 766
28.3.3.16 ポータブルデバイス検出割り込み 766
28.3.4 パイプコントロール 767
28.3.4.1 パイプコントロールレジスタの切り替え手順 768
28.3.4.2 転送タイプ 768
28.3.4.3 エンドポイント番号 768

28.3.4.4 最大パケットサイズ設定 769
28.3.4.5 トランザクションカウンタ（受信方向パイプ 1 ～ 5） 769
28.3.4.6 応答 PID 769
28.3.4.7 データ PID シーケンスビット 771
28.3.4.8 応答 PID = NAK 機能 771
28.3.4.9 自動応答モード 771
28.3.4.10 OUT-NAK モード 771
28.3.4.11 Null 自動応答モード 772
28.3.5 FIFO バッファメモリ 773
28.3.6 FIFO バッファクリア 774
28.3.7 FIFO ポートの機能 775
28.3.8 DMA 転送（D0FIFO/D1FIFO ポート） 776
28.3.9 DCP を使用したコントロール転送 777
28.3.9.1 ホストコントローラモードでのコントロール転送 777
28.3.9.2 デバイスコントローラモードでのコントロール転送 778
28.3.10 バルク転送（パイプ 1 ～ 5） 779
28.3.11 インタラプト転送（パイプ 6 ～ 9） 780
28.3.11.1 ホストコントローラモードでのインタラプト転送時のインターバルカウンタ 780
28.3.12 アイソクロナス転送（パイプ 1 ～ 2） 781
28.3.12.1 アイソクロナス転送のエラー検出 781
28.3.12.2 DATA-PID 782
28.3.12.3 インターバルカウンタ 783
28.3.13 SOF 補完機能 788
28.3.14 パイプスケジュール 789
28.3.14.1 トランザクション発行条件 789
28.3.14.2 転送スケジュール 789
28.3.14.3 USB 通信許可 789
28.3.15 バッテリチャージング検出処理 790
28.3.15.1 デバイスコントローラモードでの処理 790
28.3.15.2 ホストコントローラ選択時の処理 792
28.4 使用上の注意事項 795
28.4.1 モジュールストップ状態の設定 795
28.4.2 ソフトウェアスタンバイモード終了時の割り込みステータスレジスタのクリア 795
28.4.3 ポート機能設定後の割り込みステータスレジスタのクリア 795
29. シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI） 796
29.1 概要 796
29.2 レジスタの説明 800
29.2.1 受信シフトレジスタ（RSR） 800
29.2.2 受信データレジスタ（RDR） 800
29.2.3 受信 9 ビットデータレジスタ（RDRHL） 800

29.2.4 受信 FIFO データレジスタ H, L, HL（FRDRH, FRDRL, FRDRHL） 801
29.2.5 送信データレジスタ（TDR） 802
29.2.6 送信 9 ビットデータレジスタ（TDRHL） 803
29.2.7 送信 FIFO データレジスタ H, L, HL（FTDRH, FTDRL, FTDRHL） 804
29.2.8 送信シフトレジスタ（TSR） 805
29.2.9 非スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SMR）(SCMR.SMIF = 0) 805
29.2.10 スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SMR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1) 807
29.2.11 非スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCR）(SCMR.SMIF = 0) 809
29.2.12 スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1) 811
29.2.13 非スマートカードインタフェースおよび非 FIFO モード用シリアルステータスレジスタ（SSR）(SCMR.SMIF = 0 および FCR.FM = 0) 813
29.2.14 非スマートカードインタフェースおよび FIFO モード用シリアルステータスレジスタ（SSR_FIFO）(SCMR.SMIF = 0 および FCR.FM = 1) 816
29.2.15 スマートカードインタフェースモード用シリアルステータスレジスタ（SSR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1) 819
29.2.16 スマートカードモードレジスタ（SCMR） 822
29.2.17 ビットレートレジスタ（BRR） 824
29.2.18 モジュレーションデューティレジスタ（MDDR） 833
29.2.19 シリアル拡張モードレジスタ（SEMR） 835
29.2.20 ノイズフィルタ設定レジスタ（SNFR） 837
29.2.21 I2C モードレジスタ 1（SIMR1） 838
29.2.22 I2C モードレジスタ 2（SIMR2） 839
29.2.23 I2C モードレジスタ 3（SIMR3） 840
29.2.24 I2C ステータスレジスタ（SISR） 842
29.2.25 SPI モードレジスタ（SPMR） 843
29.2.26 FIFO コントロールレジスタ（FCR） 845
29.2.27 FIFO データ数レジスタ（FDR） 846
29.2.28 ラインステータスレジスタ（LSR） 847
29.2.29 コンペアマッチデータレジスタ（CDR） 848
29.2.30 データコンペアマッチコントロールレジスタ（DCCR） 849
29.2.31 シリアルポートレジスタ（SPTR） 851
29.3 調歩同期式モードの動作 852
29.3.1 シリアル転送フォーマット 853
29.3.2 調歩同期式モードの受信データサンプリングタイミングと受信マージン 855
29.3.3 クロック 856
29.3.4 倍速動作とビットレートの 6 倍の周波数 856
29.3.5 CTS、RTS 機能 857
29.3.6 アドレス一致（受信データー致）検出機能 858
29.3.7 SCI の初期化（調歩同期式モード） 861

29.3.8 シリアルデータの送信（調歩同期式モード） 863
29.3.9 シリアルデータの受信（調歩同期式モード） 869
29.4 マルチプロセッサ通信機能 876
29.4.1 マルチプロセッサシリアルデータ送信 878
29.4.2 マルチプロセッサシリアルデータ受信 881
29.5 クロック同期式モードの動作 886
29.5.1 クロック 886
29.5.2 CTS、RTS 機能 887
29.5.3 SCI の初期化（クロック同期式モード） 888
29.5.4 シリアルデータの送信（クロック同期式モード） 890
29.5.5 シリアルデータの受信（クロック同期式モード） 896
29.5.6 シリアルデータの同時送受信動作（クロック同期式モード） 901
29.6 スマートカードインタフェースモードの動作 905
29.6.1 接続例 905
29.6.2 データフォーマット（ブロック転送モード時を除く） 905
29.6.3 ブロック転送モード 907
29.6.4 受信データのサンプリングタイミングと受信マージン 908
29.6.5 SCI の初期化 909
29.6.6 シリアルデータの送信（ブロック転送モード時を除く） 911
29.6.7 シリアルデータの受信（ブロック転送モード時を除く） 914
29.6.8 クロック出力制御 916
29.7 簡易 IIC モードの動作 917
29.7.1 開始条件、再開始条件、停止条件の生成 919
29.7.2 クロック同期化 920
29.7.3 SDA 出力遅延 921
29.7.4 SCI の初期化（簡易 IIC モード） 922
29.7.5 マスタ送信動作（簡易 IIC モード） 923
29.7.6 マスタ受信動作（簡易 IIC モード） 925
29.8 簡易 SPI モードの動作 927
29.8.1 マスタモード、スレーブモードと各端子の状態 928
29.8.2 マスタモード時の SS 機能 928
29.8.3 スレーブモード時の SS 機能 928
29.8.4 クロックと送受信データの関係 929
29.8.5 SCI の初期化（簡易 SPI モード） 929
29.8.6 シリアルデータの送受信（簡易 SPI モード） 929
29.9 ビットレートモジュレーション機能 930
29.10 割り込み要因 931
29.10.1 SCIn_TXI および SCIn_RXI 割り込みのバッファ動作（非 FIFO 選択時） 931
29.10.2 SCIn_TXI および SCIn_RXI 割り込みのバッファ動作（FIFO 選択時） 931
29.10.3 調歩同期式モード、クロック同期式モード、および簡易 SPI モードにおける割り込み 931
29.10.4 スマートカードインタフェースモードにおける割り込み 933

29.10.5 簡易 IIC モードにおける割り込み 934
29.11 イベントリンク機能 935
29.12 アドレス不一致イベント出力（SCI0_DCUF） 936
29.13 ノイズ除去機能 937
29.14 使用上の注意事項 938
29.14.1 モジュールストップ状態の設定 938
29.14.2 低消費電力状態での SCI 動作 938
29.14.3 ブレークの検出と処理について 943
29.14.4 マーク状態とブレークの送出 943
29.14.5 受信エラーフラグと送信動作（クロック同期式モードおよび簡易 SPI モード） 943
29.14.6 クロック同期送信に関する制約事項（クロック同期式モードおよび簡易 SPI モード） 944
29.14.7 DMAC または DTC 使用時の制約事項 945
29.14.8 通信の開始に関する注意事項 945
29.14.9 クロック同期式モードおよび簡易 SPI モードにおける外部クロック入力 945
29.14.10 簡易 SPI モードに関する制約事項 946
30. I2C バスインタフェース（IIC） 947
30.1 概要 947
30.2 レジスタの説明 950
30.2.1 I2C バスコントロールレジスタ 1（ICCR1） 950
30.2.2 I2C バスコントロールレジスタ 2（ICCR2） 953
30.2.3 I2C バスモードレジスタ 1（ICMR1） 957
30.2.4 I2C バスモードレジスタ 2（ICMR2） 958
30.2.5 I2C バスモードレジスタ 3（ICMR3） 960
30.2.6 I2C バスファンクションイネーブルレジスタ（ICFER） 962
30.2.7 I2C バスステータスイネーブルレジスタ（ICSER） 964
30.2.8 I2C バス割り込みイネーブルレジスタ（ICIER） 966
30.2.9 I2C バスステータスレジスタ 1（ICSR1） 967
30.2.10 I2C バスステータスレジスタ 2（ICSR2） 970
30.2.11 I2C バスウェイクアップユニットレジスタ（ICWUR） 974
30.2.12 I2C バスウェイクアップユニットレジスタ 2（ICWUR2） 975
30.2.13 スレーブアドレスレジスタ Ly（SARLy）(y = 0 ～ 2) 976
30.2.14 スレーブアドレスレジスタ Uy（SARUy）(y = 0 ～ 2) 977
30.2.15 I2C バスビットレート Low レジスタ（ICBRL） 978
30.2.16 I2C バスビットレート High レジスタ（ICBRH） 979
30.2.17 I2C バス送信データレジスタ（ICDRT） 981
30.2.18 I2C バス受信データレジスタ（ICDRR） 981
30.2.19 I2C バスシフトレジスタ（ICDRS） 981
30.3 動作説明 982
30.3.1 通信データフォーマット 982
30.3.2 初期設定 983

30.3.3 マスタ送信動作 984
30.3.4 マスタ受信動作 988
30.3.5 スレーブ送信動作 993
30.3.6 スレーブ受信動作 996
30.4 SCL 同期回路 998
30.5 SDA 出力遅延機能 999
30.6 デジタルノイズフィルタ回路 1000
30.7 アドレス一致検出機能 1001
30.7.1 スレーブアドレス一致検出機能 1001
30.7.2 ジェネラルコールアドレス検出機能 1003
30.7.3 デバイス ID アドレス検出機能 1003
30.7.4 ホストアドレス検出機能 1005
30.8 ウェイクアップ機能 1006
30.8.1 ノーマルウェイクアップモード 1 1007
30.8.2 ノーマルウェイクアップモード 2 1011
30.8.3 コマンドリカバリモード／EEP 応答モード（特殊ウェイクアップモード） 1014
30.8.4 WFI 命令の実行に関する注意事項 1017
30.9 SCL の自動 Low ホールド機能 1018
30.9.1 送信データの誤送信防止機能 1018
30.9.2 NACK 受信転送中断機能 1019
30.9.3 受信データ取りこぼし防止機能 1020
30.10 アービトレーションロスト検出機能 1022
30.10.1 マスタアービトレーションロスト検出機能（MALE ビット） 1022
30.10.2 NACK 送信中のアービトレーションロスト検出機能（NALE ビット） 1024
30.10.3 スレーブアービトレーションロスト検出機能（SALE ビット） 1025
30.11 スタートコンディション、リスタートコンディション、ストップコンディション発行機能 1026
30.11.1 スタートコンディション発行動作 1026
30.11.2 リスタートコンディション発行動作 1026
30.11.3 ストップコンディション発行動作 1029
30.12 バスハングアップ 1030
30.12.1 タイムアウト検出機能 1030
30.12.2 SCL クロック追加出力機能 1032
30.12.3 IIC リセット、内部リセット 1033
30.13 SMBus 動作 1034
30.13.1 SMBus タイムアウト測定 1034
30.13.2 パケットエラーコード（PEC） 1035
30.13.3 SMBus ホスト通知プロトコル（Notify ARP Master コマンド） 1035
30.14 割り込み要因 1036
30.14.1 IICn_TXI 割り込みおよび IICn_RXI 割り込みのバッファ動作 1036
30.15 各コンディション発行時のレジスタの状態 1037
30.16 イベントリンク出力機能 1038

30.16.1 割り込み処理とイベントリンク機能 ... 1038
30.17 使用上の注意事項 ... 1038
30.17.1 モジュールストップ状態の設定 ... 1038
30.17.2 転送開始に関する注意事項 ... 1038
31. CAN（Controller Area Network）モジュール ... 1039
31.1 概要 ... 1039
31.2 レジスタの説明 ... 1042
31.2.1 コントロールレジスタ（CTLR） ... 1042
31.2.2 ビットコンフィグレーションレジスタ（BCR） ... 1046
31.2.3 マスクレジスタ k（MKRk）(k = 0 ～ 7) ... 1048
31.2.4 FIFO 受信 ID 比較レジスタ 0、1（FIDCR0, FIDCR1） ... 1049
31.2.5 マスク無効レジスタ（MKIVLR） ... 1050
31.2.6 メールボックスレジスタ j（MBj_ID、MBj_DL、MBj_Dm、MBj_TS）(j = 0 ～ 31; m = 0 ～ 7) ... 1051
31.2.7 メールボックス割り込みイネーブルレジスタ（MIER） ... 1055
31.2.8 FIFO メールボックスモード用メールボックス割り込みイネーブルレジスタ（MIER_FIFO） ... 1056
31.2.9 送信用メッセージコントロールレジスタ（MCTL_TXj）(j = 0 ～ 31) ... 1057
31.2.10 受信用メッセージコントロールレジスタ（MCTL_RXj）(j = 0 ～ 31) ... 1060
31.2.11 受信 FIFO コントロールレジスタ（RFCR） ... 1062
31.2.12 受信 FIFO ポインタコントロールレジスタ（RFPCR） ... 1064
31.2.13 送信 FIFO コントロールレジスタ（TFCR） ... 1065
31.2.14 送信 FIFO ポインタコントロールレジスタ（TFPCR） ... 1066
31.2.15 ステータスレジスタ（STR） ... 1067
31.2.16 メールボックスサーチモードレジスタ（MSMR） ... 1069
31.2.17 メールボックスサーチステータスレジスタ（MSSR） ... 1070
31.2.18 チャネルサーチサポートレジスタ（CSSR） ... 1071
31.2.19 アクセプタンスフィルタサポートレジスタ（AFSR） ... 1072
31.2.20 エラー割り込みイネーブルレジスタ（EIER） ... 1073
31.2.21 エラー割り込み要因判定レジスタ（EIFR） ... 1075
31.2.22 受信エラーカウントレジスタ（RECR） ... 1077
31.2.23 送信エラーカウントレジスタ（TECR） ... 1077
31.2.24 エラーコード格納レジスタ（ECSR） ... 1078
31.2.25 タイムスタンプレジスタ（TSR） ... 1079
31.2.26 テストコントロールレジスタ（TCR） ... 1080
31.3 動作モード ... 1082
31.3.1 CAN リセットモード ... 1083
31.3.2 CAN halt モード ... 1084
31.3.3 CAN スリープモード ... 1085
31.3.4 CAN オペレーションモード（バスオフ状態以外） ... 1085
31.3.5 CAN オペレーションモード（バスオフ状態） ... 1086
31.4 データ転送レートの設定 ... 1087

31.4.1 クロックの設定 1087
31.4.2 ビットタイムの設定 1087
31.4.3 データ転送レート 1088
31.5 メールボックスとマスクレジスタの構成 1089
31.6 アクセプタンスフィルタ機能とマスク機能 1091
31.7 受信／送信 1094
31.7.1 受信 1095
31.7.2 送信 1097
31.8 割り込み 1098
31.9 使用上の注意事項 1099
31.9.1 モジュールストップ状態の設定 1099
31.9.2 動作クロックの設定 1099
32. シリアルペリフェラルインタフェース（SPI） 1100
32.1 概要 1100
32.2 レジスタの説明 1104
32.2.1 SPI コントロールレジスタ（SPCR） 1104
32.2.2 SPI スレーブ選択極性レジスタ（SSLP） 1105
32.2.3 SPI 端子コントロールレジスタ（SPPCR） 1106
32.2.4 SPI ステータスレジスタ（SPSR） 1107
32.2.5 SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA） 1110
32.2.6 SPI シーケンスコントロールレジスタ（SPSCR） 1114
32.2.7 SPI シーケンスステータスレジスタ（SPSSR） 1115
32.2.8 SPI ビットレートレジスタ（SPBR） 1116
32.2.9 SPI データコントロールレジスタ（SPDCR） 1117
32.2.10 SPI クロック遅延レジスタ（SPCKD） 1119
32.2.11 SPI スレーブ選択ネゲート遅延レジスタ（SSLND） 1120
32.2.12 SPI 次アクセス遅延レジスタ（SPND） 1121
32.2.13 SPI コントロールレジスタ 2（SPCR2） 1122
32.2.14 SPI コマンドレジスタ（SPCMDm）（SPI0 の場合 m = 0 ～ 7、SPI1 の場合 m = 0) 1123
32.3 動作説明 1126
32.3.1 SPI 動作の概要 1126
32.3.2 SPI 端子の制御 1127
32.3.3 SPI システム構成例 1128
32.3.3.1 シングルマスタとシングルスレーブ（MCU はマスタ） 1128
32.3.3.2 シングルマスタとシングルスレーブ（MCU はスレーブ） 1129
32.3.3.3 シングルマスタとマルチスレーブ（MCU はマスタ） 1130
32.3.3.4 シングルマスタとマルチスレーブ（MCU はスレーブ） 1131
32.3.3.5 マルチマスタとマルチスレーブ（MCU はマスタ） 1132
32.3.3.6 クロック同期式モードのマスタとスレーブ（MCU はマスタ） 1133
32.3.3.7 クロック同期式モードのマスタとスレーブ（MCU はスレーブ） 1133

32.3.4 データフォーマット 1134
32.3.4.1 パリティ機能無効時の動作（SPCR2.SPPE = 0） 1136
32.3.4.2 パリティ機能有効時（SPCR2.SPPE = 1） 1140
32.3.5 転送フォーマット 1144
32.3.5.1 CPHA ビット = 0 の場合 1144
32.3.5.2 CPHA ビット = 1 の場合 1145
32.3.6 データ転送モード 1146
32.3.6.1 全二重同期式シリアル通信（SPCR.TXMD = 0） 1146
32.3.6.2 送信のみ動作（SPCR.TXMD = 1） 1147
32.3.7 送信バッファエンプティ／受信バッファフル割り込み 1148
32.3.8 エラー検出 1150
32.3.8.1 オーバーランエラー 1151
32.3.8.2 パリティエラー 1153
32.3.8.3 モードフォルトエラー 1154
32.3.8.4 アンダーランエラー 1154
32.3.9 SPI の初期化 1155
32.3.9.1 SPE ビットのクリアによる初期化 1155
32.3.9.2 システムリセットによる初期化 1155
32.3.10 SPI 動作 1156
32.3.10.1 マスタモード動作 1156
32.3.10.2 スレーブモード動作 1167
32.3.11 クロック同期式動作 1171
32.3.11.1 マスタモード動作 1171
32.3.11.2 スレーブモード動作 1177
32.3.12 ループバックモード 1179
32.3.13 パリティビット機能の自己診断 1180
32.3.14 割り込み要因 1181
32.4 イベントリンク動作 1182
32.4.1 受信バッファフルイベント出力 1182
32.4.2 送信バッファエンプティイベント出力 1182
32.4.3 モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラーイベント出力 ... 1182
32.4.4 SPI アイドルイベント出力 1183
32.4.5 送信完了イベント出力 1183
32.5 使用上の注意事項 1184
32.5.1 モジュールストップ状態の設定 1184
32.5.2 低消費電力機能に関する制約 1184
32.5.3 転送の開始に関する制限 1184
32.5.4 モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラーイベント出力に関する制限 1184
32.5.5 SPRF および SPTEF フラグに関する制限 1184

33. 巡回冗長検査（CRC）演算器 1185
33.1 概要 1185
33.2 レジスタの説明 1186
33.2.1 CRC コントロールレジスタ 0（CRCCR0） 1186
33.2.2 CRC コントロールレジスタ 1（CRCCR1） 1187
33.2.3 CRC データ入力レジスタ（CRCDIR/CRCDIR_BY） 1187
33.2.4 CRC データ出力レジスタ（CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY） 1188
33.2.5 スヌープアドレスレジスタ（CRCSAR） 1189
33.3 動作説明 1190
33.3.1 基本動作 1190
33.3.2 CRC スヌープ 1194
33.4 使用上の注意事項 1195
33.4.1 モジュールストップ状態の設定 1195
33.4.2 送信時の注意事項 1195
34. 14 ビット A/D コンバータ（ADC14） 1196
34.1 概要 1196
34.2 レジスタの説明 1200
34.2.1 A/D データレジスタ y（ADDRy）、A/D データ 2 重化レジスタ（ADDBLDR）、A/D データ 2 重化レジスタ A（ADDBLDRA）、A/D データ 2 重化レジスタ B（ADDBLDRB）、A/D 温度センサデータレジスタ（ADTSDR）、A/D 内部基準電圧データレジスタ（ADOCDR） 1200
34.2.2 A/D 自己診断データレジスタ（ADRD） 1204
34.2.3 A/D コントロールレジスタ（ADCSR） 1206
34.2.4 A/D チャネル選択レジスタ A0（ADANSA0） 1210
34.2.5 A/D チャネル選択レジスタ A1（ADANSA1） 1211
34.2.6 A/D チャネル選択レジスタ B0（ADANSB0） 1212
34.2.7 A/D チャネル選択レジスタ B1（ADANSB1） 1213
34.2.8 A/D 変換値加算／平均チャネル選択レジスタ 0（ADADS0） 1214
34.2.9 A/D 変換値加算／平均チャネル選択レジスタ 1（ADADS1） 1215
34.2.10 A/D 変換値加算／平均回数選択レジスタ（ADADC） 1217
34.2.11 A/D コントロール拡張レジスタ（ADCER） 1218
34.2.12 A/D 変換開始トリガ選択レジスタ（ADSTRGR） 1220
34.2.13 A/D 変換拡張入力コントロールレジスタ（ADEXICR） 1222
34.2.14 A/D サンプリングステートレジスタ n（ADSSTRn）（n = 00, 04 ～ 06, 09, 10, L, T, O） 1224
34.2.15 A/D 断線検出コントロールレジスタ（ADDISCR） 1225
34.2.16 A/D グループスキャン優先コントロールレジスタ（ADGSPCR） 1226
34.2.17 A/D コンペア機能コントロールレジスタ（ADCMPCR） 1227
34.2.18 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネル選択レジスタ 0（ADCMPANSR0） 1229
34.2.19 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネル選択レジスタ 1（ADCMPANSR1） 1230
34.2.20 A/D コンペア機能ウィンドウ A 拡張入力選択レジスタ（ADCMPANSER） 1230
34.2.21 A/D コンペア機能ウィンドウ A 比較条件設定レジスタ 0（ADCMPLR0） 1231

34.2.22 A/D コンペア機能ウィンドウ A 比較条件設定レジスタ 1（ADCMPLR1）..... 1233
34.2.23 A/D コンペア機能ウィンドウ A 拡張入力比較条件設定レジスタ（ADCMPLER）.. 1234
34.2.24 A/D コンペア機能ウィンドウ A 下側レベル設定レジスタ（ADCMPDR0）、
A/D コンペア機能ウィンドウ A 上側レベル設定レジスタ（ADCMPDR1）、
A/D コンペア機能ウィンドウ B 下側レベル設定レジスタ（ADWINLLB）、
A/D コンペア機能ウィンドウ B 上側レベル設定レジスタ（ADWINULB）..... 1235
34.2.25 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネルステータスレジスタ 0（ADCMPSR0）... 1237
34.2.26 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネルステータスレジスタ 1（ADCMPSR1）... 1238
34.2.27 A/D コンペア機能ウィンドウ A 拡張入力チャネルステータスレジスタ
（ADCMPSER）..... 1239
34.2.28 A/D コンペア機能ウィンドウ B チャネル選択レジスタ（ADCMPBNSR）..... 1240
34.2.29 A/D コンペア機能ウィンドウ B ステータスレジスタ（ADCMPBSR）..... 1242
34.2.30 A/D コンペア機能ウィンドウ A/B ステータスモニタレジスタ（ADWINMON）..... 1243
34.2.31 A/D 高電位／低電位基準電圧コントロールレジスタ（ADHVREFCNT）..... 1244
34.3 動作説明 1245
34.3.1 スキャンの動作説明 1245
34.3.2 シングルスキャンモード 1246
34.3.2.1 基本動作 1246
34.3.2.2 チャネル選択と自己診断 1247
34.3.2.3 温度センサ出力／内部基準電圧選択時の A/D 変換動作 1248
34.3.2.4 ダブルトリガモード選択時の A/D 変換動作 1249
34.3.2.5 ダブルトリガモード選択時の拡張動作 1250
34.3.3 連続スキャンモード 1251
34.3.3.1 基本動作 1251
34.3.3.2 チャネル選択と自己診断 1252
34.3.4 グループスキャンモード 1253
34.3.4.1 基本動作 1253
34.3.4.2 ダブルトリガモード選択時の A/D 変換動作 1254
34.3.4.3 グループ A 優先制御動作 1255
34.3.5 コンペア機能（ウィンドウ A、ウィンドウ B）..... 1265
34.3.5.1 コンペア機能 1265
34.3.5.2 コンペア機能のイベント出力 1267
34.3.5.3 コンペア機能の制限事項 1269
34.3.6 アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間 1269
34.3.7 A/D データレジスタの自動クリア機能の使用例 1272
34.3.8 A/D 変換値加算／平均モード 1272
34.3.9 断線検出アシスト機能 1273
34.3.10 非同期トリガによる A/D 変換の開始 1274
34.3.11 周辺モジュールからの同期トリガによる A/D 変換の開始 1275
34.4 割り込み要因と DTC/DMAC 転送要求 1276
34.4.1 割り込み要求 1276
34.5 イベントリンク機能 1277

34.5.1 ELC へのイベント出力 ... 1277
34.5.2 ELC からのイベントによる ADC14 の動作 ... 1277
34.6 基準電圧の選択 ... 1277
34.7 高電位基準電圧に内部基準電圧を選択する A/D 変換手順 ... 1278
34.8 使用上の注意事項 ... 1279
34.8.1 データレジスタの読み出し注意事項 ... 1279
34.8.2 A/D 変換停止時の注意事項 ... 1280
34.8.3 A/D 変換強制停止と開始時の動作タイミング ... 1281
34.8.4 スキャン終了割り込み処理の制限事項 ... 1281
34.8.5 モジュールストップ機能の設定 ... 1281
34.8.6 低消費電力状態への遷移に関する制限事項 ... 1281
34.8.7 断線検出アシスト機能使用時の絶対精度誤差 ... 1281
34.8.8 ADHSC ビット書き換え手順 ... 1281
34.8.9 動作モードおよびステータスビットについての注意事項 ... 1282
34.8.10 ボード設計に関する注意事項 ... 1282
34.8.11 ノイズ低減についての注意事項 ... 1282
34.8.12 14 ビット A/D コンバータ入力を使用する場合のポートの設定 ... 1283
34.8.13 ADC14、OPAMP、ACMPLP 間の関係 ... 1283
34.8.14 ソフトウェアスタンバイモードの解除についての注意事項 ... 1283
35. 12 ビット D/A コンバータ（DAC12） ... 1284
35.1 概要 ... 1284
35.2 レジスタの説明 ... 1285
35.2.1 D/A データレジスタ 0（DADR0） ... 1285
35.2.2 D/A コントロールレジスタ（DACR） ... 1285
35.2.3 DADR0 フォーマット選択レジスタ（DADPR） ... 1286
35.2.4 D/A A/D 同期スタートコントロールレジスタ（DAADSCR） ... 1286
35.2.5 D/A VREF コントロールレジスタ（DAVREFCR） ... 1287
35.3 動作説明 ... 1288
35.3.1 D/A 変換と A/D 変換の干渉低減 ... 1289
35.3.2 内部基準電圧を基準電圧として使用するときの注意事項 ... 1291
35.4 イベントリンクの動作設定手順 ... 1292
35.5 イベントリンク動作における注意事項 ... 1292
35.6 使用上の注意事項 ... 1293
35.6.1 モジュールストップ機能の設定 ... 1293
35.6.2 モジュールストップ状態での DAC12 の動作 ... 1293
35.6.3 ソフトウェアスタンバイモード時の DAC12 の動作 ... 1293
35.6.4 D/A 変換と A/D 変換の干渉低減有効時の制限事項 ... 1293
36. 温度センサ（TSN） ... 1294
36.1 概要 ... 1294
36.2 レジスタの説明 ... 1295
36.2.1 温度センサ較正データレジスタ H（TSCDRH） ... 1295

36.2.2 温度センサ較正データレジスタ L（TSCDRL） ... 1295
36.3 温度センサの使用方法 ... 1296
36.3.1 使用前の準備 ... 1296
36.3.2 温度センサの使用手順 ... 1297
37. オペアンプ（OPAMP） ... 1298
37.1 概要 ... 1298
37.2 レジスタの説明 ... 1299
37.2.1 オペアンプモードコントロールレジスタ（AMPMC） ... 1299
37.2.2 オペアンプトリガモードコントロールレジスタ（AMPTRM） ... 1300
37.2.3 オペアンプ起動トリガ選択レジスタ（AMPTRS） ... 1300
37.2.4 オペアンプコントロールレジスタ（AMPC） ... 1301
37.2.5 オペアンプモニタレジスタ（AMPMON） ... 1302
37.3 動作説明 ... 1303
37.3.1 状態遷移 ... 1303
37.3.2 オペアンプ制御動作 ... 1304
37.4 ソフトウェアトリガモード ... 1308
37.5 起動トリガモード ... 1309
37.6 起動および A/D トリガモード ... 1310
37.7 使用上の注意事項 ... 1310
38. 低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP） ... 1311
38.1 概要 ... 1311
38.2 レジスタの説明 ... 1314
38.2.1 ACMPLP モード設定レジスタ（COMPMDR） ... 1314
38.2.2 ACMPLP フィルタコントロールレジスタ（COMPFIR） ... 1315
38.2.3 ACMPLP 出力コントロールレジスタ（COMPOCR） ... 1316
38.2.4 コンパレータ入力選択レジスタ（COMPSEL0） ... 1316
38.2.5 コンパレータ基準電圧選択レジスタ（COMPSEL1） ... 1317
38.3 動作説明 ... 1318
38.4 ノイズフィルタ ... 1321
38.5 ACMPLP 割り込み ... 1322
38.6 ELC イベント出力 ... 1322
38.7 割り込み処理と ELC リンクの関係 ... 1322
38.8 コンパレータ端子出力 ... 1322
38.9 使用上の注意事項 ... 1322
38.9.1 モジュールストップ機能の設定 ... 1322
38.9.2 A/D コンバータとの関係 ... 1322
39. 8 ビット D/A コンバータ（DAC8） ... 1323
39.1 概要 ... 1323
39.2 レジスタの説明 ... 1324
39.2.1 D/A 変換値設定レジスタ n（DACSn）（n = 0, 1） ... 1324
39.2.2 D/A コンバータモードレジスタ（DAM） ... 1324

39.3 動作説明 1325
39.4 使用上の注意事項 1325
39.4.1 モジュールストップ状態 1325
39.4.2 モジュールストップ状態での 8 ビット D/A コンバータの動作 1325
39.4.3 ソフトウェアスタンバイモード時の 8 ビット D/A コンバータの動作 1325
39.4.4 D/A コンバータを使用しないとき 1325
40. 静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU） 1326
40.1 概要 1326
40.2 レジスタの説明 1329
40.2.1 CTSU コントロールレジスタ 0（CTSUCR0） 1329
40.2.2 CTSU コントロールレジスタ 1（CTSUCR1） 1331
40.2.3 CTSU 同期ノイズ低減設定レジスタ（CTSUSDPRS） 1332
40.2.4 CTSU センサ安定待ち時間コントロールレジスタ（CTSUSST） 1333
40.2.5 CTSU 計測チャネルレジスタ 0（CTSUMCH0） 1334
40.2.6 CTSU 計測チャネルレジスタ 1（CTSUMCH1） 1335
40.2.7 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 0（CTSUCHAC0） 1335
40.2.8 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 1（CTSUCHAC1） 1336
40.2.9 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 2（CTSUCHAC2） 1336
40.2.10 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 3（CTSUCHAC3） 1337
40.2.11 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 4（CTSUCHAC4） 1337
40.2.12 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 0（CTSUCHTRC0） 1338
40.2.13 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 1（CTSUCHTRC1） 1338
40.2.14 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 2（CTSUCHTRC2） 1339
40.2.15 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 3（CTSUCHTRC3） 1339
40.2.16 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 4（CTSUCHTRC4） 1340
40.2.17 CTSU 高域ノイズ低減コントロールレジスタ（CTSUDCLKC） 1340
40.2.18 CTSU ステータスレジスタ（CTSUST） 1341
40.2.19 CTSU 高域ノイズ低減スペクトラム拡散コントロールレジスタ（CTSUSSC） 1343
40.2.20 CTSU センサオフセットレジスタ 0（CTSUSO0） 1344
40.2.21 CTSU センサオフセットレジスタ 1（CTSUSO1） 1345
40.2.22 CTSU センサカウンタ（CTSUSC） 1346
40.2.23 CTSU リファレンスカウンタ（CTSURC） 1347
40.2.24 CTSU エラーステータスレジスタ（CTSUERRS） 1348
40.3 動作説明 1349
40.3.1 計測動作原理 1349
40.3.2 計測モード 1351
40.3.2.1 初期設定フロー 1352
40.3.2.2 ステータスカウンタ 1353
40.3.2.3 自己容量シングルスキャンモードの動作 1354
40.3.2.4 自己容量マルチスキャンモードの動作 1356
40.3.2.5 相互容量フルスキャンモードの動作 1358

40.3.3 複数モードに関わる共通事項 1361
40.3.3.1 センサ安定待ち時間と計測時間 1361
40.3.3.2 割り込み 1362
40.4 使用上の注意事項 1364
40.4.1 計測結果データ（CTSUSC カウンタ、CTSURC カウンタ） 1364
40.4.2 ソフトウェアトリガに対する制限 1364
40.4.3 外部トリガに対する制限 1364
40.4.4 強制終了に関する制限 1364
40.4.5 TSCAP 端子 1365
40.4.6 計測動作時（CTSUCR0.CTSUSTRT ビット = 1）の制限 1365
41. データ演算回路（DOC） 1366
41.1 概要 1366
41.2 レジスタの説明 1367
41.2.1 DOC コントロールレジスタ（DOCR） 1367
41.2.2 DOC データインプットレジスタ（DODIR） 1368
41.2.3 DOC データ設定レジスタ（DODSR） 1368
41.3 動作説明 1369
41.3.1 データ比較モード 1369
41.3.2 データ加算モード 1370
41.3.3 データ減算モード 1371
41.4 イベントリンクコントローラ（ELC）への割り込み要求と出力 1371
41.5 使用上の注意事項 1371
41.5.1 モジュールストップ状態の設定 1371
42. SRAM 1372
42.1 概要 1372
42.2 レジスタの説明 1373
42.2.1 SRAM パリティエラー検出後動作レジスタ（PARIOAD） 1373
42.2.2 SRAM プロテクトレジスタ（SRAMPRCR） 1373
42.2.3 ECC 動作モードコントロールレジスタ（ECCMODE） 1374
42.2.4 ECC 2 ビットエラーステータスレジスタ（ECC2STS） 1374
42.2.5 ECC 1 ビットエラー情報更新イネーブルレジスタ（ECC1STSEN） 1375
42.2.6 ECC 1 ビットエラーステータスレジスタ（ECC1STS） 1375
42.2.7 ECC プロテクトレジスタ（ECCPRCR） 1376
42.2.8 ECC プロテクトレジスタ 2（ECCPRCR2） 1376
42.2.9 ECC テストコントロールレジスタ（ECCETST） 1377
42.2.10 SRAM ECC エラー検出後動作レジスタ（ECCOAD） 1377
42.3 動作説明 1378
42.3.1 消費電力低減機能 1378
42.3.2 ECC 機能 1378
42.3.3 ECC エラー発生 1379
42.3.4 ECC デコーダのテスト方法 1380

42.3.5 パリティ計算機能 1381
42.3.6 SRAM エラー要因 1382
42.3.7 アクセスサイクル 1383
42.4 使用上の注意事項 1383
42.4.1 SRAM 領域からの命令フェッチ 1383
42.4.2 SRAM のストアバッファ 1383
43. フラッシュメモリ 1384
43.1 概要 1384
43.2 メモリ構成 1386
43.3 フラッシュキャッシュ 1387
43.3.1 概要 1387
43.3.2 レジスタの説明 1388
43.3.2.1 フラッシュキャッシュイネーブルレジスタ（FCACHEE） 1388
43.3.2.2 フラッシュキャッシュインバリデートレジスタ（FCACHEIV） 1388
43.3.2.3 データフラッシュコントロールレジスタ（DFLCTL） 1389
43.4 動作説明 1390
43.4.1 フラッシュキャッシュ使用における注意 1390
43.5 フラッシュメモリ関連の動作モード 1391
43.5.1 ID コードプロテクト機能 1391
43.6 機能概要 1393
43.6.1 構成領域ビットマップ 1395
43.6.2 スタートアップ領域選択 1395
43.6.3 アクセスウィンドウによるプロテクション 1396
43.7 プログラムコマンド 1397
43.8 サスペンド動作 1397
43.9 プロテクション機能 1397
43.10 シリアルプログラミングモード 1397
43.10.1 SCI ブートモード 1397
43.10.2 USB ブートモード 1398
43.11 シリアルプログラマを使用する場合 1399
43.11.1 シリアルプログラミング 1399
43.11.2 プログラミング環境 1399
43.12 セルフプログラミング 1400
43.12.1 概要 1400
43.12.2 バックグラウンドオペレーション 1400
43.13 フラッシュメモリの読み出し 1401
43.13.1 コードフラッシュメモリの読み出し 1401
43.13.2 データフラッシュメモリの読み出し 1401
43.14 使用上の注意事項 1401
43.14.1 イレースを中断した領域 1401
43.14.2 イレースサスペンドコマンドによる中断 1401
43.14.3 追加の書き込みに関する制限 1401

43.14.4 プログラム／イレース中のリセット 1401
43.14.5 プログラム／イレース中に禁止されるノンマスカブル割り込み 1401
43.14.6 プログラム／イレース中における割り込みベクタの配置 1402
43.14.7 Low-speed モードでのプログラム／イレース 1402
43.14.8 プログラム／イレース中の異常終了 1402
43.14.9 プログラム／イレース中に禁止の動作 1402
44. セグメント LCD コントローラ（SLCDC） 1403
44.1 概要 1403
44.2 レジスタの説明 1405
44.2.1 LCD モードレジスタ 0（LCDM0） 1405
44.2.2 LCD モードレジスタ 1（LCDM1） 1406
44.2.3 LCD クロックコントロールレジスタ 0（LCDC0） 1407
44.3 LCD 表示データレジスタ 1408
44.4 LCD 表示データレジスタの選択 1409
44.4.1 A パターン領域と B パターン領域のデータ表示 1409
44.4.2 点滅表示（A パターン領域と B パターン領域のデータを交互に表示） 1410
44.5 LCD コントローラ／ドライバの設定 1411
44.6 動作停止手順 1412
44.7 LCD 駆動電圧（VL1、VL2、VL4）の供給 1413
44.7.1 外部抵抗分割方式 1413
44.8 コモン信号とセグメント信号 1415
44.9 表示モード 1420
44.9.1 4 時分割表示例 1420
45. セキュア暗号エンジン（SCE5） 1424
45.1 概要 1424
45.2 動作説明 1426
45.2.1 暗号エンジン 1426
45.2.2 暗号化と復号 1427
45.3 使用上の注意事項 1427
45.3.1 ソフトウェアスタンバイモード 1427
45.3.2 モジュールストップ機能の設定 1427
46. Bluetooth Low Energy (BLE) 1428
46.1 概要 1428
46.2 動作説明 1431
46.2.1 状態遷移図 1431
46.3 割り込み 1432
46.4.1 RF トランシーバ用電源 1433
46.4.2 無線規格 1434
46.4.3 ボード設計上の注意事項 1434
47. 内部電圧レギュレータ 1435
47.1 概要 1435

47.2 動作説明 1435
48. 電気的特性 1436
48.1 絶対最大定格 1437
48.2 DC 特性 1439
48.2.1 Tj/Ta の定義 1439
48.2.2 I/O VIH, V_{IL} 1439
48.2.3 I/O I_{OH}, I_{OL} 1441
48.2.4 I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性 1443
48.2.5 低駆動能力の入出力端子出力特性 1445
48.2.6 中駆動能力の入出力端子出力特性 1447
48.2.7 中駆動能力の P409 入出力端子出力特性 1449
48.2.8 IIC 入出力端子出力特性 1450
48.2.9 動作電流とスタンバイ電流 1451
48.2.10 VCC 立ち上がり／立ち下がり勾配とリップル周波数 1460
48.3 AC 特性 1461
48.3.1 周波数 1461
48.3.2 クロックタイミング 1464
48.3.3 リセットタイミング 1467
48.3.4 ウェイクアップ時間 1468
48.3.5 NMI/IRQ ノイズフィルタ 1471
48.3.6 I/O ポート、POEG、GPT、AGT、KINT、ADC14 のトリガタイミング 1472
48.3.7 CAC タイミング 1473
48.3.8 SCI タイミング 1474
48.3.9 SPI タイミング 1479
48.3.10 IIC タイミング 1484
48.3.11 CLKOUT タイミング 1486
48.4 USB 特性 1487
48.4.1 USBFS タイミング 1487
48.5 ADC14 特性 1489
48.6 DAC12 特性 1497
48.7 TSN 特性 1499
48.8 OSC 停止検出特性 1499
48.9 POR/LVD 特性 1500
48.10 VBATT 特性 1504
48.11 CTSU 特性 1507
48.12 セグメント LCD コントローラ特性 1507
48.12.1 抵抗分割方式 1507
48.13 コンパレータ特性 1508
48.14 OPAMP 特性 1509
48.15 フラッシュメモリ特性 1510
48.15.1 コードフラッシュメモリ特性 1510
48.15.2 データフラッシュメモリ特性 1512

48.16 ジョイントテストアクショングループ（JTAG） 1513
48.16.1 シリアルワイヤデバッグ（SWD） 1515
48.17 BLE 特性 1517
48.17.1 送信特性 1517
48.17.2 受信特性（2Mbps） 1517
48.17.3 受信特性（1Mbps） 1518
48.17.4 受信特性（500kbps） 1518
48.17.5 受信特性（125kbps） 1519
付録 1. 各プロセスモードのポート状態 1520
付録 2. 外形寸法図 1522
付録 3. I/O レジスタ 1524
3.1 周辺機能のベースアドレス 1524
3.2 アクセスサイクル 1526
3.3 レジスタの説明 1528
改訂記録 1548

高効率48MHz Arm® Cortex®-M4コア、512KBのコードフラッシュメモリ、96KB SRAM、セグメントLCDコントローラ、静電容量式タッチセンシングユニット、Bluetooth Low Energy、USB2.0フルスピード、14ビットA/Dコンバータ、12ビットD/Aコンバータ、セキュリティ＆セーフティ機能

特長

■ 浮動小数点ユニット（FPU）内蔵 Arm Cortex-M4 コア

- Armv7E-M アーキテクチャ（DSP 命令セット搭載）
- 最大動作周波数：48MHz
- 4GB アドレス空間をサポート
- Arm メモリプロテクションユニット（Arm MPU）（8 領域）
- デバッグ＆トレース：ITM、DWT、FPB、TPIU、ETB
- CoreSight™ デバッグポート：JTAG-DP および SW-DP

■ メモリ

- 512KB のコードフラッシュメモリ
- 8KB データフラッシュメモリ（最大 100000 回のイレース／ライトサイクル）
- 96KB の SRAM
- フラッシュキャッシュ（FCACHE）
- メモリプロテクションユニット
- メモリミラー機能（MMF）
- 128 ビットの固有の ID

■ 接続性

- Bluetooth Low Energy（1 チャネル）
  - Bluetooth5.0に準拠したRFトランシーバおよびLink Layerを内蔵
  - LE 1M PHY、LE 2M PHY、LE Coded PHY（125kbps, 500kbps）、LE Advertising Extensions に対応
  - Bluetooth 専用 AES-CCM（128 ビット）暗号回路を内蔵
- USB2.0 フルスピードモジュール（USBFS）
  - オンチップトランシーバ
  - USB バッテリチャージング規格 1.2 に準拠
- シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）× 4
  - UART
  - 簡易 IIC
  - 簡易 SPI
- シリアルペリフェラルインタフェース（SPI）× 2
- I^2C バスインタフェース（IIC）× 2
- コントローラエリアネットワーク（CAN）モジュール

■ アナログ

- 14 ビット A/D コンバータ（ADC14）
- 12 ビット D/A コンバータ（DAC12）
- 8 ビット D/A コンバータ（DAC8）× 2（ACMPLP 用）
- 低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）× 2
- オペアンプ（OPAMP）× 1
- 温度センサ（TSN）

■ タイマ

- 32 ビット汎用 PWM タイマ（GPT32）× 4
- 16 ビット汎用 PWM タイマ（GPT16）× 3
- 非同期汎用タイマ（AGT）× 2
- ウォッチドッグタイマ（WDT）

■ セーフティ

- エラーコレクションコード（ECC）搭載の SRAM
- SRAM のパリティエラー検査
- フラッシュ領域の保護
- ADC 自己診断機能
- クロック周波数精度測定回路（CAC）
- 巡回冗長検査（CRC）演算器
- データ演算回路（DOC）
- GPT 用のポートアウトプットイネーブル（POEG）
- 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）
- GPIO リードバックレベル検出
- レジスタライトプロテクション
- メインクロック発振器停止検出
- 不正メモリアクセス

■ システムおよびパワーマネジメント

- 低消費電力モード
- カレンダおよびバッテリバックアップ対応のリアルタイムクロック（RTC）
- イベントリンクコントローラ（ELC）
- DMA コントローラ（DMAC）× 4
- データトランスファコントローラ（DTC）
- キー割り込み機能（KINT）
- パワーオンリセット
- 電圧設定が可能な低電圧検出（LVD）

■ セキュリティおよび暗号化

- AES128/256
- GHASH
- 真性乱数発生器（TRNG）

■ ヒューマンマシーンインタフェース（HMI）

- セグメント LCD コントローラ（SLCDC）
  - 最大 9 セグメント × 4 コモン
- 静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）

■ マルチクロックソース

- メインクロック発振器（MOSC）
  （1 ～ 20MHz、VCC = 2.4 ～ 3.6V の場合）
  （1 ～ 8MHz、VCC = 1.8 ～ 2.4V の場合）
- サブクロック発振器（SOSC）（32.768kHz）
- 高速オンチップオシレータ（HOCO）
  （24, 32, 48, 64MHz、VCC = 2.4 ～ 3.6V の場合）
  （24, 32, 48MHz、VCC = 1.8 ～ 3.6V の場合）
- 中速オンチップオシレータ（MOCO）（8MHz）
- 低速オンチップオシレータ（LOCO）（32.768kHz）
- IWDT 専用オンチップオシレータ（15kHz）
- HOCO/MOCO/LOCO に対するクロックトリム機能
- クロックアウトのサポート

■ 汎用入出力ポート

- 最大 35 本の入出力端子
  - 最大 3 本の CMOS 入力
  - 最大 32 本の CMOS 入出力
    - 最大 4 本の 5V トレラント入出力
    - 最大 1 本の大電流端子（20mA）

■ 動作電圧

- VCC: 1.8 ～ 3.6V

■ 動作温度およびパッケージ

- Ta = -40 ℃～ +85 ℃
  - 56 ピン QFN（7mm × 7mm、0.4mm ピッチ）

1. 概要

本 MCU は、さまざまなシリーズのソフトウェアおよび端子と互換性のある Arm® ベースの 32 ビットコア MCU で構成されています。同じ一連のルネサス周辺デバイスを共有することで、設計の拡張性やプラットフォームベースの製品開発の効率が高まります。

本 MCU は、最大 48MHz で動作する低消費電力で高性能な Arm Cortex®-M4 コアと、以下の各機能を最適な形で組み合わせています。

- 512KB のコードフラッシュメモリ
- 96KB の SRAM
- Bluetooth Low Energy (BLE)
- セグメント LCD コントローラ（SLCDC）
- 静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）
- USB2.0 フルスピードモジュール（USBFS）
- 14 ビット A/D コンバータ（ADC14）
- 12 ビット D/A コンバータ（DAC12）
- セキュリティ機能

1.1 機能の概要

表 1.1 Armコア

機能	機能の説明
Arm Cortex-M4	• 最高動作周波数：48MHz • Arm Cortex-M4 - リビジョン：r0p1-01rel0 - Armv7E-Mアーキテクチャプロファイル - 単精度浮動小数点ユニット（ANSI/IEEE規格754-2008に準拠） • Armメモリプロテクションユニット（Arm MPU） - Armv7保護メモリシステムアーキテクチャ - 8つのメモリ保護領域 • SysTickタイマ - SYSTICCLK（LOCO）またはICLKクロックによる駆動

表 1.2 メモリ

機能	機能の説明
コードフラッシュメモリ	最大512KBのコードフラッシュメモリ。「43. フラッシュメモリ」を参照してください。
データフラッシュメモリ	8KBのデータフラッシュメモリ。「43. フラッシュメモリ」を参照してください。
オプション設定メモリ	オプション設定メモリは、MCUのリセット後の状態を決定します。 「7. オプション設定メモリ」を参照してください。
メモリミラー機能（MMF）	MMFを構成することで、コードフラッシュメモリ内のアプリケーションイメージのロードアドレスを、23ビットの未使用メモリ空間におけるアプリケーションイメージのリンクアドレス（メモリミラー空間アドレス）へミラーすることが可能です。ユーザアプリケーションコードを開発する場合、このMMF転送先アドレスから実行するようにリンクします。アプリケーションコードでは、コードフラッシュメモリ内に格納されるときのロードアドレスを認識する必要がありません。「5. メモリミラー機能（MMF）」を参照してください。
SRAM	パリティビットまたは誤り訂正コード（ECC）を備えた高速SRAMを内蔵しています。ECC誤り訂正機能はSRAM0の領域にあります。「42. SRAM」を参照してください。

表 1.3 システム (1/2)

機能	機能の説明
動作モード	2種類の動作モード： • シングルチップモード • SCI/USB ブートモード 「3. 動作モード」を参照してください。
リセット	14種類のリセット： • RES端子リセット • パワーオンリセット • VBATT選択電圧のパワーオンリセット • 独立ウォッチドッグタイマリセット • ウォッチドッグタイマリセット • 電圧監視0リセット • 電圧監視1リセット • SRAMパリティエラーリセット • SRAM ECCエラーリセット • バスマスタMPUエラーリセット • バススレーブMPUエラーリセット • スタックポインタエラーリセット • ソフトウェアリセット 「6. リセット」を参照してください。
低電圧検出（LVD）	低電圧検出（LVD）機能は、VCC端子へ入力された電圧レベルを監視します。検出レベルはソフトウェアプログラムで選択できます。「8. 低電圧検出（LVD）」を参照してください。
クロック	• メインクロック発振器（MOSC） • サブクロック発振器（SOSC） • 高速オンチップオシレータ（HOCO） • 中速オンチップオシレータ（MOCO） • 低速オンチップオシレータ（LOCO） • PLL周波数シンセサイザ • IWDT専用オンチップオシレータ • Bluetooth専用クロック発振器 • Bluetooth専用低速オンチップオシレータ • クロックアウトのサポート 「9. クロック発生回路」を参照してください。
クロック周波数精度測定回路（CAC）	クロック周波数精度測定回路（CAC）は、測定基準として使用するクロック（測定基準クロック）で生成した時間内に、測定対象となるクロック（測定対象クロック）のパルスをカウントし、パルス数が許容範囲内であるかどうかを判定します。 測定が完了した場合、または測定基準クロックで生成した時間内のパルス数が許容範囲内でない場合は、割り込み要求が発生します。 「10. クロック周波数精度測定回路（CAC）」を参照してください。
割り込みコントローラユニット（ICU）	割り込みコントローラユニット（ICU）は、NVIC/DTCモジュールとDMACモジュールにリンクされるイベント信号を制御します。また、NMI割り込みも制御します。「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。
キー割り込み機能（KINT）	キー割り込みは、キーリターンモードレジスタ（KRM）を設定し、キー割り込み入力端子に立ち上がりまたは立ち下がりエッジを入力することで発生させることができます。「21. キー割り込み機能（KINT）」を参照してください。
低消費電力モード	クロック分周器の設定、モジュールストップ設定、通常動作時の電力制御モード選択、低消費電力モードへの遷移など、さまざまな方法で消費電力を低減できます。「11. 低消費電力モード」を参照してください。
バッテリバックアップ機能	バッテリバックアップ機能により、バッテリによる部分電力供給が可能です。バッテリ電源領域に含まれるものには、RTC、SOSC、LOCO、ウェイクアップコントロール、バックアップメモリ、VBATT_R低電圧検出、およびVCCとVBATT間の切り替えがあります。 正常に動作しているとき、バッテリ電源領域にはメイン電源（VCC端子）から電力が供給されます。VCC端子に電圧降下が検出されると、電源は専用のバッテリバックアップ用電源端子（VBATT端子）に切り替わります。 再び電圧が上昇すると、電源は再びVBATT端子からVCC端子へ切り替わります。「12. バッテリバックアップ機能」を参照してください。
レジスタライトプロテクション	レジスタライトプロテクション機能は、ソフトウェアエラーによって重要なレジスタが書き換えられないように保護します。「13. レジスタライトプロテクション」を参照してください。

表 1.3 システム (2/2)

機能	機能の説明
メモリプロテクションユニット（MPU）	メモリ保護のために4つのメモリプロテクションユニット（MPU）とCPUスタックポインタモニタ機能が備えられています。「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。
ウォッチドッグタイマ（WDT）	ウォッチドッグタイマ（WDT）は14ビットのダウンカウンタです。システムが暴走してWDTをリフレッシュできないためにカウンタがアンダーフローした場合、本MCUをリセットするために使用できます。さらに、アンダーフローによって、ノンマスカブル割り込みまたは割り込みを発生させることも可能です。カウンタのリフレッシュには、リフレッシュ許可期間を設定することができ、この許可期間を暴走検知の条件として使用できます。「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。
独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）	独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）は14ビットのダウンカウンタで構成されます。このカウンタはアンダーフロー防止のため周期的に動作させる必要があります。IWDTには、本MCUをリセットする機能や、タイマのアンダーフローに備えて割り込み／ノンマスカブル割り込みを生成する機能があります。タイマは独立した専用のクロックソースで動作するため、システムが暴走したとき、本MCUをフェールセーフ機構と呼ばれる状態に戻すことに特に役立ちます。独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）は、リセット、アンダーフロー、リフレッシュエラー時に自動的に起動します。あるいはレジスタのカウント値のリフレッシュによっても起動します。「27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

表 1.4 イベントリンク

機能	機能の説明
イベントリンクコントローラ（ELC）	イベントリンクコントローラ（ELC）は、各周辺モジュールで発生する割り込み要求をイベント信号として使用し、それらを異なるモジュールに接続することにより、CPUを介さずにモジュール間の直接的な相互作用を可能にします。「19. イベントリンクコントローラ（ELC）」を参照してください。

表 1.5 ダイレクトメモリアクセス

機能	機能の説明
データトランスファコントローラ（DTC）	データトランスファコントローラ（DTC）モジュールは割り込み要求による起動時に、データ転送を行います。「18. データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。
DMAコントローラ（DMAC）	4チャネルのDMAコントローラ（DMAC）モジュールは、CPUを介さずにデータ転送が可能です。DMA転送要求が発生すると、DMACは転送元アドレスに格納されているデータを転送先アドレスへ転送します。「17. DMAコントローラ（DMAC）」を参照してください。

表 1.6 タイマ

機能	機能の説明
汎用PWMタイマ（GPT）	汎用PWMタイマ（GPT）は、4チャネルの32ビットタイマの場合と、3チャネルの16ビットタイマの場合があります。PWM波形は、アップカウンタ、ダウンカウンタ、またはアップダウンカウンタを制御することで発生させることができます。さらに、ブラシレスDCモータ制御用のPWM波形を発生させることもできます。GPTは汎用タイマとしても使用可能です。「23. 汎用PWMタイマ（GPT）」を参照してください。
GPT用のポートアウトプットイネーブル（POEG）	汎用PWMタイマ（GPT）の出力端子を出力禁止状態とするには、GPT用のポートアウトプットイネーブル（POEG）機能を使用します。「22. GPT用ポートアウトプットイネーブル（POEG）」を参照してください。
非同期汎用タイマ（AGT）	非同期汎用タイマ（AGT）は、パルスの出力、外部パルスの幅または周期の測定、および外部イベントのカウントに利用可能な16ビットタイマです。 この16ビットタイマは、リロードレジスタとダウンカウンタで構成されます。これらのリロードレジスタとダウンカウンタは、同一アドレスに配置され、AGTレジスタでアクセスが可能です。「24. 非同期汎用タイマ（AGT）」を参照してください。
リアルタイムクロック（RTC）	リアルタイムクロック（RTC）は、カレンダカウントモードとバイナリカウントモードの2種類のカウントモードを持ちます。これらはレジスタ設定で制御されます。 カレンダカウントモードでは、RTCは2000年から2099年までの100年間のカレンダを内蔵しており、うるう年を自動調整します。 バイナリカウントモードでは、RTCは秒をカウントし、その情報をシリアル値として保持します。バイナリカウントモードは、西暦以外のカレンダに利用可能です。 「25. リアルタイムクロック（RTC）」を参照してください。

表 1.7 通信インタフェース

機能	機能の説明
シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）	シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）は、下記の5種類の調歩同期式および同期式シリアルインタフェースとして設定が可能です。 • 調歩同期式インタフェース（UARTおよび調歩同期式通信インタフェースアダプタ（ACIA）） • 8ビットクロック同期式インタフェース • 簡易IIC（マスタのみ） • 簡易SPI • スマートカードインタフェース スマートカードインタフェースは、電子信号と伝送プロトコルに関してISO/IEC 7816-3規格に準拠しています。 SCI0およびSCI1はFIFOバッファを内蔵しており、連続した全二重通信が可能です。また、内蔵のボーレートジェネレータを用いて、データの転送速度を個別に設定することが可能です。「29. シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）」を参照してください。
I²Cバスインタフェース（IIC）	2チャネルI²Cバスインタフェース（IIC）モジュールは、NXP社が提唱するI²Cバス（Inter-Integrated Circuit Bus）インタフェース機能に準拠しており、そのサブセット機能を提供しています。「30. I²Cバスインタフェース（IIC）」を参照してください。
シリアルペリフェラルインタフェース（SPI）	独立した2つのシリアルペリフェラルインタフェース（SPI）チャネルによって、複数のプロセッサおよび周辺デバイスとの高速な全二重同期式シリアル通信が可能です。「32. シリアルペリフェラルインタフェース（SPI）」を参照してください。
CAN（Controller Area Network）モジュール	CAN（Controller Area Network）モジュールは、電磁ノイズの多い応用機器において、複数のスレーブ・マスタ間でメッセージベースのプロトコルを用いたデータの送受信機能を提供します。 CANモジュールは、ISO 11898-1（CAN 2.0A/CAN 2.0B）規格に準拠しており、通常のメールボックスモードおよびFIFOモードを送受信用に設定可能な最大32個のメールボックスをサポートしています。標準（11ビット）と拡張（29ビット）の両方のメッセージフォーマットに対応しています。「31. CAN（Controller Area Network）モジュール」を参照してください。
USB2.0フルスピードモジュール（USBFS）	USB2.0フルスピードモジュール（USBFS）は、ホストコントローラまたはデバイスコントローラとして動作可能です。本モジュールは、ユニバーサルシリアルバス規格2.0のフルスピード転送とロースピード転送（ホストコントローラのみ）に対応しています。また、USBトランシーバを内蔵しており、ユニバーサルシリアルバス規格2.0で定義されている全転送タイプに対応しています。 データ転送用にバッファメモリを内蔵し、最大10本のパイプを使用できます。 パイプ1～9に対しては、通信を行う周辺デバイスやユーザシステムに合わせて任意のエンドポイント番号の割り付けが可能です。 本MCUは、バッテリチャージング規格のリビジョン1.2に準拠しています。「28. USB2.0フルスピードモジュール（USBFS）」を参照してください。
Bluetooth low energy (BLE)	• Bluetooth 5.0 Low Energyの仕様に準拠したRFトランシーバおよびリンク層 • ビットレート：1Mbps, 2Mbps, 500kbps, 125kbps • LE Advertising Extensions • RFトランシーバ電源供給を含む（DC-DCコンバータとリニアレギュレータを選択可能） • 外部部品削減のためのオンチップマッチング回路 • 送信電力：+4dBmをサポート

表 1.8 アナログ

機能	機能の説明
14ビットA/Dコンバータ（ADC14）	逐次比較方式の14ビットA/Dコンバータを内蔵しています。アナログ入力チャネルは最大8チャネルまで選択可能です。変換には温度センサ出力と内部基準電圧を選択できます。A/D変換精度には12ビット変換と14ビット変換が選択可能であり、デジタル値生成における速度と分解能のバランスを最適化できます。「34. 14ビットA/Dコンバータ（ADC14）」を参照してください。
12ビットD/Aコンバータ（DAC12）	出力アンプ付きの12ビットD/Aコンバータ（DAC12）です。「35. 12ビットD/Aコンバータ（DAC12）」を参照してください。
8ビットD/Aコンバータ（DAC8）（ACMPLP用）	出力アンプなしの8ビットD/Aコンバータ（DAC8）です。DAC8はACMPLPの基準電圧としてのみ使用します。「39. 8ビットD/Aコンバータ（DAC8）」を参照してください。
温度センサ（TSN）	デバイス動作の信頼性確保のため、内蔵の温度センサでダイ温度の測定と監視が可能です。このセンサはダイ温度に正比例した電圧を出力するため、ダイ温度と出力電圧はリニアな関係にあります。出力された電圧はADC14で変換されてから、末端の応用機器で使用できます。「36. 温度センサ（TSN）」を参照してください。
低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）	低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）は、基準入力電圧とアナログ入力電圧を比較します。比較結果はソフトウェアで読み取ることも、外部に出力することもできます。基準入力電圧は、CMPREFi（i = 0, 1）端子への入力、内部8ビットD/Aコンバータ出力、またはMCU内部に生成された内部基準電圧（Vref）から選択できます。 ACMPLPの応答速度は、動作開始前に設定可能です。高速モードを設定すると、応答遅延時間が短くなりますが、電流消費は増加します。低速モードを設定すると、応答遅延時間が長くなりますが、電流消費は低減します。「38. 低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）」を参照してください。
オペアンプ（OPAMP）	オペアンプ（OPAMP）は、小さいアナログ入力電圧を増幅してその増幅電圧の出力が可能です。入力端子2つと出力端子1つを備えた差動オペアンプユニットが搭載されています。「37. オペアンプ（OPAMP）」を参照してください。

表 1.9 ヒューマンマシーンインタフェース

機能	機能の説明
セグメントLCDコントローラ（SLCDC）	SLCDCには下記の機能があります。 • A波形またはB波形の選択が可能 • LCD駆動電圧生成回路は外部抵抗分割方式を使用 • 表示データレジスタの自動読み出しによるセグメント信号とコモン信号の自動出力 • LCDの点滅が可能 「44. セグメントLCDコントローラ（SLCDC）」を参照してください。
静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）	静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）は、タッチセンサの静電容量を測定します。ソフトウェアで静電容量の変化を判定することによって、指などがタッチセンサに接触したことを検出できます。通常、タッチセンサの電極表面は電気絶縁体で覆われており、指が電極に直接接触することはありません。「40. 静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）」を参照してください。

表 1.10 データ処理

機能	機能の説明
巡回冗長検査（CRC）演算器	巡回冗長検査（CRC）演算器は、CRCコードを生成してデータエラーを検出します。LSBファーストまたはMSBファーストでの通信用に、CRC演算結果のビットオーダを切り替えることができます。さらに、いくつかのCRC生成多項式が利用可能です。スヌープ機能により、特定のアドレスに対する読み出しと書き込みをモニタできます。この機能は、シリアル送信バッファへの書き込みとシリアル受信バッファからの読み出しをモニタする場合など、特定のイベントでCRCコードの自動生成が必要となるアプリケーションで役立ちます。「33. 巡回冗長検査（CRC）演算器」を参照してください。
データ演算回路（DOC）	データ演算回路（DOC）は、16ビットのデータを比較、加算、または減算する機能です。「41. データ演算回路（DOC）」を参照してください。

表 1.11 セキュリティ

機能	機能の説明
セキュアクリプトエンジン5 （SCE5）	• セキュリティアルゴリズム： - 対称暗号方式：AES • その他のサポート機能： - TRNG（真性乱数発生器） - ハッシュ値生成：GHASH

1.2 ブロック図

図 1.1 に、本 MCU のスーパーセットのブロック図を示します。グループ内の個々のデバイスは、その機能のサブセットを持つ場合があります。

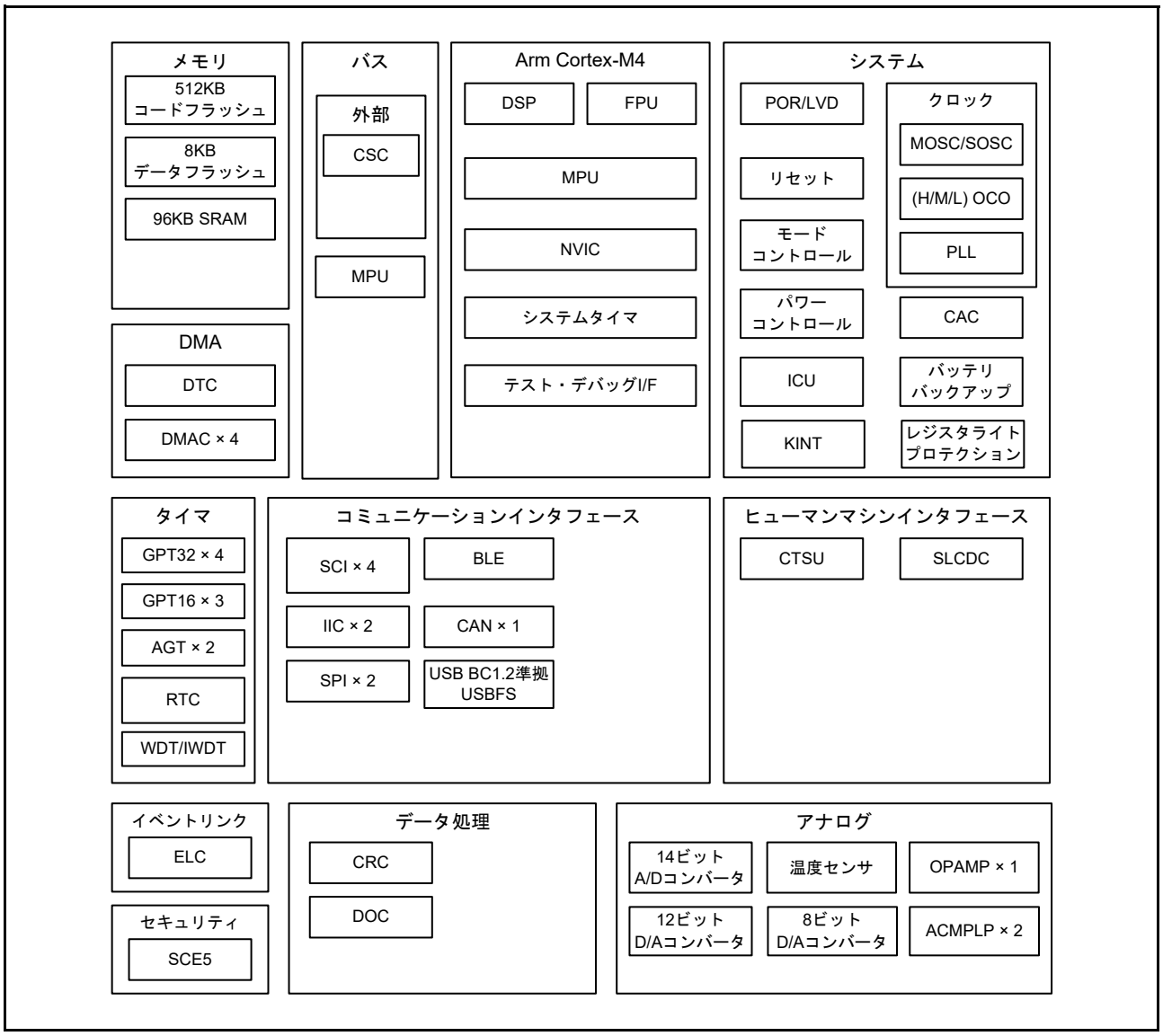


図 1.1 ブロック図

1.3 型名

図 1.2 に、メモリ容量およびパッケージタイプを含む製品型名情報を示します。表 1.12 に製品一覧を示します。

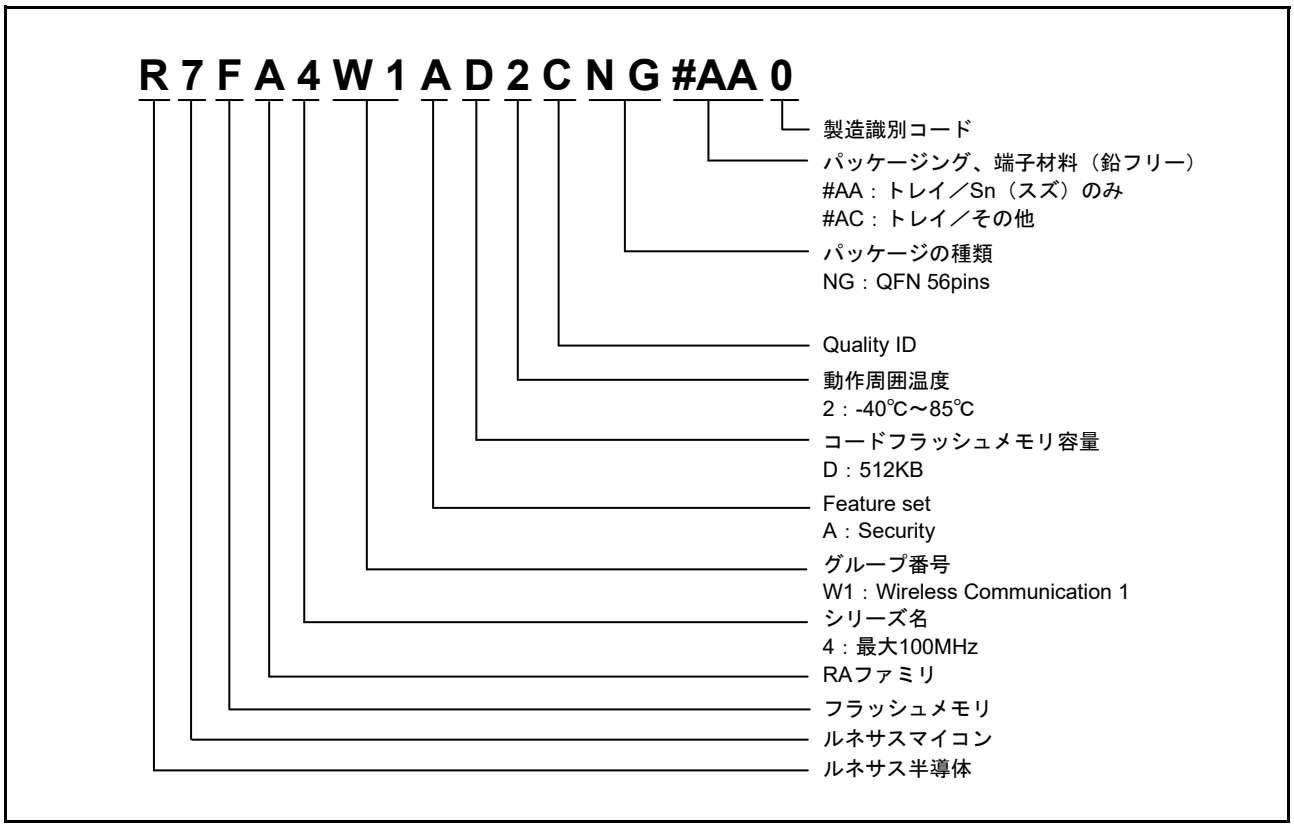


図 1.2 型名の読み方

表 1.12 製品一覧

製品型名	オーダー用型名	コードフラッシュ	データフラッシュ	SRAM	動作温度
R7FA4W1AD2CNG	R7FA4W1AD2CNG#AA0	512KB	8KB	96KB	-40～+85℃

1.4 機能の比較

表 1.13 機能の比較

型名		R7FA4W1AD2CNG
端子総数		56
パッケージ		QFN
コードフラッシュメモリ		512KB
データフラッシュメモリ		8KB
SRAM		96KB
	パリティ	80KB
	ECC	16KB
システム	CPUクロック	48MHz
	バックアップレジスタ	512バイト
	ICU	あり
	KINT	8
イベントコントロール	ELC	あり
DMA	DTC	あり
	DMAC	4
タイマ	GPT32	4
	GPT16	3
	AGT	2
	RTC	あり
	WDT/IWDT	あり
通信	SCI	6
	IIC	2
	SPI	2
	CAN	1
	USBFS	あり
	BLE	Bluetooth5.0準拠RF トランシーバ、Link Layer
アナログ	ADC14	8
	DAC12	1
	DAC8	2
	ACMPLP	2
	OPAMP	1
	TSN	あり
HMI	SLCDC	4com × 9seg
	CTSU	11
データ処理	CRC	あり
	DOC	あり
セキュリティ		SCE5

1.5 端子機能

機能	端子名	入出力	説明
電源	VCC	入力	電源端子。システムの電源に接続してください。この端子は0.1μFのコンデンサを介してVSSに接続してください。コンデンサは端子近くに配置してください。
	VCL	入力	この端子は、内部電源を安定化するための平滑コンデンサを介してVSS端子に接続してください。コンデンサは端子近くに配置してください。
	VSS	入力	グランド端子。システムの電源（0V）に接続してください。
	VBATT	入力	バックアップ電源端子
クロック	XTAL	出力	水晶振動子用の接続端子。EXTAL端子を通じて外部クロック信号の入力が可能です。
	EXTAL	入力	
	XCIN	入力	サブクロック発振器用の入出力端子。XCOUTとXCINの間には、水晶振動子を接続してください。
	XCOUT	出力	
	CLKOUT_RF	出力	4MHz、2MHz、1MHz Bluetooth専用クロック出力
	XTAL1_RF	入力	Bluetooth専用発振子接続端子。32MHzの発振子を接続してください。
	XTAL2_RF	出力	
	CLKOUT	出力	クロック出力端子
動作モードコントロール	MD	入力	動作モード設定用の端子。これらの端子の信号レベルは、リセット解除時の動作モードの遷移中に変更しないでください。
システム制御	RES	入力	リセット信号入力端子。本端子がLowになると、本MCUはリセット状態となります。
CAC	CACREF	入力	測定基準クロックの入力端子
インタラプト	NMI	入力	ノンマスカブル割り込み要求端子
	IRQ0～IRQ4, IRQ6, IRQ7, IRQ9, IRQ11, IRQ14, IRQ15	入力	マスカブル割り込み要求端子
KINT	KR00～KR07	入力	キー割り込みは、キー割り込み入力端子に立ち下がりエッジを入力することで生成することが可能です。
オンチップデバッグ	TMS	入出力	オンチップエミュレータ用端子
	TDI	入力	
	TCK	入力	
	TDO	出力	
	SWDIO	入出力	シリアルワイヤデバッグデータの入出力端子
	SWCLK	入力	シリアルワイヤクロック端子
	SWO	出力	シリアルワイヤトレース出力端子
バッテリバックアップ	VBATWIO0	入出力	VBATTウェイクアップコントロール機能用のウェイクアップ信号出力 VBATTウェイクアップコントロール機能用の外部イベント入力
GPT	GTETRGA, GTETRGB	入力	外部トリガ入力端子
	GTIO0A～GTIO5A, GTIO8A, GTIO0B～GTIO5B, GTIO8B	入出力	インプットキャプチャ、アウトプットキャプチャ、またはPWM出力端子
	GTIU	入力	ホールセンサ入力端子U
	GTIV	入力	ホールセンサ入力端子V
	GTIW	入力	ホールセンサ入力端子W
	GTOUUP	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（正相U相）
	GTOULO	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（逆相U相）
	GTOVUP	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（正相V相）
	GTOVLO	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（逆相V相）
	GTOWUP	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（正相W相）
	GTOWLO	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（逆相W相）
AGT	AGTEE0, AGTEE1	入力	外部イベント入力
	AGTIO0, AGTIO1	入出力	外部イベント入力およびパルス出力
	AGTO0, AGTO1	出力	パルス出力
	AGTOB0	出力	出力コンペアマッチB出力

機能	端子名	入出力	説明
RTC	RTCOUT	出力	1Hz/64Hzのクロック出力端子
	RTCIC0, RTCIC2	入力	時間キャプチャイベント入力端子
SCI	SCK0,SCK1,SCK4, SCK9	入出力	クロック用の入出力端子（クロック同期式モード）
	RXD0, RXD1, RXD4, RXD9	入力	受信データ用の入力端子（調歩同期式モード／クロック同期式モード）
	TXD0, TXD1, TXD4, TXD9	出力	送信データ用の出力端子（調歩同期式モード／クロック同期式モード）
	CTS0_RTS0, CTS1_RTS1, CTS4_RTS4, CTS9_RTS9	入出力	送受信の開始制御用の入出力端子（調歩同期式モード／クロック同期式モード）、アクティブLow
	SCL0, SCL1, SCL4, SCL9	入出力	I^2Cクロック用の入出力端子（簡易IIC）
	SDA0, SDA1, SDA4, SDA9	入出力	I^2Cデータ用の入出力端子（簡易IIC）
	SCK0, SCK1, SCK4, SCK9	入出力	クロック用の入出力端子（簡易SPI）
	MISO0, MISO1, MISO4, MISO9	入出力	データのスレーブ送信用の入出力端子（簡易SPI）
	MOSI0, MOSI1, MOSI4, MOSI9	入出力	データのマスタ送信用の入出力端子（簡易SPI）
	SS0, SS1,SS4,SS9	入力	スレーブ選択入力端子（簡易SPI）、アクティブLow
IIC	SCL0～SCL1	入出力	クロック用の入出力端子
	SDA0～SDA1	入出力	データ用の入出力端子
SPI	RSPCKA, RSPCKB	入出力	クロック入出力端子
	MOSIA, MOSIB	入出力	マスタから出力されたデータの入出力
	MISOA, MISOB	入出力	スレーブから出力されたデータの入出力
	SSLA0, SSLB0	入出力	スレーブ選択用の入出力端子
	SSLA1, SSLA2, SSLA3, SSLB1, SSLB3	出力	スレーブ選択用の出力端子
CAN	CRX0	入力	受信データ
	CTX0	出力	送信データ
USBFS	VSS_USB	入力	グランド端子
	VCC_USB_LDO	入力	USBトランシーバ用の電源端子。 VCC_USBと同じ電圧を印可してください。
	VCC_USB	入出力	入力：USBトランシーバ用の電源端子
	USB_DP	入出力	USB内蔵トランシーバD+入出力端子。この端子はUSBバスのD+端子に接続してください。
	USB_DM	入出力	USB内蔵トランシーバD-入出力端子。この端子はUSBバスのD-端子に接続してください。
	USB_VBUS	入力	USBケーブル接続モニタ端子。USBバスのVBUSに接続してください。 デバイスコントローラ機能選択時のVBUSの接続／切断を検出することが可能です。
	USB_VBUSEN	出力	外部電源チップへのVBUS（5V）供給許可信号
	USB_OVRCURA, USB_OVRCURB	入力	外部オーバーカレント検出信号を接続してください。
アナログ電源	AVCC0	入力	アナログ部の電源端子
	AVSS0	入力	アナログ部の電源グランド端子
	VREFH0	入力	基準電源端子
	VREFL0	入力	基準電源グランド端子
ADC14	AN004～AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020	入力	A/Dコンバータで処理されるアナログ信号用の入力端子
	ADTRG0	入力	A/D変換を開始する外部トリガ信号用の入力端子、アクティブLow
DAC12	DA0	出力	D/Aコンバータのアナログ出力端子
コンパレータ出力	VCOUT	出力	コンパレータ出力端子

機能	端子名	入出力	説明
ACMPLP	CMPREF0, CMPREF1	入力	基準電圧入力端子
	CMPIN0, CMPIN1	入力	アナログ電圧入力端子
OPAMP	AMP2+	入力	アナログ電圧入力端子
	AMP2-	入力	アナログ電圧入力端子
	AMP2O	出力	アナログ電圧出力端子
CTSU	TS00, TS01, TS03, TS10, TS12, TS13, TS18, TS28, TS30, TS31, TS34	入力	静電容量式タッチ検出端子（タッチ端子）
	TSCAP	—	タッチドライバ用の二次電源端子
I/Oポート	P004, P010, P011, P014, P015	入出力	汎用入出力端子
	P100～P111	入出力	汎用入出力端子
	P200	入力	汎用入力端子
	P201, P204～P206, P212, P213	入出力	汎用入出力端子
	P214, P215	入力	汎用入力端子
	P300	入出力	汎用入出力端子
	P402, P404, P407, P409, P414	入出力	汎用入出力端子
	P501	入出力	汎用入出力端子
	P914, P915	入出力	汎用入出力端子
SLCDC	VL1, VL2, VL4	入出力	LCD駆動用の電圧端子
	COM0～COM3	出力	LCDコントローラ／ドライバ用のコモン信号出力端子
	SEG6, SEG9, SEG11, SEG12, SEG20, SEG23, SEG49, SEG52, SEG53	出力	LCDコントローラ／ドライバ用のセグメント信号出力端子
Bluetooth low energy	ANT	入出力	RFトランシーバのRF単一入出力端子 （信号ラインは50Ωインピーダンスにしてください）
	DCLOUT	出力	RFトランシーバ用電源出力端子
	DCLIN_A	入力	RFトランシーバ用電源出力接続端子
	DCLIN_D	入力	RFトランシーバ用電源出力接続端子
	VCC_RF	入力	RFトランシーバ用電源端子
	AVCC_RF	入力	RFトランシーバ用電源端子
	VSS_RF	入力	RFトランシーバ用グランド端子

1.6 ピン配置図

図 1.3 にピン配置図を示します。

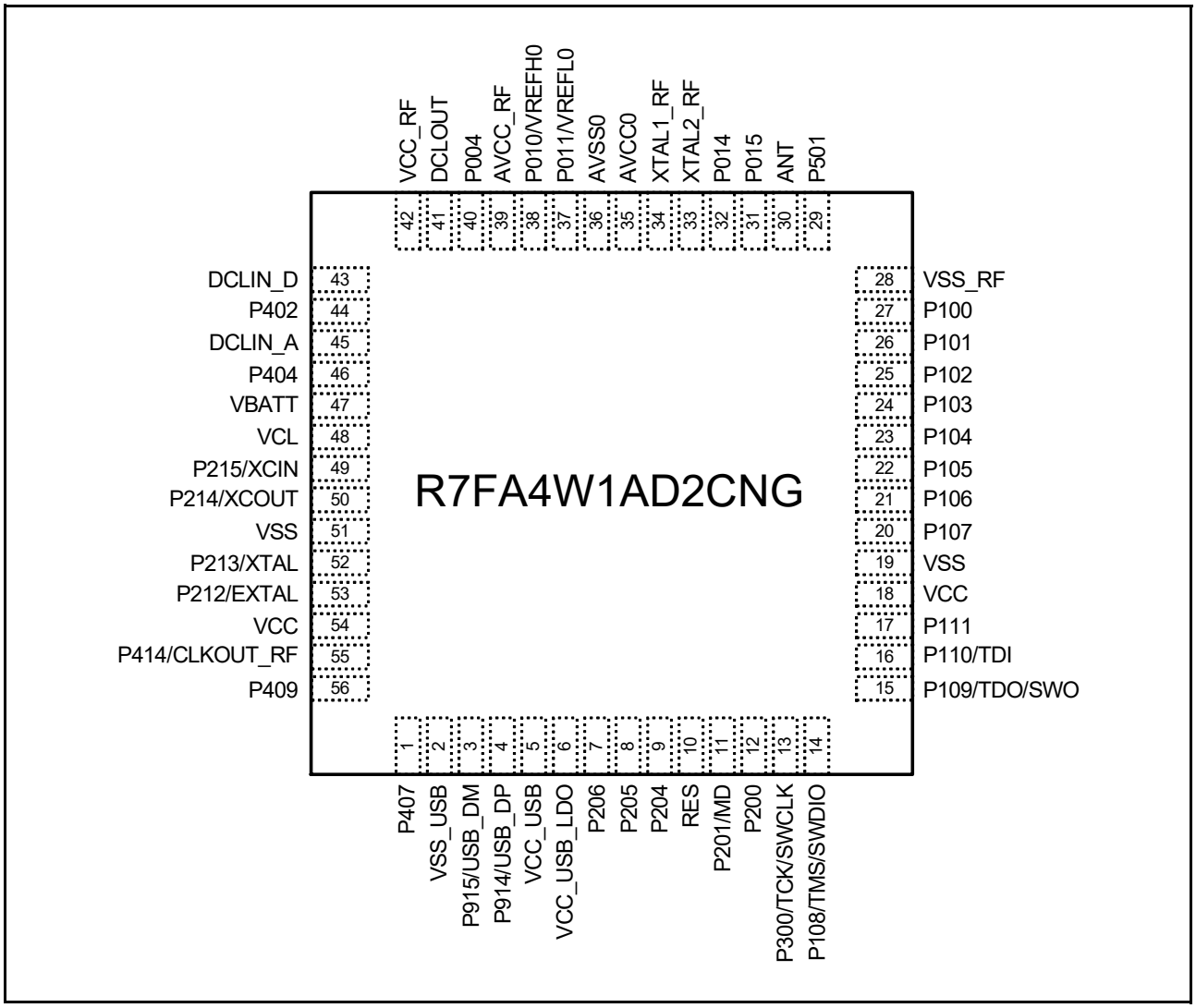


図 1.3 56-pin QFN のピン配置図（上面透視図）

注 . VSS_RF は exposed die pad 端子です。
詳細は「2. 外形寸法図」を参照してください。

1.7 端子一覧

ピン番号				タイマ				通信インタフェース					アナログ			HMI	
QFN56	電源、システム、クロック、デバッグ、CAC、VBATT	インタラプト	I/Oポート	AGT	GPT_OPS, POEG	GPT	RTC	USBFS, CAN	SCI	IIC	SPI	RF	ADC14	DAC12, OPAMP	ACMPLP	SLCDC	CTSU
1			P407	AGTIO0			RTCOUT	USB_VBUS	CTS4_RTS4/SS4	SDA0	SSLB3		ADTRG0			SEG11	TS3
2	VSS_USB																
3			P915					USB_DM									
4			P914					USB_DP									
5	VCC_USB																
6	VCC_USB_LDO																
7		IRQ0	P206		GTIU			USB_VBUSEN	RXD4/MISO4/SCL4	SDA1	SSLB1					SEG12	TS1
8	CLKOUT	IRQ1	P205	AGTO1	GTIV	GTIOC4A		USB_OVRCURA	TXD4/MOSI4/SDA4/CTS9_RTS9/SS9	SCL1	SSLB0					SEG20	TSCAP
9	CACREF		P204	AGTO1	GTIW	GTIOC4B		USB_OVRCURB	SCK4/SCK9	SCL0	RSPCKB					SEG23	TS0
10	RES																
11	MD		P201														
12		NMI	P200														
13	TCK/SWCLK		P300		GTOUUP	GTIOC0A					SSLB1						
14	TMS/SWDIO		P108		GTOULO	GTIOC0B			CTS9_RTS9/SS9		SSLB0						
15	TDO/SWO/CLKOUT		P109		GTOVUP	GTIOC1A		CTX0	SCK1/TXD9/MOSI9/SDA9		MOSIB					SEG52	TS10
16	TDI	IRQ3	P110		GTOVLO	GTIOC1B		CRX0	RXD9/MISO9/SCL9		MISOB				VCOUT	SEG53	
17		IRQ4	P111			GTIOC3A			SCK9		RSPCKB						TS12
18	VCC																
19	VSS																
20		KR07	P107			GTIOC8A										COM3	
21		KR06	P106			GTIOC8B					SSLA3					COM2	
22		KR05/IRQ0	P105		GTETRGA	GTIOC1A					SSLA2					COM1	TS34
23		KR04/IRQ1	P104		GTETRGB	GTIOC1B			RXD0/MISO0/SCL0		SSLA1					COM0	TS13
24		KR03	P103		GTOWUP	GTIOC2A		CTX0	CTS0_RTS0/SS0		SSLA0		AN019		CMPREF1	VL4	
25		KR02	P102	AGTO0	GTOWLO	GTIOC2B		CRX0	SCK0		RSPCKA		AN020/ADTRG0		CMPIN1		
26		KR01/IRQ1	P101	AGTEE0	GTETRGB	GTIOC5A			TXD0/MOSI0/SDA0/CTS1_RTS1/SS1	SDA1	MOSIA				CMPREF0	VL2	
27		KR00/IRQ2	P100	AGTIO0	GTETRGA	GTIOC5B			RXD0/MISO0/SCL0/SCK1	SCL1	MISOA				CMPIN0	VL1	
28												VSS_RF					
29		IRQ11	P501	AGTOB0	GTIV	GTIOC2B		USB_OVRCURA					AN017		CMPIN1	SEG49	
30												ANT					

ピン番号	電源、システム、クロック、デバッグ、CAC、VBATT	インタラプト	I/Oポート	タイマ				通信インタフェース					アナログ			HMI	
QFN56				AGT	GPT_OPS, POEG	GPT	RTC	USBFS, CAN	SCI	IIC	SPI	RF	ADC14	DAC12, OPAMP	ACMPLP	SLCDC	CTSU
31		IRQ7	P015										AN010				TS28
32			P014										AN009	DA0			
33												XTAL2_RF					
34												XTAL1_RF					
35	AVCC0																
36	AVSS0																
37	VREFL0	IRQ15	P011										AN006	AMP2+			TS31
38	VREFH0	IRQ14	P010										AN005	AMP2-			TS30
39												AVCC_RF					
40		IRQ3	P004										AN004	AMP2O			
41												DCLOUT					
42												VCC_RF					
43												DCLIN_D					
44	VBATWIO0	IRQ4	P402	AGTIO0/ AGTIO1			RTCIC0	CRX0	RXD1/ MISO1/ SCL1							SEG6	TS18
45												DCLIN_A					
46			P404			GTIOC3B	RTCIC2										
47	VBATT																
48	VCL																
49	XCIN		P215														
50	XCOUT		P214														
51	VSS																
52	XTAL	IRQ2	P213		GTETRGA	GTIOC0A			TXD1/ MOSI1/ SDA1								
53	EXTAL	IRQ3	P212	AGTEE1	GTETRGB	GTIOC0B			RXD1/ MISO1/ SCL1								
54	VCC																
55		IRQ9	P414			GTIOC0B					SSLA1	CLKOUT_ RF					

ピン番号				タイマ				通信インタフェース					アナログ			HMI	
QFN56	電源、システム、クロック、デバッグ、CAC、VBATT	インタラプト	I/Oポート	AGT	GPT_OPS, POEG	GPT	RTC	USBFS, CAN	SCI	IIC	SPI	RF	ADC14	DAC12, OPAMP	ACMPLP	SLCDC	CTSU
56		IRQ6	P409		GTOWUP	GTIOC5A		USB_EXICEN								SEG9	

注： VSS_RF は exposed die pad 端子です。
詳細は「2. 外形寸法図」を参照してください。

2. CPU

本 MCU は、Arm® Cortex®-M4 コアをベースにしています。

2.1 概要

2.1.1 CPU

- Arm Cortex-M4
  - リビジョン：r0p1-01rel0
  - Armv7E-M アーキテクチャプロファイル
  - 単精度浮動小数点ユニット（ANSI/IEEE 規格 754-2008 に準拠）
- メモリプロテクションユニット（MPU）
  - Armv7 保護メモリシステムアーキテクチャ
  - 8 つのメモリ保護領域
- SysTick タイマ
  - SYSTICCLK（LOCO）または ICLK クロックによる駆動

詳細は、参考資料 1. および 2. を参照してください。

2.1.2 デバッグ

- Arm CoreSight™ ETM™-M4
  - リビジョン：r0p1-00rel0
  - Arm ETM アーキテクチャバージョン 3.5
- CoreSight 計装トレースマクロセル（ITM）
- データウォッチポイント & トレース（DWT）ユニット
  - ウォッチポイントとトリガ用の 4 つのコンパレータ
- フラッシュパッチ & ブレークポイント（FPB）ユニット
  - フラッシュパッチ（リマップ）機能は使用できません。ブレイクポイント機能のみ使用可能です
  - 6 つの命令コンパレータ
  - 2 つのリテラルコンパレータ
- CoreSight タイムスタンプジェネレータ（TSG）
  - ETM および ITM 用タイムスタンプ
  - CPU クロックによる駆動
- デバッグレジスタモジュール（DBGREG）
  - リセットコントロール
  - 停止コントロール
- CoreSight デバッグアクセスポート（DAP）
  - JTAG デバッグポート（JTAG-DP）
  - シリアルワイヤデバッグポート（SW-DP）

- Cortex-M4 トレースポートインタフェースユニット（TPIU）
  - シリアルワイヤ出力（SWO）
- CoreSight エンベデッドトレースバッファ（ETB）
  - CoreSight トレースメモリコントローラ（ETB コンフィグレーション内蔵）
  - バッファサイズ：1KB

詳細は、参考資料 1. および 2. を参照してください。

2.1.3 動作周波数

本 MCU の動作周波数は以下のとおりです。

- CPU：最大 48MHz
- シリアルワイヤ出力（SWO）トレースインタフェース：最大 12.5MHz
- Joint Test Action Group（JTAG）インタフェース：最大 12.5MHz
- シリアルワイヤデバッグ（SWD）インタフェース：最大 12.5MHz

図 2.1 に Cortex-M4 CPU のブロック図を示します。

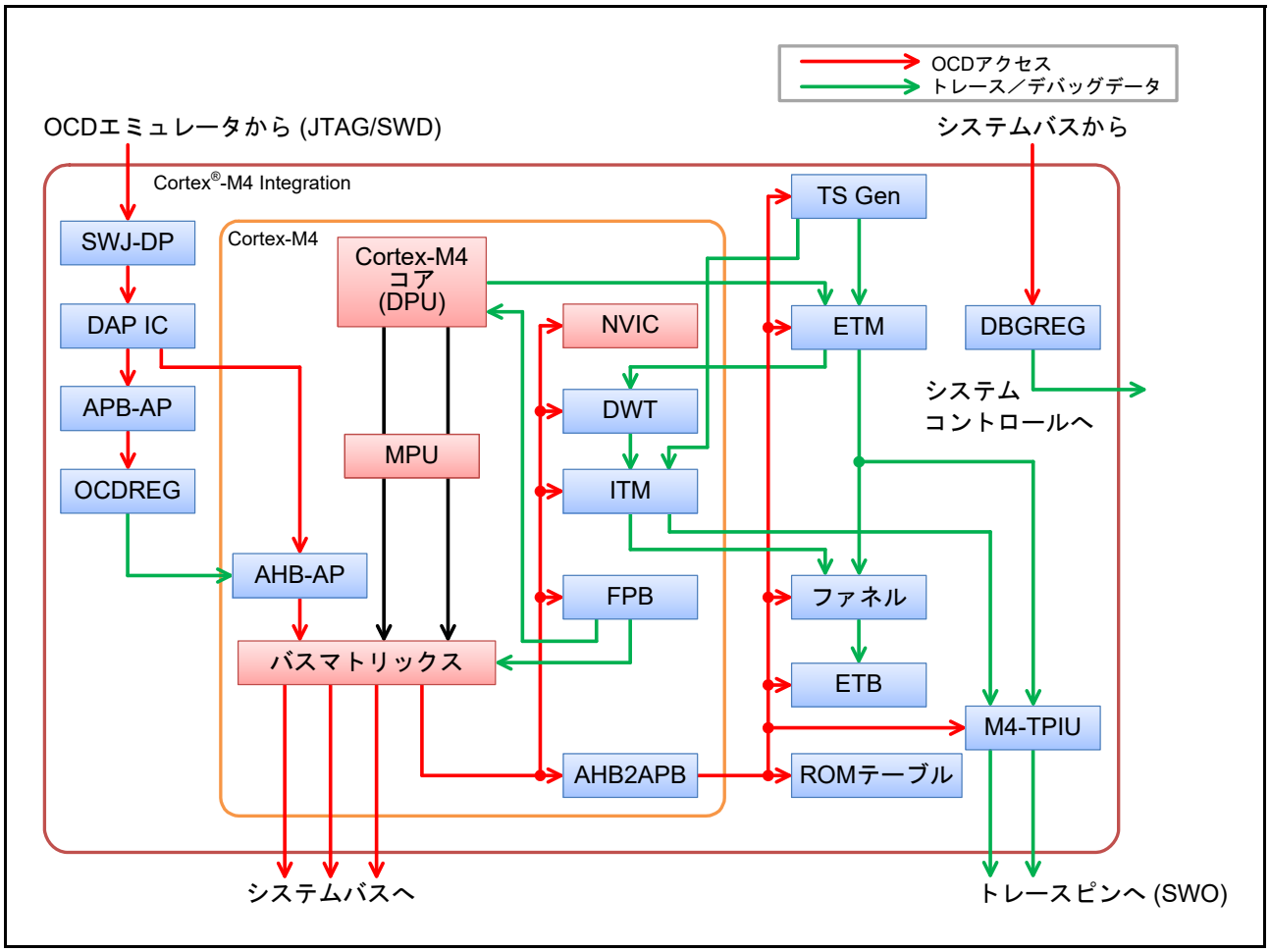


図 2.1 Cortex-M4 CPU ブロック図

2.2 MCU の実装オプション

表 2.1 に MCU の実装オプションを示します。これは、参考資料 2. の構成可能オプションを基にしています。

表 2.1 実装オプション

コンポーネント	説明
MPU	あり（8つのメモリ保護領域）
FPB	フラッシュパッチ（リマップ）機能は使用できず、ブレイクポイント機能のみ使用可能です。
DWT	あり
ITM	あり
ETM	あり
AHB-AP	あり
HTMインタフェース	なし
TPIU	あり シリアルワイヤ出力のみ
WIC（注1）	なし
デバッグポート	SWJ-DP
FPU	あり
割り込み数	32
プライオリティビット数	4ビット（16レベル）
エンディアン形式	リトルエンディアン
タイムスタンプジェネレータ	あり
ETB	あり
スリープモードパワーセーブ	スリープモードなどの低消費電力モードがサポートされています。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。 SCB.SCR.SLEEPDEEPは無視されます。
メモリ特性	本MCUではキャッシュ可能属性を利用しています。 詳細は、「15. バス」を参照してください。
SysTickタイマ	あり SYST_CALIB = 4000 0147h ビット [31] = 0 基準クロック提供 ビット [30] = 1 TERMS値が精度異常 ビット [29:24] = 00h 予約ビット ビット [23:0] = 000147h TERM: (32768 × 10ms) - 1 / 32.768kHz = 326.66（10進） = 327（スキューを含む） = 000147h
イベント入出力	実装なし
システムリセット要求出力	アプリケーション割り込みおよびリセットコントロールレジスタのSYSRESETREQビットによってCPUがリセットされます。
補助フォルト入力（AUXFAULT）	実装なし

注 1. ウェイクアップ割り込みコントローラ（WIC）の代わりに、ICU によって CPU のウェイクアップが可能です。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

2.3 トレースインタフェース

シリアルワイヤ出力（SWO）はトレース出力を行います。表 2.2 はトレース機能用の MCU 端子を示します。この端子は他機能と兼用されます。

表 2.2 トレース機能の端子

名称	入出力	幅	機能	使用しない場合
TDO/SWO	出力	1ビット	シリアルワイヤ出力 JTAG TDO端子と兼用	オープン

2.4 JTAG/SWD インタフェース

表 2.3 は JTAG/SWD 端子を示します。

表 2.3 JTAG/SWD端子

名称	入出力	P/N	幅	機能	使用しない場合
TCK/SWCLK	入力	Pos.	1ビット	JTAGクロック端子／SWDクロック端子	プルアップ
TMS/SWDIO	入出力	Neg.	1ビット	JTAG TMS端子／SWD入出力端子	プルアップ
TDI	入力	Pos.	1ビット	JTAG TDI端子	プルアップ
TDO/SWO	出力	Neg.	1ビット	JTAG TDO端子 シリアルワイヤ出力と兼用	オープン

2.5 デバッグモード

2.5.1 デバッグモード定義

シングルチップモードでは、デバッガを接続した状態を OCD（オンチップデバッガ）モード、デバッガを接続していない状態をユーザモードと定義します。表 2.4 に、2 つの CPU デバッグモードおよびその使用条件を示します。

表 2.4 CPUデバッグモードおよび条件

条件		モード	
OCD接続	JTAG/SWD認証	デバッグモード	デバッグ認証
未接続	—	ユーザモード	禁止
接続	不合格	ユーザモード	禁止
接続	合格	OCDモード	許可

注 . OCD 接続は、SWJ-DP レジスタの CDBGPWRUPREQ ビット出力によって判別されます。このビットは OCD によってのみ書き込み可能です。ただし、このビットのレベルは、DBGSTR.CDBGPWRUPREQ ビットを読み出すことで確認できます。

注 . デバッグ認証は、ARMv7-M アーキテクチャによって定義されます。「許可」とは、侵入型と非侵入型の両方の CPU デバッグが許可されることを意味します。「禁止」とは、両方とも許可されないことを意味します。

2.5.2 デバッグモードの影響

この節ではデバッグモードの影響について説明します。デバッグモードはCPUの内部および外部に影響を与えます。

2.5.2.1 低消費電力モード

すべてのCoreSightデバッグコンポーネントは、CPUがソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモードへ遷移した場合でも、レジスタの設定値を格納することが可能です。ただし、これらの低消費電力モードにおいては、AHB-APはオンチップデバッグ（OCD）アクセスに応答できません。CoreSightデバッグコンポーネントにアクセスするには、OCDは低消費電力モードが解除されるのを待つ必要があります。OCDはMCUCTRLレジスタのDBIRQビットを設定することで、低消費電力モードの解除を要求できます。詳細は、2.6.5.3 MCUコントロールレジスタ（MCUCTRL）を参照してください。

2.5.2.2 リセット

OCDモードでは、一部のリセットはCPU状態とDBGSTOPCRの設定内容に依存します。

表2.5 リセットまたは割り込みおよびモード設定

リセット／割り込み名称	オンチップデバッグ（OCD）モード時の制御	
	OCDブレークモード	OCD RUNモード
RES端子リセット	ユーザモードと同じ	
パワーオンリセット	ユーザモードと同じ	
独立ウォッチドッグタイマリセット／割り込み	発生しない（注1）	DBGSTOPCRの設定内容に依存（注2）
ウォッチドッグタイマリセット／割り込み	発生しない（注1）	DBGSTOPCRの設定内容に依存（注2）
電圧監視0リセット	DBGSTOPCRの設定内容に依存（注3）	
電圧監視1リセット／割り込み	DBGSTOPCRの設定内容に依存（注3）	
SRAMパリティエラーリセット／割り込み	DBGSTOPCRの設定内容に依存（注3）	
SRAM ECCエラーリセット／割り込み	DBGSTOPCRの設定内容に依存（注3）	
MPUバスマスタリセット／割り込み	ユーザモードと同じ	
MPUバススレーブリセット／割り込み	ユーザモードと同じ	
スタックポインタエラーリセット／割り込み	ユーザモードと同じ	
ソフトウェアリセット	ユーザモードと同じ	

注 . OCDブレークモードではCPUが停止しています。OCD RUNモードではCPUがOCDモードにあって、停止していません。
注 1. このモードではIWDTとWDTは常に停止しています。
注 2. IWDTとWDTの動作は、DBGSTOPCRの設定内容に依存します。
注 3. リセットまたは割り込みのマスク処理は、DBGSTOPCRの設定内容に依存します。

2.6 プログラマモデル

2.6.1 アドレス空間

本 MCU のデバッグシステムには、次の 2 つの CoreSight アクセスポート（AP）があります。

- AHB-AP：CPU バスマトリックスに接続され、CPU と同様にシステムアドレス空間にアクセスします
- APB-AP：専用のアドレス空間（OCD アドレス空間）を持ち、OCD レジスタに接続されます

図 2.2 は、AP 接続とアドレス空間のブロック図です。

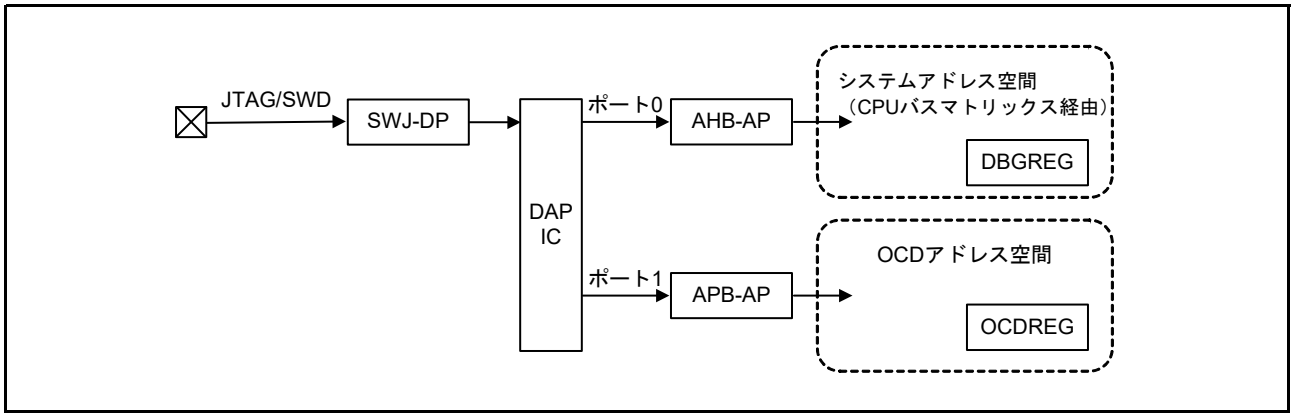


図 2.2 JTAG/SWD 認証のブロック図

デバッグ用に、DBGREG と OCDREG の 2 つのレジスタモジュールが存在します。DBGREG はシステムアドレス空間に配置され、OCD エミュレータ、CPU、および MCU の他のバスマスタからアクセスが可能です。OCDREG は OCD アドレス空間に配置され、OCD ツールからのみアクセスが可能です。CPU と他のバスマスタは OCD レジスタにアクセスできません。

2.6.2 Cortex-M4 ペリフェラルアドレスマップ

システムアドレス空間では、Cortex-M4 コアは専用周辺バス（PPB）を備えます。このバスは CPU および OCD エミュレータからのみアクセスが可能です。PPB は、本 MCU に対する Cortex-M4 最初の実装から拡張されます。表 2.6 は、本 MCU のアドレスマップを示しています。

表 2.6 Cortex-M4 ペリフェラルアドレスマップ

コンポーネント名	開始アドレス	終了アドレス	備考
ITM	E000 0000h	E000 0FFFh	参考資料 2. を参照してください。
DWT	E000 1000h	E000 1FFFh	参考資料 2. を参照してください。
FPB	E000 2000h	E000 2FFFh	参考資料 2. を参照してください。
SCS	E000 E000h	E000 EFFFh	参考資料 2. を参照してください。
TPIU	E004 0000h	E004 0FFFh	参考資料 2. を参照してください。
ETM	E004 1000h	E004 1FFFh	参考資料 5. を参照してください。
ATB ファネル	E004 2000h	E004 2FFFh	2.7 を参照してください。 参考資料 4. を参照してください。
ETB	E004 3000h	E004 3FFFh	参考資料 6. を参照してください。
タイムスタンプジェネレータ	E004 4000h	E004 4FFFh	2.10 を参照してください。 参考資料 4. を参照してください。
ROM テーブル	E00F F000h	E00F FFFFh	2.6.3 を参照してください。 参考資料 7. を参照してください。

2.6.3 CoreSight ROM テーブル

本 MCU には 1 つの CoreSight ROM テーブルがあります。これは Arm コンポーネントの一覧表です。

2.6.3.1 ROM エントリ

表 2.7 に、CoreSight ROM テーブルの ROM エントリを示します。OCD エミュレータは、この ROM エントリを使用して、システムに実装されているコンポーネントを識別できます。詳細は、参考資料 7. を参照してください。

表 2.7 CoreSight ROMテーブル

#	アドレス	アクセスサイズ	R/W	値	対象モジュール
0	E00F F000h	32ビット	R	FFF0_F003h	SCS
1	E00F F004h	32ビット	R	FFF0_2003h	DWT
2	E00F F008h	32ビット	R	FFF0_3003h	FPB
3	E00F F00Ch	32ビット	R	FFF0_1003h	ITM
4	E00F F010h	32ビット	R	FFF4_1003h	TPIU
5	E00F F014h	32ビット	R	FFF4_2003h	ETM
6	E00F F018h	32ビット	R	FFF4_3003h	ファネル
7	E00F F01Ch	32ビット	R	FFF4_4003h	ETB
8	E00F F020h	32ビット	R	FFF4_5003h	TSG
9	E00F F024h	32ビット	R	0000_0000h	（エントリ終了）

2.6.3.2 CoreSight コンポーネントレジスタ

CoreSightROM テーブルは、Arm CoreSight アーキテクチャで定義された CoreSight コンポーネントレジスタの一覧です。表 2.8 にこれらのレジスタを示します。各レジスタの詳細は、参考資料 7. を参照してください。

表 2.8 CoreSight ROMテーブルのCoreSightコンポーネントレジスタ

名称	アドレス	アクセスサイズ	R/W	初期値
DEVTYPE	E00F FFCCh	32ビット	R	0000_0001h
PID4	E00F FFD0h	32ビット	R	0000_0004h
PID5	E00F FFD4h	32ビット	R	0000_0000h
PID6	E00F FFD8h	32ビット	R	0000_0000h
PID7	E00F FFDCh	32ビット	R	0000_0000h
PID0	E00F FFE0h	32ビット	R	0000_0013h
PID1	E00F FFE4h	32ビット	R	0000_0030h
PID2	E00F FFE8h	32ビット	R	0000_000Ah
PID3	E00F FFECh	32ビット	R	0000_0000h
CID0	E00F FFF0h	32ビット	R	0000_000Dh
CID1	E00F FFF4h	32ビット	R	0000_0010h
CID2	E00F FFF8h	32ビット	R	0000_0005h
CID3	E00F FFFCh	32ビット	R	0000_00B1h

2.6.4 DBGREG モジュール

DBGREG レジスタモジュールはデバッグ機能を制御し、CoreSight 準拠のコンポーネントとして実装されています。表 2.9 に、CoreSight コンポーネントレジスタ以外の DBGREG レジスタを示します。

表 2.9 CoreSight ではない DBGREG レジスタ

名称		DAP ポート	アドレス	アクセスサイズ	R/W
デバッグステータスレジスタ	DBGSTR	ポート 0	4001 B000h	32 ビット	R
デバッグストップコントロールレジスタ	DBGSTOPCR	ポート 0	4001 B010h	32 ビット	R/W
トレースコントロールレジスタ	TRACECTR	ポート 0	4001 B020h	32 ビット	R/W

2.6.4.1 デバッグステータスレジスタ（DBGSTR）

アドレス DBG.DBGSTR 4001 B000h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	CDBGPWRUPACK	CDBGPWRUPREQ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b27-b0	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。	R
b28	CDBGPWRUPREQ	デバッグパワーアップ要求	0：OCD はデバッグパワーアップを要求していない 1：OCD はデバッグパワーアップを要求している	R
b29	CDBGPWRUPACK	デバッグパワーアップアクノリッジ	0：デバッグパワーアップ要求は承認されていない 1：デバッグパワーアップ要求は承認されている	R
b31-b30	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。	R

2.6.4.2 デバッグストップコントロールレジスタ（DBGSTOPCR）

アドレス DBG.DBGSTOPCR 4001 B010h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	DBGSTOP_RECCR	DBGSTOP_RPER	—	—	—	—	—	—	DBGSTOP_LVD[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	DBGSTOP_WDT	DBGSTOP_IWDT
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DBGSTOP_IWDT	IWDTリセット／割り込み用のマスクビット	0：IWDTリセット／割り込みを許可 1：IWDTリセット／割り込みをマスクし、CPUがOCDブレークモードの場合はWDTカウントを停止	R/W
b1	DBGSTOP_WDT	WDTリセット／割り込み用のマスクビット	0：WDTリセット／割り込みを許可 1：WDTリセット／割り込みをマスクし、CPUがOCDブレークモードの場合はWDTカウントを停止	R/W
b15-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b16	DBGSTOP_LVD[1:0]	LVD0リセット／割り込み用のマスクビット	0：LVD0リセットを許可 1：LVD0リセットをマスク	R/W
b17		LVD1リセット／割り込み用のマスクビット	0：LVD1リセット／割り込みを許可 1：LVD1リセット／割り込みをマスク	R/W
b23-b18	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b24	DBGSTOP_RPER	SRAMパリティエラーリセット／割り込み用のマスクビット	0：SRAMパリティエラーリセット／割り込みを許可 1：SRAMパリティエラーリセット／割り込みをマスク	R/W
b25	DBGSTOP_RECCR	SRAM ECCエラーリセット／割り込み用のマスクビット	0：SRAM ECCエラーリセット／割り込みを許可 1：SRAM ECCエラーリセット／割り込みをマスク	R/W
b31-b26	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

デバッグストップコントロールレジスタ（DBGSTOPCR）は、OCD モード時の機能停止を指定します。このレジスタの全ビットは、チップが OCD モードでないときは、0 とみなされます。

2.6.4.3 トレースコントロールレジスタ（TRACECTR）

アドレス DBG.TRACECTR 4001 B020h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	ENETB FULL	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b30-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31	ENETBFULL	ETB フルによる停止要求用の許可ビット	0：ETB フルはCPU を停止させない 1：ETB フルはCPU を停止させる	R/W

2.6.4.4 DBGREG CoreSight コンポーネントレジスタ

DBGREG モジュールは、Arm CoreSight アーキテクチャで定義された CoreSight コンポーネントレジスタを備えています。表 2.10 は、これらのレジスタの一覧です。各レジスタの詳細は、参考資料 7. を参照してください。

表 2.10 DBGREG CoreSightコンポーネントレジスタ

名称	アドレス	アクセスサイズ	R/W	初期値
PID4	4001 BFD0h	32ビット	R	0000_0004h
PID5	4001 BFD4h	32ビット	R	0000_0000h
PID6	4001 BFD8h	32ビット	R	0000_0000h
PID7	4001 BFDCh	32ビット	R	0000_0000h
PID0	4001 BFE0h	32ビット	R	0000_0005h
PID1	4001 BFE4h	32ビット	R	0000_0030h
PID2	4001 BFE8h	32ビット	R	0000_001Ah
PID3	4001 BFECh	32ビット	R	0000_0000h
CID0	4001 BFF0h	32ビット	R	0000_000Dh
CID1	4001 BFF4h	32ビット	R	0000_00F0h
CID2	4001 BFF8h	32ビット	R	0000_0005h
CID3	4001 BFFCh	32ビット	R	0000_00B1h

2.6.5 OCDREG モジュール

OCDREG モジュールは、オンチップデバッグ（OCD）エミュレータ機能を制御し、CoreSight 準拠のコンポーネントとして実装されています。表 2.11 に、CoreSight コンポーネントレジスタ以外の OCDREG レジスタを一覧で表します。

表 2.11 OCDREG レジスタ

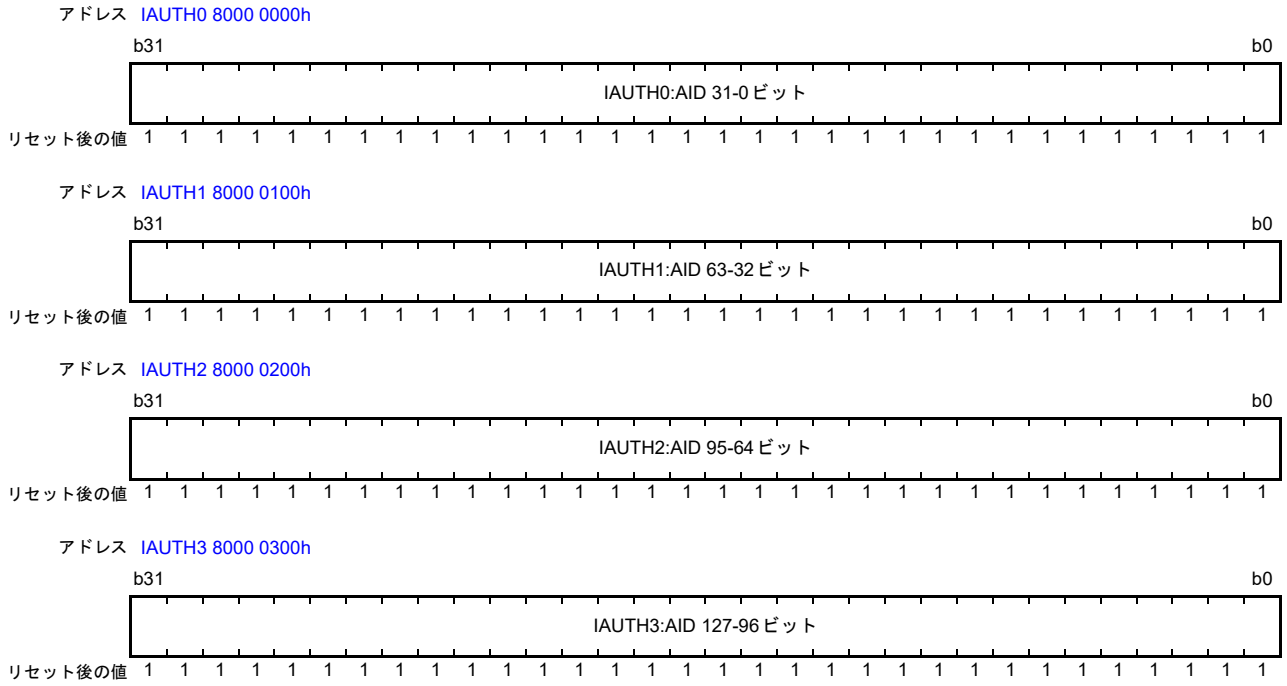
名称		DAPポート	アドレス	アクセスサイズ	R/W
ID認証コードレジスタ0	IAUTH0	ポート1	8000 0000h	32ビット	W
ID認証コードレジスタ1	IAUTH1	ポート1	8000 0100h	32ビット	W
ID認証コードレジスタ2	IAUTH2	ポート1	8000 0200h	32ビット	W
ID認証コードレジスタ3	IAUTH3	ポート1	8000 0300h	32ビット	W
MCUステータスレジスタ	MCUSTAT	ポート1	8000 0400h	32ビット	R
MCUコントロールレジスタ	MCUCTRL	ポート1	8000 0410h	32ビット	R/W

注 . OCDREG は専用の OCD アドレス空間に配置されます。このアドレスマップはシステムのアドレスマップから独立しています。

2.6.5.1 ID 認証コードレジスタ（IAUTH0 ～ 3）

128 ビットキーを書き込むための 4 つの認証レジスタが存在します。これらのレジスタは、IAUTH0 から IAUTH3 への順序で書き込む必要があります。レジスタセットへの書き込みがこの順序に従わないと、予測できない結果となります。

32 ビットの書き込みのみが許可されます。このレジスタの初期値はすべて 1 です。これは、OSIS レジスタの ID コードが初期値の場合、JTAG/SWD アクセスが許可されることを意味します。2.11.2 アンロック ID コードを参照してください。



2.6.5.2 MCU ステータスレジスタ（MCUSTAT）

アドレス MCUSTAT 8000 0400h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	CPUSTOPCLK	CPUSLEEP	AUTH
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1/0（注1）	1/0（注1）	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	AUTH	認証ステータス	0：認証失敗 1：認証成功	R
b1	CPUSLEEP	—	0：CPUは非スリープモード 1：CPUはスリープモード	R
b2	CPUSTOPCLK	—	0：CPUクロックを停止させない。MCUがノーマルモードまたはスリープモードであることを示す 1：CPUクロックを停止させる。MCUがスヌーズモードまたはソフトウェアスタンバイモードであることを示す	R
b31-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

注 1. MCU 状態に依存します。

2.6.5.3 MCU コントロールレジスタ（MCUCTRL）

アドレス MCUCTRL 8000 0410h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	DBIRQ	—	—	—	—	—	—	—	EDBGRQ
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	EDBGRQ	外部デバッグ要求	このビットに1を書き込むと、CPUが停止するかデバッグモニタ例外となります。 0：デバッグイベント要求なし 1：デバッグイベント要求あり EDBGRQビットが0に設定されたとき、またはCPUが停止したときはEDBCRQビットはクリアされます。	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	DBIRQ	デバッグ割り込み要求	このビットに1を書き込むと、MCUは低消費電力モードから復帰します。 0：デバッグ割り込み要求なし 1：デバッグ割り込み要求あり この条件はDBIRQビットに0を書き込むことで解除できます。	R/W
b31-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . DBIRQ ビットと EDBGRQ ビットには同じ値を設定してください。

2.6.5.4 OCDREG CoreSight コンポーネントレジスタ

OCDREG モジュールは、Arm CoreSight アーキテクチャで定義された CoreSight コンポーネントレジスタを備えています。表 2.12 は、これらのレジスタの一覧です。各レジスタの詳細は、参考資料 7. を参照してください。

表 2.12 DBGREGのCoreSightコンポーネントレジスター覧

名称	アドレス	アクセスサイズ	R/W	初期値
PID4	8000 0FD0h	32ビット	読み出し専用	0000_0004h
PID5	8000 0FD4h	32ビット	読み出し専用	0000_0000h
PID6	8000 0FD8h	32ビット	読み出し専用	0000_0000h
PID7	8000 0FDCh	32ビット	読み出し専用	0000_0000h
PID0	8000 0FE0h	32ビット	読み出し専用	0000_0004h
PID1	8000 0FE4h	32ビット	読み出し専用	0000_0030h
PID2	8000 0FE8h	32ビット	読み出し専用	0000_000Ah
PID3	8000 0FECh	32ビット	読み出し専用	0000_0000h
CID0	8000 0FF0h	32ビット	読み出し専用	0000_000Dh
CID1	8000 0FF4h	32ビット	読み出し専用	0000_00F0h
CID2	8000 0FF8h	32ビット	読み出し専用	0000_0005h
CID3	8000 0FFCh	32ビット	読み出し専用	0000_00B1h

2.7 CoreSight ATB ファネル

MCU には、1 個の CoreSight ATB ファネルがあります。このファネルは、2 個の ATB スレーブと 1 個の ATB マスタを持ち、ETM および ITM から ETB へのデバッグトレースのソースを選択します。図 2.3 は、MCU における CoreSight ATB 接続を示しています。

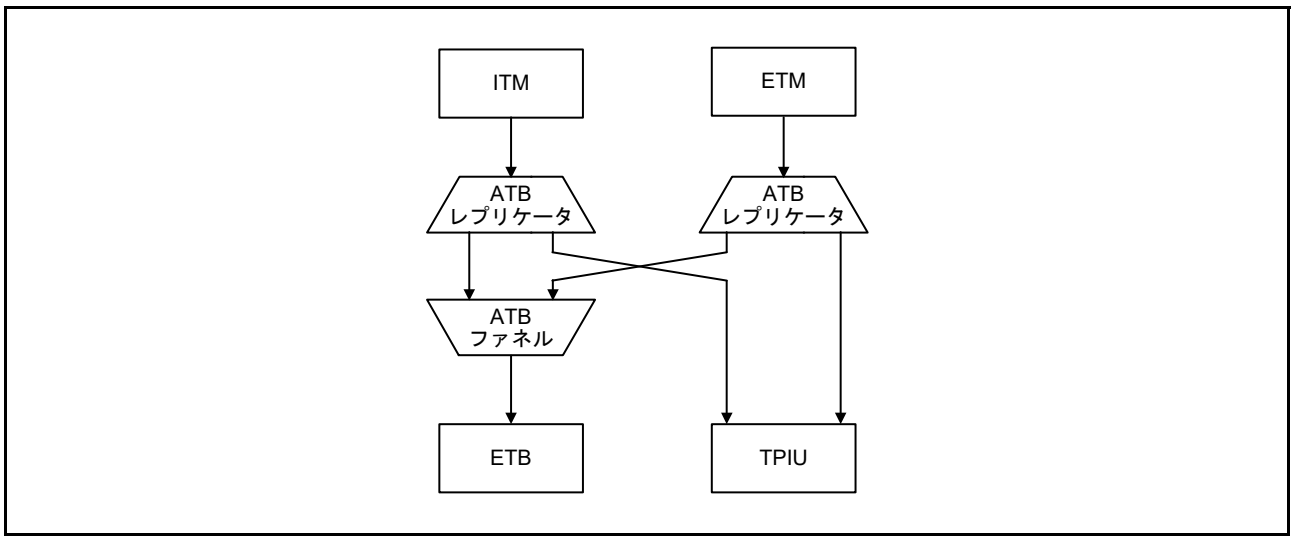


図 2.3 CoreSight ATB 接続

表 2.13 は ATB ファネルのスレーブ接続を示しています。

表 2.13 ATBスレーブ接続

ATBスレーブ番号	接続されるトレースソース
#0	ITM
#1	ETM

ATB とファネルの詳細は、参考資料 4. を参照してください。

2.8 フラッシュパッチ & ブレークユニット

本 MCU は、フラッシュパッチ & ブレークユニットを備えています。ブレイクポイント機能は使用可能ですが、フラッシュパッチ（リマップ）機能は使用できません。したがって、FP_COMPn レジスタの REPLACE ビット [31:30] を 0 に設定しないでください。FP_REMAP レジスタのビット 28 は、常に 1 に設定されています。本レジスタに書き込む場合は、ビット [28] に 1 を書き込んでください。本レジスタを読み出す場合は、ビット [28] は常に 1 が読み出されます。詳細は、参考資料 1. を参照してください。

2.9 SysTick システムタイマ

SysTick システムタイマは、簡易的な 24 ビットダウンカウンタを備えています。このタイマの基準クロックには、CPU クロック（ICLK）または SysTick タイマクロック（SYSTICCLK）を選択できます。詳細は、「9. クロック発生回路」および参考資料 1.（注 1）を参照してください。

注 1. 参考資料 1. では、IMPLEMENTATION DEFINED 外部基準クロックは SYSTICCLK（LOCO）、プロセッサクロックは ICLK です。

2.10 CoreSight タイムスタンプジェネレータ

CoreSight タイムスタンプジェネレータは、CPU クロックベースのタイムスタンプを ITM と ETM に供給します。64 ビットカウンタの 48 LSB ビットが、これら 2 つのコンポーネントに用いられます。詳細は、参考資料 4. を参照してください。

2.11 OCD エミュレータ接続

JTAG/SWD 認証機構はデバッグと MCU リソースへのアクセス許可をチェックします。全デバッグ機能を取得するには、この認証機構の合格結果が必要です。図 2.4 に、認証機構のブロック図を示します。

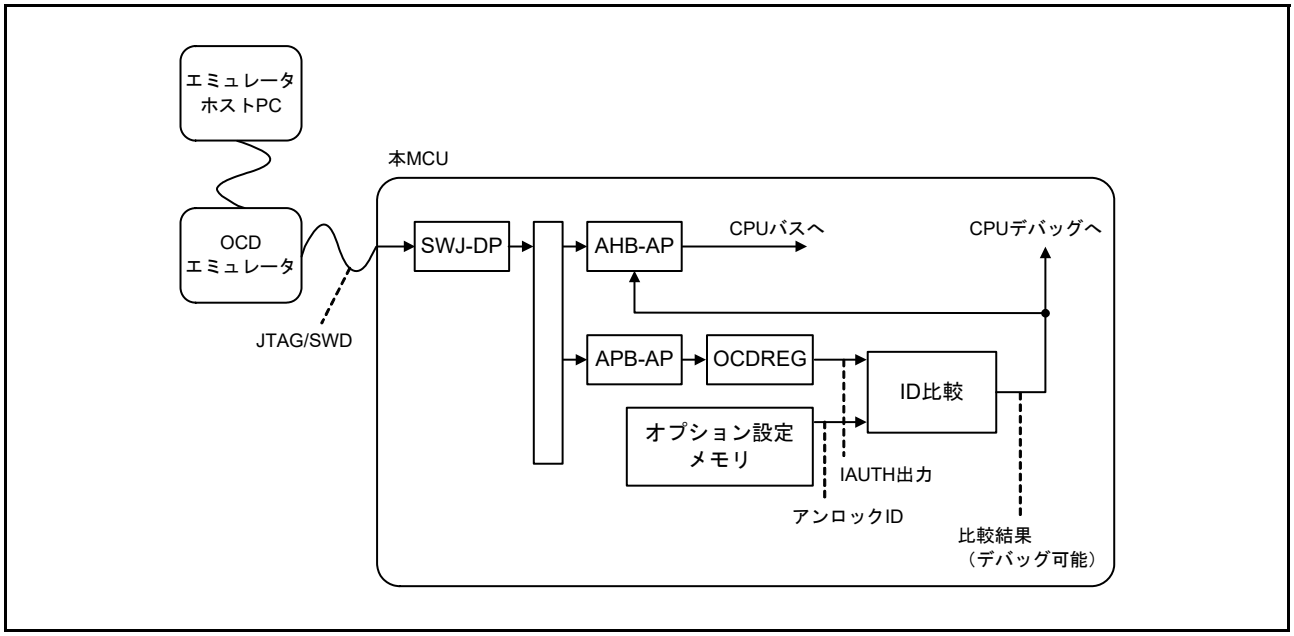


図 2.4 認証機構のブロック図

本 MCU には認証用の ID コンパレータがあります。このコンパレータは、OCDREG からの 128 ビットの IAUTH 出力と、オプション設定メモリからの 128 ビットのアンロック ID コードを比較します。これら 2 つの出力が同一であると、CPU デバッグ機能と、OCD エミュレータからのシステムバスアクセスが許可されます。

2.11.1 DBGEN

OCD エミュレータは、アクセス許可を取得した後、システムコントロール OCD コントロールレジスタ（SYOCDCR）の DBGEN ビットを設定する必要があります。また、OCD エミュレータは DBGEN ビットをクリアしないと切断されません。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

2.11.2 アンロック ID コード

アンロック ID コードは、デバッグとオンチップリソースへのアクセスの許可を判定するために用いられます。アンロック ID コードが ID 認証レジスタ 0 ～ 3 に書き込まれた 128 ビットデータと一致した場合、JTAG/SWD デバッガはアクセス許可を取得します。アンロック ID コードは、オプション設定メモリの OCD／シリアルプログラマ ID 設定レジスタ（OSIS）に書き込まれます。アンロック ID コードの初期値は、すべて 1（FFFFFFFF_FFFFFFFF_FFFFFFFF_FFFFFFFFh）です。詳細は、「7. オプション設定メモリ」を参照してください。

2.11.3 OCD エミュレータ接続における制限

この節では、エミュレータのアクセス制限について説明します。

2.11.3.1 低消費電力モード中の接続開始

OCD エミュレータから JTAG/SWD 接続を開始するとき、MCU はノーマルモードかスリープモードでなければいけません。MCU がソフトウェアスタンバイモードかスヌーズモードであると、OCD エミュレータは MCU をハングさせる場合があります。

2.11.3.2 OCD モードにおける低消費電力モードの切り替え

MCU が OCD モードであるとき、MCU の低消費電力モードへの切り替えが可能です。ただし、AHB-AP からのシステムバスアクセスは、ソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモードでは禁止されます。これらのモードでは、SWJ-DP、APB-AP、および OCDREG に対してのみ、OCD エミュレータからのアクセスが可能です。表 2.14 に制限事項を示します。

表 2.14 モード別の制限

アクティブモード	OCDエミュレータの接続開始	低消費電力モードへの切り替え	AHB-APとシステムバスへのアクセス	APB-APとOCDREGへのアクセス
ノーマル	可能	可能	可能	可能
スリープ	可能	可能	可能	可能
ソフトウェアスタンバイ	不可能	可能	不可能	可能
スヌーズ	不可能	可能	不可能	可能

ソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモードにおいてシステムバスアクセスが必要な場合は、OCDREG の MCUCTRL.DBIRQ ビットを設定して、MCU を低消費電力モードから復帰させてください。同時に、OCDREG の MCUCTRL.EDBGRQ ビットを用いることで、OCD エミュレータは CPU ブレークによって CPU の実行を開始することなく、MCU を復帰させることが可能です。

2.11.3.3 OSIS におけるアンロック ID コードの変更

OSIS においてアンロック ID コードを変更した後、OCD エミュレータは、RES 端子をアサートするか、またはシステムコントロールブロックのアプリケーション割り込みおよびリセットコントロールレジスタの SYSRESETREQ ビットを 1 にすることによって、本 MCU をリセットする必要があります。変更されたアンロック ID コードは、リセット後に反映されます。

2.11.3.4 接続順序と JTAG/SWD 認証

OCD エミュレータは JTAG/SWD 認証機構で保護されているため、OCD では認証レジスタに対し ID コードの入力が必要となる場合があります。オプション設定メモリの OSIS 値によって、コード入力が必要かを決定します。リセットネゲート後、コールドスタート時の OSIS 値を比較する前に 44µs の待ち時間が必要です。

(1) OSIS の MSB が 0（ビット [127] = 0）のとき

ID コードは常に不一致であり、OCD への接続は禁止されます。

(2) OSIS がすべて 1（デフォルト）のとき

OCD 認証は不要であり、OCD は認証なしで AHB-AP を使用できます。

1. JTAG または SWD インタフェースを介して OCD エミュレータを本 MCU に接続します。
2. DAP バスにアクセスするよう SWJ-DP を設定します。この設定において、OCD エミュレータは、SWJ-DP コントロールステータスレジスタの CDBGPWRUPREQ をアサートする必要があります。その後、

同じレジスタの CSDBGPWRUPACK がアサートされるまで待ちます。

3. システムアドレス空間にアクセスするよう AHB-AP を設定します。この AHB-AP は DAP バスのポート 0 に接続されます。
4. AHB-AP を使用して、CPU デバッグリソースへのアクセスを開始します。

(3) OSIS[127:126] が 10b のとき

OCD 認証が必要であり、OCD は、OCDREG の IAUTH レジスタ 0 ～ 3 にアンロックコードを書き込んでから、AHB-AP を使用する必要があります。

1. JTAG または SWD インタフェースを介して OCD デバッガを本 MCU に接続します。
2. DAP バスにアクセスするよう SWJ-DP を設定します。この設定において、OCD エミュレータは SWJ-DP コントロールステータスレジスタの CDBGPWRUPREQ をアサートする必要があります。その後、同じレジスタの CSDBGPWRUPACK がアサートされるまで待ちます。
3. OCDREG にアクセスするよう APB-AP を設定します。この APB-AP は DAP バスのポート 1 に接続されます。
4. APB-AP を使用して、OCDREG の IAUTH レジスタ 0 ～ 3 に 128 ビット ID コードを書き込みます。
5. この 128 ビット ID コードが OSIS の値と一致した場合、AHB-AP に対して AHB トランザクションを発行する権限が与えられます。認証結果は、MCUSTAT レジスタの AUTH ビット、または AHB-AP コントロールステータスワードレジスタの DbgStatus ビットで確認できます。
   - DbgStatus ビットが 1 の場合、128 ビット ID コードが OSIS 値と一致している。AHB 転送が許可される
   - DbgStatus ビットが 0 の場合、128 ビット ID コードが OSIS 値と一致していない。AHB 転送は許可されない
6. システムアドレス空間にアクセスするよう AHB-AP を設定します。この AHB-AP は DAP バスのポート 0 に接続されます。
7. AHB-AP を使用して、CPU デバッグリソースへのアクセスを開始します。

(4) OSIS[127:126] が 11b のとき

OCD 認証が必要であり、OCD は、OCDREG の IAUTH レジスタ 0 ～ 3 にアンロック ID コードを書き込む必要があります。接続順序は、「ALeRASE」機能を除いて、OSIS[127:126] = 10b の場合と同じです。

IATUH レジスタ 0 ～ 3 に ASCII コードで「ALeRASE」と書き込まれている場合、コードフラッシュ、データフラッシュ、および構成領域の内容はただちに消去されます。詳細は、「43. フラッシュメモリ」を参照してください。

ALeRASE のシーケンスは下記のとおりです。

1. JTAG または SWD インタフェースを介して OCD デバッガを本 MCU に接続します。
2. DAP バスにアクセスするよう SWJ-DP を設定します。この設定において、OCD エミュレータは SWJDP コントロールステータスレジスタの CDBGPWRUPREQ をアサートする必要があります。その後、同じレジスタの CSDBGPWRUPACK がアサートされるまで待ちます。
3. OCDREG にアクセスするよう APB-AP を設定します。この APB-AP は DAP バスのポート 1 に接続されます。
4. APB-AP を使用して、OCDREG の IAUTH レジスタ 0 ～ 3 に 128 ビット ID コードを書き込みます。
5. 128 ビット ID コードが ASCII コードの「ALeRASE」（414C_6552_4153_45FF_FFFF_FFFF_FFFF_FFFFh）の場合、コードフラッシュ、データフラッシュ、および構成領域の内容は消去されます。その後、MCU はスリープモードに遷移します。

2.12 参考資料

1. *ARM®v7-M Architecture Reference Manual (ARM DDI 0403D)*
2. *ARM® Cortex®-M4 Processor Technical Reference Manual (ARM DDI 0439D)*
3. *ARM®Cortex®-M4 Devices Generic User Guide (ARM DUI 0553A)*
4. *ARM® CoreSight™ SoC-400 Technical Reference Manual (ARM DDI 0480F)*
5. *ARM® CoreSight™ ETM-M4 Technical Reference Manual (ARM DDI 0440C)*
6. *ARM® CoreSight™ Trace Memory Controller Technical Reference Manual (ARM DDI 0461B)*
7. *ARM® CoreSight™ Architecture Specification (ARM IHI 0029D)*

3. 動作モード

3.1 概要

表 3.1 は、モード設定端子による動作モードの選択を示しています。詳細は、3.2 動作モードの説明を参照してください。どのモードで起動しても、内蔵フラッシュメモリが有効な場合に動作を開始します。

表 3.1 モード設定端子による動作モードの選択

モード設定端子	動作モード	内蔵フラッシュメモリ
MD		
1	シングルチップモード	有効
0	SCI/USB ブートモード	有効

3.2 動作モードの説明

3.2.1 シングルチップモード

シングルチップモードでは、すべての入出力端子が、入出力ポート、周辺機能入出力、または割り込み入力として使用可能です。MD 端子が High になっているときにリセットが解除されると、チップはシングルチップモードで起動し、内蔵フラッシュメモリが有効になります。

3.2.2 SCI ブートモード

このモードでは、本 MCU 内部の専用領域に格納された、内蔵フラッシュメモリ書き込みルーチン（SCI ブートプログラム）が用いられます。シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）を使用して、本 MCU 外部からコードフラッシュメモリとデータフラッシュメモリを含む内蔵フラッシュメモリを書き換えることが可能です。詳細は、「43. フラッシュメモリ」を参照してください。MD 端子を Low に保持してリセットを解除すると、ブートモードで起動します。

3.2.3 USB ブートモード

このモードでは、本 MCU 内部のブート領域に格納された、内蔵フラッシュメモリ書き込みルーチン（USB ブートプログラム）が用いられます。USB を使用して、本 MCU 外部から内蔵フラッシュメモリ（コードフラッシュメモリ、データフラッシュメモリ）を書き換えることが可能です。詳細は、「43. フラッシュメモリ」を参照してください。MD 端子を Low に保持してリセットを解除すると、USB ブートモードで起動します。

3.3 動作モード遷移

3.3.1 モード設定端子による動作モード遷移

MD 端子の設定による動作モード遷移について、図 3.1 に状態遷移図を示します。

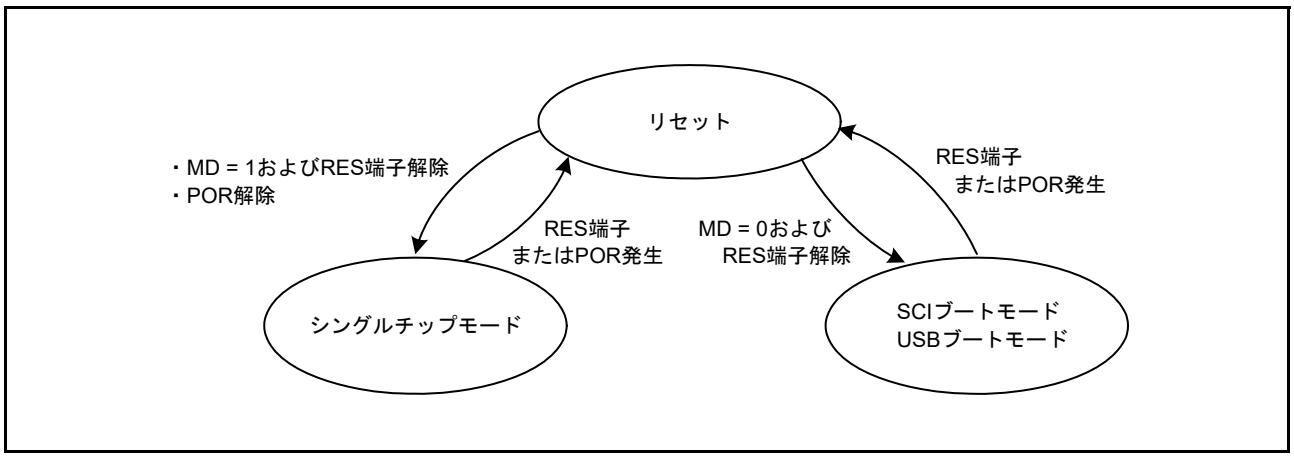


図 3.1 モード設定端子のレベルと動作モード

4. アドレス空間

4.1 概要

本 MCU は、プログラムとデータの両方を格納できる 4GB のリニアアドレス空間（0000 0000h ～ FFFF FFFFh）をサポートしています。図 4.1 にメモリマップを示します。

注 1. 製品によってフラッシュまたは SRAM の容量が異なります。
注 2. 予約領域は、アクセスしないでください。
注 3. 一部の領域はオプション設定メモリとして予約されています。領域についての詳細は、「7. オプション設定メモリ」を参照してください。

図 4.1 メモリマップ

5. メモリミラー機能（MMF）

5.1 概要

本 MCU はメモリミラー機能（MMF）を備えています。MMF を構成することによって、コードフラッシュメモリ内のアプリケーションイメージのロードアドレスを、未使用の 23 ビットメモリミラー空間アドレスにおけるアプリケーションイメージのリンクアドレスへマップすることが可能です。ユーザアプリケーションコードを開発する場合、この MMF 転送先アドレスから実行するようにリンクする必要があります。ユーザアプリケーションコードでは、コードフラッシュメモリ内に格納されるときのロードアドレスを認識する必要がありません。

表 5.1 に MMF の仕様を示します。

表 5.1 MMFの仕様

項目	内容
メモリミラー空間	8MB（0200 0000h～027F FFFFh）
メモリミラー境界	128バイト

5.2　レジスタの説明

5.2.1　MemMirror 特殊機能レジスタ（MMSFR）

アドレス　MMF.MMSFR 4000 1000h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	KEY[7:0]								—	MEMMIRADDR[15:9]						
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MEMMIRADDR[8:0]									—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b22-b7	MEMMIRADDR[15:0]	メモリミラーアドレス	0000h～FFFFh (8MB)	R/W
b23	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31-b24	KEY[7:0]	MMSFRキーコード	MEMMIRADDRビットの書き換えを有効／無効にします。	R/W

MEMMIRADDR[15:0] ビット（メモリミラーアドレス）

メモリミラーアドレスの [22:7] ビットを指定します。これらのビットでは、メモリミラー空間アドレスの開始アドレス（0200 0000h）のリンク先を設定します。これらのビットへの書き込みは、このレジスタが 32 ビット単位でアクセスされ、かつ DBh の値が KEY[7:0] ビットに書き込まれた場合にのみ有効になります。

KEY[7:0] ビット（MMSFR キーコード）

MEMMIRADDR[15:0] ビットの書き換えの可否を制御します。KEY ビットへの書き込みデータは保存されません。読むと 0 が読めます。このキーコードと MEMMIRADDR は、同じサイクルで書き込む必要があります。

5.2.2 MemMirror イネーブルレジスタ（MMEN）

アドレス MMF.MMEN 4000 1004h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	KEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	EN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	EN	メモリミラー機能有効	0：メモリミラー機能は無効 1：メモリミラー機能は有効	R/W
b23-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31-b24	KEY[7:0]	MMENキーコード	ENビットの書き換えの可否を制御します。	R/W

EN ビット（メモリミラー機能有効）

EN ビットへの書き込みは、MemMirror イネーブルレジスタが 32 ビット単位でアクセスされ、かつ DBh が KEY[7:0] ビットに書き込まれた場合にのみ有効になります。

KEY[7:0] ビット（MMEN キーコード）

EN ビットの書き換えの可否を制御します。KEY[7:0] ビットへの書き込みデータは保存されません。読むと 0 が読めます。このキーコードと EN ビットは、同じサイクルで書き込む必要があります。

5.3 動作説明

5.3.1 メモリミラー機能動作

メモリミラー機能は、メモリミラー空間（0200 0000h ～ 027F FFFFh）をコードフラッシュメモリ領域にリンクさせます。MMEN.EN = 1 の場合、CPU は通常のアドレス（開始アドレス：0000 0000h）とメモリミラー空間アドレス（開始アドレス：0200 0000h）の両方を使用してコードフラッシュメモリにアクセスできます。図 5.1 にメモリミラー機能の概要を示します。MMSFR.MEMMIRADDR ビットでは、メモリミラー空間アドレスの開始アドレス（0200 0000h）のリンク先を指定します。図 5.2、図 5.3、および図 5.4 に、メモリミラー機能の動作を示します。また、図 5.5 にメモリミラー機能の設定手順を示します。

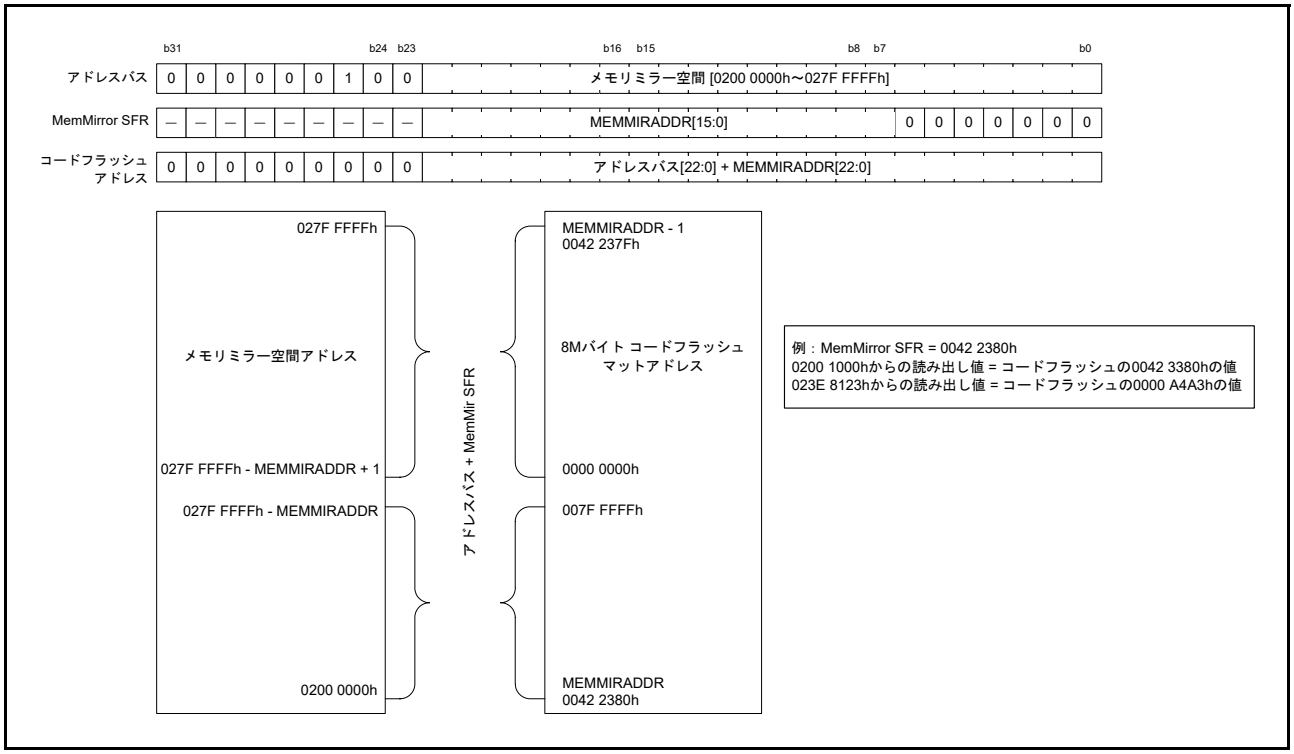
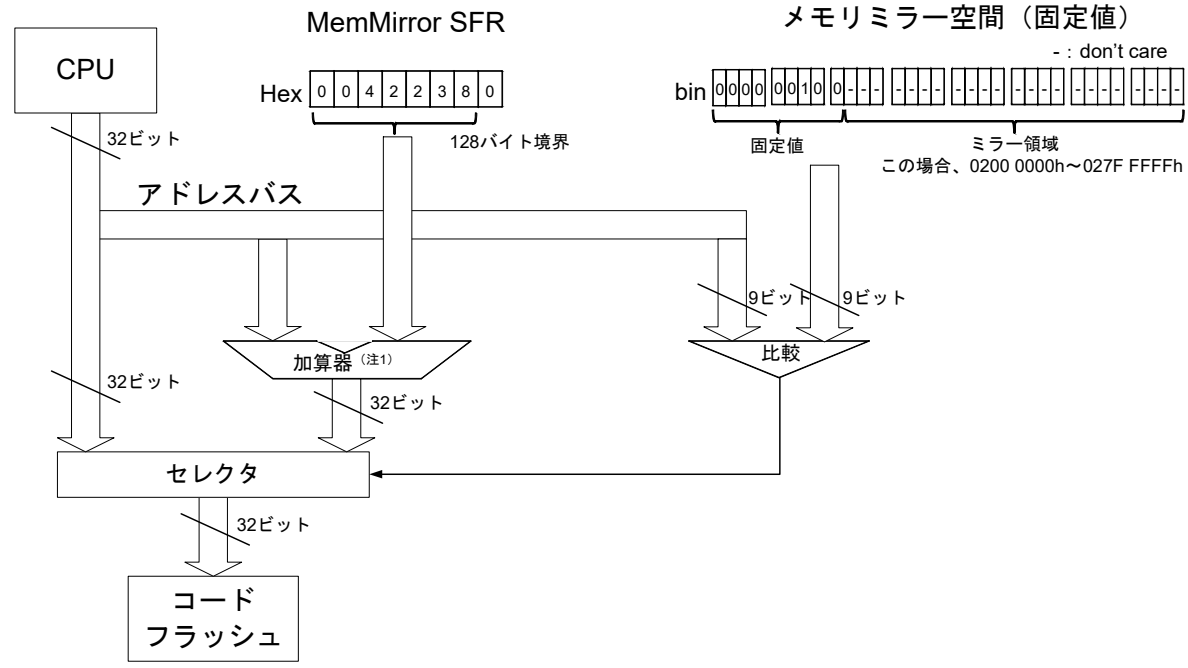


図 5.1 メモリミラー機能動作



注 1. 詳細は、図 5.4 を参照してください。

図 5.2 メモリミラー機能のブロック図

図 5.3 に、各モジュールで処理されるアドレスを示します。ARM® MPU は CPU のオリジナルアドレスを使用します。セキュリティ MPU およびコードフラッシュメモリはどちらも、メモリミラー機能による変換後のアドレスを使用します。

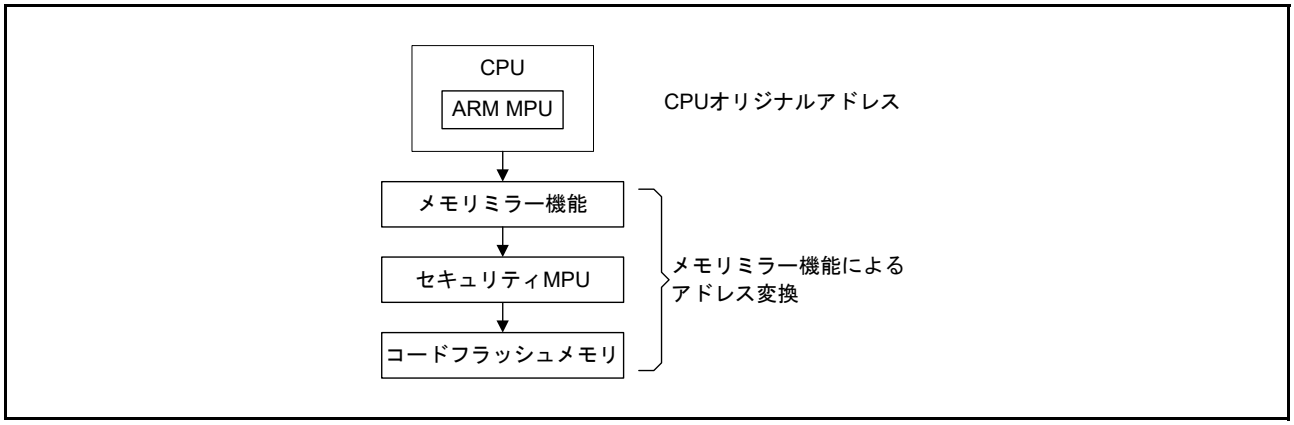


図 5.3　　メモリミラー機能のアドレス処理

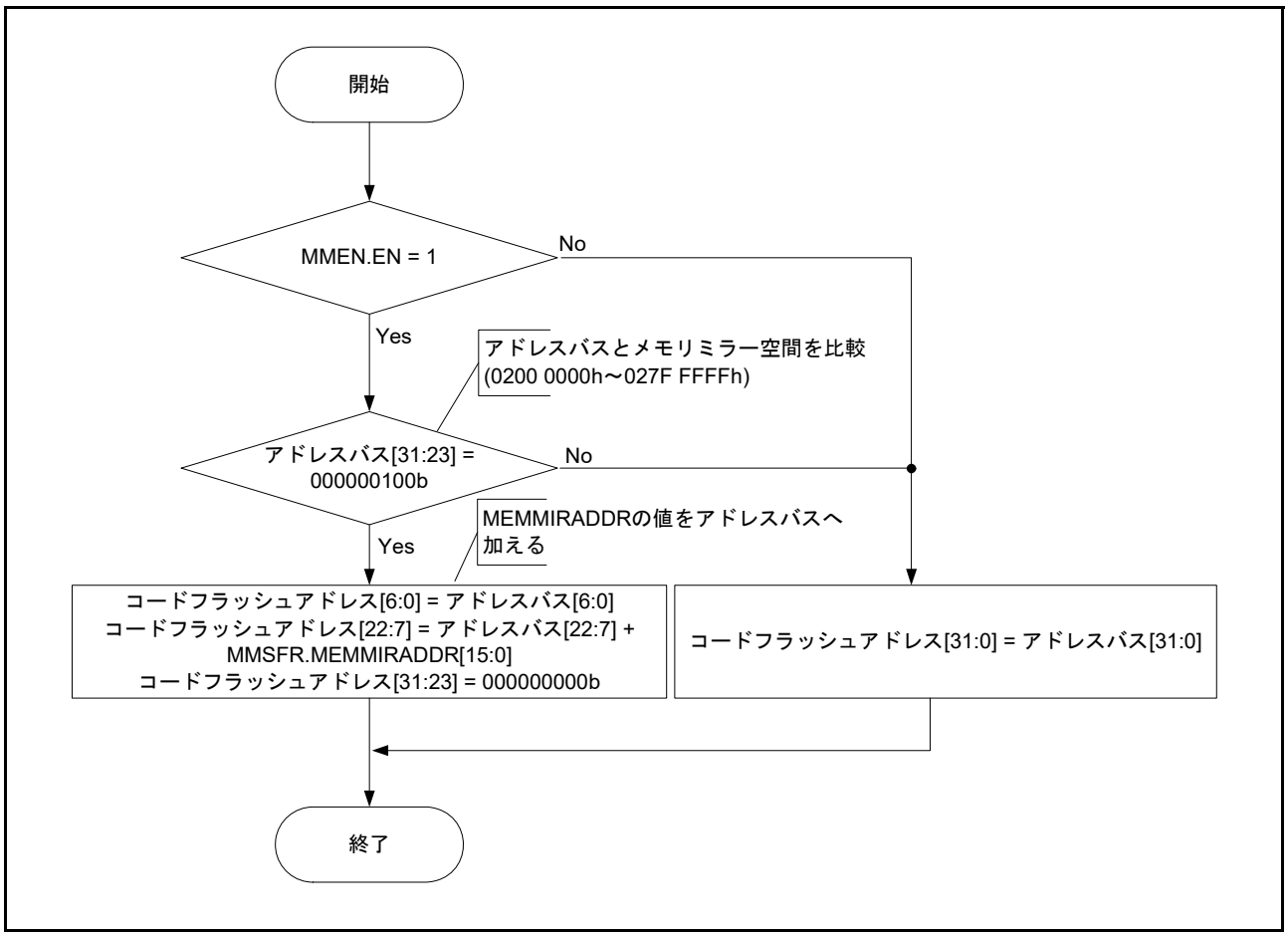


図 5.4　　メモリミラー機能の動作フローチャート

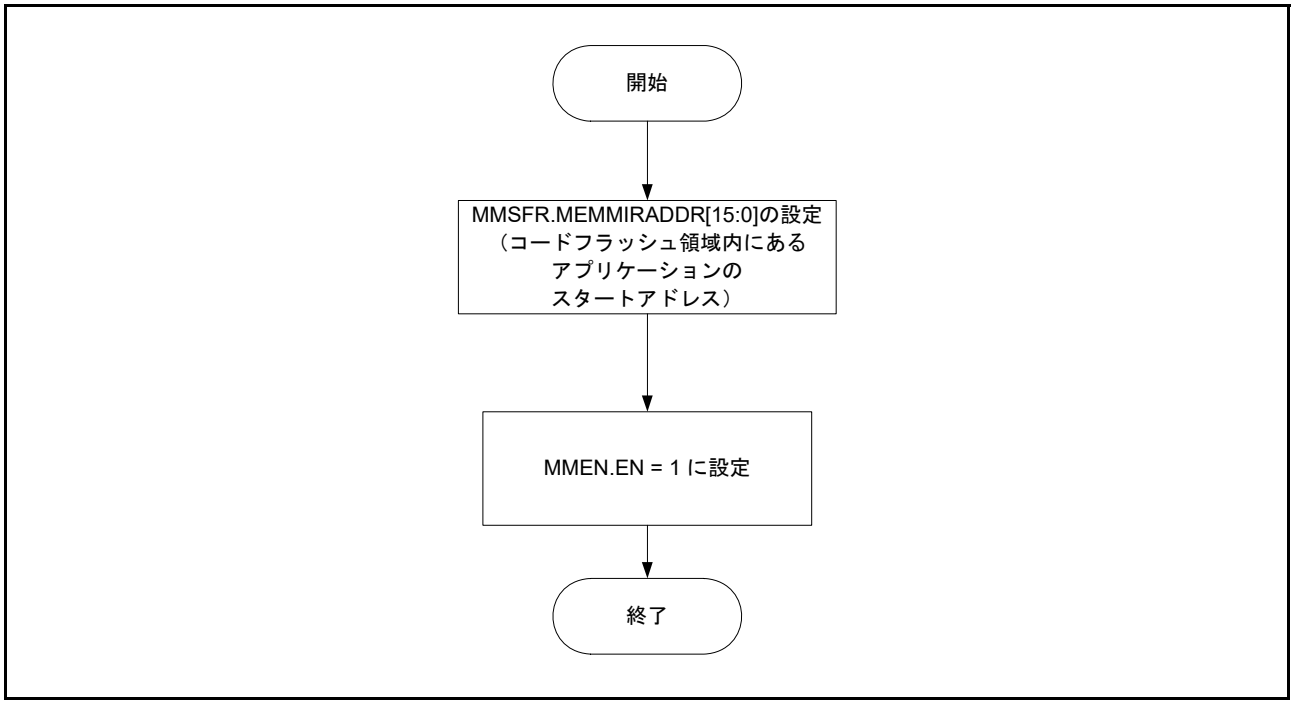


図 5.5 メモリミラー機能の設定フローチャート

5.3.2 設定例

コードフラッシュ上のアプリケーションコードは、MMSFR.MEMMIRADDR でコードフラッシュアドレスを設定し、MMEN.EN を 1 に設定することによって、メモリミラー空間上のアドレス 0200 0000h からアクセスすることが可能です。

図 5.6 に、メモリミラー機能の使用方法の例を示します。

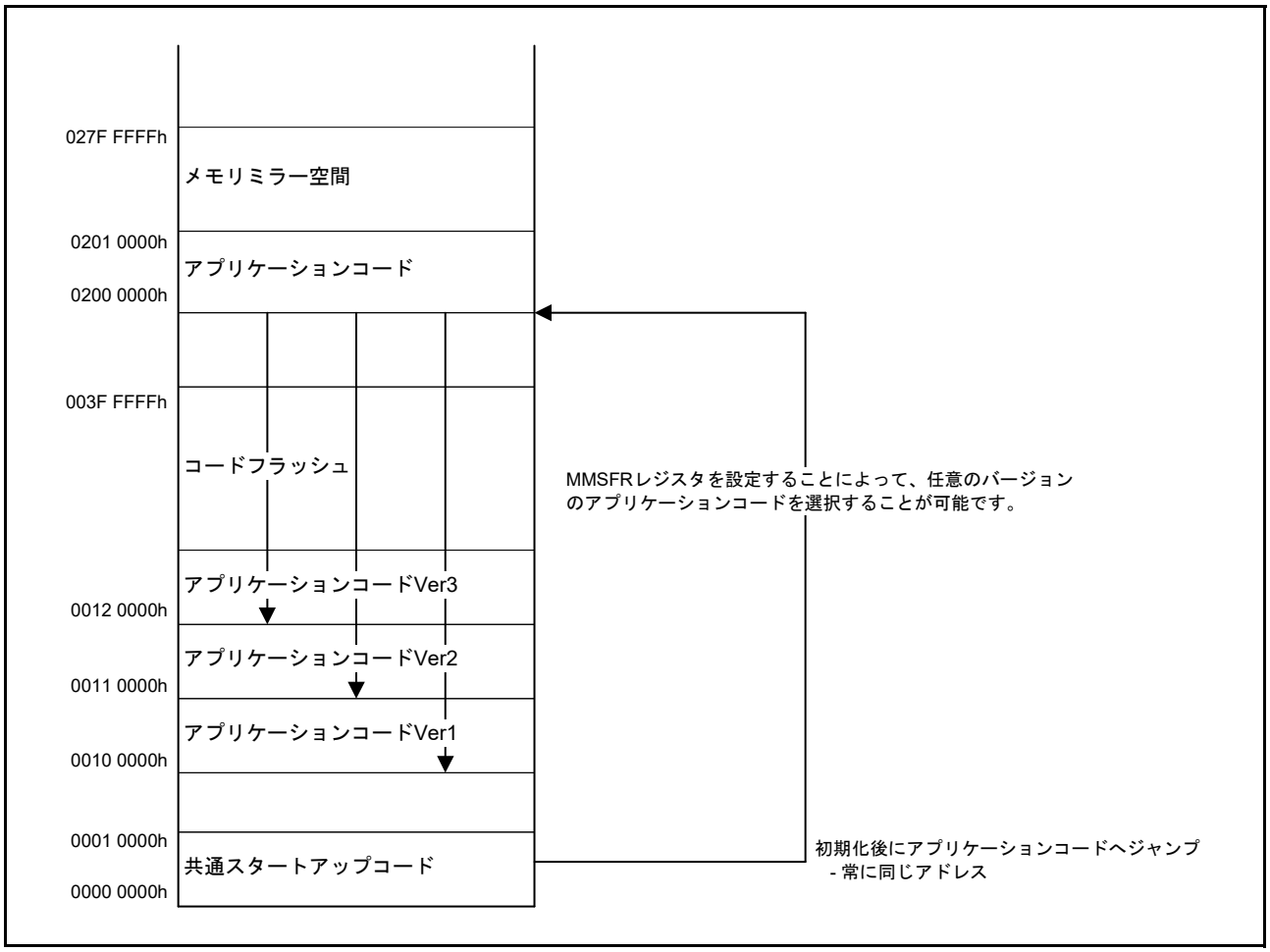


図 5.6 メモリミラー機能

アプリケーションコード Ver.1 を使用する場合は、MMSFR レジスタを DB10 0000h に設定

アプリケーションコード Ver.2 を使用する場合は、MMSFR レジスタを DB11 0000h に設定

アプリケーションコード Ver.3 を使用する場合は、MMSFR レジスタを DB12 0000h に設定

6. リセット

6.1 概要

本 MCU は、以下の 14 種類のリセットをサポートしています。

- RES 端子リセット
- パワーオンリセット
- VBATT 選択電圧のパワーオンリセット
- 独立ウォッチドッグタイマリセット
- ウォッチドッグタイマリセット
- 電圧監視 0 リセット
- 電圧監視 1 リセット
- SRAM パリティエラーリセット
- SRAM ECC エラーリセット
- バスマスタ MPU エラーリセット
- バススレーブ MPU エラーリセット
- スタックポインタエラーリセット
- ソフトウェアリセット

表 6.1 にリセットの名称と要因を示します。

表 6.1 リセットの名称と要因

リセット名	要因
RES端子リセット	RES端子への入力電圧がLow
パワーオンリセット	VCCの上昇（監視電圧：V_{POR}）（注1）
VBATT選択電圧のパワーオンリセット	VCCの下降（監視電圧：VDETBATT）（注1）
独立ウォッチドッグタイマリセット	独立ウォッチドッグタイマのアンダーフロー、またはリフレッシュエラーの発生
ウォッチドッグタイマリセット	ウォッチドッグタイマのアンダーフロー、またはリフレッシュエラーの発生
電圧監視0リセット	VCCの下降（監視電圧：V_{det0}）（注1）
電圧監視1リセット	VCCの下降（監視電圧：V_{det1}）（注1）
SRAMパリティエラーリセット	SRAMパリティエラーの検出
SRAM ECCエラーリセット	SRAM ECCエラーの検出
バスマスタMPUエラーリセット	バスマスタMPUエラーの検出
バススレーブMPUエラーリセット	バススレーブMPUエラーの検出
スタックポインタエラーリセット	スタックポインタエラーの検出
ソフトウェアリセット	レジスタ設定（Arm® ソフトウェアリセットビット、AIRCR.SYSRESETREQ）

注 1. 監視電圧（V_{POR}、V_{det0}、V_{det1}、および VDETBATT）については、「8. 低電圧検出（LVD）」および「48. 電気的特性」を参照してください。

リセットによって内部状態は初期化され、端子は初期状態になります。表 6.2 と表 6.3 に、リセット種類別の初期化対象を示します。

表 6.2 リセット要因ごとの初期化対象リセット検出フラグ

初期化対象フラグ	リセット要因						
	RES端子リセット	パワーオンリセット	電圧監視0リセット	独立ウォッチドッグタイマリセット	ウォッチドッグタイマリセット	電圧監視1リセット	ソフトウェアリセット
パワーオンリセット検出フラグ（RSTSR0.PORF）	○	×	×	×	×	×	×
電圧監視0リセット検出フラグ（RSTSR0.LVD0RF）	○	○	×	×	×	×	×
独立ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ（RSTSR1.IWDTRF）	○	○	○	×	×	×	×
ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ（RSTSR1.WDTRF）	○	○	○	×	×	×	×
電圧監視1リセット検出フラグ（RSTSR0.LVD1RF）	○	○	○	×	×	×	×
ソフトウェアリセット検出フラグ（RSTSR1.SWRF）	○	○	○	×	×	×	×
SRAMパリティエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.RPERF）	○	○	○	×	×	×	×
SRAM ECCエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.REERF）	○	○	○	×	×	×	×
バススレーブMPUエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.BUSSRF）	○	○	○	×	×	×	×
バスマスタMPUエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.BUSMRF）	○	○	○	×	×	×	×
スタックポインタエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.SPERF）	○	○	○	×	×	×	×
コールドスタート／ウォームスタート判別フラグ（RSTSR2.CWSF）	×	○	×	×	×	×	×

初期化対象フラグ	リセット要因					
	SRAMパリティエラーリセット	SRAM ECCエラーリセット	バスマスタMPUエラーリセット	バススレーブMPUエラーリセット	スタックポインタエラーリセット	VBATT_POR（注1）
パワーオンリセット検出フラグ（RSTSR0.PORF）	×	×	×	×	×	×
電圧監視0リセット検出フラグ（RSTSR0.LVD0RF）	×	×	×	×	×	×
独立ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ（RSTSR1.IWDTRF）	×	×	×	×	×	×
ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ（RSTSR1.WDTRF）	×	×	×	×	×	×
電圧監視1リセット検出フラグ（RSTSR0.LVD1RF）	×	×	×	×	×	×
ソフトウェアリセット検出フラグ（RSTSR1.SWRF）	×	×	×	×	×	×
SRAMパリティエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.RPERF）	×	×	×	×	×	×
SRAM ECCエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.REERF）	×	×	×	×	×	×
バススレーブMPUエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.BUSSRF）	×	×	×	×	×	×
バスマスタMPUエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.BUSMRF）	×	×	×	×	×	×
スタックポインタエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.SPERF）	×	×	×	×	×	×
コールドスタート／ウォームスタート判別フラグ（RSTSR2.CWSF）	×	×	×	×	×	×

○：0 に初期化される。×：初期化されない。

注 1. VBATT_POR の詳細は、「12. バッテリバックアップ機能」を参照してください。

表 6.3 リセット要因ごとの初期化対象モジュール関連レジスタ

初期化対象レジスタ		リセット要因						
		RES端子リセット	パワーオンリセット	電圧監視0リセット	独立ウォッチドッグタイマリセット	ウォッチドッグタイマリセット	電圧監視1リセット	ソフトウェアリセット
ウォッチドッグタイマ関連のレジスタ	WDTRR, WDTCR, WDTSR, WDTRCR, WDTCSTPR	○	○	○	○	○	○	○
電圧監視機能1関連のレジスタ	LVD1CR0, LVCMPCR.LVD1E, LVDLVLR.LVD1LVL	○	○	○	○	○	×	×
	LVD1CR1/LVD1SR	○	○	○	○	○	×	×
SOSC関連のレジスタ	SOSCCR	×	×	×	×	×	×	×
	SOMCR	×	×	×	×	×	×	×
LOCO関連のレジスタ	LOCOCR	×	×	×	×	×	×	×
	LOCOUTCR	×	×	×	×	×	×	×
MOSC関連のレジスタ	MOMCR	○	○	○	○	○	○	○
リアルタイムクロック関連のレジスタ（注2）		×	×	×	×	×	×	×
AGT関連のレジスタ		×	○	○	×	×	○	×
MPU関連のレジスタ		○	○	○	○	○	○	○
端子状態（XCIN/XCOUT端子以外）		○	○	○	○	○	○	○
端子状態（XCIN/XCOUT端子）		×	×	×	×	×	×	×
バッテリバックアップ	VBTCR1	×	○	×	×	×	×	×
	VBTCR2, VBTSR, VBTCMPCR, VBTLVDICR, VBTWCTLR, VBTWCH0OTSR, VBTICTLR, VBTOCTLR, VBTWTER, VBTWEGR, VBTWFR	×	×	×	×	×	×	×
	VBTBKRn（n = 0～511）	×	×	×	×	×	×	×
上記以外のレジスタ、CPU、および内部状態		○	○	○	○	○	○	○

初期化対象レジスタ		リセット要因					
		SRAMパリティエラーリセット	SRAM ECCエラーリセット	バスマスタMPUエラーリセット	バススレーブMPUエラーリセット	スタックポインタエラーリセット	VBATT_POR（注3）
ウォッチドッグタイマ関連のレジスタ	WDTRR, WDTCR, WDTSR, WDTRCR, WDTCSTPR	○	○	○	○	○	×
電圧監視機能1関連のレジスタ	LVD1CR0, LVCMPCR.LVD1E, LVDLVLR.LVD1LVL	×	×	×	×	×	×
	LVD1CR1/LVD1SR	×	×	×	×	×	×
SOSC関連のレジスタ	SOSCCR	×	×	×	×	×	○（注1）
	SOMCR	×	×	×	×	×	○
LOCO関連のレジスタ	LOCOCR	×	×	×	×	×	○
	LOCOUTCR	×	×	×	×	×	○
MOSC関連のレジスタ	MOMCR	○	○	○	○	○	×
リアルタイムクロック関連のレジスタ（注2）		×	×	×	×	×	×
AGT関連のレジスタ		×	×	×	×	×	×
MPU関連のレジスタ		○	○	×	×	×	×
端子状態（XCIN/XCOUT端子以外）		○	○	○	○	○	×
端子状態（XCIN/XCOUT端子）		×	×	×	×	×	○
バッテリバックアップ	VBTCR1	×	×	×	×	×	×
	VBTCR2, VBTSR, VBTCMPCR, VBTLVDICR, VBTWCTLR, VBTWCH0OTSR, VBTICTLR, VBTOCTLR, VBTWTER, VBTWEGR, VBTWFR	×	×	×	×	×	○
	VBTBKRn（n = 0～511）	×	×	×	×	×	×
上記以外のレジスタ、CPU、および内部状態		○	○	○	○	○	×

○：初期化される。×：初期化されない。

注 1. 各レジスタの初期値については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

注 2. RTC にはソフトウェアリセットがあります。一部の制御ビットは、いずれのリセットによっても初期化されません。対象ビットの詳細については、「25. リアルタイムクロック（RTC）」を参照してください。

注 3. VBATT_POR の詳細については、「12. バッテリバックアップ機能」を参照してください。

RTC はいずれのリセット要因によっても初期化されません。SOSC と LOCO は、RTC と AGT のクロックソースとして選択可能です。表 6.4 および表 6.5 は、リセット発生時の SOSC と LOCO の状態を示しています。

表 6.4 リセット発生時のSOSCの状態

		リセット要因	
		VBATT_POR	その他
SOSC	有効または無効	無効に初期化	リセット発生前に選択されていた状態を継続
	駆動能力	ノーマルモードに初期化	リセット発生前に選択されていた状態を継続
	XCIN/XCOUT	汎用入力端子に初期化	リセット発生前に選択されていた状態を継続

表 6.5 リセット発生時のLOCOの状態

		リセット要因	
		VBATT_POR	その他
LOCO	有効または無効	有効に初期化	リセット発生前に選択されていた状態を継続
	発振精度	LOCOUTCRによるトリミング前の精度に初期化（精度：±15%）	LOCOUTCRによってトリミングされた精度を継続

リセットが解除されると、リセット例外処理を開始します。

表 6.6 にリセット機能に関連する入出力端子を示します。

表 6.6 リセット関連の入出力端子

端子名	入出力	機能
RES	入力	リセット端子

6.2 レジスタの説明

6.2.1 リセットステータスレジスタ 0（RSTSR0）

アドレス SYSTEM.RSTSR0 4001 E410h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	LVD1RF	LVD0RF	PORF
リセット後の値	0	0	0	0	x	x（注1）	x（注1）	x（注1）

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PORF	パワーオンリセット検出フラグ	0：パワーオンリセット未検出 1：パワーオンリセット検出	R(/W)（注2）
b1	LVD0RF	電圧監視0リセット検出フラグ	0：電圧監視0リセット未検出 1：電圧監視0リセット検出	R(/W)（注2）
b2	LVD1RF	電圧監視1リセット検出フラグ	0：電圧監視1リセット未検出 1：電圧監視1リセット検出	R(/W)（注2）
b3	—	予約ビット	読み出し値は不定です。書く場合、0としてください。	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. リセット後の値は、リセット要因で異なります。
注 2. フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。このフラグは、1 を読んだ後、0 を書くことでクリアする必要があります。

PORF フラグ（パワーオンリセット検出フラグ）

パワーオンリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- パワーオンリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

LVD0RF フラグ（電圧監視 0 リセット検出フラグ）

VCC 電圧が V_{det0} レベル以下になったことを示します。

[1 になる条件]

- 電圧監視 0 リセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

LVD1RF フラグ（電圧監視 1 リセット検出フラグ）

VCC 電圧が V_{det1} レベル以下になったことを示します。

［1 になる条件］

- 電圧監視 1 リセットが発生したとき

［0 になる条件］

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

6.2.2 リセットステータスレジスタ 1（RSTSR1）

アドレス SYSTEM.RSTSR1 4001 E0C0h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	SPERF	BUSMRF	BUSSRF	REERF	RPERF	—	—	—	—	—	SWRF	WDTRF	IWDTRF
リセット後の値	0	0	0	x（注1）	x（注1）	x（注1）	x（注1）	x（注1）	0	0	0	0	0	x（注1）	x（注1）	x（注1）

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IWDTRF	独立ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ	0：独立ウォッチドッグタイマリセット未検出 1：独立ウォッチドッグタイマリセット検出	R(/W)（注2）
b1	WDTRF	ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ	0：ウォッチドッグタイマリセット未検出 1：ウォッチドッグタイマリセット検出	R(/W)（注2）
b2	SWRF	ソフトウェアリセット検出フラグ	0：ソフトウェアリセット未検出 1：ソフトウェアリセット検出	R(/W)（注2）
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	RPERF	SRAMパリティエラーリセット検出フラグ	0：SRAMパリティエラーリセット未検出 1：SRAMパリティエラーリセット検出	R(/W)（注2）
b9	REERF	SRAM ECCエラーリセット検出フラグ	0：SRAM ECCエラーリセット未検出 1：SRAM ECCエラーリセット検出	R(/W)（注2）
b10	BUSSRF	バススレーブMPUエラーリセット検出フラグ	0：バススレーブMPUエラーリセット未検出 1：バススレーブMPUエラーリセット検出	R(/W)（注2）
b11	BUSMRF	バスマスタMPUエラーリセット検出フラグ	0：バスマスタMPUエラーリセット未検出 1：バスマスタMPUエラーリセット検出	R(/W)（注2）
b12	SPERF	SPエラーリセット検出フラグ	0：SPエラーリセット未検出 1：SPエラーリセット検出	R(/W)（注2）
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. リセット後の値は、リセット要因で異なります。
注 2. フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。このフラグは、1 を読んだ後、0 を書くことでクリアする必要があります。

IWDTRF フラグ（独立ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ）

独立ウォッチドッグタイマリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- 独立ウォッチドッグタイマリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

WDTRF フラグ（ウォッチドッグタイマリセット検出フラグ）

ウォッチドッグタイマリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- ウォッチドッグタイマリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

SWRF フラグ（ソフトウェアリセット検出フラグ）

ソフトウェアリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- ソフトウェアリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

RPERF フラグ（SRAM パリティエラーリセット検出フラグ）

SRAM パリティエラーリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- SRAM パリティエラーリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

REERF フラグ（SRAM ECC エラーリセット検出フラグ）

SRAM ECC エラーリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- SRAM ECC エラーリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

BUSSRF フラグ（バススレーブ MPU エラーリセット検出フラグ）

バススレーブ MPU エラーリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- バススレーブ MPU エラーリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

BUSMRF フラグ（バスマスタ MPU エラーリセット検出フラグ）

バスマスタ MPU エラーリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- バスマスタ MPU エラーリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

SPERF フラグ（SP エラーリセット検出フラグ）

スタックポインタエラーリセットが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- スタックポインタエラーリセットが発生したとき

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

6.2.3 リセットステータスレジスタ 2（RSTSR2）

アドレス SYSTEM.RSTSR2 4001 E411h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CWSF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	x（注1）

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CWSF	コールドスタート／ウォームスタート判別フラグ	0：コールドスタート 1：ウォームスタート	R(/W)（注2）
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. リセット後の値は、リセット要因で異なります。
注 2. フラグをセットするための 1 の書き込みのみ可能です。

RSTSR2 レジスタは、電源が投入されたときのリセット処理（コールドスタート）なのか、動作中にリセット信号が入力されたときのリセット処理（ウォームスタート）なのかを判定するレジスタです。

CWSF フラグ（コールドスタート／ウォームスタート判別フラグ）

リセット処理の種類（コールドスタートまたはウォームスタート）を示します。CWSF フラグは、パワーオンリセットで初期化されます。RES 端子リセットでは初期化されません。

[1 になる条件]

- ソフトウェアで 1 を書いたとき。0 を書いても変化しない

[0 になる条件]

- 表 6.2 に示すリセットを行ったとき

6.3 動作説明

6.3.1 RES 端子リセット

RES 端子によるリセットです。RES 端子が Low になると実行中の処理はすべて打ち切られ、本 MCU はリセット状態になります。本 MCU を適切にリセットするには、電源投入時に指定された電源安定時間だけ RES 端子は Low を保持していなければいけません。

RES 端子が Low から High になったとき、RES 解除後待機時間（t_{RESWT}）経過後に内部リセットが解除されます。その後 CPU はリセット例外処理を開始します。

詳細は、「48. 電気的特性」を参照してください。

6.3.2 パワーオンリセット

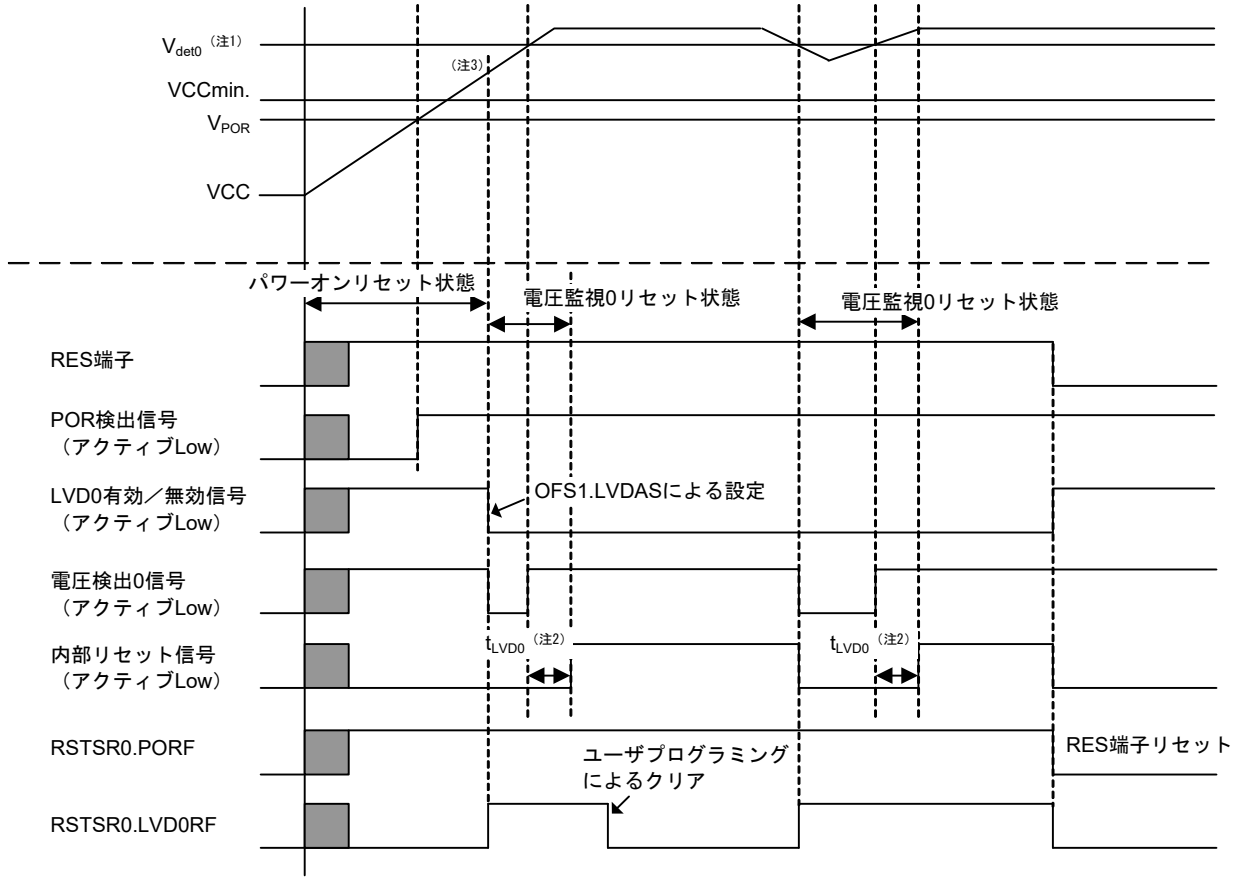
パワーオンリセット（POR）は、パワーオンリセット回路による内部リセットです。

RES 端子を High にした状態で電源を投入すると、パワーオンリセットが発生します。VCC が V_{POR} を超えると、指定されたパワーオンリセット時間経過後、内部リセットが解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。パワーオンリセット時間とは、外部電源と MCU 回路のための安定期間です。パワーオンリセットが発生すると、RSTSR0.PORF フラグが 1 になります。PORF フラグは、RES 端子リセットによって初期化されます。

電圧監視 0 リセットは、電圧監視回路による内部リセットです。オプション機能選択レジスタ 1（OFS1）の電圧検出 0 回路起動ビット（LVDAS）が 0（リセット後、電圧監視 0 リセット有効）の状態で、VCC が V_{det0} 以下になると、RSTSR0.LVD0RF フラグが 1 になり、電圧検出回路は電圧監視 0 リセットを発生させます。電圧監視 0 リセットを使用する場合は、OFS1.LVDAS ビットを 0 にしてください。

VCC が V_{det0} を超えると、電圧監視 0 リセット時間（t_{LVD0}）経過後、内部リセットが解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。V_{det0} の電圧検出レベルは、オプション機能選択レジスタ 1（OFS1）の VDSEL1[2:0] ビットの設定により変更できます。

図 6.1 に、パワーオンリセットおよび電圧監視 0 リセット時の動作例を示します。



注 . 電気的特性についての詳細は、「48. 電気的特性」を参照してください。
注 1. V_{det0} は電圧監視 0 リセット検出レベルを表し、V_{POR} はパワーオンリセット検出レベルを表します。また、VCCmin は MCU の最低保証電圧を表します。
注 2. t_{LVD0} は電圧監視 0 リセット時間を表します。
注 3. 電源投入時には、VCC が最低保証電圧に達してからでなければ、POR リセットを解除することはできません。

図 6.1 パワーオンリセットおよび電圧監視 0 リセット時の動作例

6.3.3 電圧監視リセット

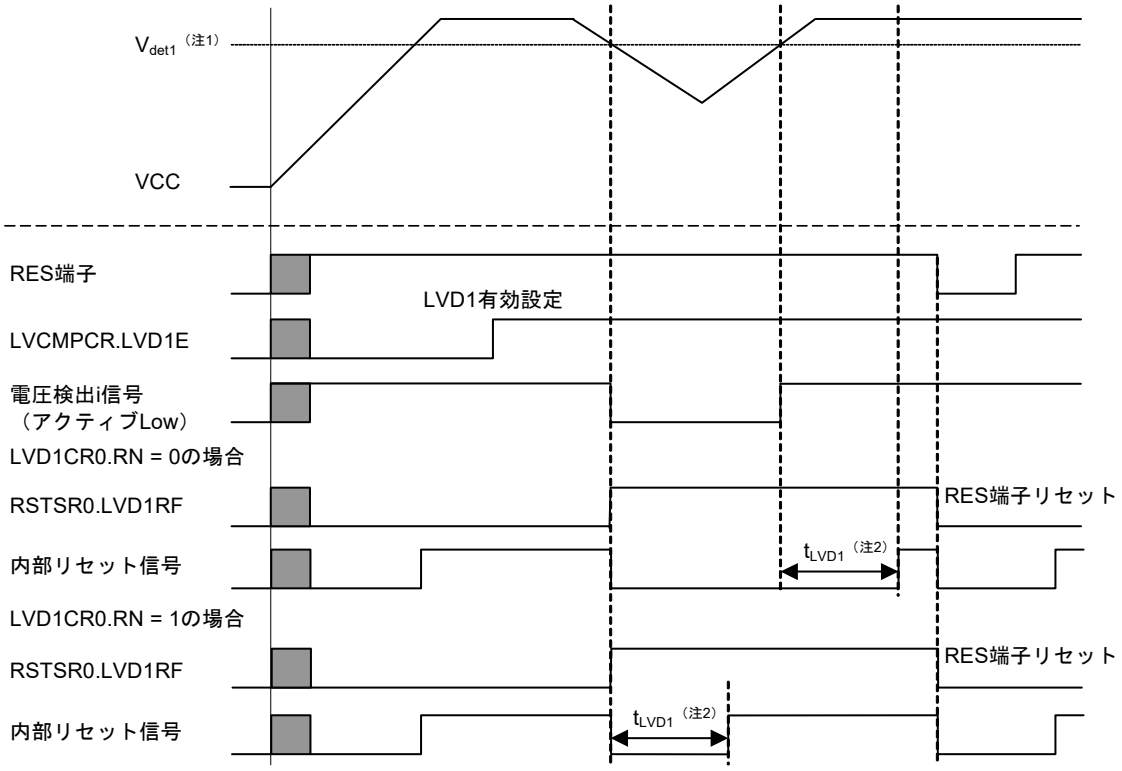
電圧監視 0 リセットは、電圧監視回路による内部リセットです。オプション機能選択レジスタ 1（OFS1）の電圧検出 0 回路起動ビット（LVDAS）が 0（リセット後、電圧監視 0 リセット有効）の状態で、VCC が V_{det0} 以下になると、RSTSR0.LVD0RF フラグが 1 になり、電圧検出回路は電圧監視 0 リセットを発生させます。電圧監視 0 リセットを使用する場合は、OFS1.LVDAS ビットを 0 にしてください。VCC が V_{det0} を超えると、電圧監視 0 リセット時間（t_{LVD0}）経過後、内部リセットが解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。

電圧監視 1 回路コントロールレジスタ 0（LVD1CR0）の電圧監視 1 割り込み／リセット許可ビット（RIE）が 1（電圧検出回路によるリセット／割り込み有効）で、かつ電圧監視 1 回路モード選択ビット（RI）が 1（低電圧検出時、リセット発生）の状態にあるとき、VCC が V_{det1} 以下になると、RSTSR0.LVD1RF フラグが 1 になり、電圧検出回路は電圧監視 1 リセットを発生させます。

電圧監視 1 リセットの解除タイミングは、LVD1CR0 レジスタの電圧監視 1 リセットネゲート選択ビット（RN）で選択可能です。LVD1CR0.RN ビットが 0 で、かつ VCC が V_{det1} 以下になっている場合、V_{det1} を超えてから LVD1 リセット時間（t_{LVD1}）が経過すると、内部リセットが解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。また、LVD1CR0.RN ビットが 1 で、かつ VCC が V_{det1} 以下になっている場合、LVD1 リセット時間（t_{LVD1}）が経過すると、内部リセットは解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。

V_{det1} の電圧検出レベルは、電圧検出レベル選択レジスタ（LVDLVLR）で変更できます。

図 6.2 に電圧監視 1 リセット時の動作例を示します。電圧監視 1 リセットの詳細は、「8. 低電圧検出（LVD）」を参照してください。



注 . 電気的特性についての詳細は、「48. 電気的特性」を参照してください。
注 1. V_{det1} は、電圧監視 1 リセットの検出レベルを表しています。
注 2. t_{LVD1} は、電圧監視 1 リセットを表しています。

図 6.2 電圧監視 1 リセット時の動作例

6.3.4 独立ウォッチドッグタイマリセット

独立ウォッチドッグタイマリセットは、独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）により生成された内部リセットです。IWDT から独立ウォッチドッグタイマリセットを出力するかどうかをオプション機能選択レジスタ 0（OFS0）で選択できます。

独立ウォッチドッグタイマリセットの出力を選択した場合、IWDT がアンダーフローしたとき、あるいはリフレッシュ動作禁止時に書き込みを行ったときに、独立ウォッチドッグタイマリセットが生成されます。独立ウォッチドッグタイマリセットの生成後に、内部リセット時間（t_{RESW2}）が経過すると、内部リセットは解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。

独立ウォッチドッグタイマリセットの詳細は、「27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

6.3.5 ウォッチドッグタイマリセット

ウォッチドッグタイマリセットは、ウォッチドッグタイマ（WDT）による内部リセットです。WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）またはオプション機能選択レジスタ 0（OFS0）によって、WDT からウォッチドッグタイマリセットを出力するかどうかを選択できます。

ウォッチドッグタイマリセットの出力を選択した場合、WDT がアンダーフローしたとき、あるいはリフレッシュ動作禁止時に書き込みを行ったときに、このリセットが発生します。ウォッチドッグタイマリセットの発生後に、内部リセット時間（t_{RESW2}）が経過すると、内部リセットは解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。

ウォッチドッグタイマリセットの詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

6.3.6 ソフトウェアリセット

ソフトウェアリセットは、Arm コア内部の AIRCR レジスタの SYSRESETREQ ビットに対するソフトウェア設定によって発生する内部リセットです。SYSRESETREQ ビットを 1 にすると、ソフトウェアリセットが発生します。ソフトウェアリセットの発生後に、内部リセット時間（t_{RESW2}）が経過すると、内部リセットは解除され、CPU がリセット例外処理を開始します。

SYSRESETREQ ビットについての詳細は、*ARM® Cortex®-M4 Technical Reference Manual* を参照してください。

6.3.7 コールドスタート／ウォームスタート判定機能

RSTSR2.CWSF フラグの読み出しによって、リセット処理の原因を判定できます。このフラグは、電源が投入されたときのリセット処理（コールドスタート）なのか、動作中にリセット信号が入力されたときのリセット処理（ウォームスタート）なのかを示します。

CWSF フラグは、パワーオンリセットが発生すると 0（コールドスタート）になります。その他のリセットを行っても 0 になりません。また、ソフトウェアで 1 を書くと 1 になります。0 を書いても 0 になりません。

図 6.3 にコールドスタート／ウォームスタート判定機能の動作例を示します。

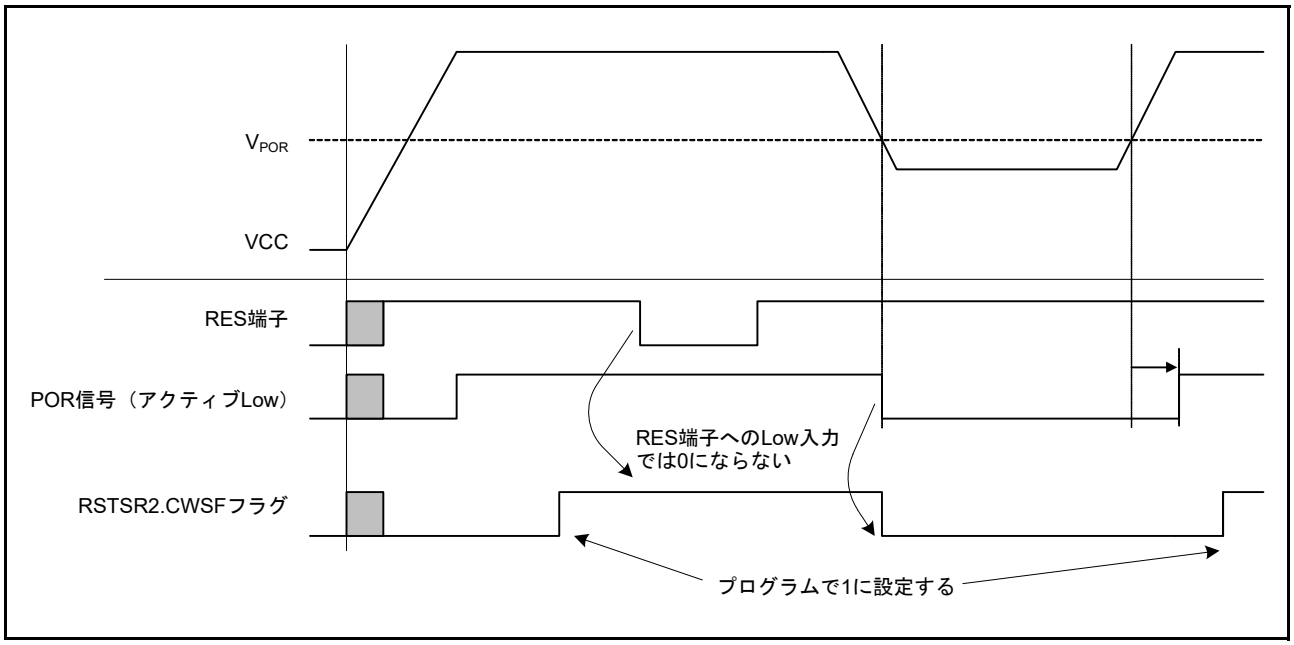
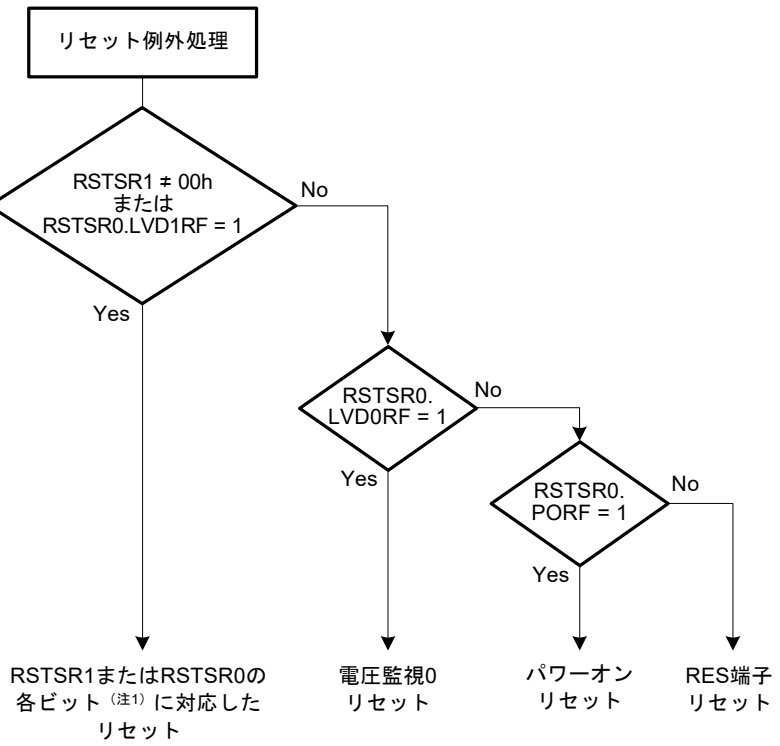


図 6.3 コールドスタート／ウォームスタート判定機能の動作例

6.3.8 リセット発生要因の判定

RSTSR0 レジスタと RSTSR1 レジスタを読むことで、いずれのリセット発生によってリセット例外処理が実行されたかを確認できます。図 6.4 にリセット発生要因の判定フロー例を示します。リセットフラグは、1 を読んだ後に 0 を書く必要があります。



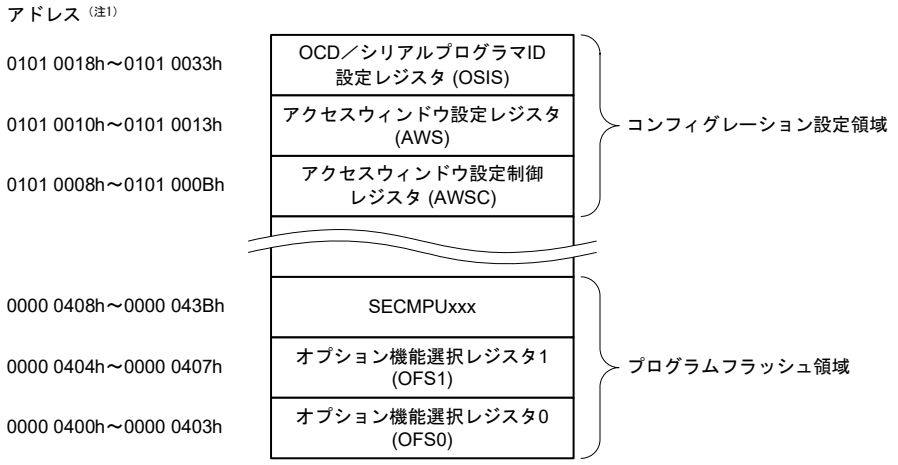
注 1. RSTSR1 の各ビット、または RSTSR0.LVD1RF ビットに対応するリセットが同時に発生した場合、全リセットフラグが 1 に設定されます。

図 6.4 リセット発生要因の判定フロー例

7. オプション設定メモリ

7.1 概要

オプション設定メモリは、MCU のリセット後の状態を決定します。オプション設定メモリは、フラッシュメモリのコンフィグレーション設定領域とプログラムフラッシュ領域にあり、これら 2 つの領域では設定方法が異なります。図 7.1 にオプション設定メモリの領域を示します。



注 1. オプション設定メモリは、フラッシュメモリのユーザエリアに配置してください。

図 7.1 オプション設定メモリの領域

7.2　レジスタの説明

7.2.1　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）

アドレス　OFS0 0000 0400h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	WDTSTPCTL	—	WDTRSTIRQ	WDTRPSS[1:0]		WDTRPES[1:0]		WDTCKS[3:0]				WDTTOPS[1:0]		WDTSTRT	—
リセット後の値	ユーザの設定値（注1）															

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	IWDTSTPCTL	—	IWDTRSTIRQS	IWDTRPSS[1:0]		IWDTRPES[1:0]		IWDTCKS[3:0]				IWDTTOPS[1:0]		IWDTSTRT	—
リセット後の値	ユーザの設定値（注1）															

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読んだ場合は、プログラムした値が読めます。	R
b1	IWDTSTRT	IWDTスタートモード選択	0：リセット後、IWDTは自動的に起動（オートスタートモード） 1：IWDTは無効	R
b3-b2	IWDTTOPS[1:0]	IWDTタイムアウト期間選択	b3 b2 0 0：128サイクル（007Fh） 0 1：512サイクル（01FFh） 1 0：1024サイクル（03FFh） 1 1：2048サイクル（07FFh）	R
b7-b4	IWDTCKS[3:0]	IWDT専用クロック分周比選択	b7 b4 0 0 0 0 ：1分周 0 0 1 0 ：16分周 0 0 1 1 ：32分周 0 1 0 0 ：64分周 1 1 1 1 ：128分周 0 1 0 1 ：256分周 上記以外は設定しないでください。	R
b9-b8	IWDTRPES[1:0]	IWDTウィンドウ終了位置選択	b9 b8 0 0：75% 0 1：50% 1 0：25% 1 1：0%（ウィンドウ終了位置の設定なし）	R
b11-b10	IWDTRPSS[1:0]	IWDTウィンドウ開始位置選択	b11 b10 0 0：25% 0 1：50% 1 0：75% 1 1：100%（ウィンドウ開始位置の設定なし）	R
b12	IWDTRSTIRQS	IWDTリセット割り込み要求選択	0：ノンマスカブル割り込み要求、または割り込み要求を許可 1：リセットを許可	R
b13	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b14	IWDTSTPCTL	IWDT停止制御	0：カウント継続 1：スリープモード、スヌーズモード、またはソフトウェアスタンバイモードのとき、カウント停止	R
b16-b15	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b17	WDTSTRT	WDTスタートモード選択	0：リセット後、WDTは自動的に起動（オートスタートモード） 1：リセット後、WDTは停止状態（レジスタスタートモード）	R

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b19-b18	WDTTOPS[1:0]	WDTタイムアウト期間選択	b19 b18 0 0：1024サイクル（03FFh） 0 1：4096サイクル（0FFFh） 1 0：8192サイクル（1FFFh） 1 1：16384サイクル（3FFFh）	R
b23-b20	WDTCKS[3:0]	WDTクロック分周比選択	b23 b20 0 0 0 1 ：PCLKB/4 0 1 0 0 ：PCLKB/64 1 1 1 1 ：PCLKB/128 0 1 1 0 ：PCLKB/512 0 1 1 1 ：PCLKB/2048 1 0 0 0 ：PCLKB/8192 上記以外は設定しないでください。	R
b25-b24	WDTRPES[1:0]	WDTウィンドウ終了位置選択	b25 b24 0 0：75% 0 1：50% 1 0：25% 1 1：0%（ウィンドウ終了位置の設定なし）	R
b27-b26	WDTRPSS[1:0]	WDTウィンドウ開始位置選択	b27 b26 0 0：25% 0 1：50% 1 0：75% 1 1：100%（ウィンドウ開始位置の設定なし）	R
b28	WDTRSTIRQS	WDTリセット割り込み要求選択	WDT動作の選択 0：割り込み 1：リセット	R
b29	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b30	WDTSTPCTL	WDT停止制御	0：カウント継続 1：スリープモード遷移時にカウント停止	R
b31	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R

注 1.　ブランク品は、FFFF_FFFFh です。ユーザがプログラムした値になります。

IWDTSTRT ビット（IWDT スタートモード選択）

リセット後の IWDT の起動モード（停止状態または起動状態）を選択します。

IWDTTOPS[1:0] ビット（IWDT タイムアウト期間選択）

ダウンカウンタがアンダーフローするまでのタイムアウト期間を、IWDTCKS[3:0] ビットで設定した分周クロックを 1 サイクルとして、128、512、1024、2048 の各サイクルで選択します。リフレッシュ後、IWDT がアンダーフローするまでのクロックサイクル数は、IWDTCKS[3:0] ビットと IWDTTOPS[1:0] ビットの組み合わせで決定されます。

詳細は、「27.　独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

IWDTCKS[3:0] ビット（IWDT 専用クロック分周比選択）

IWDT 専用クロックを分周するプリスケーラの分周比設定を、1/1、1/16、1/32、1/64、1/128、1/256 の各分周から選択します。この設定を IWDTTOPS[1:0] ビット設定と組み合わせることで、IWDT のカウント期間は 128 から 524288 までの IWDT クロックサイクルに設定可能です。

詳細は、「27.　独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

IWDTRPES[1:0] ビット（IWDT ウィンドウ終了位置選択）

ダウンカウンタのウィンドウ終了位置を、カウント値の 0%、25%、50%、75% から選択します。ウィンドウ終了位置の値はウィンドウ開始位置の値よりも小さくなければいけません。ウィンドウ終了位置をウィンドウ開始位置よりも大きい値にした場合、ウィンドウ開始位置の設定値のみが有効となります。

IWDTRPSS[1:0] および IWDTRPES[1:0] ビットで設定したウィンドウ開始および終了位置に対応するカウンタ値は、IWDTTOPS[1:0] ビットの設定によって変わります。

詳細は、「27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

IWDTRPSS[1:0] ビット（IWDT ウィンドウ開始位置選択）

ダウンカウンタのウィンドウ開始位置を、カウント値の 25%、50%、75%、100% から選択します。このとき、カウント開始時が 100%、アンダーフロー発生時が 0% です。ウィンドウ開始位置からウィンドウ終了位置までの期間がリフレッシュ許可期間となります。ただし、それ以外の期間でのリフレッシュはできません。

詳細は、「27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

IWDTRSTIRQS ビット（IWDT リセット割り込み要求選択）

ダウンカウンタのアンダーフロー、またはリフレッシュエラー発生時の動作を選択します。独立ウォッチドッグタイマリセット、ノンマスカブル割り込み要求、または割り込み要求のいずれかの動作を選択できます。

詳細は、「27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

IWDTSTPCTL ビット（IWDT 停止制御）

スリープモード、スヌーズモードまたはソフトウェアスタンバイモード遷移時にカウントを停止するかどうかを指定します。

詳細は、「27. 独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）」を参照してください。

WDTSTRT ビット（WDT スタートモード選択）

リセット後の WDT の起動モード（停止状態、またはオートスタートモードでの起動）を選択します。WDT がオートスタートモードで起動された場合、WDT の設定は OFS0 レジスタの設定が有効となります。

WDTTOPS[1:0] ビット（WDT タイムアウト期間選択）

ダウンカウンタがアンダーフローするまでのタイムアウト期間を、WDTCKS[3:0] ビットで設定した分周クロックを 1 サイクルとして、1024、4096、8192、16384 の各サイクル数で指定します。リフレッシュ後、カウンタがアンダーフローするまでの PCLKB サイクル数は、WDTCKS[3:0] ビットと WDTTOPS[1:0] ビットの組み合わせで決定されます。

詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

WDTCKS[3:0] ビット（WDT クロック分周比選択）

PCLKB を分周するプリスケーラの分周比設定を、1/4、1/64、1/128、1/512、1/2048、1/8192 の各分周から選択します。この設定を WDTTOPS[1:0] ビット設定と組み合わせることで、WDT のカウント期間は 4096 から 134217728 までの PCLKB サイクルに設定可能です。

詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

WDTRPES[1:0] ビット（WDT ウィンドウ終了位置選択）

ダウンカウンタのウィンドウ終了位置を、カウント値の 0%、25%、50%、75% から指定します。ウィンドウ終了位置の値はウィンドウ開始位置の値よりも小さくなければいけません。ウィンドウ終了位置をウィンドウ開始位置よりも大きい値にした場合、ウィンドウ開始位置の設定値のみが有効となります。

WDTRPSS[1:0] および WDTRPES[1:0] ビットで設定したウィンドウ開始および終了位置に関連するカウンタ値は、WDTTOPS[1:0] ビットの設定によって変わります。

詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

WDTRPSS[1:0] ビット（WDT ウィンドウ開始位置選択）

ダウンカウンタのウィンドウ開始位置を、カウント値の 25%、50%、75%、100% から選択します。このとき、カウント開始時が 100%、アンダーフロー発生時が 0% です。ウィンドウ開始位置からウィンドウ終了位置までの期間がリフレッシュ許可期間となります。ただしそれ以外の期間でのリフレッシュはできません。

詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

WDTRSTIRQS ビット（WDT リセット割り込み要求選択）

ダウンカウンタのアンダーフロー、またはリフレッシュエラー発生時の動作を設定します。ウォッチドッグタイマリセット、ノンマスカブル割り込み要求、または割り込み要求のいずれかを選択できます。

詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

WDTSTPCTL ビット（WDT 停止制御）

スリープモード遷移時に、カウントを停止させるかどうかを選択します。

詳細は、「26. ウォッチドッグタイマ（WDT）」を参照してください。

7.2.2　オプション機能選択レジスタ 1（OFS1）

アドレス　OFS1 0000 0404h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ユーザの設定値（注1）															

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	—	HOCOFRQ1[2:0]			—	—	—	HOCO EN	—	—	VDSEL1[2:0]			LVDAS	—	—
	ユーザの設定値（注1）															

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b2	LVDAS	電圧検出0回路起動	0：リセット後、電圧監視0リセット有効 1：リセット後、電圧監視0リセット無効	R
b5-b3	VDSEL1[2:0]	電圧検出0レベル選択	b5　b3 0　0　0：設定禁止 0　0　1：2.82Vを選択 0　1　0：2.51Vを選択 0　1　1：1.90Vを選択 上記以外は設定しないでください。	R
b7-b6	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b8	HOCOEN	HOCO発振有効	0：リセット後、HOCO発振が有効 1：リセット後、HOCO発振が無効	R
b11-b9	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b14-b12	HOCOFRQ1[2:0]	HOCO周波数設定1	b14　b12 0　0　0：24MHz 0　1　0：32MHz 1　0　0：48MHz 1　0　1：64MHz 上記以外は設定しないでください。	R
b31-b15	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R

注 1.　ブランク品は、FFFF_FFFFh です。ユーザがプログラムした値になります。

LVDAS ビット（電圧検出 0 回路起動）

リセット後、電圧監視 0 リセットを有効にするか無効にするかを選択します。

VDSEL1[2:0] ビット（電圧検出 0 レベル選択）

電圧検出 0 回路の電圧検出レベルを選択します。

HOCOEN ビット（HOCO 発振有効）

リセット後、HOCO 用発振許可ビットを有効にするか無効にするかを選択します。本ビットを 0 にすることにより、CPU が動作する前に HOCO の発振を開始することができ、発振安定の待ち時間を減らすことができます。

注 . HOCOEN ビットを 0 にしても、システムクロックソースは HOCO に切り替わりません。クロックソース選択ビット（SCKSCR.CKSEL[2:0]）を設定することによってのみ、システムクロックソースは HOCO に切り替わります。HOCO クロックを使用する場合は、OFS1.HOCOFRQ1 ビットを最適な値に設定してください。

リセット解除後、動作は Low-voltage モードとなるので、HOCOCR.HCSTP ビットをすぐに 0 にする必要があります。

HOCOFRQ1[2:0] ビット（HOCO 周波数設定 1）

リセット後の HOCO 周波数を、24、32、48、または 64MHz から選択します。

7.2.3 MPU レジスタ

表 7.1 に、MPU 機能に関連したレジスタを示します。詳細は、「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。

フラッシュメモリを消去すると、セキュリティ MPU は無効になります。MPU レジスタに不正なデータを書きこむと、MCU が動作しないことがあります。適切なデータを設定するには、「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。

表 7.1 MPU レジスタ

レジスタ名	シンボル	機能	アドレス	サイズ（バイト）
セキュリティ MPU プログラムカウンタ開始アドレスレジスタ 0	SECMPUPCS0	フラッシュのセキュリティフェッチ領域または SRAM を指定	0000 0408h	4
セキュリティ MPU プログラムカウンタ終了アドレスレジスタ 0	SECMPUPCE0	フラッシュのセキュリティフェッチ領域または SRAM を指定	0000 040Ch	4
セキュリティ MPU プログラムカウンタ開始アドレスレジスタ 1	SECMPUPCS1	フラッシュのセキュリティフェッチ領域または SRAM を指定	0000 0410h	4
セキュリティ MPU プログラムカウンタ終了アドレスレジスタ 1	SECMPUPCE1	フラッシュのセキュリティフェッチ領域または SRAM を指定	0000 0414h	4
セキュリティ MPU 領域 0 開始アドレスレジスタ	SECMPUS0	セキュリティプログラムとフラッシュデータを指定	0000 0418h	4
セキュリティ MPU 領域 0 終了アドレスレジスタ	SECMPUE0	セキュリティプログラムとフラッシュデータを指定	0000 041Ch	4
セキュリティ MPU 領域 1 開始アドレスレジスタ	SECMPUS1	SRAM のセキュアデータを指定	0000 0420h	4
セキュリティ MPU 領域 1 終了アドレスレジスタ	SECMPUE1	SRAM のセキュアデータを指定	0000 0424h	4
セキュリティ MPU 領域 2 開始アドレスレジスタ	SECMPUS2	セキュリティ機能のセキュアデータを指定	0000 0428h	4
セキュリティ MPU 領域 2 終了アドレスレジスタ	SECMPUE2	セキュリティ機能のセキュアデータを指定	0000 042Ch	4
セキュリティ MPU 領域 3 開始アドレスレジスタ	SECMPUS3	セキュリティ機能のセキュアデータを指定	0000 0430h	4
セキュリティ MPU 領域 3 終了アドレスレジスタ	SECMPUE3	セキュリティ機能のセキュアデータを指定	0000 0434h	4
セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ	SECMPUAC	セキュリティ有効／無効領域を指定	0000 0438h	4

7.2.4 アクセスウィンドウ設定コントロールレジスタ（AWSC）

アドレス AWSC 0101 0008h

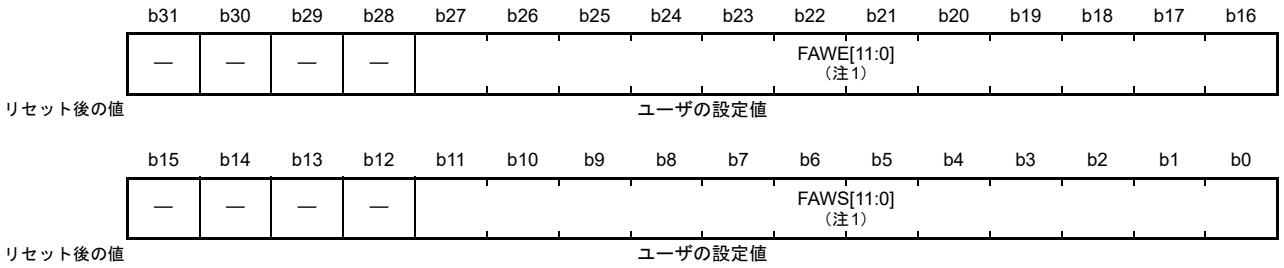
	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ユーザの設定値															

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	—	FSPR	—	—	—	—	—	BTFLG	—	—	—	—	—	—	—	—
	ユーザの設定値															

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b8	BTFLG	スタートアップ領域選択フラグ	スタートアップ領域のアドレスをブートスワップ機能用に入れ替えるかどうかを指定します。 0：最初の8KB領域（0000 0000h～0000 1FFFh）と次の8KB領域（0000 2000h～0000 3FFFh）が入れ替わる 1：最初の8KB領域（0000 0000h～0000 1FFFh）と次の8KB領域（0000 2000h～0000 3FFFh）は入れ替わらない	R
b13-b9	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b14	FSPR	アクセスウィンドウとスタートアップ領域選択機能の保護	アクセスウィンドウ、スタートアップ領域選択フラグ（BTFLG）、およびテンポラリブートスワップ制御に対するライト／イレースのプログラミングを制御します。本ビットは0にした場合、1に変更できません。 0:アクセスウィンドウ（FAWE[11:0]、FAWS[11:0]）とスタートアップ領域選択フラグ（BTFLG）のプログラミングに対するコンフィグレーション設定コマンドの実行は無効。 1:アクセスウィンドウ（FAWE[11:0]、FAWS[11:0]）とスタートアップ領域選択フラグ（BTFLG）のプログラミングに対するコンフィグレーション設定コマンドの実行は有効。	R
b31-b15	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R

7.2.5 アクセスウィンドウ設定レジスタ（AWS）

アドレス AWS 0101 0010h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b11-b0	FAWS[11:0]	アクセスウィンドウ開始ブロックアドレス（注1）	アクセスウィンドウの開始ブロックアドレスを指定します。これらのビットは、アクセスウィンドウのブロック番号を表すものではありません。アクセスウィンドウはプログラムフラッシュ領域でのみ有効です。このブロックアドレスでは、ブロックの先頭アドレスを設定します。アドレスビット[21:10]で構成されます。	R
b15-b12	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R
b27-b16	FAWE[11:0]	アクセスウィンドウ終了ブロックアドレス（注1）	アクセスウィンドウの終了ブロックアドレスを指定します。これらのビットは、アクセスウィンドウのブロック番号を表すものではありません。アクセスウィンドウはプログラムフラッシュ領域でのみ有効です。アクセスウィンドウの終了ブロックアドレスは、アクセスウィンドウで定義される受け付け可能プログラムおよびイレース領域の次のブロックです。このブロックアドレスでは、ブロックの先頭アドレスを指定します。アドレスビット[21:10]で構成されます。	R
b31-b28	—	予約ビット	読んだ場合は、書き込んだ値が読めます。書き込む場合は1としてください。	R

注 1. FAWE[0] ビットと FAWS[0] ビットにプログラムする場合、0 としてください。

アクセスウィンドウ外の領域にプログラムまたはイレースコマンドを発行すると、コマンドロック状態に陥ります。アクセスウィンドウはプログラムフラッシュ領域でのみ有効です。アクセスウィンドウは、セルフプログラミングモード、シリアルプログラミングモード、およびオンチップデバッグモードにおいて、プロテクション機能を提供します。アクセスウィンドウは FSPR ビットでロックすることが可能です。

アクセスウィンドウは、FAWS[11:0] ビットおよび FAWE[11:0] ビットの両方で指定されています。以下に、FAWS[11:0] ビットと FAWE[11:0] ビットの設定方法を説明します。

- FAWE[11:0] = FAWS[11:0] : P/E コマンドは、全プログラムフラッシュ領域に対して実行が許可される
- FAWE[11:0] > FAWS[11:0] : P/E コマンドは、FAWS[11:0] ビットで指示されたブロックから、FAWE[11:0] ビットで指示されたブロックより 1 つ下のブロックまでのウィンドウでのみ実行が許可される
- FAWE[11:0] ≦ FAWS[11:0] : P/E コマンドは、プログラムフラッシュ領域に対して実行が禁止される

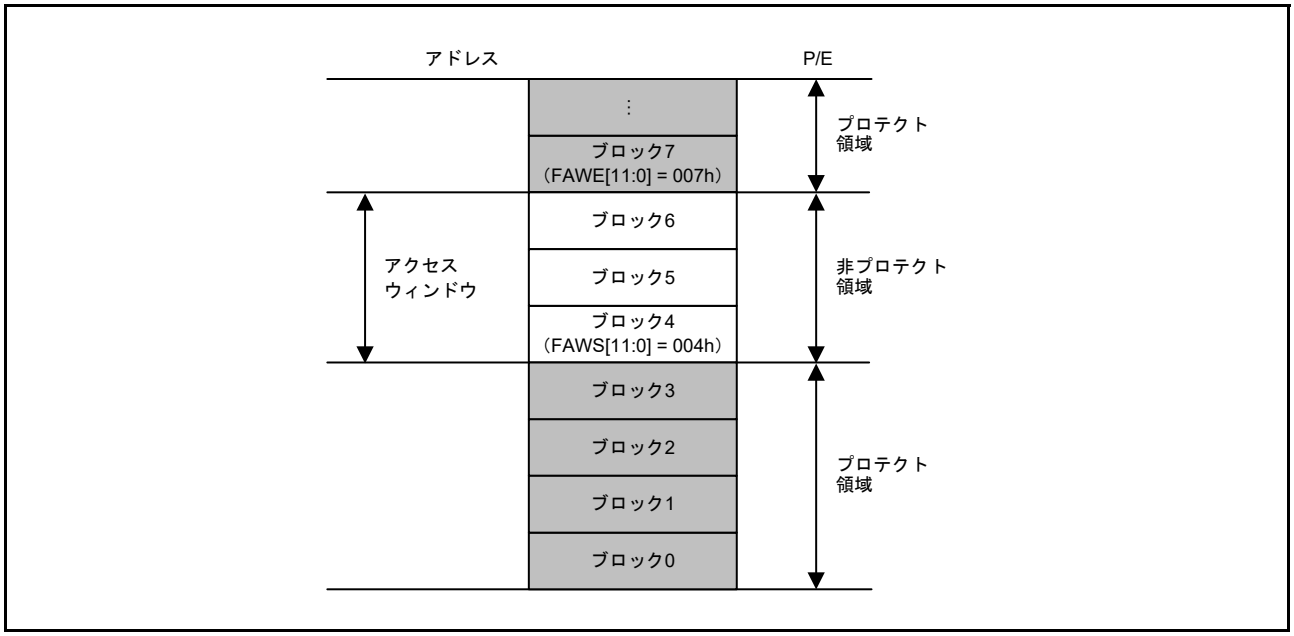


図 7.2　アクセスウィンドウの概要

7.2.6　OCD／シリアルプログラマ ID 設定レジスタ（OSIS）

OSIS レジスタは、OCD／シリアルプログラマの ID コードプロテクト機能の ID を格納します。OCD／シリアルプログラマを接続する場合、MCU がその接続を許可するか否か判定できるようにするための値を書き込んでください。本レジスタは、OCD／シリアルプログラマから送られてくるコードが、オプション設定メモリ上の ID コードと一致するか否かを判定します。ID コードが一致した場合、OCD／シリアルプログラマとの接続が許可されます。一致しない場合、OCD／シリアルプログラマとの接続はできません。OSIS レジスタは 32 ビット単位で設定する必要があります。

アドレス　OSIS 0101 0018h, OSIS 0101 0020h, OSIS 0101 0028h, OSIS 0101 0030h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値								ユーザの設定値								

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値								ユーザの設定値								

OCD／シリアルプログラマの ID 認証に使用する ID を格納します。

ID コードのビット 127 とビット 126 は、ID コードプロテクト機能が有効か判定し、ホストで使用する認証方法を決定します。ID コードがどのように認証方法を決定するかについて、表 7.2 に示します。

表 7.2　IDコードプロテクト機能の仕様

ブートアップ時の動作モード	IDコード	プロテクト状態	プログラマまたはオンチップデバッガ接続時の動作
シリアルプログラミングモード（SCI/USB ブートモード） オンチップデバッグモード（JTAG/SWD ブートモード）	FFh, …, FFh（全バイトがFFh）	プロテクト無効	IDコードはチェックされません。IDコードは常に一致して、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続が許可されます。
	ビット127 = 1およびビット126 = 1、かつ16バイトのうち少なくとも1つがFFh以外	プロテクト有効	IDコードの一致 = 認証が完了し、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続が許可されます。 IDコードの不一致 = IDコードプロテクト待ち状態へ遷移します。 プログラマまたはオンチップデバッガから送られてきたIDコードがASCIIコードのALeRASE（414C_6552_4153_45FF_FFFF_FFFF_FFFF_FFFFh）であると、ユーザフラッシュ（コードおよびデータ）領域と構成領域の内容は消去されます。 ただし、FSPRビットが0であれば、強制消去は実行されません。
	ビット127 = 1およびビット126 = 0	プロテクト有効	IDコードが一致すると認証が完了し、プログラマまたはオンチップデバッガとの接続が許可されます。 IDコードが不一致の場合、IDコードプロテクト待ち状態へ遷移します。
	ビット127 = 0	プロテクト有効	IDコードはチェックされません。IDコードは常に不一致であり、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続は禁止されます。

7.3 オプション設定メモリの設定方法

7.3.1 オプション設定メモリへのデータの配置方法

プログラムデータは、図 7.1 に示すオプション設定メモリのアドレスに配置されます。配置したデータは、フラッシュ書き込みソフトウェアやオンチップデバッガなどのツールで使用されます。

注 . プログラムの書式はコンパイラによって異なります。詳細は、コンパイラのマニュアルを参照してください。

7.3.2 オプション設定メモリにプログラムするデータの設定方法

7.3.1 オプション設定メモリへのデータの配置方法に記載した方法でデータを配置するだけでは、オプション設定メモリにデータを書き込めません。同時に、本節に記載されている方法のいずれかを実施する必要があります。

(1) セルフプログラミングでオプション設定メモリを変更する場合

プログラムコマンドを用いて、プログラムフラッシュ領域へデータを書き込んでください。また、コンフィグレーション設定コマンドを使用して、コンフィグレーション設定領域のオプション設定メモリへデータを書き込んでください。さらに、スタートアップ領域選択機能を使用して、オプション設定メモリを含むブートプログラムを安全に更新してください。

プログラムコマンド、コンフィグレーション設定コマンド、およびスタートアップ領域選択機能の詳細については、「43. フラッシュメモリ」を参照してください。

(2) OCD によるデバッグ時またはフラッシュライタによってプログラムする場合

この手順は使用するツールによって異なるため、詳細はツールのマニュアルを参照してください。

MCU は以下の 2 つの設定手順を提供します：

- 7.3.1 オプション設定メモリへのデータの配置方法に示すように配置されたデータを、コンパイラが生成するオブジェクトファイルやモトローラ S 形式ファイルから読み取り、本 MCU へプログラムする
- ツールの GUI インタフェースを使用して、7.3.1 オプション設定メモリへのデータの配置方法に示すものと同じデータをプログラムする

7.4 使用上の注意事項

7.4.1 オプション設定メモリの予約領域および予約ビットにプログラムするデータ

オプション設定メモリの予約領域および予約ビットがプログラム範囲内にある場合、予約領域の全ビットおよび全予約ビットには 1 を書き込んでください。これらのビットに 0 を書き込むと、正常動作は保証されません。

8. 低電圧検出（LVD）

8.1 概要

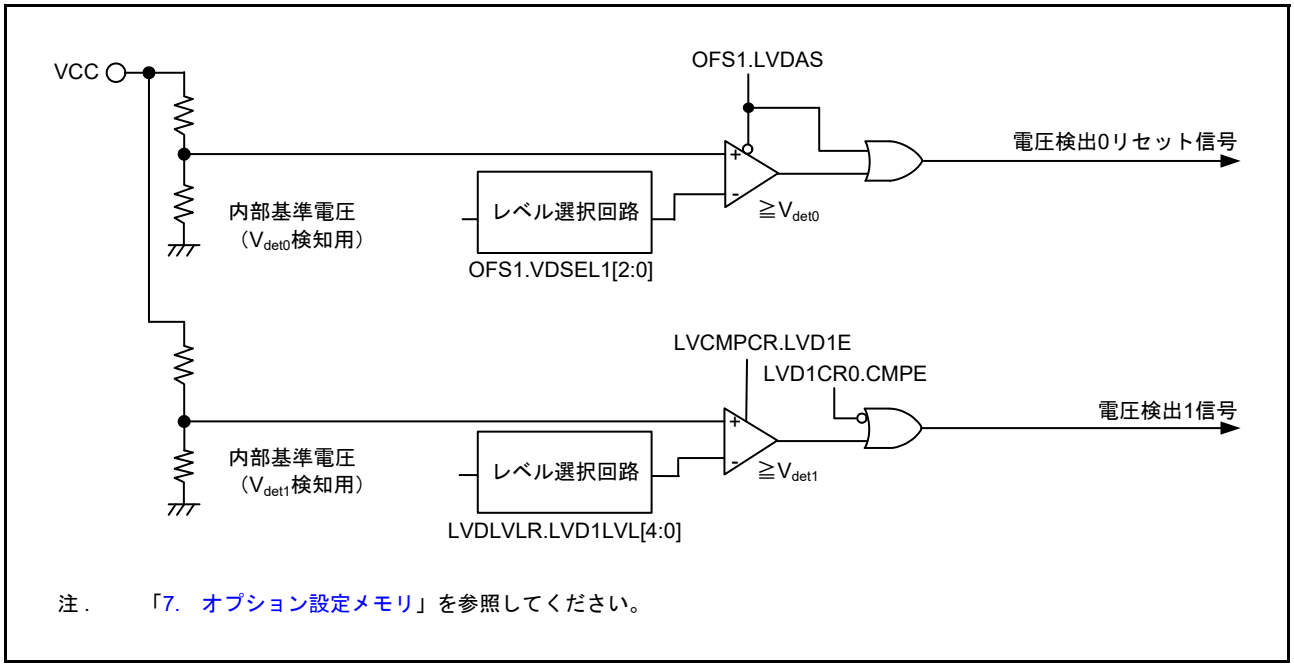
低電圧検出（LVD）モジュールは、VCC 端子へ入力された電圧レベルを監視し、検出レベルはソフトウェアプログラムで選択できます。LVD モジュールは、2 つの独立した電圧レベル検出器（電圧検出 0、1 回路）で構成され、それぞれが VCC 端子への入力電圧レベルを測定します。LVD 電圧検出レジスタにより、さまざまな電圧しきい値で VCC の変動を検出するようにユーザアプリケーションを設定できます。

それぞれの電圧レベル検出器には、電圧監視 0、1 などの電圧監視回路が対応しています。電圧監視レジスタにより、電圧しきい値を通過したときに、割り込み、イベントリンク出力、またはリセットを発生させるように LVD を設定できます。

表 8.1 に、LVD の仕様を示します。また、図 8.1 に電圧検出 0、1 回路のブロック図を、図 8.2 に電圧監視 1 割り込み／リセット発生回路のブロック図を示します。

表 8.1 LVDの仕様

項目		電圧監視0	電圧監視1
VCC監視	監視電圧	V_{det0}	V_{det1}
	検出イベント	V_{det0} 以下に下降	上昇または下降して V_{det1} を通過
	検出電圧	OFS1.VDSEL1[2:0]ビットで3レベルから選択可能	LVDLVLR.LVD1LVL[4:0]ビットで10レベルから選択可能
	モニタフラグ	なし	LVD1SR.MONフラグ：電圧が V_{det1} より高いか低いかを監視
			LVD1SR.DETフラグ：V_{det1} 通過検出
電圧検出時の処理	リセット	電圧監視0リセット	電圧監視1リセット
		V_{det0} ＞VCCでリセット。 VCC＞V_{det0} の一定時間後にCPU動作再開	V_{det1} ＞VCCでリセット。 CPU動作再開タイミングとして、VCC＞V_{det1} の一定時間後、または V_{det1} ＞VCCの一定時間後を選択可能
	割り込み	なし	電圧監視1割り込み
			ノンマスカブル割り込み、またはマスカブル割り込みを選択可能
			V_{det1} ＞VCCまたはVCC＞V_{det1} のとき割り込み要求
イベントリンク機能		なし	あり V_{det1} 通過検出時にイベント信号出力



注 . 「7. オプション設定メモリ」を参照してください。

図 8.1 電圧検出 0、1 回路のブロック図

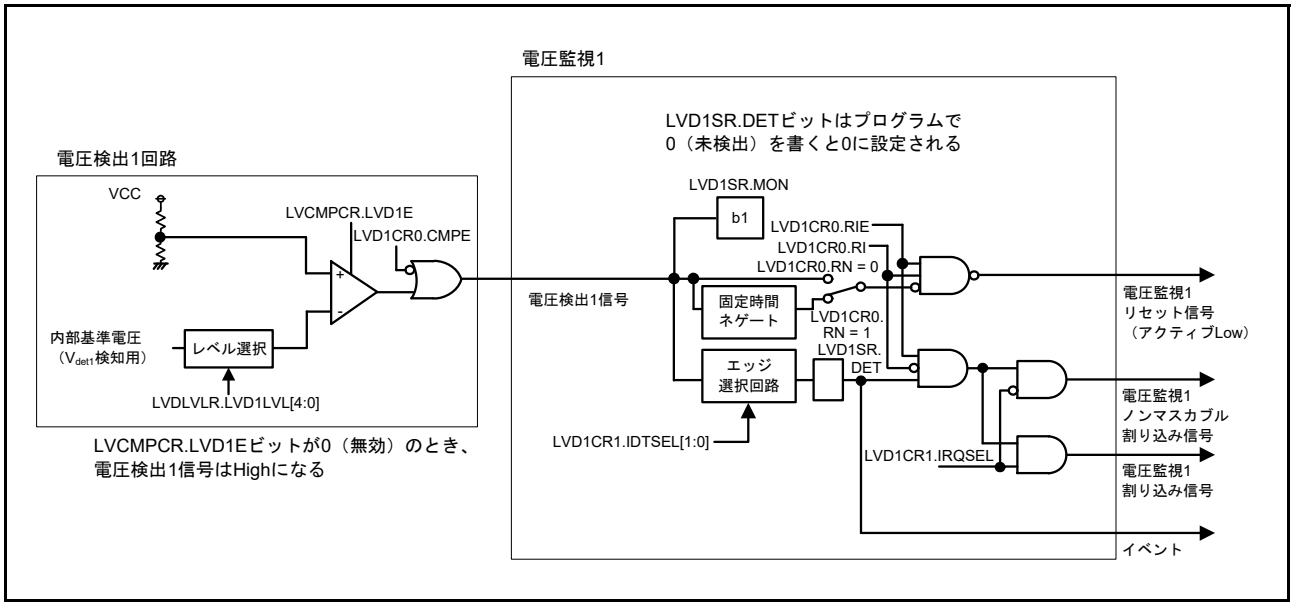


図 8.2 電圧監視 1 割り込み／リセット発生回路のブロック図

8.2 レジスタの説明

8.2.1 電圧モニタ 1 回路コントロールレジスタ 1（LVD1CR1）

アドレス SYSTEM.LVD1CR1 4001 E0E0h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	IRQSEL	IDTSEL[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	IDTSEL[1:0]	電圧監視1割り込み発生条件選択	b1 b0 0 0：VCC≧V_{det1}（上昇）検出時 0 1：VCC＜V_{det1}（下降）検出時 1 0：下降および上昇検出時 1 1：設定禁止	R/W
b2	IRQSEL	電圧監視1割り込み種類選択	0：ノンマスカブル割り込み 1：マスカブル割り込み（注1）	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . PRCR.PRC3 ビットを 1（書き込み許可）にしてから、このレジスタを書き換えてください。
注 1. マスカブル割り込みを設定する場合、ICU の NMIER.LVD1EN ビットをリセット状態から変更しないでください。

8.2.2 電圧モニタ 1 回路ステータスレジスタ（LVD1SR）

アドレス SYSTEM.LVD1SR 4001 E0E1h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	MON	DET
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DET	電圧監視1電圧変化検出フラグ	0：未検出 1：V_{det1}通過検出	R(/W)（注1）
b1	MON	電圧監視1信号モニタフラグ	0：VCC＜V_{det1} 1：VCC≧V_{det1}またはMON無効	R
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . PRCR.PRC3 ビットを 1（書き込み許可）にしてから、このレジスタを書き換えてください。
注 1. 本ビットには 0 のみ書けます。0 を書いた後、本ビットの読み出し値に反映されるまでにシステムクロックの 2 サイクルが必要です。

DET フラグ（電圧監視 1 電圧変化検出フラグ）

DET フラグは、LVCMPCR.LVD1E ビットが 1（電圧検出 1 回路有効）であり、かつ LVD1CR0.CMPE ビットが 1（電圧監視 1 回路比較結果出力許可）のときに有効になります。

DET フラグを 0 にするときは、LVD1CR0.RIE を 0（禁止）にしてから行う必要があります。LVD1CR0.RIE を 0 にした後、再度 1（許可）にする場合は、PCLKB サイクルが 2 サイクル以上経過してから行ってください。

MON フラグ（電圧監視 1 信号モニタフラグ）

MON フラグは、LVCMPCR.LVD1E ビットが 1（電圧検出 1 回路有効）であり、かつ LVD1CR0.CMPE ビットが 1（電圧監視 1 回路比較結果出力許可）のときに有効になります。

8.2.3 電圧モニタ回路コントロールレジスタ（LVCMPCR）

アドレス SYSTEM.LVCMPCR 4001 E417h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	LVD1E	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	LVD1E	電圧検出1有効	0：電圧検出1回路無効 1：電圧検出1回路有効	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注．　PRCR.PRC3 ビットを 1（書き込み許可）にしてから、このレジスタを書き換えてください。

LVD1E ビット（電圧検出 1 有効）

電圧検出 1 の割り込み／リセットを使用する場合、または LVD1SR.MON ビットを使用する場合、LVD1E ビットを 1 にしてください。LVD1E ビットを 0 から 1 に変更した後、$t_{d(E-A)}$ 経過すると、電圧検出 1 回路が動作します。

8.2.4 電圧検出レベル選択レジスタ（LVDLVLR）

アドレス SYSTEM.LVDLVLR 4001 E418h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	LVD1LVL[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	LVD1LVL[4:0]	電圧検出1レベル選択 （電圧下降時の標準電圧）	b4 b0 0 0 1 0 0 : 3.10V (V_{det1}_4) 0 0 1 0 1 : 3.00V (V_{det1}_5) 0 0 1 1 0 : 2.90V (V_{det1}_6) 0 0 1 1 1 : 2.79V (V_{det1}_7) 0 1 0 0 0 : 2.68V (V_{det1}_8) 0 1 0 0 1 : 2.58V (V_{det1}_9) 0 1 0 1 0 : 2.48V (V_{det1}_A) 0 1 0 1 1 : 2.20V (V_{det1}_B) 0 1 1 0 0 : 1.96V (V_{det1}_C) 0 1 1 0 1 : 1.86V (V_{det1}_D) 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注．　PRCR.PRC3 ビットを 1（書き込み許可）にしてから、このレジスタを書き換えてください。

LVDLVLR レジスタは、LVCMPCR.LVD1E ビットが 0（電圧検出 1 回路無効）の場合のみ変更可能です。

8.2.5 電圧モニタ 1 回路コントロールレジスタ 0（LVD1CR0）

アドレス SYSTEM.LVD1CR0 4001 E41Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RN	RI	—	—	—	CMPE	—	RIE
リセット後の値	1	0	0	0	x	0	0	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RIE	電圧監視1割り込み／リセット許可	0：禁止 1：許可	R/W
b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	CMPE	電圧監視1回路比較結果出力許可	0：電圧監視1回路比較結果出力禁止 1：電圧監視1回路比較結果出力許可	R/W
b3	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b5-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	RI	電圧監視1回路モード選択	0：V_{det1}通過時に電圧監視1割り込み発生 1：V_{det1}以下に下降時、電圧監視1リセット許可	R/W
b7	RN	電圧監視1リセットネゲート選択	0：VCC＞V_{det1}検出時、安定時間（t_{LVD1}）経過後にネゲート 1：LVD1リセットアサート時、安定時間（t_{LVD1}）経過後にネゲート	R/W

注．　PRCR.PRC3 ビットを 1（書き込み許可）にしてから、このレジスタを書き換えてください。

RIE ビット（電圧監視 1 割り込み／リセット許可）

電圧監視 1 割り込み／リセットを許可または禁止にします。このビットが 1 に設定されている状態で、かつフラッシュメモリのプログラム／イレース中の場合には、電圧監視 1 割り込みと電圧監視 1 リセットをどちらも発生させないようにしてください。

RN ビット（電圧監視 1 リセットネゲート選択）

RN ビットを 1（LVD1 リセットアサート時、安定時間経過後にネゲート）にする場合は、MOCOCR.MCSTP ビットは 0（MOCO 動作）にしてください。また、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、RN ビットは 0（VCC ＞ V_{det1} 検出時、安定時間経過後にネゲート）のみが可能です。この場合、RN ビットを 1（LVD1 リセットアサート時、安定時間経過後にネゲート）にしないでください。

8.3 VCC 入力電圧のモニタ

8.3.1 V_{det0} のモニタ

電圧監視 0 の比較結果は、読み出すことができません。

8.3.2 V_{det1} のモニタ

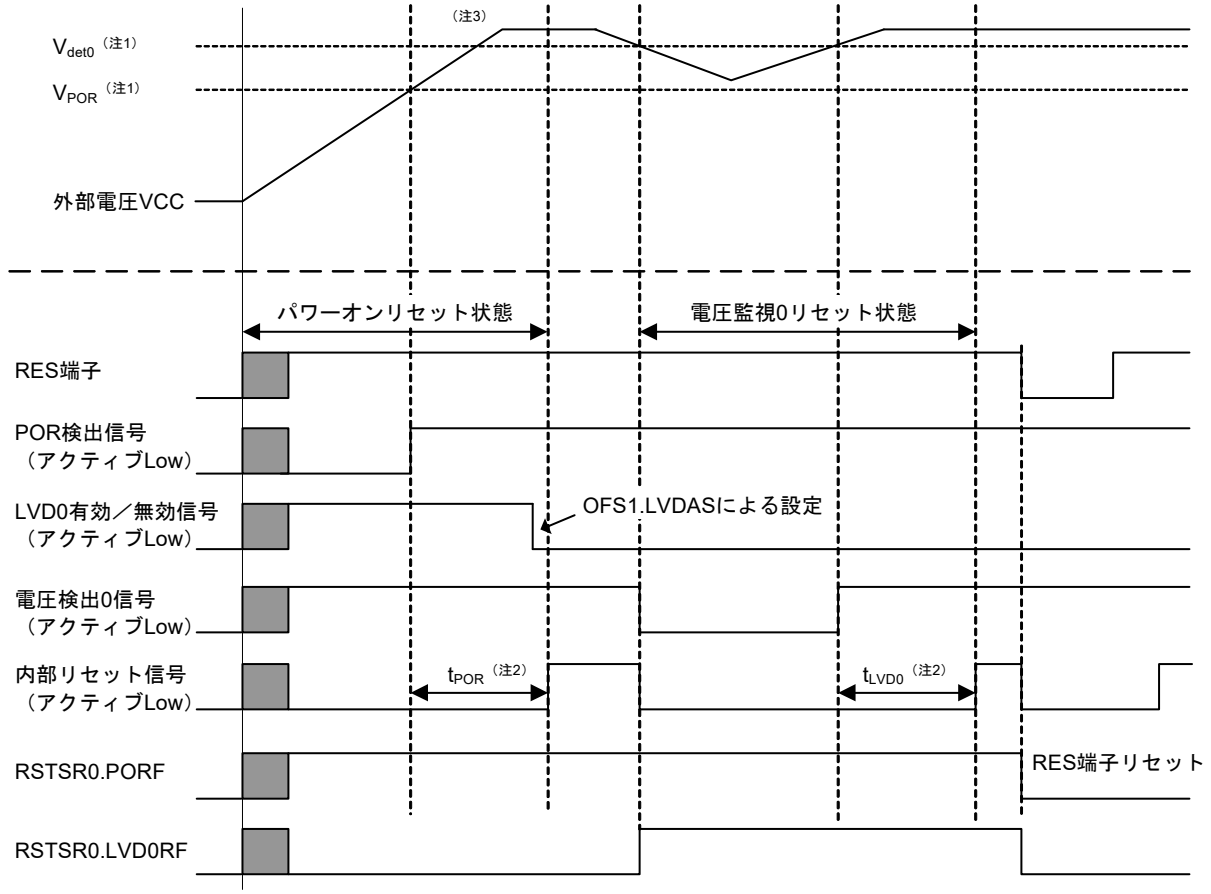
表 8.2 に V_{det1} のモニタの設定手順を示します。設定が完了すると、LVD1SR.MON フラグで電圧監視 1 の比較結果をモニタできます。

表 8.2 V_{det1} のモニタの設定手順

手順		電圧監視1の比較結果のモニタ
電圧検出1回路の設定	1	LVDLVLR レジスタへ書き込む前に、LVCMPCR.LVD1E = 0にして、電圧検出1を無効にする
	2	LVDLVLR.LVD1LVL[4:0]ビットで検出電圧を選択する
	3	LVCMPCR.LVD1E = 1にして、電圧検出1を有効にする
	4	$t_{d(E-A)}$（LVD有効切り替え後のLVD動作安定時間）以上待つ
出力許可の設定	5	LVD1CR0.CMPE = 1にして、電圧監視1の比較結果出力を許可する

8.4 電圧監視 0 リセット

電圧監視 0 リセットを使用する場合は、OFS1.LVDAS ビットを 0 にして、リセット後の電圧監視 0 リセットを有効にしてください。ただし、ブートモード時は、OFS1.LVDAS ビットの値にかかわらず、電圧監視 0 リセットは無効です。図 8.3 に電圧監視 0 リセットの動作例を示します。



注 . 電気的特性についての詳細は、「48. 電気的特性」を参照してください。
注 1. V_{POR} はパワーオンリセットの検出レベルを表し、V_{det0} は電圧監視 0 リセットの検出レベルを表します。
注 2. t_{POR} はパワーオンリセットの期間を表し、tLVD0 は電圧監視 0 リセットの期間を表します。
注 3. 電源投入時には、VCC が最低保証電圧に達してからでなければ、POR リセットを解除することはできません。

図 8.3 電圧監視 0 リセットの動作例

8.5 電圧監視 1 割り込み、電圧監視 1 リセット

電圧監視 1 回路での比較結果により、割り込みやリセットを発生させることができます。

表 8.3 に、電圧監視 1 割り込み／リセット関連ビットの動作設定手順を示します。表 8.4 に、電圧監視 1 割り込み／リセット関連ビットの停止設定手順を示します。図 8.4 に電圧監視 1 割り込みの動作例を示します。電圧監視 1 リセットの動作については、「6. リセット」の図 6.2 を参照してください。

なお、ソフトウェアスタンバイモードで電圧監視 1 回路を使用する場合は、以下の手順で電圧監視 1 回路を設定してください。

(1) ソフトウェアスタンバイモード時の設定

- VCC ＞ V_{det1} が検出された場合、安定時間経過後に電圧監視 1 リセット信号をネゲート（LVD1CR0.RN = 0）してください

表 8.3 電圧監視 1 割り込み、電圧監視 1 リセット関連ビットの動作設定手順

手順		電圧監視 1 割り込み（電圧監視 1 ELC イベント出力）	電圧監視 1 リセット
電圧検出 1 回路の設定	1	LVDLVLR レジスタへ書き込む前に、LVCMPCR.LVD1E = 0 にして、電圧検出 1 回路を無効にする	
	2	LVDLVLR.LVD1LVL[3:0] ビットで検出電圧を選択する	
	3	LVCMPCR.LVD1E = 1 にして、電圧検出 1 回路を有効にする	
	4	$t_{d(E-A)}$（LVD 有効切り替え後の LVD 動作安定時間）以上待つ（注 1）	
電圧監視 1 割り込み／リセットの設定	5	LVD1CR0.RI = 0 にして、電圧監視 1 割り込みを選択する	• LVD1CR0.RI = 1 にして、電圧監視 1 リセットを選択する • LVD1CR0.RN ビットでリセットネゲートの種類を選択する
	6	• LVD1CR1.IDTSEL[1:0] ビットで割り込み要求のタイミングを選択する • LVD1CR1.IRQSEL ビットで割り込みの種類を選択する	—
出力許可の設定	7	LVD1SR.DET = 0 にする	
	8	LVD1CR0.RIE = 1 にして、電圧監視 1 割り込み／リセットを許可する（注 2）	
	9	LVD1CR0.CMPE = 1 にして、電圧監視 1 の比較結果出力を許可する	

注 1. 手順 4 の待ち時間中に手順 5 ～ 8 を行うことができます。$t_{d(E-A)}$ の詳細は、「48. 電気的特性」を参照してください。
注 2. ELC イベント信号のみを出力させる場合、手順 8 は不要です。

表 8.4 電圧監視 1 割り込み、電圧監視 1 リセット関連ビットの停止設定手順

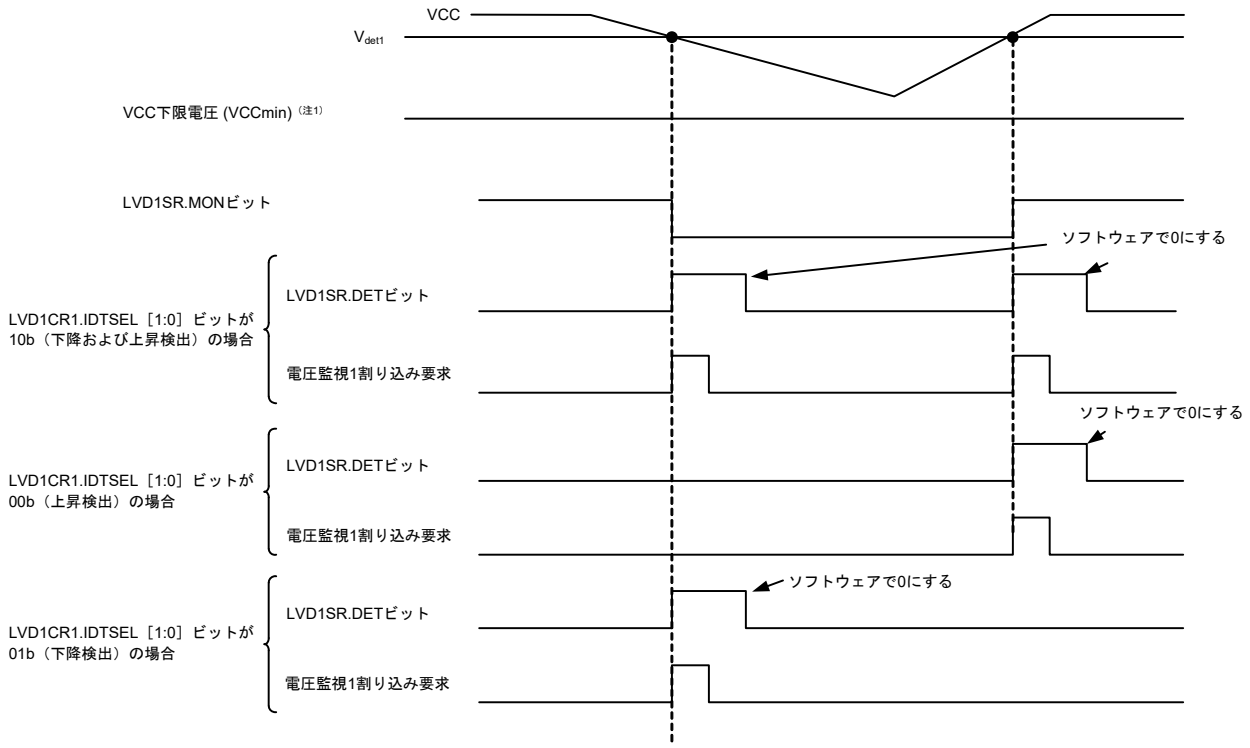
手順		電圧監視 1 割り込み（電圧監視 1 ELC イベント出力）、電圧監視 1 リセット
出力許可停止の設定	1	LVD1CR0.CMPE = 0 にして、電圧監視 1 の比較結果出力を禁止する
	2	LVD1CR0.RIE = 0 にして、電圧監視 1 割り込み／リセットを禁止する（注 1）
電圧検出 1 回路停止の設定	3	LVCMPCR.LVD1E = 0 にして、電圧検出 1 回路を無効にする

注 1. ELC イベント信号のみを出力させる場合、手順 2 は不要です。

電圧監視 1 割り込みや電圧監視 1 リセットを使用した後に、いったん停止してから再度設定する場合は、条件によって停止手順と再設定手順における以下の段階を省略してください。

- 電圧検出 1 回路の設定を変更しない場合、電圧検出 1 回路の設定または停止は不要
- 電圧監視 1 割り込みまたはリセットの設定を変更しない場合、電圧監視 1 割り込みまたはリセットの設定は不要

図 8.4 に電圧監視 1 割り込みの動作例を示します。



注1. 電圧監視0リセットを使用しない場合、VCC≧VCCminで使用してください。

図 8.4 電圧監視 1 割り込みの動作例

8.6 イベントリンク出力機能

LVD は、イベントリンクコントローラ（ELC）に対してイベント信号出力を行うことができます。

(1) Vdet1 通過検出イベント

電圧検出 1 回路有効かつ電圧監視 1 回路比較結果出力許可の状態において、V_{det1} 通過を検出した場合、LVD はイベント信号を出力します。

LVD のイベントリンク出力機能を有効にする場合、LVD を有効にしてから、ELC 側の LVD イベントリンク機能を有効にする必要があります。LVD のイベントリンク出力機能を停止する場合は、LVD の停止設定を行う前に、ELC 側の LVD イベントリンク機能を無効にしてください。

8.6.1 割り込み処理とイベントリンクの関係

LVD には、電圧監視 1 割り込みに割り込み許可または禁止を制御するビットがあります。割り込み要因が発生すると、割り込み許可ビットが許可の場合は、割り込み信号（LVD1CR0.RIE）が CPU へ出力されます。

一方、割り込み要因が発生するとすぐに、割り込み許可ビットの状態にかかわらず、イベントリンク信号がイベント信号として、ELC を介して他のモジュールに出力されます。

ソフトウェアスタンバイモードにおいても、電圧監視 1 割り込み信号を出力することが可能です。ソフトウェアスタンバイモードでは、ELC 用のイベント信号が以下のように出力されます。

- ソフトウェアスタンバイモード期間中に V_{det1} 通過イベントを検出した場合、ソフトウェアスタンバイモードではクロックが供給されていないため ELC 用のイベント信号は出力されません。V_{det1} 通過検出フラグは保持されているため、ソフトウェアスタンバイモードから復帰してクロック供給が再開されると、V_{det1} 検出フラグの状態に基づいて ELC 用のイベント信号が出力されます

9. クロック発生回路

9.1 概要

本 MCU はクロック発生回路を内蔵しています。

表 9.1 と表 9.2 にクロック発生回路の仕様を示します。図 9.1 にクロック発生回路のブロック図を示します。

表 9.1 クロックソース用のクロック発生回路の仕様

クロックソース	項目	内容
メインクロック発振器（MOSC）	発振子周波数	• 1MHz～20MHz（最大3.6V） • 1MHz～8MHz（最大2.4V）
	外部クロック入力周波数	最大20MHz
	外部発振子または付加回路：セラミック発振子、水晶振動子	あり
	接続端子：EXTAL、XTAL	
	駆動能力切り替え	
	発振停止検出機能	
サブクロック発振器（SOSC）	発振子周波数	32.768kHz
	外部発振子または付加回路：水晶振動子	あり
	接続端子：XCIN、XCOUT	
	駆動能力切り替え	
PLL回路	入力クロックソース	MOSC
	入力周波数	4MHz～12.5MHz
	逓倍比	8～31逓倍から選択可能（1ステップ単位）
	出力分周比	2、4分周から選択可能
	PLL出力周波数	24MHz～64MHz（出力分周比：2） 24MHz～32MHz（出力分周比：4）
高速オンチップオシレータ（HOCO）	発振周波数	24/32/48/64MHz
	ユーザトリミング	あり
中速オンチップオシレータ（MOCO）	発振周波数	8MHz
	ユーザトリミング	あり
低速オンチップオシレータ（LOCO）	発振周波数	32.768kHz
	ユーザトリミング	あり
IWDT専用オンチップオシレータ（IWDTLOCO）	発振周波数	15kHz
	ユーザトリミング	不可
JTAG用外部クロック入力（TCK）	入力クロック周波数	最大12.5MHz
SWD用外部クロック入力（SWCLK）	入力クロック周波数	最大12.5MHz
Bluetooth専用クロック発振器	発振子周波数	32MHz
	付加回路：水晶振動子	あり
	接続端子：XTAL1_RF、XTAL2_RF	
Bluetooth専用低速クロック（BLELOCO）	発振周波数	32.768kHz
	ユーザトリミング	なし

表 9.2 内部クロック用のクロック発生回路の仕様

項目	クロックソース	クロック供給	内容
システムクロック（ICLK）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	CPU, DTC, DMAC, Flash, SRAM	最大48MHz 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64
周辺モジュールクロックA（PCLKA）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	周辺モジュール（SPI, SCI, SCE5, CRC, GPTバスクロック）	最大48MHz 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64
周辺モジュールクロックB（PCLKB）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	周辺モジュール（DAC12, IIC, DOC, CAC, CAN, AGT, POEG, CTSU）	最大32MHz 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64
周辺モジュールクロックC（PCLKC）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	周辺モジュール（ADC14変換クロック）	最大64MHz 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64
周辺モジュールクロックD（PCLKD）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	周辺モジュール（GPTカウントクロック）	最大64MHz 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64
フラッシュインタフェースクロック（FCLK）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	フラッシュインタフェース	1MHz～32MHz（P/E） 最大32MHz（読み出し） 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64
USBクロック（UCLK）	HOCO（注1）/PLL	USBFS	48MHz
CANクロック（CANMCLK）	MOSC	CAN	1MHz～20MHz
セグメントLCDクロック（LCDSRCCLK）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO	SLCDC	最大64MHz
AGTクロック（AGTSCLK/AGTLCLK）	SOSC/LOCO	AGT	32.768kHz
CACメインクロック（CACMCLK）	MOSC	CAC	最大20MHz
CACサブクロック（CACSCLK）	SOSC	CAC	32.768kHz
CAC LOCOクロック（CACLCLK）	LOCO	CAC	32.768kHz
CAC MOCOクロック（CACMOCLK）	MOCO	CAC	8MHz
CAC HOCOクロック（CACHCLK）	HOCO	CAC	24/32/48/64MHz
CAC IWDTLOCOクロック（CACILCLK）	IWDTLOCO	CAC	15kHz
RTCクロック（RTCSCLK/RTCLCLK）	SOSC/LOCO	RTC	32.768kHz
IWDTクロック（IWDTCLK）	IWDTLOCO	IWDT	15kHz
SysTickタイマクロック（SYSTICCLK）	LOCO	SysTickタイマ	32.768kHz
JTAGクロック（JTAGTCK）	TCK端子	JTAG	最大12.5MHz
クロック／ブザー出力（CLKOUT）	MOSC/SOSC/LOCO/MOCO/HOCO	CLKOUT端子	最大16MHz 分周比： 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64, 128
シリアルワイヤクロック（SWCLK）	SWCLK端子	OCD	最大12.5MHz
トレースクロック（TRCLK）	MOSC/SOSC/HOCO/MOCO/LOCO/PLL	CPU-OCD	最大48MHz 分周比：1, 2, 4
Bluetooth専用クロック（BLECK）	Bluetooth専用クロック発振器	BLE	32MHz
Bluetooth専用低速クロック（BLELOCO）	Bluetooth専用低速オンチップ発振器	BLE	32.768kHz

注 . クロック周波数の設定に関する制限：ICLK ≧ PCLKA ≧ PCLKB、PCLKD ≧ PCLKA ≧ PCLKB、ICLK ≧ FCLK
クロック周波数比に関する制限（N：整数、最大 64）：
ICLK:FCLK = N:1、ICLK:PCLKA = N:1、ICLK:PCLKB = N:1
ICLK:PCLKC = N:1 または 1:N、ICLK:PCLKD = N:1 または 1:N
PCLKB:PCLKC = 1:1、1:2、1:4、2:1、4:1、または 8:1
注 . プログラム／イレース（P/E）モードでの最小 FCLK 周波数は 1MHz
注 1. USBFS をデバイスコントローラとして使用しているときのみ

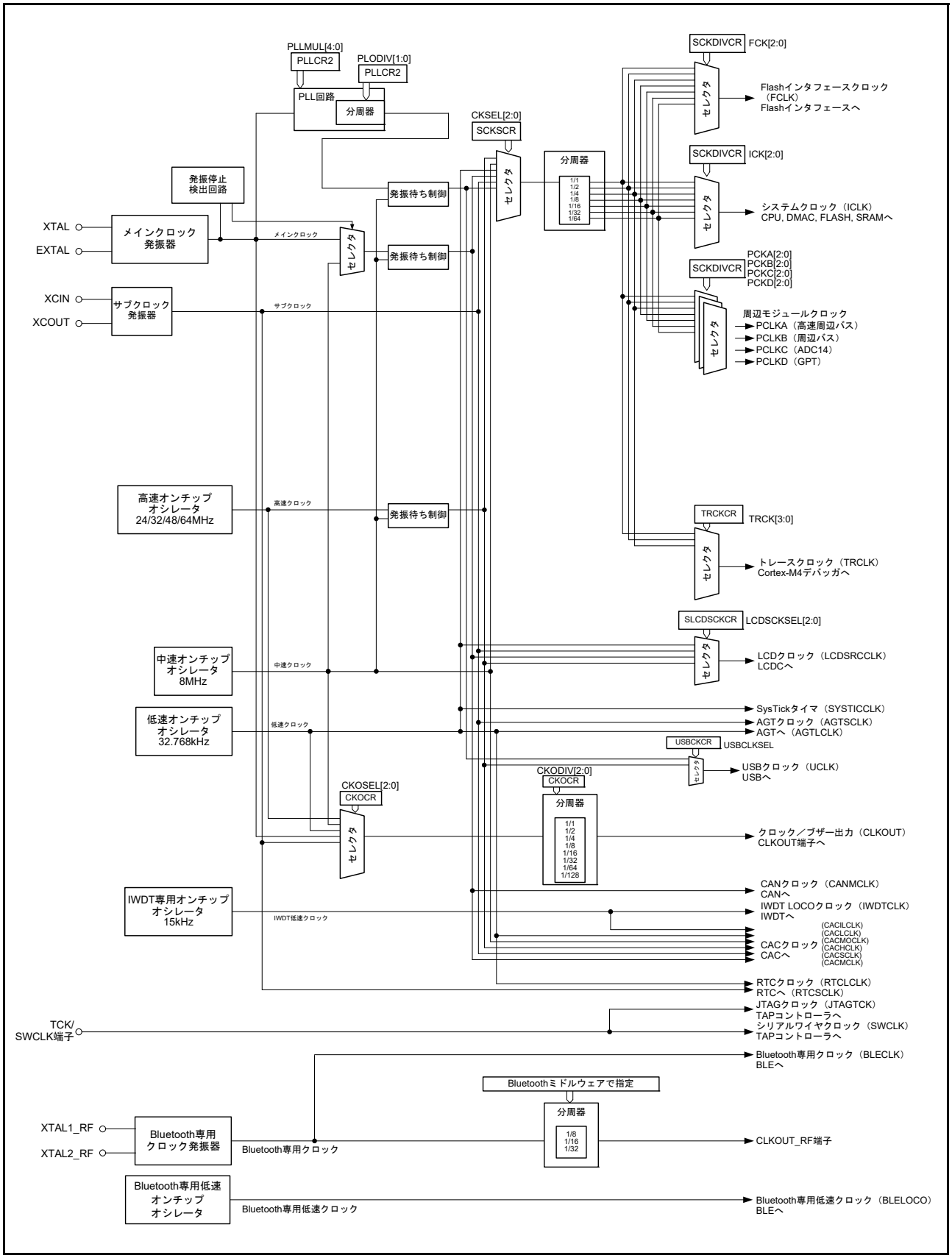


図 9.1　　クロック発生回路のブロック図

表 9.3 にクロック発生回路の入出力端子を示します。

表 9.3 クロック発生回路の入出力端子

端子名	入出力	機能
XTAL	出力	水晶振動子用の接続端子。EXTAL端子は外部クロックの入力にも使用可能です。詳細は、9.3.2 外部クロックを入力する方法を参照してください。
EXTAL	入力	
XCIN	入力	32.768kHz水晶振動子接続端子
XCOUT	出力	
TCK/SWCLK	入力	JTAG用のクロック入力
CLKOUT	出力	CLKOUT/BUZZERクロック用の出力端子
XTAL1_RF	入力	32MHz発振子接続端子
XTAL2_RF	出力	
CLKOUT_RF	出力	Bluetooth専用クロック出力端子

9.2　レジスタの説明

9.2.1　システムクロック分周コントロールレジスタ（SCKDIVCR）

アドレス　SYSTEM.SCKDIVCR 4001 E020h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	FCK[2:0]			—	ICK[2:0]			—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	PCKA[2:0]			—	PCKB[2:0]			—	PCKC[2:0]			—	PCKD[2:0]		
リセット後の値	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	PCKD[2:0]	周辺モジュールクロックD（PCLKD）選択(注3)	b2 b0 0 0 0：1分周 0 0 1：2分周 0 1 0：4分周 0 1 1：8分周 1 0 0：16分周 1 0 1：32分周 1 1 0：64分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	PCKC[2:0]	周辺モジュールクロックC（PCLKC）選択(注3)	b6 b4 0 0 0：1分周 0 0 1：2分周 0 1 0：4分周 0 1 1：8分周 1 0 0：16分周 1 0 1：32分周 1 1 0：64分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b8	PCKB[2:0]	周辺モジュールクロックB（PCLKB）選択(注2)	b10 b8 0 0 0：1分周 0 0 1：2分周 0 1 0：4分周 0 1 1：8分周 1 0 0：16分周 1 0 1：32分周 1 1 0：64分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14-b12	PCKA[2:0]	周辺モジュールクロックA（PCLKA）選択(注2)	b14 b12 0 0 0：1分周 0 0 1：2分周 0 1 0：4分周 0 1 1：8分周 1 0 0：16分周 1 0 1：32分周 1 1 0：64分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b15	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b18-b16	—	予約ビット	PCKB[2:0]と同じビットを書いてください。	R/W
b23-b19	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b26-b24	ICK[2:0]	システムクロック（ICLK）選択 （注1）（注2）（注3）（注4）	b26 b24 0 0 0：1分周 0 0 1：2分周 0 1 0：4分周 0 1 1：8分周 1 0 0：16分周 1 0 1：32分周 1 1 0：64分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b27	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b30-b28	FCK[2:0]	フラッシュインタフェースクロック（FCLK）選択 （注1）	b30 b28 0 0 0：1分周 0 0 1：2分周 0 1 0：4分周 0 1 1：8分周 1 0 0：16分周 1 0 1：32分周 1 1 0：64分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b31	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　システムクロック（ICLK）とフラッシュインタフェースクロック（FCLK）の間には以下の周波数関係が必要です。
ICLK:FCLK = N:1（N：整数）
ICLK ＜ FCLK となる設定の場合、その設定は無視されます。

注 2.　システムクロック（ICLK）と周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB）の間には以下の周波数関係が必要です。
ICLK:PCLKA = N:1、ICLK:PCLKB = N:1（N：整数）
ICLK ＜ PCLKA または ICLK ＜ PCLKB となる設定の場合、その設定は無視されます。

注 3.　システムクロック（ICLK）と周辺モジュールクロック（PCLKC、PCLKD）の間には以下の周波数関係が必要です。
ICLK:PCLKC = N:1 または 1:N、ICLK:PCLKD = N:1 または 1:N（N：整数）

注 4.　SCKSCR.CKSEL[2:0] ビットで 32MHz よりも速いシステムクロックを選択し、かつ MEMWAIT.MEMWAIT = 0 の場合、ICLK を 1 分周に設定するのは禁止です。

SCKDIVCR レジスタは、システムクロック（ICLK）、周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD）、およびフラッシュインタフェースクロック（FCLK）の周波数を選択するレジスタです。

PCKD[2:0] ビット（周辺モジュールクロック D（PCLKD）選択）

周辺モジュールクロック D（PCLKD）の周波数を選択します。

PCKC[2:0] ビット（周辺モジュールクロック C（PCLKC）選択）

周辺モジュールクロック C（PCLKC）の周波数を選択します。

PCKB[2:0] ビット（周辺モジュールクロック B（PCLKB）選択）

周辺モジュールクロック B（PCLKB）の周波数を選択します。

PCKA[2:0] ビット（周辺モジュールクロック A（PCLKA）選択）

周辺モジュールクロック A（PCLKA）の周波数を選択します。

ICK[2:0] ビット（システムクロック（ICLK）選択）

CPU、DMAC、および DTC 用システムクロックの周波数を選択します。

FCK[2:0] ビット（フラッシュインタフェースクロック（FCLK）選択）

フラッシュインタフェースクロック（FCLK）の周波数を選択します。

9.2.2 システムクロックソースコントロールレジスタ（SCKSCR）

アドレス SYSTEM.SCKSCR 4001 E026h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	CKSEL[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CKSEL[2:0]	クロックソース選択（注1）	b2 b0 0 0 0 : HOCO 0 0 1 : MOCO 0 1 0 : LOCO 0 1 1 : メインクロック発振器（MOSC） 1 0 0 : サブクロック発振器（SOSC） 1 0 1 : PLL 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. SCKDIVCR.ICK[2:0] ビットで 1 分周を選択し、かつ MEMWAIT.MEMWAIT = 0 の場合、32MHz よりも速いシステムクロックソース（システムクロックソース＞ 32MHz）の選択は禁止です。

SCKSCR レジスタは、システムクロックのクロックソースを選択するレジスタです。

CKSEL[2:0] ビット（クロックソース選択）

CKSEL[2:0] ビットは下記モジュールのクロックソースを選択します：

- システムクロック（ICLK）
- 周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB、PCLKC、および PCLKD）
- フラッシュインタフェースクロック（FCLK）

ビットは下記のソースの 1 つから選択します：

- 低速オンチップオシレータ（LOCO）
- 中速オンチップオシレータ（MOCO）
- 高速オンチップオシレータ（HOCO）
- メインクロック発振器（MOSC）
- サブクロック発振器（SOSC）
- PLL 回路

内部非同期割り込みが発生していないときに、クロックソースの切り替えを行ってください。

停止しているクロックソースへの切り替えは禁止されています。

9.2.3 PLL クロックコントロールレジスタ 2（PLLCCR2）

アドレス SYSTEM.PLLCCR2 4001 E02Bh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PLODIV[1:0]		—	PLLMUL[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	PLLMUL[4:0]	PLL周波数逓倍率選択（注1）	b4 b0 0 0 1 1 1 : × 8 0 1 0 0 0 : × 9 0 1 0 0 1 : × 10 : 1 1 1 0 1 : × 30 1 1 1 1 0 : × 31 上記以外は設定しないでください。	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7-b6	PLODIV[1:0]	PLL出力分周比選択（注1）	b7 b6 0 0 : 予約 0 1 : 2分周 1 0 : 4分周 上記以外は設定しないでください。	R/W

注 1. PLLMUL[4:0] ビットと PLODIV[1:0] ビットは、PLL の出力周波数が表 9.1 の範囲に収まるように設定する必要があります。

PLLCCR2 レジスタは、PLL 回路の動作を設定するレジスタです。PLLCR.PLLSTP ビットが 0（PLL 動作）の場合、PLLCCR2 レジスタへの書き込みは禁止です。

PLLMUL[4:0] ビット（PLL 周波数逓倍率選択）

PLL 回路の周波数逓倍率を選択します。

PLODIV[1:0] ビット（PLL 出力分周比選択）

PLL 出力の分周比を選択します。

9.2.4 PLL コントロールレジスタ（PLLCR）

アドレス SYSTEM.PLLCR 4001 E02Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	PLLSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PLLSTP	PLL停止制御	0：PLL動作（注1） 1：PLL停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. PLL 動作時は、VCC は 2.4V 以上（VCC ≧ 2.4V）でなければいけません。また、動作電力制御モードは、High-speed モードまたは Middle-speed モードに設定する必要があります。

PLLCR レジスタは、PLL 回路の動作を制御するレジスタです。

PLLSTP ビット（PLL 停止制御）

PLL 回路を起動または停止させます。

PLLSTP ビットを 0 にした後、OSCSF.PLLSF ビットが 1 になっていることを確認してから、PLL クロックを使用してください。PLL を動作するように設定してから、一定の安定待機時間を要します。PLL 動作が停止してから、発振が停止するまでにも一定の待機時間を要します。

PLL 動作の開始および停止に関しては、以下の制限があります。

- PLL の停止後、動作を再開させる前に OSCSF.PLLSF ビットが 0 であることを確認すること
- PLL を停止させる前に、PLL が動作していること、および OSCSF.PLLSF ビットが 1 であることを確認すること
- PLL クロックをシステムクロックとして選択しているかどうかにかかわらず、PLL を動作開始に設定して MCU をソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、OSCSF.PLLSF ビットが 1 になっていることを確認した上で WFI 命令を実行すること
- PLL の停止設定後にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、OSCSF.PLLSF ビットが 0 に設定されていることを確認した上で WFI 命令を実行すること

以下の条件下で PLLSTP ビットに 1 を書き込むことは禁止されています。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 101b（システムクロックソース = PLL）

PLLSTP に 0 を書き込む前に、以下の条件が満たされていることを確認してください。

- OSCSF.MOSCSF ビットが 1 であること
- PLLSTP = 1（PLL 停止）に設定してから 4µs 以上が経過していること
- PLLMUL[4:0] ビットの設定（PLL 周波数逓倍率選択）から 1µs 以上が経過していること

9.2.5 メモリウェイトサイクルコントロールレジスタ（MEMWAIT）

アドレス SYSTEM.MEMWAIT 4001 E031h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	MEMWAIT
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MEMWAIT	メモリウェイトサイクル選択	0：ウェイトなし 1：ウェイトあり	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注．　SCKDIVCR.ICK ビットで 1 分周を選択し、かつ SCKSCR.CKSEL[2:0] ビットで 32MHz よりも速いシステムクロックソース（ICLK ＞ 32MHz）を選択した場合、MEMWAIT ビットへの 0 の書き込みは禁止されています。

このレジスタは Flash リードアクセスのウェイトサイクルを制御します。

MEMWAIT ビット（メモリウェイトサイクル選択）

Flash リードアクセスのウェイトサイクルを選択します。リセット解除後は、Flash アクセスのウェイトサイクルは 0 ウェイト（MEMWAIT = 0）に設定されます。

MEMWAIT ビットへ書き込む前に、ICLK 周波数と動作電力制御モードを確認してください。ICLK、動作電力制御モード、および MEMWAIT ビットを設定する場合、以下の制限があります。

- ICLK を 32MHz よりも速く設定する場合（ICLK ＞ 32MHz）、ICLK が 32MHz 以下（ICLK ≦ 32MHz）で、かつ動作電力制御モードが High-speed モード（OPCCR.OPCM[1:0] = 00b）の状態で、MEMWAIT ビットを 1 にしてください。
  動作モードが High-speed モード以外のときに、MEMWAIT を 1 にすることは禁止されています。
  MEMWAIT = 0 の状態で、ICLK を 32MHz よりも速く設定することは禁止されています
- ICLK を 32MHz より速い設定（ICLK ＞ 32MHz）から 32MHz 以下（ICLK ≦ 32MHz）の設定にする場合は、MEMWAIT = 1 の状態で、ICLK 周波数を 32MHz 以下にする必要があります。
  ICLK が 32MHz よりも速い状態で、MEMWAIT を 0 に設定することは禁止されています。動作モードが High-speed モード以外のときに、MEMWAIT を 1 に設定することは禁止されています。ICLK 周波数が 32MHz 以下で、かつ動作電力制御モードが High-speed モード（OPCCR.OPCM[1:0] = 00b）のときに、MEMWAIT を 0 に設定できます

表 9.4　MEMWAIT ビットの設定

MEMWAIT ビット	MCU 動作電力制御		
		High-speed モード	
	モード：High-speed モード以外	ICLK ≦ 32MHz	ICLK ＞ 32MHz
0	○	○	×
1	×	○	○

○：設定可能
×：設定不可

図 9.2 に、ICLK を 32MHz よりも速く設定する場合のフロー例を示します。

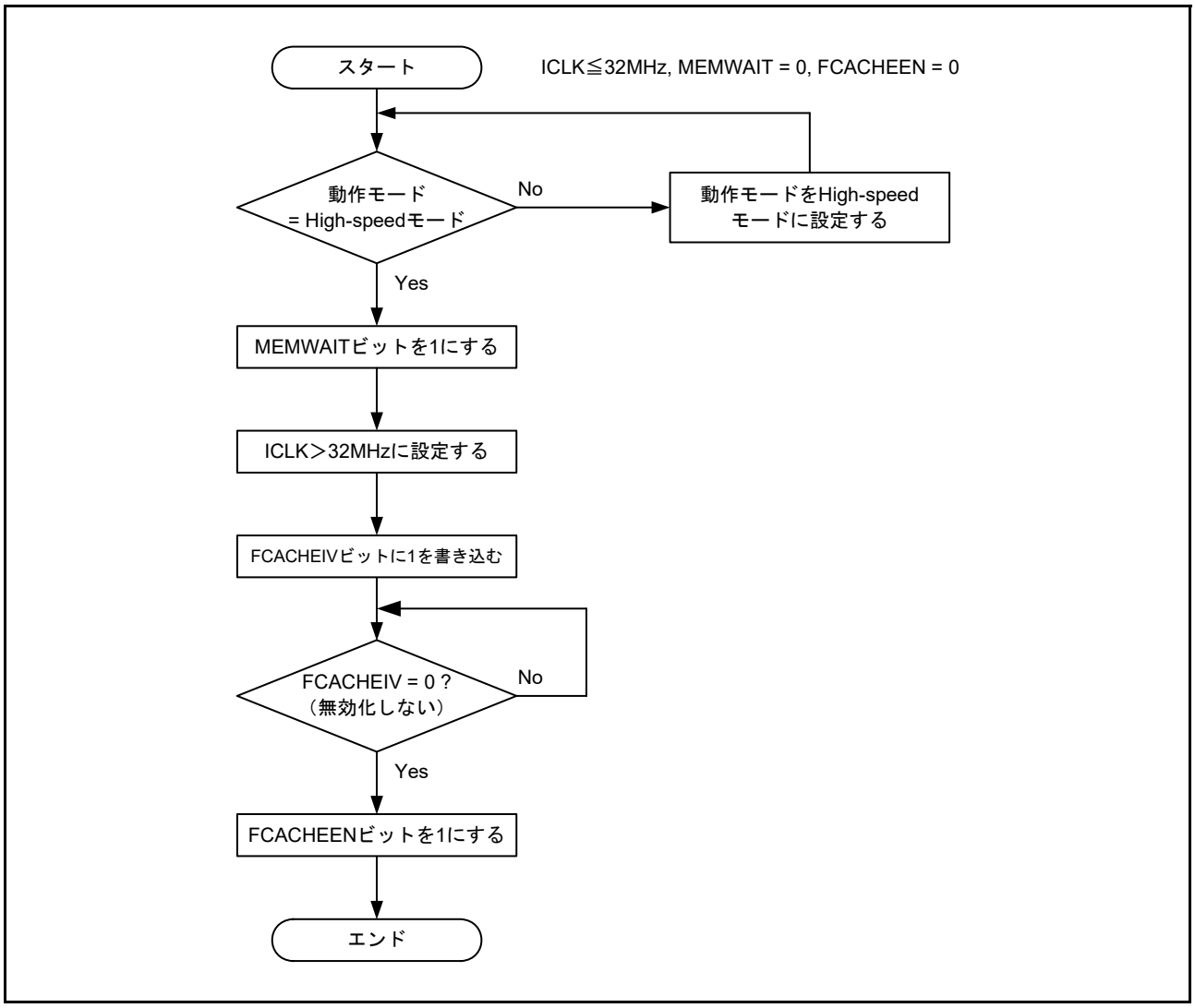


図 9.2 ICLK ＞ 32MHz に設定する場合

図 9.3 に、ICLK が 32MHz 超の場合に、ICLK を 32MHz 以下に設定する例を示します。

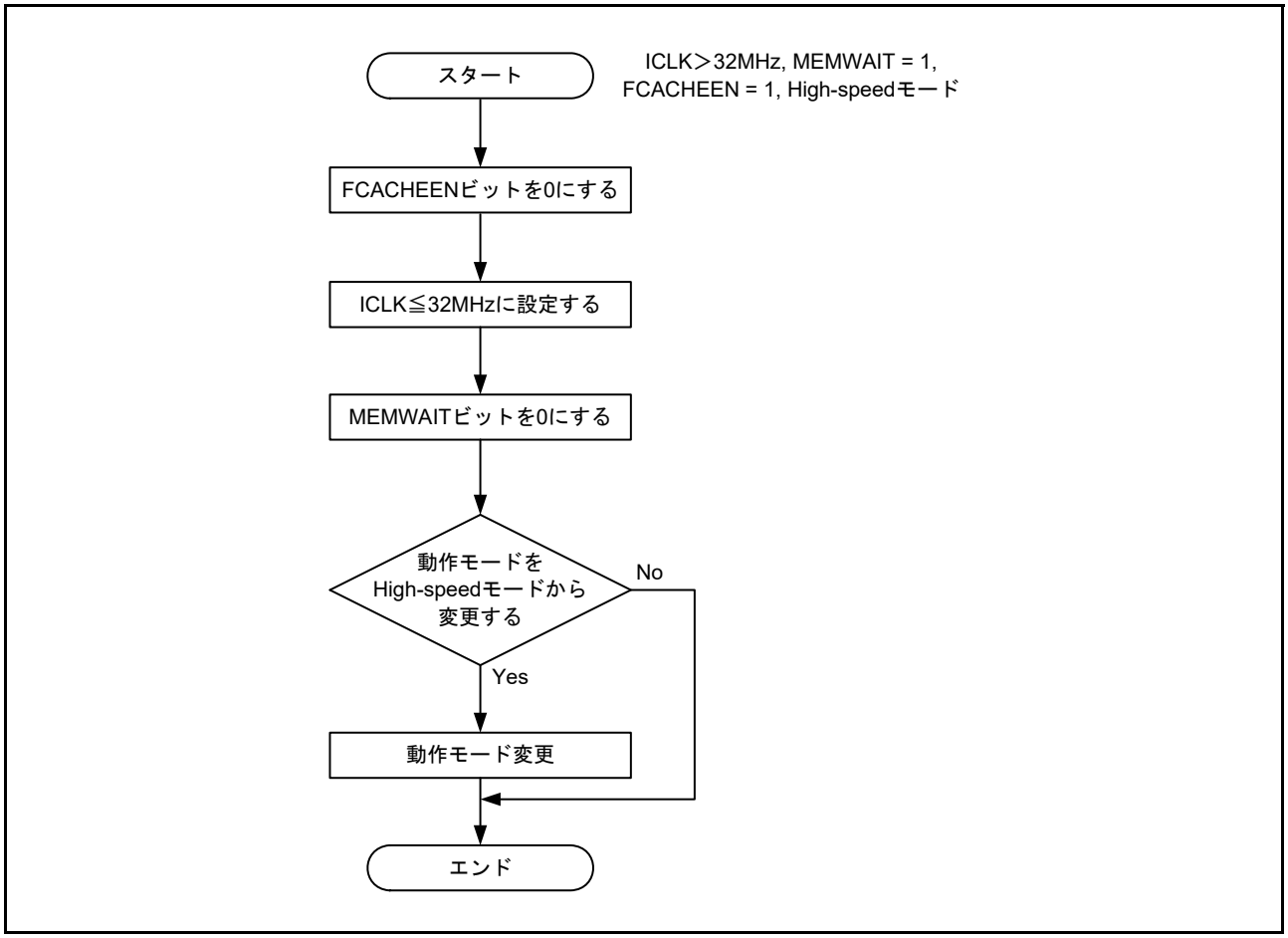


図 9.3 ICLK ＞ 32MHz の状態から ICLK ≦ 32MHz に設定する場合

9.2.6 メインクロック発振器コントロールレジスタ（MOSCCR）

アドレス SYSTEM.MOSCCR 4001 E032h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	MOSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MOSTP	メインクロック発振器停止	0：メインクロック発振器動作（注1） 1：メインクロック発振器停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. MOSTP を 0 にする前に、MOMCR レジスタを設定する必要があります。

MOSCCR レジスタは、メインクロック発振器を制御するレジスタです。

MOSTP ビット（メインクロック発振器停止）

メインクロック発振器を起動または停止させます。

MOSTP ビットを動作に設定することで、メインクロック発振器を起動させることができます。MOSTP ビット値を変更した場合、必ずそのビット値を読み出して、値が更新されていることを確認してから、次の命令を実行してください。

メインクロックを使用する場合は、MOSTP ビットを 0 にする前に、メインクロック発振器モードコントロールレジスタ（MOMCR）およびメインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）を設定する必要があります。MOSCCR.MOSTP ビット設定でメインクロックを動作させるように変更した場合、必ず OSCSF.MOSCSF ビットが 1 になっていることを確認してから、メインクロックを使用してください。

メインクロック発振器を動作させるように設定してから、発振が安定するまでに一定の時間を要します。また、メインクロックが停止した後も、発振が停止するまでに一定の時間を要します。

動作の開始および停止に関しては、以下の制限があります。

- メインクロック発振器の停止後､動作を再開させる前に OSCSF.MOSCSF ビットが 0 であることを確認すること
- メインクロック発振器を停止させる前に、メインクロック発振器が動作していること、および OSCSF.MOSCSF ビットが 1 であることを確認すること
- メインクロック発振器をシステムクロックとして選択しているかどうかにかかわらず、MCU をソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、OSCSF.MOSCSF ビットが 1 になっていることを確認した上で WFI 命令を実行すること
- メインクロック発振器を停止させるように設定した後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、OSCSF.MOSCSF ビットが 0 にクリアされていることを確認した上で WFI 命令を実行すること

以下の条件下で MOSTP ビットに 1 を書き込むことは禁止されています。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 011b（システムクロックソース = MOSC）
- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 101b（システムクロックソース = PLL）
- PLLCR.PLLSTP = 0（PLL 動作）

9.2.7 サブクロック発振器コントロールレジスタ（SOSCCR）

アドレス SYSTEM.SOSCCR 4001 E480h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	SOSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SOSTP	サブクロック発振器停止	0：サブクロック発振器動作（注1）（注2） 1：サブクロック発振器停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　SOSTP を 0 にする前に、SOMCR レジスタを設定する必要があります。
注 2.　VBATT 機能を使用しない場合、SOSC を動作させるように設定する前に、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを設定する必要があります。VBTCR1.BPWSWSTP ビットについての詳細は、「12. バッテリバックアップ機能」を参照してください。

SOSCCR レジスタは、サブクロック発振器を制御するレジスタです。

SOSTP ビット（サブクロック発振器停止）

サブクロック発振器を起動または停止させます。

SOSTP ビット値を変更した場合、必ずそのビット値を読み出して、値が更新されていることを確認してから、次の命令を実行してください。RTC など一部のモジュールに対するソースとしてサブクロックを使用する場合、SOSTP ビットを使用します。

サブクロック発振器を使用する場合は、SOSTP ビットを 0 にする前に、サブクロック発振器モードコントロールレジスタ（SOMCR）を設定してください。SOSTP ビットを 0 にした後、必ずサブクロック発振安定時間（tSUBOSCOWT）が経過してから、サブクロックを使用してください。SOSTP ビットでサブクロックを動作するように設定してから、一定の安定待機時間を要します。また、SOSTP ビットを停止に設定した後も、発振が停止するまでに一定の待機時間を要します。

動作の開始および停止に関しては、以下の制限があります。

- サブクロック発振器の停止後、動作を再開させるまでに SOSC で 5 サイクル以上の待ち時間が必要
- サブクロック発振器を停止させる場合、サブクロック発振器が安定していることを確認すること
- サブクロック発振器をシステムクロックとして選択しているかどうかにかかわらず、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、サブクロック発振器の発振が安定していることを確認した上で WFI 命令を実行すること
- サブクロック発振器を停止させた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、サブクロック発振器を停止させてから SOSC で 3 クロックサイクル以上待った後、WFI 命令を実行すること

以下の条件下で SOSTP ビットに 1 を書き込むことは禁止されています。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 100b（システムクロックソース = SOSC）

9.2.8 低速オンチップオシレータコントロールレジスタ（LOCOCR）

アドレス SYSTEM.LOCOCR 4001 E490h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	LCSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	LCSTP	LOCO停止	0：LOCOクロック動作（注1） 1：LOCOクロック停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. VBATT 機能を使用しない場合、LOCO の動作設定の前に、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを設定する必要があります。VBTCR1.BPWSWSTP については、「12. バッテリバックアップ機能」を参照してください。

LOCOCR レジスタは、LOCO を制御するレジスタです。

LCSTP ビット（LOCO 停止）

LOCO クロックを起動または停止させます。

LCSTP ビットを LOCO クロック開始に設定した後、必ず LOCO クロック発振安定待機時間（tLOCOWT）が経過してから LOCO クロックを使用してください。LOCO クロックを動作を開始するように設定してから、一定の安定待機時間を要します。また、停止に設定した後も、LOCO クロックが停止するまでに一定の時間を要します。

動作の開始および停止に関しては、以下の制限があります。

- LOCO クロックの停止後、動作を再開させるまでに LOCO で 5 クロックサイクル以上の間隔が必要
- LOCO クロックを停止させる前に、LOCO クロックの発振が安定していることを確認すること
- LOCO クロックをシステムクロックとして選択しているかどうかにかかわらず、MCU をソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、LOCO の発振が安定していることを確認した上で WFI 命令を実行すること
- LOCO クロックを停止させた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、LOCO で 3 サイクル以上待ってから WFI 命令を実行すること

以下の条件下で LOSTP ビットに 1 を書き込むことは禁止されています。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 010b（システムクロックソース = LOCO）

9.2.9 高速オンチップオシレータコントロールレジスタ（HOCOCR）

アドレス SYSTEM.HOCOCR 4001 E036h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	HCSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0/1（注1）

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	HCSTP	HOCO停止	0：HOCOクロック動作（注2）（注3） 1：HOCOクロック停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . HOCOCR.HCSTP = 0 および OSCSF.HOCOSF = 0（HOCO は安定待機時間カウント中）の状態にあるとき、OPCCR.OPCM[1:0] ビットへの書き込みは禁止されています。

注 . OPCCR.OPCMTSF = 1、SOPCCR.SOPCMTSF = 1（動作電力制御モードの遷移中）、または FLSTOP.CFLSTOPF = 1（フラッシュの遷移中）の状態にあるとき、HCSTP ビットへの書き込みは禁止されています。

注 1. OFS1.HOCOEN ビットが 0 のとき、HCSTP ビットのリセット後の値は 0 になります。OFS1.HOCOEN ビットが 1 のとき、HCSTP ビットのリセット後の値は 1 になります。

注 2. HOCO の動作周波数が 48MHz の場合、HOCO 動作時の VCC は 1.8V 以上（VCC ≧ 1.8V）である必要があります。
HOCO の動作周波数が 64MHz の場合、HOCO 動作時の VCC は 2.4V 以上（VCC ≧ 2.4V）である必要があります。

注 3. HOCO を使用する場合（HCSTP = 0）、OFS1.HOCOFRQ1 ビットを最適な値に設定する必要があります。Low-voltage モードの期間中は、HOCOCR.HCSTP は常に 0 でなければいけません。

HOCOCR レジスタは、HOCO を制御するレジスタです。

HCSTP ビット（HOCO 停止）

HOCO クロックを起動または停止させます。HOCO クロックを動作させるには、高速オンチップオシレータウェイトコントロールレジスタ（HOCOWTCR）も設定してください。

HCSTP ビットで HOCO が動作するように変更した場合、必ず OSCSF.HOCOSF ビットが 1 になっていることを確認してから、発振器を使用してください。OFS1.HOCOEN ビットが 0 になっている場合、OSCSF.HOCOSF ビットが 1 になっていることを確認してからクロックを使用してください。HOCO が動作するように設定してから、一定の安定待機時間を要します。また、HOCO クロックを停止に設定した後も、発振が停止するまでに一定の時間を要します。

動作の開始および停止に関しては、以下の制限があります。

- HOCO クロックの停止後､動作を再開させる前に OSCSF.HOCOSF ビットが 0 であることを確認すること
- HOCO クロックを停止させる前に､HOCO クロックが動作していること､および OSCSF.HOCOSF ビットが 1 であることを確認すること
- HOCO クロックをシステムクロックとして選択しているかどうかにかかわらず､HCSTP ビットで HOCO を動作設定にしてソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、OSCSF.HOCOSF ビットが 1 になっていることを確認した上で WFI 命令を実行すること
- HOCO クロックを停止させた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、OSCSF.HOCOSF ビットが 0 になっていることを確認した上で WFI 命令を実行すること

以下の条件下で HCSTP ビットに 1 を書き込むことは禁止されています。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 000b（システムクロックソース = HOCO）

9.2.10 中速オンチップオシレータコントロールレジスタ（MOCOCR）

アドレス SYSTEM.MOCOCR 4001 E038h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	MCSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MCSTP	MOCO停止	0：MOCOクロック動作 1：MOCOクロック停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

MOCOCR レジスタは、MOCO クロックを制御するレジスタです。

MCSTP ビット（MOCO 停止）

MOCO クロックを起動または停止させます。

MCSTP ビットを 0 にした後、必ず MOCO クロック発振安定時間（tMOCOWT）が経過してから、MOCO クロックを使用してください。MCSTP ビットを 0 にしてから、一定の安定待機時間を要します。また、MCSTP ビットを 1 にした後も、発振が停止するまでに一定の時間を要します。

発振器の開始および停止に関しては、以下の制限が適用されます。

- MOCO クロックの停止後、動作を再開させるまでに MOCO で 5 クロックサイクル以上の間隔が必要
- MOCO クロックを停止させる場合、MOCO の発振が安定していることを確認すること
- MOCO クロックをシステムクロックとして選択しているかどうかにかかわらず、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、MOCO の発振が安定していることを確認した上で WFI 命令を実行すること
- MOCO クロックを停止させた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、MOCO で 3 クロックサイクル以上待ってから WFI 命令を実行すること

以下の条件下で MCSTP ビットに 1 を書き込むことは禁止されています。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 001b（システムクロックソース = MOCO）

発振停止検出コントロールレジスタの発振停止検出機能有効ビット（OSTDCR.OSTDE）で発振停止検出を有効にしているとき、MCSTP ビットを 1（MOCO 停止）にすることは禁止されています。

MOCO クロックは他の発振器の待機時間の計測に使用されるため、MOCOCR.MCSTP ビットの設定値にかかわらず、他の発振器の待機時間が計測されているときは MOCO クロックが発振しています。MCSTP ビットが停止に設定されていても、意図せず MOCO クロックが供給される場合があります。

9.2.11 発振安定フラグレジスタ（OSCSF）

アドレス SYSTEM.OSCSF 4001 E03Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	PLLSF	—	MOSCSF	—	—	HOCOSF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0/1（注1）

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	HOCOSF	HOCOクロック発振安定フラグ	0：HOCOクロックは停止、または発振安定待ち中 1：HOCOクロックは安定、システムクロックとして使用可能	R
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b3	MOSCSF	メインクロック発振安定フラグ	0：メインクロック発振器は停止（MOSTP = 1）、または発振安定待ち中（注2） 1：メインクロック発振器は安定、システムクロックとして使用可能	R
b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b5	PLLSF	PLLクロック発振安定フラグ	0：PLLクロックは停止、または発振安定待ち中 1：PLLクロックは安定、システムクロックとして使用可能	R
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

注 1. リセット後の値は、OFS1.HOCOEN ビットで決まります。
OFS1.HOCOEN が 1 になっている場合、HOCOSF のリセット後の値は 0 です。
OFS1.HOCOEN が 0 になっている場合は、リセット解除直後に HOCOSF の値が 0 になり、HOCO 発振安定待機時間の経過後に HOCOSF の値が 1 になります。

注 2. 該当する発振器のウェイトコントロールレジスタに適切な値が設定されます。待機時間が不十分な場合、発振が安定する前に発振安定フラグが 1 になり、内部回路へクロック信号の供給が開始されます。

OSCSF レジスタは、各発振器の発振安定待ち回路内にあるカウンタの動作ステータスを示します。

これらのカウンタは、発振開始後、各発振器の出力クロックが内部回路に供給されるまでの待機時間を計測します。カウンタのオーバーフローは、対応する発振器から内部回路へクロックの供給が開始されたことを示します。

HOCOSF フラグ（HOCO クロック発振安定フラグ）

高速クロック発振器（HOCO）の待機時間を計測するカウンタの動作状態を示します。

OFS1.HOCOEN ビットが 0 になっている場合、OSCSF.HOCOSF ビットが 1 になっていることを確認してから、HOCO クロックを使用してください。

［1 になる条件］

- HOCO クロックの停止時に、HOCOCR.HCSTP ビットを 0 にした結果、HOCOWTCR.HSTS[2:0] ビットに設定された中速クロックのサイクルの経過後に、MCU 内部へ高速クロックの供給が開始されたとき

［0 になる条件］

- 高速クロック発振器の動作時に、HOCOCR.HCSTP ビットを 1 にした結果、高速クロック発振器が発振停止になったとき

MOSCSF フラグ（メインクロック発振安定フラグ）

メインクロック発振器の待機時間を計測するカウンタの動作状態を示します。

[1 になる条件]

- メインクロック発振器の停止時に、MOSCCR.MOSTP ビットを 0 にした結果、MOSCWTCR.MSTS[3:0] ビットに設定された中速クロックサイクルが経過し、MCU 内部へメインクロックの供給が開始されたとき

[0 になる条件]

- メインクロック発振器の動作時に、MOSCCR.MOSTP ビットを 1 にした結果、メインクロック発振器が発振停止になったとき

PLLSF フラグ（PLL クロック発振安定フラグ）

PLL の待機時間を計測するカウンタの動作状態を示します。

[1 になる条件]

- PLL の停止時に、PLLCR.PLLSTP ビットを 0 にした結果、中速クロックの 370 サイクルがカウントされて、MCU 内で PLL クロック供給が開始されたとき。ただし、PLLSTP ビットを 0 にしたときに PLL クロックソースの発振が安定していなければ、PLL クロックソースの発振が安定した後も、中速クロックサイクルのカウントが継続する

[0 になる条件]

- PLL の動作時に、PLLCR.PLLSTP ビットを 1 にした結果、PLL が発振停止になったとき

9.2.12 発振停止検出コントロールレジスタ（OSTDCR）

アドレス SYSTEM.OSTDCR 4001 E040h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	OSTDE	—	—	—	—	—	—	OSTDIE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OSTDIE	発振停止検出割り込み許可	0：発振停止検出割り込みを禁止（POEGへの通知なし） 1：発振停止検出割り込みを許可（POEGへの通知あり）	R/W
b6-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	OSTDE	発振停止検出機能有効	0：発振停止検出機能は無効 1：発振停止検出機能は有効	R/W

OSTDCR レジスタは、発振停止検出機能を制御するレジスタです。

OSTDIE ビット（発振停止検出割り込み許可）

発振停止検出機能割り込みを許可します。また本ビットは、発振停止検出を POEG に通知するかどうかを制御します。

発振停止検出ステータスレジスタの発振停止検出フラグ（OSTDSR.OSTDF）をクリアする必要がある場合、OSTDIE ビットを 0 にしてから OSTDF を 0 にしてください。OSTDIE ビットを 1 にする場合は、PCLKB で 2 サイクル以上待ってから行ってください。I/O レジスタの読み出しに要するサイクル数によっては、PCLKB の 2 サイクルを超える待ち時間が必要になる場合があります。

OSTDE ビット（発振停止検出機能有効）

発振停止検出機能を有効にします。

本ビットを 1（発振停止検出機能は有効）にすると、MOCO 停止ビット（MOCOCR.MCSTP）が 0 となり MOCO が起動します。発振停止検出機能が有効の間は、MOCO は停止できません。MOCOCR.MCSTP ビットへの 1 の書き込み（MOCO 停止）は無効です。

発振停止検出ステータスレジスタの発振停止検出フラグ（OSTDSR.OSTDF）が 1（メインクロック発振停止検出）のとき、OSTDE ビットへの 0 の書き込みは無効です。

ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に必ず OSTDE ビットを 0 にしてください。ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、最初に OSTDE ビットを 0 にしてから WFI 命令を実行してください。

発振停止検出機能を使用する場合、以下の制限があります。

- Low-speed モードでは、ICLK、FCLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、および PCLKD に対する 1 分周、2 分周、4 分周、8 分周の設定は禁止
- Low-voltage モードでは、ICLK、FCLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、および PCLKD に対する 1 分周と 2 分周の設定は禁止

9.2.13　発振停止検出ステータスレジスタ（OSTDSR）

アドレス　SYSTEM.OSTDSR 4001 E041h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	OSTDF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OSTDF	発振停止検出フラグ	0：メインクロック発振停止を未検出 1：メインクロック発振停止を検出	R(/W) （注1）
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　0 のみ書けます。

OSTDSR レジスタは、メインクロック発振器の発振停止の検出状態を示します。

OSTDF フラグ（発振停止検出フラグ）

メインクロックの状態を示します。本フラグが 1 のとき、メインクロックの発振停止が検出されたことを示します。この発振停止が検出された後、メインクロックの発振が再開しても OSTDF フラグは 0 になりません。OSTDF フラグは、1 を読み出した後に 0 を書き込むことで 0 になります。

OSTDF に 0 を書き込んでから、0 を読み出せるようになるまで、ICLK で 3 サイクル以上待つ必要があります。メインクロックの発振が停止しているとき、OSTDF フラグを 0 にすると、OSTDF フラグはいったん 0 になった後、再度 1 に戻ります。

以下の条件下では、OSTDSR.OSTDF は 0 にできません。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 011b（システムクロックソース = MOSC）

クロックソースをメインクロック発振器と PLL 以外に切り替えた後、OSTDF フラグを 0 にする必要があります。

［1 になる条件］

- OSTDCR.OSTDE が 1（発振停止検出機能は有効）の状態で、メインクロックの発振が停止したとき

［0 になる条件］

- SCKSCR.CKSEL[2:0] ビットが 011b（システムクロックが MOSC）でも 101b（システムクロックが PLL）でもない場合に、1 を読んだ後、0 を書いたとき

9.2.14　メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）

アドレス　SYSTEM.MOSCWTCR 4001 E0A2h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	MSTS[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MSTS[3:0]	メインクロック発振器待機時間設定	b3 b0 0 0 0 0 ：待機時間 = 2サイクル（0.25μs） 0 0 0 1 ：待機時間 = 1024サイクル（128μs） 0 0 1 0 ：待機時間 = 2048サイクル（256μs） 0 0 1 1 ：待機時間 = 4096サイクル（512μs） 0 1 0 0 ：待機時間 = 8192サイクル（1024μs） 0 1 0 1 ：待機時間 = 16384サイクル（2048μs） （リセット後の値） 0 1 1 0 ：待機時間 = 32768サイクル（4096μs） 0 1 1 1 ：待機時間 = 65536サイクル（8192μs） 1 0 0 0 ：待機時間 = 131072サイクル（16384μs） 1 0 0 1 ：待機時間 = 262144サイクル（32768μs） 上記以外は設定しないでください。 待機時間は”MOCO = 8MHz（標準は0.125μs）”として計算されます。	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

MSTS[3:0] ビット（メインクロック発振器 待機時間設定）

メインクロック発振器の発振安定待機時間を設定します。

発振器メーカが推奨する安定時間以上の時間をメインクロック発振安定時間に設定してください。メインクロックが外部から入力される場合、発振安定時間は必要ないので 0000b に設定してください。

MSTS[3:0] ビットに設定した待機時間は、MOCO クロックでカウントされます。MOCO は、必要であれば、MOCOCR.MCSTP ビットの値にかかわらず、自動的に発振を開始します。設定した待機時間が経過すると、MCU 内部へメインクロックの供給が開始され、OSCSF.MOSCSF フラグは 1 になります。設定した待機時間が短いと、クロックの発振が安定になる前に、メインクロックの供給が開始されます。

MOSCWTCR レジスタの書き換えは、MOSCCR.MOSTP ビットが 1 で、かつ OSCSF.MOSCSF フラグが 0 の場合にのみ行ってください。それ以外では、このレジスタを書き換えないでください。

9.2.15 高速オンチップオシレータウェイトコントロールレジスタ（HOCOWTCR）

アドレス SYSTEM.HOCOWTCR 4001 E0A5h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	HSTS[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	HSTS[2:0]	HOCO待機時間設定	b2 b0 1 0 1： • 待機時間 = 245サイクル（29.13μs） HOCOの動作周波数が24MHzまたは32MHzで、かつ動作電力制御モードが低電圧モード以外の場合 • 待機時間 = 287サイクル（35.875μs）（リセット後の値） HOCOの動作周波数が48MHzで、かつ動作電力制御モードが低電圧モード以外の場合 • 待機時間 = 679サイクル（84.88μs）（リセット後の値） 動作電力制御モードが低電圧モードの場合 1 1 0： • 待機時間 = 541サイクル（67.63μs） HOCOの動作周波数が64MHzの場合 上記以外は設定しないでください。 待機時間は”MOCO = 8MHz（標準は0.125μs）”として計算されます。	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

HOCOWTCR レジスタは、高速クロック発振器の出力を内部回路に供給するまでの待機時間を制御するレジスタです。HOCOCR.HCSTP ビットが 1 の場合、または OSCSF.HOCOSF フラグが 1 の場合にのみ、HOCOWTCR に値を書き込むことができます。それ以外では、HOCOWTCR に書き込まないでください。

HSTS[2:0] ビット（HOCO 待機時間設定）

発振安定待ち回路は、待機時間を計測し、MCU 内部へのクロック供給を制御します。高速クロック発振器が動作を開始すると、発振安定待ち回路は、HOCOWTCR レジスタに設定された中速クロックサイクル数のカウントを開始します。設定したサイクル数のカウントが完了するまでの間にわたって、MCU クロック供給は行われません。カウント完了後、MCU のクロック信号の供給が開始され、OSCSF.HOCOSF フラグが 1 になります。

MOCOCR.MCSTP ビット設定にかかわらず、発振安定待機回路による中速クロックサイクルのカウントは続きます。待機時間の計測時には、ハードウェアで自動的に中速発振器の動作／停止が制御されます。

9.2.16　メインクロック発振器モードコントロールレジスタ（MOMCR）

アドレス　SYSTEM.MOMCR 4001 E413h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	MOSEL	—	—	MODRV1	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	MODRV1	メインクロック発振器駆動能力1切り替え	0：10MHz～20MHz 1：1MHz～10MHz	R/W
b5-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	MOSEL	メインクロック発振器切り替え	0：発振子 1：外部クロック入力	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注．　EXTAL/XTAL 端子もポートとして使用されます。初期設定状態では、この端子がポートとして設定されています。
注．　本レジスタを変更する前に、MOSTP ビットを 1（MOSC 停止）にする必要があります。

MODRV1 ビット（メインクロック発振器駆動能力 1 切り替え）

メインクロック発振器の駆動能力を切り替えます。

MOSEL ビット（メインクロック発振器切り替え）

メインクロック発振器の発振源を切り替えます。

9.2.17　サブクロック発振器モードコントロールレジスタ（SOMCR）

アドレス　SYSTEM.SOMCR 4001 E481h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	SODRV[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	SODRV[1:0]	サブクロック発振器駆動能力切り替え	b1 b0 0 0：通常モード 0 1：低消費電力モード1 1 0：低消費電力モード2 1 1：低消費電力モード3	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

このレジスタの変更は、SOSCCR.SOSTP が 1（SOSC 停止）のときに行う必要があります。

SODRV[1:0] ビット（サブクロック発振器駆動能力切り替え）

サブクロック発振器の駆動能力を切り替えます。

9.2.18　セグメント LCD ソースクロックコントロールレジスタ（SLCDSCKCR）

アドレス　SYSTEM.SLCDSCKCR 4001 E050h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	LCDSCKEN	—	—	—	—	LCDSCKSEL[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	LCDSCKSEL[2:0]	LCD ソースクロック（LCDSRCCLK）選択	b2 b0 0 0 0: LOCO 0 0 1: SOSC 0 1 0: MOSC 1 0 0: HOCO 上記以外は設定しないでください。	R/W
b6-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	LCDSCKEN	LCD ソースクロックアウト許可	0：LCD ソースクロックアウトを禁止 1：LCD ソースクロックアウトを許可	R/W

LCDSCKEN ビットと LCDSCKSEL[2:0] ビットを同時に設定することはしないでください。

LCDSCKSEL[2:0] ビット（LCD ソースクロック（LCDSRCCLK）選択）

LOCO、SOSC、MOSC、または HOCO クロックを LCD クロックソースとして設定します。LCD ソースクロックを変更する場合、LCDSCKEN ビットを 0 にしてください。

これらのビットを変更する際は、以下の手順に従ってください。

1. LCDSCKEN を 0（LCD ソースクロックアウトを禁止）にする。
2. 変更する前に、LCD ソースクロックの 3 サイクル分と、ICLK の 2 サイクル分待つ。
3. LCDSCKSEL[2:0] ビットに変更値を書く。
4. LCDSCKSEL[2:0] ビットを読み出して、変更されたことを確認する。

LCDSCKEN ビット（LCD ソースクロックアウト許可）

LCD モジュールへの LCD ソースクロック出力を許可します。

本ビットを 1 にすると、選択したクロックが出力されます。本ビットを変更する場合は、LCDSCLKSEL[2:0] ビットで選択した LCD ソースクロックが安定していることを確認してください。変更後にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、以下の手順に従ってください。

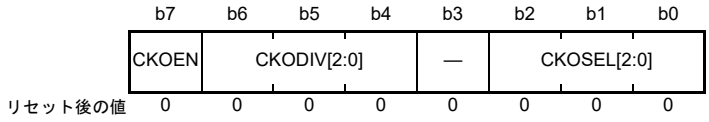
1. 本ビットを変更する。
2. LCDSCKSEL[2:0] ビットで選択したソースクロックの 2 サイクル分以上待つ。
3. WFI 命令を実行する。

本ビットを 0 にした後、LCDSCKSEL[2:0] ビットで選択したソースクロックを停止する場合は、以下の手順に従ってください。

1. 本ビットを 0（LCD ソースクロック出力を禁止）にする。
2. LCDSCKSEL[2:0] ビットで選択したソースクロックの 2 サイクル分以上待つ。
3. LCDSCKSEL[2:0] ビットで選択したソースクロックを停止する。

9.2.19　クロックアウトコントロールレジスタ（CKOCR）

アドレス　SYSTEM.CKOCR 4001 E03Eh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CKOSEL[2:0]	クロックアウトソース選択	b2 b0 0 0 0 : HOCO 0 0 1 : MOCO 0 1 0 : LOCO 0 1 1 : MOSC 1 0 0 : SOSC 上記以外は設定しないでください。	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	CKODIV[2:0]	クロックアウト入力分周比選択	b6 b4 0 0 0 : 1分周 0 0 1 : 2分周 0 1 0 : 4分周 0 1 1 : 8分周 1 0 0 : 16分周 1 0 1 : 32分周 1 1 0 : 64分周 1 1 1 : 128分周	R/W
b7	CKOEN	クロックアウト許可	0：クロックアウトを禁止 1：クロックアウトを許可	R/W

CKOSEL[2:0] ビット（クロックアウトソース選択）

HOCO、MOCO、LOCO、MOSC、または SOSC クロックを、CLKOUT 端子から出力するソースクロックとして選択するために設定します。

CLKOUT ソースクロックを変更する場合、CKOEN ビットを 0 にしてください。

CKODIV[2:0] ビット（クロックアウト入力分周比選択）

クロック分周比を選択するために設定します。

分周比を変更する場合、CKOEN ビットを 0 にしてください。出力クロック周波数の分周比は、CLKOUT 端子出力周波数の特性を超えない値に設定する必要があります。CLKOUT 端子の特性の詳細については、「48.　電気的特性」を参照してください。

CKOEN ビット（クロックアウト許可）

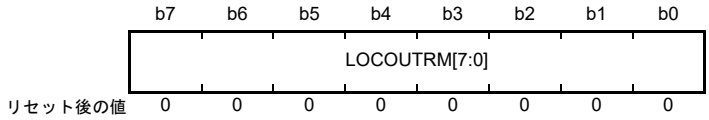
CLKOUT 端子からの出力を許可します。

本ビットを 1 にすると、選択したクロックが出力されます。本ビットを 0 にすると、Low が出力されます。本ビットを変更する場合は、CKOSEL[3:0] ビットで選択したクロックソースが安定していることを確認してください。安定していないと、出力にグリッチを生じる恐れがあります。

ソフトウェアスタンバイモードに遷移し、選択したクロックソースをこのモードで停止させる場合、モード遷移前に本ビットをクリアしてください。

9.2.20 LOCO ユーザトリミングコントロールレジスタ（LOCOUTCR）

アドレス SYSTEM.LOCOUTCR 4001 E492h



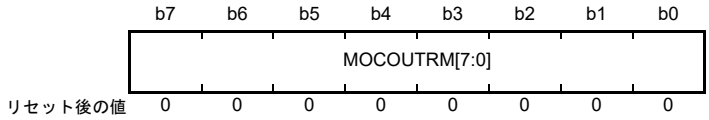
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	LOCOUTRM[7:0]	LOCOユーザトリミング	b7 b0 1 0 0 0 0 0 0 0 : -128 1 0 0 0 0 0 0 1 : -127 1 0 0 0 0 0 1 0 : -126 : 1 1 1 1 1 1 1 1 : -1 0 0 0 0 0 0 0 0 : センターコード 0 0 0 0 0 0 0 1 : +1 : 0 1 1 1 1 1 0 1 : +125 0 1 1 1 1 1 1 0 : +126 0 1 1 1 1 1 1 1 : +127 これらのビットは、元のLOCO トリミングビットに追加されます。	R/W

LOCO 周波数が仕様外となるような値に LOCOUTCR を設定した場合、MCU 動作は保証されません。

LOCOUTCR を変更した場合の周波数安定時間は、MCU 動作開始時の周波数安定時間に相当します。LOCO クロック周波数と他の発振周波数の比率が整数の場合、LOCOUTCR 値の変更は禁止されています。

9.2.21 MOCO ユーザトリミングコントロールレジスタ（MOCOUTCR）

アドレス SYSTEM.MOCOUTCR 4001 E061h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	MOCOUTRM[7:0]	MOCOユーザトリミング	b7 b0 1 0 0 0 0 0 0 0 : -128 1 0 0 0 0 0 0 1 : -127 1 0 0 0 0 0 1 0 : -126 : 1 1 1 1 1 1 1 1 : -1 0 0 0 0 0 0 0 0 : センターコード 0 0 0 0 0 0 0 1 : +1 : 0 1 1 1 1 1 0 1 : +125 0 1 1 1 1 1 1 0 : +126 0 1 1 1 1 1 1 1 : +127 これらのビットは、元のMOCOトリミングビットに追加されます。	R/W

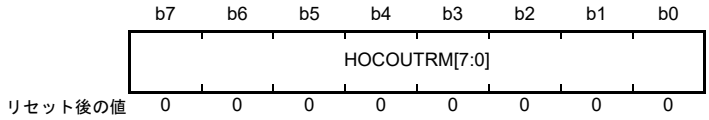
MOCO 周波数が仕様外となるような値に MOCOUTCR を設定した場合、MCU 動作は保証されません。

MOCOUTCR を変更した場合の周波数安定時間は、MCU 動作開始時の周波数安定時間に相当します。

MOCO 周波数と他の発振周波数の比率が整数の場合、MOCOUTCR 値の変更は禁止されています。

9.2.22 HOCO ユーザトリミングコントロールレジスタ（HOCOUTCR）

アドレス SYSTEM.HOCOUTCR 4001 E062h

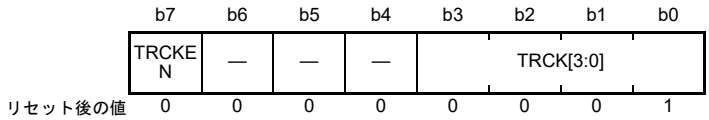


ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	HOCOUTRM[7:0]	HOCOユーザトリミング	b7 b0 1 0 0 0 0 0 0 0 : -128 1 0 0 0 0 0 0 1 : -127 1 0 0 0 0 0 1 0 : -126 : 1 1 1 1 1 1 1 1 : -1 0 0 0 0 0 0 0 0 : センターコード 0 0 0 0 0 0 0 1 : +1 : 0 1 1 1 1 1 0 1 : +125 0 1 1 1 1 1 1 0 : +126 0 1 1 1 1 1 1 1 : +127 これらのビットは、元のHOCOトリミングビットに追加されます。	R/W

HOCO 周波数が仕様外となるような値に HOCOUTCR を設定した場合、MCU 動作は保証されません。HOCOUTCR を変更した場合の周波数安定時間は、MCU 動作開始時の周波数が安定するまでの時間に相当します。USBCKCR.USBCLKSEL を 1 にした場合、00h 以外の値を HOCOUTCR に書き込むことは禁止です。

9.2.23 トレースクロックコントロールレジスタ（TRCKCR）

アドレス SYSTEM.TRCKCR 4001 E03Fh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	TRCK[3:0]	トレースクロック動作周波数選択	b3 b0 0 0 0 0 ：1分周 0 0 0 1 ：2分周（リセット後の値） 0 0 1 0 ：4分周 上記以外は設定しないでください。	R/W
b6-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	TRCKEN	トレースクロック動作許可	0：動作禁止 1：動作許可	R/W

注． 本レジスタは、VBATT_POR 以外のすべてのリセットで初期化することが可能です。

トレースクロックコントロールレジスタは、トレースクロックの切り替えを制御するレジスタです。TRCLK 周波数を変更する前に TRCKEN ビットを 0 にしてください。

9.2.24 USB クロックコントロールレジスタ（USBCKCR）

アドレス SYSTEM.USBCKCR 4001 E0D0h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	USBCLKSEL
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	USBCLKSEL	USBクロックソース選択	0：PLL（リセット後の値） 1：HOCO	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

USBCLKSEL ビット（USB クロックソース選択）

USBCLKSEL ビットは USB クロック（UCLK）のソースを選択します。

- USBCKCR レジスタの書き換えは、SYSCFG.SCKE ビットが 0 の状態で行ってください
- USBCKCR.USBCLKSEL ビットは、USBFS をデバイスコントローラとして使用しているときにのみ 1 にできます。
  ホストコントローラを使用するには、USBCKSR.USBCLKSEL ビットを 0 にしてください
- USBCKCR.USBCLKSEL ビットが 1 の場合は、ユーザトリミング機能は使用できません。HOCO ユーザトリミング機能を使用する場合は、HOCOUTCR.HOCOUTRM[7:0] ビットを 00h にしてください

9.3 メインクロック発振器

メインクロック発振器にクロック信号を供給するには、下記のいずれかの方法を使用します。

- 発振器を接続
- 外部クロック信号の入力を接続

9.3.1 水晶振動子を接続する方法

水晶振動子の接続例を図 9.4 に示します。

必要に応じてダンピング抵抗（Rd）を挿入することが可能です。この抵抗値は、振動子と発振駆動能力によって異なるので、振動子メーカの推奨する値を使用してください。また、メーカが外部帰還抵抗（Rf）の使用を推奨している場合は、その指示に従って EXTAL と XTAL の間に Rf を挿入してください。

振動子を接続してクロックを供給する場合、その振動子の周波数は、表 9.1 に記載されているように、メインクロック発振器の発振子周波数の範囲内としてください。

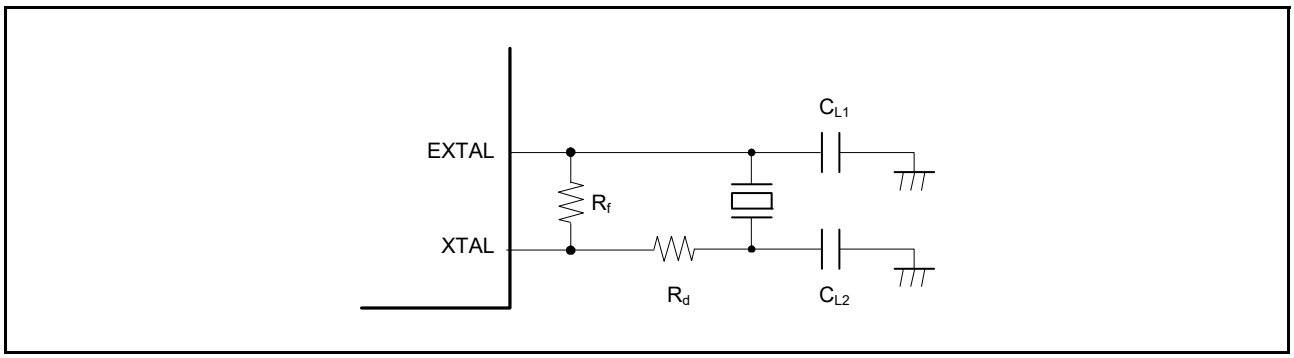


図 9.4 水晶振動子の接続例

9.3.2 外部クロックを入力する方法

外部クロック入力の接続例を図 9.5 に示します。外部クロックで発振器を動作させるには、MOMCR.MOSEL ビットを 1 にしてください。XTAL 端子はハイインピーダンスになります。

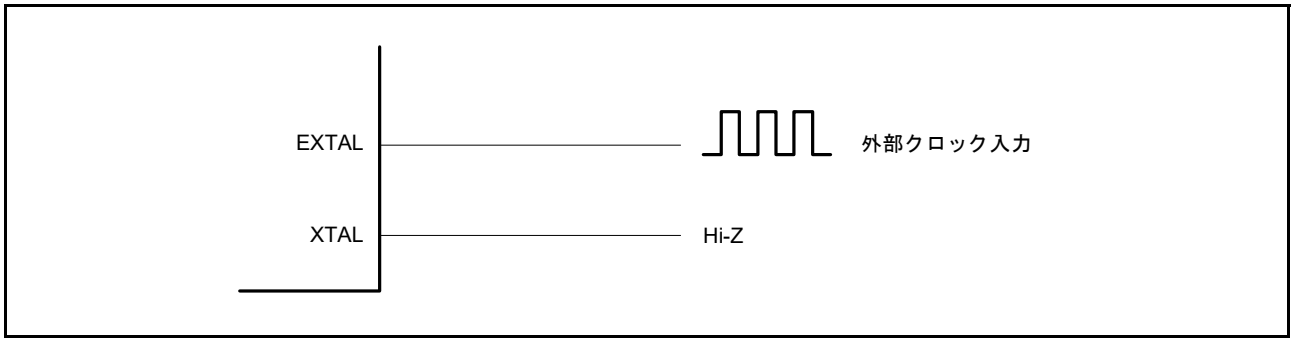


図 9.5 外部クロックの等価回路

9.3.3 外部クロック入力に関する注意事項

外部クロック入力周波数の変更は、メインクロック発振器が動作を停止しているときのみ可能です。メインクロック発振器の停止ビット（MOSCCR.MOSTP）が 0 の場合、外部クロック入力周波数を変更しないでください。

9.4 サブクロック発振器

サブクロック発振器へクロックを供給する唯一の方法は、水晶振動子を接続することです。

9.4.1 32.768kHz 水晶振動子を接続する方法

サブクロック発振器へクロックを供給するには、図 9.6 に示すように 32.768kHz の水晶振動子を接続します。

必要に応じてダンピング抵抗（Rd）を挿入することが可能です。この抵抗値は、振動子と発振駆動能力によって異なるので、振動子メーカの推奨する値を使用してください。振動子メーカが外部帰還抵抗（Rf）の使用を推奨している場合は、その指示に従って XCIN と XCOUT の間に Rf を挿入してください。振動子を接続してクロックを供給する場合、その振動子の周波数は、表 9.1 に記載されているように、サブクロック発振器の発振子周波数の範囲内としてください。

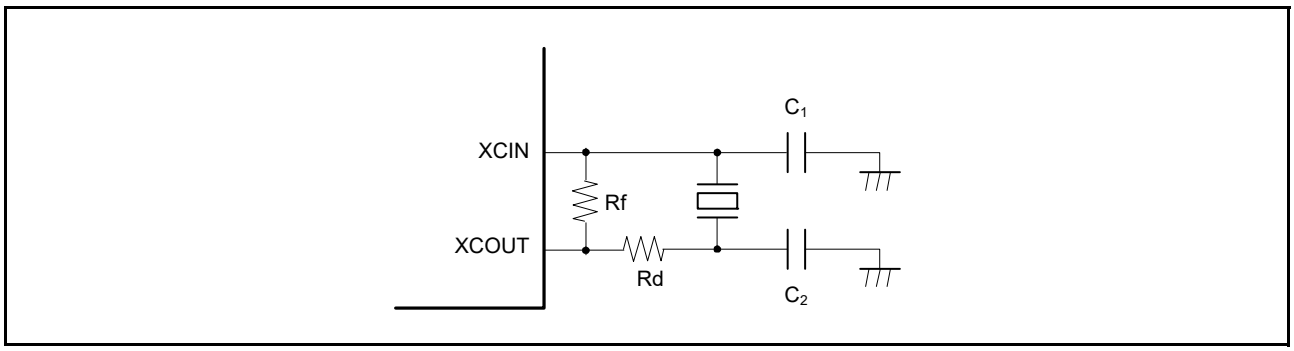


図 9.6 32.768kHz 水晶振動子の接続例

9.5 Bluetooth 専用クロック発振器

Bluetooth には、32MHz クロック発振子の接続が必要となります。

9.5.1 発振子を接続する方法

発振子を接続する場合の接続例を図 9.7 に示します。

必要に応じてダンピング抵抗（Rd）を挿入してください。抵抗値は発振子、発振駆動能力によって異なりますので発振子メーカの推奨する値に設定してください。また、発振子メーカから外部に帰還抵抗（Rf）を追加するよう指示があった場合は、その指示に従って XTAL1_RF、XTAL2_RF 間に Rf を挿入してください。

発振回路の制御は、ルネサスエレクトロニクスが提供する Bluetooth ミドルウェアによって行います。また、同ミドルウェアから内蔵可変コンデンサ CL1、CL2 の値を変更し発振周波数の調整を行う事ができます。Bluetooth 専用クロックの発振周波数の調整は、アプリケーションノート「Bluetooth 専用クロック周波数の調整手順」（R01AN4887）で説明していますので、最新版をルネサスエレクトロニクスホームページから入手して参照ください。

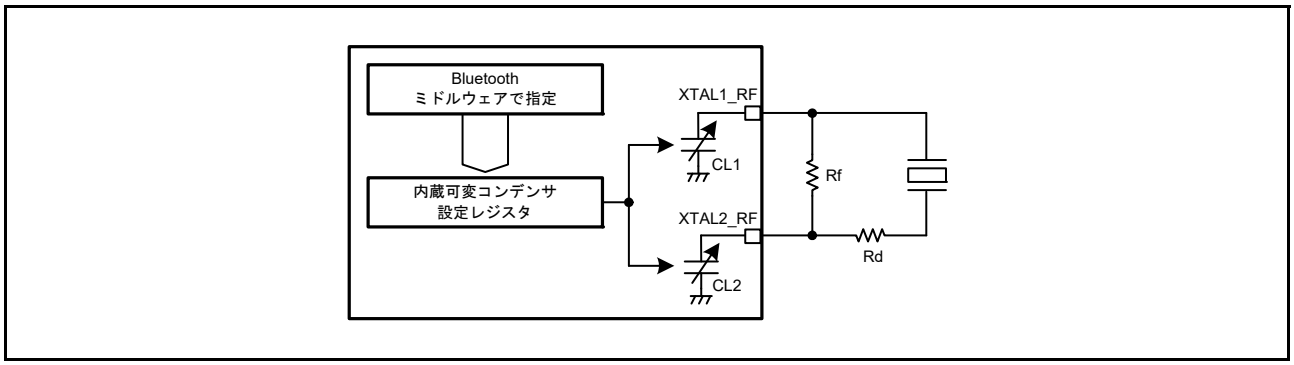


図 9.7 32MHz 水晶振動子の接続例

9.5.2 Bluetooth 専用クロック出力端子の接続方法

Bluetooth ミドルウェアで Bluetooth 専用クロック出力を設定し、かつ BLE が RF パワーダウンモードから待機モードに遷移すると、Bluetooth 専用クロックの分周クロックを CLKOUT_RF 端子から出力します。この後、RF パワーダウンモードに遷移すると、Bluetooth 専用クロックの出力は停止します。また Bluetooth 専用クロックの分周比は Bluetooth ミドルウェアで指定します。

CLKOUT_RF 端子と EXTAL 端子を基板上で外部接続することで、Bluetooth 専用クロックの出力をメインクロック発振器の外部クロックの入力として使用できます。図 9.8 に Bluetooth 専用クロックの出力をメインクロック発振器の外部クロックの入力として使用する場合の構成例を示します。

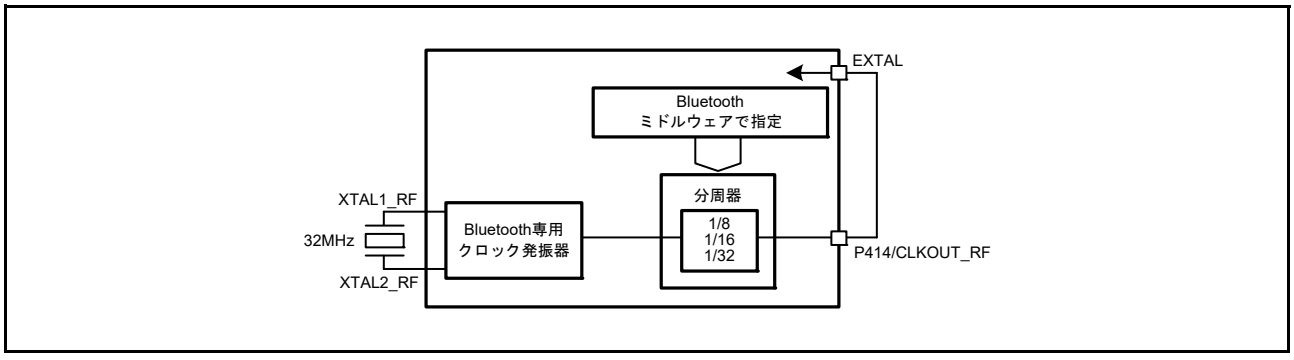


図 9.8 Bluetooth 専用クロック出力端子の接続例

9.6 発振停止検出機能

9.6.1 発振停止検出と検出後の動作

発振停止検出機能は、メインクロック発振器停止の検出に使用されます。

発振停止が検出されると、システムクロックは以下のように切り替わります。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 011b（システムクロックソース = MOSC）で発振停止が検出された場合、システムクロックソースは MOCO クロックに切り替わります
- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 101b（システムクロックソース = PLL）で発振停止が検出されると、PLL クロックはシステムクロックソースのままとなります。周波数はフリーラン発振周波数となり、SCKSCR.CKSEL[2:0] の設定は変わりません

発振停止が検出されたとき、発振停止検出割り込み要求を発生させることができます。さらに、検出時の汎用 PWM タイマ（GPT）出力をハイインピーダンスにすることが可能です。

メインクロック発振器の異常などによって、入力クロックが一定期間 0 または 1 のままとなった場合、メインクロック発振停止が検出されます（「48. 電気的特性」を参照してください）。

メインクロックと MOCO クロックの切り替え、または PLL クロックと PLL フリーランクロックの切り替えは、発振停止検出フラグ（OSTDSR.OSTDF）によって制御されます。

OSTDF は切り替えたクロックを以下のように制御します。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 011b（システムクロックソース = MOSC）の場合：
  OSTDF が 0 から 1 になると、クロックソースは MOCO クロックに切り替わる
  OSTDF が 1 から 0 になると、クロックソースは MOSC クロックに戻る
- SCKSCR.CKSEL[2:0] = 101b（システムクロックソース = PLL）の場合：
  OSTDF が 0 から 1 になると、クロックソースは PLL フリーラン発振クロックに切り替わる
  OSTDF が 1 から 0 になると、クロックソースは PLL に戻る

発振停止検出後にクロックソースをメインクロックあるいは PLL クロックに戻したい場合は、いったん CKSEL[2:0] ビットの設定をメインクロックまたは PLL クロック以外に変更し、OSTDF フラグを 0 にしてください。さらに、OSTDF フラグが 1 になっていないことを確認した後、所定の発振安定時間が経過してから、CKSEL[2:0] ビットの設定をメインクロックまたは PLL クロックに変更してください。

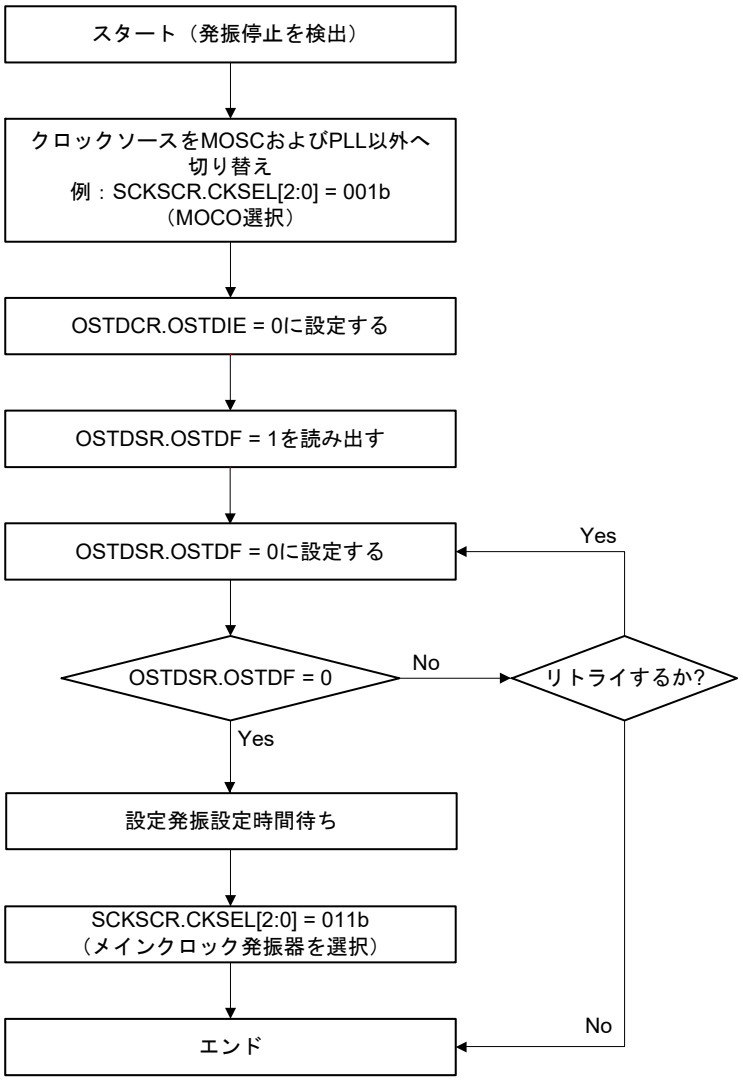
リセット解除後、メインクロック発振器は停止して、発振停止検出機能は無効になります。発振停止検出機能を有効にするには、メインクロック発振器を動作させた後、所定の発振安定時間が経過してから、発振停止検出機能有効ビット（OSTDCR.OSTDE）に 1 を書き込んでください。

発振停止検出機能は、外部要因によってメインクロックが停止したことを検出します。そのため、ソフトウェアでメインクロック発振器を停止させる場合や、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、あらかじめ発振停止検出機能を無効にする必要があります。

発振停止検出機能は、以下のクロックを MOCO クロック（システムクロックが MOSC の場合）に切り替えます。

- CLKOUT 以外の MOSC または PLL を選択できるすべてのクロック
- MOCO 動作中（システムクロックが MOSC の場合）または PLL フリーラン動作中（システムクロックが PLL の場合）のシステムクロック（ICLK）周波数は、MOCO 発振周波数と、システムクロック選択ビット（SCKDIVCR.ICK[2:0]）で設定された分周比に指定される

発振停止検出後にCKSEL[2:0] = 011b（メインクロック発振器を選択）
として復帰する場合の例



注 . 発振停止状態から復帰する際は、発振を再開できるように、メインクロック発振回路の停止要因をシステムから取り除く必要があります。

図 9.9 発振停止検出時の復帰フロー

9.6.2 発振停止検出割り込み

発振停止検出フラグ（OSTDSR.OSTDF）が 1 で、かつ発振停止検出コントロールレジスタの発振停止検出割り込み許可ビット（OSTDCR.OSTDIE）が 1（許可）のとき、発振停止検出割り込み（MOSC_STOP）が発生します。このとき GPT 用ポートアウトプットイネーブル（POEG）に対して、メインクロック発振器の停止が通知されます。POEG はこの通知を受けて、POEG Group n 設定レジスタの発振停止検出フラグ（POEGGrn.OSTPF）を 1 にします（n = A, B）。

この POEGGn.OSTPF フラグに対しては、発振停止を検出後、PCLKB で 10 サイクル以上経過するまで書き込みできません。OSTDSR.OSTDF フラグのクリアは、発振停止検出コントロールレジスタの発振停止検出割り込み許可ビット（OSTDCR.OSTDIE）を 0 にした後に行ってください。OSTDCR.OSTDIE ビットを再度 1 にする場合は、PCLKB で 2 サイクルクロック以上待ってから行ってください。I/O レジスタの読み出しに要するサイクル数によっては、これ以上の PCLKB 待ち時間が必要になる場合があります。

発振停止検出割り込みはノンマスカブル割り込みです。リセット解除後の初期状態ではノンマスカブル割り込みは禁止されているため、発振停止検出割り込みを使用する前にソフトウェアでノンマスカブル割り込みを許可してください。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

9.7 PLL 回路

PLL 回路は、発振器からの周波数を逓倍する機能を持っています。

9.8 内部クロック

内部クロック用のクロックソースには以下のものがあります。

- メインクロック発振器
- サブクロック発振器
- HOCO クロック
- MOCO クロック
- LOCO クロック
- PLL クロック
- IWDT 専用クロック
- JTAG 用外部クロック

これらのソースから、以下の内部クロックが生成されます。

- CPU、DMAC、DTC、フラッシュメモリ、および SRAM の動作クロック — システムクロック（ICLK）
- 周辺モジュールの動作クロック — PCLKA、PCLKB、PCLKC、および PCLKD
- フラッシュインタフェースの動作クロック — FCLK
- USBFS の動作クロック — UCLK
- CAN の動作クロック — CANMCLK
- CAC の動作クロック — CACCLK
- RTC LOCO クロックの動作クロック — RTCLCLK
- RTC サブクロックの動作クロック — RTCSCLK
- IWDT の動作クロック — IWDTCLK
- AGT LOCO クロックの動作クロック — AGTLCLK
- AGT サブクロックの動作クロック — AGTSCLK
- SysTick タイマの動作クロック — SYSTICCLK
- SLCDC のソースクロック — LCDSRCCLK
- 外部端子出力のクロック — CLKOUT
- JTAG の動作クロック — JTAGTCK
- BLE の動作クロック — Bluetooth 専用クロック (BLECLK)、および Bluetooth 専用低速クロック（BLELOCO）

内部クロックの周波数設定に使用するレジスタの詳細については、9.8.1 システムクロック（ICLK）～ 9.8.13 JTAG クロック（JTAGTCK）を参照してください。

各ビットを書き換えると、変更後の周波数で動作します。

9.8.1 システムクロック（ICLK）

システムクロック（ICLK）は、CPU、DMAC、DTC、フラッシュメモリ、および SRAM の動作クロックです。

ICLK の周波数は、SCKDIVCR.ICK[2:0] ビット、SCKSCR.CKSEL[2:0] ビット、PLLCCR2.PLLMUL[4:0] ビット、PLLCCR2. PLODIV[1:0] ビット、および OFS1.HOCOFRQ1[2:0] ビットで設定します。

ICLK のクロックソースを切り替えると、クロックソース遷移期間中に ICLK のクロックサイクルの期間が長くなります。図 9.10 および図 9.11 を参照してください。

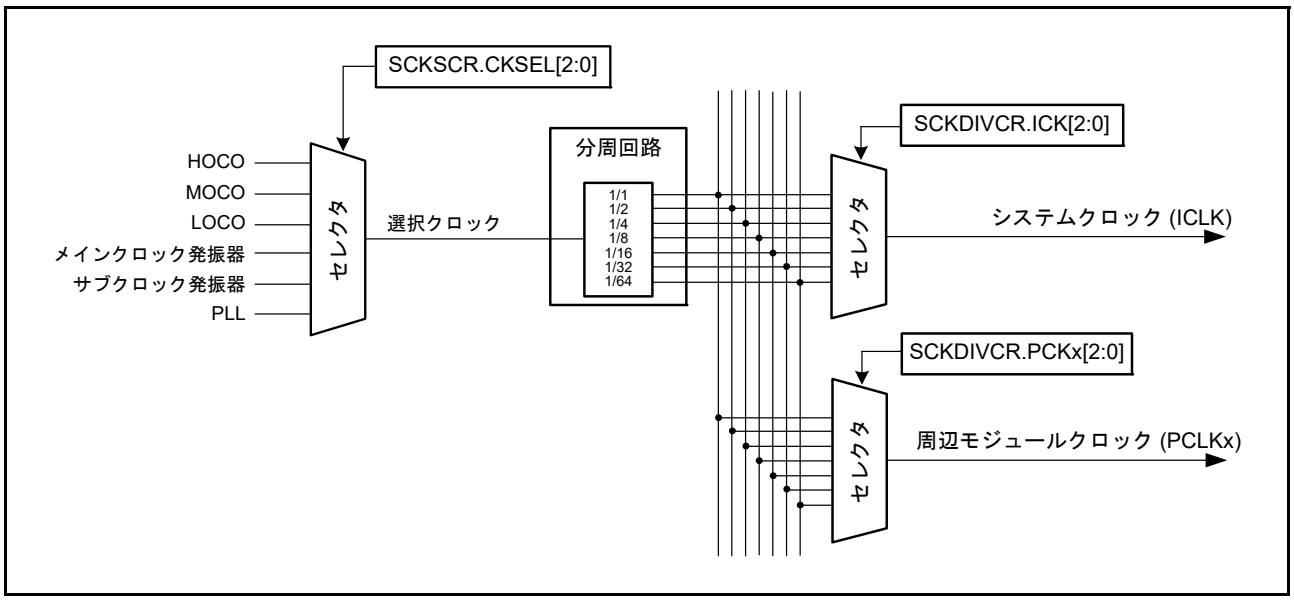


図 9.10 クロックソース選択ブロック図

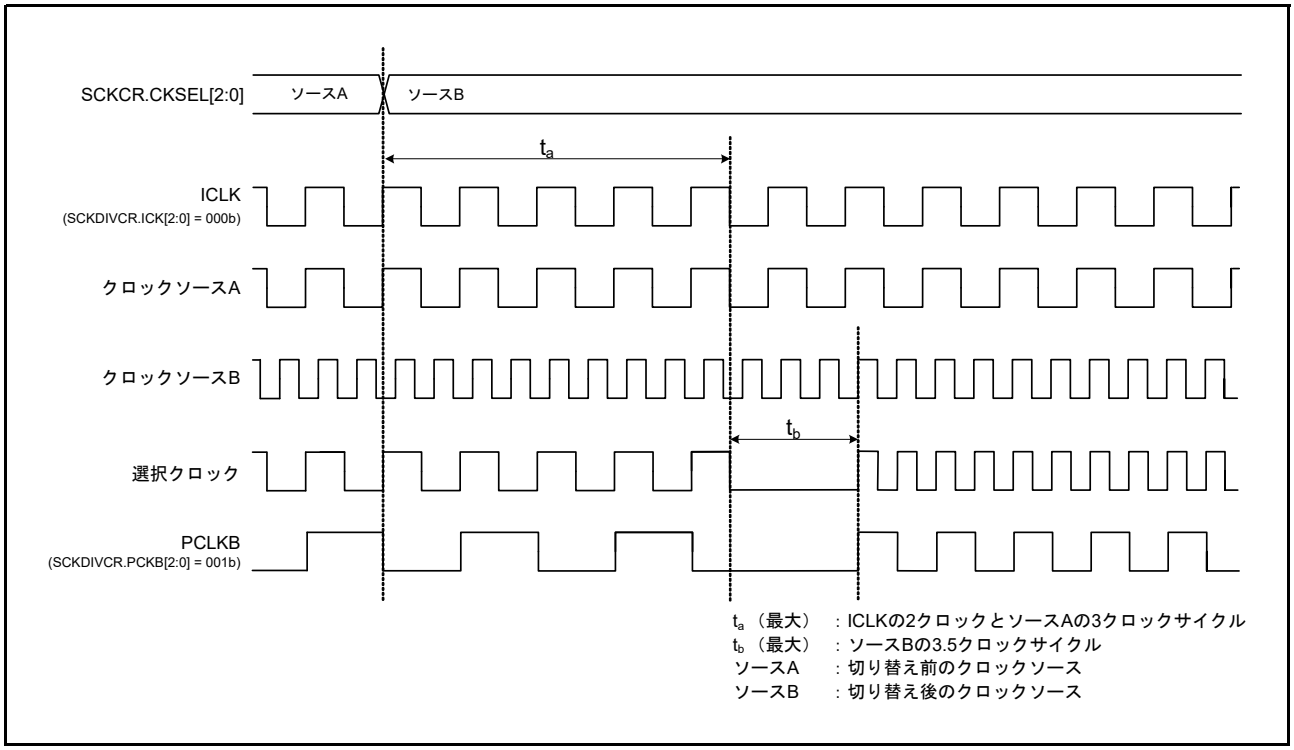


図 9.11 クロックソース切り替えタイミング図

9.8.2 周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD）

周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB、PCLKC、および PCLKD）は、周辺モジュールの動作クロックです。

各クロックの周波数は、下記ビットで設定します。

- SCKDIVCR.PCKA[2:0] ビット、SCKDIVCR.PCKB[2:0] ビット、SCKDIVCR.PCKC[2:0] ビット、および SCKDIVCR.PCKD[2:0] ビット
- SCKSCR.CKSEL[2:0] ビット
- PLLCCR2.PLLMUL[4:0] ビットおよび PLLCCR2.PLODIV[1:0] ビット
- OFS1.HOCOFRQ1[2:0] ビット

周辺モジュールクロックのクロックソースを切り替えると、クロックソースの遷移期間中に周辺モジュールクロックサイクルの期間が長くなります。図 9.10 および図 9.11 を参照してください。

9.8.3 フラッシュインタフェースクロック（FCLK）

フラッシュインタフェースクロック（FCLK）は、フラッシュメモリインタフェースの動作クロックです。FCLK はデータフラッシュからの読み出しに加え、コードフラッシュとデータフラッシュのプログラミングおよびイレースに使用されます。

FCLK の周波数は、下記ビットで設定します。

- SCKDIVCR.FCK[2:0] ビット
- SCKSCR.CKSEL[2:0] ビット
- PLLCCR2.PLLMUL[4:0] ビットおよび PLLCCR2.PLODIV[1:0] ビット
- OFS1.HOCOFRQ1[2:0] ビット

9.8.4 USB クロック（UCLK）

USB クロック（UCLK）は、USBFS モジュールの動作クロックです。USBFS モジュールには 48MHz クロックを供給する必要があります。USBFS モジュールを使用する場合は、UCLK クロックを 48MHz に設定してください。

UCLK の周波数は、下記ビットで設定します。

- SCKSCR.CKSEL[2:0] ビット
- PLLCCR2.PLLMUL[4:0] ビットおよび PLLCCR2.PLODIV[1:0] ビット
- OFS1.HOCOFRQ1[2:0] ビット

9.8.5 CAN クロック（CANMCLK）

CAN クロック（CANMCLK）は、CAN モジュールの動作クロックです。CANMCLK は、メインクロック発振器で生成されます。

9.8.6 CAC クロック（CACCLK）

CAC クロック（CACCLK）は、CAC の動作クロックです。

CACCLK は下記の発振器で生成されます。

- メインクロック発振器
- サブクロック発振器
- 高速クロック発振器
- 中速クロック発振器
- 低速オンチップオシレータ
- IWDT 専用オンチップオシレータ

9.8.7 RTC 専用クロック（RTCSCLK、RTCLCLK）

RTC 専用クロック（RTCSCLK および RTCLCLK）は、RTC の動作クロックです。

RTCSCLK はサブクロック発振器で生成され、RTCLCLK は LOCO クロックで生成されます。

9.8.8 IWDT 専用クロック（IWDTCLK）

IWDT 専用クロック（IWDTCLK）は、IWDT の動作クロックです。

IWDTCLK は、IWDT 専用オンチップオシレータの内部発振によって生成されます。

9.8.9 AGT 専用クロック（AGTSCLK、AGTLCLK）

AGT 専用クロック（AGTSCLK および AGTLCLK）は、AGT の動作クロックです。

AGTSCLK はサブクロック発振器で生成され、AGTLCLK は LOCO クロックで生成されます。

9.8.10 SysTick タイマ専用クロック（SYSTICCLK）

SysTick タイマ専用クロック（SYSTICCLK）は、SYSTICCLK の動作クロックです。

SYSTICCLK は、LOCO クロックで生成されます。

9.8.11 セグメント LCDC ソースクロック（LCDSRCCLK）

セグメント LCDC ソースクロック（LCDSRCCLK）は、SLCDC の動作クロックです。

LCDSRCCLK は、SLCDSCKCR.LCDSCKSEL[2:0] ビットで設定します。

SLCDSCKCR.LCDSCKEN を 1 にすると、LCDSRCCLK が出力されます。SLCDSCKCR.LCDSCKSEL[2:0] ビットの値を変更する場合は、SLCDSCKCR.LCDSCKEN ビットが 0 になっているか確認してください。

9.8.12 クロック／ブザー出力クロック（CLKOUT）

CLKOUT は、クロック出力またはブザー出力用に CLKOUT 端子から外部に出力されます。

CKOCR.CKOEN を 1 にすると、CLKOUT が CLKOUT 端子に出力されます。CKOCR.CKODIV[2:0] ビットまたは CKOCR.CKOSEL[2:0] ビットの値を変更する場合は、CKOCR.CKOEN ビットの値が 0 になっているか確認してください。

CLKOUT の周波数は、下記ビットで指定します。

- CKOCR.CKODIV[2:0] ビットまたは CKOCR.CKOSEL[2:0] ビット
- PLLCCR2.PLLMUL[4:0] ビットおよび PLLCCR2.PLODIV[1:0] ビット
- OFS1.HOCOFRQ1[2:0] ビット

9.8.13 JTAG クロック（JTAGTCK）

JTAG 専用クロック（JTAGTCK）は、JTAG の動作クロックです。

JTAGTCK は、JTAG の外部クロック（TCK）で生成されます。

9.8.14 BLE のクロック

Bluetooth 専用クロック（BLECLK）および Bluetooth 専用低速クロック（BLKLOCO）は BLE の動作クロックです。ルネサスが提供する Bluetooth ミドルウェアを使用することで、これらのクロックを制御することができます。

9.9 使用上の注意事項

9.9.1 クロック発生回路に関する注意事項

各モジュールに供給されるシステムクロック（ICLK）、周辺モジュールクロック（PCLKA ～ PCLKD）、およびフラッシュインタフェースクロック（FCLK）の周波数は、SCKDIVCR レジスタの設定に応じて変化します。各周波数は、以下の条件を満たす必要があります。

- 各周波数は、AC 電気的特性で規定されるクロックサイクル時間（t_{cyc}）の動作保証範囲内に収まるように選択すること。「48. 電気的特性」を参照してください
- 周波数は表 9.2 に記載の周波数範囲を超えないこと
- 周辺モジュールは PCLKA および PCLKB を基準に動作するため、周波数変更の前後で、タイマや SCI などのモジュールは動作速度が変化する
- システムクロック（ICLK）、周辺モジュールクロック（PCLKA ～ PCLKD）、およびフラッシュインタフェースクロック（FCLK）は、表 9.2 に従って設定すること

クロック周波数変更後の処理を確実に実行するには、最初に該当するクロックコントロールレジスタを書き換えて周波数を変更し、次にレジスタ値を読み出して確認し、最後にその後の処理を実行してください。

9.9.2 発振子に関する注意事項

発振子の諸特性はユーザのボード設計に密接に関係するので、使用する前に十分な評価が必要です。発振子の接続例については図 9.6 を参照してください。発振子の回路定数は、使用する発振子および実装回路の浮動容量によって異なります。そのため、回路定数に関しては振動子メーカと相談して決定してください。発振端子に印加される電圧が最大定格を超えないようにしてください。

9.9.3 ボード設計に関する注意事項

水晶振動子を使用する場合は、振動子およびコンデンサはできるだけ XTAL/EXTAL 端子の近くに配置してください。図 9.12 に示すように、発振回路の近くには信号線を通過させないでください。電磁誘導によって正常に発振しなくなることがあります。

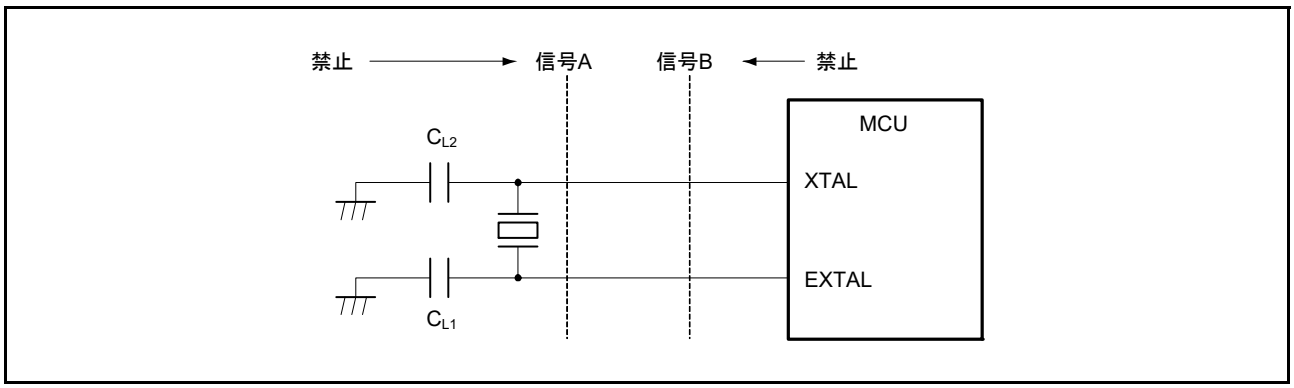


図 9.12 発振回路部のボード設計での信号ルーチング（サブクロック発振器、Bluetooth 専用発振器と同様に、メインクロック発振器にも適用可能）

9.9.4 発振子接続端子に関する注意事項

メインクロックを使用しない場合、EXTAL 端子と XTAL 端子は、汎用ポート P212 および P213 として使用可能です。これらの端子を汎用ポートとして使用する場合は、メインクロックを停止させる（MOSCCR.MOSTP ビットを 1 にする）必要があります。

10.　クロック周波数精度測定回路（CAC）

10.1　概要

クロック周波数精度測定回路（CAC）は、測定基準として使用するクロック（測定基準クロック）で生成した時間内に、測定対象となるクロック（測定対象クロック）のパルスをカウントし、パルス数が許容範囲内であるかどうかを判定します。

測定が完了している場合、または測定基準クロックで生成した時間内のパルス数が許容範囲内でない場合は、割り込み要求が発生します。

表 10.1 に CAC の仕様を、図 10.1 にブロック図を、表 10.2 に入出力端子を示します。

表 10.1　CACの仕様

項目	内容
測定対象クロック	以下のクロックの周波数を測定可能： • メインクロック発振器 • サブクロック発振器 • HOCOクロック • MOCOクロック • LOCOクロック • IWDTCLKクロック • 周辺モジュールクロックB（PCLKB）
測定基準クロック	以下のクロックを基準として使用可能： • 外部からCACREF端子に入力したクロック • メインクロック発振器 • サブクロック発振器 • HOCOクロック • MOCOクロック • LOCOクロック • IWDTCLKクロック • 周辺モジュールクロックB（PCLKB）
選択機能	デジタルフィルタ
割り込み要因	• 測定終了 • 周波数エラー • オーバーフロー
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減

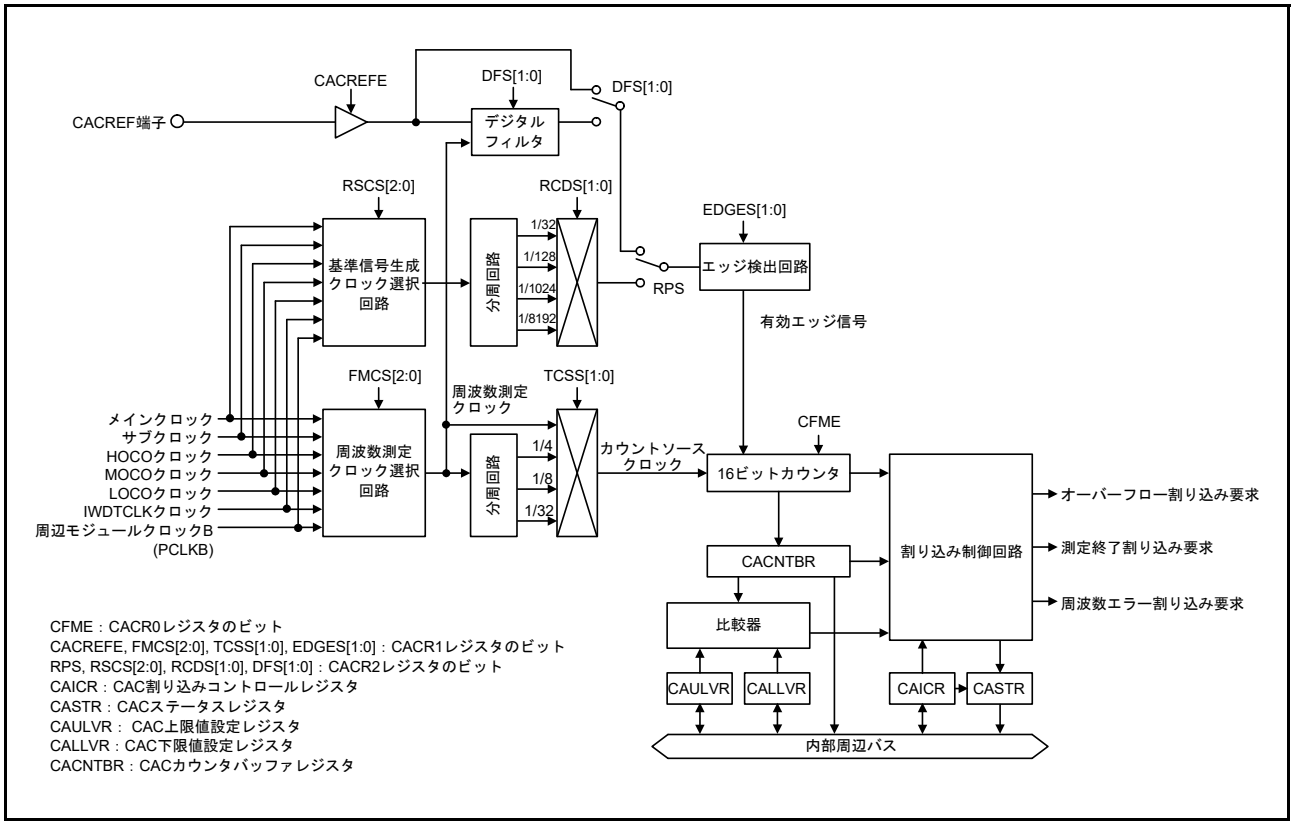


図 10.1　　CAC のブロック図

表 10.2　　CACの入出力端子

端子名	入出力	機能
CACREF	入力	測定基準クロックの入力端子

10.2　レジスタの説明

10.2.1　CAC コントロールレジスタ 0（CACR0）

アドレス　CAC.CACR0 4004 4600h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CFME
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CFME	クロック周波数測定有効	0：無効 1：有効	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CFME ビット（クロック周波数測定有効）

クロック周波数測定を有効にします。CFME ビットを読み出すことで、本ビットが変更されたことを確認できます。変更が完了するまでは、追加の書き込みは無視されます。

10.2.2 CAC コントロールレジスタ 1（CACR1）

アドレス CAC.CACR1 4004 4601h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	EDGES[1:0]		TCSS[1:0]		FMCS[2:0]			CACREFE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CACREFE	CACREF端子入力有効	0：無効 1：有効	R/W
b3-b1	FMCS[2:0]	測定対象クロック選択	b3 b1 0 0 0：メインクロック発振器 0 0 1：サブクロック発振器 0 1 0：HOCOクロック 0 1 1：MOCOクロック 1 0 0：LOCOクロック 1 0 1：周辺モジュールクロック（PCLKB） 1 1 0：IWDTCLKクロック 1 1 1：設定禁止	R/W
b5-b4	TCSS[1:0]	測定対象クロック分周比選択	b5 b4 0 0：分周なしクロック 0 1：4分周クロック 1 0：8分周クロック 1 1：32分周クロック	R/W
b7-b6	EDGES[1:0]	有効エッジ選択	b7 b6 0 0：立ち上がりエッジ 0 1：立ち下がりエッジ 1 0：立ち上がり／立ち下がり両エッジ 1 1：設定禁止	R/W

注．　CACR1 レジスタは、CACR0.CFME ビットが 0 のときに設定してください。

CACREFE ビット（CACREF 端子入力有効）

CACREF 端子入力を有効にします。

FMCS[2:0] ビット（測定対象クロック選択）

周波数を測定する測定対象クロックを選択します。

TCSS[1:0] ビット（測定対象クロック分周比選択）

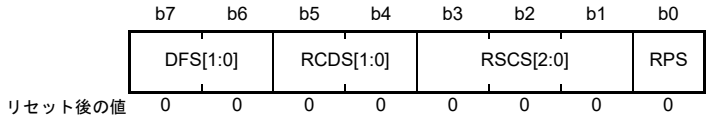
測定対象クロックの分周比を選択します。

EDGES[1:0] ビット（有効エッジ選択）

基準信号の有効エッジを選択します。

10.2.3 CAC コントロールレジスタ 2（CACR2）

アドレス CAC.CACR2 4004 4602h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPS	基準信号選択	0：CACREF端子入力 1：内部クロック（内部生成信号）	R/W
b3-b1	RSCS[2:0]	測定基準クロック選択	b3 b2 b1 0 0 0：メインクロック発振器 0 0 1：サブクロック発振器 0 1 0：HOCOクロック 0 1 1：MOCOクロック 1 0 0：LOCOクロック 1 0 1：周辺モジュールクロック（PCLKB） 1 1 0：IWDTCLKクロック 1 1 1：設定禁止	R/W
b5-b4	RCDS[1:0]	測定基準クロック分周比選択	b5 b4 0 0：32分周クロック 0 1：128分周クロック 1 0：1024分周クロック 1 1：8192分周クロック	R/W
b7-b6	DFS[1:0]	デジタルフィルタ機能選択	b7 b6 0 0：デジタルフィルタ機能無効 0 1：デジタルフィルタ用のサンプリングクロックを周波数測定クロックとして使用 1 0：デジタルフィルタ用のサンプリングクロックを周波数測定クロックの4分周クロックとして使用 1 1：デジタルフィルタ用のサンプリングクロックを周波数測定クロックの16分周クロックとして使用	R/W

注．　CACR2 レジスタは、CACR0.CFME ビットが 0 のときに設定してください。

RPS ビット（基準信号選択）

基準信号として CACREF 端子入力と内部クロック（内部生成信号）のどちらを使用するかを選択します。

RSCS[2:0] ビット（測定基準クロック選択）

測定基準クロックを選択します。

RCDS[1:0] ビット（測定基準クロック分周比選択）

内部基準クロック選択時（RPS = 1）に基準クロックの分周比を選択します。RPS = 0（CACREF 端子を基準クロックソースとして使用）の場合、基準クロックは分周されません。

DFS[1:0] ビット（デジタルフィルタ機能選択）

デジタルフィルタを有効または無効にします。また、そのサンプリングクロックを選択します。

10.2.4 CAC 割り込みコントロールレジスタ（CAICR）

アドレス CAC.CAICR 4004 4603h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	OVFFCL	MENDFCL	FERRFCL	—	OVFIE	MENDIE	FERRIE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FERRIE	周波数エラー割り込み要求許可	0：周波数エラー割り込み要求禁止 1：周波数エラー割り込み要求許可	R/W
b1	MENDIE	測定終了割り込み要求許可	0：測定終了割り込み要求禁止 1：測定終了割り込み要求許可	R/W
b2	OVFIE	オーバーフロー割り込み要求許可	0：オーバーフロー割り込み要求禁止 1：オーバーフロー割り込み要求許可	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	FERRFCL	FERRF フラグクリア	本ビットを1にするとFERRF フラグをクリアします。読むと0が読めます。	R/W
b5	MENDFCL	MENDF フラグクリア	本ビットを1にするとMENDF フラグをクリアします。読むと0が読めます。	R/W
b6	OVFFCL	OVFF フラグクリア	本ビットを1にするとOVFF フラグをクリアします。読むと0が読めます。	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

FERRIE ビット（周波数エラー割り込み要求許可）

周波数エラー割り込み要求を許可します。

MENDIE ビット（測定終了割り込み要求許可）

測定終了割り込み要求を許可します。

OVFIE ビット（オーバーフロー割り込み要求許可）

オーバーフロー割り込み要求を許可します。

FERRFCL ビット（FERRF フラグクリア）

本ビットを 1 にすると FERRF フラグをクリアします。

MENDFCL ビット（MENDF フラグクリア）

本ビットを 1 にすると MENDF フラグをクリアします。

OVFFCL ビット（OVFF フラグクリア）

本ビットを 1 にすると OVFF フラグをクリアします。

10.2.5 CAC ステータスレジスタ（CASTR）

アドレス CAC.CASTR 4004 4604h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	OVFF	MENDF	FERRF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FERRF	周波数エラーフラグ	0：クロック周波数は許容範囲内 1：クロック周波数が許容範囲を外れた（周波数エラー）	R
b1	MENDF	測定終了フラグ	0：測定中 1：測定終了	R
b2	OVFF	オーバーフローフラグ	0：カウンタがオーバーフローしていない 1：カウンタがオーバーフローした	R
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

FERRF フラグ（周波数エラーフラグ）

クロック周波数が設定値から外れた（周波数エラー）ことを示します。

[1 になる条件]

- クロック周波数が CAULVR と CALLVR の両レジスタで定義された許容範囲を外れたとき

[0 になる条件]

- FERRFCL ビットに 1 を書いたとき

MENDF フラグ（測定終了フラグ）

測定が終了したことを示します。

[1 になる条件]

- 測定が終了したとき

[0 になる条件]

- MENDFCL ビットに 1 を書いたとき

OVFF フラグ（オーバーフローフラグ）

カウンタがオーバーフローしたことを示します。

[1 になる条件]

- カウンタがオーバーフローしたとき

[0 になる条件]

- OVFFCL ビットに 1 を書いたとき

10.2.6 CAC 上限値設定レジスタ（CAULVR）

アドレス CAC.CAULVR 4004 4606h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

CAULVR レジスタは、許容範囲の上限値を指定する 16 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。カウンタ値がこのレジスタに指定された値を上回った場合、周波数エラーが検出されます。CACR0.CFME ビットが 0 のときに設定してください。

デジタルフィルタやエッジ検出回路と CACREF 端子入力信号との位相差によって、CACNTBR レジスタに格納されるカウンタ値がずれる可能性があります。そのため、余裕を持った値を設定してください。

10.2.7 CAC 下限値設定レジスタ（CALLVR）

アドレス CAC.CALLVR 4004 4608h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

CALLVR レジスタは、許容範囲の下限値を指定する 16 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。カウンタ値がこのレジスタに指定された値を下回った場合、周波数エラーが検出されます。

CACR0.CFME ビットが 0 のときに設定してください。

デジタルフィルタやエッジ検出回路と CACREF 端子入力信号との位相差によって、CACNTBR レジスタに格納されるカウンタ値がずれる可能性があります。そのため、余裕を持った値を設定してください。

10.2.8 CAC カウンタバッファレジスタ（CACNTBR）

アドレス CAC.CACNTBR 4004 460Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

CACNTBR レジスタは、測定結果を格納する 16 ビットの読み出し専用レジスタです。

10.3　動作説明

10.3.1　クロック周波数測定

CAC は、CACREF 端子入力または内部クロックを基準にしてクロック周波数を測定します。図 10.2 に CAC の動作例を示します。

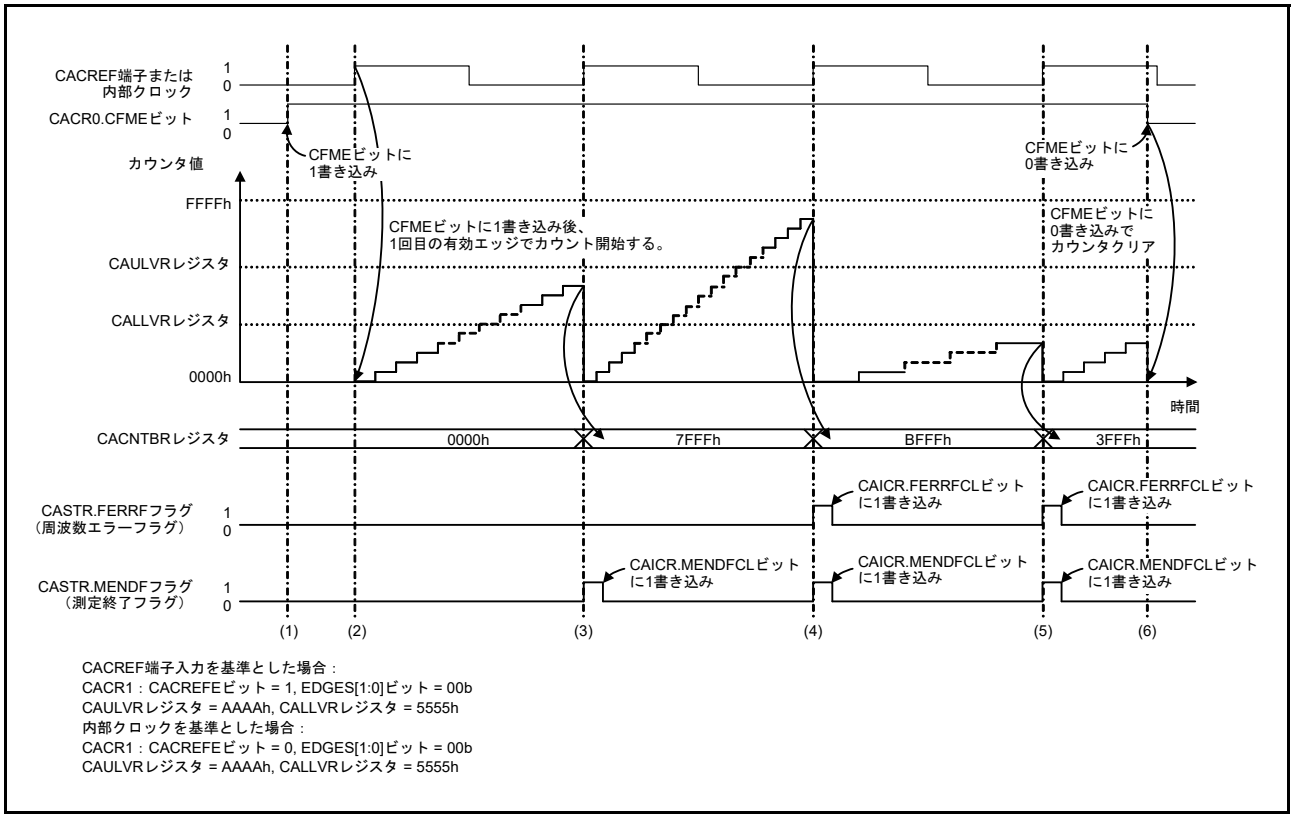


図 10.2　　CAC の動作例

1. CACR0.CFME ビットに 1 を書き込む前に、測定対象クロックと測定基準クロックを定義するために CACR1 レジスタと CACR2 レジスタを設定する必要があります。CACR0.CFME ビットに 1 を書き込むと、クロック周波数測定が有効になります。
2. CACR1.EDGES[1:0] ビットで選択した有効エッジが測定基準クロックから入力されると、タイマがカウントアップを開始します。図 10.2 に示すように、有効エッジは立ち上がりエッジ（CACR1.EDGES[1:0] = 00b）です。
3. 次の有効エッジが入力されると、カウンタ値を CACNTBR レジスタに転送し、CAULVR レジスタ値および CALLVR レジスタ値と比較します。CACNTBR ≦ CAULVR および CACNTBR ≧ CALLVR が成立する場合、クロック周波数は正常なので CASTR.MENDF フラグのみが 1 になります。また、CAICR.MENDIE ビットが 1 の場合は、測定終了割り込みが発生します。
4. 次の有効エッジが入力されると、カウンタ値を CACNTBR レジスタに転送し、CAULVR レジスタ値および CALLVR レジスタ値と比較します。CACNTBR ＞ CAULVR の場合、クロック周波数は異常なので CASTR.FERRF フラグが 1 になります。また、CAICR.FERRIE ビットを 1 にしている場合は、周波数エラー割り込みが発生します。測定終了時に CASTR の MENDF フラグは 1 になります。また、CAICR.MENDIE ビットが 1 の場合は、測定終了割り込みが発生します。
5. 次の有効エッジが入力されると、カウンタ値を CACNTBR レジスタに転送し、CAULVR レジスタ値および CALLVR レジスタ値と比較します。CACNTBR ＜ CALLVR の場合、クロック周波数は異常なので CASTR.FERRF フラグが 1 になります。また、CAICR.FERRIE ビットが 1 の場合は、周波数エラー割り込みが発生します。測定終了時に CASTR の MENDF フラグは 1 になります。また、CAICR.MENDIE ビットが 1 の場合は、測定終了割り込みが発生します。

6. CACR0.CFME ビットが 1 のときは、有効エッジが入力されるたびにカウンタ値を CACNTBR レジスタに転送し、CAULVR レジスタ値および CALLVR レジスタ値と比較します。CACR0.CFME ビットに 0 を書き込むと、カウンタをクリアしてカウントアップが停止します。

10.3.2　CACREF 端子のデジタルフィルタ機能

CACREF 端子はデジタルフィルタ機能を持っています。デジタルフィルタ機能は、設定したサンプリング周期で CACREF 端子レベルが 3 回連続で一致した場合、内部回路に一致したレベルを送信します。再度サンプリングした端子のレベルが 3 回連続で一致するまで内部へ同じレベルを送信し続けます。デジタルフィルタ機能では、デジタルフィルタ機能の有効／無効と、サンプリングクロックの設定が可能です。

デジタルフィルタと CACREF 端子入力信号の位相差によって、CACNTBR レジスタに転送されるカウンタ値には、サンプリングクロックの最大 1 周期分の誤差が生じる場合があります。カウントソースクロックに分周クロックを選択している場合は、以下の計算式を使ってカウンタ値の誤差を表すことができます。

カウント値誤差 =（カウントソースクロック 1 周期）/（サンプリングクロック 1 周期）

10.4　割り込み要求

CAC は次の 3 種類の割り込み要求を発生させます。

- 周波数エラー割り込み
- 測定終了割り込み
- オーバーフロー割り込み

割り込み要因が発生すると、対応するステータスフラグが 1 になります。表 10.3 に、CAC の割り込み要求に関する情報を示します。

表 10.3　CACの割り込み要求

割り込み要求	割り込み許可ビット	ステータスフラグ	割り込み要因
周波数エラー割り込み	CAICR.FERRIE	CASTR.FERRF	CACNTBRレジスタをCAULVRレジスタおよびCALLVRレジスタと比較した結果が、CACNTBR＞CAULVRまたはCACNTBR＜CALLVRのとき
測定終了割り込み	CAICR.MENDIE	CASTR.MENDF	• CACREF端子または内部クロックから有効エッジが入力されたとき • CACR0.CFMEビットに1を書き込んだ後の1回目の有効エッジでは、測定終了割り込みの発生なし
オーバーフロー割り込み	CAICR.OVFIE	CASTR.OVFF	カウンタがオーバーフローしたとき

10.5　使用上の注意事項

10.5.1　モジュールストップ機能の設定

モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC）によって、CAC の動作を許可または禁止することが可能です。リセット後の初期状態では、CAC モジュールの動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

11. 低消費電力モード

11.1 概要

本 MCU は、クロック分周器の設定、モジュールストップ設定、通常モード時の電力制御モード選択、低消費電力モードへの遷移など、さまざまな消費電力低減機能を提供します。

表 11.1 に低消費電力モード機能の仕様を示します。表 11.2 に、低消費電力モードへの遷移条件、CPU と周辺モジュールの状態、および各モードの解除方法を示します。リセット後、MCU はプログラム実行状態に遷移しますが、DMAC、DTC、および SRAM のみが動作しています。

表 11.1 低消費電力モード機能の仕様

項目	内容
クロックの切り替えによる消費電力の低減	システムクロック（ICLK）、周辺モジュールクロック（PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD）、フラッシュインタフェースクロック（FCLK）に対して、個別に分周比の選択が可能（注 1）
モジュールストップ	周辺モジュール機能を個別に停止可能
低消費電力モード	• スリープモード • ソフトウェアスタンバイモード • スヌーズモード
電力制御モード	動作周波数と動作電圧に応じて適切な動作電力制御モードを選択することにより、通常モード、スリープモード、スヌーズモード時の消費電力の低減が可能 5 つの動作電力制御モードが利用可能： • High-speed モード • Middle-speed モード • Low-speed モード • Low-voltage モード • Subosc-speed モード

注 1. 詳細は、「9. クロック発生回路」を参照してください。

表 11.2 各低消費電力モードの動作状態

項目	スリープモード	ソフトウェアスタンバイモード	スヌーズモード（注1）
遷移条件	SBYCR.SSBY = 0の状態でWFI命令	SBYCR.SSBY = 1の状態でWFI命令	ソフトウェアスタンバイモード時のスヌーズ要求SNZCR.SNZE = 1
解除方法	すべての割り込み。このモードで利用可能なすべてのリセット	表 11.3に示す割り込み。このモードで利用可能なすべてのリセット	表 11.3に示す割り込み。このモードで利用可能なすべてのリセット
割り込みによる解除後の状態	プログラム実行状態（割り込み処理）	プログラム実行状態（割り込み処理）	プログラム実行状態（割り込み処理）
リセットによる解除後の状態	リセット状態	リセット状態	リセット状態
メインクロック発振器	選択可能	停止	選択可能（注2）
サブクロック発振器	選択可能	選択可能	選択可能
高速オンチップオシレータ	選択可能	停止	選択可能
中速オンチップオシレータ	選択可能	停止	選択可能
低速オンチップオシレータ	選択可能	選択可能	選択可能
IWDT専用オンチップオシレータ	選択可能（注4）	選択可能（注4）	選択可能（注4）
PLL	選択可能	停止	選択可能（注2）
発振停止検出機能	選択可能	動作禁止	動作禁止
クロック／ブザー出力機能	選択可能	選択可能（注3）	選択可能
CPU	停止（保持）	停止（保持）	停止（保持）
SRAM（ECC SRAMを含む）	選択可能	停止（保持）	選択可能
フラッシュメモリ	動作	停止（保持）	停止（保持）
DMAコントローラ（DMAC）	選択可能	停止（保持）	動作禁止
データトランスファコントローラ（DTC）	選択可能	停止（保持）	選択可能
USB2.0フルスピードモジュール（USBFS）	選択可能	停止（保持）（注5）	動作禁止（注5）
ウォッチドッグタイマ（WDT）	選択可能（注4）	停止（保持）	停止（保持）
独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）	選択可能（注4）	選択可能（注4）	選択可能（注4）
リアルタイムクロック（RTC）	選択可能	選択可能	選択可能
非同期汎用タイマ（AGTn: n = 0, 1）	選択可能	選択可能（注6）	選択可能（注6）
14ビットA/Dコンバータ（ADC14）	選択可能	停止（保持）	選択可能（注11）
12ビットD/Aコンバータ（DAC12）	選択可能	停止（保持）	選択可能
静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）	選択可能	停止（保持）	選択可能
セグメントLCDコントローラ（SLCDC）	選択可能	選択可能（注7）	選択可能
データ演算回路（DOC）	選択可能	停止（保持）	選択可能
シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI0）	選択可能	停止（保持）	選択可能（注10）
シリアルコミュニケーションインタフェース（SCIn: n = 1, 4, 9）	選択可能	停止（保持）	動作禁止
I^2Cバスインタフェース（IIC0）	選択可能	選択可能	選択可能
I^2Cバスインタフェース（IIC1）	選択可能	停止（保持）	動作禁止
イベントリンクコントローラ（ELC）	選択可能	停止（保持）	選択可能（注8）
低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP0）	選択可能	選択可能（注9）	選択可能（注9）
低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP1）	選択可能	選択可能（注9）	選択可能（注9）
オペアンプ（OPAMP）	選択可能	選択可能	選択可能
NMI、IRQn（n = 0～4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）端子割り込み	選択可能	選択可能	選択可能
キー割り込み機能（KINT）	選択可能	選択可能	選択可能
低電圧検出（LVD）	選択可能	選択可能	選択可能
パワーオンリセット回路	動作	動作	動作
その他の周辺モジュール	選択可能	停止（保持）	動作禁止
I/Oポート	動作	保持	動作

注 . 「選択可能」とは、動作／停止がコントロールレジスタで選択できることを意味します。
「停止（保持）」とは、内部レジスタの内容は保持されるが、動作は中断されることを意味します。
「動作禁止」とは、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、その機能を停止させる必要があることを意味します。

注 1. モジュールストップビットが 0 に設定されているモジュールはすべて、スヌーズモード遷移後に PCLK が供給されると、ただちに起動します。スヌーズモード時に消費電力の増大を防ぐには、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、スヌーズモードで不要なモジュールのストップビットを 1 にしてください。

注 2. スヌーズモードで SCI0 を使用する場合、MOSCCR.MOSTP ビットと PLLCR.PLLSTP ビットは 1 でなければいけません。

注 3. クロックアウトプットソース選択ビット（CKOCR.CKOSEL[2:0]）が 010b（LOCO）および 100b（SOSC）以外の値に設定されている場合は停止します。

注 4. IWDT 専用オンチップオシレータおよび IWDT の場合、IWDT オートスタートモード時、オプション機能選択レジスタ 0 の IWDT 停止制御ビット（OFS0.IWDTSTPCTL）の設定により、動作／停止を選択することが可能です。WDT の場合、IWDT オートスタートモード時、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の IWDT 停止制御ビット（WDTSTPCTL）の設定により、動作／停止を選択することが可能です。

注 5. USBFS レジューム検出が可能です。

注 6. AGT0.AGTMR1.TCK[2:0] ビットで 100b（LOCO）または 110b（SOSC）が選択されている場合、AGT0 は動作可能です。
AGT1.AGTMR1.TCK[2:0] ビットで 100b（LOCO）、110b（SOSC）、または 101（AGT0 からのアンダーフローイベント信号）が選択されている場合、AGT1 は動作可能です。

注 7. SLCDSCKCR.LCDSCKSEL[2:0] ビットで 000b（LOCO）または 001b（SOSC）が選択されている場合、動作可能です。
SLCDSCKCR.LCDSCKSEL[2:0] ビットが 000b または 001b 以外の値に設定されている場合、停止が選択されます。

注 8. イベントは、11.9.13　スヌーズモードにおける ELC イベントに記載のものに限定されます。

注 9. VCOUT 機能のみが許可されます。ACMPLP がデジタルフィルタを使用していない場合に、VCOUT 端子は動作します。デジタルフィルタの詳細については、「38.　低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）」を参照してください。

注 10. SCI0 のシリアル通信モードは、調歩同期式モードに限定されます。

注 11. スヌーズモードで 14 ビット A/D コンバータを使用する場合、ADCMPCR.CMPAE ビットまたは ADCMPCR.CMPBE ビットは 1 でなければいけません。

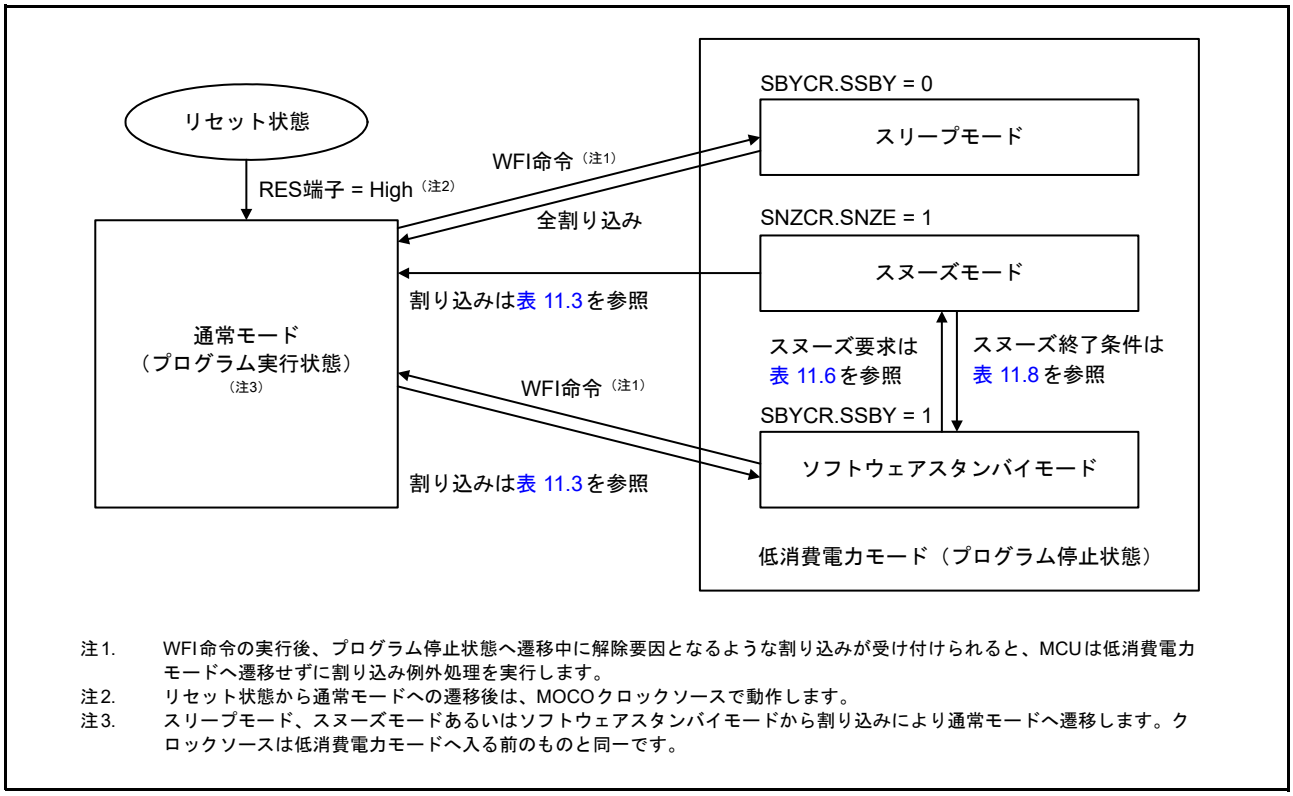
表 11.3 スヌーズモードとソフトウェアスタンバイモードから通常モードへ遷移する場合の割り込み要因

割り込み要因	名称	ソフトウェアスタンバイモード	スヌーズモード
NMI		可能	可能
VBATT	VBATT_LVD	可能	可能
ポート	PORT_IRQn（n = 0～15）	可能	可能
LVD	LVD_LVD1	可能	可能
IWDT	IWDT_NMIUNDF	可能	可能
USBFS	USBFS_USBR	可能	可能
RTC	RTC_ALM	可能	可能
	RTC_PRD	可能	可能
KINT	KEY_INTKR	可能	可能
AGT1	AGT1_AGTI	可能	可能（注3）
	AGT1_AGTCMAI	可能	可能
	AGT1_AGTCMBI	可能	可能
ACMPLP	ACMP_LP0	可能	可能
IIC0	IIC0_WUI	可能	可能
ADC140	ADC140_WCMPM	不可能	SELSR0で可能（注1）（注3）
	ADC140_WCMPUM	不可能	SELSR0で可能（注1）（注3）
SCI0	SCI0_AM	不可能	SELSR0で可能（注1）（注2）
	SCI0_RXI_OR_ERI	不可能	SELSR0で可能（注1）（注2）
DTC	DTC_COMPLETE	不可能	SELSR0で可能（注1）（注3）
DOC	DOC_DOPCI	不可能	SELSR0で可能（注1）
CTSU	CTSU_CTSUFN	不可能	SELSR0で可能（注1）

注 1. 割り込み要求をスヌーズモードからの復帰トリガとして使用するには、この割り込み要求を SELSR0 で選択する必要があります。「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。SELSR0 で選択したトリガが、WFI 命令の実行後、通常モードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移途中に発生した場合は、その要求が受け付けられるかどうかはトリガ発生のタイミングに依存します。

注 2. SCI0_AM または SCI0_RXI_OR_ERI のいずれか一方のみ選択可能です。

注 3. SNZEDCR レジスタで許可されたイベントを使用してはいけません。



注1. WFI命令の実行後、プログラム停止状態へ遷移中に解除要因となるような割り込みが受け付けられると、MCUは低消費電力モードへ遷移せずに割り込み例外処理を実行します。
注2. リセット状態から通常モードへの遷移後は、MOCOクロックソースで動作します。
注3. スリープモード、スヌーズモードあるいはソフトウェアスタンバイモードから割り込みにより通常モードへ遷移します。クロックソースは低消費電力モードへ入る前のものと同一です。

図 11.1 モード遷移

11.2 レジスタの説明

11.2.1 スタンバイコントロールレジスタ（SBYCR）

アドレス SYSTEM.SBYCR 4001 E00Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SSBY	OPE	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	OPE	出力ポート許可	0：ソフトウェアスタンバイモード時、アドレスバスとバス制御信号はハイインピーダンス状態になる。スヌーズモード時、アドレスバスとバス制御信号はソフトウェアスタンバイモード遷移前と同じ 1：ソフトウェアスタンバイモード時、アドレスバスとバス制御信号は出力状態を維持	R/W
b15	SSBY	ソフトウェアスタンバイ	0：スリープモード 1：ソフトウェアスタンバイモード	R/W

OPE ビット（出力ポート許可）

ソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモード時に、アドレスバスとバス制御信号（CS0 ～ CS3、RD、WR0 ～ WR1、WR、BC0、BC1、および ALE）がハイインピーダンス状態となるか、出力状態を維持するかを選択します。

SSBY ビット（ソフトウェアスタンバイ）

WFI 命令実行後の遷移先を設定します。

SSBY ビットが 1 の状態で WFI 命令を実行すると、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移します。なお、割り込みによってソフトウェアスタンバイモードから通常モードへ復帰したときは、SSBY ビットは 1 のままです。SSBY ビットに 0 を書き込むことにより、クリアできます。

OSTDCR.OSTDE ビットが 1 のときは、SSBY ビットの設定は無視されます。SSBY ビットが 1 であっても、WFI 命令を実行するとスリープモードへ遷移します。

FENTRYR.FENTRY0 ビットが 1、または FENTRYR.FENTRYD ビットが 1 の場合、SSBY ビットの設定値は無視されます。SSBY ビットが 1 であっても、WFI 命令を実行するとスリープモードへ遷移します。

11.2.2 モジュールストップコントロールレジスタ A（MSTPCRA）

アドレス SYSTEM.MSTPCRA 4001 E01Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	MSTPA22	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	MSTPA6	—	—	—	—	—	MSTPA0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MSTPA0	SRAM0モジュールストップ設定（注1）	対象モジュール：SRAM0 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b5-b1	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b6	MSTPA6	ECCSRAMモジュールストップ設定（注1）	対象モジュール：ECCSRAM 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b21-b7	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b22	MSTPA22	DMAコントローラ／データトランスファコントローラモジュールストップ設定（注2）	対象モジュール：DMAC/DTC 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b31-b23	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W

注 1. MSTPA0 ビットと MSTPA6 ビットの設定値は同じでなければいけません。
注 2. MSTPA22 ビットを 0 から 1 に書き換える場合、DMAC および DTC を無効にしてから MSTPA22 ビットを設定してください。

11.2.3 モジュールストップコントロールレジスタ B（MSTPCRB）

アドレス　MSTP.MSTPCRB 4004 7000h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MSTPB31	MSTPB30	—	MSTPB28	MSTPB27	—	—	—	—	MSTPB22	—	—	MSTPB19	MSTPB18	—	—
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	MSTPB11	—	MSTPB9	MSTPB8	—	—	—	—	—	MSTPB2	—	—
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b2	MSTPB2	コントローラエリアネットワークモジュールストップ設定（注1）	対象モジュール：CAN0 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b8	MSTPB8	I²Cバスインタフェース1モジュールストップ設定	対象モジュール：IIC1 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b9	MSTPB9	I²Cバスインタフェース0モジュールストップ設定	対象モジュール：IIC0 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b10	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b11	MSTPB11	ユニバーサルシリアルバス2.0フルスピードインタフェースモジュールストップ設定（注2）	対象モジュール：USBFS 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b17-b12	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b18	MSTPB18	シリアルペリフェラルインタフェース1モジュールストップ設定	対象モジュール：SPI1 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b19	MSTPB19	シリアルペリフェラルインタフェース0モジュールストップ設定	対象モジュール：SPI0 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b21-b20	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b22	MSTPB22	シリアルコミュニケーションインタフェース9モジュールストップ設定	対象モジュール：SCI9 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b26-b23	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b27	MSTPB27	シリアルコミュニケーションインタフェース4モジュールストップ設定	対象モジュール：SCI4 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b28	MSTPB28	BLEのシリアルコミュニケーションインタフェースモジュールストップ設定（注3）	対象モジュール：BLE対応SCI 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b29	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b30	MSTPB30	シリアルコミュニケーションインタフェース1モジュールストップ設定	対象モジュール：SCI1 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b31	MSTPB31	シリアルコミュニケーションインタフェース0モジュールストップ設定	対象モジュール：SCI0 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W

注 1. MSTPB2 ビットの書き換えは、本ビットによって制御されるクロックの発振が安定しているときに行う必要があります。本ビットを書き換えた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移するには、書き換え後に CAN クロック（CANMCLK）が 2 サイクル経過してから WFI 命令を実行してください。

注 2. MSTPB11 ビットを書き換えた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移するには、書き換え後に USB クロック（UCLK）が 2 サイクル経過してから WFI 命令を実行してください。

注 3. Bluetooth ミドルウェアはこのモジュールストップ設定に対応した処理を行います。このビットの設定を変更しないでください。

11.2.4　モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC）

アドレス　MSTP.MSTPCRC 4004 7004h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MSTPC31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	MSTPC14	MSTPC13	—	—	—	—	—	—	—	—	MSTPC4	MSTPC3	—	MSTPC1	MSTPC0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MSTPC0	クロック周波数精度測定回路モジュールストップ設定（注1）	対象モジュール：CAC 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b1	MSTPC1	巡回冗長検査演算器モジュールストップ設定	対象モジュール：CRC 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b2	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b3	MSTPC3	静電容量式タッチセンシングユニットモジュールストップ設定	対象モジュール：CTSU 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b4	MSTPC4	セグメントLCDコントローラモジュールストップ設定	対象モジュール：SLCDC 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b12-b5	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b13	MSTPC13	データ演算回路モジュールストップ設定	対象モジュール：DOC 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b14	MSTPC14	イベントリンクコントローラモジュールストップ設定	対象モジュール：ELC 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b30-b15	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b31	MSTPC31	SCE5モジュールストップ設定（注2）	対象モジュール：SCE5 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W

注 1.　MSTPC0 ビットの書き換えは、本ビットによって制御されるクロックの発振が安定しているときに行う必要があります。本ビットを書き換えた後、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移するには、発振器によって出力されるクロックのうち、最も遅いクロックが 2 サイクル経過してから WFI 命令を実行してください。

注 2.　本 MCU で SCE5 を使用しない場合でも、未使用回路を初期化するために、プログラムの最初で MSTPC31 ビットを 0 にしてください。11.9.15　未使用回路に対するモジュールストップ機能を参照してください。

11.2.5 モジュールストップコントロールレジスタ D（MSTPCRD）

アドレス　MSTP.MSTPCRD 4004 7008h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MSTPD31	—	MSTPD29	—	—	—	—	—	—	—	—	MSTPD20	MSTPD19	—	—	MSTPD16
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	MSTPD14	—	—	—	—	—	—	—	MSTPD6	MSTPD5	—	MSTPD3	MSTPD2	—	—
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b2	MSTPD2	非同期汎用タイマ1モジュールストップ設定（注1）	対象モジュール：AGT1 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b3	MSTPD3	非同期汎用タイマ0モジュールストップ設定（注2）	対象モジュール：AGT0 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b4	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b5	MSTPD5	汎用PWMタイマ323～320モジュールストップ設定	対象モジュール：GPT323～GPT320 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b6	MSTPD6	汎用PWMタイマ169～164モジュールストップ設定	対象モジュール：GPT168, GPT165, GPT164 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b13-b7	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b14	MSTPD14	GPT用ポートアウトプットイネーブルモジュールストップ設定	対象モジュール：POEG 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b15	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b16	MSTPD16	14ビットA/Dコンバータモジュールストップ設定	対象モジュール：ADC140 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b18-b17	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b19	MSTPD19	8ビットD/Aコンバータモジュールストップ設定（注3）	対象モジュール：DAC8 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b20	MSTPD20	12ビットD/Aコンバータモジュールストップ設定	対象モジュール：DAC12 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b28-b21	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b29	MSTPD29	低消費電力アナログコンパレータモジュールストップ設定	対象モジュール：ACMPLP 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W
b30	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b31	MSTPD31	オペアンプモジュールストップ設定	対象モジュール：OPAMP 0：モジュールストップ状態の解除 1：モジュールストップ状態へ遷移	R/W

注 1.　カウントソースがサブクロック発振器または LOCO の場合、MSTPD2 ビットを 1 にしても、AGT1 のカウントは停止しません。カウントソースがサブクロック発振器または LOCO の場合、AGT1 レジスタにアクセスする場合を除いて、本ビットを 1 にする必要があります。
注 2.　カウントソースがサブクロック発振器または LOCO の場合、MSTPD3 ビットを 1 にしても、AGT0 のカウントは停止しません。カウントソースがサブクロック発振器または LOCO の場合、AGT0 レジスタにアクセスする場合を除いて、本ビットを 1 にする必要があります。
注 3.　8 ビット D/A コンバータを使用する場合（MSTPD19 = 0）、ACMPLP の MSTPD29 ビットを 0 にしてください。

11.2.6　動作電力コントロールレジスタ（OPCCR）

アドレス　SYSTEM.OPCCR 4001 E0A0h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	OPCMTSF	—	—	OPCM[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	OPCM[1:0]	動作電力制御モード選択	b1 b0 0 0 : High-speed モード 0 1 : Middle-speed モード 1 0 : Low-voltage モード（注 1） 1 1 : Low-speed モード	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W
b4	OPCMTSF	動作電力制御モード遷移状態フラグ	0 : 遷移完了 1 : 遷移中	R
b7-b5	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W

注 1.　HOCOCR.HCSTP は常に 0 でなければいけません。

OPCCR レジスタは、通常モード、スリープモード、およびスヌーズモード時に消費電力を低減させるためのレジスタです。OPCCR レジスタを設定することにより、使用する動作周波数、動作電圧に応じて消費電力を低減させることができます。

動作電力制御モードの変更手順については、11.5　低消費電力機能を参照してください。

OPCM[1:0] ビット（動作電力制御モード選択）

通常モード、スリープモード、およびスヌーズモード時の動作電力制御モードを選択します。

表 11.4 は、各動作電力制御モードと、OPCM[1:0] ビットおよび SOPCM ビットの設定値との関係を示しています。

HOCOCR.HCSTP と OSCSF.HOCOSF が 0 の状態にある間は、HOCO クロックの発振がまだ安定していないので、OPCCR.OPCM[1:0] への書き込みは禁止されます。

OPCMTSF フラグ（動作電力制御モード遷移状態フラグ）

動作電力制御モード切り替え時の切り替え制御状態を示します。本フラグは、OPCM[1:0] ビットが書き換えられると 1、モード遷移が完了すると 0 になります。本フラグを読み取って 0 であることを確認してから次の処理を行ってください。

11.2.7　サブ動作電力コントロールレジスタ（SOPCCR）

アドレス　SYSTEM.SOPCCR 4001 E0AAh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	SOPCMTSF	—	—	—	SOPCM
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SOPCM	サブ動作電力制御モード選択	0：Subosc-speed モード以外 1：Subosc-speed モード	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W
b4	SOPCMTSF	サブ動作電力制御モード遷移状態フラグ	0：遷移完了 1：遷移中	R
b7-b5	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W

SOPCCR レジスタは、通常モード、スリープモードおよびスヌーズモード時に消費電力を低減させるために使用します。本レジスタを設定することによって、Subosc-speed モードへの遷移およびこのモードからの復帰が開始されます。Subosc-speed モードは、サブクロック発振器または分周なしの LOCO を使用した場合に限り利用可能です。

CACHEE.FCACHEEN ビットを 0 にしてフラッシュキャッシュ機能を禁止してから、動作電力制御モードを変更してください。詳細は、「43.　フラッシュメモリ」を参照してください。

動作電力制御モードの変更手順については、11.5　低消費電力機能を参照してください。

SOPCM ビット（サブ動作電力制御モード選択）

通常モード、スリープモード、およびスヌーズモード時の動作電力制御モードを選択します。本ビットを 1 にすることで、Subosc-speed モードへまたは Subosc-speed モードから遷移できます。また、本ビットを 0 にすることで、Subosc-speed モード遷移前の動作モード（OPCCR.OPCM[1:0] で設定された動作モード）へ復帰できます。

表 11.4 は、各動作電力制御モードと、OPCM[1:0] ビットおよび SOPCM ビットの設定値との関係を示しています。

SOPCMTSF フラグ（サブ動作電力制御モード遷移状態フラグ）

動作電力制御モードを Subosc-speed モードからまたは Subosc-speed モードへ切り替えたときの切り替え制御状態を示します。本フラグは、SOPCM ビットが書き換えられると 1、モード遷移が完了すると 0 になります。本フラグを読み取って 0 であることを確認してから次の処理を行ってください。

表 11.4 は、各動作電力制御モードを示しています。

表 11.4　動作電力制御モード

動作電力制御モード	OPCM[1:0] ビット	SOPCM ビット	消費電力
High-speed モード	00b	0	高
Middle-speed モード	01b	0	↓
Low-voltage モード	10b	0	↓
Low-speed モード	11b	0	↓
Subosc-speed モード	xxb	1	低

11.2.8　スヌーズコントロールレジスタ（SNZCR）

アドレス　SYSTEM.SNZCR 4001 E092h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SNZE	—	—	—	—	—	SNZDTCEN	RXDREQEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RXDREQEN	RXD0スヌーズ要求許可	0：ソフトウェアスタンバイモード時にRXD0の立ち下がりエッジを無視 1：ソフトウェアスタンバイモード時にRXD0の立ち下がりエッジを検出	R/W
b1	SNZDTCEN	スヌーズモード時のDTC許可	スヌーズモード時にDTC動作を許可 0：DTC動作を禁止 1：DTC動作を許可	R/W
b6-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	SNZE	スヌーズモード許可	0：スヌーズモードを禁止 1：スヌーズモードを許可	R/W

RXDREQEN ビット（RXD0 スヌーズ要求許可）

ソフトウェアスタンバイモード時に RXD0 端子の立ち下がりエッジを検出するか否かを指定します。本ビットは、SCI0 が調歩同期式モードで動作している場合にのみ使用可能です。RXD0 端子の立ち下がりエッジを検出するには、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、本ビットを設定してください。本ビットが 1 の場合、ソフトウェアスタンバイモード時に RXD0 端子の立ち下がりエッジが検出されると、MCU はスヌーズモードへ遷移します。

SNZDTCEN ビット（スヌーズモード時の DTC 許可）

スヌーズモード時に DTC と SRAM を使用するか否かを指定します。スヌーズモードで DTC と SRAM を使用するには、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、本ビットを 1 にしてください。本ビットが 1 の場合、IELSRn（ICU イベントリンク設定レジスタ n）の設定によって、DTC を起動することが可能です。

SNZE ビット（スヌーズモード許可）

ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへの遷移を許可するか否かを指定します。スヌーズモードを使用するには、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、本ビットを 1 にしてください。本ビットが 1 の場合、ソフトウェアスタンバイモード時に表 11.6 に示すトリガによって、MCU はスヌーズモードへ遷移します。ソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモードから通常モードへ遷移した後、ソフトウェアスタンバイモードへ再遷移する場合は、あらかじめ SNZE ビットをいったんクリアしてから再設定してください。詳細は、11.8　スヌーズモードを参照してください。

11.2.9　スヌーズ終了コントロールレジスタ（SNZEDCR）

アドレス　SYSTEM.SNZEDCR 4001 E094h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SCI0UMTED	—	—	AD0UMTED	AD0MATED	DTCNZRED	DTCZRED	AGTUNFED
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	AGTUNFED	AGT1アンダーフロー時スヌーズ終了許可	0：スヌーズ終了要求禁止 1：スヌーズ終了要求許可	R/W
b1	DTCZRED	最後のDTC送信完了時スヌーズ終了許可	0：スヌーズ終了要求禁止 1：スヌーズ終了要求許可	R/W
b2	DTCNZRED	最後以外のDTC送信完了時スヌーズ終了許可	0：スヌーズ終了要求禁止 1：スヌーズ終了要求許可	R/W
b3	AD0MATED	ADC140コンペアマッチスヌーズ終了許可	0：スヌーズ終了要求禁止 1：スヌーズ終了要求許可	R/W
b4	AD0UMTED	ADC140コンペア不一致スヌーズ終了許可	0：スヌーズ終了要求禁止 1：スヌーズ終了要求許可	R/W
b6-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	SCI0UMTED	SCI0アドレス不一致スヌーズ終了許可	0：スヌーズ終了要求禁止 1：スヌーズ終了要求許可	R/W

表 11.8 に示すトリガの 1 つをスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの切り替え条件として使用するには、SNZEDCR レジスタの対応するビットを 1 にしてください。

表 11.3 に示したような、スヌーズモードから通常モードへ復帰させるためのイベントは、SNZEDCR レジスタで許可しないでください。

AGTUNFED ビット（AGT1 アンダーフロー時スヌーズ終了許可）

AGT1 アンダーフローによるスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を許可するか否かを指定します。トリガ条件については、「24.　非同期汎用タイマ（AGT）」を参照してください。

DTCZRED ビット（最後の DTC 送信完了時スヌーズ終了許可）

最後の DTC 送信完了（すなわち、DTC の CRA または CRB レジスタが 0）による、スヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を許可するか否かを指定します。トリガ条件については、「18. データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

DTCNZRED ビット（最後以外の DTC 送信完了時スヌーズ終了許可）

各 DTC 送信完了（すなわち、DTC の CRA または CRB レジスタが 0 以外）による、スヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を許可するか否かを指定します。トリガ条件については、「18. データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

AD0MATED ビット（ADC140 コンペアマッチスヌーズ終了許可）

変換結果が期待値と一致した場合に、ADC140 イベントによるスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を許可するか否かを指定します。トリガ条件については、「34.　14 ビット A/D コンバータ（ADC14）」を参照してください。

AD0UMTED ビット（ADC140 コンペア不一致スヌーズ終了許可）

変換結果が期待値と一致しない場合に、ADC140 イベントによるスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を許可するか否かを指定します。トリガ条件については、「34.　14 ビット A/D コンバータ（ADC14）」を参照してください。

SCI0UMTED ビット（SCI0 アドレス不一致スヌーズ終了許可）

ソフトウェアスタンバイモード時に受信したアドレスが期待値と一致しない場合に、SCI0 イベントによるスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を許可するか否かを指定します。トリガ条件については、「29. シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）」を参照してください。本ビットは、SCI0 が調歩同期式モードで動作している場合にのみ 1 にしてください。

11.2.10　スヌーズ要求コントロールレジスタ（SNZREQCR）

アドレス　SYSTEM.SNZREQCR 4001 E098h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	SNZREQEN30	SNZREQEN29	SNZREQEN28	—	—	SNZREQEN25	SNZREQEN24	SNZREQEN23	—	—	—	—	—	SNZREQEN17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SNZREQEN15	SNZREQEN14	—	—	SNZREQEN11	—	SNZREQEN9	—	SNZREQEN7	SNZREQEN6	—	SNZREQEN4	SNZREQEN3	SNZREQEN2	SNZREQEN1	SNZREQEN0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SNZREQEN0	スヌーズ要求許可0	IRQ0端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b1	SNZREQEN1	スヌーズ要求許可1	IRQ1端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b2	SNZREQEN2	スヌーズ要求許可2	IRQ2端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b3	SNZREQEN3	スヌーズ要求許可3	IRQ3端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b4	SNZREQEN4	スヌーズ要求許可4	IRQ4端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	SNZREQEN6	スヌーズ要求許可6	IRQ6端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b7	SNZREQEN7	スヌーズ要求許可7	IRQ7端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b9	SNZREQEN9	スヌーズ要求許可9	IRQ9端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11	SNZREQEN11	スヌーズ要求許可11	IRQ11端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b13-b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	SNZREQEN14	スヌーズ要求許可14	IRQ14端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b15	SNZREQEN15	スヌーズ要求許可15	IRQ15端子のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b16	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b17	SNZREQEN17	スヌーズ要求許可17	キー割り込みのスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b22-b18	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b23	SNZREQEN23	スヌーズ要求許可23	ACMPLPのスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b24	SNZREQEN24	スヌーズ要求許可24	RTCアラームのスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b25	SNZREQEN25	スヌーズ要求許可25	RTC周期のスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b27-b26	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b28	SNZREQEN28	スヌーズ要求許可28	AGT1アンダーフローのスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b29	SNZREQEN29	スヌーズ要求許可29	AGT1コンペアマッチAのスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b30	SNZREQEN30	スヌーズ要求許可30	AGT1コンペアマッチBのスヌーズ要求許可 0：スヌーズ要求禁止 1：スヌーズ要求許可	R/W
b31	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SNZREQCR レジスタは、ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへ切り替えるためのトリガを制御します。WUPEN レジスタ（「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照）の設定によって、トリガがソフトウェアスタンバイモードの解除要求として選択されている場合、SNZREQCR レジスタの対応するビットが 1 であっても、そのトリガが発生すると MCU は通常モードへ遷移します。WUPEN レジスタ設定は SNZREQCR レジスタ設定よりも常に優先順位は高くなります。詳細は、11.8 スヌーズモードと「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

11.2.11　フラッシュ動作コントロールレジスタ（FLSTOP）

アドレス　SYSTEM.FLSTOP 4001 E09Eh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	FLSTPF	—	—	—	FLSTOP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FLSTOP	フラッシュメモリ動作ON/OFF選択	0：コードフラッシュメモリとデータフラッシュメモリは動作 1：コードフラッシュメモリとデータフラッシュメモリは停止	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	FLSTPF	フラッシュメモリ動作ステータスフラグ	0：遷移完了 1：遷移中（フラッシュ停止状態からフラッシュ動作状態へ、またはフラッシュ動作状態からフラッシュ停止状態へ）	R
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

FLSTOP ビット（フラッシュメモリ動作 ON/OFF 選択）

フラッシュメモリを有効または無効にします。FLSTOP ビットは SRAM で実行されるプログラムによって書き込む必要があります。FLSTOP ビットが 1 のときに割り込みを使用する場合は、SRAM 内に割り込みベクタを配置してください。Low-voltage モードが選択されていない場合、本ビットを 0 にしてください。

注 .　フラッシュメモリの動作を開始するために FLSTOP ビットの値を 1 から 0 に変更した場合、フラッシュメモリへのアクセスを再開する前に、FLSTPF フラグが 0 であること、および OSCSF.HOCOSF が 1 であることを確認してください。その後、命令はコードフラッシュメモリで実行可能になります。

注 .　HOCOCR.HCSTP と OSCSF.HOCOSF が 0（HOCO は発振安定待ちカウント中）の状態にあるとき、FLSTOP.FLSTOP への書き込みは禁止されます。

FLSTPF フラグ（フラッシュメモリ動作ステータス フラグ）

フラッシュ停止状態からフラッシュ動作状態へ、またはフラッシュ動作状態からフラッシュ停止状態への遷移状態を表します。遷移が完了したとき、本フラグを読むと 0 が読めます。フラッシュメモリ停止後、再度フラッシュメモリを使用する場合は、FLSTPF フラグが 0 であることを確認してから処理を進めてください。

11.2.12 パワーセーブメモリコントロールレジスタ（PSMCR）

アドレス SYSTEM.PSMCR 4001 E09Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PSMC[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	PSMC[1:0]	パワーセーブメモリ制御	b1 b0 0 0：ソフトウェアスタンバイモード時に全SRAMがON 0 1：ソフトウェアスタンバイモード時に48KB SRAM（2000 0000h～2000 BFFFh）がON 1 0：設定禁止 1 1：設定禁止	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

PSMC[1:0] ビット（パワーセーブメモリ制御）

ソフトウェアスタンバイモード時の SRAM 保持域を選択します。これらのビットを 01b（ソフトウェアスタンバイモード時に 48KB SRAM）にすることによって、供給電流を削減できます。WFI 命令は、PSMC レジスタの設定後に実行する必要があります。

11.2.13 システムコントロール OCD コントロールレジスタ（SYOCDCR）

アドレス SYSTEM.SYOCDCR 4001 E40Eh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DBGEN	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	DBGEN	デバッガ有効	0：オンチップデバッガは無効 1：オンチップデバッガは有効 オンチップデバッグモードで最初に1にしてください。	R/W

DBGEN ビット（デバッガ有効）

オンチップデバッグモードを有効にします。本ビットは、オンチップデバッガモードで最初に 1 にする必要があります。

［1 になる条件］

- デバッガの接続時に 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- パワーオンリセットが発生したとき
- 0 を書いたとき

11.3 クロックの切り替えによる消費電力の低減

SCKDIVCR.FCK[2:0]、ICK[2:0]、PCKA[2:0]、PCKB[2:0]、PCKC[2:0]、PCKD[2:0] の各ビットを設定すると、クロック周波数が切り替わります。CPU、DMAC、DTC、フラッシュ、および SRAM は、ICK[2:0] ビットで設定された動作クロックを使用します。

周辺モジュールは、PCKA[2:0]、PCKB[2:0]、PCKC[2:0]、および PCKD[2:0] の各ビットで設定された動作クロックを使用します。

フラッシュメモリインタフェースは、FCK[2:0] ビットで設定された動作クロックを使用します。

詳細は、「9. クロック発生回路」を参照してください。

11.4 モジュールストップ機能

モジュールストップ機能は、内蔵周辺モジュール単位で設定することが可能です。

MSTPCRA ～ MSTPCRD レジスタの MSTPmi ビット（m = A ～ D、i = 31 ～ 0）を 1 にすると、指定したモジュールは動作を停止してモジュールストップ状態へ遷移します。このとき CPU は動作を継続します。MSTPmi ビットを 0 にすることによって、モジュールストップ状態は解除され、バスサイクルの終了時点でモジュールは動作を再開します。モジュールストップ状態では、モジュール内部の状態が保持されます。

リセット解除後は、DMAC、DTC、および SRAM 以外の全モジュールがモジュールストップ状態になります。MSTPmi ビットが 1 であるときは、対応するモジュールにアクセスしないでください。そうでないと、そのモジュールに対するデータの読み出し／書き込みやモジュールの動作は保証されません。また、対応するモジュールにアクセス中であるときは、MSTPmi ビットを 1 にしないでください。

11.5 低消費電力機能

動作周波数と動作電圧に応じて適切な動作電力制御モードを選択することにより、通常モード時、スリープモード時、およびスヌーズモード時の消費電力を削減できます。

11.5.1 動作電力制御モードの設定方法

動作電力制御モードを切り替える場合は、その前後において、電圧範囲や周波数範囲などの動作条件が仕様範囲内に収まっていることを必ず確認してください。

動作電力制御モードの切り替え手順例を以下に示します。

表 11.5 各モードで使用可能な発振子

モード	発振器						
	PLL（注1）	高速オンチップオシレータ	中速オンチップオシレータ	低速オンチップオシレータ	メインクロック発振器	サブクロック発振器	IWDT専用オンチップオシレータ
High-speed	可能	可能	可能	可能	可能	可能	可能
Middle-speed	可能	可能	可能	可能	可能	可能	可能
Low-voltage	不可能	可能	可能	可能	可能	可能	可能
Low-speed	不可能	可能	可能	可能	可能	可能	可能
Subosc-speed	不可能	不可能	不可能	可能	不可能	可能	可能

注 1. PLL の VCC 範囲は 2.4 ～ 3.6V です。

(1) 消費電力が大きいモードから小さいモードへ切り替える場合

例 1：High-speed モードから Low-speed モードへの切り替え

最初は High-speed モードで動作しています。

1. フラッシュキャッシュが High-speed モードでキャッシャブルなときに、FCACHEE.FCACHEEN をリセットしてフラッシュキャッシュを禁止する。
2. 発振器を Low-speed モードで使用するものに変更する。
3. 各クロックの周波数を、Low-speed モードにおける最大動作周波数未満にする。
4. Low-speed モードで不要な発振器をオフにする。
5. OPCCR.OPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
6. OPCCR.OPCM ビットを 11b（Low-speed モード）に設定する。
7. OPCCR.OPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
8. フラッシュキャッシュが Low-speed モードでキャッシャブルなときに、以下の手順で設定してください。
   a. FCACHEIV.FCACHEIVを設定してフラッシュキャッシュをインバリデートする。
   b. FCACHEIV.FCACHEIVビットが0であることを確認する。
   c. FCACHEE.FCACHEENビットを設定してフラッシュキャッシュを許可する。

動作は Low-speed モードになります。

例 2：High-speed モードから Subosc-speed モードへの切り替え

最初は High-speed モードで動作しています。

1. フラッシュキャッシュが High-speed モードでキャッシャブルなときに、FCACHEE.FCACHEEN をリセットしてフラッシュキャッシュを禁止する。
2. クロックソースをサブクロック発振器に切り替える。HOCO、MOCO、メイン発振器、および PLL をオフにする。
3. サブクロック発振器以外の全クロックソースが停止していることを確認する。
4. SOPCCR.SOPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
5. SOPCCR.SOPCM ビットを 1（Subosc-speed モード）にする。
6. SOPCCR.SOPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
7. フラッシュキャッシュが Subosc-speed モードでキャッシャブルなときに、以下の手順で設定してください。
   a. FCACHEIV.FCACHEIVを設定してフラッシュキャッシュをインバリデートする。
   b. FCACHEIV.FCACHEIVが0であることを確認します。
   c. FCACHEE.FCACHEENを設定してフラッシュキャッシュを許可します。

動作は Subosc-speed モードになります。

(2) 消費電力が小さいモードから大きいモードへ切り替える場合

例 1：Subosc-speed モードから High-speed モードへの切り替え

最初は Subosc-speed モードで動作しています。

1. フラッシュキャッシュが Subosc-speed モードでキャッシャブルなときに、FCACHEE.FCACHEEN ビットをリセットしてフラッシュキャッシュを禁止する。
2. SOPCCR.SOPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
3. SOPCCR.SOPCM ビットを 0（High-speed モード）にする。
4. SOPCCR.SOPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
5. High-speed モードで必要な発振器をオンにする。
6. 各クロックの周波数を、High-speed モードにおける最大動作周波数未満にする。
7. フラッシュキャッシュ High-speed モードでキャッシャブルなときに、以下の手順で設定してください。
   a. FCACHEIV.FCACHEIV を設定してフラッシュキャッシュをインバリデートする。
   b. FCACHEIV.FCACHEIV が 0 であることを確認する。
   c. FCACHEE.FCACHEEN を設定してフラッシュキャッシュを許可する。

動作は High-speed モードになります。

例 2：Low-speed モードから High-speed モードへの切り替え

最初は Low-speed モードで動作しています。

1. フラッシュキャッシュが Low-speed モードでキャッシャブルなときに、FCACHEE.FCACHEEN をリセットしてフラッシュキャッシュを禁止する。
2. OPCCR.OPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
3. OPCCR.OPCM ビットを 00b（High-speed モード）にする。
4. OPCCR.OPCMTSF フラグが 0（遷移完了）であることを確認する。
5. High-speed モードで必要な発振器をオンにする。
6. 各クロックの周波数を、High-speed モードにおける最大動作周波数未満にする。
7. フラッシュキャッシュ High-speed モードでキャッシャブルなときに、以下の手順で設定してください。
   a. FCACHEIV.FCACHEIV を設定してフラッシュキャッシュをインバリデートする。
   b. FCACHEIV.FCACHEIV が 0 であることを確認する。
   c. FCACHEE.FCACHEEN を設定してフラッシュキャッシュを許可する。

動作は High-speed モードになります。

11.5.2 動作範囲

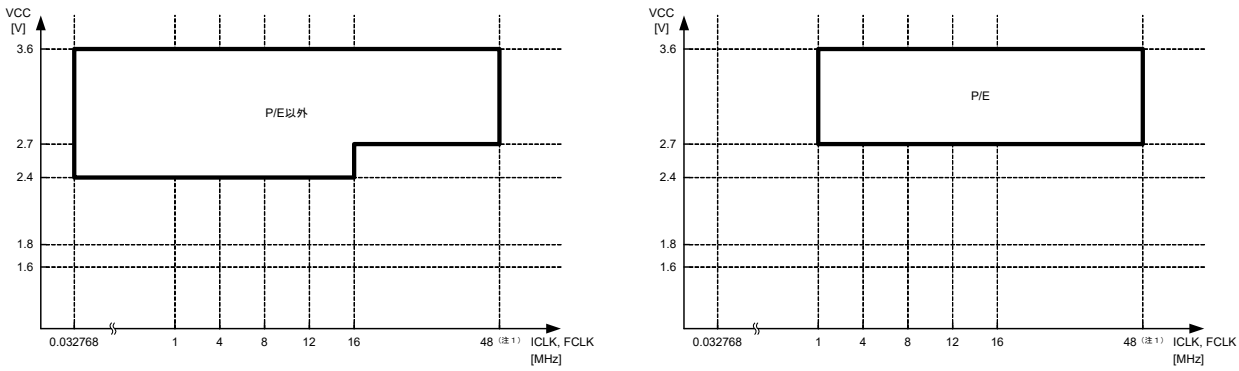
High-speed モード

フラッシュリード時の最大動作周波数は、ICLK では 48MHz、FCLK では 32MHz です。フラッシュリード時の動作電圧範囲は 2.4 ～ 3.6V です。ただし、ICLK と FCLK では、動作電圧が 2.4V 以上かつ 2.7V 未満の場合、フラッシュリード時の最大動作周波数は 16MHz になります。

フラッシュプログラムおよびイレース時では、動作周波数範囲は 1 ～ 48MHz、動作電圧範囲は 2.7 ～ 3.6V です。

動作電圧が 2.4V 以上の場合、PLL が使用可能です。

図 11.2 に、High-speed モードにおける動作電圧と動作周波数を示します。



注1. FCLKの最大周波数は32MHzです。

図 11.2 High-speed モードにおける動作電圧と動作周波数

Middle-speed モード

このモードでは、同じ条件下で High-speed モードよりも消費電力を低減できます。

フラッシュリード時の最大動作周波数は、ICLK と FCLK で 12MHz です。フラッシュリード時の動作電圧範囲は 1.8 ～ 3.6V です。ただし、ICLK と FCLK では、動作電圧が 1.8V 以上かつ 2.4V 未満の場合、フラッシュリード時の最大動作周波数は 8MHz になります。

フラッシュプログラムおよびイレース時では、動作周波数範囲は 1 ～ 12MHz で、動作電圧範囲は 1.8 ～ 3.6V です。動作電圧が 1.8V 以上かつ 2.4V 未満の場合、フラッシュプログラムおよびイレース時の最大動作周波数は 8MHz になります。

動作電圧が 2.4V 以上の場合、PLL が使用可能です。

図 11.3 に、Middle-speed モードにおける動作電圧と動作周波数を示します。

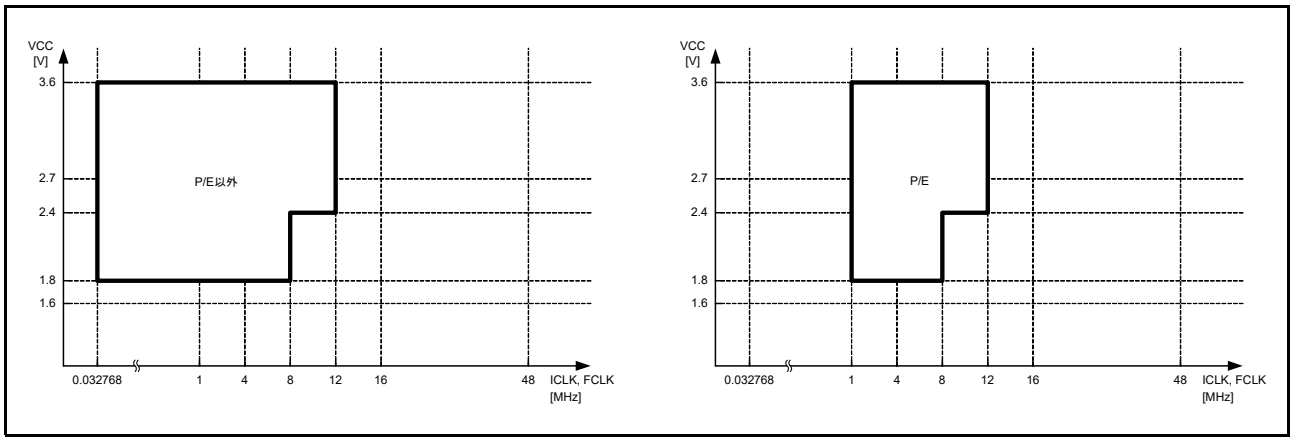


図 11.3 Middle-speed モードにおける動作電圧と動作周波数

Low-voltage モード

リセット解除後、このモードで動作が開始されます。PLL は使用禁止です。

フラッシュリード時の最大動作周波数は、ICLK と FCLK で 4MHz です。フラッシュリード時の動作電圧範囲は 1.8 ～ 3.6V です。

フラッシュプログラムおよびイレース時では、動作周波数範囲は 1 ～ 4MHz で、動作電圧範囲は 1.8 ～ 3.6V です。PLL は使用禁止です。

図 11.4 に、Low-voltage モードにおける動作電圧と動作周波数を示します。

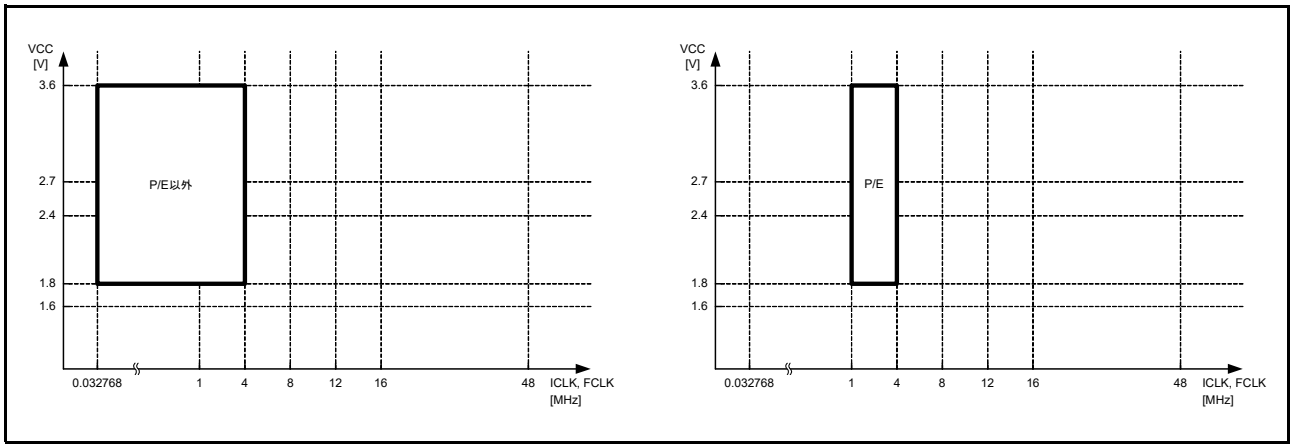


図 11.4 Low-voltage モードにおける動作電圧と動作周波数

Low-speed モード

フラッシュリード時の最大動作周波数は、ICLK と FCLK で 1MHz です。フラッシュリード時の動作電圧範囲は 1.8 ～ 3.6V です。

フラッシュメモリの P/E 動作は禁止です。PLL は使用禁止です。

図 11.5 に、Low-speed モードにおける動作電圧と動作周波数を示します。

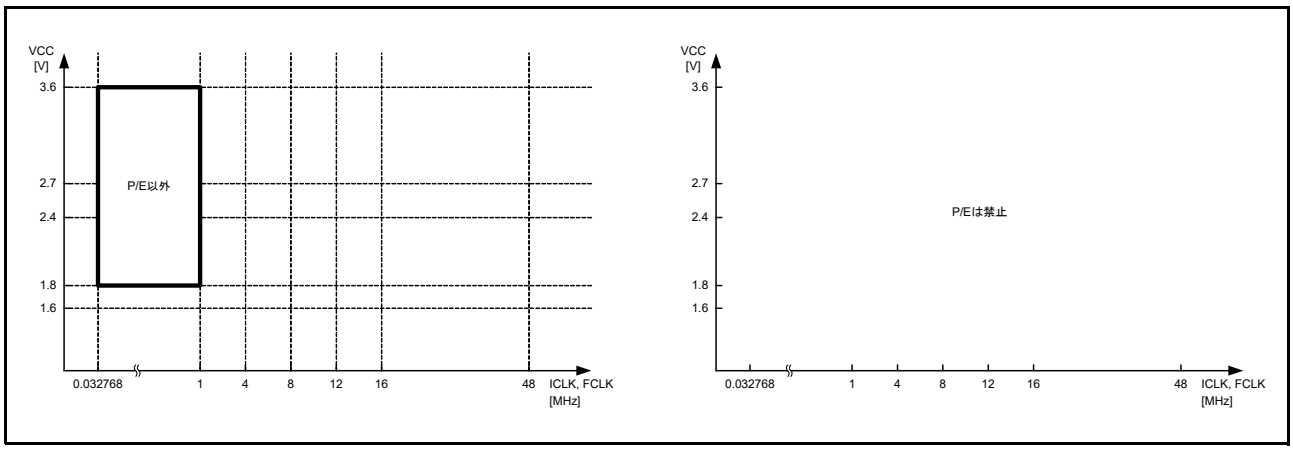


図 11.5 Low-speed モードにおける動作電圧と動作周波数

Subosc-speed モード

フラッシュリード時の最大動作周波数は、ICLK と FCLK で 37.6832kHz です。フラッシュリード時の動作電圧範囲は 1.8 ～ 3.6V です。

フラッシュメモリの P/E 動作は禁止です。サブクロック発振器と低速オンチップオシレータ以外の発振器は使用禁止です。

図 11.6 に、Subosc-speed モードにおける動作電圧と動作周波数を示します。

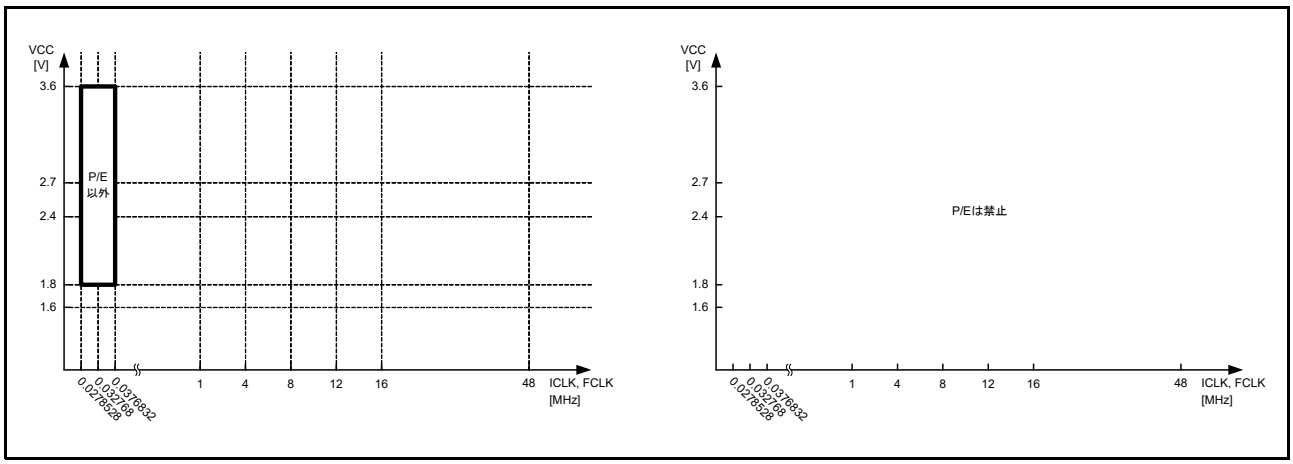


図 11.6 Subosc-speed モードにおける動作電圧と動作周波数

11.6 スリープモード

11.6.1 スリープモードへの遷移

SBYCR.SSBY ビットが 0 の状態で WFI 命令を実行すると、MCU はスリープモードへ遷移します。このモードでは、CPU は動作を停止しますが、CPU の内部レジスタの値は保持されます。CPU 以外の周辺機能は停止しません。スリープモードで利用可能なリセットまたは割り込みが発生すると、スリープモードが解除されます。すべての割り込み要因が利用可能です。割り込みを使用してスリープモードを解除する場合、WFI 命令の実行前に、対応する IELSRn レジスタを設定する必要があります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

IWDT がオートスタートモードであり、かつ OFS0.IWDTSTPCTL ビットが 1（スリープモード、ソフトウェアスタンバイモード、またはスヌーズモード時に IWDT カウント停止）の場合、MCU がスリープモードへ遷移すると IWDT はカウントを停止します。IWDT がオートスタートモードであり、かつ OFS0.IWDTSTPCTL ビットが 0（スリープモード、ソフトウェアスタンバイモード、またはスヌーズモード時に IWDT カウント継続）の場合、MCU がスリープモードへ遷移しても IWDT はカウントを継続します。

WDT がオートスタートモードであり、かつ OFS0.WDTSTPCTL ビットが 1（スリープモード時に WDT カウント停止）の場合、MCU がスリープモードへ遷移すると WDT はカウントを停止します。同様に、WDT がレジスタスタートモードであり、かつ WDTCSTPR.SLCSTP ビットが 1（スリープモード時に WDT カウント停止）の場合、MCU がスリープモードへ遷移すると WDT はカウントを停止します。

WDT がオートスタートモードであり、かつ OFS0.WDTSTPCTL ビットが 0（スリープモード時に WDT カウント継続）の場合、MCU がスリープモードへ遷移しても WDT はカウントを継続します。同様に、WDT がレジスタスタートモードであり、かつ WDTCSTPR.SLCSTP ビットが 0（スリープモード時に WDT カウント継続）の場合、MCU がスリープモードへ遷移しても WDT はカウントを継続します。

11.6.2 スリープモードの解除

スリープモードは、割り込みによって解除されます：

- RES 端子リセット
- パワーオンリセット
- 電圧監視リセット
- SRAM パリティエラーリセット
- SRAM ECC エラーリセット
- バスマスタ MPU エラーリセット
- バススレーブ MPU エラーリセット
- IWDT または WDT アンダーフローによるリセット

動作は以下の通りです：

1. 割り込みによる解除
   利用可能な割り込み要求が発生すると、スリープモードが解除されて、MCU は割り込み処理を開始します。
2. RES 端子リセットによる解除
   RES 端子を Low にすると、MCU はリセット状態になります。「48. 電気的特性」に示す規定の期間に従って、RES 端子を Low に保つようにしてください。規定の期間が経過した後、RES 端子を High にすると、CPU はリセット例外処理を開始します。
3. IWDT リセットによる解除
   IWDT アンダーフローによる内部リセットが発生すると、スリープモードが解除されて、MCU はリセット例外処理を開始します。ただし、下記の条件下では、スリープモード時に IWDT が停止して、スリープモードを解除するための内部リセットが発生しません。
   - OFS0.IWDTSTRT = 0 かつ OFS0.IWDTSTPCTL = 1

4. WDT リセットによる解除
   WDT アンダーフローによる内部リセットが発生すると、スリープモードが解除されて、MCU はリセット例外処理を開始します。ただし、下記の条件下では、通常モード時にカウントしている場合でも WDT はスリープモードで停止して、スリープモードを解除するための内部リセットが発生しません。
   - OFS0.WDTSTRT = 0（オートスタートモード）かつ OFS0.WDTSTPCTL = 1
   - OFS0.WDTSTRT = 1（レジスタスタートモード）かつ WDTCSTPR.SLCSTP = 1
5. スリープモードで利用可能な他のリセットによる解除
   その他の利用可能なリセットによってスリープモードは解除され、MCU はリセット例外処理を開始します。

注 . 割り込みの正しい設定方法については、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

11.7 ソフトウェアスタンバイモード

11.7.1 ソフトウェアスタンバイモードへの遷移

SBYCR.SSBY ビットが 1 の状態で WFI 命令を実行すると、MCU はソフトウェアスタンバイモードへ遷移します。このモードでは、CPU、ほとんどの内蔵周辺機能、および発振器が停止します。ただし、CPU の内部レジスタの値と SRAM データ、内蔵周辺機能と I/O ポートの状態は保持されます。ソフトウェアスタンバイモードでは、ほとんどの発振器が停止するため、消費電力が大幅に削減されます。表 11.2 には、各内蔵周辺機能と発振器の状態が示されています。ソフトウェアスタンバイモードで利用可能なリセットまたは割り込みが発生すると、ソフトウェアスタンバイモードが解除されます。利用可能な割り込み要因については表 11.3 を、ソフトウェアスタンバイモードから復帰させる方法については、14.2.9 ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ（WUPEN）を参照してください。割り込みを使用してソフトウェアスタンバイモードを解除する場合、WFI 命令の実行前に、対応する IELSRn レジスタを設定する必要があります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

スヌーズモード時に DTC を使用する場合を除き、DMAST.DMST ビットと DTCST.DTCST ビットを 0 に設定してから WFI 命令を実行してください。スヌーズモード時に DTC が必要な場合は、DTCST.DTCST ビットを 1 にしてから WFI 命令を実行してください。

IWDT がオートスタートモードであり、かつ OFS0.IWDTSTPCTL ビットが 1（スリープモード、ソフトウェアスタンバイモード、およびスヌーズモード時に IWDT カウント停止）の場合、MCU がソフトウェアスタンバイモードへ遷移すると IWDT はカウントを停止します。IWDT がオートスタートモードであり、かつ OFS0.IWDTSTPCTL ビットが 0（スリープモード、ソフトウェアスタンバイモード、またはスヌーズモード時に IWDT カウント継続）の場合、MCU がソフトウェアスタンバイモードへ遷移しても IWDT はカウントを継続します。

MCU がソフトウェアスタンバイモードへ遷移すると、WDT はカウントを停止します。

OSTDCR.OSTDE = 1（発振停止検出機能が有効）の状態で、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移しないでください。ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、発振停止検出機能を無効（OSTDCR.OSTDE = 0）にした後、WFI 命令を実行してください。OSTDCR.OSTDE = 1 の状態で WFI 命令を実行すると、SBYCR.SSBY = 1 であっても、MCU はスリープモードへ遷移します。また、フラッシュメモリのプログラム／イレース処理中は、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移しないでください。ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、プログラム／イレース処理が完了してから WFI 命令を実行してください。

11.7.2 ソフトウェアスタンバイモードの解除

ソフトウェアスタンバイモードは以下の要因により解除されます。

- 表 11.3 に示す利用可能な割り込み
- RES 端子リセット
- パワーオンリセット
- 電圧監視リセット
- IWDT アンダーフローによるリセット

ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に動作していた発振器が動作を再開します。すべての発振器が安定してから、MCU はソフトウェアスタンバイモードから通常モードへ復帰します。ソフトウェアスタンバイモードから復帰させる方法については、14.2.9 ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ（WUPEN）を参照してください。

以下の方法のいずれかによって、ソフトウェアスタンバイモードを解除できます。

1. 割り込みによる解除
   利用可能な割り込み要求（表 11.3 を参照）が発生すると、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に動作していた発振器が動作を再開します。すべての発振器が安定してから、MCU はソフトウェアスタンバイモードから通常モードへ復帰し、割り込み処理を開始します。
2. RES 端子リセットによる解除
   RES 端子を Low にすると、MCU はリセット状態に遷移し、デフォルト状態で動作している発振器が発振を開始します。「48. 電気的特性」に示す規定の期間に従って、RES 端子を Low に保つようにしてください。規定の期間が経過した後、RES 端子を High にすると、CPU はリセット例外処理を開始します。
3. パワーオンリセットによる解除
   パワーオンリセットによってソフトウェアスタンバイモードが解除され、MCU はリセット例外処理を開始します。
4. 電圧監視リセットによる解除
   電圧検出回路による電圧監視リセットによってソフトウェアスタンバイモードが解除され、MCU はリセット例外処理を開始します。
5. IWDT リセットによる解除
   IWDT アンダーフローによる内部リセットが発生すると、ソフトウェアスタンバイモードが解除され、MCU はリセット例外処理を開始します。ただし、下記の条件下では、ソフトウェアスタンバイモード時に IWDT が停止して、ソフトウェアスタンバイモードを解除するための内部リセットが発生しません。
   - OFS0.IWDTSTRT = 0 かつ OFS0.IWDTSTPCTL = 1

11.7.3 ソフトウェアスタンバイモードの応用例

IRQn 端子の立ち下がりエッジ検出時のソフトウェアスタンバイモードへの遷移と、IRQn 端子の立ち上がりエッジによるソフトウェアスタンバイモードの解除の例を図 11.7 に示します。

この例では、通常モードにおいて、ICU の IRQCRi.IRQMD[1:0] ビットが 01b（立ち下がりエッジ）の状態で IRQn 端子の割り込みを受け付けた後、IRQCRi.IRQMD[1:0] ビットを 10b（立ち上がりエッジ）にしています。続いて、SBYCR.SSBY ビットを 1 にした後、WFI 命令を実行しています。その結果、ソフトウェアスタンバイモードへの遷移が完了し、その後、IRQn 端子の立ち上がりエッジによってソフトウェアスタンバイモードが解除されます。

ソフトウェアスタンバイモードからの復帰には、ICU の設定も必要になります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。図 11.7 の発振安定時間については、「48. 電気的特性」に示されています。

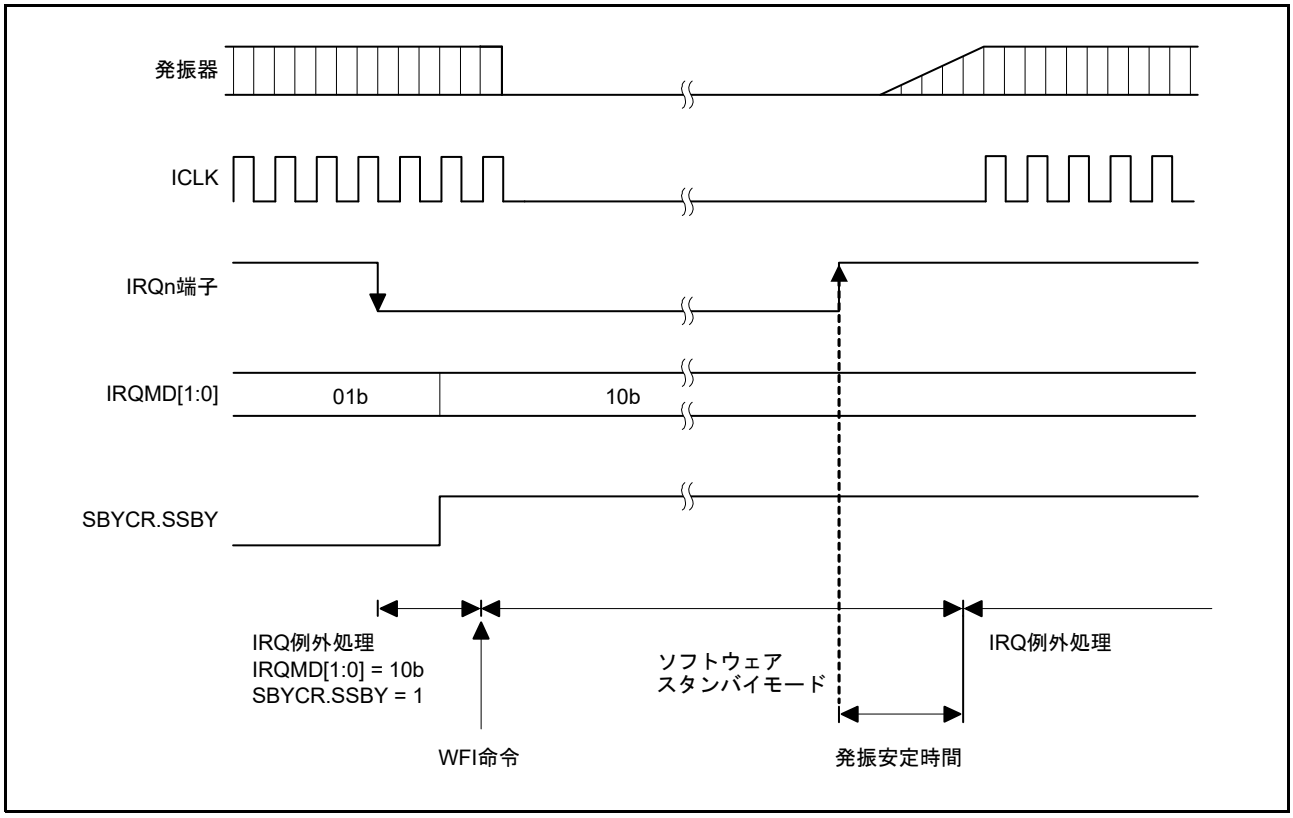


図 11.7 ソフトウェアスタンバイモードの応用例

11.8　スヌーズモード

11.8.1　スヌーズモードへの遷移

図 11.8 に、スヌーズモードエントリの構成を示します。ソフトウェアスタンバイモード時に、スヌーズ制御回路がスヌーズ要求を受信すると、MCU はスヌーズモードへ遷移します。このモードでは、CPU が復帰していなくても一部の周辺モジュールは動作します。スヌーズモードで動作可能な周辺モジュールを、表 11.2　各低消費電力モードの動作状態に示します。また、スヌーズモード時の DTC の動作は、SNZCR.SNZDTCEN ビットで選択できます。

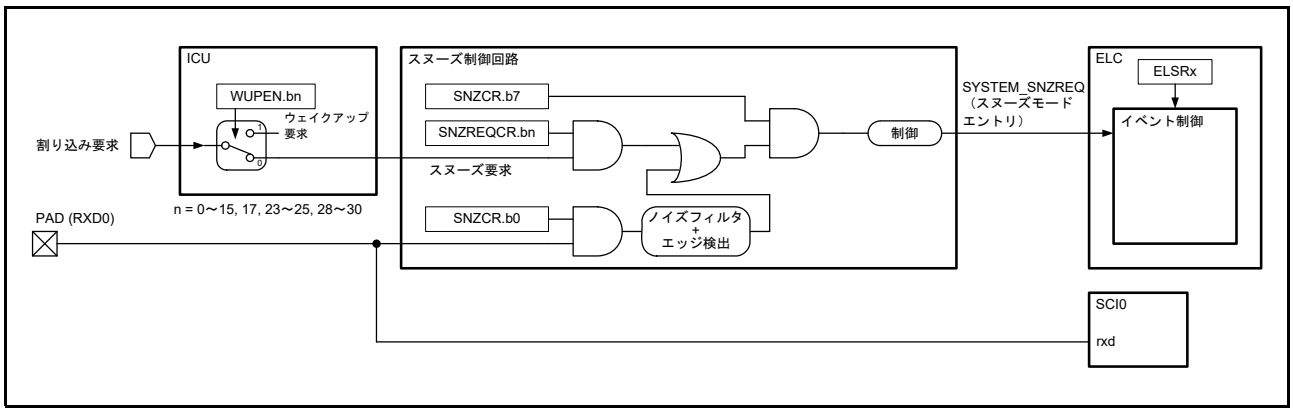


図 11.8　スヌーズモードエントリの構成

表 11.6 に、ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへの切り替えに利用可能なスヌーズ要求を示します。これらのスヌーズ要求をスヌーズモードへ切り替えるためのトリガとして使用するには、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、SNZREQCR レジスタの対応する SNZREQENn ビット、または SNZCR レジスタの RXDREQEN ビットを設定する必要があります。同時に複数のスヌーズ要求を有効にしないでください。

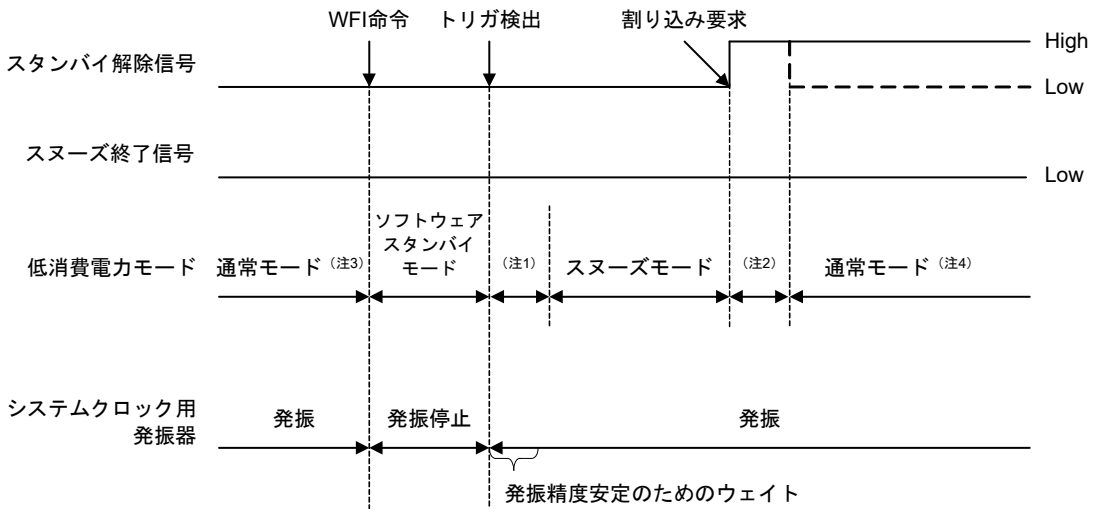
表 11.6　スヌーズモードへの切り替えに利用可能なスヌーズ要求

スヌーズ要求	コントロールレジスタ	
	レジスタ	ビット
PORT_IRQn（n = 0～4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）	SNZREQCR	SNZREQENn（n = 0～15）
KEY_INTKR	SNZREQCR	SNZREQEN17
ACMP_LP0	SNZREQCR	SNZREQEN23
RTC_ALM	SNZREQCR	SNZREQEN24
RTC_PRD	SNZREQCR	SNZREQEN25
AGT1_AGTI	SNZREQCR	SNZREQEN28
AGT1_AGTCMAI	SNZREQCR	SNZREQEN29
AGT1_AGTCMBI	SNZREQCR	SNZREQEN30
RXD0 立ち下がりエッジ	SNZCR	RXDREQEN（注 1）

注 1.　調歩同期式モード以外の場合、RXDREQEN ビットを 1 にしないでください。

11.8.2　スヌーズモードの解除

スヌーズモードは、ソフトウェアスタンバイモードで利用可能な割り込み要求、またはすべてのリセットで解除されます。各モードを解除するために使用可能な要求を、表 11.3 に示します。スヌーズモードの解除後、MCU は通常モードへ遷移して、該当の割り込みまたはリセットの例外処理を開始します。SELSR0 レジスタで選択した割り込み要求によって引き起こされる動作が、スヌーズモードを解除します。スヌーズモードを解除するための割り込みは、対応する割り込み処理の NVIC とリンクさせるため、IELSRn（n = 0 ～ 31）で選択する必要があります。SELSR0 レジスタと IELSRn レジスタについては、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。



注1.　ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへの遷移時間
注2.　スヌーズモードから通常モードへの遷移時間
注3.　ソフトウェアスタンバイモードへ切り替わる直前にスヌーズモードを許可します（SNZCR.SNZE = 1）。
注4.　通常モードへの復帰直後に必ずスヌーズモードを禁止してください（SNZCR.SNZE = 0）。

図 11.9　　スヌーズモード時に割り込み要求信号が発生する場合

11.8.3 ソフトウェアスタンバイモードへの復帰

表 11.7 に、ソフトウェアスタンバイモードへ復帰するためのトリガとして使用可能なスヌーズ終了要求を示します。スヌーズ終了要求は、スヌーズモードでのみ利用可能です。MCU がスヌーズモード状態でないときに要求が発生しても、それらは無視されます。複数の要求を選択した場合、それぞれの要求がスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへの遷移を行います。

表 11.8 に、スヌーズ終了条件を構成するスヌーズ終了要求と周辺モジュールの条件を示します。CTSU、SCI0、ADC140、および DTC は、それらの動作が完了するまで MCU をスヌーズモード状態に保ちます。ただし、ソフトウェアスタンバイモードへの復帰トリガとしての AGT1 アンダーフローは、SCI0 の動作完了を待たずにスヌーズモードを解除します。

図 11.10 に、スヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへ遷移する際のタイミング図を示します。このようなモード遷移は、SNZEDCR レジスタで設定したスヌーズ終了要求に従って発生します。ソフトウェアスタンバイモードへ遷移後、スヌーズ要求は自動的にクリアされます。

表 11.7 利用可能なスヌーズ終了要求（ソフトウェアスタンバイモードへの遷移トリガ）

スヌーズ終了要求	許可／禁止制御	
	レジスタ	ビット
AGT1アンダーフローまたは測定終了（AGT1_AGTI）	SNZEDCR	b0
DTC転送終了時（DTC_COMPLETE）	SNZEDCR	b1
DTC転送終了前（DTC_TRANSFER）	SNZEDCR	b2
ADC140ウィンドウA/Bコンペアマッチ（ADC140_WCMPM）	SNZEDCR	b3
ADC140ウィンドウA/Bコンペア不一致（ADC140_WCMPUM）	SNZEDCR	b4
SCI0アドレス不一致（SCI0_DCUF）	SNZEDCR	b7

表 11.8 スヌーズ終了条件

スヌーズ終了要求発生時の動作モジュール	スヌーズ終了要求	
	AGT1アンダーフロー	AGT1アンダーフロー以外
DTC	左記の全モジュールの動作完了後、MCUはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する。	左記の全モジュールの動作完了後、MCUはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する。
ADC140		
CTSU		
SCI0	スヌーズ終了要求の発生後、MCUはただちにソフトウェアスタンバイモードへ遷移する。	
上記以外	スヌーズ終了要求の発生後、MCUはただちにソフトウェアスタンバイモードへ遷移する。	

注 . DTC を用いて ADC140、CTSU、または SCI を起動した場合は、スヌーズ終了要求の発生後、MCU はソフトウェアスタンバイモードへ遷移します。

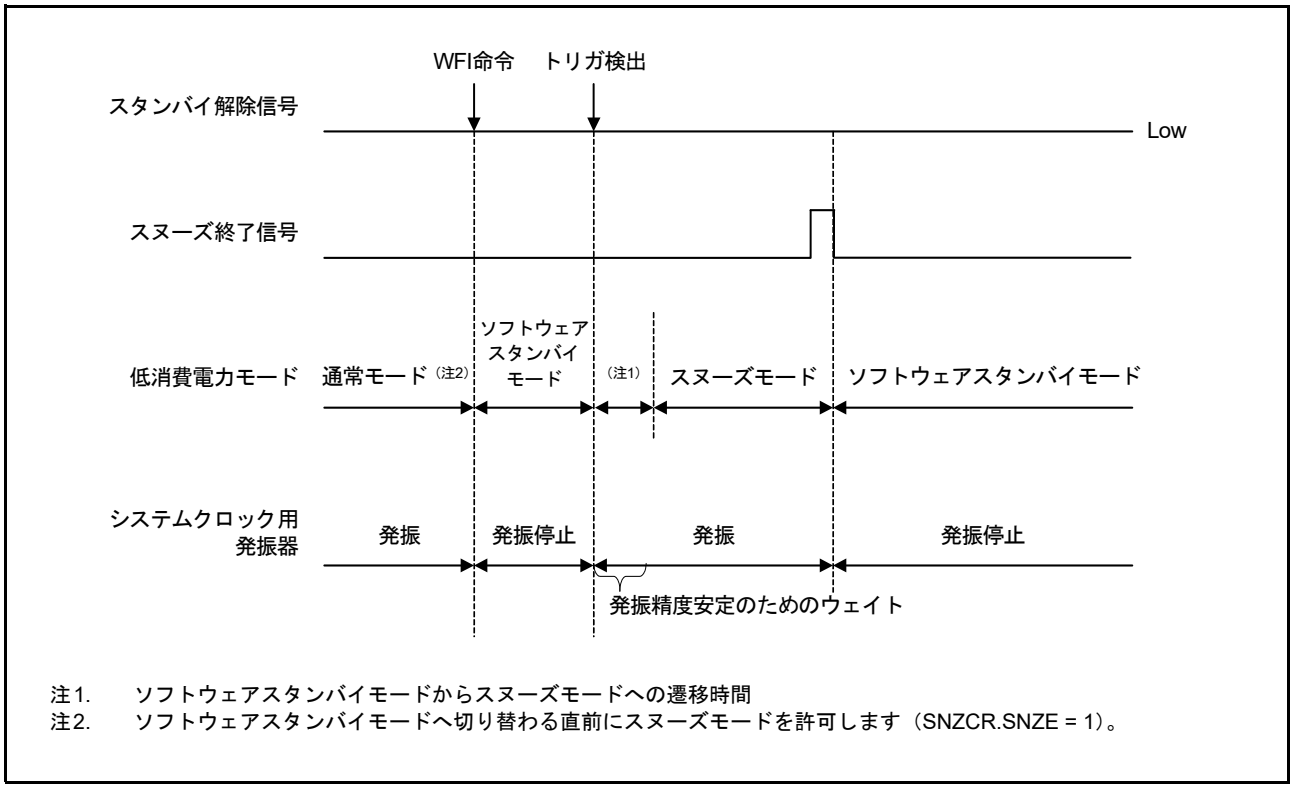


図 11.10 スヌーズモード時に割り込み要求信号が発生しない場合

11.8.4 スヌーズモードの動作例

図 11.11 に、スヌーズモードで ELC を使用する場合の設定例を示します。

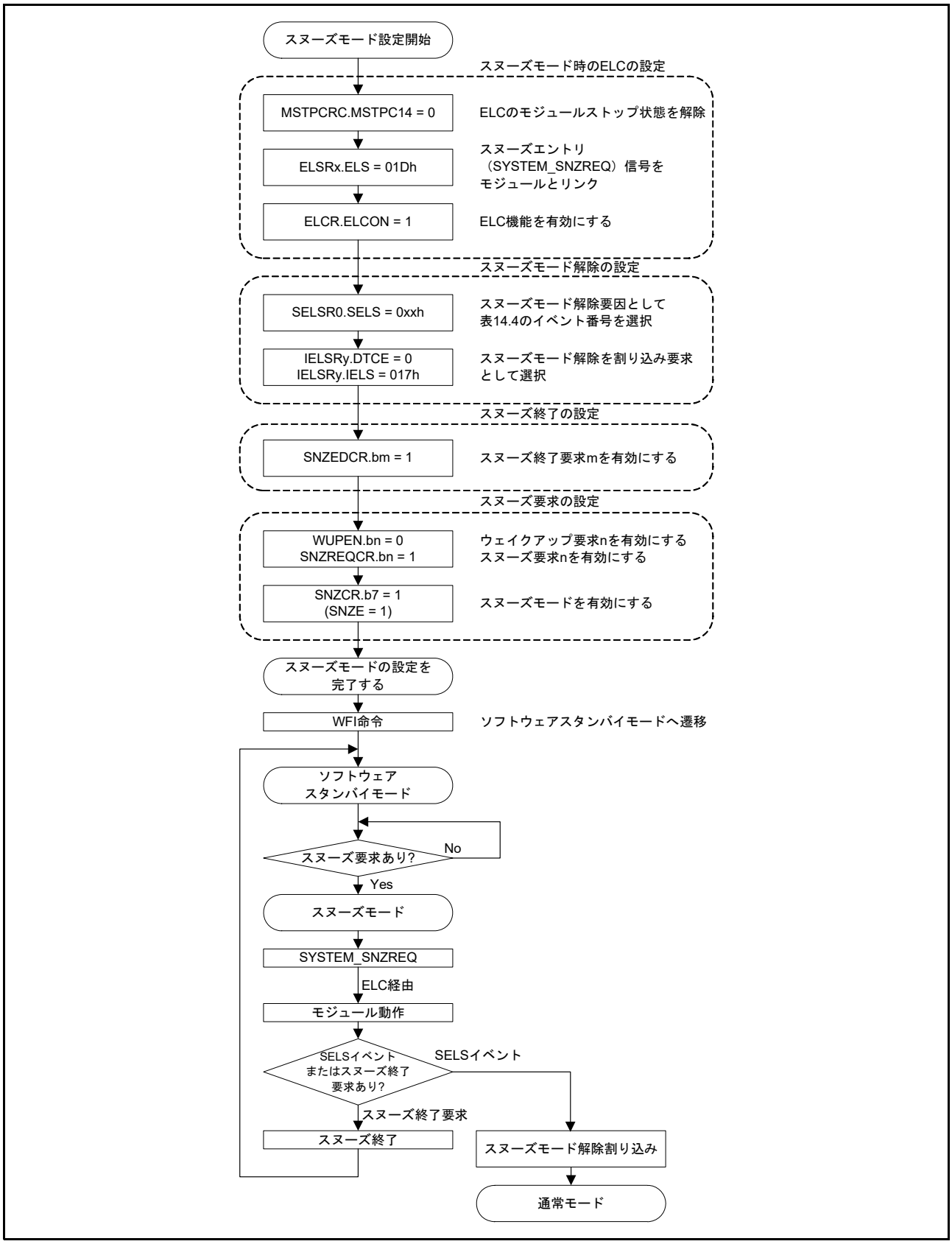


図 11.11 スヌーズモードで ELC を使用するための設定例

本 MCU は、CPU を介さずに SCI0 の調歩同期式モードでデータの送受信が可能です。表 11.9 および表 11.10 に、スヌーズモードにおける SCI0 の最大転送速度を示します。スヌーズモードで SCI0 を使用する場合、以下の動作モードのいずれかを使用してください：

- High-speed モード
- Middle-speed モード
- Low-speed モード

Low-voltage モードと Subosc-speed モードは使用しないでください。

表 11.9 および表 11.10 に、スヌーズモードにおける SCI0 の最大転送速度を示します。SCI0 をスヌーズモードで使用している場合は BGDM ビットを 0 に、ABCS ビットを 0 に、ABCSE ビットを 0 にしてください。詳細は、「29. シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）」を参照してください。

High-speed モード、Middle-speed モード、Low-speed モード

表 11.9 HOCO: ± 1.0% (Ta = -20～+85℃) **（単位：bps）**

ICLK, PCLKA, PCLKB, PCLKC, PCLKD, FCLK, TRCLKの最大分周比	HOCO周波数			
	24MHz	32MHz	48MHz	64MHz
1	9600（注1）	—	—	—
2	9600（注2）	9600（注4）	4800	—
4	9600（注3）	9600（注5）	4800	2400
8	4800	4800	4800	2400
16	4800	4800	4800	2400
32	2400	2400	2400	2400
64	2400	2400	2400	2400

注 1. 9600bps の場合は、SCI0.SMR.CKS[1:0] = 00b、SCI0.SEMR.BRME = 1、SCI0.BRR = 3Dh、SCI0.MDDR = CEh を使用する必要があります。
注 2. 9600bps の場合は、SCI0.SMR.CKS[1:0] = 00b、SCI0.SEMR.BRME = 1、SCI0.BRR = 1Eh、SCI0.MDDR = CEh を使用する必要があります。
注 3. 9600bps の場合は、SCI0.SMR.CKS[1:0] = 00b、SCI0.SEMR.BRME = 1、SCI0.BRR = 0Dh、SCI0.MDDR = BAh を使用する必要があります。
注 4. 9600bps の場合は、SCI0.SMR.CKS[1:0] = 00b、SCI0.SEMR.BRME = 1、SCI0.BRR = 32h、SCI0.MDDR = FEh を使用する必要があります。
注 5. 9600bps の場合は、SCI0.SMR.CKS[1:0] = 00b、SCI0.SEMR.BRME = 1、SCI0.BRR = 18h、SCI0.MDDR = F9h を使用する必要があります。

High-speed モード、Middle-speed モード、Low-speed モード

表 11.10 HOCO: ± 2.0% (Ta = -40～-20℃) **（単位：bps）**

ICLK, PCLKA, PCLKB, PCLKC, PCLKD, FCLK, TRCLKの最大分周比	HOCO周波数			
	24MHz	32MHz	48MHz	64MHz
1	2400	—	—	—
2	2400	2400	2400	—
4	2400	2400	2400	1200
8	2400	2400	2400	1200
16	2400	2400	2400	1200
32	1200	1200	1200	1200
64	1200	1200	1200	1200

図 11.12 に、スヌーズモードエントリで SCI0 を使用する場合の設定例を示します。

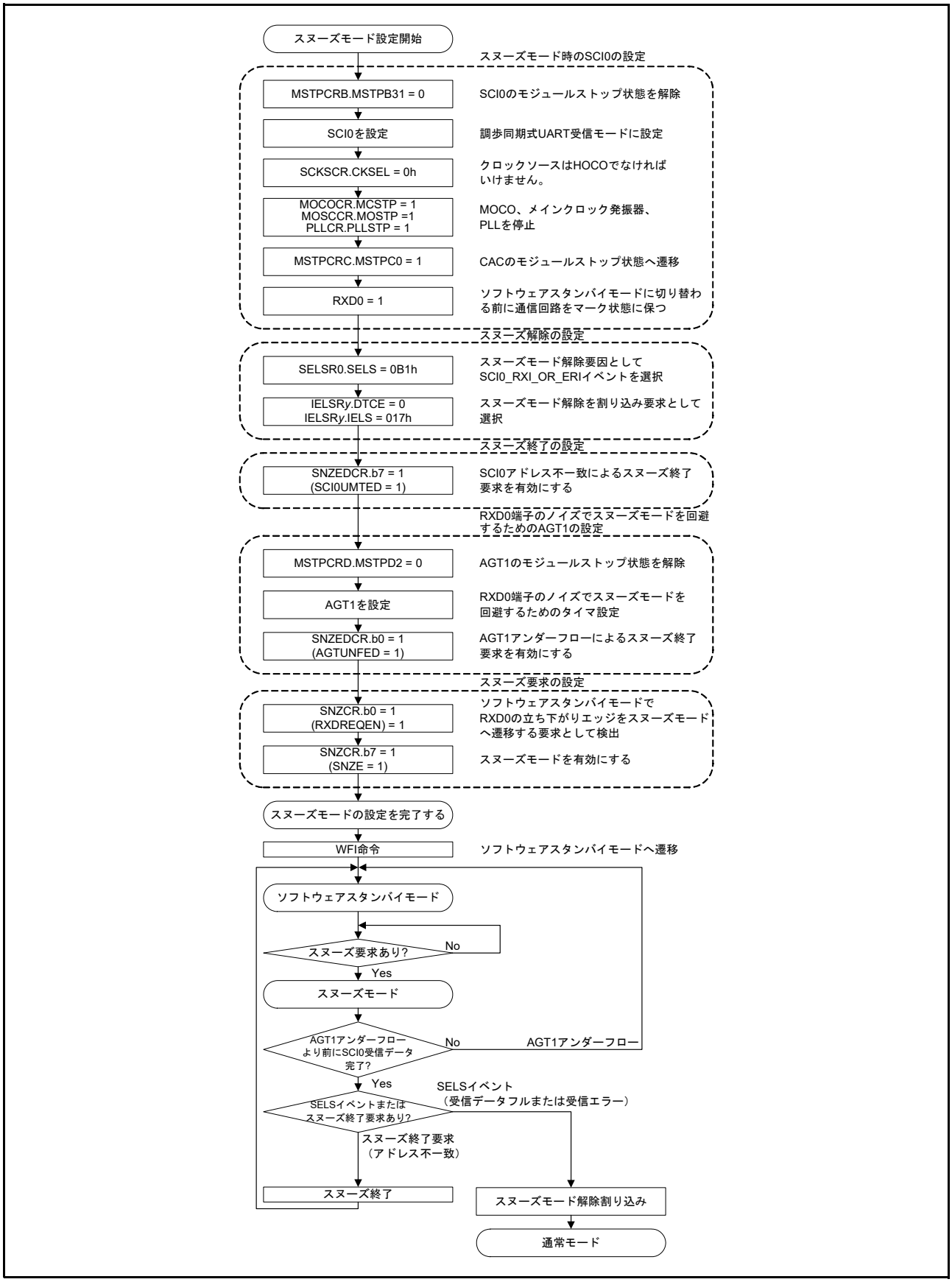


図 11.12　スヌーズモードエントリで SCI0 を使用するための設定例

11.9 使用上の注意事項

11.9.1 レジスタアクセス

(1) 下記の条件のいずれかに当てはまる場合、下記のレジスタに書き込まないでください。

［レジスタ］

- SYSTEM という周辺名をもつ全レジスタ

［条件］

- OPCCR.OPCMTSF = 1 または SOPCCR.SOPCMTSF = 1（動作電力制御モードへの遷移中）
- WFI 命令の実行から、通常モードへ復帰するまでの期間中
- FENTRYR.FENTRY0 = 1 または FENTRYR.FENTRYD = 1（フラッシュ P/E モード、データフラッシュ P/E モード）
- FLSTOP.FLSTPF = 1（遷移中）

(2) クロック関連レジスタの有効な設定値

表 11.11 と表 11.12 に、各動作電力制御モードにおけるクロック関連レジスタの有効な設定値を示します。これら有効な設定値以外を書き込まないようにしてください。書き込んでも無視されます。また、各レジスタには、動作電力制御モード以外の特定の条件下で禁止される設定値もあります。各レジスタに対する他の条件については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

表 11.11 クロック関連レジスタに対する有効な設定値（1）

モード	有効な設定値								
	SCKSCR.CKSEL[2:0], CKOCR.CKOSEL[2:0]	SCKDIVCR.FCK[2:0], SCKDIVCR.ICK[2:0]	SLCDSCKCR.LCDSCKSEL[2:0]	PLLCR.PLLSTP	HOCOCR.HCSTP	MOCOCR.MCSTP	LOCOCR.LCSTP	MOSCCR.MOSTP	SOSCCR.SOSTP
High-speed, Middle-speed	000b (HOCO) 001b (MOCO) 010b (LOCO) 011b (MOSC) 100b (SOSC) 101b (PLL)（注1）	000b (1/1) 001b (1/2) 010b (1/4) 011b (1/8) 100b (1/16) 101b (1/32) 110b (1/64)	000b (LOCO) 001b (SOSC) 010b (MOSC) 100b (HOCO)	0（動作） 1（停止）	0（動作） 1（停止）	0（動作） 1（停止）	0（動作） 1（停止）	0（動作） 1（停止）	0（動作） 1（停止）
Low-speed, Low-voltage	000b (HOCO) 001b (MOCO) 010b (LOCO) 011b (MOSC) 100b (SOSC)			1（停止）					
Subosc-speed	010b (LOCO) 100b (SOSC)	000b (1/1)	000b (LOCO) 001b (SOSC)	1（停止）	1（停止）	1（停止）	0（動作） 1（停止）	1（停止）	0（動作） 1（停止）

注 1. SCKSCR.CKSEL[2:0] のみ

表 11.12 クロック関連レジスタの有効な設定値（2）

動作発振器	有効な設定値	
	SOPCCR.SOPCM	OPCCR.OPCM[1:0]
PLL	0	00b、01b
高速オンチップオシレータ	0	00b, 01b, 10b, 11b
中速オンチップオシレータ		
メインクロック発振器		
低速オンチップオシレータ	0, 1	00b, 01b, 10b, 11b
サブクロック発振器		
IWDT専用オンチップオシレータ		

(3) 下記の条件に当てはまる場合、下記のレジスタに書き込まないでください。

［レジスタ］

- SCKSCR, OPCCR

［条件］

- SOPCCR.SOPCM = 1（Subosc-speed モード）

(4) DTC または DMAC によって、下記のレジスタに書き込まないでください。

［レジスタ］

- MSTPCRA

(5) スヌーズモード時に、下記のレジスタに書き込まないでください。これらのレジスタの設定は、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に行ってください。

［レジスタ］

- SNZCR, SNZEDCR, SNZREQCR

(6) 下記の条件のいずれかに当てはまる場合、FLSTOP.FLSTOP ビットを 1 にしないでください。

［条件］

- SOPCCR.SOPCM = 0、OPCCR.OPCM[1:0] = 00b（High-speed モード）
- SOPCCR.SOPCM = 0、OPCCR.OPCM[1:0] = 01b（Middle-speed モード）
- SOPCCR.SOPCM = 0、OPCCR.OPCM[1:0] = 11b（Low-speed モード）
- SOPCCR.SOPCM = 1（Subosc-speed モード）

(7) 下記の条件のいずれかに当てはまる場合、MEMWAIT.MEMWAIT ビットを 1 にしないでください。

［条件］

- SOPCCR.SOPCM = 0、OPCCR.OPCM[1:0] = 01（Middle-speed モード）
- SOPCCR.SOPCM = 0、OPCCR.OPCM[1:0] = 10（Low-voltage モード）
- SOPCCR.SOPCM = 0、OPCCR.OPCM[1:0] = 11（Low-speed モード）
- SOPCCR.SOPCM = 1（Subosc-speed モード）

(8) PRCR.PRC1 ビットが 0 の場合、下記のレジスタに対する書き込みは無効です。

［レジスタ］

- SBYCR, SNZCR, SNZEDCR, SNZREQCR, FLSTOP, PSMCR, OPCCR, SOPCCR

11.9.2 I/O ポートの状態

ソフトウェアスタンバイモードおよびスヌーズモード（スヌーズモード時に書き換える場合を除く）における I/O ポートの状態は、各モードへ遷移する前と同じです。したがって、High を出力している間、供給電流は低減されません。

11.9.3 DMAC と DTC のモジュールストップ状態

MSTPCRA.MSTPA22 ビットを 1 にする前に、DMAC の DMAST.DMST ビットと、DTC の DTCST.DTCST ビットを 0 にしてください。詳細は、「17. DMA コントローラ（DMAC）」と「18. データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

11.9.4 内部割り込み要因

モジュールストップ状態では、割り込みの動作ができません。割り込み要求が発生した状態でモジュールストップビットを設定すると、CPU の割り込み要因または DMAC、DTC の起動要因のクリアができません。そのため、事前に対応する割り込みを禁止してから、モジュールストップビットを設定してください。

11.9.5 低消費電力モードへの遷移

本 MCU はイベントによるウェイクアップをサポートしていないため、WFE 命令の実行によって低消費電力モード（スリープモードまたはソフトウェアスタンバイモード）へ遷移させないでください。また、本 MCU は SLEEPDEEP による低消費電力モードをサポートしていないため、Cortex®-M4 コアが内蔵するシステムコントロールレジスタの SLEEPDEEP ビットは設定しないでください。

11.9.6 WFI 命令のタイミング

WFI 命令は、I/O レジスタと CS 領域の書き込みが完了する前に実行されることがあり、その場合、意図しない動作を起こす恐れがあります。これは、I/O レジスタおよび CS 領域への書き込み直後に WFI 命令が実行された場合に生じます。この問題を避けるには、書き込まれたレジスタおよび CS 領域を読み戻すことによって、書き込みの完了を確認することが推奨されます。たとえば、WFI 命令の実行前に MSTPCRB レジスタを読み出すことにより、I/O レジスタへの書き込みを完了させる時間を確保することが可能です。

11.9.7 スリープモード／スヌーズモード時の DMAC または DTC による WDT/IWDT レジスタの書き込みについて

スリープモードやスヌーズモードへ遷移すると WDT や IWDT が停止します。停止中は、DMAC または DTC によって WDT または IWDT 関連のレジスタを書き換えないでください。

11.9.8 スヌーズモードにおける発振器について

ソフトウェアスタンバイモードへ遷移して停止した発振器は、スヌーズモードへの切り替えトリガが発生すると、自動的に動作を再開します。すべての発振器が安定するまで、MCU はスヌーズモードへ遷移しません。スヌーズモード時には、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、必ずスヌーズモードで不要な発振器を無効にしてください。そうしないと、ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへの遷移に時間がかかります。

11.9.9 RXD0 の立ち下がりエッジによるスヌーズモードエントリ

SNZCR.RXDREQEN ビットが 1 の場合、RXD0 端子のノイズが原因で、MCU がソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへ遷移する場合があります。また RXD0 端子のノイズによって、スヌーズモード時に後続の RXD0 データを受信する可能性があります。ノイズ発生後、MCU が RXD0 データを受信しなければ、割り込み（SCI0_ERI や SCI0_RXI など）もアドレス不一致イベントも発生せず、MCU はスヌーズモードを維持します。この問題を避けるには、スヌーズモードで SCI0 を使用する場合、AGT1 アンダーフロー割り込みを用いてソフトウェアスタンバイモードまたは通常モードへ復帰するようにしてください。ただし SCI 通信中は、AGT1 アンダーフロー割り込みがソフトウェアスタンバイモードへの復帰要因とならないように AGT1 を設定してください。これは、SCI0 の動作を中途半端に停止させます。

11.9.10 スヌーズモードにおける SCI0 の使用

スヌーズモードで SCI0 を使用する場合、AGT1 アンダーフロー以外のウェイクアップ要求を使用しないでください。

スヌーズモードで SCI0 を使用する場合は、下記の条件が満たされなければいけません。

- クロックソースは HOCO であること
- MOCO、メインクロック発振器、および PLL は、ソフトウェアスタンバイモード遷移前に停止していること
- RXD0 端子は、ソフトウェアスタンバイモード遷移前に High レベルを維持していること
- SCI 通信中は、ソフトウェアスタンバイモードへの遷移が生じないこと
- ソフトウェアスタンバイモード遷移前に、MSTPCRC.MSTPC0 ビットが 1 であること

11.9.11 スヌーズモードにおける A/D 変換開始条件

スヌーズモードでは、ELC のみが A/D コンバータの開始トリガとなれます。ソフトウェアトリガや ADTRG0 端子は使用しないでください。

11.9.12 スヌーズモードにおける CTSU の条件

スヌーズモードでは、ELC のみが CTSU を起動できます。

11.9.13 スヌーズモードにおける ELC イベント

スヌーズモードで利用可能な ELC イベントを下記に示します。これ以外のイベントは使用しないでください。スヌーズモードへ遷移後、初めて周辺モジュールを起動する場合は、イベントリンク設定レジスタ（ELSRn）において、スヌーズモードエントリイベント（SYSTEM_SNZREQ）をトリガとして設定する必要があります。

- スヌーズモードエントリ（SYSTEM_SNZREQ）
- DTC 転送終了（DTC_DTCEND）
- ADC140 ウィンドウ A/B コンペアマッチ（ADC140_WCMPM）
- ADC140 ウィンドウ A/B コンペア不一致（ADC140_WCMPUM）
- データ演算回路割り込み（DOC_DOPCI）

11.9.14 ADC140 に対するモジュールストップ機能

ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、ADC140 をモジュールストップ状態に設定して消費電力を削減することが推奨されます。この場合、DTC を用いて ADC140 のモジュールストップ状態を解除すると、スヌーズモードで ADC140 が利用可能になります。同様に、スヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへ復帰する前に、DTC を使用してモジュールストップ状態に戻してください。

11.9.15 未使用回路に対するモジュールストップ機能

ユーザモードで使用されない回路はリセットされない可能性があり、また、MCU のリセット中はクロックが供給されないため不安定な状態のまま動作する恐れもあります。このような場合は、MCU が Low-speed モードまたはソフトウェアスタンバイモードへ遷移すると、供給電流が、本ユーザーズマニュアルで指定された値よりも最大で 600μA 高い値に上昇する可能性があります。未使用回路は図 11.13 に示す手順を用いて初期化してください。

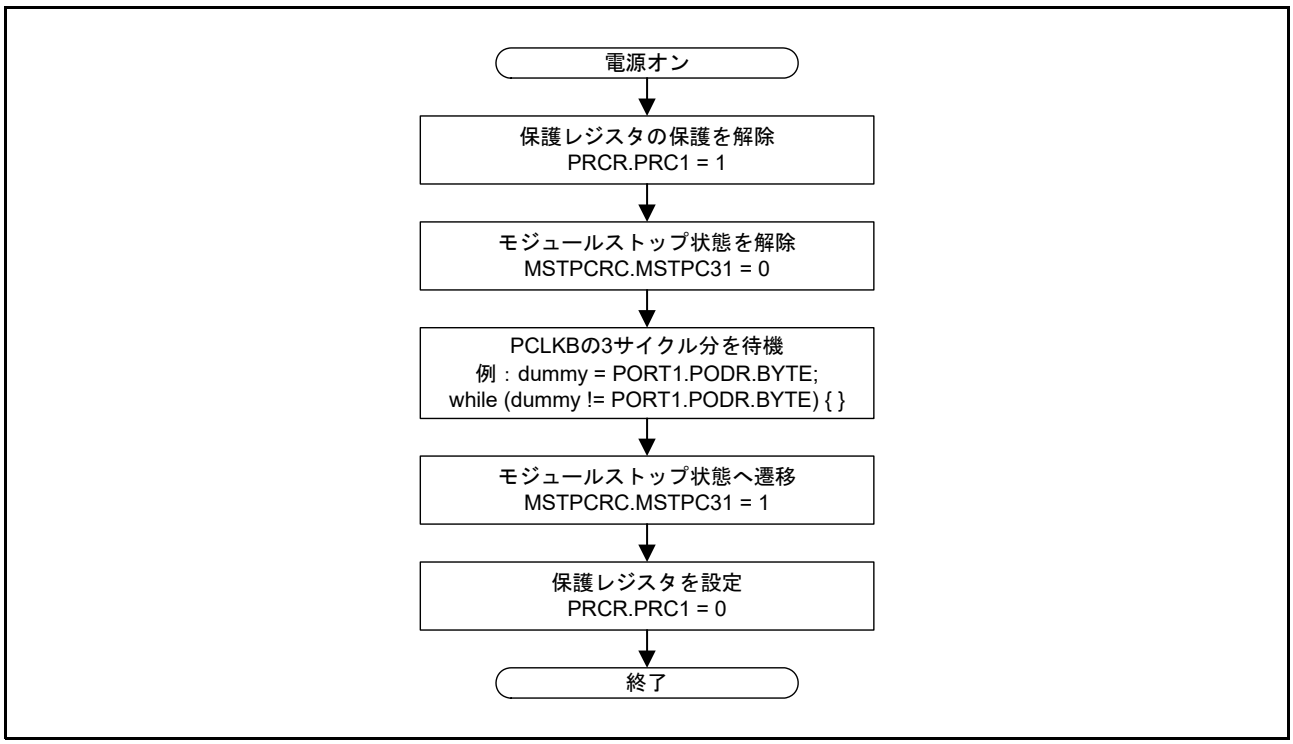


図 11.13 未使用回路の初期設定フロー例

12. バッテリバックアップ機能

12.1 概要

本 MCU は電力損失が生じた場合にバッテリによる部分給電を維持するバッテリバックアップ機能を提供します。VCC 端子と VBATT 端子の切り替えによるバッテリ電源領域には、RTC、SOSC、LOCO、ウェイクアップコントロール／バックアップメモリ、VBATT_R 低電圧検出、および VBATT 低電圧検出が含まれます。

正常に動作しているとき、バッテリ電源領域には主電源（VCC 端子）から電源が供給されます。VCC 端子に電圧降下が検出されると、電源は専用のバッテリバックアップ用電源端子（VBATT 端子）に切り替わります。そして電圧が上昇すると、電源は再び VBATT 端子から VCC 端子へ切り替わります。VBATT ウェイクアップ入出力端子の構成を表 12.1 に示します。

表 12.1 VBATTウェイクアップ入出力端子の構成

端子名	入出力	機能
VBATWIO0	入出力	VBATTウェイクアップコントロール機能用のウェイクアップ信号出力 VBATTウェイクアップコントロール機能用の外部イベント入力

12.1.1 バッテリバックアップ機能

以下の機能で構成されます。

- バッテリ電源スイッチ
- VBATT 端子低電圧検出
- VBATT_R 低電圧検出
- バックアップレジスタ
- VBATT ウェイクアップコントロール機能
- 時間キャプチャ端子検出

12.1.2 バッテリ電源スイッチ

VCC 端子の印加電圧が低下すると、この機能によって、電源が VCC 端子から VBATT 端子に切り替わります。そして電圧が上昇すると、再び VBATT 端子から VCC 端子へ切り替わります。この切り替えは VBTCR1.BPWSWSTP ビットで制御されます。デフォルトで切り替えは有効ですが、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にすることで無効にできます。

12.1.3 VBATT 端子低電圧検出

バッテリ電源領域は、VBATT 端子の低電圧検出機能によってサポートされています。この機能は、VBATT 端子へ供給される電圧状態を監視します。この電源の低電圧状態を検出することが可能です。VBATT ステータスレジスタには、低電圧検出をチェックするフラグがあります。

12.1.4 VBATT_R 低電圧検出

バッテリ電源領域は、VBATT_R 低電圧検出機能によってサポートされています。この機能は、VBATT_R の電圧レベルを監視します。VBATT_R とは、バッテリ電源スイッチの出力電圧です。低電圧検出によって VBATT_POR リセットが発生し、バッテリ電源領域が初期化されます。詳細は、各レジスタの説明を参照してください。VBATT ステータスレジスタには、低電圧検出をチェックするフラグがあります。

12.1.5 バックアップレジスタ

バッテリ電源領域には、512 個の 1 バイトバックアップレジスタが搭載されています。これらのレジスタは、電源が VBATT 端子に供給され、VCC 端子がパワーオフ状態にあるときに限りデータを保持します。このメモリは VBATT 端子の低電圧検出によってチェックされます。

12.1.6 VBATT ウェイクアップコントロール機能

VBATT ウェイクアップコントロール機能とは、VBATT 端子による VBATT_R 供給時に、RTC アラーム／周期信号がアサートされた場合に VBATWIO0 端子のトグル動作を可能にする機能です。

注 . ウェイクアップコントロール機能によるこのトグル動作では、ICU での割り込み、およびリセット対象モジュールへのリセットは発生しません。この機能は、トグルの出力によって、ボードに搭載されている他のデバイスに VCC 電源を制御させる場合などに使用します。詳細は、12.3.5 VBATT ウェイクアップコントロール機能の使用法を参照してください。

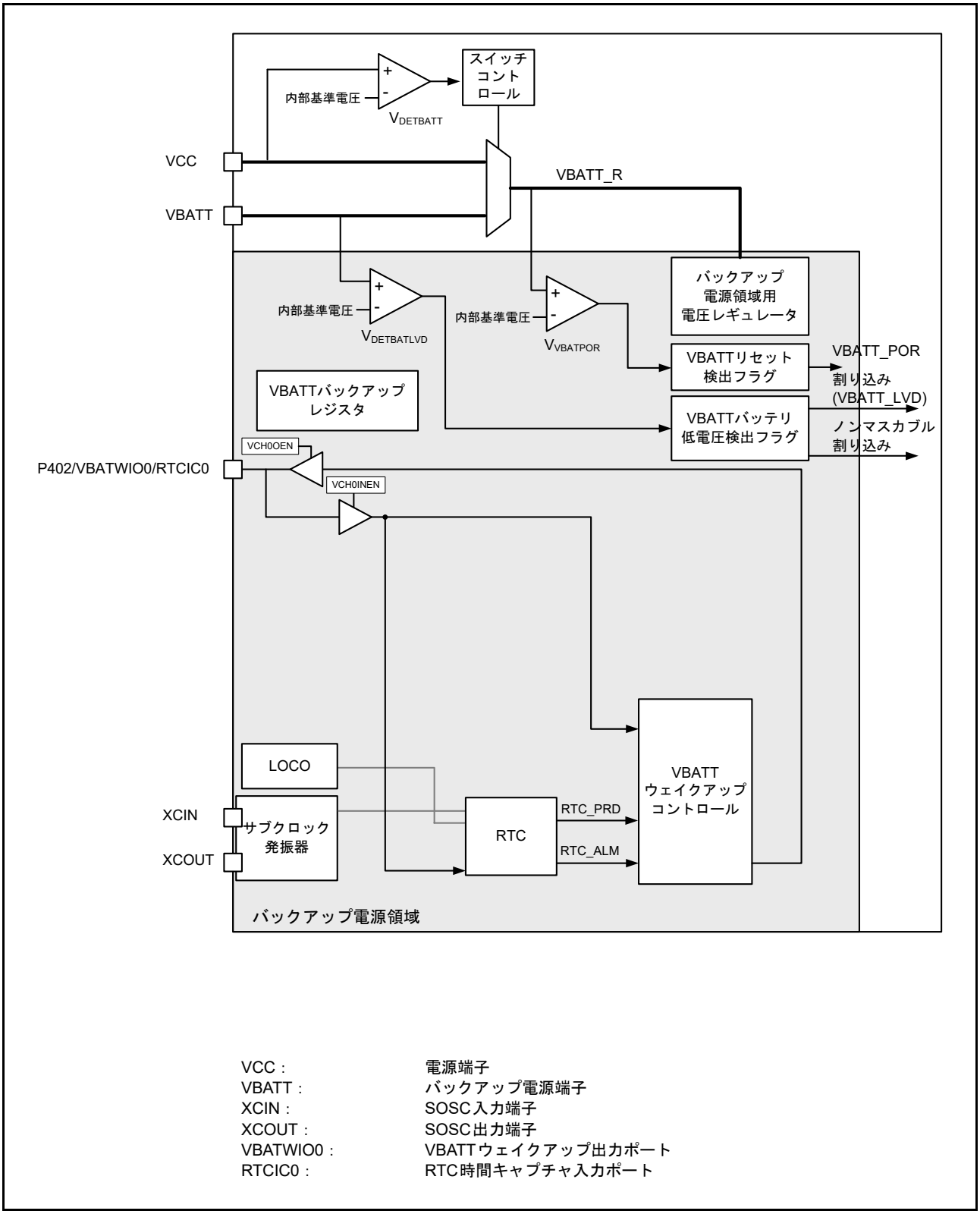
12.1.7 時間キャプチャ端子検出

RTC は、時間キャプチャ端子 RTCIC0 の入力レベルの変化を検出します。
RTCIC0 端子の機能については、「25. リアルタイムクロック（RTC）」を参照してください。RTCIC0 端子を使用するには、12.2 レジスタの説明に従って VBTICTLR レジスタを設定してください。

注 . バッテリバックアップ機能を使用しない場合は、VBATT 端子を VCC 端子に接続する必要があります。

注 . 電源投入時、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にするまで、RTC、SOSC（マルチプレクスポートを含む）、LOCO には電源が供給されません。「48. 電気的特性」に示すように、VBTCR1.BPWSWSTP ビットの設定後、モジュールに電源が供給されるまでには VBATT_POR のリセット時間 tVBATPOR が必要です。VBATT 機能を使用するか否かにかかわらず、パワーオンリセット後は、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にする必要があります。詳細は、12.2.1 VBATT コントロールレジスタ 1（VBTCR1）を参照してください。

図 12.1 に、バッテリバックアップ機能の構成図を示します。



VCC：	電源端子
VBATT：	バックアップ電源端子
XCIN：	SOSC入力端子
XCOUT：	SOSC出力端子
VBATWIO0：	VBATTウェイクアップ出力ポート
RTCIC0：	RTC時間キャプチャ入力ポート

図 12.1　　バッテリバックアップ機能の構成図

12.2　レジスタの説明

12.2.1　VBATT コントロールレジスタ 1（VBTCR1）

アドレス　SYSTEM.VBTCR1 4001 E41Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	BPWSWSTP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	BPWSWSTP	バッテリ電源スイッチ停止	0：バッテリ電源スイッチ有効 1：バッテリ電源スイッチ停止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

BPWSWSTP ビット（バッテリ電源スイッチ停止）

BPWSWSTP ビットでバッテリ電源スイッチを有効にすると、VCC 端子の印加電圧が低下した場合、バッテリバックアップモジュールの供給電圧は VCC 端子から VBATT 端子へ切り替わります。停止にすると、バッテリバックアップモジュールの電源は常に VCC から供給されます。バッテリバックアップ機能を無効にするには、本ビットに 1 を書いてください。本ビットはパワーオンリセットによってのみ初期化されます。

注 .　本ビットは、VBATSR.VBTRVLD ビットの状態をチェックすることなく設定可能です。

注 .　VBATT 機能を使用するか否かにかかわらず、パワーオンリセット後は、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にする必要があります。VBTCR1.BPWSWSTP ビットの設定フローが、図 12.2 に示されています。また、VBATT 機能を使用する際は、他の関連レジスタの設定後に、VBTCR1.BPWSWSTP ビットをクリアする必要があります。

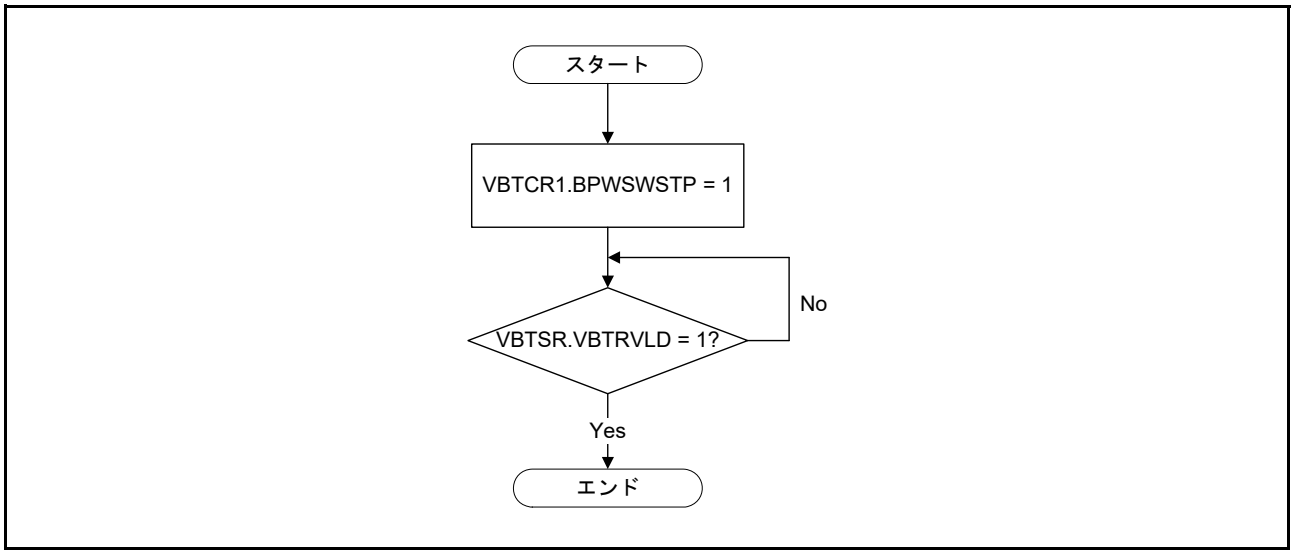


図 12.2　VBTCR1.BPWSWSTP ビットの設定フロー

注 .　図 12.2 では、VBTSR.VBTRVLD ビットが 1 でない場合、ループを抜け出すために VBATT_POR のリセット時間 tVBATPOR（「48.　電気的特性」を参照）を必要とします。
VBTSR.VBTRVLD が 0 の場合、下記のレジスタにはアクセスできません。その他のレジスタは、この条件とは無関係にアクセス可能です。

- 「9.　クロック発生回路」に記載の LOCOCR、LOCOUTCR、SOSCCR、および SOMCR
- VBTCR1 レジスタと VBTSR.VBTRVLD ビットを除く、本章に記載の全レジスタ
- 「25.　リアルタイムクロック（RTC）」に記載の全レジスタ

12.2.2 VBATT コントロールレジスタ 2（VBTCR2）

アドレス SYSTEM.VBTCR2 4001 E4B0h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	VBTLVDLVL[1:0]		—	VBTLVDEN	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	VBTLVDEN	VBATT端子低電圧検出有効	0：VBATT端子の低電圧検出は無効 1：VBATT端子の低電圧検出は有効	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7-b6	VBTLVDLVL[1:0]	VBATT端子低電圧検出レベル選択	b7 b6 0 0：予約 0 1：設定禁止 1 0：2.3V 1 1：2.1V	R/W

VBTCR2 レジスタは、VBATT 端子の低電圧検出機能を制御するレジスタです。VBTCR2 レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

VBTLVDEN ビット（VBATT 端子低電圧検出有効）

VBATT 端子の低電圧検出を制御します。

VBTLVDLVL[1:0] ビット（VBATT 端子低電圧検出レベル選択）

VBATT 端子の低電圧検出レベルを選択します。

12.2.3 VBATT ステータスレジスタ（VBTSR）

アドレス SYSTEM.VBTSR 4001 E4B1h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	VBTRVLD	—	—	VBTBLDF	VBTRDF
リセット後の値	0	0	0	0（注5）	0	0	0（注2）	1（注1）

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VBTRDF	VBATT_Rリセット検出フラグ	0：VBATT_R電圧のパワーオンリセット未検出 1：VBATT_R選択電圧のパワーオンリセットを検出	R/(W)（注3）
b1	VBTBLDF	VBATTバッテリ低電圧検出フラグ（注4）	0：VBATT端子の低電圧未検出 1：VBATT端子の低電圧を検出	R/(W)（注3）
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	VBTRVLD	VBATT_R有効	0：VBATT_R領域は無効 1：VBATT_R領域は有効	R
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　本フラグは VBATT_POR リセットによってのみ設定されます。
注 2.　本フラグは VBATT_POR リセットによってのみリセットされます。
注 3.　1 を読んだ後に 0 を書くことのみ可能です。
注 4.　本フラグは VBTLVDEN ビットが 1 の場合にのみ有効です。VBTLVDEN ビットが 0 の場合、本フラグは読むと 0 が読めます。
注 5.　VBATT_R 電圧レベルに依存します。

VBTRDF フラグ（VBATT_R リセット検出フラグ）

VBATT_R（VCC または VBATT の選択電圧）のパワーオンリセットが発生したことを示します。

［1 になる条件］

- VBATT_R 電圧のパワーオンリセットが発生したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

VBTBLDF フラグ（VBATT バッテリ低電圧検出フラグ）

VBATT 端子の低電圧が検出されたことを示します。

［1 になる条件］

- VBATT 端子の低電圧を検出したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

VBTRVLD ビット（VBATT_R 有効）

VBATT 領域が有効かどうかをチェックします。

VBATT_R 領域が有効かどうかをチェックするために使用されます。下記のレジスタに対して読み出しまたは書き込みを行う場合は、最初に VBTRVLD ビットが 1 であることを確認する必要があります。

- 「9.　クロック発生回路」に記載の LOCOCR、LOCOUTCR、SOSCCR、および SOMCR
- VBTCR1 レジスタと VBTSR.VBTRVLD ビットを除く、本章に記載の全レジスタ
- 「25.　リアルタイムクロック（RTC）」に記載の全レジスタ

12.2.4 VBATT コンパレータコントロールレジスタ（VBTCMPCR）

アドレス SYSTEM.VBTCMPCR 4001 E4B2h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	VBTCMPE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VBTCMPE	VBATT端子低電圧検出回路出力許可	0：VBATT端子の低電圧検出回路出力を禁止 1：VBATT端子の低電圧検出回路出力を許可	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTCMPE ビット（VBATT 端子低電圧検出回路出力許可）

VBATT 端子の低電圧検出回路出力を制御します。本ビットは VBATT_POR 信号によって初期化されます。

12.2.5 VBATT 端子低電圧検出割り込みコントロールレジスタ（VBTLVDICR）

アドレス SYSTEM.VBTLVDICR 4001 E4B4h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	VBTLVDISEL	VBTLVDIE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VBTLVDIE	VBATT端子低電圧検出割り込み許可	0：VBATT端子の低電圧検出割り込みを禁止 1：VBATT端子の低電圧検出割り込みを許可	R/W
b1	VBTLVDISEL	端子低電圧検出割り込み選択	0：ノンマスカブル割り込み 1：マスカブル割り込み	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTLVDICR レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

12.2.6 VBATT バックアップレジスタ（VBTBKRn）(n = 0 ～ 511)

アドレス SYSTEM.VBTBKR0 4001 E500h～SYSTEM.VBTBKR511 4001 E6FFh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	VBTBKR[7:0]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

VBTBKRn レジスタは、8 ビット単位で読み出し／書き込みが可能なレジスタであり、VBATT 電源供給時にデータを格納します。本レジスタの値は、VBATT モードでも保持されます。このレジスタはいずれのリセットによっても初期化されません。

注 .　この VBATT バックアップレジスタにアクセスする場合、VCC レベルは V_{BKBATT} を上回っていなければいけません（「48.　電気的特性」を参照してください）。

12.2.7 VBATT ウェイクアップコントロールレジスタ（VBTWCTLR）

アドレス SYSTEM.VBTWCTLR 4001 E4B6h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	VWEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VWEN	VBATTウェイクアップ有効	0：ウェイクアップ機能は無効 1：ウェイクアップ機能は有効	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTWCTLR レジスタは、VBATT ウェイクアップ機能を制御します。VBTWCTLR レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

VWEN ビット（VBATT ウェイクアップ有効）

VBATT ウェイクアップコントロール機能を有効にします。VWEN ビットを 0 にして、VBTOCTLR.VCH0OEN ビットを 1 にした場合、VBATWIO0 端子出力は Low になります。VWEN ビットを 1 にすると、VBATWIO0 端子出力は、VBTOCTLR.VOUT0LSEL ビットで指定したレベルに変化します。

VWEN ビットは、以下のレジスタの設定完了後にのみ 1 にしてください。以下のレジスタを書き換える場合は、事前に VWEN ビットを 0 にしてください。

- VBTWCH0OTSR
- VBTICTLR
- VBTOCTLR
- VBTWTER
- VBTWEGR

12.2.8 VBATT ウェイクアップ I/O 0 出力トリガ選択レジスタ（VBTWCH0OTSR）

アドレス SYSTEM.VBTWCH0OTSR 4001 E4B8h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	CH0VRTCATE	CH0VRTCTE	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	CH0VRTCTE	VBATWIO0出力RTC周期信号許可	0：RTC周期信号によるVBATTウェイクアップ入出力0の出力トリガを禁止 1：RTC周期信号によるVBATTウェイクアップ入出力0の出力トリガを許可	R/W
b4	CH0VRTCATE	VBATWIO0出力RTCアラーム信号許可	0：RTCアラーム信号によるVBATTウェイクアップ入出力0の出力トリガを禁止 1：RTCアラーム信号によるVBATTウェイクアップ入出力0の出力トリガを許可	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTWCH0OTSR レジスタは、VBATT ウェイクアップ入出力 0 の出力トリガ要因を制御するレジスタです。

本レジスタのビットを 1 にして、VBTWFR レジスタの対応するウェイクアップトリガフラグを設定すると、VBATWIO0 端子は VBTOCTLR レジスタの VOUT0LSEL ビットに従った信号を出力します。

VBTWCH0OTSR レジスタは VBATT_POR 信号によって初期化されます。

12.2.9 VBATT 入力コントロールレジスタ（VBTICTLR）

アドレス SYSTEM.VBTICTLR 4001 E4BBh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	VCH0INEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VCH0INEN	VBATTウェイクアップ入出力0入力許可	0：VBATWIO0、RTCIC0入力禁止 1：VBATWIO0、RTCIC0入力許可	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTICTLR レジスタは、VBATT ウェイクアップ入出力端子の入力方向を選択するレジスタです。VBTICTLR レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

VCH0INEN ビット（VBATT ウェイクアップ入出力 0 入力許可）

VBATT ウェイクアップ入出力端子の入力を許可します。VBATT ウェイクアップコントロール機能だけでなく、RTC（RTCIC0）の時間キャプチャ機能も使用する場合は、VBTICTLR レジスタを設定する必要があります。これらの機能については、「25. リアルタイムクロック（RTC）」を参照してください。

12.2.10 VBATT 出力コントロールレジスタ（VBTOCTLR）

アドレス SYSTEM.VBTOCTLR 4001 E4BCh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	VOUT0LSEL	—	—	VCH0OEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VCH0OEN	VBATTウェイクアップ入出力0出力許可	0：VBATWIO0の出力を禁止 1：VBATWIO0の出力を許可（注1）	R/W
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	VOUT0LSEL	VBATTウェイクアップ入出力0出力レベル選択	0：VBATTウェイクアップトリガ前にLを出力 1：VBATTウェイクアップトリガ前にHを出力	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTOCTLR レジスタは、VBATT ウェイクアップ入出力端子（VBATWIO0）の出力方向と出力レベルを選択するレジスタです。VBTOCTLR レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

VCH0OEN ビット（VBATT ウェイクアップ入出力 0 出力許可）

VBATT 出力を許可します。

注 1.　VCH0OEN ビットを 1 にした場合、P402PFS.PMR ビットは 0 にする必要があります。

VOUT0LSEL ビット（VBATT ウェイクアップ入出力 0 出力レベル選択）

VBATT ウェイクアップ入出力 0 端子からの出力レベルを選択します。VOUT0LSEL ビットを 0 にした場合、VBATWIO0 端子は、VBATT ウェイクアップトリガ受信前は Low を出力し、VBATT ウェイクアップトリガ受信後は High を出力します。VOUT0LSEL ビットを 1 にした場合、VBATWIO0 端子は、VBATT ウェイクアップトリガ受信前は High を出力し、VBATT ウェイクアップトリガ受信後は Low を出力します。

12.2.11 VBATT ウェイクアップトリガ要因イネーブルレジスタ（VBTWTER）

アドレス SYSTEM.VBTWTER 4001 E4BDh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	VRTCAE	VRTCIE	—	—	VCH0E
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VCH0E	VBATWIO0端子許可	0：VBATWIO0端子によるVBATTウェイクアップトリガを禁止 1：VBATWIO0端子によるVBATTウェイクアップトリガを許可	R/W
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	VRTCIE	RTC周期信号許可	0：RTC周期信号によるVBATTウェイクアップトリガを禁止 1：RTC周期信号によるVBATTウェイクアップトリガを許可	R/W
b4	VRTCAE	RTCアラーム信号許可	0：RTCアラーム信号によるVBATTウェイクアップトリガを禁止 1：RTCアラーム信号によるVBATTウェイクアップトリガを許可	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTWTER レジスタは、VBATT ウェイクアップトリガを許可／禁止します。VBTWTER レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

複数のトリガ要因の選択が可能です。

12.2.12 VBATT ウェイクアップトリガ要因エッジレジスタ（VBTWEGR）

アドレス SYSTEM.VBTWEGR 4001 E4BEh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	VCH0EG
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VCH0EG	VBATWIO0ウェイクアップトリガ要因エッジ選択	0：立ち下がりエッジでウェイクアップトリガを発生 1：立ち上がりエッジでウェイクアップトリガを発生	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VBTWEGR レジスタは、各 VBATT ウェイクアップトリガ要因のエッジを選択するレジスタです。VBTWEGR レジスタは VBATT_POR 信号によってリセットされます。

12.2.13 VBATT ウェイクアップトリガ要因フラグレジスタ（VBTWFR）

アドレス SYSTEM.VBTWFR 4001 E4BFh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	VRTCAF	VRTCIF	—	—	VCH0F
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VCH0F	VBATWIO0ウェイクアップトリガフラグ	0：VBATWIO0端子によるウェイクアップトリガの発生なし 1：VBATWIO0端子によるウェイクアップトリガの発生あり	R/(W)（注1）
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/(W)（注1）
b3	VRTCIF	VBATT RTC周期ウェイクアップトリガフラグ	0：RTC周期信号によるウェイクアップトリガの発生なし 1：RTC周期信号によるウェイクアップトリガの発生あり	R/(W)（注1）
b4	VRTCAF	VBATT RTCアラームウェイクアップトリガフラグ	0：RTCアラーム信号によるウェイクアップトリガの発生なし 1：RTCアラーム信号によるウェイクアップトリガの発生あり	R/(W)（注1）
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　フラグをクリアするため、1 を読んだ後に 0 を書き込むことのみ可能です。

VBTWFR レジスタは、VBATT ウェイクアップコントロール機能のトリガ要因を示します。このレジスタは、VWEN ビット（VBTWCTLR レジスタ）で保護されています。VBTWFR レジスタは、VWEN ビットに 1 を書いた後、PCLKB が 5 サイクル経過すると有効になります。同様に VBTWFR レジスタを無効にする場合も、VWEN ビットに 0 を書いた後、PCLKB の 5 サイクルを必要とします。

それぞれのフラグは、VBTWEGR レジスタで設定したトリガ要求が発生したときに 1 になります。

VBTWFR レジスタは VBATT_POR によって初期化されます。

VCH0F フラグ（VBATT ウェイクアップ入出力 0 ウェイクアップトリガフラグ）

VBATWIO0 端子によるトリガ要求が発生したことを示します。

[1 になる条件]

- VBTWEGR レジスタで設定した VBATWIO0 端子によるトリガ要求が発生したとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

VRTCIF フラグ（VBATT RTC 周期ウェイクアップトリガフラグ）

RTC 周期信号によるトリガ要求が発生したことを示します。

[1 になる条件]

- RTC 周期信号によるトリガ要求が発生したとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

VRTCAF フラグ（VBATT RTC アラームウェイクアップトリガフラグ）

RTC アラーム信号によるトリガ要求が発生したことを示します。

［1 になる条件］

- RTC アラーム信号によるトリガ要求が発生したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

12.2.14　バックアップレジスタアクセスコントロールレジスタ（BKRACR）

アドレス　SYSTEM.BKRACR 4001 E0C6h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	BKRACS[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	BKRACS[2:0]	バックアップレジスタ アクセスサイクル選択	b2　b0 0　0　0：アクセスサイクル制御無効 　システムクロックソースがSOSCまたはLOCOの場合 1　1　0：アクセスサイクル制御有効 　システムクロックソースがSOSC、LOCO以外の場合 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

BKRACR レジスタは、バックアップレジスタのアクセスサイクルを制御して消費電力を削減します。アクセスサイクル制御有効（110b）の場合、バックアップレジスタのアクセスサイクルは、アクセスサイクル制御無効（000b）の場合の 64 倍です。本レジスタは、VBATT_POR 以外のすべてのリセットで初期化されます。

［設定手順］

SOSC ／ LOCO 以外のシステムクロックを SOSC ／ LOCO に変更するには、以下を実行します：

1. SCKSCR.CKSEL[2:0] ビットを変更する。
2. BKRACR.BKRACS[2:0] ビットを 000b に変更する。

システムクロックを SOSC ／ LOCO から SOSC ／ LOCO 以外に変更するには、以下を実行します：

1. BKRACR.BKRACS[2:0] ビットを 110b に変更する。
2. SCKSCR.CKSEL[2:0] ビットを変更する。

12.3 動作説明

12.3.1 バッテリバックアップ機能

VCC 端子の電圧が低下すると、VBATT 端子から RTC、LOCO、およびサブクロック発振器への電源供給が可能です。VCC 端子の電圧降下が検出されると、電源との接続は電源から VBATT 端子に切り替わります。また、VCC 端子の電圧が VDETBATT を超えると、VCC 端子からの電源供給に戻ります。電源の切り替わりは RTC の動作に影響を与えません。VBATT 端子の電圧レベルが動作保証電圧よりも低下した場合、VBATT ステータスレジスタの VBTBLDF ビットをモニタすることが可能です。

バッテリバックアップ機能は、電圧監視 0 リセットを許可に設定した上で使用可能です。

VBATT 端子が電源を供給しているとき、ウェイクアップコントロール機能は、RTC アラーム／周期信号をトリガすることによって、VBATWIO0 の出力端子をトグルさせることができます。

RTC は、時間キャプチャ端子の入力レベルが変化したときの時間キャプチャ端子検出をサポートしています。

VBATT 端子からは、以下のモジュールに電力が供給されます。

- RTC
- サブクロック発振器（XCIN、XCOUT 端子を含む）
- VBATWIO0 端子（RTCIC0 を含む）
- LOCO
- VBATT バックアップレジスタ
- VBATT ウェイクアップコントローラ

表 12.2 に、VBATT モード時の動作状態を示します。

表 12.2 VBATTモード時の動作状態 (1/2)

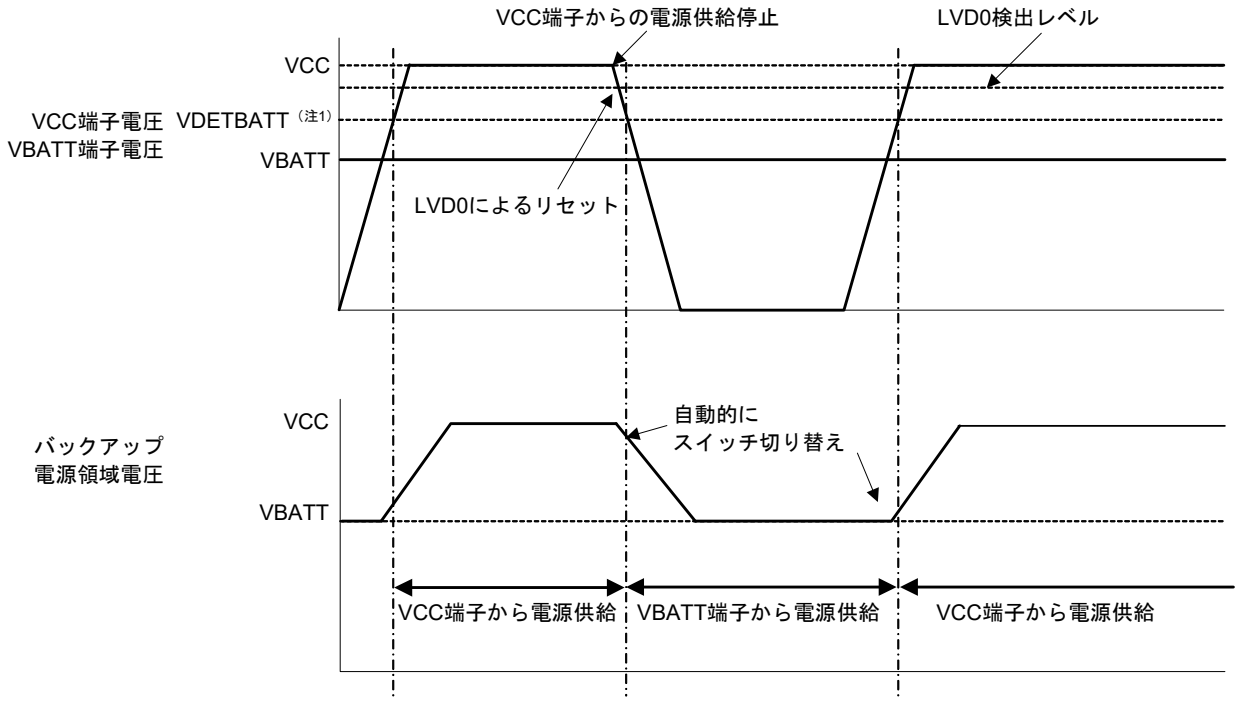
動作状態	VBATTモード
遷移条件	VCC電圧降下の検出
リセット以外の解除方法	VCC電圧上昇の検出
メインクロック発振器	停止
サブクロック発振器	動作はSOSCCR.SOSTPビットで選択可能。発振器の状態はVBATTモード遷移前と同じ。
高速オンチップオシレータ	停止
中速オンチップオシレータ	停止
低速オンチップオシレータ	動作／非動作をLOCOCR.LCSTPビットで選択可能。発振器の状態はVBATTモード遷移前と同じ。
IWDT専用オンチップオシレータ	停止
PLL	停止
CPU	停止（不定）
SRAM（ECC SRAMを含む）	停止（不定）
VBATTバックアップレジスタ	停止（保持）
フラッシュメモリ	停止（保持）
リアルタイムクロック（RTC）	選択クロックがカウントソースとして動作しているときに選択可能。
AGTn（n = 0, 1）	停止（不定）
低電圧検出（LVD）	停止
パワーオンリセット回路	停止
バッテリバックアップ電圧監視	動作
その他の周辺モジュール	停止（不定）

表 12.2　VBATTモード時の動作状態 (2/2)

動作状態	VBATTモード
I/Oポート	• RTCIC0ポート：動作 • 指定ポート以外：不定 • VBATWIO0ポート：動作

注 .　「選択可能」とは、動作がコントロールレジスタによって選択できることを意味します。モジュールによっては、対応するモジュールストップビットで制御できるものもあります。
「停止（保持）」とは、内部レジスタの内容は保持されますが、動作は中断されることを意味します。
「停止（不定）」とは、内部レジスタの内容が不定で、内部回路への通電が遮断されることを意味します。

図 12.3 に、バッテリバックアップ機能の切り替え順序を示します。



注 .　電気的特性についての詳細は、「48.　電気的特性」を参照してください。
注 1.　VDETBATT は、VCC 端子と VBATT 端子の間で電源を切り替える際のしきい値レベルを表します。

図 12.3　バッテリバックアップ機能の切り替え順序

12.3.2 VBATT バッテリ電源スイッチの使用法

VCC 端子の印加電圧が低下すると、バッテリ電源スイッチによって、電源が VCC 端子から VBATT 端子に切り替わります。そして電圧が上昇すると、再び VBATT 端子から VCC 端子へ切り替わります。この切り替えは VBTCR1.BPWSWSTP ビットで制御されます。

BPWSWSTP ビットでバッテリ電源スイッチを有効にすると、VCC 電圧が低下した際に、バッテリバックアップモジュールの供給電圧を VCC から VBATT へ切り替えることができます。バッテリ電源スイッチが停止すると、バッテリバックアップモジュールの電源は常に VCC から供給されます。バッテリバックアップ機能を使用しない場合は、本ビットに 1 を書き込む必要があります。

注 . バッテリバックアップ機能は、電圧監視 0 リセットを許可（OFS1.LVDAS ビットを 0）に設定した上で使用可能です。電圧監視 0 レベルは、VDETBATT レベルよりも高い値（OFS1.VDSEL1[2:0] ビットを 001b、または 010b）に設定してください。

注 . 本ビットは、VBTSR.VBTRVLD ビットの状態を確認することなく設定可能です。

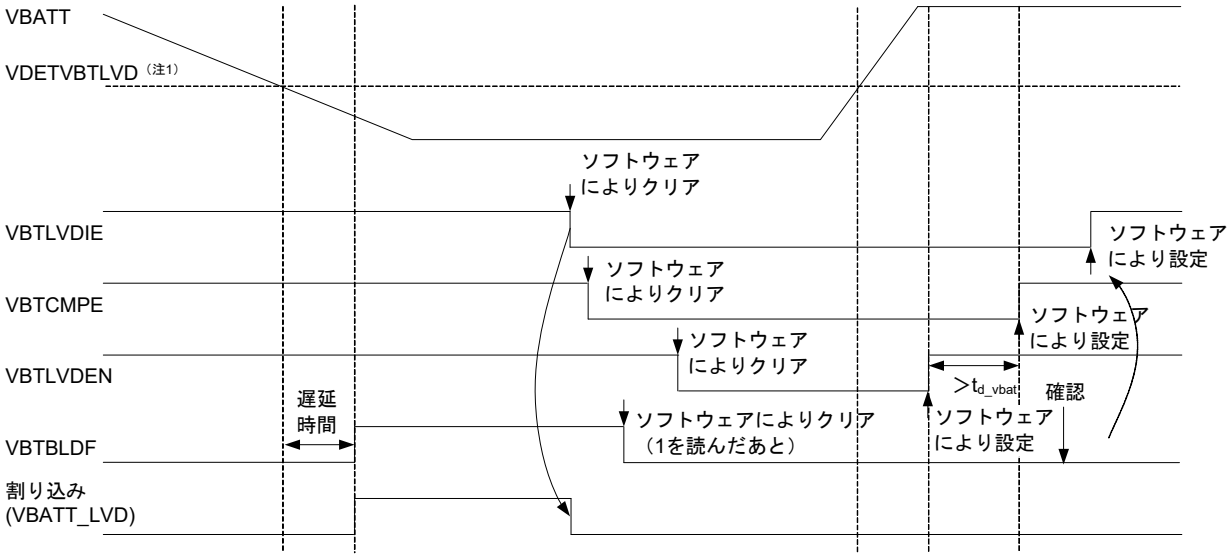
12.3.3 VBATT 端子低電圧検出の手順

以下の手順にしたがって VBTSR.VBTBLDF フラグと割り込みを用いた VBATT 端子の低電圧検出のモニタが可能です。

以下の手順は、VBATT 端子の低電圧検出を有効にする方法を示しています。

1. 電圧監視 0 リセットを設定します。「8. 低電圧検出（LVD）」を参照してください。
2. パワーオンリセット後、VBTCR1.BPWSWSTP ビットに初めてアクセスする場合は、本ビットを 1 にします。
3. VBTSR.VBTRVLD ビットが 1 になるまで待ってから、VBTCR2.VBTLVDEN、VBTLVDICR.VBTLVDIE、および VBTCMPCR.VBTCMPE の各ビットが 0 であることを確認します。
4. VBTCR2.VBTLVDLVL[1:0] ビット（VBATT 端子電圧検出レベル選択）で検出電圧を指定します。
5. VBTLVDICR.VBTLVDISEL ビットで割り込みの種類を選択します。
6. VBTCR2.VBTLVDEN ビットを 1 にして、VBATT 端子の低電圧検出を有効にします。
7. 「48. 電気的特性」に記載されているように、VBATT コンパレータ動作安定時間（t_{d_vbat}）経過後に、有効化する VBATT 端子の電圧検出回路に対する VBTCMPCR.VBTCMPE ビットを 1 にします。
8. VBTSR.VBTBLDF フラグが 0 であることを確認した後、許可対象の VBATT 端子の低電圧検出割り込み出力に対する VBTLVDICR.VBTLVDIE ビットを 1 にします。
9. VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 0 にクリアして、バッテリ電源スイッチを有効にします。12.3.2 VBATT バッテリ電源スイッチの使用法を参照してください。

VBATT の低電圧が検出された場合は、図 12.4 に示すように、VBATT の低電圧検出を無効にしてください。



注 1. VDETVBTLVD は、VBTCR2.VBTLVDLVL[1:0] で選択した VBATT 低電圧検出レベルです。

図 12.4 VBATT 低電圧検出割り込みの基本動作

以下の手順は、VBATT 端子の低電圧検出を無効にする方法を示しています。

1. VBTSR.VBTRVLD ビットが 1 であることを確認します。
2. VBTLVDICR.VBTLVDIE ビットを 0 にして、電圧検出割り込みを禁止します。
3. VBTCMPCR.VBTCMPE ビットを 0 にして、VBATT 端子の電圧検出回路出力を無効にします。
4. VBTCR2.VBTLVDEN ビットを 0 にして、VBATT 端子の低電圧出力を無効にします。
5. VBTCR2.VBTLVDEN、VBTCMPCR.VBTCMPE、および VBTLVDICR.VBTLVDIE 以外の、VBATT 端子低電圧検出レジスタに関連するビットの設定を変更します。

12.3.4 VBATT バックアップレジスタの使用法

VBATT バックアップレジスタ VBTBKRn（n = 0 ～ 511）を使用して、以下の手順に示すように、データの格納／復元が可能です。

1. パワーオンリセット後、VBTCR1.BPWSWSTP ビットに初めてアクセスする場合は、本ビットを 1 にします。
2. VBTSR.VBTRVLD ビットが 1 になるのを待ちます。
3. VBTBKRn（n = 0 ～ 511）に対して 8 ビット単位で読み出し／書き込みが可能になります。
4. VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 0 にクリアして、バッテリ電源スイッチを有効にします。12.3.2 VBATT バッテリ電源スイッチの使用法を参照してください。

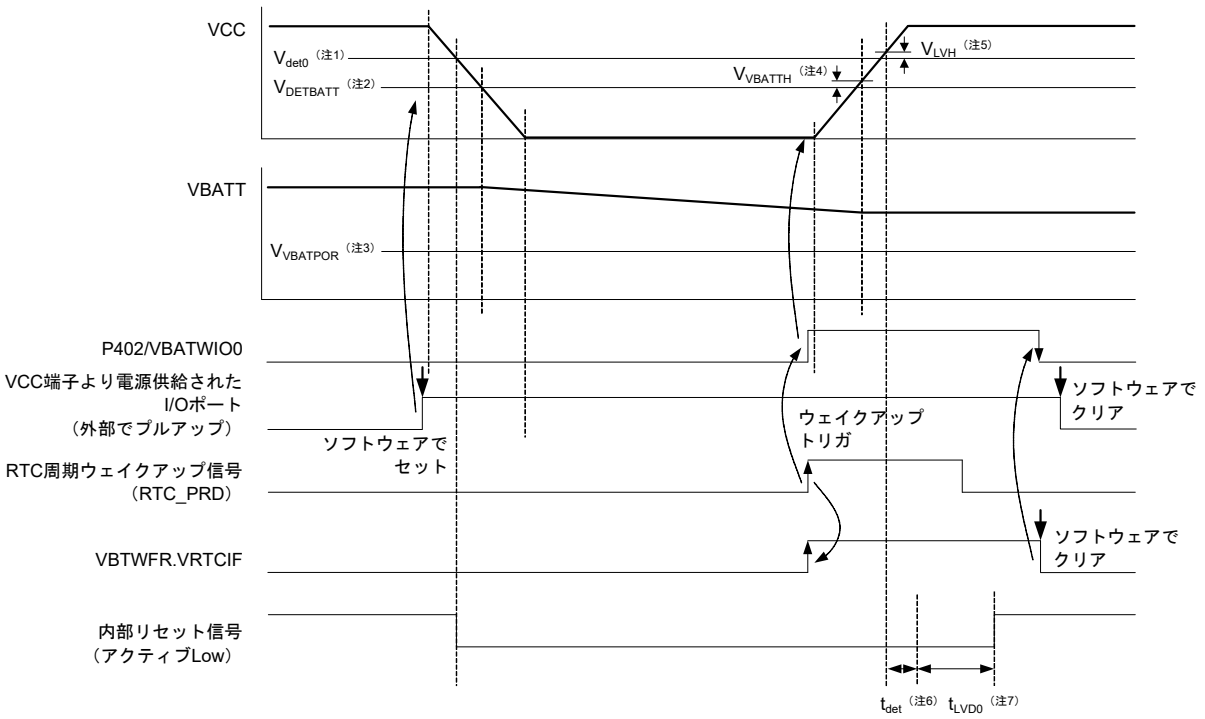
12.3.5 VBATT ウェイクアップコントロール機能の使用法

ウェイクアップコントロール機能とは、VBATT 端子による VBATT_R 供給時に、RTC アラーム／周期信号がアサートされた場合、VBATWIO0 出力端子のトグル動作を可能にする機能です。

注 . このウェイクアップコントロール機能によるトグル動作では、ICU での割り込み、およびリセット対象モジュールへのリセットは発生しません。

以下の手順は、VBATT ウェイクアップトリガによって、低電圧監視 0 リセット（LVD0）以降に MCU が起動した後のレジスタの設定方法を示しています。

1. VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にします。
2. VBTSR.VBTRVLD ビットが 1 になるまで待ってから、VBTSR.VBTRDF ビットが 0 であることを確認します。
3. VBTWFR レジスタを読み出して、VBATT ウェイクアップトリガ要因を確認します。図 12.5 の例では、VBTWFR.VRTCIF ビットが 1 になります。
4. VBTWFR レジスタの対応するビットを 0 にクリアすると、VBATWIO0 ポートでトグル出力が開始されます。図 12.5 の例では、VBATWIO0 ポートは High から Low にトグルします。
5. 必要に応じて、電源停止コントロール信号の I/O レジスタが外付けパワーマネジメント IC へ 0 または 1 を出力するように設定します。
6. VBATT ウェイクアップ動作を繰り返したい場合は、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 0 にクリアし、再度、電源供給の停止を要求するために、電源停止コントロール信号の I/O レジスタが外付けパワーマネジメント IC へ 0 または 1 を出力するように設定します。
   ウェイクアップトリガ条件を変更したい場合は、VBTWCTLR.VWEN ビットを 0 にクリアし、VBATT に関連する他のレジスタを設定する前に、VBTWTER レジスタの全ビットをクリアします。



注 1. Vdet0 は、OFS1.VDSEL1[2:0] ビットで選択する LVD0 電圧検出レベルです。
注 2. VDETBATT は、バッテリバックアップへの切り替え電圧レベルです。
注 3. VVBATPOR は、VBATT パワーオンリセットの電圧検出レベルです。（VBAT_POR）
注 4. VVBATTH は、バッテリバックアップへの切り替えヒステリシス幅です。
注 5. VLVH は、LVD0 のヒステリシス幅です。
注 6. tdet は、LVD0 の応答遅延時間です。
注 7. tLVD0 は、LVD0 リセット解除後の待機時間です。

図 12.5 VBATT ウェイクアップ機能のタイミング図

12.4 使用上の注意事項

1. VBATT 端子を使用しない場合は、VBATT 端子を VCC 端子に接続してください。
2. VBATT の電圧レベルが動作保証範囲を下回ったときは、サブクロック発振器と RTC の動作は保証されません。この電圧降下は VBTSR レジスタで確認できます。
3. 本項で説明した各レジスタへの書き込み中にリセットが発生した場合、レジスタ値が失われることがあります。
4. VBATT 端子からの給電によって RTC が動作しているとき、RTC は、カレンダ／バイナリカウント動作、VBATT ウェイクアップ機能のためのアラーム／周期トリガ、および時間キャプチャ機能をサポートします。
5. VBATT ウェイクアップコントロール機能は、VBATT_R が VBATT 端子からのみ給電されている場合に使用可能です。
6. VCC 端子から給電される I/O ポートの電圧レベルは、電源供給が停止するとハイインピーダンスに変化します。上記ポートを VBATT ウェイクアップ機能のための電源停止コントロール端子として使用する場合は、これらのポートは外部でプルアップまたはプルダウンしてください。

13. レジスタライトプロテクション

13.1 概要

レジスタライトプロテクション機能は、ソフトウェアエラーによって重要なレジスタが書き換えられないように保護します。保護されるレジスタは、プロテクトレジスタ（PRCR）で設定します。

表 13.1 に PRCR レジスタのビットと保護されるレジスタの対応関係を示します。

表 13.1 PRCR レジスタのビットと保護されるレジスタの対応関係

PRCR レジスタ	保護されるレジスタ
PRC0 ビット	• クロック発生回路関連レジスタ SCKDIVCR, SCKSCR, PLLCR, PLLCCR2, BCKCR, MEMWAIT, MOSCCR, HOCOCR, MOCOCR, CKOCR, TRCKCR, OSTDCR, OSTDSR, SLCDSCKCR, EBCKOCR, MOCOUTCR, HOCOUTCR, MOSCWTCR, MOMCR, SOSCCR, SOMCR, LOCOCR, LOCOUTCR, HOCOWTCR, USBCKCR
PRC1 ビット	• 低消費電力モード関連レジスタ SBYCR, SNZCR, SNZEDCR, SNZREQCR, FLSTOP, PSMCR, OPCCR, SOPCCR, SYOCDCR • バッテリバックアップ機能関連レジスタ VBTCR1, VBTCR2, VBTSR, VBTCMPCR, VBTLVDICR, VBTWCTLR, VBTWCH0OTSR, VBTICTLR, VBTOCTLR, VBTWTER, VBTWEGR, VBTWFR, VBTBKRn (n = 0～511), BKRACR
PRC3 ビット	• LVD 関連レジスタ LVD1CR1, LVD1SR, LVCMPCR, LVDLVLR, LVD1CR0

13.2　レジスタの説明

13.2.1　プロテクトレジスタ（PRCR）

アドレス　SYSTEM.PRCR 4001 E3FEh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PRKEY[7:0]								—	—	—	—	PRC3	—	PRC1	PRC0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PRC0	プロテクトビット0	クロック発生回路関連レジスタへの書き込み許可 0：書き込み禁止 1：書き込み許可	R/W
b1	PRC1	プロテクトビット1	低消費電力モードおよびバッテリバックアップ機能関連レジスタへの書き込み許可 0：書き込み禁止 1：書き込み許可	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	PRC3	プロテクトビット3	LVD関連レジスタへの書き込み許可 0：書き込み禁止 1：書き込み許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b8	PRKEY[7:0]	PRCキーコード	PRCRレジスタへの書き込みを制御します。PRCRレジスタを書き換える場合、上位8ビットにA5h、下位8ビットに目的の値を、16ビット単位で書いてください。	W （注1）

注 1.　書き込みデータは保持されません。読むと 00h が読めます。

PRCn ビット（プロテクトビット n）（n = 0, 1, 3）

保護されるレジスタ（表 13.1 を参照）への書き込みを許可または禁止します。PRCn ビットを 1 にすると書き込み許可、0 にすると書き込み禁止になります。

14.　割り込みコントローラユニット（ICU）

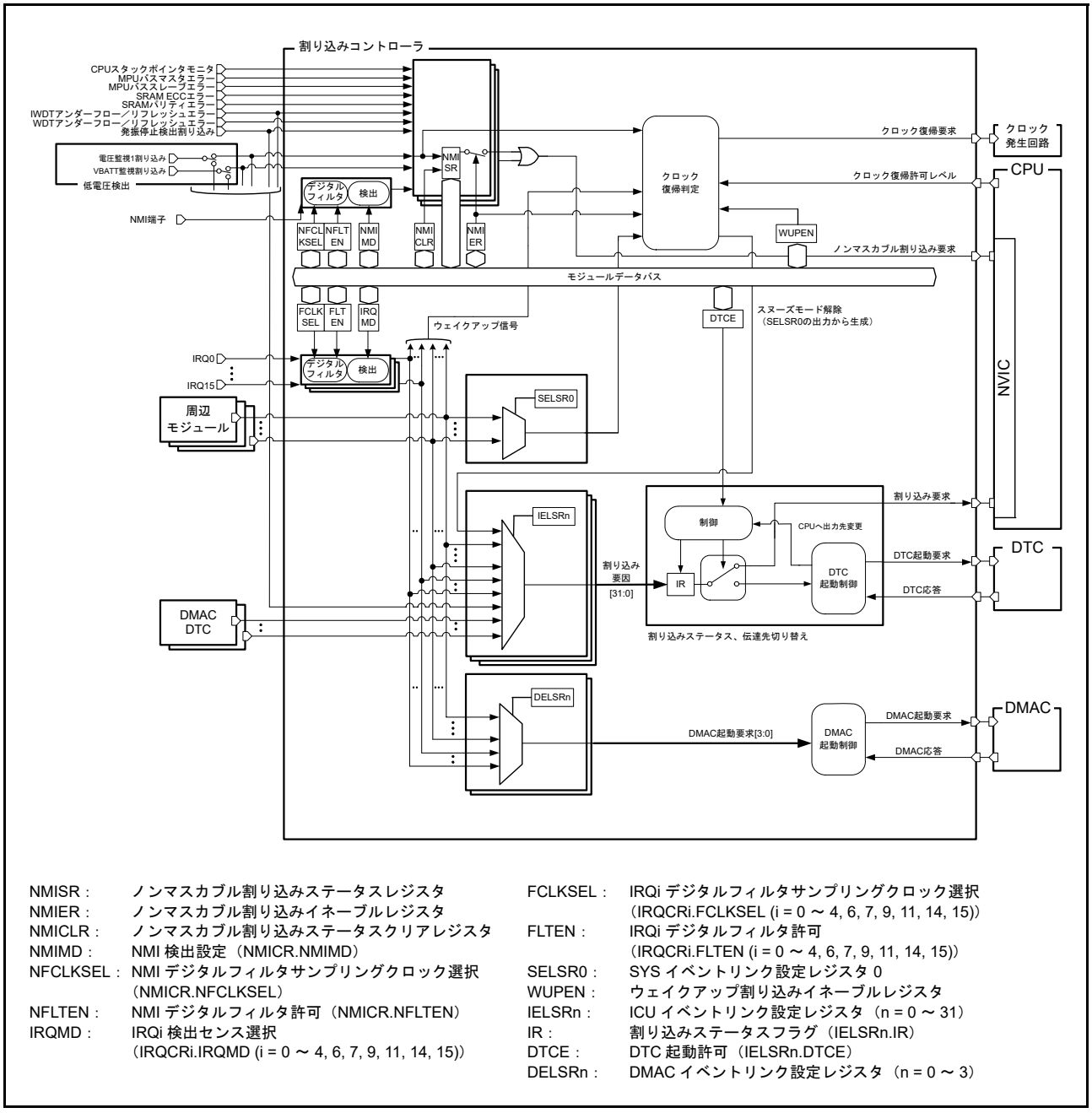
14.1　概要

割り込みコントローラユニット（ICU）は、NVIC、DTC、およびDMACモジュールにリンクされるイベント信号を制御します。ICUはノンマスカブル割り込みも制御します。表 14.1にICUの仕様を示します。図 14.1にICUのブロック図を、表 14.2に入出力端子を示します。

表 14.1　ICUの仕様

項目		内容
割り込み	周辺機能割り込み	• 周辺モジュールからの割り込み 要因数：209
	外部端子割り込み	• 割り込み検出：Lowレベル（注4）、立ち下がりエッジ、立ち上がりエッジ、両エッジ これらの検出法は要因ごとに1つ設定可能 • デジタルフィルタ機能をサポート • 11要因（IRQ0～IRQ4, IRQ6, IRQ7, IRQ9, IRQ11, IRQ14, IRQ15端子からの割り込み）
	DTC／DMAC制御	割り込み要因によってDTCとDMACの起動が可能（注1）
	NVICへの割り込み要因	• 32要因
ノンマスカブル割り込み（注2）	NMI端子割り込み	• NMI端子からの割り込み • 割り込み検出：立ち下がりエッジまたは立ち上がりエッジ • デジタルフィルタ機能をサポート
	発振停止検出割り込み（注3）	メイン発振停止検出時の割り込み
	WDTアンダーフロー／リフレッシュエラー（注3）	ダウンカウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時の割り込み
	IWDTアンダーフロー／リフレッシュエラー（注3）	ダウンカウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時の割り込み
	電圧監視1割り込み（注3）	低電圧検出1回路（LVD_LVD1）の電圧監視割り込み
	VBATT割り込み	VBATT監視による電圧監視割り込み
	RPEST	SRAMパリティエラー発生時の割り込み
	RECCST	SRAM ECCエラー発生時の割り込み
	BUSSST	MPUバススレーブエラー発生時の割り込み
	BUSMST	MPUバスマスタエラー発生時の割り込み
	SPEST	CPUスタックポインタモニタによる割り込み
低消費電力モードからの復帰		• スリープモード：ノンマスカブル割り込みまたはその他の割り込み要因によって復帰 • ソフトウェアスタンバイモード：ノンマスカブル割り込みによって復帰 割り込みはWUPENレジスタで選択可能 • スヌーズモード：ノンマスカブル割り込みによって復帰 割り込みはSELSR0およびWUPENレジスタで選択可能 14.2.8　SYSイベントリンク設定レジスタ（SELSR0）および14.2.9　ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ（WUPEN）を参照してください。

注 1.　DTC と DMAC の起動要因については、表 14.4　イベントテーブルを参照してください。
注 2.　リセット解除後に 1 回だけノンマスカブル割り込みを許可することが可能です
注 3.　これらのノンマスカブル割り込みは、イベント信号としても使用可能です。割り込みとして使用する場合、NMIER レジスタの値をリセット状態から変更しないでください。電圧監視 1 の割り込みを許可するには、LVD1CR1.IRQSEL ビットを 1 にしてください。VBATT 監視割り込みを許可するには、VBTLVDICR.VBTLVDISEL ビットを 1 にしてください。
注 4.　Low レベル：検出された後にクリアしなければ、割り込みは解除されません。



NMISR：　ノンマスカブル割り込みステータスレジスタ
NMIER：　ノンマスカブル割り込みイネーブルレジスタ
NMICLR：　ノンマスカブル割り込みステータスクリアレジスタ
NMIMD：　NMI 検出設定（NMICR.NMIMD）
NFCLKSEL：　NMI デジタルフィルタサンプリングクロック選択（NMICR.NFCLKSEL）
NFLTEN：　NMI デジタルフィルタ許可（NMICR.NFLTEN）
IRQMD：　IRQi 検出センス選択（IRQCRi.IRQMD (i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15)）
FCLKSEL：　IRQi デジタルフィルタサンプリングクロック選択（IRQCRi.FCLKSEL (i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15)）
FLTEN：　IRQi デジタルフィルタ許可（IRQCRi.FLTEN (i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15)）
SELSR0：　SYS イベントリンク設定レジスタ 0
WUPEN：　ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ
IELSRn：　ICU イベントリンク設定レジスタ（n = 0 ～ 31）
IR：　割り込みステータスフラグ（IELSRn.IR）
DTCE：　DTC 起動許可（IELSRn.DTCE）
DELSRn：　DMAC イベントリンク設定レジスタ（n = 0 ～ 3）

図 14.1　ICU のブロック図

表 14.2　ICUの入出力端子

端子名	入出力	機能
NMI	入力	ノンマスカブル割り込み要求端子
IRQ0～IRQ4, IRQ6, IRQ7, IRQ9, IRQ11, IRQ14, IRQ15	入力	外部割り込み要求端子

14.2　レジスタの説明

本章では、Arm® NVIC の内部レジスタについては説明していません。これらのレジスタについては、*ARM® Cortex®-M4 Processor Technical Reference Manual (ARM DDI 0439D)* を参照してください。

14.2.1　IRQ コントロールレジスタ i（IRQCRi）（i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）

アドレス　ICU.IRQCR0 4000 6000h, ICU.IRQCR1 4000 6001h, ICU.IRQCR2 4000 6002h, ICU.IRQCR3 4000 6003h, ICU.IRQCR4 4000 6004h, ICU.IRQCR6 4000 6006h, ICU.IRQCR7 4000 6007h, ICU.IRQCR9 4000 6009h, ICU.IRQCR11 4000 600Bh, ICU.IRQCR14 4000 600Eh, ICU.IRQCR15 4000 600Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	FLTEN	—	FCLKSEL[1:0]		—	—	IRQMD[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	IRQMD[1:0]	IRQi検出センス選択	b1　b0 0　0：立ち下がりエッジ 0　1：立ち上がりエッジ 1　0：両エッジ 1　1：Low レベル	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	FCLKSEL[1:0]	IRQiデジタルフィルタサンプリングクロック選択	b5　b4 0　0：PCLKB 0　1：PCLKB/8 1　0：PCLKB/32 1　1：PCLKB/64	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	FLTEN	IRQiデジタルフィルタ有効	0：デジタルフィルタ無効 1：デジタルフィルタ有効	R/W

IRQCRi レジスタの変更には、以下の条件があります。

- CPU 割り込みまたは DTC 起動要因の場合：
  IRQCRi レジスタの設定を変更してから、対象の IELSRn レジスタ（n = 0 ～ 31）を設定する必要があります。
  対象の IELSRn レジスタが 0000h の場合にのみ、レジスタ値の変更が可能です
- DMAC 起動要因の場合：
  IRQCRi レジスタの設定を変更してから、対象の DELSRn（n = 0 ～ 3）レジスタを設定する必要があります。
  対象の DELSRn.DELS[7:0] ビットが 00h の場合にのみ、レジスタ値の変更が可能です
- ウェイクアップ許可信号の場合：
  IRQCRi レジスタの設定を変更してから、対象の WUPEN.IRQWUPENn ビット（n = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）を設定する必要があります。
  対象の WUPEN.IRQWUPENn ビットが 0 の場合にのみ、レジスタ値の変更が可能です

IRQMD[1:0] ビット（IRQi 検出センス選択）

IRQi 外部端子割り込み要因の検出センシング方法を設定します。設定値に関する詳細は、14.4.4　外部端子割り込みを参照してください。

FCLKSEL[1:0] ビット（IRQi デジタルフィルタサンプリングクロック選択）

IRQi 外部端子割り込み要求のデジタルフィルタサンプリングクロックを選択します。下記から選択できます。

- PCLKB（毎サイクル）
- PCLKB/8（8 サイクルに 1 回）
- PCLKB/32（32 サイクルに 1 回）
- PCLKB/64（64 サイクルに 1 回）

デジタルフィルタの詳細については、14.4.3　デジタルフィルタを参照してください。

FLTEN ビット（IRQi デジタルフィルタ有効）

IRQi 外部端子割り込み要因に使用するデジタルフィルタを有効にします。デジタルフィルタは、IRQCRi.FLTEN ビットが 1 の場合に有効になり、IRQCRi.FLTEN ビットが 0 の場合に無効になります。IRQi 端子レベルは、IRQCRi.FCLKSEL[1:0] ビットで指定されたサイクルでサンプリングされます。サンプリングされたレベルが 3 回一致すると、デジタルフィルタからの出力レベルが変化します。デジタルフィルタの詳細については、14.4.3　デジタルフィルタを参照してください。

14.2.2 ノンマスカブル割り込みステータスレジスタ（NMISR）

アドレス ICU.NMISR 4000 6140h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	SPEST	BUSMST	BUSSST	RECCST	RPEST	NMIST	OSTST	—	VBATTST	—	LVD1ST	WDTST	IWDTST
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IWDTST	IWDTアンダーフロー／リフレッシュエラーステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b1	WDTST	WDTアンダーフロー／リフレッシュエラーステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b2	LVD1ST	電圧監視1割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b4	VBATTST	VBATT監視割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b6	OSTST	発振停止検出割り込みステータスフラグ	0：メイン発振停止検出割り込み要求なし 1：メイン発振停止検出割り込み要求あり	R
b7	NMIST	NMIステータスフラグ	0：NMI端子割り込み要求なし 1：NMI端子割り込み要求あり	R
b8	RPEST	SRAMパリティエラー割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b9	RECCST	SRAM ECCエラー割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b10	BUSSST	MPUバススレーブエラー割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b11	BUSMST	MPUバスマスタエラー割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b12	SPEST	CPUスタックポインタモニタ割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

NMISR レジスタは、ノンマスカブル割り込み要因のステータスを監視します。NMISR レジスタへの書き込みは無視されます。ノンマスカブル割り込みイネーブルレジスタ（NMIER）の設定は、このレジスタのステータスフラグには影響しません。ノンマスカブル割り込みの処理ルーチンでは、このレジスタの全ビットが 0 になっていることをチェックして、他の NMI 要求が発生していないことを確認してから、処理を終了してください。

IWDTST フラグ（IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラーステータスフラグ）

IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み要求を示します。本フラグは読み出し専用であり、NMICLR.IWDTCLR ビットでクリアされます。

［1 になる条件］

- IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込みが発生し、この割り込みが許可されているとき

［0 になる条件］

- NMICLR.IWDTCLR ビットに 1 を書いたとき

WDTST フラグ（WDT アンダーフロー／リフレッシュエラーステータスフラグ）

WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み要求を示します。本フラグは読み出し専用であり、NMICLR.WDTCLR ビットでクリアされます。

［1 になる条件］

- WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込みが発生したとき

［0 になる条件］

- NMICLR.WDTCLR ビットに 1 を書いたとき

LVD1ST フラグ（電圧監視 1 割り込みステータスフラグ）

電圧監視 1 割り込み要求を示します。本フラグは読み出し専用であり、NMICLR.LVD1CLR ビットでクリアされます。

［1 になる条件］

- 電圧監視 1 割り込みが発生し、この割り込みが許可されているとき

［0 になる条件］

- NMICLR.LVD1CLR ビットに 1 を書いたとき

VBATTST フラグ（VBATT 監視割り込みステータスフラグ）

VBATT 監視割り込み要求を示します。本フラグは読み出し専用であり、NMICLR.VBATTCLR ビットでクリアされます。

［1 になる条件］

- VBATT 監視割り込みが発生したとき

［0 になる条件］

- NMICLR.VBATTCLR ビットに 1 を書いたとき

OSTST フラグ（発振停止検出割り込みステータスフラグ）

メイン発振停止検出割り込み要求を示します。本フラグは読み出し専用であり、NMICLR.OSTCLR ビットでクリアされます。

［1 になる条件］

- 発振停止検出割り込みが発生したとき

［0 になる条件］

- NMICLR.OSTCLR ビットに 1 を書いたとき

NMIST フラグ（NMI ステータスフラグ）

NMI 端子割り込み要求を示します。本フラグは読み出し専用であり、NMICLR.NMICLR ビットでクリアされます。

[1 になる条件]

- NMICR.NMIMD ビットで指定したエッジが NMI 端子に入力されたとき

[0 になる条件]

- NMICLR.NMICLR ビットに 1 を書いたとき

RPEST フラグ（SRAM パリティエラー割り込みステータスフラグ）

SRAM パリティエラー割り込み要求を示します。

[1 になる条件]

- SRAM パリティエラーにより、割り込みが発生したとき

[0 になる条件]

- NMICLR.RPECLR ビットに 1 を書いたとき

RECCST フラグ（SRAM ECC エラー割り込みステータスフラグ）

SRAM ECC エラー割り込み要求を示します。

[1 になる条件]

- SRAM ECC エラーにより、割り込みが発生したとき

[0 になる条件]

- NMICLR.RECCCLR ビットに 1 を書いたとき

BUSST フラグ（MPU バススレーブエラー割り込みステータスフラグ）

バススレーブエラー割り込み要求を示します。

[1 になる条件]

- バススレーブエラーにより、割り込みが発生したとき

[0 になる条件]

- NMICLR.BUSSCLR ビットに 1 を書いたとき

BUSMST フラグ（MPU バスマスタエラー割り込みステータスフラグ）

バスマスタエラー割り込み要求を示します。

[1 になる条件]

- バスマスタエラーにより、割り込みが発生したとき

[0 になる条件]

- NMICLR.BUSMCLR ビットに 1 を書いたとき

SPEST フラグ（CPU スタックポインタモニタ割り込みステータスフラグ）

CPU スタックポインタモニタ割り込み要求を示します。

[1 になる条件]

- CPU スタックポインタモニタにより、割り込みが発生したとき

[0 になる条件]

- NMICLR.SPECLR ビットに 1 を書いたとき

14.2.3　ノンマスカブル割り込みイネーブルレジスタ（NMIER）

アドレス　ICU.NMIER 4000 6120h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	SPEEN	BUSMEN	BUSSEN	RECCEN	RPEEN	NMIEN	OSTEN	—	VBATTEN	—	LVD1EN	WDTEN	IWDTEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IWDTEN	IWDTアンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b1	WDTEN	WDTアンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b2	LVD1EN	電圧監視1割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	VBATTEN	VBATT監視割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	OSTEN	発振停止検出割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b7	NMIEN	NMI端子割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1）
b8	RPEEN	SRAMパリティエラー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b9	RECCEN	SRAM ECCエラー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b10	BUSSEN	MPUバススレーブエラー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b11	BUSMEN	MPUバスマスタエラー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b12	SPEEN	CPUスタックポインタモニタ割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/(W) （注1） （注2）
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　リセット後、1 回だけ 1 を書き込むことができ、以後のライトアクセスは無効です。0 の書き込みは無効です。
注 2.　イベント信号として使用する場合、1 にしないでください。

IWDTEN ビット（IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可）

NMI の起動要因となる IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込みを許可します。

WDTEN ビット（WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可）

NMI の起動要因となる WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込みを許可します。

LVD1EN ビット（電圧監視 1 割り込み許可）

NMI の起動要因となる電圧監視 1 割り込みを許可します。

VBATTEN ビット（VBATT 監視割り込み許可）

NMI の起動要因となる VBATT 監視割り込みを許可します。

OSTEN ビット（発振停止検出割り込み許可）

NMI の起動要因となるメイン発振停止検出割り込みを許可します。

NMIEN ビット（NMI 端子割り込み許可）

NMI の起動要因となる NMI 端子割り込みを許可します。

RPEEN ビット（SRAM パリティエラー割り込み許可）

NMI の起動要因となる SRAM パリティエラー割り込みを許可します。

RECCEN ビット（SRAM ECC エラー割り込み許可）

NMI の起動要因となる SRAM ECC エラー割り込みを許可します。

BUSSEN ビット（MPU バススレーブエラー割り込み許可）

NMI の起動要因となるバススレーブエラー割り込みを許可します。

BUSMEN ビット（MPU バスマスタエラー割り込み許可）

NMI の起動要因となるバスマスタエラー割り込みを許可します。

SPEEN ビット（CPU スタックポインタモニタ割り込み許可）

NMI の起動要因となる CPU スタックポインタモニタ割り込みを許可します。

14.2.4 ノンマスカブル割り込みステータスクリアレジスタ（NMICLR）

アドレス ICU.NMICLR 4000 6130h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	SPECLR	BUSMCLR	BUSSCLR	RECCCLR	RPECLR	NMICLR	OSTCLR	—	VBATTCLR	—	LVD1CLR	WDTCLR	IWDTCLR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IWDTCLR	IWDTクリア	0：無効 1：NMISR.IWDTSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b1	WDTCLR	WDTクリア	0：無効 1：NMISR.WDTSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b2	LVD1CLR	LVD1クリア	0：無効 1：NMISR.LVD1STフラグをクリア	R/(W) （注1）
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	VBATTCLR	VBATTクリア	0：無効 1：NMISR.VBATTSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	OSTCLR	OSTクリア	0：無効 1：NMISR.OSTSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b7	NMICLR	NMIクリア	0：無効 1：NMISR.NMISTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b8	RPECLR	SRAMパリティエラークリア	0：無効 1：NMISR.RPESTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b9	RECCCLR	SRAM ECCエラークリア	0：無効 1：NMISR.RECCSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b10	BUSSCLR	バススレーブエラークリア	0：無効 1：NMISR.BUSSSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b11	BUSMCLR	バスマスタエラークリア	0：無効 1：NMISR.BUSMSTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b12	SPECLR	CPUスタックポインタモニタ割り込みクリア	0：無効 1：NMISR.SPESTフラグをクリア	R/(W) （注1）
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　本ビットには 1 のみ書けます。

IWDTCLR ビット（IWDT クリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.IWDTST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

WDTCLR ビット（WDT クリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.WDTST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

LVD1CLR ビット（LVD1 クリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.LVD1ST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

VBATTCLR ビット（VBATT クリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.VBATTST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

OSTCLR ビット（OST クリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.OSTST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

NMICLR ビット（NMI クリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.NMIST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

RPECLR ビット（SRAM パリティエラークリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.RPEST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

RECCCLR ビット（SRAM ECC エラークリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.RECCST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

BUSSCLR ビット（バススレーブエラークリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.BUSSST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

BUSMCLR ビット（バスマスタエラークリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.BUSMSST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

SPECLR ビット（CPU スタックポインタモニタ割り込みクリア）

1 を書き込むことにより、NMISR.SPEST フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

14.2.5　NMI 端子割り込みコントロールレジスタ（NMICR）

アドレス　ICU.NMICR 4000 6100h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	NFLTEN	—	NFCLKSEL[1:0]		—	—	—	NMIMD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	NMIMD	NMI検出設定	0：立ち下がりエッジ 1：立ち上がりエッジ	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	NFCLKSEL[1:0]	NMIデジタルフィルタサンプリングクロック選択	b5 b4 0 0：PCLKB 0 1：PCLKB/8 1 0：PCLKB/32 1 1：PCLKB/64	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	NFLTEN	NMIデジタルフィルタ有効	0：デジタルフィルタ無効 1：デジタルフィルタ有効	R/W

NMICR レジスタの設定を変更してから、NMI 端子割り込みを許可（NMIER.NMIEN ビットを 1）にしてください。

NMIMD ビット（NMI 検出設定）

NMI 端子割り込みの検出センシング方法を選択します。

NFCLKSEL[1:0] ビット（NMI デジタルフィルタサンプリングクロック選択）

NMI 端子割り込みのデジタルフィルタサンプリングクロックを選択します。下記から選択できます。

- PCLKB（毎サイクル）
- PCLKB/8（8 サイクルに 1 回）
- PCLKB/32（32 サイクルに 1 回）
- PCLKB/64（64 サイクルに 1 回）

デジタルフィルタの詳細については、14.4.3　デジタルフィルタを参照してください。

NFLTEN ビット（NMI デジタルフィルタ有効）

NMI 端子割り込みのデジタルフィルタを有効にします。デジタルフィルタは、NFLTEN ビットが 1 の場合に有効になり、NFLTEN ビットが 0 の場合に無効になります。NMI 端子レベルは、NMIFLTC.NFCLKSEL[1:0] ビットで指定されたクロックサイクルでサンプリングされます。サンプリングされたレベルが 3 回一致すると、デジタルフィルタからの出力レベルが変化します。デジタルフィルタの詳細については、14.4.3　デジタルフィルタを参照してください。

14.2.6　ICU イベントリンク設定レジスタ n（IELSRn）

アドレス　ICU.IELSR0 4000 6300h, ICU.IELSR1 4000 6304h, ICU.IELSR2 4000 6308h, ICU.IELSR3 4000 630Ch……
……ICU.IELSR28 4000 6370h, ICU.IELSR29 4000 6374h, ICU.IELSR30 4000 6378h, ICU.IELSR31 4000 637Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	DTCE	—	—	—	—	—	—	—	IR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	IELS[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	IELS[7:0]	ICUイベントリンク選択	b7 b0 00000000：対応するNVICまたはDTCモジュールへの割り込みは禁止 00000001～11011001：リンクするイベント信号の番号。詳細は、表 14.4 を参照してください。	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b16	IR	割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求の発生なし 1：割り込み要求の発生あり	R/(W)（注1）
b23-b17	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b24	DTCE	DTC起動許可	0：DTC起動を禁止 1：DTC起動を許可	R/W
b31-b25	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 .　このレジスタにはハーフワードまたはワードアクセスが必要です。
注 .　Bluetooth ミドルウェアは IELSR31 レジスタに対応する処理を行います。IELSR31 の設定は変更しないでください。
注 1.　IR フラグを 1 にする書き込みは禁止です。

IELSRn レジスタでは、NVIC で使用する IRQ 要因を選択します。詳細は、表 14.4　イベントテーブルを参照してください。IELSRn（n = 0 ～ 31）は、NVIC IRQ 入力要因番号 0 ～ 31 に対応しています。

IELS[7:0] ビット（ICU イベントリンク選択）

対応する NVIC/DTC モジュールにリンクするイベント信号を指定します。

IR フラグ（割り込みステータスフラグ）

IELS[7:0] で指定されたイベントからの割り込み要求の有無を示します。

［1 になる条件］

- 対応する周辺モジュールまたは IRQi 端子から割り込み要求を受信したとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき。DTCE ビットを 0 にしてから、IR フラグを 0 にすること

IR フラグのクリア方法：

1. 入力信号をネゲートする。
2. 周辺リードアクセスを 1 回実行し、対象モジュールクロックの 2 クロックサイクル分待つ。
3. 0 を書き込んで IR フラグをクリアする。

DTCE ビット（DTC 起動許可）

DTCE ビットを 1 にすると、対応するイベントが DTC 起動要因として選択されます。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 設定の転送数が終了したとき。チェーン転送の場合は、指定された最後のチェーン転送の転送数が終了したとき
- 0 を書いたとき

14.2.7　DMAC イベントリンク設定レジスタ n（DELSRn）

アドレス　ICU.DELSR0 4000 6280h, ICU.DELSR1 DELSR1, ICU.DELSR2 4000 6288h, ICU.DELSR3 4000 628Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	IR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	DELS[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	DELS[7:0]	DMACイベントリンク選択	b7　b0 00000000：　対応するDMACモジュールへのDMA起動要求は無効 00000001～11011001：　リンクするイベント信号の番号 上記以外は設定しないでください。詳細は、表14.4　イベントテーブルを参照してください。	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b16	IR	DMACの割り込みステータスフラグ	0：割り込み要求なし 1：割り込み要求あり	R/W （注1）
b31-b17	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 .　このレジスタにはハーフワードまたはワードアクセスが必要です。
注 1.　IR フラグを 1 にする書き込みは禁止です。

DELS[7:0] ビット（DMAC イベントリンク選択）

DMAC モジュールにリンクするイベント信号を指定します。

IR フラグ（DMAC の割り込みステータスフラグ）

各 DMA 転送要求のステータスフラグです。

本フラグは、同じレジスタの DELS[7:0] ビットに対応します。

[1 になる条件]

- 本フラグは、対応する周辺モジュールまたは IRQi 端子から DMA 転送要求が発生したときに、1 に設定されます

[0 になる条件]

- 0 を書いたとき
- DMA 転送要求の発生後、DMA 転送を開始したとき

14.2.8　SYS イベントリンク設定レジスタ（SELSR0）

アドレス　ICU.SELSR0 4000 6200h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	SELS[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	SELS[7:0]	SYSイベントリンク選択	b7　b0 00000000：　対応する低消費電力モードモジュールへのイベント出力は無効 00000001～11011001：　リンクするイベント信号の番号 上記以外は設定しないでください。詳細は、表 14.4　イベントテーブルを参照してください。	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SELSR0 レジスタでは、スヌーズモードから CPU を復帰させるためのイベントを選択します。表 14.4 において「スヌーズモードの解除／ SELSR0 の使用」欄に○印が付いたイベントのみを使用できます。このレジスタで指定されるイベントは、表 14.4 では ICU_SNZCANCEL（017h）と定義されています。IELSRn.IELS ビットに 017h が設定されると、SELSR0 イベント割り込みが発生します。

14.2.9 ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ（WUPEN）

アドレス ICU.WUPEN 4000 61A0h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	IIC0WUPEN	AGT1CBWUPEN	AGT1CAWUPEN	AGT1UDWUPEN	USBFSWUPEN	—	RTCPRDWUPEN	RTCALMWUPEN	ACMPLP0WUPEN	—	—	VBATTWUPEN	—	LVD1WUPEN	KEYWUPEN	IWDTWUPEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	IRQWUPEN[15:0]															
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	IRQWUPEN[15:0]	IRQ割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：IRQ割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：IRQ割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b16	IWDTWUPEN	IWDT割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：IWDT割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：IWDT割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b17	KEYWUPEN	キー割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：キー割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：キー割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b18	LVD1WUPEN	LVD1割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：LVD1割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：LVD1割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b19	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b20	VBATTWUPEN	VBATT監視割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：VBATT監視割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：VBATT監視割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b22-b21	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b23	ACMPLP0WUPEN	ACMPLP0割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：ACMPLP0割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：ACMPLP0割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b24	RTCALMWUPEN	RTCアラーム割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：RTCアラーム割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：RTCアラーム割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b25	RTCPRDWUPEN	RTC周期割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：RTC周期割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：RTC周期割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b26	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b27	USBFSWUPEN	USBFS割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：USBFS割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：USBFS割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b28	AGT1UDWUPEN	AGT1アンダーフロー割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：AGT1アンダーフロー割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：AGT1アンダーフロー割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b29	AGT1CAWUPEN	AGT1コンペアマッチA割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：AGT1コンペアマッチA割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：AGT1コンペアマッチA割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W
b30	AGT1CBWUPEN	AGT1コンペアマッチB割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：AGT1コンペアマッチB割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：AGT1コンペアマッチB割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31	IIC0WUPEN	IIC0アドレス一致割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可	0：IIC0アドレス一致割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰禁止 1：IIC0アドレス一致割り込みによるソフトウェアスタンバイ復帰許可	R/W

このレジスタの各ビットは、対応する割り込みがソフトウェアスタンバイモードから CPU を復帰させることができるかどうかを制御します。

IRQWUPEN[15:0] ビット（IRQ 割り込みソフトウェア スタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため IRQn 割り込みの使用を許可します。0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15 ビットのみ使用可能です。

IWDTWUPEN ビット（IWDT 割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため IWDT 割り込みの使用を許可します。

KEYWUPEN ビット（キー割り込みソフトウェア スタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するためキー割り込みの使用を許可します。

LVD1WUPEN ビット（LVD1 割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため LVD1 割り込みの使用を許可します。

VBATTWUPEN ビット（VBATT 監視割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため VBATT 監視割り込みの使用を許可します。

ACMPLP0WUPEN ビット（ACMPLP0 割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため ACMPLP0 割り込みの使用を許可します。

RTCALMWUPEN ビット（RTC アラーム割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため RTC アラーム割り込みの使用を許可します。

RTCPRDWUPEN ビット（RTC 周期割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため RTC 周期割り込みの使用を許可します。

USBFSWUPEN ビット（USBFS 割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため USBFS 割り込みの使用を許可します。

AGT1UDWUPEN ビット（AGT1 アンダーフロー割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため AGT1 アンダーフロー割り込みの使用を許可します。

AGT1CAWUPEN ビット（AGT1 コンペアマッチ A 割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため AGT1 コンペアマッチ A 割り込みの使用を許可します。

AGT1CBWUPEN ビット（AGT1 コンペアマッチ B 割り込みソフトウェアスタンバイ復帰許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため AGT1 コンペアマッチ B 割り込みの使用を許可します。

IIC0WUPEN ビット（IIC0 アドレス一致割り込み ソフトウェアスタンバイ復帰 許可）

ソフトウェアスタンバイモードを解除するため IIC0 割り込みの使用を許可します。

14.3　ベクタテーブル

ICU は、マスカブル割り込みとノンマスカブル割り込みを検出します。割り込み優先順位は Arm NVIC で設定されます。*ARM® Cortex®-M4 Processor Technical Reference Manual (ARM DDI 0439D)* の NVIC の章を参照してください。

14.3.1　割り込みベクタテーブル

表 14.3 に割り込みベクタテーブルの内容を示します。割り込みベクタアドレスは、NVIC の仕様に従います。

表 14.3　割り込みベクタテーブル (1/2)

例外番号	IRQ番号	ベクタオフセット	発生元	内容
0	—	000h	Arm	初期スタックポインタ
1	—	004h	Arm	初期プログラムカウンタ（リセットベクタ）
2	—	008h	Arm	ノンマスカブル割り込み（NMI）
3	—	00Ch	Arm	ハード障害
4	—	010h	Arm	MemManage障害
5	—	014h	Arm	バス障害
6	—	018h	Arm	使用障害
7	—	01Ch	Arm	予約
8	—	020h	Arm	予約
9	—	024h	Arm	予約
10	—	028h	Arm	予約
11	—	02Ch	Arm	スーパバイザコール（SVCall）
12	—	030h	Arm	デバッグ監視
13	—	034h	Arm	予約
14	—	038h	Arm	システムサービスに対する保留可能な要求（PendableSrvReq）
15	—	03Ch	Arm	システムティックタイマ（SysTick）
16	0	040h	ICU.IELSR0	ICU.IELSR0 レジスタで選択されたイベント
17	1	044h	ICU.IELSR1	ICU.IELSR1 レジスタで選択されたイベント
18	2	048h	ICU.IELSR2	ICU.IELSR2 レジスタで選択されたイベント
19	3	04Ch	ICU.IELSR3	ICU.IELSR3 レジスタで選択されたイベント
20	4	050h	ICU.IELSR4	ICU.IELSR4 レジスタで選択されたイベント
21	5	054h	ICU.IELSR5	ICU.IELSR5 レジスタで選択されたイベント
22	6	058h	ICU.IELSR6	ICU.IELSR6 レジスタで選択されたイベント
23	7	05Ch	ICU.IELSR7	ICU.IELSR7 レジスタで選択されたイベント
24	8	060h	ICU.IELSR8	ICU.IELSR8 レジスタで選択されたイベント
25	9	064h	ICU.IELSR9	ICU.IELSR9 レジスタで選択されたイベント
26	10	068h	ICU.IELSR10	ICU.IELSR10 レジスタで選択されたイベント
27	11	06Ch	ICU.IELSR11	ICU.IELSR11 レジスタで選択されたイベント
28	12	070h	ICU.IELSR12	ICU.IELSR12 レジスタで選択されたイベント
29	13	074h	ICU.IELSR13	ICU.IELSR13 レジスタで選択されたイベント
30	14	078h	ICU.IELSR14	ICU.IELSR14 レジスタで選択されたイベント
31	15	07Ch	ICU.IELSR15	ICU.IELSR15 レジスタで選択されたイベント
32	16	080h	ICU.IELSR16	ICU.IELSR16 レジスタで選択されたイベント
33	17	084h	ICU.IELSR17	ICU.IELSR17 レジスタで選択されたイベント
34	18	088h	ICU.IELSR18	ICU.IELSR18 レジスタで選択されたイベント
35	19	08Ch	ICU.IELSR19	ICU.IELSR19 レジスタで選択されたイベント

表 14.3 割り込みベクタテーブル (2/2)

例外番号	IRQ番号	ベクタオフセット	発生元	内容
36	20	090h	ICU.IELSR20	ICU.IELSR20 レジスタで選択されたイベント
37	21	094h	ICU.IELSR21	ICU.IELSR21 レジスタで選択されたイベント
38	22	098h	ICU.IELSR22	ICU.IELSR22 レジスタで選択されたイベント
39	23	09Ch	ICU.IELSR23	ICU.IELSR23 レジスタで選択されたイベント
40	24	0A0h	ICU.IELSR24	ICU.IELSR24 レジスタで選択されたイベント
41	25	0A4h	ICU.IELSR25	ICU.IELSR25 レジスタで選択されたイベント
42	26	0A8h	ICU.IELSR26	ICU.IELSR26 レジスタで選択されたイベント
43	27	0ACh	ICU.IELSR27	ICU.IELSR27 レジスタで選択されたイベント
44	28	0B0h	ICU.IELSR28	ICU.IELSR28 レジスタで選択されたイベント
45	29	0B4h	ICU.IELSR29	ICU.IELSR29 レジスタで選択されたイベント
46	30	0B8h	ICU.IELSR30	ICU.IELSR30 レジスタで選択されたイベント
47	31	0BCh	ICU.IELSR31	ICU.IELSR31 レジスタで選択されたイベント

14.3.2　イベント番号

下表は、イベント番号を記した表 14.4 の各項目の説明です。

項目	内容
割り込み要求の発生元	割り込み要求の発生元の名称
名称	割り込みの名称
割り込み検出の形式（信号）	割り込み検出法としての「エッジ」または「レベル」 NMI割り込みとして使用可能なものが○印で示されています。
NVICへの接続	CPU割り込み（IELSRnの設定）として使用可能な割り込みが○印で示されています。
DTCの起動	DTCの起動要求（IELSRnの設定）に使用可能な割り込みが○印で示されています。
DMACの起動	DMACの起動要求（DELSRnの設定）に使用可能な割り込みが○印で示されています。
スヌーズモードの解除	SELSR0を使用したスヌーズモードからの復帰要求に使用可能な割り込みが○印で示されています。それ以外では、直接使用可能な割り込みが○印で示されています。
ソフトウェアスタンバイモードの解除	ソフトウェアスタンバイモードからの復帰要求に使用可能な割り込みが○印で示されています。

表 14.4　イベントテーブル (1/5)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	IELSRn		DELSRn	スヌーズモードの解除	ソフトウェアスタンバイモードの解除
			NVICへの接続	DTCの起動	DMACの起動		
001h	ポート	PORT_IRQ0	○	○	○	○	○
002h		PORT_IRQ1	○	○	○	○	○
003h		PORT_IRQ2	○	○	○	○	○
004h		PORT_IRQ3	○	○	○	○	○
005h		PORT_IRQ4	○	○	○	○	○
007h		PORT_IRQ6	○	○	○	○	○
008h		PORT_IRQ7	○	○	○	○	○
009h	BLE	BLEIRQ（注5）	○	○	○	○	○
00Ah	ポート	PORT_IRQ9	○	○	○	○	○
00Ch		PORT_IRQ11	○	○	○	○	○
00Fh		PORT_IRQ14	○	○	○	○	○
010h		PORT_IRQ15	○	○	○	○	○
011h	DMAC0	DMAC0_INT	○	○			
012h	DMAC1	DMAC1_INT	○	○			
013h	DMAC2	DMAC2_INT	○	○			
014h	DMAC3	DMAC3_INT	○	○			
015h	DTC	DTC_COMPLETE	○			○（注4）	
017h	ICU	ICU_SNZCANCEL	○			○	
018h	FCU	FCU_FRDYI	○				
019h	LVD	LVD_LVD1	○			○	○
01Bh	VBATT	VBATT_LVD	○			○	○
01Ch	MOSC	MOSC_STOP	○				
01Dh	低消費電力モード	SYSTEM_SNZREQ		○			
01Eh	AGT0	AGT0_AGTI	○	○	○		
01Fh		AGT0_AGTCMAI	○	○	○		
020h		AGT0_AGTCMBI	○	○	○		

表 14.4　イベントテーブル (2/5)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	IELSRn		DELSRn	スヌーズモードの解除	ソフトウェアスタンバイモードの解除
			NVICへの接続	DTCの起動	DMACの起動		
021h	AGT1	AGT1_AGTI	○	○	○	○	○
022h		AGT1_AGTCMAI	○	○	○	○	○
023h		AGT1_AGTCMBI	○	○	○	○	○
024h	IWDT	IWDT_NMIUNDF	○			○	○
025h	WDT	WDT_NMIUNDF	○				
026h	RTC	RTC_ALM	○			○	○
027h		RTC_PRD	○			○	○
028h		RTC_CUP	○				
029h	ADC140	ADC140_ADI	○	○	○		
02Ah		ADC140_GBADI	○	○	○		
02Bh		ADC140_CMPAI	○				
02Ch		ADC140_CMPBI	○				
02Dh		ADC140_WCMPM		○	○	○（注4）	
02Eh		ADC140_WCMPUM		○	○	○（注4）	
02Fh	ACMPLP	ACMP_LP0	○			○	○
030h		ACMP_LP1	○				
031h	USBFS	USBFS_D0FIFO	○	○	○		
032h		USBFS_D1FIFO	○	○	○		
033h		USBFS_USBI	○				
034h		USBFS_USBR	○			○	○
035h	IIC0	IIC0_RXI	○	○	○		
036h		IIC0_TXI	○	○	○		
037h		IIC0_TEI	○				
038h		IIC0_EEI	○				
039h		IIC0_WUI	○			○	○
03Ah	IIC1	IIC1_RXI	○	○	○		
03Bh		IIC1_TXI	○	○	○		
03Ch		IIC1_TEI	○				
03Dh		IIC1_EEI	○				
046h	CTSU	CTSU_CTSUWR	○	○	○		
047h		CTSU_CTSURD	○	○	○		
048h		CTSU_CTSUFN	○			○（注4）	
049h	KINT	KEY_INTKR	○			○（注1）	○（注1）
04Ah	DOC	DOC_DOPCI	○			○（注4）	
04Bh	CAC	CAC_FERRI	○				
04Ch		CAC_MENDI	○				
04Dh		CAC_OVFI	○				
04Eh	CAN0	CAN0_ERS	○				
04Fh		CAN0_RXF	○				
050h		CAN0_TXF	○				
051h		CAN0_RXM	○				
052h		CAN0_TXM	○				

表 14.4　イベントテーブル (3/5)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	IELSRn		DELSRn	スヌーズモードの解除	ソフトウェアスタンバイモードの解除
			NVICへの接続	DTCの起動	DMACの起動		
053h	I/Oポート	IOPORT_GROUP1	○	○（注2）	○（注2）		
054h		IOPORT_GROUP2	○	○（注2）	○（注2）		
055h		IOPORT_GROUP3	○	○（注2）	○（注2）		
056h		IOPORT_GROUP4	○	○（注2）	○（注2）		
057h	ELC	ELC_SWEVT0	○（注3）	○			
058h		ELC_SWEVT1	○（注3）	○			
059h	POEG	POEG_GROUP0	○				
05Ah		POEG_GROUP1	○				
05Bh	GPT320	GPT0_CCMPA	○	○	○		
05Ch		GPT0_CCMPB	○	○	○		
05Dh		GPT0_CMPC	○	○	○		
05Eh		GPT0_CMPD	○	○	○		
05Fh		GPT0_CMPE	○	○	○		
060h		GPT0_CMPF	○	○	○		
061h		GPT0_OVF	○	○	○		
062h		GPT0_UDF	○	○	○		
063h	GPT321	GPT1_CCMPA	○	○	○		
064h		GPT1_CCMPB	○	○	○		
065h		GPT1_CMPC	○	○	○		
066h		GPT1_CMPD	○	○	○		
067h		GPT1_CMPE	○	○	○		
068h		GPT1_CMPF	○	○	○		
069h		GPT1_OVF	○	○	○		
06Ah		GPT1_UDF	○	○	○		
06Bh	GPT322	GPT2_CCMPA	○	○	○		
06Ch		GPT2_CCMPB	○	○	○		
06Dh		GPT2_CMPC	○	○	○		
06Eh		GPT2_CMPD	○	○	○		
06Fh		GPT2_CMPE	○	○	○		
070h		GPT2_CMPF	○	○	○		
071h		GPT2_OVF	○	○	○		
072h		GPT2_UDF	○	○	○		
073h	GPT323	GPT3_CCMPA	○	○	○		
074h		GPT3_CCMPB	○	○	○		
075h		GPT3_CMPC	○	○	○		
076h		GPT3_CMPD	○	○	○		
077h		GPT3_CMPE	○	○	○		
078h		GPT3_CMPF	○	○	○		
079h		GPT3_OVF	○	○	○		
07Ah		GPT3_UDF	○	○	○		

表 14.4　イベントテーブル (4/5)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	IELSRn		DELSRn	スヌーズモードの解除	ソフトウェアスタンバイモードの解除
			NVICへの接続	DTCの起動	DMACの起動		
07Bh	GPT164	GPT4_CCMPA	○	○	○		
07Ch		GPT4_CCMPB	○	○	○		
07Dh		GPT4_CMPC	○	○	○		
07Eh		GPT4_CMPD	○	○	○		
07Fh		GPT4_CMPE	○	○	○		
080h		GPT4_CMPF	○	○	○		
081h		GPT4_OVF	○	○	○		
082h		GPT4_UDF	○	○	○		
083h	GPT165	GPT5_CCMPA	○	○	○		
084h		GPT5_CCMPB	○	○	○		
085h		GPT5_CMPC	○	○	○		
086h		GPT5_CMPD	○	○	○		
087h		GPT5_CMPE	○	○	○		
088h		GPT5_CMPF	○	○	○		
089h		GPT5_OVF	○	○	○		
08Ah		GPT5_UDF	○	○	○		
09Bh	GPT168	GPT8_CCMPA	○	○	○		
09Ch		GPT8_CCMPB	○	○	○		
09Dh		GPT8_CMPC	○	○	○		
09Eh		GPT8_CMPD	○	○	○		
09Fh		GPT8_CMPE	○	○	○		
0A0h		GPT8_CMPF	○	○	○		
0A1h		GPT8_OVF	○	○	○		
0A2h		GPT8_UDF	○	○	○		
0ABh	GPT	GPT_UVWEDGE	○				
0ACh	SCI0	SCI0_RXI	○	○	○		
0ADh		SCI0_TXI	○	○	○		
0AEh		SCI0_TEI	○				
0AFh		SCI0_ERI	○				
0B0h		SCI0_AM	○			○（注4）	
0B1h		SCI0_RXI_OR_ERI				○（注4）	
0B2h	SCI1	SCI1_RXI	○	○	○		
0B3h		SCI1_TXI	○	○	○		
0B4h		SCI1_TEI	○				
0B5h		SCI1_ERI	○				
0B6h		SCI1_AM	○				
0C1h	SCI4	SCI4_RXI	○	○	○		
0C2h		SCI4_TXI	○	○	○		
0C3h		SCI4_TEI	○				
0C4h		SCI4_ERI	○				
0C5h		SCI4_AM	○				

表 14.4　イベントテーブル (5/5)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	IELSRn		DELSRn	スヌーズモードの解除	ソフトウェアスタンバイモードの解除
			NVICへの接続	DTCの起動	DMACの起動		
0C6h	SCI9	SCI9_RXI	○	○	○		
0C7h		SCI9_TXI	○	○	○		
0C8h		SCI9_TEI	○				
0C9h		SCI9_ERI	○				
0CAh		SCI9_AM	○				
0CBh	SPI0	SPI0_SPRI	○	○	○		
0CCh		SPI0_SPTI	○	○	○		
0CDh		SPI0_SPII	○				
0CEh		SPI0_SPEI	○				
0CFh		SPI0_SPTEND	○				
0D0h	SPI1	SPI1_SPRI	○	○	○		
0D1h		SPI1_SPTI	○	○	○		
0D2h		SPI1_SPII	○				
0D3h		SPI1_SPEI	○				
0D4h		SPI1_SPTEND	○				

注 1.　KRCTL.KRMD = 1 の場合にのみサポートされます。
注 2.　最初のエッジ検出のみが有効です。
注 3.　DTC 転送後の割り込みのみがサポートされます。
注 4.　SELSR0 の使用
注 5.　Bluetooth ミドルウェアは BLEIRQ に対応する処置を行います。この要因を使用しないでください。

14.4　割り込み動作

ICU は下記の機能を実行します。

- 割り込みの検出
- 割り込みの許可／禁止
- 割り込み要求先の選択（CPU 割り込み、DTC 起動、DMAC 起動など）

14.4.1　割り込みの検出

外部端子割り込み要求は、割り込み信号のエッジまたはレベル（立ち下がりエッジ／立ち上がりエッジ／両エッジ／ Low レベル）のいずれかで検出されます。IRQi 端子検出モードを選択するには、IRQCRi レジスタの IRQMD[1:0] ビットを設定します。周辺モジュールに関連した割り込み要因については、14.3.2　イベント番号を参照してください。イベントは、割り込みが発生して CPU に受け付けられる前に、NVIC で受け付けられる必要があります。

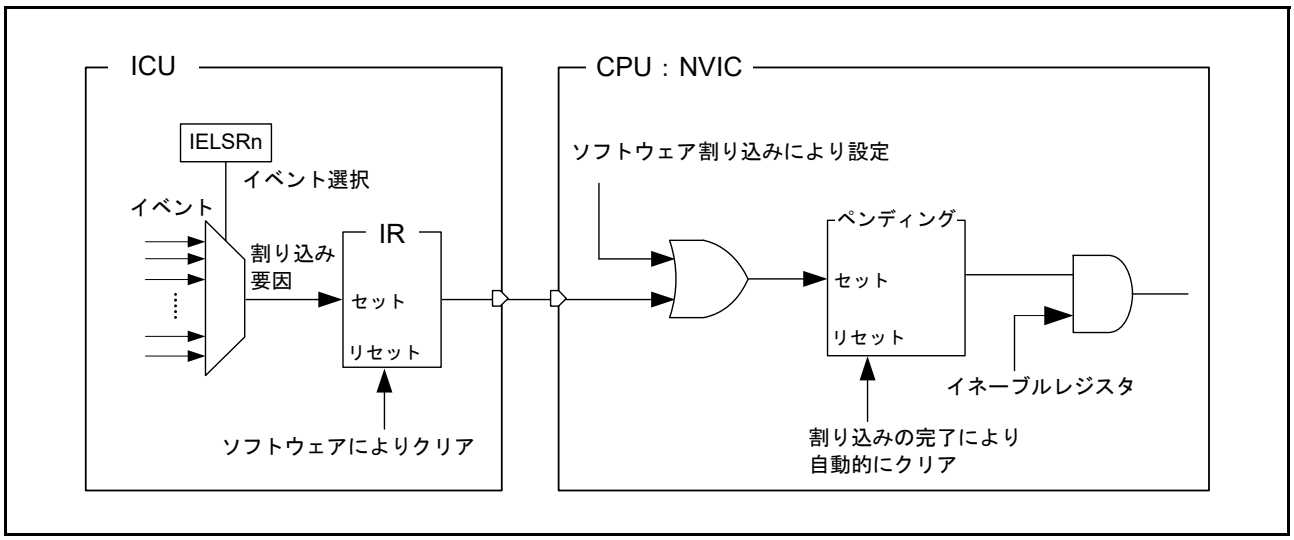


図 14.2　ICU および CPU: NVIC の割り込み経路

- 割り込み中の一般的動作
  - 非ソフトウェア割り込みが発生したとき：
    IELSRn.IR フラグと割り込みセット／クリア保留レジスタ（NVIC）が設定される
  - ソフトウェア割り込みが発生したとき：
    割り込みセット保留レジスタを設定する
  - 割り込みが完了したとき：
    ソフトウェアで IELSRn.IR フラグをクリアする。
    割り込みセット／クリア保留レジスタは自動的にクリアされる

- 割り込みが許可される場合：
  1) 割り込みセットイネーブルレジスタを設定する。
  2) IELSRn.IELSビットを割り込み要因として設定する。
  3) イベント要因に対し動作設定値を指定する。
- 割り込みが禁止される場合：
  1) イベント要因に対し設定値を無効にする。
  2) IELSRn.IELSビットをクリアする（IELSRn.IELS[7:0] = 000h）。必要に応じて、IELSRn.IRフラグをクリアする。
  3) 割り込みクリアイネーブルレジスタをクリアする。必要に応じて、割り込みクリア保留レジスタをクリアする。
- 割り込みのポーリングを行う場合：
  1) 割り込みクリアイネーブルレジスタを設定（割り込みを禁止）する。
  2) IELSRn.IELSビットを設定（割り込み要因を選択）する。
  3) イベント要因に対し動作設定値を指定する。
  4) 割り込みセット保留レジスタをポーリングする。
  5) ポーリングが不要になった場合、割り込みが完了したときに、そのクリア手順に従う。

14.4.2　割り込み要求先の選択

割り込み出力先（CPU、DTC、または DMAC）は、割り込み要因ごとに個別に選択できます。利用可能な出力先は、表 14.4　イベントテーブルに示されているように、割り込みごとに固定されています。

注 .　イベントリスト（表 14.4）で〇印が付いていない割り込み要求先の設定は使用しないでください。

1 つの IELSRn レジスタで CPU または DTC を選択した場合、他の IELSRn レジスタで同じ割り込み要因を設定しないでください。同様に、1 つの DELSRn レジスタで DMAC を選択した場合、他の DELSRn レジスタで同じ割り込み要因を設定しないでください。

注 .　IELSRn や DELSRn で同じ割り込みを設定することは禁止されています。

DMAC または DTC が IRQi 端子からの要求先として選択された場合、その割り込みに対して IRQCRi の IRQMD[1:0] ビットをエッジ検出の選択に設定する必要があります。

14.4.2.1　CPU 割り込み要求

IELSRn.DTCE = 0 のとき、IELSRn レジスタで指定されたイベントが NVIC に出力されます。IELSRn.IELS ビットを設定し、IELSRn.DTCE ビットを 0 にしてください。

14.4.2.2　DTC の起動

IELSRn.DTCE = 1 のとき、IELSRn レジスタで指定されたイベントが DTC に出力されます。DTC 送信の完了後、対応する割り込みが発生します。以下の手順に従ってください。

1. IELSRn.IELS ビットを対象のイベントに設定し、IELSRn.DTCE ビットを 1 にする。
2. DTC モジュール起動ビット（DTCST.DTCST）を 1 にする。

DTC が要求先となる場合の動作を表 14.5 に示します。

表 14.5　DTC が起動するときの動作

割り込み要求先	DISEL（注1）	残り転送動作	1要求あたりの動作	IR（注2）	転送後の割り込み要求先
DTC（注3）	1	≠ 0	DTC転送→CPUに割り込み	CPUによる割り込み受け付け時にクリアされる。	DTC
		= 0	DTC転送→CPUに割り込み	CPUによる割り込み受け付け時にクリアされる。	IELSRn.DTCEビットがクリアされ、CPUが要求先になる。
	0	≠ 0	DTC転送	DTC転送データの読み出し後、DTCデータ転送の開始時にクリアされる。	DTC
		= 0	DTC転送→CPUに割り込み	CPUによる割り込み受け付け時にクリアされる。	IELSRn.DTCEビットがクリアされ、CPUが要求先になる。

注 1.　DTC.MRB.DISEL ビットで DTC 用の割り込み要求モードを設定します。
注 2.　IELSRn.IR フラグが 1 のとき、再度発生した割り込み要求（DTC 起動要求）は無視されます。
注 3.　チェーン転送の場合は、最後のチェーン転送が終了するまで DTC 転送が継続します。このとき、DISEL ビットの状態と残りの転送数によって、転送後の CPU 割り込み発生の有無、IESRn.IR フラグクリアのタイミング、および割り込み要求先が決まります。「18.　データトランスファコントローラ（DTC）」の表 18.3　チェーン転送の条件を参照してください。

14.4.2.3　DMAC の起動

IELSRn.DTCE = 0 のとき、IELSRn レジスタで指定されたイベントが NVIC に出力されます。DMAC に対して割り込み要因を設定するには、以下の手順に従ってください。

1. DELSRn.DELS[7:0] ビットを設定する。
2. IELSRn.IELS ビットを対象のイベントに設定し、IELSRn.DTCE ビットを 1 にする。
3. 対象の DMAC チャネルの起動要因（DMACm.DMTMD.DCTG[1:0]）を 01b（割り込みモジュール検出）にする。
4. 対象の DMAC チャネルの DMAC 転送許可ビット（DMACm.DMCNT.DTE）を 1 にする。
5. DMAC 動作許可ビット（DMAST.DMST）を 1 にする。

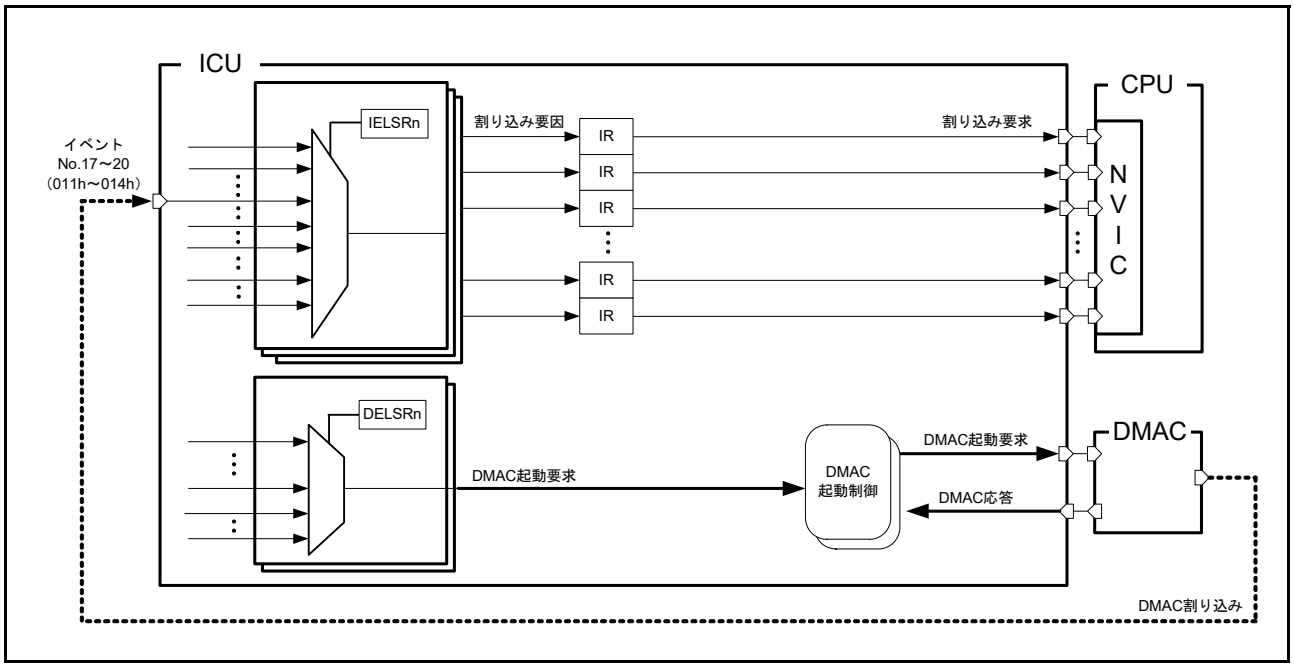


図 14.3　DMAC 要求トリガと割り込み経路

14.4.3　デジタルフィルタ

デジタルフィルタ機能は、外部割り込み要求端子（IRQi、i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）と NMI 端子割り込みのために準備されています。この機能は、入力信号をフィルタサンプリングクロック（PCLKB）でサンプリングし、3 サンプリングサイクル未満のパルス幅を持つ信号を除去します。

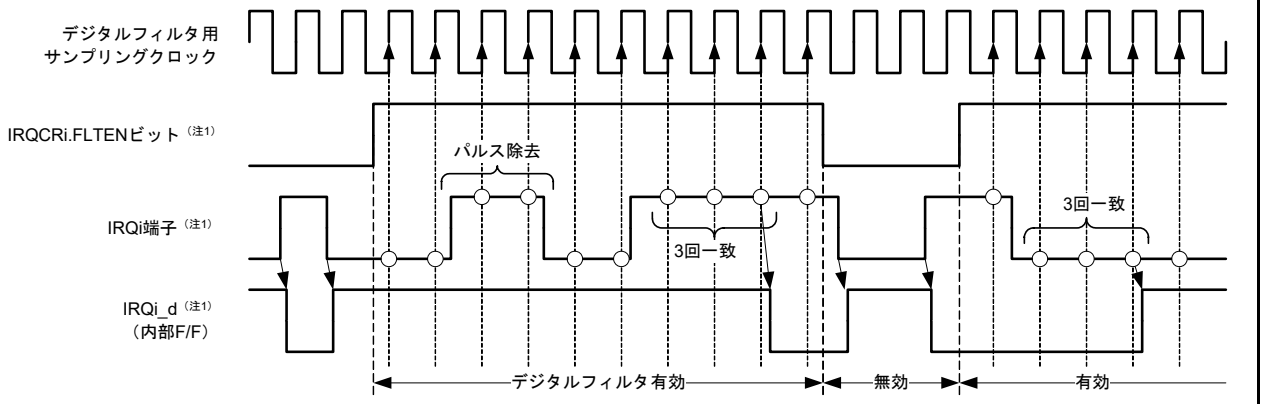
- IRQi 端子に対するデジタルフィルタの使用法：

1）	IRQCRi.FCLKSEL[1:0] ビット（i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）で、サンプリングクロックサイクルを PCLKB、PCLKB/8、PCLKB/32、または PCLKB/64 に設定する。
2）	IRQCRi.FLTEN ビット（i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）を 1（デジタルフィルタ有効）にする。

- NMI 端子に対するデジタルフィルタの使用法：

1）	NMICR.NFCLKSEL[1:0] ビットで、サンプリングクロックサイクルを PCLKB、PCLKB/8、PCLKB/32、または PCLKB/64 に設定する。
2）	NMICR.NFLTEN ビットを 1（デジタルフィルタ有効）にする。

図 14.4 にデジタルフィルタの動作例を示します。



IRQCRi.IRQMD[1:0] = 11b（Low）の場合の動作例

注 1.　i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15

図 14.4　　デジタルフィルタの動作例

ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、IRQCRi.FLTEN ビットと NMICR.NFLTEN ビットをクリアして、デジタルフィルタを無効にしてください。ICU のクロックはソフトウェアスタンバイモードでは停止します。ソフトウェアスタンバイモードの終了時、回路はスタンバイ前の状態をスタンバイ解除後の状態と比較することでエッジを検出します。ソフトウェアスタンバイモード中に入力が変化すると、誤ったエッジが検出される可能性があります。ソフトウェアスタンバイモードの終了後、デジタルフィルタを再度有効にできます。

14.4.4　　外部端子割り込み

外部端子割り込みの使用法：

1. IRQCRi.FLTEN ビット（i = 0 ～ 4, 6, 7, 9, 11, 14, 15）を 0（デジタルフィルタ無効）にする。
2. I/O ポートの設定値を設定または確認する。
3. IRQCRi レジスタの IRQMD[1:0] ビット、FCLKSEL[1:0] ビット、および FLTEN ビットを設定する。
4. IRQ 端子を以下のように選択する。
   - IRQ 端子を CPU 割り込み要求に使用する場合、IELSRn.IELS[7:0] ビットを設定し、IELSRn.DTCE ビットを 0 にする
   - IRQ 端子を DTC 起動に使用する場合、IELSRn.IELS[7:0] ビットを設定し、IELSRn.DTCE ビットを 1 にする
   - IRQ 端子を DMAC 起動に使用する場合、DELSRn.DELS ビットを設定する

14.5 ノンマスカブル割り込み動作

ノンマスカブル割り込みをトリガできるのは、以下の要因です。

- NMI 端子割り込み
- 発振停止検出割り込み
- WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み
- IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み
- 電圧監視 1 割り込み
- VBATT 監視割り込み
- SRAM パリティエラー割り込み
- SRAM ECC エラー割り込み
- MPU バスマスタエラー割り込み
- MPU バススレーブエラー割り込み
- CPU スタックポインタモニタ割り込み

ノンマスカブル割り込みは CPU でのみ使用可能です。DTC または DMAC の起動には使用できません。ノンマスカブル割り込みは他のすべての割り込みよりも優先します。ノンマスカブル割り込みの状態は、ノンマスカブル割り込みステータスレジスタ（NMISR）で確認できます。NMI 処理ルーチンから復帰する前に、NMISR のビットがすべて 0 であることを確認してください。

ノンマスカブル割り込みはデフォルトで無効になっています。ノンマスカブル割り込みを使用するには、以下の手順に従う必要があります。

NMI 端子を使用するには、手順 1 ～ 3 に従ってください。

1. NMICR.NFLTEN ビットを 0（デジタルフィルタ無効）にする。
2. NMICR レジスタの NMIMD ビット、NFCLKSEL[1:0] ビット、および NFLTEN ビットを設定する。
3. NMICLR.NMICLR ビットを 1 にして NMISR.NMIST フラグを 0 にする。
4. ノンマスカブル割り込みイネーブルレジスタ（NMIER）の対応するビットを 1 にしてノンマスカブル割り込みを許可にする。

NMIER レジスタに 1 を書いた後は、NMIER レジスタの NMIEN ビットに対する後続のライトアクセスは無視されます。NMI 割り込みは、リセットの場合を除いて、許可されたものを禁止することはできません。

14.6 低消費電力モードからの復帰

スリープモードまたはソフトウェアスタンバイモードを終了させるために使用可能な割り込み要因は、表14.4 イベントテーブルに示されています。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。14.6.1 ～ 14.6.3 には、割り込みを使用してスリープモード、ソフトウェアスタンバイモード、およびスヌーズモードから復帰する方法が示されています。

14.6.1 スリープモードからの復帰

割り込みによってスリープモードから復帰する方法：

1. 割り込み要求先として CPU を選択する。
2. NVIC で割り込みを許可にする。

ノンマスカブル割り込みによってスリープモードから復帰するには、NMIER レジスタを使用して該当の割り込み要求を許可します。

14.6.2 ソフトウェアスタンバイモードからの復帰

ICU は、ノンマスカブル割り込みを用いるか、または WUPEN レジスタで選択された割り込みを用いて、ソフトウェアスタンバイモードからの復帰を可能にします。14.2.9 ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ（WUPEN）を参照してください。

ソフトウェアスタンバイモードからの復帰方法：

1. ソフトウェアスタンバイモードからの復帰を許可する割り込み要因を選択する。
   - ノンマスカブル割り込みの場合、NMIER レジスタを使用して対象の割り込み要求を許可する
   - マスカブル割り込みの場合、WUPEN レジスタを使用して対象の割り込み要求を許可する
2. 割り込み要求先として CPU を選択する。
3. NVIC で割り込みを許可にする。

これらの条件を満たさない IRQ 端子による割り込み要求は、ソフトウェアスタンバイモードでクロックが停止している間は検出されません。

14.6.3 スヌーズモードからの復帰

ICU は、スヌーズモード用の割り込みを用いて、スヌーズモードから通常モードへの復帰を可能にします。

スヌーズモードから通常モードへの復帰方法：

1. 以下の方法のうちいずれかを使用して、スヌーズモードから通常モードへの復帰をトリガしたいイベントを選択する：
   a. スヌーズモードから通常モードへの復帰をトリガしたいイベントを SELSR0.SEL に設定し、IELSRn.IELS に値 017h（ICU_SNZCANCEL）を設定する
   b. スヌーズモードから通常モードへの復帰をトリガしたいイベントを IELSRn.IELS に設定する
2. 割り込み要求先として CPU を選択する。
3. NVIC で割り込みを許可にする。

注 . スヌーズモードでは、クロックが ICU に供給されます。IELSRn で選択したイベントが検出された場合、ソフトウェアスタンバイモードから通常モードに復帰した後、CPU は割り込みアクノリッジを実行できます。DELSRn で選択したイベントが検出された場合、ソフトウェアスタンバイモードから通常モードに復帰した後、DMAC は割り込みアクノリッジを実行できます。

14.7 ノンマスカブル割り込みとともに WFI 命令を使用する場合

WFI 命令を実行するときは、常に NMISR レジスタのステータスフラグがすべて 0 であることを確認してください。

14.8 参考資料

ARM® Cortex®-M4 Processor Technical Reference Manual (ARM DDI 0439D)

15. バス

15.1 概要

表 15.1 にバスの仕様を、図 15.1 にバスの構成図を、表 15.2 にバス種類別アドレス対応表を示します。

表 15.1 バスの仕様

バスの種類		内容
メインバス	ICodeバス（CPU）	• CPUを接続 • 内蔵メモリ（コードフラッシュメモリ）を接続
	DCodeバス（CPU）	• CPUを接続 • 内蔵メモリ（コードフラッシュメモリ）を接続
	システムバス（CPU）	• CPUを接続 • 内蔵メモリ、内部周辺バスを接続
	DMAバス	• DMAC/DTCを接続 • 内蔵メモリ、内部周辺バスを接続
スレーブインタフェース	メモリバス1	• コードフラッシュメモリを接続
	メモリバス3	• DMAバスを介してコードフラッシュメモリを接続
	メモリバス4	• SRAM0を接続
	内部周辺バス1	• 周辺モジュール関連のシステムコントロール
	内部周辺バス3	• 周辺モジュール（CAC, ELC, I/Oポート, POEG, RTC, WDT, IWDT, IIC, CAN, ADC14, DAC12, DOC）を接続
	内部周辺バス4	• 周辺モジュール（SCI, SPI, CRC, GPT）を接続
	内部周辺バス5	• 周辺モジュール（KINT, AGT, USBFS, OPAMP, ACMPLP, DAC8, SLCDC, CTSU）を接続
	内部周辺バス7	• セキュアIPを接続
	内部周辺バス9	• フラッシュメモリ（P/E時（注1））とデータフラッシュメモリを接続

注 1. P/E = プログラム／イレース

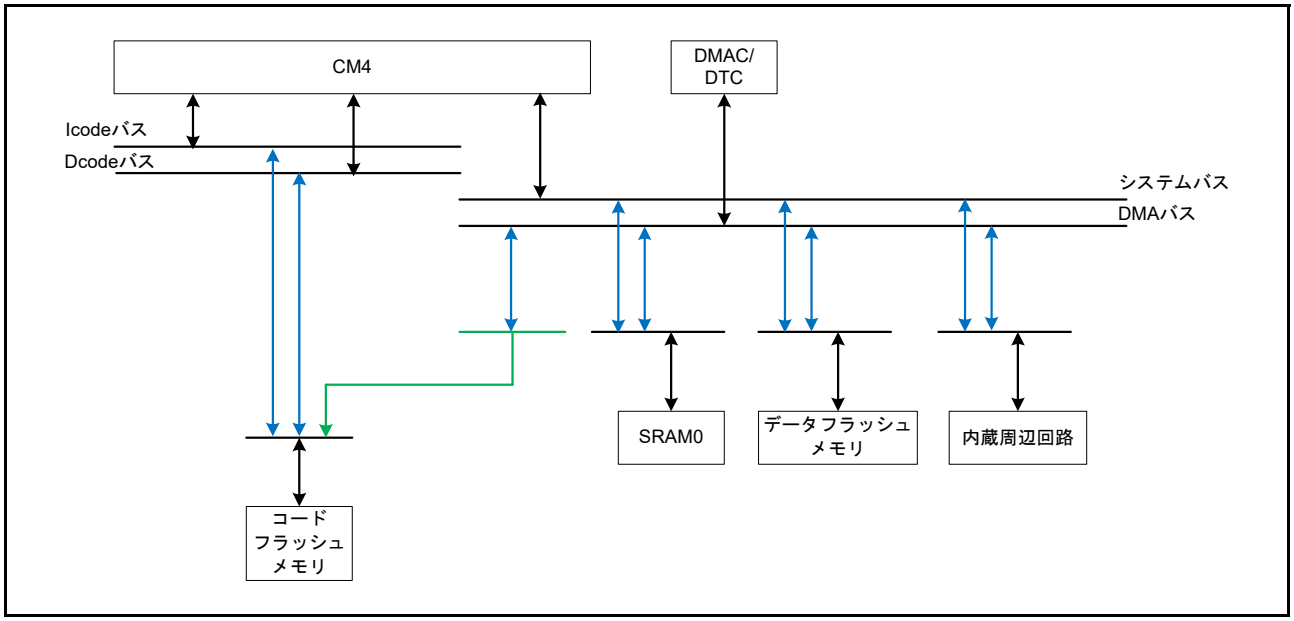


図 15.1 バスの構成図

表 15.2 バス種類別アドレス対応表

アドレス	バス	領域
0000 0000h～01FF FFFFh	メモリバス1、3	コードフラッシュメモリ
2000 0000h～2001 7FFFh	メモリバス4	SRAM0
4000 0000h～4001 FFFFh	内部周辺バス1	周辺I/Oレジスタ
4004 0000h～4005 FFFFh	内部周辺バス3	
4006 0000h～4007 FFFFh	内部周辺バス4	
4008 0000h～4009 FFFFh	内部周辺バス5	
400C 0000h～400D FFFFh	内部周辺バス7	セキュアIP
4010 0000h～407F FFFFh	内部周辺バス9	フラッシュメモリ（P/E時（注1））とデータフラッシュメモリ

注 1. P/E = プログラム／イレース

15.2 バスの説明

15.2.1 メインバス

CPU 用のメインバスは、ICode バス、DCode バス、およびシステムバスで構成されます。

- ICode バスと DCode バス：コードフラッシュメモリに接続。ICode バスは CPU への命令アクセスに使用、DCode バスは CPU へのデータアクセスに使用
- システムバス：SRAM0、データフラッシュメモリ、および内部周辺バスに接続。CPU への命令アクセスおよびデータアクセスに使用

CPU 以外のモジュール用のメインバスは、DMA バスで構成されます。DMA バスは、コードフラッシュメモリ、SRAM0、データフラッシュメモリ、および内部周辺バスに接続されます。

マスタ転送とスレーブ転送のさまざまな組み合わせの同時通信が可能です。

DMAC および DTC ブロックでは、DMAC と DTC の間で DMA バス権の調停が行われます。下記の固定優先順位が用いられます。

DMAC0 ＞ DMAC1 ＞ DMAC2 ＞ DMAC3 ＞ DTC

起動要求を受け付けた DTC または DMAC のチャネルのみ、バス権要求の発行が可能です。また、DTC の転送制御情報を読み出している間は、DTC 以外のマスタからのバスアクセス要求は受け付けません。

15.2.2 スレーブインタフェース

Cortex®-M4 コアを用いた製品には、ICode および DCode バス領域とシステムバス領域が含まれています。ICode および DCode バス領域を作成するため、バスマトリックスは、メインバスからコードフラッシュメモリのスレーブインタフェースまで、ICode バス、DCode バス、およびメモリバス 3 を接続しています。システムバス領域を作成するため、バスマトリックスは、メインバスから SRAM0、データフラッシュメモリ、および内部周辺バスのスレーブインタフェースまで、システムバスと DMA バスを接続しています。メインバスからスレーブインタフェースへの接続については、表 15.1 に記載のスレーブインタフェースを参照してください。

ICode バス、DCode バス、およびメモリバス 3 の間の調停は、ICode および DCode バス領域のスレーブインタフェースで行われます。調停法には、優先順位固定とラウンドロビンが選択可能です。詳細は、15.3.2 スレーブバスコントロールレジスタ（BUSSCNT<slave>）を参照してください。

システムバスと DMA バスの間の調停は、システムバス領域のスレーブインタフェースで行われます。調停法には、優先順位固定とラウンドロビンが選択可能です。詳細は、15.3.2 スレーブバスコントロールレジスタ（BUSSCNT<slave>）を参照してください。

マスタ転送とスレーブ転送のさまざまな組み合わせの同時通信が可能です。

15.2.3 並列動作

それぞれのバスマスタが異なるスレーブにアクセスする場合、並列に動作することが可能です。たとえば、CPU がフラッシュから命令、SRAM からオペランドをフェッチする場合、同時に DMAC は、周辺バスからの転送処理が可能です。

図 15.2 に並列動作の例を示します。この例では、CPU は命令バスとオペランドバスを使用して、それぞれフラッシュと SRAM に同時にアクセスしています。また、CPU がフラッシュと SRAM にアクセスする間、DMAC/DTC は DMA バスを使用して、周辺バスに同時にアクセスしています。

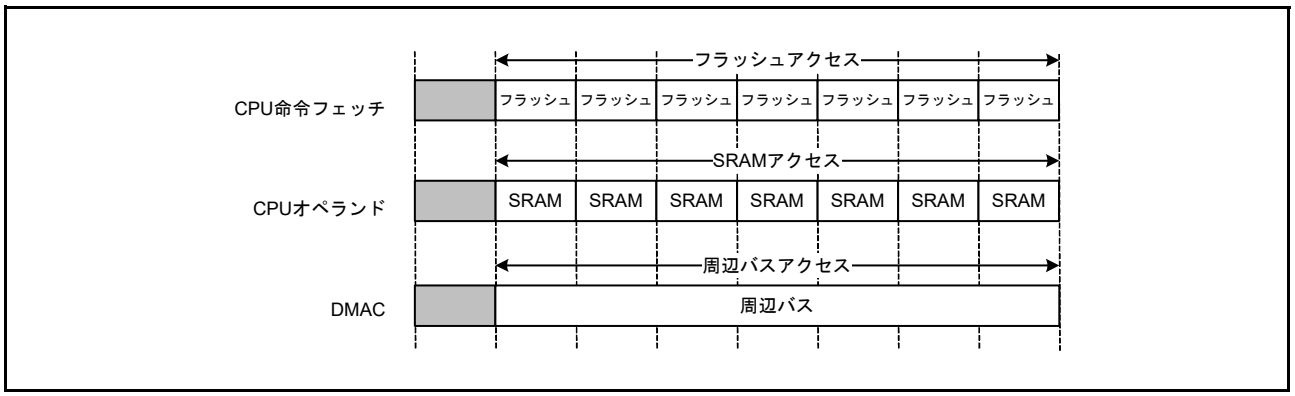


図 15.2 並列動作の例

15.2.4 エンディアン形式に関する制限事項

Cortex®-M4 コアでコードを実行する場合、メモリ空間はリトルエンディアンでなければいけません。

15.3 レジスタの説明

15.3.1 マスタバスコントロールレジスタ（BUSMCNT<master>）

アドレス BUS.BUSMCNTM4I 4000 4000h, BUS.BUSMCNTM4D 4000 4004h, BUS.BUSMCNTSYS 4000 4008h, BUS.BUSMCNTDMA 4000 400Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	IERES	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15	IERES	エラー応答無視	0：バスエラーを通知する 1：バスエラーを通知しない	R/W

注. 予約ビットを初期値 0 から書き換えることは禁止されています。書き換え中の動作は保証されません。

IERES ビット（エラー応答無視）

AHB-Lite プロトコルのエラー応答を有効または無効にします。

表 15.3 に、バスの種類とレジスタの対応を示します。

表 15.3 バスの種類とレジスタの対応

バスの種類	マスタバス コントロールレジスタ	スレーブバス コントロールレジスタ	バスエラー アドレスレジスタ	バスエラー ステータスレジスタ
ICodeバス（CPU）	BUSMCNTM4I	—	BUS1ERRADD	BUS1ERRSTAT
DCodeバス（CPU）	BUSMCNTM4D	—	BUS2ERRADD	BUS2ERRSTAT
システムバス（CPU）	BUSMCNTSYS	—	BUS3ERRADD	BUS3ERRSTAT
DMAバス	BUSMCNTDMA	—	BUS4ERRADD	BUS4ERRSTAT
メモリバス1	—	BUSSCNTFLI	—	—
メモリバス3	—	BUSSCNTMBIU	—	—
メモリバス4	—	BUSSCNTRAM0	—	—
内部周辺バス1, 3, 4, 5, 7	—	BUSSCNTPnB [n = 0, 2, 3, 4, 6]	—	—
内部周辺バス9	—	BUSSCNTFBU	—	—

15.3.2 スレーブバスコントロールレジスタ（BUSSCNT<slave>）

アドレス BUS.BUSSCNTFLI 4000 4100h, BUS.BUSSCNTMBIU 4000 4108h, BUS.BUSSCNTRAM0 4000 410Ch, BUS.BUSSCNTP0B 4000 4114h, BUS.BUSSCNTP2B 4000 4118h, BUS.BUSSCNTP3B 4000 411Ch, BUS.BUSSCNTP4B 4000 4120h, BUS.BUSSCNTP6B 4000 4128h, BUS.BUSSCNTFBU 4000 4130h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ARBMET[1:0]		—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	ARBMET[1:0]	調停法	グループ間の優先順位を指定 b5 b4 0 0：優先順位固定 0 1：ラウンドロビン 1 0：設定禁止 1 1：設定禁止	R/W
b15-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注. 予約ビットを初期値 0 から書き換えることは禁止されています。書き換え中の動作は保証されません。

ARBMET[1:0] ビット（調停法）

調停法を、すべてのバスマスタに定義される優先順位で指定します。

優先順位固定については、表 15.4 を参照してください。ラウンドロビンについては、表 15.5 を参照してください。

表 15.3 に、バスの種類に対応したレジスタを示します。

表 15.4 優先順位固定（ARBMET = 00b）

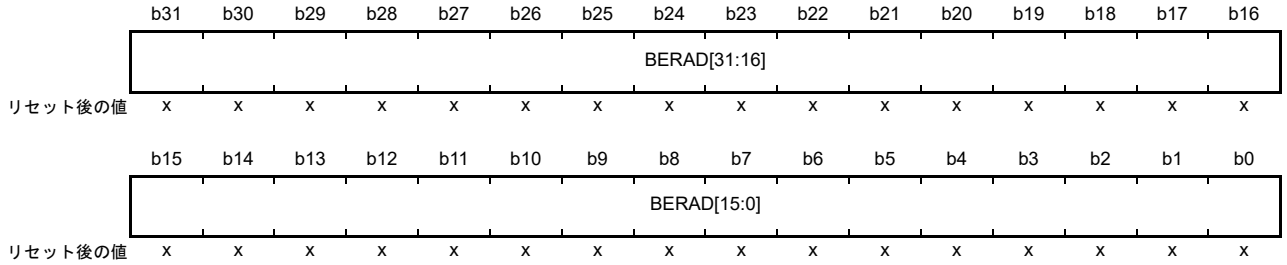
スレーブバスコントロールレジスタ	スレーブインタフェース	優先順位
BUSSCNTFLI	メモリバス1	メモリバス3＞DCodeバス（CPU）＞ICodeバス（CPU）
BUSSCNTRAM0	メモリバス4	DMAバス＞システムバス（CPU）
BUSSCNTPnB [n = 0, 2, 3, 4, 6]	内部周辺バス1, 3, 4, 5, 7	DMAバス＞システムバス（CPU）
BUSSCNTFBU	内部周辺バス9	DMAバス＞システムバス（CPU）

表 15.5 ラウンドロビン（ARBMET = 01b）

スレーブバスコントロールレジスタ	スレーブインタフェース	優先順位“↔”：ラウンドロビン
BUSSCNTFLI	メモリバス1	メモリバス3 ↔ DCodeバス（CPU）↔ ICodeバス（CPU）
BUSSCNTRAM0	メモリバス4	DMAバス↔システムバス（CPU）
BUSSCNTPnB [n = 0, 2, 3, 4, 6]	内部周辺バス1, 3, 4, 5, 7	DMAバス↔システムバス（CPU）
BUSSCNTFBU	内部周辺バス9	DMAバス↔システムバス（CPU）

15.3.3 バスエラーアドレスレジスタ（BUSnERRADD）(n = 1 ～ 4)

アドレス BUS.BUS1ERRADD 4000 4800h, BUS.BUS2ERRADD 4000 4810h,
BUS.BUS3ERRADD 4000 4820h, BUS.BUS4ERRADD 4000 4830h



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	BERAD[31:0]	バスエラーアドレス	バスエラーが発生した場合、そのエラーアドレスを格納します。	R

注 . 本レジスタは、MPU 関連リセット以外のリセットによってのみクリアされます。詳細については、「6. リセット」と「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。

表 15.3 に、バスの種類とレジスタの対応を示します。

BERAD[31:0] ビット（バスエラーアドレス）

バスエラーが発生した場合、そのアクセスアドレスを格納します。詳細については、BUSnERRSTAT.ERRSTAT ビットの説明と 15.4 バスエラー監視部を参照してください。
BUSnERRADDn.BERAD[31:0] ビット（n = 1 ～ 4）の値は、BUSnERRSTAT.ERRSTAT ビット（n = 1 ～ 4）が 1 の場合にのみ有効です。

15.3.4 バスエラーステータスレジスタ（BUSnERRSTAT）(n = 1 ～ 4)

アドレス BUS.BUS1ERRSTAT 4000 4804h, BUS.BUS2ERRSTAT 4000 4814h, BUS.BUS3ERRSTAT 4000 4824h, BUS.BUS4ERRSTAT 4000 4834h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ERRSTAT	—	—	—	—	—	—	ACCSTAT
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ACCSTAT	エラーアクセス状態	エラー発生時のアクセス状態 1：ライトアクセス 0：リードアクセス	R
b6-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b7	ERRSTAT	バスエラー状態	0：バスエラー発生なし 1：バスエラー発生あり	R

注 . 本レジスタは、MPU 関連リセット以外のリセットによってのみクリアされます。詳細については、「6. リセット」と「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。

表 15.3 に、バスの種類とレジスタの対応を示します。

ACCSTAT ビット（エラーアクセス状態）

対応するバスにエラーが発生した場合、そのアクセス状態（ライトアクセスまたはリードアクセス）を示します。詳細については、BUSnERRSTAT.ERRSTAT ビットの説明と 15.4 バスエラー監視部を参照してください。

このビットの値は、BUSnERRSTAT.ERRSTAT ビット（n = 1 ～ 4）が 1 の場合にのみ有効です。

ERRSTAT ビット（バスエラー状態）

バスエラーの発生の有無を示します。バスエラーが発生した場合、そのアクセスアドレスとアクセス状態（ライトアクセスまたはリードアクセス）が格納されます。BUSnERRSTAT.ERRSTAT ビット（n = 1 ～ 4）は 1 になります。

それぞれのバスでは、次の 4 種類のエラーが生じる可能性があります。

- 不正アドレスアクセス
- バスマスタ MPU エラー
- バススレーブ MPU エラー
- タイムアウト

バスマスタ MPU エラーまたはバススレーブ MPU エラーを検出時に、各 OAD ビットがリセットを選択している場合、ウェイトの設定によっては、MPU エラーの原因となるバスアクセスが内部リセット信号の生成後に完了し、BUSnERRSTAT.ERRSTAT（n = 1 ～ 4）が 1 にならないことがあります。

バスマスタ MPU エラーまたはバススレーブ MPU エラーを検出時に、各 OAD ビットでノンマスカブル割り込みを選択している場合は、MPU エラーの原因となるバスアクセスの完了後に、BUSnERRSTAT.ERRSTAT（n = 1 ～ 4）が 1 になります。

各バスに生じるエラーについては、15.4 バスエラー監視部、および「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。

15.4 バスエラー監視部

この監視システムは、個々の領域を監視して、エラーを検出すると AHB-Lite エラー応答プロトコルを用いてそのエラーを要求マスタ IP に返します。

15.4.1 バスに生じるエラーの種類

それぞれのバスでは、次の 4 種類のエラーが生じる可能性があります。

- 不正アドレスアクセス
- バスマスタ MPU エラー
- バススレーブ MPU エラー
- タイムアウト

表 15.6 に、アクセスによって不正アドレスアクセスエラーが引き起こされるアドレスレンジを示します。ただし、スレーブの予約領域は、不正アドレスアクセスエラーを引き起こしません。バスマスタ MPU とバススレーブ MPU については、「16. メモリプロテクションユニット（MPU）」を参照してください。

15.4.2 バスエラー発生時の動作

バスエラーが発生すると、動作は保証されず、要求マスタ IP にエラーが返されます。マスタごとに発生するバスエラーが、BUSnERRADD レジスタと BUSnERRSTAT レジスタに格納されます。これらのレジスタは必ずリセットでクリアする必要があります。詳細については、15.3.3 と 15.3.4 を参照してください。

注 . DMAC と DTC はバスエラーを受信しません。DMAC または DTC がバスにアクセスした場合、転送は継続されます。

15.4.3 不正アドレスアクセスエラーを引き起こす条件

表 15.6 に、不正アドレスアクセスエラーを引き起こす、バスごとのアドレス空間を示します。

表 15.6 不正アドレスアクセスエラーを引き起こす条件

アドレス	スレーブバス名	マスタバス	
		CPU（ICode／DCode／システム）	DMA
0000 0000h～01FF FFFFh	メモリバス1 メモリバス3	—	—
0200 0000h～027F FFFFh	メモリミラー領域	（注1）	E
0280 0000h～1FFF FFFFh	予約領域	E	E
2000 0000h～2001 7FFFh	メモリバス4	—	—
2001 8000h～3FFF FFFFh	予約領域	E	E
4000 0000h～4001 FFFFh	周辺バス1	—	—
4002 0000h～4003 FFFFh	予約領域	E	E
4004 0000h～4005 FFFFh	周辺バス3	—	—
4006 0000h～4007 FFFFh	周辺バス4	—	—
4008 0000h～4009 FFFFh	周辺バス5	—	—
400A 0000h～400B FFFFh	予約領域	—	—
400C 0000h～400D FFFFh	周辺バス7	—	—
400E 0000h～400F FFFFh	予約領域	E	E
4010 0000h～407F FFFFh	周辺バス9	—	—
4080 0000h～5FFF FFFFh	予約領域	E	E
6000 0000h～67FF FFFFh	予約領域	—	—
6800 0000h～7FFF FFFFh	予約領域	E	E
8000 0000h～97FF FFFFh	予約領域	—	—
9800 0000h～DFFF FFFFh	予約領域	E	E
E000 0000h～FFFF FFFFh	Cortex-M4用システム	—	E

E は、不正アドレスアクセスエラーが生じる経路を示します。

“—” は、不正アドレスアクセスエラーが生じない経路、またはアクセスが行われない経路を示します。

注 . MMF（メモリミラー機能）が有効な場合、マッピングされた領域（0200 0000h ～ 027F FFFFh）へのアクセスは、特定のユーザエリアに切り替わります（MMF 出力アドレス = CPU 出力アドレス + オフセット）。
バスモジュールは、MMF がアドレスを切り替えたか否かの検出を行いません。そのため、MMF が有効な状態で CPU が 0200 0000h にアクセスしても、エラーは発生しません（切り替えられたアドレスに依存します）。MMF が無効な状態で CPU が 0200 0000h にアクセスすると、バスモジュールがエラーを検出することが可能です。

注 1. バスモジュールは、MMF がアドレスを切り替えたか否かの検出を行いません。そのため、MMF が有効な状態で CPU が 0200 0000h にアクセスしても、エラーは発生しません（切り替えられたアドレスに依存します）。
MMF が無効な状態で CPU が 0200 0000h にアクセスすると、バスモジュールがエラーを検出することが可能です。

注 2. バスモジュールは、スレーブに対して何も領域が割り当てられていない場合など、予約領域へのアクセスに起因したアクセスエラーを検出します。
0280 0000h ～ 1FFF FFFFh：アクセスエラーを検出
0000 0000h ～ 01FF FFFFh：メモリバス 1 のアクセスエラー検出なし

15.4.4 タイムアウト

一部の周辺モジュールでは、モジュールストップ機能によってタイムアウトエラーが発生します。一定期間スレーブから応答がないと、タイムアウトエラーが検出されます。タイムアウトエラーは、AHB-Lite エラー応答プロトコルを用いて要求マスタ IP に返されます。

15.5 フラッシュキャッシュ使用時の注意事項

CPU からのアクセスを通じてフラッシュキャッシュを使用する場合は、Arm® MPU もキャッシング対象に設定する必要があります。詳細については、参考資料の 1. および 2. を参照してください。

15.6 参考資料

1. *ARM® v7-M Architecture Reference Manual (ARM DDI 0403D)*
2. *ARM® Cortex®-M4 Devices Generic User Guide (ARM DUI 0553A)*
3. *ARM® AMBA3 AHB-Lite Protocol v1.0 Specification (ARM IHI 0033A)*

16.　メモリプロテクションユニット（MPU）

16.1　概要

本 MCU は、4 つのメモリプロテクションユニット（MPU）と、CPU スタックポインタモニタ機能を備えています。表 16.1 に MPU の仕様を、表 16.2 に各 MPU エラー検出時の動作を示します。

表 16.1　MPUの仕様

項目	モジュール／機能	内容
不正メモリアクセス	Arm® Cortex®-M4 CPU	• Arm CPUはデフォルトのメモリマップを内蔵。CPUが不正アクセスを行うと、例外割り込みが発生 • デフォルトのメモリマップはMPUで変更可能
	CPUスタックポインタモニタ	• 2領域 メインスタックポインタ（MSP） プロセススタックポインタ（PSP）
メモリプロテクション	Arm MPU	CPU用のメモリプロテクション機能 • 8 MPU領域（サブ領域とバックグラウンド領域を含む）
	バスマスタMPU	CPUを除く各バスマスタ用のメモリプロテクション機能 • バスマスタMPUグループA：16領域
	バススレーブMPU	各バススレーブ用のメモリプロテクション機能
セキュリティ	セキュリティ MPU	非セキュアプログラムによる以下のセキュリティ領域へのアクセスを保護 • 2領域（PC） • 4領域（コードフラッシュ、SRAM、2つのセキュリティ機能）

表 16.2　MPUエラー検出時の動作

MPUの種類	通知法	エラー検出時のバスアクセス	エラーアクセス情報の保持
CPUスタックポインタモニタ	リセットまたはノンマスカブル割り込み	Don't care	保持しない
Arm MPU	ハード障害	• 正しくライトアクセスできない • 正しくリードアクセスできない	Cortex-M4 プロセッサ内に保持
バスマスタMPU	リセットまたはノンマスカブル割り込み	• 保護領域にライトアクセス • 保護領域にリードアクセス	保持
バススレーブMPU	• リセットまたはノンマスカブル割り込み • ハード障害	• ライトアクセスは無視 • リードアクセスは0が読める	保持
セキュリティ MPU	通知なし	• 正しくライトアクセスできない • 正しくリードアクセスできない	保持しない

Arm MPU に対するエラーアクセスについては、16.7 を参照してください。他の MPU に対するエラーアクセスについては、「15.　バス」の 15.3.3　バスエラーアドレスレジスタ（BUSnERRADD）(n = 1 ～ 4) および 15.3.4　バスエラーステータスレジスタ（BUSnERRSTAT）(n = 1 ～ 4) を参照してください。

16.2　CPU スタックポインタモニタ

CPU スタックポインタモニタは、スタックポインタのオーバーフローとアンダーフローを検出します。Arm CPU には、メインスタックポインタ（MSP）とプロセススタックポインタ（PSP）の 2 つのスタックポインタがあるため、2 つの CPU スタックポインタモニタをサポートしています。スタックポインタのアンダーフローやオーバーフローを検出すると、CPU スタックポインタモニタはリセットまたはノンマスカブル割り込みを発生させます。CPU スタックポインタモニタを有効にするには、スタックポインタモニタアクセスコントロールレジスタ（MSPMPUCTL、PSPMPUCTL）のスタックポインタモニタ有効ビットを 1 にします。

表 16.3 に、CPU スタックポインタモニタの仕様を示します。図 16.1 に CPU スタックポインタモニタのブロック図を、図 16.2 にレジスタの設定フローを示します。

表 16.3　CPUスタックポインタモニタの仕様

項目	内容
SRAM領域	メモリプロテクション対象領域
領域数	2領域： • メインスタックポインタ（MSP） • プロセススタックポインタ（PSP）
各領域のアドレス仕様	領域の開始および終了アドレスの設定可能
各領域のスタックポインタモニタ有効／無効設定	対応する領域に対し、有効／無効を設定
エラー検出時の動作	リセットまたはノンマスカブル割り込みを生成可能
レジスタの保護	レジスタに対する不正書き込みを防止

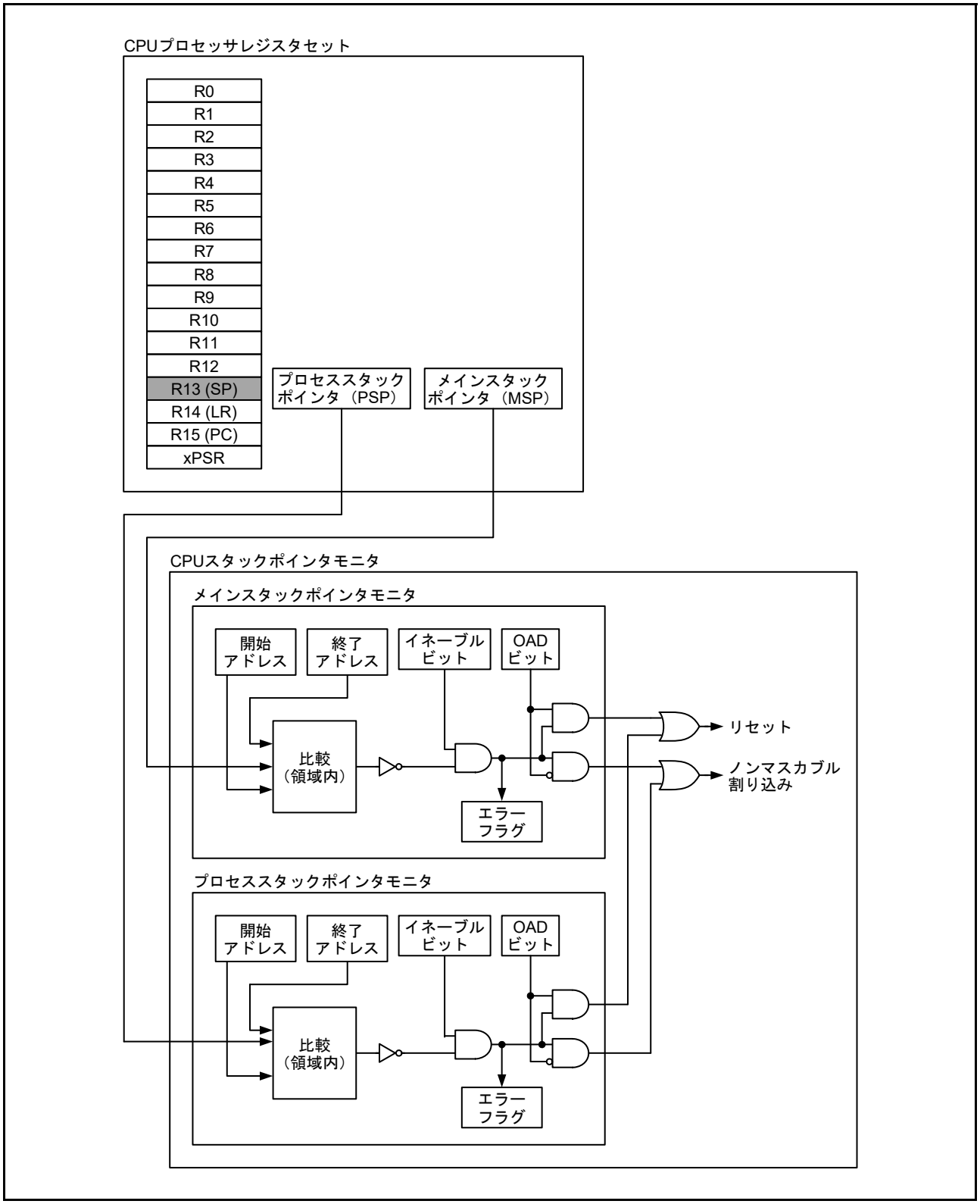


図 16.1　CPU スタックポインタモニタのブロック図

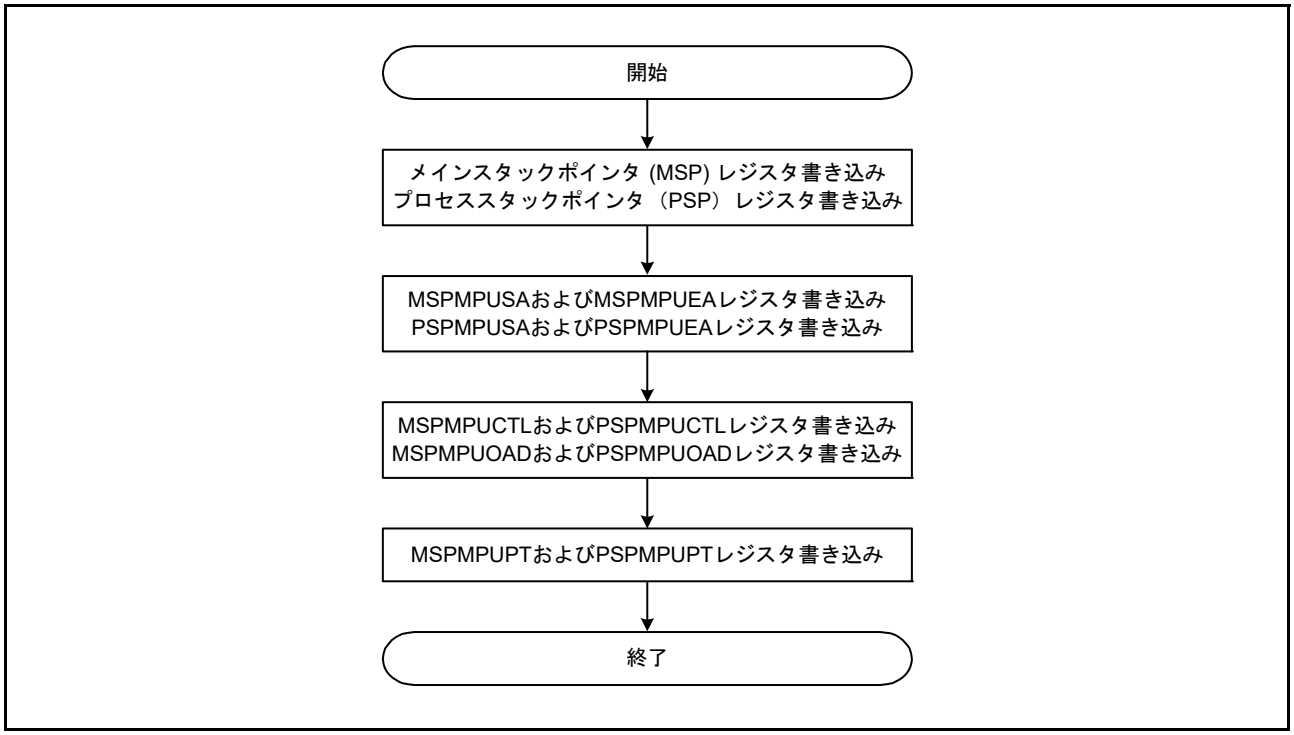


図 16.2　　レジスタの設定フロー

16.2.1　　レジスタの保護

CPU スタックポインタモニタ関連のレジスタは、スタックポインタモニタ保護レジスタ（MSPMPUPT、PSPMPUPT）の PROTECT ビットで保護することが可能です。

16.2.2　　オーバーフローエラーとアンダーフローエラー

オーバーフローやアンダーフローが検出されると、CPU スタックポインタモニタはオーバーフローエラーまたはアンダーフローエラーを発生させます。メモリプロテクションエラーは、ノンマスカブル割り込みまたはリセットのいずれかを OAD ビット設定で選択できます。

ノンマスカブル割り込みの状態は ICU.NMISR.SPEST フラグに示されます。詳細は、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。リセットの状態は SYSTEM.RSTSR1.SPERF フラグに示されます。詳細は、「6.　リセット」を参照してください。ICU.NMISR.SPEST フラグが CPU スタックポインタモニタ割り込みの発生を示した場合、MSPMPUCTL レジスタと PSPMPUCTL レジスタの ERROR ビットを確認して、それがメインスタックポインタモニタエラーなのか、プロセススタックポインタモニタエラーなのかを判定してください。

スタックポインタがアンダーフローまたはオーバーフローすると、ノンマスカブル割り込みが連続して発生します。ノンマスカブル割り込みフラグをクリアするには、指定された領域内のスタックポインタを設定し、ICU.NMICLR.SPECLR ビットを 1 に設定してノンマスカブル割り込みフラグをクリアしてください。次に、MSPMPUCTL レジスタと PSPMPUCTL レジスタの ERROR ビットに 0 を書いてクリアしてください。

16.2.3　レジスタの説明

注 .　MPU レジスタに書き込みを行う前に、バスアクセスを停止してください。

16.2.3.1　メインスタックポインタ（MSP）モニタ開始アドレスレジスタ（MSPMPUSA）

アドレス　SPMON.MSPMPUSA 4000 0D08h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MSPMPUSA[31:16]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MSPMPUSA[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	0	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	MSPMPUSA[31:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは0にしてください。値の範囲は、予約領域を除く2000 0000h～200F FFFChでなければいけません。	R/W

MSPMPUSA レジスタと MSPMPUEA レジスタでは、SRAM の CPU スタック領域を指定します（対象は 2000 0000h ～ 200F FFFFh のうち、予約領域を除く領域です）。カバーされる SRAM 領域については、図 4.1 のメモリマップを参照してください。

16.2.3.2　メインスタックポインタ（MSP）モニタ終了アドレスレジスタ（MSPMPUEA）

アドレス　SPMON.MSPMPUEA 4000 0D0Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MSPMPUEA[31:16]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MSPMPUEA[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	1	1

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	MSPMPUEA[31:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは1にしてください。値の範囲は、予約領域を除く2000 0003h～200F FFFFhでなければいけません。	R/W

16.2.3.3 プロセススタックポインタ（PSP）モニタ開始アドレスレジスタ（PSPMPUSA）

アドレス SPMON.PSPMPUSA 4000 0D18h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	PSPMPUSA[31:16]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PSPMPUSA[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	0	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	PSPMPUSA[31:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは0にしてください。値の範囲は、予約領域を除く2000 0000h～200F FFFChでなければいけません。	R/W

PSPMPUSA レジスタと PSPMPUEA レジスタでは、SRAM の CPU スタック領域を指定します（対象は 2000 0000h ～ 200F FFFFh のうち、予約領域を除く領域です。カバーされる SRAM 領域については、図 4.1 のメモリマップを参照してください）。

16.2.3.4 プロセススタックポインタ（PSP）モニタ終了アドレスレジスタ（PSPMPUEA）

アドレス SPMON.PSPMPUEA 4000 0D1Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	PSPMPUEA[31:16]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PSPMPUEA[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	1	1

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	PSPMPUEA[31:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは1にしてください。値の範囲は、予約領域を除く2000 0003h～200F FFFFhでなければいけません。	R/W

16.2.3.5 スタックポインタモニタ検出後動作レジスタ（MSPMPUOAD, PSPMPUOAD）

アドレス SPMON.MSPMPUOAD 4000 0D00h, SPMON.PSPMPUOAD 4000 0D10h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	—	OAD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OAD	検出後の動作	0：ノンマスカブル割り込み 1：リセット	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b8	KEY[7:0]	キーコード	OADビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/(W) （注1）

注 1.　書き込みデータは保持されません。

OAD ビット（検出後の動作）

CPU スタックポインタモニタによってスタックポインタのアンダーフローまたはオーバーフローが検出されたとき、リセットまたはノンマスカブル割り込みのどちらを発生させるか選択します。メインスタックポインタモニタとプロセススタックポインタモニタは、この OAD ビットを使用して、スタックポインタのアンダーフローまたはオーバーフロー検出時に発生させる信号を決定します。OAD ビットへ書き込む際は、同時にハーフワードアクセスによって KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

KEY[7:0] ビット（キーコード）

OAD ビットへの書き込みを許可または禁止します。OAD ビットへ書き込む際は、同時に KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。A5h 以外の値を KEY[7:0] ビットに書き込むと、OAD ビットは更新されません。KEY[7:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

16.2.3.6 スタックポインタモニタアクセスコントロールレジスタ（MSPMPUCTL, PSPMPUCTL）

アドレス SPMON.MSPMPUCTL 4000 0D04h, SPMON.PSPMPUCTL 4000 0D14h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	ERROR	—	—	—	—	—	—	—	ENABLE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0/1 (注1)	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ENABLE	スタックポインタモニタ有効	0：スタックポインタモニタ無効 1：スタックポインタモニタ有効	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	ERROR	スタックポインタモニタエラーフラグ	0：スタックポインタにオーバーフロー／アンダーフローなし 1：スタックポインタにオーバーフロー／アンダーフローあり	R/W
b15-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　初期値はリセット発生要因によって異なります。

ENABLE ビット（スタックポインタモニタ有効）

スタックポインタモニタ機能を有効または無効にします。メインスタックポインタモニタとプロセススタックポインタモニタを個別に設定できます。

MSPMPUCTL.ENABLE ビットを 1 にした場合、以下のレジスタが利用可能になります。

- MSPMPUSA
- MSPMPUEA
- MSPMPUOAD

PSPMPUCTL.ENABLE ビットを 1 にした場合、以下のレジスタが利用可能になります。

- PSPMPUSA
- PSPMPUEA
- PSPMPUOAD

ERROR ビット（スタックポインタモニタエラーフラグ）

スタックポインタモニタの状態を示します。各スタックポイントモニタは独立した ERROR ビットを持っています。

［1 になる条件］

- スタックポインタがアンダーフローまたはオーバーフローしたとき

［0 になる条件］

- 0 を書き込んだとき
- バスマスタ MPU リセット、バススレーブ MPU エラーリセット、およびスタックポインタエラーリセット以外のリセットのとき

注 .　ERROR ビットには 0 のみ書けます。

16.2.3.7　スタックポインタモニタ保護レジスタ（MSPMPUPT, PSPMPUPT）

アドレス　SPMON.MSPMPUPT 4000 0D06h, SPMON.PSPMPUPT 4000 0D16h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	—	PROTECT
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PROTECT	レジスタの保護	0：スタックポインタモニタ関連レジスタへの書き込みが可能 1：スタックポインタモニタ関連レジスタへの書き込みから保護（読み出しは可能）	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b8	KEY[7:0]	キーコード	PROTECTビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/(W)（注1）

注 1.　書き込みデータは保持されません。

PROTECT ビット（レジスタの保護）

保護するレジスタへの書き込みを許可または禁止します。メインスタックポインタモニタとプロセススタックポインタモニタをそれぞれ個別に設定できます。

MSPMPUPT.PROTECT ビットは、下記のメインスタックポインタ関連レジスタへの書き込みアクセスを制御します。

- MSPMPUCTL
- MSPMPUSA
- MSPMPUEA

PSPMPUPT.PROTECT ビットは、下記のプロセススタックポインタ関連レジスタへの書き込みアクセスを制御します。

- PSPMPUCTL
- PSPMPUSA
- PSPMPUEA

PROTECT ビットへ書き込む際は、同時にハーフワードアクセスによって KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

KEY[7:0] ビット（キーコード）

PROTECT ビットへの書き込みを許可または禁止します。A5h 以外の値を KEY[7:0] ビットに書き込むと、PROTECT ビットは更新されません。KEY[7:0] ビットは読むと常に 0 が読み出されます。

16.3 Arm MPU

Arm MPU は 8 つの領域のメモリプロテクションユニットを備えており、下記の項目をサポートしています。

- 保護領域
- 保護領域のオーバーラップ（優先順位は昇順）
  7 = 最高優先順位
  0 = 最低優先順位
- アクセス許可
- メモリ属性のシステムへのエクスポート

Arm MPU の不一致およびアクセス違反によって、優先順位のプログラムが可能な MemManage フォルト（ハード障害）ハンドラが呼び出されます。詳細は、16.7 参考資料の 2. を参照してください。

16.4　バスマスタ MPU

バスマスタ MPU は、全アドレス空間（0000 0000h ～ FFFF FFFFh）を対象にバスマスタがアクセスするアドレスを監視しています。アクセス制御情報は、読み出し許可と書き込み許可からなり、最大 16 の領域に対して個別に設定が可能です。バスマスタ MPU は、これらの設定に基づいて各領域へのアクセスを監視します。保護領域に対するアクセスが検出されると、バスマスタ MPU は内部リセットまたはノンマスカブル割り込みを発生させます。エラーアクセスについては、「15.　バス」の 15.3.3 および 15.3.4 を参照してください。

表 16.4 にバスマスタ MPU の仕様を、図 16.3 にブロック図を示します。

表 16.4　　バスマスタ MPU の仕様

項目	内容
保護されるマスタグループ	バスマスタ MPU グループ A：DMA バス
保護領域	0000 0000h ～ FFFF FFFFh
領域数	バスマスタ MPU グループ A：16 領域
各領域のアドレス仕様	領域の開始および終了アドレスの設定可能
各領域のメモリプロテクション有効／無効設定	対応する領域に対し、有効／無効を設定
各領域のアクセス制御設定	読み出し許可と書き込み許可
エラー検出時の動作	リセットまたはノンマスカブル割り込み
レジスタの保護	レジスタに対する不正書き込みの防止が可能

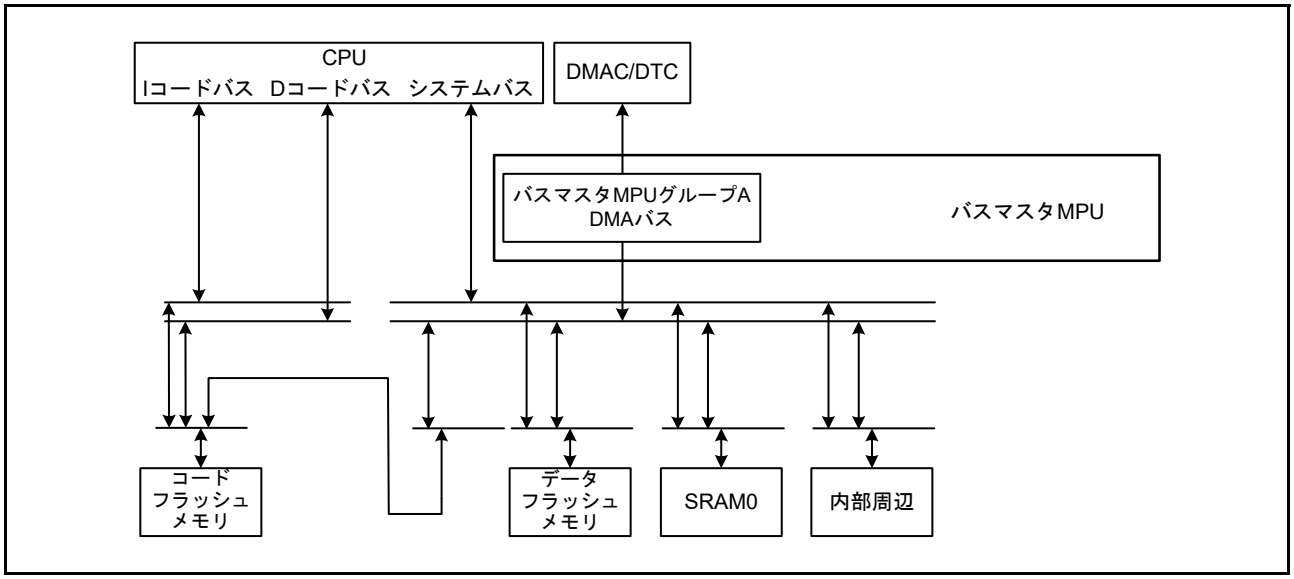


図 16.3　　バスマスタ MPU のブロック図

図 16.4 に、バスマスタ MPU グループ A の構成を示します。

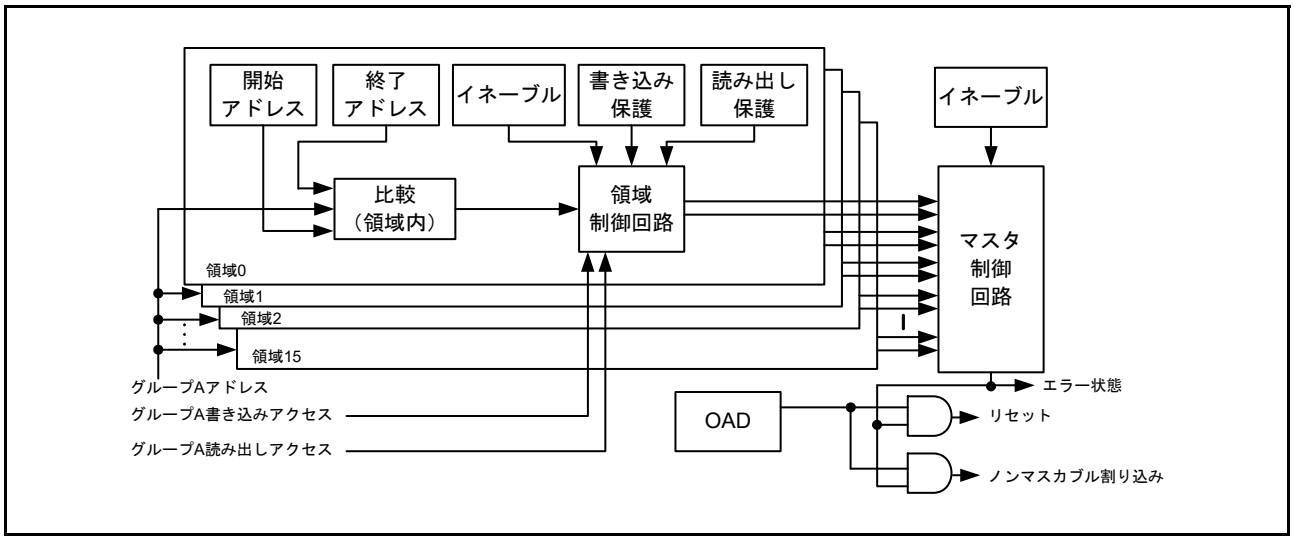


図 16.4 バスマスタ MPU グループ A の構成

16.4.1　レジスタの説明

注 .　MPU レジスタに書き込みを行う前に、バスアクセスを停止してください。

16.4.1.1　グループ A 領域 n 開始アドレスレジスタ（MMPUSAn）(n = 0 ～ 15)

アドレス　MMPU.MMPUSA0 4000 0204h, MMPU.MMPUSA1 4000 0214h, MMPU.MMPUSA2 4000 0224h, MMPU.MMPUSA3 4000 0234h, MMPU.MMPUSA4 4000 0244h, MMPU.MMPUSA5 4000 0254h, MMPU.MMPUSA6 4000 0264h, MMPU.MMPUSA7 4000 0274h, MMPU.MMPUSA8 4000 0284h, MMPU.MMPUSA9 4000 0294h, MMPU.MMPUSA10 4000 02A4h, MMPU.MMPUSA11 4000 02B4h, MMPU.MMPUSA12 4000 02C4h, MMPU.MMPUSA13 4000 02D4h, MMPU.MMPUSA14 4000 02E4h, MMPU.MMPUSA15 4000 02F4h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MMPUSA[31:16]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MMPUSA[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	0	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	MMPUSA[31:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。下位2ビットは0にしてください。	R/W

16.4.1.2　グループ A 領域 n 終了アドレスレジスタ（MMPUEAn）(n = 0 ～ 15)

アドレス　MMPU.MMPUEA0 4000 0208h, MMPU.MMPUEA1 4000 0218h, MMPU.MMPUEA2 4000 0228h, MMPU.MMPUEA3 4000 0238h, MMPU.MMPUEA4 4000 0248h, MMPU.MMPUEA5 4000 0258h, MMPU.MMPUEA6 4000 0268h, MMPU.MMPUEA7 4000 0278h, MMPU.MMPUEA8 4000 0288h, MMPU.MMPUEA9 4000 0298h, MMPU.MMPUEA10 4000 02A8h, MMPU.MMPUEA11 4000 02B8h, MMPU.MMPUEA12 4000 02C8h, MMPU.MMPUEA13 4000 02D8h, MMPU.MMPUEA14 4000 02E8h, MMPU.MMPUEA15 4000 02F8h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MMPUEA[31:16]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MMPUEA[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	1	1

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	MMPUEA[31:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。下位2ビットは1にしてください。	R/W

16.4.1.3　グループ A 領域 n アクセスコントロールレジスタ（MMPUACAn）(n = 0 ～ 15)

アドレス　MMPU.MMPUACA0 4000 0200h, MMPU.MMPUACA1 4000 0210h, MMPU.MMPUACA2 4000 0220h, MMPU.MMPUACA3 4000 0230h, MMPU.MMPUACA4 4000 0240h, MMPU.MMPUACA5 4000 0250h, MMPU.MMPUACA6 4000 0260h, MMPU.MMPUACA7 4000 0270h, MMPU.MMPUACA8 4000 0280h, MMPU.MMPUACA9 4000 0290h, MMPU.MMPUACA10 4000 02A0h, MMPU.MMPUACA11 4000 02B0h, MMPU.MMPUACA12 4000 02C0h, MMPU.MMPUACA13 4000 02D0h, MMPU.MMPUACA14 4000 02E0h, MMPU.MMPUACA15 4000 02F0h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WP	RP	ENABLE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ENABLE	領域有効	0：グループA領域nユニットは無効 1：グループA領域nユニットは有効	R/W
b1	RP	読み出し保護	0：読み出し許可 1：読み出し保護	R/W
b2	WP	書き込み保護	0：書き込み許可 1：書き込み保護	R/W
b15-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ENABLE ビット、RP ビット、および WP ビットは、グループ A 領域 n ごとに個別に設定が可能です。

ENABLE ビット（領域有効）

グループ A 領域 n ユニットを有効または無効にします。ENABLE ビットを 1 にした場合、MMPUSAn レジスタと MMPUEAn レジスタに設定した領域へのアクセスを、RP ビットと WP ビットで許可または保護することが可能です。ENABLE ビットを 0 にした場合、グループ A 領域 n のアクセスに対して領域は指定されません。

RP ビット（読み出し保護）

グループ A 領域 n の読み出し保護を有効または無効にします。ENABLE ビットを 1 にした場合に RP ビットを使用できます。

WP ビット（書き込み保護）

グループ A 領域 n の書き込み保護を有効または無効にします。ENABLE ビットを 1 にした場合に WP ビットを使用できます。

表 16.5　領域制御回路の機能

MMPUACAn. ENABLE	MMPUACAn. RP	MMPUACAn. WP	アクセス	領域	グループA領域 nユニットの出力
0	—	—	読み出し	—	領域外
			書き込み		領域外
1	0	0	読み出し	内部	許可領域
				外部	領域外
			書き込み	内部	許可領域
				外部	領域外
	0	1	読み出し	内部	許可領域
				外部	領域外
			書き込み	内部	保護領域
				外部	領域外
	1	0	読み出し	内部	保護領域
				外部	領域外
			書き込み	内部	許可領域
				外部	領域外
	1	1	読み出し	内部	保護領域
				外部	領域外
			書き込み	内部	保護領域
				外部	領域外

n = 0 ～ 15

表 16.6　マスタ制御回路の機能

MMPUCTLA. ENABLE	グループA領域 0ユニットの出力	グループA領域 1ユニットの出力	グループA領域 2～15ユニットの出力	グループAの機能
1	保護領域	Don't care	Don't care	エラー発生
1	Don't care	保護領域	Don't care	エラー発生
1	Don't care	Don't care	保護領域	エラー発生
1	領域外	領域外	領域外	エラー発生
その他の場合				エラーなし

マスタ MPU エラーは下記の条件で発生します。

- MMPUCTLA.ENABLE = 1 で、かつ 1 つ以上の領域 n ユニットの出力が保護領域の場合
- MMPUCTLA.ENABLE = 1 で、かつすべての領域 n ユニットの出力が領域外の場合
- その他の場合は許可領域として処理される

16.4.1.4　バスマスタ MPU コントロールレジスタ（MMPUCTLA）

アドレス　MMPU.MMPUCTLA 4000 0000h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	OAD	ENABLE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ENABLE	マスタグループ有効	0：マスタグループAは無効 1：マスタグループAは有効	R/W
b1	OAD	検出後の動作	0：ノンマスカブル割り込み 1：リセット	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b8	KEY[7:0]	キーコード	OADビットとENABLEビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/(W) （注1）

注 1.　書き込みデータは保持されません。

ENABLE ビット（マスタグループ有効）

マスタグループ A のバスマスタ MPU 機能を有効または無効にします。本ビットが 1 になっていれば、MMPUACAn が利用可能です。本ビットを 0 にすると、すべての領域の許可領域を含めて、MMPUACAn レジスタが使用できなくなります。ENABLE ビットを設定する際は、同時にハーフワードアクセスを使って KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

OAD ビット（検出後の動作）

バスマスタ MPU によって保護領域へのアクセスが検出されたとき、リセットまたはノンマスカブル割り込みのどちらを発生させるか選択します。OAD ビットを設定する際は、同時にハーフワードアクセスを使って KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

KEY[7:0] ビット（キーコード）

ENABLE ビットと OAD ビットへの書き込みを許可または禁止します。ENABLE ビットと OAD ビットへ書き込む際は、同時に KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。A5h 以外の値を KEY[7:0] ビットに書き込むと、ENABLE ビットと OAD ビットは更新されません。KEY[7:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

16.4.1.5　グループ A レジスタ保護（MMPUPTA）

アドレス　MMPU.MMPUPTA 4000 0102h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	—	PROTECT
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PROTECT	レジスタの保護	0：全バスマスタ MPU グループ A レジスタの書き込みを許可 1：全バスマスタ MPU グループ A レジスタの書き込みから保護（読み出しは可能）	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W
b15-b8	KEY[7:0]	キーコード	PROTECT ビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/(W)（注 1）

注 1.　書き込みデータは保持されません。

PROTECT ビット（レジスタの保護）

保護するレジスタへの書き込みを許可または禁止します。MMPUPTA.PROTECT ビットは、バスマスタ MPU グループ A 関連レジスタへの書き込み保護を制御します。下記のレジスタが MMPUPTA.PROTECT ビットで保護されます。

- MMPUSAn
- MMPUEAn
- MMPUACAn
- MMPUCTLA

PROTECT ビットを設定する際は、同時にハーフワードアクセスを使って KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

KEY[7:0] ビット（キーコード）

PROTECT ビットへの書き込みを許可または禁止します。PROTECT ビットへ書き込む際は、同時に KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。A5h 以外の値を KEY[7:0] ビットに書き込むと、PROTECT ビットは更新されません。KEY[7:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

16.4.2　動作説明

16.4.2.1　メモリプロテクション

バスマスタ MPU は、アクセス制御領域に対して個別に設定された制御情報を用いてメモリアクセスを監視します。保護領域に対するアクセスが検出されると、バスマスタ MPU はメモリプロテクションエラーを発生させます。

バスマスタ MPU は、最大 16 の保護領域に対して設定することが可能です。保護領域には、許可領域と保護領域のオーバーラップした領域と、2 つの許可領域がオーバーラップした領域が含まれます。

バスマスタ MPU にはグループ A があります。メモリプロテクション機能は、マスタグループに対してバスのアドレスをチェックし、マスタグループの全アクセスが保護されます。バスマスタ MPU は、リセット後、すべての領域を許可に設定します。MMPUCTLA.ENABLE ビットを 1 にすることで、全領域が保護されます。各領域は、保護領域上に許可領域を設定します。保護領域に対するアクセスが検出されると、バスマスタ MPU はエラーを発生させます。

図 16.5 に、バスマスタ MPU の使用例を示します。

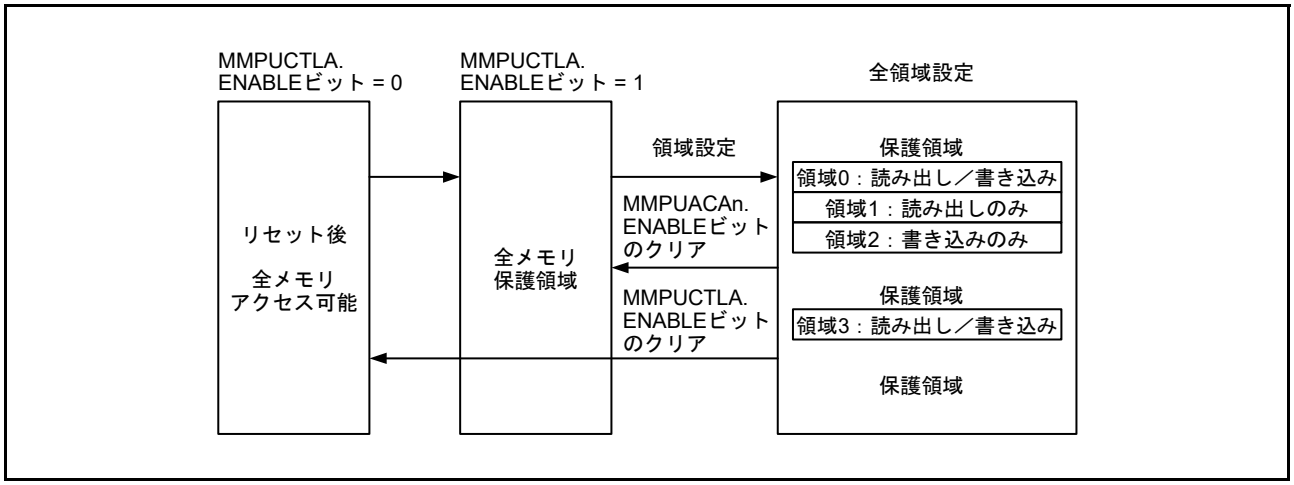


図 16.5　バスマスタ MPU の使用例

図 16.6 に、バスマスタ MPU のオーバーラップ領域に対するアクセスの許可または保護について示します。オーバーラップ領域に対するアクセス制御は以下のとおりです。

- 1 つ以上の領域ユニットの出力が保護領域の場合、領域は保護領域として処理される
- すべての領域ユニットの出力が領域外の場合、領域は保護領域として処理される
- その他の場合は許可領域として処理される

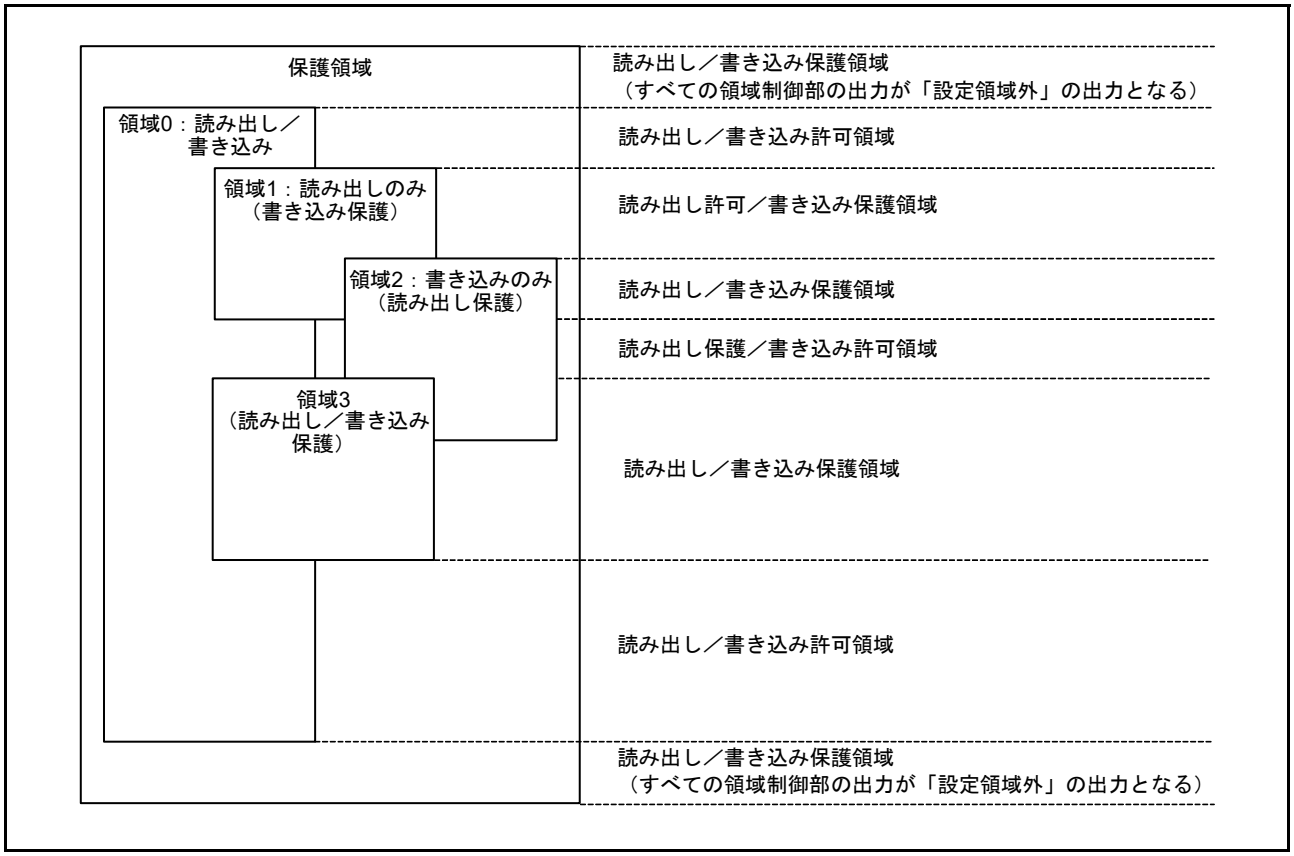


図 16.6　バスマスタ MPU 領域のオーバーラップによるアクセスの許可または保護

図 16.7 に、リセット後のレジスタ設定フローを示します。本レジスタ設定中は、CPU を除く全マスタを停止してください。

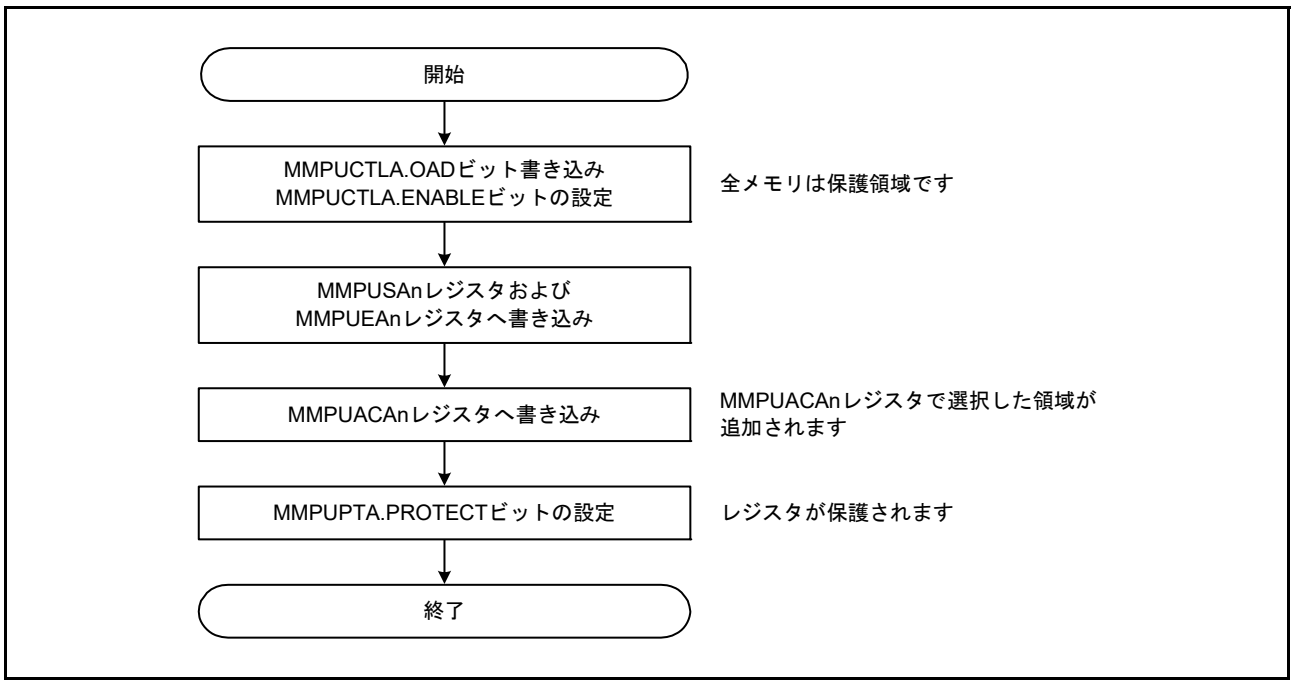


図 16.7　リセット後のレジスタ設定フロー

図 16.8 に、領域を追加するためのレジスタ設定フローを示します。本レジスタ設定中は、CPU を除く全マスタを停止してください。

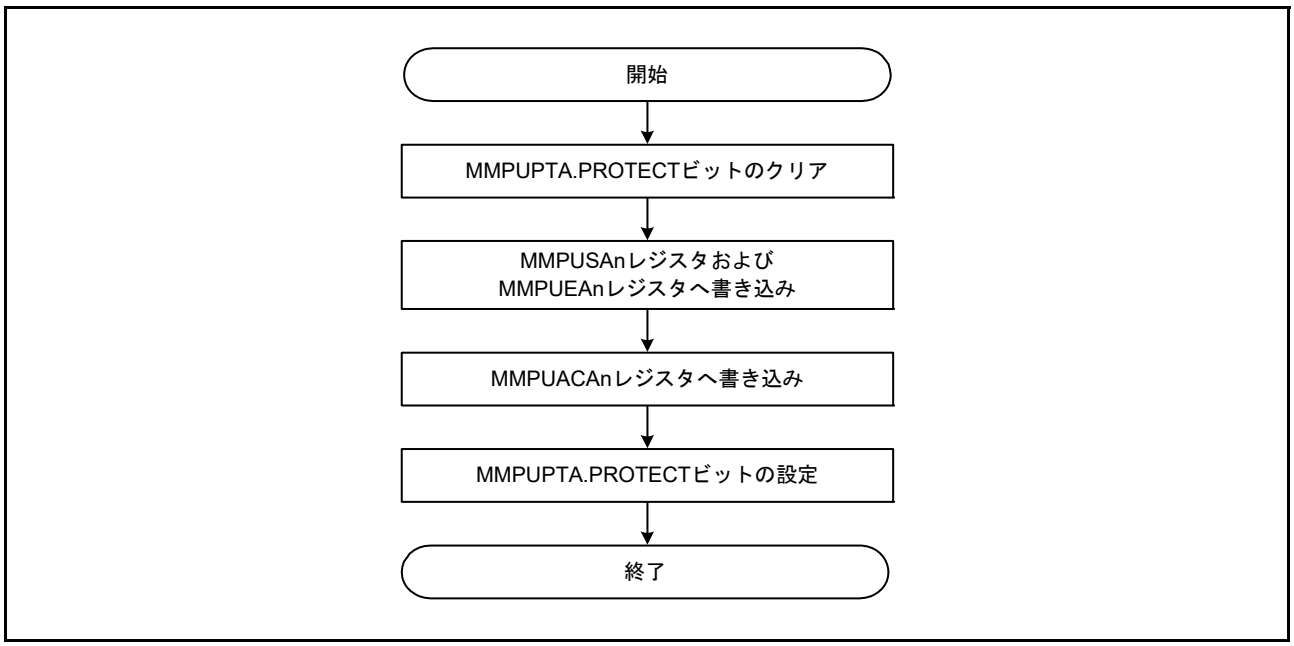


図 16.8　領域追加のレジスタ設定フロー

16.4.2.2　レジスタの保護

バスマスタ MPU 関連のレジスタを保護するには、MMPUPTA レジスタの PROTECT ビットを設定します。

16.4.2.3　メモリプロテクションエラー

保護領域に対するアクセスが検出されると、バスマスタ MPU はメモリプロテクションエラーを発生させます。OAD ビットを設定することで、このエラーをノンマスカブル割り込みとリセットのどちらで通知するか選択できます。ノンマスカブル割り込み状態は ICU.NMISR.BUSMST フラグに示されます。詳細は、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。リセット状態は SYSTEM.RSTSR1.BUSMRF フラグに示されます。詳細は、「6.　リセット」を参照してください。

16.5　バススレーブ MPU

バススレーブ MPU は、フラッシュや SRAM などのバススレーブ機能に対するアクセスを監視します。

バススレーブ機能は、2 つのバスマスタ、CPU、およびバスマスタ MPU グループ A からアクセスできます。バススレーブ MPU は、2 つのバスマスタごとに独立したプロテクトレジスタを備えており、それぞれ個別にアクセス保護が可能です。保護領域に対するアクセスが検出されると、バススレーブ MPU はリセットまたはノンマスカブル割り込みを発生させ、バスエラー状態、エラーアクセス状態、およびバスエラーアドレスを I/O レジスタに格納できます。詳細は「15.　バス」の 15.3.3 および 15.3.4 を参照してください。各領域のアクセス制御情報は、読み出し許可と書き込み許可で構成されます。

表 16.7 にバススレーブ MPU の仕様を、図 16.9 にブロック図を示します。

表 16.7　　バススレーブMPUの仕様

項目	内容
バスマスタの保護	バスマスタMPUグループA：DMAバス
スレーブ機能の保護	メモリバス3：コードフラッシュメモリ メモリバス4：SRAM0 内部周辺バス1：システムコントロール関連の周辺モジュール 内部周辺バス3：CAC, ELC, I/Oポート, POEG, RTC, WDT, IWDT, IIC, CAN, ADC14, DAC12, DOC 内部周辺バス4：SCI, SPI, CRC 内部周辺バス5：KINT, AGT, USBFS, DAC8, OPAMP, ACMPLP, CTSU 内部周辺バス7：セキュアIP（SCE5） 内部周辺バス9：フラッシュメモリ（P/E時）とデータフラッシュメモリ
各領域のアクセス制御情報設定	読み出し許可、書き込み許可
検出後の動作	リセット、ノンマスカブル割り込み、または例外
レジスタの保護	レジスタに対する不正書き込みの防止が可能

バススレーブ MPU はそれぞれのバススレーブ側に配置され、各バスマスタから各バススレーブへのアクセスを許可または保護します。

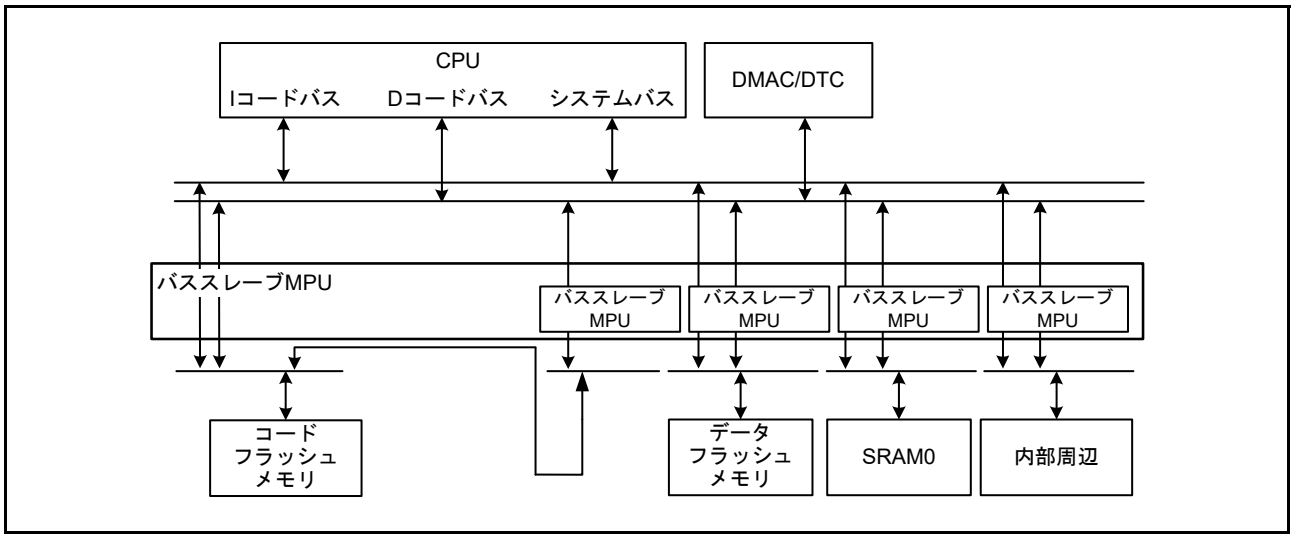


図 16.9　　バススレーブ MPU のブロック図

16.5.1　レジスタの説明

注 .　MPU レジスタに書き込みを行う前に、バスアクセスを停止してください。

16.5.1.1　メモリバス 3 アクセスコントロールレジスタ（SMPUMBIU）

アドレス　SMPU.SMPUMBIU 4000 0C10h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WPGRPA	RPGRPA	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	RPGRPA	マスタグループA読み出し保護	0：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b3	WPGRPA	マスタグループA書き込み保護	0：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RPGRPA ビット（マスタグループ A 読み出し保護）

メモリバス 3 でのマスタグループ A による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPGRPA ビット（マスタグループ A 書き込み保護）

メモリバス 3 でのマスタグループ A による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

16.5.1.2　内部周辺バス 9 アクセスコントロールレジスタ（SMPUFBIU）

アドレス　SMPU.SMPUFBIU 4000 0C14h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WPGRPA	RPGRPA	WPCPU	RPCPU
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPCPU	CPU読み出し保護	0：CPU読み出しのメモリプロテクションは無効 1：CPU読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b1	WPCPU	CPU書き込み保護	0：CPU書き込みのメモリプロテクションは無効 1：CPU書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b2	RPGRPA	マスタグループA読み出し保護	0：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b3	WPGRPA	マスタグループA書き込み保護	0：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RPCPU ビット（CPU 読み出し保護）

内部周辺バス 9 での CPU による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPCPU ビット（CPU 書き込み保護）

内部周辺バス 9 での CPU による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

RPGRPA ビット（マスタグループ A 読み出し保護）

内部周辺バス 9 でのマスタグループ A による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPGRPA ビット（マスタグループ A 書き込み保護）

内部周辺バス 9 でのマスタグループ A による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

16.5.1.3　メモリバス 4 アクセスコントロールレジスタ（SMPUSRAM0）

アドレス　SMPU.SMPUSRAM0 4000 0C18h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WPGRPA	RPGRPA	WPCPU	RPCPU
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPCPU	CPU読み出し保護	0：CPU読み出しのメモリプロテクションは無効 1：CPU読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b1	WPCPU	CPU書き込み保護	0：CPU書き込みのメモリプロテクションは無効 1：CPU書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b2	RPGRPA	マスタグループA読み出し保護	0：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b3	WPGRPA	マスタグループA書き込み保護	0：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RPCPU ビット（CPU 読み出し保護）

メモリバス 4 での CPU による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPCPU ビット（CPU 書き込み保護）

メモリバス 4 での CPU による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

RPGRPA ビット（マスタグループ A 読み出し保護）

メモリバス 4 でのマスタグループ A による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPGRPA ビット（マスタグループ A 書き込み保護）

メモリバス 4 でのマスタグループ A による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

16.5.1.4　内部周辺バス 1 アクセスコントロールレジスタ（SMPUP0BIU）

アドレス　SMPU.SMPUP0BIU 4000 0C20h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WPGRPA	RPGRPA	WPCPU	RPCPU
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPCPU	CPU読み出し保護	0：CPU読み出しのメモリプロテクションは無効 1：CPU読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b1	WPCPU	CPU書き込み保護	0：CPU書き込みのメモリプロテクションは無効 1：CPU書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b2	RPGRPA	マスタグループA読み出し保護	0：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b3	WPGRPA	マスタグループA書き込み保護	0：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RPCPU ビット（CPU 読み出し保護）

内部周辺バス 1 での CPU による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPCPU ビット（CPU 書き込み保護）

内部周辺バス 1 での CPU による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

RPGRPA ビット（マスタグループ A 読み出し保護）

内部周辺バス 1 でのマスタグループ A による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPGRPA ビット（マスタグループ A 書き込み保護）

内部周辺バス 1 でのマスタグループ A による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

16.5.1.5　内部周辺バス 3 アクセスコントロールレジスタ（SMPUP2BIU）

アドレス　SMPU.SMPUP2BIU 4000 0C24h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WPGRPA	RPGRPA	WPCPU	RPCPU
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPCPU	CPU読み出し保護	0：CPU読み出しのメモリプロテクションは無効 1：CPU読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b1	WPCPU	CPU書き込み保護	0：CPU書き込みのメモリプロテクションは無効 1：CPU書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b2	RPGRPA	マスタグループA読み出し保護	0：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b3	WPGRPA	マスタグループA書き込み保護	0：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RPCPU ビット（CPU 読み出し保護）

内部周辺バス 3、4、5 での CPU による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPCPU ビット（CPU 書き込み保護）

内部周辺バス 3、4、5 での CPU による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

RPGRPA ビット（マスタグループ A 読み出し保護）

内部周辺バス 3、4、5 でのマスタグループ A による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPGRPA ビット（マスタグループ A 書き込み保護）

内部周辺バス 3、4、5 でのマスタグループ A による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

16.5.1.6　内部周辺バス 7 アクセスコントロールレジスタ（SMPUP6BIU）

アドレス　SMPU.SMPUP6BIU 4000 0C28h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	WPGRPA	RPGRPA	WPCPU	RPCPU
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPCPU	CPU読み出し保護	0：CPU読み出しのメモリプロテクションは無効 1：CPU読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b1	WPCPU	CPU書き込み保護	0：CPU書き込みのメモリプロテクションは無効 1：CPU書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b2	RPGRPA	マスタグループA読み出し保護	0：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA読み出しのメモリプロテクションは有効	R/W
b3	WPGRPA	マスタグループA書き込み保護	0：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは無効 1：マスタグループA書き込みのメモリプロテクションは有効	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RPCPU ビット（CPU 読み出し保護）

内部周辺バス 7 での CPU による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPCPU ビット（CPU 書き込み保護）

内部周辺バス 7 での CPU による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

RPGRPA ビット（マスタグループ A 読み出し保護）

内部周辺バス 7 でのマスタグループ A による読み出しに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

WPGRPA ビット（マスタグループ A 書き込み保護）

内部周辺バス 7 でのマスタグループ A による書き込みに対してメモリプロテクションを有効または無効にします。

16.5.1.7　スレーブ MPU コントロールレジスタ（SMPUCTL）

アドレス　SMPU.SMPUCTL 4000 0C00h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	PROTECT	OAD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OAD	検出後の動作	0：ノンマスカブル割り込み 1：リセット	R/W
b1	PROTECT	レジスタの保護	0：全バススレーブレジスタの書き込みを許可 1：全バススレーブレジスタの書き込みから保護（読み出しは許可）	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b8	KEY[7:0]	キーコード	OADビットとPROTECTビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/(W) （注1）

注 1.　書き込みデータは保持されません。

OAD ビット（検出後の動作）

バススレーブ MPU によって保護領域へのアクセスが検出されたとき、リセットまたはノンマスカブル割り込みのどちらを発生させるか選択します。OAD ビットを設定する際は、同時にハーフワードアクセスによって KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

PROTECT ビット（レジスタの保護）

保護するレジスタへの書き込みを許可または禁止します。下記のレジスタが SMPUCTL.PROTECT ビットで保護されます。

- SMPUMBIU
- SMPUFBIU
- SMPUSRAM0
- SMPUP0BIU
- SMPUP2BIU
- SMPUP6BIU

PROTECT ビットを設定する際は、同時にハーフワードアクセスによって KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。

KEY[7:0] ビット（キーコード）

OAD ビットと PROTECT ビットへの書き込みを許可または禁止します。OAD ビットと PROTECT ビットへ書き込む際は、同時に KEY[7:0] ビットに A5h を書き込んでください。A5h 以外の値を KEY[7:0] ビットに書き込むと、OAD ビットと PROTECT ビットは更新されません。KEY[7:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

16.5.2 機能説明

16.5.2.1 メモリプロテクション

バススレーブ MPU は、各アクセスコントロールレジスタに設定されたアクセス制御情報を用いて、バススレーブによるアクセスがアクセス制御設定に違反していないか監視します。保護領域に対するアクセスが検出されると、バススレーブ MPU はメモリプロテクションエラーを発生させます。

バススレーブ MPU は、各アクセスコントロールレジスタ（SMPUMBIU, SMPUFBIU, SMPUSRAM0, SMPUP0BIU, SMPUP2BIU, SMPUP6BIU）の書き込み保護（WPCPU または WPGRPA）ビットまたは読み出し保護（RPCPU または RPGRPA）ビットを 1 にすることで有効になります。

16.5.2.2 レジスタの保護

バススレーブ MPU 関連のレジスタは、SMPUCTL レジスタの PROTECT ビットで保護することが可能です。

16.5.2.3 メモリプロテクションエラー

保護領域に対するアクセスが検出されると、バススレーブ MPU はメモリプロテクションエラーを発生させます。OAD ビットを設定することで、このエラーをノンマスカブル割り込みとリセットのどちらで通知するか選択できます。

ノンマスカブル割り込みの状態は ICU.NMISR.BUSSST フラグに示されます。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。リセットの状態は SYSTEM.RSTSR1.BUSSRF フラグに示されます。詳細は、「6. リセット」を参照してください。

16.6　セキュリティ MPU

本 MCU には 4 つのセキュリティ領域を持つセキュリティ MPU が内蔵されており、セキュリティ領域にはコードフラッシュ、SRAM、および 2 つのセキュリティ機能が含まれます。セキュリティ領域を、非セキュアプログラムのアクセスから保護することが可能です。非セキュアプログラムから保護領域へのアクセスは許可されていません。

表 16.8 に、セキュリティ MPU の仕様を、図 16.10 にセキュリティ MPU のブロック図を示します。

表 16.8　セキュリティ MPUの仕様

項目	内容
セキュリティ領域	コードフラッシュ、SRAM、2つのセキュリティ機能
保護領域	0000 0000h～00FF FFFFh（コードフラッシュメモリ） 1FF0 0000h～200F FFFFh（SRAM） 400C 0000h～400D FFFFh 4010 0000h～407F FFFFh（セキュリティ機能のセキュアデータ）
領域数	プログラムカウンタ = 2領域 データアクセス = 4領域
各領域のアドレス仕様	領域の開始および終了アドレスの設定
各領域のメモリプロテクション有効／無効設定	対応する領域に対し、有効／無効を設定

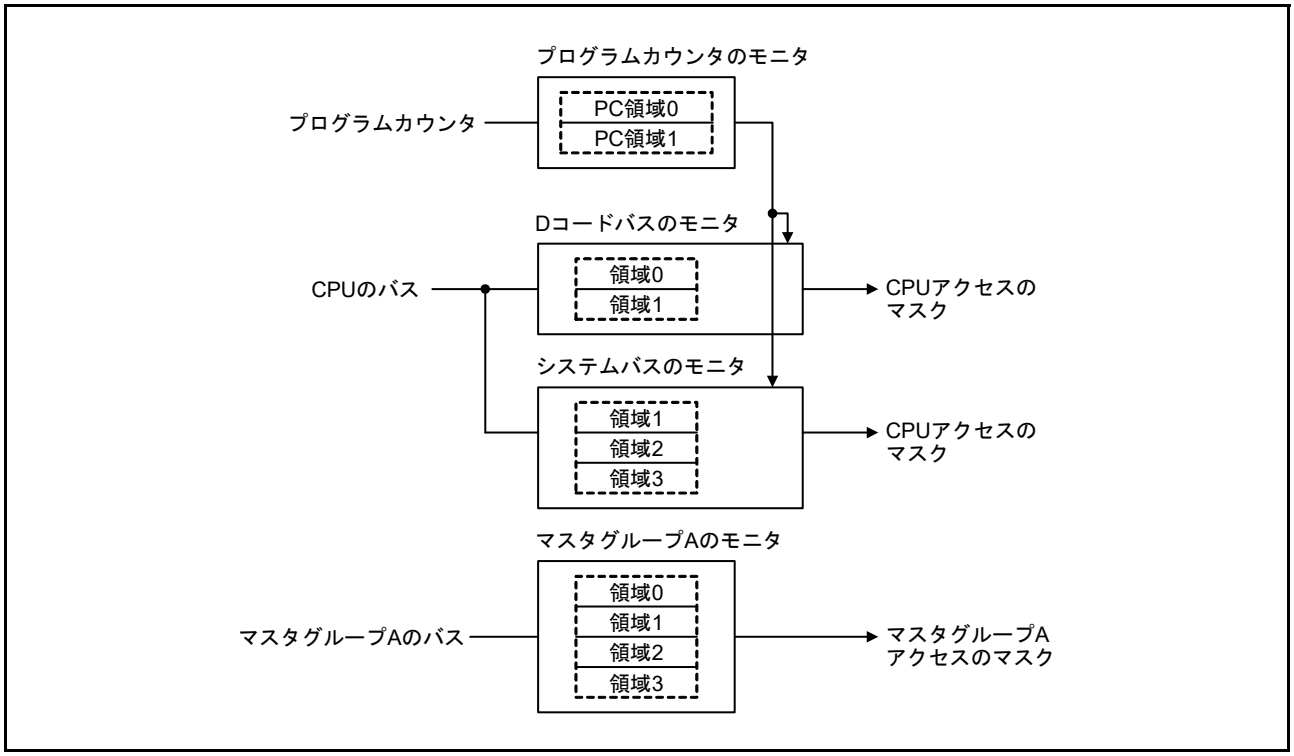


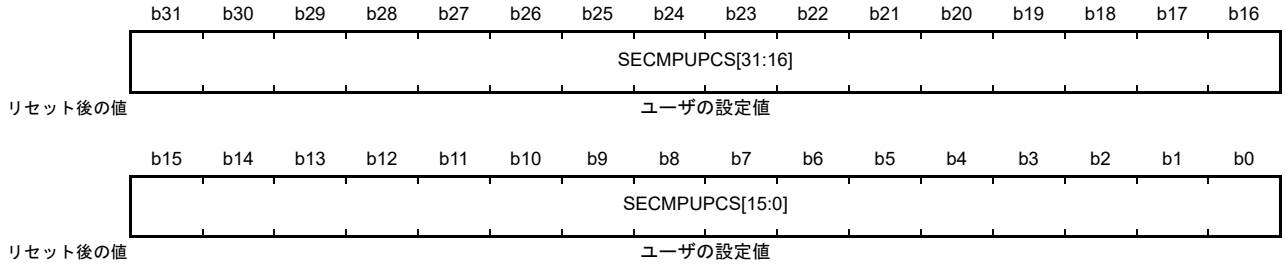
図 16.10　セキュリティ MPU のブロック図

16.6.1　レジスタの説明（オプション設定メモリ）

セキュリティ MPU のすべてのレジスタは、オプション設定メモリです。オプション設定メモリとは、リセット後のマイコンの状態を選択するために利用可能な一連のレジスタを指します。オプション設定メモリはフラッシュに配置されます。

16.6.1.1　セキュリティ MPU プログラムカウンタ開始アドレスレジスタ（SECMPUPCSn）（n = 0, 1）

アドレス　SECMPUPCS0 0000 0408h, SECMPUPCS1 0000 0410h



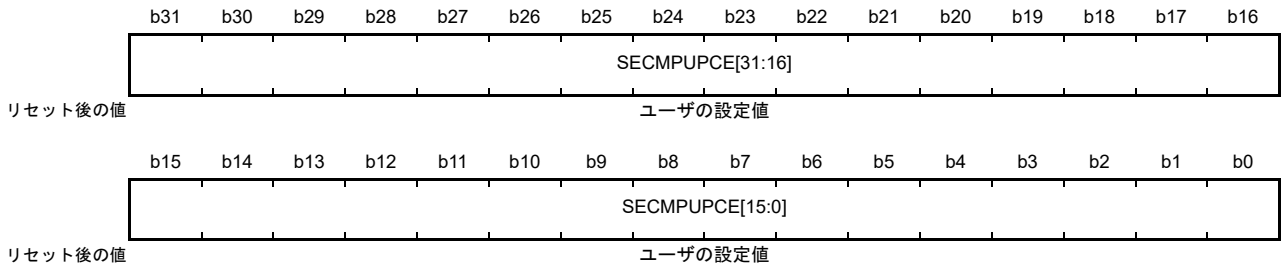
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	SECMPUPCS[31:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは読むと0が読めます。値の範囲は、予約領域を除く0000 0000h～00FF FFFChおよび1FF0 0000h～200F FFFChでなければいけません。 オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは0にしてください。	R

SECMPUPCSn レジスタと SECMPUPCEn レジスタには、コードフラッシュ（予約領域を除く 0000 0000h ～ 00FF FFFFh）または SRAM（予約領域を除く 1FF0 0000h ～ 200FFFFFh）のセキュリティフェッチ領域を指定してください。セキュアプログラムは、SECMPUPCSn レジスタおよび SECMPUPCEn レジスタで定義されたメモリ空間で実行され、SECMPUSm レジスタおよび SECMPUEm レジスタ（m = 0 ～ 3）で指定されたセキュアデータにアクセスできます。メモリミラー空間（0200 0000h ～ 027F FFFFh）を MMF に設定することは禁止です。

非セキュアプログラムの最後の命令とセキュアプログラムの最初の命令の間には 12 バイトより長い時間間隔が必要です。

16.6.1.2 セキュリティ MPU プログラムカウンタ終了アドレスレジスタ（SECMPUPCEn）（n = 0, 1）

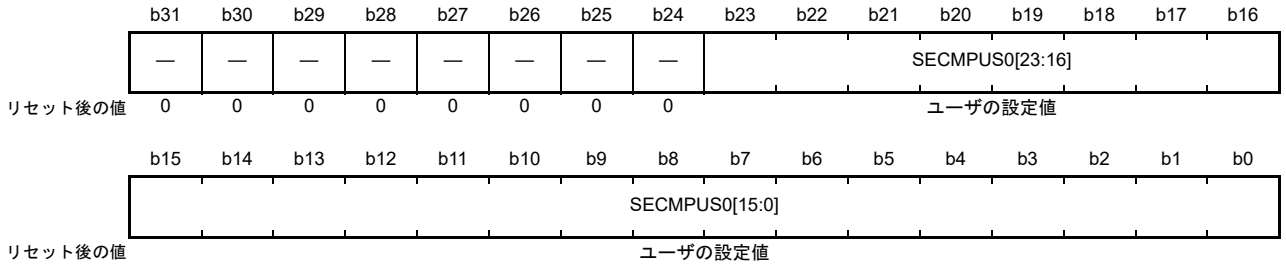
アドレス SECMPUPCE0 0000 040Ch, SECMPUPCE1 0000 0414h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	SECMPUPCE[31:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは読むと1が読めます。値の範囲は、予約領域を除く0000 0003h～00FF FFFFhおよび1FF0 0003h～200F FFFFhでなければいけません。 オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは1にしてください。	R

16.6.1.3 セキュリティ MPU 領域 0 開始アドレスレジスタ（SECMPUS0）

アドレス SECMPUS0 0000 0418h



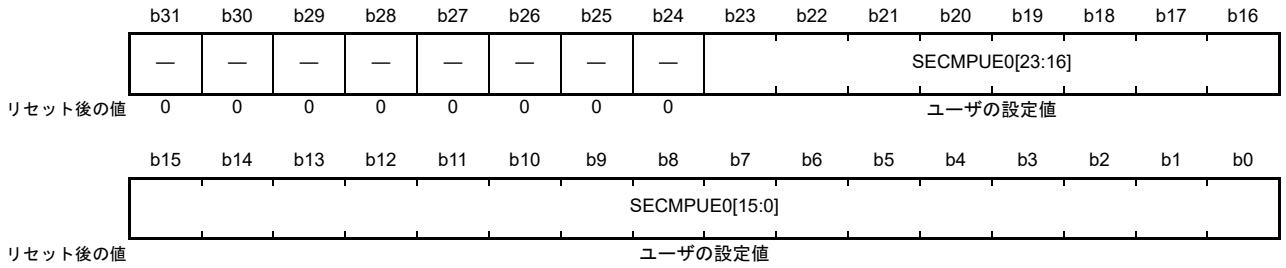
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b23-b0	SECMPUS0[23:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは読むと0が読めます。値の範囲は、予約領域を除く0000 0000h～00FF FFFChでなければいけません。 オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは0にしてください。	R
b31-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。 オプション設定メモリに設定する場合、これらのビットへの書き込みは0にしてください。	R

SECMPUS0 レジスタと SECMPUE0 レジスタには、セキュアプログラムとフラッシュデータ（予約領域を除く 0000 0000h ～ 00FF FFFFh）を設定してください。SECMPUS0 レジスタおよび SECMPUE0 レジスタで定義されたメモリ空間は、SECMPUPCSn レジスタおよび SECMPUPCEn レジスタで設定されたセキュアプログラムからのみアクセス可能です。

ベクタテーブル領域の設定は禁止されています。

16.6.1.4 セキュリティ MPU 領域 0 終了アドレスレジスタ（SECMPUE0）

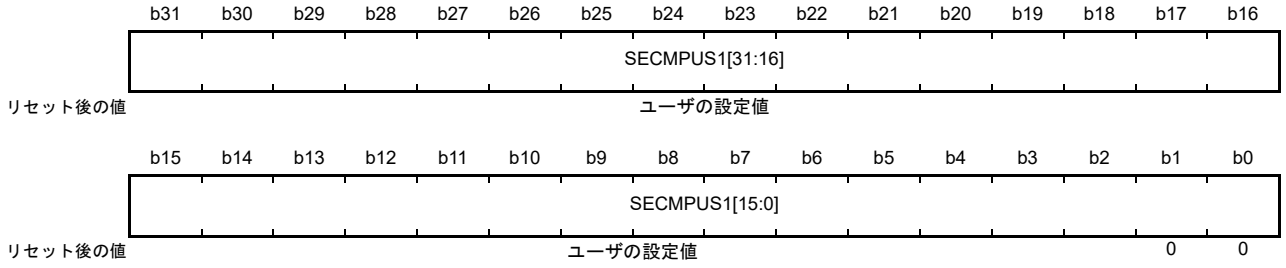
アドレス SECMPUE0 0000 041Ch



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b23-b0	SECMPUE0[23:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは読むと1が読めます。値の範囲は、予約領域を除く 0000 0003h～00FF FFFFh でなければいけません。 オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは1にしてください。	R
b31-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。 オプション設定メモリに設定する場合、これらのビットへの書き込みは0にしてください。	R

16.6.1.5 セキュリティ MPU 領域 1 開始アドレスレジスタ（SECMPUS1）

アドレス SECMPUS1 0000 0420h



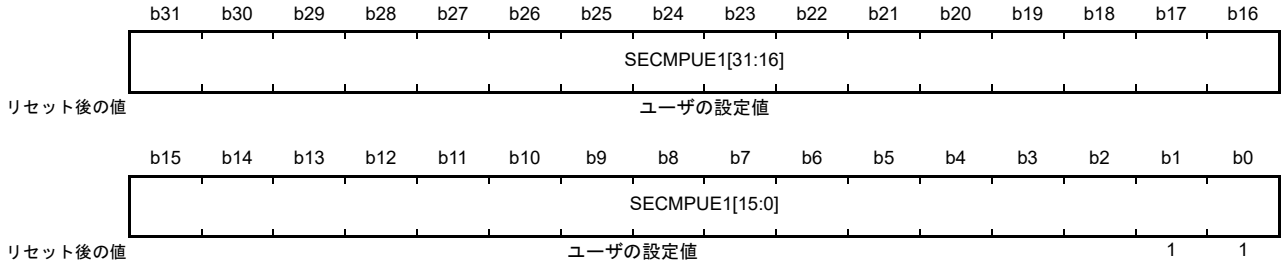
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	SECMPUS1[31:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは読むと0が読めます。値の範囲は、予約領域を除く 1FF0 0000h～200F FFFCh でなければいけません。 オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは0に、ビット[31:20]への書き込みは1FFhまたは200hにしてください。	R

SECMPUS1 レジスタと SECMPUE1 レジスタには、SRAM のセキュアデータ（予約領域を除く 1FF0 0000h ～ 200F FFFFh）を設定してください。SECMPUS1 レジスタおよび SECMPUE1 レジスタで定義されたメモリ空間は、SECMPUPCSn レジスタおよび SECMPUPCEn レジスタで設定されたセキュアプログラムからのみアクセス可能です。

スタック領域およびベクタテーブルの設定は禁止されています。

16.6.1.6　セキュリティ MPU 領域 1 終了アドレスレジスタ（SECMPUE1）

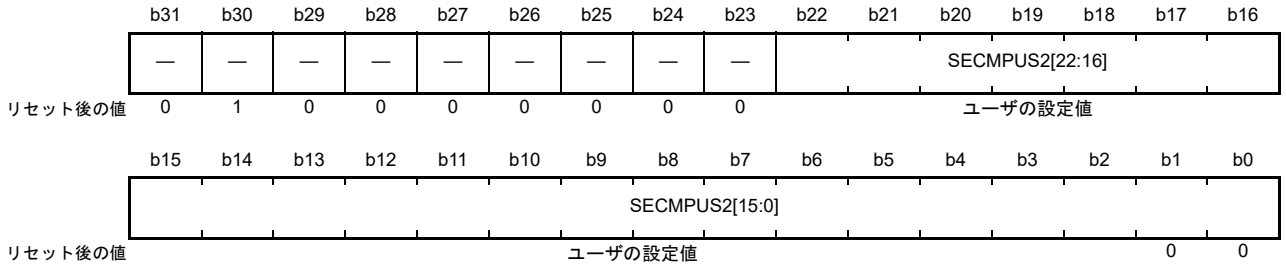
アドレス　SECMPUE1 0000 0424h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	SECMPUE1[31:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは読むと1が読めます。値の範囲は、予約領域を除く1FF0 0003h～200F FFFFhでなければいけません。オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは1に、ビット[31:20]への書き込みは1FFhまたは200hにしてください。	R

16.6.1.7　セキュリティ MPU 領域 2 開始アドレスレジスタ（SECMPUS2）

アドレス　SECMPUS2 0000 0428h

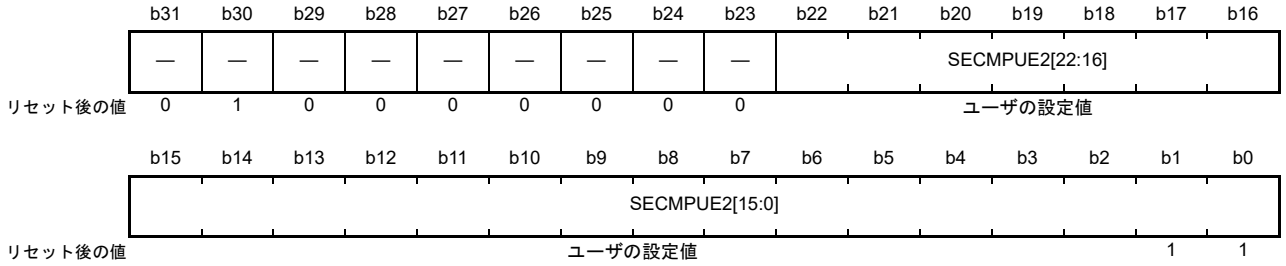


ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b22-b0	SECMPUS2[22:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは読むと0が読めます。値の範囲は、400C 0000h～400D FFFChおよび4010 0000h～407F FFFChでなければいけません。オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは0にしてください。	R
b31-b23	—	予約ビット	読むと0100 0000 0bが読めます。オプション設定メモリに設定する場合、これらのビットへの書き込みは0100 0000 0bにしてください。	R

SECMPUS2 および SECMPUE2 レジスタには、セキュリティ機能のセキュアデータ（400C 0000 ～ 400D FFFFh および 4010 0000 ～ 407F FFFFh）を指定します。SECMPUS2 レジスタおよび SECMPUE2 レジスタで定義されたメモリ空間は、SECMPUPCSn レジスタおよび SECMPUPCEn レジスタで設定されたセキュアプログラムからのみアクセス可能です。

16.6.1.8　セキュリティ MPU 領域 2 終了アドレスレジスタ（SECMPUE2）

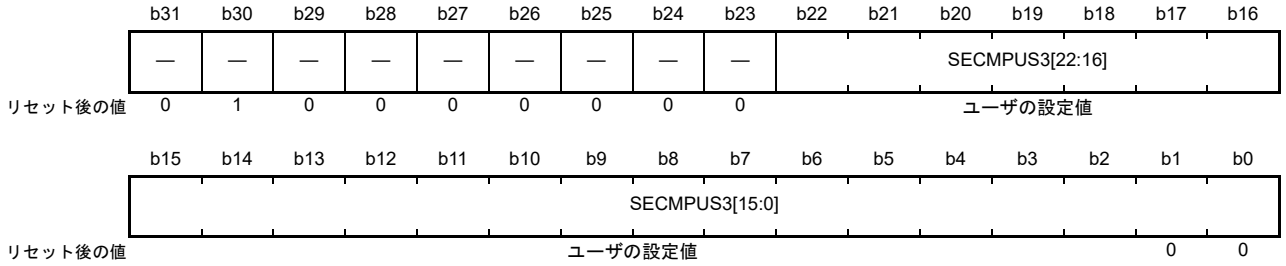
アドレス　SECMPUE2 0000 042Ch



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b22-b0	SECMPUE2[22:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは読むと1が読めます。値の範囲は、 400C 0003h～400D FFFFhおよび4010 0003h～407F FFFFhでなければいけません。オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは1にしてください。	R
b31-b23	—	予約ビット	読むと0100 0000 0bが読めます。オプション設定メモリに設定する場合、これらのビットへの書き込みは0100 0000 0bにしてください。	R

16.6.1.9　セキュリティ MPU 領域 3 開始アドレスレジスタ（SECMPUS3）

アドレス　SECMPUS3 0000 0430h

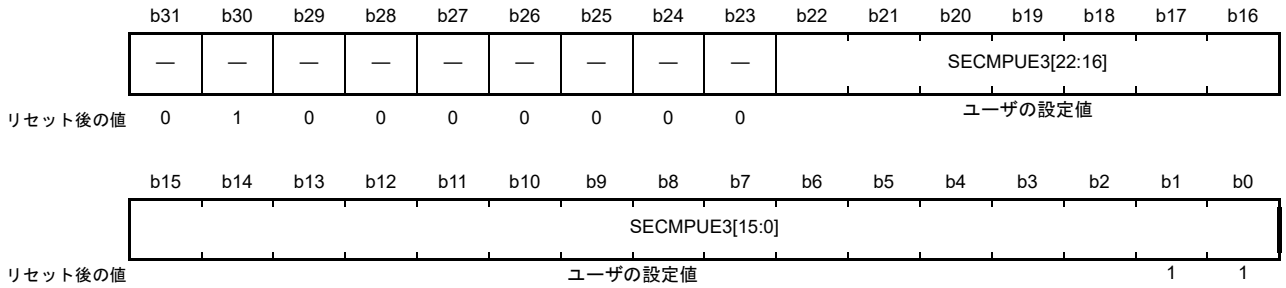


ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b22-b0	SECMPUS3[22:0]	領域開始アドレス	領域判定に使用する領域開始アドレス。 下位2ビットは読むと0が読めます。値の範囲は、 400C 0000h～400D FFFChおよび4010 0000h～407F FFFChでなければいけません。オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは0にしてください。	R
b31-b23	—	予約ビット	読むと0100 0000 0bが読めます。オプション設定メモリに設定する場合、これらのビットへの書き込みは0100 0000 0bにしてください。	R

SECMPUS3 および SECMPUE3 レジスタには、セキュリティ機能のセキュアデータ（400C 0000h ～ 400D FFFFh および 4010 0000h ～ 407F FFFFh）を指定します。SECMPUS3 レジスタおよび SECMPUE3 レジスタで定義されたメモリ空間は、SECMPUPCSn レジスタおよび SECMPUPCEn レジスタで設定されたセキュアプログラムからのみアクセス可能です。

16.6.1.10　セキュリティ MPU 領域 3 終了アドレスレジスタ（SECMPUE3）

アドレス　SECMPUE3 0000 0434h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b22-b0	SECMPUE3[22:0]	領域終了アドレス	領域判定に使用する領域終了アドレス。 下位2ビットは読むと1が読めます。値の範囲は、400C 0003h～400D FFFFhおよび4010 0003h～407F FFFFhでなければいけません。オプション設定メモリに設定する場合、下位2ビットへの書き込みは1にしてください。	R
b31-b23	—	予約ビット	読むと0100 0000 0bが読めます。オプション設定メモリに設定する場合、これらのビットへの書き込みは0100 0000 0bにしてください。	R

16.6.1.11　セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ（SECMPUAC）

アドレス　SECMPUAC 0000 0438h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	DISPC1	DISPC0	—	—	—	—	DIS3	DIS2	DIS1	DIS0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	ユーザの設定値		1	1	1	1	ユーザの設定値			

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DIS0	領域0無効	0：セキュリティ MPUの領域0は有効 1：セキュリティ MPUの領域0は無効	R
b1	DIS1	領域1無効	0：セキュリティ MPUの領域1は有効 1：セキュリティ MPUの領域1は無効	R
b2	DIS2	領域2無効	0：セキュリティ MPUの領域2は有効 1：セキュリティ MPUの領域2は無効	R
b3	DIS3	領域3無効	0：セキュリティ MPUの領域3は有効 1：セキュリティ MPUの領域3は無効	R
b7-b4	—	予約ビット	読むと1が読めます。 オプション設定メモリに設定する場合、ビット[7:4]への書き込みは1にしてください。	R
b8	DISPC0	PC領域0無効	0：セキュリティ MPUのPC領域0は有効 1：セキュリティ MPUのPC領域0は無効	R
b9	DISPC1	PC領域1無効	0：セキュリティ MPUのPC領域1は有効 1：セキュリティ MPUのPC領域1は無効	R
b15-b10	—	予約ビット	読むと1が読めます。 オプション設定メモリに設定する場合、ビット[15:10]への書き込みは1にしてください。	R

注．　フラッシュメモリが消去されると、セキュリティ MPU は無効になります。
注．　セキュリティ MPU を有効または無効にする方法については、16.6.2　メモリプロテクションを参照してください。

DIS0 ビット（領域 0 無効）

セキュリティ MPU の領域 0 を有効または無効にします。セキュリティ MPU の領域 0 を有効にすると、SECMPUS0 レジスタと SECMPUE0 レジスタで設定した範囲内のコードフラッシュ領域がセキュアデータとなります。

DIS1 ビット（領域 1 無効）

セキュリティ MPU の領域 1 を有効または無効にします。セキュリティ MPU の領域 1 を有効にすると、SECMPUS1 レジスタと SECMPUE1 レジスタで設定した範囲内の SRAM 領域がセキュアデータとなります。

DIS2 ビット（領域 2 無効）

セキュリティ MPU の領域 2 を有効または無効にします。セキュリティ MPU の領域 2 を有効にすると、SECMPUS2 レジスタと SECMPUE2 レジスタで設定した範囲内のセキュリティ機能領域のセキュアデータがセキュアデータとなります。

DIS3 ビット（領域 3 無効）

セキュリティ MPU の領域 3 を有効または無効にします。セキュリティ MPU の領域 3 を有効にすると、SECMPUS3 レジスタと SECMPUE3 レジスタで設定した範囲内のセキュリティ機能領域のセキュアデータがセキュアデータとなります。

DISPC0 ビット（PC 領域 0 無効）

セキュリティ MPU の PC 領域 0 を有効または無効にします。セキュリティ MPU の PC 領域 0 を有効にすると、SECMPUPCS0 レジスタと SECMPUPCE0 レジスタで設定した範囲内のコードフラッシュ領域または SRAM 領域にセキュアプログラムが含まれます。

DISPC1 ビット（PC 領域 1 無効）

セキュリティ MPU の PC 領域 1 を有効または無効にします。セキュリティ MPU の PC 領域 1 を有効にすると、SECMPUPCS1 レジスタと SECMPUPCE1 レジスタで設定した範囲内のコードフラッシュ領域または SRAM 領域にセキュアプログラムが含まれます。

16.6.2 メモリプロテクション

セキュリティ MPU は、セキュアプログラム以外のプログラムからアクセスできないようにセキュリティ領域（コードフラッシュ、SRAM、2 つのセキュリティ機能）を保護します。保護領域に対するアクセスが検出されると、そのアクセスは無効になります。

セキュリティ MPU を有効にする場合、セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ（SECMPUAC）の DISPC0 ビットまたは DISPC1 ビットを 0 にする必要があります。さらに、セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ（SECMPUAC）の DIS0、DIS1、DIS2、または DIS3 ビットを 0 にする必要があります。セキュリティ MPU を無効にする場合、セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ（SECMPUAC）の DISPC0、DISPC1、DIS0、DIS1、DIS2 および DIS3 ビットをすべて 1 にする必要があります。セキュリティ MPU アクセスコントロールレジスタ（SECMPUAC）の上記以外の設定は禁止です。

セキュリティ MPU は、以下の条件下でアクセス保護を行います。

- セキュアデータが非セキュアプログラムからアクセスされるとき
- セキュアデータが CPU 以外（DMAC、DTC）からアクセスされるとき
- セキュアデータがデバッガからアクセスされるとき

セキュアデータは以下の条件下でアクセス可能です。

- セキュアデータがセキュアプログラムからアクセスされるとき

注 . セキュアプログラム：SECMPUPCS0 レジスタと SECMPUPCE0 レジスタで設定した範囲内にあるコードフラッシュ領域または SRAM 領域、SECMPUPCS1 レジスタと SECMPUPCE1 レジスタで設定した範囲内にあるコードフラッシュ領域または SRAM 領域
非セキュアプログラム：セキュアプログラム領域外の全領域
セキュアデータ：SECMPUS0 レジスタと SECMPUE0 レジスタで設定した範囲内にあるコードフラッシュ領域
SECMPUS1 と SECMPUE1 で設定された範囲内にある SRAM 領域
SECMPUS2 と SECMPUE2 で設定された範囲内にあるセキュリティ機能領域
SECMPUS3 と SECMPUE3 で設定された範囲内にあるセキュリティ機能領域

コードフラッシュ内のセキュアプログラム（PC領域0）はすべてのデータ（セキュアデータおよび非セキュアデータ）へアクセスできます。
SRAM内のセキュアプログラム（PC領域1）はすべてのデータ（セキュアデータおよび非セキュアデータ）へアクセスできます。
非セキュアプログラム（PC領域0もしくはPC領域1以外）はセキュアデータ（領域0、領域1、領域2、領域3）へアクセスできません。
非セキュアプログラム（PC領域0もしくはPC領域1以外）は非セキュアデータへアクセスできます。

図 16.11　セキュリティ MPU の使用例

16.6.3　デバッグに関する注意事項

セキュリティ MPU を有効にすると、保護されたメモリをデバッグできません。セキュアプログラムをデバッグするには、セキュリティ MPU を無効にしてください。

16.7　参考資料

1. *ARM® v7-M Architecture Reference Manual (ARM DDI 0403D)*
2. *ARM® Cortex®-M4 Processor Technical Reference Manual (ARM DDI 0439D)*
3. *ARM® Cortex®-M4 Devices Generic User Guide (ARM DUI 0553A)*

17.　DMA コントローラ（DMAC）

17.1　概要

本 MCU は、4 チャネルの DMA コントローラ（DMAC）を内蔵しており、CPU を介さずにデータ転送が可能です。DMA 転送要求が発生すると、DMAC は転送元アドレスに格納されているデータを転送先アドレスへ転送します。表 17.1 に DMAC の仕様を、図 17.1 にブロック図を示します。

表 17.1　DMACの仕様

項目		内容
チャネル数		4チャネル（DMACm、m = 0～3）
転送空間		4Gバイト（0000 0000h～FFFF FFFFhのうち、予約領域を除く領域）
最大転送データ数		64Mデータ（ブロック転送モードにおける最大総転送数：1024データ × 65536ブロック）
DMA起動要因		チャネルごとに選択可能 • ソフトウェアトリガ • 周辺モジュールからの割り込み要求／外部割り込み入力端子からのトリガ（注1）
チャネル優先順位		チャネル0＞チャネル1＞チャネル2＞チャネル3（チャネル0：最優先）
転送データ	1データ	ビット長：8ビット、16ビット、32ビット
	ブロックサイズ	データ数：1～1024データ
転送モード	ノーマル転送モード	• 1回のDMA転送要求で1データを転送 • 総データ転送数を指定しない設定（フリーランニングモード）を選択可能
	リピート転送モード	• 1回のDMA転送要求で1データを転送 • 転送元または転送先に指定したリピートサイズ分のデータを転送すると、転送開始時のアドレスに復帰 • 設定可能な最大リピートサイズ：1024
	ブロック転送モード	• 1回のDMA転送要求で1ブロックを転送 • 設定可能な最大ブロックサイズ：1024データ
選択機能	拡張リピート領域機能	• 転送アドレスレジスタの上位ビット値を固定したまま、特定範囲のアドレスを繰り返すことでデータ転送が可能 • 拡張リピート領域は2バイトから128Mバイトまで転送元、転送先別に設定可能
割り込み要求（DMACm_INT）	転送終了割り込み	転送カウンタで設定したデータ数の転送終了時に発生
	転送エスケープ終了割り込み	下記の条件で発生 • リピートサイズ分のデータ転送を終了したとき • 拡張リピート領域の転送元アドレスがオーバーフローしたとき • 拡張リピート領域の転送先アドレスがオーバーフローしたとき
イベントリンク起動（DMACm_INT）		各データ転送後（ブロックの場合は各ブロック転送後）、イベントリンク要求を発生
モジュールストップ機能		モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減

注 1.　DMAC の起動要因については、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の表 14.3 を参照してください。

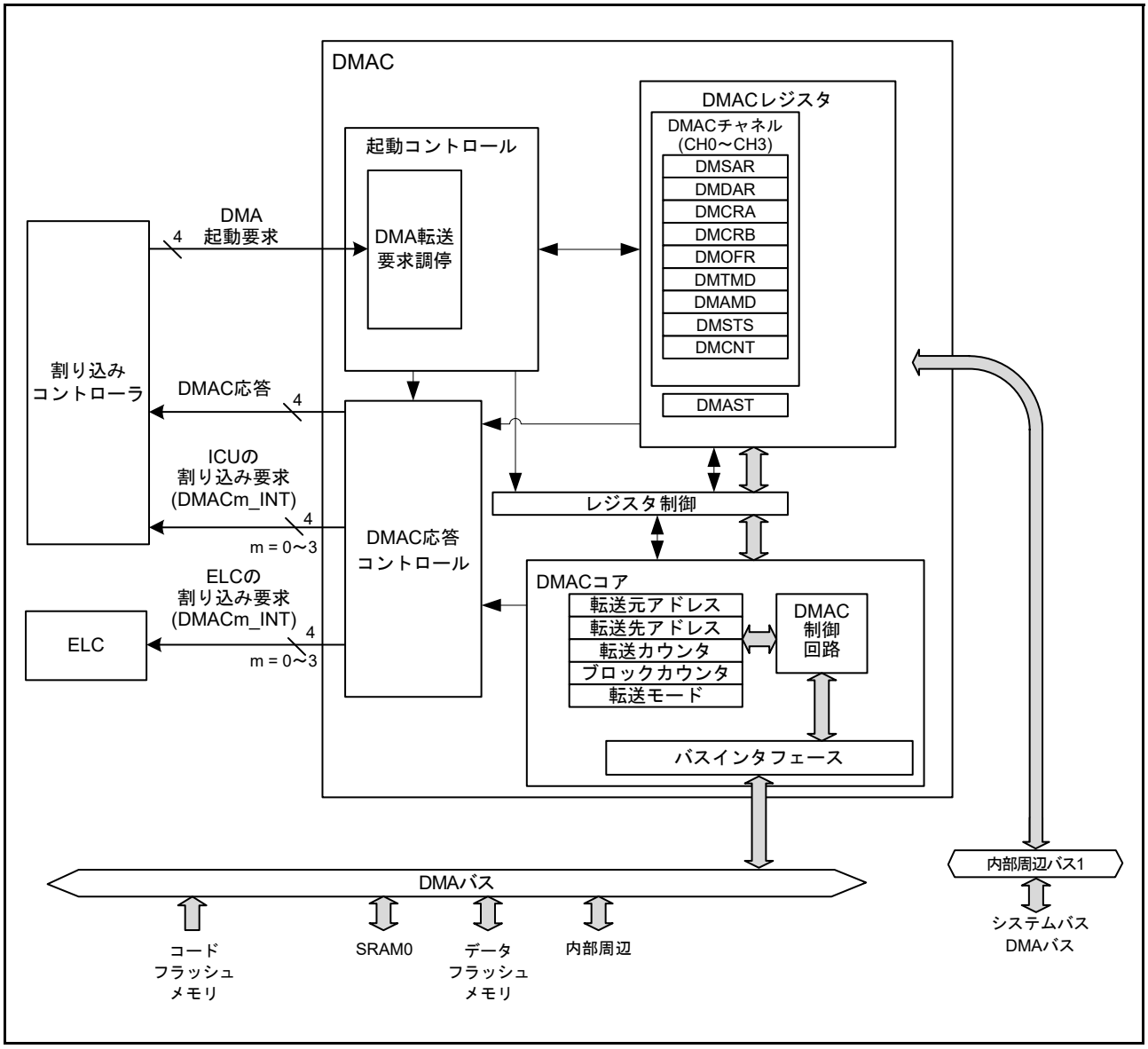


図 17.1 DMAC のブロック図

17.2　レジスタの説明

17.2.1　DMA 転送元アドレスレジスタ（DMSAR）

アドレス　DMAC0.DMSAR 4000 5000h, DMAC1.DMSAR 4000 5040h, DMAC2.DMSAR 4000 5080h, DMAC3.DMSAR 4000 50C0h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	機能	設定範囲	R/W
b31-b0	転送元の開始アドレスを設定	0000 0000h～FFFF FFFFh（4Gバイト）	R/W

DMSAR レジスタは、DMAC 起動禁止（DMAST.DMST ビット＝0）、または DMA 転送禁止（DMCNT.DTE ビット＝0）のときに設定してください。

注 .　本レジスタのアドレスアライメントは、DMTMD レジスタの SZ ビットで選択した転送データサイズ値と一致している必要があります。

17.2.2　DMA 転送先アドレスレジスタ（DMDAR）

アドレス　DMAC0.DMDAR 4000 5004h, DMAC1.DMDAR 4000 5044h, DMAC2.DMDAR 4000 5084h, DMAC3.DMDAR 4000 50C4h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	機能	設定範囲	R/W
b31-b0	転送先の開始アドレスを設定	0000 0000h～FFFF FFFFh（4Gバイト）	R/W

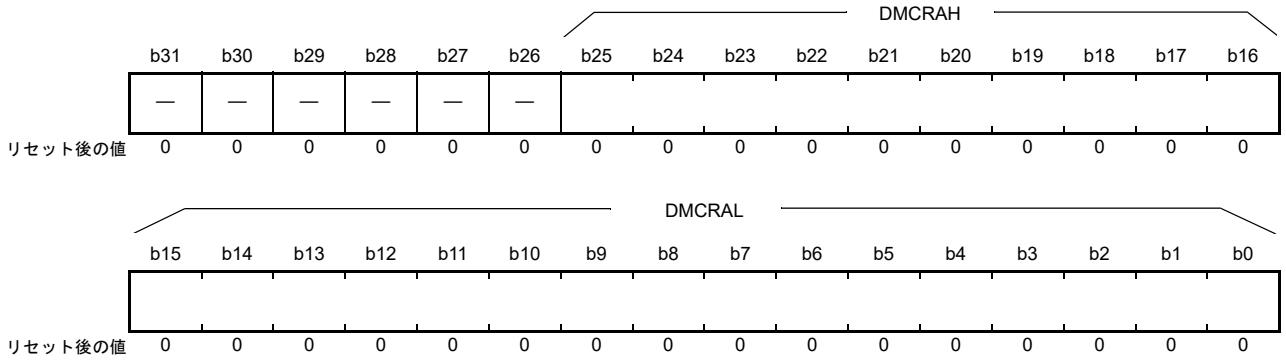
DMDAR レジスタは、DMAC 起動禁止（DMAST.DMST ビット＝0）、または DMA 転送禁止（DMCNT.DTE ビット＝0）のときに設定してください。

注 .　本レジスタのアドレスアライメントは、DMTMD レジスタの SZ ビットで選択した転送データサイズ値と一致している必要があります。

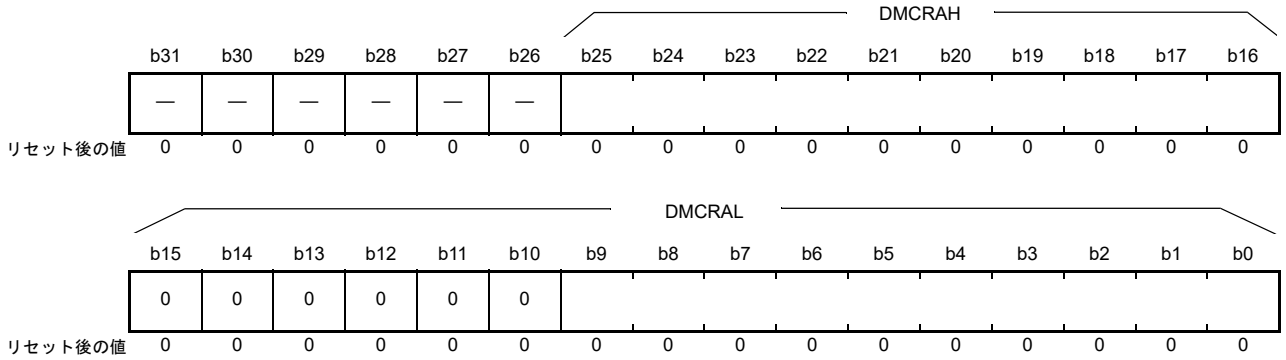
17.2.3 DMA 転送カウントレジスタ（DMCRA）

アドレス DMAC0.DMCRA 4000 5008h, DMAC1.DMCRA 4000 5048h, DMAC2.DMCRA 4000 5088h, DMAC3.DMCRA 4000 50C8h

- ノーマル転送モード



- リピート転送モード、ブロック転送モード



シンボル	ビット名	機能	R/W
DMCRAL	転送カウント下位ビット	転送回数を設定	R/W
DMCRAH	転送カウント上位ビット		R/W

注 . リピート転送モードとブロック転送モードでは、DMCRAH レジスタと DMCRAL レジスタに同じ値を設定してください。

(1) ノーマル転送モード（DMACm.DMTMD.MD[1:0] ビット = 00b）のとき

ノーマル転送モードでは、DMCRAL レジスタは 16 ビットの転送カウンタとして機能します。転送回数は、設定値が 0001h のときは 1 回、FFFFh のときは 65535 回となります。1 回のデータ転送を行うたびにデクリメント（- 1）されます。設定値が 0000h のときは転送回数の指定なしとなり、転送カウンタが停止した状態でデータ転送を行います（フリーランニングモード）。

ノーマル転送モードでは、DMCRAH レジスタを使用しないでください。DMCRAH レジスタへは 0000h を書いてください。

(2) リピート転送モード（DMACm.DMTMD.MD[1:0] ビット = 01b）のとき

リピート転送モードでは、DMCRAH レジスタはリピートサイズを指定し、DMCRAL レジスタは 10 ビットの転送カウンタとして機能します。転送回数は、設定値が 001h のときは 1 回、3FFh のときは 1023 回、000h のときは 1024 回となります。このモードでは、DMCRAH レジスタと DMCRAL レジスタの設定可能範囲は、000h ～ 3FFh（1 ～ 1024 回）です。

DMCRAL[15:10] ビットの設定は無効です。これらのビットには 0 を書いてください。DMCRAL レジスタは 1 回のデータ転送を行うたびにデクリメント（- 1）され、000h になると DMCRAH レジスタの値が DMCRAL レジスタにロードされます。

(3)　ブロック転送モード（DMACm.DMTMD.MD[1:0] ビット = 10b）のとき

ブロック転送モードでは、DMCRAH レジスタはブロックサイズを指定し、DMCRAL レジスタは 10 ビットのブロックサイズカウンタとして機能します。設定値が 001h のときはブロックサイズ 1、3FFh のときはブロックサイズ 1023、000h のときはブロックサイズ 1024 となります。このモードでは、DMCRAH レジスタと DMCRAL レジスタの設定可能範囲は、000h ～ 3FFh です。

DMCRAL[15:10] ビットの設定は無効です。これらのビットには 0 を書いてください。DMCRAL レジスタは 1 回のデータ転送を行うたびにデクリメント（- 1）され、000h になると DMCRAH レジスタの値が DMCRAL レジスタにロードされます。

17.2.4　DMA ブロック転送カウントレジスタ（DMCRB）

アドレス　DMAC0.DMCRB 4000 500Ch, DMAC1.DMCRB 4000 504Ch, DMAC2.DMCRB 4000 508Ch, DMAC3.DMCRB 4000 50CCh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	機能	設定範囲	R/W
b15-b0	ブロック転送回数またはリピート転送回数を設定	0001h～FFFFh（1～65535回） 0000h（65536回）	R/W

DMCRB レジスタは、ブロック転送モード時とリピート転送モード時の転送回数を指定するレジスタです。転送回数は、設定値が 0001h のときは 1 回、FFFFh のときは 65535 回、0000h のときは 65536 回となります。

リピート転送モードの場合、1 リピートサイズの最終データ転送時にデクリメント（- 1）されます。ブロック転送モードの場合、1 ブロックサイズの最終データ転送時にデクリメント（- 1）されます。ノーマル転送モードでは、設定は無効ですので、DMCRB レジスタは使用しないでください。

17.2.5 DMA 転送モードレジスタ（DMTMD）

アドレス　DMAC0.DMTMD 4000 5010h, DMAC1.DMTMD 4000 5050h, DMAC2.DMTMD 4000 5090h, DMAC3.DMTMD 4000 50D0h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MD[1:0]		DTS[1:0]		—	—	SZ[1:0]		—	—	—	—	—	—	DCTG[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	DCTG[1:0]	転送要求元選択	b1 b0 0 0：ソフトウェア 0 1：周辺モジュールまたは外部割り込み入力端子からの割り込み（注1） 1 0：設定禁止 1 1：設定禁止	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b9-b8	SZ[1:0]	データ転送サイズ選択	b9 b8 0 0：8ビット 0 1：16ビット 1 0：32ビット 1 1：設定禁止	R/W
b11-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13-b12	DTS[1:0]	リピート領域選択	b13 b12 0 0：転送先をリピート領域またはブロック領域に設定 0 1：転送元をリピート領域またはブロック領域に設定 1 0：リピート領域、ブロック領域の設定なし 1 1：設定禁止	R/W
b15-b14	MD[1:0]	転送モード選択	b15 b14 0 0：ノーマル転送 0 1：リピート転送 1 0：ブロック転送 1 1：設定禁止	R/W

注 1.　DMAC の起動要因を選択するには、ICU.DELSRn レジスタを使用してください。DMAC の起動要因については、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の表 14.4　イベントテーブルを参照してください。

DTS[1:0] ビット（リピート領域選択）

転送元または転送先を、リピート転送モードではリピート領域、ブロック転送モードではブロック領域として選択します。ノーマル転送モードでは、これらのビットの設定値は無効です。

17.2.6 DMA 割り込み設定レジスタ（DMINT）

アドレス DMAC0.DMINT 4000 5013h, DMAC1.DMINT 4000 5053h, DMAC2.DMINT 4000 5093h, DMAC3.DMINT 4000 50D3h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	DTIE	ESIE	RPTIE	SARIE	DARIE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DARIE	転送先アドレス拡張リピート領域オーバーフロー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/W
b1	SARIE	転送元アドレス拡張リピート領域オーバーフロー割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/W
b2	RPTIE	リピートサイズ終了割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/W
b3	ESIE	転送エスケープ終了割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/W
b4	DTIE	転送終了割り込み許可	0：禁止 1：許可	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DARIE ビット（転送先アドレス拡張リピート領域オーバーフロー割り込み許可）

本ビットが 1 のときに、転送先アドレスの拡張リピート領域オーバーフローが発生すると、DMCNT.DTE ビットが 0 になります。同時に DMSTS.ESIF フラグが 1 になり、転送先アドレスの拡張リピート領域オーバーフローによって割り込み要求がトリガされたことを示します。

拡張リピート領域機能をブロック転送モードと併用する場合は、1 ブロック分のデータ転送終了後に割り込みが発生します。割り込みにより転送を終了したチャネルの DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1 にすると、転送終了時の状態から再び転送を開始することが可能です。転送先アドレスに拡張リピート領域を設定していない場合、本ビットは無視されます。

SARIE ビット（転送元アドレス拡張リピート領域オーバーフロー割り込み許可）

本ビットが 1 のときに、転送元アドレスの拡張リピート領域オーバーフローが発生すると、DMCNT.DTE ビットが 0 になります。同時に DMSTS.ESIF フラグが 1 になり、転送元アドレスの拡張リピート領域オーバーフローによって割り込み要求がトリガされたことを示します。

拡張リピート領域機能をブロック転送モードと併用する場合は、1 ブロック分のデータ転送終了後に割り込みが発生します。割り込みにより転送を終了したチャネルの DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1 にすると、転送終了時の状態から再び転送を開始することが可能です。転送元アドレスに拡張リピート領域を設定していない場合は、本ビットは無視されます。

RPTIE ビット（リピートサイズ終了割り込み許可）

リピート転送モードにおいて本ビットを 1 にすると、1 リピートサイズ分のデータ転送終了後に DMCNT.DTE ビットが 0 になります。同時に DMSTS.ESIF フラグが 1 になり、リピートサイズ終了割り込み要求が発生したことを示します。DMTMD.DTS[1:0] ビットを 10b（リピート領域、ブロック領域の指定なし）にしたときも、リピートサイズ終了割り込み要求を発生させることができます。

本ビットをブロック転送モードで 1 にしたときも、リピート転送モードの場合と同様に 1 ブロックの転送終了後に DMCNT.DTE ビットが 0 になります。同時に DMSTS.ESIF フラグが 1 になり、リピートサイズ終了割り込み要求が発生したことを示します。DMTMD.DTS[1:0] ビットを 10b（リピート領域、ブロック領域の指定なし）にしたときも、リピートサイズ終了割り込み要求を発生させることができます。

ESIE ビット（転送エスケープ終了割り込み許可）

DMA 転送中に発生した転送エスケープ終了割り込み要求（リピートサイズ終了割り込み要求、拡張リピート領域オーバーフロー割り込み要求）を許可します。本ビットが 1 のとき割り込みが発生して、DMSTS.ESIF フラグが 1 になります。転送エスケープ終了割り込みを解除するには、本ビットまたは DMSTS.ESIF フラグを 0 にします。

DTIE ビット（転送終了割り込み許可）

指定した回数のデータ転送が終了したときに発生する転送終了割り込み要求を許可します。本ビットが 1 のとき割り込みが発生して、DMSTS.DTIF フラグが 1 になります。転送終了割り込みを解除するには、本ビットまたは DMSTS.DTIF フラグを 0 にします。

17.2.7 DMA アドレスモードレジスタ（DMAMD）

アドレス DMAC0.DMAMD 4000 5014h, DMAC1.DMAMD 4000 5054h, DMAC2.DMAMD 4000 5094h, DMAC3.DMAMD 4000 50D4h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SM[1:0]		—	SARA[4:0]					DM[1:0]		—	DARA[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	DARA[4:0]	転送先アドレス拡張リピート領域設定	転送先アドレスに拡張リピート領域を設定します。設定値についての詳細は、表 17.2 を参照してください。	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7-b6	DM[1:0]	転送先アドレス更新モード設定	b7 b6 0 0：転送先アドレス固定 0 1：オフセット加算 1 0：転送先アドレスインクリメント 1 1：転送先アドレスデクリメント	R/W
b12-b8	SARA[4:0]	転送元アドレス拡張リピート領域設定	転送元アドレスに拡張リピート領域を設定します。設定値についての詳細は、表 17.2 を参照してください。	R/W
b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b14	SM[1:0]	転送元アドレス更新モード設定	b15 b14 0 0：転送元アドレス固定 0 1：オフセット加算 1 0：転送元アドレスインクリメント 1 1：転送元アドレスデクリメント	R/W

DARA[4:0] ビット（転送先アドレス拡張リピート領域設定）

転送先アドレスに拡張リピート領域を設定します。拡張リピート領域機能は、指定した下位アドレスビットを更新し、残りの上位アドレスビットを固定することで実現されます。拡張リピート領域のサイズは、2バイトから 128M バイトまで設定可能です。設定間隔は 2 のべき乗バイト単位です。アドレスのインクリメントにより下位アドレスが拡張リピート領域をオーバーフローすると、拡張リピート領域の開始アドレスが設定されます。同様にアドレスのデクリメントにより下位アドレスが拡張リピート領域をアンダーフローすると、拡張リピート領域の終了アドレスが設定されます。

転送先にリピート領域またはブロック領域を設定している場合、転送先アドレスに拡張リピート領域を設定しないでください。リピート転送またはブロック転送を選択した場合、DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 00b（転送先にリピート領域またはブロック領域を設定）であれば、DARA[4:0] ビットには 00000b を書いてください。

拡張リピート領域にオーバーフローまたはアンダーフローが発生したとき、割り込みを要求するには、DMINT.DARIE ビットを 1 にしてください。表 17.2 には、各設定値に対応した拡張リピート領域が示されています。

DM[1:0] ビット（転送先アドレス更新モード設定）

転送先アドレスの更新モードを選択します。

- インクリメントを選択し、DMTMD.SZ[1:0] ビットに 00b、01b、または 10b を設定した場合、転送先アドレスはそれぞれ 1、2、または 4 ごとにインクリメントされる
- デクリメントを選択し、DMTMD.SZ[1:0] ビットに 00b、01b、または 10b を設定した場合、転送先アドレスはそれぞれ 1、2、または 4 ごとにデクリメントされる
- オフセット加算を選択した場合、DMACm.DMOFR レジスタで設定したオフセット値をアドレスに加算

SARA[4:0] ビット（転送元アドレス拡張リピート領域設定）

転送元アドレスに拡張リピート領域を設定します。拡張リピート領域機能は、指定した下位アドレスビットを更新し、残りの上位アドレスビットを固定することで実現されます。拡張リピート領域のサイズは、2バイトから128Mバイトまで設定可能です。設定間隔は2のべき乗バイト単位です。アドレスのインクリメントにより下位アドレスが拡張リピート領域をオーバーフローすると、拡張リピート領域の開始アドレスが設定されます。同様にアドレスのデクリメントにより下位アドレスが拡張リピート領域をアンダーフローすると、拡張リピート領域の終了アドレスが設定されます。

転送元にリピート領域またはブロック領域を設定している場合、転送元アドレスに拡張リピート領域を設定しないでください。リピート転送またはブロック転送を選択した場合、DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 01b（転送元にリピート領域またはブロック領域を設定）であれば、SARA[4:0] ビットには00000bを書いてください。

拡張リピート領域でオーバーフローまたはアンダーフローが発生したとき、割り込みを要求するには、DMINT.SARIE ビットを1にしてください。表 17.2 には、各設定値に対応した拡張リピート領域が示されています。

SM[1:0] ビット（転送元アドレス更新モード設定）

転送元アドレスの更新モードを選択します。

- インクリメントを選択し、DMTMD.SZ[1:0] ビットに00b、01b、または10bを設定した場合、転送元アドレスはそれぞれ1、2、または4ごとにインクリメントされる
- デクリメントを選択し、DMTMD.SZ[1:0] ビットに00b、01b、または10bを設定した場合、転送元アドレスはそれぞれ1、2、または4ごとにデクリメントされる
- オフセット加算を選択した場合、DMACm.DMOFR レジスタで設定したオフセット値をアドレスに加算

表 17.2　SARA[4:0]またはDARA[4:0]の設定値と対応するリピート領域 (1/2)

SARA[4:0]またはDARA[4:0]	拡張リピート領域
00000b	拡張リピート領域を設定しない
00001b	当該アドレスの下位1ビット（2バイト）を拡張リピート領域に設定
00010b	当該アドレスの下位2ビット（4バイト）を拡張リピート領域に設定
00011b	当該アドレスの下位3ビット（8バイト）を拡張リピート領域に設定
00100b	当該アドレスの下位4ビット（16バイト）を拡張リピート領域に設定
00101b	当該アドレスの下位5ビット（32バイト）を拡張リピート領域に設定
00110b	当該アドレスの下位6ビット（64バイト）を拡張リピート領域に設定
00111b	当該アドレスの下位7ビット（128バイト）を拡張リピート領域に設定
01000b	当該アドレスの下位8ビット（256バイト）を拡張リピート領域に設定
01001b	当該アドレスの下位9ビット（512バイト）を拡張リピート領域に設定
01010b	当該アドレスの下位10ビット（1Kバイト）を拡張リピート領域に設定
01011b	当該アドレスの下位11ビット（2Kバイト）を拡張リピート領域に設定
01100b	当該アドレスの下位12ビット（4Kバイト）を拡張リピート領域に設定
01101b	当該アドレスの下位13ビット（8Kバイト）を拡張リピート領域に設定
01110b	当該アドレスの下位14ビット（16Kバイト）を拡張リピート領域に設定
01111b	当該アドレスの下位15ビット（32Kバイト）を拡張リピート領域に設定
10000b	当該アドレスの下位16ビット（64Kバイト）を拡張リピート領域に設定
10001b	当該アドレスの下位17ビット（128Kバイト）を拡張リピート領域に設定
10010b	当該アドレスの下位18ビット（256Kバイト）を拡張リピート領域に設定
10011b	当該アドレスの下位19ビット（512Kバイト）を拡張リピート領域に設定
10100b	当該アドレスの下位20ビット（1Mバイト）を拡張リピート領域に設定
10101b	当該アドレスの下位21ビット（2Mバイト）を拡張リピート領域に設定
10110b	当該アドレスの下位22ビット（4Mバイト）を拡張リピート領域に設定

表 17.2　SARA[4:0]またはDARA[4:0]の設定値と対応するリピート領域 (2/2)

SARA[4:0]またはDARA[4:0]	拡張リピート領域
10111b	当該アドレスの下位23ビット（8Mバイト）を拡張リピート領域に設定
11000b	当該アドレスの下位24ビット（16Mバイト）を拡張リピート領域に設定
11001b	当該アドレスの下位25ビット（32Mバイト）を拡張リピート領域に設定
11010b	当該アドレスの下位26ビット（64Mバイト）を拡張リピート領域に設定
11011b	当該アドレスの下位27ビット（128Mバイト）を拡張リピート領域に設定
11100b～11111b	設定禁止

17.2.8 DMA オフセットレジスタ（DMOFR）

アドレス DMAC0.DMOFR 4000 5018h, DMAC1.DMOFR 4000 5058h, DMAC2.DMOFR 4000 5098h, DMAC3.DMOFR 4000 50D8h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	機能	設定範囲	R/W
b31-b0	転送元または転送先のアドレス更新モードとしてオフセット加算が選択されている場合、そのオフセット値を設定	0000 0000h～00FF FFFFh（0バイト～(16M - 1)バイト） FF00 0000h～FFFF FFFFh（-16Mバイト～-1バイト）	R/W

本レジスタへの書き込みは、データ転送中ではなく、DMAC 動作停止中または DMA 転送が禁止されているときに行ってください。[31:25] ビットの設定は無効です。[24] ビットの値が [31:25] ビットへ拡張されます。DMOFR レジスタを読み出した場合、ビット拡張された値が読み出されます。

17.2.9 DMA 転送イネーブルレジスタ（DMCNT）

アドレス DMAC0.DMCNT 4000 501Ch, DMAC1.DMCNT 4000 505Ch, DMAC2.DMCNT 4000 509Ch, DMAC3.DMCNT 4000 50DCh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	DTE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DTE	DMA転送許可	0：禁止 1：許可	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DTE ビット（DMA 転送許可）

DMA 転送を許可します。DMA 転送を許可するには、DMAST.DMST ビットを 1（DMAC 起動許可）にした後、DTE ビットを 1（対応するチャネルの DMA 転送許可）にしてください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき
- 設定された総転送データ数の転送が終了したとき
- リピートサイズ終了割り込みによって DMA 転送が停止したとき
- 拡張リピート領域オーバーフロー割り込みによって DMA 転送が停止したとき

17.2.10 DMA ソフトウェア起動レジスタ（DMREQ）

アドレス DMAC0.DMREQ 4000 501Dh, DMAC1.DMREQ 4000 505Dh, DMAC2.DMREQ 4000 509Dh, DMAC3.DMREQ 4000 50DDh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	CLRS	—	—	—	SWREQ
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SWREQ	DMAソフトウェア起動	0：DMA転送を要求しない 1：DMA転送を要求する	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	CLRS	DMAソフトウェア起動ビット自動クリア選択	0：ソフトウェアによるDMA転送開始後にSWREQビットをクリアする 1：ソフトウェアによるDMA転送開始後にSWREQビットをクリアしない	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SWREQ ビット（DMA ソフトウェア起動）

本ビットを 1 にすると DMA 転送要求が発生します。DMA 転送の開始後、CLRS ビットが 0 の場合、SWREQ ビットが 0 になります。CLRS ビットが 1 の場合、SWREQ ビットはクリアされません。DMA 転送要求は、転送終了後に再発行できます。

注 . DMTMD.DCTG[1:0] ビットが 00b（DMA 起動要因がソフトウェア）になっている場合のみ、本ビットの設定が有効となり、ソフトウェアによる DMA 転送が可能となります。DMTMD.DCTG[1:0] ビットが 00b 以外になっている場合、本ビットの設定は無効です。

CLRS ビットが 0 の状態でソフトウェアによる DMA 転送を行う場合、SWREQ ビットが 0 であることを確認してから SWREQ ビットに 1 を書いてください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- CLRS ビットが 0（ソフトウェアによる DMA 転送開始後に SWREQ ビットをクリアする）の場合に、ソフトウェアによる DMA 転送要求が受け付けられて DMA 転送が開始したとき
- 0 を書いたとき

CLRS ビット（DMA ソフトウェア起動ビット自動クリア選択）

SWREQ ビットを 1 にして転送要求を発生させた場合、DMA 転送が開始した後、SWREQ ビットを 0 にするか否かを CLRS ビットで設定します。CLRS ビットを 0 にすると、DMA 転送の開始後、SWREQ ビットは 0 になります。CLRS ビットを 1 にすると、SWREQ ビットは 0 にクリアされません。DMA 転送要求は、転送終了後に再発行できます。

17.2.11 DMA ステータスレジスタ（DMSTS）

アドレス DMAC0.DMSTS 4000 501Eh, DMAC1.DMSTS 4000 505Eh, DMAC2.DMSTS 4000 509Eh, DMAC3.DMSTS 4000 50DEh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ACT	—	—	DTIF	—	—	—	ESIF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ESIF	転送エスケープ終了割り込みフラグ	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W （注1）
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W
b4	DTIF	転送終了割り込みフラグ	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W （注1）
b6-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W
b7	ACT	DMAアクティブフラグ	0：DMACが停止中 1：DMACが動作中	R

注 1.　フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

ESIF フラグ（転送エスケープ終了割り込みフラグ）

転送エスケープ終了割り込みが発生したことを示します。

［1 になる条件］

- リピート転送モードにおいて、DMINT.RPTIE ビットが 1 の状態で 1 リピートサイズ分のデータ転送が終了したとき
- ブロック転送モードにおいて、DMINT.RPTIE ビットが 1 の状態で 1 ブロック分のデータ転送が終了したとき
- DMINT.SARIE ビットが 1 で、かつ DMAMD.SARA[4:0] ビットが 00000b 以外（転送元アドレスに拡張リピート領域を設定）の状態で、転送元アドレスに拡張リピート領域オーバーフローが発生したとき
- DMINT.DARIE ビットが 1 で、かつ DMAMD.DARA[4:0] ビットが 00000b 以外（転送先アドレスに拡張リピート領域を設定）の状態で、転送先アドレスに拡張リピート領域オーバーフローが発生したとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき
- DMCNT.DTE ビットに 1 を書いたとき

DTIF フラグ（転送終了割り込みフラグ）

転送終了割り込みが発生したことを示します。

［1 になる条件］

- ノーマル転送モードにおいて、指定した回数のデータ転送が終了したとき（DMCRAL レジスタが 0 になり転送が終了したとき）
- リピート転送モードにおいて、指定した回数のリピート転送が終了したとき（DMCRB レジスタが 0 になり転送が終了したとき）
- ブロック転送モードにおいて、指定したブロック数の転送が終了したとき（DMCRB レジスタが 0 になり転送が終了したとき）

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき
- DMCNT.DTE ビットに 1 を書いたとき

ACT フラグ（DMA アクティブフラグ）

DMAC がアイドル状態であるか、または動作中であるかを示します。

［1 になる条件］

- DMAC がデータ転送を開始したとき

［0 になる条件］

- 1 転送要求に対するデータ転送が終了したとき

17.2.12　DMACA モジュール起動レジスタ（DMAST）

アドレス　DMA.DMAST 4000 5200h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	DMST
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DMST	DMAC動作許可	0：禁止 1：許可	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DMST ビット（DMAC 動作許可）

本ビットを 1 にすると、DMAC 全チャネルの起動が許可されます。本ビットを 1（DMAC 起動許可）にした場合、複数チャネルの DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1（DMA 転送許可）にすることで、対応する全チャネルが同時に転送要求受け付け可能状態になります。

DMA 転送中に DMST ビットを 0 にすると、実行中の 1 転送要求に対するデータ転送が終了した後、DMA 転送が一時停止します。DMA 転送を再開するには、再度 DMST ビットを 1 にしてください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき

17.3　動作説明

17.3.1　転送モード

(1)　ノーマル転送モード

ノーマル転送モードでは、1 転送要求に対して 1 データの転送を行います。DMACm.DMCRAL レジスタで転送回数を最大 65535 回まで指定できます。また、DMACm.DMCRAL レジスタを 0000h にすると、転送回数は指定なしとなり、転送カウンタが停止した状態でデータ転送を行います（フリーランニングモード）。フリーランニングモードの場合を除き、指定した転送回数の終了後に転送終了割り込み要求を発生させることができます。ノーマル転送モードでは、DMACm.DMCRB レジスタの設定は無効です。

ノーマル転送モードにおけるレジスタ更新動作を表 17.3 に示します。

表 17.3　ノーマル転送モードでのレジスタ更新値

レジスタ	機能	1転送要求に対する転送終了後の更新動作
DMACm.DMSAR	転送元アドレス	インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算
DMACm.DMDAR	転送先アドレス	インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算
DMACm.DMCRAL	転送カウント	1減算／更新なし（フリーランニングモード時）
DMACm.DMCRAH	—	更新なし（ノーマル転送モードでは使用しない）
DMACm.DMCRB	—	更新なし（ノーマル転送モードでは使用しない）

ノーマル転送モードにおける転送動作を図 17.2 に示します。

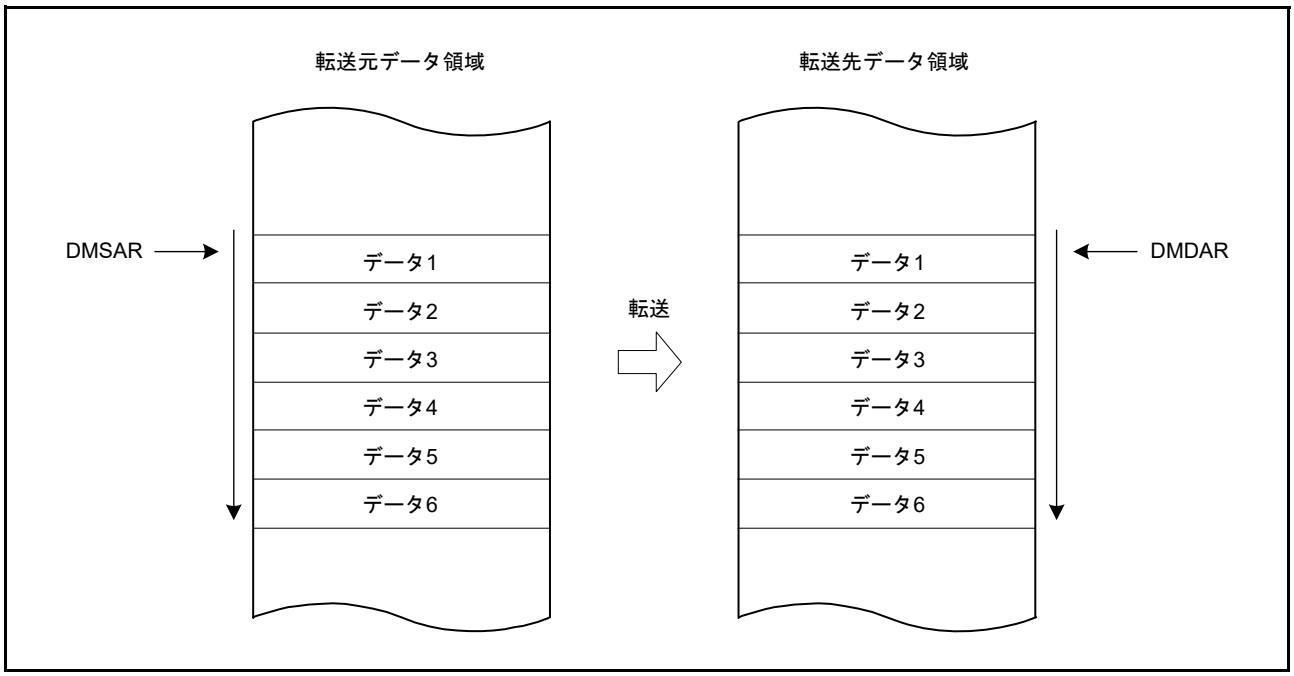


図 17.2　ノーマル転送モードにおける転送動作

(2)　リピート転送モード

リピート転送モードでは、1 転送要求に対して 1 データの転送を行います。

DMACm.DMCRA レジスタで最大 1K データのリピート転送サイズを設定します。DMACm.DMCRB で最大 64K のリピート転送回数を設定します。総データ転送サイズは、最大 64M データ（1K データ × 64K リピート転送回数）まで設定可能です。

転送元または転送先のどちらか一方をリピート領域に指定することが可能です。リピート領域に指定された方のアドレスレジスタ（DMACm.DMSAR または DMACm.DMDAR）は、リピートサイズ分のデータ転送が終了すると、転送開始時のアドレスに復帰します。このモードでは、指定したリピートサイズ分のデータ転送が終了したとき、DMA 転送を停止させて、リピートサイズ終了割り込みを要求することが可能です。DMA 転送を再開させるには、リピートサイズ終了割り込み処理で DMACm.DMCNT.DTE ビットに 1 を書き込んでください。

また、指定したリピート転送回数の終了後に、転送終了割り込み要求を発生させることができます。

リピート転送モードにおけるレジスタ更新動作を表 17.4 に、リピート転送モードにおける転送動作を図 17.3 に示します。

表 17.4　　リピート転送モードにおけるレジスタ更新動作

レジスタ	機能	1転送要求に対する転送終了後の更新動作	
		DMACm.DMCRAL レジスタが1以外のとき	DMACm.DMCRAL レジスタが1のとき（リピートサイズの最終データ転送）
DMACm.DMSAR	転送元アドレス	インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算	• DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 00b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 01b DMACm.DMSARの初期値 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 10b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算
DMACm.DMDAR	転送先アドレス	インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算	• DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 00b DMACm.DMDARの初期値 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 01b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 10b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算
DMACm.DMCRAH	リピートサイズ	更新なし	更新なし
DMACm.DMCRAL	転送カウント	1減算	DMACm.DMCRAH
DMACm.DMCRB	リピート転送回数のカウント	更新なし	1減算

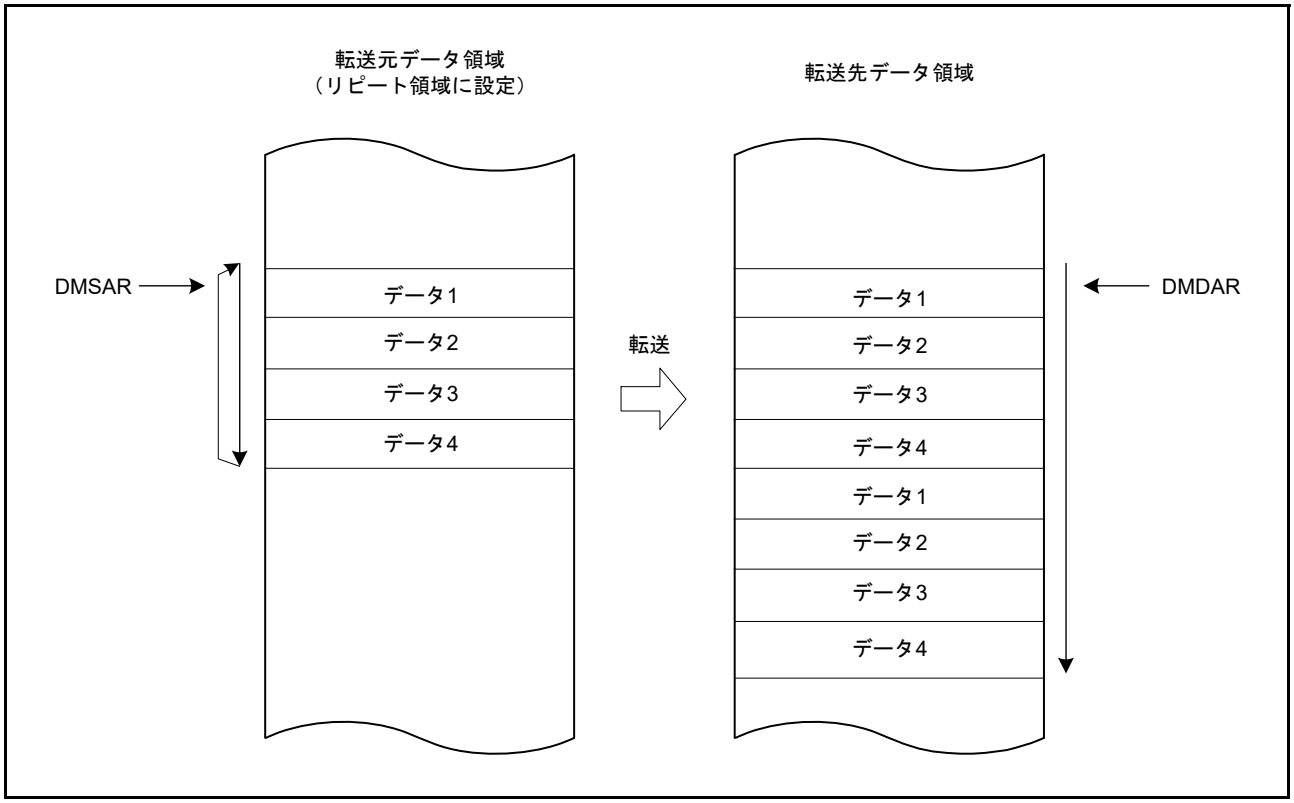


図 17.3 リピート転送モードにおける転送動作

(3)　ブロック転送モード

ブロック転送モードでは、1 転送要求に対して 1 ブロックのデータ転送を行います。

DMACm.DMCRA レジスタで最大 1K データのブロック転送サイズを設定します。DMACm.DMCRB で最大 64K のブロック転送回数を設定します。総データ転送サイズは、最大 64M データ（1K データ × 64K ブロック転送回数）まで設定可能です。

転送元または転送先のどちらか一方をブロック領域に指定することが可能です。ブロック領域に指定された方のアドレスレジスタ（DMACm.DMSAR または DMACm.DMDAR）は、1 ブロックのデータ転送が終了すると、転送開始時のアドレスに復帰します。このモードでは、1 ブロックのデータ転送が終了したとき、DMA 転送を停止させて、リピートサイズ終了割り込みを要求することが可能です。DMA 転送を再開させるには、リピートサイズ終了割り込み処理で DMACm.DMCNT.DTE ビットに 1 を書き込んでください。

また、指定したブロック転送回数の終了後に、転送終了割り込み要求を発生させることができます。ブロック転送モードにおけるレジスタ更新動作を表 17.5 に、ブロック転送モードにおける転送動作を図 17.4 に示します。

表 17.5　　ブロック転送モードにおけるレジスタ更新動作

レジスタ	機能	1転送要求に対する1ブロック転送終了後の更新動作
DMACm.DMSAR	転送元アドレス	• DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 00b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 01b DMACm.DMSARの初期値 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 10b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算
DMACm.DMDAR	転送先アドレス	• DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 00b DMACm.DMDARの初期値 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 01b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算 • DMACm.DMTMD.DTS[1:0] = 10b インクリメント／デクリメント／固定／オフセット加算
DMACm.DMCRAH	ブロックサイズ	更新なし
DMACm.DMCRAL	転送カウント	DMACm.DMCRAH
DMACm.DMCRB	ブロック転送回数のカウント	1減算

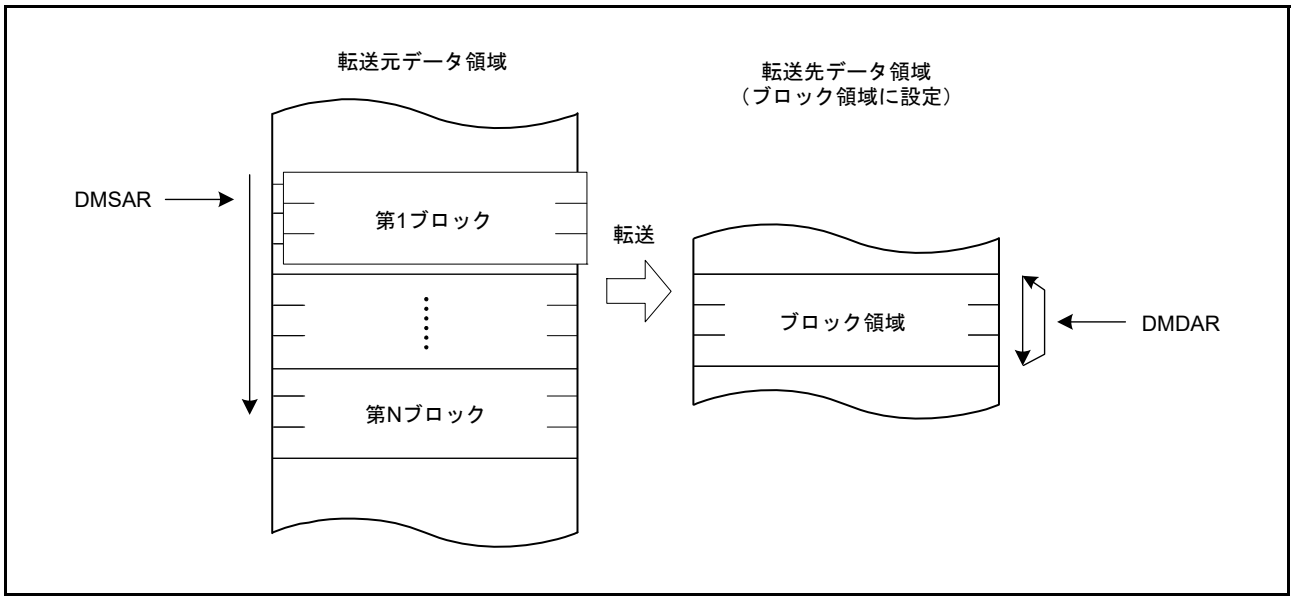


図 17.4　　ブロック転送モードにおける転送動作

17.3.2　拡張リピート領域機能

DMAC は転送元アドレスと転送先アドレスに対して拡張リピート領域をサポートしています。DMA 転送元アドレスレジスタ（DMSAR）および DMA 転送先アドレスレジスタ（DMDAR）でそれぞれ個別に設定可能です。この機能を設定すると、アドレスレジスタは拡張リピート領域に指定した範囲のアドレス値を繰り返します。転送元アドレスの拡張リピート領域は、DMACm.DMAMD.SARA[4:0] ビットで設定します。

転送先アドレスの拡張リピート領域は、DMACm.DMAMD.DARA[4:0] ビットで設定します。転送元と転送先に異なるサイズの設定が可能です。ただし、リピート領域またはブロック領域として設定した転送元または転送先に、拡張リピート領域を設定することはできません。

アドレスレジスタの値が拡張リピート領域の終了アドレスに到達し、拡張リピート領域がオーバーフローすると、DMA 転送を停止させて、拡張リピート領域オーバーフロー割り込み要求を発生させることができます。DMACm.DMINT.SARIE ビットが 1 のとき、転送元の拡張リピート領域がオーバーフローすると、DMACm.DMSTS.ESIF フラグが 1 になり、DMACm.DMCNT.DTE ビットを 0 にして DMA 転送を終了させます。このとき、DMACm.DMINT.ESIE ビットが 1 になっていると、拡張リピート領域オーバーフロー割り込み要求が発生します。DMACm.DMINT.DARIE ビットが 1 の場合、この機能は転送先アドレスレジスタが対象になります。DMA 転送を再開させるには、割り込み処理で DMACm.DMCNT.DTE ビットに 1 を書き込んでください。

図 17.5 に、拡張リピート領域の動作例を示します。

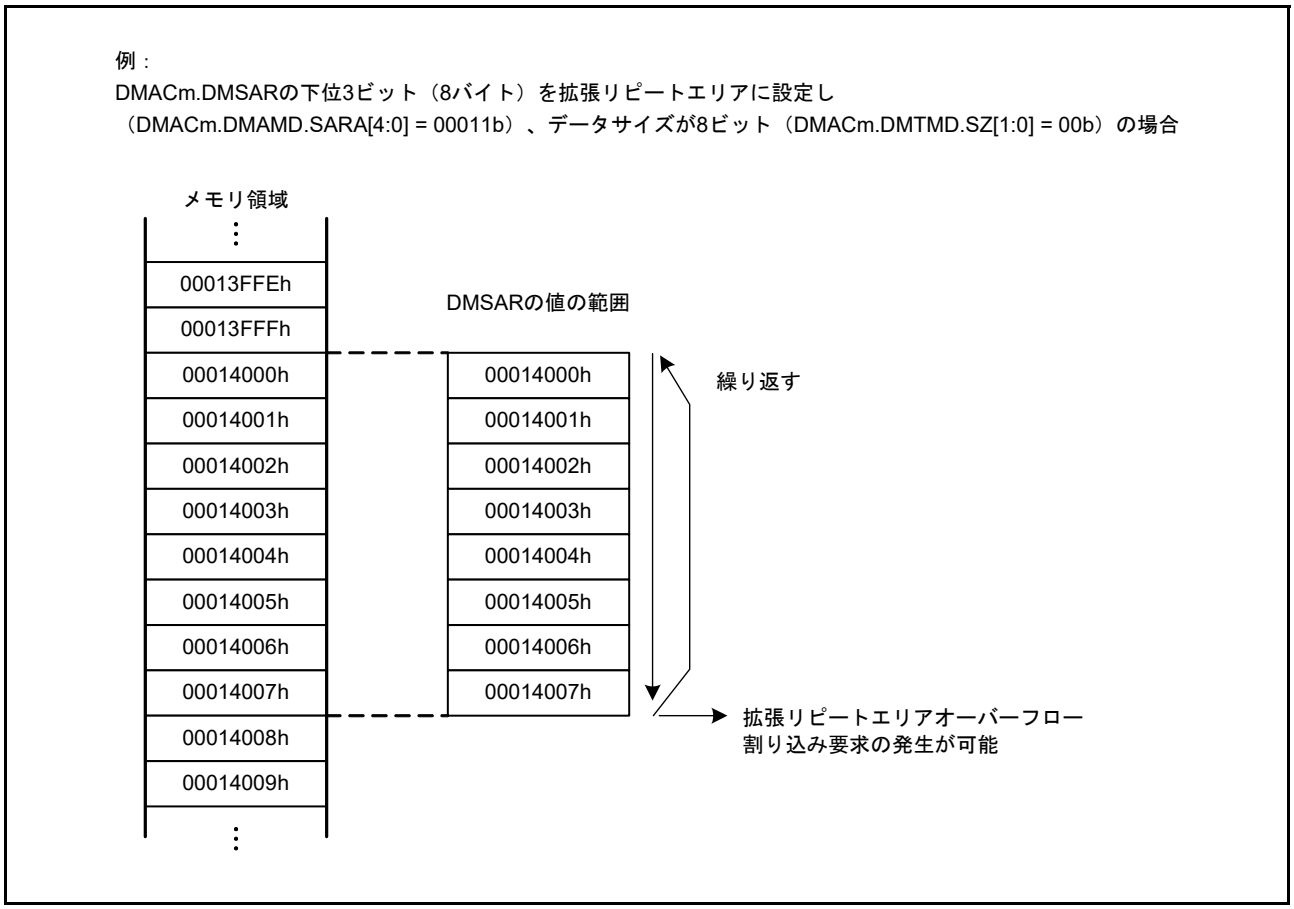


図 17.5　拡張リピート領域の動作例

ブロック転送モードで拡張リピート領域オーバーフロー割り込みを使用する場合は、以下の点を考慮してください。

- 拡張リピート領域オーバーフロー割り込みで転送を終了させる場合、ブロックサイズを 2 のべき乗になるように設定するか、またはブロックサイズの境界と拡張リピート領域の範囲の境界が一致するようにアドレスレジスタの値を設定する必要があります。また、1 ブロックの転送中に拡張リピート領域にオーバーフローが発生した場合、そのブロックの転送が終了するまで拡張リピート領域オーバーフロー割り込みは保留され、転送はオーバーランします

図 17.6 に、ブロック転送モードにおける拡張リピート領域機能の使用例を示します。

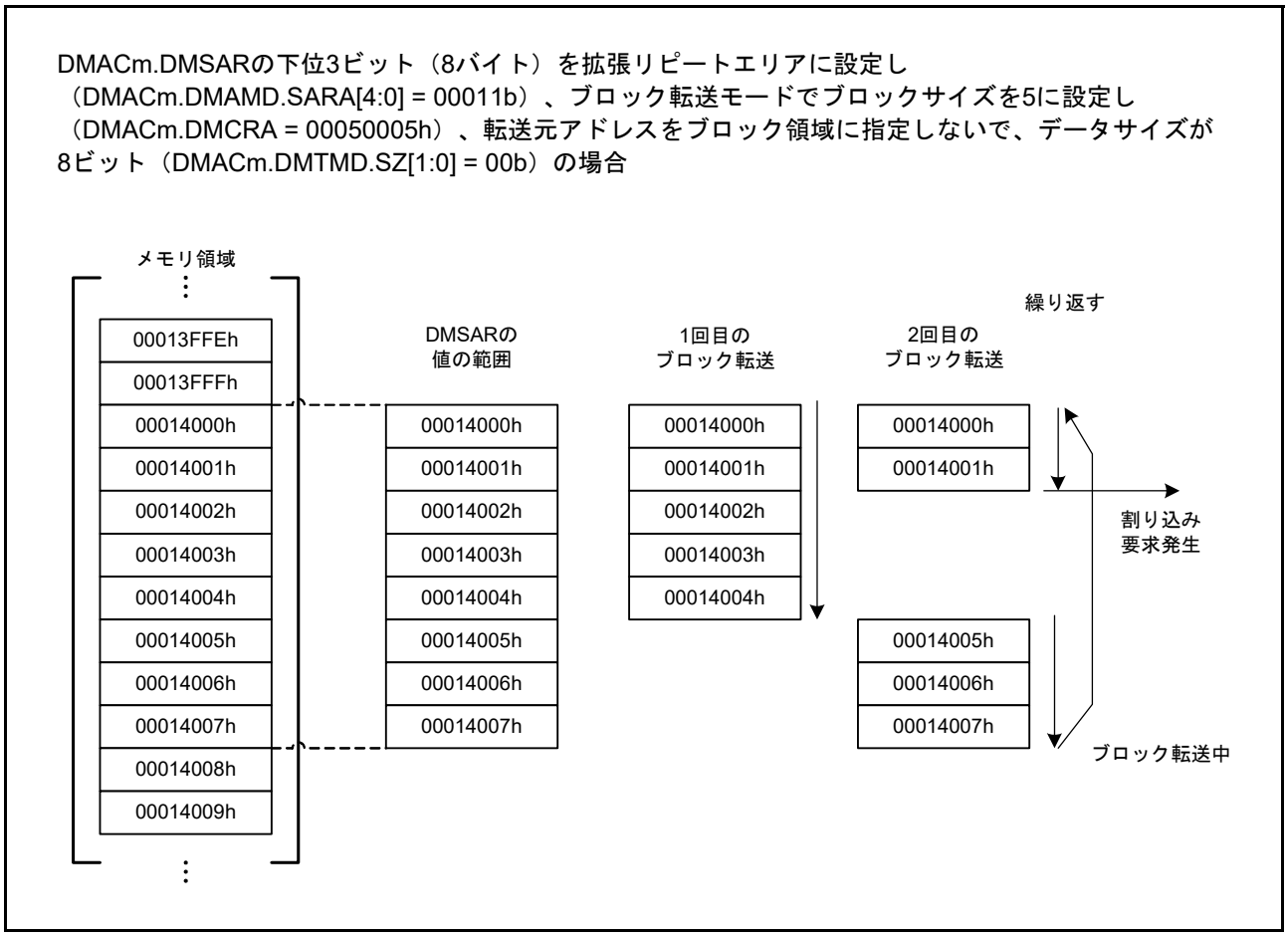


図 17.6　ブロック転送モードにおける拡張リピート領域機能の使用例

17.3.3　オフセットを使用したアドレス更新機能

転送元アドレスと転送先アドレスの更新方法には、固定、インクリメント、デクリメントの他にオフセット加算があります。オフセット加算では、DMAC が 1 データの転送を実行するたびに、DMA オフセットレジスタ（DMACm.DMOFR）で設定したオフセット値がアドレスに加算されます。この機能によって、分散した領域にアドレスが割り付けられた状態でデータ転送を実施できます。また、DMACm.DMOFR に負の値を設定すると、オフセットによる減算も可能です。負の値は 2 の補数で設定する必要があります。

各アドレス更新モードにおけるアドレス更新方法を表 17.6 に示します。

表 17.6　各アドレス更新モードにおけるアドレス更新方法

アドレス更新モード	DMACm.DMAMD.SM[1:0]および DMACm.DMAMD.DM[1:0]のアドレス更新モード設定値	DMACm.DMTMD.SZ[1:0]の設定値別アドレス更新方法		
		SZ[1:0] = 00b	SZ[1:0] = 01b	SZ[1:0] = 10b
アドレス固定	00b	固定		
オフセット加算	01b	+ DMACm.DMOFR（注1）		
インクリメント	10b	+ 1	+ 2	+ 4
デクリメント	11b	- 1	- 2	- 4

注 1.　DMA オフセットレジスタに負の値を設定する場合、その値は次式で計算される 2 の補数でなければいけません。
負のオフセット値の 2 の補数表現 = ～（オフセット値）+ 1（～：ビット反転）

(1) オフセット加算を使用した基本的な転送

オフセット加算によるアドレス更新機能の動作例を図 17.7 に示します。

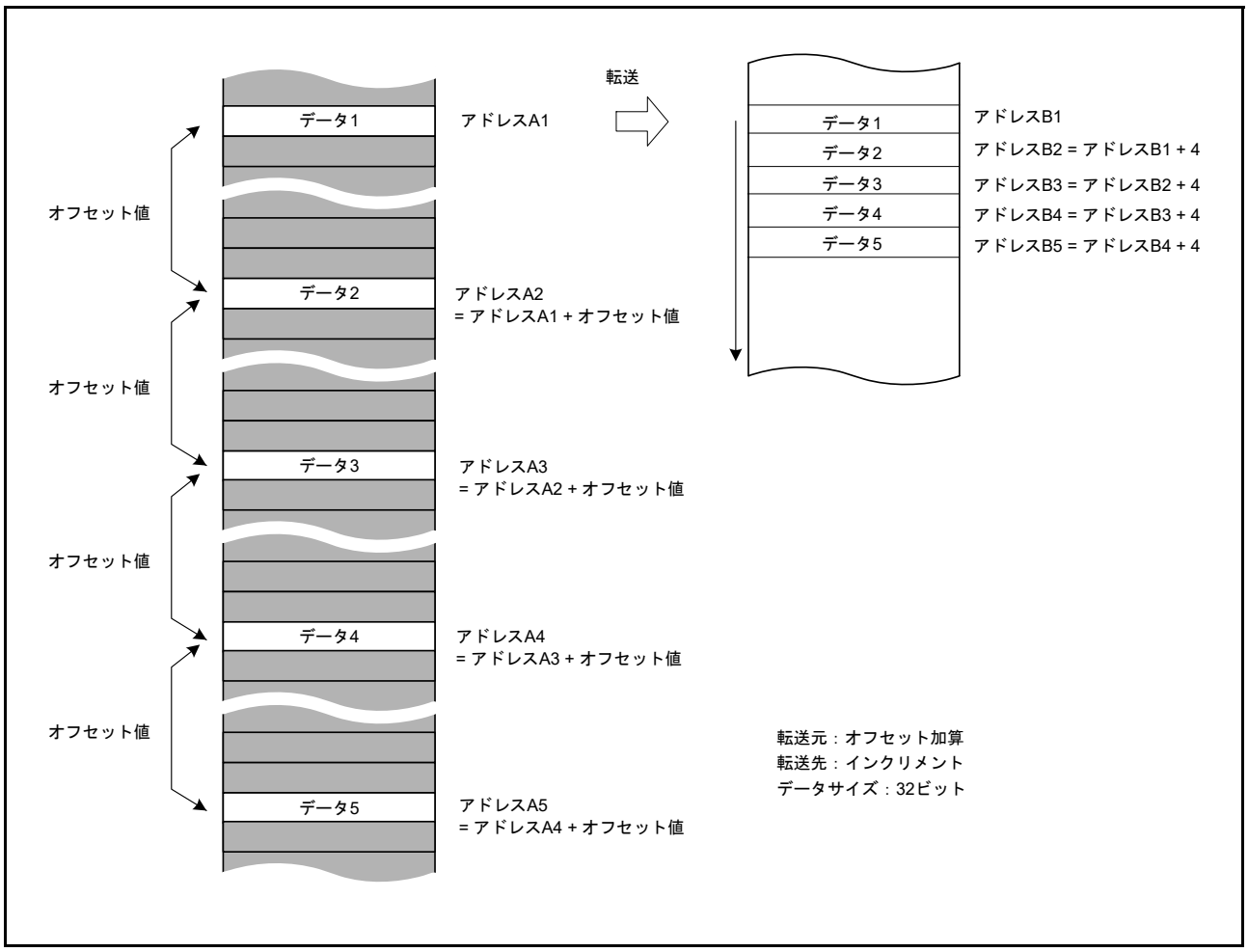


図 17.7 オフセット加算によるアドレス更新機能の動作例

図 17.7 では、以下のように設定しています。

- 転送データサイズは 32 ビット
- 転送元アドレスの更新モードはオフセット加算
- 転送先アドレスの更新モードはインクリメント

2 回目以降のデータは、前回のアドレスにオフセット値を加算することで得られる転送元アドレスから読み出されます。指定された間隔で読み出されたデータは、転送先では連続した領域に書き込まれます。

(2) オフセット加算を使用した XY 変換例

図 17.8 に、リピート転送モードとオフセット加算を組み合わせて XY 変換を行うときの動作を示します。設定方法は以下のとおりです。

- DMAC0.DMAMD — 転送元アドレス更新モード設定：オフセット加算
- DMAC0.DMAMD — 転送先アドレス更新モード設定：インクリメント
- DMAC0.DMTMD — データ転送サイズ選択：32 ビット
- DMAC0.DMTMD — 転送モード設定：リピート転送
- DMAC0.DMTMD — リピート領域選択：転送元をリピート領域に設定

- DMAC0.DMOFR — オフセットアドレス：10h
- DMAC0.DMCRA — リピートサイズ：4h
- DMAC0.DMINT — リピートサイズ終了割り込みを許可

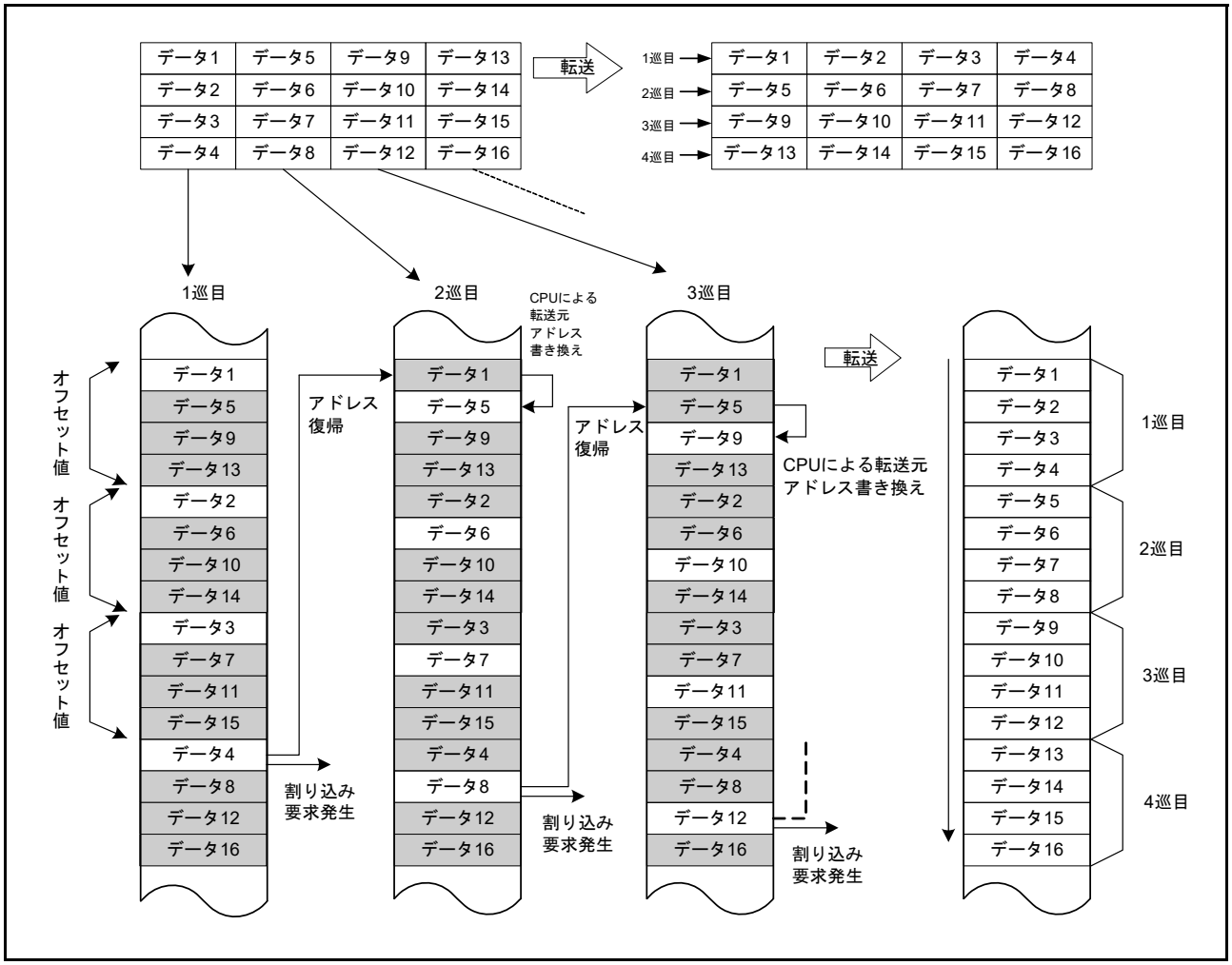


図 17.8　リピート転送モード + オフセット加算による XY 変換動作

転送が開始されると、毎回、転送元アドレスにオフセット値を加算してデータ転送が行われます。転送データは、連続した転送先アドレスに書き込まれます。“ データ 4” まで転送されたときの動作は以下のとおりです。

- リピートサイズ分のデータ転送が終了する
- 転送元アドレスは転送開始時のアドレス（転送元の “ データ 1” のアドレス）に復帰する
- リピートサイズ終了割り込要求が発生する

この割り込みによって転送が一時停止している間、以下の処理を行います。

- DMAC0.DMSAR — DMA 転送元アドレスを “ データ 5” のアドレスに書き換える
（この例では “ データ 1” のアドレスに 4 を加算）
- DMAC0.DMCNT — DTE ビットを 1 にする

DMA 転送が中断したときの状態から DMA 転送が再開されます。以降、同じ処理を繰り返すと、転送元のデータが転送先で配置を入れ替えられます（XY 変換）。

図 17.9 に XY 変換の処理フローを示します。

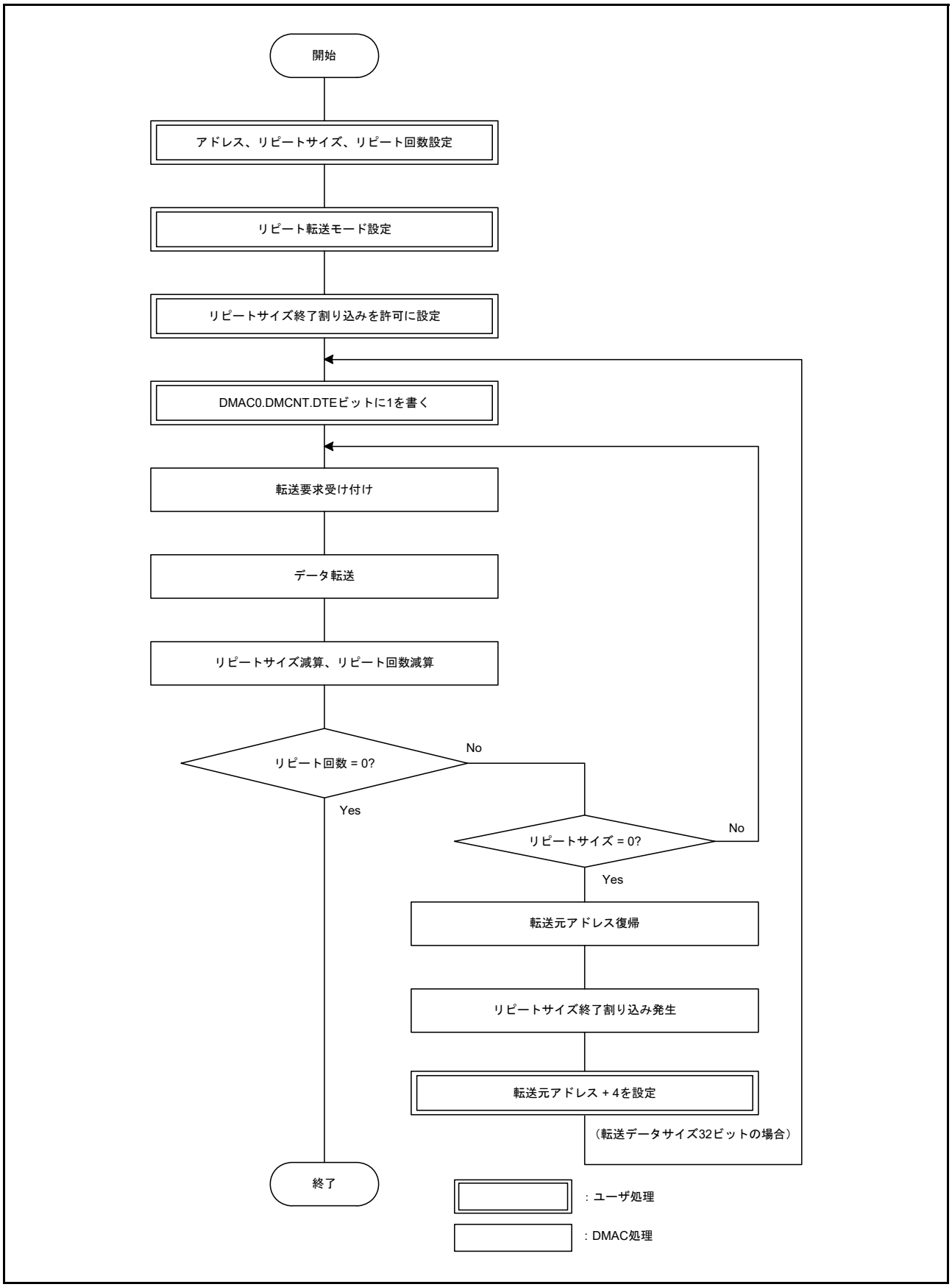


図 17.9 リピート転送モード + オフセット加算による XY 変換フロー

17.3.4 起動要因

ソフトウェア、周辺モジュールからの割り込み要求、および外部割り込み要求は、すべて DMAC 起動要因として指定可能です。起動要因を選択するには、DMACm.DMTMD.DCTG[1:0] ビットを設定します。

(1) ソフトウェアによる DMAC 起動

ソフトウェアによって DMA 転送を開始する場合、以下の手順に従います。

1. DMACm.DMTMD.DCTG[1:0] ビットを 00b にする。
2. DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1（DMA 転送許可）にする。
3. DMAST.DMST ビットを 1（DMAC 起動許可）にする。
4. DMACm.DMREQ.SWREQ ビットを 1（DMA 転送要求あり）にする。

DMACm.DMREQ.CLRS ビットが 0 の状態でソフトウェアによる DMAC 起動を行った場合、DMA 転送要求に対する転送が開始されると DMACm.DMREQ.SWREQ ビットが 0 になります。

DMACm.DMREQ.CLRS ビットが 1 の状態でソフトウェアによる DMAC 起動を行った場合は、転送を開始しても DMACm.DMREQ.SWREQ ビットは 0 になりません。要求に対する転送終了後、再び DMA 転送要求が発生します。

(2) 内蔵周辺モジュール／外部割り込み要求による DMAC 起動

内蔵周辺モジュールからの割り込み要求と外部割り込み要求を、DMAC 起動要因に指定することが可能です。起動要因は、ICU.DELSRn.DELS[7:0] ビット（n = 0 ～ 3）でチャネルごとに個別に選択できます。

内蔵周辺モジュールからの割り込み要求または外部割り込み要求によって DMAC 転送を開始する場合、以下の手順に従います。

1. DMACm.DMTMD.DCTG[1:0] ビットを 01b（周辺モジュールまたは外部割り込み端子からの割り込み）にする。
2. DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1（DMA 転送許可）にする。
3. ICU.DELSRn.DSEL ビットにイベント番号を設定する（DMAC イベントリンクを選択する）。
4. DMAST.DMST ビットを 1（DMAC 起動許可）にする。

DMAC 起動要因となる割り込み要求については、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」の表 14.3 を参照してください。

17.3.5 動作タイミング

以下に示すタイミング図は、最小実行サイクル数を示しています。

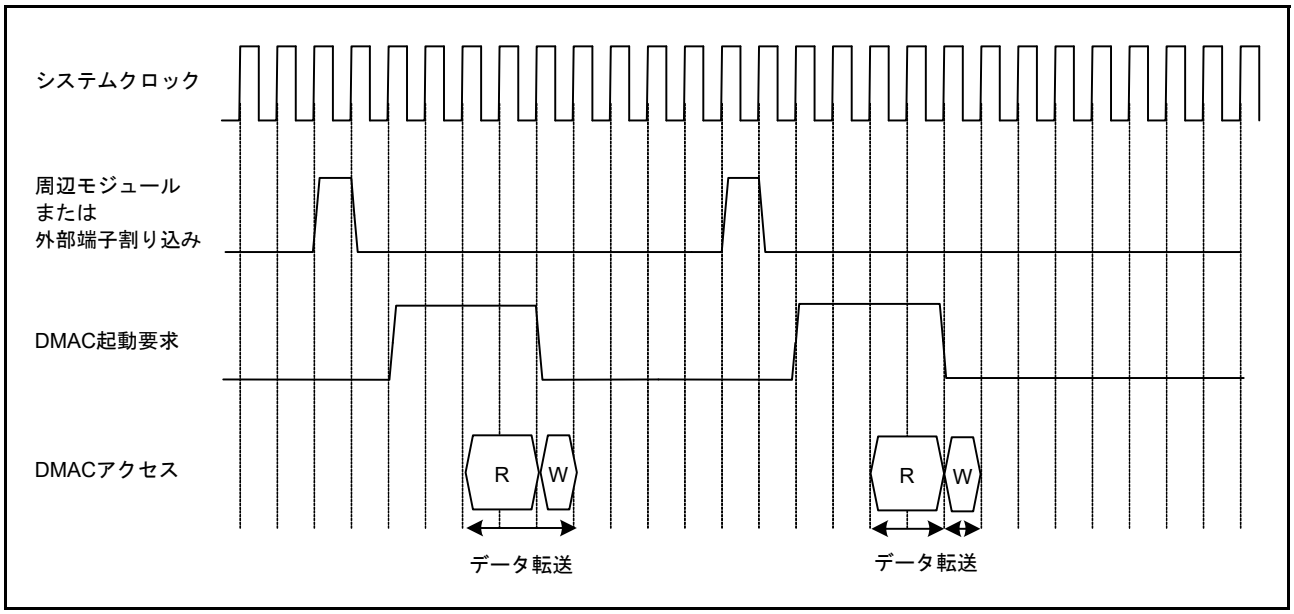


図 17.10 DMAC 動作タイミング例 1（ノーマル転送モードまたはリピート転送モードでの周辺モジュール／外部割り込み入力端子からの割り込みによる DMA 起動）

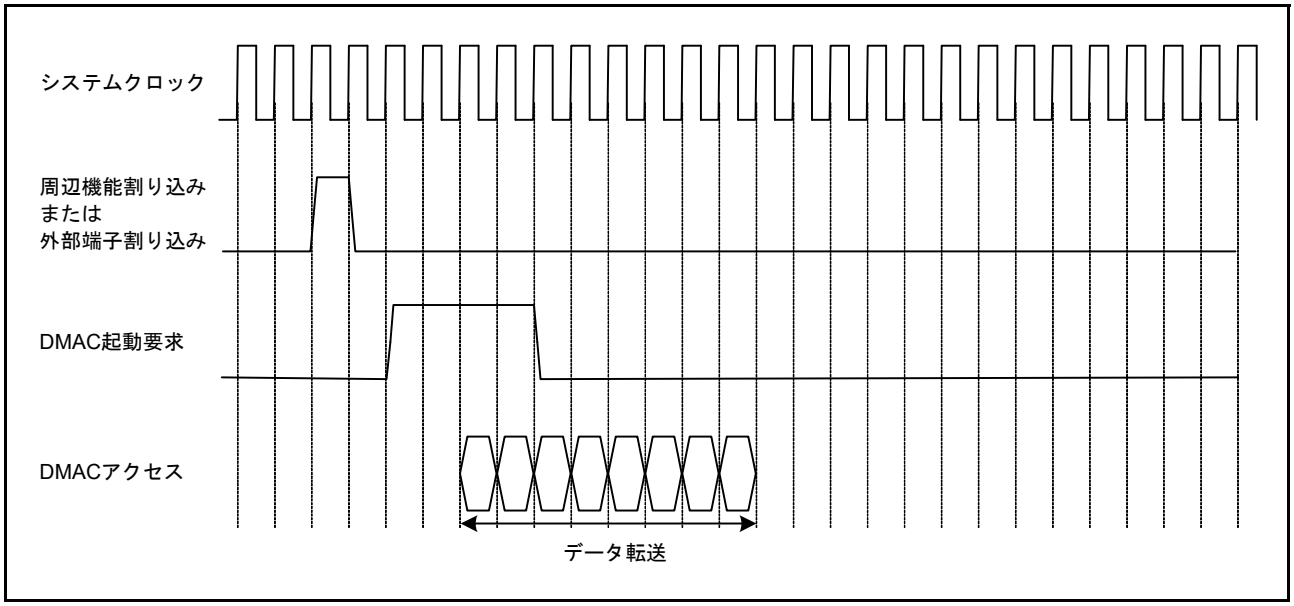


図 17.11 DMAC 動作タイミング例 2（ブロックサイズ = 4 のブロック転送モードでの周辺モジュール／外部割り込み入力端子からの割り込みによる DMA 起動）

17.3.6 DMAC の実行サイクル

表 17.7 に、1 回の DMAC データ転送動作における実行サイクルを示します。

表 17.7 DMACの実行サイクル

転送モード	データ転送（読み出し）	データ転送（書き込み）
ノーマル	Cr + 1	Cw
リピート	Cr + 1	Cw
ブロック（注1）	P × Cr	P × Cw

注 . P = ブロックサイズ（DMCRAH レジスタの設定値）
Cr = データリード先アクセスサイクル
Cw = データライト先アクセスサイクル
注 1. ブロックサイズが 2 以上の場合です。ブロックサイズが 1 の場合は、ノーマル転送のサイクル数となります。

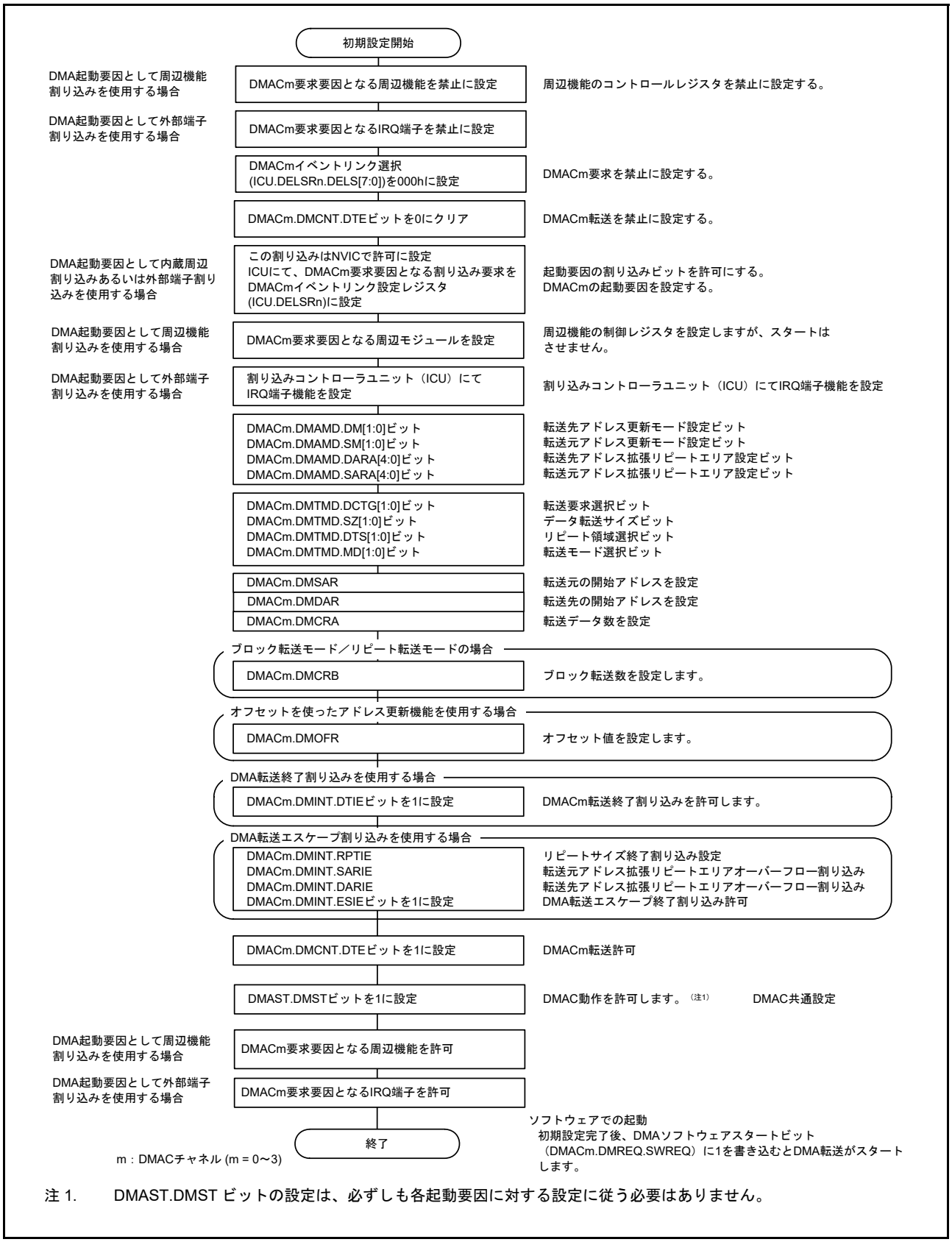
Cr と Cw はアクセス先で異なります。アクセス先ごとのサイクル数については、「42. SRAM」、「43. フラッシュメモリ」、および「15. バス」を参照してください。システムクロックと周辺クロックの周波数比も考慮されています。

データ転送（読み出し）列の「+ 1」の単位は、システムクロック（ICLK）の 1 サイクルです。動作例については、17.3.5 動作タイミングを参照してください。

DMAC の応答時間は、DMAC の起動要因が検出されてから DMAC 転送が始まるまでの時間です。表 17.7 には、DMAC の起動要因がアクティブになってから DMAC 転送が始まるまでの時間は含まれていません。

17.3.7　DMAC の起動

図 17.12 にレジスタの設定手順を示します。



注 1.　DMAST.DMST ビットの設定は、必ずしも各起動要因に対する設定に従う必要はありません。

図 17.12　レジスタの設定手順

17.3.8 DMA 転送の開始

チャネル m の DMA 転送を有効にするには、DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1（DMA 転送許可）にして、DMAST.DMST ビットを 1（DMAC 起動許可）にします。他の DMAC チャネルや DTC の転送中は、新たな起動要求は受け付けられません。先行する転送が終了した時点で最も優先順位の高いチャネルの DMA 転送要求が選択され、そのチャネルの DMA 転送が開始されます。DMA 転送が始まると、DMACm.DMSTS.ACT フラグが 1（DMAC 動作中）になります。

17.3.9 DMA 転送中のレジスタ

DMAC のレジスタは、DMA 転送処理によって値が更新されます。更新される値は、各種設定や転送の状態によって変わります。更新されるレジスタは、DMACm.DMSAR、DMACm.DMDAR、DMACm.DMCRA、DMACm.DMCRB、DMACm.DMCNT、および DMACm.DMSTS です。これらの説明を下記に示します。各転送モードにおけるレジスタの更新動作については、表 17.3 ～表 17.5 を参照してください。

(1) DMA 転送元アドレスレジスタ（DMACm.DMSAR）

1 転送要求に対するデータ転送が終了すると、DMSAR レジスタの内容は、次の転送要求でアクセスするアドレスに更新されます。

(2) DMA 転送先アドレスレジスタ（DMACm.DMDAR）

1 転送要求に対するデータ転送が終了すると、DMDAR レジスタの内容は、次の転送要求でアクセスするアドレスに更新されます。

(3) DMA 転送カウントレジスタ（DMACm.DMCRA）

1 転送要求に対するデータ転送が終了すると、カウント値が更新されます。更新動作は、選択した転送モードによって異なります。

(4) DMA ブロック転送カウントレジスタ（DMACm.DMCRB）

1 転送要求に対するデータ転送が終了すると、カウント値が更新されます。更新動作は、選択した転送モードによって異なります。

(5) DMA 転送許可ビット（DMACm.DMCNT.DTE）

DMACm.DMCNT.DTE ビットは、レジスタを書くことによってデータ転送の許可／禁止を制御します。DMA 転送の状態に応じて自動的に DMAC によって 0 になります。

DMAC が本ビットをクリアする条件は、以下のとおりです。

- 設定された総転送データ数の転送が終了したとき
- リピートサイズ終了割り込みによって DMA 転送が停止したとき
- 拡張リピート領域オーバーフロー割り込みによって DMA 転送が停止したとき

対応する DMACm.DMCNT.DTE ビットが 1 になっているチャネルのレジスタへの書き込みは禁止です（DMACm.DMCNT レジスタを除く）。DTE ビットを 0 にした後のみ、書き込みが可能になります。

(6) DMA アクティブフラグ（DMACm.DMSTS.ACT）

DMACm.DMSTS.ACT フラグは、DMACm がアイドル状態であるか、または動作中であるかを示します。本フラグは DMAC がデータ転送を開始すると 1 になり、1 転送要求に対するデータ転送が終了すると 0 になります。DMA 転送中に DMACm.DMCNT.DTE ビットに 0 を書いて DMA 転送を停止させた場合でも、本フラグは DMA 転送が終了するまで 1 を保持します。

(7) 転送終了割り込みフラグ（DMACm.DMSTS.DTIF）

総転送サイズ分の DMA 転送が終了すると、DMACm.DMSTS.DTIF フラグは 1 になります。本フラグと DMACm.DMINT.DTIE ビットがともに 1 の場合、転送終了割り込み要求が発生します。本フラグが 1 になるタイミングは、DMA 転送のバスサイクルが終了し、DMACm.DMSTS.ACT フラグが 0 になって DMA 転送終了を示したときです。割り込み処理中に DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1 にした場合、本フラグは自動的に 0 にクリアされます。

(8) 転送エスケープ終了割り込みフラグ（DMACm.DMSTS.ESIF）

リピートサイズ終了割り込み、または拡張リピート領域オーバーフロー割り込み要求が発生したとき、DMACm.DMSTS.ESIF フラグは 1 になります。本フラグと DMACm.DMINT.ESIE ビットがともに 1 の場合、転送エスケープ終了割り込み要求が発生します。本フラグが 1 になるタイミングは、割り込み要求を発生させる要因になった DMA 転送のバスサイクルが終了し、DMACm.DMSTS.ACT フラグが 0 になって DMA 転送終了を示したときです。割り込み処理中に DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1 にした場合、本フラグは自動的に 0 にクリアされます。

DMAC からの割り込み要求を CPU または DTC へ送信する前に、割り込みコントロールレジスタを設定する必要があります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

17.3.10 チャネル優先順位

DMAC は、複数の DMA 転送要求が発生したとき、DMA 転送要求のあるチャネルの優先順位を判断します。

チャネル優先順位は、チャネル 0 ＞チャネル 1 ＞チャネル 2 ＞チャネル 3 の順で固定です（チャネル 0 が最優先）。

データ転送中に DMA 転送要求が発生した場合は、最終データの転送後にチャネルアービトレーションを行い、最も優先順位の高いチャネルの転送が開始されます。

17.4 DMA 転送の終了

DMA 転送の終了は、転送終了条件によって動作が異なります。DMA 転送が終了すると、DMACm.DMCNT.DTE ビットと DMACm.DMSTS.ACT フラグが 1 から 0 になります。

17.4.1 設定した総転送回数完了による転送終了

(1) ノーマル転送モード（DMACm.DMTMD.MD[1:0] = 00b）の場合

DMACm.DMCRAL レジスタが 1 から 0 になると、対応するチャネルの DMA 転送が終了し、DMACm.DMCNT.DTE ビットが 0 になり、DMACm.DMSTS.DTIF フラグが 1 になります。このとき DMACm.DMINT.DTIE ビットが 1 であると、CPU または DTC へ転送終了割り込み要求が送信されます。

(2) リピート転送モード（DMACm.DMTMD.MD[1:0] = 01b）の場合

DMACm.DMCRB レジスタが 1 から 0 になると、対応するチャネルの DMA 転送が終了し、DMACm.DMCNT.DTE ビットが 0 になり、DMACm.DMSTS.DTIF フラグが 1 になります。このとき DMACm.DMINT.DTIE ビットが 1 であると、CPU または DTC へ割り込み要求が送信されます。

(3) ブロック転送モード（DMACm.DMTMD.MD[1:0] = 10b）の場合

DMACm.DMCRB レジスタが 1 から 0 になると、対応するチャネルの DMA 転送が終了し、DMACm.DMCNT.DTE ビットが 0 になり、DMACm.DMSTS.DTIF フラグが 1 になります。このとき DMACm.DMINT.DTIE ビットが 1 であると、CPU または DTC へ割り込み要求が送信されます。

DMAC からの割り込み要求を CPU または DTC へ送信する前に、割り込みコントロールレジスタを設定する必要があります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

17.4.2 リピートサイズ終了割り込みによる転送終了

リピート転送モードにおいて、DMACm.DMINT.RPTIE ビットが 1 であれば、1 リピートサイズ分の転送終了時にリピートサイズ終了割り込み要求が発生します。DMACm.DMCNT.DTE ビットが 0 になり、DMACm.DMSTS.ESIF フラグが 1 になります。このとき DMACm.DMINT.ESIE ビットが 1 であると、CPU または DTC へ割り込み要求が送信されます。転送を再開させるには、DMACm.DMCNT.DTE ビットに 1 を書き込んでください。

ブロック転送モードにおいても、リピートサイズ終了割り込み要求を発生させることができます。1 ブロックサイズ分の転送終了時に、リピート転送モードと同様に割り込み要求が発生します。

DMAC からの割り込み要求を CPU または DTC へ送信する前に、割り込みコントロールレジスタを設定する必要があります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

17.4.3 拡張リピート領域オーバーフロー割り込みによる転送終了

拡張リピート領域が指定され、かつ DMACm.DMINT.SARIE ビットまたは DMACm.DMINT.DARIE ビットが 1 の場合に、拡張リピート領域がオーバーフローすると、拡張リピート領域オーバーフロー割り込み要求が発生します。DMA 転送が停止して、DMACm.DMCNT.DTE ビットが 0 になり、DMACm.DMSTS.ESIF フラグが 1 になります。このとき DMACm.DMINT.ESIE ビットが 1 であると、CPU または DTC へ割り込み要求が送信されます。

この割り込み要求がリードサイクル中に発生しても、以降のライトサイクルは実行されます。ブロック転送モードでは、割り込み要求が 1 ブロックの転送中に発生しても、そのブロックの残りのデータが転送されるまで、転送は終了しません。

DMAC からの割り込み要求を CPU または DTC へ送信する前に、割り込みコントロールレジスタを設定する必要があります。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

17.4.4 DMA 転送の終了に関する注意事項

DMA 転送終了後、次の要求時に DMA 起動要求が発生する場合があります。このような状況が生じた場合、DMA 転送が開始され、DMA 起動要求は DMAC 内に保持されます。これを避けるには、ICU の DELSRn.DELS[7:0] ビットを 0 にして、DMA 起動要求を停止してください。

最後の DMA 転送後に DMA 起動要求が発生した場合は、DMA 起動要求をクリアしてください。

17.5　割り込み

各 DMAC チャネルは、1 要求分の転送終了後、CPU または DTC へ割り込み要求（DMACm_INT）を出力することが可能です。

表 17.8 に、各割り込み要因とそれらに対応するステータスフラグおよび許可ビットを示します。図 17.13 に、割り込み出力（DMAC0 ～ DMAC3）の概略論理図を示します。また、DMAC 割り込み処理ルーチンで DMA 転送を再開／終了する手順を図 17.14 に示します。

表 17.8　割り込み要因、割り込みステータスフラグ、割り込み許可ビットの対応関係

割り込み要因		割り込み許可ビット	割り込みステータスフラグ	要求出力許可ビット
転送終了		—	DMACm.DMSTS.DTIF	DMACm.DMINT.DTIE
エスケープ転送終了	リピートサイズ終了	DMACm.DMINT.RPTIE	DMACm.DMSTS.ESIF	DMACm.DMINT.ESIE
	転送元アドレス拡張リピート領域オーバーフロー	DMACm.DMINT.SARIE		
	転送先アドレス拡張リピート領域オーバーフロー	DMACm.DMINT.DARIE		

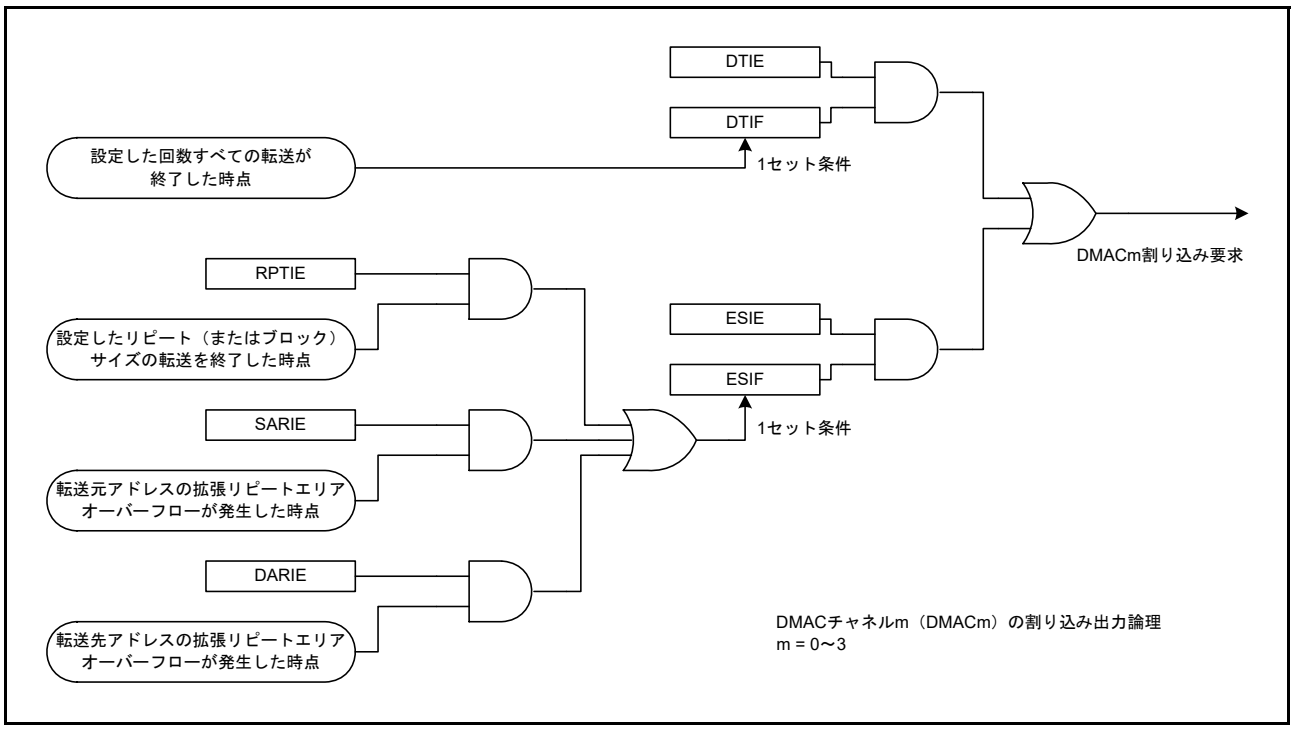


図 17.13　割り込み出力（DMAC0 ～ DMAC3）の概略論理図

割り込みを解除して DMA 転送を再開する方法は、以下のケースで異なります。

- DMA 転送を終了した場合
- DMA 転送を継続した場合

(1)　DMA 転送を終了した場合

転送終了割り込みの場合は、DMACm.DMSTS.DTIF フラグに 0 を書いてください。また、リピートサイズ割り込みと拡張リピート領域オーバーフロー割り込みの場合は、DMACm.DMSTS.ESIF フラグに 0 を書いてください。割り込み要因がクリアされます。DMACm は停止状態を保ちます。その後、新たな DMA 転送を開始する場合は、必要なレジスタを設定して、DMACm.DMCNT.DTE ビットを 1（DMA 転送許可）にしてください。

(2)　DMA 転送を継続した場合

DMACm.DMCNT.DTE ビットに 1 を書いてください。自動的に DMACm.DMSTS.ESIF フラグが 0 にクリア（割り込み要因がクリア）され、DMA 転送が再開します。

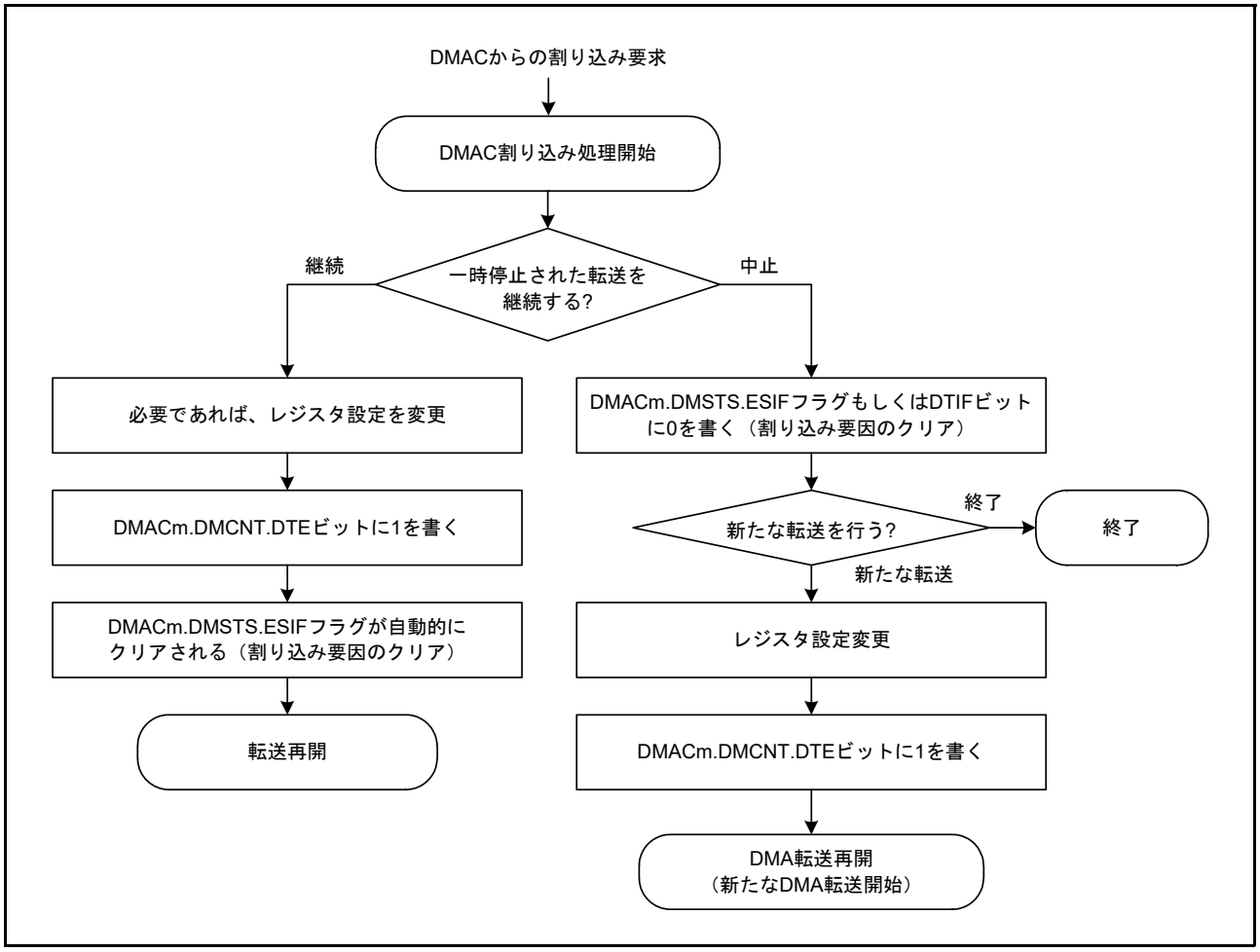


図 17.14　　DMAC 割り込み処理ルーチンで DMA 転送を再開／終了する手順

17.6 イベントリンク

各 DMAC チャネルは、1 回のデータ転送（ブロック転送モードの場合は 1 ブロックの転送）が終了するたびに、イベントリンク要求信号（DMACm_INT）を出力します。詳細は、「19. イベントリンクコントローラ（ELC）」を参照してください。

17.7 低消費電力機能

モジュールストップ状態、またはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する際は、最初に DMAST.DMST ビットを 0（DMAC モジュール停止）にして、以下の各項に示すように設定してください。

(1) モジュールストップ機能

MSTPCRA.MSTPA22 ビットに 1 を書くことによって、DMAC のモジュールストップ機能が有効になります。MSTPCRA.MSTPA22 ビットに 1 を書いたとき、DMA 転送が動作中の場合は、DMA 転送終了後にモジュールストップ状態へ遷移します。MSTPCRA.MSTPA22 ビットが 1 のとき、DMAC のレジスタにアクセスすることは禁止されています。MSTPCRA.MSTPA22 ビットに 0 を書くことで、DMAC のモジュールストップ状態は解除されます。

(2) ソフトウェアスタンバイモード

11.7.1 ソフトウェアスタンバイモードへの遷移の手順に従って設定してください。

WFI 命令実行時に DMA 転送が動作中の場合、DMA 転送が終了してからソフトウェアスタンバイモードへ遷移します。

(3) 低消費電力機能に関する注意事項

WFI 命令とレジスタの設定については、11.9.6 WFI 命令のタイミングを参照してください。

低消費電力モードから復帰後、DMA 転送を行うには、再度 DMAST.DMST ビットを 1 にしてください。ソフトウェアスタンバイモード時に発生した要求を、DMAC 起動要求ではなく CPU への割り込み要求として使用する場合は、14.4.2 割り込み要求先の選択に示すように、割り込み要求先を CPU に切り替えてから WFI 命令を実行してください。

17.8 使用上の注意事項

17.8.1 DMA 転送中のレジスタアクセスについて

DMACm.DMSTS.ACT フラグが 1（DMAC 動作中）、または DMACm.DMCNT.DTE ビットが 1（DMA 転送許可）の状態で、同じチャネルの下記のレジスタに書き込まないでください。

- DMSAR
- DMDAR
- DMCRA
- DMCRB
- DMTMD
- DMINT
- DMAMD
- DMOFR

17.8.2 予約領域への DMA 転送について

予約領域への DMA 転送は禁止です。予約領域へアクセスが発生した場合の転送結果は保証されません。予約領域の詳細は、「4. アドレス空間」を参照してください。

17.8.3 割り込みコントローラユニットの DMAC イベントリンク設定レジスタ（ICU.DELSRn）の設定

DMAC イベントリンク設定レジスタ（ICU.DELSRn）を設定する前に、DMA 転送許可ビット（DMACm.DMCNT.DTE ビット）が 0（DMA 転送禁止）であることを確認してください。また、ICU.DELSRn レジスタで設定したイベント番号に対応する DTC 起動許可レジスタビット（ICU.IELSRn.DTCE）を 1 にしないでください。ICU.IELSRn.DTCE レジスタと ICU.DELSRn レジスタの詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

17.8.4 DMA 起動の保留／再開方法

DMA 起動要求を保留する場合、DMAC イベントリンク選択（ICU.DELSRn.DELS[7:0]）ビットを 0 にしてください。DMA 転送を再開するには、17.3.7 DMAC の起動に示す設定を行った上で、ICU.DELSRn.DELS[7:0] ビットにイベント番号を書き込んでください。

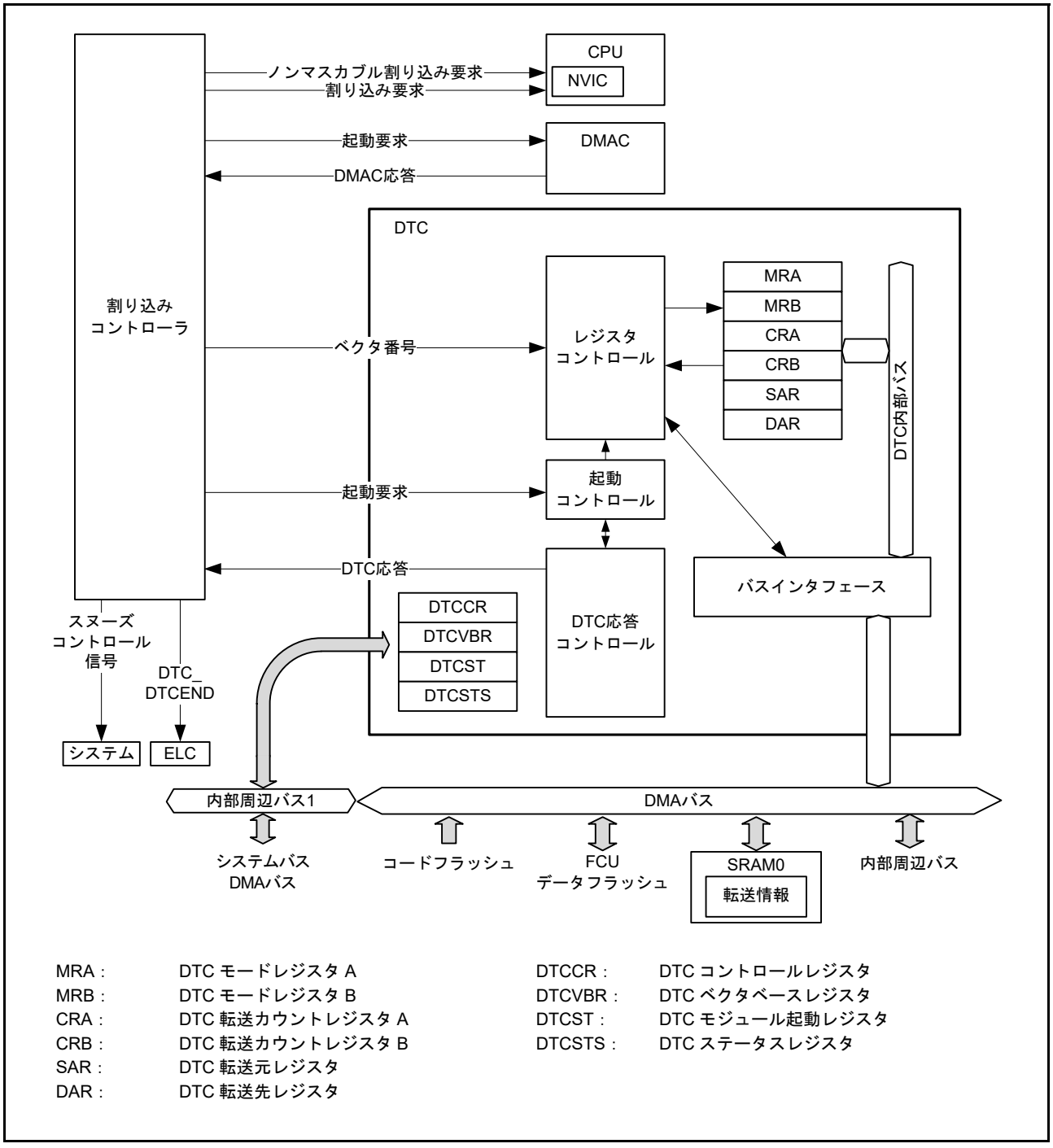
18.　データトランスファコントローラ（DTC）

18.1　概要

本 MCU は割り込み要求によって起動するとデータ転送を行うデータトランスファコントローラ（DTC）を内蔵しています。表 18.1 に DTC の仕様を、図 18.1 にブロック図を示します。

表 18.1　DTCの仕様

項目	内容
転送モード	• ノーマル転送モード 1回の起動で1データを転送 • リピート転送モード 1回の起動で1データを転送 リピートサイズ分のデータを転送すると転送開始時のアドレスに復帰 リピート回数は最大256回設定可能で、最大256 × 32ビット（1024バイト）転送可能 • ブロック転送モード 1回の起動で1ブロックを転送 ブロックサイズは、最大256 × 32ビット = 1024バイト設定可能
転送チャネル	• 割り込み要因に対応するチャネルの転送が可能（ICUからのDTC起動要求で転送） • 1つの起動要因に対して複数データの転送が可能（チェーン転送） • チェーン転送は「カウンタが0のとき実施」または「毎回実施」のいずれかを選択可能
転送空間	• 0000 0000h～FFFF FFFFhのうち予約領域を除く4Gバイトの領域
データ転送単位	• 1データ：1バイト（8ビット）、1ハーフワード（16ビット）、1ワード（32ビット） • 1ブロックサイズ：1～256データ
CPU割り込み要因	• DTCを起動した割り込みでCPUへの割り込み要求を発生可能 • 1回のデータ転送後にCPUへの割り込み要求を発生可能 • 指定したデータ数のデータ転送終了後にCPUへの割り込み要求を発生可能
イベントリンク機能	1回のデータ転送後（ブロックの場合は1ブロック転送後）、イベントリンク要求を発生
リードスキップ	転送情報の読み出しをスキップ可能
ライトバックスキップ	転送元アドレスまたは転送先アドレスが固定の場合、転送情報のライトバックをスキップ可能
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減



MRA : DTC モードレジスタ A
MRB : DTC モードレジスタ B
CRA : DTC 転送カウントレジスタ A
CRB : DTC 転送カウントレジスタ B
SAR : DTC 転送元レジスタ
DAR : DTC 転送先レジスタ

DTCCR : DTC コントロールレジスタ
DTCVBR : DTC ベクタベースレジスタ
DTCST : DTC モジュール起動レジスタ
DTCSTS : DTC ステータスレジスタ

図 18.1　DTC のブロック図

DTC と NVIC（CPU 内）の接続関係については、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の 14.1 概要を参照してください。

18.2　レジスタの説明

MRA、MRB、SAR、DAR、CRA、CRB は、すべて DTC の内部レジスタであり、CPU から直接アクセスすることはできません。これら DTC 内部レジスタの設定値は、SRAM 領域に転送情報として配置されます。起動要求が発生すると、DTC は SRAM 領域から転送情報を読み出して、それを DTC の内部レジスタに設定します。データ転送の終了後、内部レジスタの内容は転送情報として SRAM 領域にライトバックされます。

18.2.1　DTC モードレジスタ A（MRA）

アドレス （CPUから直接アクセス不可。18.3.1 を参照してください）

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MD[1:0]		SZ[1:0]		SM[1:0]		—	—
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと、不定値が読めます。書く場合、0としてください。	—
b3-b2	SM[1:0]	転送元アドレスアドレッシングモード	b3 b2 0 0：SARレジスタはアドレス固定 （SARレジスタへのライトバックをスキップ） 0 1：SARレジスタはアドレス固定 （SARレジスタへのライトバックをスキップ） 1 0：転送後SARレジスタをインクリメント SZ[1:0] = 00bのとき + 1 SZ[1:0] = 01bのとき + 2 SZ[1:0] = 10bのとき + 4 1 1：転送後SARレジスタをデクリメント SZ[1:0] = 00bのとき - 1 SZ[1:0] = 01bのとき - 2 SZ[1:0] = 10bのとき - 4	—
b5-b4	SZ[1:0]	DTCデータトランスファサイズ	b5 b4 0 0：バイト（8ビット）転送 0 1：ハーフワード（16ビット）転送 1 0：ワード（32ビット）転送 1 1：設定禁止	—
b7-b6	MD[1:0]	DTC転送モード選択	b7 b6 0 0：ノーマル転送モード 0 1：リピート転送モード 1 0：ブロック転送モード 1 1：設定禁止	—

MRA レジスタは、CPU から直接アクセスすることはできません。CPU は SRAM 領域（転送情報（n）の開始アドレス＋03h）にアクセス可能なので、DTC によって MRA レジスタから（および MRA レジスタへ）自動的に MRA 転送情報が転送されます。18.3.1　転送情報の配置と DTC ベクタテーブルを参照してください。

18.2.2　DTC モードレジスタ B（MRB）

アドレス（CPUから直接アクセス不可。18.3.1を参照してください）

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CHNE	CHNS	DISEL	DTS	DM[1:0]		—	—
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと、不定値が読めます。書く場合、0としてください。	—
b3-b2	DM[1:0]	転送先アドレスアドレッシングモード	b3 b2 0 0：DARレジスタはアドレス固定 （DARレジスタへのライトバックをスキップ） 0 1：DARレジスタはアドレス固定 （DARレジスタへのライトバックをスキップ） 1 0：転送後DARレジスタをインクリメント MRA.SZ[1:0] = 00bのとき + 1 SZ[1:0] = 01bのとき + 2 SZ[1:0] = 10bのとき + 4 1 1：転送後DARレジスタをデクリメント MRA.SZ[1:0] = 00bのとき - 1 SZ[1:0] = 01bのとき - 2 SZ[1:0] = 10bのとき - 4	—
b4	DTS	DTC転送モード選択	0：転送先にリピート領域またはブロック領域を選択 1：転送元にリピート領域またはブロック領域を選択	—
b5	DISEL	DTC割り込み選択	0：指定されたデータ転送の終了時、CPUへの割り込み要求が発生 1：DTCデータ転送のたびに、CPUへの割り込み要求が発生	—
b6	CHNS	DTCチェーン転送選択	0：連続してチェーン転送を行う 1：転送カウンタが1→0、または1→CRAHとなったとき、チェーン転送を行う	—
b7	CHNE	DTCチェーン転送許可	0：チェーン転送禁止 1：チェーン転送許可	—

MRB レジスタは、CPU から直接アクセスすることはできません。CPU は SRAM 領域（転送情報（n）の開始アドレス＋02h）にアクセス可能なので、DTC によって MRB レジスタから（および MRB レジスタへ）自動的に MRB 転送情報が転送されます。18.3.1　転送情報の配置と DTC ベクタテーブルを参照してください。

DTS ビット（DTC 転送モード選択）

リピート転送モードあるいはブロック転送モードにおいて、転送元または転送先をリピート領域またはブロック領域に設定します。

CHNS ビット（DTC チェーン転送選択）

チェーン転送の条件を選択します。CHNE ビットが 0 のとき、CHNS ビットの設定は無視されます。チェーン転送の条件については、表 18.3　チェーン転送の条件を参照してください。

次の転送がチェーン転送の場合、指定した転送回数の終了判定も、起動要因フラグのクリアも行われず、CPU への割り込み要求は発生しません。

CHNE ビット（DTC チェーン転送許可）

チェーン転送を許可します。チェーン転送条件の選択は、CHNS ビットで行います。詳細は 18.4.6 チェーン転送を参照してください。

18.2.3　DTC 転送元レジスタ（SAR）

アドレス（CPUから直接アクセス不可。18.3.1を参照してください）

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

SAR レジスタは、転送元の開始アドレスを設定するレジスタです。SAR レジスタは CPU から直接アクセスすることはできません。CPU は SRAM 領域（転送情報（n）の開始アドレス＋04h）にアクセス可能なので、DTC によって SAR レジスタから（および SAR レジスタへ）自動的に転送情報が転送されます。18.3.1 転送情報の配置と DTC ベクタテーブルを参照してください。

注 .　DTC 転送では、アドレスの不整合は禁止です。
MRA.SZ[1:0] = 01b の場合、ビット [0] は 0 でなければいけません。MRA.SZ[1:0] = 10b の場合、ビット [1] およびビット [0] は 0 でなければいけません。

18.2.4　DTC 転送先レジスタ（DAR）

アドレス（CPUから直接アクセス不可。18.3.1を参照してください）

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

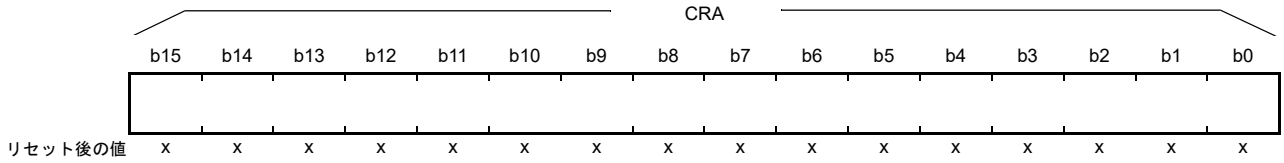
DAR レジスタは、転送先の開始アドレスを設定するレジスタです。CPU から直接アクセスすることはできません。CPU は SRAM 領域（転送情報（n）の開始アドレス＋08h）にアクセス可能なので、DTC によって DAR レジスタから（および DAR レジスタへ）自動的に転送情報が転送されます。18.3.1　転送情報の配置と DTC ベクタテーブルを参照してください。

注 .　DTC 転送では、アドレスの不整合は禁止です。MRA.SZ[1:0] = 01b の場合、ビット [0] は 0 でなければいけません。MRA.SZ[1:0] = 10b の場合、ビット [1] およびビット [0] は 0 でなければいけません。

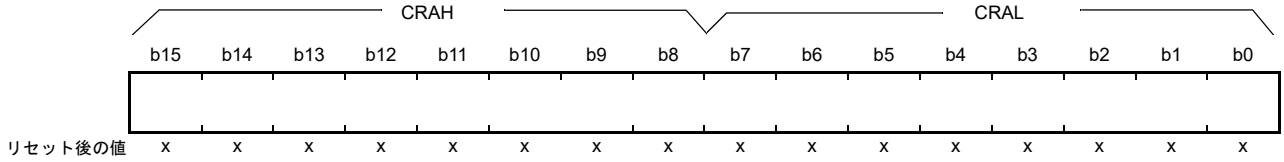
18.2.5　DTC 転送カウントレジスタ A（CRA）

アドレス（CPUから直接アクセス不可。18.3.1を参照してください）

- ノーマル転送モード



- リピート転送モード／ブロック転送モード



x：不定

シンボル	レジスタ名	機能	R/W
CRAL	転送カウンタA下位レジスタ	転送回数を設定	—
CRAH	転送カウンタA上位レジスタ		—

注．　転送モードによって機能が異なります。
注．　リピート転送モードとブロック転送モードでは、CRAH および CRAL レジスタには同じ値を設定してください。

CRA レジスタは、CPU から直接アクセスすることはできません。CPU は SRAM 領域（転送情報（n）の開始アドレス＋0Eh）にアクセス可能なので、DTC によって CRA レジスタから（および CRA レジスタへ）自動的に転送情報が転送されます。18.3.1　転送情報の配置と DTC ベクタテーブルを参照してください。

(1)　ノーマル転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 00b）の場合

ノーマル転送モードでは、CRA レジスタは 16 ビットの転送カウンタとして機能します。転送回数は、設定値が 0001h のときは 1 回、FFFFh のときは 65535 回、0000h のときは 65536 回となります。CRA レジスタの値は、データ転送を 1 回行うたびにデクリメント（- 1）されます。

(2)　リピート転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 01b）の場合

リピート転送モードでは、CRAH レジスタは転送回数を保持し、CRAL レジスタは 8 ビットの転送カウンタとして機能します。転送回数は、設定値が 01h のときは 1 回、FFh のときは 255 回、00h のときは 256 回となります。CRAL レジスタの値は、データ転送を 1 回行うたびにデクリメント（- 1）されます。00h に達すると、CRAH レジスタの値が CRAL レジスタへ転送されます。

(3)　ブロック転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 10b）の場合

ブロック転送モードでは、CRAH レジスタはブロックサイズを保持し、CRAL レジスタは 8 ビットのブロックサイズカウンタとして機能します。転送回数は、設定値が 01h のときは 1 回、FFh のときは 255 回、00h のときは 256 回となります。CRAL レジスタの値は、データ転送を 1 回行うたびにデクリメント（- 1）されます。00h に達すると、CRAH レジスタの値が CRAL レジスタへ転送されます。

18.2.6　DTC 転送カウントレジスタ B（CRB）

アドレス（CPUから直接アクセス不可。18.3.1を参照してください）

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

CRB レジスタは、ブロック転送モードのブロック転送回数を指定するレジスタです。転送回数は、設定値が 0001h のときは 1 回、FFFFh のときは 65535 回、0000h のときは 65536 回となります。CRB レジスタの値は、1 ブロックサイズの最終データ転送時にデクリメント（- 1）されます。ノーマル転送モードまたはリピート転送モードを選択した場合、CRB レジスタは使用されず、設定値は無視されます。

CRB レジスタは、CPU から直接アクセスすることはできません。CPU は SRAM 領域（転送情報（n）の開始アドレス + 0Ch）にアクセス可能なので、DTC によって CRB レジスタから（および CRB レジスタへ）自動的に転送情報が転送されます。18.3.1　転送情報の配置と DTC ベクタテーブルを参照してください。

18.2.7　DTC コントロールレジスタ（DTCCR）

アドレス　DTC.DTCCR 4000 5400h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	RRS	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	1	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b4	RRS	DTC転送情報リードスキップ許可	0：転送情報のリードスキップを行わない 1：ベクタ番号が一致したとき、転送情報のリードスキップを行う	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RRS ビット（DTC 転送情報リードスキップ許可）

ベクタ番号が一致したとき、転送情報のリードスキップを許可します。DTC ベクタ番号は、前回起動時のベクタ番号と比較されます。ベクタ番号が一致し、かつ RRS ビットが 1 になっていると、転送情報の読み出しを行わずに DTC のデータ転送が行われます。ただし、前回の転送がチェーン転送のときは、RRS ビットにかかわらず転送情報の読み出しが行われます。

前回の転送がノーマル転送で転送カウンタ（CRA レジスタ）が 0 になっている場合と、ブロック転送で転送カウンタ（CRB レジスタ）が 0 になっている場合も、RRS ビットの値にかかわらず転送情報の読み出しが行われます。

18.2.8 DTC ベクタベースレジスタ（DTCVBR）

アドレス DTC.DTCVBR 4000 5404h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	ビット名	機能	R/W
b31-b0	DTCベクタベースアドレス	DTCベクタベースアドレスを設定（下位10ビットは0にしてください）	R/W

DTCVBR レジスタは、DTC ベクタテーブルのアドレス計算に用いられるベースアドレスを設定するレジスタです。0000 0000h ～ FFFF FFFFh（4G バイト）の範囲内で 1K バイト単位の設定が可能です。

18.2.9 DTC モジュール起動レジスタ（DTCST）

アドレス DTC.DTCST 4000 540Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	DTCST
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DTCST	DTCモジュール起動	0：DTCモジュール停止 1：DTCモジュール動作	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DTCST ビット（DTC モジュール起動）

DTC が転送要求を受け付けられるようにするには、DTCST ビットを 1 にしてください。DTCST ビットを 0 にすると、新たな転送要求を受け付けません。データ転送中に 0 に書き換えた場合、受け付け済みの転送要求は処理が終了するまで有効です。

下記の状態またはモードへ遷移する際は、事前に DTCST ビットを 0 にする必要があります。

- モジュールストップ状態
- スヌーズモードへの遷移を伴わないソフトウェアスタンバイモード

これらの遷移については、18.10　モジュールストップ機能と「11.　低消費電力モード」を参照してください。

18.2.10 DTC ステータスレジスタ（DTCSTS）

アドレス DTC.DTCSTS 4000 540Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ACT	—	—	—	—	—	—	—	VECN[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	VECN[7:0]	DTCアクティブベクタ番号モニタ	DTC転送動作中にその起動要因をベクタ番号で示します。 この値は、DTC転送動作中（ACTフラグが1）の場合にのみ有効です。	R
b14-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15	ACT	DTCアクティブフラグ	0：DTC転送動作なし 1：DTC転送動作中	R

VECN[7:0] ビット（DTC アクティブベクタ番号モニタ）

DTC 転送動作中に、その転送の起動要因をベクタ番号で示します。ACT フラグが 1（DTC 転送動作中）であれば、読み出された VECN[7:0] の値は有効であり、ACT フラグが 0（DTC 転送動作なし）であれば、読み出された VECN[7:0] の値は無効です。

ACT フラグ（DTC アクティブフラグ）

DTC の転送動作状態を示します。

［1 になる条件］

- 転送要求によって DTC が起動したとき

［0 になる条件］

- 転送要求に対する DTC の転送が完了したとき

18.3 起動要因

DTC は割り込み要求によって起動します。ICU.IELSRn.DTCE ビットを 1 にすると、対応する割り込みによって DTC が起動します。ICU.IELSRn に設定されたセレクタ出力番号 *n*（n = 0 ～ 31）は、割り込みベクタ番号として定義されます。「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」の表 14.4 イベントテーブルに示すように、許可された割り込みに対して、各割り込みベクタ番号 n に対応した特定の DTC 割り込み要因が、ICU.IELSRn.IELS[7:0]（n = 0 ～ 31）によって選択されます。ソフトウェアによる起動については、19.2.2 イベントリンクソフトウェアイベント発生レジスタ n（ELSEGRn）(n = 0, 1) を参照してください。

割り込みベクタ番号は DTC ベクタテーブル番号と同等です。DTC が起動要求を受け付けると、その要求に対する転送が終了するまで、新たな起動要求は優先順位にかかわらず受け付けません。DMAC または DTC 転送中に複数の起動要求が発生した場合、転送の終了時点で最も優先順位の高い要求が受け付けられます。DTC モジュール起動ビット（DTCST.DTCST）が 0 の状態で、複数の起動要求が発生した場合、DTC は、その後 DTCST.DTCST が 1 になったときに最も優先順位の高い要求を受け付けます。割り込みベクタ番号が小さいほど優先順位は高くなります。

1 回のデータ転送開始時（チェーン転送の場合、連続した最後の転送時）、DTC は以下のように動作します。

- 指定した回数のデータ転送が終了すると、ICU.IELSRn.DTCE ビットが 0 になり、CPU に対して割り込み要求が送信される
- MRB.DISEL ビットが 1 の場合、データ転送完了時に CPU に対して割り込み要求が送信される
- 上記のいずれでもない場合、起動要因となった ICU.IELSRn.IR ビットはデータ転送開始時に 0 になる

18.3.1 転送情報の配置と DTC ベクタテーブル

DTC は、起動要因ごとにベクタテーブルから転送情報の開始アドレスを読み出して、このアドレスから始まる転送情報を読み出します。

ベクタテーブルのベースアドレス（開始アドレス）は、下位 10 ビットが 0 になるように配置する必要があります。DTC ベクタベースレジスタ（DTCVBR）を用いて、DTC ベクタテーブルのベースアドレスを設定してください。転送情報は SRAM 領域に配置します。SRAM 領域では、ベクタ番号 n を持つ転送情報（n）の開始アドレスは、ベクタテーブルのベースアドレス + 4n 番地でなければいけません。

DTC ベクタテーブルと転送情報の対応関係を図 18.2 に示します。SRAM 領域上の転送情報の配置を図 18.3 に示します。

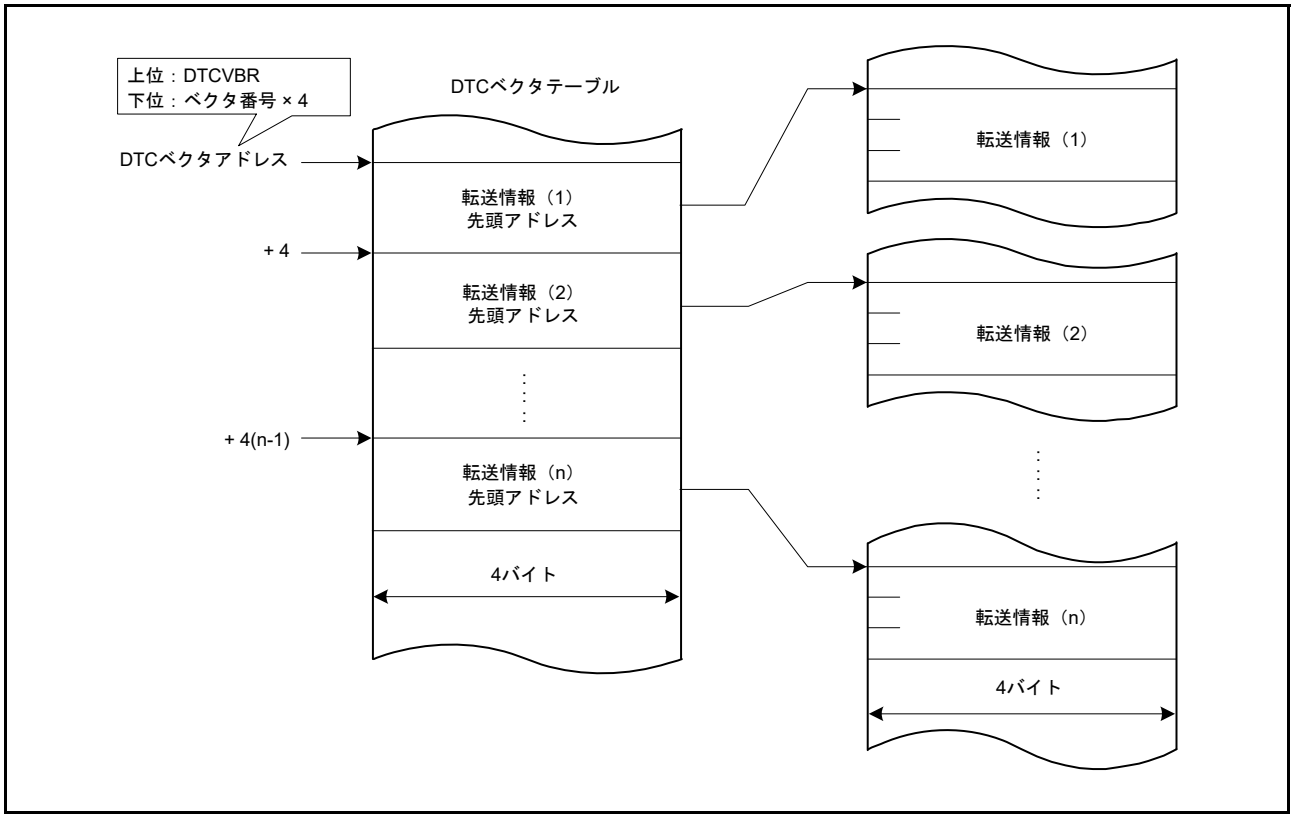


図 18.2　DTC ベクタテーブルと転送情報の対応関係

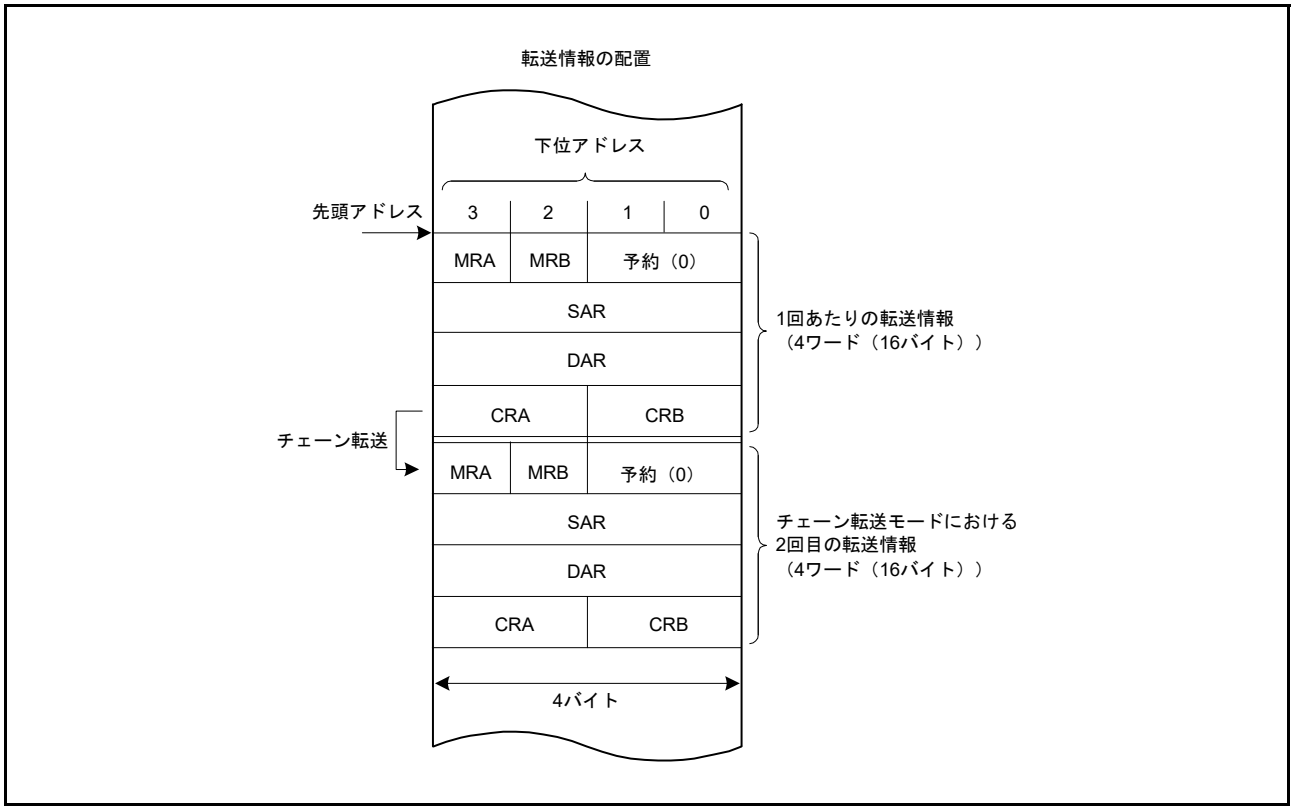


図 18.3　SRAM 領域上の転送情報の配置

18.4　動作説明

DTC は、転送情報に従ってデータを転送します。DTC を動作させるには、あらかじめ転送情報を SRAM 領域に格納しておく必要があります。DTC が起動すると、DTC はベクタ番号に対応する DTC ベクタを読み出します。次に DTC は、DTC ベクタが示す転送情報格納アドレスから転送情報を読み出して、データ転送を行います。データ転送後に、DTC は転送情報のライトバックを行います。転送情報を SRAM 領域に格納することで、任意のチャネル数のデータ転送が可能になります。

転送モードには、下記の 3 種類があります。

- ノーマル転送モード
- リピート転送モード
- ブロック転送モード

DTC は転送元アドレスを SAR レジスタ、転送先アドレスを DAR レジスタで指定します。これらのレジスタ値は、データの転送後、それぞれ個別にインクリメント、デクリメント、あるいはアドレス固定されます。

DTC の転送モードを表 18.2 に示します。

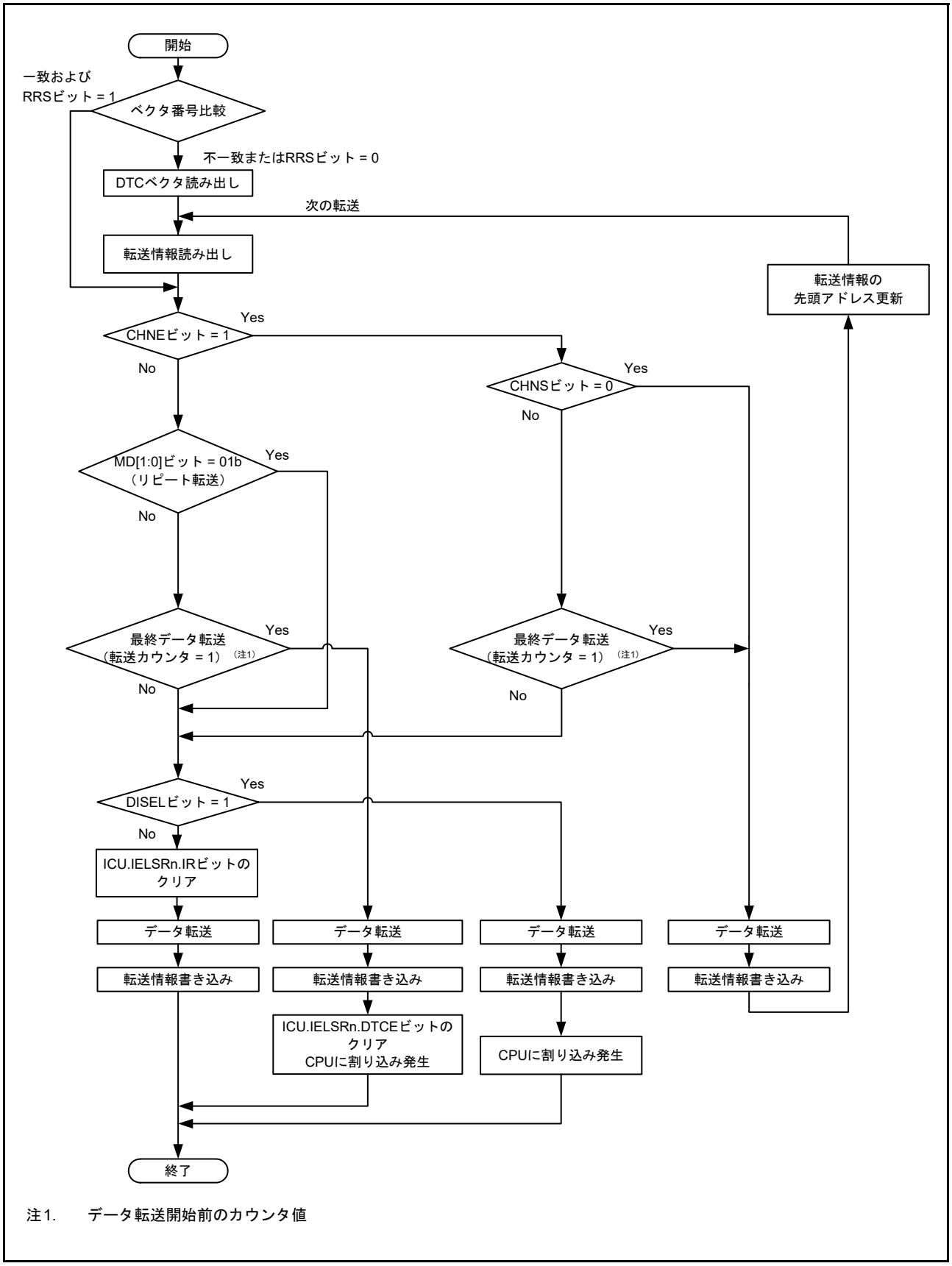
表 18.2　DTC の転送モード

転送モード	1 回の転送要求で転送可能なデータサイズ	メモリアドレスの増減	指定可能な転送回数
ノーマル転送モード	1 バイト（8 ビット）、1 ハーフワード（16 ビット）、または 1 ワード（32 ビット）	1、2、4 ずつインクリメントまたはデクリメント、あるいはアドレス固定	1～65536 回
リピート転送モード（注 1）	1 バイト（8 ビット）、1 ハーフワード（16 ビット）、または 1 ワード（32 ビット）	1、2、4 ずつインクリメントまたはデクリメント、あるいはアドレス固定	1～256 回（注 3）
ブロック転送モード（注 2）	CRAH レジスタで指定したブロックサイズ（1～256 バイト、1～256 ハーフワード（2～512 バイト）、または 1～256 ワード（4～1024 バイト））	1、2、4 ずつインクリメントまたはデクリメント、あるいはアドレス固定	1～65536 回

注 1.　転送元または転送先のいずれかをリピート領域に設定します。
注 2.　転送元または転送先のいずれかをブロック領域に設定します。
注 3.　指定回数の転送終了後は、初期状態を回復し動作を再開します。

MRB.CHNE ビットを 1 にすると、1 つの起動要因で複数転送またはチェーン転送が可能です。指定されたデータ転送終了時にチェーン転送を行う設定も可能です。

DTC の動作フローを図 18.4 に示します。チェーン転送の条件を表 18.3 に示します。この表では、2 番目以降の転送に対する制御情報の組み合わせは省略されています。



注1. データ転送開始前のカウンタ値

図 18.4 DTC の動作フロー

表 18.3　チェーン転送の条件

第1転送				第2転送（注3）				DTC転送
CHNE ビット	CHNS ビット	DISEL ビット	転送カウンタ（注1）（注2）	CHNE ビット	CHNS ビット	DISEL ビット	転送カウンタ（注1）（注2）	
0	—	0	（1→0）以外	—	—	—	—	第1転送で終了
0	—	0	（1→0）	—	—	—	—	第1転送で終了しCPUへ割り込み要求
0	—	1	—	—	—	—	—	
1	0	—	—	0	—	0	（1→0）以外	第2転送で終了
				0	—	0	（1→0）	第2転送で終了しCPUへ割り込み要求
				0	—	1	—	
1	1	0	（1→*）以外	—	—	—	—	第1転送で終了
1	1	—	（1→*）	0	—	0	（1→0）以外	第2転送で終了
				0	—	0	（1→0）	第2転送で終了しCPUへ割り込み要求
				0	—	1	—	
1	1	1	（1→*）以外	—	—	—	—	第1転送で終了しCPUへ割り込み要求

注 1.　使用する転送カウンタは、以下のように、各転送モードで異なります。
ノーマル転送モード：CRA レジスタ
リピート転送モード：CRAL レジスタ
ブロック転送モード：CRB レジスタ

注 2.　転送終了時のカウンタ動作は以下のとおりです。
ノーマル転送モード、ブロック転送モードでは（1 → 0）
リピート転送モードでは（1 → CRAH）
表中の（1 → *）は、モードに応じて、これら両方の動作を表します。

注 3.　2 番目以降の転送に対してチェーン転送の選択が可能です。第 2 転送と CHNE ビットが 1 の組み合わせに対する条件は省略されています。

18.4.1　転送情報のリードスキップ機能

DTCCR.RRS ビットを設定することにより、ベクタアドレスと転送情報の読み出しをスキップできます。DTC 起動要求時に、今回の DTC ベクタ番号と前回起動時の DTC ベクタ番号が比較されます。ベクタ番号が一致し、かつ DTCCR.RRS ビットが 1 になっているときは、ベクタアドレスと転送情報の読み出しを行わずに DTC のデータ転送が行われます。ただし、前回の転送がチェーン転送の場合は、ベクタアドレスと転送情報が読み出されます。また、前回の転送がノーマル転送で、転送カウンタ（CRA レジスタ）が 0 になっている場合、またはブロック転送で転送カウンタ（CRB レジスタ）が 0 になっている場合も、DTCCR.RRS ビットにかかわらず転送情報が読み出されます。転送情報のリードスキップの動作例を図 18.12 に示します。

DTC ベクタテーブルと転送情報を更新する場合は、DTCCR.RRS ビットを 0 にして、DTC ベクタテーブルと転送情報を更新した後、DTCCR.RRS ビットを 1 に戻してください。DTCCR.RRS ビットをいったん 0 にすることによって、格納されていたベクタ番号が破棄されます。次回の起動時には、更新された DTC ベクタテーブルと転送情報が読み出されます。

18.4.2　転送情報のライトバックスキップ機能

MRA.SM[1:0] ビットまたは MRB.DM[1:0] ビットを「アドレス固定」に設定すると、転送情報の一部はライトバックされません。転送情報のライトバックスキップ条件と対応するレジスタを表 18.4 に示します。CRA レジスタと CRB レジスタはライトバックされますが、MRA レジスタと MRB レジスタのライトバックはスキップされます。

表 18.4　転送データのライトバックスキップ条件と適用されるレジスタ

MRA.SM[1:0] ビット		MRB.DM[1:0] ビット		SAR レジスタ	DAR レジスタ
b3	b2	b3	b2		
0	0	0	0	スキップ	スキップ
0	0	0	1		
0	1	0	0		
0	1	0	1		
0	0	1	0	スキップ	ライトバック
0	0	1	1		
0	1	1	0		
0	1	1	1		
1	0	0	0	ライトバック	スキップ
1	0	0	1		
1	1	0	0		
1	1	0	1		
1	0	1	0	ライトバック	ライトバック
1	0	1	1		
1	1	1	0		
1	1	1	1		

18.4.3　ノーマル転送モード

ノーマル転送モードでは、1 つの起動要因で、1 バイト（8 ビット）、1 ハーフワード（16 ビット）、1 ワード（32 ビット）のデータ転送が可能です。転送回数は 1 ～ 65536 回まで設定できます。転送元アドレスと転送先アドレスは、それぞれ個別に、インクリメント、デクリメント、または固定に設定できます。指定回数の転送が終了すると、CPU への割り込み要求を発生させることができます。

ノーマル転送モードのレジスタ機能を表 18.5 に、ノーマル転送モードのメモリマップを図 18.5 に示します。

表 18.5　ノーマル転送モードのレジスタ機能

レジスタ	機能	転送情報のライトバックによって書き戻される値
SAR	転送元アドレス	インクリメント／デクリメント／固定（注 1）
DAR	転送先アドレス	インクリメント／デクリメント／固定（注 1）
CRA	転送カウンタ A	CRA - 1
CRB	転送カウンタ B	更新なし

注 1.　アドレス固定のとき、ライトバックはスキップされます。

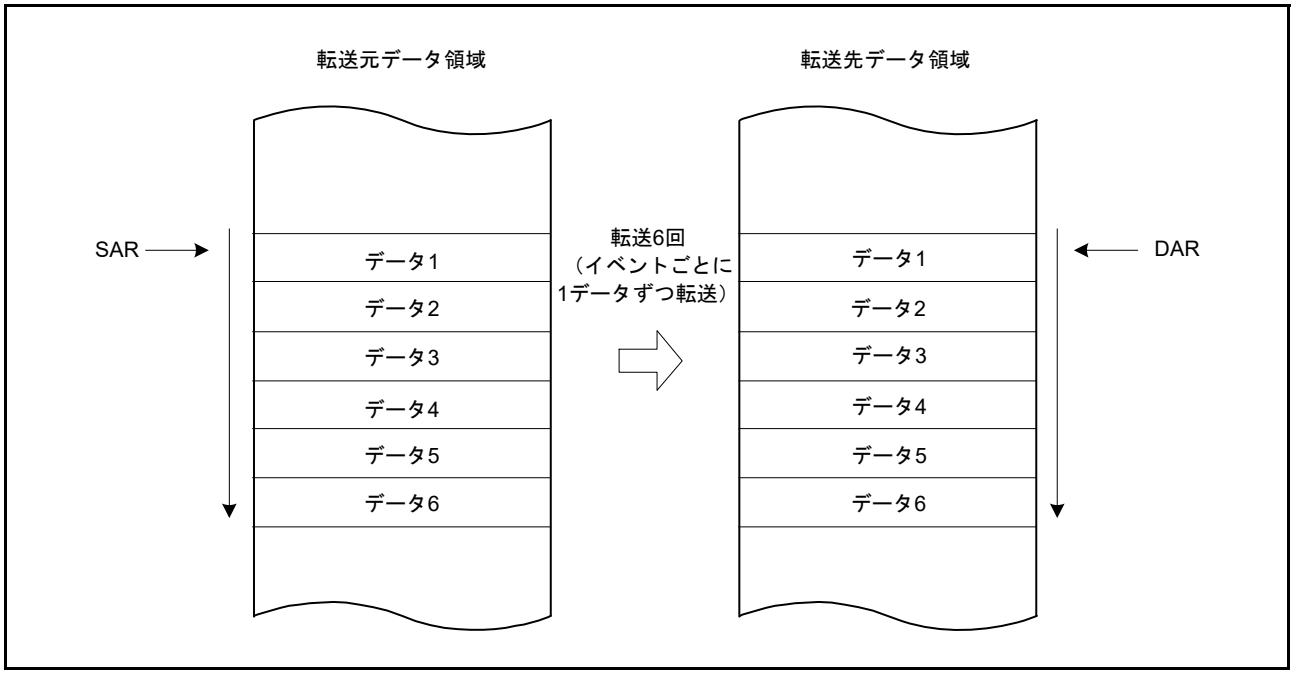


図 18.5　　ノーマル転送モードのメモリマップ（MRA.SM[1:0] = 10b, MRB.DM[1:0] = 10b, CRA = 0006h）

18.4.4　　リピート転送モード

このモードでは、1 つの起動要因で、1 バイト（8 ビット）、1 ハーフワード（16 ビット）、または 1 ワード（32 ビット）のデータ転送が可能です。MRB.DTS ビットで、転送元と転送先のいずれかをリピート領域に指定する必要があります。転送回数は 1 ～ 256 回まで設定できます。指定回数の転送が終了すると、リピート領域に設定された方のアドレスレジスタは初期値に戻り、転送カウンタも初期値に戻ります。そして転送が繰り返されます。他方のアドレスレジスタは、連続してインクリメントまたはデクリメントされるか、あるいはアドレス固定になります。

リピート転送モードでは、転送カウンタ（CRAL レジスタ）が 00h になると、CRAL レジスタの値は CRAH レジスタで設定した値に更新されます。このため、転送カウンタが 00h にならないので、MRB.DISEL ビットが 0 になっていると、CPU への割り込み要求は禁止されます。指定されたデータ転送が終了したとき、CPU への割り込みが発生します。

リピート転送モードのレジスタ機能を表 18.6 に、リピート転送モードのメモリマップを図 18.6 に示します。

表 18.6　　リピート転送モードのレジスタ機能

レジスタ	機能	転送情報のライトバックによって書き戻される値	
		CRALが1以外のとき	CRALが1のとき
SAR	転送元アドレス	インクリメント／デクリメント／固定（注1）	• MRB.DTS ビット = 0のとき インクリメント、デクリメント、固定（注1） • MRB.DTS ビット = 1のとき SAR レジスタの初期値
DAR	転送先アドレス	インクリメント／デクリメント／固定（注1）	• MRB.DTS ビット = 0のとき DAR レジスタの初期値 • MRB.DTS ビット = 1のとき インクリメント、デクリメント、固定（注1）
CRAH	転送カウンタ保持	CRAH	CRAH
CRAL	転送カウンタ A	CRAL - 1	CRAH
CRB	転送カウンタ B	更新なし	更新なし

注 1.　　アドレス固定のとき、ライトバックはスキップされます。

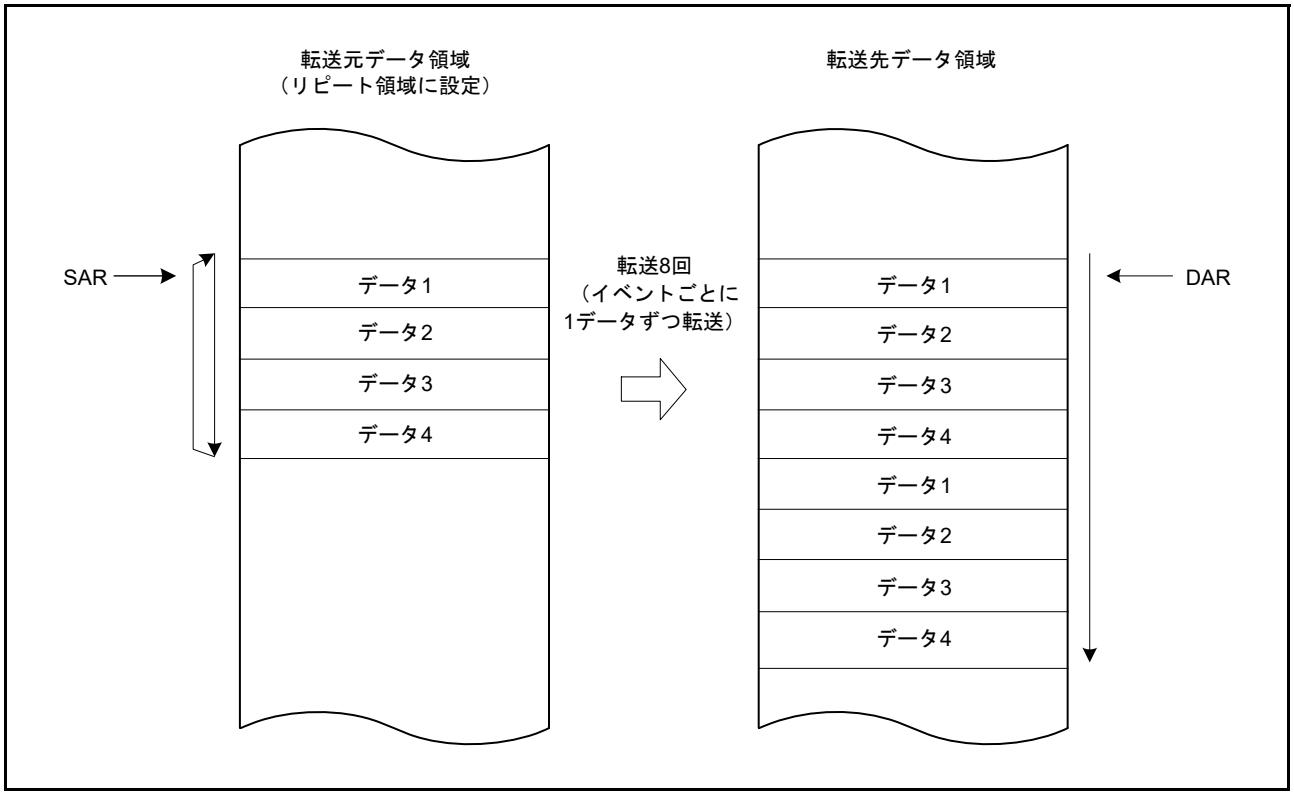


図 18.6　リピート転送モードのメモリマップ（転送元をリピート領域に設定した場合）（MRA.SM[1:0] = 10b, MRB.DM[1:0] = 10b, CRAH = 04h）

18.4.5　ブロック転送モード

このモードでは、1 つの起動要因で 1 ブロックのデータ転送が可能です。MRB.DTS ビットで、転送元と転送先のいずれかをブロック領域に指定する必要があります。ブロックサイズは、1 ～ 256 バイト、1 ～ 256 ハーフワード（2 ～ 512 バイト）、または 1 ～ 256 ワード（4 ～ 1024 バイト）に設定できます。指定された 1 ブロックの転送が終了すると、ブロックサイズカウンタ（CRAL レジスタ）と、ブロック領域に指定したアドレスレジスタ（MRB.DTS ビットが 1 のとき SAR レジスタ、DTS ビットが 0 のとき DAR レジスタ）は初期値に戻ります。他方のアドレスレジスタは、連続してインクリメントまたはデクリメントされるか、あるいはアドレス固定になります。

転送回数（ブロック数）は、1 ～ 65536 まで指定可能です。指定回数のブロック転送が終了すると、CPU への割り込み要求を発生させることができます。

ブロック転送モードのレジスタ機能を表 18.7 に、ブロック転送モードのメモリマップを図 18.7 に示します。

表 18.7　ブロック転送モードのレジスタ機能

レジスタ	機能	転送情報のライトバックによって書き戻される値
SAR	転送元アドレス	• MRB.DTSビット = 0のとき インクリメント／デクリメント／固定（注1） • MRB.DTSビット = 1のとき SARレジスタの初期値
DAR	転送先アドレス	• MRB.DTSビット = 0のとき DARレジスタの初期値 • MRB.DTSビット = 1のとき インクリメント／デクリメント／固定（注1）
CRAH	ブロックサイズ保持	CRAH
CRAL	ブロックサイズカウンタ	CRAH
CRB	ブロック転送回数カウンタ	CRB - 1

注 1.　アドレス固定のとき、ライトバックはスキップされます。

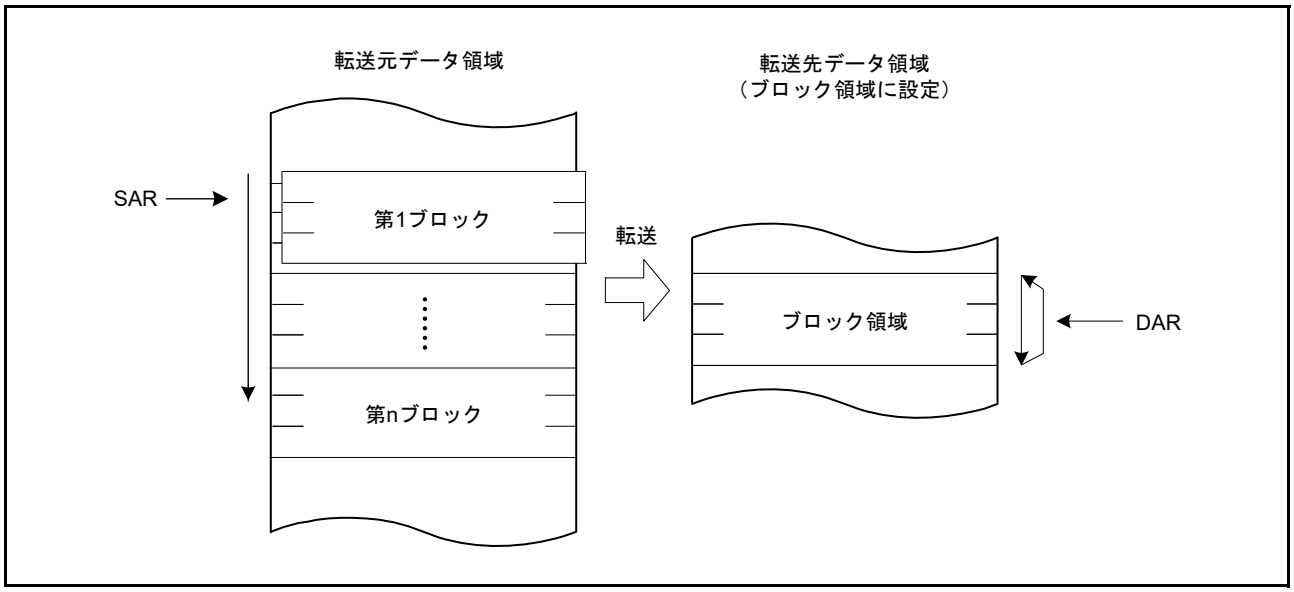


図 18.7　ブロック転送モードのメモリマップ

18.4.6　チェーン転送

MRB.CHNE ビットを 1 にすると、1 つの起動要因で複数のデータ転送を連続して行うチェーン転送が可能になります。MRB.CHNE ビットを 1 にして、MRB.CHNS ビットを 0 にした場合は、指定した転送回数の終了による CPU への割り込み要求も、MRB.DISEL ビット = 1 による CPU への割り込み要求も発生しません。割り込み要求は、DTC データ転送のたびに CPU に送信されます。データ転送が、起動要因の ICU.IELSRn.IR ビットに影響を与えることはありません。

データ転送を定義するための SAR、DAR、CRA、CRB、MRA、および MRB レジスタは、それぞれ個別に設定可能です。図 18.8 にチェーン転送の動作を示します。

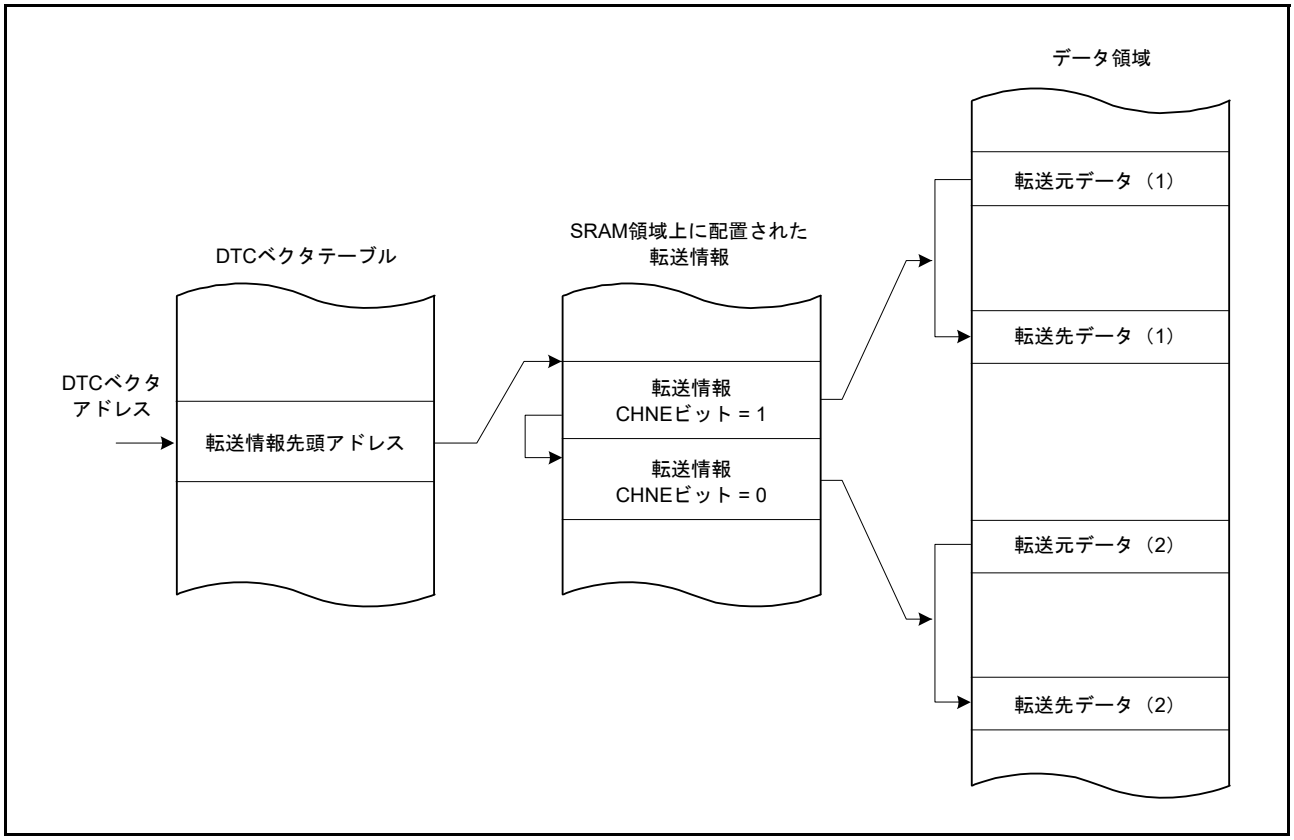


図 18.8　チェーン転送の動作

MRB.CHNE ビットと MRB.CHNS ビットを 1 にした場合、指定されたデータ転送終了時にのみチェーン転送を行います。リピート転送モードでも、指定されたデータ転送の終了時にチェーン転送が実行されます。チェーン転送の条件については、表 18.3　チェーン転送の条件を参照してください。

18.4.7　動作タイミング

図 18.9 ～図 18.12 に示すタイミング図は、最小実行サイクル数を示しています。

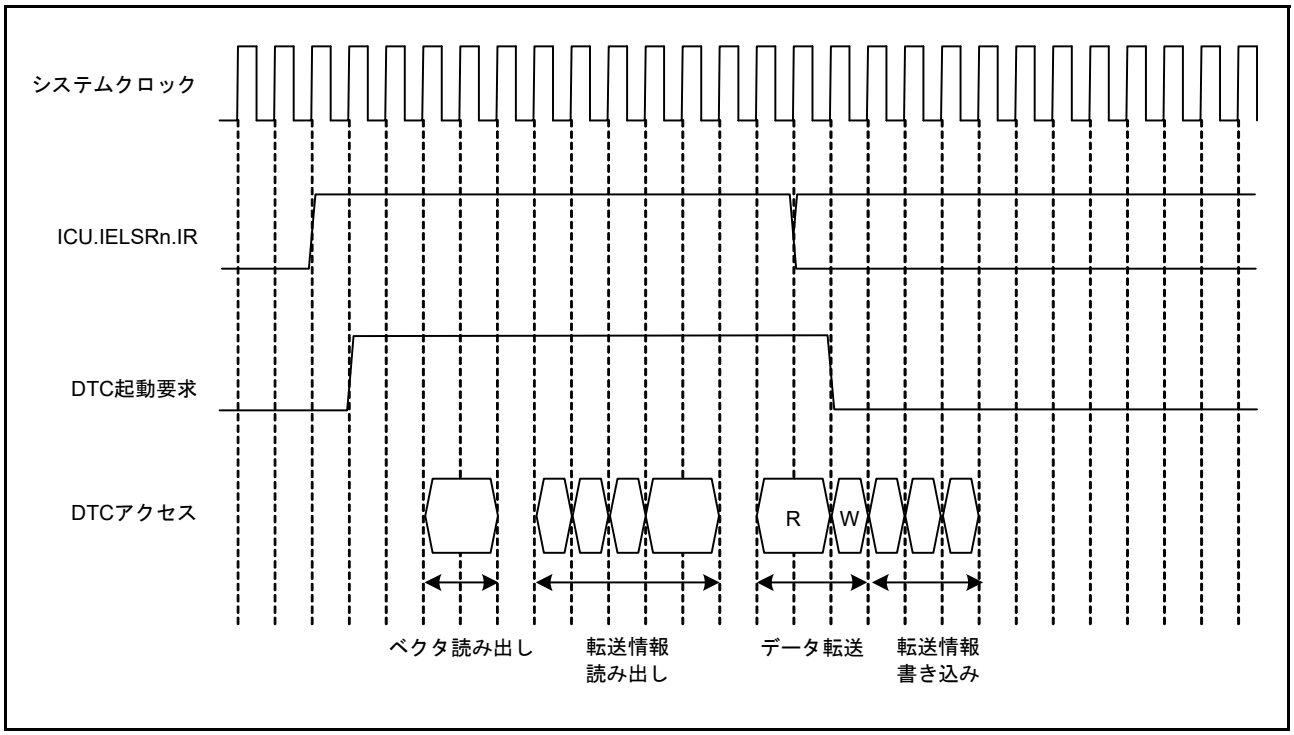


図 18.9　DTC 動作タイミング例 1（ノーマル転送モードおよびリピート転送モードの場合）

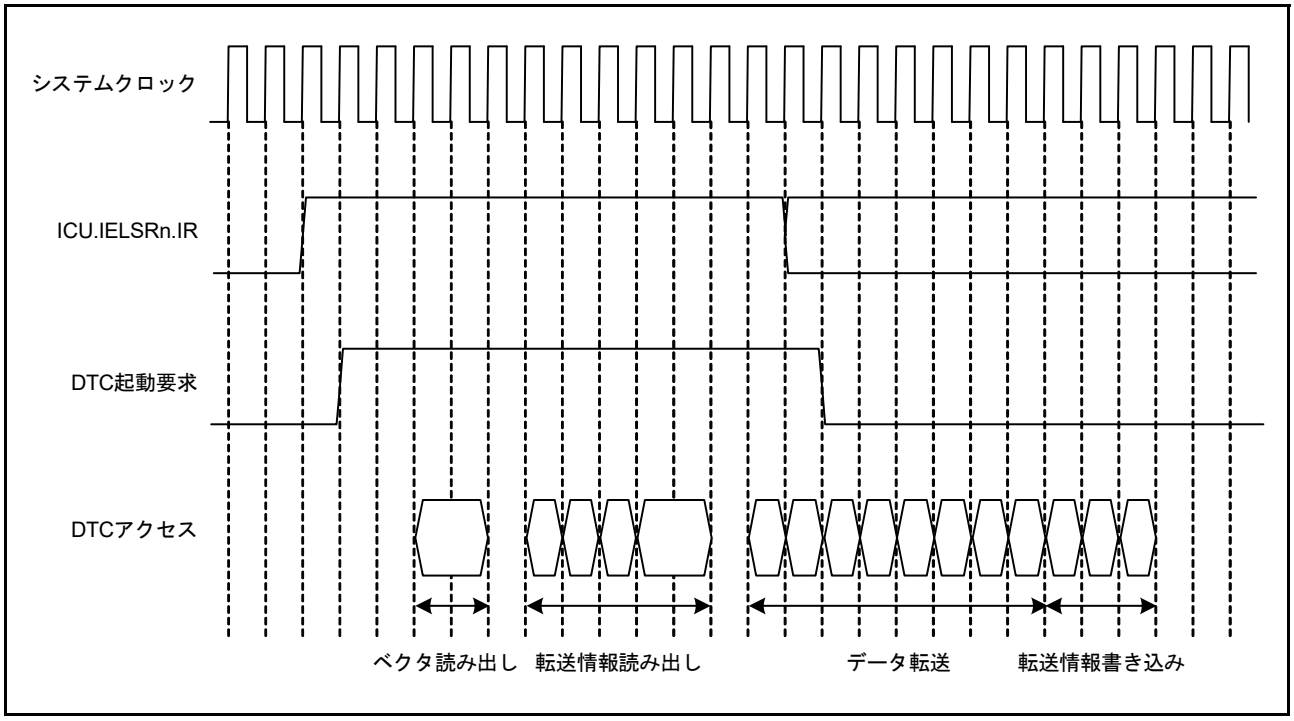


図 18.10　DTC 動作タイミング例 2（ブロック転送モードでブロックサイズ = 4 の場合）

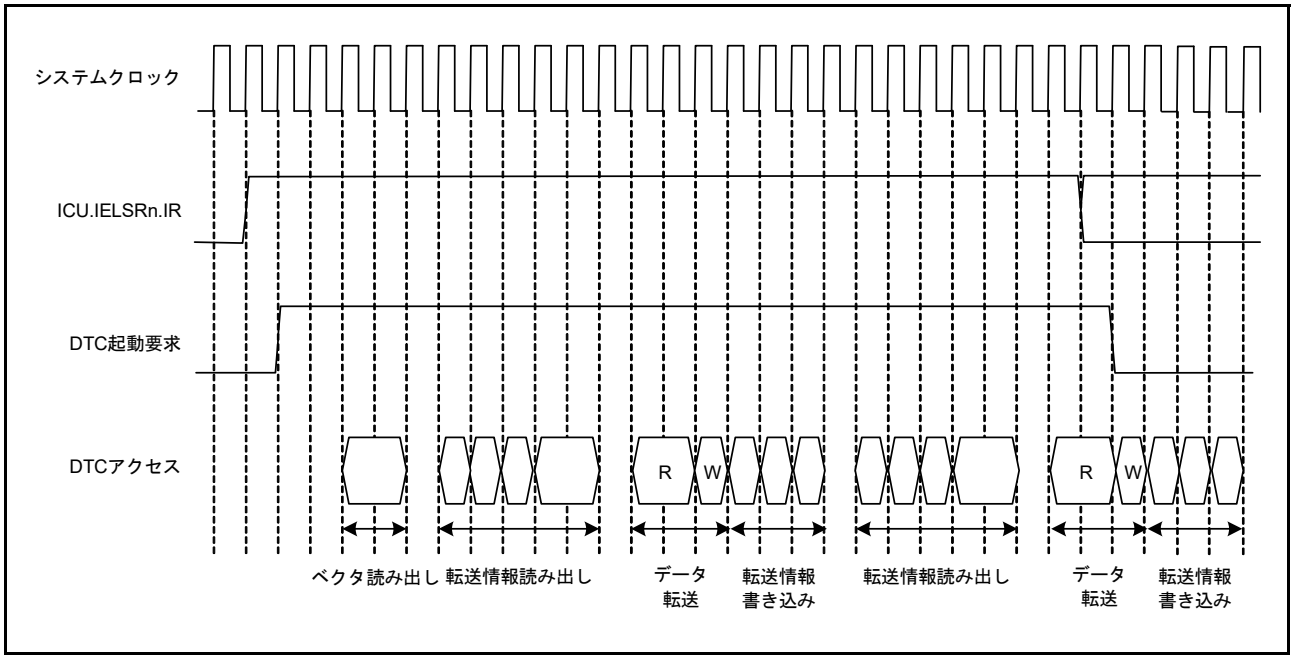
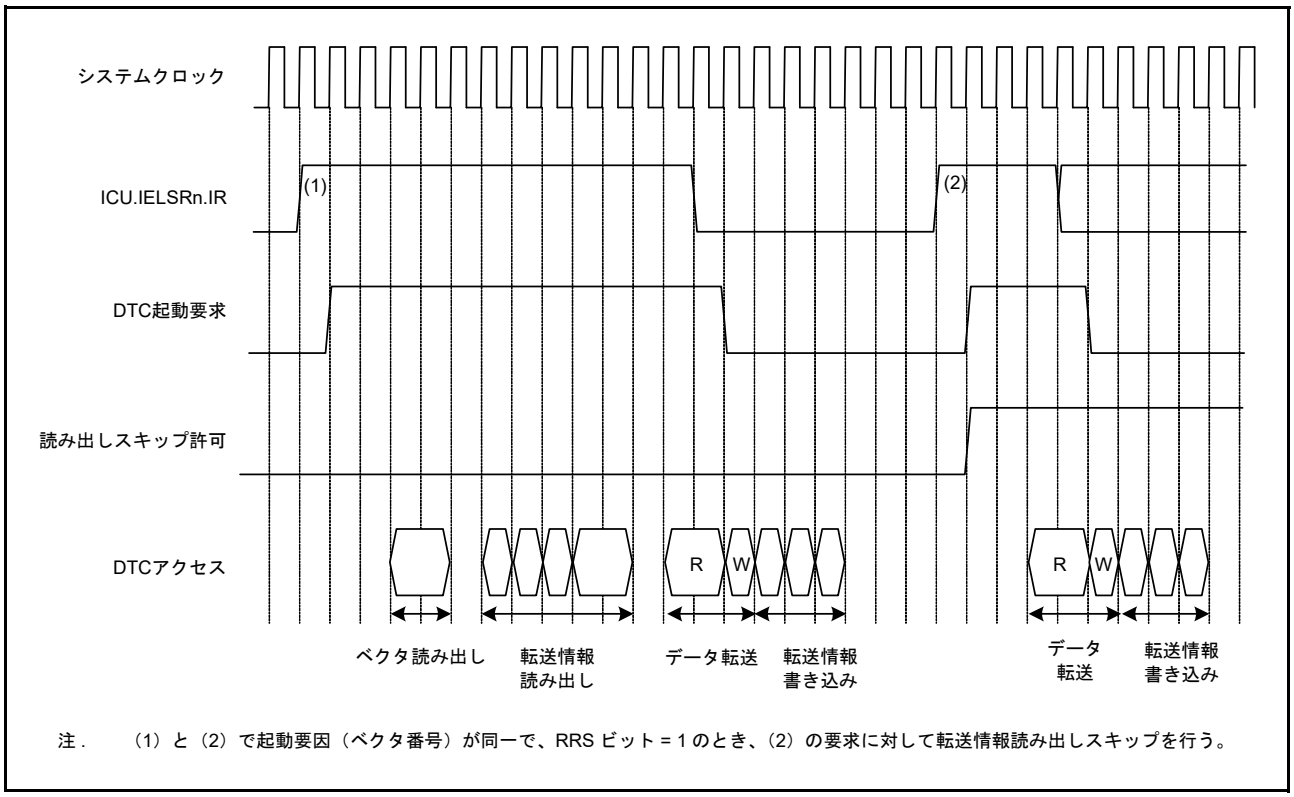


図 18.11　DTC 動作タイミング例 3（チェーン転送の場合）



注．　（1）と（2）で起動要因（ベクタ番号）が同一で、RRS ビット = 1 のとき、（2）の要求に対して転送情報読み出しスキップを行う。

図 18.12　転送情報の読み取りスキップ時の動作例
（ベクタ、転送情報、転送先データが SRAM にあり、転送元データが周辺モジュールにある場合）

18.4.8　DTC の実行サイクル

DTC の 1 回のデータ転送の実行サイクルを表 18.8 に示します。

各実行状態の順序については、18.4.7　動作タイミングを参照してください。

表 18.8　DTC の実行サイクル

転送モード	ベクタ読み出し		転送情報読み出し		転送情報書き込み			データ転送		内部動作	
								読み出し	書き込み		
ノーマル	Cv + 1	0（注1）	4 × Ci + 1	0（注1）	3 × Ci + 1（注2）	2 × Ci + 1（注3）	Ci（注4）	Cr + 1	Cw + 1	2	0（注1）
リピート								Cr + 1	Cw + 1		
ブロック（注5）								P × Cr	P × Cw		

注 1.　転送情報がリードスキップされる場合
注 2.　SAR レジスタと DAR レジスタがともにアドレス固定でない場合
注 3.　SAR レジスタと DAR レジスタのいずれかがアドレス固定の場合
注 4.　SAR レジスタと DAR レジスタがともにアドレス固定の場合
注 5.　ブロックサイズが 2 以上の場合。ブロックサイズが 1 の場合は、ノーマル転送のサイクル数となります。

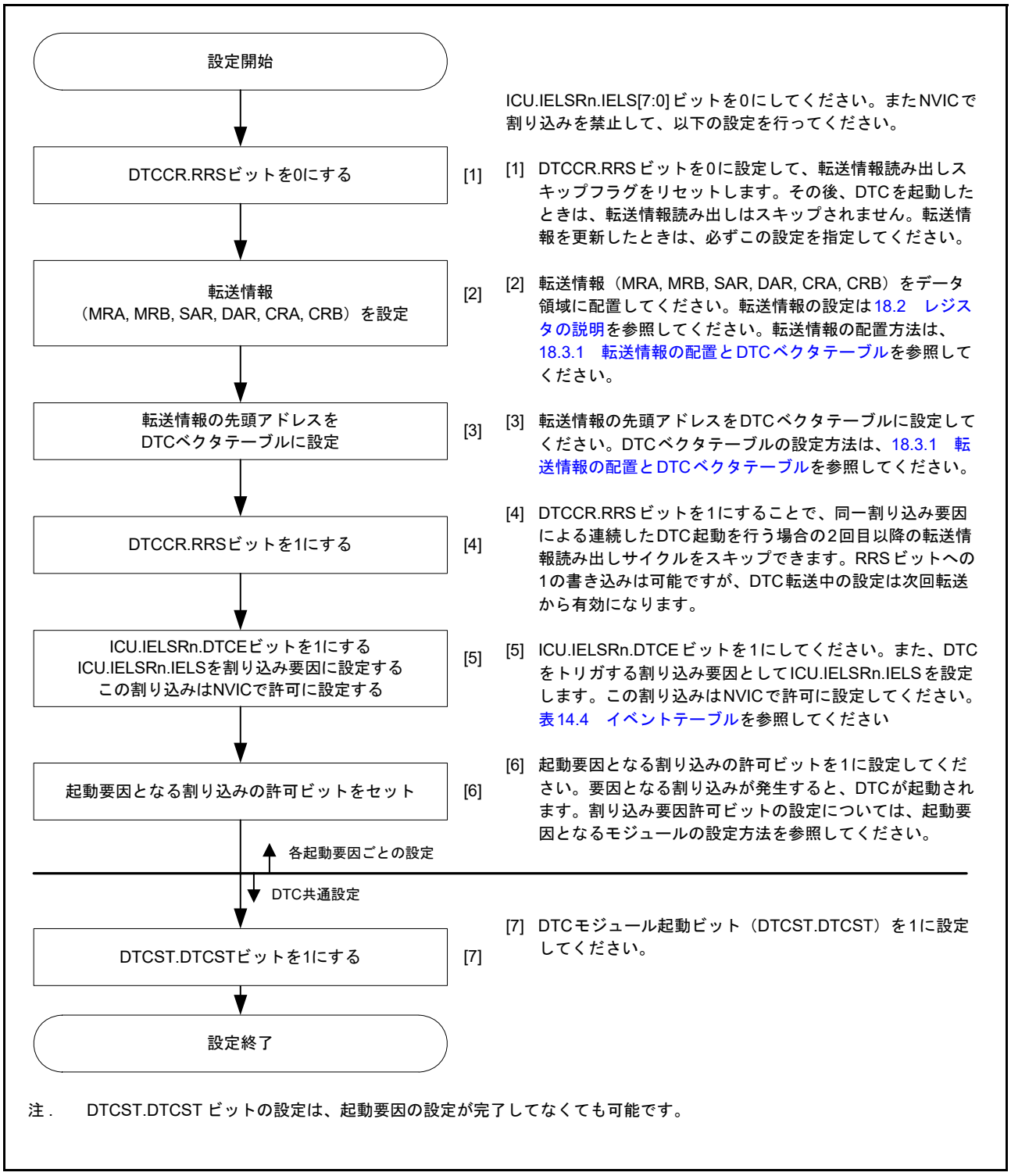
P：　ブロックサイズ（CRAH および CRAL レジスタの初期設定値）
Cv：ベクタ転送情報格納先へのアクセスサイクル
Ci：転送情報格納先アドレスへのアクセスサイクル
Cr：データリード先へのアクセスサイクル
Cw：データライト先へのアクセスサイクル
ベクタ読み出し、転送情報読み出し、データ転送読み出しの各列に記載の + 1 の単位と、内部動作の列に記載の 2 の単位は、いずれもシステムクロック（ICLK）です。
Cv、Ci、Cr、Cw は対応するアクセス先で異なります。それぞれのアクセス先に対するサイクル数については、「42. SRAM」、「43.　フラッシュメモリ」および「15.　バス」を参照してください。
システムクロックと周辺クロックの周波数比も考慮されています。
DTC の応答時間は、DTC の起動要因が検出されてから DTC 転送が始まるまでの時間です。
この表には、DTC の起動要因がアクティブになってから DTC データ転送が始まるまでの時間は含まれていません。

18.4.9　DTC のバス権解放タイミング

DTC は、転送情報の読み出し中はバス権を解放しません。転送情報の読み出しや書き込みが実施される前に、バスマスタ調停部によって決定された優先順位に従ってバス調停が行われます。バス調停については、「15.　バス」を参照してください。

18.5　DTC の設定手順

DTC を使用する前に、DTC ベクタベースレジスタ（DTCVBR）を設定してください。図 18.13 に、DTC の設定手順を示します。



注 .　DTCST.DTCST ビットの設定は、起動要因の設定が完了してなくても可能です。

図 18.13　DTC の設定手順

18.6 DTC の使用例

18.6.1 ノーマル転送

ここでは、DTC の使用例として、SCI から 128 バイトのデータ受信を行う場合を示します。

(1) 転送情報の設定

MRA レジスタに、転送元アドレス固定（MRA.SM[1:0] ビット = 00b）、ノーマル転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 00b）、およびバイト転送（MRA.SZ[1:0] ビット = 00b）を設定します。MRB レジスタには、転送先アドレスのインクリメント（MRB.DM[1:0] ビット = 10b）と、1 回の割り込みで 1 回のデータ転送（MRB.CHNE ビット = 0、MRB.DISEL ビット = 0）を設定します。MRB.DTS ビットは任意の値を設定できます。SAR レジスタには SCI の RDR レジスタのアドレス、DAR レジスタにはデータを格納する SRAM 領域の開始アドレス、CRA レジスタには 128 回（0080h）を設定します。CRB レジスタは任意の値を設定できます。

(2) DTC ベクタテーブルの設定

RXI 割り込み用の転送情報の開始アドレスを、DTC のベクタテーブルに設定します。

(3) ICU の設定と DTC モジュールの起動

ICU.IELSRn.DTCE ビットを 1 にします。また、SCI 割り込みとして ICU.IELSRn.IELS ビットを設定します。この割り込みは NVIC で許可に設定する必要があります。DTCST.DTCST ビットを 1 にします。

(4) SCI の設定

SCI の SCR.RIE ビットを 1 にして RXI 割り込みを許可します。なお、SCI の受信動作中に受信エラーが発生すると、受信が停止します。これに対処するため、CPU が受信エラー割り込みを受け付けられるように設定してください。

(5) DTC 転送

SCI が 1 バイトのデータ受信を完了するごとに RXI 割り込みが発生し、DTC が起動します。DTC によって、受信データが SCI の RDR レジスタから SRAM へ転送され、DAR レジスタのインクリメント、CRA レジスタのデクリメントが行われます。

(6) 割り込み処理

128 回のデータ転送が終了して CRA レジスタが 0 になると、CPU に対する RXI 割り込み要求が発生します。割り込み処理ルーチンで終了処理を行ってください。

18.6.2 チェーン転送

ここでは、DTC のチェーン転送の例として、汎用 PWM タイマ（GPT）によってパルスを出力する場合を示します。チェーン転送を利用して、PWM タイマのコンペア値を転送し、GPT 用 PWM タイマの周期を変更することが可能です。

チェーン転送の最初の転送には、GPTm.GTCCRC レジスタ（m = 320 ～ 323, 164, 165, 168）への転送用にノーマル転送モードを指定します。チェーン転送の 2 番目の転送には、GPTm.GTCCRE レジスタへの転送用にノーマル転送モードを指定します。チェーン転送の 3 番目の転送には、GPTm.GTPBR レジスタへの転送用にノーマル転送モードを指定します。これは、起動要因のクリアや指定回数の転送終了時の割り込み発生が、チェーン転送の 3 番目の転送、すなわち MRB.CHNE ビット = 0 のときの転送にのみ行われるからです。

以下の例では、DTC の起動要因として、GPT320.GTPR レジスタによるカウンタオーバーフロー割り込みの使用方法を説明します。

(1) 第 1 転送情報の設定

GPT320.GTCCRC レジスタへの転送を設定します。

1. MRA レジスタで、転送元アドレスのインクリメント（MRA.SM[1:0] ビット = 10b）を選択します。
2. ノーマル転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 00b）と、ワード転送（MRA.SZ[1:0] ビット = 10b）を設定します。
3. MRB レジスタで、転送先アドレスの固定（MRB.DM[1:0] ビット = 00b）を選択し、チェーン転送（MRB.CHNE ビット = 1、MRB.CHNS ビット = 0）を設定します。
4. SAR レジスタにデータテーブルの先頭アドレスを設定します。
5. DAR レジスタに GPT320.GTCCRC レジスタのアドレスを設定します。
6. CRAH および CRAL レジスタにデータテーブルのサイズを設定します。CRB レジスタは任意の値を設定できます。

(2) 第 2 転送情報の設定

GPT320.GTCCRE レジスタへの転送を設定します。

1. MRA レジスタで、転送元アドレスのインクリメント（MRA.SM[1:0] ビット = 10b）を選択します。
2. ノーマル転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 00b）と、ワード転送（MRA.SZ[1:0] ビット = 10b）を設定します。
3. MRB レジスタで、転送先アドレスの固定（MRB.DM[1:0] ビット = 00b）を選択し、チェーン転送（MRB.CHNE ビット = 1、MRB.CHNS ビット = 0）を設定します。
4. SAR レジスタにデータテーブルの先頭アドレスを設定します。
5. DAR レジスタに GPT320.GTCCRE レジスタのアドレスを設定します。
6. CRAH および CRAL レジスタにデータテーブルのサイズを設定します。CRB レジスタは任意の値を設定できます。

(3) 第 3 転送情報の設定

GPT320.GTPBR レジスタへの転送を設定します。

1. MRA レジスタで、転送元アドレスのインクリメント（MRA.SM[1:0] ビット = 10b）を選択します。
2. ノーマル転送モード（MRA.MD[1:0] ビット = 00b）と、ワード転送（MRA.SZ[1:0] ビット = 10b）を設定します。
3. MRB レジスタで、転送先アドレスの固定（MRB.DM[1:0] ビット = 00b）を選択し、1 回の割り込みで 1 回のデータ転送（MRB.CHNE ビット = 0、MRB.DISEL ビット = 0）を設定します。MRB.DTS ビットは、任意の値を設定できます。
4. SAR レジスタにデータテーブルの先頭アドレスを設定します。
5. DAR レジスタに GPT320.GTPBR レジスタのアドレスを設定します。

6. CRA レジスタにデータテーブルのサイズを設定します。CRB レジスタは任意の値を設定できます。

(4) 転送情報の配置

GPT320.GTPBR レジスタへの転送で使用する転送情報は、GPT320.GTCCRC レジスタと GPT320.GTCCRE レジスタで使用する転送制御情報のすぐ後に配置します。

(5) DTC ベクタテーブルの設定

DTC ベクタテーブルで、GPT320.GTCCRC レジスタと GPT320.GTCCRE レジスタへの転送で使用する転送制御情報の開始アドレスを設定します。

(6) ICU の設定と DTC モジュールの起動

1. GPT320 カウンタオーバーフロー割り込みに対応する ICU.IELSRn.DTCE ビットを設定します。
2. ICU.IELSRn.IELS[7:0] ビットを 97（61h）にして、GPT320 カウンタオーバーフローを指定します。
3. DTCST.DTCST ビットを 1 にします。

(7) GPT の設定

1. GTCCRA および GTCCRB レジスタがアウトプットコンペアレジスタとして動作できるように、GPT320.GTIOR レジスタを設定します。
2. GPT320.GTCCRA レジスタと GPT320.GTCCRB レジスタには、デフォルトの PWM タイマコンペア値を設定し、GPT320.GTCCRC レジスタと GPT320.GTCCRE レジスタには、次の PWM タイマコンペア値を設定します。
3. GPT320.GTPR レジスタには、デフォルトの PWM タイマ周期を設定し、GPT320.GTPBR レジスタには、次の PWM タイマ周期を設定します。
4. PmnPFS.PDR の出力ビットを 1 にして、PmnPFS.PSEL[4:0] の周辺選択ビットを 00011b にします。

(8) GPT の起動

GPT320.GTSTR.CSTRT ビットを 1 にして、GPT320.GTCNT カウンタのカウント動作を開始します。

(9) DTC 転送

GPT320.GTPR レジスタで GPT320 カウンタオーバーフローが発生するたびに、次の PWM タイマコンペア値が GPT320.GTCCRC レジスタと GPT320.GTCCRE レジスタへ転送されます。また、次の PWM タイマ周期の設定値が GPT320.GTPBR レジスタへ転送されます。

(10) 割り込み処理

指定した回数の転送終了後（たとえば、GPT 転送用 CRA レジスタの値が 0 になると）、CPU に対して GPT320 カウンタオーバーフロー割り込みが要求されます。割り込み処理ルーチンで終了処理を行ってください。

18.6.3 カウンタ = 0 のときのチェーン転送

第 2 転送は第 1 データ転送の転送カウンタが 0 になったときにだけ実行されます。第 1 データ転送情報は第 2 転送が実行されるたびに繰り返し変更されます。チェーン転送によって、256 回以上のリピート転送が可能になります。

以下に、128K バイトの入力バッファを構成する例を示します。入力バッファは下位アドレスが 0000h から始まるように設定されています。カウンタ = 0 のときのチェーン転送を図 18.14 に示します。

1. 第 1 データ転送のデータ入力用にノーマル転送モードを設定します。以下のように設定してください。
   a. 転送元アドレス = 固定
   b. CRA レジスタ = 0000h（65536 回）
   c. MRB.CHNE ビット = 1（チェーン転送許可）
   d. MRB.CHNS ビット = 1（転送カウンタが 0 の場合のみチェーン転送を行う）
   e. MRB.DISEL ビット = 0（指定されたデータ転送の終了時、CPU への割り込み要求が発生）
2. 第 1 データ転送の転送先アドレスの 65536 回ごとに、開始アドレスの上位 8 ビットアドレスを別の領域（フラッシュなど）に用意してください。たとえば、入力バッファを 20 0000h ～ 21 FFFFh にする場合は、21h と 20h を用意します。
3. 第 2 データ転送は以下のように設定してください。
   f. 第 1 データ転送の転送先アドレスをリセットするため、リピート転送モード（転送元をリピート領域）に設定
   g. 転送先として、第 1 転送情報領域の DAR レジスタの上位 8 ビットを指定
   h. MRB.CHNE ビット = 0（チェーン転送禁止）
   i. MRB.DISEL ビット = 0（指定されたデータ転送の終了時、CPU への割り込み要求が発生）
   j. 入力バッファを 20 0000h ～ 21 FFFFh にした場合は、転送カウンタ = 2
4. 1 回の割り込みで、第 1 データ転送が 65536 回実行されます。第 1 データ転送の転送カウンタが 0 になると、第 2 データ転送がスタートします。第 1 データ転送の転送先アドレスの上位 8 ビットを 21h にしてください。転送先アドレスの下位 16 ビットおよび第 1 データ転送の転送カウンタは 0000h になっています。
5. 引き続き 1 回の割り込みで、第 1 データ転送用に指定された 65536 回だけ、第 1 データ転送が実行されます。第 1 データ転送の転送カウンタが 0 になると、第 2 データ転送がスタートします。第 1 データ転送の転送先アドレスの上位 8 ビットを 20h にしてください。転送先アドレスの下位 16 ビットおよび第 1 データ転送の転送カウンタは 0000h になっています。
6. 手順 4 と 5 が無限に繰り返されます。第 2 データ転送はリピート転送モードのため、CPU への割り込み要求は発生しません。

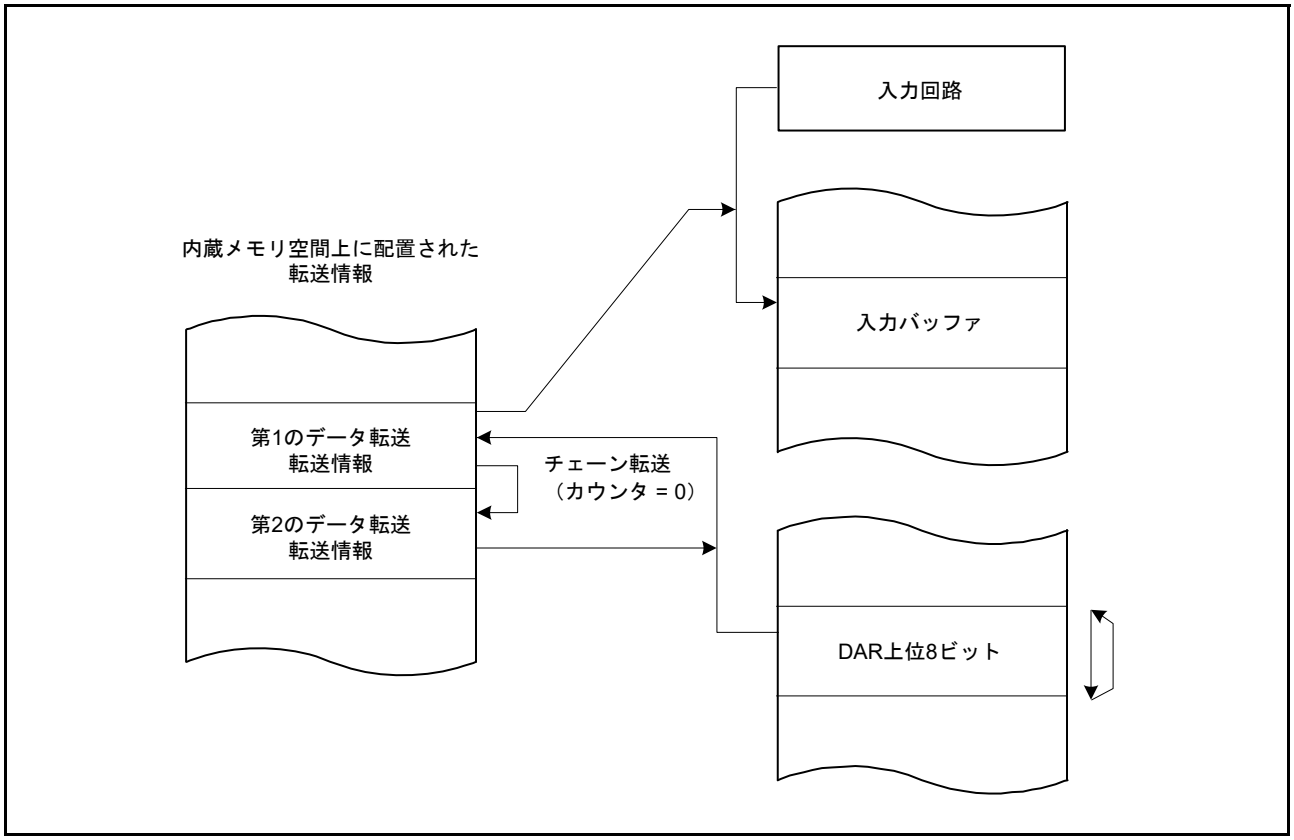


図 18.14　カウンタ = 0 のときのチェーン転送

18.7 割り込み要因

DTC が指定された回数のデータ転送を終了したとき、または MRB.DISEL ビットが 1 の状態でデータ転送が完了したとき、DTC の起動要因によって CPU に対する割り込みが発生します。CPU に対する割り込みは、NVIC および ICU.IELSRn.IELS[7:0] ビットの設定に従って制御されます。「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

DTC が決定する起動要因の優先順位は、割り込みベクタ番号が小さいほど高くなります。CPU への割り込みの優先順位は、NVIC の優先順位で決定されます。

18.8 イベントリンク

1 転送要求分の転送完了時に、DTC はイベントリンク要求を出力できます。

18.9 スヌーズ制御インタフェース

DTC によってスヌーズモードからソフトウェアスタンバイモードへ復帰させるには、SYSTEM.SNZEDCR.DTCZRED または SYSTEM.SNZEDCR.DTCNZRED を 1 にしてください。11.8.3 ソフトウェアスタンバイモードへの復帰を参照してください。

SYSTEM.SNZEDCR.DTCZRED は、最後の DTC 送信完了（CRA と CRB が 0 であることによって検出）時に、スヌーズ終了要求を許可または禁止にします。

SYSTEM.SNZEDCR.DTCNZRED は、最後以外の DTC 送信完了（CRA と CRB が 0 以外であることによって検出）時に、スヌーズ終了要求を許可または禁止にします。

18.10 モジュールストップ機能

モジュールストップ機能へ遷移、またはスヌーズモードへの遷移を伴わないソフトウェアスタンバイモードへ遷移する際は、事前に DTCST.DTCST ビットを 0 にしてください。その後、本項に示す次の動作を実行してください。SYSTEM.SNZCR.SNZDTCEN ビットを 1 にすると、DTC はスヌーズモードでも利用可能です。「11. 低消費電力モード」を参照してください。

(1) モジュールストップ機能

MSTPCRA.MSTPA22 ビットに 1 を書くことによって、DTC のモジュールストップ機能が有効になります。MSTPCRA.MSTPA22 ビットに 1 を書いたときに DTC 転送が動作中の場合、DTC 転送終了後にモジュールストップ状態へ遷移します。MSTPCRA.MSTPA22 ビットが 1 のときは、DTC のレジスタにアクセスしないでください。

MSTPCRA.MSTPA22 ビットに 0 を書くことで、DTC のモジュールストップ状態が解除されます。

(2) ソフトウェアスタンバイモード

11.7.1 ソフトウェアスタンバイモードへの遷移の手順に従って設定してください。

WFI 命令実行時点で DTC 転送が動作中の場合、DTC 転送が終了してからソフトウェアスタンバイモードへ遷移します。

ソフトウェアスタンバイモード時に、スヌーズ制御回路がスヌーズ要求を受信すると、MCU はスヌーズモードへ遷移します。11.8.1 スヌーズモードへの遷移を参照してください。スヌーズモード時の DTC の動作は、SYSTEM.SNZCR.SNZDTCEN ビットで選択できます。スヌーズモード時に DTC 動作を許可にする場合、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、DTCST.DTCST ビットを 1 にしてください。DTC によってソフトウェアスタンバイモードへ復帰させるには、SYSTEM.SNZEDCR.DTCZRED または SYSTEM.SNZEDCR.DTCNZRED を 1 にしてください。11.8.3 ソフトウェアスタンバイモードへの復帰を参照してください。ソフトウェアスタンバイモード中は ICU からの DTC 起動要求は停止しますが、スヌーズモード中は停止しません。

(3) モジュールストップ機能の注意事項

WFI 命令とレジスタの設定手順については、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

スヌーズモードへ遷移しないで低消費電力モードから復帰した後に DTC 転送を行うには、再度 DTCST.DTCST ビットを 1 にしてください。

ソフトウェアスタンバイモード時に発生した要求を、DTC 起動要求ではなく CPU への割り込み要求として使用する場合は、14.4.2 割り込み要求先の選択に示すように、割り込み要求先を CPU に切り替えてから WFI 命令を実行してください。スヌーズモード時に DTC 動作を許可する場合、DTC のモジュールストップ機能を使用しないでください。

18.11 使用上の注意事項

18.11.1 転送情報の開始アドレス

ベクタテーブルに指定する転送情報の開始アドレスは 4n 番地でなければいけません。4n 番地以外を指定すると、アドレスの最下位 2 ビットは 00b としてアクセスされます。

19.　イベントリンクコントローラ（ELC）

19.1　概要

イベントリンクコントローラ（ELC）は、各周辺モジュールで発生するイベント要求をソース信号として使用し、それらのモジュールを別のモジュールと接続することによって、CPU を介さずにモジュール間の直接リンクを実現します。

表 19.1 に ELC の仕様を、図 19.1 にブロック図を示します。

表 19.1　ELCの仕様

項目	内容
イベントリンク機能	135種類のイベント信号を、直接モジュールに接続可能。ELCイベント信号と、DTC起動用のイベントの発生が可能
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定

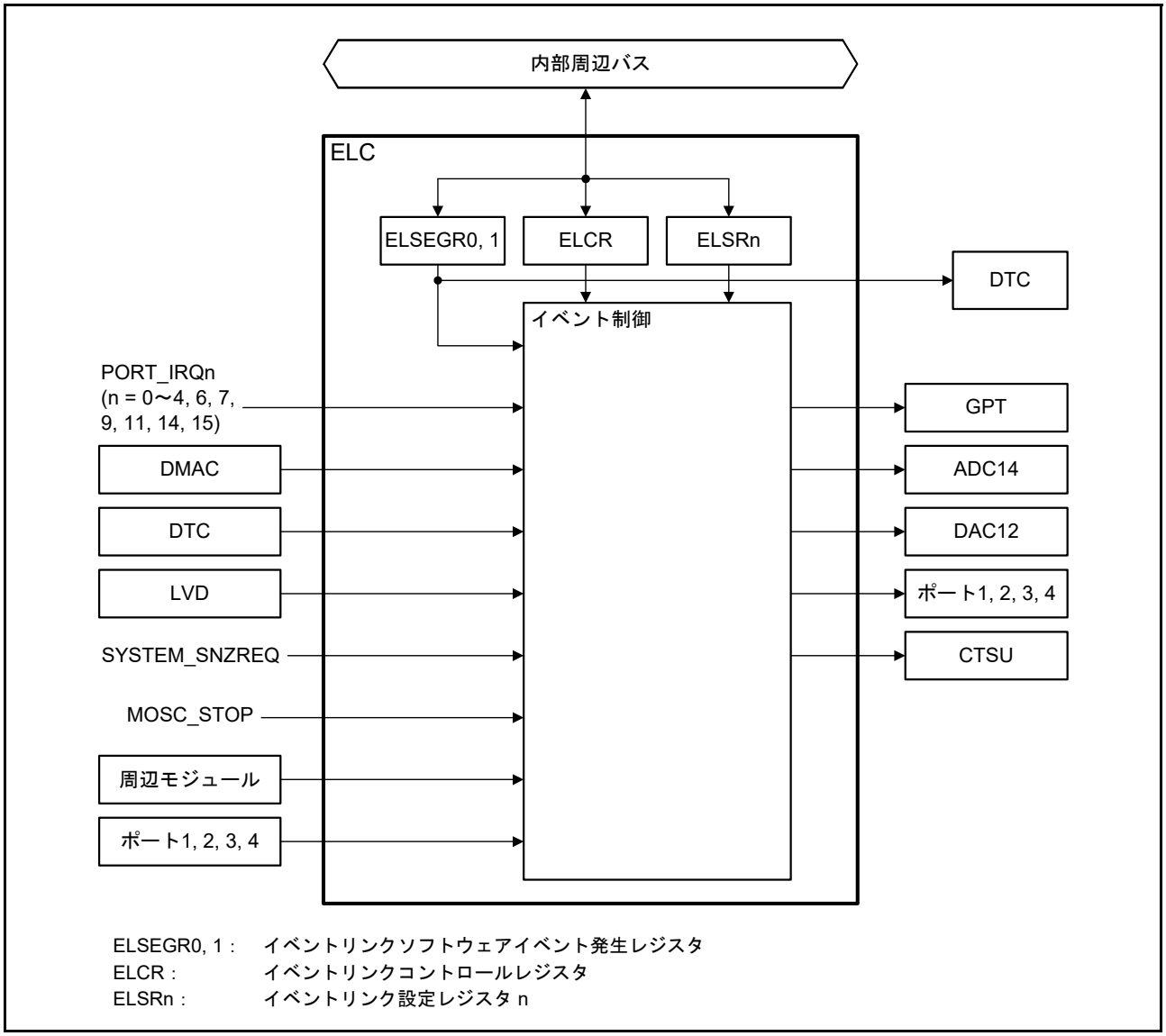


図 19.1　ELC のブロック図（n = 0 ～ 9、12、14 ～ 18）

19.2　レジスタの説明

19.2.1　イベントリンクコントローラレジスタ（ELCR）

アドレス　ELC.ELCR 4004 1000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ELCON	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	ELCON	全イベントリンク有効	0：ELC機能は無効 1：ELC機能は有効	R/W

ELCR レジスタは、ELC の動作を制御するレジスタです。

19.2.2　イベントリンクソフトウェアイベント発生レジスタ n（ELSEGRn）(n = 0, 1)

アドレス　ELC.ELSEGR0 4004 1002h, ELC.ELSEGR1 4004 1004h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	WI	WE	—	—	—	—	—	SEG
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SEG	ソフトウェアイベント発生	0：通常動作 1：ソフトウェアイベント発生	W
b5-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	WE	SEGビット書き込み許可	0：SEGビットへの書き込み禁止 1：SEGビットへの書き込み許可	R/W
b7	WI	ELSEGRレジスタ書き込み禁止	0：ELSEGRレジスタへの書き込み許可 1：ELSEGRレジスタへの書き込み禁止	W

SEG ビット（ソフトウェアイベント発生）

WE ビットが 1 の状態で本ビットに 1 を書くとソフトウェアイベントが発生します。読むと 0 が読めます。1 を書いてもデータは格納されません。WE ビットを 1 にしてから、本ビットを書く必要があります。

ソフトウェアイベントは、DTC に対してイベントリンクをトリガすることが可能です。

WE ビット（SEG ビット書き込み許可）

WE ビットが 1 の場合にのみ、SEG ビットへの書き込みが可能になります。WI ビットを 0 にクリアしてから、本ビットを書く必要があります。

[1 になる条件]

- WI ビットが 0 の状態で 1 を書いたとき

[0 になる条件]

- WI ビットが 0 の状態で 0 を書いたとき

WI ビット（ELSEGR レジスタ書き込み禁止）

WI ビットへの書き込み値が 0 の場合にのみ、ELSEGR レジスタに対する書き込みが可能になります。読むと 1 が読めます。WI ビットを 0 にしてから、WE または SEG ビットを設定する必要があります。

19.2.3　イベントリンク設定レジスタ n（ELSRn）(n = 0 ～ 9, 12, 14 ～ 18)

アドレス　ELC.ELSR0 4004 1010h, ELC.ELSR1 4004 1014h, ELC.ELSR2 4004 1018h, ELC.ELSR3 4004 101Ch, ELC.ELSR4 4004 1020h, ELC.ELSR5 4004 1024h, ELC.ELSR6 4004 1028h, ELC.ELSR7 4004 102Ch, ELC.ELSR8 4004 1030h, ELC.ELSR9 4004 1034h, ELC.ELSR12 4004 1040h, ELC.ELSR14 4004 1048h, ELC.ELSR15 4004 104Ch, ELC.ELSR16 4004 1050h, ELC.ELSR17 4004 1054h, ELC.ELSR18 4004 1058h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	ELS[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	ELS[7:0]	イベントリンク選択	b7 b0 00000000：対応する周辺モジュールへのイベント出力は禁止 00000001～11010100：リンクするイベント信号の番号を指定 上記以外は設定しないでください。	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ELSRn レジスタは、周辺モジュールごとに、リンクするイベント信号を指定するレジスタです。ELSRn レジスタと周辺モジュールの対応関係を表 19.2 に示します。また、ELSRn レジスタに設定するイベント信号名と信号番号の対応関係を表 19.3 に示します。

表 19.2　ELSRn レジスタと周辺機能の対応

レジスタ名	周辺機能（モジュール）	イベント名
ELSR0	GPT (A)	ELC_GPTA
ELSR1	GPT (B)	ELC_GPTB
ELSR2	GPT (C)	ELC_GPTC
ELSR3	GPT (D)	ELC_GPTD
ELSR4	GPT (E)	ELC_GPTE
ELSR5	GPT (F)	ELC_GPTF
ELSR6	GPT (G)	ELC_GPTG
ELSR7	GPT (H)	ELC_GPTH
ELSR8	ADC14A	ELC_AD00
ELSR9	ADC14B	ELC_AD01
ELSR12	DAC12	ELC_DA0
ELSR14	PORT 1	ELC_PORT1
ELSR15	PORT 2	ELC_PORT2
ELSR16	PORT 3	ELC_PORT3
ELSR17	PORT 4	ELC_PORT4
ELSR18	CTSU	ELC_CTSU

表 19.3 ELSRn.ELSビットに設定するイベント信号名と信号番号の対応関係 (1/4)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	内容
001h	ポート	PORT_IRQ0（注1）	外部端子割り込み0
002h		PORT_IRQ1（注1）	外部端子割り込み1
003h		PORT_IRQ2（注1）	外部端子割り込み2
004h		PORT_IRQ3（注1）	外部端子割り込み3
005h		PORT_IRQ4（注1）	外部端子割り込み4
007h		PORT_IRQ6（注1）	外部端子割り込み6
008h		PORT_IRQ7（注1）	外部端子割り込み7
00Ah		PORT_IRQ9（注1）	外部端子割り込み9
00Ch		PORT_IRQ11（注1）	外部端子割り込み11
00Fh		PORT_IRQ14（注1）	外部端子割り込み14
010h		PORT_IRQ15（注1）	外部端子割り込み15
011h	DMAC0	DMAC0_INT	DMAC転送終了0
012h	DMAC1	DMAC1_INT	DMAC転送終了1
013h	DMAC2	DMAC2_INT	DMAC転送終了2
014h	DMAC3	DMAC3_INT	DMAC転送終了3
016h	DTC	DTC_DTCEND（注3）	DTC転送終了
019h	LVD	LVD_LVD1	電圧監視1割り込み
01Ch	MOSC	MOSC_STOP	メインクロック発振停止
01Dh	低消費電力モード	SYSTEM_SNZREQ（注2）（注3）	スヌーズエントリ
01Eh	AGT0	AGT0_AGTI	AGT割り込み
01Fh		AGT0_AGTCMAI	コンペアマッチA
020h		AGT0_AGTCMBI	コンペアマッチB
021h	AGT1	AGT1_AGTI	AGT割り込み
022h		AGT1_AGTCMAI	コンペアマッチA
023h		AGT1_AGTCMBI	コンペアマッチB
024h	IWDT	IWDT_NMIUNDF	IWDTアンダーフロー
025h	WDT	WDT_NMIUNDF	WDTアンダーフロー
027h	RTC	RTC_PRD	周期割り込み
029h	ADC140	ADC140_ADI	A/Dスキャン変換終了割り込み
02Dh		ADC140_WCMPM（注3）	コンペアマッチ
02Eh		ADC140_WCMPUM（注3）	コンペア不一致
02Fh	ACMPLP	ACMP_LP0	低消費電力アナログコンパレータ割り込み0
030h		ACMP_LP1	低消費電力アナログコンパレータ割り込み1
035h	IIC0	IIC0_RXI	受信データフル
036h		IIC0_TXI	送信データエンプティ
037h		IIC0_TEI	送信終了
038h		IIC0_EEI	通信エラー
03Ah	IIC1	IIC1_RXI	受信データフル
03Bh		IIC1_TXI	送信データエンプティ
03Ch		IIC1_TEI	送信終了
03Dh		IIC1_EEI	通信エラー
04Ah	DOC	DOC_DOPCI（注3）	データ演算回路割り込み

表 19.3　ELSRn.ELSビットに設定するイベント信号名と信号番号の対応関係 (2/4)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	内容
053h	I/Oポート	IOPORT_GROUP1	ポート1イベント
054h		IOPORT_GROUP2	ポート2イベント
055h		IOPORT_GROUP3	ポート3イベント
056h		IOPORT_GROUP4	ポート4イベント
057h	ELC	ELC_SWEVT0	ソフトウェアイベント0
058h		ELC_SWEVT1	ソフトウェアイベント1
05Bh	GPT320	GPT0_CCMPA	コンペアマッチA
05Ch		GPT0_CCMPB	コンペアマッチB
05Dh		GPT0_CMPC	コンペアマッチC
05Eh		GPT0_CMPD	コンペアマッチD
05Fh		GPT0_CMPE	コンペアマッチE
060h		GPT0_CMPF	コンペアマッチF
061h		GPT0_OVF	オーバーフロー
062h		GPT0_UDF	アンダーフロー
063h	GPT321	GPT1_CCMPA	コンペアマッチA
064h		GPT1_CCMPB	コンペアマッチB
065h		GPT1_CMPC	コンペアマッチC
066h		GPT1_CMPD	コンペアマッチD
067h		GPT1_CMPE	コンペアマッチE
068h		GPT1_CMPF	コンペアマッチF
069h		GPT1_OVF	オーバーフロー
06Ah		GPT1_UDF	アンダーフロー
06Bh	GPT322	GPT2_CCMPA	コンペアマッチA
06Ch		GPT2_CCMPB	コンペアマッチB
06Dh		GPT2_CMPC	コンペアマッチC
06Eh		GPT2_CMPD	コンペアマッチD
06Fh		GPT2_CMPE	コンペアマッチE
070h		GPT2_CMPF	コンペアマッチF
071h		GPT2_OVF	オーバーフロー
072h		GPT2_UDF	アンダーフロー
073h	GPT323	GPT3_CCMPA	コンペアマッチA
074h		GPT3_CCMPB	コンペアマッチB
075h		GPT3_CMPC	コンペアマッチC
076h		GPT3_CMPD	コンペアマッチD
077h		GPT3_CMPE	コンペアマッチE
078h		GPT3_CMPF	コンペアマッチF
079h		GPT3_OVF	オーバーフロー
07Ah		GPT3_UDF	アンダーフロー

表 19.3　ELSRn.ELSビットに設定するイベント信号名と信号番号の対応関係 (3/4)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	内容
07Bh	GPT164	GPT4_CCMPA	コンペアマッチA
07Ch		GPT4_CCMPB	コンペアマッチB
07Dh		GPT4_CMPC	コンペアマッチC
07Eh		GPT4_CMPD	コンペアマッチD
07Fh		GPT4_CMPE	コンペアマッチE
080h		GPT4_CMPF	コンペアマッチF
081h		GPT4_OVF	オーバーフロー
082h		GPT4_UDF	アンダーフロー
083h	GPT165	GPT5_CCMPA	コンペアマッチA
084h		GPT5_CCMPB	コンペアマッチB
085h		GPT5_CMPC	コンペアマッチC
086h		GPT5_CMPD	コンペアマッチD
087h		GPT5_CMPE	コンペアマッチE
088h		GPT5_CMPF	コンペアマッチF
089h		GPT5_OVF	オーバーフロー
08Ah		GPT5_UDF	アンダーフロー
09Bh	GPT168	GPT8_CCMPA	コンペアマッチA
09Ch		GPT8_CCMPB	コンペアマッチB
09Dh		GPT8_CMPC	コンペアマッチC
09Eh		GPT8_CMPD	コンペアマッチD
09Fh		GPT8_CMPE	コンペアマッチE
0A0h		GPT8_CMPF	コンペアマッチF
0A1h		GPT8_OVF	オーバーフロー
0A2h		GPT8_UDF	アンダーフロー
0ABh	GPT	GPT_UVWEDGE	UVWのエッジイベント
0ACh	SCI0	SCI0_RXI（注4）	受信データフル
0ADh		SCI0_TXI（注4）	送信データエンプティ
0AEh		SCI0_TEI	送信終了
0AFh		SCI0_ERI（注4）	受信エラー
0B0h		SCI0_AM	アドレス一致イベント
0B2h	SCI1	SCI1_RXI（注4）	受信データフル
0B3h		SCI1_TXI（注4）	送信データエンプティ
0B4h		SCI1_TEI	送信終了
0B5h		SCI1_ERI（注4）	受信エラー
0B6h		SCI1_AM	アドレス一致イベント
0C1h	SCI4	SCI4_RXI（注4）	受信データフル
0C2h		SCI4_TXI（注4）	送信データエンプティ
0C3h		SCI4_TEI	送信終了
0C4h		SCI4_ERI（注4）	受信エラー
0C5h		SCI4_AM	アドレス一致イベント
0C6h	SCI9	SCI9_RXI（注4）	受信データフル
0C7h		SCI9_TXI（注4）	送信データエンプティ
0C8h		SCI9_TEI	送信終了
0C9h		SCI9_ERI（注4）	受信エラー
0CAh		SCI9_AM	アドレス一致イベント

表 19.3 ELSRn.ELSビットに設定するイベント信号名と信号番号の対応関係 (4/4)

イベント番号	割り込み要求の発生元	名称	内容
0CBh	SPI0	SPI0_SPRI	受信バッファフル
0CCh		SPI0_SPTI	送信バッファエンプティ
0CDh		SPI0_SPII	アイドル
0CEh		SPI0_SPEI	エラー
0CFh		SPI0_SPTEND	送信完了イベント
0D0h	SPI1	SPI1_SPRI	受信バッファフル
0D1h		SPI1_SPTI	送信バッファエンプティ
0D2h		SPI1_SPII	アイドル
0D3h		SPI1_SPEI	エラー
0D4h		SPI1_SPTEND	送信完了イベント

注 1. パルス（エッジ検出）のみがサポートされています。
注 2. ELSR8、9、および ELSR14 ～ ELSR18 が、このイベントを選択できます。
注 3. このイベントはスヌーズモードでも発生可能です。
注 4. このイベントは FIFO モードではサポートされていません。

19.3 動作説明

19.3.1 割り込み処理とイベントリンクの関係

イベントリンクのイベント番号は、対応する割り込み要因のイベント番号と同一です。イベント信号の発生方法については、各イベント出力元モジュールの章を参照してください。

19.3.2 イベントのリンク

イベントリンク設定レジスタ（ELSRn）に設定しておいたイベントが発生すると、対応するモジュールが起動します。起動するモジュールの動作設定は、前もって完了しておく必要があります。表 19.4 に、イベントが発生したときのモジュール別動作一覧を示します。

表 19.4 イベント発生時のモジュールの動作

モジュール	イベント発生時の動作
GPT	• カウント開始 • カウント停止 • カウントクリア • アップカウント • ダウンカウント • インプットキャプチャ
ADC14	A/D変換開始
DAC12	D/A変換開始
I/Oポート	• EORR（リセット）またはEOSR（セット）に基づく端子出力の変化 • 端子状態をEIDRにラッチ • ELCで使用可能なポート： PORT 1 PORT 2 PORT 3 PORT 4
CTSU	測定動作開始
DTC	DTCデータ転送開始

19.3.3 イベントリンクの動作設定手順例

イベントのリンク方法は以下のとおりです。

1. イベントをリンクするモジュールの動作設定を行います。
2. イベントをリンクするモジュールに対して、ELSRn レジスタを設定します。
3. ELCR.ELCON ビットを 1 にして、すべてのイベントリンクを有効にします。
4. イベント出力元モジュールの設定を行い、起動させます。これによって、2 つのモジュール間のリンクがアクティブになります。
5. モジュール単位でイベントリンク動作を停止させるには、そのモジュールに対応する ELSRn.ELS[7:0] ビットを 00000000b にします。すべてのイベントリンクを停止させるには、ELCR.ELCON ビットを 0 にします。

RTC のイベントリンク出力機能を使用する場合は、RTC の設定（初期化、時刻設定など）を行った後、ELC を設定してください。ELC の設定後に RTC の設定を行うと、意図しないイベント出力が発生する可能性があります。

19.4 使用上の注意事項

19.4.1 DMAC または DTC 転送終了のイベントリンクを使用する場合

DMAC または DTC 転送終了のイベントリンクを使用する場合、DMAC または DTC の転送先とイベントのリンク先を同一周辺モジュールに設定しないでください。設定すると、周辺モジュールへの DMAC または DTC 転送が完了する前に、周辺モジュールが起動する場合があります。

19.4.2 クロック設定について

イベントリンクを使用するには、ELC と対象モジュールが動作可能な状態でなければいけません。対象モジュールがモジュールストップ状態の場合、または、対象モジュールが停止するような低消費電力モード（ソフトウェアスタンバイモード）の場合、そのモジュールは動作できません。モジュールによっては、スヌーズモードで動作できるものもあります。詳細については、表 19.3 と「11. 低消費電力モード」を参照してください。

19.4.3 モジュールストップ機能の設定

モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC）によって、ELC 動作を許可または禁止することが可能です。リセット後の初期状態では、ELC の動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。モジュールストップコントロールレジスタを用いて ELC の動作を禁止する場合は、事前に ELCON ビットを 0 にする必要があります。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

19.4.4 ELC 遅延時間

図 19.2 に示すように、モジュール A は ELC を介してモジュール B にアクセスします。モジュール A とモジュール B の間には、ELC モジュールでの遅延時間（ELC 遅延時間）が存在します。表 19.5 に ELC 遅延時間を示します。

モジュール A とモジュール B のクロックドメインが同一であれば、遅延時間は 0 です。しかし、モジュール A とモジュール B のクロックドメインが異なっていれば、ELC モジュールにある程度の遅延が生じます。この時間遅延は、モジュール A とモジュール B の各クロックのうち遅い方のクロック周波数で決まります。

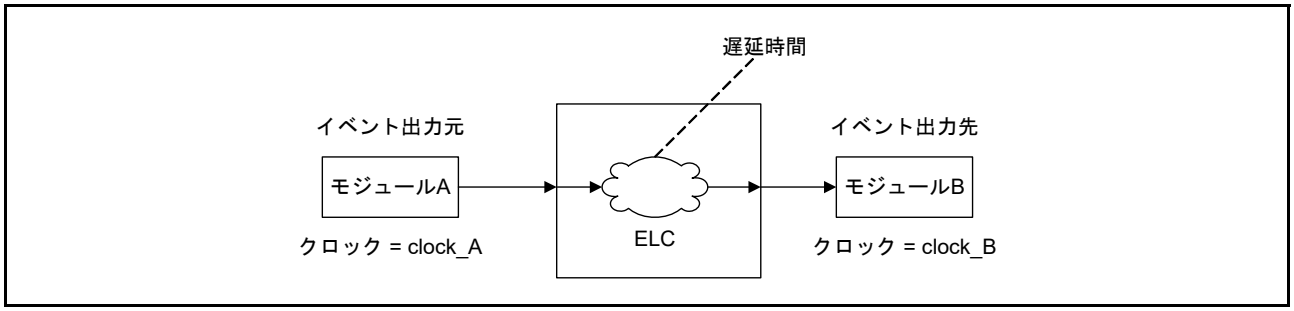


図 19.2 ELC 遅延時間

表 19.5 ELC遅延時間

クロックドメイン	クロック周波数	ELC遅延時間
clock_A = clock_B	clock_A = clock_B	0サイクル
clock_A ≠ clock_B	clock_A = clock_B	1～2サイクル
	clock_A ＞ clock_B	Bの1～2サイクル
	clock_A ＜ clock_B	Aの1～2サイクル

20. I/O ポート

20.1 概要

I/O ポート端子は、汎用入出力ポート端子、周辺モジュールの入出力端子、割り込み入力端子、アナログ入出力、ELC のポートグループ機能、またはバス制御端子として動作します。すべての端子は、リセット直後は入力端子として動作しますが、レジスタの設定によって機能を切り替えることができます。各端子の I/O ポートと周辺モジュールは、対応するレジスタで設定します。図 20.1 に、I/O ポートレジスタの接続図を示します。パッケージによって I/O ポートの構成は異なります。表 20.1 に I/O ポートの仕様を、表 20.2 に I/O ポートの機能を示します。

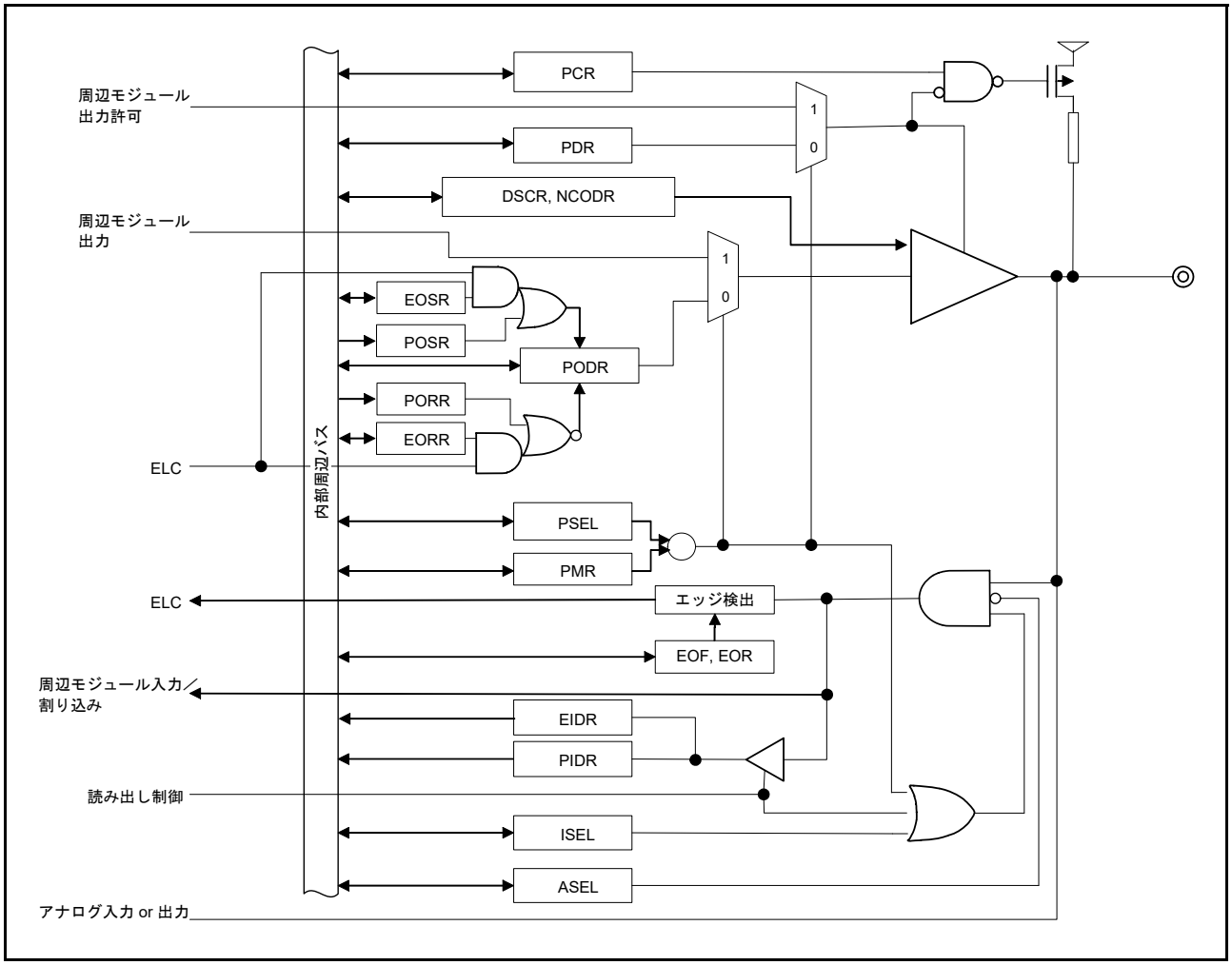


図 20.1 I/O ポートレジスタの接続図

注 . この図はポートの基本構成を示しています。ポートによって構成は異なります。

表 20.1 I/Oポートの仕様

ポート	パッケージ	
	56ピン	本数
ポート0	P004, P010, P011, P014, P015	5
ポート1	P100～P111	12
ポート2	P200, P201, P204～P206, P212～P215	9
ポート3	P300	1
ポート4	P402, P404, P407, P409, P414	5
ポート5	P501	1
ポート9	P914, P915	2
	合計本数	35

表 20.2 I/Oポートの機能

ポート	ポート名	入力プルアップ	オープンドレイン出力	駆動能力切り替え	5Vトレラント
ポート0	P004, P010, P011, P014, P015	○	—	低／中	—
ポート1	P100～P111	○	○	低／中	—
ポート2	P200, P214, P215	—	—	—	—
	P201, P204	○	○	低／中	—
	P205, P206	○	○	低／中	○
	P212, P213	○	○	—	—
ポート3	P300	○	○	低／中	—
ポート4	P402, P407	○	○	低／中	○
	P404, P409, P414	○	○	低／中	—
ポート5	P501	○	○	低／中	—
ポート9	P914, P915	—	—	—	—

20.2 レジスタの説明

20.2.1 ポートコントロールレジスタ 1（PCNTR1/PODR/PDR）

アドレス PORT0.PCNTR1 4004 0000h, PORT1.PCNTR1 4004 0020h, PORT2.PCNTR1 4004 0040h, PORT3.PCNTR1 4004 0060h, PORT4.PCNTR1 4004 0080h, PORT5.PCNTR1 4004 00A0h, PORT9.PCNTR1 4004 0120h

PORT0.PODR 4004 0000h, PORT1.PODR 4004 0020h, PORT2.PODR 4004 0040h, PORT3.PODR 4004 0060h, PORT4.PODR 4004 0080h, PORT5.PODR 4004 00A0h, PORT9.PODR 4004 0120h,

PORT0.PDR 4004 0002h, PORT1.PDR 4004 0022h, PORT2.PDR 4004 0042h, PORT3.PDR 4004 0062h, PORT4.PDR 4004 0082h, PORT5.PDR 4004 00A2h, PORT9.PDR 4004 0122h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	PODR 15	PODR 14	PODR 13	PODR 12	PODR 11	PODR 10	PODR 09	PODR 08	PODR 07	PODR 06	PODR 05	PODR 04	PODR 03	PODR 02	PODR 01	PODR 00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PDR15	PDR14	PDR13	PDR12	PDR11	PDR10	PDR09	PDR08	PDR07	PDR06	PDR05	PDR04	PDR03	PDR02	PDR01	PDR00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	PDRn	Pmn方向	0：入力（入力端子として機能） 1：出力（出力端子として機能）	R/W
b31-b16	PODRn	Pmn出力データ	0：Low出力 1：High出力	R/W

m = 0 ～ 5, 9
n = 00 ～ 15

ポートコントロールレジスタ 1（PCNTR1/PODR/PDR）は、32 ビットおよび 16 ビットの読み出し／書き込み可能なレジスタで、ポート方向およびポート出力データを制御します。

PCNTR1 はポート方向とポート出力データを指定し、32 ビット単位でアクセスされます。PODRn（PCNTR1 のビット [31:16]）および PDRn（PCNTR1 のビット [15:0]）はそれぞれ 16 ビット単位でアクセスされます。

PDRn ビットは、汎用入出力端子として設定されている個々のポート端子の入力／出力方向を選択します。ポート m の各端子はそれぞれ PORTm.PCNTR1.PDRn ビットに対応しています。入出力方向は 1 ビット単位で指定できます。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。P200、P214、P215 は入力専用です。そのため PORT2.PCNTR1.PDR00、PORT2.PCNTR1.PDR14、および PORT2.PCNTR1.PDR15 は予約ビットです。PORTm.PCNTR1 レジスタの PDRn ビットは、PFS.PmnPFS レジスタの PDR ビットと同じ働きをします。

PODRn ビットは、汎用入出力端子から出力されるデータを格納します。存在しないポート m のビットは予約ビットです。これらのビットには 0 を書いてください。存在しない端子のビットは予約ビットです。P200、P214、P215 は入力専用なので、PORT2.PCNTR1.PODR00、PORT2.PCNTR1.PODR14、および PORT2.PCNTR1.PODR15 は予約ビットです。予約ビットは、読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。PORTm.PCNTR1 レジスタの PODRn ビットは、PFS.PmnPFS レジスタの PODR ビットと同じ働きをします。

20.2.2 ポートコントロールレジスタ 2（PCNTR2/EIDR/PIDR）

アドレス PORT0.PCNTR2 4004 0004h, PORT1.PCNTR2 4004 0024h, PORT2.PCNTR2 4004 0044h, PORT3.PCNTR2 4004 0064h, PORT4.PCNTR2 4004 0084h, PORT5.PCNTR2 4004 00A4h, PORT9.PCNTR2 4004 0124h

PORT1.EIDR 4004 0024h, PORT2.EIDR 4004 0044h, PORT3.EIDR 4004 0064h, PORT4.EIDR 4004 0084h,

PORT0.PIDR 4004 0006h, PORT1.PIDR 4004 0026h, PORT2.PIDR 4004 0046h, PORT3.PIDR 4004 0066h, PORT4.PIDR 4004 0086h, PORT5.PIDR 4004 00A6h, PORT9.PIDR 4004 0126h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	EIDR15	EIDR14	EIDR13	EIDR12	EIDR11	EIDR10	EIDR09	EIDR08	EIDR07	EIDR06	EIDR05	EIDR04	EIDR03	EIDR02	EIDR01	EIDR00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PIDR15	PIDR14	PIDR13	PIDR12	PIDR11	PIDR10	PIDR09	PIDR08	PIDR07	PIDR06	PIDR05	PIDR04	PIDR03	PIDR02	PIDR01	PIDR00
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	PIDRn	Pmn状態	0：Low レベル 1：High レベル	R
b31-b16	EIDRn	ポートイベント入力データ（注1）	ELC_PORTxの発生時： 0：Low入力 1：High入力	R

m = 0 ～ 5, 9

n = 00 ～ 15

x = 1 ～ 4

注 1. ポート 1 ～ 4 に対応しています。

ポートコントロールレジスタ 2（PCNTR2/EIDR/PIDR）は、32 ビットおよび 16 ビット単位での、Pmn 状態およびポートイベント入力データへのリードアクセスを可能にします。

PCNTR2 は、Pmn 状態およびポートイベント入力データを設定し、32 ビット単位でアクセスされます。EIDRn（PCNTR2 のビット [31:16]）および PIDRn（PCNTR2 のビット [15:0]）はそれぞれ 16 ビット単位でアクセスがされます。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは、読むと不定値が読めます。

PIDRn ビットは、PmnPFS.PMR ビットと PmnPFS.PDR ビットの設定値にかかわらず、ポートの個々の端子状態を反映します。PORTm.PCNTR2 レジスタの PIDRn ビットは、PFS.PmnPFS レジスタの PIDR ビットと同じ働きをします。

以下の機能のいずれかが有効な場合、端子の状態は PIDRn ビットに反映されません。

- メインクロック発振器（MOSC）
- サブクロック発振器（SOSC）
- CS 領域コントローラ（CSC）
- アナログ機能（ASEL = 1）
- 静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）
- セグメント LCD コントローラ（SLCDC）
- USB2.0 フルスピードモジュール（USBFS）

EIDRn ビットは、ELC_PORTx 信号の発生時に端子の状態をラッチします。PmnPFS.PMR ビットおよび PmnPFS.PDR ビットが 0 の場合にのみ、EIDRn ビットに端子状態を入力できます。PmnPFS.ASEL ビットが 1 の場合は、対応する端子の状態は EIDRn ビットに反映されません。

20.2.3 ポートコントロールレジスタ 3（PCNTR3/PORR/POSR）

アドレス PORT0.PCNTR3 4004 0008h, PORT1.PCNTR3 4004 0028h, PORT2.PCNTR3 4004 0048h, PORT3.PCNTR3 4004 0068h, PORT4.PCNTR3 4004 0088h, PORT5.PCNTR3 4004 00A8h, PORT9.PCNTR3 4004 0128h

PORT0.PORR 4004 0008h, PORT1.PORR 4004 0028h, PORT2.PORR 4004 0048h, PORT3.PORR 4004 0068h, PORT4.PORR 4004 0088h, PORT5.PORR 4004 00A8h, PORT9.PORR 4004 0128h,

PORT0.POSR 4004 000Ah, PORT1.POSR 4004 002Ah, PORT2.POSR 4004 004Ah, PORT3.POSR 4004 006Ah, PORT4.POSR 4004 008Ah, PORT5.POSR 4004 00AAh, PORT9.POSR 4004 012Ah

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	PORR 15	PORR 14	PORR 13	PORR 12	PORR 11	PORR 10	PORR 09	PORR 08	PORR 07	PORR 06	PORR 05	PORR 04	PORR 03	PORR 02	PORR 01	PORR 00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	POSR 15	POSR 14	POSR 13	POSR 12	POSR 11	POSR 10	POSR 09	POSR 08	POSR 07	POSR 06	POSR 05	POSR 04	POSR 03	POSR 02	POSR 01	POSR 00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	POSRn	Pmn出力設定	0：出力に影響なし 1：High出力	W
b31-b16	PORRn	Pmn出力リセット	0：出力に影響なし 1：Low出力	W

m = 0 ～ 5, 9

n = 00 ～ 15

注 . EORRn または EOSRn を設定した場合、PODRn、PORRn、および POSRn への書き込みは禁止されます。

注 . PORRn ビットと POSRn ビットを同時に設定してはいけません。

ポートコントロールレジスタ 3（PCNTR3/PORR/POSR）は、32 ビットおよび 16 ビットの書き込み可能なレジスタで、ポート出力データの設定またはリセットを制御します。

PCNTR3 はポート出力データの設定またはリセットを制御し、32 ビット単位で設定されます。

PORR（PCNTR3 のビット [31:16]）および POSR（PCNTR3 のビット [15:0]）はそれぞれ 16 ビット単位でアクセスされます。

POSR ビットがソフトウェア書き込みによって設定されると、PODR ビットが変更されます。たとえば P100 の場合、PORT1.PCNTR3.POSR00 = 1 であると、PORT1.PCNTR1.PODR00 は 1 を出力します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。書く場合、常に 0 としてください。P200、P214、P215 は入力専用です。そのため PORT2.PCNTR3.POSR00、PORT2.PCNTR3.POSR14、PORT2.PCNTR3.POSR15 は予約ビットです。

PORR ビットがソフトウェア書き込みによってリセットされると、PODR ビットが変更されます。たとえば P100 の場合、PORT1.PCNTR3.PORR00 = 1 であると、PORT1.PCNTR1.PODR00 は 0 を出力します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。書く場合、常に 0 としてください。P200、P214、P215 は入力専用です。そのため PORT2.PCNTR3.PORR00、PORT2.PCNTR3.PORR14、PORT2.PCNTR3.PORR15 は予約ビットです。

20.2.4 ポートコントロールレジスタ 4（PCNTR4/EORR/EOSR）

アドレス PORT1.PCNTR4 4004 002Ch, PORT2.PCNTR4 4004 004Ch, PORT3.PCNTR4 4004 006Ch, PORT4.PCNTR4 4004 008Ch
PORT1.EORR 4004 002Ch, PORT2.EORR 4004 004Ch, PORT3.EORR 4004 006Ch, PORT4.EORR 4004 008Ch,
PORT1.EOSR 4004 002Eh, PORT2.EOSR 4004 004Eh, PORT3.EOSR 4004 006Eh, PORT4.EOSR 4004 008Eh

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	EORR 15	EORR 14	EORR 13	EORR 12	EORR 11	EORR 10	EORR 09	EORR 08	EORR 07	EORR 06	EORR 05	EORR 04	EORR 03	EORR 02	EORR 01	EORR 00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	EOSR 15	EOSR 14	EOSR 13	EOSR 12	EOSR 11	EOSR 10	EOSR 09	EOSR 08	EOSR 07	EOSR 06	EOSR 05	EOSR 04	EOSR 03	EOSR 02	EOSR 01	EOSR 00
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	EOSRn	Pmnイベント出力設定	ELC_PORTxの発生時： 0：出力に影響なし 1：High出力	R/W
b31-b16	EORRn	Pmnイベント出力リセット	ELC_PORTxの発生時： 0：出力に影響なし 1：Low出力	R/W

m = 1 ～ 4
n = 00 ～ 15
x = 1 ～ 4
注 . EORRn または EOSRn を設定した場合、PODRn、PORRn、および POSRn への書き込みは禁止されます。
注 . EORRn ビットと EOSRn ビットを同時に設定してはいけません。

ポートコントロールレジスタ 4 は、32 ビットおよび 16 ビットの読み出し／書き込み可能なレジスタで、ELC からのイベント入力によりポート出力データの設定またはリセットを制御します。

PCNTR4 は、ELC からのイベント入力によりポート出力データの設定またはリセットを制御し、32 ビット単位で設定されます。

EORR（PCNTR4 のビット [31:16]）および EOSR（PCNTR4 のビット [15:0]）は 16 ビット単位でアクセスされます。

EOSR ビットが ELC_PORTx 信号の発生によって設定されると、PODR ビットが変更されます。たとえば P100 の場合、ELC_PORTx 信号の発生時に PORT1.PCNTR4.EOSR00 が 1 になると、PORT1.PCNTR1.PODR00 は 1 を出力します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。書く場合、常に 0 としてください。P200、P214、P215 は入力専用です。そのため PORT2.PCNTR4.EOSR00、PORT2.PCNTR4.EOSR14、および PORT2.PCNTR4.EOSR15 は予約ビットです。

EORR ビットが ELC_PORTx 信号の発生によってリセットされると、PODR ビットが変更されます。たとえば P100 の場合、ELC_PORTx の発生時に PORT1.PCNTR4.EORR00 が 1 になると、PORT1.PCNTR1.PODR00 は 0 を出力します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。書く場合、常に 0 としてください。P200、P214、P215 は入力専用です。そのため PORT2.PCNTR4.EORR00、PORT2.PCNTR4.EORR14、PORT2.PCNTR4.EORR15 は予約ビットです。

20.2.5 ポート mn 端子機能選択レジスタ（PmnPFS/PmnPFS_HA/PmnPFS_BY）(m = 0 ～ 5, 9; n = 00 ～ 15)

アドレス PFS.P004PFS 4004 0810h, PFS.P010PFS 4004 0828h, PFS.P011PFS 4004 082Ch, PFS.P014PFS 4004 0838h, PFS.P015PFS 4004 083Ch, PFS.P100PFS 4004 0840h～PFS.P111PFS 4004 086Ch, PFS.P200PFS 4004 0880h, PFS.P201PFS 4004 0884h, PFS.P204PFS 4004 0890h～PFS.P206PFS 4004 0898h, PFS.P212PFS 4004 08B0h～PFS.P215PFS 4004 08BCh, PFS.P300PFS 4004 08C0h, PFS.P402PFS 4004 0908h, PFS.P404PFS 4004 0910h, PFS.P407PFS 4004 091Ch, PFS.P409PFS 4004 0924h, PFS.P414PFS 4004 0938h, PFS.P501PFS 4004 0944h, PFS.P914PFS 4004 0A78h, PFS.P915PFS 4004 0A7Ch,

PFS.P004PFS_HA 4004 0812h, PFS.P010PFS_HA 4004 082Ah, PFS.P011PFS_HA 4004 082Eh, PFS.P014PFS_HA 4004 083Ah, PFS.P015PFS_HA 4004 083Eh, PFS.P100PFS_HA 4004 0842h～PFS.P111PFS_HA 4004 086Eh, PFS.P200PFS_HA 4004 0882h, PFS.P201PFS_HA 4004 0886h, PFS.P204PFS_HA 4004 0892h～PFS.P206PFS_HA 4004 089Ah, PFS.P212PFS_HA 4004 08B2h～PFS.P215PFS_HA 4004 08BEh, PFS.P300PFS_HA 4004 08C2h, PFS.P402PFS_HA 4004 090Ah, PFS.P404PFS_HA 4004 0912h, PFS.P407PFS_HA 4004 091Eh, PFS.P409PFS_HA 4004 0926h, PFS.P414PFS_HA 4004 093Ah, PFS.P501PFS_HA 4004 0946h, PFS.P914PFS_HA 4004 0A7Ah, PFS.P915PFS_HA 4004 0A7Eh,

PFS.P004PFS_BY 4004 0813h, PFS.P004PFS_BY 4004 082Bh, PFS.P004PFS_BY 4004 082Fh, PFS.P004PFS_BY 4004 083Bh, PFS.P015PFS_BY 4004 083Fh, PFS.P100PFS_BY 4004 0843h～PFS.P004PFS_BY 4004 086Fh, PFS.P200PFS_BY 4004 0883h, PFS.P201PFS_BY 4004 0887h, PFS.P204PFS_BY 4004 0893h～PFS.P206PFS_BY 4004 089Bh, PFS.P212PFS_BY 4004 08B3h～PFS.P215PFS_BY 4004 08BFh, PFS.P300PFS_BY 4004 08C3h, PFS.P402PFS_BY 4004 090Bh, PFS.P404PFS_BY 4004 0913h, PFS.P407PFS_BY 4004 091Fh, PFS.P409PFS_BY 4004 0927h, PFS.P414PFS_BY 4004 093Bh, PFS.P501PFS_BY 4004 0947h, PFS.P914PFS_BY 4004 0A7Bh, PFS.P915PFS_BY 4004 0A7Fh

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	PSEL[4:0]					—	—	—	—	—	—	—	PMR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0（注2）

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ASEL	ISEL	EOF	EOR	—	DSCR	—	—	—	NCODR	—	PCR	—	PDR	PIDR	PODR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0（注2）	0	0	0	0	0	0（注2）	0	0	x	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PODR	ポート出力データ	0：Low出力 1：High出力	R/W
b1	PIDR	ポート入力データ	0：Low入力 1：High入力	R
b2	PDR	ポート方向	0：入力（入力端子として機能） 1：出力（出力端子として機能）	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	PCR	プルアップ制御	0：入力プルアップ無効 1：入力プルアップ有効	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	NCODR	Nチャネルオープンドレイン制御	0：CMOS出力 1：NMOSオープンドレイン出力	R/W
b9-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10	DSCR	ポート駆動能力	0：低駆動 1：中駆動	R/W
b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13-b12	EOF/EOR	立ち下がり時イベント／立ち上がり時イベント（注1）	b13 b12 0 0：Don't care 0 1：立ち上がりエッジ検出 1 0：立ち下がりエッジ検出 1 1：両エッジ検出	R/W
b14	ISEL	IRQ入力許可	0：IRQn入力端子として使用しない 1：IRQn入力端子として使用する	R/W
b15	ASEL	アナログ入力許可	0：アナログ端子として使用しない 1：アナログ端子として使用する	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b16	PMR	ポートモード制御	0：汎用入出力端子として使用する 1：周辺機能用の入出力ポートとして使用する	R/W
b23-b17	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b28-b24	PSEL[4:0]	周辺機能選択	周辺機能を選択します。各端子の機能については、本章の関連する表を参照してください。	R/W
b31-b29	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. ポート 1 ～ 4 に対応しています。
注 2. P108、P109、P110、P201、P300、P914、P915 の初期値は 0000_0000h 以外になります。
P108 は 0001_0010h、P109 は 0001_0000h、P110 は 0001_0010h、P201 は 0000_0010h、P300 は 0001_0010h、P914 は 0001_0000h、P915 は 0001_0000h となります。
ポート mn 端子機能選択レジスタ（PmnPFS）は、端子機能を選択します。

ポート mn 端子機能選択レジスタ（PmnPFS/PmnPFS_HA/PmnPFS_BY）は、32 ビット、16 ビットおよび 8 ビットの読み出し／書き込み可能なコントロールレジスタです。PmnPFS はポート mn 機能の選択を制御し、32 ビット単位で設定されます。PmnPFS_HA（PmnPFS のビット [15:0]）は 16 ビット単位でアクセスされます。PmnPFS_BY（ビット [7:0]）は 8 ビット単位でアクセスされます。

PDR ビット、PIDR ビット、PODR ビットは、PCNTR レジスタと同じ機能を果たします。これらのビットを読むと、PCNTR 値が読めます。

PCR ビットは、ポートの各端子に対して入力プルアップ抵抗を有効または無効にします。端子が入力状態にあって、PORTm.PCR の対応するビットが 1 になっている場合、その端子に接続されたプルアップ抵抗が有効になります。汎用ポート出力端子、または周辺機能出力端子に設定されている場合は、PCR の設定値にかかわらず、プルアップ抵抗は無効になります。リセット状態でもプルアップ抵抗は無効になります。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

NCODR ビットは、ポート端子の出力タイプを設定します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

DSCR ビットは、ポートの駆動能力を切り替えます。端子の駆動能力が固定されている場合、対応するビットは読み出し／書き込み可能ですが、駆動能力は変更できません。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

EOF/EOR ビットは、ポートグループ入力信号のエッジ検出方法を選択します。立ち上がりエッジ検出、立ち下がりエッジ検出、または両エッジ検出を選択できます。EOR/EOF ビットを 01b、10b、または 11b にすると、入出力セルの入力許可がアサートされます。それに続いて、外部端子からイベントパルスが入力され、GPIO が ELC にイベントパルスを出力します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

ISEL ビットは、IRQ 入力端子を設定します。周辺機能と組み合わせて使用することも可能です。ただし、同じ番号の IRQn（外部端子割り込み）を 2 つ以上の端子で許可することは禁止です。

ASEL ビットは、アナログ端子を設定します。本ビットでアナログ端子に設定する場合、以下のように指定します。

1. ポートモード制御ビット（PmnPFS.PMR）で、汎用入出力ポートに指定します。
2. プルアップ制御ビット（PmnPFS.PCR）で、入力プルアップ抵抗を無効にします。
3. ポート方向ビット（PmnPFS.PDR）で、入力に設定します。このとき、端子状態を読むことはできません。PmnPFS レジスタは、ライトプロテクトレジスタ（PWPR）によって保護されています。書き込み禁止を解除してから、レジスタを書き換えてください。

未指定の IRQn に対する ISEL ビットは予約ビットです。未指定のアナログ入出力に対する ASEL ビットは予約ビットです。

PMR ビットは、ポートの端子機能を設定します。存在しない端子に対応するビットは予約ビットです。予約ビットは読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

PSEL[4:0] ビットは、周辺機能を割り当てます。

製品ごとの周辺選択設定の詳細は、20.6　製品ごとの周辺選択設定を参照してください。

20.2.6　書き込みプロテクトレジスタ（PWPR）

アドレス PMISC.PWPR 4004 0D03h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	B0WI	PFSWE	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	PFSWE	PmnPFS レジスタ書き込み許可	0：PmnPFS レジスタへの書き込みを禁止 1：PmnPFS レジスタへの書き込みを許可	R/W
b7	B0WI	PFSWE ビット書き込み禁止	0：PFSWE ビットへの書き込みを許可 1：PFSWE ビットへの書き込みを禁止	R/W

PFSWE ビット（PmnPFS レジスタ書き込み許可）

PFSWE ビットを 1 にしたときのみ、PmnPFS レジスタに対する書き込みが許可されます。最初に B0WI ビットに 0 を書いてから、PFSWE ビットを 1 にする必要があります。

B0WI ビット（PFSWE ビット書き込み禁止）

B0WI ビットを 0 にしたときのみ、PFSWE ビットに対する書き込みが許可されます。

20.3 動作説明

20.3.1 汎用入出力ポート

P108、P109、P110、P300、P914、P915 以外のすべての端子は、リセット後は汎用入出力ポートとして動作します。汎用入出力ポートは各ポート 16 ビットで構成され、ポートコントロールレジスタ（PCNTRn、n = 1 ～ 4）によるポート単位のアクセス、または端子機能選択レジスタによる端子単位のアクセスが可能です。これらのレジスタの詳細は、20.2 レジスタの説明を参照してください。

各ポートのレジスタを以下に示します。

- ポート方向ビット（PDRn）：入力／出力の方向を選択する
- ポート出力データビット（PODRn）：出力用データを格納する
- ポート入力データビット（PIDRn）：端子状態を示す
- イベント入力データビット（EIDRn）：ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号発生時の端子状態を示す
- ポート出力設定ビット（POSRn）：ソフトウェア書き込み発生時の出力値を示す
- ポート出力リセットビット（PORRn）：ソフトウェア書き込み発生時の出力値を示す
- イベント出力設定ビット（EOSRn）：ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号発生時の出力値を示す
- イベント出力リセットビット（EORRn）：ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号発生時の出力値を示す

20.3.2 ポート機能選択

下記のポート機能を使用して、各端子の設定が可能です。

- 入出力設定：相補出力またはオープンドレイン出力、プルアップ制御、および駆動強度
- 汎用入出力：ポート方向、出力データ設定、および読み出し入力データ
- 代替機能：端子への設定機能の割り当て

各端子はそれぞれ端子機能選択レジスタ（PmnPFS）に対応しており、PODR、PIDR、PDR などの対応ビットを持ちます。さらに、PmnPFS レジスタは以下のビットを持ちます。

- PCR：入力プルアップ MOS のオン／オフを切り替えるためのプルアップ抵抗制御ビット
- NCODR：各端子の出力タイプを選択するための N チャネルオープンドレイン制御ビット
- DSCR：駆動能力を選択するための駆動能力制御ビット
- EOR：ポート入力の立ち上がりエッジ検出に使用する立ち上がり時イベントビット
- EOF：ポート入力の立ち下がりエッジ検出に使用する立ち下がり時イベントビット
- ISEL：IRQ 入力端子を設定するための IRQ 入力許可ビット
- ASEL：アナログ端子を設定するためのアナログ入力許可ビット
- PMR：各ポートの端子機能を設定するためのポートモードビット
- PSEL：対応する周辺機能を選択するためのポート機能選択ビット

これらの設定を実行するには、端子機能選択レジスタに対して単一レジスタアクセスを行います。詳細は、20.2.5 ポート mn 端子機能選択レジスタ（PmnPFS/PmnPFS_HA/PmnPFS_BY）(m = 0 ～ 5, 9; n = 00 ～ 15) を参照してください。

20.3.3 ELC のポートグループ機能

本 MCU では、ポート 1 ～ 4 がポートグループ機能に割り当てられています。

20.3.3.1 ELC から ELC_PORT1, 2, 3, 4 が入力された場合の動作

本 MCU は、ELC から ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号が入力されたとき、以下の 2 つの機能をサポートしています。

(1) EIDR への入力

GPI 機能（PmnPFS レジスタで PDR = 0 および PMR = 0）では、ELC から ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号が入力されると、入出力セルの入力許可がアサートされ、外部端子からのデータが EIDR ビットに読み出されます。

GPO 機能（PDR = 1）または周辺モード（PMR = 1）では、外部端子から EIDR ビットに 0 が入力されます。

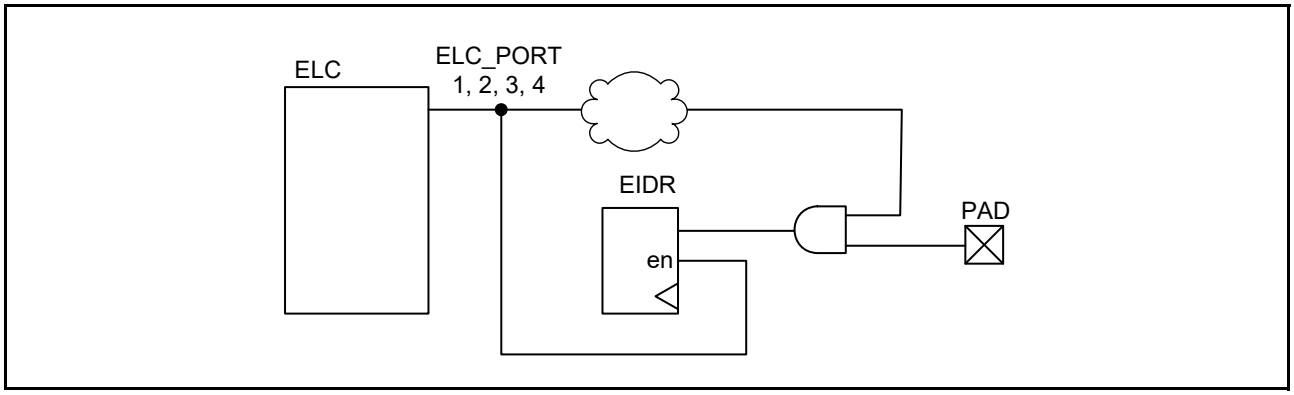


図 20.2 イベントポート入力データ

(2) EOSR/EORR による PODR からの出力

ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号の発生時に、EOSR/EORR ビットの設定値に基づいて、PODR から外部端子へデータが出力されます。

- EOSR を 1 にすると、ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号発生時に PODR レジスタは外部端子へ 1 を出力します。EOSR = 0 の場合、PODR の値はそのままです
- EORR を 1 にすると、ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号発生時に PODR レジスタは外部端子へ 0 を出力します。EORR = 0 の場合、PODR の値はそのままです

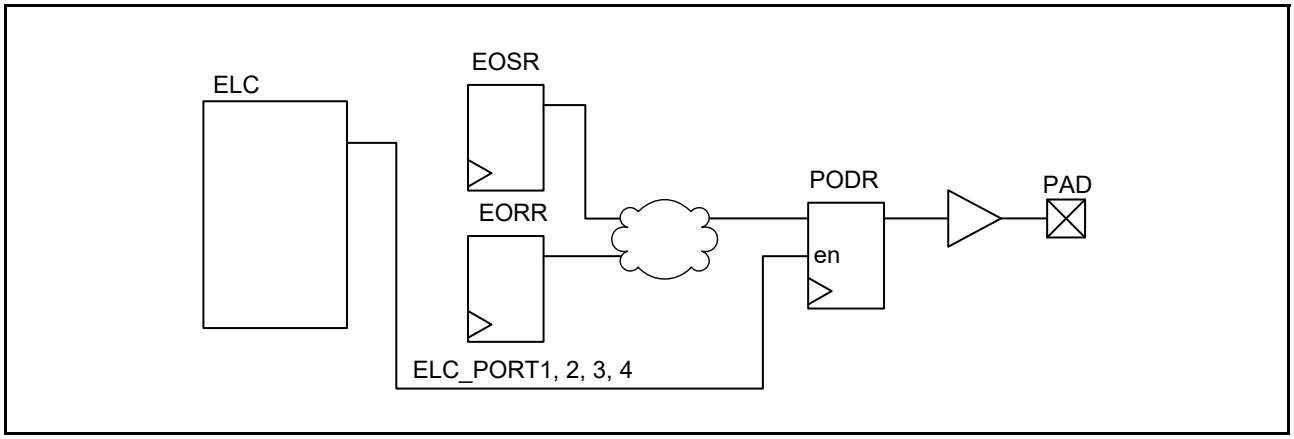


図 20.3 イベントポート出力データ

20.3.3.2 イベントパルスが ELC に出力された場合の動作

外部端子から ELC にイベントパルスを出力するには、PmnPFS.EOR/EOF ビットを設定します。詳細は、20.2.5 ポート mn 端子機能選択レジスタ（PmnPFS/PmnPFS_HA/PmnPFS_BY）(m = 0 ～ 5, 9; n = 00 ～ 15) を参照してください。EOR/EOF ビットを設定すると、入出力セルの入力許可がアサートされます。

外部端子のデータが入力となります。たとえばポート 1 に対して、P100 から P111 へデータが入力されると、これら 12 端子のデータは OR 論理で構成されます。このデータは、ワンショットパルスとして形成され、ELC に入力されます。ポート 2 ～ 4 の動作も同じです。

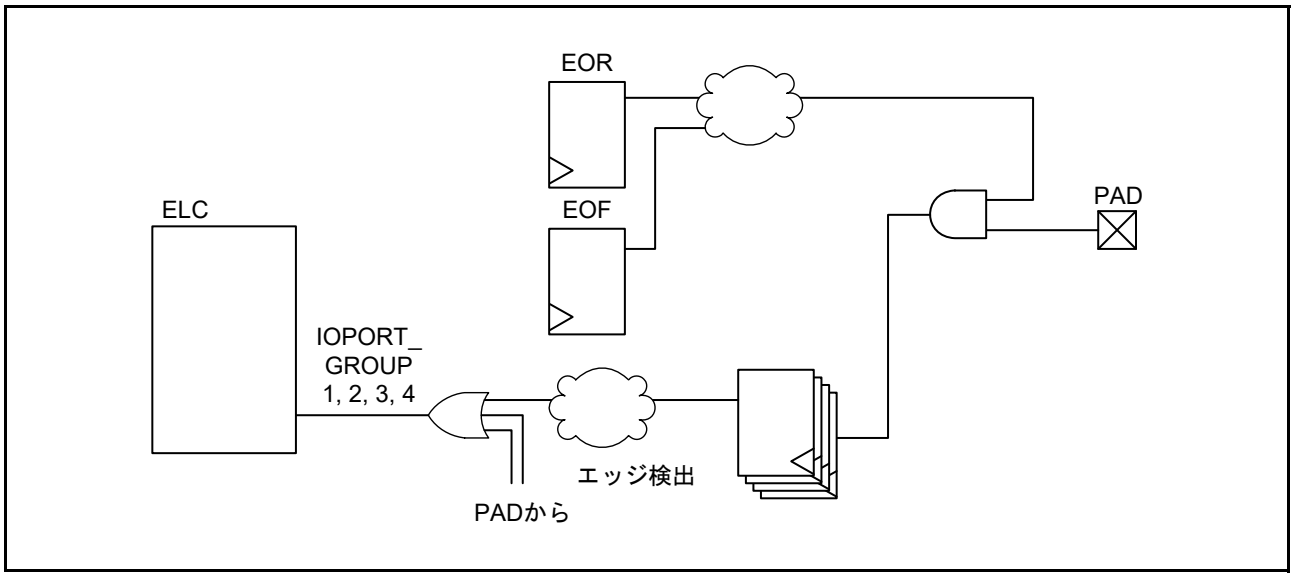


図 20.4 イベントパルスの発生

20.4 未使用端子の処理

表 20.3 に、未使用端子の処理方法を示します。

表 20.3 未使用端子の処理

端子名	内容
P201/MD	モード端子として使用
RES	抵抗を介してVCCに接続（プルアップ）
USB_DP, USB_DM	P914PFS.PMRおよびP915PFS.PMRビットがともに1の場合、端子を開放。 P914PFS.PMRまたはP915PFS.PMRビットのいずれかが0の場合、ポート1～9と同じ方法で設定
P200/NMI	抵抗を介してVCCに接続（プルアップ）
P212/EXTAL	メインクロック発振器を使用しない場合、MOSCCR.MOSTPビットを1（汎用ポートP212）に設定。 本端子をポートP212として使用しない場合、ポート1～9と同じ方法で設定
P213/XTAL	メインクロック発振器を使用しない場合、MOSCCR.MOSTPビットを1（汎用ポートP213）に設定。 本端子をポートP213として使用しない場合、ポート1～9と同じ方法で設定 外部クロックがEXTAL端子に入力される場合、この端子は開放したまま
P215/XCIN	サブクロック発振器を使用しない場合、SOSCCR.SOSTPビットを1（汎用ポートP215）に設定。 本端子をポートP215として使用しない場合、ポート1～9と同じ方法で設定
P214/XCOUT	サブクロック発振器を使用しない場合、SOSCCR.SOSTPビットを1（汎用ポートP214）に設定。 本端子をポートP214として使用しない場合、ポート1～9と同じ方法で設定
P004, P010, P011, P014, P015	入力（PCNTR1.PDRn = 0）に設定した場合、対応する端子は抵抗を介してAVCC0に接続（プルアップ）、または抵抗を介してAVSS0に接続（プルダウン）（注1）
P1x～P9x（P200, P201, P212～P215を除く）	入力（PCNTR1.PDRn = 0）に設定した場合、対応する端子は抵抗を介してVCCに接続（プルアップ）、または抵抗を介してVSSに接続（プルダウン）（注1）（注2） 出力（PCNTR1.PDRn = 1）に設定した場合、端子を開放（注1）（注3）

注 1. PmnPFS.PMR ビット、PmnPFS.ISEL ビット、PmnPFS.PCR ビット、および PmnPFS.ASEL ビットを 0 にクリアしてください。

注 2. P108、P110、および P300 端子は、初期値（PmnPFS.PCR = 1）から有効にされた入力プルアップなので、抵抗を介して VCC に接続（プルアップ）することを推奨します。

注 3. P109 端子は、初期値から出力であるため、出力（PCNTR1.PDRn = 1）として設定することを推奨します。

20.5 使用上の注意事項

20.5.1 端子機能の設定手順

入出力端子機能を設定するには、下記の手順に従ってください。

1. PWPR.B0WI ビットをクリアします。PWPR.PFSWE ビットに書き込みできるようになります。
2. PWPR.PFSWE ビットを 1 にします。PmnPFS レジスタに書き込みできるようになります。
3. 当該端子の PMR のポートモード制御ビットをクリアして、汎用入出力ポートに設定します。
4. PmnPFS.PSEL[4:0] ビットによって、この端子の入出力機能を設定します。
5. 必要に応じて PMR を 1 にして、選択した入出力機能に切り替えます。
6. PWPR.PFSWE ビットをクリアします。PmnPFS レジスタへの書き込みが禁止されます。
7. PWPR.B0WI ビットを 1 にします。PWPR.PFSWE ビットへの書き込みが禁止されます。

20.5.2 ポートグループ入力の使用手順

ポートグループ入力（ポート 1 ～ 4）を使用するには、下記の手順に従ってください。

1. ELSRx.ELS[7:0] ビットを 00000000b にして、意図しないパルスを無視します。詳細は、「19. イベントリンクコントローラ（ELC）」を参照してください。
2. PmnPFS.EOF/EOR ビットを設定して、立ち上がりエッジ検出、立ち下がりエッジ検出、または両エッジ検出を指定します。
3. ダミーリードを実行するか、少しの間（たとえば 100ns）待ちます。意図しないパルスを無視するかどうかは、外部端子の初期値によって異なります。
4. ELSRx.ELS[8:0] ビットを設定して、イベント信号を許可します。

20.5.3 ポート出力データレジスタ（PODR）の概要

本レジスタは下記のようにデータを出力します。

1. ELC_PORT1, 2, 3, 4 信号の発生時に PCNTR4.EORR が 1 になると、0 を出力する。
2. PCNTR4.EOSR ビットを 1 にすると、ELC からの ELC_PORT1, 2, 3, 4 発生時に 1 を出力する。
3. PCNTR3.PORR ビットを 1 にすると、0 を出力する。
4. PCNTR3.POSR ビットを 1 にすると、1 を出力する。
5. PCNTR1.PODR ビットが設定されると、0 または 1 を出力する。
6. PmnPFS.PODR ビットが設定されると、0 または 1 を出力する。

上記の番号は、PODR への書き込み優先順位に相当しています。たとえば、上記の 1. と 3. が同時に発生した場合、優先度の高い 1. が実行されます。

20.5.4 アナログ機能を使う場合の注意事項

アナログ機能を使用するには、ポートモードコントロールビット（PMR）とポート方向ビット（PDR）の対応するビットを両方とも 0 にして、端子が汎用入力ポートとして動作できるようにしてください。その後、ポート mn 端子機能選択レジスタのアナログ入力許可ビット（ASEL）を 1 にしてください。

20.5.5 入出力バッファの仕様

P402 端子が内部プルアップ抵抗で出力または入力に構成されている場合は、バッテリバックアップ機能を使用するか否かにかかわらず、I/O レジスタを設定する前に、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にしてください。この設定は、パワーオンリセット後に一度だけ必要です。バッテリバックアップ機能を使用する場合は、バッテリバックアップ機能関連のレジスタを設定した後、再度 VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 0 にしてください。

VBTCR1.BPWSWSTP ビットの設定フローが、図 12.2 に示されています。

P402 端子は、RTC 入力端子 RTCIC0 として使用できます。VBTICTLR レジスタでこれらの入力端子を有効にすると、端子の出力機能は強制的に無効になります。そのため、ポート機能を使用するには、VBTICTLR レジスタを 0 にする必要があります。

注 . VBTICTLR レジスタは、リセット時に初期化されません。詳細は、「12. バッテリバックアップ機能」を参照してください。

20.5.6 USB_DP 端子および USB_DM 端子の選択

USB_DP 端子は P914 と、USB_DM 端子 P915 端子と共有されます。USB_DP 端子と P914 端子は PFS.P914PFS.PMR ビットで設定できます。USB_DM 端子と P915 端子は PFS.P915PFS.PMR ビットで設定できます。表 20.4 に、選択した端子ごとの、PFS.P914PFS.PMR ビットおよび PFS.P915PFS.PMR ビットの設定値を示します。

表 20.4 USB端子／PORT端子の選択

PMRビットの設定		選択した端子	
P914PFS.PMRビット	P915PFS.PMRビット	P914/USB_DP端子	P915/USB_DM端子
0	0	P914	P915
0	1	P914	P915
1	0	P914	P915
1	1	USB_DP	USB_DM

注 . P914/USB_DP および P915/USB_DM を GPIO 端子（P914 および P915）として使用する場合、USB レジスタは初期値で使用してください。

注 . P914/USB_DP および P915/USB_DM を USB 端子（USB_DP および USB_DM）として使用する場合、P914 と P915 の GPIO レジスタは初期値で使用してください。

注 . P914/USB_DP および P915/USB_DM を GPIO 端子または USB 端子として使用する場合、これらの端子はリセット後に 1 回だけ設定してください。

20.5.7 USBFS/GPIO 機能を使用した P914 および P915 のプルアップ／プルダウン設定

P914 および P915 を GPIO 端子として使用する場合、それらの動作は USBFS レジスタのプルアップ／プルダウン機能による影響を受けます。

そのため、GPIO 機能を使用する場合は SYSCFG.DMRPU、SYSCFG.DPRPU および SYSCFG.DRPD ビットを使用して、あらかじめ USBFS レジスタのプルアップ／プルダウン制御を無効にしてください。

20.6 製品ごとの周辺選択設定

本節では、PmnPFS レジスタによる端子機能選択設定について詳しく説明します。ただし、同じ機能を 2 つ以上の端子に同時に割り当てないでください。

表 20.5 入出力端子機能のレジスタ設定（ポート0）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子				
		P004	P010	P011	P014	P015
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z				
01100b	CTSU	—	TS30	TS31	—	TS28
ASEL ビット		AN004/ AMP2O	AN005/ VREFH0/ AMP2-	AN006/ VREFL0/ AMP2+	AN009/ DA0	AN010
ISEL ビット		IRQ3	IRQ14	IRQ15	—	IRQ7
PCR ビット		○	○	○	○	○
DSCR ビット		低／中	低／中	低／中	低／中	低／中

○：使用可能
—：設定禁止

表 20.6 入出力端子機能のレジスタ設定（ポート1）（1）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子							
		P100	P101	P102	P103	P104	P105	P106	P107
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z							
00001b	AGT	AGTIO0	AGTEE0	AGTO0	—	—	—	—	—
00010b	GPT	GTETRGA	GTETRGB	GTOWLO	GTOWUP	GTETRGB	GTETRGA	—	—
00011b	GPT	GTIOC5B	GTIOC5A	GTIOC2B	GTIOC2A	GTIOC1B	GTIOC1A	GTIOC8B	GTIOC8A
00100b	SCI	RXD0/ MISO0/ SCL0	TXD0/ MOSI0/ SDA0	SCK0	CTS0_RTS0/ SS0	RXD0/ MISO0/ SCL0	—	—	—
00101b	SCI	SCK1	CTS1_RTS1/ SS1	TXD2/ MOSI2/ SDA2	—	—	—	—	—
00110b	SPI	MISOA	MOSIA	RSPCKA	SSLA0	SSLA1	SSLA2	SSLA3	—
00111b	IIC	SCL1	SDA1	—	—	—	—	—	—
01000b	KINT	KR00	KR01	KR02	KR03	KR04	KR05	KR06	KR07
01001b	CLKOUT/ ACMPLP/ RTC	—	—	—	—	—	—	—	—
01010b	CAC/ADC14	—	—	ADTRG0	—	—	—	—	—
01100b	CTSU	—	—	—	—	TS13	TS34	—	—
01101b	SLCDC	VL1	VL2	—	VL4	COM0	COM1	COM2	COM3
10000h	CAN	—	—	CRX0	CTX0	—	—	—	—
ASEL ビット		CMPIN0	CMPREF0	AN020/ CMPIN1	AN019/ CMPREF1	—	—	—	—
ISEL ビット		IRQ2	IRQ1	—	—	IRQ1	IRQ0	—	—
NCODR ビット		○	○	○	○	○	○	○	○
PCR ビット		○	○	○	○	○	○	○	○
DSCR ビット		低／中	低／中	低／中	低／中	低／中	低／中	低／中	低／中

○：使用可能
—：設定禁止

表 20.7 入出力端子機能のレジスタ設定（ポート1）（2）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子			
		P108	P109	P110	P111
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	TMS/ SWDIO	TDO/ TRACESWO	TDI	Hi-Z
00001b	AGT	—	—	—	—
00010b	GPT	GTOULO	GTOVUP	GTOVLO	—
00011b	GPT	GTIOC0B	GTIOC1A	GTIOC1B	GTIOC3A
00100b	SCI	—	SCK1	CTS2_RTS2/ SS2	SCK2
00101b	SCI	CTS9_RTS9/ SS9	TXD9/ MOSI9/ SDA9	RXD9/ MISO9/ SCL9	SCK9
00110b	SPI	SSLB0	MOSIB	MISOB	RSPCKB
00111b	IIC	—	—	—	—
01000b	KINT	—	—	—	—
01001b	CLKOUT/ ACMPLP/ RTC	—	CLKOUT	VCOUT	—
01010b	CAC/ADC14	—	—	—	—
01100b	CTSU	—	TS10	—	TS12
01101b	SLCDC	—	SEG52	SEG53	—
10000b	CAN	—	CTX0	CRX0	—
ASELビット		—	—	—	—
ISELビット		—	—	IRQ3	IRQ4
NCODRビット		○	○	○	○
PCRビット		○	○	○	○
DSCRビット		低／中	低／中	低／中	低／中

○：使用可能
—：設定禁止

表 20.8 入出力端子機能のレジスタ設定（ポート2）（1）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子				
		P200	P201	P204	P205	P206
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z				
00001b	AGT	—	—	AGTIO1	AGTO1	—
00010b	GPT	—	—	GTIW	GTIV	GTIU
00011b	GPT	—	—	GTIOC4B	GTIOC4A	—
00100b	SCI	—	—	SCK4	TXD4/ MOSI4/ SDA4	RXD4/ MISO4/ SCL4
00101b	SCI	—	—	SCK9	CTS9_RTS9/ SS9	—
00110b	SPI	—	—	RSPCKB	SSLB0	SSLB1
00111b	IIC	—	—	SCL0	SCL1	SDA1
01001b	CLKOUT/ ACMPLP/ RTC	—	—	—	CLKOUT	—
01010b	CAC/ADC14	—	—	CACREF	—	—
01100b	CTSU	—	—	TS00	TSCAP	TS01
01101b	SLCDC	—	—	SEG23	SEG20	SEG12
10011b	USBFS	—	—	USB_OVRCURB	USB_OVRCURA	USB_VBUSEN
ISELビット		NMI	—	—	IRQ1	IRQ0
NCODRビット		—	○	○	○	○
PCRビット		—	○	○	○	○
DSCRビット		—	低／中	低／中	低／中	低／中

○：使用可能
—：設定禁止

表 20.9 入出力端子機能のレジスタ設定（ポート2）（2）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子			
		P212	P213	P214	P215
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z			
00001b	AGT	AGTEE1	—	—	—
00010b	GPT	GTETRGB	GTETRGA	—	—
00011b	GPT	GTIOC0B	GTIOC0A	—	—
00100b	SCI	—	—	—	—
00101b	SCI	RXD1/ MISO1/ SCL1	TXD1/ MOSI1/ SDA1	—	—
00110b	SPI	—	—	—	—
00111b	IIC	—	—	—	—
01001b	CLKOUT/ ACMPLP/ RTC	—	—	—	—
01010b	CAC/ADC14	—	—	—	—
01100b	CTSU	—	—	—	—
01101b	SLCDC	—	—	—	—
10011b	USBFS	—	—	—	—
ISELビット		IRQ3	IRQ2	—	—
NCODRビット		○	○	—	—
PCRビット		○	○	—	—
DSCRビット		—	—	—	—

○：使用可能
—：設定禁止

表 20.10　入出力端子機能のレジスタ設定（ポート3）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子
		P300
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	TCK/ SWCLK
00001b	AGT	—
00010b	GPT	GTOUUP
00011b	GPT	GTIOC0A
00110b	SPI	SSLB1
ISEL ビット		—
NCODR ビット		O
PCR ビット		O
DSCR ビット		低／中

O：使用可能
—：設定禁止

表 20.11　入出力端子機能のレジスタ設定（ポート4）（1）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子		
		P402	P404	P407
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z		
00001b	AGT	AGTIO0（注2）/ AGTIO1（注2）	—	AGTIO0
00010b	GPT	—	—	—
00011b	GPT	—	GTIOC3B	—
00100b	SCI	—	—	CTS4_RTS4/ SS4
00101b	SCI	RXD1/ MISO1/ SCL1	—	—
00110b	SPI	—	—	SSLB3
00111b	IIC	—	—	SDA0
01001b	CLKOUT/ ACMPLP/ RTC	—	—	RTCOUT
01010b	CAC/ADC14	—	—	ADTRG0
01100b	CTSU	TS18	—	TS03
01101b	SLCDC	SEG06	—	SEG11
10000b	CAN	CRX0	—	—
10011b	USBFS	—	—	USB_VBUS
Don't care		RTCIC0（注1）	—	—
ISEL ビット		IRQ4	—	—
NCODR ビット		O	O	O
PCR ビット		O	O	O
DSCR ビット		低／中	低／中	低／中

O：使用可能
—：設定禁止

注 1.　この端子機能を使用する場合は、該当端子を汎用入力（PmnPFS.PDR ビットおよび PmnPFS.PMR ビットを 0）にしてください。
注 2.　この端子機能を使用する場合は、PmnPFS.PSEL[4:0] ビットおよび AGTIOSEL.SEL[1:0] ビットを設定してください（詳細は、「24.2.10　AGT 端子選択レジスタ（AGTIOSEL）」を参照）。

表 20.12　入出力端子機能のレジスタ設定（ポート 4）（2）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子	
		P409	P414
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z	
00001b	AGT	—	—
00010b	GPT	GTOWUP	—
00011b	GPT	GTIOC5A	GTIOC0B
00100b	SCI	—	—
00101b	SCI	—	—
00110b	SPI	—	SSLA1
00111b	IIC	—	—
01001b	CLKOUT/ ACMPLP/ RTC	—	—
01010b	CAC/ADC14	—	—
01100b	CTSU	—	—
01101b	SLCDC	SEG09	—
10000b	CAN	—	—
10011b	USBFS	—	—
Don't care		—	—
ISEL ビット		IRQ6	IRQ9
NCODR ビット		○	○
PCR ビット		○	○
DSCR ビット		低／中	低／中

○：使用可能
—：設定禁止

注 .　この端子機能を使用する場合は、該当端子の設定を汎用入力にしてください（PmnPFS.PDR ビットおよび PmnPFS.PMR ビットを 0 にする）。

注 .　この端子機能を使用する場合は、PmnPFS.PSEL[4:0] ビットおよび AGTIOSEL.SEL[1:0] ビットを設定してください（詳細は、「24.2.10　AGT 端子選択レジスタ（AGTIOSEL）」を参照）。

表 20.13　入出力端子機能のレジスタ設定（ポート 5）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子
		P501
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z
00001b	AGT	AGTOB0
00010b	GPT	GTIV
00011b	GPT	GTIOC2B
01101b	SLCDC	SEG49
10011b	USBFS	USB_OVRCURA
ASEL ビット		AN017/ CMPIN1
ISEL ビット		IRQ11
NCODR ビット		○
PCR ビット		○
DSCR ビット		低／中

○：使用可能
—：設定禁止

表 20.14 入出力端子機能のレジスタ設定（ポート9）

PSEL[4:0] ビット設定値	機能	端子	
		P914	P915
00000b（リセット後の値）	Hi-Z/JTAG/SWD	Hi-Z	
00001b	AGT	—	—
00100b	SCI	—	—
01011b	BUS	—	—
Don't care		(USB_DP)	(USB_DM)
NCODRビット		—	—
PCRビット		—	—
DSCRビット		—	—

○：使用可能
—：設定禁止

21. キー割り込み機能（KINT）

21.1 概要

キー割り込み（KEY_INTKR）は、キーリターンモードレジスタ（KRM）を設定し、キー割り込み入力端子 KR00 ～ KR07 に立ち上がりエッジまたは立ち下がりエッジを入力することで発生させることができます。表 21.1 にキー割り込み検出端子の配置、表 21.2 に機能の構成、そして図 21.1 にブロック図を示します。

表 21.1 キー割り込み検出端子の配置

フラグ	内容
KRM0	1ビット単位でKR00信号を制御
KRM1	1ビット単位でKR01信号を制御
KRM2	1ビット単位でKR02信号を制御
KRM3	1ビット単位でKR03信号を制御
KRM4	1ビット単位でKR04信号を制御
KRM5	1ビット単位でKR05信号を制御
KRM6	1ビット単位でKR06信号を制御
KRM7	1ビット単位でKR07信号を制御

表 21.2 キー割り込み機能（KINT）の構成

項目	構成
入力	KR00～KR07
コントロールレジスタ	キーリターンコントロールレジスタ（KRCTL） キーリターンモードレジスタ（KRM） キーリターンフラグレジスタ（KRF）

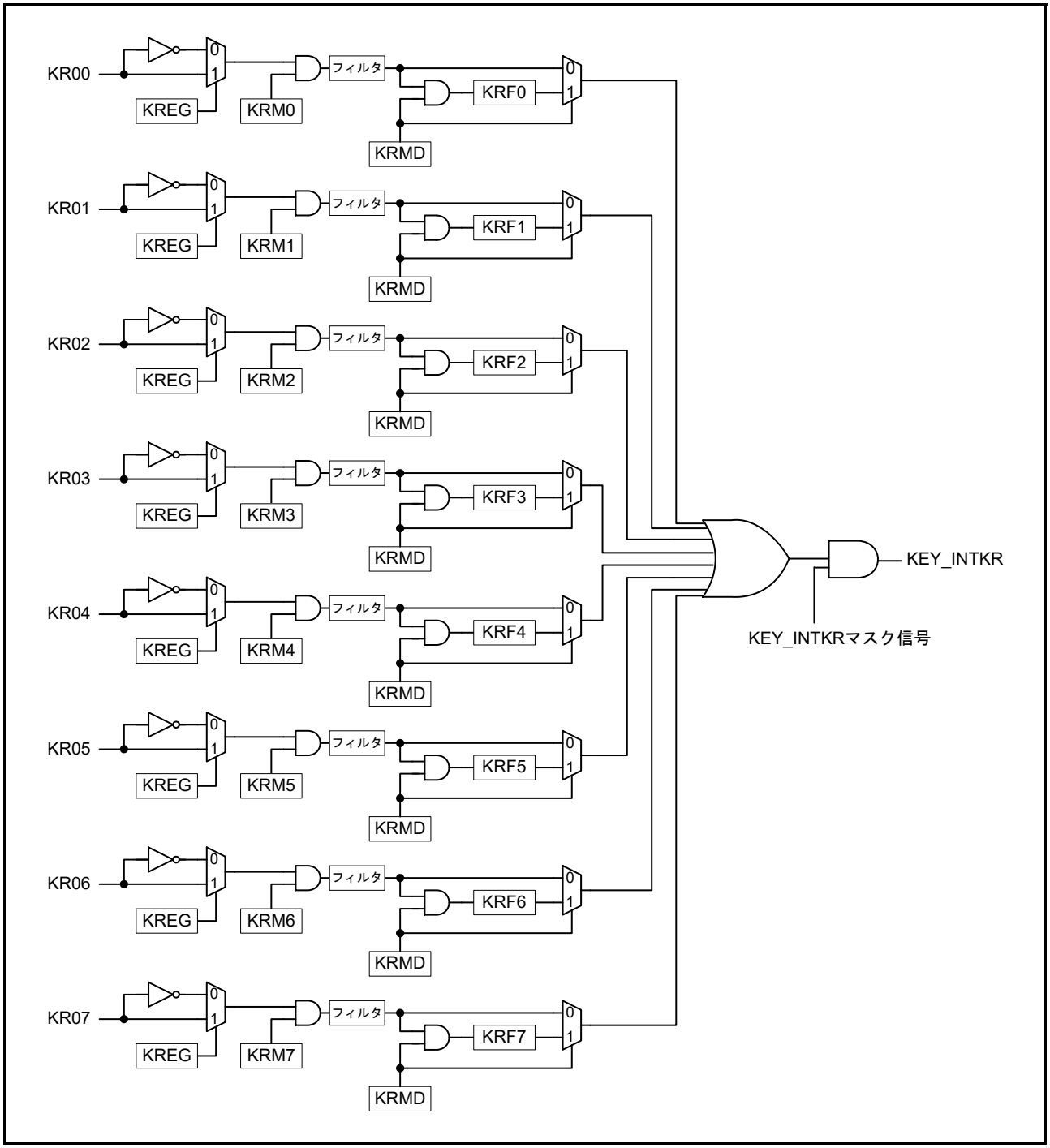


図 21.1　　キー割り込み機能のブロック図

図 21.1 において、すべてのキーリターン要因が OR ゲートでマージされ、マージされたキーリターン要因が AND ゲートで KEY_INTKR マスク信号によってマスクされ、AND ゲートの出力がキー割り込み（KEY_INTKR）になります。KRFn（KRMD = 1）を使用する場合、KEY_INTKR マスク信号は、KRFn をクリアすることでアサートされる出力マスクとして使用されます。

21.2　レジスタの説明

21.2.1　キーリターンコントロールレジスタ（KRCTL）

アドレス　KINT.KRCTL 4008 0000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KRMD	—	—	—	—	—	—	KREG
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	KREG	検出エッジ選択（KR00～KR07）	0：立ち下がりエッジ 1：立ち上がりエッジ	R/W
b6-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	KRMD	キー割り込みフラグ使用状態 （KRF0～KRF7）	0：キー割り込みフラグを使用しない 1：キー割り込みフラグを使用する	R/W

KRCTL レジスタは、キー割り込みフラグ（KRF0 ～ KRF7）の使用状態を制御し、検出エッジを設定するためのレジスタです。

21.2.2　キーリターンフラグレジスタ（KRF）

アドレス　KINT.KRF 4008 0004h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KRF7	KRF6	KRF5	KRF4	KRF3	KRF2	KRF1	KRF0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	KRFn	キー割り込みフラグn	0：キー割り込みの検出なし 1：キー割り込みの検出あり	R/W

n = 0 ～ 7

注 .　KRMD = 0 の場合、KRFn ビットを 1 にすることは禁止されます。
KRFn ビットを 1 に設定しても KRFn の値は変化しません。
KRFn ビットをクリアする場合は、0 を書き込む前に該当ビットが 1 であることを確認し、その後でその他のビットには 1 を書き込んでください。

KRF レジスタは、キー割り込みフラグ（KRF0 ～ KRF7）を制御するレジスタです。

21.2.3 キーリターンモードレジスタ（KRM）

アドレス KINT.KRM 4008 0008h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KRM7	KRM6	KRM5	KRM4	KRM3	KRM2	KRM1	KRM0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	KRMn	キー割り込みモード制御n	0：キー割り込み信号を検出しない 1：キー割り込み信号を検出する	R/W

n = 0 ～ 7

注 .　対応するキー割り込み入力端子をプルアップ抵抗に設定することで、内蔵プルアップ抵抗の適用が可能です。詳細は、「20. I/O ポート」を参照してください。

キー割り込みは PmnPFS.PSEL ビットで割り当てることができます。詳細は、「20. I/O ポート」を参照してください。

キー割り込み入力端子へ入力中の信号が Low レベル（KREG = 0 の場合）または High レベル（KREG = 1 の場合）のとき、KRM レジスタの対象ビットがセットされると割り込みが発生します。この割り込みを無視するには、割り込み処理を禁止してから、KRM レジスタを設定してください。

KRM レジスタは、キー割り込みモードの設定を行うレジスタです。

21.3　動作説明

21.3.1　キー割り込みフラグを使用しない場合（KRMD = 0）

キー割り込み端子 KR00 ～ KR07 に、KREG ビットで指定された有効エッジが入力されたとき、キー割り込み（KEY_INTKR）が発生します。有効エッジが入力されたチャネルを判別するには、キー割り込み（KEY_INTKR）の発生後にポートレジスタを読み出して、ポートのレベルをチェックしてください。

KEY_INTKR 信号は、キー割り込み入力端子（KR00 ～ KR07）の入力レベルに応じて変化します。

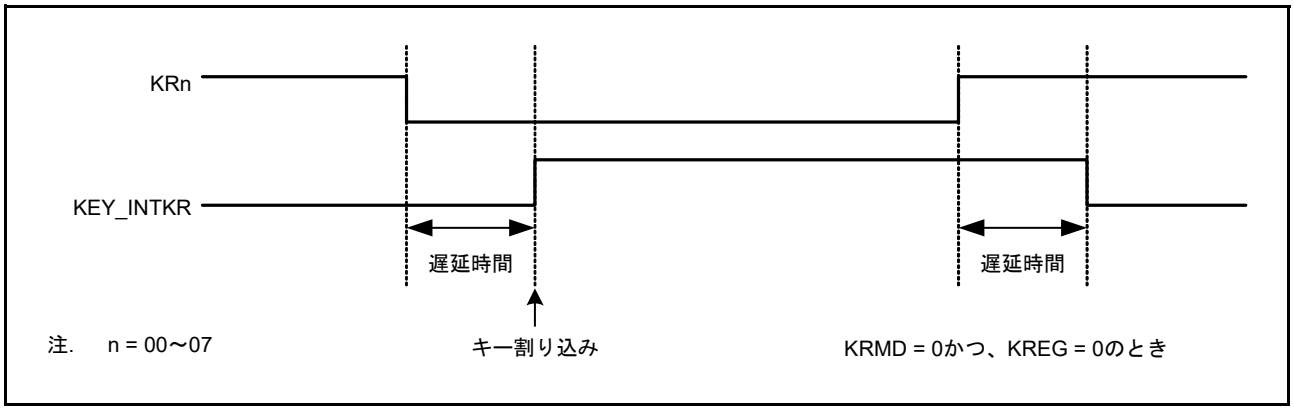


図 21.2　キー割り込みが 1 つのチャネルに入力された場合の KEY_INTKR 信号の動作

有効エッジが複数のキー割り込み入力端子に入力された場合の動作を図 21.3 に示します。一方の端子に Low レベルが入力中であるとき、すなわち KREG ビットが 0 の場合、KEY_INTKR 信号がセットされます。そのため、この期間中に他方の端子に立ち下がりエッジが入力されても、再度キー割り込み（KEY_INTKR）は発生しません。図 21.3 の [1] を参照してください。

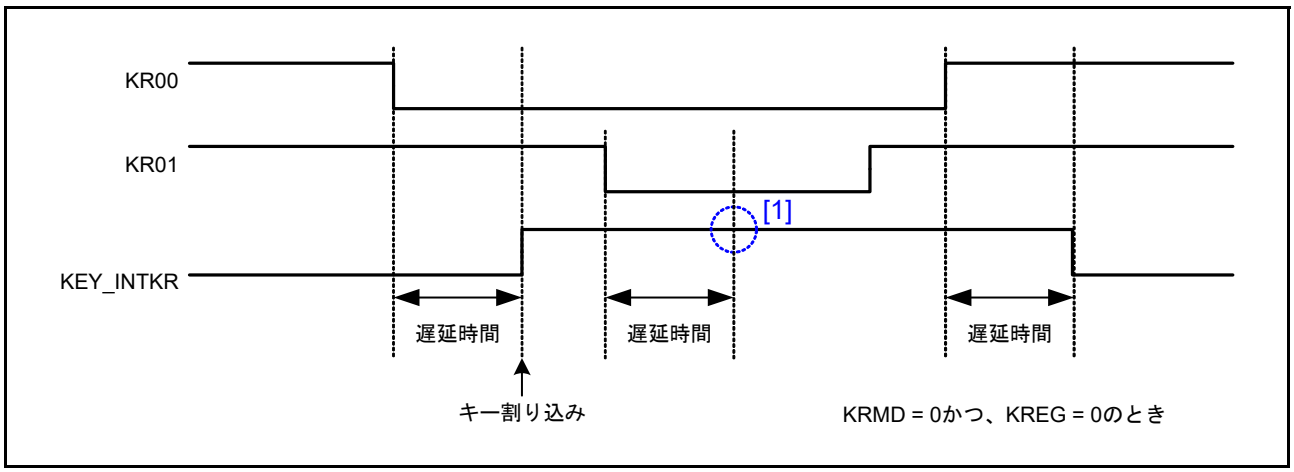


図 21.3　キー割り込みが複数のチャネルに入力された場合の KEY_INTKR 信号の動作

21.3.2　キー割り込みフラグを使用する場合の動作（KRMD = 1）

キー割り込み端子 KR00 ～ KR07 に、KREG ビットで指定された有効エッジが入力されたとき、キー割り込み（KEY_INTKR）が発生します。有効エッジが入力されたチャネルを判別するには、キー割り込み（KEY_INTKR）の発生後にキーリターンフラグレジスタ（KRF）を読み出します。KRMD ビットが 1 になっている場合は、KRF レジスタの対応するビットをクリアして、KEY_INTKR 信号をクリアしてください。

図 21.4 に示すように、KREG ビットが 0 の場合、1 つのチャネルに立ち下がりエッジが入力されるごとに、1 回だけ割り込みが発生します。立ち上がりエッジが入力される前や後に KRFn ビットがクリアされても、それ以上割り込みは発生しません。

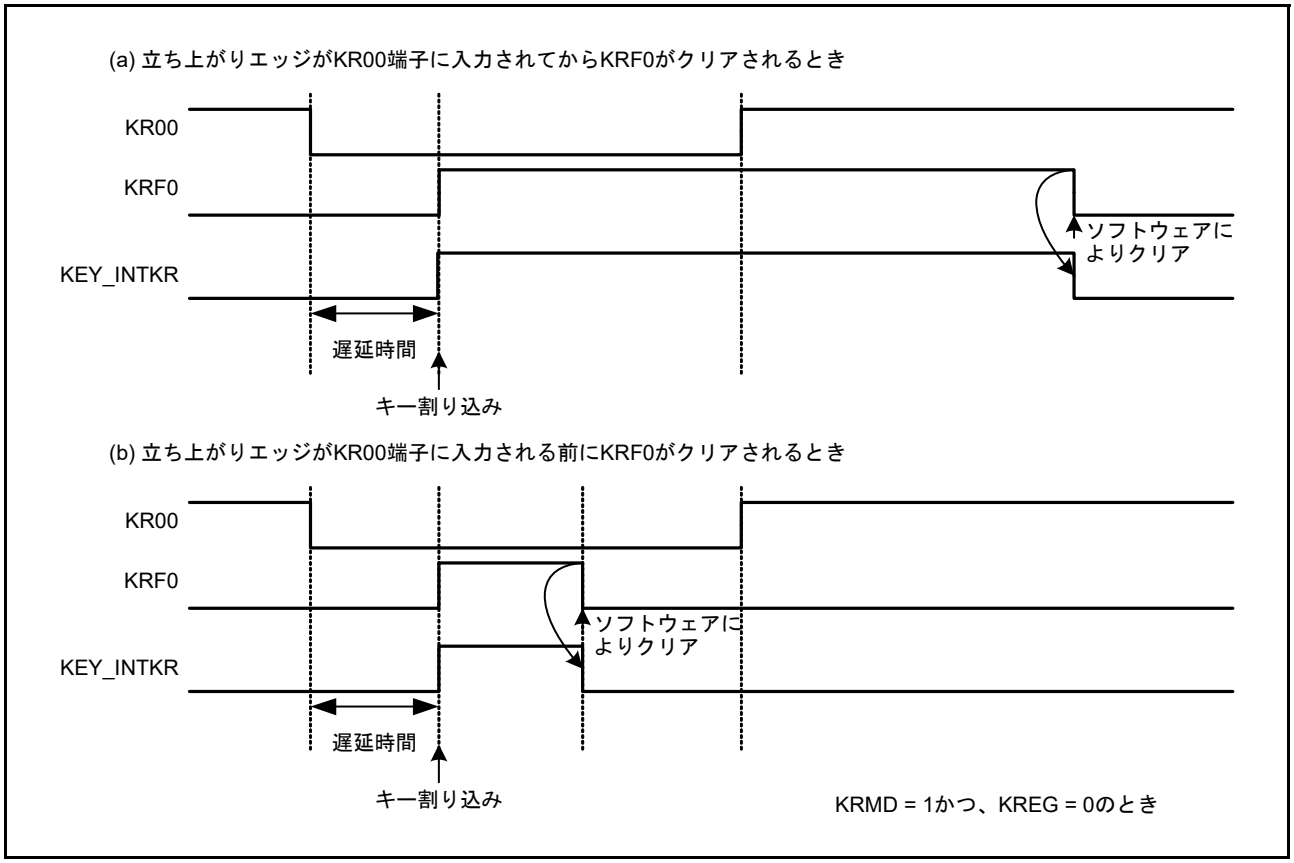


図 21.4　キー割り込みフラグを使用する場合の KEY_INTKR 信号の基本動作

有効エッジが複数のキー割り込み入力端子に入力された場合の動作を図 21.5 に示します。KR00 端子に立ち下がりエッジが入力された後に、すなわち KREG = 0 の場合に、KR01 端子と KR05 端子にも立ち下がりエッジが入力されます。KRF0 ビットがクリアされたとき、KRF1 ビットはセット状態になっています。そのため、KRF0 ビットがクリアされると、キー割り込みが 1 クロックサイクル（PCLKB）を生成します。図 21.5 の [1] を参照してください。また、KR05 端子に立ち下がりエッジが入力された後に、KRF5 ビットがセットされます。KRF1 ビットがクリアされたとき、図中の [2] の状態になります。そのため、KRF1 ビットがクリアされると、キー割り込みが 1 クロックサイクル（PCLKB）を生成します。図中の [3] を参照してください。したがって、複数チャネルに有効エッジが入力されたとき、それぞれキー割り込みを発生させることが可能です。

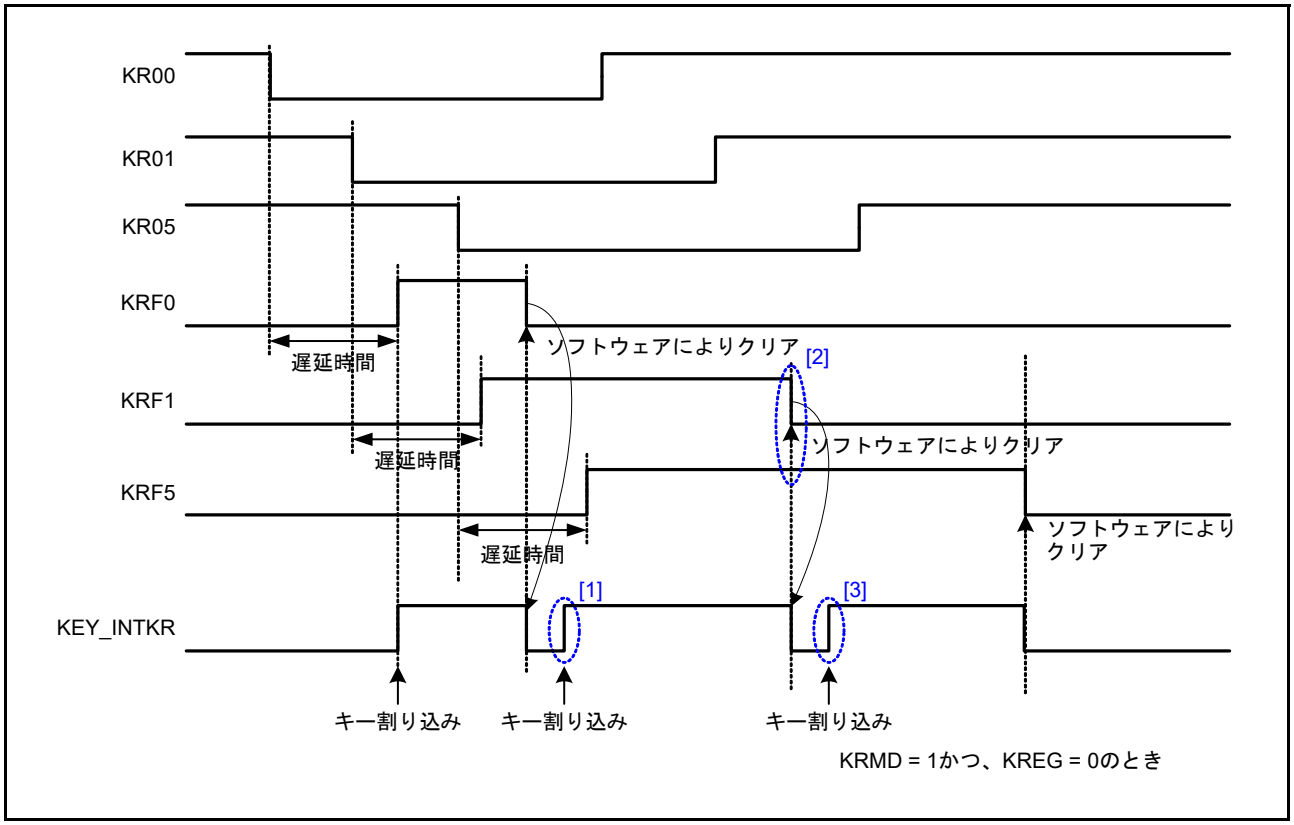


図 21.5　キー割り込みが複数のチャネルに入力された場合の KEY_INTKR 信号の動作

21.4 使用上の注意事項

- KEY_INTKR をスヌーズ要求として用いる場合は、KRMD を 0 にすること
- KEY_INTKR をスヌーズモードおよびソフトウェアスタンバイモードから通常モードへ復帰するための割り込み要因として用いる場合は、KRMD ビットを 1 にすること
- キー割り込み機能（KINT）が端子に割り当てられる場合、この端子入力はソフトウェアスタンバイモード時に常に許可される。また、この端子レベルが変化すると、対応する KRFn がセットされる可能性がある。そのため、ソフトウェアスタンバイモードの解除時に、キー割り込みが発生する場合がある

ソフトウェアスタンバイモード時のキー割り込み端子の変化を無視するには、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、対応する KRM ビットをクリアしてください。ソフトウェアスタンバイモードの解除後は、対応する KRM ビットがセットされる前に、KRFn をクリアする必要があります。

22. GPT用ポートアウトプットイネーブル（POEG）

汎用PWMタイマ（GPT）の出力端子を出力禁止状態とするには、ポートアウトプットイネーブル（POEG）機能において、以下の方法の1つを使用します。

- GTETRGn端子（n = A, B）の入力レベル検出
- GPTからの出力禁止要求
- コンパレータ割り込み要求検出
- クロック発生回路の発振停止検出
- レジスタ設定

GTETRGn端子（n = A, B）は、GPTへの外部トリガ入力端子としても利用可能です。

22.1 概要

表22.1にPOEGの仕様を、図22.1にブロック図を、表22.2に入力端子を示します。

表22.1　POEGの仕様

項目	内容
入力レベル検出による出力禁止制御	極性とフィルタの選択後、GTETRGn端子の立ち上がりエッジまたはHighレベルをサンプリングした場合に、GPT出力端子を出力禁止に設定可能
GPTからの出力禁止要求	GTIOCA端子とGTIOCB端子が同時にアクティブレベルとなる場合、GPTはPOEGに対して出力禁止要求を発生させる。POEGは、これらの出力禁止要求を受信して、GTIOCAおよびGTIOCB端子を出力禁止にするか否かの制御が可能
発振停止検出による出力禁止制御	クロック発生回路による発振が停止した場合に、GPT出力端子を出力禁止に設定可能
ソフトウェア（レジスタ）による出力禁止制御	レジスタの設定値を書き換えることにより、GPT出力端子を出力禁止に設定可能
割り込み	• 入力レベル検出による出力禁止制御が可能 • GPTからの出力禁止要求が可能
GPTに対する外部トリガ出力機能（カウント開始／カウント停止／カウントクリア／アップカウント／ダウンカウント／インプットキャプチャ機能）	極性とフィルタの選択後、GTETRGn信号をGPTへ出力可能
ノイズフィルタリング	• どの入力端子（GTETRGn）に対しても、PCLKB/1、PCLKB/8、PCLKB/32、またはPCLKB/128クロックごとに3回のサンプリングを設定可能 • どの入力端子（GTETRGn）に対しても、正または負の極性を選択可能 • 極性およびフィルタ選択後の信号状態のモニタが可能

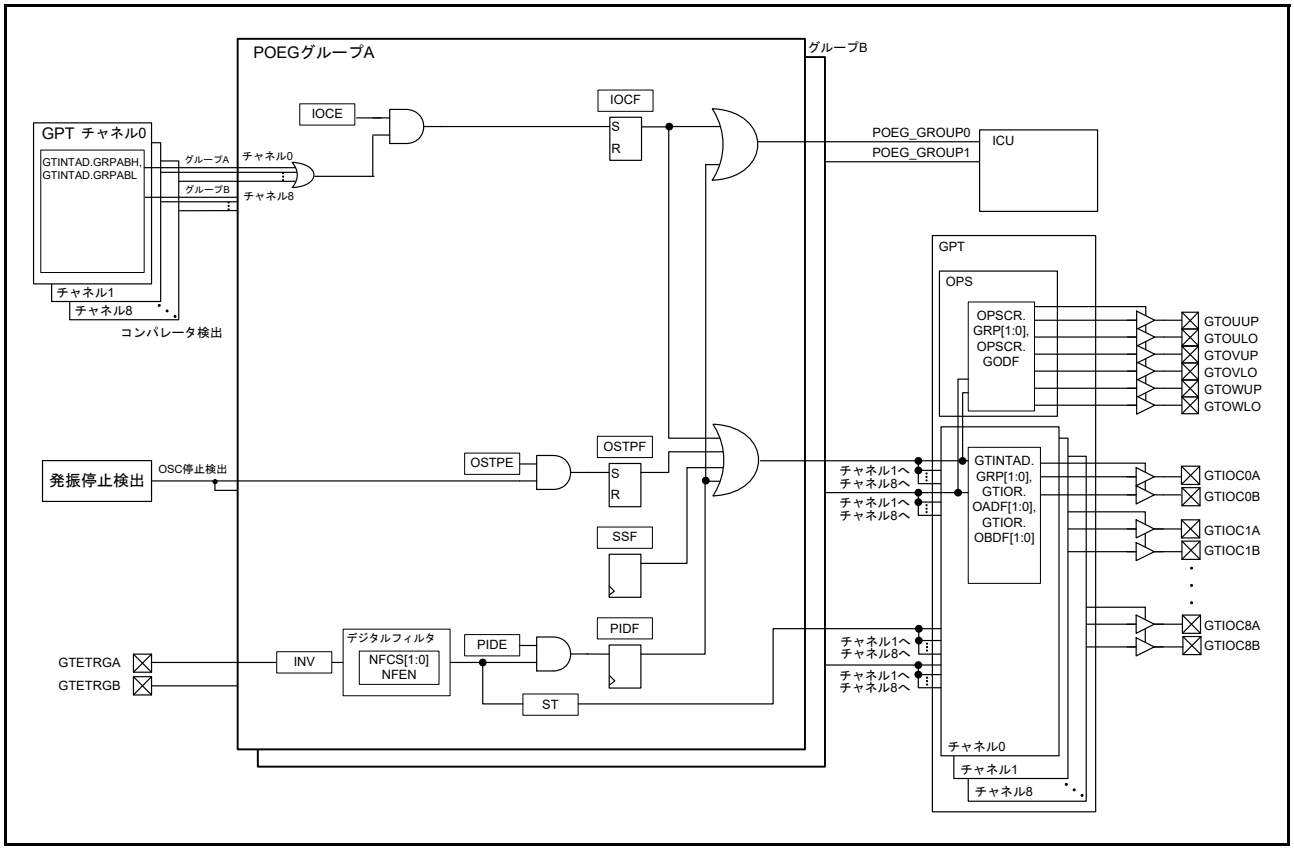


図 22.1　　POEG のブロック図

表 22.2　　POEGの入力端子

端子名	入出力	機能
GTETRGA	入力	GPT出力端子の出力禁止要求信号およびGPT外部トリガ入力端子A
GTETRGB	入力	GPT出力端子の出力禁止要求信号およびGPT外部トリガ入力端子B

22.2　レジスタの説明

22.2.1　POEG グループ n 設定レジスタ（POEGGn）(n = A, B)

アドレス　POEG.POEGGA 4004 2000h, POEG.POEGGB 4004 2100h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	NFCS[1:0]		NFEN	INV	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ST
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	OSTPE	IOCE	PIDE	SSF	OSTPF	IOCF	PIDF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIDF	ポート入力検出フラグ	0：GTETRGn端子からの出力禁止要求なし 1：GTETRGn端子からの出力禁止要求あり	R(/W) （注1）
b1	IOCF	GPT出力禁止要求検出フラグ	0：GPTの禁止要求による出力禁止要求なし 1：GPTの禁止要求による出力禁止要求あり	R(/W) （注1）
b2	OSTPF	発振停止検出フラグ	0：発振停止検出による出力禁止要求なし 1：発振停止検出による出力禁止要求あり	R(/W) （注1）
b3	SSF	ソフトウェア停止フラグ	0：ソフトウェアによる出力禁止要求なし 1：ソフトウェアによる出力禁止要求あり	R/W
b4	PIDE	ポート入力検出許可	0：GTETRGn端子からの出力禁止要求なし 1：GTETRGn端子からの出力禁止要求あり	R/W （注2）
b5	IOCE	GPT出力禁止要求許可	0：GPTの禁止要求による出力禁止要求なし 1：GPTの禁止要求による出力禁止要求あり	R/W （注2）
b6	OSTPE	発振停止検出許可	0：発振停止検出による出力禁止要求を禁止 1：発振停止検出による出力禁止要求を許可	R/W （注2）
b15-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b16	ST	GTETRGn入力ステータスフラグ	0：フィルタリング後のGTETRGn入力は0 1：フィルタリング後のGTETRGn入力は1	R
b27-b17	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b28	INV	GTETRGn入力反転	0：GTETRGnをそのまま入力 1：GTETRGnを反転して入力	R/W
b29	NFEN	ノイズフィルタ有効	0：ノイズのフィルタリングを禁止 1：ノイズのフィルタリングを許可	R/W
b31-b30	NFCS[1:0]	ノイズフィルタクロック選択	b1 b0 0 0：GTETRGn端子の入力レベルをPCLKB/1クロックごとに3回サンプリング 0 1：GTETRGn端子の入力レベルをPCLKB/8クロックごとに3回サンプリング 1 0：GTETRGn端子の入力レベルをPCLKB/32クロックごとに3回サンプリング 1 1：GTETRGn端子の入力レベルをPCLKB/128クロックごとに3回サンプリング	R/W

注 1.　フラグをクリアするための 0 書き込みのみ可能です。
注 2.　リセット後、1 回のみ書き込み可能です。

POEGGA ～ POEGGD レジスタは、GPT 端子の出力禁止状態、割り込み、および GPT への外部トリガ入力を制御するレジスタです。以下の説明で POEGGn とは、POEGGA ～ POEGGD レジスタのすべてを表しています。

22.3　出力禁止制御の動作

以下のいずれかの条件が成立したとき、GTIOCxA、GTIOCxB、およびBLDCモータ制御用3相PWM出力端子を出力禁止に設定できます。

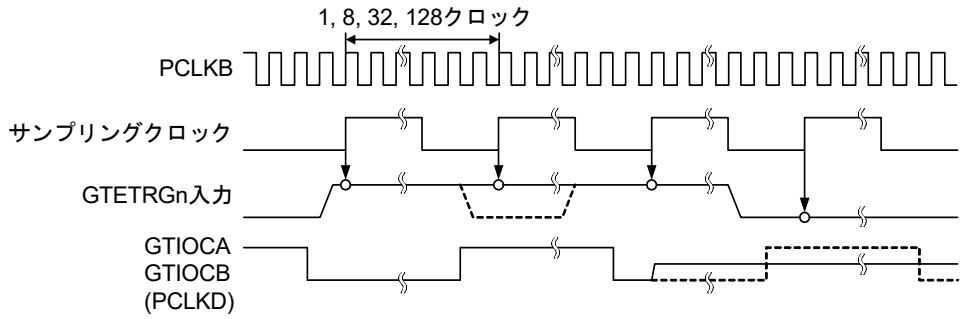
- GTETRGn端子の入力レベルまたはエッジ検出
  POEGGn.PIDEビットが1の場合、POEGGn.PIDFフラグが1になります
- GPTからの出力禁止要求
  POEGGn.IOCEビットが1の場合、GTINTAD.GRPABHビットまたはGTINTAD.GRPABLビットで許可された禁止要求が、GPTレジスタのGTINTAD.GRP[1:0]ビットとOPSCR.GRP[1:0]ビットで選択されたグループに適用されると、POEGGn.IOCFフラグが1になります
- クロック発生回路の発振停止検出
  POEGGn.OSTPEビットが1の場合、POEGGn.OSTPFフラグが1になります
- SSFビットの設定
  POEGGn.SSFビットが1の場合、PWM出力は禁止です
  出力禁止状態はGPTで制御されます。GTIOCxA端子およびGTIOCxB端子の出力禁止は、GPTのGTINTAD.GRP[1:0]ビット、GTIOR.OADF[1:0]ビット、およびGTIOR.OBDF[1:0]ビットで設定されます。BLDCモータ制御用3相PWM出力端子の出力禁止は、GPT_OPSのOPSCR.GRP[1:0]ビットおよびOPSCR.GODFビットで設定されます

22.3.1　端子入力レベル検出時の動作

POEGGn.PIDE、POEGGn.NFCS[1:0]、POEGGn.NFEN、およびPOEGGn.INVビットに設定した入力条件が、GTETRGn端子で発生した場合、GPT出力端子は出力禁止になります。

22.3.1.1　デジタルフィルタ

図22.2に、デジタルフィルタによるHigh検出時の動作を示します。POEGGn.INVビットの極性の設定に対応したHigh状態が、POEGGn.NFCS[1:0]ビットとPOEGGn.NFENビットで選択したサンプリングクロックにおいて3回連続して検出されたとき、High検出とみなされて、GPT出力端子は出力禁止状態になります。このとき、一度でもLowを検出した場合はHigh検出とみなされません。さらに、サンプリングクロックが出力されていない期間は、GTETRGn端子のレベル変化が無視されます。



すべてHighをサンプリングした場合	[1]	[2]	[3]	フラグセット（GTETRGn受け付け）
一度でもLowをサンプリングした場合	[1]	[0]	[1]	フラグ未セット

注．　各チャネル出力は、GPTでの設定が可能です。
　　Lowレベルサンプリングは、POEGGn.INVビットでの設定が可能です。

図22.2　デジタルフィルタの動作例

22.3.2　GPT からの出力禁止要求

この動作の詳細については、「23.　汎用 PWM タイマ（GPT）」を参照してください。

22.3.3　発振停止検出による出力禁止制御

POEGGn.OSTPE ビットが 1 の場合、クロック発生回路の発振停止検出機能が発振停止を検出すると、GPT 出力端子はグループごとに出力禁止になります。

22.3.4　レジスタによる出力禁止制御

GPT 出力端子は、ソフトウェア停止フラグ（POEGGn.SSF）に書き込むことで直接制御が可能です。

22.3.5　出力禁止状態の解除

出力禁止状態になっている GPT 出力端子を解放するには、リセットによって初期状態に復帰させるか、または下記のフラグをすべてクリアします。

- POEGGn.PIDF フラグ
- POEGGn.IOCF フラグ
- POEGGn.OSTPF フラグ
- POEGGn.SSF フラグ

外部入力端子 GTETRGn が無効ではなく、かつ POEGGn.ST ビットが 0 になっていなければ、POEGGn.PIDF フラグに 0 を書いても無視されます（フラグはクリアされません）。

GPT の GTST.OABHF フラグ、および GTST.OABLF フラグがすべて 0 になっている場合にのみ、POEGGn.IOCF フラグに 0 を書くこと（フラグをクリアすること）が可能です。

クロック発生回路の OSTDSR.OSTDF フラグが 0 になっていない場合、POEGGn.OSTPF フラグに 0 を書いても無視されます（フラグはクリアされません）。また、フラグのセットとクリアが同時に発生した場合、セットが優先されます。

図 22.3 に、出力禁止状態の解除タイミングを示します。フラグがクリアされた後、次の GPT カウント周期の開始時に、出力禁止状態が解除されます。

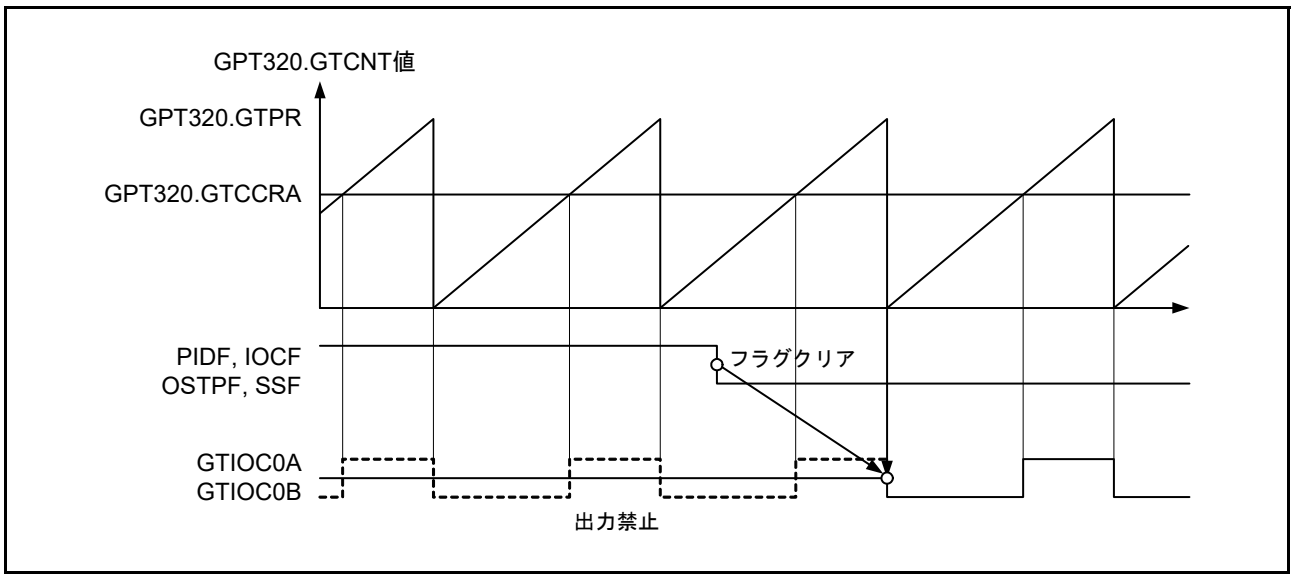


図 22.3　GPT 端子出力の出力禁止状態の解除タイミング

22.4　割り込み要因

POEG は、以下の要因によってトリガされたとき、割り込み要求を発生させます。

- 入力レベル検出による出力禁止制御
- GPT からの出力禁止要求

表 22.3 に、割り込み要求の条件を示します。

表 22.3　割り込み要因と条件

割り込み要因	シンボル	対応するフラグ	トリガ条件
POEGグループA割り込み	POEG_GROUP0	POEGGA.IOCF	GPTからの出力禁止要求の発生
		POEGGA.PIDF	GTETRGA端子からの出力禁止要求の発生
POEGグループB割り込み	POEG_GROUP1	POEGGB.IOCF	GPTからの出力禁止要求の発生
		POEGGB.PIDF	GTETRGB端子からの出力禁止要求の発生

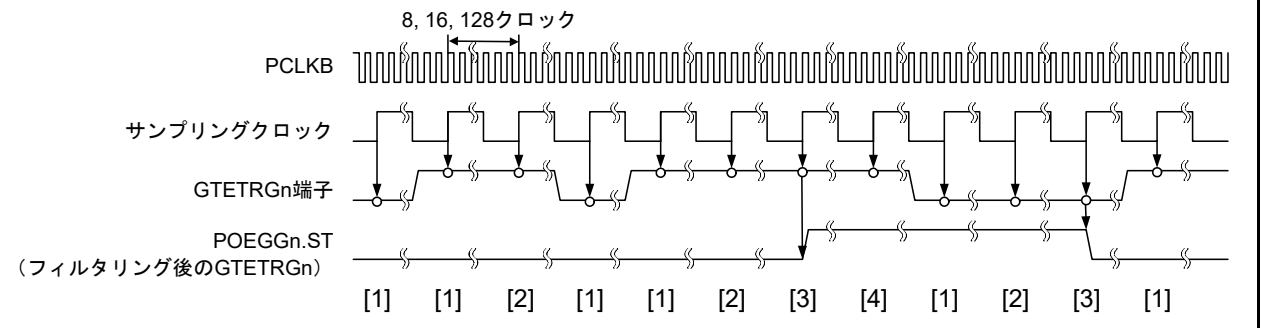
22.5　GPT に対する外部トリガ出力

POEG は、下記の GPT 動作のトリガ信号として、GTETRGn 信号を出力します。

- カウント開始
- カウント停止
- カウントクリア
- アップカウント
- ダウンカウント
- インプットキャプチャ

POEGG.INV ビットで設定した極性信号に対し、POEGGn.NFCS[1:0] および POEGGn.NFEN ビットで選択したサンプリングクロックで同じレベルが 3 回連続して入力されたとき、その値が出力されます。22.3.1 端子入力レベル検出時の動作に記載のコントロールレジスタと同じものを設定してください。フィルタリング後の状態は POEGGn.ST フラグでモニタできます。

図 22.4 に、GPT に対する外部トリガ出力のタイミングを示します。



注．　各チャネル出力は、GPT での設定が可能です。
　　極性は POEGGn.INV ビットでの設定により反転可能です。

図 22.4　GPT に対する外部トリガ出力のタイミング

22.6 使用上の注意事項

22.6.1 ソフトウェアスタンバイモードへの遷移

POEG を使用する場合は、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移させないでください。このモードでは POEG が停止するため、端子の出力禁止を制御することができません。

22.6.2 GPT 対応端子の指定

POEG は、PmnPFS.PMR および PmnPFS.PSEL ビットによって、GPT 対応端子として指定された場合にのみ出力禁止制御を行います。端子が汎用入出力端子として指定されている場合、POEG は出力禁止制御を行いません。

23. 汎用 PWM タイマ（GPT）

23.1 概要

汎用 PWM タイマ（GPT）は、4 チャネルの 32 ビットタイマ（GPT32）と、3 チャネルの 16 ビットタイマ（GPT16）で構成されます。PWM 波形は、アップカウンタ、ダウンカウンタ、またはアップダウンカウンタを制御することで発生させることができます。さらに、ブラシレス DC モータ制御用の PWM 波形を発生させることもできます。GPT は汎用タイマとしても使用可能です。

表 23.1 に GPT の仕様を、表 23.2 に GPT の機能一覧を、図 23.1 にブロック図を、図 23.2 に GPT チャネルとモジュール名の対応関係を、表 23.3 に入出力端子を示します。

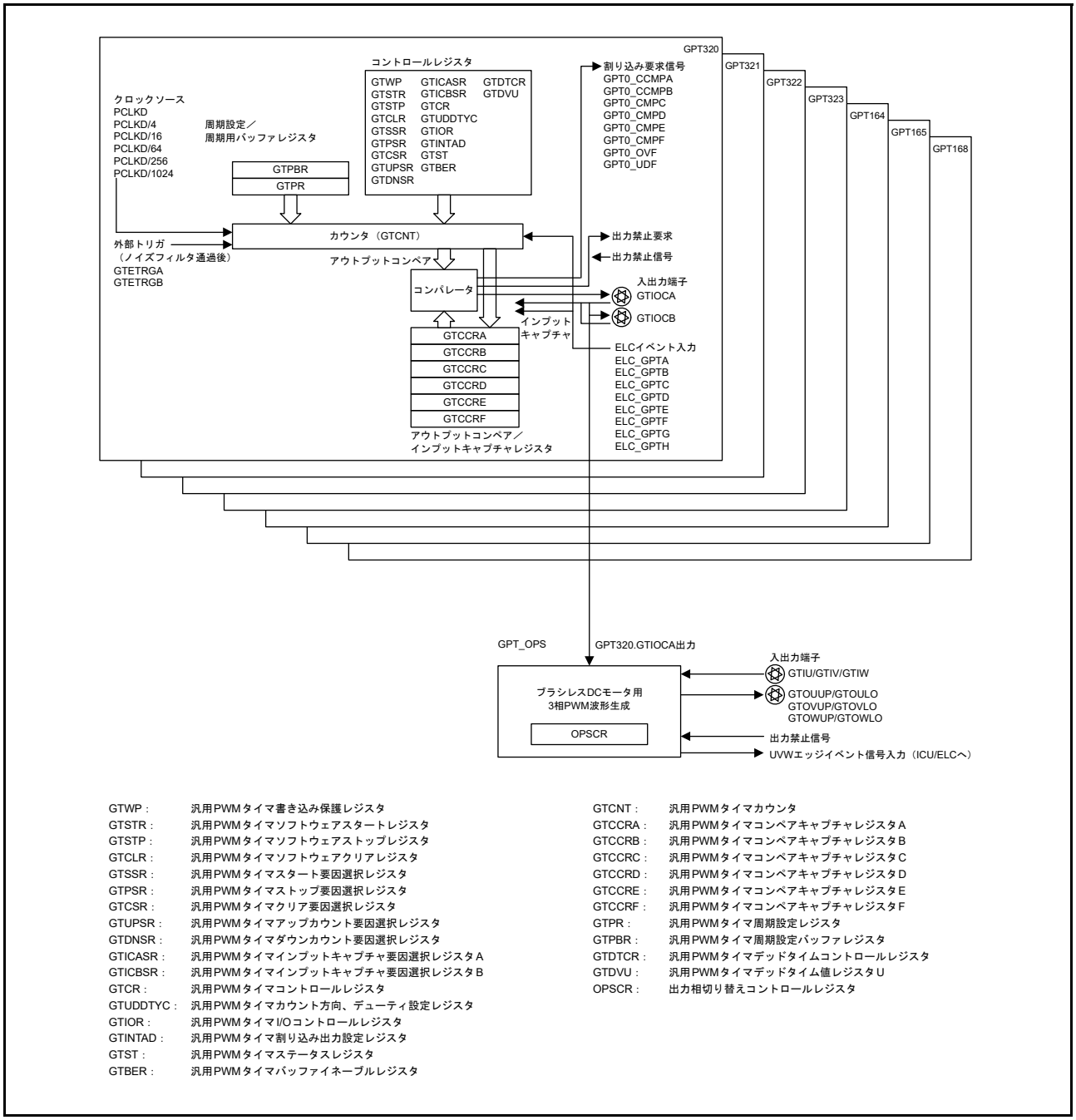
表 23.1　GPTの仕様

項目	内容
機能	• 32ビット × 4チャネル • 16ビット × 3チャネル • 各カウンタは、アップカウントもしくはダウンカウント（のこぎり波）、またはアップダウンカウント（三角波） • チャネルごとに独立したクロックソースを選択可能 • チャネルごとに2本の入出力端子 • チャネルごとにアウトプットコンペア／インプットキャプチャ用レジスタが2本 • 各チャネル2本のアウトプットコンペア／インプットキャプチャレジスタに対し、それぞれバッファレジスタとして4本のレジスタがあり、バッファ動作しないときにはコンペアレジスタとしても動作可能 • アウトプットコンペア動作時に山／谷それぞれバッファ動作可能で左右非対称なPWM波形を生成 • チャネルごとにフレーム周期設定用レジスタを搭載（オーバーフロー／アンダーフローで割り込み可能） • PWM動作の際にデッドタイム生成が可能 • 任意チャネルのカウンタの同期スタート／ストップ／クリア • 最大8個のELCイベントに対応したカウンタのスタート／ストップ／クリア／アップ／ダウン • 入力レベル比較に対応したカウンタのスタート／ストップ／クリア／アップ／ダウン • 最大4個の外部トリガに対応したカウンタのスタート／ストップ／クリア／アップ／ダウン • 出力端子間の短絡検出による出力端子無効機能 • ブラシレスDCモータ制御用のPWM波形生成が可能 • コンペアマッチA～Fイベント、オーバーフローイベント／アンダーフローイベント、および入力UVWエッジイベントをELCに出力可能 • インプットキャプチャおよび入力UVWのノイズフィルタを使用可能 • バスクロック：PCLKA • コアクロック：PCLKD • 周波数比：PCLKA : PCLKD = 1 : N（N = 1/2/4/8/16/32/64）

表 23.2　GPTの機能一覧

項目		GPT32, GPT16
カウントクロック		PCLKD PCLKD/4 PCLKD/16 PCLKD/64 PCLKD/256 PCLKD/1024
アウトプットコンペア／インプットキャプチャレジスタ（GTCCR）		GTCCRA GTCCRB
コンペア／バッファレジスタ		GTCCRC GTCCRD GTCCRE GTCCRF
周期設定レジスタ		GTPR
周期設定バッファレジスタ		GTPBR
入出力端子		GTIOCA GTIOCB
外部トリガ入力端子（注1）		GTETRGA GTETRGB
カウンタクリア要因		GTPRレジスタコンペアマッチ、インプットキャプチャ、入力端子状態、ELCイベント入力、およびGTETRGn（n = A, B）端子入力
コンペアマッチ出力	Low出力	可能
	High出力	可能
	トグル出力	可能
インプットキャプチャ機能		可能
デッドタイム自動付加機能		可能 （デッドタイムバッファなし）
PWMモード		可能
位相計数機能		可能
バッファ動作		ダブルバッファ
ワンショット動作		可能
DTCの起動		すべての割り込み要因
ブラシレスDCモータ制御機能		可能
割り込み要因		8要因： • GTCCRAコンペアマッチ／インプットキャプチャ（GPTn_CCMPA） • GTCCRBコンペアマッチ／インプットキャプチャ（GPTn_CCMPB） • GTCCRCコンペアマッチ（GPTn_CMPC） • GTCCRDコンペアマッチ（GPTn_CMPD） • GTCCREコンペアマッチ（GPTn_CMPE） • GTCCRFコンペアマッチ（GPTn_CMPF） • GTCNTオーバーフロー（GTPRコンペアマッチ）（GPTn_OVF） • GTCNTアンダーフロー（GPTn_UDF） 注. n = 0～5, 8
イベントリンク（ELC）機能		可能
ノイズフィルタ機能		可能

注 1.　GTRETRGn は、POEG モジュールを経由して GPT に接続します。そのため、GPT 機能を使用するには、MSTPD14 ビットをクリアして POEG にクロックを供給する必要があります。



GTWP : 汎用PWMタイマ書き込み保護レジスタ
GTSTR : 汎用PWMタイマソフトウェアスタートレジスタ
GTSTP : 汎用PWMタイマソフトウェアストップレジスタ
GTCLR : 汎用PWMタイマソフトウェアクリアレジスタ
GTSSR : 汎用PWMタイマスタート要因選択レジスタ
GTPSR : 汎用PWMタイマストップ要因選択レジスタ
GTCSR : 汎用PWMタイマクリア要因選択レジスタ
GTUPSR : 汎用PWMタイマアップカウント要因選択レジスタ
GTDNSR : 汎用PWMタイマダウンカウント要因選択レジスタ
GTICASR : 汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタA
GTICBSR : 汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタB
GTCR : 汎用PWMタイマコントロールレジスタ
GTUDDTYC : 汎用PWMタイマカウント方向、デューティ設定レジスタ
GTIOR : 汎用PWMタイマI/Oコントロールレジスタ
GTINTAD : 汎用PWMタイマ割り込み出力設定レジスタ
GTST : 汎用PWMタイマステータスレジスタ
GTBER : 汎用PWMタイマバッファイネーブルレジスタ

GTCNT : 汎用PWMタイマカウンタ
GTCCRA : 汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタA
GTCCRB : 汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタB
GTCCRC : 汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタC
GTCCRD : 汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタD
GTCCRE : 汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタE
GTCCRF : 汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタF
GTPR : 汎用PWMタイマ周期設定レジスタ
GTPBR : 汎用PWMタイマ周期設定バッファレジスタ
GTDTCR : 汎用PWMタイマデッドタイムコントロールレジスタ
GTDVU : 汎用PWMタイマデッドタイム値レジスタU
OPSCR : 出力相切り替えコントロールレジスタ

図 23.1　GPT のブロック図

図 23.2 に複数の GPT の使用例を示します。

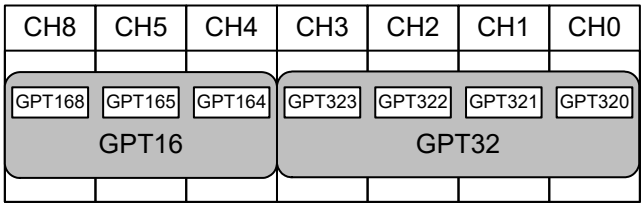


図 23.2　GPT チャネルとモジュール名の対応関係

表 23.3 GPTの入出力端子

チャネル	端子名	入出力	機能
共通	GTETRGA	入力	外部トリガ入力端子A（ノイズフィルタリング後）
	GTETRGB	入力	外部トリガ入力端子B（ノイズフィルタリング後）
GPT320	GTIOC0A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC0B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT321	GTIOC1A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC1B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT322	GTIOC2A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC2B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT323	GTIOC3A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC3B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT164	GTIOC4A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC4B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT165	GTIOC5A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC5B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT168	GTIOC8A	入出力	GTCCRAレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
	GTIOC8B	入出力	GTCCRBレジスタのインプットキャプチャ入力／アウトプットコンペア出力／PWM出力端子
GPT_OPS	GTIU	入力	ホールセンサ入力端子U
	GTIV	入力	ホールセンサ入力端子V
	GTIW	入力	ホールセンサ入力端子W
	GTOUUP	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（正相U相）
	GTOULO	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（逆相U相）
	GTOVUP	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（正相V相）
	GTOVLO	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（逆相V相）
	GTOWUP	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（正相W相）
	GTOWLO	出力	BLDCモータ制御用3相PWM出力（逆相W相）

23.2　レジスタの説明

表 23.4 に GPT のレジスター覧を示します。

表 23.4　GPT レジスタ

モジュールシンボル	レジスタ名	レジスタシンボル	リセット値	アドレス	アクセスサイズ
GPT32m（注1） GPT16m（注2）	汎用PWMタイマ書き込み保護レジスタ	GTWP	0000_0000h	4007 8000h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマソフトウェアスタートレジスタ	GTSTR	0000_0000h	4007 8004h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマソフトウェアストップレジスタ	GTSTP	FFFF_FFFFh	4007 8008h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマソフトウェアクリアレジスタ	GTCLR	0000_0000h	4007 800Ch + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマスタート要因選択レジスタ	GTSSR	0000_0000h	4007 8010h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマストップ要因選択レジスタ	GTPSR	0000_0000h	4007 8014h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマクリア要因選択レジスタ	GTCSR	0000_0000h	4007 8018h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマアップカウント要因選択レジスタ	GTUPSR	0000_0000h	4007 801Ch + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマダウンカウント要因選択レジスタ	GTDNSR	0000_0000h	4007 8020h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタA	GTICASR	0000_0000h	4007 8024h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタB	GTICBSR	0000_0000h	4007 8028h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコントロールレジスタ	GTCR	0000_0000h	4007 802Ch + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマカウント方向、デューティ設定レジスタ	GTUDDTYC	0000_0001h	4007 8030h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマI/Oコントロールレジスタ	GTIOR	0000_0000h	4007 8034h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマ割り込み出力設定レジスタ	GTINTAD	0000_0000h	4007 8038h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマステータスレジスタ	GTST	0000_8000h	4007 803Ch + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマバッファイネーブルレジスタ	GTBER	0000_0000h	4007 8040h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマカウンタ	GTCNT	0000_0000h	4007 8048h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタA	GTCCRA	FFFF_FFFFh（注3）	4007 804Ch + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタB	GTCCRB	FFFF_FFFFh（注3）	4007 8050h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタC	GTCCRC	FFFF_FFFFh（注3）	4007 8054h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタE	GTCCRE	FFFF_FFFFh（注3）	4007 8058h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタD	GTCCRD	FFFF_FFFFh（注3）	4007 805Ch + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタF	GTCCRF	FFFF_FFFFh（注3）	4007 8060h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマ周期設定レジスタ	GTPR	FFFF_FFFFh（注3）	4007 8064h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマ周期設定バッファレジスタ	GTPBR	FFFF_FFFFh（注3）	4007 8068h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマデッドタイムコントロールレジスタ	GTDTCR	0000_0000h	4007 8088h + 0100h × m	32
	汎用PWMタイマデッドタイム値レジスタU	GTDVU	FFFF_FFFFh（注3）	4007 808Ch + 0100h × m	32
GPT_OPS	出力相切り替えコントロールレジスタ	OPSCR	0000_0000h	4007 8FF0h	32

注 1.　GPT32m (m = 0 ～ 3)
注 2.　GPT16m (m = 4, 5, 8)
注 3.　GPT16m のリセット値は 0000FFFFh です。

23.2.1　汎用 PWM タイマ書き込み保護レジスタ（GTWP）

アドレス　GPT32m.GTWP 4007 8000h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTWP 4007 8000h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PRKEY[7:0]								—	—	—	—	—	—	—	WP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	WP	レジスタ書き込み禁止	0：レジスタへの書き込みを許可 1：レジスタへの書き込みを禁止	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b8	PRKEY[7:0]	GTWPキーコード	これらのビットにA5hを書き込むと、WPビットへの書き込みが許可されます。読むと0が読めます。	R/W
b31-b16	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTWP レジスタは、誤書き込み防止のためレジスタへの書き込みを許可／禁止するレジスタです。書き込みが許可／禁止されるレジスタは以下のとおりです。

GTSSR, GTPSR, GTCSR, GTUPSR, GTDNSR, GTICASR, GTICBSR, GTCR, GTUDDTYC, GTIOR, GTINTAD, GTST, GTBER, GTCNT, GTCCRA, GTCCRB, GTCCRC, GTCCRD, GTCCRE, GTCCRF, GTPR, GTPBR, GTDTCR, GTDVU

23.2.2　汎用 PWM タイマソフトウェアスタートレジスタ（GTSTR）

アドレス　GPT32m.GTSTR 4007 8004h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTSTR 4007 8004h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CSTRT8	—	—	CSTRT5	CSTRT4	CSTRT3	CSTRT2	CSTRT1	CSTRT0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

GTSTR レジスタは、各チャネル n（n = 0 ～ 5, 8）の GTCNT カウンタ動作を開始します。

GTSTR レジスタのビット番号はチャネル番号に相当します。GTSTR レジスタは各チャネル共通です。1 が書き込まれた GTSTR レジスタのビット番号に対応するチャネルの GTCNT カウンタが動作を開始します。0 を書き込んでも、GTCNT カウンタの状態と GTSTR レジスタの値には影響しません。GTSTR のビット番号とチャネル番号の対応関係については、図 23.2 を参照してください。

CSTRT[8:0] ビット（チャネル n GTCNT カウントスタート）（n = 0 ～ 5, 8）

チャネル n の GTCNT カウンタ動作を開始します。GPTm.GTSSR.CSTRTn ビットを 1 にしないかぎり、GTSTR.CSTRTn ビットへの書き込みは無効です（n = 0 ～ 5, 8、m = 320 ～ 323、164, 165, 168）。

リードデータは各チャネルのカウンタ状態（GTCR.CST ビット値）を示します。0 はカウンタストップを、1 はカウンタ動作を意味します。

23.2.3　汎用 PWM タイマソフトウェアストップレジスタ（GTSTP）

アドレス　GPT32m.GTSTP 4007 8008h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTSTP 4007 8008h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CSTOP8	—	—	CSTOP5	CSTOP4	CSTOP3	CSTOP2	CSTOP1	CSTOP0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

GTSTP レジスタは、各チャネル n（n = 0 ～ 5, 8）の GTCNT カウンタ動作を停止します。

GTSTP レジスタのビット番号はチャネル番号に相当します。GTSTP レジスタの各チャネルはすべてのチャネルに共通です。1 が書き込まれた GTSTP レジスタのビット番号に対応するチャネルの GTCNT カウンタが停止します。0 を書き込んでも、GTCNT カウンタの状態および GTSTP レジスタの値には影響しません。

GTSTP のビット番号とチャネル番号の対応関係については、図 23.2 を参照してください。

CSTOP[8:0] ビット（チャネル n GTCNT カウントストップ）（n = 0 ～ 5, 8）

チャネル n の GTCNT カウンタ動作を停止します。GPT32m.GTPSR.CSTOPn ビットを 1 にしないかぎり、GTSTP.CSTOPn ビットへの書き込みは無効です（n = 0 ～ 5, 8、m = 320 ～ 323, 164, 165, 168）。リードデータは各チャネルのカウンタ状態（GTCR.CST ビットの反転値）を示します。0 はカウンタ動作を、1 はカウンタストップを意味します。

23.2.4　汎用 PWM タイマソフトウェアクリアレジスタ（GTCLR）

アドレス　GPT32m.GTCLR 4007 800Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCLR 4007 800Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CCLR8	—	—	CCLR5	CCLR4	CCLR3	CCLR2	CCLR1	CCLR0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

GTCLR レジスタは書き込み専用レジスタであり、各チャネル n（n = 0 ～ 5, 8）の GTCNT カウンタ動作をクリアします。

GTCLR レジスタのビット番号はチャネル番号に相当します。GTCLR レジスタの各チャネルはすべてのチャネルに共通です。1 が書き込まれた GTCLR レジスタのビット番号に対応するチャネルの GTCNT カウンタがクリアされます。0 を書き込んでも GTCNT カウンタの状態には影響しません。GTCLR のビット番号とチャネル番号の対応関係については、図 23.2 を参照してください。

CCLR[8:0] ビット（チャネル n GTCNT カウントクリア）（n = 0 ～ 5, 8）

1 を書き込むと、チャネル n の GTCNT カウンタ値がクリアされます。読むと 0 が読めます。

23.2.5　汎用 PWM タイマスタート要因選択レジスタ（GTSSR）

アドレス　GPT32m.GTSSR 4007 8010h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTSSR 4007 8010h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	CSTRT	—	—	—	—	—	—	—	SSELCH	SSELCG	SSELCF	SSELCE	SSELCD	SSELCC	SSELCB	SSELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SSCBFAH	SSCBFAL	SSCBRAH	SSCBRAL	SSCAFBH	SSCAFBL	SSCARBH	SSCARBL	—	—	—	—	SSGTRGBF	SSGTRGBR	SSGTRGAF	SSGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SSGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b1	SSGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b2	SSGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b3	SSGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	SSCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b9	SSCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b10	SSCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b11	SSCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b12	SSCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b13	SSCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	SSCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b15	SSCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタスタートを許可	R/W
b16	SSELCA	ELC_GPTAイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b17	SSELCB	ELC_GPTBイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b18	SSELCC	ELC_GPTCイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b19	SSELCD	ELC_GPTDイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b20	SSELCE	ELC_GPTEイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b21	SSELCF	ELC_GPTFイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b22	SSELCG	ELC_GPTGイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b23	SSELCH	ELC_GPTHイベント要因カウンタスタート許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタスタートを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタスタートを許可	R/W
b30-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31	CSTRT	ソフトウェア要因カウンタスタート許可	0：GTSTRレジスタによるカウンタスタートを禁止 1：GTSTRレジスタによるカウンタスタートを許可	R/W

GTSSR レジスタは GTCNT カウンタの開始要因を設定するレジスタです。

SSGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタスタート許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

SSELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタスタート許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

CSTRT ビット（ソフトウェア要因カウンタスタート許可）

GTSTR レジスタによる GTCNT カウンタスタートの許可／禁止を選択します。

23.2.6　汎用 PWM タイマストップ要因選択レジスタ（GTPSR）

アドレス　GPT32m.GTPSR 4007 8014h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTPSR 4007 8014h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	CSTOP	—	—	—	—	—	—	—	PSELCH	PSELCG	PSELCF	PSELCE	PSELCD	PSELCC	PSELCB	PSELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PSCBFAH	PSCBFAL	PSCBRAH	PSCBRAL	PSCAFBH	PSCAFBL	PSCARBH	PSCARBL	—	—	—	—	PSGTRGBF	PSGTRGBR	PSGTRGAF	PSGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PSGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b1	PSGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b2	PSGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b3	PSGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	PSCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b9	PSCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b10	PSCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b11	PSCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b12	PSCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b13	PSCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	PSCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b15	PSCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタストップを許可	R/W
b16	PSELCA	ELC_GPTAイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b17	PSELCB	ELC_GPTBイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b18	PSELCC	ELC_GPTCイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b19	PSELCD	ELC_GPTDイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b20	PSELCE	ELC_GPTEイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b21	PSELCF	ELC_GPTFイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b22	PSELCG	ELC_GPTGイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b23	PSELCH	ELC_GPTHイベント要因カウンタストップ許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタストップを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタストップを許可	R/W
b30-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31	CSTOP	ソフトウェア要因カウンタストップ許可	0：GTSTPレジスタによるカウンタストップを禁止 1：GTSTPレジスタによるカウンタストップを許可	R/W

GTPSR レジスタは GTCNT カウンタの停止要因を設定するレジスタです。

PSGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタストップ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタストップ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタ ストップ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタ ストップ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

PSELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタストップ許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

CSTOP ビット（ソフトウェア要因カウンタストップ許可）

GTSTP レジスタによる GTCNT カウンタストップの許可／禁止を選択します。

23.2.7　汎用 PWM タイマクリア要因選択レジスタ（GTCSR）

アドレス　GPT32m.GTCSR 4007 8018h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCSR 4007 8018h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	CCLR	—	—	—	—	—	—	—	CSELCH	CSELCG	CSELCF	CSELCE	CSELCD	CSELCC	CSELCB	CSELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CSCBFAH	CSCBFAL	CSCBRAH	CSCBRAL	CSCAFBH	CSCAFBL	CSCARBH	CSCARBL	—	—	—	—	CSGTRGBF	CSGTRGBR	CSGTRGAF	CSGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CSGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b1	CSGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b2	CSGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b3	CSGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	CSCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b9	CSCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b10	CSCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b11	CSCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b12	CSCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b13	CSCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	CSCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b15	CSCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタクリアを許可	R/W
b16	CSELCA	ELC_GPTAイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b17	CSELCB	ELC_GPTBイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b18	CSELCC	ELC_GPTCイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b19	CSELCD	ELC_GPTDイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b20	CSELCE	ELC_GPTEイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b21	CSELCF	ELC_GPTFイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b22	CSELCG	ELC_GPTGイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b23	CSELCH	ELC_GPTHイベント要因カウンタクリア許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタクリアを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタクリアを許可	R/W
b30-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31	CCLR	ソフトウェア要因カウンタクリア許可	0：GTCLRレジスタによるカウンタクリアを禁止 1：GTCLRレジスタによるカウンタクリアを許可	R/W

GTCSR レジスタは GTCNT カウンタのクリア要因を設定するレジスタです。

CSGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因 カウンタクリア許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因 カウンタクリア許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因 カウンタクリア許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因 カウンタクリア許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタクリア許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CSELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタクリア許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

CCLR ビット（ソフトウェア要因カウンタクリア許可）

GTCLR レジスタによる GTCNT カウンタクリアの許可／禁止を選択します。

23.2.8　汎用 PWM タイマアップカウント要因選択レジスタ（GTUPSR）

アドレス　GPT32m.GTUPSR 4007 801Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTUPSR 4007 801Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	USELCH	USELCG	USELCF	USELCE	USELCD	USELCC	USELCB	USELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	USCBFAH	USCBFAL	USCBRAH	USCBRAL	USCAFBH	USCAFBL	USCARBH	USCARBL	—	—	—	—	USGTRGBF	USGTRGBR	USGTRGAF	USGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	USGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b1	USGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b2	USGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b3	USGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	USCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b9	USCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b10	USCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b11	USCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b12	USCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b13	USCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	USCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b15	USCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントアップを許可	R/W
b16	USELCA	ELC_GPTAイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b17	USELCB	ELC_GPTBイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b18	USELCC	ELC_GPTCイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b19	USELCD	ELC_GPTDイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b20	USELCE	ELC_GPTEイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b21	USELCF	ELC_GPTFイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b22	USELCG	ELC_GPTGイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b23	USELCH	ELC_GPTHイベント要因カウンタカウントアップ許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタカウントアップを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタカウントアップを許可	R/W
b31-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTUPSR レジスタは GTCNT カウンタのカウントアップ要因を設定するレジスタです。

GTUPSR レジスタの少なくとも 1 つのビットを 1 にすると、そのビットに対応する要因によって GTCNT カウンタがカウントアップされます。この場合、GTCR.TPCS ビットは無効です。

USGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントアップ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

USELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタカウントアップ許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCNT カウンタカウントアップの許可／禁止を選択します。

23.2.9　汎用 PWM タイマダウンカウント要因選択レジスタ（GTDNSR）

アドレス　GPT32m.GTDNSR 4007 8020h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTDNSR 4007 8020h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	DSELCH	DSELCG	DSELCF	DSELCE	DSELCD	DSELCC	DSELCB	DSELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DSCBFAH	DSCBFAL	DSCBRAH	DSCBRAL	DSCAFBH	DSCAFBL	DSCARBH	DSCARBL	—	—	—	—	DSGTRGBF	DSGTRGBR	DSGTRGAF	DSGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DSGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b1	DSGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b2	DSGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b3	DSGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	DSCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b9	DSCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b10	DSCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b11	DSCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b12	DSCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b13	DSCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	DSCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b15	DSCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b16	DSELCA	ELC_GPTAイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b17	DSELCB	ELC_GPTBイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b18	DSELCC	ELC_GPTCイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b19	DSELCD	ELC_GPTDイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b20	DSELCE	ELC_GPTEイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b21	DSELCF	ELC_GPTFイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b22	DSELCG	ELC_GPTGイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b23	DSELCH	ELC_GPTHイベント要因カウンタカウントダウン許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタカウントダウンを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのカウンタカウントダウンを許可	R/W
b31-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTDNSR レジスタは GTCNT カウンタのカウントダウン要因を設定するレジスタです。

GTDNSR レジスタの少なくとも 1 つのビットを 1 にすると、そのビットに対応する要因によって GTCNT カウンタがカウントダウンされますが、GTCR.TPCS ビットで設定した GTCNT カウンタはカウントを実行しません。

DSGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因カウンタカウントダウン許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

DSELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタカウントダウン許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCNT カウンタカウントダウンの許可／禁止を選択します。

23.2.10　汎用 PWM タイマインプットキャプチャ要因選択レジスタ A（GTICASR）

アドレス　GPT32m.GTICASR 4007 8024h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTICASR 4007 8024h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	ASELCH	ASELCG	ASELCF	ASELCE	ASELCD	ASELCC	ASELCB	ASELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ASCBFAH	ASCBFAL	ASCBRAH	ASCBRAL	ASCAFBH	ASCAFBL	ASCARBH	ASCARBL	—	—	—	—	ASGTRGBF	ASGTRGBR	ASGTRGAF	ASGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ASGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b1	ASGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b2	ASGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b3	ASGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	ASCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b9	ASCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b10	ASCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b11	ASCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b12	ASCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b13	ASCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	ASCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b15	ASCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b16	ASELCA	ELC_GPTAイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b17	ASELCB	ELC_GPTBイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b18	ASELCC	ELC_GPTCイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b19	ASELCD	ELC_GPTDイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b20	ASELCE	ELC_GPTEイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b21	ASELCF	ELC_GPTFイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b22	ASELCG	ELC_GPTGイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b23	ASELCH	ELC_GPTHイベント要因GTCCRAインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのGTCCRAインプットキャプチャを許可	R/W
b31-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTICASR レジスタは GTCCRA のインプットキャプチャ要因を設定するレジスタです。

ASGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因 GTCCRA インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

ASELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタ GTCCRA インプットキャプチャ許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCCRA インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

23.2.11　汎用 PWM タイマインプットキャプチャ要因選択レジスタ B（GTICBSR）

アドレス　GPT32m.GTICBSR 4007 8028h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTICBSR 4007 8028h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	BSELCH	BSELCG	BSELCF	BSELCE	BSELCD	BSELCC	BSELCB	BSELCA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BSCBFAH	BSCBFAL	BSCBRAH	BSCBRAL	BSCAFBH	BSCAFBL	BSCARBH	BSCARBL	—	—	—	—	BSGTRGBF	BSGTRGBR	BSGTRGAF	BSGTRGAR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	BSGTRGAR	GTETRGA端子立ち上がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b1	BSGTRGAF	GTETRGA端子立ち下がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b2	BSGTRGBR	GTETRGB端子立ち上がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b3	BSGTRGBF	GTETRGB端子立ち下がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTETRGB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	BSCARBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b9	BSCARBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち上がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b10	BSCAFBL	GTIOCB値LowでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が0のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b11	BSCAFBH	GTIOCB値HighでのGTIOCA端子立ち下がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCB入力が1のとき、GTIOCA入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b12	BSCBRAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b13	BSCBRAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち上がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち上がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	BSCBFAL	GTIOCA値LowでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が0のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b15	BSCBFAH	GTIOCA値HighでのGTIOCB端子立ち下がり入力要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：GTIOCA入力が1のとき、GTIOCB入力の立ち下がりエッジでのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b16	BSELCA	ELC_GPTAイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTAイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTAイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b17	BSELCB	ELC_GPTBイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTBイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTBイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b18	BSELCC	ELC_GPTCイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTCイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTCイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b19	BSELCD	ELC_GPTDイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTDイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTDイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b20	BSELCE	ELC_GPTEイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTEイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTEイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b21	BSELCF	ELC_GPTFイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTFイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTFイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b22	BSELCG	ELC_GPTGイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTGイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTGイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b23	BSELCH	ELC_GPTHイベント要因GTCCRBインプットキャプチャ許可	0：ELC_GPTHイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを禁止 1：ELC_GPTHイベント入力でのGTCCRBインプットキャプチャを許可	R/W
b31-b24	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTICBSR レジスタは GTCCRB のインプットキャプチャ要因を設定するレジスタです。

BSGTRGAR ビット（GTETRGA 端子立ち上がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSGTRGAF ビット（GTETRGA 端子立ち下がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSGTRGBR ビット（GTETRGB 端子立ち上がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSGTRGBF ビット（GTETRGB 端子立ち下がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTETRGB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCARBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCARBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち上がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCAFBL ビット（GTIOCB 値 Low での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 0 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCAFBH ビット（GTIOCB 値 High での GTIOCA 端子立ち下がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCB 入力が 1 のとき、GTIOCA 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCBRAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCBRAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち上がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち上がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCBFAL ビット（GTIOCA 値 Low での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 0 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSCBFAH ビット（GTIOCA 値 High での GTIOCB 端子立ち下がり入力要因 GTCCRB インプットキャプチャ許可）

GTIOCA 入力が 1 のとき、GTIOCB 端子入力の立ち下がりエッジでの GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

BSELCm ビット（ELC_GPTm イベント要因カウンタ GTCCRB インプットキャプチャ許可）（m = A ～ H）

ELC_GPTm イベント入力での GTCCRB インプットキャプチャの許可／禁止を選択します。

23.2.12　汎用 PWM タイマコントロールレジスタ（GTCR）

アドレス　GPT32m.GTCR 4007 802Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCR 4007 802Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	TPCS[2:0]			—	—	—	—	—	MD[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	CST
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CST	カウントスタート	0：カウント動作を停止 1：カウント動作を実行	R/W
b15-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b18-b16	MD[2:0]	モード選択	b18 b16 0 0 0：のこぎり波PWMモード（シングル／ダブルバッファ可） 0 0 1：のこぎり波ワンショットパルスモード（バッファ動作固定） 0 1 0：設定禁止 0 1 1：設定禁止 1 0 0：三角波PWMモード1（谷32ビット転送）（シングル／ダブルバッファ可） 1 0 1：三角波PWMモード2（山／谷32ビット転送）（シングル／ダブルバッファ可） 1 1 0：三角波PWMモード3（谷64ビット転送）（バッファ動作固定） 1 1 1：設定禁止	R/W
b23-b19	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b26-b24	TPCS[2:0]	タイマプリスケーラ選択	b26 b24 0 0 0：PCLKD/1 0 0 1：PCLKD/4 0 1 0：PCLKD/16 0 1 1：PCLKD/64 1 0 0：PCLKD/256 1 0 1：PCLKD/1024	R/W
b31-b27	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTCR レジスタは、GTCNT カウンタを制御するレジスタです。

CST ビット（カウントスタート）

GTCNT カウンタのスタート／ストップを制御します。

［1 になる条件］

- GTSSR.CSTRT ビットが 1 の状態で、GTSTR レジスタの値（チャネル番号はビット番号に対応）を 1 にしたとき
- ELC イベント入力、またはカウンタスタート要因により GTSSR レジスタで許可した GTIOCA/GTIOCB/GTETRGn ポート入力が発生したとき
- ソフトウェアで直接 1 を書き込んだとき

［0 になる条件］

- GTSSR.CSTOP ビットが 1 の状態で、GTSTP レジスタの値（チャネル番号はビット番号に対応）を 1 にしたとき
- ELC イベント入力、またはカウンタストップ要因により GTSSR レジスタで許可した GTIOCA/GTIOCB/GTETRGn ポート入力が発生したとき
- ソフトウェアで直接 0 を書き込んだとき

MD[2:0] ビット（モード選択）

GPT の動作モードを選択します。MD[2:0] ビットの設定は、GTCNT 動作が停止しているときに行ってください。

TPCS[2:0] ビット（タイマプリスケーラ選択）

GTCNT カウンタのクロックを選択します。チャネルごとに個別にクロックプリスケーラの選択が可能です。TPCS[2:0] ビットの設定は、GTCNT カウンタの動作が停止しているときに行ってください。

23.2.13　汎用 PWM タイマカウント方向、デューティ設定レジスタ（GTUDDTYC）

アドレス　GPT32m.GTUDDTYC 4007 8030h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTUDDTYC 4007 8030h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	OBDTYR	OBDTYF	OBDTY[1:0]		—	—	—	—	OADTYR	OADTYF	OADTY[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	UDF	UD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	UD	カウント方向設定	0：GTCNTカウンタはダウンカウント 1：GTCNTカウンタはアップカウント	R/W
b1	UDF	カウント方向強制設定	0：強制設定しない 1：強制設定する	R/W
b15-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b17-b16	OADTY[1:0]	GTIOCA出力デューティ設定	b17 b16 0 x：GTIOCA端子のデューティはコンペアマッチに依存 1 0：GTIOCA端子のデューティは0% 1 1：GTIOCA端子のデューティは100%	R/W
b18	OADTYF	GTIOCA出力デューティ強制設定	0：強制設定しない 1：強制設定する	R/W
b19	OADTYR	0%/100%デューティ設定解除後のGTIOCA出力値選択	0：0%/100%デューティ設定解除後に、0%/100%デューティに設定された出力値をGTIOA[3:2]機能に適用 1：0%/100%デューティ設定解除後に、マスクされたコンペアマッチ出力値をGTIOA[3:2]機能に適用	R/W
b23-b20	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b25-b24	OBDTY[1:0]	GTIOCB出力デューティ設定	b25 b24 0 x：GTIOCB端子のデューティはコンペアマッチに依存 1 0：GTIOCB端子のデューティは0% 1 1：GTIOCB端子のデューティは100%	R/W
b26	OBDTYF	GTIOCB出力デューティ強制設定	0：強制設定しない 1：強制設定する	R/W
b27	OBDTYR	0%/100%デューティ設定解除後のGTIOCB出力値選択	0：0%/100%デューティ設定解除後に、0%/100%デューティに設定された出力値をGTIOB[3:2]機能に適用 1：0%/100%デューティ設定解除後に、マスクされたコンペアマッチ出力値をGTIOB[3:2]機能に適用	R/W
b31-b28	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

x: Don’t care

GTUDDTYC レジスタは、GTCNT カウンタのカウント方向（アップ／ダウン）および GTIOCA/GTIOCB 端子出力のデューティを設定するレジスタです。

【カウント方向】

- のこぎり波モードの場合

アップカウント中に UD ビットを 0 にした場合、オーバーフロー時に（GTCNT カウンタ値が GTPR 値になった後、カウントクロックに同期したタイミングで）カウント方向が切り替わります。ダウンカウント中に UD 値を 1 にした場合、アンダーフロー時に（GTCNT カウンタ値が 0 になった後、カウントクロックに同期したタイミングで）カウント方向が切り替わります。

カウントストップ中に UDF ビットが 0 の状態で UD 値を 1 から 0 に変更した場合、カウント動作はアップカウントとなり、オーバーフロー時に（GTCNT カウンタ値が GTPR 値になった後、カウントクロックに

同期したタイミングで）カウント方向が切り替わります。カウントストップ中にUDFビットが0の状態でUD値を0から1に変更した場合、カウント動作はダウンカウントとなり、アンダーフロー時に（GTCNTカウンタ値が0になった後、カウントクロックに同期したタイミングで）カウント方向が切り替わります。

カウントストップ中にUDFビットを1にすると、UDビット値がカウントスタート時のカウント方向に反映されます。

- 三角波モードの場合

カウント中にUD値を変更しても、カウント方向は切り替わりません。カウントストップ中にUDFビットが0の状態でUD値を変更しても、カウントスタート時のカウント方向には反映されません。

カウントストップ中にUDFビットを1にすると、そのときのUD値がカウントスタート時のカウント方向に反映されます。

UDビット（カウント方向設定）

GTCNTカウンタのカウント方向（アップ／ダウン）を設定します。

UDFビット（カウント方向強制設定）

GTCNTカウンタ動作スタート時のカウント方向を強制的にUDビットの値に設定します。カウンタが動作している間は、本ビットに0以外を書き込まないでください。カウントストップ中に1を書いた場合、カウントがスタートする前に0に戻してください。

【出力デューティ】

- のこぎり波モードの場合

アップカウント中にOADTY/OBDTY値を変更すると、オーバーフロー時（GTCNT = GTPR）にデューティが反映されます。ダウンカウント中にOADTY/OBDTY値を変更すると、アンダーフロー時（GTCNT = 0）にデューティが反映されます。

カウントストップ中に、OADTYF/OBDTYFビットが0の状態でOADTY/OBDTY値を1に変更すると、カウンタスタート時に出力デューティは反映されません。カウント方向がアップカウントの場合、オーバーフロー時（GTCNT = GTPR）に出力デューティが反映されます。カウント方向がダウンカウントの場合、アンダーフロー時（GTCNT = 0）に出力デューティが反映されます。カウントストップ中に、OADTYF/OBDTYFビットが1の状態でOADTY/OBDTY値を0に変更すると、カウンタスタート時に出力デューティが反映されます。

- 三角波モードの場合

カウント中にOADTY/OBDTY値を変更すると、アンダーフロー時にデューティが反映されます。

カウントストップ中に、OADTYF/OBDTYFビットが0の状態でOADTY/OBDTY値を1に変更すると、カウンタ動作開始時に出力デューティは反映されません。アンダーフロー時に出力デューティが反映されます。カウントストップ中に、OADTYF/OBDTYFビットが1の状態でOADTY/OBDTY値を0に変更すると、カウンタスタート時に出力デューティが反映されます。

OmDTY[1:0]ビット（GTIOCm出力デューティ設定）（m = A、B）

GTIOCm端子の出力デューティ（0%、100%、またはコンペアマッチ制御）を設定します。

OmDTYFビット（GTIOCm出力デューティ強制設定）（m = A、B）

出力デューティサイクルをOmDTYの設定値に強制的に設定します。カウンタの動作中は、本ビットを0にする必要があります。カウントストップ中に本ビットを1にした場合は、カウンタの動作開始後、最初の周期が終わるまでに本ビットを0に戻してください。

OmDTYRビット（0%/100%デューティ設定解除後のGTIOCm出力値選択）（m = A、B）

制御が0%/100%デューティ設定からGTIOCm端子およびGTIORレジスタのコンペアマッチに変更された場合、周期の終わりで出力保持／トグル出力の対象となる値を選択します。GTIOm[3:2]ビットが00b（周期の終わりで出力保持）に、またはGTIOR.GTIOm[3:2]ビットが11b（周期の終わりでトグル出力）に設定されます。

デューティ0%/100%設定動作実行中、GPT32内では、コンペアマッチ動作が継続されます。OmDTYRビットを1にすると、GTIOCm端子は、コンペアマッチ動作中の周期の終わりでGTIOR.GTIOm[3:2]ビットで選択された出力状態になります。

23.2.14　汎用 PWM タイマ I/O コントロールレジスタ（GTIOR）

アドレス　GPT32m.GTIOR 4007 8034h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTIOR 4007 8034h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	NFCSB[1:0]		NFBEN	—	—	OBDF[1:0]		OBE	OBHLD	OBDFLT	—	GTIOB[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	NFCSA[1:0]		NFAEN	—	—	OADF[1:0]		OAE	OAHLD	OADFLT	—	GTIOA[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	GTIOA[4:0]	GTIOCA端子機能選択	表 23.5を参照してください。	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	OADFLT	カウントストップ時のGTIOCA端子出力値設定	0：カウントストップ時にGTIOCA端子はLowを出力 1：カウントストップ時にGTIOCA端子はHighを出力	R/W
b7	OAHLD	カウントスタート／ストップ時のGTIOCA端子出力設定	0：カウントスタート／ストップ時のGTIOCA端子出力レベルはレジスタ設定値に従う 1：カウントスタート／ストップ時にGTIOCA端子の出力レベルを保持する	R/W
b8	OAE	GTIOCA端子出力許可	0：出力を禁止 1：出力を許可	R/W
b10-b9	OADF[1:0]	GTIOCA端子禁止値設定	b10 b9 0 0：出力禁止を禁止 0 1：出力禁止時にGTIOCA端子をHi-Zにする 1 0：出力禁止時にGTIOCA端子を0にする 1 1：出力禁止時にGTIOCA端子を1にする	R/W
b12-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13	NFAEN	ノイズフィルタA有効	0：GTIOCA端子のノイズフィルタは無効 1：GTIOCA端子のノイズフィルタは有効	R/W
b15-b14	NFCSA[1:0]	ノイズフィルタAサンプリングクロック選択	b15 b14 0 0：PCLKD/1 0 1：PCLKD/4 1 0：PCLKD/16 1 1：PCLKD/64	R/W
b20-b16	GTIOB[4:0]	GTIOCB端子機能選択	表 23.5を参照してください。	R/W
b21	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b22	OBDFLT	カウントストップ時のGTIOCB端子出力値設定	0：カウントストップ時にGTIOCB端子はLowを出力 1：カウントストップ時にGTIOCB端子はHighを出力	R/W
b23	OBHLD	カウントスタート／ストップ時のGTIOCB端子出力設定	0：カウントスタート／ストップ時のGTIOCB端子出力レベルはレジスタ設定値に従う 1：カウントスタート／ストップ時のGTIOCB端子出力レベルは保持される	R/W
b24	OBE	GTIOCB端子出力許可	0：出力を禁止 1：出力を許可	R/W
b26-b25	OBDF[1:0]	GTIOCB端子禁止値設定	b26 b25 0 0：出力禁止を禁止 0 1：出力禁止時にGTIOCB端子をHi-Zにする 1 0：出力禁止時にGTIOCB端子を0にする 1 1：出力禁止時にGTIOCB端子を1にする	R/W
b28-b27	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b29	NFBEN	ノイズフィルタB有効	0：GTIOCB端子のノイズフィルタは無効 1：GTIOCB端子のノイズフィルタは有効	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b30	NFCSB[1:0]	ノイズフィルタBサンプリングクロック選択	b31 b30 0 0 : PCLKD/1 0 1 : PCLKD/4 1 0 : PCLKD/16 1 1 : PCLKD/64	R/W

GTIOR レジスタは、GTIOCA 端子および GTIOCB 端子の機能を設定するレジスタです。

GTIOA[4:0] ビット（GTIOCA 端子機能選択）

GTIOCA 端子の機能を選択します。詳細は、表 23.5 を参照してください。

OADFLT ビット（カウントストップ時の GTIOCA 端子出力値設定）

カウントストップ時に、GTIOCA 端子が Low または High のいずれを出力するかを設定します。

OAHLD ビット（カウントスタート／ストップ時の GTIOCA 端子出力設定）

GTIOCA 端子の出力レベルを保持するか、カウントスタート／ストップ時のレベルをレジスタ設定に依存させるかを指定します。

［OAHLD ビットを 0 にした場合］

- カウントスタート時に、GTIOA[4:0] ビットの b4 で指定した値を出力
- カウントストップ時に、OADFLT ビットで指定した値を出力
- カウントストップ中に OADFLT ビットを書き換えた場合、新しい値がただちに出力に反映される

［OAHLD ビットを 1 にした場合］

- カウントスタート／ストップ時に出力が保持される

OAE ビット（GTIOCA 端子出力許可）

GTIOCA 端子出力の許可／禁止を選択します。

GTCCRA レジスタをインプットキャプチャレジスタとして使用する場合（GTICASR レジスタの少なくとも 1 つのビットを 1 にした場合）、OAE ビット値に関わらず、GTIOCA 端子を出力しません。

OADF[1:0] ビット（GTIOCA 端子禁止値設定）

出力禁止要求発生時に GTIOCA 端子の出力値を選択します。

NFAEN ビット（ノイズフィルタ A 有効）

GTIOCA 端子からの入力に対してノイズフィルタの許可／停止を設定します。本ビット値を変更すると予想外のエッジが内部で発生する恐れがあるため、GTIOR レジスタの該当端子に対しアウトプットコンペア機能を選択してから、本ビットを変更してください。

NFCSA[1:0] ビット（ノイズフィルタ A サンプリングクロック選択）

GTIOCA 端子のノイズフィルタのサンプリング周期を設定します。これらのビットを設定する場合、選択したサンプリング周期の 2 周期分待った後、インプットキャプチャ機能を設定してください。

GTIOB[4:0] ビット（GTIOCB 端子機能選択）

GTIOCB 端子の機能を選択します。詳細は、表 23.5 を参照してください。

OBDFLT ビット（カウントストップ時の GTIOCB 端子出力値設定）

カウントストップ時に、GTIOCB 端子が High または Low のいずれを出力するかを設定します。

OBHLD ビット（カウントスタート／ストップ時の GTIOCB 端子出力設定）

GTIOCB 端子の出力レベルを保持するか、カウントスタート／ストップ時のレベルをレジスタ設定に依存させるかを指定します。

［OBHLD ビットを 0 にした場合］

- カウントスタート時に、GTIOB[4:0] ビットの b4 で指定した値を出力
- カウントストップ時に、OBDFLT ビットで指定した値を出力
- カウントストップ中に OBDFLT ビットを書き換えた場合、新しい値がただちに出力に反映される

［OBHLD ビットを 1 にした場合］

- カウントスタート／ストップ時に出力が保持される

OBE ビット（GTIOCB 端子出力許可）

GTIOCB 端子出力の許可／禁止を選択します。

GTCCRB レジスタをインプットキャプチャレジスタとして使用する場合（GTICBSR レジスタの少なくとも 1 つのビットを 1 にした場合）、OBE ビット値に関わらず、GTIOCB 端子を出力しません。

OBDF[1:0] ビット（GTIOCB 端子禁止値設定）

出力禁止要求発生時に GTIOCB 端子の出力値を選択します。

NFBEN ビット（ノイズフィルタ B 有効）

GTIOCB 端子からの入力に対してノイズフィルタ機能の許可／停止を設定します。本ビット値を変更すると予想外のエッジが内部で発生する恐れがあるため、GTIOR レジスタの該当端子に対しアウトプットコンペア機能を選択してから、本ビットを変更してください。

NFCSB[1:0] ビット（ノイズフィルタ B サンプリングクロック選択）

GTIOCB 端子のノイズフィルタのサンプリング周期を設定します。これらのビットを設定する場合、選択したサンプリング周期の 2 周期分待った後、インプットキャプチャ機能を設定してください。

表 23.5　GTIOA[4:0] ビットと GTIOB[4:0] ビットの設定値 (1/2)

GTIOA/GTIOB[4:0] ビット					機能		
b4	b3	b2	b1	b0	b4	b3-b2（注1）（注2）（注3）	b1-b0（注2）
0	0	0	0	0	初期出力はLow	周期の終わりで出力保持	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
0	0	0	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
0	0	0	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
0	0	0	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力
0	0	1	0	0		周期の終わりでLow出力	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
0	0	1	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
0	0	1	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
0	0	1	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力
0	1	0	0	0		周期の終わりでHigh出力	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
0	1	0	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
0	1	0	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
0	1	0	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力
0	1	1	0	0		周期の終わりでトグル出力	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
0	1	1	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
0	1	1	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
0	1	1	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力

表 23.5　GTIOA[4:0]ビットとGTIOB[4:0]ビットの設定値 (2/2)

GTIOA/GTIOB[4:0]ビット					機能		
b4	b3	b2	b1	b0	b4	b3-b2（注1）（注2）（注3）	b1-b0（注2）
1	0	0	0	0	初期出力はHigh	周期の終わりで出力保持	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
1	0	0	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
1	0	0	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
1	0	0	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力
1	0	1	0	0		周期の終わりでLow出力	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
1	0	1	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
1	0	1	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
1	0	1	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力
1	1	0	0	0		周期の終わりでHigh出力	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
1	1	0	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
1	1	0	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
1	1	0	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力
1	1	1	0	0		周期の終わりでトグル出力	GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチで出力保持
1	1	1	0	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでLow出力
1	1	1	1	0			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでHigh出力
1	1	1	1	1			GTCCRA/GTCCRBコンペアマッチでトグル出力

注 1.　周期の終わりとは、オーバーフロー（アップカウント時に GTCNT カウンタが GTPR 値から 0 に変化）、またはアンダーフロー（ダウンカウント時に GTCNT カウンタが 0 から GTPR 値に変化）を意味します。GTCNT カウンタはのこぎり波に対してクリアされます。また三角波の谷（GTCNT カウンタが 0 から 1 に変化）に対してクリアされます。

注 2.　コンペアマッチ動作時に、周期の終わりと GTCCRA/GTCCRB コンペアマッチのタイミングが一致した場合、のこぎり波 PWM モードでは b3-b2 の設定値が優先され、それ以外のモードでは b1-b0 の設定値が優先されます。

注 3.　GTUPSR レジスタまたは GTDNSR レジスタの少なくとも 1 つのビットが 1 の場合のイベントカウント動作では、b3-b2 の設定値は無視されます。

23.2.15　汎用 PWM タイマ割り込み出力設定レジスタ（GTINTAD）

アドレス　GPT32m.GTINTAD 4007 8038h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTINTAD 4007 8038h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	GRPABL	GRPABH	—	—	—	GRP[1:0]		—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b23-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b25-b24	GRP[1:0]	出力禁止要因選択	b25 b24 0　0：グループA出力禁止要求 0　1：グループB出力禁止要求 1　x：設定禁止	R/W
b28-b26	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b29	GRPABH	同時出力レベルHigh禁止要求許可	0：同時出力レベルHigh禁止要求を禁止 1：同時出力レベルHigh禁止要求を許可	R/W
b30	GRPABL	同時出力レベルLow禁止要求許可	0：同時出力レベルLow禁止要求を禁止 1：同時出力レベルLow禁止要求を許可	R/W
b31	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTINTAD レジスタは、割り込み要求と出力禁止要求を許可または禁止するレジスタです。

GRP[1:0] ビット（出力禁止要因選択）

GTIOCA 端子または GTIOCB 端子の出力禁止要因を選択します。

GRPABH で同時出力レベル High が有効になる、または GRPABL で同時出力レベル Low が有効になると、POEG に対する出力禁止要求が GRP[1:0] ビットで選択されたグループに出力されます。

GTST.ODF が、GRP[1:0] ビットで選択した出力禁止要因グループの要求を示します。GRP[1:0] ビットの設定は、GTIOR.OAE ビットと GTIOR.OBE ビットの両方が 0 のときに行ってください。

GRPABH ビット（同時出力レベル High 禁止要求許可）

GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 1 を出力する場合の出力禁止要求を許可／禁止します。

GRPABL ビット（同時出力レベル Low 禁止要求許可）

GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 0 を出力する場合の出力禁止要求を許可／禁止します。

23.2.16　汎用 PWM タイマステータスレジスタ（GTST）

アドレス　GPT32m.GTST 4007 803Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTST 4007 803Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	OABLF	OABHF	—	—	—	—	ODF	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TUCF	—	—	—	—	—	—	—	TCFPU	TCFPO	TCFF	TCFE	TCFD	TCFC	TCFB	TCFA
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TCFA	インプットキャプチャ／コンペアマッチフラグA	0：GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチの発生なし 1：GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチの発生あり	R/(W)（注1）
b1	TCFB	インプットキャプチャ／コンペアマッチフラグB	0：GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチの発生なし 1：GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチの発生あり	R/(W)（注1）
b2	TCFC	インプットコンペアマッチフラグC	0：GTCCRCコンペアマッチの発生なし 1：GTCCRCコンペアマッチの発生あり	R/(W)（注1）
b3	TCFD	インプットコンペアマッチフラグD	0：GTCCRDコンペアマッチの発生なし 1：GTCCRDコンペアマッチの発生あり	R/(W)（注1）
b4	TCFE	インプットコンペアマッチフラグE	0：GTCCREコンペアマッチの発生なし 1：GTCCREコンペアマッチの発生あり	R/(W)（注1）
b5	TCFF	インプットコンペアマッチフラグF	0：GTCCRFコンペアマッチの発生なし 1：GTCCRFコンペアマッチの発生あり	R/(W)（注1）
b6	TCFPO	オーバーフローフラグ	0：オーバーフロー（山）の発生なし 1：オーバーフロー（山）の発生あり	R/(W)（注1）
b7	TCFPU	アンダーフローフラグ	0：アンダーフロー（谷）の発生なし 1：アンダーフロー（谷）の発生あり	R/(W)（注1）
b14-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15	TUCF	カウント方向フラグ	0：GTCNTカウンタはダウンカウント 1：GTCNTカウンタはアップカウント	R
b23-b16	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b24	ODF	出力禁止フラグ	0：出力禁止要求の発生なし 1：出力禁止要求の発生あり	R
b28-b25	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b29	OABHF	同時出力レベルHighフラグ	0：GTIOCA端子とGTIOCB端子は同時に1を出力しない 1：GTIOCA端子とGTIOCB端子は同時に1を出力する	R
b30	OABLF	同時出力レベルLowフラグ	0：GTIOCA端子とGTIOCB端子は同時に0を出力しない 1：GTIOCA端子とGTIOCB端子は同時に0を出力する	R
b31	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　本ビットには 0 のみ書けます。1 を書き込まないでください。

GTST レジスタは、GPT の状態を示します。

TCFA フラグ（インプットキャプチャ／コンペアマッチフラグ A）

GTCCRA のインプットキャプチャまたはコンペアマッチのステータスフラグです。

［1 になる条件］

- GTCCRA レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値 = GTCCRA 値になったとき
- GTCCRA レジスタがインプットキャプチャレジスタとして機能している場合、インプットキャプチャ信号によって GTCNT カウンタ値が GTCCRA レジスタに転送されたとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

TCFB フラグ（インプットキャプチャ／コンペアマッチフラグ B）

GTCCRB のインプットキャプチャまたはコンペアマッチのステータスフラグです。

［1 になる条件］

- GTCCRB レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値 = GTCCRB 値になったとき
- GTCCRB レジスタがインプットキャプチャレジスタとして機能している場合、インプットキャプチャ信号によって GTCNT カウンタの値が GTCCRB レジスタに転送されたとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

TCFC フラグ（インプットコンペアマッチフラグ C）

GTCCRC のコンペアマッチのステータスフラグです。

［1 になる条件］

- GTCNT カウンタ値 = GTCCRC 値になったとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

［比較を行わない条件］

- GTCR.MD[2:0] ビット = 001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット = 110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRA[1:0] ビット = 01b、10b、11b（GTCCRC レジスタがバッファ動作）

TCFD フラグ（インプットコンペアマッチフラグ D）

GTCCRD のコンペアマッチのステータスフラグです。

［1 になる条件］

- GTCNT カウンタ値 = GTCCRD 値になったとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

［比較を行わない条件］

- GTCR.MD[2:0] ビット = 001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット = 110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRA[1:0] ビット = 10b、11b（GTCCRD レジスタがバッファ動作）

TCFE フラグ（インプットコンペアマッチフラグ E）

GTCCRE のコンペアマッチのステータスフラグです。

［1 になる条件］

- GTCNT カウンタ値＝GTCCRE 値になったとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

［比較を行わない条件］

- GTCR.MD[2:0] ビット＝001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット＝110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRB[1:0] ビット＝01b、10b、11b（GTCCRE レジスタがバッファ動作）

TCFF フラグ（インプットコンペアマッチフラグ F）

GTCCRF のコンペアマッチのステータスフラグです。

［1 になる条件］

- GTCNT カウンタ値＝GTCCRF 値になったとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

［比較を行わない条件］

- GTCR.MD[2:0] ビット＝001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット＝110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRB[1:0] ビット＝10b、11b（GTCCRF レジスタがバッファ動作）

TCFPO フラグ（オーバーフローフラグ）

オーバーフローまたは山が発生したことを示します。

［1 になる条件］

- のこぎり波モードにおいて、オーバーフロー（アップカウント時に GTCNT カウンタが GTPR 値から 0 に変化）が発生したとき
- 三角波モードにおいて、山（GTCNT カウンタが GTPR 値から GTPR 値 - 1 に変化）が発生したとき
- ハードウェア要因によるカウントで、オーバーフロー（アップカウント時に GTCNT カウンタ値が GTPR 値から 0 に変化）が発生したとき

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書いたとき

TCFPU フラグ（アンダーフローフラグ）

アンダーフローまたは谷が発生したことを示します。

[1 になる条件]

- のこぎり波モードにおいて、アンダーフロー（ダウンカウント時に GTCNT カウンタが 0 から GTPR 値に変化）が発生したとき
- 三角波モードにおいて、谷（GTCNT カウンタが 0 から 1 に変化）が発生したとき
- ハードウェア要因によるカウントで、アンダーフロー（ダウンカウント時に GTCNT カウンタが 0 から GTPR 値に変化）が発生したとき

[0 になる条件]

- 本ビットに 0 を書いたとき

TUCF フラグ（カウント方向フラグ）

GTCNT カウンタのカウント方向を示します。イベントカウント動作で、本フラグはアップカウント時に 1、ダウンカウント時に 0 になります。

ODF フラグ（出力禁止フラグ）

GRP[1:0] ビットで選択した出力禁止要因グループの要求を示します。

出力禁止時、出力禁止要求がネゲートされる周期の間、出力禁止制御は解除されません。次の周期に解除されます。

OABHF フラグ（同時出力レベル High フラグ）

GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 1 を出力したことを示します。

GTIOCA 端子または GTIOCB 端子が 0 を出力すると、本フラグは 0 に戻ります。本フラグは読み出し専用です。本フラグをクリアするために 0 を書き込むことは禁止されています。

OABHF フラグによる割り込みが許可されている（GTINTAD.GRPABH ビット = 1）場合、OABHF フラグが出力禁止要求として POEG に出力されます。

[1 になる条件]

- OAE ビットと OBE ビットがどちらも 1 で、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 1 を出力するとき

[0 になる条件]

- OAE ビットと OBE ビットがどちらも 1 で、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子の出力値が異なるとき
- OAE ビットと OBE ビットがどちらも 1 で、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 0 を出力するとき
- OAE ビットと OBE ビットのどちらかが 0 になったとき

OABLF フラグ（同時出力レベル Low フラグ）

GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 0 を出力したことを示します。

GTIOCA 端子または GTIOCB 端子が 1 を出力すると、本フラグは 0 に戻ります。本フラグは読み出し専用です。本フラグをクリアするために 0 を書き込むことは禁止されていません。OABLF フラグによる割り込みが許可されている（GTINTAD.GRPABL ビット = 1）場合、OABLF フラグが出力禁止要求として POEG に出力されます。

［1 になる条件］

- OAE ビットと OBE ビットがどちらも 1 で、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 0 を出力するとき

［0 になる条件］

- OAE ビットと OBE ビットがどちらも 1 で、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子の出力値が異なるとき
- OAE ビットと OBE ビットがどちらも 1 で、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子が同時に 1 を出力するとき
- OAE ビットと OBE ビットのどちらかが 0 になったとき

OABHF/OABLF フラグを生成する比較対象信号は、出力禁止機能でマスクされる前のコンペアマッチ出力（PWM 出力）信号です。出力禁止状態が実行される場合、コンペアマッチも GPT 内部で継続して実行され、OABHF/OABLF フラグは比較値の結果に従って更新されます。

23.2.17　汎用 PWM タイマバッファイネーブルレジスタ（GTBER）

アドレス　GPT32m.GTBER 4007 8040h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTBER 4007 8040h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—		—	—	—		—	CCRSWT	PR[1:0]		CCRB[1:0]		CCRA[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	BD[1]	BD[0]
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	BD[0]	GTCCRバッファ動作禁止	0：バッファ動作を許可 1：バッファ動作を禁止	R/W
b1	BD[1]	GTPRバッファ動作禁止		R/W
b15-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b17-b16	CCRA[1:0]	GTCCRAバッファ動作	b17 b16 0 0：バッファ動作しない 0 1：シングルバッファ動作（GTCCRA レジスタ⇔GTCCRC レジスタ） 1 x：ダブルバッファ動作（GTCCRA レジスタ⇔GTCCRC レジスタ⇔GTCCRD レジスタ）	R/W
b19-b18	CCRB[1:0]	GTCCRBバッファ動作	b19 b18 0 0：バッファ動作しない 0 1：シングルバッファ動作（GTCCRB レジスタ⇔GTCCRE レジスタ） 1 x：ダブルバッファ動作（GTCCRB レジスタ⇔GTCCRE レジスタ⇔GTCCRF レジスタ）	R/W
b21-b20	PR[1:0]	GTPRバッファ動作	b21 b20 0 0：バッファ動作しない 0 1：シングルバッファ動作（GTPBR レジスタ⇒GTPR レジスタ） 1 x：設定禁止	R/W
b22	CCRSWT	GTCCRA・GTCCRB強制バッファ動作	1を書くとGTCCRAおよびGTCCRB レジスタのバッファ転送を強制的に行います。本ビットは1を書いた後、自動的に0に戻ります。読むと0が読めます。	R/W
b31-b23	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

GTBER レジスタは、バッファ動作を設定するレジスタです。GTCNT カウンタが停止しているときに設定する必要があります。

BD[0] ビット（GTCCR バッファ動作禁止）

GTCCRA、GTCCRC、GTCCRD レジスタを組み合わせたバッファ動作、および GTCCRB、GTCCRE、GTCCRF レジスタを組み合わせたバッファ動作を禁止します。

GTDTCR.TDE ビットが 1 のとき、BD[0] ビットを 0 にしても、GTCCRB レジスタはバッファ動作を行いません。GTCCRB レジスタは、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値に自動的に設定されます。

BD[1] ビット（GTPR バッファ動作禁止）

GTPR レジスタと GTPBR レジスタを組み合わせたバッファ動作を禁止します。

CCRA[1:0] ビット（GTCCRA バッファ動作）

GTCCRA、GTCCRC、および GTCCRD レジスタを組み合わせたバッファ動作を設定します。GTCR レジスタで設定した動作モードによってバッファ動作が制限される場合は、GTCR レジスタの設定が優先されます。（注 1）

CCRB[1:0] ビット（GTCCRB バッファ動作）

GTCCRB、GTCCRE、および GTCCRF レジスタを組み合わせたバッファ動作を設定します。GTCR レジスタで設定した動作モードによってバッファ動作が制限される場合は、GTCR レジスタの設定が優先されます。（注 1）

PR[1:0] ビット（GTPR バッファ動作）

GTPR および GTPBR レジスタを組み合わせたバッファ動作を設定します。

CCRSWT ビット（GTCCRA・GTCCRB 強制バッファ動作）

CCRSWT ビットに 1 を書くと、強制的に GTCCRA レジスタと GTCCRB レジスタのバッファ転送を行います。本ビットは 1 を書いた後、自動的に 0 に戻ります。読むと 0 が読めます。カウントストップ時にコンペマッチ動作が設定されている場合にのみ有効です。

注 1. のこぎり波ワンショットパルスモード、または三角波 PWM モード 3（谷 64 ビット転送）では、バッファ動作モードは固定されます。

23.2.18　汎用 PWM タイマカウンタ（GTCNT）

アドレス　GPT32m.GTCNT 4007 8048h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCNT 4007 8048h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

GTCNT は、GPT32m（m = 0 ～ 3）用の 32 ビットの読み出し／書き込みカウンタです。GPT16m（m = 4, 5, 8）の場合、GTCNT は 16 ビットレジスタになります。GTCNT への書き込みは、カウントストップ後にのみ可能です。32 ビット単位でアクセスしてください。8 ビット単位／ 16 ビット単位でのアクセスはしないでください。

GPT16m（m = 4, 5, 8）の場合、32 ビット単位アクセス時の上位 16 ビットは、読むと常に 0000h が読み出され、書き込みは無視されます。

GTCNT レジスタは、0 ≦ GTCNT ≦ GTPR の範囲に収まるように設定する必要があります。

23.2.19　汎用 PWM タイマコンペアキャプチャレジスタ n（GTCCRn）(n = A ～ F)

アドレス　GPT32m.GTCCRA 4007 804Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCCRA 4007 804Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8),
GPT32m.GTCCRB 4007 8050h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCCRB 4007 8050h + 0100h × m (m = 4, 5, 8),
GPT32m.GTCCRC 4007 8054h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCCRC 4007 8054h + 0100h × m (m = 4, 5, 8),
GPT32m.GTCCRD 4007 805Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCCRD 4007 805Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8),
GPT32m.GTCCRE 4007 8058h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCCRE 4007 8058h + 0100h × m (m = 4, 5, 8),
GPT32m.GTCCRF 4007 8060h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTCCRF 4007 8060h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

注 1.　GPT16m（m = 4, 5, 8）の場合、リセット後の上位 16 ビットの値は 0000h です。

GTCCRn レジスタは読み出し／書き込みレジスタです。GTCCRn レジスタの有効サイズは、GTCNT レジスタ（16 ビットまたは 32 ビット）と同一です。GTCCRn レジスタの有効サイズが 16 ビットの場合、32 ビット単位アクセス時の上位 16 ビットは、読むと常に 0000h が読み出され、書き込みは無視されます。

GTCCRA レジスタと GTCCRB レジスタは、アウトプットコンペア／インプットキャプチャ兼用のレジスタです。GTCCRC レジスタと GTCCRE レジスタは、コンペアマッチレジスタですが、GTCCRA レジスタと GTCCRB レジスタ用のバッファレジスタとしても機能します。

GTCCRD レジスタと GTCCRF レジスタは、コンペアマッチレジスタですが、GTCCRC レジスタと GTCCRE レジスタ用のバッファレジスタ（GTCCRA レジスタと GTCCRB レジスタ用のダブルバッファレジスタ）としても機能します。

23.2.20　汎用 PWM タイマ周期設定レジスタ（GTPR）

アドレス　GPT32m.GTPR 4007 8064h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTPR 4007 8064h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

注 1.　GPT16m（m = 4, 5, 8）の場合、リセット後の上位 16 ビットの値は 0000h です。

GTPR レジスタは、GTCNT カウンタの最大カウント値を設定する、読み出し／書き込みレジスタです。GTPR レジスタの有効サイズは、GTCNT レジスタ（16 ビットまたは 32 ビット）と同一です。GTPR レジスタの有効サイズが 16 ビットの場合、32 ビット単位アクセス時の上位 16 ビットは、読むと常に 0000h が読み出され、書き込みは無視されます。

のこぎり波の場合、GTPR 値 + 1 がカウント周期になります。三角波の場合、GTPR 値 × 2 がカウント周期になります。

23.2.21　汎用 PWM タイマ周期設定バッファレジスタ（GTPBR）

アドレス　GPT32m.GTPBR 4007 8068h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTPBR 4007 8068h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

注 1.　GPT16m（m = 4, 5, 8）の場合、リセット後の上位 16 ビットの値は 0000h です。

GTPBR レジスタは、読み出し／書き込み可能なレジスタであり、GTPR レジスタ用のバッファレジスタとして機能します。GTPBR レジスタの有効サイズは、GTCNT レジスタ（16 ビットまたは 32 ビット）と同一です。GTPBR レジスタの有効サイズが 16 ビットの場合、32 ビット単位アクセス時の上位 16 ビットは、読むと常に 0000h が読み出され、書き込みは無視されます。

23.2.22　汎用 PWM タイマデッドタイムコントロールレジスタ（GTDTCR）

アドレス　GPT32m.GTDTCR 4007 8088h + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTDTCR 4007 8088h + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	TDE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TDE	逆相波形設定	0：GTDVU レジスタを使用しないで、GTCCRB レジスタを設定する 1：GTDVU レジスタを使用して、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値を GTCCRB レジスタに自動設定する	R/W
b31-b1	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W

GTDTCR レジスタは、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値の自動設定を許可するレジスタです。GPT にはデッドタイム制御機能があります。デッドタイム値の設定には GTDVU レジスタを使用します。

TDE ビット（逆相波形設定）

GTDVU レジスタを使用するか否かを指定します。GTDVU レジスタを使用する場合、正相波形のコンペアマッチ値（GTCCRA 値）とデッドタイム値（GTDVU 値）から算出されたデッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値が、GTCCRB レジスタに自動設定されます。TDE ビットの設定値は、のこぎり波 PWM モードでは無視され、自動設定は行われません。

GTCCRB レジスタ値が自動設定されるとき、下記のような上限／下限値があります。算出された GTCCRB 値がこの範囲に収まらない場合、GTCCRB レジスタには下記の制限値が設定されます。

- 三角波の場合
  上限値：GTPR レジスタ値 - 1
  下限値：アップカウント時は 1、ダウンカウント時は 0
- のこぎり波ワンショットパルスモードの場合
  上限値：GTPR レジスタ値
  下限値：0

23.2.23　汎用 PWM タイマデッドタイム値レジスタ U（GTDVU）

アドレス　GPT32m.GTDVU 4007 808Ch + 0100h × m (m = 0～3),
GPT16m.GTDVU 4007 808Ch + 0100h × m (m = 4, 5, 8)

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）	1（注1）

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

注 1.　GPT16m（m = 4, 5, 8）の場合、リセット後の上位 16 ビットの値は 0000h です。

GTDVU レジスタは、PWM 波形を生成するためのデッドタイム値を設定する、読み出し／書き込みレジスタです。GTDVU レジスタの有効サイズは GTCNT（16 ビットまたは 32 ビット）と同じです。GTDVU の有効サイズが 16 ビットの場合、32 ビット単位の上位 16 ビットでのアクセスの読み取り値は常に 0000h で、本ビットへの書き込みは無視されます。

周期を超えるデッドタイム値の設定はしないでください。GTCCRB レジスタを読み出すことによって、設定された値の確認が可能です。GTDVU レジスタを使用する場合、GTCCRB レジスタへの書き込みはしないでください。本レジスタ値を 0 にすると、デッドタイムなしの波形が出力されます。

GPT の動作中は、GTDVU レジスタ値の変更はしないでください。GTDVU を新しい値に変更するには、GTCR レジスタの CST ビットで GPT を停止してください。GTDVU レジスタは 32 ビット単位でアクセスしてください。8 ビット単位／ 16 ビット単位でのアクセスはしないでください。

23.2.24　出力相切り替えコントロールレジスタ（OPSCR）

アドレス　GPT_OPS.OPSCR 4007 8FF0h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	NFCS[1:0]		NFEN	—	—	GODF	GRP[1:0]		—	—	ALIGN	—	INV	N	P	FB
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	EN	—	W	V	U	—	WF	VF	UF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	UF	入力相ソフト設定	ソフトウェア設定からの入力相を設定します。OPSCR.FBビットが1のとき、これらのビットの設定が有効になります。	R/W
b1	VF			R/W
b2	WF			R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	U	入力U相監視	入力相の状態を監視します。 OPSCR.FB = 0：PCLKDによって同期化した外部入力は、これらのビットに監視される OPSCR.FB = 1：ソフトウェア設定（UF/VF/WFビット）	R
b5	V	入力V相監視		R
b6	W	入力W相監視		R
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	EN	イネーブル相出力制御	0：出力しない（“Hi-Z”外部端子） 1：出力する（注1）	R/W
b15-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b16	FB	外部フィードバック信号許可	ソフトウェア設定および外部入力から入力相を選択します。 0：外部入力を選択 1：ソフトウェア設定（OPSCR.UF/VF/WFビット）を選択	R/W
b17	P	正相出力（P）制御	0：レベル信号を出力 1：PWM信号を出力（GPT320のPWM）	R/W
b18	N	逆相出力（N）制御	0：レベル信号を出力 1：PWM信号を出力（GPT320のPWM）	R/W
b19	INV	反転相出力制御	0：正論理（アクティブHigh）を出力 1：負論理（アクティブLow）を出力	R/W
b20	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b21	ALIGN	入力相アライメント	0：入力相をPCLKDに調整 1：入力相をPWMに調整	R/W
b23-b22	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b25-b24	GRP[1:0]	出力禁止要因選択	b25 b24 0 0：グループA出力禁止要因を選択 0 1：グループB出力禁止要因を選択 1 x：設定禁止	R/W
b26	GODF	グループ出力禁止機能	0：本ビット機能を無視 1：グループ禁止でOPSCR.ENビットをクリア（注1）	R/W
b28-b27	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b29	NFEN	外部入力ノイズフィルタ有効	0：外部入力にノイズフィルタを使用しない 1：外部入力にノイズフィルタを使用する	R/W
b31-b30	NFCS[1:0]	外部入力ノイズフィルタクロック選択	外部入力のノイズフィルタサンプリングクロック設定 b31 b30 0 0：PCLKD/1 0 1：PCLKD/4 1 0：PCLKD/16 1 1：PCLKD/64	R/W

注 1. OPSCR.GODF ビット = 1、かつ OPSCR.GRP[1:0] ビットで選択した信号値が High の場合、OPSCR.EN ビットは 0 になります。

OPSCR レジスタは、ブラシレス DC モータ制御に必要な信号波形の出力を設定するレジスタです。

UF、VF、WF ビット（入力相ソフト設定）

ソフトウェア設定からの入力相を設定します。OPSCR.FB ビットが 0 のとき、これらのビットが有効になります。UF/VF/WF ビットの設定値が U/V/W 外部入力に代わります。

U、V、W ビット（入力相監視）

OPSCR.FB ビットが 0 のとき、PCLKD と同期した外部入力を監視します。OPSCR.FB ビットが 1 の場合、OPSCR.U、OPSCR.V、OPSCR.W ビットは、OPSCR.UF、OPSCR.VF、OPSCR.WF ビットを読み出せます。

EN ビット（イネーブル相出力制御）

出力許可信号出力相（正相／逆相）を制御します。

OPSCR.EN ビットが 1 の場合に、信号波形が出力されます。

OPSCR.EN ビット = 0 のとき、最初に OPSCR.FB、OPSCR.UF/VF/WF（ソフトウェア設定を選択）、OPSCR.P/N、OPSCR.INV、OPSCR.ALIGN、OPSCR.RV、OPSCR.GRP[1:0]、OPSCR.GODF、OPSCR.NFEN、OPSCR.NFCS[1:0] ビットを設定してください。次に EN ビットを 1 にします。また、OPSCR.GODF ビット = 1、かつ OPSCR.GRP[1:0] ビットで選択した信号値が High の場合、OPSCR.EN ビットは 0 になります。

FB ビット（外部フィードバック信号許可）

ソフトウェア設定（OPSCR.UF、VF、WF ビット）、およびホール素子などの外部入力からの入力相を選択します。

P ビット（正相出力（P）制御）

レベル信号出力（GPT320 の PWM）、または正相出力の PWM 信号出力（GTOUUP 端子、GTOVUP 端子、GTOWUP 端子）のどちらかを選択します。

N ビット（逆相出力（N）制御）

レベル信号出力（GPT320 の PWM）、または逆相出力の PWM 信号出力（GTOULO 端子、GTOVLO 端子、GTOWLO 端子）のどちらかを選択します。

INV ビット（反転相出力制御）

出力相として、正論理（アクティブ High）出力、または負論理（アクティブ Low）出力のどちらかを選択します。

ALIGN ビット（入力相アライメント）

入力相のサンプリングとして、PCLKD または PWM を選択します（入力相は OPSCR.FB ビットで指定）。

OPSCR.ALIGN ビット = 0 のとき、入力相は PCLKD に調整されます。

注 . PWM 出力（OPSCR.P/N ビット = 1）を選択して、PCLKD 入力相を調整すると、PWM パルスは短パルスになる場合があります。

注 . OPSCR.ALIGN ビット = 1 のとき、入力相は PWM 出力に調整されます。

GRP[1:0] ビット（出力禁止要因選択）

出力禁止要因（A, B）を選択します。

GODF ビット（グループ出力禁止機能）

OPSCR.GODF ビット = 1、かつ OPSCR.GRP[1:0] ビットで選択した信号値が High の場合、OPSCR.EN ビットは 0 になります。OPSCR.GODF ビット = 0 のとき、本ビットは無視されます。

NFEN ビット（外部入力ノイズフィルタ有効）

外部入力用のノイズフィルタを選択します。

OPSCR.NFEN ビット = 0 の場合、外部入力にノイズフィルタは使用されません。

注 . 意図しない内部エッジにより本ビットが切り替わった場合、OPSCR.EN ビットを 0 にしてください。

NFCS[1:0] ビット（外部入力ノイズフィルタクロック選択）

外部入力用のノイズフィルタ用クロックを選択します。OPSCR.NFEN ビット = 1 の場合、外部入力のノイズフィルタサンプリングクロック設定が有効になります。

1. NFCS[1:0] ビットを設定します。
2. クロックの 2 周期分待ちます。
3. OPSCR.EN ビットを 1 にします。

23.3 動作説明

23.3.1 基本動作

各チャネルには32ビットタイマがあり、各タイマは、カウントクロックとハードウェア要因を用いて周期的なカウント動作を実行します。カウント機能には、アップカウントとダウンカウントの両方があります。GTPRレジスタがカウント周期を制御します。GTCNTカウンタ値がGTCCRAまたはGTCCRBレジスタの値に一致すると、対応するGTIOCA端子またはGTIOCB端子からの出力を変更できます。GTCCRAまたはGTCCRBレジスタは、ハードウェア要因によるインプットキャプチャレジスタとして使用可能です。GTCCRCおよびGTCCRDレジスタは、GTCCRAレジスタ用のバッファレジスタとしても機能します。また、GTCCREおよびGTCCRFレジスタは、GTCCRBレジスタ用のバッファレジスタとしても機能します。

23.3.1.1 カウンタ動作

(1) カウンタスタート／ストップ

各チャネルのカウンタは、GTCR.CSTビットを1にするとカウント動作を開始します。GTCR.CSTビット値は以下の要因によって変化します。

- GTCRレジスタへの書き込み
- GTSSR.CSTRTビットが1の場合、GTSTRレジスタのGPTチャネル番号に対応したビットへの1の書き込み
- GTPSR.CSTOPビットが1の場合、GTSTPレジスタのGPTチャネル番号に対応したビットへの1の書き込み
- GTSSRレジスタで選択したハードウェア要因
- GTPSRレジスタで選択したハードウェア要因

(2) カウントクロックによるアップカウント時の周期カウント動作

各チャネルのGTCNTカウンタは、GTUPSRおよびGTDNSRレジスタを00000000hにした状態で、対応するGTCR.CSTビットを1にすると、アップカウントを開始します。GTCNTカウンタ値がGTPR値から0に変化（オーバーフロー）すると、GTST.TCFPOフラグが1になります。GTCNTカウンタがオーバーフローすると、00000000hからアップカウントを再開します。

アップカウント時の周期カウント動作例を図 23.3 に示します。

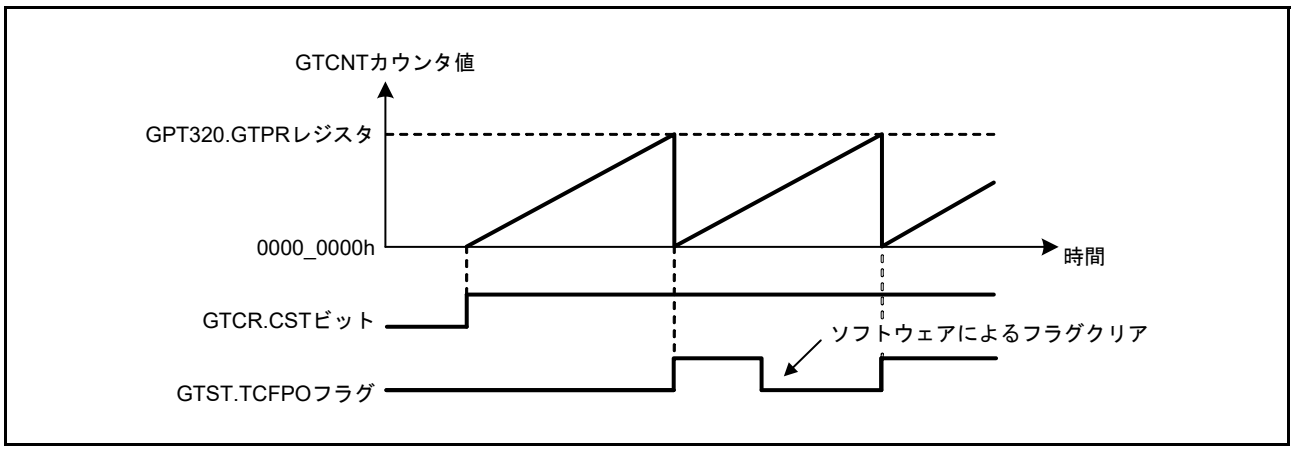


図 23.3 カウントクロックによるアップカウント時の周期カウント動作例

アップカウント時の周期カウント動作の設定例を図 23.4 に示します。

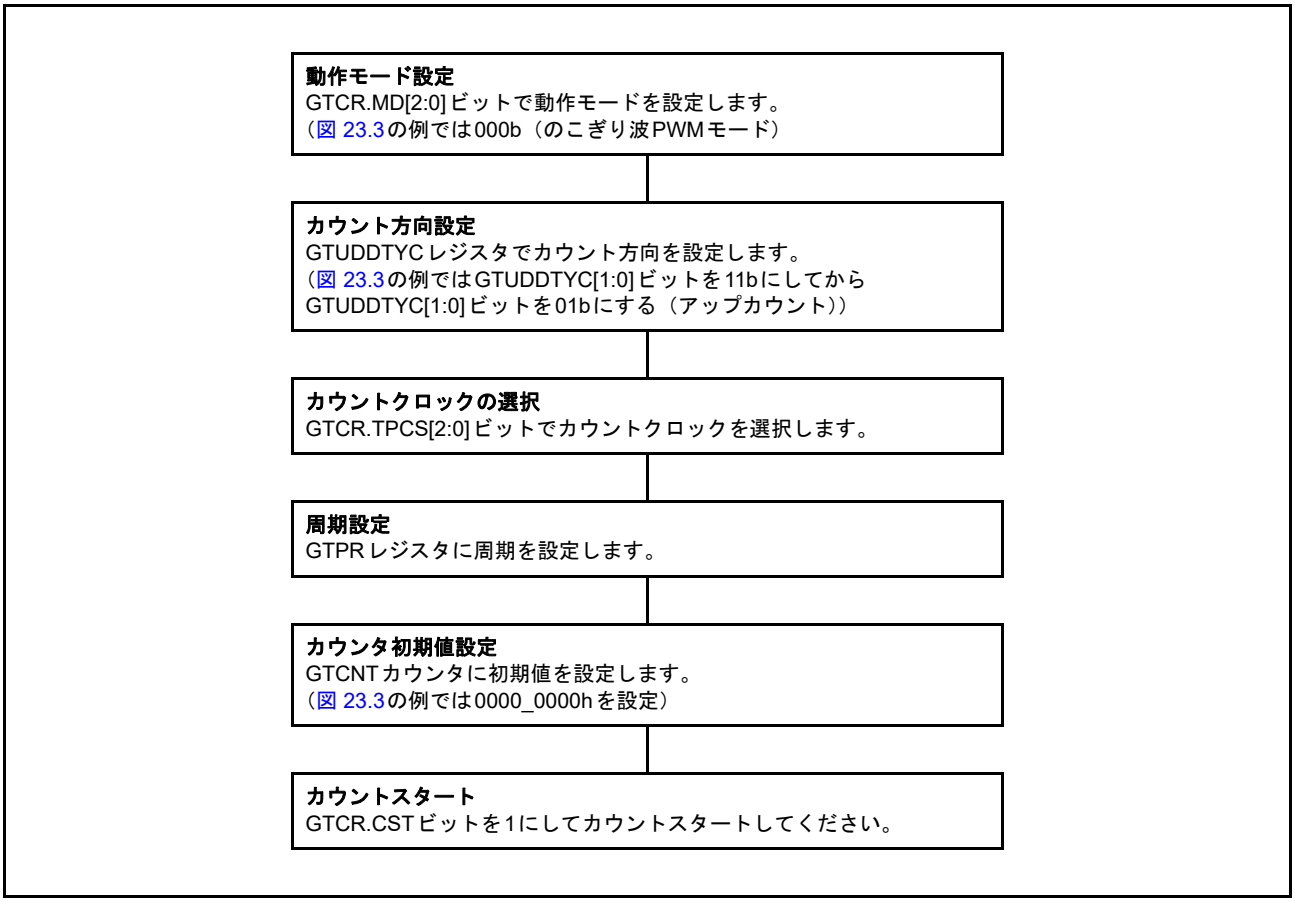


図 23.4　　カウントクロックによるアップカウント時の周期カウント動作の設定例

(3)　カウントクロックによるダウンカウント時の周期カウント動作

各チャネルの GTCNT カウンタは、GTUPSR および GTDNSR レジスタを 00000000h にした状態で、GTUDDTYC.UD ビットを設定することにより、ダウンカウントを実行できます。GTCNT カウンタ値が 0 から GTPR 値に変化（アンダーフロー）すると、GTST.TCFPU ビットが 1 になります。GTCNT カウンタがアンダーフローすると、GTPR 値からダウンカウントを再開します。

カウントクロックによるダウンカウント時の周期カウント動作例を図 23.5 に示します。

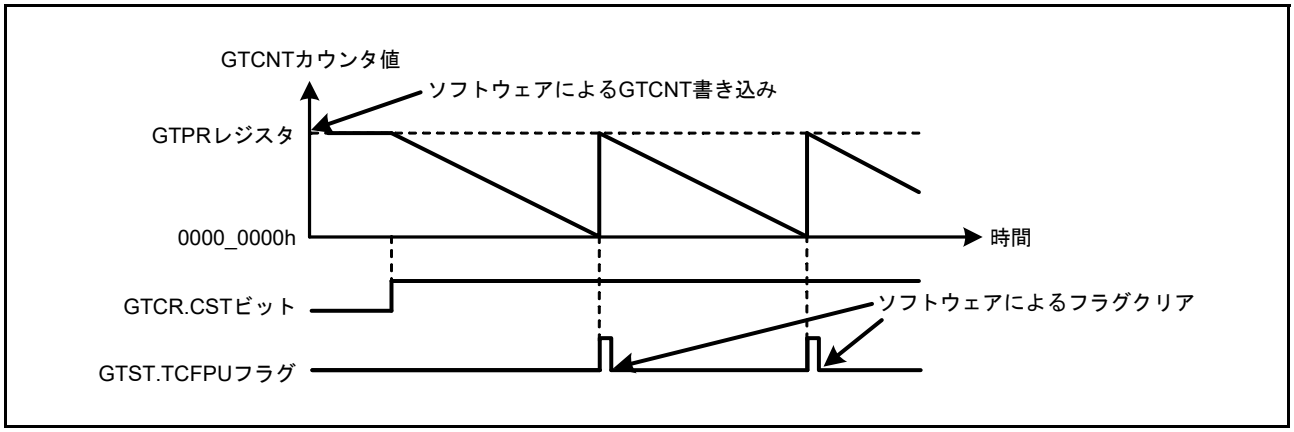


図 23.5　　カウントクロックによるダウンカウント時の周期カウント動作例

カウントクロックによるダウンカウント時の周期カウント動作の設定例を図 23.6 に示します。

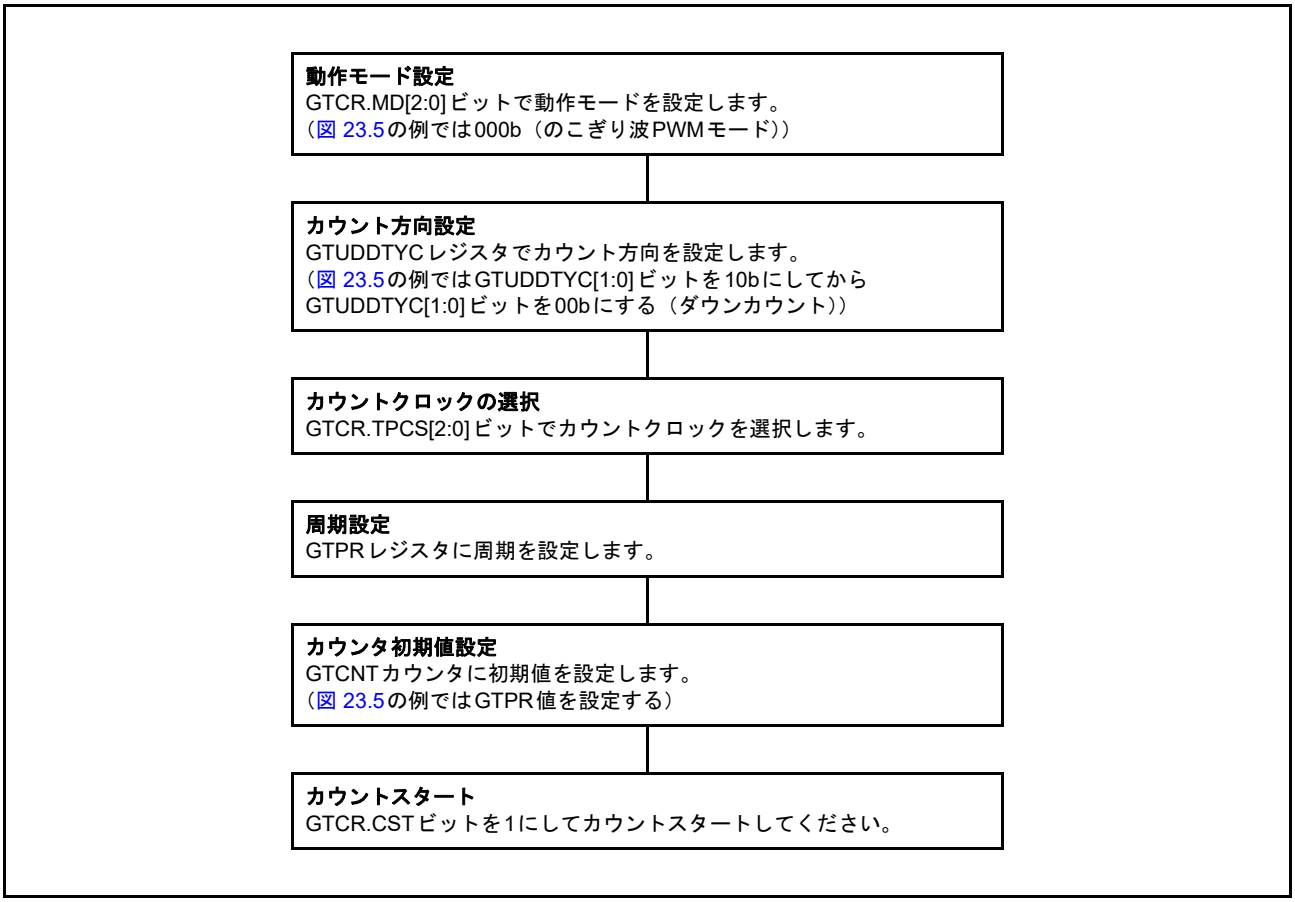


図 23.6　　カウントクロックによるダウンカウント時の周期カウント動作の設定例

(4)　ハードウェア要因によるアップカウント時のイベントカウント動作

各チャネルの GTCNT カウンタは、GTUPSR レジスタで設定したハードウェア要因によるアップカウントを実行できます。

GTUPSR レジスタを許可に設定すると、GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウントクロックと、GTUDDTYC.UD ビットで選択したカウント方向は無視されます。ハードウェア要因によるアップカウントとダウンカウントが同時に発生した場合、GTCNT カウンタ値は変化しません。ハードウェア要因によるアップカウントのオーバーフロー動作は、カウントクロックによるアップカウントのオーバーフロー動作と同じです。

GTCR.CST ビットを 1 にしてハードウェア要因によるカウントアップを行うと、カウント動作が有効になります。GTCR.CST ビットを 1 にすると、GTCR.TPCS[2:0] ビットで指定した 1 クロック周期の間カウンタはカウントアップされません。これは、カウント動作が GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウントクロックと同期するためです。PCLKD1 クロック遅れでカウントアップを行う場合、GTCR.TPCS[2:0] ビットを 000b にしてください。

ハードウェア要因（GTETRGA 端子の立ち上がりエッジ）によるアップカウント時の周期カウント動作例を図 23.7 に示します。

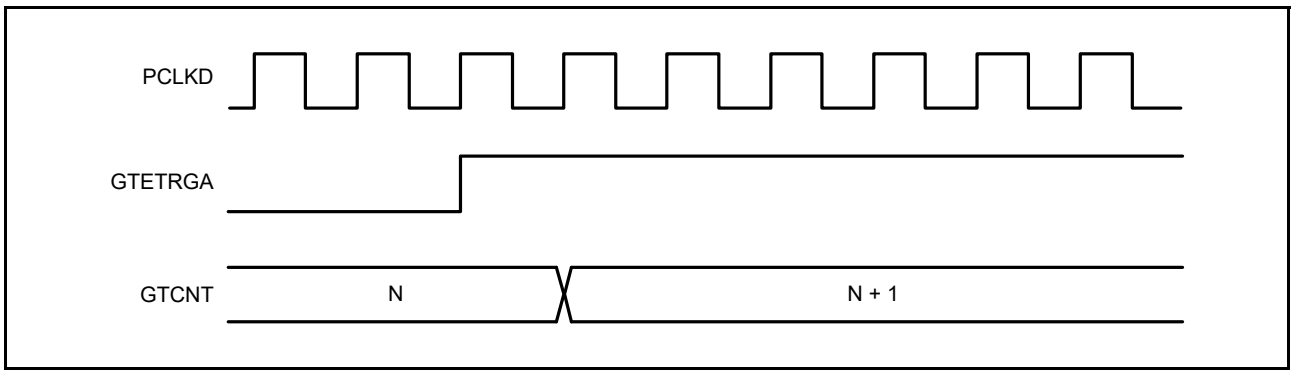


図 23.7　　ハードウェア要因によるアップカウント時の周期カウント動作例

カウントクロックによるダウンカウント時の周期カウント動作の設定例を図 23.8 に示します。

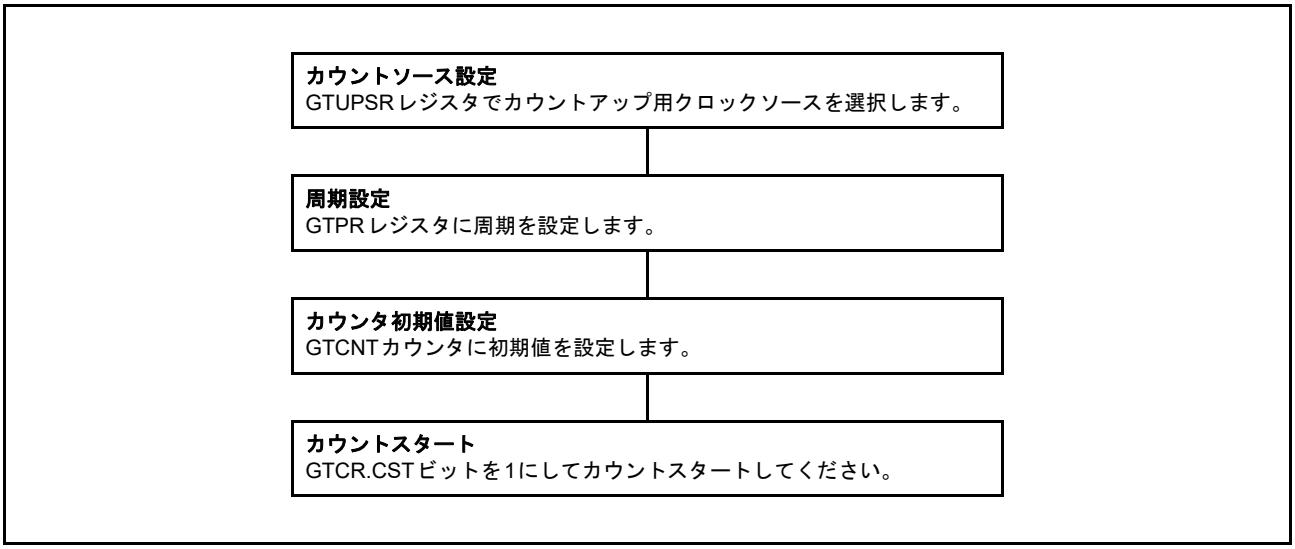


図 23.8　　ハードウェア要因によるアップカウント時のイベントカウント動作の設定例

(5)　ハードウェア要因によるダウンカウント時のイベントカウント動作

各チャネルの GTCNT カウンタは、GTDNSR レジスタで設定したハードウェア要因によるダウンカウントを実行できます。

GTDNSR レジスタを許可に設定すると、GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウントクロックと、GTUDDTYC.UD ビットで選択したカウント方向は無視されます。ハードウェア要因によるアップカウントとダウンカウントが同時に発生した場合、GTCNT カウンタ値は変化しません。ハードウェア要因によるダウンカウントのアンダーフロー動作は、カウントクロックによるダウンカウントのアンダーフロー動作と同じです。

GTCR.CST ビットを 1 にしてハードウェア要因によるカウントダウンを行うと、カウント動作が有効になります。GTCR.CST ビットを 1 にすると、GTCR.TPCS[2:0] ビットで指定した 1 クロック周期の間カウンタはカウントダウンされません。これは、カウント動作が GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウントクロックと同期するためです。PCLKD1 クロック遅れでカウントダウンを行う場合、GTCR.TPCS[2:0] ビットを 000b にしてください。

ハードウェア要因（GTETRGA 端子の立ち上がりエッジ）によるダウンカウント時の周期カウント動作例を図 23.9 に示します。

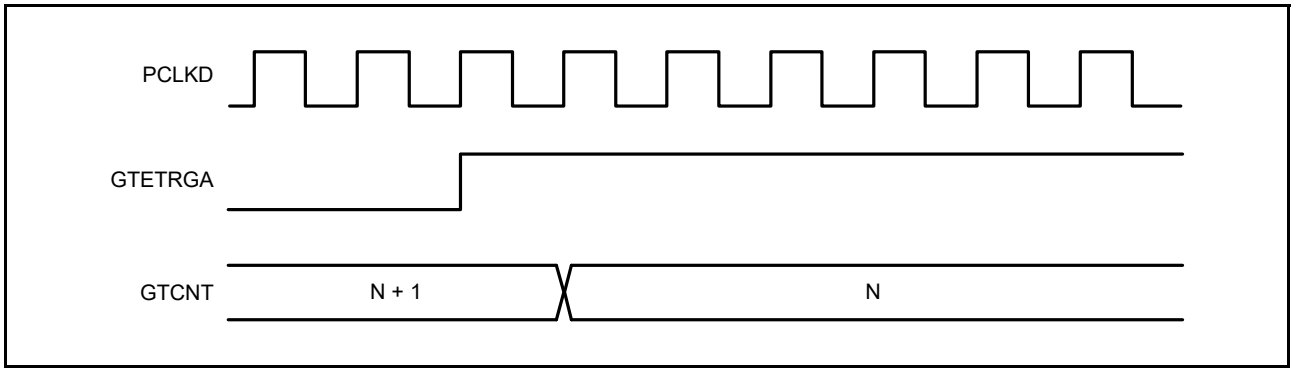


図 23.9　　ハードウェア要因によるダウンカウント時のイベントカウント動作

ハードウェア要因によるダウンカウント時の周期カウント動作の設定例を図 23.10 に示します。

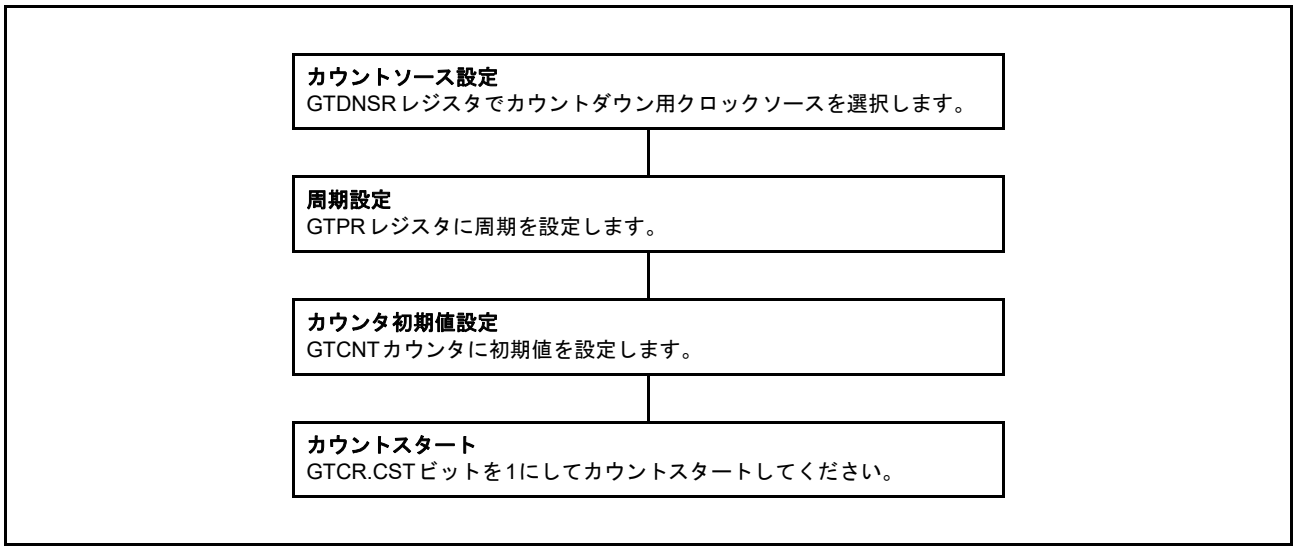


図 23.10　　ハードウェア要因によるダウンカウント時のイベントカウント動作の設定例

(6)　カウンタクリア動作

各チャネルのカウンタは、下記の要因でクリアされます。

- GTCNT レジスタへの 0 の書き込み
- GTCSR.CCLR ビットが 1 の場合、GTCLR レジスタの GPT チャネル番号に対応したビットへの 1 の書き込み
- GTCSR レジスタで選択したハードウェア要因

カウント動作時は、GTCNT レジスタへの書き込みはしないでください。GTCNT カウンタは、カウント中でも（GTCR.CST ビット = 1）、カウント中でなくても（GTCR.CST ビット = 0）、GTCLR レジスタへの 1 の書き込みとハードウェア要因のクリア要求の両方の方法でクリアできます。

GTCR.MD[2:0] ビットおよびダウンカウント（GTST.TUCF ビット = 0）を示すカウント方向フラグで指定したのこぎり波の場合、GTCLR レジスタに 1 を書き込んだとき、またはハードウェア要因によりクリアされたときに、GTCNT レジスタは GTPR レジスタの値に設定されます。のこぎり波モードでもダウンカウントでもない場合、GTCLR レジスタへの 1 の書き込みと、ハードウェア要因によるクリアの実行時に、GTCNT レジスタは 0 になります。

GTUPSR または GTDNSR レジスタの少なくとも 1 ビットが 1 の場合のイベントカウント動作では、クリア要因発生後、GTCLR レジスタへの書き込みとハードウェア要因によるクリアがただちに実行され、PCLKD と同期が取られます。その他の設定を使用すると、GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウンタクロックと同期してクリアが実行されます。

23.3.1.2　コンペアマッチによる波形出力機能

コンペアマッチとは、GTCNT カウンタ値が GTCCRA または GTCCRB レジスタ値と一致することを意味します。コンペアマッチが発生すると、イベントカウントを含むカウントクロックと同期して、コンペアマッチフラグが発生します。同時に、GPT は、対応する GTIOCA または GTIOCB 出力端子から Low 出力／High 出力／トグル出力を行うことができます。また、GTPR レジスタで決定される “ 周期の終わり ” においても、GTIOCA または GTIOCB 端子出力を Low 出力／ High 出力／トグル出力とすることが可能です。

“ 周期の終わり ” とは、以下の場合です。

- のこぎり波でアップカウントの場合：GTCNT カウンタが GTPR 値から 0 に変化したとき（オーバーフロー）
- のこぎり波でダウンカウントの場合：GTCNT カウンタが 0 から GTPR 値に変化したとき（アンダーフロー）
- のこぎり波の場合：GTCNT カウンタがクリアされたとき
- 三角波の場合：GTCNT カウンタが 0 から 1 に変化したとき（谷）

(1)　Low 出力／ High 出力

GTCCRA および GTCCRB レジスタのコンペアマッチによる Low 出力／ High 出力の動作例を図 23.11 に示します。

この例では、GPT320.GTCNT カウンタがアップカウント動作を行い、GPT320.GTCCRA レジスタのコンペアマッチによって GTIOC0A 端子から High が出力され、GPT320.GTCCRB レジスタのコンペアマッチによって GTIOC0B 端子から Low が出力されるように設定しています。設定したレベルと端子レベルが一致した場合、端子レベルは変化しません。

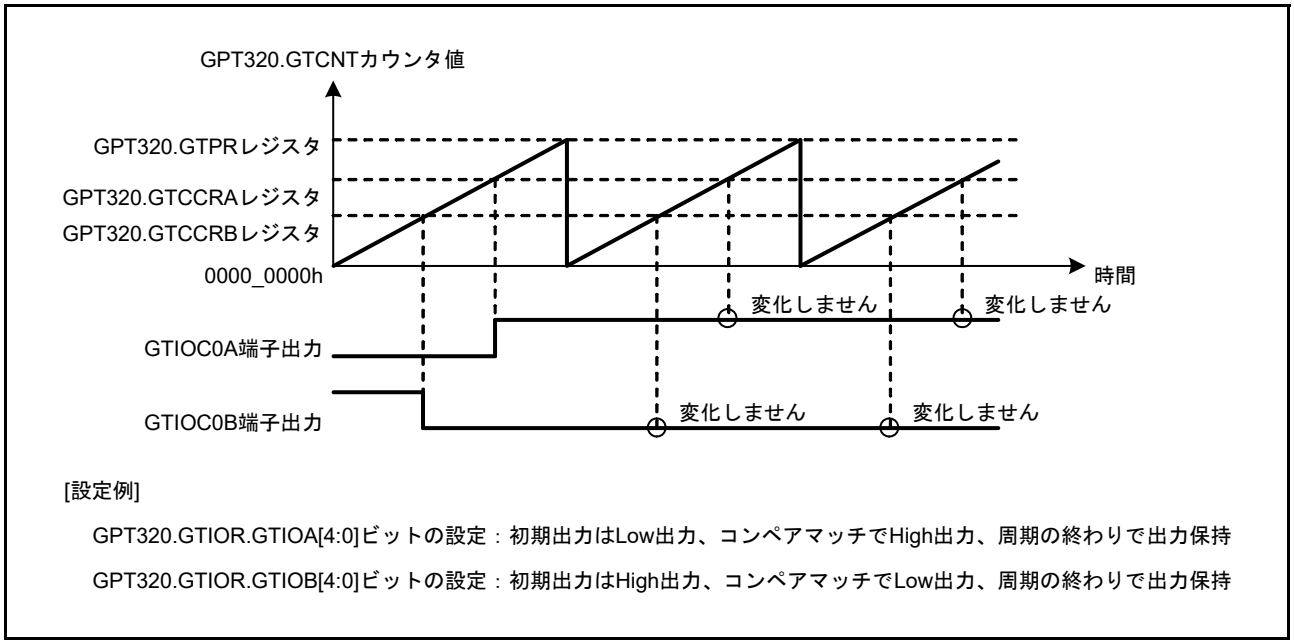


図 23.11　Low 出力／ High 出力動作例

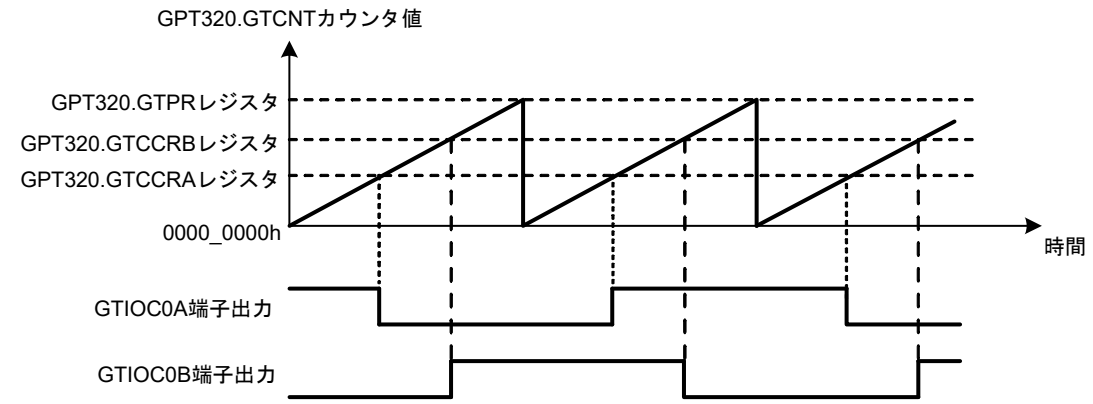
Low 出力／ High 出力動作の設定例を図 23.12 に示します。

図 23.12 Low 出力／ High 出力動作の設定例

(2)　トグル出力

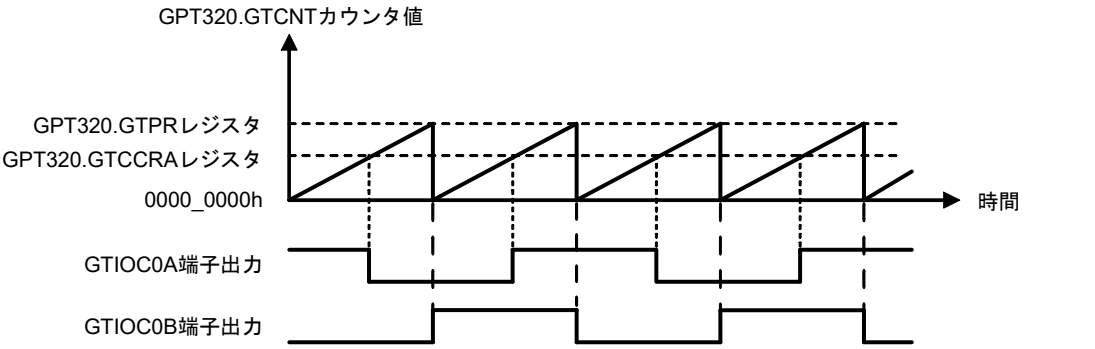
GTCCRA および GTCCRB レジスタのコンペアマッチによるトグル出力の動作例を、図 23.13 および図 23.14 に示します。図 23.13 では、GPT320.GTCNT カウンタがアップカウント動作を行い、GPT320.GTCCRA レジスタのコンペアマッチと、GPT320.GTCCRB レジスタのコンペアマッチによって、それぞれ GTIOC0A 端子と GTIOC0B 端子がトグル出力となるように設定しています。

図 23.14 では、GPT320.GTCNT カウンタがアップカウント動作を行い、GPT320.GTCCRA レジスタのコンペアマッチによって GTIOC0A 端子がトグル出力となり、周期の終わりで GTIOC0B 端子がトグル出力となるように設定しています。



［設定例］
GPT320.GTIOR.GTIOA[4:0] ビットの設定：初期出力はHigh出力、コンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持
GPT320.GTIOR.GTIOB[4:0] ビットの設定：初期出力はLow出力、コンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持

図 23.13　　トグル出力動作例（1）



［設定例］
GPT320.GTIOR.GTIOA[4:0]ビットの設定：初期出力はHigh出力、コンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持
GPT320.GTIOR.GTIOB[4:0]ビットの設定：初期出力はLow出力、コンペアマッチで出力保持 、周期の終わりでトグル出力

図 23.14　　トグル出力動作例（2）

トグル出力動作設定例を図 23.15 に示します。

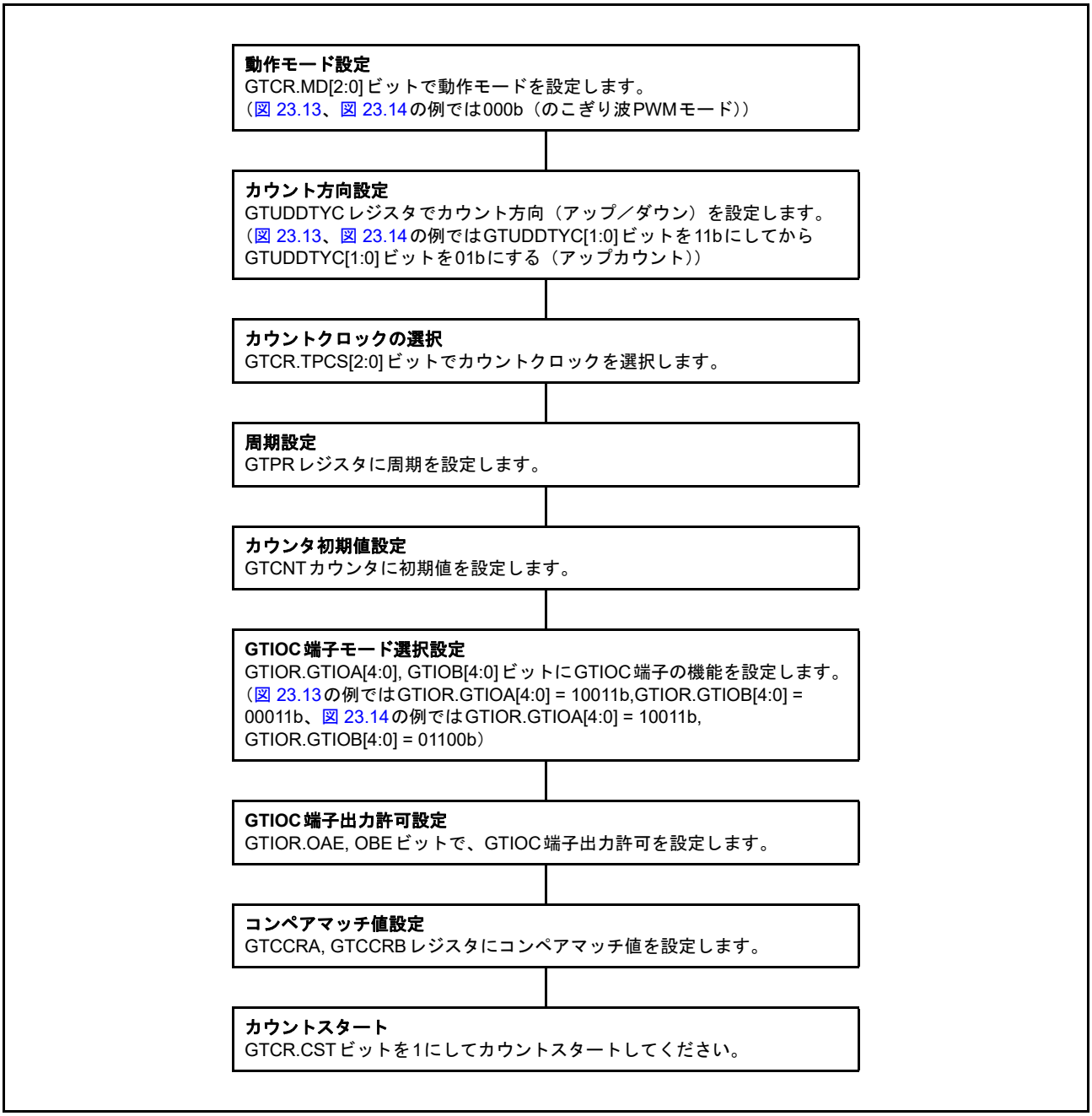


図 23.15 トグル出力動作の設定例

23.3.1.3　インプットキャプチャ機能

GTICASR および GTICBSR レジスタに設定されたハードウェア要因の検出時に、GTCCRA レジスタまたは GTCCRB レジスタのいずれか一方に GTCNT カウンタ値を転送できます。

インプットキャプチャ機能の動作例を図 23.16 に示します。

この例では、カウントクロックで GPT320.GTCNT カウンタがアップカウント動作を行い、GTIOC0A 入力端子の両エッジで GTICCRA レジスタにインプットキャプチャを実行し、GTIOC0B 入力端子の立ち上がりエッジで GTICCRB レジスタにインプットキャプチャを実行するように設定しています。

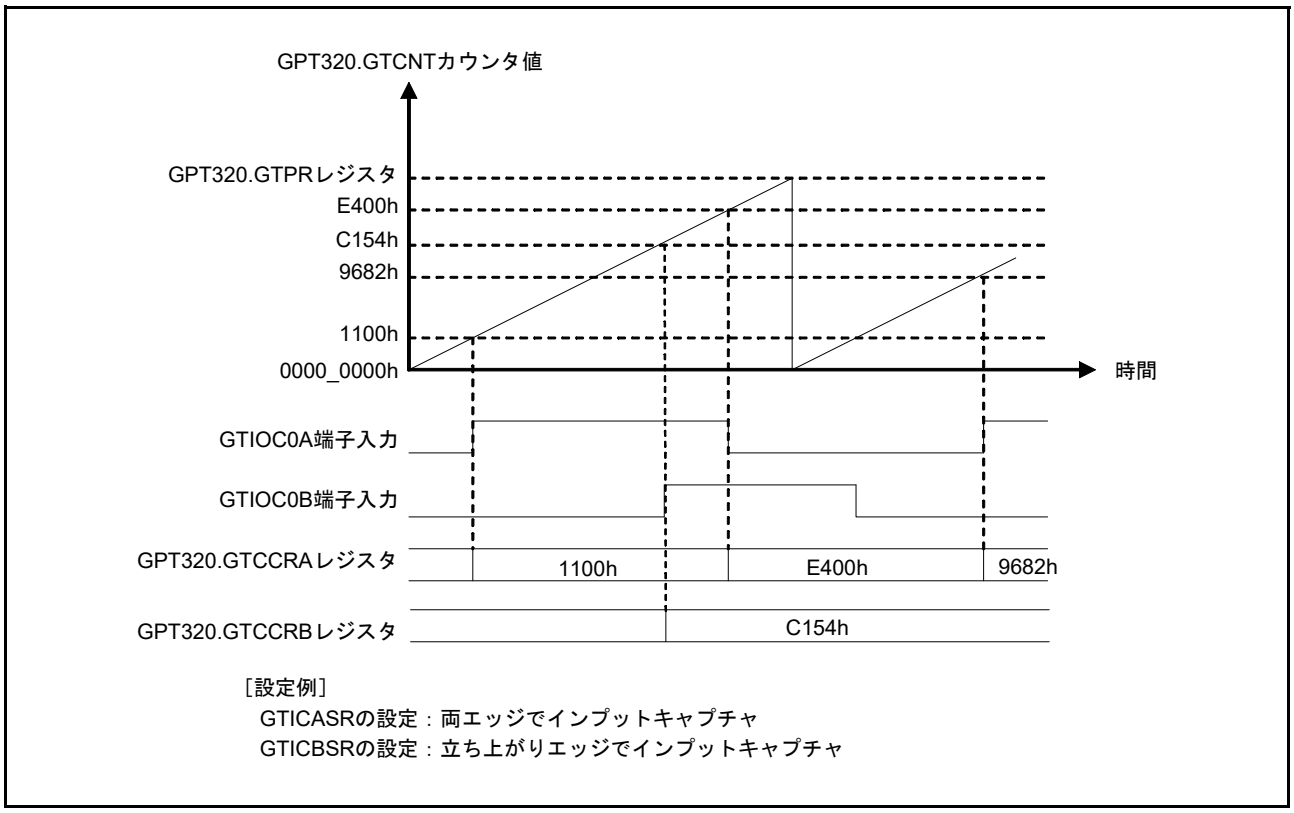


図 23.16　インプットキャプチャ動作例

カウントクロックによるカウント動作でのインプットキャプチャ動作の設定例を図 23.17 に示します。

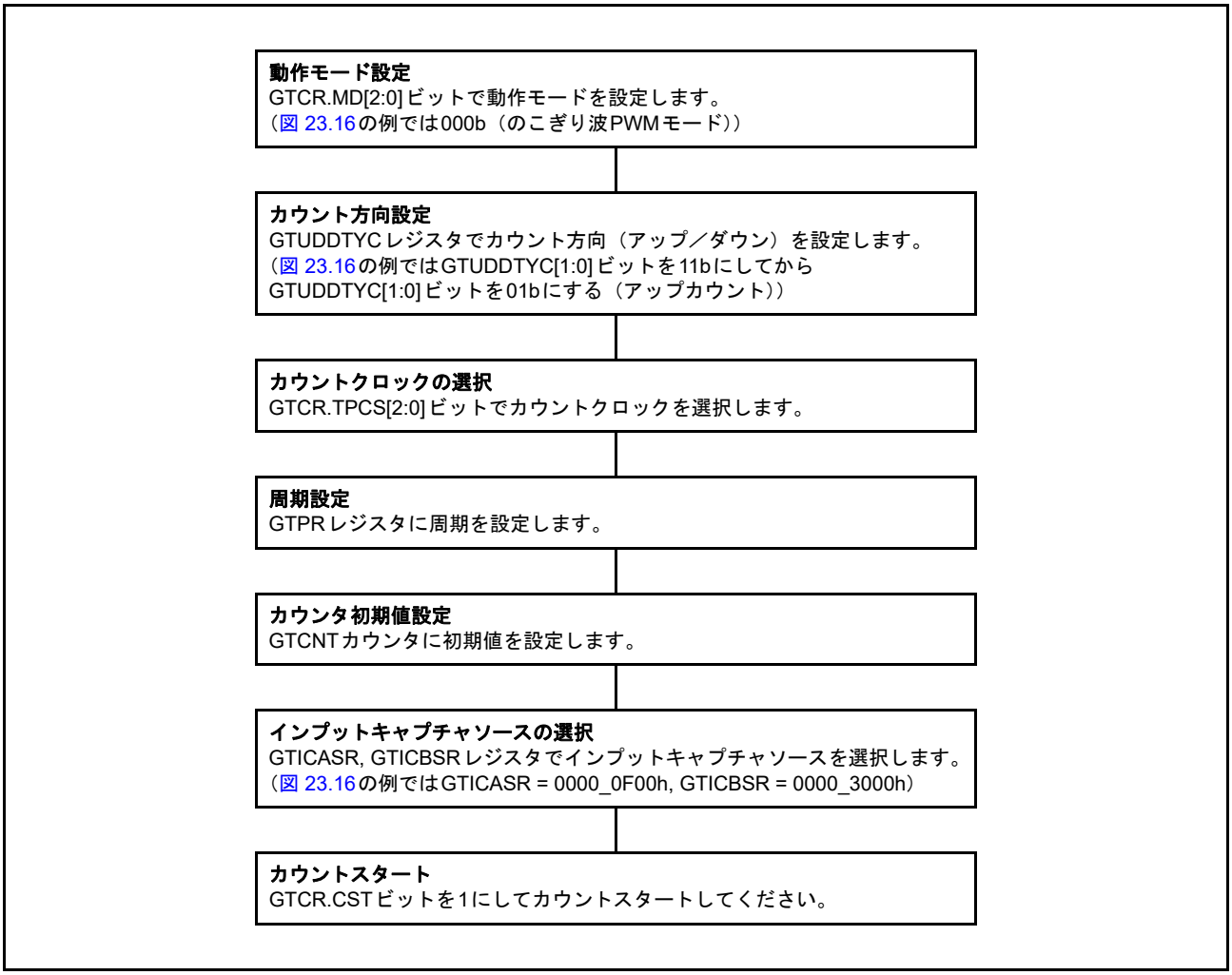


図 23.17　インプットキャプチャ動作設定例

23.3.2 バッファ動作

GTBER レジスタによって、以下のバッファ動作の設定が可能です。

- GTPR レジスタと GTPBR レジスタ
- GTCCRA レジスタ、GTCCRC レジスタ、および GTCCRD レジスタ
- GTCCRB レジスタ、GTCCRE レジスタ、および GTCCRF レジスタ

23.3.2.1 GTPR レジスタのバッファ動作

GTPBR レジスタは、GTPR レジスタ用のバッファレジスタとして機能します。バッファ転送は、のこぎり波モードまたはイベントカウントでは、オーバーフロー時（アップカウント中）またはアンダーフロー時（ダウンカウント中）に実行されます。また、三角波モードでは谷で実行されます。

のこぎり波モードまたはイベントカウントでは、カウント中に以下のカウンタクリア動作が発生すると、バッファ転送が実行されます。

- ハードウェア要因によるクリア（クリア要因は GTCSR[23:0] ビットで選択）
- ソフトウェアによるクリア（GTCSR.CCLR ビットが 1、GTCLR[n] ビットが 1、n＝チャネル番号）

GTPR レジスタのバッファ動作例を図 23.18 ～図 23.20 に、GTPR レジスタのバッファ動作設定例を図 23.21 に示します。

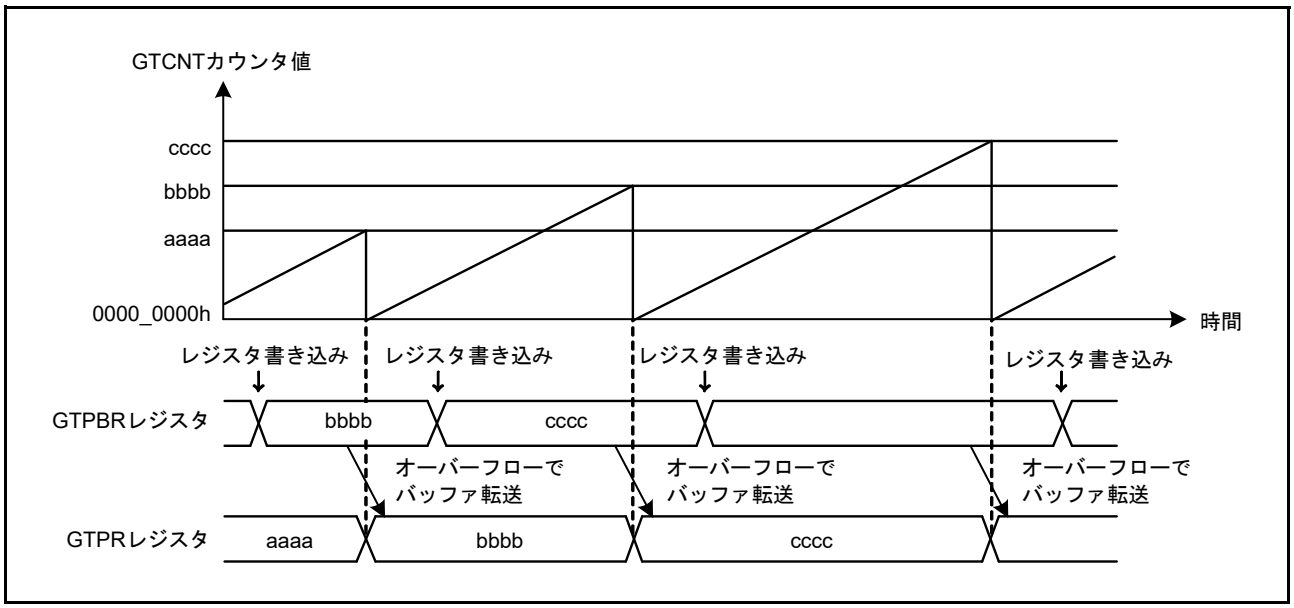


図 23.18 GTPR レジスタのバッファ動作例（のこぎり波でアップカウントの場合）

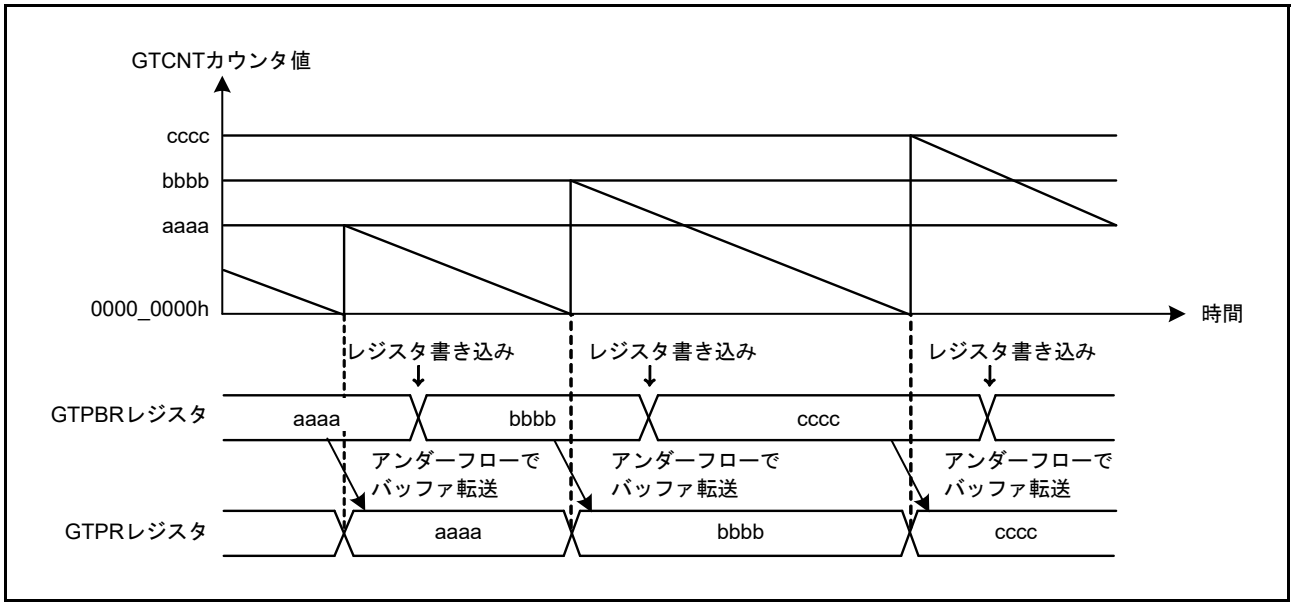


図 23.19　GTPR レジスタのバッファ動作例（のこぎり波でダウンカウントの場合）

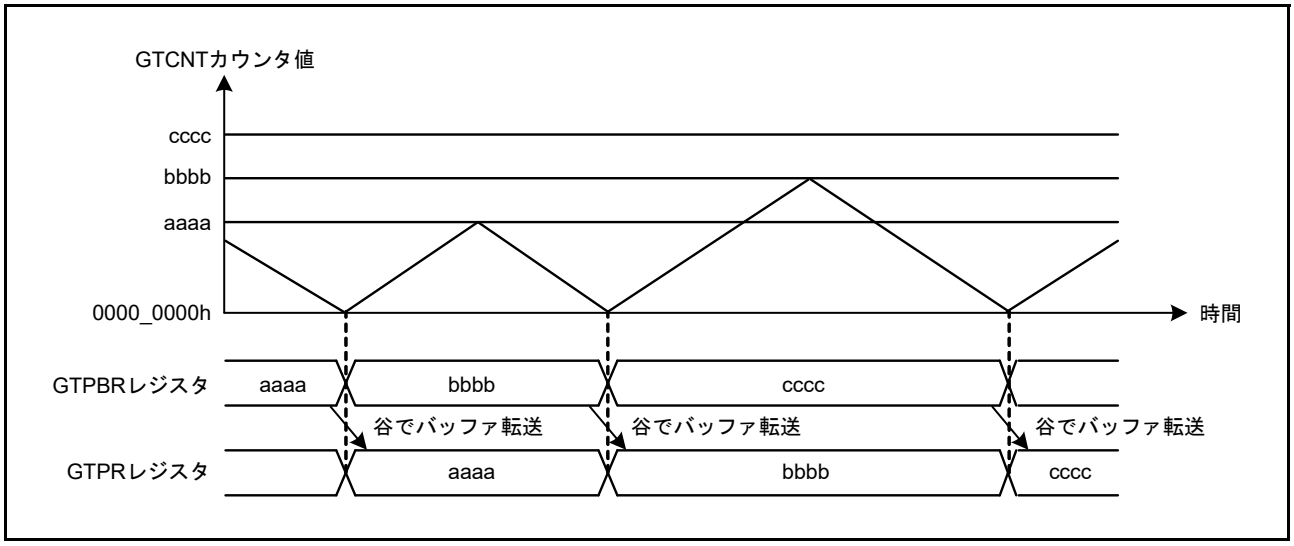


図 23.20　GTPR レジスタのバッファ動作例（三角波の場合）

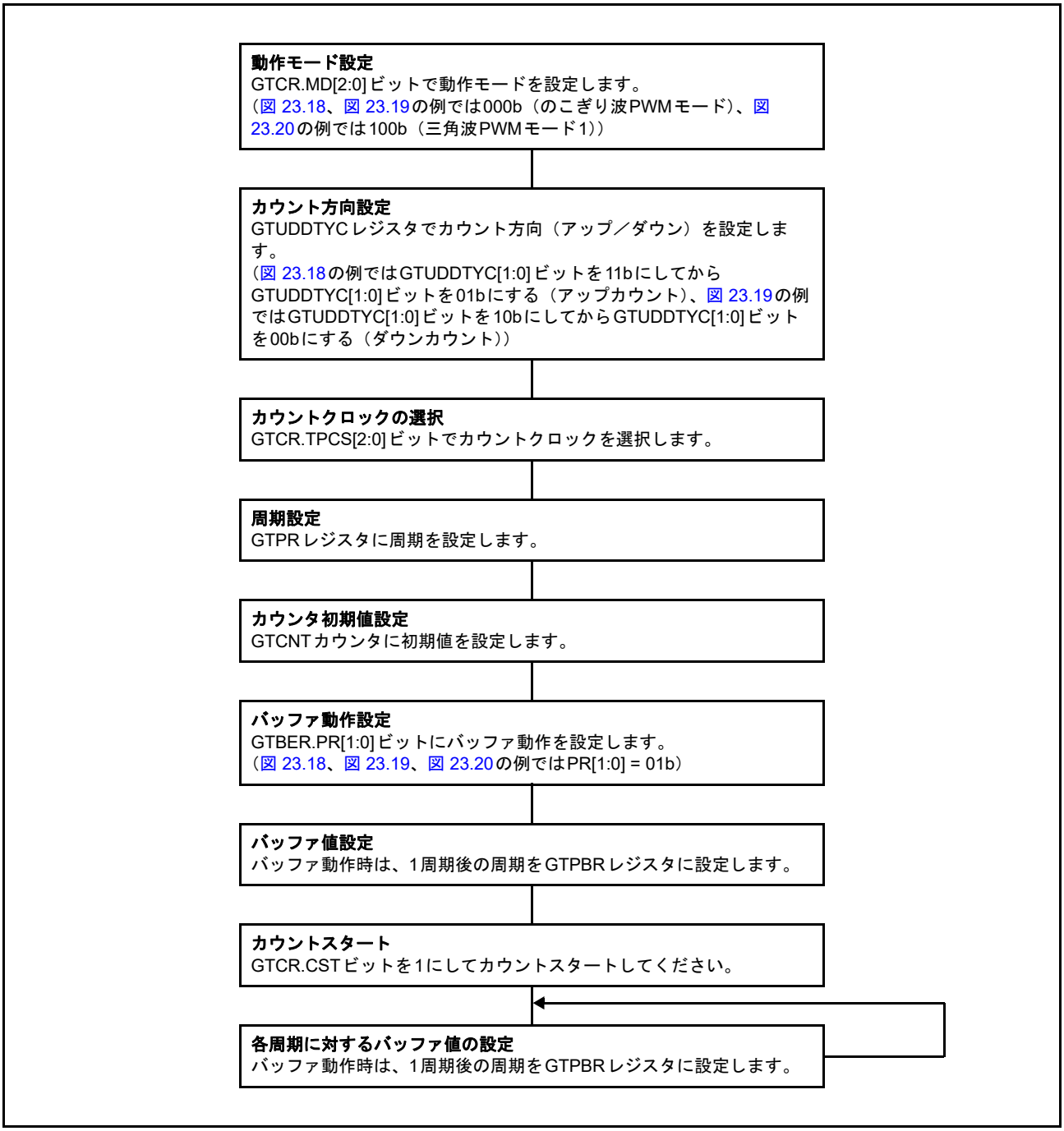


図 23.21　GTPR レジスタのバッファ動作の設定例

23.3.2.2 GTCCRA、GTCCRB レジスタのバッファ動作

GTCCRC レジスタは GTCCRA レジスタ用のバッファレジスタとして、GTCCRD レジスタは GTCCRC レジスタ用のバッファレジスタ（すなわち、GTCCRA レジスタ用のダブルバッファレジスタ）として機能します。同様に、GTCCRE レジスタは GTCCRB レジスタ用のバッファレジスタとして、GTCCRF レジスタは GTCCRE レジスタ用のバッファレジスタ（すなわち、GTCCRB レジスタ用のダブルバッファレジスタ）として機能します。

GTCCRA または GTCCRB レジスタのダブルバッファ動作を設定するには、GTBER.CCRA[1:0] または GTBER.CCRB[1:0] ビットを 10b または 11b にしてください。シングルバッファ動作を設定するには、GTBER.CCRA[1:0] または GTBER.CCRB[1:0] ビットを 01b にしてください。GTCCRA または GTCCRB レジスタのバッファ動作を設定しない場合は、GTBER.CCRA[1:0] または GTBER.CCRB[1:0] ビットを 00b にしてください。

(1) GTCCRA または GTCCRB レジスタがアウトプットコンペアレジスタとして動作している場合

バッファ転送は次の場合に実行されます。

- オーバーフロー／アンダーフローによるバッファ転送
  のこぎり波モードまたはイベントカウント動作では、オーバーフロー時（アップカウント中）またはアンダーフロー時（ダウンカウント中）に、バッファ転送が実行されます。三角波モードでは、谷（三角波 PWM モード 1）または山と谷（三角波 PWM モード 2）で、バッファ転送が実行されます
- カウンタクリアによるバッファ転送
  のこぎり波モードまたはイベントカウント動作では、カウント中に 23.3.2.1 GTPR レジスタのバッファ動作の場合と同じカウンタクリア要因によって、バッファ転送が（同じく、アップカウント中のオーバーフロー時またはダウンカウント中のアンダーフロー時に）実行されます。三角波モードでは、カウンタクリアによるバッファ転送は実行されません
- バッファ強制転送
  カウントストップ中に GTBER.CCRSWT ビットを 1 にすると、のこぎり波モード、イベントカウント動作、および三角波モードでは、GTCCRA および GTCCRB レジスタのバッファ転送が強制的に実行されます。さらに、のこぎり波ワンショットパルスモードまたは三角波 PWM モード 3 では、GTCCRD レジスタから一時レジスタ A へのバッファ転送、および GTCCRF レジスタから一時レジスタ B へのバッファ転送が実行されます

GTCCRA および GTCCRB レジスタのバッファ動作例を図 23.22 ～図 23.24 に、GTCCRA および GTCCRB レジスタのバッファ動作の設定例を図 23.25 に示します。

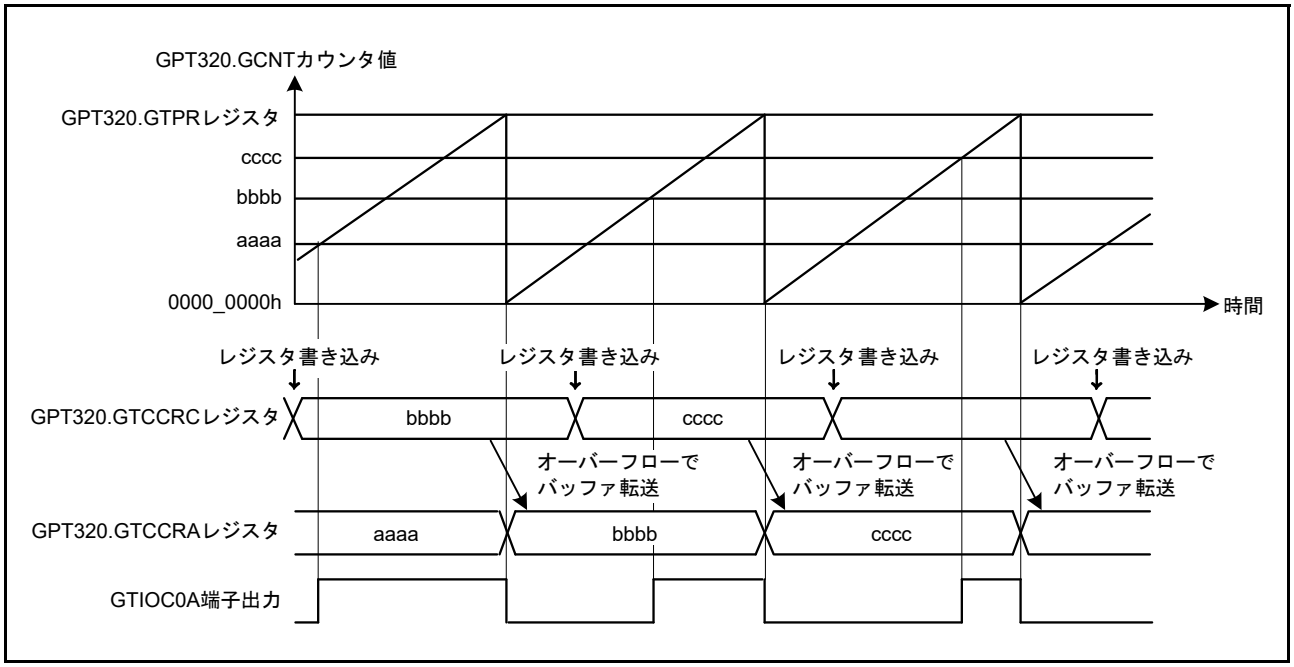


図 23.22　GTCCRA、GTCCRB レジスタのバッファ動作例（アウトプットコンペア、アップカウント時ののこぎり波、GTCCRA レジスタのコンペアマッチで High 出力、周期の終わりで Low 出力の場合）

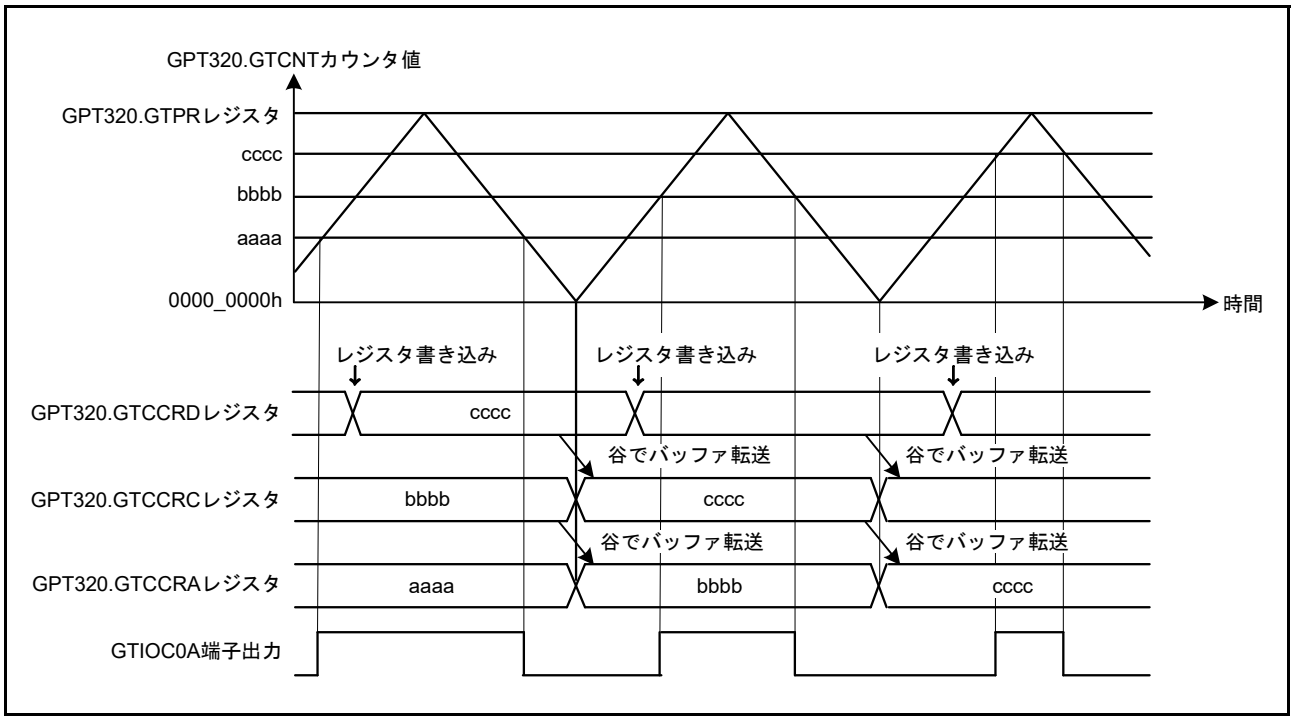


図 23.23　GTCCRA、GTCCRB レジスタのダブルバッファ動作例（アウトプットコンペア、三角波、谷でバッファ動作、GTCCRA レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持の場合）

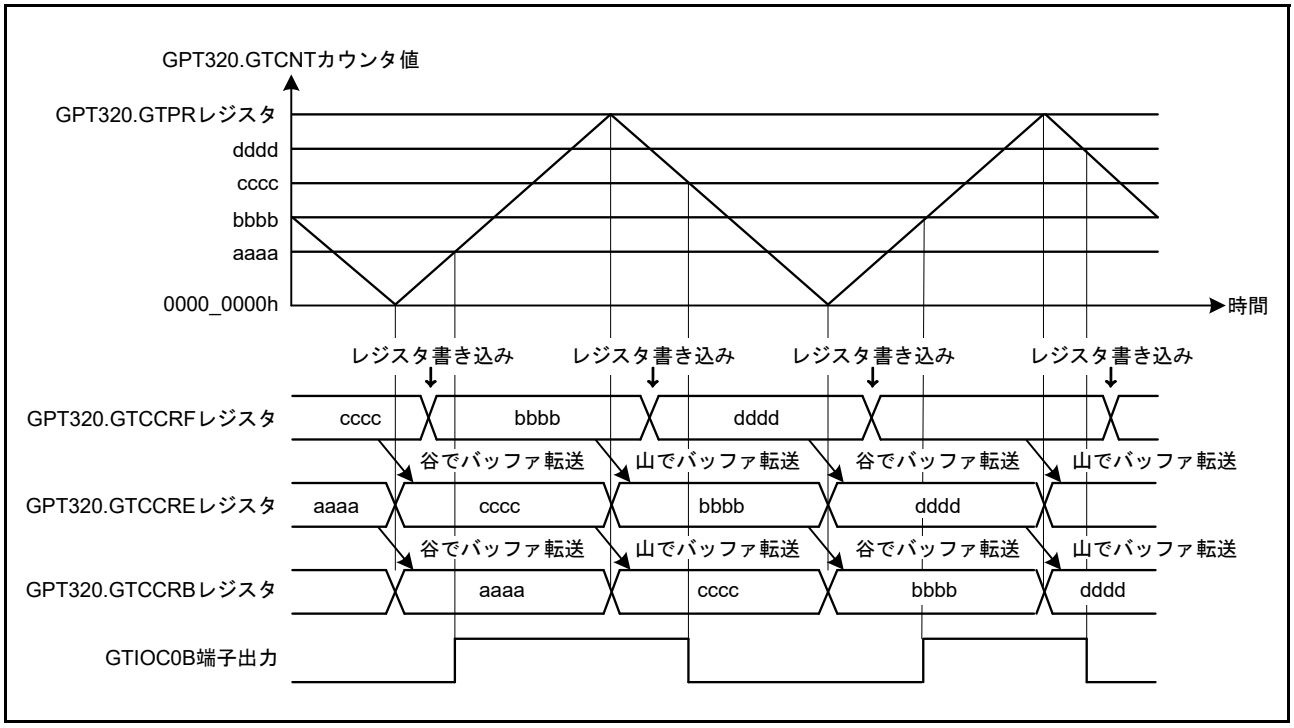


図 23.24 GTCCRA、GTCCRB レジスタのダブルバッファ動作例（アウトプットコンペア、三角波、山と谷でバッファ動作、GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持の場合）

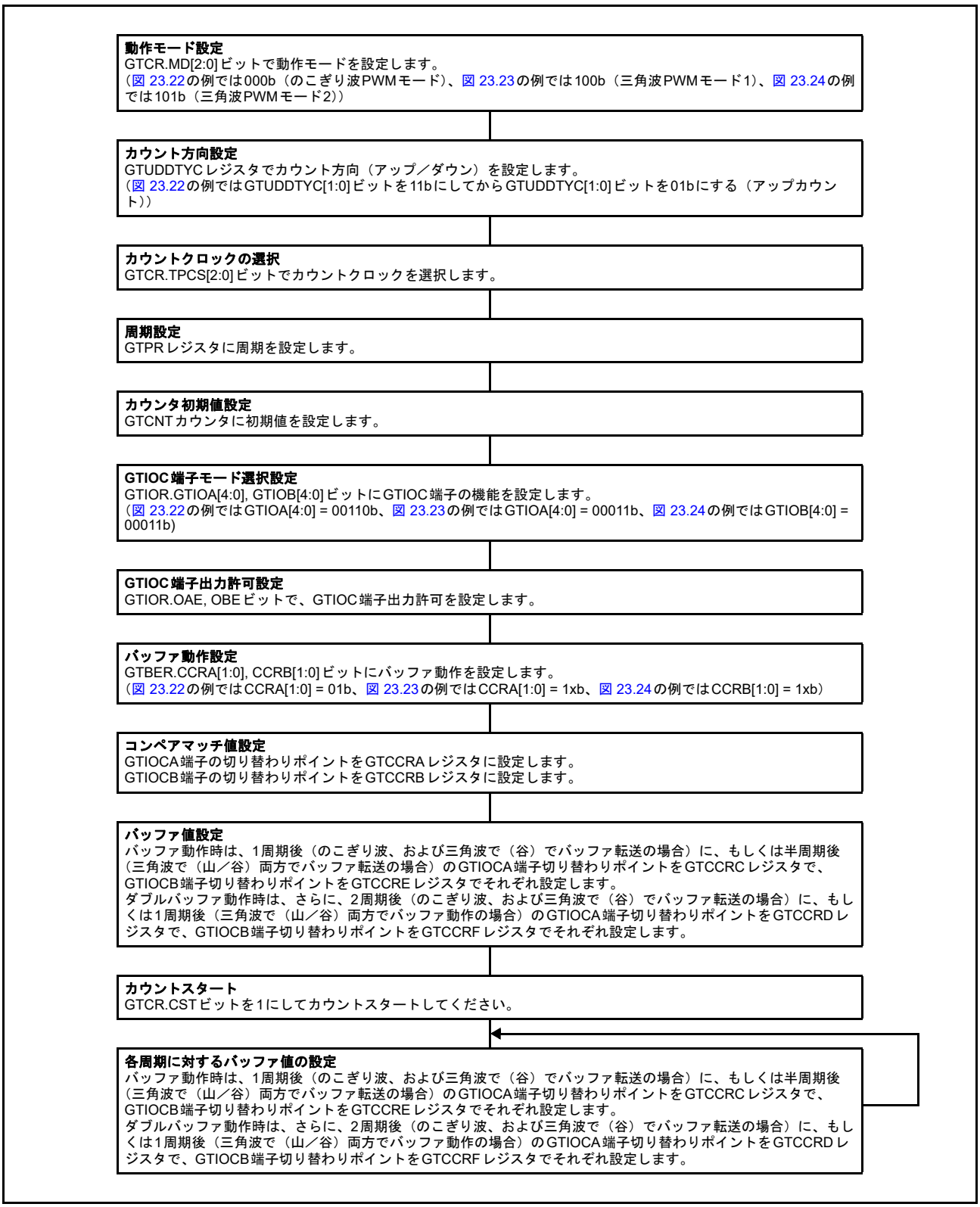


図 23.25　GTCCRA、GTCCRB レジスタのバッファ動作の設定例（アウトプットコンペア時）

(2) GTCCRA または GTCCRB レジスタがインプットキャプチャレジスタとして動作している場合

インプットキャプチャが発生すると、GTCNT カウンタ値が GTCCRA および GTCCRB レジスタに転送されると同時に、それまで格納されていた GTCCRA および GTCCRB レジスタ値がバッファレジスタに転送されます。インプットキャプチャ動作では、カウンタクリアによるバッファ転送は実行されません。

GTCCRA および GTCCRB レジスタのバッファ動作例を図 23.26 と図 23.27 に、GTCCRA および GTCCRB レジスタのバッファ動作の設定例を図 23.28 に示します。

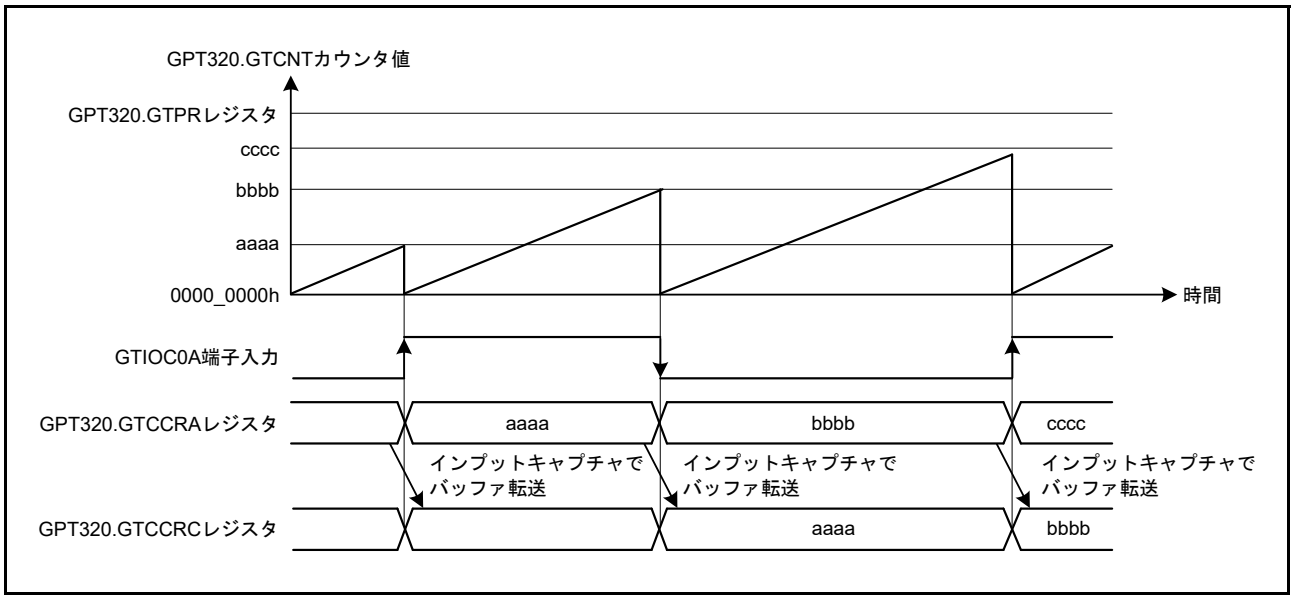


図 23.26　GTCCRA、GTCCRB レジスタのバッファ動作例（GTIOC0A 端子入力の両エッジでインプットキャプチャ、のこぎり波でアップカウント、GTIOC0A 端子入力の両エッジで GTCNT カウンタクリアの場合）

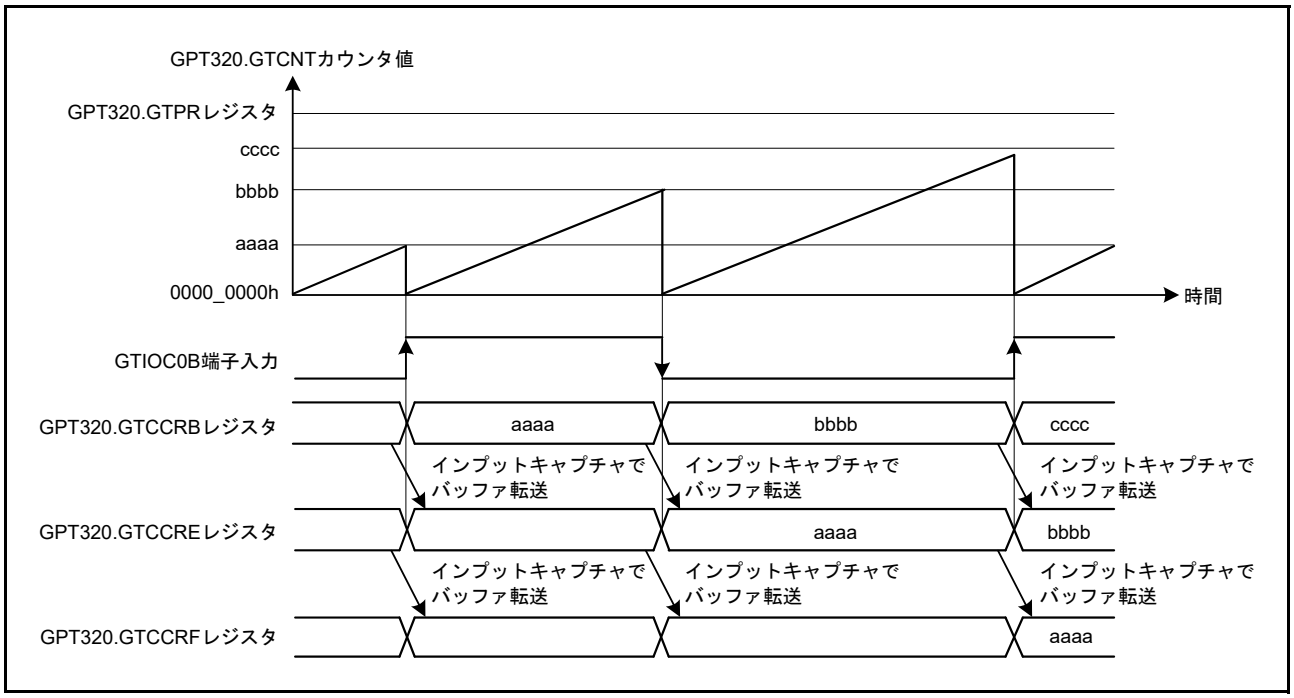


図 23.27　GTCCRA、GTCCRB レジスタのダブルバッファ動作例（GTIOC0B 端子入力の両エッジでインプットキャプチャ、のこぎり波でアップカウント、GTIOC0B 端子入力の両エッジで GTCNT カウンタクリアの場合）

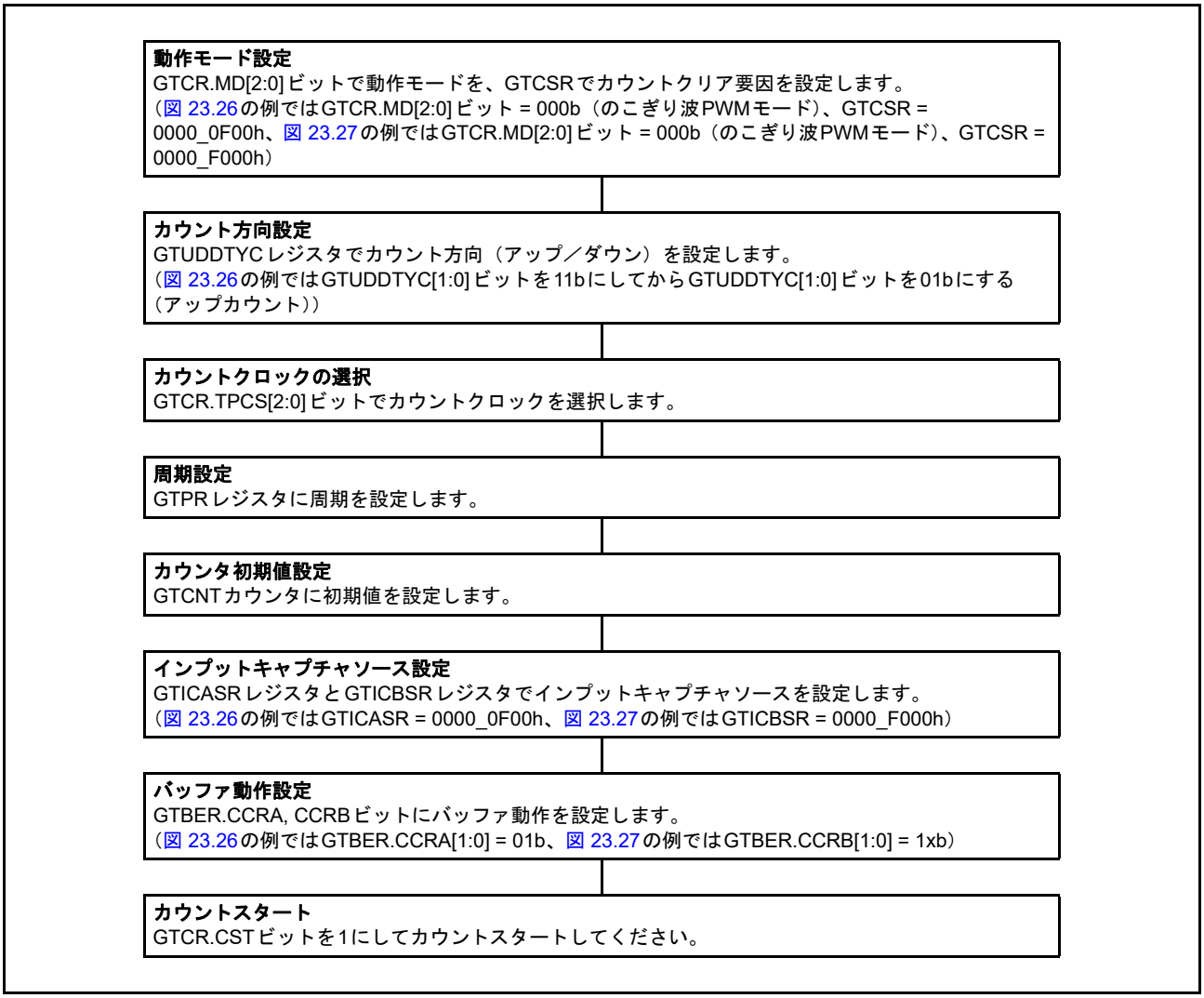


図 23.28 GTCCRA、GTCCRB レジスタのバッファ動作設定例（インプットキャプチャ時）

23.3.3　PWM 出力動作モード

GPT は、GTCNT カウンタと GTCCRA または GTCCRB レジスタとのコンペアマッチに基づいて、GTIOCA 端子または GTIOCB 端子へ PWM 波形を出力することが可能です。また、GTDTCR および GTDVU レジスタを設定することにより、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値を、GTCCRB レジスタに自動設定することが可能です。

23.3.3.1　のこぎり波 PWM モード

のこぎり波 PWM モードでは、GTPR レジスタに周期を設定することにより、GTCNT カウンタにのこぎり波（半波）動作を実行させます。また、GTCCRA または GTCCRB レジスタのコンペアマッチ発生時に、GTIOCA または GTIOCB 端子に PWM 波形を出力させます。端子の出力値は、GTIOR レジスタの設定によって、コンペアマッチ時と周期の終わりでそれぞれ個別に Low 出力／ High 出力／トグル出力から選択できます。

図 23.29 にのこぎり波 PWM モードの動作例を、図 23.30 にのこぎり波 PWM モードの設定例を示します。

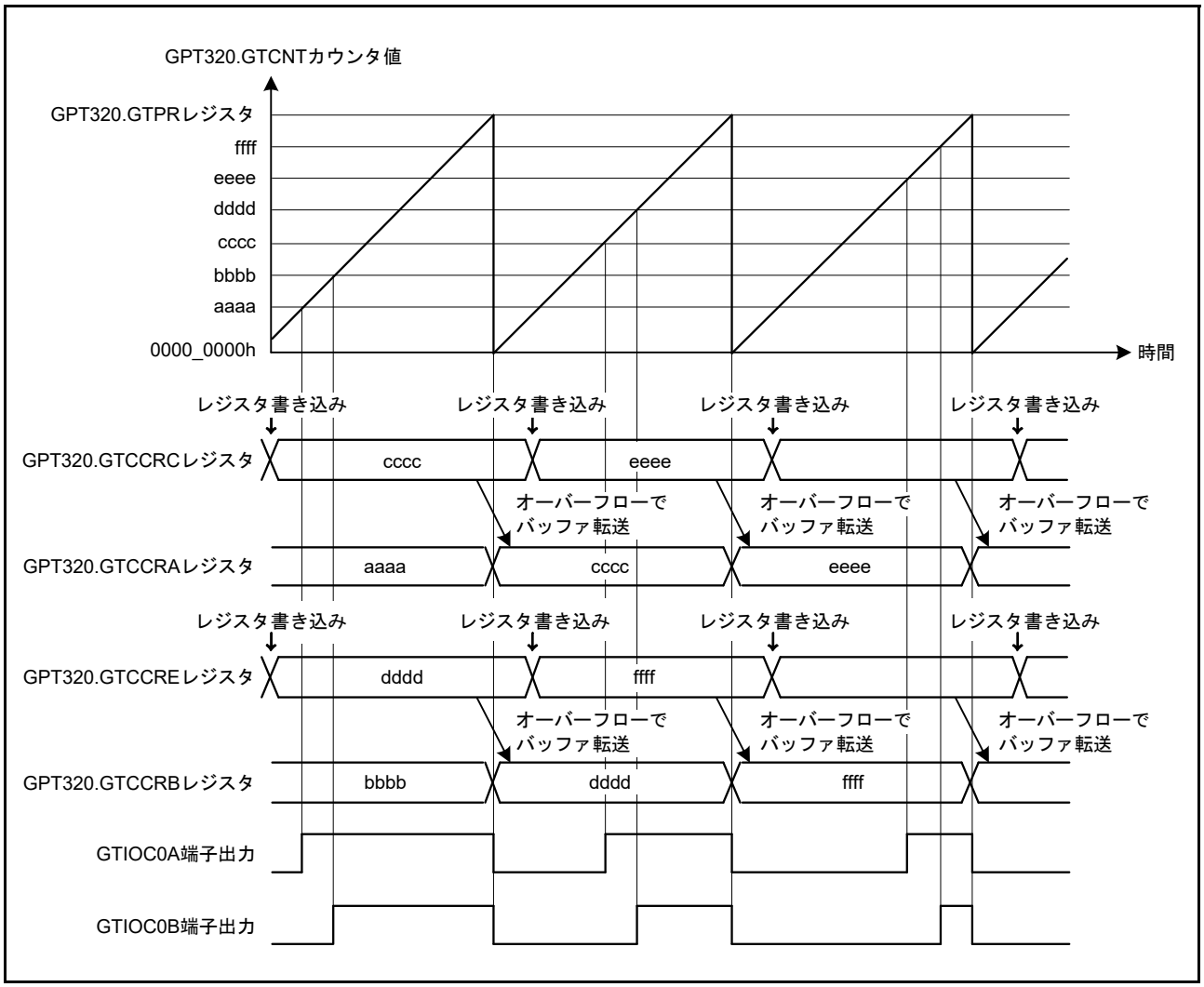


図 23.29　のこぎり波 PWM モード動作例（アップカウント、バッファ動作、GTCCRA/GTCCRB レジスタのコンペアマッチで High 出力、周期の終わりで Low 出力の場合）

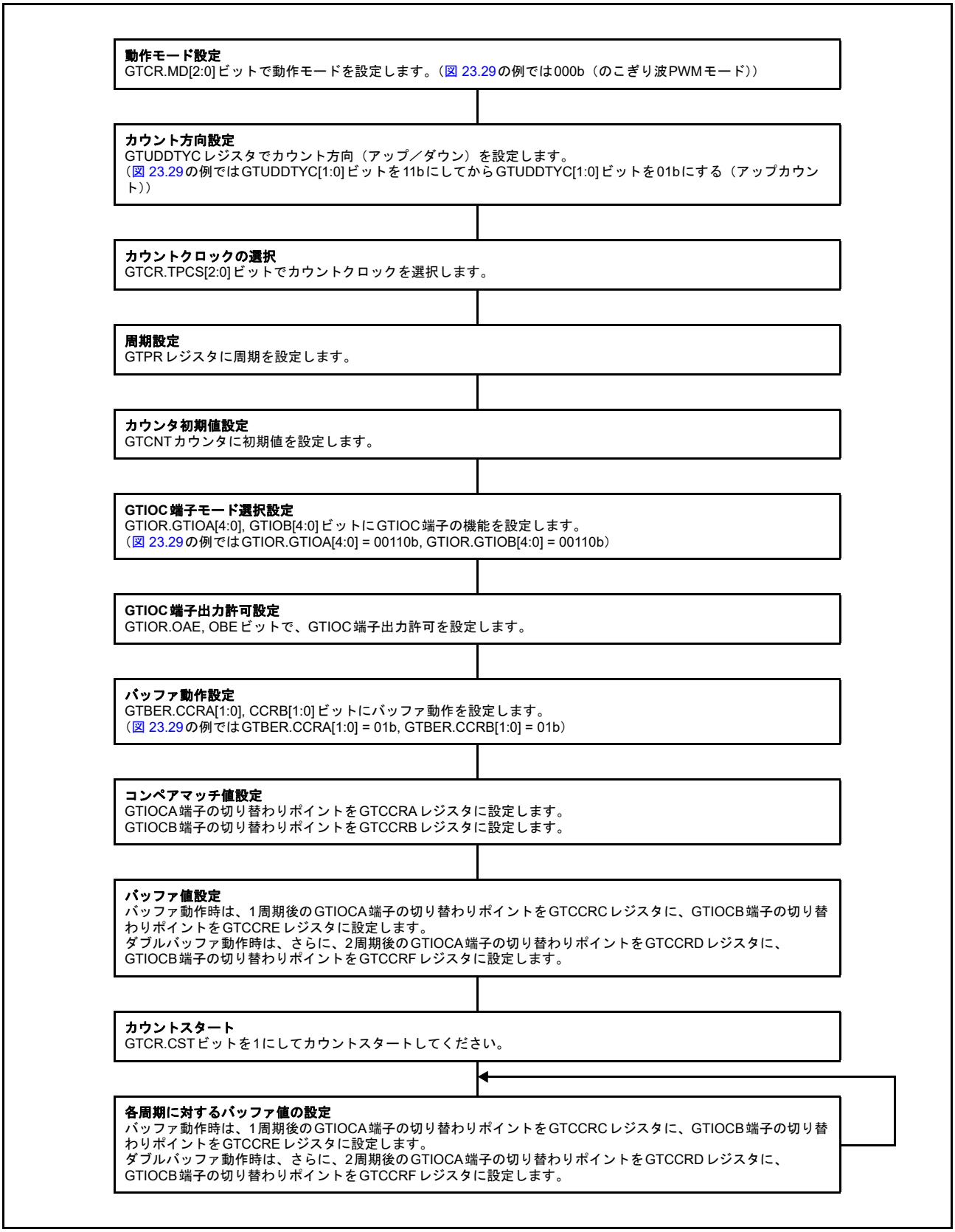


図 23.30 のこぎり波 PWM モードの設定例

23.3.3.2 のこぎり波ワンショットパルスモード

のこぎり波ワンショットパルスモードは、GTPR レジスタに周期を設定するモードです。GTCNT カウンタにのこぎり波（半波）動作を実行させ、バッファ動作を固定させた状態で GTCCRA または GTCCRB レジスタのコンペアマッチ発生時に GTIOCA または GTIOCB 端子に PWM 波形を出力させます。

のこぎり波ワンショットパルスモードでのバッファ動作は、通常のバッファ動作とは異なります。バッファ転送は以下のように実行されます。

- 周期の終わりに GTCCRC レジスタから GTCCRA レジスタへ
- 周期の終わりに GTCCRE レジスタから GTCCRB レジスタへ
- 周期の終わりに GTCCRD レジスタから一時レジスタ A へ
- 周期の終わりに GTCCRF レジスタから一時レジスタ B へ
- GTCCRA レジスタのコンペアマッチ時に、一時レジスタ A から GTCCRA レジスタへ
- GTCCRB レジスタのコンペアマッチ時に、一時レジスタ B から GTCCRB レジスタへ

端子の出力値は、GTIOR レジスタの設定によって、コンペアマッチ時と周期の終わりでそれぞれ個別に Low 出力／ High 出力／トグル出力から選択できます。カウントストップ中に GTBER.CCRSWT ビットを 1 にすると、GTCCRD レジスタから一時レジスタ A へ、および GTCCRF レジスタから一時レジスタ B へ、バッファ転送が強制的に実行されます。また、GTDTCR および GTDVU レジスタを設定することにより、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値は GTCCRB レジスタに自動設定されます。

図 23.31 に、のこぎり波ワンショットパルスモードの動作例を、図 23.32 に、のこぎり波ワンショットパルスモードの設定例を示します。

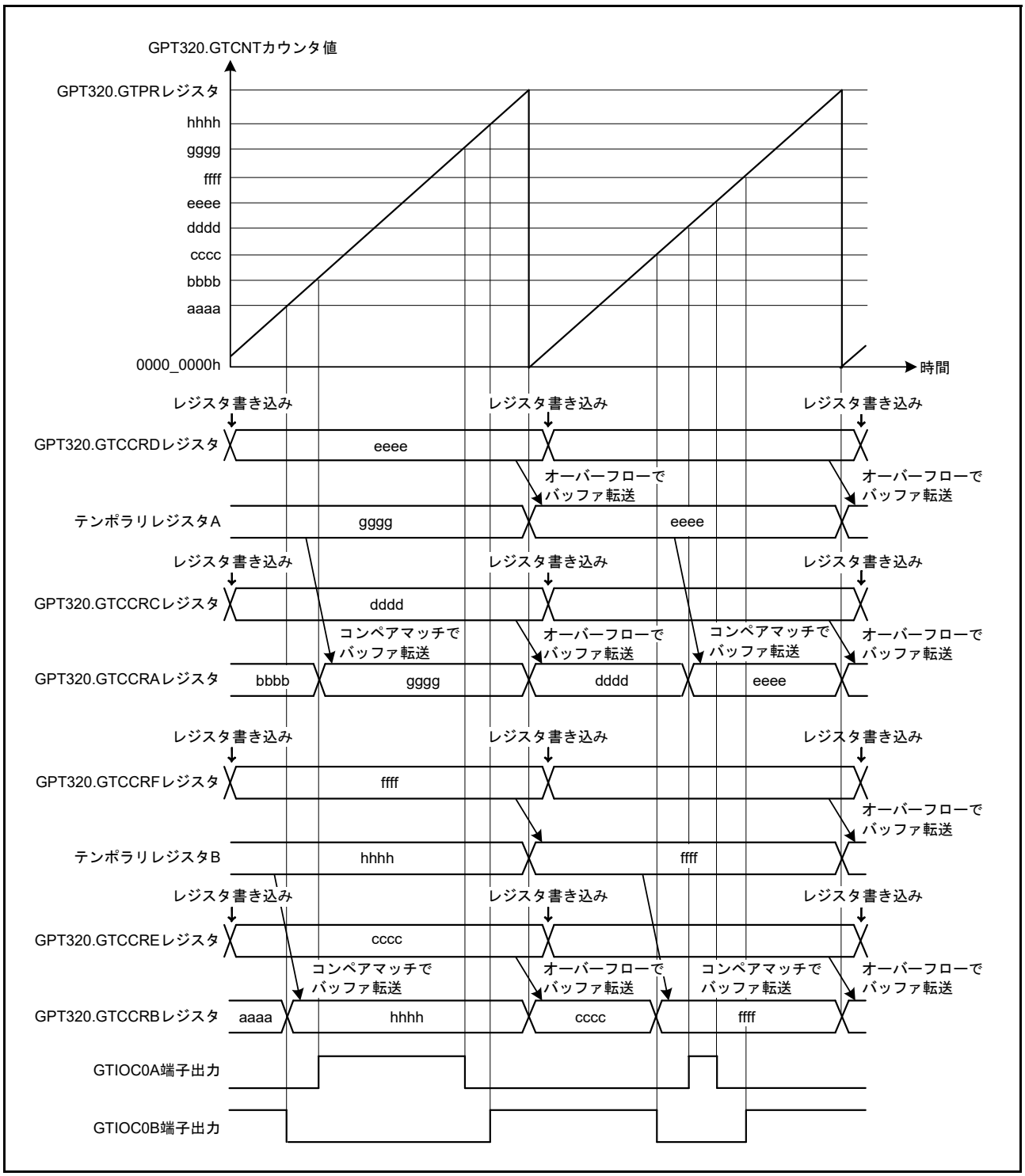


図 23.31　のこぎり波ワンショットパルスモード動作例（アップカウント、カウントスタート時 GTIOC0A 端子 = Low 出力／ GTIOC0B 端子 = High 出力、GTCCRA/GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持の場合）

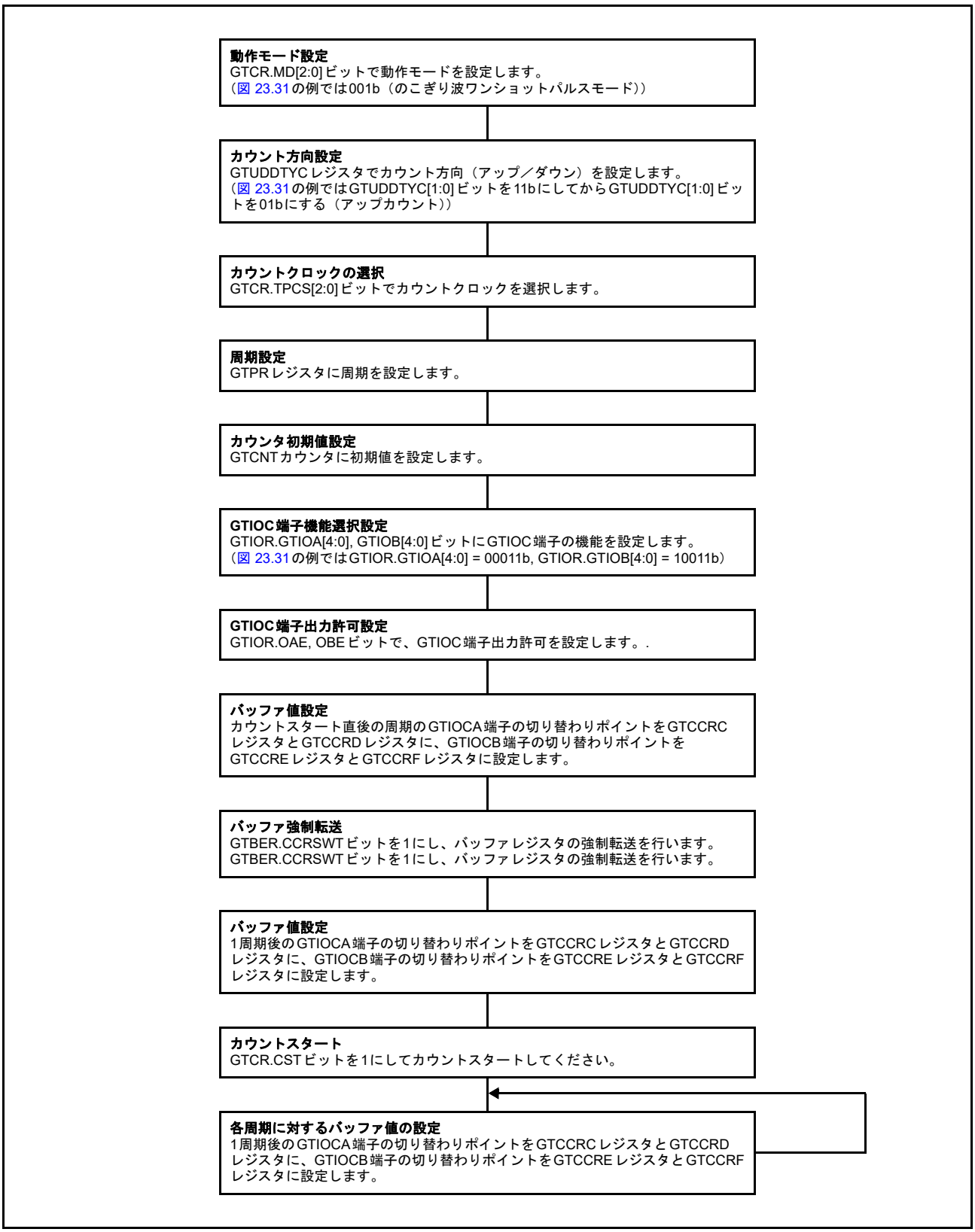


図 23.32　　のこぎり波ワンショットパルスモードの設定例

23.3.3.3　三角波 PWM モード 1（谷 32 ビット転送）

三角波 PWM モード 1 は、GTPR レジスタに周期を設定するモードです。GTCNT カウンタに三角波（全波）動作を実行させ、GTCCRA または GTCCRB レジスタのコンペアマッチ発生時に GTIOCA または GTIOCB 端子に PWM 波形を出力させます。バッファ転送は谷で行われます。端子の出力値は、GTIOR レジスタの設定によって、コンペアマッチ時と周期の終わりでそれぞれ個別に Low 出力／High 出力／トグル出力から選択できます。

また、GTDTCR および GTDVU レジスタを設定することにより、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値を GTCCRB レジスタに自動設定することが可能です。

図 23.33 に三角波 PWM モード 1 の動作例を、図 23.34 に三角波 PWM モード 1 の設定例を示します。

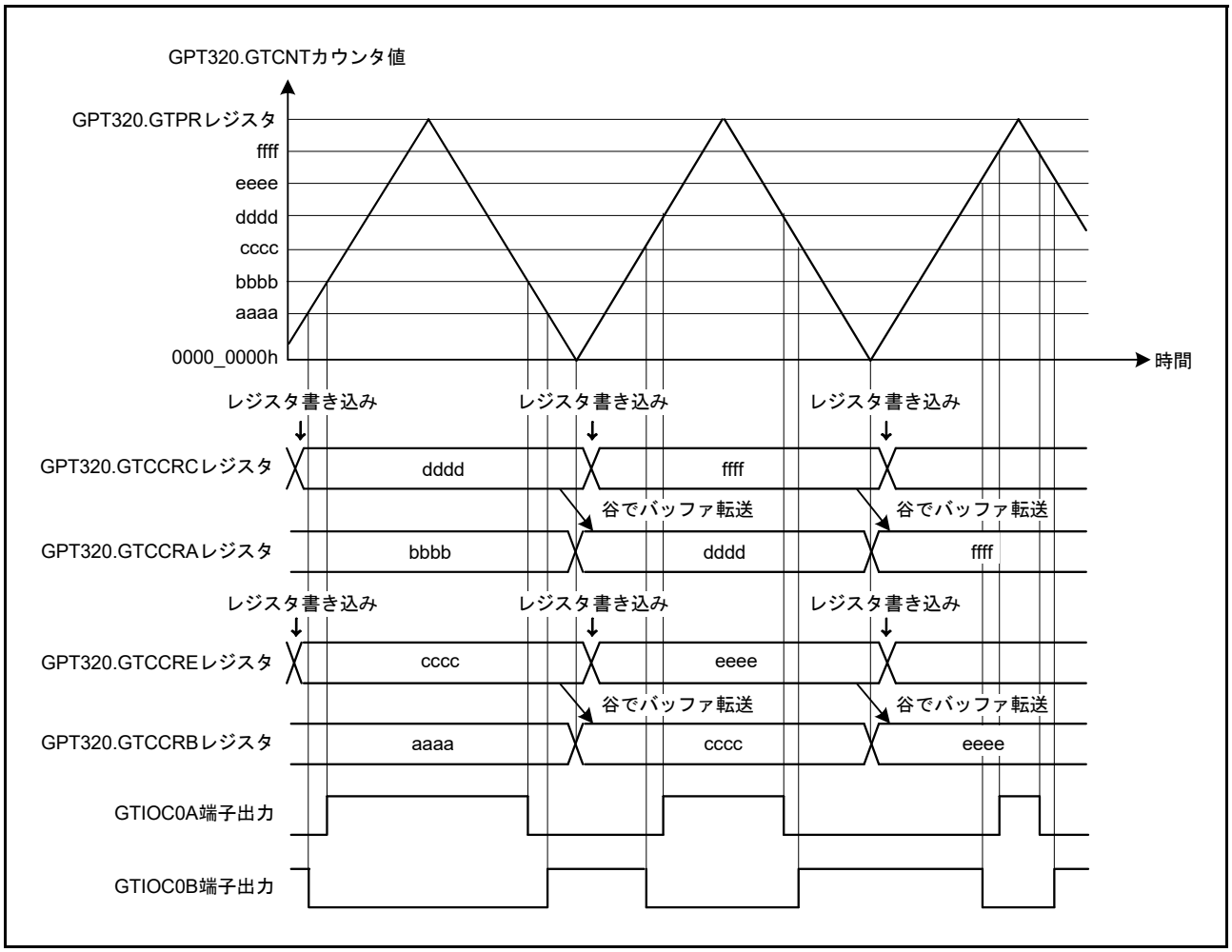


図 23.33　三角波 PWM モード 1 動作例（バッファ動作、カウントスタート時 GTIOC0A 端子 = Low 出力／GTIOC0B 端子 = High 出力、GTCCRA/GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持の場合）

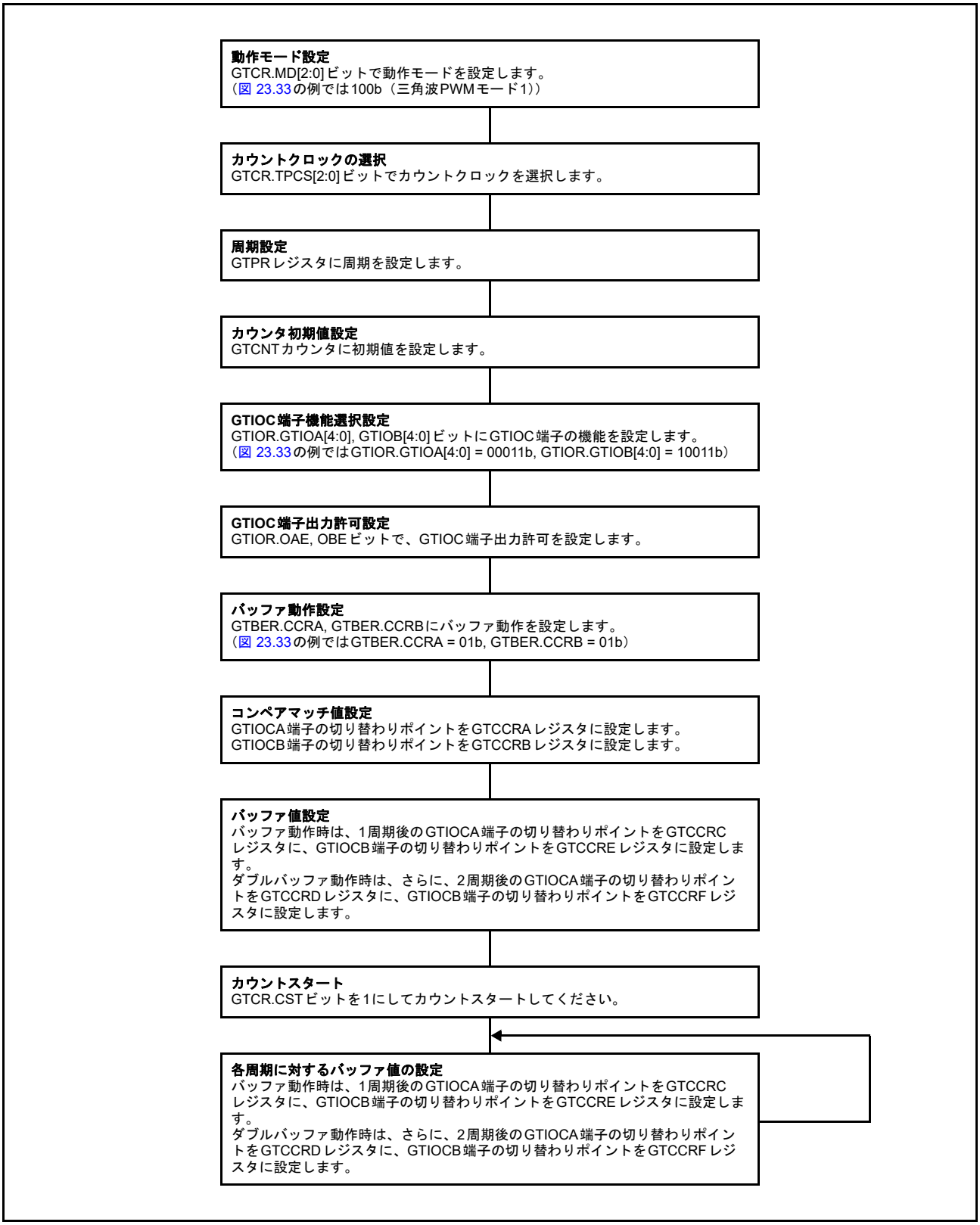


図 23.34　三角波 PWM モード 1 の設定例

23.3.3.4　三角波 PWM モード 2（山／谷 32 ビット転送）

三角波 PWM モード 1 と同様に、三角波 PWM モード 2 でも GTPR レジスタに周期を設定します。GTCNT カウンタに三角波（全波）動作を実行させ、GTCCRA または GTCCRB レジスタのコンペアマッチ発生時に GTIOCA または GTIOCB 端子に PWM 波形を出力させます。山と谷の両方でバッファ転送が行われます。端子の出力値は、GTIOR レジスタの設定によって、コンペアマッチ時と周期の終わりでそれぞれ個別に Low 出力／ High 出力／トグル出力から選択できます。また、GTDTCR および GTDVU レジスタを設定することにより、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値を GTCCRB レジスタに自動設定することが可能です。

図 23.35 に三角波 PWM モード 2 の動作例を、図 23.36 に三角波 PWM モード 2 の設定例を示します。

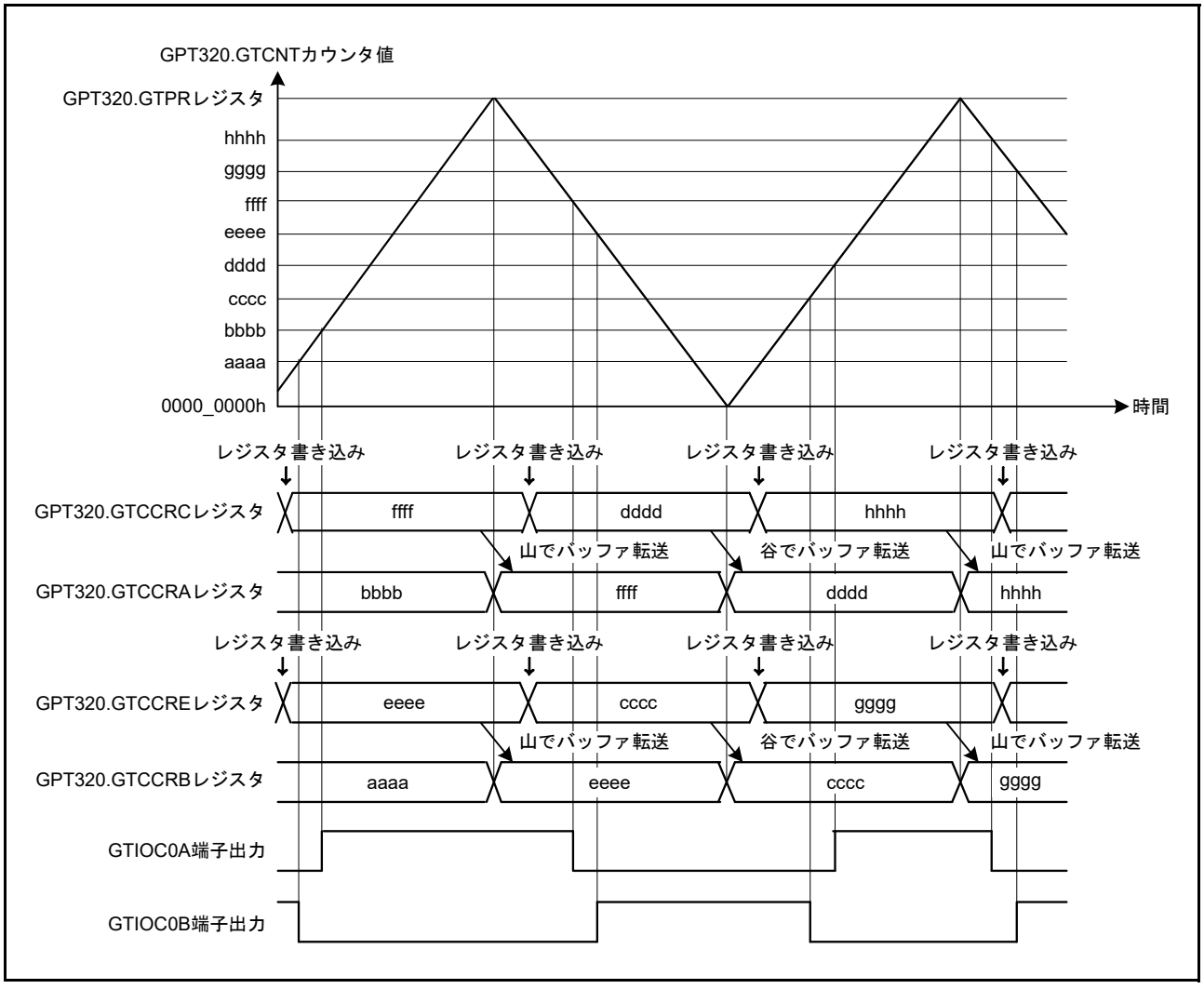


図 23.35　三角波 PWM モード 2 動作例（バッファ動作、カウントスタート時 GTIOC0A 端子 = Low 出力／GTIOC0B 端子 = High 出力、GTCCRA/GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持の場合）

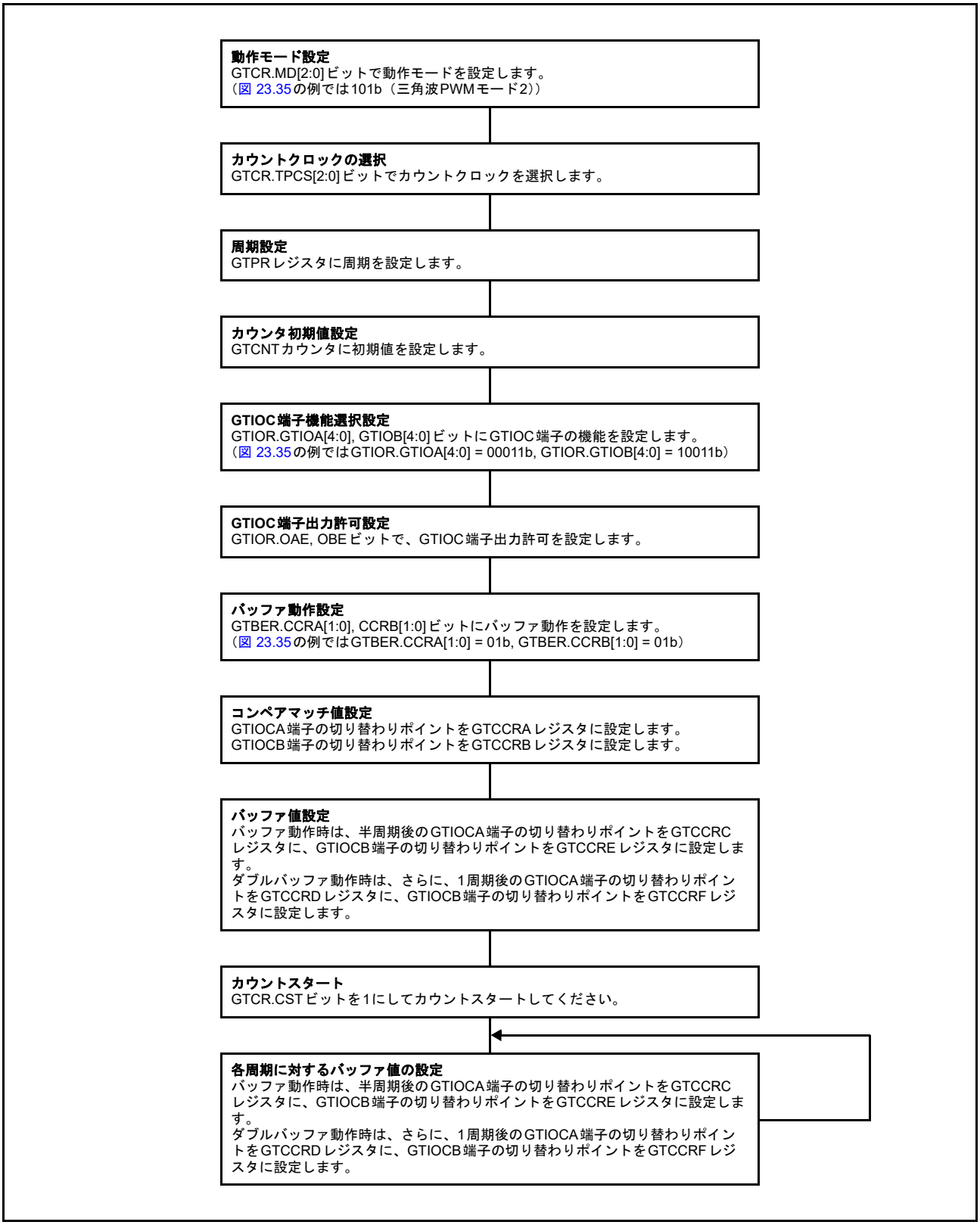


図 23.36　三角波 PWM モード 2 の設定例

23.3.3.5 三角波 PWM モード 3（谷 64 ビット転送）

三角波 PWM モード 3 は、GTPR レジスタに周期を設定するモードです。GTCNT カウンタに三角波（全波）動作を実行させ、バッファ動作を固定させた状態で GTCCRA または GTCCRB レジスタのコンペアマッチ発生時に GTIOCA または GTIOCB 端子に PWM 波形を出力させます。三角波 PWM モード 3 でのバッファ動作は、通常のバッファ動作とは異なります。バッファ転送は以下のように実行されます。

- 谷で GTCCRC レジスタから GTCCRA レジスタへ
- 谷で GTCCRE レジスタから GTCCRB レジスタへ
- 谷で GTCCRD レジスタから一時レジスタ A へ
- 谷で GTCCRF レジスタから一時レジスタ B へ
- 山で一時レジスタ A から GTCCRA レジスタへ
- 山で一時レジスタ B から GTCCRB レジスタへ

端子の出力値は、GTIOR レジスタの設定によって、コンペアマッチ時と周期の終わりでそれぞれ個別に Low 出力／ High 出力／トグル出力から選択できます。また、GTDTCR および GTDVU レジスタを設定することにより、デッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値を GTCCRB レジスタに自動設定することが可能です。

図 23.37 に三角波 PWM モード 3 の動作例を、図 23.38 に三角波 PWM モード 3 の設定例を示します。

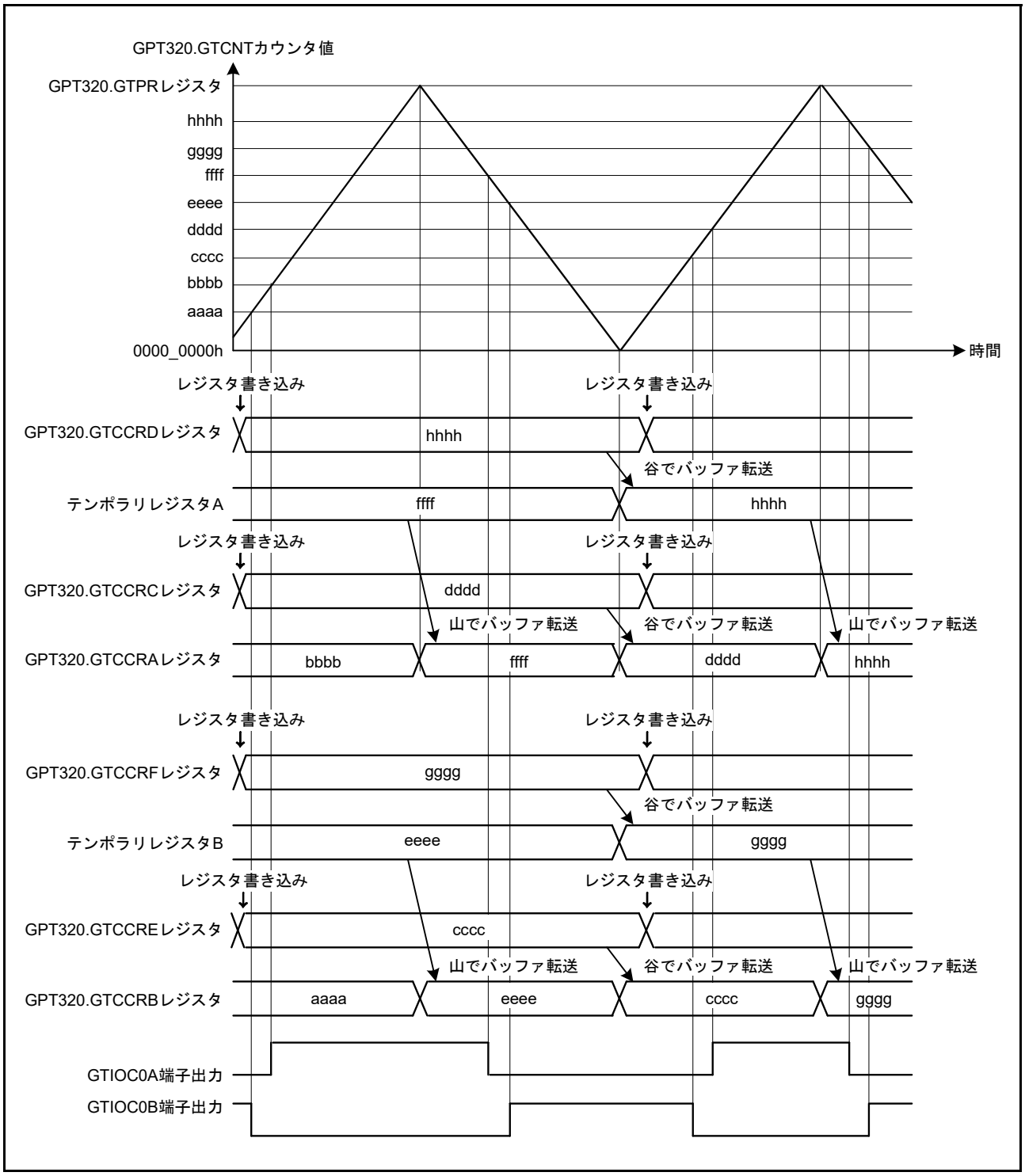


図 23.37　三角波 PWM モード 3 動作例（カウントスタート時 GTIOC0A 端子 = Low 出力／ GTIOC0B 端子 = High 出力、GTCCRA/GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力保持の場合）

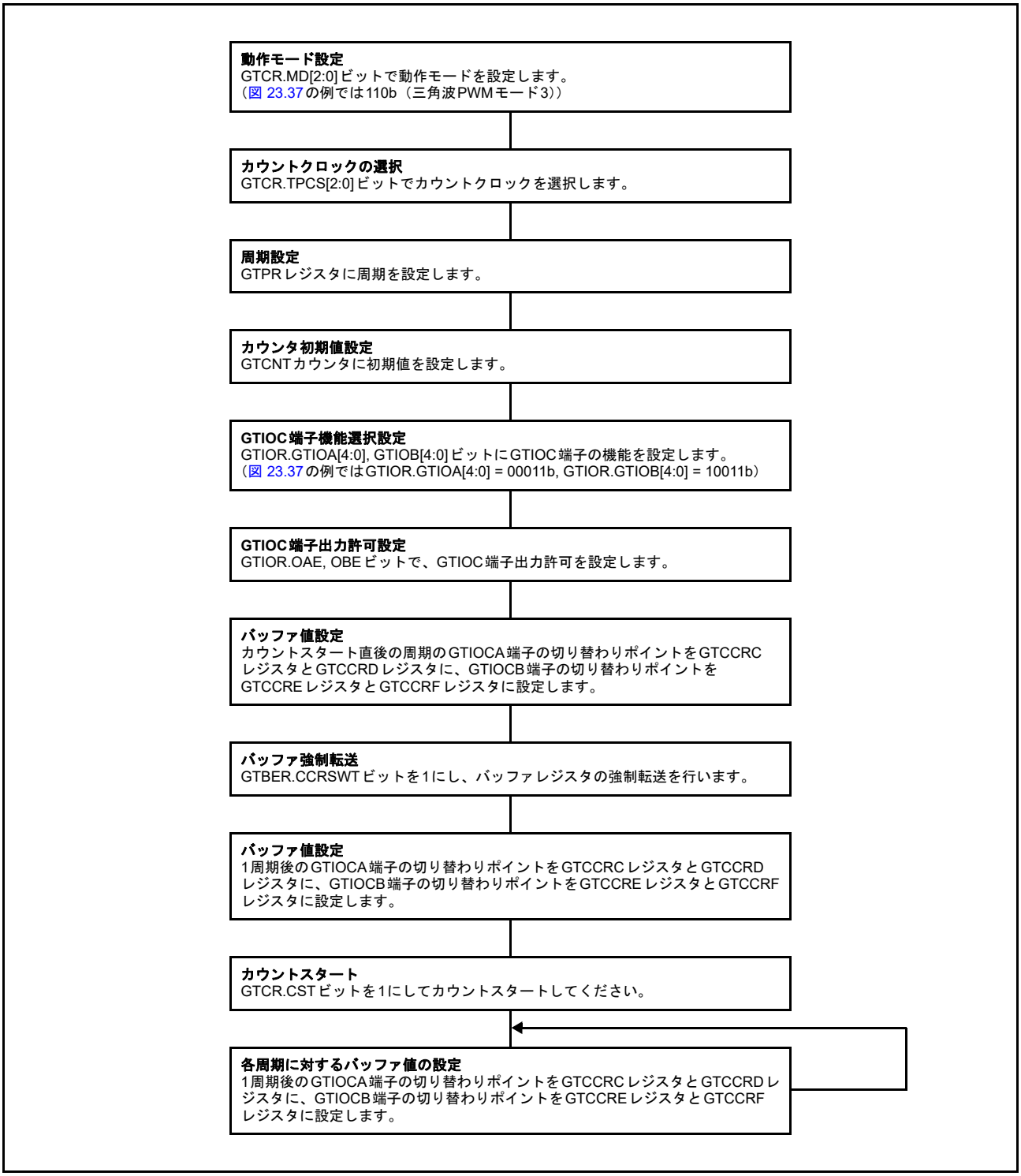


図 23.38 三角波 PWM モード 3 の設定例

23.3.4　デッドタイム自動設定機能

GTDTCR レジスタを設定することにより、正相波形のコンペアマッチ値（GTCCRA 値）と指定したデッドタイム値（GTDVU 値）から算出されたデッドタイム付き逆相波形のコンペアマッチ値を、GTCCRB レジスタに自動設定することが可能です。このデッドタイム自動設定機能は、のこぎり波ワンショットパルスモードと、すべての三角波 PWM モードで使用できます。

なお、デッドタイム自動設定機能を使用する場合、GTCCRB レジスタへの書き込みはしないでください。また、周期を超えるデッドタイムの設定もしないでください。デッドタイム自動設定値は、GTCCRB レジスタ値を読むことで確認できます。GTCCRB レジスタにデッドタイム値が自動設定されるのは、次のカウントクロック周期で、デッドタイム自動設定値の計算用レジスタが更新されるときです。

デッドタイム自動設定機能の動作例を図 23.39 ～図 23.42 に示します。設定例を図 23.43 および図 23.44 に示します。

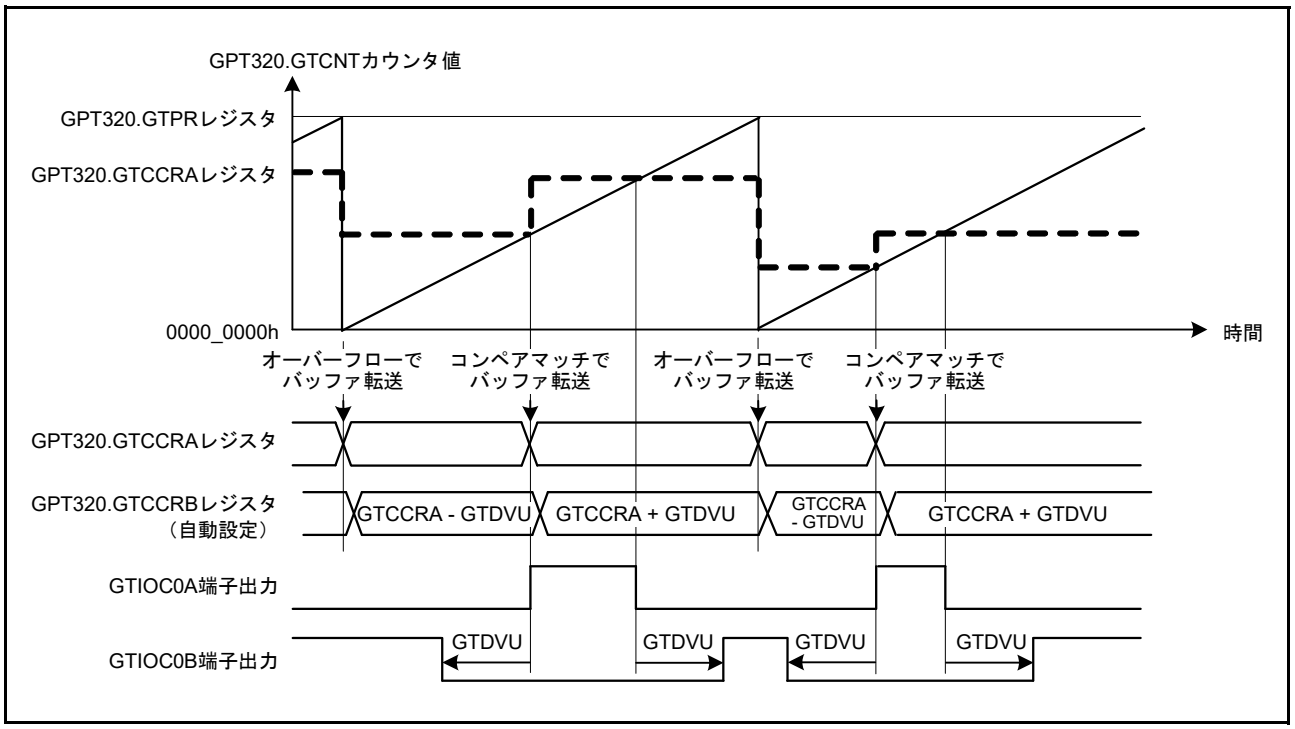


図 23.39　デッドタイム自動設定機能の動作例（のこぎり波ワンショットパルスモード、アップカウント、アクティブ High の場合）

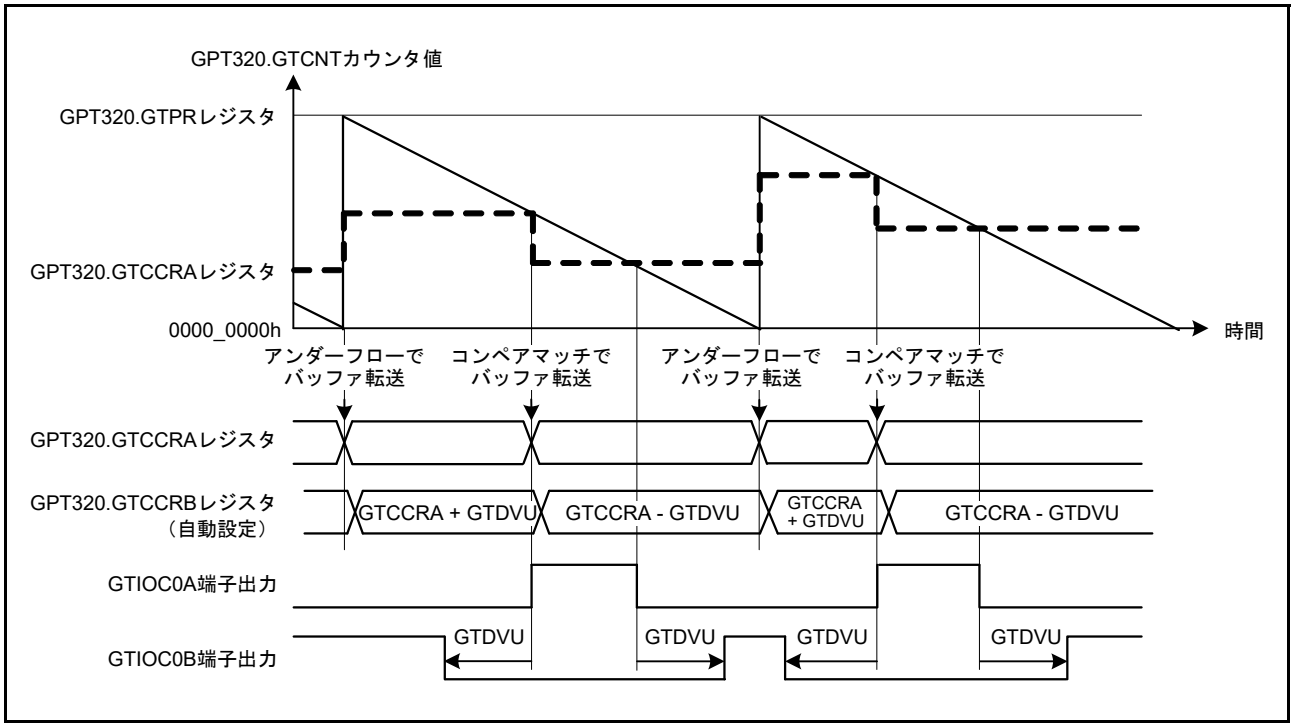


図 23.40　デッドタイム自動設定機能の動作例（のこぎり波ワンショットパルスモード、ダウンカウント、アクティブ High の場合）

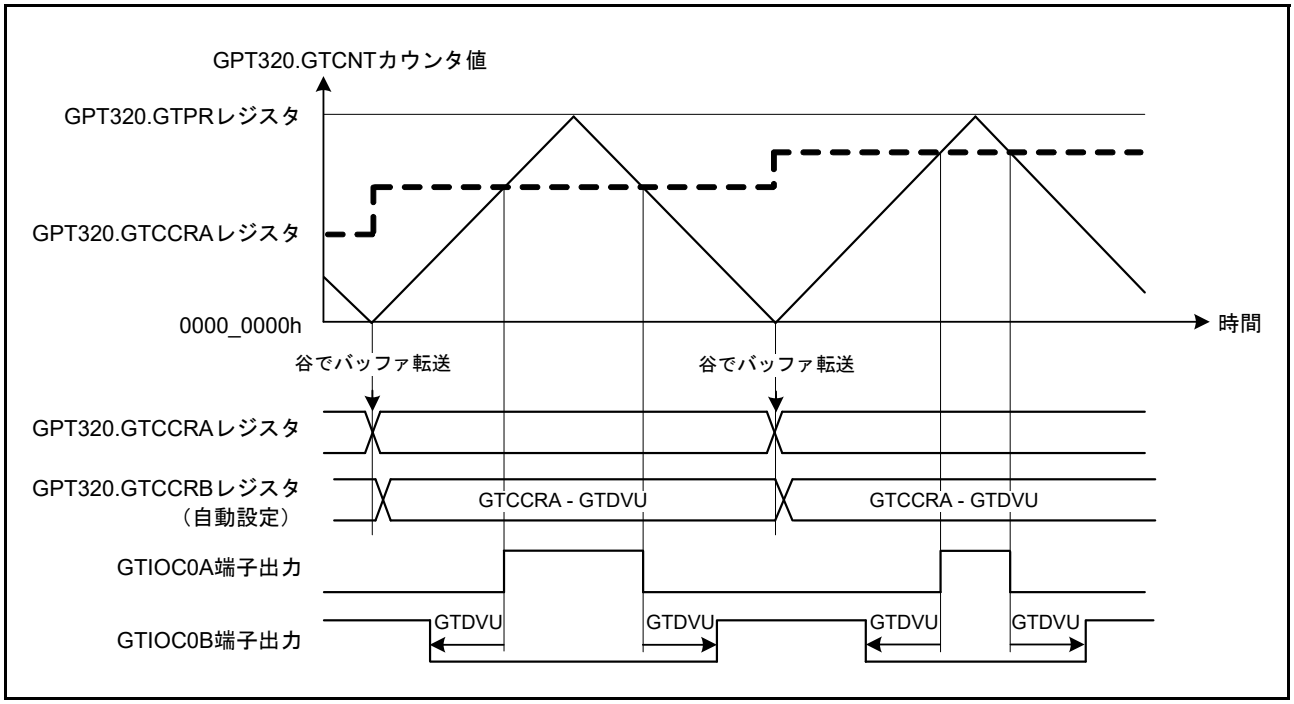


図 23.41　デッドタイム付きコンペアマッチ値の自動設定機能の動作例（三角波 PWM モード 1、アクティブ High の場合）

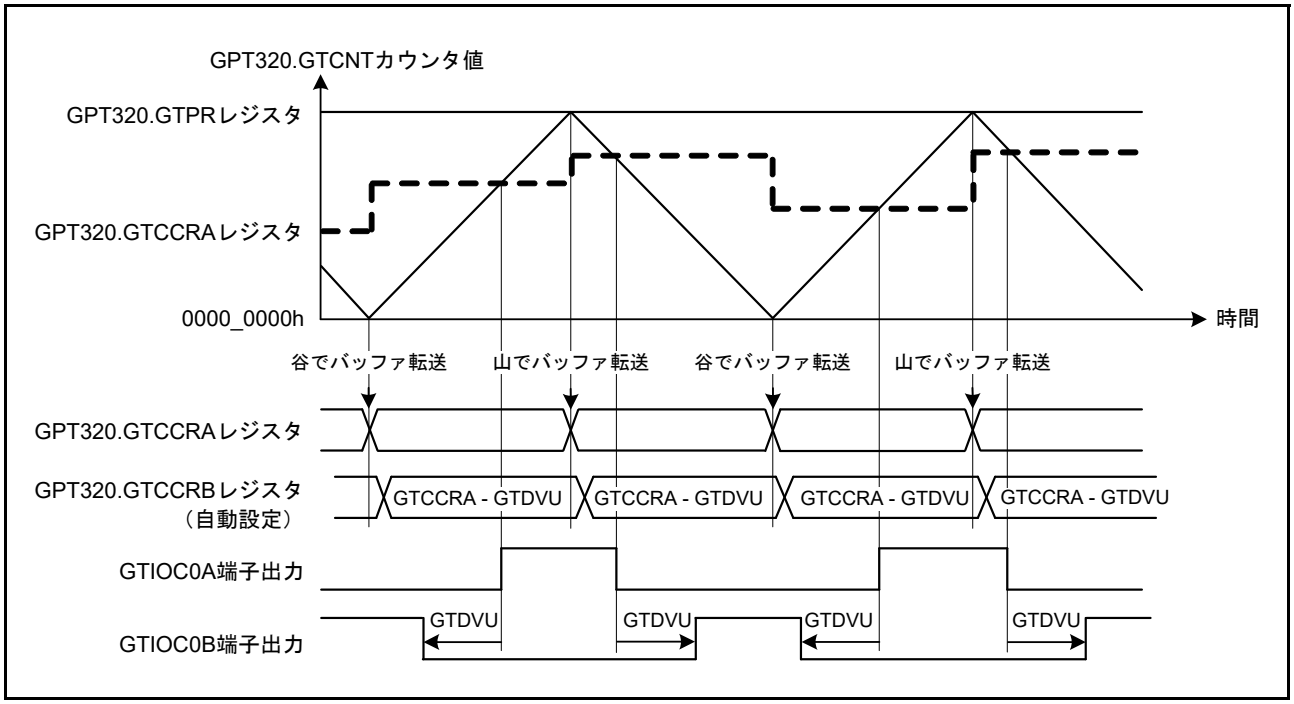


図 23.42 デッドタイム付きコンペアマッチ値の自動設定機能の動作例（三角波 PWM モード 2 または 3、アクティブ High の場合）

図 23.43　デッドタイム自動設定機能の設定例（のこぎり波ワンショットパルスモード、三角波 PWM モード 3 の場合）

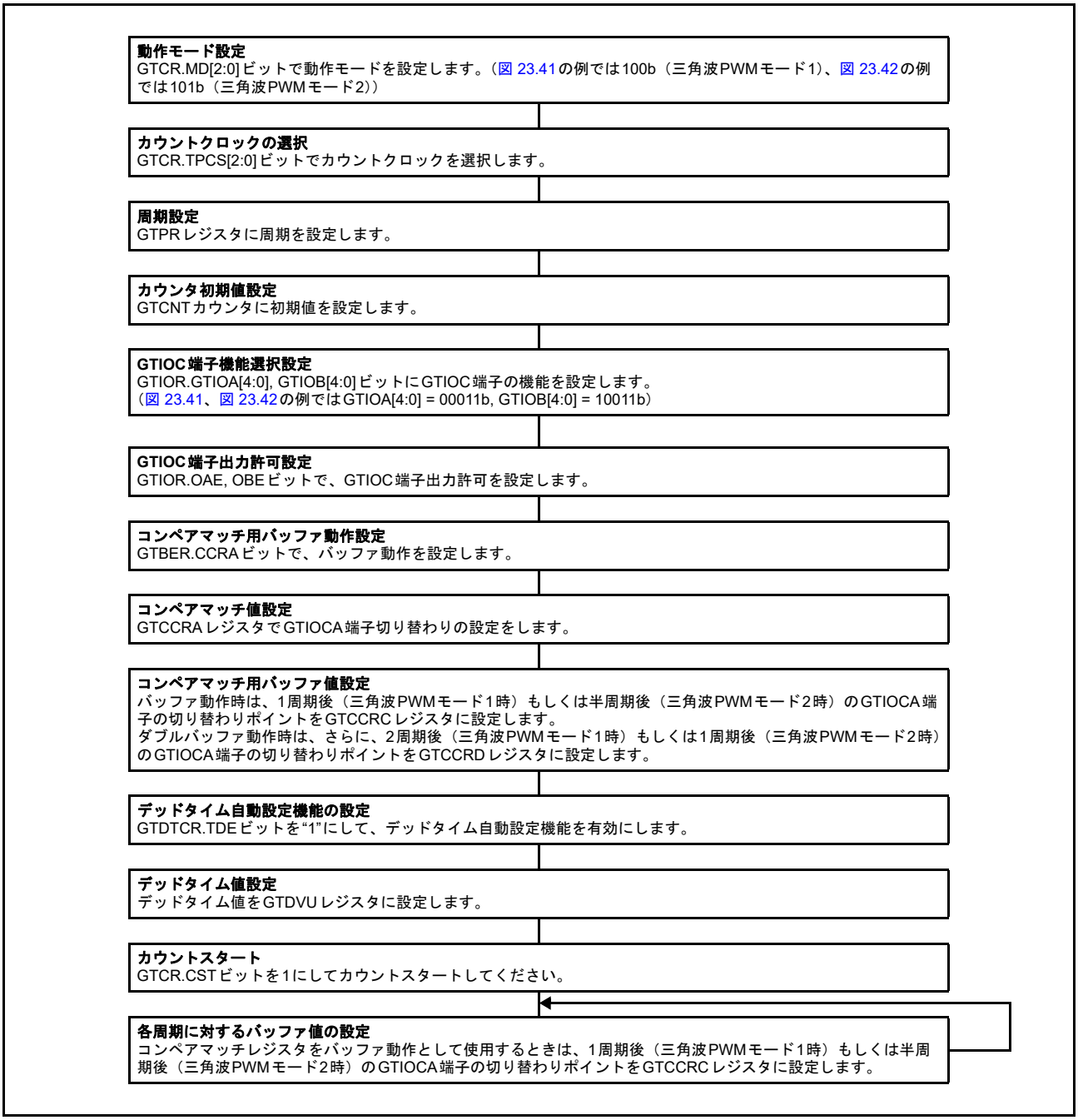


図 23.44　デッドタイム自動設定機能の設定例（三角波 PWM モード 1 または 2 の場合）

23.3.5　カウント方向切り替え機能

GTUDDTYC.UD ビットの値を書き換えることにより、GTCNT カウンタのカウント方向を切り替えることが可能です。

のこぎり波モードの場合、カウント動作中に GTUDDTYC.UD ビット値を変更すると、オーバーフロー（アップカウント中に変更した場合）またはアンダーフロー（ダウンカウント中に変更した場合）発生時に、カウント方向が切り替わります。カウントストップ中に GTUDDTYC.UDF ビットが 0 の状態で GTUDDTYC.UD ビット値を変更しても、その変更値はカウントスタート時に反映されず、オーバーフローまたはアンダーフロー発生時にカウント方向が切り替わります。カウントストップ中に GTUDDTYC.UDF ビットを 1 にすると、そのときの GTUDDTYC.UD ビット値がカウントスタート時に反映されます。

三角波モードの場合、カウント動作中に GTUDDTYC.UD ビット値を変更しても、カウント方向は切り替わりません。同様に、カウントストップ中に GTUDDTYC.UDF ビットが 0 の状態で GTUDDTYC.UD ビット値を変更しても、その値はカウント動作に反映されません。カウントストップ中に GTUDDTYC.UDF ビットを 1 にすると、そのときの GTUDDTYC.UD ビット値がカウントスタート時に反映されます。

のこぎり波のカウント動作中にカウント方向を変更すると、アップカウント中はアップカウントスタート後の GTPR 値がカウント周期に反映され、ダウンカウント中はダウンカウントスタート前の GTPR 値が反映されます。

図 23.45 にカウント方向切り替え機能の動作例を示します。

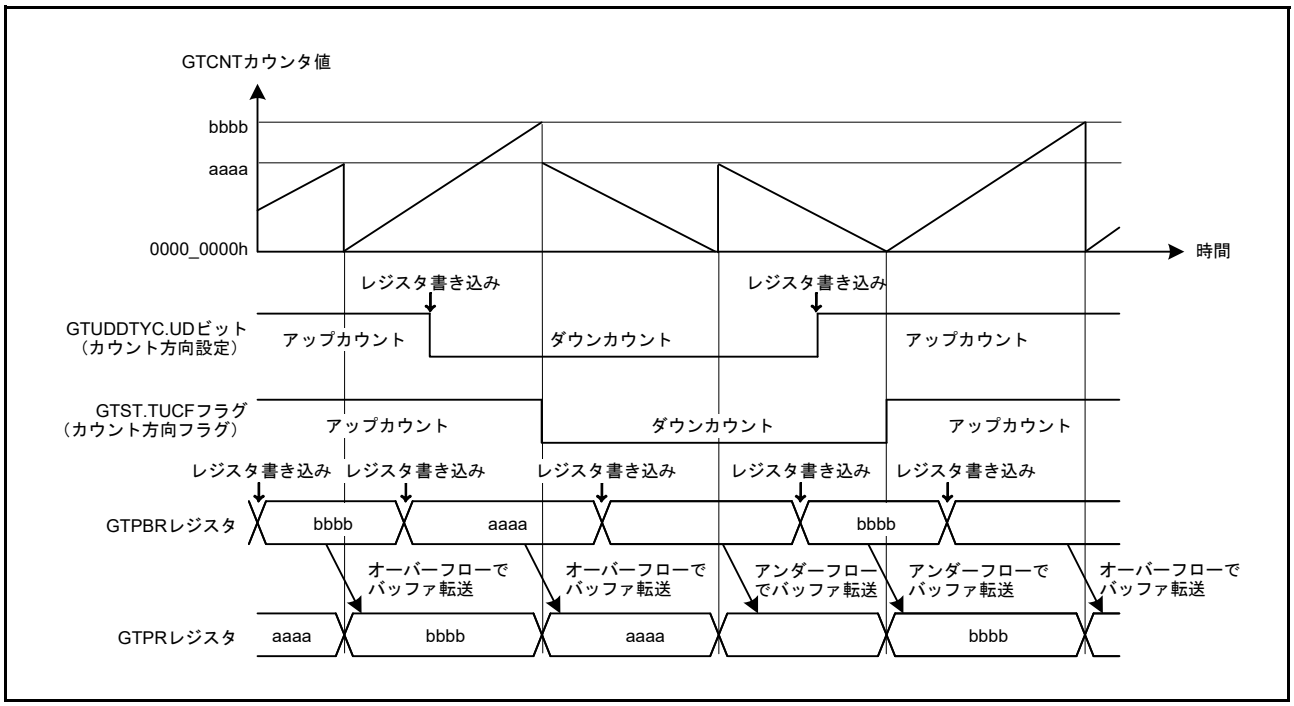


図 23.45　カウント方向切り替え機能の動作例（バッファ動作時）

23.3.6 出力デューティ 0% および出力デューティ 100% 機能

GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビットを変更することにより、GTIOCA 端子と GTIOCB 端子の出力デューティが 0% または 100% に設定されます。

のこぎり波モードの場合、カウント動作中に GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビットを変更すると、オーバーフロー（アップカウント中に変更した場合）またはアンダーフロー（ダウンカウント中に変更した場合）発生時に、出力デューティの設定値が反映されます。カウントストップ中に GTUDDTYC.OADTYF ビットまたは GTUDDTYC.OBDTYF ビットが 0 の状態で GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビットを変更しても、出力デューティの変更値はカウントスタート時に反映されません。出力デューティはオーバーフローまたはアンダーフロー発生時に変更されます。カウントストップ中に GTUDDTYC.OADTYF ビットまたは GTUDDTYC.OBDTYF ビットを 1 にすると、そのときの GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビット値がカウントスタート時に反映されます。

三角波モードの場合、カウント動作中に GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビットを変更すると、アンダーフロー発生時に出力デューティの設定値が反映されます。

カウントストップ中に GTUDDTYC.OADTYF ビットまたは GTUDDTYC.OBDTYF ビットが 0 の状態で GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビットを変更しても、出力デューティの変更値はカウントスタート時に反映されません。アンダーフロー時に出力デューティが変更されます。カウントストップ中に GTUDDTYC.OADTYF ビットまたは GTUDDTYC.OBDTYF ビットが 1 の状態で GTUDDTYC.OADTY ビットまたは GTUDDTYC.OBDTY ビットを変更すると、出力デューティの変更値はカウントスタート時に反映されます。

0% または 100% デューティ動作の実行時、GPT は内部で以下の動作を継続します。

- コンペアマッチ動作の実行
- コンペアマッチフラグの設定
- 割り込み出力
- バッファ動作の実行

0% または 100% デューティ設定からコンペアマッチに制御が変更されると、周期の終わりでの GTIOCA 端子の出力値は、GTIOR.GTIOA[3:2] ビットと GTUDDTYC.OADTYR ビットで決定されます。周期の終わりでの GTIOCB 端子の出力値は、GTIOR.GTIOB[3:2] ビットと GTUDDTYC.OBDTYR ビットで決定されます。

GTIOR.GTIOA[3:2] ビットと GTIOR.GTIOB[3:2] ビットを 01b にすると、出力端子は周期の終わりで Low 出力となります。GTIOR.GTIOA[3:2] ビットと GTIOR.GTIOB[3:2] ビットを 10b にすると、出力端子は周期の終わりで High 出力となります。

GTIOR.GTIOm[3:2] ビットが 00b（周期の終わりで出力保持）または 11b（周期の終わりでトグル出力）になっている場合、GTUDDTYC.OADTYR ビットでは、周期の終わりで出力保持／トグル出力の対象となる値を選択します。周期の終わりでの GTIOCA/GTIOCB 端子の出力値を表 23.6 に示します。

表 23.6　0%または100%デューティ設定解除後の出力値（m = A, B）

GTIOR.GTIOm[3:2]	0%または100%デューティ設定でマスクされた周期の終わりでのコンペアマッチ値	GTUDDTYC.OmDTYR（デューティ 0%設定時）		GTUDDTYC.OmDTYR（デューティ 100%設定時）	
		0	1	0	1
00（周期の終わりで出力保持）	0	0	0	1	0
	1	0	1	1	1
01（周期の終わりでLow出力）	—	0	0	0	0
10（周期の終わりでHigh出力）	—	1	1	1	1
11（周期の終わりでトグル出力）	0	1	1	0	1
	1	1	0	0	0

図 23.46 に出力デューティ 0%、100% 機能動作例を示します。

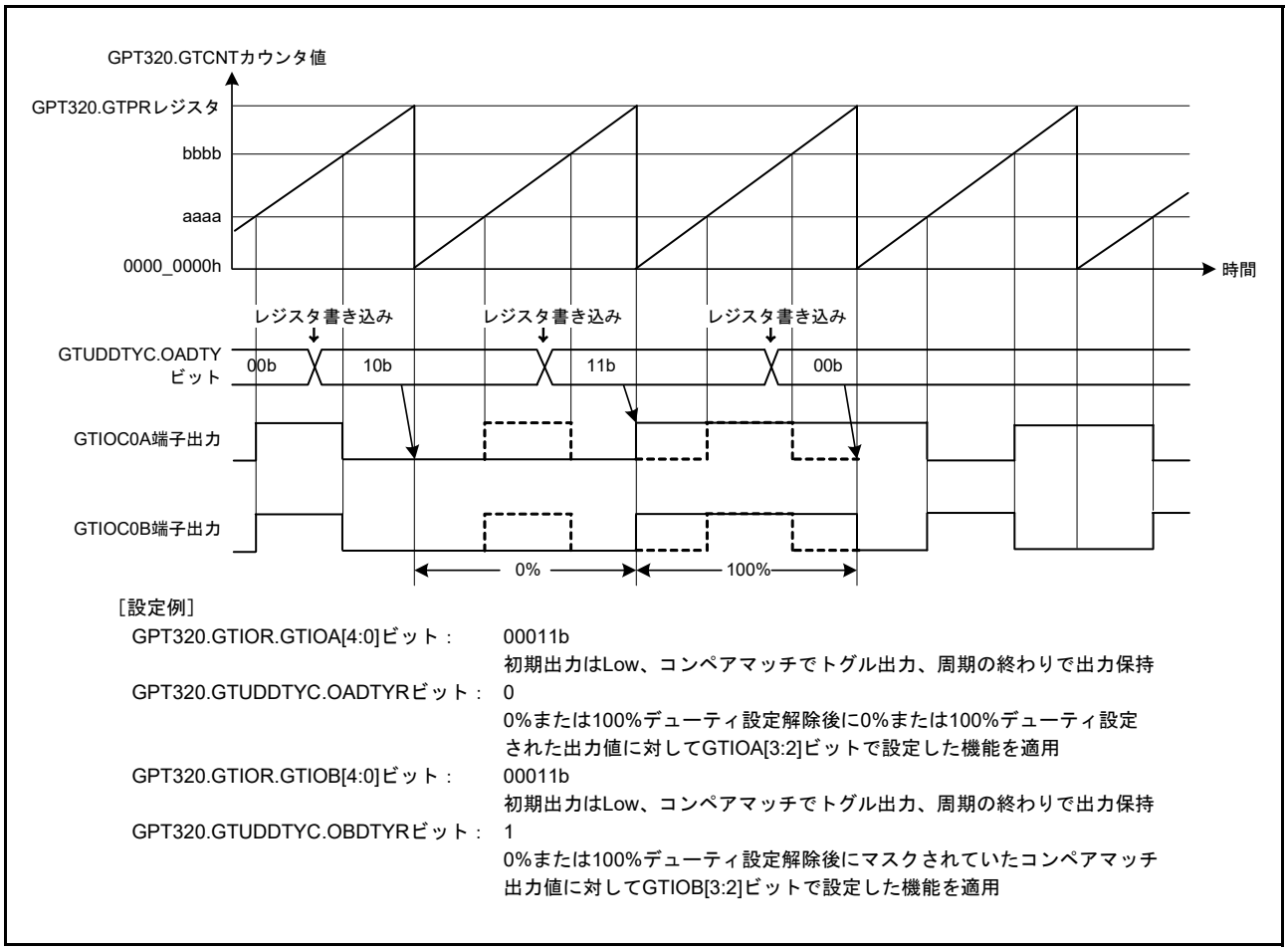


図 23.46　出力デューティ 0%、100% 機能動作例

23.3.7 ハードウェアカウントスタート／カウントストップ、カウントクリア動作

下記のハードウェア要因によって、GTCNT カウンタのカウントスタート、カウントストップ、またはカウントクリアが可能です。

- 出力トリガ入力
- ELC イベント入力
- GTIOCA/GTIOCB 端子入力

23.3.7.1 ハードウェアスタート動作

GTSSR レジスタでハードウェア要因を選択することにより、GTCNT カウンタのカウントスタートが可能です。

図 23.47 にハードウェア要因によるカウントスタートの動作例を示します。図 23.48 に設定例を示します。

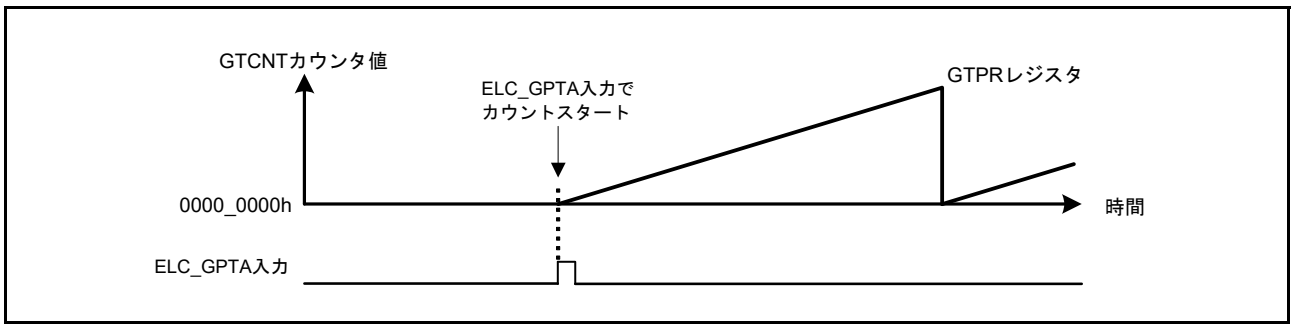


図 23.47 ハードウェア要因によるカウントスタート動作例（ELC_GPTA イベントからの信号入力時のスタート）

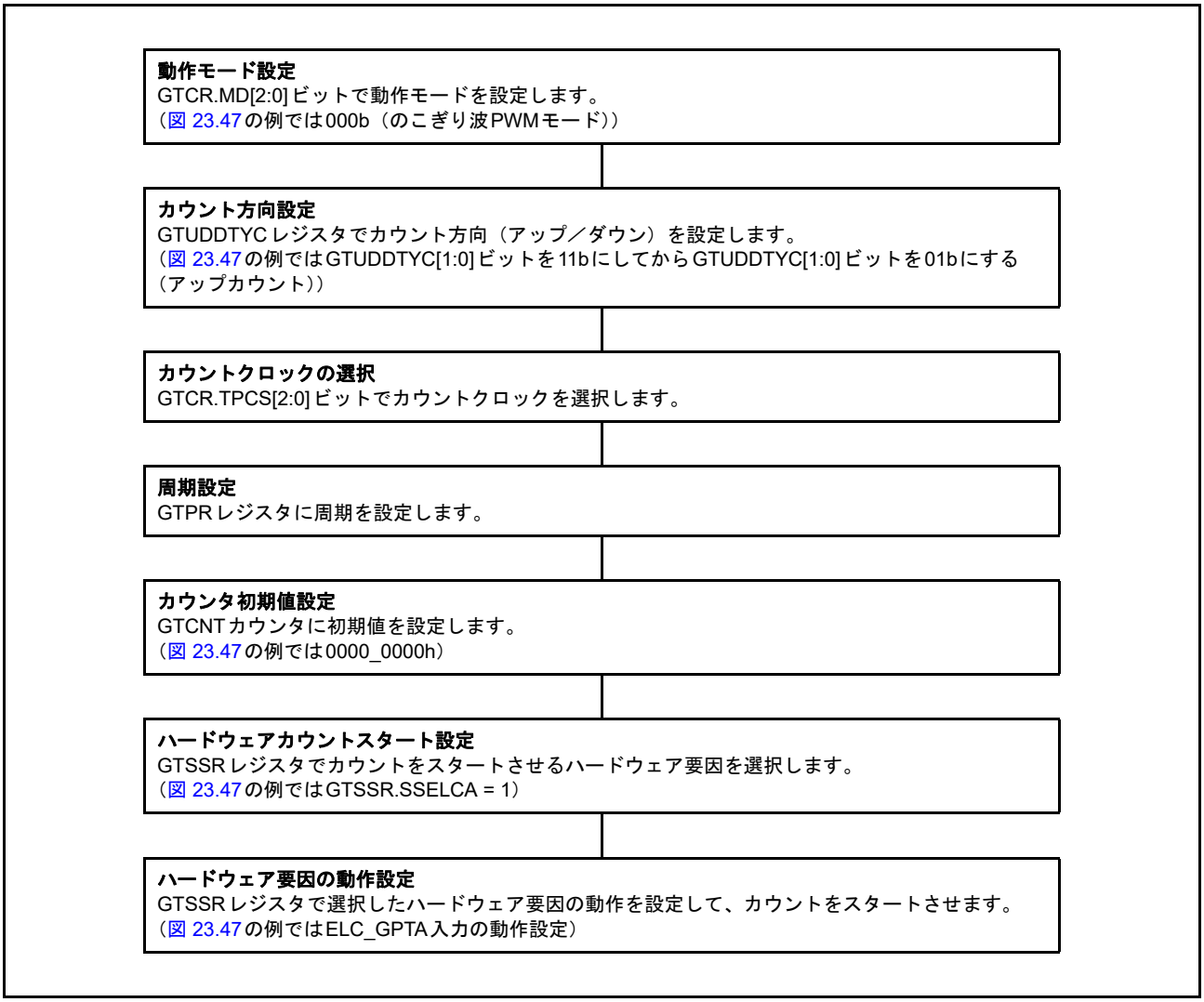


図 23.48　ハードウェア要因によるカウントスタート動作設定例

23.3.7.2 ハードウェアストップ動作

GTPSR レジスタでハードウェア要因を選択することにより、GTCNT カウンタのカウントストップが可能です。

図 23.49 にハードウェア要因によるカウントストップの動作例を示します。図 23.50 に設定例を示します。この例では、カウント動作がストップし、ELC イベント入力のエッジで再スタートしています。

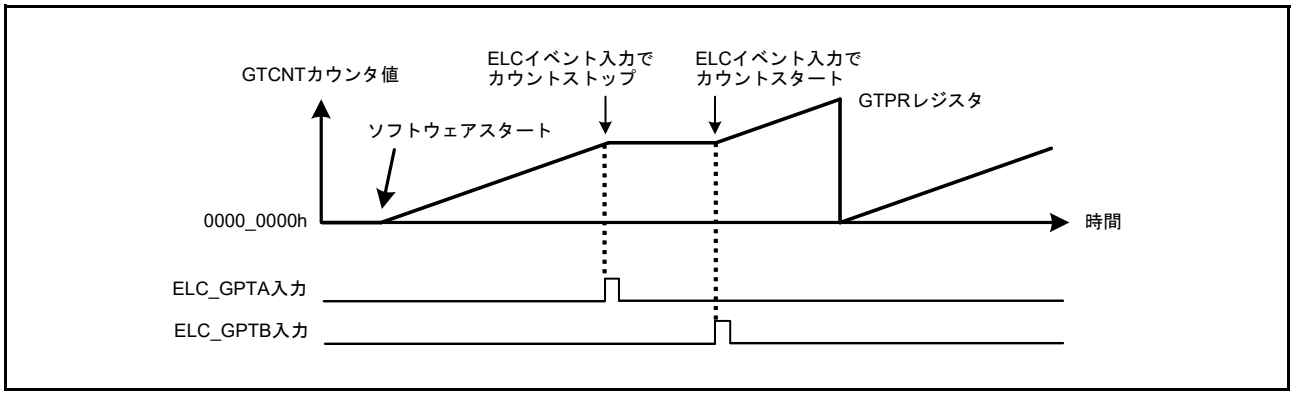


図 23.49 ハードウェア要因によるカウントストップ動作例（ソフトウェアによるスタート、ELC_GPTA 入力でのストップ、ELC_GPTB 入力での再スタートの場合）

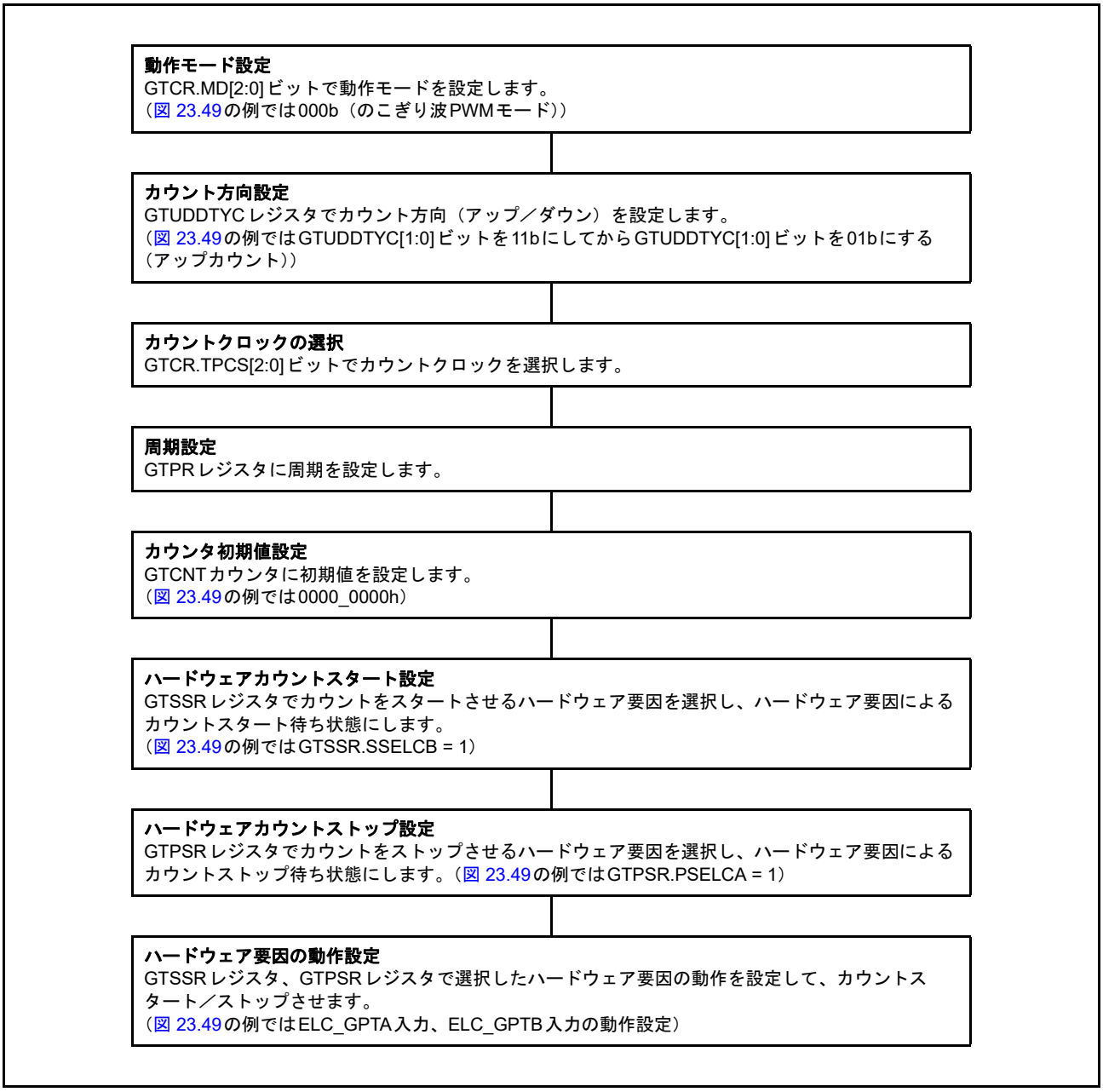


図 23.50　ハードウェア要因によるカウントストップ動作設定例

図 23.51 にハードウェア要因によるカウントスタート／ストップ動作例を示します。図 23.52 に設定例を示します。この例では、外部トリガ入力 GTETRGA 端子が High の期間に、カウンタが動作しています。

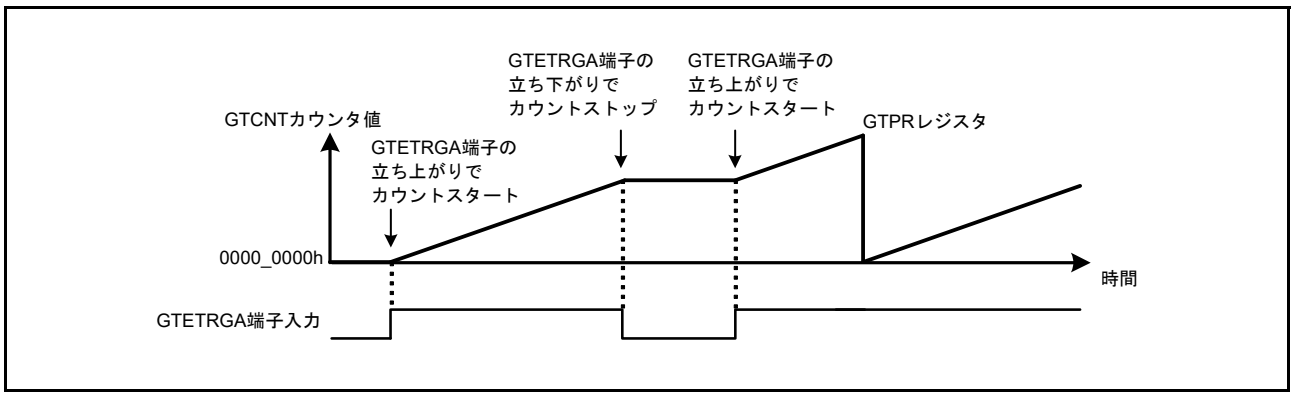


図 23.51 ハードウェア要因によるカウントスタート／ストップ動作例（GTETRGA 端子入力の立ち上がりエッジでスタート、GTETRGA 端子入力の立ち下がりエッジでストップの場合）

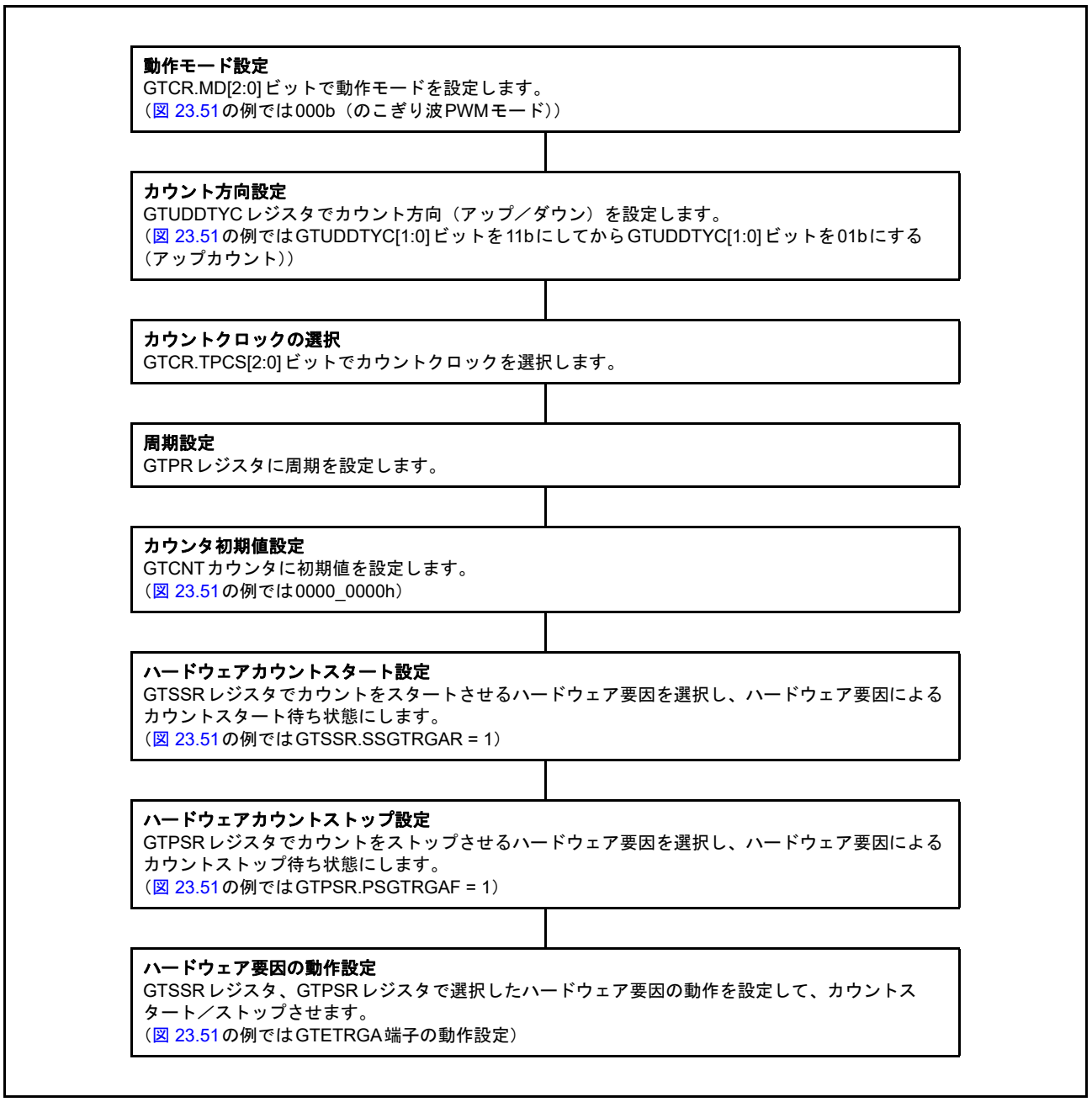


図 23.52　ハードウェア要因によるカウントスタート／ストップ動作設定例

23.3.7.3　ハードウェアクリア動作

GTCSR レジスタでハードウェア要因を選択することにより、GTCNT カウンタのカウントクリアが可能です。ハードウェア要因またはソフトウェアによって GTCNT カウンタがクリアされても、GPTn_OVF/GPTn_UDF（n = 0 ～ 5, 8）割り込み（オーバーフロー／アンダーフロー割り込み）は発生しません。

図 23.53 および図 23.54 に、ハードウェア要因による GTCNT カウンタのクリア動作例を示します。図 23.55 に設定例を示します。この例では、GTCNT カウンタは ELC_GPTA 入力のエッジでスタートし、ELC_GPTB 入力のエッジでストップおよびクリアされています。

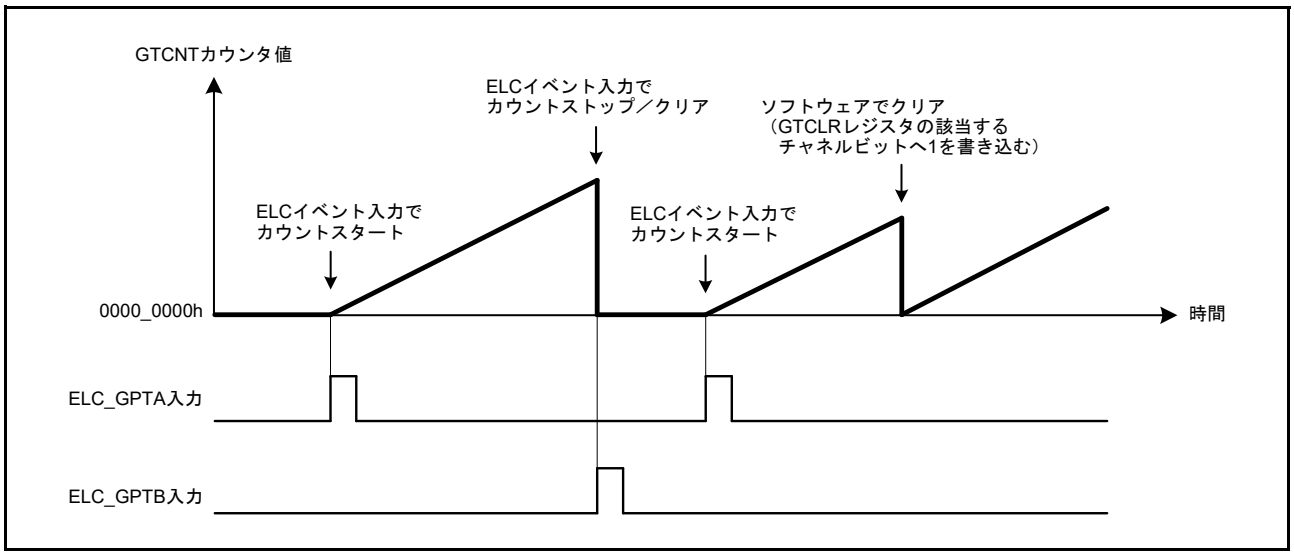


図 23.53　ハードウェア要因によるカウントクリア動作例（のこぎり波アップカウント、ELC_GPTA 入力でスタート、ELC_GPTB 入力でストップ／クリアの場合）

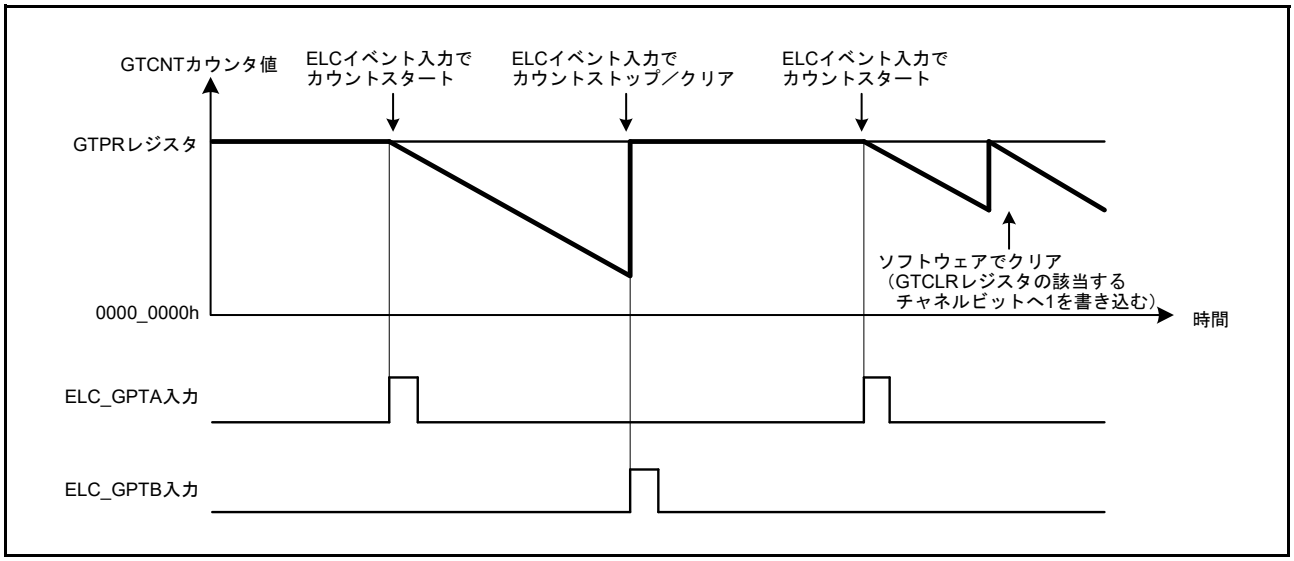


図 23.54　ハードウェア要因によるカウントクリア動作例（のこぎり波ダウンカウント、ELC_GPTA 入力でスタート、ELC_GPTB 入力でストップ／クリアの場合）

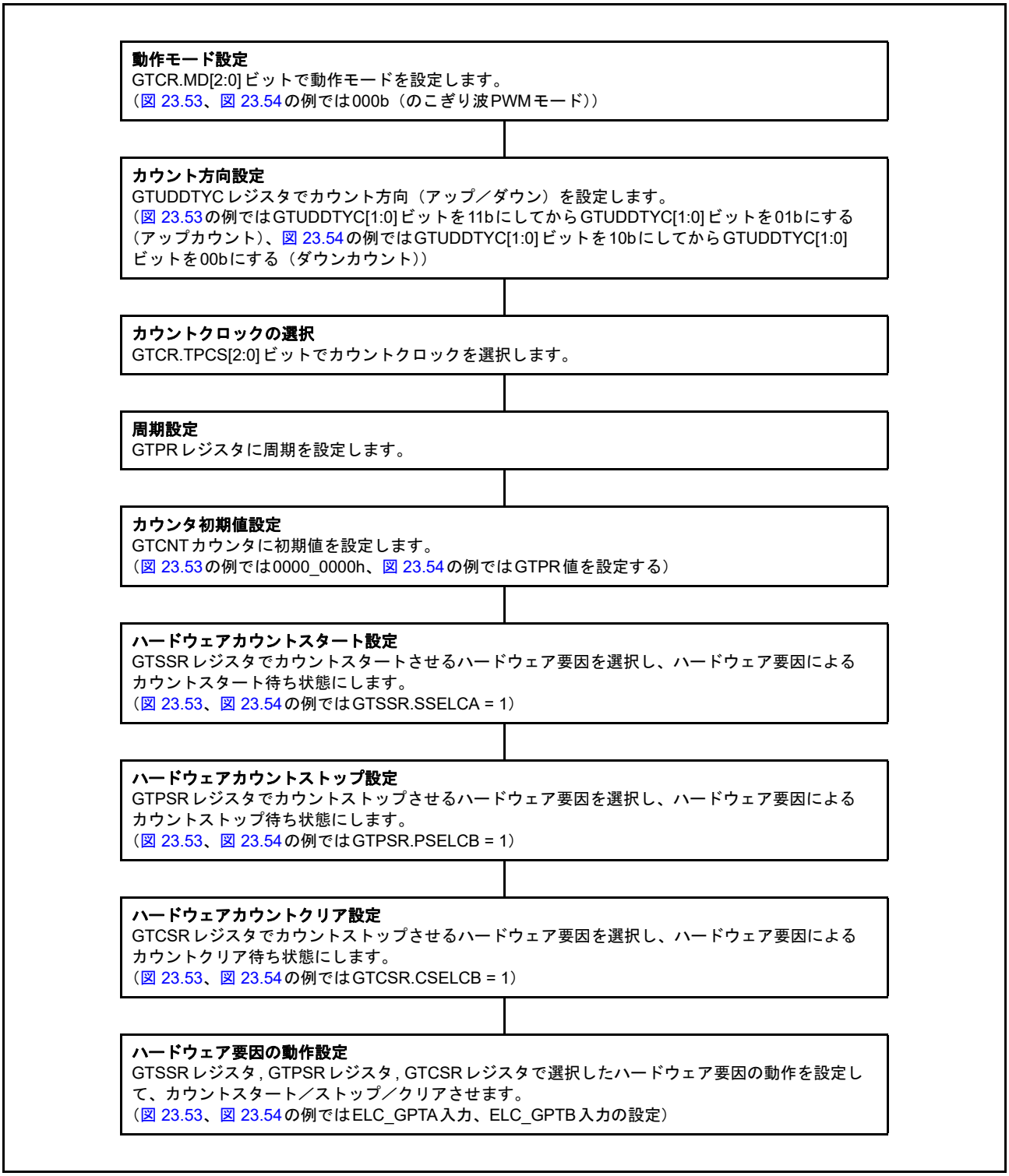


図 23.55　ハードウェア要因によるカウントクリア動作設定例

ハードウェア要因またはソフトウェアによってカウンタがクリアされても、GPTn_OVF/GPTn_UDF（n = 0 ～ 5, 8）割り込み（オーバーフロー／アンダーフロー割り込み）は発生しません。

図 23.56 にハードウェア要因によるカウンタクリアと GPTn_OVF（n = 0 ～ 5, 8）割り込みの関係を示します。

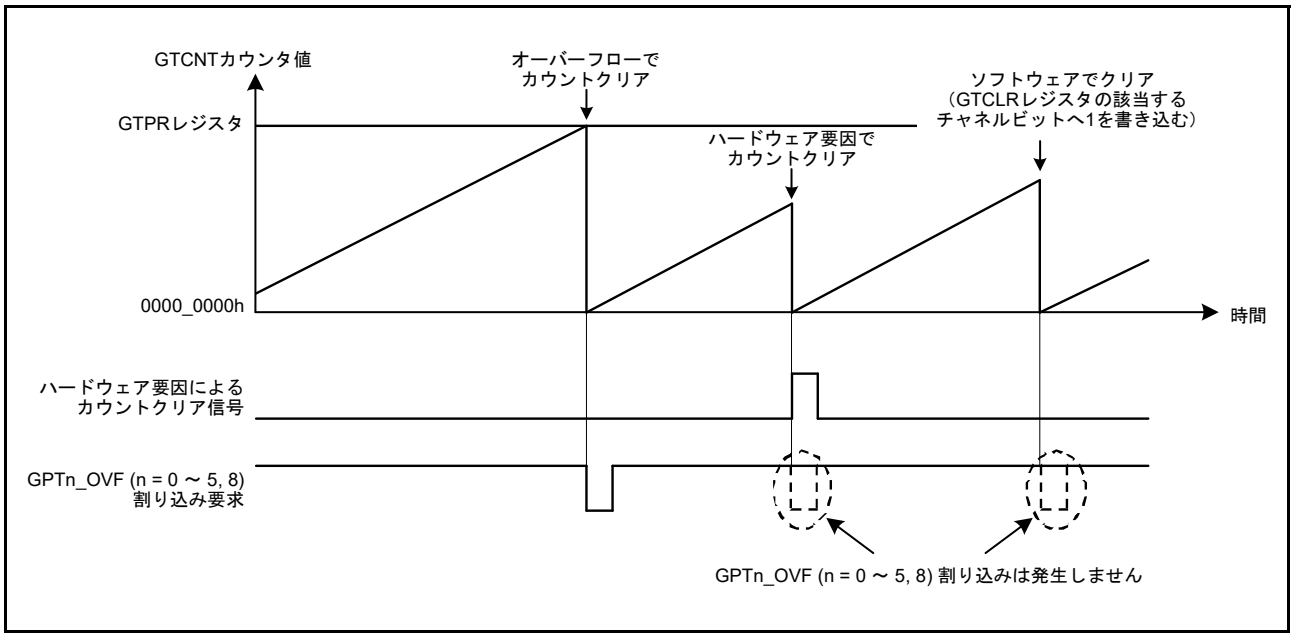


図 23.56　　ハードウェア要因によるカウンタクリアと GPTn_OVF（n = 0 ～ 5, 8）割り込みの関係

23.3.8　同期動作

同期スタート／ストップ／クリア動作など、チャネル間の同期動作を実行できます。

23.3.8.1　ソフトウェアによる同期動作

GTCNT カウンタは、対応する GTSTR ビット、GTSTP ビット、または GTCLR ビットを同時に 1 にすることにより、複数のチャネル上でスタート／ストップ／クリアが可能です。

また、GTCNT カウンタの初期値を設定し、対応する GTSTR ビットを同時に 1 にすることにより、位相の異なるカウントスタートが可能です。

図 23.57 に、ソフトウェアによる同時スタート／ストップ／クリアの動作例を示します。図 23.58 に、ソフトウェアによる位相スタートの動作例を示します。

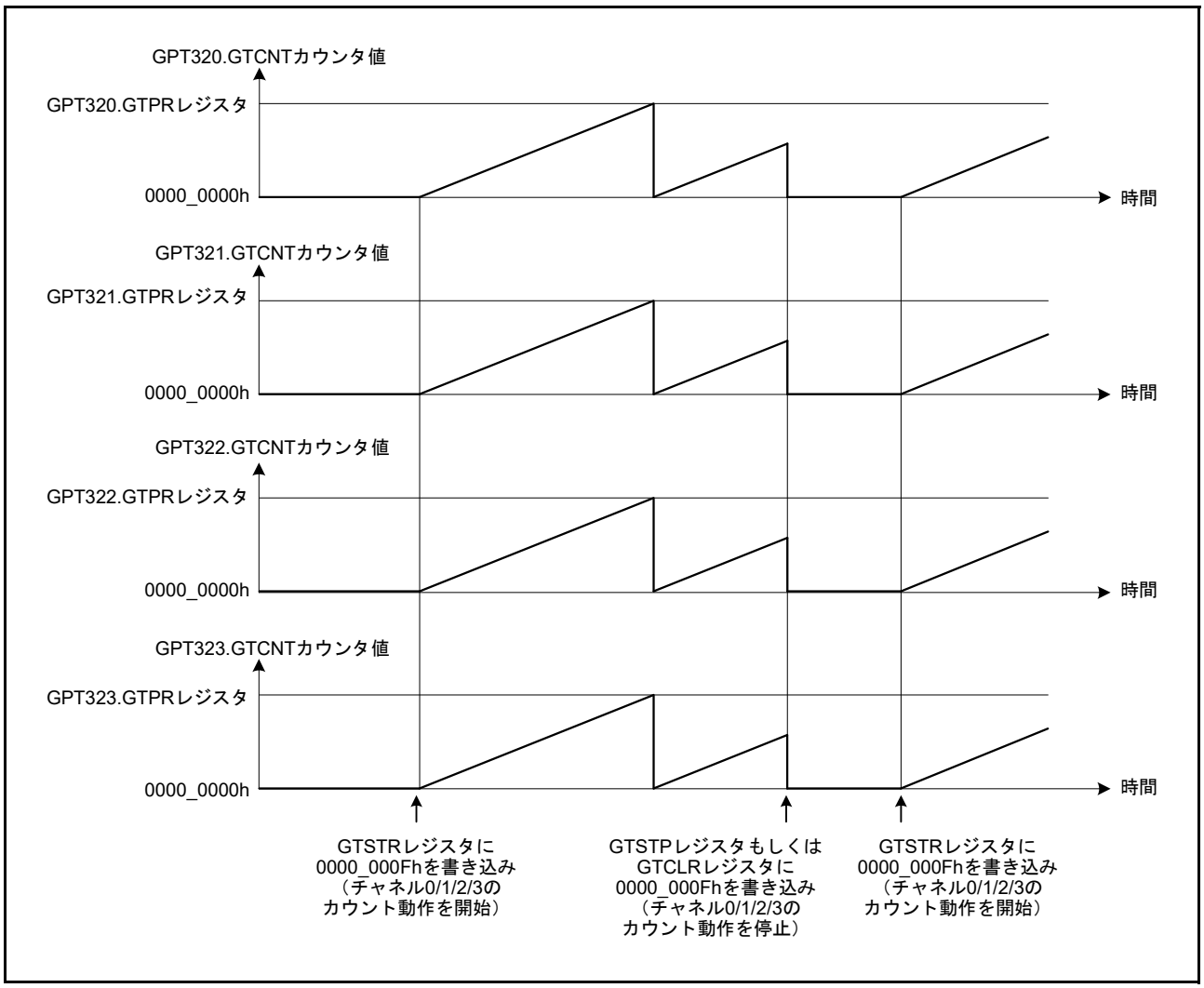


図 23.57　ソフトウェアによる同時スタート／ストップ／クリアの例（カウント周期（GTPR レジスタ値）が同一のとき）

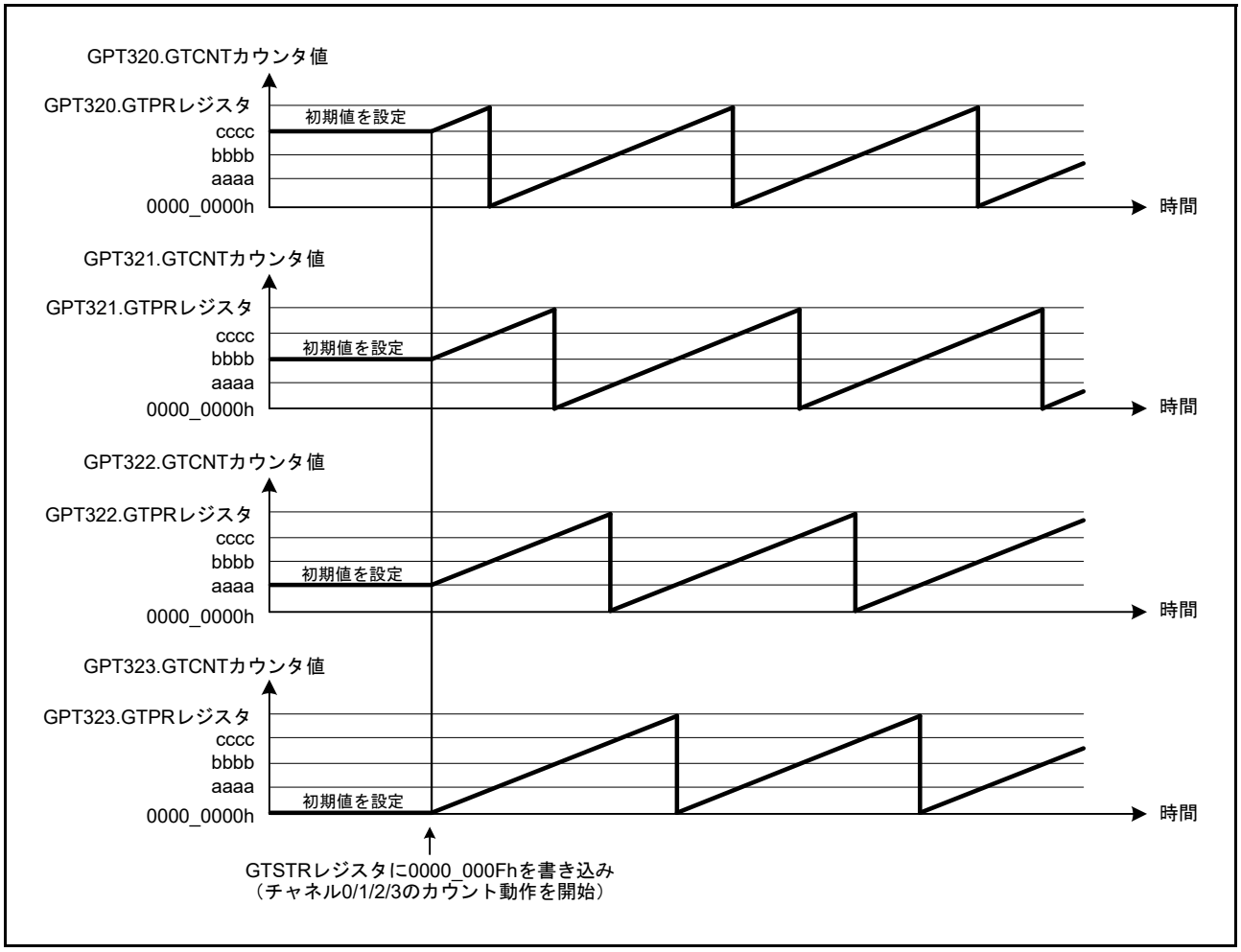


図 23.58 ソフトウェアによる位相スタート動作例（カウント周期（GTPR レジスタ値）が同一のとき）

23.3.8.2 ハードウェアによる同期動作

下記のハードウェア要因によって、GTCNT カウンタを同時にスタートさせることができます。

- 外部トリガ入力
- ELC イベント入力

図 23.59 にハードウェア要因による同時スタート／ストップ／クリアの動作例を示します。図 23.60 に設定例を示します。

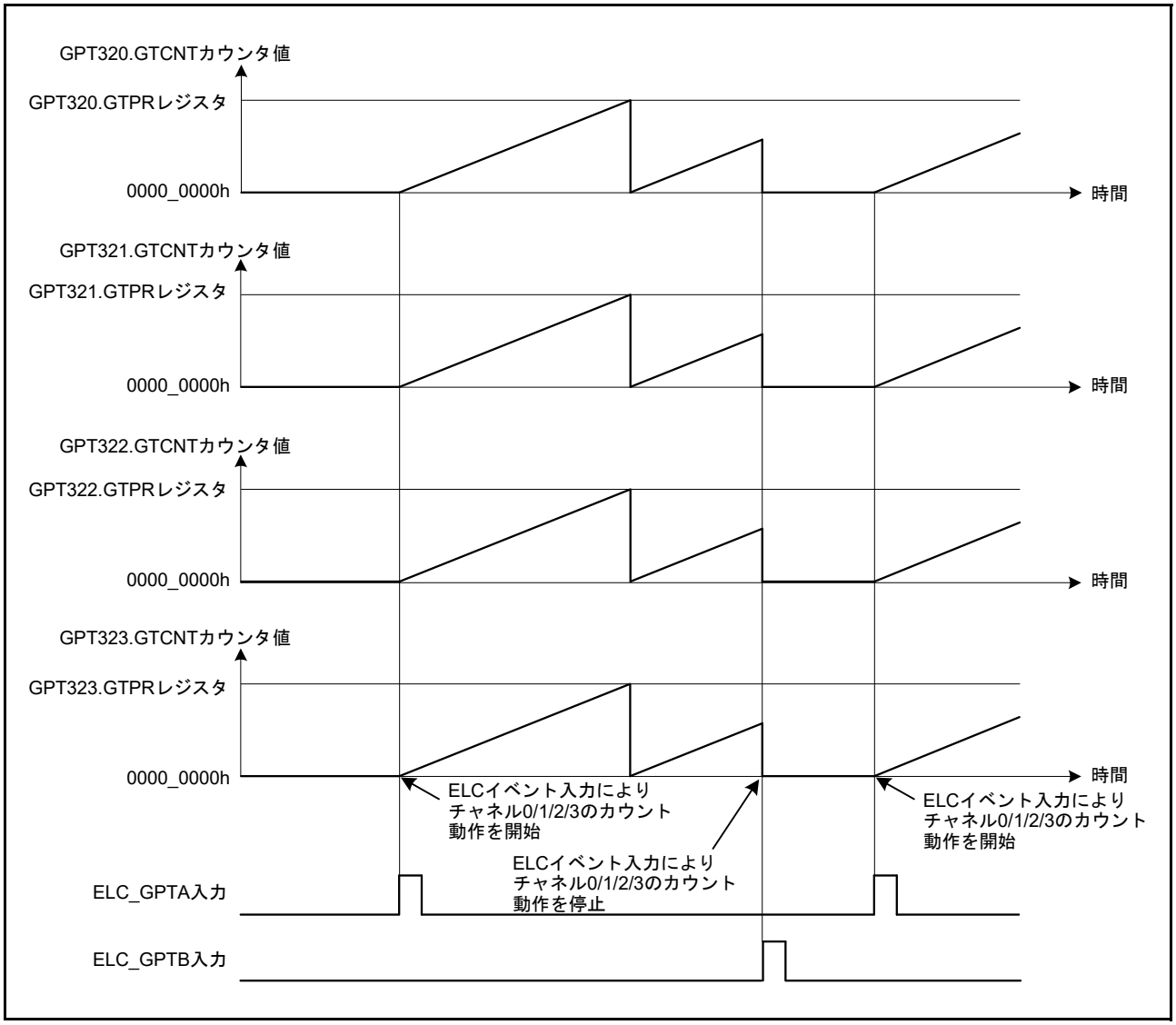


図 23.59 ハードウェア要因による同時スタート／ストップ／クリア動作例（カウント周期（GTPR レジスタ値）が同一のとき）

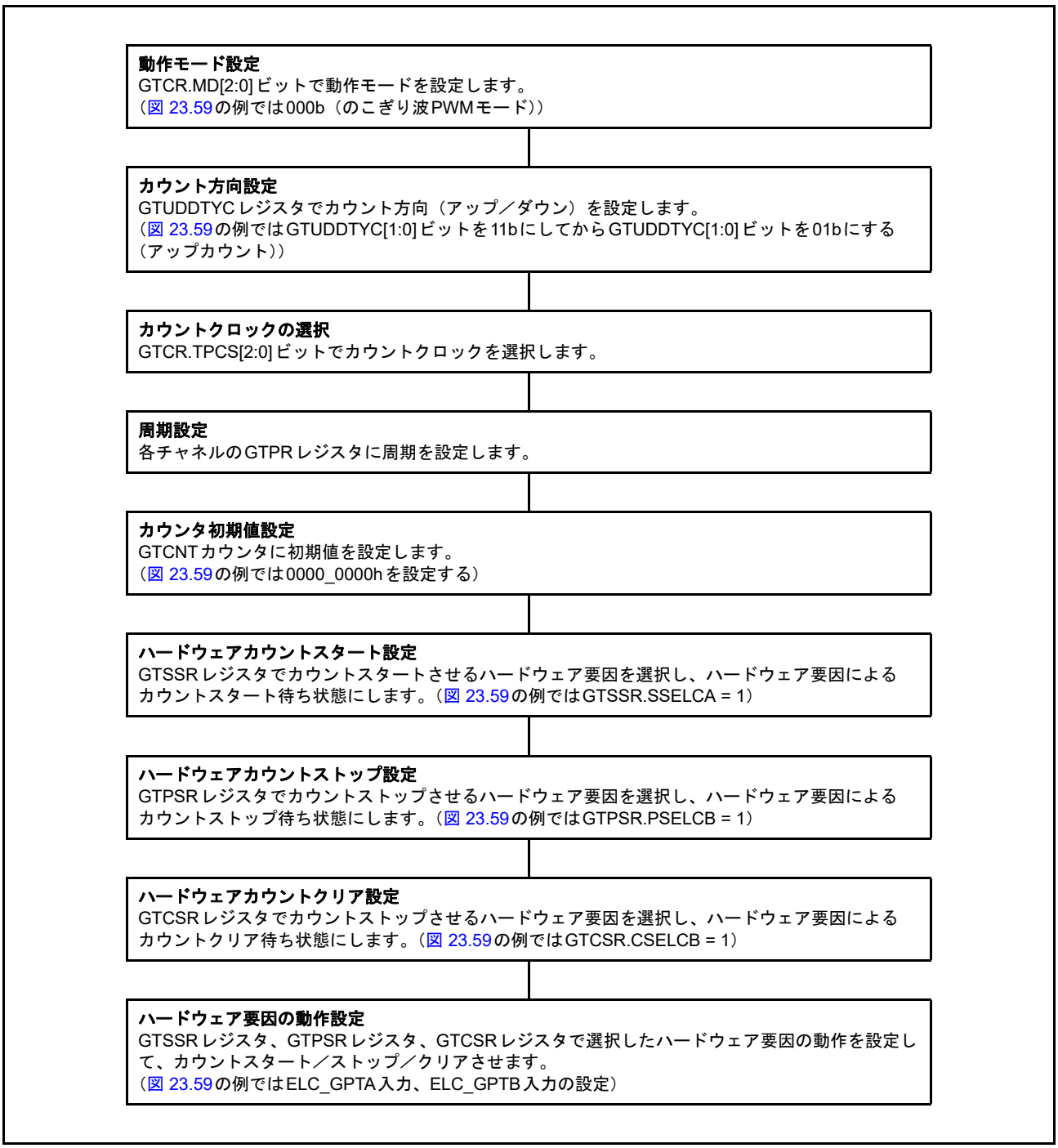


図 23.60 ハードウェア要因による同時スタート設定例

23.3.9　PWM 出力動作例

(1)　同期 PWM 出力

複数の GPT を使用することで、最大 10 チャネル 20 相の連動した PWM 波形を出力します。

図 23.61 に、4 チャネルをのこぎり波 PWM モードで同期動作させて、8 相の PWM 波形を出力させる例を示します。GTIOCA 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRA レジスタのコンペアマッチで High 出力、周期の終わりで Low 出力するように設定されています。GTIOCB 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRB レジスタのコンペアマッチで High 出力、周期の終わりで Low 出力するように設定されています。

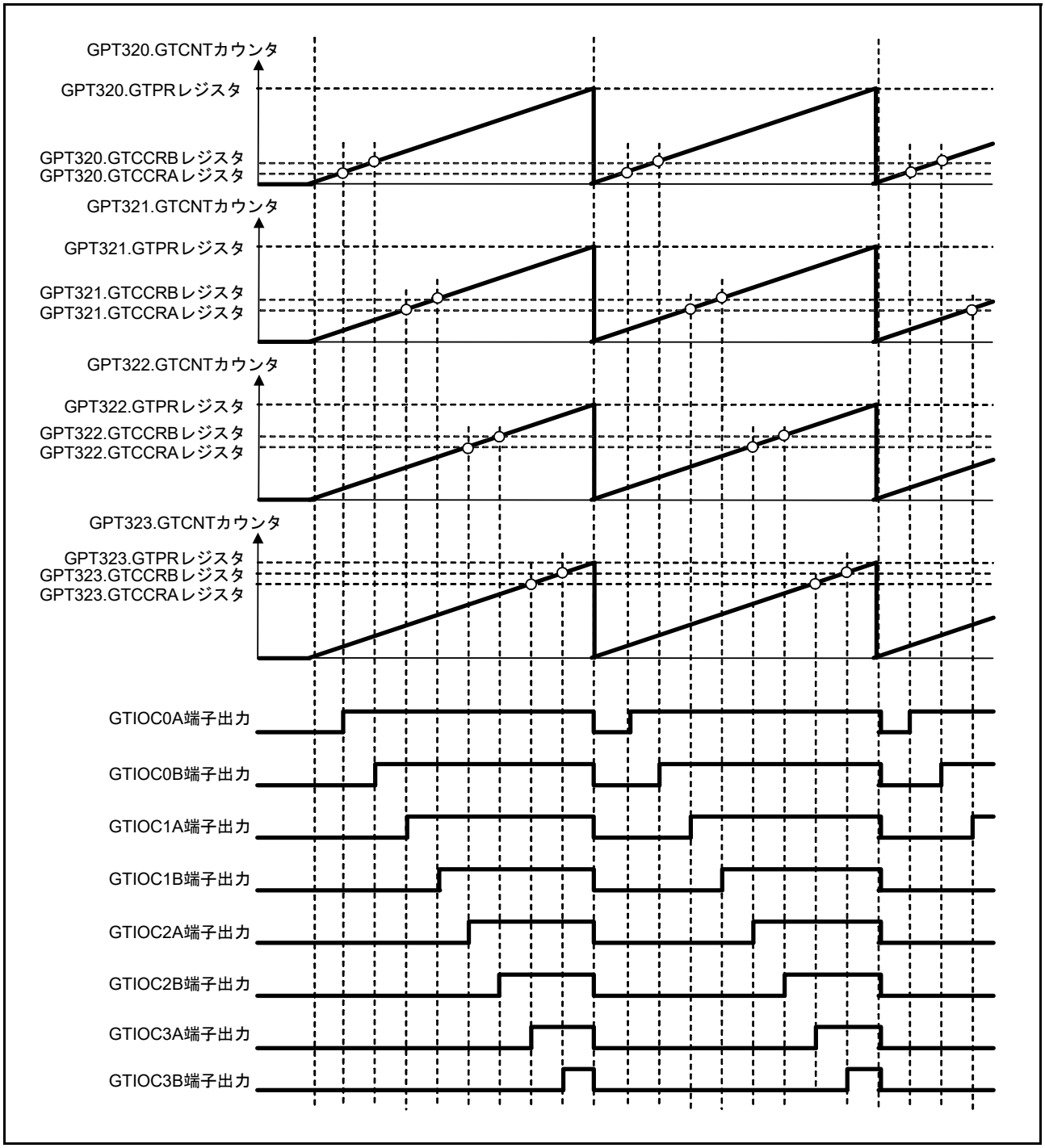


図 23.61　　同期 PWM 出力例

(2) のこぎり波 3 相相補 PWM 出力

図 23.62 に、3 チャネルをのこぎり波 PWM モードで同期動作させて、3 相の相補 PWM 波形を出力させる例を示します。GTIOCA 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRA レジスタのコンペアマッチで High 出力、周期の終わりで Low 出力するように設定されています。GTIOCB 端子は、初期値として High 出力、GTCCRB レジスタのコンペアマッチで Low 出力、周期の終わりで High 出力するように設定されています。

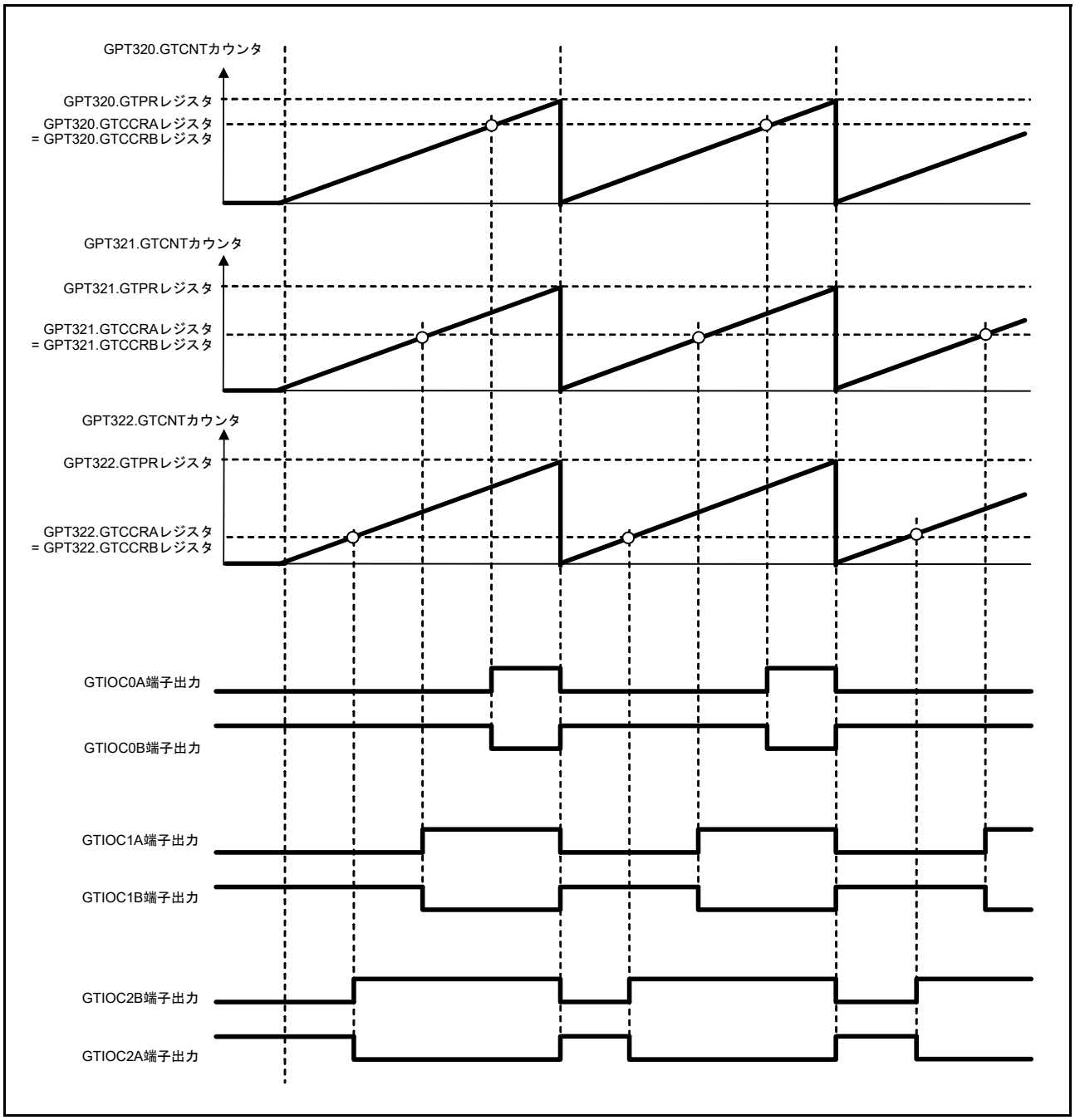


図 23.62 のこぎり波 3 相相補 PWM 出力例

(3)　のこぎり波 3 相相補 PWM 出力（デッドタイム自動設定）

図 23.63 に、デッドタイム自動設定機能を使用して、3 チャネルをのこぎり波ワンショットパルスモードで同期動作させ、3 相の相補 PWM 波形を出力させる例を示します。GTIOCA 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRA レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。GTIOCB 端子は、初期値として High 出力、GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。

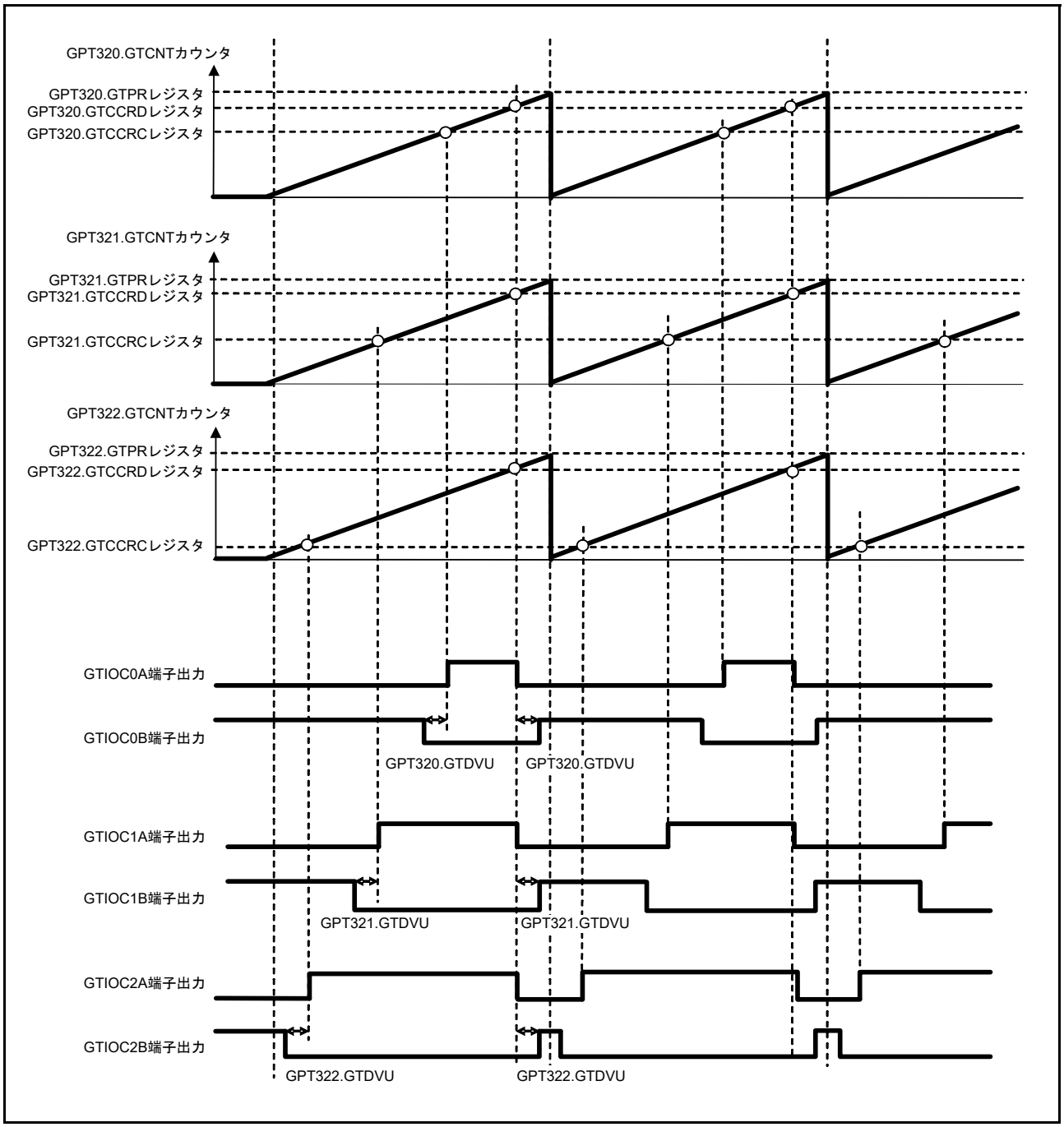


図 23.63　　のこぎり波 3 相相補 PWM 出力例（デッドタイム自動設定）

(4) 三角波 3 相相補 PWM 出力

図 23.64 に、3 チャネルを三角波 PWM モード 1 で同期動作させて、3 相の相補 PWM 波形を出力させる例を示します。GTIOCA 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRA レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。GTIOCB 端子は、初期値として High 出力、GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。

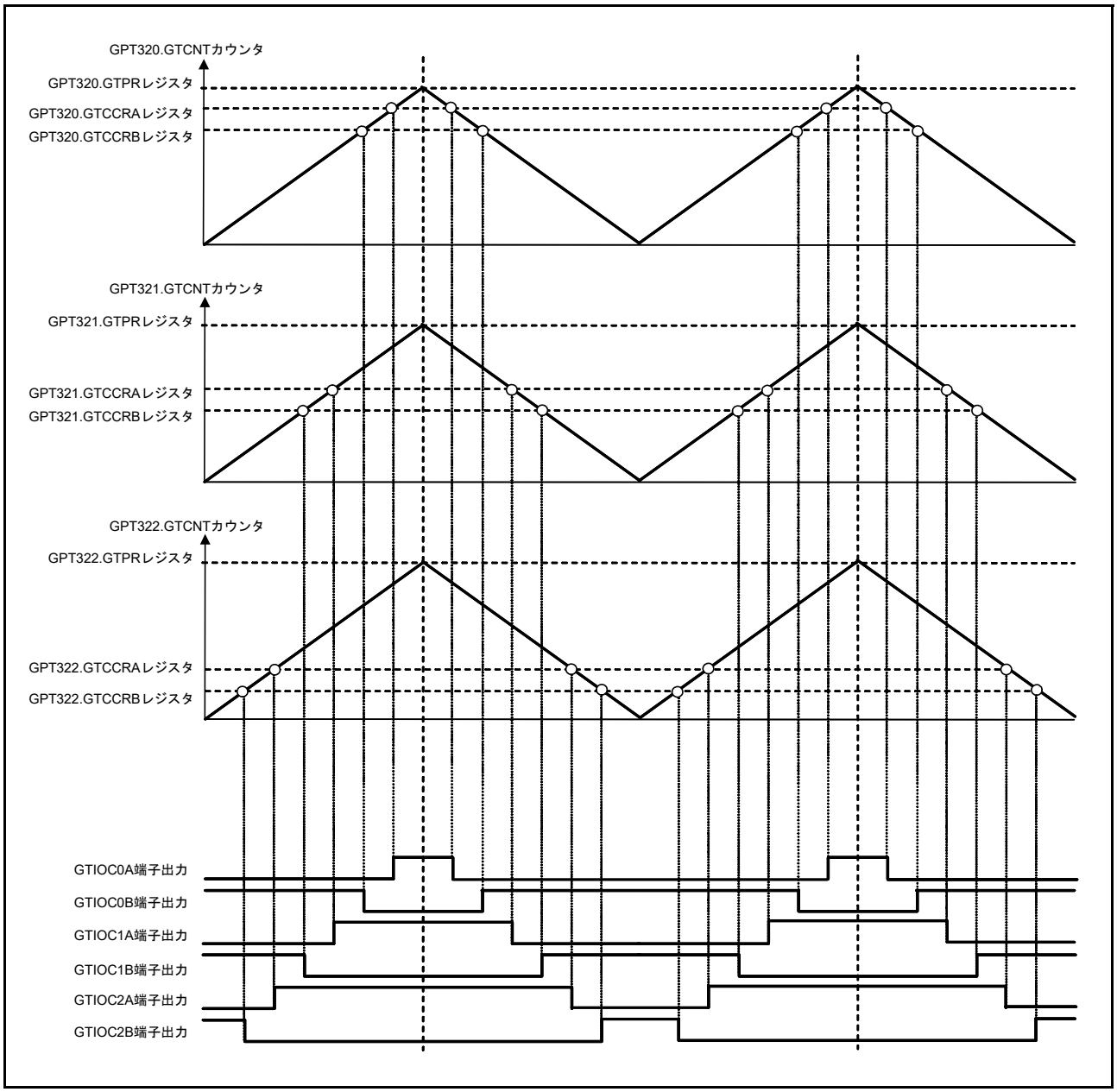


図 23.64 三角波 3 相相補 PWM 出力例

(5)　三角波 3 相相補 PWM 出力（デッドタイム自動設定）

図 23.65 に、デッドタイム自動設定機能を使用して、3 チャネルを三角波 PWM モード 1 で同期動作させ、3 相の相補 PWM 波形を出力させる例を示します。GTIOCA 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRA レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。GTIOCB 端子は、初期値として High 出力、GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。

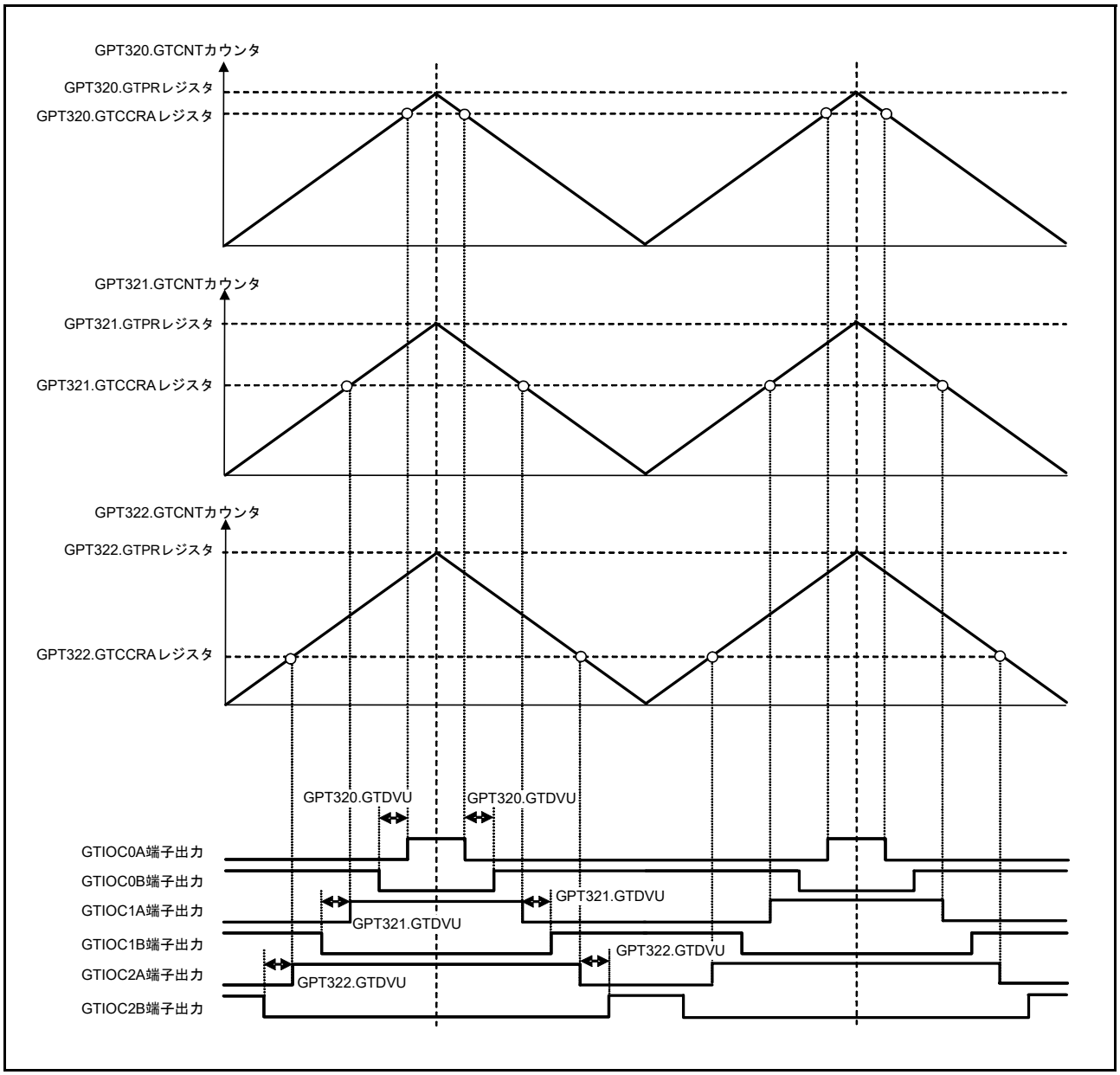


図 23.65　　三角波 3 相相補 PWM 出力例（デッドタイム自動設定）

(6)　非対称三角波 3 相相補 PWM 出力（デッドタイム自動設定）

図 23.66 に、デッドタイム自動設定機能を使用して、3 チャネルを三角波 PWM モード 3 で同期動作させ、3 相の相補 PWM 波形を出力させる例を示します。GTIOCA 端子は、初期値として Low 出力、GTCCRA レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。GTIOCB 端子は、初期値として High 出力、GTCCRB レジスタのコンペアマッチでトグル出力、周期の終わりで出力を保持するように設定されています。

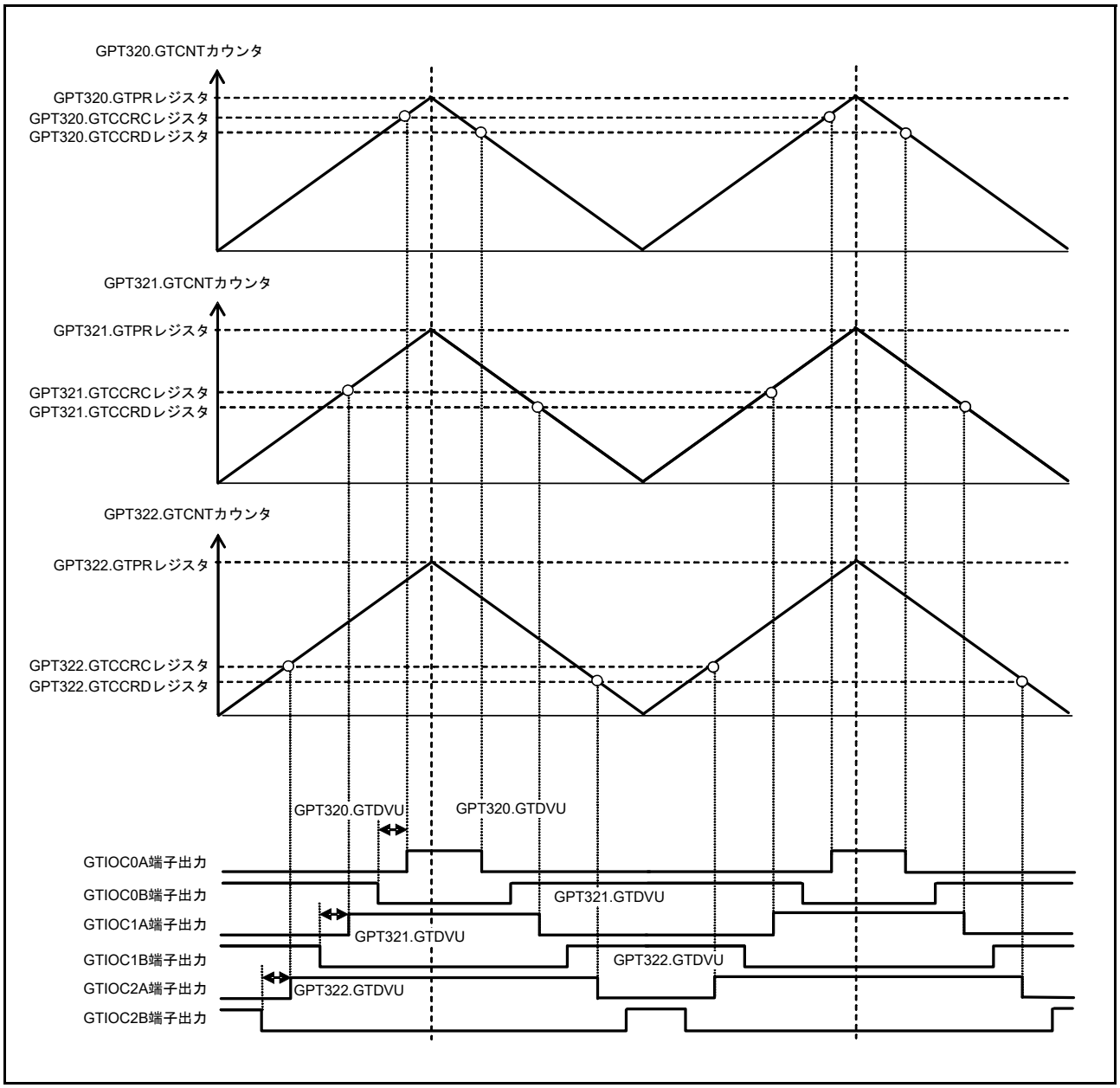


図 23.66　　非対称三角波 3 相相補 PWM 出力例（デッドタイム自動設定）

23.3.10　位相計数機能

GTIOCA 端子入力と GTIOCB 端子入力の間で位相差が検出されると、対応する GTCNT カウンタがカウントアップまたはカウントダウンを実行します。GTUPSR および GTDNSR レジスタに設定されている GTIOCA 端子入力と GTIOCB 端子入力のレベルとエッジの関係が、どのような組み合わせであっても位相差を検出できます。カウント動作については、23.3.1.1　カウンタ動作を参照してください。

図 23.67 ～図 23.76 に、位相計数モード 1 ～ 5 を示します。表 23.7 ～表 23.16 に、アップカウント／ダウンカウントの条件と、GTUPSR および GTDNSR レジスタの設定値を示します。

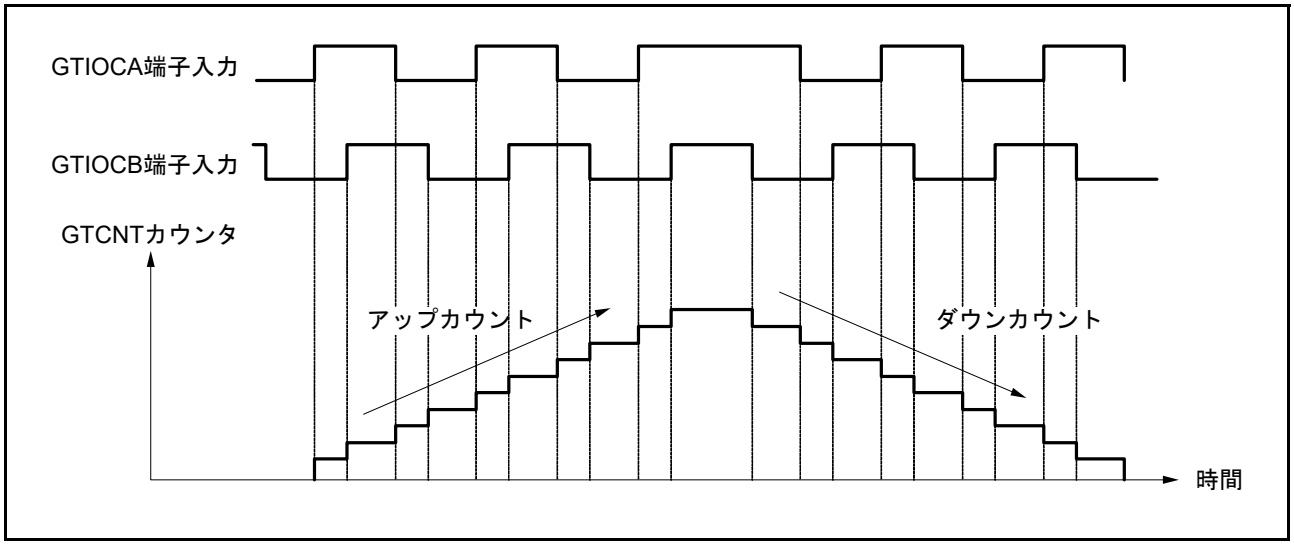


図 23.67　位相計数モード 1 動作例

表 23.7　位相計数モード1でのアップカウント／ダウンカウントの条件

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	アップカウント	GTUPSR レジスタ = 00006900h GTDNSR レジスタ = 00009600h
Low	↓		
↑	Low		
↓	High		
High	↓	ダウンカウント	
Low	↑		
↑	High		
↓	Low		

↑：立ち上がりエッジ

↓：立ち下がりエッジ

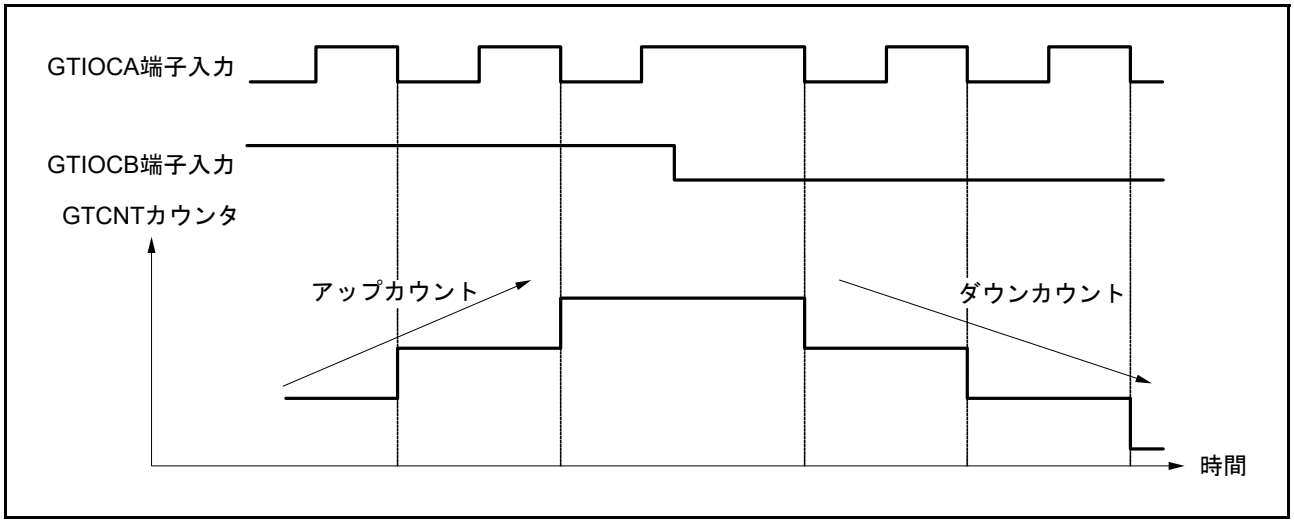


図 23.68　位相計数モード 2 動作例（A）

表 23.8　位相計数モード2でのアップカウント／ダウンカウントの条件（A）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↓	Don't care	GTUPSR レジスタ = 00000800h GTDNSR レジスタ = 00000400h
Low	↓		
↑	Low		
↓	High	アップカウント	
High	↓	Don't care	
Low	↑		
↑	High		
↓	Low	ダウンカウント	

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

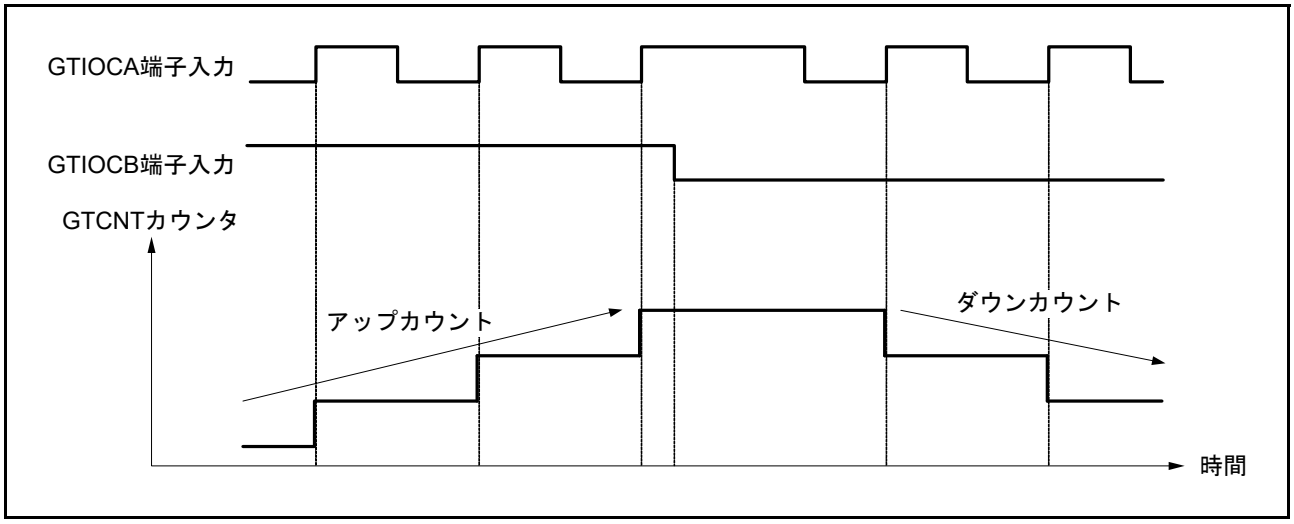


図 23.69　位相計数モード 2 動作例（B）

表 23.9　位相計数モード2でのアップカウント／ダウンカウントの条件（B）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↓	Don't care	GTUPSR レジスタ = 00000200h GTDNSR レジスタ = 00000100h
Low	↓		
↑	Low	ダウンカウント	
↓	High	Don't care	
High	↓		
Low	↑		
↑	High	アップカウント	
↓	Low	Don't care	

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

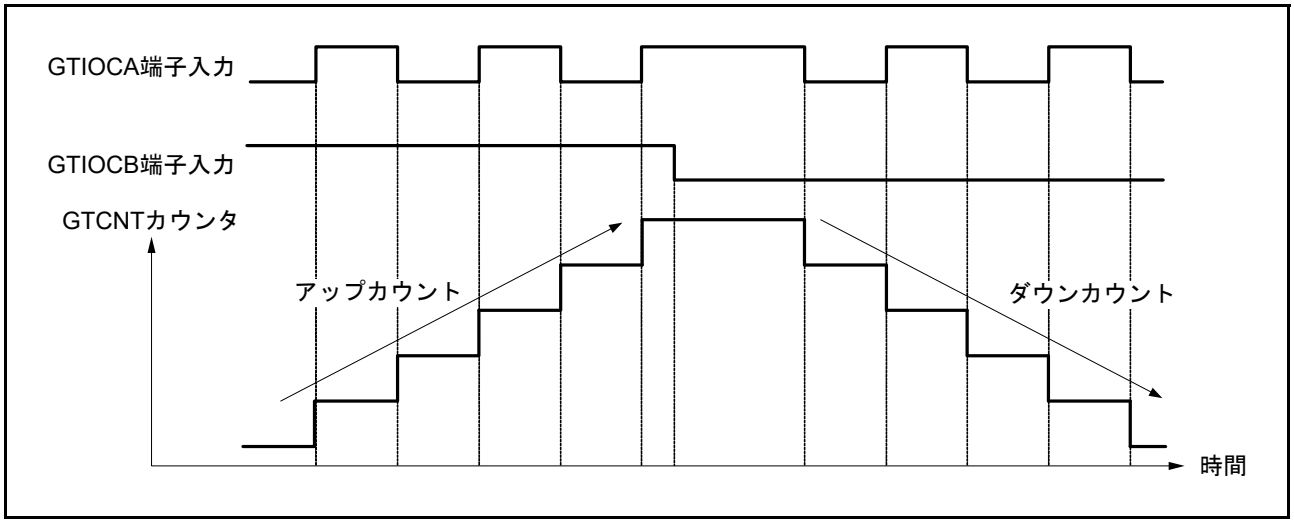


図 23.70　位相計数モード 2 動作例（C）

表 23.10　位相計数モード2でのアップカウント／ダウンカウントの条件（C）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	Don't care	GTUPSR レジスタ = 00000A00h GTDNSR レジスタ = 00000500h
Low	↓		
↑	Low	ダウンカウント	
↓	High	アップカウント	
High	↓	Don't care	
Low	↑		
↑	High	アップカウント	
↓	Low	ダウンカウント	

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

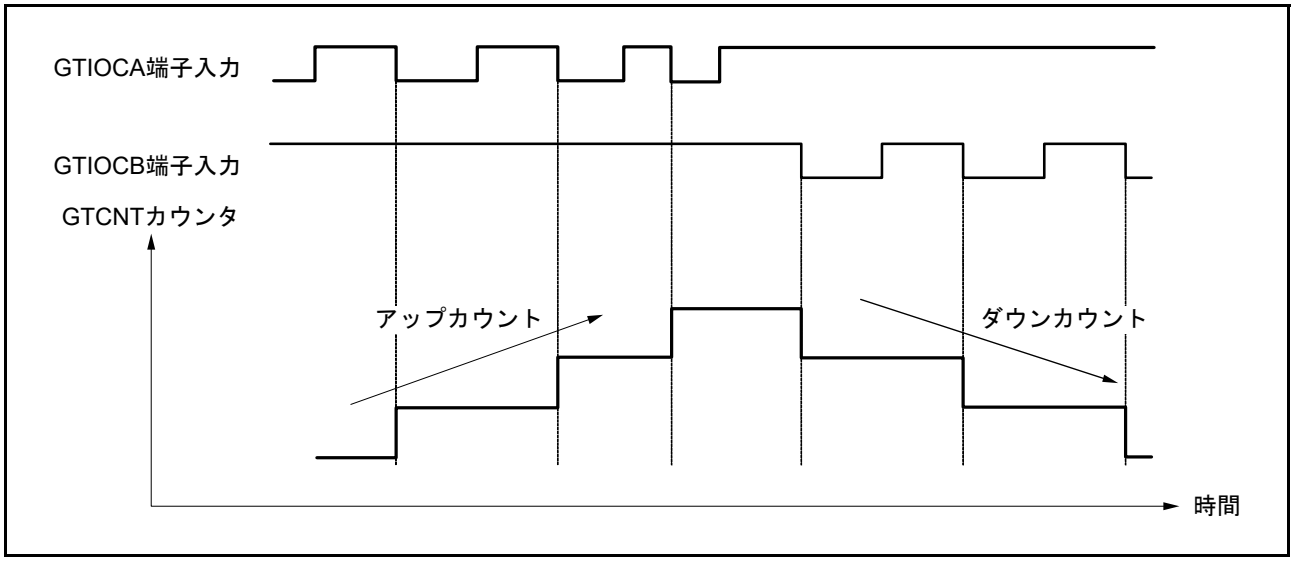


図 23.71　位相計数モード 3 動作例（A）

表 23.11　位相計数モード3でのアップカウント／ダウンカウントの条件（A）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	Don’t care	GTUPSR レジスタ = 00000800h GTDNSR レジスタ = 00008000h
Low	↓		
↑	Low		
↓	High	アップカウント	
High	↓	ダウンカウント	
Low	↑	Don’t care	
↑	High		
↓	Low		

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

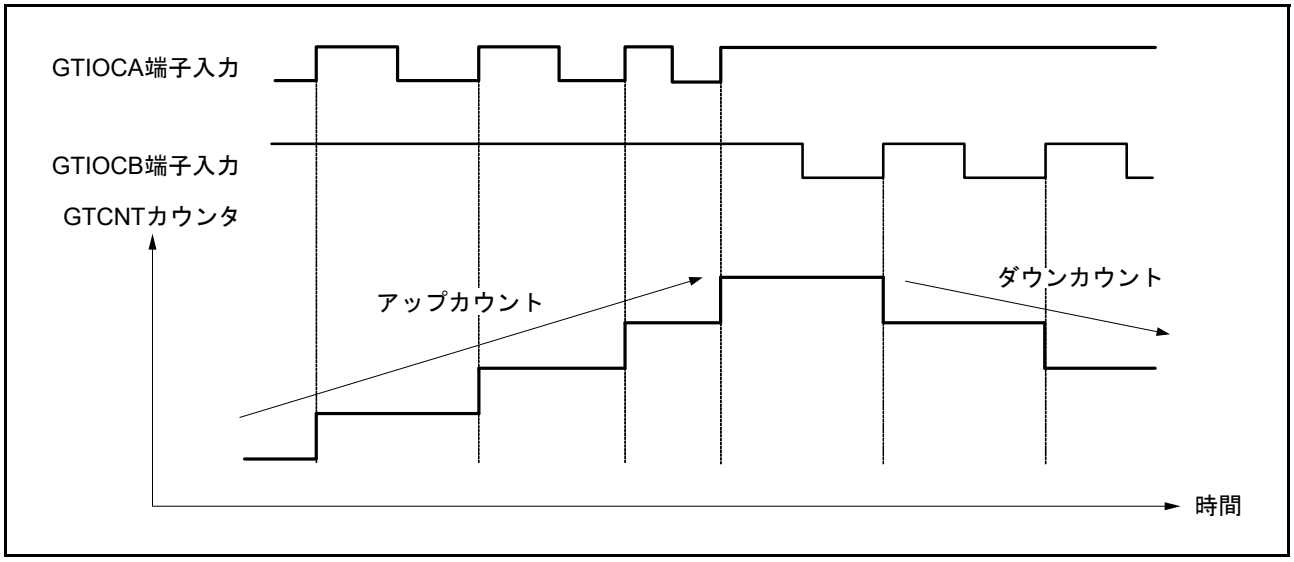


図 23.72　位相計数モード 3 動作例（B）

表 23.12　位相計数モード3でのアップカウント／ダウンカウントの条件（B）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	ダウンカウント	GTUPSR レジスタ = 00000200h GTDNSR レジスタ = 00002000h
Low	↓	Don’t care	
↑	Low		
↓	High		
High	↓		
Low	↑		
↑	High	アップカウント	
↓	Low	Don’t care	

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

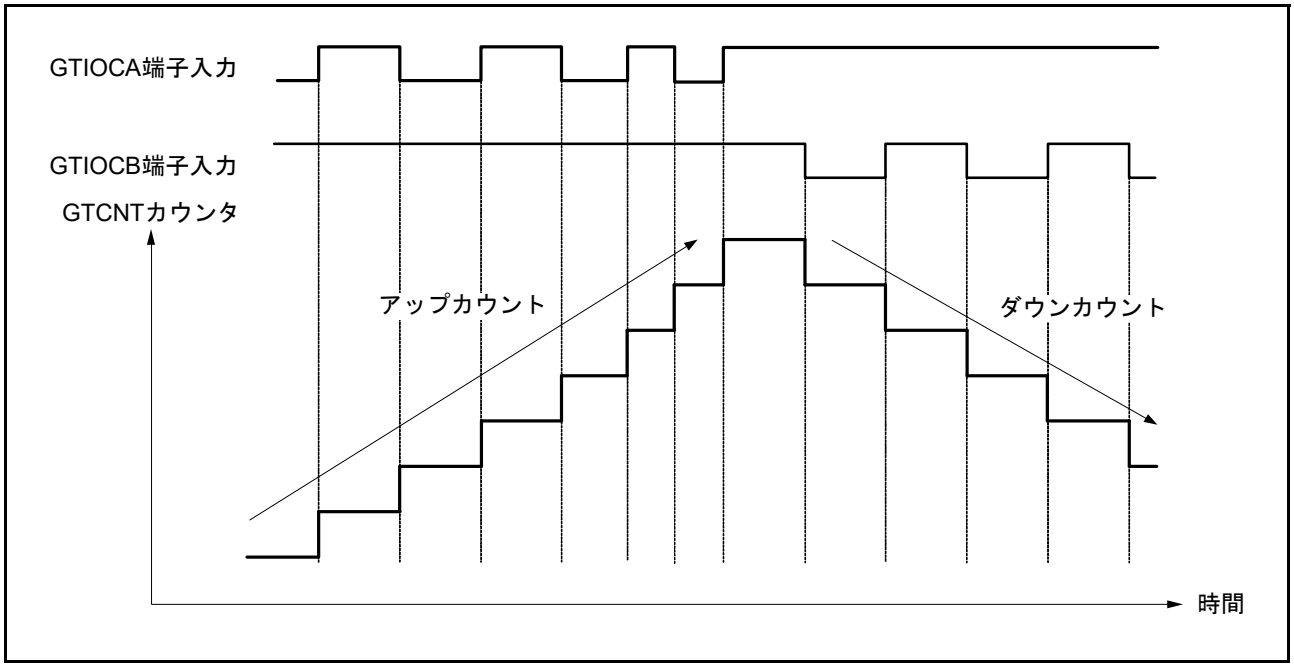


図 23.73　位相計数モード 3 動作例（C）

表 23.13　位相計数モード3でのアップカウント／ダウンカウントの条件（C）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	ダウンカウント	GTUPSR レジスタ = 00000A00h GTDNSR レジスタ = 0000A000h
Low	↓	Don't care	
↑	Low		
↓	High	アップカウント	
High	↓	ダウンカウント	
Low	↑	Don't care	
↑	High	アップカウント	
↓	Low	Don't care	

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

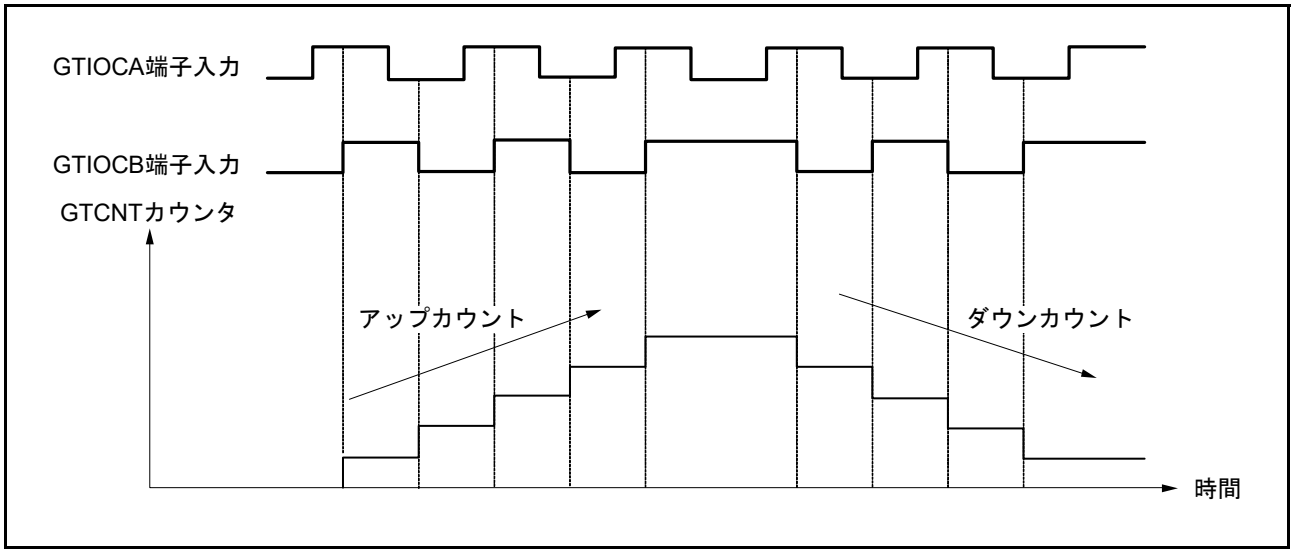


図 23.74　位相計数モード 4 動作例

表 23.14　位相計数モード4でのアップカウント／ダウンカウントの条件

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	アップカウント	GTUPSR レジスタ = 00006000h GTDNSR レジスタ = 00009000h
Low	↓		
↑	Low	Don’t care	
↓	High		
High	↓	ダウンカウント	
Low	↑		
↑	High	Don’t care	
↓	Low		

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

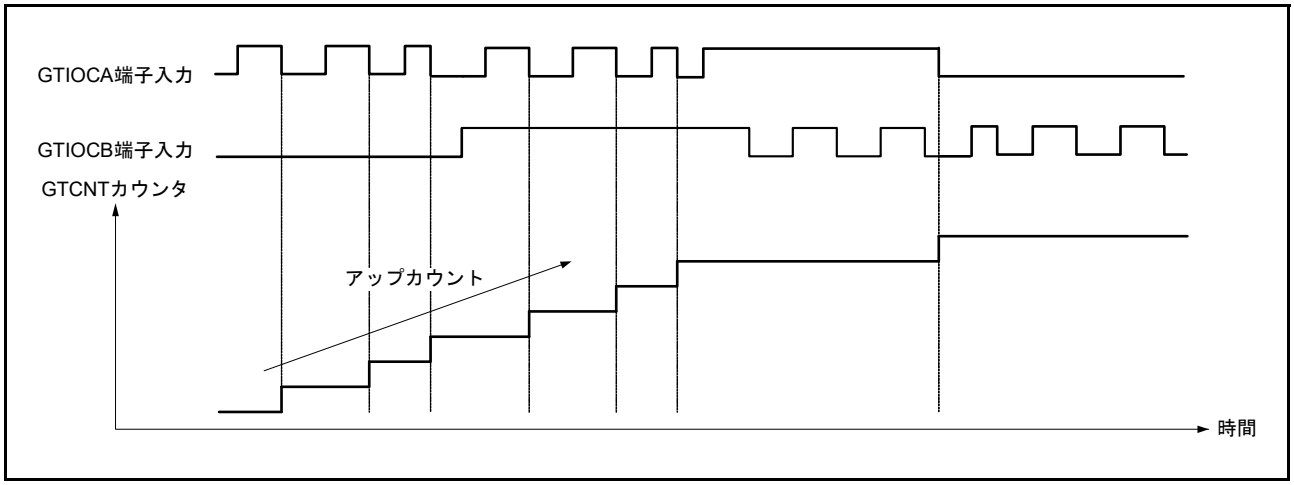


図 23.75　位相計数モード 5 動作例（A）

表 23.15　位相計数モード5でのアップカウント／ダウンカウントの条件（A）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	Don't care	GTUPSR レジスタ = 00000C00h GTDNSR レジスタ = 00000000h
Low	↓		
↑	Low		
↓	High	アップカウント	
High	↓	Don't care	
Low	↑		
↑	High		
↓	Low	アップカウント	

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

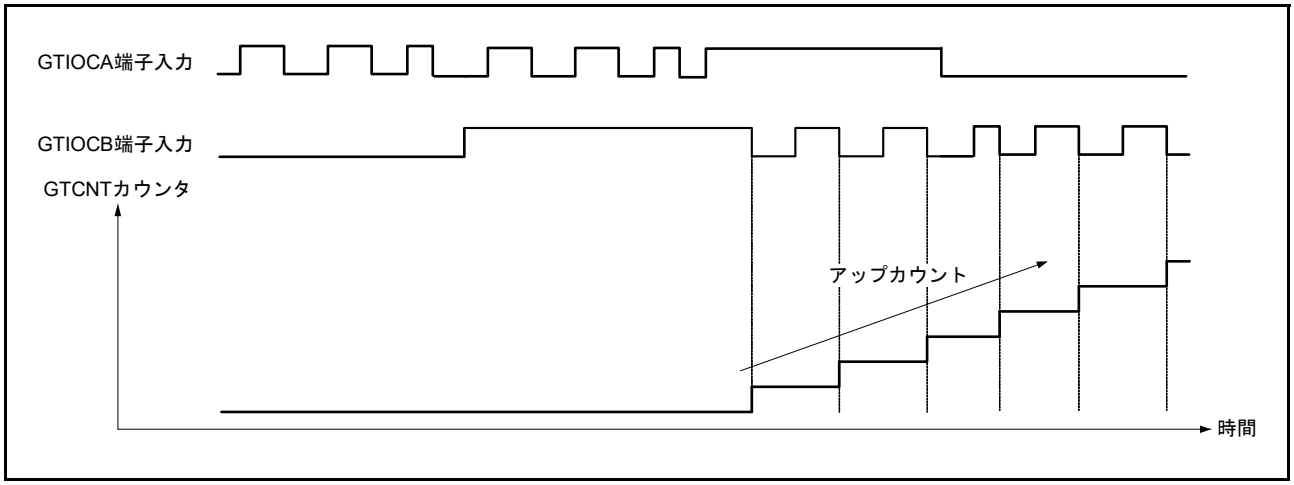


図 23.76　位相計数モード 5 動作例（B）

表 23.16　位相計数モード5でのアップカウント／ダウンカウントの条件（B）

GTIOCA端子入力	GTIOCB端子入力	動作	レジスタ設定値
High	↑	Don't care	GTUPSR レジスタ = 0000C000h GTDNSR レジスタ = 00000000h
Low	↓	アップカウント	
↑	Low	Don't care	
↓	High		
High	↓	アップカウント	
Low	↑	Don't care	
↑	High		
↓	Low		

↑ ：立ち上がりエッジ

↓ ：立ち下がりエッジ

23.3.11 出力相切り替え（GPT_OPS）

GPT_OPS は、出力相切り替えコントロールレジスタ（OPSCR）によるブラシレス DC モータ動作の簡易制御機能を提供しています。

GPT_OPS は、6 相モータ制御の各相（U 正相／逆相、V 正相／逆相、W 正相／逆相）のレベル信号またはチョッパ制御に使用する PWM 信号を出力します。この機能では、ソフトウェアで設定したソフト設定値（OPSCR.UF、VF、WF ビット）、ホール素子により検知した外部信号、GPT320.GTIOCA 端子の PWM 波形などを使用します。

図 23.77 に GPT_OPS 制御フローの概念図を示します。

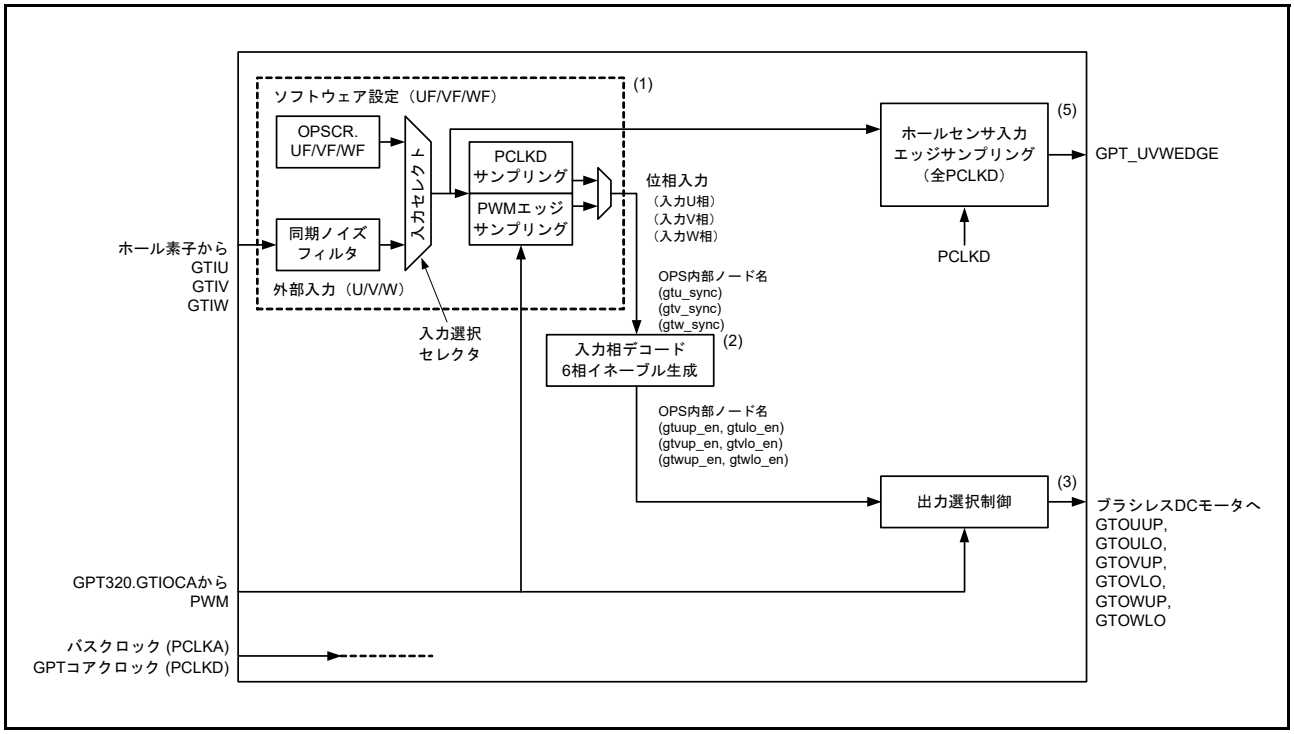


図 23.77 GPT_OPS 制御フロー概念図

図 23.78 に GPT_OPS 動作の 6 相レベル信号出力例を示します。

図 23.78 の GPT_UVWEDGE 信号は、ELC 出力へのホールセンサ入力エッジです。

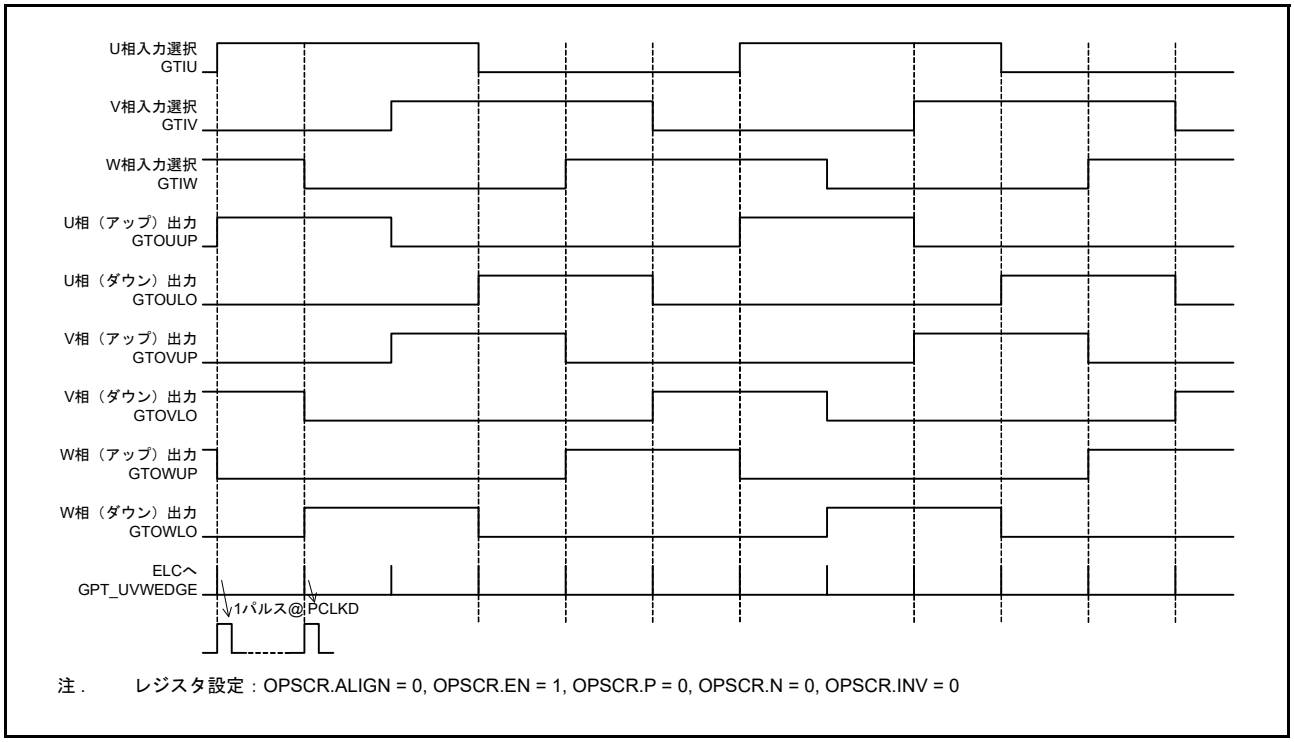


図 23.78 6 相レベル出力動作例

図 23.79 に GPT_OPS 動作の 6 相 PWM 出力例（チョッパ制御）を示します。

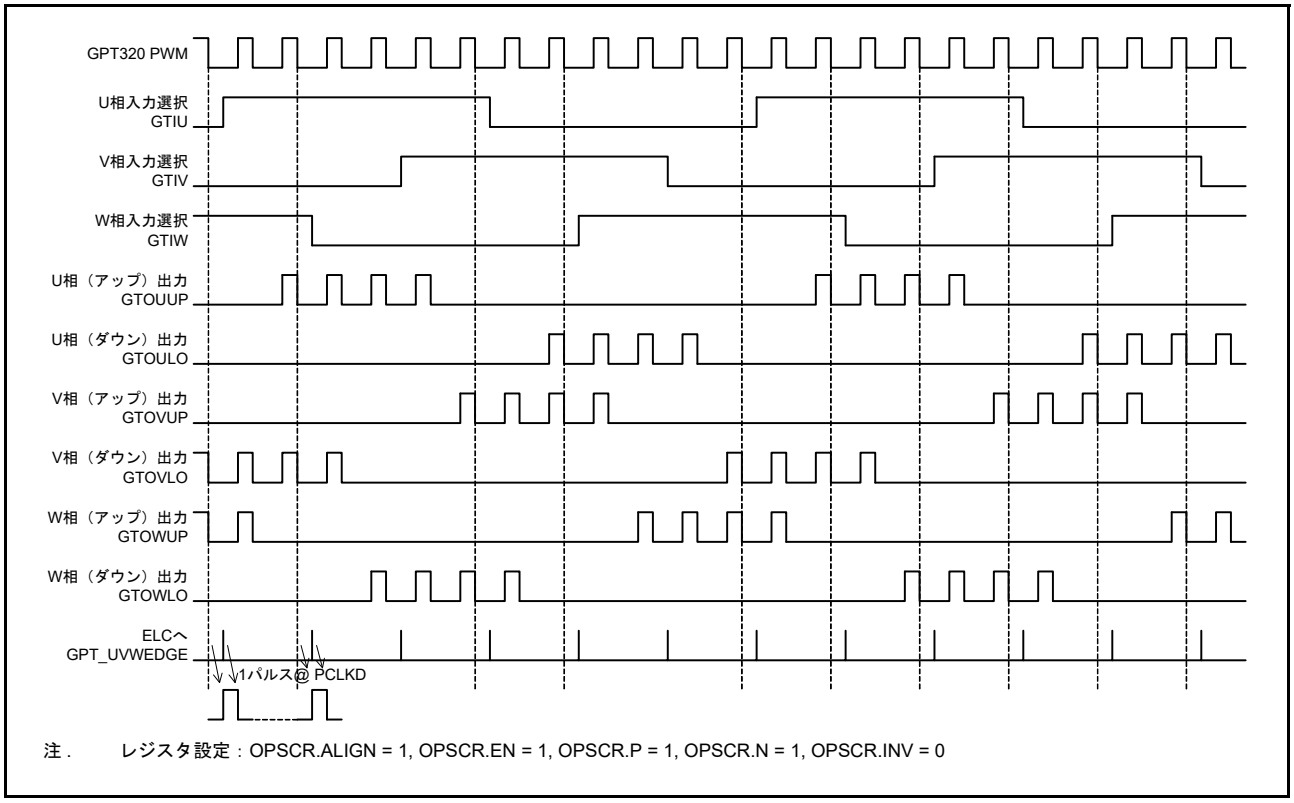


図 23.79 6 相 PWM 出力動作例（チョッパ制御）

図 23.80 に出力禁止制御の例（6 相 PWM 出力動作）を示します。

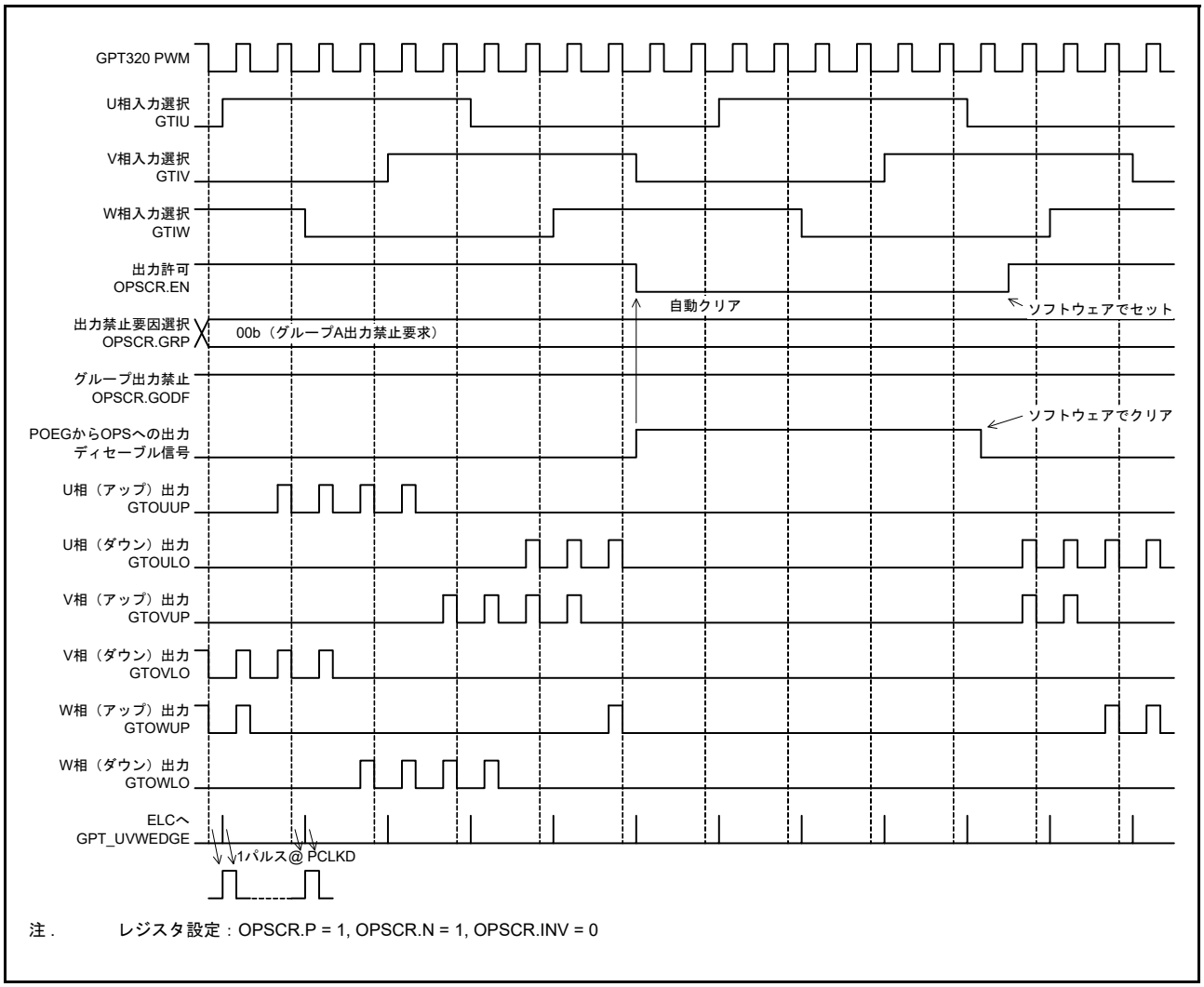


図 23.80 グループ出力禁止制御動作例

23.3.11.1 外部入力信号の同期および入力選択

図 23.77 に示す GPT_OPS 制御フロー概念図の（1）の部分では、ソフトウェア設定による入力相と OPSCR.FB ビットによる外部入力を選択します。

OPSCR.FB ビット = 0 の場合、外部入力を選択してください。GPT コアクロック（PCLKD）で同期してから入力信号を許可してください。ノイズフィルタ（オプション）実施後、OPSCR.ALIGN ビット = 1 でサンプリングした立ち下がりエッジで、外部入力を PWM（GPT320.GTIOCA 端子の PWM）の入力相に設定してください。

OPSCR.FB ビット = 1 の場合、OPSCR.ALIGN ビット = 1 でサンプリングした立ち下がりエッジで、PWM（GPT320.GTIOCA 端子の PWM）の入力相の値でソフト設定（OPSCR.UF、VF、WF ビット）を選択してください。

OPSCR.ALIGN ビット = 0 の場合、OPSCR.FB ビット = 0 または 1 のいずれにおいても、GPT_OPS は PCLKD 同期の入力相で動作します。ただし、切り替えタイミング（直前／直後）の出力 U/V/W 相（PWM 出力モード）の PWM パルス幅が狭くなる場合があります。

表 23.17 に、入力選択処理と対応する OPSCR レジスタのビット設定を示します。

表 23.17 入力選択処理方法

OPSCR レジスタ		入力相サンプリング方法の選択（U/V/W 相）	同期入出力選択処理（GPT_OPS 内部ノード名）
FB ビット	ALIGN ビット		
0	1	PWM 立ち下がりエッジサンプリングでの外部入力 （PCLKD 同期 + 立ち下がりエッジサンプル）	入力相 入力 U 相（gtu_sync） 入力 V 相（gtv_sync） 入力 W 相（gtw_sync）
	0	PCLKD 同期出力での外部入力 （PCLKD 同期 + スルーモード）	
1	1	PWM 立ち下がりエッジサンプリングでのソフトウェア設定 （立ち下がりエッジサンプルの OPSCR.UF、VF、WF ビット）	
	0	ソフトウェア設定値選択 （= OPSCR.UF/VF/WF ビット値）（= PCLKD 同期）	

23.3.11.2 入力サンプリング

OPSCR.U、V、W ビットは、OPSCR.FB ビットで選択した入力の PCLKD サンプリング結果を示します。

OPSCR.FB ビット = 0 の場合、GPT コアクロック（PCLKD）との同期およびノイズフィルタリング（オプション）後に、OPSCR.U、V、W ビットは外部入力のサンプリング結果を示します。OPSCR.FB ビット = 1 の場合、OPSCR.U、V、W ビットはソフト設定値（OPSCR.UF、VF、WF ビット）です。

23.3.11.3 入力相デコード

図 23.77 に示す GPT_OPS 制御フロー概念図の（2）の部分では、OPSCR.FB ビットで選択した入力相をデコードすることにより、6 相信号を有効にします。6 相許可信号は、GPT_OPS の内部処理に使用されます。

表 23.18 に入力相のデコード表を示します。

表 23.18 入力相デコード表

入力相（U/V/W）（GPT_OPS内部ノード名）			入力相のデコードによる6相許可[U/V/W（Up/Lo）]（GPT_OPS内部ノード名）					
入力U相	入力V相	入力W相	U相（Up）	U相（Lo）	V相（Up）	V相（Lo）	W相（Up）	W相（Lo）
(gtu_sync)	(gtv_sync)	(gtw_sync)	(gtuup_en)	(gtulo_en)	(gtvup_en)	(gtvlo_en)	(gtwup_en)	(gtwlo_en)
1	0	1	1	0	0	1	0	0
1	0	0	1	0	0	0	0	1
1	1	0	0	0	1	0	0	1
0	1	0	0	1	1	0	0	0
0	1	1	0	1	0	0	1	0
0	0	1	0	0	0	1	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	1	1	0	0	0	0	0	0

23.3.11.4　出力選択制御

図 23.77 に示す GPT_OPS 制御フロー概念図の（3）の部分では、OPSCR レジスタのビットを設定することによって出力波形を選択します。

出力選択に関連するビットを以下に示します。

- OPSCR.EN ビット：6 相出力の出力／停止を制御
- OPSCR.P ビットおよび OPSCR.N ビット：出力相に対してレベル信号／ PWM 信号（チョッパ出力）を選択可能
- 出力相の極性は、OPSCR.INV ビットで正論理／負論理に設定可能

表 23.19 および表 23.20 に、OPSCR レジスタのビットを使用した出力選択制御方法を示します。

表 23.19　出力選択制御方法（正相）

イネーブル相出力制御	正相出力（P）制御	反転相出力制御	出力ポート名（正相 = Up） （出力選択内部ノード割り当て）	
OPSCR.EN ビット	OPSCR.P ビット	OPSCR.INV ビット	GTOUUP GTOVUP GTOWUP	モード
0	x	x	0	出力停止 （外部端子Hi-Z） GPT_OPS→0出力
1	0	0	レベル信号 (gtuup_en) (gtvup_en) (gtwup_en)	レベル出力モード （正相） （正論理）
1	0	1	レベル信号 (～gtuup_en) (～gtvup_en) (～gtwup_en)	レベル出力モード （正相） （負論理）
1	1	0	PWM信号 (PWM & gtuup_en) (PWM & gtvup_en) (PWM & gtwup_en)	PWM出力モード （正相） （正論理）
1	1	1	PWM信号 (～(PWM & gtuup_en)) (～(PWM & gtvup_en)) (～(PWM & gtwup_en))	PWM出力モード （正相） （負論理）

表 23.20　出力選択制御方法（逆相）

イネーブル相出力制御	逆相出力（N）制御	反転相出力制御	出力ポート名（逆相 = Lo） （出力選択内部ノード割り当て）	
OPSCR.EN ビット	OPSCR.N ビット	OPSCR.INV ビット	GTOULO GTOVLO GTOWLO	モード
0	x	x	0	出力停止 （外部端子Hi-Z） GPT_OPS→0出力
1	0	0	レベル信号 (gtulo_en) (gtvlo_en) (gtwlo_en)	レベル出力モード （逆相） （正論理）
1	0	1	レベル信号 (～gtulo_en) (～gtvlo_en) (～gtwlo_en)	レベル出力モード （逆相） （負論理）
1	1	0	PWM信号 (PWM & gtulo_en) (PWM & gtvlo_en) (PWM & gtwlo_en)	PWM出力モード （逆相） （正論理）
1	1	1	PWM信号 (～(PWM & gtulo_en)) (～(PWM & gtvlo_en)) (～(PWM & gtwlo_en))	PWM出力モード （逆相） （負論理）

23.3.11.5　出力選択制御（グループ出力禁止機能）

OPSCR.GODF ビット = 1 の場合、OPSCR.GRP[1:0] ビットで選択した信号値が High（出力禁止要求）であると、GPT_OPS 出力端子は非同期に Hi-Z に変化し、PCLKD と同期した出力禁止要求信号によって OPSCR.EN ビットは 0 になります。その応答として、ソフトウェアで出力禁止要求をクリアした後、OPSCR.EN ビットを 1 にしてください。

OPSCR.EN ビットが 0 になるタイミングは、出力禁止要求が発生してから PCLKD の 3 サイクル後です。出力禁止制御を確実に実行するには、（POEG の出力禁止要求フラグのクリアによる）出力禁止要求の発生から停止まで、少なくとも PCLKD の 4 サイクル分待つ必要があります。グループ出力禁止制御の動作例については、図 23.80 を参照してください。

23.3.11.6　イベントリンクコントローラ（ELC）出力

図 23.77 に示す GPT_OPS 制御フロー概念図の（5）の部分では、ホールセンサ入力信号エッジを ELC に出力します。

ホールセンサ入力エッジ信号は、PCLKD で検出したパルスと、入力相の U 相／ V 相／ W 相それぞれの立ち上がり／立ち下がりエッジ信号との OR 論理となります。すなわち、入力相の U 相／ V 相／ W 相それぞれの High レベル持続期間が短いと、その時点でホールセンサエッジ入力信号は出力されません。

OPSCR.FB ビット = 0 の場合、ホールセンサ入力エッジ信号は、外部入力相の PCLKD エッジで検出したパルスの OR 論理となります。OPSCR.FB ビット = 1 の場合、ホールセンサ入力エッジ信号は、ソフト設定（OPSCR.UF、VF、WF ビット）の PCLKD エッジで検出したパルスの OR 論理となります。

ELC への出力信号の例については、図 23.78 ～図 23.80 を参照してください。

23.3.11.7　GPT_OPS スタート動作設定フロー

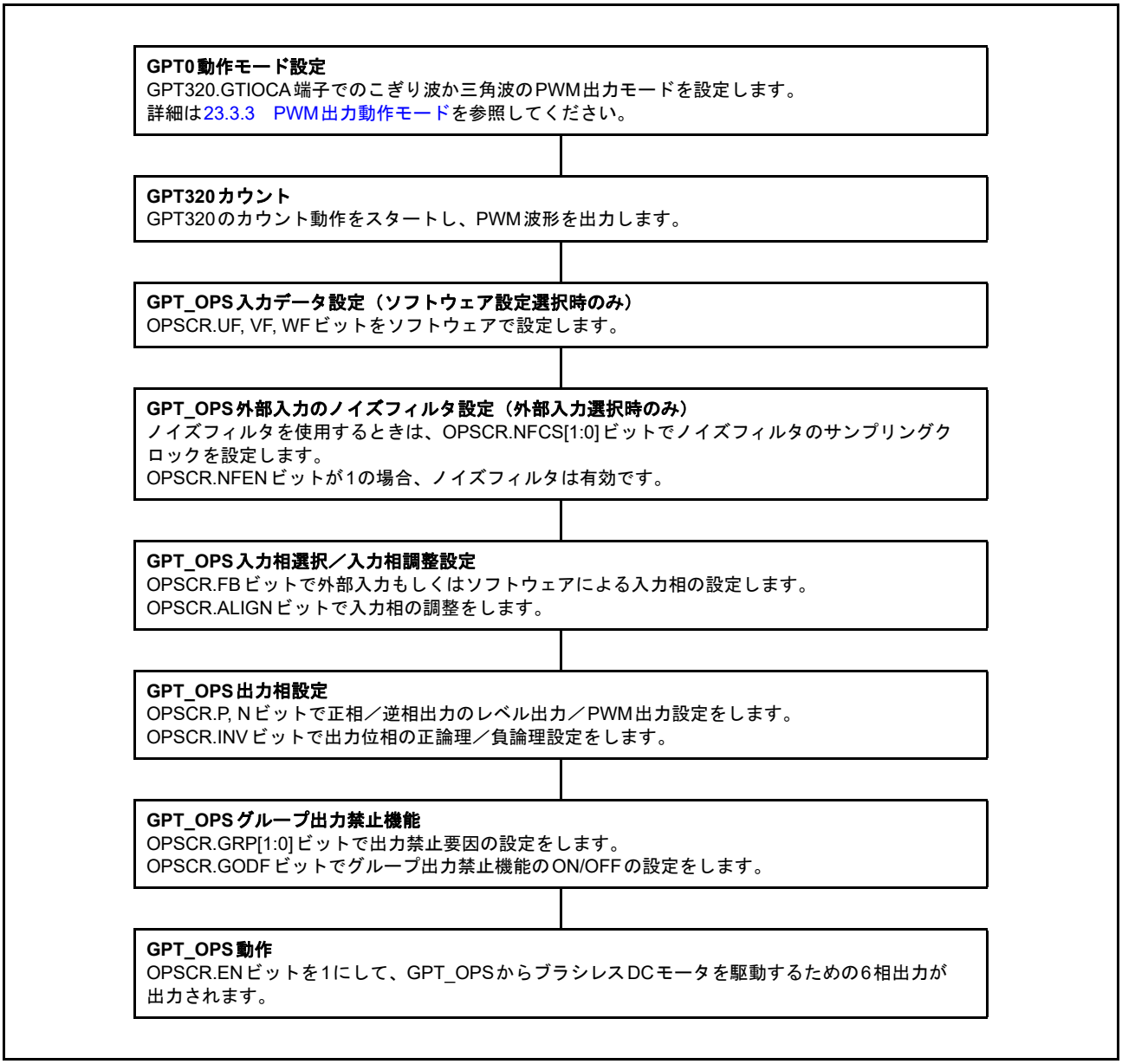


図 23.81　GPT_OPS スタート動作の設定例

23.4 割り込み要因

23.4.1 割り込み要因

GPT には以下の割り込み要因があります。

- GTCCR インプットキャプチャ／コンペアマッチ
- GTCNT カウンタオーバーフロー（GTPR コンペアマッチ）／アンダーフロー

各割り込み要因には、それぞれ専用のステータスフラグがあります。割り込み要因信号が発生すると、GTST レジスタの対応するステータスフラグが 1 になります。GTST レジスタの対応するステータスフラグは、0 を書き込むことでクリアできます。フラグのセットとクリアが同時に発生した場合、フラグのクリアが優先されます。これらのフラグは、内部状態により自動更新されます。表 23.21 は、GPT の割り込み要因の一覧です。

表 23.21 割り込み要因 (1/2)

チャネル	名称	割り込み要因	割り込みフラグ	DMAC/DTCの起動
0	GPT0_CCMPA	GPT320.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT0_CCMPB	GPT320.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT0_CMPC	GPT320.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT0_CMPD	GPT320.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT0_CMPE	GPT320.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT0_CMPF	GPT320.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT0_OVF	GPT320.GTCNTオーバーフロー（GPT320.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT0_UDF	GPT320.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能
1	GPT1_CCMPA	GPT321.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT1_CCMPB	GPT321.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT1_CMPC	GPT321.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT1_CMPD	GPT321.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT1_CMPE	GPT321.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT1_CMPF	GPT321.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT1_OVF	GPT321.GTCNTオーバーフロー（GPT321.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT1_UDF	GPT321.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能
2	GPT2_CCMPA	GPT322.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT2_CCMPB	GPT322.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT2_CMPC	GPT322.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT2_CMPD	GPT322.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT2_CMPE	GPT322.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT2_CMPF	GPT322.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT2_OVF	GPT322.GTCNTオーバーフロー（GPT322.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT2_UDF	GPT322.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能
3	GPT3_CCMPA	GPT323.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT3_CCMPB	GPT323.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT3_CMPC	GPT323.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT3_CMPD	GPT323.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT3_CMPE	GPT323.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT3_CMPF	GPT323.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT3_OVF	GPT323.GTCNTオーバーフロー（GPT323.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT3_UDF	GPT323.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能

表 23.21　割り込み要因 (2/2)

チャネル	名称	割り込み要因	割り込みフラグ	DMAC/DTCの起動
4	GPT4_CCMPA	GPT164.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT4_CCMPB	GPT164.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT4_CMPC	GPT164.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT4_CMPD	GPT164.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT4_CMPE	GPT164.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT4_CMPF	GPT164.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT4_OVF	GPT164.GTCNTオーバーフロー（GPT164.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT4_UDF	GPT164.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能
5	GPT5_CCMPA	GPT165.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT5_CCMPB	GPT165.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT5_CMPC	GPT165.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT5_CMPD	GPT165.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT5_CMPE	GPT165.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT5_CMPF	GPT165.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT5_OVF	GPT165.GTCNTオーバーフロー（GPT165.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT5_UDF	GPT165.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能
8	GPT8_CCMPA	GPT168.GTCCRAインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFA	可能
	GPT8_CCMPB	GPT168.GTCCRBインプットキャプチャ／コンペアマッチ	TCFB	可能
	GPT8_CMPC	GPT168.GTCCRCコンペアマッチ	TCFC	可能
	GPT8_CMPD	GPT168.GTCCRDコンペアマッチ	TCFD	可能
	GPT8_CMPE	GPT168.GTCCREコンペアマッチ	TCFE	可能
	GPT8_CMPF	GPT168.GTCCRFコンペアマッチ	TCFF	可能
	GPT8_OVF	GPT168.GTCNTオーバーフロー（GPT168.GTPRコンペアマッチ）	TCFPO	可能
	GPT8_UDF	GPT168.GTCNTアンダーフロー	TCFPU	可能

(1)　GPTn_CCMPA 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- GTCCRA レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値が GTCCRA レジスタ値と一致したとき
- GTCCRA レジスタがインプットキャプチャレジスタとして機能している場合、インプットキャプチャ信号によって GTCNT カウンタ値が GTCCRA レジスタに転送されたとき

(2)　GPTn_CCMPB 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- GTCCRB レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値が GTCCRB レジスタ値と一致したとき
- GTCCRB レジスタがインプットキャプチャレジスタとして機能している場合、インプットキャプチャ信号によって GTCNT カウンタ値が GTCCRB レジスタに転送されたとき

(3)　GPTn_CMPC 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- GTCCRC レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値が GTCCRC レジスタ値と一致したとき

以下の条件ではコンペアマッチが行われないため、割り込み要求は発生しません。

- GTCR.MD[2:0] ビット = 001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット = 110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRA[1:0] ビット = 01b、10b、11b（GTCCRC レジスタがバッファ動作）

(4) GPTn_CMPD 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- GTCCRD レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値が GTCCRD レジスタ値と一致したとき

以下の条件ではコンペアマッチが行われないため、割り込み要求は発生しません。

- GTCR.MD[2:0] ビット = 001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット = 110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRA[1:0] ビット = 10b、11b（GTCCRD レジスタがバッファ動作）

(5) GPTn_CMPE 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- GTCCRE レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値が GTCCRE レジスタ値と一致したとき

以下の条件ではコンペアマッチが行われないため、割り込み要求は発生しません。

- GTCR.MD[2:0] ビット = 001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット = 110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRB[1:0] ビット = 01b、10b、11b（GTCCRE レジスタがバッファ動作）

(6) GPTn_CMPF 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- GTCCRF レジスタがコンペアマッチレジスタとして機能している場合、GTCNT カウンタ値が GTCCRF レジスタ値と一致したとき

以下の条件ではコンペアマッチが行われないため、割り込み要求は発生しません。

- GTCR.MD[2:0] ビット = 001b（のこぎり波ワンショットパルスモード）
- GTCR.MD[2:0] ビット = 110b（三角波 PWM モード 3）
- GTBER.CCRB[1:0] ビット = 10b、11b（GTCCRF レジスタがバッファ動作）

(7) GPTn_OVF 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- のこぎり波モードの場合、オーバーフロー（アップカウント時に GTCNT カウンタ値が GTPR 値から 0 に変化）によって割り込み要求が許可されたとき
- 三角波モードの場合、山（GTCNT カウンタ値が GTPR 値から GTPR 値 - 1 に変化）によって割り込み要求が許可されたとき
- ハードウェア要因によるカウントで、オーバーフロー（アップカウント時に GTCNT カウンタ値が GTPR 値から 0 に変化）が発生したとき

(8) GPTn_UDF 割り込み（n = 0 ～ 5, 8）

割り込み要求は以下の条件で発生します。

- のこぎり波モードの場合、アンダーフロー（ダウンカウント時に GTCNT カウンタ値が 0 から GTPR 値に変化）によって割り込み要求が許可されたとき

- 三角波モードの場合、谷（GTCNT カウンタ値が 0 から 1 に変化）によって割り込み要求が許可されたとき
- ハードウェア要因によるカウントで、アンダーフロー（ダウンカウント時に GTCNT カウンタ値が 0 から GTPR 値に変化）が発生したとき

表 23.22 割り込み信号と割り込みステータスフラグ

割り込み信号	割り込みステータスフラグ
GPTn_UDF	GTST[7] (TCFPU)
GPTn_OVF	GTST[6] (TCFPO)
GPTn_CMPF	GTST[5] (TCFF)
GPTn_CMPE	GTST[4] (TCFE)
GPTn_CMPD	GTST[3] (TCFD)
GPTn_CMPC	GTST[2] (TCFC)
GPTn_CCMPB	GTST[1] (TCFB)
GPTn_CCMPA	GTST[0] (TCFA)

注 . n = 0 ～ 5, 8

23.4.2 DMAC/DTC の起動

各チャネルの割り込みによって、DMAC および DTC を起動することが可能です。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」、「17. DMA コントローラ（DMAC）」、および「18. データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

23.5 ELC によるリンク動作

23.5.1 ELC へのイベント信号出力

GPT では、その割り込み要求信号がイベントリンクコントローラ（ELC）でイベント信号として使用された場合、あらかじめ設定しておいたモジュールとのリンク動作が可能です。

GPT には以下の ELC イベント信号があります。

- コンペアマッチ A 割り込み発生（GPTn_CCMPA）
- コンペアマッチ B 割り込み発生（GPTn_CCMPB）
- コンペアマッチ C 割り込み発生（GPTn_CMPC）
- コンペアマッチ D 割り込み発生（GPTn_CMPD）
- コンペアマッチ E 割り込み発生（GPTn_CMPE）
- コンペアマッチ F 割り込み発生（GPTn_CMPF）
- オーバーフロー割り込み発生（GPTn_OVF）
- アンダーフロー割り込み発生（GPTn_UDF）

注 . n = 0 ～ 5, 8

23.5.2 ELC からのイベント信号入力

GPT は、ELC からの最大 8 個のイベントに対して、以下の動作を実行できます。

- カウントスタート／ストップ／クリア
- アップカウント／ダウンカウント
- インプットキャプチャ

ハードウェア要因についての詳細は、23.3 動作説明を参照してください。

23.6　ノイズフィルタ機能

GPT のインプットキャプチャ入力端子とホールセンサ入力端子には、ノイズフィルタが装備されています。ノイズフィルタは、入力信号をサンプリングクロックでサンプリングし、3 サンプリング周期に満たない長さのパルスを除去します。

ノイズフィルタ機能では、端子ごとにノイズフィルタ機能を有効／無効にすることや、チャネルごとにサンプリングクロックを設定することが可能です。

図 23.82 にノイズフィルタのタイミングを示します。

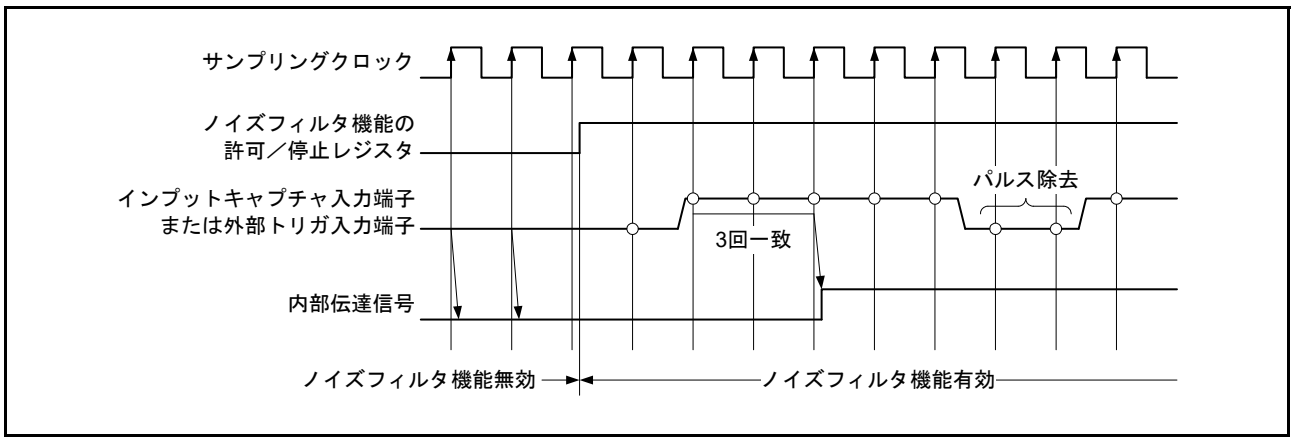


図 23.82　ノイズフィルタのタイミング

ノイズフィルタ機能を有効にすると、「サンプリング周期 × 3 + PCLKD」の遅延の後、ノイズフィルタ対象信号の両エッジでインプットキャプチャ動作または外部トリガ動作が実行されます。この遅延は、インプットキャプチャ入力または外部トリガ動作に対するノイズフィルタリングに起因するものです。

23.7　保護機能

23.7.1　レジスタの書き込み保護

レジスタへの誤書き込みを防止するため、GTWP.WP ビットを設定することで、チャネル単位でレジスタへの書き込みを禁止できます。下記のレジスタに対して、書き込み保護の設定が可能です。

GTSSR, GTPSR, GTCSR, GTUPSR, GTDNSR, GTICASR, GTICBSR, GTCR, GTUDDTYC, GTIOR, GTINTAD, GTST, GTBER, GTCNT, GTCCRA, GTCCRB, GTCCRC, GTCCRD, GTCCRE, GTCCRF, GTPR, GTPBR, GTDTCR, GTDVU

23.7.2　バッファ動作の禁止

バッファレジスタへの書き込みタイミングが、バッファの転送タイミングに対して遅延した場合、GTBER.BD ビットの設定でバッファ動作の中断が可能です。バッファレジスタの書き込み中にバッファ転送条件が発生しても、バッファ転送を一時的に禁止することが可能です。そのためには、バッファレジスタの書き込み前に対応する GTBER.BD ビットを 1（バッファ動作禁止）にしておき、すべてのバッファレジスタへの書き込み終了後に 0（バッファ動作許可）に戻します。

図 23.83 にバッファ動作を禁止するための動作例を示します。

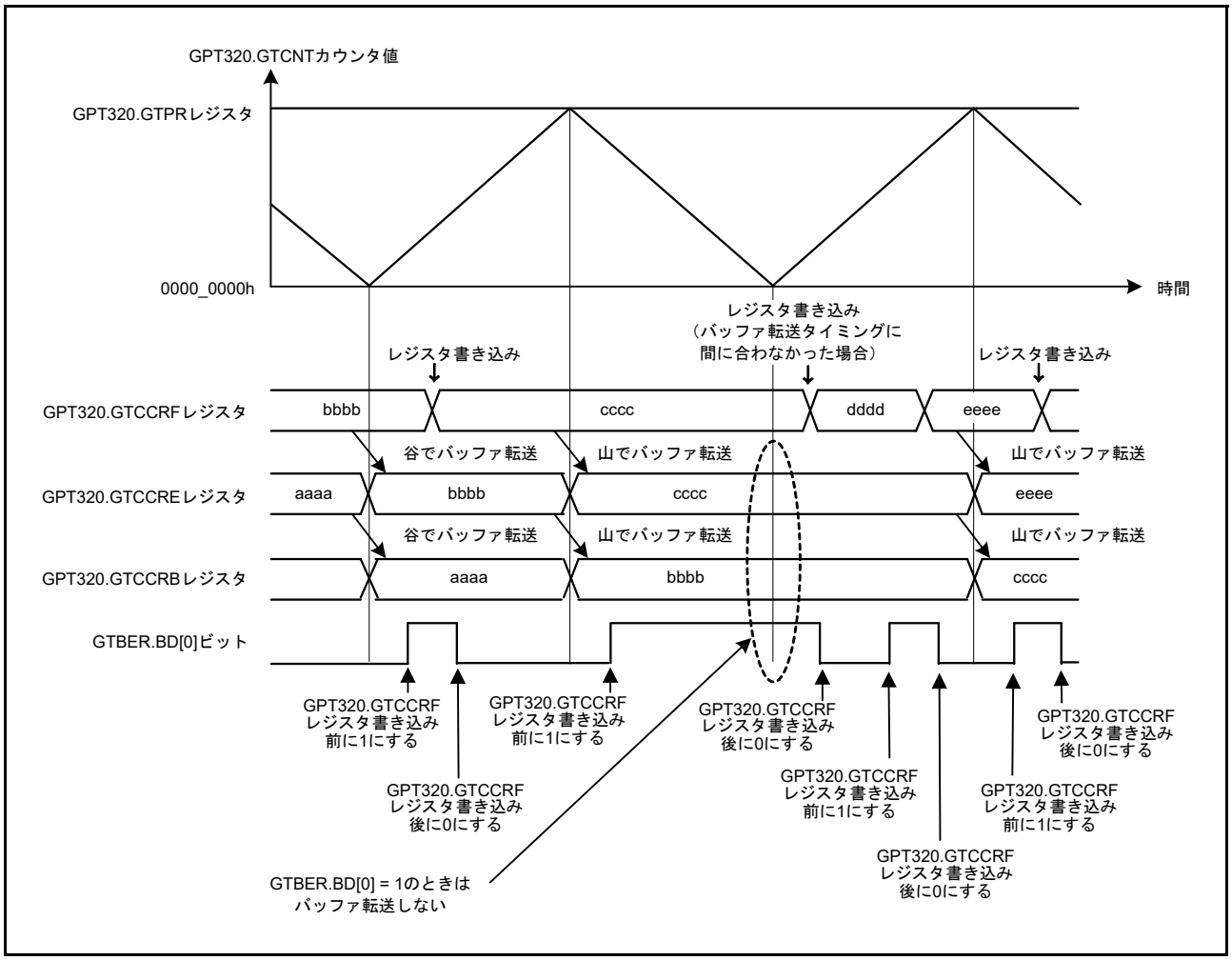


図 23.83　バッファ動作禁止の動作例（三角波、ダブルバッファ動作、谷と山の両方でバッファ転送の場合）

23.7.3　GTIOC 端子出力のネゲート制御

システム障害から保護するために、POEG からの出力禁止要求によって、GTIOC 端子の出力値を強制的に変更する出力禁止制御が備えられています。

デッドタイムエラーが発生した場合や、GTIOCA 端子の出力値が GTIOCB 端子の出力値と同じ場合には、出力保護が必要です。GPT はこのような条件を検出すると、GTINAD.GRPABH ビットや GTINTAD.GRPABL ビットなどの出力禁止要求許可ビットの設定に応じて、POEG に対して出力禁止要求を生成します。POEG は、各チャネルから出力禁止要求を受信すると、OR 演算を用いて外部入力を計算し、GPT に対して出力禁止要求を発生させます。

POEG が生成した 4 つの出力禁止要求のうちの 1 つの出力要求信号（GTIOCA 端子および GTIOCB 端子の共通出力禁止要求信号）を GTINTAD.GRP[1:0] ビットの設定で選択します。選択した出力禁止要求の状態は、GTST.ODF ビットを読むことでモニタできます。出力禁止中の出力レベルは、GTIOCA 端子については GTIOR.OADF[1:0] ビットの設定、GTIOCB 端子については GTIOR.OBDF[1:0] ビットの設定に依存します。

出力禁止状態への変更は、POEG から出力禁止要求を発生させることで非同期に実行されます。出力禁止状態の解除は、出力禁止要求を停止させることで周期の終わりに実行されます。出力禁止状態の解除タイミングは、出力禁止要求の停止から、早くとも PCLKD の 3 サイクル後です。出力禁止制御を確実に実行するには、（POEG の出力禁止要求フラグのクリアによる）出力禁止要求の発生から停止まで、少なくとも PCLKD の 4 サイクル分待つ必要があります。

イベントカウント実行時、または出力禁止状態を周期の終わりを待たずにただちに解除する必要がある場合は、GTIOR.OADF[1:0] ビットを 00b（GTIOCA 端子の場合）にするか、GTIOR.OBDF[1:0] ビットを 00b（GTIOCB 端子の場合）にしてください。

図 23.84 に GTIOC 端子出力禁止制御の動作例を示します。

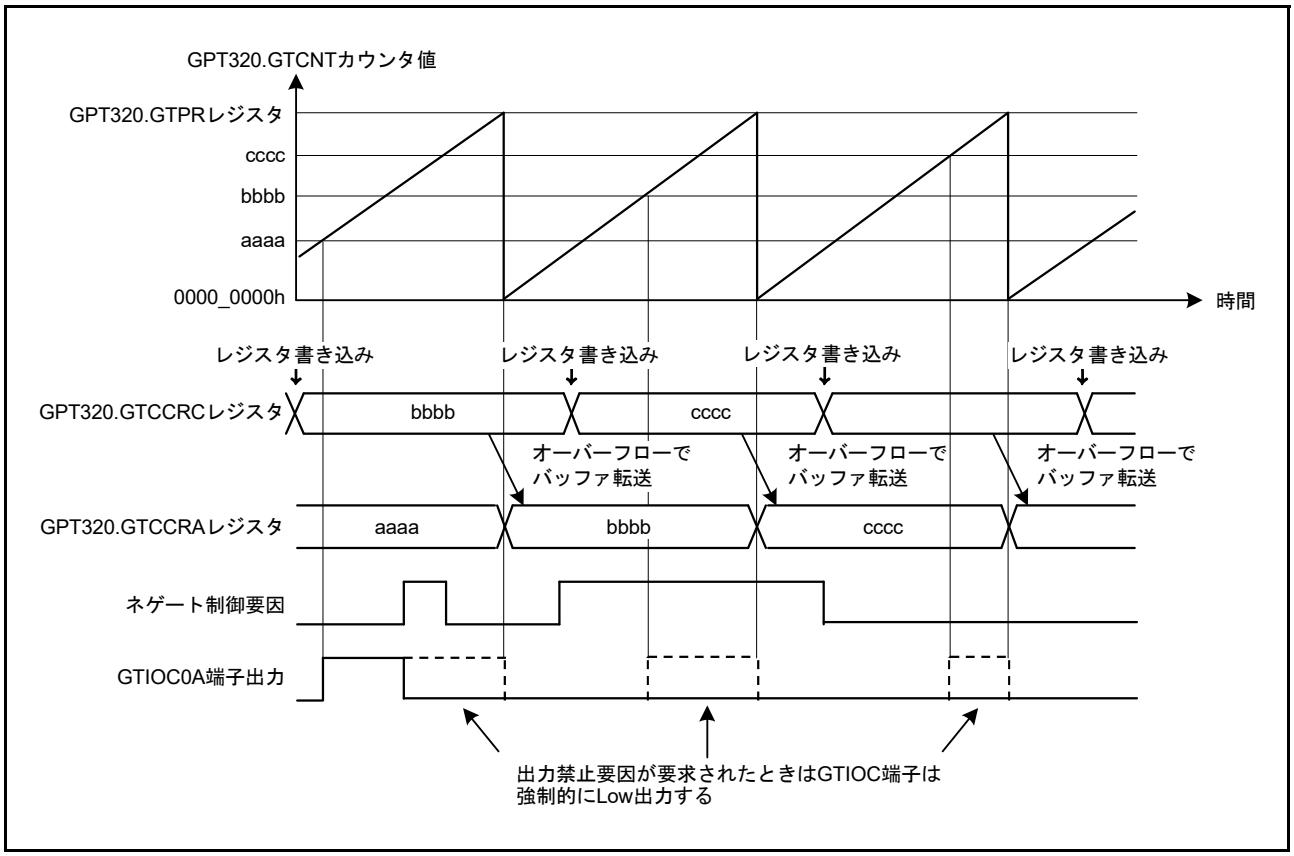


図 23.84　GTIOC 端子出力禁止制御動作例（のこぎり波でアップカウント、バッファ動作、アクティブレベル 1、GTCCRA レジスタのコンペアマッチで High 出力、周期の終わりで Low 出力、出力禁止で Low 出力の場合）

23.8　出力端子の初期化方法

23.8.1　リセット後の端子設定

GPT のレジスタはリセット時に初期化されます。ポート端子機能を PmnPFS レジスタで選択し、GTIOR.OAE および GTIOR.OBE ビットを設定し、GPT 機能を外部端子に出力してから、カウントを開始してください。

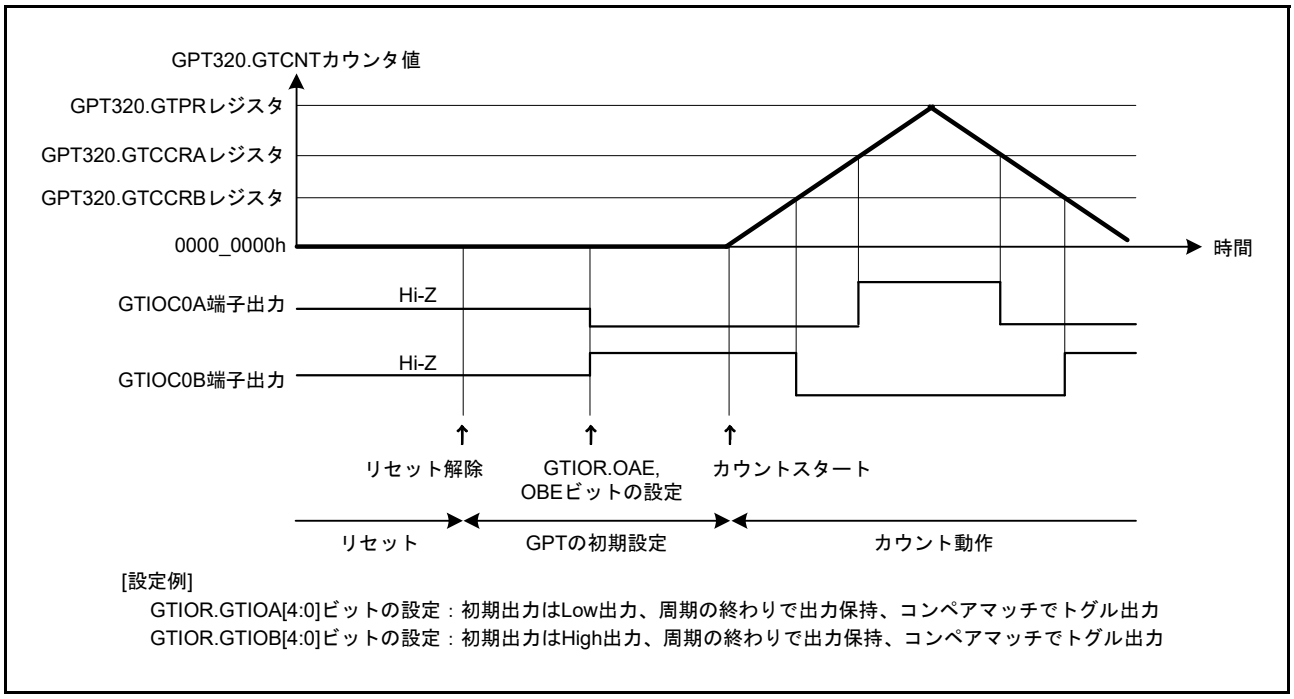


図 23.85　リセット後の端子設定例

23.8.2　動作中の異常による端子の初期化

GPT の動作中に異常が発生した場合、端子を初期化する前に、下記の 4 種類の端子処理を実行できます。

- GTIOR レジスタの OAHLD および OBHLD ビットを 1 にして、カウントストップ時の出力を保持する
- GTIOR レジスタの OAHLD および OBHLD ビットを 0 にするとともに、GTIOR レジスタの OADFLT および OBDFLT ビットに任意の出力値を設定して、カウントストップ時に任意の値を出力させる
- あらかじめ I/O ポートの PDR、PODR、PmnPFS レジスタを設定することにより、端子が汎用出力ポートとして任意の値を出力するように設定する。GTIOR レジスタの OAE および OBE ビットを 0 にするとともに、端子に対応した PmnPFS.PMR の制御ビットを 0 にして、エラー発生時に、汎用出力ポートとして設定した端子から任意の値が出力されるように設定する
- POEG 機能を使用して、出力をハイインピーダンス状態にする

デッドタイムの自動設定を行った場合は、カウントストップ後に GTDTCR.TDE ビットを 0 にしてください。カウントストップ時は、GPT の外部要因によって変更されたレジスタ値のみが変化します。カウントが再開すると、停止していた状態から動作が継続します。カウントを停止させた場合は、各レジスタを初期化してからカウントを再開してください。

23.9 使用上の注意事項

23.9.1 モジュールストップ機能の設定

モジュールストップコントロールレジスタによって、GPT の動作を禁止または許可することが可能です。初期設定では、リセット後、GPT の動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタのアクセスが可能になります。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

23.9.2 コンペアマッチ動作時の GTCCRn レジスタの設定（n = A ～ F）

(1) 三角波 PWM モードでデッドタイムの自動設定を行う場合

GTCCRA レジスタは次の条件を満たす必要があります：GTDVU ＜ GTCCRA かつ 0 ＜ GTCCRA ＜ GTPR

(2) 三角波 PWM モードでデッドタイムの自動設定を行わない場合

GTCCRA レジスタは、0 ＜ GTCCRA ＜ GTPR の範囲に収まるように設定する必要があります。GTCCRA = 0 または GTCCRA = GTPR に設定すると、GTCCRA = 0 または GTCCRA = GTPR が成立した場合にのみ、コンペアマッチが周期内で発生します。GTCCRA ＞ GTPR に設定すると、コンペアマッチは発生しません。

同様に、GTCCRB レジスタも、0 ＜ GTCCRB ＜ GTPR の範囲に収まるように設定してください。GTCCRB = 0 または GTCCRB = GTPR に設定すると、GTCCRB = 0 または GTCCRB = GTPR が成立した場合にのみ、コンペアマッチが周期内で発生します。GTCCRB ＞ GTPR に設定すると、コンペアマッチは発生しません。

(3) のこぎり波ワンショットパルスモードでデッドタイムの自動設定を行う場合

GTCCRC および GTCCRD レジスタは、以下の制限を満たすように設定する必要があります。この制限を満たさない場合、デッドタイムを確保した正常な出力波形が得られない場合があります。

- アップカウント時：GTCCRC ＜ GTCCRD、GTCCRC ＞ GTDVU、GTCCRD ＜ (GTPR - GTDVU)
- ダウンカウント時：GTCCRC ＞ GTCCRD、GTCCRC ＜ (GTPR - GTDVU)、GTCCRD ＞ GTDVU

(4) のこぎり波ワンショットパルスモードでデッドタイムの自動設定を行わない場合

GTCCRC および GTCCRD レジスタは、以下の制限を満たすように設定する必要があります。この制限を満たさない場合、コンペアマッチが 2 回発生せず、パルス出力が得られません。

- アップカウント時：0 ＜ GTCCRC ＜ GTCCRD ＜ GTPR
- ダウンカウント時：GTPR ＞ GTCCRC ＞ GTCCRD ＞ 0

同様に、GTCCRE および GTCCRF レジスタは、以下の制限を満たすように設定する必要があります。この制限を満たさない場合、コンペアマッチが 2 回発生せず、パルス出力が得られません。

- アップカウント時：0 ＜ GTCCRE ＜ GTCCRF ＜ GTPR
- ダウンカウント時：GTPR ＞ GTCCRE ＞ GTCCRF ＞ 0

(5) のこぎり波 PWM モードの場合

GTCCRA レジスタは、0 < GTCCRA < GTPR の範囲に収まるように設定する必要があります。GTCCRA = 0 または GTCCRA = GTPR に設定すると、GTCCRA = 0 または GTCCRA = GTPR が成立した場合にのみ、コンペアマッチが周期内で発生します。GTCCRA > GTPR に設定すると、コンペアマッチは発生しません。

同様に、GTCCRB レジスタは、0 < GTCCRB < GTPR の範囲に収まるように設定する必要があります。GTCCRB = 0 または GTCCRB = GTPR に設定すると、GTCCRB = 0 または GTCCRB = GTPR が成立した場合にのみ、コンペアマッチが周期内で発生します。GTCCRB > GTPR に設定すると、コンペアマッチは発生しません。

23.9.3 GTCNT カウンタの範囲設定

GTCNT カウンタレジスタは、0 ≦ GTCNT ≦ GTPR の範囲に収まるように設定する必要があります。

23.9.4 GTCNT カウンタのスタート／ストップ

GTCR.CST ビットによる GTCNT カウンタのスタート／ストップ制御タイミングは、GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウントクロックと同期しています。GTCR.CST ビットを更新すると、GTCR.TPCS[2:0] ビットで選択したカウントクロックに従って、GTCNT カウンタがスタート／ストップします。このため、GTCNT カウンタが実際にスタートする前に発生したイベントは無視されます。一方、GTCR.CST ビットが 0 になった後にイベントが受け付けられたり、割り込みが発生する可能性があります。

23.9.5 イベントごとの優先順位

(1) GTCNT レジスタ

表 23.23 に、GTCNT レジスタを更新するイベントの優先順位を示します。

表 23.23 GTCNTを更新する要因の優先順位

GTCNTを更新する要因	優先順位
CPUによる書き込み（GTCNT/GTCLRレジスタへの書き込み）	高 ↑ 低
GTCSRレジスタで設定したハードウェア要因によるクリア	
GTUPSR/GTDNSRレジスタで設定したハードウェア要因によるカウントアップ／ダウン	
カウント動作	

ハードウェア要因によるアップカウントとダウンカウントが同時に発生した場合、GTCNT カウンタ値は変化しません。GTCNT レジスタの更新と CPU による読み出しの間で競合があると、更新前のデータが読み出されます。

(2) GTCR.CST ビット

GTSSR/GTPSR レジスタで設定したハードウェア要因によるスタート／ストップと CPU による書き込み（GTCR/GTSTR/GTSTP レジスタへの書き込み）の間で競合があると、CPU による書き込みが優先されます。

GTSSR レジスタで設定したハードウェア要因によるスタートと GTPSR レジスタに設定したハードウェア要因によるストップの間で競合があると、GTCR.CST ビット値は変化しません。GTCR.CST ビットの更新と CPU による読み出しの間で競合があると、更新前のデータが読み出されます。

(3) GTCCRm レジスタ（m = A ～ F）

インプットキャプチャ／バッファ転送動作と GTCCRm レジスタへの書き込みの間で競合があると、GTCCRm レジスタへの書き込みが優先されます。インプットキャプチャと CPU によるカウンタレジスタへの書き込みまたはハードウェア要因によるカウンタレジスタの更新の間で競合があると、更新前のカウンタ値がキャプチャされます。GTCCRm レジスタの更新と CPU による読み出しの間で競合があると、更新前のデータが読み出されます。

(4) GTPR レジスタ

バッファ転送動作と GTPR レジスタへの書き込みの間で競合があると、GTPR レジスタへの書き込みが優先されます。GTPR レジスタの更新と CPU による読み出しの間で競合があると、更新前のデータが読み出されます。

24.　非同期汎用タイマ（AGT）

24.1　概要

非同期汎用タイマ（AGT）は、パルス出力、外部パルスの幅または周期の測定、および外部イベントのカウントに利用可能な 16 ビットのタイマです。

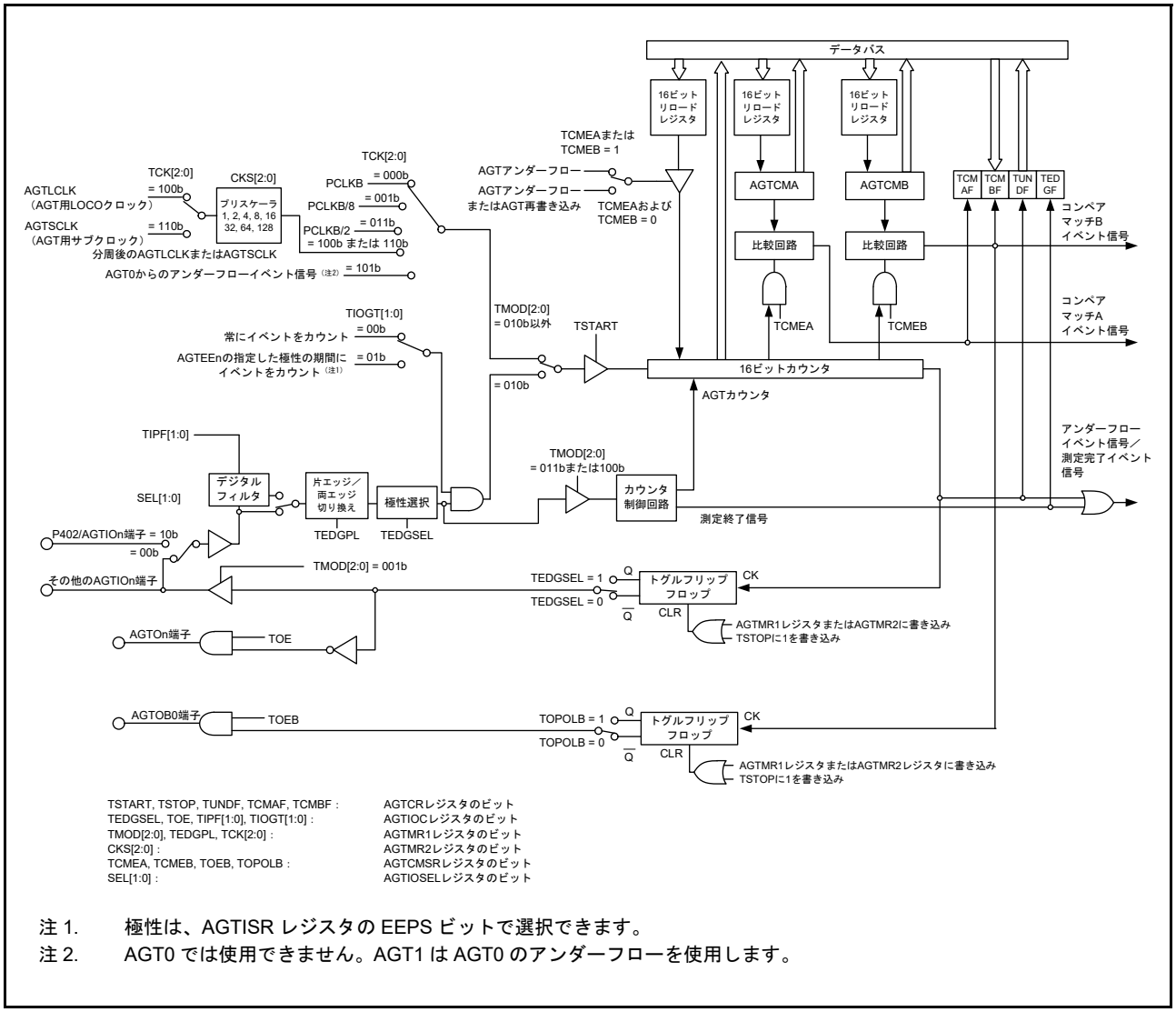
この 16 ビットタイマは、リロードレジスタとダウンカウンタで構成されています。これらのリロードレジスタとダウンカウンタは、同一アドレスに配置され、AGT レジスタでアクセス可能です。

表 24.1 に AGT の仕様を、図 24.1 にブロック図を、表 24.2 に端子構成を示します。

表 24.1　AGTの仕様

項目		内容
動作モード	タイマモード	カウントソースをカウント
	パルス出力モード	タイマがアンダーフローするごとにカウントソースをカウントし、出力を反転
	イベントカウンタモード	外部イベントをカウント
	パルス幅測定モード	外部パルス幅を測定
	パルス周期測定モード	外部パルス周期を測定
カウントソース（動作クロック）（注2）		PCLKB、PCLKB/2、PCLKB/8、AGTLCLK/d、AGTSCLK/d、またはAGT0（注1）のアンダーフロー信号を選択可能（d = 1、2、4、8、16、32、64、または128）
割り込み／イベントリンク機能（出力）		• アンダーフローイベント信号または測定完了イベント信号 – カウンタのアンダーフロー時 – パルス幅測定モードで、外部入力（AGTIOn）のアクティブ幅の測定が終了したとき – パルス周期測定モードで、外部入力（AGTIOn）の設定エッジが入力されたとき • コンペアマッチAイベント信号 – AGTとAGTCMAの値が一致したとき（コンペアマッチA機能有効時）（注3） • コンペアマッチBイベント信号 – AGTとAGTCMBの値が一致したとき（コンペアマッチB機能有効時） • AGT1_AGTI、AGT1_AGTCMAI、またはAGT1_AGTCMBIによる、ソフトウェアスタンバイモードからの復帰が可能
選択可能な機能		• コンペアマッチ機能 コンペアマッチAレジスタおよびコンペアマッチBレジスタの両方または一方を選択可能

注 1.　AGT0 では使用できません。AGT1 が、AGT0 タイマからのアンダーフローイベント信号に直接接続します。
注 2.　周辺モジュールクロック（PCLKB）周波数≧カウントソースクロック周波数となるように設定してください。
注 3.　コンペアマッチ A のコンペアマッチ出力端子はありません。



注 1.　極性は、AGTISR レジスタの EEPS ビットで選択できます。
注 2.　AGT0 では使用できません。AGT1 は AGT0 のアンダーフローを使用します。

図 24.1　AGT のブロック図

表 24.2　AGTの入出力端子

端子名	入出力	機能
AGTEEn	入力	AGTの外部イベント入力
AGTIOn（注1）	入出力（注1）	AGTの外部イベント入力およびパルス出力
AGTOn	出力	AGTのパルス出力
AGTOB0	出力	AGTのアウトプットコンペアマッチB出力

注 .　n : 0, 1（チャネル番号）
注 1.　AGTIO1 が P402 に割り当てられている場合、AGTIO1 は入力にのみ使用できます。

24.2　レジスタの説明

24.2.1　AGT カウンタレジスタ（AGT）

アドレス　AGT0.AGT 4008 4000h, AGT1.AGT 4008 4100h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

ビット	機能	設定範囲	R/W
b15-b0	16 ビットのカウンタおよびリロードレジスタ（注 1）（注 2）	0000h～FFFFh	R/W

注 1.　AGTCR レジスタの TSTOP ビットに 1 を書き込むと、この 16 ビットカウンタは強制的に停止して、FFFFh になります。

注 2.　AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットの設定値が 001b（PCLKB/8）または 011b（PCLKB/2）以外の場合、AGT レジスタが 0000h になると、ICU、DTC、および ELC への要求信号が、カウント開始直後に一度発生します。AGTOn および AGTIOn はトグル出力となります。
イベントカウンタモードで AGT レジスタが 0000h になると、TCK[2:0] ビットの値にかかわらず、ICU、DTC、および ELC への要求信号が、カウント開始直後に一度発生します。
また、指定したカウント期間以外の期間も AGTOn はトグル出力となります。AGT レジスタが 0001h 以上になると、AGT がアンダーフローするたびに要求信号が発生します。

AGT は 16 ビットのレジスタです。書き込み値はリロードレジスタに書き込まれ、読み出し値はカウンタから読み出されます。

リロードレジスタとカウンタの状態は、AGTCR レジスタの TSTART ビットと AGTCMSR レジスタの TCMEA/TCMEB ビットに応じて変化します。詳細は、24.3.1　リロードレジスタおよびカウンタの書き換え動作を参照してください。AGT レジスタは、16 ビットのメモリ操作命令によって設定できます。

24.2.2　AGT コンペアマッチ A レジスタ（AGTCMA）

アドレス　AGT0.AGTCMA 4008 4002h, AGT1.AGTCMA 4008 4102h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

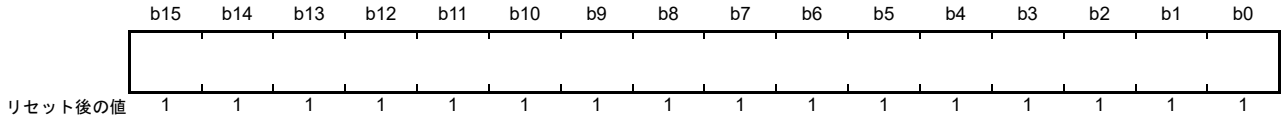
ビット	機能	設定範囲	R/W
b15-b0	16 ビットのコンペアマッチ A データを格納（注 1）	0000h～FFFFh	R/W

注 1.　コンペアマッチ A を使用しない場合、AGTCMA レジスタは FFFFh にしてください。

AGTCMA レジスタは、AGT カウンタとのコンペアマッチ値を設定するための、読み出し／書き込みレジスタです。リロードレジスタとコンペアレジスタ A の状態は、AGTCR レジスタの TSTART ビットに応じて変化します。詳細は、24.3.2　リロードレジスタおよびコンペアレジスタ A/B の書き換え動作を参照してください。AGTCMA レジスタは、16 ビットのメモリ操作命令によって設定できます。

24.2.3　AGT コンペアマッチ B レジスタ（AGTCMB）

アドレス　AGT0.AGTCMB 4008 4004h, AGT1.AGTCMB 4008 4104h



ビット	機能	設定範囲	R/W
b15-b0	16 ビットのコンペアマッチ B データを格納（注 1）	0000h～FFFFh	R/W

注 1.　コンペアマッチ B を使用しない場合、AGTCMB レジスタは FFFFh にしてください。

AGTCMB レジスタは、AGT カウンタとのコンペアマッチ値を設定するための、読み出し／書き込み可能なレジスタです。リロードレジスタとコンペアレジスタ B の状態は、AGTCR レジスタの TSTART ビットに応じて変化します。詳細は、24.3.2　リロードレジスタおよびコンペアレジスタ A/B の書き換え動作を参照してください。AGTCMB レジスタは、16 ビットのメモリ操作命令によって設定できます。

24.2.4　AGT コントロールレジスタ（AGTCR）

アドレス　AGT0.AGTCR 4008 4008h, AGT1.AGTCR 4008 4108h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TCMBF	TCMAF	TUNDF	TEDGF	—	TSTOP	TCSTF	TSTART
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TSTART	AGTカウント開始（注2）	0：カウント停止 1：カウント開始	R/W
b1	TCSTF	AGTカウント状態フラグ（注2）	0：カウント停止 1：カウント実行中	R
b2	TSTOP	AGTカウント強制停止（注1）	0：書き込みは無効 1：強制的にカウント停止	W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	TEDGF	アクティブエッジ判定フラグ	0：アクティブエッジ未受信 1：アクティブエッジ受信	R/(W)（注3）
b5	TUNDF	アンダーフローフラグ	0：アンダーフローなし 1：アンダーフローあり	R/(W)（注3）
b6	TCMAF	コンペアマッチAフラグ	0：不一致 1：一致	R/(W)（注3）
b7	TCMBF	コンペアマッチBフラグ	0：不一致 1：一致	R/(W)（注3）

注 1.　TSTOP ビットに 1（強制的にカウント停止）を書き込むと、TSTART および TCSTF ビットが同時に初期化されます。パルス出力レベルも初期化されます。読むと 0 が読めます。
注 2.　TSTART および TCSTF ビットの使用方法については、24.4.1　カウント動作の開始および停止制御を参照してください。
注 3.　フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

TSTART ビット（AGT カウント開始）

TSTART ビットに 1 を書き込むとカウント動作が開始し、0 を書き込むとカウント動作が停止します。本ビットを 1 にすると、カウントソースと同期して、TCSTF ビットが 1（カウント実行中）になります。また、TSTART ビットに 0 を書き込むと、カウントソースと同期して、TCSTF ビットが 0（カウント停止）になります。詳細は、24.4.1　カウント動作の開始および停止制御を参照してください。

TCSTF ビット（AGT カウント状態フラグ）

［1 になる条件］

- TSTART ビットに 1 を書いたとき（カウントソースと同期して、TCSTF ビットが 1 になる）

［0 になる条件］

- TSTART ビットに 0 を書いたとき（カウントソースと同期して、TCSTF ビットが 0 になる）
- TSTOP ビットに 1 を書いたとき

TSTOP ビット（AGT カウント強制停止）

本ビットに 1 を書くと、強制的にカウントが停止します。読むと 0 が読めます。

TEDGF ビット（アクティブエッジ判定フラグ）

［1 になる条件］

- パルス幅測定モードで、外部入力（AGTIOn）のアクティブ幅の測定が終了したとき
- パルス周期測定モードで、外部入力（AGTIOn）の設定エッジが入力されたとき

［0 になる条件］

- ソフトウェアで 0 を書いたとき

TUNDF ビット（アンダーフローフラグ）

［1 になる条件］

- カウンタがアンダーフローしたとき

［0 になる条件］

- ソフトウェアで 0 を書いたとき

TCMAF ビット（コンペアマッチ A フラグ）

［1 になる条件］

- AGT レジスタ値が AGTCMA レジスタ値と一致したとき

［0 になる条件］

- ソフトウェアで 0 を書いたとき

TCMBF ビット（コンペアマッチ B フラグ）

［1 になる条件］

- AGT レジスタ値が AGTCMB レジスタ値と一致したとき

［0 になる条件］

- ソフトウェアで 0 を書いたとき

24.2.5 AGT モードレジスタ 1（AGTMR1）

アドレス AGT0.AGTMR1 4008 4009h, AGT1.AGTMR1 4008 4109h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	TCK[2:0]			TEDGPL	TMOD[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	TMOD[2:0]	動作モード（注3）	b2 b0 0 0 0：タイマモード 0 0 1：パルス出力モード 0 1 0：イベントカウンタモード 0 1 1：パルス幅測定モード 1 0 0：パルス周期測定モード 上記以外は設定しないでください。	R/W
b3	TEDGPL	エッジ極性（注4）	0：片エッジ 1：両エッジ	R/W
b6-b4	TCK[2:0]	カウントソース （注1）（注2）（注5）	b6 b4 0 0 0：PCLKB 0 0 1：PCLKB/8 0 1 1：PCLKB/2 1 0 0：AGTMR2 レジスタの CKS[2:0] ビットで設定した分周クロック AGTLCLK 1 0 1：AGT0 からのアンダーフローイベント信号（注6） 1 1 0：AGTMR2 レジスタの CKS[2:0] ビットで設定した分周クロック AGTSCLK 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . AGTMR1 レジスタへライトアクセスすると、AGT の AGTOn、AGTIOn、および AGTOB0 端子（n = 0, 1）からの出力が初期化されます。初期化時の出力レベルについては、24.2.7 AGT I/O コントロールレジスタ（AGTIOC）の説明を参照してください。

注 1. イベントカウンタモードを選択した場合、TCK[2:0] ビットの設定にかかわらず、カウントソースとして外部入力（AGTIOn）が選択されます。

注 2. カウント動作中は、カウントソースを切り替えないでください。カウントソースは、AGTCR レジスタの TSTART および TCSTF ビットが、どちらも 0（カウント停止）の場合にのみ切り替えてください。

注 3. AGTCR レジスタの TSTART および TCSTF ビットが、どちらも 0（カウント停止）の状態で、カウントが停止している場合にのみ、動作モードを変更できます。カウント動作中は、動作モードを変更しないでください。

注 4. TEDGPL ビットは、イベントカウンタモードでのみ有効です。

注 5. AGT をソフトウェアスタンバイモードで動作させるには、AGTLCLK または AGTSCLK を選択してください。

注 6. AGT0 では使用できません（設定禁止）。AGT1 が、AGT0 のアンダーフローを使用します。

24.2.6 AGT モードレジスタ 2（AGTMR2）

アドレス AGT0.AGTMR2 4008 400Ah, AGT1.AGTMR2 4008 410Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	LPM	—	—	—	—	CKS[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CKS[2:0]	AGTLCLK/AGTSCLKカウントソースクロック周波数分周比 （注1）（注2）（注3）	b2 b0 0 0 0 : 1/1 0 0 1 : 1/2 0 1 0 : 1/4 0 1 1 : 1/8 1 0 0 : 1/16 1 0 1 : 1/32 1 1 0 : 1/64 1 1 1 : 1/128	R/W
b6-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	LPM	低消費電力モード	0：通常モード 1：低消費電力モード	R/W

注 1. カウント動作中は、CKS[2:0] ビットを書き換えないでください。AGTCR レジスタの TSTART および TCSTF ビットが、どちらも 0（カウント停止）の場合にのみ、CKS[2:0] を書き換えてください。
注 2. カウントソースが AGTLCLK または AGTSCLK の場合に、CKS[2:0] の切り替えが有効となります。
注 3. CKS[2:0] ビットが 000b 以外の場合は、AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットを切り替えないでください。CKS[2:0] を 000b にした後、AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットを切り替えて、カウントソースの 1 サイクル待機してください。

LPM ビット（低消費電力モード）

低消費電力モードに設定します。これによって、特定の AGT レジスタへのアクセスに影響が及びます。低消費電力で動作させるには 1 にしてください。本ビットが 1 の場合、下記のレジスタへはアクセスしないでください。

- AGT/AGTCMA/AGTCMB/AGTCR

本ビットを 1 から 0 に切り替えた後は、最初のレジスタアクセスが以下のように制限されます

- AGT：レジスタを 2 回読む必要があります。2 回目の読み出しデータのみが有効です
- AGT、AGTCMA、AGTCMB、および AGTCR：レジスタに書き込む場合、カウントソースクロックで 2 サイクル以上の余裕が必要です

24.2.7 AGT I/O コントロールレジスタ（AGTIOC）

アドレス AGT0.AGTIOC 4008 400Ch, AGT1.AGTIOC 4008 410Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TIOGT[1:0]		TIPF[1:0]		—	TOE	—	TEDGSEL
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TEDGSEL	I/O極性切り替え	動作モードによって機能が異なります（表 24.3および表 24.4参照）。 TEDGSELビットは、AGTOnの出力極性、およびAGTIOnの入出力エッジと極性を切り替えます。パルス出力モードでは、AGTOnの出力極性とAGTIOnの出力極性のみが制御されます。AGTMR1レジスタに書き込みを行った場合、およびAGTCRレジスタのTSTOPビットに1を書いた場合、AGTOn出力とAGTIOn出力が初期化されます。	R/W
b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	TOE	AGTOn出力許可	0：AGTOn出力を禁止 1：AGTOn出力を許可	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	TIPF[1:0]	入力フィルタ（注3）	b5 b4 0 0：フィルタなし 0 1：PCLKBでのフィルタサンプリング 1 0：PCLKB/8でのフィルタサンプリング 1 1：PCLKB/32でのフィルタサンプリング これらのビットは、AGTIOn入力用フィルタのサンプリング周波数を指定します。AGTIOn端子への入力がサンプリングされ、3回連続して値が一致すると、その値が入力値とみなされます。	R/W
b7-b6	TIOGT[1:0]	カウント制御 （注1）（注2）	b7 b6 0 0：常にイベントをカウントする 0 1：AGTEEnに指定された極性期間の間、イベントをカウントする 上記以外は設定しないでください。	R/W

注 1. AGTEEn を使用する場合、イベントをカウントするための極性は AGTISR レジスタの EEPS ビットで選択できます。
注 2. TIOGT[1:0] ビットは、イベントカウンタモード時に限り有効です。
注 3. ソフトウェアスタンバイモード中にイベントカウンタモード動作が実行される場合、デジタルフィルタ機能は使用できません。

表 24.3　AGTIOnの入出力エッジおよび極性切り替え

動作モード	機能
タイマモード	使用しない
パルス出力モード	0：Highで出力開始（初期レベル：High） 1：Lowで出力開始（初期レベル：Low）
イベントカウンタモード	0：立ち上がりエッジでカウント 1：立ち下がりエッジでカウント
パルス幅測定モード	0：Low レベル幅を測定 1：High レベル幅を測定
パルス周期測定モード	0：ある立ち上がりエッジから次の立ち上がりエッジまで測定 1：ある立ち下がりエッジから次の立ち下がりエッジまで測定

表 24.4　AGTOnの出力極性切り替え

動作モード	機能
全モード	0：Lowで出力開始（初期レベル：Low） 1：Highで出力開始（初期レベル：High）

24.2.8 AGT イベント端子選択レジスタ（AGTISR）

アドレス AGT0.AGTISR 4008 400Dh, AGT1.AGTISR 4008 410Dh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	EEPS	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	EEPS	AGTEEn極性選択	0：Lowの期間、イベントをカウントする 1：Highの期間、イベントをカウントする	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

24.2.9 AGT コンペアマッチ機能選択レジスタ（AGTCMSR）

アドレス AGT0.AGTCMSR 4008 400Eh, AGT1.AGTCMSR 4008 410Eh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	TOPOLB	TOEB	TCMEB	—	—	—	TCMEA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TCMEA	コンペアマッチAレジスタ有効 （注1）（注2）	0：コンペアマッチAレジスタは無効 1：コンペアマッチAレジスタは有効	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	TCMEB	コンペアマッチBレジスタ有効 （注1）（注2）	0：コンペアマッチBレジスタは無効 1：コンペアマッチBレジスタは有効	R/W
b5	TOEB	AGTOBn出力許可（注1）（注2）（注3）	0：AGTOBn出力を禁止 1：AGTOBn出力を許可	R/W
b6	TOPOLB	AGTOBn極性選択（注1）（注2）（注3）	0：AGTOBn出力をLowで開始 1：AGTOBn出力をHighで開始	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　カウント動作中は、AGTCMSR レジスタを書き換えないでください。AGTCMSR レジスタは、AGTCR レジスタの TSTART および TCSTF ビットが、どちらも 0（カウント停止）の場合にのみ書き換えてください。
注 2.　パルス幅測定モードまたはパルス周期測定モード時は、1 にしないでください。
注 3.　AGT1 では使用できません。

24.2.10 AGT 端子選択レジスタ（AGTIOSEL）

アドレス AGT0.AGTIOSEL 4008 400Fh, AGT1.AGTIOSEL 4008 410Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	TIES	—	—	SEL[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	SEL[1:0]	AGTIOn端子選択（注1）	b1 b0 0 0：下記端子以外はAGTIOnを選択 0 1：設定禁止 1 0：P402/AGTIOnを選択 P402/AGTIOnは入力専用です。出力することはできません。 1 1：設定禁止	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	TIES	AGTIOn入力許可	0：ソフトウェアスタンバイモード中、外部イベント入力を禁止 1：ソフトウェアスタンバイモード中、外部イベント入力を許可	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　端子機能選択レジスタを設定する必要があります。「20. I/O ポート」を参照してください。

AGTIOSEL レジスタは、ソフトウェアスタンバイモード時に AGTIOn を使用する場合、AGTIOn 端子を設定するためのレジスタです。AGTIOSEL レジスタは、8 ビットのメモリ操作命令によって設定できます。

SEL[1:0] ビット（AGTIOn 端子選択）

AGTIOn 端子の機能を選択します。

TIES ビット（AGTIOn 入力許可）

外部イベント入力を許可または禁止します。

24.3　動作説明

24.3.1　リロードレジスタおよびカウンタの書き換え動作

動作モードにかかわらず、リロードレジスタとカウンタへの書き換え動作のタイミングは、AGTCR レジスタの TSTART ビット値、および AGTCMSR レジスタの TCMEA または TCMEB ビット値によって異なります。TSTART ビットが 0（カウント停止）の場合、カウント値がリロードレジスタとカウンタに直接書き込まれます。TSTART ビットが 1（カウント開始）で、かつ TCMEA または TCMEB ビットが 0（コンペアマッチ A/B レジスタが無効）の場合、値がカウントソースと同期してリロードレジスタに書き込まれた後、次のカウントソースと同期してカウンタに書き込まれます。TSTART ビットが 1（カウント開始）で、かつ TCMEA または TCMEB ビットが 1（コンペアマッチ A/B レジスタが有効）の場合、値がカウントソースと同期してリロードレジスタに書き込まれた後、カウンタのアンダーフローと同期してカウンタに書き込まれます。

TSTART ビット値と TCMEA または TCMEB ビット値による書き換え動作のタイミングを図 24.2 および図 24.3 に示します。

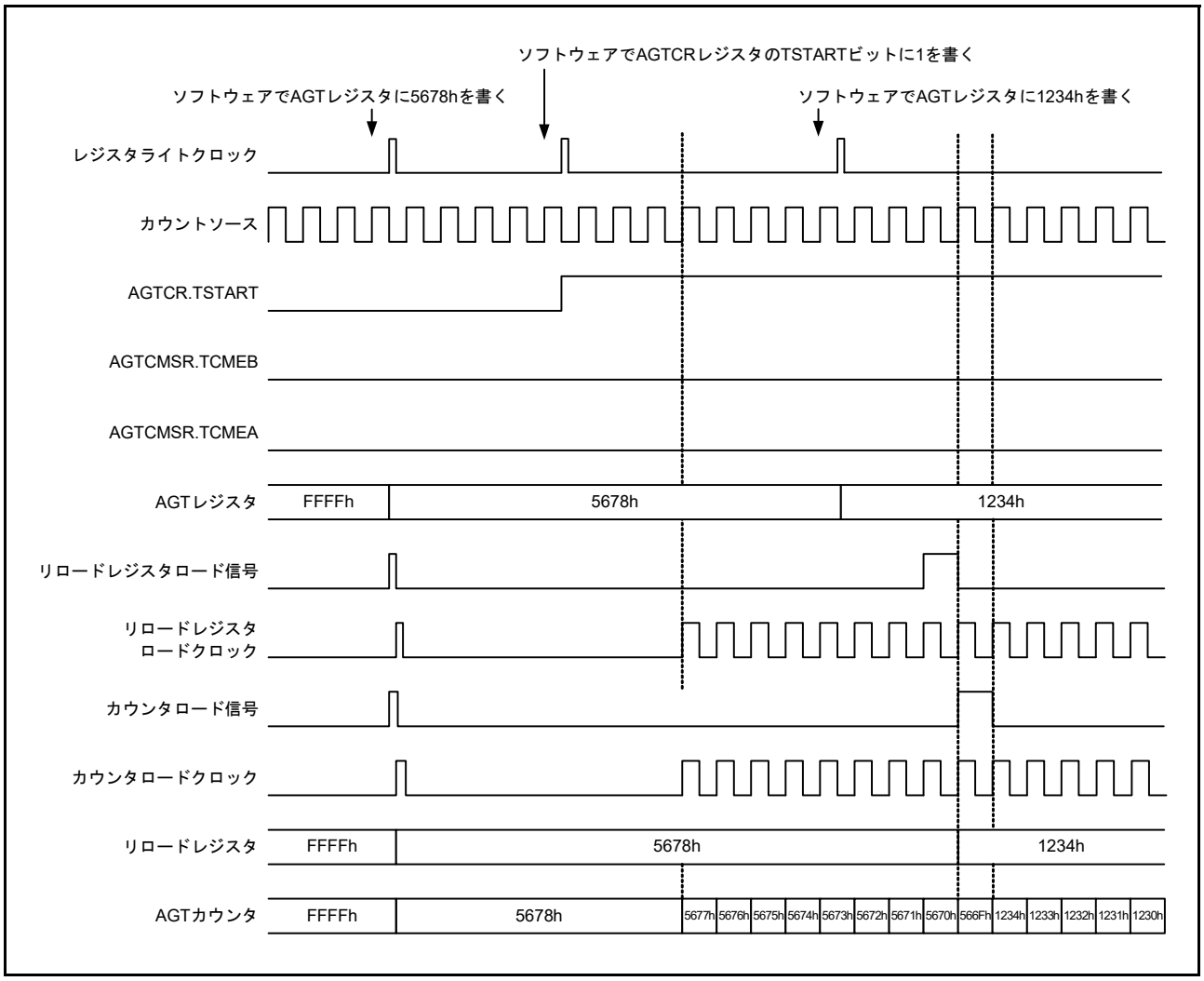


図 24.2　TSTART ビット値および TCMEA または TCMEB ビット値による書き換え動作のタイミング（コンペアマッチ A レジスタまたはコンペアマッチ B レジスタが無効の場合）

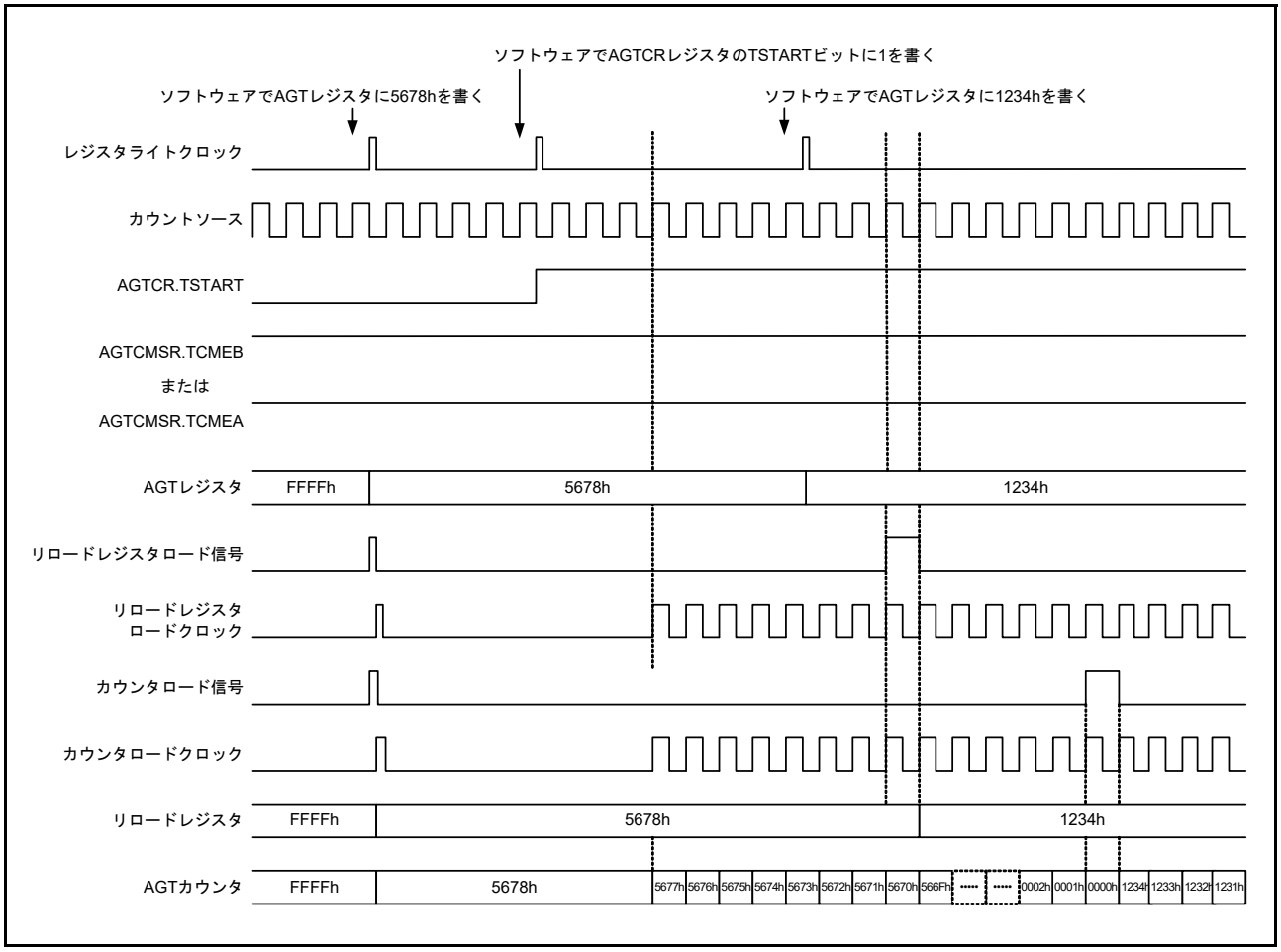


図 24.3 TSTART ビット値および TCMEA または TCMEB ビット値による書き換え動作のタイミング（コンペアマッチ A レジスタまたはコンペアマッチ B レジスタが有効の場合）

24.3.2　リロードレジスタおよびコンペアレジスタ A/B の書き換え動作

動作モードにかかわらず、コンペアレジスタ A/B への書き換え動作のタイミングは、AGTCR レジスタの TSTART ビット値によって異なります。TSTART ビットが 0（カウント停止）の場合、カウント値がリロードレジスタとコンペアレジスタ A/B に直接書き込まれます。TSTART ビットが 1（カウント開始）の場合、値がカウントソースと同期してリロードレジスタに書き込まれた後、カウンタのアンダーフローと同期してコンペアレジスタに書き込まれます。

TSTART ビット値によるコンペアレジスタ A への書き換え動作のタイミングを図 24.4 に示します。コンペアレジスタ B の場合もコンペアレジスタ A と同じです。

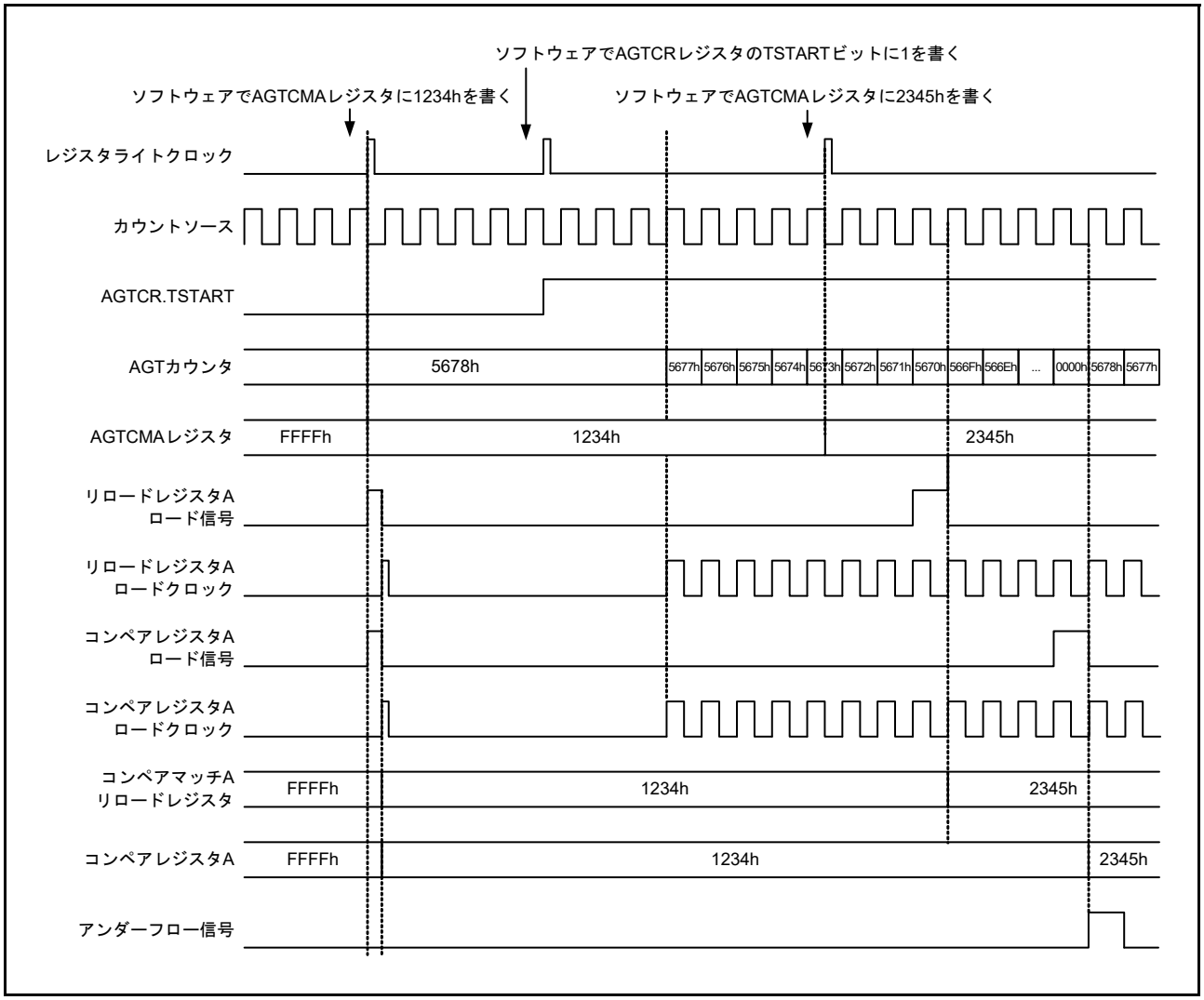


図 24.4　　コンペアレジスタ A の TSTART ビット値による書き換え動作のタイミング

24.3.3　タイマモード

このモードでは、AGT カウンタは AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットで選択したカウントソースによってデクリメントします。タイマモードでは、カウント値がカウントソースの立ち上がりエッジごとに 1 ずつデクリメントします。カウント値が 0000h に達して、次のカウントソースが入力されると、アンダーフローが発生して割り込み要求が生成されます。

タイマモードでの動作例を図 24.5 に示します。

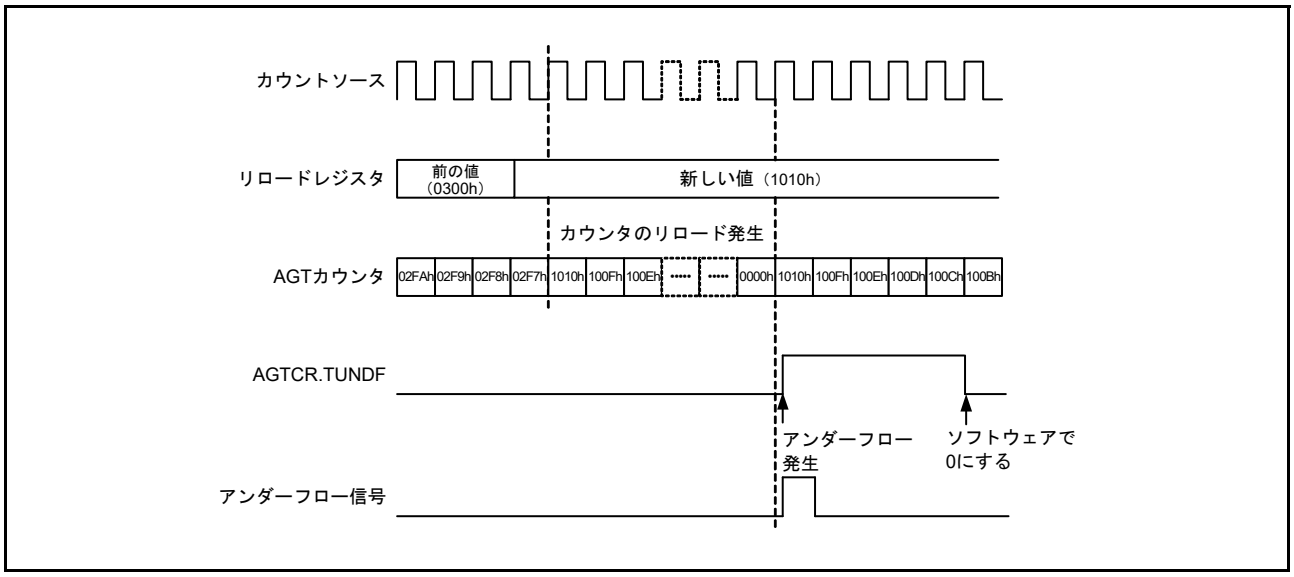


図 24.5　タイマモードでの動作例

24.3.4　パルス出力モード

このモードでは、カウンタは AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットで選択したカウントソースによってデクリメントし、アンダーフローが発生するたびに AGTIOn および AGTOn 端子の出力レベルは反転します。

パルス出力モードでは、カウント値がカウントソースの立ち上がりエッジごとに 1 ずつデクリメントします。カウント値が 0000h に達して、次のカウントソースが入力されると、アンダーフローが発生して割り込み要求が生成されます。さらに、AGTIOn および AGTOn 端子からパルスを出力できます。その出力レベルは、アンダーフローが発生するたびに反転します。AGTOn 端子からのパルス出力は、AGTIOC レジスタの TOE ビットで停止できます。出力レベルは、AGTIOC レジスタの TEDGSEL ビットで選択できます。

パルス出力モードでの動作例を図 24.6 に示します。

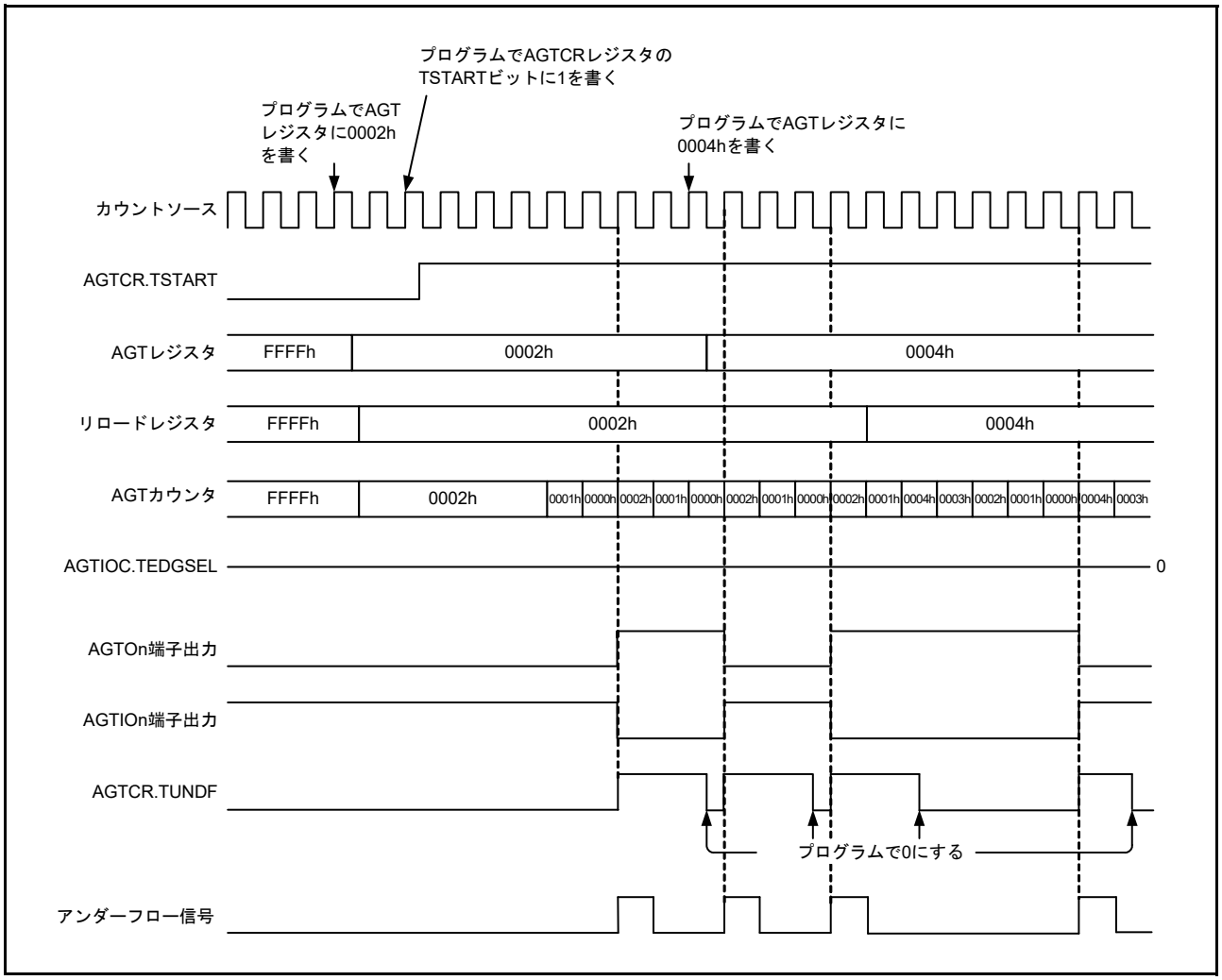


図 24.6　　パルス出力モードでの動作例

24.3.5 イベントカウンタモード

このモードでは、カウンタは AGTIOn 端子への外部イベント信号入力によってデクリメントします。イベントをカウントする期間は、AGTIOC レジスタの TIOGT[1:0] ビットと AGTISR レジスタによってさまざまな設定が可能です。さらに、AGTIOC レジスタの TIPF[1:0] ビットによって、AGTIOn 入力用のフィルタ機能を指定できます。イベントカウンタモードでも、AGTOn 端子からトグル出力が可能です。

イベントカウンタモードでの動作例を図 24.7 に示します。

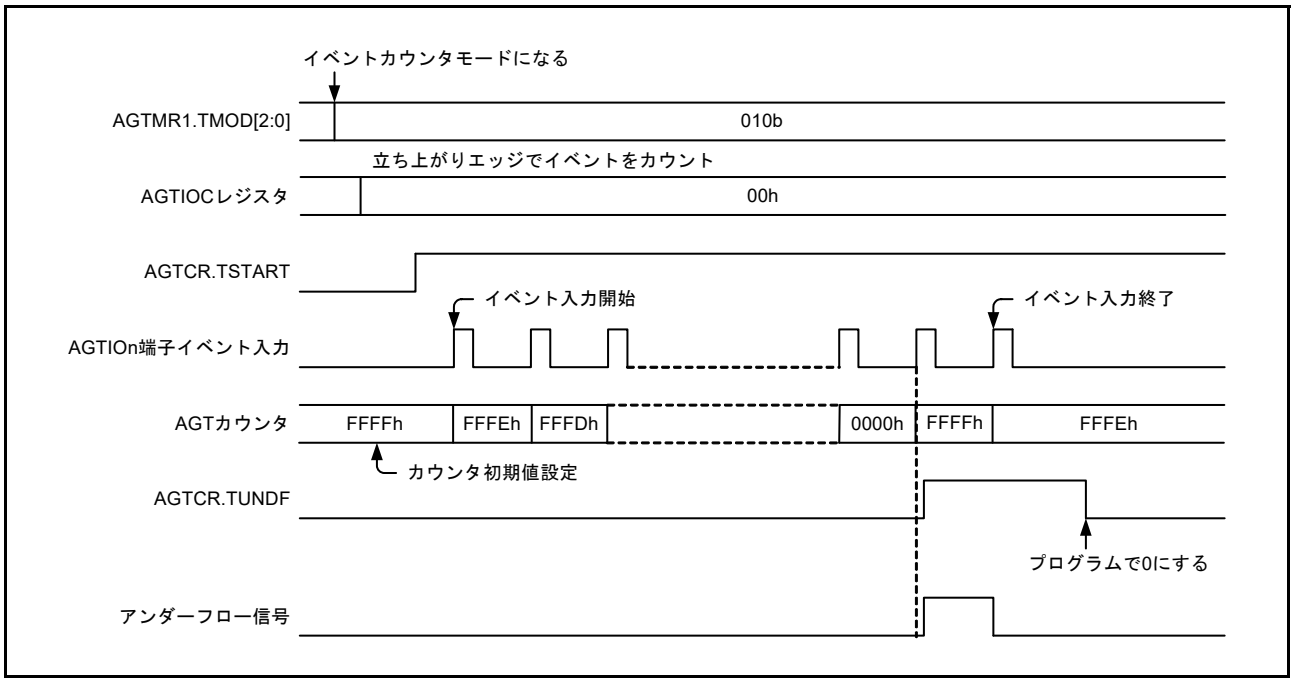
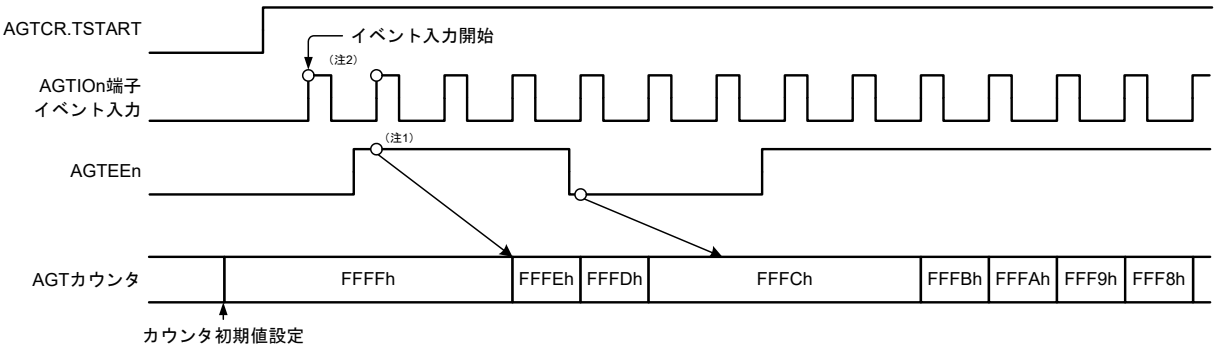


図 24.7 イベントカウンタモードでの動作例 1

イベントカウンタモード時に、指定された期間にイベントがカウントされるように（AGTIOC レジスタの TIOGT[1:0] ビットを 01b に設定）した場合の動作例を図 24.8 に示します。



注1.　同期を制御するため、カウント動作に影響が出るまでにカウントソースで2サイクル分の遅延が発生します。また、AGTEEnとサンプリングクロックの位相差により、カウント開始のタイミングが1サイクル分ずれることがあります。

注2.　カウントが停止する前の状態によっては、カウント開始直後にカウントソースで2サイクル分のカウント動作を実行できる状態となります。
カウント開始直後の2サイクル分のカウント動作を無効にするには、AGTCR.TSTOPビットに1を設定して内部回路を初期化した後、カウント動作を開始する前に動作設定を完了してください。

図 24.8　　イベントカウンタモードでの動作例 2

24.3.6　パルス幅測定モード

このモードでは、AGTIOn 端子に入力される外部信号のパルス幅を測定します。

AGTIOC レジスタの TEDGSEL ビットで指定したレベルが AGTIOn 端子に入力されると、カウンタは AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットで選択したカウントソースによってデクリメントします。指定した AGTIOn 端子レベルが終了すると、カウンタは停止して、AGTCR レジスタの TEDGF ビットが 1（アクティブエッジ受信）になり、割り込み要求が発生します。カウンタの停止中にカウント値を読み込むことで、パルス幅データが測定されます。また、測定中にカウンタがアンダーフローすると、AGTCR レジスタの TUNDF ビットが 1 になり、割り込み要求が発生します。

パルス幅測定モードでの動作例を図 24.9 に示します。

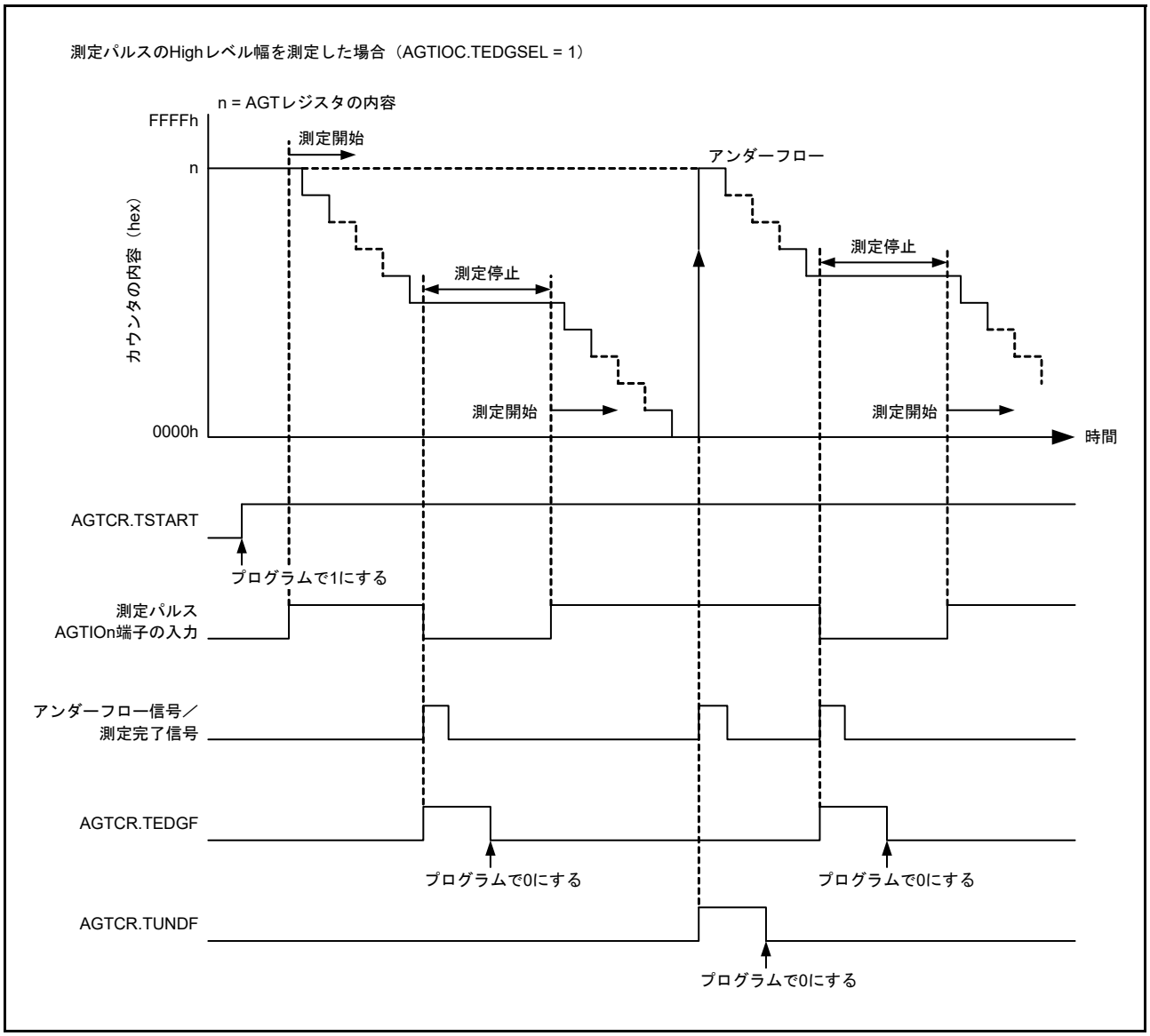


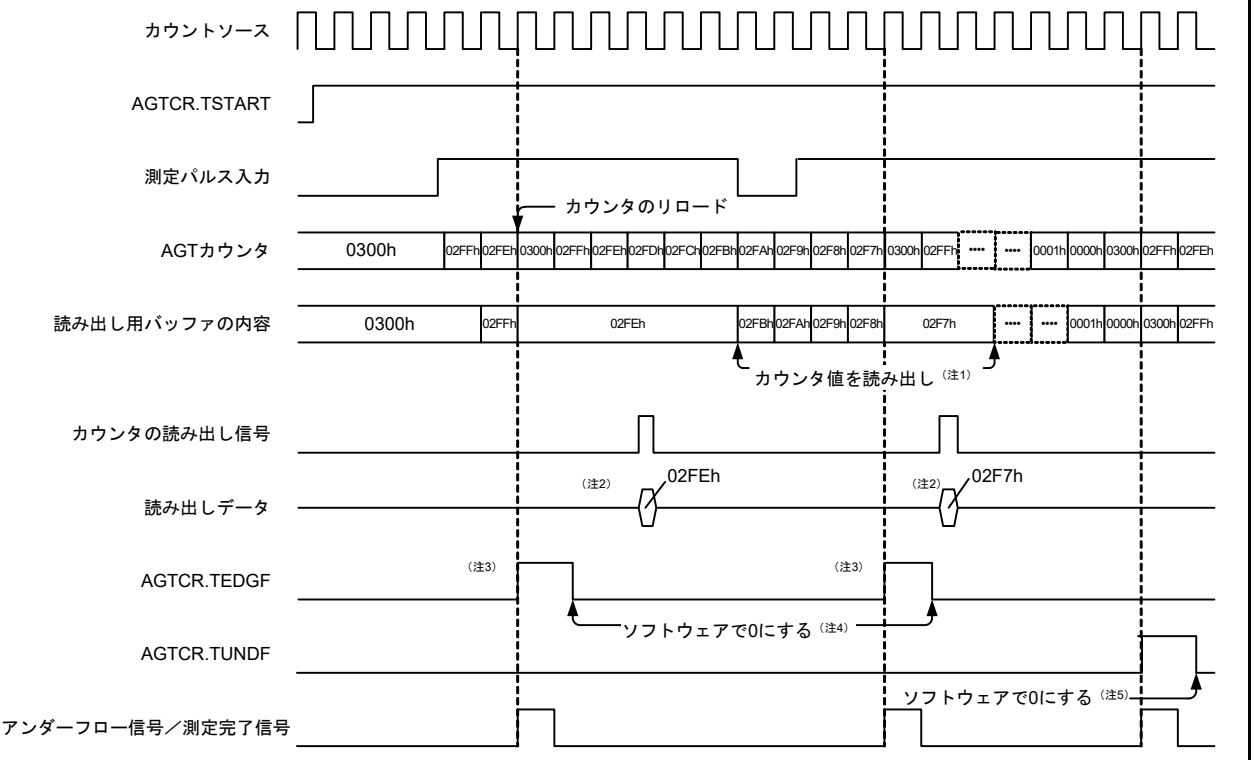
図 24.9　パルス幅測定モードでの動作例

24.3.7　パルス周期測定モード

このモードでは、AGTIOn 端子に入力される外部信号のパルス周期を測定します。カウンタは AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットで選択したカウントソースによってデクリメントします。AGTIOC レジスタの TEDGSEL ビットで指定した周期のパルスが AGTIOn 端子に入力されると、カウント値が、カウントソースの立ち上がりエッジで読み出しバッファに転送されます。リロードレジスタの値は、次の立ち上がりエッジでカウンタにロードされます。同時に、AGTCR レジスタの TEDGF ビットが 1（アクティブエッジ受信）になり、割り込み要求が発生します。この時点で読み出しバッファ（AGT レジスタ）が読み出され、リロード値（24.4.5　イベント番号、パルス幅、およびパルス周期の計算方法を参照）との差が入力パルスの周期データとなります。この周期データは、読み出しバッファが読み出されるまで保持されます。カウンタがアンダーフローすると、AGTCR レジスタの TUNDF ビットが 1 になり、割り込み要求が発生します。

パルス周期測定モードでの動作例を図 24.10 に示します。

カウントソース周期の 2 倍よりも長い周期を持つ入力パルスのみが測定されます。また、Low 幅と High 幅は、両方ともカウントソースの周期より長くなければいけません。これらの条件よりも短いパルス周期が入力されると、その入力は無視される場合があります。



この例は、AGT レジスタの初期値が 0300h のとき、AGTIOC レジスタの TEDGSEL ビットが 0 のとき、および計測パルスの 1 つの立ち上がりエッジから次の立ち上がりエッジまでの期間が測定されるときに該当します。

注1.　AGT レジスタの読み出しは、TEDGF ビットが 1（アクティブエッジ受信）になってから、次のアクティブエッジが入力されるまでの期間に行われなければなりません。読み出しバッファの内容は、AGT レジスタが読み出されるまで保持されます。アクティブエッジの入力前に読み出されない場合、前回の期間の測定結果が保持されます。
注2.　AGT レジスタがパルス周期測定モードで読み出されたとき、読み出しバッファの内容が読み出されます。
注3.　測定パルスのアクティブエッジおよび外部パルスの設定エッジが入力されたとき、AGTCR レジスタの TEDGF ビットは 1（アクティブエッジ受信）になります。
注4.　ソフトウェアによって 0 にするには、8 ビットのメモリ操作命令によって AGTCR レジスタの TEDGF ビットに 0 を書き込んでください。
注5.　ソフトウェアによって 0 にするには、8 ビットのメモリ操作命令によって AGTCR レジスタの TUNDF ビットに 0 を書き込んでください。

図 24.10　パルス周期測定モードでの動作例

24.3.8 コンペアマッチ機能

この機能は、AGTCMA または AGTCMB レジスタの内容と AGT レジスタの内容の一致（コンペアマッチ）を検出します。この機能は、AGTCMSR レジスタの TCMEA または TCMEB ビットが 1（コンペアマッチ A/B レジスタが有効）の場合に有効となります。カウンタは AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビットで選択したカウントソースによってデクリメントします。AGT の値と AGTCMA または AGTCMB の値が一致した場合、AGTCR レジスタの TCMAF/TCMBF ビットが 1（一致）になり、割り込み要求が発生します。

コンペアマッチ機能が有効の場合、リロードレジスタとカウンタでは、書き替え動作のタイミングは異なります。詳細は、24.3.1 リロードレジスタおよびカウンタの書き換え動作を参照してください。また、AGTOB0 端子の出力レベルは、一致およびアンダーフローによって反転します。出力レベルは、AGTCMSR レジスタの TOPOLB ビットで選択できます。

コンペアマッチモードでの動作例を図 24.11 に示します。

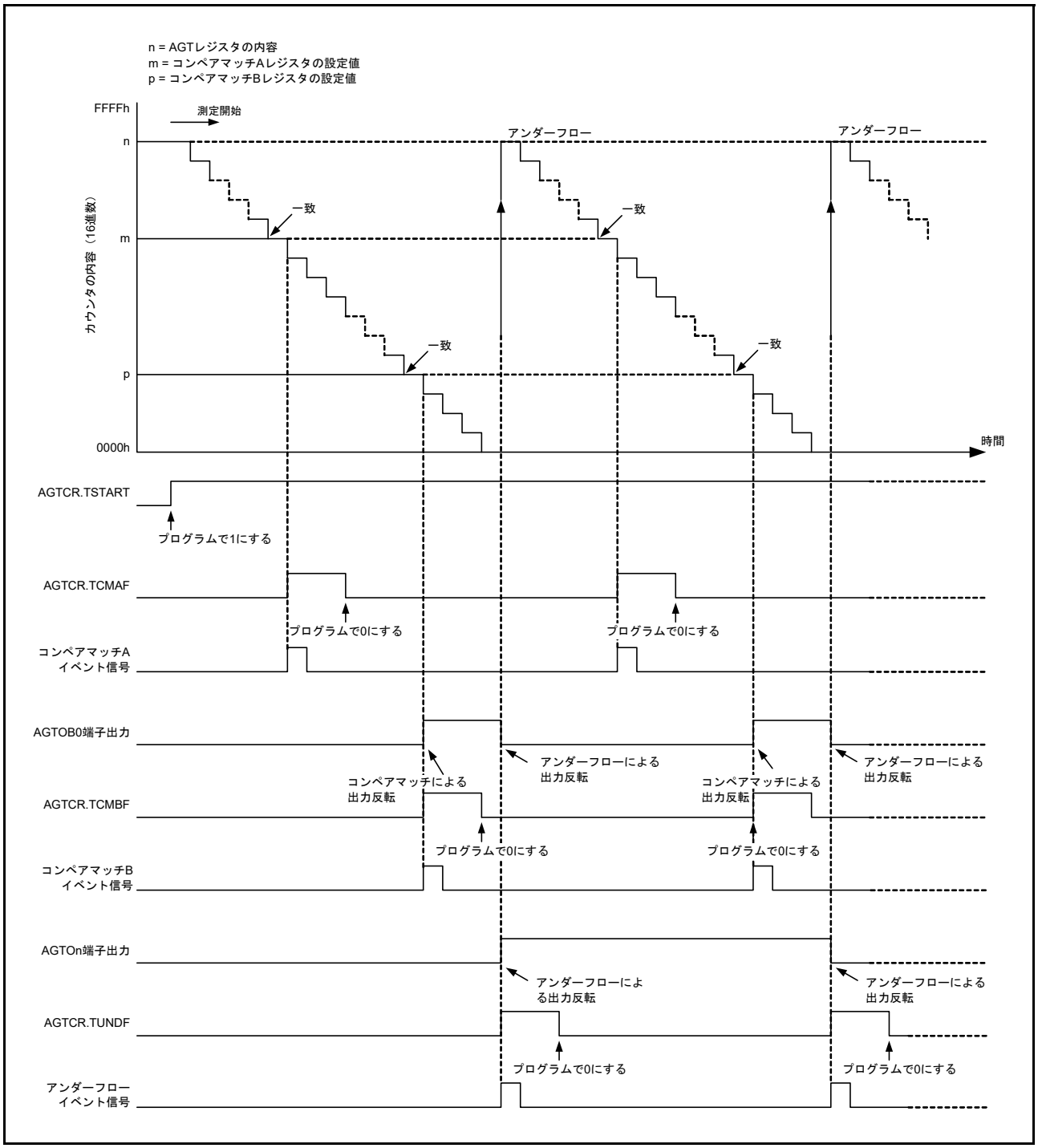


図 24.11　コンペアマッチモードでの動作例（TOPOLB = 0 の場合）

24.3.9　各モードの出力設定

各モードでの AGTOn、AGTIOn、および AGTOB0 端子の状態を表 24.5 ～表 24.7 に示します。

表 24.5　AGTOn端子の設定

動作モード	AGTIOC レジスタ		AGTOn端子出力
	TOE ビット	TEDGSEL ビット	
全モード	1	1	反転出力
		0	通常出力
	0	0または1	出力禁止

表 24.6　AGTIO0端子の設定

動作モード	AGTIOC レジスタ	AGTIOn端子入出力
	TEDGSEL ビット	
タイマモード	0または1	入力（使用しない）
パルス出力モード	1	通常出力
	0	反転出力
イベントカウンタモード	0または1	入力
パルス幅測定モード		
パルス周期測定モード		

表 24.7　AGTOB0端子の設定

動作モード	AGTCMSR レジスタ		AGTOB0端子出力
	TOEB ビット	TOPOLB ビット	
タイマモード	1	1	反転出力
		0	通常出力
	0	0または1	出力禁止（使用しない）
パルス出力モード	1	1	反転出力
		0	通常出力
	0	0または1	出力禁止（使用しない）
イベントカウンタモード	1	1	反転出力
		0	通常出力
	0	0または1	出力禁止（使用しない）
パルス幅測定モード	0	0	禁止
パルス周期測定モード			

24.3.10　スタンバイモード

AGT はソフトウェアスタンバイモードでも動作可能です。カウント開始（TSTART = 1 および TCSTF = 1）の状態で、ソフトウェアスタンバイモードに設定してください。

ソフトウェアスタンバイモードで使用可能な設定を表 24.8 および表 24.9 に示します。

表 24.8　ソフトウェアスタンバイモードで使用可能な設定（AGT0）

動作モード	AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビット	動作クロック	CPU の回復要因
タイマモード	100b または 110b	AGTLCLK または AGTSCLK	—
パルス出力モード	100b または 110b	AGTLCLK または AGTSCLK	—
イベントカウンタモード	—（無効）	AGTIOn	—
パルス幅測定モード	100b または 110b	AGTLCLK または AGTSCLK	—
パルス周期測定モード	100b または 110b	AGTLCLK または AGTSCLK	—

表 24.9　ソフトウェアスタンバイモードで使用可能な設定（AGT1）

動作モード	AGTMR1 レジスタの TCK[2:0] ビット	動作クロック	CPU の回復要因
タイマモード	100b、110b、または 101b（注1）	AGTLCLK、AGTSCLK、または AGT0 アンダーフロー	• アンダーフロー • コンペアマッチ A/B
パルス出力モード	100b、110b、または 101b（注1）	AGTLCLK、AGTSCLK、または AGT0 アンダーフロー	• アンダーフロー • コンペアマッチ A/B
イベントカウンタモード	—（無効）	AGTIOn	• アンダーフロー • コンペアマッチ A/B
パルス幅測定モード	100b、110b、または 101b（注1）	AGTLCLK、AGTSCLK、または AGT0 アンダーフロー	• アンダーフロー • アクティブエッジ
パルス周期測定モード	100b、110b、または 101b（注1）	AGTLCLK、AGTSCLK、または AGT0 アンダーフロー	• アンダーフロー • アクティブエッジ

注 .　ソフトウェアスタンバイモードの解除は AGT1 のみです。
注 1.　AGT0 が表 24.8 の状態で動作している場合のみ。

24.3.11　割り込み要因

AGT には、表 24.10 に示すように、3 種類の割り込み要因があります。

表 24.10　AGT の割り込み要因

名称	割り込み要因	DMAC/DTC の起動
AGTn_AGTI	• カウンタがアンダーフローしたとき • 外部入力（AGTIOn）のアクティブ幅の測定がパルス幅測定モードで終了したとき • 外部入力（AGTIOn）の設定エッジがパルス周期測定モードで入力されたとき	可能
AGTn_AGTCMAI	AGT と AGTCMA の値が一致したとき	可能
AGTn_AGTCMBI	AGT と AGTCMB の値が一致したとき	可能

注 .　チャネル番号（n = 0, 1）

24.3.12　ELC へのイベント信号出力

AGT はイベントリンクコントローラ（ELC）を用いて、割り込み要求信号をイベント信号として使用することにより、指定したモジュールに対するリンク動作の実行が可能です。AGT は、コンペアマッチ A、コンペアマッチ B、およびアンダーフロー／測定完了信号をイベント信号として出力します。詳細は、「19. イベントリンクコントローラ（ELC）」を参照してください。

24.4　使用上の注意事項

24.4.1　カウント動作の開始および停止制御

- イベントカウントモード以外に動作モード（表 24.1 参照）が設定されている場合、またはカウントソースが AGT0 アンダーフロー（TCK[2:0] = 101b）以外に設定されている場合
  - カウント停止中に AGTCR レジスタの TSTART ビットに 1（カウント開始）を書き込んでも、カウントソースの 3 サイクル中は、AGTCR レジスタの TCSTF ビットは 0（カウント停止）のままです。TCSTF ビットが 1（カウント実行中）になるまで、TCSTF ビット以外の AGT 関連レジスタ（注 1）にはアクセスしないでください
  - カウント動作中に TSTART ビットに 0（カウント停止）を書き込んでも、カウントソースの 3 サイクル中は、TCSTF ビットは 1 のままです。TCSTF ビットが 0 になったとき、カウントが停止します。TCSTF ビットが 0 になるまで、TCSTF ビット以外の AGT 関連レジスタ（注 1）にはアクセスしないでください
  - TSTART ビットを 0 から 1 に変更する前に、割り込みレジスタをクリアしてください。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください

注 1.　AGT 関連レジスタ：AGT、AGTCMA、AGTCMB、AGTCR、AGTMR1、AGTMR2、AGTIOC、AGTISR、および AGTCMSR

- イベントカウントモードに動作モード（表 24.1 参照）が設定されている場合、またはカウントソースが AGT0 アンダーフロー（TCK[2:0] = 101b）に設定されている場合
  - カウント停止中に AGTCR レジスタの TSTART ビットに 1（カウント開始）を書き込んでも、PCLKB の 2 サイクル中は、AGTCR レジスタの TCSTF ビットは 0（カウント停止）のままです。TCSTF ビットが 1（カウント実行中）になるまで、TCSTF ビット以外の AGT 関連レジスタ（注 1）にはアクセスしないでください
  - カウント動作中に TSTART ビットに 0（カウント停止）を書き込んでも、PCLKB の 2 サイクル中は、TCSTF ビットは 1 のままです。TCSTF ビットが 0 になったとき、カウントが停止します。TCSTF ビットが 0 になるまで、TCSTF ビット以外の AGT 関連レジスタ（注 1）にはアクセスしないでください
  - TSTART ビットを 0 から 1 に変更する前に、割り込みレジスタをクリアしてください。詳細は、「14. 割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください

注 1.　AGT 関連レジスタ：AGT、AGTCMA、AGTCMB、AGTCR、AGTMR1、AGTMR2、AGTIOC、AGTISR、および AGTCMSR

24.4.2 カウンタレジスタへのアクセス

AGTCR レジスタの TSTART および TCSTF ビットがともに 1（カウント開始）の場合、AGT レジスタへ連続して書き込むときの書き込み間隔には、カウントソースクロックで 3 サイクル以上の余裕が必要です。

24.4.3 モード変更時

AGT の動作モードに関連するレジスタ（AGTMR1、AGTMR2、AGTIOC、AGTISR、AGTCMSR、AGTIOC）は、TSTART および TCSTF ビットがともに 0（カウント停止）になって、カウントが停止した場合にのみ変更可能です。カウント動作中は、これらのレジスタを変更しないでください。

AGT の動作モードに関連するレジスタが変更されると、TEDGF、TUNDF、TCMAF、および TCMBF ビットの値は不定となります。カウントを開始する前に、以下のビットに 0 を書き込んでください。

- TEDGF（アクティブエッジ未受信）
- TUNDF（アンダーフローなし）
- TCMAF（不一致）
- TCMBF（不一致）

24.4.4 デジタルフィルタ

デジタルフィルタの使用時に、TIPF[1:0] ビットを設定した後、および AGTIOC レジスタの TEDGSEL ビットを変更した場合は、デジタルフィルタクロックの 5 サイクル中はタイマ動作を開始しないでください。

24.4.5 イベント番号、パルス幅、およびパルス周期の計算方法

- イベントカウントモードでは、イベント番号が次式で計算されます。
  イベント番号 = カウンタ［AGT レジスタ］の初期値 - アクティブイベント終了のカウンタ値
- パルス幅測定モードでは、パルス幅が次式で計算されます。
  パルス幅 = 測定停止のカウンタ値 - 次の測定停止のカウンタ値
- パルス周期測定モードでは、入力パルス周期が次式で計算されます。
  入力パルス周期 =（カウンタ［AGT レジスタ］の初期値 - 読み出しバッファの読み出し値）+ 1

24.4.6 TSTOP ビットで強制的にカウントを停止した場合

AGTCR レジスタの TSTOP ビットでカウンタを強制的に停止した後、カウントソースの 1 サイクル中は、下記の I/O レジスタにアクセスしないでください。

- AGT
- AGTCMA
- AGTCMB
- AGTCR
- AGTMR1
- AGTMR2

24.4.7 カウントソースとして AGT0 アンダーフローを選択した場合

カウントソースとして AGT のアンダーフロー信号を選択した場合、以下の手順に従って AGT を操作してください。

(1) 動作開始手順

1. AGT0 および AGT1 を設定します。
2. AGT1 のカウント動作を開始します。
3. AGT0 のカウント動作を開始します。

(2) 動作停止手順

1. AGT0 のカウント動作を停止します。
2. AGT1 のカウント動作を停止します。
3. AGT1 のカウントソースクロックを停止します（AGT1.AGTMR1.TCK[2:0] ビットに 000b を書き込みます）。

24.4.8 I/O レジスタのリセット

AGT の I/O レジスタは、リセットの種類によっては初期化されません。詳細は、「6. リセット」を参照してください。

24.4.9 カウントソースとして PCLKB、PCLKB/8、または PCLKB/2 を選択した場合

リセット発生後、AGT の動作は保証されません。AGT 関連レジスタを再設定してください。

24.4.10 カウントソースとして AGTLCLK または AGTSCLK を選択した場合

MSTPCRD レジスタの MSTPD2 ビットは、AGT1 レジスタにアクセスする場合を除き、1 にする必要があります。MSTPCRD レジスタの MSTPD3 ビットは、AGT0 レジスタにアクセスする場合を除き、1 にする必要があります。MSTPD2 または MSTPD3 ビットが 0 の状態でリセットが発生した場合、AGT1 または AGT0 の動作は保証されません。AGT 関連レジスタを再設定してください。

24.4.11 クロックソースを切り替える場合

SCKCR.CKSEL[2:0] を変更することによりクロックソースを切り替える場合、セレクタからのクロック出力は、切り替えたクロックで 4 サイクル間停止します。したがって、外部イベント入力として AGTIOn、AGTEEn、またはこれら両方の入力を使用する場合、クロックソースを切り替えないでください。もし外部イベント入力使用中にクロックソースを切り替える場合は、切り替えたソースクロックサイクルで 4 サイクル分入力パルス幅を拡張してください。

25.　リアルタイムクロック（RTC）

25.1　概要

RTC には、カレンダカウントモードとバイナリカウントモードの 2 種類のカウントモードがあり、レジスタ設定を切り替えることで使用します。カレンダカウントモードでは、RTC は 2000 年から 2099 年まで 100 年間のカレンダを保持し、うるう年の日付を自動補正します。バイナリカウントモードでは、RTC は秒をカウントし、その情報をシリアル値として保持します。バイナリカウントモードは、西暦以外のカレンダに利用可能です。

時計カウンタのカウントソースとして、サブクロック発振器または LOCO を選択できます。RTC は、カウントソースをプリスケーラで分周して得られた 128Hz クロックを使用します。年、月、日、曜日、午前／午後（12 時間モード時）、時、分、秒、または 32 ビットバイナリを 1/128 秒単位でカウントします。

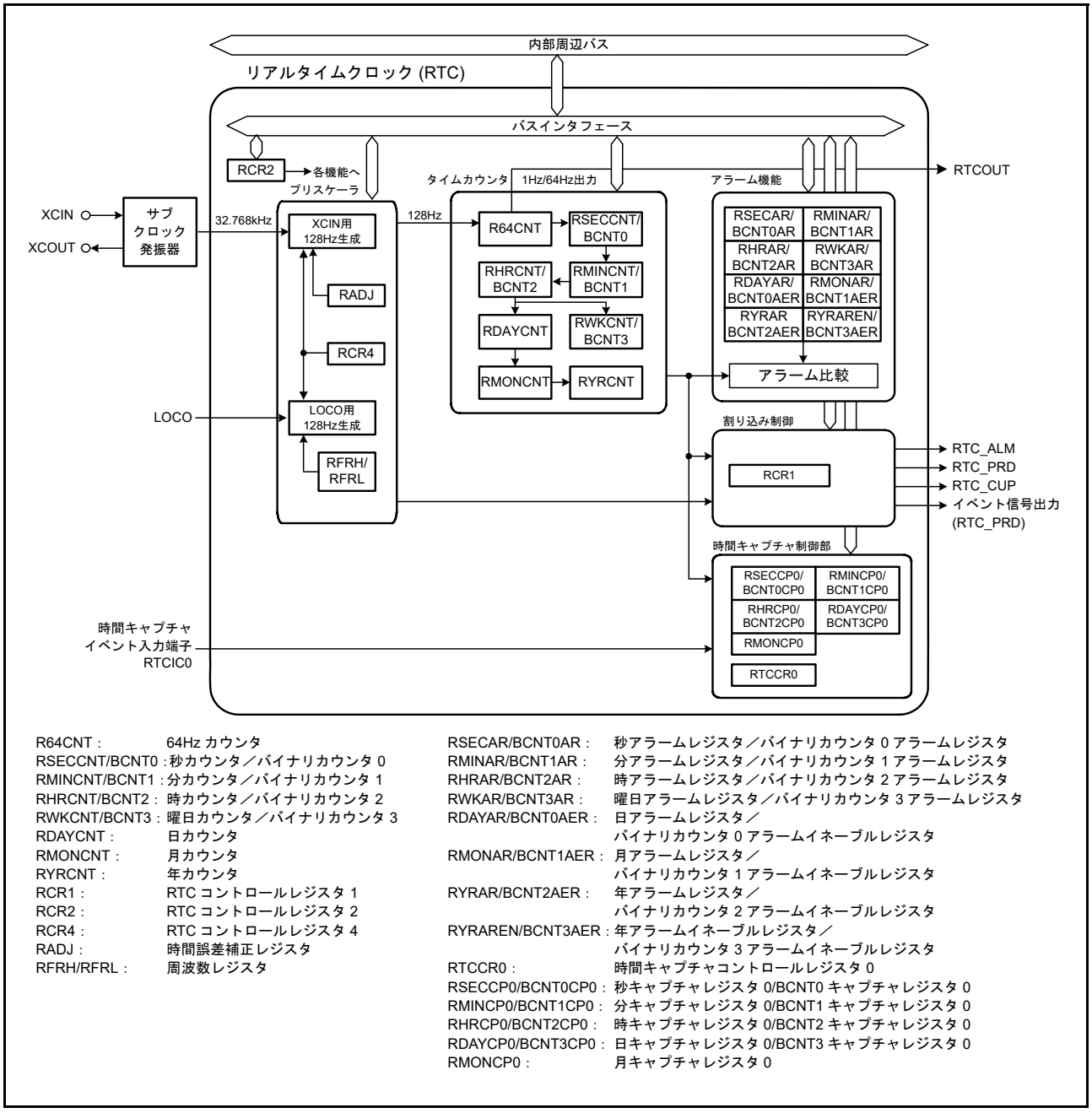
注 .　コールドスタート後は、VBATT 機能を使用するか否かにかかわらず、VBTCR1.BPWSWSTP ビットを 1 にしてから、RTC レジスタにアクセスしてください。詳細は、「12.　バッテリバックアップ機能」の図 12.2 VBTCR1.BPWSWSTP ビットの設定フローを参照してください。

表 25.1 に RTC の仕様を、図 25.1 に RTC のブロック図を、表 25.2 に RTC の入出力端子を示します。

表 25.1　RTCの仕様

項目	内容
カウントモード	カレンダカウントモード／バイナリカウントモード
カウントソース（注1）	サブクロック（XCIN）またはLOCO
時計／カレンダ機能	• カレンダカウントモード 年、月、日、曜日、時、分、秒をカウント、BCD表示 12時間／24時間モード切り替え機能 30秒調整機能（30秒未満は00秒に切り捨て、30秒以上は1分に切り上げ） うるう年自動補正機能 • バイナリカウントモード 秒を32ビットでカウント、バイナリ表示 • 両モード共通 スタート／ストップ機能 秒以下の桁のバイナリ表示（1Hz、2Hz、4Hz、8Hz、16Hz、32Hz、64Hz） 時計誤差補正機能 クロック（1Hz/64Hz）出力
割り込み	• アラーム割り込み（RTC_ALM） アラーム割り込み条件として、比較対象を下記から選択可能 カレンダカウントモード：年、月、日、曜日、時、分、秒 バイナリカウントモード：32ビットバイナリカウンタの各ビット • 周期割り込み（RTC_PRD） 割り込み周期として、2秒、1秒、1/2秒、1/4秒、1/8秒、1/16秒、1/32秒、1/64秒、1/128秒、1/256秒から選択可能 • 桁上げ割り込み（RTC_CUP） 次のいずれかの条件で割り込み発生 • 64Hzカウンタから秒カウンタへ桁上げが生じたとき • 64Hzカウンタの変化とR64CNTレジスタの読み出しタイミングが重なったとき • アラーム割り込みまたは周期割り込みによる、ソフトウェアスタンバイモードからの復帰が可能
時間キャプチャ機能	• 時間キャプチャイベント入力端子のエッジ検出時に、時間のキャプチャが可能 イベント入力ごとに、月、日、時、分、および秒をキャプチャ、または32ビットバイナリカウンタ値をキャプチャ
イベントリンク機能	周期イベント出力（RTC_PRD）

注 1.　周辺モジュールクロック（PCLKB）周波数≧カウントソースクロック周波数となるように設定してください。



R64CNT： 64Hz カウンタ
RSECCNT/BCNT0：秒カウンタ／バイナリカウンタ 0
RMINCNT/BCNT1：分カウンタ／バイナリカウンタ 1
RHRCNT/BCNT2： 時カウンタ／バイナリカウンタ 2
RWKCNT/BCNT3：曜日カウンタ／バイナリカウンタ 3
RDAYCNT： 日カウンタ
RMONCNT： 月カウンタ
RYRCNT： 年カウンタ
RCR1： RTC コントロールレジスタ 1
RCR2： RTC コントロールレジスタ 2
RCR4： RTC コントロールレジスタ 4
RADJ： 時間誤差補正レジスタ
RFRH/RFRL： 周波数レジスタ

RSECAR/BCNT0AR： 秒アラームレジスタ／バイナリカウンタ 0 アラームレジスタ
RMINAR/BCNT1AR： 分アラームレジスタ／バイナリカウンタ 1 アラームレジスタ
RHRAR/BCNT2AR： 時アラームレジスタ／バイナリカウンタ 2 アラームレジスタ
RWKAR/BCNT3AR： 曜日アラームレジスタ／バイナリカウンタ 3 アラームレジスタ
RDAYAR/BCNT0AER： 日アラームレジスタ／
バイナリカウンタ 0 アラームイネーブルレジスタ
RMONAR/BCNT1AER： 月アラームレジスタ／
バイナリカウンタ 1 アラームイネーブルレジスタ
RYRAR/BCNT2AER： 年アラームレジスタ／
バイナリカウンタ 2 アラームイネーブルレジスタ
RYRAREN/BCNT3AER：年アラームイネーブルレジスタ／
バイナリカウンタ 3 アラームイネーブルレジスタ
RTCCR0： 時間キャプチャコントロールレジスタ 0
RSECCP0/BCNT0CP0：秒キャプチャレジスタ 0/BCNT0 キャプチャレジスタ 0
RMINCP0/BCNT1CP0：分キャプチャレジスタ 0/BCNT1 キャプチャレジスタ 0
RHRCP0/BCNT2CP0： 時キャプチャレジスタ 0/BCNT2 キャプチャレジスタ 0
RDAYCP0/BCNT3CP0：日キャプチャレジスタ 0/BCNT3 キャプチャレジスタ 0
RMONCP0： 月キャプチャレジスタ 0

図 25.1　　RTC のブロック図

表 25.2　　RTC 端子の構成

端子名	入出力	機能
XCIN	入力	32.768kHzの水晶振動子を接続します
XCOUT	出力	
RTCOUT	出力	1Hz/64Hz波形出力に使用します
RTCIC0	入力	時間キャプチャイベント入力端子です

25.2　レジスタの説明

RTC レジスタの書き込み／読み出しは、25.6.5　レジスタの書き込み／読み出し時の注意事項に従って行ってください。

RTC レジスタのビット一覧で、リセット後の値が x（不定）になっているビットは、リセットで初期化されません。カウント動作時（たとえば RCR2.START ビットが 1 のとき）に、RTC がリセット状態または低消費電力状態へ遷移した場合、年／月／曜日／日／時／分／秒／ 64Hz カウンタは動作を継続します。

注 .　レジスタへの書き込み中にリセットが発生すると、レジスタ値が破壊される可能性があります。また、どのレジスタに対しても、その設定直後は、ソフトウェアスタンバイモードへ遷移しないでください。詳細は、25.6.4　レジスタ設定後の低消費電力モードへの遷移についてを参照してください。

25.2.1　64Hz カウンタ（R64CNT）

アドレス　RTC.R64CNT 4004 4000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	F1HZ	F2HZ	F4HZ	F8HZ	F16HZ	F32HZ	F64HZ
リセット後の値	0	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	F64HZ	64Hz	秒以下の桁の 1Hz～64Hz の状態を示します。	R
b1	F32HZ	32Hz		R
b2	F16HZ	16Hz		R
b3	F8HZ	8Hz		R
b4	F4HZ	4Hz		R
b5	F2HZ	2Hz		R
b6	F1HZ	1Hz		R
b7	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。	R

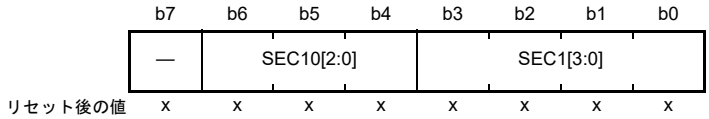
R64CNT カウンタは、カレンダカウントモード／バイナリカウントモード共通で使用します。64Hz カウンタ（R64CNT）は、128Hz クロックでアップカウントするカウンタで、秒周期を生成します。このカウンタを読み出すことで、秒以下の領域の状態を確認できます。

このカウンタは、RTC ソフトウェアリセットまたは 30 秒調整によって 00h になります。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.2　秒カウンタ（RSECCNT）／バイナリカウンタ 0（BCNT0）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RSECCNT 4004 4002h



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	SEC1[3:0]	1秒カウント	1秒ごとに0から9までカウントします。桁上げが生じると、十の位が+1されます。	R/W
b6-b4	SEC10[2:0]	10秒カウント	0から5までカウントして、60秒カウントを行います。	R/W
b7	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W

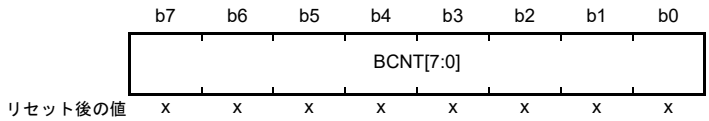
RSECCNT カウンタは、BCD コード化された秒の値を設定およびカウントします。64Hz カウンタでの 1 秒ごとの桁上げによってカウントします。

設定可能範囲は 10 進で 00 ～ 59 です。これ以外の値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。

このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT0 4004 4002h



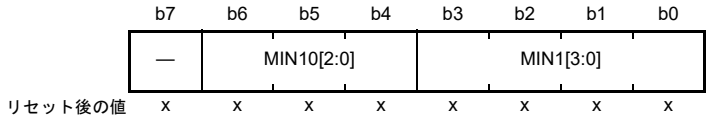
x：不定

BCNT0 は、書き込み／読み出し可能な 32 ビットバイナリカウンタの b7 ～ b0 です。32 ビットバイナリカウンタは、64Hz カウンタでの 1 秒ごとの桁上げによってカウント動作を行います。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.3　分カウンタ（RMINCNT）／バイナリカウンタ 1（BCNT1）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RMINCNT 4004 4004h



x：不定

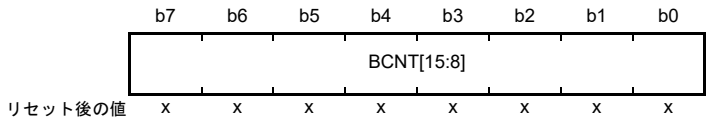
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MIN1[3:0]	1分カウント	1分ごとに0から9までカウントします。桁上げが生じると、十の位が+1されます。	R/W
b6-b4	MIN10[2:0]	10分カウント	0から5までカウントして、60分カウントを行います。	R/W
b7	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W

RMINCNT カウンタは、BCD コード化された分の値を設定およびカウントします。秒カウンタでの 1 分ごとの桁上げによってカウントします。

設定可能範囲は 10 進（BCD）で 00 ～ 59 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT1 4004 4004h



x：不定

BCNT1 カウンタは、書き込み／読み出し可能な 32 ビットバイナリカウンタの b15 ～ b8 です。32 ビットバイナリカウンタは、64Hz カウンタでの 1 秒ごとの桁上げによってカウント動作を行います。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.4　時カウンタ（RHRCNT）／バイナリカウンタ 2（BCNT2）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RHRCNT 4004 4006h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	PM	HR10[1:0]		HR1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	HR1[3:0]	1時間カウント	1時間に1回、0から9までカウントします。桁上げが生じると、十の位が+1されます。	R/W
b5-b4	HR10[1:0]	10時間カウント	一の位からの桁上げごとに1回、0から2までカウントします。	R/W
b6	PM	PM	時計カウンタのAM/PMの設定 0：午前 1：午後	R/W
b7	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W

RHRCNT カウンタは、BCD コード化された時間の値を設定およびカウントします。分カウンタでの 1 時間ごとの桁上げによってカウントします。設定可能範囲は、時間モードビット（RCR2.HR24）の設定値に応じて以下のように異なります。

- RCR2.HR24 ビットが 0 の場合、00 ～ 11（BCD）
- RCR2.HR24 ビットが 1 の場合、00 ～ 23（BCD）

この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。PM ビットは、RCR2.HR24 ビットが 0 の場合にのみ有効です。それ以外では、PM ビットの設定値は無効です。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT2 4004 4006h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BCNT[23:16]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT2 カウンタは、書き込み／読み出し可能な 32 ビットバイナリカウンタの b23 ～ b16 です。32 ビットバイナリカウンタは、64Hz カウンタでの 1 秒ごとの桁上げによってカウント動作を行います。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.5　曜日カウンタ（RWKCNT）／バイナリカウンタ 3（BCNT3）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RWKCNT 4004 4008h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	DAYW[2:0]		
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	DAYW[2:0]	曜日カウント	b2 b1 b0 0 0 0：日 0 0 1：月 0 1 0：火 0 1 1：水 1 0 0：木 1 0 1：金 1 1 0：土 1 1 1：設定禁止	R/W
b7-b3	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W

RWKCNT カウンタは、コード化された曜日の値を設定およびカウントします。時カウンタでの 1 日ごとの桁上げによってカウントします。設定可能範囲は 0 ～ 6 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT3 4004 4008h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BCNT[31:24]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT3 は、書き込み／読み出し可能な 32 ビットバイナリカウンタの b31 ～ b24 です。64Hz カウンタでの 1 秒ごとの桁上げによってカウント動作を行います。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.6　日カウンタ（RDAYCNT）

アドレス　RTC.RDAYCNT 4004 400Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	DATE10[1:0]		DATE1[3:0]			
リセット後の値	0	0	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	DATE1[3:0]	1日カウント	1日に1回、0から9までカウントします。桁上げが生じると、十の位が+1されます。	R/W
b5-b4	DATE10[1:0]	10日カウント	一の位からの桁上げごとに1回、0から3までカウントします。	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RDAYCNT カウンタは、カレンダカウントモード時に使用され、BCD コード化された日の値を設定およびカウントします。時カウンタでの 1 日ごとの桁上げによってカウントします。カウント動作は、月によっても、うるう年か否かによっても異なります。うるう年は、年カウンタ（RYRCNT）の値が 400、100、および 4 で割り切れるか否かで判定されます。

設定可能範囲は 10 進（BCD）で 01 ～ 31 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。値を設定する際は、指定可能な日数範囲が月によっても、うるう年か否かによっても異なるので注意してください。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.7　月カウンタ（RMONCNT）

アドレス　RTC.RMONCNT 4004 400Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	MON10	MON1[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MON1[3:0]	1月カウント	1月に1回、0から9までカウントします。桁上げが生じると、十の位が+1されます。	R/W
b4	MON10	10月カウント	一の位からの桁上げごとに1回、0から1までカウントします。	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RMONCNT カウンタは、カレンダカウントモード時に使用され、BCD コード化された月の値を設定およびカウントします。日カウンタでの 1 月ごとの桁上げによってカウントします。

設定可能範囲は 10 進（BCD）で 01 ～ 12 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.8　年カウンタ（RYRCNT）

アドレス　RTC.RYRCNT 4004 400Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	YR10[3:0]				YR1[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	YR1[3:0]	1年カウント	1年に1回、0から9までカウントします。桁上げが生じると、十の位が+1されます。	R/W
b7-b4	YR10[3:0]	10年カウント	一の位からの桁上げごとに1回、0から9までカウントします。十の位に桁上げが生じると、百の位が+1されます。	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

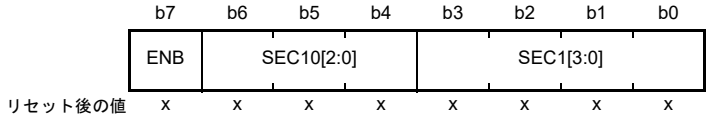
RYRCNT カウンタは、カレンダカウントモード時に使用され、BCD コード化された年の値を設定およびカウントします。月カウンタでの 1 年ごとの桁上げによってカウントします。

設定可能範囲は 10 進（BCD）で 00 ～ 99 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前にスタートビット（RCR2.START）でカウント動作を停止させてください。このカウンタを読み出す際は、25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください。

25.2.9　秒アラームレジスタ（RSECAR）／バイナリカウンタ 0 アラームレジスタ（BCNT0AR）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RSECAR 4004 4010h



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	SEC1[3:0]	1秒	一秒の位の設定値	R/W
b6-b4	SEC10[2:0]	10秒	十秒の位の設定値	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRSECCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRSECCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

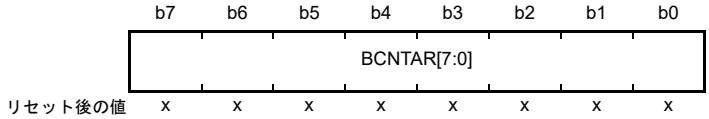
RSECAR レジスタは、BCD コード化された秒カウンタ（RSECCNT）に対応するアラームレジスタです。ENB ビットが 1 であれば、RSECAR レジスタ値が RSECCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。RSECAR レジスタの設定可能範囲は、10 進（BCD）で 00 ～ 59 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT0AR 4004 4010h



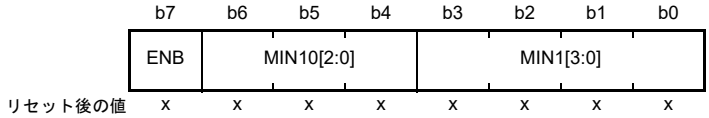
x：不定

BCNT0AR は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b7 ～ b0 に対応するアラームレジスタです。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.10　分アラームレジスタ（RMINAR）／バイナリカウンタ 1 アラームレジスタ（BCNT1AR）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RMINAR 4004 4012h



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MIN1[3:0]	1分	一分の位の設定値	R/W
b6-b4	MIN10[2:0]	10分	十分の位の設定値	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRMINCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRMINCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

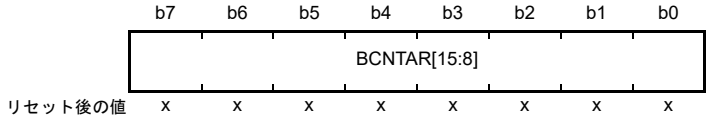
RMINAR レジスタは、BCD コード化された分カウンタ（RMINCNT）に対応するアラームレジスタです。ENB ビットが 1 であれば、RMINAR レジスタ値が RMINCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。RMINAR レジスタの設定可能範囲は、10 進（BCD）で 00 ～ 59 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT1AR 4004 4012h



x：不定

BCNT1AR は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b15 ～ b8 に対応するアラームレジスタです。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.11　時アラームレジスタ（RHRAR）／バイナリカウンタ 2 アラームレジスタ（BCNT2AR）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RHRAR 4004 4014h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB	PM	HR10[1:0]		HR1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	HR1[3:0]	1時間	一時間の位の設定値	R/W
b5-b4	HR10[1:0]	10時間	十時間の位の設定値	R/W
b6	PM	PM	時計アラームの設定 0：午前 1：午後	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRHRCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRHRCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

RHRAR レジスタは、BCD コード化されたときカウンタ（RHRCNT）に対応するアラームレジスタです。ENB ビットが 1 であれば、RHRAR レジスタ値が RHRCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

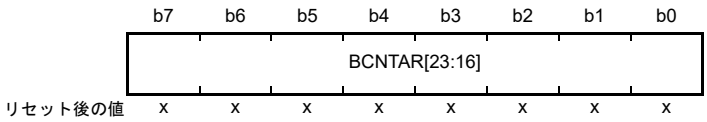
それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。設定可能範囲は、時間モードビット（RCR2.HR24）の設定値に応じて以下のように異なります。

- RCR2.HR24 ビットが 0 の場合、00 ～ 11（BCD）
- RCR2.HR24 ビットが 1 の場合、00 ～ 23（BCD）

この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。RCR2.HR24 ビットが 0 の場合、必ず PM ビットを設定してください。RCR2.HR24 ビットが 1 の場合、PM ビットの設定値は無効です。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2) バイナリカウントモード時

アドレス RTC.BCNT2AR 4004 4014h



x：不定

BCNT2AR は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b23 ～ b16 に対応するアラームレジスタです。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.12 曜日アラームレジスタ（RWKAR）／バイナリカウンタ 3 アラームレジスタ（BCNT3AR）

(1) カレンダカウントモード時

アドレス RTC.RWKAR 4004 4016h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB	—	—	—	—	DAYW[2:0]		
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	DAYW[2:0]	曜日設定	b2 b0 0 0 0：日 0 0 1：月 0 1 0：火 0 1 1：水 1 0 0：木 1 0 1：金 1 1 0：土 1 1 1：設定禁止	R/W
b6-b3	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRWKCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRWKCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

RWKAR レジスタは、コード化された曜日カウンタ（RWKCNT）に対応するアラームレジスタです。ENB ビットが 1 であれば、RWKAR レジスタ値が RWKCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。RWKAR レジスタの設定可能範囲は、10 進（BCD）で 0 ～ 6 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2) バイナリカウントモード時

アドレス RTC.BCNT3AR 4004 4016h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BCNTAR[31:24]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT3AR は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b31 ～ b24 に対応するアラームレジスタです。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.13 日アラームレジスタ（RDAYAR）／バイナリカウンタ 0 アラームイネーブルレジスタ（BCNT0AER）

(1) カレンダカウントモード時

アドレス RTC.RDAYAR 4004 4018h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB	—	DATE10[1:0]		DATE1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	DATE1[3:0]	1日	一日の位の設定値	R/W
b5-b4	DATE10[1:0]	10日	十日の位の設定値	R/W
b6	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRDAYCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRDAYCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

RDAYAR レジスタは、BCD コード化された日カウンタ（RDAYCNT）に対応するアラームレジスタです。ENB ビットが 1 であれば、RDAYAR レジスタ値が RDAYCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。RDAYAR レジスタの設定可能範囲は、10 進（BCD）で 01 ～ 31 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2) バイナリカウントモード時

アドレス RTC.BCNT0AER 4004 4018h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB[7:0]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT0AER は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b7 ～ b0 に対応するアラーム許可設定用のレジスタです。ENB[31:0] ビットのうち、1 になっているビットに対応するバイナリカウンタ（BCNT[31:0]）が、バイナリアラームレジスタ（BCNTAR[31:0]）と比較されて、すべてが一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.14　月アラームレジスタ（RMONAR）／バイナリカウンタ 1 アラームイネーブルレジスタ（BCNT1AER）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RMONAR 4004 401Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB	—	—	MON10	MON1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MON1[3:0]	1月	一月の位の設定値	R/W
b4	MON10	10月	十月の位の設定値	R/W
b6-b5	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRMONCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRMONCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

RMONAR レジスタは、BCD コード化された月カウンタ（RMONCNT）に対応するアラームレジスタです。ENB ビットが 1 であれば、RMONAR レジスタ値が RMONCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。RMONAR レジスタの設定可能範囲は、10 進（BCD）で 01 ～ 12 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT1AER 4004 401Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB[15:8]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT1AER は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b15 ～ b8 に対応するアラーム許可設定用のレジスタです。ENB[31:0] ビットのうち、1 になっているビットに対応するバイナリカウンタ（BCNT[31:0]）が、バイナリアラームレジスタ（BCNTAR[31:0]）と比較されて、すべてが一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.15　年アラームレジスタ（RYRAR）／バイナリカウンタ 2 アラームイネーブルレジスタ（BCNT2AER）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RYRAR 4004 401Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	YR10[3:0]				YR1[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	YR1[3:0]	1年	一年の位の設定値	R/W
b7-b4	YR10[3:0]	10年	十年の位の設定値	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

RYRAR レジスタは、BCD コード化された年カウンタ（RYRCNT）に対応するアラームレジスタです。RYRAR レジスタの設定可能範囲は、10 進（BCD）で 00 ～ 99 です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 0000h になります。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT2AER 4004 401Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	ENB[23:16]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT2AER は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b23 ～ b16 に対応するアラーム許可設定用のレジスタです。ENB[31:0] ビットのうち、1 になっているビットに対応するバイナリカウンタ（BCNT[31:0]）が、バイナリアラームレジスタ（BCNTAR[31:0]）と比較されて、すべてが一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 0000h になります。

25.2.16　年アラームイネーブルレジスタ（RYRAREN）／バイナリカウンタ 3 アラームイネーブルレジスタ（BCNT3AER）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RYRAREN 4004 401Eh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	0を設定してください。読むと設定値が読めます。	R/W
b7	ENB	ENB	0：このレジスタ値とRYRCNTカウンタ値との比較を行わない 1：このレジスタ値とRYRCNTカウンタ値との比較を行う	R/W

RYRAREN レジスタの ENB ビットが 1 であれば、RYRAR レジスタ値が RYRCNT カウンタ値と比較されます。以下のアラームレジスタのうち、ENB ビットが 1 になっているものだけが、対応するカウンタと比較されます。

- RSECAR
- RMINAR
- RHRAR
- RWKAR
- RDAYAR
- RMONAR
- RYRAREN

それぞれの値がすべて一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT3AER 4004 401Eh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ENB[31:24]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT3AER は、書き込み／読み出し可能な、32 ビットバイナリカウンタの b31 ～ b24 に対応するアラーム許可設定用のレジスタです。ENB[31:0] ビットのうち、1 になっているビットに対応するバイナリカウンタ（BCNT[31:0]）が、バイナリアラームレジスタ（BCNTAR[31:0]）と比較されて、すべてが一致すると、RTC_ALM 割り込みに対応した IR フラグが 1 になります。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。

25.2.17 RTC コントロールレジスタ 1（RCR1）

アドレス RTC.RCR1 4004 4022h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	PES[3:0]				RTCOS	PIE	CIE	AIE
リセット後の値	x	x	x	x	0	x	0	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	AIE	アラーム割り込み許可	0：アラーム割り込み要求を禁止 1：アラーム割り込み要求を許可	R/W
b1	CIE	桁上げ割り込み許可	0：桁上げ割り込み要求を禁止 1：桁上げ割り込み要求を許可	R/W
b2	PIE	周期割り込み許可	0：周期割り込み要求を禁止 1：周期割り込み要求を許可	R/W
b3	RTCOS	RTCOUT 出力選択	0：RTCOUT は 1Hz を出力 1：RTCOUT は 64Hz を出力	R/W
b7-b4	PES[3:0]	周期割り込み選択	b7 b4 0 1 1 0 ：1/256秒ごとに周期割り込みが発生（注1） 0 1 1 1 ：1/128秒ごとに周期割り込みが発生 1 0 0 0 ：1/64秒ごとに周期割り込みが発生 1 0 0 1 ：1/32秒ごとに周期割り込みが発生 1 0 1 0 ：1/16秒ごとに周期割り込みが発生 1 0 1 1 ：1/8秒ごとに周期割り込みが発生 1 1 0 0 ：1/4秒ごとに周期割り込みが発生 1 1 0 1 ：1/2秒ごとに周期割り込みが発生 1 1 1 0 ：1秒ごとに周期割り込みが発生 1 1 1 1 ：2秒ごとに周期割り込みが発生 上記以外：周期割り込みは発生しない	R/W

注 1. PES[3:0] ビット = 0110b のときに LOCO を選択（RCR4.RCKSEL ビット = 1）すると、周期割り込みは 1/128 秒ごとに発生します。

RCR1 レジスタは、カレンダカウントモード／バイナリカウントモード共通で使用します。AIE、PIE、PES[3:0] ビットは、カウントソースに同期して更新されます。RCR1 レジスタを書き換えた場合は、全ビットが更新されたことを確認してから次の処理を実行してください。

AIE ビット（アラーム割り込み許可）

アラーム割り込み要求を許可または禁止します。

CIE ビット（桁上げ割り込み許可）

RSECCNT/BCNT0 カウンタへの桁上げが生じたとき、または 64Hz カウンタの読み出し中に 64Hz カウンタ（R64CNT）への桁上げが生じたときの割り込み要求の許可および禁止を選択します。

PIE ビット（周期割り込み許可）

周期割り込み要求を許可または禁止します。

RTCOS ビット（RTCOUT 出力選択）

RTCOUT の出力周期を選択します。RTCOS ビットは、カウント動作停止（RCR2.START ビット = 0）、かつ RTCOUT 出力禁止（RCR2.RTCOE ビット = 0）のときに書き換えてください。RTCOUT を外部端子に出力する場合は、RCR2.RTCOE ビットを許可にする必要があります。I/O ポートの制御については、20.5.1 端子機能の設定手順を参照してください。

PES[3:0] ビット（周期割り込み選択）

周期割り込みの周期を設定します。これらのビットで設定した周期に応じて周期割り込みが発生します。

25.2.18　RTC コントロールレジスタ 2（RCR2）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RCR2 4004 4024h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CNTMD	HR24	AADJP	AADJE	RTCOE	ADJ30	RESET	START
リセット後の値	x	x	x	x	0	0	0	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	START	スタート	0：プリスケーラと時計カウンタは停止 1：プリスケーラと時計カウンタは通常動作	R/W
b1	RESET	RTCソフトウェアリセット	• 書き込み時 0：無効（0の書き込みは無効です） 1：プリスケーラおよびRTCソフトウェアリセット対象レジスタ（注1）を初期化 •読み出し時 0：通常の時計動作中またはRTCソフトウェアリセット完了 1：RTCソフトウェアリセット処理中	R/W
b2	ADJ30	30秒調整	• 書き込み時 0：無効（0の書き込みは無効です） 1：30秒調整を実行 • 読み出し時 0：通常の時計動作中または30秒調整が完了 1：30秒調整処理中	R/W
b3	RTCOE	RTCOUT出力許可	0：RTCOUT出力を禁止 1：RTCOUT出力を許可	R/W
b4	AADJE	自動補正有効（注3）	0：自動補正は無効 1：自動補正は有効	R/W
b5	AADJP	自動補正周期選択（注3）	0：1分ごとにプリスケーラのカウント値に対してRADJ.ADJ[5:0]ビット値を加減算 1：10秒ごとにプリスケーラのカウント値に対してRADJ.ADJ[5:0]ビット値を加減算	R/W
b6	HR24	時間モード	0：RTCは12時間モードで動作 1：RTCは24時間モードで動作	R/W
b7	CNTMD	カウントモード選択	0：カレンダカウントモード 1：バイナリカウントモード	R/W

注 1.　R64CNT, RSECAR/BCNT0AR, RMINAR/BCNT1AR, RHRAR/BCNT2AR, RWKAR/BCNT3AR, RDAYAR/BCNT0AER, RMONAR/BCNT1AER, RYRAR/BCNT2AER, RYRAREN/BCNT3AER, RADJ, RTCCR0, RSECCP0/BCNT0CP0, RMINCP0
注 2.　BCNT1CP0, RHRCP0/BCNT2CP0, RDAYCP0/BCNT3CP0, RMONCP0, RCR2.ADJ30, RCR2.AADJE, RCR2.AADJP
注 3.　LOCO を選択した場合、本ビットの設定は無効です。

RCR2 レジスタは、時間モード、自動補正機能、RTCOUT 出力許可、30 秒調整、RTC ソフトウェアリセット、およびカウント制御に関するレジスタです。

START ビット（スタート）

プリスケーラまたは時計カウンタの動作を停止または再開します。

START ビットは、カウントソースの次の周期に同期して更新されます。START ビットを書き換えた場合は、このビットが更新されたことを確認してから次の処理を実行してください。

RESET ビット（RTC ソフトウェアリセット）

プリスケーラと RTC ソフトウェアリセット対象レジスタを初期化します。

RESET ビットに 1 を書くと、カウントソースに同期して初期化が始まります。初期化が完了すると、RESET ビットは自動的に 0 になります。本ビットが 0 になったことを確認してから次の処理を実行してください。

ADJ30 ビット（30 秒調整）

30 秒調整を行います。

ADJ30 ビットに 1 を書くと、RSECCNT カウンタ値が 30 秒未満の場合は 00 秒に切り捨てられ、30 秒以上の場合は 1 分に切り上げられます。

30 秒調整は、カウントソースに同期して行われます。ADJ30 ビットに 1 を書いた場合、30 秒調整が完了すると ADJ30 ビットは自動的に 0 になります。ADJ30 ビットに 1 を書いた場合は、このビットが 0 になったことを確認してから次の処理を実行してください。30 秒調整を実行すると、プリスケーラと R64CNT カウンタもリセットされます。ADJ30 ビットは、RTC ソフトウェアリセットによって 0 になります。

RTCOE ビット（RTCOUT 出力許可）

RTCOUT 端子からの 1Hz/64Hz クロック信号出力を許可します。

RTCOE ビット値を変更する前に、START ビットでカウント動作を停止させてください。カウント動作の停止（START ビットへの 0 の書き込み）と、RTCOE ビット値の変更は、同時に行わないでください。

RTCOUT を外部端子から出力する場合は、RTCOE ビットを許可にするとともに、この端子にポート制御を設定してください。

AADJE ビット（自動補正有効）

自動補正を制御（有効または無効に）します。

AADJE ビット値を変更する前に、プラスマイナスビット（RADJ.PMADJ[1:0]）を 00b（補正を行わない）にしてください。

AADJE ビットは、RTC ソフトウェアリセットによって 0 になります。

AADJP ビット（自動補正周期選択）

自動補正の周期を選択します。

AADJP ビット値を変更する前に、プラスマイナスビット（RADJ.PMADJ[1:0]）を 00b（補正を行わない）にしてください。

AADJP ビットは、RTC ソフトウェアリセットによって 0 になります。

HR24 ビット（時間モード）

RTC を 12 時間モードと 24 時間モードのどちらで動作させるかを指定します。

HR24 ビット値を変更する前に、START ビットでカウント動作を停止させてください。カウント動作の停止（START ビットへの 0 の書き込み）と、HR24 ビット値の変更は、同時に行わないでください。

CNTMD ビット（カウントモード選択）

RTC をカレンダカウントモードとバイナリカウントモードのどちらで動作させるかを指定します。

カウントモードを設定した場合は、RTC ソフトウェアリセットを実行し、初期設定からやり直してください。本ビットはカウントソースに同期して更新され、RTC ソフトウェアリセットが完了する前に値が確定します。

初期設定の詳細は、25.3.1　電源投入後のレジスタ初期設定の概要を参照してください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.RCR2 4004 4024h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CNTMD	—	AADJP	AADJE	RTCOE	—	RESET	START
リセット後の値	x	x	x	x	0	0	0	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	START	スタート	0：32ビットバイナリカウンタ、64Hzカウンタ、およびプリスケーラは停止 1：32ビットバイナリカウンタ、64Hzカウンタ、およびプリスケーラは通常動作	R/W
b1	RESET	RTCソフトウェアリセット	• 書き込み時 0：無効（0の書き込みは無効です） 1：プリスケーラおよびRTCソフトウェアリセット対象レジスタ（注1）を初期化 • 読み出し時 0：通常の時計動作中またはRTCソフトウェアリセット完了 1：RTCソフトウェアリセット処理中	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	RTCOE	RTCOUT出力許可	0：RTCOUT出力を禁止 1：RTCOUT出力を許可	R/W
b4	AADJE	自動補正有効（注3）	0：自動補正は無効 1：自動補正は有効	R/W
b5	AADJP	自動補正周期選択（注3）	0：32秒ごとにプリスケーラのカウント値に対してRADJ.ADJ[5:0]ビット値を加減算 1：8秒ごとにプリスケーラのカウント値に対してRADJ.ADJ[5:0]ビット値を加減算	R/W
b6	—	予約ビット	値は不定です。書く場合、0としてください。	R/W
b7	CNTMD	カウントモード選択	0：カレンダカウントモード 1：バイナリカウントモード	R/W

注 1.　R64CNT, RSECAR/BCNT0AR, RMINAR/BCNT1AR, RHRAR/BCNT2AR, RWKAR/BCNT3AR, RDAYAR/BCNT0AER, RMONAR/BCNT1AER, RYRAR/BCNT2AER, RYRAREN/BCNT3AER, RTCCR0, RSECCP0/BCNT0CP0, RMINCP0

注 2.　BCNT1CP0, RHRCP0/BCNT2CP0, RDAYCP0/BCNT3CP0, RMONCP0, RCR2.ADJ30, RCR2.AADJE, RCR2.AADJP

注 3.　LOCO を選択した場合、本ビットの設定は無効です。

START ビット（スタート）

プリスケーラまたはカウンタ（時計）の動作を停止または再開します。

START ビットは、カウントソースに同期して更新されます。START ビットを書き換えた場合は、このビットが更新されたことを確認してから次の処理を実行してください。

RESET ビット（RTC ソフトウェアリセット）

プリスケーラと RTC ソフトウェアリセット対象レジスタを初期化します。

RESET ビットに 1 を書くと、カウントソースに同期して初期化が始まります。初期化が完了すると、RESET ビットは自動的に 0 になります。RESET ビットに 1 を書いた場合は、このビットが 0 になったことを確認してから次の処理を実行してください。

RTCOE ビット（RTCOUT 出力許可）

RTCOUT 端子からの 1Hz/64Hz クロック信号出力を許可します。

RTCOE ビット値を変更する前に、START ビットでカウント動作を停止させてください。カウント動作の停止（START ビットへの 0 の書き込み）と、RTCOE ビット値の変更は、同時に行わないでください。RTCOUT 信号を外部端子から出力する場合は、本ビットを許可にするとともに、ポート制御を有効にしてください。

AADJE ビット（自動補正有効）

自動補正を制御（有効または無効に）します。

AADJE ビット値を変更する前に、プラスマイナスビット（RADJ.PMADJ[1:0]）を 00b（補正を行わない）にしてください。AADJE ビットは、RTC ソフトウェアリセットによって 0 になります。

AADJP ビット（自動補正周期選択）

自動補正の周期を選択します。

バイナリカウントモードでは、32 秒ごとまたは 8 秒ごとの補正周期を選択できます。

AADJP ビット値を変更する前に、プラスマイナスビット（RADJ.PMADJ[1:0]）を 00b（補正を行わない）にしてください。AADJP ビットは、RTC ソフトウェアリセットによって 0 になります。

CNTMD ビット（カウントモード選択）

RTC をカレンダカウントモードとバイナリカウントモードのどちらで動作させるかを指定します。

カウントモードを設定した場合は、RTC ソフトウェアリセットを実行し、初期設定からやり直してください。本ビットはカウントソースに同期して更新され、RTC ソフトウェアリセットが完了する前に値が確定します。

初期設定の詳細は、25.3.1　電源投入後のレジスタ初期設定の概要を参照してください。

25.2.19　RTC コントロールレジスタ 4（RCR4）

アドレス　RTC.RCR4 4004 4028h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	RCKSEL
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RCKSEL	カウントソース選択	0：サブクロック発振器を選択 1：LOCO を選択	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W

RCR4 レジスタは、カウントソースを選択するためのレジスタです。カレンダカウントモード／バイナリカウントモード共通で使用します。

RCKSEL ビットを 0 にすると、サブクロック発振器を使用して時計のカウント動作が行われます。RCKSEL ビットを 1 にすると、LOCO を使用して時計のカウント動作が行われます。

RCKSEL ビット（カウントソース選択）

カウントソースを、サブクロック発振器と LOCO から選択します。

カウントソースの選択は、電源投入後、RTC レジスタの初期設定前に一度だけ行ってください。

25.2.20　周波数レジスタ（RFRH/RFRL）

アドレス　RTC.RFRH 4004 402Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	RFC16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RFC16	予約ビット	コールドスタート後、RFRL レジスタに書き込む前に 0 を書いてください。	R/W
b15-b1	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W

アドレス　RTC.RFRL 4004 402Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RFC[15:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	RFC[15:0]	周波数比較値	LOCO 使用時は、このレジスタに 00FFh を書いてください。	R/W

RFRL レジスタは、LOCO 選択時のプリスケーラを制御するレジスタです。

RTC の時計カウンタは、128Hz クロック信号を基本クロックとして動作します。そのため、LOCO を選択した場合、プリスケーラで LOCO が分周されて 128Hz クロック信号が生成されます。RFC[15:0] ビットには、LOCO 周波数から 128Hz クロックを生成するための周波数比較値を設定します。コールドスタート後、RFC[15:0] へ書き込む前に、RFRH に 0000h を書き込んでください。

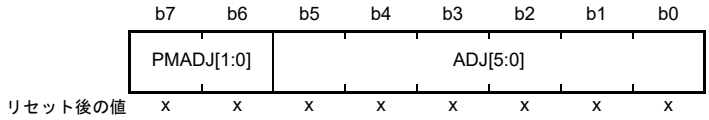
周波数比較値の設定可能範囲は、0007h ～ 01FFh です。この範囲にない値が設定されると、RTC は正常に動作しません。このレジスタへ書き込む際は、必ず事前に RCR2.START ビットでカウント動作を停止させてください。周辺モジュールクロックと LOCO の動作周波数は、「周辺モジュールクロック≧ LOCO」となるようにしてください。

周波数比較値の計算方法：
RFC[15:0] =（LOCO クロック周波数）÷ 128 - 1

LOCO 周波数が 32.768kHz の場合、RFRL レジスタは 00FFh にしてください。

25.2.21　時計誤差補正レジスタ（RADJ）

アドレス　RTC.RADJ 4004 402Eh



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	ADJ[5:0]	補正値	プリスケーラの補正値を設定します。	R/W
b7-b6	PMADJ[1:0]	プラスマイナス	b7 b6 0 0：補正を行わない 0 1：プリスケーラに対して値を加算して補正を行う 1 0：プリスケーラに対して値を減算して補正を行う 1 1：設定禁止	R/W

プリスケーラに対して値を加算または減算することによって補正が行われます。自動補正有効ビット（RCR2.AADJE）が 0 であると、RADJ レジスタへの書き込み時に補正が行われます。RCR2.AADJE ビットが 1 であると、自動補正周期選択ビット（RCR2.AADJP）で設定した間隔で補正が行われます。

ソフトウェア設定による補正（自動補正が無効）では、レジスタの設定後、カウントソースの 320 サイクル中に次の補正値を設定すると、現在の補正値の設定が無効となる場合があります。連続して補正を行う場合は、レジスタの設定後、カウントソースで 320 サイクル以上待ってから次の補正値を設定してください。

RADJ レジスタは、カウントソースに同期して更新されます。RADJ レジスタを書き換えた場合は、全ビットの値が更新されたことを確認してから次の処理を実行してください。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。サブクロックを選択した場合にのみ、このレジスタの設定が有効になります。LOCO を選択した場合、補正は行われません。

ADJ[5:0] ビット（補正値）

プリスケーラに対する補正値（サブクロックのサイクル数）を設定します。

PMADJ[1:0] ビット（プラスマイナス）

ADJ[5:0] ビットで設定した誤差補正値に従って、時計を進めるか、遅らせるかを選択します。

25.2.22　時間キャプチャコントロールレジスタ 0（RTCCR0）

アドレス　RTC.RTCCR0 4004 4040h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TCEN	—	TCNF[1:0]		—	TCST	TCCT[1:0]	
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	TCCT[1:0]	時間キャプチャ制御	b1　b0 0　0：イベントを検出しない 0　1：立ち上がりエッジを検出 1　0：立ち下がりエッジを検出 1　1：両エッジを検出	R/W
b2	TCST	時間キャプチャステータス	0：イベント検出なし 1：イベント検出あり（注1）	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	TCNF[1:0]	時間キャプチャノイズフィルタ制御	b5　b4 0　0：ノイズフィルタOFF 0　1：設定禁止 1　0：ノイズフィルタON（カウントソース） 1　1：ノイズフィルタON（カウントソースの32分周）	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	TCEN	時間キャプチャイベント入力端子有効	0：RTCIC0端子は時間キャプチャイベント入力として無効 1：RTCIC0端子は時間キャプチャイベント入力として有効	R/W

注 1.　イベントが検出されたことを示します。1 の書き込みは無効です。0 を書き込むと 0 になります。

RTCCR0 レジスタは、カレンダカウントモード／バイナリカウントモード共通で使用します。RTCCR0 レジスタは RTCIC0 端子を制御します。

RTCCR0 レジスタは、カウントソースに同期して更新されます。RTCCR0 レジスタを書き換えた場合は、TCST ビット以外の全ビットが更新されたことを確認してから次の処理を実行してください。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。RTCIC0 を時間キャプチャ端子として使用する場合、VBTICTLR.VCH0IEN ビットを 1 にする必要があります。詳細は、「12.　バッテリバックアップ機能」を参照してください。

TCCT[1:0] ビット（時間キャプチャ制御）

時間キャプチャイベント入力端子（RTCIC0）のエッジ検出を制御します。検出するエッジの選択が可能です。TCCT[1:0] ビットは、VBTICTLR.VCH0IEN ビットが 1 の状態で設定してください。

TCST ビット（時間キャプチャステータス）

時間キャプチャイベント入力端子（RTCIC0）のイベントが検出されたことを示します。TCST ビットが 0 の場合、イベントは検出されていません。TCST ビットが 1 の場合、対応する端子のイベントが検出されたこと、およびキャプチャレジスタが有効であることを示します。複数回イベントが検出された場合は、最初のイベントのキャプチャ時刻が保持されます。

カウント動作が停止中（すなわち RCR2.START ビットが 0 のとき）にイベントが検出された場合、そのキャプチャ値は保証されません。その場合は、TCST ビットを 0 にしてキャプチャ値を削除してください。TCST ビットに 0 を書き込むことで、TCST ビットを 0 にできます。0 以外の値の書き込みは無効です。

TCST ビットの設定は、TCCT[1:0] ビットが 00b（イベントを検出しない）の状態で行ってください。TCST ビットは、カウントソースに同期して 0 になります。TCST ビットを 0 にした場合、このビットが更新されたことを確認してから次の処理を実行してください。

TCNF[1:0] ビット（時間キャプチャノイズフィルタ制御）

時間キャプチャイベント入力端子（RTCIC0）のイベントが時間キャプチャイベント入力端子（RTCIC0）のノイズフィルタを制御します。出されたことを示します。

ノイズフィルタが ON の場合、カウントソースの 1 分周または 32 分周を選択できます。このとき、時間キャプチャイベント入力端子の入力レベルが設定したサンプリング周期で 3 回連続して一致すると、その入力レベルが確定されます。

TCNF[1:0] ビットの設定は、TCCT[1:0] ビットが 00b（イベントを検出しない）の状態で行ってください。ノイズフィルタを使用する場合は、TCNF[1:0] ビットの設定後、設定したサンプリング周期の 3 周期分待った後、TCCT[1:0] ビットの設定を行ってください。また、TCNF[1:0] ビットの設定は、VBTICTLR.VCH0IEN ビットが 1 の状態で行ってください。

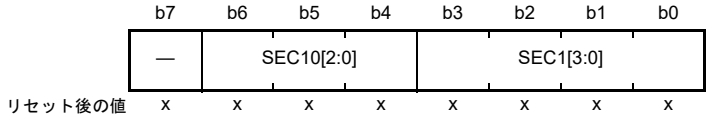
TCEN ビット（時間キャプチャイベント入力端子有効）

時間キャプチャイベント入力端子（RTCIC0）を有効または無効にします。時間キャプチャイベント入力端子（RTCTC0）に複数の機能を割り当てる場合は、最初に VBTICTLR レジスタを設定してください。TCEN ビットを 0 にする場合、TCCT[1:0] ビットも 00b にしてください。

25.2.23　秒キャプチャレジスタ 0（RSECCP0）／BCNT0 キャプチャレジスタ 0（BCNT0CP0）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RSECCP0 4004 4052h



x：不定

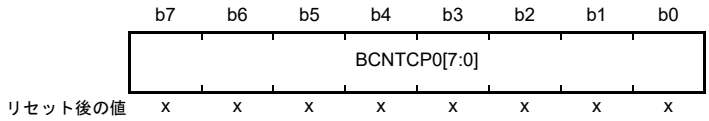
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	SEC1[3:0]	1秒キャプチャ	一秒の位のキャプチャ値を示します。	R
b6-b4	SEC10[2:0]	10秒キャプチャ	十秒の位のキャプチャ値を示します。	R
b7	—	予約ビット	RTCソフトウェアリセット後、読むと0が読めます。	R

RSECCP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に RSECCNT カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は RSECCP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT0CP0 4004 4052h



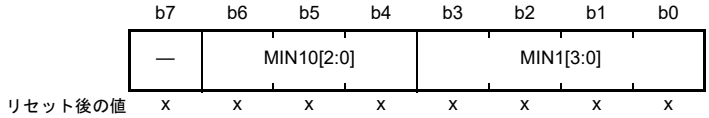
x：不定

BCNT0CPy レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に BCNT0 カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。RTCIC0 端子によるイベント検出時は BCNT0CP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

25.2.24　分キャプチャレジスタ 0（RMINCP0）／BCNT1 キャプチャレジスタ 0（BCNT1CP0）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RMINCP0 4004 4054h



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MIN1[3:0]	1分キャプチャ	一分の位のキャプチャ値を示します。	R
b6-b4	MIN10[2:0]	10分キャプチャ	十分の位のキャプチャ値を示します。	R
b7	—	予約ビット	RTCソフトウェアリセット後、読むと0が読めます。	R

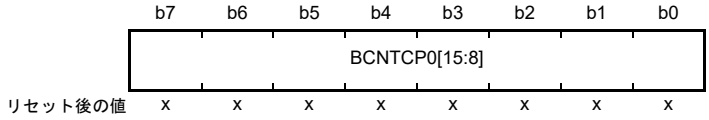
RMINCP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に RMINCNT カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は RMINCP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT1CP0 4004 4054h



x：不定

BCNT1CP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に BCNT1 カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は BCNT1CP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

25.2.25　時キャプチャレジスタ 0（RHRCP0）／BCNT2 キャプチャレジスタ 0（BCNT2CP0）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RHRCP0 4004 4056h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	PM	HR10[1:0]		HR1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	HR1[3:0]	1時間キャプチャ	一時間の位のキャプチャ値を示します。	R
b5-b4	HR10[1:0]	10時間キャプチャ	十時間の位のキャプチャ値を示します。	R
b6	PM	PM	0：午前 1：午後	R
b7	—	予約ビット	RTCソフトウェアリセット後、読むと0が読めます。	R

RHRCP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に RHRCNT カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は RHRCP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。RCR2.HR24 ビットが 0（12 時間モード）の場合にのみ、PM ビットが有効になります。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT2CP0 4004 4056h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BCNTCP0[23:16]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT2CP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に BCNT2 カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は BCNT2CP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

25.2.26　日キャプチャレジスタ 0（RDAYCP0）／BCNT3 キャプチャレジスタ 0（BCNT3CP0）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RDAYCP0 4004 405Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	DATE10[1:0]		DATE1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	DATE1[3:0]	1日キャプチャ	一日の位のキャプチャ値を示します。	R
b5-b4	DATE10[1:0]	10日キャプチャ	十日の位のキャプチャ値を示します。	R
b7-b6	—	予約ビット	RTCソフトウェアリセット後、読むと0が読めます。	R

RDAYCP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に RDAYCNT カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は RDAYCP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

(2)　バイナリカウントモード時

アドレス　RTC.BCNT3CP0 4004 405Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BCNTCP0[31:24]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

BCNT3CP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に BCNT3 カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCTC0 端子によるイベント検出時は BCNT3CP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

25.2.27　月キャプチャレジスタ 0（RMONCP0）

(1)　カレンダカウントモード時

アドレス　RTC.RMONCP0 4004 405Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	MON10	MON1[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	MON1[3:0]	1月キャプチャ	一月の位のキャプチャ値を示します。	R
b4	MON10	10月キャプチャ	十月の位のキャプチャ値を示します。	R
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

RMONCP0 レジスタは、時間キャプチャイベント検出時に RMONCNT カウンタ値をキャプチャする読み出し専用のレジスタです。

RTCIC0 端子によるイベント検出時は RMONCP0 レジスタにイベント検出時刻が格納されます。

このレジスタは、RTC ソフトウェアリセットによって 00h になります。このレジスタから値を読み出す際は、必ず事前に RTCCR0.TCCT[1:0] ビットで時間キャプチャイベント検出を停止させてください。

25.3 動作説明

25.3.1 電源投入後のレジスタ初期設定の概要

電源投入後は、クロック設定、カウントモード設定、時間誤差補正、時刻設定、アラーム、割り込み、および時間キャプチャコントロールレジスタに対して、初期設定を行ってください。

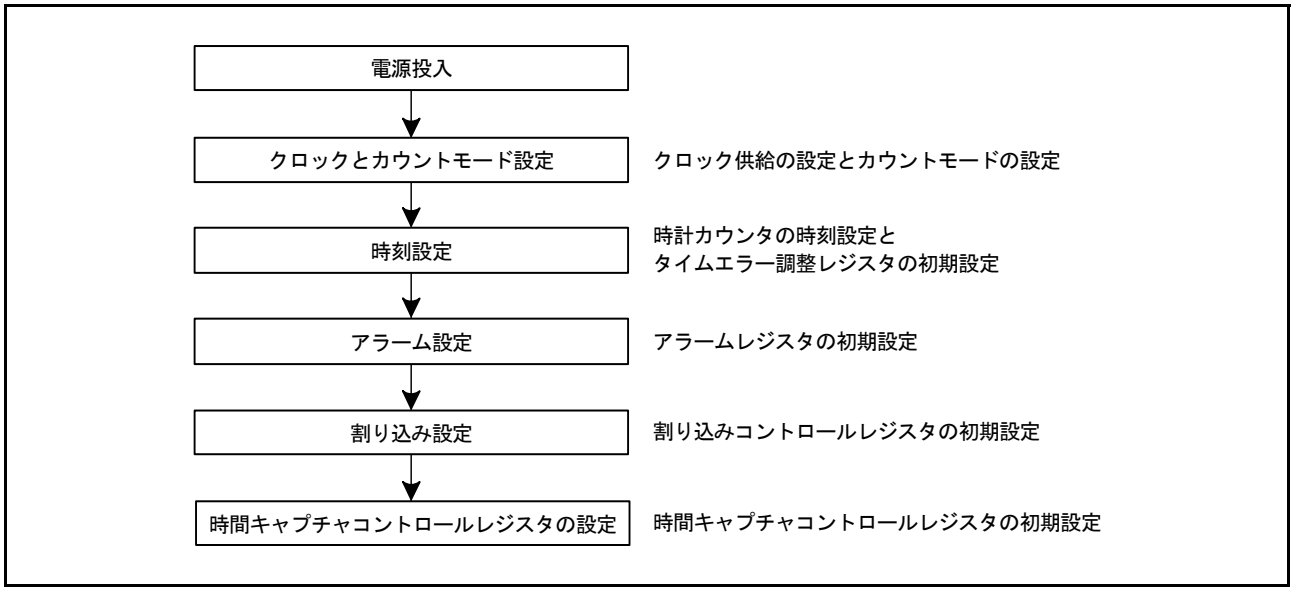
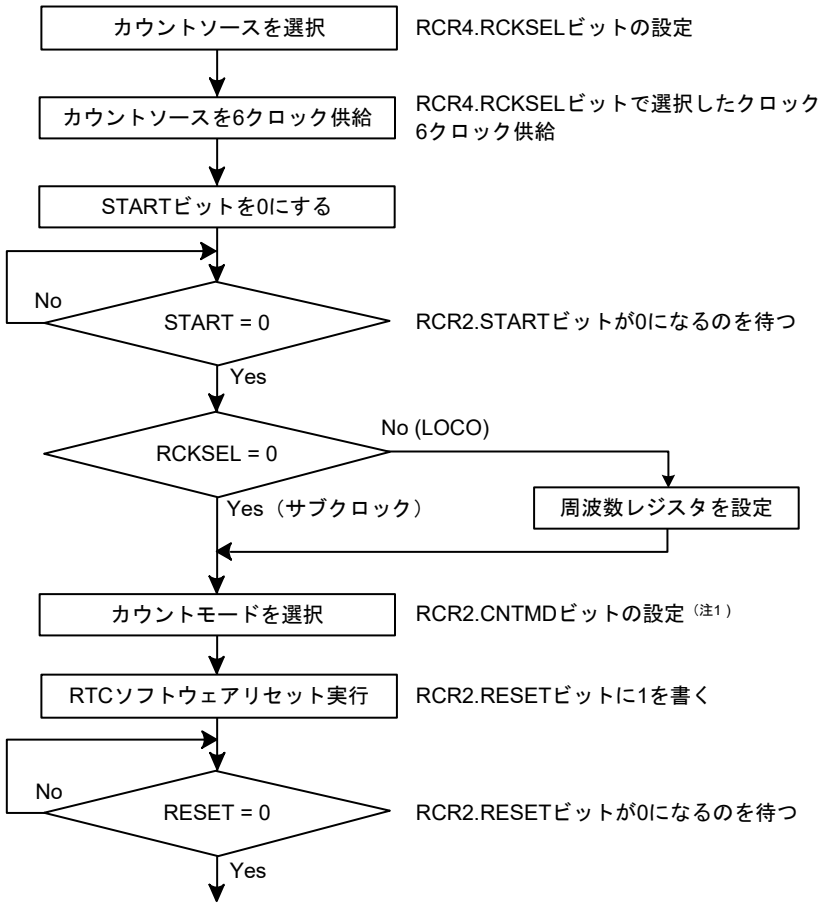


図 25.2 電源投入後の初期設定の概要

25.3.2　クロックおよびカウントモードの設定手順

図 25.3 にクロックおよびカウントモードの設定手順を示します。

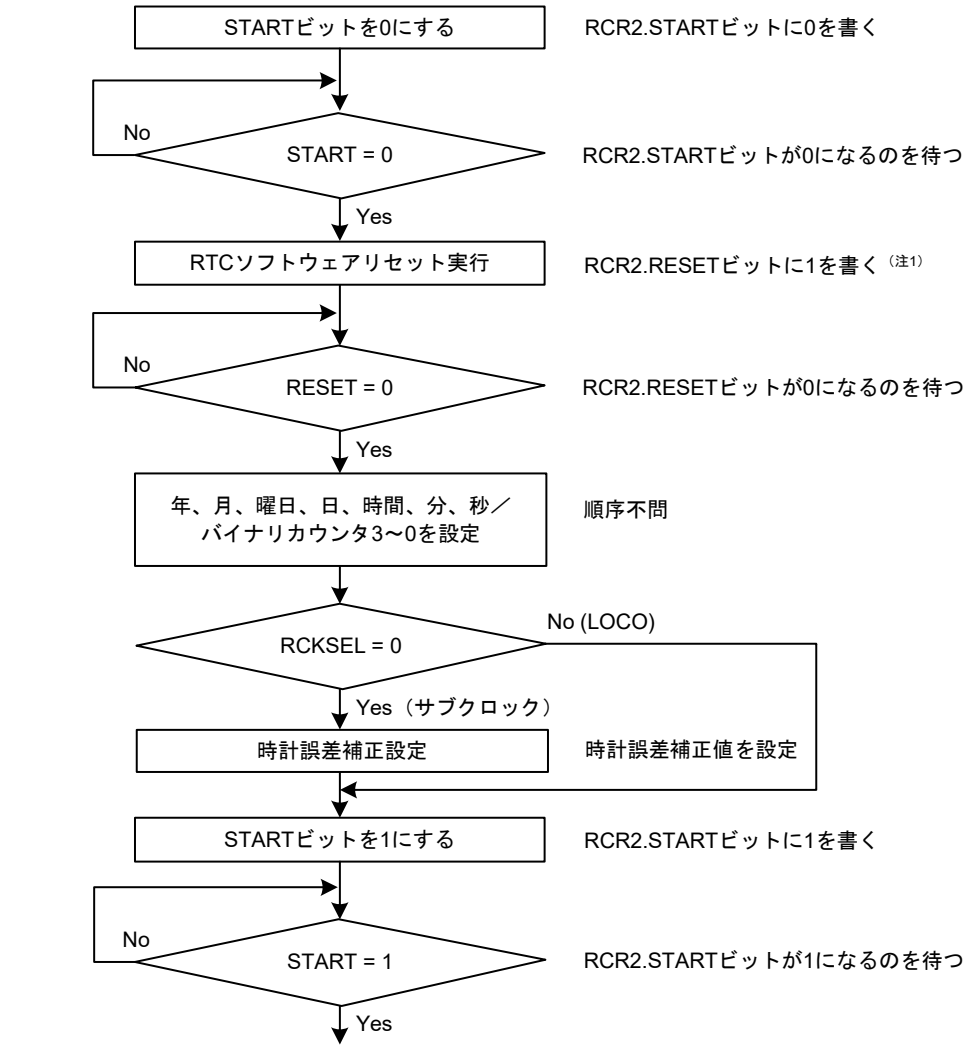


注 1.　START ビットを 0 にすると同時にカウントモードを設定する場合、このステップは不要です。
RCR2.CNTMD ビットには、カウントモード設定に応じた値を書き込む必要があります。

図 25.3　クロックおよびカウントモードの設定手順

25.3.3　時刻の設定

図 25.4 に時刻の設定手順を示します。



注 1.　電源投入時の初期設定のクロック設定手順において、RTC ソフトウェアリセットを実行するため、時刻設定手順では、本手順は不要です。

図 25.4　時刻の設定

25.3.4 30 秒調整

図 25.5 に 30 秒調整の実行手順を示します。

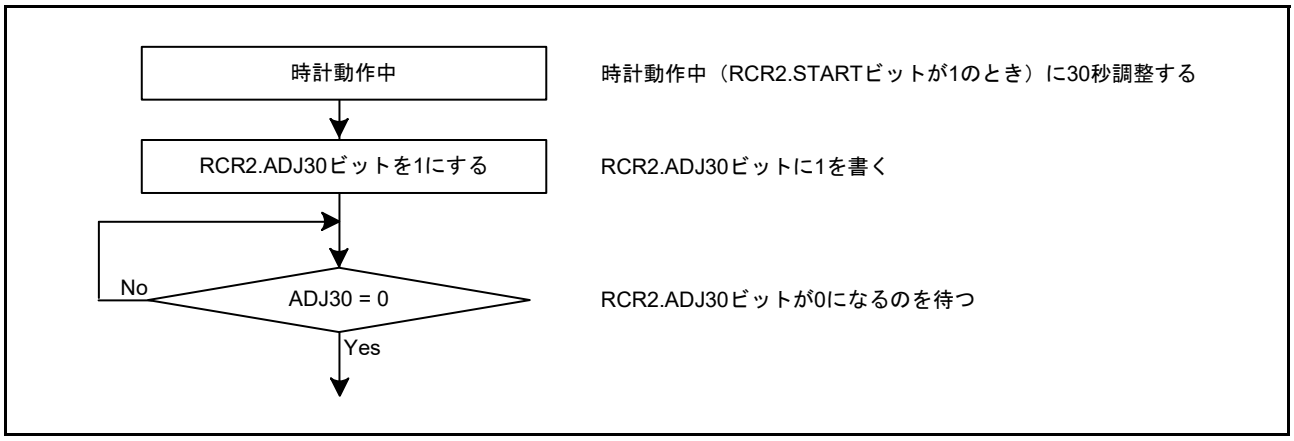


図 25.5 30 秒調整

25.3.5　64Hz カウンタと時刻の読み出し

図 25.6 に 64Hz カウンタと時刻の読み出し手順を示します。

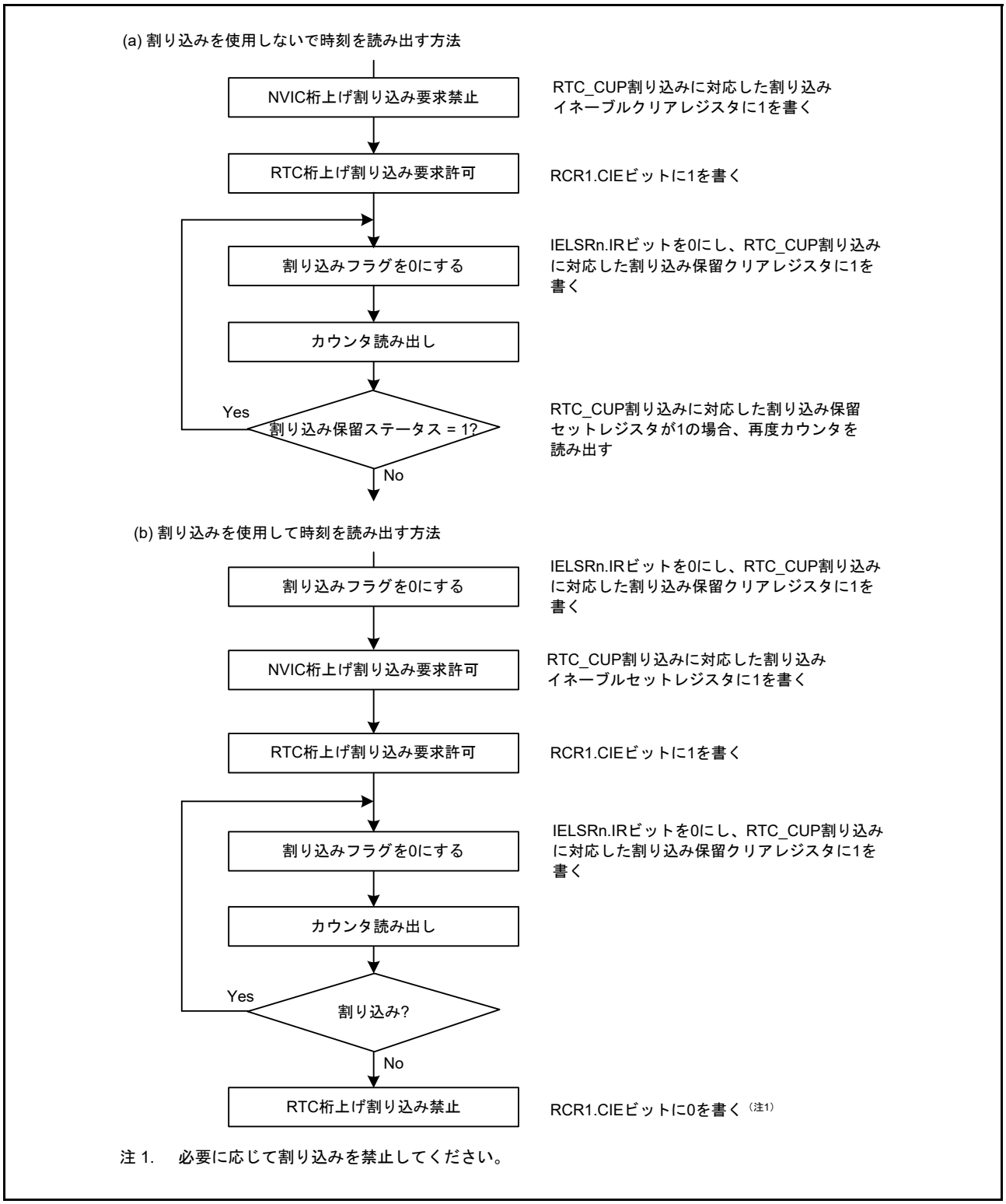


図 25.6　　時刻読み出し

64Hz カウンタと時刻の読み出し中に桁上げが生じると、正しい時刻が得られないため、再度読み出す必要があります。割り込みを使用しないで時刻を読み出す場合の手順を図 25.6 の（a）に、桁上げ割り込みを使用する場合の手順を（b）に示します。通常は、プログラムを容易にするために、方法（a）を使用してください。

25.3.6　アラーム機能

図 25.7 にアラーム機能の使用方法を示します。

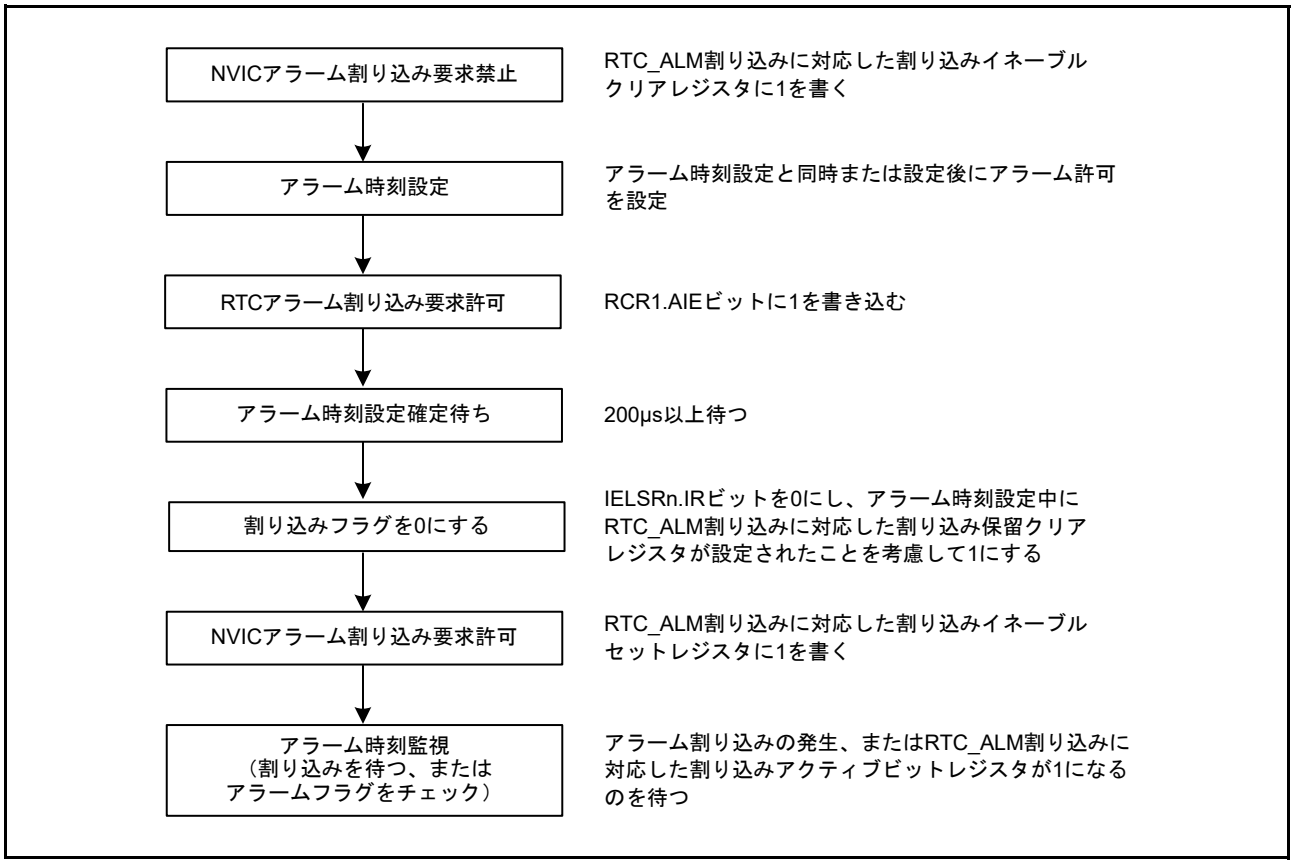


図 25.7　　アラーム機能の使用法

カレンダカウントモードでは、年、月、日、曜日、時、分、秒のいずれか 1 つ、またはこれらの任意の組み合わせで、アラームを発生させることができます。アラーム設定を必要とする各アラームレジスタの ENB ビットに 1 を書き込み、下位ビットにアラーム時刻を設定します。アラームの対象外のレジスタは ENB ビットに 0 を書き込みます

バイナリカウントモードでは、32 ビットの任意ビットの組み合わせでアラームを発生させることができます。アラームの対象とするビットに対応するアラームイネーブルレジスタの ENB ビットに 1 を書き込み、アラームレジスタにアラーム時刻を設定します。アラームの対象外とするビットに対しては、アラームイネーブルレジスタの ENB ビットに 0 を書き込みます。

カウンタとアラーム時刻が一致すると、IELSRn.IR ビットと、RTC_ALM 割り込みに対応した割り込みセット保留／クリア保留レジスタが 1 になります。アラームの検出は、RTC_ALM 割り込みに対応した割り込みセット保留レジスタを読み出すことで確認できますが、通常は割り込みを使用してください。RTC_ALM 割り込みに対応した割り込みセットイネーブルレジスタが 1 になっていると、アラームイベント発生時にアラーム割り込みが発生し、アラームの検出が可能になります。

RTC_ALM 割り込みに対応した IELSRn.IR ビットは、0 を書き込むと 0 になります。割り込みを許可した場合、割り込みハンドラの終了後、RTC_ALM 割り込みに対応した割り込みセット保留／クリア保留レジスタと割り込みアクティブビットレジスタが自動的にクリアされます。割り込みを禁止した場合は、RTC_ALM 割り込みに対応した割り込みクリア保留レジスタに 1 を書いてクリアしてください。

低消費電力状態のときにカウンタとアラーム時刻が一致すると、MCU は低消費電力状態から復帰します。

25.3.7 アラーム割り込み禁止手順

図 25.8 に、許可状態のアラーム割り込み要求を禁止する手順を示します。

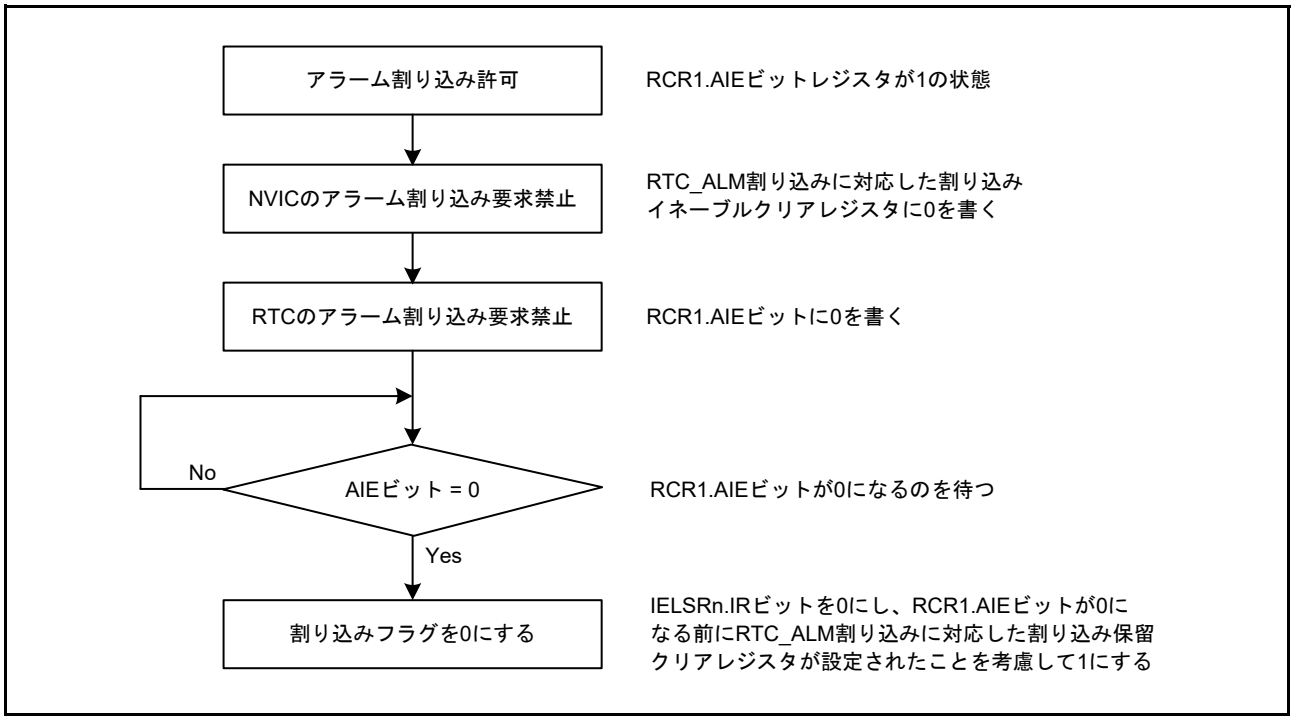


図 25.8 アラーム割り込み要求の禁止手順

25.3.8 時間誤差補正機能

時間誤差補正機能は、サブクロックによる発振精度の変動に起因した、時間の誤差（遅れ／進み）を補正するために使用します。サブクロックを選択した場合、サブクロックの 32768 サイクルが 1 秒の動作に相当するため、サブクロックの周波数が高いと時計が進み、低いと時計が遅れます。時間誤差補正機能には下記の 2 種類があります。

- 自動補正
- ソフトウェアによる補正

自動補正またはソフトウェアによる補正は、RCR2.AADJE ビットで選択してください。

25.3.8.1 自動補正

RCR2.AADJE ビットを 1 にすると、自動補正が有効になります。自動補正では、RCR2.AADJE ビットで選択した補正周期ごとに、プリスケーラでカウントした値に対して RADJ レジスタ値を加算または減算します。

(1) 例 1：サブクロックが 32.769kHz で動作している場合

(a) 補正方法

サブクロックが 32.769kHz で動作している場合、32769 クロックサイクルごとに 1 秒経過します。RTC は、32768 クロックサイクルで動作するよう設計されているため、1 秒ごとに 1 クロックサイクル分時計が進みます。時計は、1 分当たり 60 クロックサイクルのペースで早くなるため、1 分ごとに 60 クロックサイクルだけ遅らせる方法で補正が可能です。

レジスタ設定値（RCR2.CNTMD = 0 の場合）

- RCR2.AADJP ビット = 0（1 分ごとに補正）
- RADJ.PMADJ[1:0] ビット = 10b（プリスケーラに対して値を減算して補正）
- RADJ.ADJ[5:0] ビット = 60（3Ch）

(2) 例 2：サブクロックが 32.766kHz で動作している場合

(a) 補正方法

サブクロックが 32.766kHz で動作している場合、32766 クロックサイクルごとに 1 秒経過します。RTC は、32768 クロックサイクルで動作するよう設計されているため、1 秒ごとに 2 クロックサイクル分、時計が遅れます。時計は、10 秒当たり 20 クロックサイクルのペースで遅くなるため、10 秒ごとに 20 クロックサイクル分時計を進める方法で補正が可能です。

レジスタ設定値：（RCR2.CNTMD = 0 の場合）

- RCR2.AADJP ビット = 1（10 秒ごとに補正）
- RADJ.PMADJ[1:0] ビット = 01b（プリスケーラに対して値を加算して補正）
- RADJ.ADJ[5:0] ビット = 20（14h）

(3) 例 3：サブクロックが 32.764kHz で動作している場合

(a) 補正方法

32.764kHz で動作している場合、32764 クロックサイクルで 1 秒経過します。RTC は、32768 クロックサイクルを 1 秒として動作するため、時計は 1 秒間に 4 クロックサイクル分遅れます。8 秒間では 32 クロックサイクル遅れるため、8 秒ごとに 32 クロックサイクル分時計を進める方法で補正が可能です。

レジスタ設定値（RCR2.CNTMD = 1 の場合）

- RCR2.AADJP ビット = 1（8 秒ごとに補正）
- RADJ.PMADJ[1:0] ビット = 01b（プリスケーラに対して値を加算して補正）
- RADJ.ADJ[5:0] ビット = 32（20h）

25.3.8.2 ソフトウェアによる補正

RCR2.AADJE ビットを 0 にすると、ソフトウェアによる補正が有効になります。ソフトウェアによる補正では、RADJ レジスタへの書き込み命令を実行したタイミングで、プリスケーラでカウントした値に対し RADJ レジスタ値を加算または減算します。

(1) 例 1：サブクロックが 32.769kHz で動作している場合

(a) 補正方法

サブクロックが 32.769kHz で動作している場合、32769 クロックサイクルごとに 1 秒経過します。RTC は、32768 クロックサイクルで動作するよう設計されているため、1 秒ごとに 1 クロックサイクル分時計が進みます。時計は、1 秒当たり 1 クロックサイクルのペースで早くなるため、1 秒ごとに 1 クロックサイクル分時計を遅らせる方法で補正が可能です。

(b) レジスタ設定値

- RADJ.PMADJ[1:0] ビット = 10b（プリスケーラに対して値を減算して補正）
- RADJ.ADJ[5:0] ビット = 1（01h）
  この値を、1 秒の割り込みにつき 1 回、RADJ レジスタに書き込みます

25.3.8.3 補正モードの変更手順

補正モードを変更する場合は、RADJ.PMADJ[1:0] ビットを 00b（補正を行わない）にした後、RCR2.AADJE ビットの値を変更してください。

ソフトウェアによる補正から自動補正へ切り替える場合

1. RADJ.PMADJ[1:0] ビットを 00b（補正を行わない）にします。
2. RCR2.AADJE ビットを 1（自動補正を有効）にします。
3. RCR2.AADJP ビットで補正周期を選択します。
4. RADJ.PMADJ[1:0] ビットに加算または減算を設定し、RADJ.ADJ[5:0] ビットに時間誤差補正値を設定します。

自動補正からソフトウェアによる補正へ切り替える場合

1. RADJ.PMADJ[1:0] ビットを 00b（補正を行わない）にします。
2. RCR2.AADJE ビットを 0（ソフトウェアによる補正を有効）にします。
3. 任意のタイミングで、RADJ.PMADJ[1:0] ビットに加算または減算を設定し、RADJ.ADJ[5:0] ビットに時間誤差補正値を設定することにより、補正を開始します。以降、RADJ レジスタに値を書き込むごとに時間補正が行われます。

25.3.8.4 補正の停止手順

補正を停止するには、RADJ.PMADJ[1:0] ビットを 00b（補正を行わない）にします。

25.3.8.5　時間キャプチャ

RTC は、時間キャプチャイベント入力端子のエッジ検出によって、月、日、時、分、および秒の値、またはバイナリカウンタ 3 ～ 0 の値を格納することが可能です。

また、RTC の時間キャプチャイベント入力端子には、ノイズフィルタを使用できます。ノイズフィルタを有効にした場合、端子の入力レベルが 3 回一致すると TCST ビットが 1 になります。

時間キャプチャイベント入力端子は、端子ごとにノイズフィルタの ON/OFF を設定できます。VBTICTLR.VCH0IEN ビットを 1 にして、RTCIC0 入力を有効にしてください。ノイズフィルタ OFF の場合の動作を図 25.9 に、ノイズフィルタ ON の場合の動作を図 25.10 に示します。

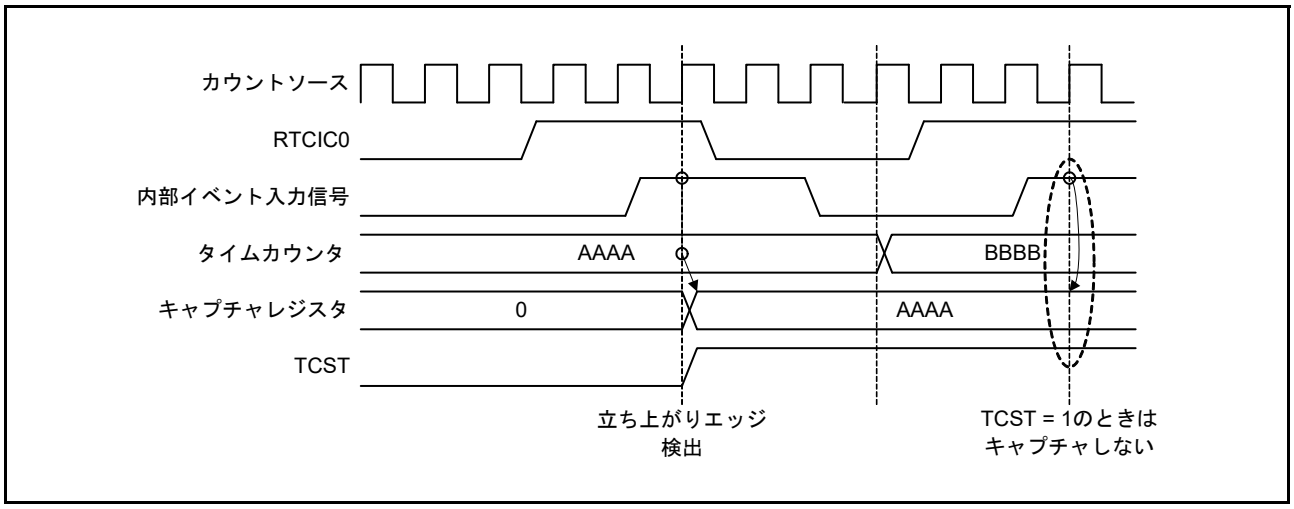


図 25.9　　フィルタ OFF 時の時間キャプチャ動作のタイミング

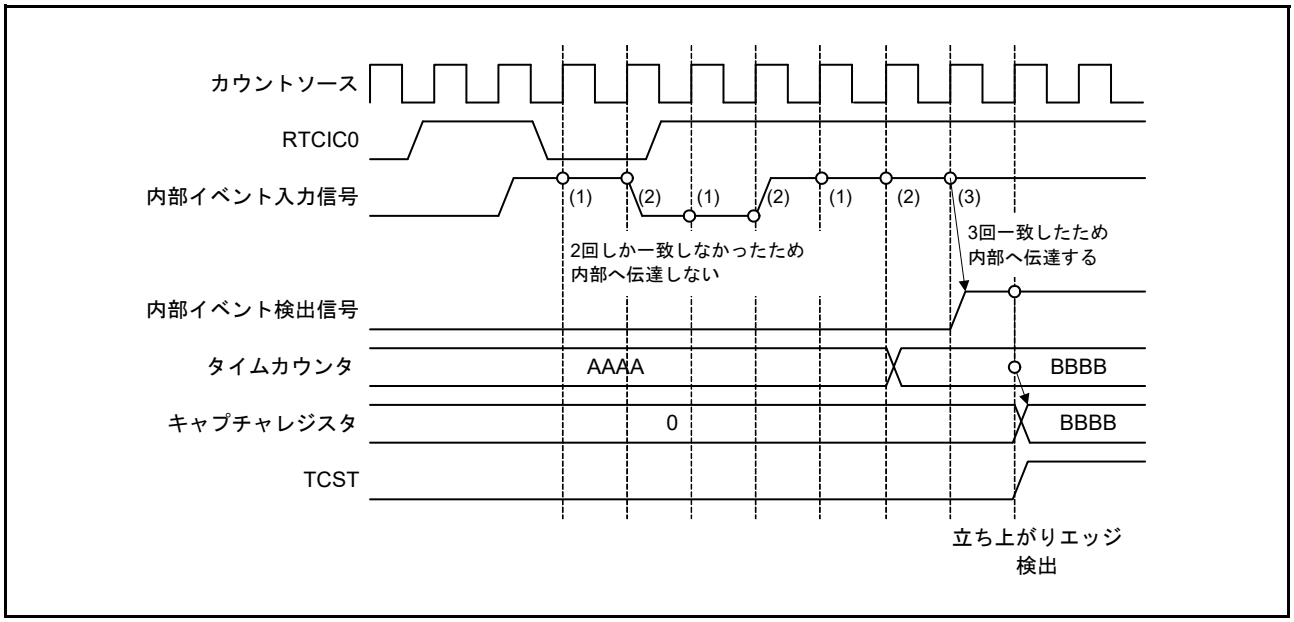


図 25.10　　フィルタ ON 時の時間キャプチャ動作のタイミング

25.4　割り込み要因

RTC には、表 25.3 に示すように、3 種類の割り込み要因があります。

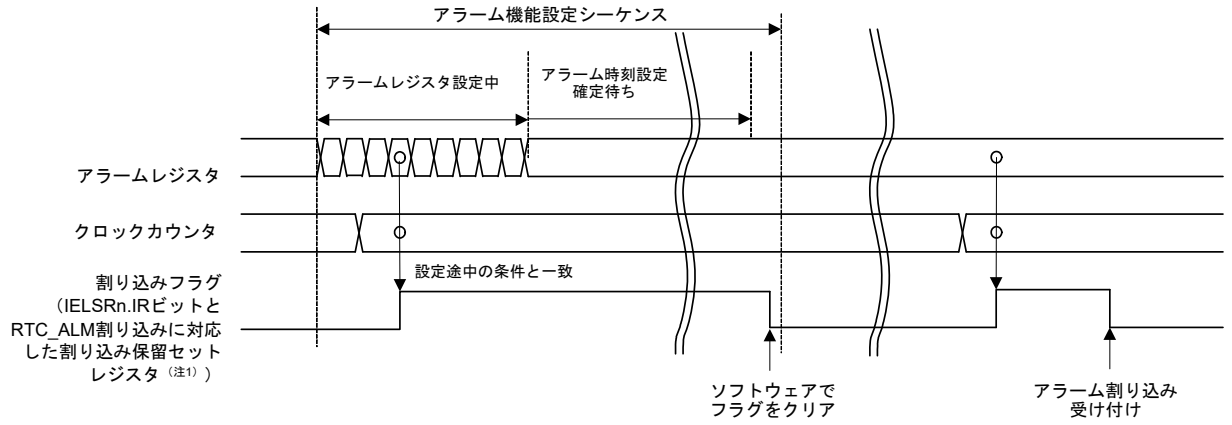
表 25.3　　RTC割り込み要因

名称	割り込み要因
RTC_ALM	アラーム割り込み
RTC_PRD	周期割り込み
RTC_CUP	桁上げ割り込み

(1)　アラーム割り込み（RTC_ALM）

この割り込みは、アラームレジスタとリアルタイムクロックカウンタの比較結果に基づいて発生します。詳細は、25.3.6　アラーム機能を参照してください。

アラームレジスタの設定値が時計カウンタと一致したとき、割り込みフラグが 1 になる可能性があるため、アラームレジスタの値を変更した後は、アラーム時刻の設定が確定されるまで待って、IELSRn.IR ビットと、RTC_ALM 割り込みに対応する割り込みセット保留レジスタを再び 0 にクリアしてください。アラーム割り込みの割り込みフラグが 1 になった後、アラームレジスタと時計カウンタを不一致状態に戻すと、再び一致するかアラームレジスタの値の再設定を行うまでフラグは 1 になりません。



注1.　対応する割り込みベクタ番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

図 25.11　　アラーム割り込み（RTC_ALM）のタイミング図

(2)　周期割り込み（RTC_PRD）

この割り込みは、2 秒、1 秒、1/2 秒、1/4 秒、1/8 秒、1/16 秒、1/32 秒、1/64 秒、1/128 秒、または 1/256 秒周期で発生します。RCR1.PES[3:0] ビットによって割り込み周期の選択が可能です。

(3)　桁上げ割り込み（RTC_CUP）

この割り込みは、秒カウンタ／バイナリカウンタ 0 への桁上げが生じたとき、または 64Hz カウンタの読み出しと R64CNT カウンタへの桁上げが重なったときに発生します。

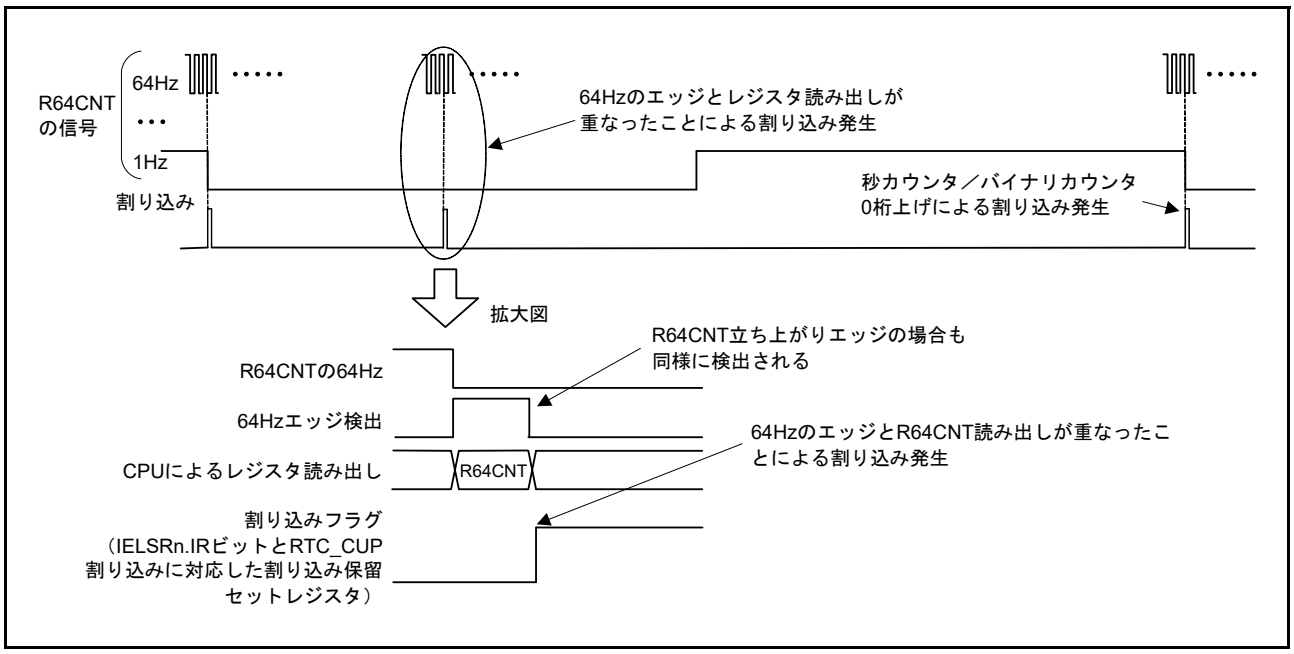


図 25.12　　桁上げ割り込み（RTC_CUP）のタイミング図

25.5　イベントリンク出力機能

RTC は、イベントリンクコントローラ（ELC）に対して周期イベント出力（RTC_PRD）のイベント信号を発生させることで、あらかじめ選択しておいた他のモジュールを動作させることが可能です。

RCR1.PES[3:0] ビットの設定により、2 秒、1 秒、1/2 秒、1/4 秒、1/8 秒、1/16 秒、1/32 秒、1/64 秒、1/128 秒、1/256 秒から選択した周期でイベントを出力します。イベント発生を選択した直後のイベント発生周期は保証されません。

注 .　RTC からのイベントリンク機能を使用する場合は、必ず RTC の設定（初期化、時刻設定など）を行った後、ELC を設定してください。ELC の設定後に RTC を設定すると、意図しないイベント信号が出力される場合があります。

25.5.1　割り込み処理とイベントリンク機能

RTC には、周期割り込みを許可または禁止する許可ビットがあります。割り込み要因が発生すると、対応する割り込み許可ビットが許可の場合に、CPU に対して割り込み要求信号が出力されます。

これに対して、イベントリンク出力信号は、対応する割り込み許可ビットの設定とは無関係に、割り込み要因が発生すると、ELC を介して他のモジュールにイベント信号として送信されます。

注 .　ソフトウェアスタンバイモード中も、アラーム割り込みと周期割り込みの出力は可能ですが、ELC 用の周期イベント信号は出力されません。

25.6 使用上の注意事項

25.6.1 カウント動作時のレジスタ書き込みについて

カウント動作時（RCR2.START ビット = 1 のとき）は、以下のレジスタやビットに書き込みを行わないでください。

- RSECCNT/BCNT0
- RMINCNT/BCNT1
- RHRCNT/BCNT2
- RDAYCNT
- RWKCNT/BCNT3
- RMONCNT
- RYRCNT
- RCR1.RTCOS
- RCR2.RTCOE
- RCR2.HR24
- RFRL

上記のレジスタのいずれかに書き込みを行う場合は、前もってカウント動作を停止する必要があります。

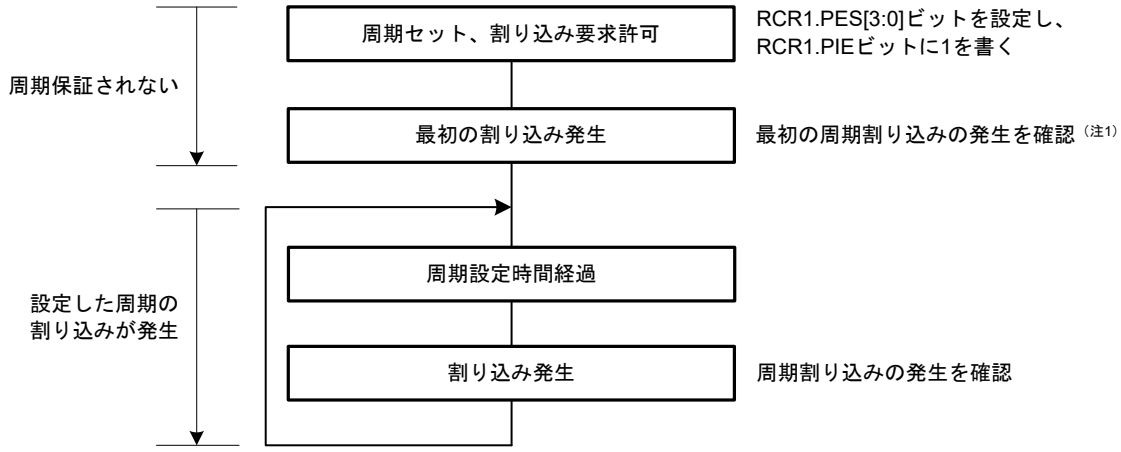
25.6.2　周期割り込みの使用について

周期割り込みの使用法を図 25.13 に示します。

周期割り込みの発生とその周期は、RCR1.PES[3:0] ビットの設定で変更できます。ただし、割り込みの生成にはプリスケーラ R64CNT と RSECCNT/BCNT0 カウンタが使用されるため、RCR1.PES[3:0] ビットの設定直後は、割り込み発生周期が保証されません。さらに、以下のいずれかによって、割り込み発生周期が影響される可能性があります。

- カウンタ動作の停止／動作／リセット
- RTC ソフトウェアリセット
- RCR2 値の変更による 30 秒調整

時間誤差補正機能を使用した場合、補正後の割り込み発生周期は、補正値に従って加算または減算されます。



注 1.　周期割り込みを使用中に割り込み発生周期を変更した場合は、設定完了時に割り込みが発生する場合があります。設定直後に割り込みが発生している場合は、設定直後の割り込みを含めて 2 回目の割り込みまで周期が保証されません。

図 25.13　周期割り込み機能の使用法

25.6.3　RTCOUT（1Hz/64Hz）クロック出力について

RCR2 レジスタ値を変更して、カウント動作の停止／動作／リセット、RTC ソフトウェアリセット、および 30 秒調整を行うと、RTCOUT（1Hz/64Hz）出力の周期に影響を与えます。時間誤差補正機能を使用した場合、補正後の RTCOUT（1Hz/64Hz）出力の周期は、補正値に従って加算または減算されます。

25.6.4　レジスタ設定後の低消費電力モードへの遷移について

RTC レジスタの書き込み中に低消費電力状態（ソフトウェアスタンバイモードまたはバッテリバックアップ状態）へ遷移すると、レジスタ値が破壊される場合があります。レジスタの設定後は、設定が確定されたことを確認してから低消費電力状態へ遷移してください。

25.6.5 レジスタの書き込み／読み出し時の注意事項

- カウンタレジスタ（秒カウンタなど）へ書き込んだ後、そのカウンタレジスタを読み出す際は、25.3.5 64Hz カウンタと時刻の読み出しに示す手順に従ってください
- カウントレジスタ、アラームレジスタ、年アラームイネーブルレジスタ、RCR2.AADJE、AADJP、HR24 ビット、RCR4 レジスタ、または周波数レジスタに書いた値は、書き込み後、4 回目の読み出しから反映されます
- RCR1.CIE ビット、RCR1.RTCOS ビット、および RCR2.RTCOE ビットは、書き込み直後に書いた値を読み出すことができます
- リセット、ソフトウェアスタンバイモード、またはバッテリバックアップ状態から復帰した後、時計カウンタ値を読み出す際は、時計が動作中（RCR2.START ビット = 1）の状態で 1/128 秒待ってください
- リセット発生後、カウントソースクロックが 6 サイクル経過してから、RTC レジスタへ書き込んでください

25.6.6 カウントモードの変更について

カウントモード（カレンダ／バイナリ）を変更する場合は、RCR2.START ビットを 0 にしてカウント動作を停止させた後、初期設定からやり直してください。初期設定の詳細は、25.3.1 電源投入後のレジスタ初期設定の概要を参照してください。

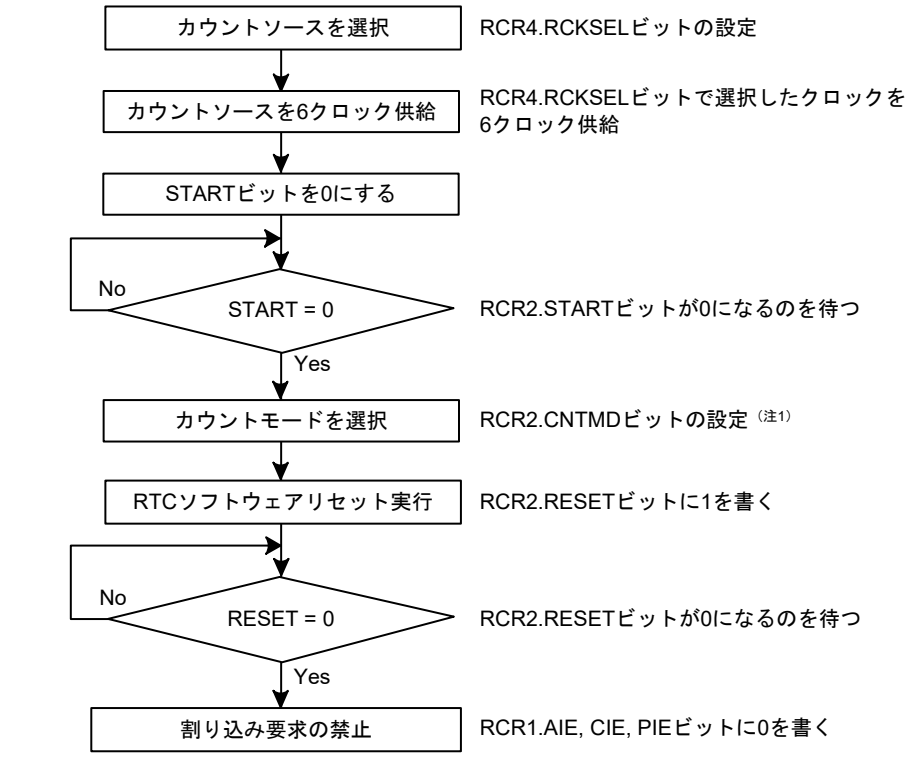
25.6.7　リアルタイムクロックを使用しない場合の初期化手順

RTC 内のレジスタは、リセットによって初期化されません。初期状態によっては、意図しない割り込み要求の発生やカウンタの動作によって、消費電力が増大する場合があります。

リアルタイムクロックを必要としない製品では、図 25.14 に示す初期化手順に従って、レジスタを初期化してください。

他の方法として、サブクロックをシステムクロックにもリアルタイムクロックにも使用しない場合は、RCR4.RCKSEL ビットを 0（サブクロック発振器を選択）にした後、サブクロックを停止させることでカウンタを停止できます。サブクロックを停止させるには、SOSCCR.SOSTP ビットに 1 を書き込んでください。

SOSCCR.SOSTP ビットの設定については、「9.　クロック発生回路」を参照してください。



注 1.　START ビットを 0 にすると同時にカウントモードを設定した場合、このステップは不要です。

図 25.14　初期化手順

25.6.8　クロックソースを切り替える場合

SCKCR.CKSEL[2:0] を変更することによりクロックソースを切り替える場合、セレクタからのクロック出力は、切り替えたクロックで 4 サイクル間停止します。このとき RTC 定期割り込みまたは RTC 定期イベント出力が発生した場合は、その割り込みまたはイベントは無効です。

26.　ウォッチドッグタイマ（WDT）

26.1　概要

ウォッチドッグタイマ（WDT）は 14 ビットのダウンカウンタです。システムが暴走して WDT をリフレッシュできなくなったため、カウンタがアンダーフローした場合、MCU をリセットするために使用できます。さらに、ノンマスカブル割り込みやアンダーフロー割り込みを発生させるためにも使用できます。リフレッシュ許可期間を設定することで、カウンタのリフレッシュやシステムの暴走検知が可能になります。表 26.1 に WDT の仕様を、図 26.1 にブロック図を示します。

表 26.1　　WDTの仕様

項目	内容
カウントソース	周辺クロック（PCLKB）
クロック分周比	4分周／64分周／128分周／512分周／2048分周／8192分周
カウンタ動作	14ビットのダウンカウンタによるダウンカウント
カウンタ開始条件	• オートスタートモード：　リセット後、またはアンダーフロー／リフレッシュエラー発生後に自動的にカウント開始 • レジスタスタートモード：WDTRR レジスタへの書き込みによるリフレッシュ動作でカウント開始
カウンタ停止条件	• リセット（ダウンカウンタおよび他のレジスタが初期値に戻る） • カウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時
ウィンドウ機能	ウィンドウ開始／終了位置を設定可能（リフレッシュ許可／禁止期間）
ウォッチドッグタイマリセット要因	• ダウンカウンタのアンダーフロー • リフレッシュ許可期間外でのリフレッシュ動作（リフレッシュエラー）
ノンマスカブル割り込み／割り込み要因	• ダウンカウンタのアンダーフロー • リフレッシュ許可期間外でのリフレッシュ動作（リフレッシュエラー）
カウンタ値の読み出し	WDTSR レジスタを読み出すことで、ダウンカウンタ値の読み出しが可能
イベントリンク機能（出力）	• ダウンカウンタアンダーフローイベント出力 • リフレッシュエラーイベント出力
出力信号（内部信号）	• リセット出力 • 割り込み要求出力 • スリープモードカウント停止制御出力

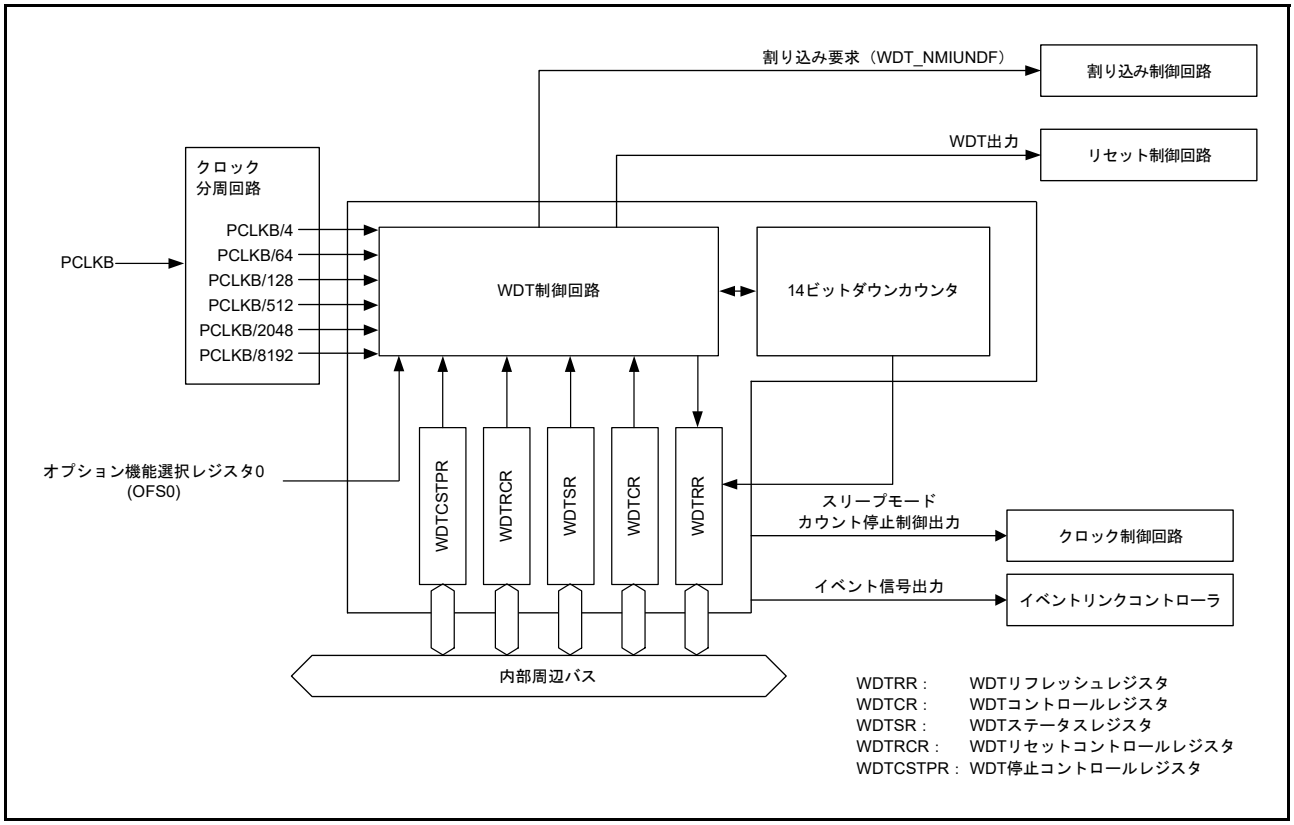
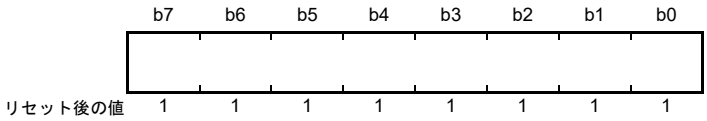


図 26.1 WDT のブロック図

26.2　レジスタの説明

26.2.1　WDT リフレッシュレジスタ（WDTRR）

アドレス　WDT.WDTRR 4004 4200h



ビット	機能	R/W
b7-b0	このレジスタに対して、00hの書き込み後、FFhの書き込みでダウンカウンタがリフレッシュ	R/W

WDTRR レジスタは、WDT のダウンカウンタをリフレッシュするためのレジスタです。

リフレッシュ許可期間内に、WDTRR レジスタに 00h を書き込んだ後、FFh を書き込むこと（リフレッシュ動作）により、WDT のダウンカウンタがリフレッシュされます。

オートスタートモードでは、ダウンカウンタがリフレッシュされると、オプション機能選択レジスタ 0 の WDT タイムアウト期間選択ビット（OFS0.WDTTOPS[1:0]）で設定した値からダウンカウントがスタートします。レジスタスタートモードでは、WDT コントロールレジスタのタイムアウト期間選択ビット（WDTCR.TOPS[1:0]）で設定した値からダウンカウントがスタートします。

読み出し値は、00h を書き込んだ場合は 00h であり、00h 以外の値を書き込んだ場合は FFh となります。リフレッシュ動作の詳細は、26.3.3　リフレッシュ動作を参照してください。

26.2.2 WDT コントロールレジスタ（WDTCR）

アドレス WDT.WDTCR 4004 4202h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	RPSS[1:0]		—	—	RPES[1:0]		CKS[3:0]				—	—	TOPS[1:0]	
リセット後の値	0	0	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	TOPS[1:0]	タイムアウト期間選択	b1 b0 0 0：1024サイクル（03FFh） 0 1：4096サイクル（0FFFh） 1 0：8192サイクル（1FFFh） 1 1：16384サイクル（3FFFh）	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W
b7-b4	CKS[3:0]	クロック分周比選択	b7 b4 0 0 0 1 ：PCLKB/4 0 1 0 0 ：PCLKB/64 1 1 1 1 ：PCLKB/128 0 1 1 0 ：PCLKB/512 0 1 1 1 ：PCLKB/2048 1 0 0 0 ：PCLKB/8192 上記以外は設定しないでください。	R/W
b9-b8	RPES[1:0]	ウィンドウ終了位置選択	b9 b8 0 0：75% 0 1：50% 1 0：25% 1 1：0%（ウィンドウ終了位置の設定なし）	R/W
b11-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W
b13-b12	RPSS[1:0]	ウィンドウ開始位置選択	b13 b12 0 0：25% 0 1：50% 1 0：75% 1 1：100%（ウィンドウ開始位置の設定なし）	R/W
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W

WDTCR レジスタへの書き込みには、いくつかの制限があります。詳細は、26.3.2 WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタへの書き込み制御を参照してください。

オートスタートモードの場合、WDTCR レジスタの設定値は無効となり、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の設定値が有効となります。WDTCR レジスタの設定は、OFS0 レジスタでも可能です。詳細は、26.3.7 オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係を参照してください。

TOPS[1:0] ビット（タイムアウト期間選択）

タイムアウト期間（ダウンカウンタがアンダーフローするまでの期間）を、CKS[3:0] ビットで設定した分周クロックを 1 サイクルとして、1024 サイクル、4096 サイクル、8192 サイクル、16384 サイクルから選択します。

ダウンカウンタのリフレッシュ後、アンダーフローするまでの時間（PCLKB サイクル数）は、CKS[3:0] ビットと TOPS[1:0] ビットの組み合わせで決定されます。

表 26.2 に、CKS[3:0] および TOPS[1:0] ビットの設定値、タイムアウト期間、および PCLKB サイクル数の関係を示します。

表 26.2　タイムアウト期間の設定

CKS[3:0]ビット				TOPS[1:0]ビット		クロック分周比	タイムアウト期間（サイクル数）	PCLKB クロックサイクル数
b7	b6	b5	b4	b1	b0			
0	0	0	1	0	0	PCLKB/4	1024	4096
				0	1		4096	16384
				1	0		8192	32768
				1	1		16384	65536
0	1	0	0	0	0	PCLKB/64	1024	65536
				0	1		4096	262144
				1	0		8192	524288
				1	1		16384	1048576
1	1	1	1	0	0	PCLKB/128	1024	131072
				0	1		4096	524288
				1	0		8192	1048576
				1	1		16384	2097152
0	1	1	0	0	0	PCLKB/512	1024	524288
				0	1		4096	2097152
				1	0		8192	4194304
				1	1		16384	8388608
0	1	1	1	0	0	PCLKB/2048	1024	2097152
				0	1		4096	8388608
				1	0		8192	16777216
				1	1		16384	33554432
1	0	0	0	0	0	PCLKB/8192	1024	8388608
				0	1		4096	33554432
				1	0		8192	67108864
				1	1		16384	134217728

CKS[3:0] ビット（クロック分周比選択）

ダウンカウンタで使用するクロックの分周比を設定します。分周比は、周辺クロック（PCLKB）の 4 分周／ 64 分周／ 128 分周／ 512 分周／ 2048 分周／ 8192 分周から選択できます。TOPS[1:0] ビット設定と組み合わせて、WDT のカウント期間を PCLKB クロックの 4096 ～ 134217728 サイクルから選択できます。

RPES[1:0] ビット（ウィンドウ終了位置選択）

リフレッシュ許可期間を示すウィンドウ終了位置を設定します。ウィンドウ終了位置は、タイムアウト期間の 75%、50%、25%、0% から選択できます。ウィンドウ終了位置には、ウィンドウ開始位置より小さい値を選択してください（ウィンドウ開始位置＞ウィンドウ終了位置）。ウィンドウ終了位置がウィンドウ開始位置よりも大きいと、ウィンドウ開始位置の設定のみが有効となります。

RPSS[1:0] ビット（ウィンドウ開始位置選択）

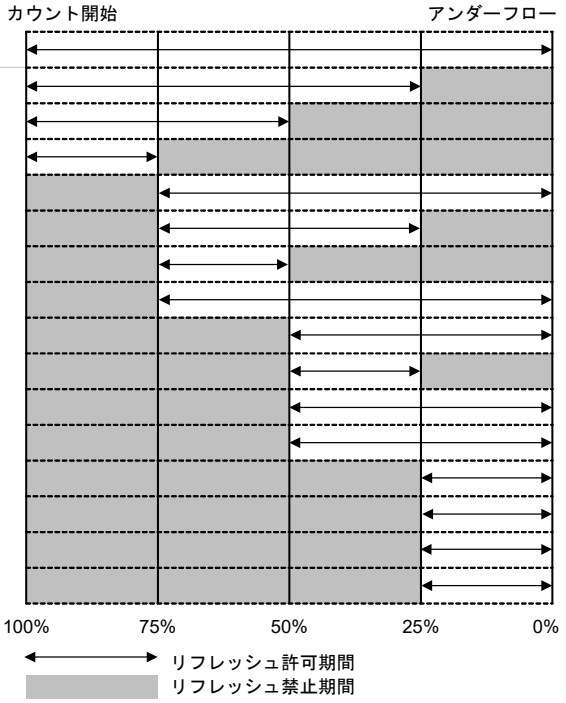
リフレッシュ許可期間を示すウィンドウ開始位置を設定します。ウィンドウ終了位置は、タイムアウト期間の 100%、75%、50%、25% から選択できます。ウィンドウ開始位置には、ウィンドウ終了位置より大きい値を設定してください。ウィンドウ開始位置に対してウィンドウ終了位置以下の値を設定した場合、ウィンドウ終了位置は 0% になります。

表 26.3 に、TOPS[1:0] ビットで設定されるタイムアウト期間を、図 26.2 に RPSS[1:0] ビットおよび RPES[1:0] ビットで設定されるリフレッシュ許可期間を示します。

表 26.3　タイムアウト期間とウィンドウ開始／終了カウンタ値の対応表

TOPS[1:0]ビット		タイムアウト期間		ウィンドウ開始／終了カウンタ値			
		サイクル数	カウンタ値	100%	75%	50%	25%
0	0	1024	03FFh	03FFh	02FFh	01FFh	00FFh
0	1	4096	0FFFh	0FFFh	0BFFh	07FFh	03FFh
1	0	8192	1FFFh	1FFFh	17FFh	0FFFh	07FFh
1	1	16384	3FFFh	3FFFh	2FFFh	1FFFh	0FFFh

RPSS[1:0]ビット		RPES[1:0]ビット		ウィンドウ	
b13	b12	b9	b8	開始（%）	終了（%）
1	1	1	1	100	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75
1	0	1	1	75	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75
0	1	1	1	50	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75
0	0	1	1	25	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75



注 .　「ウィンドウ終了」≧「ウィンドウ開始」設定を行った場合、「ウィンドウ終了」設定は 0% になります。

図 26.2　RPSS[1:0] および RPES[1:0] ビットとリフレッシュ許可期間

26.2.3 WDT ステータスレジスタ（WDTSR）

アドレス WDT.WDTSR 4004 4204h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	REFEF	UNDFF	CNTVAL[13:0]													
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	CNTVAL[13:0]	ダウンカウンタ値	ダウンカウンタのカウンタ値	R
b14	UNDFF	アンダーフローフラグ	0：アンダーフロー発生なし 1：アンダーフロー発生あり	R(/W) （注1）
b15	REFEF	リフレッシュエラーフラグ	0：リフレッシュエラー発生なし 1：リフレッシュエラー発生あり	R(/W) （注1）

注 1.　フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

CNTVAL[13:0] ビット（ダウンカウンタ値）

本ビットを読み出すことにより、ダウンカウンタの値を確認できます。読み出し値は、実際のカウント値から 1 カウントずれる場合があります。

UNDFF フラグ（アンダーフローフラグ）

本フラグを読み出すことにより、ダウンカウンタのアンダーフロー発生状態を確認できます。読み出し値が 1 のとき、ダウンカウンタがアンダーフローしたことを示します。値を 0 にするには 0 を書き込んでください。1 の書き込みは無効です。

UNDFF フラグのクリアには、(N + 1) PCLKB サイクルを要します。さらに、アンダーフローの発生から (N + 1) PCLKB サイクルの間は、このフラグをクリアしても無視されます。N は、次式のように、WDTCR.CKS[3:0] ビットで指定されます。

- WDTCR.CKS[3:0] = 0001b のとき、N = 4
- WDTCR.CKS[3:0] = 0100b のとき、N = 64
- WDTCR.CKS[3:0] = 1111b のとき、N = 128
- WDTCR.CKS[3:0] = 0110b のとき、N = 512
- WDTCR.CKS[3:0] = 0111b のとき、N = 2048
- WDTCR.CKS[3:0] = 1000b のとき、N = 8192

REFEF フラグ（リフレッシュエラーフラグ）

本フラグを読み出すことにより、リフレッシュエラー発生状態を確認できます。読み出し値が 1 のとき、リフレッシュエラーが発生したことを示します。値を 0 にするには 0 を書き込んでください。1 の書き込みは無効です。

REFEF フラグのクリアには、(N + 1) PCLKB サイクルを要します。さらに、リフレッシュエラーの発生から (N + 1) PCLKB サイクルの間は、このフラグをクリアしても無視されます。N は、次式のように、WDTCR.CKS[3:0] ビットで指定されます。

- WDTCR.CKS[3:0] = 0001b のとき、N = 4
- WDTCR.CKS[3:0] = 0100b のとき、N = 64
- WDTCR.CKS[3:0] = 1111b のとき、N = 128
- WDTCR.CKS[3:0] = 0110b のとき、N = 512
- WDTCR.CKS[3:0] = 0111b のとき、N = 2048
- WDTCR.CKS[3:0] = 1000b のとき、N = 8192

26.2.4　WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）

アドレス　WDT.WDTRCR 4004 4206h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RSTIRQS	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W
b7	RSTIRQS	リセット割り込み要求選択	0：ノンマスカブル割り込み要求または割り込み要求の出力を許可 1：リセット出力を許可	R/W

WDTRCR レジスタへの書き込みには、いくつかの制限があります。詳細は、26.3.2　WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタへの書き込み制御を参照してください。

オートスタートモードの場合、WDTRCR レジスタの設定値は無効となり、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の設定値が有効となります。OFS0 レジスタの設定は、WDTCR レジスタと同様の設定が可能です。詳細は、26.3.7　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係を参照してください。

26.2.5　WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR）

アドレス　WDT.WDTCSTPR 4004 4208h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SLCSTP	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書き込みは無効です。	R/W
b7	SLCSTP	スリープモードカウント停止制御	0：カウント停止を禁止 1：スリープモード遷移時にカウント停止	R/W

WDTCSTPR レジスタは、低消費電力状態において、WDT カウンタを停止させるか否かを制御します。WDTCSTPR レジスタへの書き込みには、いくつかの制限があります。詳細は、26.3.2　WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタへの書き込み制御を参照してください。

オートスタートモードの場合、WDTCSTPR レジスタの設定値は無効となり、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の設定値が有効となります。OFS0 レジスタの設定は、WDTCSTPR レジスタと同様の設定が可能です。詳細は、26.3.7　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係を参照してください。

SLCSTP ビット（スリープモードカウント停止制御）

スリープモード遷移時に、カウントを停止させるかどうかを選択します。

26.2.6　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）

OFS0 レジスタの詳細については、26.3.7　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係を参照してください。

26.3 動作説明

26.3.1 スタートモード別のカウント動作

WDT には 2 つのスタートモードがあります。

- オートスタートモード：リセット状態の解除後、自動的にカウント開始
- レジスタスタートモード：リフレッシュ（レジスタへの書き込み）によってカウント開始

オートスタートモードでは、リセット状態の解除後、フラッシュ内のオプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の設定に従って自動的にカウントがスタートします。

レジスタスタートモードでは、リセット状態の解除後、各レジスタを設定してからリフレッシュ（レジスタへの書き込み）を行うと、カウントがスタートします。

オートスタートモードまたはレジスタスタートモードの選択は、OFS0 レジスタの WDT スタートモード選択ビット（OFS0.WDTSTRT）で行います。

オートスタートモードを選択した場合、WDT コントロールレジスタ（WDTCR）、WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）、および WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR）の設定値は無効となり、OFS0 レジスタの設定値が有効となります。

レジスタスタートモードを選択した場合、OFS0 レジスタの設定値は無効となり、WDT コントロールレジスタ（WDTCR）、WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）、および WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR）の設定値が有効となります。

26.3.1.1 レジスタスタートモード

WDT スタートモード選択ビット（OFS0.WDTSTRT）が 1 の場合、レジスタスタートモードが選択されて、WDT コントロールレジスタ（WDTCR）、WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）、および WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR）が有効となります。

リセット状態の解除後に、WDTCSTPR レジスタにおいて以下をスリープモードに設定してください。

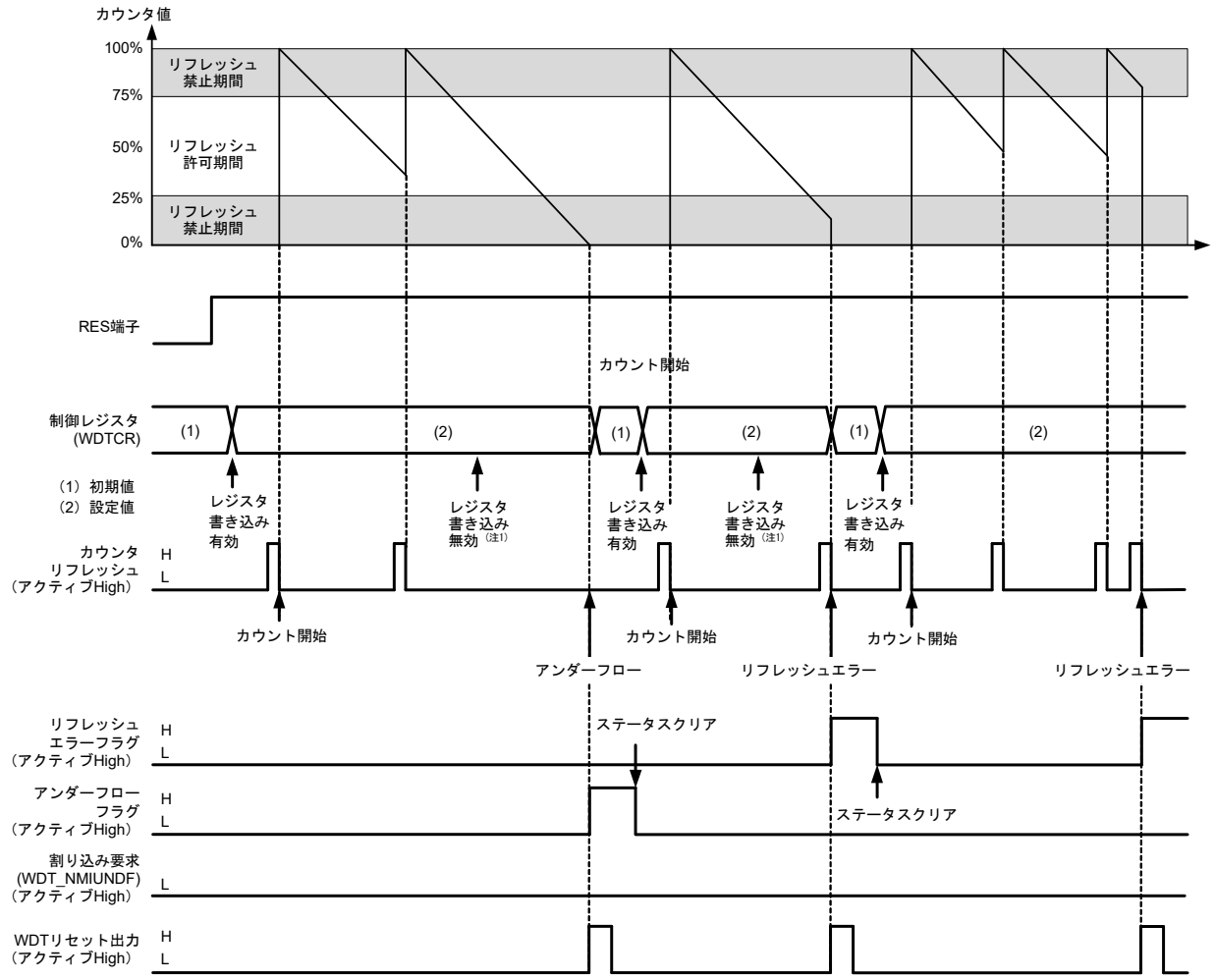
- クロック分周比
- ウィンドウ開始／終了位置
- WDTCR レジスタにおいて、タイムアウト期間
- WDTRCR レジスタにおいて、リセット出力または割り込み要求出力
- WDTCSTPR レジスタにおいて、スリープモード遷移時のカウント停止制御

ダウンカウンタをリフレッシュして、タイムアウト期間選択ビット（WDTCR.TOPS[1:0]）で設定した値からダウンカウントを開始してください。

以降、リフレッシュ許可期間内にカウンタがリフレッシュされる限り、リフレッシュごとにカウンタ値がリセットされて、ダウンカウント動作が継続します。カウントが継続する間、WDT はリセット信号を出力しません。ただし、プログラムの暴走によってダウンカウンタをリフレッシュできなかったため、ダウンカウンタがアンダーフローした場合や、リフレッシュ許可期間外にカウンタをリフレッシュしたため、リフレッシュエラーが発生した場合は、WDT はリセット信号を出力するか、またはノンマスカブル割り込み要求／割り込み要求（WDT_NMIUNDF）を出力します。リセット出力または割り込み要求出力の選択は、WDT リセット割り込み要求選択ビット（WDTRCR.RSTIRQS）で行います。ノンマスカブル割り込み要求または割り込み要求の選択は、WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可ビット（NMIER.WDTEN）で行います。

図 26.3 に、下記の条件下での動作例を示します。

- レジスタスタートモード（OFS0.WDTSTRT = 1）
- リセット出力を許可（WDTRCR.RSTIRQS = 1）
- ウィンドウ開始位置 75%（WDTCR.RPSS[1:0] = 10b）
- ウィンドウ終了位置 25%（WDTCR.RPES[1:0] = 10b）



注 1.　26.3.2　WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタへの書き込み制御を参照してください。

図 26.3　　レジスタスタートモードでの動作例

26.3.1.2 オートスタートモード

オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の WDT スタートモード選択ビット（OFS0.WDTSTRT）が 0 の場合、オートスタートモードが選択されて、WDT コントロールレジスタ（WDTCR）、WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）、および WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR）の設定値は無効となり、OFS0 レジスタの設定値が有効となります。

リセット状態の間に、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の下記の設定値が WDT のレジスタに設定されます。

- クロック分周比
- ウィンドウ開始／終了位置
- タイムアウト期間
- リセット出力または割り込み要求
- スリープモード遷移時のカウント停止制御

リセット状態が解除されると、WDT タイムアウト期間選択ビット（OFS0.WDTTOPS[1:0]）で設定された値からダウンカウンタが自動でダウンカウントを開始します。

以降、リフレッシュ許可期間内にカウンタがリフレッシュされる限り、リフレッシュごとにカウンタ値がリセットされて、ダウンカウント動作が継続します。カウントが継続する間、WDT はリセット信号を出力しません。

ただし、プログラムの暴走によってダウンカウンタをリフレッシュできなかったため、ダウンカウンタがアンダーフローした場合や、リフレッシュ許可期間外にカウンタをリフレッシュしたため、リフレッシュエラーが発生した場合は、WDT はリセット信号を出力するか、またはノンマスカブル割り込み要求／割り込み要求（WDT_NMIUNDF）を出力します。

リセット信号またはノンマスカブル割り込み要求／割り込み要求が発生してから 1 サイクルカウント後に、カウンタはタイムアウト期間をリロードします。ダウンカウンタにタイムアウト期間の値が設定され、カウントが再開します。

リセット出力または割り込み要求出力の選択は、WDT リセット割り込み要求選択ビット（OFS0.WDTRSTIRQS）で行います。ノンマスカブル割り込み要求または割り込み要求の選択は、WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可ビット（NMIER.WDTEN）で行います。

図 26.4 に、下記の条件下での動作（ノンマスカブル割り込み）例を示します。

- オートスタートモード（OFS0.WDTSTRT = 0）
- ノンマスカブル割り込み要求出力を許可（OFS0.WDTRSTIRQS = 0）
- ウィンドウ開始位置 75%（WDTCR.RPSS[1:0] = 10b）
- ウィンドウ終了位置 25%（WDTCR.RPES[1:0] = 10b）

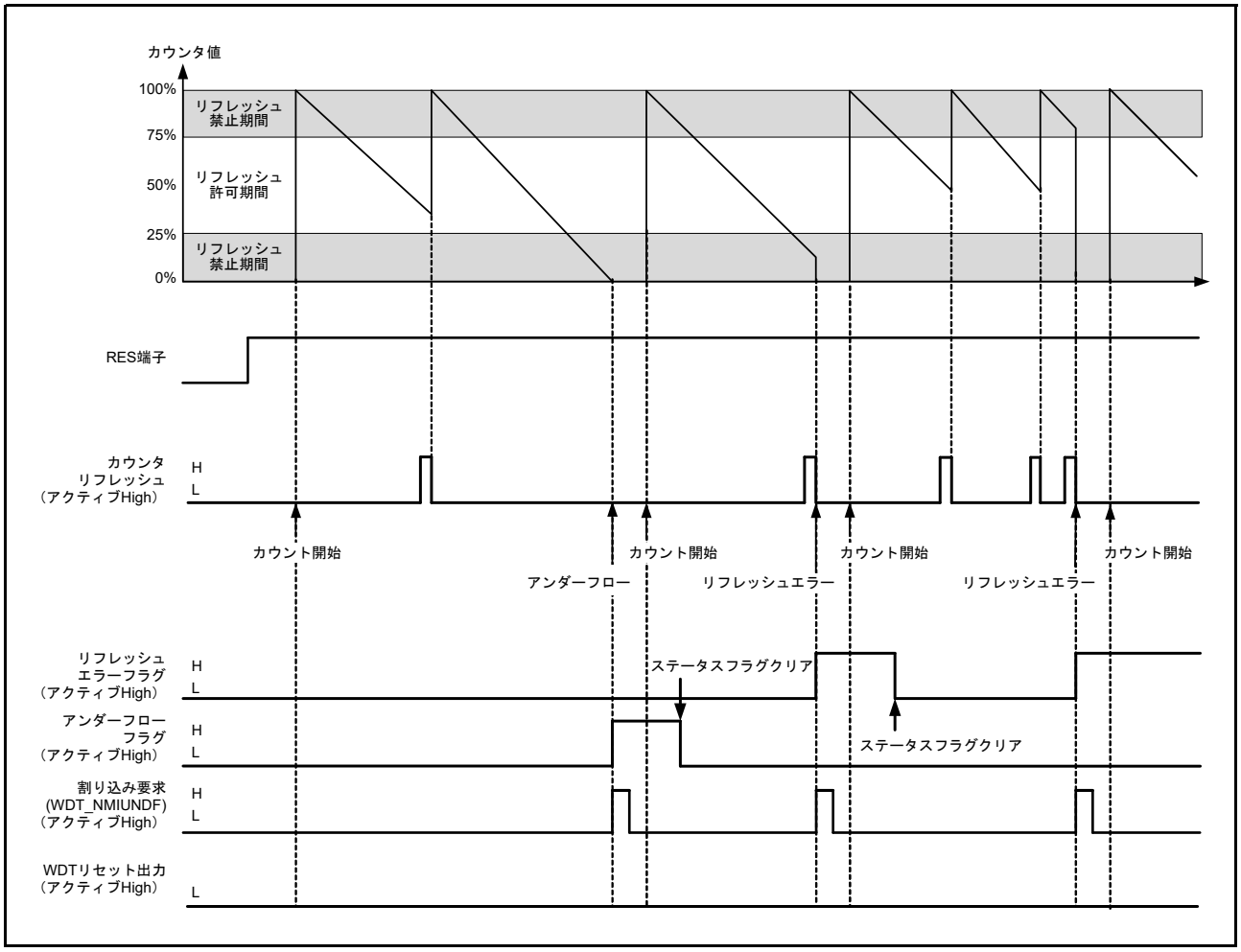


図 26.4　オートスタートモードでの動作例

26.3.2　WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタへの書き込み制御

WDT コントロールレジスタ（WDTCR）、WDT リセットコントロールレジスタ（WDTRCR）、および WDT カウント停止コントロールレジスタ（WDTCSTPR）への書き込みは、リセット状態の解除から最初のリフレッシュ動作までの間に可能です。

リフレッシュ（カウントスタート）後、あるいは WDTCR、WDTRCR、または WDTCSTPR レジスタへ書き込み後に、WDT 内部のプロテクト信号が 1 となり、以後の書き込みから WDTCR、WDTRCR、および WDTCSTPR レジスタを保護します。この保護動作は、WDT のリセット要因によって解除されます。それ以外のリセット要因では解除されません。

図 26.5 に、WDTCR レジスタへの書き込みに対して生成される制御波形を示します。

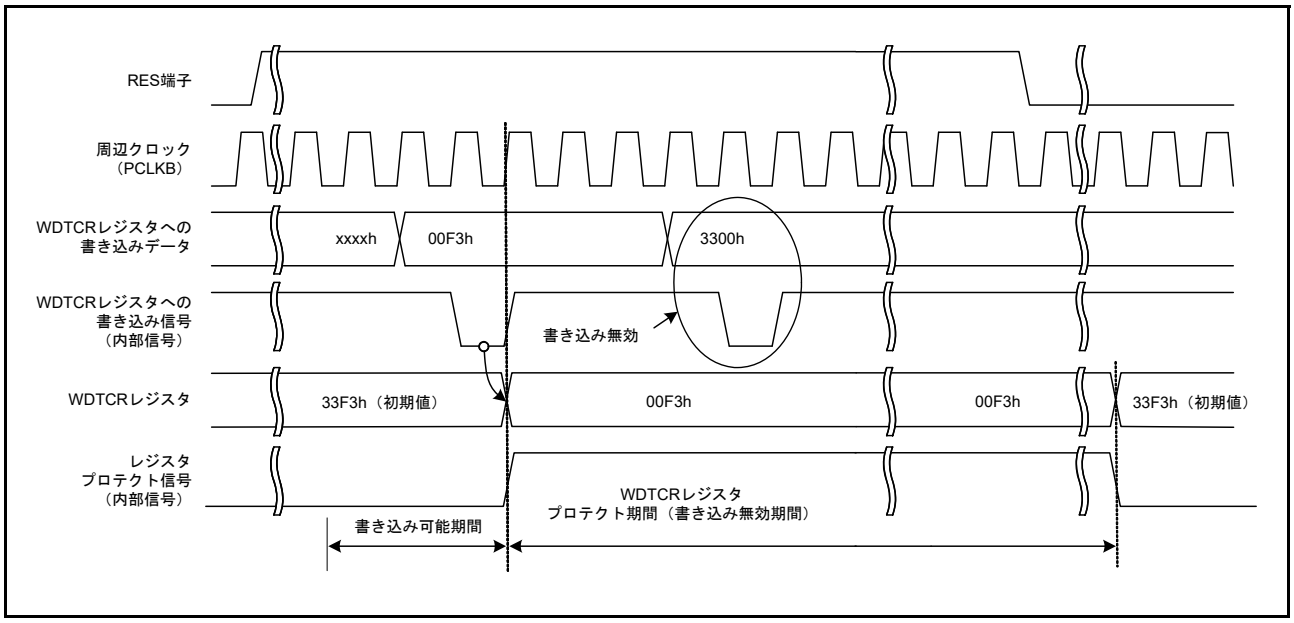


図 26.5　WDTCR レジスタへの書き込みに対して生成される制御波形

26.3.3　リフレッシュ動作

ダウンカウンタは、WDT リフレッシュレジスタ（WDTRR）に 00h と FFh を書き込むことによってリフレッシュされます。00h の後に FFh 以外の値を書き込むと、ダウンカウンタはリフレッシュされません。無効な値を書き込んだ場合は、WDTRR レジスタへ 00h と FFh を書き込むと、正常なリフレッシュが再開します。

また、WDTRR レジスタへの 00h の書き込みと FFh の書き込みの間で、WDTRR 以外のレジスタにアクセスしたり、WDTRR レジスタを読み出したりしても、正常にリフレッシュが行われます。

カウンタをリフレッシュするための書き込みは、リフレッシュ許可期間中に行う必要があります。この判定は FFh の書き込み時に行われます。そのため、00h の書き込みがリフレッシュ許可期間外であっても、リフレッシュは正常に行われます。

【カウンタのリフレッシュに有効な書き込み順序の例】

- 00h → FFh
- 00h（n - 1 回目）→ 00h（n 回目）→ FFh
- 00h →別レジスタへのアクセスまたは WDTRR レジスタの読み出し→ FFh

【カウンタのリフレッシュに無効な書き込み順序の例】

- 23h（00h 以外の値）→ FFh
- 00h → 54h（FFh 以外の値）
- 00h → AAh（00h および FFh 以外の値）→ FFh

ダウンカウンタのリフレッシュには、WDT リフレッシュレジスタ（WDTRR）に FFh を書き込んでから、カウント信号のサイクル数で最大 4 サイクルを要します。この要件を満たすには、ダウンカウンタのアンダーフローが発生する 4 カウントサイクル前までに、WDTRR レジスタへの FFh の書き込みを完了する必要があります。

図 26.6 に、クロック分周比が PCLKB/64 である場合の WDT リフレッシュ動作波形を示します。

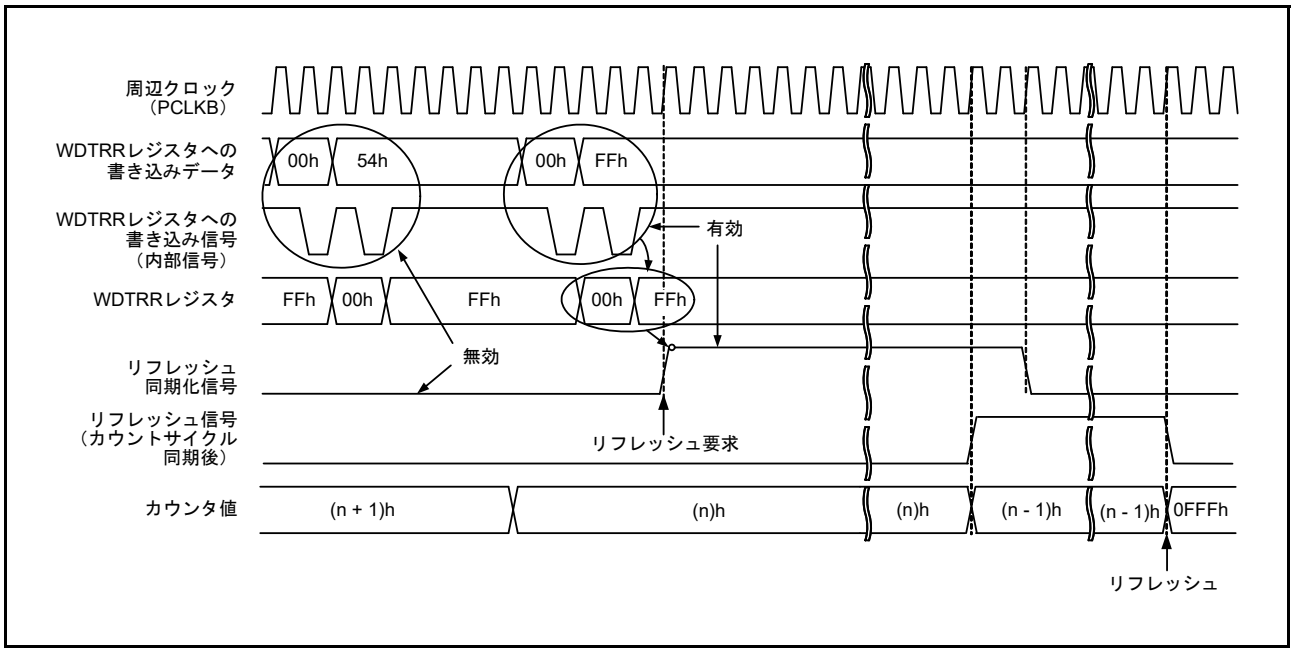


図 26.6　WDT リフレッシュ動作波形（WDTCR.CKS[3:0] = 0100b、WDTCR.TOPS[1:0] = 01b の場合）

26.3.4　リセット出力

レジスタスタートモードでリセット割り込み選択ビット（WDTRCR.RSTIRQS）を 1 にした場合、またはオートスタートモードでオプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の WDT リセット割り込み要求選択ビット（OFS0.WDTRSTIRQS）を 1 にした場合、ダウンカウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時に、リセット信号が 1 サイクル間出力されます。

レジスタスタートモードでは、リセット信号の出力後、ダウンカウンタが初期化され（全ビットが 0 になり）、その状態のまま停止します。リセット状態が解除されて、プログラムが再起動した後は、リフレッシュ動作によってカウンタが設定され、ダウンカウントが再開します。オートスタートモードでは、リセット状態の解除後、自動的にダウンカウントがスタートします。

26.3.5　割り込み要因

レジスタスタートモードでリセット割り込み選択ビット（WDTRCR.RSTIRQS）を 0 にした場合、またはオートスタートモードでオプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の WDT リセット割り込み要求選択ビット（OFS0.WDTRSTIRQS）を 0 にした場合、カウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時に、割り込み（WDT_NMIUNDF）信号が生成されます。この割り込みは、ノンマスカブル割り込みと割り込みの両方に対応しています。詳細は、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

表 26.4　WDTの割り込み要因

名称	割り込み要因	DTCの起動
WDT_NMIUNDF	• ダウンカウンタのアンダーフロー • リフレッシュエラー	不可能

26.3.6　ダウンカウンタ値の読み出し

WDT は、カウンタ値を WDT ステータスレジスタのダウンカウンタ値ビット（WDTSR.CNTVAL[13:0]）に格納します。これらのビットを確認して、カウンタ値を取得してください。

図 26.7 に、クロック分周比が PCLKB/64 である場合の WDT ダウンカウンタ値の読み出し処理を示します。

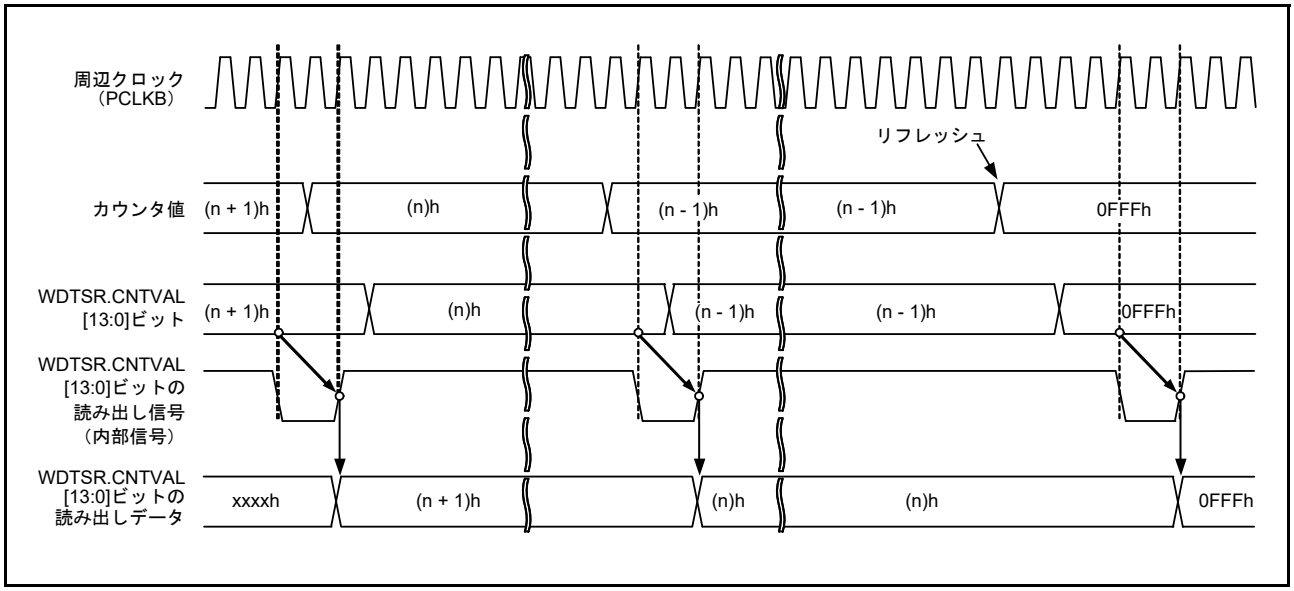


図 26.7　WDT ダウンカウンタ値の読み出し処理
（WDTCR.CKS[3:0] = 0100b、WDTCR.TOPS[1:0] = 01b の場合）

26.3.7　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係

表 26.5 に、オートスタートモードで使用するオプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と、レジスタスタートモードで使用するレジスタの対応関係を示します。

OFS0 レジスタの設定値は、WDT 動作中は変更しないでください。オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）については、7.2.1　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）を参照してください。

表 26.5　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）と WDT レジスタの対応関係

制御対象	機能	OFS0 レジスタ（オートスタートモード時有効）OFS0.WDTSTRT = 0	WDT レジスタ（レジスタスタートモード時有効）OFS0.WDTSTRT = 1
ダウンカウンタ	タイムアウト期間選択	OFS0.WDTTOPS[1:0]	WDTCR.TOPS[1:0]
	クロック分周比選択	OFS0.WDTCKS[3:0]	WDTCR.CKS[3:0]
	ウィンドウ開始位置選択	OFS0.WDTRPSS[1:0]	WDTCR.RPSS[1:0]
	ウィンドウ終了位置選択	OFS0.WDTRPES[1:0]	WDTCR.RPES[1:0]
リセット出力／割り込み要求出力	リセット出力／割り込み要求出力選択	OFS0.WDTRSTIRQS	WDTRCR.RSTIRQS
カウント停止	スリープモードカウント停止制御	OFS0.WDTSTPCTL	WDTCSTPR.SLCSTP

26.4　ELC によるリンク動作

ELC が割り込み要求信号をイベント信号として使用する場合、WDT は前もって設定しておいたモジュールに対してリンク動作が可能です。イベント信号は、カウンタのアンダーフローおよびリフレッシュエラーによって出力されます。

イベント信号は、レジスタスタートモードまたはオートスタートモードでのリセット割り込み要求選択ビット（WDTRCR.RSTIRQS）の設定とは無関係に出力されます。また、リフレッシュエラーフラグ（WDTSR.REFEF）またはアンダーフローフラグ (WDTSR.UNDFF) が 1 の状態で次の割り込み要因が発生した場合も、イベント信号の出力が可能です。詳細は、「19.　イベントリンクコントローラ（ELC）」を参照してください。

26.5　使用上の注意事項

26.5.1　ICU イベントリンク設定レジスタ n（IELSRn）の設定

WDT リセットアサートを許可（OFS0.WDTRSTIRQS = 0 または WDTRCR.RSTIRQS = 0）にした場合、またはイベントリンク動作を許可（ELSRm.ELS[7:0] = 25h）にした場合、ICU イベントリンク設定レジスタ n（IELSRn.IELS[7:0]）には 25h を設定しないでください。

27.　独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）

27.1　概要

独立ウォッチドッグタイマ（IWDT）は 14 ビットのダウンカウンタです。このカウンタはアンダーフロー防止のため周期的に動作させる必要があります。IWDT には、MCU をリセットする機能や、タイマのアンダーフロー発生時に割り込み／ノンマスカブル割り込みを生成する機能があります。このタイマは独立した専用のクロックソースで動作するため、システムが暴走したとき、MCU をフェールセーフ機構と呼ばれる状態に戻すことに特に役立ちます。IWDT は、リセット、アンダーフロー、リフレッシュエラー、またはレジスタのカウント値のリフレッシュで自動的に起動します。

IWDT の機能は、WDT とは以下の点で異なります。

- カウントソースとして IWDT 専用クロック（IWDTCLK）の分周したものを使用（PCLKB の影響を受けない）
- IWDT はレジスタスタートモードを非サポート
- 低消費電力モードへ遷移したとき、OFS0.IWDTSTPCTL ビットを使用してカウンタを停止する／しないの選択が可能

表 27.1 に IWDT の仕様を、図 27.1 にブロック図を示します。

表 27.1　IWDTの仕様

項目	内容
カウントソース（注1）	IWDT専用クロック（IWDTCLK）
クロック分周比	1分周／16分周／32分周／64分周／128分周／256分周
カウンタ動作	14ビットのダウンカウンタによるダウンカウント
カウンタ開始条件	• リセット後、自動的にカウント開始
カウンタ停止条件	• リセット（ダウンカウンタおよび他のレジスタが初期値に戻る） • カウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラーの発生（自動的にカウント再スタート）
ウィンドウ機能	ウィンドウ開始／終了位置を設定可能（リフレッシュ許可／禁止期間）
リセット出力要因	• ダウンカウンタのアンダーフロー • リフレッシュ許可期間外でのリフレッシュ動作（リフレッシュエラー）
ノンマスカブル割り込み／割り込み要因	• ダウンカウンタのアンダーフロー • リフレッシュ許可期間外でのリフレッシュ動作（リフレッシュエラー）
カウンタ値の読み出し	IWDTSRレジスタを読み出すことで、ダウンカウンタ値の読み出しが可能
イベントリンク機能（出力）	• ダウンカウンタアンダーフローイベント出力 • リフレッシュエラーイベント出力
出力信号（内部信号）	• リセット出力 • 割り込み要求出力 • スリープモードカウント停止制御出力
オートスタートモード	• リセット後のクロック分周比の選択（OFS0.IWDTCKS[3:0]ビット） • 独立ウォッチドッグタイマのタイムアウト期間の選択（OFS0.IWDTTOPS[1:0]ビット） • 独立ウォッチドッグタイマのウィンドウ開始位置の選択（OFS0.IWDTRPSS[1:0]ビット） • 独立ウォッチドッグタイマのウィンドウ終了位置の選択（OFS0.IWDTRPES[1:0]ビット） • リセット出力または割り込み要求出力の選択（OFS0.IWDTRSTIRQSビット） • スリープモード、ソフトウェアスタンバイモード、またはスヌーズモード遷移時のダウンカウント停止機能の選択（OFS0.IWDTSTPCTLビット）

注 1.　周辺モジュールクロック（PCLKB）周波数≧ 4 ×（カウントクロックソースの分周後周波数）となるように設定してください。

IWDT を使用するには、IWDT 専用クロック（IWDTCLK）を供給してください。バスインタフェース部とレジスタ部は PCLKB で動作し、14 ビットカウンタと制御回路は IWDTCLK で動作します。

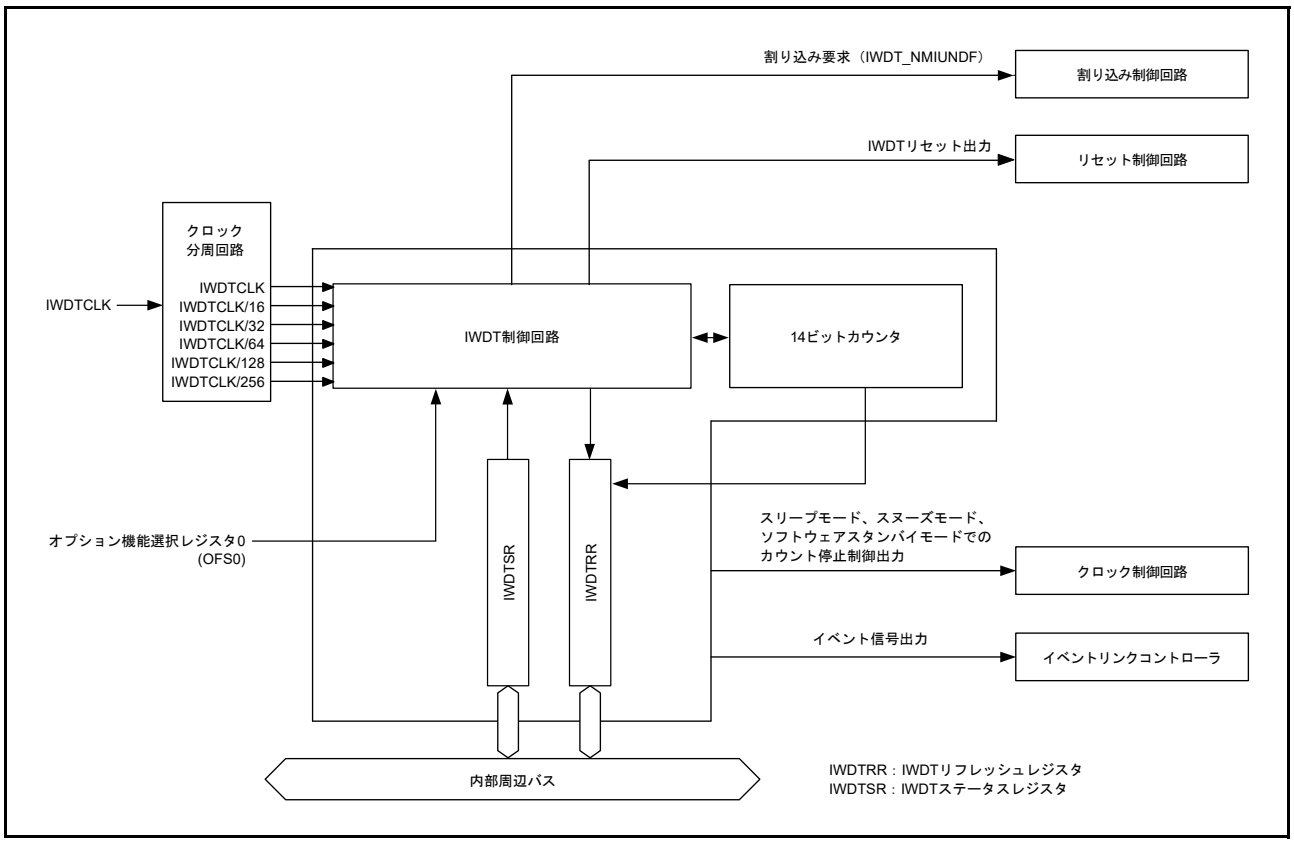
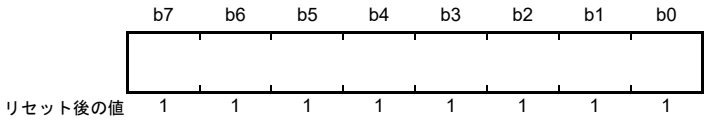


図 27.1　　IWDT のブロック図

27.2　レジスタの説明

27.2.1　IWDT リフレッシュレジスタ（IWDTRR）

アドレス　IWDT.IWDTRR 4004 4400h



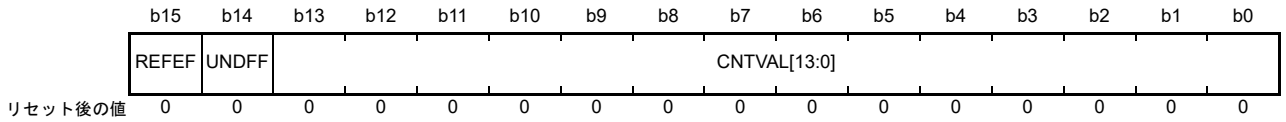
ビット	機能	R/W
b7-b0	このレジスタに対して、00hの書き込み後、FFhの書き込みでカウンタがリフレッシュ	R/W

IWDTRR レジスタは、IWDT のダウンカウンタをリフレッシュするためのレジスタです。リフレッシュ許可期間内に、IWDTRR レジスタに 00h を書き込んだ後、FFh を書き込むこと（リフレッシュ動作）により、IWDT のダウンカウンタがリフレッシュされます。ダウンカウンタがリフレッシュされると、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の IWDT タイムアウト期間選択ビット（OFS0.IWDTTOPS[1:0]）で設定した値からダウンカウントがスタートします。

読み出し値は、00h を書き込んだ場合は 00h であり、00h 以外の値を書き込んだ場合は FFh となります。リフレッシュ動作の詳細は、27.3.2　リフレッシュ動作を参照してください。

27.2.2 IWDT ステータスレジスタ（IWDTSR）

アドレス IWDT.IWDTSR 4004 4404h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	CNTVAL[13:0]	カウンタ値	ダウンカウンタのカウンタ値	R
b14	UNDFF	アンダーフローフラグ	0：アンダーフロー発生なし 1：アンダーフロー発生あり	R/(W) （注1）
b15	REFEF	リフレッシュエラーフラグ	0：リフレッシュエラー発生なし 1：リフレッシュエラー発生あり	R/(W) （注1）

注 1.　フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

CNTVAL[13:0] ビット（カウンタ値）

本ビットを読み出すことにより、ダウンカウンタの値を確認できます。読み出し値は、実際のカウント値から 1 カウントずれる場合があります。

UNDFF フラグ（アンダーフローフラグ）

本フラグを読み出すことにより、ダウンカウンタのアンダーフロー発生状態を確認できます。読み出し値が 1 のとき、ダウンカウンタがアンダーフローしたことを示します。値を 0 にするには 0 を書き込んでください。1 の書き込みは無効です。

UNDFF フラグのクリアには、(N + 2) IWDTCLK サイクルと 2 PCLKB サイクルを要します。さらに、アンダーフローの発生から (N + 2) IWDTCLK サイクルの間は、このフラグをクリアしても無視されます。N は、次式のように、IWDTCKS[3:0] ビットで指定されます。

- IWDTCKS[3:0] = 0000b のとき、N=1
- IWDTCKS[3:0]=0010b のとき、N= 16
- IWDTCKS[3:0] = 0011b のとき、N = 32
- IWDTCKS[3:0] = 0100b のとき、N = 64
- IWDTCKS[3:0] = 1111b のとき、N = 128
- IWDTCKS[3:0] = 0101b のときのとき、N = 256

REFEF フラグ（リフレッシュエラーフラグ）

本フラグを読み出すことにより、リフレッシュエラー発生状態を確認できます。読み出し値が 1 のとき、リフレッシュエラーが発生したことを示します。値を 0 にするには 0 を書き込んでください。1 の書き込みは無効です。

REFEF フラグのクリアには、(N + 2) IWDTCLK サイクルと 2 PCLKB サイクルを要します。さらに、リフレッシュエラーの発生から (N + 2) IWDTCLK サイクルの間は、このフラグをクリアしても無視されます。N は、次式のように、IWDTCKS[3:0] ビットで指定されます。

- IWDTCKS[3:0] = 0000b のとき、N = 1
- IWDTCKS[3:0] = 0010b のとき、N = 16
- IWDTCKS[3:0] = 0011b のとき、N = 32
- IWDTCKS[3:0] = 0100b のとき、N = 64
- IWDTCKS[3:0] = 1111b のとき、N = 128
- IWDTCKS[3:0] = 0101b のとき、N = 256

27.2.3　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）

オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の詳細については、7.2.1　オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）を参照してください。

IWDTTOPS[1:0] ビット（IWDT タイムアウト期間選択）

タイムアウト期間（ダウンカウンタがアンダーフローするまでの期間）について、IWDTCKS[3:0] ビットで設定した分周クロックを 1 サイクルとして、128 サイクル／ 512 サイクル／ 1024 サイクル／ 2048 サイクルから選択します。

ダウンカウンタのリフレッシュ後、アンダーフローするまでの時間（IWDTCLK サイクル数）は、IWDTCKS[3:0] ビットと IWDTTOPS[1:0] ビットの組み合わせで決定されます。

表 27.2 に、IWDTCKS[3:0] および IWDTTOPS[1:0] ビットの設定値、タイムアウト期間、および IWDTCLK サイクル数の関係を示します。

表 27.2　タイムアウト期間の設定

IWDTCKS[3:0]ビット				IWDTTOPS[1:0]ビット		クロック分周比	タイムアウト期間（サイクル数）	IWDTCLKのクロックサイクル数
b7	b6	b5	b4	b1	b0			
0	0	0	0	0	0	IWDTCLK/1	128	128
				0	1		512	512
				1	0		1024	1024
				1	1		2048	2048
0	0	1	0	0	0	IWDTCLK/16	128	2048
				0	1		512	8192
				1	0		1024	16384
				1	1		2048	32768
0	0	1	1	0	0	IWDTCLK/32	128	4096
				0	1		512	16384
				1	0		1024	32768
				1	1		2048	65536
0	1	0	0	0	0	IWDTCLK/64	128	8192
				0	1		512	32768
				1	0		1024	65536
				1	1		2048	131072
1	1	1	1	0	0	IWDTCLK/128	128	16384
				0	1		512	65536
				1	0		1024	131072
				1	1		2048	262144
0	1	0	1	0	0	IWDTCLK/256	128	32768
				0	1		512	131072
				1	0		1024	262144
				1	1		2048	524288

IWDTCKS[3:0] ビット（IWDT 専用クロック分周比選択）

ダウンカウンタで使用するクロックの分周比を設定します。分周比は、IWDT 専用クロック（IWDTCLK）の 1 分周／ 16 分周／ 32 分周／ 64 分周／ 128 分周／ 256 分周から選択できます。IWDTTOPS[1:0] ビット設定と組み合わせて、IWDT のカウント期間を IWDTCLK クロックの 128 ～ 524288 サイクルから選択できます。

IWDTRPES[1:0] ビット（IWDT ウィンドウ終了位置選択）

リフレッシュ許可期間を示すウィンドウの終了位置を設定します。ウィンドウ終了位置は、タイムアウト期間の 75%、50%、25%、0% から選択できます。ウィンドウ終了位置には、ウィンドウ開始位置より小さい値を選択してください。ウィンドウ終了位置がウィンドウ開始位置よりも大きいと、ウィンドウ開始位置の設定のみが有効となります。

IWDTRPSS[1:0] ビット（IWDT ウィンドウ開始位置選択）

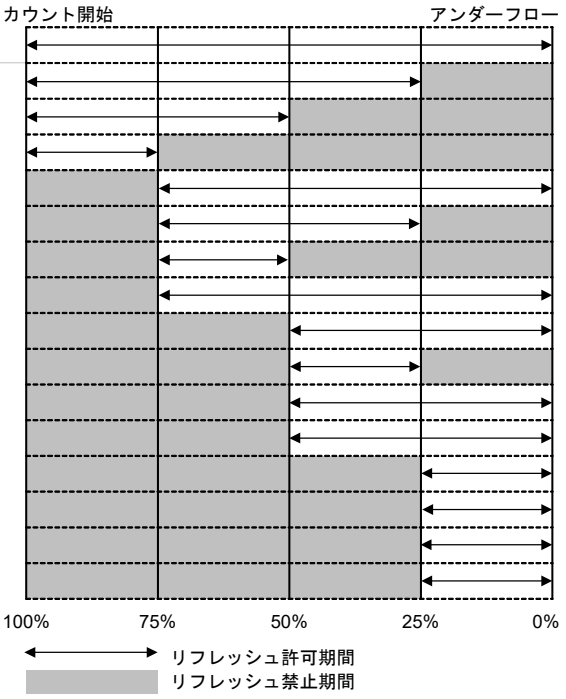
リフレッシュ許可期間を示すウィンドウの開始位置を設定します。ウィンドウ開始位置は、タイムアウト期間の 100%、75%、50%、25% から選択できます。ウィンドウ開始位置には、ウィンドウ終了位置より大きい値を設定してください。ウィンドウ開始位置がウィンドウ終了位置以下であると、ウィンドウ終了位置は 0% になります。

IWDTRPSS[1:0]、WDTRPES[1:0]、IWDTTOPS[1:0] ビットで設定されるウィンドウ開始、終了位置のカウンタ値を表 27.3 に、リフレッシュ許可期間を図 27.2 に示します。

表 27.3　　タイムアウト期間とウィンドウ開始／終了カウンタ値の対応表

IWDTTOPS[1:0] ビット		タイムアウト期間		ウィンドウ開始／終了カウンタ値			
b1	b0	サイクル数	カウンタ値	100%	75%	50%	25%
0	0	128	007Fh	007Fh	005Fh	003Fh	001Fh
0	1	512	01FFh	01FFh	017Fh	00FFh	007Fh
1	0	1024	03FFh	03FFh	02FFh	01FFh	00FFh
1	1	2048	07FFh	07FFh	05FFh	03FFh	01FFh

IWDTRPSS[1:0]ビット		IWDTRPES[1:0]ビット		ウィンドウ	
b13	b12	b9	b8	開始 (%)	終了 (%)
1	1	1	1	100	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75
1	0	1	1	75	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75
0	1	1	1	50	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75
0	0	1	1	25	0
		1	0		25
		0	1		50
		0	0		75



注 .　「ウィンドウ終了」≧「ウィンドウ開始」設定を行った場合、「ウィンドウ終了」設定は 0% になります。

図 27.2　　IWDTRPSS[1:0] および IWDTRPES[1:0] ビットとリフレッシュ許可期間

IWDTRSTIRQS ビット（IWDT リセット割り込み要求選択）

アンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時の動作を指定します。1 にすると、リセット出力が選択されます。0 にすると、ノンマスカブル割り込み／割り込みが選択されます。

IWDTSTPCTL ビット（IWDT 停止制御）

スリープモード、スヌーズモード、またはソフトウェアスタンバイモード遷移時に、カウントを停止させるか否かを選択します。

27.3 動作説明

27.3.1 オートスタートモード

オプション機能選択レジスタ 0 の IWDT スタートモード選択ビット（OFS0.IWDTSTRT）が 0 の場合、オートスタートモードが選択されています。それ以外では IWDT は無効です。

リセット状態の間に、オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の下記の設定値が IWDT のレジスタに設定されます。

- クロック分周比
- ウィンドウ開始／終了位置
- タイムアウト期間
- リセット出力または割り込み要求
- 低消費電力モード遷移時のカウンタ停止制御

リセット状態が解除されると、IWDT タイムアウト期間選択ビット（OFS0.IWDTTOPS[1:0]）で選択した値からカウンタが自動でダウンカウントを開始します。

以降、プログラムが正常に動作し続けて、許可期間内にカウンタがリフレッシュされる限り、リフレッシュごとにカウンタ値がリセットされて、ダウンカウント動作が継続します。カウントが継続する間、IWDT はリセット信号を出力しません。ただし、プログラムのクラッシュや、リフレッシュ許可期間外のリフレッシュ動作に起因したリフレッシュエラーの発生によって、カウンタがアンダーフローすると、IWDT はリセット信号またはノンマスカブル割り込み要求／割り込み要求（IWDT_NMIUNDF）をアサートします。

リセット信号またはノンマスカブル割り込み要求／割り込み要求が発生してから 1 サイクルカウント後に、カウンタはタイムアウト期間をリロードして、カウント動作を再開します。リセット出力または割り込み要求の選択は、IWDT リセット割り込み要求選択ビット（OFS0.IWDTRSTIRQS）で行います。ノンマスカブル割り込み要求または割り込み要求の選択は、IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み許可ビット（NMIER.IWDTEN）で行います。

図 27.3 に、下記の条件下での動作例を示します。

- オートスタートモード（OFS0.IWDTSTRT = 0）
- ノンマスカブル割り込み要求出力を許可（OFS0.IWDTRSTIRQS = 0）
- ウィンドウ開始位置 75%（OFS0.IWDTRPSS[1:0] = 10b）
- ウィンドウ終了位置 25%（OFS0.IWDTRPES[1:0] = 10b）

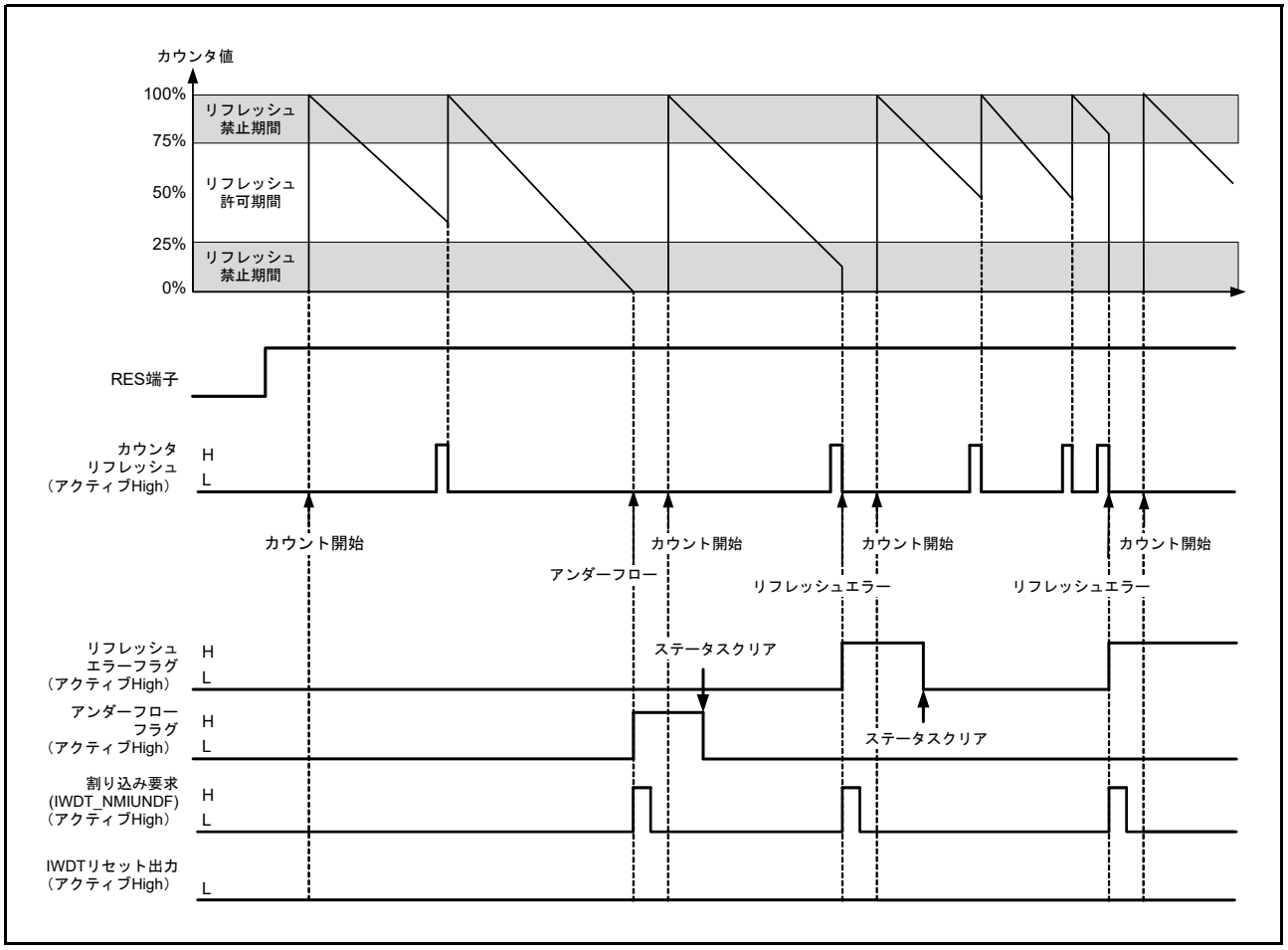


図 27.3　オートスタートモードでの動作例

27.3.2 リフレッシュ動作

ダウンカウンタは、IWDT リフレッシュレジスタ（IWDTRR）に 00h と FFh を書き込むことによってリフレッシュされます（カウントはリフレッシュによって開始されます）。00h の後に FFh 以外の値を書き込むと、カウンタはリフレッシュされません。無効な値を書き込んだ場合は、再度、IWDT リフレッシュレジスタ（IWDTRR）へ 00h と FFh を書き込むと、正常にリフレッシュが行われます。

00h（1 回目）→ 00h（2 回目）の順で書き込みを行った場合でも、その後に FFh を書き込めば、00h → FFh の書き込み順序が成立します。00h（n - 1 回目）→ 00h（n 回目）→ FFh という書き込み順序は有効であり、正常にリフレッシュが行われます。00h より前の書き込み値が 00h 以外であっても、動作に 00h → FFh という書き込み順序が含まれていれば、正常にリフレッシュが行われます。また、IWDTRR レジスタへの 00h の書き込みと FFh の書き込みの間で、IWDTRR 以外のレジスタにアクセスしたり、IWDTRR レジスタを読み出したりしても、正常にリフレッシュが行われます。

【カウンタのリフレッシュに有効な書き込み順序の例】

- 00h → FFh
- 00h（n - 1 回目）→ 00h（n 回目）→ FFh
- 00h →別レジスタへのアクセスまたは IWDTRR レジスタの読み出し→ FFh

【カウンタのリフレッシュに無効な書き込み順序の例】

- 23h（00h 以外の値）→ FFh
- 00h → 54h（FFh 以外の値）
- 00h → AAh（00h および FFh 以外の値）→ FFh

リフレッシュ許可期間外に IWDTRR レジスタへ 00h を書き込んだ場合でも、リフレッシュ許可期間内に IWDTRR レジスタへ FFh を書き込めば、この書き込み順序は有効であり、リフレッシュ動作が行われます。

カウンタのリフレッシュには、IWDTRR レジスタに FFh を書き込んだ後、カウント信号のサイクル数で最大 4 サイクル必要です（カウントの 1 サイクルが、IWDT 専用クロック（IWDTCLK）の何サイクルに相当するかは、IWDT 専用クロック分周比選択ビット（OFS0.IWDTCKS[3:0]）で決まります）。そのため、リフレッシュ許可期間の終了またはカウンタアンダーフローの 4 カウントサイクル前までに、IWDTRR レジスタへの FFh の書き込みを完了してください。カウンタの値はカウンタ値ビット（IWDTSR.CNTVAL[13:0]）で確認できます。

【リフレッシュ動作タイミング例】

- ウィンドウ開始位置を 1FFFh とした場合、IWDTSR.CNTVAL[13:0] ビット値が 1FFFh に達する前（たとえば 2002h）に IWDTRR レジスタへ 00h を書き込んだとしても、1FFFh に達した後に IWDTRR レジスタへ FFh を書き込めば、リフレッシュが行われます
- ウィンドウ終了位置を 1FFFh とした場合、IWDTRR レジスタへ 00h → FFh を書き込んだ直後に IWDTSR.CNTVAL[13:0] ビットから読み出した値が 2003h（1FFFh の 4 カウントサイクル前）以上であれば、リフレッシュが行われます
- リフレッシュ許可期間が 0000h まで続く場合、アンダーフローの直前でリフレッシュが可能です。この場合、IWDTRR レジスタへ 00h → FFh を書き込んだ直後に IWDTSR.CNTVAL[13:0] ビットから読み出した値が 0003h（アンダーフローの 4 カウントサイクル前）以上であれば、アンダーフローが発生することなく、リフレッシュが行われます

図 27.4 に、PCLKB ＞ IWDTCLK のとき、クロック分周比が IWDTCLK である場合の IWDT リフレッシュ動作波形を示します。

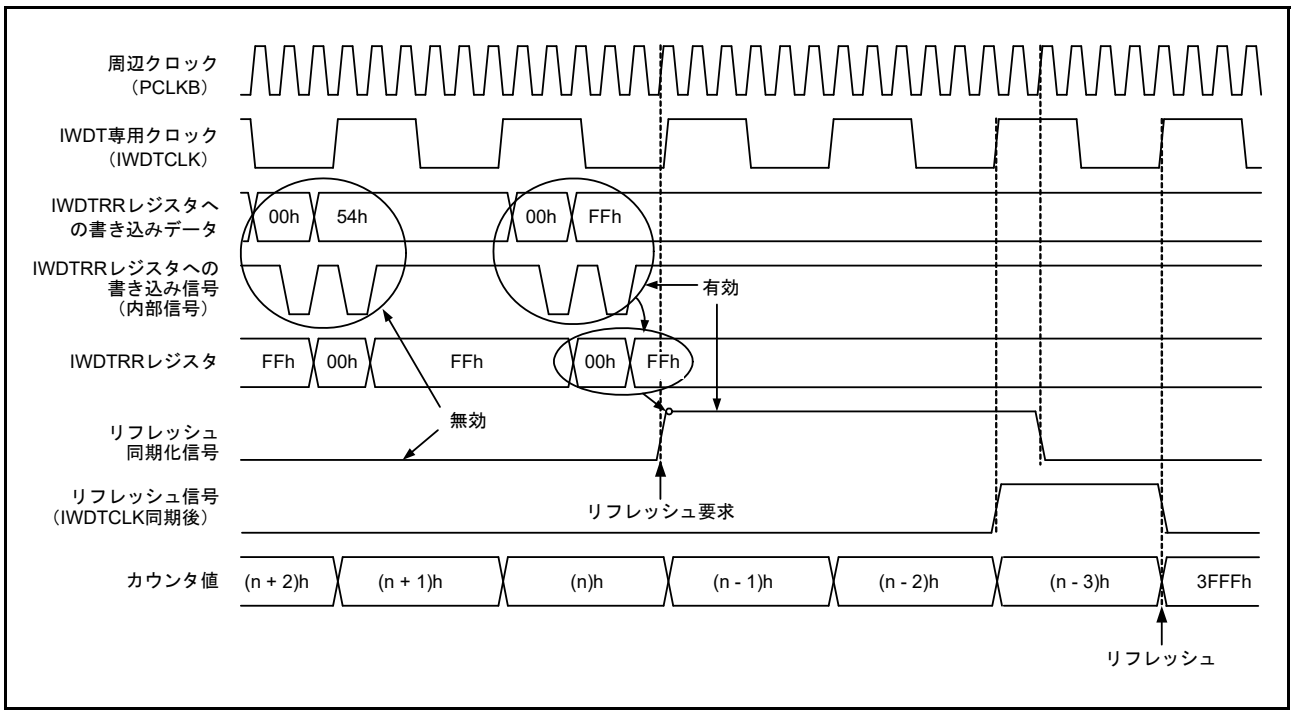


図 27.4　IWDT リフレッシュ動作波形（OFS0.IWDTCKS[3:0] = 0000b、OFS0.IWDTTOPS[1:0] = 11b の場合）

27.3.3　ステータスフラグ

リフレッシュエラーフラグ（IWDTSR.REFEF）とアンダーフローフラグ（IWDTSR.UNDFF）は、IWDT がリセット信号を出力した場合のリセット要因、または IWDT の割り込み要求が発生した場合の割り込み要因を保持します。そのため、リセット状態の解除後、または割り込み要求の発生後に、IWDTSR.REFEF フラグや UNDFF フラグを読み出すことで、リセット要因や割り込み要因の発生状態を確認できます。各フラグは、0 を書くことによってクリアされます。1 の書き込みは無効です。

ステータスフラグをそのままにしておいても、動作に影響を与えません。次に IWDT がリセットまたは割り込み要求を出力したとき、フラグがクリアされていなければ、古いリセット要因や割り込み要因はクリアされて、新しいリセット要因や割り込み要因が書き込まれます。なお、各フラグに 0 を書いてから、その値が反映されるまでに、最大で 3 IWDTCLK サイクルと 2 PCLKB サイクルを要します。

27.3.4　リセット出力

オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の IWDT リセット割り込み要求選択ビット（OFS0.IWDTRSTIRQS）を 1 にした場合、カウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時に、リセット信号が出力されます。リセット出力後、自動でダウンカウントがスタートします。

27.3.5　割り込み要因

オプション機能選択レジスタ 0（OFS0）の IWDT リセット割り込み要求選択ビット（OFS0.IWDTRSTIRQS）を 0 にした場合、カウンタのアンダーフローまたはリフレッシュエラー発生時に、割り込み（IWDT_NMIUNDF）信号が生成されます。この割り込みは、ノンマスカブル割り込みと割り込みの両方に対応しています。詳細は、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

表 27.4　IWDTの割り込み要因

名称	割り込み要因	DTCの起動
IWDT_NMIUNDF	ダウンカウンタのアンダーフロー リフレッシュエラー	不可能

27.3.6　ダウンカウンタ値の読み出し

IWDT のカウンタは IWDT 専用クロック（IWDTCLK）で動作しているため、カウンタ値を直接読み出すことはできません。IWDT は、カウンタ値を周辺クロック（PCLKB）に同期させて、IWDT ステータスレジスタのダウンカウンタ値ビット（IWDTSR.CNTVAL[13:0]）へ格納します。したがって、カウンタ値は IWDTSR.CNTVAL[13:0] ビットで間接的に確認できます。

ただし、カウンタ値の読み出しには PCLKB で数クロックサイクル（最大 4 クロックサイクル）を要するため、読み出されるカウント値は、カウンタの実際の値に対し 1 カウントずれることがあります。

図 27.5 に、PCLKB ＞ IWDTCLK のとき、クロック分周比が IWDTCLK である場合の IWDT カウンタ値の読み出し処理を示します。

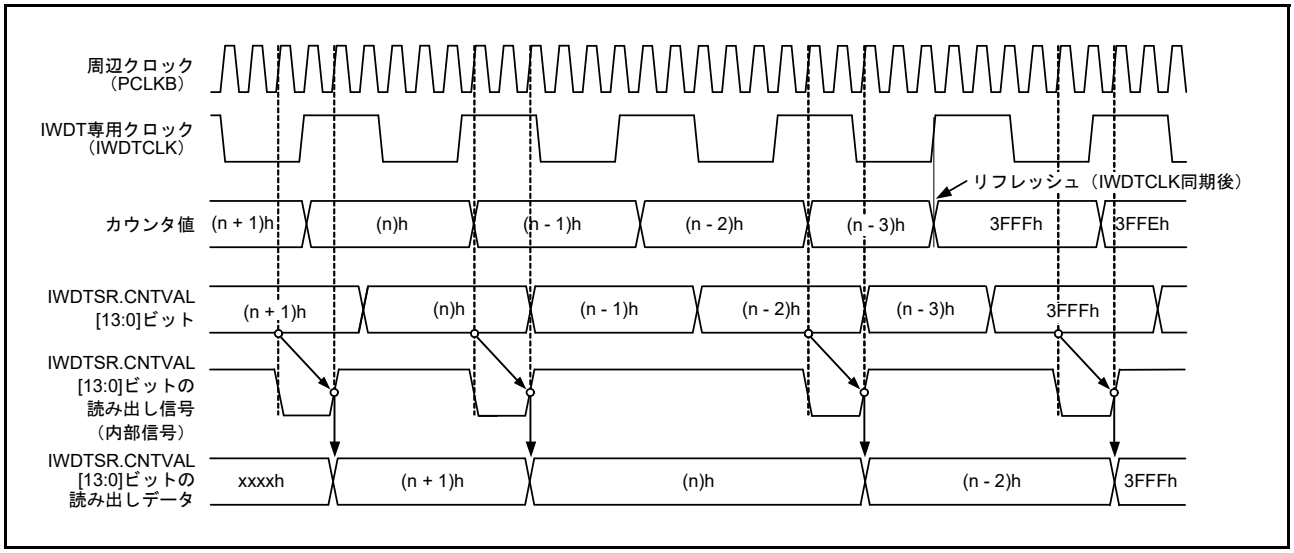


図 27.5　IWDT カウンタ値の読み出し処理（OFS0.IWDTCKS[3:0] = 0000b、OFS0.IWDTTOPS[1:0] = 11b の場合）

27.4　ELC によるリンク動作

イベントリンクコントローラ（ELC）が割り込み要求信号をイベント信号として使用する場合、IWDT は設定されたモジュールに対してリンク動作が可能です。イベント信号は、カウンタのアンダーフローおよびリフレッシュエラーによって出力されます。

イベント信号は、OFS0.WDTRSTIRQS ビットの設定とは無関係に出力されます。また、リフレッシュエラーフラグ（IWDTSR.REFEF）またはアンダーフローフラグ（IWDTSR.UNDFF）が 1 の状態で、次の割り込み要因が発生した場合も、イベント信号の出力が可能です。詳細は、「19.　イベントリンクコントローラ（ELC）」を参照してください。

27.5 使用上の注意事項

27.5.1 リフレッシュ動作

リフレッシュ時間を設定する際は、PCLKB と IWDTCLK の精度における誤差範囲内での変動を考慮してください。その上で、リフレッシュできる値を設定してください。

27.5.2 クロック分周比の設定

周辺モジュールクロック（PCLKB）周波数≧ 4 ×（カウントクロックソースの分周後周波数）となるように設定してください。

28.　USB2.0 フルスピードモジュール（USBFS）

28.1　概要

本 MCU は、Universal Serial Bus（USB）2.0 規格に準拠したホストコントローラまたはデバイスコントローラとして動作する USB2.0 フルスピードモジュール（USBFS）を内蔵しています。ホストコントローラは USB2.0 フルスピード転送とロースピード転送に対応し、デバイスコントローラは USB2.0 フルスピード転送に対応しています。また、USBFS は USB トランシーバを内蔵しており、USB2.0 規格で定義されている全転送タイプに対応しています。

USBFS はデータ転送用に FIFO バッファを備え、最大 10 本のパイプが使用可能です。パイプ 1 ～ 9 に対しては、周辺デバイスやユーザシステムの通信要件に合わせた任意のエンドポイント番号の割り付けが可能です。

本 MCU は、バッテリチャージング規格のリビジョン 1.2 に準拠しています。

表 28.1 に USBFS の仕様を、図 28.1 にブロック図を、表 28.2 に入出力端子を示します。

表 28.1　USBFSの仕様

項目	内容
特徴	• ホストコントローラ、デバイスコントローラに対応したUSBデバイスコントローラ（UDC）とUSB2.0トランシーバ • ホストコントローラとデバイスコントローラはソフトウェアで切り替え可能 • セルフパワーモードまたはバスパワーモードの選択が可能 • バッテリチャージング仕様のリビジョン1.2に準拠
	ホストコントローラの特長： • フルスピード転送（12Mbps）およびロースピード転送（1.5Mbps） • SOFおよびパケット送信のスケジューリングを自動化 • アイソクロナス転送およびインタラプト転送の転送インターバル設定機能
	デバイスコントローラの特長： • フルスピード転送（12Mbps）およびロースピード転送（1.5Mbps） • コントロール転送ステージ管理機能 • デバイスステート管理機能 • SET_ADDRESSリクエストに対する自動応答機能 • SOF補完
通信データ転送タイプ	• コントロール転送 • バルク転送 • インタラプト転送 • アイソクロナス転送
パイプコンフィグレーション	• USB通信用のFIFOバッファ • 最大10本のパイプを選択可能（デフォルトコントロールパイプを含む） • パイプ1～9に対して任意のエンドポイント番号を割り付け可能
	パイプごとに転送条件を指定可能： • パイプ0：64バイトシングルバッファによるコントロール転送 • パイプ1, 2：64バイトダブルバッファによるバルク転送 256バイトダブルバッファによるアイソクロナス転送 • パイプ3～5：64バイトダブルバッファによるバルク転送 • パイプ6～9：64バイトシングルバッファによるインタラプト転送
その他	• トランザクションカウントによる受信終了機能 • BRDY割り込みイベント通知タイミング変更機能（BFRE） • DnFIFOポート（n = 0, 1）で指定したパイプのデータ読み出し後のFIFOバッファ自動クリア機能（DCLRM） • 転送終了時に発生する応答PIDのNAK設定機能（SHTNAK） • USB_DP/USB_DMのプルアップ抵抗、プルダウン抵抗をチップに内蔵 • USBクロックとして使用可能なHOCOクロック
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減

図 28.1 に USBFS のブロック図を示します。

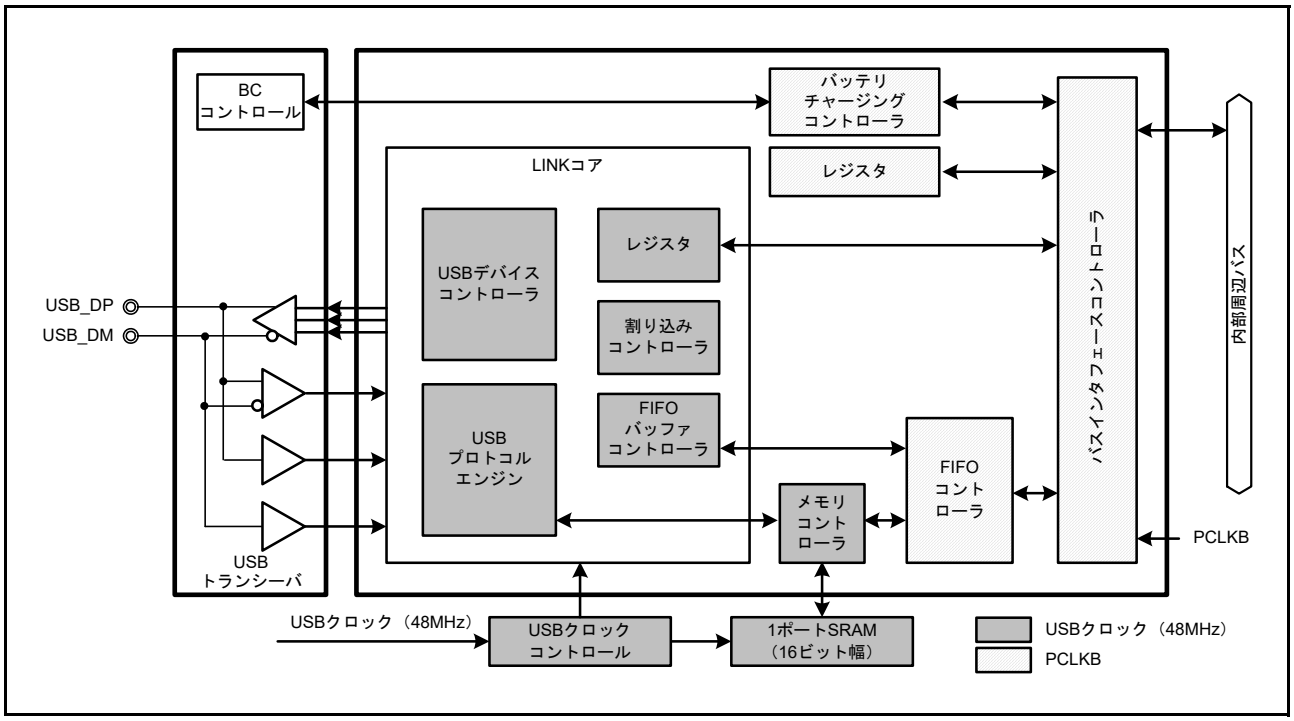


図 28.1　　USBFS のブロック図

表 28.2 に USBFS の入出力端子を示します。

表 28.2　　USBFSの入出力端子

ポート	端子名	入出力	機能
USBFS	USB_DP	入出力	USB内蔵トランシーバD+入出力端子 USBバスのD+端子に接続してください。
	USB_DM	入出力	USB内蔵トランシーバD-入出力端子 USBバスのD-端子に接続してください。
	USB_VBUS	入力	USBケーブル接続モニタ端子 USBバス上のVBUS信号に接続してください。USBFSがデバイスコントローラの場合、VBUS端子状態（アタッチ／デタッチ）の検出が可能です。(注1)
	USB_VBUSEN	出力	外部電源IC用のVBUS（5V）イネーブル信号
	USB_OVRCURA USB_OVRCURB	入力	USBFSのオーバーカレント端子 外部オーバーカレント検出信号に接続してください。
共通	VCC_USB	入力	USB トランシーバ用の電源端子
	VCC_USB_LDO	入力	USB トランシーバ用の電源端子 VCC_USBと同じ電圧を印可してください。
	VSS_USB	入力	USB用グランド端子

注 1.　P407 は 5V トレラントです。

28.2　レジスタの説明

28.2.1　システムコンフィグレーションコントロールレジスタ（SYSCFG）

アドレス　USBFS.SYSCFG 4009 0000h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	SCKE	—	CNEN	—	DCFM	DRPD	DPRPU	DMRPU	—	—	USBE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	USBE	USBFS動作許可	0：禁止 1：許可	R/W
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	DMRPU	D-ライン抵抗制御（注1）	0：ラインのプルアップを禁止 1：ラインのプルアップを許可	R/W
b4	DPRPU	D+ライン抵抗制御（注1）	0：ラインのプルアップを禁止 1：ラインのプルアップを許可	R/W
b5	DRPD	D+/D-ライン抵抗制御	0：ラインのプルダウンを禁止 1：ラインのプルダウンを許可	R/W
b6	DCFM	コントローラ機能選択	0：デバイスコントローラを選択 1：ホストコントローラを選択	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	CNEN	CNENシングルエンドレシーバ許可	0：シングルエンドレシーバを禁止 1：シングルエンドレシーバを許可	R/W
b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10	SCKE	USBクロック許可（注2）	0：USBFSへのクロック供給を停止 1：USBFSへのクロック供給を許可	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　DMRPU ビットと DPRPU ビットを同時に許可にしないでください。
注 2.　SCKE ビットに 1 を書き込んだ後は、SCKE ビットを読み出して、1 になっていることを確認してください。

USBE ビット（USBFS 動作許可）

USBFS の動作を許可または禁止します。

USBE ビットを 1 から 0 に変更したときに初期化されるビットを表 28.3 に示します。本ビットの変更は、SCKE ビットが 1 のときに限り行ってください。ホストコントローラモードでは、DRPD ビットを 1 にした後、SYSSTS0.LNST[1:0] ビットのチャタリング除去を行い、USB バスの状態が安定したことを確認した上で、USBE ビットを 1 にしてください。

表 28.3　SYSCFG.USBE ビットへの 0 の書き込みにより初期化されるレジスタ

選択機能	レジスタ	ビット	注意点
デバイスコントローラ	SYSSTS0	LNST[1:0]	ホストコントローラモードでは値が保持されます。
	DVSTCTR0	RHST[2:0]	—
	INTSTS0	DVSQ[2:0]	ホストコントローラモードでは値が保持されます。
	USBREQ	BREQUEST[7:0]、BMREQUESTTYPE[7:0]	ホストコントローラモードでは値が保持されます。
	USBVAL	WVALUE[15:0]	ホストコントローラモードでは値が保持されます。
	USBINDX	WINDEX[15:0]	ホストコントローラモードでは値が保持されます。
	USBLENG	WLENTUH[15:0]	ホストコントローラモードでは値が保持されます。
ホストコントローラ	DVSTCTR0	RHST[2:0]	—
	FRMNUM	FRNM[10:0]	デバイスコントローラモードでは値が保持されます。

DMRPU ビット（D- ライン抵抗制御）

デバイスコントローラモードで、D- ラインのプルアップを許可または禁止します。

デバイスコントローラモードで DMRPU ビットを 1 にすると、USBFS は D- ラインをプルアップし、それがロースピードデバイスとしてアタッチされたことを USB ホストに通知します。DMRPU ビットを 1 から 0 に変更すると、プルアップが解除され、結果としてそれがデタッチされたことを USB ホストに通知します。

ホストコントローラモードでは、本ビットを 0 にしてください。

DPRPU ビット（D+ ライン抵抗制御）

デバイスコントローラモードで、D+ ラインのプルアップを許可または禁止します。

デバイスコントローラモードで DPRPU ビットを 1 にすると、USBFS は D+ ラインをプルアップし、それがアタッチされたことを USB ホストに通知します。DPRPU ビットを 1 から 0 に変更すると、プルアップが解除され、結果としてそれがデタッチされたことを USB ホストに通知します。

ホストコントローラモードでは、本ビットを 0 にしてください。

DRPD ビット（D+/D- ライン抵抗制御）

ホストコントローラモードで、D+/D- ラインのプルダウンを許可または禁止します。

本ビットは、ホストコントローラモードでは 1、デバイスコントローラモードでは 0 にしてください。

DCFM ビット（コントローラ機能選択）

USBFS の機能をホスト機能にするか、デバイス機能にするかを選択します。

本ビットの変更は、DMRPU ビット、DPRPU ビット、および DRPD ビットが 0 の場合に限り行ってください。

CNEN ビット（CNEN シングルエンドレシーバ許可）

CNEN ビットを 1 にすると、シングルエンドレシーバが許可され、D+/D- ラインのステータスをモニタするように LNST ビットが設定されます。

CNEN ビットを使用するのは、USBFS がバッテリチャージ用ポータブルデバイスとして動作する場合です。

SCKE ビット（USB クロック許可）

USB への 48MHz クロック供給を停止または許可します。

このビットが 0 の場合、SYSCFG レジスタのみ読み出し／書き込みが許可されます。他の USB 関連レジスタの読み出し／書き込みはしないでください。

28.2.2 システムコンフィグレーションステータスレジスタ 0（SYSSTS0）

アドレス USBFS.SYSSTS0 4009 0004h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	OVCMON[1:0]		—	—	—	—	—	—	—	HTACT	—	—	—	—	LNST[1:0]	
リセット後の値	0（注1）	0（注1）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	x	0	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	LNST[1:0]	USBデータラインステータスモニタ	USBデータラインのステータスを示します。表 28.4を参照してください。	R
b2	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。	R
b5-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b6	HTACT	USBホストシーケンサステータスモニタ	0：ホストシーケンサが完全に停止している 1：ホストシーケンサが完全に停止していない	R
b13-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15-b14	OVCMON[1:0]	外部USB_OVRCURA/USB_OVRCURB入力端子モニタ	OVCMON[1]ビットは、USB_OVRCURA端子のステータスを示します。 OVCMON[0]ビットは、USB_OVRCURB端子のステータスを示します。	R

注 1.　USB_OVRCURA/USB_OVRCURB 端子のステータスに依存します。

LNST[1:0] ビット（USB データラインステータスモニタ）

USB データライン（D+ および D-）のステータスを示します。詳細は、表 28.4 を参照してください。

LNST[1:0] ビットの読み出しは、デバイスコントローラモードではアタッチ処理（SYSCFG.DPRPU ビット = 1）後に、ホストコントローラモードではラインのプルダウン許可（SYSCFG.DRPD ビット = 1）後に行ってください。

HTACT ビット（USB ホストシーケンサステータスモニタ）

USBFS のホストシーケンサが完全に停止しているとき、HTACT ビットは 0 になります。

ホストコントローラモードで、DVSTCTR0.UACT ビットを 0 にして USBFS を Suspended ステートにする場合や、SCKE ビットを 0 にして通信中にクロック供給を停止する場合は、事前に HTACT ビットが 0 であることを確認してください。

OVCMON[1:0] ビット（外部 USB_OVRCURA/USB_OVRCURB 入力端子モニタ）

外部電源 IC からのオーバーカレント信号のステータスを示します。

表 28.4　USBデータバスライン（D+ライン、D-ライン）のステータス

LNST[1:0]ビット	フルスピード動作時	ロースピード動作時
00b	SE0	SE0
01b	J-State	K-State
10b	K-State	J-State
11b	SE1	SE1

28.2.3 デバイスステートコントロールレジスタ 0（DVSTCTR0）

アドレス USBFS.DVSTCTR0 4009 0008h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	VBUSEN	WKUP	RWUPE	USBRST	RESUME	UACT	—	RHST[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	RHST[2:0]	USBバスリセットステータス	• ホストコントローラモードの場合 b2 b0 0 0 0：通信速度は不確定 （パワード時あるいは非接続時） 1 x x：USBバスリセット処理中 0 0 1：ロースピード接続時 0 1 0：フルスピード接続時 • デバイスコントローラモードの場合 b2 b0 0 0 0：通信速度は不確定 0 0 1：USBバスリセット処理中またはロースピード接続時 0 1 0：USBバスリセット処理中またはフルスピード接続時	R
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	UACT	USBバス許可	0：ダウンポート動作禁止（SOF送出禁止） 1：ダウンポート動作許可（SOF送出許可）	R/W
b5	RESUME	レジューム出力	0：レジューム信号を出力しない 1：レジューム信号を出力する	R/W
b6	USBRST	USBバスリセット出力	0：USBバスリセット信号を出力しない 1：USBバスリセット信号を出力する	R/W
b7	RWUPE	ウェイクアップ検出許可	0：ダウンポートウェイクアップ禁止 1：ダウンポートウェイクアップ許可	R/W
b8	WKUP	ウェイクアップ出力	0：リモートウェイクアップ信号を出力しない 1：リモートウェイクアップ信号を出力する	R/W
b9	VBUSEN	USB_VBUSEN出力端子制御	0：外部USB_VBUSEN端子はLowを出力 1：外部USB_VBUSEN端子はHighを出力	R/W
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

x: Don’t care

RHST[2:0] ビット（USB バスリセットステータス）

USB バスリセットのステータスを示します。

ホストコントローラモードでは、USBRST ビットを 1 にすると RHST[2:0] ビットが 100b になります。USBRST ビットを 0 にして USBFS が SE0 ステートを終了すると、RHST[2:0] ビットが新しい値に更新されます。

デバイスコントローラモードでは、USBFS が USB バスリセットを検出すると、DPRPU ビットが 1 の場合は RHST[2:0] ビットが 010b に、DMRPU ビットが 1 の場合は RHST[2:0] ビットが 001b になり、DVST 割り込みが発生します。

UACT ビット（USB バス許可）

ホストコントローラモードで UACT ビットを 1 にすると、UACT ビットは USB バスへの SOF パケットの送信（データと受信を含む）を制御することで、USB バス動作を許可します。UACT ビットを 1 にしてから 1 フレーム期間内に、USBFS は SOF パケット出力を開始します。UACT ビットを 0 にすると、USB は SOF パケット出力後にアイドル状態に遷移します。

本ビットを 0 にした場合、USB は SOF パケットを出力した後、アイドル状態に遷移します。

以下のいずれかの場合に、USB は UACT ビットを 0 にします。

- 通信中（UACT ビットが 1 のとき）に DTCH 割り込みを検出したとき
- 通信中（UACT ビットが 1 のとき）に EOFERR 割り込みを検出したとき

USB バスリセット処理の終了時（USBRST ビットへの 0 書き込み時）、または Suspended ステートからのレジューム処理の終了時（RESUME ビットへの 0 書き込み時）には、常に UACT ビットに 1 を書いてください。

デバイスコントローラモードでは、常に本ビットを 0 にしてください。

RESUME ビット（レジューム出力）

ホストコントローラモードで、レジューム信号の出力を制御します。

本ビットを 1 にすると、USBFS は USB ポートを K-State にドライブし、レジューム信号を出力します。RWUPE ビットが 1 で、USB Suspended ステートのとき、USBFS がリモートウェイクアップ信号を検出すると、本ビットを 1 にします。

また、RESUME ビットが 1 のとき、ソフトウェアで RESUME ビットを 0 にするまで、USBFS は K-State を出力し続けます。RESUME ビットが 1 の期間（レジューム期間）は、USB2.0 規格に定められた時間を確保してください。インタフェースが Suspended ステートのときにのみ、RESUME ビットを 1 にしてください。レジューム処理の終了（RESUME ビットへの 0 書き込み）と同時に UACT ビットに 1 を書いてください。

デバイスコントローラモードでは、常に本ビットを 0 にしてください。

USBRST ビット（USB バスリセット出力）

ホストコントローラモードで、USB バスリセット信号の出力を制御します。USBRST ビットを 1 にすると、USBFS は USB ポートを SE0 ステートにドライブして、USB バスをリセットします。USBFS は、USBRST ビットが 1 の期間、ソフトウェアで USBRST ビットを 1 にするまで SE0 を出力し続けます。USBRST ビットが 1 の期間（USB バスリセット期間）は、USB2.0 規格に定められた時間を確保してください。

通信中（UACT ビット = 1）またはレジューム処理中（RESUME ビット = 1）に、本ビットに 1 を書き込むと、UACT ビットと RESUME ビットの両方が 0 になるまで、USBFS は USB バスリセット処理を開始できません。USB バスリセット処理の終了（USBRST ビットへの 0 書き込み）と同時に UACT ビットに 1 を書いてください。

デバイスコントローラモードでは、常に本ビットを 0 にしてください。

RWUPE ビット（ウェイクアップ検出許可）

ホストコントローラモードにで、下流周辺デバイスからのリモートウェイクアップ信号（レジューム信号）の受け付けを許可または禁止します。本ビットを 1 にすると、USBFS は下流周辺デバイスからのリモートウェイクアップ信号（2.5µs 間の K-State）を検出し、レジューム処理を実行して K-State にします。

本ビットを 0 にすると、USBFS は USB ポートに接続された周辺デバイスからのリモートウェイクアップ信号（K-State）を無視します。RWUPE ビットが 1 のときは、Suspended ステートであっても、内部クロックを停止しないでください（SYSCFG.SCKE ビットは 1 にする必要があります）。

デバイスコントローラモードでは、常に本ビットを 0 にしてください。

WKUP ビット（ウェイクアップ出力）

デバイスコントローラモードで、USB バスへのリモートウェイクアップ信号（レジューム信号）の受け付けを許可または禁止します。

USBFS は、リモートウェイクアップ信号の出力タイミングを管理しています。WKUP ビットを 1 にすると、USBFS は 10ms の K-State を出力した後、本ビットをクリアして 0 にします。USB2.0 規格では、リモートウェイクアップ信号の送信までに最短 5ms の USB バスアイドル状態を保持する必要があります。そのため、USB が Suspended ステートを検出した直後に本ビットを 1 にすると、2ms 後に K-State が出力されます。

本ビットへの 1 の書き込みは、デバイスが Suspended ステート（INTSTS0.DVSQ[2:0] ビット = 1xxb）で、かつ USB ホストがリモートウェイクアップ信号を許可している場合にのみ行ってください。本ビットが 1 のときは、Suspended ステートであっても、内部クロックを停止しないでください（SYSCFG.SCKE ビットを 1 にする必要があります）。ホストコントローラモードでは、本ビットを 0 にしてください。

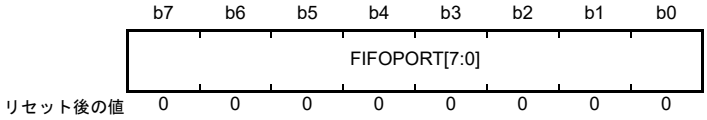
28.2.4 CFIFO ポートレジスタ（CFIFO/CFIFOL）
D0FIFO ポートレジスタ（D0FIFO/D0FIFOL）
D1FIFO ポートレジスタ（D1FIFO/D1FIFOL）

（1）MBW ビットが 1 の場合

アドレス　USBFS.CFIFO 4009 0014h, USBFS.D0FIFO 4009 0018h, USBFS.D1FIFO 4009 001Ch

（2）MBW ビットが 0 の場合

アドレス　USBFS.CFIFOL 4009 0014h, USBFS.D0FIFOL 4009 0018h, USBFS.D1FIFOL 4009 001Ch



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	FIFOPORT[15:0] （注1）	FIFOポート	これらのビットにアクセスして、FIFOバッファから受信データを読み出すか、またはFIFOバッファへ送信データを書き込みます。	R/W

注 1.　有効ビットは、関連するポート選択レジスタの MBW ビット（CFIFOSEL.MBW、D0FIFOSEL.MBW、D1FIFOSEL.MBW）の設定値と、BIGEND ビット（CFIFOSEL.BIGEND、D0FIFOSEL.BIGEND、D1FIFOSEL.BIGEND）の設定値で決まります。表 28.5 と表 28.6 を参照してください。

下記の 3 つの FIFO ポートが用意されています。

- CFIFO
- D0FIFO
- D1FIFO

各 FIFO ポートは下記のレジスタで構成されます。

- FIFO バッファからのデータリードと、FIFO バッファへのデータライトを処理するポートレジスタ（CFIFO、D0FIFO、または D1FIFO）
- FIFO ポートに割り当てられたパイプを選択するためのポート選択レジスタ（CFIFOSEL、D0FIFOSEL、または D1FIFOSEL）
- ポートコントロールレジスタ（CFIFOCTR、D0FIFOCTR、または D1FIFOCTR）

各 FIFO ポートには、下記の制限事項があります。

- DCP コントロール転送用 FIFO バッファにアクセスする場合、CFIFO ポート経由で行う
- DMA または DTC 転送用 FIFO バッファにアクセスする場合、D0FIFO または D1FIFO ポート経由で行う
- D0FIFO および D1FIFO ポートへのアクセスは、CPU によっても可能
- DMA または DTC 転送機能など、FIFO ポートに固有の機能を使用する場合、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットで選択したパイプ番号は変更不可
- 1 つの FIFO ポートを設定するレジスタ群が、他の FIFO ポートに影響を与えることはない
- 同一パイプを複数の FIFO ポートに割り当てることは禁止

- FIFOバッファの状態には、アクセス権がCPU側にある場合とSIE（Serial Interface Engine）側にある場合の2種類がある。SIE側にアクセス権がある場合、CPUからFIFOバッファへのアクセスは不可

FIFOPORT[15:0]ビット（FIFOポート）

FIFOPORT[15:0]ビットへのアクセス時に、USBFSはFIFOバッファから受信データを読み出すか、またはFIFOバッファへ送信データを書き込みます。FIFOポートレジスタへのアクセスは、対応するポートコントロールレジスタ（CFIFOCTR、D0FIFOCTR、またはD1FIFOCTR）のFRDYビットが1のときに限り可能です。

FIFOポートレジスタの有効ビットは、ポート選択レジスタ（CFIFOSEL、D0FIFOSEL、またはD1FIFOSEL）のMBWおよびBIGENDビットの設定値で決まります。表28.5と表28.6を参照してください。

表28.5　16ビットアクセス時のエンディアン動作

CFIFOSEL.BIGENDビット D0FIFOSEL.BIGENDビット D1FIFOSEL.BIGENDビット	ビット15～8	ビット7～0
0	N＋1データ	N＋0データ
1	N＋0データ	N＋1データ

表28.6　8ビットアクセス時のエンディアン動作

CFIFOSEL.BIGENDビット D0FIFOSEL.BIGENDビット D1FIFOSEL.BIGENDビット	ビット15～8	ビット7～0
0	アクセス禁止（注1）	N＋0データ
1	アクセス禁止（注1）	N＋0データ

注1.　アクセス禁止領域に対する書き込みや読み出しはしないでください。

28.2.5 CFIFOポート選択レジスタ（CFIFOSEL）
D0FIFOポート選択レジスタ（D0FIFOSEL）
D1FIFOポート選択レジスタ（D1FIFOSEL）

CFIFOSEL

アドレス　USBFS.CFIFOSEL 4009 0020h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RCNT	REW	—	—	—	MBW	—	BIGEND	—	—	ISEL	—	CURPIPE[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	CURPIPE[3:0]	CFIFOポートアクセスパイプ指定	b3 b0 0 0 0 0：DCP（デフォルトコントロールパイプ） 0 0 0 1：パイプ1 0 0 1 0：パイプ2 0 0 1 1：パイプ3 0 1 0 0：パイプ4 0 1 0 1：パイプ5 0 1 1 0：パイプ6 0 1 1 1：パイプ7 1 0 0 0：パイプ8 1 0 0 1：パイプ9 上記以外は設定しないでください。	R/W
b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	ISEL	DCP選択時CFIFOポートアクセス方向	0：バッファメモリからの読み出しを選択 1：バッファメモリへの書き込みを選択	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	BIGEND	CFIFOポートエンディアン制御	0：リトルエンディアン 1：ビッグエンディアン	R/W
b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10	MBW	CFIFOポートアクセスビット幅	0：8ビット幅 1：16ビット幅	R/W
b13-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	REW	バッファポインタリワインド	0：バッファポインタのリワインドを行わない 1：バッファポインタのリワインドを行う	R/W （注1）
b15	RCNT	リードカウントモード	0：CFIFOからすべての受信データを読み出したときに、DTLN[8:0]ビット（CFIFOCTR.DTLN[8:0]、D0FIFOCTR.DTLN[8:0]、D1FIFOCTR.DTLN[8:0]）をクリア ダブルバッファモードの場合は、1面のみの全データを読み出したときにDTLN[8:0]ビット値をクリア 1：CFIFOから受信データを読み出すごとにDTLN[8:0]ビットをダウンカウント	R/W

注 1.　読むと 0 が読み出されます。

CFIFOSEL、D0FIFOSEL、および D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットには、同じパイプ番号を指定しないでください。D0FIFOSEL および D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットを 0000b にすると、パイプ指定なしとなります。

DMA または DTC 転送が許可されているとき、パイプ番号を変更しないでください。

CURPIPE[3:0] ビット（CFIFO ポートアクセスパイプ指定）

CFIFO ポート経由のデータリード／ライトに使用するパイプ番号を指定します。これらのビットに書き込む際は、書き込み後に読み出して、書き込み値と読み出し値が一致していることを確認してから、次の処理に進んでください。

CFIFOSEL、D0FIFOSEL、および D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットに同じパイプ番号を設定しないでください。

FIFO バッファへのアクセス中は、ソフトウェアが CURPIPE[3:0] ビット値を変更しようとしても、アクセスが完了するまで現在のパイプ指定が維持されます。CURPIPE[3:0] ビットに現在値を書き戻すと、アクセスが継続されます。

ISEL ビット（DCP 選択時 CFIFO ポートアクセス方向）

選択パイプが DCP のときに ISEL ビットへの新しい値の書き込みを行ったときは、その後で ISEL ビットの読み出しを行い、書き込み値と読み出し値が一致することを確認してから次の処理に進んでください。ISEL ビットと CURPIPE[3:0] ビットは、同時に設定してください。

MBW ビット（CFIFO ポートアクセスビット幅）

CFIFO ポートへのアクセスビット幅を指定します。

選択パイプが受信方向の場合、CURPIPE[3:0] ビットと MBW ビットを同時に設定してください。これらのビットへの書き込みによって FIFO バッファからのデータリードが開始したら、すべてのデータが読み出されるまで、これらのビットを変更しないでください。FIFO バッファを読み出す場合、MBW ビットで設定されたアクセスサイズで読み出してください。

選択パイプが送信方向の場合、バッファメモリへのデータライト中は、ビット幅を 8 ビット幅から 16 ビット幅へ切り替えることはできません。

16 ビット幅を選択した場合でも、バイトアクセス制御を通じて、奇数バイトの書き込みが可能です。

REW ビット（バッファポインタリワインド）

バッファポインタのリワインドを行うか否かを指定します。

選択パイプが受信方向の場合、FIFO バッファの読み出し中に本ビットを 1 にすると、FIFO バッファの最初のデータから再読み出しが可能になります。ダブルバッファモードでは、この設定によって、現在読み出している FIFO バッファ面の最初のデータから再読み出しが可能になります。

CURPIPE[3:0] ビットを変更するのと同時に、本ビットを 1 にしないでください。REW ビットを 1 にする前に、必ず FRDY ビットが 1 であることを確認してください。

送信方向のパイプに対して FIFO バッファの最初のデータから書き込みをやり直す場合は、BCLR ビットを使用してください。

D0FIFOSEL、D1FIFOSEL

アドレス　USBFS.D0FIFOSEL 4009 0028h, USBFS.D1FIFOSEL 4009 002Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RCNT	REW	DCLRM	DREQE	—	MBW	—	BIGEND	—	—	—	—	CURPIPE[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	CURPIPE[3:0]	FIFOポートアクセスパイプ指定	b3 b0 0 0 0 0：パイプ指定なし 0 0 0 1：パイプ1 0 0 1 0：パイプ2 0 0 1 1：パイプ3 0 1 0 0：パイプ4 0 1 0 1：パイプ5 0 1 1 0：パイプ6 0 1 1 1：パイプ7 1 0 0 0：パイプ8 1 0 0 1：パイプ9 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	BIGEND	FIFOポートエンディアン制御	0：リトルエンディアン 1：ビッグエンディアン	R/W
b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10	MBW	FIFOポートアクセスビット幅	0：8ビット幅 1：16ビット幅	R/W
b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b12	DREQE	DMA/DTC転送要求許可	0：DMA/DTC転送要求を禁止 1：DMA/DTC転送要求を許可	R/W
b13	DCLRM	指定パイプデータ読み出し後自動バッファメモリクリアモードアクセス	0：自動バッファクリアモードを禁止 1：自動バッファクリアモードを許可	R/W
b14	REW	バッファポインタリワインド	0：バッファポインタのリワインドを行わない 1：バッファポインタのリワインドを行う	R/W （注1）
b15	RCNT	リードカウントモード	0：DnFIFOからすべての受信データを読み出したときに、DTLN[8:0]ビット（CFIFOCTR.DTLN[8:0]、D0FIFOCTR.DTLN[8:0]、D1FIFOCTR.DTLN[8:0]）をクリア （ダブルバッファモードの場合は、1面のみの全データを読み出したときにDTLNビット値をクリア） 1：DnFIFOから受信データを読み出すごとにDTLN[8:0]ビットをダウンカウント （n = 0, 1）	R/W

注 1.　読むと 0 が読み出されます。

CFIFOSEL、D0FIFOSEL、D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットには、同じパイプ番号を指定しないでください。D0FIFOSEL および D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットを 0000b にすると、パイプ指定なしとなります。DMA または DTC 転送が許可されているとき、パイプ番号を変更しないでください。

CURPIPE[3:0] ビット（FIFO ポートアクセスパイプ指定）

D0FIFO ポートまたは D1FIFO ポート経由のデータリード／ライトに使用するパイプ番号を指定します。これらのビットに書き込む際は、書き込み後に読み出して、書き込み値と読み出し値が一致していることを確認してから、次の処理に進んでください。CFIFOSEL、D0FIFOSEL、および D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットには、同じパイプ番号を設定しないでください。

FIFOバッファへのアクセス中は、ソフトウェアがCURPIPE[3:0]ビット値を変更しようとしても、アクセスが完了するまで現在のパイプ指定が維持されます。CURPIPE[3:0]ビットに現在値を書き戻すと、アクセスが継続されます。

MBWビット（FIFOポートアクセスビット幅）

D0FIFOポートまたはD1FIFOポートへのアクセスビット幅を指定します。

選択パイプが受信方向の場合、これらのビットへの書き込みによってFIFOバッファからのデータリードが開始したら、すべてのデータが読み出されるまで、これらのビットを変更しないでください。FIFOバッファを読み出す場合、MBWビットで設定されたアクセスサイズで読み出してください。CURPIPE[3:0]ビットとMBWビットは、同時に設定してください。

選択パイプが送信方向の場合、FIFOメモリへのデータライト中は、ビット幅を8ビット幅から16ビット幅へ切り替えることはできません。

16ビット幅を選択した場合でも、バイトアクセス制御を通じて、奇数バイトの書き込みが可能です。

DREQEビット（DMA/DTC転送要求許可）

DREQEビットは、DMAまたはDTC転送要求の発行を許可または禁止します。DMAまたはDTC転送要求を許可するには、CURPIPE[3:0]ビットの設定後に、本ビットを1にしてください。CURPIPE[3:0]ビットを変更する場合は、最初に本ビットを0にしてください。

DCLRMビット（指定パイプデータ読み出し後自動バッファメモリクリアモードアクセス）

選択パイプのデータを読み出した後の自動FIFOバッファクリアを許可または禁止します。

本ビットを1にすると、選択パイプに割り当てられたFIFOバッファが空の状態でZero-Lengthパケットを受信したとき、またはPIPECFG.BFREビットが1の状態で受信したショートパケットの読み出しが完了したとき、USBFSはFIFOポートコントロールレジスタのBCLRビットを1にします。

SOFCFG.BRDYMビットを1にしてUSBFSを使用する場合、DCLRMビットを0にしてください。

REWビット（バッファポインタリワインド）

バッファポインタのリワインドを行うか否かを指定します。

選択パイプが受信方向の場合、FIFOバッファの読み出し中に本ビットを1にすると、FIFOバッファの最初のデータから再読み出しが可能になります。ダブルバッファモードでは、この設定によって、現在読み出しているFIFOバッファ面の最初のデータから再読み出しが可能になります。

CURPIPE[3:0]ビットを変更するのと同時に、本ビットを1にしないでください。本ビットを1にする前に、必ずFRDYビットが1であることを確認してください。

送信方向のパイプに対してFIFOバッファの最初のデータから書き込みをやり直す場合は、BCLRビットを使用してください。

RCNTビット（リードカウントモード）

CFIFOCTR.DTLNビット値の読み出しモードを指定します。PIPECFG.BFREビットを1にしてDnFIFOにアクセスする場合、RCNTビットを0にしてください。

28.2.6 CFIFO ポートコントロールレジスタ（CFIFOCTR）
D0FIFO ポートコントロールレジスタ（D0FIFOCTR）
D1FIFO ポートコントロールレジスタ（D1FIFOCTR）

アドレス　USBFS.CFIFOCTR 4009 0022h, USBFS.D0FIFOCTR 4009 002Ah, USBFS.D1FIFOCTR 4009 002Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BVAL	BCLR	FRDY	—	—	—	—	DTLN[8:0]								
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b8-b0	DTLN[8:0]	受信データ長	受信データ長を示します。 ポート選択レジスタのRCNTビットの設定値によって値の意味が異なります。詳細は、DTLN[8:0]ビットの説明を参照してください。	R
b12-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13	FRDY	FIFOポートレディ	0：FIFOポートアクセス不可能 1：FIFOポートアクセス可能	R
b14	BCLR	CPUバッファクリア	0：何もしない 1：CPU側FIFOバッファをクリア	R/W （注1）
b15	BVAL	バッファメモリ有効フラグ	0：無効 1：書き込み終了	R/W

注 1.　読むと 0 が読み出されます。

CFIFOCTR、D0FIFOCTR、および D1FIFOCTR レジスタは、それぞれ CFIFO、D0FIFO、および D1FIFO バッファに対応しています。

DTLN[8:0] ビット（受信データ長）

受信データ長を表示します。

FIFO バッファの読み出し中、DTLN[8:0] ビットは、以下のように DnFIFOSEL.RCNT ビット（n = 0, 1）に応じて異なる値を示します。

- RCNT = 0
  CPU または DMAC/DTC が FIFO バッファ 1 面分の全受信データの読み出しを完了するまで、USBFS は受信データ長を DTLN[8:0] ビットに表示します。
  PIPECFG.BFRE ビットが 1 のときは、全データが読み出された後も、BCLR ビットが 1 になるまで、USB は受信データ長を保持します。
- RCNT = 1
  FIFO バッファからデータを読み出すごとに USBFS は DTLN[8:0] ビットの表示値をダウンカウントします。MBW ビットが 0 のときは - 1 ずつ、MBW ビットが 1 のときは - 2 ずつ値がダウンカウントされます。
  1 面分の FIFO バッファ読み出し完了時に、USBFS は DTLN[8:0] ビットを 0 にします。ただしダブルバッファモードでは、FIFO バッファ 1 面分の受信データの読み出しを完了する前に、もう 1 面分の FIFO バッファにデータを受信した場合、USBFS は、最初の 1 面分の読み出し完了時に、次の 1 面分の受信データ長を DTLN[8:0] ビットに表示します。

FRDY ビット（FIFO ポートレディ）

CPU または DMAC/DTC から FIFO ポートにアクセス可能かどうかを表示します。

以下の場合、USBFS は FRDY ビットを 1 にしますが、読み出すべきデータがないため、FIFO ポート経由のデータ読み出しはできません。

- 選択パイプに割り当てられている FIFO バッファが空の状態で Zero-Length パケットを受信した場合
- PIPECFG.BFRE ビットが 1 のときに、ショートパケットを受信し、データ読み出しを完了した場合

このような場合は、BCLR ビットを 1 にして FIFO バッファをクリアし、次のデータ送受信が可能な状態にしてください。

BCLR ビット（CPU バッファクリア）

選択パイプの CPU の FIFO バッファをクリアする場合、BCLR ビットを 1 にしてください。

選択パイプに割り当てられた FIFO バッファに、ダブルバッファモードが設定されている場合、FIFO バッファの両面とも読み出し可能な状態であっても、USBFS はその片面のみをクリアします。

選択パイプが DCP の場合は、CPU 側と SIE 側のどちらにアクセス権があるかにかかわらず、BCLR ビットを 1 にすると、USBFS は FIFO バッファのクリアが可能になります。SIE 側にアクセス権がある場合、FIFO バッファをクリアするには、DCPCTR.PID[1:0] ビットを 00b（NAK 応答）にしてから、BCLR ビットを 1 にしてください。

選択パイプが送信方向の場合、BVAL フラグと BCLR ビットへ同時に 1 を書き込むと、USBFS は書き込み済みのデータをクリアして、Zero-Length パケットの送信を可能にします。

選択パイプが DCP 以外の場合、BCLR ビットへの 1 の書き込みは、FIFO ポートコントロールレジスタの FRDY ビットが（USBFS によって）1 になっている場合にのみ行ってください。

BVAL フラグ（バッファメモリ有効フラグ）

CURPIPE[3:0] ビットで選択したパイプの CPU 側の FIFO バッファへデータライトが完了したとき、BVAL フラグを 1 にしてください。

選択パイプが送信方向のとき、以下の場合に、本フラグを 1 にしてください。

- ショートパケットを送信する場合、データライト後に本フラグを 1 にする
- Zero-Length パケットを送信する場合、FIFO バッファへのデータライト前に本フラグを 1 にする

USBFS は、CPU の FIFO バッファを SIE に切り替え、それにより送信可能な状態にします。

連続転送モード時にパイプに対して最大パケットサイズ分のデータを書き込むと、USBFS は BVAL フラグを 1 にし、FIFO バッファを CPU から SIE に切り替え、それにより送信可能な状態にします。

BVAL フラグへの 1 の書き込みは、FRDY ビットが（USBFS によって）1 になっている場合にのみ行ってください。選択パイプが受信方向の場合、BVAL フラグは 1 にしないでください。

28.2.7　割り込みイネーブルレジスタ 0（INTENB0）

アドレス　USBFS.INTENB0 4009 0030h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	VBSE	RSME	SOFE	DVSE	CTRE	BEMPE	NRDYE	BRDYE	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	BRDYE	バッファレディ割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b9	NRDYE	バッファノットレディ応答割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b10	BEMPE	バッファエンプティ割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b11	CTRE	コントロール転送ステージ遷移割り込み許可（注1）	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b12	DVSE	デバイスステート遷移割り込み許可（注1）	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b13	SOFE	フレーム番号更新割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b14	RSME	レジューム割り込み許可（注1）	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b15	VBSE	VBUS割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W

注 1.　RSME、DVSE、および CTRE ビットは、デバイスコントローラモード時にのみ 1 にできます。ホストコントローラモードでは、これらのビットを 1 にしないでください。

INTSTS0 レジスタのステータスフラグが 1 で、INTENB0 レジスタの関連する割り込み要求許可ビットが 1 の場合、USBFS は USBFS 割り込み要求を発行します。

INTENB0 レジスタの設定値にかかわらず、関連する条件を満たすステート切り替えに応じて、INTSTS0 レジスタのステータスフラグは 1 となります。

INTSTS0 レジスタの対応するステータスフラグが 1 の状態で、INTENB0 レジスタの割り込み要求許可ビットが 0 から 1 に切り替わると、USBFS 割り込み要求が発行されます。

28.2.8 割り込みイネーブルレジスタ 1（INTENB1）

アドレス USBFS.INTENB1 4009 0032h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	OVRCRE	BCHGE	—	DTCHE	ATTCHE	—	—	—	—	EOFERRE	SIGNE	SACKE	—	—	—	PDDETINTE0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PDDETINTE0	PDDETINT0検出割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	SACKE	SETUPトランザクション正常応答割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b5	SIGNE	SETUPトランザクションエラー割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b6	EOFERRE	EOFエラー検出割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b10-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11	ATTCHE	アタッチ検出割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b12	DTCHE	デタッチ検出割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	BCHGE	USBバス変化割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b15	OVRCRE	オーバーカレント入力変化割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W

注 . INTENB1 レジスタのビットは、ホストコントローラモード時にのみ 1 にできます。デバイスコントローラモードでは、1 にしないでください。

INTENB1 レジスタは、ホストコントローラモード時の SETUP トランザクションに対する割り込みマスクを指定します。

INTSTS1 レジスタのステータスフラグが 1 で、INTENB1 レジスタの関連する割り込み要求許可ビットが 1 の場合、USBFS は USBFS 割り込み要求を発行します。

INTENB1 レジスタの設定値にかかわらず、関連する条件を満たすステート切り替えに応じて、INTSTS1 レジスタのステータスフラグは 1 となります。

INTSTS1 レジスタの対応するステータスフラグが 1 の状態で、INTENB1 レジスタの割り込み要求許可ビットが 0 から 1 に切り替わると、USBFS 割り込み要求が発行されます。

デバイスコントローラモードでは、割り込みを許可しないでください。

28.2.9 BRDY割り込みイネーブルレジスタ（BRDYENB）

アドレス USBFS.BRDYENB 4009 0036h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PIPE9BRDYE	PIPE8BRDYE	PIPE7BRDYE	PIPE6BRDYE	PIPE5BRDYE	PIPE4BRDYE	PIPE3BRDYE	PIPE2BRDYE	PIPE1BRDYE	PIPE0BRDYE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIPE0BRDYE	パイプ0のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b1	PIPE1BRDYE	パイプ1のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b2	PIPE2BRDYE	パイプ2のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b3	PIPE3BRDYE	パイプ3のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b4	PIPE4BRDYE	パイプ4のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b5	PIPE5BRDYE	パイプ5のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b6	PIPE6BRDYE	パイプ6のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b7	PIPE7BRDYE	パイプ7のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b8	PIPE8BRDYE	パイプ8のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b9	PIPE9BRDYE	パイプ9のBRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

BRDYENB レジスタは、各パイプの BRDY 割り込み検出時に、INTSTS0.BRDY ビットを 1 にすることを許可または禁止します。

BRDYSTS レジスタのステータスフラグが 1 で、BRDYENB レジスタの関連する PIPEnBRDYE ビット（n = 0 ～ 9）が 1 の場合、INTSTS0.BRDY フラグは 1 になります。このとき、INTENB0 レジスタの BRDYE ビットが 1 であれば、USBFS は BRDY 割り込み要求を発生させます。

PIPEnBRDY ビットの少なくとも 1 つが 1 のとき、ソフトウェアで BRDYENB レジスタの対応する割り込み許可ビットを 0 から 1 に変更すると、USBFS は BRDY 割り込み要求を発生させます。

28.2.10 NRDY割り込みイネーブルレジスタ（NRDYENB）

アドレス USBFS.NRDYENB 4009 0038h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PIPE9NRDYE	PIPE8NRDYE	PIPE7NRDYE	PIPE6NRDYE	PIPE5NRDYE	PIPE4NRDYE	PIPE3NRDYE	PIPE2NRDYE	PIPE1NRDYE	PIPE0NRDYE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIPE0NRDYE	パイプ0のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b1	PIPE1NRDYE	パイプ1のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b2	PIPE2NRDYE	パイプ2のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b3	PIPE3NRDYE	パイプ3のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b4	PIPE4NRDYE	パイプ4のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b5	PIPE5NRDYE	パイプ5のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b6	PIPE6NRDYE	パイプ6のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b7	PIPE7NRDYE	パイプ7のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b8	PIPE8NRDYE	パイプ8のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b9	PIPE9NRDYE	パイプ9のNRDY割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

NRDYENB レジスタは、各パイプの NRDY 割り込み検出時に、INTSTS0.NRDY ビットを 1 にすることを許可または禁止します。

NRDYSTS レジスタのステータスフラグが 1 で、NRDYENB レジスタの関連する PIPEnNRDYE ビット（n = 0 ～ 9）が 1 の場合、INTSTS0.NRDY フラグは 1 になります。このとき、INTENB0 レジスタの NRDYE ビットが 1 であれば、USBFS は NRDY 割り込み要求を発生させます。

PIPEnNRDY ビットの少なくとも 1 つが 1 のとき、ソフトウェアで NRDYENB レジスタの対応する割り込み要求許可ビットを 0 から 1 に変更すると、USBFS は NRDY 割り込み要求を発生させます。

28.2.11 BEMP割り込みイネーブルレジスタ（BEMPENB）

アドレス USBFS.BEMPENB 4009 003Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PIPE9BEMPE	PIPE8BEMPE	PIPE7BEMPE	PIPE6BEMPE	PIPE5BEMPE	PIPE4BEMPE	PIPE3BEMPE	PIPE2BEMPE	PIPE1BEMPE	PIPE0BEMPE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIPE0BEMPE	パイプ0のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b1	PIPE1BEMPE	パイプ1のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b2	PIPE2BEMPE	パイプ2のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b3	PIPE3BEMPE	パイプ3のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b4	PIPE4BEMPE	パイプ4のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b5	PIPE5BEMPE	パイプ5のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b6	PIPE6BEMPE	パイプ6のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b7	PIPE7BEMPE	パイプ7のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b8	PIPE8BEMPE	パイプ8のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b9	PIPE9BEMPE	パイプ9のBEMP割り込み許可	0：割り込み出力を禁止 1：割り込み出力を許可	R/W
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

BEMPENB レジスタは、各パイプの BEMP 割り込み検出時に、INTSTS0.BEMP ビットを 1 にすることを禁止または許可します。

BEMPSTS レジスタのステータスフラグが 1 で、BEMPENB レジスタの関連する PIPEnBEMPE ビット（n = 0 ～ 9）が 1 の場合、INTSTS0.BEMP フラグは 1 になります。このとき、INTENB0 レジスタの BEMPE ビットが 1 であれば、USBFS は BEMP 割り込み要求を発生させます。

PIPEnBEMP ビットの少なくとも 1 つが 1 のとき、ソフトウェアで BEMPENB レジスタの対応する割り込み要求許可ビットを 0 から 1 に変更すると、USBFS は BEMP 割り込み要求を発生させます。

28.2.12 SOF出力コンフィグレーションレジスタ（SOFCFG）

アドレス USBFS.SOFCFG 4009 003Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	TRNENSEL	—	BRDYM	—	EDGESTS	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	EDGESTS	エッジ割り込み出力ステータスモニタ（注1）	エッジ割り込み出力信号のエッジ処理中は1になります。	R
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	BRDYM	BRDY割り込みステータスクリアタイミング	0：ソフトウェアでBRDYフラグをクリア 1：FIFOバッファに対するデータリード／ライトを介して、USBFSがBRDYフラグをクリア	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	TRNENSEL	トランザクション有効期間切り替え（注1）	0：ロースピード通信非対応 1：ロースピード通信対応	R/W
b15-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　USBFS へのクロック供給を停止するときは、事前に本ビットが 0 であることを確認してください。

EDGESTS ビット（エッジ割り込み出力ステータスモニタ）

エッジ割り込み出力信号のエッジ処理中は 1 を示します。USBFS へのクロック供給を停止するときは、事前に本ビットが 0 であることを確認してください。

BRDYM ビット（BRDY 割り込みステータスクリアタイミング）

パイプの BRDY 割り込みステータスフラグのクリアタイミングを指定します。

TRNENSEL ビット（トランザクション有効期間切り替え）

USB ポートでフルスピードまたはロースピード通信を行う場合に、1 フレーム中に USBFS がトークン発行を行う期間（トランザクション有効期間）を指定します。

ロースピードデバイスが接続されたとき、本ビットを 1 にしてください。本ビットは、ホストコントローラモードでのみ有効です。デバイスコントローラモードでは、本ビットを 0 にしてください。

28.2.13　割り込みステータスレジスタ 0（INTSTS0）

アドレス　USBFS.INTSTS0 4009 0040h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	VBINT	RESM	SOFR	DVST	CTRT	BEMP	NRDY	BRDY	VBSTS	DVSQ[2:0]			VALID	CTSQ[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0/1（注1）	0	0	0	0	0（注2）	0（注3）	0（注3）	0/1（注3）	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CTSQ[2:0]	コントロール転送ステージ	b2 b0 0 0 0：アイドルまたはセットアップステージ 0 0 1：コントロールリードデータステージ 0 1 0：コントロールリードステータスステージ 0 1 1：コントロールライトデータステージ 1 0 0：コントロールライトステータスステージ 1 0 1：コントロールライト（ノーデータ）ステータスステージ 1 1 0：コントロール転送シーケンスエラー	R
b3	VALID	USBリクエスト受信	0：Setupパケットの受信なし 1：Setupパケットの受信あり	R/W（注4）
b6-b4	DVSQ[2:0]	デバイスステート	b6 b4 0 0 0：Poweredステート 0 0 1：Defaultステート 0 1 0：Addressステート 0 1 1：Configuredステート 1 x x：Suspendedステート	R
b7	VBSTS	VBUS入力ステータス	0：USB_VBUS端子がLow 1：USB_VBUS端子がHigh	R
b8	BRDY	バッファレディ割り込みステータス	0：BRDY割り込み発生なし 1：BRDY割り込み発生あり	R
b9	NRDY	バッファノットレディ割り込みステータス	0：NRDY割り込み発生なし 1：NRDY割り込み発生あり	R
b10	BEMP	バッファエンプティ割り込みステータス	0：BEMP割り込み発生なし 1：BEMP割り込み発生あり	R
b11	CTRT	コントロール転送ステージ遷移割り込みステータス（注5）	0：コントロール転送ステージ遷移割り込み発生なし 1：コントロール転送ステージ遷移割り込み発生あり	R/W（注4）
b12	DVST	デバイスステート遷移割り込みステータス（注5）	0：デバイスステート遷移割り込み発生なし 1：デバイスステート遷移割り込み発生あり	R/W（注4）
b13	SOFR	フレーム番号更新割り込みステータス	0：SOF割り込み発生なし 1：SOF割り込み発生あり	R/W（注4）
b14	RESM	レジューム割り込みステータス（注5）（注6）	0：レジューム割り込み発生なし 1：レジューム割り込み発生あり	R/W（注4）
b15	VBINT	VBUS割り込みステータス（注6）	0：VBUS割り込み発生なし 1：VBUS割り込み発生あり	R/W（注4）

x: Don’t care

注 1.　MCU のリセット時は 0、USB バスリセット後は 1 です。

注 2.　USB_VBUS 端子が High のとき 1、Low のとき 0 です。

注 3.　MCU のリセット時は 000b、USB バスリセット後は 001b です。

注 4.　VBINT、RESM、SOFR、DVST、CTRT、または VALID ビットをクリアする場合は、クリアしたいビットにのみ 0 を書き込んでください。その他のビットには 1 を書いてください。0 を示しているステータスビットには、0 を書き込まないでください。

注 5.　RESM、DVST、および CTRT ビットのステータスは、デバイスコントローラモードでのみ変化します。ホストコントローラモードでは、対応する割り込み許可ビットを 0（禁止）にしてください。

注 6.　USBFS は、VBINT ビットおよび RESM ビットが示すステータス変化をクロック停止中（SCKE ビット = 0）でも検出し、対応する割り込み要求ビットが 1 であれば、その割り込みを要求します。ソフトウェアによるステータスのクリアは、クロック供給を許可にしてから行ってください。

CTSQ[2:0] ビット（コントロール転送ステージ）

ホストコントローラモードでは、CTSQ[2:0] ビットの読み出し値は無効です。

VALID ビット（USB リクエスト受信）

ホストコントローラモードでは、VALID ビットの読み出し値は無効です。

DVSQ[2:0] ビット（デバイスステート）

USB バスリセットで DVSQ[2:0] ビットは初期化されます。ホストコントローラモードでは、読み出し値は無効です。

BRDY ビット（バッファレディ割り込みステータス）

BRDY 割り込みステータスを示します。

BRDY 割り込みが許可（BRDYENB.PIPEnBRDYE = 1）になっているパイプの少なくとも 1 つで、USBFS が BRDY 割り込みステータス（PIPEnBRDY = 1、n = 0 ～ 9）を検出すると、BRDY ビットを 1 にします。

PIPEnBRDY ステータスがアサートされる条件については、28.3.3.1　BRDY 割り込みを参照してください。

1 になっている PIPEnBRDYE ビットに対応した PIPEnBRDY ビットのすべてに、ソフトウェアで 0 を書くと、USBFS は BRDY ビットを 0 にします。ソフトウェアで BRDY ビットに 0 を書き込んでも、BRDY ビットを 0 に設定することはできません。

NRDY ビット（バッファノットレディ割り込みステータス）

1 になっている PIPEnNRDYE ビット（n = 0 ～ 9）に対応した PIPENRDY ビットのうち、少なくとも 1 つの PIPEnNRDY ビット（n = 0 ～ 9）が 1 になると（ソフトウェアで NRDY 割り込み出力を許可しているパイプのうち、少なくとも 1 つで USBFS が NRDY 割り込みステータスを検出すると）、USBFS は NRDY ビットを 1 にします。

PIPEnNRDY ステータスがアサートされる条件については、28.3.3.2　NRDY 割り込みを参照してください。

1 になっている PIPEnNRDYE ビットに対応した PIPEnNRDY ビットのすべてに、ソフトウェアで 0 を書くと、USBFS は NRDY ビットを 0 にします。ソフトウェアで NRDY ビットに 0 を書き込んでも、NRDY ビットを 0 に設定することはできません。

BEMP ビット（バッファエンプティ割り込みステータス）

BEMP 割り込みステータスを示します。

BEMP 割り込みが許可されている（BEMPENB.PIPEnBEMPE = 1）パイプの少なくとも 1 つで、USBFS が BEMP 割り込みステータス（PIPEnBEMP = 1、n = 0 ～ 9）を検出すると、BEMP ビットを 1 にします。

PIPEnBEMP ステータスがアサートされる条件については、28.3.3.3　BEMP 割り込みを参照してください。

1 になっている PIPEnBEMPE ビットに対応した PIPEnBEMP ビットのすべてに、ソフトウェアで 0 を書くと、USBFS は BEMP ビットを 0 にします。ソフトウェアで BEMP ビットに 0 を書き込んでも、BEMP ビットはクリアされません。

CTRT ビット（コントロール転送ステージ遷移割り込みステータス）

デバイスコントローラモードでは、USBFS がコントロール転送ステージ遷移を検出すると、CTSQ[2:0] ビット値を更新して、CTRT ビットを 1 にします。コントロール転送ステージ遷移割り込みが発生した場合、USBFS が次のコントロール転送ステージ遷移を検出する前に、CTRT ビットをクリアしてください。

ホストコントローラモードでは、CTRT ビットからの読み出し値は無効です。

DVST ビット（デバイスステート遷移割り込みステータス）

デバイスコントローラモードでは、USBFS がデバイスステートの変化を検出すると、DVSQ[2:0] ビット値を更新して、DVST ビットを 1 にします。デバイスステート遷移割り込みが発生した場合、USBFS が次のデバイスステート遷移を検出する前に、DVST ビットをクリアしてください。

ホストコントローラモードでは、DVST ビットからの読み出し値は無効です。

SOFR ビット（フレーム番号更新割り込みステータス）

ホストコントローラモードでは、ソフトウェアで DVSTCTR0.UACT ビットを 1 にしている場合、USBFS はフレーム番号の更新時に SOFR ビットを 1 にします。SOFR 割り込みは、1ms ごとに検出されます。

デバイスコントローラモードでは、USBFS はフレーム番号の更新時に SOFR ビットを 1 にします。SOFR 割り込みは、1ms ごとに検出されます。

USB ホストから受信した SOF パケットが破損していても、USBFS は内部補完機能によって SOFR 割り込みを検出できます。

RESM ビット（レジューム割り込みステータス）

デバイスコントローラモードでは、USBFS は、Suspended ステート時（DVSQ[2:0] = 1xxb）に USB_DP 端子で信号の立ち下がりを検出すると、RESM ビットを 1 にします。ホストコントローラモードでは、RESM ビットからの読み出し値は無効です。

VBINT ビット（VBUS 割り込みステータス）

USBFS は、USB_VBUS 端子入力値のレベル変化（High から Low または Low から High）を検出すると、VBINT ビットを 1 にします。USBFS は、USB_VBUS 端子の入力値を VBSTS ビットに表示します。VBUS 割り込みが発生した場合は、ソフトウェアで VBSTS フラグを 3 回以上読み出すことでトランジェント成分を除去し、同じ値が読み出されたことを確認してください。

28.2.14　割り込みステータスレジスタ 1（INTSTS1）

アドレス　USBFS.INTSTS1 4009 0042h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	OVRCR	BCHG	—	DTCH	ATTCH	—	—	—	—	EOFERR	SIGN	SACK	—	—	—	PDDETINT0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PDDETINT0	PDDET0検出割り込みステータス	0：PDDET0検出割り込み発生なし 1：PDDET0検出割り込み発生あり	R/W（注1）
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	SACK	SETUPトランザクション正常応答割り込みステータス	0：SACK割り込み発生なし 1：SACK割り込み発生あり	R/W（注1）
b5	SIGN	SETUPトランザクションエラー割り込みステータス	0：SIGN割り込み発生なし 1：SIGN割り込み発生あり	R/W（注1）
b6	EOFERR	EOFエラー検出割り込みステータス	0：EOFERR割り込み発生なし 1：EOFERR割り込み発生あり	R/W（注1）
b10-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11	ATTCH	ATTCH割り込みステータス	0：ATTCH割り込み発生なし 1：ATTCH割り込み発生あり	R/W（注1）
b12	DTCH	USBデタッチ検出割り込みステータス	0：DTCH割り込み発生なし 1：DTCH割り込み発生あり	R/W（注1）
b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	BCHG	USBバス変化割り込みステータス（注2）	0：BCHG割り込み発生なし 1：BCHG割り込み発生あり	R/W（注1）
b15	OVRCR	オーバーカレント入力変化割り込みステータス（注2）	0：OVRCR割り込み発生なし 1：OVRCR割り込み発生あり	R/W（注1）

注 1.　INTSTS1 レジスタの各ビットを 0 にする場合は、クリアしたいビットにのみ 0 を書いてください。その他のビットには 1 を書いてください。

注 2.　USBFS は、OVRCR または BCHG ビットのステータス変化をクロック供給の停止中（SYSCFG.SCKE = 0）でも検出し、対応する割り込み要求ビットが 1 であれば割り込みを要求します。ソフトウェアでステータスをクリアする前にクロック供給を許可してください（SYSCFG.SCKE = 1）。その他の割り込みは、クロック停止中（SYSCFG.SCKE ビット = 0）は検出することができません。

INTSTS1 レジスタは、ホストコントローラモードでの各割り込みのステータスを確認するためのレジスタです。INTSTS1 レジスタの各ビットが示すステータス変化の割り込みは、ホストコントローラモードでのみ許可にしてください。

PDDETINT0 ビット（PDDET0 検出割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、ポータブルデバイス検出割り込みのステータスを示します。USBFS が USB 物理層トランシーバ（PHY）の VDPDET 端子入力値にレベル変化（High から Low または Low から High）を検出すると、本ビットが 1 になります。USBFS は、VDPDET 端子の入力値を PDDETSTS0 ビットに表示します。PDDETINT 割り込みが発生した場合は、ソフトウェアで PDDETSTS0 ビットを 3 回以上読み出すことでトランジェント成分を除去し、同じ値が読み出されたことを確認してください。

SACK ビット（SETUP トランザクション正常応答割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、SETUP トランザクション正常応答割り込みのステータスを示します。

USBFS が発行した SETUP トランザクション中に、周辺デバイスから ACK 応答が返されると、USBFS は SACK 割り込みを検出して、本ビットを 1 にします。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

デバイスコントローラモードでは、SACK ビットからの読み出し値は無効です。

SIGN ビット（SETUP トランザクションエラー割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、SETUP トランザクションエラー割り込みのステータスを示します。

USBFS が発行した SETUP トランザクション中に、周辺デバイスから ACK 応答が 3 回連続で返されない場合、USBFS は SIGN 割り込みを検出し、本ビットを 1 にします。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

3 回連続した SETUP トランザクションに対して、以下のいずれかの応答条件が発生したとき、USBFS は SIGN 割り込みを検出します。

- 周辺デバイスが何も応答しない状態で USBFS がタイムアウトを検出したとき
- 破損した ACK パケットを受信したとき
- ACK 以外のハンドシェイク（NAK、NYET、または STALL）を受信したとき

デバイスコントローラモードでは、SIGN ビットからの読み出し値は無効です。

EOFERR ビット（EOF エラー検出割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、EOFERR 割り込みのステータスを示します。

USBFS は、USB2.0 規格で定められている EOF2 のタイミングで通信が完了しなかったことを検出すると、EOFERR 割り込みを検出し、本ビットを 1 にします。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

EOFERR 割り込みの検出後、USBFS は対応する割り込み許可ビットの設定値とは無関係に、以下のようにハードウェアを制御します。

- EOFERR 割り込みが検出されたポートに対して、DVSTCTR0.UACT ビットを 0 にする
- EOFERR 割り込みが発生したポートをアイドル状態に遷移させる

ソフトウェアは通信を行っているすべてのパイプを終了させた後、USB ポートへの再エニュメレーションを行ってください。

デバイスコントローラモードでは、EOFERR ビットからの読み出し値は無効です。

ATTCH ビット（ATTCH 割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、USB アタッチ検出割り込みのステータスを示します。

USBFS は、フルスピードまたはロースピード信号レベルの J-State または K-State を 2.5μs 間検出すると、ATTCH 割り込みを検出して、本ビットを 1 にします。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

以下のいずれかの条件が発生したとき、USBFS は ATTCH 割り込みを検出します。

- K-State、SE0、または SE1 から J-State に変化し、J-State が 2.5μs 間継続したとき
- J-State、SE0、または SE1 から K-State に変化し、K-State が 2.5μs 間継続したとき

デバイスコントローラモードでは、ATTCH ビットからの読み出し値は無効です。

DTCH ビット（USB デタッチ検出割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、USB デタッチ検出割り込みのステータスを示します。

USBFS は、USB バスデタッチイベントを検出すると、DTCH 割り込みを検出して、本ビットを 1 にします。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

USBFS は、USB2.0 規格に基づいてバスデタッチイベントを検出します。

DTCH 割り込みの検出後、USBFS は対応する割り込み許可ビットの設定値とは無関係に、以下のようにハードウェアを制御します。

- DTCH 割り込みが検出されたポートに対して、DVSTCTR0.UACT ビットを 0 にする
- DTCH 割り込みが発生したポートをアイドル状態に遷移させる

ソフトウェアで、通信を行っているすべてのパイプを終了させ、USB ポートへのアタッチ待ちの状態（ATTCH 割り込み発生待ちの状態）を呼び出してください。

デバイスコントローラモードでは、DTCH フラグからの読み出し値は無効です。

BCHG ビット（USB バス変化割り込みステータス）

ホストコントローラモード時、USB バス変化割り込みのステータスを示します。

USB ポート上でフルスピードまたはロースピード信号レベルの変化が生じると、USBFS は BCHG 割り込みを検出して、本ビットを 1 にします。対象となる変化は、J-State、K-State、または SE0 から、J-State、K-State、または SE0 へのすべての変化です。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

USBFS は、USB ポートの現在の入力状態を LNST[1:0] ビットに表示します。BCHG 割り込みが発生した場合は、同じ値が 3 回以上読み出されるまで、ソフトウェアで LNST[1:0] ビットの読み出しを繰り返し、トランジェント成分を除去してください。

USB バス状態の変化は、内部クロックが停止しているときも検出可能です。

デバイスコントローラモードでは、BCHG フラグからの読み出し値は無効です。

OVRCR ビット（オーバーカレント入力変化割り込みステータス）

USB_OVRCURA および USB_OVRCURB 入力端子変化割り込みのステータスを示します。

USB_OVRCURA 端子と USB_OVRCURB 端子の入力値の少なくとも一方に変化（High から Low または Low から High）が生じると、USBFS は OVRCR 割り込みを検出して、本ビットを 1 にします。ソフトウェアで対応する割り込み許可ビットを 1 にしている場合、USBFS は割り込みを発生させます。

28.2.15 BRDY割り込みステータスレジスタ（BRDYSTS）

アドレス USBFS.BRDYSTS 4009 0046h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PIPE9BRDY	PIPE8BRDY	PIPE7BRDY	PIPE6BRDY	PIPE5BRDY	PIPE4BRDY	PIPE3BRDY	PIPE2BRDY	PIPE1BRDY	PIPE0BRDY
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIPE0BRDY	パイプ0のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b1	PIPE1BRDY	パイプ1のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b2	PIPE2BRDY	パイプ2のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b3	PIPE3BRDY	パイプ3のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b4	PIPE4BRDY	パイプ4のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b5	PIPE5BRDY	パイプ5のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b6	PIPE6BRDY	パイプ6のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b7	PIPE7BRDY	パイプ7のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b8	PIPE8BRDY	パイプ8のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b9	PIPE9BRDY	パイプ9のBRDY割り込みステータス（注2）	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　SOFCFG.BRDYM ビットが 0 の場合、BRDYSTS レジスタの各ビットが示すステータスをクリアするには、クリアしたいビットにのみ 0 を書いてください。その他のビットには 1 を書いてください。

注 2.　SOFCFG.BRDYM ビットが 0 の場合、BRDY 割り込みのクリアは、FIFO にアクセスする前に行ってください。

28.2.16 NRDY割り込みステータスレジスタ（NRDYSTS）

アドレス USBFS.NRDYSTS 4009 0048h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PIPE9NRDY	PIPE8NRDY	PIPE7NRDY	PIPE6NRDY	PIPE5NRDY	PIPE4NRDY	PIPE3NRDY	PIPE2NRDY	PIPE1NRDY	PIPE0NRDY
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIPE0NRDY	パイプ0のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b1	PIPE1NRDY	パイプ1のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b2	PIPE2NRDY	パイプ2のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b3	PIPE3NRDY	パイプ3のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b4	PIPE4NRDY	パイプ4のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b5	PIPE5NRDY	パイプ5のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b6	PIPE6NRDY	パイプ6のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b7	PIPE7NRDY	パイプ7のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b8	PIPE8NRDY	パイプ8のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b9	PIPE9NRDY	パイプ9のNRDY割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　NRDYSTS レジスタの各ビットが示すステータスをクリアするには、クリアしたいビットにのみ 0 を書いてください。その他のビットには 1 を書いてください。

28.2.17 BEMP割り込みステータスレジスタ（BEMPSTS）

アドレス USBFS.BEMPSTS 4009 004Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PIPE9BEMP	PIPE8BEMP	PIPE7BEMP	PIPE6BEMP	PIPE5BEMP	PIPE4BEMP	PIPE3BEMP	PIPE2BEMP	PIPE1BEMP	PIPE0BEMP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PIPE0BEMP	パイプ0のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b1	PIPE1BEMP	パイプ1のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b2	PIPE2BEMP	パイプ2のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b3	PIPE3BEMP	パイプ3のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b4	PIPE4BEMP	パイプ4のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b5	PIPE5BEMP	パイプ5のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b6	PIPE6BEMP	パイプ6のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b7	PIPE7BEMP	パイプ7のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b8	PIPE8BEMP	パイプ8のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b9	PIPE9BEMP	パイプ9のBEMP割り込みステータス	0：割り込み発生なし 1：割り込み発生あり	R/W（注1）
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　BEMPSTS レジスタの各ビットが示すステータスをクリアするには、クリアしたいビットにのみ 0 を書いてください。その他のビットには 1 を書いてください。

28.2.18　フレームナンバレジスタ（FRMNUM）

アドレス　USBFS.FRMNUM 4009 004Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	OVRN	CRCE	—	—	—	FRNM[10:0]										
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b10-b0	FRNM[10:0]	フレーム番号	最新のフレーム番号	R
b13-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	CRCE	受信データエラー	0：エラーなし 1：エラー発生	R/W （注1）
b15	OVRN	オーバーラン／アンダーラン検出ステータス	0：エラーなし 1：エラー発生	R/W （注1）

注 1.　ステータスをクリアするには、クリアしたいビットにのみ 0 を書いてください。その他のビットには 1 を書いてください。

FRNM[10:0] ビット（フレーム番号）

FRNM[10:0] ビットは、1ms ごとの SOF パケット発行後、または SOF パケット受信時に FRNM[10:0] ビットに書き込んだ後、USBFS に対し最新のフレーム番号を示します。

CRCE ビット（受信データエラー）

アイソクロナス転送中に CRC エラーやビットスタッフィングエラーが発生すると、CRCE ビットが 1 になります。ホストコントローラモードでの CRC エラー検出時に、USBFS は内部 NRDY 割り込みを発生させます。

CRCE ビットをクリアするには、本ビットに 0 を書き、FRMNUM レジスタの他のビットには 1 を書いてください。

OVRN ビット（オーバーラン／アンダーラン検出ステータス）

アイソクロナス転送中にオーバーランエラーやアンダーランエラーが発生すると、OVRN ビットが 1 になります。OVRN ビットをクリアするには、本ビットに 0 を書き、FRMNUM レジスタの他のビットには 1 を書いてください。

ホストコントローラモードでは、以下のいずれかの条件で、OVRN ビットが 1 になります。

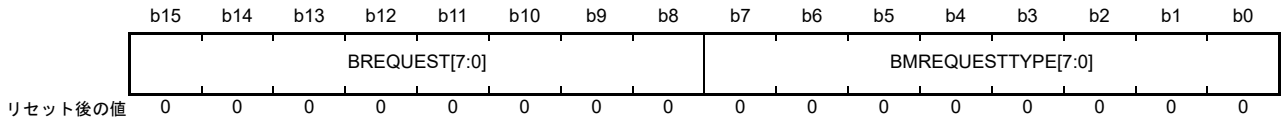
- アイソクロナス転送の送信パイプにおいて、すべての送信データが FIFO バッファに書き込まれていない状態で、OUT トークンの発行タイミングに達したとき
- アイソクロナス転送の受信パイプにおいて、FIFO バッファのすべての面に空きがない状態で、IN トークンの発行タイミングに達したとき

デバイスコントローラモードでは、以下のいずれかの条件で、OVRN ビットが 1 になります。

- アイソクロナス転送の送信パイプにおいて、すべての送信データが FIFO バッファに書き込まれていない状態で、IN トークンを受信したとき
- アイソクロナス転送の受信パイプにおいて、FIFO バッファのすべての面に空きがない状態で、OUT トークンを受信したとき

28.2.19 USB リクエストタイプレジスタ（USBREQ）

アドレス USBFS.USBREQ 4009 0054h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	BMREQUESTTYPE[7:0]	リクエストタイプ	USBリクエストのbmRequestType値	R/W（注1）
b15-b8	BREQUEST[7:0]	リクエスト	USBリクエストのbRequest値	R/W（注1）

注 1.　デバイスコントローラモードでは、これらのビットは読み出し可能ですが、書き込みは無効です。ホストコントローラモードでは、これらのビットは読み出し／書き込みが可能です。

USBREQ レジスタは、コントロール転送のセットアップリクエストを格納するレジスタです。

デバイスコントローラモードでは、USBREQ レジスタは、受信した bRequest および bmRequestType 値を格納します。ホストコントローラモードでは、送信する bRequest および bmRequestType 値を設定します。

USBREQ レジスタは、USB バスリセットで初期化されます。

BMREQUESTTYPE[7:0] ビット（リクエストタイプ）

USB リクエストの bmRequestType 値を格納します。

- ホストコントローラモード時：
  送信する SETUP トランザクションの USB リクエストデータ値を設定してください。DCPCTR.SUREQ ビットが 1 のときは、これらのビット値を変更しないでください。
- デバイスコントローラモード時：
  SETUP トランザクションで受信した USB リクエストデータ値を示します。書き込みは無効です。

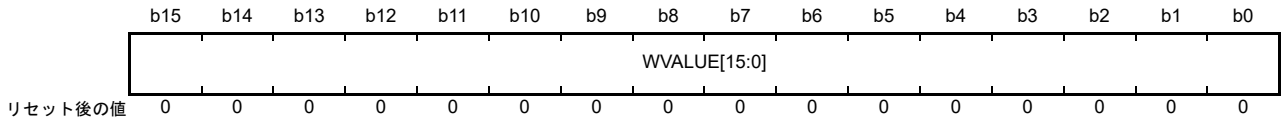
BREQUEST[7:0] ビット（リクエスト）

USB リクエストの bRequest 値を格納します。

- ホストコントローラモード時：
  送信用 SETUP トランザクションの USB リクエストデータ値を設定してください。DCPCTR.SUREQ ビットが 1 のときは、これらのビット値を変更しないでください。
- デバイスコントローラモード時：
  受信用 SETUP トランザクションの USB リクエストデータ値を示します。書き込みは無効です。

28.2.20 USB リクエストバリューレジスタ（USBVAL）

アドレス USBFS.USBVAL 4009 0056h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	WVALUE[15:0]	バリュー	USBリクエストのwValue値を格納します。	R/W（注1）

注 1. デバイスコントローラモードでは、これらのビットは読み出し可能ですが、書き込みは無効です。ホストコントローラモードでは、これらのビットは読み出し／書き込みの両方が可能です。

デバイスコントローラモードでは、USBVAL レジスタは、受信した wValue 値を格納します。ホストコントローラモードでは、送信する wValue の値を設定します。

USBVAL レジスタは、USB バスリセットで初期化されます。

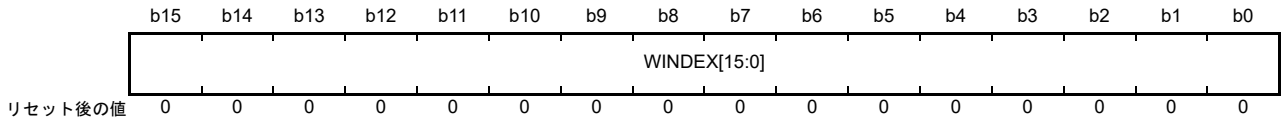
WVALUE[15:0] ビット（バリュー）

USB リクエスト wValue の値を格納します。

- ホストコントローラモード時：
  送信用 SETUP トランザクションの USB リクエストの wValue 値を設定してください。DCPCTR.SUREQ ビットが 1 のときは、これらのビット値を変更しないでください。
- デバイスコントローラモード時：
  受信用 SETUP トランザクションの USB リクエストの wValue 値を表示します。書き込みは無効です。

28.2.21 USB リクエストインデックスレジスタ（USBINDX）

アドレス USBFS.USBINDX 4009 0058h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	WINDEX[15:0]	インデックス	USBリクエストのwIndex値を格納します。	R/W（注1）

注 1. デバイスコントローラモードでは、これらのビットは読み出し可能ですが、書き込みは無効です。ホストコントローラモードでは、これらのビットは読み出し／書き込みの両方が可能です。

USBINDX レジスタは、コントロール転送のセットアップリクエストを格納するレジスタです。

デバイスコントローラモードでは、USBINDX レジスタは受信した wIndex 値を格納します。ホストコントローラモードでは、送信する wIndex の値を設定します。

USBINDX レジスタは、USB バスリセットで初期化されます。

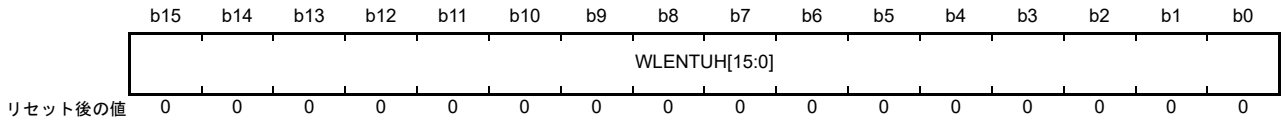
WINDEX[15:0] ビット（インデックス）

USB リクエストの値を格納します。

- ホストコントローラモード時：
  送信用 SETUP トランザクションの USB リクエストの wIndex 値を設定してください。DCPCTR.SUREQ ビットが 1 のときは、これらのビット値を変更しないでください。
- デバイスコントローラモード時：
  受信用 SETUP トランザクションの USB リクエストの wIndex 値を示します。書き込みは無効です。

28.2.22 USB リクエストレングスレジスタ（USBLENG）

アドレス USBFS.USBLENG 4009 005Ah



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	WLENTUH[15:0]	レングス	USBリクエストのwLength値を格納します。	R/W（注1）

注 1.　デバイスコントローラモードでは、これらのビットは読み出し可能ですが、書き込みは無効です。ホストコントローラモードでは、これらのビットは読み出し／書き込みの両方が可能です。

USBLENG レジスタは、コントロール転送のセットアップリクエストを格納するレジスタです。

デバイスコントローラモードの場合、受信した wLength 値を格納します。ホストコントローラモードでは、送信する wLength 値を設定します。

USBLENG レジスタは、USB バスリセットで初期化されます。

WLENTUH[15:0] ビット（レングス）

USB リクエストの wLength 値を格納します。

- ホストコントローラモード時：
  送信用 SETUP トランザクションの USB リクエストの wLength 値を設定してください。
  DCPCTR.SUREQ ビットが 1 のときは、これらのビット値を変更しないでください。
- デバイスコントローラモード時：
  受信用 SETUP トランザクションの USB リクエストの wLength 値を示します。書き込みは無効です。

28.2.23 DCP コンフィグレーションレジスタ（DCPCFG）

アドレス USBFS.DCPCFG 4009 005Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	SHTNAK	—	—	DIR	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	DIR	転送方向（注1）	0：データ受信方向 1：データ送信方向	R/W
b6-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	SHTNAK	転送終了時のパイプ禁止（注1）	0：転送終了時にパイプを継続 1：転送終了時にパイプ禁止	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　本ビットは、必ず PID = NAK のときに設定してください。本ビットを設定するときは、事前に DCPCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、DCP の DCPCTR.PID[1:0] ビットを BUF から NAK へ変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

DIR ビット（転送方向）

ホストコントローラモード時、コントロール転送のデータステージとステータスステージの転送方向を設定します。デバイスコントローラモードでは、DIR ビットは 0 にしてください。

SHTNAK ビット（転送終了時のパイプ禁止）

選択パイプが受信方向の場合に、転送終了時に PID を NAK に変更するかどうかを指定します。選択パイプが受信方向の場合のみ有効です。

SHTNAK ビットが 1 の場合、USBFS は、転送の終了を判定したときに DCP の DCPCTR.PID[1:0] ビットを NAK に変更します。USBFS は、以下の場合に転送終了と判定します。

- ショートパケット（Zero-Length パケットを含む）を正常に受信したとき

28.2.24 DCP マックスパケットサイズレジスタ（DCPMAXP）

アドレス USBFS.DCPMAXP 4009 005Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DEVSEL[3:0]				—	—	—	—	—	MXPS[6:0]						
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	MXPS[6:0]	最大パケットサイズ(注1)	DCPのペイロード内の最大データ量（最大パケットサイズ）を設定します。 b6 b0 0 0 0 1 0 0 0：8バイト 0 0 1 0 0 0 0：16バイト 0 0 1 1 0 0 0：24バイト 0 1 0 0 0 0 0：32バイト 0 1 0 1 0 0 0：40バイト 0 1 1 0 0 0 0：48バイト 0 1 1 1 0 0 0：56バイト 1 0 0 0 0 0 0：64バイト 1 0 0 1 0 0 0：72バイト 1 0 1 0 0 0 0：80バイト 1 0 1 1 0 0 0：88バイト 1 1 0 0 0 0 0：96バイト 1 1 0 1 0 0 0：104バイト 1 1 1 0 0 0 0：112バイト 1 1 1 1 0 0 0：120バイト 上記以外は設定しないでください。	R/W
b11-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b12	DEVSEL[3:0]	デバイス選択(注2)	b15 b12 0 0 0 0：アドレス0000 0 0 0 1：アドレス0001 0 0 1 0：アドレス0010 0 0 1 1：アドレス0011 0 1 0 0：アドレス0100 0 1 0 1：アドレス0101 上記以外は設定しないでください。	R/W

注 1. MXPS[6:0] ビットは、必ず PID = NAK のときに設定してください。これらのビットを設定するときは、事前に DCPCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、DCP の DCPCTR.PID[1:0] ビットを BUF から NAK へ変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。
MXPS[6:0] ビットの設定後は、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットに DCP を設定してから、ポートコントロールレジスタの BCLR ビットを 1 にしてバッファをクリアしてください。

注 2. DEVSEL[3:0] ビットは、必ず PID = NAK のときに、DCPCTR.SUREQ ビットが 0 の状態で設定してください。これらのビットを設定するときは、事前に DCPCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、DCP の DCPCTR.PID[1:0] ビットを BUF から NAK へ変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

MXPS[6:0] ビット（最大パケットサイズ）

DCP の最大データ量（最大パケットサイズ）を指定します。ビットの初期値は 40h（64 バイト）です。本ビットには、USB2.0 規格に準じた値を設定してください。MXPS[6:0] ビットを 0 にした状態で、FIFO バッファへの書き込みも、PID = BUF の設定も行わないでください。

DEVSEL[3:0] ビット（デバイス選択）

ホストコントローラモード時、コントロール転送の対象の周辺デバイスのアドレスを指定します。最初に、関連の DEVADDn（n = 0 ～ 5）レジスタでデバイスアドレスを設定し、次に、これらのビットを対応する値に設定してください。たとえば、DEVSEL[3:0] ビットを 0010b にする場合は、最初に DEVADD2 レジスタにそのアドレスを設定します。

デバイスコントローラモードでは、これらのビットを 0000b にしてください。

28.2.25 DCP コントロールレジスタ（DCPCTR）

アドレス USBFS.DCPCTR 4009 0060h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BSTS	SUREQ	—	—	SUREQCLR	—	—	SQCLR	SQSET	SQMON	PBUSY	—	—	CCPL	PID[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	PID[1:0]	応答PID	b1 b0 0 0：NAK応答 0 1：BUF応答（バッファ状態に従う） 1 0：STALL応答 1 1：STALL応答	R/W
b2	CCPL	コントロール転送終了許可	0：無効 1：コントロール転送終了を許可	R/W
b4-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	PBUSY	パイプビジー	0：DCPはトランザクションで未使用 1：DCPはトランザクションで使用中	R
b6	SQMON	シーケンストグルビットモニタ	0：DATA0 1：DATA1	R
b7	SQSET	シーケンストグルビットセット（注2）	DCP転送時にシーケンストグルビットを設定します。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：次回トランザクションの期待値をDATA1に設定	R/W（注1）
b8	SQCLR	シーケンストグルビットクリア（注2）	DCP転送時にシーケンストグルビットをクリアします。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：次回トランザクションの期待値をDATA0にクリア 読むと0が読めます。	R/W（注1）
b10-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11	SUREQCLR	SUREQビットクリア	ホストコントローラモード時にSUREQビットをクリアします。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：SUREQを0にクリア 読むと0が読めます。	R/W
b13-b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	SUREQ	SETUP トークン送出	ホストコントローラモード時のトークン送出を設定します。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：Setupパケットを送出	R/W
b15	BSTS	バッファステータス	0：バッファアクセス不可 1：バッファアクセス可能	R

注 1.　読むと 0 が読めます。

注 2.　PID = NAK の状態のときに SQSET ビットおよび SQCLR ビットに 1 を書き込んでください。これらのビットを設定するときは、事前に PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、DCP の PID[1:0] ビットを BUF から NAK へ変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

PID[1:0] ビット（応答 PID）

コントロール転送における USBFS 応答の種類を制御します。

ホストコントローラモードでは、以下のように PID[1:0] ビットの設定を NAK から BUF に変更します。

- 送信方向設定時：
  a. DVSTCTR0.UACT ビットが 1、かつ PID = NAK の状態で、FIFO バッファにすべての送信データを書き込みます
  b. PID[1:0] ビットを 01b（BUF）にします。
  これにより、USBFS が OUT トランザクションを実行します
- 受信方向設定時：
  a. DVSTCTR0.UACT ビットが 1、かつ PID = NAK の状態で、FIFO バッファが空であることを確認します（または空の状態にします）
- PID[1:0] ビットを 01b（BUF）にします。
  これにより、USBFS が IN トランザクションを実行します

USBFS は、PID[1:0] ビットの設定値を以下のように変更します。

- ソフトウェアで PID[1:0] ビットを BUF（01b）に設定した場合、USBFS は MaxPacketSize を超えるデータを受信すると、PID[1:0] ビットを STALL（11b）に設定します
- CRC エラーなどの受信エラーを 3 回連続で検出した場合、USBFS は PID[1:0] ビットを NAK（00b）に設定します
- STALL ハンドシェイクを受信すると、USBFS は PID[1:0] ビットを STALL（11b）に設定します

デバイスコントローラモードでは、USBFS は PID[1:0] ビットの設定値を以下のように変更します。

- Setup パケットを受信すると、USBFS は PID[1:0] ビットを NAK（00b）に設定します。このとき、USBFS は INTSTS0.VALID フラグを 1 にするため、ソフトウェアで VALID フラグを 0 にクリアするまで、PID[1:0] ビットの設定値は変更できなくなります
- ソフトウェアで PID[1:0] ビットを BUF（01b）に設定した場合、USBFS は MaxPacketSize を超えるデータを受信すると、PID[1:0] ビットを STALL（11b）に設定します
- USBFS はコントロール転送シーケンスエラーを検出すると、PID[1:0] ビットを STALL（1xb）に設定します
- USBFS は USBFS バスリセットを検出すると、PID[1:0] ビットを NAK に設定します

USBFS は、SET_ADDRESS リクエストの処理中、PID[1:0] ビットの設定値を参照しません。

PID[1:0] ビットは USB バスリセットで初期化されます。

CCPL ビット（コントロール転送終了許可）

デバイスコントローラモード時、CCPL ビットを 1 にすると、コントロール転送のステータスステージの終了が許可されます。対応する PID[1:0] ビットが BUF に設定されている場合、ソフトウェアで CCPL ビットを 1 にすると、USBFS はコントロール転送ステータスステージを終了します。

コントロールリード転送中、USBFS は USB ホストからの OUT トランザクションに対して ACK ハンドシェイクを送信します。コントロールライト転送またはノーデータコントロール転送中は、USBFS は USB ホストからの IN トランザクションに対して Zero-Length パケットを送信します。SET_ADDRESS リクエスト検出時は、CCPL ビットの設定値とは無関係に、USBFS はセットアップステージからステータスステージ完了まで、自動応答モードで動作します。

新たな Setup パケットを受信すると、USBFS は CCPL ビットを 1 から 0 に変更します。INTSTS0.VALID ビットが 1 のとき、ソフトウェアは CCPL ビットに 1 を書き込むことはできません。CCPL ビットは USB バスリセットで初期化されます。

ホストコントローラモードでは、常に CCPL ビットには 0 を書いてください。

PBUSY ビット（パイプビジー）

USBFS が PID[1:0] ビットを BUF から NAK に変更したときに、DCP がトランザクションで使用されているかどうかを示します。USBFS は、選択パイプに対する USBFS トランザクションの開始時に、PBUSY ビットを 0 から 1 へ変更します。そして、1 回のトランザクションが完了すると、PBUSY ビットを 1 から 0 に変更します。

ソフトウェアで PID を NAK に設定した後、PBUSY ビットの値はパイプ設定の変更が可能かどうかを示します。

詳細は、28.3.4.1　パイプコントロールレジスタの切り替え手順を参照してください。

SQMON ビット（シーケンストグルビットモニタ）

DCP 転送時、次回トランザクションのシーケンストグルビットの期待値を示します。

トランザクションが正常終了すると、USBFS は SQMON ビットをトグルします。ただし、受信方向での転送時に DATA-PID 不一致が発生すると、USBFS は本ビットをトグルしません。

デバイスコントローラモードでは、Setup パケットが正常に受信されると、USBFS は SQMON ビットを 1 に（期待値を DATA1 に）設定します。

デバイスコントローラモードでは、USBFS はステータスステージの IN または OUT トランザクション中に本ビットを参照しません。また、正常終了しても本ビットをトグルしません。

SQSET ビット（シーケンストグルビットセット）

DCP 転送時、次回トランザクションのシーケンストグルビットの期待値として DATA1 を指定します。

SQCLR ビットと SQSET ビットを同時に 1 にしないでください。

SQCLR ビット（シーケンストグルビットクリア）

DCP 転送時、次回トランザクションのシーケンストグルビットの期待値として DATA0 を指定します。読むと 0 が読めます。

SQCLR ビットと SQSET ビットを同時に 1 にしないでください。

SUREQCLR ビット（SUREQ ビットクリア）

ホストコントローラモード時、SUREQCLR ビットを 1 にすると、SUREQ ビットが 0 にクリアされます。読むと 0 が読めます。

SETUP トランザクションで SUREQ ビットが 1 であるときに転送が停止した場合は、ソフトウェアで SUREQCLR ビットを 1 にしてください。正常な SETUP トランザクションでは、その終了時に USBFS が自動的に SUREQ ビットを 0 にクリアするため、ソフトウェアによるクリアは不要です。

SUREQCLR ビットによる SUREQ ビットの制御は、DVSTCTR0.UACT ビットが 0 の場合にのみ行ってください。UACT ビットが 0 の場合は、通信が停止しているか、またはバスデタッチが検出されたために転送が行われていません。

デバイスコントローラモードでは、常に本ビットには 0 を書いてください。

SUREQ ビット（SETUP トークン送出）

ホストコントローラモード時、SUREQ ビットを 1 にすると、USBFS に対して Setup パケット送信がトリガされます。SETUP トランザクション処理が終了すると、USBFS は SACK 割り込みまたは SIGN 割り込みのいずれかを発生させ、SUREQ ビットを 0 にクリアします。また、ソフトウェアで SUREQCLR ビットを 1 にした場合も、USBFS は SUREQ ビットを 0 にクリアします。

SUREQ ビットを 1 にする前に、DCPMAXP.DEVSEL[3:0] ビット、USBREQ レジスタ、USBVAL レジスタ、USBINDX レジスタ、および USBLENG レジスタを正しく設定し、SETUP トランザクションで対象の USB リクエストを送信してください。また、DCP の PID[1:0] ビットが NAK に設定されていることを確認してください。SUREQ ビットを 1 にした後、SETUP トランザクションが終了するまで（SUREQ ビット＝1）の期間は、DCPMAXP.DEVSEL[3:0] ビット、USBREQ レジスタ、USBVAL レジスタ、USBINDX レジスタ、および USBLENG レジスタの値を変更しないでください。SETUP トークンを送出する場合にのみ、SUREQ ビットに 1 を書いてください。それ以外では、0 を書いてください。

デバイスコントローラモードでは、常に本ビットには 0 を書いてください。

BSTS ビット（バッファステータス）

DCP FIFO バッファアクセスのステータスを示します。本ビットの意味は、以下のように、CFIFOSEL.ISEL ビットの設定値で異なります。

- ISEL ビット = 0 の場合、バッファから受信データの読み出しが可能かどうかを示す
- ISEL ビット = 1 の場合、バッファへの送信データの書き込みが可能かどうかを示す

28.2.26　パイプウィンドウ選択レジスタ（PIPESEL）

アドレス　USBFS.PIPESEL 4009 0064h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	PIPESEL[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	PIPESEL[3:0]	パイプウィンドウ選択	b3 b0 0 0 0 0：パイプ選択なし 0 0 0 1：パイプ1 0 0 1 0：パイプ2 0 0 1 1：パイプ3 0 1 0 0：パイプ4 0 1 0 1：パイプ5 0 1 1 0：パイプ6 0 1 1 1：パイプ7 1 0 0 0：パイプ8 1 0 0 1：パイプ9 上記以外は設定しないでください。	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

パイプ 1 ～ 9 の設定は、PIPESEL、PIPECFG、PIPEMAXP、PIPEPERI、PIPEnCTR、PIPEnTRE、および PIPEnTRN レジスタ（n = 0 ～ 9）で行います。

PIPESEL レジスタでパイプを選択した後、対応する PIPECFG、PIPEMAXP、および PIPEPERI でパイプ機能設定してください。PIPEnCTR、PIPEnTRE、および PIPEnTRN レジスタは、PIPESEL レジスタによるパイプ選択とは無関係に設定可能です。

PIPESEL[3:0] ビット（パイプウィンドウ選択）

データの読み出し／書き込みに使用するための PIPECFG、PIPEMAXP、および PIPEPERI レジスタに対応させるパイプ番号を選択します。PIPESEL[3:0] ビットでパイプ番号を選択することにより、その番号に対応した PIPECFG、PIPEMAXP、および PIPEPERI レジスタの読み出し／書き込みが可能になります。

PIPESEL[3:0] ビット = 0000b の場合は、PIPECFG、PIPEMAXP、および PIPEPERI レジスタのすべてのビットから 0 が読み出されます。書き込みは無効です。

28.2.27　パイプコンフィグレーションレジスタ（PIPECFG）

アドレス　USBFS.PIPECFG 4009 0068h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TYPE[1:0]		—	—	—	BFRE	DBLB	—	SHTNAK	—	—	DIR	EPNUM[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	EPNUM[3:0]	エンドポイント番号（注1）	選択パイプのエンドポイント番号を指定します。 0000bの設定は、未使用パイプを意味します。	R/W
b4	DIR	転送方向（注2）（注3）	0：受信方向 1：送信方向	R/W
b6-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	SHTNAK	転送終了時のパイプ禁止（注1）	0：転送終了後、パイプ動作を継続 1：転送終了後、パイプ動作を禁止	R/W
b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b9	DBLB	ダブルバッファモード（注2）（注3）	0：シングルバッファ 1：ダブルバッファ	R/W
b10	BFRE	BRDY割り込み動作指定（注2）（注3）	0：データ送受信時のBRDY割り込み 1：データ読み出し完了時のBRDY割り込み	R/W
b13-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b14	TYPE[1:0]	転送タイプ（注1）	• パイプ1および2 b15 b14 0 0：パイプ不使用 0 1：バルク転送 1 0：設定禁止 1 1：アイソクロナス転送 • パイプ3～5 b15 b14 0 0：パイプ不使用 0 1：バルク転送 1 0：設定禁止 1 1：設定禁止 • パイプ6～9 b15 b14 0 0：パイプ不使用 0 1：設定禁止 1 0：インタラプト転送 1 1：設定禁止	R/W

注 1.　TYPE[1:0]、SHTNAK、および EPNUM[3:0] ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PIPEnCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

注 2.　BFRE、DBLB、および DIR ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットでパイプを選択する前に行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PIPEnCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

注 3.　選択パイプを使用した USB 通信が終了した後、BFRE、DBLB、および DIR ビットを変更する場合は、注 2 の制限事項に加えて、ソフトウェアで PIPEnCTR.ACLRM ビットに 1 と 0 を連続して書き込み、選択パイプに割り当てられた FIFO バッファをクリアしてください。

PIPECFG レジスタは、パイプ 1 ～ 9 に対して、転送タイプ、FIFO バッファのアクセス方向、およびエンドポイント番号を指定するレジスタです。また、シングルまたはダブルバッファモードの選択と、転送終了時にパイプ動作を継続するか禁止するかの選択を行います。

EPNUM[3:0] ビット（エンドポイント番号）

選択パイプのエンドポイント番号を指定します。0000b の設定は、未使用パイプを意味します。

DIR ビットと EPNUM[3:0] ビットの設定値の組み合わせが、他のパイプと重複しないように設定してください。すべてのパイプに対して、EPNUM[3:0] ビットを 0000b にすることは可能です。

DIR ビット（転送方向）

選択パイプの転送方向を指定します。

ソフトウェアで DIR ビットを 0 にすると、USBFS は選択パイプを受信方向で使用します。ソフトウェアで DIR ビットを 1 にすると、USBFS は選択パイプを送信方向で使用します。

SHTNAK ビット（転送終了時のパイプ禁止）

選択パイプの転送方向が受信の場合、転送終了時に PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 00b（NAK）に変更するかどうかを指定します。本ビットは、受信方向のパイプ 1 ～ 5 に対して有効です。

受信方向のパイプに対して、ソフトウェアで本ビットを 1 にすると、USBFS は、転送終了と判定したときに、対応する PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 00b（NAK）に変更します。USBFS は、以下の場合に転送終了と判定します。

- ショートパケット（Zero-Length パケットを含む）を正常に受信したとき
- トランザクションカウンタを使用し、トランザクションカウンタに指定した数のパケットを正常に受信したとき

DBLB ビット（ダブルバッファモード）

選択パイプが使用する FIFO バッファに対して、シングルまたはダブルバッファモードのいずれか一方を選択します。本ビットはパイプ 1 ～ 5 に対して有効です。

BFRE ビット（BRDY 割り込み動作指定）

選択パイプに対して、USBFS から CPU への BRDY 割り込みの発行タイミングを指定します。

ソフトウェアで BFRE ビットを 1 にした場合、選択パイプが受信方向であると、USBFS は転送終了を検出して、パケットの読み出し時に BRDY 割り込みを発生させます。

この設定で BRDY 割り込みが発生した場合、ソフトウェアでポートコントロールレジスタの BCLR ビットに 1 を書く必要があります。BCLR ビットに 1 を書くまで、選択パイプに割り当てられた FIFO バッファは受信可能な状態になりません。

ソフトウェアで BFRE ビットを 1 にしても、選択パイプが送信方向であると、USBFS は BRDY 割り込みを発生させません。詳細は、28.3.3.1　BRDY 割り込みを参照してください。

TYPE[1:0] ビット（転送タイプ）

PIPESEL.PIPESEL[3:0] ビットで選択したパイプに対して、転送タイプを指定します。PID を BUF に設定して選択パイプで USB 通信を開始する前に、TYPE[1:0] ビットを 00b 以外の値にしてください。

28.2.28　パイプマックスパケットサイズレジスタ（PIPEMAXP）

アドレス　USBFS.PIPEMAXP 4009 006Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DEVSEL[3:0]				—	—	—	MXPS[8:0]								
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0/1（注1）	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b8-b0	MXPS[8:0]	最大パケットサイズ（注2）	• パイプ1, 2： 1バイト（001h）～256バイト（100h） • パイプ3～5： 8バイト（008h）、16バイト（010h） 32バイト（020h）、64バイト（040h） （[8:7]ビットおよび[2:0]ビットはサポートされていません） • パイプ6～9： 1バイト（001h）～64バイト（040h） （[8:7]ビットはサポートされていません）	R/W
b11-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15-b12	DEVSEL[3:0]	デバイス選択（注3）	b3 b0 0 0 0 0：アドレス0000 0 0 0 1：アドレス0001 0 0 1 0：アドレス0010 0 0 1 1：アドレス0011 0 1 0 0：アドレス0100 0 1 0 1：アドレス0101 上記以外は設定しないでください。	R/W

注 1.　MXPS[8:0] ビットの値は、PIPESEL.PIPESEL[3:0] ビットでパイプを選択していないときは 000h、選択しているときは 040h です。

注 2.　MXPS[8:0] ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットでパイプを選択する前に行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PIPEnCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

注 3.　DEVSEL[3:0] ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PIPEnCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

PIPEMAXP レジスタは、パイプ 1 ～ 9 に対して、最大パケットサイズを指定するレジスタです。

MXPS[8:0] ビット（最大パケットサイズ）

選択パイプの最大データペイロード（最大パケットサイズ）を指定します。

これらのビットは、転送タイプごとに USB2.0 規格に従って適切な値を設定してください。MXPS[8:0] ビット＝0 のときは、FIFO バッファへの書き込みも、PID を BUF にする設定も行わないでください。これらの書き込みは無効です。

DEVSEL[3:0] ビット（デバイス選択）

ホストコントローラモード時、USB 通信の対象デバイスのアドレスを指定します。最初に、関連の DEVADDn（n＝0 ～ 5）レジスタでデバイスアドレスを設定し、次に、これらのビットを対応する値に設定してください。たとえば、DEVSEL[3:0] ビットを 0010b にする場合は、最初に DEVADD2 レジスタにそのアドレスを設定します。

デバイスコントローラモードでは、これらのビットを 0000b にしてください。

28.2.29　パイプ周期コントロールレジスタ（PIPEPERI）

アドレス　USBFS.PIPEPERI 4009 006Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	IFIS	—	—	—	—	—	—	—	—	—	IITV[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	IITV[2:0]（注1）	インターバルエラー検出間隔	選択パイプのインターバルエラー検出タイミングを、フレームタイミングの2のn乗で指定してください。	R/W
b11-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b12	IFIS	アイソクロナスINバッファフラッシュ	0：バッファフラッシュしない 1：バッファフラッシュする	R/W
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　IITV[2:0] ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

PIPEPERI レジスタは、アイソクロナス IN 転送時にインターバルエラーが発生した場合、バッファフラッシュ機能を動作させるか否かの選択、およびパイプ 1 ～ 9 に対してインターバルエラーの検出間隔の設定をするレジスタです。

IITV[2:0] ビット（インターバルエラー検出間隔）

IITV[2:0] ビットを設定し、USB 通信を行った後で IITV[2:0] ビットを別の値に変更する場合は、PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 00b（NAK）にした後、PIPEnCTR.ACLRM ビットを 1 にして、インターバルタイマを初期化してください。

パイプ 3 ～ 5 に対しては、IITV[2:0] ビットは存在しません。パイプ 3 ～ 5 に対応する IITV[2:0] ビット位置には、000b を書いてください。

IFIS ビット（アイソクロナス IN バッファフラッシュ）

PIPESEL.PIPESEL[3:0] ビットで選択したパイプがアイソクロナス IN 転送で使用される場合に、バッファフラッシュの有無を指定します。

デバイスコントローラモードでは、選択パイプの転送タイプがアイソクロナス IN 転送の場合、IITV[2:0] ビットに設定したインターバルごとのフレーム中に、USBFS が USB ホストから IN トークンを受信できないと、USBFS は自動的に FIFO バッファをクリアします。

ダブルバッファ（PIPECFG.DBLB ビット = 1）が設定されている場合、USBFS は前回使用した 1 面分のデータのみをクリアします。

USBFS は、IN トークンの受信が期待されているフレーム直後の SOF パケット受信時に、FIFO バッファをクリアします。SOF パケットが破損している場合でも、内部補完機能によって、SOF パケットを受信する予定のタイミングで FIFO バッファをクリアします。

ホストコントローラー機能が選択されている場合、このビットを 0 にしてください。選択パイプがアイソクロナス転送に使用されない場合は、このビットを 0 にしてください。

28.2.30　パイプnコントロールレジスタ（PIPEnCTR）(n = 1 ～ 9)

PIPEnCTR (n = 1 ～ 5)

アドレス　USBFS.PIPE1CTR 4009 0070h, USBFS.PIPE2CTR 4009 0072h, USBFS.PIPE3CTR 4009 0074h, USBFS.PIPE4CTR 4009 0076h, USBFS.PIPE5CTR 4009 0078h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BSTS	INBUFM	—	—	—	ATREPM	ACLRM	SQCLR	SQSET	SQMON	PBUSY	—	—	—	PID[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	PID[1:0]	応答PID	b1 b0 0 0：NAK応答 0 1：BUF応答（バッファ状態に従う） 1 0：STALL応答 1 1：STALL応答	R/W
b4-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	PBUSY	パイプビジー	0：パイプnはトランザクションで未使用 1：パイプnはトランザクションで使用中	R
b6	SQMON	シーケンストグルビット確認	0：DATA0 1：DATA1	R
b7	SQSET	シーケンストグルビットセット（注2）	パイプnにシーケンストグルビットを設定します。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：次回トランザクションの期待値をDATA1に設定 読むと0が読めます。	R/W（注1）
b8	SQCLR	シーケンストグルビットクリア（注2）	パイプnのシーケンストグルビットをクリアします。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：次回トランザクションの期待値をDATA0にクリア 読むと0が読めます。	R/W（注1）
b9	ACLRM	自動バッファクリアモード（注3）	0：禁止 1：許可（全バッファ初期化）	R/W
b10	ATREPM	自動応答モード（注2）	0：自動応答を禁止 1：自動応答を許可	R/W
b13-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14	INBUFM	送信バッファモニタ	0：FIFOバッファに送信可能データなし 1：FIFOバッファに送信可能データあり	R
b15	BSTS	バッファステータス	0：CPUからのバッファアクセス不可 1：CPUからのバッファアクセス可能	R

注 1.　読むと 0 が読み出されます。

注 2.　ATREPM ビットの設定と、SQCLR ビットまたは SQSET ビットへの 1 書き込みは、必ず PID が NAK であるときに行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

注 3.　ACLRM ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットでパイプを選択する前に行ってください。本ビットを設定するときは、事前に PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

PIPEnCTR レジスタは、PIPESEL レジスタで選択したどのパイプに対しても設定可能です。

PID[1:0] ビット（応答 PID）

選択パイプの次回トランザクションにおける応答の種類を指定します。

PID[1:0] ビットの初期値は NAK です。当該パイプで USBFS 転送を行う場合には PID[1:0] ビットの設定を BUF に変更してください。PID[1:0] ビットの設定値に基づく USBFS の基本動作（通信パケットにエラーがない場合）を、表 28.7 と表 28.8 に示します。

選択パイプの USBFS 通信中に、ソフトウェアで PID[1:0] ビット設定を BUF から NAK に変更したときは、そのパイプの USBFS 転送が実際に NAK 状態に遷移したかどうかを判定するため、PBUSY ビットが 1 であることを確認してください。USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

以下の場合に、USBFS が PIPEnCTR.PID[1:0] ビットの設定値を変更します。

- 選択パイプが受信方向で、かつソフトウェアで選択パイプの PIPECFG.SHTNAK ビットを 1 にしている場合、USBFS は転送終了を認識したときに PID を NAK に設定する
- 選択パイプの最大パケットサイズを超えるペイロードのデータパケットを受信したとき、USBFS は PID を STALL（11b）に設定する
- デバイスコントローラモード時に、USB バスリセットを検出したとき、USBFS は PID を NAK に設定する
- ホストコントローラモード時に、CRC エラーなどの受信エラーを 3 回連続で検出したとき、USBFS は PID を NAK に設定する
- ホストコントローラモード時に、STALL ハンドシェイクを受信したとき、USBFS は PID を STALL（11b）に設定する

応答種類を指定するには、PID[1:0] ビットを以下のように設定してください。

- NAK（00b）から STALL へ遷移させるには、10b を設定
- BUF（01b）から STALL へ遷移させるには、11b を設定
- STALL（11b）から NAK へ遷移させるには、10b を設定してから 00b を設定
- STALL から BUF へ遷移させるには、NAK から BUF への遷移を設定

表 28.7　ホストコントローラモード時の PID[1:0] ビット設定値に基づく USBFS の動作

PID[1:0] ビット値	転送タイプ	転送方向（DIR ビット）	USBFS の動作
00b（NAK）	設定値に依存しない	設定値に依存しない	トークンを発行しない。
01b（BUF）	バルクまたはインタラプト	設定値に依存しない	DVSTCTR0.UACT ビットが 1 であり、かつ選択パイプに対応する FIFO バッファが送受信可能な状態にあるとき、トークンを発行する。 DVSTCTR0.UACT ビットが 0 であるか、または選択パイプに対応する FIFO バッファが送受信可能な状態にないとき、トークンを発行しない。
	アイソクロナス	設定値に依存しない	選択パイプに対応する FIFO バッファの状態にかかわらず、トークンを発行する。
10b（STALL）または 11b（STALL）	設定値に依存しない	設定値に依存しない	トークンを発行しない。

表 28.8　デバイスコントローラモード時のPID[1:0]ビット設定値に基づくUSBFSの動作

PID[1:0]ビット値	転送タイプ	転送方向（DIRビット）	USBFSの動作
00b（NAK）	バルクまたはインタラプト	設定値に依存しない	USBホストからのトークンに対してNAK応答を行う。
	アイソクロナス	設定値に依存しない	USBホストからのトークンに対して何も応答しない。
01b（BUF）	バルク	受信方向（DIRビット = 0）	USBホストからのOUTトークンに対して、選択パイプに対応するFIFOバッファが受信可能な状態であればデータを受信し、ACK応答を行う。
	インタラプト	受信方向（DIRビット = 0）	USBホストからのOUTトークンに対して、選択パイプに対応するFIFOバッファが受信可能な状態であればデータを受信し、ACK応答を行う。
	バルクまたはインタラプト	送信方向（DIRビット = 1）	USBホストからのトークンに対して、選択パイプに対応するFIFOバッファが送信可能な状態であればデータを送信する。送信可能でなければNAK応答を行う。
	アイソクロナス	受信方向（DIRビット = 0）	USBホストからのOUTトークンに対して、選択パイプに対応するFIFOバッファが受信可能な状態であればデータを受信する。受信可能でなければデータを破棄する。
	アイソクロナス	送信方向（DIRビット = 1）	USBホストからのトークンに対して、対応するFIFOバッファが送信可能な状態であればデータを送信する。送信可能でなければ、Zero-Lengthパケットを送信する。
10b（STALL）または11b（STALL）	バルクまたはインタラプト	設定値に依存しない	USBホストからのトークンに対してSTALL応答を行う。
	アイソクロナス	設定値に依存しない	USBホストからのトークンに対して何も応答しない。

PBUSY ビット（パイプビジー）

選択パイプが現在トランザクションで使用中かどうかを示します。

USBFS は、選択パイプに対する USBFS トランザクションの開始時に、PBUSY ビットを 0 から 1 に変更します。1 回のトランザクションが終了すると、PBUSY ビットを 1 から 0 に変更します。

PID を NAK に設定した後、ソフトウェアで PBUSY ビットを読み出すことにより、パイプ設定の変更が可能かどうかを確認できます。詳細は、28.3.4.1　パイプコントロールレジスタの切り替え手順を参照してください。

SQMON ビット（シーケンストグルビット確認）

選択パイプの次回トランザクションにおけるシーケンストグルビットの期待値を示します。

選択パイプの転送タイプがアイソクロナス転送ではない場合、USBFS は、トランザクションの正常完了時に SQMON ビットをトグルします。ただし、受信方向での転送時に DATA-PID 不一致が発生すると、USBFS は SQMON フラグをトグルしません。

SQSET ビット（シーケンストグルビットセット）

ソフトウェアで SQSET ビットを 1 にすると、USBFS は選択パイプの次回トランザクションにおけるシーケンストグルビットの期待値として DATA1 を設定します。USBFS は、SQSET ビットを 0 にクリアします。

SQCLR ビット（シーケンストグルビットクリア）

ソフトウェアで SQCLR ビットを 1 にすると、USBFS は選択パイプの次回トランザクションにおけるシーケンストグルビットの期待値を DATA0 にクリアします。USBFS は、SQCLR ビットを 0 にクリアします。

ACLRM ビット（自動バッファクリアモード）

選択パイプの自動バッファクリアモードを許可または禁止します。選択パイプに割り当てられた FIFO バッファ内のデータを完全にクリアするには、ACLRM ビットに 1 を書いた後、引き続き 0 を書いてください。

表 28.9 に、ACLRM ビットに 1 と 0 を連続して書くことでクリアされるデータと、この処理が必要となる状況を示します。

表 28.9　ACLRM = 1設定時にUSBFSがクリアするデータ

番号	ACLRMビット設定によってクリアされるデータ	データのクリアが必要となる状況
1	選択パイプに割り当てられたFIFOバッファ内の全データ（ダブルバッファモードでは2つのFIFOバッファ）	選択パイプを初期化する場合
2	選択パイプの転送タイプがアイソクロナス転送のときは、インターバルカウント値	インターバルカウント値をリセットする場合
3	PIPECFG.BFREビットに関する内部フラグ	PIPECFG.BFREビットの設定値を変更する場合
4	FIFOバッファトグル制御	PIPECFG.DBLBビットの設定値を変更する場合
5	トランザクションカウントに関する内部フラグ	トランザクションカウント機能を強制終了する場合

ATREPM ビット（自動応答モード）

選択パイプの自動応答モードを許可または禁止します。

デバイスコントローラモードで、選択パイプの転送タイプがバルク転送の場合に、ATREPM ビットを 1 にすることが可能です。ATREPM ビットを 1 にした場合、USB ホストからのトークンに対し USBFS は以下のように応答します。

- 選択パイプがバルク IN 転送（PIPECFG.TYPE[1:0] = 01b かつ PIPECFG.DIR = 1）に設定されている場合：
  a. ATREPMビット = 1かつPID = BUFの場合、INトークンに対してUSBFSはZero-Lengthパケットを送信します
  b. USBホストからACKを受信するたびに、USBFSはシーケンストグルビット（DATA-PID）を更新（トグルを許可に）します。1回のトランザクションでは、INトークン受信→Zero-Lengthパケット送信→ACK受信の順に発生します。USBFSは、BRDY割り込みもBEMP割り込みも発生させません
- 選択パイプがバルク OUT 転送（PIPECFG.TYPE[1:0] = 01b かつ PIPECFG.DIR = 0）に設定されている場合：

  ATREPM ビット = 1 かつ PID = BUF の場合、OUT トークンに対して USBFS は NAK 応答を行い、NRDY 割り込みを発生させます

自動応答モードで USB 通信を行う場合、FIFO バッファが空の状態で ATREPM ビットを 1 にしてください。自動応答モードでの USB 通信中は、FIFO バッファに書き込みを行わないでください。選択パイプの転送タイプがアイソクロナス転送の場合は、常に本ビットを 0 にしてください。

ホストコントローラモードでは、常に ATREPM ビットを 0 にしてください。

INBUFM ビット（送信バッファモニタ）

選択パイプが送信方向の場合に、そのパイプの FIFO バッファステータスを示します。

選択パイプが送信方向（PIPECFG.DIR = 1）の場合、CPU または DMAC/DTC が FIFO バッファに少なくとも 1 面分のデータの書き込みを完了すると、USBFS は本ビットを 1 にします。

書き込みが完了している面の FIFO バッファ上のデータを、USBFS がすべて送信完了したときに、USBFS は本ビットを 0 にします。ダブルバッファモード（PIPECFG.DBLB = 1）では、CPU または DMAC/DTC が FIFO バッファの 1 面分のデータ書き込みを完了する前に、USBFS が FIFO バッファの 2 面分のデータ送信を完了すると、USBFS は INBUFM ビットを 0 にします。

選択パイプが受信方向（PIPECFG.DIR = 0）の場合は、INBUFM ビットは BSTS ビットと同じ値を示します。

BSTS ビット（バッファステータス）

選択パイプの FIFO バッファステータスを示します。

BSTS ビットの意味は、表 28.10 に示すように、PIPECFG.DIR ビット、PIPECFG.BFRE ビット、および DnFIFOSEL.DCLRM ビットの設定値で異なります。

表 28.10　BSTSビットの動作

DIRビット値	BFREビット値	DCLRMビット値	BSTSビットの機能
0	0	0	FIFOバッファからの受信データの読み出しが可能な場合は1に、データ読み出し完了時には0になります。
		1	設定禁止
	1	0	FIFOバッファからの受信データの読み出しが可能な場合は1に、データ読み出し完了後にソフトウェアがポートコントロールレジスタのBCLRビットを1にすると0になります。
		1	FIFOバッファからの受信データの読み出しが可能な場合は1に、データ読み出し完了時には0になります。
1	0	0	FIFOバッファへの送信データの書き込みが可能な場合は1に、データ書き込み完了時には0になります。
		1	設定禁止
	1	0	設定禁止
		1	設定禁止

PIPEnCTR (n = 6 ～ 9)

アドレス　USBFS.PIPE6CTR 4009 007Ah, USBFS.PIPE7CTR 4009 007Ch, USBFS.PIPE8CTR 4009 007Eh, USBFS.PIPE9CTR 4009 0080h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BSTS	—	—	—	—	—	ACLRM	SQCLR	SQSET	SQMON	PBUSY	—	—	—	PID[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	PID[1:0]	応答PID	b1　b0 0　0：NAK応答 0　1：BUF応答（バッファ状態に従う） 1　0：STALL応答 1　1：STALL応答	R/W
b4-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	PBUSY	パイプビジー	0：パイプnはトランザクションで未使用 1：パイプnはトランザクションで使用中	R
b6	SQMON	シーケンストグルビット確認	0：DATA0 1：DATA1	R
b7	SQSET	シーケンストグルビットセット（注2）	パイプnにシーケンストグルビットを設定します。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：次回トランザクションの期待値をDATA1に設定 読むと0が読めます。	R/W （注1）
b8	SQCLR	シーケンストグルビットクリア（注2）	パイプnのシーケンストグルビットをクリアします。 0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：次回トランザクションの期待値をDATA0にクリア 読むと0が読めます。	R/W （注1）
b9	ACLRM	自動バッファクリアモード（注2）（注3）	0：禁止 1：許可（全バッファ初期化）	R/W
b14-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15	BSTS	バッファステータス	0：バッファアクセス不可 1：バッファアクセス可能	R

注 1.　読むと 0 が読み出されます。1 のみ書けます。

注 2.　SQCLR または SQSET ビットへの 1 書き込みは、必ず PID が NAK であるときに行ってください。これらのビットを設定するときは、事前に PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

注 3.　ACLRM ビットの設定は、必ず PID が NAK であるときに、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットでパイプを選択する前に行ってください。本ビットを設定するときは、事前に PIPEnCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認した後、PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを 01b（BUF）から 00b（NAK）に変更してください。USBFS が PID[1:0] ビットを 00（NAK）に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

PID[1:0] ビット（応答 PID）

選択パイプの次回トランザクションにおける応答の種類を指定します。

PID[1:0] ビットの初期値は NAK です。当該パイプで USB 転送を行う場合には PID[1:0] ビットの設定を BUF に変更してください。PID[1:0] ビットの設定値に基づく USBFS の通信パケットにエラーがない場合の基本動作を、表 28.7 および表 28.7 に示します。

選択パイプの USB 通信中に、ソフトウェアで PID[1:0] ビット設定を BUF から NAK に変更したときは、そのパイプの USB 転送が実際に NAK 状態に遷移したかどうかを判定するため、PBUSY ビットが 1 であることを確認してください。USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

以下の場合に、USBFS が PIPEnCTR.PID[1:0] ビットの設定値を変更します。

- 選択パイプの最大パケットサイズを超えるペイロードのデータパケットを受信したとき、USBFS は PID を STALL（11b）に設定する
- デバイスコントローラモード時に USB バスリセットを検出した場合、USBFS は PID を NAK に設定する
- ホストコントローラモード時にCRCエラーなどの受信エラーを3回連続で検出した場合、USBFSはPIDをNAK に設定する
- ホストコントローラモード時に、STALL ハンドシェイクを受信した場合、USBFS は PID を STALL（11b）に設定する

応答の種類を指定するには、PID[1:0] ビットを以下のように設定してください。

- NAK（00b）から STALL へ遷移させるには、10b を設定
- BUF（01b）から STALL へ遷移させるには、11b を設定
- STALL（11b）から NAK へ遷移させるには、10b を設定してから 00b を設定
- STALL から BUF へ遷移させるには、00b（NAK）を設定してから 01b（BUF）を設定

PBUSY ビット（パイプビジー）

選択パイプが現在トランザクションで使用中かどうかを示します。

USBFS は、選択パイプに対する USBFS トランザクションの開始時に、PBUSY ビットを 0 から 1 に変更します。1 回のトランザクションが終了すると、PBUSY ビットを 1 から 0 に変更します。

PID を NAK に設定した後、ソフトウェアで PBUSY ビットを読み出すことにより、パイプ設定の変更が可能かどうかを確認できます。

SQMON ビット（シーケンストグルビット確認）

選択パイプの次回トランザクションにおけるシーケンストグルビットの期待値を示します。

トランザクションが正常終了すると、USBFS は SQMON ビットをトグルします。ただし、受信方向での転送時に DATA-PID 不一致が発生すると、USBFS は SQMON ビットをトグルしません。

SQSET ビット（シーケンストグルビットセット）

ソフトウェアで SQSET ビットを 1 にすると、USBFS は選択パイプの次回トランザクションにおけるシーケンストグルビットの期待値として DATA1 を設定します。USBFS は、SQSET ビットを 0 にします。

SQCLR ビット（シーケンストグルビットクリア）

ソフトウェアで SQCLR ビットを 1 にすると、USBFS は選択パイプの次回トランザクションにおけるシーケンストグルビットの期待値を DATA0 にクリアします。USBFS は、SQCLR ビットを 0 にします。

ACLRM ビット（自動バッファクリアモード）

選択パイプの自動バッファクリアモードを許可または禁止します。選択パイプに割り当てられた FIFO バッファ内のデータを完全にクリアするには、ACLRM ビットに 1 を書いた後、引き続き 0 を書いてください。

表 28.11 に、ACLRM ビットに 1 と 0 を連続して書くことでクリアされるデータと、この処理が必要となる状況を示します。

表 28.11　ACLRM = 1 設定時に USBFS がクリアするデータ

番号	ACLRM ビット設定によってクリアされるデータ	データのクリアが必要となる状況
1	選択パイプに割り当てられた FIFO バッファの全データ	選択パイプを初期化する場合
2	ホストコントローラ機能選択時、選択パイプの転送タイプがインタラプト転送の場合、インターバルカウント値	インターバルカウント値をリセットする場合
3	PIPECFG.BFRE ビットに関する内部フラグ	PIPECFG.BFRE ビットの設定値を変更する場合
4	トランザクションカウントに関する内部フラグ	トランザクションカウント機能を強制終了する場合

BSTS ビット（バッファステータス）

選択パイプの FIFO バッファステータスを示します。

BSTS ビットの意味は、表 28.10 に示すように、PIPECFG.DIR ビット、PIPECFG.BFRE ビット、および DnFIFOSEL.DCLRM ビットの設定値で異なります。

28.2.31　パイプnトランザクションカウンタイネーブルレジスタ（PIPEnTRE）(n = 1～5)

アドレス　USBFS.PIPE1TRE 4009 0090h, USBFS.PIPE2TRE 4009 0094h, USBFS.PIPE3TRE 4009 0098h, USBFS.PIPE4TRE 4009 009Ch, USBFS.PIPE5TRE 4009 00A0h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	TRENB	TRCLR	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	TRCLR	トランザクションカウンタクリア	0：無効（0を書いても何も影響なし） 1：カレントカウンタ値をクリア	R/W
b9	TRENB	トランザクションカウンタ有効	0：トランザクションカウンタは無効 1：トランザクションカウンタは有効	R/W
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注．　PIPEnTRE レジスタの各ビットの設定は、PID が NAK であるときに行ってください。これらのビットを設定する前に、PIPEnCTR.PBUSY ビットが 0 であることを確認してください。その後、選択パイプの PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを BUF から NAK へ変更してください。もし USBFS が PID[1:0] ビットを NAK に変更した場合は、ソフトウェアによる PBUSY ビットの確認は不要です。

TRCLR ビット（トランザクションカウンタクリア）

TRCLR ビットが 1 の場合、USBFS は選択パイプに対応するトランザクションカウンタの現在の値をクリアし、その後、TRCLR ビットを 0 にします。

TRENB ビット（トランザクションカウンタ有効）

トランザクションカウンタを有効または無効にします。

受信パイプに対して、ソフトウェアで PIPEnTRN.TRNCNT[15:0] ビットに総受信パケット数を設定した後、TRENB ビットを 1 にすると、USBFS は TRNCNT[15:0] ビットの設定値と同数のパケットを受信し終えた時点で、以下のようにハードウェアを制御します。

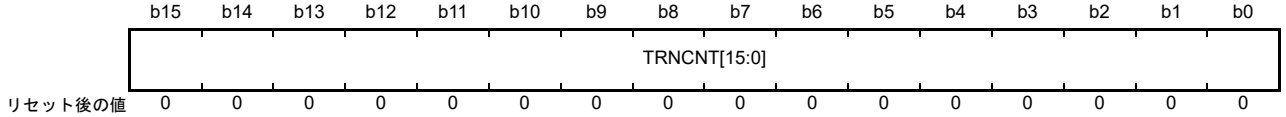
- PIPECFG.SHTNAK ビットが 1 のとき、TRNCNT[15:0] ビットの設定値と同数のパケットを受信し終えた時点で、USBFS は対応するパイプの PIPEnCTR.PID[1:0] ビットを NAK に変更
- PIPECFG.BFRE ビットが 1 のとき、TRNCNT[15:0] ビットの設定値と同数のパケットを受信し、その最後の受信データを読み出し終えた時点で、USBFS は BRDY 割り込みをアサート

送信パイプに対しては、TRENB ビットを 0 にしてください。

トランザクションカウンタを使用しない場合は、本ビットを 0 にしてください。トランザクションカウンタを使用する場合は、TRNCNT[15:0] ビットを設定してから、本ビットを 1 にしてください。トランザクションカウンタのカウント対象となる最初のパケットを受信する前に、本ビットを 1 にしてください。

28.2.32　パイプnトランザクションカウンタレジスタ（PIPEnTRN）(n = 1 ～ 5)

アドレス　USBFS.PIPE1TRN 4009 0092h, USBFS.PIPE2TRN 4009 0096h, USBFS.PIPE3TRN 4009 009Ah, USBFS.PIPE4TRN 4009 009Eh, USBFS.PIPE5TRN 4009 00A2h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	TRNCNT[15:0]	トランザクションカウンタ	• 書き込み時： 選択したパイプで受信したパケットの合計数（トランザクション数）を指定します。 • 読み出し時： PIPEnTRE.TRENBが0の場合、指定されたトランザクション数を示します。 PIPEnTRE.TRENBが1の場合、現在カウントされたトランザクション数を示します。	R/W

PIPEnTRN レジスタは、USB バスリセット時も、現在の設定値を保持します。

TRNCNT[15:0] ビット（トランザクションカウンタ）

USBFS は、パケット受信時に下記の条件がすべて満たされたとき、TRNCNT[15:0] ビット値を 1 インクリメントします。

- PIPEnTRE.TRENB ビット = 1
- パケット受信時に「TRNCNT[15:0] 設定値≠現在のカウンタ値 + 1」です
- 受信したパケットのペイロードが PIPEMAXP.MXPS[8:0] ビットの設定値と一致した

USBFS は、下記の条件のいずれかが満たされたとき、TRNCNT[15:0] ビット値を 0 にします。

以下の条件がすべて満たされたとき：

- PIPEnTRE.TRENB ビット = 1
- パケット受信時に「TRNCNT[15:0] 設定値 = 現在のカウンタ値 + 1」です
- 受信したパケットのペイロードが PIPEMAXP.MXPS[8:0] ビットの設定値と一致した

以下の条件がどちらも満たされたとき：

- PIPEnTRE.TRENB ビット = 1
- USBFS がショートパケットを受信した

以下の条件がどちらも満たされたとき：

- PIPEnTRE.TRENB ビット = 1
- PIPEnTRE.TRCLR ビットがソフトウェアによって 1 にされた

送信パイプに対しては、TRNCNT[15:0] ビットを 0 にしてください。トランザクションカウンタを使用しない場合、TRNCNT[15:0] ビットを 0 にしてください。

転送するトランザクションの回数を TRNCNT[15:0] ビットに設定することは、PIPEnTRE.TRENB ビットが 0 の場合にのみ可能です。転送するトランザクションの回数を設定する場合は、PIPEnTRE.TRENB ビットを 1 にする前に、TRCLR ビットを 1 にして、現在のカウンタ値をクリアしてください。

28.2.33　デバイスアドレス n コンフィグレーションレジスタ（DEVADDn）(n = 0 ～ 5)

アドレス　USBFS.DEVADD0 4009 00D0h, USBFS.DEVADD1 4009 00D2h, USBFS.DEVADD2 4009 00D4h, USBFS.DEVADD3 4009 00D6h, USBFS.DEVADD4 4009 00D8h, USBFS.DEVADD5 4009 00DAh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	USBSPD[1:0]		—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7-b6	USBSPD[1:0]	通信対象デバイス転送速度	b7 b6 0 0 :DEVADDn レジスタを使用しない 0 1 :ロースピード 1 0 :フルスピード 1 1 :設定禁止	R/W
b15-b8	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DEVADDn レジスタは、パイプ 0 ～ 9 に対して、通信対象の周辺デバイスの転送速度を指定するレジスタです。

ホストコントローラモードでは、パイプへの通信を開始する前に、DEVADDn レジスタのビットをすべて設定してください。DEVADDn レジスタの各ビットを変更する場合は、有効なパイプがこれらのビット設定値を使用していないときに行ってください。有効なパイプとは、以下の両方の条件を満たしているパイプです。

- DEVADDn レジスタが、DEVSEL[3:0] ビットで選択されている
- 選択パイプの PID[1:0] ビットが BUF に設定されているか、または選択パイプが DCP であり DCPCTR.SUREQ ビットが 1 になっている

デバイスコントローラモードでは、このレジスタの全ビットを 0 にしてください。

USBSPD[1:0] ビット（通信対象デバイス転送速度）

対象の周辺デバイスの USB 転送速度を設定します。

ホストコントローラモードでは、USBFS は USBSPD[1:0] の設定値に基づいてパケットを生成します。デバイスコントローラモードでは、これらのビットを 00b にしてください。

28.2.34　USB モジュールコントロールレジスタ（USBMC）

アドレス　USBFS.USBMC 4009 00CCh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VDDUSBE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	VDDUSBE	USB基準電源回路ON/OFF制御	0：USB基準電源回路OFF 1：USB基準電源回路ON	R/W
b1	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b15-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

VDDUSBE ビット（USB 基準電源回路 ON/OFF 制御）

USB 基準電源回路はバッテリチャージ用の基準電圧を発生させます。バッテリチャージ機能の使用時は、本ビットを 1 にしてください。

28.2.35　BCコントロールレジスタ0（USBBCCTRL0）

アドレス　USBFS.USBBCCTRL0 4009 00B0h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	PDDETSTS0	CHGDETSTS0	BATCHGE0	—	VDMSRCE0	IDPSINKE0	VDPSRCE0	IDMSINKE0	IDPSRCE0	RPDME0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RPDME0	D-端子プルダウン制御	0：プルダウンOFF 1：プルダウンON	R/W
b1	IDPSRCE0	D+端子IDPSRC出力制御	0：停止 1：10μA出力	R/W
b2	IDMSINKE0	D-端子0.6V入力検出（コンパレータ＆シンク）制御	0：検出OFF 1：検出ON（コンパレータ＆シンク電流ON）	R/W
b3	VDPSRCE0	D+端子VDPSRC（0.6V）出力制御	0：停止 1：0.6V出力	R/W
b4	IDPSINKE0	D+端子0.6V入力検出（コンパレータ＆シンク）制御	0：検出OFF 1：検出ON（コンパレータ＆シンク電流ON）	R/W
b5	VDMSRCE0	D-端子VDMSRC（0.6V）出力制御	0：停止 1：0.6V出力	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	BATCHGE0	BC（バッテリチャージャ）機能汎用許可制御	0：禁止 1：許可	R/W
b8	CHGDETSTS0	D-端子0.6V入力検出ステータス（注1）	0：未検出 1：検出あり	R
b9	PDDETSTS0	D+端子0.6V入力検出ステータス（注2）	0：未検出 1：検出あり	R
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　IDMSINKE0 = 1 のときに有効
注 2.　IDPSINKE0 = 1 のときに有効

RPDME0 ビット（D- 端子プルダウン制御）

バッテリチャージ機能の使用時は、RPDME0 ビットを 1 にして D- 端子のプルダウン抵抗を制御してください。

IDPSRCE0 ビット（D+ 端子 IDPSRC 出力制御）

デバイスコントローラモードでは、IDPSRCE0 ビットを 1 にすると、データ接続端子が検出されたときに電流出力が許可され、D+ 端子がプルアップされます。

IDMSINKE0 ビット（D- 端子 0.6V 入力検出（コンパレータ & シンク）制御）

デバイスコントローラモードでは、IDMSINKE0 ビットを 1 にすると、USBFS は、一次検出時にホストから D- に出力される VDMSRC（0.6V）が接続されたか否か、または、ファンクションから D+ に出力される VDPSRC（0.6V）がホスト経由で D- のファンクションに接続されたか否かを検出します。

VDPSRCE0 ビット（D+ 端子 VDPSRC（0.6V）出力制御）

デバイスコントローラモードでは、VDPSRCE0 ビットを 1 にすると、一次検出時に出力が許可されて、D+ に VDPSRC（0.6V）が印加されます。

IDPSINKE0 ビット（D+ 端子 0.6V 入力検出（コンパレータ & シンク）制御）

デバイスコントローラモードでは、IDPSINKE0 ビットを 1 にすると、USBFS は、ファンクションから D- に出力される VDMSRC（0.6V）が、ホスト経由で D+（DCP）のファンクションに接続されたか否かを検出します。ホストコントローラモードでは、USBFS は、一次検出時にデバイスから D+ に出力される VDPSRC（0.6V）が接続されたか否かを検出します。

VDMSRCE0 ビット（D- 端子 VDMSRC（0.6V）出力制御）

デバイスコントローラモードでは、VDMSRCE0 ビットを 1 にすると、二次検出時に出力が許可されて、D- に VDMSRC（0.6V）が印加されます。ホストコントローラモードでは、一次検出時に出力が許可されて、D- に VDMSRC（0.6V）が印加されます。

CHGDETSTS0 フラグ（D- 端子 0.6V 入力検出ステータス）

ホストコントローラモードでは、一次検出中にホストから D- に出力される VDMSRC（0.6V）が接続されたか、または、ファンクションから D+ に出力される VDPSRC（0.6V）がホスト経由で D- のファンクションに接続されたかを USBFS が検出すると、CHGDETSTS0 フラグが 1 になります。

PDDETSTS0 フラグ（D+ 端子 0.6V 入力検出ステータス）

デバイスコントローラモードでは、二次検出中にファンクションから D- に出力される VDMSRC（0.6V）がホスト経由で D+（DCP）のファンクションに接続されたかを USBFS が検出すると、PDDETSTS0 フラグが 1 になります。

ホストコントローラモードでは、一次検出中にファンクションから D+ に出力される VDPSRC（0.6V）が接続されたかを USBFS が検出すると、本ビットが 1 になります。

28.3　動作説明

28.3.1　システム制御

本節では、USBFS の初期化および消費電力制御に必要なレジスタ設定について説明します。

28.3.1.1　USBFS 関連レジスタへのデータ設定

クロック供給を開始（SYSCFG.SCKE ビット = 1 に）した後、SYSCFG.USBE ビットを 1 にすると、USBFS の動作が許可されて、USBFS は動作を開始します。

28.3.1.2　コントローラ機能の選択

USBFS の動作は、ホストコントローラとデバイスコントローラの 2 種類の機能から選択できます。

どちらの機能にするかは、SYSCFG.DCFM ビットで選択できます。DCFM ビットを変更するときは、リセット直後の初期設定時、または D+ プルアップ禁止状態（SYSCFG.DPRPU ビット = 0）かつ D+/D- プルダウン禁止状態（SYSCFG.DRPD ビット = 0）のときに行ってください。

28.3.1.3　抵抗による USB データバス制御

USBFS は、D+/D- ライン用のプルアップ抵抗とプルダウン抵抗を内蔵しています。SYSCFG.DPRPU、SYSCFG.DMRPU、SYSCFG.DRPD の各ビットを設定して、これらのラインをプルアップまたはプルダウンしてください。

デバイスコントローラモードでは、USB ホストへの接続を確認した後で、SYSCFG.DPRPU ビットを 1 にし、D+ ライン（フルスピード通信時）をプルアップしてください。あるいは、SYSCFG.DMRPU ビットを 1 にし、D- ライン（ロースピード通信時）をプルアップしてください。

PC との通信中に SYSCFG.DPRPU ビット（フルスピード時）を 0 にするか、または SYSCFG.DMRPU ビット（ロースピード時）を 0 にすると、USBFS が USB データラインのプルアップ抵抗を無効にするので、USB ホストに対して切断を通知することが可能です。

ホストコントローラモードでは、SYSCFG.DRPD ビットを 1 にして、D+/D- ラインをプルダウンしてください。

表 28.12　USB データバス抵抗制御

SYSCFG レジスタの設定値			D-	D+	機能
DRPD ビット	DPRPU ビット	DMRPU ビット			
0	0	0	オープン	オープン	抵抗を使用しない場合
0	1	0	オープン	プルアップ	デバイスコントローラとしてフルスピードで動作させる場合
0	0	1	プルアップ	オープン	デバイスコントローラとしてロースピードで動作させる場合
1	0	0	プルダウン	プルダウン	ホストコントローラとして動作させる場合
上記以外の設定			—	—	設定禁止

28.3.1.4　USB 外部接続回路の例

データラインの 1 つがプルアップされると、ホストは USB デバイスを認識します。本 MCU では、このために内蔵プルアップ抵抗を切り替えることができます。また、本 MCU は USB-PHY に電源を内蔵しているため、バスパワードデバイスは外部レギュレータを必要としません。

図 28.2 に、USB 接続用外部回路の例を示します。

USBFS は、D+ ラインのプルアップ抵抗と、D+ および D- ラインのプルダウン抵抗を制御します。SYSCFG.DPRPU ビットと SYSCFG.DRPD ビットで、ラインのプルアップとプルダウンを選択してください。デバイスコントローラモードでは、USB ホストとの通信中に SYSCFG.DPRPU ビットを 0 にすると、USB データラインのプルアップ抵抗が無効になります。USBFS はこれを利用して、USB ホストに対してデバイスのデタッチを通知できます。

図 28.2 に、セルフパワード状態での USB コネクタのファンクション接続例を示します。

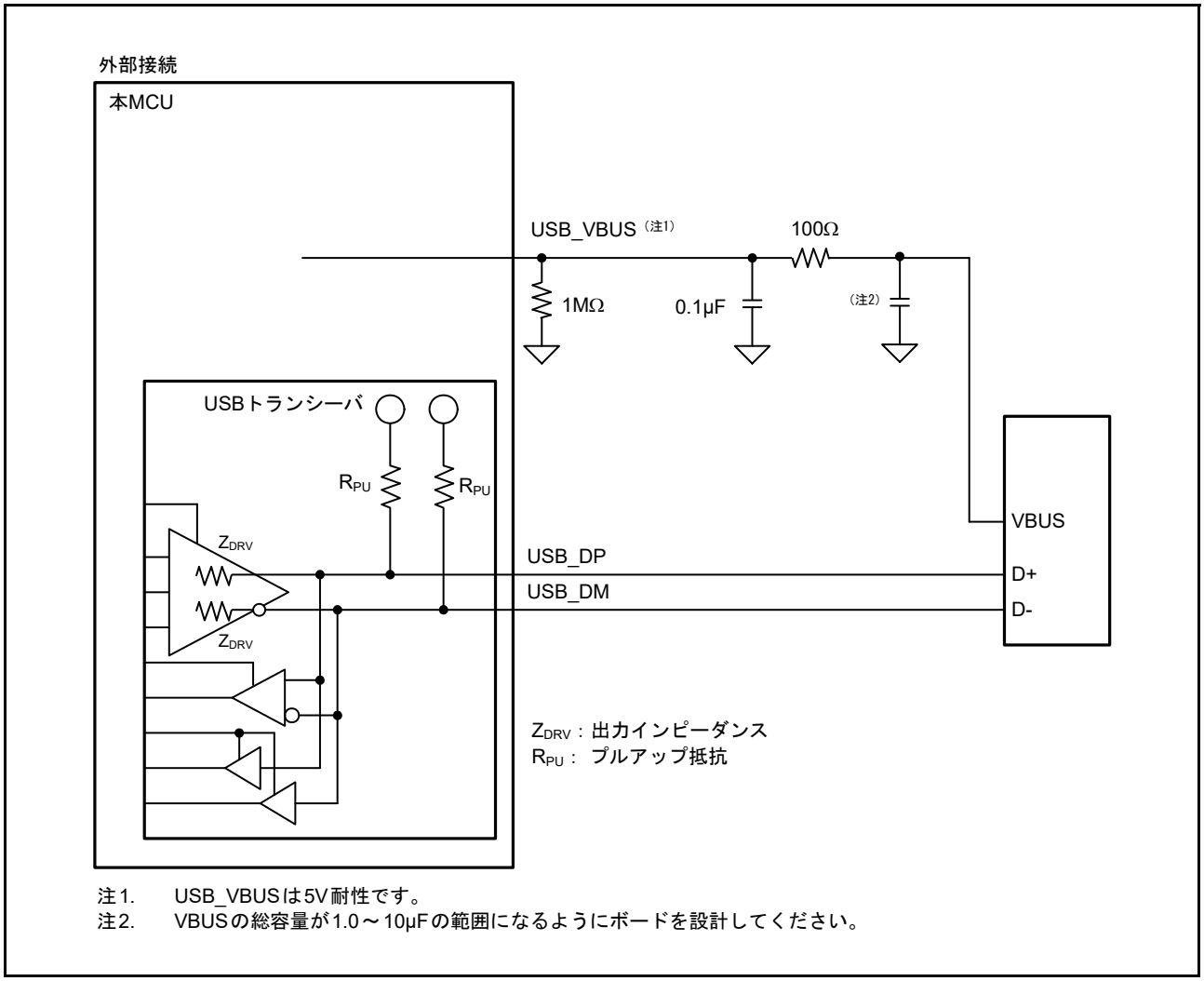


図 28.2　セルフパワード状態でのデバイス接続例

図 28.3 に、USB コネクタのホスト接続例を示します。

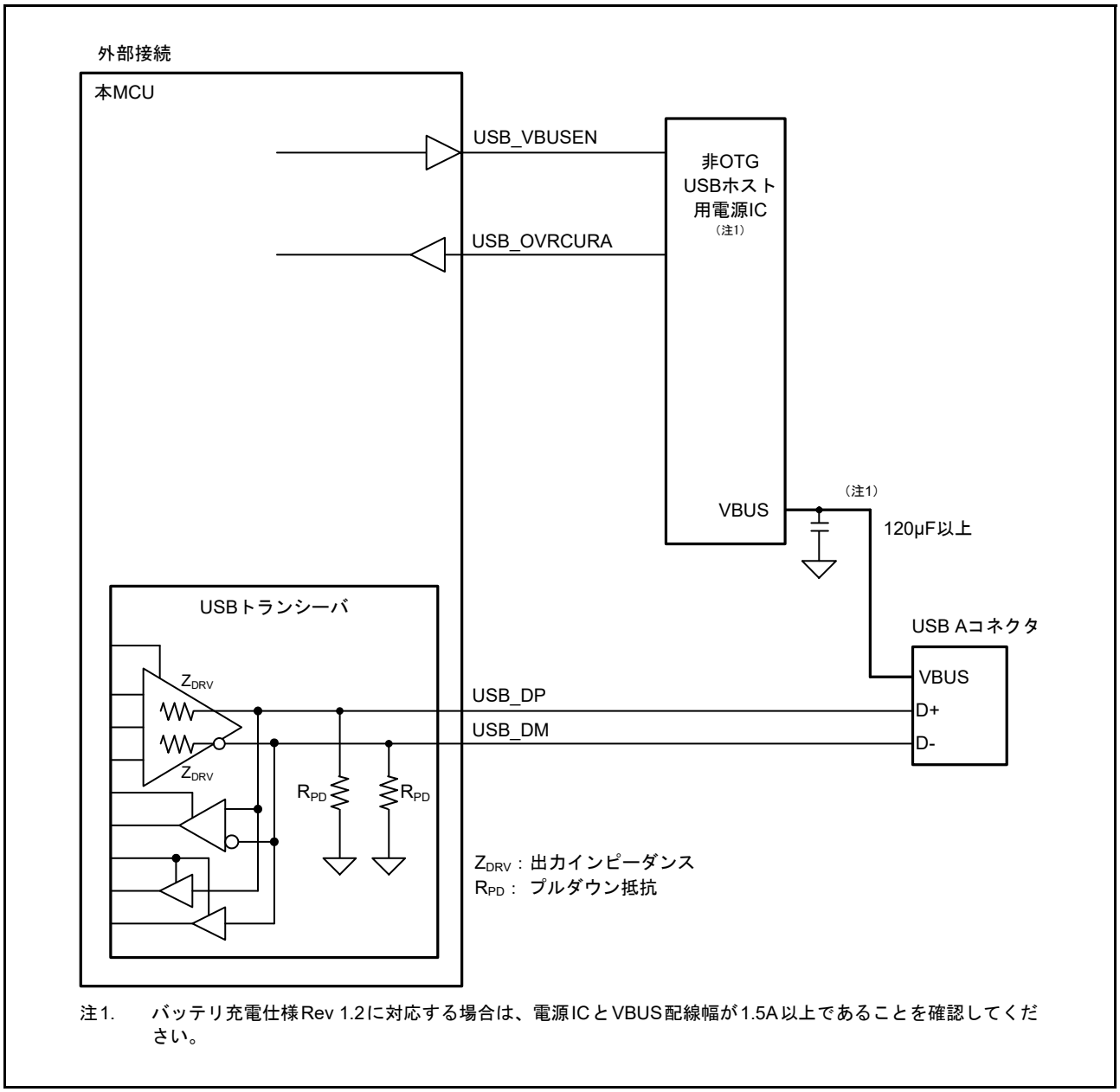


図 28.3　ホスト接続例

図 28.4 に、バスパワード状態での USB コネクタのファンクション接続例を示します。

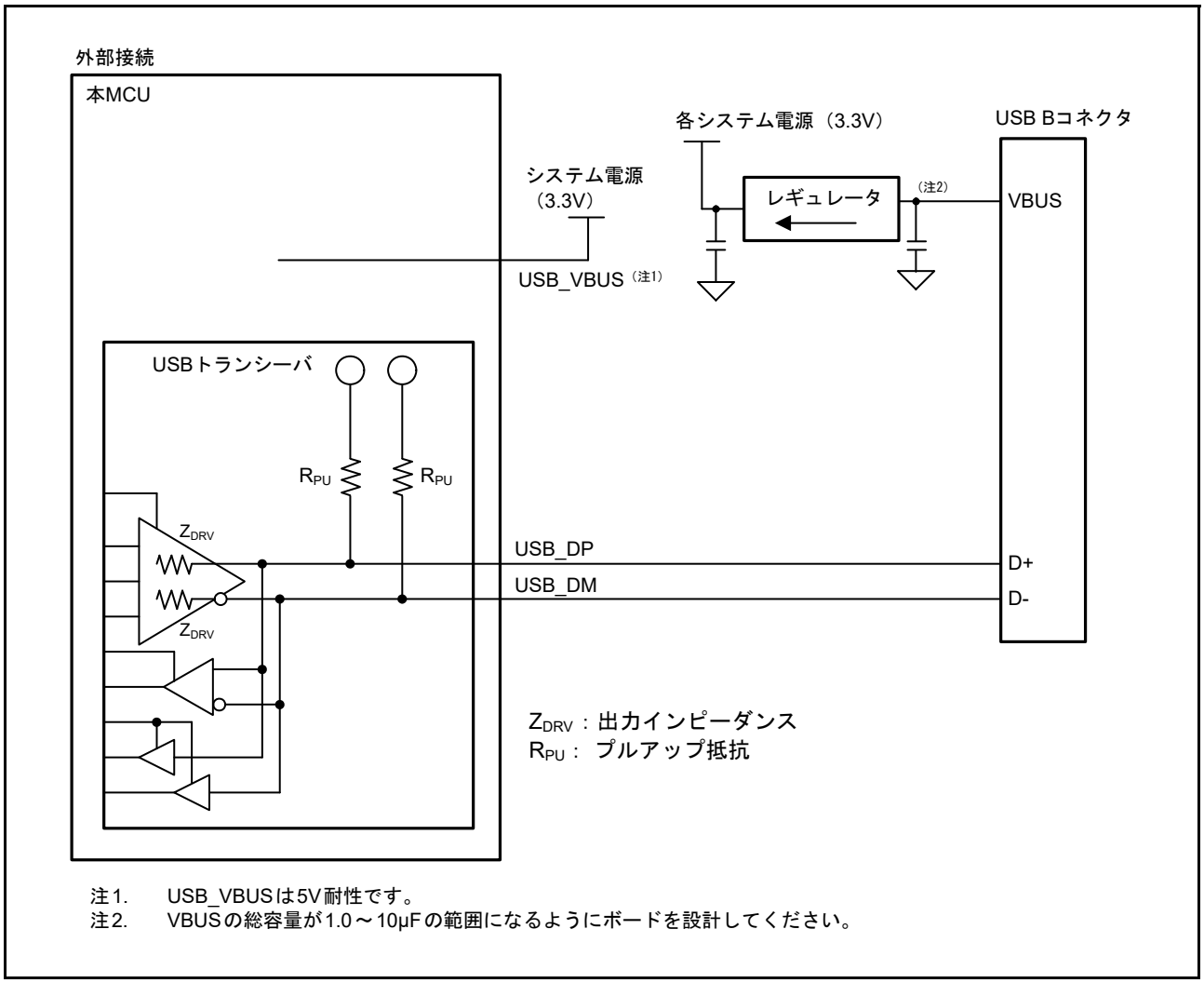
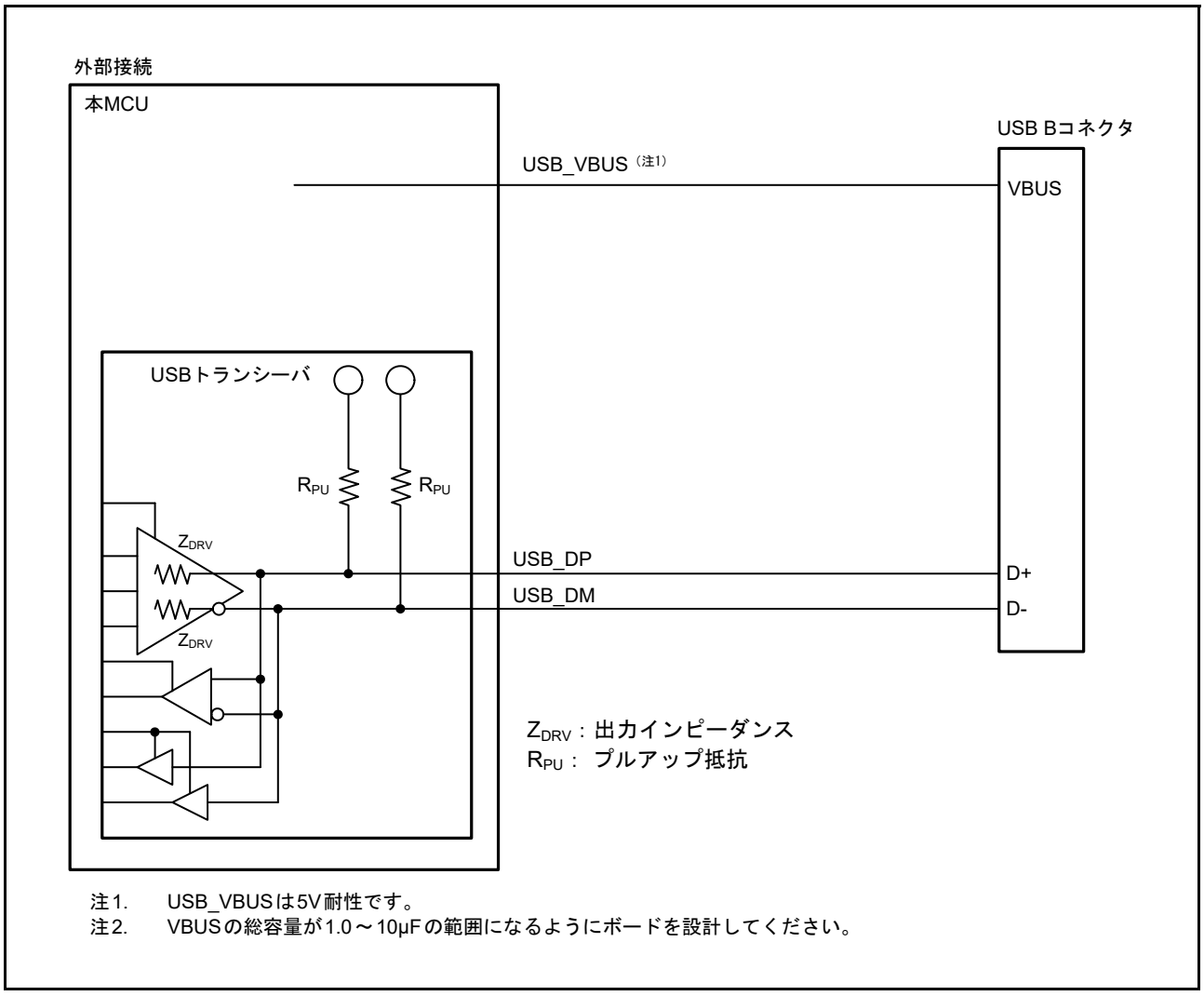


図 28.4　バスパワード状態 1 でのデバイス接続例

図 28.5 に、バスパワード状態 2 での USB コネクタのファンクション接続例を示します。

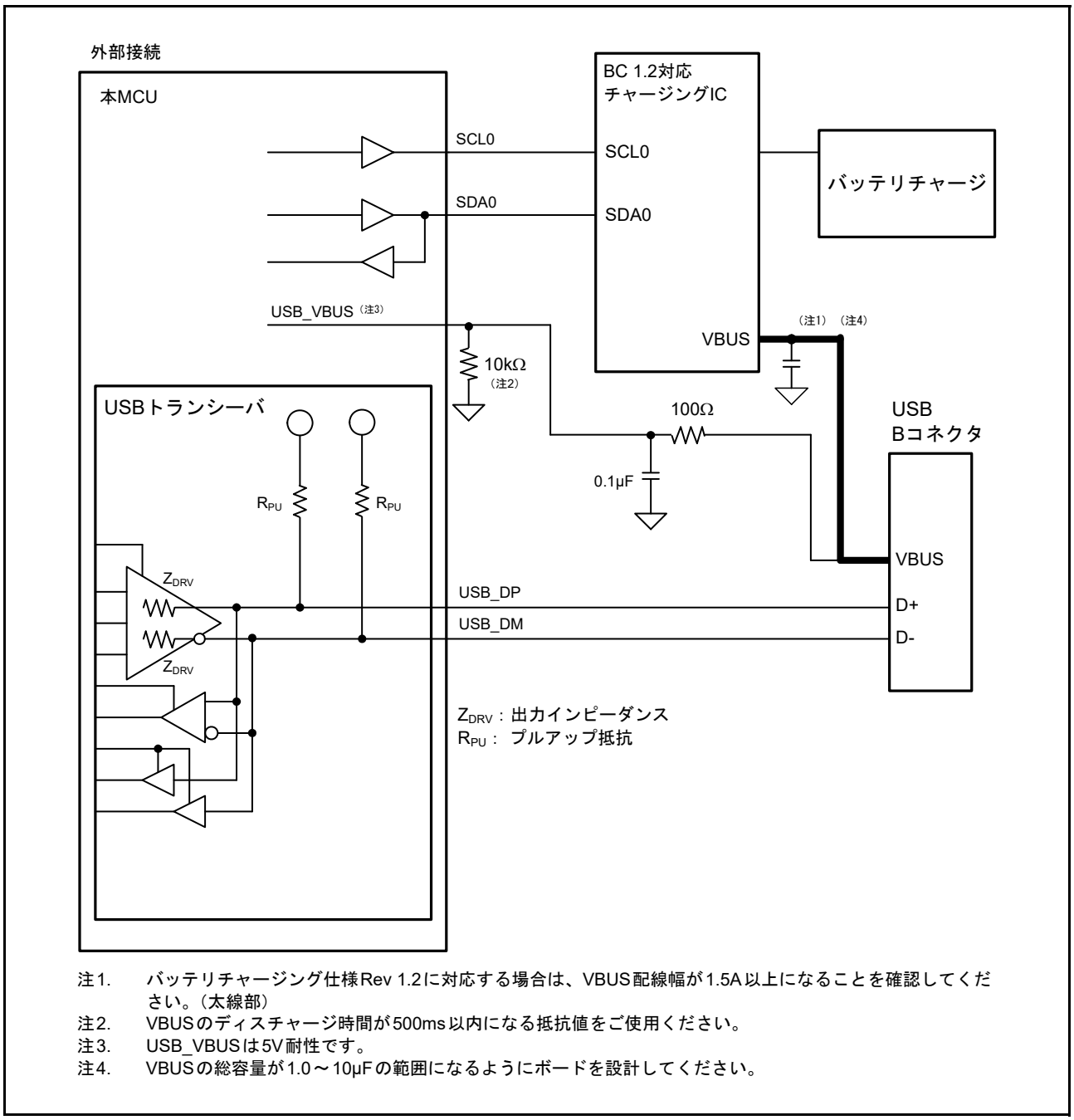


注1.　USB_VBUSは5V耐性です。
注2.　VBUSの総容量が1.0～10μFの範囲になるようにボードを設計してください。

図 28.5　バスパワード状態 2 でのデバイス接続例

この節に記載の外部回路の例は、概略回路であり、すべてのシステムにおいて動作を保証するものではありません。

図 28.6 に、バッテリチャージング仕様リビジョン 1.2 に対応した USB コネクタのファンクション接続例を示します。



注1. バッテリチャージング仕様Rev 1.2に対応する場合は、VBUS配線幅が1.5A以上になることを確認してください。（太線部）
注2. VBUSのディスチャージ時間が500ms以内になる抵抗値をご使用ください。
注3. USB_VBUSは5V耐性です。
注4. VBUSの総容量が1.0～10μFの範囲になるようにボードを設計してください。

図 28.6　バッテリチャージング仕様リビジョン 1.2 に対応したファンクション接続例

28.3.2　割り込み

表 28.13 に、USBFS の割り込み要因一覧を示します。これらの割り込み発生条件が成立し、かつ対応する割り込みイネーブルレジスタで割り込み出力が許可されていると、割り込みコントローラユニット（ICU）に対して USBFS 割り込み要求が発行されて、USBFS 割り込みが発生します。「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

表 28.13　割り込み要因 (1/2)

1にするビット	名称	割り込み要因	対象となるコントローラ機能	ステータスフラグ
VBINT	VBUS割り込み	• USB_VBUS入力端子の状態変化（Low→HighまたはHigh→Low）を検出したとき	ホストまたはデバイス（注1）	INTSTS0.VBSTS
RESM	レジューム割り込み	• SuspendedステートにおいてUSBバスの状態変化を検出したとき（J-State→K-StateまたはJ-State→SE0）	デバイス	—
SOFR	フレーム番号更新割り込み	ホストコントローラモード時： • フレーム番号の異なるSOFパケットを送信したとき デバイスコントローラモード時： • フレーム番号の異なるSOFパケットを受信したとき	ホスト／デバイス	—
DVST	デバイスステート遷移割り込み	以下のいずれかのデバイスステート遷移を検出したとき • USBバスリセットの検出 • Suspendedステートの検出 • SET_ADDRESSリクエストの受信 • SET_CONFIGURATIONリクエストの受信	デバイス	INTSTS0.DVSQ[2:0]
CTRT	コントロール転送ステージ遷移割り込み	以下のいずれかによってコントロール転送ステージ遷移を検出したとき • セットアップステージの完了 • コントロールライト転送ステータスステージ遷移の発生 • コントロールリード転送ステータスステージ遷移の発生 • コントロール転送の完了 • コントロール転送シーケンスエラーの発生	デバイス	INTSTS0.CTSQ[2:0]
BEMP	バッファエンプティ割り込み	• FIFOバッファ内の全データを送信してバッファが空になったとき • 最大パケットサイズを超えるパケットを受信したとき	ホスト／デバイス	BEMPSTS.PIPEnBEMP
NRDY	バッファノットレディ割り込み	ホストコントローラモード時： • 発行したトークンに対して周辺デバイスからSTALL応答を受信したとき • 発行したトークンに対して周辺デバイスから応答を正しく受信できなかったとき（無応答が3回連続、またはパケット受信エラーが3回連続で発生） • アイソクロナス転送中にオーバーランエラーまたはアンダーランエラーが発生したとき デバイスコントローラモード時： • PID[1:0]ビットが01b（BUF）のときに、INトークンまたはOUTトークンに対してNAKを応答したとき • アイソクロナス転送でのデータ受信中にCRCエラーまたはビットスタッフィングエラーが発生したとき • アイソクロナス転送でのデータ受信中にオーバーランまたはアンダーランが発生したとき	ホスト／デバイス	NRDYSTS.PIPEnNRDY
BRDY	バッファレディ割り込み	• バッファがレディ（読み出しまたは書き込み可能状態）になったとき	ホスト／デバイス	BRDYSTS.PIPEnBRDY
OVRCR	オーバーカレント入力変化割り込み	• USB_OVRCURAまたはUSB_OVRCURB入力端子の状態変化（Low→HighまたはHigh→Low）を検出したとき	ホスト	INTSTS1.OVRCR
BCHG	バス変化割り込み	• USBバスの状態変化を検出したとき	ホスト／デバイス	SYSSTS0.LNST[1:0]
DTCH	フルスピード動作時デタッチ検出	• フルスピード動作時に周辺デバイスのデタッチを検出したとき	ホスト	DVSTCTR0.RHST[2:0]
ATTCH	デバイスアタッチ検出	• J-StateまたはK-StateをUSBバスで2.5μs連続して検出したとき この割り込みは、周辺デバイスの接続の確認に使用できます	ホスト	—
EOFERR	EOFエラー検出	• 周辺デバイスのEOFエラーを検出したとき	ホスト	—

表 28.13　割り込み要因 (2/2)

1にするビット	名称	割り込み要因	対象となるコントローラ機能	ステータスフラグ
SACK	SETUP正常	• SETUPトランザクションの正常応答（ACK）を受信したとき	ホスト	—
SIGN	SETUPエラー	• SETUPトランザクションエラー（無応答またはACKパケット破損）を3回連続で検出したとき	ホスト	—
PDDEINT0	ポータブルデバイス検出割り込み	• ポータブルデバイスのアタッチを検出したとき	ホスト	INTSTS1.PDDETINT0

注 1.　この割り込みは、ホストコントローラモードでも発生しますが、通常はホストコントローラモードでは使用しません。

図 28.7 に、USBFS の割り込みに関連する回路を示します。

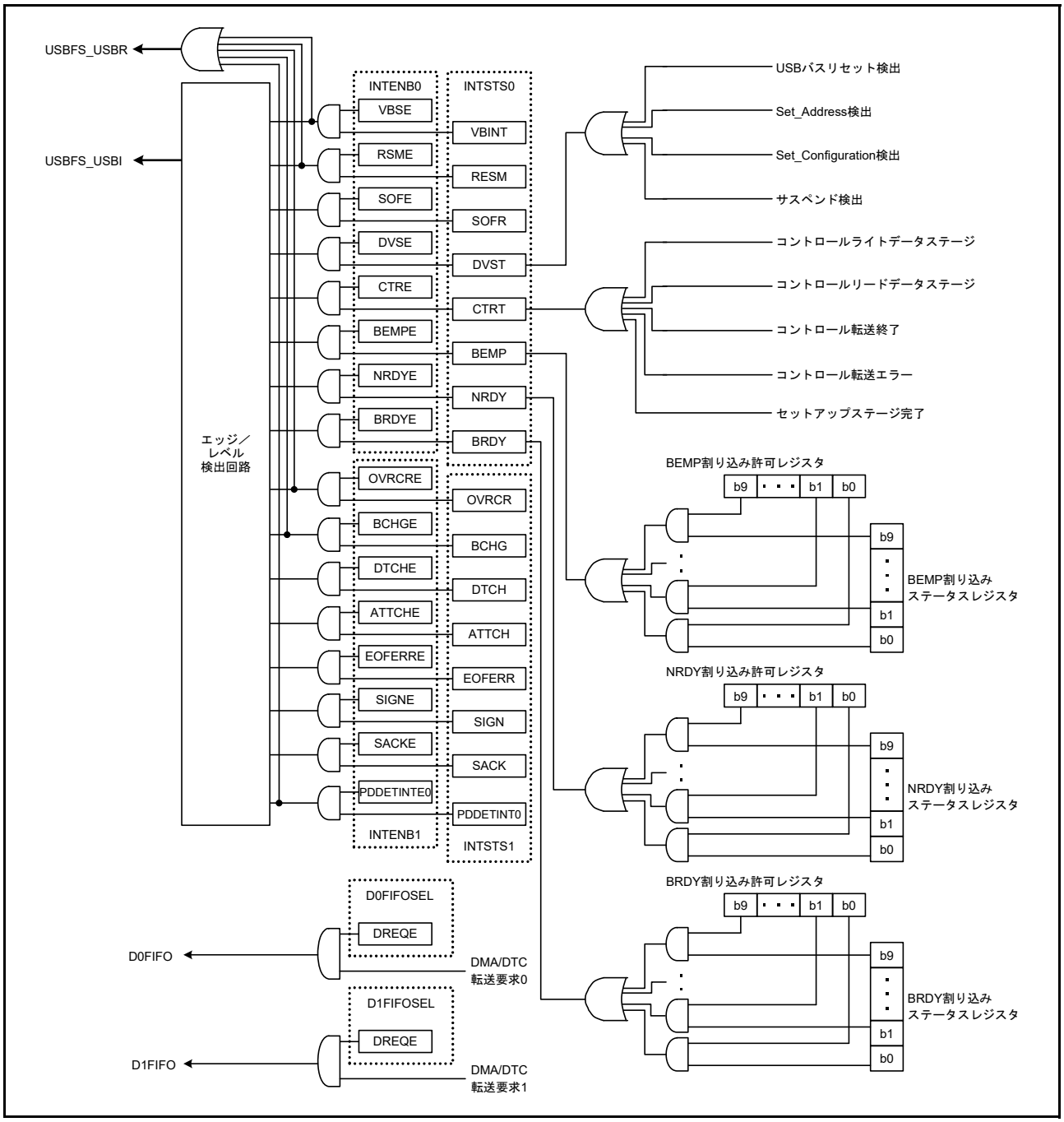


図 28.7　USBFS の割り込みに関連する回路

表 28.14 に、USBFS が発生させる割り込みを示します。

表 28.14　USBFSの割り込み

割り込み名	割り込みステータスフラグ	DTCの起動	DMACの起動	優先順位
D0FIFO	DMA転送要求0	可能	可能	高 ▲
D1FIFO	DMA転送要求1	可能	可能	
USBFS_USBI	VBUS割り込み、レジューム割り込み、フレーム番号更新割り込み、デバイスステート遷移割り込み、コントロール転送ステージ遷移割り込み、バッファエンプティ割り込み、バッファノットレディ割り込み、バッファレディ割り込み、オーバーカレント入力変化割り込み、バス変化割り込み、フルスピード動作時デタッチ検出、デバイスアタッチ検出、EOF エラー検出、SETUP正常、SETUPエラー、ポータブルデバイス検出割り込み	不可能	不可能	▼ 低
USBFS_USBR	VBUS割り込み、レジューム割り込み、オーバーカレント入力変化割り込み、ポータブルデバイス検出割り込み	不可能	不可能	—

28.3.3　割り込みの説明

28.3.3.1　BRDY 割り込み

BRDY 割り込みは、ホストコントローラモードとデバイスコントローラモードの両方で発生します。本節では、USBFS が BRDYSTS レジスタの対応するビットを 1 にする条件について説明します。これらの条件下では、ソフトウェアで当該パイプに対応する BRDYENB レジスタのビットを 1 にして、さらに INTENB0.BRDYE ビットを 1 にしていると、USBFS は BRDY 割り込みを発生させます。

BRDY 割り込みの発生およびクリア条件は、以下のように、各パイプの SOFCFG.BRDYM ビットと PIPECFG.BFRE ビットの設定値によって異なります。

(1)　SOFCFG.BRDYM = 0 かつ PIPECFG.BFRE = 0 のとき

この設定の場合、BRDY 割り込みは FIFO ポートがアクセス可能であることを示します。

下記条件のいずれかに該当する場合、USBFS は内部 BRDY 割り込み要求トリガを発生させ、選択パイプに対応する BRDYSTS.PIPEnBRDY ビットを 1 にします。

(a)　送信パイプの場合

- ソフトウェアで DIR ビットを 0 から 1 に変更したとき
- CPU からパイプの FIFO バッファへのライトアクセスが不可能な（BSTS ビットの読み出し値が 0 の）状態で、そのパイプのパケット送信が完了したとき
- ダブルバッファモードにおいて、一方の FIFO バッファへの書き込み完了時に、もう一方の FIFO バッファが空であったとき
- 一方の FIFO バッファへの送信が完了しても、現在書き込み中の FIFO バッファへの書き込みが完了するまで、要求トリガは発生しません
- アイソクロナス転送のパイプにおいて、ハードウェアによるバッファフラッシュが発生したとき
- PIPEnCTR.ACLRM ビットに 1 を書くことで、FIFO バッファが書き込み不可能な状態から書き込み可能な状態になったとき

DCP に対しては（すなわち、コントロール転送でのデータ送信においては）、要求トリガは発生しません。

(b) 受信パイプの場合

- CPUから当該パイプのFIFOバッファへのリードアクセスが不可能な（BSTSビットの読み出し値が0の）状態で、パケット受信が正常に完了したため、FIFOバッファの読み出しが可能になったとき。DATA-PID不一致が発生したトランザクションに対しては、要求トリガは発生しません
- ダブルバッファモードにおいて、一方のFIFOバッファからの読み出し完了時に、もう一方のFIFOバッファも読み出し可能なとき。一方のFIFOバッファが受信を完了しても、現在読み出し中のFIFOバッファからの読み出しが完了するまで、要求トリガは発生しません

デバイスコントローラモードでは、コントロール転送のステータスステージでBRDY割り込みは発生しません。選択パイプのPIPEnBRDY割り込みステータスは、ソフトウェアで対応するPIPEnBRDYビットに0を書くことにより、0にすることが可能です。この場合、他のパイプの他のPIPEBRDYビットは1である必要があります。

BRDYステータスのクリアは、FIFOバッファへアクセスする前に行ってください。

(2) SOFCFG.BRDYM = 0 かつ PIPECFG.BFRE = 1 のとき

この設定の場合、受信パイプによって1転送分の全データがすべて読み出されたときに、USBFSはBRDY割り込みを発生させ、当該パイプに対応するBRDYSTSレジスタのビットを1にします。

下記条件のいずれかに該当する場合、USBFSは1転送分の最後のデータが受信されたと判定します。

- ショートパケット（Zero-Lengthパケットを含む）を受信したとき
- パイプnトランザクションカウンタレジスタ（PIPEnTRN）を使用し、PIPEnTRN.TRNCNT[15:0]ビットで設定したパケット数をすべて受信したとき

上記条件のいずれかが満たされた後、データの読み出しが完了したときに、USBFSは1転送分の全データがすべて読み出されたと判定します。

FIFOバッファが空の状態でZero-Lengthパケットを受信した場合、FIFOポートコントロールレジスタのFRDYビットが1、DTLN[8:0]ビットが0の時点で、USBFSは1転送分の全データがすべて読み出されたと判定します。この場合、次の転送を開始するには、対応するポートコントロールレジスタのBCLRビットにソフトウェアで1を書いてください。この設定の場合、USBFSは送信パイプに対してBRDY割り込みを検出しません。

パイプのPIPEnBRDY割り込みステータスは、ソフトウェアで対応するBRDYSTS.PIPEnBRDYビットに0を書くことにより、0にすることが可能です。この場合、他のパイプの他のPIPEnBRDYビットは1である必要があります。

このモードを使用する場合、1転送分の全データを処理するまで、PIPECFG.BFREビットの設定値を変更しないでください。処理の途中でPIPECFG.BFREビットを変更する必要がある場合は、PIPEnCTR.ACLRMビットを用いてパイプのFIFOバッファをすべてクリアする必要があります。

(3) SOFCFG.BRDYM = 1 かつ PIPECFG.BFRE = 0 のとき

この設定の場合、BRDYSTS.PIPEnBRDYビット値は、各パイプのBSTSビットの設定値に連動します。すなわち、BRDY割り込みステータスビット（PIPEnBRDY）は、FIFOバッファの状態に応じてUSBが1または0にします。

(a) 送信パイプの場合

BRDY割り込みステータスビットは、FIFOバッファが書き込み可能な状態であれば1になり、そうでなければ0になります。送信方向のDCPが書き込み可能であっても、BRDY割り込みは発生しません。

(b) 受信パイプの場合

BRDY割り込みステータスビットは、FIFOバッファが読み出し可能な状態であれば1になり、全データが読み出されたとき（リードアクセスが不可能な状態で）0になります。

FIFOバッファが空の状態でZero-Lengthパケットを受信した場合、ソフトウェアでBCLRビットに1を書くまで、当該ビットは1になり、BRDY割り込みが発生し続けます。この設定の場合、ソフトウェアでPIPEnBRDYビットを0にすることはできません。

SOFCFG.BRDYMビットが1のときは、全パイプのPIPECFG.BFREビットを0にしてください。

図 28.8 に、BRDY 割り込みの発生タイミングを示します。

注1.　アイソクロナス転送の場合はACK Handshakeは存在しません。
注2.　FIFOバッファが読み出し可能になる条件は以下のとおりです。
　　未読み出しデータがCPU側FIFOバッファに存在しない状態で1パケット受信が発生した。
注3.　転送終了の条件は以下のとおりです。
　　以下（1）、（2）いずれかの受信が発生したとき
　　(1) Zero-Length を含むショートパケット受信、または
　　(2) トランザクションカウンタ分のパケット受信

図 28.8　BRDY 割り込みの発生タイミング

INTSTS0.BRDY ビットのクリア条件は、表 28.15 に示すように、SOFCFG.BRDYM ビットの設定値によって異なります。

表 28.15　BRDY ビットのクリア条件

BRDYM ビット	BRDY ビットのクリア条件
0	ソフトウェアでBRDYSTS レジスタの全ビットを0にすると、USBFSはBRDY ビットを0にクリアします。
1	全パイプのBSTS ビットが0になったとき、USBFSはBRDY ビットを0にクリアします。

28.3.3.2　NRDY割り込み

ソフトウェアでPIDビットをBUFに設定したパイプに内部NRDY割り込み要求が発生すると、USBFSは対応するNRDYSTS.PIPEnNRDYビットを1にします。ソフトウェアでNRDYENBレジスタの対応するビットを1にしている場合、USBFSはINTSTS0.NRDYビットを1にして、USBFS割り込みを発生させます。

USBFSが、あるパイプに対して内部NRDY割り込み要求を発生させる条件を以下に示します。

ホストコントローラモードでは、SETUPトランザクションの実行中に、内部NRDY割り込み要求は発生しません。ホストコントローラモードでは、SETUPトランザクション中に、SACKまたはSIGN割り込みを検出します。

デバイスコントローラモードでは、コントロール転送ステータスステージの実行中に、内部NRDY割り込み要求は発生しません。

(1)　ホストコントローラモード時

(a)　送信パイプの場合

以下のいずれかの条件で、USBFSはNRDY割り込みを検出します。

- アイソクロナス転送のパイプにおいて、FIFOバッファに送信すべきデータがない状態でOUTトークンの発行タイミングに達したとき。このときUSBFSは、OUTトークンに続けてZero-Lengthパケットを送信し、対応するNRDYSTS.PIPEnNRDYビットと、FRMNUM.OVRNビットを1にします
- アイソクロナス転送以外のパイプにおいて、SETUPトランザクション以外の通信中に、以下の2つのケースの任意の組み合わせが3回連続して発生したとき：
  - 周辺デバイスから応答がないとき（周辺デバイスからのハンドシェイクパケットを検出する前に、タイムアウトが検出されたとき）
  - 周辺デバイスからのパケットにエラーが検出されたとき。このときUSBFSは、対応するPIPEnNRDYビットを1にして、当該パイプに対応するPID[1:0]ビット設定値をNAKに変更します
- SETUPトランザクション以外の通信中に、周辺デバイスからSTALLハンドシェイクを受信したとき。このときUSBFSは、対応するPIPEnNRDYビットを1にして、当該パイプのPID[1:0]ビット設定値をSTALL（11b）に変更します

(b)　受信パイプの場合

- アイソクロナス転送のパイプにおいて、INトークンの発行タイミングに達したが、FIFOバッファに空きがないとき。このときUSBFSは、INトークンに対する受信データを破棄し、当該パイプに対応するPIPEnNRDYビットと、OVRNビットを1にします。さらに、INトークンに対する受信データにパケットエラーを検出した場合は、USBFSはFRMNUM.CRCEビットも1にします
- アイソクロナス転送以外のパイプにおいて、以下の2つのケースの任意の組み合わせが3回連続で発生したとき：
  - USBFSが発行したINトークンに対して周辺デバイスから応答がないとき（周辺デバイスからのDATAパケットを検出する前に、タイムアウトが検出されたとき）
  - 周辺デバイスからのパケットにエラーが検出されたとき。このときUSBFSは、対応するPIPEnNRDYビットを1にし、当該パイプに対応するPID[1:0]ビット設定値をNAKに変更します
- アイソクロナス転送のパイプにおいて、INトークンに対して周辺デバイスから応答がないとき（周辺デバイスからのDATAパケットを検出する前に、タイムアウトが検出されたとき）、または周辺デバイスからのパケットにエラーが検出されたとき。このときUSBFSは、当該パイプに対応するPIPEnNRDYビットを1にします。当該パイプのPID[1:0]ビットの設定値は変更されません
- アイソクロナス転送のパイプにおいて、受信したデータパケットにCRCエラーまたはビットスタッフィングエラーが検出されたとき。このときUSBFSは、当該パイプに対応するPIPEnNRDYビットと、CRCEビットを1にします

- STALL ハンドシェイクを受信したとき。このとき USBFS は、当該パイプに対応する PIPEnNRDY ビットを 1 にして、そのパイプの PID[1:0] ビットの設定値を STALL に変更します

(2) デバイスコントローラモード時

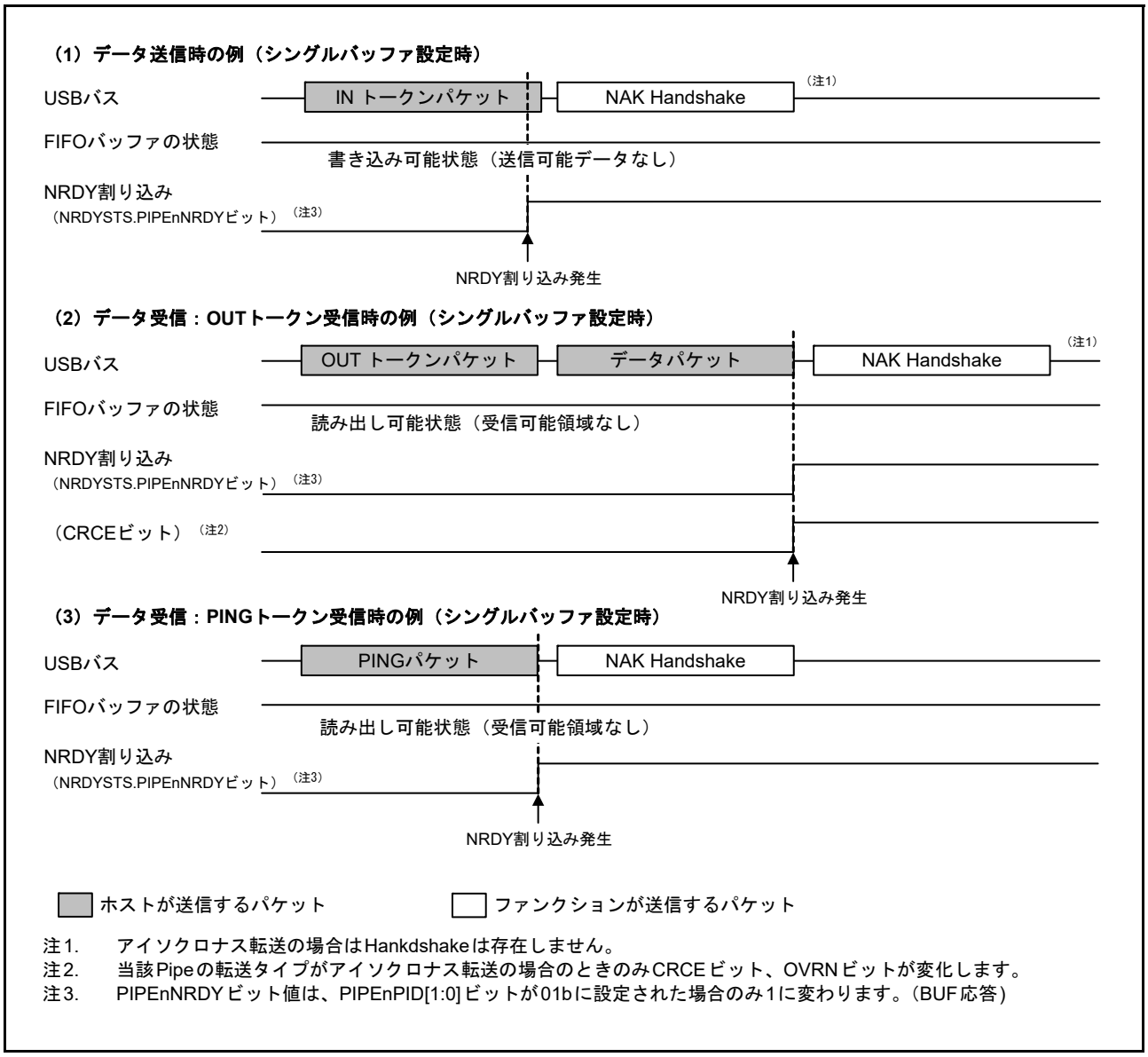
(a) 送信パイプの場合

- FIFO バッファに送信すべきデータがない状態で IN トークンを受信したとき。このとき USBFS は、IN トークン受信時に NRDY 割り込み要求を発生させ、NRDYSTS.PIPEnNRDY ビットを 1 にします。割り込みが発生したアイソクロナス転送のパイプに対して、USBFS は Zero-Length パケットを送信し、FRMNUM.OVRN ビットを 1 にします

(b) 受信パイプの場合

- OUT トークンを受信したが、FIFO バッファに空きがないとき。割り込みが発生したアイソクロナス転送のパイプに対して、USBFS は OUT トークン受信時に NRDY 割り込み要求を発生させ、PIPEnNRDY ビットを 1 にして、OVRN ビットを 1 にします。割り込みが発生したアイソクロナス転送以外のパイプに対しては、USBFS は、OUT トークンに続くデータ受信後の NAK ハンドシェイクを送信するときに、NRDY 割り込み要求を発生させ、PIPEnNRDY ビットを 1 にします。DATA-PID 不一致による再送信時には、NRDY 割り込み要求は発生しません。また、DATA パケットにエラーがある場合も、NRDY 割り込み要求は発生しません
- アイソクロナス転送のパイプにおいて、インターバルフレーム内にトークンが正常に受信されなかったとき。このとき USBFS は、SOF 受信時に NRDY 割り込み要求を発生させ、PIPEnNRDY ビットを 1 にします

図 28.9 に、デバイスコントローラ選択時の NRDY 割り込みの発生タイミングを示します。



注1.　アイソクロナス転送の場合はHankdshakeは存在しません。
注2.　当該Pipeの転送タイプがアイソクロナス転送の場合のときのみCRCEビット、OVRNビットが変化します。
注3.　PIPEnNRDYビット値は、PIPEnPID[1:0]ビットが01bに設定された場合のみ1に変わります。（BUF応答）

図 28.9　デバイスコントローラモードにおける NRDY 割り込みの発生タイミング

28.3.3.3　BEMP 割り込み

ソフトウェアで PID ビットを BUF に設定したパイプに、BEMP 割り込みが検出されると、USBFS は対応する BEMPSTS.PIPEnBEMP ビットを 1 にします。ソフトウェアで BEMPENB レジスタの対応するビットを 1 にしている場合、USBFS は INTSTS0.BEMP ビットを 1 にして、USBFS 割り込みを発生させます。本節では、USBFS が内部 BEMP 割り込み要求を発生させる条件について説明します。

(1)　送信パイプの場合

送信完了時（Zero-Length パケットの送信時を含む）に、対応するパイプの FIFO バッファが空のとき、シングルバッファモードでは、DCP 以外のパイプに対して BRDY 割り込みと同時に内部 BEMP 割り込み要求が発生します。下記条件のいずれかに該当する場合、内部 BEMP 割り込み要求は発生しません。

- ダブルバッファモードで、片方の FIFO バッファからのデータ送信完了時に、CPU または DMAC/DTC が、CPU 側の FIFO バッファへのデータ書き込みをすでに開始しているとき
- PIPEnCTR.ACLRM ビットまたはポートコントロールレジスタの BCLR ビットを 1 にして、バッファをクリア（空に）したとき
- デバイスコントローラモードのコントロール転送ステータスステージにおいて、IN 転送（Zero-Length パケット送信）を実行したとき

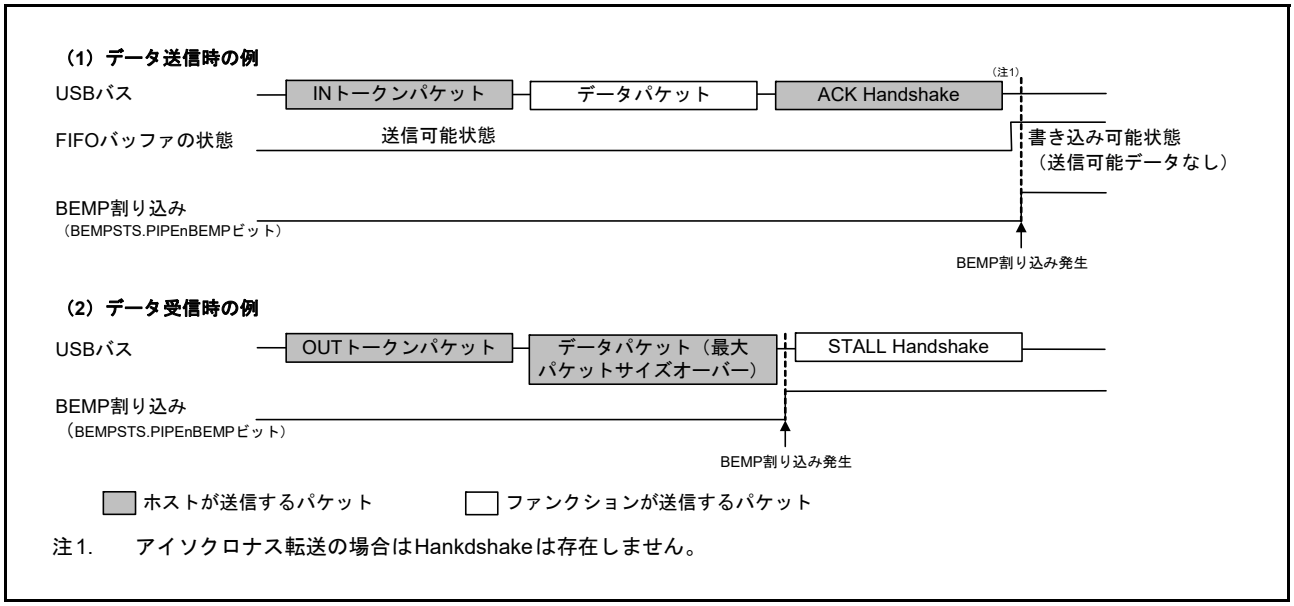
(2)　受信パイプの場合

正常に受信したデータのパケットサイズが、設定された最大パケットサイズを超えたとき。この場合、USBFS は BEMP 割り込み要求を発生させ、対応する BEMPSTS.PIPEnBEMP ビットを 1 にして、受信データを破棄し、当該パイプに対応する PID[1:0] ビット設定値を STALL（11b）に変更します。USBFS は、ホストコントローラモードでは応答を返しません。デバイスコントローラモードでは STALL 応答を行います。

下記条件のいずれかに該当する場合、内部 BEMP 割り込み要求は発生しません。

- 受信データに CRC エラーまたはビットスタッフィングエラーが検出されたとき
- SETUP トランザクションが実行されたとき
  - BEMPSTS.PIPEnBEMP ビットに 0 を書くと、ステータスがクリアされます
  - BEMPSTS.PIPEnBEMP ビットに 1 を書いても、何の影響もありません

図 28.10 に、デバイスコントローラモード時の BEMP 割り込みの発生タイミングを示します。



注1.　アイソクロナス転送の場合はHankdshakeは存在しません。

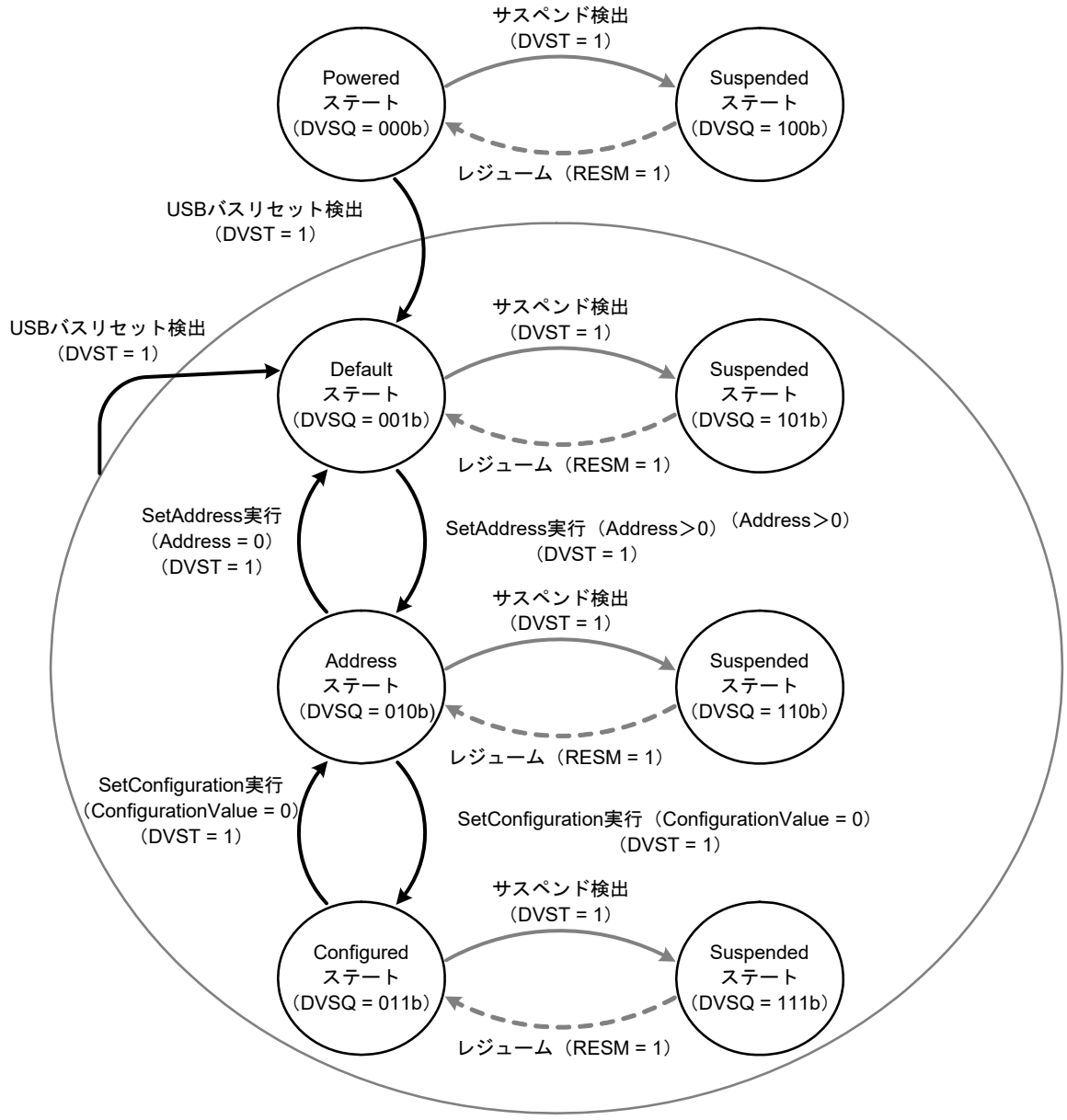
図 28.10　デバイスコントローラモード時の BEMP 割り込みの発生タイミング

28.3.3.4　デバイスステート遷移割り込み（デバイスコントローラモード）

図 28.11 に、USBFS のデバイスステート遷移図を示します。USBFS は、デバイスステートを管理して、デバイスステート遷移割り込みを発生させます。ただし、Suspended ステートからの復帰（レジューム信号検出）は、レジューム割り込みによって検出します。デバイスステート遷移割り込みは、INTENB0 レジスタを用いて個別に許可または禁止にできます。ステートが変化したデバイスは、INTSTS0.DVSQ[2:0] ビットで確認できます。

Default ステートに遷移する場合は、USB バスリセットの検出後に、デバイスステート遷移割り込みが発生します。

USBFS はデバイスステートを管理して、デバイスコントローラモードでのみデバイスステート遷移割り込みを発生させます。



注．　上図の実線で示した遷移が発生したとき、DVST ビットは 1 になります。
　　破線で示したレジュームが発生したとき、RESM ビットは 1 になります。

図 28.11　デバイスステートの遷移

28.3.3.5 コントロール転送ステージ遷移割り込み（デバイスコントローラモード）

図 28.12 に、USBFS のコントロール転送ステージ遷移図を示します。USBFS は、コントロール転送のシーケンスを管理して、コントロール転送ステージ遷移割り込みを発生させます。コントロール転送ステージ遷移割り込みは、INTENB0 レジスタで個別に許可または禁止できます。遷移した転送ステージは、INTSTS0.CTSQ[2:0] ビットで確認できます。

コントロール転送ステージ遷移割り込みは、デバイスコントローラモードでのみ発生します。本節では、コントロール転送のシーケンスエラーについて説明します。エラーが発生した場合は、DCPCTR.PID[1:0] ビットが 1xb（STALL 応答）になります。

(1) コントロールリード転送エラー

- データステージの IN トークンに対して、一度もデータ転送していない状態で OUT トークンを受信
- ステータスステージで IN トークンを受信
- ステータスステージで DATAPID = DATA0 のデータパケットを受信

(2) コントロールライト転送エラー

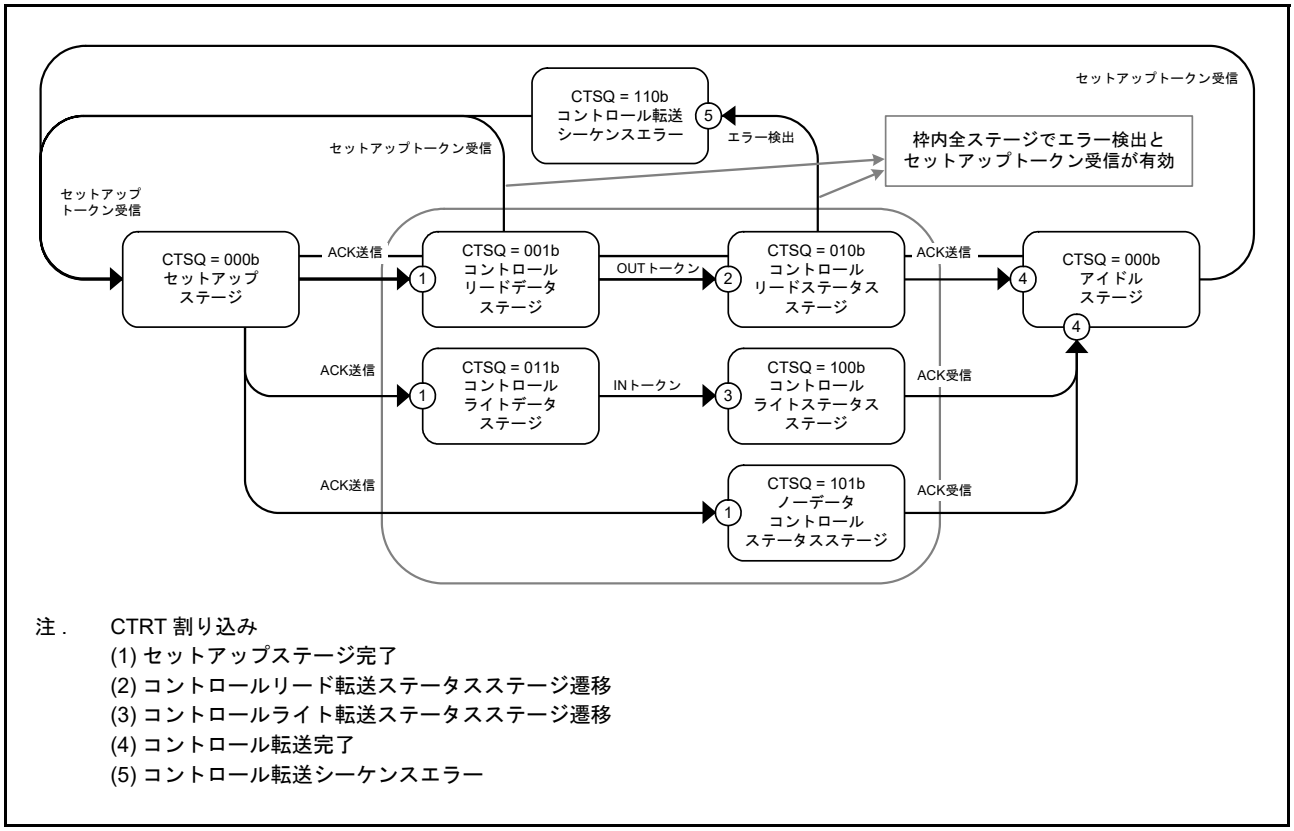
- データステージの OUT トークンに対して、一度も ACK 応答していない状態で IN トークンを受信
- データステージで最初のデータパケットとして DATAPID = DATA0 のパケットを受信
- ステータスステージで OUT トークンを受信

(3) コントロールライトノーデータ転送エラー

- ステータスステージで OUT トークンを受信

コントロールライト転送のデータステージでは、受信データ長が USB リクエストの wLength 値を超えても、コントロール転送シーケンスエラーと認識されません。コントロールリード転送のステータスステージでは、Zero-Length パケット以外のパケットが ACK 応答によって受信され、転送が正常に終了します。

シーケンスエラーに対して CTRT 割り込みが発生した場合（INTSTS0.CTRT = 1）、CTRT ビットが 0 になって割り込みステータスがクリアされるまで、CTSQ[2:0] = 110b の値が保持されます。CTSQ[2:0] = 110b が保持されている状態では、新しい USB リクエストを受信しても、セットアップステージ完了の CTRT 割り込みは発生しません。セットアップステージ完了のステータスは USBFS が保持しており、ソフトウェアによって割り込みステータスがクリアされると、USBFS が CTRT 割り込みを発生させます。



注 .　CTRT 割り込み
(1) セットアップステージ完了
(2) コントロールリード転送ステータスステージ遷移
(3) コントロールライト転送ステータスステージ遷移
(4) コントロール転送完了
(5) コントロール転送シーケンスエラー

図 28.12　コントロール転送ステージの遷移

28.3.3.6 フレーム番号更新割り込み

ホストコントローラモードでは、フレーム番号が更新されると割り込みが発生します。

デバイスコントローラモードでは、フレーム番号が更新されるとSOFR割り込みが発生します。USBFSは、フルスピード動作中に新しいSOFパケットを検出すると、フレーム番号を更新してSOFR割り込みを発生させます。

28.3.3.7 VBUS割り込み

USB_VBUS端子レベルに変化があった場合、VBUS割り込みが発生します。USB_VBUS端子のレベルは、INTSTS0.VBSTSビットで確認できます。VBUS割り込みによって、ホストコントローラの接続／切断の確認が可能です。ホストコントローラが接続された状態でシステムが起動された場合は、USB_VBUS端子レベルが変化しないため、最初のVBUS割り込みは発生しません。

28.3.3.8 レジューム割り込み

デバイスコントローラモードでは、デバイスがSuspendedステートのとき、USBバス状態が変化（J-StateからK-Stateへ、またはJ-StateからSE0へ変化）すると、レジューム割り込みが発生します。レジューム割り込みによってSuspendedステートからの復帰を検出します。

ホストコントローラモードでは、レジューム割り込みは発生しません。BCHG割り込みを用いて、USBバス状態の変化を検出してください。

28.3.3.9 OVRCR割り込み

USB_OVRCURAまたはUSB_OVRCURB端子のレベルが変化した場合に、OVRCR割り込みが発生します。USB_OVRCURA端子とUSB_OVRCURB端子のレベルは、SYSSTS0.OVCMON[1:0]ビットで確認できます。外部電源ICは、OVRCR割り込みを用いてオーバーカレントが検出されたどうかの確認が可能です。

28.3.3.10 BCHG割り込み

USBバス状態に変化があった場合に、BCHG割り込みが発生します。ホストコントローラモードでは、BCHG割り込みを用いて周辺デバイスのアタッチ検出が可能であり、また、リモートウェイクアップの検出にも利用できます。BCHG割り込みは、ホストコントローラモードとデバイスコントローラモードの両方で発生します。

28.3.3.11 DTCH割り込み

ホストコントローラモードでは、USBバスデタッチが検出されると、DTCH割り込みが発生します。USBFSは、USB2.0規格に従ってバスデタッチを検出します。

割り込みを検出した場合は、該当ポートに対して通信を行っている全パイプをソフトウェアで終了させる必要があります。通信を終了したパイプは、当該ポートへのバス接続（ATTCH割り込み発生）待ちの状態に遷移します。対応する割り込み許可ビットとは無関係に、USBFSハードウェアは以下の処理を行います。

- DTCH割り込みが検出されたポートのDVSTCTR0.UACTビットを0にする
- DTCH割り込みが発生したポートをアイドル状態に遷移させる

28.3.3.12 SACK割り込み

ホストコントローラモードでは、送信したSetupパケットに対して周辺デバイスからACK応答を受信すると、SACK割り込みが発生します。SACK割り込みを用いて、SETUPトランザクションが正常に終了したことを確認できます。

28.3.3.13 SIGN割り込み

ホストコントローラモードでは、送信したSetupパケットに対して周辺デバイスからACK応答を3回連続して正常に受信できなかった場合に、SIGN割り込みが発生します。SIGN割り込みを用いて、周辺デバイスからACK応答が送信されないことや、ACKパケットの破損を検出することが可能です。

28.3.3.14 ATTCH 割り込み

ホストコントローラモードでは、USB ポートにフルスピード信号レベルの J-State または K-State が 2.5µs 間検出されると、ATTCH 割り込みが発生します。具体的には、ATTCH 割り込みは以下のいずれかの条件下で検出されます。

- K-State、SE0、または SE1 から J-State へ変化し、J-State が 2.5µs 間継続したとき
- J-State、SE0、または SE1 から K-State へ変化し、K-State が 2.5µs 間継続したとき

28.3.3.15 EOFERR 割り込み

USB2.0 規格で定められている EOF2 のタイミングで通信が終了しないことを USBFS が検出すると、EOFERR 割り込みが発生します。

割り込みが検出された場合、該当ポートに対して通信を行っている全パイプをソフトウェアで終了させ、そのポートを再エニュメレーションする必要があります。対応する割り込み許可ビットとは無関係に、USBFS ハードウェアは以下の処理を行います。

- EOFERR 割り込みが検出されたポートの DVSTCTR0.UACT ビットを 0 にする
- EOFERR 割り込みが発生したポートをアイドル状態に遷移させる

28.3.3.16 ポータブルデバイス検出割り込み

USB-PHY から出力された PDDET のレベル変化（High から Low または Low から High）を USBFS が検出すると、ポータブルデバイス検出割り込みが発生します。ポータブルデバイス検出割り込みが発生した場合、信号のチャタリングを除去するため、同じ値が 3 回以上読み出されるまでソフトウェアで PDDETSTS0 ビットの読み出しを繰り返してください。

28.3.4　パイプコントロール

表 28.16 に、USBFS のパイプ設定項目一覧を示します。USB データ転送では、ソフトウェアがエンドポイントに関連付けた論理パイプによって、データ転送が行われます。USBFS にはデータ転送用に 10 本のパイプがあります。各パイプは、システムの仕様に合わせて設定してください。

表 28.16　パイプ設定項目

レジスタ名	ビット名	設定内容	備考
DCPCFG PIPECFG	TYPE	転送タイプ	パイプ1～9：設定可能
	BFRE	BRDY割り込みモード	パイプ1～5：設定可能
	DBLB	ダブルバッファ選択	パイプ1～5：設定可能
	DIR	転送方向選択	INまたはOUT設定可能
	EPNUM	エンドポイント番号	パイプ1～9：設定可能 パイプ使用時は0000b以外に設定
	SHTNAK	転送終了時のパイプ禁止選択	パイプ1～2：バルク転送時のみ設定可能 パイプ3～5：設定可能
DCPMAXP PIPEMAXP	DEVSEL	デバイス選択	ホストコントローラモード時のみ参照
	MXPS	最大パケットサイズ	USB2.0規格に準拠
PIPEPERI	IFIS	バッファフラッシュ	パイプ1～2：アイソクロナス転送時のみ設定可能 パイプ3～9：設定不可能
	IITV	インターバルカウンタ	パイプ1～2：アイソクロナス転送時のみ設定可能 パイプ3～5：設定不可能 パイプ6～9：ホストコントローラモード時のみ設定可能
DCPCTR PIPEnCTR	BSTS	バッファステータス	DCPは、ISELビットで受信／送信バッファ状態を切り替えます。
	INBUFM	INバッファモニタ	パイプ1～5のみ搭載
	SUREQ	SETUPリクエスト	DCPのみ設定可能、ホストコントローラモード時のみ制御
	SUREQCLR	SUREQクリア	DCPのみ設定可能、ホストコントローラモード時のみ制御
	ATREPM	自動応答モード	パイプ1～5：デバイスコントローラモード時のみ設定可能
	ACLRM	自動バッファクリア	パイプ1～9：設定可能
	SQCLR	シーケンスクリア	データトグルビットのクリア
	SQSET	シーケンスセット	データトグルビットのセット
	SQMON	シーケンスモニタ	データトグルビットの監視
	PBUSY	パイプビジーステータス	-
	PID	応答PID	28.3.4.6　応答PIDを参照してください。
PIPEnTRE	TRENB	トランザクションカウンタ許可	パイプ1～5：設定可能
	TRCLR	カレントトランザクションカウンタのクリア	パイプ1～5：設定可能
PIPEnTRN	TRNCNT	トランザクションカウンタ	パイプ1～5：設定可能

28.3.4.1 パイプコントロールレジスタの切り替え手順

パイプコントロールレジスタの以下のビットは、USB 通信が禁止（PID = NAK）されている場合に限り、書き換え可能です。

USB 通信が許可（PID = BUF）されているときは、以下のレジスタおよびビットを変更しないでください。

- DCPCFG および DCPMAXP レジスタの各ビット
- DCPCTR レジスタの SQCLR および SQSET ビット
- PIPECFG レジスタ、PIPEMAXP レジスタ、PIPEPERI レジスタの各ビット
- PIPEnCTR レジスタの ATREPM、ACLRM、SQCLR、および SQSET ビット
- PIPEnTRE および PIPEnTRN レジスタの各ビット

USB 通信が許可（PID = BUF）されている場合に、上記の各ビットを設定するには、以下の手順で行ってください。

1. パイプコントロールレジスタのビット変更要求が発生します。
2. 当該パイプの PID[1:0] ビットを NAK に設定します。
3. 当該パイプの PBUSY ビットが 0 になるまで待ちます。
4. パイプコントロールレジスタのビットを設定します。

パイプコントロールレジスタの以下のビットは、CFIFOSEL、D0FIFOSEL、および D1FIFOSEL レジスタの CURPIPE[3:0] ビットに選択パイプの情報が設定されていない場合に限り、書き換え可能です。

CURPIPE[3:0] ビットが設定されているときは、以下のレジスタを設定しないでください。

- DCPCFG および DCPMAXP レジスタの各ビット
- PIPECFG レジスタ、PIPEMAXP レジスタ、PIPEPERI レジスタの各ビット

パイプ情報を変更する場合は、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットを、変更するパイプ以外のパイプに設定する必要があります。DCP については、パイプ情報の変更後、ポートコントロールレジスタの BCLR ビットを用いてバッファをクリアしなければいけません。

28.3.4.2 転送タイプ

PIPECFG.TYPE[1:0] ビットで、各パイプの転送タイプを以下のように指定します。

- DCP：設定不要（コントロール転送固定）
- パイプ 1 ～ 2：バルク転送またはアイソクロナス転送に設定
- パイプ 3 ～ 5：バルク転送に設定
- パイプ 6 ～ 9：インタラプト転送に設定

28.3.4.3 エンドポイント番号

PIPECFG.EPNUM[3:0] ビットで、各パイプのエンドポイント番号を設定します。DCP は、エンドポイント 0 に固定されています。他のパイプは、エンドポイント 1 からエンドポイント 15 までの設定が可能です。

- DCP：設定不要（エンドポイント 0 固定）
- パイプ 1 ～ 9：1 から 15 までのエンドポイント番号を選択して設定してください。ただし、PIPECFG.DIR ビットと EPNUM[3:0] ビットの組み合わせが重複しないようにしてください

28.3.4.4 最大パケットサイズ設定

DCPMAXP.MXPS[6:0] ビットと PIPEMAXP.MXPS[8:0] ビットで、各パイプの最大パケットサイズを指定します。DCP とパイプ 1 ～ 5 は、USB2.0 規格で定義されているすべての最大パイプサイズに設定可能です。パイプ 6 ～ 9 では、最大パケットサイズは 64 バイトです。最大パケットサイズは、転送を開始（PID = BUF）する前に、以下のように設定してください。

- DCP：8、16、32、または 64 に設定
- パイプ 1 ～ 5：バルク転送時は 8、16、32、または 64 に設定
- パイプ 1 ～ 2：アイソクロナス転送時は 1 ～ 256 の値に設定
- パイプ 6 ～ 9：1 ～ 64 の値に設定

28.3.4.5 トランザクションカウンタ（受信方向パイプ 1 ～ 5）

USBFS は、データパケット受信方向で、指定回数のトランザクションが終了した場合に、転送終了と認識します。トランザクションカウンタには、実行するトランザクション回数を指定する PIPEnTRN レジスタと、実行されたトランザクション回数を内部でカウントするカレントカウンタがあります。PIPECFG.SHTNAK ビットが 1 の状態で、カレントカウンタ値がトランザクションの指定回数に一致すると、対応する PIPEnCTR.PID[1:0] ビットが NAK に設定され、次の転送を禁止状態にします。PIPEnTRE.TRCLR ビットで、トランザクションカウンタ機能のカレントカウンタを初期化することにより、トランザクションを最初からカウントし直すことができます。PIPEnTRN レジスタから読み出されるデータは、PIPEnTRE.TRENB ビットの設定値に応じて以下のように異なります。

- TRENB ビット = 0：指定したトランザクションカウンタ値の読み出しが可能
- TRENB ビット = 1：内部でカウントした実行済みトランザクション回数を示すカレントカウンタ値の読み出しが可能

TRCLR ビットの操作には、以下の制約事項があります。

- トランザクションのカウント中で、PID = BUF の場合、カレントカウンタはクリアできない
- バッファ内にデータが残っている場合、カレントカウンタはクリアできない

28.3.4.6 応答 PID

DCPCTR および PIPEnCTR レジスタの PID[1:0] ビットで、各パイプの応答 PID を設定します。本節では、各応答 PID の設定値に対する USBFS の動作について説明します。

(1) ソフトウェアの応答 PID 設定（ホストコントローラモード時）

応答 PID を選択して、以下のようにトランザクションの実行を指定します。

- NAK 設定：パイプ禁止状態かつトランザクション実行なし
- BUF 設定：FIFO バッファの状態に応じて下記のトランザクションを実行
  - OUT 方向の場合：FIFO バッファに送信データがある場合、OUT トークンを発行
  - IN 方向の場合：FIFO バッファに空きがあり受信可能な場合に、IN トークンを発行
- STALL 設定：パイプ禁止状態かつトランザクション実行なし

注 . DCP の SETUP トランザクションを実行するには、DCPCTR.SUREQ ビットを使用してください。

(2)　ソフトウェアの応答 PID 設定（デバイスコントローラモード時）

応答 PID を選択して、以下のようにホストからのトランザクションに対する応答を指定します。

- NAK 設定：発生したすべてのトランザクションに対して NAK 応答を返す
- BUF 設定：FIFO バッファの状態に応じてトランザクションに応答する
- STALL 設定：発生したすべてのトランザクションに対して STALL 応答を返す

注 .　SETUP トランザクションに対しては、PID[1:0] ビットの設定にかかわらず、常に ACK 応答を返し、レジスタに USB リクエストを格納します。

以下の (3) および (4) では、特定のトランザクションの結果に従って、USBFS が PID[1:0] ビットに書き込みを行う状況について説明します。

(3)　ハードウェアの応答 PID 設定（ホストコントローラモード時）

- NAK 設定：以下の場合に PID = NAK となり、トークンの発行が自動的に停止
  - アイソクロナス以外の転送で、NRDY 割り込みが発生したとき
    （詳細は、28.3.3.2　NRDY 割り込みを参照してください）
  - バルク転送において PIPECFG.SHTNAK ビットが 1 の場合に、ショートパケットを受信したとき
  - バルク転送において SHTNAK ビットが 1 の場合に、トランザクションカウンタが終了したとき
- BUF 設定：USBFS によるこの設定の書き込みなし
- STALL 設定：以下の場合に PID = STALL となり、トークンの発行が自動的に停止
  - 送信したトークンに対して STALL を受信したとき
  - 受信したデータのパケットサイズが、最大パケットサイズを超えたとき

(4)　ハードウェアの応答 PID 設定（デバイスコントローラモード時）

- NAK 設定：以下の場合に PID = NAK となり、トランザクションに対して NAK 応答を返す
  - SETUP トークンを正常に受信したとき（DCP のみ）
  - バルク転送において PIPECFG.SHTNAK ビットが 1 の場合に、トランザクションカウンタが終了したとき、またはショートパケットを受信したとき
- BUF 設定：USBFS による BUF 書き込みなし
- STALL 設定：以下の場合に PID = STALL となり、トランザクションに対して STALL 応答を返す
  - 受信したデータのパケットサイズが、最大パケットサイズを超えたとき
  - コントロール転送シーケンスエラーが検出されたとき（DCP のみ）

28.3.4.7 データ PID シーケンスビット

コントロール転送のデータステージ、バルク転送、およびインタラプト転送において、データが正常に転送されると、USBFS がデータ PID のシーケンスビットを自動的にトグルします。次に送出されるデータ PID のシーケンスビットは、DCPCTR レジスタおよび PIPEnCTR レジスタの SQMON ビットで確認できます。データ送信時は ACK ハンドシェイク受信のタイミングでシーケンスビットが切り替わります。データ受信時は ACK ハンドシェイク送信のタイミングでシーケンスビットが切り替わります。DCPCTR レジスタの SQCLR ビットと PIPEnCTR レジスタの SQSET ビットで、データ PID シーケンスビットの変更が可能です。

デバイスコントローラモードでのコントロール転送では、ステージ遷移時に USBFS が自動的にシーケンスビットを設定します。セットアップステージ終了時は DATA1 が返されます。ステータスステージではシーケンスビットは参照せず、PID = DATA1 で応答します。このため、ソフトウェアによる設定は必要ありません。ただし、ホストコントローラモードでのコントロール転送では、ステージ遷移時にシーケンスビットをソフトウェアで設定する必要があります。

ホストコントローラモードとデバイスコントローラモードのどちらの場合でも、ClearFeature リクエストの送受信では、ソフトウェアでデータ PID シーケンスビットを設定する必要があります。

28.3.4.8 応答 PID = NAK 機能

USBFS には、トランザクションの最後のデータパケットを受信したとき、パイプ動作を禁止（応答 PID = NAK）にする機能があります。USBFS は、ショートパケット受信またはトランザクションカウンタに基づいて、トランザクションの終了を自動識別します。PIPECFG.SHTNAK ビットを 1 にすると、この機能が有効になります。

この機能を使用することで、FIFO バッファをダブルバッファモードで使用している場合に、転送単位でのデータパケットの受信が可能です。パイプ動作を禁止した場合は、ソフトウェアで再度パイプを許可（応答 PID = BUF）にする必要があります。

なお、応答 PID = NAK 機能は、バルク転送でのみ使用可能です。

28.3.4.9 自動応答モード

バルク転送のパイプ（1 ～ 5）において、PIPEnCTR.ATREPM ビットを 1 にすると、自動応答モードとなります。OUT 転送時（PIPECFG.DIR ビット = 0）では OUT-NAK モードとなり、IN 転送時（DIR ビット = 1）では Null 自動応答モードとなります。

28.3.4.10 OUT-NAK モード

バルク OUT 転送のパイプにおいて、PIPEnCTR.ATREPM ビットを 1 にすると、OUT トークンに対して NAK が返され、NRDY 割り込みを出力します。通常モードから OUT-NAK モードへ遷移させるためには、パイプ動作が禁止（PID[1:0] ビット = 00b（NAK 応答））の状態で、OUT-NAK モードを指定してください。その後、パイプ動作を許可（PID[1:0] ビット = 01b（BUF 応答））にすると、OUT-NAK モードが有効になります。パイプ動作を禁止する直前で OUT トークンを受け付けた場合は、そのトークンのデータが正常に受信されて、ホストへ ACK が返されます。

OUT-NAK モードから通常モードへ遷移させるには、パイプ動作禁止（NAK）の状態で OUT-NAK モードを解除してください。その後、パイプ動作を許可（BUF）してください。通常モードでは、OUT データ受信が可能となります。

28.3.4.11　Null 自動応答モード

バルク IN 転送のパイプにおいて、PIPEnCTR.ATREPM ビットを 1 にすると、Zero-Length パケットを送信し続けます。

通常モードから Null 自動応答モードへ遷移させるには、パイプ動作禁止（応答 PID = NAK）の状態で Null 自動応答モードを指定してください。その後、パイプ動作を許可（応答 PID = BUF）にすると、Null 自動応答モードが有効になります。Null 自動応答モードの設定は、バッファが空でなければ不可能なため、事前に PIPEnCTR.INBUFM ビットが 0 であることを確認してください。INBUFM ビットが 1 の場合は、PIPEnCTR.ACLRM ビットでバッファを空にしてください。また、Null 自動応答モードへの遷移中は、FIFO ポートからのデータ書き込みは行わないでください。

Null 自動応答モードから通常モードへ遷移させるには、パイプ動作禁止（応答 PID = NAK）の状態を Zero-Length パケット送信期間（約 10µs）だけ維持した後、Null 自動応答モードを解除してください。通常モードでは、FIFO ポートへデータ書き込みが可能となり、パイプ動作許可（応答 PID = BUF）に設定することで、ホストへのパケット送信が可能となります。

28.3.5　FIFOバッファメモリ

USBFSは、データ転送用のFIFOバッファを備えており、各パイプに使用されるメモリ領域を管理しています。FIFOバッファには、アクセス権がシステム（CPU側）にある場合と、USBFS（SIE側）にある場合の2種類の状態があります。

(1)　バッファステータス

表28.17と表28.18に、USBFSのバッファステータスを示します。FIFOバッファのステータスは、DCPCTR.BSTSおよびPIPEnCTR.INBUFMビットで確認できます。FIFOバッファの転送方向は、PIPECFG.DIRビットまたはCFIFOSEL.ISELビット（DCP選択時）のいずれかで指定できます。

INBUFMビットは、送信方向のパイプ0～5に対して有効です。

送信側の転送パイプがダブルバッファモードを使用している場合、ソフトウェアはBSTSビットを読み出してCPU側のFIFOバッファステータスを監視することや、INBUFMビットを読み出してSIE側のFIFOバッファステータスを監視することが可能です。CPUまたはDMAC/DTCによるFIFOポートへのライトアクセスが遅く、BEMP割り込みではバッファの空き状態を判別できない場合に、ソフトウェアはINBUFMビットで送信の終了を確認できます。

表28.17　BSTSビットが示すバッファステータス

ISELまたはDIR	BSTS	バッファメモリのステータス
0（受信方向）	0	受信データなし、またはデータ受信中 FIFOポートからの読み出し不可能
0（受信方向）	1	受信データあり、またはZero-Lengthパケット受信 FIFOポートからの読み出し可能。Zero-Lengthパケット受信時は読み出し不可能のためバッファクリアが必要
1（送信方向）	0	送信未完了 FIFOポートへの書き込み不可能
1（送信方向）	1	送信完了 CPUは書き込み可能

表28.18　INBUFMビットが示すバッファステータス

DIR	INBUFM	バッファメモリのステータス
0（受信方向）	無効	無効
1（送信方向）	0	送信完了 送信待ちデータなし
1（送信方向）	1	データがFIFOポートからバッファへ書き込まれた状態 送信データあり

28.3.6　FIFOバッファクリア

表 28.19 に、FIFOバッファのクリア方式を示します。FIFOバッファは、ポートコントロールレジスタのBCLRビット、DnFIFOSEL.DCLRMビット、またはPIPEnCTR.ACLRMビットでクリアできます。

パイプ1～5に対しては、PIPECFG.DBLBビットでシングルバッファまたはダブルバッファを選択できます。

表 28.19　バッファクリア方式一覧

FIFOバッファクリアモード	CPU側FIFOバッファのクリア	指定パイプのデータ読み出し後に自動でFIFOバッファをクリアするモード	すべての受信パケットを破棄するための自動バッファクリアモード
使用するレジスタ	CFIFOCTR DnFIFOCTR	DnFIFOSEL	PIPEnCTR
使用するビット	BCLR	DCLRM	ACLRM
クリア条件	1書き込みでクリア	1：モード有効 0：モード無効	1：モード有効 0：モード無効

(1)　自動バッファクリアモード機能

PIPEnCTR.ACLRMビットを1にすると、USBFSは受信したすべてのデータパケットを破棄します。正常なデータパケットを受信した場合は、ホストコントローラに対してACK応答を行います。自動バッファクリアモード機能は、FIFOバッファ読み出し方向にのみ設定可能です。

ACLRMビットを1にした後、続けて0にすると、アクセス方向に関係なく、選択パイプのFIFOバッファがクリアされます。ハードウェアの内部シーケンス実行時間として、ACLRMビットへの1書き込みと0書き込みの間隔を100ns以上とってください。

28.3.7　FIFO ポートの機能

表 28.20 に、FIFO ポート機能の設定内容を示します。ライトアクセス時は、最大パケットサイズに達するまで書き込みを行うと、自動的にデータ送信が可能になります。最大パケットサイズに達する前に送信を可能とするには、ポートコントロールレジスタの BVAL フラグを書き込み終了に設定してください。Zero-Length パケットを送信するには、BCLR ビットでバッファをクリアした後、BVAL フラグを書き込み終了に設定してください。

読み出し時は、すべてのデータを読み出すと、自動的に新しいパケットの受信が可能になります。Zero-Length パケット受信時（DTLN[8:0] ビット = 0）は、データは読み出せないので、BCLR ビットによるバッファクリアが必要です。受信データ長は、ポートコントロールレジスタの DTLN[8:0] ビットで確認できます。

表 28.20　FIFOポート機能の設定

レジスタ名	ビット名	内容
CFIFOSEL, DnFIFOSEL（n = 0, 1）	RCNT	DTLN[8:0]読み出しモードを選択
	REW	FIFOバッファをリワインド（再読み出し、再書き込み）
	DCLRM	指定パイプの受信データ読み出し後、受信データの自動クリア（DnFIFO専用）
	DREQE	DMA/DTC転送許可（DnFIFO専用）
	MBW	FIFOポートアクセスビット幅
	BIGEND	FIFOポートエンディアンを選択
	ISEL	FIFOポートアクセス方向（DCP専用）
	CURPIPE	カレントパイプを選択
CFIFOCTR, DnFIFOCTR（n = 0, 1）	BVAL	FIFOメモリへの書き込みを終了
	BCLR	CPU側FIFOバッファをクリア
	DTLN	受信データ長の確認

(1)　FIFO ポート選択

表 28.21 に、各 FIFO ポートで選択可能なパイプを示します。ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットで、アクセスするパイプを選択する必要があります。パイプを選択した後、書き込み値が CURPIPE[3:0] ビットから正しく読み出せたかどうかをソフトウェアで確認してください（前回のパイプ番号が読み出された場合は、USBFS がパイプ変更処理中であることを示します）。次に、ポートコントロールレジスタの FRDY ビットが 1 であることをソフトウェアで確認します。

また、ポート選択レジスタの MBW ビットでアクセスするバス幅をソフトウェアで指定する必要があります。FIFO バッファアクセス方向は、PIPECFG.DIR ビットの設定値に従います。DCP のみ、ポート選択レジスタの ISEL ビットによって方向が決まります。

表 28.21　パイプ別FIFOポートアクセス

パイプ	アクセス方法	使用可能なポート
DCP	CPUアクセス	CFIFOポートレジスタ
パイプ1～9	CPUアクセス	• CFIFOポートレジスタ • D0FIFO/D1FIFOポートレジスタ
	DMA/DTCアクセス	D0FIFO/D1FIFOポートレジスタ

(2)　REW ビット

現在アクセス中のパイプへのアクセスを一時的に中断し、別のパイプにアクセスした後、再度、現在のパイプ処理を続行することが可能です。このような処理には、ポート選択レジスタの REW ビットを使用します。

REW ビットを 1 にした状態で、ポート選択レジスタの CURPIPE[3:0] ビットでパイプを選択すると、FIFO バッファの読み出しまたは書き込みポインタがリセットされ、先頭バイトからの読み出しまたは書き込みが可能になります。REW ビットを 0 にした状態でパイプを選択すると、ポインタをリセットせずに、前回選択時の続きから継続してデータの読み出しや書き込みが可能です。

FIFO ポートにアクセスするには、パイプの選択後、ポートコントロールレジスタの FRDY ビットが 1 であることをソフトウェアで確認する必要があります。

28.3.8　DMA 転送（D0FIFO/D1FIFO ポート）

(1)　DMA 転送の概要

パイプ 1 ～ 9 に対して、DMAC による FIFO ポートのアクセスが可能です。DMA 転送用パイプのバッファアクセスを可能にすると、DMA 転送要求が発行されます。

DnFIFOSEL.MBW ビットで FIFO ポートへの転送単位を選択するとともに、DnFIFOSEL.CURPIPE[3:0] ビットで DMA 転送用のパイプを選択してください。なお、DMA 転送中は選択パイプを変更しないでください。

(2)　DnFIFO 自動クリアモード（D0FIFO/D1FIFO ポート読み出し方向）

DnFIFOSEL.DCLRM ビットを 1 にすると、FIFO バッファからのデータ読み出し完了時に、USBFS は選択パイプの FIFO バッファを自動的にクリアします。

表 28.22 に、設定値ごとのパケット受信とソフトウェアによる FIFO バッファクリア処理を示します。この表に示すように、PIPECFG.BFRE ビットの設定値によってバッファクリア条件が異なります。バッファクリアが必要なすべての状況において、DnFIFOSEL.DCLRM ビットを使用することにより、ソフトウェアによるクリアが不要になります。すなわち、ソフトウェアの介在しない DMA 転送が可能となります。

DnFIFO 自動クリアモードは、FIFO バッファ読み出し方向でのみ設定可能です。

表 28.22　パケット受信とソフトウェアによるFIFOバッファクリア処理

パケット受信時のバッファステータス	レジスタ設定値			
	DCLRM = 0		DCLRM = 1	
	BFRE = 0	BFRE = 1	BFRE = 0	BFRE = 1
バッファフル	クリア不要	クリア不要	クリア不要	クリア不要
Zero-Lengthパケット受信	クリア必要	クリア必要	クリア不要	クリア不要
通常のショートパケット受信	クリア不要	クリア必要	クリア不要	クリア不要
トランザクションカウント終了	クリア不要	クリア必要	クリア不要	クリア不要

28.3.9 DCP を使用したコントロール転送

コントロール転送データステージでは、デフォルトコントロールパイプ（DCP）を使用してデータ転送が行われます。DCP の FIFO バッファは、コントロールリードとコントロールライトで共通の固定領域を持つ 64 バイトシングルバッファです。FIFO バッファは、CFIFO ポートでのみアクセス可能です。

28.3.9.1 ホストコントローラモードでのコントロール転送

(1) セットアップステージ

USQREQ、USBVAL、USBINDX、および USBLENG レジスタは、SETUP トランザクションの USB リクエストを送信するためのレジスタです。Setup パケットのデータをレジスタに書き込み、DCPCTR.SUREQ ビットに 1 を書き込むことで、設定されているデータが SETUP トランザクションとして送出されます。SUREQ ビットは、トランザクションが終了すると 0 になります。SUREQ ビットが 1 のときは、上記 USB リクエストレジスタを変更しないでください。

アタッチされたファンクションデバイスが検出された場合、ソフトウェアによって、DCPMAXP.DEVSEL[3:0] ビットを 0 にし、DEVADD0.USBSPD[1:0] ビットを適切に設定した上で、前述のシーケンスに従って当該デバイスの最初の SETUP トランザクションを発行してください。

アタッチされたファンクションデバイスが Address ステートに遷移した場合、ソフトウェアによって、割り当てられた USB アドレスを DEVSEL[3:0] ビットに設定し、指定された USB アドレスに対応する DEVADDn レジスタのビットを適切に設定した上で、前述のシーケンスに従って SETUP トランザクションを発行してください。たとえば、PIPEMAXP.DEVSEL[3:0] = 0010b であれば、DEVADD2 レジスタを適切に設定してください。PIPEMAXP.DEVSEL[3:0] = 0101b であれば、DEVADD5 レジスタを適切に設定してください。

SETUP トランザクションのデータが送信されると、周辺デバイスからの応答に基づいて割り込み要求が発生します（INTSTS1 レジスタの SIGN ビットまたは SACK ビット）。この割り込み要求により、ソフトウェアで SETUP トランザクションの結果を確認できます。

SETUP トランザクションの DATA0 データパケット（USB リクエスト）は、DCPCTR.SQMON ビットの状態にかかわらず、常に送信されます。

(2) データステージ

データステージは、DCP の FIFO バッファを使用してデータを転送するために使用します。

DCP の FIFO バッファにアクセスする前に、CFIFOSEL.ISEL ビットでアクセス方向を指定してください。また、DCPCFG.DIR ビットで転送方向を指定してください。

データステージの第 1 データパケットは、データ PID を DATA1 として転送する必要があります。DCPCTR.SQSET ビットでデータ PID を DATA1 に設定し、PID ビットを BUF に設定してください。データ転送の完了は、BRDY 割り込みまたは BEMP 割り込みによって検出します。

コントロールライト転送では、送信データのバイト数が最大パケットサイズの整数倍であるときに、ソフトウェアで最後に Zero-Length パケットを送出してください。

(3) ステータスステージ

ステータスステージは、データステージとは逆方向の Zero-Length パケットのデータ転送を行うために使用します。データステージと同様に、DCP の FIFO バッファを使用してデータを転送します。データステージと同じ手順で、トランザクションを実行します。

ステータスステージのデータパケットは、DCPCTR.SQSET ビットでデータ PID を DATA1 に設定して送受信する必要があります。

Zero-Length パケットを受信した場合は、BRDY 割り込み発生後に CFIFOCTR.DTLN[8:0] ビットで受信データ長を確認してから、BCLR ビットで FIFO バッファをクリアしてください。

28.3.9.2 デバイスコントローラモードでのコントロール転送

(1) セットアップステージ

USBFS は、USBFS に対する正常な Setup パケットに対して ACK 応答を送信します。セットアップステージでの USBFS の動作を以下に示します。

新しい Setup パケットを受信すると、USBFS は以下のビットを設定します。

- INTSTS0.VALID ビットを 1 にする
- DCPCTR.PID[1:0] ビットを NAK にする
- DCPCTR.CCPL ビットを 0 にする

Setup パケットの後にデータパケットを受信すると、USBFS は、USB リクエストのパラメータを、USBREQ レジスタ、USBVAL レジスタ、USBINDX レジスタ、および USBLENG レジスタに格納します。

コントロール転送に対する応答処理は、VALID フラグを 0 にしてから実行してください。VALID ビットが 1 の状態では、PID = BUF に設定できず、データステージを終了することができません。

VALID ビットの機能により、USBFS は、コントロール転送中に新しい USB リクエストを受信すると、実行中の現在のリクエスト処理を中断し、最新のリクエストに対する応答を行うことができます。

また、USBFS は、受信した USB リクエスト内の方向ビット（bmRequestType のビット 8）およびリクエストデータ長（wLength）を自動検出します。USBFS は他にも、コントロールリード転送、コントロールライト転送、およびノーデータコントロール転送を判別し、ステージ遷移を管理します。間違ったシーケンスに対しては、コントロール転送ステージ遷移割り込みでシーケンスエラーが発生し、その割り込みがソフトウェアに通知されます。USBFS のステージ管理については、図 28.12 を参照してください。

(2) データステージ

受信した USB リクエストに対応したデータ転送は、DCP を用いて行ってください。DCP の FIFO バッファにアクセスする前に、CFIFOSEL.ISEL ビットでアクセス方向を指定してください。

転送データが DCP の FIFO バッファサイズより大きい場合は、コントロールライト転送では BRDY 割り込みを、コントロールリード転送では BEMP 割り込みを使用してデータ転送を行ってください。

(3) ステータスステージ

DCPCTR.PID[1:0] ビットが BUF に設定された状態で、DCPCTR.CCPL ビットを 1 にすることにより、コントロール転送が終了します。

この設定後、セットアップステージで確定したデータ転送方向に従い、USBFS が自動的にステータスステージを実行します。手順を以下に示します。

- コントロールリード転送の場合
  USBFS は、USB ホストから Zero-Length パケットを受信し、ACK 応答を送信します。
- コントロールライト転送、ノーデータコントロール転送の場合
  USBFS は、Zero-Length パケットを送信し、USB ホストから ACK 応答を受信します。

(4) コントロール転送自動応答機能

USBFS は、正常な SET_ADDRESS リクエストに自動応答します。SET_ADDRESS リクエストに下記のエラーのいずれかが発生した場合は、ソフトウェアによる応答が必要です。

- bmRequestType が 00h でない場合：コントロールライト転送以外
- wIndex が 00h でない場合：リクエストエラー
- wLength が 00h でない場合：ノーデータコントロール転送以外
- wValue が 7Fh より大きい場合：リクエストエラー
- INTSTS0.DVSQ[2:0] ビットが 011b（Configured ステート）の場合：デバイスステートエラーのコントロール転送

SET_ADDRESS リクエスト以外のすべてのリクエストには、対応するソフトウェアによる応答が必要です。

28.3.10　バルク転送（パイプ 1 ～ 5）

バルク転送では、FIFO バッファの使用方法（シングル／ダブルバッファ設定）の構成が可能です。USBFS は、バルク転送用として下記の機能を備えています。

- BRDY 割り込み機能（PIPECFG.BFRE ビット）：28.3.3.1 (2)　SOFCFG.BRDYM = 0 かつ PIPECFG.BFRE = 1 のときを参照してください
- トランザクションカウント機能（PIPEnTRE.TRENB ビット、PIPEnTRE.TRCLR ビット、PIPEnTRN.TRNCNT[15:0] ビット）：28.3.4.5　トランザクションカウンタ（受信方向パイプ 1 ～ 5）を参照してください
- 応答 PID = NAK 機能（PIPECFG.SHTNAK ビット）：28.3.4.8　応答 PID = NAK 機能を参照してください
- 自動応答モード（PIPEnCTR.ATREPM ビット）：28.3.4.9　自動応答モードを参照してください

28.3.11　インタラプト転送（パイプ 6 ～ 9）

デバイスコントローラモードでは、USBFS は、ホストコントローラが指示するタイミングに基づいてインタラプト転送を行います。

ホストコントローラモードでは、インターバルカウンタを使用して、ソフトウェアでトークン発行タイミングを設定できます。

28.3.11.1　ホストコントローラモードでのインタラプト転送時のインターバルカウンタ

インタラプト転送を行う場合、PIPEPERI.IITV[2:0] ビットにトランザクションのインターバルを指定します。

(1)　USBFS は、このインターバルに基づいてインタラプト転送のトークンを発行します。カウンタの初期化

USBFS は、以下の条件でインターバルカウンタを初期化します。

- パワーオンリセット
  IITV[2:0] ビットが初期化されます。
- PIPEnCTR.ACLRM ビットを使用した FIFO バッファの初期化
  IITV[2:0] ビットは初期化されませんが、カウント値は初期化されます。PIPEnCTR.ACLRM ビットを 0 にすると、IITV[2:0] ビットの設定値からカウントを開始します。

なお、下記の場合にはインターバルカウンタは初期化されません。

- USB バスリセット、または USB Suspended ステート
  IITV[2:0] ビットは初期化されません。DVSTCTR0.UACT ビットを 1 にすることにより、USB バスリセット状態または USB Suspended ステートとなる前に保存された値からカウントが開始します。

(2)　トークン発生タイミングにもかかわらずトークンの送受信ができない場合の動作

以下の場合、トークンの発生タイミングであってもトークンは発生しません。このような場合、USBFS は次のインターバルにトランザクションの実行を試みます。

- PID を NAK または STALL に設定した場合
- 受信（IN）方向でのトークン送信時に、FIFO バッファに空き領域がない場合
- 送信（OUT）方向でのトークン送信時に、FIFO バッファに送信データがない場合

28.3.12　アイソクロナス転送（パイプ 1 ～ 2）

USBFS は、アイソクロナス転送用として下記の機能を備えています。

- アイソクロナス転送のエラー通知
- インターバルカウンタ（PIPEPERI.IITV[2:0] ビットで指定）
- アイソクロナス IN 転送データセットアップ制御（IDLY 機能）
- アイソクロナス IN 転送バッファフラッシュ機能（PIPEPERI.IFIS ビットで指定）

28.3.12.1　アイソクロナス転送のエラー検出

USBFS は、アイソクロナス転送時に発生したエラーをソフトウェアで管理できるようにするため、下記エラーの検出機能を備えています。表 28.23 および表 28.24 に、USBFS によるエラー検出の優先順位と、関連する割り込みを示します。

(a)　PID エラー

- 受信パケットの PID 値が不正な場合

(b)　CRC エラー、ビットスタッフィングエラー

- 受信パケットに CRC エラーがあった場合、またはビットスタッフィングが無効な場合

(c)　最大パケットサイズオーバーエラー

- 受信パケットのデータサイズが、最大パケットサイズの設定値を越えた場合

(d)　オーバーランエラー、アンダーランエラー

ホストコントローラモード時：

- IN（受信）方向でのトークン送信時に、FIFO バッファに空き領域がない場合
- OUT（送信）方向でのトークン送信時に、FIFO バッファに送信データがない場合

デバイスコントローラモード時：

- IN（送信）方向でのトークン受信時に、FIFO バッファに送信データがない場合
- OUT（受信）方向でのトークン受信時に、FIFO バッファに空き領域がない場合

(e)　インターバルエラー

デバイスコントローラモードでは、以下の場合にインターバルエラーとして処理されます。

- アイソクロナス IN 転送時に、インターバルフレーム内に IN トークンを受信できなかった場合
- アイソクロナス OUT 転送時に、インターバルフレーム内に OUT トークンを受信できなかった場合

表 28.23　トークンの送受信に関するエラー検出

検出の優先順位	エラー	発生する割り込みとステータス
1	PIDエラー	ホストコントローラモードでも、デバイスコントローラモードでも、割り込みは発生しません（破損パケットとして無視されます）。
2	CRCエラー、ビットスタッフィングエラー	ホストコントローラモードでも、デバイスコントローラモードでも、割り込みは発生しません（破損パケットとして無視されます）。
3	オーバーランエラー、アンダーランエラー	ホストコントローラモードでも、デバイスコントローラモードでも、NRDY割り込みが発生し、FRMNUM.OVRNビットが1になります。 デバイスコントローラモードでは、INトークンに対してZero-Lengthパケットを送信します。OUTトークンに対してはデータパケットを受信しません。
4	インターバルエラー	デバイスコントローラモードでは、NRDY割り込みが発生します。ホストコントローラモードでは、割り込みは発生しません。

表 28.24　データパケットの受信に関するエラー検出

検出の優先順位	エラー	発生する割り込みとステータス
1	PIDエラー	割り込みは発生しません（破損パケットとして無視されます）。
2	CRCエラー、ビットスタッフィングエラー	ホストコントローラモードでも、デバイスコントローラモードでも、NRDY割り込みが発生し、FRMNUM.CRCEビットが1になります。
3	最大パケットサイズオーバーエラー	ホストコントローラモードでも、デバイスコントローラモードでも、BEMP割り込みが発生し、PID[1:0]ビットがSTALLに設定されます。

28.3.12.2　DATA-PID

デバイスコントローラモードでは、USBFS は受信 PID に対して以下のように応答します。

(1)　IN 方向の場合

- DATA0：データパケットの PID として送信
- DATA1：送信しない
- DATA2：送信しない
- mDATA：送信しない

(2)　OUT 方向の場合

- DATA0：データパケットの PID として正常受信
- DATA1：データパケットの PID として正常受信
- DATA2：パケットを無視
- mDATA：パケットを無視

28.3.12.3　インターバルカウンタ

アイソクロナス転送のインターバルは、PIPEPERI.IITV[2:0] ビットで設定できます。デバイスコントローラモードでは、インターバルカウンタによって、表 28.25 に示す機能を実現します。ホストコントローラモードでは、USBFS はトークン発行タイミングを生成し、インターバルカウンタの動作はインタラプト転送の場合と同じです。

表 28.25　デバイスコントローラモード時のインターバルカウンタ機能

転送方向	機能	検出条件
IN	送信バッファフラッシュ	アイソクロナス IN 転送時にインターバルフレーム内に IN トークンを正常受信できない。
OUT	トークン未受信の通知	アイソクロナス OUT 転送時にインターバルフレーム内に OUT トークンを正常受信できない。

インターバルのカウントは、SOF の受信時または補完された SOF で行われるので、SOF が破損していても等時性を保つことができます。設定できるフレーム間隔は 2^{IITV} フレームです。

(1)　デバイスコントローラモードでのカウンタの初期化

USBFS は、以下の条件でインターバルカウンタを初期化します。

- パワーオンリセット：
  PIPEPERI.IITV[2:0] ビットが初期化されます。
- ACLRM ビットを使用した FIFO バッファの初期化：
  IITV[2:0] ビットは初期化されませんが、カウント値は初期化されます。

インターバルカウンタが初期化されると、パケットを正常に転送した後に、下記のどちらかの条件でインターバルのカウントを開始します。

- PID = BUF のときに IN トークンに対してデータを送信後、SOF を受信した場合
- PID = BUF のときに OUT トークンに対してデータを受信後、SOF を受信した場合

なお、下記の条件ではインターバルカウンタは初期化されません。

- PID[1:0] ビットを NAK または STALL に設定した場合
  インターバルタイマは停止しません。USBFS は次のインターバルにトランザクションの実行を試みます。
- USB バスリセットまたは USBFS サスペンドの場合
  IITV[2:0] ビットは初期化されません。SOF を受信すると、SOF 受信前の設定値からインターバルカウンタのカウントを開始します。

(2)　ホストコントローラモードでのインターバルカウントと転送制御

USBFS は、PIPEPERI.IITV[2:0] ビットの設定値に従って、トークン発行間隔を制御します。具体的には、USBFS は 2^{IITV} 回のフレームに 1 回の間隔で、選択パイプに対するトークンを発行します。

USBFS は、ソフトウェアで PID[1:0] ビットを BUF に設定したフレームの次のフレームから、トークン発行間隔のカウントを開始します。

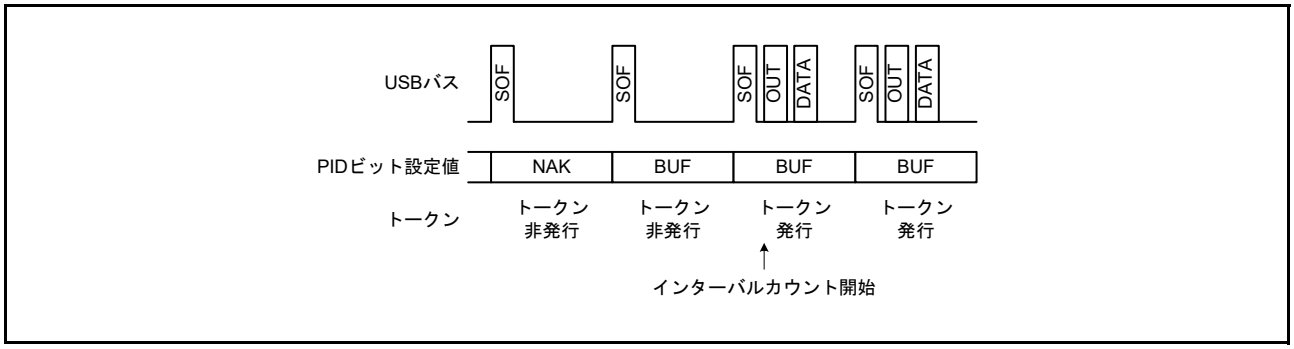


図 28.13　IITV = 0 の場合のトークン発行

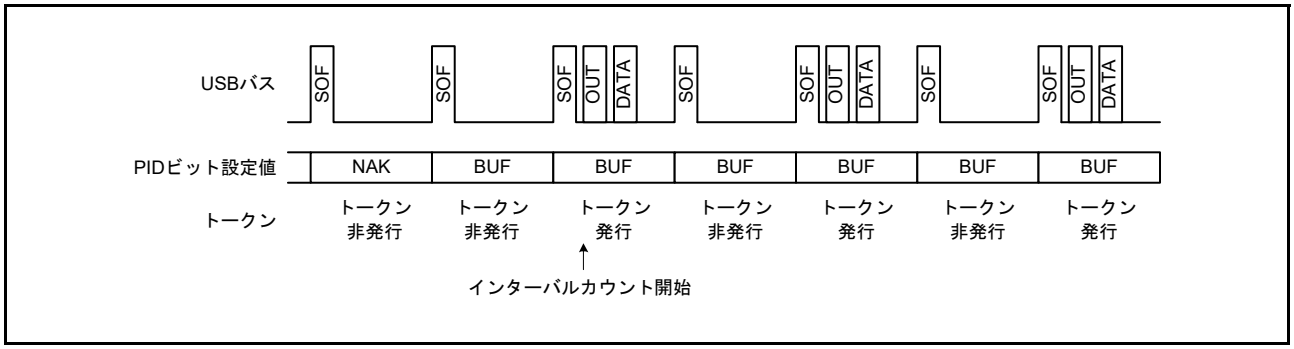


図 28.14　IITV = 1 の場合のトークン発行

選択パイプの転送タイプがアイソクロナスの場合、USB はトークン発行間隔の制御に付随して以下の動作を行います。NRDY 割り込み発生条件が成立する場合でも、USB はトークンを発行します。

(a)　選択パイプがアイソクロナス IN 転送パイプの場合

USBFS は、IN トークンを発行しても周辺デバイスからパケットを正常受信しなかった場合（無応答やパケットエラーの場合）、NRDY 割り込みを発生させます。

CPU または DMAC/DTC が FIFO バッファからデータを読み出すのが遅いことが原因で FIFO バッファがフルであるため、USBFS がデータを受信できない状態で IN トークン発行タイミングに至った場合、USBFS は FRMNUM.OVRN ビットを 1 にして、NRDY 割り込みを発生させます。

(b)　選択パイプがアイソクロナス OUT 転送パイプの場合

CPU または DMAC/DTC が FIFO バッファにデータを書き込むのが遅いことが原因で、送信可能なデータが FIFO バッファにない状態で OUT トークン発行タイミングに至った場合、USBFS は OVRN ビットを 1 にして、NRDY 割り込みを発生させ、Zero-Length パケットを送信します。

以下のいずれかの条件で、トークン発行間隔がリセットされます。

- USBFS がリセット端子でリセットされた場合
  IITV[2:0] ビットが初期化されます。
- ソフトウェアで PIPEnCTR.ACLRM ビットを 1 にした場合

(3)　デバイスコントローラモードでのインターバルカウントと転送制御

(a)　選択パイプがアイソクロナス OUT 転送パイプの場合

PIPEPERI.IITV[2:0] ビットに設定したインターバル中にデータパケットを受信できなかった場合、USBFS は NRDY 割り込みを発生させます。

データパケットに CRC エラーなどのエラーが含まれていた場合や、FIFO バッファがフルのために USBFS がデータを受信できなかった場合も、USBFS は NRDY 割り込みを発生させます。

NRDY 割り込みの発生タイミングは、SOF パケットの受信時です。SOF パケットが破損している場合でも、内部補完機能によって、SOF パケットの受信時に割り込みを発生させることが可能です。ただし、IITV ビットが 0 以外になっていると、インターバルカウント開始後のインターバルごとに、USBFS は SOF パケットの受信時に NRDY 割り込みを発生させます。

インターバルタイマの起動後、ソフトウェアで PID[1:0] ビットを NAK に設定した場合は、USBFS は SOF パケットを受信しても NRDY 割り込みを発生させません。

インターバルのカウント開始タイミングは、下記のように、IITV[2:0] ビットの設定値によって異なります。

- IITV[2:0] ビット = 0 の場合：
  選択パイプの PID[1:0] ビットを 01b（BUF）に変更した時点でインターバルのカウントを開始します。

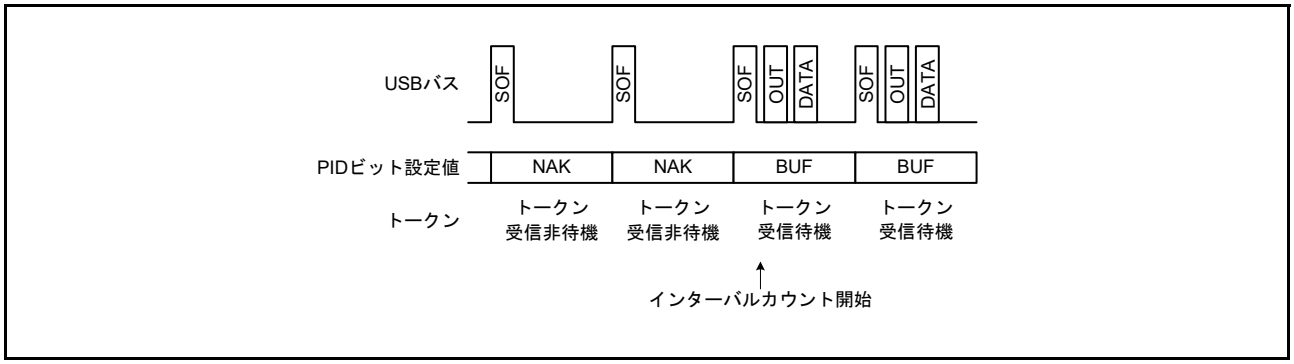


図 28.15　フレームとトークン受信待機の関係（IITV = 0 の場合）

- IITV ≠ 0 の場合:選択パイプの PID[1:0] ビットが BUF に変更された後､最初のデータパケットの正常受信完了時にインターバルのカウントが開始されます

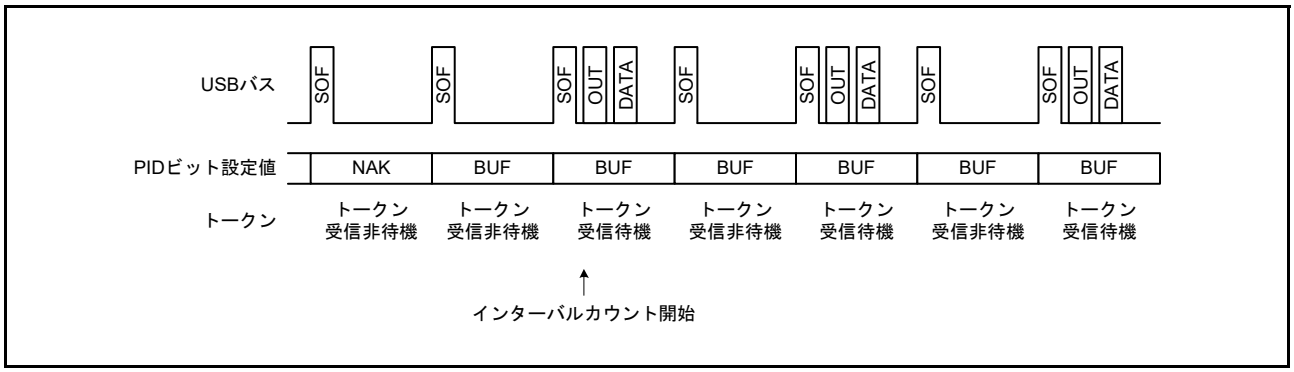


図 28.16　フレームとトークン受信待機の関係（IITV ≠ 0 の場合）

(b)　選択パイプがアイソクロナス IN 転送パイプの場合

この場合、PIPEPERI.IFIS ビットを 1 にする必要があります。IFIS ビットが 0 の場合、PIPEPERI.IITV[2:0] ビットの設定値とは無関係に、USBFS は受信したトークンに応答してデータパケットを送信します。

IFIS ビットが 1 で、FIFO バッファに送信可能なデータがある場合、IITV[2:0] ビットに設定したインターバルでフレーム中に IN トークンを受信できないと、USBFS は FIFO バッファをクリアします。

IN トークンに CRC エラーなどのバスエラーが含まれているため、IN トークンを正常受信できなかった場合も、USBFS は FIFO バッファをクリアします。

FIFO バッファクリアのタイミングは、SOF パケット受信時です。SOF パケットが破損している場合でも、内部補完機能によって、SOF パケットの受信時に FIFO バッファをクリアすることが可能です。

インターバルのカウント開始タイミングは、OUT 転送の場合と同様に、IITV[2:0] ビットの設定値によって異なります。

デバイスコントローラモードでは、以下のいずれかの条件でインターバルがカウントされます。

- USBFS がハードウェアリセットされた場合（IITV[2:0] ビットも 000b になります）
- ソフトウェアで PIPEnCTR.ACLRM ビットを 1 にした場合
- USBFS が USB バスリセットを検出した場合

(4)　デバイスコントローラモードでのアイソクロナス転送用送信データセットアップ

デバイスコントローラモードでの USBFS を用いたアイソクロナスデータ送信では、FIFO バッファにデータが書き込まれた後、SOF パケット検出後の最初のフレームでデータパケットの送出が可能になります。このアイソクロナス転送用送信データのセットアップ機能により、送信を開始したフレームを特定することが可能です。

ダブルバッファモードを使用している場合、両方のバッファへの書き込みが完了した後であっても、送信可能なバッファは、先にデータ書き込みが終了したバッファだけです。このため、複数の IN トークンを受信しても、送出される FIFO バッファデータは 1 パケット分のみとなります。

IN トークン受信時に FIFO バッファがデータを送信できる状態であれば、データが転送されて正常応答が返されます。ただし、FIFO バッファがデータを送信できない状態であれば、Zero-Length パケットが送出されてアンダーランエラーが発生します。

図 28.17 に、IITV = 0（毎フレーム）に設定した場合のアイソクロナス転送用送信データのセットアップ機能を用いた送信例を示します。

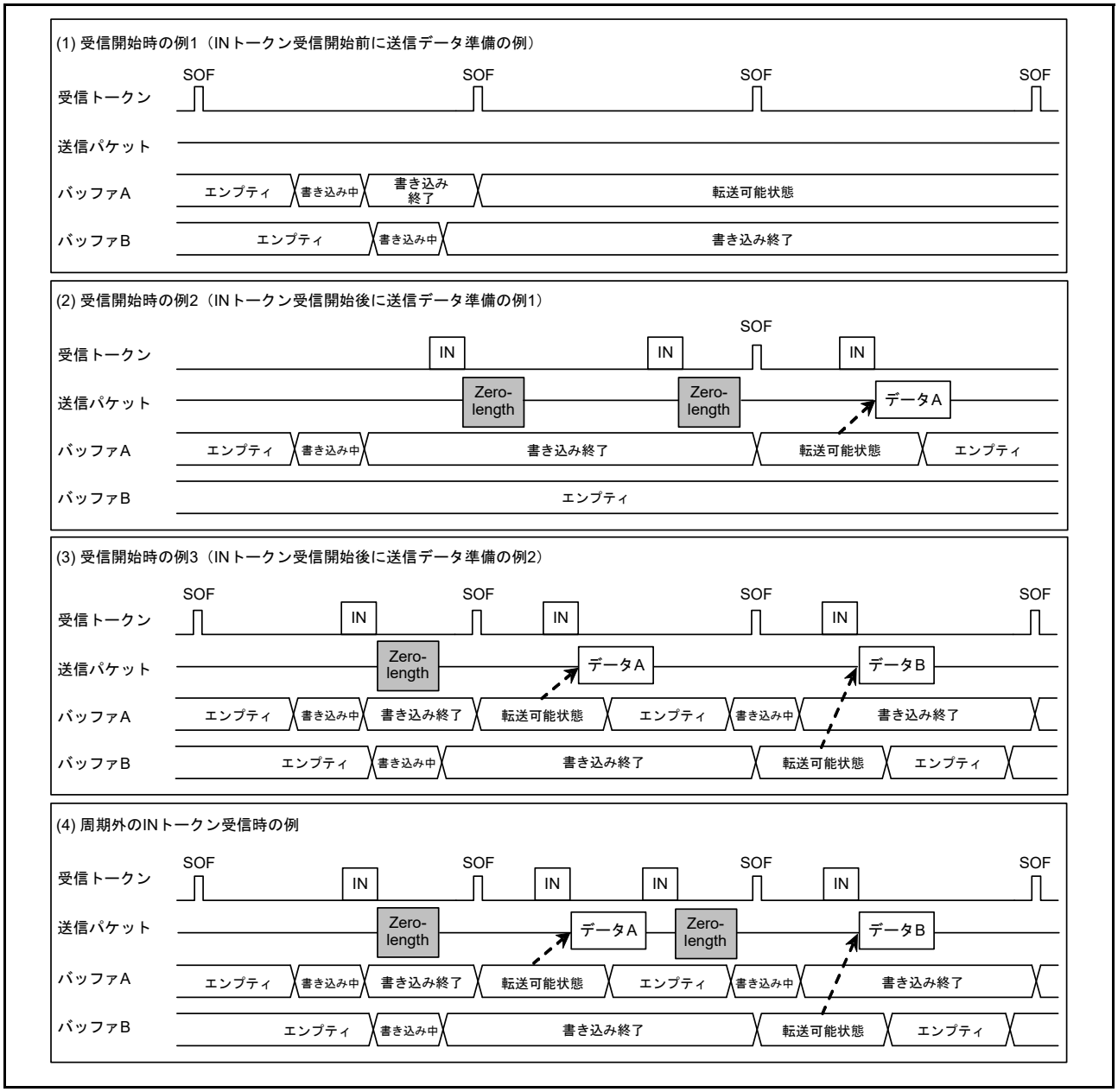


図 28.17　　データセットアップ動作例

(5)　デバイスコントローラモードでのアイソクロナス転送用送信バッファフラッシュ

デバイスコントローラモードでのアイソクロナスデータ転送時に、USBFS がインターバルフレーム内に IN トークンを受信しないまま、次フレームの SOF パケットを受信した場合は、USBFS はそれを IN トークン破損として扱い、送信可能状態となっているバッファをクリアし、そのバッファを書き込み可能な状態とします。

ダブルバッファモードを使用している場合、両方のバッファへの書き込みが完了していれば、クリアされた FIFO バッファ内のデータが同インターバルフレームで送信されたものとみなして、SOF パケット受信時にクリアされていない FIFO バッファを送信可能な状態とします。

バッファフラッシュ機能のタイミングは、以下のように、PIPEPERI.IITV[2:0] ビットの設定値によって異なります。

- IITV = 0 の場合：
  パイプが有効となった後の最初のフレームから、バッファフラッシュ動作を開始します。
- IITV ≠ 0 の場合：
  最初の正常なトランザクション以降に、バッファフラッシュ動作を開始します。

図 28.18 にバッファフラッシュの例を示します。インターバルフレーム前に予期しないトークンを受信した場合、データセットアップ状態に応じて、USBFS は書き込みデータを送出するか、またはアンダーランエラーとして Zero-Length パケットを送出します。

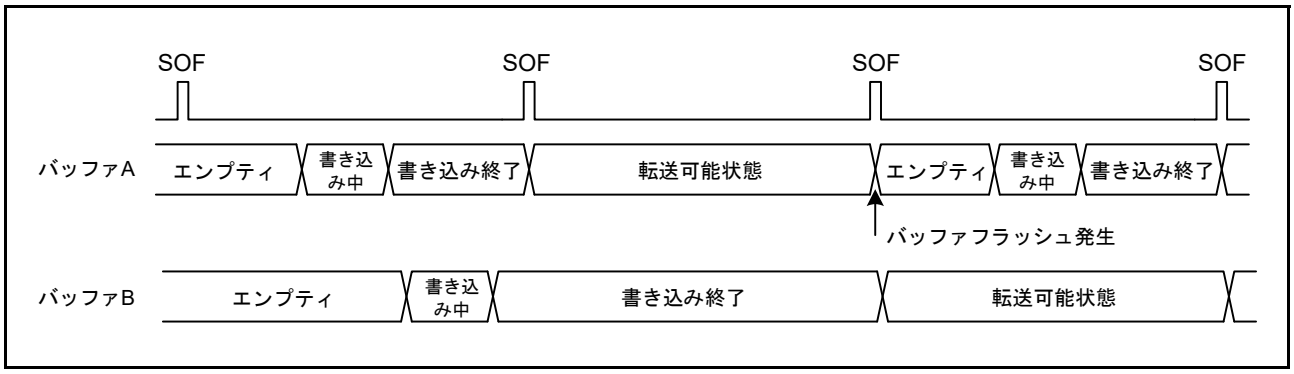


図 28.18　　バッファフラッシュ動作例

図 28.19 に、インターバルエラーの発生例を示します。この図に示すように、インターバルエラーには 5 種類あります。図中の①のタイミングでインターバルエラーが発生し、バッファフラッシュ機能が動作します。

IN 転送時にインターバルエラーが発生した場合は、バッファフラッシュ機能が動作します。OUT 転送時にインターバルエラーが発生した場合は、NRDY 割り込みが発生します。FRMNUM.OVRN ビットを用いて、この NRDY 割り込みであるか、または受信パケットエラーやオーバーランエラーによる NRDY 割り込みであるかを識別してください。

図中に網掛けで示したトークンに対しては、FIFO バッファの状態に応じて応答が返されます。

- IN 方向の場合：
  - バッファがデータを転送できる状態であれば、データが転送されて正常応答が返される
  - バッファがデータを転送できない状態であれば、Zero-Length パケットが送信されてアンダーランエラーが発生する
- OUT 方向の場合：
  - バッファがデータを受信できる状態であれば、データが受信されて正常応答が返される
  - バッファがデータを受信できない状態であれば、受信データが破棄されてオーバーランエラーが発生する

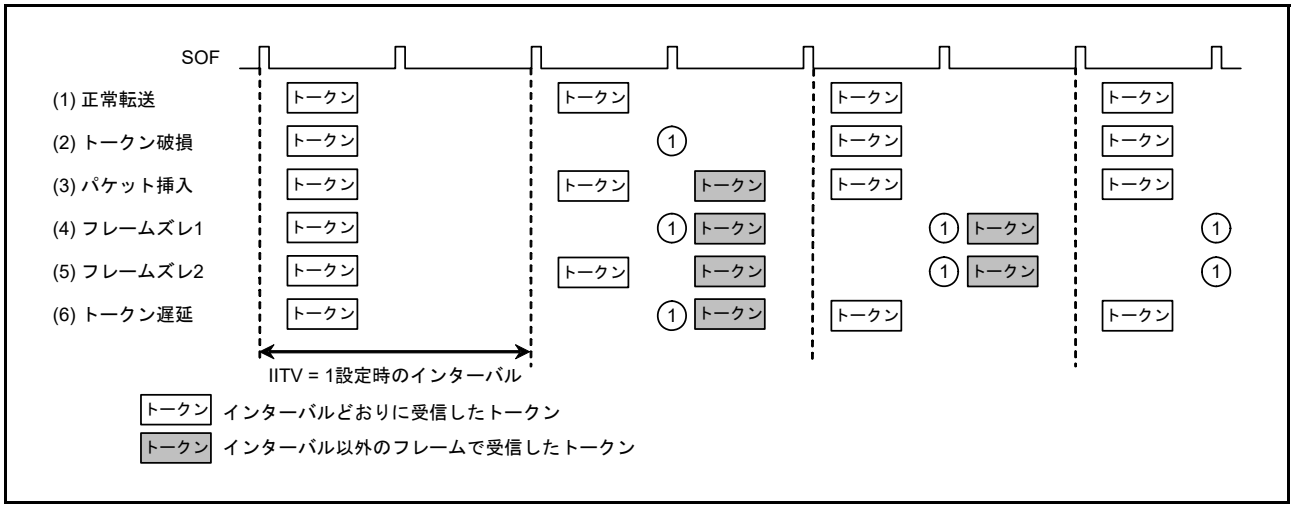


図 28.19　IITV = 1 の場合のインターバルエラー発生例

28.3.13　SOF 補完機能

デバイスコントローラモードでは、SOF パケットの破損または欠落のために 1ms 間隔でパケット受信ができなかった場合、USBFS が SOF を補完します。SOF 補完は、SYSCFG.USBE ビットと SYSCFG.SCKE ビットが 1 のときに、SOF パケットの受信時に開始します。下記の条件で、補完機能が初期化されます。

- MCU リセット
- USB バスリセット
- Suspended ステート検出

SOF 補完の動作は以下のとおりです。

- SOF パケットを受信するまでは補完機能は動作しない
- 最初の SOF パケット受信時に、48MHz の内部クロックで 1ms をカウントして補完を実行する
- 2 回目以降の SOF パケット受信時には、前回の受信間隔で補完を実行する
- Suspended ステート時または USB バスリセット時には、補完を実行しない

USBFS は、SOF パケット受信で制御される下記の機能を動作させます。SOF パケットが欠落していても、これらの機能は SOF 補完によって正常に動作します。

- フレーム番号の更新
- SOFR 割り込みタイミング
- アイソクロナス転送インターバルカウント

フルスピード動作時に SOF パケットが欠落していた場合、FRMNUM.FRNM[10:0] ビットは更新されません。

28.3.14　パイプスケジュール

28.3.14.1　トランザクション発行条件

ホストコントローラモードにおいて、DVSTCTR0.UACT ビットを 1 にすると、USBFS は表 28.26 に示す条件でトランザクションを発行します。

表 28.26　トランザクション発行条件

トランザクション	発行条件				
	DIR	PID	IITV0	バッファ状態	SUREQ
Setup	—（注1）	—（注1）	—（注1）	—（注1）	1設定
コントロール転送のデータステージ、ステータスステージ、バルク転送	IN	BUF	無効	受信領域あり	—（注1）
	OUT	BUF	無効	送信データあり	—（注1）
インタラプト転送	IN	BUF	有効	受信領域あり	—（注1）
	OUT	BUF	有効	送信データあり	—（注1）
アイソクロナス転送	IN	BUF	有効	（注2）	—（注1）
	OUT	BUF	有効	（注3）	—（注1）

注 1.　表中の「ー」は、トークンの発行に関係のない条件であることを意味します。「有効」とは、インタラプト転送とアイソクロナス転送において、インターバルカウンタによる転送フレームでのみトランザクションを発行することを意味します。「無効」とは、インターバルカウンタにかかわらず、トランザクションを発行することを意味します。
注 2.　受信領域の有無にかかわらず、トランザクションを発行します。ただし、受信領域がない場合、受信データを破棄します。
注 3.　送信データの有無にかかわらず、トランザクションを発行します。ただし、送信データがない場合、Zero-Length パケットを送信します。

28.3.14.2　転送スケジュール

この節では、USBFS のフレーム内の転送スケジューリング方法について説明します。USBFS は SOF を送信後、以下に示す順序で転送を行います。

1. 周期的転送の実行：
   パイプ 1 →パイプ 2 →パイプ 6 →パイプ 7 →パイプ 8 →パイプ 9 の順にパイプを検索し、アイソクロナス転送またはインタラプト転送のトランザクション発行が可能なパイプがあれば、トランザクションを発行します。
2. コントロール転送の SETUP トランザクション：
   DCP を確認して、SETUP トランザクションが可能であれば送信します。
3. バルク転送、コントロール転送データステージ、およびコントロール転送ステータスステージの実行：
   DCP →パイプ 1 →パイプ 2 →パイプ 3 →パイプ 4 →パイプ 5 の順にパイプを検索し、バルク転送、コントロール転送データステージ、コントロール転送ステータスステージのトランザクション発行が可能なパイプがあれば、トランザクションを発行します。
   トランザクションが発行されると、周辺デバイスからの応答が ACK であるか NAK であるかにかかわらず、処理は次のパイプのトランザクションに移ります。また、フレーム内に転送を行う時間があれば、ステップ 3. を繰り返します。

28.3.14.3　USB 通信許可

DVSTCTR0.UACT ビットを 1 にすると、SOF の送信が開始され、トランザクションの発行が可能となります。UACT ビットを 0 にすると、SOF の送信が停止して、Suspended ステートとなります。UACT ビットを 1 から 0 に変更すると、次の SOF を送信した後、処理が停止します。

28.3.15　バッテリチャージング検出処理

バッテリチャージング仕様で規定されている、データコンタクト検出（D+ ラインコンタクトチェック）、一次検出（チャージャ検出）、および二次検出（チャージャ検証）の処理を制御することが可能です。以下では、個々のファンクションデバイスとホストデバイスに求められる動作について説明します。

28.3.15.1　デバイスコントローラモードでの処理

USBFS モジュールをバッテリチャージ用のポータブルデバイスとして動作させる場合、以下の処理が必要です。

1. データライン（D+/D-）がコンタクトしたタイミングを検出し、一次検出処理を開始します。
2. 一次検出の開始後、マスク処理のため 40ms 待機してから D- の電圧レベルをチェックし、一次検出結果を確認します。
3. 一次検出中にチャージャが検出された場合は、二次検出を開始します。
4. 二次検出の開始後、マスク処理のため 40ms 待機してから D+ の電圧レベルをチェックし、二次検出結果を確認します。

ステップ 1 では、VBINT ビットと VBSTS ビットで VBUS を検出した後、以下の処理を行う必要があります。

1. 300 ～ 900ms 待機し、その後、USBBCCTRL0 レジスタの VDPSRCE0 ビットと IDMSINKE0 ビットを設定します。
2. IDPSRCE0 ビットを設定します。
3. D+ ラインが High から Low へ変化したことを LNST ビットで検出した後、IDPSRCE0 ビットを 0 にクリアし、VDPSRCE0 ビットと IDMSINKE0 ビットを同時に設定します。(注 1)

ステップ 2 では、VDPSRCE0 ビットと IDMSINKE0 ビットを設定して、40ms 待機した後、CHGDETSTS0 ビットで一次検出結果を検証してください。(注 2)

ステップ 3 では、ステップ 2 で CHGDETSTS0 ビットを設定した場合に、チャージャの検出を検証した後、VDPSRCE0 ビットと IDMSINKE0 ビットをクリアし、VDMSRCE0 ビットと IDPSINKE0 ビットを設定してください。

ステップ 4 では、VDMSRCE0 ビットと IDPSINKE0 ビットを設定して、40ms 待機した後、PDDETSTS0 ビットで二次検出結果を検証してください。

図 28.20 に、この処理フローを示します。

注 1.　バッテリチャージング仕様は、データコンタクト検出（D+/D- ラインのコンタクトチェック）に関して 2 つの実施方法を記述しています。1 つは、D+ ラインに 7 ～ 13μA の電流を印加することで D+ ラインを Logic High に保持し、D+/D- ラインがターゲットと接続したとき、ホストデバイスのプルダウン抵抗により生じる Logic Low への変化を検出する方法です。もう 1 つは、VBUS を検出した後、300 ～ 900ms 待機する方法です。

注 2.　一次検出中に、D- ラインの電圧が 0.25 ～ 0.4V 以上かつ 0.8 ～ 2.0V 以下であることが検出されると、ターゲットデバイスが、バッテリチャージ用ホストデバイス（チャージングダウンストリームポート）として認識されます。使用中の USB 送信に対して、CHGDETSTS0 ビットで D- ラインの電圧が 0.25 ～ 0.4V 以上であることだけが判明した場合、必要に応じて、LNST ビットを用いて D- ラインの電圧が 0.8 ～ 2.0V 以下であることをチェックするための処理を追加してください。

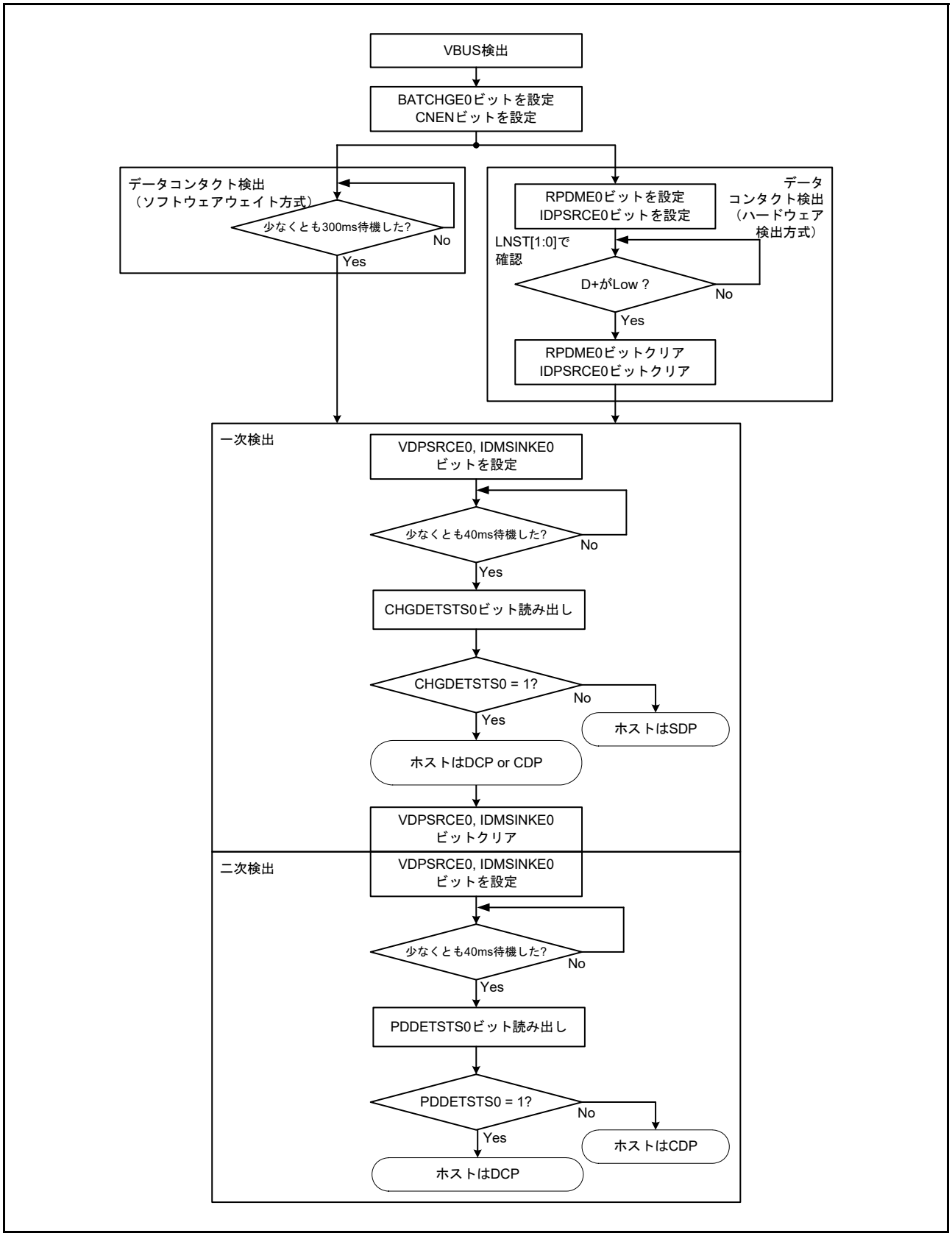


図 28.20　ポータブルデバイスとして動作時の処理フロー

28.3.15.2 ホストコントローラ選択時の処理

USBFS モジュールをバッテリチャージ用のチャージングダウンストリームポートとして動作させる場合、以下の処理が必要です。

1. VBUS のドライブを開始します。
2. ポータブルデバイス検出回路を有効にします。
3. ポータブルデバイス検出信号をモニタし、検出信号が High であれば D- ラインのドライブを開始します。
4. ポータブルデバイス検出信号のレベルが Low になるタイミングを検出し、D- ラインのドライブを停止します。

バッテリチャージング仕様に関連して、以下の処理も利用可能です。

a. デタッチ検出後、200ms以内にD-ラインのドライブを開始する。

b. アタッチ検出後、10ms以内にD-ラインのドライブを停止する。

28.3.15.1 デバイスコントローラモードでの処理で説明したように、ポータブルデバイスが一次検出を検出できるようにするには、D- ラインをドライブする必要があります。ステップ 1 ～ 4 は、ハードウェアがポータブルデバイス検出機能を備えている場合の手順です。この方法では、ポータブルデバイスが検出されたときに D- ラインをドライブします。

ステップ a と b は、ポータブルデバイス機能がハードウェアに備わっていない場合や利用できない場合の手順です。ポータブルデバイスの検出とは無関係に、D- ラインがデタッチ状態でドライブされ、アタッチ状態ではドライブされません。バッテリチャージング仕様では、これらの方法のどちらかを選択して用いることができます。

ステップ 3 と 4 では、ポータブルデバイス検出信号の変化を PDDETINT 割り込みを利用して検出した後、PDDETSTS0 ビットを読み出すことで現在の信号状態を確認することが可能です。ステップ a と b は、ソフトウェアタイマでのみ実施可能です。

図 28.21 に、ステップ 1 ～ 4 の処理フローと、ステップ a ～ b の処理フローをそれぞれ示します。

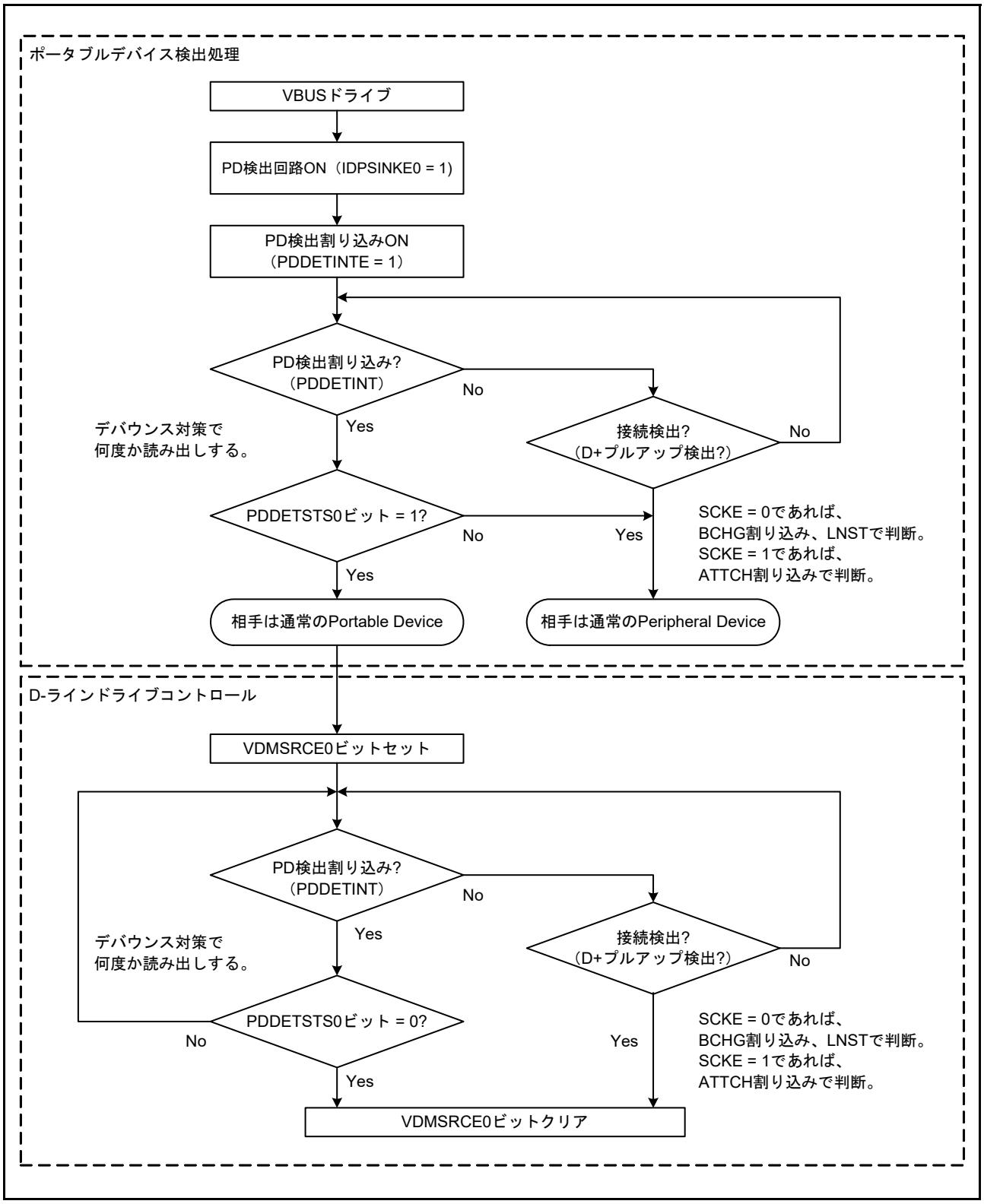


図 28.21　チャージングダウンストリームポートとして動作する場合の処理フロー（ステップ 1 ～ 4）

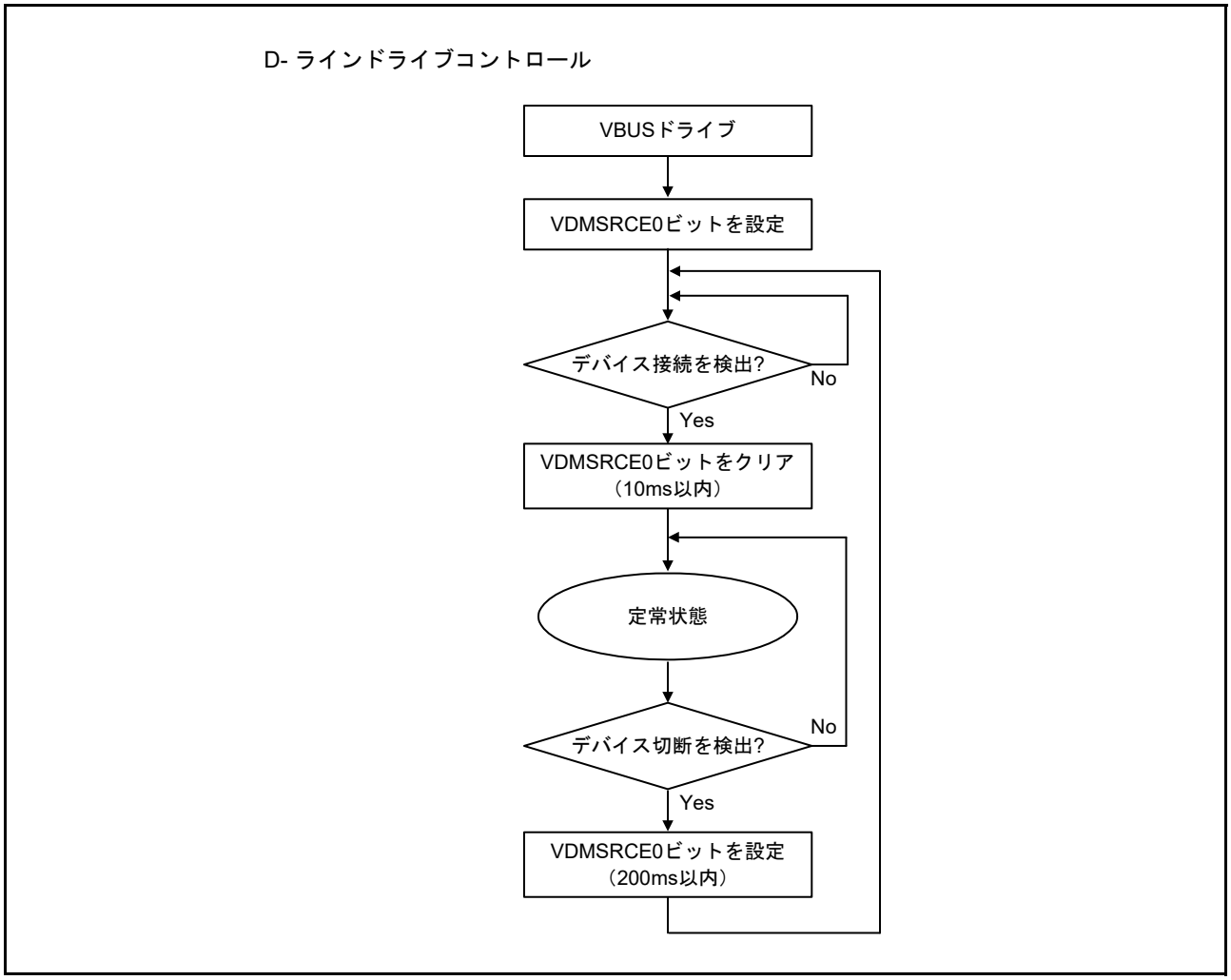


図 28.22　チャージングダウンストリームポートとして動作する場合の処理フロー（ステップ a ～ b）

28.4 使用上の注意事項

28.4.1 モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタB（MSTPCRB）によって、USBFSの動作を禁止または許可することが可能です。リセット後の初期状態では、USBFSの動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

28.4.2 ソフトウェアスタンバイモード終了時の割り込みステータスレジスタのクリア

ソフトウェアスタンバイモードでは入力バッファが常に有効となるため、下記条件下では、予期せぬ割り込みが発生する場合があります。

- 通常モードで、割り込みが許可されている
- ソフトウェアスタンバイモードで、割り込みが禁止されている
- ソフトウェアスタンバイを解除する端子の入力レベルがソフトウェアスタンバイモードで変更されている

これらの条件下では、割り込みステータスレジスタの対応する割り込みフラグが、予期せず設定されることがあります。MCUがソフトウェアスタンバイモードを終了した後に、予期せぬ割り込みが割り込みコントローラに送信される場合があります。この問題を避けるために、解除シーケンスではINTSTS0およびINTSTS1レジスタを必ずクリアしてください。

28.4.3 ポート機能設定後の割り込みステータスレジスタのクリア

入力バッファは、PmnPFS.PSELおよびPmnPFS.PMRポートの設定前に無効にされるため、内部信号がHighまたはLowに固定されます。ポートの設定後に入力バッファが有効になると、外部端子の状態がMCUに伝播します。このとき、予期せぬ割り込みが発生する場合があり、INTSTS0レジスタとINTSTS1レジスタのVBINTおよびOVRCRビットなどの割り込みステータフラグが1になります。誤作動を回避するために、ポート設定後はINTSTS0およびINTSTS1レジスタを必ずクリアしてください。

29.　シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）

29.1　概要

シリアルコミュニケーションインタフェース（SCI）は、下記の 5 種類の調歩同期式および同期式シリアルインタフェースとして設定が可能です。

- 調歩同期式インタフェース（UART および調歩同期式通信インタフェースアダプタ（ACIA））
- 8 ビットクロック同期式インタフェース
- 簡易 IIC（マスタのみ）
- 簡易 SPI
- スマートカードインタフェース

スマートカードインタフェースは、電子信号と伝送プロトコルに関して ISO/IEC 7816-3 規格に準拠しています。各 SCI チャネルは FIFO バッファを内蔵しており、連続した全二重通信が可能です。また、内蔵のボーレートジェネレータを用いて、データの転送速度を個別に設定することが可能です。表 29.1 に SCI の仕様を、図 29.1 にそのブロック図を、表 29.2 に入出力端子をモードごとに示します。

注 .　本章に記載している PCLK とは PCLKA を指します。

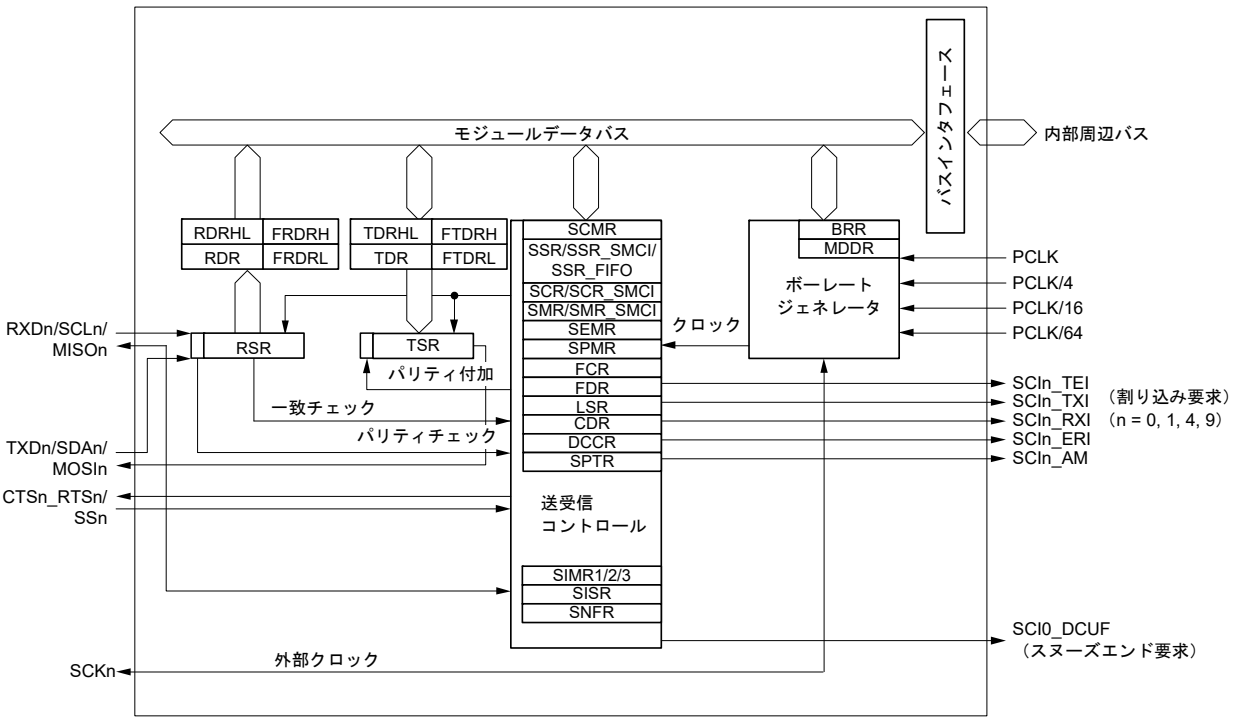
表 29.1　SCIの仕様 (1/2)

項目	内容
シリアル通信方式	• 調歩同期式 • クロック同期式 • スマートカードインタフェース • 簡易IIC • 簡易SPI
転送速度	内蔵のボーレートジェネレータにより任意のビットレートを設定可能
全二重通信	送信部：ダブルバッファ構成による連続送信が可能 受信部：ダブルバッファ構成による連続受信が可能
入出力端子	表 29.2を参照してください。
データ転送	LSBファースト／MSBファーストの選択が可能
割り込み要因	送信終了、送信データエンプティ、受信データフル、受信エラー、受信データレディ、およびアドレス一致 開始条件／再開始条件／停止条件の生成完了（簡易IICモード用）
モジュールストップ機能	チャネルごとにモジュールストップ状態の設定が可能
スヌーズ終了要求	SCI0アドレス不一致（SCI0_DCUF）

表 29.1　SCIの仕様 (2/2)

項目		内容
調歩同期式モード	データ長	7ビット／8ビット／9ビット
	送信ストップビット	1ビット／2ビット
	パリティ機能	偶数パリティ／奇数パリティ／パリティなし
	受信エラー検出機能	パリティエラー、オーバーランエラー、フレーミングエラー
	ハードウェアフロー制御	CTSn_RTSn端子を用いた送受信制御が可能
	送受信	1段レジスタまたは16段FIFOの選択が可能 （SCI0およびSCI1のみFIFO対応）
	アドレス一致	受信データとコンペアマッチレジスタの値が一致したとき、割り込み要求／イベント出力の発行が可能
	アドレス不一致（SCI0のみ）受信データ	受信データとコンペアマッチレジスタの値が一致しないとき、スヌーズ終了要求の発行が可能
	スタートビットの検出	Low検出または立ち下がりエッジ検出の選択が可能
	ブレークの検出	SPTRレジスタを読み出すことで、フレーミングエラーからのブレークの検出が可能
	クロックソース	内部クロックまたは外部クロックの選択が可能
	倍速モード	ボーレートジェネレータ倍速モードの選択が可能
	マルチプロセッサ通信機能	複数プロセッサ間のシリアル通信機能が有効
	ノイズ除去	RXDn端子入力経路にデジタルノイズフィルタを内蔵
クロック同期式モード	データ長	8ビット
	受信エラー検出機能	オーバーランエラー
	クロックソース	内部クロック（マスタモード）または外部クロック（スレーブモード）の選択が可能
	ハードウェアフロー制御	CTSn_RTSn端子を用いた送受信制御が可能
	送受信	1段レジスタまたは16段FIFOの選択が可能
スマートカードインタフェースモード	エラー処理	受信中にパリティエラーを検出するとエラーシグナルを自動送出
		送信中にエラーシグナルを受信するとデータを自動再送信
	データタイプ	ダイレクトコンベンション／インバースコンベンションをサポート
簡易IICモード	通信フォーマット	I^2Cバスフォーマット（MSBファーストのみ）
	動作モード	マスタ（シングルマスタ動作のみ）
	転送速度	最大400kbps
	ノイズ除去	SCLn端子とSDAn端子の入力経路にデジタルノイズフィルタを内蔵し、ノイズ除去幅の調整が可能
簡易SPIモード	データ長	8ビット
	エラーの検出	オーバーランエラー
	クロックソース	内部クロック（マスタモード）または外部クロック（スレーブモード）の選択が可能
	SS入力端子機能	SSn端子をHighにすることで、出力端子をハイインピーダンスにすることが可能
	クロック設定	クロック位相、クロック極性の設定を4種類から選択が可能
ビットレートモジュレーション機能		内蔵ボーレートジェネレータの出力補正により誤差の低減が可能
イベントリンク機能		受信エラーまたはエラーシグナル検出のためのエラーイベント出力（SCIn_ERI（注1））
		受信データフルイベント出力（SCIn_RXI（注1）（注2））
		送信データエンプティイベント出力（SCIn_TXI（注1）（注2））
		送信終了イベント出力（SCIn_TEI（注1）（注2））
		アドレス一致イベント出力（SCIn_AM（注1））

注 1.　チャネル番号（n = 0, 1, 4, 9）
注 2.　本イベントリンク機能は、調歩同期式モードにおいて FIFO 動作が選択された場合、使用禁止となります。



RSR：	レシーブシフトレジスタ	RDRHL：	受信9ビットデータレジスタ
RDR：	レシーブデータレジスタ	FRDRH/L（注1）：	受信FIFOデータレジスタ
TSR：	トランスミットシフトレジスタ	TDRHL：	送信9ビットデータレジスタ
TDR：	トランスミットデータレジスタ	FTDRH/L（注1）：	送信FIFOデータレジスタ
SMR/SMR_SMCI：	シリアルモードレジスタ	FCR（注1）：	FIFO制御レジスタ
SCR/SCR_SMCI：	シリアルコントロールレジスタ	FDR（注1）：	FIFOデータ数レジスタ
SSR/SSR_SMCI/SSR_FIFO（注1）：	シリアルステータスレジスタ	LSR（注1）：	ラインステータスレジスタ
SCMR：	スマートカードモードレジスタ	CDR：	コンペアマッチデータレジスタ
BRR：	ビットレートレジスタ	DCCR：	データコンペアマッチコントロールレジスタ
MDDR：	モジュレーションデューティレジスタ	SPTR：	シリアルポートレジスタ
SEMR：	シリアル拡張モードレジスタ		
SPMR：	SPIモードレジスタ		
SNFR：	ノイズフィルタ設定レジスタ		
SIMR1/2/3：	I^2Cモードレジスタ1/2/3		
SISR：	I^2Cステータスレジスタ		

注1.　SCI0およびSCI1のみ

図 29.1　SCI のブロック図

表 29.2　SCIの入出力端子

チャネル	端子名	入出力	機能
SCI0	SCK0	入出力	SCI0のクロック入出力端子
	RXD0/SCL0/ MISO0	入出力	SCI0の受信データ入力端子 SCI0のIICクロック入出力端子 SCI0のスレーブ送出データ入出力端子
	TXD0/SDA0/ MOSI0	入出力	SCI0の送信データ出力端子 SCI0のIICデータ入出力端子 SCI0のマスタ送出データ入出力端子
	SS0/CTS0_RTS0	入出力	SCI0のチップセレクト入力端子、アクティブLow SCI0の送受信開始制御用入出力端子、アクティブLow
SCI1	SCK1	入出力	SCI1のクロック入出力端子
	RXD1/SCL1/ MISO1	入出力	SCI1の受信データ入力端子 SCI1のIICクロック入出力端子 SCI1のスレーブ送出データ入出力端子
	TXD1/SDA1/ MOSI1	入出力	SCI1の送信データ出力端子 SCI1のIICデータ入出力端子 SCI1のマスタ送出データ入出力端子
	SS1/CTS1_RTS1	入出力	SCI1のチップセレクト入力端子、アクティブLow SCI1の送受信開始制御用入出力端子、アクティブLow
SCI4	SCK4	入出力	SCI4のクロック入出力端子
	RXD4/SCL4/ MISO4	入出力	SCI4の受信データ入力端子 SCI4のIICクロック入出力端子 SCI4のスレーブ送出データ入出力端子
	TXD4/SDA4/ MOSI4	入出力	SCI4の送信データ出力端子 SCI4のIICデータ入出力端子 SCI4のマスタ送出データ入出力端子
	SS4/CTS4_RTS4	入出力	SCI4のチップセレクト入力端子、アクティブLow SCI4の送受信開始制御用入出力端子、アクティブLow
SCI9	SCK9	入出力	SCI9のクロック入出力端子
	RXD9/SCL9/ MISO9	入出力	SCI9の受信データ入力端子 SCI9のIICクロック入出力端子 SCI9のスレーブ送出データ入出力端子
	TXD9/SDA9/ MOSI9	入出力	SCI9の送信データ出力端子 SCI9のIICデータ入出力端子 SCI9のマスタ送出データ入出力端子
	SS9/CTS9_RTS9	入出力	SCI9のチップセレクト入力端子、アクティブLow SCI9の送受信開始制御用入出力端子、アクティブLow

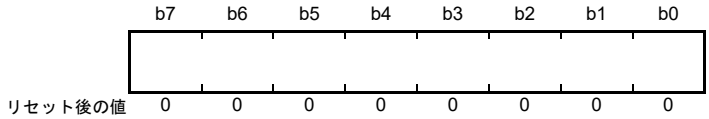
29.2　レジスタの説明

29.2.1　受信シフトレジスタ（RSR）

RSR レジスタは、RXDn 端子から入力されたシリアルデータをパラレルデータに変換するための受信用シフトレジスタです。1 フレーム分のデータを受信すると、データは自動的に RDR レジスタ、RDRHL レジスタ、または受信 FIFO へ転送されます。CPU から RSR レジスタに直接アクセスすることはできません。

29.2.2　受信データレジスタ（RDR）

アドレス　SCI0.RDR 4007 0005h, SCI1.RDR 4007 0025h, SCI4.RDR 4007 0085h, SCI9.RDR 4007 0125h



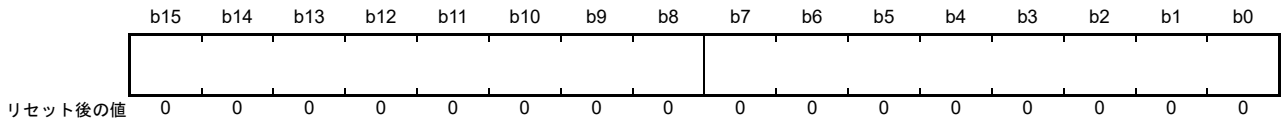
RDR レジスタは、受信データを格納するための 8 ビットのレジスタです。1 フレーム分のシリアルデータを受信すると、受信データは RSR レジスタから本レジスタへ転送され、RSR レジスタは次のデータを受信できるようになります。RSR レジスタと RDR レジスタはダブルバッファとして機能するため、連続受信動作が可能になります。

RDR レジスタの読み出しは、受信データフル割り込み（SCIn_RXI）要求が発生したときに 1 回だけ行ってください。

注 .　受信データを RDR から読み出す前に次のフレームのデータを受け取ると、オーバーランエラーになります。CPU から RDR レジスタに書き込むことはできません。

29.2.3　受信 9 ビットデータレジスタ（RDRHL）

アドレス　SCI0.RDRHL 4007 0010h, SCI1.RDRHL 4007 0030h, SCI4.RDRHL 4007 0090h, SCI9.RDRHL 4007 0130h



RDRHL レジスタは、受信データを格納するための 16 ビットのレジスタです。調歩同期式モードおよび 9 ビットデータ長選択時に使用します。

RDRHL レジスタの下位 8 ビットは RDR レジスタのシャドーレジスタです。たとえば、RDRHL レジスタへアクセスすると RDR レジスタに影響を与えます。7 ビットまたは 8 ビットのデータ長を選択した場合、RDRHL レジスタへアクセスしないでください。

1 フレーム分のデータを受信すると、受信データは RSR レジスタから RDR レジスタまたは RDRHL レジスタへ転送されるため、RSR レジスタは次のデータを受信できるようになります。

RSR レジスタと RDRHL レジスタはダブルバッファとして機能するため、連続受信動作が可能になります。RDRHL レジスタの読み出しは、受信データフル割り込み（SCIn_RXI）要求が発生した場合にのみ行ってください。受信データを RDRHL から読み出す前に次の 1 フレーム分のデータを受け取ると、オーバーランエラーになります。CPU から RDRHL レジスタに書き込むことはできません。

RDRHL レジスタのビット [15:9] は 0 に固定されています。読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

29.2.4　受信 FIFO データレジスタ H, L, HL（FRDRH, FRDRL, FRDRHL）

受信 FIFO データレジスタ H（FRDRH）

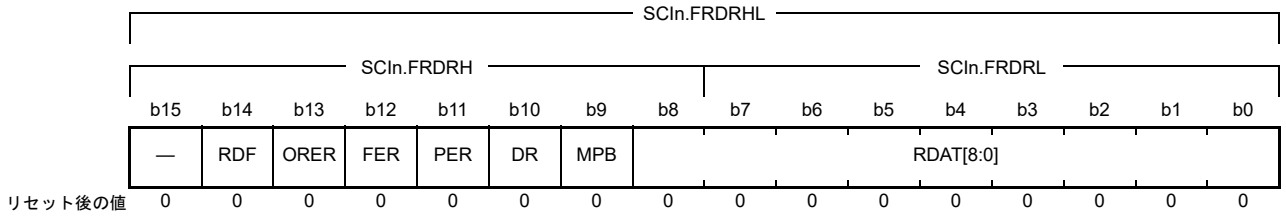
アドレス　SCI0.FRDRH 4007 0010h, SCI1.FRDRH 4007 0030h

受信 FIFO データレジスタ L（FRDRL）

アドレス　SCI0.FRDRL 4007 0011h, SCI1.FRDRL 4007 0031h

受信 FIFO データレジスタ HL（FRDRHL）

アドレス　SCI0.FRDRHL 4007 0010h, SCI1.FRDRHL 4007 0030h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b8-b0	RDAT[8:0]	シリアル受信データ	受信したシリアルデータ（調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードにおいて、FIFO選択時にのみ有効です）	R
b9	MPB	マルチプロセッサビットフラグ	シリアル受信データ（RDAT[8:0]）に対応したマルチプロセッサビット 0：データ送信サイクル 1：ID送信サイクル MPBビットは、調歩同期式モードにおいて、SMR.MP = 1およびFIFO選択時にのみ有効です。	R
b10	DR	受信データレディフラグ	0：受信中であるか、または正常に受信を完了した後、FRDRHおよびFRDRLに受信データが残っていない 1：正常に受信を完了した後、次の受信データが一定期間来ない	R （注1）
b11	PER	パリティエラーフラグ	0：FRDRHおよびFRDRLの第1データにパリティエラーの発生なし 1：FRDRHおよびFRDRLの第1データにパリティエラーの発生あり	R
b12	FER	フレーミングエラーフラグ	0：FRDRHおよびFRDRLの第1データにフレーミングエラーの発生なし 1：FRDRHおよびFRDRLの第1データにフレーミングエラーの発生あり	R
b13	ORER	オーバーランエラーフラグ	0：オーバーランエラーの発生なし 1：オーバーランエラーの発生あり	R （注1）
b14	RDF	受信FIFOデータフルフラグ	0：FRDRHおよびFRDRLに書き込まれた受信データ量が指定された受信トリガ数より少ない 1：FRDRHおよびFRDRLに書き込まれた受信データ量が指定された受信トリガ数以上です	R （注1）
b15	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

注 1.　本フラグを読むと、SSR_FIFO レジスタと同じ値が読み出されます。フラグをクリアするには、SSR_FIFO レジスタに 0 を書いてください。

FRDRHL レジスタは、FRDRL と FRDRH からなる 16 ビットのレジスタです。FRDRH と FRDRL は、シリアル受信データと関連するステータス情報を格納するための 16 段の FIFO レジスタを構成します。本レジスタは、調歩同期式モード（マルチプロセッサモードを含む）またはクロック同期式モードでのみ有効です。

SCI は、受信データを RSR レジスタから FRDRH および FRDRL へ転送し格納することで、1 フレーム分のシリアルデータの受信動作を完了します。16 段が格納されるまで連続受信が実行されます。FRDRH と FRDRL に受信データが存在しない場合、データを読み出すと、その値は不定です。FRDRH および FRDRL がいっぱいになると、それ以降のシリアル受信データは失われます。CPU から FRDRH と FRDRL を読み出すことはできますが、書き込むことはできません。

FRDRH レジスタの RDF、ORER、または DR フラグから 1 を読むことは、SSR_FIFO レジスタの対応するビットを読むことと同等です。FRDRH レジスタの読み出し後、SSR_FIFO レジスタのフラグに 0 を書いてクリアする場合は、クリアするフラグにのみ 0 を書いて、他のフラグには 1 を書いてください。

FRDRH レジスタと FRDRL レジスタの両方を読み出す場合は、FRDRH から FRDRL の順に読んでください。FRDRHL レジスタは 16 ビット単位でアクセスが可能です。

29.2.5　送信データレジスタ（TDR）

アドレス　SCI0.TDR 4007 0003h, SCI1.TDR 4007 0023h, SCI4.TDR 4007 0083h, SCI9.TDR 4007 0123h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1

TDR レジスタは、送信データを格納するための 8 ビットのレジスタです。

SCI は、TSR レジスタに空きを検出すると、TDR レジスタに書き込まれた送信データを TSR レジスタへ転送し、送信を開始します。

TDR レジスタと TSR レジスタはダブルバッファとして機能するため、連続送信動作が可能になります。1 フレーム分のデータを送信したとき、TDR レジスタに次の送信データが書き込まれていれば、SCI はそれを TSR レジスタへ転送して送信を続けます。

CPU からいつでも TDR レジスタの読み出し／書き込みが可能です。TDR レジスタへの送信データの書き込みは、送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）要求が発生するごとに 1 回だけ行ってください。

29.2.6　送信 9 ビットデータレジスタ（TDRHL）

アドレス　SCI0.TDRHL 4007 000Eh, SCI1.TDRHL 4007 002Eh, SCI4.TDRHL 4007 008Eh, SCI9.TDRHL 4007 012Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

TDRHL レジスタは、送信データを格納するための 16 ビットのレジスタです。調歩同期式モードおよび 9 ビットデータ長選択時に使用します。

TDRHL レジスタの下位 8 ビットは TDR レジスタのシャドーレジスタであるため、TDRHL レジスタへアクセスすると TDR レジスタに影響を与えます。7 ビットまたは 8 ビットのデータ長を選択した場合、TDRHL レジスタへアクセスしないでください。

TSR レジスタに空きが検出されると、TDRHL レジスタに書き込まれている送信データが TSR レジスタへ転送されて、送信が開始されます。

TSR レジスタと TDRHL レジスタはダブルバッファとして機能するため、連続送信動作が可能になります。1 フレーム分のデータを送信したとき、TDRHL レジスタに次の送信データが書き込まれていれば、TSR レジスタへ転送されて、送信動作が継続します。

CPU から TDRHL レジスタの読み出し／書き込みが可能です。TDRHL レジスタのビット [15:9] は 1 に固定されているため、読むと 1 が読めます。書く場合、1 としてください。

TDRHL レジスタへの送信データの書き込みは、送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）要求が発行されたときに 1 回だけ行ってください。

29.2.7　送信 FIFO データレジスタ H, L, HL（FTDRH, FTDRL, FTDRHL）

送信 FIFO データレジスタ H（FTDRH）

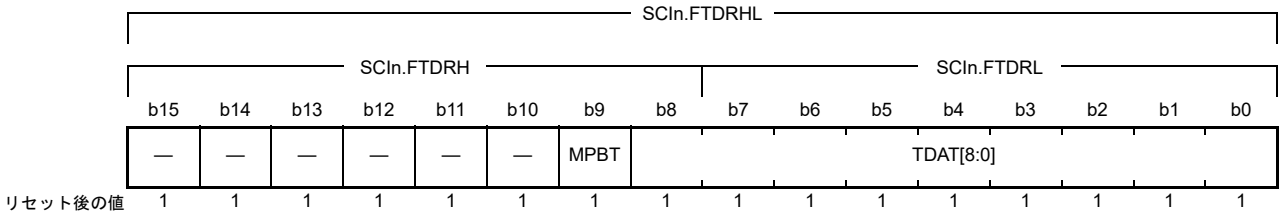
アドレス　SCI0.FTDRH 4007 000Eh, SCI1.FTDRH 4007 002Eh

送信 FIFO データレジスタ L（FTDRL）

アドレス　SCI0.FTDRL 4007 000Fh, SCI1.FTDRL 4007 002Fh

送信 FIFO データレジスタ HL（FTDRHL）

アドレス　SCI0.FTDRHL 4007 000Eh, SCI1.FTDRHL 4007 002Eh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b8-b0	TDAT[8:0]	シリアル送信データ	シリアルライトデータ（調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）およびクロック同期式モードにおいて、FIFO選択時にのみ有効です）	W
b9	MPBT	マルチプロセッサ通信ビットフラグ	送信フレーム中のマルチプロセッサビットの値： 0：データ送信サイクル 1：ID送信サイクル MPBTビットは、調歩同期式モードにおいて、SMR.MP = 1およびFIFO選択時にのみ有効です。	W
b15-b10	—	予約ビット	書く場合、1としてください。	W

FTDRHL レジスタは、FTDRH と FTDRL からなる 16 ビットのレジスタです。

FTDRH と FTDRL は、シリアル送信データとマルチプロセッサ通信ビットを格納するための 16 段の FIFO レジスタを構成します。本レジスタは、調歩同期式モード（マルチプロセッサモードを含む）およびクロック同期式モードでのみ有効です。

SCI は、TSR レジスタに空きを検出すると、FTDRH と FTDRL に書き込まれた送信データを TSR に転送し、シリアル送信を開始します。FTDRH と FTDRL に送信データが残っていない状態になるまで、連続シリアル送信が実行されます。FTDRHL レジスタが送信データでいっぱいになると、次のデータを書き込むことはできません。新たに書き込みを試みても、そのデータは無視されます。CPU から FTDRH と FTDRL に書き込むことはできますが、読み出すことはできません。

FTDRH レジスタと FTDRL レジスタの両方に書き込む場合は、FTDRH から FTDRL の順に書いてください。

MPBT フラグ（マルチプロセッサ通信ビットフラグ）

送信フレームのマルチプロセッサビットを選択します。FCR.FM = 1 の場合、SSR.MPBT ビットは無効です。

29.2.8　送信シフトレジスタ（TSR）

TSR レジスタは、シリアルデータを送信するためのシフトレジスタです。シリアルデータ送信を行う場合、SCI は最初、TDR、TDRHL、または送信 FIFO から TSR レジスタへ送信データを自動転送し、その後、そのデータを TXDn 端子に送出します。CPU から TSR レジスタに直接アクセスすることはできません。

29.2.9　非スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SMR）(SCMR.SMIF = 0)

アドレス　SCI0.SMR 4007 0000h, SCI1.SMR 4007 0020h, SCI4.SMR 4007 0080h, SCI9.SMR 4007 0120h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CM	CHR	PE	PM	STOP	MP	CKS[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	CKS[1:0]	クロック選択	b1　b0 0　0：PCLKクロック（n = 0）（注1） 0　1：PCLK/4クロック（n = 1）（注1） 1　0：PCLK/16クロック（n = 2）（注1） 1　1：PCLK/64クロック（n = 3）（注1）	R/W（注4）
b2	MP	マルチプロセッサモード	調歩同期式モードでのみ有効です。 0：マルチプロセッサ通信機能は無効 1：マルチプロセッサ通信機能は有効	R/W（注4）
b3	STOP	ストップビット長	調歩同期式モードでのみ有効です。 0：1ストップビット 1：2ストップビット	R/W（注4）
b4	PM	パリティモード	PEビット = 1の場合にのみ有効です。 0：偶数パリティを選択 1：奇数パリティを選択	R/W（注4）
b5	PE	パリティ許可	調歩同期式モードでのみ有効です。 • 送信時 0：パリティビットを付加しない 1：パリティビットを付加する • 受信時 0：パリティビットをチェックしない 1：パリティビットをチェックする	R/W（注4）
b6	CHR	キャラクタ長	SCMR.CHR1ビットと組み合わせてキャラクタ長を選択します。 CHR1　CHR 0　0：データ長9ビットで送受信 0　1：データ長9ビットで送受信 1　0：データ長8ビットで送受信（初期値） 1　1：データ長7ビットで送受信（注3） CHRビットは調歩同期式モードでのみ有効です。（注2）	R/W（注4）
b7	CM	通信モード	0：調歩同期式モード、または簡易IICモード 1：クロック同期式モード、または簡易SPIモード	R/W（注4）

注 1.　n は BRR の設定値を 10 進表記で示します。29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください。
注 2.　調歩同期式モード以外では、本ビットの設定は無効であり、データ長は 8 ビット固定です。
注 3.　LSB ファースト固定となり、TDR レジスタの MSB（ビット 7）は送信されません。
注 4.　SCR.TE ビットと SCR.RE ビットが 0（シリアル送信動作およびシリアル受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。

SMR レジスタは、通信フォーマットと、内蔵ボーレートジェネレータのクロックソースを設定するためのレジスタです。

CKS[1:0] ビット（クロック選択）

内蔵ボーレートジェネレータのクロックソースを選択します。

これらのビットの設定値とボーレートの関係については、29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください。

MP ビット（マルチプロセッサモード）

マルチプロセッサ通信機能を有効または無効にします。マルチプロセッサモードでは、PE および PM ビットの設定は無効です。

STOP ビット（ストップビット長）

送信データのストップビット長を選択します。

受信時には、本ビットの設定にかかわらず、受信したストップビットの 1 ビット目のみがチェックされます。2 ビット目が 0 の場合は、次の送信フレームのスタートビットとみなされます。

PM ビット（パリティモード）

送受信時のパリティ（偶数パリティまたは奇数パリティ）を選択します。

マルチプロセッサモードでは、PM ビットの設定は無効です。

PE ビット（パリティ許可）

PE ビットが 1 のとき、送信時はパリティビットを付加し、受信時はパリティチェックを行います。

マルチプロセッサフォーマットでは、PE ビットの設定にかかわらず、パリティビットの付加、チェックは行いません。

CHR ビット（キャラクタ長）

SCMR.CHR1 ビットと組み合わせて、送受信データのデータ長を選択します。

調歩同期式モード以外では、データ長は 8 ビット固定です。

CM ビット（通信モード）

通信モードを以下から選択します。

- 調歩同期式モード、または簡易 IIC モード
- クロック同期式モード、または簡易 SPI モード

29.2.10　スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SMR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1)

アドレス　SCI0.SMR_SMCI 4007 0000h, SCI1.SMR_SMCI 4007 0020h, SCI4.SMR_SMCI 4007 0080h, SCI9.SMR_SMCI 4007 0120h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	GM	BLK	PE	PM	BCP[1:0]		CKS[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	CKS[1:0]	クロック選択	b1　b0 0　0：PCLKクロック（n = 0）（注1） 0　1：PCLK/4クロック（n = 1）（注1） 1　0：PCLK/16クロック（n = 2）（注1） 1　1：PCLK/64クロック（n = 3）（注1）	R/W（注2）
b3-b2	BCP[1:0]	基本クロックパルス	SCMR.BCP2ビットと組み合わせて基本クロックのサイクル数を選択します。 表 29.3に、SCMR.BCP2ビットとSMR.BCP[1:0]ビットの組み合わせを示します。	R/W（注2）
b4	PM	パリティモード	PEビット = 1の場合にのみ有効です。 0：偶数パリティを選択 1：奇数パリティを選択	R/W（注2）
b5	PE	パリティ許可	PEビットが1のとき、送信時はパリティビットを付加し、受信時はパリティチェックを行います。スマートカードインタフェースモードでは、本ビットを1にしてください。	R/W（注2）
b6	BLK	ブロック転送モード	0：非ブロック転送モードで動作 1：ブロック転送モードで動作	R/W（注2）
b7	GM	GSMモード	0：非GSMモードで動作 1：GSMモードで動作	R/W（注2）

注 1.　n は BRR の設定値を 10 進表記で示します。29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください。
注 2.　SCR_SMCI.TE ビットと SCR_SMCI.RE ビットが 0（シリアル送信動作およびシリアル受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。

SMR_SMCI レジスタは、通信フォーマットと、内蔵ボーレートジェネレータのクロックソースを設定するためのレジスタです。

CKS[1:0] ビット（クロック選択）

内蔵ボーレートジェネレータのクロックソースを選択します。

これらのビットの設定値とボーレートの関係については、29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください。

BCP[1:0] ビット（基本クロックパルス）

スマートカードインタフェースモードにおいて、1 ビット転送時間中の基本クロックのサイクル数を選択します。

SCMR.BCP2 ビットと組み合わせて設定します。

詳細は、29.6.4　受信データのサンプリングタイミングと受信マージンを参照してください。

表 29.3　SCMR.BCP2ビットとSMR_SMCI.BCP[1:0]ビットの組み合わせ

SCMR.BCP2ビット	SMR_SMCI.BCP[1:0]ビット		1ビット転送時間中の基本クロックのサイクル数
0	0	0	93クロックサイクル（S = 93）（注1）
0	0	1	128クロックサイクル（S = 128）（注1）
0	1	0	186クロックサイクル（S = 186）（注1）
0	1	1	512クロックサイクル（S = 512）（注1）
1	0	0	32クロックサイクル（S = 32）（注1）（初期値）
1	0	1	64クロックサイクル（S = 64）（注1）
1	1	0	372クロックサイクル（S = 372）（注1）
1	1	1	256クロックサイクル（S = 256）（注1）

注 1.　S は BRR レジスタの S の値を表します（29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください）。

PM ビット（パリティモード）

送受信時のパリティモード（偶数パリティまたは奇数パリティ）を選択します。

スマートカードインタフェースモードにおける本ビットの使用方法については、29.6.2　データフォーマット（ブロック転送モード時を除く）を参照してください。

PE ビット（パリティ許可）

PE ビットは 1 にしてください。

送信時はパリティビットを付加し、受信時はパリティチェックを行います。

BLK ビット（ブロック転送モード）

BLK ビットを 1 にすると、ブロック転送モードで動作します。

詳細は、29.6.3　ブロック転送モードを参照してください。

GM ビット（GSM モード）

GM ビットを 1 にすると、GSM モードで動作します。

GSM モードでは、SSR_SMCI.TEND フラグのセットタイミングが、先頭から 11.0ETU（ETU：Elementary Time Unit = 1 ビット転送時間）に繰り上げられ、クロック出力制御機能が有効になります。詳細は、29.6.6　シリアルデータの送信（ブロック転送モード時を除く）と 29.6.8　クロック出力制御を参照してください。

29.2.11　非スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCR）(SCMR.SMIF = 0)

アドレス　SCI0.SCR 4007 0002h, SCI1.SCR 4007 0022h, SCI4.SCR 4007 0082h, SCI9.SCR 4007 0122h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TIE	RIE	TE	RE	MPIE	TEIE	CKE[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	CKE[1:0]	クロック許可	調歩同期式モード： b1 b0 0 0：内蔵ボーレートジェネレータ I/Oポートの設定によって、SCKn端子は入出力ポートとして使用できます。 0 1：内蔵ボーレートジェネレータ SCKn端子からビットレートと同じ周波数のクロックを出力します。 1 x：外部クロック SEMR.ABCSビットが0の場合、SCKn端子からビットレートの16倍の周波数のクロックを入力してください。SEMR.ABCSビットが1の場合、8倍の周波数のクロック信号を入力してください。 クロック同期式モード： b1 b0 0 x：内部クロック SCKn端子はクロック出力端子となります。 1 x：外部クロック SCKn端子はクロック入力端子となります。	R/W （注1）
b2	TEIE	送信終了割り込み許可	0：SCIn_TEI割り込み要求を禁止 1：SCIn_TEI割り込み要求を許可	R/W
b3	MPIE	マルチプロセッサ割り込み許可	調歩同期式モードで、SMR.MPビット = 1のとき有効です。 0：非マルチプロセッサの受信動作 1：マルチプロセッサビットが0のデータを受信した場合、そのデータは読み飛ばし、SSRレジスタのRDRF、ORER、およびFERの各ステータスフラグを1にすることはできない。マルチプロセッサビットが1のデータを受信した場合、MPIEビットは自動的に0になり、非マルチプロセッサの受信動作に戻る。	R/W （注3）
b4	RE	受信許可	0：シリアル受信動作を禁止 1：シリアル受信動作を許可	R/W （注2）
b5	TE	送信許可	0：シリアル送信動作を禁止 1：シリアル送信動作を許可	R/W （注2）
b6	RIE	受信割り込み許可	0：SCIn_RXIおよびSCIn_ERI割り込み要求を禁止 1：SCIn_RXIおよびSCIn_ERI割り込み要求を許可	R/W
b7	TIE	送信割り込み許可	0：SCIn_TXI割り込み要求を禁止 1：SCIn_TXI割り込み要求を許可	R/W

x: Don't care

注 1.　TE ビット = 0 かつ RE ビット = 0 の場合にのみ書き込み可能です。

注 2.　TE ビットおよび RE ビットが 0、かつ SMR.CM ビットが 1 のときのみ、1 の書き込みが可能です。TE ビットまたは RE ビットを 1 にした後は、TE ビットと RE ビットには 0 の書き込みのみが可能です。SMR.CM ビットが 0、かつ SIMR1.IICM ビットが 0 の場合、任意のタイミングで書き込みが可能です。

注 3.　マルチプロセッサモード（SMR.MP ビット = 1）では、このレジスタの MPIE ビット以外のビットに新しい値を書き込む場合、ビット操作命令を用いたときにリードモディファイライトによって MPIE ビットが誤って 1 になってしまうのを防ぐため、ストア命令を用いて MPIE ビットに 0 を書いてください。

SCR レジスタは、送受信の制御とクロックソース選択を行うためのレジスタです。

CKE[1:0] ビット（クロック許可）

クロックソースおよび SCKn 端子の機能を選択します。

TEIE ビット（送信終了割り込み許可）

SCIn_TEI 割り込み要求を許可または禁止します。この割り込み要求を禁止にするには、TEIE ビットを 0 にしてください。

簡易 IIC モードでは、開始／再開始／停止条件の発行完了時の割り込み（STI 割り込み）に SCIn_TEI 割り込みが割り当てられます。この場合、TEIE ビットによって STI 割り込み要求を許可または禁止にできます。

MPIE ビット（マルチプロセッサ割り込み許可）

MPIE ビットを 1 にすると、マルチプロセッサビットが 0 のデータを受信した場合、そのデータは読み飛ばされて、SSR/SSR_FIFO レジスタの RDRF、RDF、ORER、および FER の各ステータスフラグを 1 にすることはできません。マルチプロセッサビットが 1 のデータを受信した場合、MPIE ビットは自動的に 0 になり、非マルチプロセッサの受信動作に戻ります。詳細は、29.4　マルチプロセッサ通信機能を参照してください。

SSR.MPB ビットが 0 のデータを受信した場合、RSR レジスタから RDR レジスタへ受信データは転送されず、受信エラーも検出されません。また、ORER および FER フラグを 1 にすることができません。

MPB ビットが 1 のデータを受信した場合、MPIE ビットが自動的に 0 になり、SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求が許可されます（SCR.RIE ビットが 1 の場合）。また、ORER および FER フラグを 1 にすることが可能です。

マルチプロセッサ通信機能を使用しない場合、MPIE ビットを 0 にしてください。

RE ビット（受信許可）

シリアル受信動作を許可または禁止します。

RE ビットを 1 にすると、調歩同期式モードの場合はスタートビットを、クロック同期式モードの場合は同期クロック入力を検出することによって、シリアル受信を開始します。RE ビットを 1 にする前に、SMR に受信フォーマットを設定してください。

非 FIFO 選択時は、RE ビットを 0 にして受信動作を停止させても、SSR レジスタの RDRF、ORER、FER、PER の各フラグは影響を受けず、以前の値が保持されます。

FIFO 選択時は、RE ビットを 0 にして受信動作を停止させても、SSR_FIFO レジスタの RDF、ORER、FER、PER、BRK、DR の各フラグは影響を受けず、以前の値が保持されます。

TE ビット（送信許可）

シリアル送信動作を許可または禁止します。

このビットを 1 にすると、TDR レジスタに送信データを書き込むことによって、シリアル送信が開始されます。なお、TE ビットを 1 にする前に SMR レジスタの設定を行い、送信フォーマットを設定してください。

RIE ビット（受信割り込み許可）

SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求を許可または禁止します。

RIE ビットを 0 にすると、SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求は禁止されます。

SCIn_ERI 割り込み要求の解除は、SSR/SSR_FIFO レジスタの ORER、FER、または PER フラグから 1 を読んだ後に 0 にするか、RIE ビットを 0 にすることで行うことができます。

TIE ビット（送信割り込み許可）

SCIn_TXI 割り込み要求を許可または禁止します。

TIE ビットを 0 にすると、SCIn_TXI 割り込み要求は禁止されます。TIE ビットは、TE ビットが 1 のときに 1 にしてください。SCIn_TXI 割り込みは、転送開始前に TE ビットと TIE ビットが同時に 1 になった後で発生します。

29.2.12　スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1)

アドレス　SCI0.SCR_SMCI 4007 0002h, SCI1.SCR_SMCI 4007 0022h, SCI4.SCR_SMCI 4007 0082h, SCI9.SCR_SMCI 4007 0122h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TIE	RIE	TE	RE	MPIE	TEIE	CKE[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	CKE[1:0]	クロック許可	• SMR_SMCI.GM ビット = 0 の場合 b1 b0 0 0 : 出力禁止 I/O ポートの設定によって、SCKn 端子は入出力ポートとして使用できます。 0 1 : クロック出力 1 x : 設定禁止 • SMR_SMCI.GM ビット = 1 の場合 b1 b0 0 0 : Low 出力固定 x 1 : クロック出力 1 0 : High 出力固定	R/W （注 1）
b2	TEIE	送信終了割り込み許可	スマートカードインタフェースモードでは、本ビットを 0 にしてください。	R/W
b3	MPIE	マルチプロセッサ割り込み許可	スマートカードインタフェースモードでは、本ビットを 0 にしてください。	R/W
b4	RE	受信許可	0 : シリアル受信動作を禁止 1 : シリアル受信動作を許可	R/W （注 2）
b5	TE	送信許可	0 : シリアル送信動作を禁止 1 : シリアル送信動作を許可	R/W （注 2）
b6	RIE	受信割り込み許可	0 : SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求を禁止 1 : SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求を許可	R/W
b7	TIE	送信割り込み許可	0 : SCIn_TXI 割り込み要求を禁止 1 : SCIn_TXI 割り込み要求を許可	R/W

x: Don't care

注 1.　TE ビット = 0 かつ RE ビット = 0 の場合にのみ書き込み可能です。

注 2.　TE ビット = 0 かつ RE ビット = 0 の場合にのみ、1 の書き込みが可能です。TE ビットまたは RE ビットを 1 にした後は、TE ビットと RE ビットには 0 の書き込みのみが可能です。

SCR_SMCI レジスタは、送信制御、割り込みの制御と受信、および送受信のクロックソース選択を行うためのレジスタです。

各割り込み要求については、29.10　割り込み要因を参照してください。

CKE[1:0] ビット（クロック許可）

SCKn 端子からのクロック出力を制御します。

GSM モードでは、クロック出力を動的に切り替えることが可能です。詳細は、29.6.8　クロック出力制御を参照してください。

TEIE ビット（送信終了割り込み許可）

スマートカードインタフェースモードでは、TEIE ビットを 0 にしてください。

RE ビット（受信許可）

シリアル受信動作を許可または禁止します。

本ビットを 1 にすると、スタートビットを検出することによって、シリアル受信を開始します。RE ビットを 1 にする前に、SMR_SMCI レジスタに受信フォーマットを設定してください。

RE ビットを 0 にして受信動作を停止しても、SSR_SMCI レジスタの ORER、FER、PER の各フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

TE ビット（送信許可）

シリアル送信動作を許可または禁止します。

本ビットを 1 にすると、TDR レジスタに送信データを書き込むことでシリアル送信が開始されます。TE ビットを 1 にする前に、SMR_SMCI レジスタに送信フォーマットを設定してください。

RIE ビット（受信割り込み許可）

SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求を許可または禁止します。

RIE ビットを 0 にすると、SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求が禁止されます。

SCIn_ERI 割り込み要求の解除は、SSR_SMCI レジスタの ORER、FER、または PER フラグから 1 を読んだ後に 0 にするか、RIE ビットを 0 にすることで行うことができます。

TIE ビット（送信割り込み許可）

SCIn_TXI 割り込み要求を許可または禁止します。

TIE ビットを 0 にすると、SCIn_TXI 割り込み要求は禁止されます。TIE ビットは、TE ビットが 1 のときに 1 にしてください。SCIn_TXI 割り込みは、転送開始前に TE ビットと TIE ビットが同時に 1 になった後で発生します。

29.2.13　非スマートカードインタフェースおよび非 FIFO モード用シリアルステータスレジスタ（SSR）(SCMR.SMIF = 0 および FCR.FM = 0)

アドレス　SCI0.SSR 4007 0004h, SCI1.SSR 4007 0024h, SCI4.SSR 4007 0084h, SCI9.SSR 4007 0124h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TDRE	RDRF	ORER	FER	PER	TEND	MPB	MPBT
リセット後の値	1	0	0	0	0	1	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MPBT	マルチプロセッサビット転送	送信フレームにマルチプロセッサビットを設定します。 0：データ送信サイクル 1：ID送信サイクル	R/W
b1	MPB	マルチプロセッサ	受信フレーム中のマルチプロセッサビットの値： 0：データ送信サイクル 1：ID送信サイクル	R
b2	TEND	送信終了フラグ	0：キャラクタを送信中 1：キャラクタを送信終了	R
b3	PER	パリティエラーフラグ	0：パリティエラーの発生なし 1：パリティエラーの発生あり	R/(W) （注1）
b4	FER	フレーミングエラーフラグ	0：フレーミングエラーの発生なし 1：フレーミングエラーの発生あり	R/(W) （注1）
b5	ORER	オーバーランエラーフラグ	0：オーバーランエラーの発生なし 1：オーバーランエラーの発生あり	R/(W) （注1）
b6	RDRF	受信データフルフラグ	0：RDR レジスタに受信データなし 1：RDR レジスタに受信データあり	R/(W) （注1）
b7	TDRE	送信データエンプティフラグ	0：TDR レジスタに送信データあり 1：TDR レジスタに送信データなし	R/(W) （注1）

注 1.　フラグをクリアするため、1 を読み出した後に 0 を書き込むことのみ可能です。

SSR レジスタは、SCI ステータスフラグと送受信マルチプロセッサビットを設定するためのレジスタです。

MPBT ビット（マルチプロセッサビット転送）

送信フレーム中のマルチプロセッサビットを選択します。

MPB ビット（マルチプロセッサ）

受信フレーム中のマルチプロセッサビットの値を格納します。SCR.RE ビットが 0 のときは変化しません。

TEND フラグ（送信終了フラグ）

送信が終了したことを示します。

[1 になる条件]

- SCR.TE ビットが 0（シリアル送信動作を禁止）、かつ FCR.FM ビットが 0（非 FIFO 選択時）のとき
  SCR.TE ビットが 1 のときは、TEND フラグは影響を受けず、1 の値を保持します
- 送信キャラクタの最後尾ビットの送信時、TDR レジスタが更新されないとき

[0 になる条件]

- SCR.TE ビットが 1 の状態で、TDR レジスタに送信データを書き込んだとき
- SCR.TE ビットが 1 の状態で、TDRE = 1 を読んだ後、TDRE に 0 を書いたとき

PER フラグ（パリティエラーフラグ）

調歩同期式モードでの受信時に、パリティエラーが発生して受信が異常終了したことを示します。

［1 になる条件］

- 調歩同期式モードでの受信時に、パリティエラーが検出され、アドレス一致検出機能が無効（DCCR.DCME = 0）のとき

  パリティエラーが発生した場合、受信データは RDR レジスタへ転送されますが、SCIn_RXI 割り込み要求は発生しません。PER フラグが 1 の状態では、以降の受信データは RDR レジスタへ転送されません。

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
  PER フラグに 0 を書き込んだ後は PER ビットを読み出して、実際に 0 になっていることを確認してください。

SCR.RE ビットを 0（シリアル受信動作を禁止）にしても、PER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

FER フラグ（フレーミングエラーフラグ）

調歩同期式モードでの受信時に、フレーミングエラーが発生して受信が異常終了したことを示します。

［1 になる条件］

- 調歩同期式モードでの受信時に、ストップビットとして 0 がサンプリングされ、アドレス一致検出機能が無効（DCCR.DCME = 0）のとき

  2 ストップビットモードでは、ストップビットの 1 ビット目のみがチェックされますが 2 ビット目はチェックされません。フレーミングエラーが発生した場合、受信データは RDR レジスタへ転送されますが SCIn_RXI 割り込み要求は発生しません。さらに、FER フラグが 1 の状態では、以降の受信データは RDR レジスタへ転送されません。

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
  FER フラグに 0 を書き込んだ後は、FER ビットを読み出して実際に 0 になっていることを確認してください。

SCR.RE ビットを 0 にしても、FER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

ORER フラグ（オーバーランエラーフラグ）

受信時にオーバーランエラーが発生して受信が異常終了したことを示します。

［1 になる条件］

- RDR レジスタからパリティエラーもフレーミングエラーもない受信データを読み出す前に、次のデータを受信したとき

  オーバーランエラーが発生する前に受信したデータは RDR レジスタに保持されますが、発生後に受信したデータは失われます。ORER フラグが 1 の状態では、受信データは RDR レジスタへ転送されません。クロック同期式モードでは、シリアル送受信は停止します。

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
  ORER フラグに 0 を書き込んだ後は、OPER ビットを読み出して、実際に 0 になっていることを確認してください。

SCR.RE ビットを 0 にしても、ORER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

RDRF フラグ（受信データフルフラグ）

RDR レジスタ内の受信データの有無を示します。

［1 になる条件］

- 受信が正常終了し、RSR レジスタから RDR レジスタへ受信データが転送されたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- RDR レジスタからデータを読み出したとき

注 .　通信が中断しない限り、SSR レジスタの RDRF ビットにアクセスすることによって RDRF フラグをクリアしないでください。

TDRE フラグ（送信データエンプティフラグ）

TDR レジスタ内の送信データの有無を示します。

［1 になる条件］

- SCR.TE ビットが 0 のとき
- TDR レジスタから TSR レジスタへデータが転送されたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- SCR.TE ビットが 1 の状態で、データを TDR レジスタに書き込んだとき

注 .　通信が中断しない限り、SSR レジスタの TDRE ビットにアクセスすることによって TDRE フラグをクリアしないでください。

29.2.14　非スマートカードインタフェースおよびFIFOモード用シリアルステータスレジスタ（SSR_FIFO）(SCMR.SMIF = 0 および FCR.FM = 1)

アドレス　SCI0.SSR_FIFO 4007 0004h, SCI1.SSR_FIFO 4007 0024h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TDFE	RDF	ORER	FER	PER	TEND	—	DR
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	x	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DR	受信データレディフラグ	0：受信中であるか、または正常に受信を完了した後、FRDRHLに受信データが残っていない（受信FIFOが空です） 1：FIFOに格納されているデータ量が受信トリガ数以下であるとき、正常に受信を完了した後、次の受信データが一定期間来ない	R/(W)（注1）
b1	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b2	TEND	送信終了フラグ	0：キャラクタを送信中 1：キャラクタを送信終了	R/(W)（注1）
b3	PER	パリティエラーフラグ	0：パリティエラーの発生なし 1：パリティエラーの発生あり	R/(W)（注1）
b4	FER	フレーミングエラーフラグ	0：フレーミングエラーの発生なし 1：フレーミングエラーの発生あり	R/(W)（注1）
b5	ORER	オーバーランエラーフラグ	0：オーバーランエラーの発生なし 1：オーバーランエラーの発生あり	R/(W)（注1）
b6	RDF	受信FIFOデータフルフラグ	0：FRDRHLに書き込まれた受信データ量が指定された受信トリガ数より少ない 1：FRDRHLに書き込まれた受信データ量が指定された受信トリガ数以上です	R/(W)（注1）
b7	TDFE	送信FIFOデータエンプティフラグ	0：FTDRHLに書き込まれた送信データ量が指定された送信トリガ数を超えている 1：FTDRHLに書き込まれた送信データ量が指定された送信トリガ数以下です	R/(W)（注1）

注 1.　フラグをクリアするため、1 を読み出した後に 0 を書き込むことのみ可能です。

SSR_FIFO レジスタは、FIFO モード用のステータスフラグのためのレジスタです。

DR フラグ（受信データレディフラグ）

受信 FIFO データレジスタ（FRDRHL）に格納されたデータ量が指定された受信トリガ数より少ないこと、および、調歩同期式モードにおいて最後のストップビットから 15ETU（Elementary Time Units）経過しても次のデータが受信されていないことを示します。本フラグは、調歩同期式モード（マルチプロセッサモードを含む）において、FIFO 選択時にのみ有効です。

クロック同期式モードでは、本フラグは 1 になりません。

[1 になる条件]

- FRDRHL 内のデータ数が指定された受信トリガ数より少なく、最後のストップビットから 15ETU（注 1）経過しても次のデータが受信されておらず、かつ SSR_FIFO.FER および SSR_FIFO.PER フラグが 0 のとき

［0 になる条件］

- 受信データをすべて読み出した後、DR フラグから 1 を読み出したとき
- FCR.FM ビットが 0 から 1 に切り替わったとき

注 1.　15ETU は、8 ビットフォーマットで 1 ストップビットが選択されている場合の 1.5 フレーム分に相当します。

TEND フラグ（送信終了フラグ）

シリアルキャラクタの最後尾ビットの送信時に、FTDRHL レジスタに有効なデータがなく、送信が停止したことを示します。

［1 になる条件］

- 1 バイトのシリアル送信キャラクタの最後尾ビット送信時に、FTDRHL レジスタに送信データがないとき

［0 になる条件］

- SCR.TE ビットが 1 の状態で、FTDRHL レジスタに送信データを書き込んだとき
- SCR.TE ビットが 1 の状態で、TEND から 1 を読み出した後、TEND に 0 を書き込んだとき
- FCR.FM ビットが 0 から 1 に切り替わったとき

PER フラグ（パリティエラーフラグ）

調歩同期式モードにおいて、アドレス一致検出機能が無効（DCCR.DCME = 0）のとき、FRDRHL レジスタから読み出したデータにパリティエラーが存在するか否かを示します。

［1 になる条件］

- データ受信時にパリティエラーが検出され、アドレス一致検出機能が無効（DCCR.DCME = 0）のとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

データ受信時にパリティエラーが発生しても、受信動作は継続し、受信データが FRDRHL レジスタに格納されます。

SCR.RE ビットが 0 のときは、PER フラグは影響を受けず、以前の状態を保持します。

FER フラグ（フレーミングエラーフラグ）

調歩同期式モードにおいて、アドレス一致検出機能が無効（DCCR.DCME = 0）のとき、FRDRHL レジスタから読み出したデータにフレーミングエラーが存在するか否かを示します。

［1 になる条件］

- 受信時にストップビットとして 0 がサンプリングされ、アドレス一致検出機能が無効（DCCR.DCME = 0）のとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

データ受信中にフレーミングエラーが発生しても、受信動作は継続し、受信データが FRDRHL レジスタに格納されます。

SCR.RE ビットが 0 のときは、FER フラグは影響を受けず、以前の状態を保持します。

ORER フラグ（オーバーランエラーフラグ）

オーバーランエラーの発生が原因で受信動作が異常停止したことを示します。

[1 になる条件]

- 受信 FIFO が 16 バイトの受信データでいっぱいになった状態で、次のシリアル受信を完了したとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

SCR.RE ビットが 0 のときは、ORER フラグは影響を受けず、以前の状態を保持します。

RDF フラグ（受信 FIFO データフルフラグ）

受信データが FRDRHL レジスタへ転送されて、レジスタ内のデータ数が指定した受信トリガ数以上となったことを示します。RTRG が 0 の場合は、受信 FIFO 内のデータ量が 0 であっても、RDF フラグはセットされません。

[1 になる条件]

- 指定された受信トリガ数以上の受信データ量が FRDRHL レジスタ (注 1) に格納され、かつ FIFO が空状態でないとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- FRDRHL レジスタが DMAC または DTC によって読み出されたとき（ブロック転送が最終送信の場合のみ）
- 1 になる条件と 0 になる条件が同時に発生したときその後、FRDRHL レジスタに格納されたデータ量が RTRG の値以上になると、1PCLK 後に RDF フラグは 1 になります

注 .　通信が中断しない限り、受信データを読み出す前に SSR レジスタの RDF ビットにアクセスすることによって RDF フラグをクリアしないでください。

注 1.　FRDRHL は 16 段の FIFO レジスタであるため、RDF が 1 のときに読み出し可能な最大のデータ量は、指定された受信トリガ数と同等です。FRDRHL 内のデータをすべて読み出した後に、さらに読み出しを実行すると、不定値が読み出されます。

TDFE フラグ（送信 FIFO データエンプティフラグ）

データが FTDRHL レジスタから TSR レジスタへ転送されて、FTDRHL 内のデータ量が指定された送信トリガ数を下回り、FTDRHL への送信データの書き込みが可能になったことを示します。

[1 になる条件]

- SCR.TE ビットが 0 のとき
- FTDRHL に書き込まれた送信データ量が、指定された送信トリガ数以下であるとき (注 1)

[0 になる条件]

- DTC または DMAC が起動している状態で、最終送信に対する FTDRHL への書き込みが実行されたとき
- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
  1 になる条件と 0 になる条件が同時に発生した場合、TDFE フラグは 0 にクリアされます。その後、FTDRHL レジスタに格納されたデータ量が TTRG の値以下になると、1PCLK 後に TDFE フラグは 1 になります。

注 .　通信が中断しない限り、送信データを書き込む前に SSR レジスタの TDFE ビットにアクセスすることによって TDFE フラグをクリアしないでください。

注 1.　FTDRHL レジスタは 16 段の FIFO レジスタであるため、TDFE フラグが 1 のときに書き込み可能な最大のデータ数は “16 - FDR.T[4:0]” です。さらにデータを書き込んでも、そのデータは破棄されます。

29.2.15　スマートカードインタフェースモード用シリアルステータスレジスタ（SSR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1)

アドレス　SCI0.SSR_SMCI 4007 0004h, SCI1.SSR_SMCI 4007 0024h, SCI4.SSR_SMCI 4007 0084h, SCI9.SSR_SMCI 4007 0124h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TDRE	RDRF	ORER	ERS	PER	TEND	MPB	MPBT
リセット後の値	1	0	0	0	0	1	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MPBT	マルチプロセッサビット転送	スマートカードインタフェースモードでは、本ビットを0にしてください。	R/W
b1	MPB	マルチプロセッサ	スマートカードインタフェースモードでは、本ビットを0にしてください。	R
b2	TEND	送信終了フラグ	0：キャラクタを送信中 1：キャラクタを送信終了	R
b3	PER	パリティエラーフラグ	0：パリティエラーの発生なし 1：パリティエラーの発生あり	R/(W)（注1）
b4	ERS	エラーシグナルステータスフラグ	0：エラーシグナルLowをサンプリングしない 1：エラーシグナルLowをサンプリングする	R/(W)（注1）
b5	ORER	オーバーランエラーフラグ	0：オーバーランエラーの発生なし 1：オーバーランエラーの発生あり	R/(W)（注1）
b6	RDRF	受信データフルフラグ	0：RDRレジスタに受信データなし 1：RDRレジスタに受信データあり	R/(W)（注1）
b7	TDRE	送信データエンプティフラグ	0：TDRレジスタに送信データあり 1：TDRレジスタに送信データなし	R/(W)（注1）

注 1.　フラグをクリアするため、1 を読み出した後に 0 を書き込むことのみ可能です。

SSR_SMCI レジスタは、スマートカードインタフェースモード用のステータスフラグの設定レジスタです。

TEND フラグ（送信終了フラグ）

受信側からエラーシグナルがなく、次のデータが TDR レジスタに転送可能となったとき、TEND ビットが 1 になります。

［1 になる条件］

- SCR_SMCI.TE ビット = 0（シリアル送信動作を禁止）のとき SCR_SMCI.TE ビットを 0 から 1 に変更しても、TEND フラグは影響を受けず、1 の値を保持します
- 1 バイトのデータを送信してから指定した期間が経過した後、ERS フラグが 0 で、TDR レジスタが更新されないとき

  1 になるタイミングは、以下のように、レジスタの設定値によって決定されます。
  - SMR_SMCI.GM = 0 および SMR_SMCI.BLK = 0 のとき、送信開始から 12.5ETU 経過後
  - SMR_SMCI.GM = 0 および SMR_SMCI.BLK = 1 のとき、送信開始から 11.5ETU 経過後
  - SMR_SMCI.GM = 1 および SMR_SMCI.BLK = 0 のとき、送信開始から 11.0ETU 経過後
  - SMR_SMCI.GM = 1 および SMR_SMCI.BLK = 1 のとき、送信開始から 11.0ETU 経過後

［0 になる条件］

- SCR_SMCI.TE ビットが 1 の状態で、TDR レジスタに送信データを書いたとき
- SCR_SMCI.TE ビットが 1 の状態で、TDRE = 1 を読んだ後、TDRE に 0 を書いたとき

PER フラグ（パリティエラーフラグ）

調歩同期式モードで、受信中にパリティエラーが発生して受信が異常終了したことを示します。

［1 になる条件］

- 受信中にパリティエラーが検出されたとき。パリティエラーが発生した場合、受信データは RDR レジスタへ転送されますが、SCIn_RXI 割り込み要求は発生しません。PER フラグが 1 の状態では、以降の受信データは RDR レジスタへ転送されません

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
  PER ビットに 0 を書き込んだ後は、PER ビットを読み出して実際に 0 になっていることを確認してください。

SCR_SMCI.RE ビットを 0（シリアル受信動作を禁止）にしても、PER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

ERS フラグ（エラーシグナルステータスフラグ）

［1 になる条件］

- エラーシグナル Low をサンプリングしたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

ORER フラグ（オーバーランエラーフラグ）

受信中にオーバーランエラーが発生して異常終了したことを示します。

［1 になる条件］

- RDR レジスタからパリティエラーのない受信データを読み出す前に、次のデータを受信したとき。オーバーランエラーが発生する前に受信したデータは RDR レジスタに保持されますが、発生後に受信したデータは失われます。ORER フラグが 1 の状態では、受信データは RDR レジスタへ転送されません

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
  ORER ビットに 0 を書き込んだ後は、ORER ビットを読み出して、実際に 0 になっていることを確認してください。

SCR_SMCI.RE ビットを 0 にしても、ORER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

RDRF フラグ（受信データフルフラグ）

RDR レジスタ内の受信データの有無を示します。

［1 になる条件］

- 受信が正常終了し、RSR レジスタから RDR レジスタへ受信データが転送されたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- RDR レジスタからデータを読み出したとき

注 .　通信が中断しない限り、SSR レジスタの RDRF ビットにアクセスすることによって RDRF フラグをクリアしないでください。

TDRE フラグ（送信データエンプティフラグ）

TDR レジスタ内の送信データの有無を示します。

［1 になる条件］

- SCR_SMCI.TE ビットが 0 のとき
- TDR レジスタから TSR レジスタへデータが転送されたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- SCR_SMCI.TE ビットが 1 の状態で、データを TDR レジスタへ転送したとき

注 .　通信が中断しない限り、SSR レジスタの TDRE ビットにアクセスすることによって TDRE フラグをクリアしないでください。

29.2.16 スマートカードモードレジスタ（SCMR）

アドレス SCI0.SCMR 4007 0006h, SCI1.SCMR 4007 0026h, SCI4.SCMR 4007 0086h, SCI9.SCMR 4007 0126h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BCP2	—	—	CHR1	SDIR	SINV	—	SMIF
リセット後の値	1	1	1	1	0	0	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SMIF	スマートカードインタフェースモード選択	0：非スマートカードインタフェースモード（調歩同期式モード、クロック同期式モード、簡易SPIモード、または簡易IICモード） 1：スマートカードインタフェースモード	R/W（注1）
b1	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b2	SINV	送受信データ反転	0：TDRレジスタの内容をそのまま送信。受信データをそのままRDRレジスタに格納 1：TDRレジスタの内容を反転して送信。受信データを反転してRDRレジスタに格納 以下のモードで使用可能です。 • スマートカードインタフェースモード • 調歩同期式モード（マルチプロセッサモード） • クロック同期式モード • 簡易SPIモード 簡易IICモードで動作させる場合は、本ビットを0にしてください。	R/W（注1）
b3	SDIR	送受信データ転送方向	0：LSBファースト転送 1：MSBファースト転送 以下のモードで使用可能です。 • スマートカードインタフェースモード • 調歩同期式モード（マルチプロセッサモード） • クロック同期式モード • 簡易SPIモード 簡易IICモードで動作させる場合は、本ビットを1にしてください。	R/W（注1）
b4	CHR1	キャラクタ長1	調歩同期式モードでのみ有効（注2） SMR.CHRビットと組み合わせてキャラクタ長を選択します。 CHR1 CHR 0 0：データ長9ビットで送受信 0 1：データ長9ビットで送受信 1 0：データ長8ビットで送受信（初期値） 1 1：データ長7ビットで送受信（注3）	R/W（注1）
b6-b5	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b7	BCP2	基本クロックパルス2	SMR_SMCI.BCP[1:0]ビットと組み合わせて基本クロックのサイクル数を選択します。 表 29.4に、SCMR.BCP2ビットとSMR_SMCI.BCP[1:0]ビットの組み合わせを示します。	R/W（注1）

注 1.　SCR/SCR_SMCI レジスタの TE ビットと RE ビットが 0（シリアル送信動作および受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。
注 2.　調歩同期式モード以外では、本ビットの設定は無効であり、データ長は 8 ビット固定となります。
注 3.　LSB ファースト固定となり、送信では TDR レジスタの MSB ビット 7 の値は送信されません。

SCMR レジスタは、スマートカードインタフェースと通信フォーマットを選択するためのレジスタです。

SMIF ビット（スマートカードインタフェースモード選択）

SMIF ビットを 1 にすると、スマートカードインタフェースモードが選択されます。本ビットを 0 にすると、下記のすべてのモードが選択されます。

- 調歩同期式モード（マルチプロセッサモードを含む）
- クロック同期式モード
- 簡易 SPI モード
- 簡易 IIC モード

SINV ビット（送受信データ反転）

送受信データのロジックレベルを反転します。本ビットは、パリティビットのロジックレベルには影響を与えません。パリティビットを反転させる場合は、SMR または SMR_SMCI レジスタの PM ビットを反転してください。

CHR1 ビット（キャラクタ長 1）

SMR レジスタの CHR ビットと組み合わせて、送受信データのデータ長を選択します。

調歩同期式モード以外では、データ長は 8 ビット固定です。

BCP2 ビット（基本クロックパルス 2）

スマートカードインタフェースモードにおいて、1 ビット転送時間中の基本クロックのサイクル数を選択します。SMR_SMCI.BCP[1:0] ビットと組み合わせて設定します。

表 29.4　SCMR.BCP2 ビットと SMR_SMCI.BCP[1:0] ビットの組み合わせ

SCMR.BCP2 ビット	SMR_SMCI.BCP[1:0] ビット	1 ビット転送時間中の基本クロックのサイクル数
0	00	93 クロックサイクル（S = 93）（注 1）
0	01	128 クロックサイクル（S = 128）（注 1）
0	10	186 クロックサイクル（S = 186）（注 1）
0	11	512 クロックサイクル（S = 512）（注 1）
1	00	32 クロックサイクル（S = 32）（注 1）（初期値）
1	01	64 クロックサイクル（S = 64）（注 1）
1	10	372 クロックサイクル（S = 372）（注 1）
1	11	256 クロックサイクル（S = 256）（注 1）

注 1.　S はビットレートレジスタ（BRR）の S 値です。29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください。

29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）

アドレス　SCI0.BRR 4007 0001h, SCI1.BRR 4007 0021h, SCI4.BRR 4007 0081h, SCI9.BRR 4007 0121h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1

BRR レジスタは、ビットレートを調整するための 8 ビットのレジスタです。

SCI はチャネルごとにボーレートジェネレータが独立しているため、それぞれ異なるビットレートの設定が可能です。調歩同期式モード、マルチプロセッサ通信、クロック同期式モード、スマートカードインタフェースモード、簡易 SPI モード、および簡易 IIC モードにおける、BRR レジスタの設定値 N とビットレート B の関係を表 29.5 に示します。

BRR レジスタの初期値は FFh です。BRR レジスタは、CPU から読み出しは可能ですが、書き込みは SCR/SCR_SMCI レジスタの TE および RE ビットが 0 の場合にのみ可能です。

表 29.5　BRR レジスタの設定値 N とビットレート B の関係

モード	SEMR レジスタの設定値 BGDM ビット	SEMR レジスタの設定値 ABCS ビット	SEMR レジスタの設定値 ABCSE ビット	BRR レジスタの設定値	誤差
調歩同期式、マルチプロセッサ通信	0	0	0	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{64 \times 2^{2n-1} \times B} - 1$	誤差 (%) = $\{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 64 \times 2^{2n-1} \times (N+1)} - 1\} \times 100$
	1	0	0	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{32 \times 2^{2n-1} \times B} - 1$	誤差 (%) = $\{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 32 \times 2^{2n-1} \times (N+1)} - 1\} \times 100$
	0	1	0		
	1	1	0	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{16 \times 2^{2n-1} \times B} - 1$	誤差 (%) = $\{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 16 \times 2^{2n-1} \times (N+1)} - 1\} \times 100$
	Don't care	Don't care	1	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{12 \times 2^{2n-1} \times B} - 1$	誤差 (%) = $\{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 12 \times 2^{2n-1} \times (N+1)} - 1\} \times 100$
クロック同期式、簡易SPI				$N = \frac{PCLK \times 10^6}{8 \times 2^{2n-1} \times B} - 1$	
スマートカードインタフェース				$N = \frac{PCLK \times 10^6}{S \times 2^{2n+1} \times B} - 1$	誤差 (%) = $\{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times S \times 2^{2n+1} \times (N+1)} - 1\} \times 100$
簡易IIC（注1）				$N = \frac{PCLK \times 10^6}{64 \times 2^{2n-1} \times B} - 1$	

B：ビットレート（bps）

N：内蔵ボーレートジェネレータの BRR の設定値（0 ≦ N ≦ 255）

PCLK：動作周波数（MHz）

n および S：表 29.7 と表 29.8 に示すように、SMR/SMR_SMCI レジスタと SCMR レジスタの設定値によって決まります。

注 1.　簡易 IIC モードでは、SCLn 出力の High/Low 幅が I^2C 規格を満たすように、ビットレートを調整してください。

表 29.6　SCL High/Low幅算出式

モード	SCL	算出式（結果は秒単位）
IIC	High幅（min値）	$(N + 1) \times 4 \times 2^{2n-1} \times 7 \times \frac{1}{PCLK \times 10^6}$
	Low幅（min値）	$(N + 1) \times 4 \times 2^{2n-1} \times 8 \times \frac{1}{PCLK \times 10^6}$

表 29.7　クロックソースの設定

SMR/SMR_SMCI.CKS[1:0]ビットの設定値 CKS[1:0]ビット	クロックソース	n
0 0	PCLKクロック	0
0 1	PCLK/4クロック	1
1 0	PCLK/16クロック	2
1 1	PCLK/64クロック	3

表 29.8　スマートカードインタフェースモード時の基本クロックの設定

SCMR.BCP2ビットの設定値	SMR_SMCI.BCP[1:0]ビットの設定値	1ビット期間中の基本クロックのサイクル数	S
0	0 0	93クロックサイクル	93
0	0 1	128クロックサイクル	128
0	1 0	186クロックサイクル	186
0	1 1	512クロックサイクル	512
1	0 0	32クロックサイクル	32
1	0 1	64クロックサイクル	64
1	1 0	372クロックサイクル	372
1	1 1	256クロックサイクル	256

調歩同期式モードにおける、BRR レジスタ値 N の設定例を表 29.9 と表 29.10 に示します。各動作周波数において選択可能な最大ビットレートを表 29.11 に示します。また、スマートカードインタフェースモードにおける、BRR レジスタ値 N の設定例を表 29.14 に示します。

簡易 IIC モードにおける、BRR レジスタ値 N の設定例を表 29.17 に示します。スマートカードインタフェースモードでは、1 ビット転送時間における基本クロックのサイクル数 S を選択できます。詳細は、29.6.4　受信データのサンプリングタイミングと受信マージンを参照してください。また、表 29.12 と表 29.13 に、外部クロック入力時の最大ビットレートを示します。

調歩同期式モードにおいて、シリアル拡張モードレジスタ（SEMR）の調歩同期基本クロック選択ビット（ABCS）またはボーレートジェネレータ倍速モード選択ビット（BGDM）のいずれか一方を 1 にした場合、ビットレートは表 29.16 に記載された値の 2 倍になります。両ビットとも 1 にした場合、ビットレートは記載値の 4 倍になります。

表 29.9　各ビットレートに対するBRRの設定例（調歩同期式モード）（1）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	8			9.8304			10			12			12.288		
	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
110	2	141	0.03	2	174	-0.26	2	177	-0.25	2	212	0.03	2	217	0.08
150	2	103	0.16	2	127	0.00	2	129	0.16	2	155	0.16	2	159	0.00
300	1	207	0.16	1	255	0.00	2	64	0.16	2	77	0.16	2	79	0.00
600	1	103	0.16	1	127	0.00	1	129	0.16	1	155	0.16	1	159	0.00
1200	0	207	0.16	0	255	0.00	1	64	0.16	1	77	0.16	1	79	0.00
2400	0	103	0.16	0	127	0.00	0	129	0.16	0	155	0.16	0	159	0.00
4800	0	51	0.16	0	63	0.00	0	64	0.16	0	77	0.16	0	79	0.00
9600	0	25	0.16	0	31	0.00	0	32	-1.36	0	38	0.16	0	39	0.00
19200	0	12	0.16	0	15	0.00	0	15	1.73	0	19	-2.34	0	19	0.00
31250	0	7	0.00	0	9	-1.70	0	9	0.00	0	11	0.00	0	11	2.40
38400	—	—	—	0	7	0.00	0	7	1.73	0	9	-2.34	0	9	0.00

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	14			16			17.2032			18			19.6608		
	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
110	2	248	-0.17	3	70	0.03	3	75	0.48	3	79	-0.12	3	86	0.31
150	2	181	0.16	2	207	0.16	2	223	0.00	2	233	0.16	2	255	0.00
300	2	90	0.16	2	103	0.16	2	111	0.00	2	116	0.16	2	127	0.00
600	1	181	0.16	1	207	0.16	1	223	0.00	1	233	0.16	1	255	0.00
1200	1	90	0.16	1	103	0.16	1	111	0.00	1	116	0.16	1	127	0.00
2400	0	181	0.16	0	207	0.16	0	223	0.00	0	233	0.16	0	255	0.00
4800	0	90	0.16	0	103	0.16	0	111	0.00	0	116	0.16	0	127	0.00
9600	0	45	-0.93	0	51	0.16	0	55	0.00	0	58	-0.69	0	63	0.00
19200	0	22	-0.93	0	25	0.16	0	27	0.00	0	28	1.02	0	31	0.00
31250	0	13	0.00	0	15	0.00	0	16	1.20	0	17	0.00	0	19	-1.70
38400	—	—	—	0	12	0.16	0	13	0.00	0	14	-2.34	0	15	0.00

注 .　この例は、SEMR.ABCS = 0、SEMR.ABCSE = 0、および SEMR.BGDM = 0 の場合を示しています。
ABCS ビットまたは BGDM ビットのいずれか一方を 1 にした場合は、ビットレートが 2 倍になります。
ABCS ビットと BGDM ビットの両方を 1 にした場合は、ビットレートが 4 倍になります。

表 29.10　各ビットレートに対するBRRの設定例（調歩同期式モード）（2）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	20			25			30			33			40		
	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
110	3	88	-0.25	3	110	-0.02	3	132	0.13	3	145	0.33	3	177	-0.25
150	3	64	0.16	3	80	0.47	3	97	-0.35	3	106	0.39	3	129	0.16
300	2	129	0.16	2	162	-0.15	2	194	0.16	2	214	-0.07	3	64	0.16
600	2	64	0.16	2	80	0.47	2	97	-0.35	2	106	0.39	2	129	0.16
1200	1	129	0.16	1	162	-0.15	1	194	0.16	1	214	-0.07	2	64	0.16
2400	1	64	0.16	1	80	0.47	1	97	-0.35	1	106	0.39	1	129	0.16
4800	0	129	0.16	0	162	-0.15	0	194	0.16	0	214	-0.07	1	64	0.16
9600	0	64	0.16	0	80	0.47	0	97	-0.35	0	106	0.39	0	129	0.16
19200	0	32	-1.36	0	40	-0.76	0	48	-0.35	0	53	-0.54	0	64	0.16
31250	0	19	0.00	0	24	0.00	0	29	0.00	0	32	0.00	0	39	0.00
38400	0	15	1.73	0	19	1.73	0	23	1.73	0	26	-0.54	0	32	-1.36

注 .　この例は、SEMR.ABCS = 0、SEMR.ABCSE = 0、および SEMR.BGDM = 0 の場合を示しています。
ABCS ビットまたは BGDM ビットのいずれか一方を 1 にした場合は、ビットレートが 2 倍になります。
ABCS ビットと BGDM ビットの両方を 1 にした場合は、ビットレートが 4 倍になります。

表 29.11　各動作周波数における最大ビットレート（調歩同期式モード）(1/2)

PCLK（MHz）	SEMR レジスタの設定値					最大ビットレート（bps）	PCLK（MHz）	SEMR レジスタの設定値					最大ビットレート（bps）
	BGDM ビット	ABCS ビット	ABCSE ビット	n	N			BGDM ビット	ABCS ビット	ABCSE ビット	n	N	
8	0	0	0	0	0	250000	17.2032	0	0	0	0	0	537600
		1	0	0	0	500000			1	0	0	0	1075200
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	1000000			1	0	0	0	2150400
	Don't care	Don't care	1	0	0	1333333		Don't care	Don't care	1	0	0	2867200
9.8304	0	0	0	0	0	307200	18	0	0	0	0	0	562500
		1	0	0	0	614400			1	0	0	0	1125000
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	1228800			1	0	0	0	2250000
	Don't care	Don't care	1	0	0	1638400		Don't care	Don't care	1	0	0	3000000
10	0	0	0	0	0	312500	19.6608	0	0	0	0	0	614400
		1	0	0	0	625000			1	0	0	0	1228800
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	1250000			1	0	0	0	2457600
	Don't care	Don't care	1	0	0	1666666		Don't care	Don't care	1	0	0	3276800
12	0	0	0	0	0	375000	20	0	0	0	0	0	625000
		1	0	0	0	750000			1	0	0	0	1250000
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	1500000			1	0	0	0	2500000
	Don't care	Don't care	1	0	0	2000000		Don't care	Don't care	1	0	0	3333333

表 29.11　各動作周波数における最大ビットレート（調歩同期式モード）(2/2)

PCLK（MHz）	SEMR レジスタの設定値					最大ビットレート（bps）	PCLK（MHz）	SEMR レジスタの設定値					最大ビットレート（bps）
	BGDM ビット	ABCS ビット	ABCSE ビット	n	N			BGDM ビット	ABCS ビット	ABCSE ビット	n	N	
12.288	0	0	0	0	0	384000	25	0	0	0	0	0	781250
		1	0	0	0	768000			1	0	0	0	1562500
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	1536000			1	0	0	0	3125000
	Don't care	Don't care	1	0	0	2048000		Don't care	Don't care	1	0	0	4166666
14	0	0	0	0	0	437500	30	0	0	0	0	0	937500
		1	0	0	0	875000			1	0	0	0	1875000
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	1750000			1	0	0	0	3750000
	Don't care	Don't care	1	0	0	2333333		Don't care	Don't care	1	0	0	5000000
16	0	0	0	0	0	500000	33	0	0	0	0	0	1031250
		1	0	0	0	1000000			1	0	0	0	2062500
	1	0	0	0	0			1	0	0	0	0	
		1	0	0	0	2000000			1	0	0	0	4125000
	Don't care	Don't care	1	0	0	2666666		Don't care	Don't care	1	0	0	5500000
40	0	0	0	0	0	1250000							
		1	0	0	0	2500000							
	1	0	0	0	0								
		1	0	0	0	5000000							
	Don't care	Don't care	1	0	0	6666666							

表 29.12　外部クロック入力時の最大ビットレート（調歩同期式モード）

PCLK (MHz)	外部入力クロック（MHz）	最大ビットレート（bps）	
		SEMR.ABCS ビット = 0	SEMR.ABCS ビット = 1
8	2.0000	125000	250000
9.8304	2.4576	153600	307200
10	2.5000	156250	312500
12	3.0000	187500	375000
12.288	3.0720	192000	384000
14	3.5000	218750	437500
16	4.0000	250000	500000
17.2032	4.3008	268800	537600
18	4.5000	281250	562500
19.6608	4.9152	307200	614400
20	5.0000	312500	625000
25	6.2500	390625	781250
30	7.5000	468750	937500
33	8.2500	515625	1031250
40	10.0000	625000	1250000

表 29.13　各ビットレートに対するBRRの設定例（クロック同期式モード、簡易SPIモード）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）															
	8		10		16		20		25		30		33		40	
	n	N	n	N	n	N	n	N	n	N	n	N	n	N	n	N
110																
250	3	124	—	—	3	249										
500	2	249	—	—	3	124	—	—			3	233				
1k	2	124	—	—	2	249	—	—	3	97	3	116	3	128	3	155
2.5k	1	199	1	249	2	99	2	124	2	155	2	187	2	205	2	249
5k	1	99	1	124	1	199	1	249	2	77	2	93	2	102	2	124
10k	0	199	0	249	1	99	1	124	1	155	1	187	1	205	1	249
25k	0	79	0	99	0	159	0	199	0	249	1	74	1	82	1	99
50k	0	39	0	49	0	79	0	99	0	124	0	149	0	164	1	49
100k	0	19	0	24	0	39	0	49	0	62	0	74	0	82	0	99
250k	0	7	0	9	0	15	0	19	0	24	0	29	0	32	0	39
500k	0	3	0	4	0	7	0	9	—	—	0	14	—	—	0	19
1M	0	1			0	3	0	4	—	—	—	—	—	—	0	9
2.5M			0	0 （注1）			0	1	—	—	0	2	—	—	0	3
5M							0	0 （注1）	—	—	—	—	—	—	0	1
7.5M											0	0 （注1）				

空欄：設定禁止

—：設定可能ですが誤差が生じます。

注 1.　連続送受信はできません。1 フレームの送受信後、次のフレームの送受信を開始するまでに 1 ビット期間の間隔が空きます。すなわち、同期クロックの出力が 1 ビット期間停止します。そのため、1 フレーム（8 ビット）のデータ転送に 9 ビット分の時間がかかり、平均転送レートはビットレートの 8/9 倍になります。

表 29.14　外部クロック入力時の最大ビットレート（クロック同期式モード、簡易SPIモード）

PCLK（MHz）	外部入力クロック（MHz）	最大ビットレート（Mbps）
8	1.3333	1.3333333
10	1.6667	1.6666667
12	2.0000	2.0000000
14	2.3333	2.3333333
16	2.6667	2.6666667
18	3.0000	3.0000000
20	3.3333	3.3333333
25	4.1667	4.1666667
30	5.0000	5.0000000
33	5.5000	5.5000000
40	6.6667	6.6666667

表 29.15　各ビットレートに対するBRRの設定例（スマートカードインタフェースモード、n = 0、S = 372の場合）

	動作周波数PCLK（MHz）											
	7.1424			10.00			10.7136			13.00		
ビットレート（bps）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
9600	0	0	0.00	0	1	30	0	1	25	0	1	8.99

	動作周波数PCLK（MHz）											
	14.2848			16.00			18.00			20.00		
ビットレート（bps）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
9600	0	1	0.00	0	1	12.01	0	2	15.99	0	2	6.66

	動作周波数PCLK（MHz）											
	25.00			30.00			33.00			40.00		
ビットレート（bps）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
9600	0	3	12.49	0	3	5.01	0	4	7.59	0	5	-6.66

表 29.16　各動作周波数における最大ビットレート（スマートカードインタフェースモード、S = 32の場合）

PCLK（MHz）	最大ビットレート（bps）	n	N
10.00	156250	0	0
10.7136	167400	0	0
13.00	203125	0	0
16.00	250000	0	0
18.00	281250	0	0
20.00	312500	0	0
25.00	390625	0	0
30.00	468750	0	0
33.00	515625	0	0
40.00	625000	0	0

表 29.17　各ビットレートに対するBRRの設定例（簡易IICモード）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	8			10			16			20			25		
	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
10k	0	24	0.0	0	30	0.8	1	12	-3.8	1	15	-2.3	1	19	-2.3
25k	0	9	0.0	0	12	-3.8	1	4	0.0	1	5	4.2	1	7	-2.3
50k	0	4	0.0	0	5	4.2	1	2	-16.7	1	2	4.2	1	3	-2.3
100k（注1）	0	2	-16.7	0	3	-21.9	0	4	0.0	0	6	-10.7	1	1	-2.3
250k	0	0	0.0	0	0	25	0	1	0.0	0	2	-16.7	0	2	4.2
350k										0	1	-10.7	0	1	11.6（注2）
400k（注1）										0	1	-21.9	0	1	-2.3（注2）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）								
	30			33			40		
	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）	n	N	誤差（%）
10k	1	22	1.9	1	25	-0.8	0	124	0.0
25k	1	8	4.2	1	9	3.1	0	49	0.0
50k	1	4	-6.3	1	4	3.1	0	24	0.0
100k（注1）	1	2	-21.9	1	2	-14.1	0	12	-3.9
250k	0	3	-6.3	0	3	3.1	0	4	0.0
350k	0	2	-10.7	0	2	-1.8	0	3	-10.7
400k（注1）	0	2	-21.9	0	2	-14.1	0	3	-21.9

注 1.　100kbps と 400kbps のビットレートは、設定値の誤差が負（マイナス）の側にあることを意味しています。
注 2.　Low 幅の最小値は、ファストモードでの標準値である 1.3μs 未満です。

表 29.18　各ビットレートでのSCL High/Low幅最小値（簡易IICモード）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）											
	8			10			16			20		
	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）
10k	0	24	43.75/50.00	0	30	43.40/49.60	1	12	45.5/52.00	1	15	44.80/51.20
25k	0	9	17.50/20.00	0	12	18.2/20.80	1	4	17.50/20.00	1	5	16.80/19.20
50k	0	4	8.75/10.00	0	5	8.40/9.60	1	2	10.50/12.00	1	2	8.40/9.60
100k	0	2	5.25/6.00	0	3	5.60/6.40	0	4	4.38/5.00	0	6	4.90/5.60
250k	0	0	1.75/2.00	0	0	1.40/1.60	0	1	1.75/2.00	0	2	2.10/2.40
350k										0	1	1.40/1.60
400k										0	1	1.40/1.60

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）											
	25			30			33			40		
	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）	n	N	SCL High/Low幅最小値（μs）
10k	1	19	44.80/51.20	1	22	42.93/49.60	1	25	44.12/50.42	0	124	43.75/50.00
25k	1	7	17.92/20.48	1	8	16.80/19.20	1	9	16.97/19.39	0	49	17.50/20.00
50k	1	3	8.96/10.24	1	4	9.33/10.66	1	4	8.48/9.70	0	24	8.75/10.00
100k	1	1	4.48/5.12	1	2	5.60/6.40	1	2	5.09/5.82	0	12	4.55/5.20
250k	0	2	1.68/1.92	0	3	1.86/2.13	0	3	1.70/1.94	0	4	1.75/2.00
350k	0	1	1.12/1.28（注1）	0	2	1.40/1.60	0	2	1.27/1.45	0	3	1.40/1.60
400k	0	1	1.12/1.28（注1）	0	2	1.40/1.60	0	2	1.27/1.45	0	3	1.40/1.60

注 1.　Low 幅の最小値は、ファストモードの標準値である 1.3μs 未満です。設定値は表 29.17 と同一です。

29.2.18　モジュレーションデューティレジスタ（MDDR）

アドレス　SCI0.MDDR 4007 0012h, SCI1.MDDR 4007 0032h, SCI4.MDDR 4007 0092h, SCI9.MDDR 4007 0132h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1

MDDR レジスタは、BRR レジスタで調整されたビットレートを補正するためのレジスタです。

SEMR.BRME ビットが 1 のとき、内蔵ボーレートジェネレータにより生成されるビットレートは、MDDR レジスタの設定に応じて均一に補正されます（M/256）。MDDR レジスタの設定値 M とビットレート B の関係を表 29.19 に示します。

MDDR レジスタの初期値は FFh です。ビット 7 は 1 に固定されています。

MDDR レジスタは、CPU から読み出しは可能ですが、書き込みは SCR/SCR_SMCI レジスタの TE ビットと RE ビットが 0 の場合にのみ可能です。

表 29.19　ビットレートモジュレーション機能使用時の MDDR レジスタ設定値 M とビットレート B の関係

モード	SEMR レジスタの設定値 BGDM ビット	SEMR レジスタの設定値 ABCS ビット	SEMR レジスタの設定値 ABCSE ビット	BRR レジスタの設定値	誤差
調歩同期式、マルチプロセッサ通信	0	0	0	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{64 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times B} - 1$	誤差（%）$= \{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 64 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times (N+1)} - 1\} \times 100$
	1	0	0	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{32 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times B} - 1$	誤差（%）$= \{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 32 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times (N+1)} - 1\} \times 100$
	0	1	0		
	1	1	0	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{16 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times B} - 1$	誤差（%）$= \{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 16 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times (N+1)} - 1\} \times 100$
	Don't care	Don't care	1	$N = \frac{PCLK \times 10^6}{12 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times B} - 1$	誤差（%）$= \{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times 12 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times (N+1)} - 1\} \times 100$
クロック同期式、簡易 SPI（注 1）				$N = \frac{PCLK \times 10^6}{8 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times B} - 1$	
スマートカードインタフェース				$N = \frac{PCLK \times 10^6}{S \times 2^{2n+1} \times (256/M) \times B} - 1$	誤差（%）$= \{\frac{PCLK \times 10^6}{B \times S \times 2^{2n+1} \times (256/M) \times (N+1)} - 1\} \times 100$
簡易 I^2C（注 2）				$N = \frac{PCLK \times 10^6}{64 \times 2^{2n-1} \times (256/M) \times B} - 1$	

B：ビットレート（bps）
M：MDDR レジスタの設定値（128 ≦ MDDR ≦ 255）
N：ボーレートジェネレータの BRR の設定値（0 ≦ N ≦ 255）
PCLK：動作周波数（MHz）
n および S：表 29.7 と表 29.8 に示すように、SMR/SMR_SMCI レジスタと SCMR レジスタの設定値によって決まります。詳細は、29.2.17　ビットレートレジスタ（BRR）を参照してください。
注 1.　クロック同期式モードと、簡易 SPI モードの最高速設定（SMR.CKS[1:0] ビット = 00b、SCR.CKE[1] ビット = 0、および BRR = 0）では、この機能を使用しないでください。
注 2.　簡易 IIC モードでは、SCLn 出力の High/Low 幅が I^2C 規格を満たすように、ビットレートを調整してください。

通常の調歩同期式モードにおける BRR レジスタ値 N と MDDR レジスタ値 M の設定例を表 29.20 に示します。

表 29.20　各ビットレートに対するBRRとMDDRの設定例（調歩同期式モード）（1）

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	8					9.8304					16				
	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）
38400	0	5	236	0	0.03	0	7	（256）（注1）	0	0.00	0	10	173	1	-0.01
57600	0	3	236	0	0.03	0	4	240	0	0.00	0	4	236	0	0.03
115200	0	1	236	0	0.03	0	1	192	0	0.00	0	4	236	1	0.03
230400	0	0	236	0	0.03	0	0	192	0	0.00	0	1	189	1	0.14
460800	0	0	236	1	0.03	0	0	192	1	0.00	0	0	189	1	0.14

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	12					12.288					14				
	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）
38400	0	8	236	0	0.03	0	9	（256）（注1）	0	0.00	0	16	191	1	0.00
57600	0	5	236	0	0.03	0	4	192	0	0.00	0	13	236	1	0.03
115200	0	2	236	0	0.03	0	4	192	1	0.00	0	6	236	1	0.03
230400	0	2	236	1	0.03	0	2	230	1	-0.17	0	2	202	1	-0.11
460800	0	0	157	1	-0.18	0	0	154	1	-0.26	0	0	135	1	0.14

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	16					17.2032					18				
	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）
38400	0	11	236	0	0.03	0	13	（256）（注1）	0	0.00	0	18	166	1	-0.01
57600	0	7	236	0	0.03	0	6	192	0	0.00	0	18	249	1	-0.01
115200	0	3	236	0	0.03	0	6	192	1	0.00	0	8	236	1	0.03
230400	0	1	236	0	0.03	0	3	219	1	-0.20	0	1	210	0	0.14
460800	0	1	236	1	0.03	0	1	219	1	-0.20	0	0	210	0	0.14

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	19.6608					20					25				
	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）
38400	0	15	（256）（注1）	0	0.00	0	10	173	0	-0.01	0	11	151	0	0.00
57600	0	9	240	0	0.00	0	9	236	0	0.03	0	7	151	0	0.00
115200	0	4	240	0	0.00	0	4	236	0	0.03	0	3	151	0	0.00
230400	0	1	192	0	0.00	0	4	236	1	0.03	0	1	151	0	0.00
460800	0	0	192	0	0.00	0	0	189	0	0.14	0	0	151	0	0.00

ビットレート（bps）	動作周波数PCLK（MHz）														
	30					33					40				
	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）	n	N	M	BGDMビット	誤差（%）
38400	0	36	194	1	0.01	0	14	143	0	0.01	0	21	173	0	-0.01
57600	0	10	173	0	-0.01	0	9	143	0	0.01	0	38	230	1	-0.01
115200	0	10	173	1	-0.01	0	4	143	0	0.01	0	9	236	0	0.03
230400	0	6	220	1	-0.09	0	4	143	1	0.01	0	4	236	0	0.03
460800	0	3	252	1	0.14	0	1	229	0	0.10	0	4	236	1	0.03

注 1.　この例は、SEMR レジスタの ABCS ビットと ABCSE ビットが 0 の場合を示しています。
SEMR.BRME = 0（M = 256）の場合、ビットレートモジュレーション機能は無効になります。

29.2.19 シリアル拡張モードレジスタ（SEMR）

アドレス SCI0.SEMR 4007 0007h, SCI1.SEMR 4007 0027h, SCI4.SEMR 4007 0087h, SCI9.SEMR 4007 0127h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RXDESEL	BGDM	NFEN	ABCS	ABCSE	BRME	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	BRME	ビットレートモジュレーション有効	0：ビットレートモジュレーション機能は無効 1：ビットレートモジュレーション機能は有効	R/W（注1）
b3	ABCSE	調歩同期拡張基本クロック選択1	調歩同期式モードにおいて、SCR.CKE[1] = 0の場合にのみ有効です。 0：1ビット期間のクロックサイクル数は、SEMRレジスタのBGDMとABCSの組み合わせにより決定 1：ボーレートは1ビット期間に対して基本クロックの6サイクル	R/W（注1）
b4	ABCS	調歩同期基本クロック選択	調歩同期式モードでのみ有効 0：基本クロックの16サイクルを1ビット期間として選択 1：基本クロックの8サイクルを1ビット期間として選択	R/W（注1）
b5	NFEN	デジタルノイズフィルタ機能有効	調歩同期式モードの場合 0：RXDn入力信号のノイズ除去機能は無効 1：RXDn入力信号のノイズ除去機能は有効 簡易IICモードの場合 0：SCLnおよびSDAn入力信号のノイズ除去機能は無効 1：SCLnおよびSDAn入力信号のノイズ除去機能は有効 他のすべてのモードでは、NFENビットは0でなければなりません。	R/W（注1）
b6	BGDM	ボーレートジェネレータ倍速モード選択	調歩同期式モードにおいて、SCR.CKE[1] = 0の場合にのみ有効です。 0：ボーレートジェネレータから通常の周波数のクロックを出力 1：ボーレートジェネレータから2倍の周波数のクロックを出力	R/W（注1）
b7	RXDESEL	調歩同期スタートビットエッジ検出選択	調歩同期式モードでのみ有効です。 0：RXDn端子入力のLowレベルでスタートビットを検出 1：RXDn端子入力の立ち下がりエッジでスタートビットを検出	R/W（注1）

注 1. SCR/SCR_SMCI レジスタの TE ビットと RE ビットが 0（シリアル送信動作および受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。

SEMR レジスタは、調歩同期式モードにおいて、1 ビット期間のクロックソースを選択するためのレジスタです。

BRME ビット（ビットレートモジュレーション有効）

ビットレートモジュレーション機能を有効または無効にします。有効にすると、内蔵ボーレートジェネレータによって生成されるビットレートが均一に補正されます。

ABCSE ビット（調歩同期拡張基本クロック選択 1）

1 ビット期間における基本クロックのパルス数は 6 であり、ボーレートジェネレータから 2 倍の周波数のクロックが出力されます。バスクロック周波数を分周しているときにビットレートを 6 にする場合、ABCSE ビットを使用し、かつ SMR.CKS[1:0] = 00b、BRR = 0 に設定してください。本ビットは、調歩同期式モード以外では 0 にしてください。

ABCS ビット（調歩同期基本クロック選択）

1 ビット期間の基本クロックのサイクル数を選択します。本ビットは、調歩同期式モード以外では 0 にしてください。

NFEN ビット（デジタルノイズフィルタ機能有効）

デジタルノイズフィルタ機能を有効または無効にします。

デジタルノイズフィルタ機能を有効にした場合：

- 調歩同期式モードでは、RXDn 入力信号のノイズを除去する
- 簡易 IIC モードでは、SDAn および SCLn の入力信号のノイズを除去する

他のすべてのモードでは、NFEN ビットを 0 にして、デジタルノイズフィルタ機能を無効にしてください。

デジタルノイズフィルタ機能を無効にすると、受信した信号がそのまま転送されます。

BGDM ビット（ボーレートジェネレータ倍速モード選択）

ボーレートジェネレータの出力クロックの周期を通常の周波数にするか 2 倍の周波数にするかを選択します。

本ビットは、調歩同期式モード（SMR.CM ビット = 0）において、クロックソースに内蔵ボーレートジェネレータ（SCR.CKE[1] ビット = 0）を選択したとき有効です。内蔵ボーレートジェネレータから通常の周波数のクロックを出力するか、2 倍の周波数のクロックを出力するかを選択できます。ボーレートジェネレータから出力されるクロックは基本クロックの生成に使用されます。BGDM ビットを 1 にすると、基本クロックの周期が 1/2 倍になり、ビットレートが 2 倍になります。

本ビットは、調歩同期式モード以外では 0 にしてください。

RXDESEL ビット（調歩同期スタートビットエッジ検出選択）

調歩同期式モードで受信する場合のスタートビットの検出方法を選択します。ブレーク中に受信を停止する場合、またはブレーク終了後に RXDn 端子入力を 1 フレーム期間以上 High レベルに保持せずに受信を開始する場合、本ビットを 1 にしてください。

本ビットは、調歩同期式モード以外では 0 にしてください。

29.2.20　ノイズフィルタ設定レジスタ（SNFR）

アドレス　SCI0.SNFR 4007 0008h, SCI1.SNFR 4007 0028h, SCI4.SNFR 4007 0088h, SCI9.SNFR 4007 0128h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	NFCS[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	NFCS[2:0]	ノイズフィルタクロック選択	調歩同期式モード時、基本クロックの標準設定は下記のとおりです。 b2 b0 0 0 0 : 1分周のクロック信号をノイズフィルタに使用 簡易IICモード時、SMR.CKS[1:0]ビットで選択した内蔵ボーレートジェネレータのクロックソースの標準設定は下記のとおりです。 b2 b0 0 0 1 : 1分周のクロック信号をノイズフィルタに使用 0 1 0 : 2分周のクロック信号をノイズフィルタに使用 0 1 1 : 4分周のクロック信号をノイズフィルタに使用 1 0 0 : 8分周のクロック信号をノイズフィルタに使用 上記以外は設定しないでください。	R/W （注1）
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　SCR/SCR_SMCI レジスタの TE ビットと RE ビットが 0（シリアル送信動作およびシリアル受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。

SNFR レジスタは、デジタルノイズフィルタのクロックを設定するためのレジスタです。

NFCS[2:0] ビット（ノイズフィルタクロック選択）

デジタルノイズフィルタのサンプリングクロックを選択します。調歩同期式モードでノイズフィルタを使用する場合、これらのビットを 000b にしてください。簡易 IIC モードでは、これらのビットを 001b ～ 100b の範囲で設定してください。

29.2.21 I²C モードレジスタ 1（SIMR1）

アドレス SCI0.SIMR1 4007 0009h, SCI1.SIMR1 4007 0029h, SCI4.SIMR1 4007 0089h, SCI9.SIMR1 4007 0129h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	IICDL[4:0]					—	—	IICM
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IICM	簡易IICモード選択	SMIF　IICM 0　0：調歩同期式モード、マルチプロセッサモード、クロック同期式モード、または簡易SPIモード 0　1：簡易IICモード 1　0：スマートカードインタフェースモード 1　1：設定禁止	R/W（注1）
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7-b3	IICDL[4:0]	SDA遅延出力選択	下記のサイクル数は、内蔵ボーレートジェネレータからのクロック信号のサイクル数です。 b7　b3 0 0 0 0 0：出力遅延なし 0 0 0 0 1：0～1サイクル 0 0 0 1 0：1～2サイクル 0 0 0 1 1：2～3サイクル 0 0 1 0 0：3～4サイクル 0 0 1 0 1：4～5サイクル ： 1 1 1 1 0：29～30サイクル 1 1 1 1 1：30～31サイクル	R/W（注1）

注 1.　SCR.TE ビットと SCR.RE ビットが 0（シリアル送信動作およびシリアル受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。

SIMR1 レジスタは、簡易 IIC モードと、SDAn 出力の遅延段数を選択するためのレジスタです。

IICM ビット（簡易 IIC モード選択）

IICM ビットは、SCMR.SMIF ビットとの組み合わせで動作モードを選択します。

IICDL[4:0] ビット（SDA 遅延出力選択）

SCLn 端子出力の立ち下がりに対する SDAn 端子出力の遅延を設定します。

内蔵ボーレートジェネレータからのクロック信号を基準として、「遅延なし」から 31 サイクルまでの範囲で設定が可能です。SMR.CKS[1:0] ビットの設定によって分周された PCLK クロックが、内蔵ボーレートジェネレータからのクロック信号として供給されます。簡易 IIC モード以外では、これらのビットを 00000b にしてください。簡易 IIC モードでは、これらのビットを 00001b ～ 11111b の範囲で設定してください。

29.2.22 I²C モードレジスタ 2（SIMR2）

アドレス SCI0.SIMR2 4007 000Ah, SCI1.SIMR2 4007 002Ah, SCI4.SIMR2 4007 008Ah, SCI9.SIMR2 4007 012Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	IICACKT	—	—	—	IICCSC	IICINTM
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IICINTM	IIC割り込みモード選択	0：ACK/NACK割り込みを使用 1：受信割り込み、送信割り込みを使用	R/W（注1）
b1	IICCSC	クロック同期化	0：クロック信号と同期しない 1：クロック信号と同期する	R/W（注1）
b4-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	IICACKT	ACK送信データ	0：ACK送信 1：NACK送信またはACK/NACK受信	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　SCR.TE ビットと SCR.RE ビットが 0（シリアル受信動作およびシリアル送信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。

SIMR2 レジスタは、簡易 IIC モードにおいて、送受信の制御方法を選択するためのレジスタです。

IICINTM ビット（IIC 割り込みモード選択）

簡易 IIC モードにおいて、割り込み要求の要因を選択します。

IICCSC ビット（クロック同期化）

たとえば、他のデバイスによりウェイトが挿入されたため SCLn 端子を Low にしたとき、内部で生成する SCLn クロック信号を同期化する場合は、IICCSC ビットを 1 にしてください。

本ビットを 0 にすると、SCLn クロック信号の同期化を行いません。SCLn 端子の入力レベルにかかわらず、BRR レジスタで選択したビットレートに従って SCLn クロック信号を生成します。

デバッグ時を除いて、本ビットは 1 にしてください。

IICACKT ビット（ACK 送信データ）

送信データの ACK ビットを格納します。ACK/NACK ビット受信時は、IICACKT ビットを 1 にしてください。

29.2.23 I²C モードレジスタ 3（SIMR3）

アドレス SCI0.SIMR3 4007 000Bh, SCI1.SIMR3 4007 002Bh, SCI4.SIMR3 4007 008Bh, SCI9.SIMR3 4007 012Bh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	IICSCLS[1:0]		IICSDAS[1:0]		IICSTIF	IICSTP REQ	IICRST AREQ	IICSTA REQ
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IICSTAREQ	開始条件生成	0：開始条件を生成しない 1：開始条件を生成する（注1）（注3）（注5）（注6）	R/W
b1	IICRSTAREQ	再開始条件生成	0：再開始条件を生成しない 1：再開始条件を生成する（注2）（注3）（注5）（注6）	R/W
b2	IICSTPREQ	停止条件生成	0：停止条件を生成しない 1：停止条件を生成する（注2）（注3）（注5）（注6）	R/W
b3	IICSTIF	開始／再開始／停止条件生成完了フラグ	0：各条件の生成要求がない状態、または生成中の状態 1：開始条件、再開始条件、または停止条件の生成が完了した状態 IICSTIFビットに0を書くと、0になります。（注4）	R/W（注4）
b5-b4	IICSDAS[1:0]	SDA出力選択	b5 b4 0 0：シリアルデータ出力 0 1：開始条件、再開始条件、または停止条件の生成 1 0：SDAn端子はLowを出力 1 1：SDAn端子はハイインピーダンス状態	R/W
b7-b6	IICSCLS[1:0]	SCL出力選択	b7 b6 0 0：シリアルクロック出力 0 1：開始条件、再開始条件、または停止条件の生成 1 0：SCLn端子はLowを出力 1 1：SCLn端子はハイインピーダンス状態	R/W

注 1.　バスの状態を確認し、バスフリー状態のときにのみ開始条件を生成してください。
注 2.　バスの状態を確認し、バスビジー状態のときに再開始条件または停止条件を生成してください。
注 3.　IICSTAREQ ビット、IICRSTAREQ ビット、IICSTPREQ ビットは、2 つ以上を 1 にしないでください。
注 4.　0 のみを書いてください。1 を書くと、その値は無視されます。
注 5.　IICSTIF フラグを 0 にしてから、各条件生成を行ってください。
注 6.　1 の状態にあるとき、0 を書かないでください。本ビットが 1 の状態にあるとき 0 を書くと、条件生成が中断します。

IICSTAREQ ビット（開始条件生成）

開始条件の生成を行うときは、IICSTAREQ ビットを 1 にするとともに、IICSDAS[1:0] ビットと IICSCLS[1:0] ビットをそれぞれ 01b にしてください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 開始条件の生成が完了したとき

IICRSTAREQ ビット（再開始条件生成）

再開始条件の生成を行うときは、IICSDAS[1:0] ビットと IICSCLS[1:0] ビットをそれぞれ 01b にし、IICRSTAREQ ビットを 1 にしてください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 再開始条件の生成が完了したとき

IICSTPREQ ビット（停止条件生成）

停止条件の生成を行うときは、IICSDAS[1:0] ビットと IICSCLS[1:0] ビットをそれぞれ 01b にし、IICSTPREQ ビットを 1 にしてください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 停止条件の生成が完了したとき

IICSTIF フラグ（開始／再開始／停止条件生成完了フラグ）

各条件の生成後に、生成が完了したことを示します。IICSTAREQ ビット、IICRSTAREQ ビット、または IICSTPREQ ビットを用いて各条件の生成を行うときは、IICSTIF フラグを 0 にしてから生成を実行してください。

SCR.TEIE ビットで割り込み要求が許可されているとき、IICSTIF フラグが 1 の場合に STI 要求が出力されます。

［1 になる条件］

- 開始条件、再開始条件、または停止条件の生成が完了したとき
  本フラグが 0 になる条件と競合した場合は、0 になる条件が優先されます。

［0 になる条件］

- 本ビットに 0 を書き込んだとき（IICSTIF フラグが 0 であることを確認してください）
- SIMR1.IICM ビットに 0 を書き込んだとき（簡易 IIC モード以外の場合）
- SCR.TE ビットに 0 を書き込んだとき

IICSDAS[1:0] ビット（SDA 出力選択）

SDAn 端子からの出力を制御します。

IICSDAS[1:0] ビットと IICSCLS[1:0] ビットは同じ値にしてください。

IICSCLS[1:0] ビット（SCL 出力選択）

SCLn 端子からの出力を制御します。

IICSCLS[1:0] ビットと IICSDAS[1:0] ビットは同じ値にしてください。

29.2.24 I²C ステータスレジスタ（SISR）

アドレス SCI0.SISR 4007 000Ch, SCI1.SISR 4007 002Ch, SCI4.SISR 4007 008Ch, SCI9.SISR 4007 012Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	IICACKR
リセット後の値	0	0	x	x	0	x	0	0

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	IICACKR	ACK受信データフラグ	0：ACK受信 1：NACK受信	R
b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b2	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。	R
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b5-b4	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。	R
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

SISR レジスタは、簡易 IIC モードにおける状態をモニタするためのレジスタです。

IICACKR フラグ（ACK 受信データフラグ）

IICACKR フラグから、受信した ACK/NACK ビットを読み出すことができます。

IICACKR フラグは、ACK/NACK を受信するビットの SCLn クロックの立ち上がりのタイミングで更新されます。

29.2.25 SPI モードレジスタ（SPMR）

アドレス SCI0.SPMR 4007 000Dh, SCI1.SPMR 4007 002Dh, SCI4.SPMR 4007 008Dh, SCI9.SPMR 4007 012Dh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CKPH	CKPOL	—	MFF	—	MSS	CTSE	SSE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SSE	SSn端子機能有効	0：SSn端子機能は無効 1：SSn端子機能は有効	R/W （注1）
b1	CTSE	CTS有効	0：CTS機能は無効（RTS出力機能は有効） 1：CTS機能は有効	R/W （注1）
b2	MSS	マスタスレーブ選択	0：TXDn端子は送信、RXDn端子は受信（マスタモード） 1：TXDn端子は受信、RXDn端子は送信（スレーブモード）	R/W （注1）
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	MFF	モードフォルトフラグ	0：モードフォルトエラーなし 1：モードフォルトエラーあり	R/W （注2）
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	CKPOL	クロック極性選択	0：クロック極性反転なし 1：クロック極性反転あり	R/W （注1）
b7	CKPH	クロック位相選択	0：クロック遅延なし 1：クロック遅延あり	R/W （注1）

注 1.　SCR.TE ビットと SCR.RE ビットが 0（シリアル送信動作およびシリアル受信動作を禁止）の場合にのみ書き込み可能です。
注 2.　フラグをクリアするため、0 を書き込むことのみ可能です。

SPMR レジスタは、調歩同期式モードおよびクロック同期式モードの拡張設定を選択するためのレジスタです。

SSE ビット（SSn 端子機能有効）

簡易 SPI モードで SSn 端子を用いて送受信制御を行うには、SSE ビットを 1 にしてください。他のすべてのモードでは 0 にしてください。マスタモード（SCR.CKE[1:0] = 00b および MSS = 0）選択時にシングルマスタ構成が存在する場合は、送受信制御にマスタ側 SSn 端子は必要ありません。そのような場合は、SSE ビットを 0 にします。SSE ビットと CTSE ビットの両方を有効にしないでください（両方を有効にした場合、両ビットを 0 にしたときと同じ動作になります）。

CTSE ビット（CTS 有効）

SSn 端子を CTS 制御信号入力として用いて送受信制御を行う場合、本ビットを 1 にしてください。本ビットを 0 にした場合は RTS 信号が出力されます。スマートカードインタフェースモード、簡易 SPI モード、および簡易 IIC モードでは、本ビットを 0 にしてください。CTSE ビットと SSE ビットの両方を 1 にしないでください（両方を有効にした場合、両ビットを 0 にしたときと同じ動作になります）。

MSS ビット（マスタスレーブ選択）

簡易 SPI モードにおいて、マスタ動作またはスレーブ動作を選択します。MSS ビットを 1 にすると、TXDn 端子と RXDn 端子の機能が逆になり、データは TXDn 端子を介して受信され、RXDn 端子を介して送信されます。簡易 SPI モード以外では 0 にしてください。

MFF フラグ（モードフォルトフラグ）

モードフォルトエラーが発生したことを示します。マルチマスタ構成では、本フラグを読み出すことでモードフォルトエラーの発生を判定できます。

［1 になる条件］

- 簡易 SPI モードでマスタモード（SSE ビット = 1 かつ MSS ビット = 0）の場合に、SSn 端子入力が Low になったとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

CKPOL ビット（クロック極性選択）

SCKn 端子からのクロック出力の極性を選択します。詳細は、図 29.70 を参照してください。

簡易 SPI モードおよびクロック同期式モード以外では 0 としてください。

CKPH ビット（クロック位相選択）

SCKn 端子からのクロック出力の位相を選択します。詳細は、図 29.70 を参照してください。

簡易 SPI モードおよびクロック同期式モード以外では 0 としてください。

29.2.26 FIFO コントロールレジスタ（FCR）

アドレス SCI0.FCR 4007 0014h, SCI1.FCR 4007 0034h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RSTRG[3:0]				RTRG[3:0]				TTRG[3:0]				DRES	TFRST	RFRST	FM
リセット後の値	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FM	FIFOモード選択	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードでのみ有効です。 0：非FIFOモード 通信にはTDR/RDRまたはTDRHL/RDRHLレジスタが選択されます。 1：FIFOモード 通信にはFTDRHL/FRDRHLレジスタが選択されます。	R/W （注1）
b1	RFRST	受信FIFOデータレジスタリセット	FCR.FM = 1の場合にのみ有効です。 0：FRDRHLレジスタをリセットしない 1：FRDRHLレジスタをリセットする	R/W
b2	TFRST	送信FIFOデータレジスタリセット	FCR.FM = 1の場合にのみ有効です。 0：FTDRHLレジスタをリセットしない 1：FTDRHLレジスタをリセットする	R/W
b3	DRES	受信データレディエラー選択	受信データレディ検出時に割り込み要求を選択します。 0：受信データフル割り込み（SCIn_RXI） 1：受信エラー割り込み（SCIn_ERI）	R/W
b7-b4	TTRG[3:0]	送信FIFOデータトリガ数	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードでのみ有効です。 0000：トリガ数0 ： 1111：トリガ数15	R/W
b11-b8	RTRG[3:0]	受信FIFOデータトリガ数	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードでのみ有効です。 0000：トリガ数0 ： 1111：トリガ数15	R/W
b15-b12	RSTRG[3:0]	RTS出力アクティブトリガ数選択	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードにおいて、FCR.FM = 1、SPMR.CTSE = 0、およびSPMR.SSE = 0の場合にのみ有効です。 0000：トリガ数0 ： 1111：トリガ数15	R/W

注 1.　TE ビット = 0 かつ RE ビット = 0 の場合にのみ書き込み可能です。

FCR レジスタは、FIFO モードの選択、FTDRHL/FRDRHL レジスタのリセット、送受信用 FIFO データトリガ数の選択、および RTS 出力アクティブトリガ数の選択を行います。

FM ビット（FIFO モード選択）

FM ビットを 1 にすると、通信には FTDRHL と FRDRHL が選択されます。FM ビットを 0 にすると、通信には TDR と RDR、または TDRHL と RDRHL が選択されます。

RFRST ビット（受信 FIFO データレジスタリセット）

RFRST ビットを 1 にすると、FRDRHL レジスタがリセットされ、受信データ数は 0 にリセットされます。本ビットは、1 を書き込んでから 1PCLK 経過後に 0 になります。

TFRST ビット（送信 FIFO データレジスタリセット）

TFRST ビットを 1 にすると、FTDRHL レジスタがリセットされ、送信データ数は 0 にリセットされます。本ビットは、1 を書き込んでから 1PCLK 経過後 0 になります。

DRES ビット（受信データレディエラー選択）

受信データレディエラー検出時、DRES ビットは、SCIn_RXI 割り込み要求または SCIn_ERI 割り込み要求を選択します。DMAC または DTC の開始、および FRDRH レジスタまたは FRDRL レジスタの読み出しを行う場合に DRES ビットを 1 にします。

TTRG[3:0] ビット（送信 FIFO データトリガ数）

送信 FIFO データレジスタ（FTDRHL）内の送信データ数が指定された送信トリガ数以下の場合、TDFE フラグが 1 になり、ソフトウェアによる FTDRHL レジスタへのデータ書き込みが可能になります。SCR.TIE = 1 であれば、SCIn_TXI 割り込み要求が発生しています。

RTRG[3:0] ビット（受信 FIFO データトリガ数）

受信 FIFO データレジスタ（FRDRHL）内の受信データ数が指定された受信トリガ数以上の場合、RDF フラグが 1 になり、ソフトウェアによる FRDRHL レジスタからのデータ読み出しが可能になります。SCR.RIE = 1 であれば、SCIn_RXI 割り込み要求が発生しています。RTRG が 0 の場合は、受信 FIFO 内のデータ数が 0 であっても、RDF フラグはセットされません。また、SCIn_RXI 割り込みは発生しません。

RSTRG[3:0] ビット（RTS 出力アクティブトリガ数選択）

受信 FIFO データレジスタ（FRDRHL）に格納された受信データ数が指定された受信トリガ数以上の場合、RTS 信号は High 状態になります。RSTRG が 0 の場合は、受信 FIFO 内のデータ数が 0 であっても、RTS 信号は High 状態になりません。

29.2.27　FIFO データ数レジスタ（FDR）

アドレス　SCI0.FDR 4007 0016h, SCI1.FDR 4007 0036h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	T[4:0]					—	—	—	R[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	R[4:0]	受信FIFOデータ数	FRDRHLレジスタに格納された受信データ数を示します（調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードにおいて、FCR.FM = 1の場合にのみ有効です）。	R
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b12-b8	T[4:0]	送信FIFOデータ数	FTDRHLレジスタに格納された未送信データ数を示します（調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードにおいて、FCR.FM = 1の場合にのみ有効です）。	R
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

このレジスタは、FRDRHL/FTDRHL レジスタに格納されたデータ数を示します。

R[4:0] ビット（受信 FIFO データ数）

FRDRHL レジスタに格納された受信データ数を示します。値 00h は受信データがないことを意味します。また、値 10h は最大数の受信データが FRDRHL レジスタに格納されていることを意味します。

T[4:0] ビット（送信 FIFO データ数）

FTDRHL レジスタに格納された未送信データ数を示します。値 00h は送信データがないことを意味します。また、値 10h は全送信データ（最大数）が FTDRHL レジスタに格納されていることを意味します。

29.2.28　ラインステータスレジスタ（LSR）

アドレス　SCI0.LSR 4007 0018h, SCI1.LSR 4007 0038h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	PNUM[4:0]					—	FNUM[4:0]					—	ORER
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ORER	オーバーランエラーフラグ	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）またはクロック同期式モードにおいて、FIFO選択時にのみ有効です。 0：オーバーランエラーの発生なし 1：オーバーランエラーの発生あり	R （注1）
b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b6-b2	FNUM[4:0]	フレーミングエラー数	受信FIFOデータレジスタ（FRDRHL）に格納された受信データの中でフレーミングエラーを含むデータ数を示します。	R
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b12-b8	PNUM[4:0]	パリティエラー数	受信FIFOデータレジスタ（FRDRHL）に格納された受信データの中でパリティエラーを含むデータ数を示します。	R
b15-b13	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

注 1.　本フラグが 1 の場合は、SSR_FIFO.ORER に 0 を書き込んでクリアしてください。

LSR レジスタは、受信エラーのステータスを示すためのレジスタです。

ORER ビット（オーバーランエラーフラグ）

SSR_FIFO.ORER の値を反映します。

FNUM[4:0] ビット（フレーミングエラー数）

FRDRHL レジスタに格納されたフレーミングエラーを含むデータ数を示します。

PNUM[4:0] ビット（パリティエラー数）

FRDRHL レジスタに格納されたパリティエラーを含むデータ数を示します。

29.2.29　コンペアマッチデータレジスタ（CDR）

アドレス　SCI0.CDR 4007 001Ah, SCI1.CDR 4007 003Ah, SCI4.CDR 4007 009Ah, SCI9.CDR 4007 013Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CMPD[8:0]								
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b8-b0	CMPD[8:0]	コンペアマッチデータ	アドレス一致ウェイクアップ機能用の比較データパターン	R/W
b15-b9	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CDR レジスタは、アドレス一致検出機能を設定するためのレジスタです。

CMPD[8:0] ビット（コンペアマッチデータ）

アドレス一致検出機能が有効（DCCR.DCME = 1）のとき、アドレス一致検出機能で受信データと比較するデータを設定します。

3 種類のビット長から 1 つ選択できます。

- 7 ビット長の CMPD[6:0]
- 8 ビット長の CMPD[7:0]
- 9 ビット長の CMPD[8:0]

29.2.30　データコンペアマッチコントロールレジスタ（DCCR）

アドレス　SCI0.DCCR 4007 0013h, SCI1.DCCR 4007 0033h, SCI4.DCCR 4007 0093h, SCI9.DCCR 4007 0133h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DCME	IDSEL	—	DFER	DPER	—	—	DCMF
リセット後の値	0	1	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DCMF	データコンペアマッチフラグ	0：不一致 1：一致	R/(W) （注1）
b2-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	DPER	データコンペアマッチパリティエラーフラグ	0：パリティエラーの発生なし 1：パリティエラーの発生あり	R/(W) （注1）
b4	DFER	データコンペアマッチフレーミングエラーフラグ	0：フレーミングエラーの発生なし 1：フレーミングエラーの発生あり	R/(W) （注1）
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	IDSEL	IDフレーム選択	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）でのみ有効です。 0：MPBビット値とは無関係に、常にデータを比較する 1：MPBビットが1（IDフレーム）のデータを比較する	R/W
b7	DCME	データコンペアマッチ有効	調歩同期式モード（マルチプロセッサを含む）でのみ有効です。 0：アドレス一致検出機能は無効 1：アドレス一致検出機能は有効	R/W

注 1.　フラグをクリアするため、1 を読み出した後に 0 を書き込むことのみ可能です。

DCCR レジスタは、アドレス一致検出機能を制御するためのレジスタです。

DCMF フラグ（データコンペアマッチフラグ）

SCI によって受信データと比較データ（CDR.CMPD）の一致が検出されたことを示します。

[1 になる条件]

- DCCR.DCME = 1 の状態で、受信データが比較データ（CDR.CMPD）と一致したとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

シリアルコントロールレジスタ（SCR）の RE ビットを 0 にしても、DCMF フラグは影響を受けず、以前の状態を保持します。

DPER フラグ（データコンペアマッチパリティエラーフラグ）

アドレス一致検出（受信データの一致検出）時に、パリティエラーが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- アドレス一致が検出されたフレームでパリティエラーが検出されるとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

SCR.RE ビットを 0（シリアル受信動作を禁止）にしても、DPER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

DFER フラグ（データコンペアマッチフレーミングエラーフラグ）

アドレス一致検出（受信データの一致検出）時に、フレーミングエラーが発生したことを示します。

[1 になる条件]

- アドレス一致が検出されたフレームにおいてストップビットが 0 のとき
- 2 ストップモードにおいて、ストップビットの 1 ビット目のみが 1 であるかチェックされ、2 ビット目はチェックされないとき

[0 になる条件]

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

SCR.RE ビットを 0（シリアル受信動作を禁止）にしても、DFER フラグは影響を受けず、以前の値を保持します。

IDSEL ビット（ID フレーム選択）

アドレス一致検出機能が有効な場合、MPB ビットの値とは無関係に比較を行うか、または MPB ビット = 1（ID フレーム）の場合にのみ比較を行うかを選択します。

DCME ビット（データコンペアマッチ有効）

アドレス一致検出機能（データコンペアマッチ機能）を使用するか否かを選択します。

SCI によって受信データと比較データ（CDR.CMPD）の一致が検出された場合、DCME は自動的にクリアされ、その後、SCI は通常のデータコンペアマッチ機能なしの受信モードで動作します。29.3.6　アドレス一致（受信データ一致）検出機能を参照してください。

調歩同期式モード以外では、書き込み値は 0 にしてください。

29.2.31　シリアルポートレジスタ（SPTR）

アドレス　SCI0.SPTR 4007 001Ch, SCI1.SPTR 4007 003Ch, SCI4.SPTR 4007 009Ch, SCI9.SPTR 4007 013Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	SPB2IO	SPB2DT	RXDMON
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RXDMON	シリアル入力データモニタ	RXD端子の状態を示します。 0：RXD端子はLow 1：RXD端子はHigh	R
b1	SPB2DT	シリアルポートブレークデータ選択	SCR.TE = 0の場合、TXD端子の出力レベルを選択します。 0：TXD端子はLow出力 1：TXD端子はHigh出力	R/W
b2	SPB2IO	シリアルポートブレーク入出力	TXD端子へSPB2DTの値を出力するか否かを選択します。 0：SPB2DTビットの値をTXD端子に出力しない 1：SPB2DTビットの値をTXD端子に出力する	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SPTR レジスタは、シリアル受信端子（RXDn 端子）の状態を確認し、送信端子（TXDn 端子）の状態を設定するためのレジスタです。

このレジスタは調歩同期式モードでのみ使用可能です。

表 29.21 に示すように、TXDn 端子の状態は、SCR.TE、SPTR.SPB2IO、および SPTR.SPB2DT の各ビット設定値の組み合わせで決定されます。

表 29.21　TXDn端子の状態

SCR.TEビット値	SPTR.SPB2IOビット値	SPTR.SPB2DTビット値	TXDn端子の状態
0	0	x	Hi-Z（初期値）
0	1	0	Lowを出力
0	1	1	Highを出力
1	x	x	シリアル送信データを出力

x: Don't care

注 .　SPTR レジスタは調歩同期式モードでのみ使用してください。本レジスタを他のモードで使用した場合の動作は保障されません。

29.3　調歩同期式モードの動作

調歩同期式シリアル通信の一般的なデータフォーマットを、図 29.2 に示します。

1 フレームは、スタートビット（Low）で始まり、送受信データ、パリティビット、ストップビット（High）の順に構成されます。

調歩同期式シリアル通信では、通信していないときの通信回線はマーク状態（High）に保たれています。

SCI は通信回線を監視しています。Low を検出すると、スタートビットとみなしてシリアル通信を開始します。

SCI 内部では送信部と受信部は独立しており、全二重通信が可能です。また、送信部と受信部はどちらも FIFO モードに加えてダブルバッファ構成になっているため、送受信中でもデータの読み出し／書き込みが可能であり、連続送受信動作が実現されます。

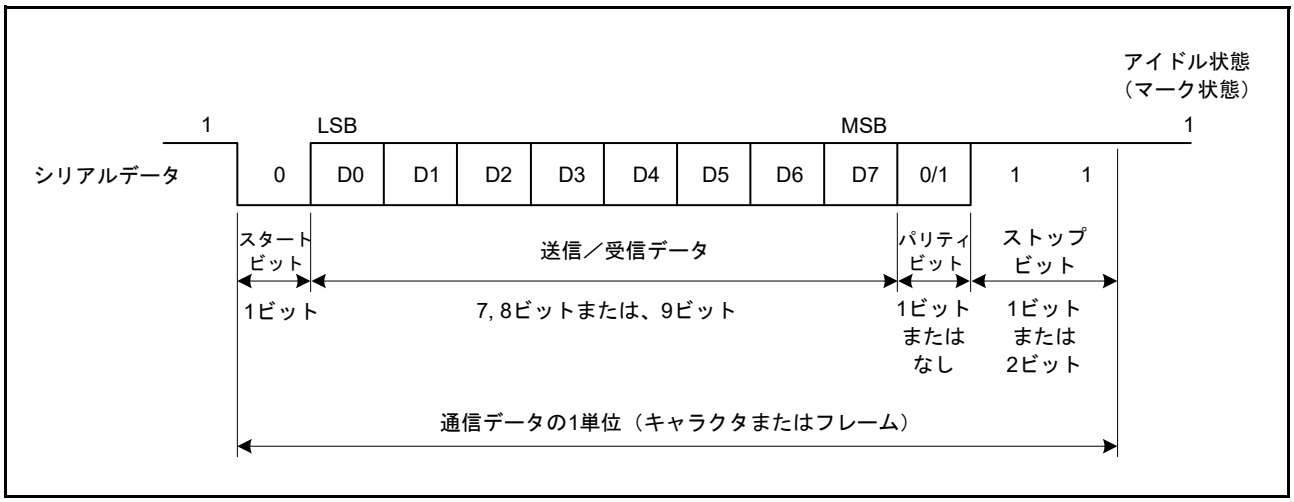


図 29.2　調歩同期式シリアル通信のデータフォーマット
（8 ビットデータ／パリティあり／2 ストップビットの場合）

29.3.1　シリアル転送フォーマット

調歩同期式モードで設定できるシリアル転送フォーマットを表 29.22 に示します。

フォーマットは 18 種類あり、SMR レジスタおよび SCMR レジスタの設定で選択できます。マルチプロセッサ機能の詳細については、29.4　マルチプロセッサ通信機能を参照してください。

表 29.22　シリアル転送フォーマット（調歩同期式モード）(1/2)

SCMRの設定値	SMRの設定値				シリアル転送フォーマットとフレーム長
					1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
CHR1	CHR	PE	MP	STOP	
0	0	0	0	0	S 9ビットデータ STOP
0	0	0	0	1	S 9ビットデータ STOP STOP
0	0	1	0	0	S 9ビットデータ P STOP
0	0	1	0	1	S 9ビットデータ P STOP STOP
1	0	0	0	0	S 8ビットデータ STOP
1	0	0	0	1	S 8ビットデータ STOP STOP
1	0	1	0	0	S 8ビットデータ P STOP
1	0	1	0	1	S 8ビットデータ P STOP STOP
1	1	0	0	0	S 7ビットデータ STOP
1	1	0	0	1	S 7ビットデータ STOP STOP
1	1	1	0	0	S 7ビットデータ P STOP

表 29.22　シリアル転送フォーマット（調歩同期式モード）(2/2)

SCMRの設定値	SMRの設定値				シリアル転送フォーマットとフレーム長
					1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
CHR1	CHR	PE	MP	STOP	
1	1	1	0	1	S 7ビットデータ P STOP STOP
0	0	—	1	0	S 9ビットデータ MPB STOP
0	0	—	1	1	S 9ビットデータ MPB STOP STOP
1	0	—	1	0	S 8ビットデータ MPB STOP
1	0	—	1	1	S 8ビットデータ MPB STOP STOP
1	1	—	1	0	S 7ビットデータ MPB STOP
1	1	—	1	1	S 7ビットデータ MPB STOP STOP

S :　スタートビット
STOP :　ストップビット
P :　パリティビット
MPB :　マルチプロセッサビット

29.3.2　調歩同期式モードの受信データサンプリングタイミングと受信マージン

調歩同期式モードでは、SCI はビットレートの 16 倍（注 1）の周波数の基本クロックで動作します。

受信時はスタートビットの立ち下がりを基本クロックでサンプリングして内部を同期化します。

また、図 29.3 に示すように、受信データは基本クロックの 8 パルス目（注 1）の立ち上がりエッジでサンプリングされるため、各ビットの中間でデータが取り込まれます。調歩同期式モードでの受信マージンは以下の式（1）のように表すことができます。

$$M = \left| (0.5 - \frac{1}{2N}) - (L - 0.5)\ F - \frac{D - 0.5}{N}\ (1 + F) \right| \times 100\ [\%] \cdots \text{式 (1)}$$

M：受信マージン
N：クロックに対するビットレートの比
（SEMR.ABCSE ビット = 0 かつ SEMR.ABCS ビット = 0 のとき N = 16、
SEMR.ABCS ビット = 1 のとき N = 8、SEMR.ABCSE ビット = 1 のとき N = 6）
D：クロックのデューティ（D = 0.5 ～ 1.0）
L：フレーム長（L = 9 ～ 13）
F：クロック周波数の偏差の絶対値

式（1）で、F（クロック周波数の偏差の絶対値）= 0、D（クロックのデューティ）= 0.5 とすると、受信マージンは次式で算出されます。

$$M = \{0.5 - 1/(2 \times 16)\} \times 100\ (\%) = 46.875\%$$

ただし、これはあくまでも計算上の値なので、システム設計の際には 20 ～ 30% の余裕を持たせてください。

注 1.　この例では、SEMR レジスタの ABCS ビットと ABCSE ビットが 0 です。ABCS ビットが 1 で ABCSE ビットが 0 の場合は、ビットレートの 8 倍の周波数が基本クロックとなり、受信データは基本クロックの 4 パルス目の立ち上がりエッジでサンプリングされます。
ABCSE ビットが 1 の場合は、ビットレートの 6 倍の周波数が基本クロックとなり、受信データは基本クロックの 3 パルス目の立ち上がりエッジでサンプリングされます。

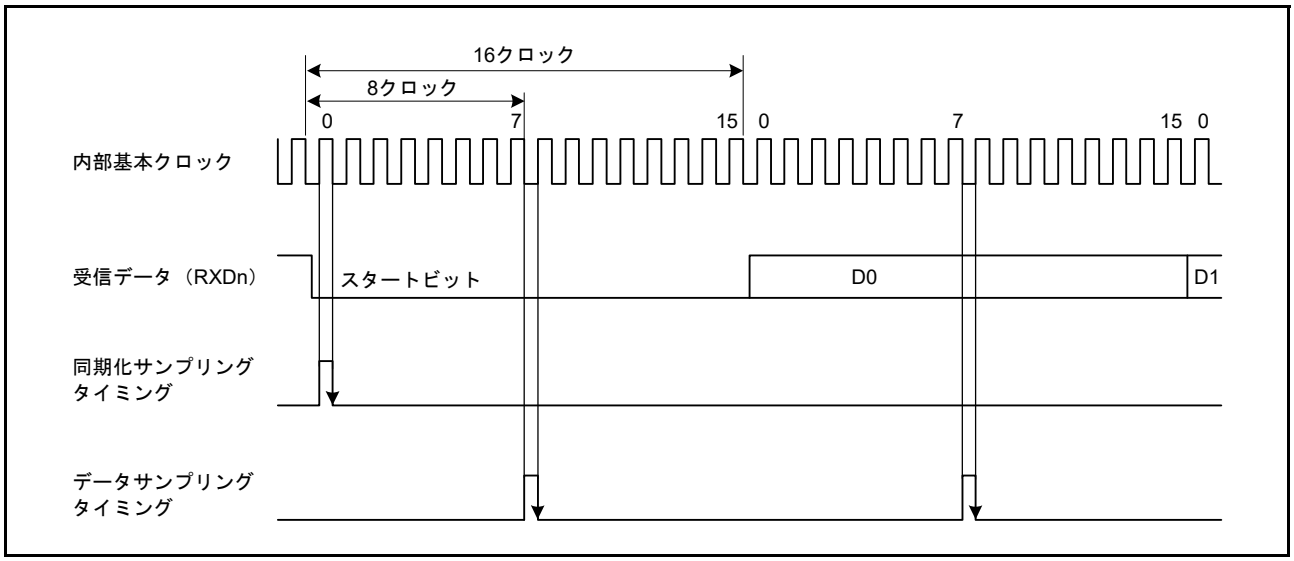


図 29.3　調歩同期式モードでの受信データのサンプリングタイミング

29.3.3　クロック

SCI 送受信クロックには、SMR.CM ビットと SCR.CKE[1:0] ビットの設定により、内蔵ボーレートジェネレータが生成する内部クロック、SCKn 端子に入力される外部クロックのいずれかを選択できます。

外部クロックを使用する場合は、SCKn 端子にビットレートの 16 倍（SEMR.ABCS ビット = 0 のとき）、または 8 倍（SEMR.ABCS ビット = 1 のとき）の周波数のクロックを入力する必要があります。

内部クロックで動作させるときは、SCKn 端子からクロックを出力させることができます。このとき出力されるクロックの周波数はビットレートと等しく、位相は図 29.4 のようになるため、送信データの中間でクロックが立ち上がります。

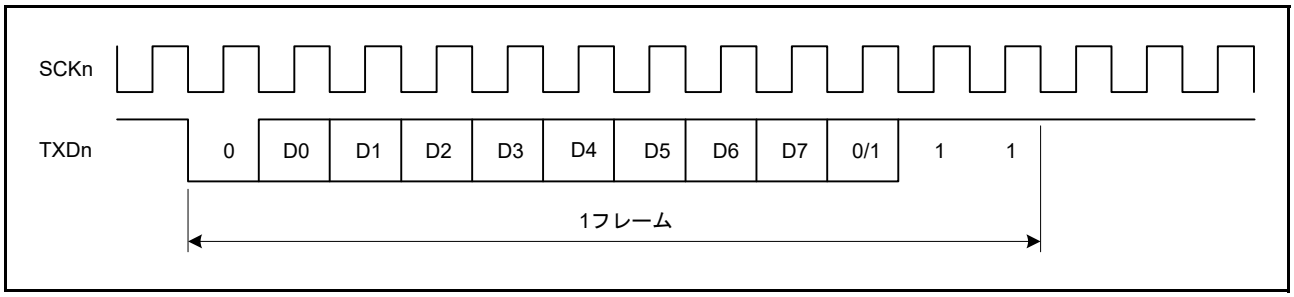


図 29.4　出力クロックと送信データの位相関係
（調歩同期式モード：SMR.CHR = 0、PE = 1、MP = 0、STOP = 1）

29.3.4　倍速動作とビットレートの 6 倍の周波数

SEMR.ABCS ビットを 1 にして、1 ビット期間として基本クロックの 8 パルスを選択した場合、ABCS ビットが 0 の場合に比べて、SCI は 2 倍のビットレートで動作します。SEMR.BGDM ビットが 1 になっていると、基本クロックの周期は 1/2 倍になり、ビットレートは BGDM ビットが 0 の場合の 2 倍になります。SCR.CKE[1] ビットを 0 にして、内蔵ボーレートジェネレータを選択した場合、ABCS ビットと BGDM ビットを 1 にすることにより、ABCS ビットと BGDM ビットが 0 の場合に比べて、SCI は 4 倍のビットレートで動作できるようになります。SEMR.ABCSE ビットが 1 になっている場合、基本クロックのパルス数は 1 ビット期間中 6 になり、SEMR.ABCS、SEMR.BGDM、および SMER.ABCSE が 0 の場合に比べて、SCI は 16/3 倍のビットレートで動作します。

29.3.2　調歩同期式モードの受信データサンプリングタイミングと受信マージンの式（1）に示すとおり、SEMR.ABCS ビットまたは SEMR.ABCSE ビットが 1 の場合、受信マージンは減少します。そのため、ABCS ビットまたは ABCSE ビットが 0 の状態で、目的とするビットレートが達成できるのであれば、ABCS ビットと ABCSE ビットを 0 にして SCI を使用することが推奨されます。

29.3.5　CTS、RTS 機能

CTS 機能は、CTSn_RTSn 端子入力を使用して送信制御を行います。SPMR.CTSE ビットを 1 にすると、CTS 機能が有効になります。CTS 機能が有効な場合、CTSn_RTSn 端子入力が Low になると送信が開始されます。

送信中に CTSn_RTSn 端子入力を High にしても、送信中のフレームは影響を受けません。

RTS 機能は、CTSn_RTSn 端子出力を使用して受信要求を行います。受信可能な状態になると Low が出力されます。出力が Low になる条件および High になる条件は以下のとおりです。

［Low になる条件］

(a)　非 FIFO 選択時に、下記条件がすべて満たされたとき

- SCR.RE ビットが 1
- 受信動作中ではない
- 読み出し前の受信データがない
- SSR レジスタの ORER、FER、PER フラグがすべて 0

(b)　FIFO 選択時に、下記条件がすべて満たされたとき

- SCR.RE ビットが 1
- FRDRHL に書き込まれた受信データ数が指定された受信トリガ数以下
- SSR_FIFO.ORER フラグ（FRDRH.ORER フラグ）が 0

［High になる条件］

(a)　非 FIFO 選択時に、下記条件がすべて満たされたとき

- Low になる条件を満たさない場合
- 受信完了後に RDR レジスタを読み出すことなく、SCR.RE = 0 によって受信を終了させた場合、RTS は High を維持します。このとき、SCR.RE に 0 を書き込んだ後に SCR レジスタをダミーリードしてください。

(b)　FIFO 選択時

- Low になる条件を満たさない場合

29.3.6　アドレス一致（受信データ一致）検出機能

アドレス一致検出機能は、調歩同期式モードでのみ使用可能です。

DCCR.DCME ビットが 1（注 4）の場合、1 フレーム分のデータを受信すると、SCI は受信データと CDR.CMPD ビットの値を比較します。SCI によって受信データと比較データ（CDR.CMPD（注 3））の一致が検出された場合、SCIn_RXI 割り込み要求を発生させることができます。

SMR.MP ビットが 0 の場合は、受信フォーマットの有効データのみが比較対象になります。マルチプロセッサモード（SMR.MP = 1）では、DCCR.IDSEL ビットが 1 の場合、MPB ビット = 1 の受信データがアドレス一致の比較対象となります。MPB ビット = 0 の受信データは、常に不一致として処理されます。

DCCR.IDSEL ビットが 0 の場合、SCI は受信データの MPB ビット値にかかわらず、アドレス一致または不一致の検出を実行します。受信データと比較データ（CDR.CMPD（注 3））の一致が検出されるまで、受信データが読み飛ばされる（廃棄される）ので、SCI はパリティエラーもフレーミングエラーも検出することができません。SCI が一致を検出すると、DCCR.DCME ビットは自動的にクリアされ、DCCR.DCMF フラグは 1 になります。

DCCR.IDSEL ビットが 1 であれば、SCR.MPIE ビットが自動的にクリアされます。また、DCCR.IDSEL ビットが 0 であれば、SCR.MPIE ビットの値が保持されます。SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCI は SCIn_RXI 割り込み要求を発行します。一致が検出された受信データに対して、SCI がフレーミングエラーを検出すると、DCCR.DFER フラグが 1 になります。また、そのフレームにパリティエラーを検出すると、DCCR.DPER フラグが 1 になります。比較された受信データは RDR レジスタ（注 1）に格納されません。また、SSR.RDRF フラグは 0 を保持します。（注 2）

SCI が一致を検出すると、DCCR.DCME ビットは自動的にクリアされ、現在のレジスタ設定に基づいて、SCI は次のデータを連続して受信します。

DCCR.DFER フラグまたは DCCR.DPER フラグが 1 の状態では、アドレス一致検出は実行されません。アドレス一致検出機能を有効にする場合は、事前に DCCR.DFER フラグと DCCR.DPER フラグを 0 にしてください。

アドレス一致検出機能の例を図 29.5 および図 29.6 に示します。

注 1.　FCR.FM = 1 の場合、これは FRDRHL レジスタになります。
注 2.　FCR.FM = 1 の場合、これは SSR_FIFO.RDF フラグになります。
注 3.　比較対象は、3 種類のビット長（7 ビット長の CMPD[6:0]、8 ビット長の CMPD[7:0]、または 9 ビット長の CMPD[8:0]）から 1 つ選択できます。
注 4.　アドレス一致検出を実行する受信フレームのスタートビットを受信する前に、DCCR.DCME ビットを 1 にしてください。

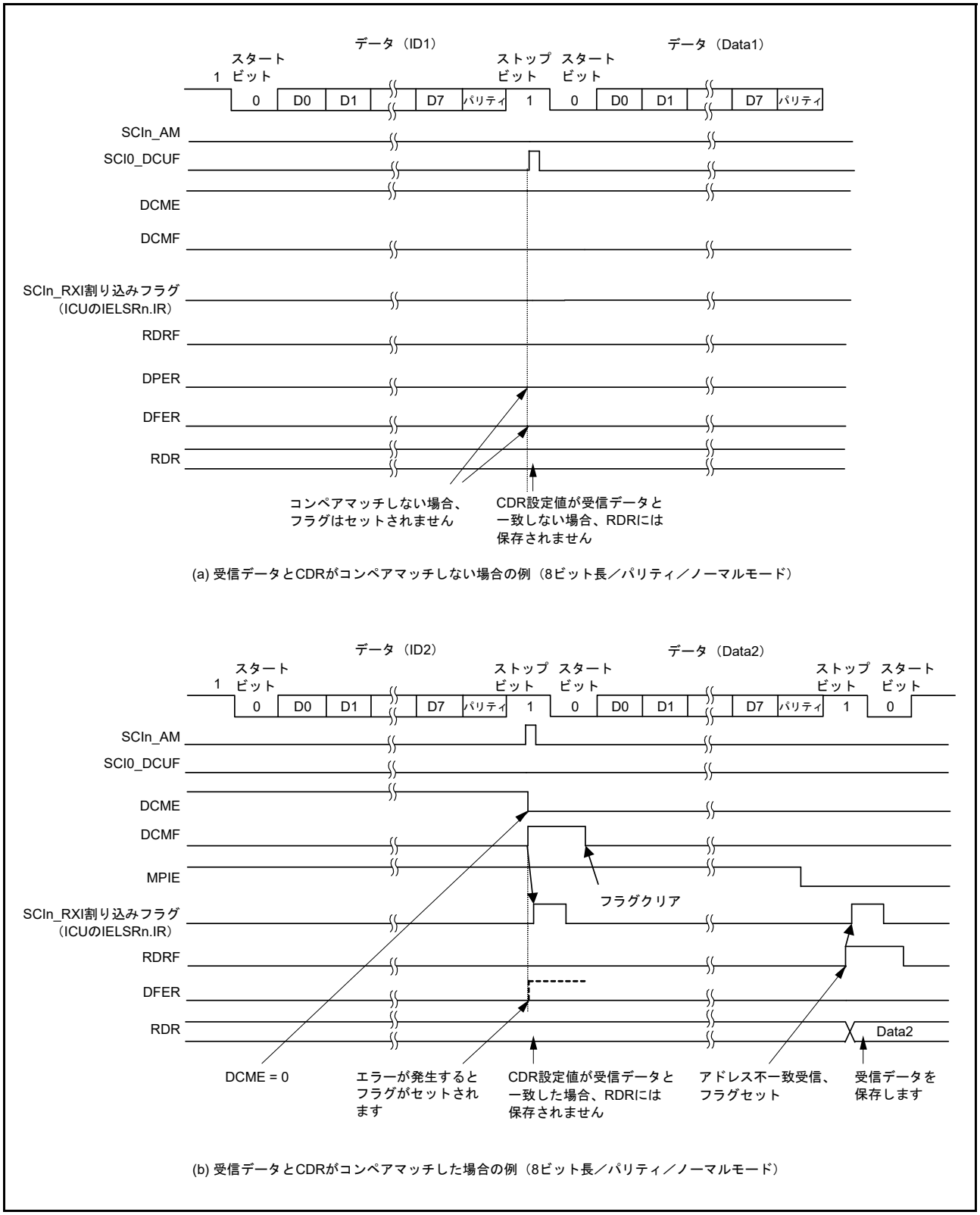


図 29.5　アドレス一致検出の例（1）（通常モード）

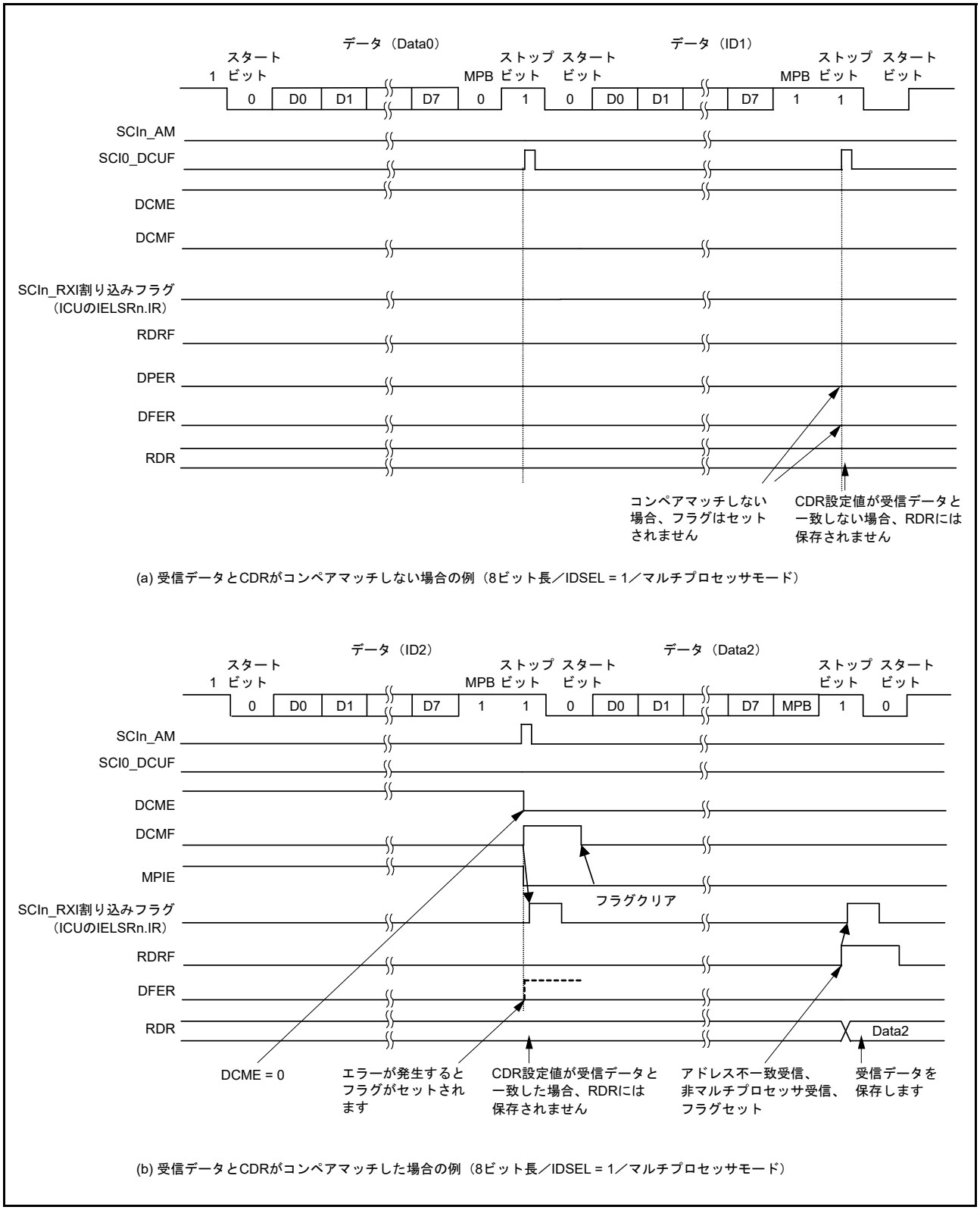


図 29.6　アドレス一致検出の例（2）（マルチプロセッサモード）

29.3.7　SCI の初期化（調歩同期式モード）

データを送受信する前に、最初に SCR レジスタに初期値 00h を書き込み、次に図 29.7 および図 29.8 のフローチャートに従って SCI の設定（非 FIFO 選択時または FIFO 選択時）を続けてください。動作モードまたは通信フォーマットを変更する場合も、かならず SCR を初期値にしてから変更してください。

調歩同期式モードで外部クロックを使用する場合は、初期化の期間も含めてクロックを供給してください。

注 .　SCR.RE ビットを 0 にしても、SSR レジスタまたは SSR_FIFO レジスタの ORER フラグ、FER フラグ、RDRF フラグ、RDF フラグ、PER フラグ、および DR フラグは初期化されません。また、RDR レジスタと RDRHL レジスタも初期化されません。SCR.TE ビットが 0 の場合、選択した FIFO バッファに対する TEND フラグは初期化されません。

注 .　SCR.TIE ビットが 1 の状態で、SCR.TE ビットを 1 から 0、または 0 から 1 に変更すると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。

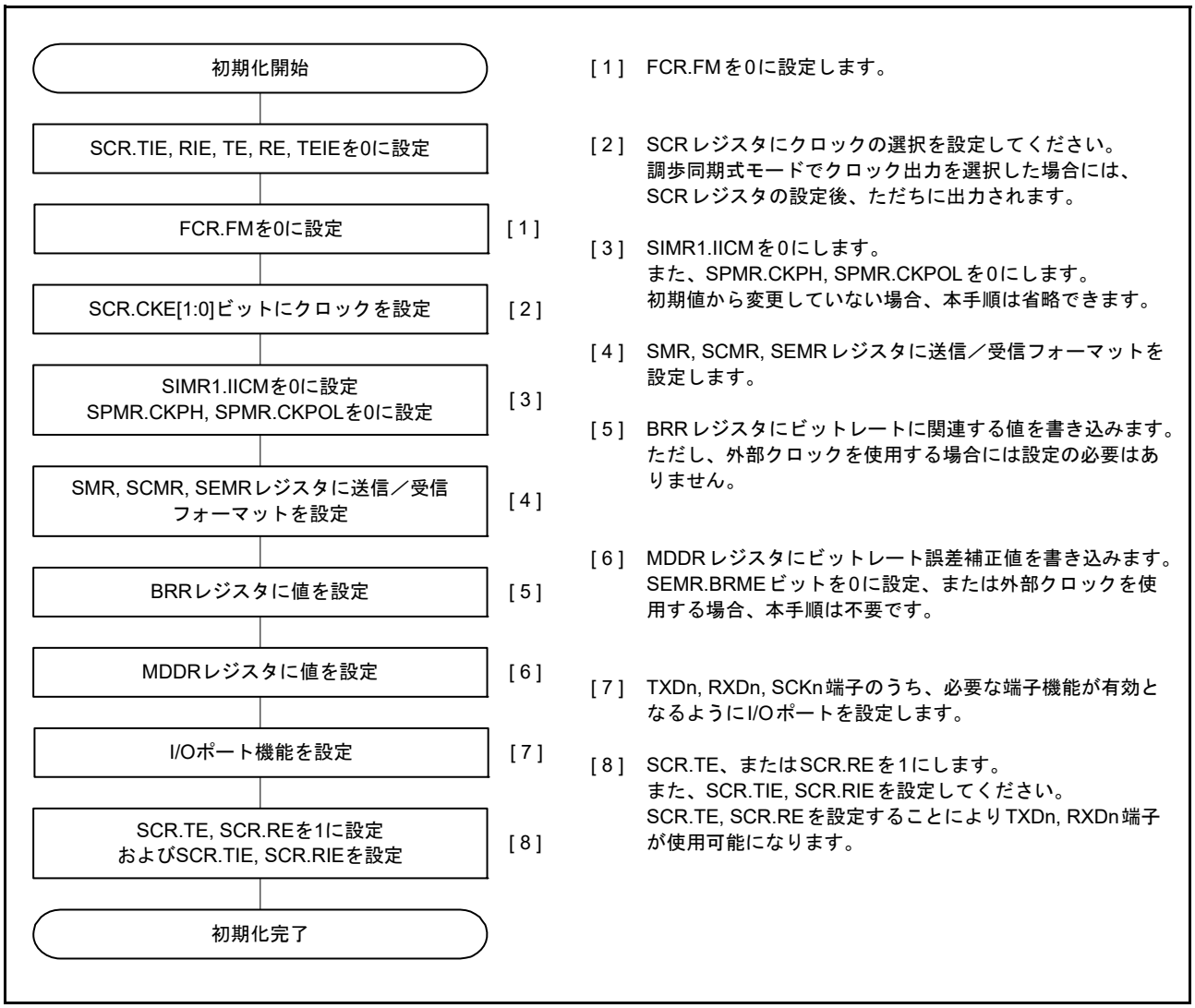


図 29.7　調歩同期式モードにおける SCI の初期化フローチャート例（非 FIFO 選択時）

図 29.8　調歩同期式モードにおける SCI の初期化フローチャート例（FIFO 選択時）

29.3.8　シリアルデータの送信（調歩同期式モード）

(1)　非 FIFO 選択時

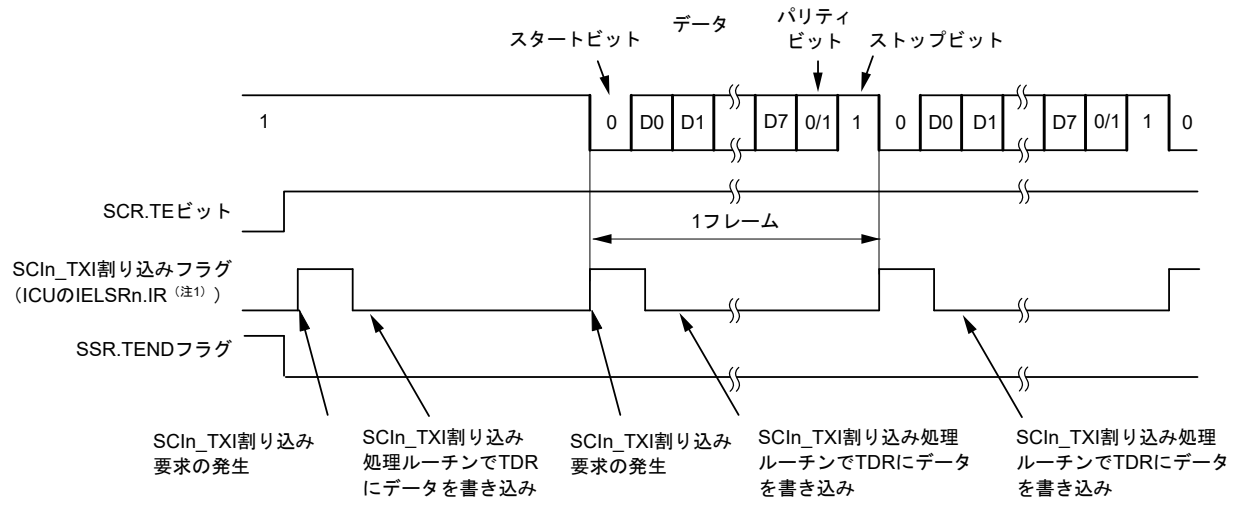
図 29.9、図 29.10、および図 29.11 に、調歩同期式モードにおけるシリアル送信の動作例を示します。

本節では、シリアルデータ送信時の SCI の動作について説明します。SCR.TE ビットが 1 の場合、1 フレーム（プリアンブル）分の High レベルが TXD 端子に出力されます。

1. SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンで TDR レジスタ（注 1）にデータが書き込まれると、SCI は TDR レジスタ（注 1）から TSR レジスタへデータを転送します。
   なお、送信開始時の SCIn_TXI 割り込み要求は、SCR.TE ビットと SCR.TIE ビットを 1 命令で同時に 1 にすることで発生します。
2. SPMR.CTSE ビットが 0（CTS 機能は無効）であるか、または CTSn_RTSn 端子入力が Low であると、TDR レジスタ（注 1）から TSR レジスタへデータが転送され、送信が開始されます。このとき、SCR.TIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。この SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンにおいて、現在のデータ送信が終了する前に、TDR レジスタ（注 1）に次の送信データを書き込むことで連続送信が可能になります。SCIn_TEI 割り込み要求を使用する場合は、SCIn_TXI 割り込み要求に対応する処理ルーチン内で最終送信データを TDR レジスタ（注 1）に書き込んだ後、SCR レジスタにおいて、TIE ビットを 0（SCIn_TXI 割り込み要求を禁止）に、TEIE ビットを 1（SCIn_TEI 割り込み要求を許可）にします。
3. データは、以下の順に TXDn 端子から送り出されます。
   - スタートビット
   - 送信データ
   - パリティビットまたはマルチプロセッサビット（フォーマットによっては、ない場合もある）
   - ストップビット
4. ストップビットを送り出すタイミングで、SCI は TDR レジスタの更新をチェックします。
5. TDR レジスタが更新されていると、SPMR.CTSE ビットが 0（CTS 機能は無効）、または CTSn_RTSn 端子入力が Low で、次の送信データが TDR レジスタ（注 1）から TSR レジスタへ転送され、ストップビット送出後、次のフレームのシリアル送信が開始されます。
6. TDR レジスタが更新されていない場合は、SSR.TEND フラグが 1 になり、ストップビットを送り出した後、1 を出力するマーク状態になります。このとき、SCR.TEIE ビットが 1 になっていると、SSR.TEND フラグが 1 になり、SCIn_TEI 割り込み要求が発生します。

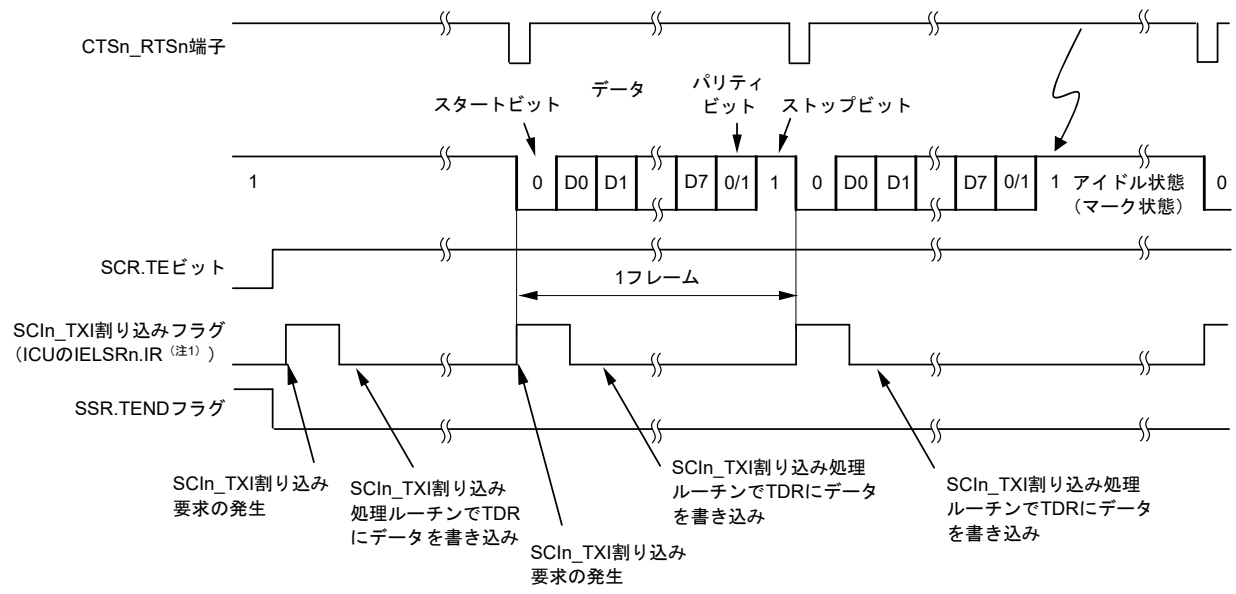
注 1.　データ長 9 ビット選択時は、TDRHL レジスタになります。

図 29.9、図 29.10、および図 29.11 に、調歩同期式モードにおけるシリアル送信の動作例を示します。



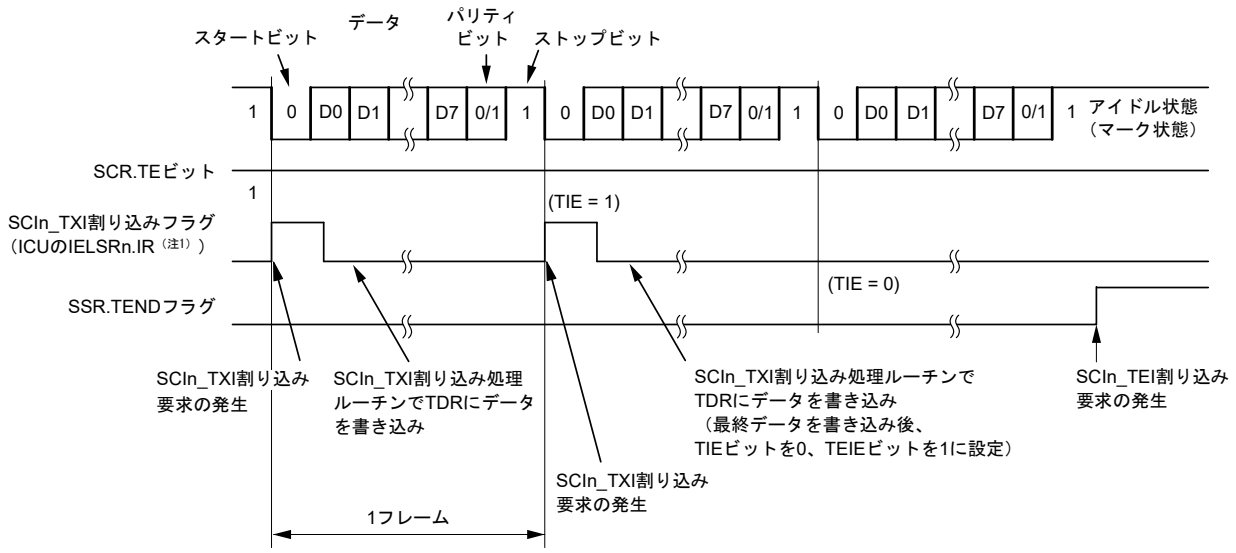
注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.9　調歩同期式モードにおけるシリアル送信の動作例（1）
（8 ビットデータ／パリティあり／1 ストップビット／CTS 機能不使用／送信開始時）



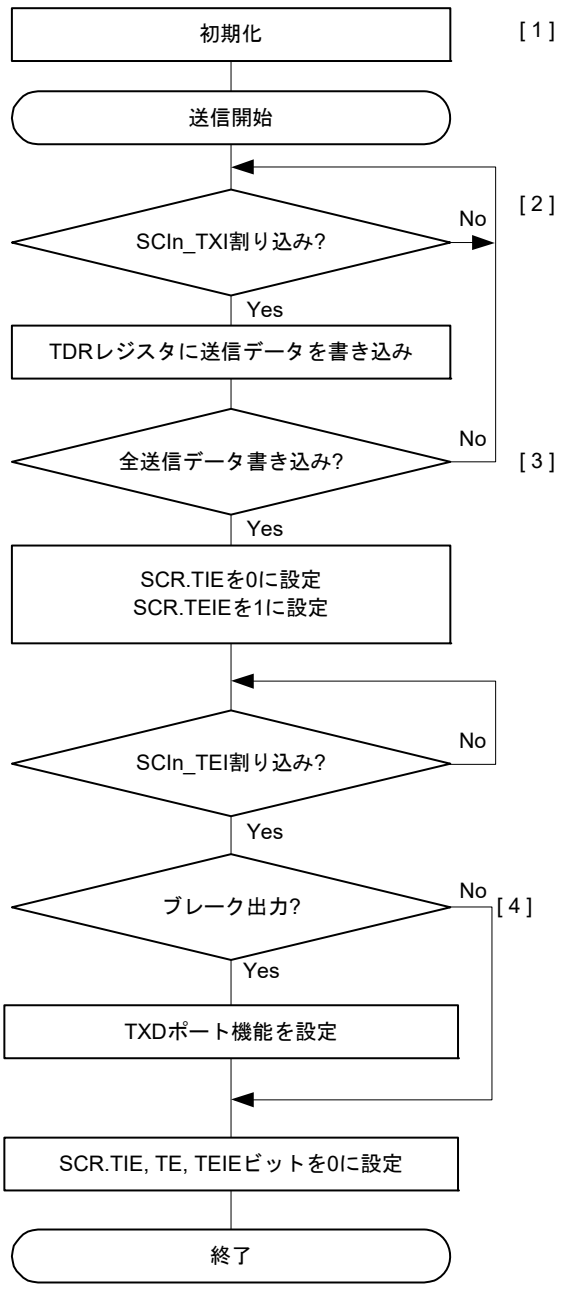
注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.10　調歩同期式モードにおけるシリアル送信の動作例（2）
（8 ビットデータ／パリティあり／1 ストップビット／CTS 機能使用／送信開始時）



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.11　調歩同期式モードにおけるシリアル送信の動作例（3）
（8 ビットデータ／パリティあり／1 ストップビット／ CTS 機能不使用／送信中～送信終了時）



[1] SCIの初期化：
データ送信に設定します。
SCR.TEビットを1にした後、1フレーム（プリアンブル）分の1を出力して送信可能状態になります。

[2] SCIn_TXI割り込み要求で送信データをTDRレジスタに書き込み：
送信データがTDRレジスタからTSRレジスタに転送されると、送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）要求が発生します。SCIn_TXI割り込み処理ルーチンでTDRレジスタに送信データを1回だけ書き込みしてください。

[3] シリアル送信の継続手順：
シリアル送信を続けるときには、SCIn_TXI割り込み要求でTDRレジスタに送信データを1回だけ書き込みしてください。
送信データは、DMACまたはDTCを起動してTDRに書き込みすることも可能です。
SCIn_TEI割り込み要求を使用しているときは、送信する最終データをTDRに書き込み後、SCR.TIEを0、SCR.TEIEを1にしてください。

[4] シリアル送信の終了時にブレークを出力：
シリアル送信時にブレークを出力する場合、SPTR.SPB2IO, SPTR.SPB2DTビットでTXDn端子の出力状態（Lowレベル出力）を設定後、SCR.TEを0にしてください。

注．　9ビットデータ長を選択時、TDRレジスタがTDRHLレジスタになります。

図 29.12　調歩同期式モードにおけるシリアル送信のフローチャート例（非 FIFO 選択時）

(2)　FIFO 選択時

図 29.13 に、調歩同期式モードにおいて FTDRH レジスタと FTDRL レジスタに書き込まれるデータフォーマットの例を示します。

データ長に対応したデータが FTDRH レジスタと FTDRL レジスタに設定されます。使用しないビットには 0 を書いてください。FTDRH から FTDRL の順に書いてください。

データ長	レジスタ設定		FTDRH, FTDRLの送信データ															
			FTDRHL															
			FTDRH								FTDRL							
	SCMR.CHR1	SMR.CHR	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
7ビット	1	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7ビット送信データ						
8ビット	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	8ビット送信データ							
9ビット	0	Don't care	—	—	—	—	—	—	—	9ビット送信データ								

—：無効ビット。書く場合、0 としてください。

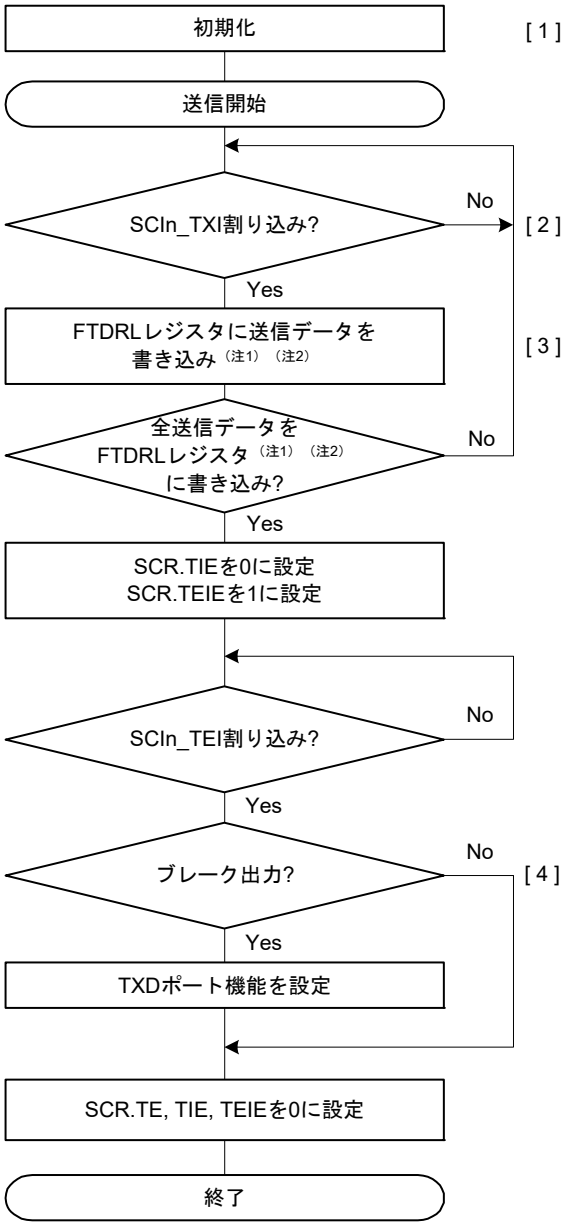
図 29.13　　FTDRH と FTDRL に書き込まれるデータフォーマット（FIFO 選択時）

本節では、シリアルデータ送信時の SCI の動作について説明します。SCR.TE ビットが 1 の場合、1 フレーム（プリアンブル）分の High レベルが TXD 端子に出力されます。

1. SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンで FTDRL レジスタ（注 1）にデータが書き込まれると、SCI は FTDRL レジスタ（注 1）から TSR レジスタへデータを転送します。
   FTDRL レジスタに書き込み可能なデータのバイト数は 16 - FDR.T[4:0] です。なお、送信開始時の SCIn_TXI 割り込み要求は、SCR.TE ビットと SCR.TIE ビットを 1 命令で同時に 1 にすることで発生します。
2. SPMR.CTSE ビットが 0（CTS 機能は無効）であり、かつ CTSn_RTSn 端子入力が Low であると、FTDRL レジスタ（注 1）から TSR レジスタへデータが転送され、送信が開始されます。FTDRL に書き込まれた送信データ数が指定された送信トリガ数以下のとき、SSR_FIFO.TDFE ビットが 1 になります。このとき、SCR.TIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。この SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンにおいて、現在のデータ送信が終了する前に、FTDRL レジスタ（注 1）に次の送信データを書き込むことで連続送信が可能になります。SCIn_TEI 割り込み要求を使用する場合は、SCIn_TXI 割り込み要求に対応する処理ルーチン内で最終送信データを FTDRL レジスタ（注 1）（注 2）に書き込んだ後、SCR.TIE ビットを 0（SCIn_TXI 割り込み要求を禁止）にして、SCR.TEIE ビットを 1（SCIn_TEI 割り込み要求を許可）にします。
3. データは、以下の順に TXDn 端子から送り出されます。
   - スタートビット
   - 送信データ
   - パリティビットまたはマルチプロセッサビット（フォーマットによっては、ない場合もある）
   - ストップビット
4. ストップビットを送り出すタイミングで、SCI は FTDRL レジスタ（注 3）に未送信データが残っていないかチェックします。
5. FTDRL レジスタ（注 3）にデータがある場合、SPMR.CTSE ビットが 0（CTS 機能は無効）であるか、または CTSn_RTSn 端子入力が Low であると、次の送信データが FTDRL レジスタ（注 1）から TSR レジスタへ転送され、ストップビット送出後、次のフレームのシリアル送信が開始されます。
6. FTDRL レジスタ（注 3）にデータがない場合、SSR_FIFO レジスタの TEND フラグが 1 になり、ストップビットを送り出した後、1 を出力するマーク状態になります。このとき、SCR.TEIE ビットが 1 になっていると、SSR_FIFO.TEND フラグが 1 になり、SCIn_TEI 割り込み要求が発生します。

注 1.　データ長 9 ビット選択時は、データを FTDRH レジスタおよび FTDRL レジスタに書き込んでください。
注 2.　データ長 9 ビット選択時は、FTDRH レジスタ→FTDRL レジスタの順にデータを書き込んでください。
注 3.　データ長 9 ビット選択時は、SCI によって FTDRL レジスタの更新のみがチェックされ、FTDRH レジスタの更新はチェックされません。

図 29.14 に、調歩同期式モードにおける FIFO 選択時のシリアル送信のフローチャート例を示します。



[1] SCIの初期化：
データ送信に設定します。SCR.TE ビットを1にした後、1フレーム（プリアンブル）分の1を出力して送信可能状態になります。

[2] SCIn_TXI割り込み要求で送信データをFTDRL（注1）に書き込み：
FTDRLからTSRへのデータ転送は、FTDRLに書き込んだ送信データ量が指定の送信トリガ数以下の場合、送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）要求が発生します。SCIn_TXI割り込み処理ルーチンでFTDRL（注1）（注2）に送信データを1回だけ書き込みしてください。

[3] シリアル送信の継続手順：
シリアル送信を続けるときには、SCIn_TXI割り込み要求でFTDRLに全送信データを書き込みし、SSR_FIFO.TDFE フラグを0にクリアしてください。書き込み可能な送信データ数は、16 - (保存した送信FIFOデータ数)です。また、送信データは、DMACまたはDTCを起動して書き込みすることも可能です。DMACまたはDTCでFTDRLにデータを書き込むと、TDFE フラグは自動的にクリアされます。そのため、TDFE フラグへ書き込みはしないでください。SCIn_TEI割り込み要求を使用する場合、最終送信データをFTDRLに書き込みした後、SCR.TIE を0に、SCR.TEIE を1にします。

[4] シリアル送信の終了時にブレークを出力：
シリアル送信時にブレークを出力するときには、SPTR.SPB2IO, SPTR.SPB2DT を使用したTXDn端子を出力状態（Low レベル出力）に設定した後、SCR.TE を0にします。

注 1.　データ長が 9 ビットの場合は、FTDRH/FTDRL レジスタが使用されます。
注 2.　データ長が 9 ビットの場合は、FTDRH、FTDRL の順番で書き込みしてください。

図 29.14　調歩同期式モードにおけるシリアル送信のフローチャート例（FIFO 選択時）

29.3.9　シリアルデータの受信（調歩同期式モード）

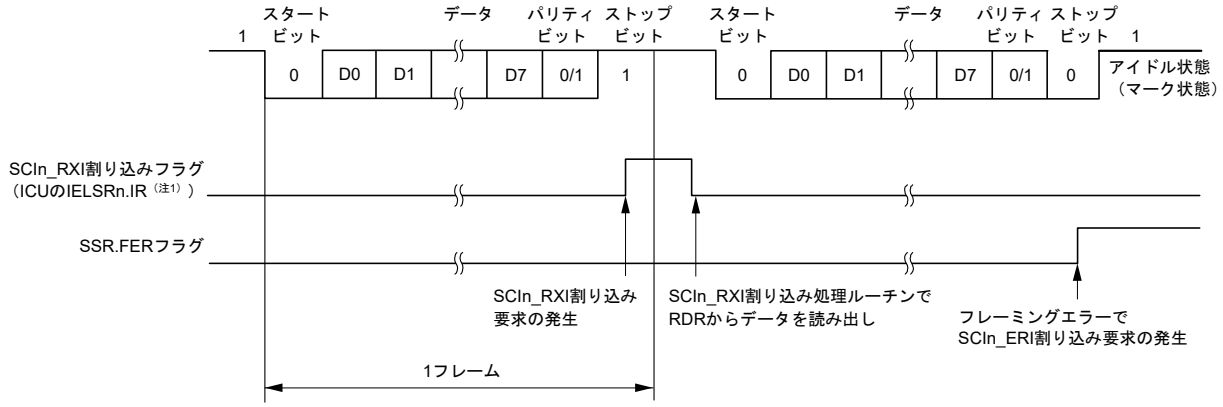
(1)　非 FIFO 選択時

図 29.15 と図 29.16 に、調歩同期式モードにおけるシリアル受信の動作例を示します。

シリアルデータの受信時、SCI は以下のように動作します。

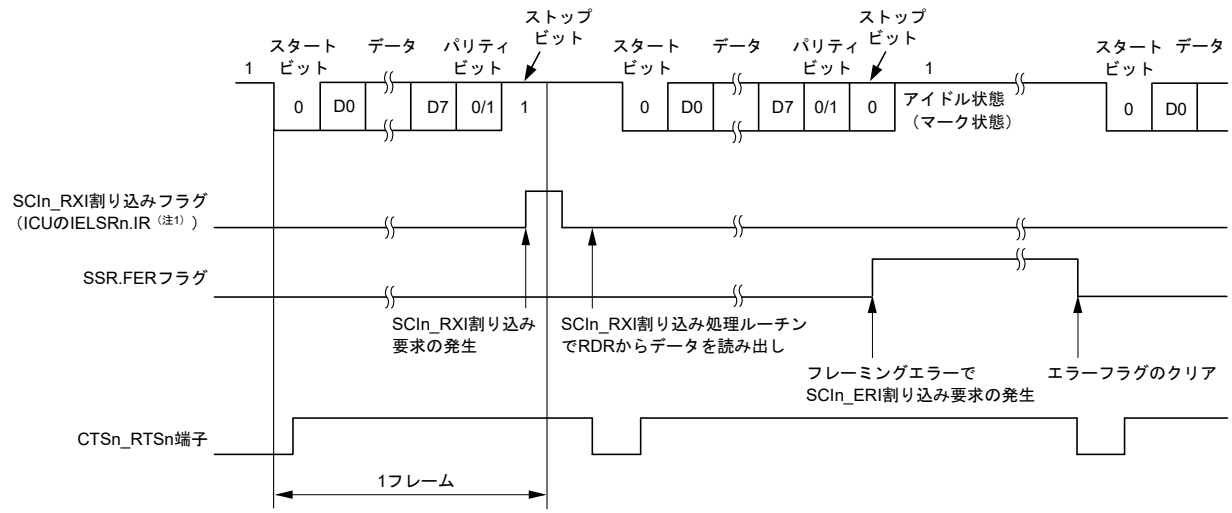
1. SCR.RE ビットが 1 になると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。
2. SCI が通信回線を監視し、スタートビットを検出すると、内部を同期化して受信データを RSR レジスタに取り込み、パリティビットとストップビットをチェックします。
3. オーバーランエラーが発生した場合、SSR.ORER フラグが 1 になります。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。受信データは RDR レジスタ（注 1）へ転送されません。
4. パリティエラーが検出された場合は、SSR.PER フラグが 1 になり、受信データが RDR レジスタ（注 1）へ転送されます。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。
5. フレーミングエラーが検出された場合は、SSR.FER フラグが 1 になり、受信データが RDR レジスタ（注 1）へ転送されます。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。
6. 正常に受信したときは、受信データが RDR レジスタ（注 1）へ転送されます。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。SCIn_RXI 割り込み処理ルーチンにおいて、次のデータ受信が終了する前に、RDR レジスタへ転送された受信データを読み出すことで連続受信が可能になります。RDR レジスタへ転送された受信データが読み出されると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。

注 1.　データ長 9 ビット選択時は、RDRHL レジスタになります。



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.15　調歩同期式モードにおけるシリアル受信の動作例（1）（RTS 機能を使用しない場合）（8 ビットデータ／パリティあり／1 ストップビットの場合）



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.16　調歩同期式モードにおけるシリアル受信の動作例（2）
（RTS 機能を使用する場合）（8 ビットデータ／パリティあり／1 ストップビットの場合）

受信エラーを検出した場合の SSR レジスタの各ステータスフラグの状態と受信データの処理を表 29.23 に示します。

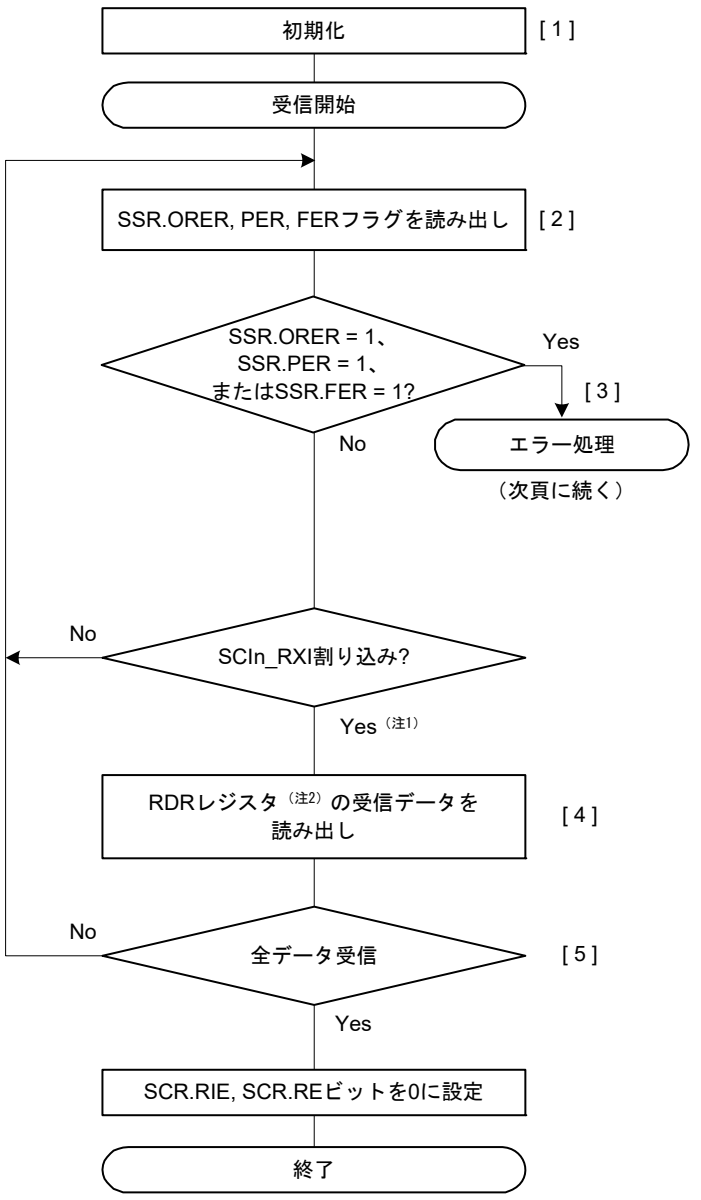
受信エラーが検出されると、SCIn_ERI 割り込み要求は発生しますが、SCIn_RXI 割り込み要求は発生しません。受信エラーフラグが 1 の状態では、受信動作を再開できません。受信を再開する前に、ORER、FER、および PER の各ビットを 0 にする必要もあります。また、オーバーランエラー処理では、必ず RDR レジスタまたは RDRHL レジスタを読み出してください。受信動作中に SCR.RE ビットを 0 にして受信動作を強制終了させた場合、RDR レジスタまたは RDRHL レジスタに読み出し前の受信データが残っている可能性があるため、RDR レジスタまたは RDRHL レジスタを読み出す必要があります。

図 29.17 および図 29.18 に、シリアル受信のフローチャート例を示します。

表 29.23　SSR レジスタのステータスフラグの状態と受信データの処理

SSR レジスタのステータスフラグ			受信データ	受信エラーの種類
ORER	FER	PER		
1	0	0	消失	オーバーランエラー
0	1	0	RDR へ転送	フレーミングエラー
0	0	1	RDR へ転送	パリティエラー
1	1	0	消失	オーバーランエラー + フレーミングエラー
1	0	1	消失	オーバーランエラー + パリティエラー
0	1	1	RDR へ転送	フレーミングエラー + パリティエラー
1	1	1	消失	オーバーランエラー + フレーミングエラー + パリティエラー

注 .　データ長 9 ビット選択時は、RDRHL レジスタになります。



[1] SCIの初期化：
データ受信に設定します。

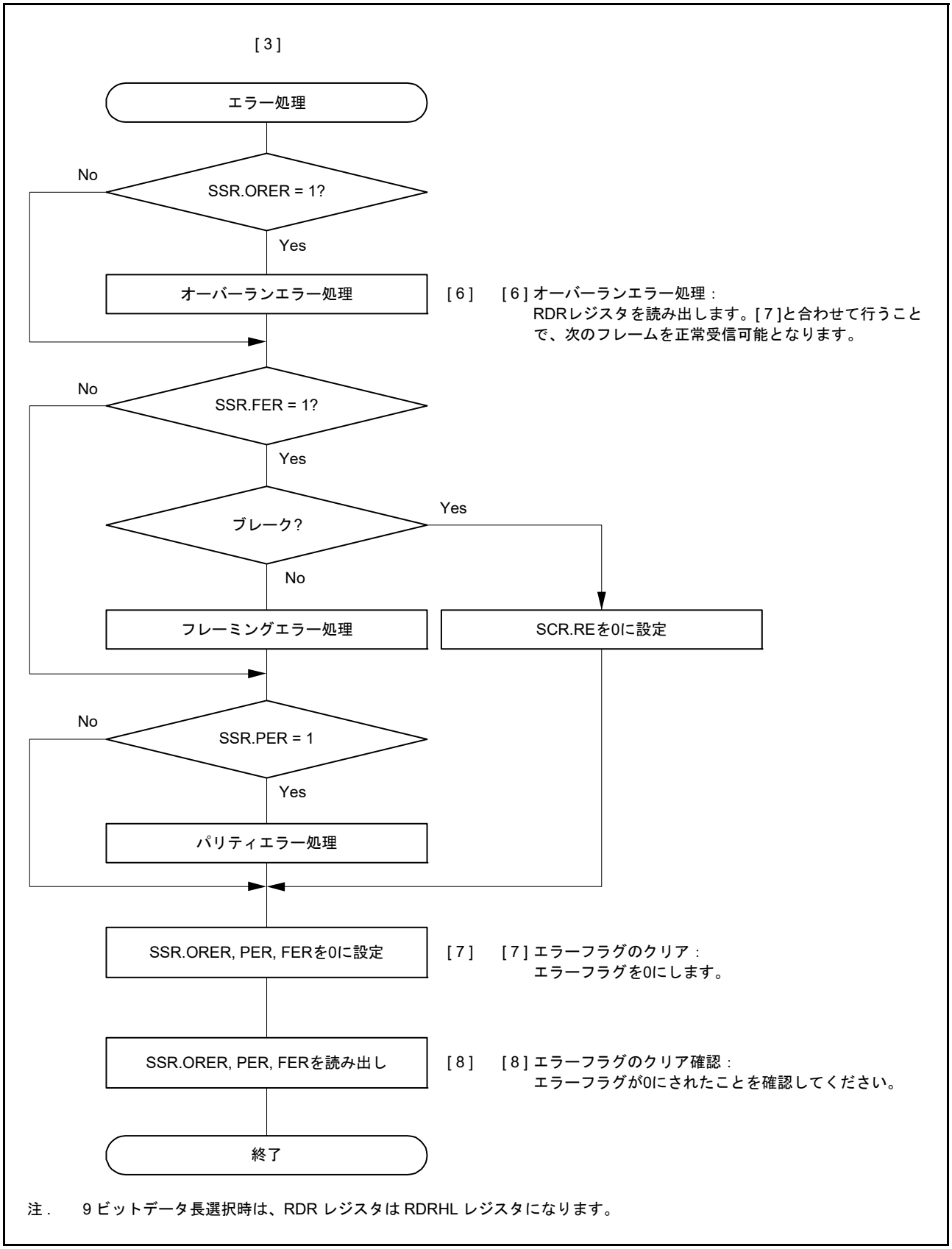
[2] [3] 受信エラー処理とブレーク検出：
受信エラーが発生したときには、SCIn_ERI割り込みが発生します。SSR.ORER, PER, FERフラグを読み出すことでエラーを判定します。所定のエラー処理を行った後、ORER, PER, FERフラグをすべて0にしてください。これらいずれかのフラグが1に設定された状態では受信を再開できません。フレーミングエラーの場合は、RXDn端子に関連する入力ポートの値を読み出すことによってブレークの検出ができます。

[4] SCIn_RXI割り込みルーチンで、RDRレジスタの受信データを1回読み出します。

[5] シリアル受信の継続手順：
シリアル受信を続けるときには、現在のフレームのストップビットを受信する前に、SCIn_RXI割り込みルーチンでRDRレジスタの値を読み出します。RDRレジスタはDMACまたはDTCを起動して値を読み出すことも可能です。

注 1.　RDR レジスタを読み出す前に RE ビットを 0 にしないでください。
注 2.　9 ビットデータ長選択時は、RDR レジスタは RDRHL レジスタになります。

図 29.17　調歩同期式モードにおけるシリアル受信のフローチャート例（非 FIFO 選択時）（1）



注．　9 ビットデータ長選択時は、RDR レジスタは RDRHL レジスタになります。

図 29.18　調歩同期式モードにおけるシリアル受信のフローチャート例（非 FIFO 選択時）（2）

(2)　FIFO 選択時

図 29.19 に、調歩同期式モードにおいて FRDRH レジスタと FRDRL レジスタに書き込まれるデータフォーマットの例を示します。

調歩同期式モードでは、FRDRH レジスタの MPB フラグに 0 が書き込まれます。データ長に対応したデータが FRDRH レジスタと FRDRL レジスタに書き込まれます。使用されないビットには、0 が書き込まれます。FRDRH から FRDRL の順に読み出してください。ソフトウェアが FRDRL レジスタを読み出すと、SCI は FER、PER、および FRDRL レジスタの受信データ（RDAT[8:0]）を次のデータで更新します。FRDRH レジスタの RDF、ORER、および DR フラグは、常に SSR_FIFO レジスタの対応するフラグを反映しています。

データ長	レジスタ設定		FRDRH, FRDRLの受信データ															
			FRDRHL															
			FRDRH								FRDRL							
	SCMR.CHR1	SMR.CHR	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
7ビット	1	0	—	RDF	ORER	FER	PER	DR	0	0	0	7ビット受信データ						
8ビット	1	1	—	RDF	ORER	FER	PER	DR	0	0	8ビット受信データ							
9ビット	0	Don't care	—	RDF	ORER	FER	PER	DR	0	9ビット受信データ								

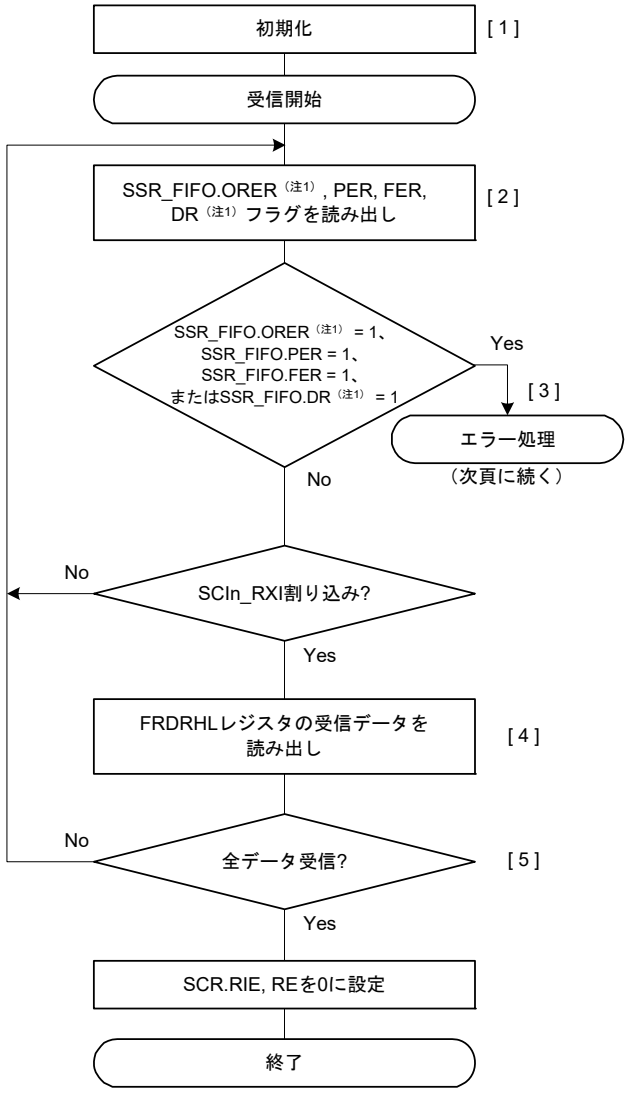
注 .　MPB フラグからは常に 0 が読み出されます (FRDRH[1])。
データ長が 7 ビットのとき、FRDRH[0], FRDRL[7] からは常に 0 が読み出されます。
データ長が 8 ビットのとき、FRDRH[0] から常に 0 が読み出されます。
FRDRH[7] ビットの読み出し値は不定です。

図 29.19　　FRDRH と FRDRL に格納されるデータフォーマット（FIFO 選択時）

シリアルデータの受信時、SCI は以下のように動作します。

1. SCR.RE ビットが 1 になると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。
2. SCI が通信回線を監視し、スタートビットを検出すると、内部を同期化して受信データを RSR レジスタに取り込み、パリティビットとストップビットをチェックします。
3. FRDRL レジスタがいっぱいであると、オーバーランエラーが発生します。オーバーランエラーが発生した場合、SSR_FIFO.ORER フラグが 1 になります。このとき、RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。受信データは FRDRL レジスタ（注 1）へ転送されません。
4. パリティエラーが検出された場合は、PER フラグと受信データが FRDRL レジスタ（注 1）へ転送されます。このとき、RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。
5. フレーミングエラーが検出された場合は、FER フラグと受信データが FRDRL レジスタ（注 1）へ転送されます。このとき、RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。
6. フレーミングエラーが検出された後、SCI によって連続受信データが 1 フレーム分であることが検出された場合、受信動作が停止します。
7. 受信 FIFO データレジスタ（FRDRL）に格納されたデータ数が指定された受信トリガ数より少なく、かつ、調歩同期式モードにおいて最後のストップビットから 15ETU 経過しても次のデータが受信されていない場合は、SSR_FIFO.DR ビットが 1 になります。RIE ビットが 1 で、FCR.DRES ビットが 0 の場合、SCI は SCIn_RXI 割り込み要求を発生させます。DRES ビットが 1 の場合、SCI は SCIn_ERI 割り込み要求を発生させます。
8. 正常に受信したときは、受信データが FRDRL レジスタ（注 1）へ転送されます。FRDRHL に書き込まれた受信データ数が指定された受信トリガ数以上であると、RDF フラグが 1 になります。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。この SCIn_RXI 割り込み処理ルーチンにおいて、オーバーランエラーが発生する前に、FRDRL レジスタ（注 2）へ転送された受信データを読み出すことで連続受信が可能になります。FRDRL レジスタ（注 3）へ転送された受信データ数が RTS トリガ数未満であると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。

注 1.　データ長 9 ビット選択時は、FRDRH レジスタと FRDRL レジスタのデータだけを読み出してください。
注 2.　データ長 9 ビット選択時は、FRDRH レジスタ→ FRDRL レジスタの順にデータを読み出してください。
注 3.　データ長 9 ビット選択時は、SCI によって FRDRL レジスタの更新のみがチェックされ、FRDRH レジスタの更新はチェックされません。



[1]　SCIの初期化：
データ受信に設定します。

[2][3]　受信エラー処理とブレークの検出：
受信エラーが発生したときには、SCIn_ERI割り込みが発生します。SPTR.RXDMONを読み出しすることにより、ブレークを検出できます。SSR_FIFO.ORER（注1）, PER, DR（注1）, FERの各フラグを読み出しすることによりエラーを判定します。所定のエラー処理を行った後、ORER（注1）フラグを0にしてください。ORER（注1）フラグが1にされた状態では受信を再開できません。FER = 1, PER = 1, またはDR（注1）= 1であっても受信動作は継続されます。

[4]　SCIn_RXI割り込み処理ルーチンでFRDRHLの受信データを読み出し：
FRDRHLレジスタに保存した受信データは、保存したデータ数が少なくともFCR.RTRG値未満になるまで読み出されます。FDR.Rビットで、FIFOの受信データビット数を確認します。

[5]　シリアル受信の継続手順：
シリアル受信を続けるときには、オーバーランエラーが発生する前に、SCIn_RXI割り込み処理ルーチンでFRDRHLからデータを読み出し、RDFフラグとDRフラグを0にクリアします。DMACまたはDTCを起動し、FRDRHLのデータを読み出しすることも可能です。この場合、RDFフラグは自動的にクリアされます。そのため、RDFフラグへ書き込みはしないでください。

注 1.　FRDRHL.ORER フラグおよび DR フラグで読み出すこともできます。

図 29.20　調歩同期式モードにおけるシリアル受信のフローチャート例（FIFO 選択時）（1）

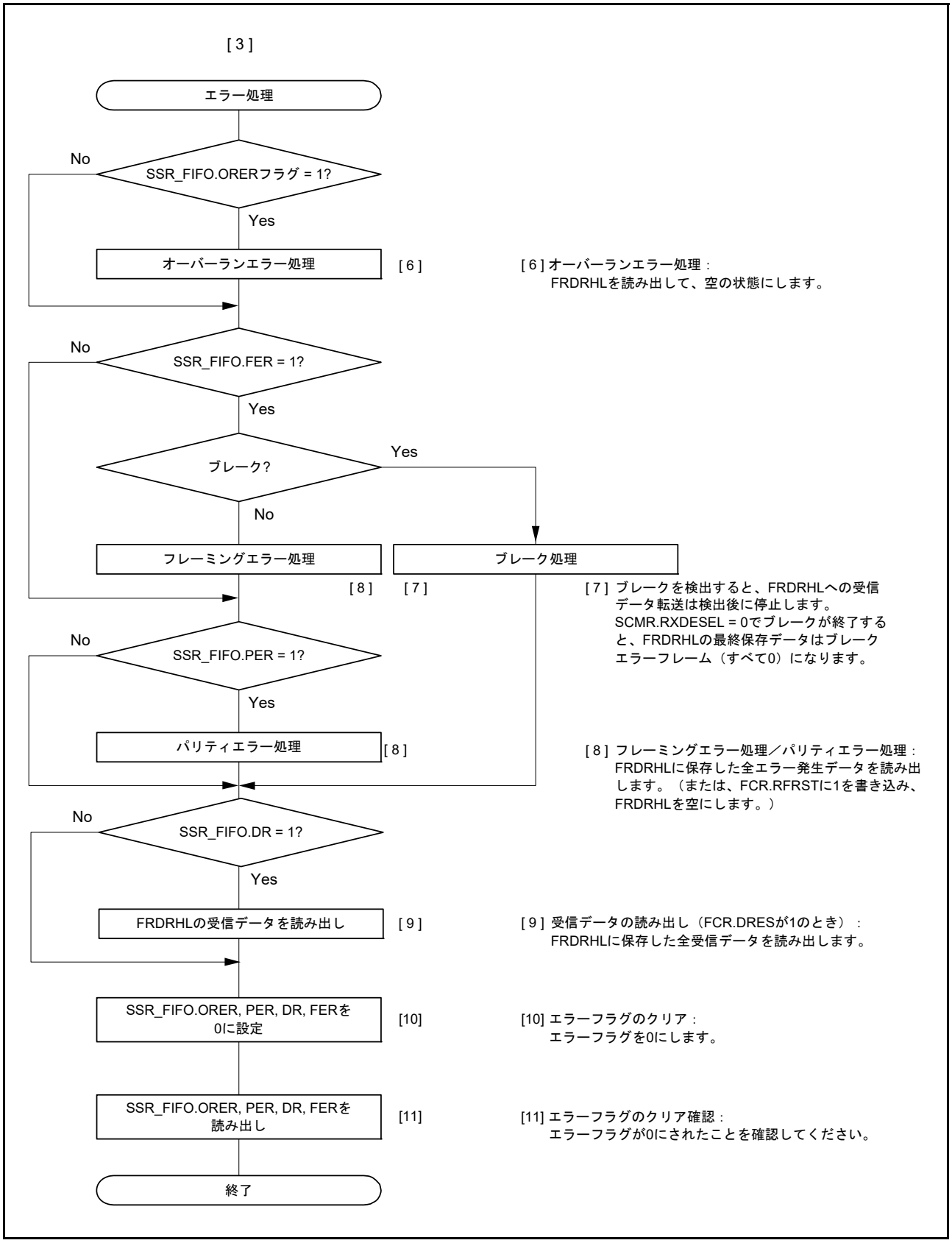


図 29.21　調歩同期式モードにおけるシリアル受信のフローチャート例（FIFO 選択時）（2）

29.4　マルチプロセッサ通信機能

マルチプロセッサ通信機能を使用すると、マルチプロセッサビットを付加した調歩同期式シリアル通信により、複数のプロセッサ間で通信回線を共有したデータの送受信が可能になります。マルチプロセッサ通信では、各受信局にそれぞれ固有の ID コードが割り付けられます。シリアル通信サイクルは、受信局を指定する ID 送信サイクルと、指定された受信局にデータを送信するためのデータ送信サイクルで構成されます。

ID 送信サイクルとデータ送信サイクルの区別はマルチプロセッサビットで行います。

- マルチプロセッサビットが 1 のとき、送信サイクルは ID 送信サイクル
- マルチプロセッサビットが 0 のとき、送信サイクルはデータ送信サイクル

図 29.22 に、マルチプロセッサフォーマットを使用したプロセッサ間通信の例を示します。送信局は、まず受信局の ID コードにマルチプロセッサビット 1 を付加した通信データを送信します。続いて、送信データにマルチプロセッサビット 0 を付加した通信データを送信します。受信局は、マルチプロセッサビットが 1 の通信データを受信すると、受信した ID を自局の ID と比較します。2 つが一致した場合、受信局は、続いて送信される通信データを受信します。一致しなかった場合、再びマルチプロセッサビットが 1 の通信データを受信するまで、受信局は通信データを読み飛ばします。

(1)　非 FIFO 選択時

SCI はこの機能をサポートするため、SCR.MPIE ビットを設けています。MPIE ビットを 1 にすると、マルチプロセッサビットが 1 のデータを受信するまで、下記の動作が禁止されます。

- RSR レジスタから RDR レジスタ（データ長 9 ビット選択時は RDRHL レジスタ）への受信データの転送
- 受信エラーの検出
- SSR.RDRF、ORER、FER の各ステータスフラグのセット

マルチプロセッサビットが 1 のキャラクタを受信すると、SSR.MPBT ビットが 1 になるとともに、SCR.MPIE ビットが自動的にクリアされ、非マルチプロセッサの受信動作に戻ります。このとき、SCR.RIE ビットがセットされていると、SCIn_RXI 割り込みが発生します。

マルチプロセッサフォーマットを指定した場合は、パリティビット機能は無効です。それ以外は、非マルチプロセッサの調歩同期式モードと変わりません。マルチプロセッサ通信を行うときのクロックも、非マルチプロセッサの調歩同期式モードで使用するクロックと同一です。

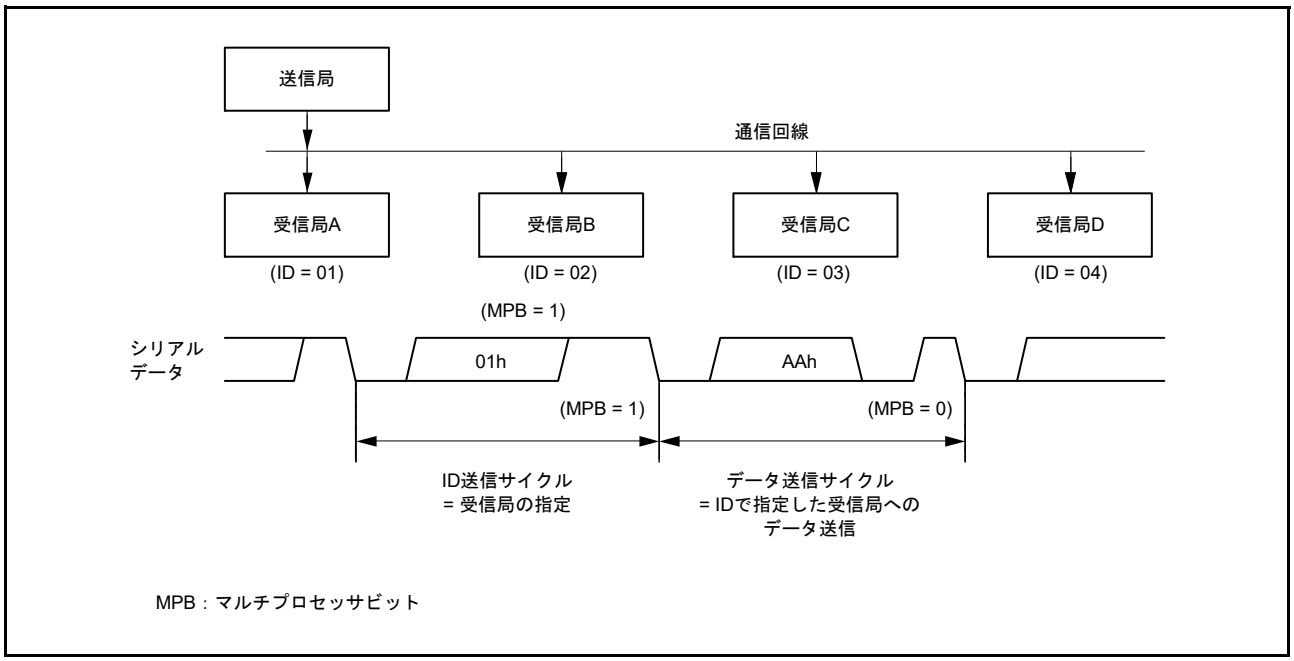


図 29.22　マルチプロセッサフォーマットを使用した通信例（データ AAh を受信局 A に送信する場合）

(2)　FIFO 選択時

データ送信では、ソフトウェアはデータを FTDRHL レジスタの MPBT ビットへ書き込む必要があります。このデータは、FTDRHL レジスタの TDAT ビットの送信データに対応します。データ受信では、受信データの一部であるマルチプロセッサビットが FTDRHL レジスタの MPB ビットに書き込まれ、受信データは FRDRL レジスタに書き込まれます。

MPIE ビットを 1 にすると、マルチプロセッサビットが 1 のデータを受信するまで、下記の動作が禁止されます。

- RSR レジスタから FRDRHL レジスタへの受信データの転送
- 受信エラーの検出
- ブレーク
- SSR_FIFO レジスタの RDF、ORER、および FER の各ステータスフラグのセット

マルチプロセッサビットが 1 の 8 ビットキャラクタを受信すると、FTDRHL.MPB ビットが 1 になるとともに、受信データが FRDRHL レジスタの RDAT ビットに書き込まれます。SCR.MPIE ビットが自動的にクリアされるので、SCI は非マルチプロセッサの受信動作に戻ります。このとき、SCR.RIE ビットがセットされていると、SCIn_RXI 割り込みが発生します。

マルチプロセッサフォーマットを指定した場合は、パリティビット機能は無効です。それ以外は、非マルチプロセッサの調歩同期式モードの FIFO 選択時と変わりません。

29.4.1　マルチプロセッサシリアルデータ送信

(1)　非 FIFO 選択時

図 29.23 に、マルチプロセッサデータ送信のフローチャート例を示します。ID 送信サイクルでは、SSR.MPBT ビットを 1 にして ID を送信してください。データ送信サイクルでは、MPBT ビットを 0 にしてデータを送信してください。その他の動作は、調歩同期式モードの動作と同じです。

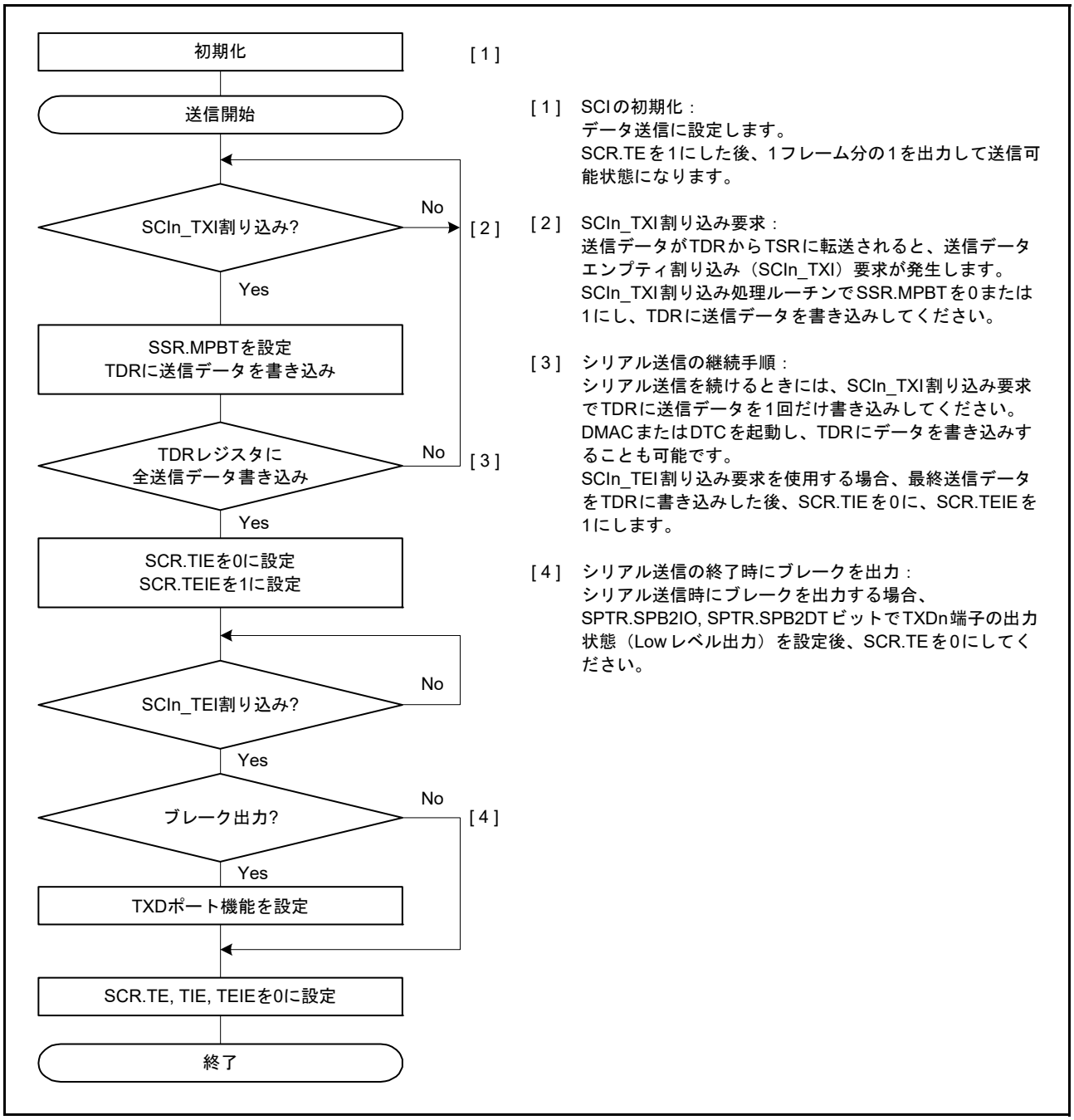


図 29.23　マルチプロセッサシリアル送信のフローチャート例（非 FIFO 選択時）

(2)　FIFO 選択時

図 29.24 に、マルチプロセッサモードにおいて FTDRH レジスタと FTDRL レジスタに書き込まれるデータフォーマットの例を示します。

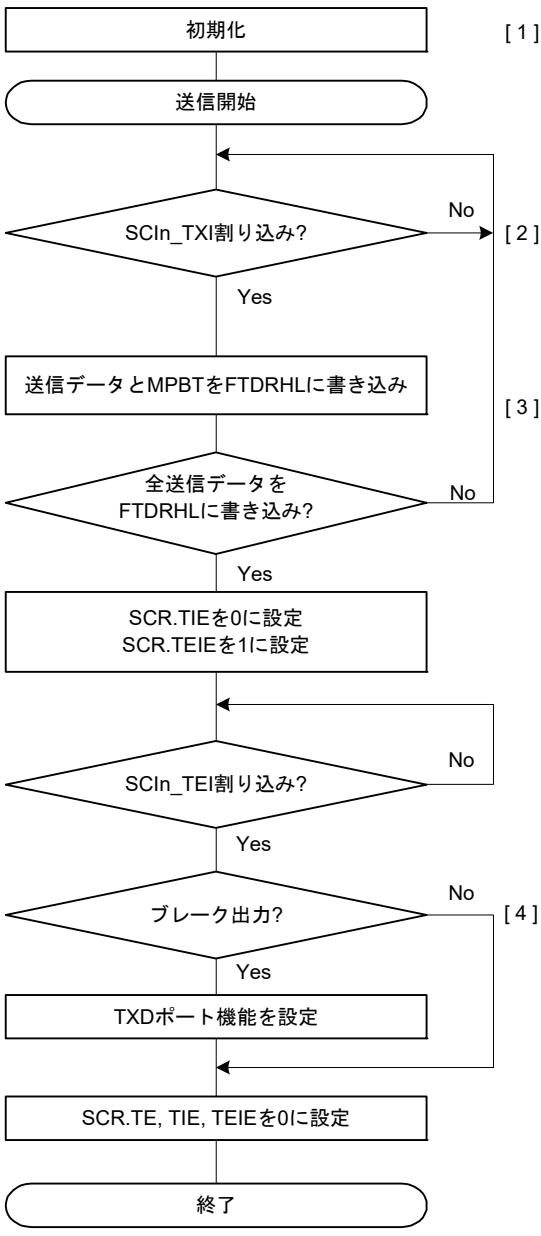
FTDRH レジスタの MPBT ビットが 1 になります。適切なデータ長のデータが FTDRH レジスタと FTDRL レジスタに書き込まれます。使用しないビットには 0 を書いてください。FTDRH から FTDRL の順に書いてください。

データ長	レジスタ設定		FTDRH, FTDRLの送信データ															
			FTDRHL															
			FTDRH								FTDRL							
	SCMR.CHR1	SMR.CHR	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
7ビット	1	0	—	—	—	—	—	—	MPBT	—	—	7ビット送信データ						
8ビット	1	1	—	—	—	—	—	—	MPBT	—	8ビット送信データ							
9ビット	0	Don't care	—	—	—	—	—	—	MPBT	9ビット送信データ								

—：無効ビット。書く場合、0 としてください。

図 29.24　マルチプロセッサモードにおいて FTDRH と FTDRL に書き込まれるデータフォーマット（FIFO 選択時）

図 29.25 に、FIFO 選択時のマルチプロセッサデータ送信のフローチャート例を示します。ID 送信サイクルでは、FTDRH.MPBT ビットを 1 にして ID を送信してください。データ送信サイクルでは、MPBT ビットを 0 にしてデータを送信してください。その他の動作は、調歩同期式モードにおける FIFO 選択時の動作と同じです。



[1] SCIの初期化：
データ送信に設定します。
SCR.TEを1にした後、1フレーム分の1を出力して送信可能状態になります。

[2] SCIn_TXI割り込み要求によるFTDRHLへの送信データを書き込み：
FTDRHLからTSRへのデータ転送は、FTDRHLに書き込んだ送信データ量が指定の送信トリガ数以下の場合、送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）要求が発生します。

[3] シリアル送信の継続手順：
シリアル送信を続けるときには、SCIn_TXI割り込み要求でFTDRHLに送信データとMPBTを1回だけ書き込みしてください。
DMACまたはDTCを起動し、FTDRHLにデータを書き込みすることも可能です。
SCIn_TEI割り込み要求を使用する場合、最終送信データをFTDRHLに書き込みした後、SCR.TIEを0に、SCR.TEIEを1にします。

[4] シリアル送信の終了時にブレークを出力：
シリアル送信時にブレークを出力する場合、SPTR.SPB2IO, SPTR.SPB2DTビットでTXDn端子の出力状態（Lowレベル出力）を設定後、SCR.TEを0にしてください。

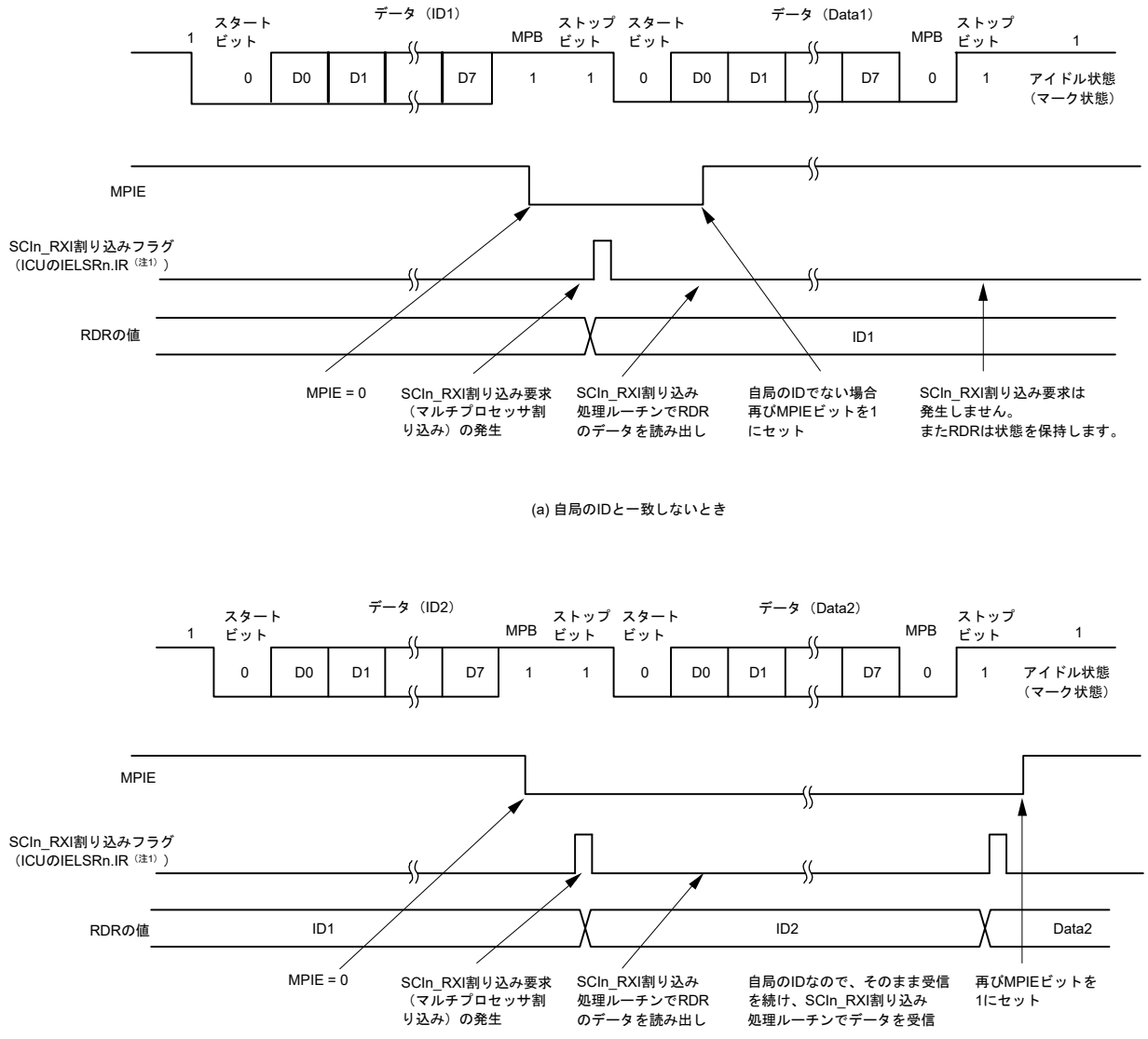
図 29.25　マルチプロセッサモードにおけるシリアル送信のフローチャート例（FIFO 選択時）

29.4.2　マルチプロセッサシリアルデータ受信

(1)　非 FIFO 選択時

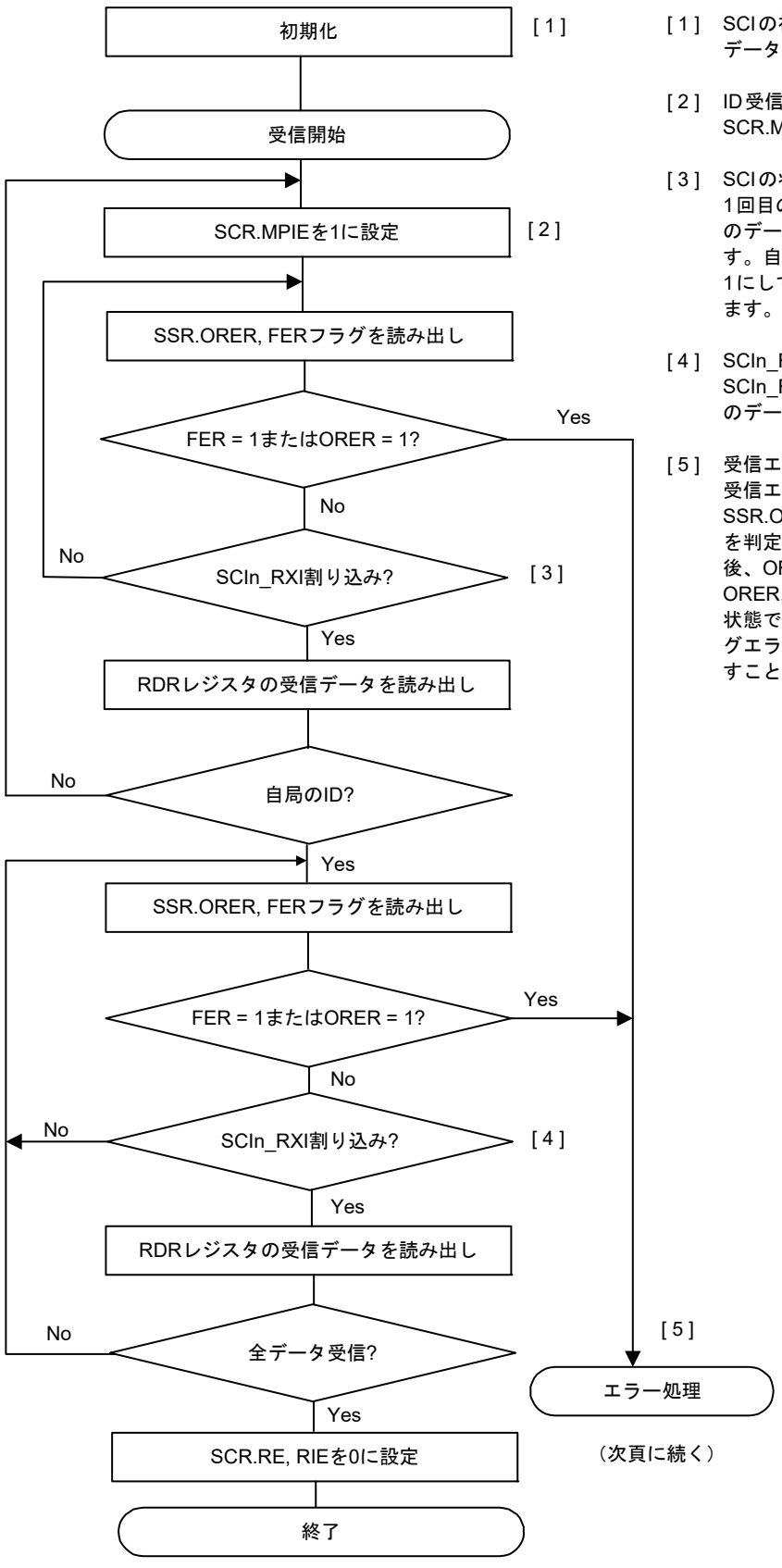
図 29.26 および図 29.27 に、マルチプロセッサデータ受信のフローチャート例を示します。SCR.MPIE ビットを 1 にすると、マルチプロセッサビットが 1 の通信データを受信するまで、通信データが読み飛ばされます。マルチプロセッサビットが 1 の通信データを受信すると、その受信データは RDR レジスタ（データ長 9 ビット選択時は RDRHL レジスタ）へ転送され、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。その他の動作は、調歩同期式モードの動作と同じです。

図 29.26 に、データ受信時の動作例を示します。



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.26　SCI の受信時の動作例（8 ビットデータ／マルチプロセッサビットあり／1 ストップビットの場合）



[1] SCIの初期化：
データ受信に設定します。

[2] ID受信サイクル：
SCR.MPIEを1にし、ID受信を待ちます。

[3] SCIの状態を確認して、IDの受信と比較：
1回目のSCIn_RXI割り込みで、RDR（注1）のデータを読み出し、自局のIDと比較します。自局のIDでないときには、再びMPIEを1にして別のSCIn_RXI割り込み要求を待ちます。

[4] SCIn_RXI割り込みでデータの受信：
SCIn_RXI割り込みルーチンで、RDR（注1）のデータを読み出します。

[5] 受信エラー処理とブレークの検出：
受信エラーが発生したときには、SSR.ORER, FERフラグをリードしてエラーを判定します。所定のエラー処理を行った後、ORER, FERフラグを0にしてください。ORER, FERフラグのいずれかが1にされた状態では受信を再開できません。フレーミングエラーの場合、SPTR.RXDMONを読み出すことでブレークの検出ができます。

注 1.　9 ビットデータ長選択時は、RDR は RDRHL になります。

図 29.27　マルチプロセッサシリアル受信のフローチャート例（1）（非 FIFO 選択時）

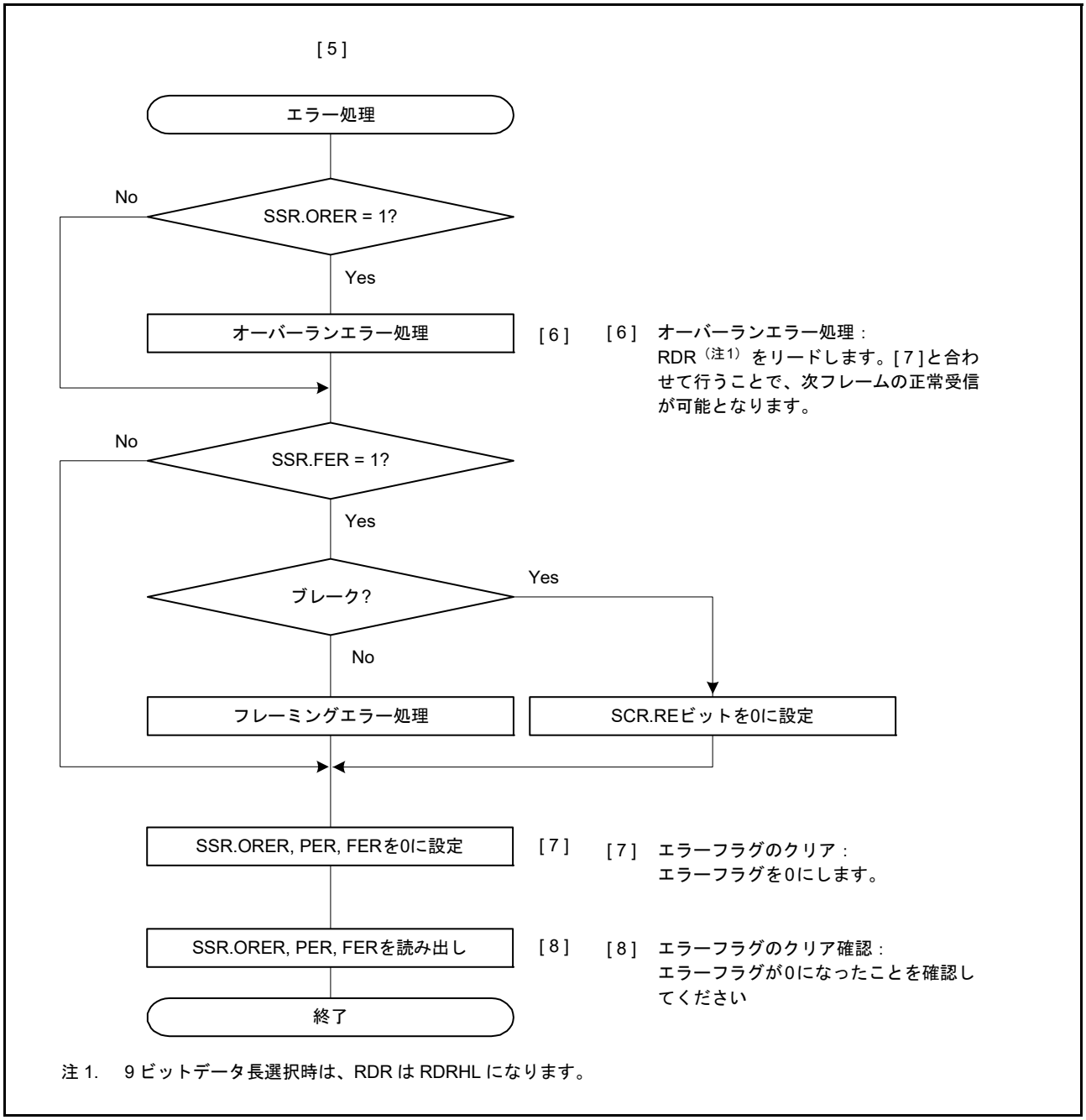


図 29.28　マルチプロセッサシリアル受信のフローチャート例（2）（非 FIFO 選択時）

(2)　FIFO 選択時

図 29.29 に、マルチプロセッサモードにおいて FRDRH レジスタと FRDRL レジスタに書き込まれるデータフォーマットの例を示します。

マルチプロセッサモードでは、受信データの一部である MPB の値が FRDRH レジスタの MPB フラグに書き込まれます。FRDRH レジスタの PER フラグに 0 が書き込まれます。適切なデータ長のデータが FRDRH レジスタと FRDRL レジスタに書き込まれます。使用されないビットには、0 が書き込まれます。読み出し順は FRDRH → FRDRL となります。ソフトウェアが FRDRL レジスタを読み出すと、SCI は FER、MPB、および FRDRL レジスタの受信データ（RDAT[8:0]）を次のデータで更新します。FRDRH レジスタの RDF、ORER、および DR フラグは、常に SSR_FIFO レジスタの対応するフラグを反映しています。

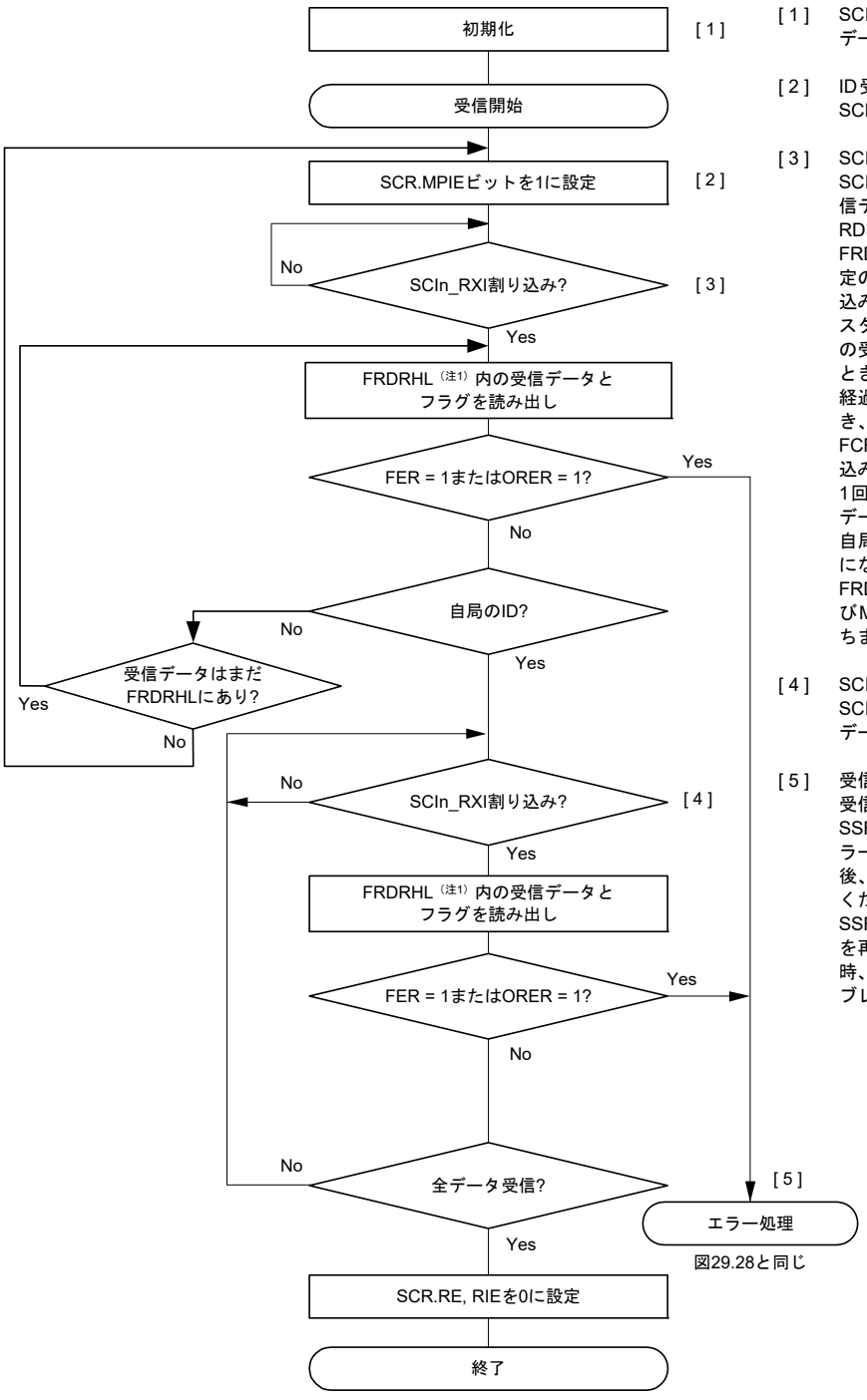
データ長	レジスタ設定		FRDRH, FRDRLの受信データ															
			FRDRHL															
			FRDRH								FRDRL							
	SCMR.CHR1	SMR.CHR	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
7ビット	1	0	—	RDF	ORER	FER	0	DR	MPB	0	0	7ビット受信データ						
8ビット	1	1	—	RDF	ORER	FER	0	DR	MPB	0	8ビット受信データ							
9ビット	0	Don't care	—	RDF	ORER	FER	0	DR	MPB	9ビット受信データ								

注．　データ長が 7 ビットのとき、FRDRH[0], FRDRL[7] からは常に 0 が読み出されます。
データ長が 8 ビットのとき、FRDRH[0] から常に 0 が読み出されます。
FRDRH[7] ビットの読み出し値は不定です。

図 29.29　マルチプロセッサモードにおいて FRDRH と FRDRL に格納されるデータフォーマット（FIFO 選択時）

図 29.30 に、FIFO 選択時のマルチプロセッサデータ受信のフローチャート例を示します。SCR.MPIE ビットを 1 にすると、マルチプロセッサビットが 1 の通信データを受信するまで、通信データは読み飛ばされます。マルチプロセッサビットが 1 の通信データを受信すると、その受信データ、MPB、および関連のエラーが FRDRHL レジスタへ転送されます。SCR.MPIE ビットが自動的にクリアされ、非マルチプロセッサの受信動作が継続します。

フレーミングエラーが発生して SSR_FIFO.FER フラグが 1 になると、SCI はデータ受信を継続します。その他の動作は、調歩同期式モードにおける FIFO 選択時の動作と同じです。



[1] SCIの初期化：
データ受信に設定します。

[2] ID受信サイクル：
SCR.MPIEを1にし、ID受信を待ちます。

[3] SCIの状態を確認して、IDの受信と比較：
SCIが最初のデータ(MPB = 1)を保存後、全受信データはFRDRHLに保存されます。
RDFが1にセットされます。このとき、FRDRHLに保存されている受信データ量が指定の受信トリガ数以上の場合、SCIn_RXI割り込み要求が発生します。受信FIFOデータレジスタ（FRDRHL）に保存されたデータ量が指定の受信トリガ数以下で、受信データが1以上のとき、そして最終ストップビットから15 FTU経過しても新たなデータを受信していないとき、SSR_FIFO.DRが1になります。このとき、FCR.DRESビットが0のときはSCIn_RXI割り込みが発生します。
1回目のSCIn_RXI割り込みで、FRDRHLのデータを読み出し、自局のIDと比較します。
自局のIDでないときには，MPB = 1のデータになるまで読み出しし、次のIDと比較します。
FRDRHLのデータがMPB = 1でない場合、再びMPIEを1にしてSCIn_RXI割り込み要求を待ちます。

[4] SCIn_RXI割り込みでデータの受信：
SCIn_RXI割り込みルーチンで、FRDRHLのデータを読み出します。

[5] 受信エラー処理とブレークの検出：
受信エラーが発生したときには、SSR_FIFO.ORER, FERフラグを読み出してエラーを判定します。所定のエラー処理を行った後、SSR_FIFO.ORER, FERフラグを0にしてください。
SSR_FIFO.ORERが1にされた状態では、受信を再開できません。フレーミングエラー検出時、SPTR.RXDMONビットを読み出すことでブレークの検出ができます。

注 1.　FRDRHL の代わりに FRDRH, FRDRL を使用した場合

図 29.30　マルチプロセッサモードにおけるシリアル受信のフローチャート例（FIFO 選択時）

29.5　クロック同期式モードの動作

クロック同期式シリアル通信のデータフォーマットを図 29.31 に示します。

クロック同期式モードでは、クロックパルスに同期してデータを送受信します。通信データの 1 キャラクタは 8 ビットデータで構成されます。クロック同期式モードでは、パリティビットの付加はできません。

SCI は、データ送信時は同期クロックの立ち下がりから次の立ち下がりまで出力します。データ受信時は同期クロックの立ち上がりに同期してデータを取り込みます。

8 ビット出力後の送信ラインは、最終ビット出力状態を保ちます。スレーブモードにおいて SPMR.CKPH ビットが 1 の場合、SCI は第 1 ビットの出力状態を保ちます。

SCI 内部では送信部と受信部は独立しており、クロックを共有することで全二重通信が可能です。送信部と受信部はどちらもダブルバッファ構成になっているため、送信中に次の送信データを書き込むことや、受信中に前の受信データを読み出すことが可能であり、連続送受信動作が実現されます。

ただし、最高速ビットレートの設定（BRR = 00h かつ SMR.CKS[1:0] = 00b）では、連続送受信動作が不可能です。そのため FIFO 選択時は、この設定（BRR = 00h かつ SMR.CKS[1:0] = 00b）は利用できません。

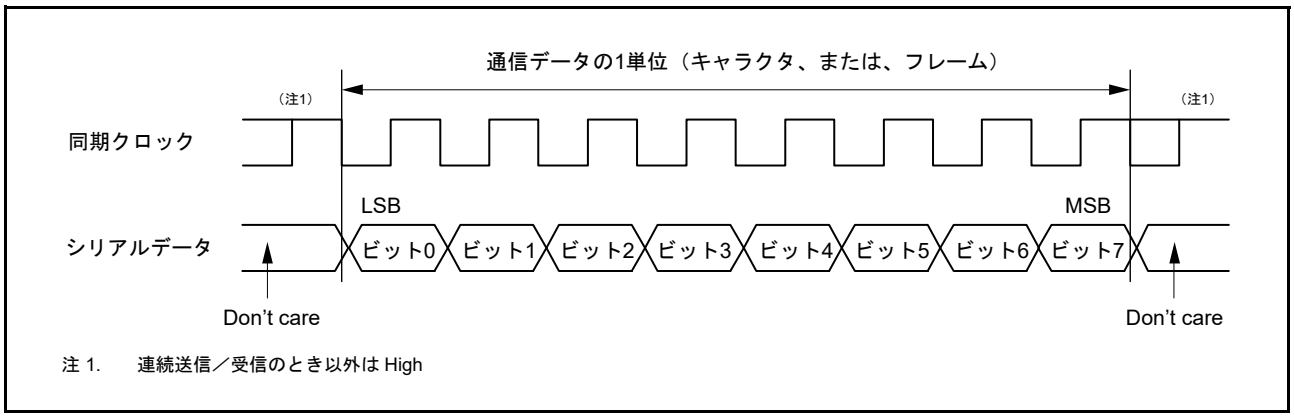


図 29.31　クロック同期式シリアル通信のデータフォーマット（LSB ファーストの場合）

29.5.1　クロック

SCR.CKE[1:0] ビットの設定に基づいて、内蔵ボーレートジェネレータが生成する内部クロック、または SCKn 端子に入力される外部同期クロックのいずれかを選択できます。

SCI が内部クロックで動作する場合は、SCKn 端子から同期クロックが出力されます。1 キャラクタの送受信で 8 パルスの同期クロックが出力されます。送受信を行わないとき、クロックは High に固定されます。ただし、受信動作のみで CTS 機能が無効な場合、SCR.RE ビットが 1 になると、同期クロックの出力が始まります。RE ビットが 0 のとき、またはオーバーランエラーが発生したとき、同期クロックは High レベル（注 1）になったところで停止します。

受信動作のみで CTS 機能が有効な場合は、SCR.RE ビットが 1 になっても CTSn_RTSn 端子入力が High であれば、クロック出力は始まりません。SCR.RE ビットが 1 になったとき、CTSn_RTSn 端子入力が Low であれば、同期クロックの出力が始まります。フレームの受信が完了した時点で CTSn_RTSn 端子入力が High であれば、同期クロック出力は High レベルになったところで停止します。CTSn_RTSn 端子入力が Low のままである場合は、RE ビットが 0 のとき、またはオーバーランエラーが発生したとき、同期クロックは High レベル（注 1）になったところで停止します。

注 1.　（SPMR.CKPH ビット = 0、かつ SPMR.CKPOL ビット = 1）または（SPMR.CKPH ビット = 1、かつ SPMR.CKPOL ビット = 1）の状態にあるとき、信号は High に固定されます。
（SPMR.CKPH ビット = 0、かつ SPMR.CKPOL ビット = 1）または（SPMR.CKPH ビット = 1、かつ SPMR.CKPOL ビット = 0）の状態にあるとき、信号は Low に固定されます。

29.5.2　CTS、RTS 機能

CTS 機能では、クロックソースが内部クロックの場合に、CTSn_RTSn 端子入力を使用してデータ送受信の開始制御を行います。SPMR.CTSE ビットを 1 にすると、CTS 機能が有効になります。CTS 機能が有効な場合、CTSn_RTSn 端子入力が Low になると、データの送受信が開始されます。

送受信中に CTSn_RTSn 端子入力を High にしても、処理中のフレームの送受信には影響を与えません。

RTS 機能では、クロックソースが外部同期クロックの場合に、CTSn_RTSn 端子出力を使用してデータ送受信の開始要求を行います。シリアル通信が可能な状態になると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。CTSn_RTSn 端子出力が Low および High となる条件は以下のとおりです。

［Low になる条件］

(a)　非 FIFO 選択時に、下記条件がすべて満たされたとき

- SCR.RE ビットまたは SCR.TE ビットが 1
- シリアル通信が許可されている
- 読み出し前の受信データがない（SCR.RE ビットが 1 の場合）
- TSR レジスタに送信用データがある（SCR.TE ビットが 1、SCR.CKE[1] ビットが 1 の場合）
- SSR.ORER フラグが 0

(b)　FIFO 選択時に、下記条件がすべて満たされたとき

- SCR.RE ビットまたは SCR.TE ビットが 1
- シリアル通信が許可されている
- FRDRHL に書き込まれた受信データ数が指定された CTSn_RTSn 出力トリガ数より少ない（SCR.RE = 1 の場合）
- FTDRHL レジスタに未送信データがある（SCR.TE ビットが 1、SCR.CKE[1] ビットが 0 の場合）
- TSR レジスタに送信用データがある（SCR.TE ビットが 1、SCR.CKE[1] ビットが 1 の場合）
- SSR_FIFO.ORER ビットが 0

［High になる条件］

(a)　非 FIFO 選択時

- Low になる条件を満たさない場合
- 受信完了後に RDR レジスタを読み出すことなく、SCR.RE = 0 によって受信を終了させた場合、RTS は High を維持します。このとき、SCR.RE に 0 を書き込んだ後に SCR レジスタをダミーリードしてください

(b)　FIFO 選択時

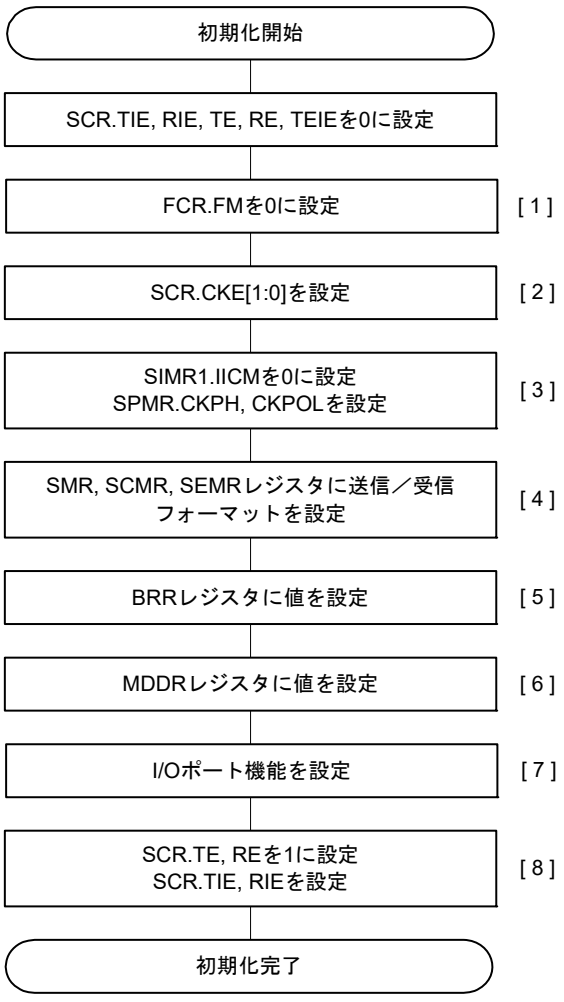
- Low になる条件を満たさない場合

29.5.3　SCI の初期化（クロック同期式モード）

データを送受信する前に、最初に SCR レジスタに初期値 00h を書き込み、次に 29.5.2　CTS、RTS 機能に示す SCI 手順を続けてください。動作モードまたは通信フォーマットを変更する場合も、SCR レジスタを初期値にしてから変更してください。

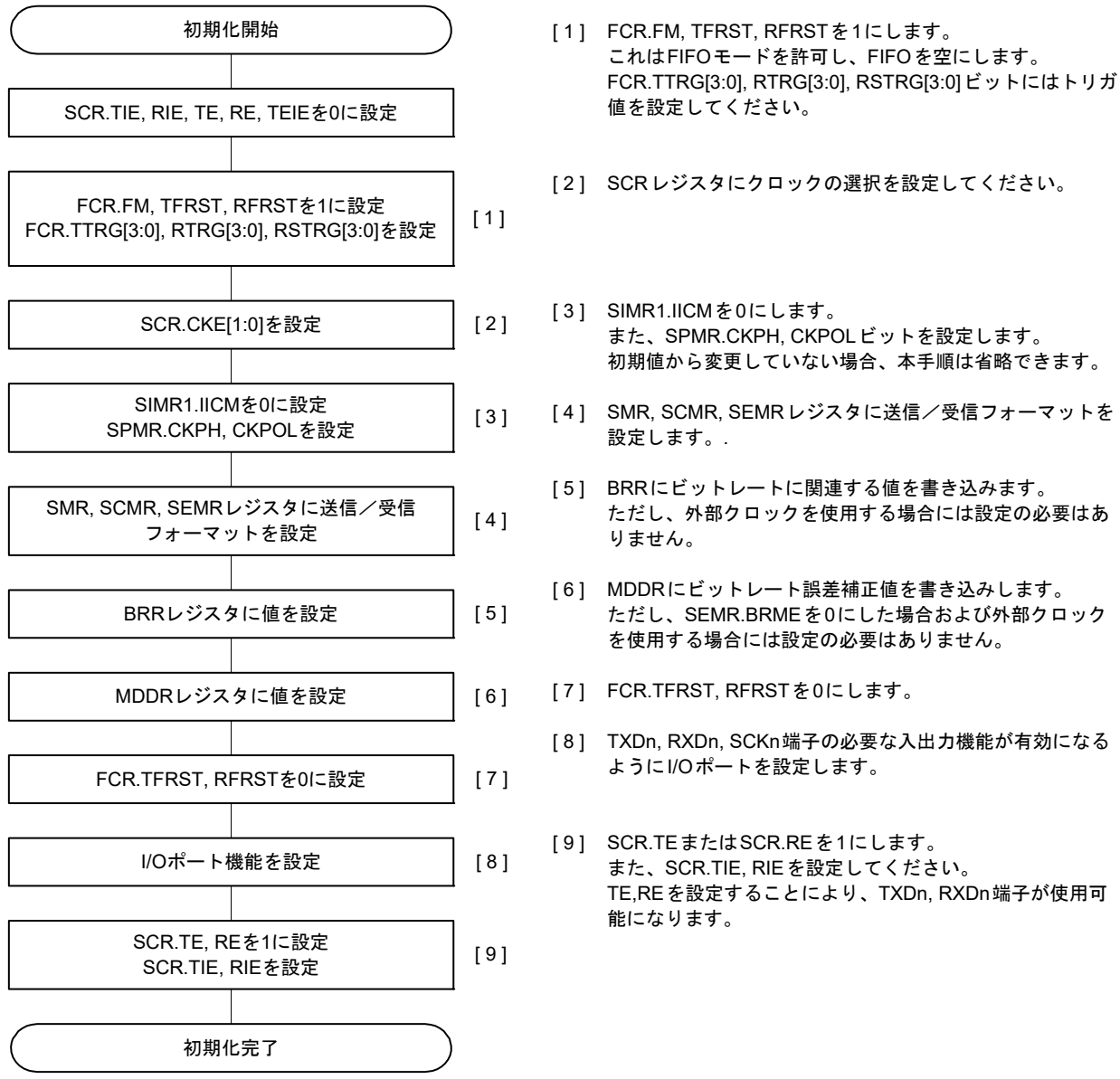
注 .　SCR.RE ビットを 0 にしても、SSR/SSR_FIFO レジスタの ORER フラグ、FER フラグ、RDRF フラグ、RDF フラグ、PER フラグ、および DR フラグは初期化されません。また、RDR レジスタおよび RDRHL レジスタも初期化されません。SCR.TE ビットが 0 の場合、選択した FIFO バッファに対する TEND フラグは初期化されません。

注 .　SCR.TIE ビットが 1 の状態で、SCR.TE ビットを 1 から 0、または 0 から 1 に変更すると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。



注 .　同時送受信動作時は、SCR.TE, SCR.RE は同時に 0 や 1 に設定する必要があります。

図 29.32　クロック同期式モードにおける SCI の初期化フローチャート例（非 FIFO 選択時）



注 .　同時送受信動作時は、SCR.TE, RE は同時に 0 や 1 に設定する必要があります。

図 29.33　クロック同期式モードにおける SCI の初期化フローチャート例（FIFO 選択時）

29.5.4　シリアルデータの送信（クロック同期式モード）

(1)　非 FIFO 選択時

図 29.34、図 29.35、および図 29.36 に、クロック同期式モードにおけるシリアル送信の動作例を示します。

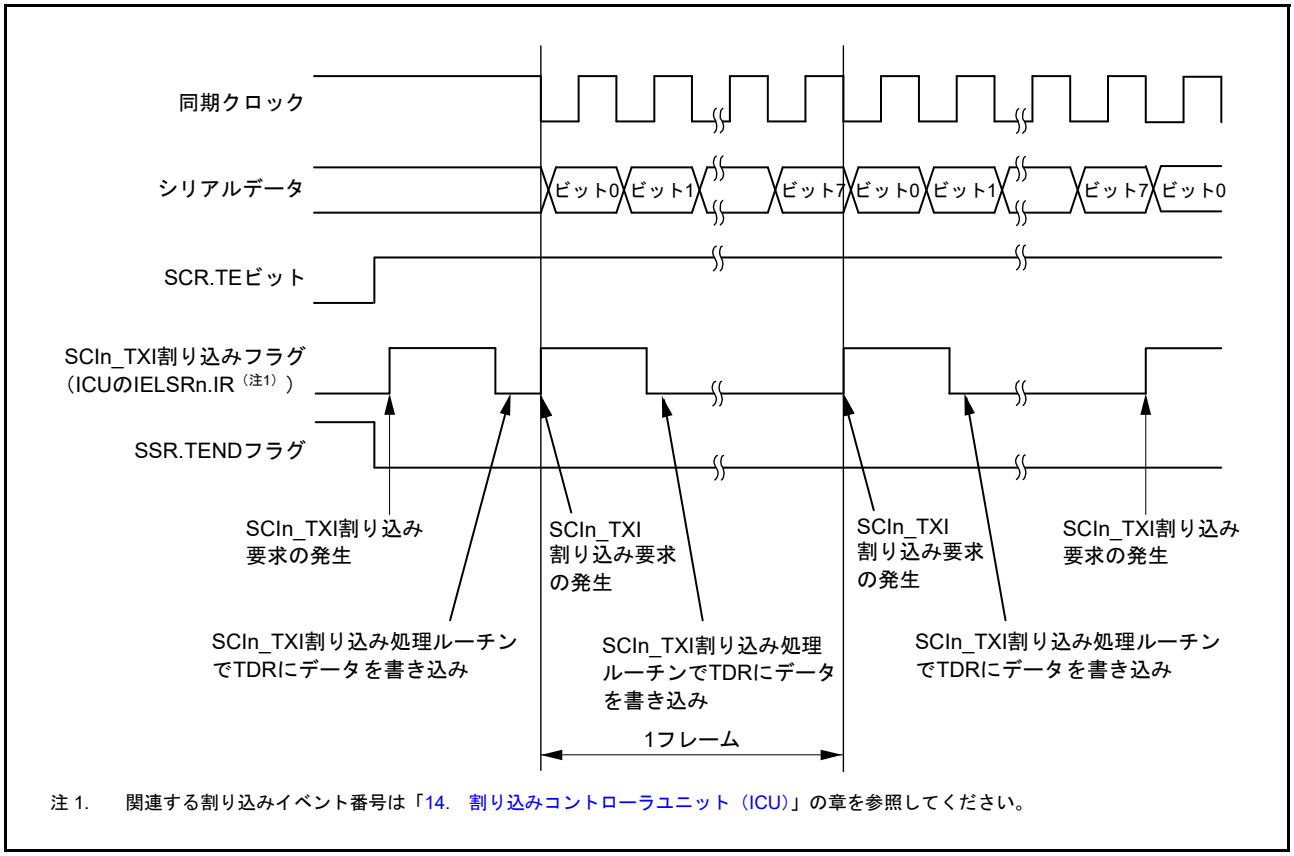
シリアルデータの送信時、SCI は以下のように動作します。

1. SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンで TDR レジスタにデータが書き込まれると、SCI は TDR レジスタから TSR レジスタへデータを転送します。なお、送信開始時の SCIn_TXI 割り込み要求は、SCR.TIE ビットを 1 にした後に SCR.TE ビットを 1 にするか、これら 2 つのビットを 1 命令で同時に 1 にすることで発生します。
2. SCI は、TDR レジスタから TSR レジスタへデータを転送した後、送信を開始します。このとき、SCR.TIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。この SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンにおいて、現在のデータ送信が終了する前に、TDR レジスタに次の送信データを書き込むことで連続送信が可能になります。SCIn_TEI 割り込み要求を使用する場合は、最終送信データを TDR レジスタに書き込んだ後、SCR.TIE ビットを 0 にして、SCR.TEIE ビットを 1 にします。
3. クロック出力モードを指定したときは出力クロックに同期して、外部クロックを指定したときは入力クロックに同期して、TXDn 端子から 8 ビットのデータが送信されます。クロック信号出力は、SPMR.CTSE ビットが 1 のとき、CTSn_RTSn 入力信号が Low になるまで待機します。
4. 最終ビットを送り出すタイミングで、SCI は TDR レジスタの更新をチェックします。
5. TDR レジスタが更新されていれば、TDR レジスタから TSR レジスタにデータを転送し、次のフレームの送信を開始します。
6. TDR レジスタが更新されていなければ、SSR.TEND フラグを 1 にします。TXDn 端子は最終ビットの出力状態を保持します。このとき、SCR.TEIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TEI 割り込み要求が発生し、SCKn 端子は High に固定されます。

図 29.34、図 29.35、および図 29.36 に、シリアル送信のフローチャート例を示します。

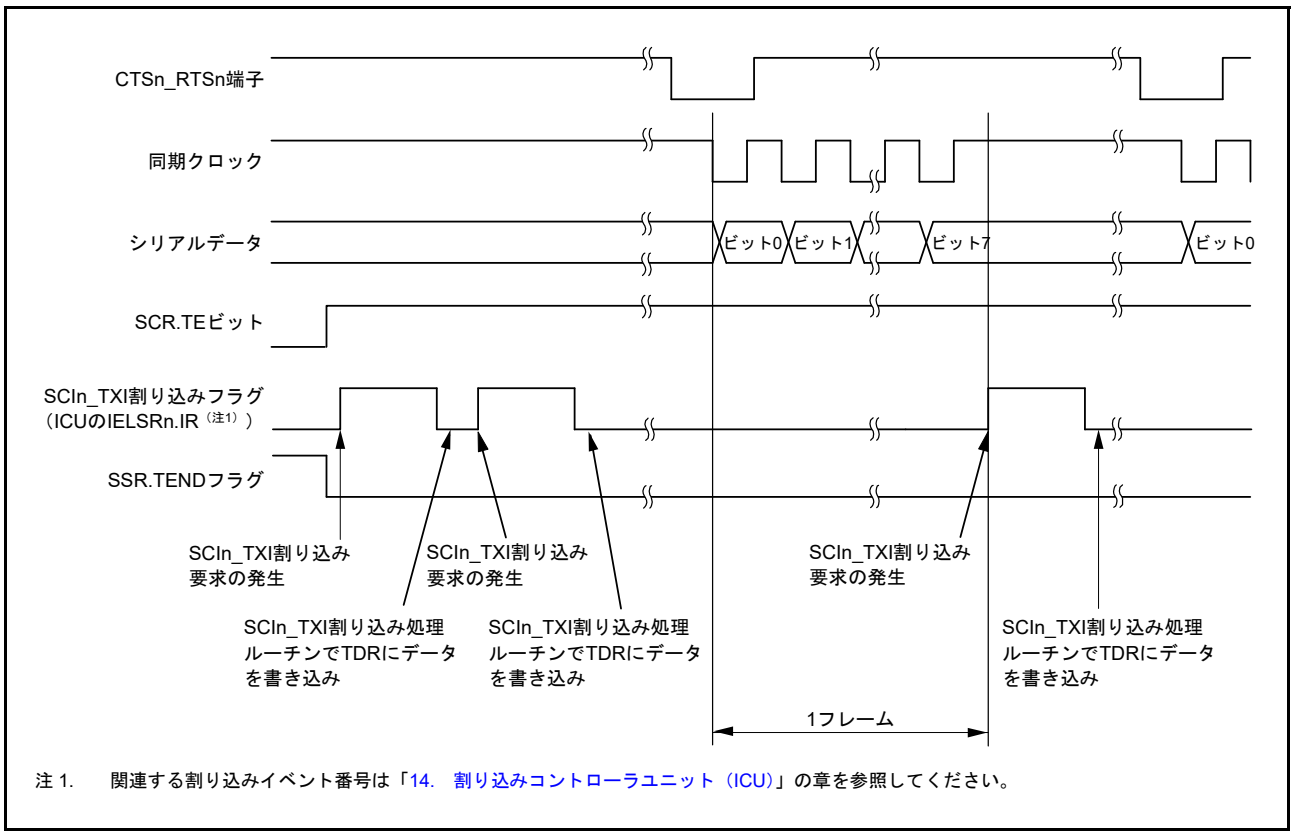
受信エラーフラグ（SSR.ORER、FER、または PER）が 1 の状態では、送信は開始されません。送信を開始する前に、必ず受信エラーフラグを 0 にしてください。

注 .　受信エラーフラグは、SCR.RE ビットを 0 にしてもクリアされません。



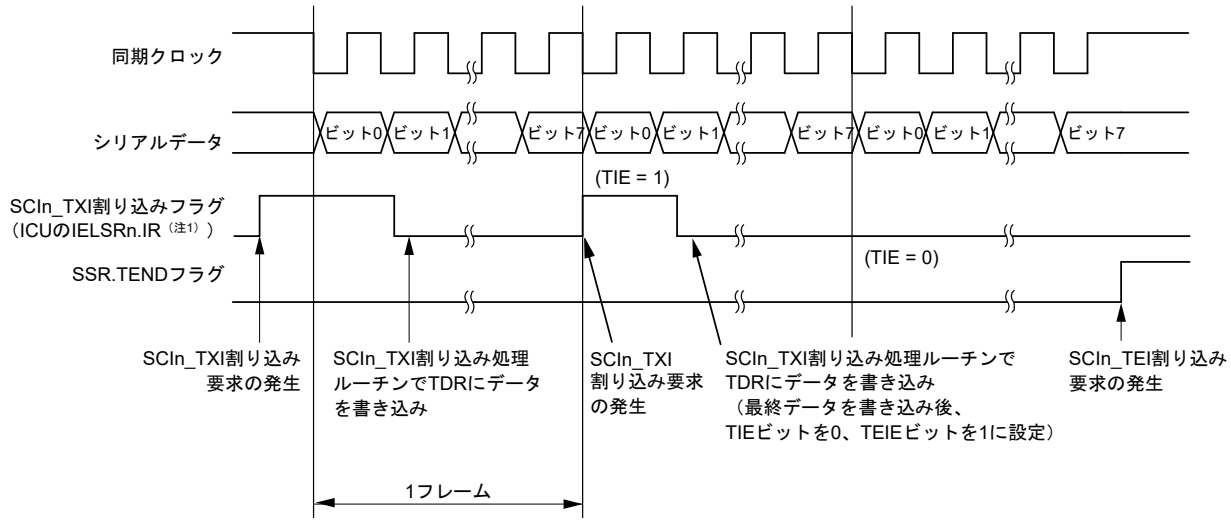
注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.34　クロック同期式モードにおけるシリアル送信の動作例（送信開始時に CTS 機能を使用しない場合）



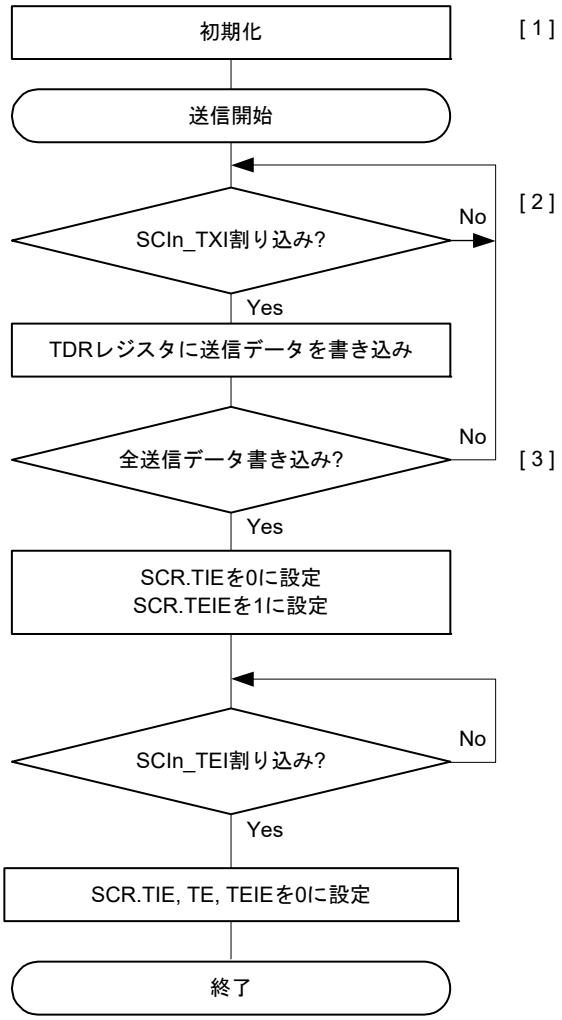
注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.35　クロック同期式モードにおけるシリアル送信の動作例（送信開始時に CTS 機能を使用する場合）



注1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.36　クロック同期式モードにおけるシリアル送信の動作例（送信中～送信終了時）



[1] SCIの初期化：
データ送信に設定します。

[2] SCIn_TXI割り込み要求で送信データをTDRレジスタへ書き込み：
送信データがTDRレジスタからTSRレジスタへ送信されると、送信データエンプティ割り込み要求（SCIn_TXI）が発生します。
SCIn_TXI割り込み処理ルーチン内で送信データをTDRレジスタへ1回書き込みます。

[3] シリアル送信の継続手順：
シリアル送信を続けるときは、送信データエンプティ割り込み要求（SCIn_TXI）により送信データをTDRレジスタへ書き込みしてください。送信データはSCIn_TXI割り込み要求でDMACあるいはDTCを起動してTDRレジスタへ書き込むことも可能です。
SCIn_TEI割り込み要求を使用するときには、最終送信データをTDRレジスタへ書き込んだ後にSCR.TIEを0に、SCR.TEIEを1にしてください。

注 . 外部クロック（SCR.CKE[1:0] = 10b, 11b）のときは、最終ビットの SCK 端子の立ち上がりで SSR.TEND フラグが 1 になります。このあと、SCR.TE をすぐに 0 に設定すると、受信デバイス側で受信データホールド時間が不足する場合があります。

図 29.37　クロック同期式モードにおけるシリアル送信のフローチャート例（非 FIFO 選択時）

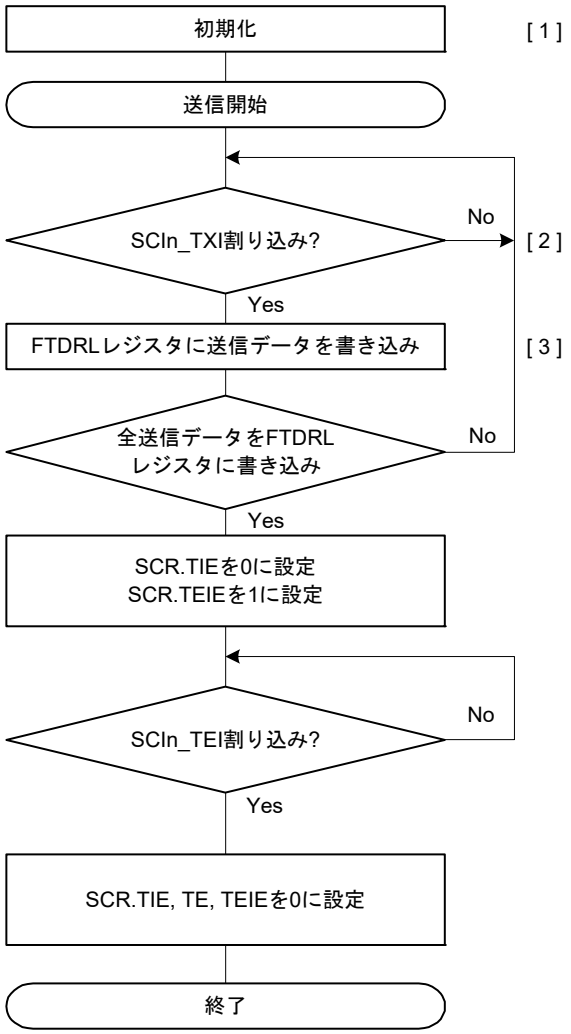
(2) FIFO 選択時

図 29.34 に、クロック同期式モードにおける FIFO 選択時のシリアル送信のフローチャート例を示します。

シリアルデータの送信時、SCI は以下のように動作します。

1. SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンで FTDRL レジスタ（注 1）にデータが書き込まれると、SCI は FTDRL レジスタ（注 1）から TSR レジスタへデータを転送します。FTDRL レジスタに書き込み可能なデータのバイト数は “16 - FDR.T[4:0]” です。なお、送信開始時の SCIn_TXI 割り込み要求は、SCR.TIE ビットを 1 にした後に SCR.TE ビットを 1 にするか、これら 2 つのビットを 1 命令で同時に 1 にすることで発生します。
2. SCI は、FTDRL レジスタから TSR レジスタにデータを転送した後、送信を開始します。FTDRL に書き込まれた送信データ数が指定された送信トリガ数以下のとき、SSR_FIFO.TDFE フラグが 1 になります。このとき、SCR.TIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。この SCIn_TXI 割り込み処理ルーチンにおいて、現在のデータ送信が終了する前に、FTDRL レジスタに次の送信データを書き込むことで連続送信が可能になります。SCIn_TEI 割り込み要求を使用する場合は、最終送信データを FTDRL レジスタに書き込んだ後、SCR.TIE ビットを 0 にして、SCR.TEIE ビットを 1 にします。
3. クロック出力モードを指定したときは出力クロックに同期して、外部クロックを指定したときは入力クロックに同期して、TXDn 端子から 8 ビットのデータが送信されます。クロック信号出力は、CTSn_RTSn 入力信号が Low になり、SPMR.CTSE ビットが 1 になるまで待機します。
4. ストップビットを送り出すタイミングで、SCI は FTDRL レジスタに未送信データが残っていないかチェックします。
5. FTDRL レジスタが更新されていれば、FTDRL レジスタから TSR レジスタにデータを転送し、次のフレームの送信を開始します。
6. FTDRL レジスタが更新されていなければ、SSR_FIFO.TEND フラグを 1 にします。TXDn 端子は最終ビットの出力状態を保持します。このとき、SCR.EIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TEI 割り込み要求が発生し、SCKn 端子は High に固定されます。

注 1.　クロック同期式モードでは、FTDRH レジスタを使用しません。



[1] SCIの初期化：
データ送信に設定します。SCR.TEを1にした後、1フレーム分の1を出力して送信可能状態になります。

[2] SCIn_TXI割り込み要求で送信データをFTDRLレジスタへ書き込み：
FTDRLレジスタからTSRレジスタへ送信される送信データについては、FTDRLレジスタで書き込んだデータ量が指定された送信トリガ数と等しいまたは小さい場合、送信FIFOデータエンプティ割り込み要求（SCIn_TXI）が発生します。SCIn_TXI割り込み処理ルーチンで送信データをFTDRLレジスタへ1回書き込んでください。

[3] シリアル送信の継続手順：
シリアル送信を続けるときには、SCIn_TXI割り込み処理ルーチンで次の送信データをFTDRLへ書き込み、現在の送信データの送信が完了する前にSSR_FIFO.TDFEフラグを0にクリアします。送信データはDMACやDTCを起動してFTDRLレジスタへ書き込むことも可能です。このとき、TDFEフラグは自動でクリアされます。
TDFEフラグへの書き込みは行わないでください。
SCIn_TEI割り込み要求を使用するときには、最終送信データをFTDRLレジスタへ書き込んだ後にSCR.TIEを0に、SCR.TEIEを1にしてください。

注．　外部クロック（SCR.CKE[1:0] = 10b, 11b）のときは、最終ビットの SCK 端子の立ち上がりで SSR_FIFO.TEND フラグが 1 になります。このあと、SCR.TE をすぐに 0 に設定すると、受信デバイス側で受信データホールド時間が不足する場合があります。

図 29.38　クロック同期式モードにおけるシリアル送信のフローチャート例（FIFO 選択時）

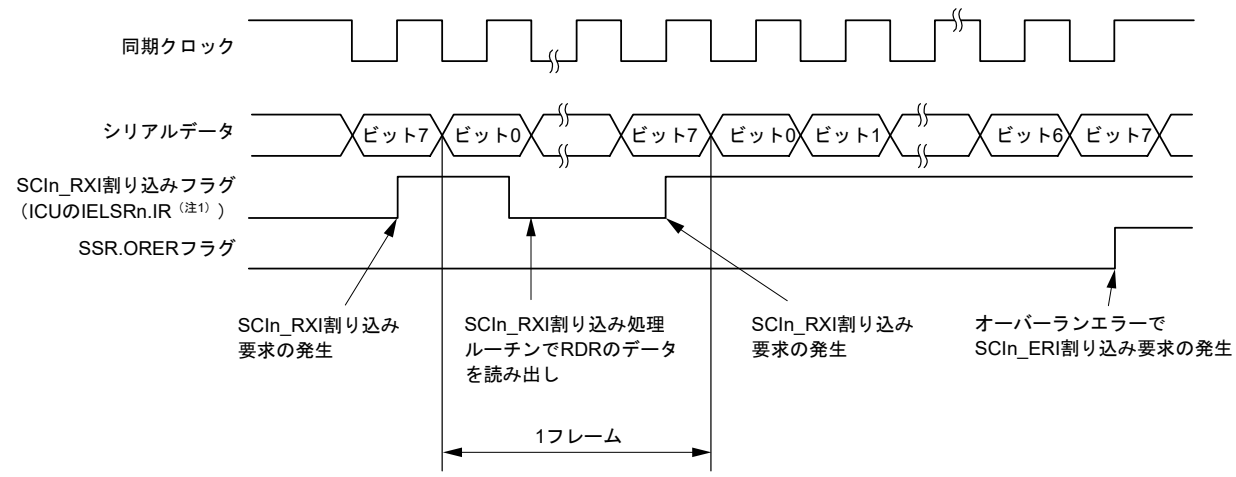
29.5.5　シリアルデータの受信（クロック同期式モード）

(1)　非 FIFO 選択時

図 29.39 と図 29.40 に、クロック同期式モードにおけるシリアル受信の動作例を示します。

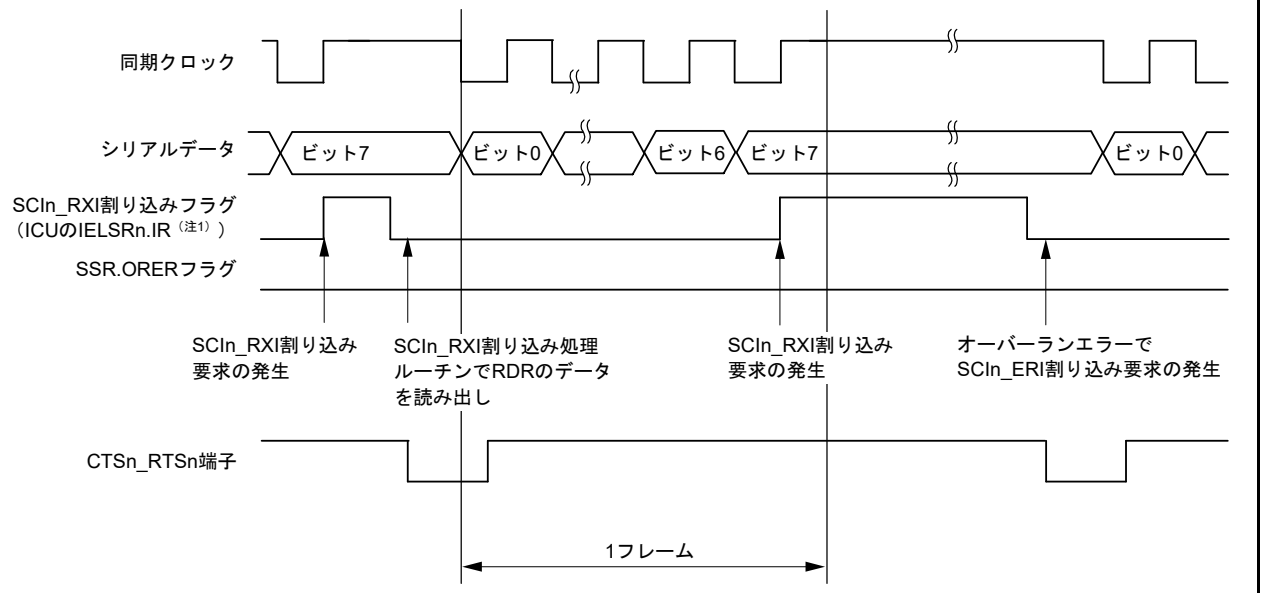
シリアルデータの受信時、SCI は以下のように動作します。

1. SCR.RE ビットの値が 1 になると、CTSn_RTSn 端子出力は Low になります。
2. SCI は内部を初期化し、同期クロックの入力または出力に同期して受信を開始して、受信データを RSR レジスタに取り込みます。
3. オーバーランエラーが発生した場合、SSR.ORER フラグが 1 になります。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。受信データは RDR レジスタへ転送されません。
4. 正常に受信したときは、受信データが RDR レジスタへ転送されます。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。SCIn_RXI 割り込み処理ルーチンにおいて、次のデータ受信が終了する前に、RDR レジスタへ転送された受信データを読み出すことで連続受信が可能になります。RDR レジスタから受信データが読み出されると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.39　クロック同期式モードにおけるシリアル受信の動作例（1）（RTS 機能を使用しない場合）



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.40　クロック同期式モードにおけるシリアル受信の動作例（2）（RTS 機能を使用する場合）

受信エラーフラグが 1 の状態では、送受信動作を再開できません。したがって、SSR.ORER、FER、および PER フラグを 0 にしてから受信を再開してください。また、オーバーランエラー処理では、必ず RDR レジスタを読み出してください。また、受信動作中に SCR.RE ビットを 0 にして受信動作を強制終了させた場合、RDR レジスタに読み出し前の受信データが残っている可能性があるため、RDR レジスタを読み出す必要があります。

図 29.41 に、シリアル受信のフローチャート例を示します。

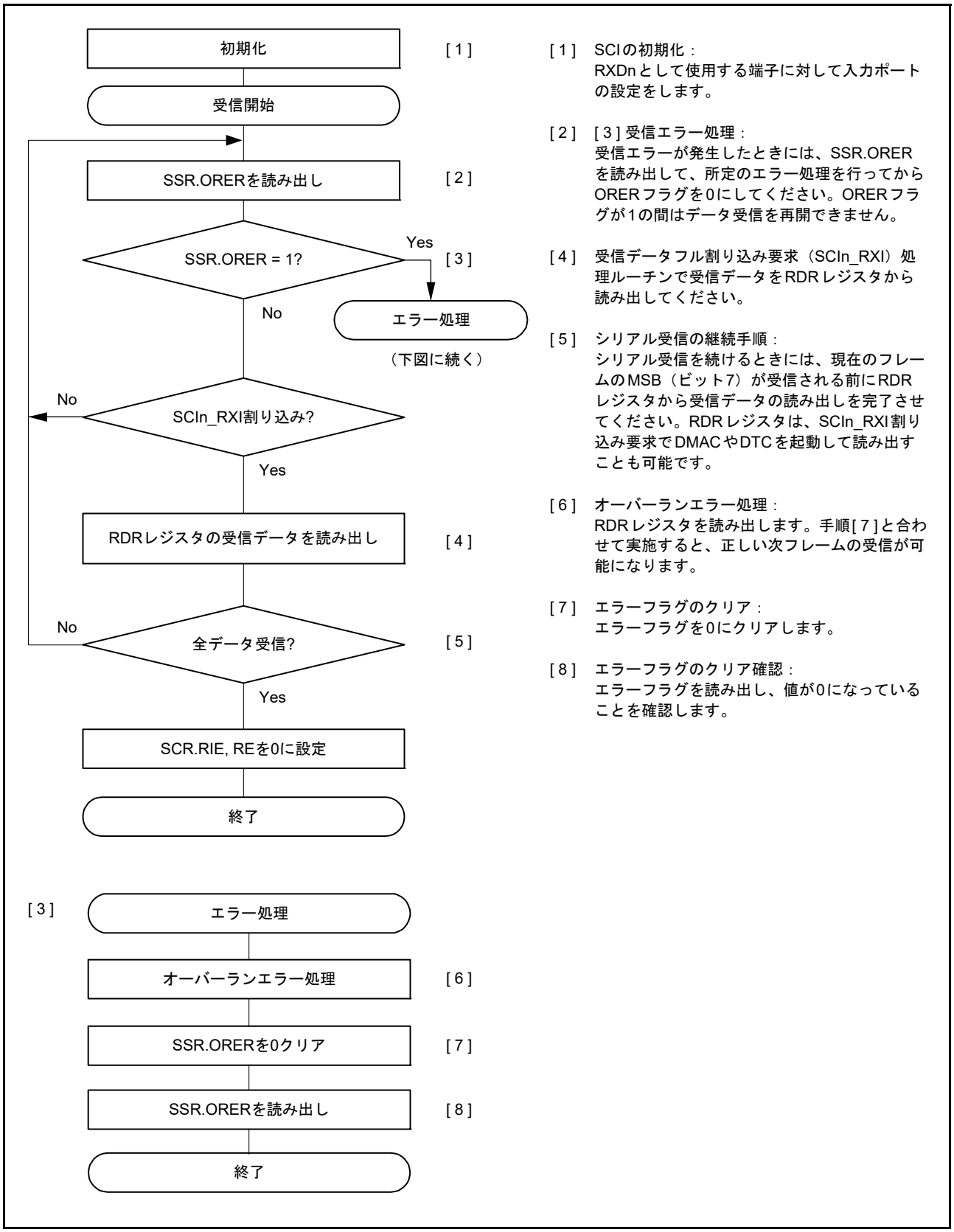


図 29.41　クロック同期式モードにおけるシリアル受信のフローチャート例（非 FIFO 選択時）

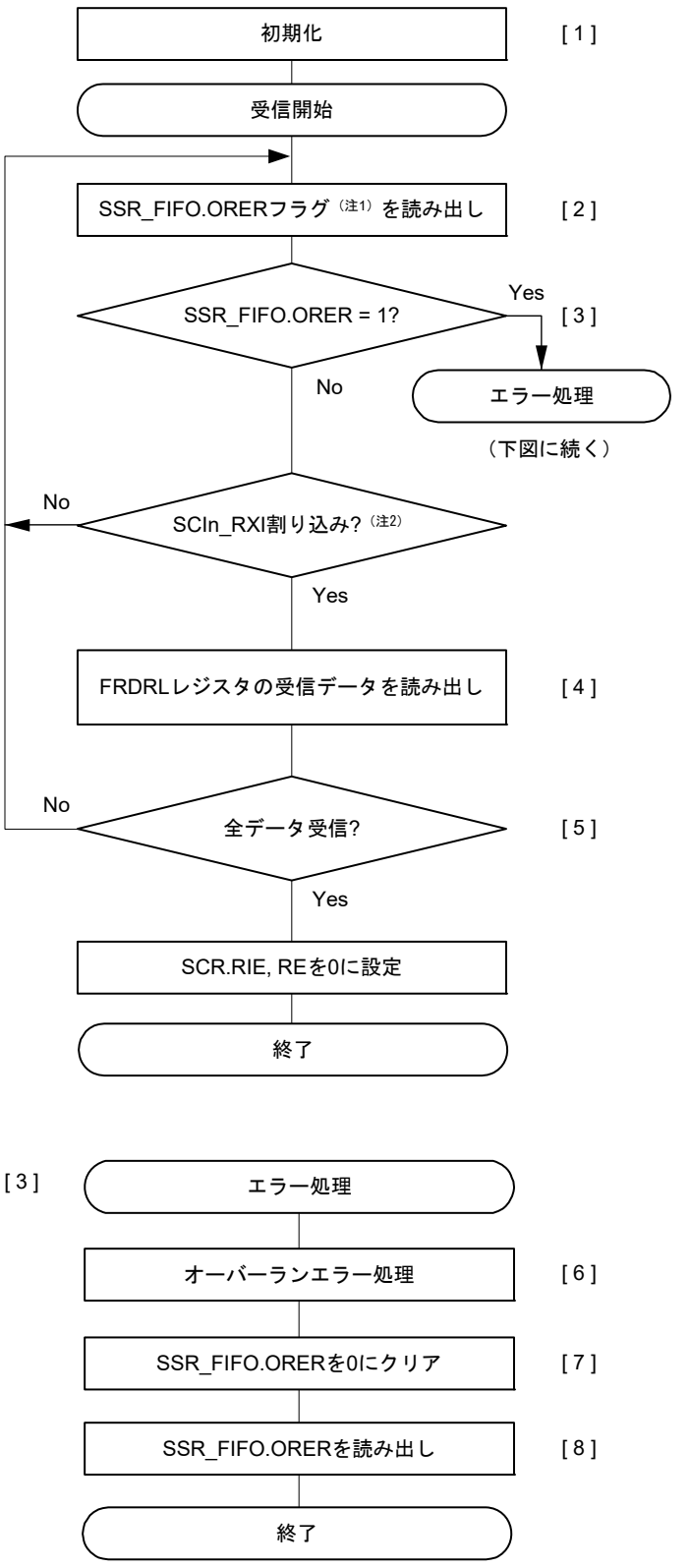
(2) FIFO 選択時

図 29.42 に、クロック同期式モードにおける FIFO 選択時のシリアル受信のフローチャート例を示します。

シリアルデータの受信時、SCI は以下のように動作します。

1. SCR.RE ビットの値が 1 になると、CTSn_RTSn 端子出力は Low になります。
2. SCI は内部を初期化し、同期クロックの入力または出力に同期して受信を開始して、受信データを RSR レジスタに取り込みます。
3. オーバーランエラーが発生した場合、SSR_FIFO.ORER フラグが 1 になります。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。受信データは FRDRL レジスタ（注 1）へ転送されません。
4. 正常に受信したときは、受信データが FRDRL レジスタ（注 1）へ転送されます。FRDRHL に格納された受信データ数が指定された受信トリガ数以上であると、SSR_FIFO.RDF フラグが 1 になります。このとき、SCR.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。この SCIn_RXI 割り込み処理ルーチンにおいて、オーバーランエラーが発生する前に、FRDRL レジスタ（注 2）へ転送された受信データを読み出すことで連続受信が可能になります。FRDRL レジスタへ転送された受信データ数が RTS トリガ数未満であると、CTSn_RTSn 端子出力が Low になります。

注 1.　クロック同期式モードでは、FRDRH レジスタを使用しません。
注 2.　RDF と ORER を受信データとともに読み出す場合は、FRDRH → FRDRL の順に読み出してください。



[1] SCIの初期化：
RXDnとして使用する端子に対して入力ポートの設定をします。

[2] [3] 受信エラー処理：
受信エラーが発生したときには、SSR_FIFO.ORERを読み出して、所定のエラー処理を行ってからSSR_FIFO.ORERフラグを0にしてください。ORERフラグが1の間はデータ受信を再開できません。

[4] FRDRLレジスタに格納された受信データを格納データ数がFCR.RTRGの値よりも小さくなるまで読みます。ソフトウェアでFDR.R[4:0]ビットを読み出して、読み出し可能なデータ数の確認ができます。

[5] シリアル受信の継続手順：
シリアル受信を続けるときには、オーバーランエラーが発生する前に、FRDRLレジスタ内の受信データの読み出しを完了し、SSR_FIFO.RDFを0にクリアしてください。FRDRLレジスタは、SCIn_RXI割り込み要求でDMACやDTCを起動して読み出すことも可能です。この場合、RDFフラグは自動でクリアされますので、RDFフラグへの書き込みは行わないでください。

[6] オーバーランエラー処理：
FRDRLレジスタを読み出します。手順[7]と合わせて実施すると、正しい次フレームの受信が可能になります。

[7] エラーフラグのクリア：
エラーフラグを0にクリアします。

[8] エラーフラグのクリア確認：
エラーフラグを読み出し、値が0になっていることを確認します。

注 1. FRDRH.ORER から読み出すことも可能ですが、ORER フラグをクリアするためには、SSR_FIFO.ORER ビットに 0 を書き込んでください。
注 2. 全受信データ数は FIFO トリガ数の整数倍である必要があります。

図 29.42　クロック同期式モードにおけるシリアル受信のフローチャート例（FIFO 選択時）

29.5.6　シリアルデータの同時送受信動作（クロック同期式モード）

(1)　非 FIFO 選択時

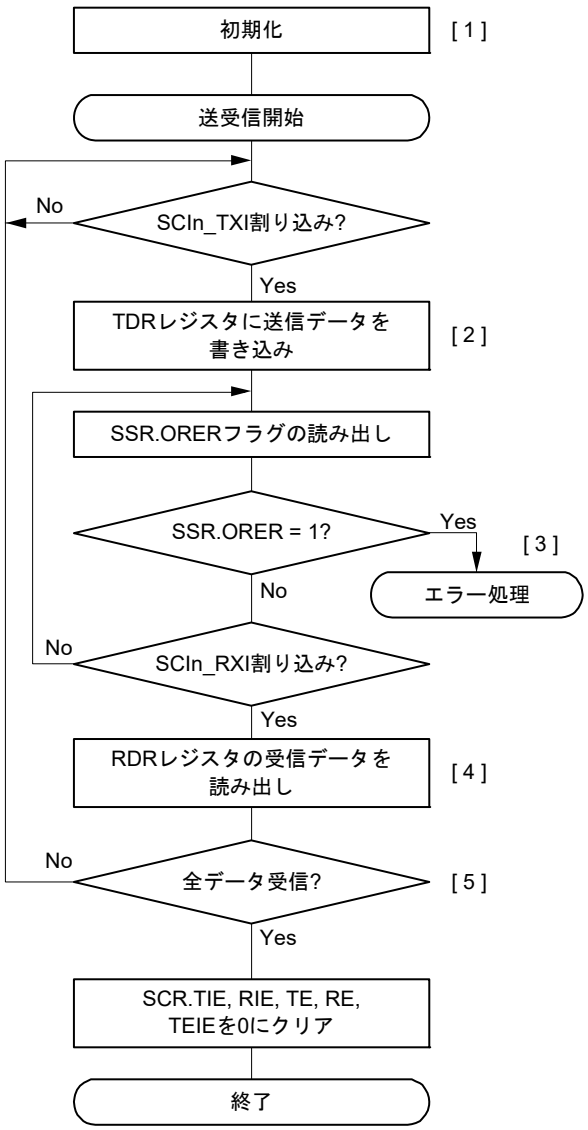
図 29.43 に、クロック同期式モードにおけるシリアル同時送受信動作のフローチャート例を示します。シリアル同時送受信動作は、SCI の初期化後、以下の手順に従って行ってください。

送信モードから同時送受信モードへの切り替えは次の手順で行います。

1. SCI が送信完了状態であることを SSR レジスタの TEND フラグが 1 になっていることで確認してください。
2. その後、SCR レジスタを初期化してから、SCR レジスタの TIE、RIE、TE、および RE の各ビットを 1 命令で同時に 1 にしてください。

受信モードから同時送受信モードへの切り替えは、次の手順で行います。

1. SCI が受信完了状態であることを確認してください。
2. SCR レジスタの RIE ビットと RE ビットを 0 にした後、SSR レジスタの受信エラーフラグ（ORER）が 0 になっていることを確認します。
3. その後、SCR レジスタの TIE、RIE、TE、および RE の各ビットを 1 命令で同時に 1 にしてください。



[1] SCIの初期化：
TXDn端子は送信時に出力端子として、RXDn端子は受信時に入力端子として同時に機能します。

[2] 送信データ書き込み：
SCIn_TXI割り込み要求処理ルーチンで送信データをTDRレジスタへ書き込みます。

[3] 受信エラー処理：
受信エラーが発生したときには、SSRレジスタのORERフラグを読み出して、所定のエラー処理を行ってからORERフラグを0にしてください。
ORERフラグが1の間はデータ受信を再開できません。

[4] 受信データ読み出し：
SCIn_RXI割り込み要求処理ルーチンでRDRレジスタ内の受信データを読み出します。

[5] シリアル送受信の継続手順：
シリアル送受信を続けるときには、現在のフレームのMSB（ビット7）が受信される前にSCIn_RXI割り込みでRDRレジスタ内の受信データ読み出しを完了させてください。また、現在のフレームのMSB（ビット7）が送信される前にSCIn_TXI割り込みでTDRレジスタへデータを書き込んでください。
送信データは、送信データエンプティ割り込み要求（SCIn_TXI）でDMACやDTCを起動してTDRレジスタへ書き込むことも可能です。同様に、受信データフル割り込み要求（SCIn_RXI）でDMACやDTCを起動してRDRレジスタのデータを読み出すことも可能です。

注．　送信または受信動作から同時送受信動作に切り替えるときには、まず SCR.TIE, RIE, TE, RE, TEIE ビットを 0 にして、その後 TIE, RIE, TE, RE ビットを同時に 1 に設定します。

図 29.43　クロック同期式モードにおけるシリアル同時送受信動作のフローチャート例（非 FIFO 選択時）

(2)　FIFO 選択時

図 29.44 に、クロック同期式モードにおける FIFO 選択時のシリアル同時送受信動作のフローチャート例を示します。

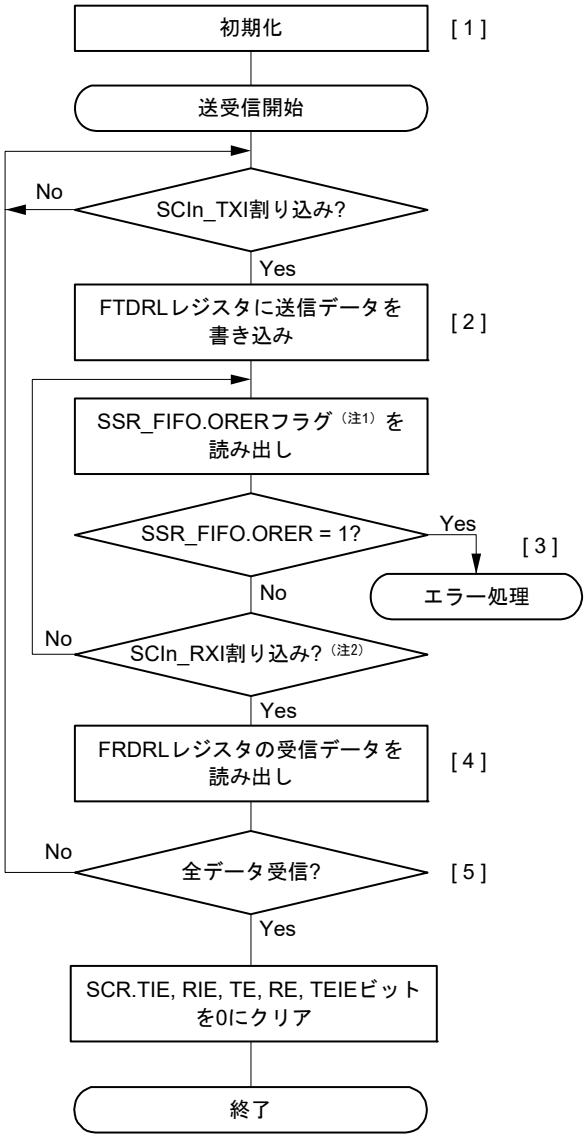
シリアル同時送受信動作は、SCI の初期化後、以下の手順に従って行ってください。

送信モードから同時送受信モードへの切り替えは次の手順で行います。

1. SCI が送信完了状態であることを SSR_FIFO レジスタの TEND フラグが 1 になっていることで確認してください。
2. その後、SCR レジスタを初期化してから、SCR レジスタの TIE、RIE、TE、および RE の各ビットを 1 命令で同時に 1 にしてください。

受信モードから同時送受信モードへの切り替えは、次の手順で行います。

1. SCI が受信完了状態であることを確認してください。
2. SCR レジスタの RIE ビットと RE ビットを 0 にした後、SSR_FIFO レジスタの受信エラーフラグ（ORER）が 0 になっていることを確認します。
3. その後、SCR レジスタの TIE、RIE、TE、および RE の各ビットを 1 命令で同時に 1 にしてください。



[1] SCIの初期化：
TXDn端子は送信時に出力端子として、RXDn端子は受信時に入力端子として同時に機能します。

[2] 送信データ書き込み：
SCIn_TXI割り込み処理ルーチンで送信データをFTDRLレジスタへ書き込んでください。書き込み可能な送信データ数は16ビットで、送信FIFOに格納されているデータ数になります。

[3] 受信エラー処理：
受信エラーが発生したときには、SSR_FIFO.ORERを読み出して、所定のエラー処理を行ってからSSR_FIFO.ORERを0にしてください。
SSR_FIFO.ORERが1の間はデータ受信を再開できません。

[4] 受信データ読み出し：
FRDRLレジスタに格納された受信データを格納データ数がFCR.RTRGの値よりも小さくなるまで読みます。ソフトウェアでFDR.R[4:0]ビットを読み出して、読み出し可能なデータ数の確認ができます。

[5] シリアル送受信の継続手順：
シリアル受信を続けるときには、オーバーランエラーが発生する前にFRDRLレジスタ内の受信データ読み出しを完了し、SSR_FIFO.RDFフラグを0にしてください。シリアル送信を続けるときには、現在の送信データの送信が完了する前に、SCIn_TXI割り込み処理ルーチンで次の送信データをFTDRLレジスタに書き込み、SSR_FIFO.TDFEフラグを0にクリアしてください。
送信データは、送信FIFOデータエンプティ割り込み要求（SCIn_TXI）でDMACやDTCを起動してFTDRLレジスタへ書き込むことも可能です。同様に、受信FIFOデータフル割り込み要求（SCIn_RXI）でDMACやDTCを起動してFRDRLレジスタのデータを読み出すことも可能です。この場合、RDFフラグとTDFEフラグは自動でクリアされるので、RDFフラグとTDFEフラグへの書き込みは行わないでください。

注 1.　FRDRH.ORER から読み出すことも可能ですが、ORER フラグをクリアするためには、SSR_FIFO.ORER ビットに 0 を書き込んでください。
注 2.　全受信データ数は FIFO トリガ数の整数倍である必要があります。

図 29.44　クロック同期式モードにおけるシリアル同時送受信動作のフローチャート例（FIFO 選択時）

29.6　スマートカードインタフェースモードの動作

SCI は拡張機能として、ISO/IEC 7816-3（Identification Card 規格）に対応したスマートカード（IC カード）インタフェースをサポートしています。

スマートカードインタフェースモードへの切り替えはレジスタにより行います。

29.6.1　接続例

図 29.45 に、スマートカード（IC カード）と本 MCU の接続例を示します。

図 29.45 に示すように、MCU と IC カードは 1 本のデータ伝送線で通信を行うため、TXDn 端子と RXDn 端子を結線し、データ伝送線を抵抗で電源 VCC 側にプルアップしてください。

IC カードを接続しない状態で SCR_SMCI レジスタの TE ビットと RE ビットを 1 にすると、閉ループの送受信が実現され、自己診断が可能になります。SCI で生成するクロックを IC カードに供給する場合は、SCKn 端子出力を IC カードの CLK 端子に入力してください。

リセット信号の出力には、本 MCU の出力ポートを使用できます。

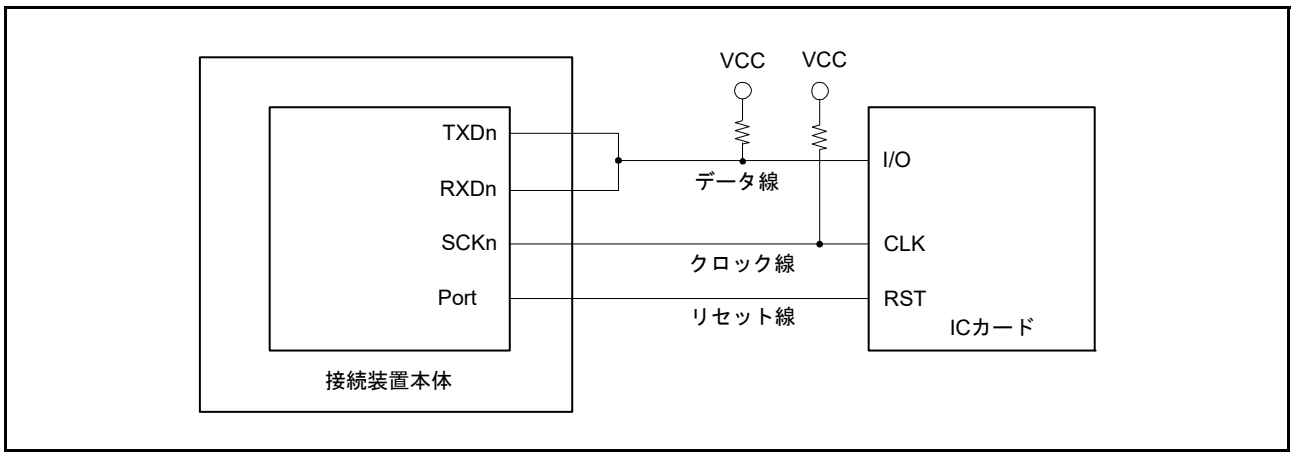


図 29.45　スマートカード（IC カード）との接続例

29.6.2　データフォーマット（ブロック転送モード時を除く）

図 29.46 に、スマートカードインタフェースモードでの送受信フォーマットを示します。

以下に、送受信フォーマットを説明します。

- 調歩同期式モードでは、1 フレームは 8 ビットデータとパリティビットで構成されます
- 送信中は、パリティビットの終了から次のフレーム開始まで、2ETU（Elementary Time Unit = 1 ビット転送時間）以上のガードタイムが必要です
- 受信中にパリティエラーを検出した場合、スタートビットから 10.5ETU 経過後、エラーシグナル（Low）が 1ETU 期間出力されます
- 送信中にエラーシグナルをサンプリングすると、2ETU 以上経過後、自動的に同じデータが再送信されます

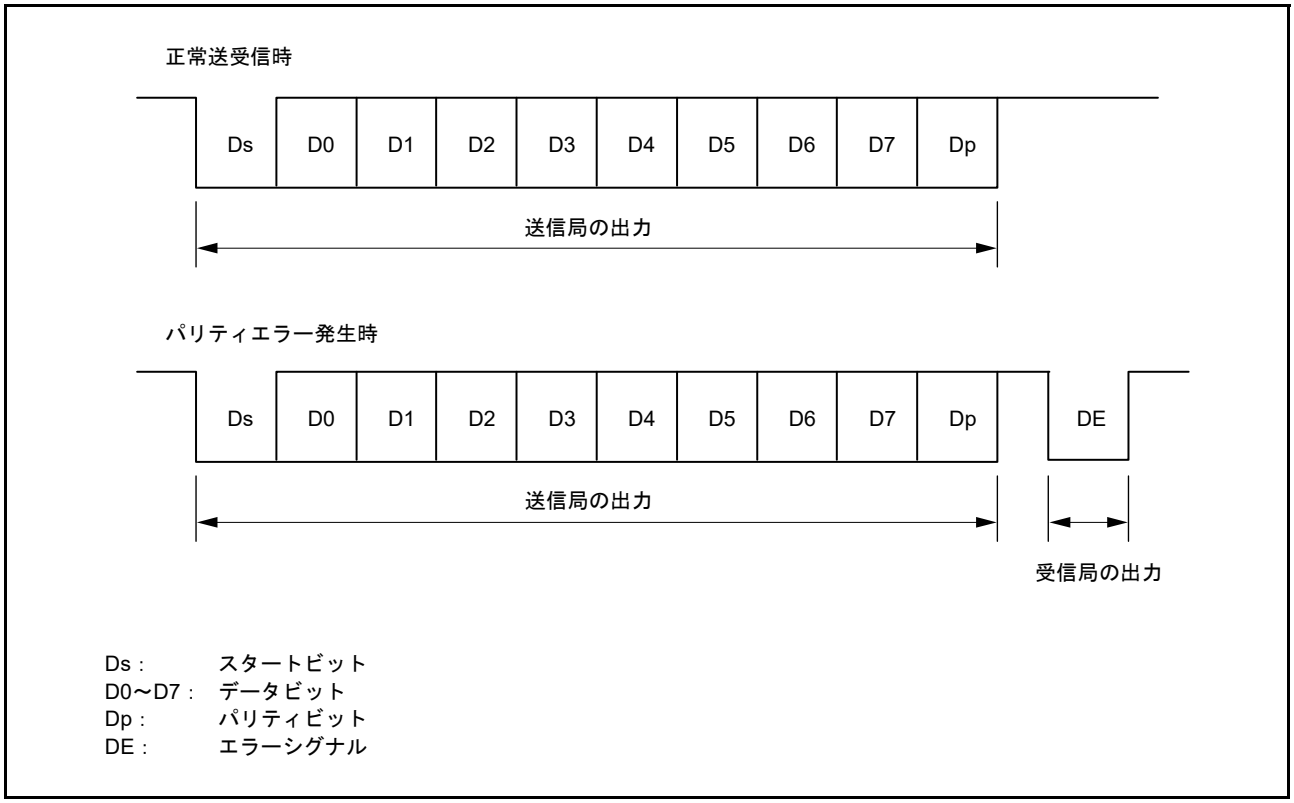


図 29.46　スマートカードインタフェースモードにおけるデータフォーマット

本節では、ダイレクトコンベンションタイプと、インバースコンベンションタイプの 2 種類の IC カードと送受信する場合について説明します。

(1)　ダイレクトコンベンションタイプ

ダイレクトコンベンションタイプでは、図 29.47 に示すように、ロジックレベル 1 は状態 Z を、ロジックレベル 0 を状態 A をそれぞれ表し、開始キャラクタとして LSB ファーストでデータのが転送されます。したがって、図 29.47 の開始キャラクタでは、データは 3Bh となります。

ダイレクトコンベンションタイプを使用する場合、SCMR.SDIR ビットと SCMR.SINV ビットの両方を 0 にしてください。また、スマートカード規格に従って偶数パリティとするため、SMR_SMCI.PM ビットは 0 にしてください。

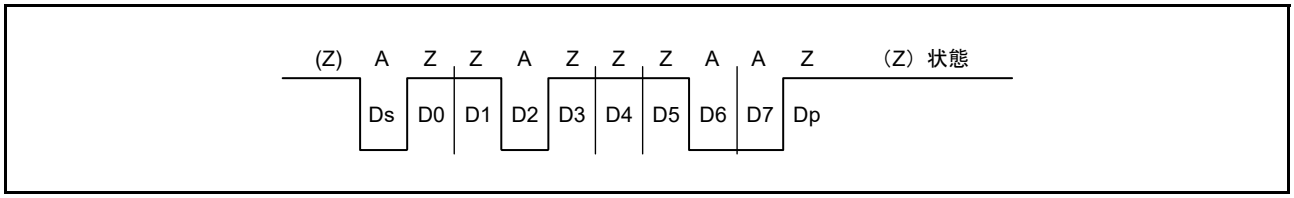


図 29.47　ダイレクトコンベンション（SCMR.SDIR ビット = 0、SCMR.SINV ビット = 0、SMR_SMCI.PM ビット = 0）

(2)　インバースコンベンションタイプ

インバースコンベンションタイプでは、図 29.48 に示すように、ロジックレベル 1、ロジックレベル 0 はそれぞれ状態 A、状態 Z を示し、開始キャラクタとして、MSB ファーストでデータの送受信が行われます。したがって、図 29.48 の開始キャラクタでは、データは 3Fh となります。

インバースコンベンションを使用する場合、SCMR.SDIR ビットと SCMR.SINV ビットの両方を 1 にしてください。スマートカード規格に従って偶数パリティとするため、パリティビットは、状態 Z に対応するロジックレベル 0 になります。SINV ビットはデータビット D7 ～ D0 のみを反転させます。そのため、送信時と受信時の両方において、SMR_SMCI.PM ビットには 1 を書いてパリティビットを反転させてください。

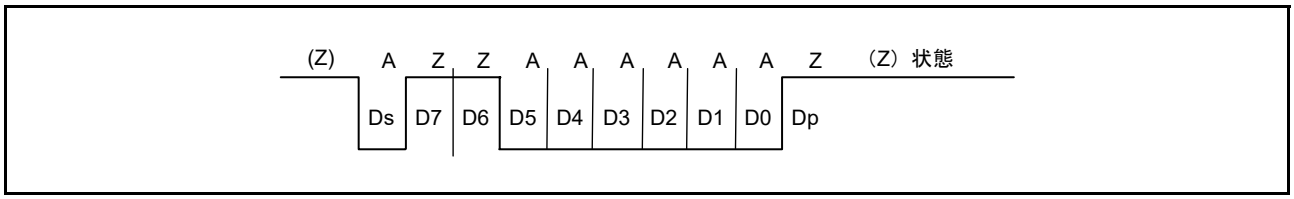


図 29.48　インバースコンベンション（SCMR.SDIR ビット = 1、SCMR.SINV ビット = 1、SMR_SMCI.PM ビット = 1）

29.6.3　ブロック転送モード

ブロック転送モードは、スマートカードインタフェースモードの非ブロック転送モードと比較して以下の点が異なります。

- 受信中にパリティエラーが検出されても、エラーシグナルは出力されません。エラー検出時に SSR_SMCI.PER ビットがセットされるので、次のフレームのパリティビットを受信する前にクリアしてください
- 送信中は、パリティビットの終了から次のフレーム開始までのガードタイムとして 1ETU 以上が必要です
- 同じデータの再送信を行わないため、送信開始から 11.5ETU 経過後に、SSR_SMCI.TEND フラグがセットされます
- ブロック転送モードでは、SSR_SMCI.ERS フラグは、スマートカードインタフェースモードの非ブロック転送モードと同様に、エラーシグナル状態を示します。ただし、エラーシグナルの送受信を行わないため、読むと 0 が読めます

29.6.4　受信データのサンプリングタイミングと受信マージン

スマートカードインタフェースモードで使用できる送受信クロックは、内蔵ボーレートジェネレータが生成するクロックのみです。

スマートカードインタフェースモードでは、SCI は SCMR.BCP2 ビットと SMR_SMCI.BCP[1:0] ビットの設定により、ビットレートの 32 倍、64 倍、372 倍、256 倍、93 倍、128 倍、186 倍、または 512 倍の周波数の基本クロックで動作します。

受信時は、スタートビットの立ち下がりを基本クロックでサンプリングして内部を同期化します。

また、図 29.49 に示すように、受信データは基本クロックのそれぞれ 16、32、186、128、46、64、93、256 サイクルの立ち上がりエッジでサンプリングされるため、各ビットの中間でデータが取り込まれます。このときの受信マージンは次式で表わすことができます。

$$M = \left| (0.5 - \frac{1}{2N}) - (L - 0.5)F - \frac{|D - 0.5|}{N}(1 + F) \right| \times 100\ [\%]$$

M：受信マージン（%）

N：クロックに対するビットレートの比（N = 32, 64, 372, 256）

D：クロックのデューティ（D = 0 ～ 1.0）

L：フレーム長（L = 10）

F：クロック周波数の偏差の絶対値

上の式で、F = 0、D = 0.5、N = 372 とすると、受信マージンは次式のようになります。

M = {0.5 - 1/(2 × 372)} × 100 [%] = 49.866%

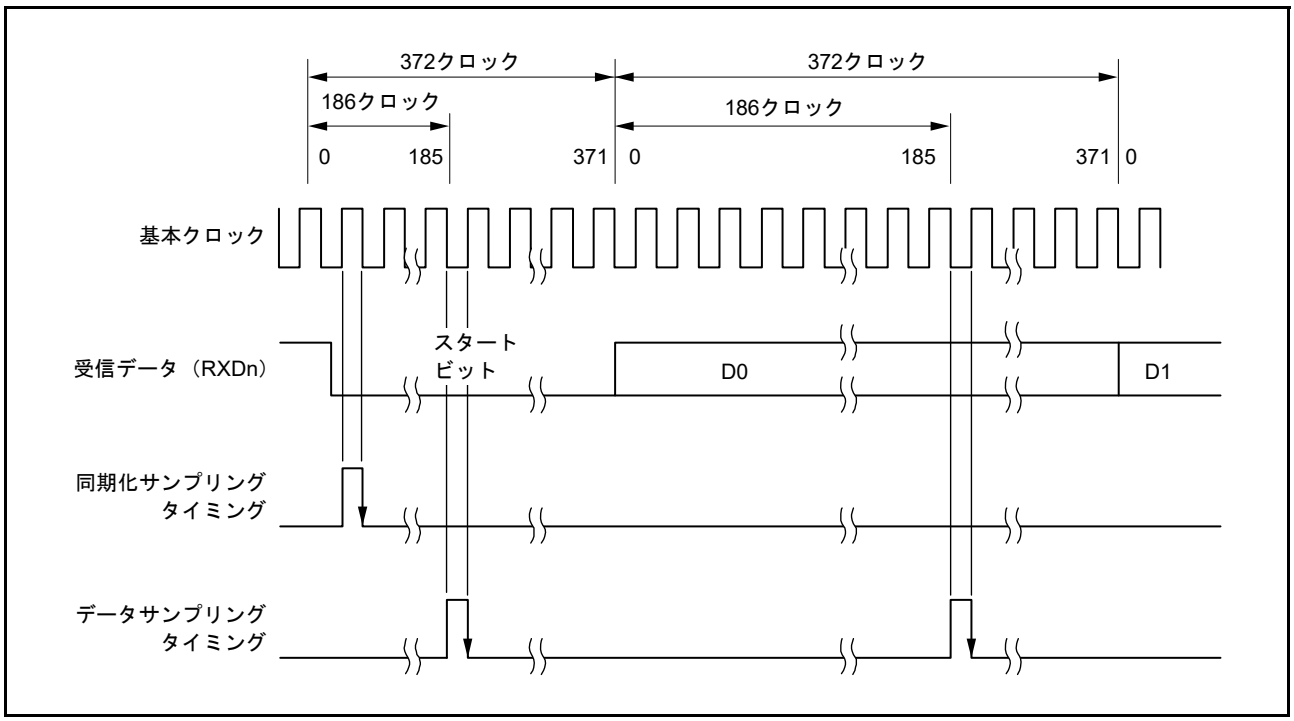


図 29.49　スマートカードインタフェースモードにおける受信データのサンプリングタイミング（ビットレートの 372 倍のクロック周波数の場合）

29.6.5　SCI の初期化

データの送受信前に、SCR_SMCI レジスタに初期値 00h を書き込み、図 29.50 に示す例に従って、SCI を初期化してください。

送信モードから受信モードへ（またはその逆へ）切り替える場合、必ず事前に SCR_SMCI レジスタの TIE、RIE、TE、RE、および TEIE ビットに初期値を設定してください。なお、SCR_SMCI.RE ビットを 0 にしても RDR レジスタは初期化されません。

受信モードから送信モードへ切り替える場合、受信動作が完了していることを確認してから、SCI を初期化してください。初期化の最後では、SCR_SMCI.TE ビット＝1、SCR_SMCI.RE ビット＝0 にしてください。受信動作の完了は、SCIn_RXI 割り込み要求、SSR_SMCI.ORER フラグ、あるいは SSR_SMCI.PER フラグで確認できます。

送信モードから受信モードへ切り替える場合、送信動作が完了していることを確認してから、SCI を初期化してください。初期化の最後では、SCR_SMCI.TE ビット＝0、SCR_SMCI.RE ビット＝1 にしてください。送信動作の完了は SSR_SMCI.TEND フラグで確認できます。

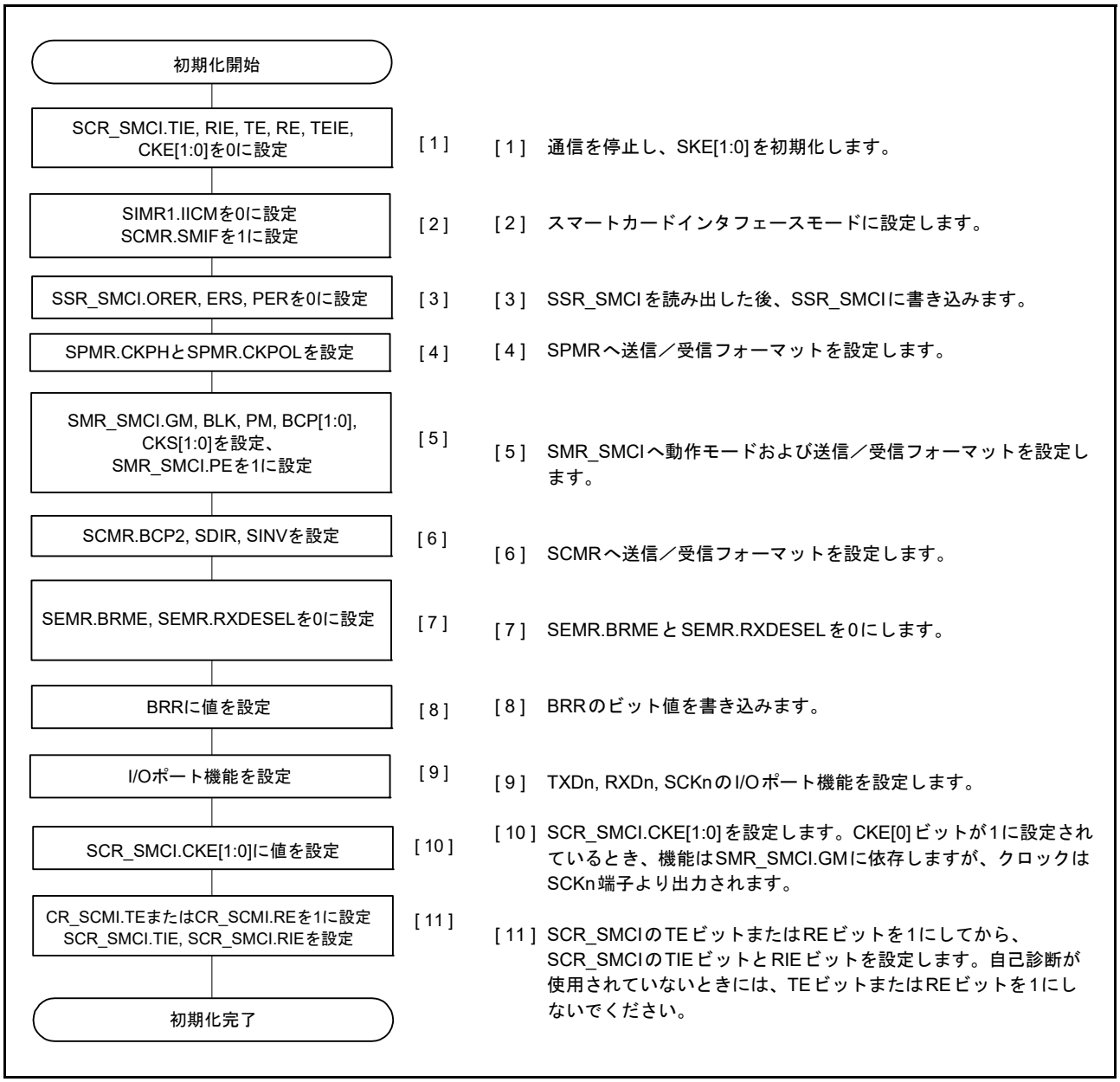


図 29.50　SCI の初期化フローチャート例（スマートカードインタフェースモード）

図 29.50 のフローにしたがってスマートカードインタフェースモードに遷移することでデータ送信が行われるときのタイミング図を図 29.51 に示します。図 29.51 は、SMR_SMCI レジスタの GM ビットが 0 になるタイミングを示します。図 29.51 のタイミングは、ポートが SCKn および TXDn として接続されている場合、SCR_SMCI レジスタの CKE[0] ビットは 0 になるため、端子は Hi-Z となることを示します。

SCR_SMCI レジスタの CKE[0] ビットを 1 にすることによって SCK 端子へのクロック出力を開始します。そして、SCR_SMCI レジスタの TE ビットを 1 にした後、送信データを書き込むことでデータ送信を開始します。SCR_SMCI レジスタの TE ビットを 0 から 1 に変更すると、データ送信の開始前に 1 フレーム分のプリアンブル期間が生じます。スマートカードインタフェースモードでは、プリアンブル期間がある場合、TXDn 端子は Hi-Z となります。MCU 外部で SCKn 端子および TXDn 端子に対するプルアップまたはプルダウンが必要です。

スマートカードインタフェースモードでは、クロック出力設定を使用すると、SCR_SMCI レジスタの TE ビットおよび RE ビットが 0 であっても、クロック出力は継続されます。

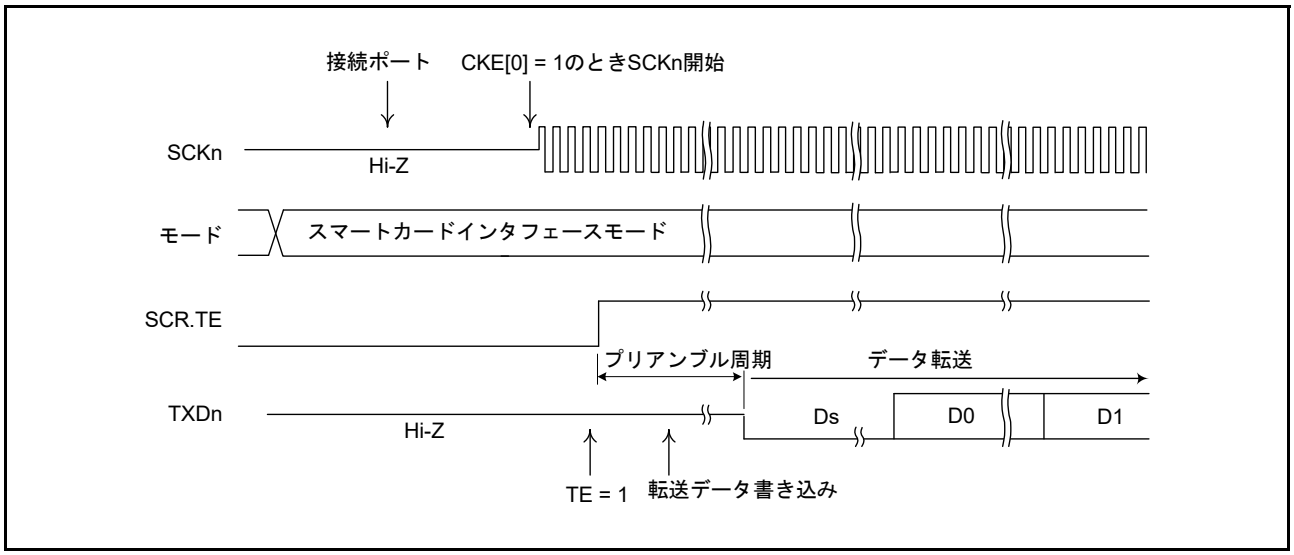


図 29.51　スマートカードインタフェースモードにおけるデータ送信のタイミング例

29.6.6　シリアルデータの送信（ブロック転送モード時を除く）

スマートカードインタフェースモードにおけるシリアル送信（ブロック転送モード時を除く）では、エラーシグナルのサンプリングと再送信処理があるため、非スマートカードインタフェースモードと動作が異なります。送信中の再転送動作を図 29.52 に示します。

1. 1 フレーム分の送信を完了した後、受信側からのエラーシグナルがサンプリングされると、SSR_SMCI.ERS フラグが 1 になります。このとき、SCR_SMCI.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。次のパリティビットがサンプリングされる前に、SSR_SMCI.ERS フラグを 0 にクリアしてください。
2. エラーシグナルを受信したフレームでは、SSR_SMCI.TEND フラグはセットされません。TDR レジスタから TSR レジスタへ再度データが転送され、自動的に再送信が行われます。
3. 受信側からエラーシグナルが返ってこない場合、ERS フラグは 1 になりません。
4. SCI は再転送を含む 1 フレーム分の送信が完了したと判断し、TEND フラグがセットされます。このとき、SCR_SMCI.TIE ビットが 1 になっていると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。TDR レジスタに送信データを書き込んで、次のデータの送信を開始してください。

図 29.53 に、シリアル送信のフローチャート例を示します。これら一連の処理は、SCIn_TXI 割り込み要求で DMAC または DTC を起動することによって、自動的に行うことができます。

送信動作では、SSR_SMCI.TEND フラグが 1 になっている場合および SCR_SMCI.TIE ビットが 1 の場合、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。

あらかじめ DMAC または DTC の起動要因として SCIn_TXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_TXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動されて、送信データの転送が可能になります。TEND フラグは、DMAC または DTC によるデータ転送時に自動的に 0 になります。

エラーが発生した場合は、SCI が自動的に同じデータを再送信します。この間、TEND フラグは 0 のまま保持され、DMAC または DTC は起動されません。したがって、エラー発生時の再送信を含め、SCI および DMAC または DTC が、指定されたバイト数を自動的に送信します。ただし、ERS フラグは自動的にはクリアされないため、RIE ビットを 1 にしておくことで、エラー発生時に SCIn_ERI 割り込み要求を発生させて、ERS フラグを 0 にクリアしてください。

なお、DMAC または DTC を使用して送受信を行う場合は、必ず DMAC または DTC を有効にしてから、SCI の設定を行ってください。

DMAC または DTC の設定方法については、「17.　DMA コントローラ（DMAC）」と「18.　データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

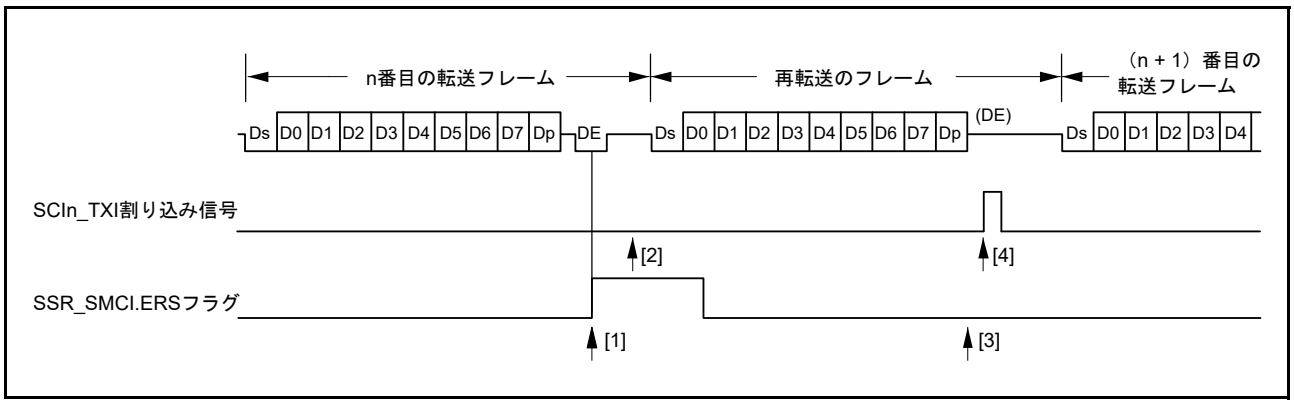


図 29.52　SCI 送信モードでの再転送動作

注 .　SMR_SMCI.GM ビットの設定によって、SSR_SMCI.TEND フラグのセットタイミングが異なります。

図 29.53 に、TEND フラグの発生タイミングを示します。

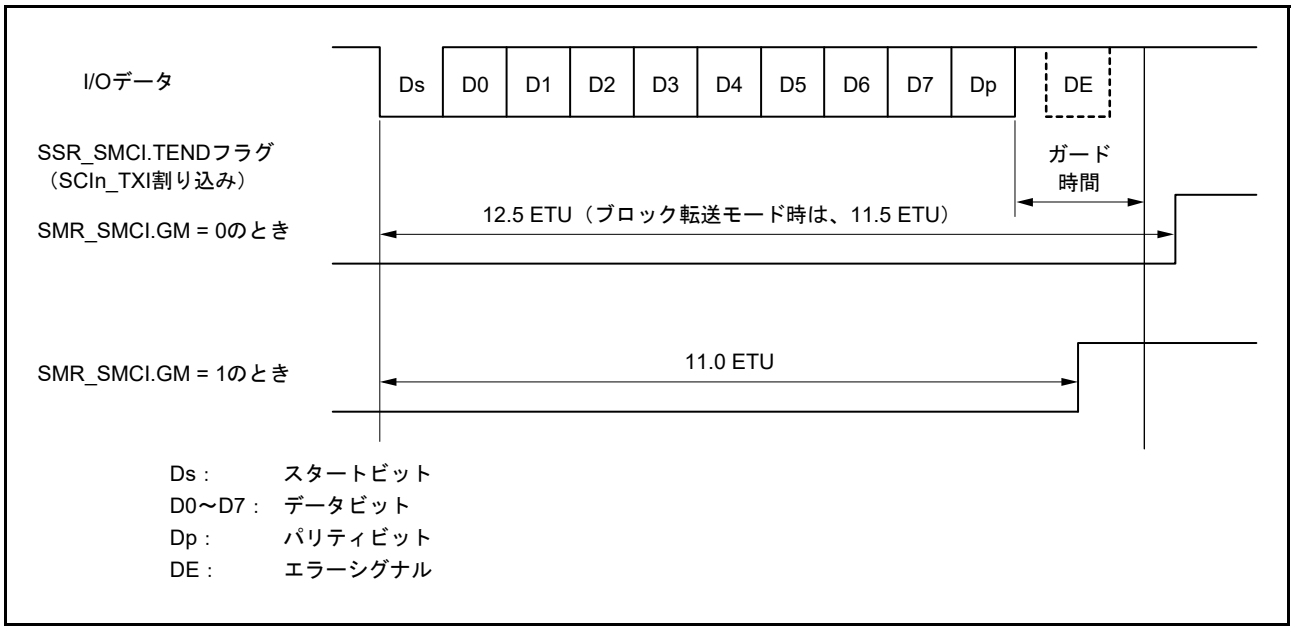


図 29.53　送信中の SSR.TEND フラグの発生タイミング

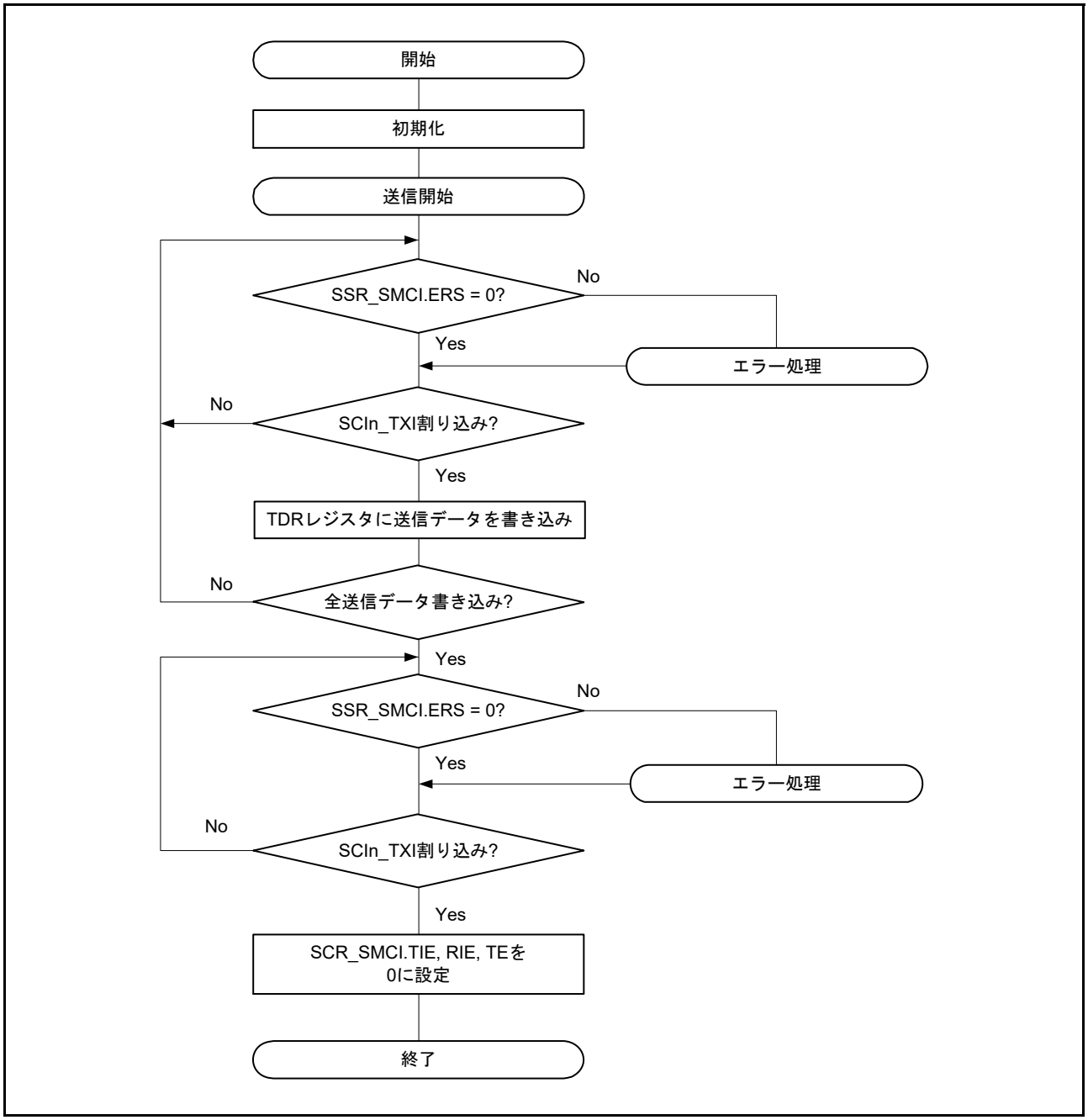


図 29.54　スマートカードインタフェース送信のフローチャート例

29.6.7　シリアルデータの受信（ブロック転送モード時を除く）

スマートカードインタフェースモードにおけるシリアル受信は、非スマートカードインタフェースモードと同様の処理手順になります。受信モードでの再転送動作を図 29.55 に示します。

1. 受信データにパリティエラーが検出されると、SSR_SMCI.PER フラグが 1 になります。このとき、SCR_SMCI.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。次のパリティビットがサンプリングされる前に、PER フラグをクリアしてください。
2. パリティエラーが検出されたフレームに対しては、SCIn_RXI 割り込みは発生しません。
3. パリティエラーが検出されない場合、SSR_SMCI.PER フラグは 1 になりません。
4. この場合、正常に受信が完了したと判断されます。このとき、SCR_SMCI.RIE ビットが 1 になっていると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。

図 29.56 に、シリアル受信のフローチャート例を示します。これら一連の処理は、SCIn_RXI 割り込み要求で DMAC または DTC を起動することによって、自動的に行うことができます。

受信動作では、RIE ビットを 1 にしておくと、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。あらかじめ DMAC または DTC の起動要因として SCIn_RXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_RXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動されて、受信データの転送が可能になります。

また、受信時にエラーが発生して SSR_SMCI.ORER フラグまたは SSR_SMCI.PER フラグのいずれかが 1 になると、受信エラー割り込み（SCIn_ERI）要求が発生します。エラー発生後に、エラーフラグをクリアしてください。エラーが発生した場合、DMAC または DTC は起動されず、受信データはスキップされます。そのため、DMAC または DTC に指定されたバイト数だけ受信データが転送されます。

なお、受信時にパリティエラーが発生して PER フラグが 1 になった場合でも、受信したデータは RDR レジスタへ転送されるので、このデータを読み出すことは可能です。

また、受信動作中に SCR_SMCI.RE ビットを 0 にして受信動作を強制終了させた場合、RDR レジスタに読み出し前の受信データが残っている可能性があるため、RDR レジスタを読み出す必要があります。

注 .　ブロック転送モードの場合は、29.3　調歩同期式モードの動作を参照してください。

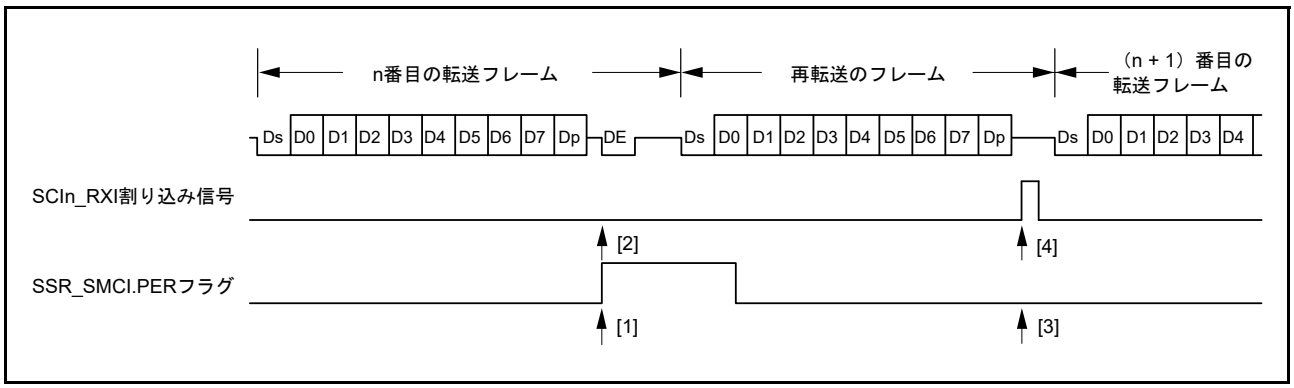


図 29.55　SCI 受信モードでの再転送動作（受信時の再転送動作）

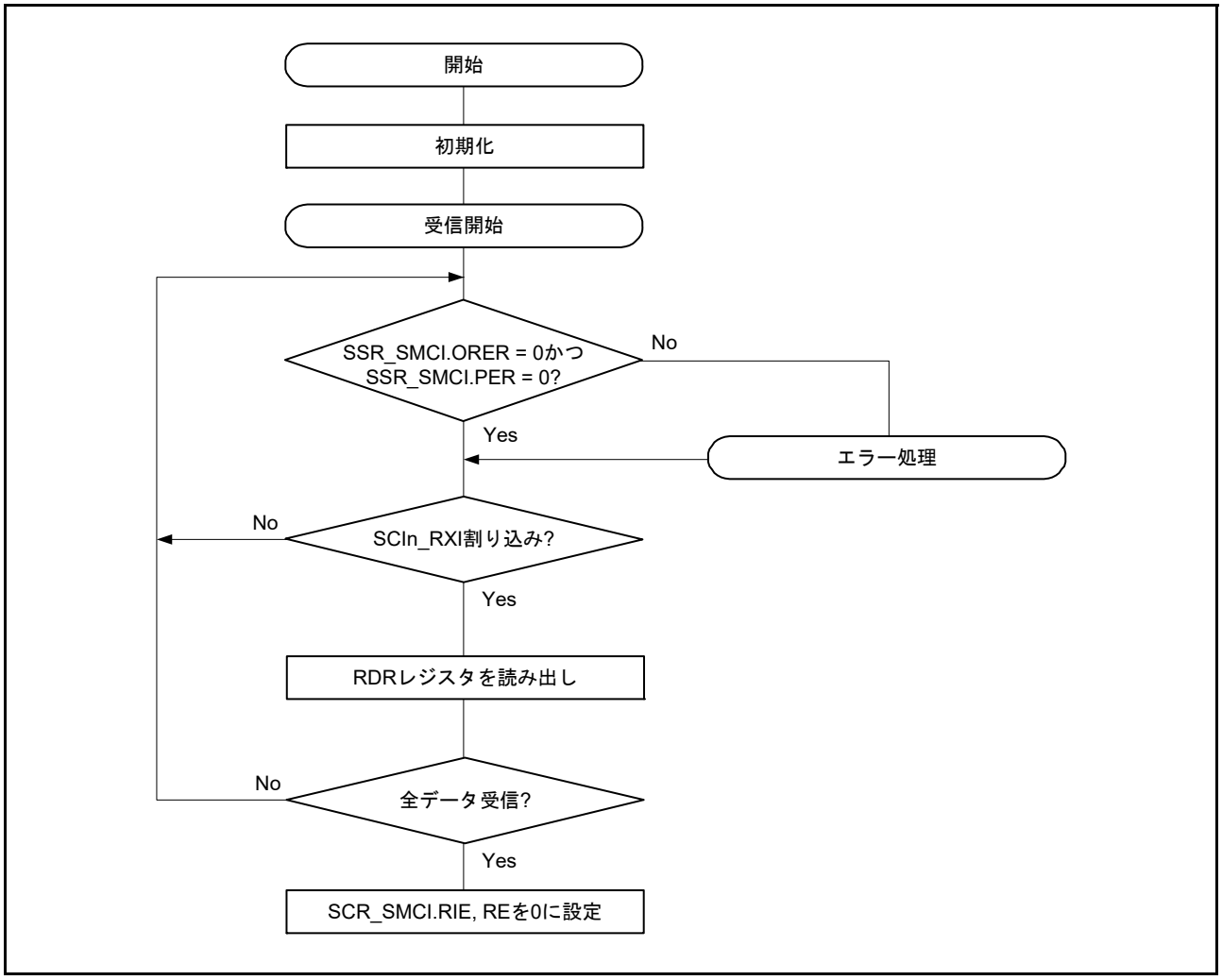


図 29.56　スマートカードインタフェース受信のフローチャート例

29.6.8　クロック出力制御

SMR_SMCI.GM ビットを 1 にすると、SCR_SMCI.CKE[1:0] ビットでクロック出力の制御が行えます。CKE[1:0] ビットの詳細については、29.2.12　スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCR_SMCI）(SCMR.SMIF = 1) を参照してください。クロック出力を設定すると、29.6.4　受信データのサンプリングタイミングと受信マージンで説明されている基本クロックが出力されます。

図 29.57 に、SCR_SMCI.CKE[1] ビットを 0 にして SCR_SMCI.CKE[0] ビットを制御する場合のクロック出力制御のタイミング例を示します。

SMR_SMCI.GM ビットを 0 にすると、SCR_SMCI.CKE[0] ビットによる出力制御がただちに SCK 端子に反映されるため、SCK 端子から意図しない幅のパルスが出力される可能性があります。

SMR_SMCI.GM ビットを 1 にすると、SCR_SMCI.CKE[0] ビットが変更されても、基本クロックと同じパルス幅で設定したクロックが出力されます。

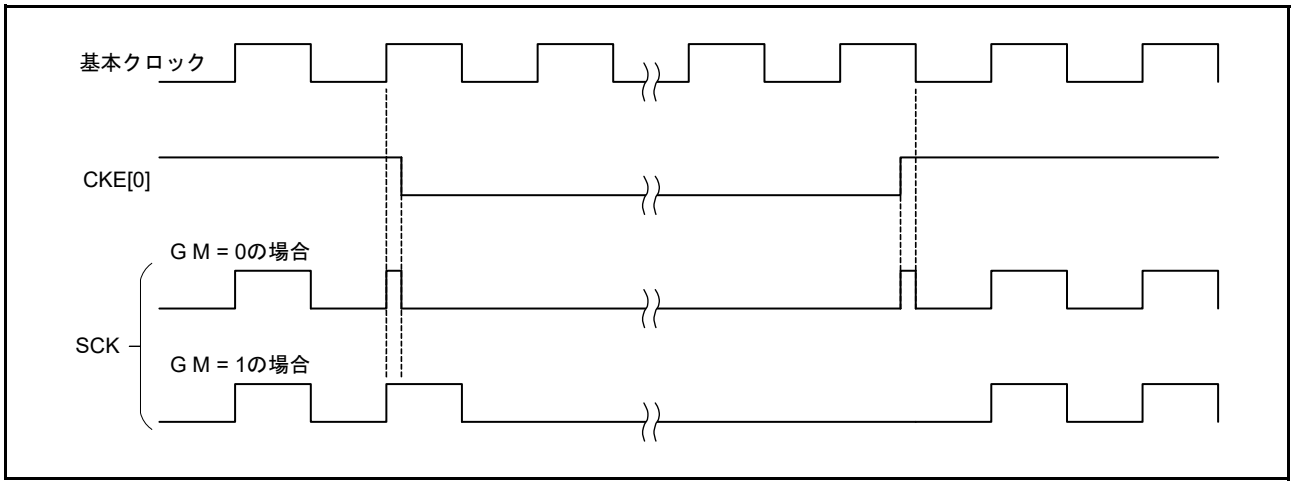


図 29.57　クロック出力制御

29.7　簡易 IIC モードの動作

簡易 I²C バスフォーマットは、8 ビットのデータと 1 ビットのアクノリッジから構成されます。開始条件および再開始条件に続くフレームはスレーブアドレスのフレームであり、マスタデバイスは、通信先であるスレーブデバイスを指定するために使用します。指定されたスレーブデバイスは、新たにスレーブデバイスが指定されるか、または停止条件が満たされるまで有効です。各フレーム内の 8 ビットのデータは、MSB から順に送信されます。

図 29.58 に、I²C バスフォーマットを、図 29.59 に、I²C バスタイミングを示します。

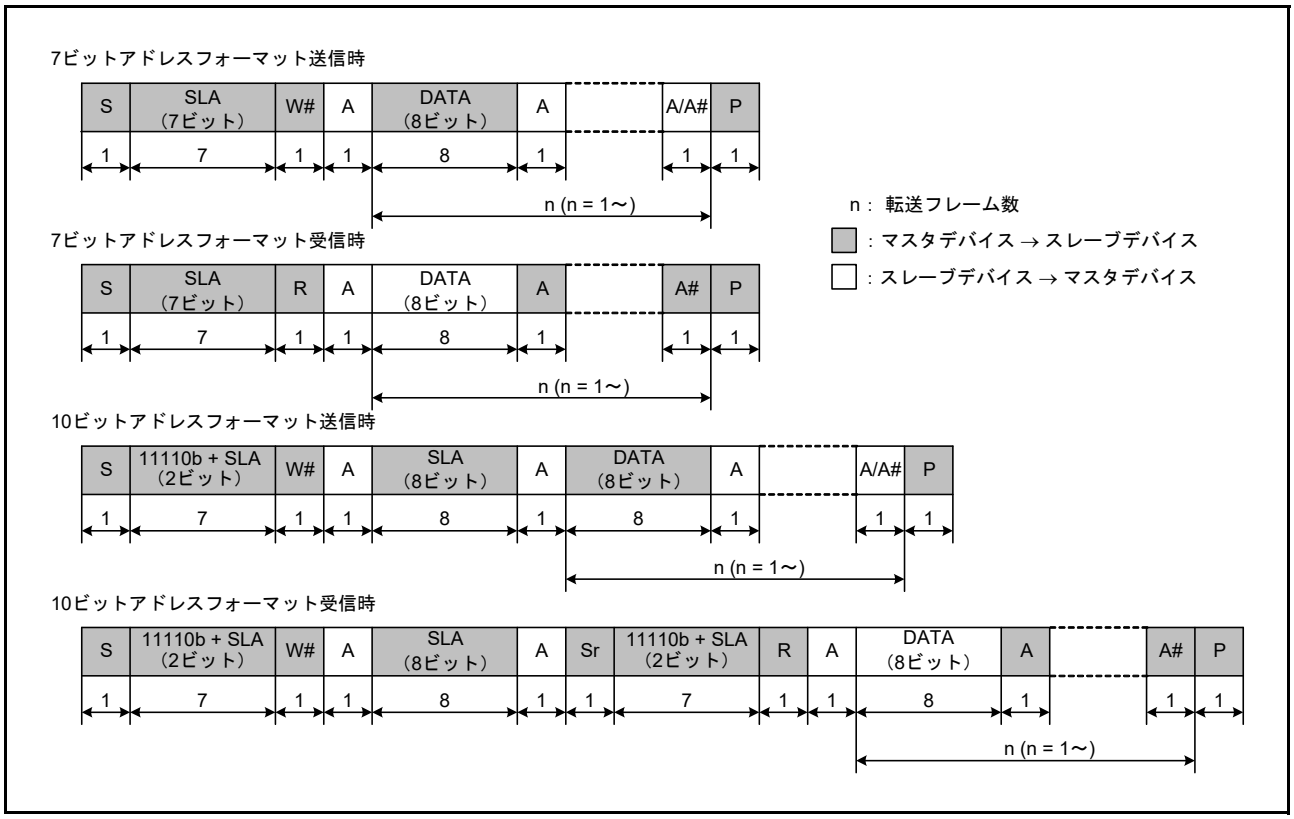


図 29.58　I²C バスフォーマット

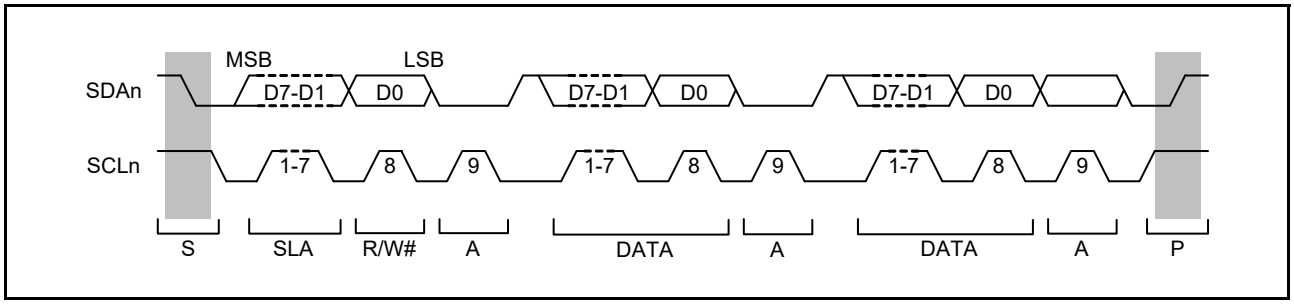


図 29.59　I²C バスタイミング（SLA = 7 ビットの場合）

S：　開始条件を示します。マスタデバイスは、SCLn ラインが High 状態にあるとき、SDAn ラインのレベルを High から Low へ変化させます。

SLA：　スレーブアドレスを示します。これによってマスタデバイスがスレーブデバイスを選択します。

R/W#：　転送方向（送信／受信）を示します。値 1 のときはスレーブデバイスからマスタデバイスへ、値 0 のときはマスタデバイスからスレーブデバイスへデータを送信します。

A/A#：　アクノリッジを示します。マスタ送信モードでは、スレーブデバイスがアクノリッジを返します。マスタ受信モードでは、マスタデバイスがアクノリッジを返します。Low への復帰は ACK を、High への復帰は NACK を示します。

Sr：　再開始条件を示します。マスタデバイスは、SCLn ラインが High 状態にあるとき、セットアップ時間経過後に SDAn ラインのレベルを High から Low へ変化させます。

DATA：　送受信データを示します。

P：　停止条件を示します。マスタデバイスは、SCLn ラインが High 状態にあるとき、SDAn ラインのレベルを Low から High へ変化させます。

29.7.1　開始条件、再開始条件、停止条件の生成

SIMR3.IICSTAREQ ビットに 1 を書き込むことにより、開始条件の生成を行います。開始条件の生成では、以下の動作が行われます。

- SDAn ラインを立ち下げ（High から Low へ変化）、SCLn ラインは開放状態を保持
- BRR レジスタで設定したビットレートでの 1 ビット期間の半分を、開始条件のホールド時間に設定
- SCLn ラインを立ち下げ（High から Low へ変化）、SIMR3.IICSTAREQ ビットを 0 にして、開始条件生成割り込み要求を出力

SIMR3.IICRSTAREQ ビットに 1 を書き込むことにより、再開始条件の生成を行います。再開始条件の生成では、以下の動作が行われます。

- SDAn ラインを開放、SCLn ラインは Low を保持
- BRR レジスタで設定したビットレートでの 1 ビット期間の半分を、SCLn ラインの Low 期間に設定
- SCLn ラインを開放（Low から High へ変化）
- SCLn ラインの High を検出時、BRR レジスタで設定したビットレートでの 1 ビット期間の半分を、再開始条件のセットアップ時間に設定
- SDAn ラインを立ち下げ（High から Low へ変化）
- BRR レジスタで設定したビットレートでの 1 ビット期間の半分を、再開始条件のホールド時間に設定
- SCLn ラインを立ち下げ（High から Low へ変化）、SIMR3.IICRSTAREQ ビットを 0 にして、再開始条件生成割り込み要求を出力

SIMR3.IICSTPREQ ビットに 1 を書き込むことにより、停止条件の生成を行います。停止条件の生成では、以下の動作が行われます。

- SDAn ラインを立ち下げ（High から Low へ変化）、SCLn ラインは Low を保持
- BRR レジスタで設定したビットレートでの 1 ビット期間の半分を、SCLn ラインの Low 期間に設定
- SCLn ラインを開放（Low から High へ変化）
- SCLn ラインの High を検出時、BRR レジスタで設定したビットレートでの 1 ビット期間の半分を、停止条件のセットアップ時間に設定
- SDAn ラインを開放（Low から High へ変化）、SIMR3.IICSTPREQ ビットを 0 にして、停止条件生成割り込み要求を出力

図 29.60 に、開始条件、再開始条件、停止条件生成の動作タイミングを示します。

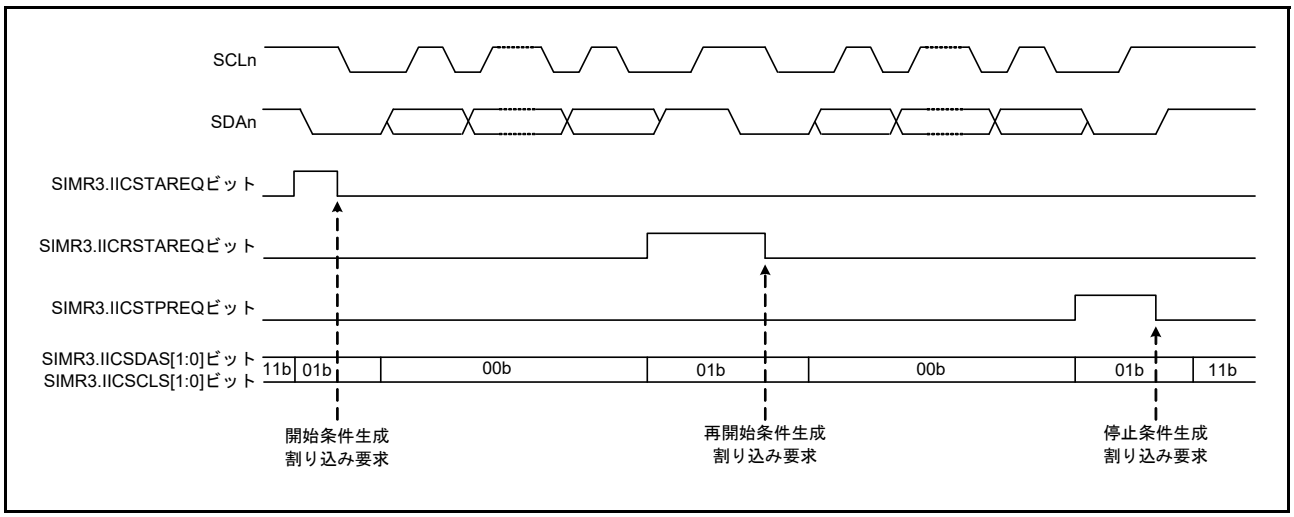


図 29.60　開始条件、再開始条件、停止条件生成の動作タイミング

29.7.2　クロック同期化

通信先のスレーブデバイスがウェイトを挿入する目的で、SCLn ラインを Low にする場合があります。内部 SCLn クロック信号と SCLn 端子入力のレベルに差異が生じる場合、SIMR2.IICCSC ビットを 1 にすることで、クロック同期の制御が可能になります。

SIMR2.IICCSC ビットを 1 にすると、内部 SCLn クロック信号が Low から High へ変化します。SCLn 端子入力が Low の間は High 期間のカウントを停止します。SCLn 端子入力が High へ遷移すると、High 期間のカウントが開始します。

このとき、SCLn 端子が High へ変化して High 期間のカウントを開始するまでの間隔は、SCLn 端子入力遅延、SCLn 端子入力のノイズフィルタ遅延（ノイズフィルタのサンプリングクロックで 2 ～ 3 サイクル）、および内部処理遅延（PCLK で 1 ～ 2 サイクル）の合計になります。この間、他のデバイスが SCLn ラインを Low にしていなくても、内部 SCLn クロックの High 期間が延長されます。

SIMR2.IICCSC ビットが 1 の場合、データの送受信は、SCLn 端子入力と内部 SCLn クロックの論理積に同期して行われます。SIMR2.IICCSC ビットが 0 の場合は、データの送受信は内部 SCLn クロックに同期して行われます。

開始条件、再開始条件、または停止条件の生成要求発行後、内部 SCLn クロックが Low から High へ変化するまでの間にスレーブデバイスからウェイトが挿入された場合、その期間分は生成までの時間が延長されます。

内部 SCLn クロック信号が Low から High へ変化した後、スレーブデバイスがウェイトを挿入した場合は、そのウェイト期間も停止はせず生成完了割り込み要求を発行しますが、条件生成自体は保証されません。図 29.61 に、クロック同期化の動作例を示します。

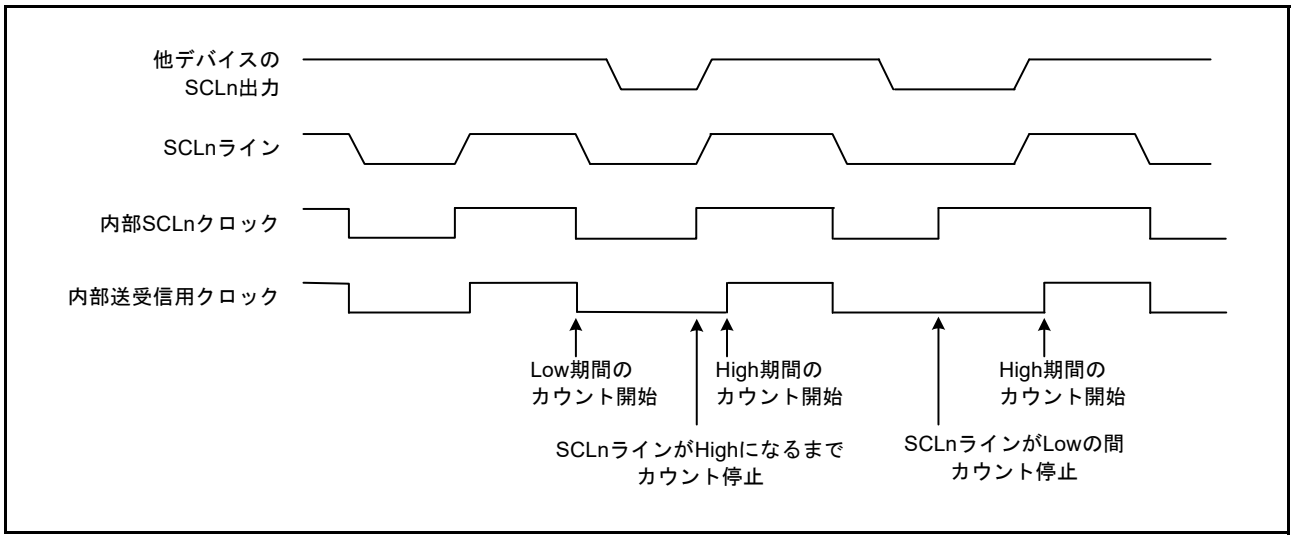


図 29.61　クロック同期化の動作例

29.7.3　SDA 出力遅延

SIMR1.IICDL[4:0] ビットを用いて、SCLn 端子出力の立ち下がりに対し、SDAn 端子出力を遅延させることが可能です。遅延設定は 0 ～ 31 サイクルの間で選択可能です。遅延設定は、対応する内蔵ボーレートジェネレータからのクロック信号のサイクル数を表します（SMR.CKS[1:0] ビットで選択した分周ベースクロック（PCLK）を基準とします）。SDAn 端子出力の遅延は、開始条件／再開始条件／停止条件の各信号、8 ビットの送信データ、およびアクノリッジビットに適用されます。

SDAn 出力遅延が SCLn 端子出力の立ち下がりに要する時間より短い場合、SCLn 端子出力の立ち下がり中に SDAn 端子出力が変化を開始し、スレーブデバイスが誤動作する可能性があります。SDAn 出力遅延は、SCLn 端子出力の立ち下がり時間の最大値（IIC の標準モードとファストモードでは 300ns）より大きい値を設定してください。

図 29.62 に、SDAn 出力遅延のタイミングを示します。

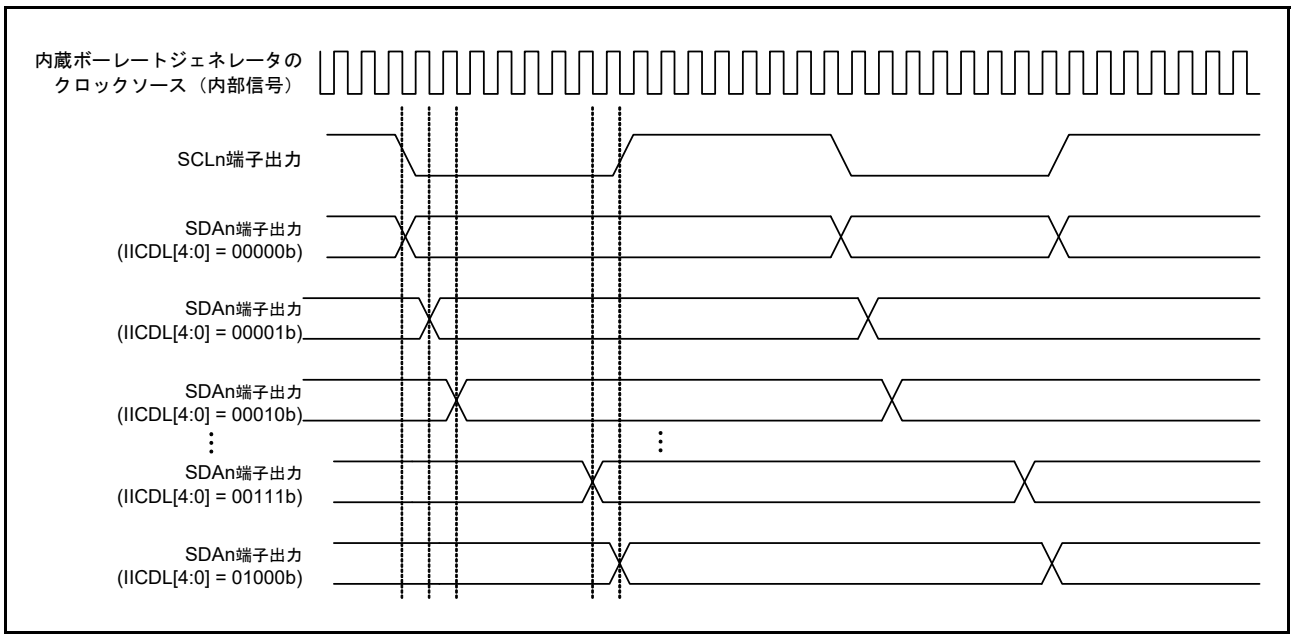


図 29.62　SDAn 出力遅延のタイミング

29.7.4　SCI の初期化（簡易 IIC モード）

データの送受信前に、SCR レジスタに初期値 00h を書き込み、図 29.63 の例に示すようにインタフェースを初期化してください。

動作モードまたは通信フォーマットを変更する前に、必ず SCR レジスタを初期値にしてください。

また、簡易 IIC モード時の通信ポートのオープンドレイン設定は、ポート側で行ってください。

[1] SCLn端子、SDAn端子機能が有効（Nチャネルオープンドレイン出力）になるようにI/Oポート機能を設定します。

[2] 開始条件が生成されるまで、SCLn端子、SDAn端子をハイインピーダンスにします。

[3] SMR, SCMRレジスタに送信／受信フォーマットを設定します。
SMRレジスタではCKS[1:0]を設定し、それ以外のビットを0にします。
SCMRレジスタではSDIRを1、SINVを0、SMIFを0にします。

[4] BRRレジスタにビットレートに対応する値を書き込みます。

[5] MDDRレジスタにビットレート誤差補正値を書き込みます。
ただし、SEMR.BRMEを0にする場合には設定の必要はありません。

[6] SEMR, SNFR, SIMR1, SIMR2, SPMRレジスタに値を設定します。
SEMRでは、NFEN, BRMEを設定します。
SNFRでは、NFCS[2:0]を設定します。
SIMR1では、IICMを1にし、IICDL[4:0]を設定します。
SIMR2では、IICACKT, IICCSCを1にし、IICINTMを設定します。
SPMRでは、全ビットを0にします。

[7] SCR.RE, TEを1にします。また、SCR.TIE,RIE, TEIEを設定してください。（送信動作かつSIMR2.IICINTM = 1のときはRIEを0にします。）SCR.TE, REを1にすることによりSCLn, SDAn端子機能が使用可能になります。

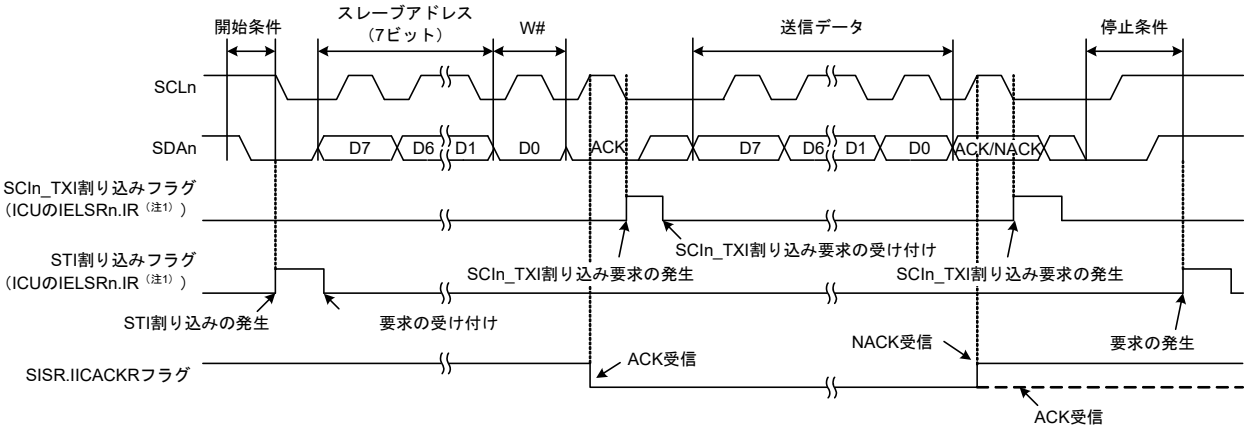
図 29.63　SCI の初期化フローチャート例（簡易 IIC モード）

29.7.5　マスタ送信動作（簡易 IIC モード）

図 29.64 と図 29.65 に、マスタ送信の動作例を、図 29.66 に、データ送信のフローチャート例を示します。下図では、SIMR2.IICINTM ビットが 1（受信割り込み、送信割り込みを使用）で、かつ SCR.RIE ビットが 0（SCIn_RXI および SCIn_ERI 割り込み要求を禁止）の場合を想定しています。STI 割り込みについては、表 29.24 を参照してください。

10 ビットスレーブアドレス使用時は、図 29.66 の［3］～［4］の手順を 2 回繰り返します。

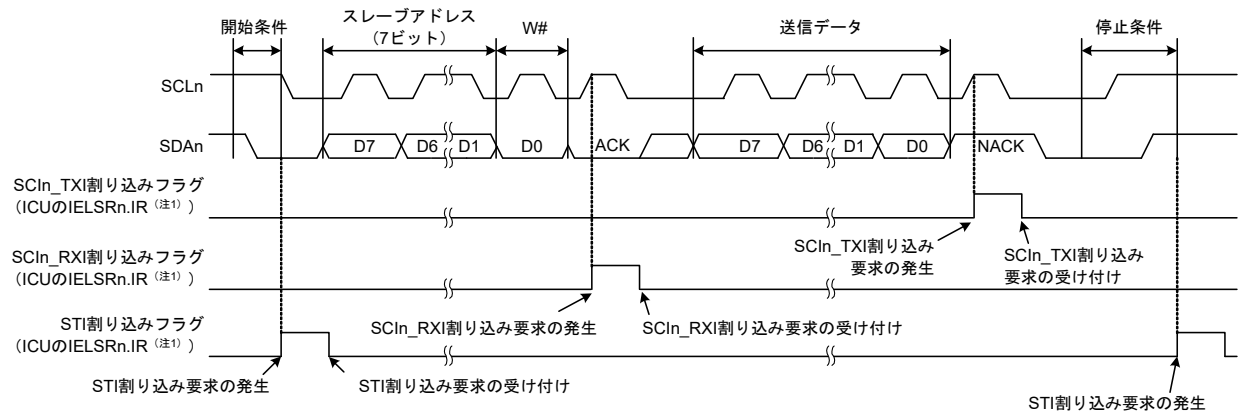
簡易 IIC モードでの送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）は、クロック同期式送信時の SCIn_TXI 割り込み要求発生のタイミングとは異なり、1 フレームの通信を完了した時点で発生します。



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

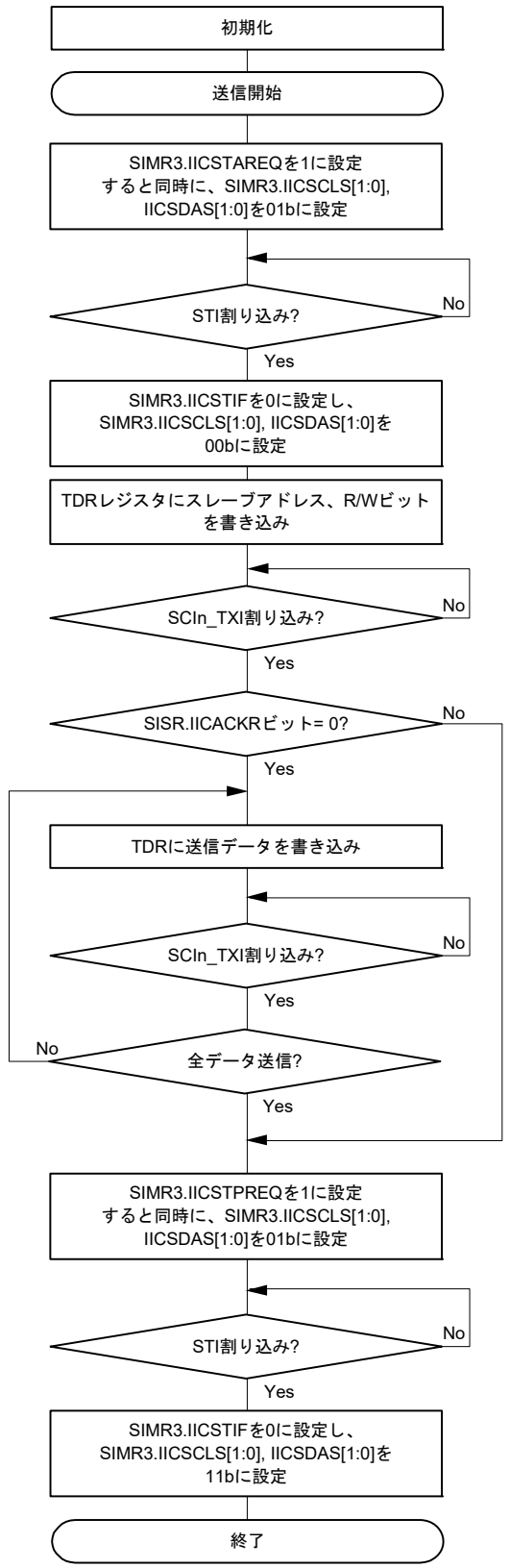
図 29.64　簡易 IIC モードにおけるマスタ送信の動作例 1
（7 ビットスレーブアドレス、送信割り込み、受信割り込み使用時）

マスタ送信中に SIMR2.IICINTM ビットを 0（ACK 割り込み、NACK 割り込みを使用）にした場合、ACK 割り込みをトリガにして DMAC または DTC を起動し、データを必要バイト数送信します。NACK を受信した場合は、NACK 割り込みをトリガにして、送信中止や再送信などのエラー処理を行います。



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.65　簡易 IIC モードにおけるマスタ送信の動作例 2
（7 ビットスレーブアドレス、ACK 割り込み、NACK 割り込み使用時）



[1] [1] シンプルIICモードの初期化：
送信するにはSCR.RIEビットを0に設定します。
（RXI割り込み要求とERI割り込み要求は無効です。）

[2] [2] 開始条件を生成します。

[3] [3] TDRレジスタへの書き込み：
TDRレジスタのR/Wビットへスレーブアドレスと値を
書き込みます。

[3]
[4] 10ビットスレーブアドレスの使用時は、
[3][4]の処理を2回実行します。

[4] [4] スレーブデバイスからのACK応答の確認：
SISR.IICACKRビットを確認してください。値が0の
ときは、スレーブデバイスがACKで応答して処理が
進んでいることを示します。 値が1のときは、
スレーブデバイスからの応答がないため、
次の遷移で停止条件を生成することを示します。

[5] [5] シリアル送信を続行する手順：
送信が継続される場合、追加の送信データを
TDRレジスタに書き込みます。最初に送信される
データを除き、SCIn_TXI割り込み要求ではDMAC
またはDTCをアクティブ化することでTDRレジスタへの
データを書き込み処理ができますが、ACKまたはNACKの
状態を確認することはできません。

[6] [6] 停止条件を生成します。

注 .　シンプル IIC モードでは、通信完了した後に SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。

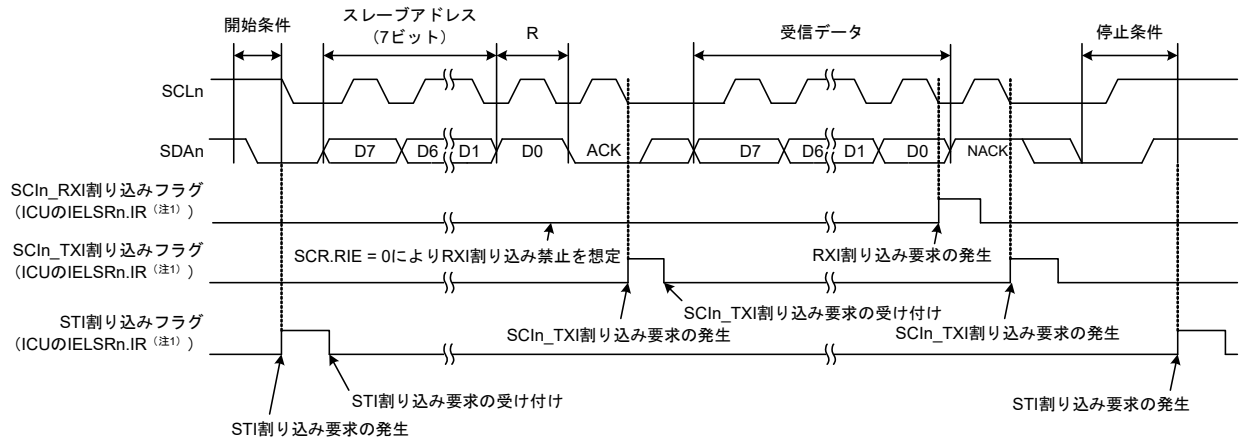
図 29.66　簡易 IIC モードにおけるマスタ送信の手順例
（送信割り込み、受信割り込み使用時）

29.7.6　マスタ受信動作（簡易 IIC モード）

図 29.67 に簡易 IIC モードにおけるマスタ受信の動作例を、図 29.68 にマスタ受信のフローチャート例を示します。

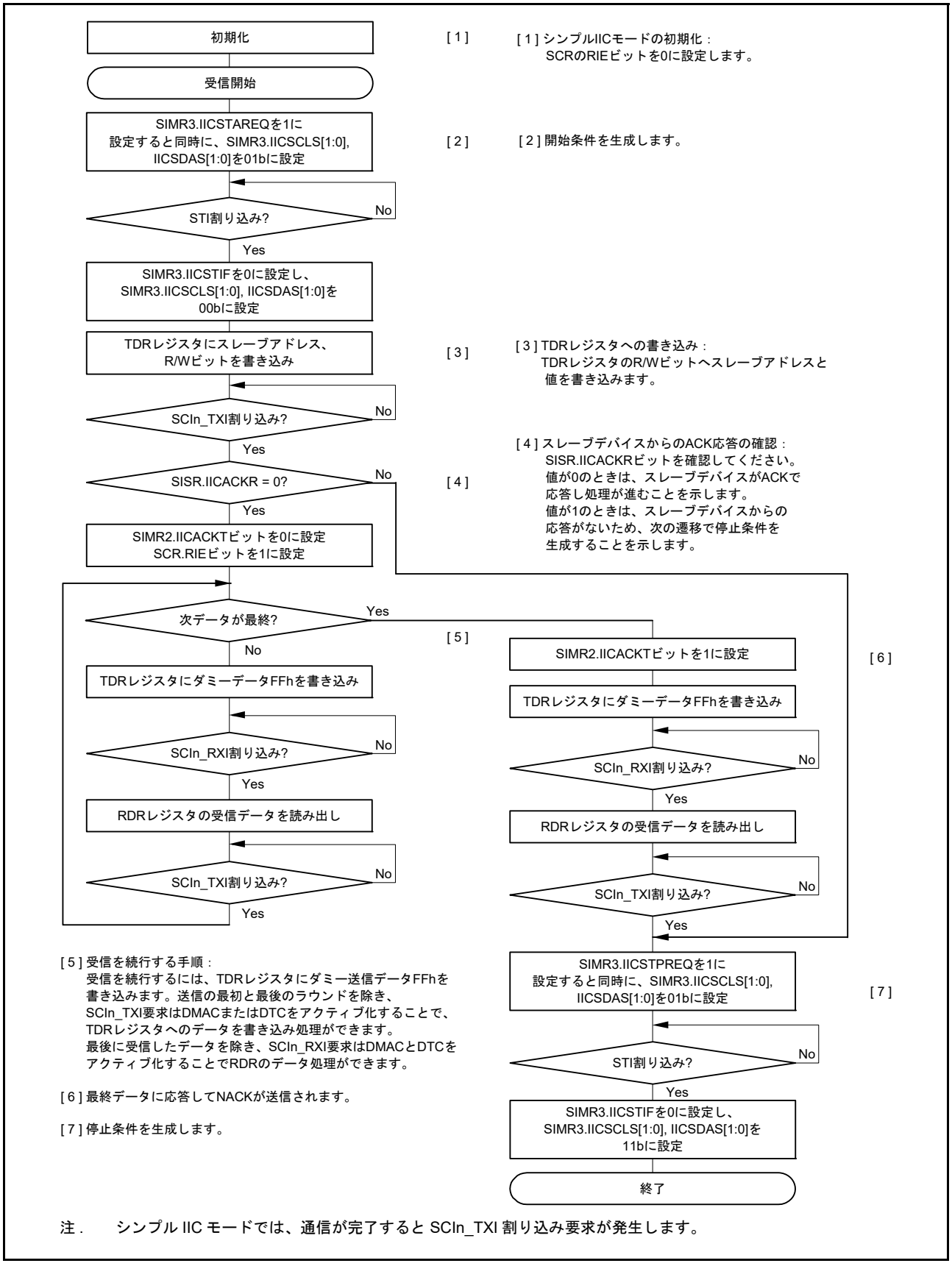
下図では、SIMR2.IICINTM ビットを 1 にして受信割り込み、および送信割り込みを使用している場合を想定しています。

簡易 IIC モードでの送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）は、クロック同期式送信時の SCIn_TXI 割り込み要求発生のタイミングとは異なり、1 フレームの通信を完了した時点で発生します。



注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.67　簡易 IIC モードにおけるマスタ受信の動作例
（7 ビットスレーブアドレス、送信割り込み、受信割り込み使用時）



注 .　シンプル IIC モードでは、通信が完了すると SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。

図 29.68　簡易 IIC モードにおけるマスタ受信のフローチャート例（送信割り込み、受信割り込み使用時）

29.8　簡易 SPI モードの動作

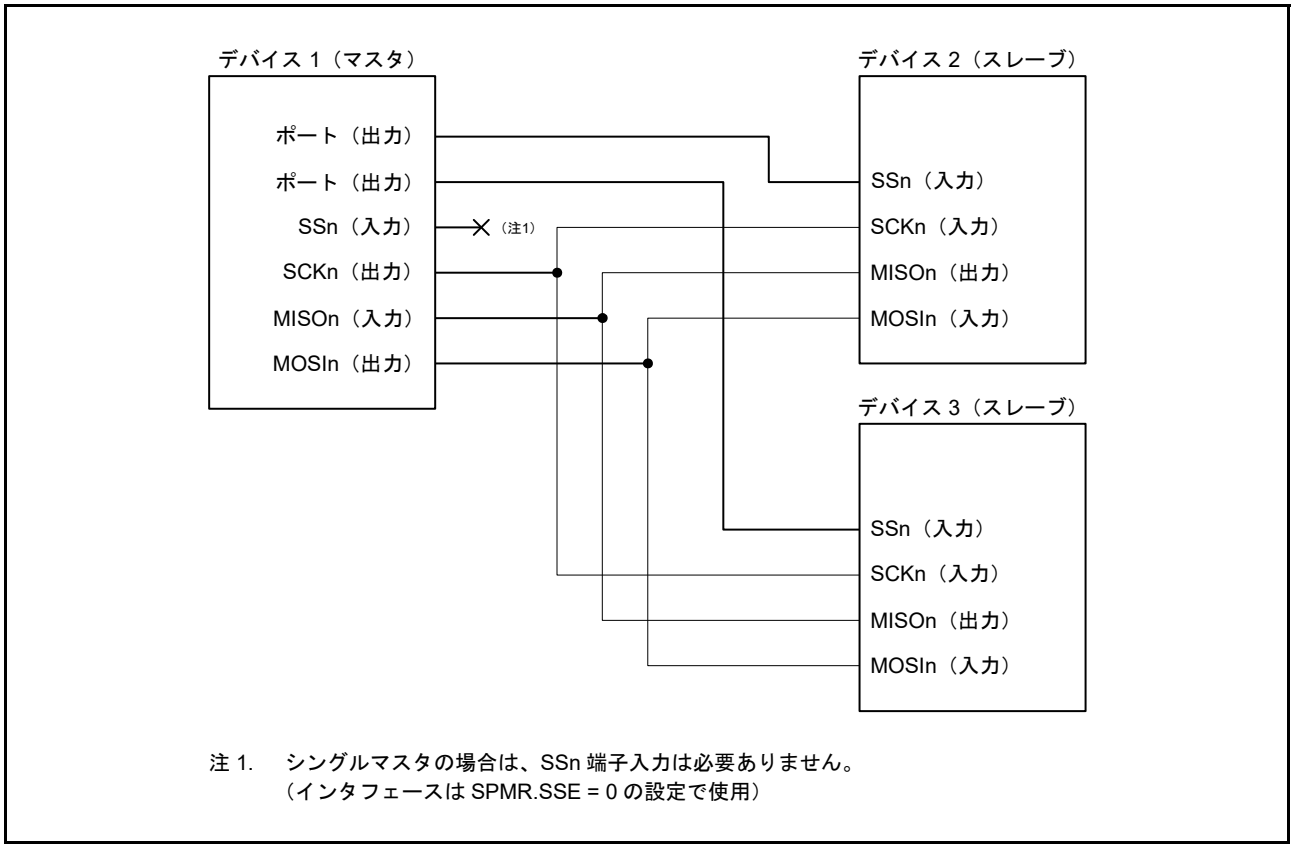
SCI は拡張機能として、1 つまたは複数のマスタと複数のスレーブとの間で通信が可能な、簡易 SPI モードをサポートしています。

SCI を簡易 SPI モードにするには、クロック同期式モードの設定（SCMR.SMIF = 0、SIMR1.IICM = 0、SMR.CM = 1）を使用し、SPMR.SSE ビットを 1 にします。マスタが一つしかない構成では、簡易 SPI モードでマスタとして使用されているデバイスへの接続に、SSn 端子機能は必要ありません。したがって、この場合、SPMR.SSE ビットを 0 にしてください。

図 29.69 に、簡易 SPI モードの接続例を示します。汎用ポート端子を使用して、マスタからの SSn 出力信号を生成してください。

簡易 SPI モードでは、クロック同期式モードと同様に、クロックパルスに同期してデータを送受信します。通信データの 1 キャラクタは 8 ビットデータで構成され、パリティビットの付加はできません。SCMR.SINV ビットを 1 にすることで、送受信データを反転できます。

SCI 内部では送信部と受信部は独立しており、クロックを共有することで全二重通信が可能です。また、送信部と受信部はどちらもバッファ構成になっているため、送信中に次の送信データを書き込むことや、受信中に前の受信データを読み出すことが可能です。これにより、連続転送が可能となります。



注 1.　シングルマスタの場合は、SSn 端子入力は必要ありません。
（インタフェースは SPMR.SSE = 0 の設定で使用）

図 29.69　簡易 SPI モードでの接続例（シングルマスタ時、SPMR.SSE ビット = 0）

29.8.1　マスタモード、スレーブモードと各端子の状態

簡易 SPI モードでは、マスタモード（SCR.CKE[1:0] = 00b または 01b、かつ SPMR.MSS = 0）と、スレーブモード（SCR.CKE[1:0] = 10b または 11b、かつ SPMR.MSS = 1）で、各端子の入出力方向が異なります。

表 29.24 に、端子状態、モード、および SSn 端子入力の関係を示します。

表 29.24　モードごとの端子状態およびSSn端子の入力レベル

モード	SSn端子入力	TXDn端子状態	RXDn端子状態	SCKn端子状態
マスタモード（注1）	High レベル（通信可）	送信データ出力（注2）	受信データ入力	クロック出力（注3）
	Low レベル（通信不可）	ハイインピーダンス	受信データ入力（無効）	ハイインピーダンス
スレーブモード	High レベル（通信可）	受信データ入力（無効）	ハイインピーダンス	クロック入力（無効）
	Low レベル（通信不可）	受信データ入力	送信データ出力	クロック入力

注 1.　シングルマスタ構成（SPMR.SSE ビット = 0）のみの場合、SSn 端子の入力レベルにかかわらず、通信可能となります。これは、SSn 端子入力が High のときと等価です。SSn 端子機能は不要であり、別の用途に使用できます。
注 2.　シリアル送信禁止（SCR.TE ビット = 0）の場合、MOSIn 端子出力はハイインピーダンスです。
注 3.　マルチマスタ構成（SPMR.SSE ビット = 1）では、シリアル送受信禁止（SCR.TE および SCR.RE ビット = 00b）の場合、SCKn 端子出力はハイインピーダンスです。

29.8.2　マスタモード時の SS 機能

SCR.CKE[1:0] ビットを 00b にして、SPMR.MSS ビットを 0 にすると、マスタモードになります。シングルマスタ構成（SPMR.SSE ビット = 0）では、SSn 端子が使用されないため、SSn 端子の値にかかわらず送受信動作が可能です。

マルチマスタ構成（SPMR.SSE ビット = 1）において SSn 端子入力が High の場合、他にマスタが存在しないこと、あるいは、別のマスタが送受信動作を行っていることを示すため、マスタデバイスは SCKn 端子からクロックを出力した後、送受信動作を開始します。

マルチマスタ構成（SPMR.SSE ビット = 1）において SSn 端子入力が Low の場合は、別のマスタが存在して、送受信を行っています。MOSIn 端子出力と SCKn 端子出力はハイインピーダンスになり、送受信動作を開始することができません。また、モードフォルトエラーとして SPMR.MFF ビットが 1 になります。マルチマスタ構成では、SPMR.MFF フラグを読み出すことでエラー処理を開始してください。なお、送受信動作中にモードフォルトが発生しても、送受信動作は停止しませんが、送受信動作完了後の MOSIn 端子出力と SCKn 端子出力はハイインピーダンス状態です。汎用ポート端子を使用して、マスタからの SS 出力信号を生成してください。

29.8.3　スレーブモード時の SS 機能

SCR.CKE[1:0] ビットを 10b にして、SPMR.MSS ビットを 1 にすると、スレーブモードになります。SSn 端子入力が High のとき、MISOn 出力端子の状態はハイインピーダンスであり、SCKn 端子からのクロック入力は無視されます。SSn 端子入力が Low のとき、SCKn 端子からのクロック入力が有効になり、送受信動作が可能になります。

送受信動作中に SSn 端子入力が Low から High に変化した場合、MISOn 端子出力がハイインピーダンスになります。なお、内部の送受信動作は SCKn 端子から入力されるクロックレートで継続し、1 キャラクタ分の送受信が完了すると、動作が停止して、割り込み（SCIn_TXI、SCIn_RXI、SCIn_TEI のいずれか）が発生します。

29.8.4　クロックと送受信データの関係

SPMR.CKPOL ビットと SPMR.CKPH ビットを用いて、送受信に用いるクロックを 4 種類から選択できます。クロック信号と送受信データの関係を図 29.70 に示します。マスタモードとスレーブモードの両方で、クロックと送受信データの関係は同一です。これは、SSn 端子入力が High のときと等価です。

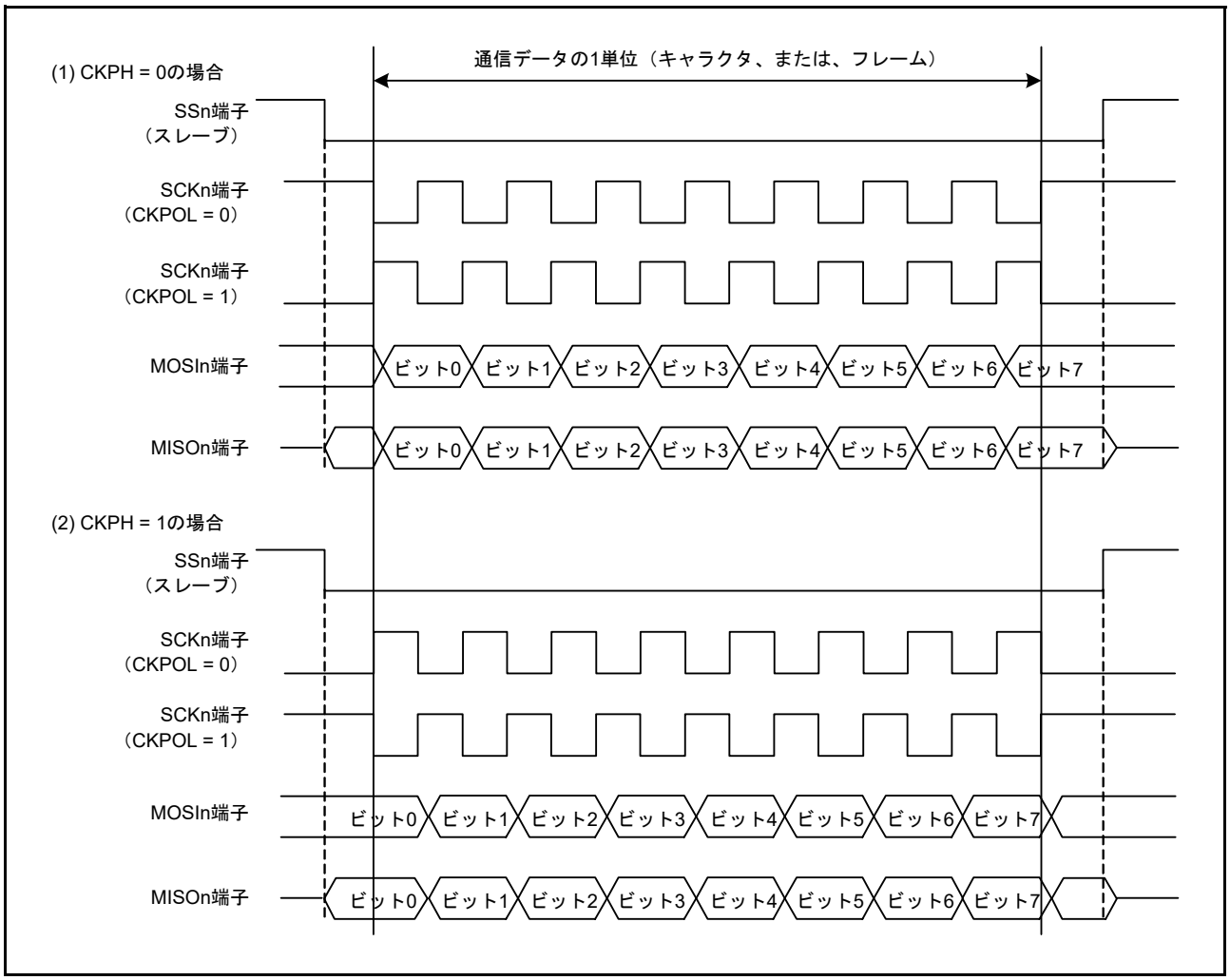


図 29.70　簡易 SPI モードにおけるクロックと送受信データの関係

29.8.5　SCI の初期化（簡易 SPI モード）

簡易 SPI モードでの初期化は、クロック同期式モードの場合と同じです。初期化フローの例については、図 29.32 を参照してください。SPMR.CKPOL ビットと SPMR.CKPH ビットは、選択したクロック信号コンフィグレーションがマスタデバイスとスレーブデバイスの両方に適するように設定する必要があります。

動作モードや転送フォーマットに変更を加える場合は、必ず SCR レジスタを初期化してから行ってください。

注 .　0 になるのは SCR.RE ビットのみです。SSR.ORER、FER、PER、RDR の各フラグは初期化されません。

SCR.TIE ビットが 1 のときに、SCR.TE ビットの値を 1 から 0、または 0 から 1 に変更すると、送信データエンプティ割り込み（SCIn_TXI）が発生します。

29.8.6　シリアルデータの送受信（簡易 SPI モード）

マスタモードでは、送受信先のスレーブデバイスの SSn 端子を、送受信開始前に Low にして、送受信終了後に High にしてください。それ以外の手順はクロック同期式モードと同様です。

29.9　ビットレートモジュレーション機能

ビットレートモジュレーション機能では、PCLK が SMR/SMR_SMCI レジスタの CKS[1:0] ビットで選択された場合に、MDDR レジスタで指定した数を用いて、ビットレートを均一に補正することが可能です。

調歩同期式モードにおいて、PCLK が SMR/SMR_SMCI レジスタの CKS[1:0] ビットで選択されたとき、BRR と MDDR がそれぞれ 0 と 160 の場合の例を図 29.71 に示します。この例では、基本クロックの周期が均一に 256/160 に補正され、同時にビットレートも 160/256 に補正されています。

注 .　内部クロックを有効にするとバイアスが発生し、内部基本クロックのパルス幅に伸縮が生じます。

クロック同期式モードと、簡易 SPI モードでの最高速設定（SMR.CKS[1:0] ビット = 00b、SCR.CKE[1] ビット = 0、および BRR = 0）では、この機能を使用しないでください。

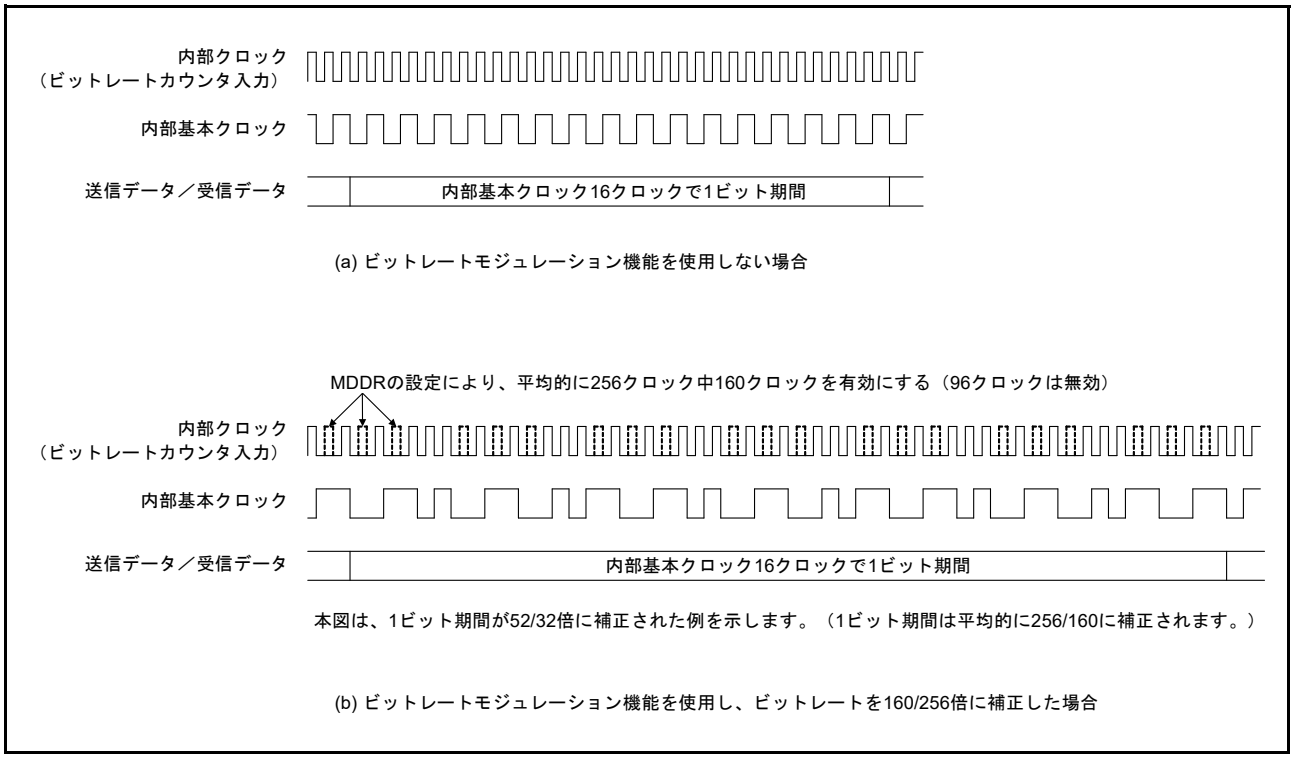


図 29.71　ビットレートモジュレーション機能使用時の内部基本クロックの例

29.10　割り込み要因

29.10.1　SCIn_TXI および SCIn_RXI 割り込みのバッファ動作（非 FIFO 選択時）

ICU の割り込みステータスフラグが 1 のときは、SCIn_TXI 割り込みと SCIn_RXI 割り込みの発生条件が成立していても、ICU は割り込み要求を出力せず、内部で保存します（内部で保存できる容量は、1 要因ごとに 1 要求までです）。

ICU の割り込みステータスフラグが 0 になると、ICU 内で保持していた割り込み要求を出力します。割り込み要求が出力されると、内部で保持されていた割り込みは自動的に破棄されます。また、内部で保持されていた割り込み要求は、対応する割り込み許可ビット（SCR/SCR_SMCI レジスタの TIE ビットまたは RIE ビット）をクリアすることでも破棄できます。

29.10.2　SCIn_TXI および SCIn_RXI 割り込みのバッファ動作（FIFO 選択時）

ICU の割り込みステータスフラグを 1 にすると、SCIn_TXI 割り込みと SCIn_RXI 割り込みは ICU に対して割り込み要求を出力しません。ICU の割り込みステータスフラグを 0 にした場合に、SCIn_TXI 割り込みと SCIn_RXI 割り込みの条件が満たされていれば、割り込み要求が発生します。

29.10.3　調歩同期式モード、クロック同期式モード、および簡易 SPI モードにおける割り込み

(1)　非 FIFO 選択時

表 29.25 に、調歩同期式モード、クロック同期式モード、および簡易 SPI モードにおける割り込み要因を示します。各割り込み要因には、異なる割り込みベクタの割り当てが可能です。SCR レジスタの許可ビットによって、割り込み要因を個別に許可または禁止することが可能です。

SCR.TIE ビットが 1 のとき、送信データが TDR レジスタまたは TDRHL レジスタ（注 1）から TSR レジスタへ転送されると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。また、SCR.TE ビットと SCR.TIE ビットを 1 命令で同時に 1 にすることでも、SCIn_TXI 割り込み要求を発生することが可能です。SCIn_TXI 割り込み要求を用いて DMAC または DTC を起動し、データ転送を行うことができます。

SCR.TIE ビットが 0 のときに SCR.TE ビットを 1 にするか、SCR.TE ビットが 1 のときに SCR.TIE ビットを 1 にすると（注 2）、SCIn_TXI 割り込み要求は発生しません。

SCR.TEIE ビットが 1 のとき、送信データの最終ビットを送信するタイミングまでに次のデータが書き込まれていないと、SSR.TEND フラグが 1 になり、SCIn_TEI 割り込み要求が発生します。また、SCR.TE ビットが 1 のとき、TDR レジスタまたは TDRHL レジスタ（注 1）に送信データを書き込むまでの間は、SSR.TEND フラグは 1 を保持しており、SCR.TEIE ビットを 1 にすると SCIn_TEI 割り込み要求が発生します。

TDR レジスタまたは TDRHL レジスタ（注 1）にデータを書き込むと、SSR.TEND フラグがクリアされて SCIn_TEI 割り込み要求は取り消されますが、取り消されるまである程度時間がかかります。

SCR.RIE ビットが 1 のとき、受信データが RDR レジスタに格納されると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。SCIn_RXI 割り込み要求を用いて DMAC または DTC を起動し、データ転送を行うことができます。

SCR.RIE ビットが 1 のとき、SSR.ORER、FER、PER のいずれかのフラグが 1 になると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。このとき、SCIn_RXI 割り込み要求は発生しません。これら 3 つのフラグ（ORER、FER、PER）のすべてをクリアすることによって、SCIn_ERI 割り込み要求を取り消すことができます。

(2) FIFO 選択時

表 29.26 に、FIFO モード選択時の割り込み要因を示します。

SCR.TIE ビットが 1 で、FTDRL レジスタに格納されたデータの数が FCR.TTRG ビットで示されたしきい値以下のとき、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。また、SCIn_TXI 割り込み要求は、SCR.TIE ビットと SCR.TE ビットを 1 命令で同時に 1 にすることでも発生します。

SCR.TIE ビットが 0 のときに SCR.TE ビットを 1 にするか、SCR.TE ビットが 1 のときに SCR.TIE ビットを 1 にすると、SCIn_TXI 割り込み要求は発生しません。

SCR.TEIE ビットが 1 のとき、送信データの最終ビットを送信するタイミングまでに次のデータが FTDRL レジスタに書き込まれていないと、SSR_FIFO.TEND フラグが 1 になり、SCIn_TEI 割り込み要求が発生します。

SCR.RIE ビットが 1 で、FRDRL レジスタに格納されたデータの数が FCR.RTRG ビットで示されたしきい値以下のとき、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。RTRG が 0 の場合は、受信 FIFO 内のデータ数が 0 であっても、SCIn_RXI 割り込み要求は発生しません。

SCR.RIE ビットが 1 のとき、SSR_FIFO.ORER フラグが 1 になるか、あるいは、フレーミングエラーまたはパリティエラーのあるデータが FRDRL レジスタに格納されると、SCIn_ERI 割り込み要求が発生します。FRDRL レジスタに格納されたデータ数がしきい値以上であると、同時に SCIn_RXI 割り込み要求も発生します。SSR_FIFO.ORER、FER、および PER フラグをすべてクリアすることで、SCIn_ERI 割り込み要求を取り消すことができます。

注 1.　調歩同期式モードにおいて、データ長 9 ビットを選択した場合です。
注 2.　最終データの送信時に SCIn_TXI 割り込みを一時的に禁止して、送信終了割り込みによる処理を行った後、新たにデータ送信を開始したい場合は、SCR.TIE ビットではなく、ICU の割り込み要求許可ビットを用いて、割り込みの発行を制御してください。この方法によって、新しいデータの送信時に、SCIn_TXI 割り込み要求の発生が抑止されるのを防ぐことができます。

表 29.25　SCIの割り込み要因（非FIFO選択時）

名称	割り込み要因	割り込みフラグ	割り込み許可	DTCの起動	DMACの起動
SCIn_ERI	受信エラー（注1）	ORER, FER, PER, DFER, DPER	RIE	不可能	不可能
SCIn_RXI	受信データフル	RDRF	RIE	可能	可能
	アドレス一致	DCMF	RIE	可能	可能
SCIn_AM	アドレス一致	DCMF	—	可能	可能
SCIn_TXI	送信データエンプティ	TDRE	TIE	可能	可能
SCIn_TEI	送信終了	TEND	TEIE	不可能	不可能

注 1.　割り込みフラグが ORER になるのはクロック同期式モードおよび簡易 SPI モードにおいてのみです。

表 29.26　SCIの割り込み要因（FIFO選択時）

名称	割り込み要因	割り込みフラグ	割り込み許可	DTCの起動	DMACの起動
SCIn_ERI	受信エラー（注1）	ORER, FER, PER, DFER, DPER	RIE	不可能	不可能
		DR（FCR.DRES = 1 の場合）	RIE	不可能	不可能
SCIn_RXI	受信データフル	RDF	RIE	可能	可能
	受信データレディ	DR（FCR.DRES = 0 の場合）	RIE	可能	可能
	アドレス一致	DCMF	RIE	可能	可能
SCIn_AM	アドレス一致	DCMF	—	可能	可能
SCIn_TXI	送信データエンプティ	TDFE	TIE	可能	可能
SCIn_TEI	送信終了	TEND	TEIE	不可能	不可能

注 1.　割り込みフラグが ORER になるのはクロック同期式モードおよび簡易 SPI モードにおいてのみです。

29.10.4　スマートカードインタフェースモードにおける割り込み

スマートカードインタフェースモードにおける割り込み要因を表 29.27 に示します。このモードでは、送信終了割り込み（SCIn_TEI）要求とアドレス一致（SCIn_AM）要求は使用できません。

表 29.27　SCIの割り込み要因：スマートカードインタフェースモード

名称	割り込み要因	割り込みフラグ	割り込み許可	DTCの起動	DMACの起動
SCIn_ERI	受信エラー、エラーシグナル検出	ORER, FER, ERS	RIE	不可能	不可能
SCIn_RXI	受信データフル	RDRF	RIE	可能	可能
SCIn_TXI	送信終了	TEND	TIE	可能	可能

スマートカードインタフェースモードの場合も、他の SCI モードと同様に、DMAC または DTC を使用した送受信が可能です。送信動作では、SSR_SMCI.TEND フラグが 1 になると、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。あらかじめ DMAC または DTC の起動要因として SCIn_TXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_TXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動されて、送信データの転送が可能になります。TEND フラグは、DMAC または DTC によるデータ転送時に自動的に 0 になります。

エラーが発生した場合は、SCI が自動的に同じデータを再送信します。再送信中は、TEND フラグは 0 のまま保持され、DMAC または DTC は起動されません。したがって、エラー発生時の再送信を含め、SCI および DMAC または DTC が、指定されたバイト数を自動的に送信します。ただし、エラー発生時に SSR_SMCI.ERS フラグは自動的に 0 になりません。そのため、SCR_SMCI.RIE ビットを 1 にしてエラー発生時に SCIn_ERI 割り込み要求を発生させることで、ERS フラグをクリアしてください。

なお、DMAC または DTC を使用して送受信を行う場合は、必ず DMAC または DTC を有効にしてから、SCI の設定を行ってください。DMAC または DTC の設定方法については、「17.　DMA コントローラ（DMAC）」と「18.　データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

受信動作では、受信データが RDR レジスタに格納されると、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。DMAC または DTC の起動要因として SCIn_RXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_RXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動されて、受信データの転送が可能になります。エラーが発生した場合は、エラーフラグがセットされます。そのため、DMAC または DTC は起動せず、代わりに CPU に対して SCIn_ERI 割り込み要求が発行されます。エラーフラグをクリアしてください。

29.10.5　簡易 IIC モードにおける割り込み

簡易 IIC モードにおける割り込み要因を表 29.28 に示します。STI 割り込みは、送信終了割り込み（SCIn_TEI）要求に割り当てられます。受信エラー割り込み（SCIn_ERI）要求とアドレス一致（SCIn_AM）要求は使用できません。

簡易 IIC モードにおいても、DMAC または DTC を使用した送受信が可能です。

SIMR2.IICINTM ビットが 1 のとき

- SCLn 信号の 8 ビット目の立ち下がりで、SCIn_RXI 割り込み要求が発生します。あらかじめ DMAC または DTC の起動要因として SCIn_RXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_RXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動され、受信データの転送が可能になります
- また、SCLn 信号の 9 ビット目（アクノリッジビット）の立ち下がりで、SCIn_TXI 割り込み要求が発生します。あらかじめ DMAC または DTC の起動要因として SCIn_TXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_TXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動され、送信データの転送が可能になります

SIMR2.IICINTM ビットが 0 のとき

- SCLn 信号の 9 ビット目（アクノリッジビット）の立ち上がりで、SDAn 端子入力が Low であると、SCIn_RXI 割り込み要求（ACK 検出）が発生します。あらかじめ DMAC または DTC の起動要因として SCIn_RXI 割り込み要求を設定しておけば、SCIn_RXI 割り込み要求によって DMAC または DTC が起動されて、受信データの転送が可能になります
- SCLn 信号の 9 ビット目（アクノリッジビット）の立ち上がりで、SDAn 端子入力が High であると、SCIn_TXI 割り込み要求（NACK 検出）が発生します

DMAC または DTC を使用して送受信を行う場合は、前もって DMAC または DTC を有効にしてから SCI の設定を行ってください。

SIMR3.IICSTAREQ、IICRSTAREQ、IICSTPREQ の各ビットを用いて開始条件、再開始条件、停止条件を生成した場合、生成が完了すると STI 割り込み要求が発生します。

表 29.28　SCIの割り込み要因：簡易IICモード

名称	割り込み要因	割り込みフラグ	割り込み許可	DTCの起動	DMACの起動
SCIn_RXI	受信、ACK検出	—	RIE	可能	可能
SCIn_TXI	送信、NACK検出	—	TIE	可能	可能
STIn	開始条件、再開始条件、停止条件生成終了	IICSTIF	TEIE	不可能	不可能

注 .　SIMR2.IICINTM ビットが 1（受信割り込み、送信割り込みを使用）の場合にのみ、DTC の起動が可能です。

29.11　イベントリンク機能

SCI は、各割り込み要因をイベントとして使用することで、イベントリンクコントローラ（ELC）を通じて、あらかじめ設定しておいたモジュールを動作させることが可能です。

イベントは、対応する割り込みの割り込み要求許可ビットの設定に関係なく出力させることが可能です。

(1)　エラーイベント出力（受信エラーまたはエラーシグナル検出時）

- 調歩同期式モードで、受信中にパリティエラーが発生して異常終了したことを示します
- 調歩同期式モードで、受信中にフレーミングエラーが発生して異常終了したことを示します
- 受信中にオーバーランエラーが発生して異常終了したことを示します
- スマートカードインタフェースモードで、送信時にエラー信号が検出されたことを示します
- FIFO 選択時かつ FCR.DRES ビットが 1 の場合、SSR_FIFO.FER フラグと SSR_FIFO.PER フラグが 0 であり、受信 FIFO データトリガ数より少ない受信データが受信 FIFO バッファに格納され、15ETU 経過したことを示します

(2)　受信データフルイベント出力

- 簡易 IIC モードで、SIMR2.IICINTM ビットが 0 のとき、ACK が検出されたことを示します
- 簡易 IIC モードで、SIMR2.IICINTM ビットが 1 のとき、SCLn 信号の 8 ビット目の立ち下がりが検出されたことを示します

簡易 IIC モードでのマスタ送信時に、SIMR2.IICINTM ビットが 1 のときは、受信データフルイベントを使用しないようにイベントリンクコントローラ（ELC）を設定してください。

(a)　非 FIFO 選択時

- 受信データが受信データレジスタ（RDR または RDRHL）に格納されたことを示します

(b)　FIFO 選択時

- このイベント出力は使用しないでください

(3)　送信データエンプティイベント出力

- SCR/SCR_SMCI.TE ビットが 0 から 1 に変化したことを示します
- スマートカードインタフェースモードで、送信が完了したことを示します
- 簡易 IIC モードで、SIMR2.IICINTM ビットが 0 のとき、NACK が検出されたことを示します
- 簡易 IIC モードで、SIMR2.IICINTM ビットが 1 のとき、SCLn 信号の 9 ビット目の立ち下がりが検出されたことを示します

(a)　非 FIFO 選択時

- 送信データが送信データレジスタ（TDR または TDRHL）から送信シフトレジスタ（TSR）へ転送されたことを示します

(b)　FIFO 選択時

- このイベント出力は使用しないでください

(4)　送信終了イベント出力

- 送信が完了したことを示します
- 簡易 IIC モードで、開始条件、再開始条件、または停止条件の生成が完了したことを示します

注 .　FIFO が選択されている場合、このイベント出力は使用しないでください。

(5)　アドレス一致イベント出力

- 調歩同期式モード（マルチプロセッサモードを含む）において、DCCR.DCME ビットが 1 の場合、比較データ（CDR.CMPD）と受信データの 1 フレームが一致したことを示します

29.12　アドレス不一致イベント出力（SCI0_DCUF）

調歩同期式モード（マルチプロセッサモードを含む）において、DCCR.DCME ビットが 1 の場合、比較データ（CDR.CMPD）と受信データの 1 フレームが一致しなかったことを示します。このイベントは、スヌーズ終了要求に対してのみ使用可能です

29.13　ノイズ除去機能

ノイズ除去機能に用いるノイズフィルタの構成を図 29.72 に示します。ノイズフィルタは 2 段のフリップフロップ回路と一致検出回路で構成されます。ノイズフィルタの入力信号と、2 段のフリップフロップ回路の出力信号が完全に一致したとき、一致したレベルが内部信号として伝えられます。一致しない場合は前の値が保持されます。ノイズフィルタのサンプリングクロックで、同じレベルが 3 サイクル以上保持された場合、有効な受信信号とみなされます。3 サイクルに達する前にパルスが変化した場合、それは受信信号ではなく、ノイズとみなされます。

SEMR.ABCS = 0 かつ SEMR.ABCSE = 0 の場合、周期は 1 ビット転送期間の 1/16 となります。

SEMR.ABCS = 1 かつ SEMR.ABCSE = 0 の場合、周期は 1 ビット転送期間の 1/8 となります。

SEMR.ABCSE = 1 の場合、周期は 1 ビット転送期間の 1/6 となります。

調歩同期式モードでは、RXDn 端子に入力される受信信号にノイズ除去機能を使用できます。RXDn 端子の受信レベルは、調歩同期式モードの基本クロックを使用して、ノイズフィルタのフリップフロップ回路でサンプリングされます。

簡易 IIC モードでは、SDAn 端子と SCLn 端子の各入力信号に、この機能を使用できます。ノイズ除去機能のサンプリングクロックは、SNFR.NFCS ビットでボーレートジェネレータのソースクロックを 1、2、4、または 8 分周することにより選択します。

ノイズフィルタが有効な状態で基本クロックを停止させ、その後、基本クロック入力を再開させた場合、ノイズフィルタは、クロック停止時の状態から動作を再開します。基本クロックの入力中に SCR.TE ビットと SCR.RE ビットを 0 にすると、ノイズフィルタのフリップフロップ値はすべて 1 に初期化されます。したがって、受信再開時の入力データが 1 の場合は、レベル一致が検出されたと判断され、その結果が内部信号として伝えられます。入力レベルが 0 の場合は、サンプリングサイクルで連続して 3 回信号のレベルが一致するまで、ノイズフィルタの最初の出力値が保持されます。

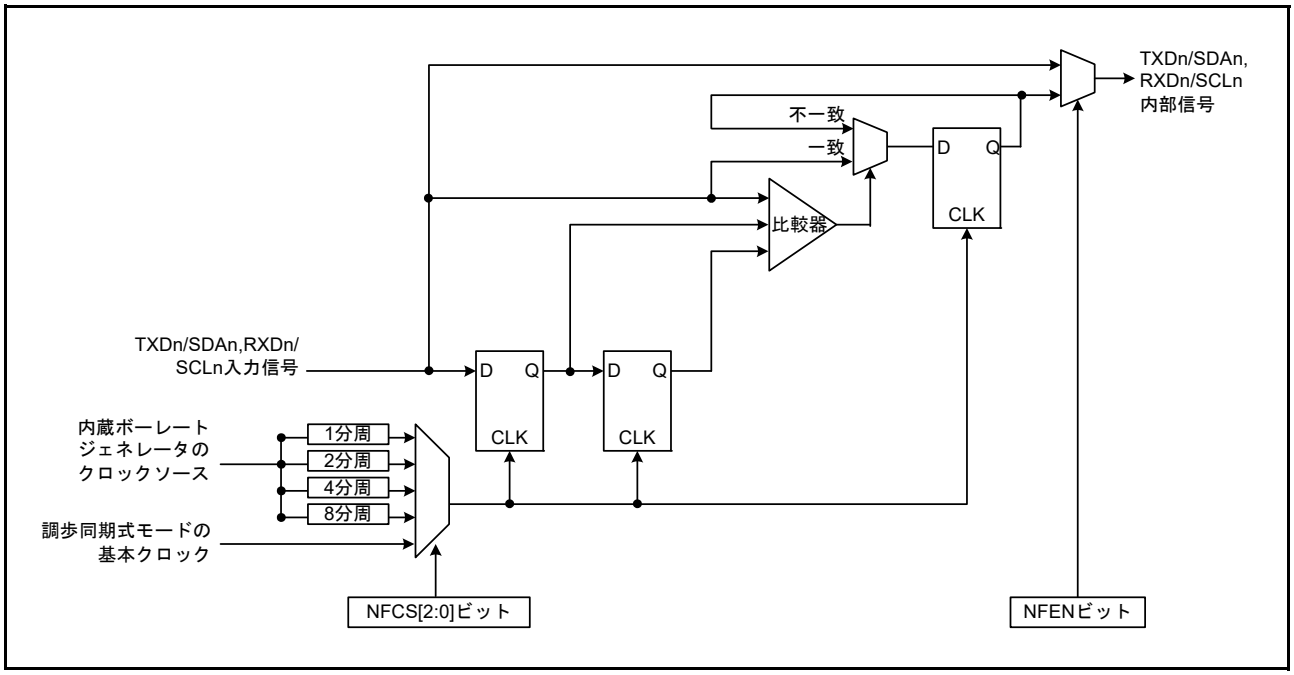


図 29.72　デジタルノイズフィルタ回路のブロック図

29.14　使用上の注意事項

29.14.1　モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタ B（MSTPCRB）により、SCI の動作許可または禁止を設定できます。SCI は、リセット後の初期状態では動作が停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

29.14.2　低消費電力状態での SCI 動作

(1)　送信

モジュールストップ状態を設定する場合、またはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、TXDn 端子を汎用入出力ポート機能に切り替えた後、送信動作を停止（SCR/SCR_SMCI レジスタの TIE、TE、TEIE ビットを 0）にしてください。入出力ポートを SCI 接続に設定すると、SPTR レジスタによって TXDn 端子状態の制御が可能になります。TE ビットを 0 にすることにより、TSR レジスタが初期化されます。SSR/SSR_SMCI レジスタの TEND ビットは、非 FIFO 選択時には 1 にリセットされます。FIFO 選択時には値が保持されます。モジュールストップ状態またはソフトウェアスタンバイモードからの復帰後、出力端子は、ポートの設定と SPTR レジスタの設定に応じて、これらの低消費電力状態へ遷移する前のレベルを出力する場合があります。送信中に低消費電力状態へ遷移すると、送信データは不定になります。

低消費電力状態を解除した後、同じ送信モードで送信する場合は、以下の手順を実行します。

1. TE ビットを 1 にします。
2. SSR/SSR_FIFO/SSR_SMCI レジスタを読み出します。
3. 連続して TDR レジスタへの書き込みを行い、データ送信を開始します。

異なる送信モードで送信する場合は、SCI の初期化からやり直してください。

図 29.73 に、送信中にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合のフローチャート例を示します。図 29.74 と図 29.75 に、ソフトウェアスタンバイモード遷移時のポートの端子状態を示します。

DTC 転送による送信モードから、モジュールストップ状態を設定する場合、またはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、最初に、送信動作を停止（TE ビットを 0）にしてください。低消費電力状態の解除後に DTC による送信を開始する場合は、TE ビットを 1 にしてください。SCIn_TXI 割り込みフラグが 1 になり、DTC による送信が始まります。

(2)　受信

(a)　ウェイクアップ条件としてアドレス一致検出機能を使用しない場合

モジュールストップ状態を設定する場合、またはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、最初に、受信動作を停止（SCR/SCR_SMCI.RE ビットを 0）にしてください。受信中に遷移すると、受信中のデータは無効になります。

図 29.73 に、受信時にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合のフローチャート例を示します。

(b)　ウェイクアップ条件としてアドレス一致検出機能を使用する場合

モジュールストップ状態を設定する場合、またはソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は最初に、

1. 低消費電力状態解除後の動作を設定してください。
2. CDR.CMPD ビットと DCCR.DCME ビットを 1 にしてください。
3. 受信動作を許可（SCR/SCR_SMCI.RE = 1）にしてください。
4. モジュールストップ状態またはソフトウェアスタンバイモードを設定してください。

SCI が低消費電力モードへ遷移するとき、受信データ端子（RXD）が Low であれば、SEMR.RXDESEL を 0 にしてください。SEMR.RXDESEL が 1 になっていると、低消費電力モードの解除時にスタートビット

（RXDn 端子の立ち下がり）が検出されない可能性があります。

図 29.73 に、アドレス一致を用いて受信中にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合のフローチャート例を示します。

(c)　SCI0 をスヌーズモードで使用する場合

SCI0 をスヌーズモードで使用する場合は、最大ビットレートなどのいくつかの制約事項があります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

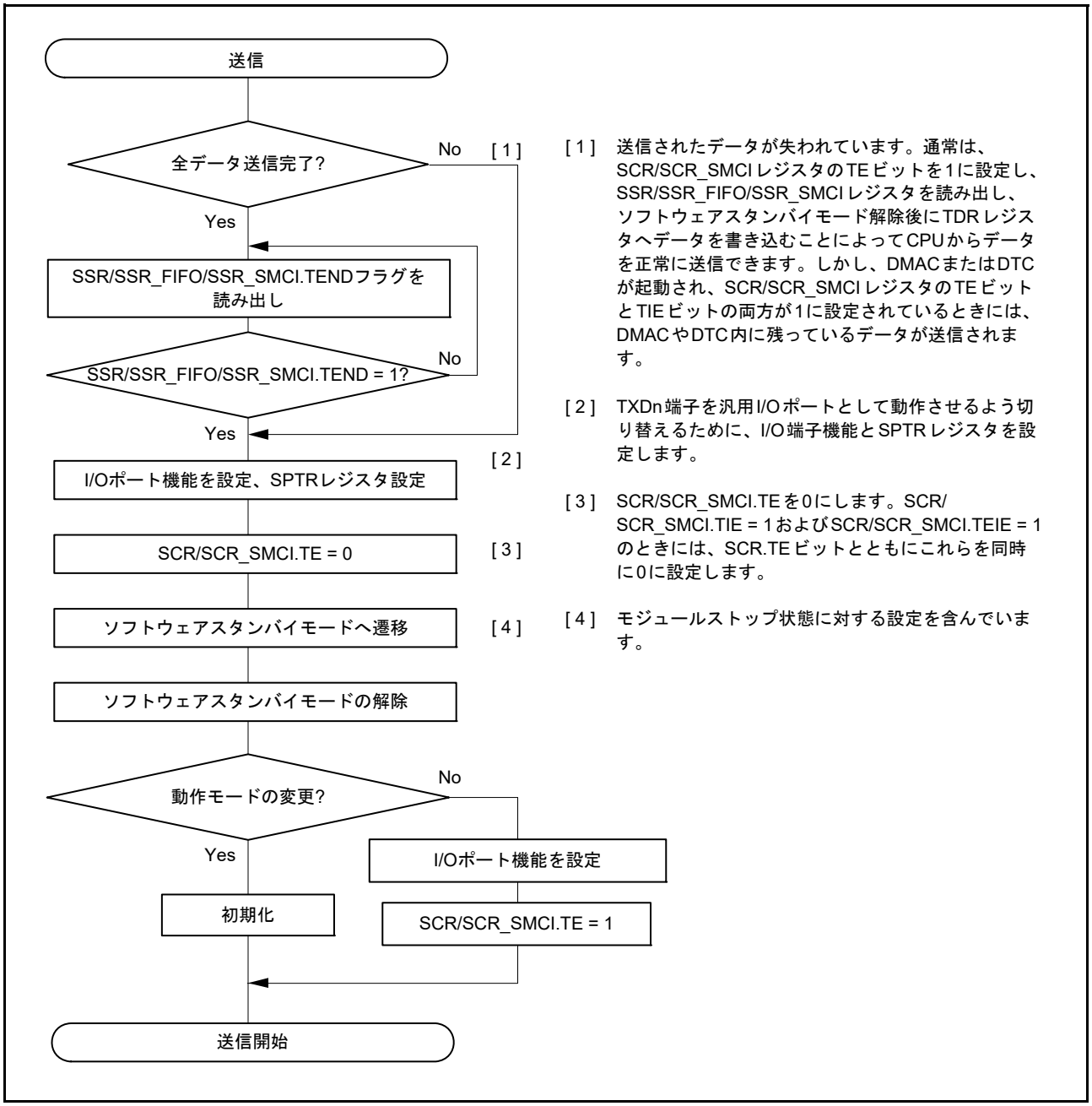


図 29.73　　送信中にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合のフローチャート例

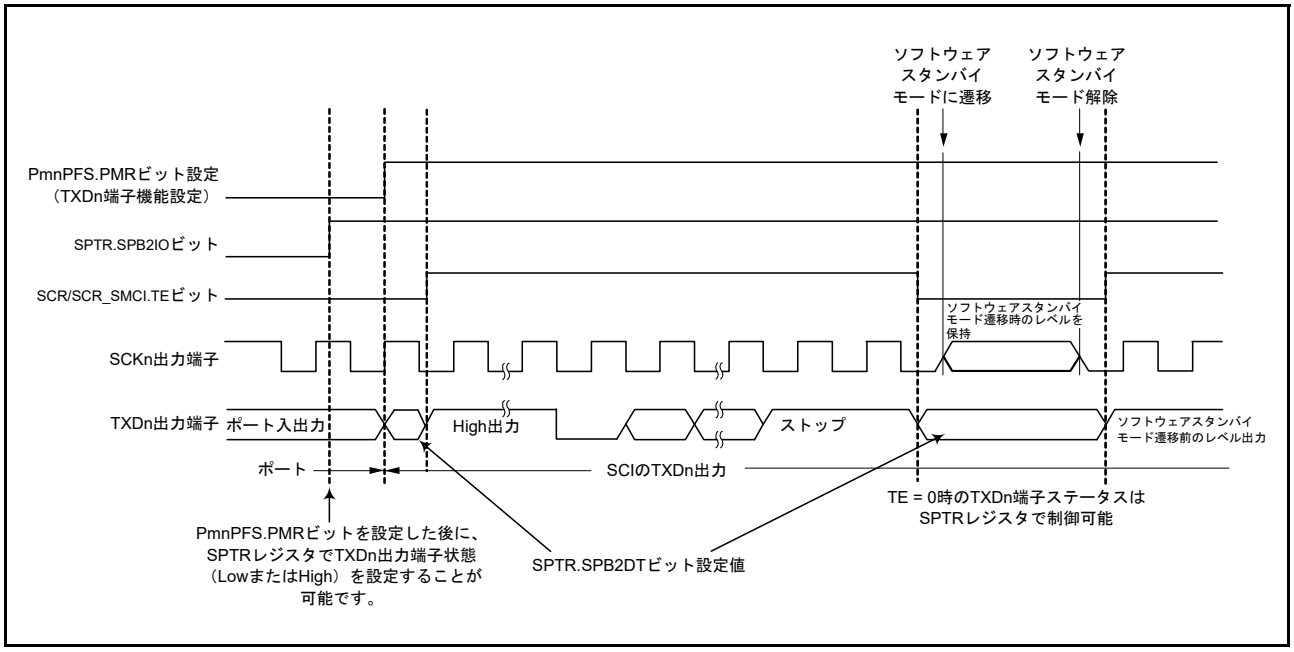


図 29.74　ソフトウェアスタンバイモード遷移中のポートの端子状態（内部クロック、調歩同期送信）

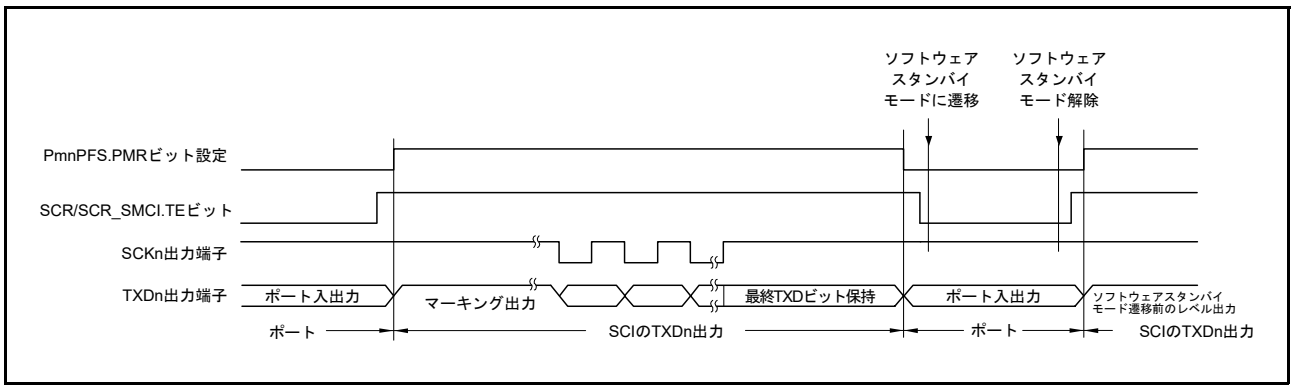


図 29.75　ソフトウェアスタンバイモード遷移中のポートの端子状態（内部クロック、クロック同期送信）

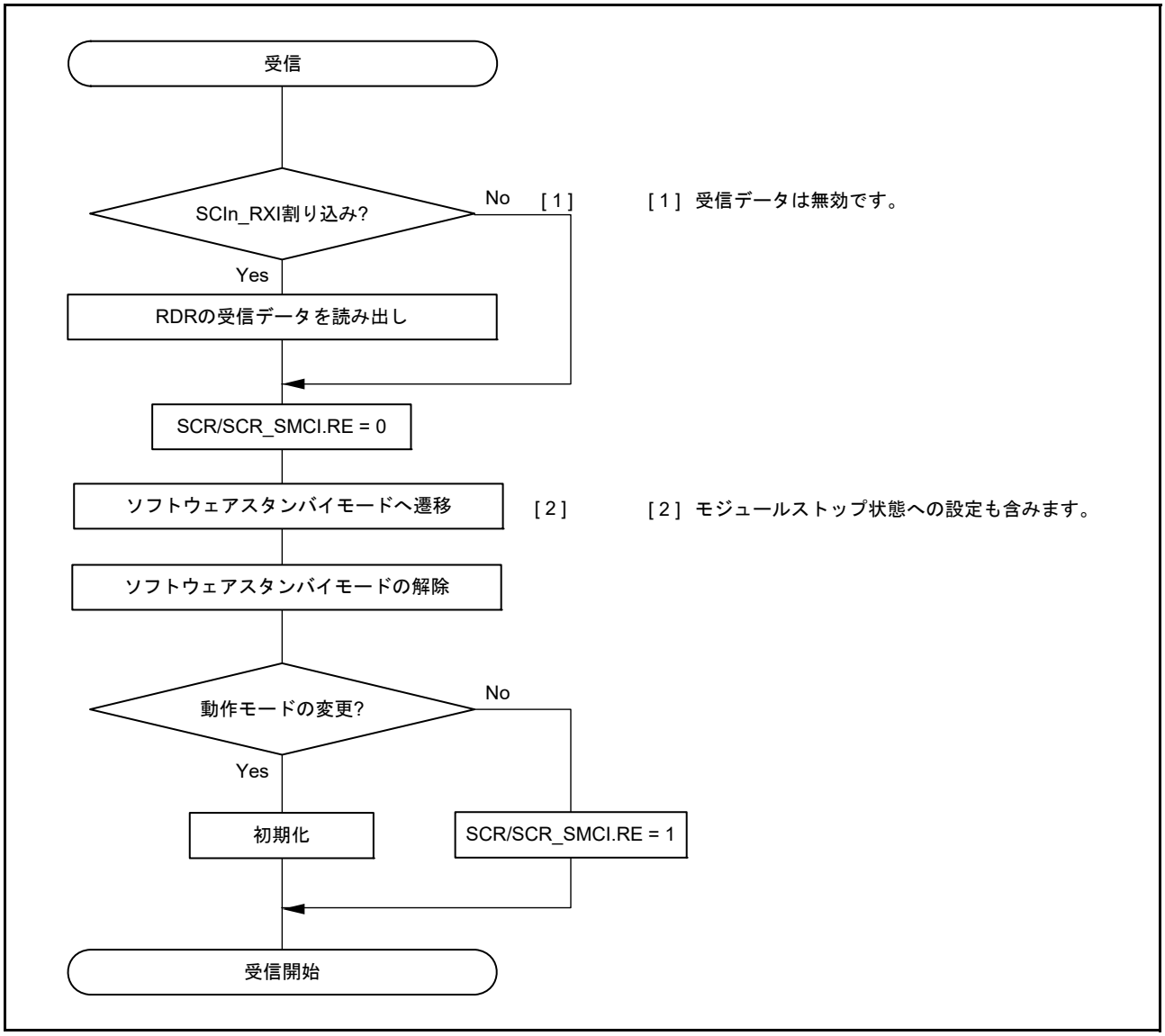


図 29.76　　受信中にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合のフローチャート例

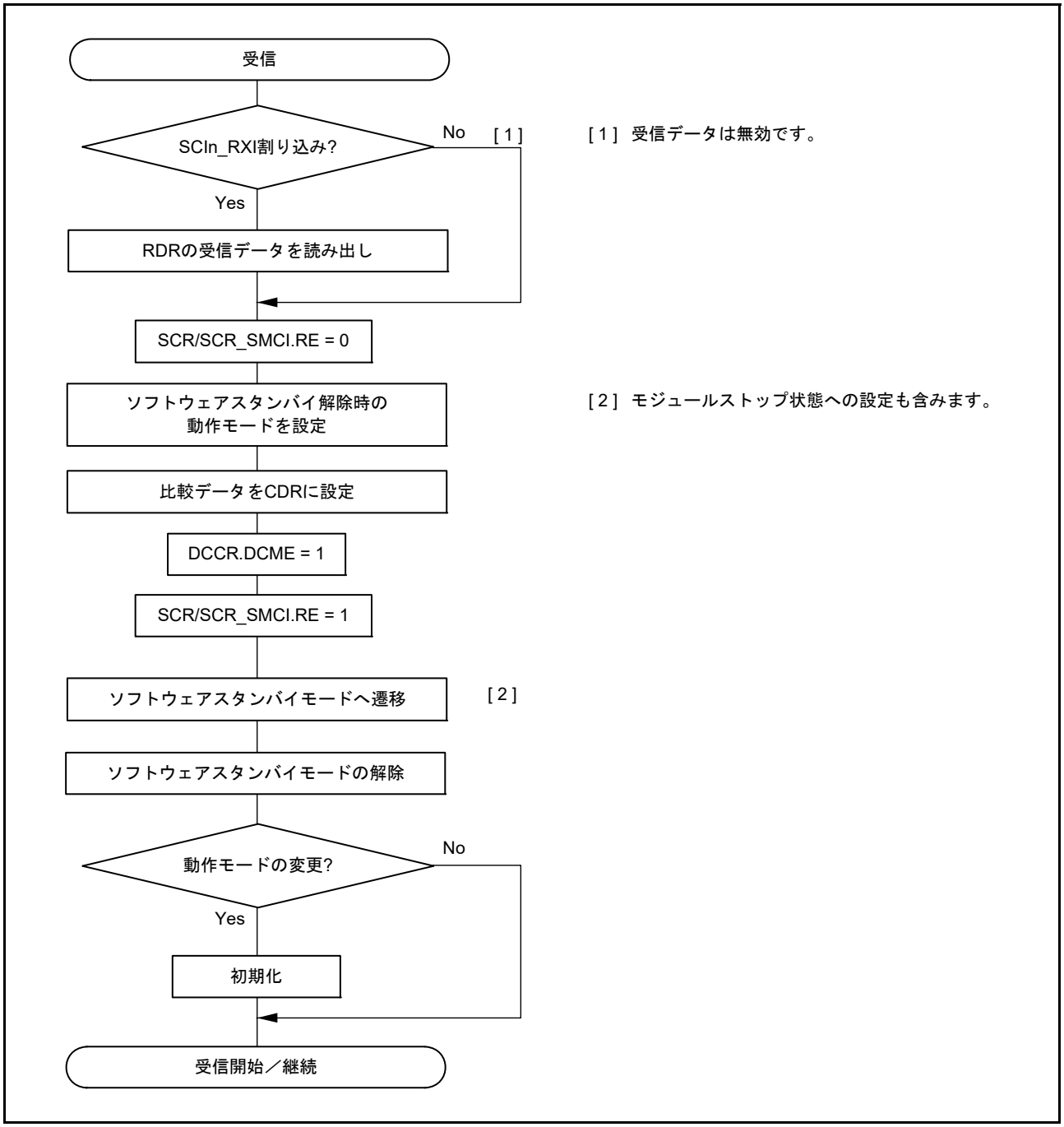


図 29.77　アドレス一致を用いて受信中にソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合のフローチャート例

29.14.3　ブレークの検出と処理について

(1)　非 FIFO 選択時

フレーミングエラー検出時に、RXDn 端子の値を直接読み出すことでブレークを検出できます。ブレークでは、RXDn 端子からの入力がすべて 0 になり、SSR.FER フラグが 1（フレーミングエラーの発生あり）になります。さらに、SSR.PER フラグも 1（パリティエラーの発生あり）になる可能性があります。SCI は、ブレークを受信した後も受信動作を続けます。したがって、FER フラグを 0（フレーミングエラーの発生なし）にしても、再び FER フラグが 1 になります。SEMR.RXDESEL ビットが 1 のとき、SCI は、SSR.FER フラグを 1 にして、次のデータフレームのスタートビットが検出されるまで、受信動作を停止します。このとき、SSR.FER フラグが 0 であれば、ブレーク中は SSR.FER フラグは 0 を保持します。

RXDn 端子が 1 になってブレークが終了した後、最初の RXDn 端子の立ち下がりでスタートビットの先頭を検出すれば、受信動作を開始させることが可能です。

(2)　FIFO 選択時

フレーミングエラーが検出された後、SCI によって 1 フレーム分の連続する受信データが 0 であることが検出された場合、受信動作が停止します。フレーミングエラー検出時に、SPTR.RXDMON ビットの値を読み出すことでブレークを検出できます。RXD 信号がマーク状態になってブレークが終了した後、FRDRHL レジスタへのデータ受信が再開されます。

29.14.4　マーク状態とブレークの送出

SCR/SCR_SMCI.TE ビットが 0（シリアル送信動作を禁止）のとき、SPTR.SPB2IO ビットおよび SPTR.SPB2DT ビットを用いて TXDn 端子状態の設定が可能です。この方法により、TXDn 端子をマーク状態にしてブレークを送出できます。

SCR/SCR_SMCI.TE ビットを 1（シリアル送信動作を許可）にする前に、SPB2IO ビットと SPB2DT ビットによって通信回線をマーク状態（1 の状態）に設定し、I/O ポート機能を用いて TXDn 端子を変更してください。データ送信時にブレークを出力したいときは、SPB2IO ビットと SPB2DT ビットによって TXDn 端子を 0 出力に設定した後、I/O ポート機能を用いて TXDn 端子を変更し、SCR/SCR_SMCI.TE ビットを 0 にしてください。SCR/SCR_SMCI.TE ビットを 0 にすると、現在の送信状態とは無関係に送信部は初期化されます。

29.14.5　受信エラーフラグと送信動作（クロック同期式モードおよび簡易 SPI モード）

受信エラーフラグ（SSR/SSR_FIFO.ORER）が 1 の状態では、TDR または FTDRL (注 1) レジスタにデータを書き込んでも、送信は開始されません。送信を開始する前に、必ず受信エラーフラグを 0 にしてください。

注 .　SCR/SCR_SMCI.RE ビットを 0 にしてシリアル受信を禁止すると、受信エラーフラグは 0 になりません。

注 1.　簡易 SPI モードでは、FTDRH レジスタを使用しないでください。

29.14.6　クロック同期送信に関する制約事項（クロック同期式モードおよび簡易 SPI モード）

同期クロックに外部クロックソースを使用する場合、以下の制約があります。

(1)　送信開始時

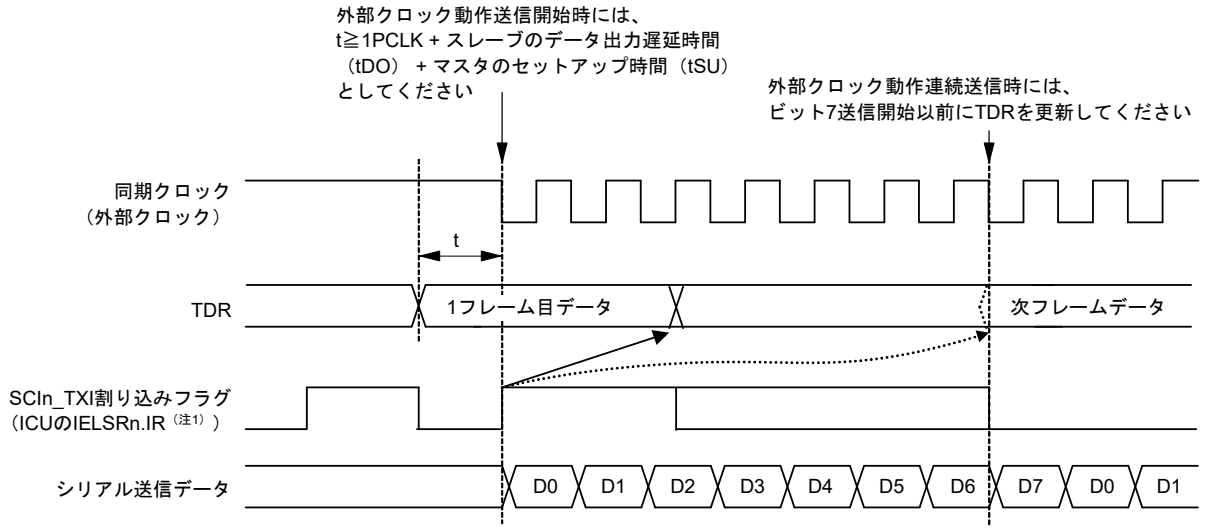
TDR レジスタへの送信データの書き込みから、外部クロック入力の開始まで、下記に示す以上の待機時間を確保してください。

1PCLK + スレーブのデータ出力遅延時間（tDO）+ マスタのセットアップ時間（tSU）（図 29.78 参照）。

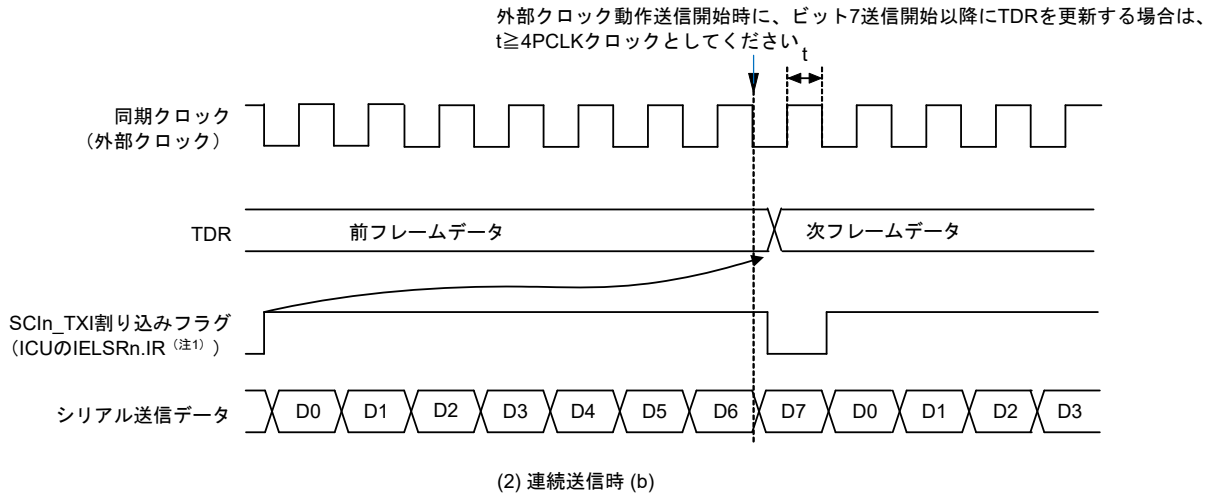
(2)　連続送信時

送信クロックの 7 ビット目の立ち下がり以前に、TDR または TDRHL レジスタに次の送信データを書き込んでください（図 29.78 参照）。

ビット 7 送信開始以降に TDR を更新する場合は、同期クロックが Low の期間に TDR を更新し、かつ送信クロックの 7 ビット目の High 幅を、4PCLK 以上にしてください（図 29.78 参照）。



(1) 送信開始時および、(2) 連続送信 (a)



(2) 連続送信時 (b)

注 1.　関連する割り込みイベント番号は「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」の章を参照してください。

図 29.78　クロック同期送信時の外部クロック使用に関する制約事項

29.14.7　DMAC または DTC 使用時の制約事項

DMAC または DTC による送受信動作中は、DMAC または DTC に転送情報を設定しないでください。

(1)　TDR（FTDRHL）レジスタへの書き込み

(a)　非 FIFO 選択時

TDR および TDRHL レジスタにデータを書き込むことが可能です。ただし、TDR または TDRHL レジスタに送信データが残っている状態で、TDR または TDRHL レジスタに新しいデータを書き込むと、残っていたデータは TSR レジスタへ転送されず、失われます。DMAC または DTC を使用する場合、TDR または TDRHL レジスタへの送信データの書き込みは、必ず SCIn_TXI 割り込み要求処理ルーチンで行ってください。

(b)　FIFO 選択時

SCR.TE ビットが 1 の場合に、FTDRH および FTDRL レジスタにデータを書き込むことが可能です。FDR.T[4:0] ビットによって、書き込み可能なデータ数を確認してください。

(2)　RDR（FRDRHL）レジスタからの読み出し

DMAC または DTC を用いて RDR および RDRHL レジスタを読み出すときは、対応する SCI チャネルの起動要因として、必ず受信データフル割り込み（SCIn_RXI）を設定してください。

29.14.8　通信の開始に関する注意事項

通信開始時点で ICU の割り込みステータスフラグ（IELSRn.IR フラグ）が 1 のときは、動作許可（SCR/SCR_SMCI.TE ビットを 1、または SCR/SCR_SMCI.RE ビットを 1）にする前に、以下の手順で割り込み要求をクリアしてください。割り込みステータスフラグの詳細については、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

1. 通信が停止していること（SCR/SCR_SMCI.TE ビットまたは SCR/SCR_SMCI.RE ビットが 0 になっていること）を確認します。
2. 対応する割り込み許可ビット（SCR/SCR_SMCI.TIE ビットまたは SCR/SCR_SMCI.RIE ビット）を 0 にします。
3. 対応する割り込み許可ビット（SCR/SCR_SMCI.TIE ビットまたは SCR/SCR_SMCI.RIE ビット）を読み出して、実際に 0 になっていることを確認します。
4. ICU の割り込みステータスフラグ（IELSRn.IR フラグ）を 0 にします。

29.14.9　クロック同期式モードおよび簡易 SPI モードにおける外部クロック入力

クロック同期式モードと簡易 SPI モードでは、外部クロック SCKn 入力を下記のように設定してください。

High パルス期間および Low パルス期間は 2PCLK 以上、周期は 6PCLK 以上

29.14.10　簡易 SPI モードに関する制約事項

(1)　マスタモード

- SPMR.SSE ビットが 1 の場合、SPMR.CKPH ビットと SPMR.CKPOL ビットで設定した送受信クロックの初期値に合わせて、クロック線を抵抗でプルアップまたはプルダウンしてください。これによって、SCR.TE ビットを 0 にしたときにクロック線がハイインピーダンス状態になったり、SCR.TE ビットを 0 から 1 に変更したりしたときにクロック線に意図しないエッジが発生したりするのを防止できます。シングルマスタモードで SPMR.SSE ビットが 0 の場合は、SCR.TE ビットを 0 にしてもクロック線はハイインピーダンスにならないので、プルアップまたはプルダウンは不要です
- クロック遅れあり（SPMR.CKPH ビット = 1）では、図 29.79 に示すように、SCKn 端子の最終クロックエッジ手前のクロックエッジで受信データフル割り込み（SCIn_RXI）が発生します。SCR.TE ビットと SCR.RE ビットを SCKn 端子の最終クロックエッジより前に 0 にすると、SCKn 端子出力がハイインピーダンスとなり、送受信クロックの最後のクロックパルス幅が短くなります。また、SCIn_RXI 割り込みの発生によって、SCKn 端子の最終クロックエッジより前に接続先スレーブの SSn 端子入力信号が High になった場合、スレーブが誤動作する可能性があります
- マルチマスタ構成では、キャラクタの転送中にモードフォルトエラーが発生すると、SSn 端子入力が Low の間に、SCKn 端子出力がハイインピーダンスとなり、接続先スレーブへの送受信クロック供給が停止します。送受信動作再開時のビットずれを回避するために、接続先スレーブの再設定を行ってください

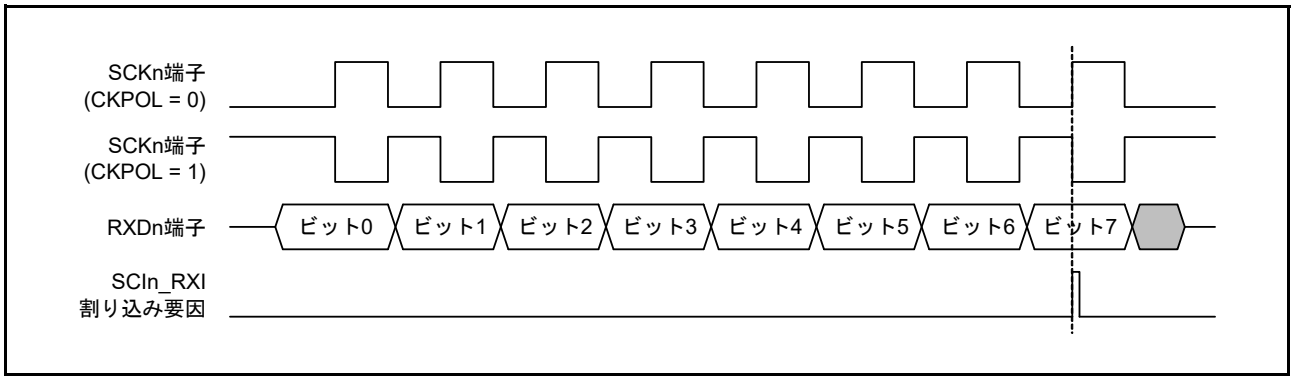


図 29.79　簡易 SPI モードにおける SCIn_RXI 割り込みの発生タイミング（クロック遅れあり）

(2)　スレーブモード

- TDR レジスタへの送信データの書き込みから、外部クロック入力の開始まで、下記に示す以上の待機時間を確保してください
  1PCLK + スレーブのデータ出力遅延時間（t_{DO}）+ マスタのセットアップ時間（t_{SU}）

  また、SSn 端子への Low 入力から、外部クロック入力の開始までについても、5PCLK 以上の待機時間を確保してください
- マスタからの外部クロックの供給は、転送データ長に合わせてください
- SSn 端子入力は、データ転送開始前と完了後に制御する必要があります
- キャラクタ転送中に SSn 端子への入力レベルが Low から High に変化した場合は、SCR.TE ビットと SCR.RE ビットを 0 にして、設定を回復後に 1 バイト目から転送をやり直してください

30. I²C バスインタフェース（IIC）

30.1 概要

本 MCU は、2 チャネルの I²C バスインタフェース（IIC）を内蔵しています。IIC モジュールは、NXP 社の I²C（Inter-Integrated Circuit）バスインタフェース方式に準拠しており、そのサブセット機能を備えています。表 30.1 に IIC の仕様を、図 30.1 に IIC のブロック図を、図 30.2 に入出力端子の外部回路接続例（I²C バス構成例）を示します。表 30.2 に、入出力端子を示します。

表 30.1　IICの仕様 (1/2)

項目	内容
通信フォーマット	• I²Cバスフォーマットまたは SMBus フォーマット • マスタ／スレーブモードを選択可能 • 転送速度に応じたセットアップ時間、ホールド時間、バスフリー時間を自動確保
転送速度	ファストモード対応（～400kbps）
SCLクロック	マスタ動作時、SCLクロックのデューティ比を4%～96%の範囲で設定可能
コンディション発行・コンディション検出	スタートコンディション／リスタートコンディション／ストップコンディションの自動生成、スタートコンディション（リスタートコンディション含む）／ストップコンディションの検出が可能
スレーブアドレス	• 異なるスレーブアドレスを3種類まで設定可能 • 7ビット／10ビットアドレスフォーマット対応（混在可能） • ジェネラルコールアドレス検出、デバイスIDアドレス検出、SMBusのホストアドレス検出可能
アクノリッジ応答	• 送信時、アクノリッジビットの自動ロード ノットアクノリッジビット検出時に次送信データ転送の自動中断が可能 • 受信時、アクノリッジビットの自動送出 8クロック目と9クロック目の間にウェイトありを選択すると、受信値に応じたアクノリッジビット値のソフトウェア制御が可能
ウェイト機能	受信時、SCLクロックのLowホールドによる下記期間のウェイトが可能 • 8クロック目と9クロック目の間をウェイト • 9クロック目と次転送の1クロック目の間をウェイト
SDA出力遅延機能	アクノリッジ送信を含むデータ送信の出力タイミングを遅延させることが可能
アービトレーション	• マルチマスタ対応 - 他のマスタとのSCLクロック衝突時、SCLクロックの同期が可能 - スタートコンディション発行がバスで競合する可能性がある場合、SDA内部信号とSDAラインの状態の不一致によるアービトレーションロストを検出可能 - マスタ動作時、SDA内部信号とSDAラインの状態の不一致によるアービトレーションロストを検出可能 • バスビジー中のスタートコンディション発生によるアービトレーションロストを検出可能（スタートコンディションの二重発行防止） • ノットアクノリッジビット送信時、SDA内部信号とSDAラインの状態の不一致によるアービトレーションロストを検出可能 • スレーブ送信時、データのSDA内部信号とSDAラインの状態の不一致によるアービトレーションロストを検出可能
タイムアウト検出機能	SCLクロックの長時間停止を内部で検出
ノイズ除去	• SCLおよびSDA信号用のデジタルノイズフィルタ • フィルタによるノイズ除去幅をプログラマブルに調整可能
割り込み要因	• 通信エラーまたはイベント発生：アービトレーション検出、NACK、タイムアウト、スタート／リスタートコンディション、またはストップコンディション • 受信データフル（スレーブアドレス一致時含む） • 送信データエンプティ（スレーブアドレス一致時含む） • 送信終了
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態の設定が可能
IICの動作モード	• マスタ送信 • マスタ受信 • スレーブ送信 • スレーブ受信

表 30.1　　IICの仕様 (2/2)

項目	内容
イベントリンク機能（出力）	• 通信エラーまたはイベント発生：アービトレーション検出、NACK、タイムアウト、スタート／リスタートコンディション、またはストップコンディション • 受信データフル（スレーブアドレス一致時含む） • 送信データエンプティ（スレーブアドレス一致時含む） • 送信終了
ウェイクアップ機能（注1）	• ウェイクアップイベントを使用したCPUのソフトウェアスタンバイモードからの復帰が可能

注 1.　　この機能は、IIC のチャネル IIC0 でのみ利用可能です。

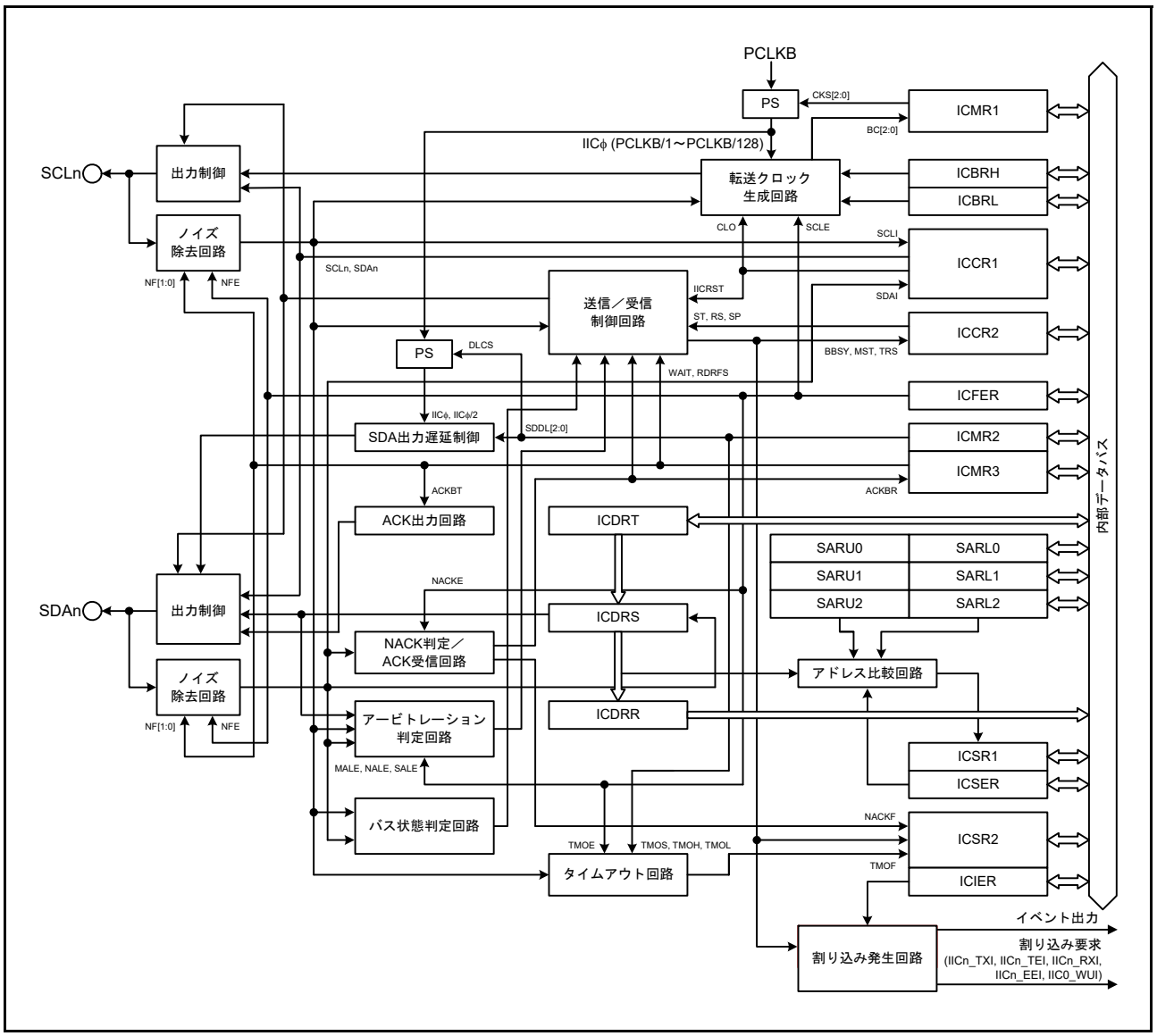


図 30.1　　IIC のブロック図

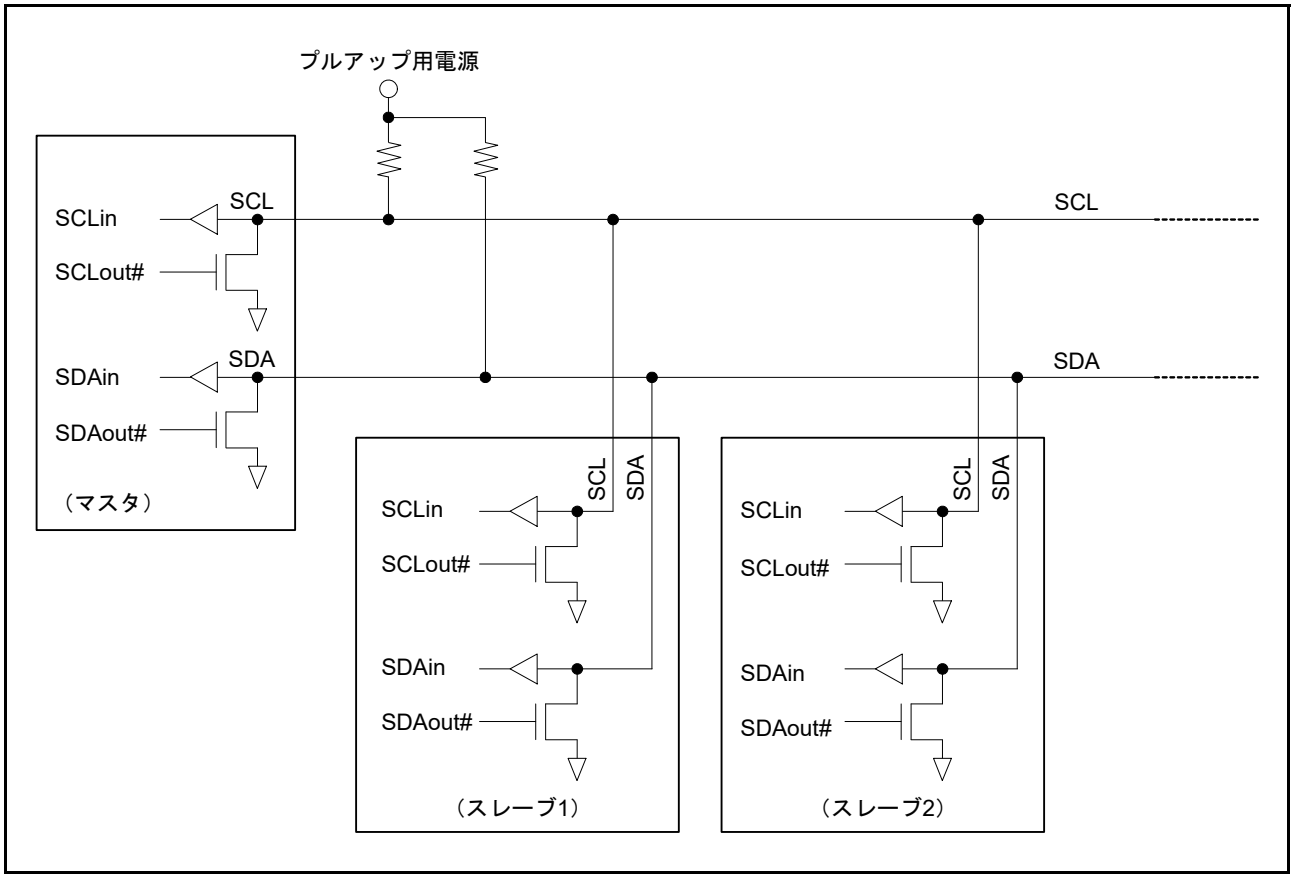


図 30.2　　入出力端子の外部回路接続例（I²C バス構成例）

IIC の各信号の入力レベルは、I²C バス選択時（ICMR3.SMBS = 0）は CMOS レベルであり、SMBus 選択時（ICMR3.SMBS = 1）は TTL レベルです。

表 30.2　　IIC の端子構成

チャネル	端子名	入出力	機能
IIC0	SCL0	入出力	IIC0 シリアルクロック入出力端子
	SDA0	入出力	IIC0 シリアルデータ入出力端子
IIC1	SCL1	入出力	IIC1 シリアルクロック入出力端子
	SDA1	入出力	IIC1 シリアルデータ入出力端子

30.2　レジスタの説明

30.2.1　I2C バスコントロールレジスタ 1（ICCR1）

アドレス　IIC0.ICCR1 4005 3000h, IIC1.ICCR1 4005 3100h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ICE	IICRST	CLO	SOWP	SCLO	SDAO	SCLI	SDAI
リセット後の値	0	0	0	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SDAI	SDAラインモニタ	0：SDAnラインはLow 1：SDAnラインはHigh	R
b1	SCLI	SCLラインモニタ	0：SCLnラインはLow 1：SCLnラインはHigh	R
b2	SDAO	SDA出力制御／モニタ	• 読み出し時 0：IICはSDAn端子をLowにする 1：IICはSDAn端子を解放する • 書き込み時 0：IICはSDAn端子をLowにする 1：IICはSDAn端子を解放する	R/W
b3	SCLO	SCL出力制御／モニタ	• 読み出し時 0：IICはSCLn端子をLowにする 1：IICはSCLn端子を解放する • 書き込み時 0：IICはSCLn端子をLowにする 1：IICはSCLn端子を解放する 外部プルアップ抵抗を使用して信号をHighにしてください。	R/W
b4	SOWP	SCLO/SDAOライトプロテクト	0：SCLOおよびSDAOビットの書き込みを許可 1：SCLOおよびSDAOビットの書き込みを禁止 読むと1が読めます。	R/W
b5	CLO	SCLクロック追加出力	0：SCLクロックを追加で出力しない（デフォルト） 1：SCLクロックを追加で出力する 1クロック出力後、自動的に0になります。	R/W
b6	IICRST	IICバスインタフェース内部リセット	0：IICリセットまたは内部リセットを解除する 1：IICリセットまたは内部リセットを行う これにより、ビットカウンタをクリアし、SCLn/SDAn出力ラッチを解除します。	R/W
b7	ICE	IICバスインタフェース許可	0：禁止（SCLnおよびSDAn端子は非駆動状態） 1：許可（SCLnおよびSDAn端子は駆動状態） IICRSTビットとの組み合わせで、IICリセット、または内部リセットを選択します。	R/W

SDAO ビット（SDA 出力制御／モニタ）、SCLO ビット（SCL 出力制御／モニタ）

IIC から出力される SDAn 信号と SCLn 信号を直接操作します。

これらのビットに書き込む場合は、SOWP ビットにも 0 を書いてください。これらのビットを設定すると、入力バッファを介して IIC に入力されます。スレーブモードに設定していると、ビットの設定によってはスタートコンディションを検出してバスを解放することがあります。

スタートコンディション、ストップコンディション、リスタートコンディションの期間中、または送受信中に、これらのビットを書き換えないでください。これらの期間に書き換えた場合の動作は保証されません。これらのビットを読んだ場合は、そのとき IIC が出力している信号の状態が読めます。

CLO ビット（SCL クロック追加出力）

SCL クロックを 1 クロック単位で追加出力できるようにするもので、デバッグ時またはエラー処理時に使用します。

通常は 0 にしてください。通常の通信状態で本ビットを 1 にすると、通信エラーの原因になります。この機能の詳細については、30.12.2　SCL クロック追加出力機能を参照してください。

IICRST ビット（IIC バスインタフェース内部 リセット）

IIC の内部状態をリセットします。

本ビットを 1 にすると、IIC リセットまたは内部リセットを起動できます。IIC リセットまたは内部リセットのどちらが起動するかは、ICE ビットと組み合わせた IICRST ビットの設定によって決定されます。表 30.3 に IIC のリセットの種類を示します。

IIC リセットでは、ICCR1.ICE ビットと ICCR1.ICCRST1 ビット以外の IIC の全レジスタと内部状態が初期化されます。

内部リセットは下記を初期化します。

- ビットカウンタ（ICMR1.BC[2:0] ビット）
- I2C バスシフトレジスタ（ICDRS）
- I2C バスステータスレジスタ（ICSR1 および ICSR2）
- SDAO および SCLO 出力制御／モニタ（ICCR1.SDAO ビットおよび ICCR1.SCLO ビット）
- I2C バスコントロールレジスタ 2（ICCR2.BBSY ビット以外）

各レジスタのリセット条件については、30.15　各コンディション発行時のレジスタの状態を参照してください。

動作中に（ICE ビット = 1 の状態で）IICRST ビットを 1 にして内部リセットを行うと、ポートの設定と IIC のコントロールレジスタや設定レジスタを初期化することなく、IIC の内部状態がリセットされます。また、IIC が Low を出力したままハングアップした場合、内部状態をリセットすることで、Low 出力状態が解除され、SCLn 端子と SDAn 端子がハイインピーダンスの状態でバスが解放されます。

注 .　スレーブモード時に、マスタデバイスとの通信中に生じたバスのハングアップに対して IICRST ビットで内部リセットを行うと、ビットカウンタ情報の差異が原因で、スレーブデバイスとマスタデバイスが異なる状態になる可能性があります。そのため、スレーブモード時には内部リセットは行わないでください。復帰処理はマスタデバイスから行うようにしてください。スレーブモード時に SCLn ラインが Low 出力状態のまま IIC がハングアップしたため、内部リセットが必要になった場合は、内部リセット後にマスタデバイスからリスタートコンディションを発行するか、またはストップコンディションを発行して、スタートコンディションから通信をやり直してください。スレーブデバイスでのみ単独でリセットを行い、マスタデバイスからスタートコンディションまたはリスタートコンディション発行がないまま通信が再開されると、双方が非同期で動作することになるため同期ズレの原因になります。

表 30.3　IICのリセット

IICRST	ICE	状態	内容
1	0	IICリセット	ICCR1.ICEビットとICCR1.ICCRSTビット以外のIICの全レジスタと内部状態をリセット
	1	内部リセット	下記をリセット： • ICMR1.BC[2:0]ビット • ICSR1レジスタ • ICSR2レジスタ • ICDRSレジスタ • ICCR1.SCLOビット • ICCR1.SDAOビット • ICCR2レジスタ（ICCR2.BBSYビット以外） • IICの内部状態

ICE ビット（IIC バスインタフェース許可）

SCLn および SDAn 端子の駆動状態／非駆動状態を選択します。また、IICRST ビットと組み合わせて、実行するリセットを 2 種類から選ぶことができます。リセットの種類については、表 30.3 を参照してください。

IIC を使用するときは、ICE ビットを 1 にしてください。ICE ビットを 1 にすると、SCLn および SDAn 端子は駆動状態になります。IIC を使用しないときは、ICE ビットを 0 にしてください。ICE ビットを 0 にすると、SCLn および SDAn 端子は非駆動状態になります。端子機能制御を設定するときに、SCLn または SDAn 端子を IIC に割り当てないでください。これらの端子が IIC に割り当てられると、スレーブアドレス比較が行われます。

30.2.2 I²C バスコントロールレジスタ 2（ICCR2）

アドレス IIC0.ICCR2 4005 3001h, IIC1.ICCR2 4005 3101h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BBSY	MST	TRS	—	SP	RS	ST	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	ST	スタートコンディション発行要求	0：スタートコンディション要求を発行しない 1：スタートコンディション要求を発行する	R/W
b2	RS	リスタートコンディション発行要求	0：リスタートコンディション要求を発行しない 1：リスタートコンディション要求を発行する	R/W
b3	SP	ストップコンディション発行要求	0：ストップコンディション要求を発行しない 1：ストップコンディション要求を発行する	R/W
b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	TRS	送信／受信モード	0：受信モード 1：送信モード	R/W （注1）
b6	MST	マスタ／スレーブモード	0：スレーブモード 1：マスタモード	R/W （注1）
b7	BBSY	バスビジー検出フラグ	0：I²Cバスは解放状態（バスフリー状態） 1：I²Cバスは占有状態（バスビジー状態）	R

注 1.　ICMR1.MTWP ビットが 1 の場合に、MST および TRS ビットへの書き込みが可能です。

ST ビット（スタートコンディション発行要求）

マスタモードへの遷移を要求し、スタートコンディションを発行します。

本ビットを 1 にすると、BBSY フラグが 0（バスフリー状態）のときに、スタートコンディションが発行されます。スタートコンディション発行の詳細については、30.11　スタートコンディション、リスタートコンディション、ストップコンディション発行機能を参照してください。

［1 になる条件］

- 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき
- スタートコンディションが発行されたとき（スタートコンディションが検出されたとき）
- ICSR2.AL（アービトレーションロスト）フラグが 1 になったとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

注 .　BBSY フラグが 0（バスフリー状態）のときに、ST ビットを 1（スタートコンディション要求）にする設定のみ行ってください。BBSY フラグが 1（バスビジー状態）のときに、ST ビットを 1（スタートコンディション要求）にすると、アービトレーションロストが発生する場合があります。

RS ビット（リスタートコンディション発行要求）

マスタモード時にリスタートコンディションの発行を要求します。

本ビットを 1 にしてリスタートコンディションを要求すると、BBSY フラグが 1（バスビジー状態）かつ MST ビットが 1（マスタモード）のときに、リスタートコンディションが発行されます。リスタートコンディション発行の詳細については、30.11　スタートコンディション、リスタートコンディション、ストップコンディション発行機能を参照してください。

［1 になる条件］

- ICCR2.BBSY フラグが 1 の状態で、1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき
- リスタートコンディションが発行されたとき（スタートコンディションが検出されたとき）
- ICSR2.AL（アービトレーションロスト）フラグが 1 になったとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

注 .　ストップコンディション発行中に RS ビットを 1 にしないでください。

注 .　スレーブモードで RS ビットを 1（リスタートコンディション要求）にすると、リスタートコンディションは発行されず、RS ビットは 1 のままになります。RS ビットがクリアされていない状態で動作モードをマスタモードに変更すると、リスタートコンディションが発行される場合があります。

SP ビット（ストップコンディション発行要求）

マスタモード時にストップコンディションの発行を要求します。

本ビットを 1 にすると、BBSY フラグが 1（バスビジー状態）かつ MST ビットが 1（マスタモード）のときに、ストップコンディションが発行されます。ストップコンディション発行の詳細については、30.11　スタートコンディション、リスタートコンディション、ストップコンディション発行機能を参照してください。

［1 になる条件］

- ICCR2.BBSY フラグと ICCR2.MST ビットが両方とも 1 の状態で、1 を書いたとき

［0 になる条件］

- 0 を書いたとき
- ストップコンディションが発行されたとき（ストップコンディションが検出されたとき）
- ICSR2.AL（アービトレーションロスト）フラグが 1 になったとき
- スタートコンディションおよびリスタートコンディションが検出されたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

注 .　BBSY フラグが 0（バスフリー状態）のとき、SP ビットへの書き込みはできません。

注 .　リスタートコンディション発行中に SP ビットを 1 にしないでください。

TRS ビット（送信／受信モード）

送信／受信モードを示します。

IIC は、TRS ビットが 0 のときは受信モード、1 のときは送信モードになります。TRS ビットと MST ビットの組み合わせで IIC の動作モードを示します。

スタートコンディションの発行または検出時、および R/W# ビットの設定時に、TRS ビット値は自動的に 1（送信モード）または 0（受信モード）に変化します。ICMR1.MTWP ビットが 1 のとき、TRS ビットへ書き込むことは可能ですが、通常の使用時は、書き込む必要はありません。

［1 になる条件］

- スタートコンディション要求によってスタートコンディションが正常に発行されたとき（ST ビットが 1 の状態で、スタートコンディションが検出されたとき）
- リスタートコンディション要求によってリスタートコンディションが正常に発行されたとき（RS ビットが 1 の状態で、リスタートコンディションが検出されたとき）
- マスタモード時、スレーブアドレスに付加した R/W# ビットが 0 になったとき
- スレーブモードで受信したアドレスが ICSER レジスタで有効にしたアドレスと一致し、かつ R/W# ビットが 1 になったとき
- ICMR1.MTWP ビットが 1 の状態で、TRS ビットに 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- ストップコンディションが検出されたとき
- ICSR2.AL（アービトレーションロスト）フラグが 1 になったとき
- マスタモードで、R/W# ビットが付加されたスレーブアドレスに 1 が設定されるとき
- スレーブモード時、受信したアドレスが ICSER レジスタで有効にしたアドレスと一致し、かつ受信した R/W# ビットの値が 0 のとき（ジェネラルコールアドレスを受信した場合を含む）
- スレーブモード時、リスタートコンディションが検出されたとき（ICCR2.BBSY = 1、ICCR2.MST = 0 の状態でスタートコンディションが検出されたとき）
- ICMR1.MTWP ビットが 1 の状態で、TRS ビットに 0 を書いたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

MST ビット（マスタ／スレーブモード）

マスタモード／スレーブモードを示します。

IIC は、MST ビットが 0 のときはスレーブモード、1 のときはマスタモードになります。MST ビットと TRS ビットの組み合わせで IIC の動作モードを示します。

スタートコンディションの発行時、あるいはストップコンディションの発行または検出時、MST ビットの値は自動的に 1（マスタモード）または 0（スレーブモード）に変化します。ICMR1.MTWP ビットが 1 のとき、MST ビットへ書き込むことは可能ですが、通常の使用時は、書き込む必要はありません。

［1 になる条件］

- スタートコンディション要求によってスタートコンディションが正常に発行されたとき（ST ビットが 1 の状態で、スタートコンディションが検出されたとき）
- ICMR1.MTWP ビットが 1 の状態で、MST ビットに 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- ストップコンディションが検出されたとき
- ICSR2.AL（アービトレーションロスト）フラグが 1 になったとき
- ICMR1.MTWP ビットが 1 の状態で、MST ビットに 0 を書いたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

BBSY フラグ（バスビジー検出フラグ）

I²C バスが占有されているか（バスビジー状態）、解放されているか（バスフリー状態）を示します。

SCLn ラインが High のときに SDAn ラインが High から Low に変化すると、スタートコンディションが発行されたとみなされて、本フラグは 1 になります。

SCLn ラインが High の状態で SDAn ラインが Low から High に変化するときに、バスフリー時間（ICBRL レジスタの設定）のスタートコンディションが検出されないと、ストップコンディションが発行されたとみなされて、本フラグは 0 になります。

［1 になる条件］

- スタートコンディションが検出されたとき

［0 になる条件］

- ストップコンディション検出後、バスフリー時間（ICBRL レジスタの設定）スタートコンディションが検出されないとき
- ICCR1.ICE ビットが 0 の状態で、ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いたとき（IIC リセット）

30.2.3 I²C バスモードレジスタ 1（ICMR1）

アドレス IIC0.ICMR1 4005 3002h, IIC1.ICMR1 4005 3102h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MTWP	CKS[2:0]			BCWP	BC[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	1	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	BC[2:0]	ビットカウンタ	b2 b0 0 0 0：9ビット 0 0 1：2ビット 0 1 0：3ビット 0 1 1：4ビット 1 0 0：5ビット 1 0 1：6ビット 1 1 0：7ビット 1 1 1：8ビット	R/W （注1）
b3	BCWP	BCライトプロテクト	0：BC[2:0]ビットへの書き込み許可 1：BC[2:0]ビットへの書き込み禁止 読むと1が読めます。	R/W （注1）
b6-b4	CKS[2:0]	内部基準クロック選択	IICの内部基準クロックソース（IICφ）を選択します。 b6 b4 0 0 0：PCLKBクロック 0 0 1：PCLKB/2クロック 0 1 0：PCLKB/4クロック 0 1 1：PCLKB/8クロック 1 0 0：PCLKB/16クロック 1 0 1：PCLKB/32クロック 1 1 0：PCLKB/64クロック 1 1 1：PCLKB/128クロック	R/W
b7	MTWP	MST/TRSライトプロテクト	0：ICCR2.MST、TRSビットへの書き込み禁止 1：ICCR2.MST、TRSビットへの書き込み許可	R/W

注 1.　BC[2:0] ビットを書き換える場合は、同時に BCWP ビットを 0 にしてください。

BC[2:0] ビット（ビットカウンタ）

SCLn ラインの立ち上がりエッジの検出時に、残りの転送ビット数を示すカウンタです。読み出しおよび書き込みは可能ですが、通常はこれらのビットへのアクセスは不要です。

なお、これらのビットへ書き込む場合は、SCLn ラインが Low の状態で、転送するデータのビット数＋1（追加のアクノリッジビット分）を転送フレーム間で指定してください。

BC[2:0] ビットの値は、アクノリッジビットを含むデータ転送の終了時、あるいはスタートコンディション／リスタートコンディションの検出時に 000b に戻ります。

30.2.4 I²C バスモードレジスタ 2（ICMR2）

アドレス IIC0.ICMR2 4005 3003h, IIC1.ICMR2 4005 3103h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DLCS	SDDL[2:0]			—	TMOH	TMOL	TMOS
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TMOS	タイムアウト検出時間選択	0：ロングモードを選択 1：ショートモードを選択	R/W
b1	TMOL	タイムアウトLカウント制御	0：SCLnラインがLowの間カウントを禁止 1：SCLnラインがLowの間カウントを許可	R/W
b2	TMOH	タイムアウトHカウント制御	0：SCLnラインがHighの間カウントを禁止 1：SCLnラインがHighの間カウントを許可	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	SDDL[2:0]	SDA出力遅延カウンタ	• ICMR2.DLCS = 0（IICφ）のとき b6 b5 b4 0 0 0：出力遅延なし 0 0 1：IICφの1サイクル 0 1 0：IICφの2サイクル 0 1 1：IICφの3サイクル 1 0 0：IICφの4サイクル 1 0 1：IICφの5サイクル 1 1 0：IICφの6サイクル 1 1 1：IICφの7サイクル • ICMR2.DLCS = 1（IICφ/2）のとき b6 b5 b4 0 0 0：出力遅延なし 0 0 1：IICφの1または2サイクル 0 1 0：IICφの3または4サイクル 0 1 1：IICφの5または6サイクル 1 0 0：IICφの7または8サイクル 1 0 1：IICφの9または10サイクル 1 1 0：IICφの11または12サイクル 1 1 1：IICφの13または14サイクル	R/W
b7	DLCS	SDA出力遅延クロックソース選択	0：SDA出力遅延カウンタのクロックソースに内部基準クロック（IICφ）を選択 1：SDA出力遅延カウンタのクロックソースに内部基準クロックの2分周（IICφ/2）を選択（注1）	R/W

注 1.　DLCS = 1（IICφ/2）の設定は、SCL が Low のときのみ有効です。SCL が High のとき、DLCS = 1 の設定は無効となり、クロックソースは内部基準クロック（IICφ）となります。

TMOS ビット（タイムアウト検出時間選択）

タイムアウト検出機能が有効（ICFER.TMOE ビット = 1）の場合に、タイムアウト検出時間としてロングモードまたはショートモードを選択します。本ビットを 0 にすると、ロングモードが選択されます。TMOS ビットを 1 にすると、ショートモードが選択されます。ロングモードでは、タイムアウト検出用の内部カウンタが 16 ビットカウンタとして機能します。ショートモードでは、このカウンタが 14 ビットカウンタとして機能します。SCLn ラインが、このカウンタを TMOH ビットと TMOL ビットの指定通り動作させる状態にあるとき、カウンタは内部基準クロック（IICφ）をカウントソースとしてアップカウントを行います。

タイムアウト検出機能の詳細については、30.12.1　タイムアウト検出機能を参照してください。

TMOL ビット（タイムアウト L カウント制御）

SCLn ラインが Low ホールドであり、かつタイムアウト検出機能有効時（ICFER.TMOE ビット = 1）に、タイムアウト検出機能の内部カウンタによるカウントアップを許可または禁止します。

TMOH ビット（タイムアウト H カウント制御）

SCLn ラインが High ホールドであり、かつタイムアウト検出機能有効時（ICFER.TMOE ビット = 1）に、タイムアウト検出機能の内部カウンタによるカウントアップを許可または禁止します。

SDDL[2:0] ビット（SDA 出力遅延カウンタ）

SDDL[2:0] ビットの設定値を使用して、SDA 出力を遅延させることができます。SDA 出力遅延カウンタは、DLCS ビットで選択したクロックソースで動作します。この機能の設定値は、アクノリッジビット送出を含むすべての種類の SDA 出力で使用可能です。

SDA 出力遅延時間は、データ有効時間／アクノリッジ有効時間（注 1）に対する I2C バス規格、または SMBus 規格を満たすように、「データホールド時間（300ns 以上 + SCL クロックの Low 幅）- データセットアップ時間（250ns）」の範囲内で設定してください。規格外に設定すると、デバイス間の通信に誤動作を引き起こすか、バスの状態によってはスタートコンディションまたはストップコンディションを誤って表示する可能性があります。

この機能の詳細については、30.5　SDA 出力遅延機能を参照してください。

注 1.　データ有効時間／アクノリッジ有効時間
3450ns（～ 100kbps）：スタンダードモード（Sm）
900ns（～ 400kbps）：ファストモード（Fm）

30.2.5 I²C バスモードレジスタ 3（ICMR3）

アドレス　IIC0.ICMR3 4005 3004h, IIC1.ICMR3 4005 3104h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SMBS	WAIT	RDRFS	ACKWP	ACKBT	ACKBR	NF[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	NF[1:0]	ノイズフィルタ段数選択	b1 b0 0 0：1IICφサイクル以下のノイズを除去（フィルタは1段） 0 1：2IICφサイクル以下のノイズを除去（フィルタは2段） 1 0：3IICφサイクル以下のノイズを除去（フィルタは3段） 1 1：4IICφサイクル以下のノイズを除去（フィルタは4段）	R/W
b2	ACKBR	受信アクノリッジ	0：アクノリッジビットに0を受信（ACK受信） 1：アクノリッジビットに1を受信（NACK受信）	R
b3	ACKBT	送信アクノリッジ	0：アクノリッジビットに0を送出（ACK送信） 1：アクノリッジビットに1を送出（NACK送信）	R/W （注1）
b4	ACKWP	ACKBTライトプロテクト	0：ACKBTビットへの書き込み禁止 1：ACKBTビットへの書き込み許可	R/W （注1）
b5	RDRFS	RDRFフラグセットタイミング選択	0：SCLクロックの9クロック目の立ち上がりでRDRFフラグをセット 8クロック目の立ち下がりでSCLnラインのLowホールドを行わない 1：SCLクロックの8クロック目の立ち上がりでRDRFフラグをセット 8クロック目の立ち下がりでSCLnラインのLowホールドを行う LowホールドはACKBTビットへの書き込みで解除されます。	R/W （注2）
b6	WAIT	WAIT	0：ウェイトなし 9クロック目と1クロック目の間でSCLnのLowホールドを行わない 1：ウェイトあり 9クロック目と1クロック目の間でSCLnのLowホールドを行う LowホールドはICDRRレジスタの読み出しで解除されます。	R/W （注2）
b7	SMBS	SMBus/I²Cバス選択	0：I²Cバスを選択 1：SMBusを選択	R/W

注 1.　ACKBT ビットに書き込む場合は、ACKWP ビットがすでに 1 の状態であるときにのみ行ってください。ソフトウェアが ACKWP ビットと ACKBT ビットに同時に 1 を書き込んでも、ACKBT ビットは 1 になりません。
注 2.　WAIT ビットと RDRFS ビットは、受信モードでのみ有効（送信モードでは無効）です。

NF[1:0] ビット（ノイズフィルタ段数選択）

デジタルノイズフィルタの段数を選択します。

デジタルノイズフィルタ機能の詳細については、30.6　デジタルノイズフィルタ回路を参照してください。

注 .　ノイズフィルタで除去するノイズ幅は、SCLn ラインの High 幅または Low 幅よりも狭くなるように設定してください。ノイズ幅の設定が［SCL クロックの幅：High 幅または Low 幅のいずれか短い方］-［1.5 内部基準クロック（IICφ）サイクル + アナログノイズフィルタ：120ns（参考値）］の値以上の場合、IIC のノイズフィルタ機能は SCL クロックをノイズとみなし、IIC は正常に動作することができなくなる可能性があります。

ACKBR ビット（受信アクノリッジ）

送信モード時に受信デバイスから受け取ったアクノリッジビットの内容を格納します。

［1 になる条件］

- ICCR2.TRS ビットが 1 の状態で、アクノリッジビットに 1 を受信したとき

［0 になる条件］

- ICCR2.TRS ビットが 1 の状態で、アクノリッジビットに 0 を受信したとき
- ICCR1.ICE ビットが 0 の状態で、ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いたとき（IIC リセット）

ACKBT ビット（送信アクノリッジ）

受信モード時に送出されるアクノリッジビットを設定します。

［1 になる条件］

- ACKWP ビットが 1 の状態で、本ビットに 1 を書いたとき

［0 になる条件］

- ACKWP ビットが 1 の状態で、本ビットに 0 を書いたとき
- ICCR2.SP ビットが 1 の状態で、ストップコンディションの発行を検出したとき
- ICCR1.ICE ビットが 0 の状態で、ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いたとき（IIC リセット）

ACKWP ビット（ACKBT ライトプロテクト）

ACKBT ビットの書き込み許可を制御します。

RDRFS ビット（RDRF フラグセットタイミング選択）

受信モード時の RDRF フラグのセットタイミングと、SCL クロックの 8 クロック目の立ち下がりで SCLn ラインの Low ホールドを行うかどうかを選択します。

RDRFS ビットが 0 のとき、SCL クロックの 8 クロック目の立ち下がりで SCLn ラインの Low ホールドは行わず、SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで RDRF フラグを 1 にします。

RDRFS ビットが 1 のとき、SCL クロックの 8 クロック目の立ち下がりで SCLn ラインの Low ホールドを行い、SCL クロックの 8 クロック目の立ち上がりで RDRF フラグを 1 にします。この SCLn ラインの Low ホールドは、ACKBT ビットへの書き込みによって解除されます。

この設定でデータを受信した後、アクノリッジビット送出前に、SCLn ラインは自動的に Low ホールドされます。これによって、受信データの内容に応じた ACK（ACKBT ビットが 0）または NACK（ACKBT ビットが 1）の送出処理が可能となります。

WAIT ビット（WAIT）

受信モードにおいて 1 バイト受信ごとに、受信データバッファ（ICDRR レジスタ）の読み出しが完了するまで、SCL クロックの 9 クロック目と 1 クロック目の間を Low ホールドするかどうかを制御します。

WAIT ビットが 0 のとき、SCL クロックの 9 クロック目と 1 クロック目の間の Low ホールドは行わず、受信動作をそのまま継続します。RDRFS ビットと WAIT ビットがともに 0 のとき、ダブルバッファによる連続受信動作が可能です。

WAIT ビットが 1 のとき、1 バイト受信ごとに、9 クロック目の立ち下がり以降、ICDRR レジスタ値が読み出されるまでの間、SCLn ラインを Low にホールドします。これによって、1 バイトごとの受信動作が可能になります。

注 .　WAIT ビットの値を読み出す場合は、必ず最初に ICDRR レジスタを読み出してください。

SMBS ビット（SMBus/I²C バス選択）

SMBS ビットを 1 にすると、SMBus が選択されて、ICSER.HOAE ビットが有効になります。

30.2.6 I²C バスファンクションイネーブルレジスタ（ICFER）

アドレス　IIC0.ICFER 4005 3005h, IIC1.ICFER 4005 3105h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	SCLE	NFE	NACKE	SALE	NALE	MALE	TMOE
リセット後の値	0	1	1	1	0	0	1	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TMOE	タイムアウト検出機能有効	0：タイムアウト検出機能は無効 1：タイムアウト検出機能は有効	R/W
b1	MALE	マスタアービトレーションロスト検出有効	0：マスタアービトレーションロスト検出は無効 アービトレーションロスト発生時は、ICCR2.MSTビットとTRSビットの自動クリアも禁止する。 1：マスタアービトレーションロスト検出は有効 アービトレーションロスト発生時は、ICCR2.MSTビットとTRSビットの自動クリアも許可する。	R/W
b2	NALE	NACK送信アービトレーションロスト検出有効	0：NACK送信アービトレーションロスト検出は無効 1：NACK送信アービトレーションロスト検出は有効	R/W
b3	SALE	スレーブアービトレーションロスト検出有効	0：スレーブアービトレーションロスト検出は無効 1：スレーブアービトレーションロスト検出は有効	R/W
b4	NACKE	NACK受信転送中断許可	0：NACK受信時、転送を中断しない（転送中断禁止） 1：NACK受信時、転送を中断する（転送中断許可）	R/W
b5	NFE	デジタルノイズフィルタ回路有効	0：デジタルノイズフィルタ回路を使用しない 1：デジタルノイズフィルタ回路を使用する	R/W
b6	SCLE	SCL同期回路有効	0：SCL同期回路を使用しない 1：SCL同期回路を使用する	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

TMOE ビット（タイムアウト検出機能有効）

タイムアウト検出機能を有効または無効にします。

タイムアウト検出機能の詳細については、30.12.1　タイムアウト検出機能を参照してください。

MALE ビット（マスタアービトレーションロスト検出有効）

マスタモード時にアービトレーションロスト検出機能を使用するかどうかを指定します。通常の動作では、本ビットを 1 にしてください。

NALE ビット（NACK 送信アービトレーションロスト検出有効）

受信モード時の NACK 送出中に ACK が検出された場合（同じアドレスのスレーブがバス上に存在した場合や、2 つ以上のマスタが同時に同一のスレーブデバイスを選択し、それぞれ受信バイト数が異なる場合など）に、アービトレーションロストを発生させるかどうかを選択します。

SALE ビット（スレーブアービトレーションロスト検出有効）

スレーブ送信モード時に、送出中の値と異なる値がバス上で検出された場合（同じアドレスのスレーブがバス上に存在した場合や、ノイズが原因で送信データとの不一致が生じた場合など）に、アービトレーションロストを発生させるかどうかを選択します。

NACKE ビット（NACK 受信転送中断許可）

送信モード時にスレーブデバイスから NACK を受信した場合、転送動作を継続するか中断するかを選択します。通常の動作では、本ビットを 1 にしてください。

NACKE ビットが 1 の状態で NACK を受信した場合、次の転送動作が中断されます。NACKE ビットが 0 の場合は、受信したアクノリッジの内容にかかわらず、次の転送動作が継続されます。

NACK 受信転送中断機能の詳細については、30.9.2　NACK 受信転送中断機能を参照してください。

SCLE ビット（SCL 同期回路有効）

SCL クロックを SCL 入力クロックと同期させるかどうかを選択します。通常の動作では、本ビットを 1 にしてください。

SCLE ビットを 0（SCL 同期回路を使用しない）にすると、IIC は SCL クロックを SCL 入力クロックと同期させません。この設定の場合、SCLn ラインの状態にかかわらず、IIC は、ICBRH および ICBRL レジスタで設定した転送速度の SCL クロックを出力します。そのため、I²C バスラインのバス負荷が規格値よりも大幅に大きい場合や、マルチマスタにおいて SCL クロック出力が重なった場合に、規格外の短い SCL クロックが出力される場合があります。また、SCL 同期回路を使用しないと、スタートコンディション／リスタートコンディション／ストップコンディションの発行と、追加 SCL クロックサイクルの連続出力にも影響します。

SCLE ビットは、設定した転送速度が出力されているか確認する場合を除き、0 にしないでください。

30.2.7 I2C バスステータスイネーブルレジスタ（ICSER）

アドレス　IIC0.ICSER 4005 3006h, IIC1.ICSER 4005 3106h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	HOAE	—	DIDE	—	GCAE	SAR2E	SAR1E	SAR0E
リセット後の値	0	0	0	0	1	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SAR0E	スレーブアドレスレジスタ0有効	0：SARL0およびSARU0のスレーブアドレスは無効 1：SARL0およびSARU0のスレーブアドレスは有効	R/W
b1	SAR1E	スレーブアドレスレジスタ1有効	0：SARL1およびSARU1のスレーブアドレスは無効 1：SARL1およびSARU1のスレーブアドレスは有効	R/W
b2	SAR2E	スレーブアドレスレジスタ2有効	0：SARL2およびSARU2のスレーブアドレスは無効 1：SARL2およびSARU2のスレーブアドレスは有効	R/W
b3	GCAE	ジェネラルコールアドレス有効	0：ジェネラルコールアドレス検出は無効 1：ジェネラルコールアドレス検出は有効	R/W
b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	DIDE	デバイスIDアドレス検出有効	0：デバイスIDアドレス検出は無効 1：デバイスIDアドレス検出は有効	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	HOAE	ホストアドレス有効	0：ホストアドレス検出は無効 1：ホストアドレス検出は有効	R/W

SARyE ビット（スレーブアドレスレジスタ y 有効）（y = 0 ～ 2）

受信したスレーブアドレスと、SARLy および SARUy レジスタで設定したスレーブアドレスを有効または無効にします。

SARyE ビットを 1 にすると、SARLy および SARUy レジスタで設定したスレーブアドレスが有効になり、受信したスレーブアドレスと比較が行われます。SARyE ビットを 0 にすると、SARLy および SARUy レジスタで設定したスレーブアドレスが無効になり、受信したスレーブアドレスと一致しても無視されます。

GCAE ビット（ジェネラルコールアドレス有効）

ジェネラルコールアドレス（0000 000b + 0[W]：すべて 0）を受信した場合、それを無視するかどうかを選択します。

本ビットを 1 にした場合、受信したスレーブアドレスがジェネラルコールアドレスと一致すると、IIC は、SARLy および SARUy レジスタ（y = 0 ～ 2）で設定したスレーブアドレスとは無関係に、受信したスレーブアドレスをジェネラルコールアドレスと認識し、データ受信動作を行います。本ビットを 0 にした場合、受信したスレーブアドレスは、ジェネラルコールアドレスと一致しても無視されます。

DIDE ビット（デバイス ID アドレス検出有効）

スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出後の第 1 フレームでデバイス ID（1111 100b）を受信した場合、デバイス ID アドレスと認識して動作させるかどうかを選択します。

DIDE ビットが 1 のときに、受信した第 1 フレームがデバイス ID と一致すると、IIC はデバイス ID アドレスを受信したと認識します。続く R/W# ビットが 0[W] の場合、IIC は第 2 フレーム以降をスレーブアドレスとみなして、受信動作を継続します。DIDE ビットが 0 の場合、IIC は受信した第 1 フレームがデバイス ID アドレスと一致してもそれを無視し、第 1 フレームを通常のスレーブアドレスと認識します。

デバイス ID アドレス検出機能の詳細については、30.7.3　デバイス ID アドレス検出機能を参照してください。

HOAE ビット（ホストアドレス有効）

ICMR3.SMBS ビットが 1 の場合、受信したホストアドレス（0001 000b）を無視するかどうかを指定します。

本ビットが 1 で、かつ ICMR3.SMBS ビットも 1 の場合、受信したスレーブアドレスがホストアドレスと一致すると、IIC は SARLy および SARUy レジスタ（y = 0 ～ 2）で設定したスレーブアドレスとは無関係に、受信したスレーブアドレスをホストアドレスとして認識し、受信動作を行います。

ICMR3.SMBS ビットまたは HOAE ビットが 0 の場合、受信したスレーブアドレスがホストアドレスと一致しても無視されます。

30.2.8 I²C バス割り込みイネーブルレジスタ（ICIER）

アドレス　IIC0.ICIER 4005 3007h, IIC1.ICIER 4005 3107h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TIE	TEIE	RIE	NAKIE	SPIE	STIE	ALIE	TMOIE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TMOIE	タイムアウト割り込み要求許可	0：タイムアウト割り込み（TMOIn）要求を禁止 1：タイムアウト割り込み（TMOIn）要求を許可	R/W
b1	ALIE	アービトレーションロスト割り込み要求許可	0：アービトレーションロスト割り込み（ALIn）要求を禁止 1：アービトレーションロスト割り込み（ALIn）要求を許可	R/W
b2	STIE	スタートコンディション検出割り込み要求許可	0：スタートコンディション検出割り込み（STIn）要求を禁止 1：スタートコンディション検出割り込み（STIn）要求を許可	R/W
b3	SPIE	ストップコンディション検出割り込み要求許可	0：ストップコンディション検出割り込み（SPIn）要求を禁止 1：ストップコンディション検出割り込み（SPIn）要求を許可	R/W
b4	NAKIE	NACK受信割り込み要求許可	0：NACK受信割り込み（NAKIn）要求を禁止 1：NACK受信割り込み（NAKIn）要求を許可	R/W
b5	RIE	受信データフル割り込み要求許可	0：受信データフル割り込み（IICn_RXI）要求を禁止 1：受信データフル割り込み（IICn_RXI）要求を許可	R/W
b6	TEIE	送信終了割り込み要求許可	0：送信終了割り込み（IICn_TEI）要求を禁止 1：送信終了割り込み（IICn_TEI）要求を許可	R/W
b7	TIE	送信データエンプティ割り込み要求許可	0：送信データエンプティ割り込み（IICn_TXI）要求を禁止 1：送信データエンプティ割り込み（IICn_TXI）要求を許可	R/W

TMOIE ビット（タイムアウト割り込み要求許可）

ICSR2.TMOF フラグが 1 のとき、タイムアウト割り込み（TMOIn）要求を許可または禁止します。TMOI 割り込み要求を解除するには、TMOF フラグまたは TMOIE ビットを 0 にします。

ALIE ビット（アービトレーションロスト割り込み要求許可）

ICSR2.AL フラグが 1 のとき、アービトレーションロスト割り込み（ALIn）要求を許可または禁止します。ALI 割り込み要求を解除するには、AL フラグまたは ALIE ビットを 0 にします。

STIE ビット（スタートコンディション検出割り込み要求許可）

ICSR2.START フラグが 1 のとき、スタートコンディション検出割り込み（STIn）要求を許可または禁止します。STI 割り込み要求を解除するには、START フラグまたは STIE ビットを 0 にします。

SPIE ビット（ストップコンディション検出割り込み要求許可）

ICSR2.STOP フラグが 1 のとき、ストップコンディション検出割り込み（SPIn）要求を許可または禁止します。SPI 割り込み要求を解除するには、STOP フラグまたは SPIE ビットを 0 にします。

NAKIE ビット（NACK 受信割り込み要求許可）

ICSR2.NACKF フラグが 1 のとき、NACK 受信割り込み（NAKIn）要求を許可または禁止します。NAKI 割り込み要求を解除するには、NACKF フラグまたは NAKIE ビットを 0 にします。

RIE ビット（受信データフル割り込み要求許可）

ICSR2.RDRF フラグが 1 のとき、受信データフル割り込み（IICn_RXI）要求を許可または禁止します。

TEIE ビット（送信終了割り込み要求許可）

ICSR2.TEND フラグが 1 のとき、送信終了割り込み（IICn_TEI）要求を許可または禁止します。IICn_TEI 割り込み要求を解除するには、TEND フラグまたは TEIE ビットを 0 にします。

TIE ビット（送信データエンプティ割り込み要求許可）

ICSR2.TDRE フラグが 1 のとき、送信データエンプティ割り込み（IICn_TXI）要求を許可または禁止します。

30.2.9 I²C バスステータスレジスタ 1（ICSR1）

アドレス　IIC0.ICSR1 4005 3008h, IIC1.ICSR1 4005 3108h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	HOA	—	DID	—	GCA	AAS2	AAS1	AAS0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	AAS0	スレーブアドレス0検出フラグ	0：スレーブアドレス0未検出 1：スレーブアドレス0検出	R/(W) （注1）
b1	AAS1	スレーブアドレス1検出フラグ	0：スレーブアドレス1未検出 1：スレーブアドレス1検出	R/(W) （注1）
b2	AAS2	スレーブアドレス2検出フラグ	0：スレーブアドレス2未検出 1：スレーブアドレス2検出	R/(W) （注1）
b3	GCA	ジェネラルコールアドレス検出フラグ	0：ジェネラルコールアドレス未検出 1：ジェネラルコールアドレス検出	R/(W) （注1）
b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	DID	デバイスIDアドレス検出フラグ	0：デバイスIDコマンド未検出 1：デバイスIDコマンド検出 スタートコンディション検出直後に受信した第1フレームが、[デバイスIDアドレス（1111 100b）+ 0[W]]の値と一致した場合、1になります。	R/(W) （注1）
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	HOA	ホストアドレス検出フラグ	0：ホストアドレス未検出 1：ホストアドレス検出 受信したスレーブアドレスが、ホストアドレス（0001 000b）と一致した場合、1になります。	R/(W) （注1）

注 1.　フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

AASy フラグ（スレーブアドレス y 検出フラグ）（y = 0 ～ 2）

［1 になる条件］

【7 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS = 0）】

- ICSER.SARyE ビットが 1（スレーブアドレス y 検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスが SARLy.SVA[6:0] ビット値と一致したとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になる

【10 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS = 1）】

- ICSER.SARyE ビットが 1（スレーブアドレス y 検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスが（11110b + SARUy.SVA[1:0]）の値と一致し、かつ、それに続くアドレスが SARLy レジスタの値と一致したとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になる

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ストップコンディションが検出されたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

【7 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS = 0）】

- ICSER.SARyE ビットが 1（スレーブアドレス y 検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスが SARLy.SVA[6:0] ビット値と不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる

【10 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS = 1）】

- ICSER.SARyE ビットが 1（スレーブアドレス y 検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスが（11110b + SARUy.SVA[1:0]）の値と不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる
- ICSER.SARyE ビットが 1（スレーブアドレス y 検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスが（11110b + SARUy.SVA[1:0]）の値と一致し、かつ、それに続くアドレスが SARLy レジスタの値と不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる

GCA フラグ（ジェネラルコールアドレス検出フラグ）

［1 になる条件］

- ICSER.GCAE ビットが 1（ジェネラルコールアドレス検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスがジェネラルコールアドレス（0000 000b + 0[W]）と一致したとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になる

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ストップコンディションが検出されたとき
- ICSER.GCAE ビットが 1（ジェネラルコールアドレス検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスがジェネラルコールアドレス（0000 000b + 0[W]）と不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

DID フラグ（デバイス ID アドレス検出フラグ）

［1 になる条件］

- ICSER.DIDE ビットが 1（デバイス ID アドレス検出有効）の状態で、スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出直後に受信した第 1 フレームが（デバイス ID（1111 100b）+ 0[W]）の値と一致したとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になる

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ストップコンディションが検出されたとき
- ICSER.DIDE ビットが 1（デバイス ID アドレス検出有効）の状態で、スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出直後に受信した第 1 フレームがデバイス ID（1111 100b）と不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる
- ICSER.DIDE ビットが 1（デバイス ID アドレス検出有効）の状態で、スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出直後に受信した第 1 フレームが（デバイス ID（1111 100b）+ 0[W]）の値と一致し、かつ、第 2 フレームがスレーブアドレス 0 ～ 2 のすべてと不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

HOA フラグ（ホストアドレス検出フラグ）

［1 になる条件］

- ICSER.HOAE ビットが 1（ホストアドレス検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスがホストアドレス（0001 000b）と一致したとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になる

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ストップコンディションが検出されたとき
- ICSER.HOAE ビットが 1（ホストアドレス検出有効）の状態で、受信したスレーブアドレスがホストアドレス（0001 000b）と不一致のとき。そのフレームの SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 0 になる
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

30.2.10 I²C バスステータスレジスタ 2（ICSR2）

アドレス　IIC0.ICSR2 4005 3009h, IIC1.ICSR2 4005 3109h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TDRE	TEND	RDRF	NACKF	STOP	START	AL	TMOF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TMOF	タイムアウト検出フラグ	0：タイムアウト未検出 1：タイムアウト検出	R/(W)（注1）
b1	AL	アービトレーションロストフラグ	0：アービトレーションロスト未発生 1：アービトレーションロスト発生	R/(W)（注1）
b2	START	スタートコンディション検出フラグ	0：スタートコンディション未検出 1：スタートコンディション検出	R/(W)（注1）
b3	STOP	ストップコンディション検出フラグ	0：ストップコンディション未検出 1：ストップコンディション検出	R/(W)（注1）
b4	NACKF	NACK検出フラグ	0：NACK未検出 1：NACK検出	R/(W)（注1）
b5	RDRF	受信データフルフラグ	0：ICDRRレジスタに受信データなし 1：ICDRRレジスタに受信データあり	R/(W)（注1）
b6	TEND	送信終了フラグ	0：データ送信中 1：データ送信完了	R/(W)（注1）
b7	TDRE	送信データエンプティフラグ	0：ICDRTレジスタに送信データあり 1：ICDRTレジスタに送信データなし	R

注 1.　フラグをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

TMOF フラグ（タイムアウト検出フラグ）

SCLn ラインの状態が一定期間変化しなかったために、IIC がタイムアウトを検出したとき、TMOF フラグは 1 になります。

［1 になる条件］

- マスタモードまたはスレーブモード時に、ICFER.TMOE ビットが 1（タイムアウト検出機能有効）で、かつ受信したスレーブアドレスが一致した状態で、ICMR2.TMOH、TMOL、TMOS ビットで指定した期間 SCLn ライン状態が変化しなかったとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

AL フラグ（アービトレーションロストフラグ）

スタートコンディション発行時やアドレスおよびデータ送信時に、バス競合などが原因で、バス占有権がアービトレーションロストしたことを示します。IIC は、送信中に SDAn ラインのレベルを監視し、SDAn ラインのレベルと出力中のビット値が一致していないと、AL フラグを 1 にすることで、バスが他のデバイスによって占有されていることを示します。

さらに IIC は、AL フラグをセットすることで、マスタモードでの NACK 送信中やスレーブモードでのデータ送信中に、アービトレーションロストが検出されたことも示します。

［1になる条件］

【マスタアービトレーションロスト検出有効時（ICFER.MALE = 1）】

- マスタ送信モードでのデータ送信中のACK期間を除き、内部のSDA出力状態がSCLクロックの立ち上がりでSDAnラインレベルと不一致のとき
- ICCR2.STビットが1（スタートコンディション発行要求）の状態でスタートコンディションが検出されたとき、または、内部のSDA出力状態がSDAnラインレベルと不一致のとき
- ICCR2.BBSYフラグが1の状態で、ICCR2.STビットを1（スタートコンディション発行要求）にしたとき

【NACKアービトレーションロスト検出有効時（ICFER.NALE = 1）】

- 受信モードでのNACK送信中に、ACK期間において、内部のSDA出力状態がSCLクロックの立ち上がりでSDAnラインレベルと不一致のとき

【スレーブアービトレーションロスト検出有効時（ICFER.SALE = 1）】

- スレーブ送信モードでのデータ送信中のACK期間を除き、内部のSDA出力状態がSCLクロックの立ち上がりでSDAnラインレベルと不一致のとき

［0になる条件］

- 1を読んだ後、0を書いたとき
- ICCR1.IICRSTビットに1を書いて、IICリセットまたは内部リセットを行ったとき

表 30.4　アービトレーションロスト発生要因と各アービトレーションロスト許可機能との関係

ICFER			ICSR2	エラー内容	アービトレーションロスト発生要因
MALE	NALE	SALE	AL		
1	x	x	1	スタートコンディション発行エラー	ICCR2.STビットが1の状態で、スタートコンディション検出時に、内部のSDA出力状態がSDAnラインレベルと不一致のとき
					ICCR2.BBSYが1の状態で、ICCR2.STを1にしたとき
			1	送信データ不一致	マスタ送信モード時に、送信データ（スレーブアドレス含む）とバス状態が不一致のとき
x	1	x	1	NACK送信不一致	マスタまたはスレーブ受信モード時に、NACK送信中にACKを検出したとき
x	x	1	1	送信データ不一致	スレーブ送信モード時に、送信データとバス状態が不一致のとき

×: Don't care

START フラグ（スタートコンディション検出フラグ）

［1になる条件］

- スタートコンディション（またはリスタートコンディション）が検出されたとき

［0になる条件］

- 1を読んだ後、0を書いたとき
- ストップコンディションが検出されたとき
- ICCR1.IICRSTビットに1を書いて、IICリセットまたは内部リセットを行ったとき

STOP フラグ（ストップコンディション検出フラグ）

［1 になる条件］

- ストップコンディションが検出されたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

NACKF フラグ（NACK 検出フラグ）

［1 になる条件］

- ICFER.NACKE ビットが 1（転送中断許可）の状態で、送信モード時に受信デバイスからアクノリッジを受信しなかった（NACK を受信した）とき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

注 .　NACKF フラグが 1 になると、IIC はデータ送受信動作を中断します。NACKF フラグが 1 の状態では、送信モードで ICDRT レジスタへ書き込みを行ったり、受信モードで ICDRR レジスタから読み出しを行ったりしても、データ送受信動作は許可されません。データ送受信動作を再開するには、NACKF フラグを 0 にしてください。

RDRF フラグ（受信データフルフラグ）

［1 になる条件］

- ICDRS レジスタから ICDRR レジスタへ受信データが転送されたとき。RDRF フラグは、SCL クロックの 8 クロック目または 9 クロック目（ICMR3.RDRFS ビットで選択）の立ち上がりで 1 になる
- ICCR2.TRS ビットが 0 の状態で、スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出後、受信したスレーブアドレスが一致したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ICDRR レジスタからデータを読んだとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

TEND フラグ（送信終了フラグ）

［1 になる条件］

- TDRE フラグが 1 の状態での SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がり時

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ICDRT レジスタへデータを書いたとき
- ストップコンディションが検出されたとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

TDRE フラグ（送信データエンプティフラグ）

［1 になる条件］

- ICDRT レジスタから ICDRS レジスタへデータが転送され、ICDRT レジスタが空になったとき
- ICCR2.TRS ビットが 1 になったとき
- TRS ビットが 1 の状態で、受信したスレーブアドレスが一致したとき

［0 になる条件］

- ICDRT レジスタへデータを書いたとき
- ICCR2.TRS ビットが 0 になったとき
- ICCR1.IICRST ビットに 1 を書いて、IIC リセットまたは内部リセットを行ったとき

注 .　ICFER.NACKE ビットが 1 の状態で NACKF フラグが 1 になると、IIC はデータ送受信動作を中断します。このとき、TDRE フラグが 0（次の送信データがすでに書き込まれている状態）であれば、9 クロック目の立ち上がりで ICDRS レジスタへデータが転送され、ICDRT レジスタが空になりますが、TDRE フラグは 1 になりません。

30.2.11 I2C バスウェイクアップユニットレジスタ（ICWUR）

アドレス　IIC0.ICWUR 4005 3016h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	WUE	WUIE	WUF	WUACK	—	—	—	WUAFA
リセット後の値	0	0	0	1	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	WUAFA	ウェイクアップアナログフィルタ追加選択	0：ウェイクアップアナログフィルタを追加しない 1：ウェイクアップアナログフィルタを追加する	R/W
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	WUACK	ウェイクアップモード用ACK	ICCR1.IICRSTビットとWUACKビットの組み合わせで、4つの応答モードから選択します。表 30.5を参照してください。	R/W
b5	WUF	ウェイクアップイベント発生フラグ	0：ウェイクアップ時にスレーブアドレス不一致 1：ウェイクアップ時にスレーブアドレス一致	R/W
b6	WUIE	ウェイクアップ割り込み要求許可	0：ウェイクアップ割り込み要求（IIC0_WUI）禁止 1：ウェイクアップ割り込み要求（IIC0_WUI）許可	R/W
b7	WUE	ウェイクアップ機能有効	0：ウェイクアップ機能は無効 1：ウェイクアップ機能は有効	R/W

表 30.5　ウェイクアップモード

IICRST	WUACK	動作モード	内容
0	0	ノーマルウェイクアップモード1	SCLクロックの9クロック目でACK応答を行い、9クロック目の後でSCLのLowホールドを行う。
0	1	ノーマルウェイクアップモード2	即時ACK応答せず、SCLクロックの8クロック目と9クロック目の間でSCLのLowホールドを行う。SCLクロックの9クロック目でSCLのLowホールドを解除し、ACK応答を行う。
1	0	コマンドリカバリモード	SCLクロックの9クロック目でACK応答を行い、SCLのLowホールドは行わない。
1	1	EEP応答モード	SCLクロックの9クロック目でNACK応答を行い、SCLのLowホールドは行わない。

WUF フラグ（ウェイクアップイベント発生フラグ）

［1 になる条件］

- ウェイクアップモード時、最初の SCL クロックの 8 クロック目で SCL が Low となり、スレーブアドレスが一致した後、PCLKB が供給されたとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき
- ICE ビットが 0 で IICRST ビットが 1 のとき

30.2.12 I2C バスウェイクアップユニットレジスタ 2（ICWUR2）

アドレス IIC0.ICWUR2 4005 3017h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	WUSYF	WUASYF	WUSEN
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	WUSEN	ウェイクアップ機能同期有効	0：IIC非同期動作を許可 1：IIC同期動作を許可	R/W
b1	WUASYF	ウェイクアップ機能非同期動作ステータスフラグ	0：IIC同期動作を許可 1：IIC非同期動作を許可	R
b2	WUSYF	ウェイクアップ機能同期動作ステータスフラグ	0：IIC非同期動作を許可 1：IIC同期動作を許可	R
b7-b3	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W

WUSEN ビット（ウェイクアップ機能同期有効）

ウェイクアップ機能が有効（ICWUR.WUE = 1）のとき、WUSEN ビットは、WUASYF フラグ（または WUSYF フラグ）との組み合わせで、PCLKB の動作（同期動作／非同期動作）の切り替えに使用されます。

PCLKB の動作は、以下の場合に同期動作から非同期動作に切り替わります：

- WUASYF フラグが 0 の状態で WUSEN ビットに 0 が書き込まれ、ICCR2.BBSY フラグが 0（バスフリーの状態）のとき。PCLKB 非同期動作に切り替わった後、ウェイクアップイベントを検出すると、PCLKB の動作状態に関係なく、（PCLKB 停止状態で）受信が実行される

PCLKB の動作は、以下の場合に非同期動作から同期動作に切り替わります：

- WUASYF フラグが 1 の状態で WUSEN ビットに 1 が書き込まれ、ウェイクアップイベントを検出したとき。1 が書き込まれると、WUASYF フラグはただちに 0 になる
- ウェイクアップイベントが未検出の状態でストップコンディションを検出したとき

WUASYF フラグ（ウェイクアップ機能非同期動作ステータスフラグ）

本フラグは、ウェイクアップ機能が有効（ICWUR.WUE = 1）のとき、IIC を PCLKB 非同期動作に切り替えることが可能です。

［1 になる条件］

- ICCR2.BBSY フラグが 0 の場合に、ICWUR.WUE ビットが 1 の状態で WUSEN ビットを 0 にしたとき

［0 になる条件］

- ICWUR.WUE ビットが 1 の状態でウェイクアップイベント検出後、WUSEN ビットに 1 が書き込まれたとき
- WUASYF フラグが 1 で ICWUR.WUE ビットも 1 の状態でウェイクアップイベントを検出する前に、WUSEN ビットが 1 の状態でストップコンディションが検出されたとき
- WUASYF フラグが 1 の状態で WUSEN ビットに 1 が書き込まれ、ICWUR.WUE ビットが 1 の状態でウェイクアップイベントを検出したとき
- ICCR1.ICE = 0 かつ ICCRST = 1（ICC リセット）
- ICWUR.WUE = 0

WUSYF フラグ（ウェイクアップ機能同期動作ステータスフラグ）

本フラグは、ウェイクアップ機能が有効（ICWUR.WUE = 1）のとき、IIC を PCLKB 同期動作に切り替えることが可能です。本フラグを使用すると、WUASYF フラグが予約されます。

［1 になる条件］

- WUSYF フラグが 0 で ICWUR.WUE ビットが 1 の状態でウェイクアップイベント検出後、WUSEN ビットに 1 が書き込まれたとき
- WUSYF フラグが 0 で ICWUR.WUE ビットが 0 の状態でウェイクアップイベントを検出する前に、WUSEN ビットが 1 の状態でストップコンディションが検出されたとき
- ICCR1.ICE = 0 かつ ICCRST = 1（ICC リセット）
- ICWUR.WUE = 0

［0 になる条件］

- WUSEN ビットに 0 を書き込んだ後、ICWUR.WUE ビットが 1 の状態で ICCR2.BBSY フラグが 0 のとき

30.2.13　スレーブアドレスレジスタ Ly（SARLy）(y = 0 ～ 2)

アドレス　IIC0.SARL0 4005 300Ah, IIC1.SARL0 4005 310Ah,
IIC0.SARL1 4005 300Ch, IIC1.SARL1 4005 310Ch,
IIC0.SARL2 4005 300Eh, IIC1.SARL2 4005 310Eh

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SVA0	10 ビットアドレス最下位ビット	スレーブアドレス設定	R/W
b7-b1	SVA[6:0]	7 ビットアドレス／10 ビットアドレス下位ビット	スレーブアドレス設定	R/W

SVA0 ビット（10 ビットアドレス最下位ビット）

10 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS ビット = 1）、本ビットは 10 ビットアドレスの最下位ビットとして機能します。また、SVA[6:0] ビットと組み合わせて 10 ビットアドレスの下位 8 ビットを形成します。

本ビットは、ICSER.SARyE ビットが 1（SARLy および SARUy レジスタ有効）で、かつ SARUy.FS ビットが 1 の場合に有効です。SARUy.FS ビットまたは SARyE ビットが 0 の場合、本ビットの設定値は無視されます。

SVA[6:0] ビット（7 ビットアドレス／10 ビットアドレス下位ビット）

7 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS ビット = 0）、これらのビットは 7 ビットアドレスとして機能します。10 ビットアドレスフォーマット選択時（SARUy.FS ビット = 1）、これらのビットは、SVA0 ビットと組み合わせて 10 ビットアドレスの下位 8 ビットを形成します。ICSER.SARyE ビットが 0 のとき設定値は無視されます。

30.2.14　スレーブアドレスレジスタ Uy（SARUy）(y = 0 ～ 2)

アドレス　IIC0.SARU0 4005 300Bh, IIC1.SARU0 4005 310Bh,
IIC0.SARU1 4005 300Dh, IIC1.SARU1 4005 310Dh,
IIC0.SARU2 4005 300Fh, IIC1.SARU2 4005 310Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	SVA[1:0]		FS
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FS	7ビット／10ビットアドレス フォーマット選択	0：7ビットアドレスフォーマットを選択 1：10ビットアドレスフォーマットを選択	R/W
b2-b1	SVA[1:0]	10ビットアドレス上位ビット	スレーブアドレス設定	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

FS ビット（7 ビット／10 ビットアドレス フォーマット選択）

スレーブアドレス y（SARLy および SARUy レジスタ）に対して、7 ビットアドレスまたは 10 ビットアドレスを選択します。

ICSER.SARyE ビットが 1（SARLy および SARUy レジスタ有効）で、かつ SARUy.FS ビットが 0 の場合、スレーブアドレス y には 7 ビットアドレスフォーマットが選択され、SARLy.SVA[6:0] ビットの設定値が有効になり、SVA[1:0] ビットと SARLy.SVA0 ビットの設定値は無視されます。

ICSER.SARyE ビットが 1（SARLy および SARUy レジスタ有効）で、かつ SARUy.FS ビットが 1 の場合、スレーブアドレス y には 10 ビットアドレスフォーマットが選択され、SVA[1:0] ビットおよび SARLy レジスタの設定値が有効になります。

ICSER.SARyE ビットが 0（SARLy および SARUy レジスタ無効）の場合、SARUy.FS ビットの設定値は無効です。

SVA[1:0] ビット（10 ビットアドレス上位ビット）

10 ビットアドレスフォーマット選択時（FS ビット = 1）、これらのビットは 10 ビットアドレスの上位 2 ビットとして機能します。

これらのビットは、ICSER.SARyE ビットが 1（SARLy および SARUy レジスタ有効）で、かつ SARUy.FS ビットが 1 の場合に有効です。SARUy.FS ビットまたは SARyE ビットが 0 の場合、これらのビットの設定値は無視されます。

30.2.15 I2C バスビットレート Low レジスタ（ICBRL）

アドレス　IIC0.ICBRL 4005 3010h, IIC1.ICBRL 4005 3110h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	BRL[4:0]				
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	BRL[4:0]	ビットレートLow幅設定	SCLクロックのLow幅	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W

BRL[4:0] ビット（ビットレート Low 幅設定）

BRL[4:0] ビットは、SCL クロックの Low 幅を設定します。ICBRL レジスタは、ICMR1.CKS[2:0] ビットで指定した内部基準クロックソース（IICφ）で Low 幅をカウントします。ICBRL は、SCL 自動 Low ホールド機能のデータセットアップ時間も生成します（30.9　SCL の自動 Low ホールド機能を参照）。IIC をスレーブモードのみで使用する場合、ICBRL レジスタはデータセットアップ時間（注 1）以上の値を設定してください。

デジタルノイズフィルタ回路を有効（ICFER.NFE ビット = 1）にした場合、ICBRL レジスタにはノイズフィルタの段数 + 1 以上の値を設定してください。この段数については、ICMR3.NF[1:0] ビットの説明を参照してください。

注 1.　データセットアップ時間（tSU:DAT）
250ns（～ 100kbps）：スタンダードモード（Sm）
100ns（～ 400kbps）：ファストモード（Fm）

30.2.16 I²C バスビットレート High レジスタ（ICBRH）

アドレス　IIC0. ICBRH 4005 3011h, IIC1.ICBRH 4005 3111h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	BRH[4:0]				
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	BRH[4:0]	ビットレートHigh幅設定	SCLクロックのHigh幅	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W

BRH[4:0] ビット（ビットレート High 幅設定）

SCL クロックの High 幅を設定します。BRH[4:0] ビットはマスタモードで有効になります。IIC をスレーブモードのみで使用する場合は、BRH[4:0] ビットを設定しないでください。

ICBRH レジスタは、ICMR1.CKS[2:0] ビットで指定した内部基準クロックソース（IICφ）で High 幅をカウントします。

デジタルノイズフィルタ回路を有効（ICFER.NFE ビット = 1）にした場合、ICBRH レジスタにはノイズフィルタの段数 + 1 以上の値を設定してください。この段数については、ICMR3.NF[1:0] ビットの説明を参照してください。

IIC 転送速度および SCL クロックのデューティ比は以下の式で算定します。

1) ICFER.SCLE = 0 の場合
転送速度 = 1 / {[(BRH + 1) + (BRL + 1)] / IICφ (注 1) + tr (注 2) + tf (注 2) }
デューティ比 = {tr + [(BRH + 1) / IICφ]} / {tr + tf + [(BRH + 1) + (BRL + 1)] / IICφ}

2) ICFER.SCLE = 1、ICFER.NFE = 0、CKS[2:0] = 000b（IICφ = PCLKB）の場合
転送速度 = 1 / {[(BRH + 3) + (BRL + 3)] / IICφ + tr + tf}
デューティ比 = {tr + [(BRH + 3) / IICφ]} / {tr + tf + [(BRH + 3) + (BRL + 3)] / IICφ}

3) ICFER.SCLE = 1、ICFER.NFE = 1、CKS[2:0] = 000b（IICφ = PCLKB）の場合
転送速度 = 1 / {[(BRH + 3 + nf (注 3)) + (BRL + 3 + nf)] / IICφ + tr + tf}
デューティ比 = {tr + [(BRH + 3 + nf) / IICφ]} / {tr + tf + [(BRH + 3 + nf) + (BRL + 3 + nf)] / IICφ}

4) ICFER.SCLE = 1、ICFER.NFE = 0、CKS[2:0] ≠ 000b の場合
転送速度 = 1 / {[(BRH + 2) + (BRL + 2)] / IICφ + tr + tf}
デューティ比 = {tr + [(BRH + 2) / IICφ]} / {tr + tf + [(BRH + 2) + (BRL + 2)] / IICφ}

5) ICFER.SCLE = 1、ICFER.NFE = 1、CKS[2:0] ≠ 000b の場合
転送速度 = 1 / {[(BRH + 2 + nf) + (BRL + 2 + nf)] / IICφ + tr + tf}
デューティ比 = {tr + [(BRH + 2 + nf) / IICφ]} / {tr + tf + [(BRH + 2 + nf) + (BRL + 2 + nf)] / IICφ}

注 1.　IICφ = PCLKB × 分周比

注 2.　SCLn ライン立ち上がり時間 [tr] および SCLn ライン立ち下がり時間 [tf] は、バスライン総容量 [Cb] とプルアップ抵抗 [Rp] に依存します。詳細については、NXP 社の I²C バス規格書を参照してください。

注 3.　nf = ICMR3.NF ビットで選択したデジタルノイズフィルタの段数

表 30.6　SCLE = 0 の場合の ICBRH/ICBRL 転送速度設定例

転送速度（kbps）	CKS[2:0]	BRH[4:0] (ICBRH)	BRL[4:0] (ICBRL)	PCLKB（MHz）	NF[1:0]	計算式
100	011	15 (EFh)	18 (F2h)	32	—	1)
400	001	9 (E9h)	20 (F4h)	32	—	1)

表 30.7　SCLE = 1かつNFE = 0の場合のICBRH/ICBRL転送速度設定例

転送速度（kbps）	CKS[2:0]	BRH[4:0] (ICBRH)	BRL[4:0] (ICBRL)	PCLKB（MHz）	NF[1:0]	計算式
100	011	14 (EEh)	17 (F1h)	32	—	4)
400	001	8 (E8h)	19 (F3h)	32	—	4)

表 30.8　SCLE = 1かつNFE = 1の場合のICBRH/ICBRL転送速度設定例

転送速度（kbps）	CKS[2:0]	BRH[4:0] (ICBRH)	BRL[4:0] (ICBRL)	PCLKB（MHz）	NF[1:0]	計算式
100	011	12 (ECh)	15 (EFh)	32	01b	5)
400	001	6 (E6h)	17 (F1h)	32	01b	5)

注 .　SCLn ラインの立ち上がり時間（tr）：100kbps 以下、Sm：1000ns、400kbps 以下、Fm：300ns 以下
SCLn ラインの立ち下がり時間（tf）：400kbps 以下、Sm/Fm：300ns 以下

30.2.17 I2C バス送信データレジスタ（ICDRT）

アドレス IIC0.ICDRT 4005 3012h, IIC1.ICDRT 4005 3112h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	1	1	1	1	1	1	1	1

ICDRT レジスタは、I2C バスシフトレジスタ（ICDRS）の空きを検出すると、ICDRT レジスタに書き込まれた送信データを ICDRS レジスタへ転送し、送信モードでデータ送信を開始します。

ICDRT レジスタと ICDRS レジスタはダブルバッファ構成になっているため、ICDRS レジスタのデータ送信中に、次に送信するデータを ICDRT レジスタに書き込めば、連続送信動作が可能になります。

ICDRT レジスタは常に読み出し／書き込み可能です。ICDRT レジスタへの送信データの書き込みは、送信データエンプティ割り込み（IICn_TXI）要求が発生したときに 1 回だけ行ってください。

30.2.18 I2C バス受信データレジスタ（ICDRR）

アドレス IIC0.ICDRR 4005 3013h, IIC1.ICDRR 4005 3113h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

1 バイトのデータを受信すると、受信したデータは I2C バスシフトレジスタ（ICDRS）から ICDRR レジスタへ転送され、次のデータを受信可能にします。

ICDRS レジスタと ICDRR レジスタはダブルバッファ構成になっているため、ICDRS レジスタのデータ受信中に、すでに受信したデータを ICDRR レジスタから読み出せば、連続受信動作が可能になります。ICDRR レジスタに書き込むことはできません。ICDRR レジスタからの読み出しは、受信データフル割り込み（IICn_RXI）要求が発生したときに 1 回だけ行ってください。

現在のデータを ICDRR レジスタから読み出す前に（ICSR2.RDRF フラグが 1 の状態のまま）、ICDRR レジスタが次の受信データを受け取ると、IIC は RDRF フラグが再び 1 になる前に自動的に SCL クロックを 1 クロック分 Low ホールドします。

30.2.19 I2C バスシフトレジスタ（ICDRS）

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	—	—	—	—	—	—	—	—

ICDRS レジスタは、データを送受信するための 8 ビットのシフトレジスタです。送信時は、送信データが ICDRT レジスタから ICDRS レジスタへ転送されて、SDAn 端子からデータが送出されます。受信時は、1 バイトのデータ受信後に、データが ICDRS レジスタから ICDRR レジスタへ転送されます。ICDRS レジスタは、直接アクセスすることはできません。

30.3　動作説明

30.3.1　通信データフォーマット

I2C バスフォーマットは、8 ビットのデータと 1 ビットのアクノリッジで構成されています。スタートコンディションまたはリスタートコンディションに続くフレームは、マスタデバイスの通信先であるスレーブデバイスを指定するアドレスフレームです。指定されたスレーブは、新たにスレーブが指定されるか、またはストップコンディションが発行されるまで有効です。

図 30.3 に I2C バスフォーマットを、図 30.4 に I2C バスタイミングを示します。

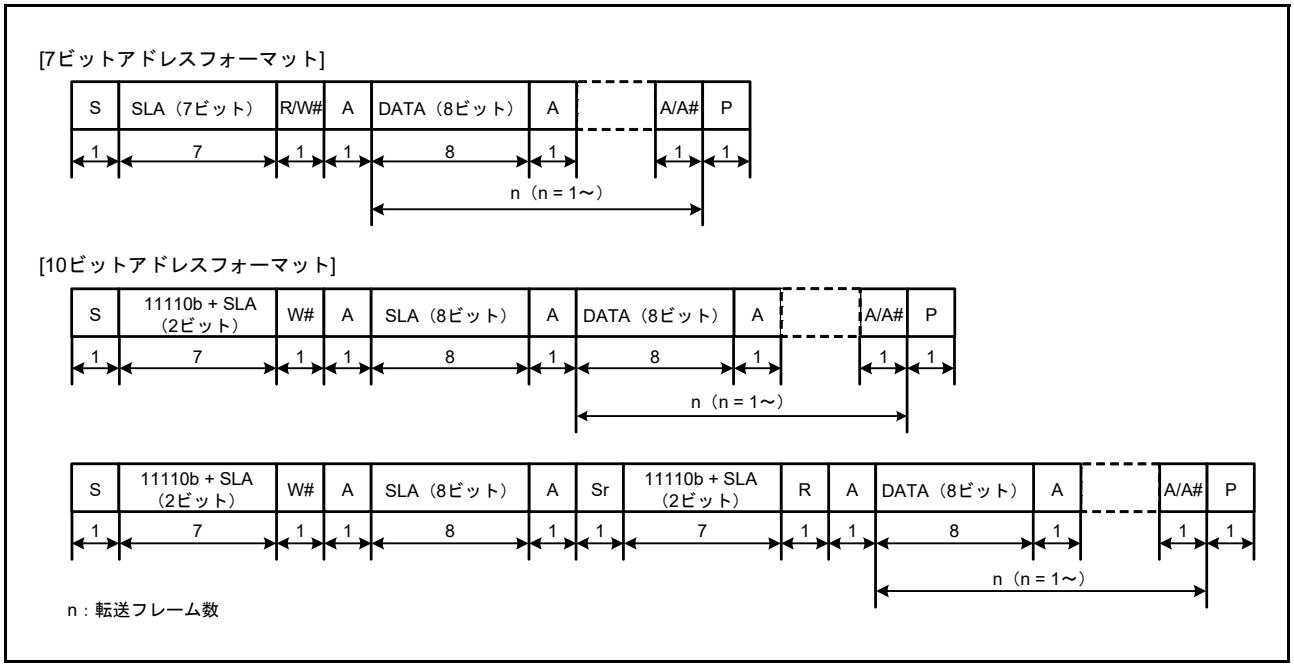


図 30.3　I2C バスフォーマット

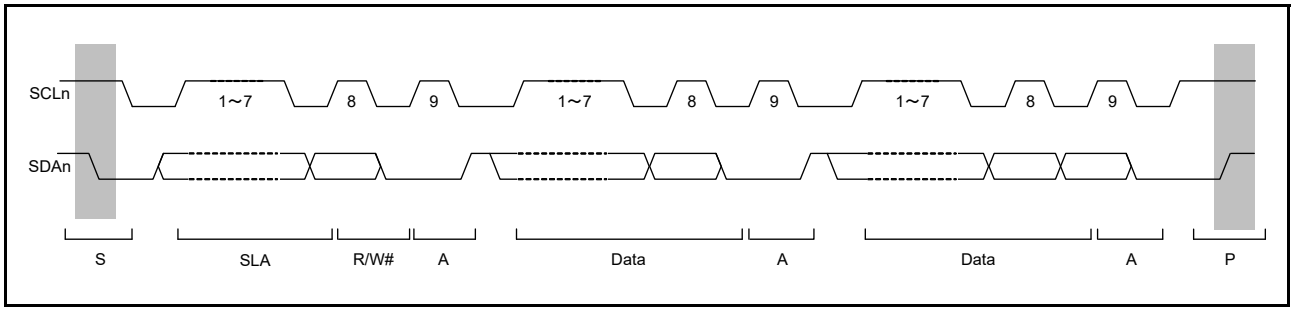


図 30.4　I2C バスタイミング（SLA = 7 ビットの場合）

S：　スタートコンディションを表します。SCLn ラインが High のときに、マスタデバイスが SDAn ラインを High から Low に変化させます。

SLA：　スレーブアドレスを表します。マスタデバイスがスレーブデバイスを選択します。

R/W#：　データ転送の方向を表します。R/W#が 1 のとき、スレーブデバイスからマスタデバイスの方向、R/W#が 0 のとき、マスタデバイスからスレーブデバイスの方向に送信します。

A：　アクノリッジを表します。受信デバイスが SDAn ラインを Low にします。マスタ送信モード時はスレーブデバイスがアクノリッジを返します。マスタ受信モード時はマスタデバイスがアクノリッジを返します。

A#：　ノットアクノリッジを表します。受信デバイスが SDAn ラインを High にします。

Sr：　リスタートコンディションを表します。SCLn ラインが High のときに、セットアップ時間が経過した後、マスタデバイスが SDAn ラインを High から Low に変化させます。

DATA：　送信または受信されるデータを表します。

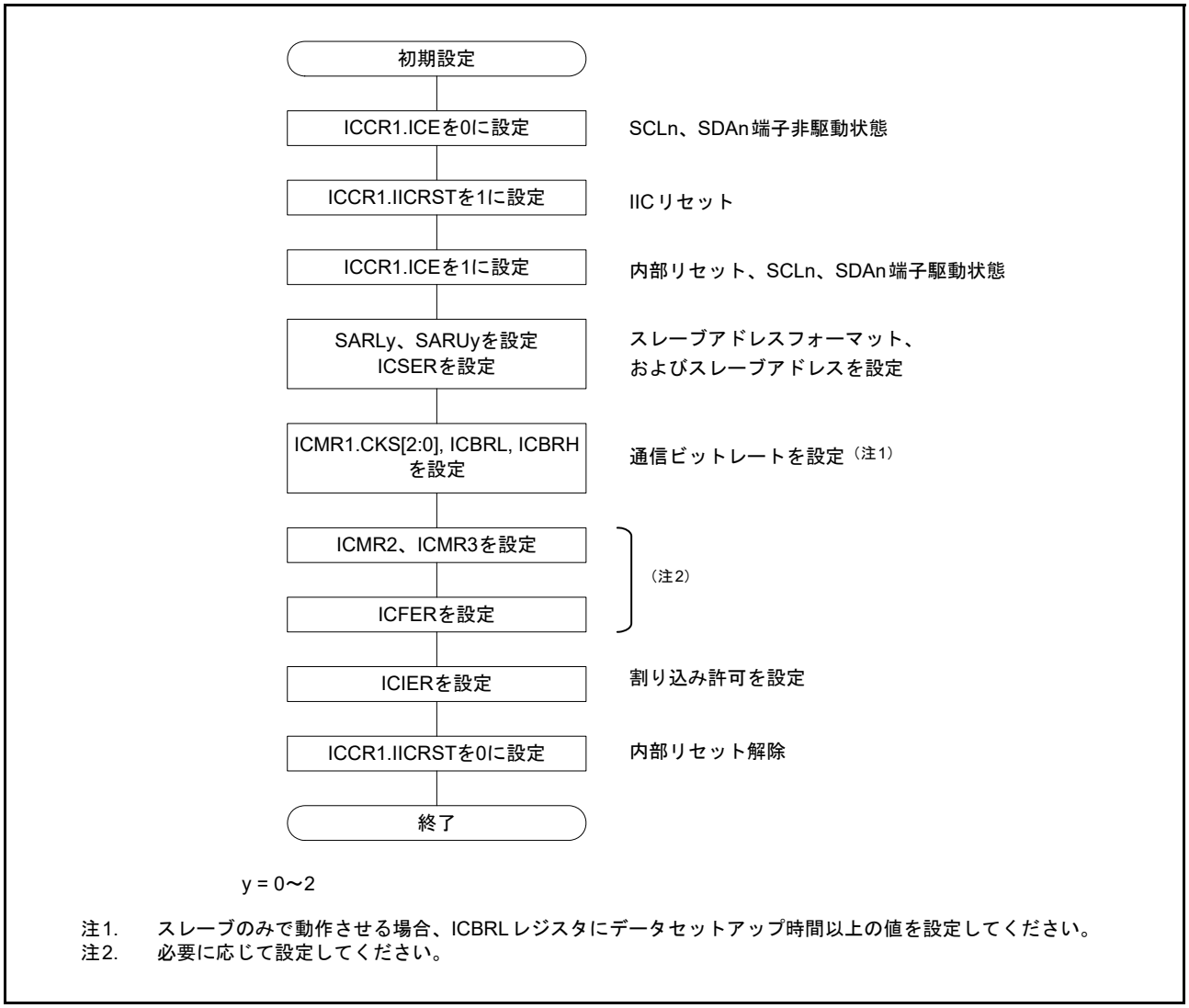
P：　ストップコンディションを表します。SCLnラインがHighのときに、マスタデバイスがSDAnラインをLowからHighに変化させます。

30.3.2　初期設定

データの送受信を開始する前に、図 30.5 に示す手順に従って IIC を初期化してください。

1. ICCR1.ICE ビットを 0 にして、SCLn 端子および SDAn 端子を非駆動状態にします。
2. ICCR1.IICRST ビットを 1 にして、IIC のリセットを行います。
3. ICCR1.ICE ビットを 1 にして、内部リセットを行います。
4. SARLy、SARUy、ICSER、ICMR1、ICBRH、ICBRL の各レジスタ（y = 0 ～ 2）を設定します。必要に応じて、それ以外のレジスタも設定します。IIC の初期設定については、図 30.5 を参照してください。
5. 必要なレジスタの設定が完了したら、ICCR1.IICRST ビットを 0 にして IIC リセットを解除してください。

注 .　すでに IIC の初期化が完了している場合、この手順は不要です。



注1.　スレーブのみで動作させる場合、ICBRL レジスタにデータセットアップ時間以上の値を設定してください。
注2.　必要に応じて設定してください。

図 30.5　IIC の初期化フローチャート例

30.3.3　マスタ送信動作

マスタ送信動作では、マスタデバイスである IIC が SCL クロックと送信データ信号を出力し、スレーブデバイスがアクノリッジを返します。図 30.6 に、マスタ送信の例を示します。図 30.7 ～図 30.9 に、マスタ送信の動作タイミングを示します。

マスタ送信の設定および実行は以下の手順で行います。

1. 30.3.2　初期設定に示す手順で IIC を初期化します。
2. ICCR2.BBSY フラグを読んでバスが解放状態であることを確認した後、ICCR2.ST ビットに 1 を書きます（スタートコンディション要求）。IIC はスタートコンディション要求を受け付けると、スタートコンディションを発行します。同時に、ICSR2.BBSY フラグと ICSR2.START フラグが自動的に 1 になり、ST ビットが自動的に 0 になります。ST ビットが 1 の状態でスタートコンディションが検出され、かつ SDA 出力の内部レベルと SDAn ラインのレベルが一致したとき、IIC は ST ビットで要求したスタートコンディションが正しく完了したと認識し、ICCR2.MST ビットと ICCR2.TRS ビットが自動的に 1 になって、IIC はマスタ送信モードになります。TRS ビットが 1 になると、それに応じて、ICSR2.TDRE フラグは自動的に 1 になります。
3. ICSR2.TDRE フラグが 1 であることを確認した後、ICDRT レジスタに送信データ（スレーブアドレスと R/W# ビット）を書いてください。ICDRT レジスタに送信データが書き込まれると、TDRE フラグは自動的に 0 になり、ICDRT レジスタから ICDRS レジスタにデータが転送されて、再び TDRE フラグが 1 になります。スレーブアドレスと R/W# ビットを含むバイトの送信後、送信された R/W# ビットの値に応じて TRS ビットの値が自動的に更新され、マスタ送信モードまたはマスタ受信モードが選択されます。R/W# ビットの値が 0 の場合、IIC はマスタ送信モードの状態を継続します。
このとき ICSR2.NACKF フラグが 1 であると、アドレスを認識したスレーブデバイスが存在しないか、または通信エラーが発生していることを示しているため、ICCR2.SP ビットに 1 を書いて、ストップコンディションを発行してください。
データを 10 ビットフォーマットのアドレスで送信する場合は、最初に、1 回目のアドレス送信処理で ICDRT レジスタに 1111 0b（スレーブアドレスの上位 2 ビット）と W を書きます。次に、2 回目のアドレス送信処理では、ICDRT レジスタにスレーブアドレスの下位 8 ビットを書いてください。
4. ICSR2.TDRE フラグが 1 であることを確認した後、送信データを ICDRT レジスタに書いてください。なお、送信データの準備ができるまで、またはストップコンディションが発行されるまで、IIC は自動的に SCLn ラインを Low にホールドします。
5. 送信データの全バイトを ICDRT レジスタに書いた後、ICSR2.TEND フラグが 1 に戻るまで待ってから、ICCR2.SP ビットを 1（ストップコンディション要求）にしてください。IIC はストップコンディション要求を受け付けると、ストップコンディションを発行します。詳細は、30.11.3　ストップコンディション発行動作を参照してください。
6. IIC はストップコンディションを検出すると、ICCR2.MST ビットと ICCR2.TRS ビットを自動的に 00b にして、スレーブ受信モードへ遷移します。さらに IIC は、TDRE フラグと TEND フラグを自動的に 0 にして、ICSR2.STOP フラグを 1 にします。
7. ICSR2.STOP フラグが 1 であることを確認した後、次の転送動作のために、ICSR2.NACKF フラグと ICSR2.STOP フラグを 0 にしてください。

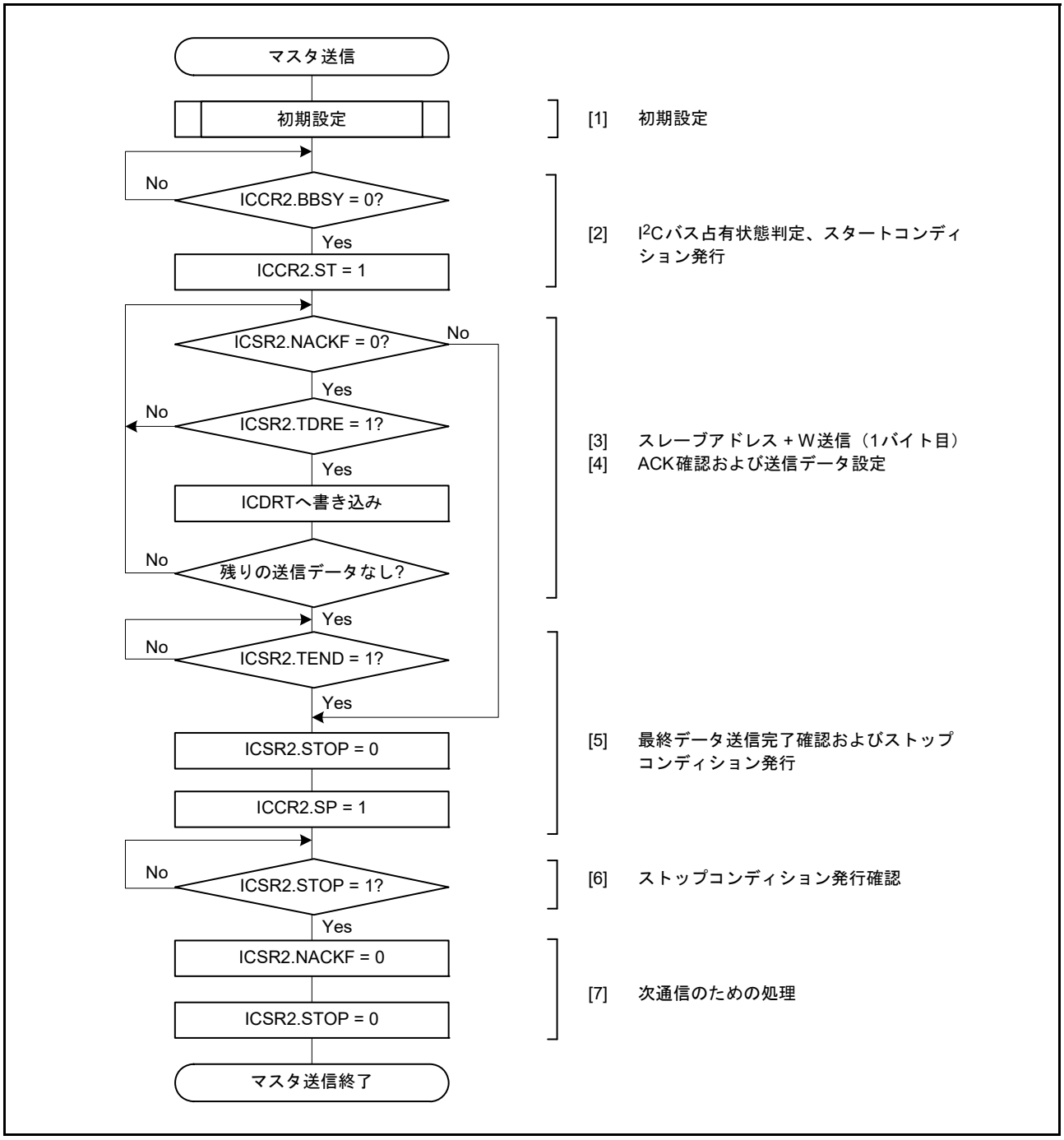


図 30.6　マスタ送信のフローチャート例

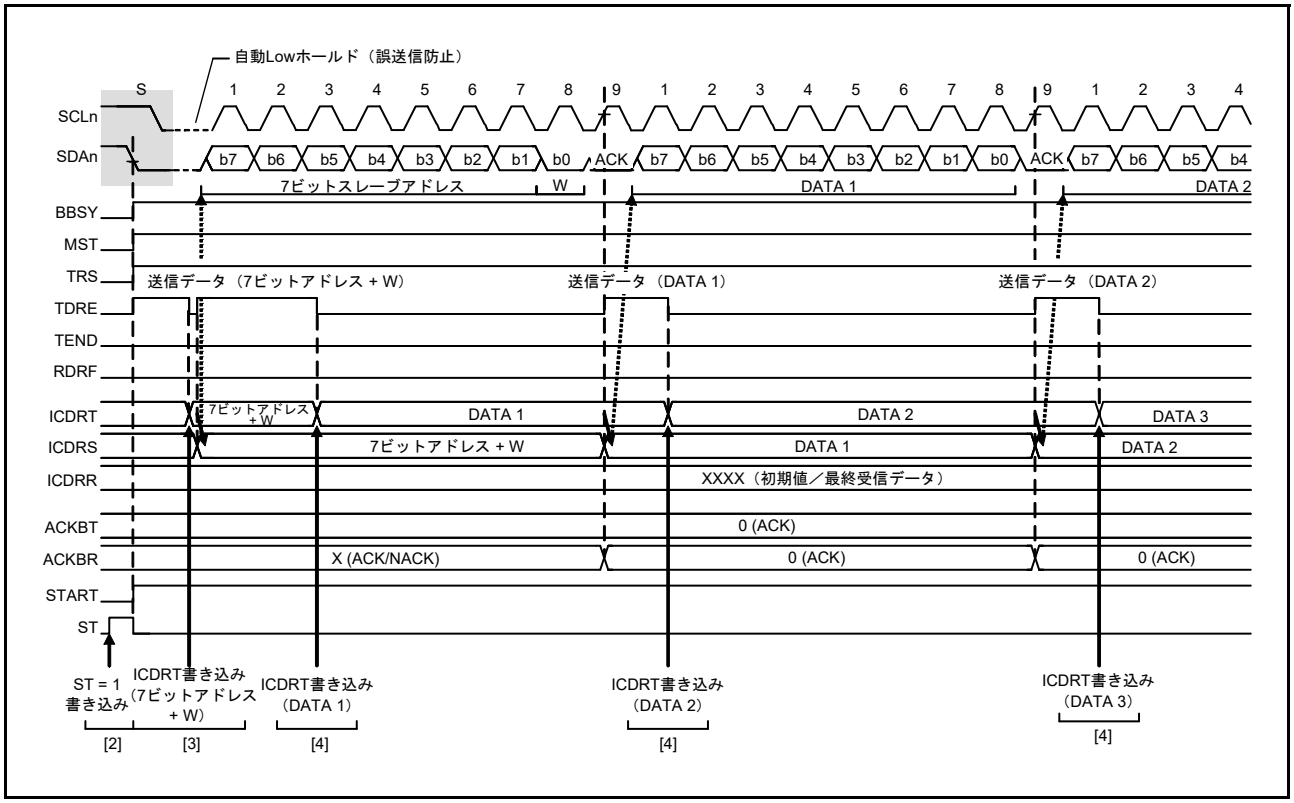


図 30.7　　マスタ送信の動作タイミング（1）（7 ビットアドレスフォーマット）

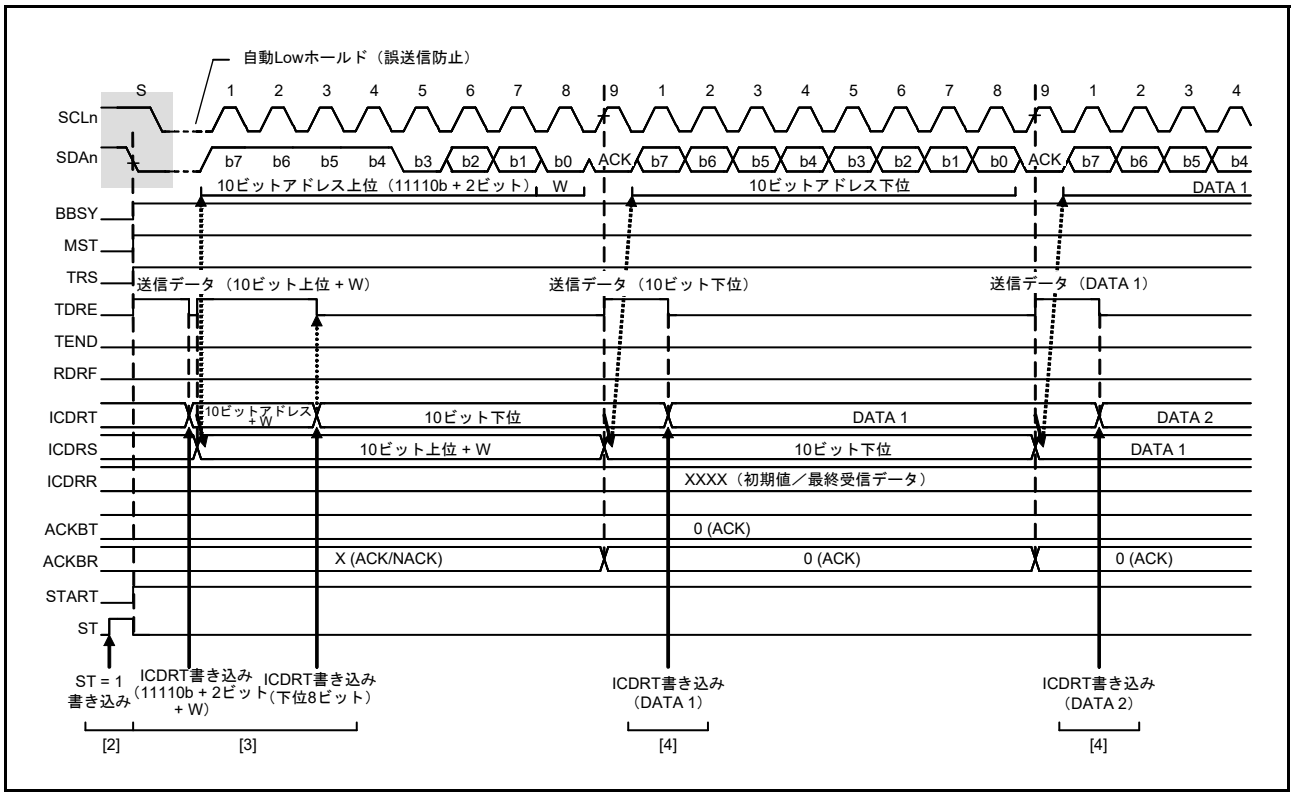


図 30.8　　マスタ送信の動作タイミング（2）（10 ビットアドレスフォーマット）

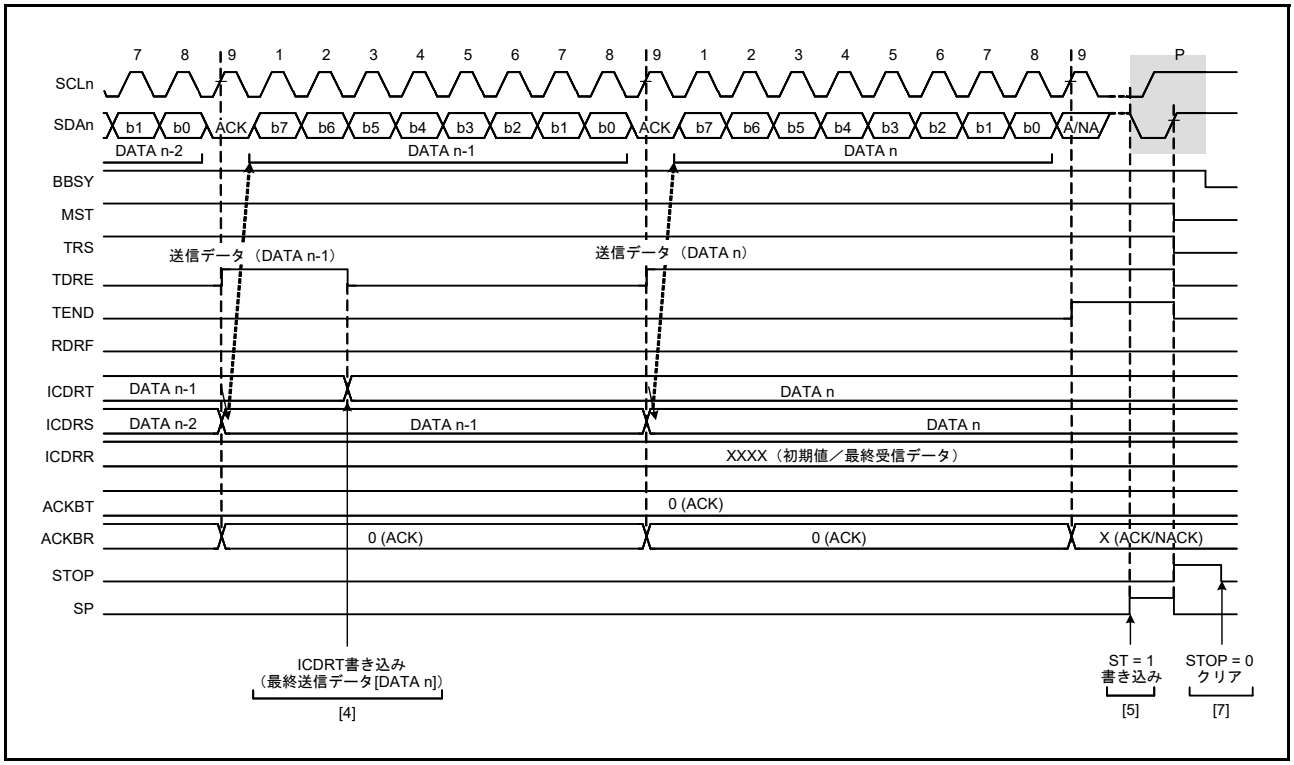


図 30.9　　マスタ送信の動作タイミング（3）

30.3.4　マスタ受信動作

マスタ受信動作では、マスタデバイスである IIC が SCL クロックを出力し、スレーブデバイスからデータを受信して、アクノリッジを返します。最初に、対応するスレーブデバイスにスレーブアドレスを送信する必要があるため、スレーブアドレス段階の手順ではマスタ送信モードで実行し、その後の手順ではマスタ受信モードで実行します。

図 30.10 と図 30.11 に、マスタ受信の例（7 ビットアドレスフォーマットの場合）を示します。図 30.12 ～図 30.14 に、マスタ受信の動作タイミングを示します。

マスタ受信の設定および実行は以下の手順で行います。

1. 30.3.2　初期設定に示す手順で IIC を初期化します。
2. ICCR2.BBSY フラグを読み出してバスが解放状態であることを確認した後、ICCR2.ST ビットを 1 にしてスタートコンディションの発行を要求します。IIC はスタートコンディション要求を受け付けると、スタートコンディションを発行します。IIC がスタートコンディションを検出すると、ICSR2.BBSY フラグと ICSR2.START フラグが自動的に 1 になり、ST ビットは自動的に 0 になります。ST ビットが 1 の状態でスタートコンディションが検出され、かつ SDA 出力のレベルと SDAn ラインのレベルが一致したとき、IIC は ST ビットで要求したスタートコンディション発行が正しく完了したと認識し、ICCR2.MST ビットと ICCR2.TRS ビットが自動的に 1 になって、IIC はマスタ送信モードになります。TRS ビットが 1 になると、それに応じて、ICSR2.TDRE フラグも自動的に 1 になります。
3. ICSR2.TDRE フラグが 1 であることを確認した後、ICDRT レジスタに送信データ（1 バイト目はスレーブアドレスと R/W# ビットの値を示す）を書いてください。ICDRT レジスタに送信データが書き込まれると、TDRE フラグは自動的に 0 になり、ICDRT レジスタから ICDRS レジスタにデータが転送されて、再び TDRE フラグが 1 になります。スレーブアドレスと R/W# ビットを含むバイトが送信されると、送信された R/W# ビットの値に応じて ICCR2.TRS ビットの値が自動的に更新され、送信モードまたは受信モードが選択されます。R/W# ビットの値が 1 の場合、SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで TRS ビットが 0 になり、IIC はマスタ受信モードになります。TDRE フラグが 0 になり、ICSR2.RDRF フラグが自動的に 1 になります。
このとき ICSR2.NACKF フラグが 1 であると、アドレスを認識したスレーブデバイスが存在しないか、または通信エラーが発生していることを示しているため、ICCR2.SP ビットに 1 を書いて、ストップコンディションを発行してください。
なお、10 ビットアドレスフォーマットでマスタ受信を行う場合は、まずマスタ送信で 10 ビットアドレスを送信した後、リスタートコンディションを発行します。その後、1111 0b（スレーブアドレスの上位 2 ビット）と R ビットを送信することで、IIC はマスタ受信モードになります。
4. ICSR2.RDRF フラグが 1 であることを確認した後、ICDRR レジスタをダミーリードします。これにより、IIC は SCL クロックの出力とデータ受信動作を開始します。
5. 1 バイトのデータの受信後、ICMR3.RDRFS ビットで設定した SCL クロックの 8 クロック目または 9 クロック目の立ち上がりで、ICSR2.RDRF フラグが 1 になります。ICDRR レジスタを読むと受信したデータを読むことができ、RDRF フラグは自動的に 0 になります。SCL クロックの 9 クロック目のアクノリッジビットには、ICMR3.ACKBT ビットに設定した値が返信されます。次に受信するバイトが最後から 2 番目のバイトの場合、最後から 2 番目のバイトを含む ICDRR レジスタを読む前に、ICMR3.WAIT ビットを 1（WAIT あり）にしてください。これにより、手順（6）の ICMR3.ACKBT ビットを 1（NACK）にする処理が割り込みなどの他の処理によって遅れた場合でも、NACK 出力が可能になるとともに、最終バイトの受信時に 9 クロック目の立ち上がりで SCLn ラインを Low に固定して、ストップコンディションの発行が可能になります。
6. ICMR3.RDRFS ビットが 0 で、かつスレーブデバイスに対して、次および最終バイトの転送でデータ受信が終了すべきであることを通知する必要がある場合は、ICMR3.ACKBT ビットを 1（NACK）にしてください。
7. 最後から 2 番目のバイトを ICDRR レジスタから読み出した後、ICSR2.RDRF フラグが 1 であれば、（ストップコンディションを要求するために）ICCR2.SP ビットを 1 にした後、ICDRR レジスタの最終バイトを読み出してください。ICDRR レジスタの読み出し時、IIC はウェイト状態から解除され、9 クロック目の Low 出力終了後または SCLn ラインの Low ホールド解除後に、ストップコンディションを発行します。

8. ストップコンディションの検出時に、IIC は ICCR2.MST ビットと ICCR2.TRS ビットを自動的に 00b にして、スレーブ受信モードへ遷移します。また、ストップコンディションの検出によって、ICSR2.STOP フラグが 1 になります。
9. ICSR2.STOP フラグが 1 であることを確認した後、次の転送動作のために、ICSR2.NACKF フラグと ICSR2.STOP フラグを 0 にしてください。

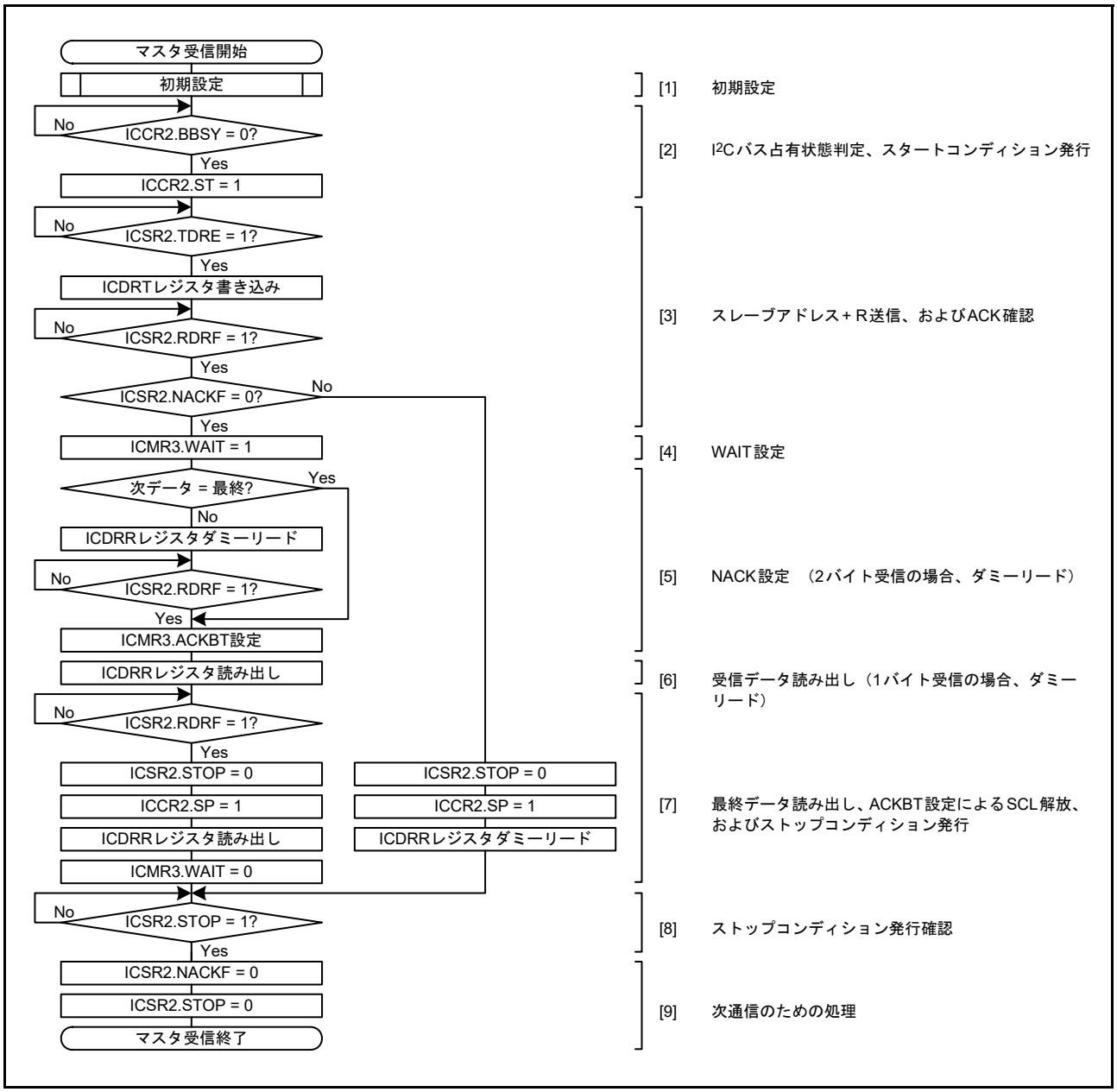


図 30.10　マスタ受信の例（7 ビットアドレスフォーマット、1 ～ 2 バイト受信時）

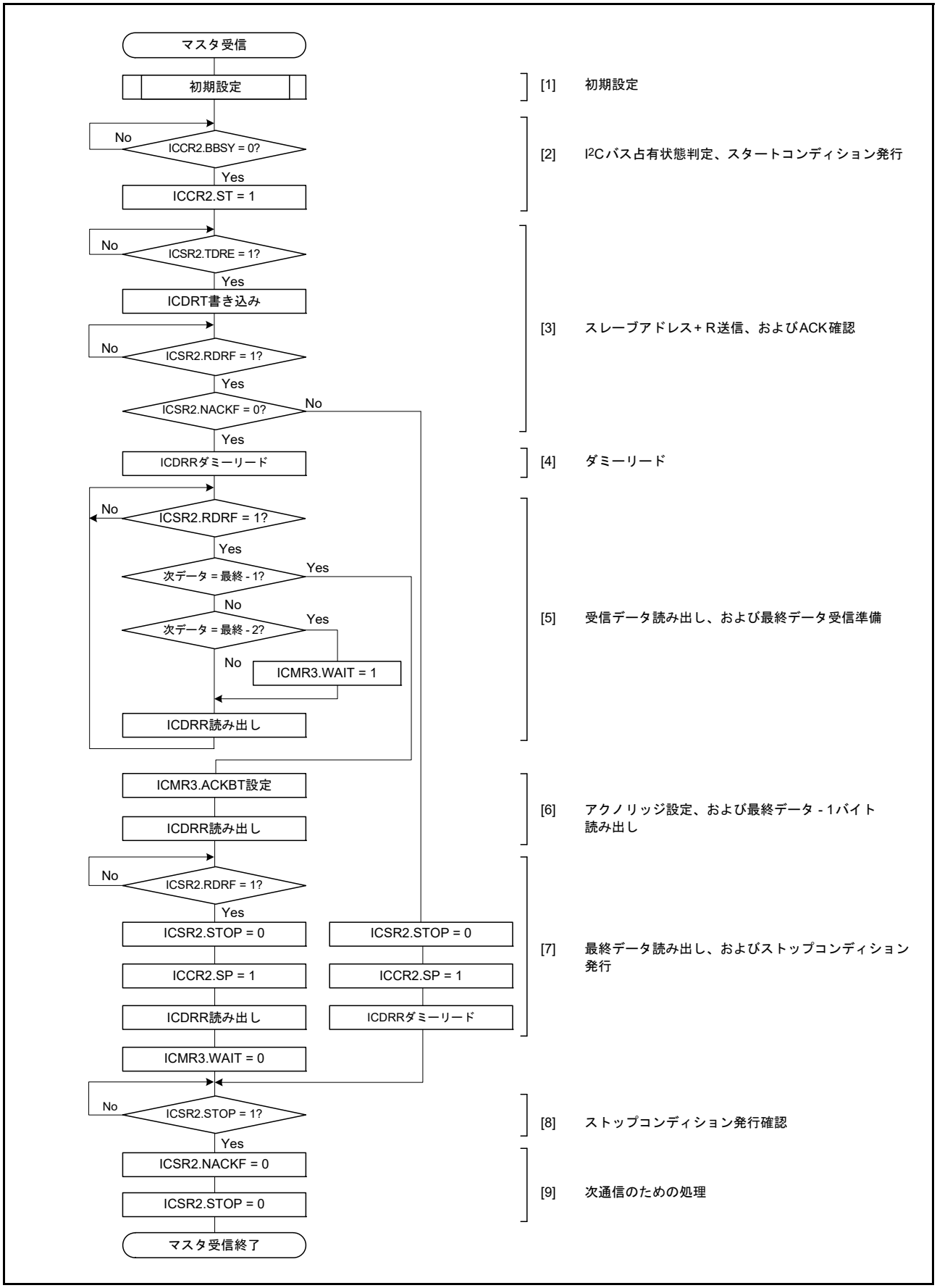


図 30.11　マスタ受信の例（7 ビットアドレスフォーマット、3 バイト以上受信時）

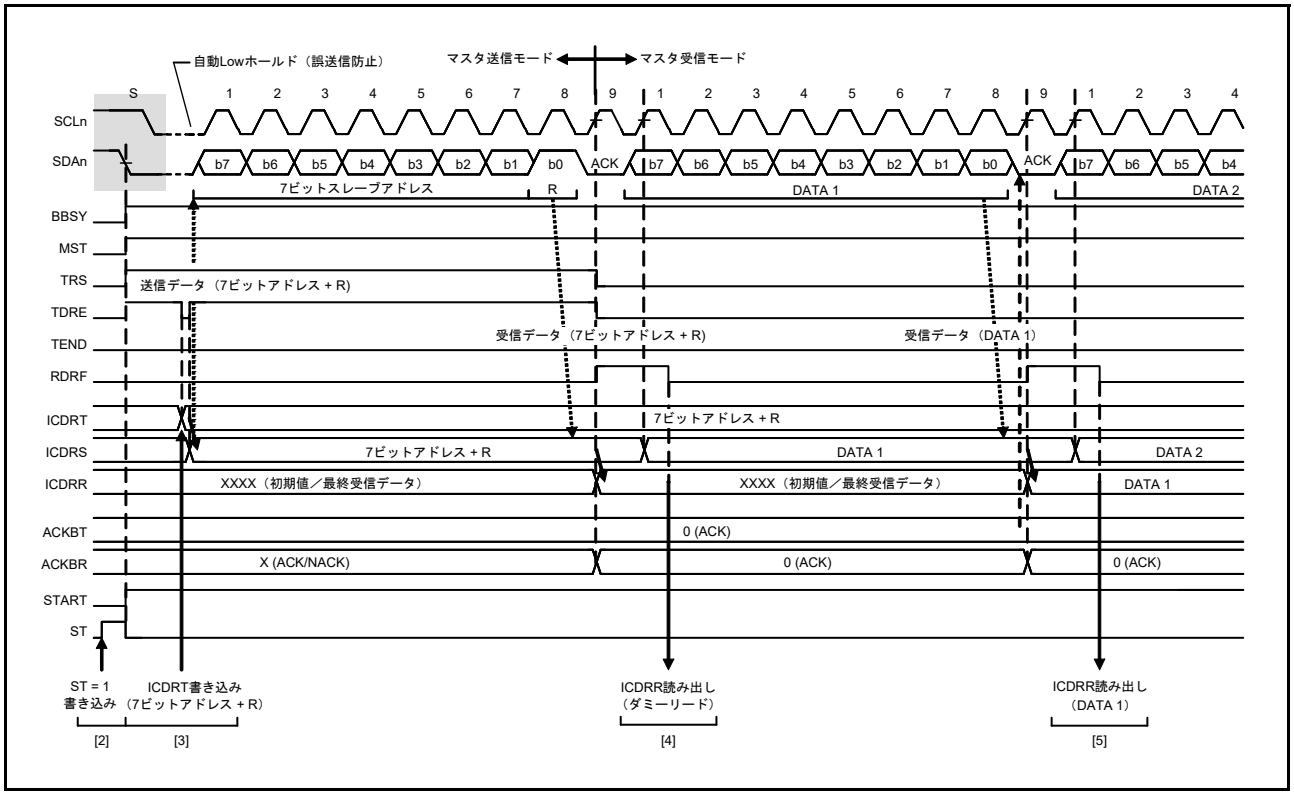


図 30.12　マスタ受信の動作タイミング（1）（7 ビットアドレスフォーマットで RDRFS = 0 の場合）

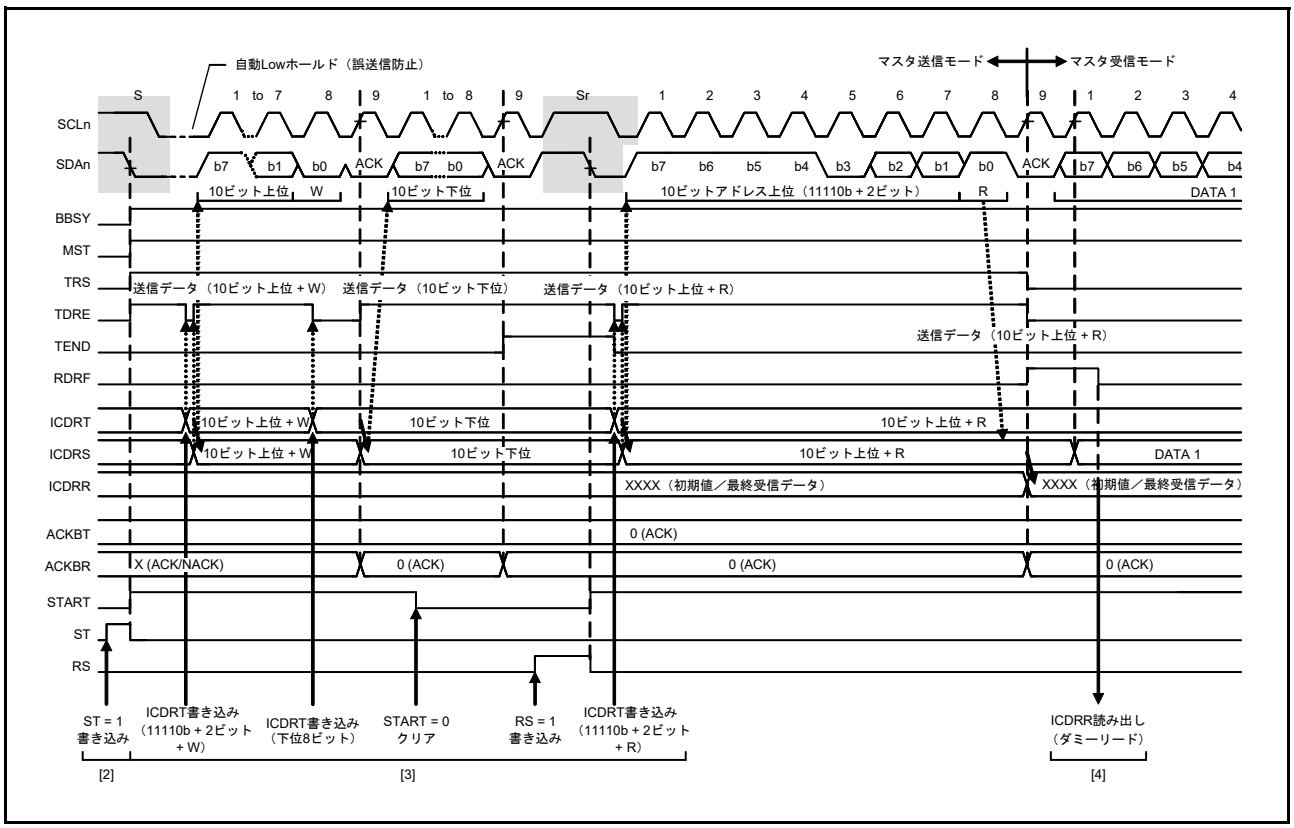


図 30.13　マスタ受信の動作タイミング（2）（10 ビットアドレスフォーマットで RDRFS = 0 の場合）

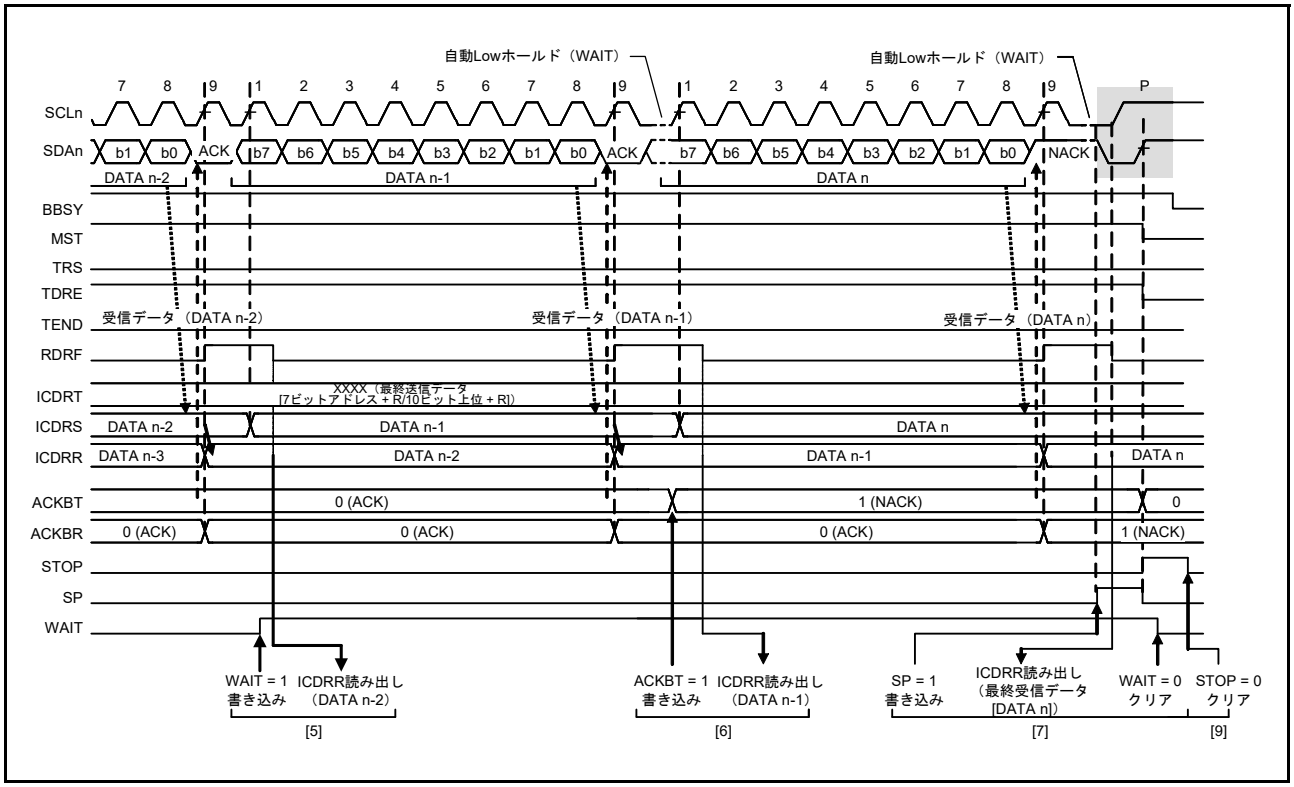


図 30.14　マスタ受信の動作タイミング（3）（RDRFS = 0 の場合）

30.3.5　スレーブ送信動作

スレーブ送信動作では、マスタデバイスが SCL クロックを出力し、スレーブデバイスである IIC がデータを送信し、マスタデバイスがアクノリッジを返します。

図 30.15 に、スレーブ送信の例を示します。図 30.16 および図 30.17 に、スレーブ送信の動作タイミングを示します。

スレーブ送信の設定および実行は以下の手順で行います。

1. IIC を初期化する場合は、30.3.2　初期設定に示す手順に従ってください。
   初期化の後、IIC は受信したスレーブアドレスが一致するまで待機状態となります。
2. スレーブアドレスが一致した後、IIC は対応する ICSR1.HOA, GCA, AASy ビット（y = 0 ～ 2）のいずれかを SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 にして、SCL クロックの 9 クロック目のアクノリッジビットとして ICMR3.ACKBT ビットの設定値を出力します。受信した R/W# ビットの値が 1 のとき、IIC は ICCR2.TRS ビットと ICSR2.TDRE フラグの両方を 1 にすることで、自動的にスレーブ送信モードに切り替わります。
3. ICSR2.TEND フラグが 1 であることを確認し、送信データを ICDRT レジスタに書き込んでください。ICFER.NACKE ビットが 1 の状態でマスタデバイスからアクノリッジを受信しなかった（NACK を受信した）場合、IIC は次の転送動作を中断します。
4. ICSR2.NACKF フラグが 1 になるか、または最終送信バイトを ICDRT レジスタに書いた後、ICSR2.TDRE フラグが 1 の状態で、ICSR2.TEND フラグが 1 になるまで待ってください。ICSR2.NACKF フラグが 1 または TEND フラグが 1 の場合、IIC は SCL クロックの 9 クロック目の立ち下がりで SCLn ラインを Low にします。
5. ICSR2.NACKF フラグが 1 または ICSR2.TEND フラグが 1 の場合、終了処理のため ICDRR レジスタをダミーリードしてください。これによって SCLn ラインが開放されます。
6. IIC はストップコンディションを検出すると、ICSR1.HOA、GCA、AASy ビット（y = 0 ～ 2）、ICSR2.TDRE、TEND フラグ、および ICCR2.TRS ビットを自動的に 0 にして、スレーブ受信モードへ遷移します。
7. ICSR2.STOP フラグが 1 であることを確認し、次の転送動作のために、ICSR2.NACKF フラグと ICSR2.STOP フラグを 0 にしてください。

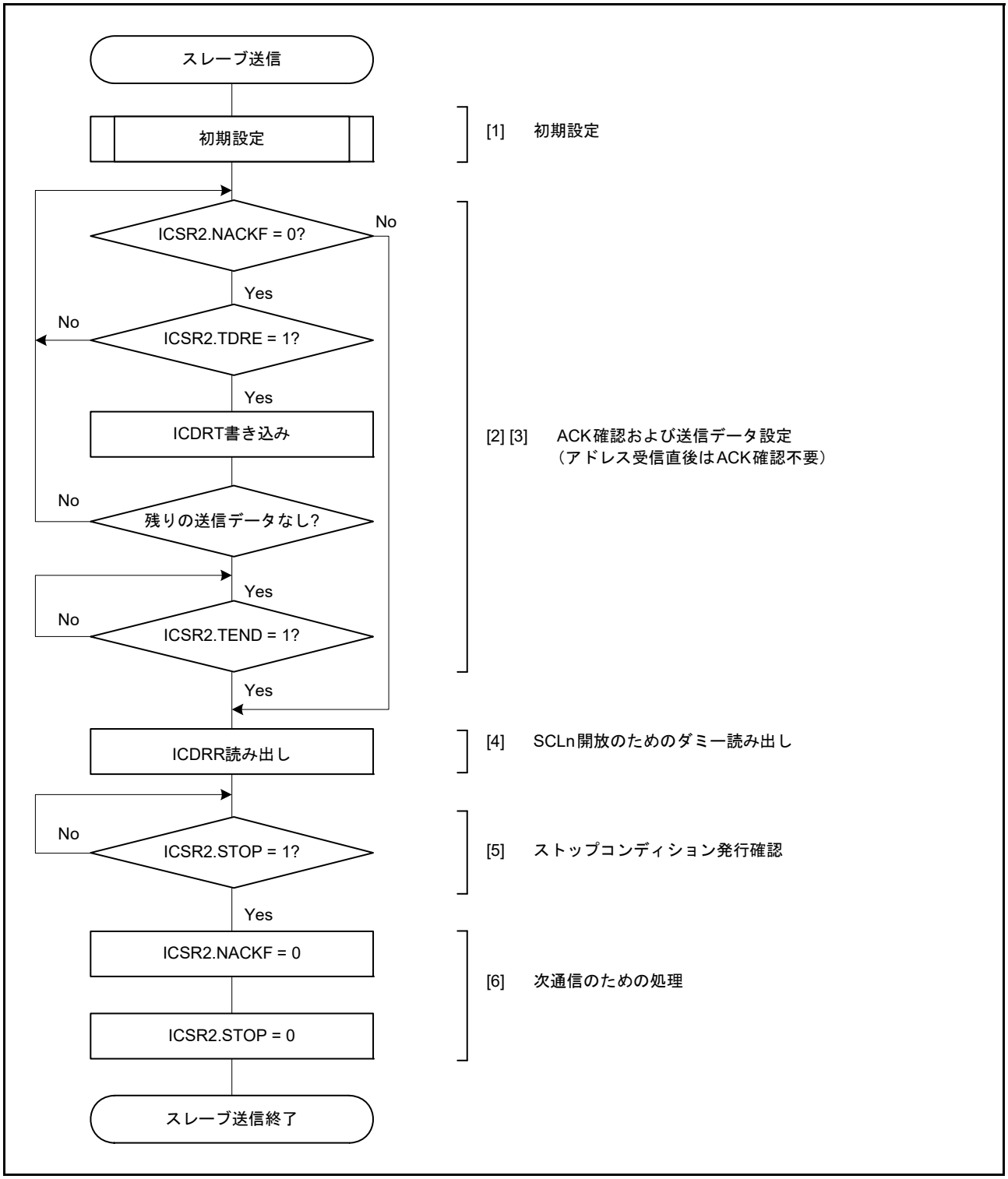


図 30.15　スレーブ送信のフロー例

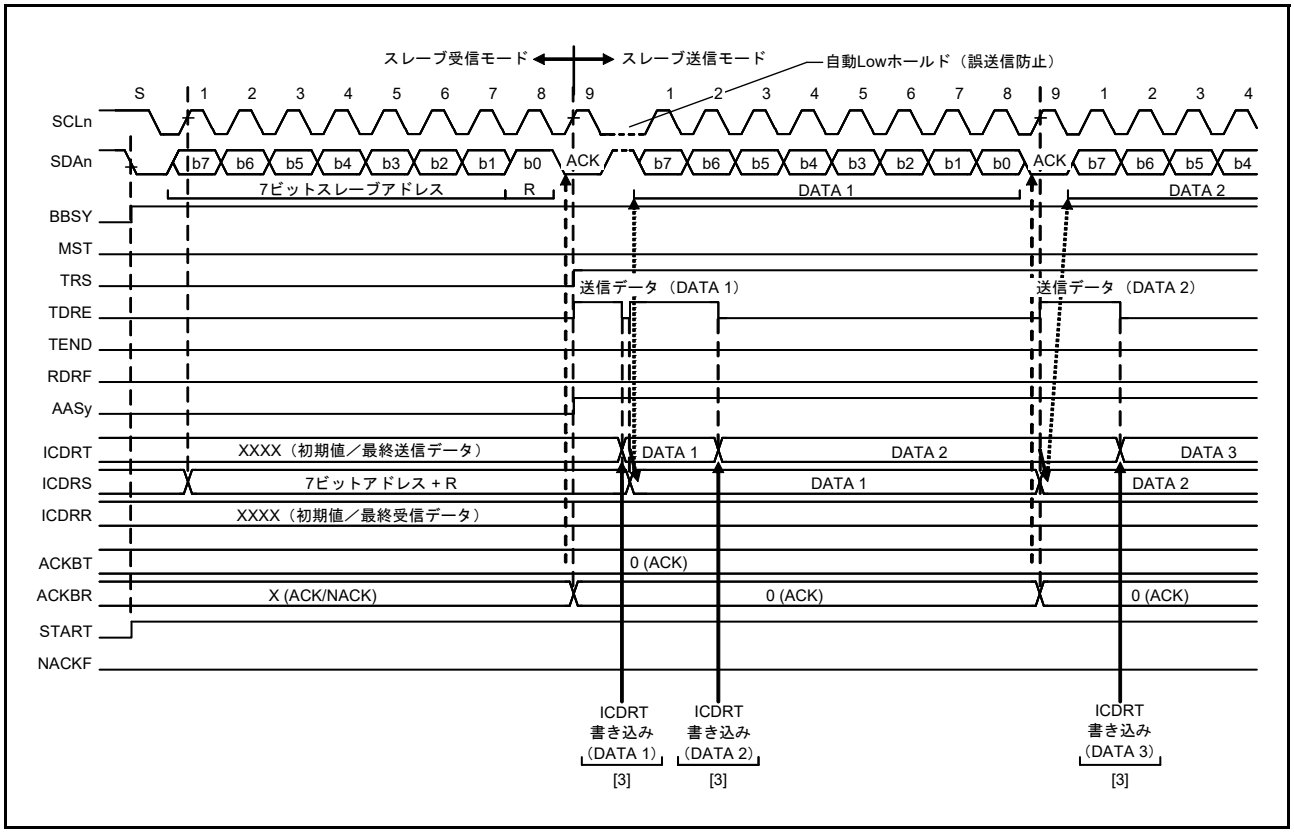


図 30.16　スレーブ送信の動作タイミング（1）（7 ビットアドレスフォーマット）

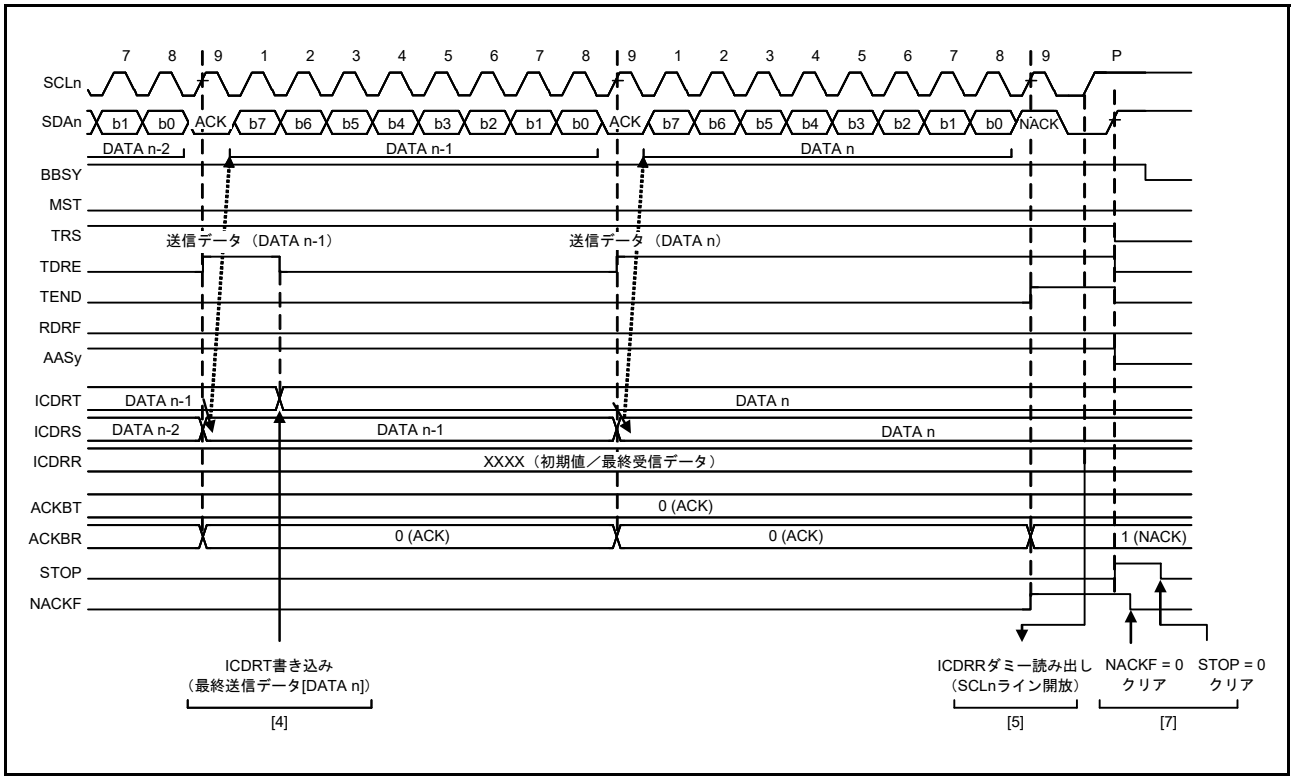


図 30.17　スレーブ送信の動作タイミング（2）

30.3.6　スレーブ受信動作

スレーブ受信動作では、マスタデバイスが SCL クロックと送信データを出力し、スレーブデバイスである IIC がアクノリッジを返します。

図 30.18 に、スレーブ受信の例を示します。図 30.19 および図 30.20 に、スレーブ受信の動作タイミングを示します。

スレーブ受信の設定および実行は以下の手順で行います。

1. IIC を初期化する場合は、30.3.2　初期設定に示す手順に従ってください。
   初期化の後、IIC は受信したスレーブアドレスが一致するまで待機状態となります。
2. スレーブアドレスが一致した後、IIC は対応する ICSR1.HOA, GCA, AASy ビット（y = 0 ～ 2）のいずれかを SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 にして、SCL クロックの 9 クロック目のアクノリッジビットに ICMR3.ACKBT ビットの設定値を出力します。
   受信した R/W# ビットの値が 0 であれば、IIC はスレーブ受信モードを継続し、ICSR2.RDRF フラグを 1 にします。
3. ICSR2.STOP フラグが 0 であることと、ICSR2.RDRF フラグが 1 であることを確認し、ICDRR レジスタをダミーリードしてください。ダミーリードした値は、7 ビットアドレスフォーマット選択時はスレーブアドレス + R/W# ビット、10 ビットアドレスフォーマット選択時は下位 8 ビットアドレスです。
4. ICDRR レジスタが読み出されると、IIC は ICSR2.RDRF フラグを自動的に 0 にします。なお、ICDRR レジスタの読み出しが遅れて、RDRF フラグが 1 のまま次のバイトを受信すると、IIC は RDRF フラグが設定されるポイントの 1 つ手前の SCL クロックまで SCLn ラインを Low にホールドします。この場合、ICDRR レジスタを読み出すと、SCLn ラインが Low ホールド状態から解放されます。
   ICSR2.STOP フラグが 1 で、かつ ICSR2.RDRF フラグが 1 の場合、全データの受信が完了するまで ICDRR レジスタを読み出してください。
5. IIC はストップコンディションを検出すると、ICSR1.HOA、GCA、AASy ビット（y = 0 ～ 2）を自動的に 0 にします。
6. ICSR2.STOP フラグが 1 であることを確認した後、次の転送動作のために ICSR2.STOP フラグを 0 にしてください。

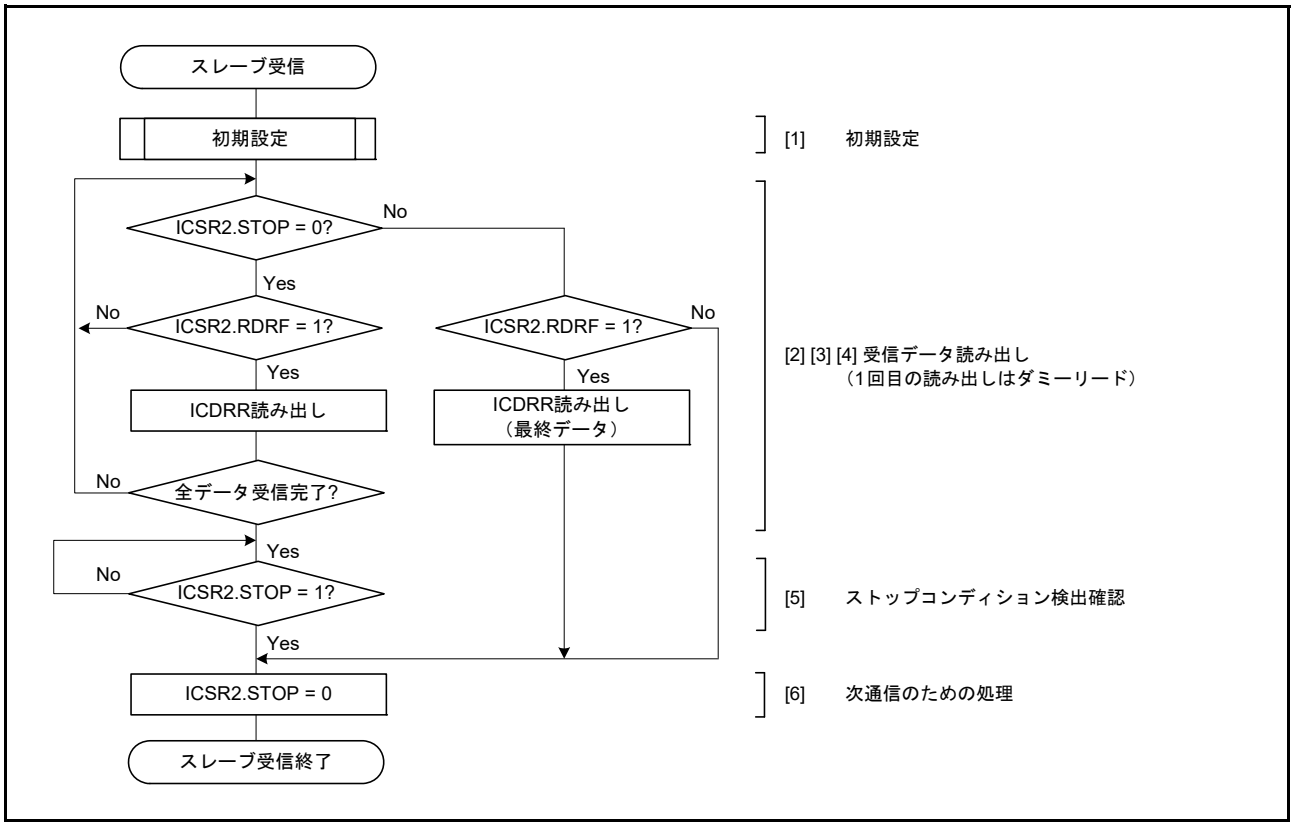


図 30.18　スレーブ受信のフロー例

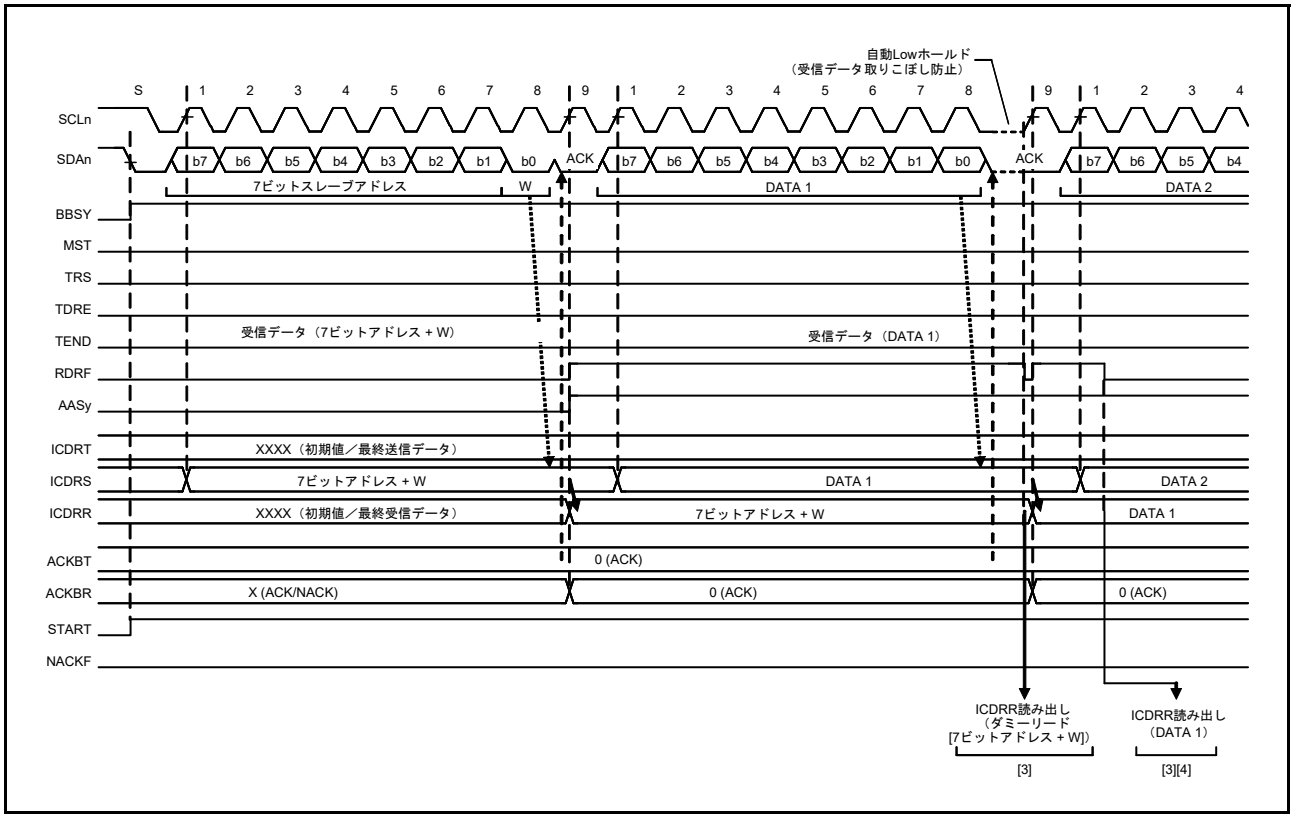


図 30.19　　スレーブ受信の動作タイミング（1）（7 ビットアドレスフォーマットで RDRFS = 0 の場合）

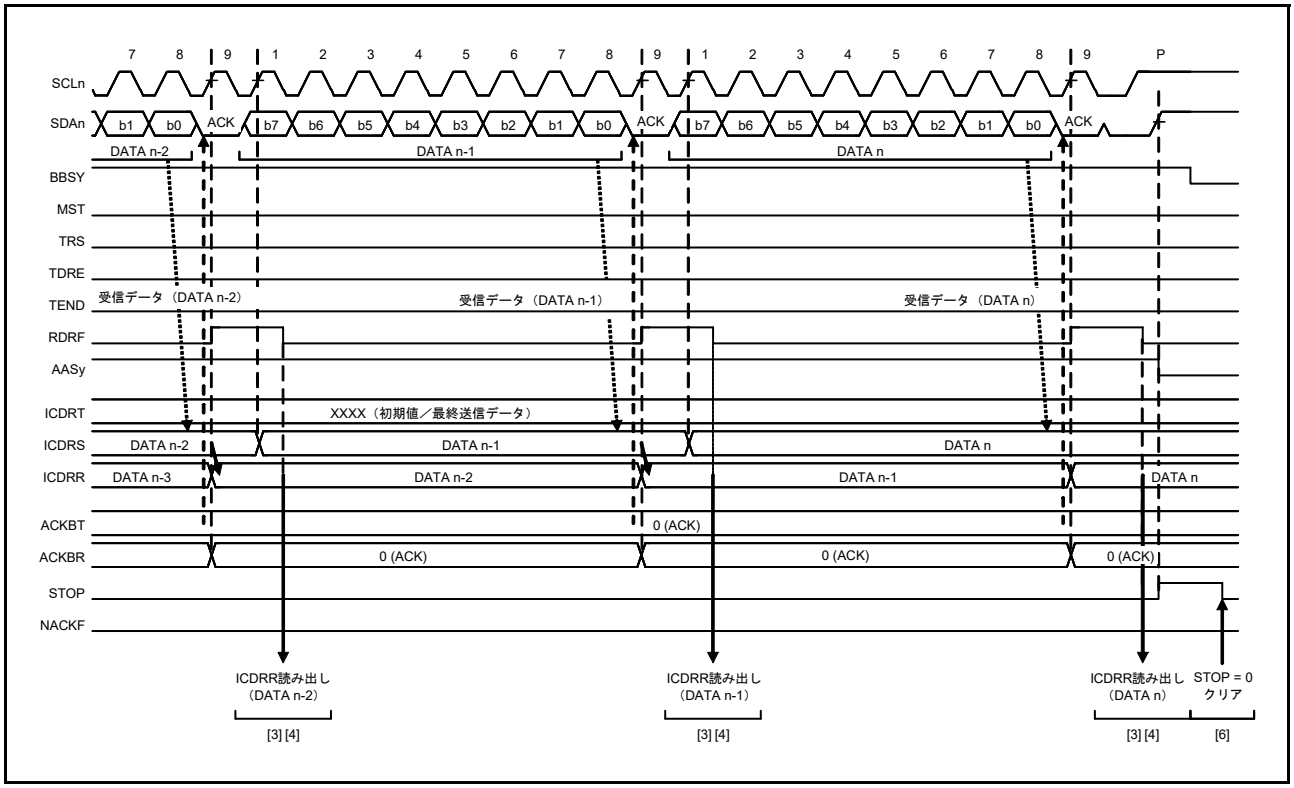


図 30.20　　スレーブ受信の動作タイミング（2）（RDRFS = 0 の場合）

30.4　SCL 同期回路

SCL クロック生成では、IIC が SCLn ラインの立ち上がりを検出すると、ICBRH レジスタで設定した High 幅のカウントを開始し、カウントが終了すると SCLn ラインを Low にします。また、IIC が SCLn ラインの立ち下がりを検出すると、ICBRL レジスタで設定した Low 幅のカウントを開始し、カウントが終了すると SCLn ラインを開放します。IIC はこのプロセスを繰り返すことによって、SCL クロックを生成します。

I²C バスをマルチマスタで使用する場合、他のマスタデバイスとの競合により SCL 信号同士が衝突する場合があります。SCL 信号が衝突した場合、マスタデバイスは SCL 信号の同期化を行う必要があります。この SCL 信号の同期化はビットごとに行う必要があるため、IIC はマスタモード時に SCLn ラインを監視することで、ビットごとに SCL クロック信号の同期を取る SCL 同期回路を備えています。

IIC が SCLn ラインの立ち上がりを検出して、ICBRH レジスタで指定した High 幅のカウントを開始し、他のマスタデバイスが生成している SCL 信号によって SCLn ラインが Low になると、IIC は以下の処理を実行します。

1. 立ち下がりを検出すると、カウントを停止します。
2. SCLn ラインを Low に変化させます。
3. ICBRL レジスタで指定した Low 幅のカウントを開始します。

Low 幅のカウントが終了すると、IIC は SCLn ラインの Low ホールドを停止します。他のマスタデバイスからの SCL クロック信号の Low 幅が、IIC 側で設定した Low 幅よりも長いと、SCL クロックの Low 幅が延長されます。他のマスタデバイスの Low 幅出力が終了すると、SCLn ラインの解放によって SCL クロックが立ち上がります。IIC が SCL クロックの Low 幅の出力を終了すると、SCLn ラインが解放され、SCL クロックが立ち上がります。すなわち、マルチマスタによる SCL 信号衝突時の SCL 信号の High 幅は、High 幅の短いクロックに同期化され、SCL 信号の Low 幅は、Low 幅の長いクロックに同期化されます。なお、この SCL 同期は、ICFER.SCLE ビットが 1 のときのみ有効です。

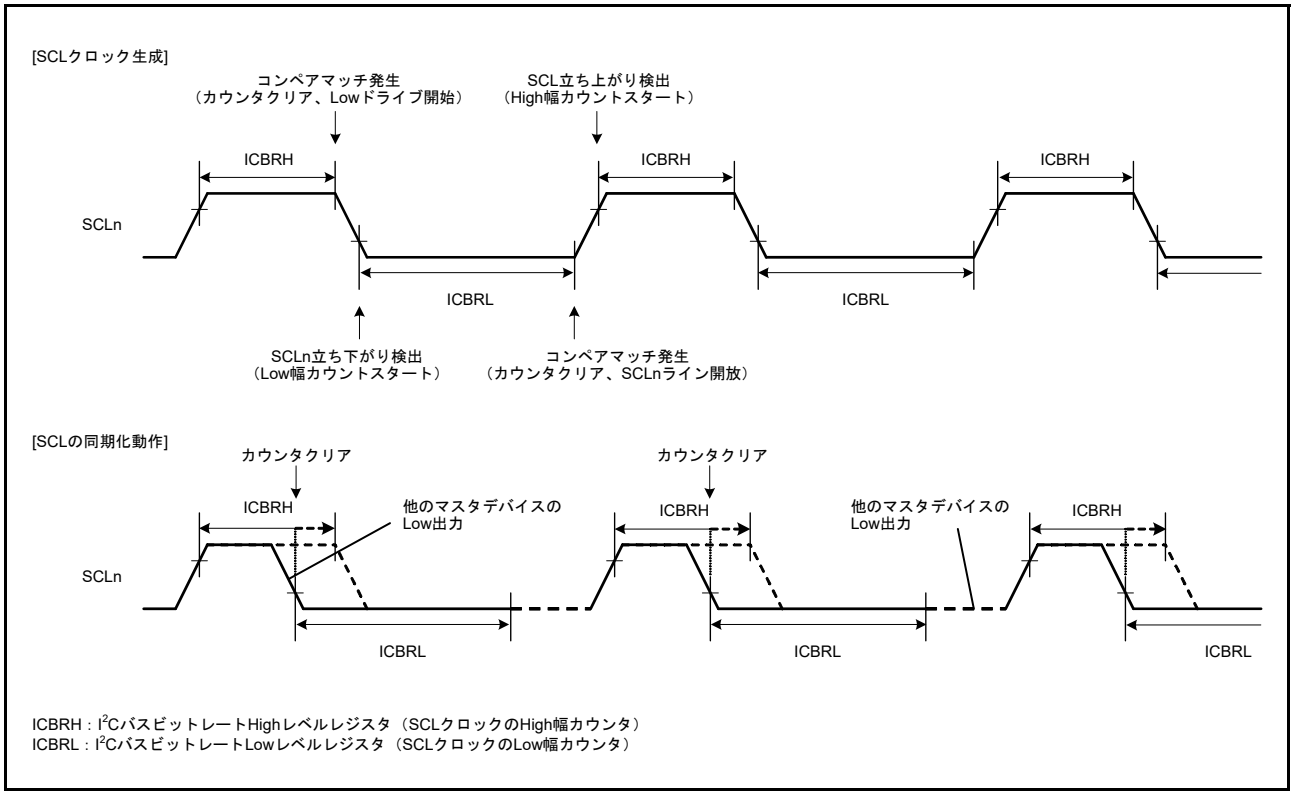


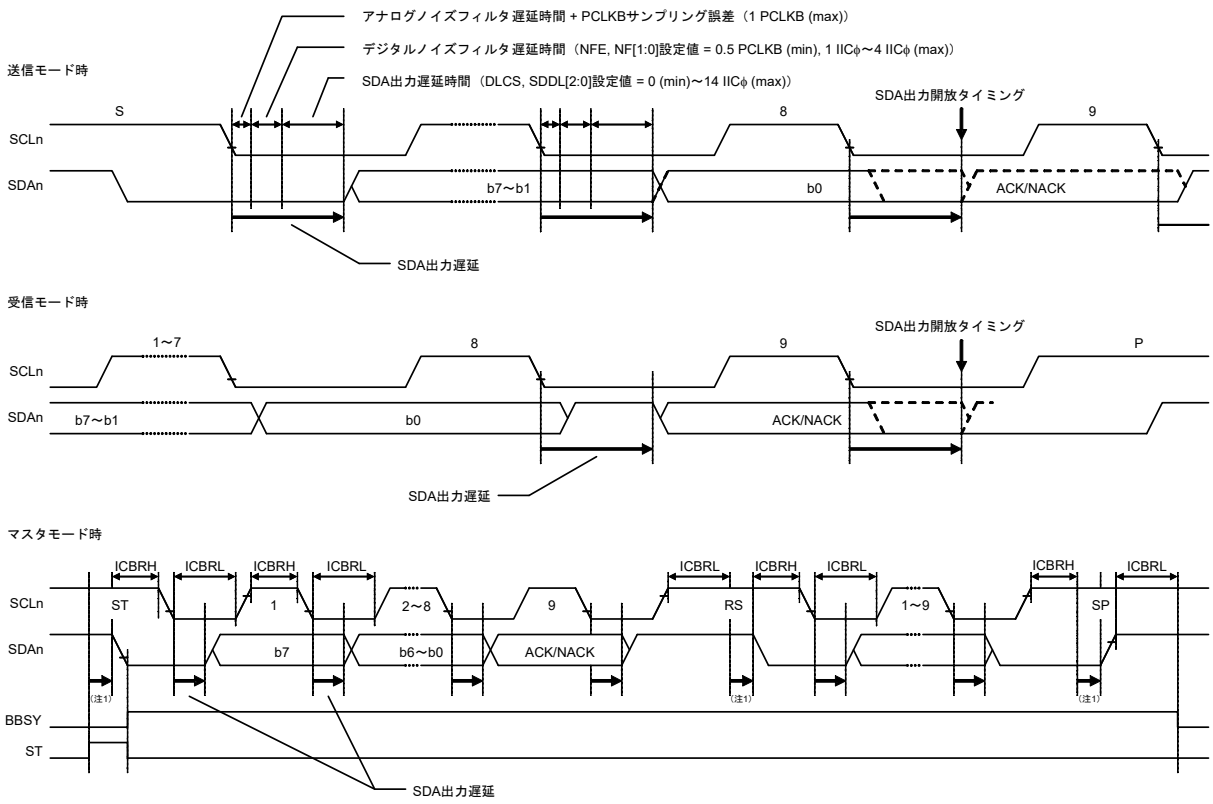
図 30.21　IIC の SCL クロック生成および SCL 同期化動作

30.5　SDA 出力遅延機能

IIC モジュールは SDA 出力遅延機能を備えています。SDA 出力遅延機能は、すべての SDA 出力タイミング（スタート／リスタート／ストップコンディションの発行、データ出力、ACK/NACK 出力）を遅延させることができます。

この機能は、SCL 信号の立ち下がり検出から SDA 出力を遅延させ、SCL クロックが Low である期間中に確実に SDA 信号が出力されるようにします。この方法により、SMBus 仕様の最小データホールド時間（300ns）の要件を満たして、通信デバイスの誤動作を防止できるようになります。SDA 出力遅延機能は、ICMR2.SDDL[2:0] ビットが 000b 以外のとき有効で、SDDL[2:0] ビットが 000b のとき無効です。

SDA 出力遅延機能が有効のとき、たとえば ICMR2.DLCS ビットは、IIC モジュール用の内部基準クロック（IICΦ）とその 2 分周クロック（IICΦ/2）のどちらを SDA 出力遅延カウンタのクロックソースとして使用するかを選択します。カウンタは、ICMR2.SDDL[2:0] ビットに設定されたサイクル数をカウントします。遅延カウントに達すると、IIC モジュールは SDA ライン上で必要な出力（スタート／リスタート／ストップコンディション、データ、ACK/NACK 信号）を行います。



注1.　スタートコンディション（ST）、リスタートコンディション（RS）、ストップコンディション（SP）発行時はDLCS, SDDL[2:0]設定値分の遅延

図 30.22　　SDA 出力遅延機能

30.6　デジタルノイズフィルタ回路

SCLn 端子および SDAn 端子の状態は、アナログノイズフィルタ回路とデジタルノイズフィルタ回路を通じて確認できます。図 30.23 に、デジタルノイズフィルタ回路のブロック図を示します。

IIC に内蔵されているデジタルノイズフィルタ回路は、4 段の直列に接続されたフリップフロップ回路と一致検出回路で構成されています。

デジタルノイズフィルタの有効段数は ICMR3.NF[1:0] ビットで選択します。ノイズ除去能力は選択した有効段数に応じて、1IICφ ～ 4IICφ サイクル分となります。

SCLn 端子入力信号（または SDAn 端子入力信号）は IICφ の立ち下がりでサンプリングされます。入力信号レベルが、ICMR3.NF[1:0] ビットで選択した有効なフリップフロップ回路段数の出力レベルと一致したとき、その信号レベルを後続の各段で確認できます。一致しない場合は前のレベルを保持します。

なお、内部動作クロック（PCLKB）と通信速度の比が小さい場合、たとえば PCLKB = 4MHz 時の 400kbps 通信では、デジタルノイズフィルタは有効信号をノイズとして処理する可能性があります。そのような場合は、ICFER.NFE ビットを 0 にすることでデジタルノイズフィルタ回路を無効にし、アナログノイズフィルタ回路のみを使用することが可能です。

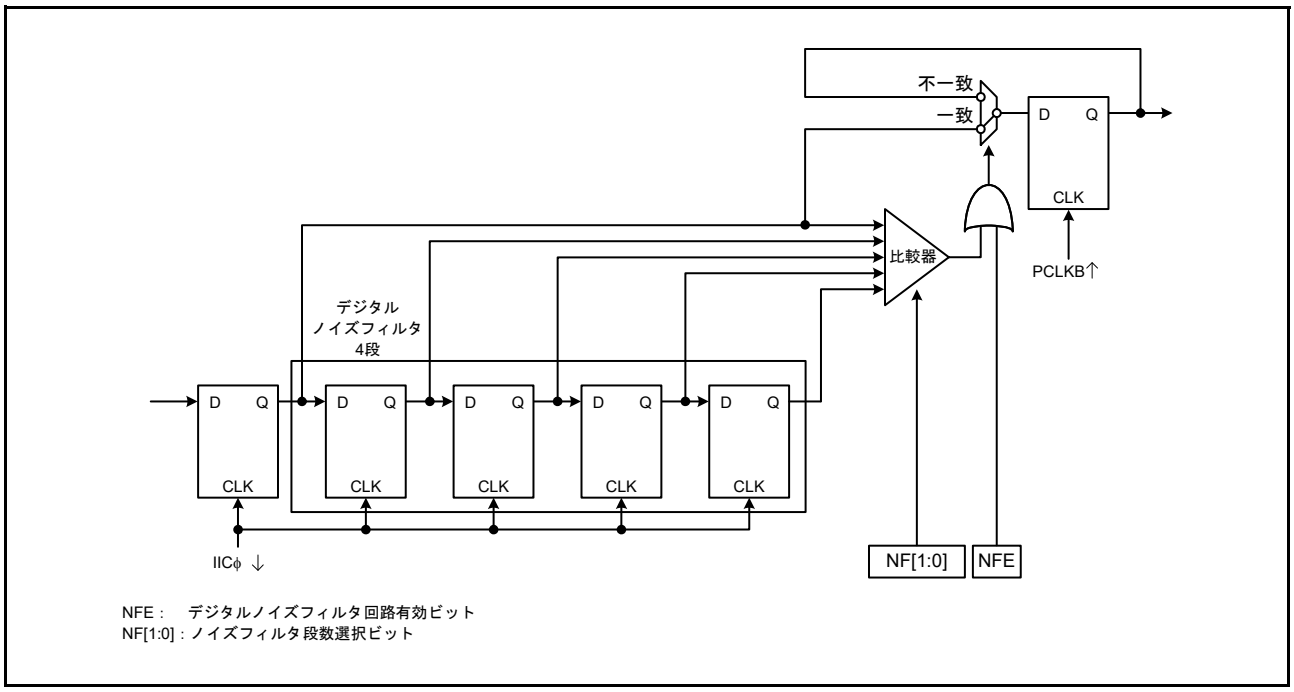


図 30.23　　デジタルノイズフィルタ回路のブロック図

30.7　アドレス一致検出機能

IIC は、ジェネラルコールアドレス、ホストアドレスの他に、3 種類の固有のスレーブアドレスの設定が可能です。またスレーブアドレスには、7 ビットアドレスまたは 10 ビットアドレスを設定できます。

30.7.1　スレーブアドレス一致検出機能

IIC は 3 種類の固有のスレーブアドレスの設定が可能であり、それぞれに対してスレーブアドレス検出機能を備えています。ICSER.SARyE ビット（y = 0 ～ 2）が 1 のとき、SARUy および SARLy レジスタ（y = 0 ～ 2）に設定されたスレーブアドレスを検出できます。

IIC が設定されたスレーブアドレス一致を検出すると、対応する ICSR1.AASy フラグ（y = 0 ～ 2）が SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になり、続く R/W# ビットにより ICSR2.RDRF フラグまたは ICSR2.TDRE フラグが 1 になります。これによって、受信データフル割り込み（IICn_RXI）または送信データエンプティ割り込み（IICn_TXI）を発生させることができます。どのスレーブアドレスが指定されたかは AASy フラグで識別できます。

図 30.24 ～図 30.26 に、AASy フラグが 1 になるタイミングを 3 つのケースで示します。

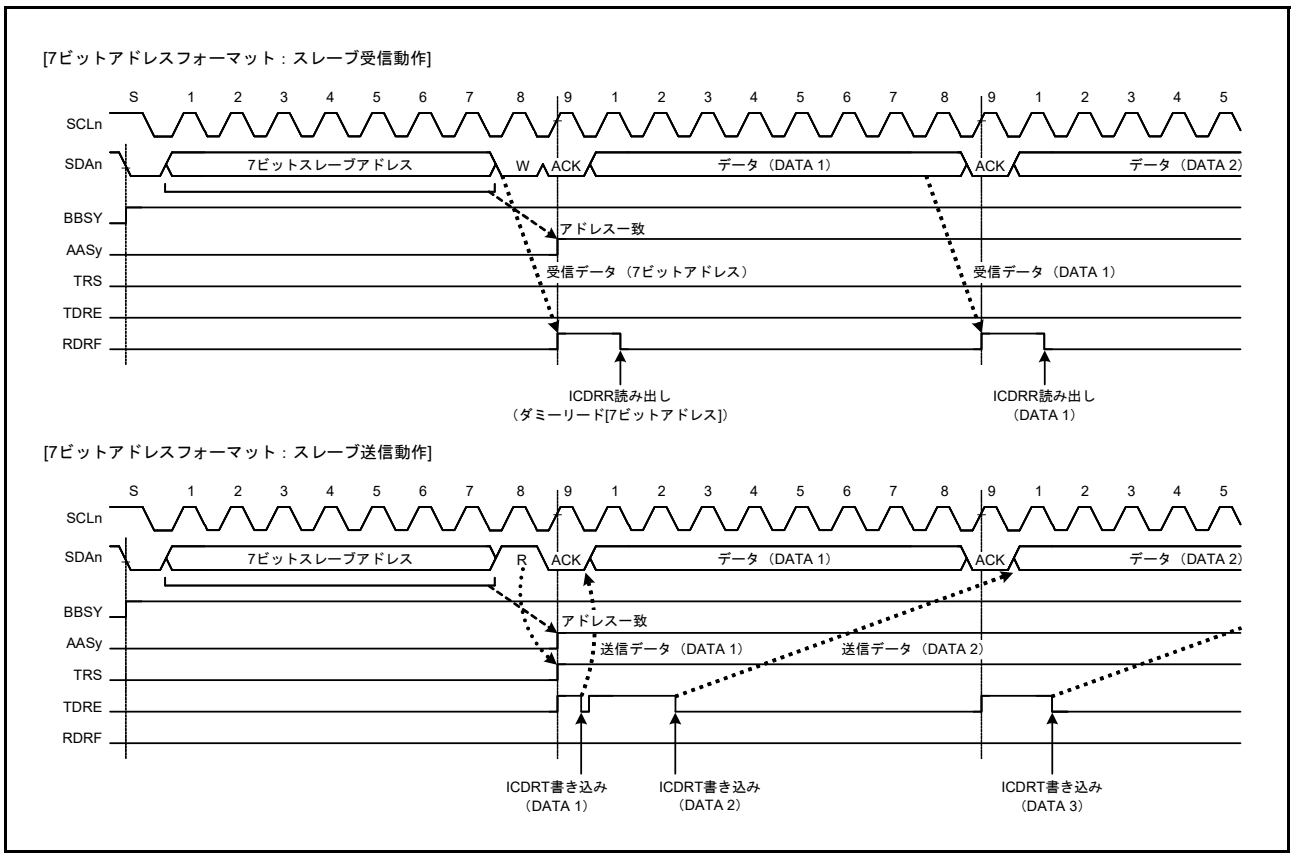


図 30.24　AASy フラグが 1 になるタイミング（7 ビットアドレスフォーマット選択時）

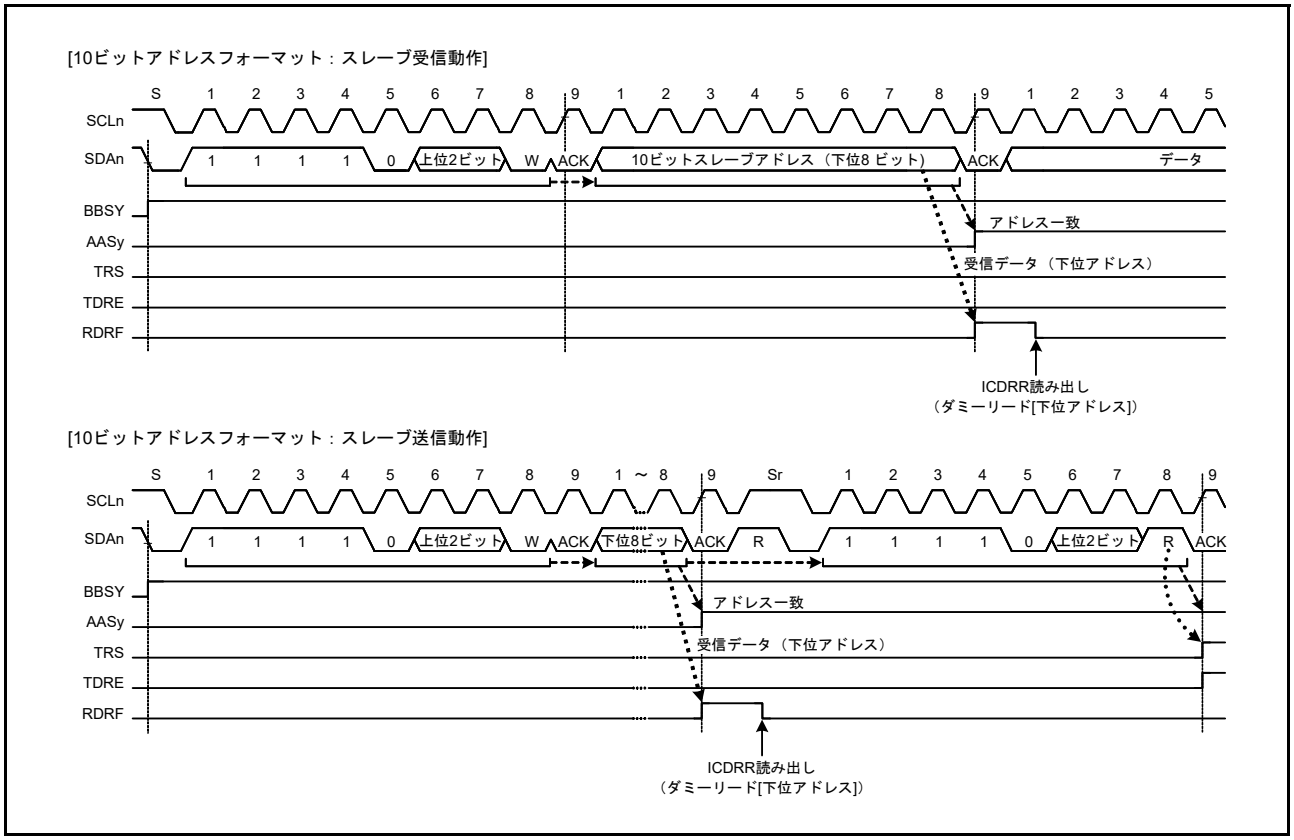


図 30.25　AASy フラグが 1 になるタイミング（10 ビットアドレスフォーマット選択時）

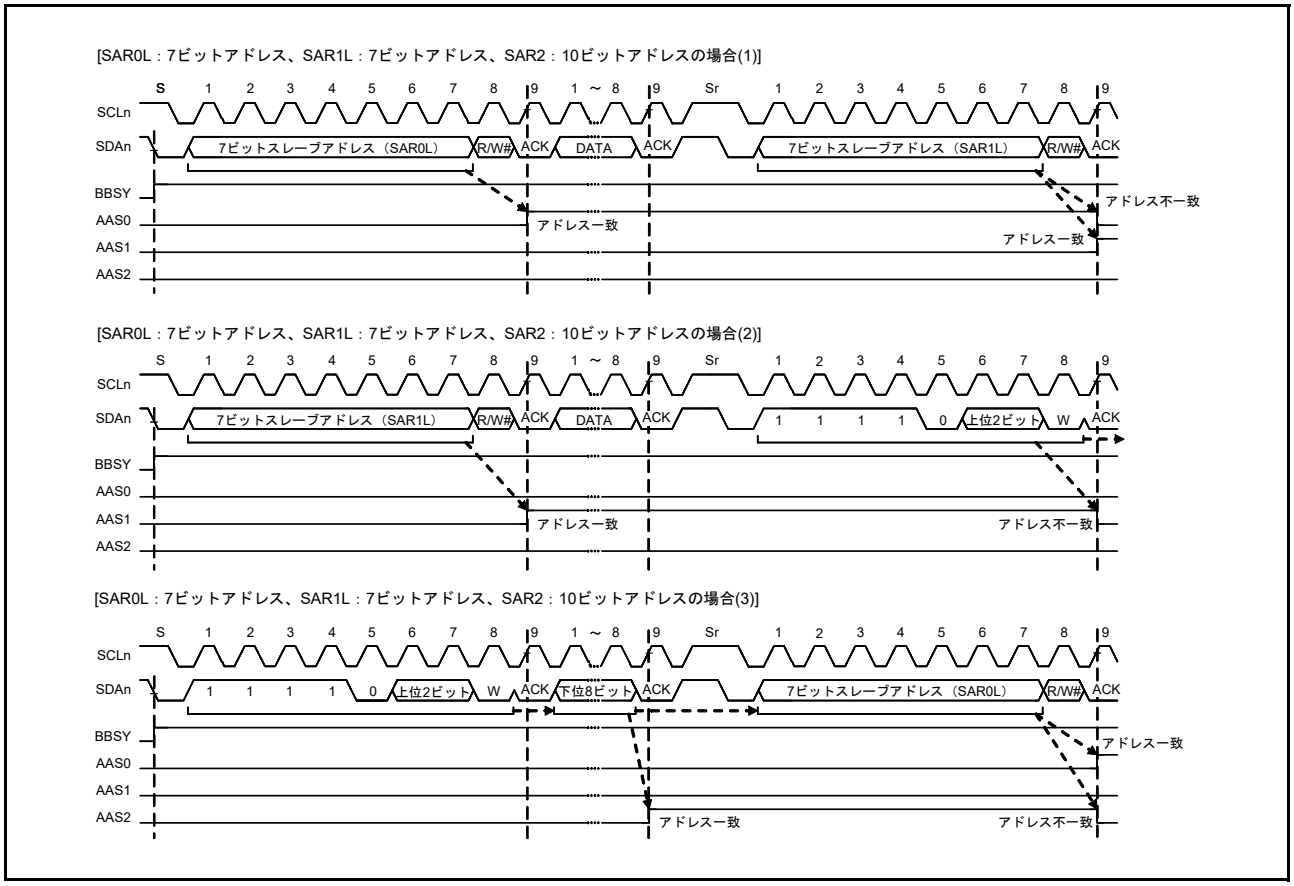


図 30.26　AASy フラグが 1 または 0 になるタイミング（7 ビット／10 ビットアドレスフォーマット混在）

30.7.2　ジェネラルコールアドレス検出機能

IIC は、ジェネラルコールアドレス（0000 000b + 0[W]）の検出機能を備えています。ジェネラルコールアドレス検出機能は、ICSER.GCAE ビットを 1 にすることで有効になります。

スタートコンディションまたはリスタートコンディション発行後に受信したアドレスが 0000 000b + 1[R]（開始バイト）の場合、IIC はスレーブアドレスの内容はすべて 0 であるとみなし、ジェネラルコールアドレスとは認識しません。

IIC がジェネラルコールアドレスを検出すると、SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで ICSR1.GCA フラグと ICSR2.RDRF フラグが 1 になります。これによって、受信データフル割り込み（IICn_RXI）が発生します。GCA フラグを確認することで、ジェネラルコールアドレスが送信されたかどうかを確認できます。

なお、ジェネラルコールアドレス検出後の動作は、通常のスレーブ受信動作と同じです。

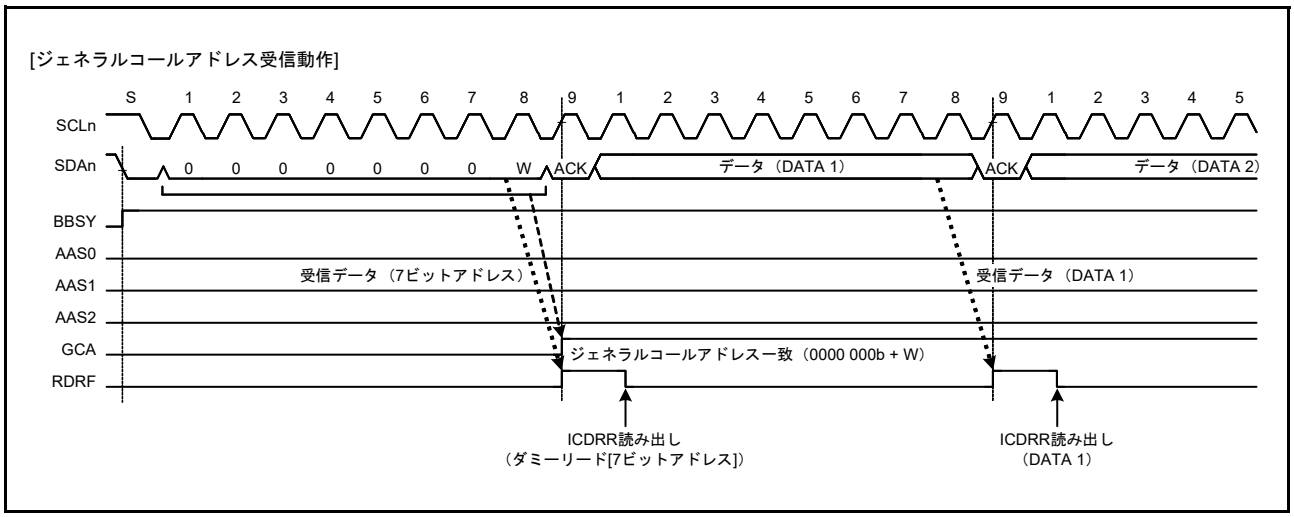


図 30.27　ジェネラルコールアドレス受信時に GCA フラグが 1 になるタイミング

30.7.3　デバイス ID アドレス検出機能

IIC モジュールは、I²C バス仕様（リビジョン 03）に準拠したデバイス ID アドレスの検出機能を備えています。ICSER.DIDE ビットを 1 にした状態で、スタートコンディションまたはリスタートコンディション発行後の 1 バイト目に 1111 100b を受信すると、IIC はこのアドレスをデバイス ID アドレスと認識し、続く R/W# ビットが 0 の場合、SCL クロックの 8 クロック目の立ち上がりで ICSR1.DID フラグを 1 にした後、2 バイト目以降と自スレーブアドレスを比較します。この 2 バイト目以降のアドレスがスレーブアドレスレジスタの値と一致した場合、IIC は対応する ICSR1.AASy フラグ（y = 0 ～ 2）を 1 にします。

スタートコンディションまたはリスタートコンディション発行後に受信した 1 バイト目が再びデバイス ID アドレス（1111 100b）と一致し、続く R/W# ビットが 1 の場合、IIC は続く 2 バイト目以降のアドレス比較を行わず、ICSR2.TDRE フラグを 1 にします。

デバイス ID アドレス検出機能では、IIC スレーブアドレスと一致しなかった場合、あるいは IIC スレーブアドレスが一致し、リスタートコンディションの検出時にデバイス ID アドレスと一致しなかった場合、IIC は DID フラグを 0 にします。スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出後の 1 バイト目がデバイス ID アドレス（1111 100b）と一致し、かつ R/W# ビットが 0 の場合は、IIC は DID フラグを 1 にして、続く 2 バイト目以降を IIC のスレーブアドレスと比較します。R/W# ビットが 1 の場合、DID フラグは前値の状態を継続し、IIC は 2 バイト目以降の比較を行いません。したがって、TDRE = 1 の確認後、DID フラグを読むことで、デバイス ID アドレスを受信したことを確認することが可能です。

なお、一連のデバイス ID フィールド受信後にホストに送信するデバイス ID フィールドとして、必要な情報（3 バイトデータ：メーカ情報［12 ビット］+ 部品識別［9 ビット］+ リビジョン［3 ビット］）を、通常の送信データとして準備しておいてください。デバイス ID フィールドに含める必要のある情報については、NXP 社にお問い合わせください。

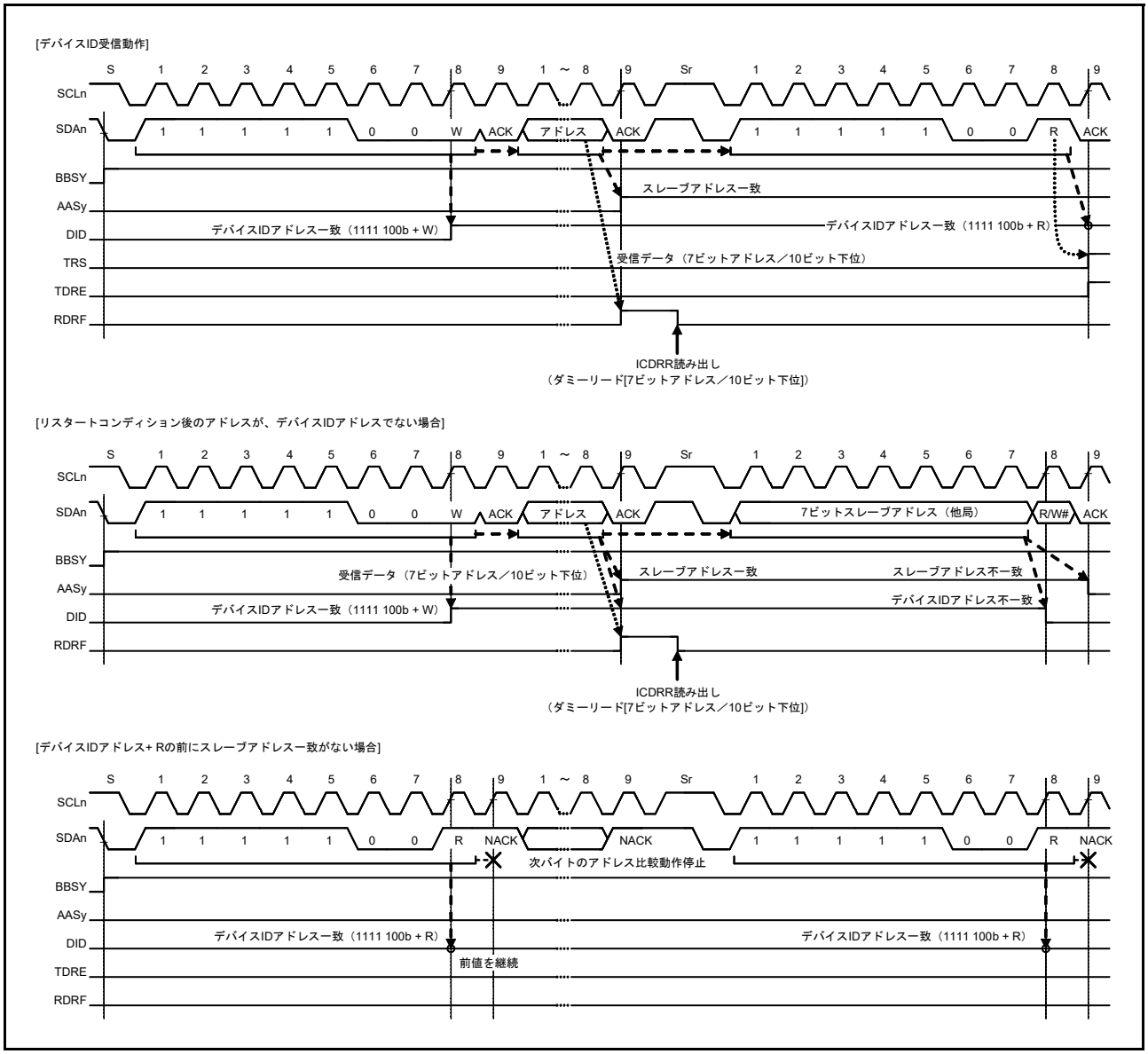


図 30.28　デバイス ID 受信時の AASy、DID フラグのセット／クリアタイミング

30.7.4　ホストアドレス検出機能

IIC は、SMBus モード動作時、ホストアドレスの検出が可能です。ICMR3.SMBS ビットが 1 のとき ICSER.HOAE ビットを 1 にすると、スレーブ受信モード（ICCR2.MST、ICCR2.TRS ビット = 00b）時に、ホストアドレス（0001 000b）の検出が可能です。

IIC がホストアドレスを検出すると、SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで ICSR1.HOA フラグが 1 になります。同時に、R/W# ビットが 0 のとき、ICSR2.RDRF フラグが 1 になります。これによって、受信データフル割り込み（IICn_RXI）が発生します。HOA フラグは、ホストアドレスが検出されたことを示します。

なお、ホストアドレス（0001 000b）に続くビットが読み出しビット（R/W# ビット = 1）の場合にも、ホストアドレスの検出が可能です。ホストアドレス検出後の IIC の動作は、通常のスレーブ動作と同じです。

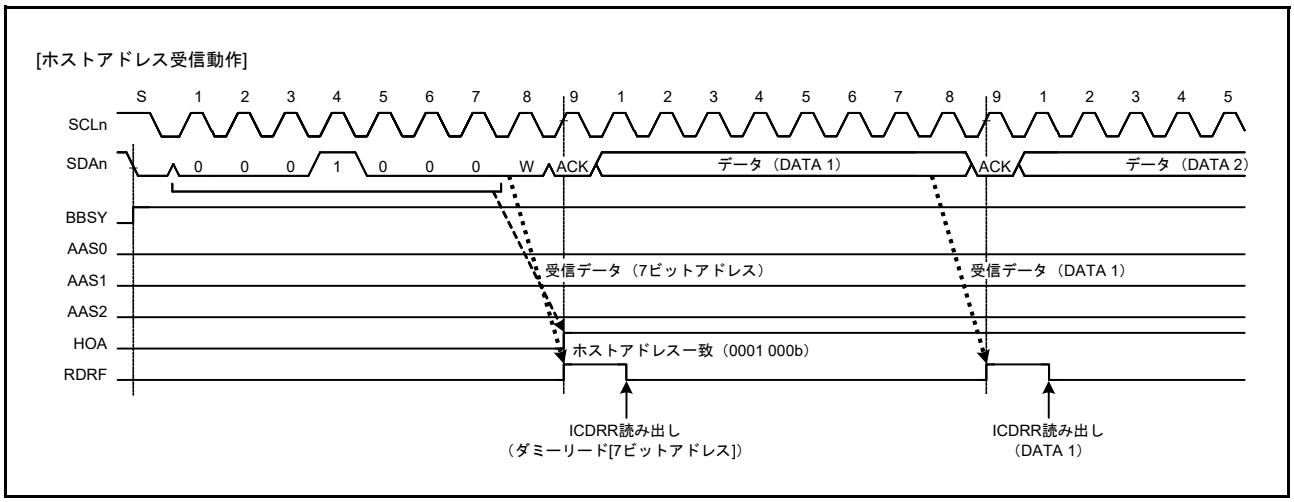


図 30.29　ホストアドレス受信時に HOA フラグが 1 になるタイミング

30.8　ウェイクアップ機能

IIC は、MCU をソフトウェアスタンバイモードから通常動作に遷移させるウェイクアップ機能を備えています。ウェイクアップ機能は、システムクロック停止時にデータの受信を許可し、受信データのスレーブアドレスが一致した場合にウェイクアップ割り込み信号を生成します。このウェイクアップ割り込み信号により、MCU は通常動作に遷移します。

ウェイクアップ機能には、下記の 4 つの動作モードがあります。

- ノーマルウェイクアップモード 1
- ノーマルウェイクアップモード 2
- コマンドリカバリモード
- EEP 応答モード

表 30.9 に各モードの動作を示します。

表 30.9　ウェイクアップ動作モード

動作モード	ACK応答タイミング	ウェイクアップ前のACK応答	ウェイクアップ時のSCL状態
ノーマルウェイクアップモード1	ウェイクアップ前	ACK	Lowに固定
ノーマルウェイクアップモード2	ウェイクアップ後	ウェイクアップ前：応答なし ウェイクアップ後：ACK応答	Lowに固定
コマンドリカバリモード	ウェイクアップ前	ACK	解放
EEP応答モード	ウェイクアップ前	NACK	解放

ウェイクアップ機能使用時の注意事項

- ウェイクアップ割り込みによってソフトウェアスタンバイモードから通常動作へ遷移させた後、ウェイクアップ機能を無効（WUE = 0）にしてください
- WUF が 0 の場合は、ウェイクアップ割り込みによってシステムクロックが回復しても、IIC レジスタの内容を変更しないでください。WUF が 1 であることを確認してから、レジスタ設定を行ってください
- ソフトウェアスタンバイモードへ遷移する前に、WUE および WUIE ビットを 1 に、MST および TRS ビットを 0（スレーブ受信モード）にしてください
- BBSY が 1 の場合は、ソフトウェアスタンバイモードへの遷移を行わないでください
- ウェイクアップ機能は、スレーブアドレスレジスタ SARL0 の 7 ビットスレーブアドレス、ジェネラルコールアドレス、およびホストアドレスをサポートしています。10 ビットスレーブアドレス、SARL1、SARL2 はサポートしていません
- ウェイクアップ機能を有効にする場合、ICIER レジスタの TIE、TEIE、RIE、NAKIE、SPIE、STIE、ALIE、および TMOIE の各ビットで選択可能な割り込みは禁止してください
- ウェイクアップ機能が有効のときは、タイムアウト機能を使用しないでください
- ウェイクアップ割り込み以外の割り込み（たとえば IRQn）で、ソフトウェアスタンバイモードからの遷移がトリガされると、WUF フラグは 1 になりません

30.8.1　ノーマルウェイクアップモード 1

以下では、ノーマルウェイクアップモード 1 の動作、タイミング、および動作例について説明します。

ノーマルウェイクアップモード 1 では、スレーブアドレスの一致によってトリガされたウェイクアップ割り込みにより、以下のような通常動作への遷移が行われます。

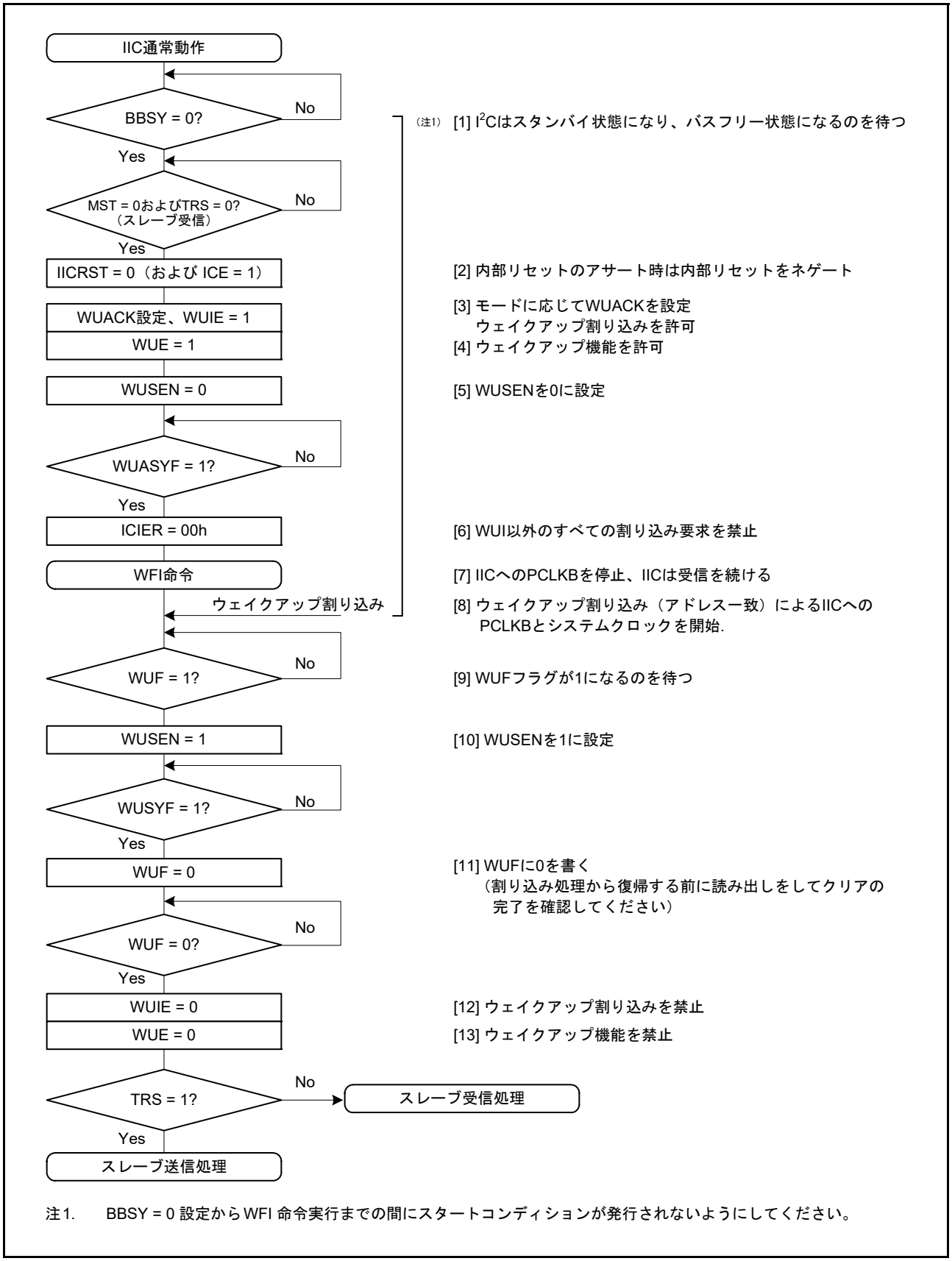
ウェイクアップ前：IIC の自スレーブアドレスとともに受信したデータに対して ACK を送信する。
ウェイクアップ中：SCL の 9 クロック目で ACK 応答を行ってから、SCL の Low ホールドを行う。（注 1）
ウェイクアップ後：通常動作が継続する。

スレーブアドレスが不一致の場合、SCL の 9 クロック目の後に SCL ラインの Low ホールドは行われず、スレーブ動作が継続します。

図 30.30 に動作例を、図 30.32 に詳細なタイミングを示します。

注 1.　ウェイクアップ中の 9 クロック目と 1 クロック目の間では、WAIT = 1 は無効です。

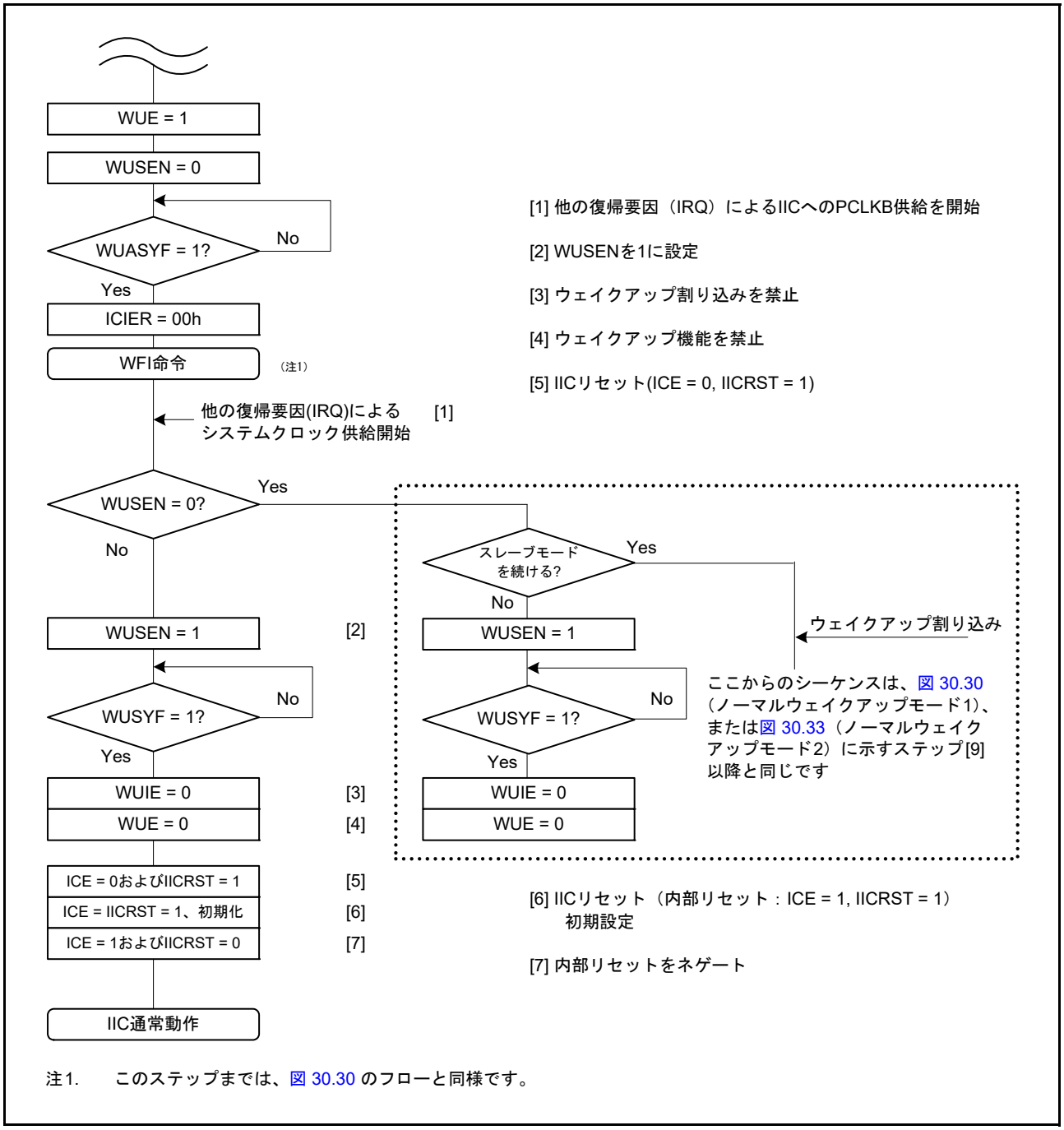
ウェイクアップ割り込み以外の割り込み（たとえば IRQn）でソフトウェアスタンバイモードからの遷移がトリガされると、WUF フラグは 1 になりません。図 30.31 に、動作例を示します。



注1.　BBSY = 0 設定からWFI 命令実行までの間にスタートコンディションが発行されないようにしてください。

図 30.30　ノーマルウェイクアップモード 1 の動作例（スレーブアドレス一致時のウェイクアップ割り込みによるウェイクアップの場合）

注 .　ウェイクアップ機能使用時の注意事項を参照してください。



注1.　このステップまでは、図 30.30 のフローと同様です。

図 30.31　ノーマルウェイクアップモード 1 および 2 の動作例（IIC ウェイクアップ割り込み以外の割り込み（たとえば IRQn）によるウェイクアップの場合）

注 .　IIC の初期設定の詳細は、30.3.2　初期設定を参照してください。

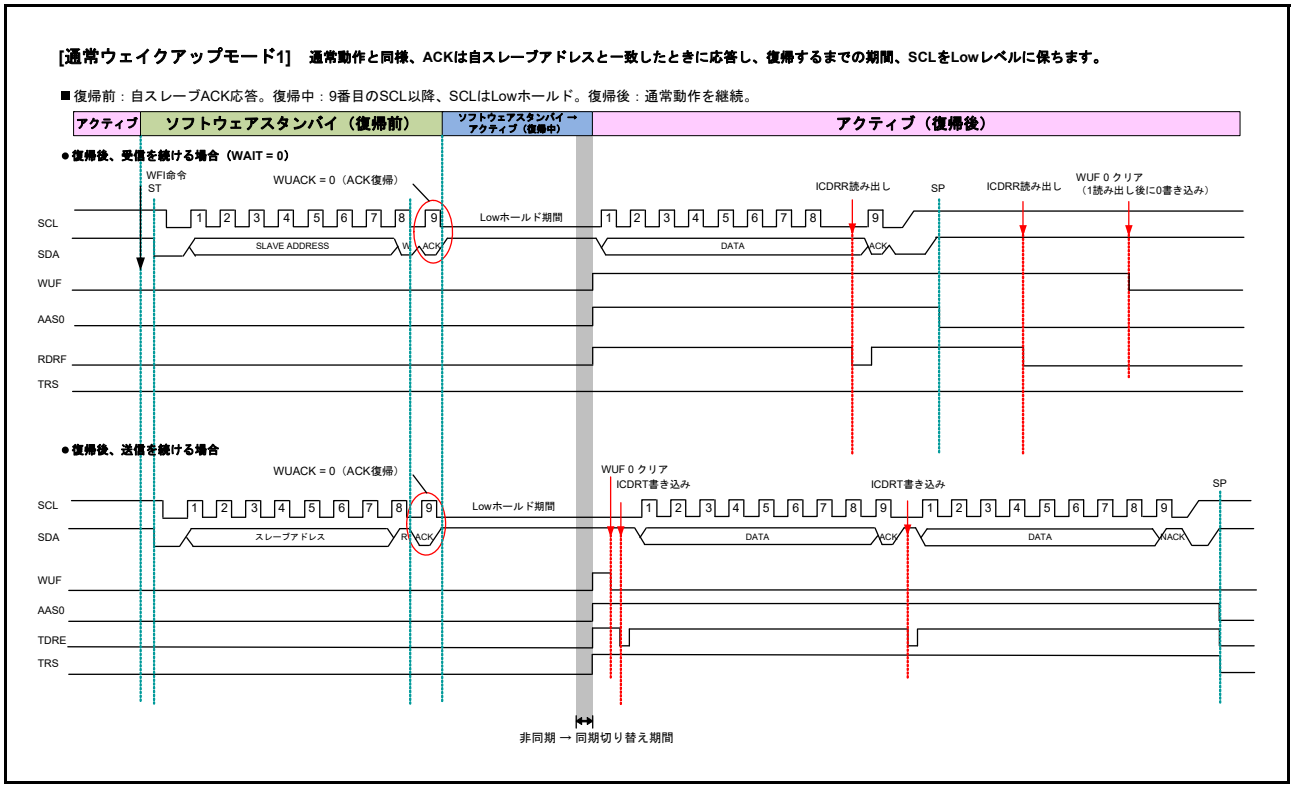


図 30.32　　ノーマルウェイクアップモード 1 のタイミング

30.8.2　ノーマルウェイクアップモード 2

以下では、ノーマルウェイクアップモード 2 の動作、タイミング、および動作例について説明します。

ノーマルウェイクアップモード 2 では、スレーブアドレスの一致によってトリガされたウェイクアップ割り込みにより、以下のような通常動作への遷移が行われます。

ウェイクアップ前：自スレーブアドレスとともに受信したデータに対して SCL の 8 クロック目の終わりまで応答しない。

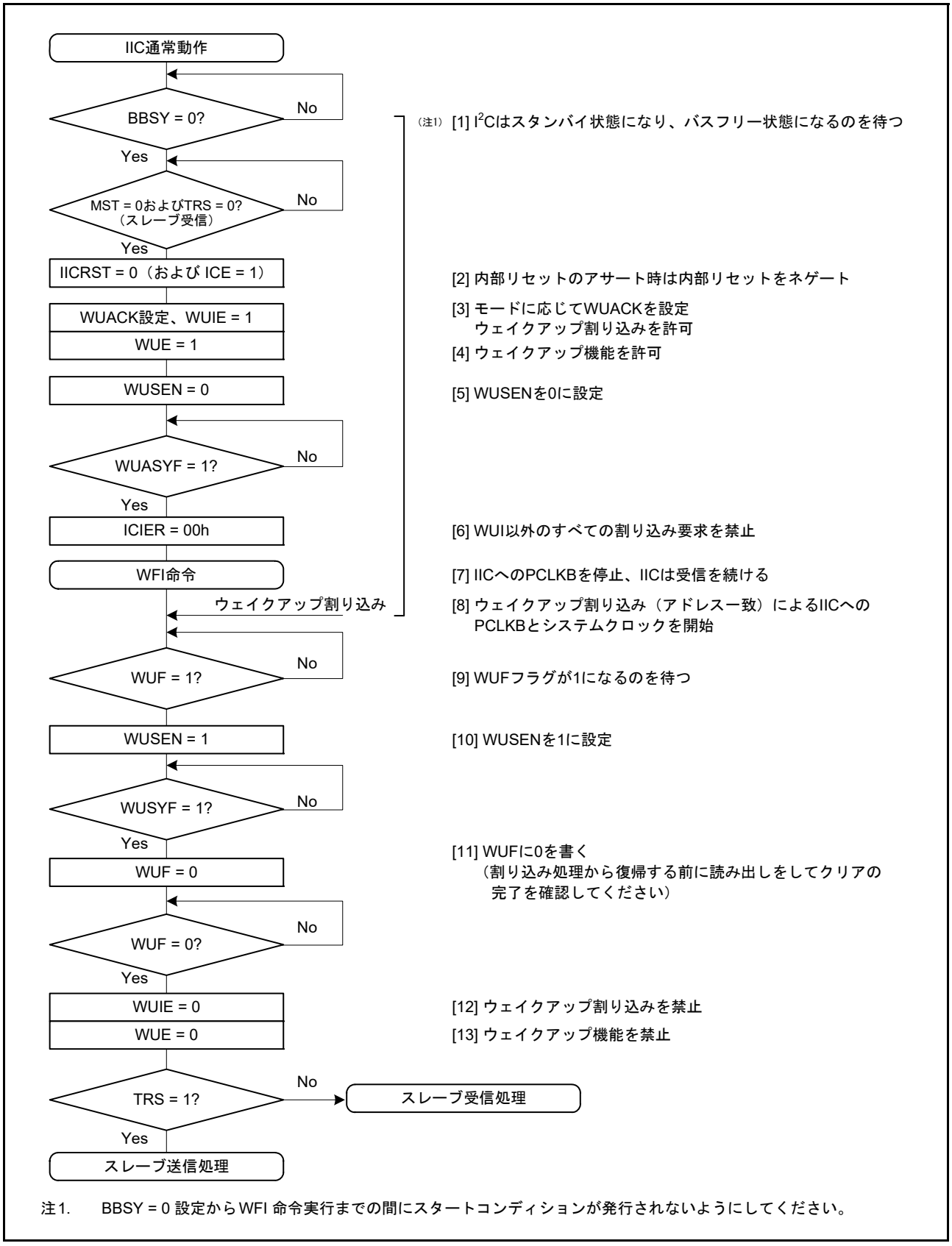
ウェイクアップ中：8 クロック目と 9 クロック目に SCL ラインの Low ホールドを行う。

ウェイクアップ後：SCL の 9 クロック目で ACK を返し、通常動作を継続する。

スレーブアドレスが不一致の場合、SCL の 8 クロック目の後に SCL ラインの Low ホールドは行われず、スレーブ動作が継続します。

ノーマルウェイクアップモード 2 の動作例については、図 30.33 を参照してください。図 30.34 に、詳細なタイミングを示します。

ウェイクアップ割り込み以外の割り込み（たとえば IRQ）で、ソフトウェアスタンバイモードからの遷移がトリガされると、WUF フラグは 1 になりません。図 30.31 に示す動作例に従ってください。



注1.　BBSY = 0 設定からWFI 命令実行までの間にスタートコンディションが発行されないようにしてください。

図 30.33　ノーマルウェイクアップモード 2 の動作例（スレーブアドレス一致時のウェイクアップ割り込みによるウェイクアップの場合）

注 .　ウェイクアップ機能使用時の注意事項を参照してください。

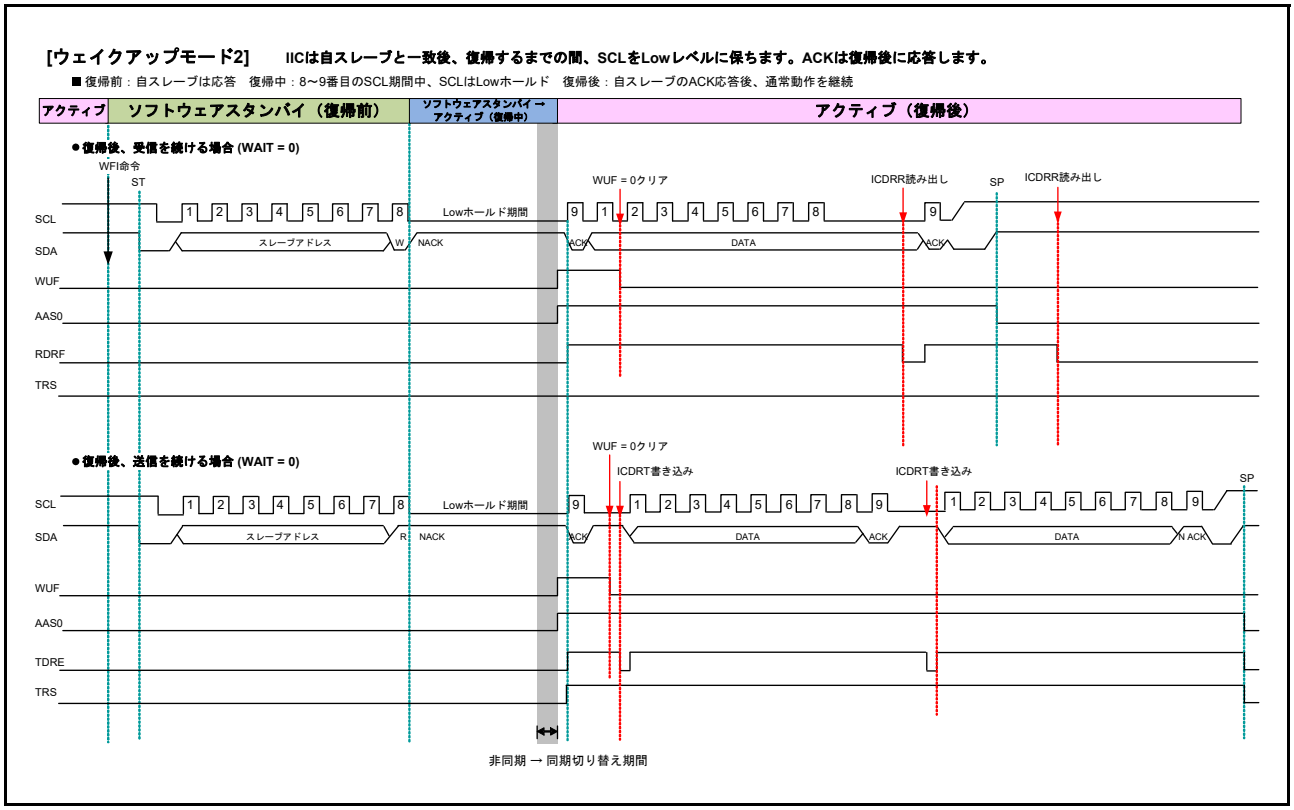


図 30.34　　ノーマルウェイクアップモード 2 のタイミング

30.8.3　コマンドリカバリモード／EEP 応答モード（特殊ウェイクアップモード）

コマンドリカバリモードと EEP 応答モードでは、ウェイクアップ期間中（SCL の 9 クロック目の立ち上がり後）に SCL ラインの Low ホールドは行われません。したがって、他の IIC デバイスはこの期間に I2C バスを利用できます。

以下では、コマンドリカバリモードと EEP 応答モードの動作、タイミング、および動作例について説明します。

スレーブアドレスの一致によってトリガされたウェイクアップ割り込みにより、以下のように通常動作への遷移が行われます。

ウェイクアップ前：IIC は自スレーブアドレスとともに受信したデータに対して、ACK（コマンドリカバリモードの場合）または NACK（EEP 応答モードの場合）を返す。

ウェイクアップ中：SCL ラインの Low ホールドを行わない。

ウェイクアップ後：IIC の初期化後、通常動作を継続する。

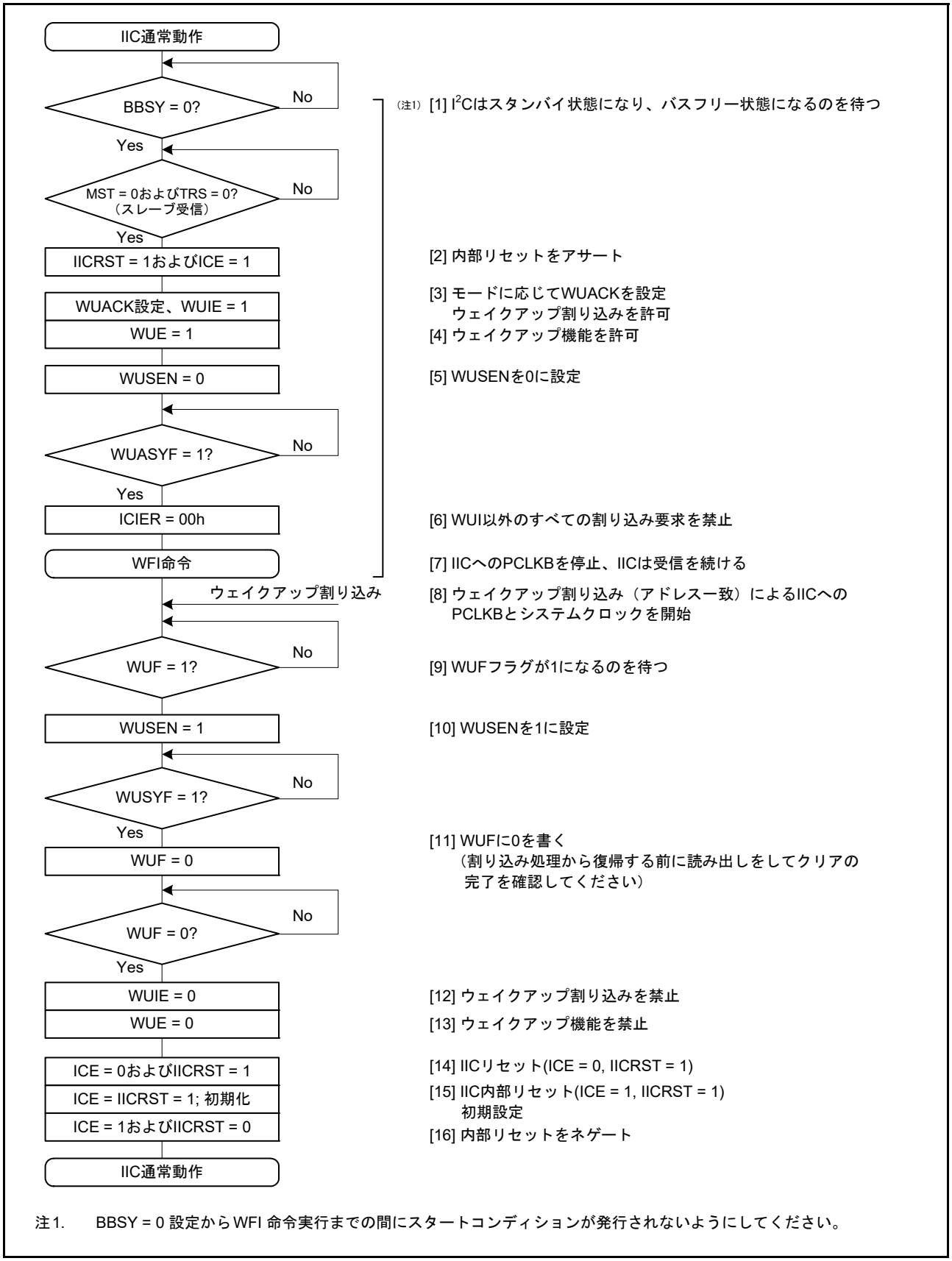
スレーブアドレスが不一致の場合、スレーブ動作が継続します。

コマンドリカバリモードと EEP 応答モードの動作例については、図 30.35 を参照してください。図 30.37 に、詳細なタイミングを示します。

注 .　ウェイクアップ中に SCL ラインの Low ホールドは行われないので、スレーブアドレスの後続データは送受信できません。

注 .　コマンドリカバリモードと EEP 応答モードは、内部リセット（ICE = IICRST = 1）状態です。したがって、スレーブアドレスが一致しても、ICSR1 レジスタのフラグ（HOA、GCA、AAS0、AAS1、AAS2）は設定されません。

ウェイクアップ割り込み以外の割り込み（たとえば IRQn）で、ソフトウェアスタンバイモードからの遷移がトリガされると、WUF フラグは 1 になりません。図 30.36 に示す動作例に従ってください。



注1.　BBSY = 0 設定からWFI 命令実行までの間にスタートコンディションが発行されないようにしてください。

図 30.35　コマンドリカバリモードと EEP 応答モードの動作例（スレーブアドレス一致時のウェイクアップ割り込みによるウェイクアップの場合）

注 .　ウェイクアップ機能使用時の注意事項を参照してください。

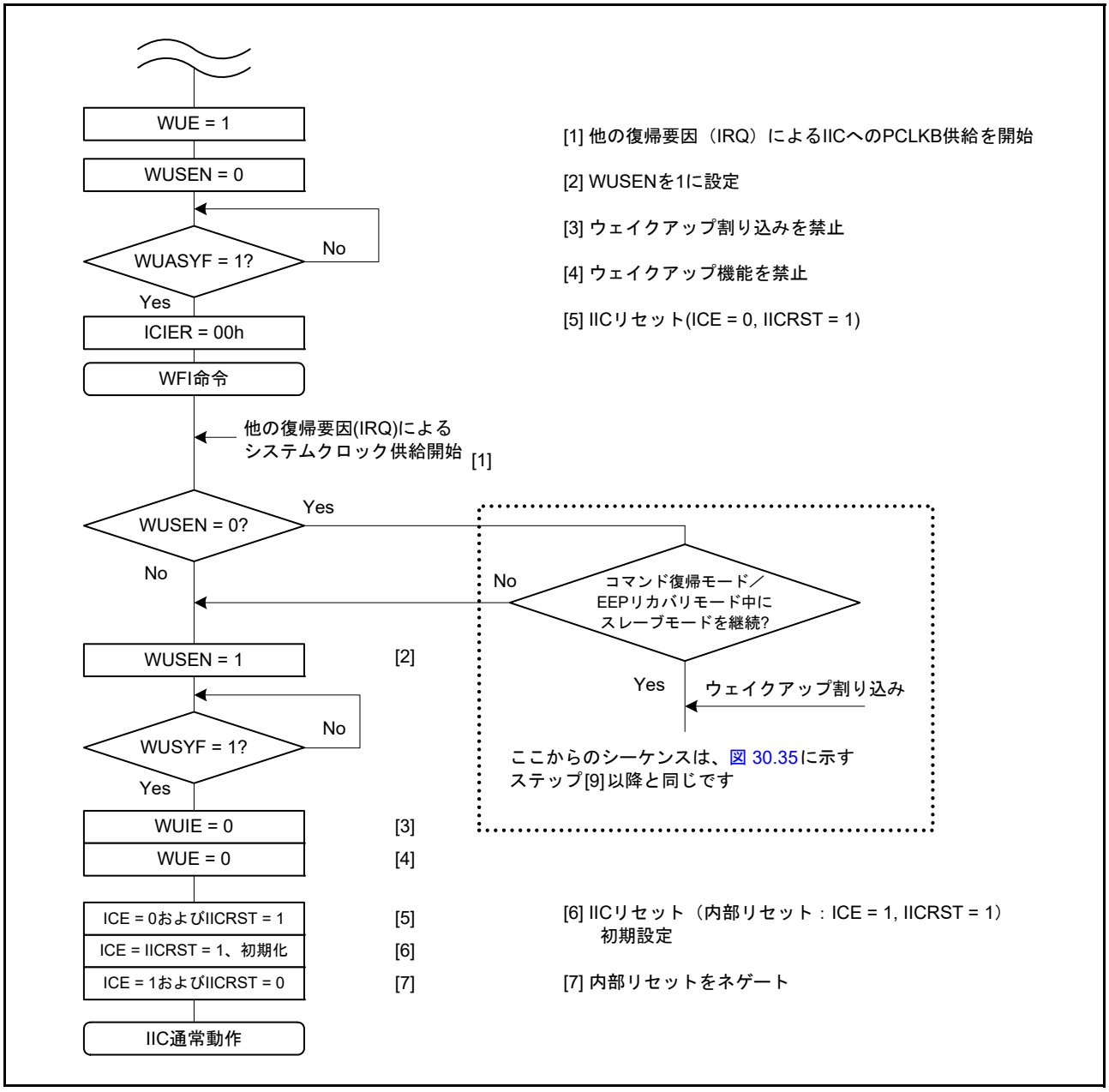


図 30.36　コマンドリカバリモードと EEP 応答モードの動作例（IIC ウェイクアップ割り込み以外の割り込み（たとえば IRQn）によるウェイクアップの場合）

注 .　IIC の初期設定の詳細は、30.3.2　初期設定を参照してください。

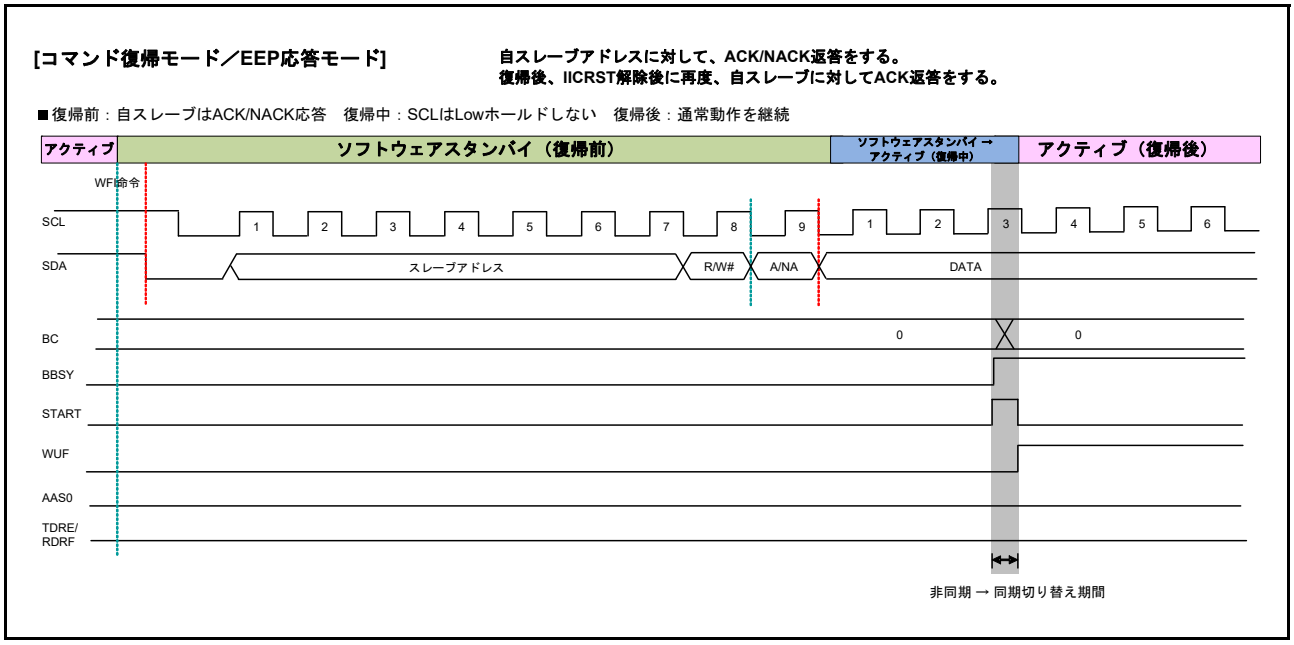


図 30.37　　コマンドリカバリモードおよび EEP 応答モードのタイミング

30.8.4　WFI 命令の実行に関する注意事項

図 30.30、図 30.33、図 30.35 に示すウェイクアップ機能の例では、BBSY = 0 を設定してから WFI 命令を実行するまでの間は、スタートコンディションを発行しないようにしてください。

この間にスタートコンディションを発行すると、先頭データブロックの 1 バイト目の受信後に NACK が返されます。その後、スタートコンディションまたはリスタートコンディションの検出によって、ウェイクアップ機能が有効になります。

30.9　SCL の自動 Low ホールド機能

30.9.1　送信データの誤送信防止機能

IIC が送信モード時（ICCR2.TRS ビット = 1）、I2C バス送信レジスタ（ICDRT）にデータが書かれていない場合で、I2C バスシフトレジスタ（ICDRS）が空の場合、以下に示す区間、自動的に SCLn ラインの Low ホールドを行います。この Low ホールドは、送信データの書き込みが行われるまでの期間 Low 区間を延長し、意図しない送信データの誤送信を防止します。

マスタ送信モード：

- スタートコンディション／リスタートコンディション発行後の Low 区間
- 9 クロック目と 1 クロック目の間の Low 区間

スレーブ送信モード：

- 9 クロック目と 1 クロック目の間の Low 区間

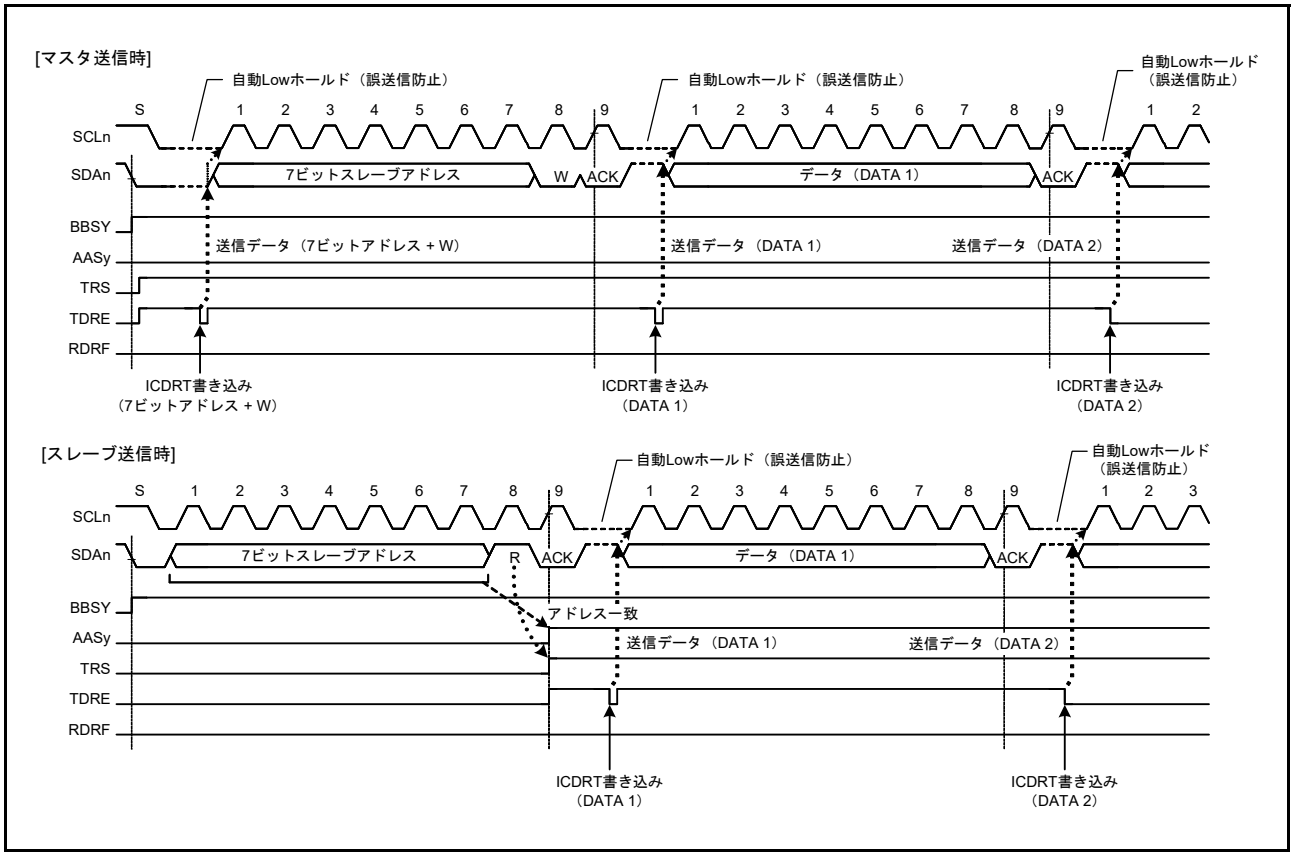


図 30.38　送信モード時の自動 Low ホールド動作

30.9.2　NACK 受信転送中断機能

本機能は、送信モード時（ICCR2.TRS ビット＝1）、NACK を受信した場合に転送動作を中断します。この機能は、ICFER.NACKE ビットが 1（転送中断許可）のとき有効になります。NACK 受信時に次の送信データが書き込まれていた場合（ICSR2.TDRE フラグ＝0）、SCL クロックの 9 クロック目の立ち下がりで、次のデータ送信を自動的に中断します。これによって、次送信データの MSB が 0 の場合、SDAn ライン Low 出力固定を防止することが可能です。

本機能によって転送動作が中断された場合（ICSR2.NACKF フラグ＝1）、以降の送受信動作は行いません。送受信動作を再開するには、NACKF フラグを 0 にする必要があります。マスタ送信モードでは、リスタートコンディションまたはストップコンディション発行後に、NACKF フラグを 0 にしてから、再度スタートコンディションを発行してください。

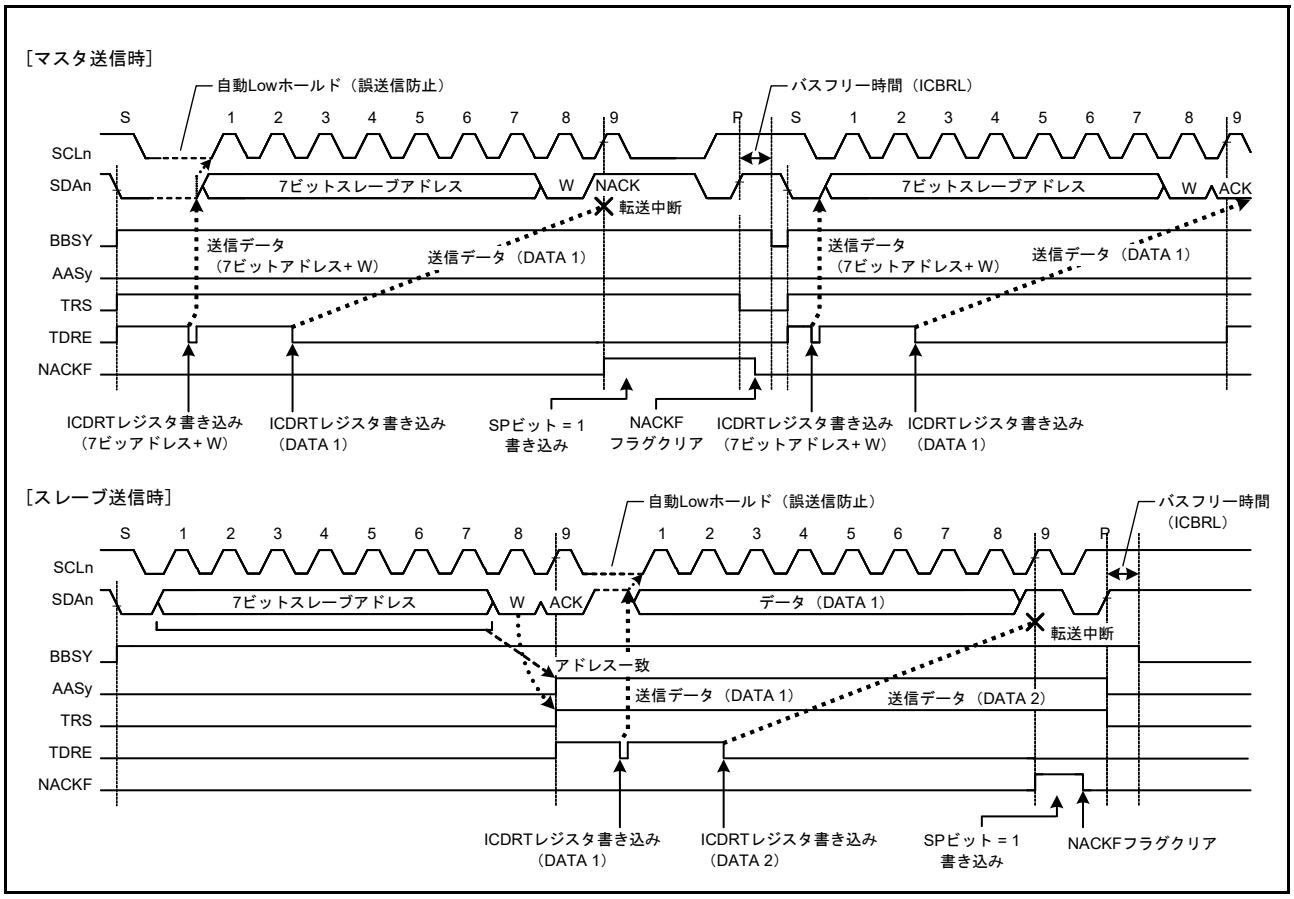


図 30.39　NACK 受信時のデータ転送中断動作（NACKE = 1 の場合）

30.9.3　受信データ取りこぼし防止機能

受信モード時（ICCR2.TRS ビット = 0）に、受信データフル（ICSR2.RDRF フラグ = 1）の状態で受信データ（ICDRR レジスタ）の読み出しが 1 転送フレーム以上遅れるなどの応答処理遅延が発生した場合、IIC は次のデータ受信の直前で自動的に SCLn ラインの Low ホールドを行い、受信データの取りこぼしを防止します。

本機能は、最終受信データの読み出し処理が遅れて、その間にストップコンディションが発行され、IIC スレーブアドレスが指定された場合でも有効です。ストップコンディション発行後に自スレーブアドレスとの不一致が発生した場合は、IIC は SCLn ラインの Low ホールドを行わないため、本機能によって他の通信を妨げることはありません。

また、ICMR3.WAIT、RDRFS ビットの組み合わせにより、SCLn ラインが Low ホールドされる期間を選択できます。

(1)　WAIT ビットによる 1 バイト受信動作／自動 Low ホールド機能

ICMR3.WAIT ビットを 1 にすると、IIC は WAIT ビット機能を用いた 1 バイト受信動作を行います。また、ICMR3.RDRFS ビットが 0 の場合、SCL クロックの 8 クロック目の立ち下がりから 9 クロック目の立ち下がりまでの期間、IIC はアクノリッジビットに対し自動的に ICMR3.ACKBT ビットの内容を送出し、9 クロック目の立ち下がりを検出すると、WAIT ビット機能を用いて自動的に SCLn ラインの Low ホールドを行います。この Low ホールドは、ICDRR レジスタからデータを読み出すことで解除されます。そのため 1 バイトごとの受信動作が可能となります。

なお WAIT ビット機能は、マスタ受信モードまたはスレーブ受信モード時に、ジェネラルコールアドレスとホストアドレスを含む IIC スレーブアドレスとの一致があった以降の受信フレームから有効になります。

(2)　RDRFS ビットによる 1 バイト受信動作（ACK/NACK 送出制御）／自動 Low ホールド機能

ICMR3.RDRFS ビットを 1 にすると、IIC は RDRFS ビット機能を用いた 1 バイト受信動作を行います。RDRFS ビットを 1 にすると、SCL クロックの 8 クロック目の立ち上がりで ICSR2.RDRF フラグが 1（受信データフル）になり、8 クロック目の立ち下がりで自動的に SCLn ラインの Low ホールドが行われます。この Low ホールドは、ICMR3.ACKBT ビットに書き込むことで解除されますが、ICDRR レジスタからデータを読み出しても解除されません。そのため、1 バイトごとに受信したデータの内容に基づいて ACK/NACK の送信を制御することによって受信動作が可能となります。

なお RDRFS ビット機能は、マスタ受信モードまたはスレーブ受信モード時に、ジェネラルコールアドレスとホストアドレスを含む IIC スレーブアドレスとの一致があった以降の受信フレームから有効になります。

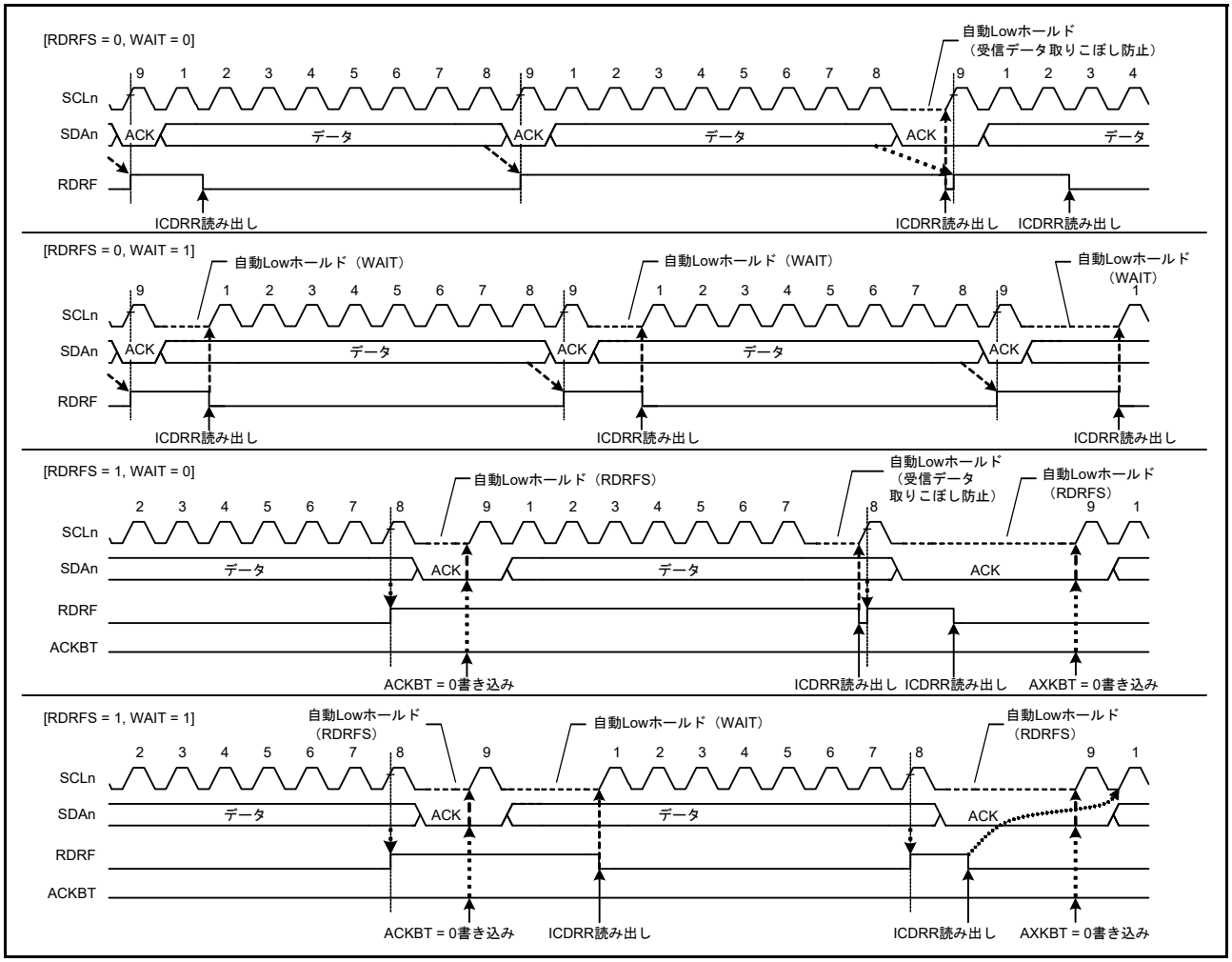


図 30.40　受信モード時の自動 Low ホールド動作（RDRFS、WAIT ビットを使用）

30.10　アービトレーションロスト検出機能

IIC は、I²C バス規格で定められている通常のアービトレーションロスト検出機能の他に、スタートコンディションの二重発行防止機能、NACK 送信時のアービトレーションロスト検出機能、およびスレーブ送信モード時のアービトレーションロスト検出機能を備えています。

30.10.1　マスタアービトレーションロスト検出機能（MALE ビット）

IIC はスタートコンディション発行の際、SDAn ラインを Low にします。ただし、これよりも早く他のマスタデバイスがスタートコンディションを発行して SDAn ラインを Low にした場合、IIC は自身のスタートコンディション発行をエラーと判断し、これをアービトレーションロストとみなします。他のマスタデバイスによる転送の方が優先されます。同様に、バスビジー（ICCR2.BBSY フラグ = 1）の状態で ICCR2.ST ビットを 1 にすることでスタートコンディション発行を要求すると、IIC はこれをスタートコンディションの二重発行エラーと判断し、自身がアービトレーションロストを発生させたとみなします。この機能は、転送中に発行されるスタートコンディションによって転送が失敗するのを防止します。

スタートコンディションの発行が正常に行われた場合、アドレスビットを含む送信データ（内部の SDA 出力レベル）と SDAn ラインのレベルが一致しなければ、IIC ではアービトレーションロストが発生します。

マスタアービトレーションロストが発生した後、IIC はただちにスレーブ受信モードへ遷移します。このとき、ジェネラルコールアドレスを含むスレーブアドレスが自身のアドレスと一致していれば、IIC はスレーブ動作を継続します。

なお、マスタアービトレーションロストは、ICFER.MALE ビットが 1（マスタアービトレーションロスト検出有効）の状態で、以下に示す条件が成立したとき検出されます。

［マスタアービトレーションロスト条件］

- ICCR2.BBSY フラグが 0 の状態で ICCR2.ST ビットを 1 にしてスタートコンディションを発行した後、SDA の内部出力レベルと SDAn ラインのレベルが不一致のとき（スタートコンディション発行エラー）
- ICCR2.BBSY フラグが 1 の状態で ICCR2.ST ビットを 1 にしたとき（スタートコンディション二重発行エラー）
- マスタ送信モード時（ICCR2.MST、TRS ビット = 11b）、アクノリッジを除く送信データ（内部の SDA 出力レベル）と SDAn ラインのレベルが不一致のとき

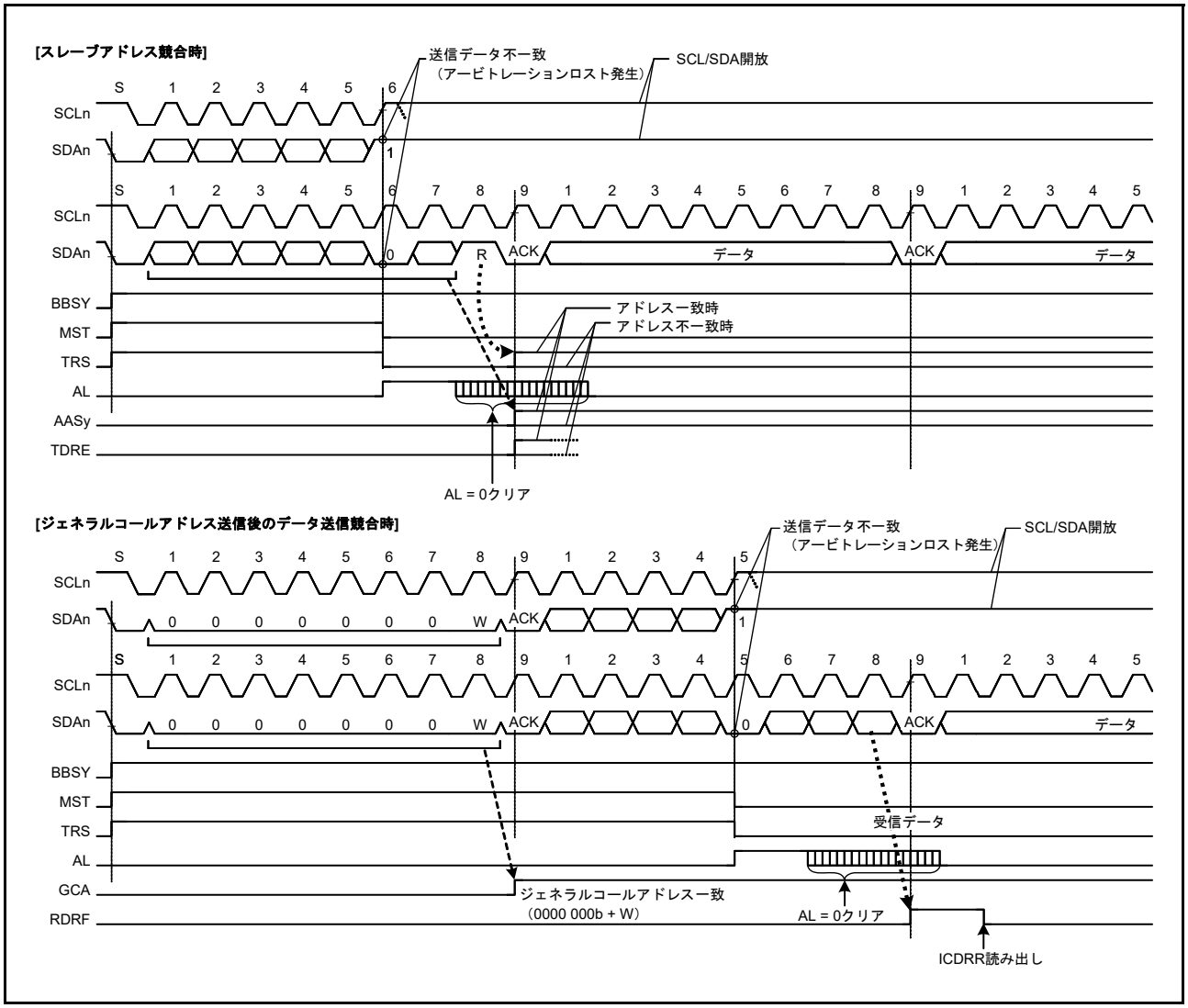


図 30.41　　マスタアービトレーションロスト検出動作例（MALE = 1 の場合）

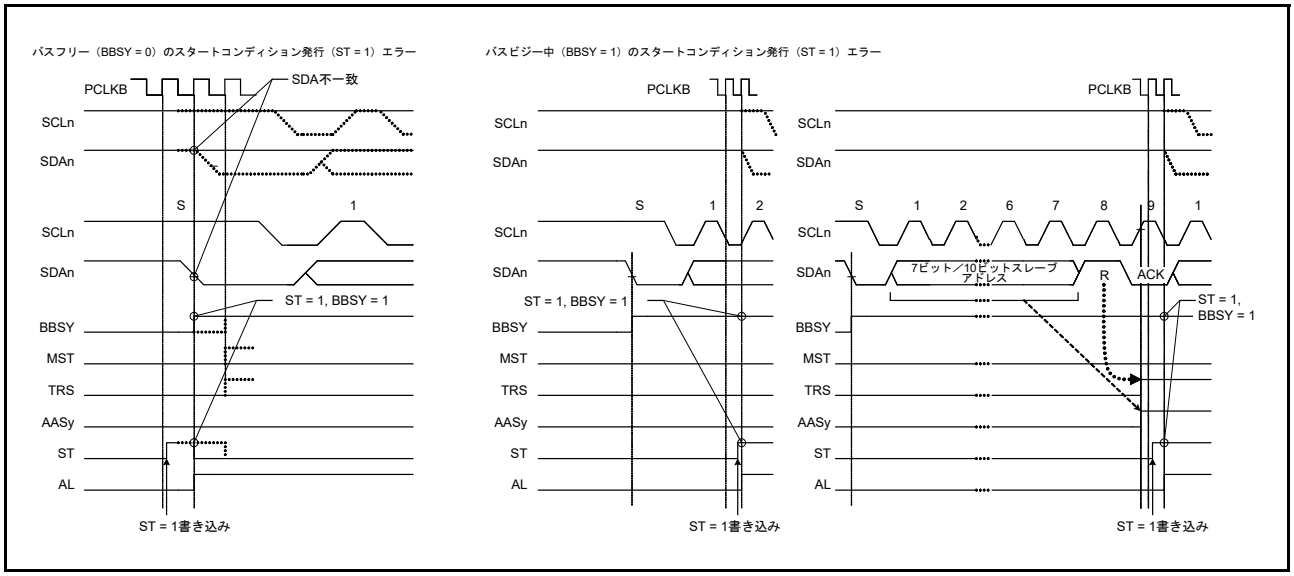


図 30.42　　スタートコンディション発行時のアービトレーションロスト（MALE = 1 の場合）

30.10.2　NACK 送信中のアービトレーションロスト検出機能（NALE ビット）

受信モードでの NACK 送信時に、内部の SDA 出力レベルが SDAn ラインのレベルと一致しない場合、本機能はアービトレーションロストを発生させます。マルチマスタのシステムにおいて、2 つ以上のマスタデバイスが同じスレーブデバイスから同時にデータを受信するとき、NACK 送信と ACK 送信の間の衝突が原因で、アービトレーションロストが発生します。このような衝突は、複数のマスタデバイスが 1 つのスレーブデバイスに対して同じ情報を送受信する際に生じます。図 30.43 に、NACK 送信中のアービトレーションロスト検出の動作例を示します。

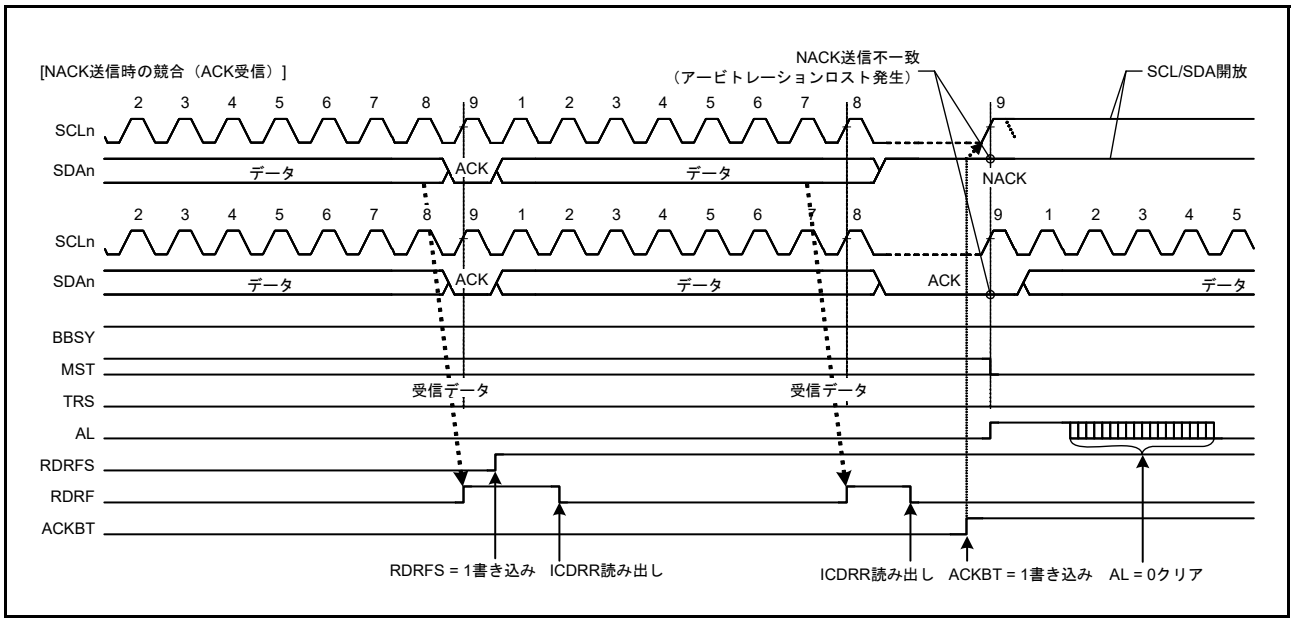


図 30.43　　NACK 送信中のアービトレーションロスト検出の動作例（NALE = 1 の場合）

以下では、2 つのマスタデバイス（マスタ A、B）と 1 つのスレーブデバイスがバス上に接続されている場合を例にアービトレーションロストを説明します。マスタ A はスレーブデバイスから 2 バイト受信、マスタ B はスレーブデバイスから 4 バイト分のデータ受信を行うものとします。

マスタ A とマスタ B が同時にスレーブデバイスにアクセスした場合、スレーブアドレスが同じであるため、スレーブデバイスアクセス中にマスタ A にも B にもアービトレーションロストは発生しません。そのため、マスタ A とマスタ B は、どちらもバス権を取得したものと認識して動作します。マスタ A は、スレーブデバイスから最終バイトである 2 バイト分の受信が完了した時点で NACK を送信します。一方マスタ B は、スレーブデバイスからの受信データが必要な 4 バイト受信に満たないため ACK 送信を行います。このときマスタ A の NACK 送信とマスタ B の ACK 送信の衝突が発生します。一般的に、このような衝突が発生した場合、マスタ A はマスタ B が出した ACK 送信を検出できずにストップコンディションを発行します。そのため、このストップコンディションの発行は、マスタ B の SCL クロック出力と競合し、通信を中断させます。

IIC は、NACK 送信時に ACK を受信した場合、他のマスタデバイスと競合負けが発生したことを検知し、アービトレーションロストを発生させることができます。

NACK 送信時にアービトレーションロストが発生すると、IIC はただちにスレーブ一致状態を解除して、スレーブ受信モードへ遷移します。この機能は、ストップコンディション発行を未然に防ぎ、バスの通信エラーを防止します。

同様に、SMBus の ARP コマンド処理においても、NACK 送信中のアービトレーションロスト検出機能を用いて、アサインアドレスコマンド後の Get UDID 汎用処理でアサインアドレスの UDID（ユニークデバイス ID）が不一致の場合に必要となる FFh 送信処理などの追加クロック処理を省くことができます。

ICFER.NALE ビットが 1（NACK 送信中アービトレーションロスト検出有効）の状態で、以下に示す条件が成立したとき、IIC は NACK 送信中のアービトレーションロストを検出します。

［NACK 送信中アービトレーションロスト条件］

- NACK 送信時（ICMR3.ACKBT ビット = 1）、内部の SDA 出力レベルと SDAn ラインの状態（ACK 受信）が不一致のとき

30.10.3　スレーブアービトレーションロスト検出機能（SALE ビット）

スレーブ送信モード時に、送信データと SDAn ラインのレベルが一致しない場合、本機能はアービトレーションロストを発生させます。このアービトレーションロスト検出機能は、主に SMBus での UDID（ユニークデバイス ID）送信時に使用します。

スレーブアービトレーションロストが発生した場合、IIC はただちにスレーブ一致状態を解除してスレーブ受信モードへ遷移します。この機能によって、SMBus での UDID 送信時のデータ衝突を検出し、以降の余剰な処理（FFh 送信処理）を省くことができます。

ICFER.SALE ビットが 1（スレーブアービトレーションロスト検出有効）の状態で、以下に示す条件が成立したとき、IIC はスレーブアービトレーションロストを検出します。

［スレーブアービトレーションロスト条件］

- スレーブ送信モード時（ICCR2.MST、TRS ビット = 01b）、アクノリッジを除く送信データ（内部 SDA 出力レベル）と SDAn ラインが不一致のとき

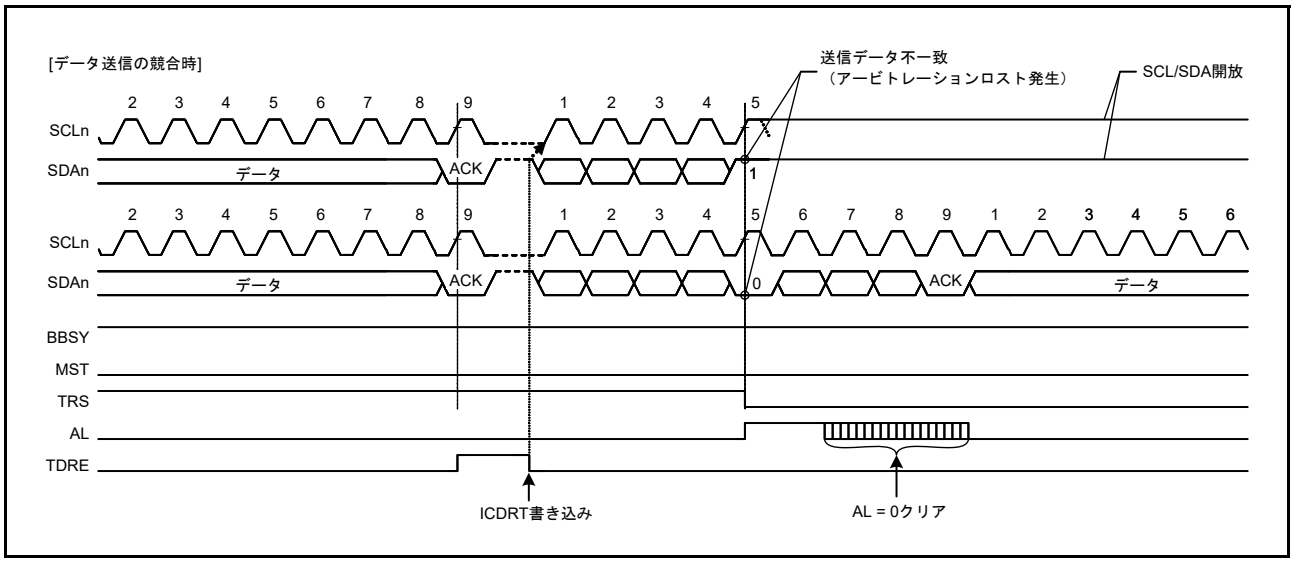


図 30.44　スレーブアービトレーションロスト検出動作例（SALE = 1 の場合）

30.11 スタートコンディション、リスタートコンディション、ストップコンディション発行機能

30.11.1 スタートコンディション発行動作

IIC は、ICCR2.ST ビットが 1 のときにスタートコンディションを発行します。

ST ビットを 1 にすると、スタートコンディション要求が行われます。ICCR2.BBSY フラグが 0（バスフリー状態）の場合、IIC はスタートコンディションを発行します。スタートコンディションが正常に発行された場合、IIC は自動的にマスタ送信モードへ遷移します。

スタートコンディションの発行方法：

1. SDAn ラインを立ち下げる（High から Low に遷移）。
2. ICBRH レジスタで設定した時間とスタートコンディションのホールド時間が経過したことを確認する。
3. SCLn ラインを立ち下げる（High から Low に遷移）。
4. SCLn ラインの Low を検出後、ICBRL レジスタで設定した SCLn ラインの Low 幅が経過したことを確認する。

30.11.2 リスタートコンディション発行動作

IIC は、ICCR2.RS ビットが 1 のときリスタートコンディションを発行します。

RS ビットを 1 にすると、リスタートコンディション要求が行われます。ICCR2.BBSY フラグが 1（バスビジー状態）で、かつ ICCR2.MST ビットが 1（マスタモード）の場合、IIC はリスタートコンディションを発行します。

リスタートコンディションの発行方法：

1. SDAn ラインを開放する。
2. ICBRL レジスタで設定した SCLn ラインの Low 幅が経過したことを確認する。
3. SCLn ラインを開放する（Low から High に遷移）。
4. SCLn ラインの High を検出後、ICBRL レジスタで設定した時間とリスタートコンディションのセットアップ時間が経過したことを確認する。
5. SDAn ラインを立ち下げる（High から Low に遷移）。
6. ICBRH レジスタで設定した時間とリスタートコンディションのホールド時間を確保する。
7. SCLn ラインを立ち下げる（High から Low に遷移）。
8. SCLn ラインの Low を検出し、ICBRL レジスタで設定した SCLn ラインの Low 幅が経過したことを確認する。

注 . リスタートコンディション要求の発行時、ICCR2.RS が 0 であることを確認してから、ICDRT レジスタにスレーブアドレスを書いてください。ICCR2.RS が 1 のときに書き込まれたデータは、以前の再送条件と判断されるため、転送されません。

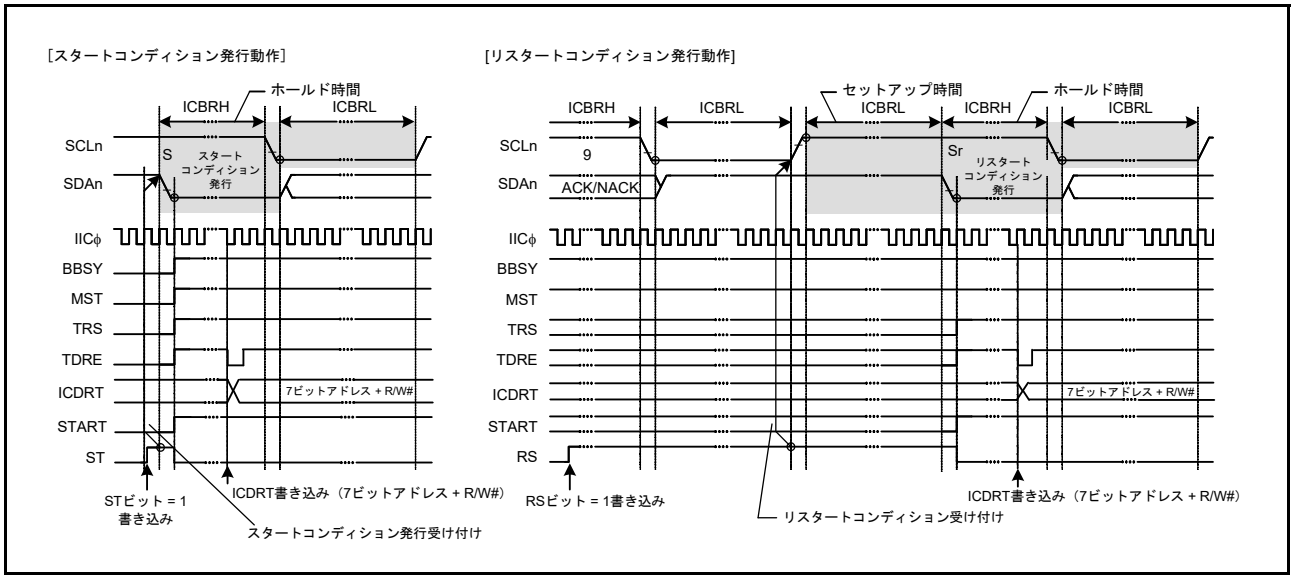


図 30.45　スタートコンディション／リスタートコンディション発行動作タイミング（ST、RS ビット）

図 30.46 に、マスタ送信後にリスタートコンディションが発行されたときの動作タイミングを示します。

マスタ送信後にリスタートコンディションを発行するには：

1. 30.3.2　初期設定の内容に従って、IIC を初期化します。
2. IICR2.BBSY フラグを読み出してバスフリー状態であることを確認した後、ICCR2.ST ビットを 1（スタートコンディション要求）にします。IIC はスタートコンディション要求を受け付けると、スタートコンディションを発行します。同時に、ICSR2.BBSY フラグと ICSR2.START フラグが自動的に 1 になり、ST ビットが自動的に 0 になります。ST ビットが 1 の状態でスタートコンディションが検出され、SDA 出力状態の内部レベルと SDAn ラインの各レベルが一致すると、IIC は、ST ビットで要求したとおり、スタートコンディションが正常に発行されたと認識します。ICCR2.MST ビットおよび ICCR2.TRS ビットは自動的に 1 になり、IIC はマスタ送信モードになります。TRS ビットが 1 になると、ICSR2.TDRE フラグも自動的に 1 になります。
3. ICSR2.TDRE フラグが 1 であることを確認した後、ICDRT レジスタに送信データ（スレーブアドレスと R/W# ビット）を書き込んでください。ICDRT レジスタに送信データが書き込まれると、TDRE フラグは自動的に 0 になり、ICDRT レジスタから ICDRS レジスタにデータが転送されて、再び TDRE フラグが 1 になります。スレーブアドレスと R/W# ビットを含むバイトの送信が完了すると、送信された R/W# ビットの値に応じて自動的に TRS ビットの値が更新され、マスタ送信モードまたはマスタ受信モードが選択されます。R/W# ビットの値が 0 の場合、IIC はマスタ送信モードの状態を継続します。このとき ICSR2.NACKF フラグが 1 であると、アドレスを認識したスレーブデバイスが存在しない、または通信エラーが発生していることを示しているため、ICCR2.SP ビットに 1 を書き込んで、ストップコンディションを発行してください。データを 10 ビットフォーマットのアドレスで送信する場合は、まず 1 回目のアドレス送信処理で ICDRT レジスタに 1111 0b（スレーブアドレスの上位 2 ビット）と W を書きます。次に、2 回目のアドレス送信処理では、ICDRT レジスタにスレーブアドレスの下位 8 ビットを書き込んでください。
4. ICSR2.TDRE フラグが 1 であることを確認した後、送信データを ICDRT レジスタに書き込んでください。なお、送信データの準備ができて、リスタートコンディションまたはストップコンディションが発行されるまで、IIC は自動的に SCLn ラインを Low にホールドします。
5. ICDRT レジスタに送信データの全バイトが書き込まれたら、ICSR2.TEND フラグの値が 1 に戻るのを待ちます。その後、ICSR2.START フラグが 1 になっているのを確認してから、ICSR2.START を 0 にします。
6. ICCR2.RS ビットを 1（リスタートコンディション要求）にします。IIC は要求を受け付けると、リスタートコンディションを発行します。
7. ICSR2.START フラグが 1 であることを確認した後、ICDRT レジスタに送信データ（スレーブアドレスと R/W# ビット）を書き込んでください。

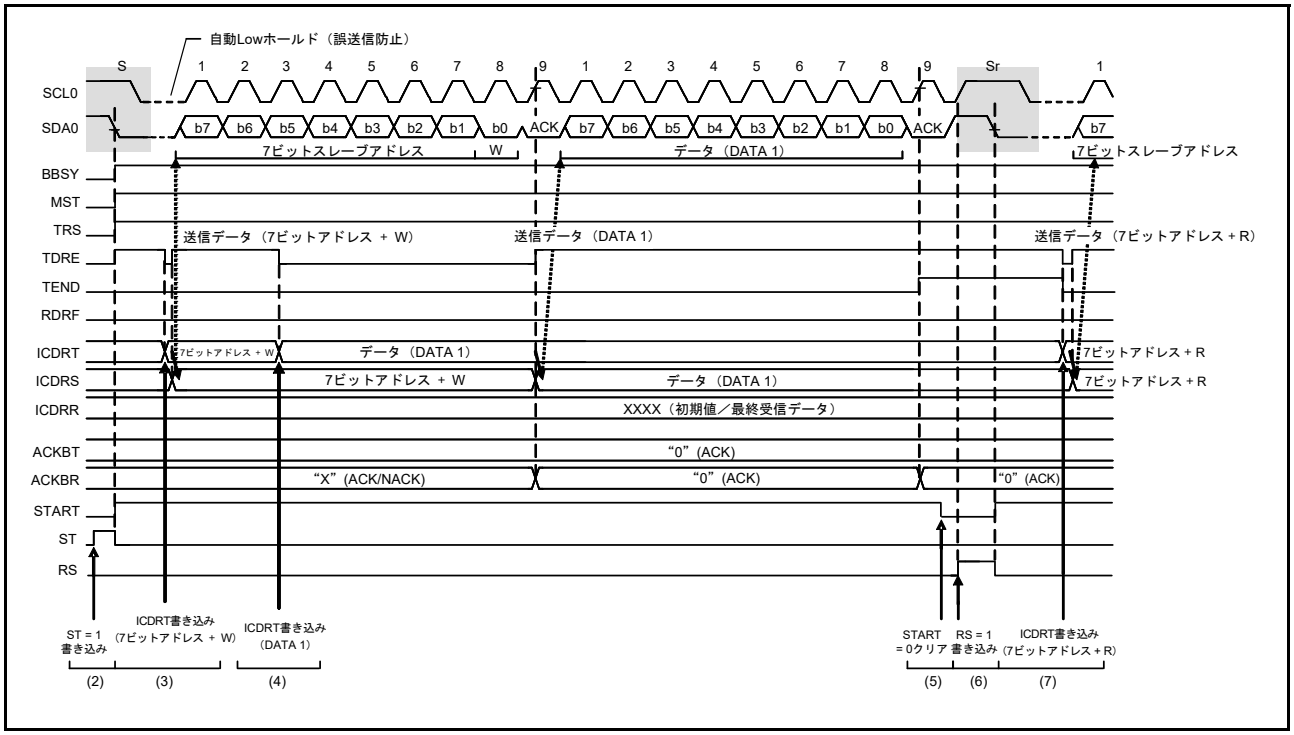


図 30.46　　マスタ送信後のリスタートコンディション発行タイミング

30.11.3　ストップコンディション発行動作

IIC は、ICCR2.SP ビットが 1 のときストップコンディションを発行します。

SP ビットを 1 にすると、ストップコンディション要求が行われ、ICCR2.BBSY フラグが 1（バスビジー状態）で、かつ ICCR2.MST ビットが 1（マスタモード）の場合、IIC はストップコンディションを発行します。

ストップコンディションの発行方法：

1. SDAn ラインを立ち下げる（High から Low に遷移）。
2. ICBRL レジスタで設定した SCLn ラインの Low 幅が経過したことを確認する。
3. SCLn ラインを開放する（Low から High に遷移）。
4. SCLn ラインの High 検出後、ICBRH レジスタで設定した時間とストップコンディションのセットアップ時間が経過したことを確認する。
5. SDAn ラインを開放する（Low から High に遷移）。
6. ICBRL レジスタで設定した時間とバスフリー時間が経過したことを確認する。
7. BBSY フラグをクリアしてバス権を解放する。

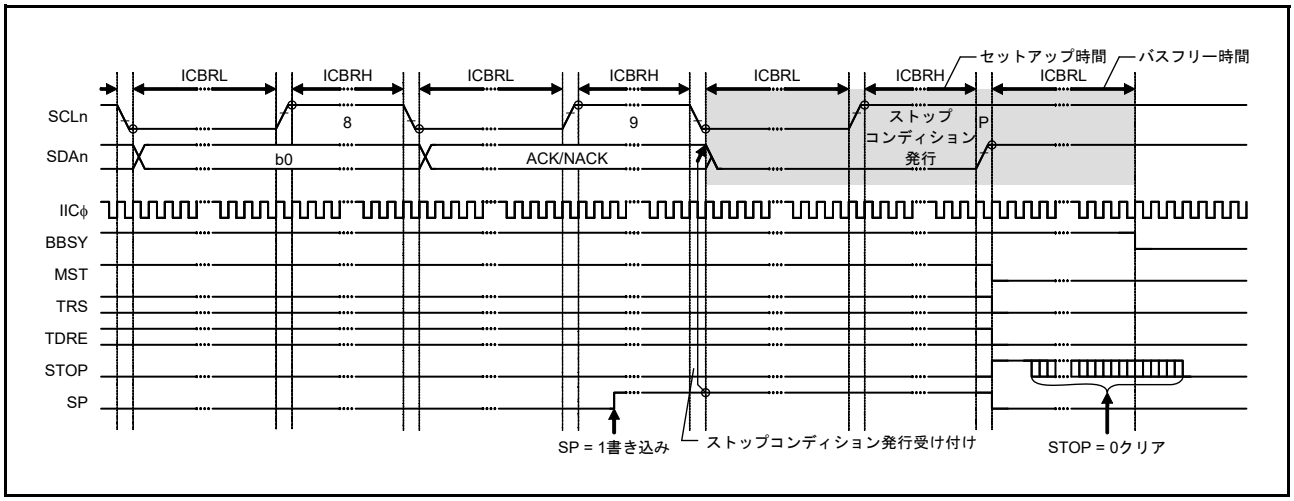


図 30.47　ストップコンディション発行タイミング（SP ビット）

30.12　バスハングアップ

I²C バスでは、ノイズなどが原因で、マスタデバイスから出力されたクロック信号とスレーブデバイスから出力されたクロック信号の間で同期ズレが発生すると、SCLn ラインや SDAn ライン上のレベルが固定されたままバスハングアップを起こす場合があります。

バスハングアップを管理するために、IIC は次の機能を備えています：

- SCLn ラインを監視してハングアップを検出するためのタイムアウト機能
- クロック信号の同期ズレが原因でハングアップ状態になったバスを解放するための SCL クロック追加出力機能
- IIC リセット機能
- 内部リセット機能

ICCR1.SCLO、SDAO、SCLI、SDAI の各ビットをチェックすることで、IIC 自身と通信相手のどちらが SCLn ラインまたは SDAn ラインを Low にしているのか確認することが可能です。

30.12.1　タイムアウト検出機能

タイムアウト検出機能では、SCLn ラインに一定時間以上変化が見られない状態を検出できます。IIC は、SCLn ラインが Low または High に固定されたまま一定時間以上経過したことを監視して、バスの異常状態を検出することが可能です。

タイムアウト検出機能は SCLn ラインの状態を監視し、Low または High の時間を内部カウンタでカウントします。タイムアウト検出機能は SCLn ラインに変化（立ち上がり／立ち下がり）があった場合、内部カウンタをリセットし、変化がない場合、カウント動作を続けます。SCLn ラインに変化がないために内部カウンタがオーバーフローすると、IIC はタイムアウトを検出してバスハングアップ状態を報告します。

タイムアウト検出機能は、ICFER.TMOE ビットが 1 のときのみ有効です。以下の条件で SCLn ラインが Low または High に固定される場合にバスハングアップを検出します。

- マスタモード（ICCR2.MST ビット = 1）で、バスビジー（ICCR2.BBSY フラグ = 1）
- スレーブモード（ICCR2.MST ビット = 0）で、IIC スレーブアドレス検出（ICSR1 レジスタ ≠ 00h）かつバスビジー（ICCR2.BBSY フラグ = 1）
- スタートコンディション要求中（ICCR2.ST ビット = 1）で、バスフリー（ICCR2.BBSY フラグ = 0）

タイムアウト検出機能の内部カウンタは、ICMR1.CKS[2:0] ビットで設定された内部基準クロック（IICφ）をカウントソースとして使用します。このカウンタは、ロングモード選択時（ICMR2.TMOS ビット = 0）は 16 ビットカウンタ、ショートモード選択時（ICMR2.TMOS ビット = 1）は 14 ビットカウンタとして機能します。

また、内部カウンタのカウント動作は、SCLn ラインが Low のときカウントさせるか、High のときカウントさせるか、あるいはその両方をカウントさせるかを ICMR2.TMOH、TMOL ビットで選択することが可能です。TMOL ビットと TMOH ビットの両方を 0 にした場合、内部カウンタは動作しません。

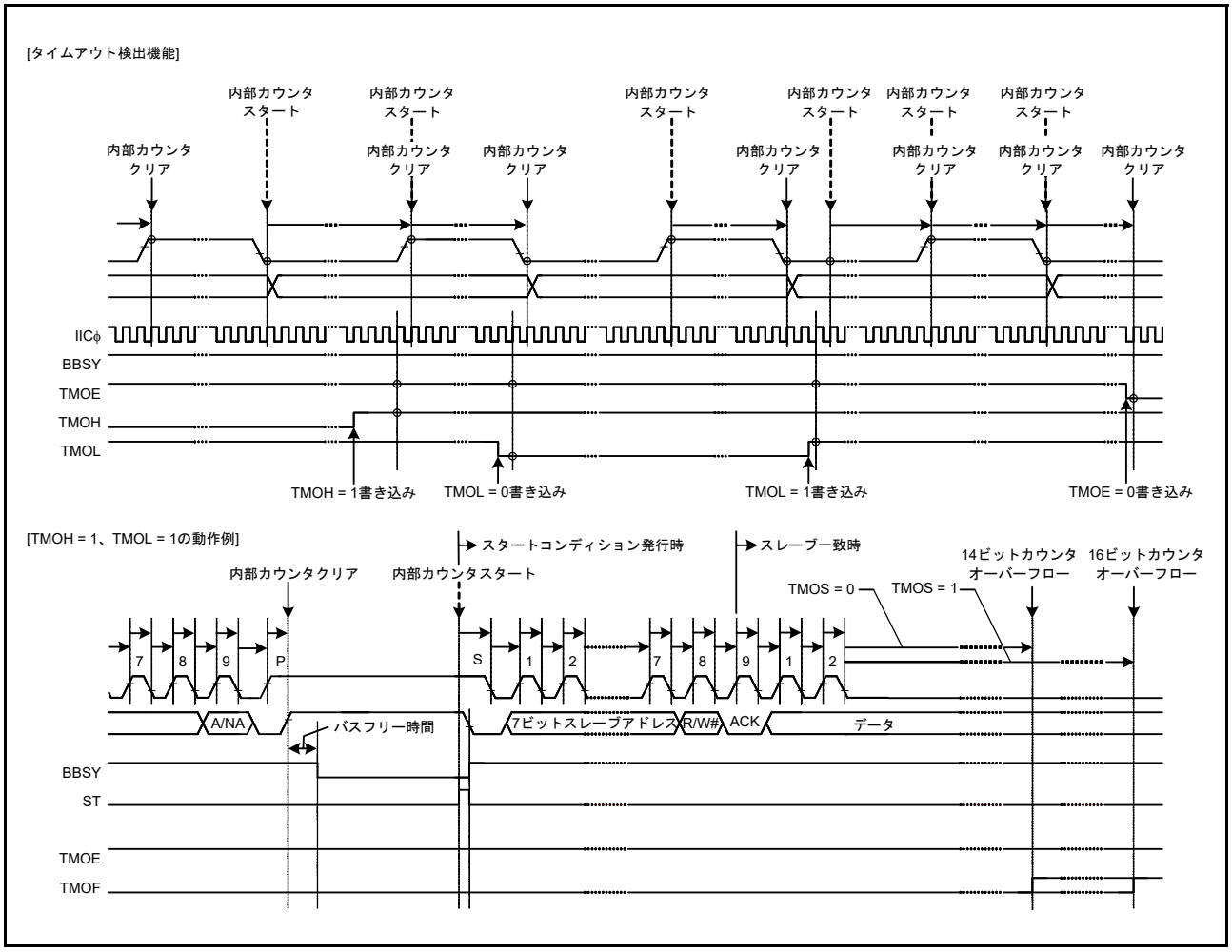


図 30.48　タイムアウト検出機能（TMOE、TMOS、TMOH、TMOL ビット）

30.12.2　SCL クロック追加出力機能

マスタモード時、本機能は SCL クロック追加出力を行い、マスタデバイスとスレーブデバイスとの同期ズレにより生じた、スレーブデバイスによる SDAn ラインの Low ホールド状態を解放します。

本機能は、スレーブデバイスが SDAn ラインを Low ホールドしているため、IIC がストップコンディションを発行できない状態のバスエラー発生時に、SCL クロックを 1 クロック単位で使用します。通常は本機能を使用しないでください。正常な通信動作中に使用すると通信異常の原因になります。

マスタモードで ICCR1.CLO ビットを 1 にすると、ICMR1.CKS[2:0] ビット、ICBRH、ICBRL レジスタで設定した転送速度で、SCL クロックが 1 クロック分追加クロックとして出力されます。1 クロック分の追加クロック出力が終了すると、CLO ビットは自動的に 0 になります。そのため、CLO ビットが 0 であることを確認後、CLO ビットに 1 を書くことにより、連続的に追加クロックの出力を行うことが可能になります。

IIC モジュールがマスタモード時に、ノイズの影響によりスレーブデバイスとの同期ズレが原因でスレーブデバイスが SDAn ラインを Low に固定したままだと、ストップコンディションが出力できません。この機能を使用して SCL 追加クロックを 1 クロックずつ出力することで、SDAn ラインをスレーブデバイスによる Low ホールドから解放し、バスを使用できない状態から回復させることができます。スレーブデバイスによる SDAn ラインの解放は、ICCR1.SDAI ビットを読みだすことで確認できます。SDAn ラインがスレーブデバイスから解放されたことを確認した後、通信を終了させるため再度ストップコンディション発行を行ってください。

本機能を使用する場合、ICFER.MALE ビットを 0（マスタアービトレーションロスト検出無効）にしてください。MALE ビットが 1（有効）であると、ICCR1.SDAO ビットの値と SDAn ラインの状態が不一致のときにアービトレーションロストが発生します。

［ICCR1.CLO ビット使用時の出力条件］

- バスフリー状態（ICCR2.BBSY フラグ = 0）またはマスタモード（ICCR2.MST ビット = 1、ICCR2.BBSY フラグ = 1）のとき
- 通信デバイスが SCLn ラインを Low ホールドにしていないとき

図 30.49 に SCL クロック追加出力機能（CLO ビット）の動作タイミングを示します。

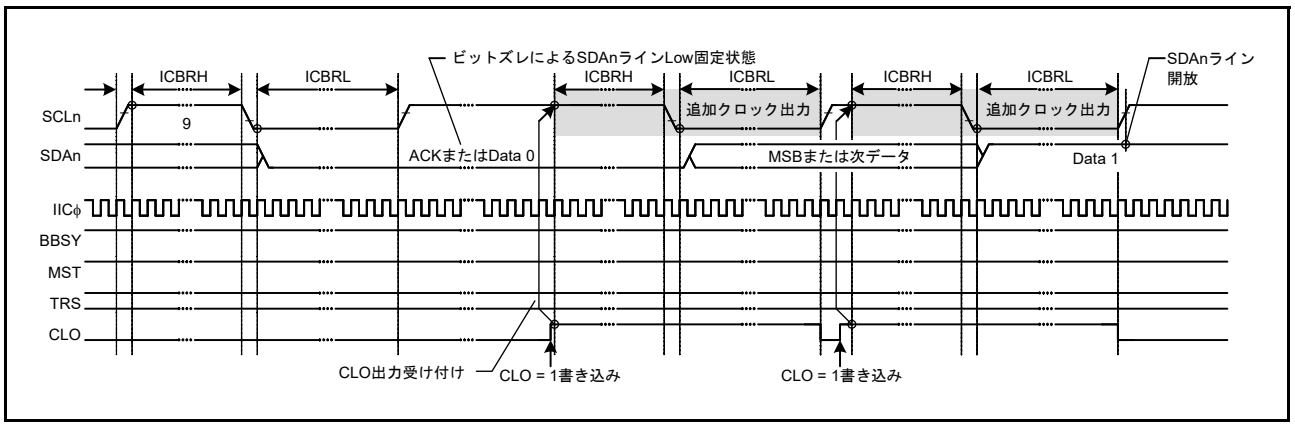


図 30.49　SCL クロック追加出力機能（CLO ビット）

30.12.3　IIC リセット、内部リセット

IIC がサポートするリセットには 2 種類あります。

- IIC リセット — ICCR2.BBSY フラグを含めたすべてのレジスタを初期化します
- 内部リセット — 他の設定を保持したまま IIC をスレーブアドレス一致状態から解放し、内部カウンタを初期化します

リセット後は、必ず ICCR1.IICRST ビットを 0 にしてください。いずれのリセットも、SCLn 端子および SDAn 端子の出力状態を解除してハイインピーダンスに戻すため、バスハングアップ状態の解除に有効です。

なおスレーブ動作時のリセットは、マスタデバイスとの同期ズレを引き起こす原因になるので、使用は極力避けてください。また、IIC リセット（ICCR1.ICE、IICRST ビット = 01b）中は、スタートコンディションの有無など、バス状態の監視はできません。

IIC リセットと内部リセットの詳細については、30.15　各コンディション発行時のレジスタの状態を参照してください。

30.13 SMBus 動作

IIC は SMBus 仕様（バージョン 2.0）に準拠した通信動作に対応しています。SMBus 通信を行うには、ICMR3.SMBS ビットを 1 にしてください。転送速度が SMBus 規格の 10kbps ～ 100kbps の範囲に収まるように、ICMR1.CKS[2:0] ビットと ICBRH および ICBRL レジスタを設定してください。また、データホールド時間の規定値 300ns 以上を満たすように、ICMR2.DLCS ビットおよび ICMR2.SDDL[2:0] ビットの値を決定してください。IIC をスレーブデバイスとしてのみ使用する場合は、転送速度の設定は不要ですが、ICBRL レジスタにはデータセットアップ時間（250ns）以上の値を設定してください。

なお、SMBus デバイスデフォルトアドレス（1100 001b）には、スレーブアドレスレジスタ L0 ～ L2（SARL0、SARL1、SARL2）のいずれか 1 本を使用し、対応する SARUy.FS ビット（y = 0 ～ 2）（7 ビットまたは 10 ビットアドレスフォーマット選択ビット）を 0（7 ビットアドレスフォーマット）にしてください。

また、UDID（ユニークデバイス ID）送信時には、ICFER.SALE ビットを 1 にして、スレーブアービトレーションロスト検出機能を有効にしてください。

30.13.1 SMBus タイムアウト測定

(1) スレーブデバイスのタイムアウト測定

SMBus 通信では、スレーブデバイスは下記に示す区間（タイムアウト間隔：$T_{LOW:SEXT}$）を計測する必要があります。

- スタートコンディションからストップコンディションまで

スレーブデバイスでタイムアウト測定を行うには、IIC のスタートコンディション検出割り込み（STIn）とストップコンディション検出割り込み（SPIn）を利用して、スタートコンディション検出からストップコンディション検出までの期間を GPT を使用して計測してください。測定したタイムアウト時間は、SMBus 規格のクロック Low 累積時間（スレーブデバイス）$T_{LOW:SEXT}$：25ms（max）以内でなければいけません。

GPT で計測した時間が、SMBus 規格のクロック Low 検出のタイムアウト $T_{TIMEOUT}$：25ms（min）を超えた場合、スレーブデバイスは ICCR1.IICRST ビットに 1 を書き込んで IIC の内部リセットを発行し、バスを解放する必要があります。内部リセットを行うと、IIC は SCLn 端子と SDAn 端子のバス駆動を中止し、両端子の出力をハイインピーダンスにします。これによって、バスを解放することが可能です。

(2) マスタデバイスのタイムアウト測定

SMBus 通信では、マスタデバイスは下記に示す区間（タイムアウト間隔：$T_{LOW:MEXT}$）を計測する必要があります。

- スタートコンディションからアクノリッジビットまで
- アクノリッジビットから次のアクノリッジビットまで
- アクノリッジビットからストップコンディションまで

マスタデバイスでタイムアウト測定を行うには、IIC のスタートコンディション検出割り込み（STIn）、ストップコンディション検出割り込み（SPIn）、および送信終了割り込み（IICn_TEI）、または受信データフル割り込み（IICn_RXI）を利用して、GPT を使用して計測してください。測定したタイムアウト時間は、SMBus 規格のクロック Low 累積延長時間（マスタデバイス）$T_{LOW:MEXT}$：10ms（max）以内であり、かつスタートコンディションからストップコンディションまでのすべての $T_{LOW:MEXT}$ の合計が $T_{LOW:SEXT}$：25ms（max）以内である必要があります。

ACK 受信タイミング（SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がり）は、マスタ送信モード時（マスタトランスミッタ）は ICSR2.TEND フラグ、マスタ受信モード時（マスタレシーバ）は ICSR2.RDRF フラグで監視します。マスタ送信モード時は 1 バイト送信動作を行い、マスタ受信モード時は最終バイト受信の直前まで ICMR3.RDRFS ビットを 0 に保持してください。RDRFS ビットが 0 のとき、RDRF フラグは SCL クロックの 9 クロック目の立ち上がりで 1 になります。

GPT で計測した時間が、SMBus 規格のクロック Low 累積延長時間（マスタデバイス）$T_{LOW:MEXT}$：10ms（max）を超えた場合、または各計測時間の合計が、SMBus 規格のクロック Low 検出のタイムアウト $T_{TIMEOUT}$：25ms（min）を超えた場合は、マスタデバイスはストップコンディションを発行してトランザクションを中止する必要があります。マスタ送信モード時には即座に送信動作を中止（ICDRT レジスタへの書き込み）してください。

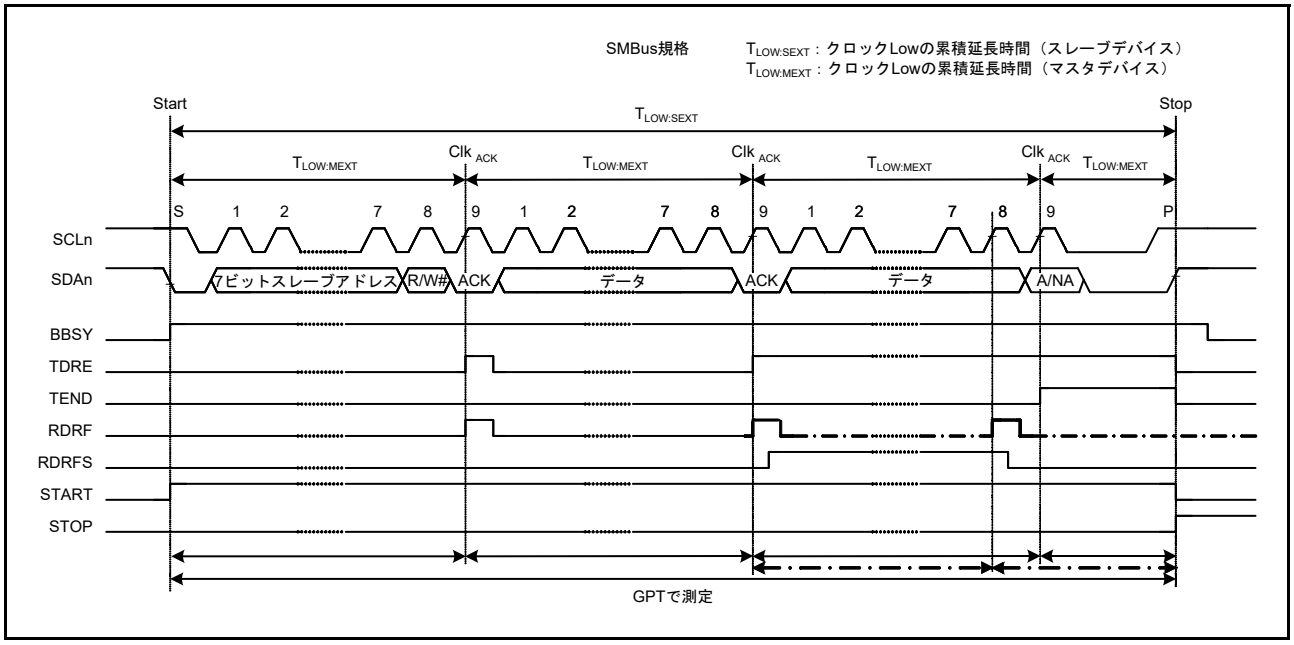


図 30.50　SMBus タイムアウト測定

30.13.2　パケットエラーコード（PEC）

本 MCU は CRC 演算器を内蔵しており、この CRC 演算器を利用して、パケットエラーコード（PEC）の送信や、SMBus データ通信時の受信データチェックが可能です。CRC 演算器の生成多項式については、「33.　巡回冗長検査（CRC）演算器」を参照してください。

マスタ送信モード時の PEC データは、全送信データを CRC 演算器の CRC データ入力レジスタ（CRCDIR）に書き込むことで生成することが可能です。

マスタ受信モード時の PEC データは、全受信データを CRC 演算器の CRCDIR レジスタに書き込み、取得した CRC データ出力レジスタ（CRCDOR）の値と受信した PEC データを比較することでチェックできます。

PEC コードチェックの結果として、最終バイト受信時の結果（一致／不一致）に応じた ACK/NACK 送出を行う場合は、最終バイト受信中の SCL の 8 クロック目の立ち上がりまでに ICMR3.RDRFS ビットを 1 にし、8 クロック目の立ち下がりで SCLn ラインを Low にホールドしてください。

30.13.3　SMBus ホスト通知プロトコル（Notify ARP Master コマンド）

SMBus 通信では、スレーブデバイスが一時的にマスタデバイスとなり、SMBus ホスト（または ARP マスタ）に対して自スレーブアドレスを通知したり、SMBus ホストに対して自スレーブアドレスを要求したりできます。

本 MCU を使用する製品を SMBus ホスト（または ARP マスタ）として動作させる場合、スレーブデバイスからのホストアドレス（0001 000b）送信をスレーブアドレスとして検出する必要があるため、IIC はホストアドレス検出機能を備えています。ホストアドレスをスレーブアドレスとして検出するには、ICMR3.SMBS ビットおよび ICSER.HOAE ビットを 1 にしてください。ホストアドレス検出後の動作は、通常のスレーブ動作と同じです。

30.14　割り込み要因

IIC が発行する割り込み要求には 5 種類あります。

- 転送エラーまたはイベント生成（アービトレーションロスト、NACK 検出、タイムアウト検出、スタートコンディション検出、およびストップコンディション検出）
- 受信データフル
- 送信データエンプティ
- 送信終了
- ウェイクアップ機能時にアドレスが一致

表 30.10 に割り込み要求の詳細を示します。受信データフル割り込みコンディションと送信データエンプティコンディションは、どちらも DTC または DMAC を起動してデータ転送を行うことができます。

表 30.10　割り込み要因

シンボル	割り込み要因	割り込みフラグ	DTCの起動	DMACの起動	割り込み条件
IICn_EEI（注5）	通信エラー／イベント発生	AL	不可能	不可能	AL = 1かつALIE = 1
		NACKF			NACKF = 1かつNAKIE = 1
		TMOF			TMOF = 1かつTMOIE = 1
		START			START = 1かつSTIE = 1
		STOP			STOP = 1かつSPIE = 1
IICn_RXI（注2）（注5）	受信データフル	RDRF	可能	可能	RDRF = 1かつRIE = 1
IICn_TXI（注1）（注5）	送信データエンプティ	TDRE	可能	可能	TDRE = 1かつTIE = 1
IICn_TEI（注3）（注5）	送信終了	TEND	不可能	不可能	TEND = 1かつTEIE = 1
IIC0_WUI（注4）	ウェイクアップ機能時にスレーブアドレス一致	WUF	不可能	不可能	スレーブアドレス一致 スレーブ受信完了 RWAK動作ASY0 = 1 WUIE = 1

注 .　CPU による周辺モジュールへの書き込み命令の実行と、実際にモジュールに書き込まれるタイミングとの間には、遅延があります。割り込みフラグをクリアまたはマスクした場合は、関連するフラグを再度読み出し、クリアまたはマスク処理の完了を確認した後、割り込み処理から復帰させてください。そうしないと、同じ割り込み処理が繰り返される可能性があります。

注 1.　IICn_TXI 割り込みはエッジ検出割り込みであるため、クリアの必要はありません。また IICn_TXI 割り込みの条件となる ICSR2.TDRE フラグは、ICDRT レジスタへの送信データの書き込み、あるいはストップコンディションの検出（ICSR2.STOP = 1）で自動的に 0 になります。

注 2.　IICn_RXI 割り込みはエッジ検出割り込みであるため、クリアの必要はありません。また IICn_RXI 割り込みの条件となる ICSR2.RDRF フラグは、ICDRR レジスタの読み出しで自動的に 0 になります。

注 3.　IICn_TEI 割り込みを使用する場合、IICn_TEI 割り込み処理で ICSR2.TEND フラグをクリアしてください。ICSR2.TEND フラグは、ICDRT レジスタへの送信データの書き込み、あるいはストップコンディションの検出（ICSR2.STOP = 1）で自動的に 0 になります。

注 4.　ウェイクアップ機能はチャネル 0 にしかないので、IIC0_WUI はチャネル 0 の場合しか使用しません。

注 5.　チャネル番号（n = 0 ～ 1）

割り込み処理中に、それぞれのフラグをクリアまたはマスクしてください。

30.14.1　IICn_TXI 割り込みおよび IICn_RXI 割り込みのバッファ動作

対応する IR フラグが 1 のときに、IICn_TXI 割り込みおよび IICn_RXI 割り込みの発生条件が成立した場合、割り込み要求は ICU へ出力されず、内部に保存されます。1 要因あたり 1 要求を内部に保持できます。

ICU.IELSRn.IR フラグが 0 になると、ICU に保存されている割り込み要求が出力されます。通常の使用状態では、内部的に保存されていた割り込み要求が自動的にクリアされます。また、内部的に保存されていた割り込み要求は、対応する周辺側の割り込み許可ビットを 0 にすることでクリアが可能です。

30.15 各コンディション発行時のレジスタの状態

IIC は 2 種類の専用リセット機能、すなわち IIC リセットと内部リセットを備えています。表 30.11 に、各コンディション発行時のレジスタの状態を示します。

表 30.11　各コンディション発行時のレジスタの状態

レジスタ		リセット	IIC リセット（ICE ビット = 0、IICRST ビット = 1）	内部リセット（ICE ビット = 1、IICRST ビット = 1）	スタートコンディションまたはリスタートコンディション検出	ストップコンディション検出
ICCR1	ICE, IICRST	リセット	保持	保持	保持	保持
	SCLO, SDAO		リセット	リセット		
	その他			保持		
ICCR2	BBSY	リセット	リセット	保持	セット	保持
	ST			リセット	保持	保持
	TRS, MST				セットまたは保持	リセット
	その他				リセット	リセットまたは保持
ICMR1	BC[2:0]	リセット	リセット	リセット	リセット	保持
	その他			保持	保持	
ICMR2		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICMR3		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICFER		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICSER		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICIER		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICSR1		リセット	リセット	リセット	保持	リセット
ICSR2	TDRE, TEND	リセット	リセット	リセット	保持	リセット
	START				セット	
	STOP				保持	セット
	その他					保持
ICWUR		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICWUR2	WUSEN	リセット	リセット	保持	保持	保持
	その他					保持、セット、またはリセット
SARL0～SARL2 SARU0～SARU2		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICBRH, ICBRL		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICDRT		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICDRR		リセット	リセット	保持	保持	保持
ICDRS		リセット	リセット	リセット	保持	保持
タイムアウト検出機能		リセット	リセット	動作	動作	動作
バスフリー時間計測		リセット	リセット	動作	動作	動作

30.16　イベントリンク出力機能

IIC0 ～ IIC1 は、イベントリンクコントローラ（ELC）に対して次の要因によってイベント出力を行います。

(1)　通信エラーイベント

通信エラーイベントが発生すると、対応するイベント信号を ELC によって他のモジュールに出力できます。

(2)　受信データフル

レシーブデータレジスタが受信データフルになると、対応するイベント信号を ELC によって他のモジュールに出力できます。

(3)　送信データエンプティ

トランスミットデータレジスタが送信データエンプティになると、対応するイベント信号を ELC によって他のモジュールに出力できます。

(4)　送信終了

転送が終了すると、対応するイベント信号を ELC によって他のモジュールに出力できます。

30.16.1　割り込み処理とイベントリンク機能

IIC の各割り込み（表 30.10 参照）には、対応する割り込み信号の許可または禁止を制御する許可ビットがあります。対応する割り込み許可ビットが設定されている場合に割り込み要因の条件が成立すると、CPU に対して割り込み要求信号が出力されます。

割り込み要因が発生すると、割り込み許可ビットの設定にかかわらず、対応するイベントリンク出力信号が ELC によって他のモジュールにイベント信号として出力されます。各割り込み要因については、表 30.10 を参照してください。

30.17　使用上の注意事項

30.17.1　モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタ B（MSTPCRB）により、IIC の動作を許可または禁止することが可能です。IIC は、リセット後の初期状態では動作が停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。

モジュールストップコントロールレジスタ B の詳細については、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

30.17.2　転送開始に関する注意事項

転送開始（ICCR1.ICE ビット = 1）時点で IIC の割り込みに対応した IR フラグが 1 であれば、動作を許可する前に下記の手順で割り込み要求をクリアしてください。ICCR1.ICE ビットが 1 の状態で IR フラグを 1 にして転送を開始すると、転送開始後、割り込み要求が内部で保持されるため、IR フラグが予期しない動作となる可能性があります。

1. ICCR1.ICE ビットが 0 であることを確認する。
2. 周辺機能で対応する割り込み許可ビット（ICIER.TIE など）を 0 にする。
3. 周辺機能で対応する割り込み許可ビット（ICIER.TIE など）を読み出して、値が 0 であることを確認する。
4. IR フラグを 0 にする。

31. CAN（Controller Area Network）モジュール

31.1 概要

CAN モジュールは、電磁的ノイズの多いアプリケーションにおいて、メッセージベースのプロトコルを用いて複数のスレーブとマスタの間でデータの送受信を行います。このモジュールは、ISO 11898-1（CAN 2.0A/CAN 2.0B）規格に準拠し、最大 32 個のメールボックスをサポートしています。これらは、通常のメールボックスモードと FIFO モードでの送受信用に設定可能です。標準（11 ビット）と拡張（29 ビット）の両方のメッセージフォーマットに対応しています。CAN モジュールには、追加の外部 CAN トランシーバが必要です。

表 31.1 に CAN モジュールの仕様を、図 31.1 にブロック図を示します。

表 31.1　CANモジュールの仕様 (1/2)

項目	内容
データ転送	ISO11898-1準拠の標準フレームと拡張フレーム
ビットレート	最大1Mbpsにプログラム可能（fCAN≧8MHz） fCAN：CANクロックソース
メッセージボックス	32個のメールボックスに対し、下記の2種類のメールボックスモードを選択可能 • 通常モード：32個のメールボックスを送信または受信用に個別に設定可能 • FIFOモード：24個のメールボックスを送信または受信用に個別に設定可能、残りのメールボックスは受信用および送信用の4段FIFOで使用
受信	• データフレームとリモートフレームの受信をサポート • 受信IDフォーマットは、標準IDのみ、拡張IDのみ、またはミックスIDを選択可能 • ワンショット受信機能をプログラム可能 • オーバーライトモード（未読メッセージ上書き）またはオーバーランモード（未読メッセージ保持）を選択可能 • メールボックスごとに個別に受信完了割り込みを許可または禁止
アクセプタンスフィルタ	• 8つのアクセプタンスマスク（4メールボックスごとにマスク1つ） • メールボックスごとに個別にマスクを許可または禁止
送信	• データフレームとリモートフレームの送信をサポート • 送信IDフォーマットは、標準IDのみ、拡張IDのみ、またはミックスIDを選択可能 • ワンショット送信機能をプログラム可能 • ブロードキャストメッセージ機能 • メッセージIDまたはメールボックス番号に基づく優先モードを選択可能 • 送信要求アボートをサポート、アボート完了はステータスフラグで確認可能 • メールボックスごとに個別に送信完了割り込みを許可または禁止
バスオフ復帰のモード遷移	バスオフ状態からの復帰のモード遷移を選択可能： • ISO11898-1仕様準拠 • バスオフ開始で自動的にCAN haltモードへ遷移 • バスオフ終了で自動的にCAN haltモードへ遷移 • ソフトウェアによりCAN haltモードへ遷移 • ソフトウェアによりエラーアクティブ状態へ遷移
エラー状態の監視	• CANバスエラー（スタッフエラー、フォームエラー、ACKエラー、15ビットCRCエラー、ビットエラー、ACKデリミタエラー）の監視 • エラー状態（エラーワーニング、エラーパッシブ、バスオフ開始、バスオフ復帰）への遷移の検出 • エラーカウンタ読み出しのサポート
タイムスタンプ機能	• 16ビットカウンタによるタイムスタンプ機能 • 基準クロックは、1、2、4、8ビットタイム期間から選択可能
割り込み機能	5種類の割り込み要因をサポート： • 受信完了割り込み • 送信完了割り込み • 受信FIFO割り込み • 送信FIFO割り込み • エラー割り込み
CANスリープモード	CANクロック停止による消費電力の削減

表 31.1　CANモジュールの仕様 (2/2)

項目	内容
ソフトウェアサポートユニット	3つのソフトウェアサポートユニット： • アクセプタンスフィルタサポート • メールボックス検索サポート（受信メールボックス検索、送信メールボックス検索、メッセージロスト検索） • チャネル検索サポート
CANクロックソース	PCLKBまたはCANMCLK
テストモード	評価用に3つのテストモードを用意： • リッスンオンリモード • セルフテストモード0（外部ループバック） • セルフテストモード1（内部ループバック）
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態を設定して消費電力を削減可能

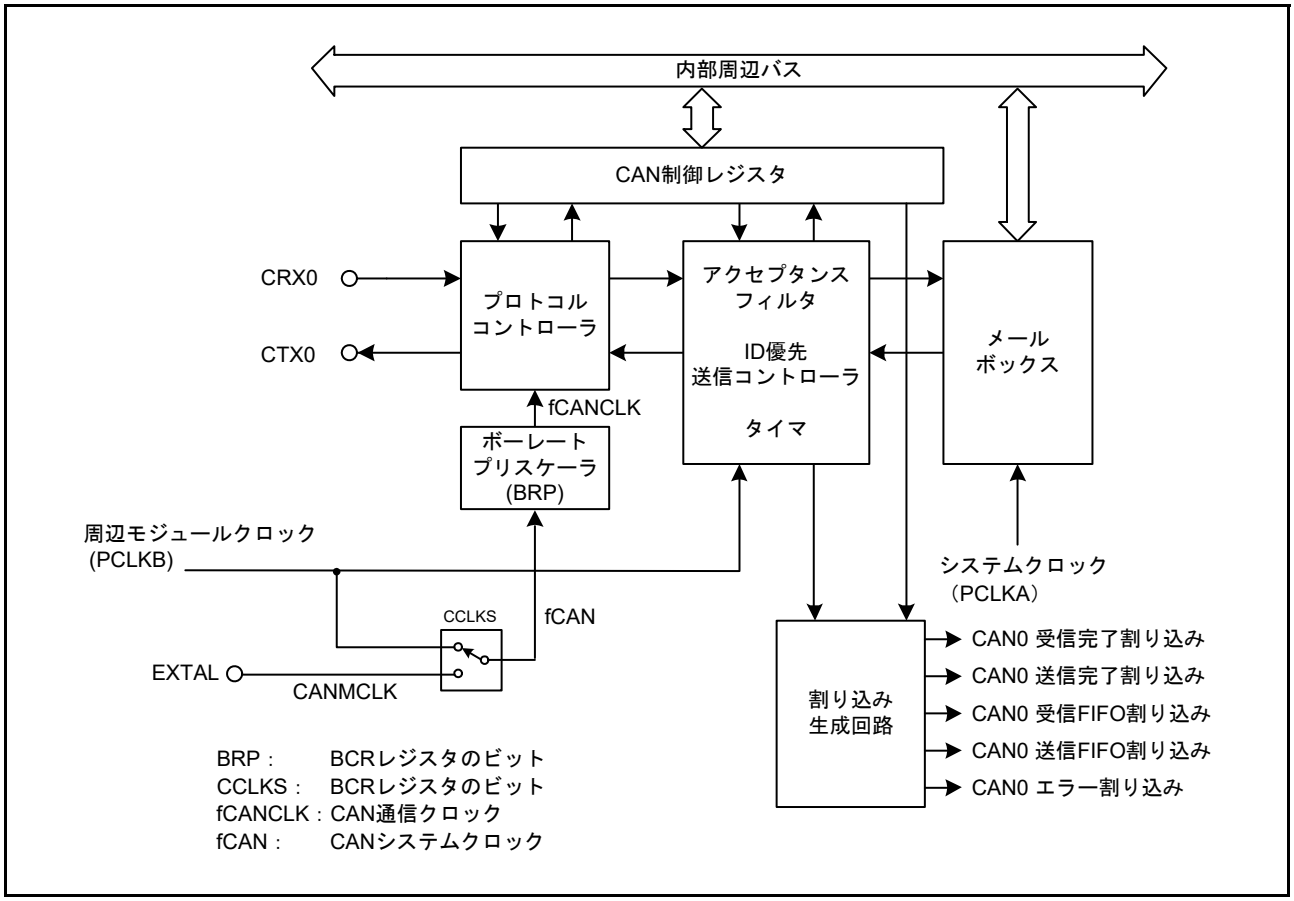


図 31.1　CAN モジュールのブロック図

CAN モジュールには、次のブロックが含まれます。

- CAN の入出力端子
  CRX0 および CTX0
- プロトコルコントローラ
  バスアービトレーション、送受信時のビットタイミング、スタッフ処理、エラー処理などの CAN プロトコル処理を行います。
- メールボックス
  送信または受信に使用可能な 32 個のメールボックスで構成されます。各メールボックスは、固有の ID、データ長コード（DLC）、データフィールド（8 バイト）、およびタイムスタンプを持ちます。

- アクセプタンスフィルタ
  MKR0 ～ MKR7 レジスタの設定値を使用して、受信したメッセージのフィルタ処理を行います。
- タイマ
  タイムスタンプ機能に使用します。メールボックスにメッセージを格納するときのタイマ値が、タイムスタンプ値として書き込まれます。
- 5 種類の割り込み発生回路
  - CAN0 受信完了割り込み
  - CAN0 送信完了割り込み
  - CAN0 受信 FIFO 割り込み
  - CAN0 送信 FIFO 割り込み
  - CAN0 エラー割り込み

表 31.2 に CAN モジュール端子を示します。これらは、本 MCU の他の信号との兼用端子です。詳細は、「20.　I/O ポート」を参照してください。

表 31.2　端子構成

端子名	入出力	機能
CRX0	入力	データ受信端子
CTX0	出力	データ送信端子

31.2　レジスタの説明

31.2.1　コントロールレジスタ（CTLR）

アドレス　CAN0.CTLR 4005 0840h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	RBOC	BOM[1:0]		SLPM	CANM[1:0]		TSPS[1:0]		TSRC	TPM	MLM	IDFM[1:0]		MBM
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MBM	CANメールボックスモード選択（注1）	0：通常メールボックスモード 1：FIFOメールボックスモード	R/W
b2-b1	IDFM[1:0]	IDフォーマットモード選択（注1）	b2 b1 0 0：標準IDモード すべてのメールボックス（FIFOメールボックスを含む）は標準IDのみに対応します。 0 1：拡張IDモード すべてのメールボックス（FIFOメールボックスを含む）は拡張IDのみに対応します。 1 0：ミックスIDモード すべてのメールボックス（FIFOメールボックスを含む）は、標準IDと拡張IDの両方に対応します。通常メールボックスモードでは、対応するIDEビットを使用して標準IDと拡張IDを区別してください。FIFOメールボックスモードでは、対応するIDEビットはメールボックス0～23に使用します。FIDCR0およびFIDCR1レジスタのIDEビットは受信FIFO用に、メールボックス24のIDEビットは送信FIFO用に使用します。 1 1：設定禁止	R/W
b3	MLM	メッセージロストモード選択（注1）	0：オーバーライトモード 1：オーバーランモード	R/W
b4	TPM	送信優先順位モード選択（注1）	0：ID優先送信モード 1：メールボックス番号優先送信モード	R/W
b5	TSRC	タイムスタンプカウンタリセットコマンド（注4）	0：タイムスタンプカウンタをリセットしない 1：タイムスタンプカウンタをリセットする（注3）	R/W
b7-b6	TSPS[1:0]	タイムスタンププリスケーラ選択（注1）	b7 b6 0 0：1ビットタイムごと 0 1：2ビットタイムごと 1 0：4ビットタイムごと 1 1：8ビットタイムごと	R/W
b9-b8	CANM[1:0]	CANオペレーションモード選択（注5）	b9 b8 0 0：CANオペレーションモード 0 1：CANリセットモード 1 0：CAN haltモード 1 1：CANリセットモード（強制遷移）	R/W
b10	SLPM	CANスリープモード（注5）（注6）	0：CANスリープモードの終了 1：CANスリープモードの開始	R/W
b12-b11	BOM[1:0]	バスオフ復帰モード（注1）	b12 b11 0 0：通常モード（ISO11898-1仕様準拠） 0 1：バスオフ状態開始で自動的にCAN haltモードへ遷移 1 0：バスオフ状態終了で自動的にCAN haltモードへ遷移 1 1：ソフトウェア要求によりバスオフ復帰期間中にCAN haltモードへ遷移	R/W
b13	RBOC	バスオフ強制復帰（注2）	0：復帰しない 1：バスオフ状態から強制復帰（注3）	R/W
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　BOM[1:0]、TSPS[1:0]、TPM、MLM、IDFM[1:0]、および MBM ビットへの書き込みは、CAN リセットモード時に行ってください。

注 2.　RBOC ビットはバスオフ状態で 1 にしてください。

注 3. このビットは、1 にした後、自動的に 0 になります。読むと 0 が読めます。
注 4. TSRC ビットは CAN オペレーションモード時に 1 にしてください。
注 5. CANM[1:0] および SLPM ビットを変更した場合は、STR レジスタでモードが切り替わったことを確認してください。モードが切り替わるまで、CANM[1:0] ビットまたは SLPM ビットを変更しないでください。
注 6. SLPM ビットへの書き込みは、CAN リセットモードまたは CAN halt モード時に行ってください。SLPM ビットを書き換える場合は、SLPM ビットのみに 0 または 1 を書いてください。

MBM ビット（CAN メールボックスモード選択）

MBM ビットが 0（通常メールボックスモード）の場合、メールボックス 0 ～ 31 は送信または受信メールボックスに設定されます。

MBM ビットが 1（FIFO メールボックスモード）の場合

- メールボックス 0 ～ 23 は送信または受信メールボックスに設定される
- メールボックス 24 ～ 27 は送信 FIFO に設定される
- メールボックス 28 ～ 31 は受信 FIFO に設定される

送信データは、メールボックス 24（送信 FIFO のウィンドウメールボックス）に書き込まれる。受信データは、メールボックス 28（受信 FIFO のウィンドウメールボックス）から読み出される。

表 31.3 にメールボックスの構成を示します。

IDFM[1:0] ビット（ID フォーマットモード選択）

IDFM[1:0] ビットは、ID フォーマットを指定します。

MLM ビット（メッセージロストモード選択）

MLM ビットは、未読メールボックスに新しいメッセージを取り込む場合の動作を指定します。オーバーライトモードまたはオーバーランモードを選択できます。すべてのメールボックス（受信 FIFO を含む）は、オーバーライトモードかオーバーランモードのどちらかになります。

本ビットが 0 の場合、すべてのメールボックスはオーバーライトモードになります。新しいメッセージを受信すると、それによって既存のメッセージが上書きされます。

本ビットが 1 の場合、すべてのメールボックスはオーバーランモードになります。新しいメッセージを受信しても、古いメッセージは上書きされず、新しいメッセージが破棄されます。

TPM ビット（送信優先順位モード選択）

TPM ビットは、メッセージを送信する場合の優先順位を指定します。

TPM ビットは、ID 優先送信モードまたはメールボックス番号送信モードを選択します。すべてのメールボックスは、ID 優先送信またはメールボックス番号優先送信のどちらかになります。

TPM ビットが 0 の場合、ID 優先送信モードが選択され、送信優先順位は ISO11898-1 の CAN 仕様に定められているように CAN バスアービトレーションルールに従います。ID 優先送信モードでは、メールボックス 0 ～ 31（通常メールボックスモード時）、メールボックス 0 ～ 23（FIFO メールボックスモード時）、および送信 FIFO が、送信用に設定されたメールボックスの ID と比較されます。2 つ以上のメールボックス ID が同一であると、小さい番号のメールボックスが優先されます。

送信 FIFO から送信される次のメッセージのみが、送信アービトレーションの対象となります。FIFO メッセージを送信中の場合、送信 FIFO 内の次の待機メッセージが送信アービトレーションの対象となります。

TPM ビットが 1 の場合、メールボックス番号送信モードが選択され、一番小さい番号の送信メールボックスが最優先されます。FIFO メールボックスモードでは、送信 FIFO は通常メールボックス（0 ～ 23）よりも優先順位が低くなります。

TSRC ビット（タイムスタンプカウンタリセットコマンド）

TSRC ビットは、タイムスタンプカウンタをリセットします。本ビットを 1 にすると、TSR レジスタが 0000h になります。本ビットは自動的に 0 になります。

TSPS[1:0] ビット（タイムスタンププリスケーラ選択） TSPS[1:0] ビットは、タイムスタンプ用のプリスケーラを選択します。タイムスタンプ用の基準クロックは、1、2、4、または 8 ビットタイム期間から選択できます。

CANM[1:0] ビット（CAN オペレーションモード選択）

CANM[1:0] ビットは、CAN モジュールのモードを下記から 1 つ選択します。

- CAN オペレーションモード
- CAN リセットモード
- CAN halt モード

CAN スリープモードは SLPM ビットで設定します。詳細は、31.3　動作モードを参照してください。

CAN モジュールが、BOM[1:0] ビットの設定値に基づいて CAN halt モードへ遷移した場合、CANM[1:0] ビットは自動的に 10b になります。

SLPM ビット（CAN スリープモード）

SLPM ビットを 1 にすると、CAN モジュールは CAN スリープモードへ遷移します。SLPM ビットを 0 にすると、CAN モジュールは CAN スリープモードから復帰します。詳細は、31.3　動作モードを参照してください。

BOM[1:0] ビット（バスオフ復帰モード）

BOM[1:0] ビットは、CAN モジュールのバスオフ復帰モードを選択します。

BOM[1:0] ビットが 00b の場合、CAN 仕様（ISO11898-1）に準拠してバスオフ状態から復帰します。CAN モジュールは、11 の連続するレセシブビットを 128 回検出すると、CAN 通信（エラーアクティブ状態）を回復させます。バスオフからの復帰時に、バスオフ復帰割り込み要求が発生します。

BOM[1:0] ビットが 01b の場合、CAN モジュールがバスオフ状態に達すると、CTLR.CANM[1:0] ビットが 10b になり CAN halt モードへ遷移します。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求は発生せず、TECR レジスタと RECR レジスタが 00h になります。

BOM[1:0] ビットが 10b の場合、CAN モジュールがバスオフ状態に達すると、ただちに CANM[1:0] ビットが 10b になります。CAN モジュールは、バスオフ状態から復帰した後（11 の連続するレセシブビットを 128 回検出した後）、CAN halt モードへ遷移します。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求が発生し、TECR レジスタと RECR レジスタは 00h になります。

BOM[1:0] ビットが 11b の場合、CAN モジュールがまだバスオフ状態のときに CANM[1:0] ビットを 10b にすると、CAN halt モードへ遷移します。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求は発生せず、TECR レジスタと RECR レジスタは 00h になります。しかし、CANM[1:0] ビットを 10b にする前に 11 の連続するレセシブビットを 128 回検出して、バスオフから復帰した場合は、バスオフ復帰割り込み要求が発生します。

CAN モジュールが CAN halt モードへ遷移しようとしたとき（BOM[1:0] ビット = 01b のときはバスオフ開始時、BOM[1:0] ビット = 10b のときはバスオフ終了時）、同時に CPU が CAN リセットモードへの遷移を要求した場合は、CPU 要求の CAN リセットモードへの遷移が優先されます。

RBOC ビット（バスオフ強制復帰）

バスオフ状態のとき RBOC ビットを 1 にすると、CAN モジュールは強制的にバスオフ状態を終了させます。本ビットは自動的に 0 になり、エラー状態はバスオフからエラーアクティブに変化します。RBOC ビットを 1 にすると、RECR および TECR レジスタが 00h になり、STR.BOST ビットは 0 になります。これは、CAN モジュールがバスオフ状態ではないことを示します。他のレジスタは RBOC ビットを 1 にしても変化しません。このバスオフ状態からの復帰によって、バスオフ復帰割り込み要求は発生しません。RBOC ビットは、BOM[1:0] ビットが 00b（通常モード）の場合にのみ使用してください。

表 31.3　メールボックスの構成

メールボックス	MBMビット = 0 （通常メールボックスモード）	MBMビット = 1（注1）～（注5） （FIFOメールボックスモード）
メールボックス0～23	通常メールボックス	通常メールボックス
メールボックス24～27		送信FIFO
メールボックス28～31		受信FIFO

注 1.　送信 FIFO は TFCR レジスタで制御します。メールボックス 24 ～ 27 に対応する MCTL_TXj レジスタは無効です。MCTL_TX24 ～ MCTL_TX27 レジスタは送信 FIFO では使用できません。
注 2.　受信 FIFO は RFCR レジスタで制御します。メールボックス 28 ～ 31 に対応する MCTL_RXj レジスタは無効です。MCTL_RX28 ～ MCTL_RX31 レジスタは受信 FIFO では使用できません。
注 3.　FIFO 割り込みについては、MIER_FIFO レジスタを参照してください。
注 4.　メールボックス 24 ～ 31 に対応する MKIVLR レジスタのビットは無効です。これらのビットは 0 にしてください。
注 5.　送信および受信 FIFO は、データフレームとリモートフレームの両方に使用可能です。

31.2.2 ビットコンフィグレーションレジスタ（BCR）

アドレス CAN0.BCR 4005 0844h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	TSEG1[3:0]				—	—	BRP[9:0]									
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	SJW[1:0]		—	TSEG2[2:0]			—	—	—	—	—	—	—	CCLKS
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CCLKS	CANクロックソース選択	0：PCLKB（PLLクロックで生成） 1：CANMCLK（メインクロックで生成）	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b8	TSEG2[2:0]	タイムセグメント2制御	b10 b8 0 0 0：設定禁止 0 0 1：2Tq 0 1 0：3Tq 0 1 1：4Tq 1 0 0：5Tq 1 0 1：6Tq 1 1 0：7Tq 1 1 1：8Tq	R/W
b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13-b12	SJW[1:0]	同期ジャンプ幅制御	b13 b12 0 0：1Tq 0 1：2Tq 1 0：3Tq 1 1：4Tq	R/W
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b25-b16	BRP[9:0]	ボーレートプリスケーラ選択（注1）	CAN通信クロック（fCANCLK）の周波数を設定します。	R/W
b27-b26	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b31-b28	TSEG1[3:0]	タイムセグメント1制御	b31 b28 0 0 0 0：設定禁止 0 0 0 1：設定禁止 0 0 1 0：設定禁止 0 0 1 1：4Tq 0 1 0 0：5Tq 0 1 0 1：6Tq 0 1 1 0：7Tq 0 1 1 1：8Tq 1 0 0 0：9Tq 1 0 0 1：10Tq 1 0 1 0：11Tq 1 0 1 1：12Tq 1 1 0 0：13Tq 1 1 0 1：14Tq 1 1 1 0：15Tq 1 1 1 1：16Tq	R/W

Tq: Time Quantum

注 1.　SCKSCR.CKSEL[2:0] ビットが 011b（メインクロック発振器選択）の場合、1 未満の値を選択しないでください。

ビットタイミングの設定については、31.4　データ転送レートの設定を参照してください。BCR レジスタは、CAN リセットモードから CAN halt モードまたは CAN オペレーションモードへ遷移する前に設定してください。このレジスタは、いったん設定した後も、CAN リセットモードまたは CAN halt モード時に書き込みが可能です。32 ビットでリード／ライトアクセスする場合、ビット 0 ～ 7 を変更しないように行う必要があります。

CCLKS ビット（CAN クロックソース選択）

CCLKS ビットが 0 の場合、CAN クロックソース（fCAN）には、PLL 周波数シンセサイザで生成された周辺クロック（PCLKB）が使用されます。CCLKS ビットが 1 の場合、CAN クロックソース（fCAN）には、外部の EXTAL 端子で生成された CANMCLK が使用されます。

TSEG2[2:0] ビット（タイムセグメント 2 制御）

TSEG2[2:0] ビットは、フェーズバッファセグメント 2（PHASE_SEG2）の長さを Tq 値で指定します。2 ～ 8Tq の値が設定可能です。TSEG1[3:0] ビット値未満の値を設定してください。

SJW[1:0] ビット（同期ジャンプ幅制御）

SJW[1:0] ビットは、同期ジャンプ幅を Tq 値で指定します。1 ～ 4Tq の値が設定可能です。TSEG2[2:0] ビット値以下の値を設定してください。

BRP[9:0] ビット（ボーレートプリスケーラ選択）

BRP[9:0] ビットは、CAN 通信クロック（fCANCLK）の周波数を設定します。fCANCLK の周期が 1Tq となります。設定値を P（0 ～ 1023）とすると、ボーレートプリスケーラは fCAN を P + 1 で分周します。

TSEG1[3:0] ビット（タイムセグメント 1 制御）

TSEG1[3:0] ビットは、プロパゲーションタイムセグメント（PROP_SEG）とフェーズバッファセグメント 1（PHASE_SEG1）の合計長を Tq 値で指定します。4 ～ 16Tq の値が設定可能です。

31.2.3　マスクレジスタ k（MKRk）(k = 0 ～ 7)

アドレス　CAN0.MKR0 4005 0400h～CAN0.MKR7 4005 041Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	—	SID[10:0]											EID[17:0]	
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	EID[17:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b17-b0	EID[17:0]	拡張ID	0：対応するEID[17:0]ビットを比較しない 1：対応するEID[17:0]ビットを比較する	R/W
b28-b18	SID[10:0]	標準ID	0：対応するSID[10:0]ビットを比較しない 1：対応するSID[10:0]ビットを比較する	R/W
b31-b29	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

FIFO メールボックスモードでのマスク機能については、31.6　アクセプタンスフィルタ機能とマスク機能を参照してください。

MKR0 ～ MKR7 レジスタへの書き込みは、CAN リセットモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

EID[17:0] ビット（拡張 ID）

EID[17:0] ビットは、CAN 拡張 ID ビットに対応するフィルタマスクビットです。拡張 ID のメッセージを受信する場合に使用します。EID[17:0] ビットを 0 にした場合、受信した各 ID ビットは、対応するメールボックスの ID ビットと比較されません。EID[17:0] ビットを 1 にした場合、受信した各 ID ビットは、対応するメールボックスの ID ビットと比較されます。

SID[10:0] ビット（標準 ID）

SID[10:0] ビットは、CAN 標準 ID ビットに対応するフィルタマスクビットです。標準 ID と拡張 ID のメッセージを受信する場合の両方で使用します。

SID[10:0] ビットを 0 にした場合、受信した各 ID ビットは、対応するメールボックスの ID ビットと比較されません。SID[10:0] ビットが 1 の場合、受信した各 ID は、対応するメールボックスの ID ビットと比較されます。

31.2.4　FIFO 受信 ID 比較レジスタ 0、1（FIDCR0, FIDCR1）

アドレス　CAN0.FIDCR0 4005 0420h, CAN0.FIDCR1 4005 0424h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	IDE	RTR	—	SID[10:0]											EID[17:0]	
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	EID[17:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b17-b0	EID[17:0]	拡張ID	データフレームとリモートフレームの拡張ID	R/W
b28-b18	SID[10:0]	標準ID	データフレームとリモートフレームの標準ID	R/W
b29	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b30	RTR	リモート送信要求	0：データフレーム 1：リモートフレーム	R/W
b31	IDE	ID拡張（注1）	0：標準ID 1：拡張ID	R/W

注 1.　CTLR.IDFM[1:0] ビット値が 10b 以外の場合、IDE ビットには 0 を書いて、読むと 0 が読めるようにしてください。

FIDCR0 および FIDCR1 レジスタは、CTLR.MBM ビットを 1（FIFO メールボックスモード）にした場合に有効です。FIFO メールボックスモードでは、メールボックス 28 ～メールボックス 31 レジスタの EID[17:0]、SID[10:0]、RTR、および IDE ビットは無効です。FIDCR0 および FIDCR1 レジスタへの書き込みは、CAN リセットモードまたは CAN halt モード時に行ってください。FIDCR0 および FIDCR1 レジスタの使用方法については、31.6　アクセプタンスフィルタ機能とマスク機能を参照してください。

EID[17:0] ビット（拡張 ID）

EID[17:0] ビットは、データフレームとリモートフレームの拡張 ID を設定します。拡張 ID のメッセージを受信する場合に使用します。

SID[10:0] ビット（標準 ID）

SID[10:0] ビットは、データフレームとリモートフレームの標準 ID を設定します。標準 ID と拡張 ID の両メッセージを受信するために使用します。

RTR ビット（リモート送信要求）

RTR ビットは、フレームフォーマットをデータフレームまたはリモートフレームに設定します。

- FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの RTR ビットが両方とも 0 の場合、データフレームのみ受信
- FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの RTR ビットが両方とも 1 の場合、リモートフレームのみ受信
- FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの RTR ビット同士が異なる値の場合、データフレームとリモートフレームの両方を受信

IDE ビット（ID 拡張）

IDE ビットは、ID フォーマットを標準 ID または拡張 ID に設定します。IDE ビットは、CTLR.IDFM[1:0] ビットが 10b（ミックス ID モード）の場合に有効です。

- FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの IDE ビットが両方とも 0 の場合、標準 ID フレームのみ受信
- FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの IDE ビットが両方とも 1 の場合、拡張 ID フレームのみ受信
- FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの IDE ビット同士が異なる値の場合、標準 ID フレームと拡張 ID フレームの両方を受信

31.2.5　マスク無効レジスタ（MKIVLR）

アドレス　CAN0.MKIVLR 4005 0428h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MB31	MB30	MB29	MB28	MB27	MB26	MB25	MB24	MB23	MB22	MB21	MB20	MB19	MB18	MB17	MB16
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MB15	MB14	MB13	MB12	MB11	MB10	MB9	MB8	MB7	MB6	MB5	MB4	MB3	MB2	MB1	MB0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	MB31～MB0	マスク無効	0：マスク有効 1：マスク無効	R/W

MKIVLR レジスタの各ビットは、同じ番号のメールボックスに対応しています。MKIVLR レジスタのビット 0 はメールボックス 0（MB0）に対応し、ビット 31 はメールボックス 31（MB31）に対応しています。（注 1）

MBn ビットを 1 にすると、対応するメールボックスの該当アクセプタンスマスクレジスタが無効になります。MBn ビットを 1 にすると、受信メッセージの ID がメールボックスの ID と完全に一致する場合にのみ、対応するメールボックスによってメッセージ受信が行われます。MKIVLR レジスタへの書き込みは、CAN リセットモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

注 1.　FIFO メールボックスモード時は、ビット 31 ～ 24 を 0 にしてください。

31.2.6 メールボックスレジスタ j（MBj_ID、MBj_DL、MBj_Dm、MBj_TS）(j = 0 ～ 31; m = 0 ～ 7)

表 31.4 に CAN0 メールボックスのメモリ配置を示します。表 31.5 に CAN データフレームの構成を示します。リセット後、CAN0 メールボックスの値は不定です。

MBj_ID、MBj_DL、MBj_Dm、および MBj_TS レジスタへの書き込みは、対応する MCTL_TXj または MCTL_RXj（j = 0 ～ 31）レジスタが 00h で、かつ対応するメールボックスがアボート要求を処理していない場合にのみ行ってください。レジスタアドレスの詳細については、表 31.4 を参照してください。

表 31.4　CAN0 メールボックスのメモリ配置

アドレス	メッセージ内容
CAN0	メモリ配置
4005 0200h + 16 × j + 0	IDE、RTR、SID10～SID6
4005 0200h + 16 × j + 1	SID5～SID0、EID17、EID16
4005 0200h + 16 × j + 2	EID15～EID8
4005 0200h + 16 × j + 3	EID7～EID0
4005 0200h + 16 × j + 4	—
4005 0200h + 16 × j + 5	データ長コード（DLC[3:0]）
4005 0200h + 16 × j + 6	データバイト0
4005 0200h + 16 × j + 7	データバイト1
4005 0200h + 16 × j + 8	データバイト2
4005 0200h + 16 × j + 9	データバイト3
4005 0200h + 16 × j + 10	データバイト4
4005 0200h + 16 × j + 11	データバイト5
4005 0200h + 16 × j + 12	データバイト6
4005 0200h + 16 × j + 13	データバイト7
4005 0200h + 16 × j + 14	タイムスタンプ上位バイト
4005 0200h + 16 × j + 15	タイムスタンプ下位バイト

表 31.5　CAN データフレームの構成

SID10～SID6	SID5～SID0	EID17～EID16	EID15～EID8	EID7～EID0	DLC3～DLC1	DATA0	DATA1	…	DATA7

各メールボックスの内容は、新しいメッセージを受信しない限り、以前の値を保持します。

アドレス　CAN0.MB0_ID 4005 0200h～CAN0.MB31_ID 4005 03F0h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	IDE	RTR	—	SID[10:0]											EID[17:0]	
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	EID[17:0]															
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b17-b0	EID[17:0]	拡張ID（注1）	データフレームとリモートフレームの拡張ID	R/W
b28-b18	SID[10:0]	標準ID	データフレームとリモートフレームの標準ID	R/W
b29	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b30	RTR	リモート送信要求	0：データフレーム 1：リモートフレーム	R/W
b31	IDE	ID拡張（注2）	0：標準ID 1：拡張ID	R/W

注 1.　メールボックスが標準 ID のメッセージを受信すると、そのメールボックスの EID ビット値は不定になります。
注 2.　IDE ビットは、CTLR.IDFM[1:0] ビットが 10b（ミックス ID モード）の場合に有効です。CTLR.IDFM[1:0] ビット値が 10b 以外の場合、IDE ビットには 0 を書いて、読むと 0 が読めるようにしてください。

アドレス　CAN0.MB0_DL 4005 0204h～CAN0.MB31_DL 4005 03F4h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	DLC[3:0]			
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

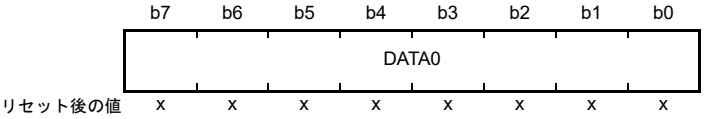
x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	DLC[3:0]	データ長コード（注1）	b3 b0 0 0 0 0：データ長 = 0バイト 0 0 0 1：データ長 = 1バイト 0 0 1 0：データ長 = 2バイト 0 0 1 1：データ長 = 3バイト 0 1 0 0：データ長 = 4バイト 0 1 0 1：データ長 = 5バイト 0 1 1 0：データ長 = 6バイト 0 1 1 1：データ長 = 7バイト 1 x x x：データ長 = 8バイト	R/W
b15-b4	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

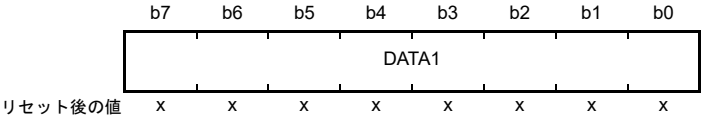
x: Don’t care

注 1.　メールボックスが n バイト（n は 8 未満）のデータ長（DLC[3:0] ビットで設定）のメッセージを受信した場合、そのメールボックスの DATAn ～ DATA7 レジスタ内のデータは不定です。DATA0 ～ DATA7 が、このメールボックスのデータレジスタです。たとえば、データ長が 6 バイト（DLC[3:0] = 6h）であれば、DATA6 レジスタと DATA7 レジスタのデータは不定です。

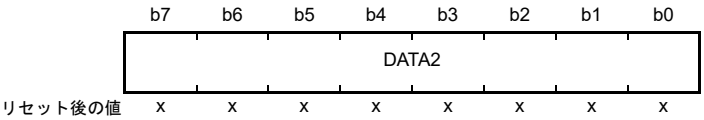
アドレス　CAN0.MB0_D0 4005 0206h～CAN0.MB31_D0 4005 03F6h



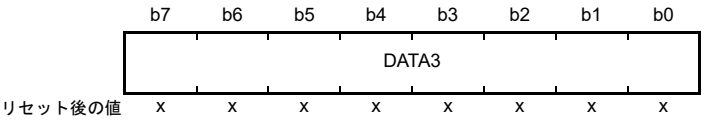
アドレス　CAN0.MB0_D1 4005 0207h～CAN0.MB31_D1 4005 03F7h



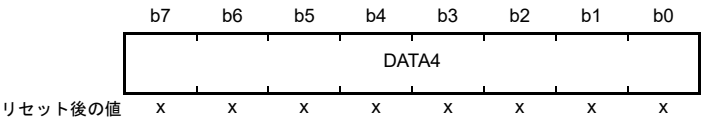
アドレス　CAN0.MB0_D2 4005 0208h～CAN0.MB31_D2 4005 03F8h



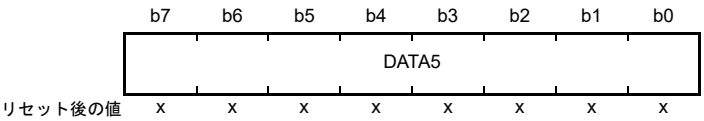
アドレス　CAN0.MB0_D3 4005 0209h～CAN0.MB31_D3 4005 03F9h



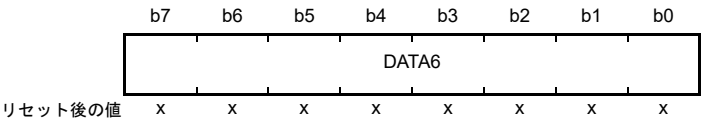
アドレス　CAN0.MB0_D4 4005 020Ah～CAN0.MB31_D4 4005 03FAh



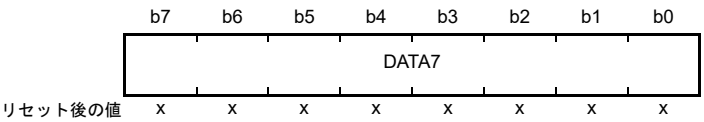
アドレス　CAN0.MB0_D5 4005 020Bh～CAN0.MB31_D5 4005 03FBh



アドレス　CAN0.MB0_D6 4005 020Ch～CAN0.MB31_D6 4005 03FCh



アドレス　CAN0.MB0_D7 4005 020Dh～CAN0.MB31_D7 4005 03FDh



x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	DATA0～DATA7	データバイト0～7（注1）（注2）	DATA0～7は送信または受信したCANメッセージデータを格納します。送受信は、DATA0から開始されます。CANバス上のビットオーダはMSBファーストであり、ビット7から送受信が開始されます。	R/W

注 1.　メールボックスが n バイト（n は 8 未満）のメッセージを受信した場合、メールボックスの DATAn ～ DATA7 の値は不定です。たとえば、受信データ長が 6 バイトであれば、DATA6 と DATA7 の値は不定です。
注 2.　メールボックスがリモートフレームを受信した場合、そのメールボックスの DATA0 ～ DATA7 は以前の値を保持します。

アドレス　CAN0.MB0_TS 4005 020Eh～CAN0.MB31_TS 4005 03FEh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TSH[7:0]								TSL[7:0]							
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	TSL[7:0]	タイムスタンプ下位バイト	TSH[7:0]ビットとTSL[7:0]ビットは、受信メッセージがメールボックスに取り込まれた時点のタイムスタンプのカウンタ値を格納します。	R/W
b15-b8	TSH[7:0]	タイムスタンプ上位バイト		R/W

EID[17:0] ビット（拡張 ID）

EID[17:0] ビットは、データフレームとリモートフレームの拡張 ID を設定します。拡張 ID のメッセージを送受信するために使用します。

SID[10:0] ビット（標準 ID）

SID[10:0] ビットは、データフレームとリモートフレームの標準 ID を設定します。標準 ID と拡張 ID の両メッセージを送受信するために使用します。

RTR ビット（リモート送信要求）

RTR ビットは、フレームフォーマットをデータフレームまたはリモートフレームに設定します。

- 受信メールボックスは、RTR ビットで指定されたフォーマットのフレームのみを受信する
- 送信メールボックスは、RTR ビットで指定されたフォーマットのフレームのみを送信する
- 受信 FIFO メールボックスは、FIDCR0 および FIDCR1 レジスタの RTR ビットで指定されたデータフレーム、リモートフレーム、またはその両方を受信する
- 送信 FIFO メールボックスは、該当する送信メッセージ内の RTR ビットで指定されたデータフレームまたはリモートフレームを送信する

IDE ビット（ID 拡張）

IDE ビットは、ID フォーマットを標準 ID または拡張 ID に設定します。IDE ビットは、CTLR.IDFM[1:0] ビットが 10b（ミックス ID モード）の場合に有効です。

- 受信メールボックスは、IDE ビットで指定された ID フォーマットのみを受信する
- 送信メールボックスは、IDE ビットで指定された ID フォーマットで送信する
- 受信FIFOメールボックスは、FIDCR0およびFIDCR1レジスタのIDEビットで指定された標準IDと拡張IDの設定でメッセージを受信する
- 送信FIFOメールボックスは、送信メッセージ内のIDEビットで指定された標準IDまたは拡張IDの設定でメッセージを送信する

DLC[3:0] ビット（データ長コード）

DLC[3:0] ビットは、データフレームで送信されるデータ長を指定します。リモートフレームを使用してデータを要求する場合、DLC[3:0] ビットは要求するデータ長を指定します。

データフレームを受信した場合、DLC[3:0] ビットには受信したデータ長が格納されます。リモートフレームを受信した場合、DLC[3:0] ビットには要求されたデータ長が格納されます。

31.2.7　メールボックス割り込みイネーブルレジスタ（MIER）

アドレス　CAN0.MIER 4005 042Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	MB31	MB30	MB29	MB28	MB27	MB26	MB25	MB24	MB23	MB22	MB21	MB20	MB19	MB18	MB17	MB16
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MB15	MB14	MB13	MB12	MB11	MB10	MB9	MB8	MB7	MB6	MB5	MB4	MB3	MB2	MB1	MB0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b31-b0	MB31～MB0	割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可 ビット31はメールボックス31（MB31）に、ビット0はメールボックス0（MB0）に対応しています。	R/W

MIER レジスタは、メールボックスごとに個別に割り込みを許可できます。このレジスタは、通常メールボックスモードで利用可能です。FIFO メールボックスモードでは、このレジスタにアクセスしないでください。各ビットは、同じ番号のメールボックスに対応しています。これらのビットは、対応するメールボックスの送信完了割り込みと受信完了割り込みを許可または禁止します：

- MIER レジスタのビット 0 はメールボックス 0（MB0）に対応
- MIER レジスタのビット 31 はメールボックス 31（MB31）に対応

MIER レジスタへの書き込みは、関連する MCTL_TXj または MCTL_RXj（j = 0 ～ 31）レジスタが 00h で、かつ対応するメールボックスが送受信アボート要求を処理していない場合にのみ行ってください。

31.2.8 FIFO メールボックスモード用メールボックス割り込みイネーブルレジスタ（MIER_FIFO）

アドレス CAN0.MIER_FIFO 4005 042Ch

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
	—	—	MB29	MB28	—	—	MB25	MB24	MB23	MB22	MB21	MB20	MB19	MB18	MB17	MB16
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MB15	MB14	MB13	MB12	MB11	MB10	MB9	MB8	MB7	MB6	MB5	MB4	MB3	MB2	MB1	MB0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b23-b0	MB23～MB0	割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可 ビット23はメールボックス23（MB23）に、ビット0はメールボックス0（MB0）にそれぞれ対応しています。	R/W
b24	MB24	送信FIFO割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b25	MB25	送信FIFO割り込み発生タイミング制御	0：送信完了ごとに発生 1：送信完了時に送信FIFOが空になると発生	R/W
b27-b26	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b28	MB28	受信FIFO割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b29	MB29	受信FIFO割り込み発生タイミング制御（注1）	0：受信完了ごとに発生 1：受信完了により受信FIFOがバッファワーニング（注2）になると発生	R/W
b31-b30	—	予約ビット	読むと不定値が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　受信 FIFO がフルからバッファワーニングになっても、割り込み要求は発生しません。
注 2.　バッファワーニングとは、受信 FIFO に 3 つ目のメッセージが格納された状態です。

MIER_FIFO レジスタは、メールボックスごと、FIFO ごとに個別に割り込みを許可できます。このレジスタは、FIFO メールボックスモードで利用可能です。通常メールボックスモードでは、このレジスタにアクセスしないでください。

MB0 ～ MB23 ビットは、同じ番号のメールボックスに対応しています。これらのビットは、対応するメールボックスの送信完了割り込みと受信完了割り込みを許可または禁止します。

- MIER_FIFO レジスタのビット 0 はメールボックス 0（MB0）に対応
- MIER_FIFO レジスタのビット 23 はメールボックス 23（MB23）に対応

MB24、MB25、MB28、MB29 の各ビットは、送信 FIFO 割り込みおよび受信 FIFO 割り込みを許可するか否か、および割り込み要求のタイミングを指定します。

MIER_FIFO レジスタへの書き込みは、関連する MCTL_TXj または MCTL_RXj（j = 0 ～ 31）レジスタが 00h で、かつ対応するメールボックスが送受信アボート要求を処理していない場合にのみ行ってください。また、関連する FIFO の MIER_FIFO レジスタのビットは、下記のすべての条件が成立する場合にのみ変更してください。

- TFCR.TFE ビットが 0 で、かつ TFCR.TFEST ビットが 1
- RFCR.RFE ビットが 0 で、かつ RFCR.RFEST ビットが 1

31.2.9 送信用メッセージコントロールレジスタ（MCTL_TXj）(j = 0 ～ 31)

• 送信モード（TRMREQビットが1、RECREQビットが0の場合）

アドレス　CAN0.MCTL_TX[0] 4005 0820h～CAN0.MCTL_TX[31] 4005 083Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TRMREQ	RECREQ	—	ONESHOT	—	TRMABT	TRMACTIVE	SENTDATA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SENTDATA	送信完了フラグ（注1）	0：送信未完了 1：送信完了	R/W
b1	TRMACTIVE	送信中ステータスフラグ	0：送信待機中または送信要求なし 1：送信中	R
b2	TRMABT	送信アボート完了フラグ （注1）（注2）	0：送信開始、送信完了により送信アボート失敗、または送信アボート要求なし 1：送信アボート完了	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	ONESHOT	ワンショット許可（注2）（注3）	0：ワンショット送信禁止 1：ワンショット送信許可	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	RECREQ	受信メールボックス要求 （注2）（注3）（注4）（注5）	0：受信用に設定しない 1：受信用に設定する	R/W
b7	TRMREQ	送信メールボックス要求 （注2）（注4）	0：送信用に設定しない 1：送信用に設定する	R/W

注 1.　0 のみ書けます。1 の書き込みは無効です。
注 2.　このレジスタの各ビットに書き込みを行う際に、SENTDATA フラグおよび TRMABT フラグが書き込み対象でない場合は、これらのフラグに 1 を書き込んでください。
注 3.　ワンショット送信モードへ遷移するには、TRMREQ ビットを 1 にすると同時に、ONESHOT ビットに 1 を書いてください。ワンショット送信モードを解除するには、メッセージが送信またはアボートされた後、ONESHOT ビットに 0 を書いてください。
注 4.　RECREQ ビットと TRMREQ ビットの両方を 1 にしないでください。
注 5.　RECREQ ビットを 0 にするときは、SENDDATA、TRMACTIVE、TRMABT の各フラグを同時に 0 にしてください。

MCTL_TXj レジスタは、メールボックス j を送信モードまたは受信モードに設定します。送信モードの場合、MCTL_TXj レジスタは送信状態の制御と表示も行います。メールボックス j が受信モードの場合は、MCTL_TXj レジスタにアクセスしないでください。MCTL_TXj レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時にのみ行ってください。FIFO メールボックスモードでは、MCTL_TX24 ～ MCTL_TX31 レジスタを使用しないでください。

SENTDATA フラグ（送信完了フラグ）

SENTDATA フラグは、対応するメールボックスからのデータ送信が完了すると 1 になります。本フラグは、ソフトウェア書き込みで 0 になります。

本フラグを 0 にする場合、最初に TRMREQ ビットを 0 にしてください。SENTDATA ビットと TRMREQ ビットを同時に 0 にすることはできません。対応するメールボックスから新しいメッセージを送信するには、SENTDATA フラグを 0 にしてください。

TRMACTIVE フラグ（送信中ステータスフラグ）

TRMACTIVE フラグは、CAN モジュールの対応するメールボックスがメッセージ送信を開始すると 1 になります。TRMACTIVE フラグは、CAN モジュールで CAN バスアービトレーションロストが発生するか、CAN バスエラーが発生するか、あるいはデータ送信が完了すると 0 になります。

TRMABT フラグ（送信アボート完了フラグ）

TRMABT フラグは、以下の場合に 1 になります。

- 送信アボート要求に続いて、送信開始前に送信アボートが完了したとき
- 送信アボート要求に続いて、CAN モジュールが CAN バスアービトレーションロストまたは CAN バスエラーを検出したとき
- ワンショット送信モード時（RECREQ = 0、TRMREQ = 1、ONESHOT = 1）に、CAN モジュールが CAN バスアービトレーションロストまたは CAN バスエラーを検出したとき

TRMABT フラグは、データ送信が完了しても 1 にはなりません。ソフトウェア書き込みによって、SENTDATA フラグは 1 になり、TRMABT フラグは 0 になります。

ONESHOT ビット（ワンショット許可）

送信モード時（RECREQ = 0、TRMREQ = 1）に ONESHOT ビットを 1 にすると、CAN モジュールはメッセージを 1 回だけ送信します。CAN バスエラーまたは CAN バスアービトレーションロストが発生しても、CAN モジュールはメッセージを再送信しません。送信が完了したとき、SENTDATA フラグが 1 になります。CAN バスエラーまたは CAN バスアービトレーションロストによって送信が完了しない場合は、TRMABT フラグが 1 になります。ONESHOT ビットは、SENTDATA フラグまたは TRMABT フラグが 1 になった後に 0 にしてください。

RECREQ ビット（受信メールボックス要求）

RECREQ ビットは、表 31.10 に示す受信モードを選択します。

RECREQ ビットを 1 にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの受信用に設定されます。

RECREQ ビットを 0 にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの受信用に設定されません。

ハードウェアプロテクトのため、下記の期間中、RECREQ ビットをソフトウェア書き込みで 0 にすることはできません。

- ハードウェアプロテクトがアクセプタンスフィルタ処理から開始されるとき（CRC フィールドの始まり）
- ハードウェアプロテクトが解除されるとき
  - メッセージの受信用に指定されたメールボックスで、受信したデータがメールボックスに格納された後、または CAN バスエラーが発生した後。すなわち、ハードウェアプロテクトの最大期間は、CRC フィールドの始まりから EOF の 7 ビット目の終わりまでになります
  - その他のメールボックスは、アクセプタンスフィルタ処理後
  - メッセージの受信用に指定されたメールボックスがない場合、アクセプタンスフィルタ処理後

RECREQ ビットを 1 にする場合は、TRMREQ ビットを 1 にしないでください。メールボックスの設定を送信から受信に変更する場合、最初に送信をアボートし、次に SENTDATA フラグと TRMABT フラグを 0 にしてから、受信に変更してください。

注 .　MCTL_TXj.RECREQ は、MCTL_RXj.RECREQ のミラービットです。

TRMREQ ビット（送信メールボックス要求）

TRMREQ ビットは、表 31.10 に示す送信モードを選択します。

TRMREQ ビットを 1 にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの送信用に設定されます。

TRMREQ ビットを 0 にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの送信用に設定されません。

TRMREQ ビットを 1 から 0 に変更して、対応する送信要求を解除すると、TRMABT フラグまたは SENTDATA フラグのいずれかが 1 になります。TRMREQ ビットを 1 にする場合は、RECREQ ビットを 1 にしないでください。メールボックスの設定を受信から送信に変更する場合、最初に受信をアボートし、次に NEWDATA フラグと MSGLOST フラグを 0 にしてから、送信に変更してください。

注 . MCTL_TXj.TRMREQ は、MCTL_RXj.TRMREQ のミラービットです。

31.2.10 受信用メッセージコントロールレジスタ（MCTL_RXj）(j = 0 ～ 31)

- 受信モード（TRMREQビットが0、RECREQビットが1の場合）

アドレス CAN0.MCTL_RX[0] 4005 0820h～CAN0.MCTL_RX[31] 4005 083Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TRMREQ	RECREQ	—	ONESHOT	—	MSGLOST	INVALDATA	NEWDATA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	NEWDATA	受信完了フラグ （注1）（注2）	0：受信データなし、または本ビットに0を書いた場合 1：新しいメッセージをメールボックスに格納中または格納済み	R/W
b1	INVALDATA	受信中ステータスフラグ	0：メッセージは有効 1：メッセージを更新	R
b2	MSGLOST	メッセージロストフラグ （注1）（注2）	0：メッセージのオーバーライトまたはオーバーランなし 1：メッセージのオーバーライトまたはオーバーランあり	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	ONESHOT	ワンショット許可 （注2）（注3）	0：ワンショット受信禁止 1：ワンショット受信許可	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	RECREQ	受信メールボックス要求 （注2）（注3）（注4）（注5）	0：受信用に設定しない 1：受信用に設定する	R/W
b7	TRMREQ	送信メールボックス要求 （注2）（注4）	0：送信用に設定しない 1：送信用に設定する	R/W

注 1.　0 のみ書けます。1 の書き込みは無効です。
注 2.　このレジスタの各ビットに書き込みを行う際に、NEWDATA フラグおよび MSGLOST フラグが書き込み対象でない場合は、これらのフラグに 1 を書き込んでください。
注 3.　ワンショット受信モードへ遷移するには、RECREQ ビットを 1 にすると同時に、ONESHOT ビットに 1 を書き込んでください。
ワンショット受信モードを解除するには、RECREQ ビットに 0 を書いた後、RECREQ ビットが 0 であることを確認してから ONESHOT ビットに 0 を書いてください。
注 4.　RECREQ ビットと TRMREQ ビットの両方を 1 にしないでください。
注 5.　RECREQ ビットを 0 にする場合、MSGLOST、NEWDATA、および RECREQ ビットを同時に 0 にしてください。

MCTL_RXj レジスタは、メールボックス j を送信モードまたは受信モードに設定します。受信モードの場合、MCTL_RXj レジスタは受信状態の制御と表示も行います。

メールボックス j が送信モードの場合は、MCTL_RXj レジスタにアクセスしないでください。MCTL_RXj レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時に行ってください。FIFO メールボックスモードでは、MCTL_RX24 ～ MCTL_RX31 レジスタを使用しないでください。

NEWDATA フラグ（受信完了フラグ）

NEWDATA フラグは、新しいメッセージをメールボックスに格納中または格納済みのときに 1 になります。常に INVALDATA フラグと同時に 1 にしてください。NEWDATA フラグは、ソフトウェア書き込みで 0 になります。対応する INVALDATA フラグが 1 の場合、NEWDATA フラグをソフトウェア書き込みで 0 にすることはできません。

INVALDATA フラグ（受信中ステータスフラグ）

INVALDATA フラグは、メッセージの受信完了後、対応するメールボックスで受信したメッセージが更新中であるとき 1 になります。INVALDATA フラグは、メッセージが格納された直後に 0 になります。INVALDATA フラグが 1 のときにメールボックスを読み出すと、そのデータは不定です。

MSGLOST フラグ（メッセージロストフラグ）

MSGLOST フラグは、NEWDATA フラグが 1 のとき、メールボックスが新しい受信メッセージでオーバーライトまたはオーバーランされると 1 になります。MSGLOST フラグは、EOF の 6 ビット目の終わりで 1 になります。MSGLOST フラグは、ソフトウェア書き込みで 0 になります。

オーバーライトモードとオーバーランモードの両方において、EOF の 6 ビット目の終わりから、周辺モジュールクロック（PCLKB）の 5 サイクルの間は、MSGLOST フラグをソフトウェア書き込みで 0 にすることはできません。

ONESHOT ビット（ワンショット許可）

受信モード時（RECREQ = 1、TRMREQ = 0）に ONESHOT ビットを 1 にすると、メールボックスはメッセージを 1 回だけ受信します。メールボックスがメッセージを受信した後は、受信メールボックスとしては動作しません。NEWDATA フラグと INVALDATA フラグの動作は、通常の受信モードと同じです。ワンショット受信モードでは、MSGLOST フラグは 1 にはなりません。ONESHOT ビットを 0 にする場合、最初に RECREQ ビットに 0 を書いて、RECREQ ビットが 0 であることを確認してから行ってください。

RECREQ ビット（受信メールボックス要求）

RECREQ ビットは、表 31.10 に示す受信モードを選択します。

RECREQ ビットを 1 にすると、対応するメールボックスがデータフレームまたはリモートフレームの受信用に設定されます。

ハードウェアプロテクトのため、下記の期間中、RECREQ ビットをソフトウェア書き込みで 0 にすることはできません。

- アクセプタンスフィルタ処理によるハードウェアプロテクト開始時（CRC フィールドの始まり）
- ハードウェアプロテクトが解除されるとき
  - メッセージの受信用に指定されたメールボックスで、受信したデータがメールボックスに格納された後、または CAN バスエラーが発生した後。ハードウェアプロテクトの最大期間は、CRC フィールドの始まりから EOF の 7 ビット目の終わりまでになります
  - その他のメールボックスは、アクセプタンスフィルタ処理後
  - メッセージの受信用に指定されたメールボックスがない場合、アクセプタンスフィルタ処理後

RECREQ ビットを 1 にする場合は、TRMREQ ビットを 1 にしないでください。メールボックスの設定を送信から受信に変更する場合、最初に送信をアボートし、次に SENTDATA フラグと TRMABT フラグを 0 にしてから、受信に変更してください。

注 .　MCTL_RXj.RECREQ は、MCTL_TXj.REQREQ のミラービットです。

TRMREQ ビット（送信メールボックス要求）

TRMREQ ビットは、表 31.10 に示す送信モードを選択します。

TRMREQ ビットを 1 にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの送信用に設定されます。

TRMREQ ビットを 1 から 0 に変更して、対応する送信要求を解除すると、TRMABT フラグまたは SENTDATA フラグのいずれかが 1 になります。TRMREQ ビットを 1 にする場合は、RECREQ ビットを 1 にしないでください。メールボックスの設定を受信から送信に変更する場合、最初に受信をアボートし、次に NEWDATA フラグと MSGLOST フラグを 0 にしてから、送信に変更してください。

注 .　MCTL_RXj.TRMREQ は、MCTL_TXj.TRMREQ のミラービットです。

31.2.11　受信 FIFO コントロールレジスタ（RFCR）

アドレス　CAN0.RFCR 4005 0848h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	RFEST	RFWST	RFFST	RFMLF	RFUST[2:0]			RFE
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	RFE	受信FIFO許可	0：受信FIFO禁止 1：受信FIFO許可	R/W
b3-b1	RFUST[2:0]	受信FIFO未読メッセージ数ステータス	b3 b2 b1 0 0 0：未読メッセージなし 0 0 1：未読メッセージ1件あり 0 1 0：未読メッセージ2件あり 0 1 1：未読メッセージ3件あり 1 0 0：未読メッセージ4件あり 1 0 1：予約ビット 1 1 0：予約ビット 1 1 1：予約ビット	R
b4	RFMLF	受信FIFOメッセージロストフラグ	0：受信FIFOメッセージロスト発生なし 1：受信FIFOメッセージロスト発生あり	R/W
b5	RFFST	受信FIFOフルステータスフラグ	0：受信FIFOはフルでない 1：受信FIFOはフル（未読メッセージ4件）	R
b6	RFWST	受信FIFOバッファワーニングステータスフラグ	0：受信FIFOにバッファワーニングなし 1：受信FIFOにバッファワーニングあり （未読メッセージ3件）	R
b7	RFEST	受信FIFO空ステータスフラグ	0：受信FIFOに未読メッセージあり 1：受信FIFOに未読メッセージなし	R

RFCR レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

RFE ビット（受信 FIFO 許可）

RFE ビットを 1 にすると、受信 FIFO が許可されます。RFE ビットを 0 にすると、受信 FIFO は受信禁止になり、空状態（RFEST ビット = 1）になります。RFMLF フラグの設定と同時に RFE ビットに 0 を書いてください。

通常メールボックスモード（CTLR.MBM = 0）では、本ビットを 1 にしないでください。ハードウェアプロテクトのため、下記の期間中に、RFE ビットはソフトウェア書き込みで 0 になりません。

- アクセプタンスフィルタ処理によるハードウェアプロテクト開始時（CRC フィールドの始まり）
- ハードウェアプロテクトが解除されるとき：
  - メッセージの受信用に受信 FIFO が指定されている場合に、受信したデータが受信 FIFO に格納された後、または CAN バスエラーが発生した後。ハードウェアプロテクトの最大期間は、CRC フィールドの始まりから EOF の 7 ビット目の終わりまでになります
  - メッセージの受信用に受信 FIFO が指定されていない場合は、アクセプタンスフィルタ処理後

RFUST[2:0] ビット（受信 FIFO 未読メッセージ数ステータス）

RFUST[2:0] ビットは、受信 FIFO 内の未読メッセージの数を示します。RFE ビットを 0 にすると、RFUST[2:0] ビットの値は 000b に初期化されます。

RFMLF フラグ（受信 FIFO メッセージロストフラグ）

受信 FIFO がフルのときに新しいメッセージを受信すると、RFMLF ビットは 1（受信 FIFO メッセージロスト発生あり）になります。本フラグは、EOF の 6 ビット目の終わりで 1 になります。

RFMLF フラグは、ソフトウェア書き込みで 0 になります（1 の書き込みは無効です）。オーバーライトモードとオーバーランモードの両方において、受信 FIFO がフルのときにメッセージを受信することが決定された場合、ハードウェアプロテクトにより、EOF の 6 ビット目の終わりから、周辺モジュールクロック（PCLKB）の 5 サイクルの間は、RFMLF フラグをソフトウェア書き込みで 0（受信 FIFO メッセージロスト発生なし）にすることができません。

RFFST フラグ（受信 FIFO フルステータスフラグ）

受信 FIFO 内の未読メッセージの数が 4 件になると、RFFST フラグは 1（受信 FIFO はフル）になります。受信 FIFO 内の未読メッセージの数が 4 件未満になると、RFFST フラグは 0（受信 FIFO はフルでない）になります。RFE ビットが 0 の場合、RFFST フラグは 0 になります。

RFWST フラグ（受信 FIFO バッファワーニングステータスフラグ）

受信 FIFO 内の未読メッセージの数が 3 件になると、RFWST フラグが 1（受信 FIFO にバッファワーニングあり）になります。受信 FIFO 内の未読メッセージの数が 3 件未満または 4 件になると、RFWST フラグは 0（受信 FIFO にバッファワーニングなし）になります。RFE ビットが 0 の場合、RFWST フラグは 0 になります。

RFEST フラグ（受信 FIFO 空ステータスフラグ）

受信 FIFO 内に未読メッセージがなくなると、RFEST フラグは 1（受信 FIFO に未読メッセージなし）になります。RFE ビットを 0 にすると、RFEST フラグは 1 になります。受信 FIFO 内の未読メッセージ数が 1 件以上になると、RFEST フラグは 0（受信 FIFO に未読メッセージあり）になります。

図 31.2 に受信 FIFO メールボックスの動作を示します。

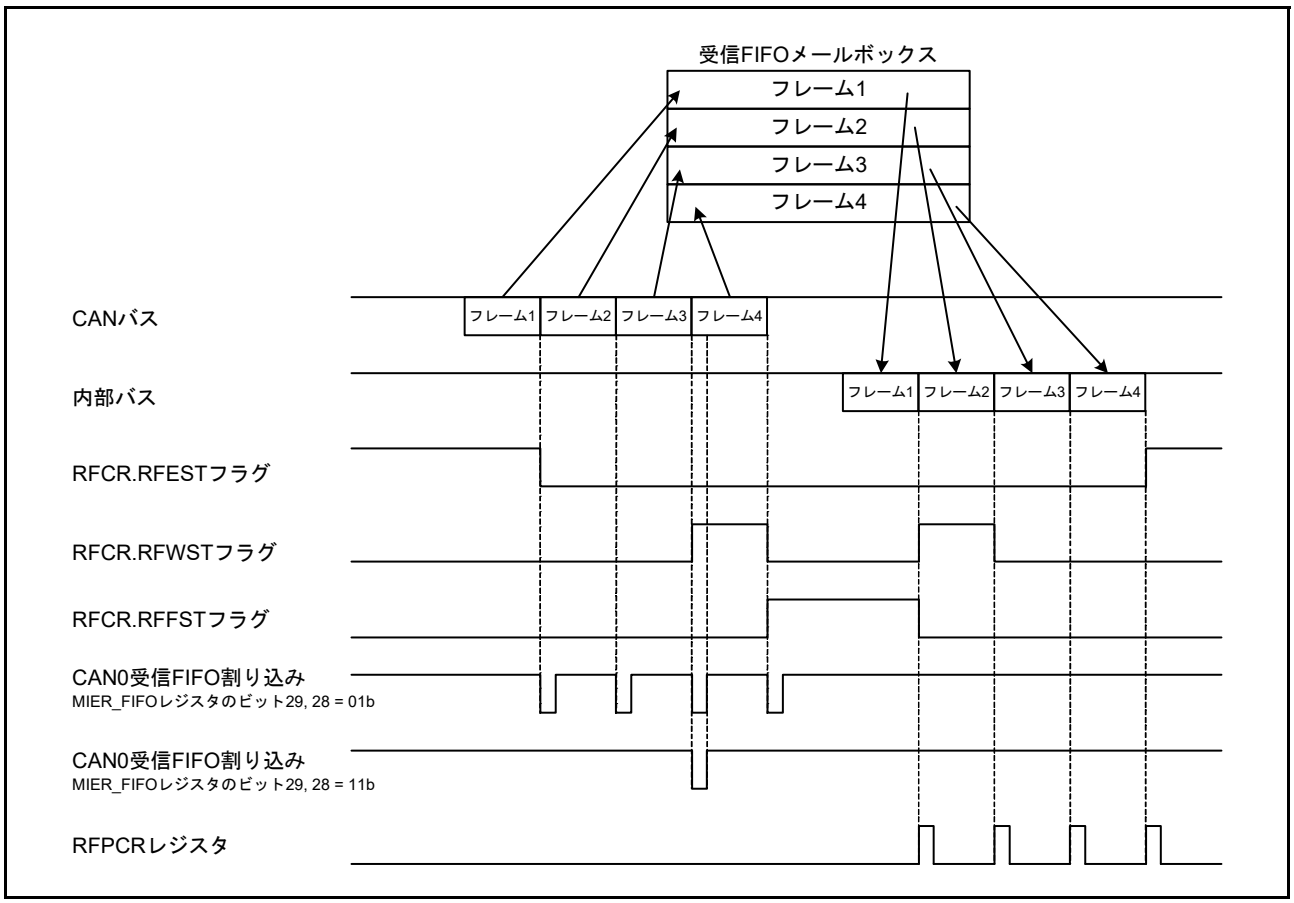


図 31.2　受信 FIFO メールボックスの動作（MIER_FIFO レジスタのビット 29、28 が 01b または 11b のとき）

31.2.12　受信 FIFO ポインタコントロールレジスタ（RFPCR）

アドレス　CAN0.RFPCR 4005 0849h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	機能	R/W
b7-b0	RFPCRにFFhを書き込むと、受信FIFOのCPUポインタが増加	W

受信 FIFO が空状態でないとき、CPU ポインタを増加させて次のメールボックス位置に移動させるには、RFPCR レジスタにソフトウェアで FFh を書いてください。RFCR.RFE ビットが 0（受信 FIFO 禁止）の場合、RFPCR レジスタに書き込みを行わないでください。

オーバーライトモードで RFFST フラグが 1（受信 FIFO はフル）のときに新しいメッセージが受信されると、CAN ポインタと CPU ポインタの両方が増加します。この状態で RFMLF フラグが 1 のとき、RFPCR レジスタにソフトウェア書き込みを行っても CPU ポインタは増加しません。

31.2.13 送信 FIFO コントロールレジスタ（TFCR）

アドレス CAN0.TFCR 4005 084Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	TFEST	TFFST	—	—	TFUST[2:0]			TFE
リセット後の値	1	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TFE	送信FIFO許可	0：送信FIFO禁止 1：送信FIFO許可	R/W
b3-b1	TFUST[2:0]	送信FIFO未送信メッセージ数ステータス	b3 b2 b1 0 0 0：未送信メッセージなし 0 0 1：未送信メッセージ1件 0 1 0：未送信メッセージ2件 0 1 1：未送信メッセージ3件 1 0 0：未送信メッセージ4件 1 0 1：予約ビット 1 1 0：予約ビット 1 1 1：予約ビット	R
b5-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	TFFST	送信FIFOフルステータス	0：送信FIFOはフルでない 1：送信FIFOはフル（未送信メッセージ4件）	R
b7	TFEST	送信FIFO空ステータス	0：送信FIFOに未送信メッセージあり 1：送信FIFOに未送信メッセージなし	R

TFCR レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

TFE ビット（送信 FIFO 許可）

TFE ビットを 1 にすると、送信 FIFO が送信許可になります。

TFE ビットを 0 にすると、送信 FIFO は空状態（TFEST ビットが 1）になり、次のように送信 FIFO からの未送信メッセージが失われます。

- 送信 FIFO から次のメッセージ送信予定がない、または送信中でないときはただちに
- 送信 FIFO から次のメッセージ送信予定がある、または送信中の場合、送信完了、CAN バスエラー、CAN バスアービトレーションロスト、または CAN halt モードへの遷移が発生した時点

TFE ビットを再度 1 にする前に、TFEST ビットが 1 になっていることを確認してください。TFE ビットを 1 にした後、メールボックス 24 に送信データを書き込んでください。

通常メールボックスモード（CTLR.MBM ビット = 0）では、TFE ビットを 1 にしないでください。

TFUST[2:0] ビット（送信 FIFO 未送信メッセージ数ステータス）

TFUST[2:0] ビットは、送信 FIFO 内の未送信メッセージの数を示します。TFE ビットを 0 にした後、送信アボートまたは送信が完了すると、TFUST[2:0] ビットは 000b になります。

TFFST ビット（送信 FIFO フルステータス）

送信 FIFO 内の未送信メッセージの数が 4 件になると、TFFST ビットは 1（送信 FIFO はフル）になります。送信 FIFO 内の未送信メッセージの数が 4 件未満になると、TFFST ビットは 0（送信 FIFO はフルでない）になります。送信 FIFO の送信がアボートされると、TFFST ビットは 0 になります。

TFEST ビット（送信 FIFO 空ステータス）

送信 FIFO 内に未送信メッセージがなくなると、TFEST ビットは 1（送信 FIFO にメッセージなし）になります。送信 FIFO からの送信がアボートされると、TFEST ビットは 1 になります。送信 FIFO 内の未送信メッセージの数が 1 件以上になると、TFEST ビットは 0（送信 FIFO にメッセージあり）になります。

図 31.3 に送信 FIFO メールボックスの動作を示します。

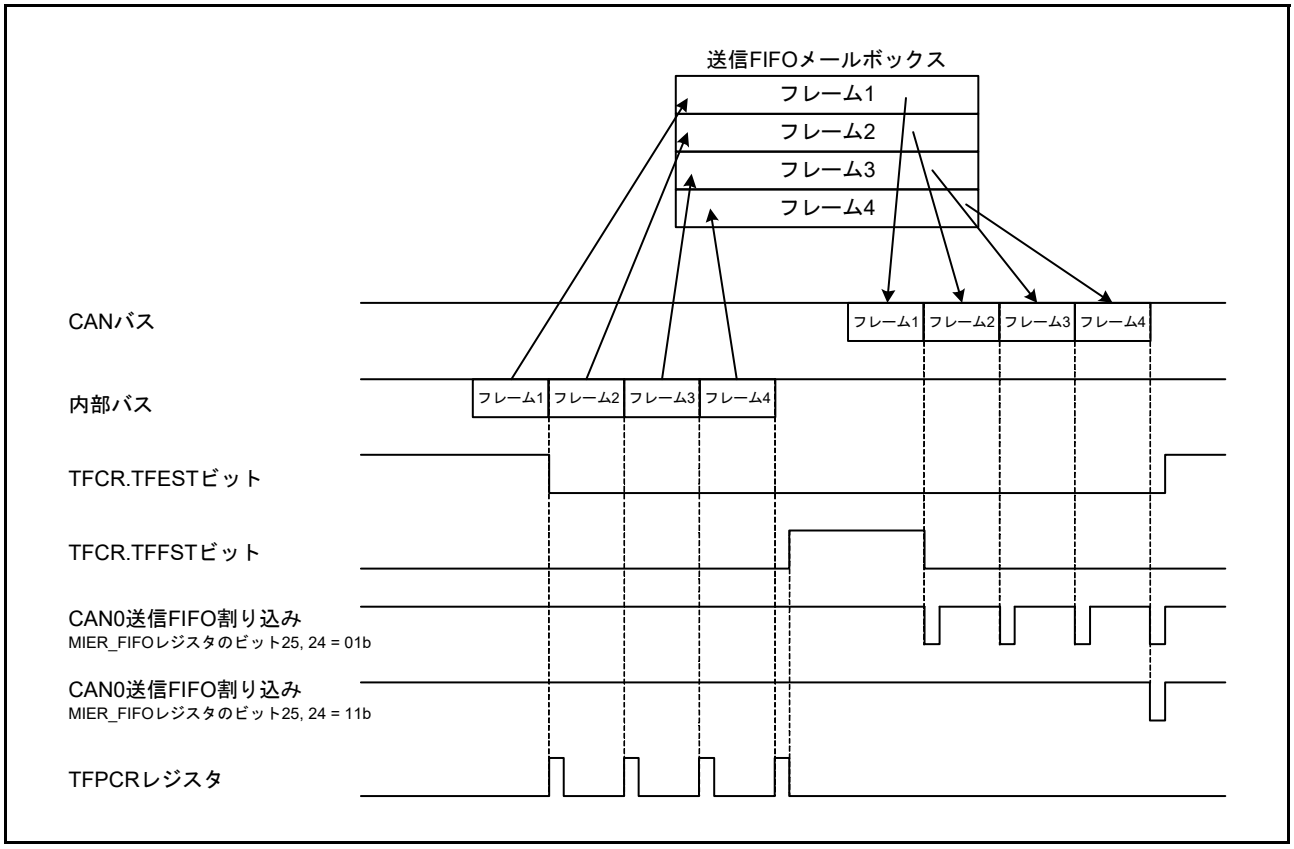


図 31.3　送信 FIFO メールボックスの動作（MIER_FIFO レジスタのビット 25、24 が 01b または 11b のとき）

31.2.14　送信 FIFO ポインタコントロールレジスタ（TFPCR）

アドレス　CAN0.TFPCR 4005 084Bh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	機能	R/W
b7-b0	TFPCRにFFhを書き込むと、送信FIFOのCPUポインタが増加	W

送信 FIFO がフルでないとき、送信 FIFO の CPU ポインタを増加させて次のメールボックス位置に移動させるには、ソフトウェアで TFPCR レジスタに FFh を書いてください。

TFCR.TFE ビットが 0（送信 FIFO 禁止）の場合、TFPCR レジスタに書き込みを行わないでください。

31.2.15　ステータスレジスタ（STR）

アドレス　CAN0.STR 4005 0842h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	RECST	TRMST	BOST	EPST	SLPST	HLTST	RSTST	EST	TABST	FMLST	NMLST	TFST	RFST	SDST	NDST
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	NDST	NEWDATAステータスフラグ	0：NEWDATAが1のメールボックスなし 1：NEWDATAが1のメールボックスあり	R
b1	SDST	SENTDATAステータスフラグ	0：SENTDATAが1のメールボックスなし 1：SENTDATAが1のメールボックスあり	R
b2	RFST	受信FIFOステータスフラグ	0：受信FIFOにメッセージなし 1：受信FIFOにメッセージあり	R
b3	TFST	送信FIFOステータスフラグ	0：送信FIFOはフル 1：送信FIFOはフルでない	R
b4	NMLST	通常メールボックスメッセージロストステータスフラグ	0：MSGLOSTが1のメールボックスなし 1：MSGLOSTが1のメールボックスが1つ以上あり	R
b5	FMLST	FIFOメールボックスメッセージロストステータスフラグ	0：RFMLFが0 1：RFMLFが1	R
b6	TABST	送信アボートステータスフラグ	0：TRMABTが1のメールボックスなし 1：TRMABTが1のメールボックスあり	R
b7	EST	エラーステータスフラグ	0：エラー発生なし 1：エラー発生あり	R
b8	RSTST	CANリセットステータスフラグ	0：CANリセットモードではない 1：CANリセットモード	R
b9	HLTST	CAN haltステータスフラグ	0：CAN haltモードではない 1：CAN haltモード	R
b10	SLPST	CANスリープステータスフラグ	0：CANスリープモードではない 1：CANスリープモード	R
b11	EPST	エラーパッシブステータスフラグ	0：エラーパッシブ状態ではない 1：エラーパッシブ状態	R
b12	BOST	バスオフステータスフラグ	0：バスオフ状態ではない 1：バスオフ状態	R
b13	TRMST	送信ステータスフラグ	0：バスアイドルまたは受信中 1：送信中またはバスオフ状態	R
b14	RECST	受信ステータスフラグ	0：バスアイドルまたは送信中 1：受信中	R
b15	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

NDST フラグ（NEWDATA ステータスフラグ）

MCTL_RXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の NEWDATA フラグのうち、少なくとも 1 つが 1 であると、MIER レジスタまたは MIER_FIFO レジスタの値にかかわらず、NDST フラグは 1 になります。すべての NEWDATA フラグが 0 であると、NDST フラグは 0 になります。

SDST フラグ（SENTDATA ステータスフラグ）

MCTL_TXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の SENTDATA フラグのうち、少なくとも 1 つが 1 であると、MIER レジスタまたは MIER_FIFO レジスタの値にかかわらず、SDST フラグは 1 になります。すべての SENTDATA フラグが 0 であると、SDST フラグは 0 になります。

RFST フラグ（受信 FIFO ステータスフラグ）

RFST フラグは、受信 FIFO が空状態でないとき 1 になります。受信 FIFO が空状態か、または通常メールボックスモードが選択されている場合、RFST フラグは 0 になります。

TFST フラグ（送信 FIFO ステータスフラグ）

TFST フラグは、送信 FIFO がフルでないとき 1 になります。送信 FIFO がフルであるか、または通常メールボックスモードが選択されている場合、TFST フラグは 0 になります。

NMLST フラグ（通常メールボックスメッセージロストステータスフラグ）

MCTL_RXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の MSGLOST フラグのうち、少なくとも 1 つが 1 であると、MIER レジスタまたは MIER_FIFO レジスタの値にかかわらず、NMLST フラグは 1 になります。すべての MSGLOST フラグが 0 であると、NMLST フラグは 0 になります。

FMLST フラグ（FIFO メールボックスメッセージロストステータスフラグ）

RFCR レジスタの RFMLF フラグが 1 になると、MIER_FIFO の値にかかわらず、FMLST フラグは 1 になります。RFMLF フラグが 0 の場合、FMLST フラグは 0 になります。

TABST フラグ（送信アボートステータスフラグ）

MCTL_TXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の TRMABT フラグのうち、少なくとも 1 つが 1 であると、MIER レジスタまたは MIER_FIFO レジスタの値にかかわらず、TABST フラグは 1 になります。すべての TRMABT フラグが 0 であると、TABST フラグは 0 になります。

EST フラグ（エラーステータスフラグ）

EIFR レジスタで 1 つでもエラーが検出されると、EIER レジスタの値にかかわらず、EST フラグは 1 になります。EIFR レジスタで 1 つもエラーが検出されないと、EST フラグは 0 になります。

RSTST フラグ（CAN リセットステータスフラグ）

RSTST フラグは、CAN モジュールが CAN リセットモードになると 1 になります。RSTST フラグは、CAN モジュールが CAN リセットモード以外になると 0 になります。CAN リセットモードから CAN スリープモードに遷移しても、RSTST フラグは 1 のままです。

HLTST フラグ（CAN halt ステータスフラグ）

HLTST フラグは、CAN モジュールが CAN halt モードになると 1 になります。HLTST フラグは、CAN モジュールが CAN halt モード以外になると 0 になります。CAN halt モードから CAN スリープモードに遷移しても、HLTST フラグは 1 のままです。

SLPST フラグ（CAN スリープステータスフラグ）

SLPST フラグは、CAN モジュールが CAN スリープモードになると 1 になります。SLPST フラグは、CAN モジュールが CAN スリープモード以外になると 0 になります。

EPST フラグ（エラーパッシブステータスフラグ）

TECR または RECR レジスタの値が 127 を超えて、CAN モジュールがエラーパッシブ状態（128 ≦ TEC ＜ 256 または 128 ≦ REC ＜ 256）になると、EPST フラグは 1 になります。CAN モジュールがエラーパッシブ状態以外になると、EPST フラグは 0 になります。

BOST フラグ（バスオフステータスフラグ）

TECR レジスタの値が 255 を超えて、CAN モジュールがバスオフ状態（TEC ≧ 256）になると、BOST フラグは 1 になります。CAN モジュールがバスオフ状態以外になると、BOST フラグは 0 になります。

TRMST フラグ（送信ステータスフラグ）

TRMST フラグは、CAN モジュールが送信ノードとして動作するか、またはバスオフ状態になると 1 になります。TRMST フラグは、CAN モジュールが受信ノードとして動作するか、またはバスアイドル状態になると 0 になります。

RECST フラグ（受信ステータスフラグ）

RECST フラグは、CAN モジュールが受信ノードとして動作すると 1 になります。RECST フラグは、CAN モジュールが送信ノードとして動作するか、またはバスアイドル状態になると 0 になります。

31.2.16　メールボックスサーチモードレジスタ（MSMR）

アドレス　CAN0.MSMR 4005 0853h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	MBSM[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	MBSM[1:0]	メールボックス検索モード選択	b1　b0 0　0：受信メールボックス検索モード 0　1：送信メールボックス検索モード 1　0：メッセージロスト検索モード 1　1：チャネル検索モード	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

MSMR レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

MBSM[1:0] ビット（メールボックス検索モード選択）

MBSM[1:0] ビットは、メールボックス検索機能の検索モードを選択します。

MBSM[1:0] ビットが 00b の場合、受信メールボックス検索モードになります。このモードでの検索対象は、通常メールボックスでの MCTL_RXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の NEWDATA フラグと、RFCR レジスタの RFEST ビットです。

MBSM[1:0] ビットが 01b の場合、送信メールボックス検索モードになります。このモードでの検索対象は、MCTL_TXj レジスタの SENTDATA フラグです。

MBSM[1:0] ビットが 10b の場合、メッセージロスト検索モードになります。このモードでの検索対象は、通常メールボックスでの MCTL_RXj レジスタの MSGLOST フラグ、および RFCR レジスタの RFMLF フラグです。

MBSM[1:0] ビットが 11b の場合、チャネル検索モードになります。このモードでの検索対象は、CSSR レジスタです。31.2.18　チャネルサーチサポートレジスタ（CSSR）を参照してください。

31.2.17 メールボックスサーチステータスレジスタ（MSSR）

アドレス CAN0.MSSR 4005 0852h

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	MBNST[4:0]	検索結果メールボックス番号ステータス	これらのビットは、MSMRレジスタで選択した各検索モードにおいて、発見された最小メールボックス番号を出力します。	R
b6-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b7	SEST	検索結果ステータス	0：検索結果あり 1：検索結果なし	R

MBNST[4:0] ビット（検索結果メールボックス番号ステータス）

すべてのメールボックス検索モードにおいて、MBNST[4:0] ビットは、発見された最小のメールボックス番号を出力します。受信メールボックス検索モード、送信メールボックス検索モード、およびメッセージロスト検索モードでは、メールボックスの値（出力される検索結果）が次の場合に更新されます。

- MBNST[4:0] で出力されたメールボックスについて、それぞれの NEWDATA、SENTDATA、または MSGLOST フラグが 0 の場合
- MBNST[4:0] で出力されたメールボックスよりも小さな番号のメールボックスについて、それぞれの NEWDATA、SENTDATA、または MSGLOST フラグが 1 の場合

MBSM[1:0] ビットが 00b（受信メールボックス検索モード）または 10b（メッセージロスト検索モード）の場合、受信 FIFO（メールボックス 28）が空状態ではなく、すべての通常メールボックス（メールボックス 0 ～ 23）に未読の受信メッセージもロストメッセージもないと、受信 FIFO が出力されます。MBSM[1:0] ビットが 01b（送信メールボックス検索モード）の場合、送信 FIFO（メールボックス 24）は出力されません。表 31.6 に、FIFO メールボックスモードでの MBNST[4:0] ビットの動作を示します。

チャネル検索モードでは、MBNST[4:0] ビットは対応するチャネル番号を出力します。MSSR レジスタがソフトウェアで読み出されると、次のターゲットチャネル番号が出力されます。

SEST ビット（検索結果ステータス）

すべてのメールボックスを検索した結果、対応するメールボックスがなかった場合、SEST ビットは 1（検索結果なし）になります。たとえば、送信メールボックス検索モードにおいて、どのメールボックスの SENTDATA フラグも 1 でない場合は、SEST ビットは 1 になります。少なくとも 1 つの SENTDATA フラグが 1 であると、SEST ビットは 0 になります。SEST ビットが 1 の場合、MBNST[4:0] ビットの値は不定です。

表 31.6　FIFOメールボックスモードでのMBNST[4:0]ビットの動作

MBSM[1:0] ビット	メールボックス24（送信FIFO）	メールボックス28（受信FIFO）
00b	メールボックス24は表示されない	通常メールボックスのどのMCTL_RXj.NEWDATAフラグも1にならず（メールボックスに格納中または格納済みのメッセージがない）、かつ受信FIFOが空状態でない場合、メールボックス28が表示される
01b		メールボックス28は表示されない
10b		通常メールボックスのどのMCTL_RXj.MSGLOSTビットも1（メッセージのオーバーライトまたはオーバーランあり）ではなく、かつ受信FIFOのRFCR.RFMLFフラグが1（受信FIFOメッセージロスト発生）になった場合、メールボックス28が表示される
11b		メールボックス28は表示されない

31.2.18 チャネルサーチサポートレジスタ（CSSR）

アドレス CAN0.CSSR 4005 0851h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	機能	R/W
b7-b0	チャネル検索の値が入力された場合、チャネル番号をMSSRレジスタに出力	R/W

CSSR レジスタで 1 になったビットは、8/3 エンコーダ（最小ビット位置がより高い優先順位）によってエンコードされ、MSSR.MBNST[4:0] ビットに出力されます。MSSR レジスタは、ソフトウェアで読み出すたびに更新された値を出力します。

CSSR レジスタへの書き込みは、MSMR.MBSM[1:0] ビットが 11b（チャネル検索モード）の場合にだけ行ってください。CSSR レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

図 31.4 に、CSSR および MSSR レジスタの書き込みと読み出しの動作を示します。

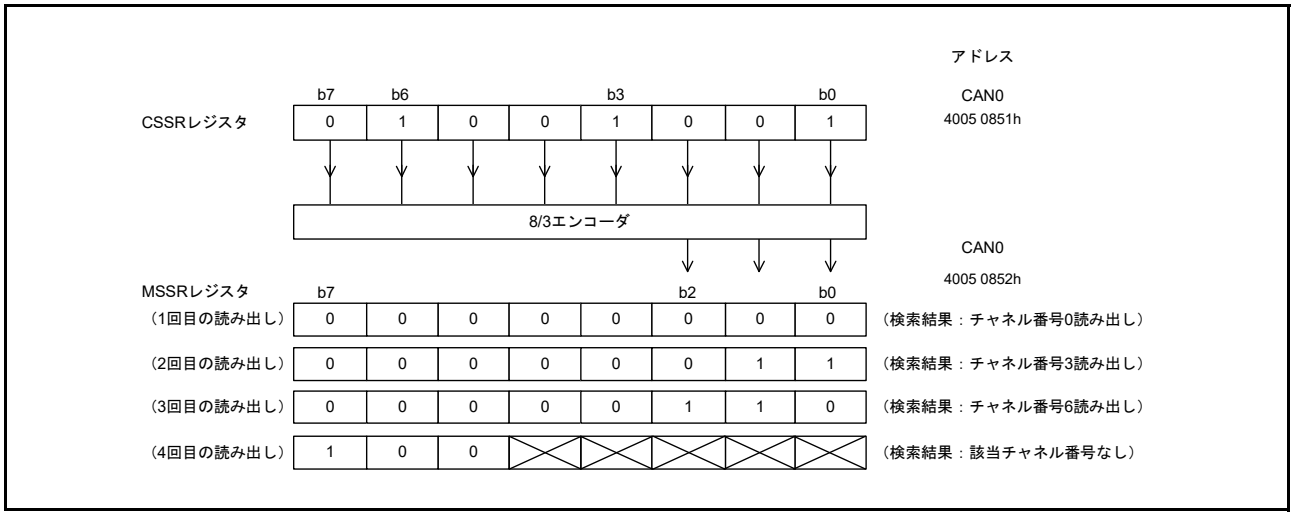


図 31.4　CSSR および MSSR レジスタの書き込みおよび読み出し動作

CSSR レジスタの値も、MSSR レジスタを読み出すたびに更新されます。読んだ場合、8/3 エンコーダ変換前の値が読めます。

31.2.19 アクセプタンスフィルタサポートレジスタ（AFSR）

アドレス CAN0.AFSR 4005 0856h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

x：不定

ビット	機能	R/W
b15-b0	受信メッセージの標準IDを書いた後に、データテーブル検索用に変換された値が読める	R/W

注．　AFSR レジスタへの書き込みは、CAN オペレーションモードまたは CAN halt モード時に行ってください。

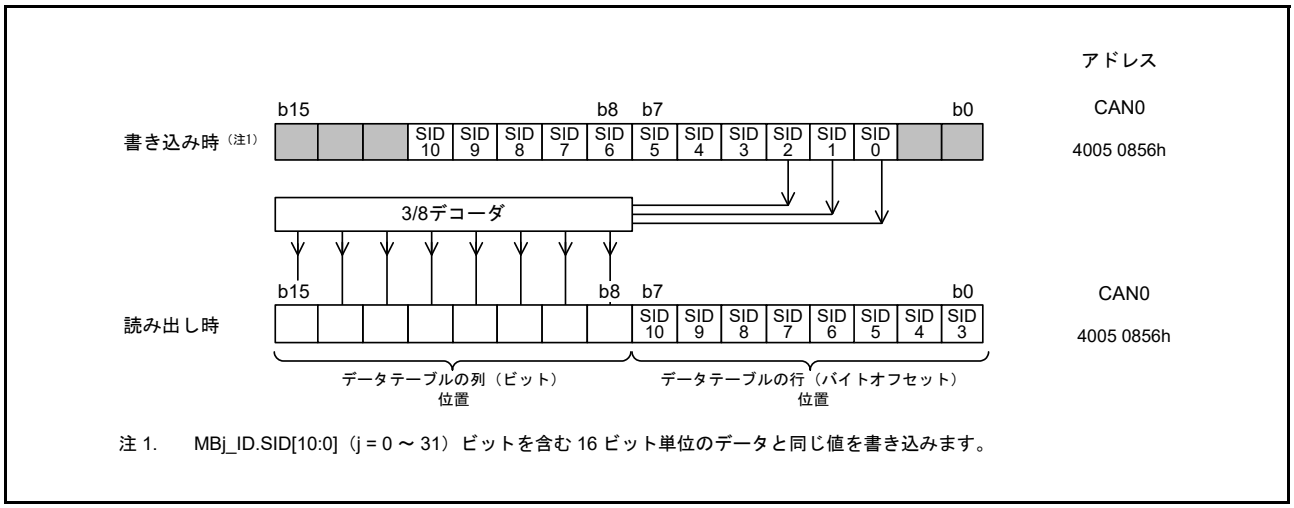
アクセプタンスフィルタサポートユニット（ASU）が、データテーブル（8 ビット × 256）の検索に使用可能です。このデータテーブルには、作成したすべての標準 ID の有効／無効が 1 ビット単位で設定されます。受信した標準 ID が格納された MBj_ID.SID[10:0] ビット（j = 0 ～ 31）を含む 16 ビット単位のデータを AFSR レジスタに書き込むと、デコードされたデータテーブル検索用の行（バイトオフセット）位置と、列（ビット）位置が読み出せます。ASU は、標準（11 ビット）ID にのみ使用できます。

ASU は、次の場合に有効です。

- 受信する ID がアクセプタンスフィルタでマスクできない場合。たとえば、受信する ID が 078h、087h、111h の場合
- 受信する ID が多すぎるため、ソフトウェアによるフィルタリング処理時間を短縮したい場合

注．　AFSR レジスタは、CAN リセットモードでは設定できません。

図 31.5 に、AFSR レジスタの書き込みおよび読み出し動作を示します。



注 1.　MBj_ID.SID[10:0]（j = 0 ～ 31）ビットを含む 16 ビット単位のデータと同じ値を書き込みます。

図 31.5　AFSR レジスタの書き込みおよび読み出し動作

31.2.20　エラー割り込みイネーブルレジスタ（EIER）

アドレス　CAN0.EIER 4005 084Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BLIE	OLIE	ORIE	BORIE	BOEIE	EPIE	EWIE	BEIE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	BEIE	バスエラー割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b1	EWIE	エラーワーニング割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b2	EPIE	エラーパッシブ割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b3	BOEIE	バスオフ開始割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b4	BORIE	バスオフ復帰割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b5	ORIE	オーバーラン割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b6	OLIE	オーバーロードフレーム送信割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W
b7	BLIE	バスロック割り込み許可	0：割り込み禁止 1：割り込み許可	R/W

EIER レジスタは、エラー割り込みの許可／禁止を EIFR レジスタのエラー割り込み要因ごとに個別に設定します。EIER レジスタへの書き込みは、CAN リセットモード時に行ってください。

BEIE ビット（バスエラー割り込み許可）

BEIE ビットが 0 の場合、EIFR.BEIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。BEIE ビットが 1 の場合、EIFR.BEIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

EWIE ビット（エラーワーニング割り込み許可）

EWIE ビットが 0 の場合、EIFR.EWIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。EWIE ビットが 1 の場合、EIFR.EWIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

EPIE ビット（エラーパッシブ割り込み許可）

EPIE ビットが 0 の場合、EIFR.EPIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。EPIE ビットが 1 の場合、EIFR.EPIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

BOEIE ビット（バスオフ開始割り込み許可）

BOEIE ビットが 0 の場合、EIFR.BOEIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。BOEIE ビットが 1 の場合、EIFR.BOEIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

BORIE ビット（バスオフ復帰割り込み許可）

BORIE ビットが 0 の場合、EIFR.BORIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。BORIE ビットが 1 の場合、EIFR.BORIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

ORIE ビット（オーバーラン割り込み許可）

ORIE ビットが 0 の場合、EIFR.ORIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。ORIE ビットが 1 の場合、EIFR.ORIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

OLIE ビット（オーバーロードフレーム送信割り込み許可）

OLIE ビットが 0 の場合、EIFR.OLIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。OLIE ビットが 1 の場合、EIFR.OLIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

BLIE ビット（バスロック割り込み許可）

BLIE ビットが 0 の場合、EIFR.BLIF フラグが 1 であっても、エラー割り込み要求は発生しません。BLIE ビットが 1 の場合、EIFR.BLIF フラグが 1 になると、エラー割り込み要求が発生します。

31.2.21　エラー割り込み要因判定レジスタ（EIFR）

アドレス　CAN0.EIFR 4005 084Dh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	BLIF	OLIF	ORIF	BORIF	BOEIF	EPIF	EWIF	BEIF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	BEIF	バスエラー検出フラグ	0：バスエラー未検出 1：バスエラー検出	R/W
b1	EWIF	エラーワーニング検出フラグ	0：エラーワーニング未検出 1：エラーワーニング検出	R/W
b2	EPIF	エラーパッシブ検出フラグ	0：エラーパッシブ未検出 1：エラーパッシブ検出	R/W
b3	BOEIF	バスオフ開始検出フラグ	0：バスオフ開始未検出 1：バスオフ開始検出	R/W
b4	BORIF	バスオフ復帰検出フラグ	0：バスオフ復帰未検出 1：バスオフ復帰検出	R/W
b5	ORIF	受信オーバーラン検出フラグ	0：受信オーバーラン未検出 1：受信オーバーラン検出	R/W
b6	OLIF	オーバーロードフレーム送信検出フラグ	0：オーバーロードフレーム送信未検出 1：オーバーロードフレーム送信検出	R/W
b7	BLIF	バスロック検出フラグ	0：バスロック未検出 1：バスロック検出	R/W

EIFR フラグに関連するイベントが発生すると、EIER レジスタの設定にかかわらず、EIFR レジスタの対応するビットが 1 になります。

これらのビットは、ソフトウェア書き込みで 0 にクリアしてください。ソフトウェアによるクリアと同時にビットが 1 になると、そのビットは 1 になります。個々のビットをソフトウェアで 0 にする場合、転送（MOV）命令を使用して、必ず指定されたビットのみを 0 にし、その他のビットは 1 にしてください。1 を書いても、これらのビット値は影響されません。

BEIF フラグ（バスエラー検出フラグ）

バスエラーが検出されると、BEIF フラグは 1 になります。

EWIF フラグ（エラーワーニング検出フラグ）

受信エラーカウンタ（REC）または送信エラーカウンタ（TEC）の値が 95 を超えると、EWIF フラグは 1 になります。本フラグは、REC または TEC の値が初めて 95 を超えたときのみ 1 になります。REC または TEC の値が 95 を超えたままの状態で、ソフトウェアが本ビットに 0 を書き込むと、REC または TEC の値が一度 95 以下になってから再度 95 を超えるまで EWIF フラグは 1 になりません。

EPIF フラグ（エラーパッシブ検出フラグ）

CAN エラーの状態がエラーパッシブになり、REC または TEC の値が 127 を超えると、EPIF フラグが 1 になります。本フラグは、REC または TEC が初めて 127 を超えたときのみ 1 になります。REC または TEC の値が 127 を超えたままの状態で、ソフトウェアが本ビットに 0 を書き込むと、REC または TEC の値が一度 127 以下になってから再度 127 を超えるまで EPIF フラグは 1 になりません。

BOEIF フラグ（バスオフ開始検出フラグ）

CAN エラー状態がバスオフになり、TEC の値が 255 を超えると BOEIF フラグは 1 になります。また、CTLR レジスタの BOM[1:0] ビットが 01b（バスオフ開始で自動的に CAN halt モードへ遷移）の場合に、CAN モジュールがバスオフ状態になると BOEIF フラグも 1 になります。

BORIF フラグ（バスオフ復帰検出フラグ）

CAN モジュールが、下記の条件下で、バスオフ状態から通常復帰（11 の連続するレセシブビットを 128 回検出）した場合、BORIF フラグは 1 になります。

- CTLR.BOM[1:0] ビットが 00b の場合
- CTLR.BOM[1:0] ビットが 10b の場合
- CTLR.BOM[1:0] ビットが 11b の場合

CAN モジュールが、下記の条件下で、バスオフ状態から復帰した場合、BORIF フラグは 1 になりません。

- CTLR.CANM[1:0] ビットが 01b または 11b（CAN リセットモード）の場合
- CTLR.RBOC ビットが 1（バスオフからの強制復帰）の場合
- CTLR.BOM[1:0] ビットが 01b の場合
- CTLR.BOM[1:0] ビットが 11b で、通常復帰が発生する前に、CTLR.CANM[1:0] ビットを 10b（CAN halt モード）にした場合

表 31.7 に、CTLR.BOM[1:0] ビットの設定値ごとの BOEIF および BORIF フラグの動作を示します。

表 31.7　CTLR.BOM[1:0] ビットの設定による BOEIF、BORIF フラグの動作

BOM[1:0] ビット	BOEIF フラグ	BORIF フラグ
00b	バスオフ状態への遷移時に 1 になる	バスオフ状態からの復帰時に 1 になる
01b		1 にはならない
10b		バスオフ状態からの復帰時に 1 になる
11b		CANM[1:0] ビットが 10b（CAN halt モード）になる前に、通常のバスオフ復帰が発生した場合に 1 になる

ORIF フラグ（受信オーバーラン検出フラグ）

ORIF フラグは、受信オーバーランが発生すると 1 になります。本フラグは、オーバーライトモードでは 1 になりません。本モードでは、オーバーライト条件が発生し、ORIF フラグが 1 にならない場合は、受信完了割り込み要求が発生します。

通常メールボックスモードのオーバーランモードでは、メールボックス 0 ～ 31 のいずれかでオーバーランが発生すると、ORIF フラグが 1 になります。FIFO メールボックスモードのオーバーランモードでは、メールボックス 0 ～ 23 のいずれかまたは受信 FIFO でオーバーランが発生すると、ORIF フラグが 1 になります。

OLIF フラグ（オーバーロードフレーム送信検出フラグ）

CAN モジュールが送信または受信を行う場合にオーバーロードフレームの送信条件が検出されると、OLIF フラグは 1 になります。

BLIF フラグ（バスロック検出フラグ）

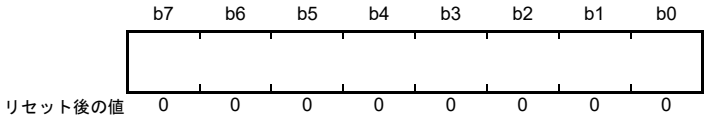
CAN モジュールが CAN オペレーションモードのとき、CAN バス上に 32 の連続するドミナントビットが検出されると、BLIF フラグは 1 になります。

BLIF フラグが 1 になった後、次のいずれかの条件下では、32 の連続するドミナントビットが再検出されます。

- BLIF フラグが 0 から 1 に変化した後、レセシブビットが検出された場合
- BLIF フラグが 0 から 1 に変化した後、CAN モジュールが一度 CAN リセットモードまたは CAN halt モードになってから、再度 CAN オペレーションモードになった場合

31.2.22　受信エラーカウントレジスタ（RECR）

アドレス　CAN0.RECR 4005 084Eh

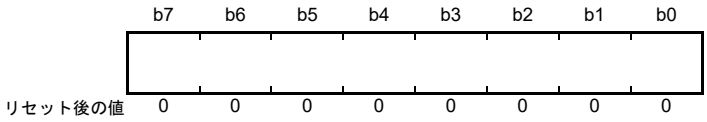


ビット	機能	R/W
b7-b0	受信エラーカウント機能。受信中のCANモジュールのエラー状態に基づいて、RECRはカウンタ値をインクリメントまたはデクリメント	R

RECR レジスタは、受信エラーカウンタの値を示します。受信エラーカウンタの増減条件については、CAN 仕様（ISO11898-1）を参照してください。バスオフ状態では、RECR レジスタの値は不定です。

31.2.23　送信エラーカウントレジスタ（TECR）

アドレス　CAN0.TECR 4005 084Fh



ビット	機能	R/W
b7-b0	送信エラーカウント機能。送信中のCANモジュールのエラー状態に基づいて、TECRはカウンタ値をインクリメントまたはデクリメント	R

TECR レジスタは、送信エラーカウンタの値を示します。送信エラーカウンタの増減条件については、CAN 仕様（ISO11898-1）を参照してください。バスオフ状態では、TECR レジスタの値は不定です。

31.2.24　エラーコード格納レジスタ（ECSR）

アドレス　CAN0.ECSR 4005 0850h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	EDPM	ADEF	BE0F	BE1F	CEF	AEF	FEF	SEF
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SEF	スタッフエラーフラグ（注1）（注2）	0：スタッフエラー未検出 1：スタッフエラー検出	R/W
b1	FEF	フォームエラーフラグ（注1）（注2）	0：フォームエラー未検出 1：フォームエラー検出	R/W
b2	AEF	ACKエラーフラグ（注1）（注2）	0：ACKエラー未検出 1：ACKエラー検出	R/W
b3	CEF	CRCエラーフラグ（注1）（注2）	0：CRCエラー未検出 1：CRCエラー検出	R/W
b4	BE1F	ビットエラー（レセシブ）フラグ（注1）（注2）	0：ビットエラー（レセシブ）未検出 1：ビットエラー（レセシブ）検出	R/W
b5	BE0F	ビットエラー（ドミナント）フラグ（注1）（注2）	0：ビットエラー（ドミナント）未検出 1：ビットエラー（ドミナント）検出	R/W
b6	ADEF	ACKデリミタエラーフラグ（注1）（注2）	0：ACKデリミタエラー未検出 1：ACKデリミタエラー検出	R/W
b7	EDPM	エラー表示モード選択（注3）（注4）	0：最初に検出されたエラーコードを出力 1：蓄積したエラーコードを出力	R/W

注 1.　1 を書いても、これらのビットの値は影響されません。
注 2.　SEF、FEF、AEF、CEF、BE1F、BE0F、ADEF ビットに 0 を書く場合は、転送（MOV）命令を使用して、必ず指定されたビットのみを 0 にし、その他のビットは 1 にしてください。
注 3.　EDPM ビットへの書き込みは、CAN リセットモードまたは CAN halt モード時に行ってください。
注 4.　同時に 2 つ以上のエラー条件が検出された場合は、関係するすべてのビットが 1 になります。

ECSR レジスタは、CAN バス上のエラー発生の有無を示します。各エラーの発生条件については、CAN 仕様（ISO11898-1）を参照してください。

ソフトウェア書き込みで EDPM ビット以外のビットをすべて 0 にクリアしてください。ソフトウェアによるクリアと同時に ECSR レジスタのビットが 1 になると、そのビットは 1 になります。

SEF フラグ（スタッフエラーフラグ）

スタッフエラーが検出されると、SEF フラグは 1 になります。

FEF フラグ（フォームエラーフラグ）

フォームエラーが検出されると、FEF フラグは 1 になります。

AEF フラグ（ACK エラーフラグ）

ACK エラーが検出されると、AEF フラグは 1 になります。

CEF フラグ（CRC エラーフラグ）

CRC エラーが検出されると、CEF フラグは 1 になります。

BE1F フラグ（ビットエラー（レセシブ）フラグ）

レセシブビットエラーが検出されると、BE1F フラグは 1 になります。

BE0F フラグ（ビットエラー（ドミナント）フラグ）

ドミナントビットエラーが検出されると、BE0F フラグは 1 になります。

ADEF フラグ（ACK デリミタエラーフラグ）

送信中に ACK デリミタでフォームエラーが検出されると、ADEF フラグは 1 になります。

EDPM ビット（エラー表示モード選択）

EDPM ビットは、ECSR レジスタの出力モードを選択します。EDPM ビットを 0 にすると、ECSR レジスタは最初のエラーコードを出力します。EDPM ビットを 1 にすると、ECSR レジスタは蓄積したエラーコードを出力します。

31.2.25　タイムスタンプレジスタ（TSR）

アドレス　CAN0.TSR 4005 0854h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	機能	R/W
b15-b0	タイムスタンプ機能のためのフリーランカウンタ値	R

注 .　TSR レジスタの読み出しは 16 ビット単位で実行してください。

TSR レジスタを読むと、16 ビットフリーランタイムスタンプカウンタの現在値が読み出せます。タイムスタンプカウンタの基準クロックは、CTLR.TSPS[1:0] ビットで設定します。このカウンタは、CAN スリープモードおよび CAN halt モードで停止し、CAN リセットモードで初期化されます。タイムスタンプカウンタの値は、受信メッセージが受信メールボックスに格納されるとき、MBj_TS レジスタの TSL[7:0] ビットと TSH[7:0] ビットに格納されます。

31.2.26　テストコントロールレジスタ（TCR）

アドレス　CAN0.TCR 4005 0858h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	TSTM[1:0]		TSTE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TSTE	CANテストモード許可	0：CANテストモード禁止 1：CANテストモード許可	R/W
b2-b1	TSTM[1:0]	CANテストモード選択	b2　b1 0　0：CANテストモードではない 0　1：リッスンオンリモード 1　0：セルフテストモード0（外部ループバック） 1　1：セルフテストモード1（内部ループバック）	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

TCR レジスタは、CAN テストモードを制御します。TCR レジスタは、CAN halt モードでのみ書き込みを行ってください。

(1)　リッスンオンリモード

CAN 仕様（ISO11898-1）では、オプションのバスモニタモードが推奨されています。リッスンオンリモードでは、有効なデータフレームとリモートフレームを受信できます。ただし、CAN バスにはレセシブビットのみが送信可能であり、ACK ビット、オーバーロードフラグ、アクティブエラーフラグは送信できません。リッスンオンリモードは、ボーレート検出に使用できます。リッスンオンリモードでは、どのメールボックスからも送信要求を行わないでください。

図 31.6 にリッスンオンリモード選択時の接続を示します。

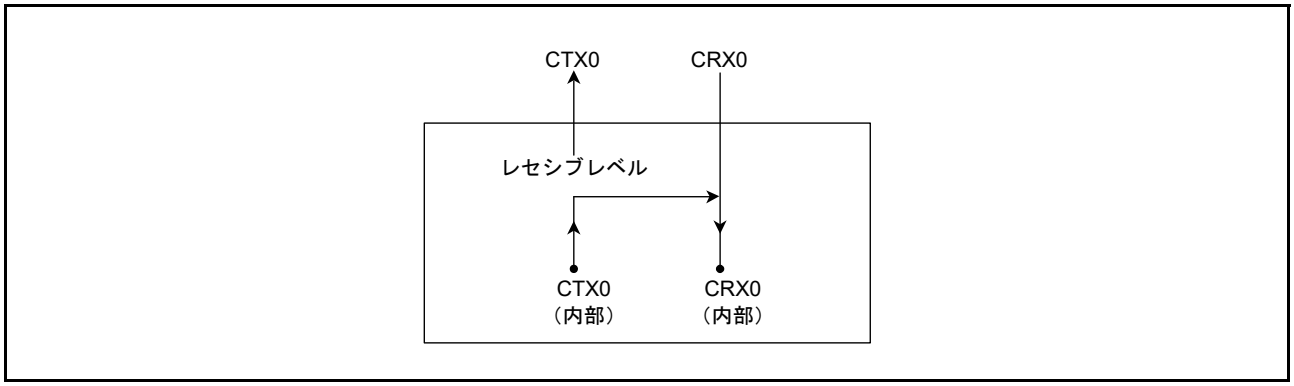


図 31.6　リッスンオンリモード選択時の接続

(2)　セルフテストモード 0（外部ループバック）

セルフテストモード 0 は、CAN トランシーバテスト用です。

このモードでは、プロトコルモジュールは、送信したメッセージを CAN トランシーバ経由で受信したメッセージとして取り扱い、送信したメッセージを受信メールボックスに格納します。外部の刺激に影響されないようにするため、プロトコルモジュールは ACK ビットを生成します。CTX0 および CRX0 端子はトランシーバに接続してください。

図 31.7 にセルフテストモード 0 選択時の接続を示します。

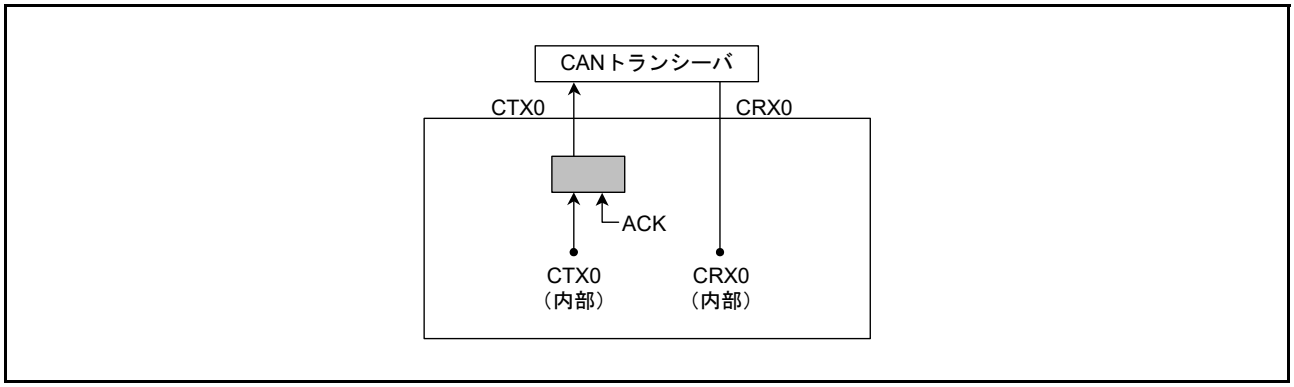


図 31.7　　セルフテストモード 0 選択時の接続

(3)　セルフテストモード 1（内部ループバック）

セルフテストモード 1 は、セルフテスト機能用です。

このモードでは、送信したメッセージを受信したメッセージとして取り扱い、送信したメッセージを受信メールボックスに格納します。外部の刺激に影響されないようにするため、プロトコルコントローラは ACK ビットを生成します。

セルフテストモード 1 では、プロトコルコントローラは内部 CTX0 端子から内部 CRX0 端子への内部フィードバックを行います。外部 CRX0 端子の入力値は無視されます。外部 CTX0 端子はレセシブビットのみ出力します。CTX0 端子と CRX0 端子は、CAN バスや他のどの外部デバイスにも接続する必要がありません。

図 31.8 にセルフテストモード 1 選択時の接続を示します。

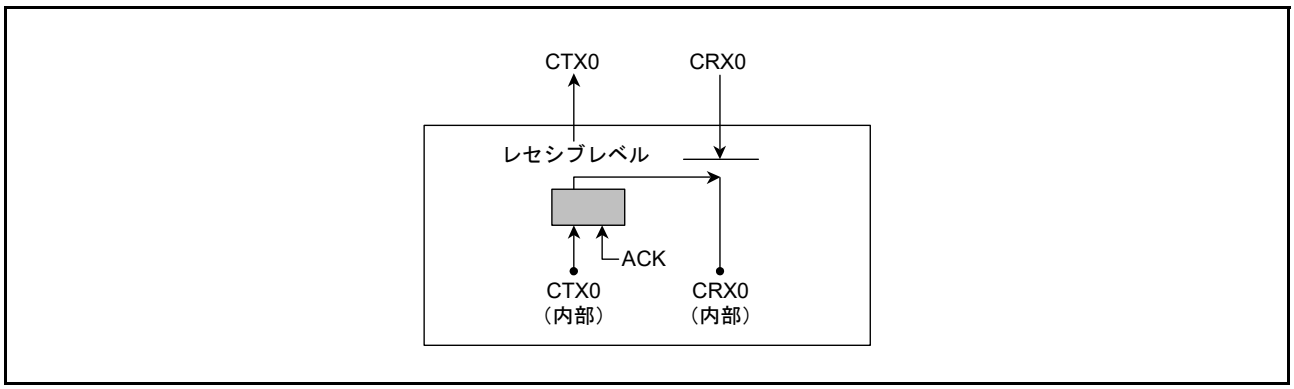


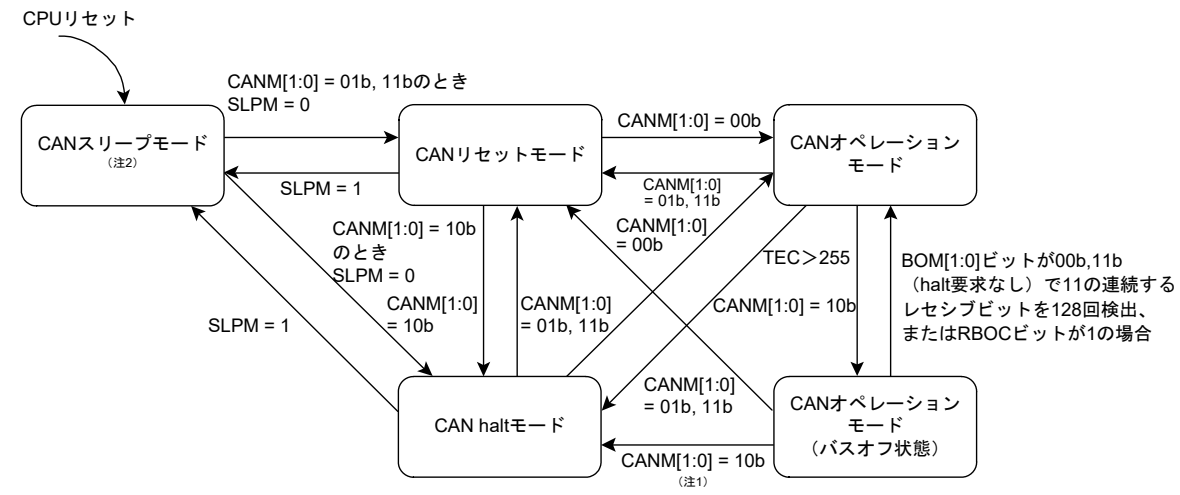
図 31.8　　セルフテストモード 1 選択時の接続

31.3　動作モード

CAN モジュールには、下記の動作モードがあります。

- CAN リセットモード
- CAN halt モード
- CAN オペレーションモード
- CAN スリープモード

図 31.9 に、各動作モード間の遷移を示します。



CANM, SLPM, BOM, RBOC：CTLRレジスタのビット

注 1.　バスオフ状態から CAN Halt モードへの送信タイミングは、CTLR.BOM[1:0] ビットの設定に依存します。
CTLR.BOM[1:0] ビットが 01b のとき、状態遷移の発生はバスオフ状態への遷移直後になります。
CTLR.BOM[1:0] ビットが 10b のとき、状態遷移の発生はバスオフ状態終了時になります。
CTLR.BOM[1:0] ビットが 11b のとき、状態遷移の発生は CTLR.CANM[1:0] ビットが 10b（CAN Halt モード）の設定時になります。

注 2.　CAN スリープモードを設定／解除する場合は、CTLR.SLPM ビットを変更してください。

図 31.9　　各動作モード間の遷移

31.3.1 CAN リセットモード

CAN リセットモードは、CAN 通信を設定するためのモードです。

CTLR.CANM[1:0] ビットを 01b または 11b にすると、CAN モジュールは CAN リセットモードへ遷移します。そのとき、STR.RSTST フラグが 1 になります。RSTST フラグが 1 になるまで、CTLR.CANM[1:0] ビットを変更しないでください。CAN リセットモードから他のモードへ遷移する前に、BCR レジスタを設定してください。

以下のレジスタは、CAN リセットモードへ遷移すると、それぞれのリセット後の値に初期化され、CAN リセットモード中はその初期値を保持します。

- MCTL_TXj および MCTL_RXj
- STR（SLPST ビットと TFST ビットを除く）
- EIFR
- RECR
- TECR
- TSR
- MSSR
- MSMR
- RFCR
- TFCR
- TCR
- ECSR（EDPM ビットを除く）

以下のレジスタは、CAN リセットモードへ遷移後も以前の値を保持します。

- CTLR
- STR（SLPST ビットと TFST ビットのみ）
- MIER および MIER_FIFO
- EIER
- BCR
- CSSR
- ECSR（EDPM ビットのみ）
- MBj_ID、MBj_DL、MBj_Dm、MBj_TS
- MKRk
- FIDCR0 および FIDCR1
- MKIVLR
- AFSR
- RFPCR
- TFPCR

31.3.2 CAN halt モード

CAN halt モードは、メールボックスの設定とテストモードの設定のためのモードです。CTLR.CANM[1:0] ビットを 10b にすると、CAN halt モードになり、STR.HLTST ビットが 1 になります。HLTST ビットが 1 になるまで、CTLR.CANM[1:0] ビットを変更しないでください。送信または受信時の状態遷移条件については、表 31.8 を参照してください。

CAN halt モードへ遷移する際に変化する可能性があるのは、STR レジスタの RSTST ビット、HLTST ビット、および SLPST ビットだけです。これ以外のすべてのレジスタは変化しません。

CAN halt モードでは、CTLR レジスタ（CANM[1:0] ビットと SLPM ビット以外）と、EIER レジスタを変更しないでください。CAN halt モードでは、自動ボーレート検出のためにリッスンオンリモードを選択している場合のみ、BCR レジスタを変更できます。

表 31.8　CAN リセットモードと CAN halt モードでの動作

動作モード	受信	送信	バスオフ
CAN リセットモード（強制遷移） CANM[1:0] = 11b	CAN モジュールはメッセージ受信の終了を待たずに CAN リセットモードへ遷移	CAN モジュールはメッセージ送信の終了を待たずに CAN リセットモードへ遷移	CAN モジュールはバスオフ復帰の終了を待たずに CAN リセットモードへ遷移
CAN リセットモード CANM[1:0] = 01b	CAN モジュールはメッセージ受信の終了を待たずに CAN リセットモードへ遷移	CAN モジュールはメッセージ送信の終了を待って CAN リセットモードへ遷移 （注 1）（注 4）	CAN モジュールはバスオフ復帰の終了を待たずに CAN リセットモードへ遷移
CAN halt モード	CAN モジュールはメッセージ受信の終了を待って CAN halt モードへ遷移（注 2）（注 3）	CAN モジュールはメッセージ送信の終了を待って CAN halt モードへ遷移（注 1）（注 4）	• BOM[1:0] ビットが 00b のとき： バスオフ復帰後のみ、ソフトウェアからの Halt 要求を受け付ける • BOM[1:0] ビットが 01b のとき： CAN モジュールは、ソフトウェアからの Halt 要求とは無関係に、バスオフ復帰の終了を待たずに自動的に CAN halt モードへ遷移 • BOM[1:0] ビットが 10b のとき： CAN モジュールは、ソフトウェアからの Halt 要求とは無関係に、バスオフ復帰の終了を待って自動的に CAN halt モードへ遷移 • BOM[1:0] ビットが 11b のとき： CAN モジュールは、バスオフ中にソフトウェアによる Halt 要求があると、バスオフ復帰の終了を待たずに CAN halt モードへ遷移

注 1.　複数メッセージの送信要求があると、最初の送信完了後にモード遷移が発生します。送信のサスペンド中に CAN リセットモードが要求されている状態では、バスアイドルになったとき、次の送信が終了したとき、または CAN モジュールがレシーバになったときに、モード遷移が発生します。

注 2.　CAN バスがドミナントレベルでロックされた場合、EIFR レジスタの BLIF フラグをモニタすることで、プログラムはバスロック状態を検出できます。

注 3.　CAN halt モードが要求された後、受信中に CAN バスエラーが発生すると、CAN モジュールは CAN halt モードへ遷移します。

注 4.　CAN リセットモードまたは CAN halt モードが要求された後、送信中に CAN バスエラーまたはアービトレーションロストが発生すると、CAN モジュールは要求された CAN モードへ遷移します。

31.3.3　CAN スリープモード

CAN スリープモードは、CAN モジュールへのクロック供給を停止することで、消費電力を削減します。MCU の端子リセットまたはソフトウェアリセット後、CAN モジュールは、CAN スリープモードから動作を開始します。

CTLR.SLPM ビットを 1 にすると、CAN モジュールは CAN スリープモードへ遷移し、STR.SLPST ビットが 1 になります。SLPST ビットが 1 になるまで、SLPM ビットの値を変更しないでください。CAN モジュールが CAN スリープモードへ遷移しても、他のレジスタが変化することはありません。

SLPM ビットへの書き込みは、CAN リセットモードおよび CAN halt モード時に行ってください。CAN スリープモード時には、どのレジスタも変更しないでください（SLPM ビットは除く）。ただし、読み出し動作は許可されます。

SLPM ビットを 0 にすると、CAN モジュールは CAN スリープモードから復帰します。CAN モジュールが CAN スリープモードから復帰しても、他のレジスタが変化することはありません。

31.3.4　CAN オペレーションモード（バスオフ状態以外）

CAN オペレーションモードは、CAN 通信を行うためのモードです。

CTLR.CANM[1:0] ビットを 00b にすると、CAN モジュールは CAN オペレーションモードになります。そのとき、RSTST ビットと HLTST ビットが 0 になります。RSTST ビットと HLTST ビットが 0 になるまで、CANM[1:0] ビットの値を変更しないでください。CAN オペレーションモードへ遷移後、11 の連続するレセシブビットが検出されると、CAN モジュールは以下の状態になります。

- CAN モジュールは、ネットワーク上でアクティブノードとなり、CAN メッセージの送受信が可能になる
- 受信エラーカウンタや送信エラーカウンタなど、CAN バスのエラー監視処理が行われる

CAN モジュールは、CAN バスの状態によって、CAN オペレーションモード中に、次の 3 つのいずれかのサブモードになっています。

- アイドルモード：送受信が発生していない
- 受信モード：他のノードが送信した CAN メッセージを受信中
- 送信モード：CAN メッセージを送信中。セルフテストモード 0（TCR.TSTM[1:0] = 10b）またはセルフテストモード 1（TCR.TSTM[1:0] = 11b）を選択した場合、CAN モジュールは同時に自ノードが送信したメッセージを受信する

図 31.10 に、CAN オペレーションモードのサブモードを示します。

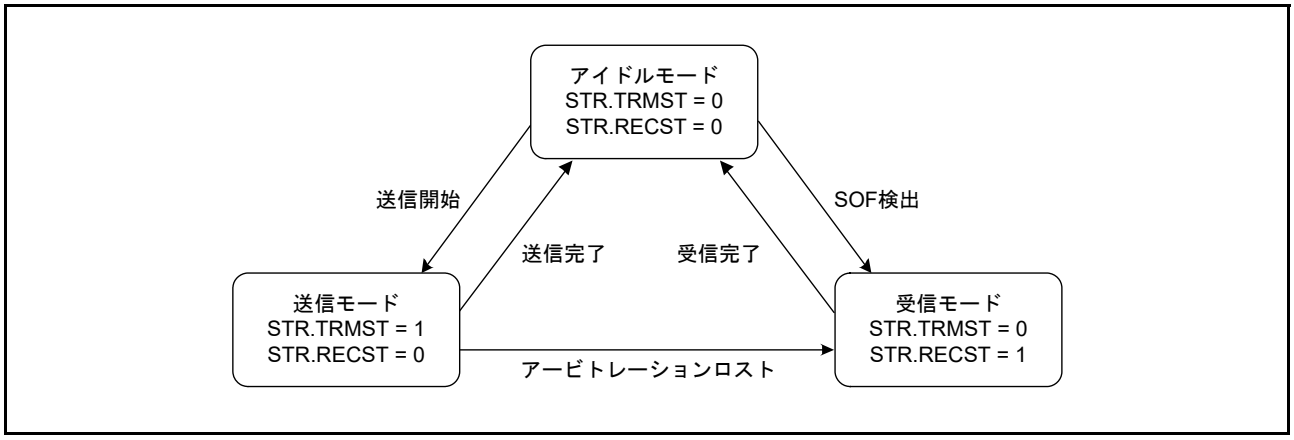


図 31.10　CAN オペレーションモードのサブモード

31.3.5　CAN オペレーションモード（バスオフ状態）

CAN 仕様に定められた送信または受信エラーカウンタの増減ルールに従って、CAN モジュールはバスオフ状態へ遷移します。

CAN モジュールがバスオフ状態から復帰するとき、下記のケースがあります。CAN モジュールがバスオフ状態のとき、STR、EIFR、RECR、TECR、TSR を除いて、CAN 関連レジスタの値は変化しません。

(1)　CTLR.BOM[1:0] = 00b（通常モード）の場合

CAN モジュールは、バスオフ状態からの復帰を完了すると、エラーアクティブ状態となり、CAN 通信が可能になります。EIFR.BORIF フラグは 1（バスオフ復帰検出）になります。

(2)　CTLR.RBOC = 1（バスオフ強制復帰）の場合

CAN モジュールは、バスオフ状態時に RBOC ビットが 1 であると、エラーアクティブ状態になります。11 の連続するレセシブビットを検出した後、再び CAN 通信が可能になります。BORIF フラグは 1 になりません。

(3)　CTLR.BOM[1:0] = 01b（バスオフ開始で自動的に CAN halt モードへ遷移）の場合

CAN モジュールは、バスオフ状態に達したとき、CAN halt モードへ遷移します。BORIF フラグは 1 になりません。

(4)　CTLR.BOM[1:0] = 10b（バスオフ終了で自動的に CAN halt モードへ遷移）の場合

CAN モジュールは、バスオフからの復帰を完了すると、CAN halt モードへ遷移します。BORIF フラグは 1 になります。

(5)　バスオフ状態時に CTLR.BOM[1:0] = 11b（ソフトウェアにより自動的に CAN halt モードへ遷移）および CTLR.CANM[1:0] = 10b（CAN halt モード）の場合

CAN モジュールは、バスオフ状態時に CANM[1:0] ビットが 10b（CAN halt モード）になっていると、CAN halt モードへ遷移します。EIFR.BORIF フラグは 1 になりません。

バスオフ時に CANM[1:0] ビットが 10b になっていないと、（1）と同じ動作になります。

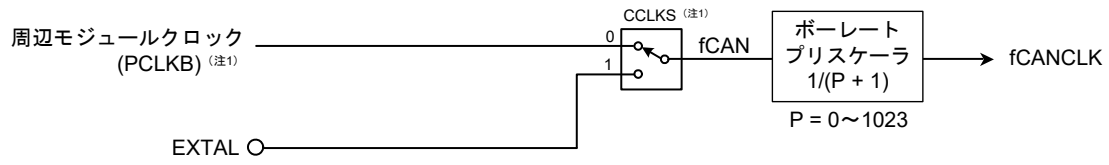
31.4　データ転送レートの設定

本節では、データ転送レートの設定方法について説明します。

31.4.1　クロックの設定

CAN モジュールは CAN クロック発生回路を内蔵しています。CAN クロックは、BCR レジスタの CCLKS ビットと BRP[9:0] ビットで設定できます。

図 31.11 に CAN クロック発生回路のブロック図を示します。



CCLKS：　BCRレジスタのビット
fCAN：　CANシステムクロック
P：　BCR.BRPビットの選定値。P = 0～1023
fCANCLK：CAN通信クロックfCANCLK = fCAN/(P + 1)

注1.　「9.　クロック発生回路」を参照してください。
CCLKSビットが0に設定された状態でCANモジュールを使用する場合、周辺モジュールクロックのクロックソースにPLLを選択する必要があります。

図 31.11　CAN クロック発生回路のブロック図

31.4.2　ビットタイムの設定

ビットタイムは、図 31.12 に示す 3 つのセグメントで構成されます。

各セグメントの範囲：　ビットタイム= 8 Tq～25 Tq
SS = 1 Tq
TSEG1 = 4 Tq～16 Tq
TSEG2 = 2 Tq～8 Tq
SJW = 1 Tq～4 Tq
TSEG1とTSEG2の設定：　TSEG1＞TSEG2≧SJW

図 31.12　ビットタイミング

31.4.3　データ転送レート

データ転送レートは、fCAN（CAN システムクロック）の分周値、ボーレートプリスケーラの分周値、および 1 ビットタイムの Tq 数に依存します。

$$\text{データ転送レート [bps]} = \frac{\text{fCAN}}{\text{ボーレートプリスケーラ分周値}^{(注1)} \times \text{1ビットタイムのTq数}} = \frac{\text{fCANCLK}}{\text{1ビットタイムのTq数}}$$

注 1.　ボーレートプリスケーラ分周値 = P + 1（P = 0 ～ 1023）、ここで P は、BCR.BRP[9:0] ビットの設定値

表 31.9 に、データ転送レートの例を示します。

表 31.9　fCAN = 32MHzの場合のデータ転送レート例

データ転送レート	Tq数	P + 1
1Mbps	8Tq 16Tq	4 2
500kbps	8Tq 16Tq	8 4
250kbps	8Tq 16Tq	16 8
125kbps	8Tq 16Tq	32 16
83.3kbps	8Tq 16Tq	48 24
33.3kbps	8Tq 10Tq 16Tq 20Tq	120 96 60 48

31.5　メールボックスとマスクレジスタの構成

図 31.13 に、32 本のメールボックスレジスタ（MBj_ID、MBj_DL、MBj_Dm、MBj_TS）の構成を示します。

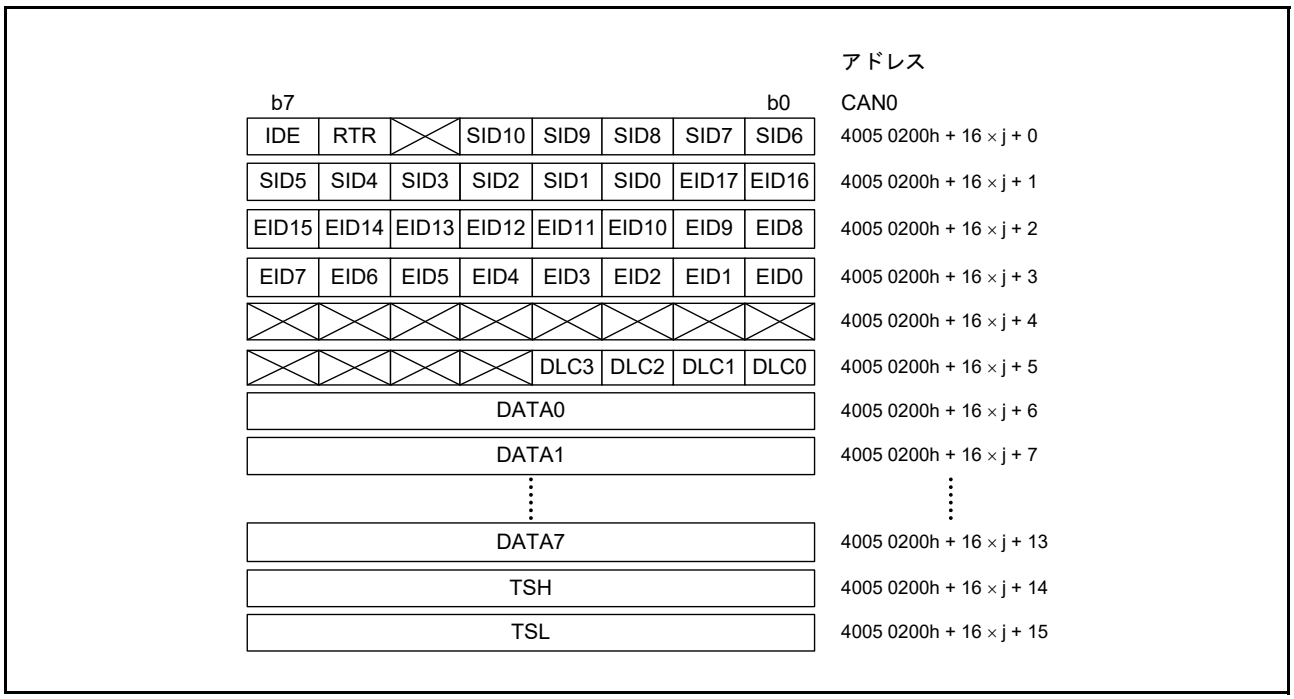


図 31.13　メールボックスレジスタの構成（j = 0 ～ 31）

図 31.14 に、8 本のマスクレジスタ（MKRk）の構成を示します。

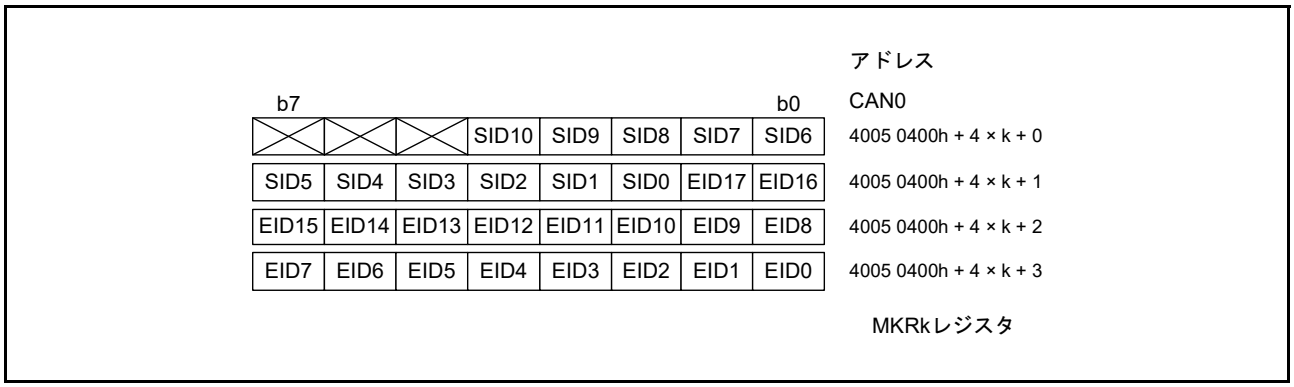


図 31.14　MKRk レジスタの構成（k = 0 ～ 7）

図 31.15 に、2 本の FIFO 受信 ID 比較レジスタ（FIDCR0 および FIDCR1）の構成を示します。

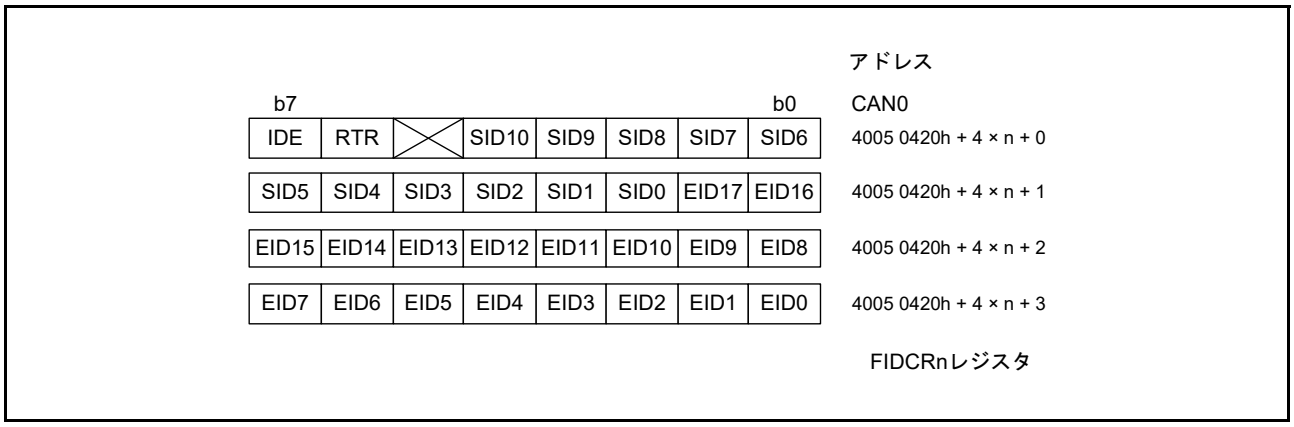


図 31.15　FIDCRn レジスタの構成（n = 0, 1）

31.6 アクセプタンスフィルタ機能とマスク機能

アクセプタンスフィルタ機能とマスク機能によって、指定範囲内のメールボックスに対して、複数 ID のメッセージを選択および受信することが可能になります。

MKRk レジスタは、標準 ID と 29 ビットの拡張 ID をマスクできます。

- MKR0 は、メールボックス 0 ～ 3 のマスクレジスタ
- MKR1 は、メールボックス 4 ～ 7 のマスクレジスタ
- MKR2 は、メールボックス 8 ～ 11 のマスクレジスタ
- MKR3 は、メールボックス 12 ～ 15 のマスクレジスタ
- MKR4 は、メールボックス 16 ～ 19 のマスクレジスタ
- MKR5 は、メールボックス 20 ～ 23 のマスクレジスタ
- MKR6 は、通常メールボックスモードの場合はメールボックス 24 ～ 27、FIFO メールボックスモードの場合は受信 FIFO メールボックス 28 ～ 31 のマスクレジスタ
- MKR7 は、通常メールボックスモードの場合はメールボックス 28 ～ 31、FIFO メールボックスモードの場合は受信 FIFO メールボックス 28 ～ 31 のマスクレジスタ

MKIVLR レジスタは、各メールボックスに対して個別にアクセプタンスフィルタ処理を禁止します。

MBj_ID レジスタの IDE ビットは、CTLR.IDFM[1:0] ビットが 10b（ミックス ID モード）のときに有効です。

MBj_ID レジスタの RTR ビットは、データフレームまたはリモートフレームを選択します。

FIFO メールボックスモードの場合、通常メールボックス 0 ～ 23 は、アクセプタンスフィルタ処理に関連レジスタ（MKR0 ～ MKR5）を使用します。受信 FIFO メールボックス（28 ～ 31）は、アクセプタンスフィルタ処理に 2 つのレジスタ（MKR6 および MKR7）を使用します。受信 FIFO は、FIDCR0 および FIDCR1 レジスタの 2 つを使用して、ID の比較を行います。受信 FIFO のメールボックス 28 ～メールボックス 31 の EID[17:0]、SID[10:0]、RTR、IDE ビットは無効になります。2 つの論理積の結果でアクセプタンスフィルタ処理を行うので、受信 FIFO は 2 つの範囲の ID を受信することが可能です。MKIVLR レジスタは、受信 FIFO に対しては無効です。

異なる値が FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの IDE ビットに設定された場合、両方の ID フォーマットが受信されます。異なる値が FIDCR0 レジスタと FIDCR1 レジスタの RTR ビットに設定された場合、データフレームとリモートフレームの両方が受信されます。2 つの範囲の ID の組み合わせを必要としない場合は、FIFO ID とマスクレジスタの両方に同じマスク値と同じ ID を設定してください。

図 31.16 は、マスクレジスタとメールボックスの関係を示しています。図 31.17 は、アクセプタンスフィルタ機能を示しています。

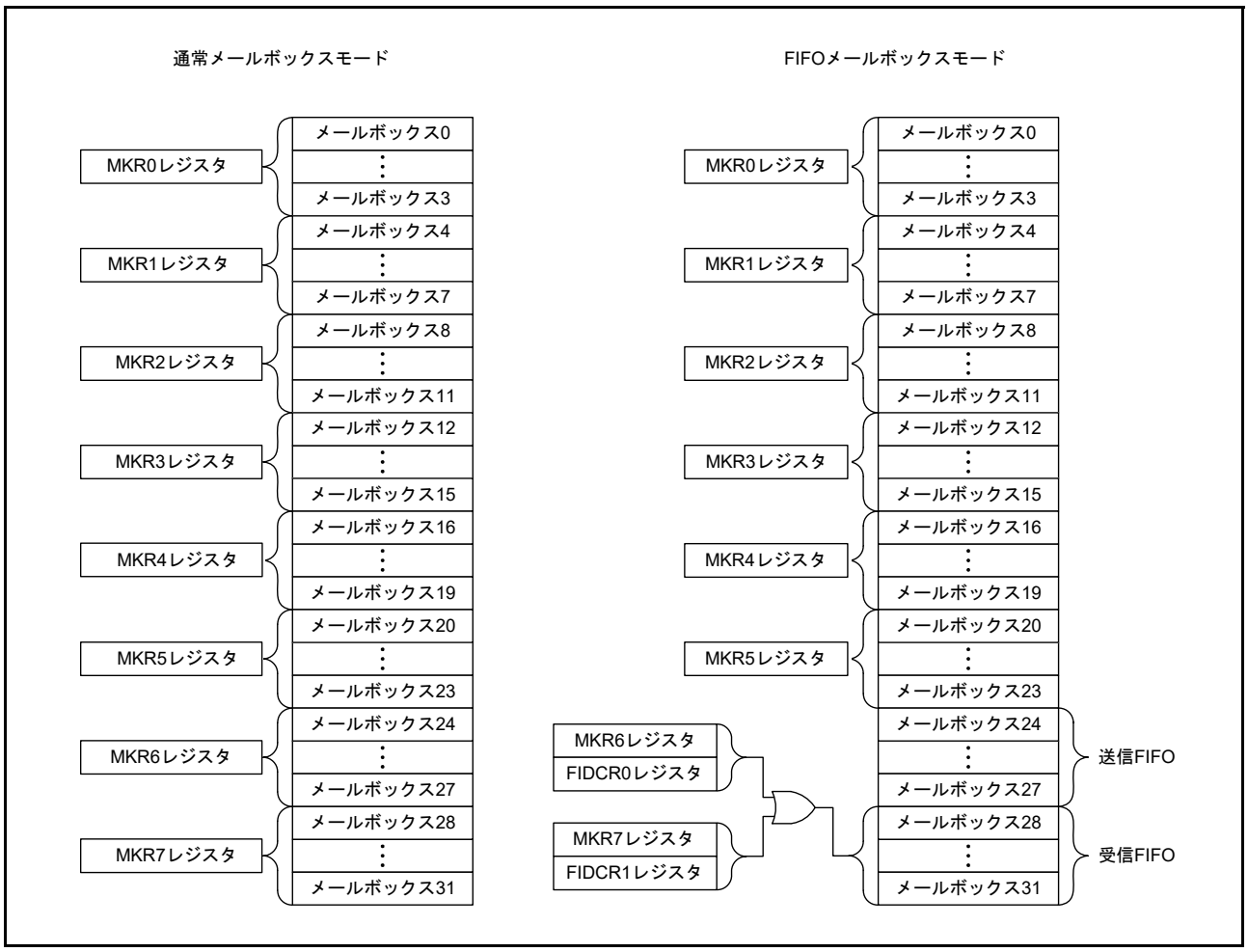
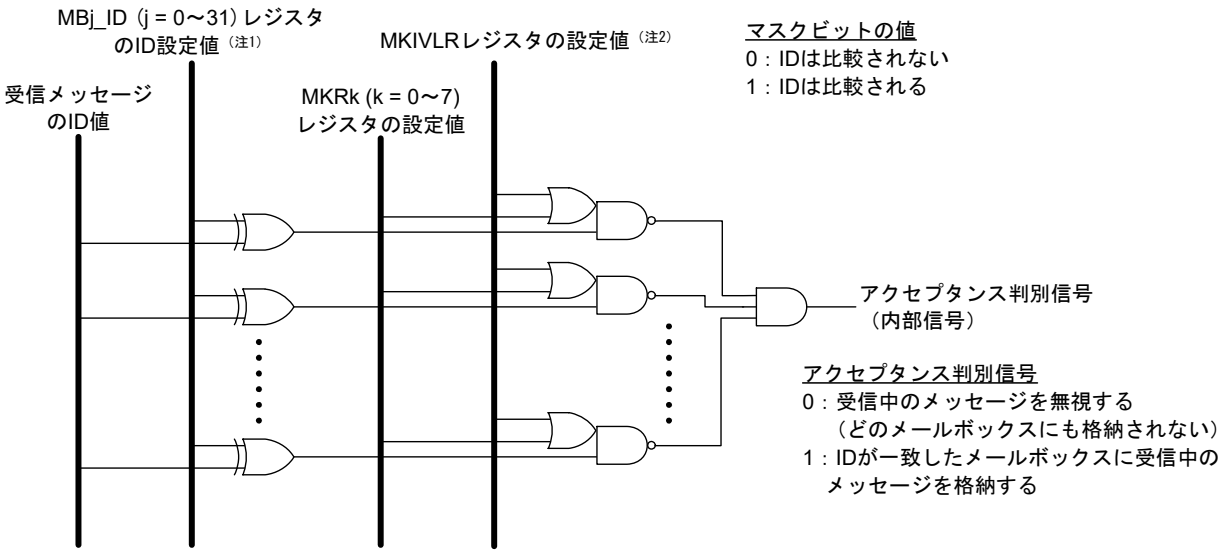


図 31.16　　マスクレジスタとメールボックスの関係



注1.　FIFOメールボックスモードでは、FIDCR0, FIDCR1レジスタの設定値を使用します。
注2.　FIFOメールボックスでは無効です。

図 31.17　　アクセプタンスフィルタ機能

31.7　受信／送信

表 31.10 に、CAN 通信モードの設定方法を示します。

表 31.10　CAN受信モードと送信モードの設定

MCTL_TXj.TRMREQ および MCTL_RXj.TRMREQ	MCTL_TXj.RECREQ および MCTL_RXj.RECREQ	MCTL_TXj.ONESHOT および MCTL_RX.ONESHOT	メールボックス通信モード
0	0	0	メールボックス使用不可、または送信アボート中
0	0	1	ワンショットモードでプログラムされたメールボックスからの送受信がアボートされた場合のみ、設定可能
0	1	0	データフレームまたはリモートフレーム用の受信メールボックスとして設定
0	1	1	データフレームまたはリモートフレーム用のワンショット受信メールボックスとして設定
1	0	0	データフレームまたはリモートフレーム用の送信メールボックスとして設定
1	0	1	データフレームまたはリモートフレーム用のワンショット送信メールボックスとして設定
1	1	0	設定禁止
1	1	1	設定禁止

j = 0 ～ 31

メールボックスを受信メールボックスまたはワンショット受信メールボックスとして設定する場合：

1. メールボックスを設定する前に、MCTL_RXj レジスタを 00h にしてください。
2. 受信メッセージは、受信モード設定とアクセプタンスフィルタ機能に基づく条件に一致する最初のメールボックスに格納されます。このとき、番号の小さいメールボックスを優先して、受信メッセージが格納されます。
3. CAN オペレーションモードでは、ID が一致していても、CAN モジュールは自ら送信したデータを受信しません。ただし、セルフテストモードでは、CAN モジュールは自ら送信したデータを受信し、ACK を返します。

メールボックスを送信メールボックスまたはワンショット送信メールボックスとして設定する場合：

- メールボックスを設定する前に、MCTL_TXj レジスタが 00h であること、およびアボート処理が待機中でないことを確認してください

31.7.1　受信

図 31.18 に、データフレーム受信時の動作例（オーバーライトモードの場合）を示します。

この例は、MCTL_RXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の受信条件に一致する 2 つの連続した CAN メッセージを受信したときに、CAN モジュールが最初のメッセージを上書きする場合の動作です。

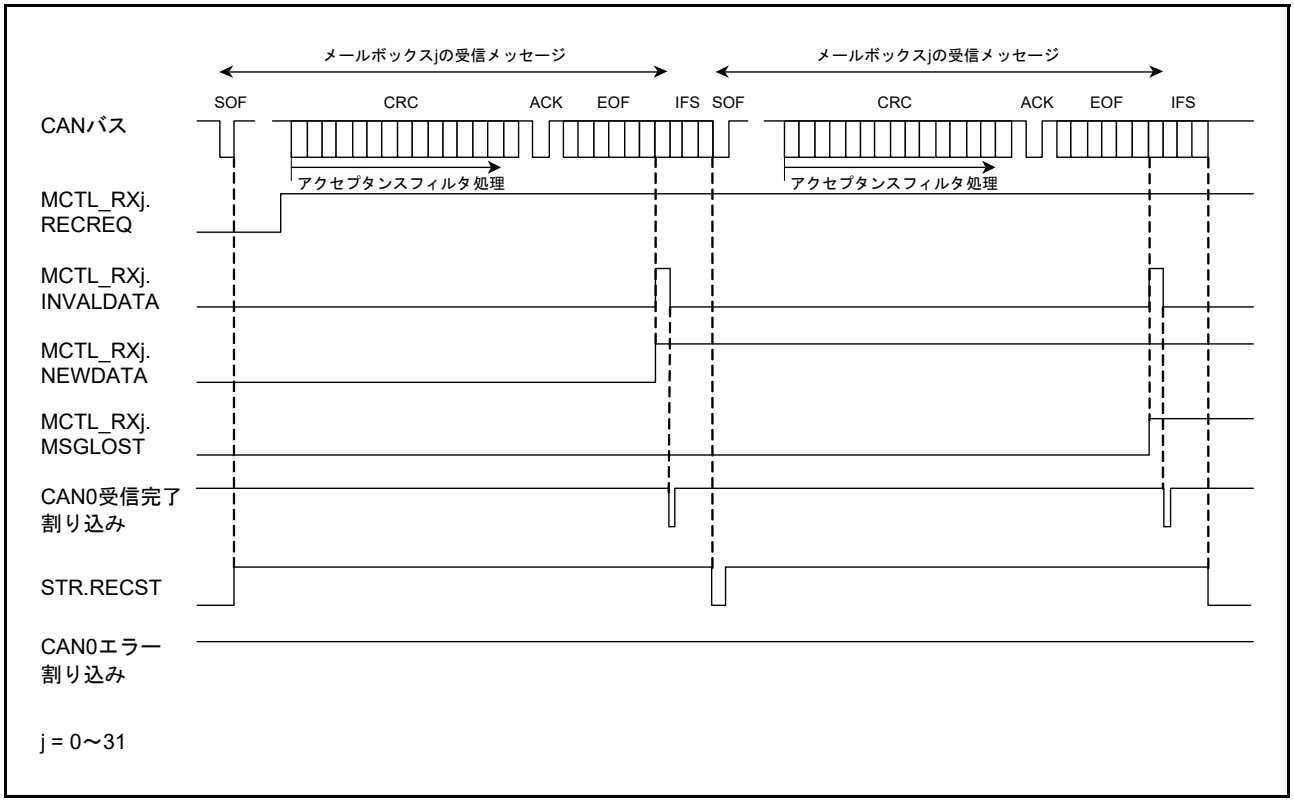


図 31.18　データフレーム受信時の動作例（オーバーライトモードの場合）

1. CAN バス上で SOF を検知すると、CAN モジュールに送信開始するメッセージがない場合、STR.RECST ビットが 1（受信中）になります。
2. 受信メールボックスを選択するために、CRC フィールドの最初からアクセプタンスフィルタ処理が開始されます。
3. メッセージの受信を完了すると、受信メールボックスの MCTL_RXj.NEWDATA ビットが 1（新しいメッセージをメールボックスに格納中または格納済み）になります。同時に MCTL_RXj.INVALDATA フラグが 1（メッセージを更新中）になります。そのメールボックスにメッセージ全体が転送された後、INVALDATA フラグが再度 0（メッセージは有効）になります。
4. 受信メールボックスの MIER レジスタの割り込み許可ビットが 1（割り込み許可）の場合、INVALDATA フラグが 0 になっていると、CAN0 受信完了割り込み要求が発生します。
5. メールボックスからメッセージを読み出した後、NEWDATA フラグをソフトウェアで 0 にする必要があります。
6. オーバーライトモードでは、MCTL_RXj.NEWDATA ビットが 1 になっている間に、次の CAN メッセージを受信すると、MCTL_RXj.MSGLOST フラグが 1（メッセージのオーバーライトあり）になります。新しく受信したメッセージはメールボックスに転送されます。CAN0 受信完了割り込み要求が、手順 4. と同様に発生します。

図 31.19 に、データフレーム受信時の動作例（オーバーランモードの場合）を示します。この例は、MCTL_RXj レジスタ（j = 0 ～ 31）の受信条件に一致する 2 つの連続した CAN メッセージを受信したときに、CAN モジュールが 2 番目のメッセージをオーバーランする場合の動作です。

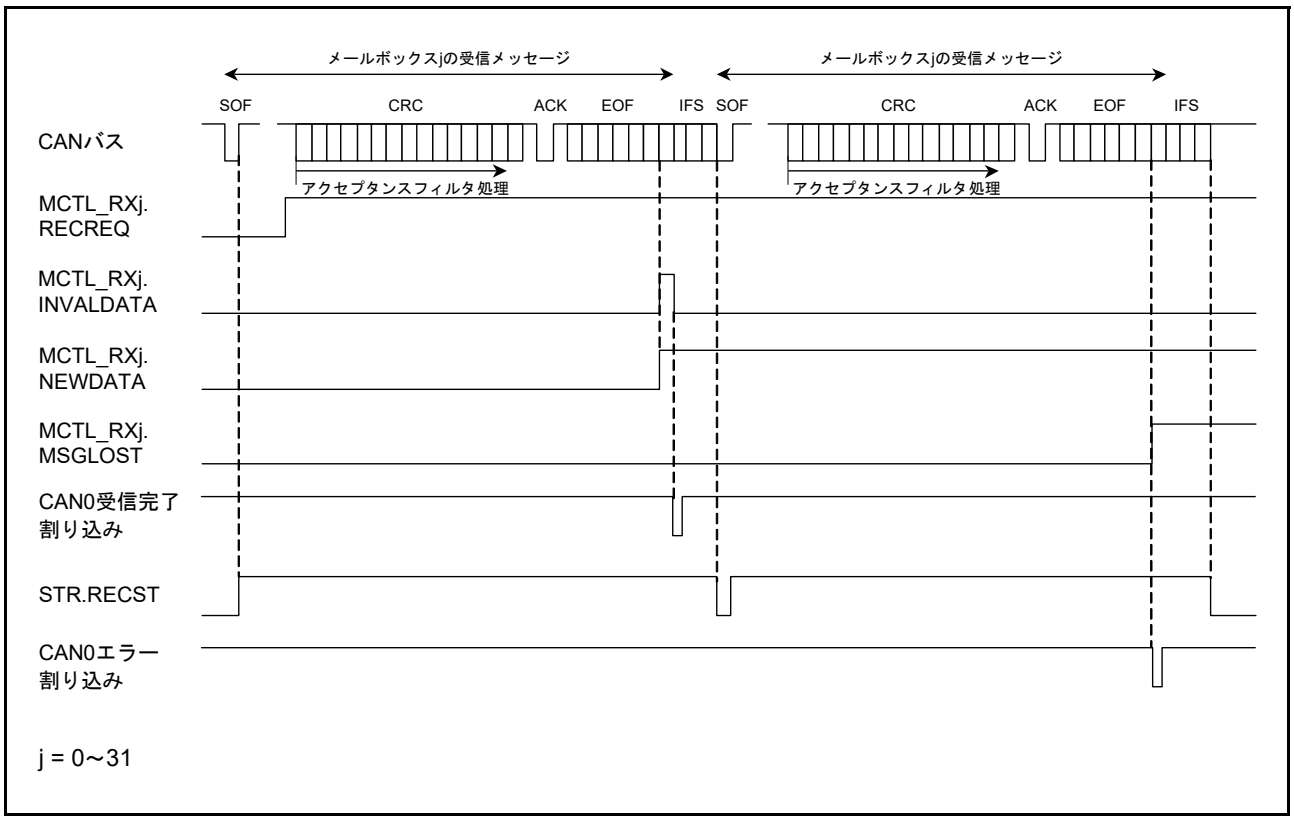


図 31.19　　データフレーム受信時の動作例（オーバーランモードの場合）

手順 1. ～ 5. はオーバーライトモードと同じです。

6. オーバーランモードでは、MCTL_RXj.NEWDATA フラグが 0 になる前に、次の CAN メッセージを受信すると、MCTL_RXj.MSGLOST フラグが 1（メッセージのオーバーランあり）になります。新しく受信したメッセージは破棄され、EIER レジスタの対応する割り込み許可ビットが 1（割り込み許可）の場合、CAN0 エラー割り込み要求が発生します。

31.7.2　送信

図 31.20 に、データフレーム送信時の動作例を示します。

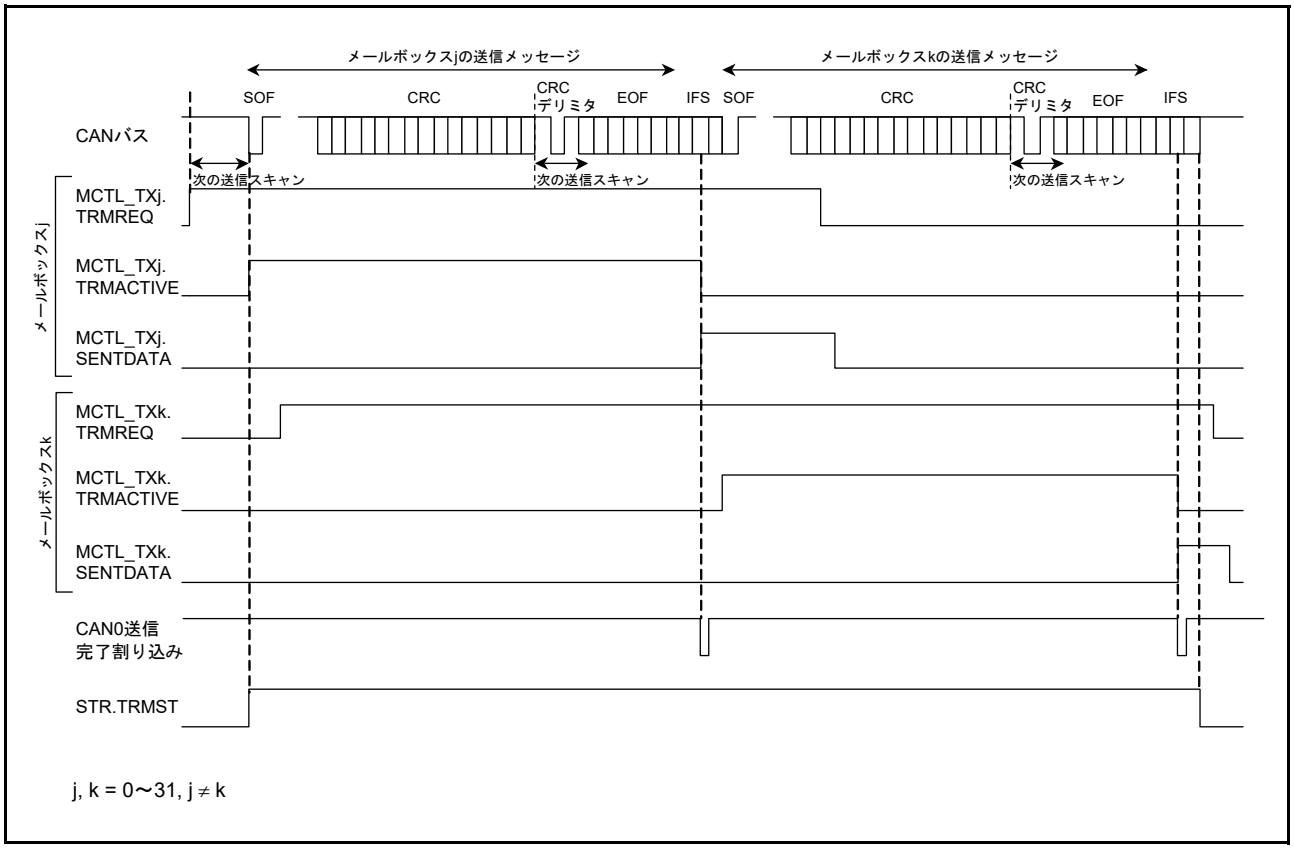


図 31.20　　データフレーム送信時の動作例

1. バスアイドル状態で、MCTL_TXj.TRMREQ ビット（j = 0 ～ 31）を 1（送信メールボックス）にすると、最も優先順位の高い送信メールボックスを決定するために、メールボックススキャンが開始されます。送信メールボックスが決定されると、MCTL_TXj.TRMACTIVE フラグが 1（送信要求の取り込みから、送信完了まで、あるいは、エラー発生またはアービトレーションロスト発生まで）になり、さらに STR.TRMST ビットが 1（送信中）になって、CAN モジュールは送信を開始します（注 1）。
2. 他の TRMREQ ビットが設定されている場合は、次の送信の CRC デリミタから送信スキャンが開始されます。
3. アービトレーションロストが発生せずに送信が完了すると、MCTL_TXj.SENTDATA フラグが 1（送信完了）になり、TRMACTIVE フラグが 0（送信待機中または送信要求なし）になります。そして、MIER レジスタの割り込み許可ビットが 1（割り込み許可）の場合は、CAN0 送信完了割り込み要求が発生します。
4. 同一のメールボックスから次の送信を要求する場合は、SENTDATA および TRMREQ ビットを 0 にした後、SENTDATA および TRMREQ ビットが 0 になったことを確認してから、TRMREQ ビットを 1 にしてください。

注 1.　CAN モジュールが送信を開始した後、アービトレーションロストが発生した場合は、TRMACTIVE フラグは 0 になります。CRC デリミタの始めから最も優先順位の高い送信メールボックスを検索するために、再び送信スキャンが行われます。送信中またはアービトレーションロストに続いてエラーが発生すると、CRC デリミタの始めから、最も優先順位の高い送信メールボックスを検索するために、再び送信スキャンが行われます。

31.8　割り込み

CAN モジュールには、チャネルごとに下記の割り込みがあります。

- メールボックス 0 ～ 31 の CAN0 受信完了割り込み（CAN0_RXM）
- メールボックス 0 ～ 31 の CAN0 送信完了割り込み（CAN0_TXM）
- CAN0 受信 FIFO 割り込み（CAN0_RXF）
- CAN0 送信 FIFO 割り込み（CAN0_TXF）
- CAN0 エラー割り込み（CAN0_ERS）

CAN0 のエラー割り込みには、下記の 8 つの割り込み要因が利用可能です。EIFR レジスタを確認して、割り込み要因を調べてください。

- バスエラー
- エラーワーニング
- エラーパッシブ
- バスオフ開始
- バスオフ復帰
- 受信オーバーラン
- オーバーロードフレーム送信
- バスロック

表 31.11 に CAN 割り込みの一覧を示します。

表 31.11　CANの割り込み

モジュール	割り込みシンボル	割り込み要因	要因フラグ
CAN0	CAN0_ERS	バスロック検出	EIFR.BLIF
		オーバーロードフレーム送信検出	EIFR.OLIF
		オーバーラン検出	EIFR.ORIF
		バスオフ復帰検出	EIFR.BORIF
		バスオフ開始検出	EIFR.BOEIF
		エラーパッシブ検出	EIFR.EPIF
		エラーワーニング検出	EIFR.EWIF
		バスエラー検出	EIFR.BEIF
	CAN0_RXF	受信FIFOメッセージ受信（MIER_FIFO.MB29 = 0）	RFCR.RFUST[2:0]
		受信FIFOワーニング（MIER_FIFO.MB29 = 1）	
	CAN0_TXF	送信FIFOメッセージ送信完了（MIER_FIFO.MB25 = 0）	TFCR.TFUST[2:0]
		FIFOラストメッセージ送信完了（MIER_FIFO.MB25 = 1）	
	CAN0_RXM	メールボックス0～31メッセージ受信	MCTL_RX0.NEWDATA～MCTL_RX31.NEWDATA
	CAN0_TXM	メールボックス0～31メッセージ送信完了	MCTL_TX0.SENTDATA～MCTL_TX31.SENTDATA

31.9 使用上の注意事項

31.9.1 モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタ B（MSTPCRB）によって、CAN モジュールの動作を許可または禁止することが可能です。リセット後の初期状態では、CAN モジュールの動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

31.9.2 動作クロックの設定

動作クロックの設定方法を次に示します。

- CCLKS ビットが 1 のとき、CAN モジュールは下記のクロック制約を満たす必要があります

  fPCLKB ≧ fCANMCLK

- CCLKS ビットが 0 のとき、CAN モジュールの周辺モジュールクロックソースは PLL でなければいけません
- CAN モジュールを使用する場合、PCLKA と PCLKB のクロック周波数比は 2 : 1 でなければいけません。これ以外の設定では、動作は保証されません

32.　シリアルペリフェラルインタフェース（SPI）

32.1　概要

本 MCU は、独立した 2 チャネルのシリアルペリフェラルインタフェース（SPI）を備えています。SPI チャネルによって、複数のプロセッサや周辺デバイスとの高速な全二重同期式シリアル通信が可能です。表 32.1 に SPI の仕様を、図 32.1 にブロック図を示します。

本章に記載している PCLK とは PCLKA を指します。また、n は A または B を表し、i は 0 または 1 を表します。端子および信号名の小文字の i は 0 ～ 3 の値を示し、SPI コマンドレジスタ m（SPCMDm）の小文字の m は 0 ～ 7 の値を示します。

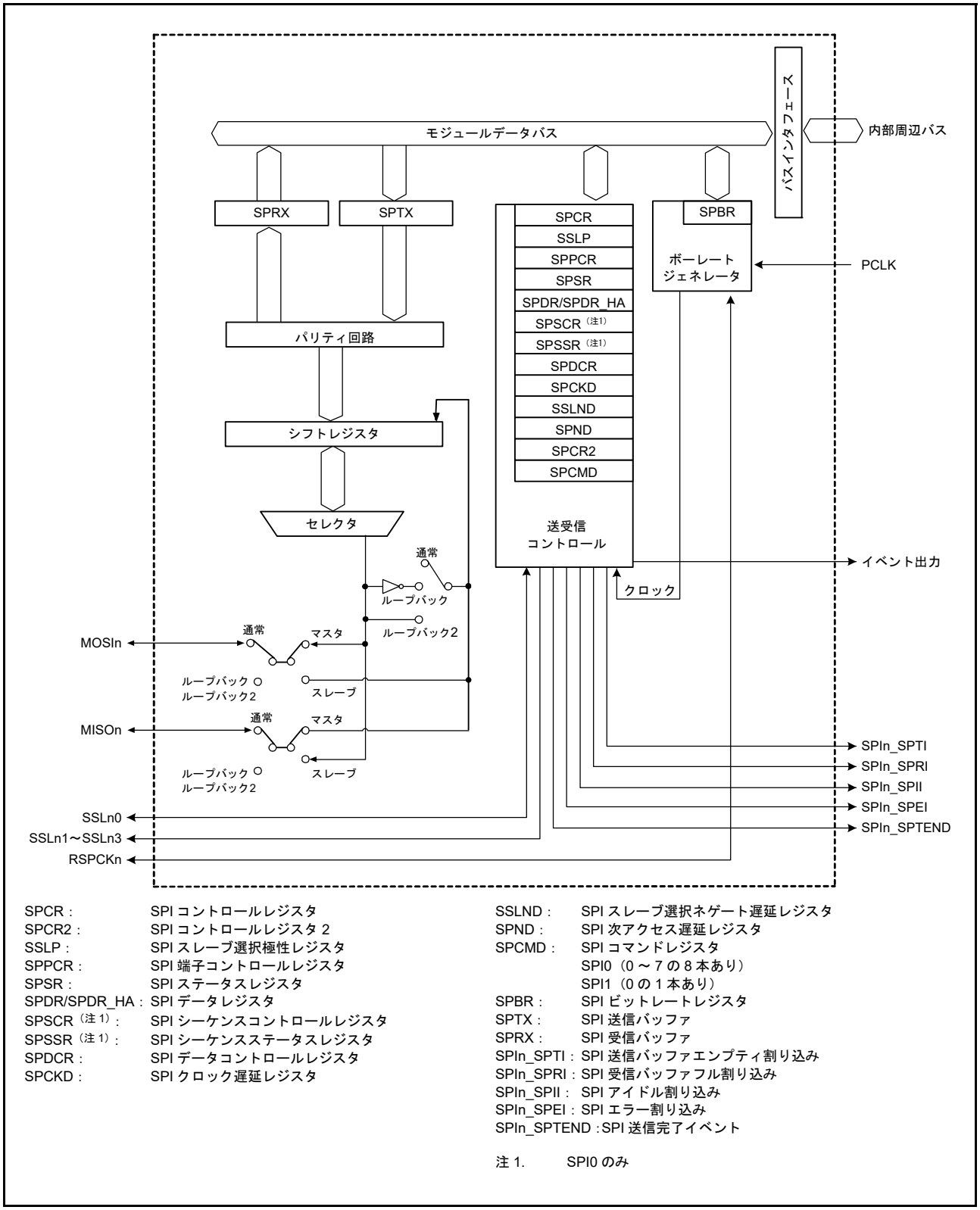
表 32.1　SPIの仕様 (1/2)

項目	内容
チャネル数	2チャネル
SPI転送機能	• MOSI（Master Out/Slave In）、MISO（Master In/Slave Out）、SSL（Slave Select）、RSPCK（SPI Clock）の各信号を使用して、SPI動作（4線式）またはクロック同期式動作（3線式）によるシリアル通信が可能 • 送信のみの動作が可能 • 通信モード：全二重または送信のみを選択可能 • RSPCK極性切り替え • RSPCK位相切り替え
データフォーマット	• MSBファーストまたはLSBファーストを選択可能 • 転送ビット長を8、9、10、11、12、13、14、15、16、20、24、32ビットから選択可能 • SPI0：一度の送受信で最大4フレーム（1フレームは最大32ビット）転送可能な、128ビットの送信および受信バッファ • SPI1：一度の送受信で1フレーム転送可能な、32ビットの送信および受信バッファ
ビットレート	• マスタモード時、内蔵ボーレートジェネレータでPCLKを分周してRSPCKを生成（分周比は2～4096分周） • スレーブモード時は、PCLKの最小6分周のクロックを、RSPCKとして入力可能（RSPCKの最大周波数はPCLKの6分周） High幅：PCLKの3サイクル Low幅：PCLKの3サイクル
バッファ構成	• 送信および受信バッファはそれぞれダブルバッファ構造 • SPI0：送信および受信バッファは128ビット • SPI1：送信および受信バッファは32ビット
エラー検出	• モードフォルトエラー検出 • アンダーランエラー検出 • オーバーランエラー検出（注1） • パリティエラー検出
SSL制御機能	• 1チャネルあたり4本のSSL端子（SSLn0～SSLn3） • シングルマスタモード時：SSLn0～SSLn3端子は出力用 • マルチマスタモード時： SSLn0端子は入力用、SSLn1～SSLn3端子は出力用または未使用 • スレーブモード時： SSLn0端子は入力用、SSLn1～SSLn3端子は未使用 • SSL出力のアサートからRSPCK動作までの遅延（RSPCK遅延）を制御可能 設定範囲：1～8RSPCK周期　（設定単位：1RSPCK周期） • RSPCK停止からSSL出力のネゲートまでの遅延（SSLネゲート遅延）を制御可能 設定範囲：1～8RSPCK周期　（設定単位：1RSPCK周期） • 次アクセスのSSL出力アサートのウェイト（次アクセス遅延）を制御可能 設定範囲：1～8RSPCK周期　（設定単位：1RSPCK周期） • SSL極性変更機能
マスタ転送時の制御方式	• 最大8コマンド（SPI0の場合）で構成された転送を連続してループ実行可能 • 以下のコマンドをサポート – SPI0：SSL信号値、ビットレート、RSPCK極性／位相、転送データ長、MSB/LSBファースト、バースト、RSPCK遅延、SSLネゲート遅延、次アクセス遅延 – SPI1：SSL信号値、ビットレート、RSPCK極性／位相、転送データ長、MSB/LSBファースト、RSPCK遅延、SSLネゲート遅延、次アクセス遅延 • 送信バッファへの書き込みによる転送起動 • SSLネゲート時のMOSI信号値を設定可能 • RSPCK自動停止機能

表 32.1　SPIの仕様 (2/2)

項目	内容
割り込み要因	• 受信バッファフル割り込み • 送信バッファエンプティ割り込み • SPIエラー割り込み（モードフォルト、オーバーラン、パリティエラー） • SPIアイドル割り込み（SPIアイドル） • 送信完了割り込み
イベントリンク機能（出力）	以下のイベントをイベントリンクコントローラへ出力可能 • 受信バッファフル信号 • 送信バッファエンプティ信号 • モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラー信号 • SPIアイドル信号 • 送信完了信号
その他	• SPI初期化機能 • ループバックモード
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減

注 1.　マスタ受信時に RSPCK 自動停止機能が有効な場合は、オーバーランエラーが検出されると転送クロックが停止するため、オーバーランエラーは発生しません。



SPCR：　SPI コントロールレジスタ
SPCR2：　SPI コントロールレジスタ 2
SSLP：　SPI スレーブ選択極性レジスタ
SPPCR：　SPI 端子コントロールレジスタ
SPSR：　SPI ステータスレジスタ
SPDR/SPDR_HA：　SPI データレジスタ
SPSCR（注 1）：　SPI シーケンスコントロールレジスタ
SPSSR（注 1）：　SPI シーケンスステータスレジスタ
SPDCR：　SPI データコントロールレジスタ
SPCKD：　SPI クロック遅延レジスタ
SSLND：　SPI スレーブ選択ネゲート遅延レジスタ
SPND：　SPI 次アクセス遅延レジスタ
SPCMD：　SPI コマンドレジスタ
　SPI0（0 ～ 7 の 8 本あり）
　SPI1（0 の 1 本あり）
SPBR：　SPI ビットレートレジスタ
SPTX：　SPI 送信バッファ
SPRX：　SPI 受信バッファ
SPIn_SPTI：SPI 送信バッファエンプティ割り込み
SPIn_SPRI：SPI 受信バッファフル割り込み
SPIn_SPII：　SPI アイドル割り込み
SPIn_SPEI：SPI エラー割り込み
SPIn_SPTEND :SPI 送信完了イベント

注 1.　SPI0 のみ

図 32.1　SPI のブロック図

表 32.2 に SPI で使用する入出力端子を示します。SSLn0 端子の入出力方向は、SPI が自動的に切り替えます。SSLn0 は、SPI がシングルマスタの場合は出力状態、マルチマスタとスレーブの場合は入力状態になります。RSPCKn、MOSIn、および MISOn 端子の入出力方向は、マスタ／スレーブ設定と SSLn0 端子の入力レベルに応じて、SPI が自動的に切り替えます。詳細は、32.3.2　SPI 端子の制御を参照してください。

表 32.2　SPIの端子構成

チャネル	端子名	入出力	機能
SPI0	RSPCKA	入出力	クロック入出力
	MOSIA	入出力	マスタ送出データ入出力
	MISOA	入出力	スレーブ送出データ入出力
	SSLA0	入出力	スレーブセレクト入出力
	SSLA1	出力	スレーブセレクト出力
	SSLA2	出力	スレーブセレクト出力
	SSLA3	出力	スレーブセレクト出力
SPI1	RSPCKB	入出力	クロック入出力
	MOSIB	入出力	マスタ送出データ入出力
	MISOB	入出力	スレーブ送出データ入出力
	SSLB0	入出力	スレーブセレクト入出力
	SSLB1	出力	スレーブセレクト出力
	SSLB3	出力	スレーブセレクト出力

32.2　レジスタの説明

32.2.1　SPI コントロールレジスタ（SPCR）

アドレス　SPI0.SPCR 4007 2000h, SPI1.SPCR 4007 2100h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SPRIE	SPE	SPTIE	SPEIE	MSTR	MODFEN	TXMD	SPMS
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SPMS	SPIモード選択	0：SPI動作（4線式） 1：クロック同期式動作（3線式）	R/W
b1	TXMD	通信動作モード選択	0：全二重同期式シリアル通信 1：送信動作のみのシリアル通信	R/W
b2	MODFEN	モードフォルトエラー検出許可	0：モードフォルトエラー検出を禁止 1：モードフォルトエラー検出を許可	R/W
b3	MSTR	SPIマスタ／スレーブモード選択	0：スレーブモード 1：マスタモード	R/W
b4	SPEIE	SPIエラー割り込み許可	0：SPIエラー割り込み要求の発生を禁止 1：SPIエラー割り込み要求の発生を許可	R/W
b5	SPTIE	送信バッファエンプティ割り込み許可	0：送信バッファエンプティ割り込み要求の発生を禁止 1：送信バッファエンプティ割り込み要求の発生を許可	R/W
b6	SPE	SPI機能有効	0：SPI機能は無効 1：SPI機能は有効	R/W
b7	SPRIE	SPI受信バッファフル割り込み許可	0：SPI受信バッファフル割り込み要求の発生を禁止 1：SPI受信バッファフル割り込み要求の発生を許可	R/W

SPCR.SPE ビットが 1 の状態で、SPCR.MSTR ビット、SPCR.MODFEN ビット、または SPCR.TXMD ビットを変更した場合、以降の動作を行わないでください。

SPMS ビット（SPI モード選択）

SPI 動作（4 線式）またはクロック同期式動作（3 線式）を選択します。

クロック同期式動作では、SSLn0 ～ SSLn3 端子は使用されません。RSPCKn 端子、MOSIn 端子、MISOn 端子の 3 端子を用いて通信を行います。また、マスタモード（SPCR.MSTR = 1）でクロック同期式動作を行う場合は、SPCMDm.CPHA ビットを 0 または 1 にしてください。スレーブモード（SPCR.MSTR = 0）でクロック同期式動作を行う場合は、CPHA ビットを 1 にしてください。スレーブモード（SPCR.MSTR = 0）でクロック同期式動作を行う場合、CPHA ビットが 0 であれば、動作を行わないでください。

TXMD ビット（通信動作モード選択）

全二重同期式のシリアル通信または送信のみの動作を選択します。

本ビットを 1 にした場合、SPI は送信動作のみを行い、受信動作を行いません（32.3.6　データ転送モードを参照）。また、受信バッファフル割り込み要求を使用することはできません。

MODFEN ビット（モードフォルトエラー検出許可）

モードフォルトエラーの検出を許可または禁止します（32.3.8　エラー検出を参照）。また、SPI は MODFEN ビットと MSTR ビットとの組み合わせに基づいて、SSLn0 ～ SSLn3 端子の入出力方向を決定します（32.3.2　SPI 端子の制御を参照）。

MSTR ビット（SPI マスタ／スレーブモード選択）

SPI に対してマスタモードまたはスレーブモードを選択します。SPI は MSTR ビットの設定に従って、RSPCKn、MOSIn、MISOn、および SSLn0 ～ SSLn3 端子の方向を決定します。

SPEIE ビット（SPI エラー割り込み許可）

以下の場合に、SPI エラー割り込み要求の発生を許可または禁止します。

- SPI がモードフォルトエラーまたはアンダーランエラーを検出し、SPSR.MODF フラグを 1 にした場合
- SPI がオーバーランエラーを検出し、SPSR.OVRF フラグを 1 にした場合
- SPI がパリティエラーを検出し、SPSR.PERF フラグを 1 にした場合

詳細は、32.3.8　エラー検出を参照してください。

SPTIE ビット（送信バッファエンプティ割り込み許可）

SPI が送信バッファエンプティを検出したときの、送信バッファエンプティ割り込み要求の発生を許可または禁止します。

送信開始時の送信バッファエンプティ割り込み要求は、SPE ビットと SPTIE ビットを同時に 1 にするか、または SPTIE ビットを 1 にした後、SPE ビットを 1 にすることで発生します。SPI 機能を無効（SPE ビットを 0 に変更）にしても、SPTIE ビットが 1 であると、割り込みが発生します。

SPE ビット（SPI 機能有効）

SPI 機能を有効または無効にします。SPSR.MODF フラグが 1 の場合、SPE ビットを 1 にすることはできません。詳細は、32.3.8　エラー検出を参照してください。

SPE ビットを 0 にすると、SPI 機能が無効になり、このモジュール機能の一部が初期化されます。詳細は、32.3.9　SPI の初期化を参照してください。また、SPE ビットを 0 から 1 へまたは 1 から 0 へ切り替えると、送信バッファエンプティ割り込み要求が発生します。

SPRIE ビット（SPI 受信バッファフル割り込み許可）

SPI がシリアル転送完了後の受信バッファフルを検出したときの、割り込み要求の発生を許可または禁止します。

32.2.2　SPI スレーブ選択極性レジスタ（SSLP）

アドレス　SPI0.SSLP 4007 2001h, SPI1.SSLP 4007 2101h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	SSL3P	SSL2P	SSL1P	SSL0P
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SSL0P	SSL0信号極性設定	0：SSL0信号はアクティブLow 1：SSL0信号はアクティブHigh	R/W
b1	SSL1P	SSL1信号極性設定	0：SSL1信号はアクティブLow 1：SSL1信号はアクティブHigh	R/W
b2	SSL2P（注1）	SSL2信号極性設定	0：SSL2信号はアクティブLow 1：SSL2信号はアクティブHigh	R/W
b3	SSL3P	SSL3信号極性設定	0：SSL3信号はアクティブLow 1：SSL3信号はアクティブHigh	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　SPI1 では使用できません。

SPCR.SPE ビットが 1 の状態で、SSLP レジスタの内容を変更した場合、以降の動作を行わないでください。

32.2.3 SPI 端子コントロールレジスタ（SPPCR）

アドレス SPI0.SPPCR 4007 2002h, SPI1.SPPCR 4007 2102h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	MOIFE	MOIFV	—	—	SPLP2	SPLP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SPLP	SPIループバック	0：通常モード 1：ループバックモード（データを反転して送信）	R/W
b1	SPLP2	SPIループバック2	0：通常モード 1：ループバックモード（データを反転せずに送信）	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	MOIFV	MOSIアイドル固定値	0：MOSIアイドル時のMOSIn端子の出力レベルはLow 1：MOSIアイドル時のMOSIn端子の出力レベルはHigh	R/W
b5	MOIFE	MOSIアイドル値固定許可	0：MOSI出力値は前回転送の最終データ 1：MOSI出力値はMOIFVビットの設定値	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SPCR.SPE ビットが 1 の状態で、SPPCR レジスタの内容を変更した場合、以降の動作は行わないでください。

SPLP ビット（SPI ループバック）

SPI の端子モードを選択します。

SPLP ビットが 1 の場合、SPCR.MSTR ビットが 1 であれば、SPI は MISOn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断し、SPCR.MSTR ビットが 0 であれば、MOSIn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断します。その後、SPI はシフトレジスタの入力経路と出力経路を接続し、ループバックモードを確立します。

SPLP2 ビット（SPI ループバック 2）

SPI の端子モードを選択します。

SPLP2 ビットが 1 の場合、SPCR.MSTR ビットが 1 であれば、SPI は MISOn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断し、SPCR.MSTR ビットが 0 であれば、MOSIn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断します。その後、SPI はシフトレジスタの入力経路と出力経路を接続し、ループバックモードを確立します。

MOIFV ビット（MOSI アイドル固定値）

マスタモードで MOIFE ビットが 1 の場合、SPI0 および SPI1 の SSL ネゲート期間中（SPI0 のバースト転送における SSL 保持期間を含む）の MOSIn 端子の出力値を決定します。

MOIFE ビット（MOSI アイドル値固定許可）

マスタモードの SPI が SPI0 および SPI1 の SSL ネゲート期間中（SPI0 のバースト転送における SSL 保持期間を含む）のとき、MOSIn 出力値を固定します。MOIFE ビットが 0 の場合、SPI は SSL ネゲート期間中に前回のシリアル転送の最終データを MOSIn 端子に出力します。MOIFE ビットが 1 の場合、SPI は MOIFV ビットに設定された固定値を MOSIn 端子に出力します。

32.2.4 SPI ステータスレジスタ（SPSR）

アドレス SPI0.SPSR 4007 2003h, SPI1.SPSR 4007 2103h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SPRF	—	SPTEF	UDRF	PERF	MODF	IDLNF	OVRF
リセット後の値	0	0	1	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OVRF	オーバーランエラーフラグ	0：オーバーランエラーなし 1：オーバーランエラー発生	R/(W) （注1）
b1	IDLNF	SPIアイドルフラグ	0：SPIはアイドル状態 1：SPIは転送状態	R
b2	MODF	モードフォルトエラーフラグ	0：モードフォルトエラーおよびアンダーランエラーなし 1：モードフォルトエラーまたはアンダーランエラー発生	R/(W) （注1）
b3	PERF	パリティエラーフラグ	0：パリティエラーなし 1：パリティエラー発生	R/(W) （注1）
b4	UDRF	アンダーランエラーフラグ	0：モードフォルトエラー発生（MODF = 1） 1：アンダーランエラー発生（MODF = 1） 本ビットはMODF フラグが0の場合、無効です。	R/W （注1） （注2）
b5	SPTEF	SPI送信バッファエンプティフラグ	0：送信バッファにデータあり 1：送信バッファにデータなし	R/(W) （注3）
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	SPRF	SPI受信バッファフルフラグ	0：SPDR/SPDR_HAに有効なデータなし 1：SPDR/SPDR_HAに有効なデータあり	R/(W) （注3）

注 1.　フラグをクリアするため、1 を読んだ後に 0 を書き込むことのみ可能です。
注 2.　MODF フラグをクリアすると同時に、UDRF フラグをクリアしてください。
注 3.　書く場合、1 としてください。

OVRF フラグ（オーバーランエラーフラグ）

オーバーランエラーの発生を示します。マスタモード（SPCR.MSTR = 1）かつ RSPCK クロック自動停止機能有効（SPCR1.SCKASE = 1）の場合、オーバーランエラーは発生せず、本フラグは 1 になりません。詳細は、32.3.8.1　オーバーランエラーを参照してください。

［1 になる条件］

- SPCR.TXMD ビットが 0 かつ受信バッファフルの状態で、次のシリアル転送が終了したとき

［0 になる条件］

- OVRF フラグが 1 のときに SPSR レジスタを読んだとき

IDLNF フラグ（SPI アイドルフラグ）

SPI の転送状況を示します。

［1 になる条件］

マスタモード

- ［0 になる条件］に示した、マスタモード時の条件 1. と条件 2. のいずれも満たさないとき

スレーブモード

- SPCR.SPE ビットが 1（SPI 機能が有効）のとき

［0 になる条件］

マスタモード

- SPI0 の場合、条件 1. を満たすか、または条件 2.、3.、および 4. を満たすとき
  SPI1 の場合、条件 1. を満たすか、または条件 2. および 4. を満たすとき

1. SPCR.SPE ビットが 0（SPI 初期化）
2. 送信バッファ（SPTX）が空である（次転送データがセットされていない）
3. SPSSR.SPCP[2:0] ビットが 000b（シーケンス制御の先頭）であるとき
4. SPI 内部シーケンサがアイドル状態（次アクセス遅延までの動作が完了）のとき

スレーブモード

- SPCR.SPE ビットが 0（SPI 初期化）のとき

MODF フラグ（モードフォルトエラーフラグ）

モードフォルトエラーまたはアンダーランエラーの発生を示します。発生したエラーの種類は UDRF フラグによって示されます。

［1 になる条件］

マスタモード

- SPCR.MSTR ビットが 1（マスタモード）、かつ SPCR.MODFEN ビットが 1（モードフォルトエラー検出を許可）の状態で、SSLni 端子の入力レベルがアクティブレベルになり、モードフォルトエラーが発生したとき

スレーブモード

- 下記の条件 1. または条件 2. を満たしているとき

1. SPCR.MSTR ビットが 0（スレーブモード）、かつ SPCR.MODFEN ビットが 1（モードフォルトエラー検出許可）の状態で、データ転送に必要な RSPCK サイクルが終了する前に SSLni 端子がネゲートされ、モードフォルトエラーが発生した場合
2. SPCR.MSTR ビットが 0（スレーブモード）、SPCR.SPE ビットが 1、かつ送信データが準備されていない状態で、シリアル転送が開始されたため、アンダーランエラーが発生した場合

なお、SSLni 信号のアクティブレベルは、SSLP.SSLiP ビット（SSLi 信号極性設定ビット）によって決定されます。

［0 になる条件］

- 本フラグが 1 のときに SPSR レジスタを読んだとき

PERF フラグ（パリティエラーフラグ）

パリティエラーの発生を示します。

［1 になる条件］

- SPCR.TXMD ビットが 0、かつ SPCR2.SPPE ビットが 1 の状態で、シリアル転送が終了し、パリティエラーが発生したとき

［0 になる条件］

- PERF フラグが 1 のときに SPSR レジスタを読んだとき

UDRF フラグ（アンダーランエラーフラグ）

アンダーランエラーの発生を示します。

［1 になる条件］

- SPCR.MSTR ビットが 0（スレーブモード）、SPCR.SPE ビットが 1、かつ送信データが準備されていない状態で、シリアル転送が開始されたため、アンダーランエラーが発生したとき

［0 になる条件］

- UDRF フラグが 1 のときに SPSR レジスタを読んだとき

SPTEF フラグ（SPI 送信バッファエンプティフラグ）

SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）の送信バッファの状態を示します。

［1 になる条件］

- 下記の条件 1. または条件 2. を満たしているとき

1. SPI 初期化のため、SPCR.SPE ビットが 0 であるとき
2. 送信データが送信バッファからシフトレジスタへ転送されたとき

［0 になる条件］

- SPI0：SPDR/SPDR_HA レジスタへ書き込まれたデータが、SPI データコントロールレジスタ（SPDCR）のフレーム数設定ビット（SPFC[1:0]）で設定したフレーム数に等しいとき
- SPI1：SPDR/SPDR_HA レジスタへデータが書き込まれたとき

SPTEF ビットが 1 の場合のみ、データを SPDR/SPDR_HA レジスタに書き込むことができます。SPTEF ビットが 0 のときに SPDR/SPDR_HA レジスタの送信バッファにデータが書き込まれた場合、送信バッファのデータは更新されません。

SPRF フラグ（SPI 受信バッファフルフラグ）

SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）の受信バッファの状態を示します。

［1 になる条件］

- SPI0：SPCR.TXMD ビットが 0 で SPRF フラグが 0 のときに、SPDCR.SPFC[1:0] ビットで指定されたフレーム数分の受信データがシフトレジスタから SPDR/SPDR_HA レジスタへ転送されたとき。ただし、OVRF フラグが 1 の場合、本フラグは 0 から 1 に変更されない
- SPI1：SPCR.TXMD ビットが 0 で SPRF フラグが 0 のときに、受信データがシフトレジスタから SPDR/SPDR_HA レジスタへ転送されたとき。ただし、OVRF フラグが 1 の場合、本フラグは 0 から 1 に変更されない

［0 になる条件］

- 受信データが SPDR/SPDR_HA レジスタから読み出されたとき

32.2.5 SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）

アドレス　SPI0.SPDR 4007 2004h, SPI1.SPDR 4007 2104h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

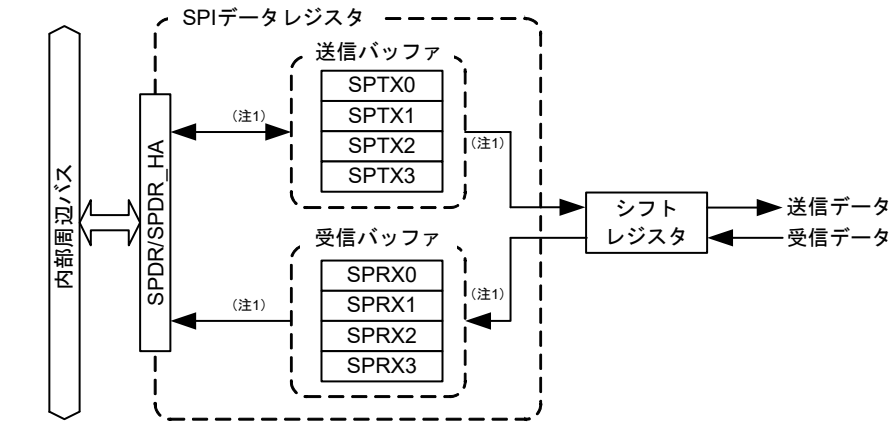
アドレス　SPI0.SPDR_HA 4007 2004h, SPI1.SPDR_HA 4007 2104h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

SPDR/SPDR_HA レジスタは、SPI 送受信用のデータを格納するバッファとのインタフェースです。

ワードアクセス（SPLW ビット＝1）のときは、SPDR レジスタにアクセスしてください。ハーフワードアクセス（SPLW ビット＝0）のときは、SPDR_HA レジスタにアクセスしてください。

送信バッファ（SPTX）と受信バッファ（SPRX）は独立したバッファですが、SPDR/SPDR_HA レジスタにマッピングされています。図 32.2 と図 32.3 に、SPI0 チャネルと SPI1 チャネルの場合の SPDR/SPDR_HA レジスタ構成をそれぞれ示します。



注1.　アクセス先のバッファおよびステージはハードウェアにより自動的に切り替えます。

図 32.2　SPDR/SPDR_HA レジスタの構成図（SPI0 の場合）

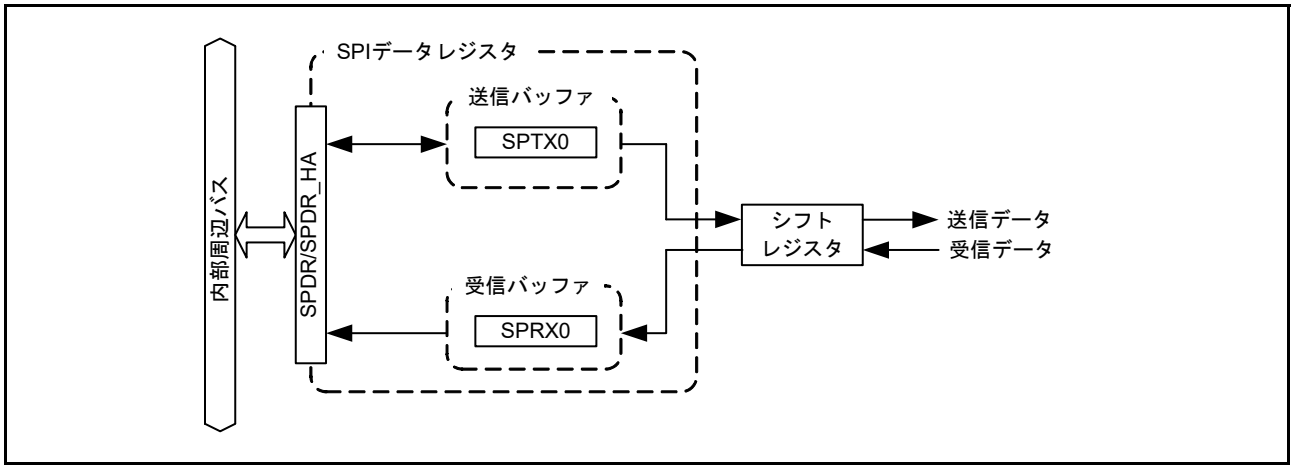


図 32.3　SPDR/SPDR_HA レジスタの構成図（SPI1 の場合）

送信および受信バッファには、それぞれ SPI0 では 4 ステージ、SPI1 では 1 ステージあります。SPI0 で使用するステージ数は、SPDCR レジスタのフレーム数設定ビット（SPDCR）で設定できます。SPDR/SPDR_HA レジスタの 1 アドレスに、これらのバッファステージすべてマッピングされます。

SPDR/SPDR_HA レジスタへ書き込まれたデータは、送信バッファステージ（SPTXn）（SPI0 では n = 0 ～ 3、SPI1 では n = 0）へ書き込まれた後、バッファから送信されます。受信バッファは、受信完了時に受信データを格納します。オーバーランが発生すると、受信バッファは更新されません。

データ長が 32 ビット以外の場合、SPRXn（SPI0 では n = 0 ～ 3、SPI1 では n = 0）の関連するビットには、SPTXn（SPI0 では n = 0 ～ 3、SPI1 では n = 0）の非参照ビットが格納されます。たとえば、データ長が 9 ビットのデータを受信した場合、SPRXn[8:0] ビットには受信データが格納され、SPRXn[31:9] ビットには SPTXn[31:9] ビットが格納されます。

(1)　バスインタフェース

SPDR/SPDR_HA レジスタは、32 ビットの送信および受信バッファとのインタフェースであり、それぞれのバッファには SPI0 では 4 ステージ、SPI1 では 1 ステージあり、合計 32 バイトになります。これらの 32 バイトを SPDR/SPDR_HA レジスタの 4 バイトのアドレス空間にマッピングしています。SPDR/SPDR_HA レジスタへのアクセスは、SPDCR レジスタの SPI ワードアクセス／ハーフワードアクセス設定ビット（SPLW）で設定したアクセスサイズで行ってください。

送信データは、LSB 詰めで書いてください。受信データは LSB 詰めで格納してください。

以下では、SPDR/SPDR_HA レジスタに対する書き込みおよび読み出しに関連する動作について説明します。

(a)　書き込み

SPDR/SPDR_HA レジスタへ書き込まれたデータは、送信バッファ SPTXn（SPI0 では n = 0 ～ 3、SPI1 では n = 0）へ書き込まれます。SPDR/SPDR_HA レジスタの読み出し時と異なり、書き込みは SPDCR.SPRDTD ビットの値に影響されません。

送信バッファにはライトポインタがあり、SPDR/SPDR_HA レジスタへデータを書き込むたびにポインタが自動更新され、次のステージを参照するようになります。

図 32.4 と図 32.5 に、SPDR/SPDR_HA レジスタへの書き込み時の送信バッファのバスインタフェースの構成図を、SPI0 および SPI1 それぞれの場合について示します。

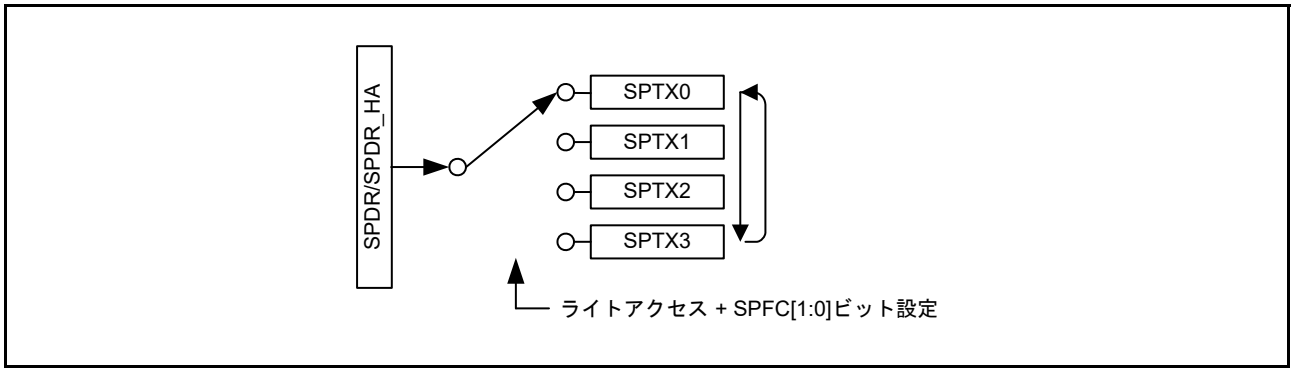


図 32.4　　書き込み時の SPDR/SPDR_HA レジスタの構成図（SPI0 の場合）

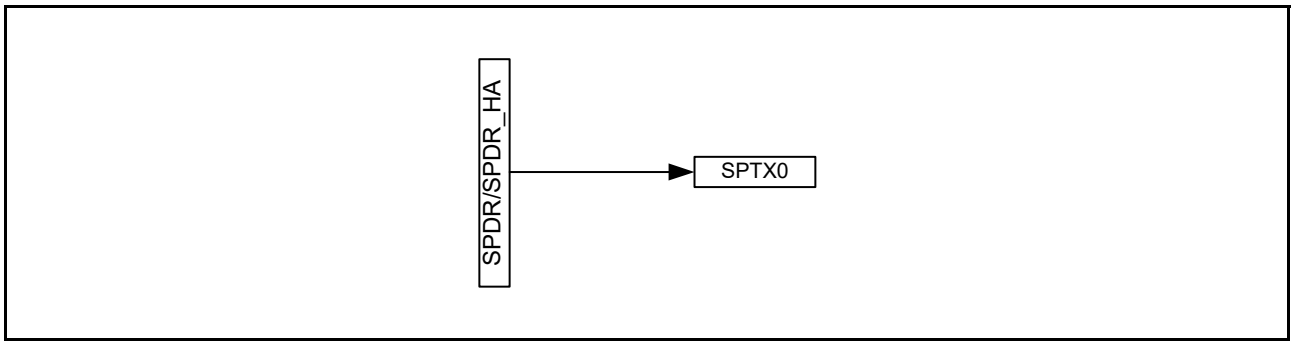


図 32.5　　書き込み時の SPDR/SPDR_HA レジスタの構成図（SPI1 の場合）

SPI0 の場合、送信バッファライトポインタの切り替え順序は、SPDCR レジスタのフレーム数設定ビット（SPFC[1:0]）の設定によって変わります。

- SPFC[1:0] ビットの設定と SPTX0 から SPTX3 へのポインタ切り替え順序：
  SPFC[1:0] ビットが 00b のとき：SPTX0 → SPTX0 → SPTX0 →・・・
  SPFC[1:0] ビットが 01b のとき：SPTX0 → SPTX1 → SPTX0 → SPTX1 →・・・
  SPFC[1:0] ビットが 10b のとき：SPTX0 → SPTX1 → SPTX2 → SPTX0 → SPTX1 →・・・
  SPFC[1:0] ビットが 11b のとき：SPTX0 → SPTX1 → SPTX2 → SPTX3 → SPTX0 → SPTX1 →・・・

本ビットが 0 のとき SPI コントロールレジスタ（SPCR）の SPI 機能有効ビット（SPE）に 1 を書くと、次の書き込み先は SPTX0 になります。

送信バッファ SPTXn（SPI0 では n = 0 ～ 3、SPI1 では n = 0）への書き込みは、送信バッファエンプティ割り込み発生後（SPSR.SPTEF = 1）、SPDCR レジスタのフレーム数設定ビット（SPFC[1:0]）で設定したフレーム数分の送信データを書き込んでください。書き込み完了から次の送信バッファエンプティ割り込み発生（SPSR.SPTEF = 0）までの期間は、送信バッファ（SPTXn）にフレーム数分の書き込みを行っても同バッファの値は更新されません。

(b)　読み出し

SPDR/SPDR_HA レジスタにアクセスすることによって、受信バッファ（SPRXn）または送信バッファ（SPTXn）の値を読むことができます（SPI0 では n = 0 ～ 3、SPI1 では n = 0）。SPDCR レジスタの SPI 送受信データ選択ビット（SPRDTD）の設定によって、受信バッファを読み出すか、送信バッファを読み出すかを選択できます。

SPDR/SPDR_HA レジスタの読み出し順は、独立したポインタである受信バッファリードポインタと送信バッファリードポインタによって制御されます。

図 32.6 と図 32.7 に、SPDR/SPDR_HA レジスタからの読み出し時の受信および送信バッファのバスインタフェースの構成図を、SPI0 および SPI1 それぞれの場合について示します。

- SPI0

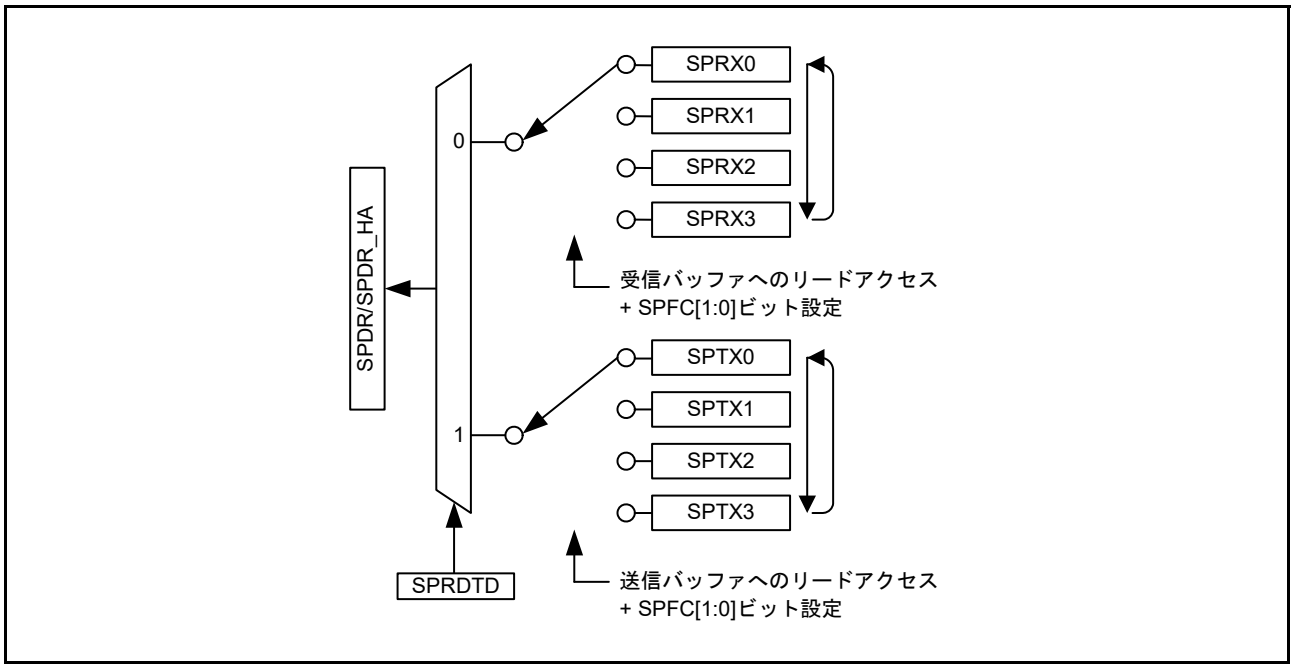


図 32.6　読み出し時の SPDR/SPDR_HA レジスタの構成図（SPI0 の場合）

受信バッファを読み出すと、受信バッファリードポインタが次のバッファに自動的に切り替わります。受信バッファリードポインタの切り替え順序は、送信バッファライトポインタと同様の順序で切り替わります。

ただし、本ビットが 1 のとき SPI コントロールレジスタ（SPCR）の SPI 機能有効ビット（SPE）に 1 を書くと、次の読み出し時はバッファリードポインタによって SPRX0 が参照されます。

送信バッファリードポインタは、SPDR/SPDR_HA レジスタへの書き込み時に更新され、送信バッファからの読み出し時には更新されません。送信バッファを読み出すと、SPDR/SPDR_HA レジスタに最後に書き込まれた値が読み出せます。ただし、送信バッファエンプティ割り込み発生後に送信バッファが再びいっぱいになる（フレーム数設定ビット（SPDCR.SPFC[1:0]）で指定されているデータフレーム数が送信バッファに書き込まれる）と、次の送信バッファエンプティ割り込みが発生するまで、送信バッファからの読み出し値はすべて 0 になります。

- SPI1

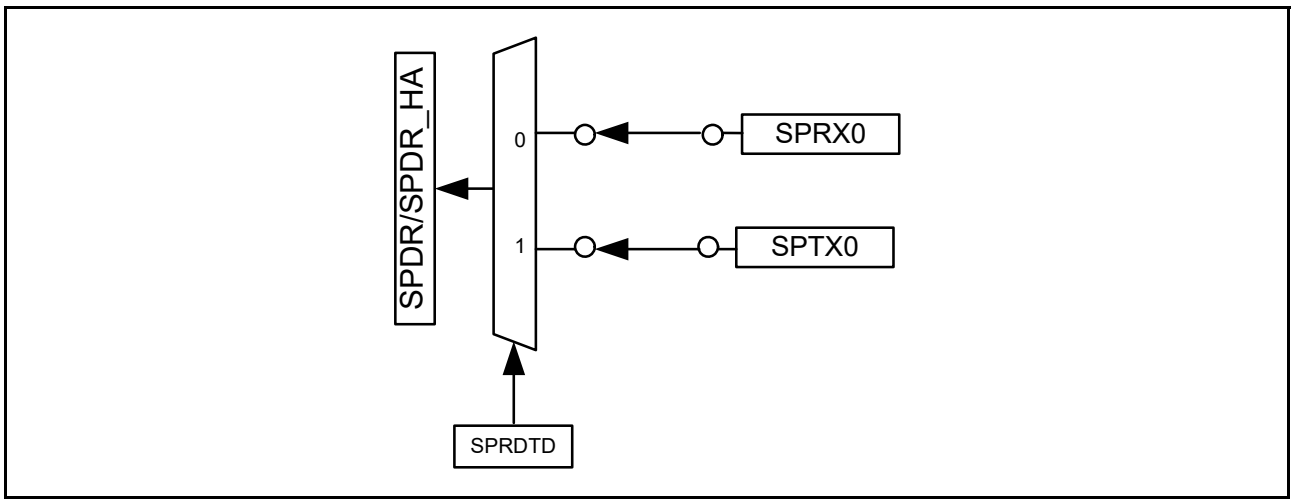
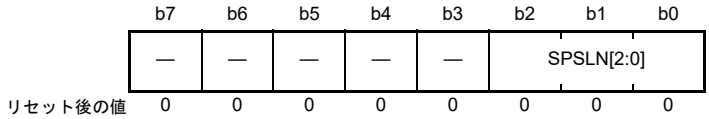


図 32.7　読み出し時の SPDR/SPDR_HA レジスタの構成図（SPI1 の場合）

送信バッファリードポインタは、SPDR/SPDR_HA レジスタへの書き込み時に更新され、送信バッファからの読み出し時には更新されません。送信バッファを読み出すと、SPDR/SPDR_HA レジスタに最後に書き込まれた値が読み出せます。ただし、送信バッファエンプティ割り込み発生後に送信バッファが再びフルになると、次の送信バッファエンプティ割り込みが発生する（SPTEF = 0）まで、送信バッファからの読み出し値は、すべて 0 になります。

32.2.6　SPI シーケンスコントロールレジスタ（SPSCR）

アドレス　SPI0.SPSCR 4007 2008h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	SPSLN[2:0]	SPI シーケンス長設定	b2 b0 シーケンス長　参照するSPCMD0～7レジスタ（番号） 0 0 0 : 1　0→0→… 0 0 1 : 2　0→1→0→… 0 1 0 : 3　0→1→2→0→… 0 1 1 : 4　0→1→2→3→0→… 1 0 0 : 5　0→1→2→3→4→0→… 1 0 1 : 6　0→1→2→3→4→5→0→… 1 1 0 : 7　0→1→2→3→4→5→6→0→… 1 1 1 : 8　0→1→2→3→4→5→6→7→0→… 設定されたシーケンス長に基づいて、参照するSPCMD0～SPCMD7レジスタの参照順を変更します。SPSLN[2:0]ビットの設定値とシーケンス長、SPIが参照するSPCMD0～SPCMD7レジスタの関係は上記のとおりです。なお、スレーブモードのSPIでは、SPCMD0レジスタが参照されます。	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SPSCR レジスタは、SPI がマスタモードで動作する場合のシーケンス長を設定するためのレジスタです。SPCR.MSTR ビットおよび SPCR.SPE ビットがともに 1 の状態において、SPSCR.SPSLN[2:0] ビットを書き換える場合、必ず SPSR.IDLNF フラグが 0 であることを確認してください。

SPSLN[2:0] ビット（SPI シーケンス長設定）

マスタモードの SPI がシーケンス動作する場合のシーケンス長を設定します。マスタモードの SPI は SPSLN[2:0] ビットで設定されたシーケンス長に基づいて、参照する SPCMD0 ～ SPCMD7 レジスタと参照順を変更します。スレーブモードでは、SPCMD0 レジスタが参照されます。

32.2.7　SPI シーケンスステータスレジスタ（SPSSR）

アドレス　SPI0.SPSSR 4007 2009h

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	SPCP[2:0]	SPIコマンドポインタ	b2 b0 0 0 0 : SPCMD0 0 0 1 : SPCMD1 0 1 0 : SPCMD2 0 1 1 : SPCMD3 1 0 0 : SPCMD4 1 0 1 : SPCMD5 1 1 0 : SPCMD6 1 1 1 : SPCMD7	R
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b6-b4	SPECM[2:0]	SPIエラーコマンド	b6 b4 0 0 0 : SPCMD0 0 0 1 : SPCMD1 0 1 0 : SPCMD2 0 1 1 : SPCMD3 1 0 0 : SPCMD4 1 0 1 : SPCMD5 1 1 0 : SPCMD6 1 1 1 : SPCMD7	R
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

SPSSR レジスタは、SPI がマスタモードで動作する場合のシーケンス制御の状態を示します。SPSSR レジスタへの書き込みは無効です。

SPCP[2:0] ビット（SPI コマンドポインタ）

SPI によるシーケンス制御中に、ポインタで参照されている SPCMDm レジスタを示します。SPI のシーケンス制御については、32.3.10.1　マスタモード動作を参照してください。

SPECM[2:0] ビット（SPI エラーコマンド）

SPI のシーケンス制御中のエラー検出時に SPCP[2:0] ビットで指定されていた SPCMDm レジスタを示します。SPI は、エラー検出時にのみ SPECM[2:0] ビットを更新します。SPSR.OVRF フラグと SPSR.MODF フラグがともに 0 で、エラーが発生していない場合、SPECM[2:0] ビット値には意味がありません。

SPI のエラー検出機能については、32.3.8　エラー検出を参照してください。SPI のシーケンス制御については、32.3.10.1　マスタモード動作を参照してください。

32.2.8 SPI ビットレートレジスタ（SPBR）

アドレス SPI0.SPBR 4007 200Ah, SPI1.SPBR 4007 210Ah

SPBR レジスタは、マスタモード時のビットレートを設定するレジスタです。SPCR.MSTR ビットと SPCR.SPE ビットがともに 1 の状態で、SPBR レジスタの内容を変更した場合、以降の動作は行わないでください。

SPI がスレーブモードのときは、SPBR レジスタ、SPCMDm.BRDV[1:0] ビット（ビットレート分周設定ビット）の設定に関係なく、ビットレートは、入力クロックのビットレートに依存します。デバイスの電気的特性を満たすビットレートを使用してください。

ビットレートは本レジスタの設定値と SPI コマンドレジスタ SPCMDm（SPI0 の場合は SPCMD0 ～ SPCMD7、SPI1 の場合は SPCMD0）の BRDV[1:0] ビットの設定値の組み合わせで決定されます。ビットレートの計算式は下記のとおりです。

$$\text{Bit rate} = \frac{f(\text{PCLK})}{2 \times (n + 1) \times 2^{N}}$$

計算式中で n は SPBR レジスタの設定値（0, 1, 2, ……, 255）、N は BRDV[1:0] ビットの設定値（0, 1, 2, 3）です。

SPBR レジスタの設定値、BRDV[1:0] ビットの設定値、およびビットレートの関係の例を表 32.3 に示します。

表 32.3　SPBR レジスタ設定値、BRDV[1:0] ビット設定値、およびビットレートの関係

SPBR（n）	BRDV[1:0]（N）	分周比	ビットレート	
			PCLK = 32MHz	PCLK = 48MHz
0	0	2	16.0Mbps	—
1	0	4	8.00Mbps	12.0Mbps
2	0	6	5.33Mbps	8.00Mbps
3	0	8	4.00Mbps	6.00Mbps
4	0	10	3.20Mbps	4.80Mbps
5	0	12	2.67Mbps	4.00Mbps
5	1	24	1.33Mbps	2.00Mbps
5	2	48	667kbps	1.00Mbps
5	3	96	333kbps	500kbps
255	3	4096	7.81kbps	11.7kbps

32.2.9 SPI データコントロールレジスタ（SPDCR）

アドレス SPI0.SPDCR 4007 200Bh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
(SPI0)	—	—	SPLW	SPRDTD	—	—	SPFC[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

アドレス SPI1.SPDCR 4007 210Bh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
(SPI1)	—	—	SPLW	SPRDTD	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	SPFC[1:0]	フレーム数設定	• SPI0： b1 b0 0 0：1フレーム 0 1：2フレーム 1 0：3フレーム 1 1：4フレーム	R/W
	—	予約ビット	• SPI1： 読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	SPRDTD	SPI受信／送信データ選択	0：SPDR/SPDR_HAは受信バッファを読み出す 1：SPDR/SPDR_HAは送信バッファを読み出す（送信バッファが空の場合のみ）	R/W
b5	SPLW	SPIワードアクセス／ハーフワードアクセス設定	0：SPDR_HAが有効（ハーフワードアクセス） 1：SPDRが有効（ワードアクセス）	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

1 回の送受信で SPI0 の場合は最大 4 フレーム、SPI1 の場合は 1 フレームを送受信できます。SPI0 の場合、各転送におけるデータ量は、SPCMDm.SPB[3:0] ビット、SPSCR.SPSLN[2:0] ビット、および SPDCR.SPFC[1:0] ビットの組み合わせで制御されます。SPI1 の場合、各転送におけるデータ量は、SPCMD0.SPB[3:0] ビットで制御されます。

SPCR.SPE ビットが 1 の状態で、SPDCR.SPFC[1:0] ビットを変更する場合、必ず SPSR.IDLNF フラグが 0 であることを確認してください。

SPFC[1:0] ビット（フレーム数設定）

（1 回の転送起動で）SPDR/SPDR_HA レジスタに格納できるフレーム数を設定します。1 回の送受信で最大 4 フレームを送受信できます。

SPFC[1:0] ビットで指定されたフレーム数分の送信データが SPDR/SPDR_HA レジスタに書き込まれると、SPI は SPSR.SPTEF フラグを 0 にし、送信を開始します。その後、SPFC[1:0] ビットで指定されたフレーム数分の送信データがシフトレジスタに送信されると、SPI は送信バッファエンプティ割り込みを発生させます（SPSR.SPTEF = 1）。

SPFC[1:0] ビットで指定されたフレーム数分のデータが受信されると、SPI は受信バッファフル割り込みを発生させます（SPSR.SPRF が 1 になります）。
SPI1 では SPFC[1:0] ビットは予約ビットです。

表 32.4　SPSLN[2:0]ビットとSPFC[1:0]ビットの設定可能な組み合わせ

設定	SPSLN[2:0]	SPFC[1:0]	1シーケンスで転送するフレーム数	送信バッファ／受信バッファがフルになるフレーム数
1-1	000b	00b	1	1
1-2	000b	01b	2	2
1-3	000b	10b	3	3
1-4	000b	11b	4	4
2-1	001b	01b	2	2
2-2	001b	11b	4	4
3	010b	10b	3	3
4	011b	11b	4	4
5	100b	00b	5	1
6	101b	00b	6	1
7	110b	00b	7	1
8	111b	00b	8	1

SPRDTD ビット（SPI 受信／送信データ選択）

SPDR/SPDR_HA レジスタが、値を受信バッファと送信バッファのどちらから読み出すかを選択します。

送信バッファから読み出す場合、SPDR/SPDR_HA レジスタへ直前に書き込まれた値が読み出されます。SPI0 の送信バッファの読み出しは、SPFC[1:0] ビットで設定したフレーム数の書き込み終了前、かつ送信バッファエンプティ割り込みの発生後（SPSR.SPTEF = 1）に行ってください。SPI1 の送信バッファの読み出しは、送信バッファエンプティ割り込みの発生後（SPSR.SPTEF = 1）に行ってください。

詳細は、32.2.5　SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）を参照してください。

SPLW ビット（SPI ワードアクセス／ハーフワードアクセス設定）

SPDR レジスタへのアクセス幅を設定します。SPLW ビットが 0 の場合、SPDR_HA レジスタへのハーフワードアクセスが有効となり、SPLW ビットが 1 の場合、SPDR レジスタへのワードアクセスが有効となります。また、SPLW ビットが 0 のとき、SPI データ長設定ビット（SPCMDm.SPB[3:0]）の設定は、8 ～ 16 ビットにしてください。20、24、32 ビットに設定した場合は、動作はしないでください。

32.2.10 SPI クロック遅延レジスタ（SPCKD）

アドレス SPI0.SPCKD 4007 200Ch, SPI1.SPCKD 4007 210Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	SCKDL[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	SCKDL[2:0]	RSPCK遅延設定	b2 b1 b0 0 0 0 : 1RSPCK 0 0 1 : 2RSPCK 0 1 0 : 3RSPCK 0 1 1 : 4RSPCK 1 0 0 : 5RSPCK 1 0 1 : 6RSPCK 1 1 0 : 7RSPCK 1 1 1 : 8RSPCK	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SPCKD レジスタは、SPCMDm.SCKDEN ビットが 1 の状態における、SSLni 信号アサート開始から RSPCK 発振までの期間（RSPCK 遅延）を設定するためのレジスタです。SPCR.MSTR ビットと SPCR.SPE ビットがともに 1 の状態で、SPCKD レジスタの内容を変更した場合、以降の動作は行わないでください。

SCKDL[2:0] ビット（RSPCK 遅延設定）

SPCMDm.SCKDEN ビットが 1 の場合の RSPCK 遅延値を設定します。SPI をスレーブモードで使用する場合は、SCKDL[2:0] ビットを 000b にしてください。

32.2.11 SPI スレーブ選択ネゲート遅延レジスタ（SSLND）

アドレス SPI0.SSLND 4007 200Dh, SPI1.SSLND 4007 210Dh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	SLNDL[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	SLNDL[2:0]	SSL ネゲート遅延設定	b2 b1 b0 0 0 0 : 1RSPCK 0 0 1 : 2RSPCK 0 1 0 : 3RSPCK 0 1 1 : 4RSPCK 1 0 0 : 5RSPCK 1 0 1 : 6RSPCK 1 1 0 : 7RSPCK 1 1 1 : 8RSPCK	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。	R/W

SSLND レジスタは、マスタモードの SPI がシリアル転送の最終 RSPCK エッジを送信してから SSLni 信号をネゲートするまでの期間（SSL ネゲート遅延）を設定するためのレジスタです。SPCR.MSTR ビットと SPCR.SPE ビットがともに 1 の状態で、SSLND レジスタの内容を変更した場合、以降の動作は行わないでください。

SLNDL[2:0] ビット（SSL ネゲート遅延設定）

SPI がマスタモードのとき、SSL ネゲート遅延値を設定します。SPI をスレーブモードで使用する場合は、SLNDL[2:0] ビットを 000b にしてください。

32.2.12 SPI 次アクセス遅延レジスタ（SPND）

アドレス SPI0.SPND 4007 200Eh, SPI1.SPND 4007 210Eh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	SPNDL[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	SPNDL[2:0]	SPI次アクセス遅延設定	b2 b1 b0 0 0 0 : 1RSPCK + 2PCLK 0 0 1 : 2RSPCK + 2PCLK 0 1 0 : 3RSPCK + 2PCLK 0 1 1 : 4RSPCK + 2PCLK 1 0 0 : 5RSPCK + 2PCLK 1 0 1 : 6RSPCK + 2PCLK 1 1 0 : 7RSPCK + 2PCLK 1 1 1 : 8RSPCK + 2PCLK	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SPND レジスタは、SPCMDm.SPNDEN ビットが 1 の状態で、シリアル転送終了後の SSLni 信号の非アクティブ期間（次アクセス遅延）を設定するためのレジスタです。SPCR.MSTR ビットと SPCR.SPE ビットがともに 1 の状態で、SPND レジスタの内容を変更した場合、以降の動作は行わないでください。

SPNDL[2:0] ビット（SPI 次アクセス遅延設定）

SPCMDm.SPNDEN ビットが 1 の場合の次アクセス遅延を設定します。SPI をスレーブモードで使用する場合は、SPNDL[2:0] ビットを 000b にしてください。

32.2.13　SPI コントロールレジスタ 2（SPCR2）

アドレス　SPI0.SPCR2 4007 200Fh, SPI1.SPCR2 4007 210Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	SCKASE	PTE	SPIIE	SPOE	SPPE
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SPPE	パリティ有効	0：送信データにパリティビットを付加せず、受信データのパリティビットをチェックしない 1：（SPCR.TXMD = 0の場合）送信データにパリティビットを付加し、受信データのパリティビットをチェックする（SPCR.TXMD = 1の場合）送信データにパリティビットを付加するが、受信データのパリティビットをチェックしない	R/W
b1	SPOE	パリティモード	0：送受信用に偶数パリティを選択 1：送受信用に奇数パリティを選択	R/W
b2	SPIIE	SPIアイドル割り込み許可	0：アイドル割り込み要求を禁止 1：アイドル割り込み要求を許可	R/W
b3	PTE	パリティ自己診断	0：パリティ回路自己診断機能は無効 1：パリティ回路自己診断機能は有効	R/W
b4	SCKASE	RSPCK自動停止機能有効	0：RSPCK自動停止機能は無効 1：RSPCK自動停止機能は有効	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

SPCR.SPE ビットが 1 の状態で、SPCR2 レジスタの SPPE、SPOE、または SCKASE ビットを変更した場合、以降の動作は行わないでください。

SPPE ビット（パリティ有効）

パリティ機能を有効または無効にします。

SPCR.TXMD ビットが 0 で、SPCR2.SPPE ビットが 1 のとき、送信データにパリティビットを付加し、受信データのパリティチェックを行います。SPCR.TXMD ビットが 1 で、SPCR2.SPPE ビットが 1 のとき、送信データにパリティビットを付加しますが、受信データのパリティチェックは行いません。

SPOE ビット（パリティモード）

偶数パリティまたは奇数パリティを指定します。

偶数パリティを設定すると、パリティビットと送受信キャラクタを合わせて、値が 1 のビットの総数が偶数になるようにパリティビットが付加されます。同様に、奇数パリティを設定すると、パリティビットと送受信キャラクタを合わせて、値が 1 のビットの総数が奇数になるようにパリティビットが付加されます。

SPOE ビットは、SPPE ビットが 1 の場合にのみ有効です。

SPIIE ビット（SPI アイドル割り込み許可）

SPI がアイドル状態を検出し、SPSR.IDLNF フラグが 0 になった場合に、SPI アイドル割り込み要求の発生を許可または禁止します。

PTE ビット（パリティ自己診断）

パリティ機能が正常であることを確認するために、パリティ回路の自己診断を有効にするビットです。

SCKASE ビット（RSPCK 自動停止機能有効）

RSPCK 自動停止機能を有効または無効にします。この機能を有効にすると、マスタモードでのデータ受信時に、オーバーランエラーが発生する前に RSPCK クロックが停止します。詳細は、32.3.8.1　オーバーランエラーを参照してください。

32.2.14　SPI コマンドレジスタ（SPCMDm）（SPI0 の場合 m = 0 ～ 7、SPI1 の場合 m = 0)

アドレス　SPI0.SPCMD0 4007 2010h, SPI0.SPCMD1 4007 2012h, SPI0.SPCMD2 4007 2014h, SPI0.SPCMD3 4007 2016h, SPI0.SPCMD4 4007 2018h, SPI0.SPCMD5 4007 201Ah, SPI0.SPCMD6 4007 201Ch, SPI0.SPCMD7 4007 201Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
(SPI0)	SCKDEN	SLNDEN	SPNDEN	LSBF	SPB[3:0]				SSLKP	SSLA[2:0]			BRDV[1:0]		CPOL	CPHA
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1

アドレス　SPI1.SPCMD0 4007 2110h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
(SPI1)	SCKDEN	SLNDEN	SPNDEN	LSBF	SPB[3:0]				—	SSLA[2:0]			BRDV[1:0]		CPOL	CPHA
リセット後の値	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CPHA	RSPCK位相設定	0：立ち上がりエッジでデータサンプリング、立ち下がりエッジでデータ変化を選択 1：立ち上がりエッジでデータ変化、立ち下がりエッジでデータサンプリングを選択	R/W
b1	CPOL	RSPCK極性設定	0：アイドル時のRSPCKがLow 1：アイドル時のRSPCKがHigh	R/W
b3-b2	BRDV[1:0]	ビットレート分周設定	b3 b2 0 0：ベースのビットレートを選択 0 1：ベースのビットレートの2分周を選択 1 0：ベースのビットレートの4分周を選択 1 1：ベースのビットレートの8分周を選択	R/W
b6-b4	SSLA[2:0] （注1）	SSL信号アサート設定	b6 b4 0 0 0：SSL0 0 0 1：SSL1 0 1 0：SSL2 0 1 1：SSL3 1 x x：設定禁止 x: Don't care	R/W
b7	SSLKP	SSL信号レベル保持	• SPI0 0：転送終了時に全SSL信号をネゲート 1：転送終了後から次アクセス開始までSSL信号レベルを保持	R/W
	—	予約ビット	• SPI1 読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11-b8	SPB[3:0]	SPIデータ長設定	b11 b8 0100～0111：8ビット 1 0 0 0：9ビット 1 0 0 1：10ビット 1 0 1 0：11ビット 1 0 1 1：12ビット 1 1 0 0：13ビット 1 1 0 1：14ビット 1 1 1 0：15ビット 1 1 1 1：16ビット 0 0 0 0：20ビット 0 0 0 1：24ビット 0010、0011：32ビット	R/W
b12	LSBF	SPI LSBファースト	0：MSBファースト 1：LSBファースト	R/W
b13	SPNDEN	SPI次アクセス遅延許可	0：次アクセス遅延は1RSPCK + 2PCLK 1：次アクセス遅延はSPI次アクセス遅延レジスタ（SPND）の設定値	R/W

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14	SLNDEN	SSLネゲート遅延設定許可	0：SSLネゲート遅延は1RSPCK 1：SSLネゲート遅延はSPIスレーブセレクトネゲート遅延レジスタ（SSLND）の設定値	R/W
b15	SCKDEN	RSPCK遅延設定許可	0：RSPCK遅延は1RSPCK 1：RSPCK遅延はSPIクロック遅延レジスタ（SPCKD）の設定値	R/W

注 1.　SPI1 では使用できません。

- SPI0

SPCMDm レジスタは、マスタモードの SPI に対して転送フォーマットを設定するレジスタです。SPI0 には、8 個の SPI コマンドレジスタ（SPCMD0 ～ SPCMD7）があります。また、SPCMD0 レジスタの一部のビットは、スレーブモードの SPI の転送モードを設定するために使用されます。マスタモードの SPI は、SPSCR.SPSLN[2:0] ビットの設定に従ってシーケンシャルに SPCMDm レジスタを参照し、参照した SPCMDm レジスタに設定されたシリアル転送を実行します。

SPCMDm レジスタの設定は、送信バッファが空の（SPSR.SPTEF = 1 で、次転送のデータがセットされていない）状態で、その SPCMDm レジスタが参照されたときに送信されるデータの設定前に行ってください。マスタモードの SPI が参照している SPCMDm レジスタは、SPSSR.SPCP[2:0] ビットで確認できます。

SPCR.MSTR ビットが 0、かつ SPCR.SPE ビットが 1 の状態で、SPCMDm レジスタの内容を変更した場合、以降の動作は行わないでください。

- SPI1

SPI1 には、1 個の SPI コマンドレジスタ（SPCMD）があります。SPI コマンドレジスタ（SPCMD）は、マスタモードの転送フォーマットを設定します。SPCMD0 レジスタの一部のビットは、スレーブモードの SPI に対して転送モードを設定するために使用されます。SPCR.SPE が 1 の状態で SPCMD レジスタを書き換えた場合、その後の動作を行わないでください。

CPHA ビット（RSPCK 位相設定）

マスタモード／スレーブモードの SPI の RSPCK 位相を設定します。SPI モジュール間でデータ通信を行う場合、モジュール間では同一の RSPCK 位相を設定する必要があります。

CPOL ビット（RSPCK 極性設定）

マスタモード／スレーブモードの SPI の RSPCK 極性を設定します。SPI モジュール間でデータ通信を行う場合、モジュール間では同一の RSPCK 極性を設定する必要があります。

BRDV[1:0] ビット（ビットレート分周設定）

ビットレートを決定します。BRDV[1:0] ビットと SPBR レジスタの設定値との組み合わせでビットレートを決定します。32.2.8　SPI ビットレートレジスタ（SPBR）を参照してください。SPBR レジスタの設定値は、ベースとなるビットレートを決定します。BRDV[1:0] ビットの設定値は、ベースのビットレートに対して分周なし／2 分周／4 分周／8 分周したビットレートを選択します。SPI0 では SPCMDm の BRDV[1:0] ビットに異なる値を設定することで、コマンドごとに異なるビットレートでシリアル転送を実行できます。

SSLA[2:0] ビット（SSL 信号アサート設定）

マスタモードの SPI がシリアル転送を行う際の、SSLni 信号のアサートを制御します。

SSLni 信号アサート時の信号極性は、関連する SSLP レジスタの設定値で決定されます。マルチマスタモードで SSLA[2:0] ビットを 000b にした場合、SSLn0 端子は入力になるため、全 SSL 信号がネゲート状態でシリアル転送が実行されます。

SPI をスレーブモードで使用する場合は、SSLA[2:0] ビットを 000b にしてください。

SSLKP ビット（SSL 信号レベル保持）

マスタモードの SPI がシリアル転送する場合に、現コマンドに対応する SSL ネゲートタイミングから次コマンドに対応する SSL アサートタイミングの間、現コマンドの SSLni 信号レベルを保持するか、ネゲートするかを設定するビットです。

SSLKP ビットを 1 にすると、バースト転送が可能になります。詳細は、32.3.10.1　マスタモード動作の (4)　バースト転送を参照してください。SPI をスレーブモードで使用する場合は、SSLKP ビットを 0 にしてください。

SPI1 では SSLKP ビットは予約ビットです。

SPB[3:0] ビット（SPI データ長設定）

マスタモード／スレーブモードの SPI の転送データ長を設定します。

SPLW ビットが 0 のとき、SPI データ長設定ビット（SPCMDm.SPB[3:0]）の設定は、8 ～ 16 ビットにしてください。

LSBF ビット（SPI LSB ファースト）

マスタモード／スレーブモードの SPI のデータフォーマットを、MSB ファーストにするか LSB ファーストにするかを選択します。

SPNDEN ビット（SPI 次アクセス遅延許可）

マスタモードの SPI がシリアル転送を終了して SSLni 信号を非アクティブにしてから、次アクセスの SSLni 信号アサートを可能にするまでの期間（次アクセス遅延）を設定します。SPNDEN ビットが 0 のとき、SPI は次アクセス遅延を 1RSPCK + 2PCLK にします。SPNDEN ビットが 1 のとき、SPI は SPND レジスタの設定値に従って次アクセス遅延を挿入します。

SPI をスレーブモードで使用する場合は、SPNDEN ビットを 0 にしてください。

SLNDEN ビット（SSL ネゲート遅延設定許可）

マスタモードの SPI が、RSPCK を発振停止してから SSLni 信号を非アクティブにするまでの期間（SSL ネゲート遅延）を設定します。SLNDEN ビットが 0 のとき、SPI は SSL ネゲート遅延を 1RSPCK に設定します。SLNDEN ビットが 1 のとき、SPI は SSLND レジスタの設定に従った SSL ネゲート遅延で SSL 信号をネゲートします。

SPI をスレーブモードで使用する場合は、SLNDEN ビットを 0 にしてください。

SCKDEN ビット（RSPCK 遅延設定許可）

マスタモードの SPI が、SSLni 信号をアクティブにしてから RSPCK の発振を開始するまでの期間（SPI クロック遅延）を設定します。SCKDEN ビットが 0 のとき、SPI は RSPCK 遅延を 1RSPCK に設定します。SCKDEN ビットが 1 のとき、SPI は SPCKD レジスタの設定に従った RSPCK 遅延で RSPCK の発振を開始します。

SPI をスレーブモードで使用する場合は、SCKDEN ビットを 0 にしてください。

32.3　動作説明

本項では、シリアル転送期間という用語を、有効データのドライブ開始から最終有効データの取り込みまでの期間を意味する用語として使用しています。

32.3.1　SPI 動作の概要

SPI は、下記のモードでの同期式シリアル転送が可能です。

- スレーブモード（SPI 動作）
- シングルマスタモード（SPI 動作）
- マルチマスタモード（SPI 動作）
- スレーブモード（クロック同期式動作）
- マスタモード（クロック同期式動作）

SPI のモードは、SPCR.MSTR、SPCR.MODFEN、SPCR.SPMS ビットで選択できます。表 32.5 に、SPI のモードと SPCR レジスタの設定値との関係、および各モードの概要を示します。

表 32.5　SPCR レジスタの設定と SPI のモードの関係

モード	スレーブ（SPI動作）	シングルマスタ（SPI動作）	マルチマスタ（SPI動作）	スレーブ（クロック同期式動作）	マスタ（クロック同期式動作）
MSTRビット設定値	0	1	1	0	1
MODFENビット設定値	0または1	0	1	0	0
SPMSビット設定値	0	0	0	1	1
RSPCKn信号	入力	出力	出力／Hi-Z	入力	出力
MOSIn信号	入力	出力	出力／Hi-Z	入力	出力
MISOn信号	出力／Hi-Z	入力	入力	出力	入力
SSLn0信号	入力	出力	入力	Hi-Z（注1）	Hi-Z（注1）
SSLn1～SSLn3信号	Hi-Z（注1）	出力	出力／Hi-Z	Hi-Z（注1）	Hi-Z（注1）
SSL極性変更機能	あり	あり	あり	—	—
転送速度	～PCLK/6	～PCLK/2	～PCLK/2	～PCLK/6	～PCLK/2
クロックソース	RSPCKn入力	内蔵ボーレートジェネレータ	内蔵ボーレートジェネレータ	RSPCKn入力	内蔵ボーレートジェネレータ
クロック極性	2種				
クロック位相	2種	2種	2種	1種（CPHA = 1）	2種
先頭転送ビット	MSB/LSB				
転送データ長	8～16、20、24、32ビット				
バースト転送	あり（SPI0）	あり（SPI0）	あり（SPI0）	—	—
RSPCK遅延制御	なし	あり	あり	なし	あり
SSLネゲート遅延制御	なし	あり	あり	なし	あり
次アクセス遅延制御	なし	あり	あり	なし	あり
転送起動方法	SSL入力アクティブまたはRSPCK発振	送信バッファエンプティ割り込み要求発生で送信バッファ書き込み（SPTEF = 1）	送信バッファエンプティ割り込み要求発生で送信バッファ書き込み（SPTEF = 1）	RSPCK発振	送信バッファエンプティ割り込み要求発生で送信バッファ書き込み（SPTEF = 1）
シーケンス制御	なし	あり（SPI0）	あり（SPI0）	なし	あり（SPI0）
送信バッファエンプティ検出	あり				
受信バッファフル検出	あり（注2）				
オーバーランエラー検出	あり（注2）	あり（注2）（注4）	あり（注2）（注4）	あり（注2）	あり（注2）
パリティエラー検出	あり（注2）（注3）				

表 32.5　SPCR レジスタの設定と SPI のモードの関係

モード	スレーブ（SPI動作）	シングルマスタ（SPI動作）	マルチマスタ（SPI動作）	スレーブ（クロック同期式動作）	マスタ（クロック同期式動作）
モードフォルトエラー検出	あり（MODFEN = 1）	なし	あり	なし	なし
アンダーランエラー検出	あり	なし	なし	あり	なし

注 1.　この機能は本モードでは使用しません。
注 2.　SPCR.TXMD ビットが 1 のときは、受信バッファフル検出、オーバーランエラー検出、パリティエラー検出を行いません。
注 3.　SPCR2.SPPE ビットが 0 のときは、パリティエラー検出を行いません。
注 4.　SPCR2.SCKASE ビットが 1 のときは、オーバーランエラー検出を行いません。

32.3.2　SPI 端子の制御

SPI は、SPCR.MSTR、SPCR.MODFEN、SPCR.SPMS ビットの設定、および入出力ポートの PmnPFS.NCODR ビットの設定に基づき、端子の状態を切り替えます。端子状態と各ビットの設定値との関係を表 32.6 に示します。入出力ポートの PmnPFS.NCODR ビットの設定値を 0 にすると CMOS 出力となります。設定値を 1 にするとオープンドレイン出力となります。入出力ポートの設定も同じとなるよう設定してください。

表 32.6　端子状態とビット設定値の関係

モード	端子	端子状態（注2）	
		入出力ポートの PmnPFS.NCODR ビット = 0	入出力ポートの PmnPFS.NCODR ビット = 1
シングルマスタモード（SPI動作）（MSTR = 1、MODFEN = 0、SPMS = 0）	RSPCKn	CMOS出力	オープンドレイン出力
	SSLn0～SSLn3	CMOS出力	オープンドレイン出力
	MOSIn	CMOS出力	オープンドレイン出力
	MISOn	入力	入力
マルチマスタモード（SPI動作）（MSTR = 1、MODFEN = 1、SPMS = 0）	RSPCKn（注3）	CMOS出力／Hi-Z	オープンドレイン出力／Hi-Z
	SSLn0	入力	入力
	SSLn1～SSLn3（注3）	CMOS出力／Hi-Z	オープンドレイン出力／Hi-Z
	MOSIn（注3）	CMOS出力／Hi-Z	オープンドレイン出力／Hi-Z
	MISOn	入力	入力
スレーブモード（SPI動作）（MSTR = 0、SPMS = 0）	RSPCKn	入力	入力
	SSLn0	入力	入力
	SSLn1～SSLn3（注5）	Hi-Z（注1）	Hi-Z（注1）
	MOSIn	入力	入力
	MISOn（注4）	CMOS出力／Hi-Z	オープンドレイン出力／Hi-Z
マスタモード（クロック同期式動作）（MSTR = 1、MODFEN = 0、SPMS = 1）	RSPCKn	CMOS出力	オープンドレイン出力
	SSLn0～SSLn3（注5）	Hi-Z（注1）	Hi-Z（注1）
	MOSIn	CMOS出力	オープンドレイン出力
	MISOn	入力	入力
スレーブモード（クロック同期式動作）（MSTR = 0、SPMS = 1）	RSPCKn	入力	入力
	SSLn0～SSLn3（注5）	Hi-Z（注1）	Hi-Z（注1）
	MOSIn	入力	入力
	MISOn	CMOS出力	オープンドレイン出力

注 1.　この機能は本モードでは使用しません。
注 2.　SPI 機能が選択されていない兼用端子には、SPI の設定値は反映されません。
注 3.　SSLn0 がアクティブレベルの場合、端子状態が Hi-Z になります。
注 4.　SSLn0 が非アクティブレベルまたは SPCR.SPE ビットが 0 の場合、端子状態が Hi-Z になります。
注 5.　これらの端子は入出力ポート端子として使用できます。

シングルマスタモードまたはマルチマスタモード（SPI 動作）の SPI は、SPPCR.MOIFE ビットと SPPCR.MOIFV ビットの設定値に基づいて、SSL ネゲート期間（SPI0 のバースト転送における SSL 保持期間を含む）の MOSI 信号値を表 32.7 のように決定します。

表 32.7　SSL ネゲート期間の MOSI 信号値の決定方法

MOIFE ビット	MOIFV ビット	SSL ネゲート期間の MOSIn 信号値
0	0, 1	前回転送の最終データ
1	0	Low
1	1	High

32.3.3　SPI システム構成例

32.3.3.1　シングルマスタとシングルスレーブ（MCU はマスタ）

図 32.8 に、MCU がマスタである場合のシングルマスタとシングルスレーブの SPI システム構成例を示します。シングルマスタとシングルスレーブ構成では、MCU（マスタ）の SSLn0 ～ SSLn3 出力は使用されません。SPI スレーブの SSL 入力は Low に固定され、SPI スレーブの選択状態を維持します。(注 1)

MCU（マスタ）は、RSPCKn および MOSIn 信号をドライブします。SPI スレーブは、MISO 信号をドライブします。

注 1.　SPCMDm.CPHA ビットが 0 の場合に使用する転送フォーマットでは、SSL 信号をアクティブレベルに固定することができないスレーブデバイスも存在します。このような場合は、本 MCU の SSLni 出力をスレーブデバイスの SSL 入力に接続してください。

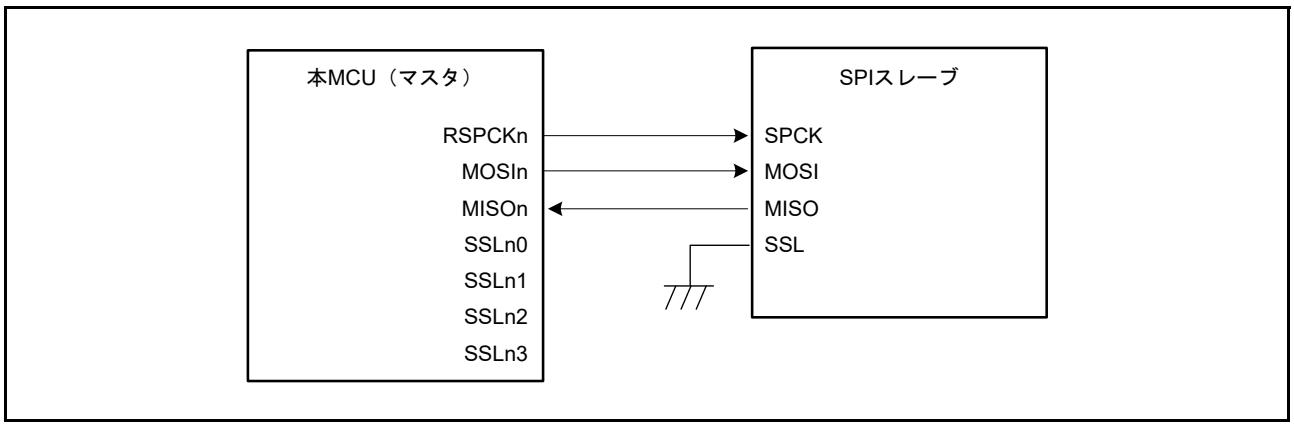


図 32.8　シングルマスタとシングルスレーブの構成例（MCU はマスタ）

32.3.3.2　シングルマスタとシングルスレーブ（MCU はスレーブ）

図 32.9 に、MCU がスレーブである場合のシングルマスタとシングルスレーブの SPI システム構成例を示します。MCU がスレーブとして動作する場合は、SSLn0 端子は SSL 入力として使用されます。SPI マスタは、SPCK および MOSI 信号をドライブします。MCU（スレーブ）は、MISOn 信号をドライブします。(注 1)

SPCMDm.CPHA ビットを 1 にしたシングルスレーブ構成の場合には、MCU（スレーブ）の SSLn0 入力は Low に固定され、MCU（スレーブ）は選択状態を維持します。これにより、シリアル転送を実行することも可能です（図 32.10）。

注 1.　SSLn0 が非アクティブレベルの場合、端子状態が Hi-Z になります。

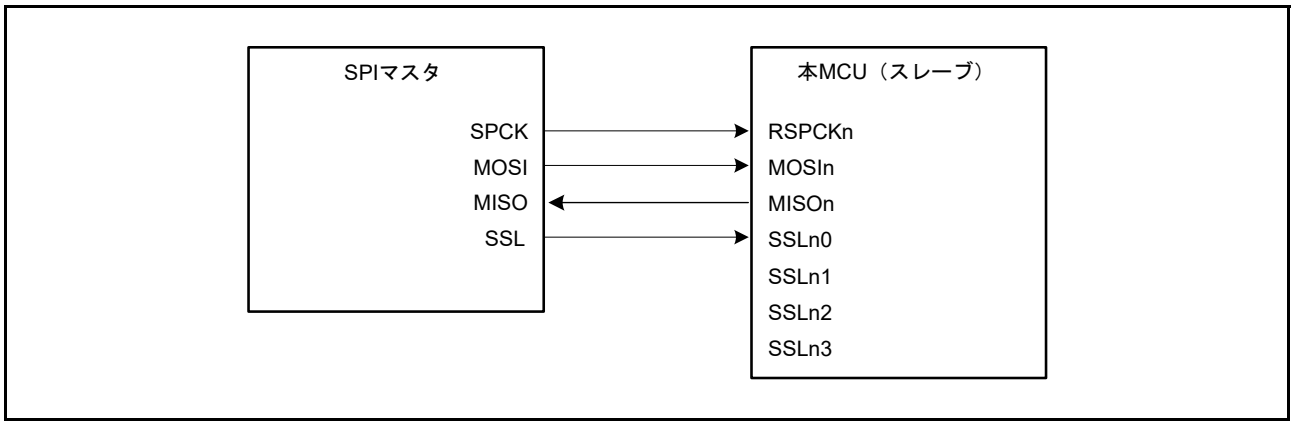


図 32.9　シングルマスタとシングルスレーブの構成例（MCU はスレーブ、CPHA = 0）

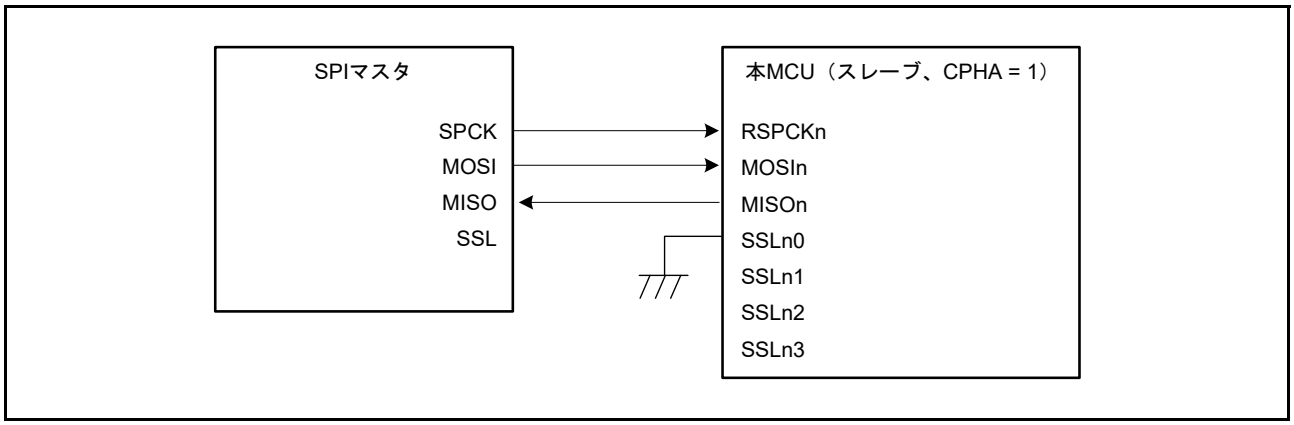


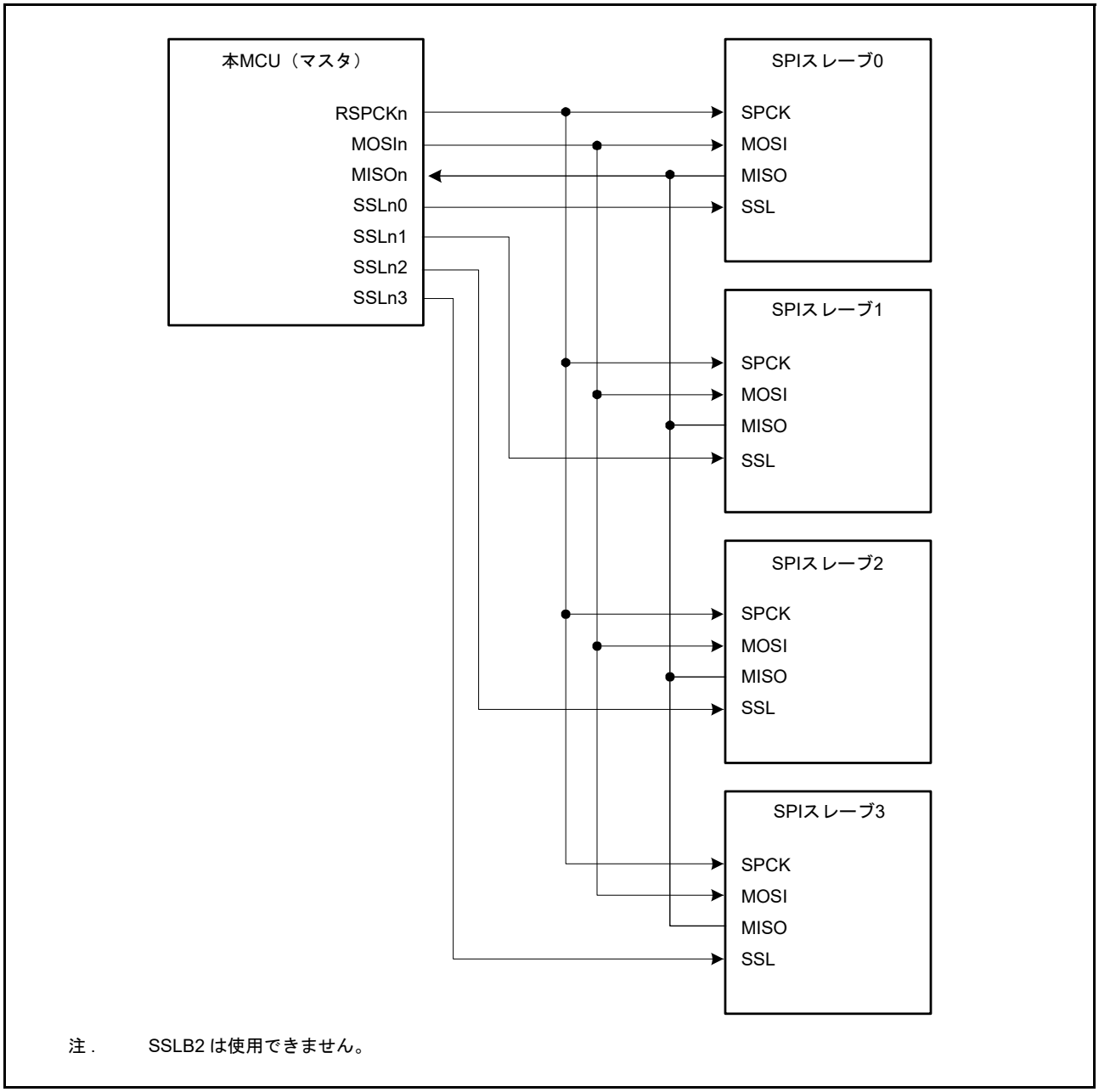
図 32.10　シングルマスタとシングルスレーブの構成例（MCU はスレーブ、CPHA = 1）

32.3.3.3　シングルマスタとマルチスレーブ（MCU はマスタ）

図 32.11 に、MCU がマスタである場合のシングルマスタとマルチスレーブの SPI システム構成例を示します。図 32.11 の例では、MCU（マスタ）と 4 つのスレーブ（SPI スレーブ 0 ～ SPI スレーブ 3）で SPI システムを構成しています。

MCU（マスタ）の RSPCKn 出力と MOSIn 出力は、SPI スレーブ 0 ～ SPI スレーブ 3 の SPCK 入力と MOSI 入力に接続します。SPI スレーブ 0 ～ SPI スレーブ 3 の MISO 出力は、すべて MCU（マスタ）の MISOn 入力に接続します。MCU（マスタ）の SSLn0 ～ SSLn3 出力は、それぞれ SPI スレーブ 0 ～ SPI スレーブ 3 の SSL 入力に接続します。

MCU（マスタ）は、RSPCKn 信号、MOSIn 信号、および SSLn0 ～ SSLn3 端子をドライブします。SPI スレーブ 0 ～ SPI スレーブ 3 のうち、SSL 入力に Low を入力されているスレーブが、MISO 信号をドライブします。



注 .　SSLB2 は使用できません。

図 32.11　シングルマスタとマルチスレーブの構成例（MCU はマスタ）

32.3.3.4　シングルマスタとマルチスレーブ（MCU はスレーブ）

図 32.12 に、MCU がスレーブである場合のシングルマスタ／マルチスレーブの SPI システム構成例を示します。図 32.12 の例では、SPI マスタと 2 つの MCU（スレーブ X、スレーブ Y）で SPI システムを構成しています。

SPI マスタの SPCK 出力と MOSI 出力は、MCU（スレーブ X、スレーブ Y）の RSPCKn 入力と MOSIn 入力に接続します。MCU（スレーブ X、スレーブ Y）の MISOn 出力は、すべて SPI マスタの MISO 入力に接続します。SPI マスタの SSLX 出力、SSLY 出力は、それぞれ MCU（スレーブ X、スレーブ Y）の SSLn0 入力に接続します。

SPI マスタは、SPCK、MOSI、SSLX、SSLY をドライブします。MCU スレーブ（X、Y）のうち、SSLn0 入力に Low を入力されているスレーブが、MISOn をドライブします。

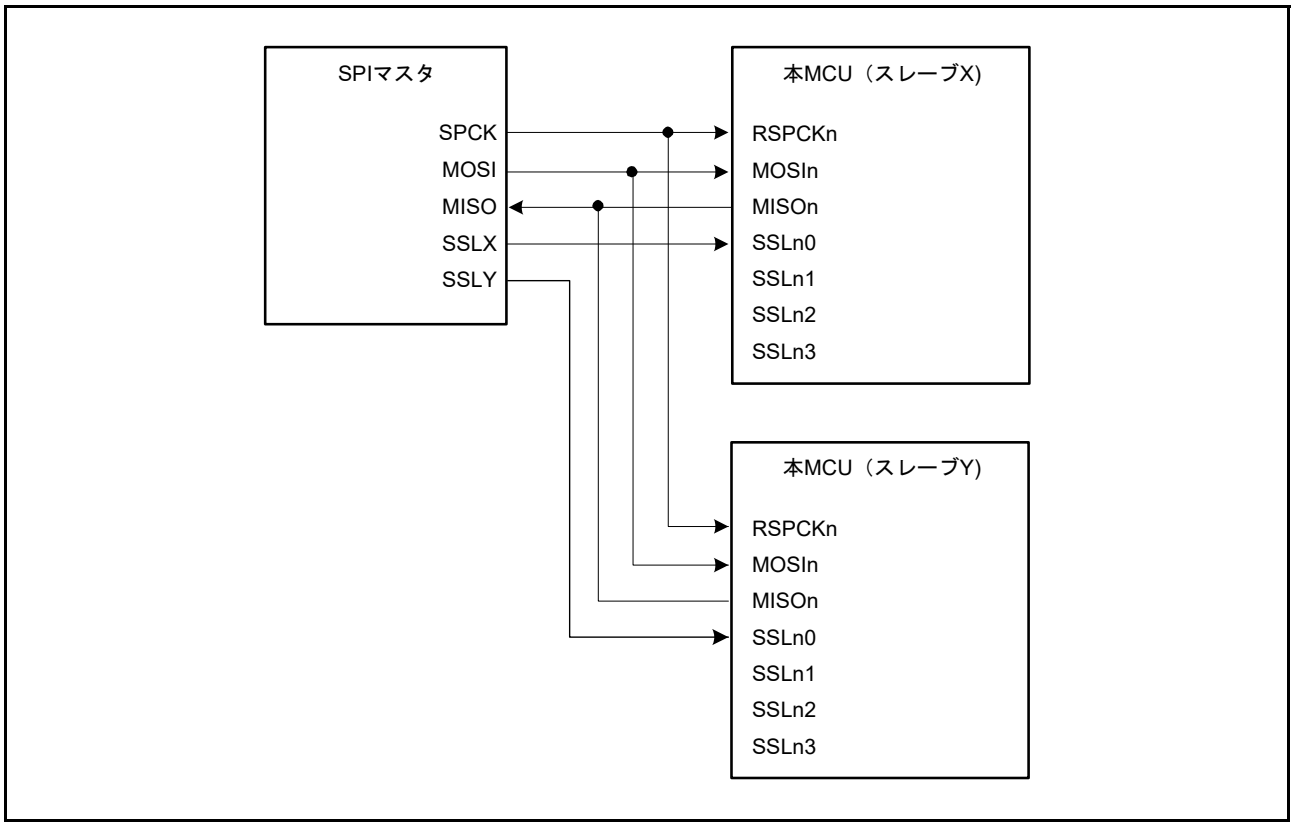


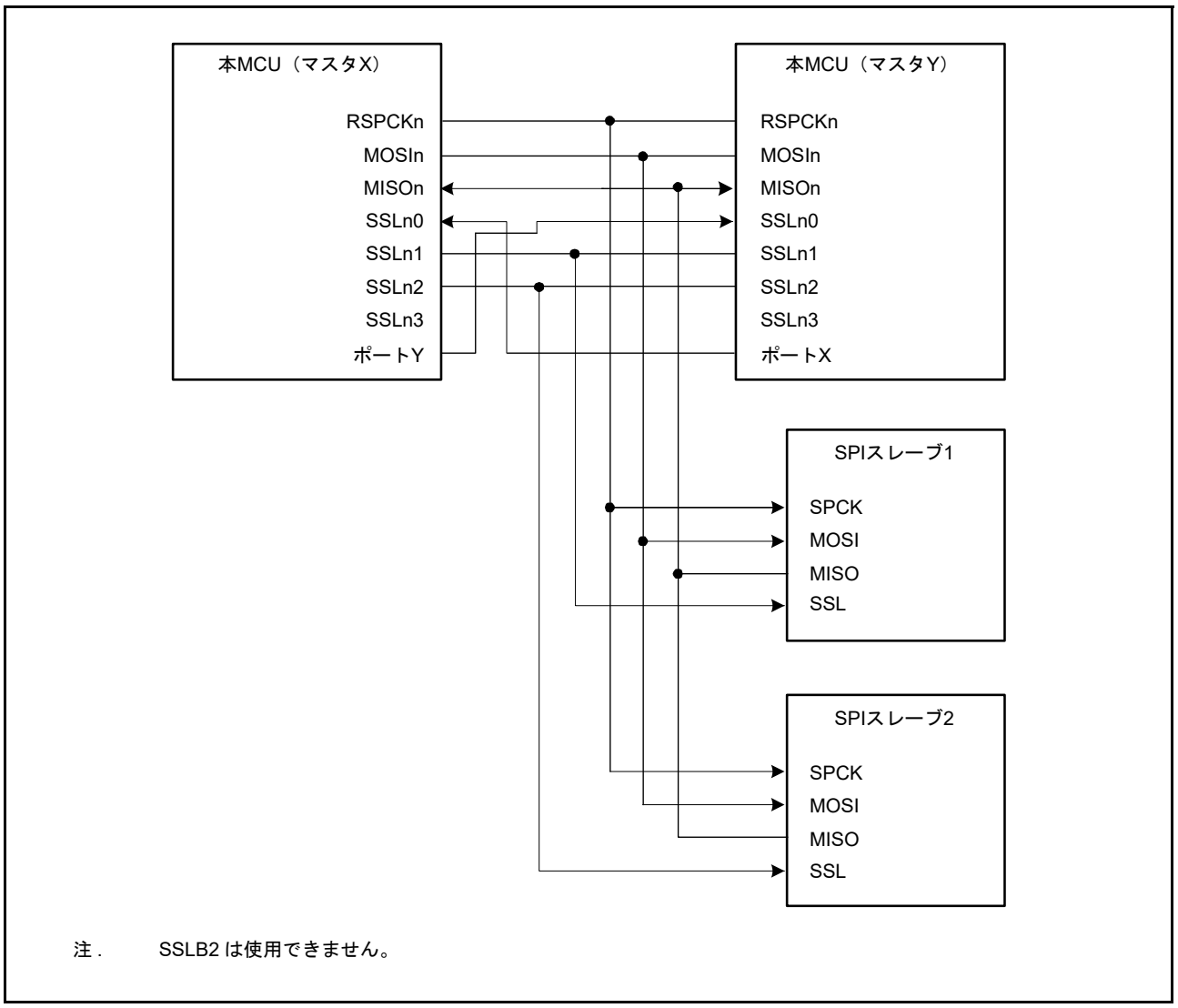
図 32.12　シングルマスタとマルチスレーブの構成例（MCU はスレーブ）

32.3.3.5　マルチマスタとマルチスレーブ（MCU はマスタ）

図 32.13 に、MCU がマスタである場合のマルチマスタ／マルチスレーブの SPI システム構成例を示します。図 32.13 の例では、2 つの MCU（マスタ X、マスタ Y）と 2 つの SPI スレーブ（SPI スレーブ 1、SPI スレーブ 2）で SPI システムを構成しています。

MCU（マスタ X、マスタ Y）の RSPCKn 出力と MOSIn 出力は、SPI スレーブ 1、SPI スレーブ 2 の RSPCK 入力と MOSI 入力に接続します。SPI スレーブ 1、SPI スレーブ 2 の MISO 出力は、MCU（マスタ X、マスタ Y）の MISOn 入力に接続します。MCU（マスタ X）の任意の汎用ポート Y 出力は、MCU（マスタ Y）の SSLn0 入力に接続します。MCU（マスタ Y）の任意の汎用ポート X 出力は、MCU（マスタ X）の SSLn0 入力に接続します。MCU（マスタ X、マスタ Y）の SSLn1 出力と SSLn2 出力は、SPI スレーブ 1、SPI スレーブ 2 の SSL 入力に接続します。この構成例では、SSLn0 入力とスレーブ接続用の SSLn1 出力および SSLn2 出力のみでシステムを構成できるため、MCU の SSLn3 出力は必要ありません。

MCU は、SSLn0 入力レベルが High の場合には、RSPCKn、MOSIn、SSLn1、SSLn2 をドライブします。SSLn0 入力レベルが Low の場合、MCU はモードフォルトエラーを検出し、RSPCKn、MOSIn、SSLn1、および SSLn2 を Hi-Z にして、他方のマスタに SPI バスを直接解放します。SPI スレーブ 1 および SPI スレーブ 2 のうち、SSL 入力に Low を入力されているスレーブが MISO をドライブします。



注 .　SSLB2 は使用できません。

図 32.13　マルチマスタとマルチスレーブの構成例（MCU はマスタ）

32.3.3.6　クロック同期式モードのマスタとスレーブ（MCU はマスタ）

図 32.14 に、MCU がマスタである場合のクロック同期式モードのマスタ／スレーブの構成を示します。クロック同期式モードのマスタとスレーブでは、MCU（マスタ）の SSLn0 ～ SSLn3 は使用しません。

MCU（マスタ）は、RSPCKn および MOSIn 信号をドライブします。SPI スレーブは、MISO 信号をドライブします。

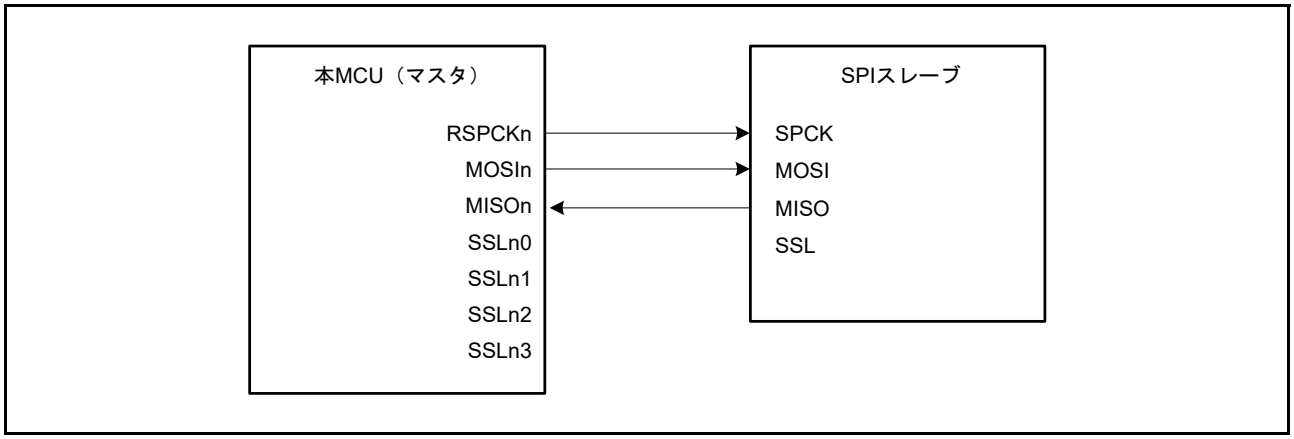


図 32.14　クロック同期式モードのマスタとスレーブの構成例（MCU はマスタ）

32.3.3.7　クロック同期式モードのマスタとスレーブ（MCU はスレーブ）

図 32.15 に、MCU がスレーブである場合のクロック同期式モードのマスタ／スレーブの構成例を示します。MCU をスレーブ（クロック同期動作）として使用する場合は、MCU（スレーブ）は MISOn 信号をドライブし、SPI マスタは SPCK および MOSI 信号をドライブします。MCU（スレーブ）の SSLn0 ～ SSLn3 は使用しません。

SPCMDm.CPHA ビットを 1 にしたシングルスレーブ構成の場合のみ、MCU（スレーブ）はシリアル転送の実行が可能です。

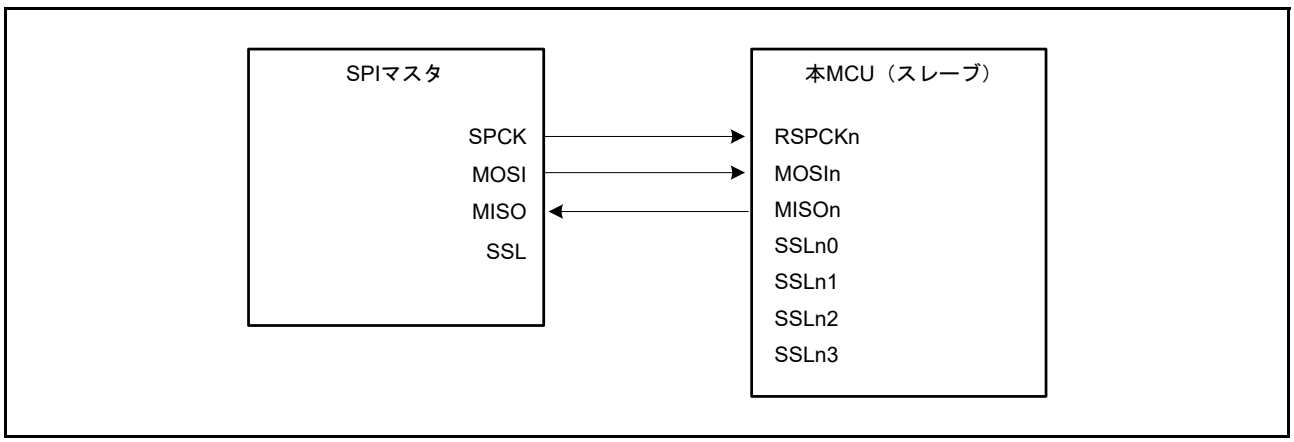


図 32.15　クロック同期式モードのマスタとスレーブの構成例（MCU はスレーブ、CPHA = 1）

32.3.4　データフォーマット

SPI のデータフォーマットは、SPI コマンドレジスタ m（SPCMDm）（m = 0 ～ 7）と SPI コントロールレジスタ 2（SPCR2）のパリティ許可ビット（SPPE）の設定値に依存します。並び順が MSB ファーストか LSB ファーストかにかかわらず、SPI は SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）の LSB ビットから設定データ長に該当するビット分の範囲を転送データとして扱います。

以下では、転送前または転送後のデータの 1 フレーム分のデータフォーマットについて説明します。

(a)　パリティ機能無効時のデータフォーマット

パリティ機能無効時は、SPI コマンドレジスタ m の SPI データ長設定ビット（SPI0 では SPCMDm.SPB[3:0]、SPI1 では SPCMD0.SPB[3:0]）で設定したビット長のデータの送受信を行います。

(b)　パリティ機能有効時のデータフォーマット

パリティ機能有効時は、SPI コマンドレジスタ m の SPI データ長設定ビット（SPI0 では SPCMDm.SPB[3:0]、SPI1 では SPCMD0.SPB[3:0]）で設定したビット長のデータの送受信を行います。ただし、最終ビットはパリティビットです。

- SPI0

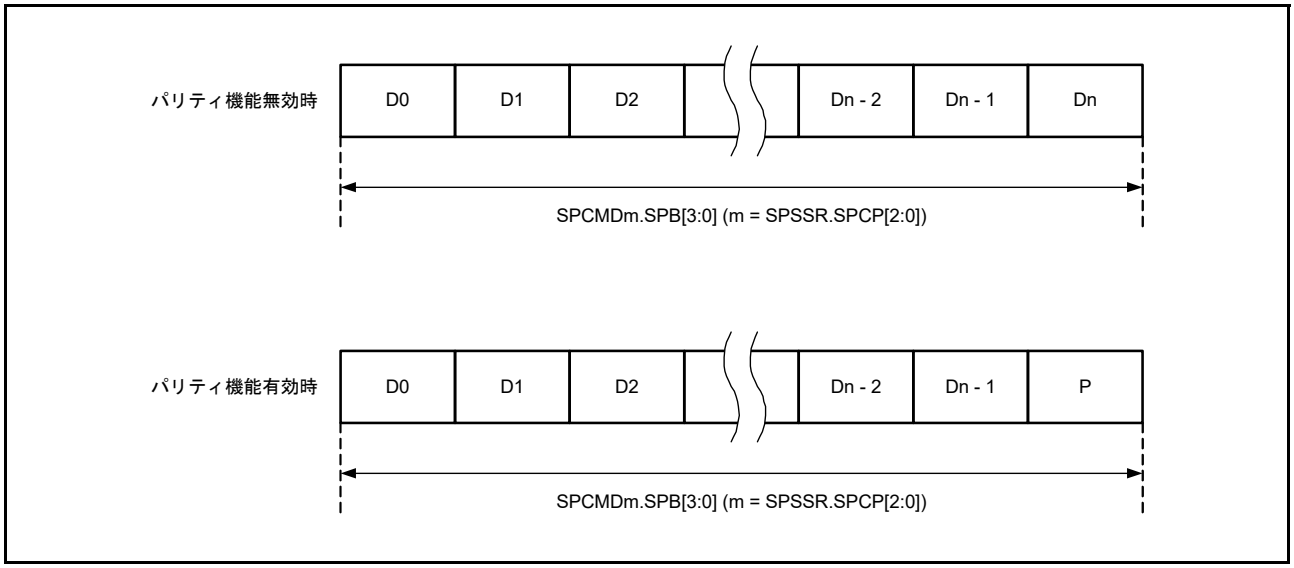


図 32.16　パリティ機能無効時と有効時のデータフォーマット（SPI0）

- SPI1

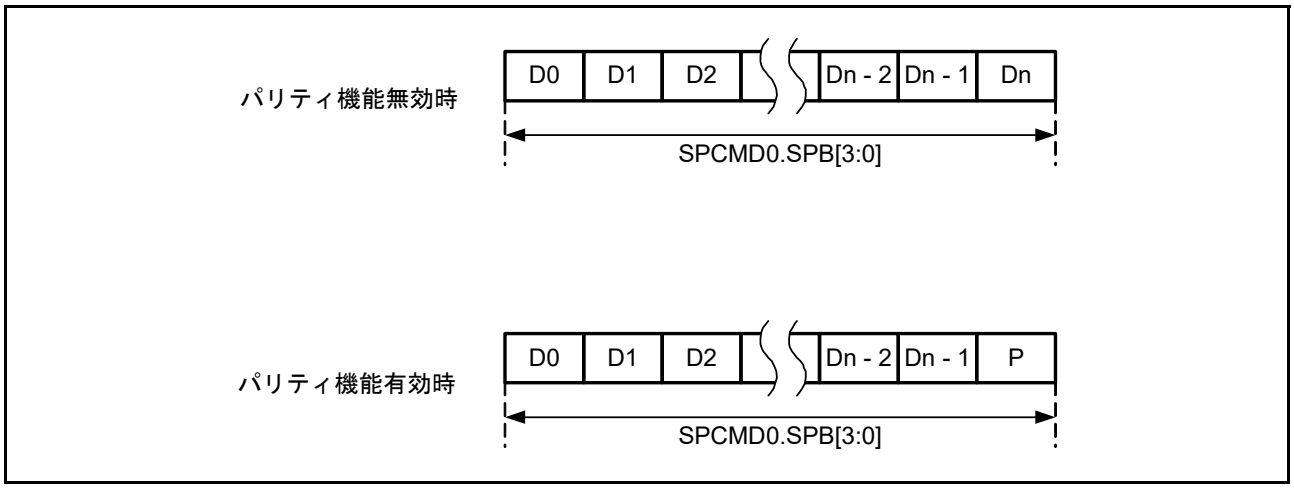


図 32.17 パリティ機能無効時と有効時のデータフォーマット（SPI1）

32.3.4.1　パリティ機能無効時の動作（SPCR2.SPPE = 0）

パリティ機能が無効の場合、送信データを加工せず、シフトレジスタにコピーします。以下では、SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）とシフトレジスタの関係を、MSB/LSB ファーストとビット長の組み合わせで説明します。

(1)　32 ビットデータの MSB ファースト転送

図 32.18 に、パリティ機能無効時に、SPI がデータ長 32 ビットの MSB ファースト転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、送信バッファの現ステージのビット T31 ～ T00 をシフトレジスタにコピーします。送信データは、T31 → T30 →・・・T00 の順にシフトレジスタの値をシフトして送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 0 から格納し、1 ビットごと受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、R31 ～ R00 ビットまでデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。

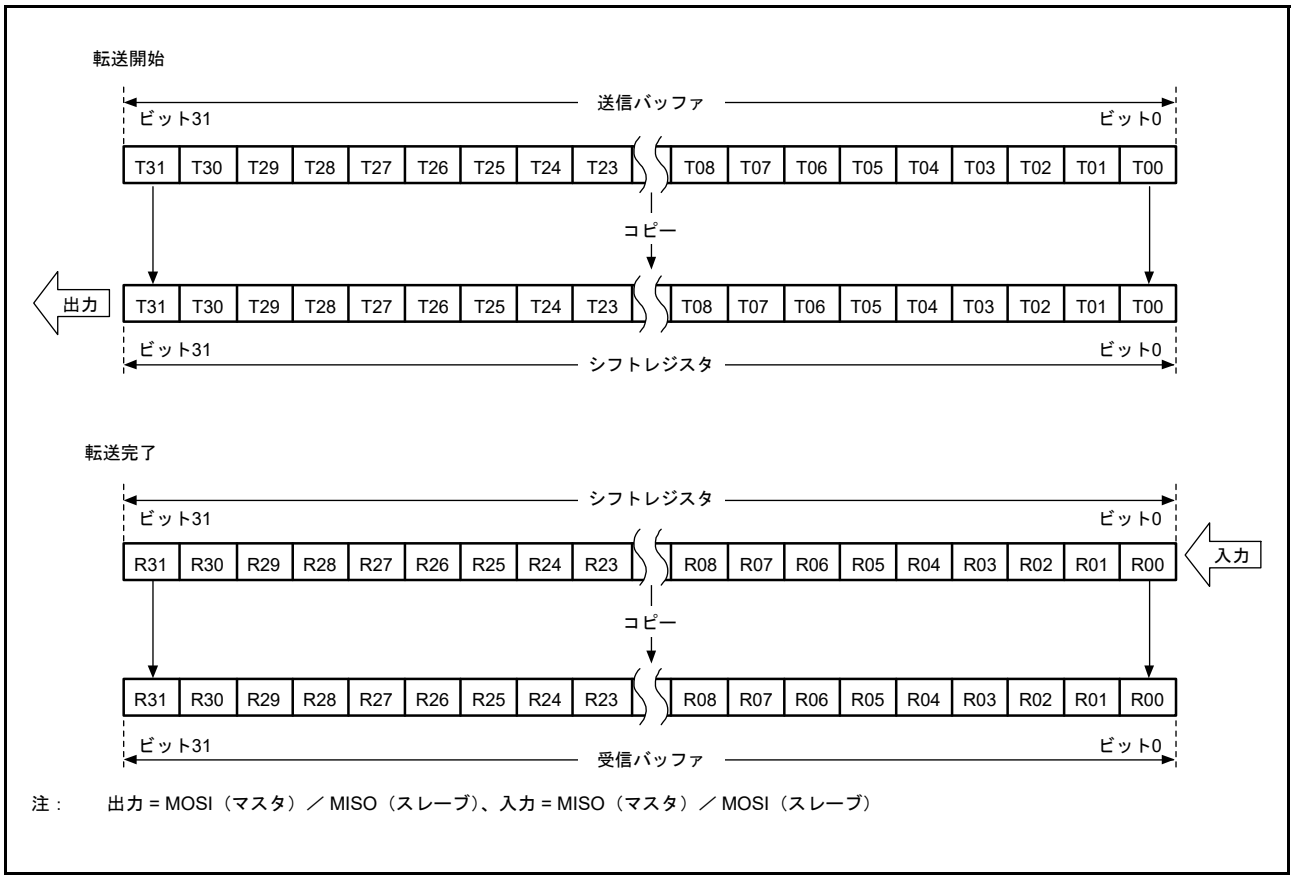


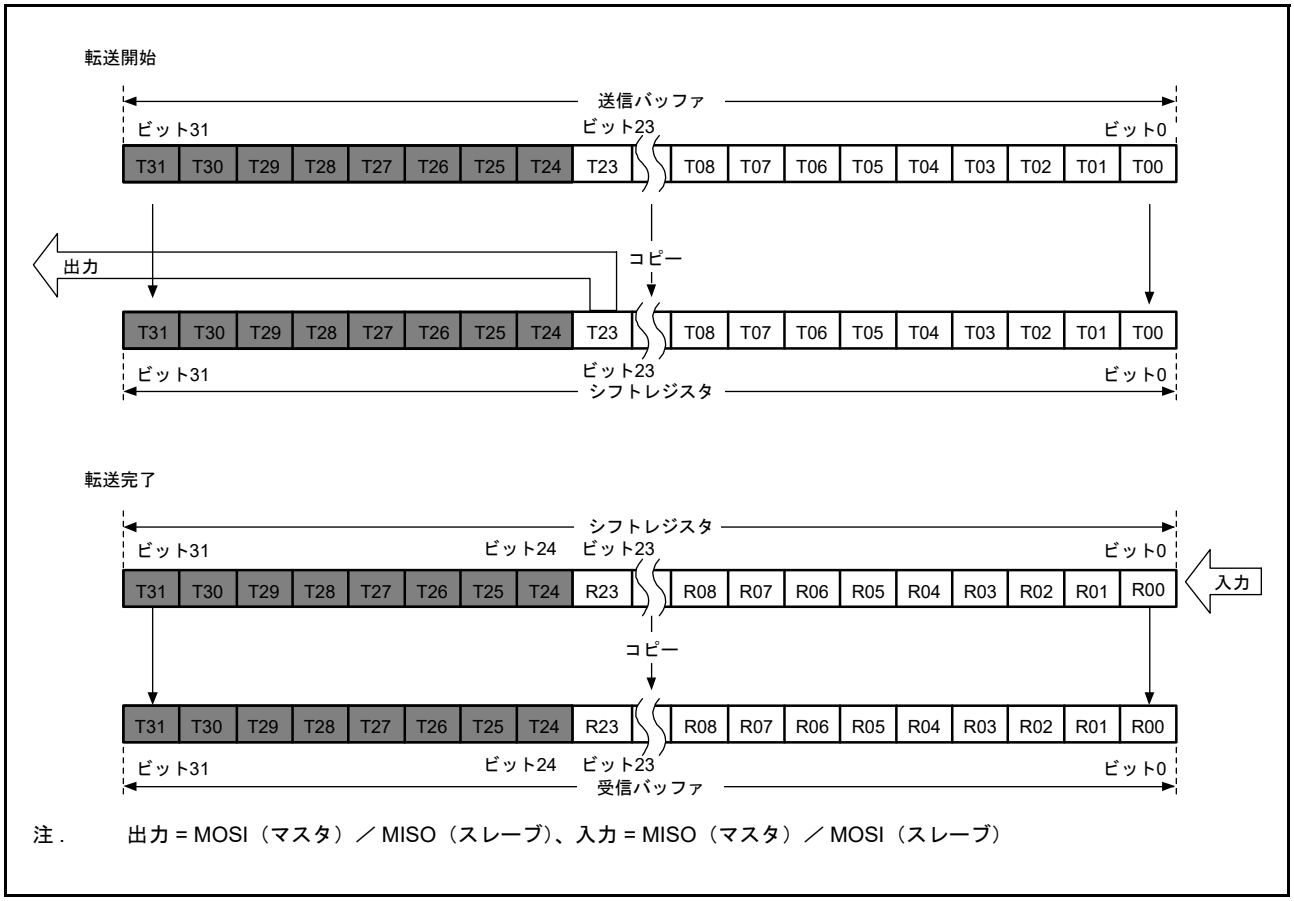
図 32.18　MSB ファースト転送（32 ビットデータ／パリティ機能無効）

(2)　24 ビットデータの MSB ファースト転送

図 32.19 に、パリティ機能無効時に、SPI がデータ長 32 ビット以外のデータを MSB ファースト転送する例として、24 ビットのデータ転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、送信バッファの現ステージの下位 24 ビット（T23 ～ T00）をシフトレジスタにコピーします。送信データは、T23 → T22 →・・・T00 の順にシフトレジスタの値をシフトして送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 0 から格納し、1 ビットごと受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、R23 ～ R00 ビットまでデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。受信バッファの上位 8 ビットには送信バッファの上位 8 ビットの値が格納されます。送信時に T31 ～ T24 ビットに 0 を書き込んでおくことにより、受信バッファの上位 8 ビットに 0 を入れることができます。



注 .　出力 = MOSI（マスタ）／ MISO（スレーブ）、入力 = MISO（マスタ）／ MOSI（スレーブ）

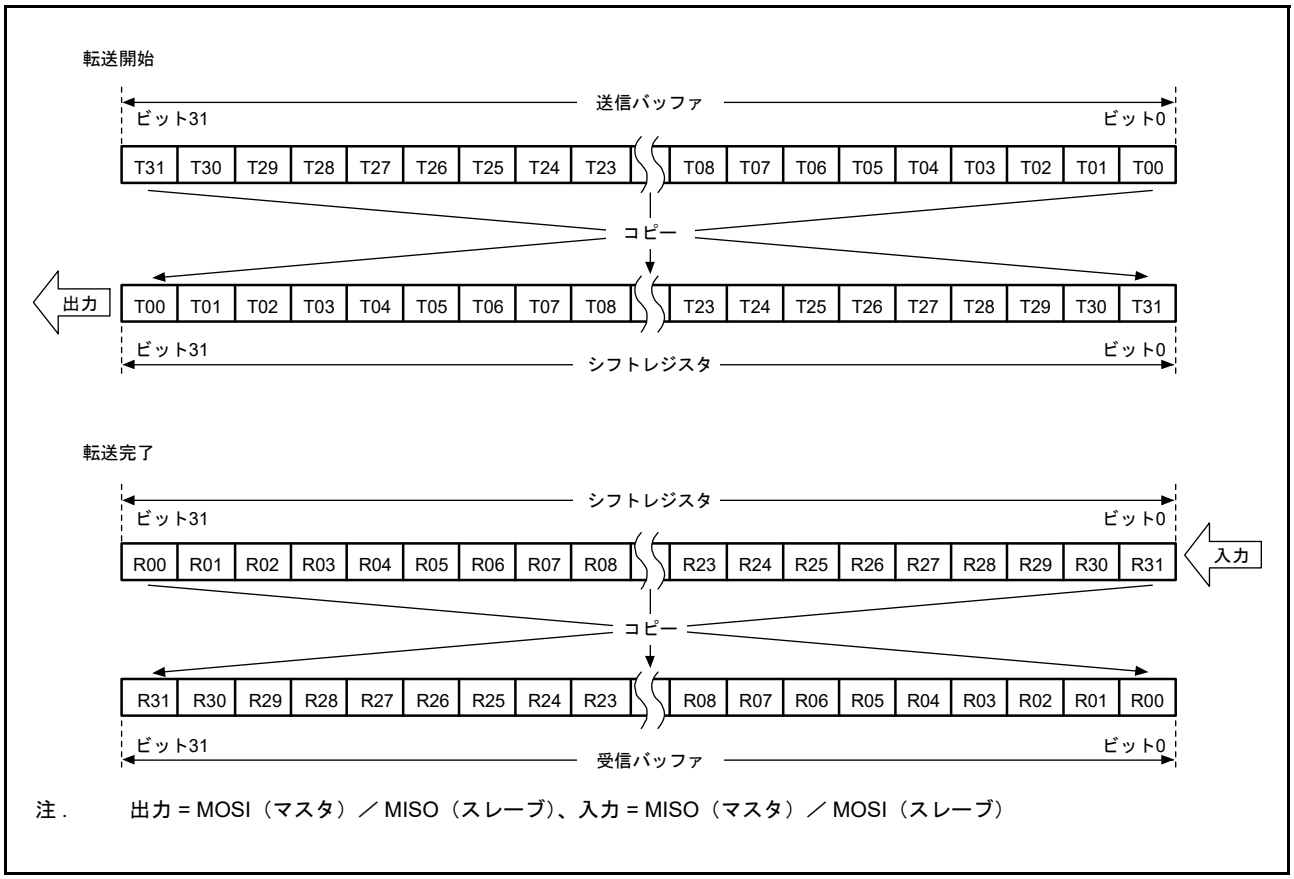
図 32.19　MSB ファースト転送（24 ビットデータ／パリティ機能無効）

(3)　32 ビットデータの LSB ファースト転送

図 32.20 に、パリティ機能無効時に SPI がデータ長 32 ビットの LSB ファースト転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、送信バッファの現ステージのビット T31 ～ T00 をビット単位で T00 ～ T31 の順序に並び替えて、シフトレジスタにコピーします。送信データは、T00 → T01 →・・・T31 の順にシフトレジスタの値をシフトして送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 0 から格納し、1 ビットごと受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、R00 ～ R31 ビットまでデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。



注 .　出力 = MOSI（マスタ）／ MISO（スレーブ）、入力 = MISO（マスタ）／ MOSI（スレーブ）

図 32.20　LSB ファースト転送（32 ビットデータ／パリティ機能無効）

(4)　24 ビットデータの LSB ファースト転送

図 32.21 に、パリティ機能無効時に、SPI がデータ長 32 ビット以外のデータを LSB ファースト転送する例として、24 ビットのデータ転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、送信バッファの現ステージの下位 24 ビット（T23 ～ T00）をビット単位で T00 ～ T23 の順序に並び換えて、シフトレジスタにコピーします。送信データは、T00 → T01 →・・・T23 の順にシフトレジスタの値をシフトして送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 8 から格納し始め、1 ビットごとに受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、R00 ～ R23 ビットまでデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。

受信バッファの上位 8 ビットには送信バッファの上位 8 ビットの値が格納されます。送信時に T31 ～ T24 ビットに 0 を書き込んでおくことにより、受信バッファの上位 8 ビットに 0 を入れることができます。

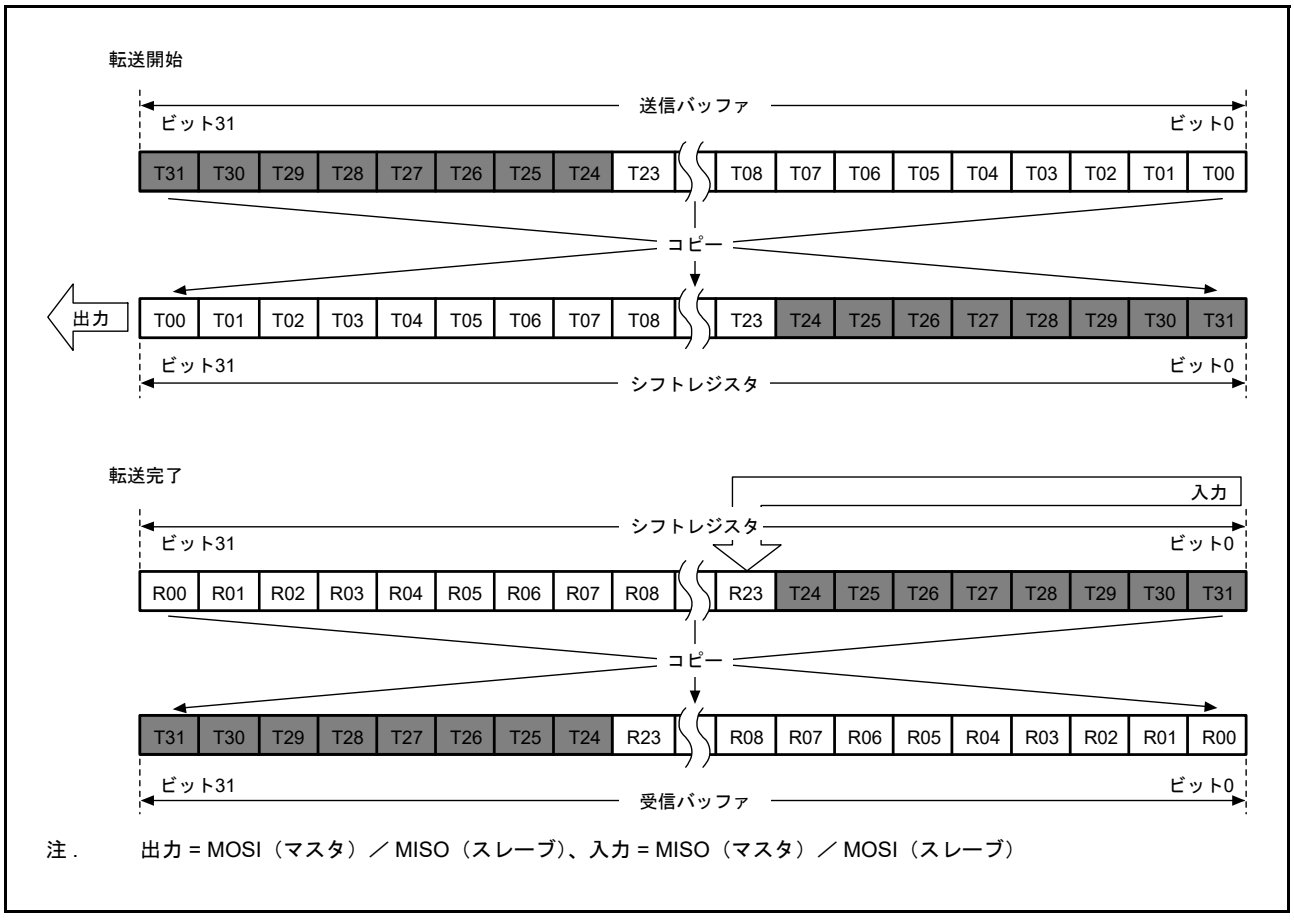


図 32.21　　LSB ファースト転送（24 ビットデータ／パリティ機能無効）

32.3.4.2　パリティ機能有効時（SPCR2.SPPE = 1）

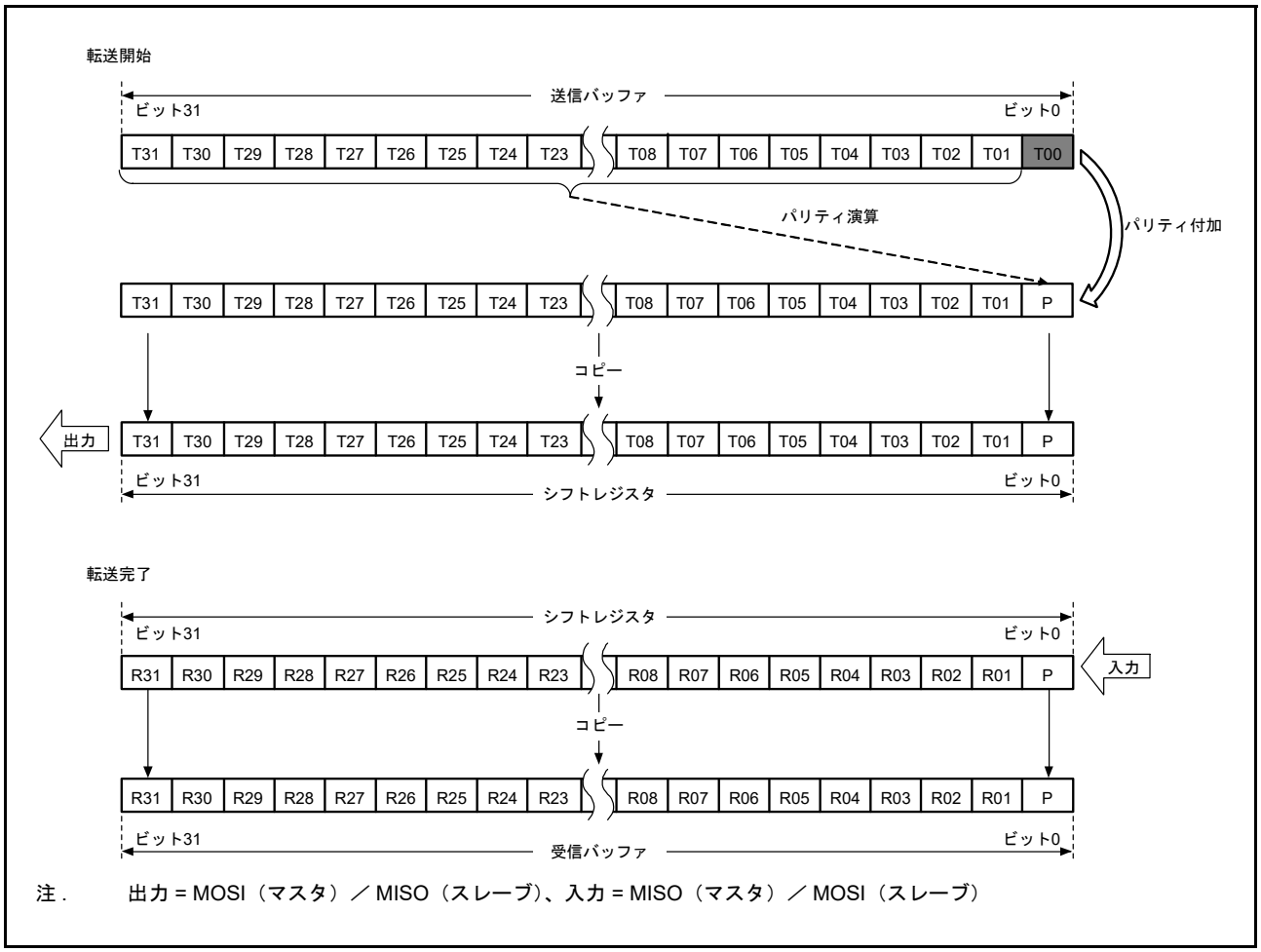
パリティ機能が有効の場合、送信データの最下位ビットはパリティビットになります。パリティビットの値は、ハードウェアが計算します。

(1)　32 ビットデータの MSB ファースト転送

図 32.22 に、パリティ機能有効時に、SPI がデータ長 32 ビットの MSB ファースト転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、最初に T31 ～ T01 ビットからパリティビット（P）の値を計算し、最終ビットである T00 と置き換え、値全体をシフトレジスタにコピーします。データは、T31 → T30 →・・・T01 → P の順に送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 0 から格納し、1 ビットごと受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、R31 ～ P ビットまでデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。シフトレジスタにデータをコピー後、パリティエラーがないか R31 ～ P のデータをチェックします。



注 .　出力 = MOSI（マスタ）／ MISO（スレーブ）、入力 = MISO（マスタ）／ MOSI（スレーブ）

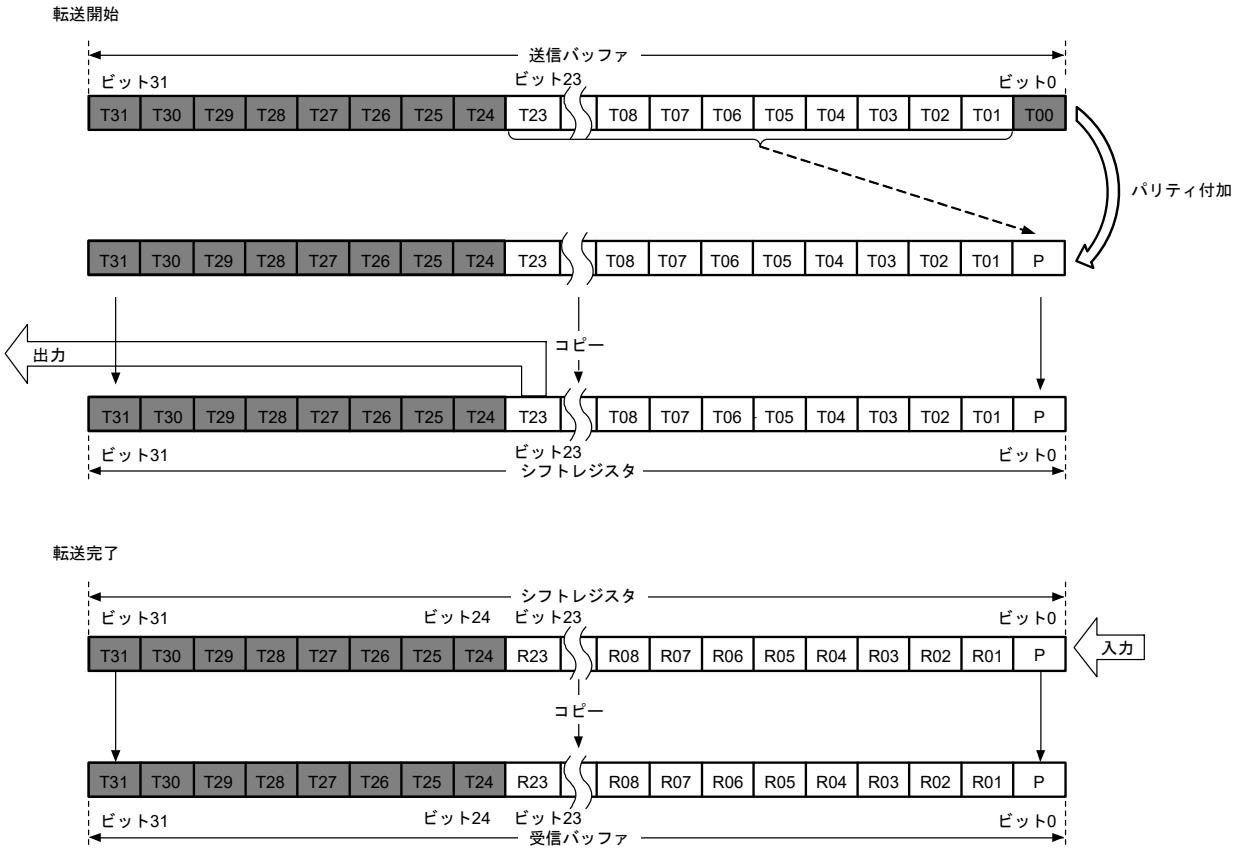
図 32.22　MSB ファースト転送（32 ビットデータ／パリティ機能有効）

(2)　24 ビットデータの MSB ファースト転送

図 32.23 に、パリティ機能有効時に、SPI がデータ長 32 ビット以外のデータを MSB ファースト転送する例として、24 ビットのデータ転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、T23 ～ T01 ビットからパリティビット（P）の値を計算し、最終ビットである T00 と置き換え、値全体をシフトレジスタにコピーします。データは、T23 → T22 →・・・T01 → P の順に送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 0 から格納し、1 ビットごと受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、R23 ～ P ビットまでデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。シフトレジスタにデータをコピー後、パリティエラーがないか R23 ～ P のデータをチェックします。受信バッファの上位 8 ビットには送信バッファの上位 8 ビットの値が格納されます。送信時に T31 ～ T24 ビットに 0 を書き込んでおくことにより、受信バッファの上位 8 ビットに 0 を入れることができます。



注 .　出力 = MOSI（マスタ）／ MISO（スレーブ）、入力 = MISO（マスタ）／ MOSI（スレーブ）

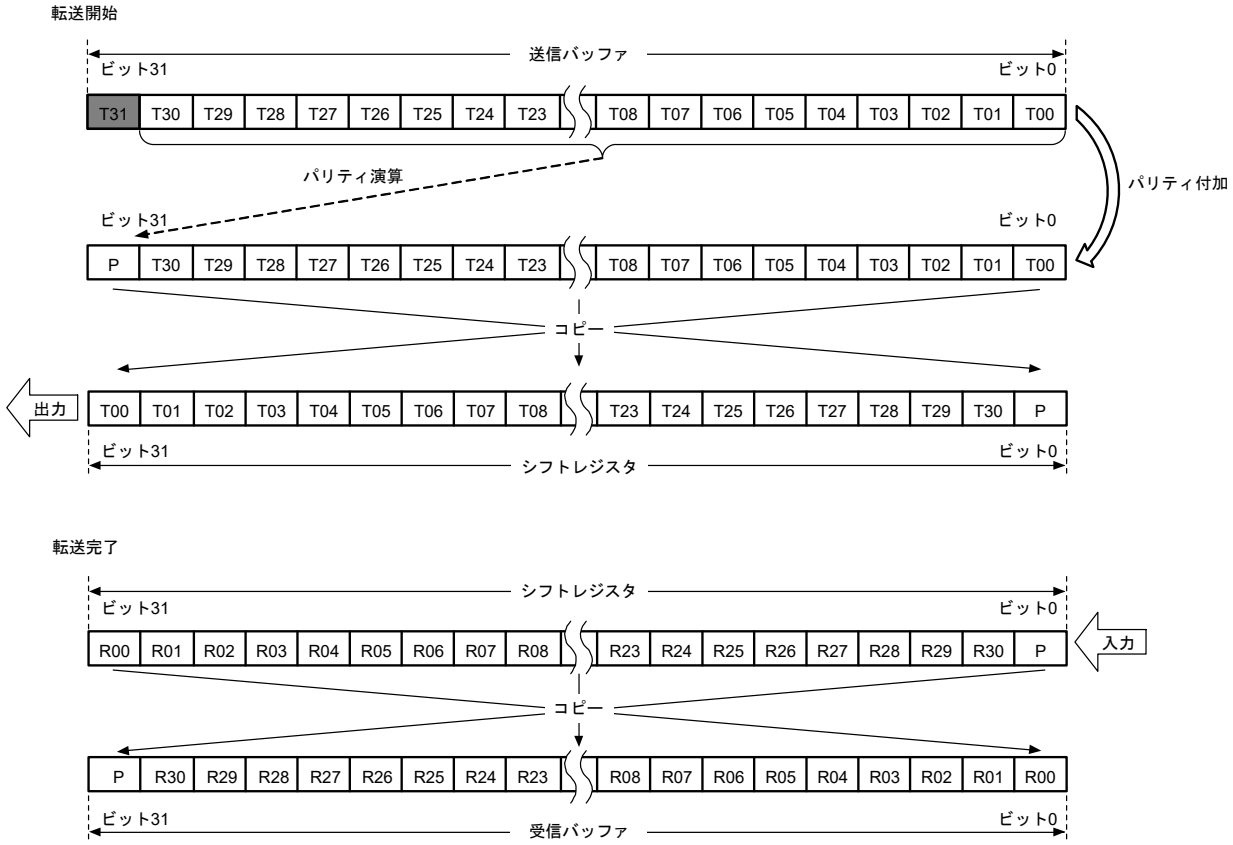
図 32.23　MSB ファースト転送（24 ビットデータ／パリティ機能有効）

(3)　32 ビットデータの LSB ファースト転送

図 32.24 に、パリティ機能有効時に、SPI がデータ長 32 ビットの LSB ファースト転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、T30 ～ T00 ビットからパリティビット（P）の値を計算し、最終ビットである T31 と置き換え、値全体をシフトレジスタにコピーします。送信データは、T00 → T01 →・・・T30 → P の順番に送信します。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 0 から格納し始め、1 ビットごと受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、ビット R00 ～ P までデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。シフトレジスタにデータをコピー後、パリティエラーがないか R00 ～ P のデータをチェックします。



注 .　出力 = MOSI（マスタ）／ MISO（スレーブ）、入力 = MISO（マスタ）／ MOSI（スレーブ）

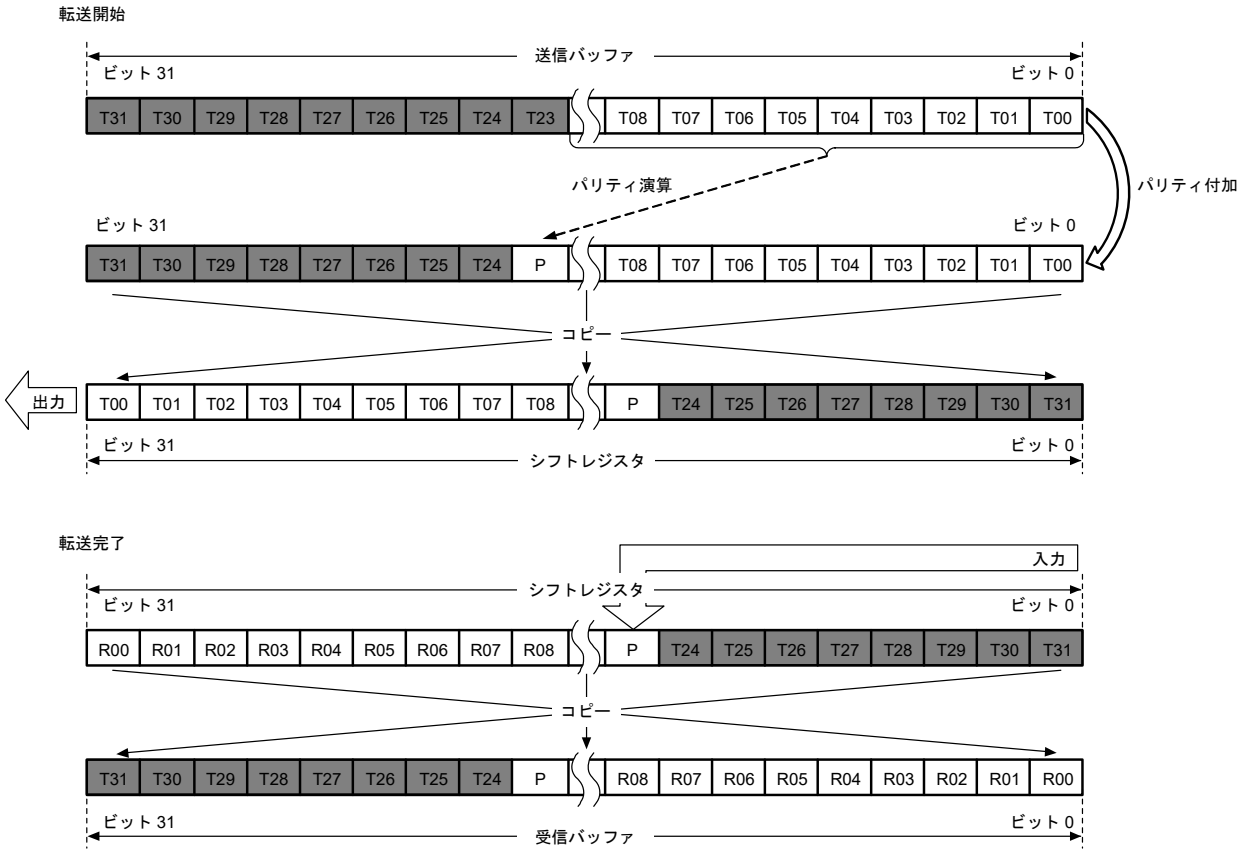
図 32.24　LSB ファースト転送（32 ビットデータ／パリティ機能有効）

(4)　24 ビットデータの LSB ファースト転送

図 32.25 に、パリティ機能有効時に、SPI がデータ長 32 ビット以外のデータを LSB ファースト転送する例として、24 ビットのデータ転送を実施する場合の SPI データレジスタ（SPDR）とシフトレジスタの動作内容を示します。

送信時は、T22 ～ T00 ビットからパリティビット（P）の値を計算し、最終ビットである T23 と置き換え、値全体をシフトレジスタにコピーします。データは、T00 → T01 →・・・T22 → P の順に送信されます。

受信時は、受信データをシフトレジスタのビット 8 から格納し始め、1 ビットごとに受信データをシフトします。必要数分の RSPCK 周期が入力され、ビット R00 ～ P までデータがたまると、シフトレジスタの値を受信バッファにコピーします。シフトレジスタにデータをコピー後、パリティエラーがないか R00 ～ P のデータをチェックします。受信バッファの上位 8 ビットには送信バッファの上位 8 ビットの値が格納されます。送信時に T31 ～ T24 ビットに 0 を書き込んでおくことにより、受信バッファの上位 8 ビットに 0 を入れることができます。



注 .　出力 = MOSI（マスタ）／ MISO（スレーブ）、入力 = MISO（マスタ）／ MOSI（スレーブ）

図 32.25　LSB ファースト転送（24 ビットデータ／パリティ機能有効）

32.3.5　転送フォーマット

32.3.5.1　CPHA ビット = 0 の場合

図 32.26 に SPCMDm.CPHA ビットが 0 の場合に、8 ビットのデータをシリアル転送した場合の転送フォーマット例を示します。SPI がスレーブモード（SPCR.MSTR = 0）で、CPHA ビットが 0 の場合、クロック同期式動作（SPCR.SPMS ビット = 1）は行わないでください。図 32.26 において、RSPCKn（CPOL = 0）は SPCMDm.CPOL ビットが 0 の場合、RSPCKn（CPOL = 1）は SPCMDm.CPOL ビットが 1 の場合の RSPCKn 信号波形です。サンプリングタイミングは、SPI がシフトレジスタにシリアル転送データを取り込むタイミングを表します。各信号の入出力方向は、SPI の設定に依存します。詳細は、32.3.2　SPI 端子の制御を参照してください。

SPCMDm.CPHA ビットが 0 の場合には、SSLni 信号のアサートタイミングで、MOSIn 信号と MISOn 信号への有効データのドライブが開始されます。SSLni 信号のアサート後に発生する最初の RSPCKn 信号変化が、最初の転送データ取り込みになり、これ以降、1RSPCK 周期ごとにデータがサンプリングされます。MOSIn 信号と MISOn 信号の変化タイミングは、転送データ取り込みタイミングの 1/2RSPCK 周期後になります。CPOL ビットの設定値は、RSPCK 信号の動作タイミングには影響を与えず、信号極性のみに影響を与えます。

t1 は、SSLni 信号のアサートから RSPCKn 発振までの期間（RSPCK 遅延）を示します。t2 は、RSPCKn 発振停止から SSLni 信号のネゲートまでの期間（SSL ネゲート遅延）を示します。t3 は、シリアル転送終了後に次転送のための SSLni 信号アサートを抑制する期間（次アクセス遅延）を示します。t1、t2、t3 は、SPI システム上のマスタデバイスによって制御されます。MCU の SPI がマスタモードである場合の t1、t2、t3 については、32.3.10.1　マスタモード動作を参照してください。

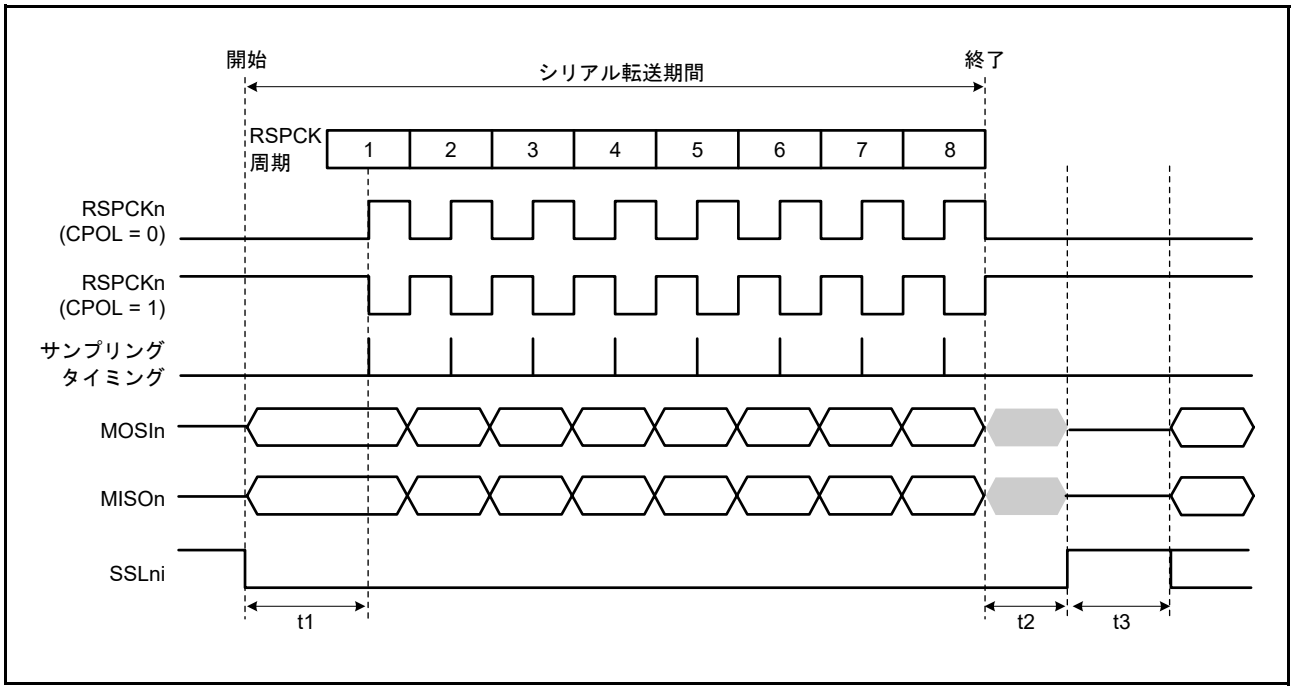


図 32.26　SPI 転送フォーマット（CPHA ビット = 0）

32.3.5.2　CPHA ビット = 1 の場合

図 32.27 に SPCMDm.CPHA ビットが 1 の場合に、8 ビットのデータをシリアル転送した場合の転送フォーマット例を示します。ただし、SPCR.SPMS ビットが 1 の場合は SSLni 信号を用いず、RSPCKn 信号、MOSIn 信号、MISOn 信号の 3 つの信号のみで通信を行います。図 32.27 において、RSPCK（CPOL = 0）は、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の場合の RSPCKn 信号波形を示し、RSPCK は SPCMDm.CPOL ビットが 1 の場合の RSPCKn 信号波形を示します。サンプリングタイミングは、SPI がシフトレジスタにシリアル転送データを取り込むタイミングを示しています。各信号の入出力方向は、SPI のモード（マスタ／スレーブ）に依存します。詳細は、32.3.2　SPI 端子の制御を参照してください。

SPCMDm.CPHA ビットが 1 の場合には、SSLni 信号のアサートタイミングで、MISOn 信号への無効データのドライブが開始されます。SSLni 信号のアサート後に発生する最初の RSPCKn 信号変化で、MOSIn 信号と MISOn 信号への有効データの出力が開始され、これ以降、1RSPCK 周期ごとにデータが更新されます。転送データの取り込みは、このデータ更新タイミングの 1/2RSPCK 周期後になります。SPCMDm.CPOL ビットの設定値は、RSPCKn 信号の動作タイミングには影響を与えず、信号極性のみに影響を与えます。

t1、t2、t3 の内容は、CPHA ビット = 0 の場合と同様です。MCU の SPI がマスタモードである場合の t1、t2、t3 については、32.3.10.1　マスタモード動作を参照してください。

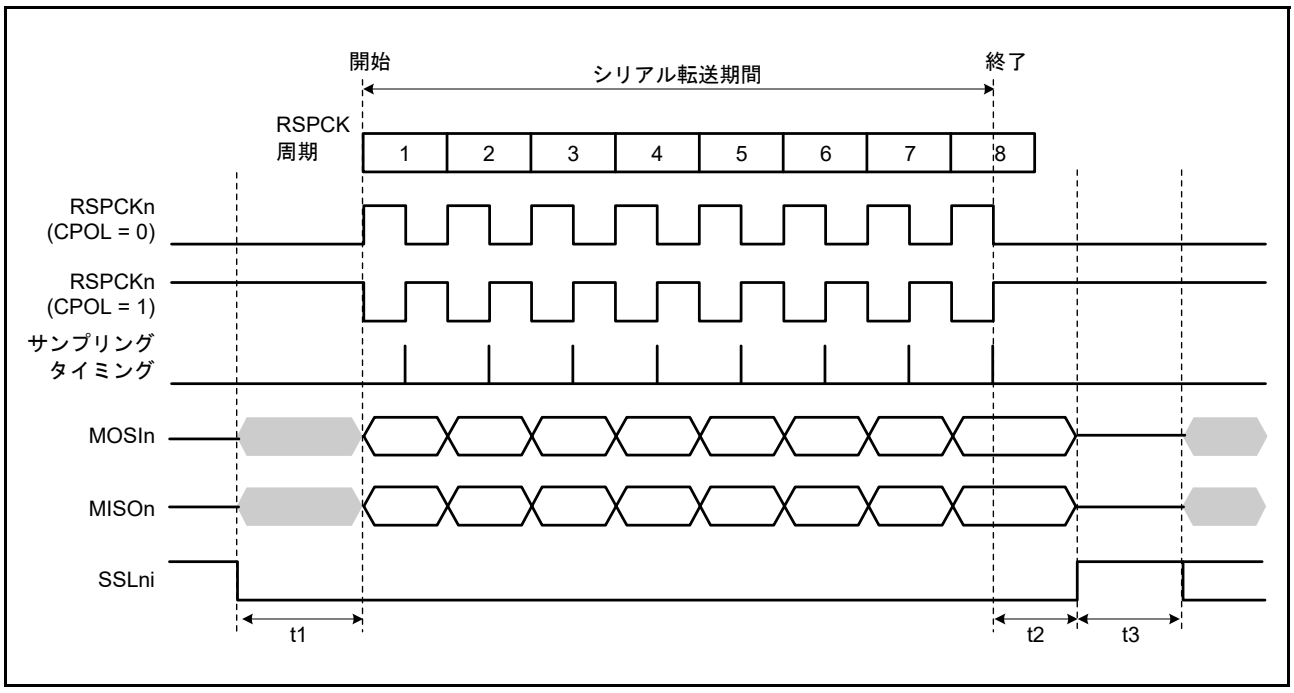


図 32.27　SPI 転送フォーマット（CPHA ビット = 1）

32.3.6　データ転送モード

通信動作モード選択ビット（SPCR.TXMD）の設定により、全二重同期式シリアル通信または送信のみの動作が選択できます。図 32.28、図 32.29 に記載のレジスタアクセスは、SPDR/SPDR_HA レジスタへのアクセス状況を示しています。W は書き込みサイクルを示しています。

32.3.6.1　全二重同期式シリアル通信（SPCR.TXMD = 0）

図 32.28 に、通信動作モード選択ビット（SPCR.TXMD）を 0 にした場合の動作例を示します。この例では、SPI0 の場合は SPDCR.SPFC[1:0] ビットが 00b、SPCMDm.CPHA ビットが 1、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI1 の場合は SPCMD0.CPHA ビットが 1、SPCMD0.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI が 8 ビットのシリアル転送を実行しています。RSPCKn 波形の下に記載した数字は、RSPCK サイクル数（= 転送ビット数）を示しています。

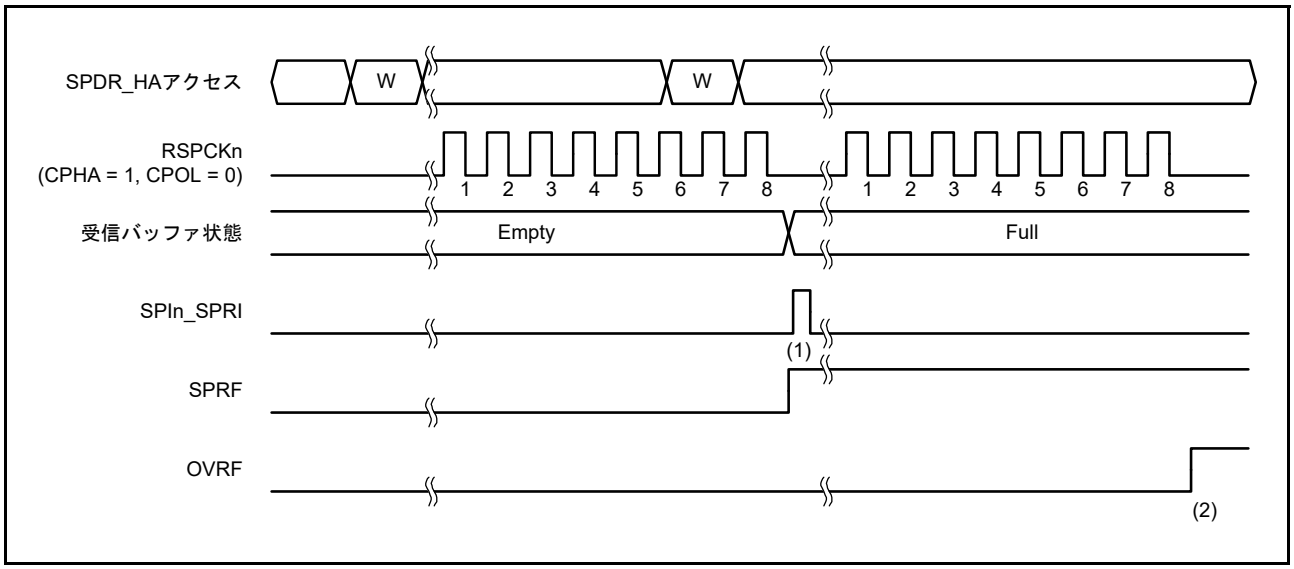


図 32.28　SPCR.TXMD = 0 の動作例

以下に、図 32.28 の（1）、（2）に示したタイミングでのフラグ動作を説明します。

(1) SPDR_HA レジスタの受信バッファが空の状態でシリアル転送が終了すると、SPI は受信バッファフル割り込み要求（SPIn_SPRI）を発生させ、SPSR.SPRF フラグを 1 にして、シフトレジスタの受信データを受信バッファにコピーします。

(2) SPDR_HA レジスタの受信バッファに以前のシリアル転送の受信データがある状態でシリアル転送が終了すると、SPI は SPSR.OVRF フラグを 1 にしてシフトレジスタの受信データを破棄します。

32.3.6.2　送信のみ動作（SPCR.TXMD = 1）

図 32.29 に、通信動作モード選択ビット（SPCR.TXMD）を 1 にした場合の動作例を示します。この例では、SPI0 の場合は SPDCR.SPFC[1:0] ビットが 00b、SPCMDm.CPHA ビットが 1、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI1 の場合は SPCMD0.CPHA ビットが 1、SPCMD0.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI が 8 ビットのシリアル転送を実行しています。RSPCKn 波形の下に記載した数字は RSPCK サイクル数（= 転送ビット数）を示しています。

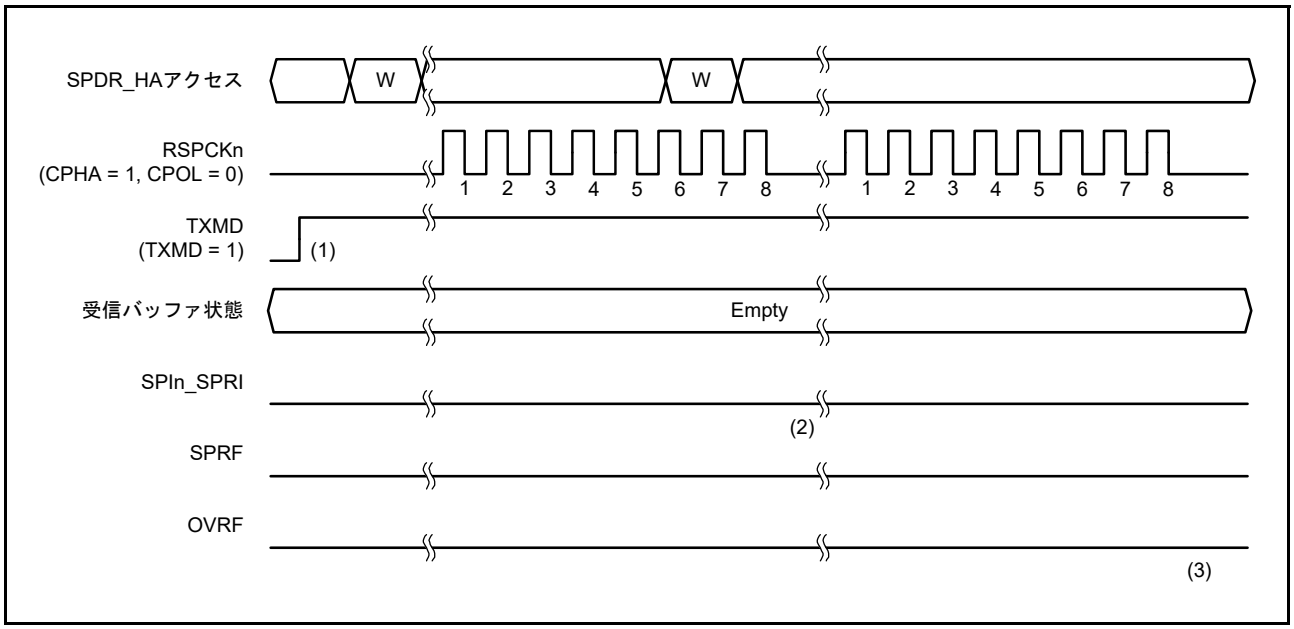


図 32.29　SPCR.TXMD = 1 の動作例

以下に、図 32.29 の（1）～（3）に示したタイミングでのフラグの動作内容を説明します。

(1) 送信のみ動作（SPCR.TXMD = 1）への遷移は、受信バッファにデータが残っていないこと（SPSR.SPRF = 0）、SPSR.OVRF フラグが 0 であることを確認してから、行ってください。

(2) SPDR_HA レジスタの受信バッファが空の状態でシリアル転送が終了すると、送信のみモード（SPCR.TXMD = 1）を選択している場合、SPSR.SPRF フラグは 0 を保持し、SPI はシフトレジスタのデータを受信バッファへコピーしません。

(3) SPDR_HA レジスタの受信バッファに以前のシリアル転送の受信データは存在しないため、シリアル転送が終了しても、SPSR.OVRF フラグは 0 を保持し、シフトレジスタのデータを受信バッファへコピーしません。

送信のみ動作（SPCR.TXMD = 1）では、SPI はデータを送信しますが、受信はしません。そのため、SPSR.SPRF および SPSR.OVRF フラグは（1）～（3）それぞれのタイミングで 0 を保持します。

32.3.7　送信バッファエンプティ／受信バッファフル割り込み

図 32.30 および図 32.31 に、送信バッファエンプティ割り込み（SPIn_SPTI）と受信バッファフル割り込み（SPIn_SPRI）の動作例を示します。これらの図に記載のレジスタアクセスは、SPDR_HA レジスタへのアクセス状況を示しています。“W” はライトサイクル、“R” はリードサイクルを示しています。図 32.26 では、SPI0 の場合は SPCR.TXMD ビットが 0、SPDCR.SPFC[1:0] ビットが 00b、SPCMDm.CPHA ビットが 0、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI1 の場合は SPCR.TXMD ビットが 0、SPCMD0.CPHA ビットが 0、SPCMD0.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI が 8 ビットのシリアル転送を実行しています。

図 32.27 では、SPI0 の場合は SPCR.TXMD ビットが 0、SPDCR.SPFC[1:0] ビットが 00b、SPCMDm.CPHA ビットが 1、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI1 の場合は SPCR.TXMD ビットが 0、SPCMD0.CPHA ビットが 1、SPCMD0.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI が 8 ビットのシリアル転送を実行しています。
RSPCKn 波形の下に記載した数字は、転送ビット数などの RSPCK サイクル数を示しています。

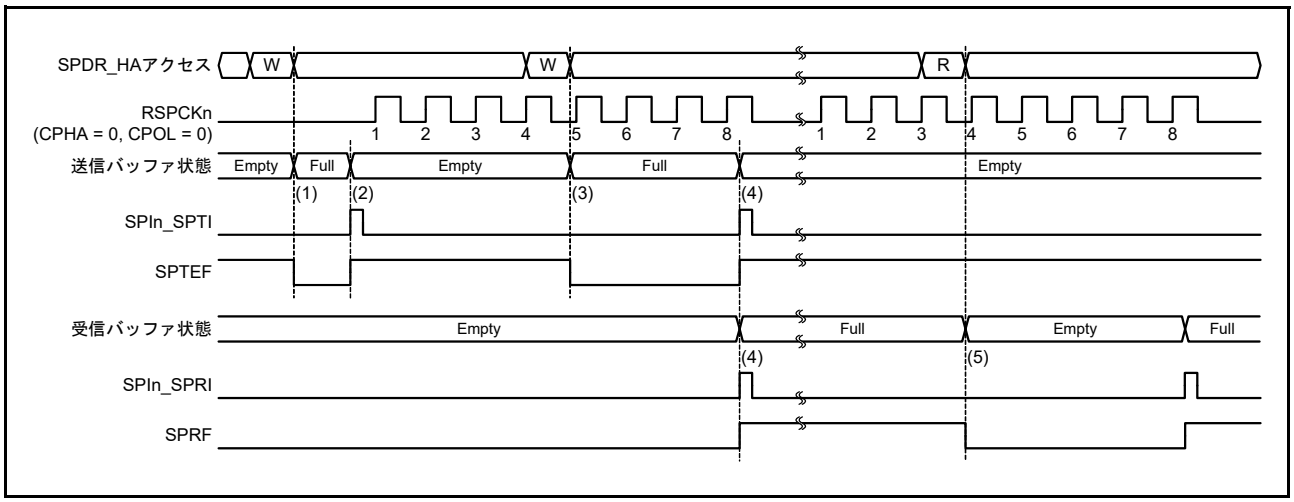


図 32.30　SPIn_SPTI、SPIn_SPRI 割り込みの動作例（CPHA = 0、CPOL = 0）

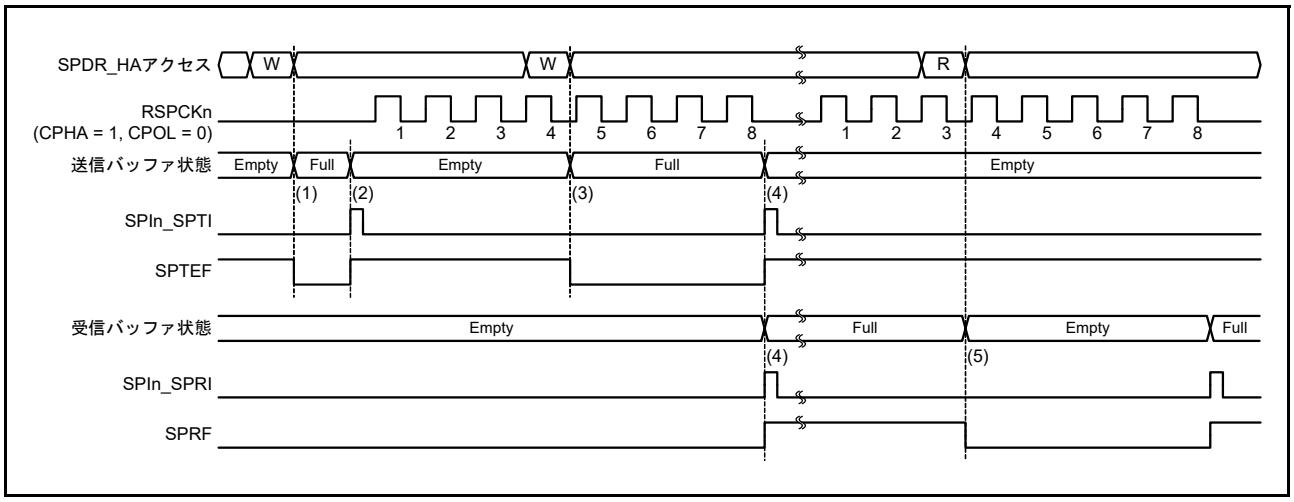


図 32.31　SPIn_SPTI、SPIn_SPRI 割り込みの動作例（CPHA = 1、CPOL = 0）

以下に、図 32.31 の（1）～（5）での SPI の動作内容を説明します。

(1) SPDR_HA レジスタの送信バッファが空の（次転送のデータがセットされていない）状態で、SPDR_HA レジスタに送信データを書き込むと、SPI は送信バッファにデータを書き込み、SPSR.SPTEF フラグを 0 にクリアします。

(2) シフトレジスタが空の場合には、SPI は送信バッファのデータをシフトレジスタにコピーして送信バッファエンプティ割り込み要求（SPIn_SPTI）を発生させ、SPSR.SPTEF フラグを 1 にします。なお、シリアル転送の開始方法は、SPI のモードに依存します。詳細は、32.3.10　SPI 動作および 32.3.11　クロック同期式動作を参照してください。

(3) 送信バッファエンプティ割り込みルーチン、またはSPTEFフラグによる送信バッファエンプティの処理でSPDR_HAレジスタに送信データを書き込むと、SPIは送信バッファにデータを書き込み、SPTEFフラグを0にクリアします。シフトレジスタにはシリアル転送中のデータが格納されているため、SPIは送信バッファのデータをシフトレジスタにコピーしません。

(4) SPDR_HAレジスタの受信バッファが空の状態でシリアル転送が終了すると、SPIはシフトレジスタの受信データを受信バッファにコピーし、受信バッファフル割り込み要求（SPIn_SPRI）を発生させ、SPRFフラグを1にします。また、シリアル転送が終了するとシフトレジスタが空になるため、シリアル転送が終了する前に送信バッファがフルであった場合には、SPIがSPTEFフラグを1にし、送信バッファのデータをシフトレジスタにコピーします。なお、オーバーランエラー発生状態で、シフトレジスタから受信バッファへ受信データをコピーしなかった場合でも、シリアル転送が終了するとSPIはシフトレジスタが空であると判断し、送信バッファからシフトレジスタへのデータ転送が可能な状態になります。

(5) 受信バッファフル割り込みルーチン、またはSPRFフラグによる受信バッファフル割り込みの処理でSPDR_HAレジスタを読み出すと、受信データが読み出せます。

送信バッファに未送信のデータがある状態（SPTEF = 0）で、SPDR_HAレジスタへ書き込みが行われた場合には、SPIは送信バッファのデータを更新しません。SPDR_HAレジスタへ書き込む場合は、送信バッファエンプティ割り込み要求を使用するか、またはSPTEFフラグによる送信バッファエンプティ割り込みの処理を行ってください。また、送信バッファエンプティ割り込みを利用する場合には、SPCR.SPTIEビットを1にしてください。

SPI機能が無効（SPCR.SPE = 0）の場合には、SPTIEビットを0にしてください。

受信バッファフルの状態（SPRF = 1）で、シリアル転送が終了した場合には、SPIはシフトレジスタから受信バッファへデータをコピーせず、オーバーランエラーを検出します（32.3.8　エラー検出を参照してください）。受信データのオーバーランエラーを防ぐために、受信バッファフル割り込み要求で、次のシリアル転送終了よりも前に受信データを読み出してください。また、SPI受信バッファフル割り込みを利用する場合には、SPCR.SPRIEビットを1にしてください。

送信／受信バッファの状態は、送信／受信割り込み、または関連するICUのIELSRj.IRフラグ（jは割り込みベクタ番号）によって確認することが可能です。同様に、SPTEFおよびSPRFフラグによっても、送信／受信バッファの状態を確認できます。割り込みベクタ番号については、「14.　割り込みコントローラユニット（ICU）」を参照してください。

32.3.8　エラー検出

通常の SPI のシリアル転送では、SPDR/SPDR_HA レジスタの送信バッファに書き込んだデータが送信され、受信したデータは SPDR/SPDR_HA レジスタの受信バッファから読み出すことができます。SPDR/SPDR_HA レジスタにアクセスがあった場合、送信または受信バッファの状態やシリアル転送の開始時または終了時の SPI の状態によって、通常以外の転送となることがあります。

通常以外の転送が発生した場合には、SPI はアンダーランエラー、オーバーランエラー、パリティエラー、またはモードフォルトエラーとして検出します。表 32.8 に、通常以外の転送動作と SPI のエラー検出機能の関係を示します。

表 32.8　通常以外の転送動作と SPI のエラー検出機能の関係

	発生条件	SPI 動作	エラー検出
1	送信バッファフルの状態で SPDR/SPDR_HA レジスタに書き込み	• 送信バッファ内容を保持 • 書き込みデータ欠落	なし
2	受信バッファエンプティの状態で SPDR/SPDR_HA レジスタを読み出し	受信バッファ内容および受信済みデータを出力	なし
3	SPI がデータ送信不能のときに、スレーブモードでシリアル転送が開始	• シリアル転送を中断 • 送受信データ欠落 • MISOA 出力信号のドライブ停止 • SPI 機能は無効	アンダーランエラー
4	受信バッファフルの状態で、シリアル転送が終了	• 受信バッファ内容を保持 • 受信データ欠落	オーバーランエラー
5	全二重同期式シリアル通信時にパリティ機能が有効な状態で誤ったパリティビットを受信	パリティエラーフラグのアサート	パリティエラー
6	マルチマスタモードでシリアル転送アイドル時に SSLn0 入力信号アサート	• RSPCKn、MOSIn、SSLn1 ～ SSLn3 出力信号のドライブ停止 • SPI 機能は無効	モードフォルトエラー
7	マルチマスタモードでシリアル転送中に SSLn0 入力信号アサート	• シリアル転送を中断 • 送受信データ欠落 • RSPCKn、MOSIn、SSLn1 ～ SSLn3 出力信号のドライブ停止 • SPI 機能は無効	モードフォルトエラー
8	スレーブモードでシリアル転送中に SSLn0 入力信号ネゲート	• シリアル転送を中断 • 送受信データ欠落 • MISOn 出力信号のドライブ停止 • SPI 機能は無効	モードフォルトエラー

表 32.8 の 1 に示した動作に対しては、SPI はエラーを検出しません。SPDR/SPDR_HA レジスタへの書き込み時にデータを欠落させないために、送信バッファエンプティ割り込み要求で SPDR/SPDR_HA レジスタへの書き込みを実行してください（SPSR.SPTEF フラグ = 1 の場合）。

2 に示した動作に対しても、SPI はエラーを検出しません。不要なデータを読み出さないようにするためには、SPI 受信バッファフル割り込み要求で SPDR/SPDR_HA レジスタの読み出しを実行するようにしてください（SPSR.SPRF フラグ = 1 の場合）。

詳細情報の参照先：

- 動作 3 に示したアンダーランエラーについては、32.3.8.4　アンダーランエラーを参照してください
- 動作 4 に示したオーバーランエラーについては、32.3.8.1　オーバーランエラーを参照してください
- 動作 5 に示したパリティエラーについては、32.3.8.2　パリティエラーを参照してください
- 動作 6 ～ 8 に示したモードフォルトエラーについては、32.3.8.3　モードフォルトエラーを参照してください

送受信の割り込みについては、32.3.7　送信バッファエンプティ／受信バッファフル割り込みを参照してください。

32.3.8.1　オーバーランエラー

SPDR/SPDR_HA レジスタの受信バッファフル状態でシリアル転送が終了すると、SPI はオーバーランエラーを検出して SPSR.OVRF フラグを 1 にします。OVRF フラグが 1 の状態では、SPI はシフトレジスタのデータを受信バッファにコピーしないので、受信バッファにはエラー発生前のデータが保持されます。OVRF フラグを 0 にするには、OVRF フラグが 1 の状態の SPSR レジスタを CPU が読み出した後に、OVRF フラグに 0 を書いてください。

図 32.32 に、OVRF フラグと SPRF フラグの動作例を示します。図 32.32 に記載した SPSR アクセスと SPDR_HA アクセスは、それぞれ SPSR、SPDR_HA レジスタへのアクセス状況を示しています。“W” は書き込みサイクル、“R” は読み出しサイクルを示しています。図 32.32 では、SPCMDm.CPHA ビットが 1、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI が 8 ビットのシリアル転送を実行しています。RSPCKn 波形の下に記載した数字は、転送ビット数などの RSPCK サイクル数を示しています。

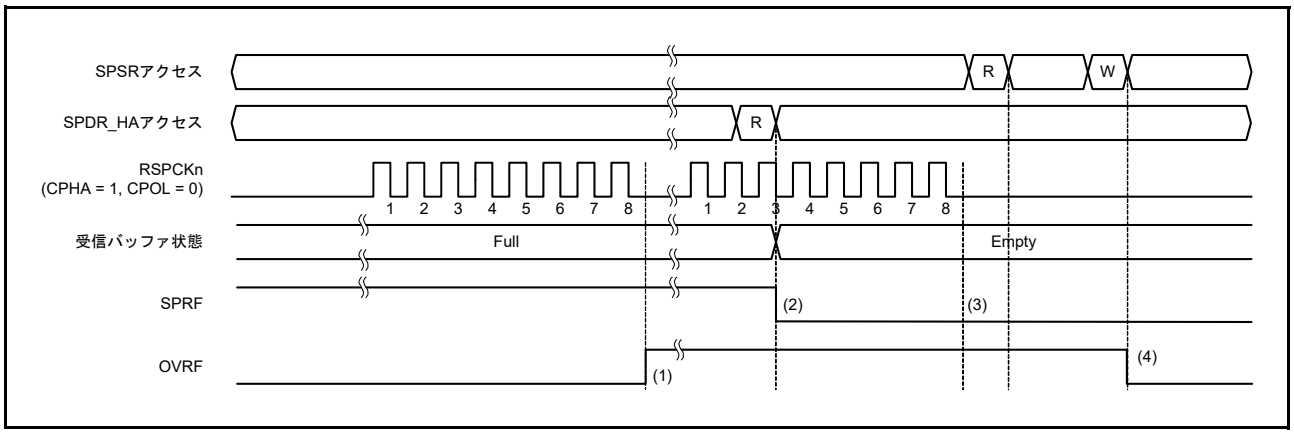


図 32.32　OVRF フラグおよび SPRF フラグの動作例

以下に、図 32.32 の（1）～（4）に示したタイミングでのフラグの動作内容を説明します。

(1) SPRF フラグが 1（受信バッファフル）の状態でシリアル転送が終了すると、SPI がオーバーランエラーを検出し、OVRF フラグを 1 にします。SPI はシフトレジスタのデータを受信バッファにコピーしません。また、SPPE ビットが 1 であってもパリティエラーの検出は行いません。SPI0 のマスタモードの場合、SPI は SPCMDm ポインタの値を SPSSR.SPECM[2:0] ビットにコピーします。

(2) SPDR/SPDR_HA レジスタを読み出すと、SPI は受信バッファのデータを出力します。その後、SPRF フラグが 0 になります。受信バッファが空になっても、OVRF フラグは 0 になりません。

(3) OVRF フラグが 1 の状態（オーバーランエラー）でシリアル転送が終了した場合には、SPI はシフトレジスタのデータを受信バッファにコピーしません（SPRF フラグは 1 になりません）。受信バッファフル割り込みも発生しません。また、SPPE ビットが 1 であってもパリティエラーの検出は行いません。SPI0 のマスタモードの場合、SPI は SPSSR.SPECM[2:0] ビットを更新しません。オーバーランエラー発生状態で、SPI がシフトレジスタから受信バッファへ受信データをコピーしなかった場合でも、シリアル転送が終了すると SPI はシフトレジスタを空であると判定します。これにより、送信バッファからシフトレジスタへのデータ転送が可能な状態になります。

(4) OVRF フラグが 1 の状態で SPSR レジスタを読んだ後、OVRF フラグに 0 を書くと、OVRF フラグは 0 になります。

SPSR レジスタの読み出し、あるいは SPI エラー割り込みと SPSR レジスタの読み出しによって、オーバーランの発生を確認できます。シリアル転送を実行する場合には、SPDR_HA レジスタの読み出し直後に SPSR レジスタを読み出すなどの方法で、オーバーランエラー発生を早期に検出できるように対処してください。SPI が SPI0 のマスタモードの場合、SPSSR.SPECM[2:0] ビットを読み出すことで、エラー発生時の SPCMDm レジスタに対するポインタ値を確認できます。

オーバーランエラーが発生して OVRF フラグが 1 になると、OVRF フラグが 0 になるまで正常な受信動作ができなくなります。

マスタモードで RSPCK 自動停止機能を有効にした場合は、オーバーランエラーが発生しません。図 32.33、図 32.34 にマスタモードの受信バッファフル状態でシリアル転送が継続するときのクロック停止波形を示します。

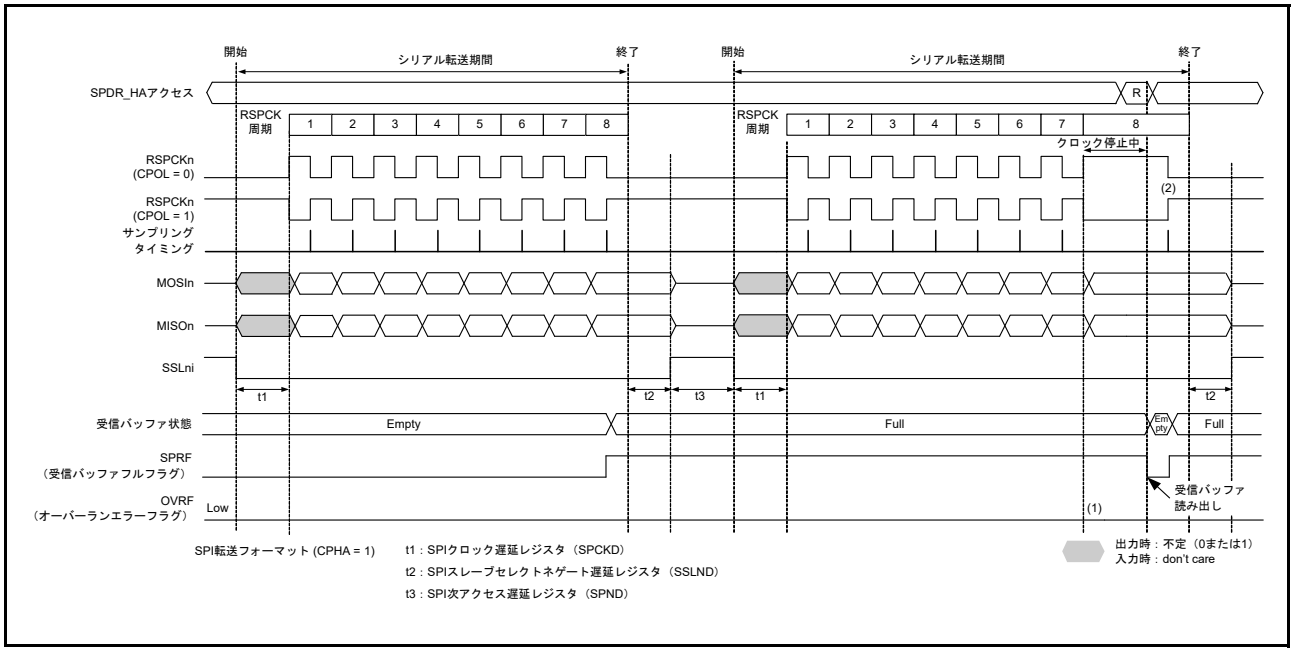


図 32.33　マスタモードの受信バッファフル状態でシリアル転送が継続するときのクロック停止波形（CPHA = 1）

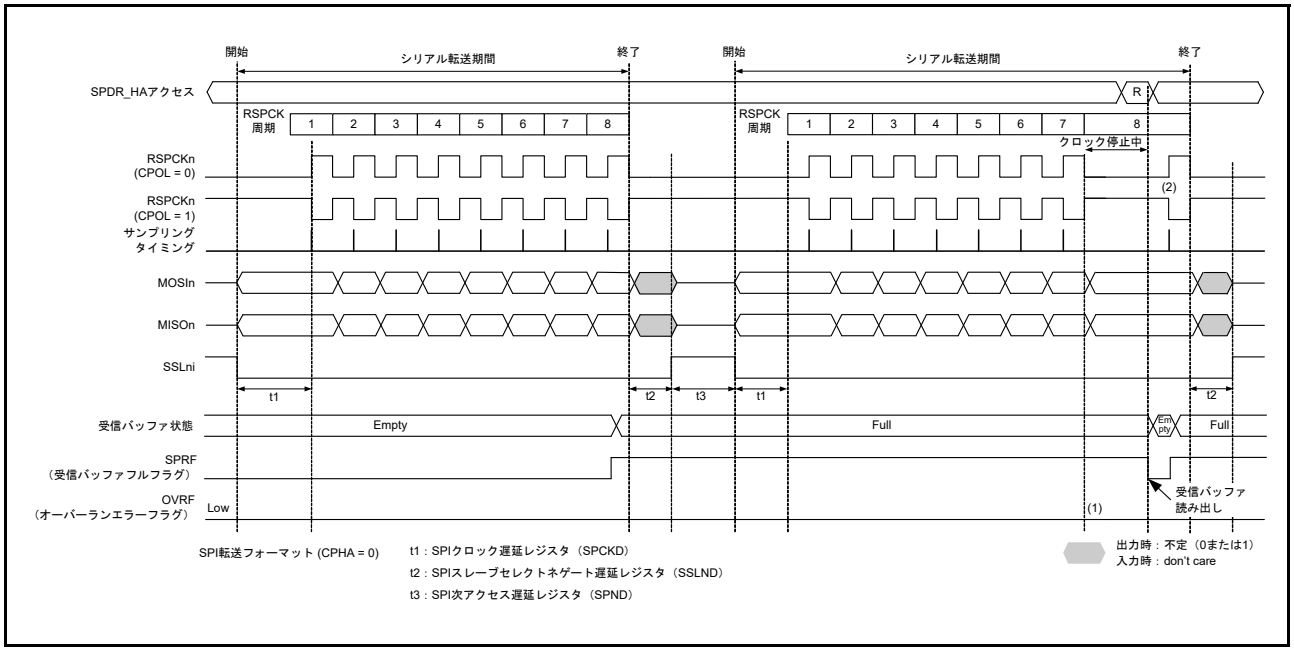


図 32.34　マスタモードの受信バッファフル状態でシリアル転送が継続するときのクロック停止波形（CPHA = 0）

以下に、図 32.33 および図 32.34 の（1）、（2）に示したタイミングでのフラグ動作を説明します。

(1) 受信バッファフルの場合は、RSPCK クロックが停止するためオーバーランエラーは発生しません。

(2) クロック停止中に SPDR/SPDR_HA レジスタを読み出すと、受信バッファのデータが読み出せます。受信バッファの読み出し後（SPSR.SPRF フラグが 0 にされた後）、RSPCK クロックが再開します。

32.3.8.2　パリティエラー

SPCR.TXMD ビットが 0、SPCR2.SPPE ビットが 1 の状態で、全二重同期式シリアル通信を行い、転送が終了すると、SPI はパリティエラーの判定を行います。SPI は、受信データにパリティエラーを検出すると、SPSR.PERF フラグを 1 にします。SPSR.OVRF フラグが 1 の状態では、SPI はシフトレジスタのデータを受信バッファにコピーしないので、受信データに対するパリティエラーの検出は行いません。PERF フラグを 0 にするためには、PERF フラグが 1 の状態の SPSR レジスタを読んだ後、PERF フラグに 0 を書いてください。

図 32.35 に、OVRF フラグと PERF フラグの動作例を示します。図 32.35 に記載した SPSR アクセスでは、W は書き込みサイクル、R は読み出しサイクルを示しています。図 32.35 の例では、SPCR.TXMD ビットが 0、SPCR2.SPPE ビットが 1 の状態で全二重同期式シリアル通信を行います。SPCMDm.CPHA ビットが 1、SPCMDm.CPOL ビットが 0 の設定で、SPI が 8 ビットのシリアル転送を実行しています。RSPCKn 波形の下に記載した数字は、転送ビット数などの RSPCK サイクル数を示しています。

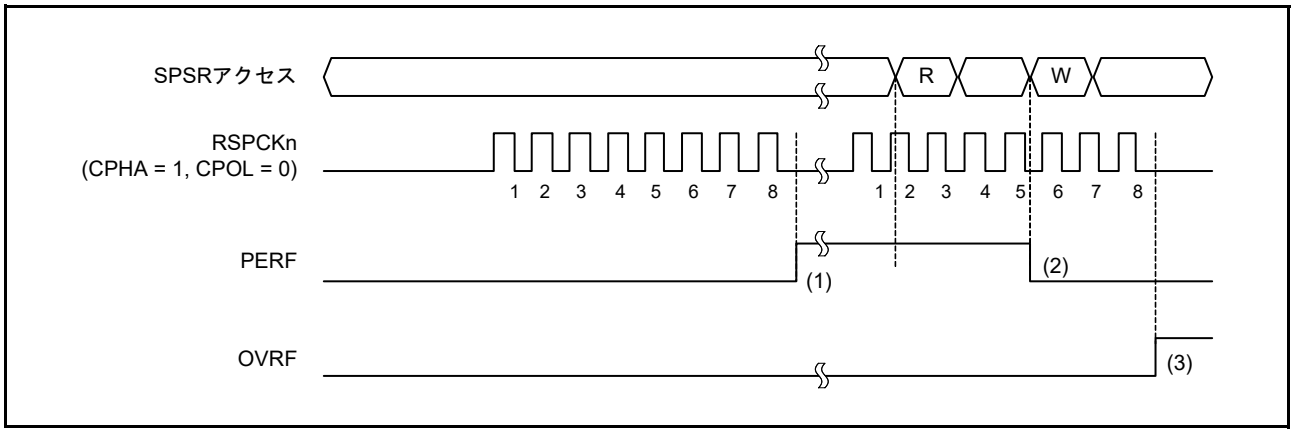


図 32.35　OVRF フラグおよび PERF フラグの動作例

以下に、図 32.35 の（1）～（3）に示したタイミングでのフラグの動作内容を説明します。

(1) SPI がオーバーランエラーを検出せず、シリアル転送が終了すると、SPI はシフトレジスタのデータを受信バッファにコピーします。このとき、SPI が受信データをチェックし、パリティエラーを検出すると PERF フラグを 1 にします。SPI0 のマスタモードの場合、SPI は SPCMDm ポインタの値を SPSSR.SPECM[2:0] ビットにコピーします。

(2) PERF フラグが 1 の状態で SPSR レジスタを読んだ後、PERF フラグに 0 を書くと、PERF フラグは 0 になります。

(3) SPI がオーバーランエラーを検出し、シリアル転送が終了すると、シフトレジスタのデータを受信バッファにコピーしません。このとき、SPI はパリティエラーを検出しません。

SPSR レジスタの読み出し、あるいは SPI エラー割り込みと SPSR レジスタの読み出しによって、パリティエラーの発生を確認できます。シリアル転送を実行する場合には、SPSR レジスタエラーを読み出すなどの方法で、パリティエラー発生を早期に検出できるように対処してください。SPI が SPI0 のマスタモードの場合、SPSSR.SPECM[2:0] ビットを読み出すことで、エラー発生時の SPCMDm レジスタに対するポインタ値を確認できます。

32.3.8.3　モードフォルトエラー

SPCR.MSTR ビットが 1、SPCR.SPMS ビットが 0、SPCR.MODFEN ビットが 1 の場合には、SPI はマルチマスタモードで動作します。マルチマスタモードの SPI の SSLn0 入力信号に対してアクティブレベルが入力されると、シリアル転送状態にかかわらず、SPI はモードフォルトエラーを検出して SPSR.MODF フラグを 1 にします。SPI は SPI0 のモードフォルトエラーを検出すると、SPCMDm ポインタの値を SPSSR.SPECM[2:0] ビットにコピーします。なお、SSLn0 信号のアクティブレベルは、SSLP.SSL0P ビットによって決定されます。

MSTR ビットが 0 の場合には、SPI はスレーブモードで動作します。スレーブモードの SPI の MODFEN ビットが 1、SPMS ビットが 0 の場合、シリアル転送期間（有効データのドライブ開始から最終有効データの取り込みまで）に SSLn0 入力信号がネゲートされると、SPI はモードフォルトエラーを検出します。

SPI はモードフォルトエラーを検出すると、出力信号のドライブ停止および SPCR.SPE ビットを 0 にクリアします（32.3.9　SPI の初期化を参照）。マルチマスタ構成の場合には、モードフォルトエラーの検出によって出力信号のドライブと SPI 機能を停止させ、マスタであることを解除できます。

モードフォルトエラーの発生は、SPSR レジスタの読み出し、あるいは SPI エラー割り込みと SPSR レジスタの読み出しによって確認できます。SPI エラー割り込みを利用せずにモードフォルトエラーを検出するためには、SPSR レジスタをポーリングする必要があります。SPI を SPI0 のマスタモードで使用する場合、SPSSR.SPECM[2:0] ビットを読み出すことで、エラー発生時の SPCMDm ポインタ値を確認できます。

MODF フラグが 1 の状態では、SPI は SPE ビットへの 1 の書き込みを無視します。モードフォルトエラー検出後に SPI 機能を有効にするには、MODF フラグを 0 にしてください。

32.3.8.4　アンダーランエラー

SPCR.MSTR ビットが 0（スレーブモード）、SPCR.SPE ビットが 1、かつ送信データが準備されていない状態でシリアル転送が開始すると、SPI はアンダーランエラーを検出します。その後、SPI は SPSR.MODF および SPSR.UDRF フラグを 1 にします。

SPI はアンダーランエラーを検出すると、出力信号のドライブ停止および SPCR.SPE ビットを 0 にクリアします（32.3.9　SPI の初期化を参照）。

アンダーランエラーは、SPSR レジスタの読み出し、あるいは SPI エラー割り込みと SPSR レジスタの読み出しによって確認できます。SPI エラー割り込みを利用せずにアンダーランエラーを検出するためには、SPSR レジスタをポーリングする必要があります。

MODF フラグが 1 の状態では、SPI は SPE ビットへの 1 の書き込みを無視します。アンダーランエラー検出後に SPI 機能を有効にするには、MODF フラグを 0 にしてください。

32.3.9　SPI の初期化

SPCR.SPE ビットに 0 を書いた場合、あるいは SPI がモードフォルトエラーまたはアンダーランエラーを検出して SPE ビットを 0 にした場合は、SPI は SPI 機能を無効にして、モジュール機能の一部を初期化します。また、システムリセットが発生した場合には、SPI はモジュール機能をすべて初期化します。以下では、SPCR.SPE ビットをクリアすることによる初期化と、システムリセットによる初期化について説明します。

32.3.9.1　SPE ビットのクリアによる初期化

SPCR.SPE ビットを 0 にしたとき、SPI は以下に示す方法で初期化を実施します。

- 実行中のシリアル転送を中断
- スレーブモードの場合、出力信号のドライブ停止（Hi-Z）
- SPI 内部ステートの初期化
- SPI 送信バッファの初期化（SPSR.STEF フラグが 1 になります）

SPE ビットのクリアによる初期化では、SPI の制御ビットは初期化されません。このため、再度 SPE ビットを 1 にすれば初期化前と同じ転送モードで SPI を起動できます。

SPSR.SPRF、SPSR.OVRF、SPSR.MODF、SPSR.PERF、および SPSR.UDRF フラグの値は初期化されません。また、SPI シーケンスステータスレジスタ（SPSSR）の値も SPI0 用に初期化はされません。このため、SPI の初期化後も受信バッファからデータを読み出すことで、SPI 転送時のエラー状況を確認できます。

送信バッファは空の状態に初期化されます（SPSR.SPTEF フラグが 1 になります）。このため、SPI 初期化後に SPCR.SPTIE ビットを 1 にしていると、送信バッファエンプティ割り込みが発生します。SPI を初期化する場合に、送信バッファエンプティ割り込みを禁止するためには、SPE ビットへの 0 書き込みと同時に SPTIE ビットにも 0 を書き込んでください。

32.3.9.2　システムリセットによる初期化

システムリセットでは、32.3.9.1　SPE ビットのクリアによる初期化に記載の要件に加え、SPI 制御用の全ビット、ステータスビット、およびデータレジスタが初期化され、SPI が完全に初期化されます。

32.3.10　SPI 動作

32.3.10.1　マスタモード動作

シングルマスタモード動作とマルチマスタモード動作の違いは、モードフォルトエラー検出の使用のみです（32.3.8　エラー検出を参照）。SPI は、シングルマスタモードではモードフォルトエラーを検出しませんが、マルチマスタモードでは検出します。以下では、シングル／マルチマスタモードで共通する動作について説明します。

(1)　シリアル転送の開始

SPI 送信バッファが空きの状態で SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）にデータが書き込まれ、次転送のデータがセットされていない（SPSR.SPTEF フラグ = 1）とき、SPI は送信バッファ（SPTX）のデータを更新します。SPI0 で、SPDCR.SPFC[1:0] ビットで設定したフレーム数分のデータを SPDR/SPDR_HA レジスタへ書き込んだ後、シフトレジスタが空になった場合は（SPI1 ではシフトレジスタが空の場合）、SPI は送信バッファのデータをシフトレジスタにコピーしてシリアル転送を開始します。SPI は、シフトレジスタに送信データをコピーすると、シフトレジスタのステータスを「フル」に変更し、シリアル転送が終了すると、シフトレジスタのステータスを「空」に変更します。シフトレジスタのステータスを参照することはできません。

SSLni 出力端子の極性は、SSLP レジスタの設定値で決まります。SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(2)　シリアル転送の終了

SPCMDm.CPHA ビットの設定にかかわらず、SPI は最終サンプリングタイミングに対応する RSPCKn エッジを送出するとシリアル転送を終了します。受信バッファ（SPRX）が空（SPSR.SPRF = 0）の場合には、シリアル転送終了後に SPI はシフトレジスタから SPDR/SPDR_HA レジスタの受信バッファにデータをコピーします。

注 .　最終サンプリングタイミングは転送データのビット長に依存して変化します。マスタモードの SPI のデータ長は、SPCMDm.SPB[3:0] ビットの設定値で決まります。SSLni 出力端子の極性は、SSLP レジスタの設定値で決まります。SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(3)　シーケンス制御

(a)　SPI0

マスタモード時の転送フォーマットは、SPSCR レジスタ、SPCMDm レジスタ、SPBR レジスタ、SPCKD レジスタ、SSLND レジスタ、および SPND レジスタによって決定されます。

SPSCR レジスタは、マスタモードの SPI で実行するシリアル転送のシーケンス構成を決定するためのレジスタです。SPCMDm レジスタでは、以下の項目を設定します。

- SSLni 端子の出力信号値
- MSB/LSB ファースト
- データ長
- ビットレート設定の一部
- RSPCK 極性／位相
- SPCKD レジスタの参照要否
- SSLND レジスタの参照要否
- SPND レジスタの参照要否

SPBR レジスタは、SPI クロック遅延（SPCKD）、SSL ネゲート遅延（SSLND）、次アクセス遅延（SPND）などの、ビットレート設定値の一部を保持しています。

SPI は、SPSCR レジスタに設定されたシーケンス長に従って、SPCMDm レジスタの一部／全部からなるシーケンスを構成します。SPI には、シーケンスを構成している SPCMDm レジスタに対するポインタが存在します。このポインタの値は、SPSSR.SPCP[2:0] ビットの読み出しによって確認できます。SPCR.SPE ビットを 1 にして SPI 機能を有効にすると、SPI はコマンドに対するポインタを SPCMD0 レジスタにセットし、シリアル転送の開始時に SPCMD0 レジスタの設定内容を転送フォーマットに反映します。SPI は、各データ転送の次アクセス遅延期間が終了するたびにポインタをインクリメントします。シーケンスの最終コマンドに対応するシリアル転送が終了すると、SPI はシーケンスを繰り返し実行するように、ポインタを SPCMD0 レジスタにセットします。

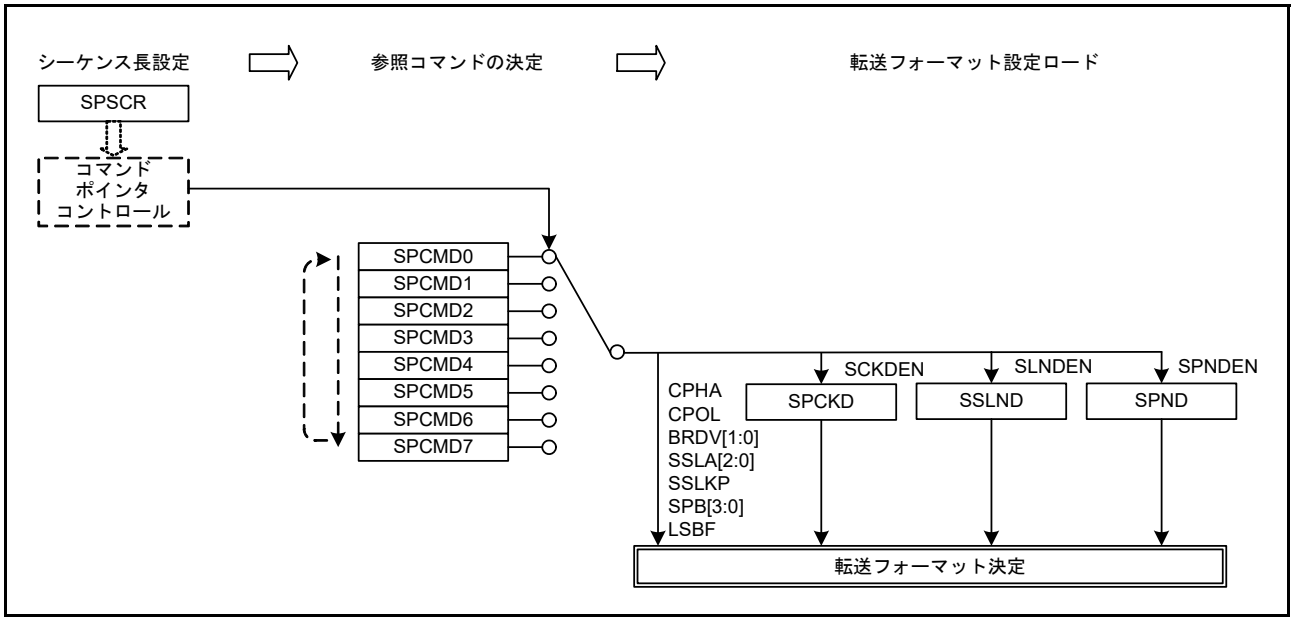


図 32.36　　マスタモードでのシリアル転送フォーマットの決定方法（SPI0）

ここでは、SPDR/SPDR_HA データと SPCMDm 設定の 2 つを合わせてフレームとします。

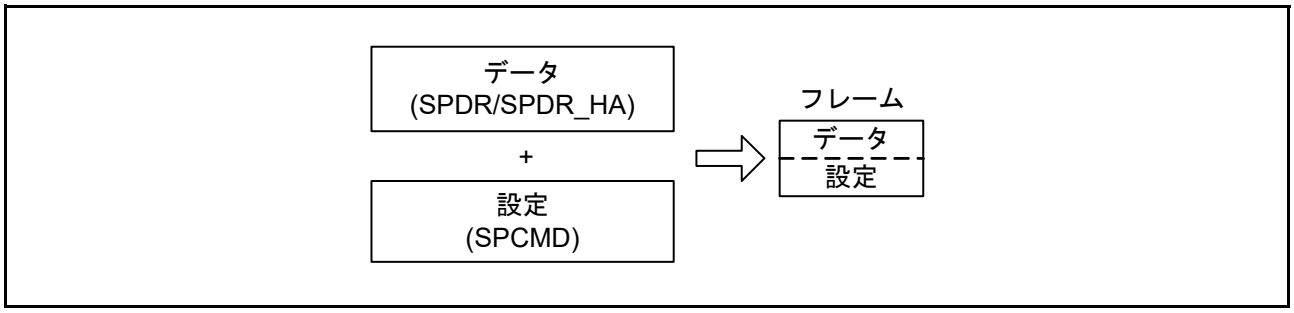


図 32.37　　フレームの概念図（SPI0）

表 32.4 の設定でシーケンス動作を行ったときのコマンドと送信バッファ／受信バッファの関係を図 32.38 に示します。

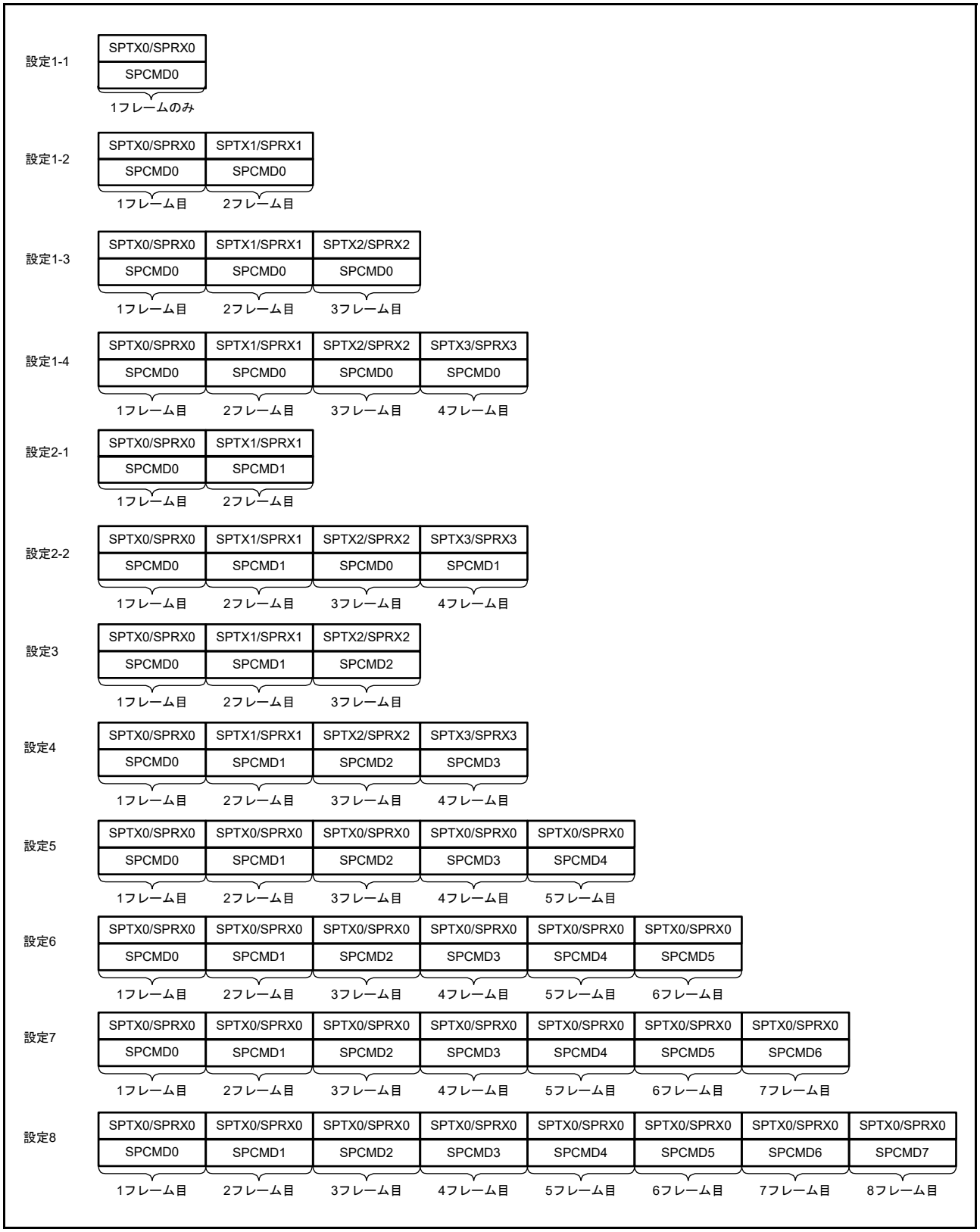


図 32.38　シーケンス動作時の SPI コマンドレジスタ（SPCMDm）と送受信バッファの関係（SPI0）

(b)　SPI1

マスタモード時の転送フォーマットは、SPSCR レジスタ、SPCMD0 レジスタ、SPBR レジスタ、SPCKD レジスタ、SSLND レジスタ、および SPND レジスタによって決定されます。

SPSCR レジスタは、マスタモードの SPI で実行するシリアル転送のシーケンス構成を決定するためのレジスタです。SPCMD0 レジスタでは、以下の項目を設定します。

- SSLni 端子の出力信号値
- MSB/LSB ファースト
- データ長
- ビットレート設定の一部
- RSPCK 極性／位相
- SPCKD レジスタの参照要否
- SSLND レジスタの参照要否
- SPND レジスタの参照要否

SPBR レジスタは、SPI クロック遅延（SPCKD）、SSL ネゲート遅延（SSLND）、次アクセス遅延（SPND）などの、ビットレート設定の一部を保持しています。

SPI 機能を有効（SPCR.SPE = 1）にすると、SPI はコマンドに対するポインタを SPCMD0 レジスタにセットし、シリアル転送の開始時に SPCMD0 レジスタの設定内容を転送フォーマットに反映します。

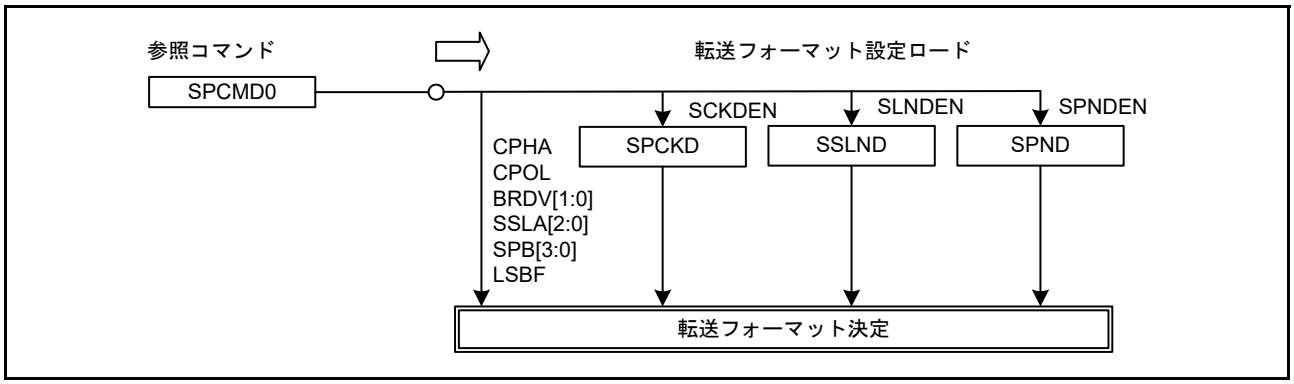


図 32.39　　マスタモードでのシリアル転送方式の決定方法（SPI1）

ここでは、SPDR/SPDR_HA データと SPCMD0 設定の 2 つを合わせてフレームとします。

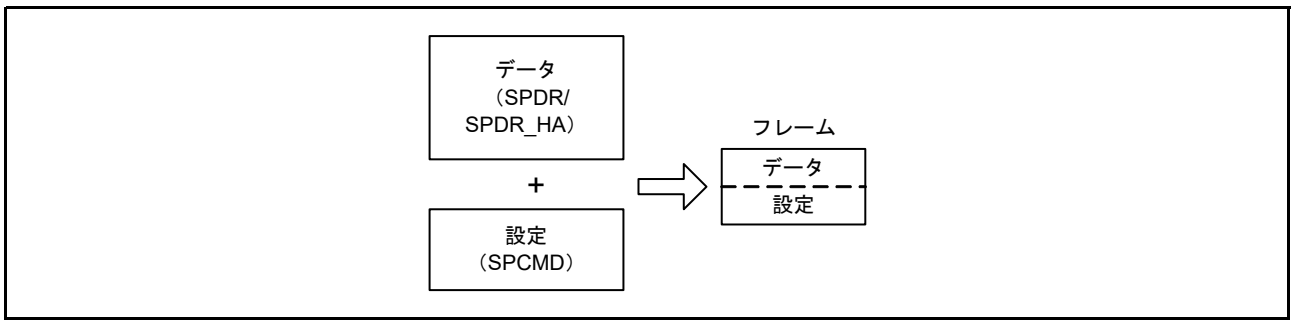


図 32.40　　フレームの概念図（SPI1）

シーケンス動作を行ったときのコマンドと送信バッファ／受信バッファの関係を図 32.41 に示します。

図 32.41　シーケンス動作時の SPI コマンドレジスタと送受信バッファの関係（SPI1）

(4)　バースト転送

- SPI0

SPI が現在のシリアル転送で参照している SPCMDm.SSLKP ビットが 1 の場合には、SPI はシリアル転送中の SSLni 信号レベルを次のシリアル転送の SSLni 信号アサート開始まで保持します。次のシリアル転送での SSLni 信号レベルが、現在のシリアル転送での SSLni 信号レベルと同じであれば、SPI は SSLni 信号アサート状態を保持したまま連続的にシリアル転送を実行することが可能です（バースト転送）。

図 32.42 に、SPCMD0 および SPCMD1 レジスタの設定値を使用してバースト転送を実現した場合の SSLni 信号動作例を示します。図 32.42 に記載した（1）～（7）の SPI 動作内容について、以下に説明します。

注 .　SSLni 出力信号の極性は、SSLP レジスタの設定値で決まります。

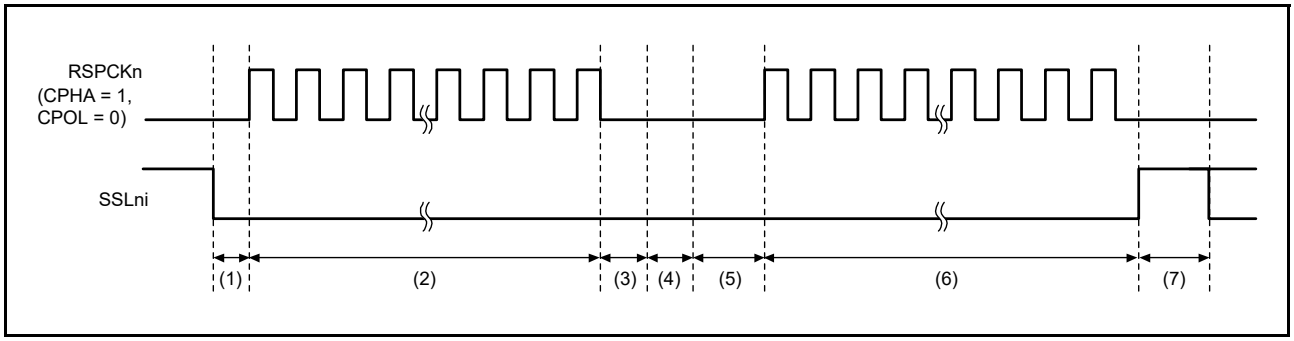


図 32.42　SSLKP ビットを利用したバースト転送の動作例（SPI0）

1. SPI は、SPCMD0 レジスタに従って SSLni 信号をアサートし RSPCK 遅延を挿入します。
2. SPI は、SPCMD0 レジスタに従ってシリアル転送を実行します。
3. SPI は、SSL ネゲート遅延を挿入します。
4. SPCMD0.SSLKP ビットが 1 であるため、SPI は SPCMD0 レジスタでの SSLni 信号値を保持します。この期間は、最短でも SPCMD0 レジスタの次アクセス遅延と同じだけ継続されます。最短期間が経過してもシフトレジスタが空の場合は、次転送のための送信データがシフトレジスタに格納されるまで、この期間は継続します。
5. SPI は、SPCMD1 レジスタに従って SSLni 信号をアサートし RSPCK 遅延を挿入します。
6. SPI は、SPCMD1 レジスタに従ってシリアル転送を実行します。
7. SPCMD1.SSLKP ビットが 0 であるため、SPI は SSLni 信号をネゲートします。また、SPCMD1 レジスタに従って次アクセス遅延を挿入します。

SSLKP ビットを 1 にした SPCMDm レジスタでの SSLni 信号出力設定と、次転送で使用する SPCMDm レジスタでの SSLni 信号出力設定が異なる場合、SPI は図 32.42 の（5）で示すように、SSLni 信号状態を SSLni 信号アサートに切り替えます。この SSLni 信号は次転送のコマンドに対応しています。

注 .　このような SSLni 信号の切り替えが発生した場合、MISOn 信号をドライブするスレーブが競合して信号レベルの衝突が発生する可能性があります。

マスタモードの SPI は、SSLKP ビットを使用しない場合は、SSLni 信号動作をモジュール内部で参照しています。SPCMDm.CPHA ビットが 0 の場合でも、SPI は内部で検出した次転送の SSLni 信号のアサートを使用してシリアル転送を正確に開始できます。

- SPI1

SPI は連続的なシリアル転送（バースト転送）をサポートしていないため、SSL 信号アサート状態が保持されます。ただし、汎用ポートの SSL 信号出力を制御することで、バースト転送の実現が可能です。

(5)　RSPCK 遅延（t1）

マスタモードでの RSPCK 遅延は、SPCMDm.SCKDEN ビットの設定値と SPCKD レジスタの設定値で決まります。SPI0 の場合、SPI はポインタ制御によってシリアル転送中に参照する SPCMDm レジスタを決定し、SPCMDm.SCKDEN ビットと SPCKD レジスタを使用して、表 32.9 のように RSPCK 遅延値を決定します。SPI1 の場合は、SPI は SPCMD0.SCKDEN ビットと SPCKD レジスタを使用して、表 32.9 のように RSPCK 遅延値を決定します。なお、RSPCK 遅延の定義については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

表 32.9　　SCKDEN ビット、SPCKD レジスタ、RSPCK 遅延の関係

SPCMDm.SCKDEN ビット	SPCKD.SCKDL[2:0] ビット	RSPCK 遅延
0	000b ～ 111b	1RSPCK
1	000b	1RSPCK
	001b	2RSPCK
	010b	3RSPCK
	011b	4RSPCK
	100b	5RSPCK
	101b	6RSPCK
	110b	7RSPCK
	111b	8RSPCK

(6)　SSL ネゲート遅延（t2）

マスタモードでの SSL ネゲート遅延は、SPCMDm.SLNDEN ビットの設定値と SSLND レジスタの設定値で決まります。SPI0 の場合、SPI はポインタ制御によってシリアル転送中に参照する SPCMDm レジスタを決定し、SPCMDm.SLNDEN ビットと SSLND レジスタを使用して、表 32.10 のように SSL ネゲート遅延値を決定します。SPI1 の場合は、SPI は SPCMD0.SLNDEN ビットと SSLND レジスタを使用して、表 32.10 のように SSL ネゲート遅延値を決定します。なお、SSL ネゲート遅延の定義については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

表 32.10　　SLNDEN ビット、SSLND レジスタ、SSL ネゲート遅延の関係

SPCMDm.SLNDEN ビット	SSLND.SLNDL[2:0] ビット	SSL ネゲート遅延
0	000b ～ 111b	1RSPCK
1	000b	1RSPCK
	001b	2RSPCK
	010b	3RSPCK
	011b	4RSPCK
	100b	5RSPCK
	101b	6RSPCK
	110b	7RSPCK
	111b	8RSPCK

(7)　次アクセス遅延（t3）

マスタモードでの次アクセス遅延は、SPCMDm.SPNDEN ビットの設定値と SPND レジスタの設定値で決まります。SPI0 の場合、SPI はポインタ制御によってシリアル転送中に参照する SPCMDm レジスタを決定し、SPCMDm.SPNDEN ビットと SPND レジスタを使用して、表 32.11 のようにシリアル転送時の次アクセス遅延値を決定します。SPI1 の場合は、SPI は SPCMD0.SPNDEN ビットと SPND レジスタを使用して、表 32.11 のようにシリアル転送時の次アクセス遅延値を決定します。なお、次アクセス遅延の定義については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

表 32.11　　SPNDEN ビット、SPND レジスタ、次アクセス遅延の関係

SPCMDm.SPNDEN ビット	SPND.SPNDL[2:0] ビット	次アクセス遅延
0	000b～111b	1RSPCK + 2PCLK
1	000b	1RSPCK + 2PCLK
	001b	2RSPCK + 2PCLK
	010b	3RSPCK + 2PCLK
	011b	4RSPCK + 2PCLK
	100b	5RSPCK + 2PCLK
	101b	6RSPCK + 2PCLK
	110b	7RSPCK + 2PCLK
	111b	8RSPCK + 2PCLK

(8)　初期化フロー

図 32.43 に、SPI をマスタモードで使用する場合の SPI 初期化フローの例を示します。なお、割り込みコントローラユニット、DMAC、および入出力ポートの設定方法については、各ブロックの説明を参照してください。

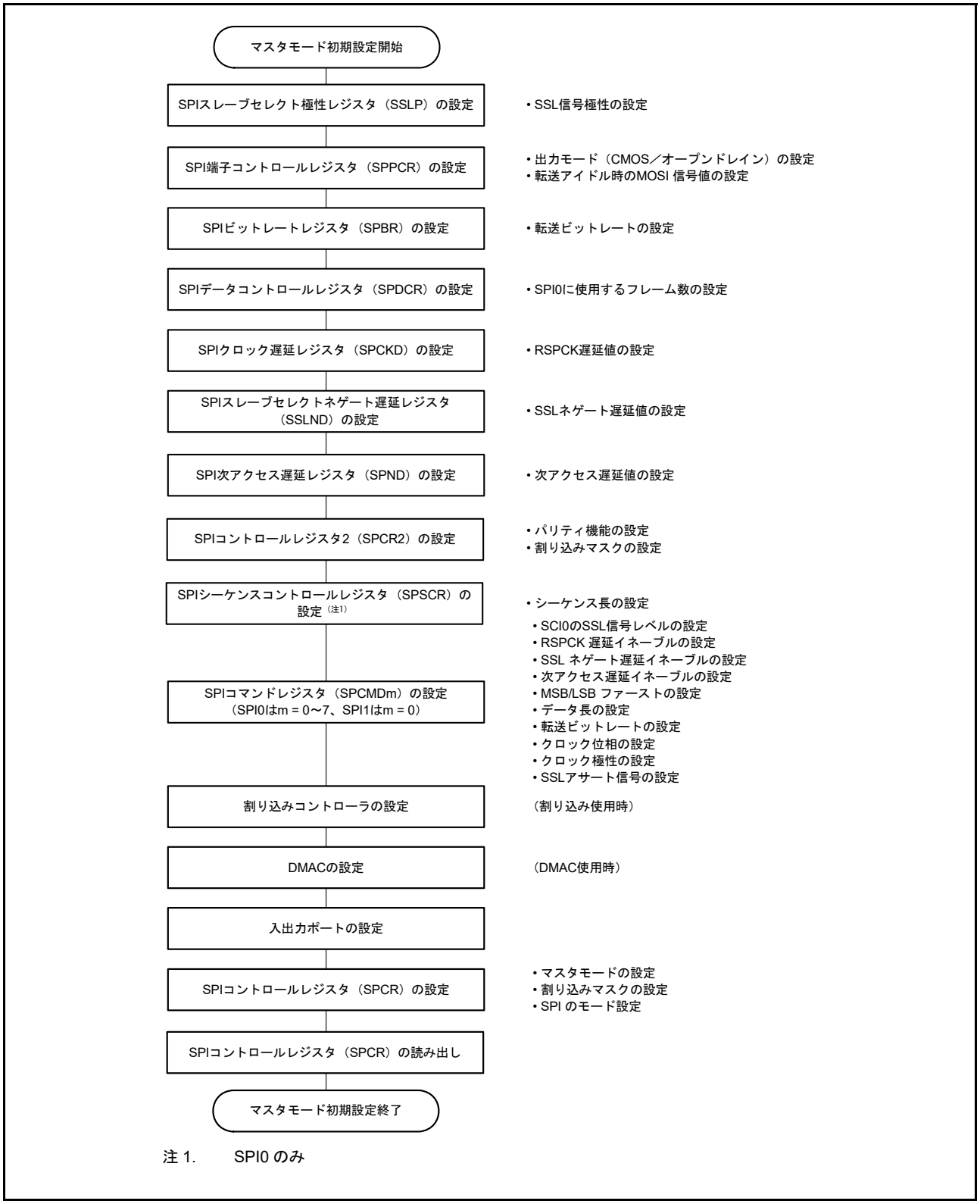


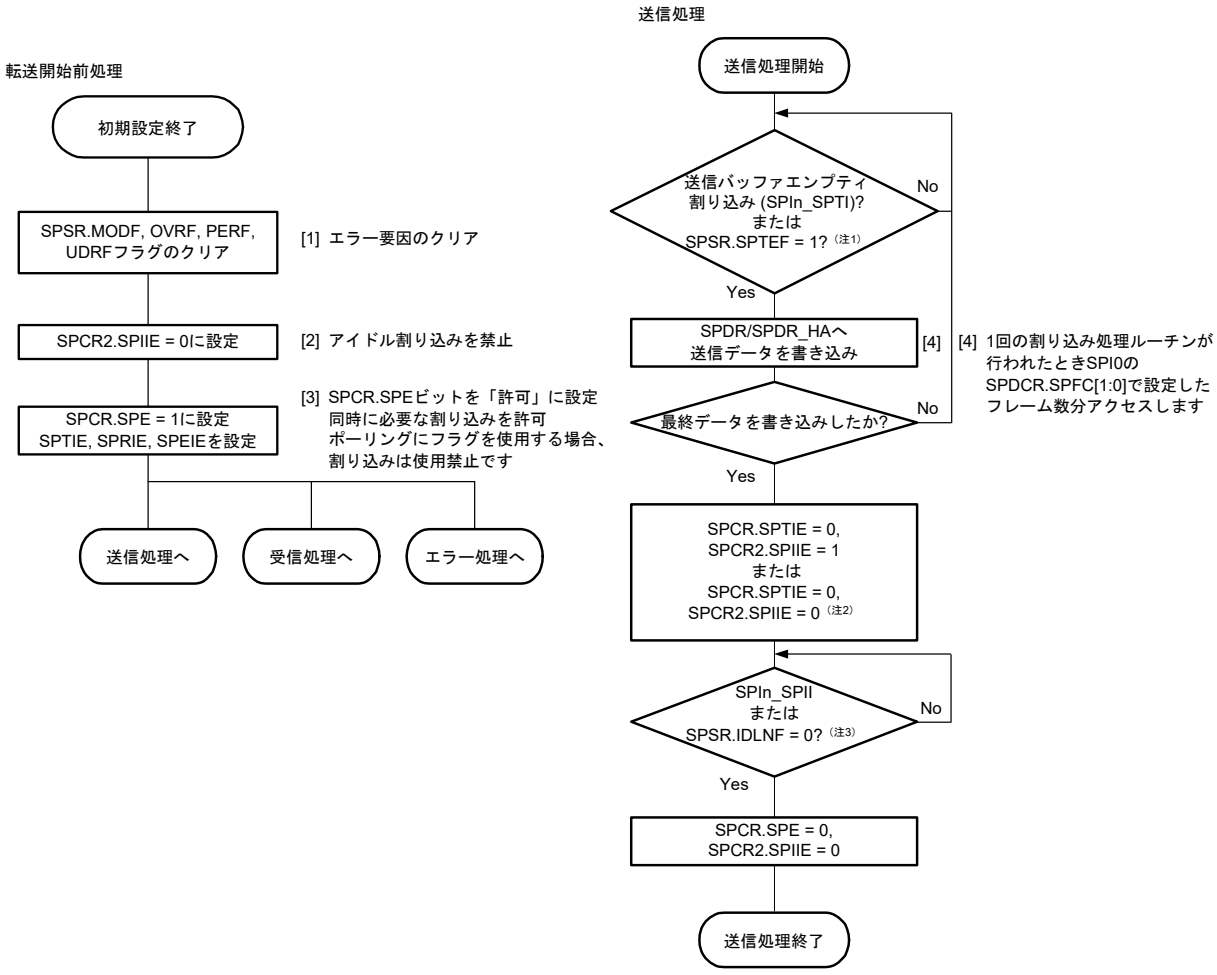
図 32.43　マスタモード時の SPI 動作の初期化フロー例

(9)　ソフトウェア処理フロー

ソフトウェア処理フローの例を図 32.44 ～図 32.46 に示します。

(a)　送信処理フロー

送信を行う場合、SPIn_SPII 割り込みが有効のときは、送信データの最終データ書き込み後にデータ送信完了を CPU に通知します。



注1.　ポーリングにフラグを使用する場合、SPSR.SPTEF フラグで送信バッファが空であることを確認してから SPDR/SPDR_HA への送信データ書き込み処理を行ってください。
注2.　ポーリング用のフラグを使用中の場合、アイドル割り込みの設定は禁止です(SPCR2.SPIIE = 0)。
注3.　ポーリング用のフラグを使用中の場合、SPDR への送信データを書き込んだ後と、PSR.IDLNF のポーリングを開始する前に 1PCLK 以上の時間を待ってください。

図 32.44　　マスタモードでの送信フロー

(b)　受信処理フロー

SPI は受信のみの動作を行わないため、送信を必要とします。

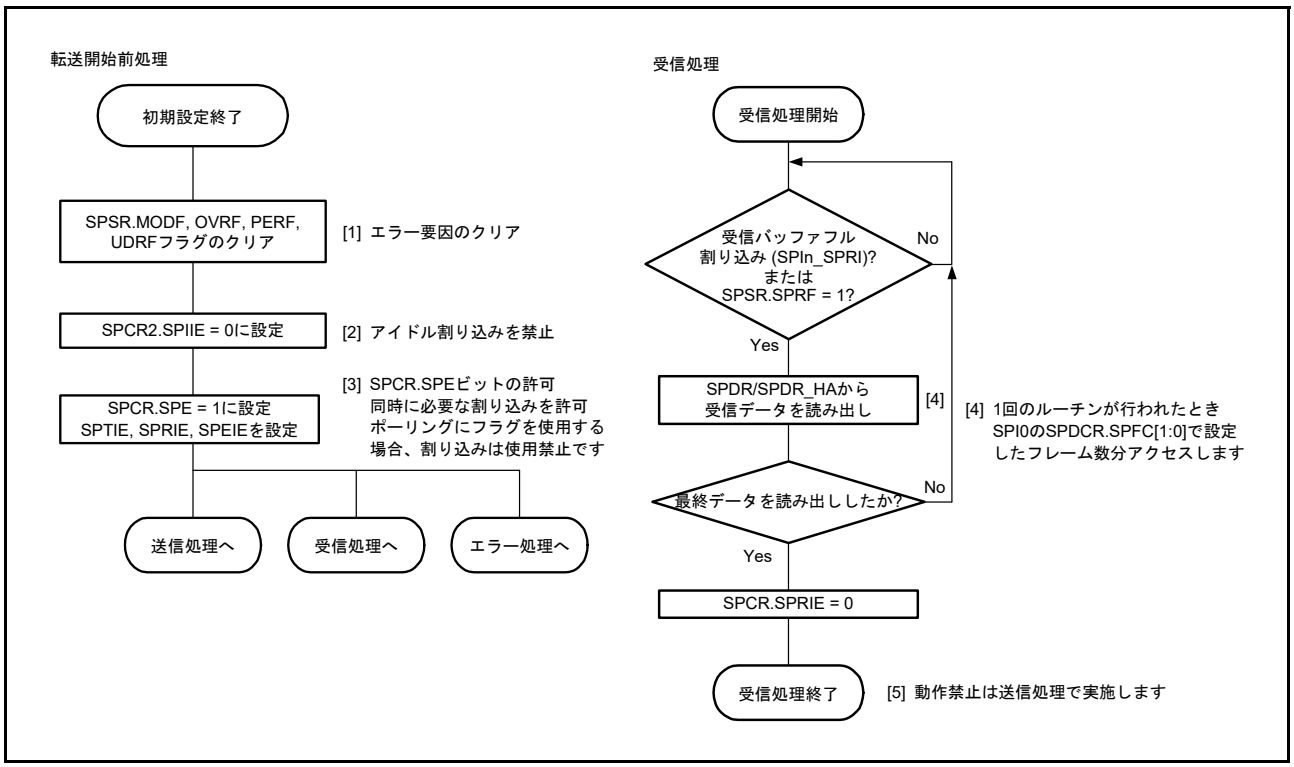


図 32.45　　マスタモードでの受信フロー

(c)　エラー処理フロー

SPI は以下のエラー検出を行います。

- モードフォルトエラー
- アンダーランエラー
- オーバーランエラー
- パリティエラー

モードフォルトエラー発生時は、SPCR.SPE ビットが自動的にクリアされ、送信／受信動作を停止させます。その他のエラー要因では、SPCR.SPE ビットはクリアされず、送信／受信動作は継続します。モードフォルトエラー以外のエラーの場合は、SPCR.SPE ビットをクリアし、動作を停止することが推奨されます。SPI0 では、動作を停止しないと、SPSSR.SPECM[2:0] ビットが更新されます。

割り込みによるエラー発生時は、エラー処理ルーチンにて ICU.IELSRj.IR フラグをクリアしてください。クリアしない場合、ICU.IELSRj.IR フラグに送信バッファエンプティ割り込みまたは受信バッファフル割り込み要求が保持されている可能性があります。また、SPIn_SPRI 割り込み要求が保持されている場合、受信バッファを読み出して SPI の内部シーケンサを初期化してください。

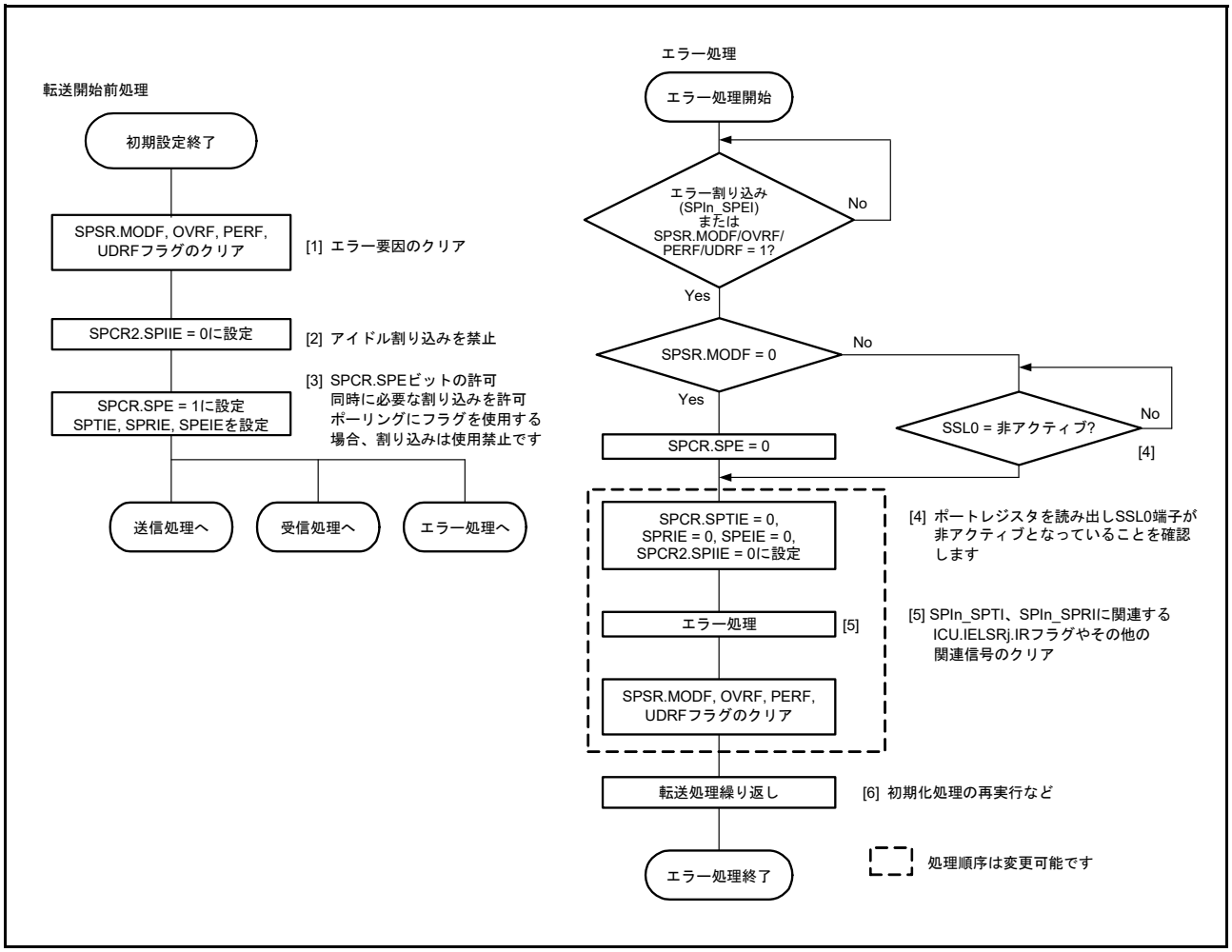


図 32.46　　マスタモードでのエラー処理フロー

32.3.10.2　スレーブモード動作

(1)　シリアル転送の開始

SPCMD0.CPHA ビットが 0 の場合、SPI は SSLn0 入力信号のアサートを検出すると、MISOn 出力信号への有効データをドライブする必要があります。このため、CPHA ビットが 0 の場合には、SSLn0 入力信号のアサートがシリアル転送開始のトリガになります。

CPHA ビットが 1 の場合には、SPI は SSLn0 入力信号のアサート状態で最初の RSPCKn エッジを検出すると、MISOn 出力信号への有効データをドライブする必要があります。このため、CPHA ビットが 1 の場合には、SSLn0 信号アサート状態における最初の RSPCKn エッジがシリアル転送開始のトリガになります。

CPHA ビットの設定にかかわらず、SPI は SSLn0 信号のアサート時に、MISOn 出力信号のドライブを実行します。CPHA ビットの設定によって、SPI が出力するデータの有効／無効が異なります。

SSLn0 入力信号の極性は、SSLP.SSL0P ビットの設定値で決まります。SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(2)　シリアル転送の終了

SPCMD0.CPHA ビットにかかわらず、SPI は最終サンプリングタイミングに関連する RSPCKn エッジを検出するとシリアル転送を終了します。受信バッファが空（SPSR.SPRF = 0）の場合には、シリアル転送終了後に SPI はシフトレジスタから SPDR/SPDR_HA レジスタの受信バッファに受信データをコピーします。また、受信バッファの状態にかかわらず、SPI はシリアル転送の終了時にシフトレジスタの状態を「空」に変更します。シリアル転送開始からシリアル転送終了までの間に SPI が SSLn0 入力信号のネゲートを検出すると、モードフォルトエラーが発生します（32.3.8　エラー検出を参照）。

最終サンプリングタイミングは転送データのビット長に依存して変化します。スレーブモードの SPI のデータ長は SPCMD0.SPB[3:0] ビットの設定値で決まります。SSLn0 入力信号の極性は、SSLP.SSL0P ビットの設定値で決まります。

SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(3)　シングルスレーブ動作時の注意点

SPCMD0.CPHA ビットが 0 の場合、SPI は SSLn0 入力信号のアサートエッジを検出するとシリアル転送を開始します。図 32.10 の例に示したような構成で SPI がシングルスレーブモードの場合は、SSLn0 入力信号がアクティブ状態に固定されます。そのため、CPHA ビットを 0 に設定した SPI では、シリアル転送を正しく開始できません。SSLn0 入力信号がアクティブ状態に固定されているときに、スレーブモードの SPI の送受信を正しく実行するには、CPHA ビットを 1 にしてください。CPHA ビットを 0 にする必要があるアプリケーションの場合、SSLn0 入力信号を固定しないでください。

(4)　バースト転送

SPCMD0.CPHA ビットが 1 であれば、SSLn0 入力信号のアサート状態を保持したままで連続的なシリアル転送（バースト転送）を実行できます。CPHA ビットが 1 の場合には、SSLn0 入力信号アクティブ状態における最初の RSPCKn エッジから最終ビット受信のためのサンプリングタイミングまでが、シリアル転送期間に相当します。SSLn0 入力信号がアクティブレベルのままであっても、SPI はアクセスの開始を検出可能なため、バースト転送に対応できます。

CPHA ビットが 0 の場合には、バースト転送の 2 回目以降のシリアル転送を正しく実行できません。

SPI1 では、バースト転送は実行できません。

(5)　初期化フロー

図 32.47 に、SPI がスレーブモードの場合の SPI 動作の初期化フローの例を示します。なお、割り込みコントローラユニット、DMAC、および入出力ポートの設定方法については、各ブロックの説明を参照してください。

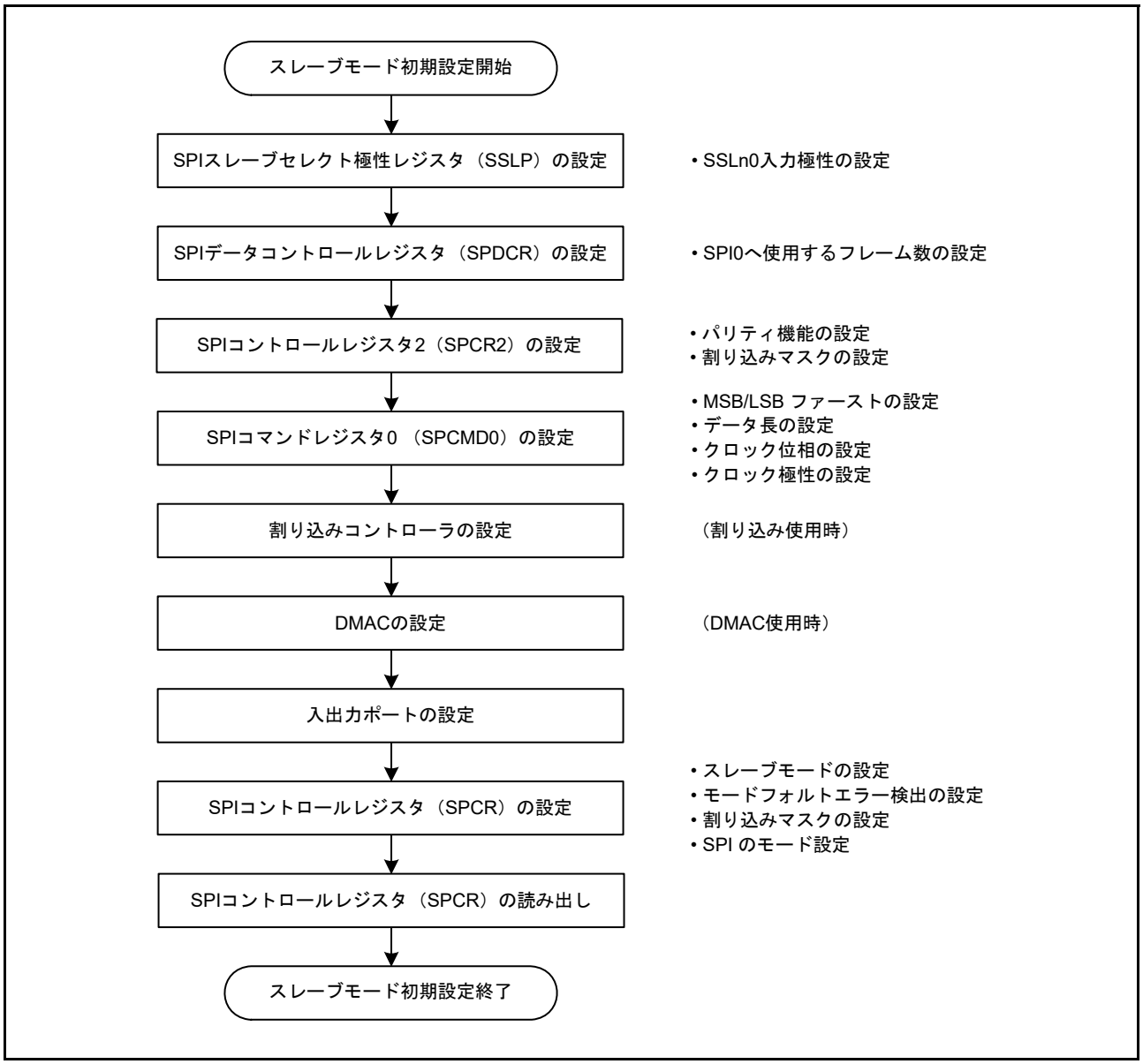
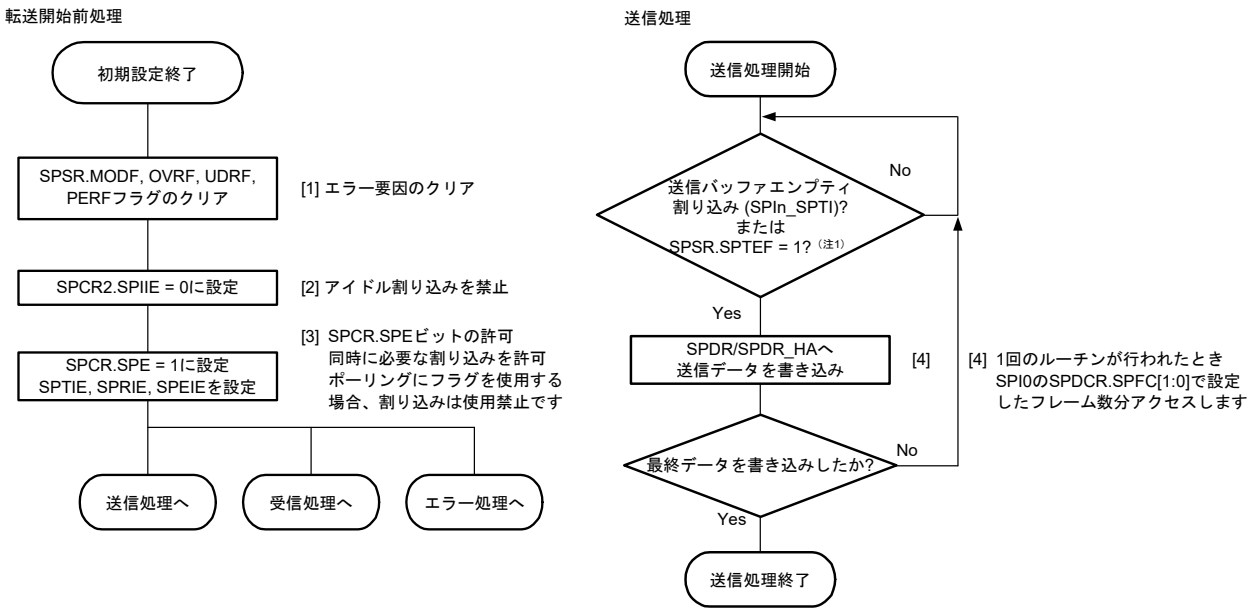


図 32.47　スレーブモード時の SPI 動作の初期化フロー例

(6)　ソフトウェア処理フロー

ソフトウェア処理フローの例を図 32.48 ～図 32.50 に示します。

(a)　送信処理フロー



注1.　ポーリングにフラグを使用する場合、SPSR.SPTEF フラグで送信バッファが空であることを確認してから SPDR/SPDR_HA への送信データ書き込み処理を行ってください。

図 32.48　スレーブモードでの送信フロー

(b)　受信処理フロー

SPI は受信のみの動作を行わないため、送信を必要とします。

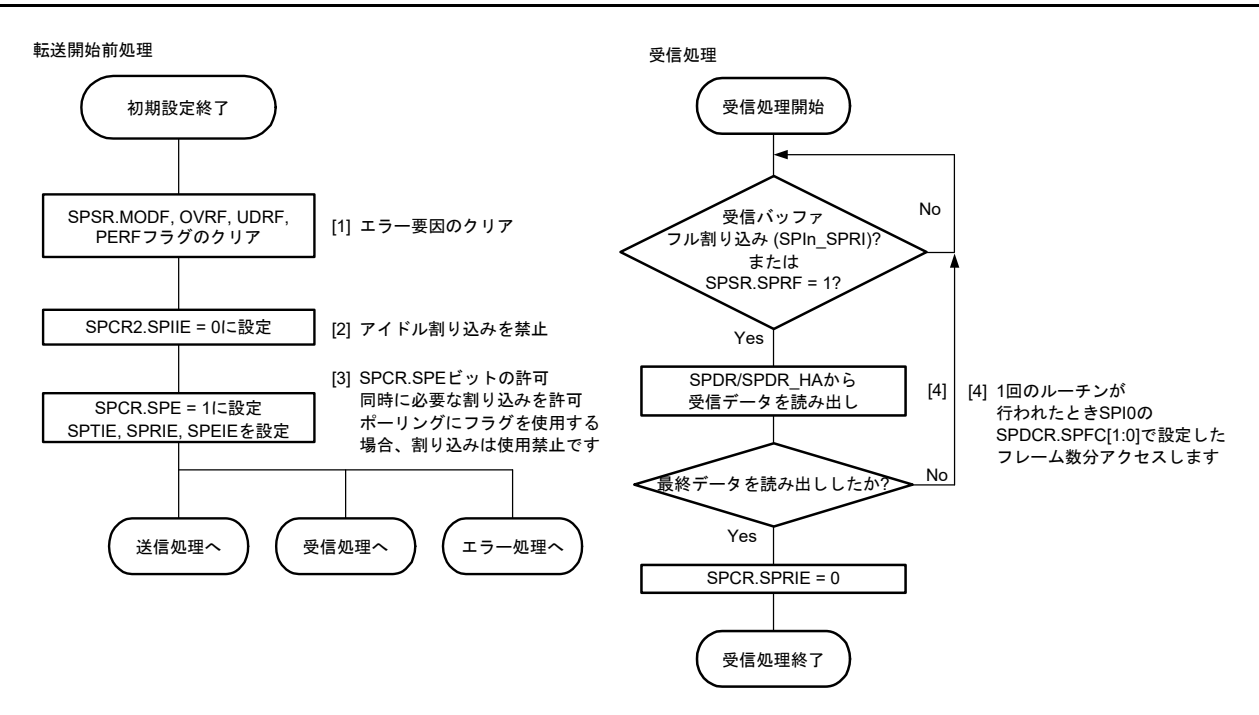


図 32.49　スレーブモードでの受信フロー

(c)　エラー処理フロー

スレーブ動作では、モードフォルトエラーが発生しても、SSLn0 端子の状態にかかわらず SPSR.MODF フラグをクリアすることが可能です。

割り込みによるエラー検出時は、エラー処理ルーチンにて ICU.IELSRj.IR フラグをクリアしてください。クリアしない場合、ICU.IELSRj.IR フラグに送信バッファエンプティ割り込みまたは受信バッファフル割り込み要求が保持されている可能性があります。受信バッファフル割り込み要求が保持されている場合、受信バッファを読み出して SPI の内部シーケンサを初期化してください。

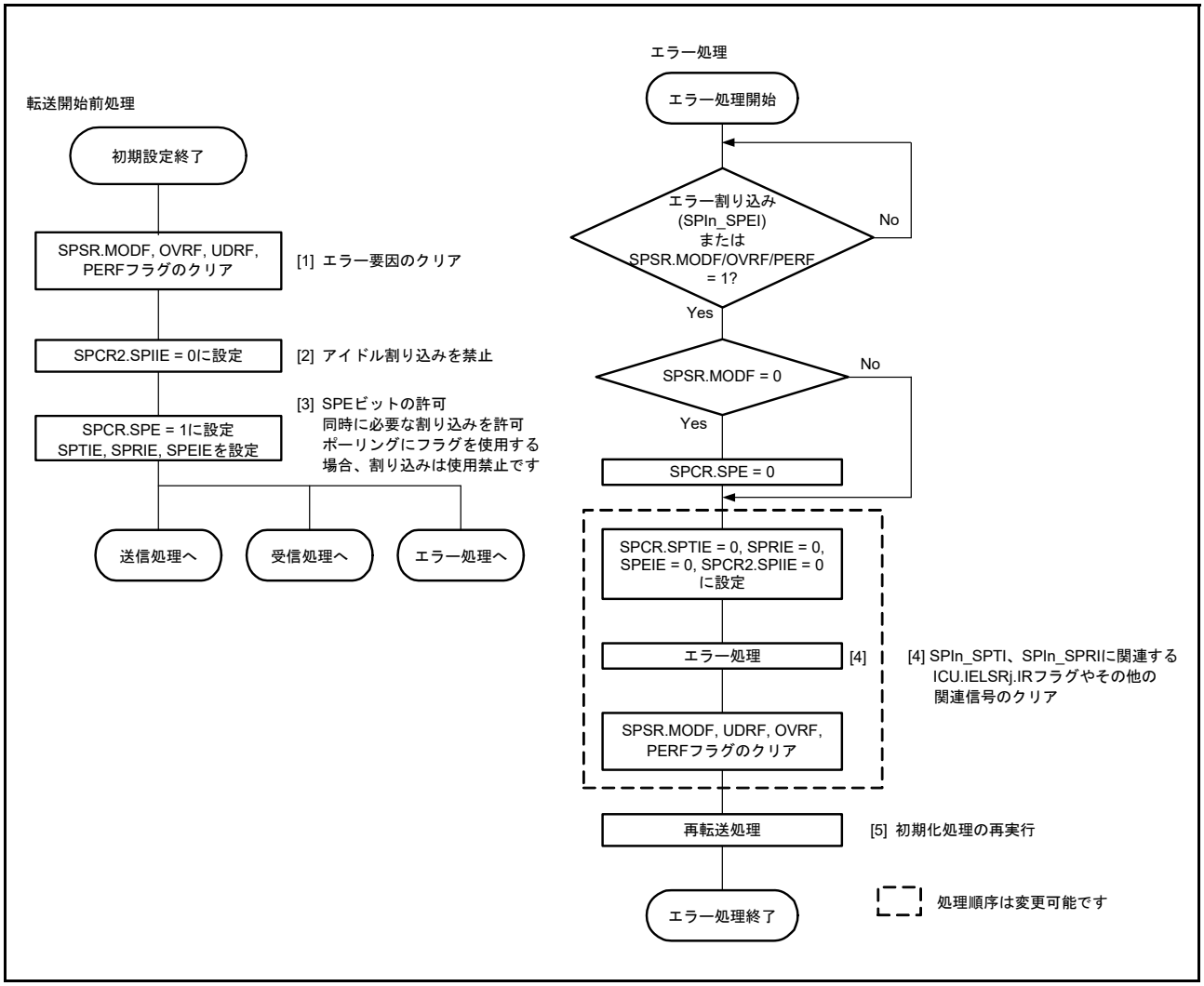


図 32.50　　スレーブモードでのエラー処理フロー

32.3.11　クロック同期式動作

SPI は、SPCR.SPMS ビットが 1 であるとき、クロック同期式動作となります。クロック同期式動作は、SSLni 端子を使用せず、RSPCKn、MOSIn、MISOn の端子を用いて通信を行います。各 SSLni 端子は入出力ポートとして使用することが可能です。

クロック同期式動作は、SSLni 端子を使用せずに通信を行いますが、モジュールの動作は SPI 動作と同様です。マスタ動作およびスレーブ動作において、SPI 動作時と同様のフローで通信を行うことができますが、SSLni 端子を使用しませんので、モードフォルトエラーの検出は行いません。

また、クロック同期式動作では、スレーブモード時（SPCR.MSTR = 0）に SPCMDm.CPHA ビットを 0 にした場合の動作はしないでください。

32.3.11.1　マスタモード動作

(1)　シリアル転送の開始

送信バッファが空、すなわち次転送のデータがセットされておらず、SPSR.SPTEF フラグ = 1 の状態で、SPDR/SPDR_HA レジスタへデータを書くと、SPI は SPDR/SPDR_HA レジスタの送信バッファ（SPTX）のデータを更新します。SPI0 の場合、SPDCR.SPFC[1:0] ビットで設定したフレーム分のデータを SPDR/SPDR_HA レジスタへ書き込み後にシフトレジスタが空のときは、SPI は送信バッファのデータをシフトレジスタにコピーしてシリアル転送を開始します。SPI は、シフトレジスタに送信データをコピーすると、シフトレジスタのステータスを「フル」に変更し、シリアル転送が終了すると、シフトレジスタのステータスを「空」に変更します。シフトレジスタのステータスを参照することはできません。

クロック同期式動作時は、SSLn0 出力信号を用いずに転送を行います。SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(2)　シリアル転送の終了

SPI はサンプリングタイミングに対応する RSPCKn エッジを送出するとシリアル転送を終了します。受信バッファが空（SPSR.SPRF = 0）の場合には、シリアル転送終了後に SPI はシフトレジスタから SPI データレジスタ（SPDR/SPDR_HA）の受信バッファにデータをコピーします。

なお、最終サンプリングタイミングは転送データのビット長に依存して変化します。マスタモードの SPI のデータ長は、SPCMDm.SPB[3:0] ビットの設定値で決まります。クロック同期式動作時は、SSLn0 出力信号を用いずに転送を行います。

SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(3)　シーケンス制御

(a)　SPI0

マスタモード時の転送フォーマットは、SPSCR レジスタ、SPCMDm レジスタ、SPBR レジスタ、SPCKD レジスタ、SSLND レジスタ、および SPND レジスタによって決定されます。クロック同期式動作時は、SSLni 信号の出力を行いませんが、これらの設定は有効です。

SPSCR レジスタは、マスタモードの SPI で実行するシリアル転送のシーケンス構成を決定するためのレジスタです。SPCMDm レジスタには以下の項目が設定されています。

- SSLni 端子の出力信号値
- MSB/LSB ファースト
- データ長
- ビットレート設定の一部
- RSPCKn 極性／位相
- SPCKD レジスタの参照要否
- SSLND レジスタの参照要否
- SPND レジスタの参照要否

SPBR レジスタは、SPI クロック遅延（SPCKD）、SSL ネゲート遅延（SSLND）、次アクセス遅延（SPND）などの、ビットレート設定の一部を保持しています。

SPI は、SPSCR レジスタに設定されたシーケンス長に従って、SPCMDm レジスタの一部／全部からなるシーケンスを構成します。SPI には、シーケンスを構成している SPCMDm レジスタに対するポインタが存在します。このポインタの値は、SPSSR.SPCP[2:0] ビットの読み出しによって確認できます。SPCR.SPE ビットを 1 にして SPI 機能を有効にすると、SPI はコマンドに対するポインタを SPCMD0 レジスタにセットし、シリアル転送の開始時に SPCMD0 レジスタの設定内容を転送フォーマットに反映します。SPI は、各データ転送の次アクセス遅延期間が終了するたびにポインタをインクリメントします。シーケンスを含む最終コマンドに対応するシリアル転送が終了すると、SPI はシーケンスを繰り返し実行するように、ポインタを SPCMD0 レジスタにセットします。

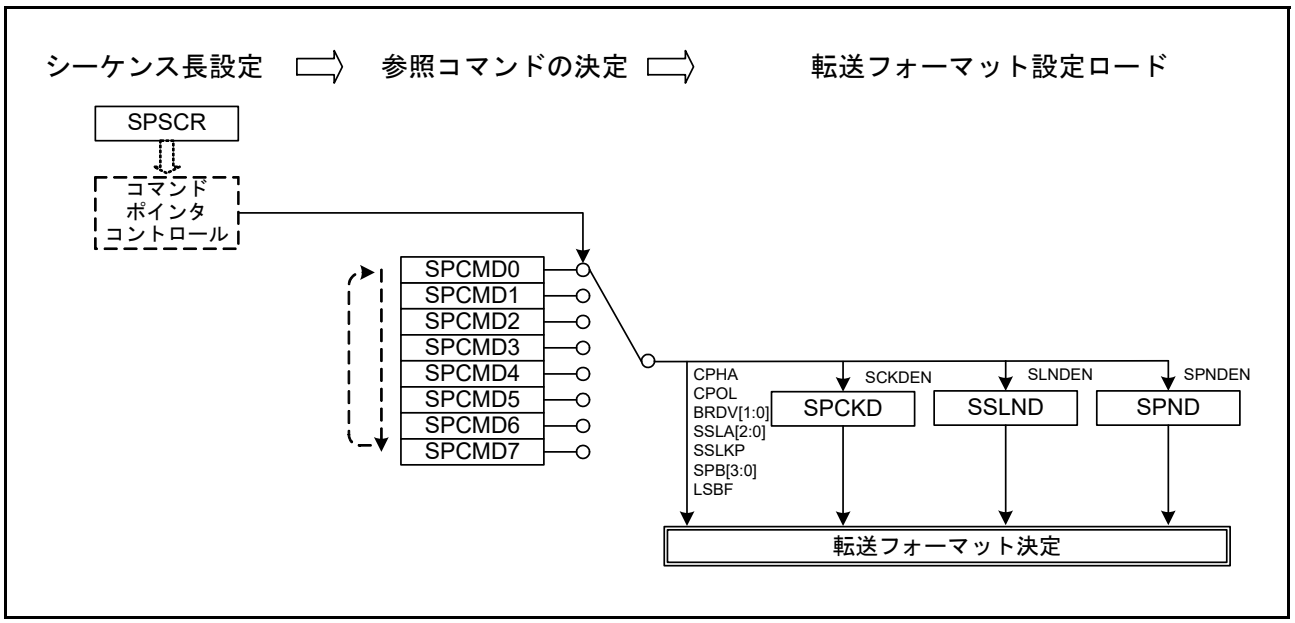


図 32.51　　マスタモードでのシリアル転送フォーマットの決定方法（SPI0）

ここでは、SPDR/SPDR_HA データと SPCMDm 設定の 2 つを合わせてフレームとします。

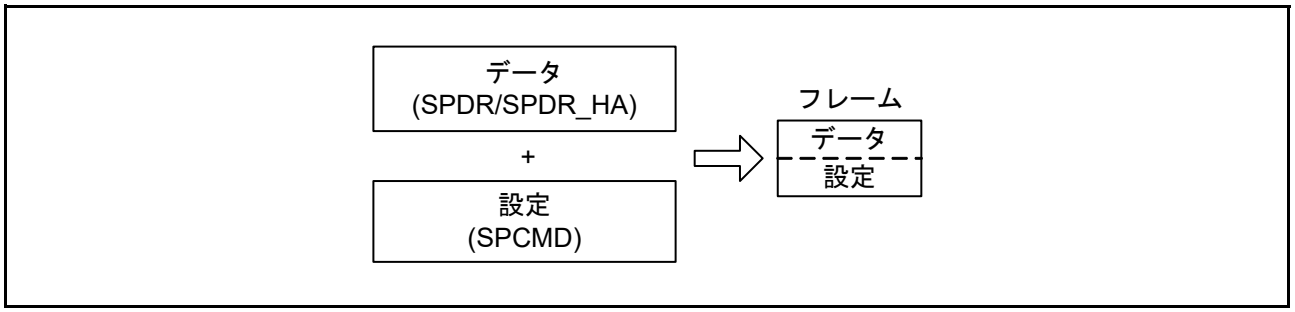


図 32.52　　フレームの概念図（SPI0）

表 32.4 の設定でシーケンス動作を行ったときのコマンドと送信バッファ／受信バッファの関係を図 32.53 に示します。

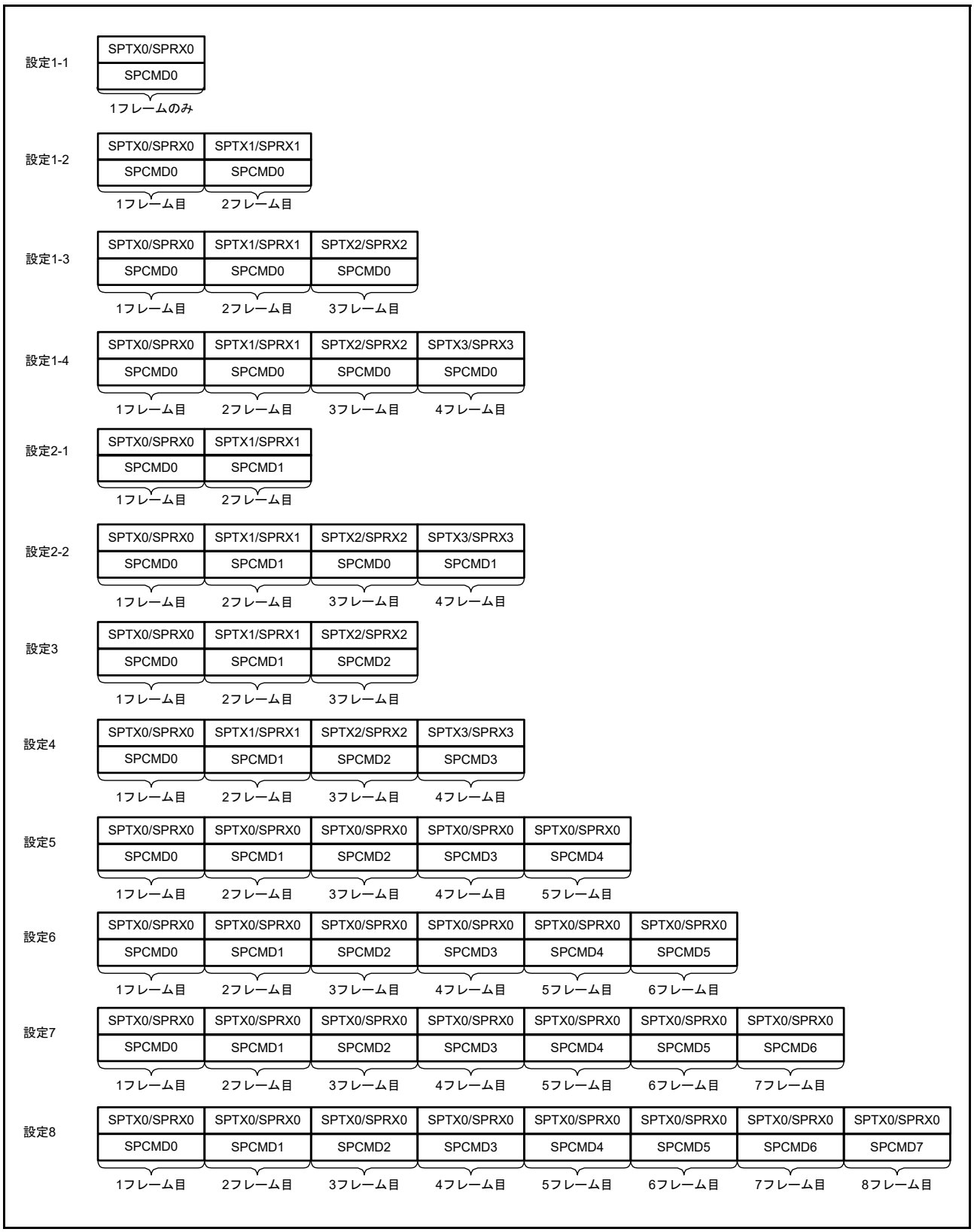


図 32.53　シーケンス動作時の SPI コマンドレジスタと送受信バッファの関係（SPI0）

(b)　SPI1

マスタモード時の転送フォーマットは、SPCMD0 レジスタ、SPBR レジスタ、SPCKD レジスタ、SSLND レジスタ、および SPND レジスタによって決定されます。クロック同期式動作時は、SSLni 信号の出力を行いませんが、これらの設定は有効です。

SPCMD0 レジスタでは、以下の項目を設定します。

- SSLni 端子の出力信号値
- MSB ファーストまたは LSB ファースト
- データ長
- ビットレート設定の一部
- RSPCKn 極性／位相
- SPCKD レジスタの参照要否
- SSLND レジスタの参照要否
- SPND レジスタの参照要否

SPBR レジスタは、SPI クロック遅延（SPCKD）、SSL ネゲート遅延（SSLND）、次アクセス遅延（SPND）などの、ビットレート設定の一部を保持しています。

SPCR.SPE ビットを 1 にして SPI 機能を有効にすると、SPI はコマンドに対するポインタを SPCMD0 レジスタにセットし、シリアル転送の開始時に SPCMD0 レジスタの設定内容を転送フォーマットに反映します。

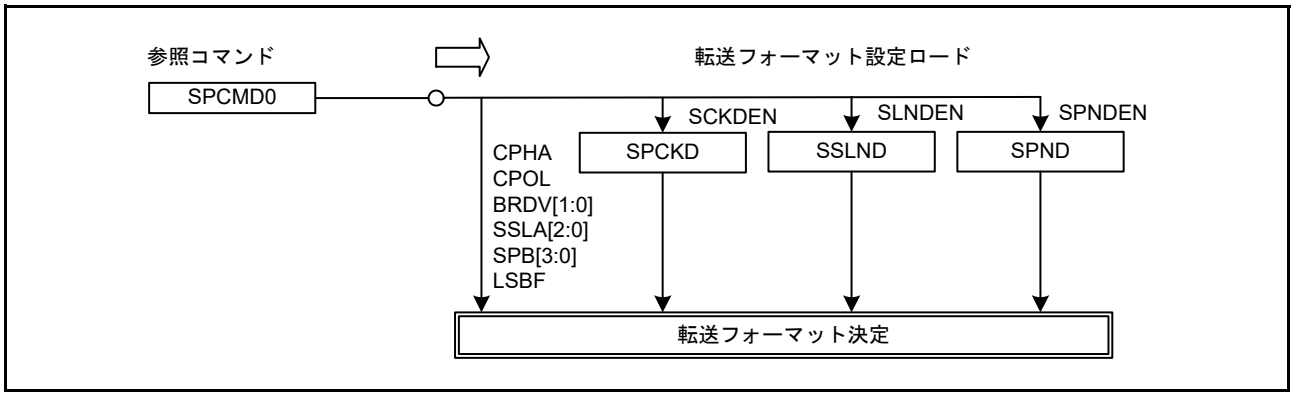


図 32.54　　マスタモードでのシリアル転送フォーマットの決定方法（SPI1）

本項では、SPDR/SPDR_HA データと SPCMD0 設定の 2 つを合わせてフレームとします。

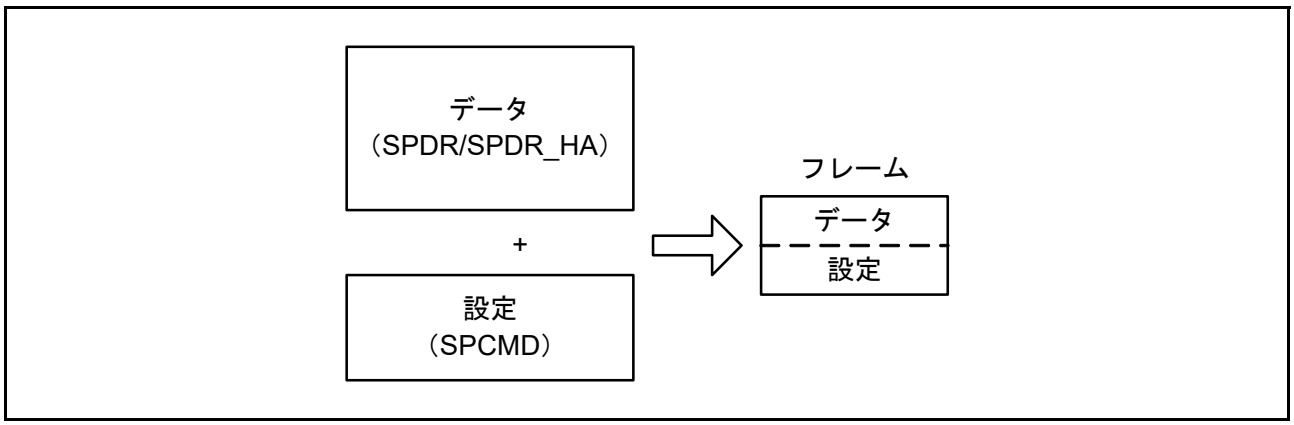


図 32.55　　マスタモードでのシリアル転送フォーマットの決定方法（SPI1）

シーケンス動作を行ったときのコマンドと送信バッファ／受信バッファの関係を図 32.56 に示します。

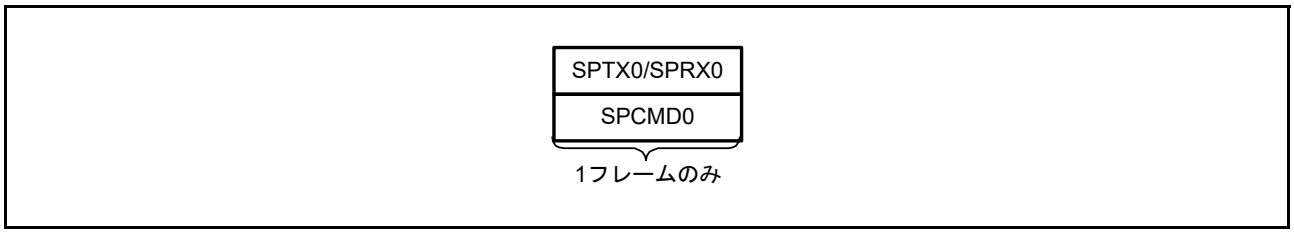


図 32.56　シーケンス動作時の SPI コマンドレジスタと送受信バッファの関係（SPI1）

(4)　初期化フロー

図 32.57 に、SPI がマスタモードである場合のクロック同期式動作の初期化フローの例を示します。なお、割り込みコントローラユニット、DMAC、および入出力ポートの設定方法については、各ブロックの説明を参照してください。

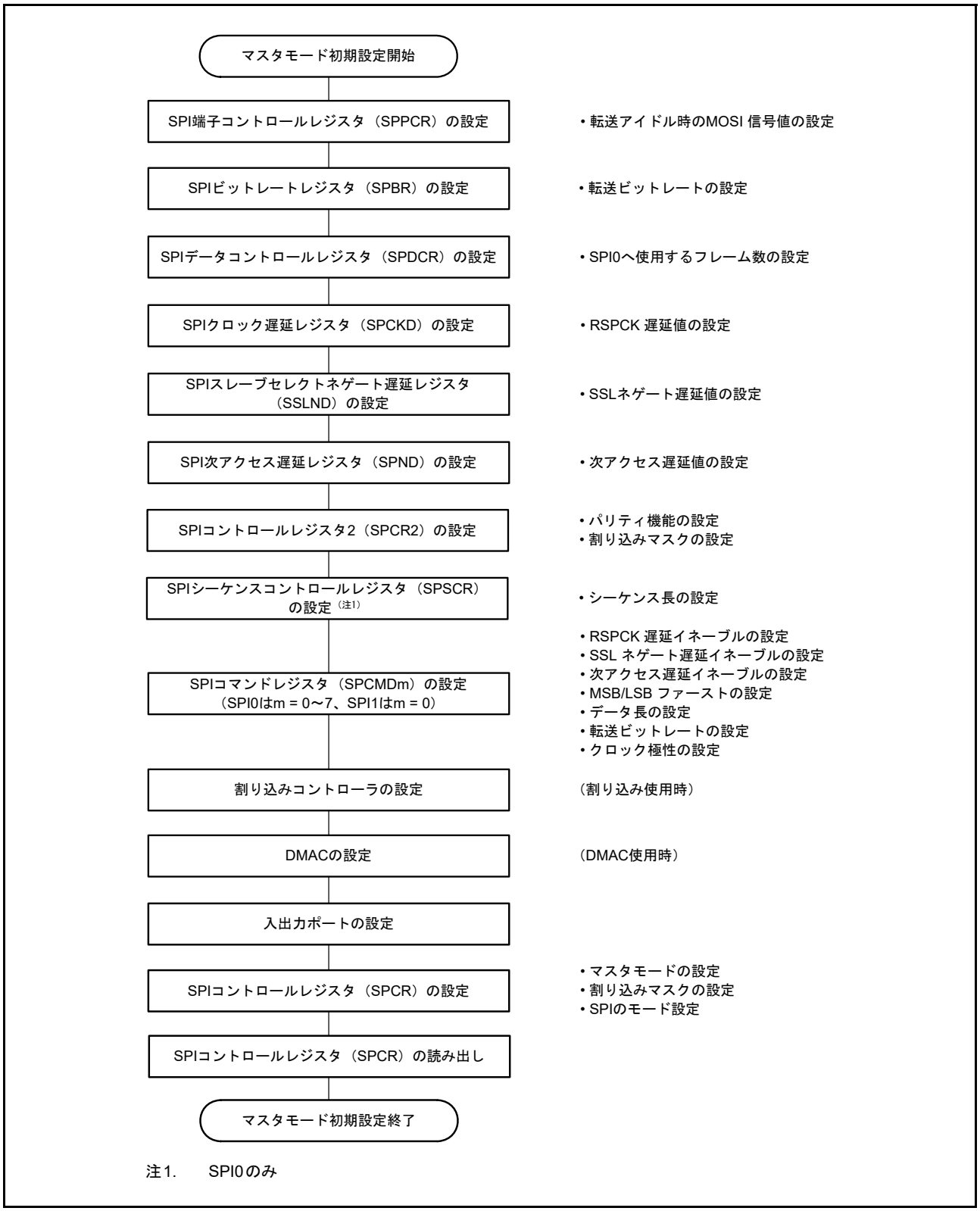


図 32.57　マスタモード時のクロック同期式動作の初期化フロー例

(5)　ソフトウェア処理フロー

クロック同期式動作時のマスタモードでのソフトウェア処理は、SPI 動作時のマスタモードでのソフトウェア処理と同様になります。詳細は、32.3.10.1 の (9)　ソフトウェア処理フローを参照してください。

注 .　　クロック同期式動作では、モードフォルトエラーは発生しません。

32.3.11.2　スレーブモード動作

(1)　シリアル転送の開始

SPCR.SPMS ビットが 1 であるとき、最初の RSPCKn エッジが SPI のシリアル転送開始のトリガになり、SPI は MISOn 出力信号をドライブします。

クロック同期式動作時は SSLn0 入力信号を使用しません。SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(2)　シリアル転送の終了

SPI は最終サンプリングタイミングに対応する RSPCKn エッジを検出するとシリアル転送を終了します。受信バッファが空（SPSR.SPRF = 0）の場合には、シリアル転送終了後に SPI はシフトレジスタから SPDR/SPDR_HA レジスタの受信バッファに受信データをコピーします。また、受信バッファの状態にかかわらず、SPI はシリアル転送の終了時にシフトレジスタの状態を「空」に変更します。なお、最終サンプリングタイミングは転送データのビット長に依存して変化します。スレーブモードの SPI のデータ長は SPCMD0.SPB[3:0] ビットの設定値で決まります。

SPI の転送フォーマットの詳細については、32.3.5　転送フォーマットを参照してください。

(3)　初期化フロー

図 32.58 に、SPI がスレーブモードである場合のクロック同期式動作の初期化フローの例を示します。なお、割り込みコントローラユニット、DMAC、および入出力ポートの設定方法については、各ブロックの説明を参照してください。

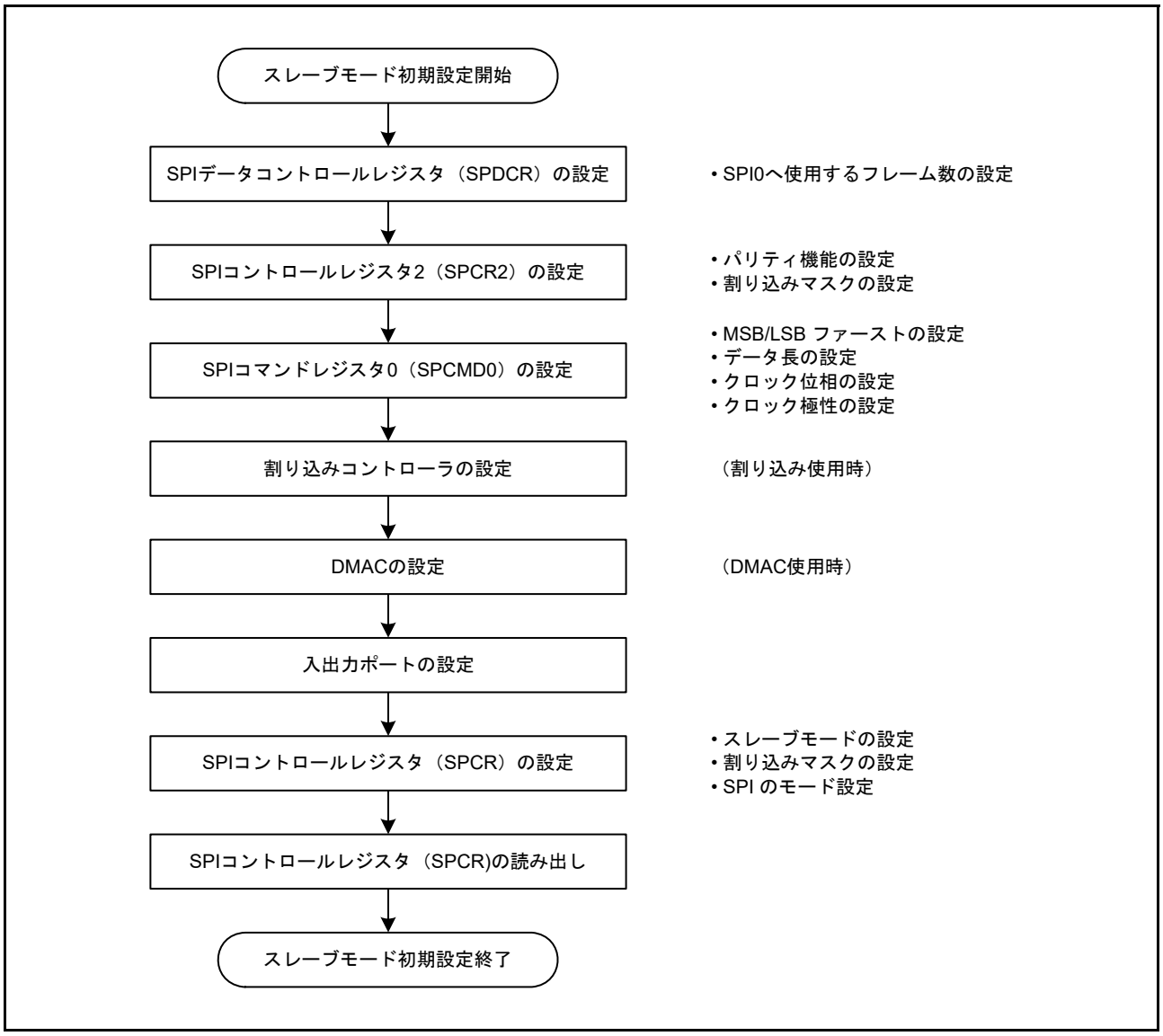


図 32.58　スレーブモード時のクロック同期式動作の初期化フロー例

(4)　ソフトウェア処理フロー

クロック同期式動作時のスレーブモードでのソフトウェア処理は、SPI 動作時のスレーブモードでのソフトウェア処理と同様になります。詳細は、32.3.10.2 の (6)　ソフトウェア処理フローを参照してください。

注 .　クロック同期式モードでは、モードフォルトエラーは発生しません。

32.3.12　ループバックモード

SPPCR.SPLP2 ビットまたは SPPCR.SPLP ビットに 1 を書き込むと、SPI は、SPCR.MSTR ビットが 1 であれば、MISOn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断し、SPCR.MSTR ビットが 0 であれば、MOSIn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断して、シフトレジスタの入力経路と出力経路を接続し、ループバックモードを確立します。また、SPCR.MSTR ビットが 1 であれば、MOSIn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断せず、SPCR.MSTR ビットが 0 であれば、MISOn 端子とシフトレジスタ間の経路を遮断しません。ループバックモードでシリアル転送を実行すると、SPI の送信データまたは送信データの反転が SPI の受信データになります。

表 32.12 に、SPLP2 ビット、SPLP ビット、および受信データの関係を示します。また、図 32.59 に、マスタモードの SPI をループバックモード（SPPCR.SPLP2 = 1、SPPCR.SPLP = 0 または 1）に設定した場合のシフトレジスタ入出力経路の構成を示します。

表 32.12　SPLP2 ビット、SPLP ビットの設定と受信データ

SPPCR.SPLP2 ビット	SPPCR.SPLP ビット	受信データ
0	0	MOSIn 端子または MISOn 端子からの入力データ
0	1	送信データの反転
1	0	送信データ
1	1	送信データ

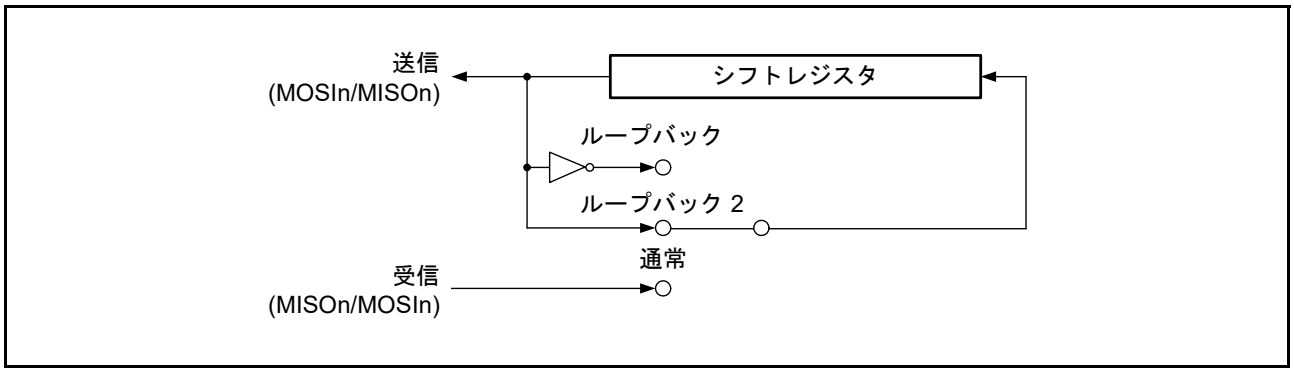


図 32.59　ループバックモード時のシフトレジスタ入出力経路の構成（マスタモード）

32.3.13　パリティビット機能の自己診断

パリティ回路は、送信データに対するパリティ付加部と、受信データに対するエラー検出部で構成されます。パリティ付加部とエラー検出部の故障を検出するために、図 32.60 に示すように、パリティ回路は自己診断を行います。

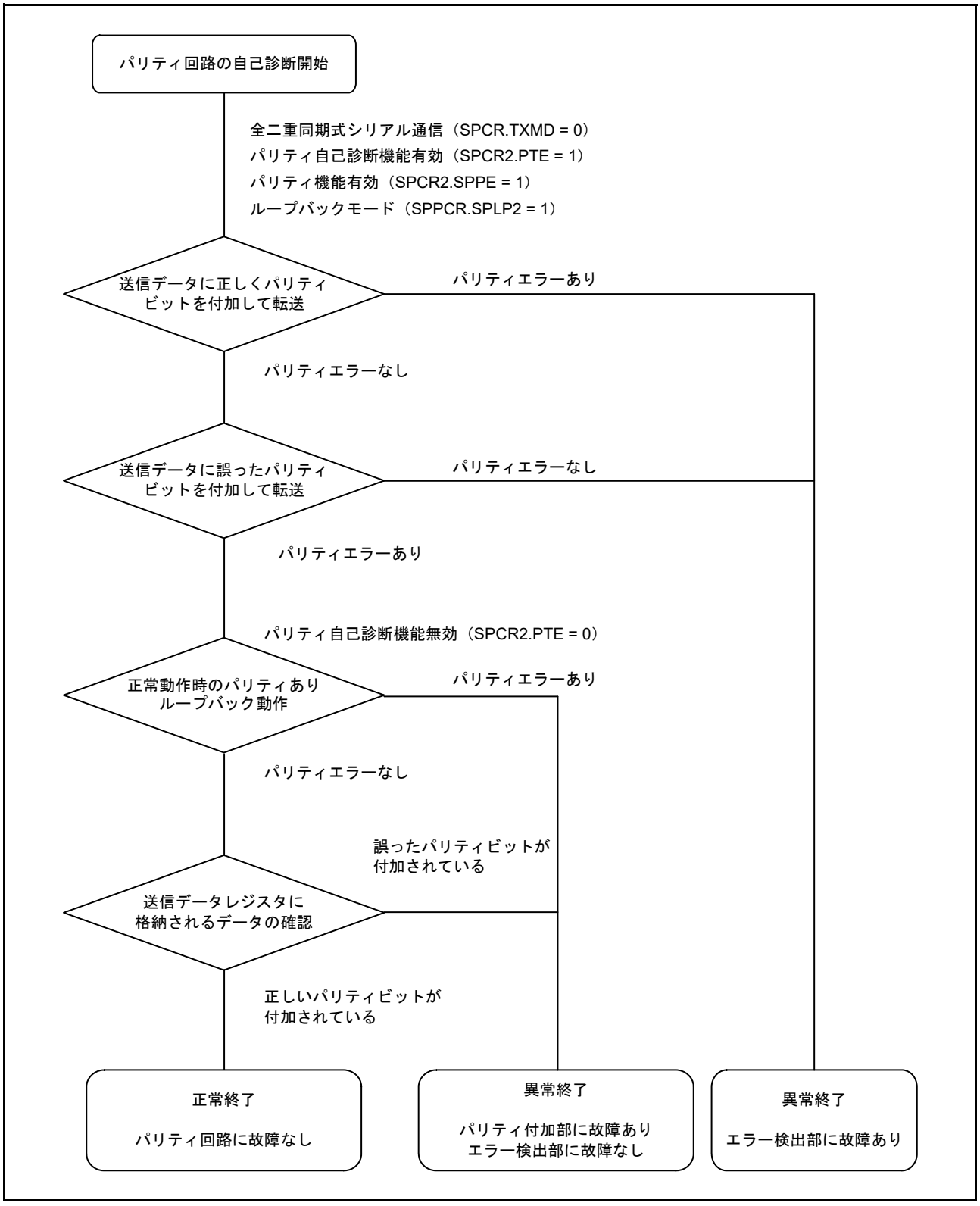


図 32.60　パリティ回路の自己診断フロー

32.3.14　割り込み要因

SPI には、以下の 8 種類の割り込み要因があります。

- 受信バッファフル
- 送信バッファエンプティ
- 送信終了
- モードフォルト
- アンダーラン
- オーバーラン
- パリティエラー
- SPI アイドル

また、受信バッファフル、送信バッファエンプティの割り込み要求で DTC、DMAC を起動し、データ転送を行うことができます。

SPIn_SPEI のベクタアドレスは、モードフォルト、アンダーラン、オーバーラン、およびパリティエラーでトリガされる割り込み要求に割り付けられるため、実際の割り込み要因は、フラグから判断する必要があります。表 32.13 に SPI の割り込み要因に対応するフラグを示します。表 32.13 の割り込み条件が成立すると、割り込みが発生します。受信バッファフルと送信バッファエンプティの要因に対しては、データ転送でクリアしてください。

DTC または DMAC を使用してデータの送受信を行う場合、最初に DTC または DMAC を転送許可状態に設定してから SPI の設定を行ってください。DTC または DMAC の設定については、それぞれ「17.　DMA コントローラ（DMAC）」と「18.　データトランスファコントローラ（DTC）」を参照してください。

ICU.IELSRj.IR フラグが 1 の状態で、送信バッファエンプティ割り込みまたは受信バッファフル割り込みの発生条件が生じても、ICU に対して割り込み要求は出力されず、内部で保持されます（内部で保持できる容量は、1 要因ごとに 1 要求までです）。ICU.IELSRj.IR フラグが 0 になると、保持されていた割り込み要求が出力されます。保持されていた割り込み要求が出力されると、その割り込み要求は自動的に破棄されます。また、内部で保持されている割り込み要求は、対応する割り込み許可ビット（SPCR.SPTIE ビットまたは SPCR.SPRIE ビット）を 0 にすることでもクリアできます。

表 32.13　SPIの割り込み要因

割り込み要因	シンボル	割り込み条件	DMAC/DTCの起動
受信バッファフル	SPIn_SPRI	SPCR.SPRIEビットが1の状態で受信バッファフル（SPSR.SPRF = 1）になったとき	可能
送信バッファエンプティ	SPIn_SPTI	SPCR.SPTIEビットが1の状態で送信バッファエンプティ（SPSR.SPTEF = 1）になったとき	可能
SPIエラー（モードフォルト、アンダーラン、オーバーラン、パリティエラー）	SPIn_SPEI	SPCR.SPEIEビットが1の状態でSPSR.MODF、OVRF、PERF、またはUDRFフラグが1になったとき	不可能
SPIアイドル	SPIn_SPII	SPCR2.SPIIEビットが1の状態でSPSR.IDLNFフラグが0になったとき	不可能
送信完了	SPIn_SPTEND	マスタモードのときは、IDLNFフラグ（SPIアイドルフラグ）が1から0になる条件で割り込みが発生します。スレーブモードのときは、表 32.15に示す条件で割り込みが発生します。	不可能

32.4　イベントリンク動作

イベントリンクコントローラ（ELC）は、次のイベント出力信号を生成することが可能です。

- 受信バッファフルイベント出力
- 送信バッファエンプティイベント出力
- モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラーイベント出力
- SPI アイドルイベント出力
- 送信完了イベント出力

イベントリンク出力信号は、割り込み許可ビットの設定に関係なく出力されます。

32.4.1　受信バッファフルイベント出力

シリアル転送の終了時に、受信したデータがシフトレジスタから SPDR/SPDR_HA レジスタへ転送されたときにイベント信号を出力します。

32.4.2　送信バッファエンプティイベント出力

送信バッファからシフトレジスタに送信データが転送されたとき、および SPE ビットが 0 から 1 に変化したときにイベント信号を出力します。

32.4.3　モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラーイベント出力

モードフォルト、アンダーラン、オーバーラン、パリティエラーを検出したときにイベント信号を出力します。このイベント信号を使用する場合は、32.5.4　モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラーイベント出力に関する制限を参照してください。

(1)　モードフォルト

表 32.14 にモードフォルトイベントの発生条件を示します。

表 32.14　モードフォルトの発生条件

条件	SPCR.MODFEN ビット	SSLn0 端子	備考
SPI 動作（SPMS = 0） スレーブ（SPCR.MSTR ビット = 0）	1	非アクティブ	通信動作中に SSLn0 端子が非アクティブになった場合のみイベント出力

(2)　アンダーラン

アンダーランイベント信号は、送信データが準備されておらず、SPCR.MSTR ビットが 0 かつ SPCR.SPE ビットが 1 の状態でシリアル転送が開始されたときに出力されます。この条件下では、MODF フラグおよび UDRF フラグが 1 となります。

(3)　オーバーラン

オーバーランイベント信号は、SPCR.TXMD ビットが 0、かつ受信バッファに未読み出しのデータがある状態でシリアル転送が終了したときに出力します。この条件下では、OVRF フラグが 1 になります。

(4)　パリティエラー

パリティエラーイベント信号は、SPCR.TXMD ビットが 0 かつ SPCR2.SPPE ビットが 1 の状態でシリアル転送が終了したとき、パリティエラーの検出時に出力します。

32.4.4　SPI アイドルイベント出力

(1)　マスタモード時

マスタモードの場合、IDLNF フラグ（SPI アイドルフラグ）が 0 になる条件が成立すると、イベントが出力されます。

(2)　スレーブモード時

スレーブモードの場合、SPCR.SPE ビットが 0（SPI 初期化）のとき、イベントが出力されます。

32.4.5　送信完了イベント出力

SPI 動作とクロック同期式動作ともに、マスタモード時に IDLNF フラグ（SPI アイドルフラグ）が 1 から 0 に変化すると、イベントが出力されます。

表 32.15　スレーブモードでの送信完了イベント出力の発生条件

条件	送信バッファ状態	シフトレジスタ状態	その他
SPI動作（SPMS = 0）	エンプティ	エンプティ	SSLn0入力ネゲート
クロック同期式動作（SPMS = 1）	エンプティ	エンプティ	最終RSPCKnのエッジ検出

動作がマスタモードまたはスレーブモードのどちらであっても、送信中に SPCR.SPE ビットに 0 が書き込まれた場合、あるいは、モードフォルトエラーまたはアンダーランエラーの発生によって SPCR.SPE ビットがクリアされた場合、イベントは出力されません。

32.5　使用上の注意事項

32.5.1　モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタ B（MSTPCRB）により、SPI の動作禁止／許可を設定できます。SPI は、リセット後の初期状態では動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。モジュールストップコントロールレジスタ B の詳細については、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

32.5.2　低消費電力機能に関する制約

モジュールストップ機能を使用する場合、およびスリープモード以外の低消費電力モードへ遷移する場合は、あらかじめ SPCR.SPE ビットを 0 にしてから通信を終了させてください。

32.5.3　転送の開始に関する制限

ICU.IELSRj.IR フラグが 1 の状態で転送を開始すると、転送開始後も割り込み要求が内部で保持されるため、ICU.IELSRj.IR フラグが予期しない挙動となる可能性があります。これを避けるには、動作を許可する（SPCR.SPE ビットを 1 にする）前に、下記の手順で割り込み要求をクリアしてください。

1. 転送が停止していること（SPCR.SPE = 0）を確認する。
2. 対応する割り込み許可ビット（SPCR.SPTIE ビットまたは SPCR.SPRIE ビット）を 0 にする。
3. 対応する割り込み許可ビット（SPCR.SPTIE ビットまたは SPCR.SPRIE ビット）を読み出して、0 であることを確認する。
4. ICU.IELSRj.IR フラグを 0 にする。

32.5.4　モードフォルト／アンダーラン／オーバーラン／パリティエラーイベント出力に関する制限

SPI がマルチマスタモード（SPCR.SPMS ビット = 0、SPCR.MSTR ビット = 1、SPCR.MODFEN ビット = 1）の場合は、モードフォルト、アンダーラン、オーバーラン、およびパリティエラーイベントを使用することはできません。

32.5.5　SPRF および SPTEF フラグに関する制限

ポーリング用のフラグ（SPRF および SPTEF）を使用している場合、割り込みを使用することはできません。SPCR.SPRIE および SPCR.SPTIE ビットは 0 にしてください。割り込みまたはフラグのどちらか一方のみ使用可能です。

33.　巡回冗長検査（CRC）演算器

33.1　概要

巡回冗長検査（CRC: Cyclic Redundancy Check）演算器は、CRC コードを生成してデータエラーを検出します。LSB ファーストまたは MSB ファーストでの通信用に、CRC 演算結果のビットオーダを切り替えることができます。さらに、いくつかの CRC 生成多項式が利用可能です。スヌープ機能により、特定のアドレスに対する読み出しおよび書き込みをモニタできます。この機能は、シリアル送信バッファへの書き込みとシリアル受信バッファからの読み出しをモニタする場合など、特定のイベントで CRC コードの自動生成が必要となるアプリケーションで役立ちます。

表 33.1 に CRC 演算器の仕様を、図 33.1 にブロック図を示します。

表 33.1　CRCの仕様

項目	内容	
データサイズ	8ビット	32ビット
CRC演算対象データ（注1）	8nビット単位の任意データに対しCRCコードを生成（n = 自然数）	32nビット単位のデータに対してCRCコードを生成（n = 自然数）
CRC演算処理方式	8ビット並列実行	32ビット並列実行
CRC生成多項式	3つの生成多項式から1つ選択可能 [8ビットCRC] • $X^8 + X^2 + X + 1$ (CRC-8) [16ビットCRC] • $X^{16} + X^{15} + X^2 + 1$ (CRC-16) • $X^{16} + X^{12} + X^5 + 1$ (CRC-CCITT)	2つの生成多項式から1つ選択可能 [32ビットCRC] • $X^{32} + X^{26} + X^{23} + X^{22} + X^{16} + X^{12} + X^{11} + X^{10} + X^8 + X^7 + X^5 + X^4 + X^2 + X + 1$ (CRC-32) • $X^{32} + X^{28} + X^{27} + X^{26} + X^{25} + X^{23} + X^{22} + X^{20} + X^{19} + X^{18} + X^{14} + X^{13} + X^{11} + X^{10} + X^9 + X^8 + X^6 + 1$ (CRC-32C)
CRC演算切り替え	LSBファーストまたはMSBファーストでの通信用に、CRC演算結果のビットオーダの切り替えが可能	
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減	
CRCスヌープ	特定のレジスタアドレスに対する読み出しと書き込みのモニタ	—

注 1.　回路は、CRC 演算で使用するデータを分割できません。8 または 32 ビット単位で書いてください。

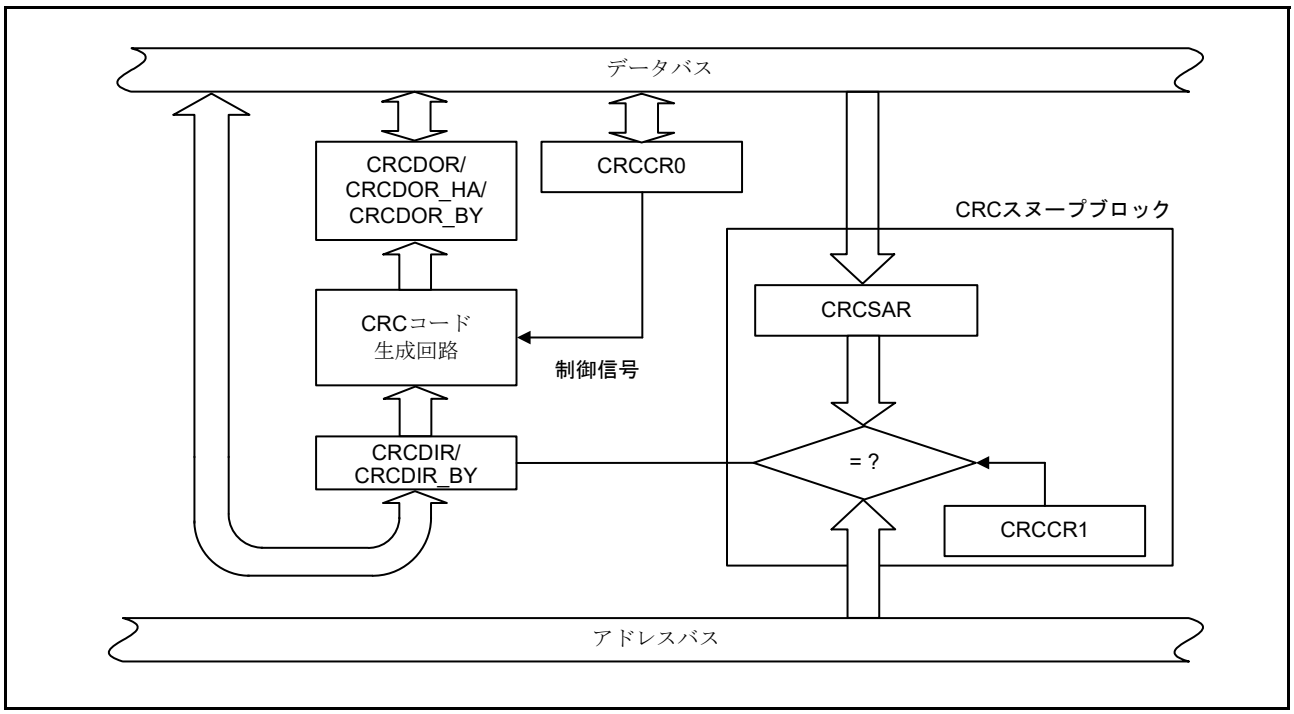


図 33.1　CRC 演算器のブロック図

33.2　レジスタの説明

33.2.1　CRC コントロールレジスタ 0（CRCCR0）

アドレス　CRC.CRCCR0 4007 4000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DORCLR	LMS	—	—	—	GPS[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	GPS[2:0]	CRC生成多項式切り替え	b2 b1 b0 0 0 0: 演算しません 0 0 1: 8ビットCRC-81 ($X^8 + X^2 + X + 1$) 0 1 0: 16ビットCRC-16 ($X^{16} + X^{15} + X^2 + 1$) 0 1 1: 16ビットCRC-CCITT ($X^{16} + X^{12} + X^5 + 1$) 1 0 0: 32ビットCRC-32 ($X^{32} + X^{26} + X^{23} + X^{22} + X^{16} + X^{12} + X^{11} + X^{10} + X^8 + X^7 + X^5 + X^4 + X^2 + X + 1$) 1 0 1: 32ビットCRC-32C ($X^{32} + X^{28} + X^{27} + X^{26} + X^{25} + X^{23} + X^{22} + X^{20} + X^{19} + X^{18} + X^{14} + X^{13} + X^{11} + X^{10} + X^9 + X^8 + X^6 + 1$) その他：演算しません	R/W
b5-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	LMS	CRC演算切り替え	0：LSBファースト通信用にCRCを生成 1：MSBファースト通信用にCRCを生成	R/W
b7	DORCLR	CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BYレジスタクリア	1：CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BYレジスタをクリア 読むと0が読めます。	W （注1）

注 1.　このレジスタに書き込みを行うときは、本ビットは必ず 1 にしてください。

GPS[2:0] ビット（CRC 生成多項式切り替え）

CRC 生成多項式を選択します。

LMS ビット（CRC 演算切り替え）

生成した CRC コードのビットオーダを選択します。LSB ファーストで通信を行う場合は CRC コードの下位バイトから先に、MSB ファーストで通信を行う場合は CRC コードの上位バイトから先に送信してください。CRC コードの送信および受信については、33.3　動作説明を参照してください。

DORCLR ビット（CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY）

本ビットを 1 にすると、CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY レジスタが 0000_0000h になります。

読むと 0 が読めます。本ビットには 1 のみ書けます。

33.2.2 CRC コントロールレジスタ 1（CRCCR1）

アドレス CRC.CRCCR1 4007 4001h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CRCSEN	CRCSWR	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	CRCSWR	スヌープオンライト／リード切り替え	0：スヌープオンリード 1：スヌープオンライト	R/W
b7	CRCSEN	スヌープ許可	0：禁止 1：許可	R/W

CRCSWR ビット（スヌープオンライト／リード切り替え）

アドレスモニタ機能でのアクセス方向を選択します。

本ビットを 0（初期値）にすると、特定のレジスタアドレスの読み出しに対して CRC スヌープ動作が有効になります。同様に、本ビットを 1 にすると、特定のレジスタアドレスの書き込みに対して CRC スヌープ動作が有効になります。

CRCSEN ビット（スヌープ許可）

本ビットを 1 にすると、CRC スヌープ動作が有効になります。0 にすると、CRC スヌープ動作が無効になります。

33.2.3 CRC データ入力レジスタ（CRCDIR/CRCDIR_BY）

アドレス CRC.CRCDIR/CRCDIR_BY 4007 4004h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

CRCDIR レジスタは、CRC-32 または CRC-32C 演算用データを書き込むための 32 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。CRCDIR_BY レジスタは、CRC-8、CRC-16、または CRC-CCITT 演算用データを書き込むための 8 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。

33.2.4 CRC データ出力レジスタ（CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY）

アドレス CRC.CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY 4007 4008h

	b31	b30	b29	b28	b27	b26	b25	b24	b23	b22	b21	b20	b19	b18	b17	b16
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

CRCDOR レジスタは、CRC-32 または CRC-32C 演算用の 32 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。

CRCDOR_HA レジスタは、CRC-16 または CRC-CCITT 演算用の 16 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。

CRCDOR_BY レジスタは、CRC-8 演算用の 8 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。

初期値は 0000_0000h であるため、初期値以外の値を用いて演算する場合は、CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY レジスタを書き換えてください。

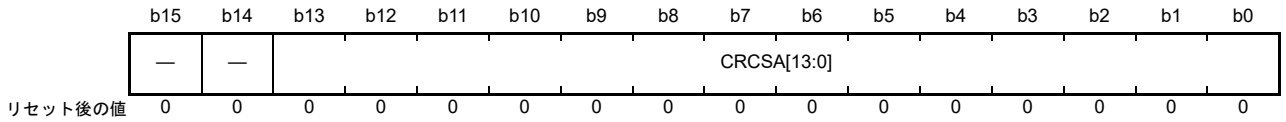
CRCDIR/CRCDIR_BY レジスタに書き込まれたデータは CRC 演算され、結果は CRCDOR/CRCDOR_HA/CRCDOR_BY レジスタに格納されます。転送データに続いて CRC コードを計算し、その結果が 0000_0000h であると、CRC エラーなしと判断できます。

8 ビット CRC（$X^8 + X^2 + X + 1$ の多項式）を使用した場合、CRCDOR_BY レジスタに有効な CRC コードが得られます。

16 ビット CRC（$X^{16} + X^{15} + X^2 + 1$、または $X^{16} + X^{12} + X^5 + 1$ の多項式）を使用した場合、CRCDOR_HA レジスタに有効な CRC コードが得られます。

33.2.5　スヌープアドレスレジスタ（CRCSAR）

アドレス　CRC.CRCSAR 4007 400Ch



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	CRCSA[13:0]	レジスタスヌープアドレス	SCIモジュールのTDRまたはRDRアドレスをスヌープにします。	R/W
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CRCSA[13:0] ビット（レジスタスヌープアドレス）

これらのビットには、CRC スヌープ動作でモニタされるレジスタアドレスの下位 14 ビットを設定します。

CRCSA[13:0] ビットで使用できるのは、以下のアドレスのみです。

- 4007 0003h : SCI0.TDR, 4007 0005h : SCI0.RDR
- 4007 0023h : SCI1.TDR, 4007 0025h : SCI1.RDR
- 4007 0123h : SCI9.TDR, 4007 0125h : SCI9.RDR
- 4007 000Fh : SCI0.FTDRL, 4007 0011h : SCI0.FRDRL
- 4007 002Fh : SCI1.FTDRL, 4007 0031h : SCI1.FRDRL

33.3 動作説明

33.3.1 基本動作

CRC 演算器は、LSB ファーストまたは MSB ファースト転送で使用する CRC コードを生成します。

16 ビットの CRC-CCITT 生成多項式（$X^{16}+X^{12}+X^5+1$）を使用して、入力データ（F0h）に対し CRC コードを生成する例を以下に示します。この例では、CRC 演算の前に、CRC データ出力レジスタ（CRCDOR_HA）の値をクリアします。

8 ビット CRC（X^8+X^2+X+1 の多項式）を使用している場合は、CRCDOR_BY レジスタに有効な CRC コードのビットが得られます。32 ビット CRC を使用している場合は、CRCDOR レジスタに有効な CRC コードのビットが得られます。

図 33.2 と図 33.3 に LSB ファーストと MSB ファーストのデータ送信例を、図 33.4 と図 33.5 に LSB ファーストと MSB ファーストのデータ受信例をそれぞれ示します。

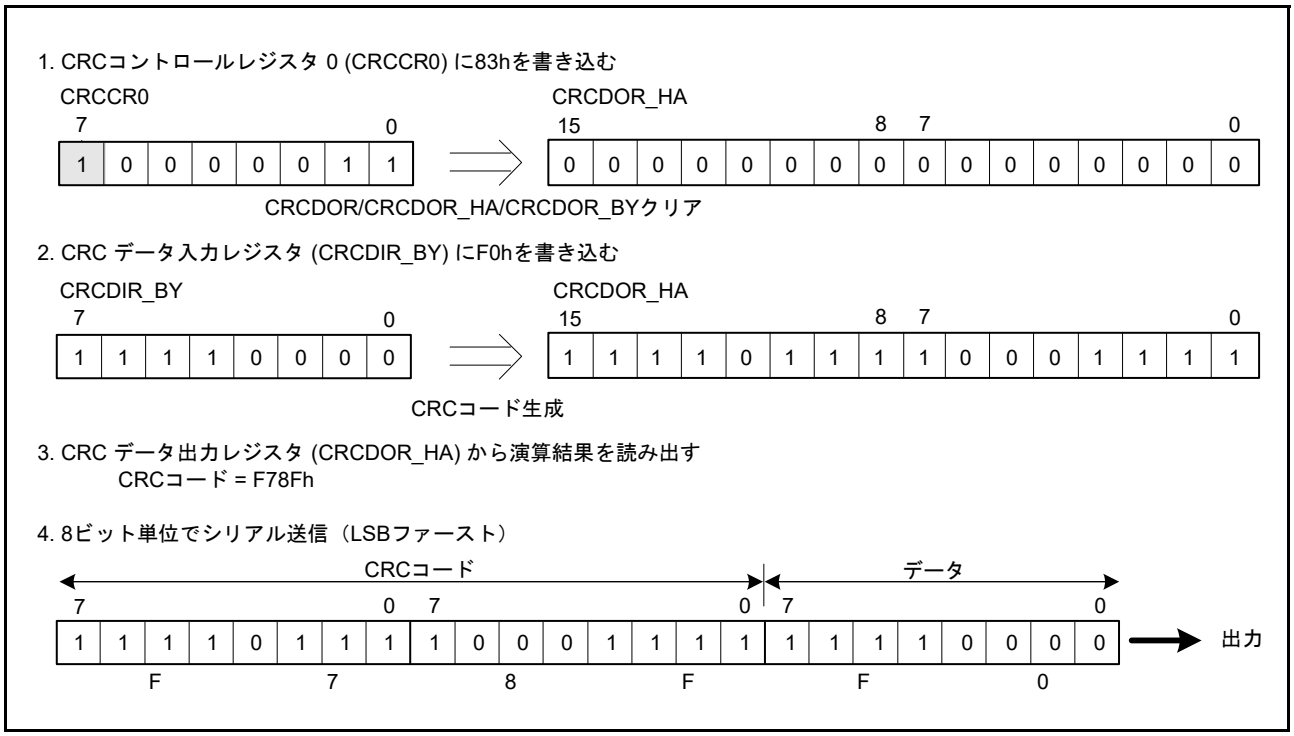


図 33.2 LSB ファーストのデータ送信

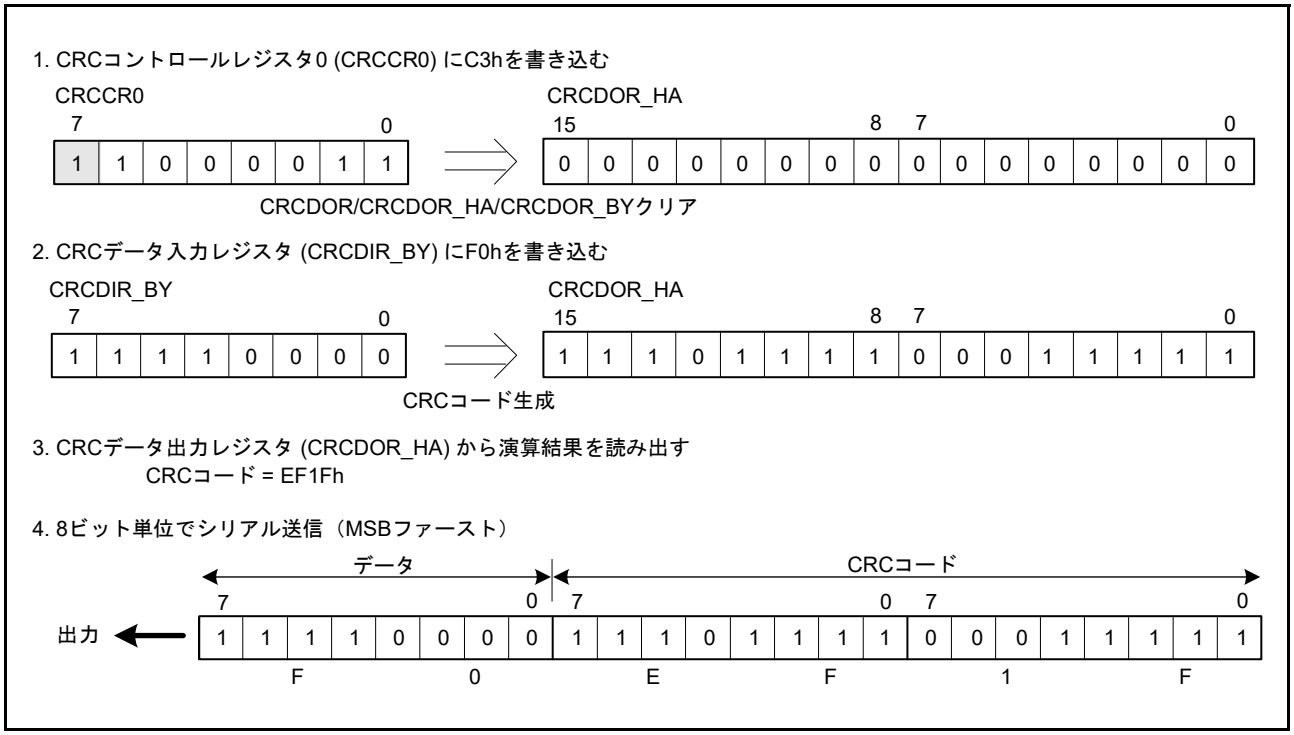


図 33.3 MSB ファーストのデータ送信

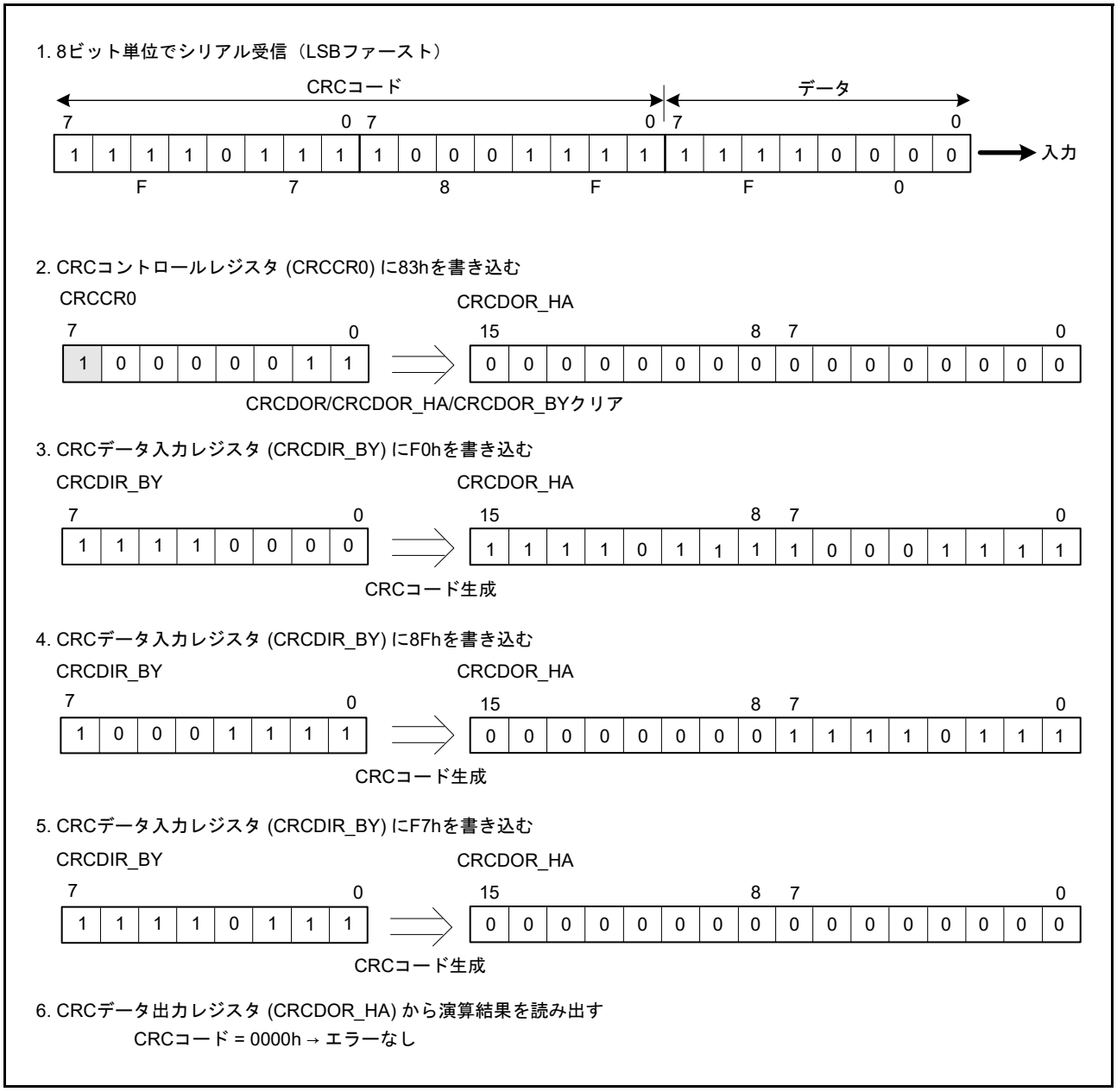


図 33.4 LSB ファーストのデータ受信

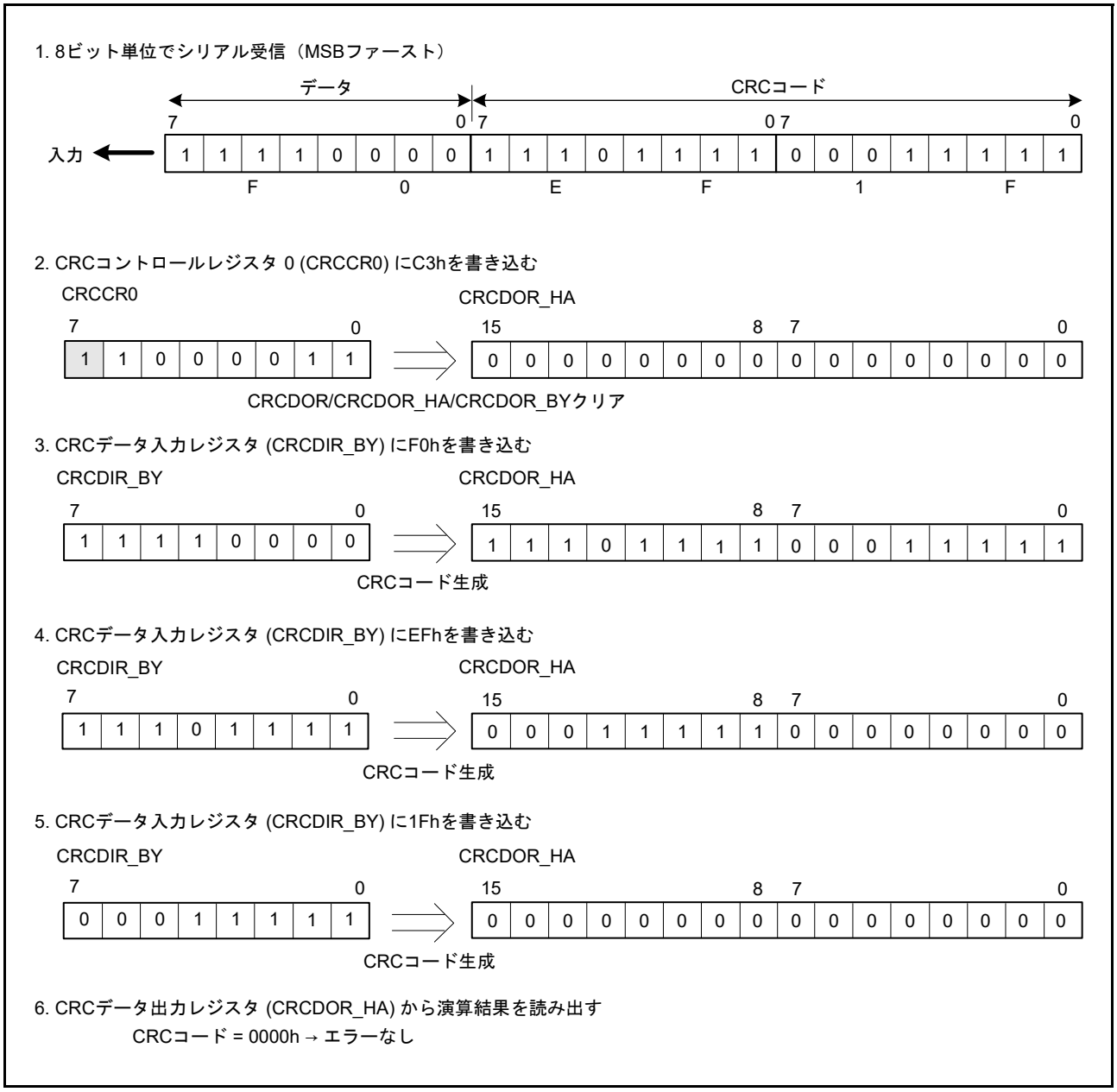


図 33.5　MSB ファーストのデータ受信

33.3.2 CRC スヌープ

CRC スヌープ機能では、特定のレジスタアドレスの読み出しおよび書き込みをモニタし、そのレジスタアドレスで読み出し／書き込みしたデータに自動 CRC 演算を実行します。CRC スヌープは、特定のレジスタアドレスに対する読み出しと書き込みを CRC 演算を自動的に実行するトリガとして認識するため、CRCDIR_BY レジスタにデータを書き込む必要がありません。CRC スヌープの対象アドレスは、スヌープアドレスレジスタ（CRCSAR）で指定したすべての I/O レジスタアドレスです。CRC スヌープは、シリアル送信バッファへの書き込みと、シリアル受信バッファからの読み出しをモニタするのに役立ちます。

この機能を使用するには、対象となる I/O レジスタアドレスを CRCSAR レジスタの CRCSA13 ～ CRCSA0 ビットに書き込み、CRCCR1 レジスタの CRCSEN ビットを 1 にします。次に、CRCCR1.CRCSWR ビットを 1 にして、対象アドレスへの書き込みに対してスヌープを有効にするか、あるいは、CRCCR1.CRCSWR ビットを 0 にして、対象アドレスからの読み出しに対してスヌープを有効にします。

CRCSEN ビットを 1、CRCSWR ビットを 1 にして、バスマスタモジュール（CPU、DMA、DTC など）の対象となる I/O レジスタアドレスにデータを書き込むと、CRC 演算器は CRCDIR_BY レジスタにデータを格納して CRC 演算を実行します。同様に、CRCSEN ビットを 1、CRCSWR ビットを 0 にして、バスマスタモジュール（CPU、DMA、DTC など）の対象となる I/O レジスタアドレスのデータを読み出すと、CRC 演算器は CRCDIR_BY レジスタにデータを格納して CRC 演算を実行します。

一度に 1 バイトの CRC 演算が実行されます。対象となる I/O レジスタアドレスに対してワード（16 ビット）またはロングワード（32 ビット）でアクセスすると、データの下位バイト（1 バイト）に CRC コードが生成されます。

33.4　使用上の注意事項

33.4.1　モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC）により、CRC 演算器の動作を許可または禁止することが可能です。リセット後、CRC の動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

33.4.2　送信時の注意事項

LSB ファーストで送信する場合と、MSB ファーストで送信する場合とでは、CRC コードの送信順序が異なります。図 33.6 に LSB ファーストと MSB ファーストのデータ送信を示します。

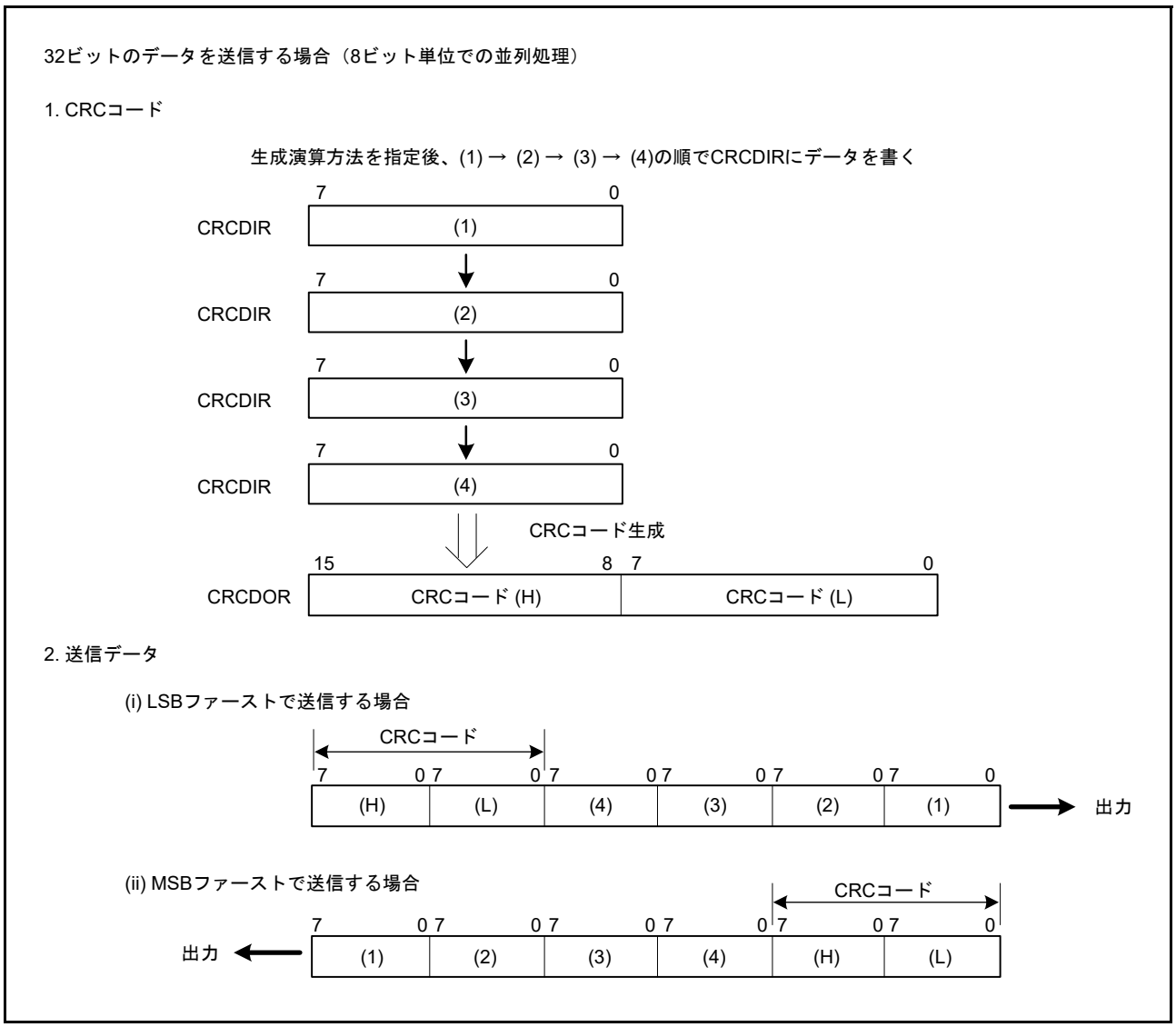


図 33.6　LSB ファーストと MSB ファーストのデータ送信

34. 14 ビット A/D コンバータ（ADC14）

34.1 概要

本 MCU は、逐次比較方式の 14 ビットの A/D コンバータ（ADC14）ユニットを内蔵しています。最大 8 チャネルのアナログ入力を選択可能です。変換には温度センサ出力および内部基準電圧を選択できます。A/D 変換精度には 14 ビット変換を選択でき、デジタル値の生成時に速度と分解能のバランスを最適化することが可能です。

ADC14 には次の動作モードがあります。

- 任意に選択したチャネルのアナログ入力を、チャネル番号の昇順に変換するシングルスキャンモード
- 任意に選択したチャネルのアナログ入力を、順次チャネル番号の昇順に連続して変換する連続スキャンモード
- チャネルのアナログ入力を任意に 2 つのグループ（グループ A とグループ B）に分け、グループ単位で選択したチャネルのアナログ入力をチャネル番号の昇順に変換するグループスキャンモード

グループスキャンモードでは、グループ A とグループ B のスキャン開始条件を個別に選択することで、グループ A とグループ B は異なるタイミングで A/D 変換を開始することが可能です。さらに、グループ A の優先制御動作を設定すると、ADC14 はグループ B の A/D 変換動作中にグループ A のスキャン開始を受け付けて、グループ B の A/D 変換動作を中断します。このようにして、グループ A の A/D 変換を優先的に開始することが可能です。

ダブルトリガモードは、任意に選択した 1 チャネルのアナログ入力をシングルスキャンモードまたはグループスキャンモード（グループ A）で変換し、1 回目の A/D 変換開始トリガで変換したデータと 2 回目の A/D 変換開始トリガで変換したデータを別々のレジスタに格納（A/D 変換データの 2 重化）します。

自己診断は、スキャンごとの最初に 1 回実施され、ADC14 内部で生成する 3 つの電圧値のうち 1 つを A/D 変換します。

A/D 変換には温度センサ出力および内部基準電圧を同時に選択できません。温度センサ出力および内部基準電圧は個別に変換されます。内部基準電圧を高電位側の基準電圧に選択する場合、温度センサまたは内部基準電圧の A/D 変換も実行できません。

基準電源端子（VREFH0）、アナログ部の電源端子（AVCC0）、または内部基準電圧は、高電位側の基準電圧として選択可能です。基準電源グランド端子（VREFL0）またはアナログ部の電源グランド端子（AVSS0）は、低電位側の基準電圧として選択可能です。

ADC14 は比較機能（ウィンドウ A とウィンドウ B）を搭載しています。この比較機能は、ウィンドウ A とウィンドウ B それぞれの上側基準値および下側基準値を指定し、選択したチャネルの A/D 変換値が比較条件に一致すると割り込みを出力します。

表 34.1 に ADC14 の仕様を、表 34.2 に機能を、図 34.1 にブロック図を示します。表 34.3 に入出力端子を示します。

表 34.1 ADC14の仕様 (1/2)

項目	内容
ユニット数	1ユニット
入力チャネル	最大8チャネル（AN004～AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020）
拡張アナログ機能	温度センサ出力、内部基準電圧
A/D変換方式	逐次比較方式
分解能	14ビット（14ビットまたは12ビット変換が選択可能）
変換時間	1チャネル当たり0.79μs、A/D変換クロックPCLKC（ADCLK）が64MHzで動作時
A/D変換クロック	周辺モジュールクロックPCLKB（注1）およびA/D変換クロックPCLKC（ADCLK）（注1）を以下の分周比で設定可能 PCLKB：PCLKC（ADCLK）分周比 = 1:1、2:1、4:1、8:1、1:2、1:4

表 34.1　ADC14の仕様 (2/2)

項目	内容
データレジスタ	• アナログ入力用28本 ダブルトリガモードでのA/D変換データ2重化用1本 ダブルトリガモード拡張動作時のA/D変換データ2重化用2本 • 温度センサ出力用1本 • 内部基準電圧用1本 • 自己診断用1本 • A/D変換結果をA/Dデータレジスタに保持 • A/D変換結果の12および14ビット精度出力対応 • A/D変換値加算モード（A/D変換結果の加算値を変換精度ビット数＋2ビットでA/Dデータレジスタに保持）（注4） • ダブルトリガモード、シングルスキャンとグループスキャンモードで選択可能： 選択した1つのチャネルのアナログ入力のA/D変換データを1回目は対象チャネルのデータレジスタに保持、2回目のA/D変換データは2重化レジスタに保持 • ダブルトリガモード拡張動作（特定トリガ種別で有効） 選択した1つのチャネルのアナログ入力のA/D変換データを関連するトリガに準備した2重化レジスタに保持
動作モード	• シングルスキャンモード 任意に選択したチャネルのアナログ入力、温度センサ出力、内部基準電圧を1回のみA/D変換 • 連続スキャンモード 任意に選択したチャネルのアナログ入力、温度センサ出力、内部基準電圧を繰り返しA/D変換 • グループスキャンモード 任意にグループAとグループBに分けたチャネルのアナログ入力を1回のみA/D変換 グループAとグループBのスキャン開始条件を個別に選択することで、グループAとグループBのA/D変換をそれぞれ異なるタイミングで開始することが可能 • グループスキャンモード（グループA優先制御選択時） グループBのA/D変換動作中にグループAのトリガ入力があった場合、グループBのA/D変換動作を中断し、グループAのA/D変換動作を実施 グループAのA/D変換動作終了後にグループBのA/D変換動作の再実行（再スキャン）の設定が可能
A/D変換開始条件	• ソフトウェアトリガ • イベントリンクコントローラ（ELC）からの同期トリガ • 外部トリガADTRG0端子からの非同期トリガ
機能	• サンプリングステート数可変機能 • ADC14の自己診断機能 • A/D変換値加算モードと平均モードが選択可能 • アナログ入力断線検出機能（ディスチャージ機能／プリチャージ機能） • ダブルトリガモード（A/D変換データ2重化機能） • 12/14ビット変換切り替え機能（注2） • A/Dデータレジスタオートクリア機能 • コンペアレジスタとデータレジスタとの値の比較、およびデータレジスタ間の値のデジタル比較
割り込み要因	• シングルスキャンモード（ダブルトリガモード非選択）では、1回のスキャン終了でA/Dスキャン終了割り込み要求およびELCイベント信号（ADC140_ADI）を発生 デジタルコンペア機能の比較条件成立で、コンペア割り込み要求（ADC140_CMPAI/ADC140_CMPBI）を発生 デジタルコンペア機能の比較条件成立で、ウィンドウコンペアELCイベント信号（ADC140_WCMPM）を発生 デジタルコンペア機能の比較条件不成立で、ウィンドウコンペアELCイベント信号（ADC140_WCMPUM）を発生 • シングルスキャンモード（ダブルトリガモード選択）では、2回のスキャン終了でA/Dスキャン終了割り込み要求およびELCイベント信号（ADC140_ADI）を発生 • 連続スキャンモードでは、選択した全チャネルのスキャン終了でA/Dスキャン終了割り込み要求およびELCイベント信号（ADC140_ADI）を発生 • グループスキャンモード（ダブルトリガモード非選択）では、グループAのスキャン終了でA/Dスキャン終了割り込み要求およびELCイベント信号（ADC140_ADI）を発生。グループBのスキャン終了でグループBのA/Dスキャン終了割り込み要求（ADC140_GBADI）を発生 • グループスキャンモード（ダブルトリガモード選択）では、2回のグループAのスキャン終了でA/Dスキャン終了割り込み要求およびELCイベント信号（ADC140_ADI）を発生。グループBのスキャン終了でグループBのA/Dスキャン終了割り込み要求（ADC140_GBADI）を発生 • ADC140_ADI、ADC140_GBADI、ADC140_WCMPM、およびADC140_WCMPUMでDMAコントローラ（DMAC）、データトランスファコントローラ（DTC）を起動可能
ELCインタフェース	ELCからのトリガでスキャン開始可能
基準電圧	• VREFH0、AVCC0、または内部基準電圧は、高電位の基準電圧として選択可能 • VREFL0またはAVSS0は低電位の基準電圧として選択可能
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態への設定が可能（注3）

注 .　温度センサ出力または内部基準電圧を選択する場合、連続スキャンモードまたはグループスキャンモードは使用しないでください。
注 1.　周辺モジュールクロック PCLKB 周波数は SCKDIVCR.PCKB[2:0] ビットで指定し、A/D 変換クロック ADCLK は SCKDIVCR.PCKC[2:0] ビットで指定します。PCLKB の最大周波数は 32MHz で、PCLKC（ADCLK）の最大周波数は 64MHz です。
注 2.　A/D 変換精度を変えた場合、A/D 変換時間も変わります。詳細は、34.3.6　アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間を参照してください。
注 3.　詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。
注 4.　加算用の拡張ビット数は、A/D 変換精度および加算回数によって異なります。A/D 変換精度が 12 または 14 ビットの場合、2 ビット拡張は最大で変換 4 回（加算 3 回）となります。

表 34.2　ADC14の機能

項目			ADC140
アナログ入力チャネル			AN004～AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020 内部基準電圧 温度センサ出力
A/D変換開始条件	外部トリガ	トリガ入力端子	ADTRG0
	ソフトウェア	ソフトウェアトリガ	許可
	同期トリガ（ELCからのトリガ）	ELC トリガ	ELC_AD00 ELC_AD01
割り込み			ADC140_ADI ADC140_GBADI ADC140_CMPAI ADC140_CMPBI
ELCへの出力			ADC140_ADI ADC140_WCMPM ADC140_WCMPUM
モジュールストップ機能の設定（注1）（注2）			MSTPCRD.MSTPD16 ビット

注 1.　詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。
注 2.　モジュールストップ状態の解除後に A/D 変換を開始するのに、1μs 以上待機します。

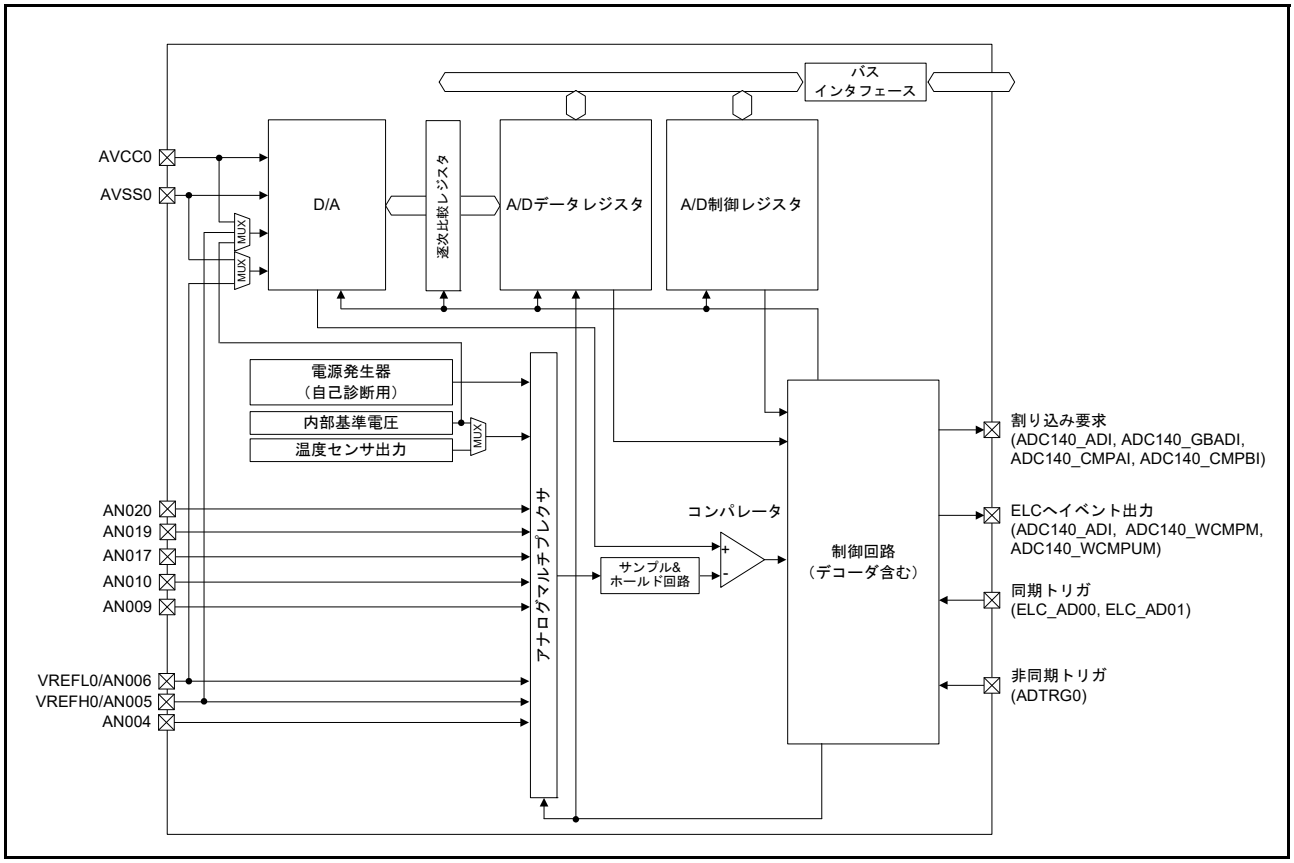


図 34.1　　ADC14 のブロック図

表 34.3　　ADC14の入出力端子

単位	端子名	入出力	機能
ユニット0	AVCC0	入力	アナログ部の電源端子
	AVSS0	入力	アナログ部の電源グランド端子
	VREFH0	入力	基準電源端子
	VREFL0	入力	基準電源グランド端子
	AN004～AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020	入力	アナログ入力端子4～6, 9, 10, 17, 19, 20
	ADTRG0	入力	A/D変換開始のための外部トリガ入力端子

34.2　レジスタの説明

34.2.1　A/D データレジスタ y（ADDRy）、A/D データ 2 重化レジスタ（ADDBLDR）、A/D データ 2 重化レジスタ A（ADDBLDRA）、A/D データ 2 重化レジスタ B（ADDBLDRB）、A/D 温度センサデータレジスタ（ADTSDR）、A/D 内部基準電圧データレジスタ（ADOCDR）

データレジスタには以下の種類があります。

- ADDRy レジスタ（y = 4 ～ 6, 9, 10, 17, 19, 20）: A/D 変換結果を格納する 16 ビットの読み出し専用レジスタ
- ADDBLDR: ダブルトリガモード選択時の2回目のトリガによってA/D変換した結果を格納する16ビットの読み出し専用レジスタ
- ADDBLDRA および ADDBLDRB : ダブルトリガモード選択時、拡張動作中のトリガによって A/D 変換した結果を格納する 16 ビットの読み出し専用レジスタ
- ADTSDR：温度センサ出力を A/D 変換した結果を格納する 16 ビットの読み出し専用レジスタ
- ADOCDR：内部基準電圧を A/D 変換した結果を格納する 16 ビットの読み出し専用レジスタ

これらのレジスタは、下記の条件によりデータフォーマットが異なります。

- A/D データレジスタフォーマット選択ビット（ADCER.ADRFMT）の設定値（右詰めまたは左詰め）
- A/D 変換精度指定ビット（ADCER.ADPRC[1:0]）の設定値（12 ビットまたは 14 ビット設定）
- 加算／平均回数選択ビット（ADADC.ADC[2:0]）の設定値（1 回、2 回、3 回、4 回、16 回の設定）
- 平均モードイネーブルビット（ADADC.AVEE）の設定値（加算または平均の設定）

以下では、各モードにおける条件ごとのデータフォーマットについて説明します。

(1)　A/D 変換値加算／平均モードを非選択とした場合

以下に、条件ごとのデータフォーマットを示します。

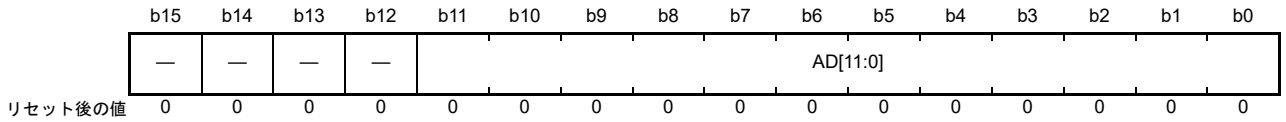
右詰めのフォーマット、14 ビット精度に設定した場合

アドレス　ADC140.ADDR4 4005 C028h～ADC140.ADDR6 4005 C02Ch, ADC140.ADDR9 4005 C032h, ADC140.ADDR10 4005 C034h, ADC140.ADDR17 4005 C042h, ADC140.ADDR19 4005 C046h, ADC140.ADDR20 4005 C048h, ADC140.ADDBLDR 4005 C018h, ADC140.ADDBLDRA 4005 C084h, ADC140.ADDBLDRB 4005 C086h, ADC140.ADTSDR 4005 C01Ah, ADC140.ADOCDR 4005 C01Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	AD[13:0]													
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

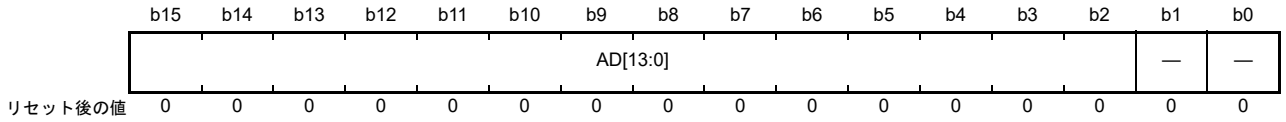
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	AD[13:0]	変換値13～0	14ビットA/D変換値	R
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

右詰めのフォーマット、12 ビット精度に設定した場合



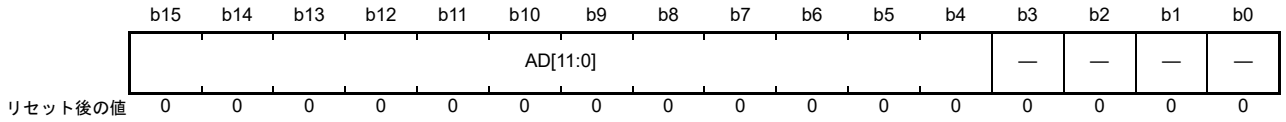
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b11-b0	AD[11:0]	変換値11～0	12ビットA/D変換値	R
b15-b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

左詰めのフォーマット、14 ビット精度に設定した場合



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15-b2	AD[13:0]	変換値13～0	14ビットA/D変換値	R

左詰めのフォーマット、12 ビット精度に設定した場合



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15-b4	AD[11:0]	変換値11～0	12ビットA/D変換値	R

(2)　A/D 変換値平均モードを選択した場合

A/D 変換値加算モードで 2 回または 4 回を指定した場合、A/D 変換値平均モードを選択できます。A/D 変換値平均モードを選択した場合、本レジスタは特定チャネルの A/D 変換値を平均した値を示します。通常の A/D 変換と同様に A/D データレジスタフォーマット選択ビットの設定に基づき、A/D データレジスタに値が格納されます。

(3)　A/D 変換値加算モードを選択した場合

12 ビットまたは 14 ビット精度（ADPRC ビットの設定値）の場合、A/D 変換値加算で 1 回、2 回、3 回、または 4 回を選択できます。12 ビット精度を選択した場合に限り、16 回を選択することもできます。

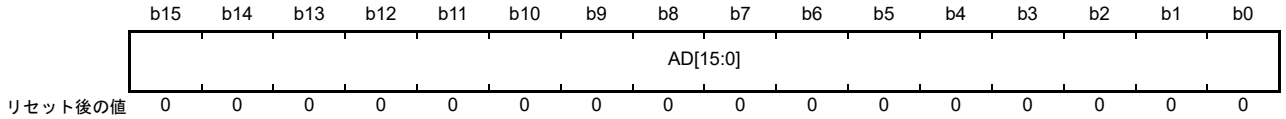
加算モードでは、本レジスタは特定チャネルの A/D 変換値を加算した結果の値を示します。A/D データレジスタフォーマット選択ビットの設定に基づき、A/D データレジスタに値が格納されます。

加算モードで 1 回、2 回、3 回、または 4 回変換を設定し、12 ビットまたは 14 ビット精度を指定した場合、変換結果の値を、指定した精度のビット数に 2 ビット分拡張したデータとして A/D データレジスタに保持します。

加算モードの 12 ビット精度で 16 回変換をした場合、変換結果は指定した精度に 4 ビット拡張した値で A/D データレジスタに格納されます。

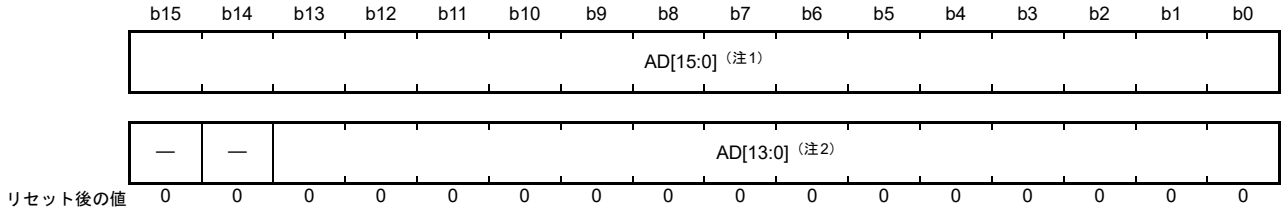
以下、条件ごとのフォーマットを示します。

右詰めのフォーマット、14 ビット精度に設定した場合（A/D 変換値加算モード時）



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	AD[15:0]	加算結果15～0	16ビットA/D変換値加算結果	R

右詰めのフォーマット、12 ビット精度に設定した場合（A/D 変換値加算モード時）

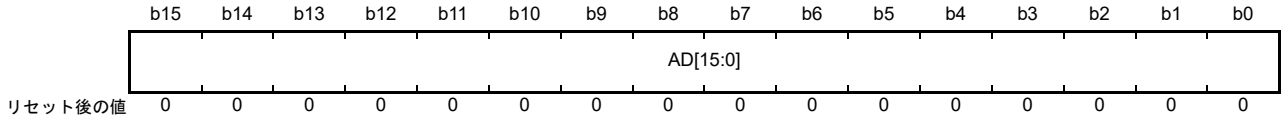


ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	AD[15:0] (注1)	加算結果15～0	16ビットA/D変換値加算結果	R

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	AD[13:0] (注2)	加算結果13～0	14ビットA/D変換値加算結果	R
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

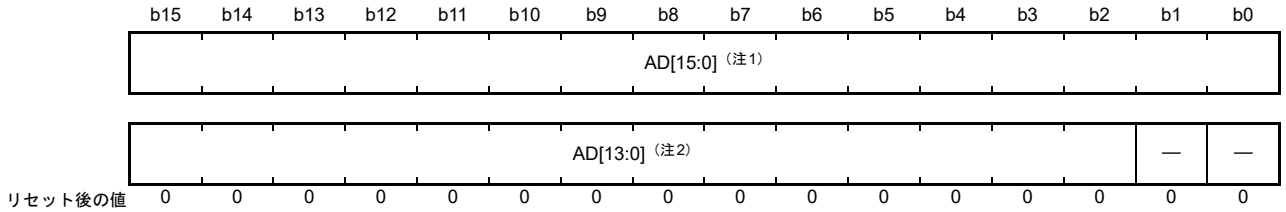
注 1.　A/D 変換値加算モードで 16 回変換を選択した場合に使用
注 2.　A/D 変換値加算モードで 1 回、2 回、3 回、または 4 回変換を指定した場合に使用

左詰めのフォーマット、14 ビット精度に設定した場合（A/D 変換値加算モード時）



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	AD[15:0]	加算結果15～0	16ビットA/D変換値加算結果	R

左詰めのフォーマット、12 ビット精度に設定した場合（A/D 変換値加算モード時）



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	AD[15:0] (注1)	加算結果15～0	16ビットA/D変換値加算結果	R

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15-b2	AD[13:0] (注2)	加算結果13～0	14ビットA/D変換値加算結果	R

注 1.　A/D 変換値加算モードで 16 回変換を選択した場合に使用
注 2.　A/D 変換値加算モードで 1 回、2 回、3 回、または 4 回変換を指定した場合に使用

34.2.2　A/D 自己診断データレジスタ（ADRD）

ADRD レジスタは、ADC14 の自己診断により A/D 変換した結果を格納する 16 ビットの読み出し専用レジスタです。A/D 変換値を示す AD[13:0] ビットに加えて、自己診断ステータスビット（DIAGST）が付加されます。

本レジスタは、下記の条件によりデータフォーマットが異なります。

- A/D データレジスタフォーマット選択ビット（ADCER.ADRFMT）の設定値（左詰めまたは右詰め）
- A/D 変換精度指定ビット（ADCER.ADPRC[1:0]）の設定値（12 ビットまたは 14 ビット設定）

A/D 自己診断機能には A/D 変換加算モードと A/D 変換平均モードを適用することはできません。自己診断の詳細については、34.2.11　A/D コントロール拡張レジスタ（ADCER）を参照してください。

以下では、各条件のデータフォーマットについて説明します。

右詰めのフォーマット、14 ビット精度に設定した場合

アドレス　ADC140.ADRD 4005 C01Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DIAGST[1:0]		AD[13:0]													
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b13-b0	AD[13:0]	変換値13～0	14ビットA/D変換値	R
b15-b14	DIAGST[1:0]	自己診断ステータス	b15 b14 0　0：パワーオンから自己診断を実施していないことを示す 0　1：0Vの電圧値の自己診断を実施したことを示す 1　0：基準電源（注1）× 1/2の電圧値の自己診断を実施したことを示す 1　1：基準電源（注1）の電圧値の自己診断を実施したことを示す 自己診断の詳細については、34.2.11　A/Dコントロール拡張レジスタ（ADCER）を参照してください。	R

注 1.　基準電源は VREFH0 を指します。

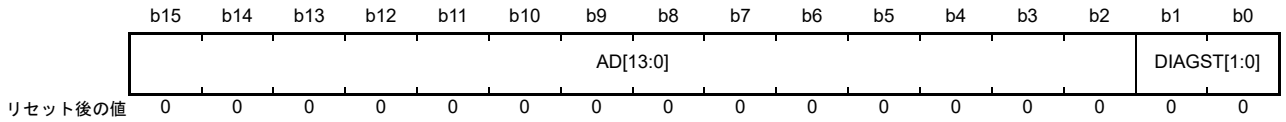
右詰めのフォーマット、12 ビット精度に設定した場合

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DIAGST[1:0]		—	—	AD[11:0]											
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b11-b0	AD[11:0]	変換値11～0	12ビットA/D変換値	R
b13-b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15-b14	DIAGST[1:0]	自己診断ステータス	b15 b14 0　0：パワーオンから自己診断を実施していないことを示す 0　1：0Vの電圧値の自己診断を実施したことを示す 1　0：基準電源（注1）× 1/2の電圧値の自己診断を実施したことを示す 1　1：基準電源（注1）の電圧値の自己診断を実施したことを示す 自己診断の詳細については、34.2.11　A/Dコントロール拡張レジスタ（ADCER）を参照してください。	R

注 1.　基準電源は VREFH0 を指します。

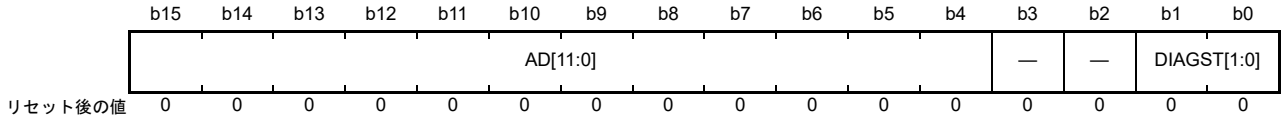
左詰めのフォーマット、14 ビット精度に設定した場合



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	DIAGST[1:0]	自己診断ステータス	b1 b0 0 0：パワーオンから自己診断を実施していないことを示す 0 1：0Vの電圧値の自己診断を実施したことを示す 1 0：基準電源（注1）× 1/2の電圧値の自己診断を実施したことを示す 1 1：基準電源（注1）の電圧値の自己診断を実施したことを示す 自己診断の詳細については、34.2.11 A/Dコントロール拡張レジスタ（ADCER）を参照してください。	R
b15-b2	AD[13:0]	変換値13～0	14ビットA/D変換値	R

注 1.　基準電源は VREFH0 を指します。

左詰めのフォーマット、12 ビット精度に設定した場合



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	DIAGST[1:0]	自己診断ステータス	b1 b0 0 0：パワーオンから自己診断を実施していないことを示す 0 1：0Vの電圧値の自己診断を実施したことを示す 1 0：基準電源（注1）× 1/2の電圧値の自己診断を実施したことを示す 1 1：基準電源（注1）の電圧値の自己診断を実施したことを示す 自己診断の詳細については、34.2.11 A/Dコントロール拡張レジスタ（ADCER）を参照してください。	R
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15-b4	AD[11:0]	変換値11～0	12ビットA/D変換値	R

注 1.　基準電源は VREFH0 を指します。

34.2.3 A/D コントロールレジスタ（ADCSR）

アドレス ADC140.ADCSR 4005 C000h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ADST	ADCS[1:0]		—	—	ADHSC	TRGE	EXTRG	DBLE	GBADIE	—	DBLANS[4:0]				
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	DBLANS[4:0]	ダブルトリガ対象チャネル選択	ダブルトリガ対象のアナログ入力を1チャネル選択します。ダブルトリガモード選択時のみ有効です。	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	GBADIE	グループBスキャン終了割り込み許可	0：グループBのスキャン終了後にADC140_GBADI割り込み発生を禁止 1：グループBのスキャン終了後にADC140_GBADI割り込み発生を許可 グループBのスキャンは、グループスキャンモードでのみ実行できます。	R/W
b7	DBLE	ダブルトリガモード選択	0：ダブルトリガモード非選択 1：ダブルトリガモード選択	R/W
b8	EXTRG	トリガ選択（注1）	0：同期トリガ（ELC）によるA/D変換の開始を選択 1：非同期トリガ（ADTRG0）によるA/D変換の開始を選択	R/W
b9	TRGE	トリガ開始許可	0：同期、非同期トリガによるA/D変換の開始を禁止 1：同期、非同期トリガによるA/D変換の開始を許可	R/W
b10	ADHSC	A/D変換モード選択	0：高速A/D変換モード 1：低消費電力A/D変換モード	R/W
b12-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b14-b13	ADCS[1:0]	スキャンモード選択	b14 b13 0 0：シングルスキャンモード 0 1：グループスキャンモード 1 0：連続スキャンモード 1 1：設定禁止	R/W
b15	ADST	A/D変換スタート	0：A/D変換停止 1：A/D変換開始	R/W

注 1.　外部端子（非同期トリガ）で A/D 変換を起動する方法：
外部端子（ADTRG0）に High を入力した状態で、ADCSR.TRGE ビットおよび ADCSR.EXTRG ビットを 1 にし、ADTRG0 信号を Low にします。この設定の場合、ADTRG0 の立ち下がりエッジを検出すると、スキャン変換を開始します。この構成では、Low 入力のパルス幅は 1.5PCLKB クロック以上必要です。

DBLANS[4:0] ビット（ダブルトリガ対象チャネル選択）

ダブルトリガモードで A/D 変換データを 2 重化する 1 チャネルを選択します。指定したアナログ入力チャネルを、1 回目の A/D 変換開始トリガで変換した結果が A/D データレジスタ y に格納され、2 回目の A/D 変換開始トリガで変換した結果が A/D データ 2 重化レジスタに格納されます。表 34.4 にダブルトリガ対象チャネルの選択表を示します。

ダブルトリガモード時、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したチャネルは無効となり、DBLANS[4:0] ビットで選択したチャネルが代わりに A/D 変換されます。

グループスキャンモードでダブルトリガモードを使用する場合、ダブルトリガ制御はグループ A のみに適用され、グループ B には適用されません。そのため、ダブルトリガモードでもグループ B に対してはマルチチャネルアナログ入力を選択できます。

DBLANS[4:0] ビットの設定は、ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。この設定を ADST ビットへの 1 書き込みと同時に行わないでください。

ダブルトリガモードが設定されている状態で A/D 変換値加算／平均モードに遷移するには、DBLANS[4:0] ビットで選択したチャネルを ADANSA0、ADANSA1 レジスタに設定してください。

表 34.4　DBLANSビット設定値とダブルトリガ対象チャネルの関係

DBLANS[4:0]	2重化チャネル	DBLANS[4:0]	2重化チャネル
00100	AN004	10001	AN017
00101	AN005	10011	AN019
00110	AN006	10100	AN020
01001	AN009		
01010	AN010		

注 .　自己診断機能、温度センサ出力、および内部基準電圧の A/D 変換データは、ダブルトリガモードで使用できません。

GBADIE ビット（グループ B スキャン終了割り込み許可）

グループスキャンモードでのグループ B のスキャン終了割り込み（ADC140_GBADI）の発生を許可または禁止します。

DBLE ビット（ダブルトリガモード選択）

ダブルトリガモードの選択／非選択を指定します。ダブルトリガモードは、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットで選択された同期トリガ（ELC）のみで動作できます。

ダブルトリガモードは以下のように動作します。

- 1 回目の変換終了時は ADC140_ADI 割り込みを出力せず、2 回目の変換終了時に出力します
- 1 回目のトリガで変換した二重化チャネル（DBLANS[4:0] ビットで選択）の A/D 変換結果は、A/D データレジスタ y に格納され、2 回目のトリガで変換した変換結果は、A/D データ 2 重化レジスタに格納されます

DBLE が設定されている場合（ダブルトリガモードを選択）、ADANSA0 および ADANSA1 レジスタで指定したチャネルは無効です。ダブルトリガモードは、連続スキャンモードで選択しないでください。

ダブルトリガモードでは、ソフトウェアトリガを使用できません。DBLE ビットの設定は、必ず ADST ビットを 0 にしてから行ってください。すなわち、本ビットの設定を ADST ビットへの 1 書き込みと同時に行わないでください。

EXTRG ビット（トリガ選択）

A/D 変換を起動するトリガを同期トリガにするか、非同期トリガにするかを選択します。

TRGE ビット（トリガ開始許可）

同期トリガ、非同期トリガによる A/D 変換の起動を許可または禁止します。グループスキャンモードでは本ビットを 1 にしてください。

ADHSC ビット（A/D 変換モード選択）

A/D 変換を高速モードにするか低電力モードにするかを選択します。

本ビットの書き換え方法については、34.8.8　ADHSC ビット書き換え手順を参照してください。

ADCS[1:0] ビット（スキャンモード選択）

スキャンモードを選択します。

シングルスキャンモードでは、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したアナログ入力を若いチャネル番号順に A/D 変換を実施します（最大 8 チャネル）。選択したすべてのチャネルの A/D 変換が終了するとスキャン変換を停止します。温度センサ出力または内部基準電圧を選択した場合、チャネルのアナログ入力の A/D 変換の後に温度センサ出力、内部基準電圧の順に A/D 変換されます。

連続スキャンモードでは、ADCSR.ADST ビットが 1 の時、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したアナログ入力を若いチャネル番号順に A/D 変換を実施し、選択したすべてのチャネルの変換が終了すると最初のチャネルに戻り A/D 変換を継続します。連続スキャン中に ADCSR.ADST ビットを 0 にすると、スキャン中でも A/D 変換を停止します。温度センサ出力または内部基準電圧を選択した場合、指定したアナログ入力チャネルの A/D 変換の後に温度センサ出力、内部基準電圧の順に A/D 変換されます。

グループスキャンモード

- ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットで選択した同期トリガ（ELC）によりグループ A のスキャンが開始されます。ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択した最大 8 チャネル数まで、若いチャネル番号順にグループ A のアナログ入力に対し AD 変換を実施します。選択したすべてのチャネルの A/D 変換が終了すると A/D 変換を停止します。
- ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットで選択した同期トリガ（ELC）によりグループ B のスキャンが開始されます。ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した最大 8 チャネル数まで、若いチャネル番号順にグループ B のアナログ入力に対し AD 変換を実施します。選択したすべてのチャネルの A/D 変換が終了すると変換を停止します。

グループ A 側とグループ B 側の変換が重なった場合、これらの変換は別々に制御することができません。この場合は、A/D グループスキャン優先コントロールレジスタのグループ A 優先制御設定ビット（ADGSPCR.PGS）を 1 にして、変換優先順位を A 側に設定してください。

グループスキャンモード時は、グループ A とグループ B で別々のチャネルとトリガを選択してください。

温度センサ出力または内部基準電圧を選択した場合、チャネルのアナログ入力の A/D 変換の後に温度センサ出力、内部基準電圧の順に A/D 変換されます。

ADCS[1:0] ビットの設定は、ADST ビットを 0 にした後に行ってください。すなわち、ADCS[1:0] ビットと ADST ビットを同時に 1 にしないでください。

表 34.5　スキャンモードおよびダブルトリガモードに基づく A/D 変換対象の選択可否

スキャンモード設定	ダブルトリガモード設定	A/D 変換対象				
		自己診断	アナログ入力（グループA含む）	アナログ入力（グループB）	温度センサ出力	内部基準電圧
シングルスキャン	DBLE = 0	○	○	×	○	○
	DBLE = 1	×	○（1chのみ）	×	×	×
連続スキャン	DBLE = 0	○	○	×	×	×
	DBLE = 1	×	×	×	×	×
グループスキャン	DBLE = 0	○	○	○	×	×
	DBLE = 1	×	○（1chのみ）	○	×	×

○：選択可能　×：選択不可

ADST ビット（A/D 変換スタート）

A/D 変換の開始または停止を制御します。ADST ビットを 1 にする前に、A/D 変換クロック、変換モード、変換対象アナログ入力の設定を行ってください。

［1 になる条件］

- ソフトウェアで 1 を書き込んだとき
- ADCSR.EXTRG ビットを 0、ADCSR.TRGE ビットを 1 にし、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットで選択した同期トリガ（ELC）を検出したとき
- グループスキャンモードで ADCSR.TRGE ビットを 1 にし、ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットで選択した同期トリガ（ELC）を検出したとき
- ADCSR.TRGE ビットと ADCSR.EXTRG ビットを 1、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットを 000000b にし、非同期トリガを検出したとき
- グループ A 優先制御動作モード有効時（ADCSR.ADCS[1:0] ビット = 01b かつ ADGSPCR.PGS ビット = 1）に、ADGSPCR.GBRP ビットを 1 にし、グループ B の A/D 変換を開始したとき

［0 になる条件］

- ソフトウェアで 0 を書き込んだとき
- シングルスキャンモードで、選択したすべてのチャネル、温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換が終了したとき
- グループスキャンモードでグループ A のスキャンが終了したとき
- グループスキャンモードでグループ B のスキャンが終了したとき
- グループ A 優先制御動作モード有効時（ADCSR.ADCS[1:0] ビット = 01b かつ ADGSPCR.PGS ビット = 1）に、ADGSPCR.GBRP ビットを 1 にし、グループ B のスキャンが終了したとき

注 .　グループ A 優先制御動作モード有効時（ADCSR.ADCS[1:0] ビット = 01b かつ ADGSPCR.PGS ビット = 1）、ADST ビットを 1 にしないでください。

注 .　グループ A 優先制御動作モード有効時（ADCSR.ADCS[1:0] ビット = 01b かつ ADGSPCR.PGS ビット = 1）、かつ ADGSPCR.GBRP ビット = 1 のとき、ADST ビットを 0 にしないでください。A/D 変換を強制停止させる場合、ADST ビットのクリア手順に従ってください。

注 .　グループ優先制御動作モード有効時（ADCSR.ADCS[1:0] ビット = 01b かつ ADGSPCR.PGS ビット = 1）、かつシングルスキャン連続機能が使用されるとき（ADGSPCR.GBRP = 1）、ADST ビットは 1 のままとなります。

34.2.4 A/D チャネル選択レジスタ A0（ADANSA0）

アドレス ADC140.ADANSA0 4005 C004h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	ANSA10	ANSA09	—	—	ANSA06	ANSA05	ANSA04	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	ANSA06～ANSA04	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット6（ANSA06）はAN006に対応し、ビット4（ANSA04）はAN004に対応します。	R/W
b8-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b9	ANSA10, ANSA09	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット10（ANSA10）はAN010に対応し、ビット9（ANSA09）はAN009に対応します。	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ANSAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）（A/D 変換チャネル選択）

ANSAn.ADANSA0 ビットは、A/D 変換を行うアナログ入力チャネル AN004 ～ AN006, AN009, AN010 を選択します。選択するチャネルおよびチャネル数は任意に設定可能です。ANSA04 ビットが AN004 に対応し、ANSA10 ビットが AN010 に対応します。

温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換を実行するときは、アナログ入力チャネルを選択しないで、本レジスタは 0000h としてください。

ダブルトリガモード時は、ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで指定したチャネルがグループ A の選択チャネルとなり、ADANSA0 レジスタで選択したチャネルは無効になります。

グループスキャンモード時は、A/D チャネル選択レジスタ B0（ADANSB0）、および A/D チャネル選択レジスタ B1（ADANSB1）で指定したチャネルを選択しないでください。

ADANSA0 レジスタの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.5 A/D チャネル選択レジスタ A1（ADANSA1）

アドレス ADC140.ADANSA1 4005 C006h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ANSA20	ANSA19	—	ANSA17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	ANSA17	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット1（ANSA17）はAN017に対応します。	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4-b3	ANSA20, ANSA19	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット4（ANSA20）はAN020に対応し、ビット3（ANSA19）はAN019に対応します。	R/W
b15-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ANSAn ビット（n = 17, 19, 20）（A/D 変換チャネル選択）

ADANSA1.ANSAn ビットは、A/D 変換を行うアナログ入力チャネル AN017, AN019, AN020 を選択します。選択するチャネルおよびチャネル数は任意に設定可能です。ANSA17 ビットが AN017、ANSA20 ビットが AN020 に対応します。

温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換を選択するときは、アナログ入力チャネルを選択しないで、本レジスタは 0000h としてください。

ダブルトリガモード時は、ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで指定した 1 チャネルがグループ A の選択チャネルとなり、ADANSA1 レジスタの設定は無効になります。

グループスキャンモード時は、A/D チャネル選択レジスタ B0（ADANSB0）、および A/D チャネル選択レジスタ B1（ADANSB1）で指定したチャネルを設定しないでください。

ADANSA1 レジスタの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.6 A/D チャネル選択レジスタ B0（ADANSB0）

アドレス ADC140.ADANSB0 4005 C014h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	ANSB10	ANSB09	—	—	ANSB06	ANSB05	ANSB04	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	ANSB06～ANSB04	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット6（ANSB06）はAN006に対応し、ビット4（ANSB04）はAN004に対応します。	R/W
b8-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b9	ANSB10, ANSB09		0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット10（ANSB10）はAN010に対応し、ビット9（ANSB09）はAN009に対応します。	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ANSBn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）（A/D 変換チャネル選択）

ADANSB0.ANSBn ビットは、グループスキャンモード時にグループ B で A/D 変換を行うアナログ入力チャネル AN004 ～ AN006, AN009, AN010 を選択します。ADANSB0 レジスタはグループスキャンモードでのみ使用され、他のモードでは使用しません。グループ A で指定したチャネル（ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択、およびダブルトリガモード時に ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択した、グループ A の関連チャネル）を選択しないでください。

ANSB04 ビットが AN004、ANSB06 ビットが AN006、ANSB10 ビットが AN010 に対応します。

温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換を選択するときは、アナログ入力チャネルを選択しないで、本レジスタは 0000h としてください。

ADANSB レジスタの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.7 A/D チャネル選択レジスタ B1（ADANSB1）

アドレス ADC140.ADANSB1 4005 C016h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ANSB20	ANSB19	—	ANSB17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	ANSB17	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット1（ANSB17）はAN017に対応します。	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4-b3	ANSB20, ANSB19	A/D変換チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット4（ANSB20）はAN020に対応し、ビット3（ANSB19）はAN019に対応します。	R/W
b15-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ANSBn ビット（n = 17 ,19, 20）（A/D 変換チャネル選択）

ADANSB1.ANSBn ビットは、グループスキャンモード時にグループ B で A/D 変換を行うアナログ入力チャネル AN017, AN019, AN020 を選択します。ADANSB1 レジスタはグループスキャンモードでのみ使用し、他のモードでは使用しません。グループ A で指定したチャネル（ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択、およびダブルトリガモード時に ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択したチャネル）を選択しないでください。

ANSB17 ビットが AN017、ANSB19 ビットが AN019、ANSB20 ビットが AN020 に対応します。

温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換を選択するときは、アナログ入力チャネルを選択しないで、本レジスタは 0000h にしてください。

ADANSB1 レジスタの設定は、ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.8 A/D 変換値加算／平均チャネル選択レジスタ 0（ADADS0）

アドレス ADC140.ADADS0 4005 C008h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	ADS10	ADS09	—	—	ADS06	ADS05	ADS04	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	ADS06～ADS04	A/D変換値加算／平均チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット6（ADS06）はAN006に対応し、ビット4（ADS04）はAN004に対応します。	R/W
b8-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b9	ADS10, ADS09	A/D変換値加算／平均チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット10（ADS10）はAN010に対応し、ビット9（ADS09）はAN009に対応します。	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ADSn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）（A/D 変換値加算／平均チャネル選択）

ADANSA0.ANSAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）または ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択した A/D 変換チャネルのうちどのチャネルが A/D 変換値加算または平均の対象となるかを決定します。ADANSB0.ANSBn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）を 1 にすると、選択したチャネルのアナログ入力を、ADADC.ADC[2:0] ビットで指定した回数（1 ～ 16 回）分、連続して A/D 変換します。

ADADC.AVEE ビットが 0 の場合、加算（積算）した値を、ADADC.AVEE ビットが 1 の場合、加算（積算）値から平均した値を A/D データレジスタに格納します。加算／平均モードが非選択の A/D 変換チャネルは、通常の 1 回変換を実施し、A/D データレジスタに変換結果を格納します。

ADADS0 レジスタのビット設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.9 A/D 変換値加算／平均チャネル選択レジスタ 1（ADADS1）

アドレス ADC140.ADADS1 4005 C00Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ADS20	ADS19	—	ADS17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	ADS17	A/D変換値加算／平均チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット1（ADS17）はAN017に対応します。	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4-b3	ADS20, ADS19	A/D変換値加算／平均チャネル選択	0：対応する入力チャネルを非選択 1：対応する入力チャネルを選択 ビット4（ADS20）はAN020に対応し、ビット3（ADS19）はAN019に対応します。	R/W
b15-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ADSn ビット（n = 17, 19, 20）（A/D 変換値加算／平均チャネル選択）

ADANSA1.ANSAn ビット（n = 17, 19, 20）または ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択した A/D 変換チャネルのうちどのチャネルが A/D 変換値加算または平均の対象となるかを決定します。ADANSB1.ANSBn ビット（n = 17, 19, 20）を 1 にすると、選択したチャネルのアナログ入力を、ADADC.ADC[2:0] ビットで指定した回数（1 ～ 16 回）分連続して A/D 変換します。

ADADC.AVEE ビットが 0 の場合は加算した値を、ADADC.AVEE ビットが 1 の場合は加算値から平均した値を A/D データレジスタに格納します。加算／平均モードが非選択の A/D 変換チャネルは、通常の 1 回変換を実施し、A/D データレジスタに変換結果を格納します。

ADADS1 レジスタの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

図 34.2 に、ADADS0.ADS06 および ADADS1.ADS19 ビットを 1 にしたときのスキャン動作シーケンスを示します。この例では以下のようになります。

- 加算モードを選択（ADADS.AVEE = 0）
- 変換回数を 4 に設定（ADADC.ADC[1:0] = 11b）
- 連続スキャンモード（ADCSR.ADCS[1:0] = 10b）でチャネル AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020 を選択（ADANSA0.ANSA0[15:0] = 0670h, ADANSA1.ANSA1[15:0] = 001Ah）

AN004 から変換を開始します。AN006 の変換は 4 回連続実行し、加算値を A/D データレジスタ 6（ADDR6）に返します。その後、AN009 の変換を開始し、AN019 の変換は 4 回連続実行し、加算値を A/D データレジスタ 19（ADDR19）に返します。AN020 の変換後、再度 AN004 から同じシーケンスで動作します。

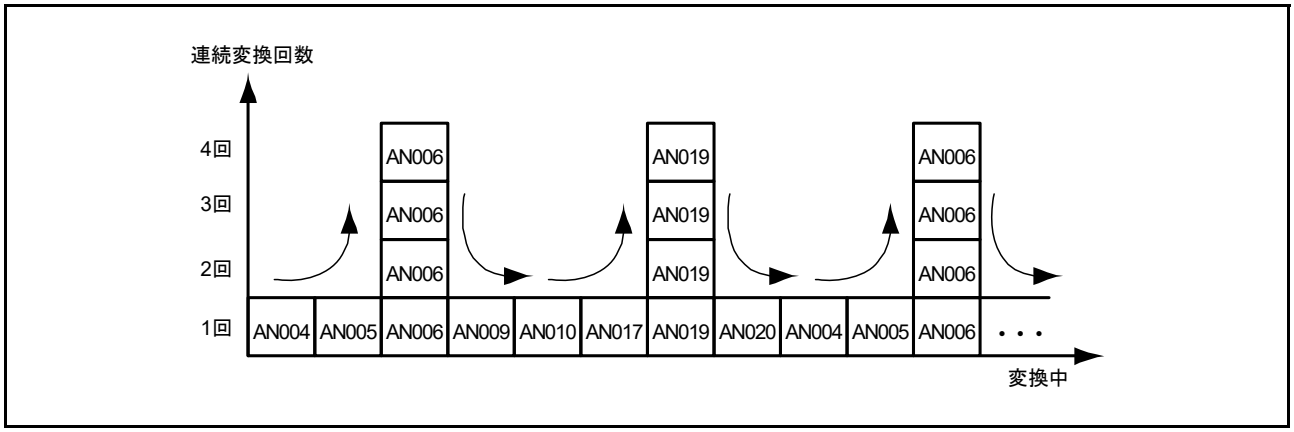


図 34.2 ADADC.ADC[2:0] = 011b、ADADS0.ADS06 = 1、ADADS1.ADS19 = 1 選択時のスキャン変換シーケンス

34.2.10 A/D 変換値加算／平均回数選択レジスタ（ADADC）

アドレス ADC140.ADADC 4005 C00Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	AVEE	—	—	—	—	ADC[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	ADC[2:0]	回数選択	b2 b0 0 0 0：1回変換（加算なし。通常変換と同じ） 0 0 1：2回変換（1回加算を行う） 0 1 0：3回変換（2回加算を行う） 0 1 1：4回変換（3回加算を行う） 1 0 1：16回変換（15回加算を行う） 上記以外は設定しないでください。	R/W
b6-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	AVEE	平均モードイネーブル	0：平均モードを禁止（注1） 1：平均モードを許可（注2）	R/W

注 1. ADADC.AVEE ビットを 0 にして平均モードを非選択にする場合、加算回数は、1 回、2 回、3 回、4 回、または 16 回変換に設定してください。16 回変換は 12 ビット精度でのみ使用できます。

注 2. ADADC.AVEE ビットを 1 にして平均モードを選択する場合、加算回数は、2 回または 4 回変換に設定してください。加算回数は、3 回または 16 回変換（ADC[2:0] = 010b および 101b）に設定しないでください。

ADC[2:0] ビット（回数選択）

ダブルトリガモードでの選択チャネル（ADCSR.DBLANS[4:0] ビットでの選択チャネル）を含む A/D 変換および加算／平均モードが選択されたすべてのチャネルに対して加算回数を設定します。加算回数は、温度センサ出力、内部基準電圧の A/D 変換にも適用されます。

ADC[2:0] ビットの設定には以下の制約があります。

- ADADC.AVEE ビットを 1 にして平均モードを選択する場合、変換精度 14 ビット（ADCER.ADPRC[1:0] = 11b）では 3 回または 16 回変換（ADADC.ADC[2:0] = 010b または 101b）に設定しないでください
- 自己診断機能（ADCER.DIAGM = 1）を実施する場合、ADC[2:0] ビットを 000b 以外の値にしないでください
- 変換精度が 14 ビット（ADCER.ADPRC[1:0] = 11b）の場合、ADC[2:0] ビットを 101b にしないでください

ADC[2:0] ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

AVEE ビット（平均モードイネーブル）

ダブルトリガモードでの選択チャネル（ADCSR.DBLANS[4:0] ビットでの選択チャネル）を含む A/D 変換および加算／平均モードが選択されたチャネル、温度センサ出力、内部基準電圧の A/D 変換に対して、加算モードまたは平均モードの選択を行います。

ADADC.AVEE ビットを 1 にして平均モードを選択する場合、3 回変換（ADADC.ADC[2:0] = 010b）に設定しないでください。

AVEE ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときに行ってください。

34.2.11　A/D コントロール拡張レジスタ（ADCER）

アドレス　ADC140.ADCER 4005 C00Eh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ADRFMT	—	—	—	DIAGM	DIAGLD	DIAGVAL[1:0]		—	—	ACE	—	—	ADPRC[1:0]		—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2-b1	ADPRC[1:0]	A/D変換精度指定	b2　b1 0　0：12ビット精度 0　1：設定禁止 1　0：設定禁止 1　1：14ビット精度	R/W
b4-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	ACE	A/Dデータレジスタ自動クリアイネーブル	0：自動クリアを禁止 1：自動クリアを許可	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b9-b8	DIAGVAL[1:0]	自己診断変換電圧選択	b9　b8 0　0：自己診断有効時は設定禁止 0　1：0Vを選択 1　0：基準電源の電圧値（注1）× 1/2を選択 1　1：基準電源の電圧値（注1）を選択	R/W
b10	DIAGLD	自己診断モード選択	0：自己診断電圧ローテーションモードを選択 1：自己診断電圧固定モードを選択	R/W
b11	DIAGM	自己診断イネーブル	0：ADC14の自己診断を実施しない 1：ADC14の自己診断を実施する	R/W
b14-b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15	ADRFMT	A/Dデータレジスタフォーマット選択	0：A/Dデータレジスタのフォーマットを右詰めにする 1：A/Dデータレジスタのフォーマットを左詰めにする	R/W

注 1.　基準電源は VREFH0 を指します。

ADPRC[1:0] ビット（A/D 変換精度指定）

A/D 変換の精度を、12 ビットまたは 14 ビット精度から選択します。A/D 変換精度を変えた場合、結果レジスタに格納する有効データのビット幅、A/D 変換時間も変わります。

詳細は、34.3.6　アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間を参照してください。ADPRC[1:0] ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときに行ってください。

ACE ビット（A/D データレジスタ自動クリアイネーブル）

CPU、DTC、または DMAC によって ADDRy、ADRD、ADDBLDR、ADDBLDRA、ADDBLDRB、ADTSDR、ADOCDR レジスタを読み出した後、当該レジスタの自動クリア（すべて 0）を行うか行わないかを選択します。

DIAGVAL[1:0] ビット（自己診断変換電圧選択）

自己診断電圧固定モードでの電圧値を選択します。詳細は、ADCER.DIAGLD ビットの説明を参照してください。

ADCER.DIAGVAL[1:0] ビットが 00b のときには、自己診断を実施しないでください。

DIAGLD ビット（自己診断モード選択）

自己診断に使用する 3 つの電圧値をローテーションするか、電圧値を固定するかを選択します。

DIAGLD を 0 にすると、0V →基準電源電圧 × 1/2 →基準電源電圧の順番にローテーションして電圧変換していきます。リセット後、自己診断電圧ローテーションモードを選択した場合は、0V から自己診断を行います。スキャン変換が終了しても自己診断電圧値は 0 に戻りません。再びスキャン変換を実施すると、前回に続く電圧値からローテーションを開始します。

DIAGLD を 1 にすることにより固定モードを選択します。ADCER.DIAGVAL[1:0] ビットで指定した固定電圧が変換されます。固定モードからローテーションモードに切り替えた場合は、固定電圧値からローテーションを開始します。

DIAGLD ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときに行ってください。

DIAGM ビット（自己診断イネーブル）

自己診断を実施するかしないかを選択します。

自己診断は、ADC14 の故障を検出するための機能です。自己診断モードでは、内部で生成する 0V、基準電源電圧 × 1/2、基準電源電圧の 3 つの電圧値のいずれかを変換します。変換が終了すると、A/D 自己診断データレジスタ（ADRD）に変換した電圧の情報と変換結果を格納します。ADRD レジスタはソフトウェアで読み出すことができ、変換結果が正常な範囲内にあるかどうか（値が正常か異常か）を判断します。

自己診断は、スキャンごとの最初に 1 回実施され、3 つの電圧値のうち 1 つを A/D 変換します。ダブルトリガモードを設定（ADCSR.DBLE = 1）した場合、自己診断は常に無効にしてください（DIAGM = 0）。グループスキャンモードで自己診断を有効にした場合は、グループ A とグループ B でそれぞれ別々に自己診断を実行します。

DIAGM ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

ADRFMT ビット（A/D データレジスタフォーマット選択）

ADDRy、ADDBLDR、ADDBLDRA、ADDBLDRB、ADTSDR、ADOCDR、ADCMPDR0/1、ADWINLLB、ADWINULB、ADRD レジスタに格納するデータの右詰め／左詰めを選択します。

ADRFMT ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.12　A/D 変換開始トリガ選択レジスタ（ADSTRGR）

アドレス　ADC140.ADSTRGR 4005 C010h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	TRSA[5:0]						—	—	TRSB[5:0]					
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	TRSB[5:0]	グループB用A/D変換開始トリガ選択	グループスキャンモードでグループBのA/D変換開始トリガを選択します。	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13-b8	TRSA[5:0]	A/D変換開始トリガ選択	シングルスキャンモード、連続スキャンモードでのA/D変換開始トリガを選択します。グループスキャンモードではグループAのA/D変換開始トリガを選択します。	R/W
b15-b14	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

TRSB[5:0] ビット（グループ B 用 A/D 変換開始トリガ選択）

グループ B で選択したアナログ入力のスキャンを開始するトリガを選択します。TRSB[5:0] ビットはグループスキャンモードでのみ使用し、他のスキャンモードでは使用しません。グループ B のスキャン変換開始トリガには、ソフトウェアトリガまたは非同期トリガの設定はしないでください。グループスキャンモードでは、TRSB[5:0] ビットを 000000b 以外の値にし、ADCSR.TRGE ビットを 1 にしてください。

グループスキャンモードのグループ A 優先制御時に、ADGSPCR.GBRP ビットを 1 にすることで、グループ B をシングルスキャンモードで連続動作させることができます。ADGSPCR.GBRP ビットを 1 にする場合は、TRSB[5:0] ビットを 3Fh にしてください。変換トリガの発行間隔は、実際のスキャン変換時間（tSCAN）以上となるように設定してください。発行間隔が tSCAN より短い場合は、トリガによる A/D 変換が無効となる場合があります。

A/D 変換開始トリガに GPT モジュールを選択した場合、同期化処理の分だけ遅延が発生します。詳細は、34.3.6　アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間を参照してください。表 34.6 に TRSB[5:0] ビットでの A/D 変換起動要因選択一覧を示します。

表 34.6　TRSB[5:0] ビットでのA/D変換起動要因選択一覧

要因	備考	TRSB[5]	TRSB[4]	TRSB[3]	TRSB[2]	TRSB[1]	TRSB[0]
トリガ要因非選択状態		1	1	1	1	1	1
ELC_AD00	ELC	0	0	1	0	0	1
ELC_AD01	ELC	0	0	1	0	1	0
ELC_AD00/ELC_AD01	ELC	0	0	1	0	1	1

TRSA[5:0] ビット（A/D 変換開始トリガ選択）

シングルスキャンモード、連続スキャンモードでの A/D 変換開始トリガの選択を行います。グループスキャンモードではグループ A で選択したアナログ入力のスキャンを開始するトリガを選択します。グループスキャンモードまたはダブルトリガモードでスキャンを行う場合、ソフトウェアトリガまたは非同期トリガを使用しないでください。

同期トリガ（ELC）を A/D 変換起動要因として使用する場合は、ADCSR.TRGE ビットを 1 にし、かつ ADCSR.EXTRG ビットを 0 にしてください。

ソフトウェアトリガ（ADCSR.ADST）は、ADCSR.TRGE ビット、ADCSR.EXTRG ビット、TRSA[5:0] ビットの設定値にかかわらず有効です。変換トリガの発行間隔は実際のスキャン変換時間（t_{SCAN}）以上となるように設定してください。発行間隔が t_{SCAN} より短い場合は、トリガによる A/D 変換が無効となる場合があります。詳細は、34.3.6　アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間を参照してください。

表 34.7 に TRSA[5:0] ビットでの A/D 変換起動要因選択一覧を示します。

表 34.7 TRSA[5:0]ビットでのA/D変換起動要因選択一覧

要因	備考	TRSA[5]	TRSA[4]	TRSA[3]	TRSA[2]	TRSA[1]	TRSA[0]
トリガ要因非選択状態		1	1	1	1	1	1
ADTRG0	トリガ入力端子	0	0	0	0	0	0
ELC_AD00	ELC	0	0	1	0	0	1
ELC_AD01	ELC	0	0	1	0	1	0
ELC_AD00/ELC_AD01	ELC	0	0	1	0	1	1

34.2.13 A/D 変換拡張入力コントロールレジスタ（ADEXICR）

アドレス ADC140.ADEXICR 4005 C012h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	OCSA	TSSA	—	—	—	—	—	—	OCSAD	TSSAD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TSSAD	温度センサ出力A/D変換値加算／平均モード選択	0：温度センサ出力A/D変換値加算／平均モード非選択 1：温度センサ出力A/D変換値加算／平均モード選択	R/W
b1	OCSAD	内部基準電圧A/D変換値加算／平均モード選択	0：内部基準電圧A/D変換値加算／平均モード非選択 1：内部基準電圧A/D変換値加算／平均モード選択	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b8	TSSA	温度センサ出力A/D変換選択	0：温度センサ出力のA/D変換禁止 1：温度センサ出力のA/D変換許可	R/W
b9	OCSA	内部基準電圧A/D変換選択	0：内部基準電圧のA/D変換禁止 1：内部基準電圧のA/D変換許可	R/W
b15-b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

TSSAD ビット（温度センサ出力 A/D 変換値加算／ 平均モード選択）

TSSAD ビットが 1 の場合、ADADC.ADC[2:0] ビットで設定した回数分、連続して温度センサ出力の A/D 変換が行われます。最大加算回数は変換精度によって異なります（34.2.1 参照）。ADADC.AVEE ビットが 0 の場合は加算（積算）した値を、ADADC.AVEE ビットが 1 の場合は平均した値を A/D 温度センサデータレジスタ（ADTSDR）に返します。

TSSAD ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

OCSAD ビット（内部基準電圧 A/D 変換値加算／平均モード選択）

OCSAD ビットが 1 の場合、ADADC.ADC[2:0] ビットで設定した回数分、連続して内部基準電圧の A/D 変換が行われます。最大加算回数は変換精度によって異なります（34.2.1 参照）。ADADC.AVEE ビットが 0 の場合は加算した値を、ADADC.AVEE ビットが 1 の場合は平均した値を A/D 内部基準電圧データレジスタ（ADOCDR）に返します。

OCSAD ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

TSSA ビット（温度センサ出力 A/D 変換選択）

温度センサ出力の A/D 変換を選択します。

A/D 変換を実行する場合、

1. ADANSA0/1 および ADANSB0/1 レジスタのすべてのビット、ADCSR.DBLE ビット、および ADEXICR.OCSA ビットを 0 にします
2. シングルスキャンモードで A/D 変換を実行します

温度センサ出力の A/D 変換を実行すると、ADDISCR レジスタは 0Fh になり、ADC14 はサンプリング前にディスチャージを行います（15ADCLK）。最小サンプリング時間は 5µs です。ADC14 は、温度センサ出力の A/D 変換を行うたびにディスチャージを実行します。

TSSA ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

OCSA ビット（内部基準電圧 A/D 変換選択）

内部基準電圧の A/D 変換を選択します。

A/D 変換を実行する場合、

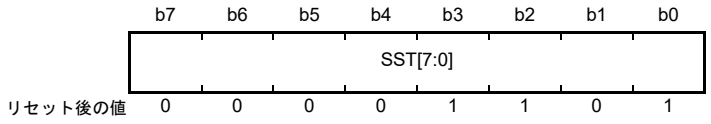
1. ADANSA0/1 および ADANSB0/1 レジスタのすべてのビット、ADCSR.DBLE ビット、および ADEXICR.TSSA ビットを 0 にします
2. シングルスキャンモードで A/D 変換を実行します

内部基準電圧の A/D 変換を実行すると、ADDISCR レジスタは 0Fh になり、ADC14 はサンプリング前にディスチャージを行います（15ADCLK）。最小サンプリング時間は 5µs です。ADC14 は、内部基準電圧の A/D 変換を行うたびにディスチャージを実行します。

OCSA ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

34.2.14　A/D サンプリングステートレジスタ n（ADSSTRn）（n = 00, 04 ～ 06, 09, 10, L, T, O）

アドレス　ADC140.ADSSTR00 4005 C0E0h, ADC140.ADSSTR04 4005 C0E4h～ADC140.ADSSTR06 4005 C0E6h, ADC140.ADSSTR09 4005 C0E9h, ADC140.ADSSTR10 4005 C0EAh, ADC140.ADSSTRL 4005 C0DDh, ADC140.ADSSTRT 4005 C0DEh, ADC140.ADSSTRO 4005 C0DFh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	SST[7:0]	サンプリング時間設定	5～255ステートの間でサンプリング時間を設定します。	R/W

ADSSTRn レジスタは、アナログ入力のサンプリング時間の設定を行います。1 ステート = 1ADCLK（A/D 変換クロック）幅で ADCLK クロックが 64MHz の場合、1 ステート = 15.625ns になります。初期値は 13 ステートです。

アナログ入力信号源のインピーダンスが高くサンプリング時間が不足する場合や、ADCLK クロックが低速な場合に、サンプリング時間を調整することが可能です。

SST[7:0] ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

サンプリング時間の下限値は分周比によって以下のように異なります。

- PCLKB : PCLKC（ADCLK）の分周比が 1:1、2:1、4:1、または 8:1 の場合、サンプリング時間は 5 ステートより長く設定してください
- PCLKB : PCLKC（ADCLK）の分周比が 1:2 または 1:4 の場合、サンプリング時間は 6 ステートより長く設定してください

表 34.8 に A/D サンプリングステートレジスタと関連チャネルの関係を示します。詳細は、34.3.6　アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間を参照してください。

表 34.8　A/Dサンプリングステートレジスタと関連チャネルの関係

ビット名	関連チャネル
ADSSTR00.SST[7:0]ビット	自己診断機能
ADSSTR04.SST[7:0]ビット	AN004
ADSSTR05.SST[7:0]ビット	AN005
ADSSTR06.SST[7:0]ビット	AN006
ADSSTR09.SST[7:0]ビット	AN009
ADSSTR10.SST[7:0]ビット	AN010
ADSSTRL.SST[7:0]ビット	AN017, AN019, AN020
ADSSTRT.SST[7:0]ビット	温度センサ出力（注1）
ADSSTRO.SST[7:0]ビット	内部基準電圧（注1）

注 1.　温度センサ出力または内部基準電圧変換時は、サンプリング時間を 5μs より長く設定してください。SST[7:0] の最大値は 255 ステートなので、ADCLK 周波数は、サンプリング時間が最低でも 5μs となるように設定しなければなりません。

34.2.15 A/D 断線検出コントロールレジスタ（ADDISCR）

アドレス ADC140.ADDISCR 4005 C07Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	PCHG	ADNDIS[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	ADNDIS[3:0]	プリチャージ／ディスチャージ期間	b3 b0 0 0 0 0：断線検出アシスト機能無効 0 0 0 1：設定禁止 その他：プリチャージ／ディスチャージ期間のステート数	R/W
b4	PCHG	プリチャージ／ディスチャージ選択	0：ディスチャージ 1：プリチャージ	R/W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ADDISCR レジスタは、A/D 断線検出アシスト機能のプリチャージ／ディスチャージの設定および期間を設定します。ADDISCR レジスタの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

温度センサ出力または内部基準電圧変換時、A/D コンバータは自動的にディスチャージを行います。この動作は、ADEXICR.OCSA ビットまたは TSSA ビットが 1 のときに、ADDISCR レジスタを 0Fh（15ADCLK）にすることで可能となります。ディスチャージ実行後、A/D コンバータはサンプリングを行います。必要なサンプリング時間は 5µs 以上です。

下記の機能のいずれかを使用する場合は断線検出アシスト機能を無効にしてください。

- 温度センサ
- 内部基準電圧
- A/D 自己診断

ADNDIS[3:0] ビット（プリチャージ／ディスチャージ期間）

ADNDIS[3:0] ビットは、プリチャージ／ディスチャージの期間を指定します。ADNDIS[3:0] = 0000b の場合は、断線検出アシスト機能は無効です。ADNDIS[3:0] = 0001b は設定禁止です。ADNDIS[3:0] = 0000b または 0001b 以外では、設定した値がプリチャージ／ディスチャージ期間のステート数となります。
ADNDIS[3:0] ビットが 0000b または 0001b 以外の値の場合、断線検出アシスト機能は有効になります。

PCHG ビット（プリチャージ／ディスチャージ選択）

プリチャージまたはディスチャージを選択します。

34.2.16　A/D グループスキャン優先コントロールレジスタ（ADGSPCR）

アドレス　ADC140.ADGSPCR 4005 C080h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	GBRP	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	GBRSCN	PGS
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	PGS	グループA優先制御設定（注1）	0：グループAの優先制御動作を行わない 1：グループAの優先制御動作を行う	R/W
b1	GBRSCN	グループB再起動設定	PGS = 1のときのみ有効。PGS = 0のときは予約ビット。 0：グループAの優先制御でグループBのスキャンを中断した後にグループBのスキャンの再起動をしない 1：グループAの優先制御でグループBのスキャンを中断した後にグループBのスキャンの再起動をしない	R/W
b14-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b15	GBRP	グループB用シングルスキャン連続起動設定（注2）	PGS = 1のときのみ有効。PGS = 0のときは予約ビット。 0：グループBのシングルスキャン連続動作を行わない 1：グループBのシングルスキャン連続動作を行う	R/W

注 1.　ADCSR.ADCS[1:0] ビットは、PGS を 1 にする前に 01b（グループスキャンモード）にする必要があります。それ以外の設定をした場合、動作は保証されません。

注 2.　GBRP ビットを 1 にした場合は、GBRSCN ビットの設定にかかわらず、グループ B のシングルスキャン連続動作を実行します。

PGS ビット（グループ A 優先制御設定）

PGS ビットを 1 にすると、グループ A の優先動作が行われます。PGS ビットを 1 にする場合は、事前に ADCSR.ADCS[1:0] ビットを 01b（グループスキャンモード）にしてください。それ以外の設定をした場合、動作は保証されません。

PGS ビットを 0 にした場合は、34.8.2　A/D 変換停止時の注意事項に従い、ソフトウェアでのクリアを行ってください。PGS ビットを 1 にした場合は、34.3.4.3　グループ A 優先制御動作の手順に従い設定を行ってください。

GBRSCN ビット（グループ B 再起動設定）

グループ A 優先制御時の、グループ B の再スキャン動作を設定します。GBRSCN ビットを 1 にすると、グループ A のトリガ入力によるグループ B のスキャン動作中断後、グループ A の A/D 変換終了を待ってグループ B の再スキャン動作を実行します。また、グループ A の A/D 変換動作中にグループ B のトリガ入力があった場合、グループ A の変換終了を待ってグループ B の再スキャン動作を行います。

GBRSCN ビットを 0 にした場合は、A/D 変換実行中に入力されたトリガは無視されます。GBRSCN ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

GBRSCN ビットの設定は、PGS ビットが 1 のときに有効となります。

GBRP ビット（グループ B 用シングルスキャン連続起動設定）

グループ B のシングルスキャン連続動作を実行します。GBRP ビットを 1 にした場合は、グループ B のシングルスキャンが起動します。スキャン終了後は自動的にグループ B のシングルスキャンを再開します。グループ A の動作によってグループ B の変換が中断した場合、グループ A の動作が優先され、グループ A の変換終了後、自動的にグループ B のシングルスキャンを再開します。

GBRP ビットを 1 にする場合は、事前にグループ B のトリガ入力を無効にしてください。GBRP ビットを 1 にした場合、GBRSCN ビットの設定は無効となります。GBRP ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

GBRP ビットの設定は、PGS ビットが 1 のときに有効となります。

34.2.17 A/D コンペア機能コントロールレジスタ（ADCMPCR）

アドレス ADC140.ADCMPCR 4005 C090h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CMPAIE	WCMPE	CMPBIE	—	CMPAE	—	CMPBE	—	—	—	—	—	—	—	CMPAB[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	CMPAB[1:0]	ウィンドウA/B複合条件設定	b1 b0 0 0：ウィンドウA比較条件に一致ORウィンドウB比較条件に一致の場合、ADC140_WCMPMを出力。その他の場合はADC140_WCMPUMを出力 0 1：ウィンドウA比較条件に一致EXORウィンドウB比較条件に一致の場合、ADC140_WCMPMを出力。その他の場合はADC140_WCMPUMを出力 1 0：ウィンドウA比較条件に一致ANDウィンドウB比較条件に一致の場合、ADC140_WCMPMを出力。その他の場合はADC140_WCMPUMを出力 1 1：設定禁止 これらのビットは、ウィンドウAおよびウィンドウBがどちらも有効（CMPAE = 1およびCMPBE = 1）な場合に有効となります。	R/W
b8-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b9	CMPBE	コンペアウィンドウB動作許可	0：コンペアウィンドウB動作禁止 ADC140_WCMPMおよびADC140_WCMPUMの出力不可 1：コンペアウィンドウB動作許可	R/W
b10	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11	CMPAE	コンペアウィンドウA動作許可	0：コンペアウィンドウA動作禁止 ADC140_WCMPMおよびADC140_WCMPUMの出力不可 1：コンペアウィンドウA動作許可	R/W
b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b13	CMPBIE	コンペアB割り込み許可	0：比較条件（ウィンドウB）一致によるADC140_CMPBI割り込み禁止 1：比較条件（ウィンドウB）一致によるADC140_CMPBI割り込み許可	R/W
b14	WCMPE	ウィンドウ機能設定	0：ウィンドウ機能無効 ウィンドウAおよびBはコンパレータとして動作し、下位の1つの値をA/D変換結果と比較します。 1：ウィンドウ機能有効 ウィンドウAおよびBはコンパレータとして動作し、上位および下位の2つの値をA/D変換結果と比較します。	R/W
b15	CMPAIE	コンペアA割り込み許可	0：比較条件（ウィンドウA）一致によるADC140_CMPAI割り込み禁止 1：比較条件（ウィンドウA）一致によるADC140_CMPAI割り込み許可	R/W

CMPAB[1:0] ビット（ウィンドウ A/B 複合条件設定）

シングルスキャンモードでウィンドウ A およびウィンドウ B がどちらも有効（CMPAE = 1 および CMPBE = 1）な場合に有効となります。CMPAB[1:0] ビットにより、ADWINMON.MONCONB のコンペア機能一致／不一致イベント出力条件および監視条件を選択します。

CMPAB[1:0] ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

CMPBE ビット（コンペアウィンドウ B 動作許可）

コンペアウィンドウ B の動作を許可または禁止します。

CMPBE ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

本ビットは、以下のレジスタおよびビットを設定する前に 0 にしてください。

- A/D チャネル選択レジスタ A0/A1/B0/B1（ADANSA0、ADANSA1、ADANSB0、ADANSB1）
- A/D 変換拡張入力コントロールレジスタ（ADEXICR）の OCSA または TSSA
- ウィンドウ B チャネル選択レジスタ（ADCMPBNSR）の CMPCHB[5:0] ビット

CMPAE ビット（コンペアウィンドウ A 動作許可）

コンペアウィンドウ A の動作を許可または禁止します。

CMPAE ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

本ビットは、以下のレジスタおよびビットを設定する前に 0 にしてください。

- A/D チャネル選択レジスタ A0/A1/B0/B1（ADANSA0、ADANSA1、ADANSB0、ADANSB1）
- A/D 変換拡張入力コントロールレジスタ（ADEXICR）の OCSA または TSSA
- ウィンドウ A チャネル選択レジスタ 0/1（ADCMPANSR0、ADCMPANSR1）
- ウィンドウ A 拡張入力選択レジスタ（ADCMPANSER）

CMPBIE ビット（コンペア B 割り込み許可）

比較条件（ウィンドウ B）の一致による割り込み出力 ADC140_CMPBI を許可または禁止します。

WCMPE ビット（ウィンドウ機能設定）

ウィンドウ機能の有効または無効を選択します。

WCMPE ビットの設定は、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ行ってください。

CMPAIE ビット（コンペア A 割り込み許可）

比較条件（ウィンドウ A）の一致による割り込み出力 ADC140_CMPAI を許可または禁止します。

34.2.18 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネル選択レジスタ 0（ADCMPANSR0）

アドレス ADC140.ADCMPANSR0 4005 C094h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	CMPCHA10	CMPCHA09	—	—	CMPCHA06	CMPCHA05	CMPCHA04	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	CMPCHA06～CMPCHA04	コンペアウィンドウAチャネル選択	0：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を禁止 1：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を許可 ビット6（CMPCHA06）はAN006に対応し、ビット4（CMPCHA04）はAN004に対応します。	R/W
b8-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b9	CMPCHA10, CMPCHA09		0：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を禁止 1：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を許可 ビット10（CMPCHA10）はAN010に対応し、ビット9（CMPCHA09）はAN009に対応します。	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPCHAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）（コンペアウィンドウ A チャネル選択）

ADANSA0.ANSAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）および ADANSB0.ANSBn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）で選択した A/D 変換チャネルと同一番号の CMPCHAn ビットを 1 にすると、コンペア機能が有効になります。

CMPCHAn ビットは、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ設定してください。

34.2.19 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネル選択レジスタ 1（ADCMPANSR1）

アドレス ADC140.ADCMPANSR1 4005 C096h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	CMPCHA20	CMPCHA19	—	CMPCHA17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	CMPCHA17	コンペアウィンドウAチャネル選択	0：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を禁止 1：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を許可 ビット1（CMPCHA17）はAN017に対応します。	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4-b3	CMPCHA20, CMPCHA19	コンペアウィンドウAチャネル選択	0：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を禁止 1：関連する入力チャネルに対するコンペア機能を許可 ビット4（CMPCHA20）はAN020に対応し、ビット3（CMPCHA19）はAN019に対応します。	R/W
b15-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPCHAn ビット（n = 17, 19, 20）（コンペアウィンドウ A チャネル選択）

ADANSA1.ANSAn ビット（n = 17, 19, 20）および ADANSB1.ANSBn ビット（n = 17, 19, 20）で選択した A/D 変換チャネルと同一番号の CMPCHAn ビットを 1 にすると、コンペア機能が有効になります。

CMPCHAn ビットは、ADCSR.ADST ビットが 0 のときのみ設定してください。

34.2.20 A/D コンペア機能ウィンドウ A 拡張入力選択レジスタ（ADCMPANSER）

アドレス ADC140.ADCMPANSER 4005 C092h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	CMPOCA	CMPTSA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CMPTSA	温度センサ出力コンペア選択	0：温度センサ出力をコンペアウィンドウA対象から外す 1：温度センサ出力をコンペアウィンドウA対象とする	R/W
b1	CMPOCA	内部基準電圧コンペア選択	0：内部基準電圧をコンペアウィンドウA対象から外す 1：内部基準電圧をコンペアウィンドウA対象とする	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPTSA ビット（温度センサ出力コンペア選択）

ADEXICR.TSSA ビットが 1 のときに CMPTSA ビットを 1 にすると、コンペアウィンドウ A 機能が有効になります。

CMPTSA ビットは、ADSCR.ADST ビットが 0 のときのみ設定してください。

CMPOCA ビット（内部基準電圧コンペア選択）

ADEXICR.OCSA ビットが 1 のときに CMPOCA ビットを 1 にすると、コンペアウィンドウ A 機能が有効になります。

CMPOCA ビットは、ADSCR.ADST ビットが 0 のときのみ設定してください。

34.2.21 A/D コンペア機能ウィンドウ A 比較条件設定レジスタ 0（ADCMPLR0）

アドレス ADC140.ADCMPLR0 4005 C098h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	CMPLCHA10	CMPLCHA09	—	—	CMPLCHA06	CMPLCHA05	CMPLCHA04	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	CMPLCHA06～CMPLCHA04	コンペアウィンドウA比較条件選択	ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN004～AN006の比較条件を設定します。比較条件を図 34.3に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEが0）： 0：ADCMPDR0値＞A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEが1）： 0：A/D変換値＜ADCMPDR0値またはADCMPDR1値＜A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値＜ADCMPDR1値	R/W
b8-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b9	CMPLCHA10, CMPLCHA09	コンペアウィンドウA比較条件選択	ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN009～AN010の比較条件を設定します。比較条件を図 34.3に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEが0）： 0：ADCMPDR0値＞A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEが1）： 0：A/D変換値＜ADCMPDR0値またはADCMPDR1値＜A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値＜ADCMPDR1値	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPLCHAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）（コンペアウィンドウ A 比較条件選択）

ウィンドウ A 比較条件を適用するチャネル AN004 ～ AN006, AN009, AN010 の比較条件を選択します。CMPLCHAn ビットはコンペア対象のアナログ入力ごとに設定可能です。CMPLCHA04、CMPLCHA06、CMPLCHA10 はそれぞれ AN004、AN006、AN010 に対応します。各アナログ入力の比較結果が設定条件と一致すると、ADCMPSR0.CMPSTCHAn フラグは 1 になり、コンペア割り込み（ADC140_CMPAI）が発生します。

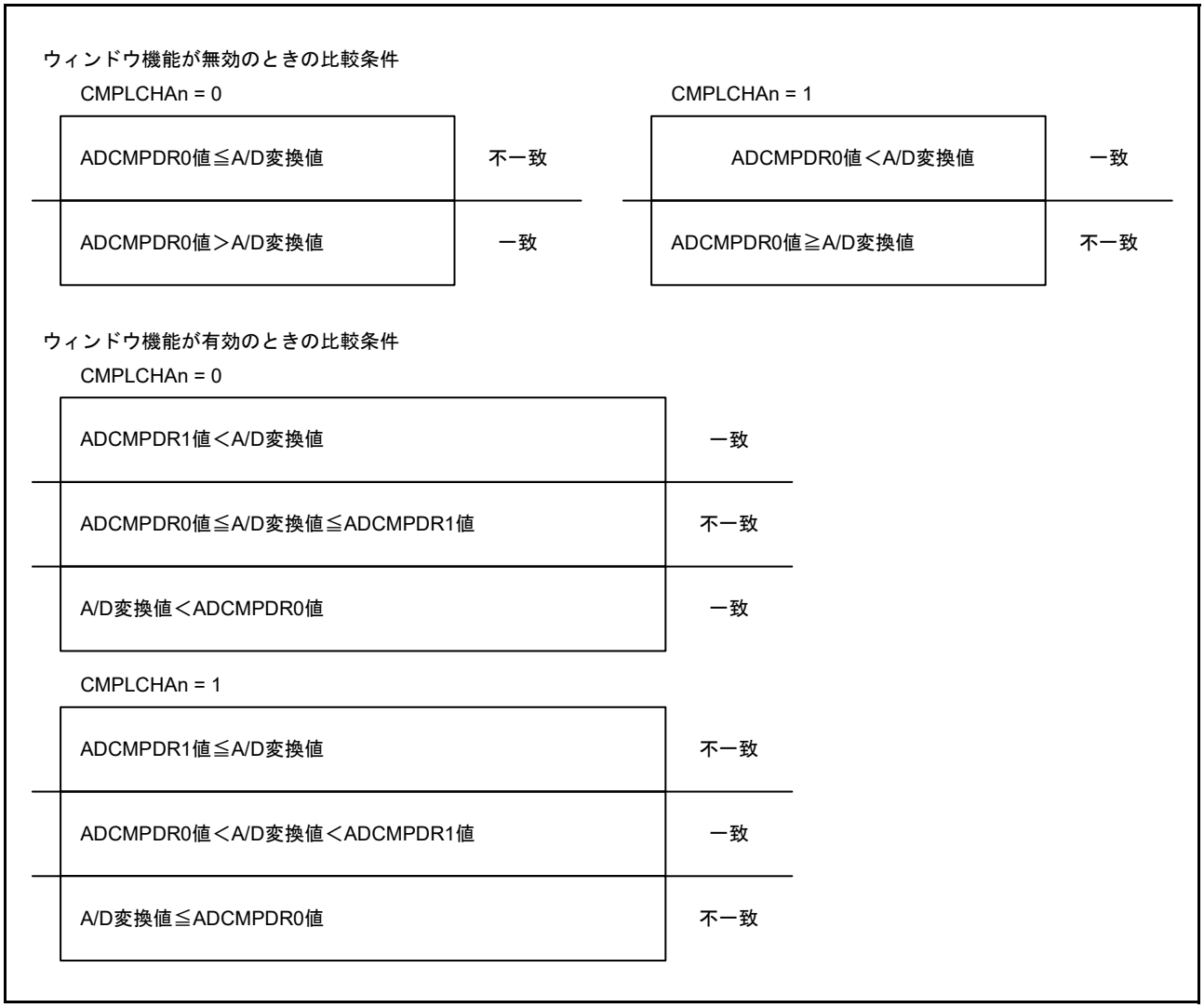


図 34.3　コンペア機能ウィンドウ A 比較条件の説明

34.2.22 A/D コンペア機能ウィンドウ A 比較条件設定レジスタ 1（ADCMPLR1）

アドレス ADC140.ADCMPLR1 4005 C09Ah

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	CMPLCHA20	CMPLCHA19	—	CMPLCHA17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	CMPLCHA17	コンペアウィンドウA比較条件選択	ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN017の比較条件を設定します。比較条件を図 34.3に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEが0）： 0：ADCMPDR0値＞A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEが1）： 0：A/D変換値＜ADCMPDR0値またはADCMPDR1値＜A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値＜ADCMPDR1値	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4-b3	CMPLCHA20, CMPLCHA19	コンペアウィンドウA比較条件選択	ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN019～AN020の比較条件を設定します。比較条件を図 34.3に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEが0）： 0：ADCMPDR0値＞A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEが1）： 0：A/D変換値＜ADCMPDR0値またはADCMPDR1値＜A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値＜ADCMPDR1値	R/W
b15-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPLCHAn ビット（n = 17, 19, 20）（コンペアウィンドウ A 比較条件選択）

ウィンドウ A 比較条件を適用するチャネル AN017, AN019, AN020 の比較条件を選択します。CMPLCHAn ビットはコンペア対象のアナログ入力ごとに設定可能です。CMPLCHA17、CMPLCHA19、CMPLCHA20 はそれぞれ AN017、AN019、AN020 に対応します。各アナログ入力の比較結果が設定条件と一致すると、ADCMPSR1.CMPSTCHAn ビットは 1 になり、コンペア割り込み（ADC140_CMPAI）が発生します。

34.2.23 A/D コンペア機能ウィンドウ A 拡張入力比較条件設定レジスタ（ADCMPLER）

アドレス ADC140.ADCMPLER 4005 C093h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	CMPLOCA	CMPLTSA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CMPLTSA	コンペアウィンドウA温度センサ出力比較条件選択	比較条件を図 34.3に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEビットが0）： 0：ADCMPDR0値＞A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEビットが1）： 0：AD変換値＜ADCMPDR0値またはAD変換値＞ADCMPDR1値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値＜ADCMPDR1値	R/W
b1	CMPLOCA	コンペアウィンドウA内部基準電圧比較条件選択	比較条件を図 34.3に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEビットが0）： 0：ADCMPDR0値＞A/D変換値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEビットが1）： 0：AD変換値＜ADCMPDR0値またはAD変換値＞ADCMPDR1値 1：ADCMPDR0値＜A/D変換値＜ADCMPDR1値	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPLTSA ビット（コンペアウィンドウ A 温度センサ出力比較条件選択）

温度センサ出力がウィンドウ A 比較条件の対象である場合の比較条件を選択します。温度センサ出力の比較結果が設定条件と一致すると、ADCMPSER.CMPSTTSA フラグは 1 になり、コンペア割り込み（ADC140_CMPAI）が発生します。

CMPLOCA ビット（コンペアウィンドウ A 内部基準電圧比較条件選択）

内部基準電圧がウィンドウ A 比較条件の対象である場合の比較条件を選択します。内部基準電圧の比較結果が設定条件と一致すると、ADCMPSER.CMPSTOCA ビットは 1 になり、コンペア割り込み（ADC140_CMPAI）が発生します。

34.2.24 A/D コンペア機能ウィンドウ A 下側レベル設定レジスタ（ADCMPDR0）、A/D コンペア機能ウィンドウ A 上側レベル設定レジスタ（ADCMPDR1）、A/D コンペア機能ウィンドウ B 下側レベル設定レジスタ（ADWINLLB）、A/D コンペア機能ウィンドウ B 上側レベル設定レジスタ（ADWINULB）

アドレス　ADC140.ADCMPDR0 4005 C09Ch, ADC140.ADCMPDR1 4005 C09Eh, ADC140.ADWINLLB 4005 C0A8h, ADC140.ADWINULB 4005 C0AAh

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	—	—	基準値	R/W

ADCMPDRy（y = 0, 1）レジスタは、コンペアウィンドウ A 機能使用時、基準となるデータを設定するレジスタです。

ADCMPDR0 はウィンドウ A の下側基準を設定し、ADCMPDR1 は上側基準を設定します。

ADWINULB および ADWINLLB は、コンペアウィンドウ B 機能使用時、基準となるデータを設定します。ADWINLLB はウィンドウ B の下側基準を設定し、ADWINULB は上側基準を設定します。ADCMPDRy、ADWINULB、および ADWINLLB は読み出し／書き込み可能です。

ADCMPDRy、ADWINULB、および ADWINLLB の書き込みは A/D 変換中でも有効です。A/D 変換中にレジスタ値を書き換えることにより、基準データを動的に変更することが可能です。(注 1)

これらのレジスタを設定するときは、上側基準が下側基準を下回らないようにしてください（ADCMPDR1 ≧ ADCMPDR0、ADWINULB ≧ ADWINLLB）。ADCMPDR1 および ADWINULB はウィンドウ機能無効時は使用しません。

注 1.　下側基準および上側基準は、それぞれのレジスタが書き込まれるときに変更されます。たとえば上側基準値が変更され、下側基準値が変更中の場合、本 MCU は上側基準値（変更後）と下側基準値（変更前）を A/D 変換結果と比較します。図 34.4 を参照してください。2 つの基準値の書き換え時に比較エラーとなった場合、ADCSR.ADST および関連するコンペアウィンドウ動作許可ビット（ADCMPCR.CMPAE または ADCMPCR.CMPBE）がどちらも 0 のときに、それらの基準値を書き換えてください。

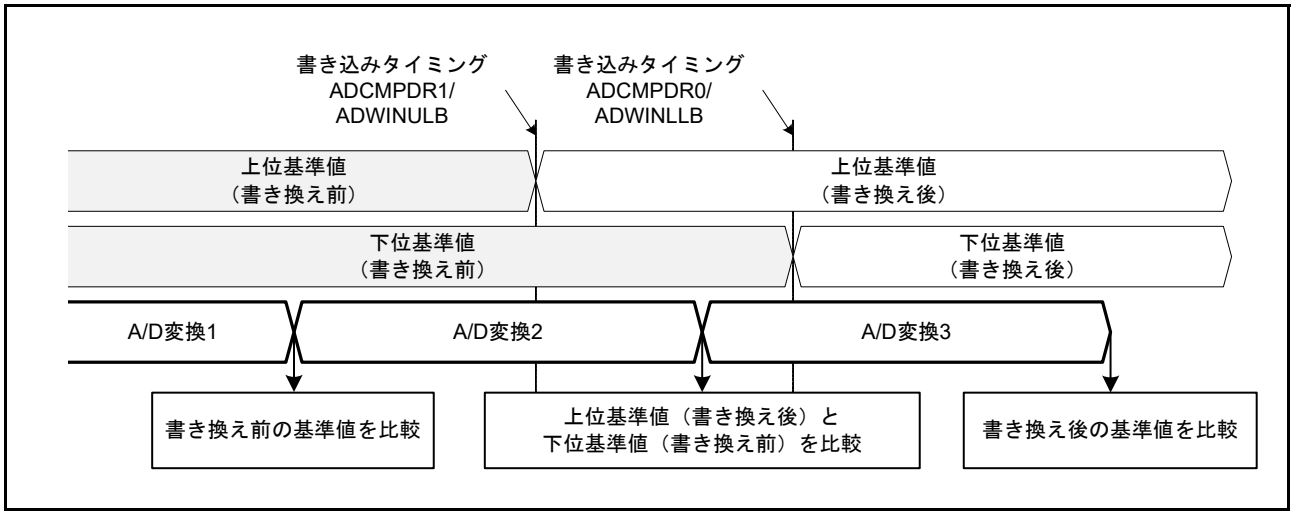


図 34.4　書き換え前後の上側基準値と下側基準値の比較

ADCMPDRy、ADWINLLB、およびADWINULBレジスタは、下記の条件でフォーマットが異なります。

- A/Dデータレジスタフォーマット選択ビットの設定値（右詰めまたは左詰め）
- A/D変換精度指定ビットの設定値（14ビットまたは12ビット）
- A/D変換値加算／平均チャネル選択ビットの設定値（A/D変換値加算モード選択、または非選択）

以下、条件ごとのフォーマットを示します。

(1) A/D変換値加算モードを非選択とした場合

- 右詰めのフォーマット、14ビット精度の場合：下位14ビット[13:0]が有効
- 右詰めのフォーマット、12ビット精度の場合：下位12ビット[11:0]が有効
- 左詰めのフォーマット、14ビット精度の場合：上位14ビット[15:2]が有効
- 左詰めのフォーマット、12ビット精度の場合：上位12ビット[15:4]が有効

(2) A/D変換値加算モードを選択した場合

- 右詰めのフォーマット、14ビット精度の場合：全ビット[15:0]が有効
- 右詰めのフォーマット、12ビット精度の場合：下位14ビット[13:0]が有効
- 左詰めのフォーマット、14ビット精度の場合：全ビット[15:0]が有効
- 左詰めのフォーマット、12ビット精度の場合：上位14ビット[15:2]が有効

34.2.25 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネルステータスレジスタ 0（ADCMPSR0）

アドレス ADC140.ADCMPSR0 4005 C0A0h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	CMPSTCHA10	CMPSTCHA09	—	—	CMPSTCHA06	CMPSTCHA05	CMPSTCHA04	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	CMPSTCHA06～CMPSTCHA04	コンペアウィンドウAフラグ	ウィンドウA動作が有効（ADCMPCR.CMPAE = 1b）な場合、ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN004～AN006の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b8-b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b10-b9	CMPSTCHA10, CMPSTCHA09	コンペアウィンドウAフラグ	ウィンドウA動作が有効（ADCMPCR.CMPAE = 1b）な場合、ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN009, AN010の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b15-b11	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPSTCHAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）（コンペアウィンドウ A フラグ）

ウィンドウ A 比較条件を適用するチャネル AN004 ～ AN006, AN009, AN010 の比較結果ステータスフラグです。ADCMPLR0.CMPLCHAn で設定した比較条件が A/D 変換終了時に成立すると、該当ビットが 1 になります。ADCMPCR.CMPAIE ビットが 1 の場合、本ビットが 1 になると比較割り込み（ADC140_CMPAI）要求が発生します。CMPSTCHA04、CMPSTCHA06、CMPSTCHA10 はそれぞれ AN004、AN006、AN010 に対応します。

CMPSTCHAn ビットに 1 を書き込むことはできません。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 のときに、ADCMPLR0.CMPLCHAn で設定した条件が成立したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

34.2.26 A/D コンペア機能ウィンドウ A チャネルステータスレジスタ 1（ADCMPSR1）

アドレス ADC140.ADCMPSR1 4005 C0A2h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	CMPSTCHA20	CMPSTCHA19	—	CMPSTCHA17	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	CMPSTCHA17	コンペアウィンドウAフラグ	ウィンドウA動作が有効（ADCMPCR.CMPAE = 1b）な場合、ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN017の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4-b3	CMPSTCHA20, CMPSTCHA19	コンペアウィンドウAフラグ	ウィンドウA動作が有効（ADCMPCR.CMPAE = 1b）な場合、ウィンドウA比較条件を適用するチャネルAN019, AN020の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b15-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPSTCHAn ビット（n = 17, 19, 20）（コンペアウィンドウ A フラグ）

ウィンドウ A 比較条件を適用するチャネル AN017, AN019, AN020 の比較結果ステータスフラグです。ADCMPLR1.CMPLCHAn で設定した比較条件が A/D 変換終了時に成立すると、関連する CMPSTCHAn ビットが 1 になります。ADCMPCR.CMPAIE ビットが 1 の場合、本ビットが 1 になると比較割り込み（ADC140_CMPAI）要求が発生します。CMPSTCHA17、CMPSTCHA19、CMPSTCHA20 はそれぞれ AN017、AN019、AN020 に対応します。CMPSTCHAn ビットに 1 を書き込むことはできません。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 のときに、ADCMPLR1.CMPLCHAn で設定した条件が成立したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

34.2.27 A/D コンペア機能ウィンドウ A 拡張入力チャネルステータスレジスタ（ADCMPSER）

アドレス ADC140.ADCMPSER 4005 C0A4h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	CMPSTOCA	CMPSTTSA
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CMPSTTSA	コンペアウィンドウA温度センサ出力コンペアフラグ	ウィンドウA動作が有効（ADCMPCR.CMPAE = 1）な場合、温度センサ出力の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b1	CMPSTOCA	コンペアウィンドウA内部基準電圧コンペアフラグ	ウィンドウA動作が有効（ADCMPCR.CMPAE = 1）な場合、内部基準電圧の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPSTTSA ビット（コンペアウィンドウ A 温度センサ出力コンペアフラグ）

温度センサ出力の比較結果を示すステータスフラグです。ADCMPLER.CMPLTSA で設定した比較条件が A/D 変換終了時に成立すると 1 になります。ADCMPCR.CMPAIE ビットが 1 の場合、本ビットが 1 になると比較割り込み（ADC140_CMPAI）要求が発生します。

CMPSTTSA ビットに 1 を書き込むことはできません。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 のときに、ADCMPLER.CMPLTSA で設定した条件が成立したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

CMPSTOCA ビット（コンペアウィンドウ A 内部基準電圧コンペアフラグ）

内部基準電圧の比較結果を示すステータスフラグです。ADCMPLER.CMPLOCA で設定した比較条件が A/D 変換終了時に成立すると 1 になります。ADCMPCR.CMPAIE ビットが 1 の場合、本ビットが 1 になると比較割り込み（ADC140_CMPAI）要求が発生します。

CMPSTOCA ビットに 1 を書き込むことはできません。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 のとき、ADCMPLER.CMPLOCA で設定した条件が成立したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

34.2.28 A/D コンペア機能ウィンドウ B チャネル選択レジスタ（ADCMPBNSR）

アドレス ADC140.ADCMPBNSR 4005 C0A6h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CMPLB	—	CMPCHB[5:0]					
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	CMPCHB[5:0]	コンペアウィンドウB チャネル選択	コンペアウィンドウB条件と比較するチャネルを選択します。 b5 b0 0 0 0 1 0 0：AN004 0 0 0 1 0 1：AN005 0 0 0 1 1 0：AN006 0 0 1 0 0 1：AN009 0 0 1 0 1 0：AN010 0 1 0 0 0 1：AN017 0 1 0 0 1 1：AN019 0 1 0 1 0 0：AN020 1 0 0 0 0 0：温度センサ 1 0 0 0 0 1：内部基準電圧 1 1 1 1 1 1：選択なし 上記以外は設定しないでください。	R/W
b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	CMPLB	コンペアウィンドウB 比較条件設定	ウィンドウBのチャネル比較条件を設定します。比較条件を図 34.5 に示します。 • ウィンドウ機能無効時（ADCMPCR.WCMPEが0）： 0：ADWINLLB値＞A/D変換値 1：ADWINLLB値＜A/D変換値 • ウィンドウ機能有効時（ADCMPCR.WCMPEが1）： 0：A/D変換値＜ADWINLLB値またはADWINULB値＜A/D変換値 1：ADWINLLB値＜A/D変換値＜ADWINULB値	R/W

CMPCHB[5:0] ビット（コンペアウィンドウ B チャネル選択）

AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020 のコンペアウィンドウ B 条件、温度センサ、および内部基準電圧と比較するチャネルを選択します。コンペアウィンドウ B 機能は、以下のビットで選択した A/D 変換チャネルの 16 進数を指定することで有効になります。

- ADANSA0.ANSAn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）
- ADANSA1.ANSAn ビット（n = 17, 19, 20）
- ADANSB0.ANSBn ビット（n = 04 ～ 06, 09, 10）
- ADANSB1.ANSBn ビット（n = 17, 19, 20）

CMPCHB[5:0] ビットは、ADCSR.ADST ビットが 0 のときに設定してください。

CMPLB ビット（コンペアウィンドウ B 比較条件設定）

ウィンドウ B のチャネル比較条件を設定します。各アナログ入力の比較結果が設定条件と一致すると、ADCMPBSR.CMPSTB ビットは 1 になり、コンペア割り込み（ADC140_CMPBI）が発生します。

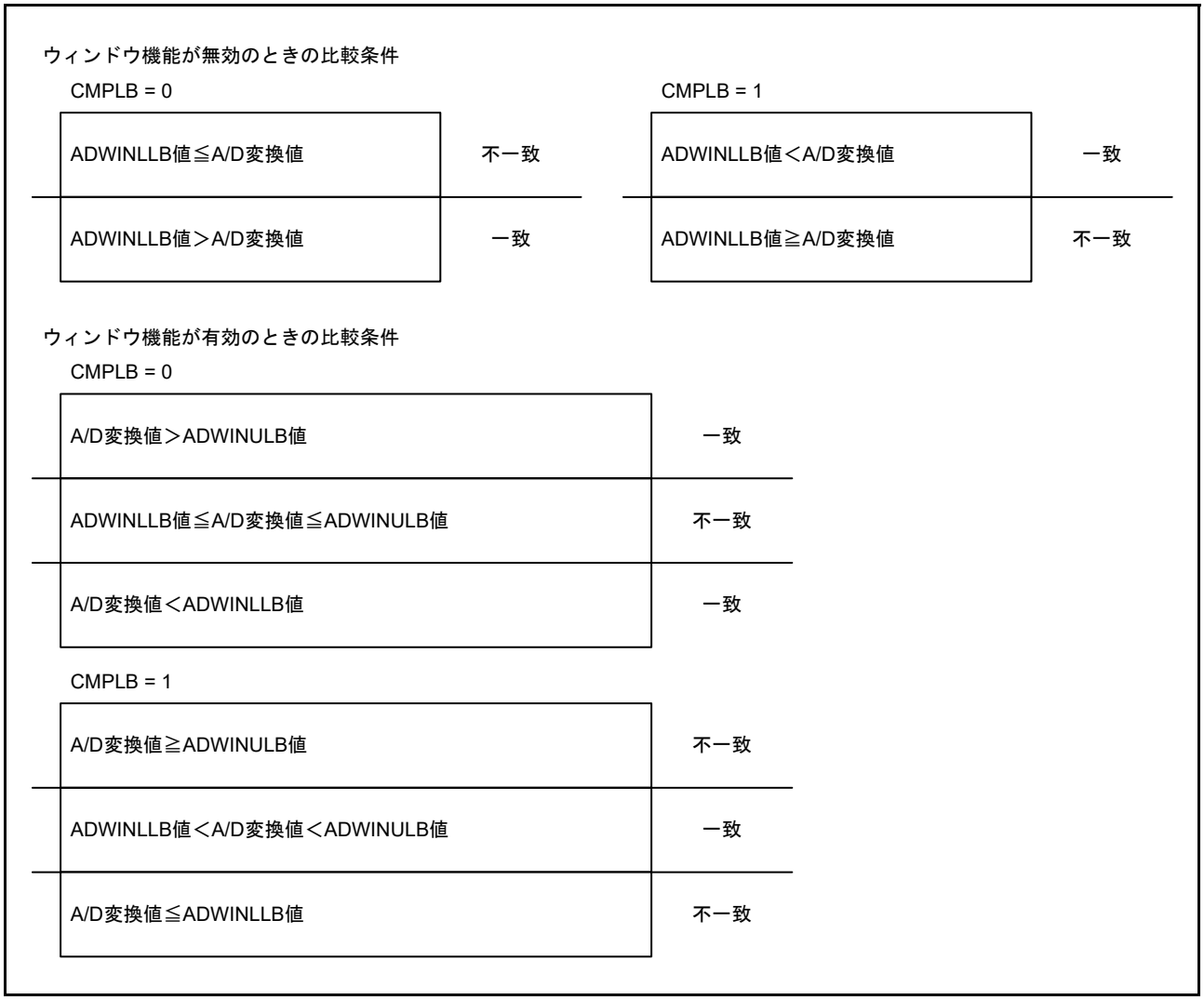


図 34.5　コンペア機能ウィンドウ B 比較条件の説明

34.2.29 A/D コンペア機能ウィンドウ B ステータスレジスタ（ADCMPBSR）

アドレス ADC140.ADCMPBSR 4005 C0ACh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	CMPSTB
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CMPSTB	コンペアウィンドウBフラグ	ウィンドウB動作が有効（ADCMPCR.CMPBE = 1）な場合、ウィンドウB比較条件を適用するチャネルAN004～AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020、温度センサ出力、および内部基準電圧の比較結果を示します。 0：比較条件不成立 1：比較条件成立	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CMPSTB ビット（コンペアウィンドウ B フラグ）

ウィンドウ B 比較条件を適用するチャネル（AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020、温度センサ出力、および内部基準電圧）の比較結果を示します。ADCMPBNSR.CMPLB で設定した比較条件が A/D 変換終了時に成立すると 1 になります。ADCMPCR.CMPBIE ビットが 1 の場合、本フラグが 1 になると比較割り込み（ADC140_CMPBI）要求が発生します。

CMPSTB ビットに 1 を書き込むことはできません。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPBE が 1 のときに、ADCMPBNSR.CMPLB で設定した条件が成立したとき

［0 になる条件］

- 1 を読んだ後、0 を書いたとき

34.2.30 A/D コンペア機能ウィンドウ A/B ステータスモニタレジスタ（ADWINMON）

アドレス ADC140.ADWINMON 4005 C08Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	MONCMPB	MONCMPA	—	—	—	MONCOMB
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	MONCOMB	組み合わせ結果監視	組み合わせ結果を示します。本ビットは、ウィンドウAおよびウィンドウBの動作がどちらも有効な場合に有効となります。 0：ウィンドウA／ウィンドウBの複合条件が不成立 1：ウィンドウA／ウィンドウBの複合条件が成立	R
b3-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b4	MONCMPA	比較結果監視A	0：ウィンドウA比較条件が不成立 1：ウィンドウA比較条件が成立	R
b5	MONCMPB	比較結果監視B	0：ウィンドウB比較条件が不成立 1：ウィンドウB比較条件が成立	R
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

MONCOMB ビット（組み合わせ結果監視）

ADCMPCR.CMPAB[1:0] ビットで設定した複合条件との比較条件結果 A および比較結果条件 B の組み合わせの結果を示す読み出し専用ビットです。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 かつ ADCMPCR.CMPBE が 1 のとき、組み合わせ結果が ADCMPCR.CMPAB[1:0] ビットで設定した複合条件と一致したとき

［0 になる条件］

- 組み合わせ結果が ADCMPCR.CMPAB[1:0] ビットで設定した複合条件と一致しないとき
- ADCMPCR.CMPAE が 0 または ADCMPCR.CMPBE が 0 のとき

MONCMPA ビット（比較結果監視 A）

ウィンドウ A の対象チャネルの A/D 変換値が ADCMPLR0/ADCMPLR1 および ADCMPLER で設定した条件と一致すると 1 が読み出される読み出し専用ビットです。それ以外の場合は読むと 0 が読み出されます。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 のときに、A/D 変換値が ADCMPLR0.CMPLCHAn で設定した条件と一致するとき

［0 になる条件］

- ADCMPCR.CMPAE が 1 のときに、A/D 変換値が ADCMPLR0.CMPLCHAn で設定した条件と一致しないとき
- ADCMPCR.CMPAE が 0 のとき（ADCMPCR.CMPAE の値が 1 から 0 に変化すると自動的に 0 になる）

MONCMPB ビット（比較結果監視 B）

ウィンドウ B の対象チャネルの A/D 変換値が ADCMPBNSR.CMPLB ビットで設定した条件と一致すると 1 が読み出される読み出し専用ビットです。それ以外の場合は読むと 0 が読み出されます。

［1 になる条件］

- ADCMPCR.CMPBE が 1 のときに、A/D 変換値が ADCMPBNSR.CMPLB で設定した条件と一致するとき

［0 になる条件］

- ADCMPCR.CMPBE が 1 のときに、A/D 変換値が ADCMPBNSR.CMPLB で設定した条件と一致しないとき
- ADCMPCR.CMPBE が 0 のとき（ADCMPCR.CMPBE の値が 1 から 0 に変化すると自動的に 0 になる）

34.2.31　A/D 高電位／低電位基準電圧コントロールレジスタ（ADHVREFCNT）

アドレス　ADC140.ADHVREFCNT 4005 C08Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	ADSLP	—	—	LVSEL	—	—	HVSEL[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	HVSEL[1:0]	高電位基準電圧選択	b1　b0 0　0：高電位基準電圧にAVCC0を選択 0　1：高電位基準電圧にVREFH0を選択 1　0：高電位基準電圧に内部基準電圧を選択 1　1：内部ノードディスチャージ（基準電圧端子を選択しない）	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	LVSEL	低電位基準電圧選択	0：低電位基準電圧にAVSS0を選択 1：低電位基準電圧にVREFL0を選択	R/W
b6-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	ADSLP	スリープ	0：通常動作 1：スタンバイ状態	R/W

HVSEL[1:0] ビット（高電位基準電圧選択）

高電位基準電圧を、AVCC0、VREFH0、または内部基準電圧（1.45V）から指定します。

これらのビットを 10b にして内部基準電圧を選択する前に、HVSEL[1:0] を 11b にして高電位基準電圧のパスをディスチャージしてください。ディスチャージが完了したら、HVSEL[1:0] を 10b にして A/D 変換を開始してください。

高電位基準電圧に内部基準電圧を選択した場合（HVSEL[1:0] = 10b）、チャネル AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020 の A/D 変換を実行できますが、内部基準電圧および温度センサ出力の A/D 変換はできません。

LVSEL ビット（低電位基準電圧選択）

低電位基準電圧を、AVSS0 または VREFL0 から指定します。

ADSLP ビット（スリープ）

ADC14 をスタンバイ状態に遷移させます。ADCSR.ADHSC ビットの変更時にのみ、ADSLP ビットを 1 にしてください。その他の場合、ADSLP ビットを 1 にすることはできません。

ADSLP ビットを 1 にしたら、0 に戻す前に最低 5µs 待ってください。また、ADSLP ビットを 0 にしたら、最低 1µs 待ってから A/D 変換を開始してください。

ADHSC ビットの書き換え手順については、34.8.8　ADHSC ビット書き換え手順を参照してください。

34.3 動作説明

34.3.1 スキャンの動作説明

スキャンとは、選択したチャネルのアナログ入力を順次 A/D 変換する動作を指します。

スキャン変換には、以下のように 3 つの動作モードと 2 つの変換モードがあります。

動作モードは以下の 3 つです。

- シングルスキャンモード
- 連続スキャンモード
- グループスキャンモード

変換モードは以下の 2 つです。

- 高速変換モード
- 低消費電力 A/D 変換モード

シングルスキャンモードは、指定した 1 チャネル以上のスキャンを 1 回実施して終了するモードです。連続スキャンモードは指定した 1 チャネル以上のスキャンを、ソフトウェアで ADCSR.ADST ビットを 1 から 0 にするまで繰り返し実行するモードです。グループスキャンモードは、グループ A とグループ B のスキャンをそれぞれ選択した同期トリガ（ELC）で開始し、グループ A とグループ B で選択したチャネルのスキャンをそれぞれ 1 回ずつ実施して終了するモードです。

シングルスキャンモードおよび連続スキャンモードでは、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を行います。グループスキャンモードでは、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したグループ A のチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を行い、その後 ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択したグループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を行います。

自己診断を選択した場合は、スキャンごとの最初に自己診断が 1 回実施され、ADC14 内部で生成する 3 つの電圧値のうち 1 つを A/D 変換します。

温度センサ出力および内部基準電圧を同時に選択しないでください。内部基準電圧を高電位側の基準電圧に選択する場合、温度センサまたは内部基準電圧の A/D 変換も実行できません。温度センサ出力または内部基準電圧を選択した場合、シングルスキャンモードを使用してください。

ダブルトリガモードは、シングルスキャンモードまたはグループスキャンモードで使用可能です。ダブルトリガモードを許可（ADCSR.DBLE = 1）すると、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットで選択した同期トリガ（ELC）でのスキャン変換起動でのみ、ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択したチャネルの A/D 変換データを 2 重化します。グループスキャンモードでは、ダブルトリガモードを使用できるのはグループ A のみです。

ダブルトリガモードの拡張動作では、A/D 変換動作が同期トリガコンビネーションから発生します。トリガコンビネーションは ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットで選択します。通常のダブルトリガモード動作に加え、奇数トリガ（ELC_AD00）による A/D 変換データを A/D データ 2 重化レジスタ A（ADDBLDRA）に、偶数トリガ（ELC_AD01）による A/D 変換データを A/D データ 2 重化レジスタ B（ADDBLDRB）に格納します。ダブルトリガモードの拡張動作では、トリガコンビネーションの 1 つが同時発生すると、指定したトリガのデータ 2 重化レジスタ設定が実行されず、A/D 変換データは A/D データ 2 重化レジスタ B（ADDBLDRB）に格納されます。他の同期トリガによって開始された A/D 変換中に発生した同期トリガは無視されます。

34.3.2　シングルスキャンモード

34.3.2.1　基本動作

シングルスキャンモードの基本動作は、指定されたチャネルのアナログ入力を以下のように1サイクルのみA/D変換します。

1. ソフトウェアトリガ、同期トリガ入力（ELC）または非同期トリガ入力によってADCSR.ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、ADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。
2. 1チャネルのA/D変換が終了するごとに、A/D変換結果は関連するA/Dデータレジスタ（ADDRy）に格納されます。
3. 選択したすべてのチャネルのA/D変換終了後、ADC140_ADI割り込み要求を発生します。
4. ADSTビットはA/D変換中は1（A/D変換開始）を保持し、選択されたすべてのチャネルのA/D変換が終了すると自動的にクリアされ、ADC14は待機状態になります。

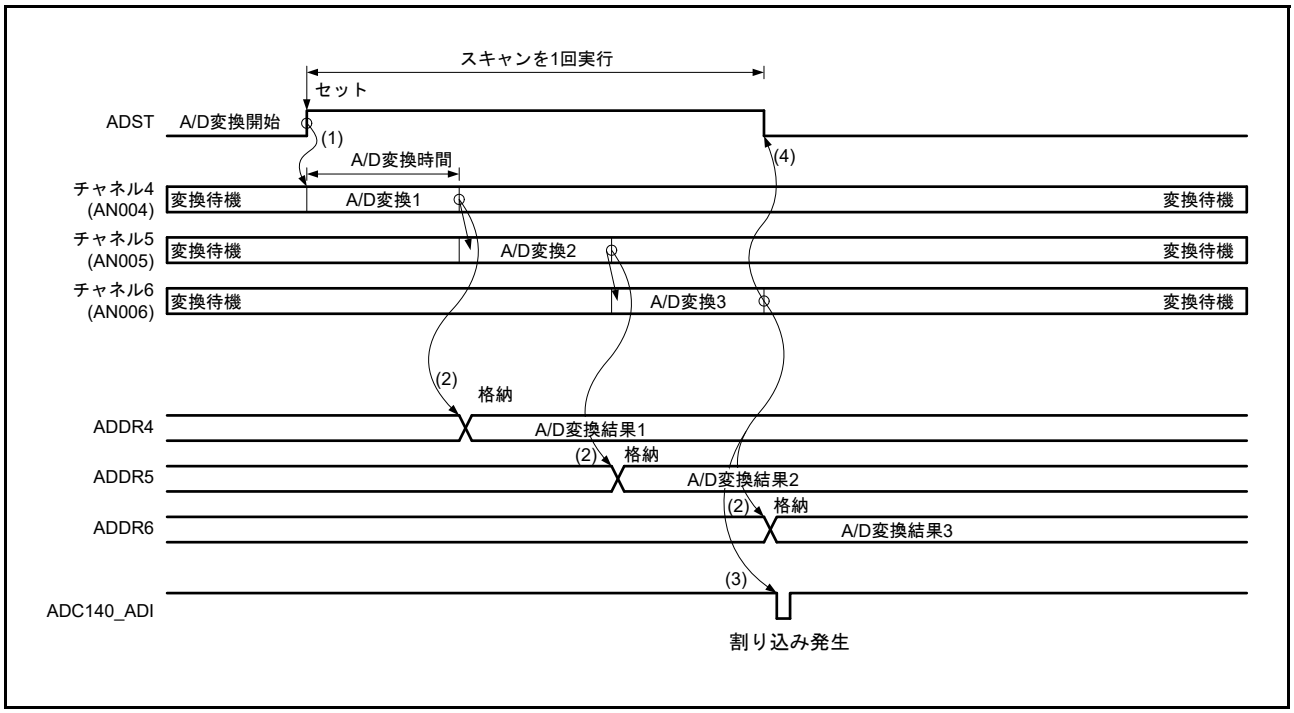


図 34.6　シングルスキャンモードの基本動作例（AN004 ～ AN006 選択）

34.3.2.2　チャネル選択と自己診断

チャネル選択とともに自己診断を選択すると、まずADC14に供給される基準電圧VREFH0（×0, ×1/2, または×1）のA/D変換を行います。

その後、以下のように選択したチャネルのアナログ入力を1回のみA/D変換します。

1. ソフトウェアトリガ、同期トリガ入力（ELC）または非同期トリガ入力によってADCSR.ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、最初に自己診断でのA/D変換を開始します。
2. 自己診断のA/D変換が終了すると、A/D変換結果はA/D自己診断データレジスタ（ADRD）に格納され、次にADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。
3. 1チャネルのA/D変換が終了するごとに、A/D変換結果は関連するA/Dデータレジスタ（ADDRy）に格納されます。
4. 選択したすべてのチャネルのA/D変換終了後、ADC140_ADI割り込み要求を発生します。
5. ADSTビットはA/D変換中は1（A/D変換開始）を保持し、選択されたすべてのチャネルのA/D変換が終了すると自動的にクリアされ、ADC14は待機状態になります。

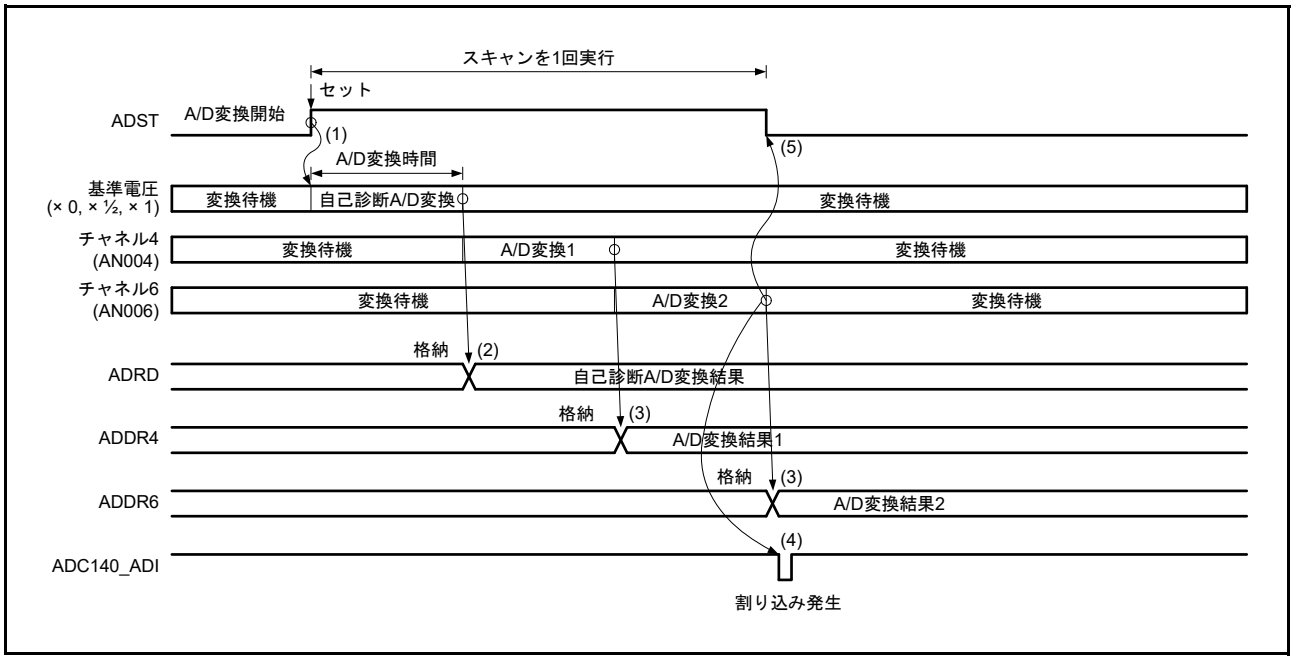


図 34.7　シングルスキャンモードの基本動作例（AN004、AN006 選択 + 自己診断）

34.3.2.3　温度センサ出力／内部基準電圧選択時の A/D 変換動作

シングルスキャンモードでは、以下で説明するように、温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換を行います。

温度センサ出力または内部基準電圧の A/D 変換を選択した場合、すべてのチャネルを非選択にしてください（ADANSA0 および ADANSA01 レジスタ、および ADCSR.DBLE ビットを 0 にする）。

温度センサ出力の A/D 変換を選択した場合、内部基準電圧 A/D 変換選択ビット（ADEXICR.OCSA）を 0（非選択）にしてください。内部基準電圧の A/D 変換を選択した場合、温度センサ出力 A/D 変換選択ビット（ADEXICR.TSSA）を 0（非選択）にしてください。

動作は以下のとおりです。

1. サンプリング時間を 5µs 以上に設定します。サンプリングステートレジスタ O（ADSSTRT/ADSSTRO）設定および ADCLK 周波数に注意してください。
2. 内部基準電圧または温度センサ出力の A/D 変換に切り替えた後は、ADST ビットを 1 にして変換を開始してください。
3. A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は温度センサ出力データレジスタ（ADTRDR）または A/D 内部基準電圧データレジスタ（ADOCDR）へ格納され、ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
4. ADST ビットは A/D 変換中は 1 を保持し、A/D 変換が終了すると自動的にクリアされ、ADC14 は待機状態になります。

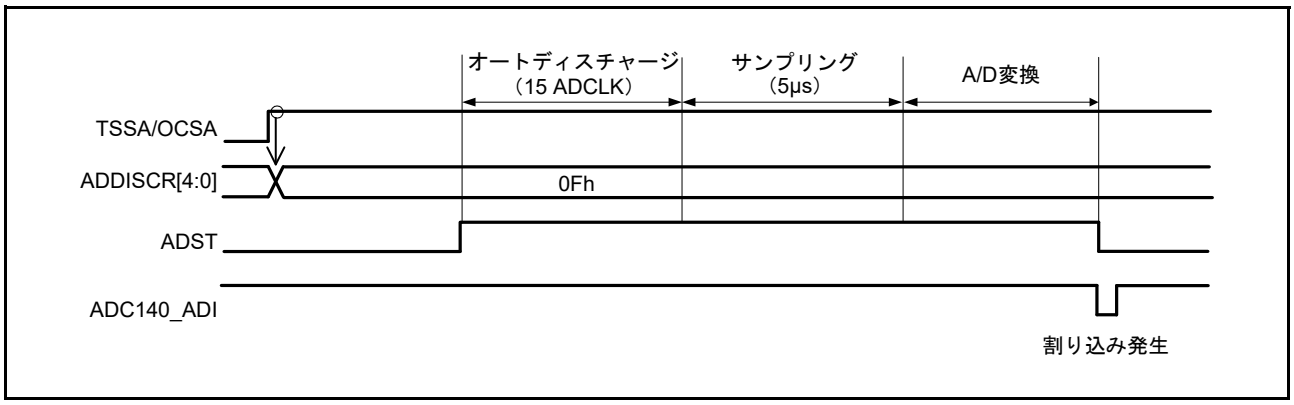


図 34.8　シングルスキャンモードの基本動作例（AN004、温度センサ出力または内部基準電圧選択）

34.3.2.4　ダブルトリガモード選択時のA/D変換動作

シングルスキャンモードでダブルトリガモードを選択した場合は、同期トリガ（ELC）で開始するシングルスキャンモードの実行2回分を一連の動作として実行します。

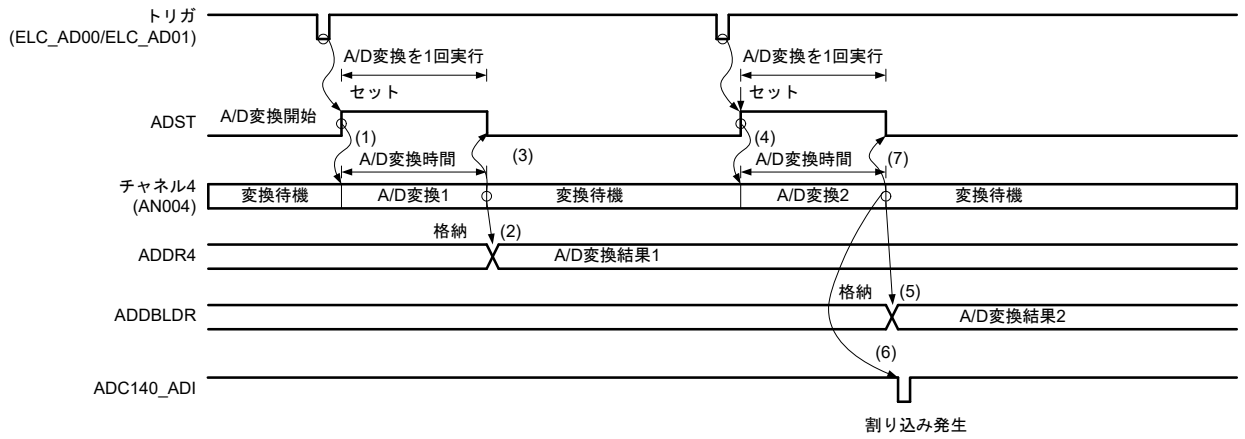
自己診断は非選択とし、温度センサ出力A/D変換選択ビット（ADEXICR.TSSA、ADEXICR.TSSB）と内部基準電圧A/D変換選択ビット（ADEXICR.OCSA、ADEXICR.OCSB）はともに0にしてください。

A/D変換データ2重化は、2重化するチャネルの番号をADCSR.DBLANS[4:0]ビットに設定し、ADCSR.DBLEビットを1にすると有効となります。ADCSR.DBLEビットを1にした場合はADANSA0、ADANSA1レジスタのチャネル選択は無効になります。

ダブルトリガモード時は、ADSTRGR.TRSA[5:0]ビットで同期トリガ（ELC）を選択し、ADCSR.EXTRGビットを0に、ADCSR.TRGEビットを1にしてください。ソフトウェアトリガは使用しないでください。

動作は以下のとおりです。

1. 同期トリガ入力（ELC）によってADCSR.ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、ADCSR.DBLANS[4:0]ビットで選択した1チャネルのA/D変換を開始します。
2. 1チャネルのA/D変換が終了すると、A/D変換結果は関連するA/Dデータレジスタ（ADDRy）に格納されます。
3. ADSTビットは自動的に0になり、ADC14は待機状態になります。ADC140_ADI割り込み要求は発生しません。
4. 2回目のトリガ入力によってADCSR.ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、ADCSR.DBLANS[4:0]ビットで選択した1チャネルのA/D変換を開始します。
5. A/D変換が終了すると、A/D変換結果はダブルトリガモード専用のA/Dデータ2重化レジスタ（ADDBLDR）に格納されます。
6. ADC140_ADI割り込み要求が発生します。
7. ADSTビットはA/D変換中は1（A/D変換開始）を保持し、A/D変換が終了すると自動的に0となり、ADC14は待機状態になります。



注．　AN004を2重化設定、ELC_AD00/ELC_AD01トリガを選択した場合

図34.9　シングルスキャンモードの基本動作例（ダブルトリガモード選択、AN004を2重化）

34.3.2.5　ダブルトリガモード選択時の拡張動作

シングルスキャンモードでダブルトリガモードを選択した場合で、A/D 変換開始トリガとして同期トリガ ELC_AD00/ELC_AD01 を選択した場合、シングルスキャンモードの実行 2 回分を行います。

自己診断は非選択とし、温度センサ出力 A/D 変換選択ビット（ADEXICR.TSSA、ADEXICR.TSSB）と内部基準電圧 A/D 変換選択ビット（ADEXICR.OCSA、ADEXICR.OCSB）はともに 0 にしてください。

A/D 変換データ 2 重化は、2 重化するチャネルの番号を ADCSR.DBLANS[4:0] ビットに設定し、ADCSR.DBLE ビットを 1 にすると有効となります。ADCSR.DBLE ビットを 1 にした場合は ADANSA0、ADANSA1 レジスタのチャネル選択は無効になります。

拡張ダブルトリガモード時は、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットを 0Bh にして同期トリガ ELC_AD00/ELC_AD01 を選択し、ADCSR.EXTRG ビットを 0 に、ADCSR.TRGE ビットを 1 にしてください。ソフトウェアトリガは使用しないでください。

動作は以下のとおりです。

1. 同期トリガ入力（ELC_AD00/ELC_AD01）により ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になると、ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択した 1 チャネルの A/D 変換を開始します。
2. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、変換結果は対応する A/D データレジスタ（ADDRy）、および ELC_AD00/ELC_AD01 のトリガ入力時 A/D データ 2 重化レジスタ A（ADDBLDRA）または A/D データ 2 重化レジスタ B（ADDBLDRB）へそれぞれ格納されます。
3. ADCSR.ADST ビットは自動的に 0 になり、ADC14 は待機状態になります。ADC140_ADI 割り込みは発生しません。
4. 2 番目のトリガ入力（ELC_AD00/ELC_AD01）によって ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になると、ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択した 1 チャネルの A/D 変換を開始します。
5. A/D 変換が終了すると、結果は A/D データ 2 重化レジスタ（ADDBLDR）、および ELC_AD00/ELC_AD01 のトリガ入力時 A/D データ 2 重化レジスタ A（ADDBLDRA）または A/D データ 2 重化レジスタ B（ADDBLDRB）へそれぞれ格納されます。
6. ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
7. ADCSR.ADST ビットは A/D 変換中は 1（A/D 変換開始）を保持し、A/D 変換が終了すると自動的に 0 となり、ADC14 は待機状態になります。

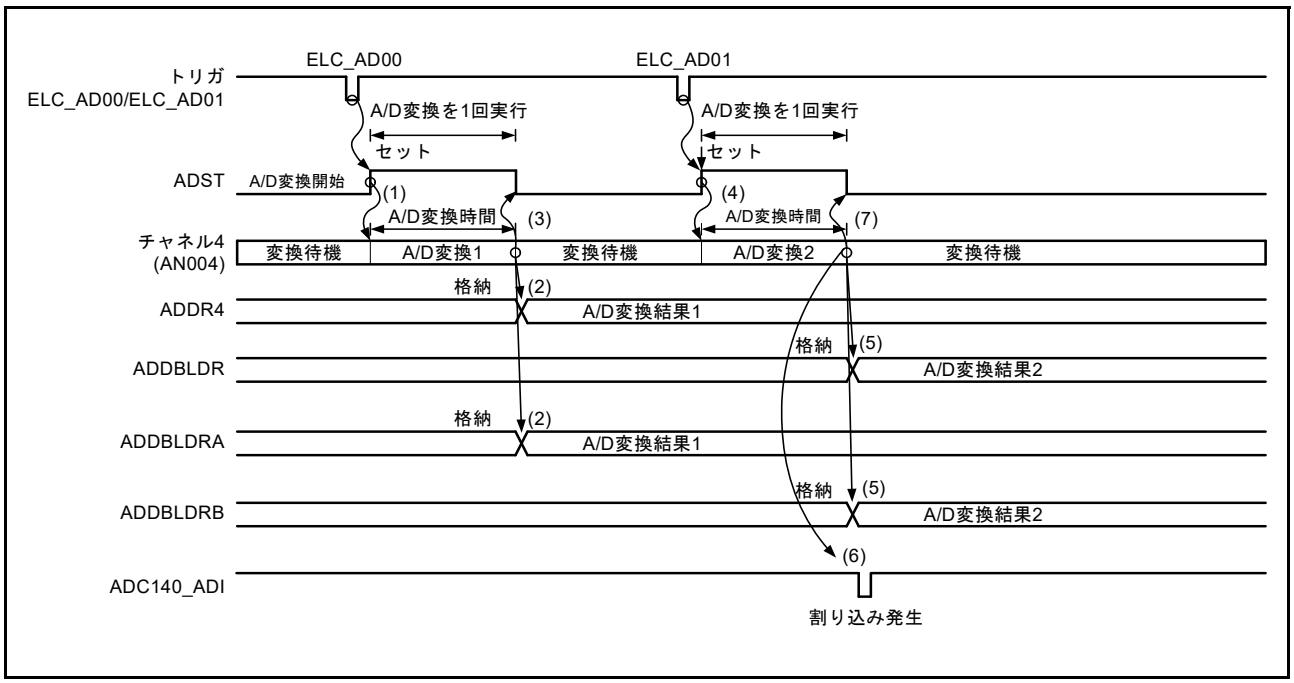


図 34.10　ダブルトリガモードの拡張動作例（1）（ELC_AD00/ELC_AD01 選択、AN004 を 2 重化）

34.3.3　連続スキャンモード

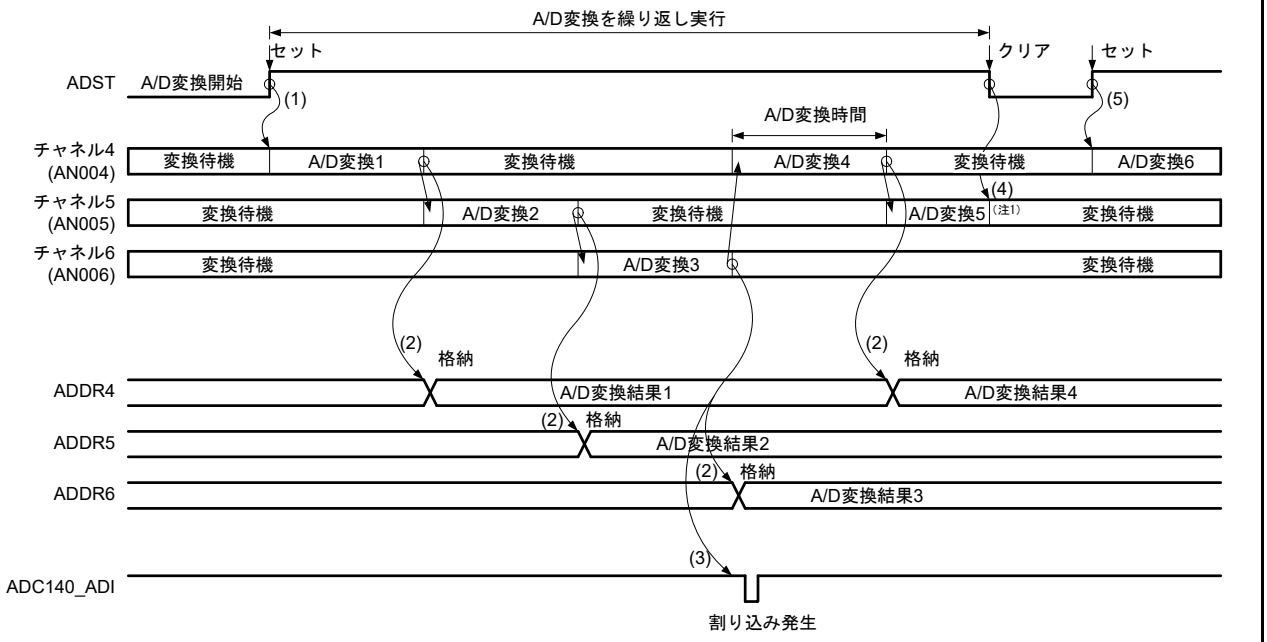
34.3.3.1　基本動作

連続スキャンモードでは、以下のように選択されたチャネルのアナログ入力を以下のように繰り返しA/D変換します。

本モードでは、ADEXICR.TSSAビットとADEXICR.OCSAビットをともに0にすることにより、温度センサ出力A/D変換と内部基準電圧A/D変換を非選択にします。

動作は以下のとおりです。

1. ソフトウェアトリガ、同期トリガ入力（ELC）または非同期トリガ入力によってADCSR.ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、ADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。
2. 1チャネルのA/D変換が終了すると、A/D変換結果は関連するA/Dデータレジスタ（ADDRy）に格納されます。
3. 選択したすべてのチャネルのA/D変換終了後、ADC140_ADI割り込み要求をレジスタ設定なしで発生します。またADC14は、継続してADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。
4. ADCSR.ADSTビットは自動的にクリアされず、1（A/D変換開始）の状態の間は（2）～（3）を繰り返します。ADCSR.ADSTビットを0（A/D変換停止）にするとA/D変換は停止、ADC14は待機状態になります。
5. その後、ADSTビットが1（A/D変換開始）になると再びADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。



注1.　A/D変換5のデータは無視されます。

図 34.11　連続スキャンモードの基本動作例（AN004 ～ AN006 選択）

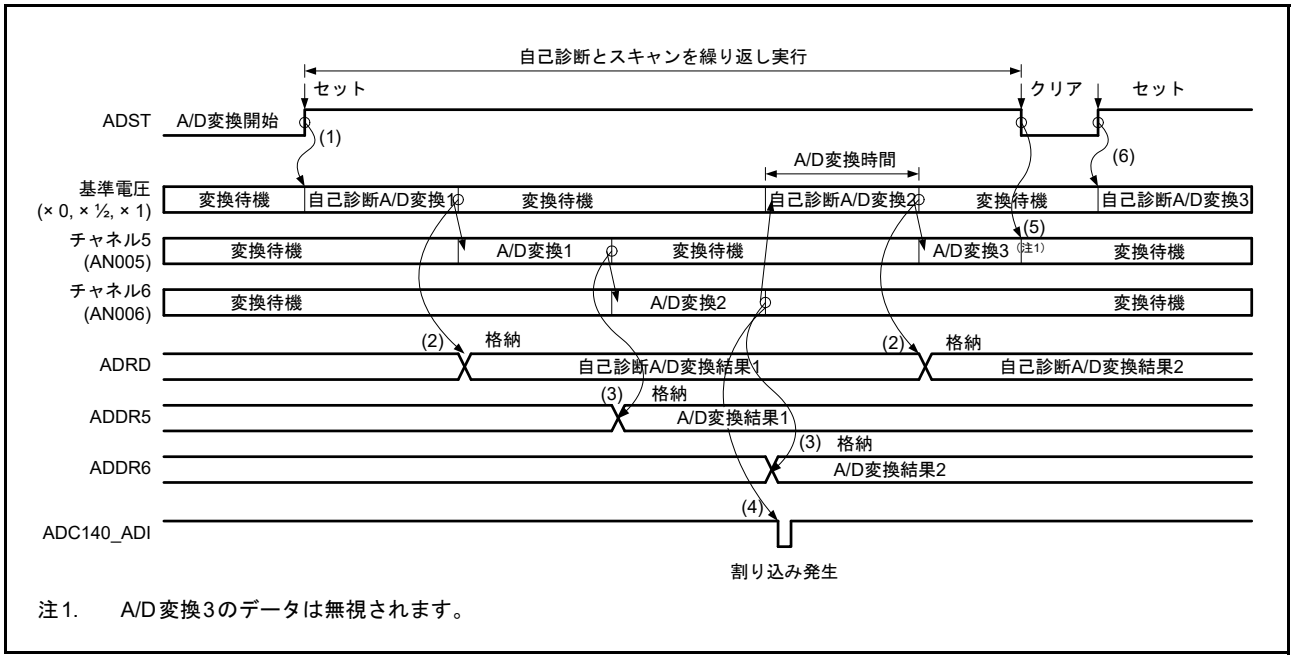
34.3.3.2　チャネル選択と自己診断

チャネル選択とともに自己診断を選択すると、まずADC14に供給される基準電圧VREFH0（× 0、× 1/2、× 1のいずれか）のA/D変換を行い、その後、選択したチャネルのアナログ入力をA/D変換します。本シーケンスは本項で記述しているように繰り返されます。

連続スキャンモードでは、温度センサ出力A/D変換選択ビット（ADEXICR.TSSA）と内部基準電圧A/D変換選択ビット（ADEXICR.OCSA）はともに0（非選択）にします。

動作は以下のとおりです。

1. ソフトウェアトリガ、同期トリガ入力（ELC）または非同期トリガ入力によってADCSR.ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、最初に自己診断でのA/D変換を開始します。
2. 自己診断のA/D変換が終了すると、A/D変換結果はA/D自己診断データレジスタ（ADRD）に格納され、ADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。
3. 1チャネルのA/D変換が終了するごとに、A/D変換結果は関連するA/Dデータレジスタ（ADDRy）に格納されます。
4. 選択したすべてのチャネルのA/D変換終了後、ADC140_ADI割り込み要求を発生します（レジスタ設定なしで）。同時に、ADC14は自己診断でのA/D変換を開始し、その後ADANSA0、ADANSA1レジスタで選択したチャネルANnのnが小さい番号順にA/D変換を開始します。
5. ADSTビットは自動的にクリアされず、1になっている間は（2）～（4）を繰り返します。ADSTビットを0（A/D変換停止）にすると A/D変換は停止し、ADC14は待機状態になります。
6. その後、ADSTビットが1（A/D変換開始）になると、再び自己診断でのA/D変換から開始します。



注1.　A/D変換3のデータは無視されます。

図 34.12　連続スキャンモードの基本動作例（AN005 および AN006 選択 + 自己診断）

34.3.4　グループスキャンモード

34.3.4.1　基本動作

本項で記述しているように、グループスキャンモードでは、同期トリガ（ELC）をスキャン開始条件とし、グループ A とグループ B のそれぞれで選択したすべてのチャネルのアナログ入力を以下のように 1 回のみ A/D 変換します。グループ A とグループ B のそれぞれのスキャン動作は、シングルスキャンモードと同じ動作になります。

グループスキャンモードのグループ A およびグループ B の同期トリガは、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットと ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットでそれぞれ設定できます。これら 2 つのグループの A/D 変換が同時に起こらないように、グループ A とグループ B のトリガは別々のトリガにしてください。また、ソフトウェアトリガは使用しないでください。

A/D 変換対象とするチャネルは、ADANSA0、ADANSA1 レジスタでグループ A のチャネルを選択し、ADANSB0、ADANSB1 レジスタでグループ B のチャネルを選択します。グループ A とグループ B で同一のチャネルを選択することはできません。

グループスキャンモードでは、温度センサ出力 A/D 変換選択ビット（ADEXICR.TSSA）と内部基準電圧 A/D 変換選択ビット（ADEXICR.OCSA）はともに 0（非選択）にします。グループスキャンモードで自己診断を選択した場合は、グループ A とグループ B それぞれで自己診断を実施します。

以下に ELC からの同期トリガによるグループスキャンモードの動作例を示します。グループ A は ELC からの ELC_AD00 トリガで変換開始し、グループ B は ELC からの ELC_AD01 トリガで変換開始する設定です。また、ELC_AD00 および ELC_AD01 は、対応する ELC.ELSRn レジスタで GPT イベントに選択されます。

動作は以下のとおりです。

1. ELC_AD00 トリガでグループ A のスキャンを開始します。
2. グループ A のスキャン終了後、ADC140_ADI 割り込みをレジスタ設定なしで発生します。
3. ELC_AD01 トリガでグループ B のスキャンを開始します。
4. グループ B のスキャン終了時に ADCSR.GBADIE ビットが 1（スキャン終了による ADC140_GBADI 割り込み許可）に設定されていると、ADC140_GBADI 割り込みを発生します。

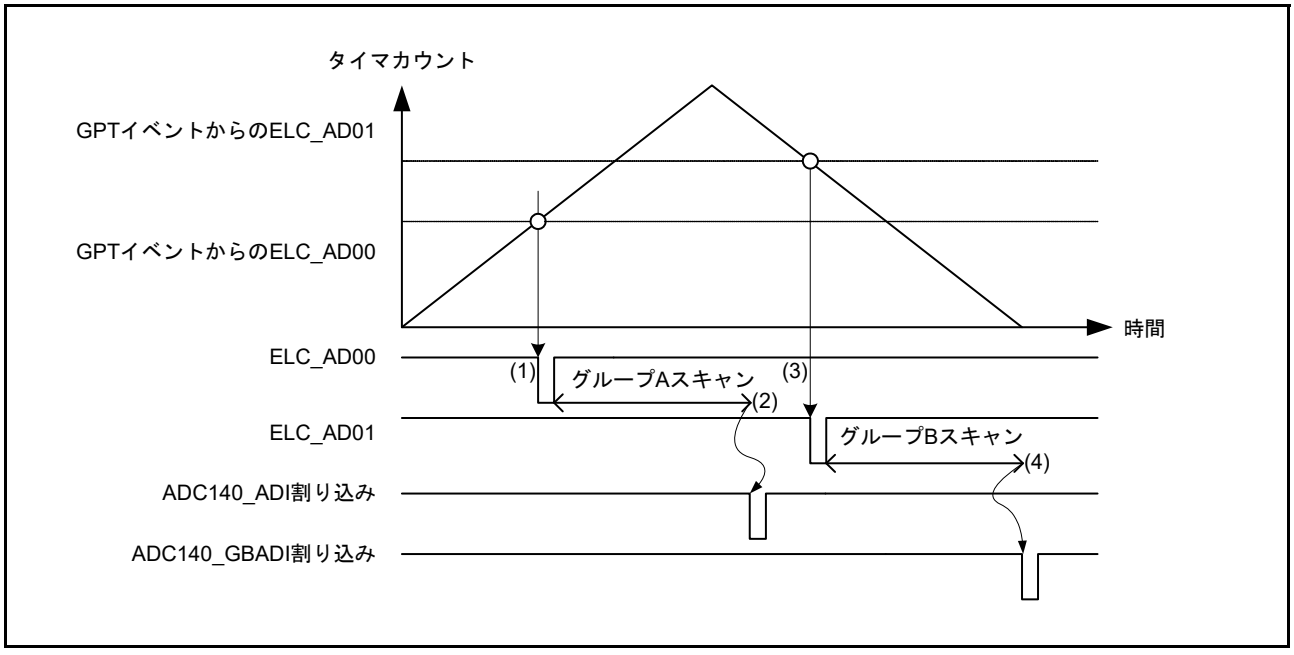


図 34.13　グループスキャンモードの基本動作例（ELC からの同期トリガ）

34.3.4.2　ダブルトリガモード選択時の A/D 変換動作

グループスキャンモードでダブルトリガモードを選択した場合は、グループ A は同期トリガ（ELC）で開始するシングルスキャンモードの実行 2 回分を一連の動作として実行します。グループ B は同期トリガ（ELC）で開始するシングルスキャンモードの動作を 1 回実行します。

グループスキャンモード時、同期トリガ設定は、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットでグループ A の同期トリガを選択し、ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットでグループ B の同期トリガを選択します。グループ A とグループ B の A/D 変換が同時に起こらないように、グループ A とグループ B のトリガは別々のトリガにしてください。なお、ソフトウェアトリガまたは非同期トリガ（ADTRG0）は使用しないでください。

ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットを 0Bh にすることによって ELC_AD00/ELC_AD01 をグループ A の同期トリガに選択した場合は、ダブルトリガ拡張モードで動作します。

A/D 変換を行うグループ A チャネルは ADCSR.DBLANS[4:0] ビットで選択され、A/D 変換を行うグループ B チャネルは ADANSB0 レジスタおよび ADANSB1 レジスタで選択されます。グループ A とグループ B で同一のチャネルを選択することはできません。

グループスキャンモードでは、ADEXICR.TSSA ビットと ADEXICR.OCSA ビットをともに 0 にすることにより、温度センサ出力 A/D 変換と内部基準電圧 A/D 変換を非選択にします。

グループスキャンモードでダブルトリガモード選択時は自己診断は選択できません。

A/D 変換データ 2 重化は、2 重化するチャネルの番号を ADCSR.DBLANS[4:0] ビットに設定し、ADCSR.DBLE ビットを 1 にすると有効となります。

以下に ELC からの同期トリガによるグループスキャンモードかつダブルトリガモード設定時の動作例を示します。以下の例では、ELC_AD00 トリガでグループ A の変換が開始され、ELC_AD01 トリガでグループ B の変換が開始されています。また、ELC_AD00 および ELC_AD01 は、対応する ELC.ELSRn レジスタで GPT イベントに選択されます。

動作は以下のとおりです。

1. ELC からの ELC_AD00 トリガでグループ B のスキャンを開始します。
2. グループ B のスキャン終了時に ADCSR.GBADIE ビットが 1（グループ B のスキャン終了割り込み許可）に設定されていると ADC140_GBADI 割り込みを発生します。
3. 1 回目の ELC_AD01 トリガでグループ A の 1 回目のスキャンを開始します。
4. グループ A の 1 回目のスキャンが終了すると、変換結果は対応する A/D データレジスタ（ADDRy）に格納されます。ADC140_ADI 割り込み要求は発生しません。
5. 2 回目の ELC_AD01 トリガでグループ A の 2 回目のスキャンを開始します。
6. グループ A の 2 回目のスキャン終了時、A/D 変換結果を ADDBLDR に格納します。レジスタ設定なしで、ADC140_ADI 割り込みが発生します。

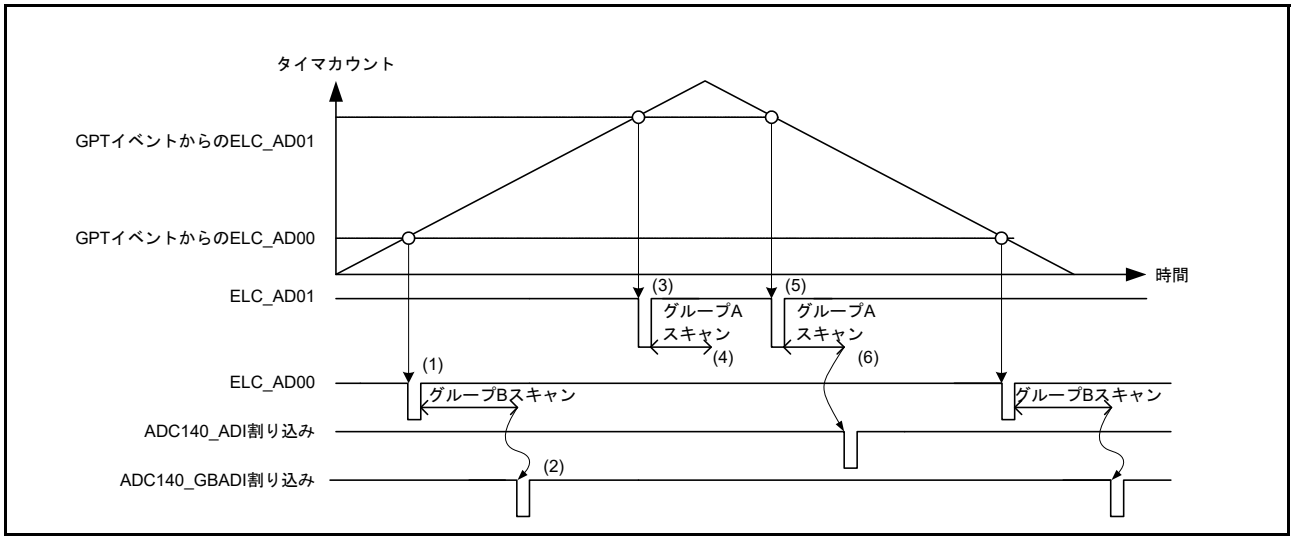


図 34.14　グループスキャンモードかつダブルトリガモード設定時の動作（ELC からの同期トリガ）

34.3.4.3　グループ A 優先制御動作

グループスキャンモードで ADGSPCR.PGS ビットを 1 にすると、グループ A 優先制御動作を行います。ADPGSCR レジスタの PGS ビットを 1 にする際は、図 34.15 に記載された手順に従い、設定を実行してください。フロー以外の設定をした場合、A/D 変換の動作および格納されたデータは保証されません。

グループスキャンモードの基本動作では、グループ A、もしくはグループ B の A/D 変換動作中に他方の A/D 変換のトリガ入力があっても無視されます。グループ A 優先制御動作では、グループ B の A/D 変換動作中にグループ A のトリガ入力があった場合、グループ B の A/D 変換動作を中断して、グループ A の A/D 変換動作を行います。ADGSPCR.GBRSCN ビットが 0 のときは、ADC14 はグループ A の A/D 変換終了時に待機状態となります。ADGSPCR.GBRSCN ビットが 1 のときは、グループ A の A/D 変換終了後、自動的にグループ B のスキャンをグループ先頭から自動で再開します。ADGSPCR.GBRSCN ビットの設定と A/D 変換動作中のトリガ入力時の動作を表 34.9 に示します。

グループ A とグループ B のスキャン動作は、シングルスキャンモードと同じ動作になります。また、グループ B のスキャン動作中に ADGSPCR.GBRP ビットを 1 にすると、シングルスキャンを連続して実行する動作になります。

グループスキャンモードのトリガ設定は、ADSTRGR.TRSA[5:0] ビットでグループ A の同期トリガを選択し、ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットでグループ A のトリガとは異なるグループ B の同期トリガを選択してください。ADGSPCR.GBRP ビットを 1 にする場合は、ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットを 3Fh にしてください。

また A/D 変換対象とするチャネルは、ADANSA0、ADANSA1 レジスタでグループ A のチャネルを選択し、ADANSB0、ADANSB1 レジスタでグループ A とは異なるグループ B のチャネルを選択してください。

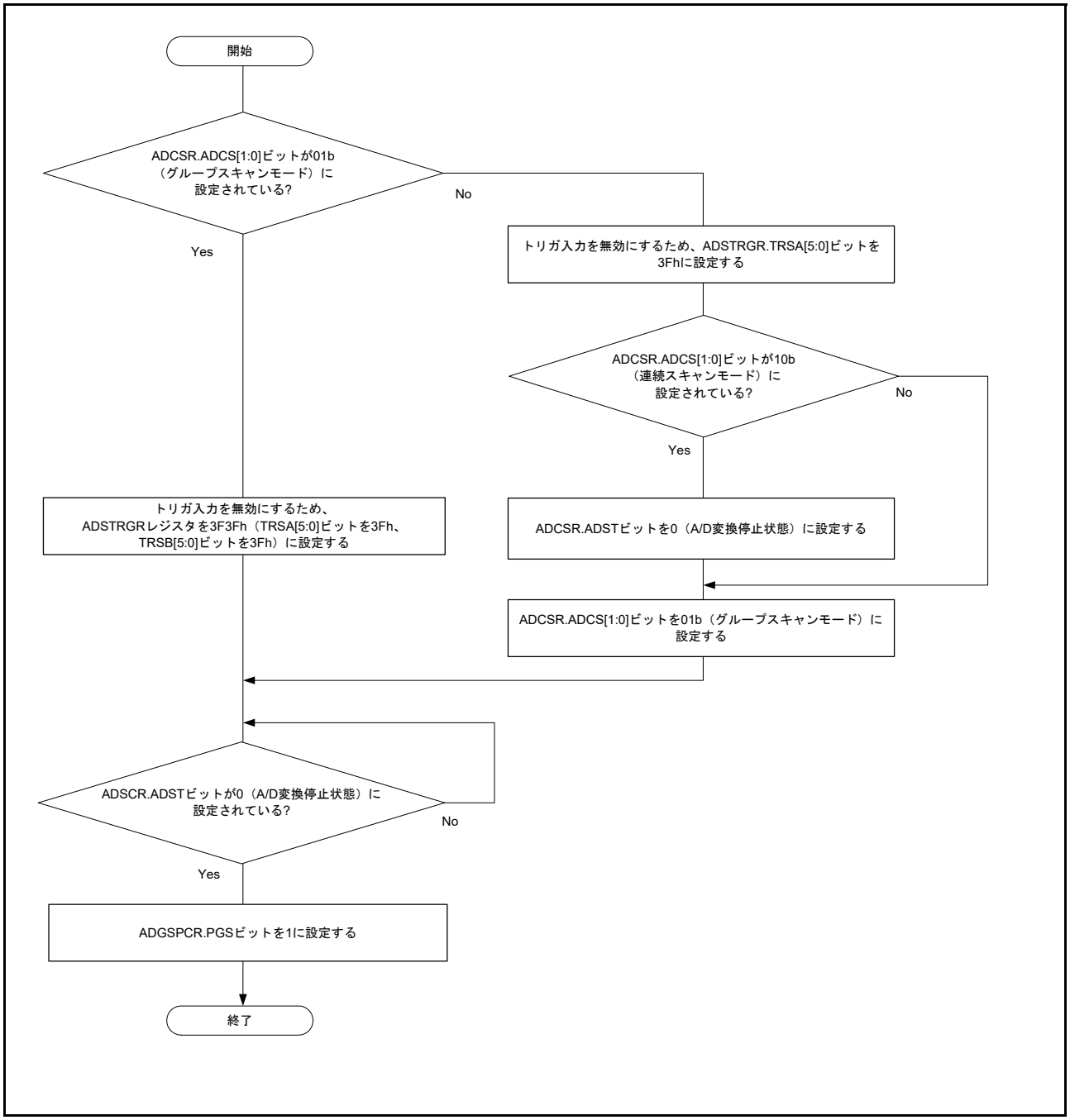


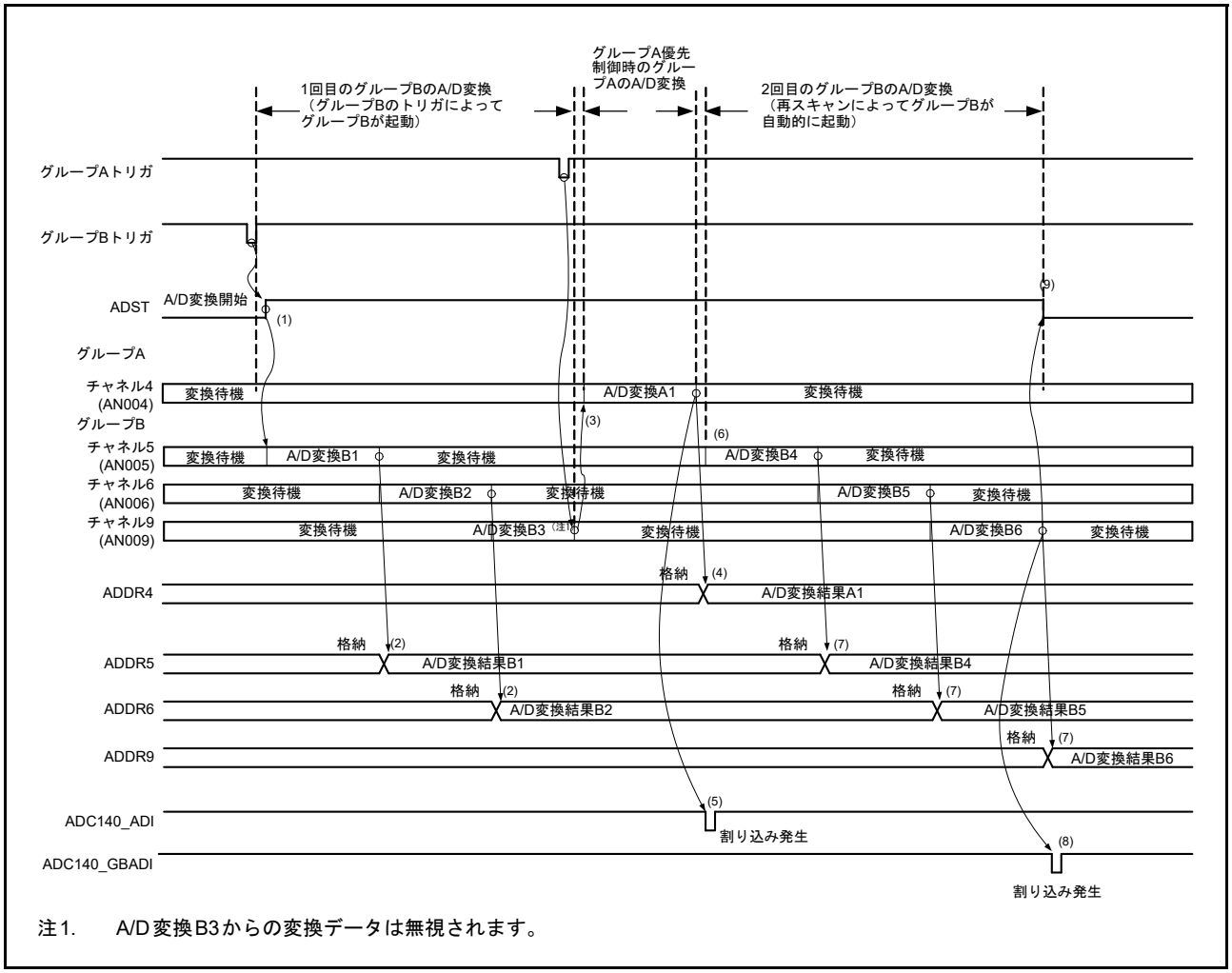
図 34.15 ADGSPCR.PGS ビット設定時のフロー

表 34.9 ADGSPCR.GBRSCN ビットの設定によるA/D変換動作制御

A/D変換動作	トリガ入力	ADGSPCR.GBRSCN = 0	ADGSPCR.GBRSCN = 1
グループAのA/D変換動作中	グループAトリガ入力	トリガ入力無効	トリガ入力無効
	グループBトリガ入力	トリガ入力無効	グループAのA/D変換動作終了後、グループBのA/D変換動作を行う
グループBのA/D変換動作中	グループAトリガ入力	グループBのA/D変換動作を中断し、グループAのA/D変換動作開始	• グループBのA/D変換動作を中断し、グループAのA/D変換動作を開始 • グループAのA/D変換動作終了後、グループBのA/D変換動作開始
	グループBトリガ入力	トリガ入力無効	トリガ入力無効

以下にグループ A にチャネル 4 を、グループ B にチャネル 5, 6, 9 を選択したグループ A 優先制御グループスキャンモード動作の動作例（ADGSPCR.GBRSCN = 1、ADGSPCR.GBRP = 0 時）を示します。

1. グループ B のトリガ入力によって、ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になると、ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、チャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
2. グループ B の各チャネルの A/D 変換が終了すると、結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
3. グループ B の A/D 変換動作中に、グループ A のトリガ入力があると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままで、グループ B の A/D 変換を中断し、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。グループ B の変換中に割り込みが発生したときに A/D 変換が完了していない場合は、A/D 変換結果は A/D データレジスタ（ADDRy）に格納されません。
4. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は対応する A/D データレジスタ（ADDRy）に格納されます。
5. レジスタ設定なしで ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
6. ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、グループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を再度開始しますが、このとき ADCSR.ADST ビットは 1 のままです。
7. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は対応する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
8. グループ B のすべてのチャネルの A/D 変換終了時、ADCSR.GBADIE ビットが 1（グループ B のスキャン終了時 ADC140_GBADI 割り込み許可）に設定されていると、ADC140_GBADI 割り込み要求を発生します。
9. A/D 変換が完了すると ADCSR.ADST ビットは自動的にクリアされ ADC14 は待機状態に遷移します。

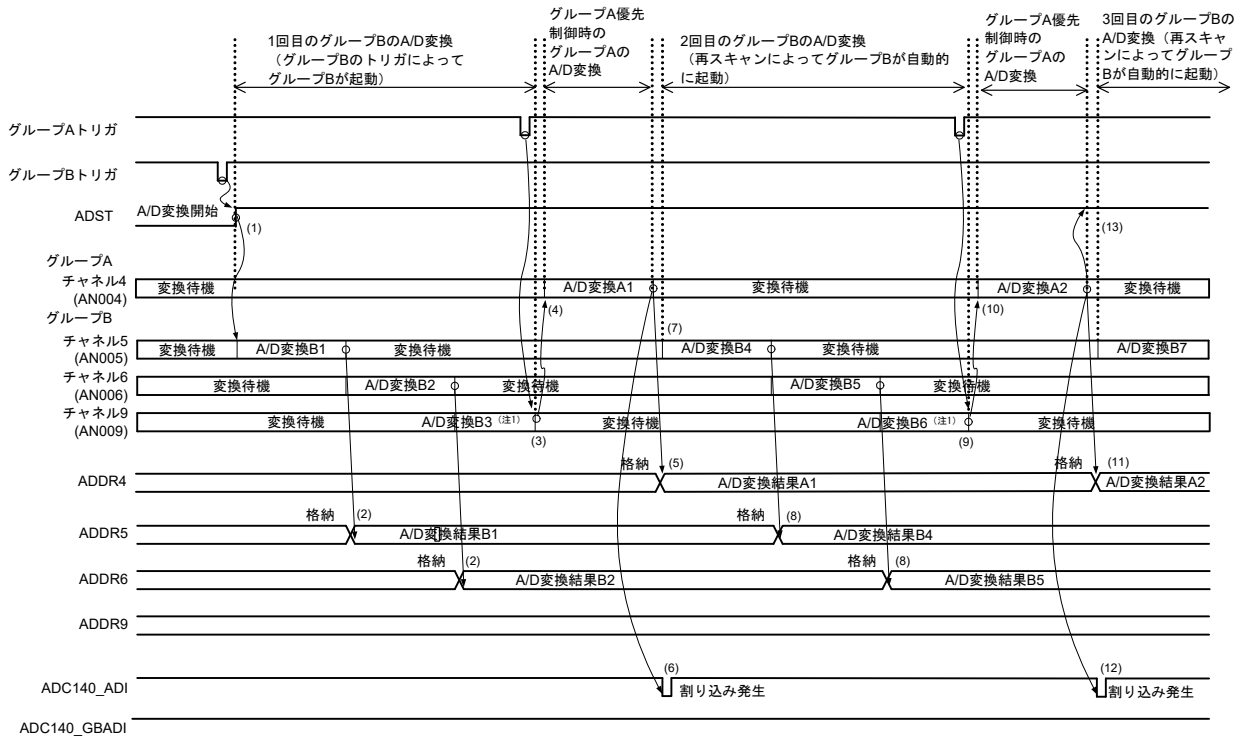


注1.　A/D変換B3からの変換データは無視されます。

図 34.16　　グループ A 優先制御の動作例（1）（ADGSPCR.GBRSCN = 1, ADGSPCR.GBRP = 0 の場合）

次に、グループ B 再スキャン動作時に、再度グループ A のトリガが入力された場合の例として、グループ A 優先動作時（ADGSPCR.GBRSCN = 1、ADGSPCR.GBRP = 0 時）に、グループ A にチャネル 4 を、グループ B にチャネル 5, 6, 9 を選択した場合の動作例を示します。

1. グループ B のトリガ入力によって、ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になると、ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、グループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
2. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ（ADDRy）に格納されます。
3. グループ B の A/D 変換動作中に、グループ A のトリガ入力があると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままで、グループ B の A/D 変換を中断します。グループ B の変換中に割り込みが発生したときに A/D 変換が完了していない場合は、A/D 変換結果は A/D データレジスタ（ADDRy）に格納されません。
4. ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択した、グループ A のチャネル ANn の n が小さい番号順に、グループ A の A/D 変換を開始します。
5. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
6. レジスタ設定なしで ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
7. ADGSPCR.GBRSCN ビットが 1 の場合は、グループ A の A/D 変換が終了すると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままでグループ B が再びスキャンされます。ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、グループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に、A/D 変換を再度開始します。
8. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は対応する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
9. グループ B の A/D 変換の再スキャン中に、グループ A のトリガ入力があると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままで、グループ B の A/D 変換を中断します。
10. ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択した、グループ A のチャネル ANn の n が小さい番号順に、グループ A の A/D 変換を開始します。
11. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
12. レジスタ設定なしで ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
13. グループ A の A/D 変換が終了時 ADGSPCR.GBRSCN ビットが 1 の場合は、ADCSR.ADST ビットは 1 のままでグループ B が再びスキャンされます。ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、グループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に、A/D 変換を再度開始します。
14. 再スキャン起動によるグループ B の A/D 変換中に、グループ A のトリガ入力があると、(9) ～ (13) を繰り返し実行します。グループ A のトリガ入力が無い場合は、グループ B の A/D 変換が終了すると ADCSR.ADST ビットが自動的にクリアされ、ADC14 は待機状態になります。



注1.　A/D変換B3とB6の変換データは無視されます。

図 34.17　グループ A 優先制御の動作例（2）（ADGSPCR.GBRSCN = 1, ADGSPCR.GBRP = 0 の場合）

以下では、グループ A の変換動作中に、グループ B のトリガが入力された場合の再スキャン動作の例を示します。本例では、グループ A 優先制御動作の動作時（ADGSPCR.GBRSCN = 1、ADGSPCR.GBRP = 0 時）に、グループ A にチャネル 5, 6, 9 が、グループ B にチャネル 4 が選択されています。

1. グループ A のトリガ入力によって、ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になると、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択した、チャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
2. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
3. グループ A の A/D 変換動作中に、グループ B のトリガ入力があると、グループ A の A/D 変換終了後に、グループ B の A/D 変換を実行できる状態となります。ただし、グループ A のトリガが連続で入力された場合、グループ B のスキャン動作は、グループ A に取り消され、実施されません。
4. グループ A の A/D 変換終了後、レジスタ設定なしで ADC140_ADI 割り込み要求を発生します。
5. グループ A の変換が終了すると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままでグループ B が再びスキャンされます。その後、ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、グループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に、A/D 変換を開始します。
6. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
7. グループ B の再スキャン終了後、ADCSR.GBADIE ビットが 1（スキャン終了による ADC140_GBADI 割り込み許可）になっていると、ADC140_GBADI 割り込み要求を発生します。
8. A/D 変換が完了すると ADCSR.ADST ビットは自動的にクリアされ ADC14 は待機状態に遷移します。

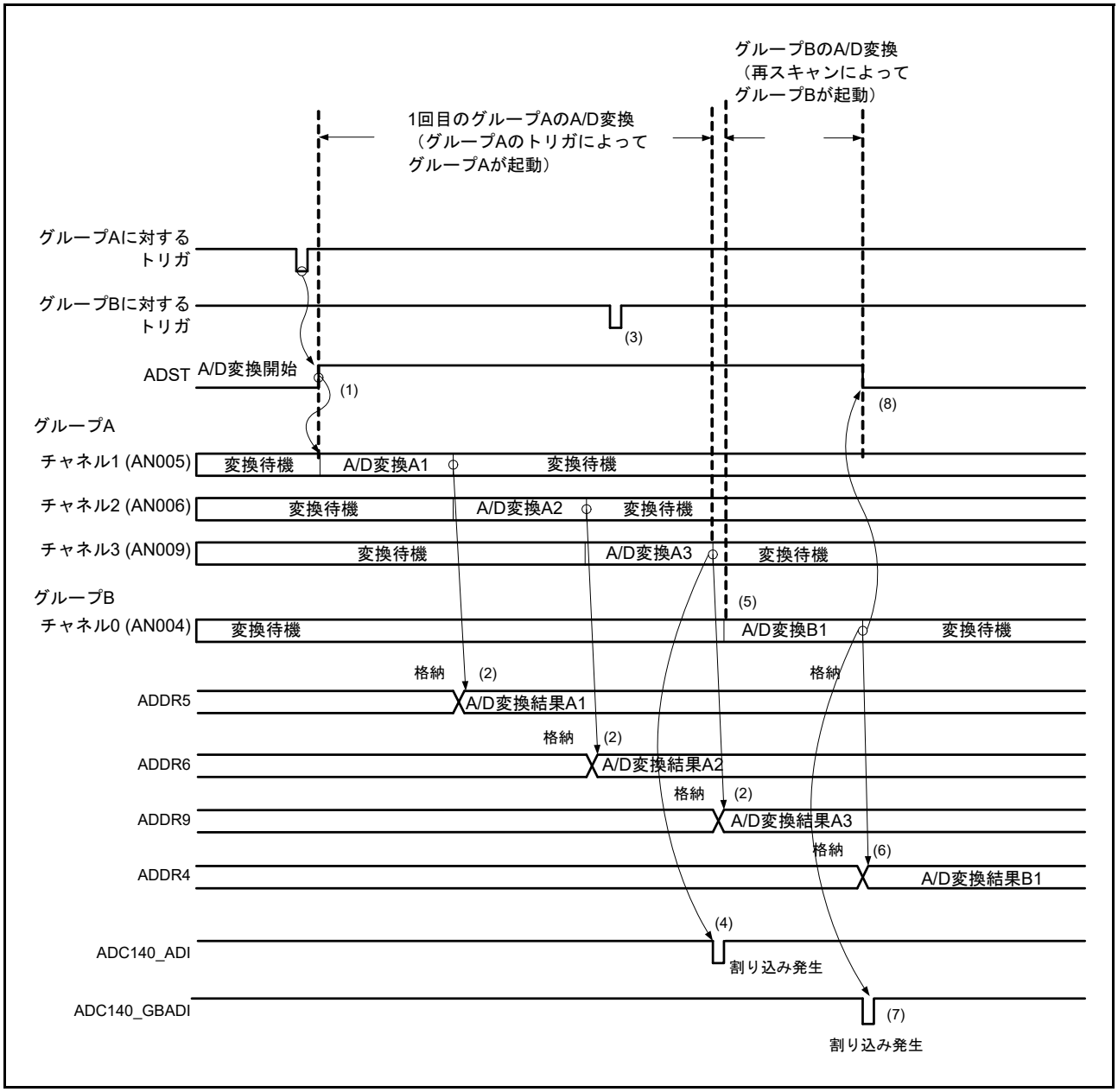
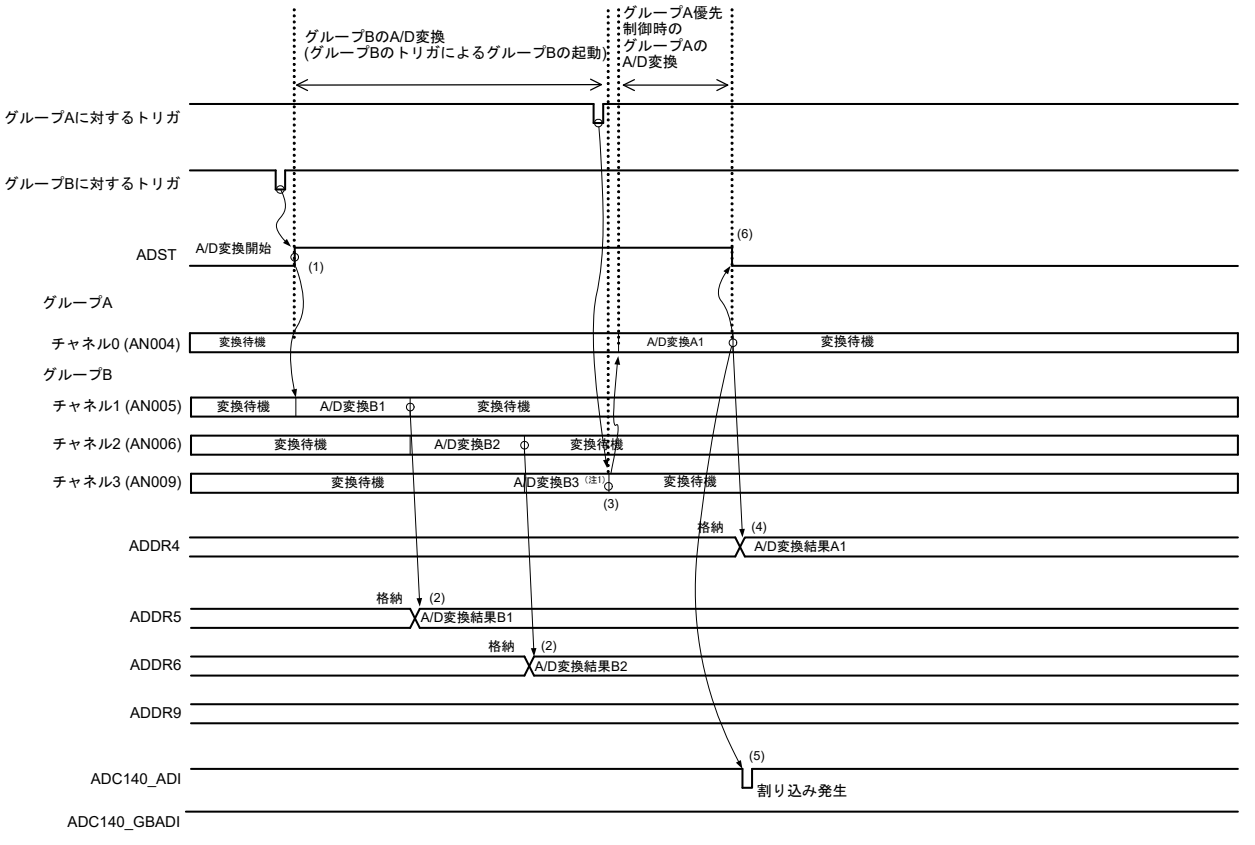


図 34.18　グループ A 優先制御の動作例（3）（ADGSPCR.GBRSCN = 1, ADGSPCR.GBRP = 0 の場合）

以下にグループ A にチャネル 4 を、グループ B にチャネル 5, 6, 9 を選択したときのグループ A 優先制御の動作例（ADGSPCR.GBRSCN = 0、ADGSPCR.GBRP = 0）を示します。

1. グループ B のトリガ入力によって ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になると、ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
2. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
3. グループ B の A/D 変換動作中に、グループ A のトリガ入力があると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままで、グループ B の A/D 変換を中断します。その後、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
4. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
5. レジスタ設定なしで ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
6. A/D 変換が完了すると ADCSR.ADST ビットは自動的にクリアされ ADC14 は待機状態に遷移します。

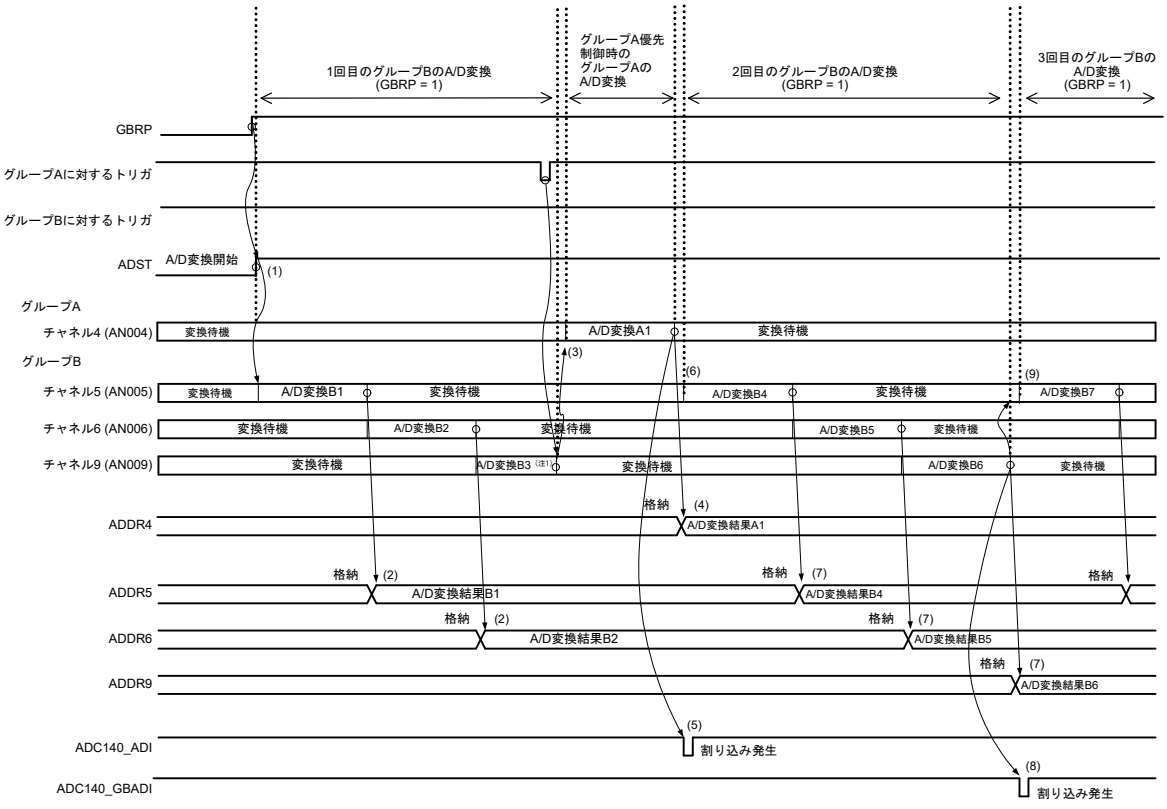


注1.　A/D変換B3の変換データは無視されます。

図 34.19　グループ A 優先制御の動作例（4）（ADGSPCR.GBRSCN = 0, ADGSPCR.GBRP = 0 の場合）

以下にグループ A にチャネル 4 を、グループ B にチャネル 5, 6, 9 を選択したときのグループ A 優先制御の動作例（ADGSPCR.GBRP = 1）を示します。

1. ADGSPCR.GBRP = 1 にすると、ADCSR.ADST ビットが 1（A/D 変換開始）になり、ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
2. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
3. グループ B の A/D 変換動作中に、グループ A のトリガ入力があると、ADCSR.ADST ビットは 1 のままで、グループ B の A/D 変換を中断します。その後、ADANSA0、ADANSA1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。
4. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
5. レジスタ設定なしで ADC140_ADI 割り込み要求が発生します。
6. ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択した、グループ B のチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を再度開始し、ADCSR.ADST ビットは 1 のままです。
7. 1 チャネルの A/D 変換が終了すると、A/D 変換結果は関連する A/D データレジスタ y（ADDRy）に格納されます。
8. ADCSR.GBADIE ビットが 1 になっていると、ADC140_GBADI 割り込み要求を発生します。
9. ADANSB0、ADANSB1 レジスタで選択したチャネル ANn の n が小さい番号順に A/D 変換を開始します。ADGSPCR.GBRP ビットが 1 になっている間は、(6) ～ (9) の動作を繰り返します。
ADGSPCR.GBRP ビットが 1 の状態の間は、ADCSR.ADST ビットを 0 にしないでください。
ADGSPCR.GBRP = 1 の場合に A/D 変換を強制終了するには、図 34.31 に示す ADCSR.ADST ビットによるソフトウェアクリア実行の設定フローの手順に従ってください。



注1.　A/D変換B3の変換データは無視されます。

図 34.20　グループ A 優先制御の動作例（5）（ADGSPCR.GBRP = 1 の場合）

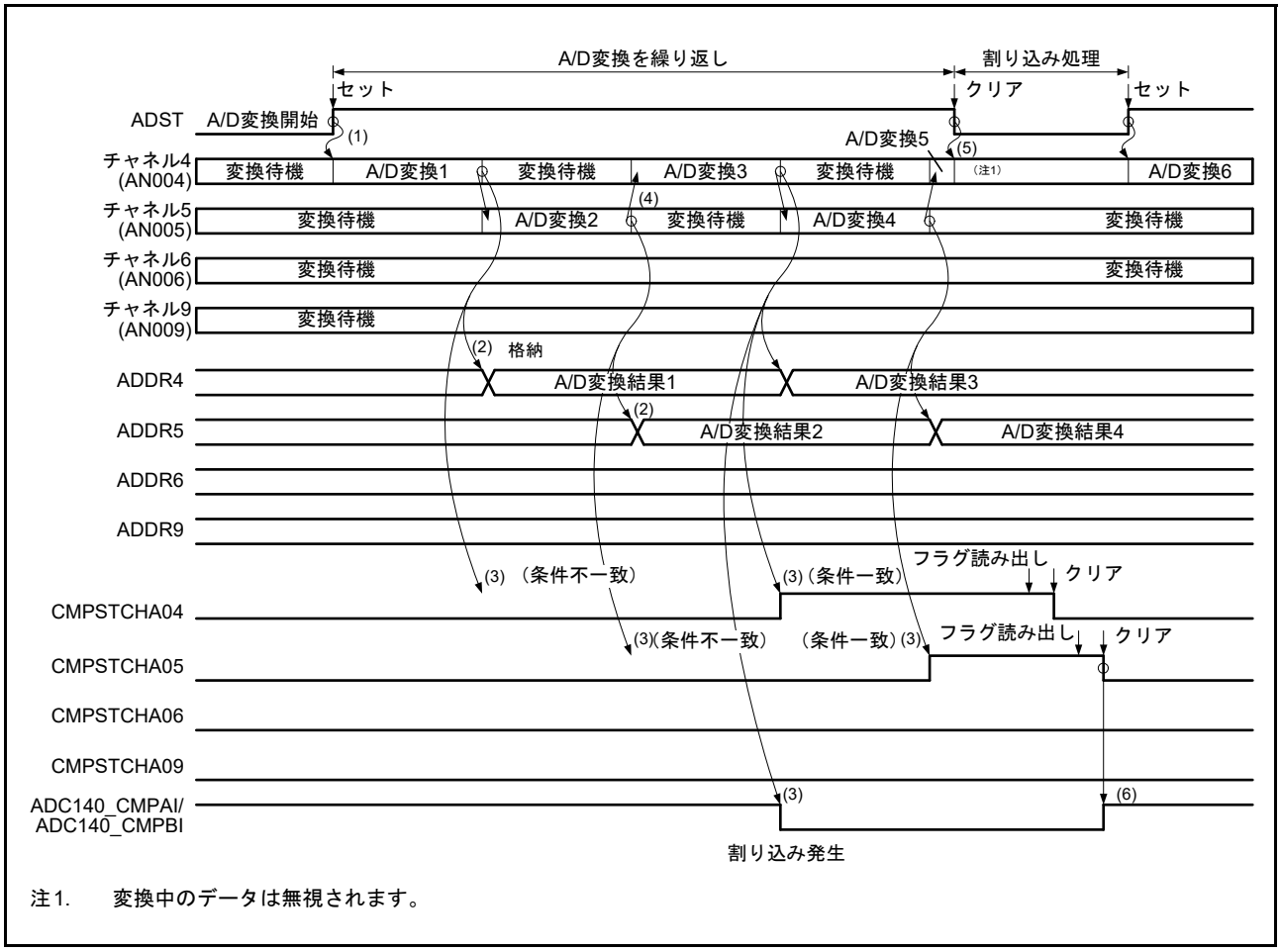
34.3.5 コンペア機能（ウィンドウA、ウィンドウB）

34.3.5.1 コンペア機能

コンペア機能は、基準値とA/D変換結果を比較する機能です。基準値はウィンドウAおよびウィンドウBそれぞれに設定することが可能です。コンペア機能の使用中は、自己診断機能およびダブルトリガモードは使用できません。ウィンドウAとウィンドウBの主な違いとしては、割り込み出力信号の違いと、ウィンドウBは1つのチャネルしか選択できないという制限があります。

連続スキャンモードとコンペア機能を組み合わせた動作シーケンスを以下に示します。

1. ソフトウェア、同期トリガ（ELC）、または非同期トリガでADCSR.ADSTビットを1（A/D変換開始）にした場合、選択したチャネルに対してA/D変換を開始します。温度センサおよび内部基準電圧を同時に選択しないでください。また、内部基準電圧を高電位基準電圧に選択した場合、温度センサまたは内部基準電圧のA/D変換は実行できません。
2. A/D変換が終了すると、A/D変換結果は対応するA/Dデータレジスタ（ADDRy、ADTSDR、またはADOCDR）に格納されます。ADCMPCR.CMPAEが1のとき、ウィンドウAに対してADCMPANSRyまたはADCMPANSERレジスタのビットを設定すると、A/D変換結果を設定したADCMPDR0/1レジスタ値と比較します。ADCMPCR.CMPBEが1のとき、ウィンドウBに対してADCMPBNSRレジスタのビットを設定すると、A/D変換結果を、ADWINULB/ADWINLLBレジスタの設定値と比較します。
3. 比較した結果、ウィンドウAがADCMPLR0/1またはADCMPLERに設定された条件と一致すると、コンペアウィンドウAフラグ（ADCMPSR0.CMPSTCHAn、ADCMPSR1.CMPSTCHAn、ADCMPSER.CMPSTTSAまたはADCMPSER.CMPSTOCA）ビットが1になります。ADCMPCR.CMPAIEビットが1であれば、ADC140_CMPAI割り込み要求が発生します。同様に、ウィンドウBがADCMPBNSR.CMPLBに設定された条件と一致すると、コンペアウィンドウBフラグ（ADCMPBSR.CMPSTB）のビットが1になります。ADCMPCR.CMPBIEビットが1であれば、ADC140_CMPBI割り込み要求が発生します。
4. 選択したすべてのA/D変換および比較が終了すると、スキャンが再開します。
5. ADC140_CMPAIおよびADC140_CMPBI割り込みを受け付けると、ADCSR.ADSTビットは0（A/D変換停止）になり、コンペアフラグが1であるチャネルの処理を行います。
6. ウィンドウAのすべてのコンペアフラグをクリアすると、ADC140_CMPAI割り込み要求は取り消されます。同様に、ウィンドウBのすべてのコンペアフラグをクリアすると、ADC140_CMPBI割り込み要求はリセットされます。再度比較を実行するには、A/D変換を再開してください。



注1.　変換中のデータは無視されます。

図 34.21　コンペア機能の動作例（AN004 ～ AN006, AN009 を比較）

34.3.5.2　コンペア機能のイベント出力

コンペア機能のイベント出力は、上側基準電圧値と下側基準電圧値をそれぞれウィンドウ A とウィンドウ B に設定し、選択したチャネルの A/D 変換値を上側／下側基準電圧値と比較します。その後、イベント条件（A or B、A and B、A XOR B）とウィンドウ A およびウィンドウ B の比較結果に従って、ADC140_WCMPM/ADC140_WCMPUM イベントを出力します。

ウィンドウ A で複数のチャネルを選択し、チャネルのうち 1 つでも比較条件と一致した場合、ウィンドウ A の比較結果は一致となります。この機能を使用する場合、A/D 変換はシングルスキャンモードで行ってください。

ウィンドウ A の場合、AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020 のチャネルのどれか、内部基準電圧、温度センサ出力を選択できます。ただし、内部基準電圧または温度センサ出力を選択する場合、同時に他のチャネルを選択することはできません。また、ADC14 の高電位基準電圧に内部基準電圧を選択した場合、内部基準電圧および温度センサ出力を A/D 変換することはできません。

ウィンドウ B の場合、AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020 のチャネルのどれか、内部基準電圧、温度センサ出力を選択できます。ただし、内部基準電圧または温度センサ出力を選択する場合、同時に他のチャネルを選択することはできません。また、高電位基準電圧に内部基準電圧を選択した場合、内部基準電圧および温度センサ出力を A/D 変換することはできません。

コンペア機能のイベント出力使用時の設定手順および設定例を以下に示します。

1. ADCSR.ADCS[1:0] ビットが 00b（シングルスキャンモード）であることを確認してください。
2. ADCMPANSR0/1 および ADCMPANSER でウィンドウ A のチャネルを選択します。ADCMPLR0/1 および ADCMPLER レジスタにウィンドウ比較条件を設定します。ADCMPDR0/1 レジスタに上側および下側基準値を設定します。
3. ADCMPBNSR レジスタでウィンドウ B のチャネルおよび比較条件を設定し、ADWINULB/ADWINLLB レジスタで上側および下側基準値を設定します。
4. ウィンドウ A/B の複合条件、ウィンドウ A/B 動作許可、および割り込み出力許可を ADCMPCR に設定してください。

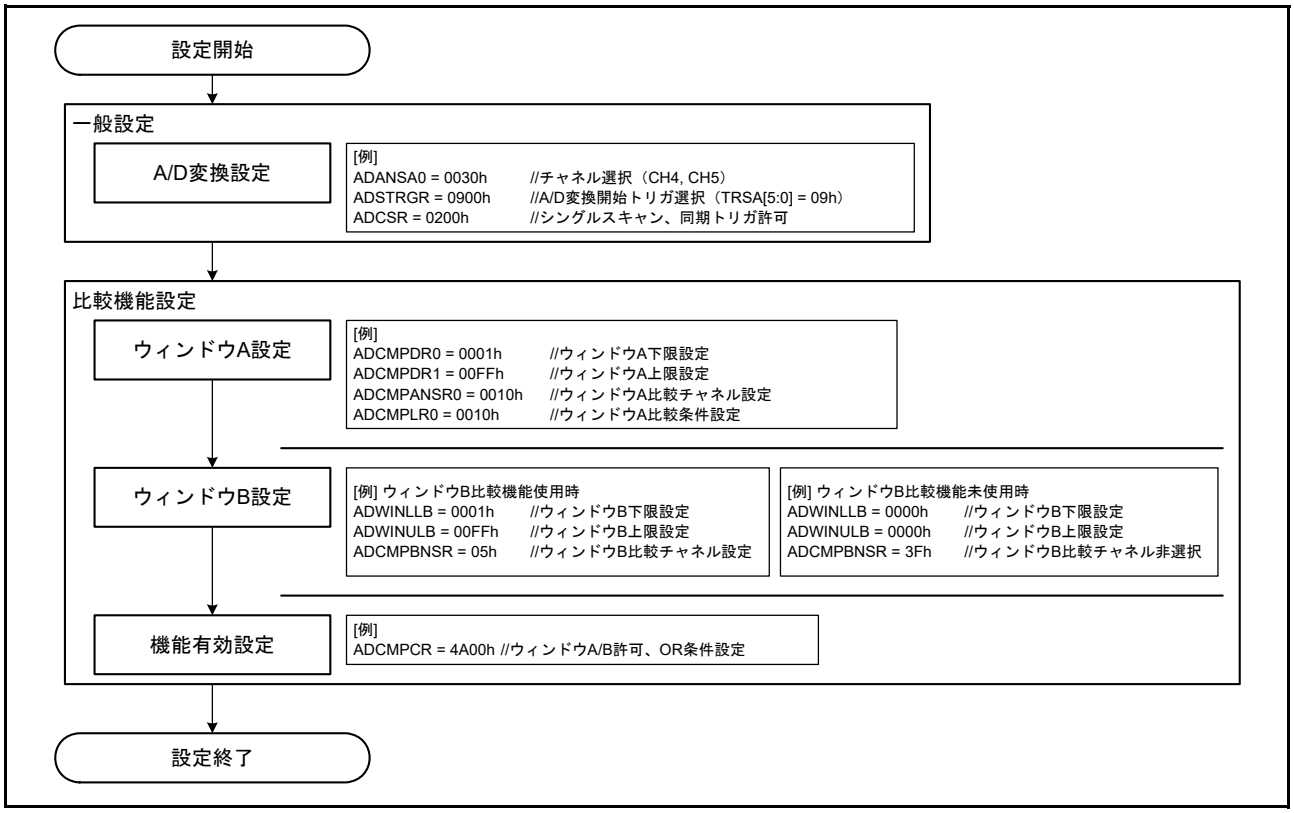


図 34.22　コンペア機能のイベント出力使用時の設定例

コンペア機能でウィンドウAのみを使用するときのイベント出力の使用方法について、以下に注意点を示します。

- ウィンドウAおよびBをどちらも有効にしてください（ADCMPCR.CMPAE = 1、ADCMPCR.CMPBE = 1）
- ウィンドウAおよびBの複合条件を「OR条件」にしてください（ADCMPCR.CMPAB[1:0] = 00b）
- ウィンドウBの比較対象チャネルを「非選択」にしてください（ADCMPBNSR.CMPCHB[5:0] = 111111b）
- ウィンドウBの比較条件を、常に不一致を表す「0 ＜結果＜ 0」に設定してください（ADCMPCR.WCMPE = 1、ADWINLLB[15:0] = ADWINULB[15:0] = 0000h、ADCMPBNSR.CMPLB = 1）

コンペア機能のイベント出力動作例を図 34.23 に示します。

シングルスキャンが一度終了するタイミングで、スキャン終了イベント（ADC140_ADI）を出力します。その後、ADCMPCR.CMPAB[1:0]の設定に従い、1PCLKB遅れて一致または不一致イベント（ADC140_WCMPM/ADC140_WCMPUM）を出力します。

注．　一致イベントと不一致イベントは排他的であるため、2つのイベントを同時に出力することはありません。

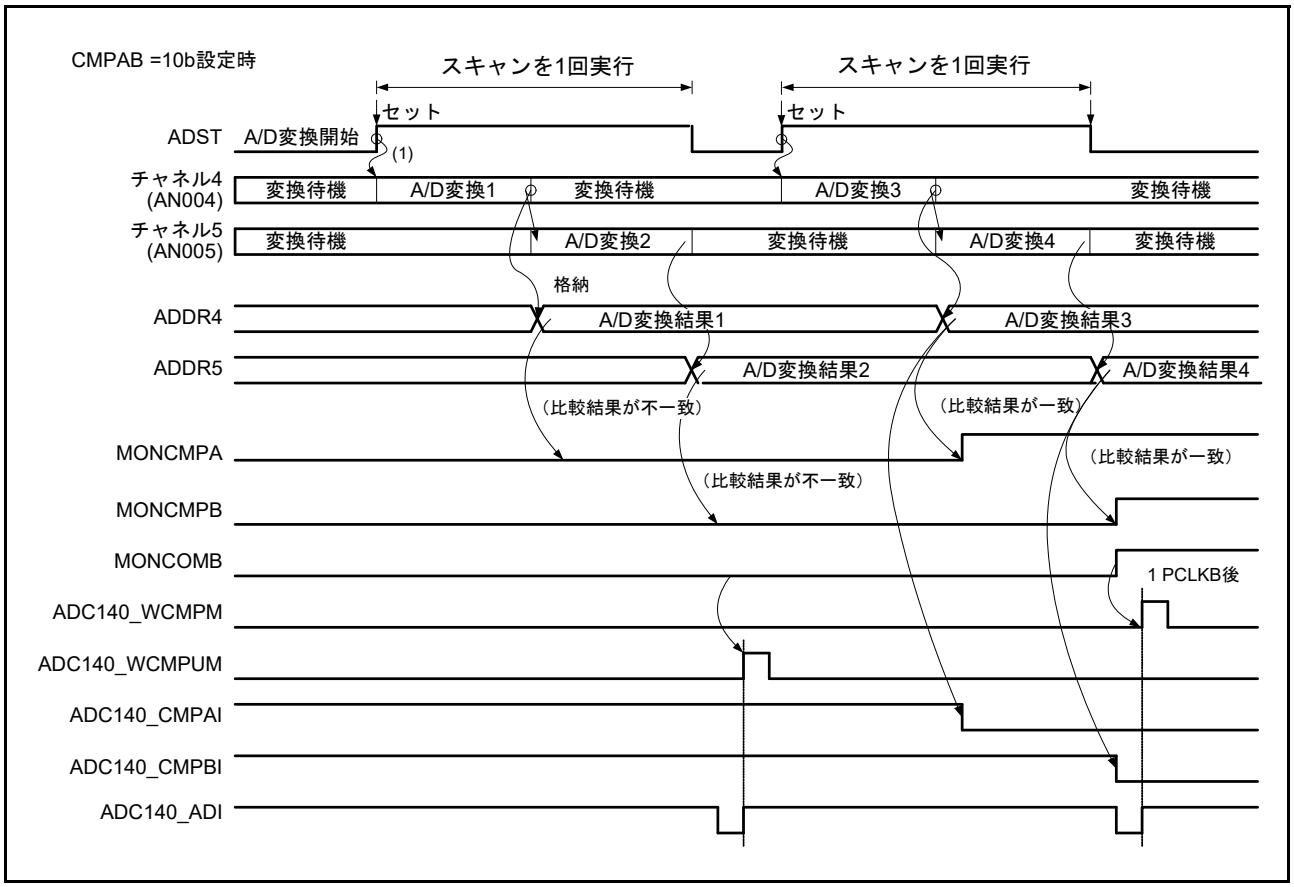


図 34.23　コンペア機能のイベント出力動作例（AN004 ～ AN005 を比較）

注．　コンペア機能のイベント出力は、ADCMPCR.CMPAB[1:0]の設定に従い、ウィンドウAおよびウィンドウBの比較結果の一致／不一致を出力します。

注．　ウィンドウAの比較結果は、ウィンドウAの比較対象チャネルの比較結果の論理和です。ウィンドウAおよびBの比較結果は、A/D変換ごとに更新され、シングルスキャンが終了しても保持されます。比較結果をクリアするには、ADCMPCR.CMPAEおよびADCMPCR.CMPBEを0にしてください。

34.3.5.3　コンペア機能の制限事項

コンペア機能には以下の制限事項が適用されます。

1. コンペア機能は、自己診断機能またはダブルトリガモードと一緒には使用できません。ADRD、ADDBLDR、ADDBLDRA、ADDBLDRB ではコンペア機能は使用できません。
2. 一致／不一致イベント出力を使用する場合はシングルスキャンモードにしてください。
3. ウィンドウ A に温度センサまたは内部基準電圧を選択する場合、ウィンドウ B 動作は無効。
4. ウィンドウ B に温度センサまたは内部基準電圧を選択する場合、ウィンドウ A 動作は無効。
5. ウィンドウ A およびウィンドウ B に同じチャネルを設定することはできません。
6. 基準電圧値を設定する際は、高電位基準電圧値が低電位基準電圧値以上となるように設定してください。

34.3.6　アナログ入力のサンプリング時間とスキャン変換時間

スキャン変換は、ソフトウェア起動、同期トリガ（ELC）による起動および非同期トリガ（ADTRG0）による起動が選択できます。スキャン変換開始遅延時間（t_D）の後に、断線検出アシスト処理、自己診断変換処理をすべて行い、この後に A/D 変換処理が開始されます。

図 34.24 に、ソフトウェアトリガまたは同期トリガ（ELC）起動によりスキャン変換を行う場合のタイミングを示します。また、図 34.25 に、非同期トリガ（ADTRG0）起動によるスキャン変換を行う場合のタイミングを示します。スキャン変換時間（t_{SCAN}）はスキャン変換開始遅延時間（t_D）、断線検出アシスト処理時間（t_{DIS}）（注 1）、自己診断変換時間（t_{DIAG} および t_{DSD}）（注 2）、A/D 変換処理時間（t_{CONV}）、スキャン変換終了遅延時間（t_{ED}）を含めた時間となります。

A/D 変換処理時間（t_{CONV}）は、入力サンプリング時間（t_{SPL}）、逐次変換時間（t_{SAM}）を合わせた時間となります。サンプリング時間（t_{SPL}）は、ADC14 内のサンプル&ホールド回路に電荷を充電するための時間です。アナログ入力の信号源インピーダンスが高くサンプリング時間が不足する場合や、A/D 変換クロック（ADCLK）が低速の場合には、ADSSTR レジスタでサンプリング時間を調整することが可能です。

逐次変換時間（t_{SAM}）は、14 ビット精度および高速モード選択時で 37.5 ステート（ADCLK）、14 ビット精度および低電流モード選択時で 46.5 ステート（ADCLK）、12 ビット精度および高速モード選択時で 31.5 ステート（ADCLK）、12 ビット精度および低電流モード選択時で 40.5 ステート（ADCLK）となります。スキャン変換時間を表 34.10 に示します。

選択チャネル数が n のシングルスキャンのスキャン変換時間（t_{SCAN}）は、次のように表されます。

$t_{SCAN} = t_D + (t_{DIS} \times n) + t_{DIAG} + t_{DSD} + (t_{CONV}$（注 3）$\times n) + t_{ED}$

連続スキャンの 1 サイクル目は、シングルスキャンの t_{SCAN} から t_{ED} を省いた時間です。連続スキャンの 2 サイクル目以降は、$(t_{DIS} \times n) + t_{DIAG} + t_{DSD} +$（$t_{CONV}$（注 3）$\times n$）固定となります。

注 1.　断線検出アシストを設定しない場合は、$t_{DIS} = 0$ となります。
温度センサまたは内部基準電圧を A/D 変換する場合のみ、15ADCLK ステートの自動ディスチャージ期間が入ります。

注 2.　自己診断機能を使用しない場合は、$t_{DIAG} = 0$、$t_{DSD} = 0$ となります。

注 3.　選択したすべてのチャネルの入力サンプリング時間（tSPL）が同じの場合、この要素は tCONV × n になります。チャネルごとに異なるサンプリング時間の場合、この要素は選択したチャネルごとに設定した tSPL と tSAM の和となります。

表 34.10　スキャン変換時間（ADCLKとPCLKBのサイクル数）

項目			シンボル		種別／条件			単位
					同期トリガ（注6）	非同期トリガ	ソフトウェアトリガ	
スキャン開始処理時間（注1）（注2）	グループA優先制御動作によるグループAのA/D変換	グループB中断あり（グループAのA/D変換要因によってグループBを停止させた後、グループAを起動）	t_D		3PCLKB + 6ADCLK、5PCLKB + 3ADCLK（注5）	—	—	サイクル
		グループB中断なし（グループAのA/D変換要因によって起動）			2PCLKB + 4ADCLK	—	—	
	自己診断有効時のA/D変換	自己診断変換開始時			2PCLKB + 6ADCLK	4PCLKB + 6ADCLK	6ADCLK	
	上記以外				2PCLKB + 4ADCLK	2PCLKB + 4ADCLK	4ADCLK	
断線検出アシスト処理時間			t_{DIS}		ADNDIS[3:0]設定値（初期値00h）× ADCLK（注3）			
自己診断変換処理時間（注1）	サンプリング時間		t_{DIAG}	t_{SPL}	ADSSTR00設定値（初期値 = 0Dh）× ADCLK（注4）+ 0.5ADCLK（注4）			
	逐次変換時間	12ビット変換精度		t_{SAM}	高速モードで31.5ADCLK 低電流モードで40.5ADCLK			
		14ビット変換精度			高速モードで37.5ADCLK 低電流モードで46.5ADCLK			
	自己診断変換終了からアナログチャネルサンプリング開始までの待機時間			t_{DED}	2ADCLK			
	連続スキャンモードでの最後のチャネル変換終了から自己診断サンプリング開始までの待機時間			t_{DSD}	2ADCLK			
A/D変換処理時間（注1）	サンプリング時間		t_{CONV}	t_{SPL}	ADSSTRn（n = 0～15, L, T, O）設定値（初期値 = 0Dh）× ADCLK + 0.5ADCLK			
	逐次変換時間	12ビット変換精度		t_{SAM}	高速モードで31.5ADCLK 低電流モードで40.5ADCLK			
		14ビット変換			高速モードで37.5ADCLK 低電流モードで46.5ADCLK			
スキャン終了処理時間（注1）			t_{ED}		1PCLKB + 3ADCLK、 2PCLKB + 3ADCLK（注5）			

注 1.　t_D、t_{SPLSH}、t_{DIAG}、t_{CONV}、t_{ED} の各タイミングについては、図 34.24、図 34.25 を参照してください。
注 2.　ソフトウェア書き込み、またはトリガ入力から A/D 変換開始までの最大時間です。
注 3.　温度センサ出力または内部基準電圧を A/D 変換する場合、値は 0Fh（15ADCLK）固定です。
注 4.　必要なサンプリング時間（ns）は、電圧条件によって指定されます。サンプリング時間は電気的特性を満たすように設定してください。
注 5.　ADCLK が PCLKB（PCLKB/ADCLK の分周率 = 1：2 または 1：4）より速い場合。
注 6.　タイマ出力からトリガ入力までの経路で使われる時間は含みません。

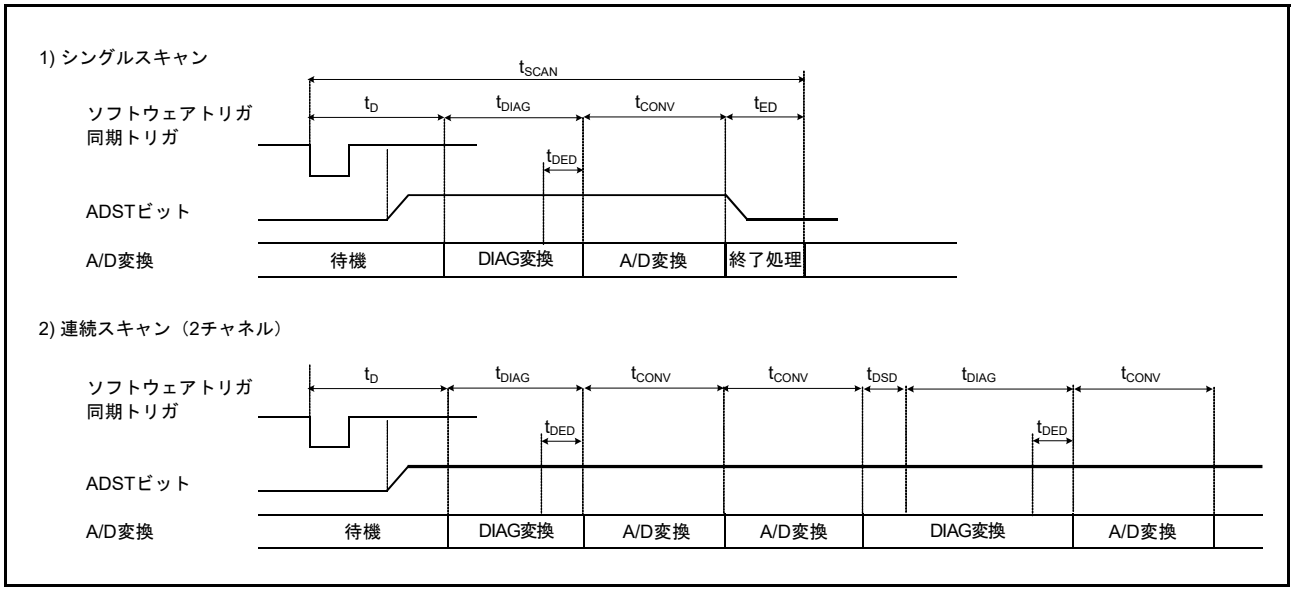


図 34.24　スキャン変換のタイミング（ソフトウェア起動、同期トリガ入力（ELC）起動の場合）

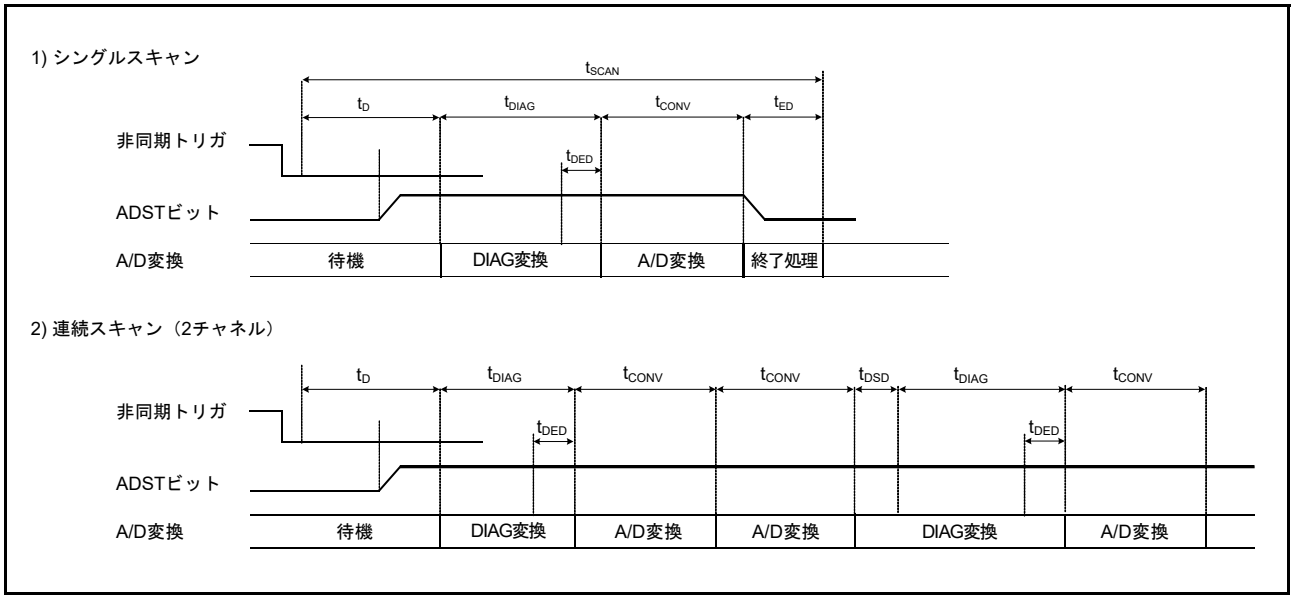


図 34.25　スキャン変換のタイミング（非同期トリガ入力（ADTRG0）起動の場合）

34.3.7 A/D データレジスタの自動クリア機能の使用例

ADCER.ACE ビットを 1 にすることにより、CPU、DTC および DMAC によって A/D データレジスタ（ADDRy、ADRD、ADDBLDR、ADDBLDRA、ADDBLDRB、ADTSDR、ADOCDR）を読み出す際、自動的に ADDRy、ADRD、ADDBLDR、ADDBLDRA、ADDBLDRB、ADTSDR、ADOCDR レジスタを 0000h にクリアできます。この機能を使うことにより、ADDRy、ADRD、ADDBLDR、ADDBLDRA、ADDBLDRB、ADTSDR、ADOCDR レジスタの未更新故障を検出することが可能です。以下に、ADDRy レジスタの自動クリア機能が無効時と有効時の例をそれぞれ示します。

- ADCER.ACE ビットが 0（自動クリア禁止）の場合、A/D 変換結果（0222h）が何らかの原因で ADDRy レジスタに書き込みされなかったとき、ADDRy レジスタの値は古いデータ（0111h）を保持します。さらに A/D スキャン終了割り込みを利用して、この ADDRy レジスタの値を汎用レジスタに読み出した場合、古いデータ（0111h）を汎用レジスタに保持できます。ただし、未更新のチェックを行う場合、古いデータを SRAM または汎用レジスタに逐一保持しながらチェックを行う必要があります
- ADCER.ACE ビットが 1（自動クリア許可）の場合には、ADDRy = 0111h が CPU、DTC または DMAC によって読み出された場合、ADDRy レジスタは自動的に 0000h にクリアされます。A/D 変換結果（0222h）が ADDRy レジスタに何らかの原因で転送できなかったとき、クリアされたデータ（0000h）が ADDRy レジスタ値として残ります。ここで A/D スキャン終了割り込みを利用して、この ADDRy レジスタの値を汎用レジスタに読み出した場合は、0000h が汎用レジスタに保持されます。読み出されたデータ値が 0000h であることをチェックするだけで、ADDRy レジスタの未更新故障があったことを判断できます

34.3.8 A/D 変換値加算／平均モード

A/D 変換値加算モードは、同じチャネルを 1、2、3、4、または 16 (注 1) 回連続で A/D 変換し、その変換値の合計をデータレジスタに保持します。A/D 変換値平均モードは、同じチャネルを 2 または 4 回連続で A/D 変換し、その変換値の平均をデータレジスタに保持します。

この結果の平均値を使用することで、ノイズ成分によっては A/D 変換精度が向上します。ただし、A/D 変換精度が必ず向上することを保証する機能ではありません。

A/D 変換値加算／平均モードは、チャネル選択アナログ入力 A/D 変換、温度センサ出力 A/D 変換、内部基準電圧 A/D 変換に使用できます。

注 1. 12 ビット精度を選択している場合、設定できる加算回数は 16 回のみです。

34.3.9　断線検出アシスト機能

ADC14は、A/D変換開始前に、サンプリング容量の電荷を所定の状態（VREFH0またはVREFL0）に固定する断線検出アシスト機能を内蔵しています。この機能により、アナログ入力に接続した配線の断線検出が可能になります。

図34.26に断線検出アシスト機能を使用した場合のA/D変換動作図を示します。図34.27にプリチャージを選択した場合の断線検出例を示します。図34.28にディスチャージを選択した場合の断線検出例を示します。

下記の機能のいずれかが使用されている場合、断線検出アシスト機能は無効にしてください。

- 温度センサ
- 内部基準電圧
- A/D自己診断

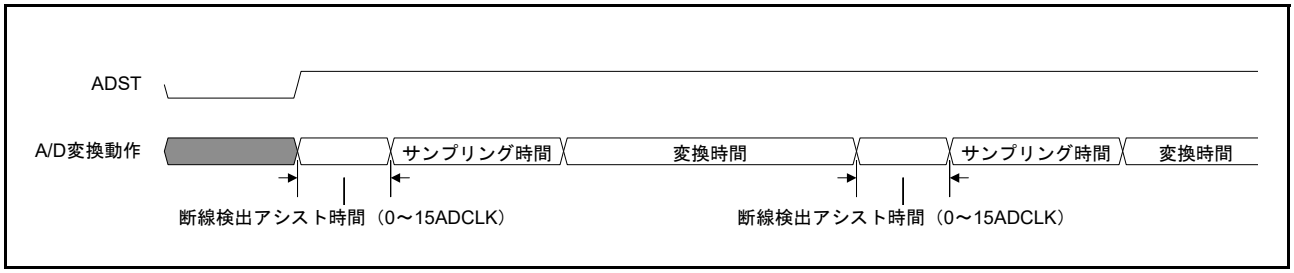


図34.26　断線検出アシスト機能を使用した場合のA/D変換動作図

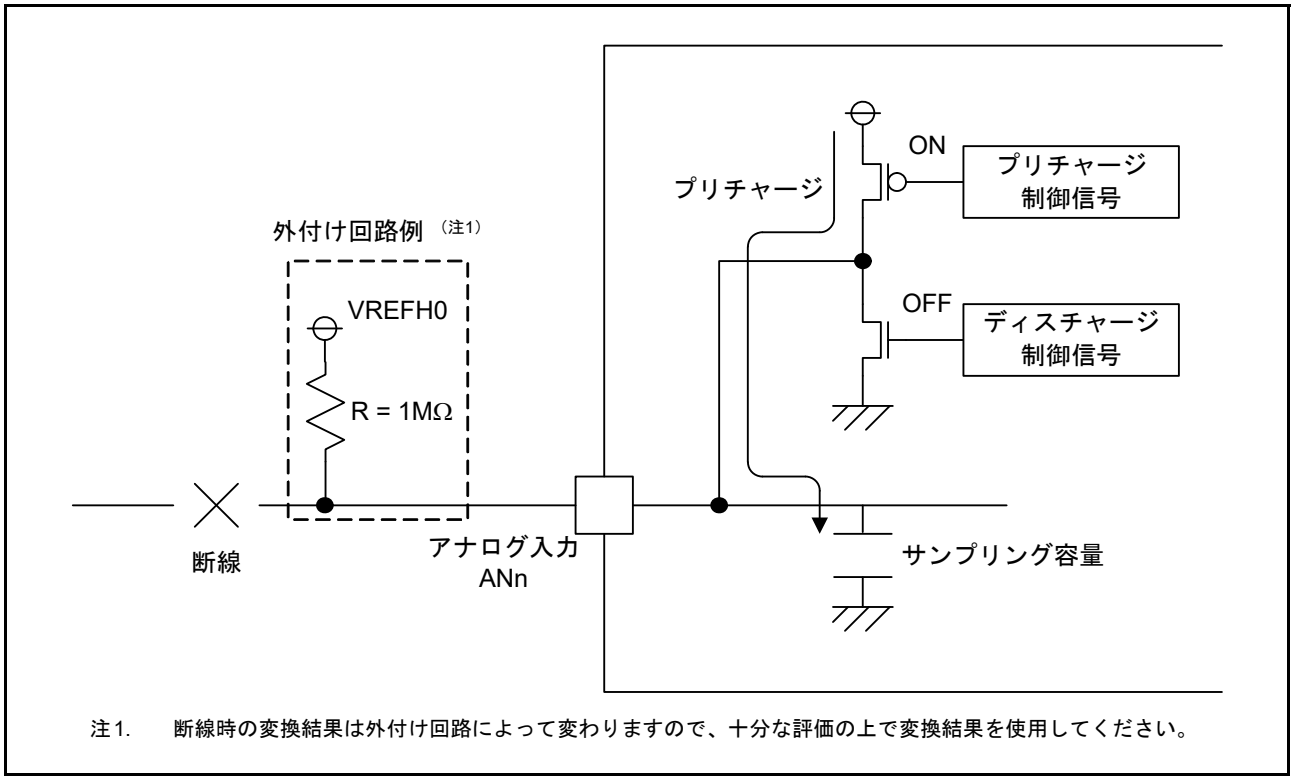
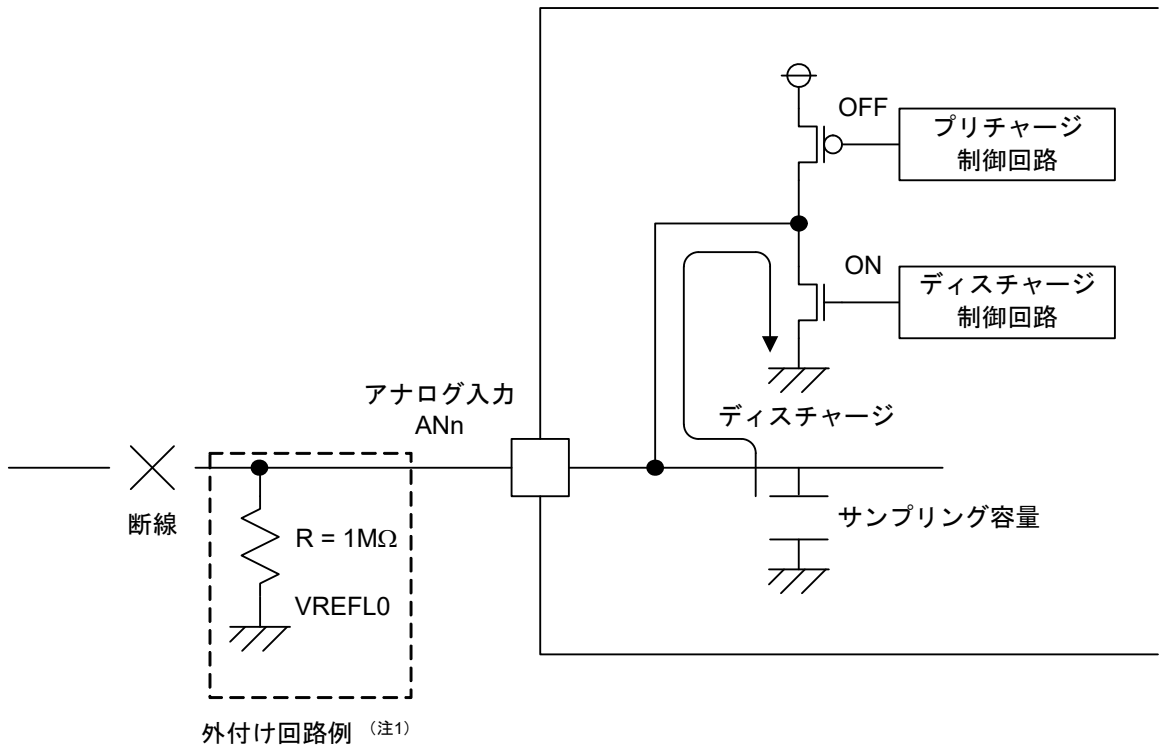


図34.27　プリチャージを選択した場合の断線検出例



注1.　断線時の変換結果は外付け回路によって変わりますので、十分な評価の上で変換結果を使用してください。

図 34.28　ディスチャージを選択した場合の断線検出例

34.3.10　非同期トリガによる A/D 変換の開始

非同期トリガの入力により AD 変換を開始することが可能です。非同期トリガで A/D 変換を開始する方法を以下に示します。

1. PmnPFS レジスタの端子機能を設定します。
2. A/D 変換開始トリガ選択ビット（ADSTRGR.TRSA[5:0]）を 000000b にします。
3. 非同期トリガ（ADTRG0 端子）に High を入力します。
4. ADCSR.TRGE ビットと ADCSR.EXTRG ビットをどちらも 1 にしてください。

図 34.29 に非同期トリガ入力タイミングを示します。

非同期トリガは、グループスキャンモードで使用するグループ B の A/D 変換開始トリガ選択ビット（ADSTRGR.TRSB[5:0]）では選択できません。端子機能の設定については、「20.　I/O ポート」を参照してください。

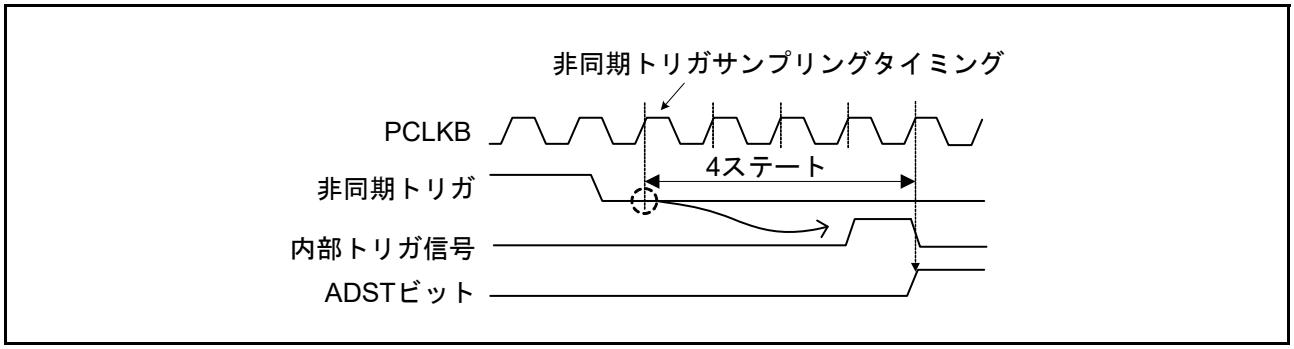


図 34.29　　非同期トリガ入力タイミング

34.3.11　周辺モジュールからの同期トリガによる A/D 変換の開始

A/D 変換は同期トリガ（ELC）によって開始できます。同期トリガで A/D 変換を開始する方法を以下に示します。

- ADCSR.TRGE ビットを 1 にする
- ADCSR.EXTRG ビットを 0 にする
- ADSTRGR.TRSA[5:0]、ADSTRGR.TRSB[5:0] ビットで該当の A/D 変換開始要因を選択する

34.4　割り込み要因と DTC/DMAC 転送要求

34.4.1　割り込み要求

ADC14 は、スキャン終了割り込み要求である ADC140_ADI、ADC140_GBADI 割り込みを CPU へ送信することが可能です。また、比較条件成立で、CPU への ADC140_CMPAI および ADC140_CMPBI 割り込みを発生します。

ADC140_ADI 割り込みは常時発生します。ADC140_GBADI 割り込みは、ADCSR.GBADIE ビットを 1 にすることで発生させることができます。同様に、ADC140_CMPAI および ADC140_CMPBI 割り込みは ADCMPCR.CMPAIE ビットおよび ADCMPCR.CMPBIE ビットを 1 にすることで発生させることができます。

また、ADC140_ADI または ADC140_GBADI 割り込み発生時に DTC または DMAC を起動できます。これらの割り込みで変換されたデータの読み出しを DTC または DMAC を起動して行うと、連続変換がソフトウェアの負担なく実現できます。

DTC の設定は「18.　データトランスファコントローラ（DTC）」を、DMAC の設定は「17.　DMA コントローラ（DMAC）」を参照してください。

表 34.11 に、ADC14 で使用可能な割り込み要因および ELC イベントを示します。

表 34.11　ADC14の割り込み要因およびELCイベント

動作			割り込み要求またはELCイベント	割り込み要求	DTC/DMAC起動	ELCイベント要求	機能
スキャンモード	ダブルトリガモード	コンペア機能（ウィンドウA、ウィンドウB）					
シングルスキャンモード	非選択	非選択	ADC140_ADI	○	○	○	シングルスキャンの最後にADC140_ADI発生
		選択	ADC140_ADI	○	○	○	シングルスキャンの最後にADC140_ADI発生
			ADC140_CMPAI	○	×	×	ウィンドウAの比較条件一致でADC140_CMPAI発生
			ADC140_CMPBI	○	×	×	ウィンドウBの比較条件一致でADC140_CMPBI発生
			ADC140_WCMPM	×	○	○	ウィンドウA/Bコンペア機能の条件一致でADC140_WCMPM発生
			ADC140_WCMPUM	×	○	○	ウィンドウA/Bコンペア機能の条件不一致でADC140_WCMPUM発生
	選択	非選択	ADC140_ADI	○	○	○	偶数回、スキャン終了時にADC140_ADI発生
連続スキャンモード	非選択	非選択	ADC140_ADI	○	○	○	選択したすべてのチャネルのスキャン終了時にADC140_ADI発生
		選択	ADC140_CMPAI	○	×	×	ウィンドウAの比較条件一致でADC140_CMPAI発生
			ADC140_CMPBI	○	×	×	ウィンドウBの比較条件一致でADC140_CMPBI発生
グループスキャンモード	非選択	非選択	ADC140_ADI	○	○	○	グループAのスキャン終了時にADC140_ADI発生
			ADC140_GBADI	○	○	×	グループBのスキャン終了時にグループB用のADC140_GBADI発生
		選択	ADC140_ADI	○	○	○	グループAのスキャン終了時にADC140_ADI発生
			ADC140_GBADI	○	○	×	グループBのスキャン終了時にグループB用のADC140_GBADI発生
			ADC140_CMPAI	○	×	×	ウィンドウAの比較条件一致でADC140_CMPAI発生
			ADC140_CMPBI	○	×	×	ウィンドウBの比較条件一致でADC140_CMPBI発生
	選択	非選択	ADC140_ADI	○	○	○	偶数回、グループAスキャン終了時にADC140_ADI発生
			ADC140_GBADI	○	○	×	グループBのスキャン終了時にグループB用のADC140_GBADI発生

○：使用可能　×：使用不可

34.5 イベントリンク機能

34.5.1 ELCへのイベント出力

ELCは、ADC140_ADI割り込み要求信号をイベント信号として使用し、事前設定モジュールに対してリンク動作が可能です。ADC140_GBADI割り込みおよびADC140_CMPAI/ADC140_CMPBI割り込みをイベント信号として使用することはできません。詳細は、表34.11 ADC14の割り込み要因およびELCイベントを参照してください。

34.5.2 ELCからのイベントによるADC14の動作

ADC14は、以下のように、ELCのELSRn設定で指定した事前設定イベントによってA/D変換を開始できます。

- ELC.ELSR8レジスタでELC_AD00信号を選択する
- ELC.ELSR9レジスタでELC_AD01信号を選択する

A/D変換中にELC_AD00またはELC_AD01イベントが発生した場合、そのイベントは無効となります。

34.6 基準電圧の選択

ADC14は高電位基準電圧にVREFH0またはAVCC0を、内部基準電圧および低電位基準電圧にVREFL0またはAVSS0を選択できます。これらの設定はA/D変換開始前に行ってください。本設定の詳細については、ADHVREFCNTレジスタの説明を参照してください。

34.7　高電位基準電圧に内部基準電圧を選択するA/D変換手順

ここでは、高電位基準電圧に内部基準電圧を選択したときのA/D変換手順について説明します。この場合、AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020のチャネルに対してのA/D変換は可能ですが、内部基準電圧および温度センサ出力のA/D変換は実行できません。

A/D変換手順は下記のとおりです。

1. ADHVREFCNT.HVSEL[1:0]を11bにして、ADC14の高電位基準電圧パスをディスチャージしてください。
2. ソフトウェア内で1µsのディスチャージ時間待機してください。
3. ADHVREFCNT.HVSEL[1:0]を10bにして、高電位基準電圧に内部基準電圧を選択してください。

注 .　ADC14はプロテクト機能を有しており、VREFH0（ADHVREFCNT.HVSEL[1:0] = 01b）やAVCC0（ADHVREFCNT.HVSEL[1:0] = 00b）選択からディスチャージ（ADHVREFCNT.HVSEL[1:0] = 11b）を経ずに内部基準電圧（ADHVREFCNT.HVSEL[1:0] = 10b）を選択することはできません。ディスチャージを経ずに内部基準電圧を設定した場合は、強制的にディスチャージの設定を行います。1µs後、再度、内部基準電圧の選択を行ってください。

4. 内部基準電圧が安定するまでソフトウェア内で待機してから（5µs）、A/D変換を実行してください。

高電位基準電圧に内部基準電圧を選択する手順の波形を図34.30に示します。

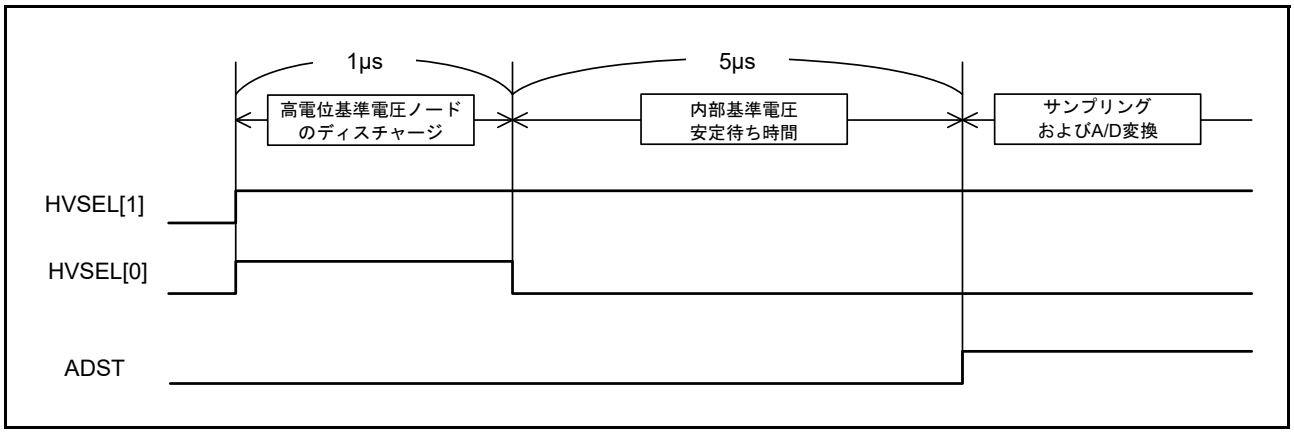


図 34.30　高電位基準電圧に内部基準電圧を選択する手順

34.8 使用上の注意事項

34.8.1 データレジスタの読み出し注意事項

以下のレジスタの読み出しは、ハーフワード単位で行ってください。

- A/D データレジスタ
- A/D データ 2 重化レジスタ A
- A/D データ 2 重化レジスタ B
- A/D 温度センサデータレジスタ
- A/D 内部基準電圧レジスタ
- A/D 自己診断データレジスタ

バイト単位で上位バイト／下位バイトの 2 回に分けてレジスタを読み出すことにより、1 回目に読み出した A/D 変換値と 2 回目に読み出した A/D 変換値で矛盾することがあります。これを避けるために、バイト単位のデータレジスタの読み出しは行わないでください。

34.8.2　A/D 変換停止時の注意事項

A/D 変換開始条件に非同期トリガ、または同期トリガを選択している場合、A/D 変換を停止させるためには、図 34.31 のフローチャートの手順に従ってください。

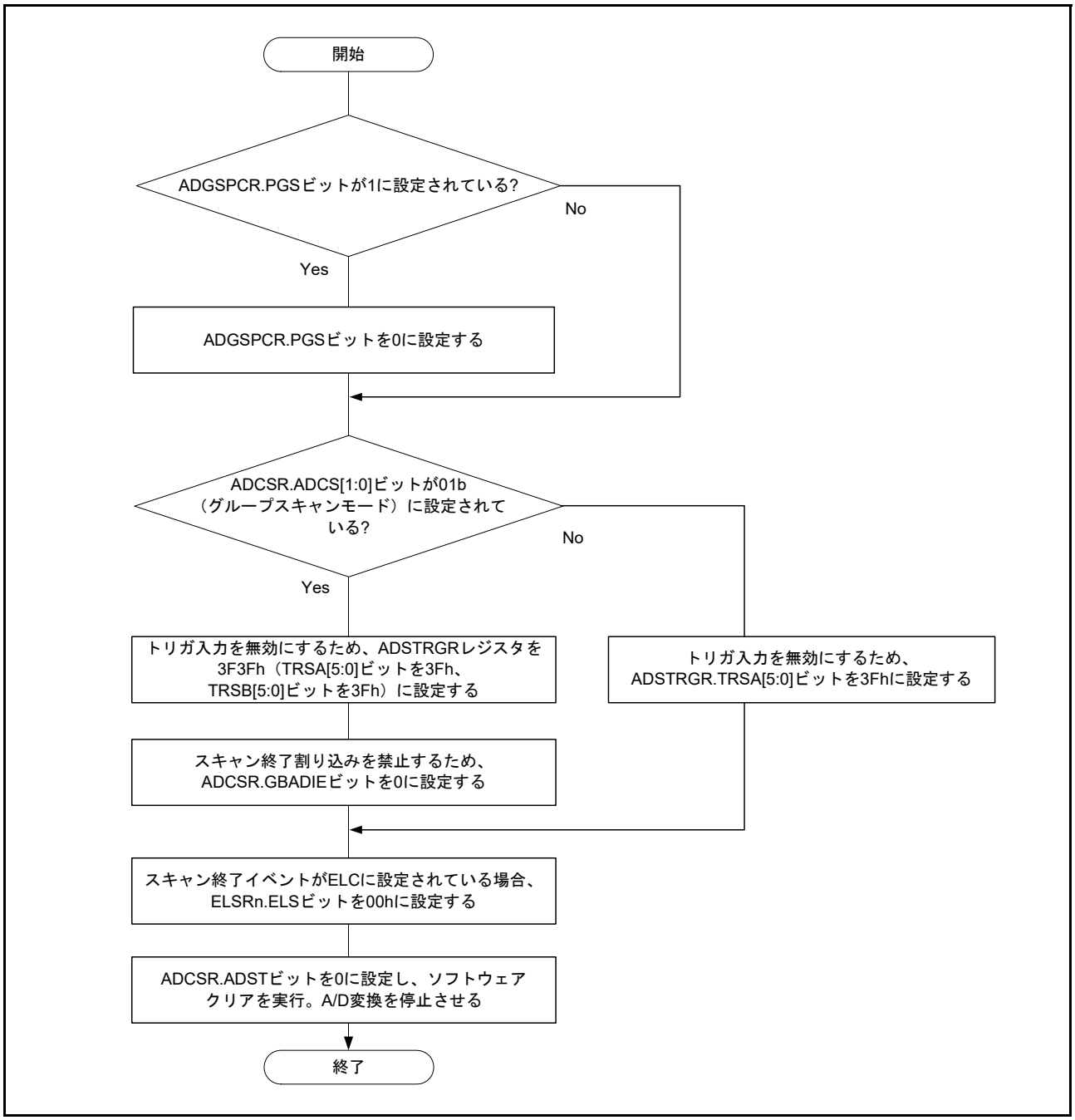


図 34.31　ソフトウェアによる ADCSR.ADST ビットのクリア手順

34.8.3 A/D 変換強制停止と開始時の動作タイミング

ADC14 の停止状態のアナログ部を ADCSR.ADST ビットへの 1 書き込み時に再開するには、ADCLK で最大 6 クロックの時間を必要とします。ADC14 の動作中のアナログ部を ADCSR.ADST ビットへの 0 書き込み時に強制終了するには、ADCLK で最大 3 クロックの時間を必要とします。

34.8.4 スキャン終了割り込み処理の制限事項

トリガ起動による同一アナログ入力のスキャンを 2 回行う場合などで、1 回目のスキャン終了割り込み発生から、2 回目のスキャンによる最初のアナログ入力の A/D 変換が終了するまでに、CPU が A/D 変換データを読み出し終えていなければ、1 回目の A/D 変換データが 2 回目の A/D 変換データで上書きされます。

34.8.5 モジュールストップ機能の設定

モジュールストップコントロールレジスタにより、ADC14 の動作を許可または禁止することが可能です。ADC14 はリセット後の初期状態では動作が停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。モジュールストップ状態を解除した後は、1µs 以上待ってから A/D 変換を開始してください。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

34.8.6 低消費電力状態への遷移に関する制限事項

モジュールストップ状態やソフトウェアスタンバイモードへ遷移する場合は、事前に A/D 変換を停止させてください。ADCSR.ADST ビットを 0 にし、ADC14 のアナログ部が停止するまでの時間を確保する必要があります。ソフトウェアにより ADCSR.ADST ビットをクリアするには、図 34.31 に示す手順に従ってください。その後、ADCLK の 3 クロック期間待った後、モジュールストップ状態やソフトウェアスタンバイモードへ遷移させてください。

34.8.7 断線検出アシスト機能使用時の絶対精度誤差

断線検出アシスト機能を使用する場合、ADC14 の絶対精度誤差が生じます。この誤差は、アナログ入力端子にプルアップ／プルダウン抵抗（Rp）と信号源抵抗（Rs）の抵抗分圧分の誤差電圧が入力されるために生じます。絶対精度の誤差は下式で表されます。

最大絶対精度誤差（LSB）= 4095 × Rs/(Rs + Rp)

断線検出アシスト機能は、十分な評価の上で使用してください。

34.8.8 ADHSC ビット書き換え手順

A/D 変換選択ビット（ADCSR.ADHSC）を 0 から 1 または 1 から 0 に書き換える場合、事前に ADC14 をスタンバイ状態にしておく必要があります。ADCSR.ADHSC ビットは下記の手順で変更してください。スリープビット（ADHVREFCNT.ADSLP）を 0 にしてから 1µs 以上待ってから A/D 変換を開始してください。

ADCSR.ADHSC ビットは下記の手順で変更してください。

1. スリープビット（ADHVREFCNT.ADSLP）を 1 にします。
2. 0.2µs 以上待ってから A/D 変換選択ビット（ADCSR.ADHSC）を変更してください。
3. 4.8µs 以上待ってからスリープビット（ADHVREFCNT.ADSLP）を 0 にしてください。

注 . A/D 変換選択ビット（ADCSR.ADHSC）を変更する場合以外でスリープビット（ADHVREFCNT.ADSLP）を 1 にすることはできません。

注 . A/D 変換選択ビット（ADCSR.ADHSC）が 1 の場合はスリープビットをリセットしないでください。本ビットを 0 にした後、または動作モードがモジュールストップモードに遷移した後は、ADCSR.ADHSC ビットの書き換え手順に従いスリープビットをリセットしてください。

34.8.9　動作モードおよびステータスビットについての注意事項

自己診断の電圧値、ダブルトリガモードでの1回目または2回目のスキャンの判定、データバッファポインタ、コンペア機能のステータスモニタについては、それぞれ必要に応じて初期化または再設定を行ってください。

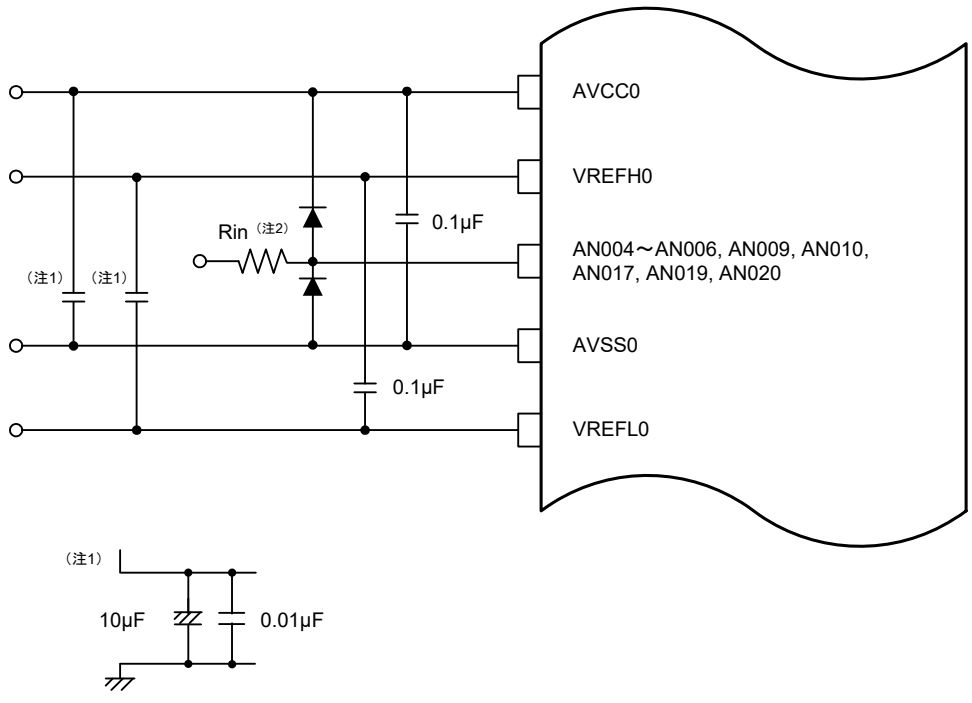
- 自己診断の電圧値（ADCER.DIAGVAL[1:0]）は、ADCER.DIAGLDを1に設定してから選択してください
- ダブルトリガモードは、ADCSR.DBLEを0から1にした後、1回目のスキャンとして動作します
- コンペア機能のステータスモニタビット（MONCMPA、MONCMPB、MONCOMB）は、ADCMPCR.CMPAEおよびADCMPCR.CMPBEを0にした後、初期化されます

34.8.10　ボード設計に関する注意事項

デジタル回路とアナログ回路の間ができるだけ離れるように、ボードを設計してください。また、デジタル信号線とアナログ信号線は、交差させたり互いに近づけしたりしないでください。これらに従わないと、アナログ信号にノイズが発生し、A/D変換精度に影響を及ぼします。アナログ入力端子（AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020）、基準電源端子（VREFH0）、基準グランド端子（VREFL0）、アナログ電源端子（AVCC0）は、アナロググランド端子（AVSS0）を使用したデジタル回路と距離を離すようにしてください。アナロググランド端子（AVSS0）は、ボード上の安定したデジタルグランド端子（VSS）に接続してください（単一グランドプレーン接続）。

34.8.11　ノイズ低減についての注意事項

過剰電圧などの異常電圧によってアナログ入力端子（AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020）が破壊されないように、AVCC0およびAVSS0間、ならびにVREFH0およびVREFL0間にコンデンサを設置する必要があります。また、アナログ入力端子（AN004 ～ AN006, AN009, AN010, AN017, AN019, AN020）を保護するため、図 34.32に示すように保護回路を接続してください。



注1.　ここに示す値は基準値です。
注2.　Rin：信号源インピーダンス

図 34.32　アナログ入力用保護回路例

34.8.12 14 ビット A/D コンバータ入力を使用する場合のポートの設定

高精度チャネルを使用する場合は、ポート 0 を汎用 I/O、IRQ2、IRQ3 入力、および TS 送信ポートとして使用しないでください。通常精度チャネルを使用している場合は、A/D アナログ入力とデジタル出力に同じポートは使用しないことを推奨します。A/D アナログ入力としても使用しているデジタル出力を出力信号用に使用する場合は、A/D 変換を複数回実行し、最大値と最小値を除いた平均をとるなどの対策を行ってください。

34.8.13 ADC14、OPAMP、ACMPLP 間の関係

表 34.12 に示す A/D 変換対象は、A/D 変換中の OPAMP、および ACMPLP 入力に選択できません。

表 34.12 A/D変換中に選択できないOPAMP、およびACMPLP端子一覧

A/D変換対象	OPAMP	ACMPLP
AN005	AMP2-	—
AN006	AMP2+	—
AN017	—	CMPIN1
AN019	—	CMPREF1
AN020	—	CMPIN1

34.8.14 ソフトウェアスタンバイモードの解除についての注意事項

ソフトウェアスタンバイモードから通常モードへの遷移後は、1µs 待ってから A/D 変換を開始してください。

35.　12 ビット D/A コンバータ（DAC12）

35.1　概要

本 MCU は、12 ビット D/A コンバータ（DAC12）を内蔵しています。表 35.1 に DAC12 の仕様を、図 35.1 に DAC12 のブロック図を、表 35.2 に入出力端子を示します。

表 35.1　DAC12の仕様

項目	内容
分解能	12ビット
出力チャネル	1チャネル
アナログモジュール間の干渉低減	D/A変換回路とA/D変換回路の干渉を低減 D/A変換データ更新タイミングは、ADC14からの同期D/A変換許可入力信号により制御され、これにより、DAC12ラッシュカレントのA/D変換精度に及ぼす影響を低減
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態を設定して消費電力を低減
イベントリンク機能（入力）	イベント信号の入力により、DA0変換の開始が可能

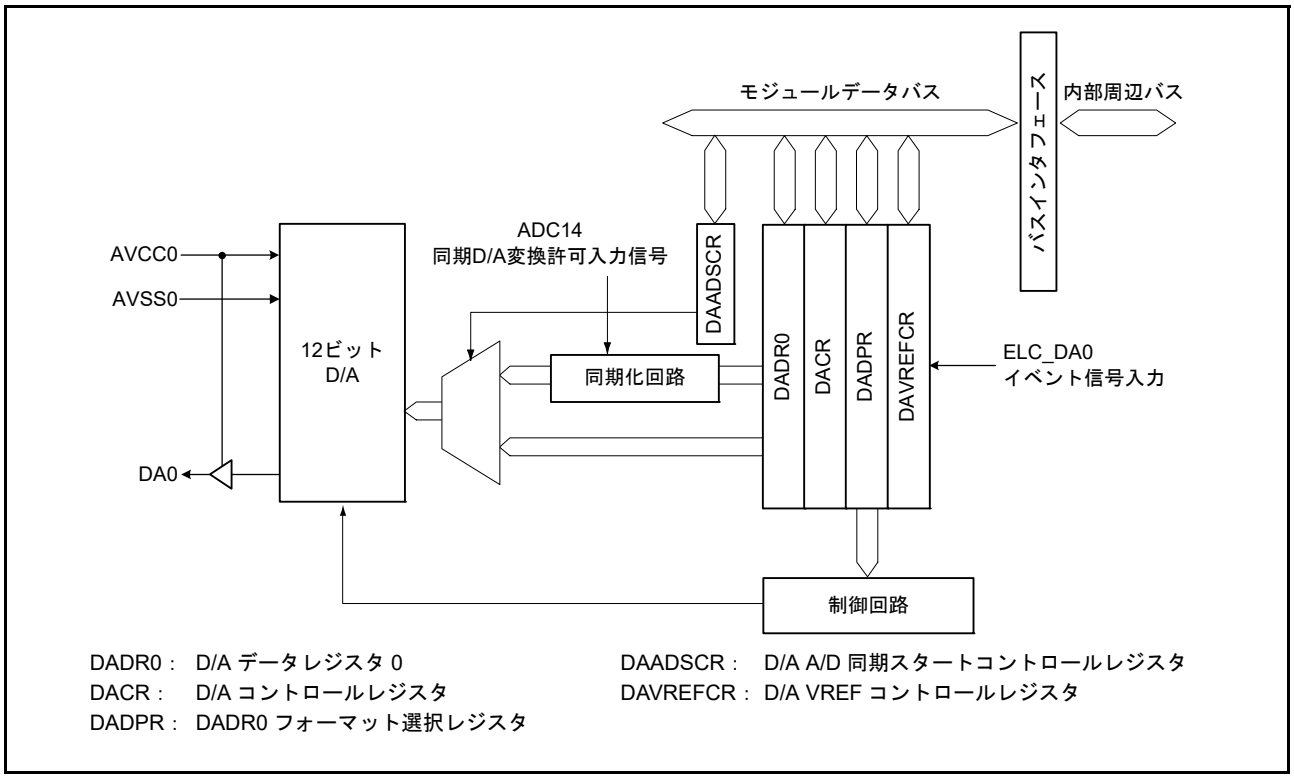


図 35.1　DAC12 のブロック図

表 35.2　DAC12の端子構成

端子名	入出力	機能
AVCC0	入力	ADC14、DAC12、コンパレータ、およびOPAMP用のアナログ電源端子 これらのモジュールを使用しない場合は、VCCに接続してください。
AVSS0	入力	ADC14、DAC12、コンパレータ、およびOPAMP用のアナロググランド端子 これらのモジュールを使用しない場合は、VSSに接続してください。
DA0	出力	チャネル0のアナログ出力端子

35.2　レジスタの説明

35.2.1　D/A データレジスタ 0（DADR0）

アドレス　DAC12.DADR0 4005 E000h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

DADR0 レジスタは、D/A 変換を行うデータを格納するための 16 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。アナログ出力を許可すると、DADR0 レジスタの値が変換され、アナログ出力端子に出力されます。

12 ビットデータを左詰めにするか右詰めにするかは、DADPR.DPSEL ビットで設定できます。右詰め形式（DADPR.DPSEL = 0）では、下位 12 ビット（[11:0]）が有効です。左詰め形式（DADPR.DPSEL = 1）では、上位 12 ビット（[15:4]）が有効です。

35.2.2　D/A コントロールレジスタ（DACR）

アドレス　DAC12.DACR 4005 E004h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	DAOE0	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b4-b0	—	予約ビット	読むと1が読めます。書く場合、1としてください。	R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	DAOE0	D/A出力許可0	0：チャネル0のアナログ出力（DA0）を禁止 1：チャネル0（DA0）のD/A変換およびアナログ出力を許可	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DACR レジスタは、DAADSCR.DAADST ビットが 1（D/A 変換と A/D 変換の干渉低減が有効）の状態で、ADC14 が停止中の場合のみ設定してください。DACR を設定するときは、ADC14 トリガで ADC14 を確実に停止させるために、ADCSR.ADST ビットが 0、かつソフトウェアトリガを選択した状態でのみ行ってください。

DAOE0 ビット（D/A 出力許可 0）

D/A 変換とアナログ出力を制御します。

D/A 変換と A/D 変換の干渉低減対策が有効時（DAADSCR.DAADST ビット = 1）、ADC14 が停止中（ADCSR.ADST ビット = 0）の場合のみ、DAOE0 ビットを設定してください。ADC14 を確実に停止させるため、ソフトウェアトリガは、ADC14 トリガとして選択されます。

イベントリンク機能を使用して、DAOE0 ビットを 1 にできます。ELC_DA0 の ELSR12 レジスタで指定されたイベントが発生すると、DAOE0 ビットが 1 になり、D/A 変換結果の出力を開始します。

35.2.3 DADR0 フォーマット選択レジスタ（DADPR）

アドレス DAC12.DADPR 4005 E005h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DPSEL	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	DPSEL	DADR0フォーマット選択	0：右詰め 1：左詰め	R/W

35.2.4 D/A A/D 同期スタートコントロールレジスタ（DAADSCR）

アドレス DAC12.DAADSCR 4005 E006h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DAADST	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b6-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	DAADST	D/A A/D同期変換	0：DAC12の動作はADC14の動作と同期しない（D/A変換とA/D変換の干渉低減が無効） 1：DAC12の動作はADC14の動作と同期する（D/A変換とA/D変換の干渉低減が有効）	R/W

D/A 変換と A/D 変換の干渉低減のため、D/A 変換を ADC14 トリガからの同期 D/A 変換許可入力信号に同期させるかさせないかを選択します。このレジスタの設定は、ADC14 が停止中のとき（ADCSR.ADST ビット＝0）、またソフトウェアトリガが ADC14 トリガとして選択されるときのみ行ってください。

DAADST ビットを 1 にする前に、ADC14 の対象ユニットをユニット 1 に設定してください。

DAADST ビット（D/A A/D 同期変換）

DAADST ビットを 0 にすると、DADR0 レジスタの値を随時 D/A 変換します。DAADST ビットを 1 にすると、ADC14 からの同期 D/A 変換許可入力信号に同期して D/A 変換が行われます。DADR0 レジスタの値を書き換えても、ADC14 の A/D 変換が終了するまで D/A 変換は行われません。DAADST ビットの設定は、ADC14 が停止中（ADCSR.ADST ビットが 0）のときに行ってください。このとき、ADC14 を確実に停止させるため、ADC14 のトリガ選択をソフトウェアトリガに設定してください。なお、DAADST ビットを 1 にした場合は、イベントリンク機能は使用できません。ELC の ELSR12 レジスタでイベントリンク機能を停止に設定してください。DAADST ビットの設定は、DAC12 のチャネル 0 およびチャネル 1 に共通です。

35.2.5　D/A VREF コントロールレジスタ（DAVREFCR）

アドレス　DAC12.DAVREFCR 4005 E007h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	REF[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	REF[2:0]	D/A基準電圧選択	b2　b0 0　0　0：基準電圧を選択しない 0　0　1：AVCC0/AVSS0を選択 0　1　1：内部基準電圧／AVSS0を選択 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

D/A VREF コントロールレジスタ（DAVREFCR）は、DAC12 の基準電圧を選択するためのレジスタです。

REF[2:0] ビット（D/A 基準電圧選択）

DAC12 の基準電圧を選択するビットです。ビット値を変更する場合はこれらのビットに 000b を書いてから変更してください。変更後に REF[2:0] ビットを読み出して、値が変更されたことを確認してください。内部基準電圧を選択するときは DADR0 レジスタを 0000h にして、VREF 経路をディスチャージしてから電圧を切り替えてください。リセット解除後も経路はディスチャージされた状態なので、内部基準電圧を選択することが可能です。ディスチャージについては、35.3.2　内部基準電圧を基準電圧として使用するときの注意事項を参照してください。また、ADC14 が A/D 変換中は本レジスタを書き換えないでください。書き換えた場合、A/D 変換の精度は保証されません。内部基準電圧を選択した場合は電圧発生回路が動作し、電流が増加します。内部基準電圧を選択したままソフトウェアスタンバイモードに遷移しても、電圧発生回路は自動的にオフになりません。

35.3　動作説明

DACR.DAOE0 ビットを 1 にすると、DAC12 が有効になり、変換結果が出力されます。

以下にチャネル 0 での D/A 変換例を示します。このときの動作タイミングを図 35.2 に示します。

1. DADPR.DPSEL ビットと DADR0 レジスタに D/A 変換を行うためのデータを設定します。
2. DACR.DAOE0 ビットを 1 にすると、D/A 変換を開始します。t_{DCONV} 時間経過後、変換結果をアナログ出力端子 DA0 より出力します。DADR0 レジスタを書き換えるか、DAOE0 ビットを 0 にするまで、この変換結果が出力され続けます。出力値（参考）は以下の式で計算します。

$$\frac{\text{DADR0の設定値}}{4096} \times \text{基準電圧}$$

3. 別の変換を開始するには、別の値を DADR0 へ書き込みます。t_{DCONV} 時間経過後、変換結果が出力されます。
   DAADSCR.DAADST ビットが 1（D/A 変換と A/D 変換の干渉低減が有効）の場合、D/A 変換開始まで最大で A/D 変換 1 回分の時間が必要です。ADCLK が周辺クロックよりも速い場合は、A/D 変換 1 回分以上の時間が必要となる場合があります。
4. アナログ入力を禁止する場合は、DAOE0 ビットを 0 にしてください。

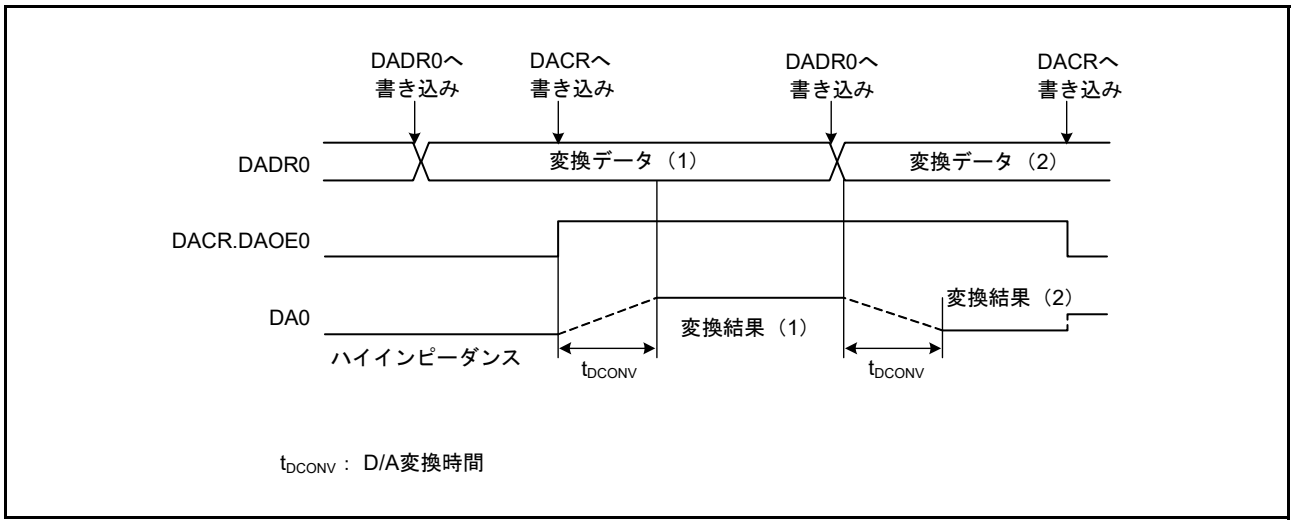


図 35.2　DAC12 の動作例

35.3.1　D/A 変換と A/D 変換の干渉低減

D/A 変換が始まると DAC12 はラッシュカレントを発生させます。DAC12 と ADC14 のアナログ電源が共通のため、発生したラッシュカレントが ADC14 の A/D 変換に干渉することがあります。

DAADSCR.DAADST ビットが 1 の場合、DADR0 レジスタのデータが変更されても、D/A 変換はすぐには実施されません。その代わり、

- ADC14 が停止中に DADR0 レジスタのデータが変更されると、1PCLKB サイクル後に D/A 変換が開始されます
- ADC14 が A/D 変換を実行中に DADR0 レジスタのデータが変更された場合、A/D 変換完了時に D/A 変換が開始されます。したがって、DADR0 レジスタデータの更新が D/A 変換回路の出力に反映されるまで、最大で A/D 変換 1 回分の時間が必要です。D/A 変換が完了するまでの間、DADR0 レジスタ値とアナログ出力値は一致しません

DAADSCR.DAADST ビットが 1 のときに、DADR0 レジスタの値が D/A 変換されたかどうかをソフトウェアで確認する手段はありません。

以下に DAC12 を ADC14 に同期して動作させる場合の D/A 変換例を示します。このときの動作タイミングを図 35.3 に示します。

ADC14 に同期して D/A 変換を実行する場合：

1. ADC14 が停止中であることを確認し、DAADSCR.DAADST ビットを 1 にする。
2. ADC14 が停止中であることを確認し、DACR.DAOE0 ビットを 1 にする。
3. DADR0 レジスタを設定する。ADCLK が周辺クロックよりも速い場合は、D/A 変換は A/D 変換 1 回分以上待たされる場合があります。

- DADR0 レジスタを書き換えたときに ADC14 が停止していた場合（ADC140.ADCSR.ADST = 0）、1PCLKB サイクル後に D/A 変換が開始されます
- DADR0 レジスタを書き換えたときに ADC14 が A/D 変換中の場合（ADC140.ADCSR.ADST = 1）、A/D 変換終了時に D/A 変換が開始されます。A/D 変換中に DADR0 レジスタを 2 回書き換えた場合、1 回目の更新は D/A 変換されないことがあります

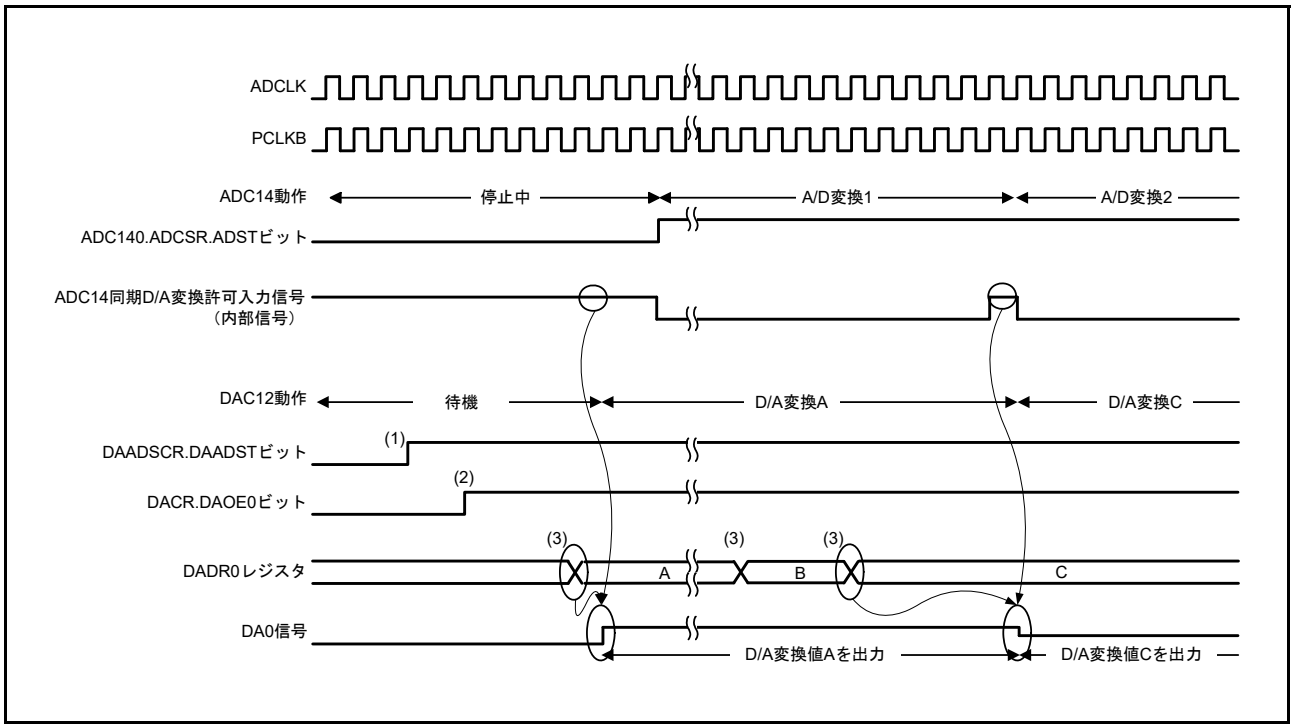


図 35.3　DAC12 を ADC14 に同期して変換する例

図 35.4 に示すように、ADCLK が PCLKB よりも速い場合、A/D 変換 1 と A/D 変換 2 の間に出力される ADCLK 出力サイクル 1 つ分の ADC14 からの同期 D/A 変換許可入力信号を DAC12 が取り込めない可能性があります。この場合、DA0 信号は D/A 変換値 A の出力を継続します。

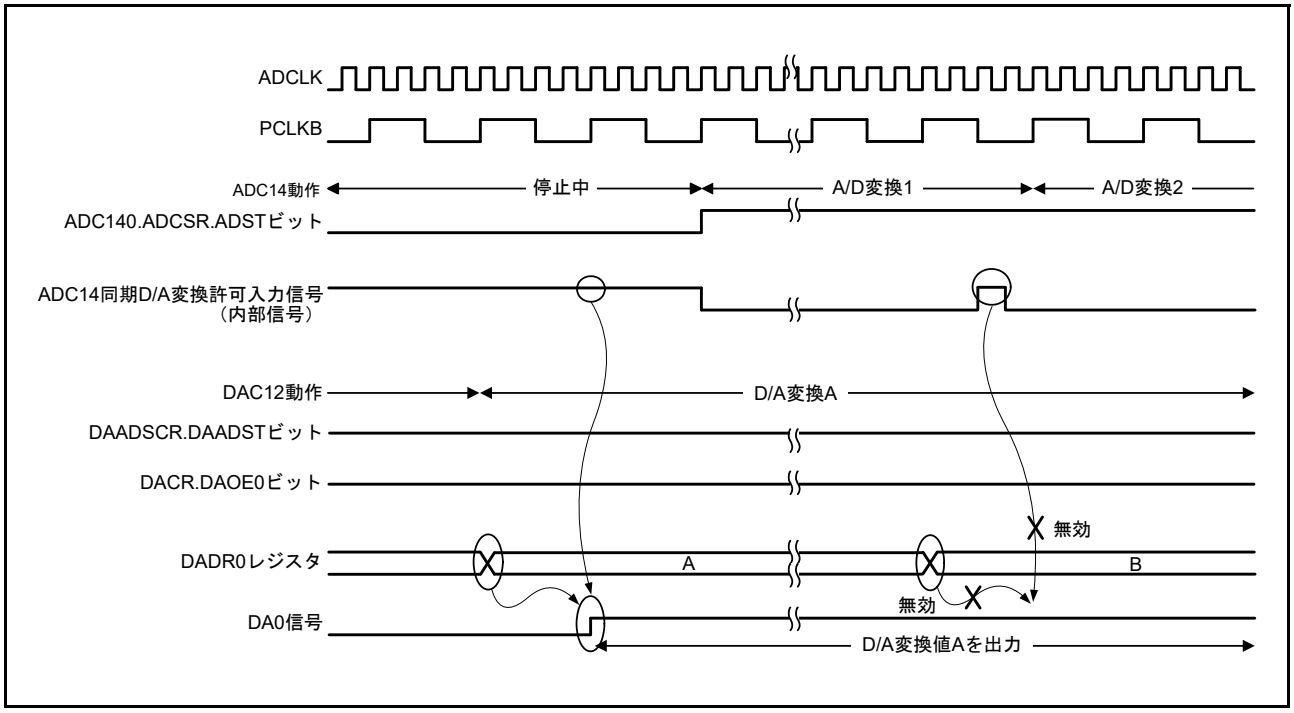


図 35.4　DAC12 が ADC14 同期 D/A 変換許可入力信号を取り込めない場合の例

35.3.2　内部基準電圧を基準電圧として使用するときの注意事項

DAVREFCR.REF[2:0] ビットを 011b にして、内部基準電圧／ AVSS0 を基準電圧として用いる場合、選択する前に VREF 経路をディスチャージする必要があります。ディスチャージ手順を以下に示します。

1. REF[2:0] ビットに 000b を書き込む。
2. DADR0 レジスタを 0000h にする。
3. 手順 2. の状態を 10µs 間維持する。（ディスチャージ動作）
4. ディスチャージ完了後に DAVREFCR.REF[2:0] ビットに 011b を書き込み、内部基準電圧／ AVSS0 を選択する。
5. DACR.DAOE0 ビットを 1 にして、5µs の内部基準電圧安定待機時間の待機をする。
6. DADR0 レジスタにデータを書き込み、D/A 変換を開始する。

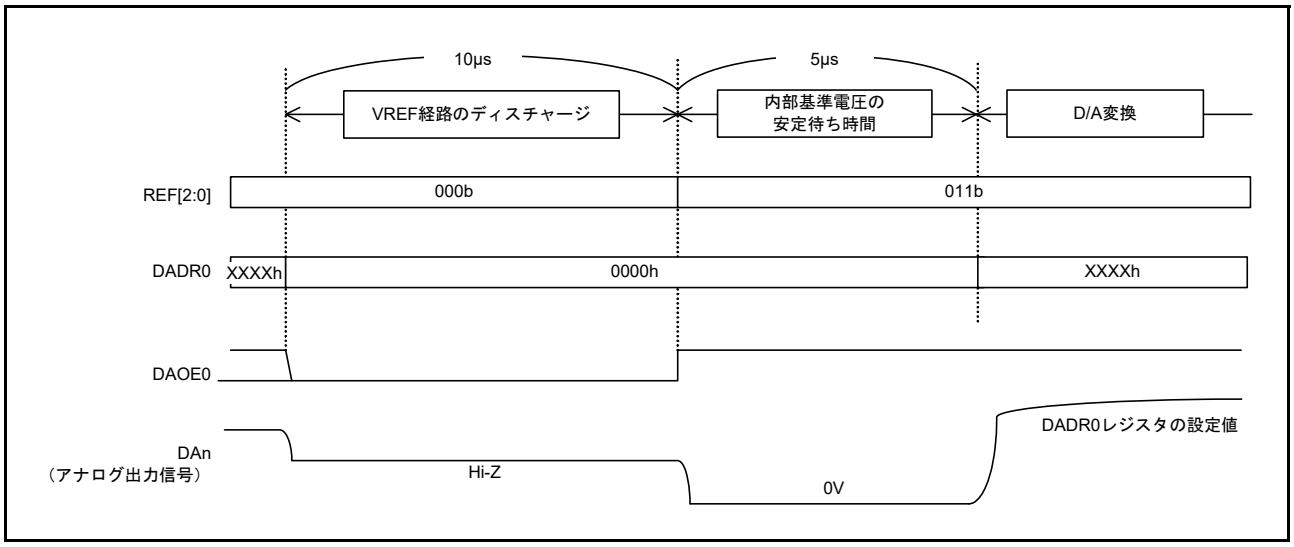


図 35.5　内部基準電圧を基準電圧に選択する手順

35.4 イベントリンクの動作設定手順

イベントリンクの動作を設定する場合（DA0）：

1. DADPR.DPSEL ビットを設定し、DADR0 レジスタに D/A 変換を行うためのデータを設定します。
2. ELC_DA0 イベント信号が ELSR12 レジスタの各周辺モジュールとリンクするよう設定します。
3. ELC.ELCR.ELCON ビットを 1 にします。これによりイベントリンク機能が設定されている全モジュールのイベントリンク動作が有効となります。
4. イベント出力元のモジュールを設定し、イベントリンクを起動します。モジュールからイベントが出力されると、DACR.DAOE0 ビットが 1 になり、チャネル 0 の D/A 変換が開始されます。
5. DAC12 のチャネル 0 のイベントリンク動作を停止するには、ELC.ELSR12.ELS[7:0] ビットを 00h にしてください。また ELCON ビットを 0 にすることにより、全モジュールのイベントリンク動作が停止します。

35.5 イベントリンク動作における注意事項

- DACR.DAOE0ビットへの書き込み実行中にELC_DA0イベント信号で指定されたイベントが発生すると、書き込みサイクルは停止し、発生イベントのビットが優先的に 1 になります
- D/A変換とA/D変換の干渉低減のためにDAADSCR.DAADST ビットを1にしている場合、イベントリンク機能は使用しないでください

35.6 使用上の注意事項

35.6.1 モジュールストップ機能の設定

モジュールストップコントロールレジスタによって、DAC12 の動作を許可／禁止することが可能です。DAC12 は、リセット後は動作が停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

35.6.2 モジュールストップ状態での DAC12 の動作

D/A 変換を許可した状態で MCU がモジュールストップ状態になったとき、D/A 出力は保持されるため、アナログ電源電流は D/A 変換中と同様になります。モジュールストップ時にアナログ電源電流を低減する必要がある場合は、DACR.DAOE0 ビットを 0 にして D/A 変換を禁止してください。

35.6.3 ソフトウェアスタンバイモード時の DAC12 の動作

D/A 変換を許可した状態で MCU がソフトウェアスタンバイモードになったとき、D/A 出力は保持されるため、アナログ電源電流は D/A 変換中と同様になります。ソフトウェアスタンバイモード時にアナログ電源電流を低減する必要がある場合は、DACR.DAOE0 ビットを 0 にして D/A 変換を禁止してください。

35.6.4 D/A 変換と A/D 変換の干渉低減有効時の制限事項

DAADSCR.DAADST ビットが 1（D/A 変換と A/D 変換の干渉低減が有効）の場合、ADC14 をモジュールストップ状態にしないでください。A/D 変換が停止するだけでなく、D/A 変換も停止する可能性があります。

36. 温度センサ（TSN）

36.1 概要

デバイス動作の信頼性確保のため、内蔵されている温度センサでチップの温度を決定し、監視することが可能です。センサはチップの温度と正比例する電圧を出力します。チップ温度と出力電圧はほとんどリニアの関係にあります。出力された電圧は ADC14 で変換されてから、末端の応用機器で使用できます。

表 36.1 に温度センサの仕様を、図 36.1 にブロック図を示します。

表 36.1 温度センサの仕様

項目	内容
温度センサ電圧出力	ADC14へ出力

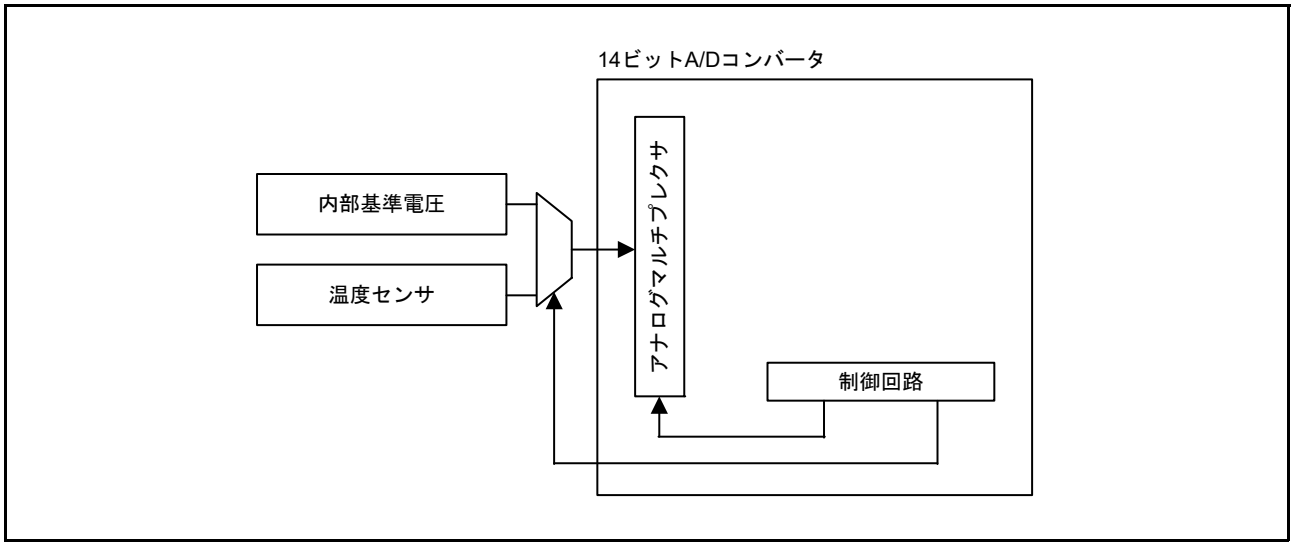
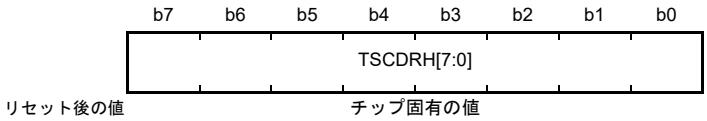


図 36.1 温度センサのブロック図

36.2 レジスタの説明

36.2.1 温度センサ較正データレジスタ H（TSCDRH）

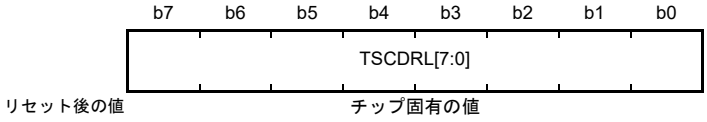
アドレス TSN.TSCDRH 407E C228h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	TSCDRH[7:0]	温度センサ補正データ	変換後の値の上位4ビットを格納します。	R

36.2.2 温度センサ較正データレジスタ L（TSCDRL）

アドレス TSN.TSCDRL 407E C229h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	TSCDRL[7:0]	温度センサ補正データ	変換後の値の下位8ビットを格納します。	R

TSCDRH レジスタおよび TSCDRL レジスタには、工場出荷時に各チップ用に測定された温度センサ補正データが格納されています。

温度センサ補正データは、温度センサが出力した電圧を、ADC14 によって Ta = Tj = 125 ℃および AVCC0 = 3.3V の条件下で変換したデジタル値です。TSCDRH レジスタには変換値の上位 4 ビットが、TSCDRL レジスタには下位 8 ビットがそれぞれ格納されます。

36.3 温度センサの使用方法

温度センサが出力する電圧は、温度により変化します。この電圧は ADC14 でデジタル値に変換されます。チップの温度は、この値を温度に変換することで求められます。

36.3.1 使用前の準備

温度（T）はセンサの電圧出力（Vs）と比例関係にあるため、以下の式で温度を求められます。

T = (Vs - V1) / Slope + T1

T：測定温度（℃）

Vs：温度測定時の温度センサの出力電圧（V）

T1：1 点目の試行測定時の温度（℃）

V1：T1 測定時の温度センサの出力電圧（V）

T2：2 点目の試行測定時の温度（℃）

V2：T2 測定時の温度センサの出力電圧（V）

Slope：温度センサの温度傾斜（V/ ℃）、Slope = (V2 - V1) / (T2 - T1)

特性はセンサによってばらつきがあります。そのため、以下のような 2 つの異なるサンプル温度の測定を推奨します。

1. ADC14 を使用して、温度 T1 のときの温度センサの出力電圧 V1 を測定します。
2. ADC14 を使用して、温度 T1 と異なる温度 T2 のときの温度センサの出力電圧 V2 を測定します。両者の測定結果から、温度傾斜（Slope = (V2 - V1) / (T2 - T1)）を求めます。
3. この Slope の値を温度特性の式（T = (Vs - V1) / Slope + T1）に代入し、温度を求めます。

「48. 電気的特性」に記載の温度傾斜を用いる場合は、1 回の試行測定で V1 と T1 を決定します。なお、この測定方法の精度は 2 点測定方法よりも劣ります。

TSCDRH レジスタおよび TSCDRL レジスタには、Ta = Tj = 125 ℃および AVCC0 = 3.3V の条件下で測定された温度センサの温度値（CAL125）が格納されています。この温度値を 1 点目のサンプル測定結果として使用する場合、温度センサ使用前の本準備を省略することが可能です。

本測定値 CAL125 は以下により算出します。

CAL125 = (TSCDRH レジスタ値 << 8) + TSCDRL レジスタ値

V1 は下記のように CAL125 から算出されます。

V1 = 3.3 × CAL125 / 4096［V］

この値を用いて、以下の式により測定温度が算出できます。

T = (Vs0 - V1) / Slope + 125［℃］

T：測定温度（℃）

Vs：温度測定時の温度センサの出力電圧（V）

V1：Ta = Tj = 125 ℃および AVCC0 = 3.3V のときの温度センサの出力電圧（V）

Slope：温度センサの温度傾斜 ÷ 1000（V/ ℃）

図 36.2 に測定温度の誤差を示します。標準偏差は 3σ です。

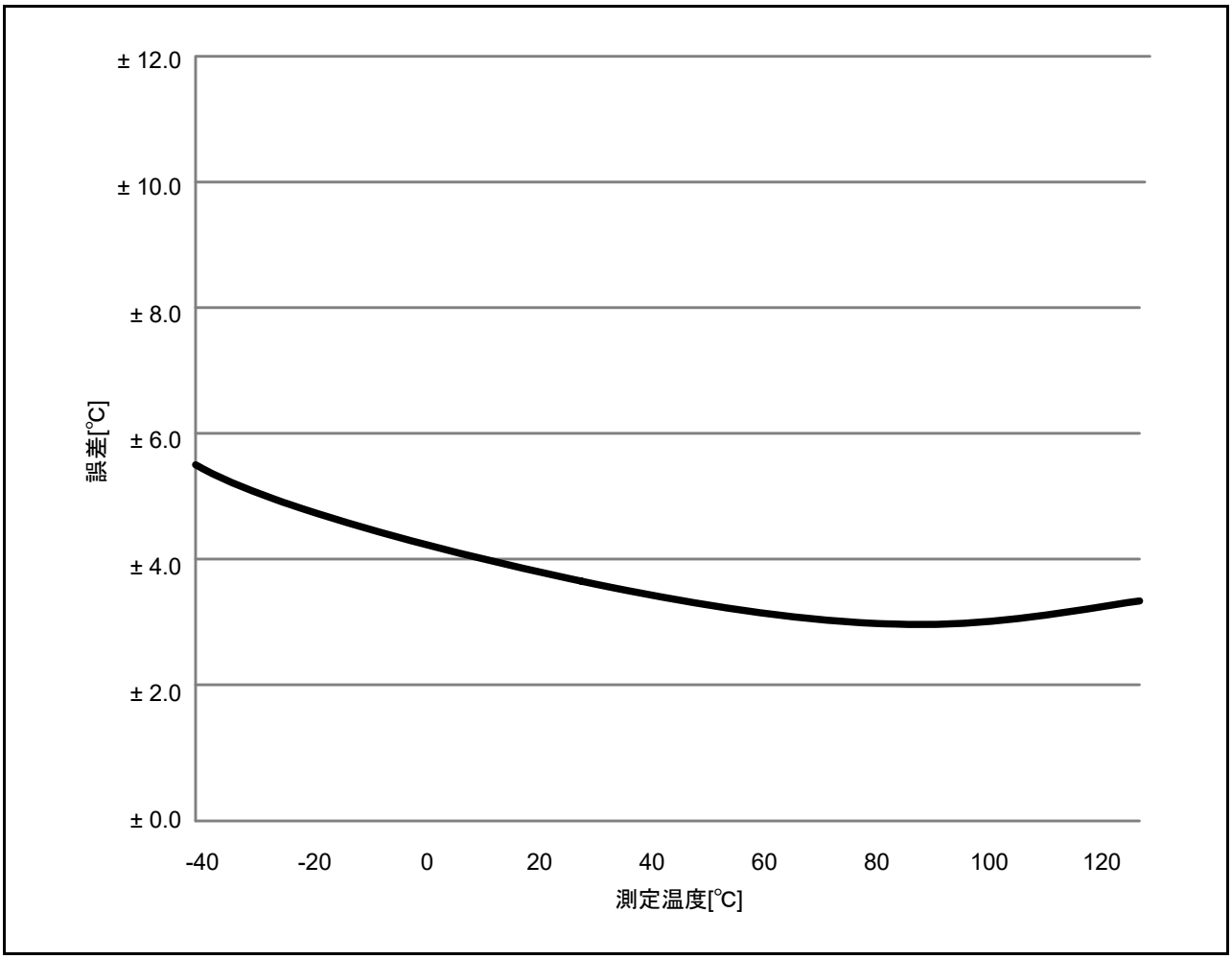


図 36.2 測定温度の誤差（設計値）

36.3.2 温度センサの使用手順

詳細は「34. 14 ビット A/D コンバータ（ADC14）」を参照してください。

37. オペアンプ（OPAMP）

37.1 概要

オペアンプを使用して、小さいアナログ入力電圧を増幅して出力することが可能です。本 MCU では、入力端子 2 つと出力端子 1 つを備えたオペアンプユニットを 1 つ搭載しています。

オペアンプには次の機能があります。

- ユニットからの出力信号は、ADC14 への入力信号に使用できます
- 高速モード（高消費電流）および低消費電力モード（低速応答）をサポートしており、応答速度と電流消費とのバランスに応じてどちらかのモードを選択できます
- 非同期汎用タイマ（AGT）からのトリガによって動作を開始することができます
- A/D 変換終了トリガによって動作を停止できます

図 37.1 にオペアンプのブロック図を、表 37.2 にユニット構成を示します。

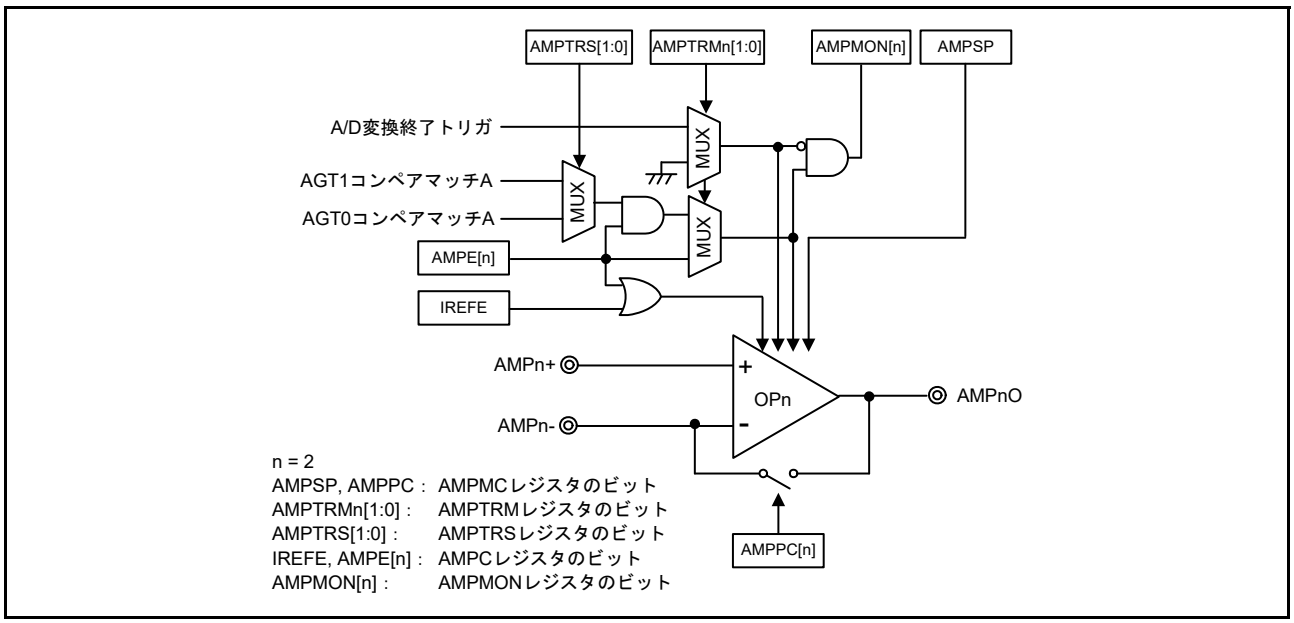


図 37.1 オペアンプのブロック図

表 37.1 OPAMPのユニット構成

単位	入出力端子	入出力	機能
ユニット2（オペアンプ2）	AMP2+、AMP2-	入力	オペアンプ2（+、-）の入力端子
	AMP2O	出力	オペアンプ2の出力端子

37.2 レジスタの説明

37.2.1 オペアンプモードコントロールレジスタ（AMPMC）

アドレス OPAMP.AMPMC 4008 6008h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	AMPSP	—	—	—	—	AMPPC[2]	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	AMPPC[2]	オペアンププリチャージ制御	0：オペアンプ2のプリチャージ停止 1：オペアンプ2のプリチャージ可能	R/W
b6-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	AMPSP	オペアンプ動作モード選択	0：低消費電力モード（低速） 1：高速モード	R/W

注 . AMPC レジスタが 00h（オペアンプおよび基準電流回路が停止中）の場合は、AMPSP ビットを設定してください。
注 . 本レジスタで使用しないビットは初期値に設定するようにしてください。

37.2.2 オペアンプトリガモードコントロールレジスタ（AMPTRM）

アドレス OPAMP.AMPTRM 4008 6009h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	AMPTRM2[1:0]		—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	AMPTRM2[1:0]	OPAMP機能起動／停止トリガ制御n（注2）	AMPTRM2[1] AMPTRM2[0] 0 0：ソフトウェアトリガモード： • AMPCレジスタの設定によるオペアンプの起動／停止が可能 • 起動トリガによるオペアンプの起動は不可 • A/D変換終了トリガによるオペアンプの制御は不可 0 1：起動トリガモード： • AMPCレジスタの設定により、オペアンプを起動トリガを待つよう設定する、または停止することが可能 • 起動トリガによるオペアンプの起動が可能（注1） • A/D変換終了トリガによるオペアンプの制御は不可 1 0：設定禁止 1 1：起動およびA/Dトリガモード： • AMPCレジスタの設定により、オペアンプを起動トリガを待つよう設定する、または停止することが可能 • 起動トリガによるオペアンプの起動が可能（注1） • A/D変換終了トリガによるオペアンプの停止が可能。A/D変換終了トリガは常にA/D変換の最後に発生します	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . A/D 変換終了トリガは常に A/D 変換の最後に発生します。
注 1. 起動トリガによってオペアンプを起動する場合、まず AGT に関連する設定を行い、AMPTRS レジスタを設定した後、AMPC レジスタによって起動するオペアンプの動作制御ビットを 1（オペアンプ待機状態が有効）にしてください。
注 2. AMPTRM2[1:0] の設定値を変更する場合、AMPC.AMPE[2] ビットを 0（オペアンプ停止）にしてください。

37.2.3 オペアンプ起動トリガ選択レジスタ（AMPTRS）

アドレス OPAMP.AMPTRS 4008 600Ah

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	AMPTRS[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	AMPTRS[1:0]	起動トリガ選択（注1）	b1 b0 0 0: オペアンプ2：オペアンプ起動トリガ2 0 1: オペアンプ2：オペアンプ起動トリガ1 1 0: 設定禁止 1 1: オペアンプ2：オペアンプ起動トリガ0	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 . 本レジスタで使用しないビットは初期値に設定するようにしてください。
注 1. AMPTRM レジスタを設定した後、AMPTRS レジスタの値を書き換えないでください。

37.2.4 オペアンプコントロールレジスタ（AMPC）

アドレス OPAMP.AMPC 4008 600Bh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	IREFE	—	—	—	—	AMPE[2]	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b2	AMPE[2]	OPAMP動作制御	0：オペアンプ2停止 1：ソフトウェアトリガモード： オペアンプ2の動作許可（注1） 起動トリガモード、または起動およびA/Dトリガモード： AGTが有効になるまで待機	R/W
b6-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b7	IREFE	OPAMP基準電流回路動作制御	0：オペアンプ基準電流回路停止 1：オペアンプ基準電流回路の動作許可	R/W

注 .　本レジスタで使用しないビットは初期値に設定するようにしてください。
注 1.　IREFE ビットの設定にかかわらず、オペアンプ基準電流回路の動作も許可されます。使用しないユニットのビットは 0 にしてください。

各イベントに対応するオペアンプ起動トリガを表 37.2 に示します。

表 37.2　イベントに対応するオペアンプ起動トリガ

トリガ	イベント
オペアンプ起動トリガ0	AGT1コンペアマッチA
オペアンプ起動トリガ1	AGT0コンペアマッチA
オペアンプ起動トリガ2	AGT1コンペアマッチA

37.2.5 オペアンプモニタレジスタ（AMPMON）

アドレス OPAMP.AMPMON 4008 600Ch

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	AMPMON[2]	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

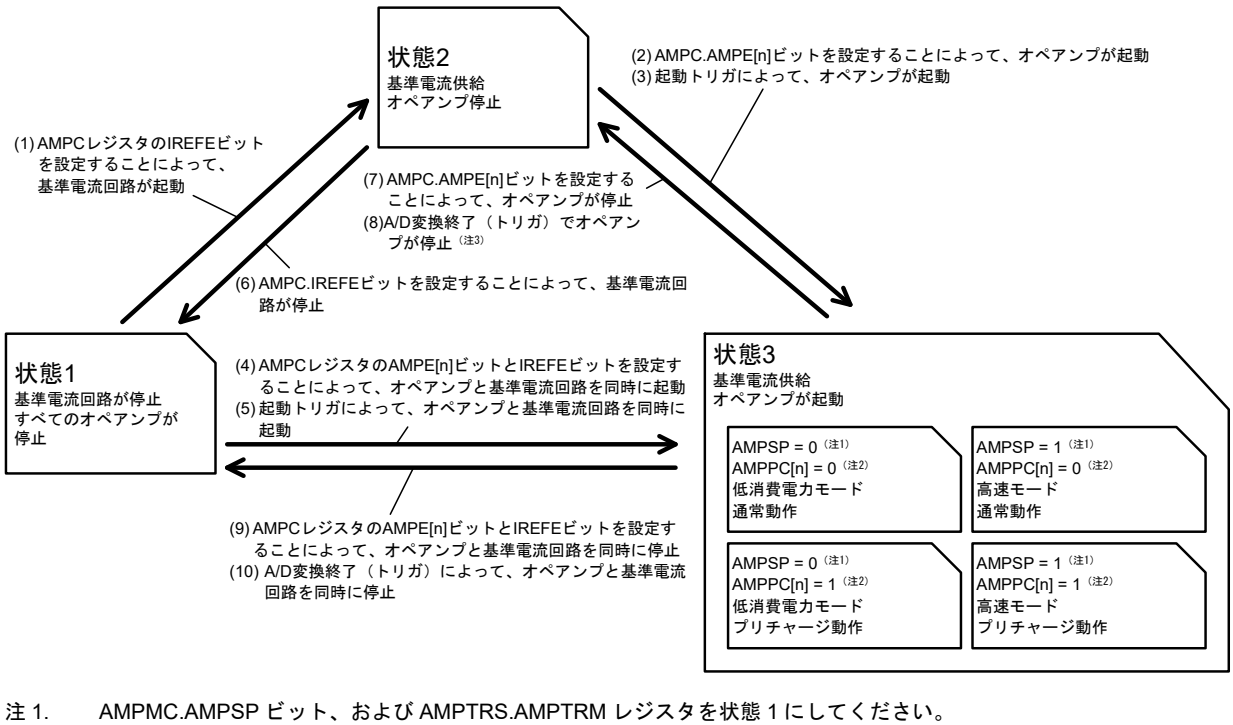
ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b2	AMPMON[2]	オペアンプ2の状態	0：オペアンプ2停止中 1：オペアンプ2動作中	R
b7-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

注 . 本レジスタを使用して、各オペアンプが動作中か停止中かを非同期に反映します。オペアンプの状態を判断するには、継続的に本レジスタを読み出し、ビット状態の変化を判断してください。
起動トリガ、クロックと同期した A/D 変換終了トリガ、または他の割り込みルーチンでのソフトウェアトリガを使用してオペアンプを制御する場合、オペアンプの動作または停止のタイミングは、通常動作を確認するなどの目的で予測することが可能です。この場合、該当のトリガまたはオペアンプの状態に影響する割り込みが発生したら、CPU ／周辺クロックの 1 サイクル後に本レジスタを読み出してください。
本レジスタで使用しないビットは初期値に設定するようにしてください。

37.3　動作説明

37.3.1　状態遷移

オペアンプおよび基準電流回路がオペアンプ制御回路によって起動または停止するときの状態遷移を図 37.2 に示します。



注 1.　AMPMC.AMPSP ビット、および AMPTRS.AMPTRM レジスタを状態 1 にしてください。
注 2.　AMPMC.AMPPC[2] ビットを状態 3 にしてください。
注 3.　A/D 変換の最後にオペアンプだけを停止するには、あらかじめ基準電流回路の動作を有効に設定しておく（状態 3 でオペアンプを動作）必要があります。

図 37.2　オペアンプの状態遷移

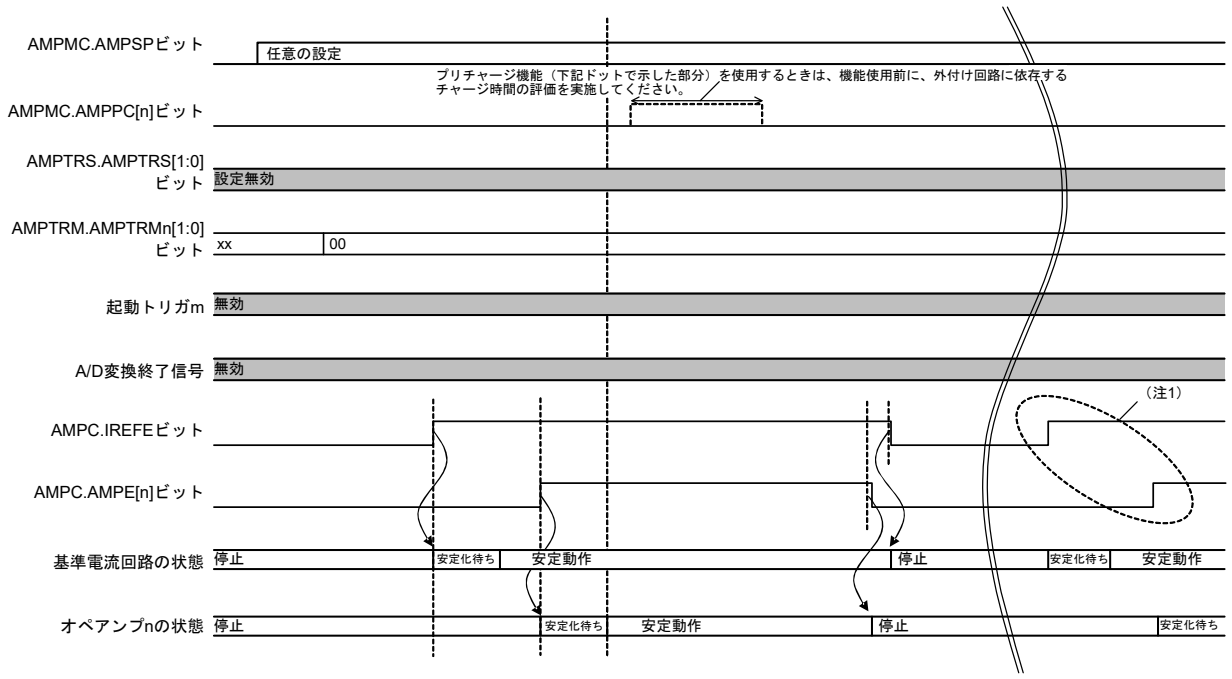
基準電流の供給後は安定待ち時間が必要となり、オペアンプの動作は各動作が実際に開始する前に設定されます。安定待ち時間の詳細は、「48.　電気的特性」を参照してください。

ステップ (2) → (8)、(2) → (10)、(3) → (10)、(4) → (10) では、オペアンプを継続的に起動／停止することはできません。

起動トリガおよび A/D 変換の終了によって、AMPTRM レジスタで、使用することがあらかじめ設定されたオペアンプのみを起動または停止することが可能です。

37.3.2 オペアンプ制御動作

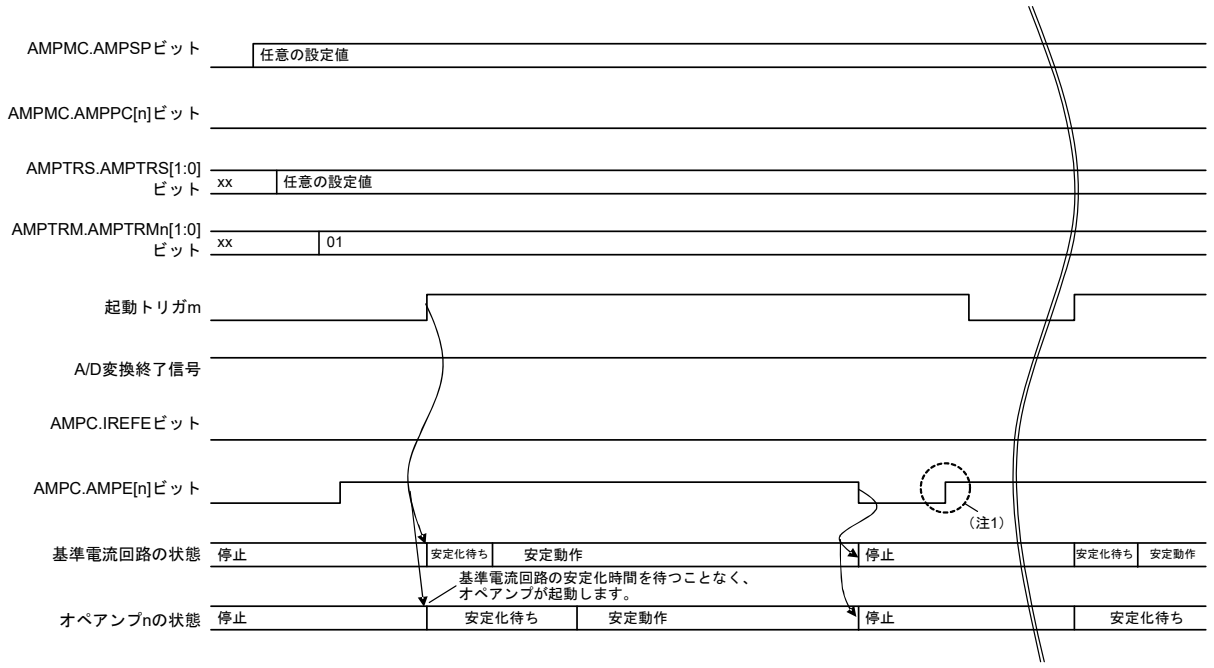
オペアンプの制御動作を図 37.3 ～図 37.6 に示します。



注 . n：ユニット番号（n = 2）
m：AMPTRS レジスタで選択したオペアンプユニット n の制御に使用する起動トリガ

注 1. オペアンプを継続的に動作または停止する場合、オペアンプの停止後に初期設定の場合と同様な IREFE および AMPE[n] ビットの再設定をしてください。

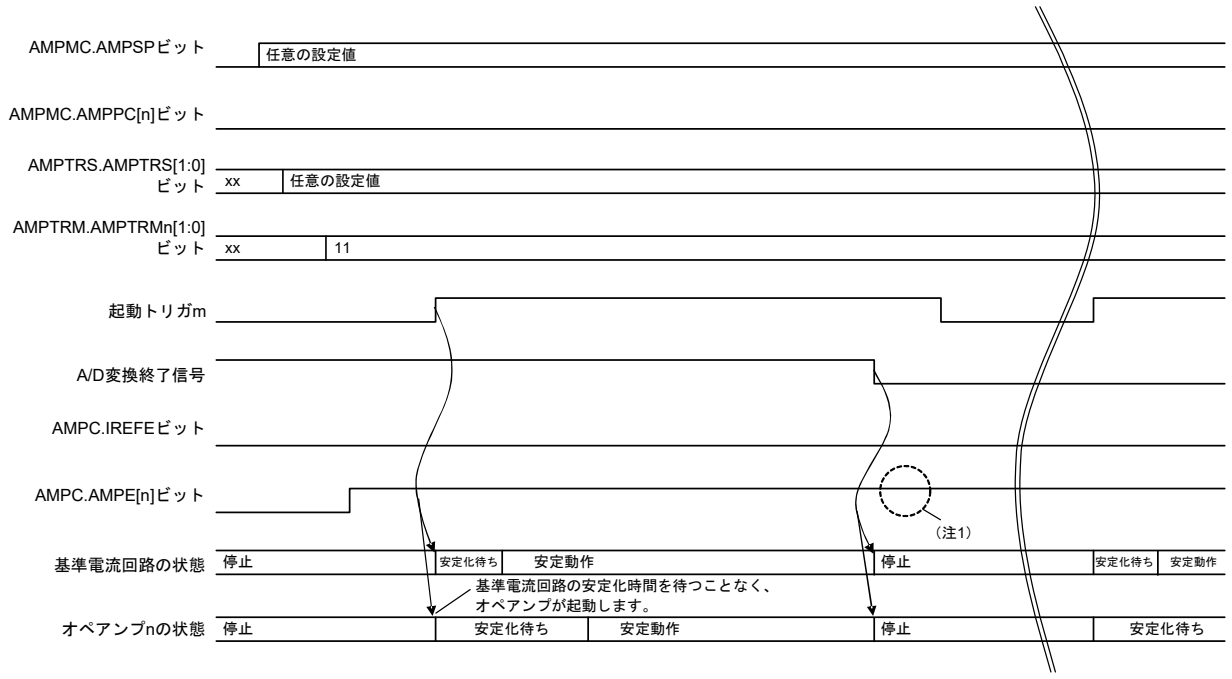
図 37.3 オペアンプの制御動作（ソフトウェアトリガモードによる制御）
（ソフトウェアトリガモードによって基準電流回路およびオペアンプを起動／停止する場合）



注 . n：ユニット番号（n = 2）
m：AMPTRS レジスタで選択したオペアンプユニット n の制御に使用する起動トリガ
AGT 機能を設定してください。

注 1. オペアンプを継続的に動作または停止する場合、初期設定のように AMPE[n] ビットを再設定し、停止後に起動トリガを待つようにオペアンプを設定してください。

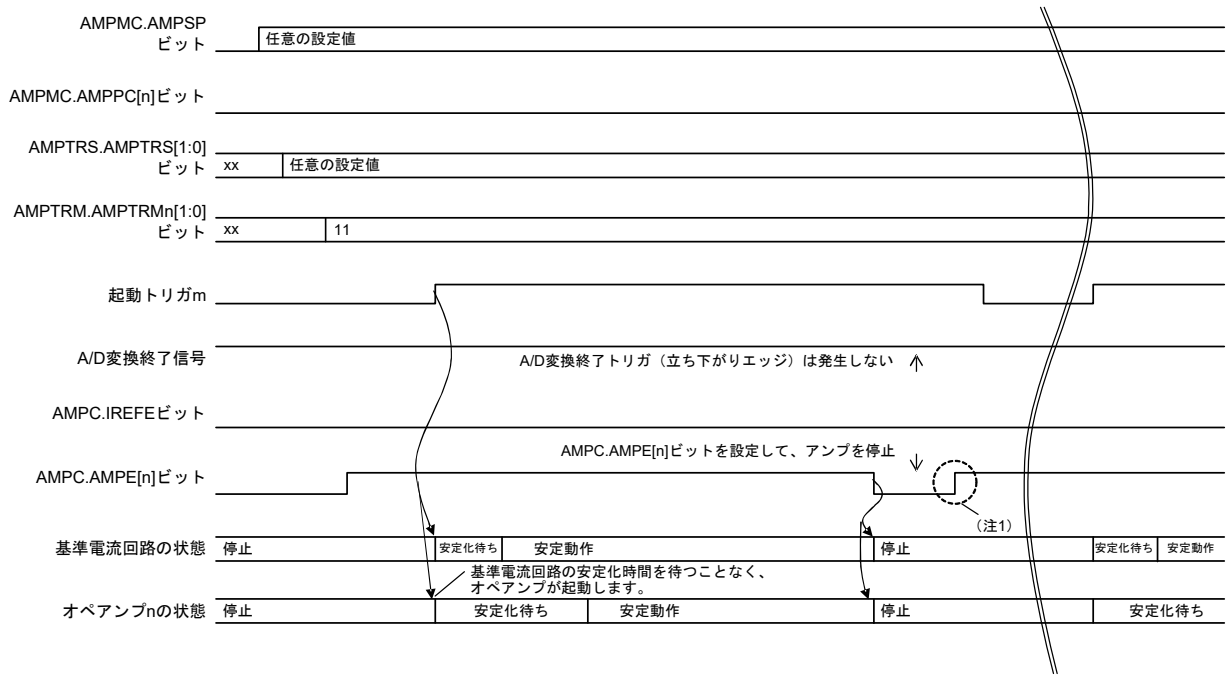
図 37.4 オペアンプの制御動作（起動トリガモードによる起動）（基準電流回路およびオペアンプを起動トリガによって起動し、AMPC レジスタ設定によって停止する場合）



注 . n：ユニット番号（n = 2）
m：AMPTRS レジスタで選択したオペアンプユニット n の制御に使用する起動トリガ
AGT 機能を設定してください。

注 1. オペアンプを継続的に動作または停止する場合、オペアンプは停止後に起動トリガを待つため、レジスタを再設定する必要はありません。

図 37.5 オペアンプの制御動作（起動および A/D トリガモード（1））（基準電流回路およびオペアンプを起動トリガによって起動し、A/D 変換終了（トリガ）によって停止する場合）



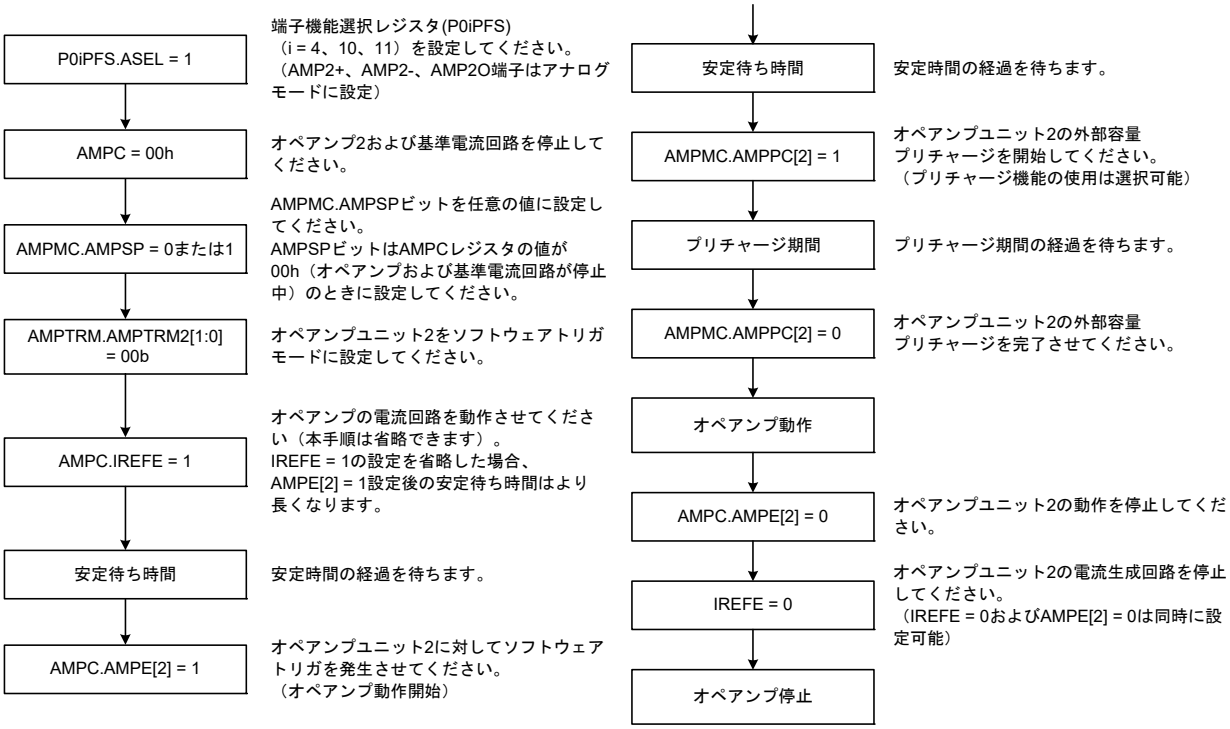
注 . n：ユニット番号（n = 2）
m：AMPTRS レジスタで選択したオペアンプユニット n の制御に使用する起動トリガ
AGT 機能を設定してください。起動トリガによってオペアンプを起動する手順については、37.4 ソフトウェアトリガモードを参照してください。

注 1. オペアンプを継続的に動作または停止する場合、初期設定のように AMPE[n] ビットを再設定し、停止後に起動トリガを待つようにオペアンプを設定してください。

図 37.6 オペアンプの制御動作（起動および A/D トリガモード（2））（基準電流回路およびオペアンプを起動トリガによって起動し、AMPC レジスタの設定によって基準電流回路およびオペアンプを停止する場合）

37.4　ソフトウェアトリガモード

ここでは、ソフトウェアトリガによってオペアンプを起動および停止する手順について説明します。各レジスタの設定例を図 37.7 に示します。



注 .　安定待ち時間の詳細は、「48.　電気的特性」を参照してください。

図 37.7　ソフトウェアトリガモードでの OPAMP 起動および停止手順

37.5 起動トリガモード

ここでは、起動トリガによってオペアンプを起動し、ソフトウェアによって停止する手順について説明します。各レジスタの設定例を図 37.8 に示します。

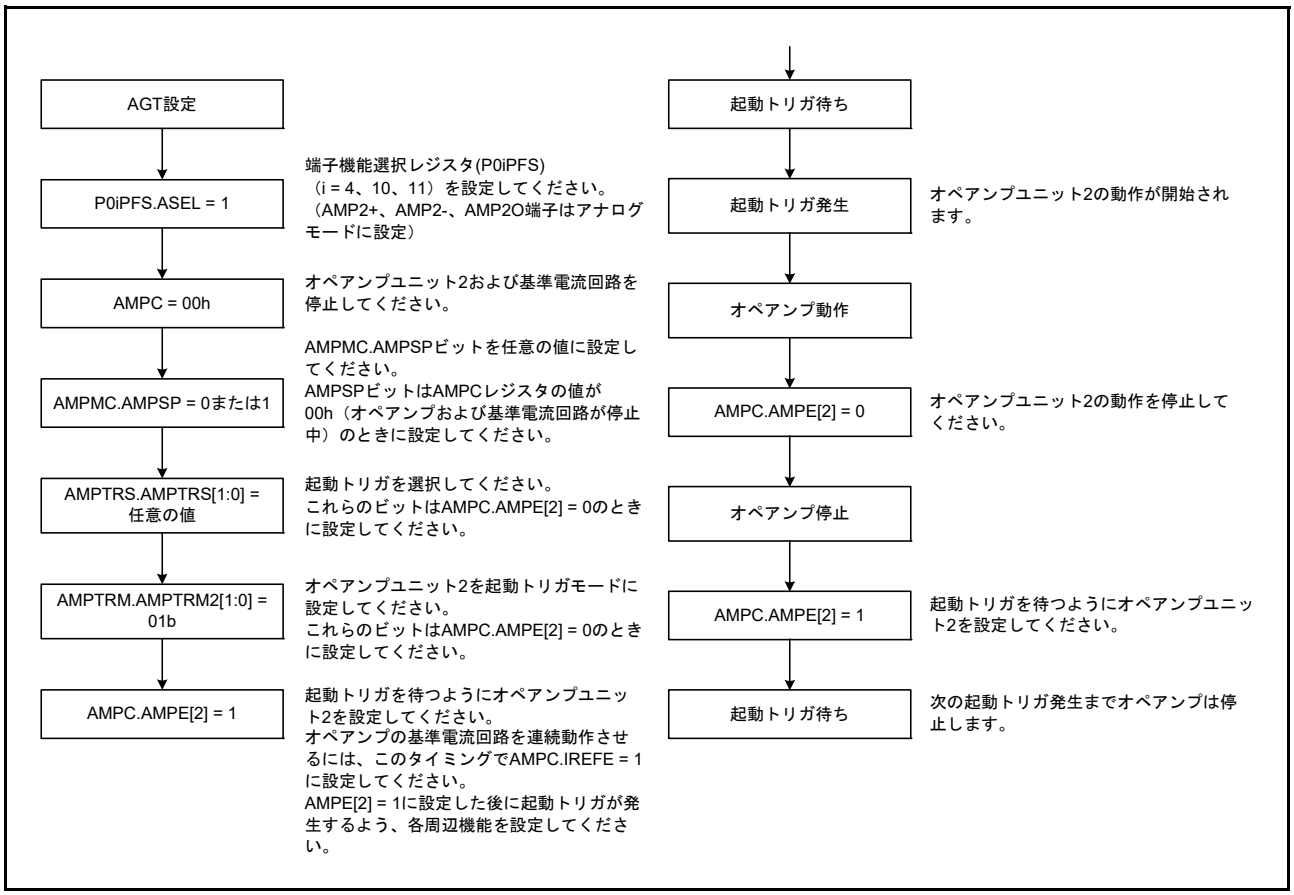


図 37.8 起動トリガモードでの OPAMP 起動および停止手順

37.6 起動および A/D トリガモード

ここでは、起動トリガによってオペアンプを起動し、A/D 変換終了トリガによって停止する手順について説明します。各レジスタの設定例を図 37.9 に示します。

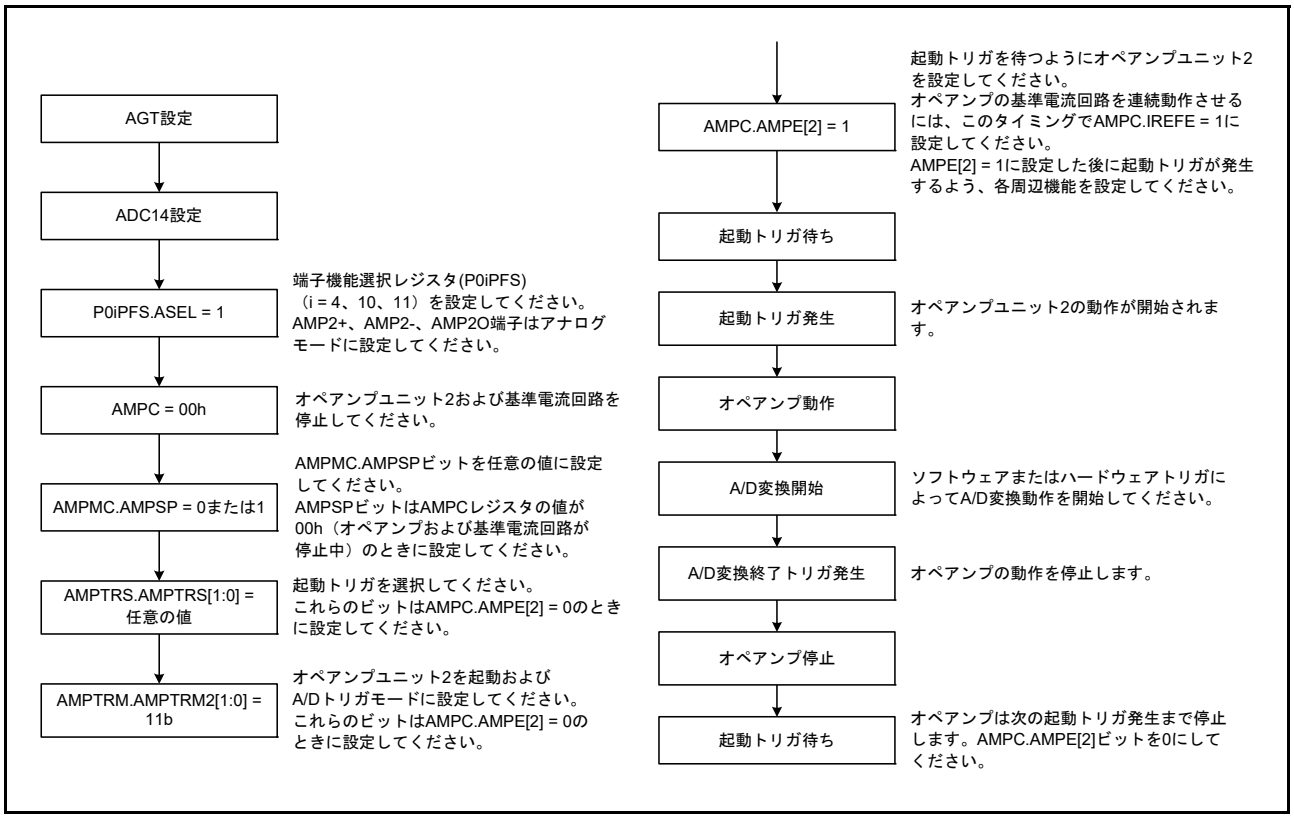


図 37.9 起動トリガによるオペアンプ起動と A/D 変換終了トリガによるオペアンプ停止手順

37.7 使用上の注意事項

AMPC レジスタの設定に加え、オペアンプ機能は起動トリガによって起動でき、A/D 変換終了で停止することが可能です。基準電流回路は A/D 変換終了時に停止できます。アプリケーションシーケンスでは、起動と停止の制御において、これらの非同期トリガが衝突しないような考慮が必要です。

オペアンプのプラスおよびマイナス入力に使用する端子は、A/D コンバータ用のアナログ入力にマルチプレクスされているため、それらの端子で A/D 変換を行わないでください。

38.　低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）

38.1　概要

低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）は、基準入力電圧とアナログ入力電圧を比較します。コンパレータチャネル ACMPLP0 と ACMPLP1 は、それぞれ独立しています。

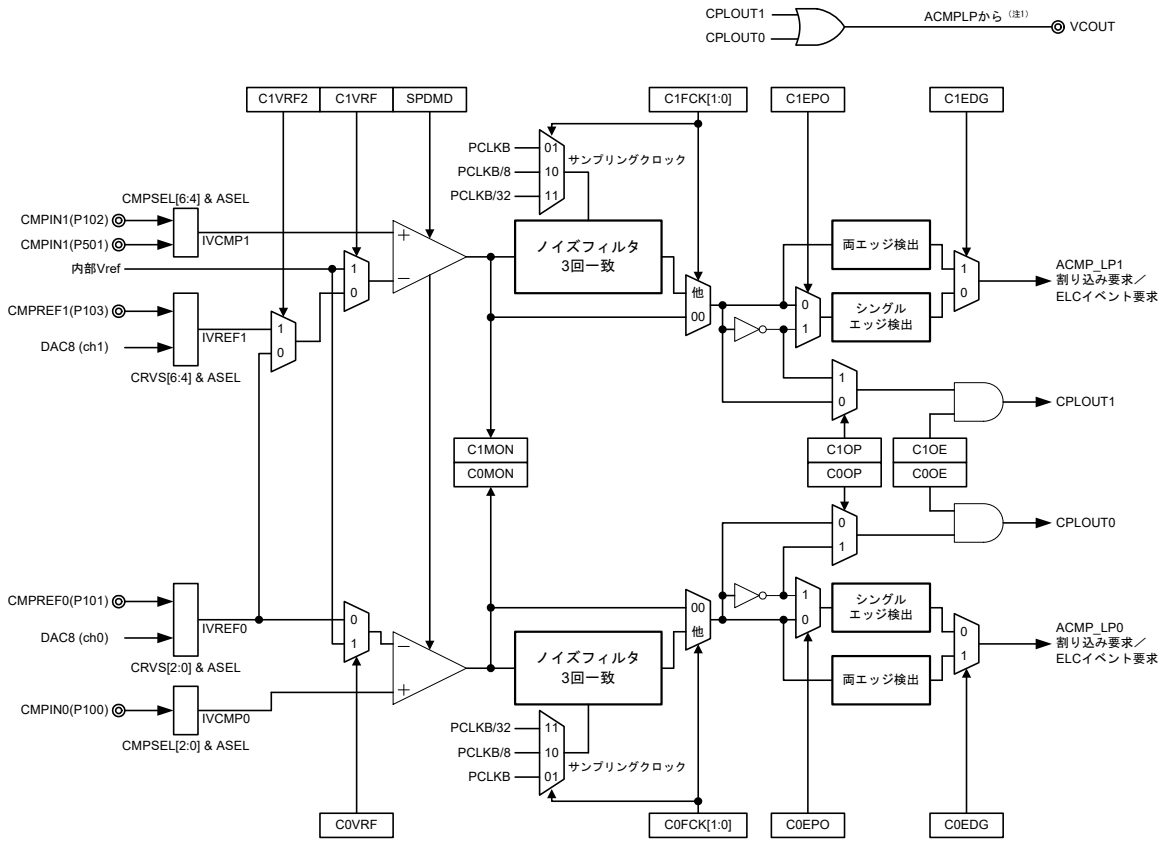
基準入力電圧およびアナログ入力電圧の比較結果はソフトウェアで読み出すことができます。比較結果は外部に出力することもできます。基準入力電圧は、CMPREFi（i = 0, 1）端子への入力、内部 8 ビット D/A コンバータ出力、および MCU の内部に生成された内部基準電圧（Vref）から選択できます。

ACMPLP の応答速度は、動作開始前に設定可能です。High-speed モードを設定すると、応答遅延時間が短くなりますが、電流消費は増加します。Low-speed モードを設定すると、応答遅延時間が長くなりますが、電流消費は低減します。

ACMPLP の特長を表 38.1 に、ウィンドウ機能が無効である場合の ACMPLP のブロック図を図 38.1 に、ウィンドウ機能が有効である場合の ACMPLP のブロック図を図 38.2 に示します。表 38.2 に ACMPLP の入出力端子を示します。

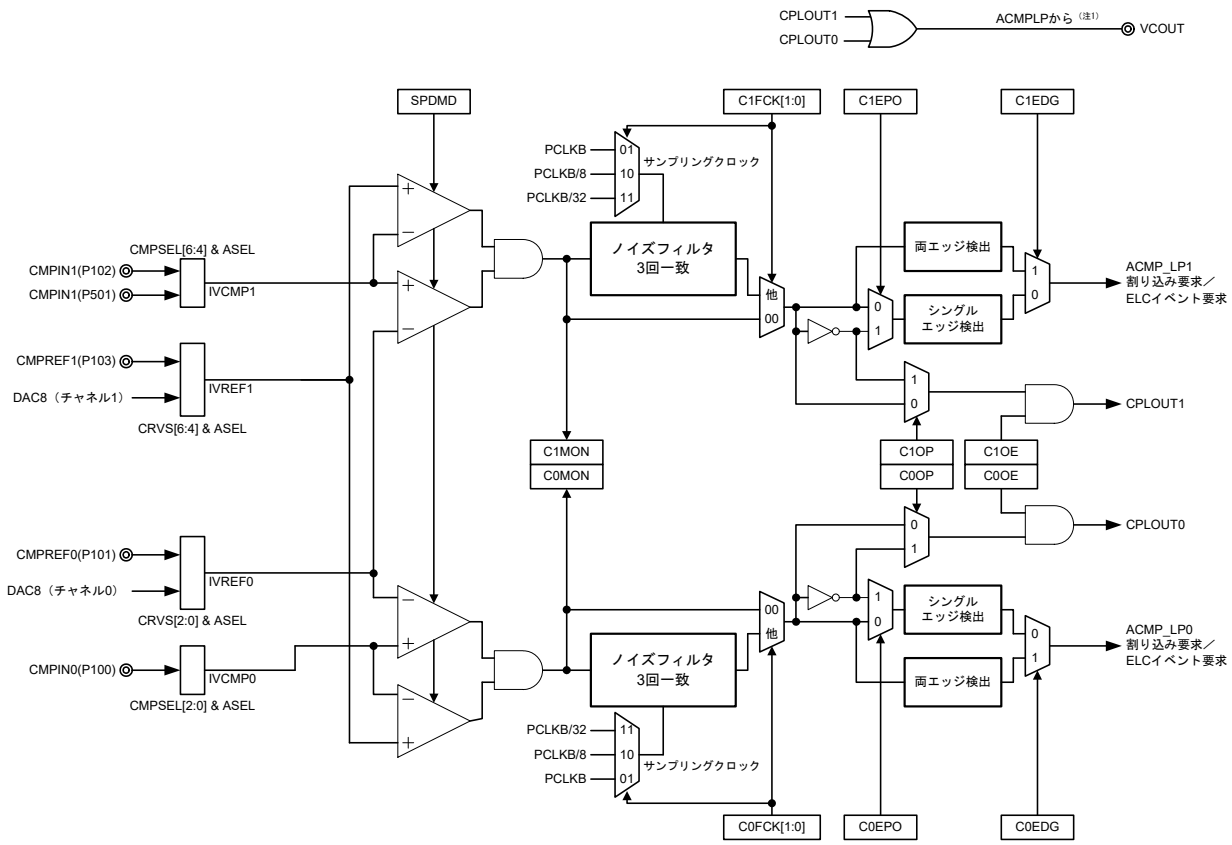
表 38.1　ACMLPの特長

項目	内容
チャネル数	2チャネル：ACMPLP0、ACMPLP1
アナログ入力電圧	CMPINi（i = 0, 1）端子からの入力
基準電圧	• 標準モード（下記のいずれかを選択） – 内部基準電圧（Vref） – CMPREFi（i = 0、1）端子からの入力 – 内部8ビットD/Aコンバータからの出力 • ウィンドウモード（下記のいずれかを選択） – CMPREFi（i = 0、1）端子からの入力 （CMPREF0：低基準、CMPREF1：高基準） – 内部8ビットD/Aコンバータからの出力
コンパレータ出力	• 比較結果 • ELCイベント出力の発生 • レジスタからの出力監視
割り込み要求信号	• 比較結果の有効エッジ検出時に割り込み要求発生 • 立ち上がりエッジ／立ち下がりエッジ／両エッジから選択可能
選択可能な機能	• ノイズフィルタ機能 3つのサンプリング周波数のいずれかを選択可能。フィルタ機能不使用を選択可能 • ウィンドウ機能 ウィンドウ機能の使用／不使用を選択可能 • 低消費電力アナログコンパレータ応答速度 High-speedモードまたはLow-speedモードを選択可能



注 1.　ACMPLP の結果は VCOUT 端子に出力されます。

図 38.1　　ウィンドウ機能無効時の ACMPLP ブロック図



注 1.　ACMPLP の結果は VCOUT 端子に出力されます。

図 38.2　ウィンドウ機能有効時の ACMPLP ブロック図

表 38.2　コンパレータ端子の構成

コンパレータ	基準電圧入力端子		アナログ電圧入力端子		出力端子
	標準モード	ウィンドウ機能モード	標準モード	ウィンドウ機能モード	
ACMPLP0	• IVREF0 (CMPREF0 (P101)/DAC8 (チャネル0)) • 内部Vref （選択可能）	低基準電圧： • IVREF0 (CMPREF0(P101)/DAC8 (チャネル0)) 高基準電圧： • IVREF1 (CMPREF1 (P103)/DAC8 (チャネル1))	• IVCMP0 (CMPIN0(P100))		VCOUT（注1）
ACMPLP1	• IVREF0 (CMPREF0(P101)/DAC8 (チャネル0)) • IVREF1 (CMPREF1 (P103)/DAC8 (チャネル1)) • 内部Vref （選択可能）		• IVCMP1 (CMPIN1(P102)/CMPIN1 (P501)		

注 1.　ACMPLP0 および ACMPLP1 のコンペア出力は VCOUT 端子に出力されます。

38.2　レジスタの説明

38.2.1　ACMPLP モード設定レジスタ（COMPMDR）

アドレス　ACMPLP.COMPMDR 4008 5E00h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	C1MON	C1VRF	C1WDE	C1ENB	C0MON	C0VRF	C0WDE	C0ENB
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	C0ENB	ACMPLP0動作許可	0：コンパレータチャネルACMPLP0を禁止 1：コンパレータチャネルACMPLP0を許可	R/W
b1	C0WDE	ACMPLP0ウィンドウ機能モード許可（注1）（注2）（注6）	0：ACMPLP0に対するウィンドウ機能を禁止 1：ACMPLP0に対するウィンドウ機能を許可	R/W
b2	C0VRF	ACMPLP0基準電圧選択（注6）	0：IVREF0 1：内部基準電圧（Vref）（注4）	R/W
b3	C0MON	ACMPLP0モニタフラグ（注3）	ウィンドウ機能無効時 0：IVCMP0＜ACMPLP0基準電圧 1：IVCMP0＞ACMPLP0基準電圧 ウィンドウ機能有効時 0：IVCMP0＜IVREF0またはIVCMP0＞IVREF1 1：IVREF0＜IVCMP0＜IVREF1	R
b4	C1ENB	ACMPLP1動作許可	0：ACMPLP1動作を禁止 1：ACMPLP1動作を許可	R/W
b5	C1WDE	ACMPLP1ウィンドウ機能モード許可（注1）（注2）（注5）	0：ACMPLP1ウィンドウ機能モード無効 1：ACMPLP1ウィンドウ機能モード有効	R/W
b6	C1VRF	ACMPLP1基準電圧選択（注5）	0：IVREF0またはIVREF1 1：内部基準電圧（Vref）（注4）	R/W
b7	C1MON	ACMPLP1モニタフラグ（注3）	ウィンドウ機能無効時 0：IVCMP1＜ACMPLP1基準電圧 1：IVCMP1＞ACMPLP1基準電圧 ウィンドウ機能有効時 0：IVCMP1＜IVREF0またはIVCMP1＞IVREF1 1：IVREF0＜IVCMP1＜IVREF1	R

注 1.　Low-speed モードが選択されている（COMPOCR.SPDMD ビットが 0）場合は、ウィンドウ機能モードは設定できません。
注 2.　ウィンドウ機能モードでは、本ビットの設定にかかわらずコンパレータの基準電圧が選択されます。
注 3.　リセットが解除された直後は、初期値が 0 です。しかし、コンパレータの動作がいったん許可された後に C0ENB および C1ENB が 0 に設定された場合、値は不定となります。
注 4.　本設定は標準モードでのみ有効です。ウィンドウ機能モードでは、本ビットの設定にかかわらず IVREF0 または IVREF1 が選択されます。
注 5.　C1WDE および C1VRF を変更するには、CRV[6:4] ビットおよび CRV[2:0] ビットを 000b にする必要があります。
注 6.　C0WDE および C0VRF を変更するには、CRV[2:0] ビットを 000b にする必要があります。

38.2.2 ACMPLP フィルタコントロールレジスタ（COMPFIR）

アドレス ACMPLP.COMPFIR 4008 5E01h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	C1EDG	C1EPO	C1FCK[1:0]		C0EDG	C0EPO	C0FCK[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	C0FCK[1:0]	ACMPLP0フィルタ機能選択 （注1）	b1 b0 0 0：サンプリングなし（バイパス） 0 1：PCLKBでサンプリング 1 0：PCLKB/8でサンプリング 1 1：PCLKB/32でサンプリング	R/W
b2	C0EPO	ACMPLP0エッジ極性切り替え （注1）	0：立ち上がりエッジでの割り込みおよびELCイベント要求 1：立ち下がりエッジでの割り込みおよびELCイベント要求	R/W
b3	C0EDG	ACMPLP0エッジ検出選択 （注1）	0：片エッジ検出による割り込みおよびELCイベント要求 1：両エッジ検出による割り込みおよびELCイベント要求	R/W
b5-b4	C1FCK[1:0]	ACMPLP1フィルタ機能選択 （注1）	b5 b4 0 0：サンプリングなし（バイパス） 0 1：PCLKBでサンプリング 1 0：PCLKB/8でサンプリング 1 1：PCLKB/32でサンプリング	R/W
b6	C1EPO	ACMPLP1エッジ極性切り替え （注1）	0：立ち上がりエッジでの割り込みおよびELCイベント要求 1：立ち下がりエッジでの割り込みおよびELCイベント要求	R/W
b7	C1EDG	ACMPLP1エッジ検出選択 （注1）	0：片エッジ検出による割り込みおよびELCイベント要求 1：両エッジ検出による割り込みおよびELCイベント要求	R/W

注 1. CiFCK[1:0]、CiEPO、および CiEDG（i = 0, 1）ビットが変更されると、ACMPLP 割り込み要求および ELC イベント要求が発生する場合があります。これらのビットは、イベントリンクを非選択にした後にのみ変更してください。また、関連する割り込み要求フラグをクリアしてください。

38.2.3 ACMPLP 出力コントロールレジスタ（COMPOCR）

アドレス ACMPLP.COMPOCR 4008 5E02h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	SPDMD	C1OP	C1OE	—	—	C0OP	C0OE	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b1	C0OE	ACMPLP0 VCOUT端子出力許可（注1）	0：ACMPLP0 VCOUT端子出力を禁止 1：ACMPLP0 VCOUT端子出力を許可	R/W
b2	C0OP	ACMPLP0 VCOUT出力極性選択（注1）	0：反転なし 1：反転あり	R/W
b4-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	C1OE	ACMPLP1 VCOUT端子出力許可（注1）	0：ACMPLP1 VCOUT端子出力を禁止 1：ACMPLP1 VCOUT端子出力を許可	R/W
b6	C1OP	ACMPLP1 VCOUT出力極性選択（注1）	0：反転なし 1：反転あり	R/W
b7	SPDMD	ACMPLP0/ACMPLP1速度選択（注2）	0：コンパレータLow-speedモード選択 1：コンパレータHigh-speedモード選択	R/W

注 1. ACMPLP0 および ACMPLP1 の結果出力は VCOUT 端子に出力されます。
注 2. SPDMD ビットを書き換える前に、COMPMDR レジスタの CiENB ビット（i = 0, 1）を 0 にしてください。

38.2.4 コンパレータ入力選択レジスタ（COMPSEL0）

アドレス ACMPLP.COMPSEL0 4008 5E04h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	CMPSEL[6:4]			—	CMPSEL[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	1	0	0	0	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CMPSEL[2:0]	ACMPLP0入力（IVCMP0）選択（注1）	b2 b0 0 0 0：入力なし 0 0 1：CMPIN0 (P100) 上記以外は設定しないでください。	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b4	CMPSEL[6:4]	ACMPLP1入力（IVCMP1）選択（注2）	b6 b4 0 0 0：入力なし 0 0 1：CMPIN1 (P102) 1 0 0：CMPIN1 (P501) 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. CMPSEL[2:0] が 000b でない場合、000b 以外の値を書き込まないでください。
注 2. CMPSEL[6:4] が 000b でない場合、000b 以外の値を書き込まないでください。

38.2.5 コンパレータ基準電圧選択レジスタ（COMPSEL1）

アドレス　ACMPLP.COMPSEL1 4008 5E05h

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CRVS[2:0]	ACMPLP0基準電圧（IVREF0）選択（注1）	b2 b0 0 0 0：入力なし 0 0 1：CMPREF0 (P101) 0 1 0：DAC8（チャネル0）出力 上記以外は設定しないでください。	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6-b0	CRVS[6:4]	ACMPLP1基準電圧（IVREF1）選択（注2）	b6 b4 0 0 0：入力なし 0 0 1：CMPREF1 (P103) 0 1 0：DAC8（チャネル1）出力 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7	C1VRF2	ACMPLP1基準電圧選択2（注3）	0：IVREF0選択 1：IVREF1選択	R/W

注 1.　CRVS[2:0] が 000b でない場合、000b 以外の値を書き込まないでください。
注 2.　CRVS[6:4] が 000b でない場合、000b 以外の値を書き込まないでください。
注 3.　C1VRF2 を変更するには、CRVS[6:4] ビットおよび CRVS[2:0] ビットを 000b にする必要があります。

38.3　動作説明

ACMPLP0 および ACMPLP1 は独立していますが、動作は同じです。コンパレータの動作中に関連するレジスタの値を変更した場合、動作は保証されません。表 38.3 に ACMPLP に関連するレジスタの設定手順を示します。

表 38.3　ACMPLP（i = 0、1）関連レジスタの設定手順

手順番号	レジスタ	ビット	設定内容	
1	MSTPCRD	MSTPD29	0：入力クロック供給	
2	該当のポートmn端子機能選択レジスタ（PmnPFS）	ASEL	アナログ入力を選択	
	COMPSEL0	CMPSEL[2:0]、CMPSEL[6:4]		
3	COMPOCR	SPDMD	コンパレータの応答速度の選択 0：Low-speedモード 1：High-speedモード（注1）	
4	COMPMDR	CiWDE	0：ウィンドウ機能モード無効	1：ウィンドウ機能モード有効（注2）
		CiVRF（注5）	基準電圧の選択	ウィンドウコンパレータ動作 （基準 = IVREF0およびIVREF1（注3））
	COMPSEL1	CRVS[2:0]、CRVS[6:4]、C1VRF2		
	COMPMDR	CiENB	1：動作許可	
5	コンパレータ安定時間t_{cmp}（最小100µs）待機			
6	COMPFIR	CiFCK[1:0]	デジタルフィルタを使用するかどうか、およびサンプリングクロックの選択	
		CiEPO、CiEDG	割り込み要求のエッジ検出条件の選択（立ち上がりエッジ、立ち下がりエッジ、両エッジ）	
7	COMPOCR	CiOP、CiOE	VCOUT出力の設定（極性の選択および出力許可／禁止の設定）	
	該当のポートmn端子機能選択レジスタ（PmnPFS）	PSEL、PMR	VCOUTポート機能を選択	
8	IELSRn	IR、IELS[7:0]	割り込み使用時：割り込みステータスフラグ、ICUイベントリンクの選択（注3）	
9	ELSRn	ELS[7:0]	ELC使用時：イベントリンクの選択（注4）	
10	動作開始			

注 1.　ACMPLP0 および ACMPLP1 は、個別に設定できません。
注 2.　High-speed モードでのみ設定できます（SPDMD = 1）。
注 3.　コンパレータを設定した後、動作が安定するまで不要な割り込みが発生する場合があるため、割り込みフラグを初期化してください。
注 4.　コンパレータを設定した後、動作が安定するまで不要な割り込みが発生する場合があるため、イベントリンク選択を初期化してください。
注 5.　内部基準電圧（Vref）を変更するには、38.2.1　ACMPLP モード設定レジスタ（COMPMDR）に記載の手順に従ってください。

ウィンドウ機能が無効の場合の ACMPLPi（i = 0, 1）の動作例を図 38.3 に示します。以下に示すように、基準入力電圧（IVREFi）または内部基準電圧（Vref）とアナログ入力電圧（IVCMPi）が比較されます。

- アナログ入力電圧が基準入力電圧より高い場合、COMPMDR.CiMON ビットが 1 になります
- アナログ入力電圧が基準入力電圧より低い場合、CiMON ビットが 0 になります

ACMPLPi は割り込みを ICU に出力します。割り込みの詳細は、38.5　ACMPLP 割り込みを参照してください。ACMPLPi は、他のモジュールを起動するためのイベント信号も ELC に出力します。ELC の詳細は、38.6　ELC イベント出力を参照してください。比較中、レジスタの値を変更しないでください。

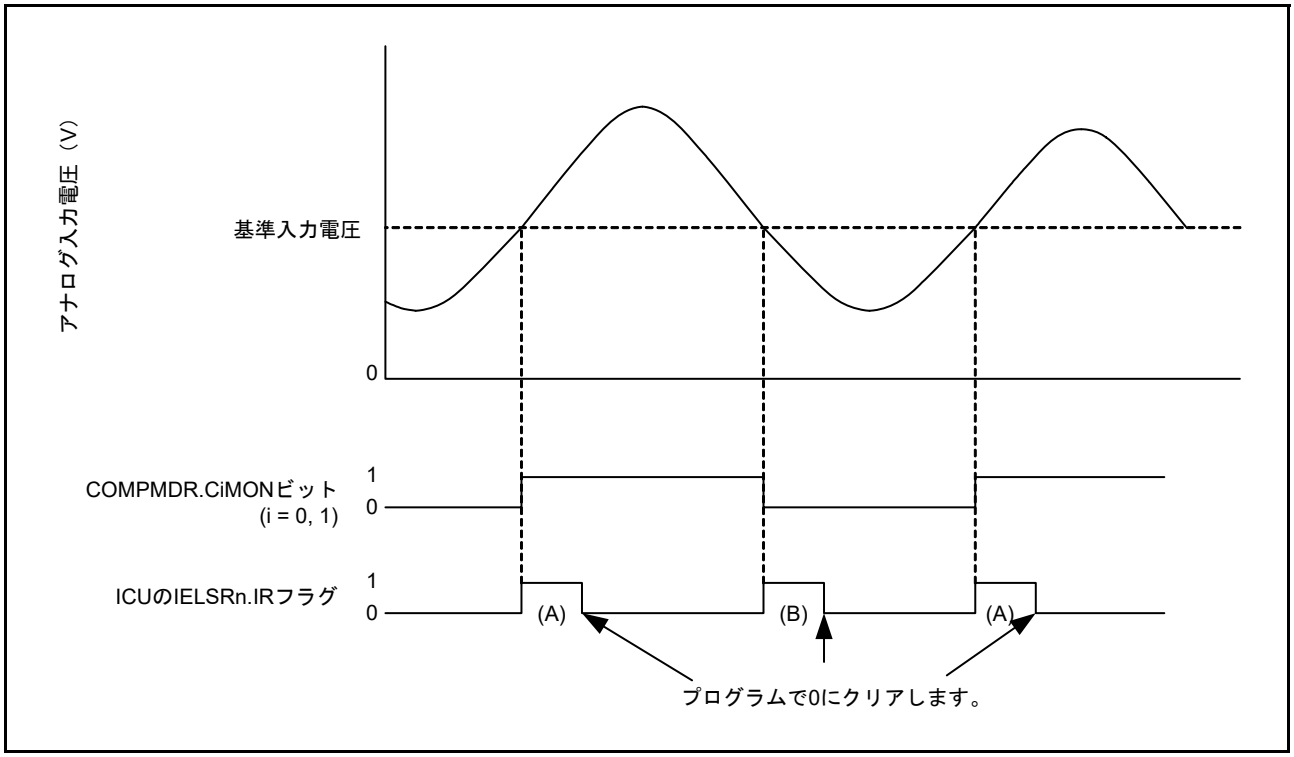


図 38.3　　ウィンドウ機能無効時の ACMPLPi（i = 0, 1）の動作例

以下の条件が成立したとき図 38.3 の内容が適用されます。

- CiFCK[1:0] = 00b（サンプリングなし）かつ CiEDG = 1（両エッジ）のとき
- CiEDG = 0 かつ CiEPO = 0（立ち上がりエッジ）の場合、IELSRn.IR が（A）で示されるように変化したとき
- CiEDG = 0 かつ CiEPO = 1（立ち下がりエッジ）の場合、IELSRn.IR が（B）で示されるように変化したとき

ウィンドウ機能が有効の場合の ACMPLPi（i = 0, 1）の動作例を図 38.4 に示します。

基準電圧（IVREF0/IVREF1）およびアナログ入力電圧が比較されます。CiMON ビットは下記のとおり設定されます。

- IVREF0 ＜アナログ入力電圧＜ IVREF1 のときは 1
- アナログ入力電圧＜ IVREF0、または IVREF1 ＜アナログ入力電圧のときは 0

ACMPLPi は割り込みを ICU に出力します。割り込みの詳細は、38.5　ACMPLP 割り込みを参照してください。ACMPLPi は、他のモジュールを起動するためのイベント信号も ELC に出力します。ELC の詳細は、38.6　ELC イベント出力を参照してください。比較中、レジスタの値を変更しないでください。

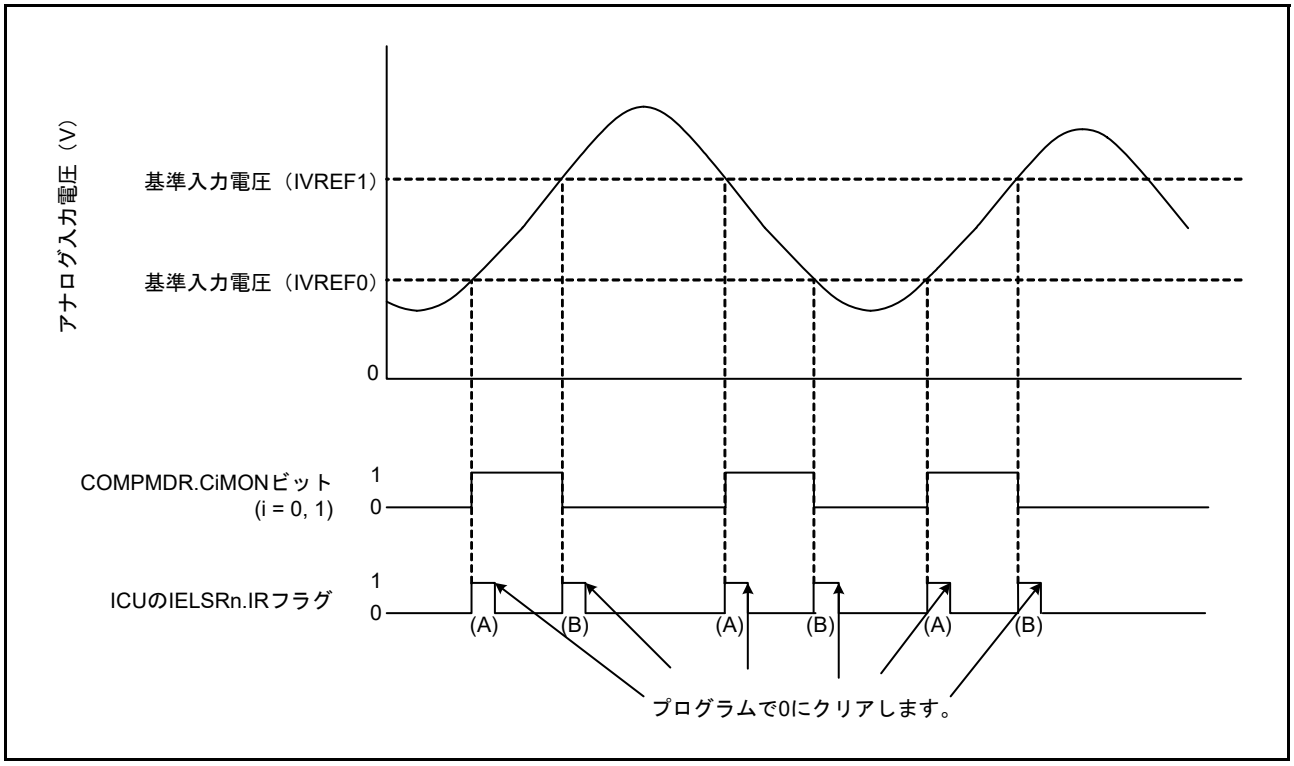


図 38.4　　ウィンドウ機能有効時の ACMPLPi（i = 0, 1）の動作例

以下の条件が成立したとき図 38.4 の内容が適用されます。

- CiFCK[1:0] = 00b（サンプリングなし）かつ CiEDG = 1（両エッジ）のとき
- CiEDG = 0 かつ CiEPO = 0（立ち上がりエッジ）の場合、IELSRn.IR が（A）で示されるように変化したとき
- CiEDG = 0 かつ CiEPO = 1（立ち下がりエッジ）の場合、IELSRn.IR が（B）で示されるように変化したとき

38.4　ノイズフィルタ

ACMPLPi ノイズフィルタの構成を図 38.5 に、動作例を図 38.6 に示します。

COMPFIR.CiFCK[1:0] ビットによってサンプリングクロックの選択が可能です。ACMPLPi からの ACMP_LPi 信号（内部信号）出力は、サンプリングクロック周期ごとにサンプリングされます。レベルが 3 回一致すると、該当の IELSRn.IR ビットが 1（割り込み要求）になり、ELC イベントが出力されます。

ソフトウェアスタンバイモードで割り込みを使用する場合、COMPFIR.CiFCK[1:0] ビットを 00b（バイパス）にします。

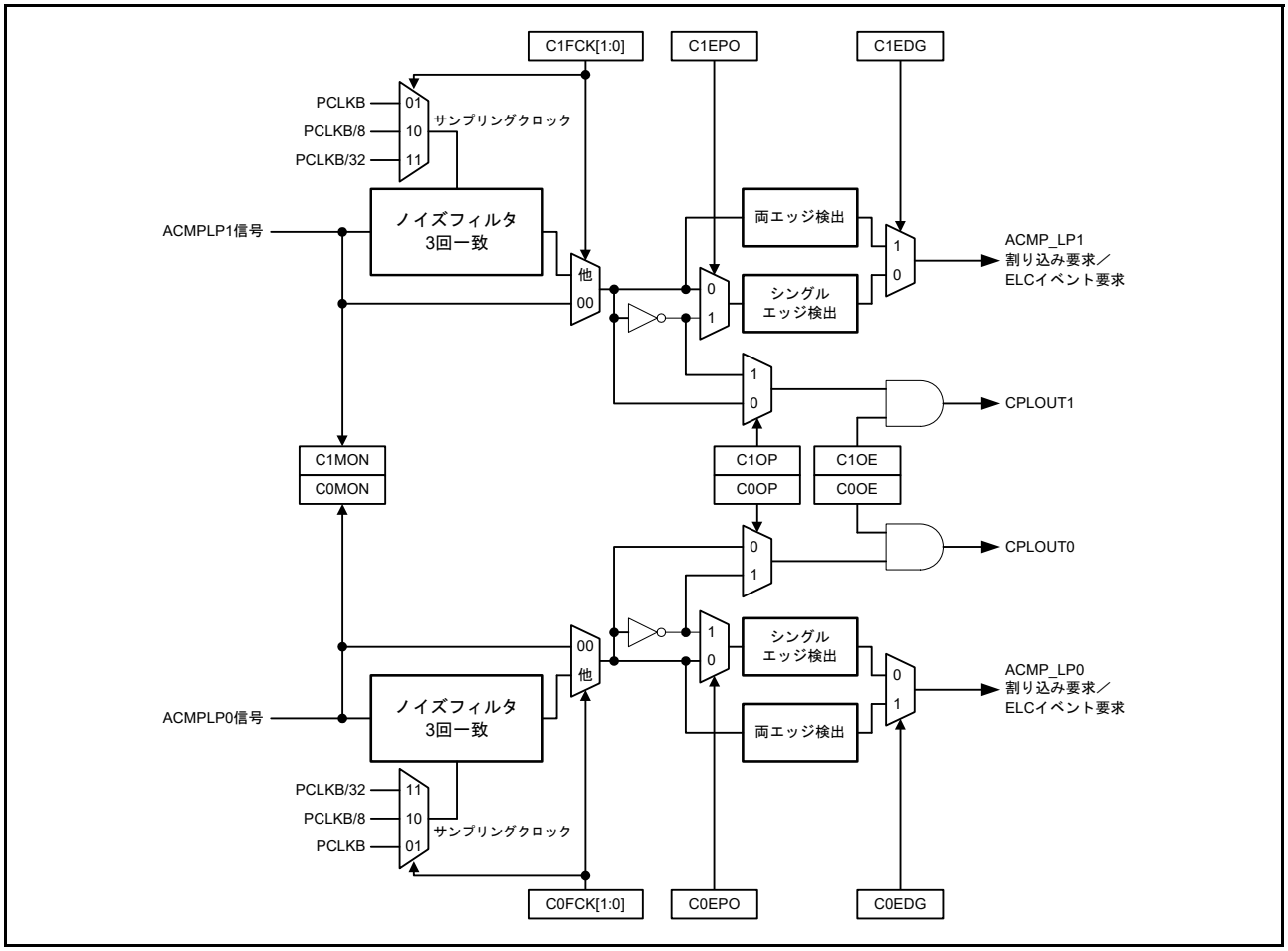


図 38.5　　ノイズフィルタおよびエッジ検出の構成

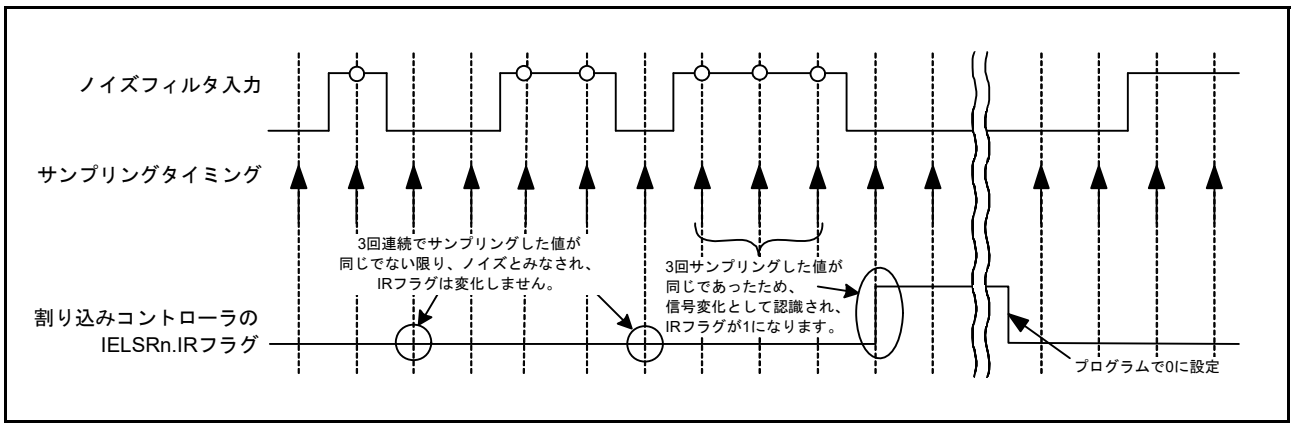


図 38.6　　ノイズフィルタおよび割り込みの動作例

38.5　ACMPLP 割り込み

ACMPLP は、ACMPLP0 および ACMPLP1 から割り込み要求を生成します。ACMPLPi（i = 0, 1）割り込みを使用するには、ICU の IELSRn レジスタで該当のビットを選択してください。COMPFIR.CiEDG ビットによって片エッジ検出または両エッジ検出のいずれかを選択してください。片エッジ検出を選択するときは、CiEPO ビットによって極性を選択してください。

割り込み出力は、COMPFIR.CiFCK[1:0] ビットで選択された、3 つのサンプリングクロックのうち 1 つを使用するノイズフィルタを通過させることも可能です。各サンプリングクロックを選択するには、COMPFIR.CiFCK[1:0] ビットを、01b、10b または 11b にします。ACMPLP0 割り込み要求を使用してソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモードを解除するには、COMPFIR.C0FCK[1:0] を 00b（サンプリングなし）にします。ACMPLP1 割り込み要求は、ソフトウェアスタンバイモードまたはスヌーズモードの解除には使用できません。

38.6　ELC イベント出力

ELC は、ACMPLP 割り込み要求信号を ELC イベント信号として使用し、事前設定モジュールに対してリンク動作が可能です。ACMPLP の ELC イベントを使用するには、ELC の ELSRn レジスタで選択します。ELC イベント要求を使用する場合、COMPFIR.CiFCK[1:0] ビットを 01b、10b、または 11b にします。

38.7　割り込み処理と ELC リンクの関係

ACMPLPi は ELC へイベント信号を出力し、あらかじめ設定していたモジュールの動作を開始することが可能です。割り込み要因の場合と同様に、ACMPLPi から ELC へのイベント信号出力発生の条件は、COMPFIR.CiEDG ビットを設定することで片エッジ検出または両エッジ検出として選択できます。片エッジ検出を選択するときは、CiEPO ビットによって極性を選択できます。

38.8　コンパレータ端子出力

ACMPLPi からの比較結果は外部端子に出力できます。COMPOCR.CiOP および CiOE ビットを使用して、出力極性（非反転出力または反転出力）、および比較出力の許可または禁止を設定できます。

ACMPLP 比較結果を CPLOUTi によって VCOUT 出力端子に出力するには、I/O レジスタの該当のポート mn 端子機能制御レジスタ（PmnPFS）を設定してください。

レジスタ設定および関連するコンパレータ出力については、38.2.3　ACMPLP 出力コントロールレジスタ（COMPOCR）を参照してください。

38.9　使用上の注意事項

38.9.1　モジュールストップ機能の設定

モジュールストップコントロールレジスタによって、ACMPLP の動作を許可または禁止することが可能です。ACMPLP は、リセット後の初期状態では動作が停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

38.9.2　A/D コンバータとの関係

ACMPLP アナログ入力と A/D コンバータアナログ入力を同時に使用する場合は制限がかかります。詳細は、34.8.13　ADC14、OPAMP、ACMPLP 間の関係を参照してください。

39.　8 ビット D/A コンバータ（DAC8）

39.1　概要

表 39.1 に 8 ビット D/A コンバータの仕様を、図 39.1 にブロック図を示します。

表 39.1　　8ビットD/Aコンバータの仕様

項目	内容
分解能	8ビット
出力チャネル	2チャネル
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態を設定して消費電力を低減

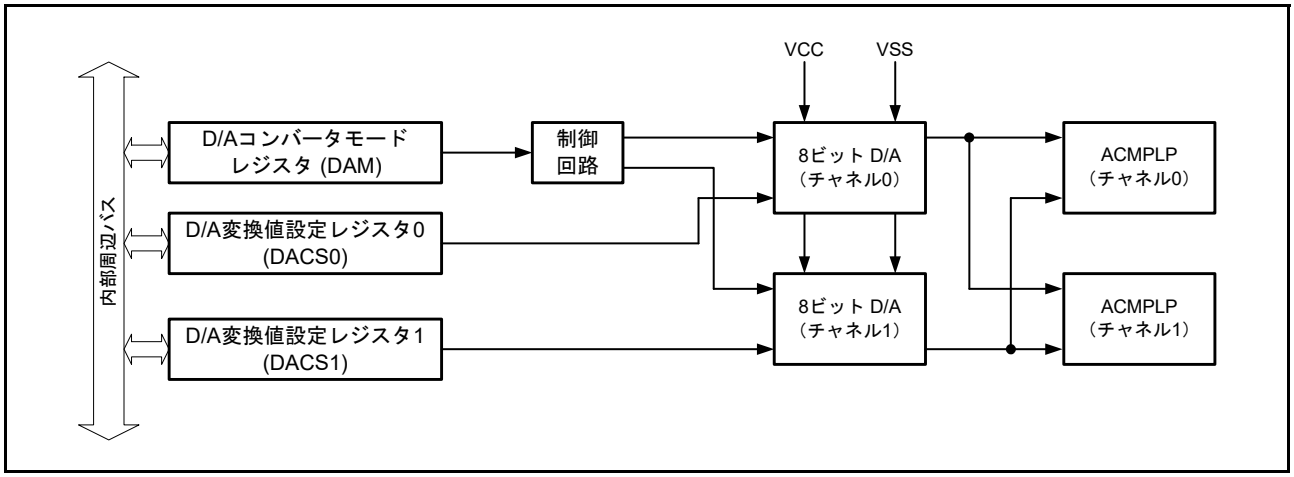


図 39.1　　8 ビット D/A コンバータのブロック図

39.2　レジスタの説明

39.2.1　D/A 変換値設定レジスタ n（DACSn）（n = 0, 1）

アドレス　DAC8.DACS0 4009 E000h, DAC8.DACS1 4009 E001h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	DACS[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

DACSn レジスタは、D/A 変換を行うデータを格納するための 8 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。D/A 変換が許可されている場合、DACSn レジスタの値が変換され、ACMPLP に出力されます。

8 ビット D/A コンバータ出力が COMPSEL1 レジスタにおいて ACMPLP の基準入力として選択されており、ACMPLP 動作が有効（COMPMDR.CnENB = 1）の場合、使用中のチャネルについて DACS[7:0] ビットを変更しないでください。

39.2.2　D/A コンバータモードレジスタ（DAM）

アドレス　DAC8.DAM 4009 E003h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	DACE1	DACE0	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	DACE0	D/A動作許可0	0：チャネル0のD/A変換を禁止 1：チャネル0のD/A変換を許可	R/W
b5	DACE1	D/A動作許可1	0：チャネル1のD/A変換を禁止 1：チャネル1のD/A変換を許可	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DACEn ビット（D/A 動作許可 n）（n = 0, 1）

D/A 変換を許可または禁止します。

8 ビット D/A コンバータ出力が COMPSEL1 レジスタにおいて ACMPLP の基準入力として選択されており、ACMPLP 動作が有効（COMPMDR.CnENB = 1）の場合、使用中のチャネルについて DACEn ビットを変更しないでください。

39.3　動作説明

8 ビット D/A コンバータには 2 チャネルの D/A 変換回路があり、それぞれが独立して動作を行うことができます。DAM.DACEn ビット（n = 0, 1）を 1 にすると、8 ビット D/A コンバータが有効になり、変換結果が ACMPLP に出力されます。

以下にチャネル 0 の D/A 変換動作例を示します。

1. DACS0 レジスタに D/A 変換を行うためのデータを設定します。
2. DAM.DACE0 ビットを 1 にすると、D/A 変換を開始します。変換結果は ACMPLP に出力されます。DACS0 が書き換えられるまで、または DAM.DACE0 ビットが 0（D/A 変換禁止）になるまで、変換結果が出力され続けます。
   出力値（参考）は以下の式で計算します。

$$\frac{\text{DACS0 レジスタ}}{256} \times \text{VCC}$$

3. COMPSEL1 レジスタを設定し、8 ビット D/A コンバータを基準電圧として選択してください。
4. COMPMDR.CiENB ビットを 1 にします。
5. コンパレータ安定時間 T_{cmp}（最小 100µs）待機します。詳細は、「38.　低消費電力アナログコンパレータ（ACMPLP）」を参照してください。

39.4　使用上の注意事項

39.4.1　モジュールストップ状態

モジュールストップコントロールレジスタによって、8 ビット D/A コンバータの動作を許可または禁止することが可能です。8 ビット D/A コンバータは、リセット後は動作が停止します。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

39.4.2　モジュールストップ状態での 8 ビット D/A コンバータの動作

D/A 変換を許可した状態で MCU がモジュールストップ状態になると、D/A 出力が保存されます。電源電流は、D/A 変換中の値と同じです。モジュールストップ状態のときに電源電流の低減が必要な場合は、DAM.DACEn ビットを 0 にして D/A 変換を禁止してください。

39.4.3　ソフトウェアスタンバイモード時の 8 ビット D/A コンバータの動作

D/A 変換を許可した状態で MCU がソフトウェアスタンバイモードになると、D/A 出力が保存されます。電源電流は D/A 変換中の値と同じです。ソフトウェアスタンバイモード時に電源電流の低減が必要な場合は、DAM.DACEn ビットを 0 にして D/A 変換を禁止してください。

39.4.4　D/A コンバータを使用しないとき

8 ビット D/A コンバータを使用しないときは、DAM.DACEn ビットを 0（出力禁止）および DACSn レジスタを 00h にすることにより、電流が流れず電流消費を低減することが可能です。

40.　静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）

40.1　概要

静電容量式タッチセンシングユニット（CTSU）は、タッチセンサの静電容量を測定します。ソフトウェアで静電容量の変化を判定することによって、指などがタッチセンサに接触したことを検出できます。通常、タッチセンサの電極表面は電気絶縁体で覆われており、指が電極に直接接触することはありません。

図 40.1 に示すように、電極と周囲の導電体との間には静電容量（寄生容量）が存在します。人体も導電体ですので、電極に指が近づくと静電容量が増加します。

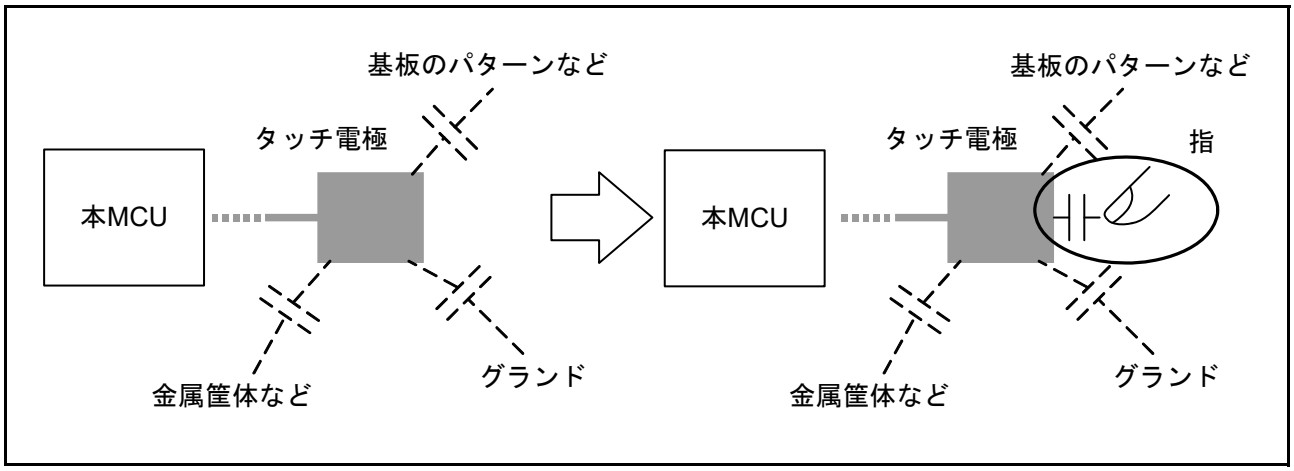


図 40.1　　指による静電容量の増加

静電容量の検出方式には、自己容量方式と相互容量方式があります。自己容量方式では、指と 1 つの電極との間に生じる静電容量を検出します。一方、相互容量方式は、2 つの電極を送信電極と受信電極として使用し、指が接近することによって両者の間に生じる静電容量の変化を検出する方式です。

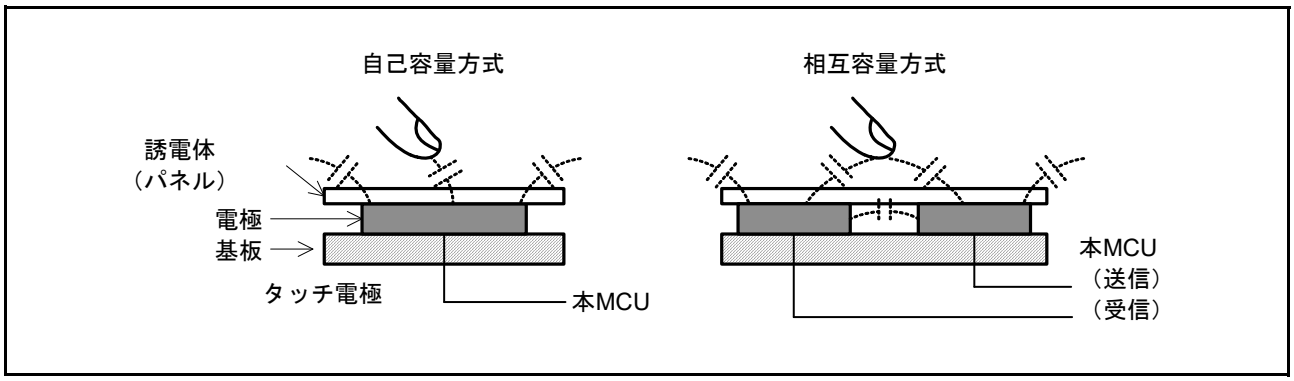


図 40.2　　自己容量方式と相互容量方式

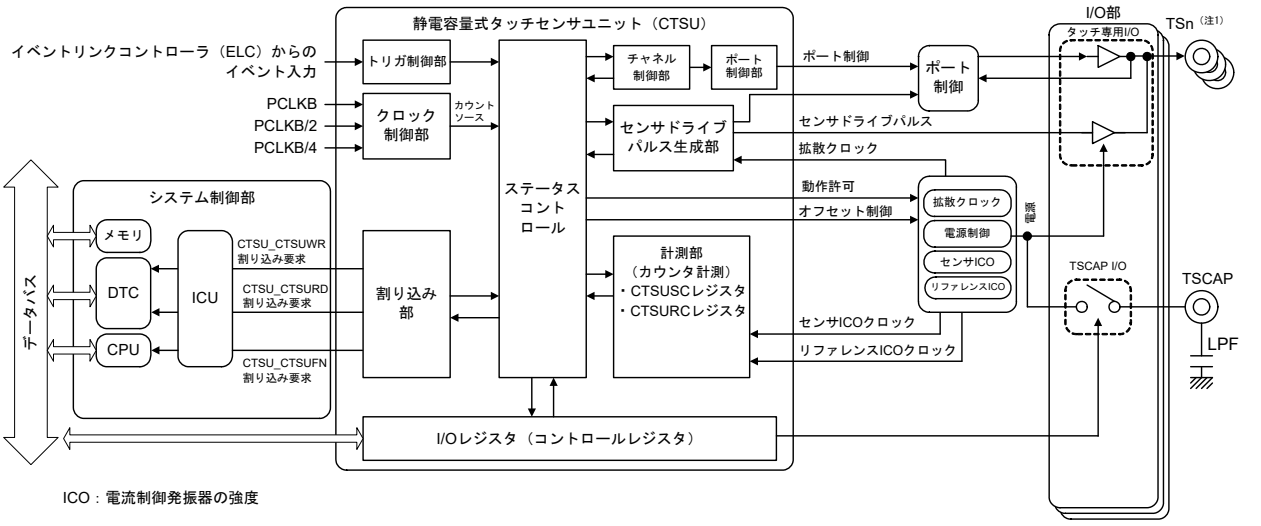
静電容量の測定は、充放電電流の量に応じて周波数が変化するクロック信号を一定の時間カウントすることにより行います。CTSU の計測原理の詳細については、40.3.1　計測動作原理を参照してください。表 40.1 に CTSU の仕様を、図 40.3 にブロック図を示します。

表 40.1　　CTSUの仕様

項目		機能
動作クロック		PCLKB, PCLKB/2, PCLKB/4
端子	静電容量計測	11チャネル（TS00、TS01、TS03、TS10、TS12、TS13、TS18、TS28、TS30、TS31、TS34）
	TSCAP	LPF（Low Pass Filter）接続端子
計測モード	自己容量シングルスキャンモード	自己容量方式で1チャネルの静電容量を計測
	自己容量マルチスキャンモード	自己容量方式で複数チャネルの静電容量を連続して計測
	相互容量フルスキャンモード	相互容量方式で複数チャネルの静電容量を連続して計測
ノイズ対策		同期系ノイズ対策、高域ノイズ対策
計測開始条件		• ソフトウェアトリガ • 外部トリガ（イベントリンクコントローラ（ELC）からのELC_CTSU）

CTSU は、図 40.3 に示すように以下のコンポーネントで構成されます。

- ステータス制御部
- トリガ制御部
- クロック制御部
- チャネル制御部
- ポート制御部
- センサドライブパルス生成部
- 計測部
- 割り込み部
- I/O レジスタ



注 1.　　n = 00, 01, 03, 10, 12, 13, 18, 28, 30, 31, 34

図 40.3　　CTSU のブロック図

表 40.2　　CTSU端子の構成

端子名	入出力	機能
TS00, TS01, TS03, TS10, TS12, TS13, TS18, TS28, TS30, TS31, TS34	入力	静電容量計測端子（タッチ端子）
TSCAP	—	LPF接続端子

40.2　レジスタの説明

40.2.1　CTSU コントロールレジスタ 0（CTSUCR0）

アドレス　CTSU.CTSUCR0 4008 1000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	CTSUINIT	—	CTSUSNZ	CTSUCAP	CTSUSTRT
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CTSUSTRT	CTSU計測動作開始	0：計測動作停止（注1） 1：計測動作開始	R/W
b1	CTSUCAP	CTSU計測動作開始トリガ選択	0：ソフトウェアトリガ 1：外部トリガ	R/W
b2	CTSUSNZ	CTSU待機時省電力有効	待機時省電力機能を設定します。 0：待機時省電力機能無効 1：待機時省電力機能有効	R/W
b3	—	予約ビット	読むと0が読み出されます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	CTSUINIT	CTSU制御部初期化	1を書くと、CTSU制御部と、CTSUSC、CTSURC、CTSUMCH0、CTSUMCH1、CTSUSTの各レジスタが初期化されます。読むと0が読めます。	W
b7-b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　CTSU を使用しない場合、本ビットは 0 に固定してください。

CTSUCAP ビットと CTSUSNZ ビットの設定は、CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。計測動作開始時に同時に設定可能です。

CTSUSTRT ビット（CTSU 計測動作開始）

計測動作の開始または停止を指定します。CTSUCAP ビットが 0 のとき、ソフトウェアが CTSUSTRT ビットに 1 を書き込むこと（ソフトウェアトリガ）により計測を開始し、ハードウェアが CTSUSTRT ビットを 0 にすると停止します。CTSUCAP ビットが 1 のとき、CTSUSTRT ビットに 1 を書き込むことにより外部トリガの待機状態となり、外部トリガの立ち上がりで計測を開始します。計測が終了したら、次の外部トリガの待機状態となり動作が継続されます。

CTSU の状態を表 40.3 に示します。

表 40.3　CTSUの状態

CTSUSTRTビット	CTSUCAPビット	CTSUの状態
0	0	停止
0	1	停止
1	0	計測中
1	1	計測中および外部トリガ待ち（注1）

注 1.　CTSUST.CTSUSTC[2:0] フラグで以下のとおり状態を判断できます。
計測中：CTSUST.CTSUSTC[2:0] フラグ≠ 000b
外部トリガ待ち：CTSUST.CTSUSTC[2:0] フラグ = 000b

CTSUSTRT ビットがすでに 1 になっている場合、ソフトウェアで本ビットを 1 にしても、その書き込みは無視され動作が継続します。CTSUSTRT ビットが 1 のとき、ソフトウェアにより動作を強制的に終了する場合は、CTSUSTRT ビットを 0 にして、同時に CTSUINIT ビットを 1 にしてください。

CTSUCAP ビット（CTSU 計測動作開始トリガ選択）

計測開始条件を指定します。詳細は、CTSUSTRT ビット（CTSU 計測動作開始）を参照してください。

CTSUSNZ ビット（CTSU 待機時省電力有効）

待機時省電力動作の有効または無効を選択します。また、本ビットにより CTSU 電源はサスペンド状態になり、待機状態の低消費電力化が可能になります。サスペンド状態では、CTSU 電源は OFF になりますが外部 TSCAP は引き続き充電されます。

CTSU 電源状態制御を表 40.4 に示します。

表 40.4　　CTSU 電源の状態制御

CTSUCR1.CTSUPON ビット	CTSUSNZ ビット	CTSUCAP ビット	CTSUSTRT ビット	CTSU 電源の状態
0	0	0	0	停止
1	0	—	—	動作
1	1	0	0	サスペンド状態

注 .　　上記以外は設定しないでください。

サスペンド状態から計測を開始する場合は、CTSUSNZ ビットを 0 にしてから CTSUSTRT ビットを 1 にしてください。計測終了後、モジュールをサスペンド状態にするには、CTSUSNZ ビットを 1 にしてください。

CTSUINIT ビット（CTSU 制御部初期化）

1 を書き込むと、内部コントロールレジスタを初期化します。動作中に強制終了させる場合は、CTSUSTRT ビットを 0 にして、同時に CTSUINIT ビットを 1 にしてください。この場合は動作が停止し、内部コントロールレジスタが初期化されます。

CTSUSTRT ビットが 1 のとき、CTSUINIT ビットに 1 を書き込まないでください。

40.2.2 CTSU コントロールレジスタ 1（CTSUCR1）

アドレス CTSU.CTSUCR1 4008 1001h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CTSUMD[1:0]		CTSUCLK[1:0]		CTSUATUNE1	CTSUATUNE0	CTSUCSW	CTSUPON
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	CTSUPON	CTSU電源供給許可	CTSU電源供給を制御します。 0：電源OFF 1：電源ON	R/W
b1	CTSUCSW	CTSU LPF容量充電制御	TSCAP端子に接続されるLPF容量の充電を制御します。 0：容量スイッチOFF 1：容量スイッチON	R/W
b2	CTSUATUNE0	CTSU電源動作モード設定	VCC≧2.4V 0：通常動作モード 1：低電圧動作モード VCC＜2.4V 0：設定禁止 1：低電圧動作モード	R/W
b3	CTSUATUNE1	CTSU電源能力調整	0：通常出力 1：高出力	R/W
b5-b4	CTSUCLK[1:0]	CTSU動作クロック選択	CTSUの動作クロックを選択します。 b5 b4 0 0：PCLKB 0 1：PCLKB/2（PCLKBを2分周したクロック） 1 0：PCLKB/4（PCLKBを4分周したクロック） 1 1：設定禁止	R/W
b7-b6	CTSUMD[1:0]	CTSU計測モード選択	CTSUの計測モードを選択します。 b7 b6 0 0：自己容量シングルスキャンモード 0 1：自己容量マルチスキャンモード 1 0：設定禁止 1 1：相互容量フルスキャンモード	R/W

CTSUCR1 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUPON ビット（CTSU 電源供給許可）

CTSU の電源制御を行います。CTSUPON ビットと CTSUCSW ビットには同じ値を設定してください。

CTSUCSW ビット（CTSU LPF 容量充電制御）

容量スイッチの ON/OFF により、TSCAP 端子に接続される LPF 容量の充電制御を行います。容量スイッチを ON にしてから TSCAP 端子に接続している容量が充電されるまで、一定時間待った後、CTSUCR0.CTSUSTRT を 1 にして計測を開始してください。計測に先立って、I/O ポートで TSCAP 端子に Low を出力し、すでに充電されている LPF 容量を放電してください。CTSUPON ビットと CTSUCSW ビットには同じ値を設定してください。

CTSUATUNE0 ビット（CTSU 電源動作モード設定）

CTSU の電源動作モードを設定します。本ビットを CTSU を動作させる VCC の下限に設定してください。たとえば、バッテリ動作に応じて VCC が変動するシステムでタッチ計測を行う場合、初期の VCC 電圧にかかわらず本ビットを 1 にしてください。VCC 電圧範囲は 2 ～ 3V です。

CTSUATUNE1 ビット（CTSU 電源能力調整）

CTSU の電源能力を設定します。通常は 0 にしてください。

CTSUCLK[1:0] ビット（CTSU 動作クロック選択）

動作クロックを選択します。

CTSUMD[1:0] ビット（CTSU 計測モード選択）

計測モードを設定します。詳細は、40.3.2　計測モードを参照してください。

40.2.3　CTSU 同期ノイズ低減設定レジスタ（CTSUSDPRS）

アドレス　CTSU.CTSUSDPRS 4008 1002h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	CTSUSOFF	CTSUPRMODE[1:0]		CTSUPRRATIO[3:0]			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	CTSUPRRATIO[3:0]	CTSU計測時間、計測パルス数調整	計測時間、パルス数を設定します。 推奨設定値：3（0011b）	R/W
b5-b4	CTSUPRMODE[1:0]	CTSU基本周期、基本パルス数設定	基本パルス数を設定します。 b5　b4 0　0：510パルス 0　1：126パルス 1　0：62パルス（推奨設定値） 1　1：設定禁止	R/W
b6	CTSUSOFF	CTSU高域ノイズ低減機能OFF設定	高域ノイズを低減するためのスペクトラム拡散機能を制御します。 0：ONに設定 1：OFFに設定	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CTSUSDPRS レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUPRRATIO[3:0] ビット（CTSU 計測時間、計測パルス数調整）

以下の式を使用して計測時間と計測パルス数を設定し、CTSUPRMODE[1:0] ビットの設定により基本パルス数が決定されます。

計測パルス数 = 基本パルス数 ×（CTSUPRRATIO[3:0] ビット + 1）
計測時間 =（基本パルス数 ×（CTSUPRRATIO[3:0] ビット + 1）+ 基本パルス数 - 2）× 0.25 × ベースクロック周期

注 .　ベースクロック周期の詳細は、40.2.21　CTSU センサオフセットレジスタ 1（CTSUSO1）を参照してください。

CTSUPRMODE[1:0] ビット（CTSU 基本周期、基本パルス数設定）

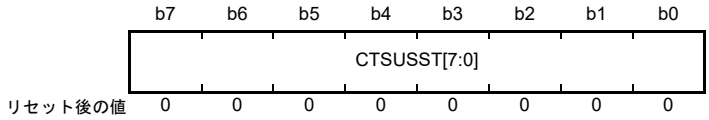
計測で発生する基本パルス数を選択します。

CTSUSOFF ビット（CTSU 高域ノイズ低減機能 OFF 設定）

高域ノイズを低減する機能の ON/OFF を設定します。1 にすると OFF になります。

40.2.4　CTSU センサ安定待ち時間コントロールレジスタ（CTSUSST）

アドレス CTSU.CTSUSST 4008 1003h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUSST[7:0]	CTSUセンサ安定待ち時間制御	0001_0000bにしてください。	R/W

CTSUSST レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUSST[7:0] ビット（CTSU センサ安定待ち時間制御）

TSCAP 端子の電圧の安定待ち時間を設定します。常に 0001_0000b にしてください。本ビットが設定されない場合、計測開始時の TSCAP 電圧が不安定となり、正しいタッチ計測結果が得られません。

40.2.5 CTSU 計測チャネルレジスタ 0（CTSUMCH0）

アドレス CTSU.CTSUMCH0 4008 1004h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	CTSUMCH0[5:0]					
リセット後の値	0	0	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	CTSUMCH0[5:0]	CTSU計測チャネル0	自己容量シングルスキャンモードでは、計測するCTSUのチャネルを設定します。 b5 b0 0 0 0 0 0 0:TS00 0 0 0 0 0 1:TS01 0 0 0 0 1 1:TS03 0 0 1 0 1 0:TS10 0 0 1 1 0 0:TS12 0 0 1 1 0 1:TS13 0 1 0 0 1 0:TS18 0 1 1 1 0 0:TS28 0 1 1 1 1 0:TS30 0 1 1 1 1 1:TS31 1 0 0 0 1 0:TS34 特に指定のない限り、上記ビット設定後にCTSUCR0.CTSUSTRTビットを1にして計測を開始することは禁止されています。	R/W （注1）
			他の計測モードでは、現在計測中のチャネルを示します。 b5 b0 0 0 0 0 0 0:TS00 0 0 0 0 0 1:TS01 0 0 0 0 1 1:TS03 0 0 1 0 1 0:TS10 0 0 1 1 0 0:TS12 0 0 1 1 0 1:TS13 0 1 0 0 1 0:TS18 0 1 1 1 0 0:TS28 0 1 1 1 0 1:TS29 0 1 1 1 1 0:TS30 0 1 1 1 1 1:TS31 1 0 0 0 1 0:TS34 1 1 1 1 1 1:計測停止中	
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　自己容量シングルスキャンモード（CTSUCR1.CTSUMD[1:0] ビット = 00b）時のみ、書き込み可能です。

CTSUMCH0 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUMCH0[5:0] ビット（CTSU 計測チャネル 0）

自己容量シングルスキャンモードでは、CTSHMCH0[5:0] ビットで計測するチャネルを設定します。このモードでは、有効チャネル（000000b, 000001b, 000011b, 001010b, 001100b, 001101b, 010010b, 011100b, 011110b, 011111b, 100010b）のみ指定してください。それ以外のモードでは計測中の受信チャネルを示し、これらのビットへの書き込みは無効になります。

40.2.6 CTSU 計測チャネルレジスタ 1（CTSUMCH1）

アドレス CTSU.CTSUMCH1 4008 1005h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	CTSUMCH1[5:0]					
リセット後の値	0	0	1	1	1	1	1	1

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	CTSUMCH1[5:0]	CTSU計測チャネル1	b5 b0 0 0 0 0 0 0:TS00 0 0 0 0 0 1:TS01 0 0 0 0 1 1:TS03 0 0 1 0 1 0:TS10 0 0 1 1 0 0:TS12 0 0 1 1 0 1:TS13 0 1 0 0 1 0:TS18 0 1 1 1 0 0:TS28 0 1 1 1 1 0:TS30 0 1 1 1 1 1:TS31 1 0 0 0 1 0:TS34 1 1 1 1 1 1:計測停止中	R
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R

CTSUMCH1[5:0] ビット（CTSU 計測チャネル 1）

フルスキャンモードで計測中の送信チャネルを示します。計測停止中、または自己容量シングルスキャンモード／自己容量マルチスキャンモードでは、111111b になります。

40.2.7 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 0（CTSUCHAC0）

アドレス CTSU.CTSUCHAC0 4008 1006h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CTSUCHAC0[7:0]（注1）							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHAC0[7:0]（注1）	CTSUチャネル有効制御0	対応するTS端子を計測するかどうかを選択します。 0：計測しない 1：計測する 本ビットは、TS00、TS01、TS03端子の設定を行います。	R/W

注 1. 本 MCU は TS02 および TS04 ～ TS07 端子には対応していません。そのため、CTSUCHAC0[2] および CTSUCHAC0[4:7] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

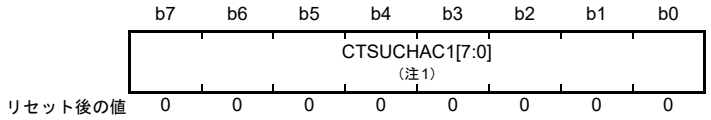
CTSUCHAC0 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHAC0[7:0] ビット（CTSU チャネル有効制御 0）

静電容量を計測する受信端子と送信端子を選択します。CTSUCHAC0[0] は TS00 に、CTSUCHAC0[3] は TS03 に対応します。

40.2.8 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 1（CTSUCHAC1）

アドレス CTSU.CTSUCHAC1 4008 1007h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHAC1[7:0] （注1）	CTSUチャネル有効制御1	対応するTS端子を計測するかどうかを選択します。 0：計測しない 1：計測する 本ビットは、TS10、TS12、TS13端子の設定を行います。	R/W

注 1. 本 MCU は TS08、TS09、TS11、TS14 端子および TS15 端子には対応していません。そのため、CTSUCHAC1[0]、CTSUCHAC1[1]、CTSUCHAC1[3] および CTSUCHAC1[7:6] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

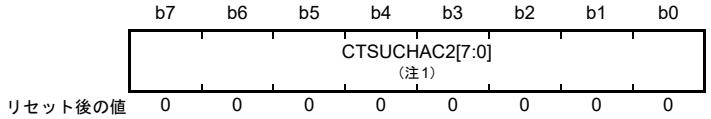
CTSUCHAC1 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHAC1[7:0] ビット（CTSU チャネル有効制御 1）

静電容量を計測する受信端子と送信端子を選択します。CTSUCHAC1[2] は TS10 に、CTSUCHAC1[5] は TS13 に対応します。

40.2.9 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 2（CTSUCHAC2）

アドレス CTSU.CTSUCHAC2 4008 1008h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHAC2[7:0] （注1）	CTSUチャネル有効制御2	対応するTS端子を計測するかどうかを選択します。 0：計測しない 1：計測する 本ビットは、TS18端子の設定を行います。	R/W

注 1. 本 MCU は TS16 端子、TS17 端子および TS19 ～ TS23 端子には対応していません。そのため、CTSUCHAC2[7:3] および CTSUCHAC2[1:0] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

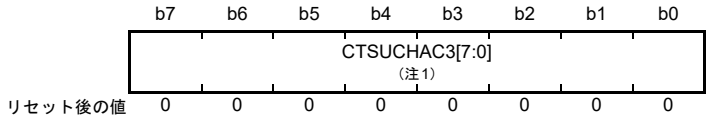
CTSUCHAC2 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHAC2[7:0] ビット（CTSU チャネル有効制御 2）

静電容量を計測する受信端子と送信端子を選択します。CTSUCHAC2[2] は TS18 に対応します。

40.2.10 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 3（CTSUCHAC3）

アドレス CTSU.CTSUCHAC3 4008 1009h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHAC3[7:0] （注1）	CTSUチャネル有効制御3	対応するTS端子を計測するかどうか選択します。 0：計測しない 1：計測する 本ビットは、TS28、TS30およびTS31端子の設定を行います。	R/W

注 1. 本 MCU は TS24 端子～ TS27 端子および TS29 端子には対応していません。そのため、CTSUCHAC3[3:0] および CTSUCHAC3[5] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

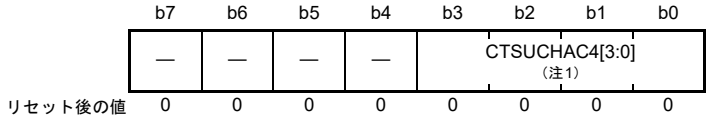
CTSUCHAC3 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHAC3[7:0] ビット（CTSU チャネル有効制御 3）

静電容量を計測する受信端子と送信端子を選択します。CTSUCHAC3[4] は TS28 に、CTSUCHAC3[7] は TS31 に対応します。

40.2.11 CTSU チャネルイネーブルコントロールレジスタ 4（CTSUCHAC4）

アドレス CTSU.CTSUCHAC4 4008 100Ah



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	CTSUCHAC4[3:0] （注1）	CTSUチャネル有効制御4	対応するTS端子を計測するかどうか選択します。 0：計測しない 1：計測する 本ビットは、TS34端子の設定を行います。	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. 本 MCU は TS32、TS33 端子および TS35 端子には対応していません。そのため、CTSUCHAC4[3] および CTSUCHAC4[1:0] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

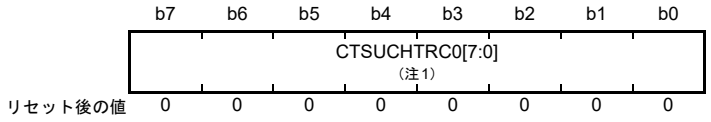
CTSUCHAC4 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHAC4[3:0] ビット（CTSU チャネル有効制御 4）

静電容量を計測する受信端子と送信端子を選択します。CTSUCHAC4[2] は TS34 に対応します。

40.2.12 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 0（CTSUCHTRC0）

アドレス CTSU.CTSUCHTRC0 4008 100Bh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHTRC0[7:0] （注1）	CTSUチャネル送受信制御0	0：受信 1：送信 本ビットは、TS00、TS01、TS03端子の設定を行います。	R/W

注 1. 本 MCU は TS02 端子および TS04 ～ TS07 端子には対応していません。そのため、CTSUCHTRC0[2] および CTSUCHTRC0[7:4] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

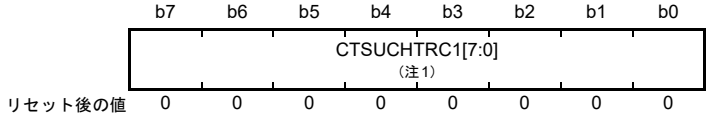
CTSUCHTRC0 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHTRC0[7:0] ビット（CTSU チャネル送受信制御 0）

フルスキャンモード時、関連する TS 端子を受信または送信に割り当てます。自己容量シングルスキャンモード、および自己容量マルチスキャンモードでは、本ビットの設定は無視されます。CTSUCHTRC0[0] は TS00 に、CTSUCHTRC0[3] は TS03 に対応します。

40.2.13 CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 1（CTSUCHTRC1）

アドレス CTSU.CTSUCHTRC1 4008 100Ch



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHTRC1[7:0] （注1）	CTSUチャネル送受信制御1	0：受信 1：送信 本ビットは、TS10、TS12、TS13端子の設定を行います。	R/W

注 1. 本 MCU は TS08、TS09、TS11、TS14 端子および TS15 端子には対応していません。そのため、CTSUCHTRC1[0]、CTSUCHTRC1[1]、CTSUCHTRC1[3] および CTSUCHTRC1[7:6] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

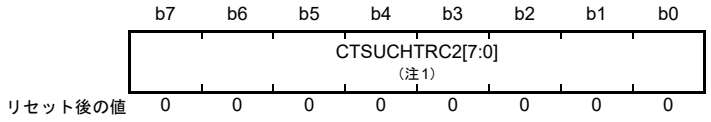
CTSUCHTRC1 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHTRC1[7:0] ビット（CTSU チャネル送受信制御 1）

フルスキャンモードで、関連 TS 端子を受信または送信に割り当てます。自己容量シングルスキャンモード、および自己容量マルチスキャンモードでは、本ビットの設定は無視されます。CTSUCHTRC1[2] は TS10 に、CTSUCHTRC1[5] は TS13 に対応します。

40.2.14　CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 2（CTSUCHTRC2）

アドレス　CTSU.CTSUCHTRC2 4008 100Dh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHTRC2[7:0] （注1）	CTSUチャネル送受信制御2	0：受信 1：送信 本ビットは、TS18端子の設定を行います。	R/W

注 1.　本 MCU は TS16、TS17 端子および TS19 ～ TS23 端子には対応していません。そのため、CTSUCHTRC2[7:3] および CTSUCHTRC2[1:0] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

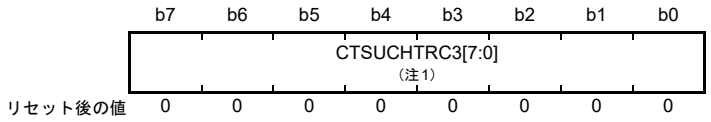
CTSUCHTRC2 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHTRC2[7:0] ビット（CTSU チャネル送受信制御 2）

フルスキャンモードで、関連 TS 端子を受信または送信に割り当てます。自己容量シングルスキャンモード、および自己容量マルチスキャンモードでは、本ビットの設定は無視されます。CTSUCHTRC2[2] は TS18 に対応します。

40.2.15　CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 3（CTSUCHTRC3）

アドレス　CTSU.CTSUCHTRC3 4008 100Eh



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSUCHTRC3[7:0] （注1）	CTSUチャネル送受信制御3	0：受信 1：送信 本ビットは、TS28、TS30端子およびTS31端子の設定を行います。	R/W

注 1.　本 MCU は TS24 ～ TS27 端子および TS29 端子には対応していません。そのため、CTSUCHTRC3[3:0] および CTSUCHTRC3[5] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

CTSUCHTRC3 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHTRC3[7:0] ビット（CTSU チャネル送受信制御 3）

フルスキャンモードで、関連 TS 端子を受信または送信に割り当てます。自己容量シングルスキャンモード、および自己容量マルチスキャンモードでは、本ビットの設定は無視されます。CTSUCHTRC3[4] は TS28 に、CTSUCHTRC3[7] は TS31 に対応します。

40.2.16　CTSU チャネル送受信コントロールレジスタ 4（CTSUCHTRC4）

アドレス　CTSU.CTSUCHTRC4 4008 100Fh

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	CTSUCHTRC4[3:0]（注1）			
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b3-b0	CTSUCHTRC4[3:0]（注1）	CTSUチャネル送受信制御4	0：受信 1：送信 本ビットは、TS34端子の設定を行います。	R/W
b7-b4	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　本 MCU は TS32、TS33 端子および TS35 端子には対応していません。そのため、CTSUCHTRC4[3] および CTSUCHTRC4[1:0] を読むと 0 が読めます。書く場合、0 としてください。

CTSUCHTRC4 レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUCHTRC4[3:0] ビット（CTSU チャネル送受信制御 4）

フルスキャンモードで、関連 TS 端子を受信または送信に割り当てます。自己容量シングルスキャンモード、および自己容量マルチスキャンモードでは、本ビットの設定は無視されます。CTSUCHTRC4[2] は TS34 に対応します。

40.2.17　CTSU 高域ノイズ低減コントロールレジスタ（CTSUDCLKC）

アドレス　CTSU.CTSUDCLKC 4008 1010h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	CTSUSSCNT[1:0]		—	—	CTSUSSMOD[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	CTSUSSMOD[1:0]	CTSU拡散クロックモード選択	00bにしてください。	R/W
b3-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5-b4	CTSUSSCNT[1:0]	CTSU拡散クロックモード制御	11bにしてください。	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CTSUDCLKC レジスタの設定は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 のときのみ行ってください。

CTSUSSMOD[1:0] ビット（CTSU 拡散クロックモード選択）

高域ノイズ低減に関わるスペクトラム拡散クロックのモードを設定します。高域ノイズ低減機能を使用する場合は必ず 00b にしてください。本ビットが設定されていない場合、CTSU は効果的に高域ノイズを低減できません。

CTSUSSCNT[1:0] ビット（CTSU 拡散クロックモード制御）

高域ノイズ低減のためのスペクトラム拡散量を調整します。高域ノイズ低減機能を使用する場合は必ず 11b にしてください。本ビットが設定されていない場合、タッチ計測が正しく行われない可能性があります。

40.2.18　CTSU ステータスレジスタ（CTSUST）

アドレス　CTSU.CTSUST 4008 1011h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CTSUPS	CTSUROVF	CTSUSOVF	CTSUDTSR	—	CTSUSTC[2:0]		
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	CTSUSTC[2:0]	CTSU計測ステータスカウンタ	現在の計測ステータスを示します。 b2 b0 0 0 0：Status0 0 0 1：Status1 0 1 0：Status2 0 1 1：Status3 1 0 0：Status4 1 0 1：Status5	R
b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b4	CTSUDTSR	CTSUデータ転送ステータスフラグ	センサカウンタ、リファレンスカウンタに格納された計測結果を読み出したか否かを示します。 0：読み出しあり 1：読み出しなし	R
b5	CTSUSOVF	CTSUセンサカウンタオーバーフローフラグ	センサカウンタのオーバーフローを示します。 0：オーバーフロー発生なし 1：オーバーフロー発生あり	R/W
b6	CTSUROVF	CTSUリファレンスカウンタオーバーフローフラグ	リファレンスカウンタのオーバーフローを示します。 0：オーバーフロー発生なし 1：オーバーフロー発生あり	R/W
b7	CTSUPS	CTSU相互容量計測ステータスフラグ	相互容量フルスキャンモードでの計測ステータスを示します。 0：1回目の計測 1：2回目の計測	R

CTSUCR0.CTSUINIT ビットでオーバーフローフラグをクリアする場合は、必ず CTSUCR0.CTSUSTRT ビットが 0 であるときに行ってください。

CTSUSTC[2:0] フラグ（CTSU 計測ステータスカウンタ）

現在の計測ステータスを示すカウンタです。各ステータスの詳細は、40.3.2.2　ステータスカウンタを参照してください。

CTSUDTSR フラグ（CTSU データ転送ステータスフラグ）

センサカウンタ、リファレンスカウンタに格納された計測結果を読み出したか否かを示します。計測完了時に 1 になり、ソフトウェアまたは DTC でリファレンスカウンタを読み出すと 0 となります。本フラグは、CTSUCR0.CTSUINIT ビットでもクリアされます。

CTSUSOVF フラグ（CTSU センサカウンタオーバーフローフラグ）

センサカウンタである CTSUSC がオーバーフローしたことを示します。オーバーフロー発生時、カウンタ値は FFFFh になります。計測は指定期間継続します。

オーバーフロー発生時に割り込みは発生しません。そのため、どのチャネルでオーバーフローが発生したかは、測定終了割り込み発生により計測完了が判明してから、各チャネルの計測結果により判定してください。

本フラグは、ソフトウェアで 1 を読み出した後、0 を書き込むことによりクリアされます。本フラグは、CTSUCR0.CTSUINIT ビットでもクリアされます。

CTSUROVF フラグ（CTSU リファレンスカウンタオーバーフローフラグ）

リファレンスカウンタである CTSURC がオーバーフローしたことを示します。オーバーフロー発生時、カウンタ値は FFFFh になります。計測は指定期間継続します。

オーバーフロー発生時でも割り込みは発生しません。そのため、どのチャネルでオーバーフローが発生したかは、測定終了割り込み発生により計測完了が判明してから、各チャネルの計測結果により判定してください。

本フラグは、ソフトウェアで 1 を読み出した後、0 を書き込むことによりクリアされます。本フラグは、CTSUCR0.CTSUINIT ビットでもクリアされます。

CTSUPS フラグ（CTSU 相互容量計測ステータスフラグ）

相互容量フルスキャンモード（CTSUCR1.CTSUMD[1:0] ビット = 11b）のとき、1 チャネルあたり 2 回の計測において計測が 1 回目なのか 2 回目なのかを示します。計測停止時、またはその他の計測モードの場合は 0 になります。

40.2.19 CTSU 高域ノイズ低減スペクトラム拡散コントロールレジスタ（CTSUSSC）

アドレス CTSU.CTSUSSC 4008 1012h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	CTSUSSDIV[3:0]				—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b11-b8	CTSUSSDIV[3:0]	CTSUスペクトラム拡散分周設定	ベースクロックの分周設定に基づき、スペクトラム拡散分周設定値を設定します。	R/W
b15-b12	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

CTSUSSDIV[3:0] ビット（CTSU スペクトラム拡散分周設定）

ベースクロックの分周設定に基づいて、スペクトラム拡散分周設定値を設定します。CTSUSSDIV[3:0] の正しい設定値を決めるには、表 40.5 でベースクロック周波数と設定値の関係を参照してください。

表 40.5　ベースクロック周波数とCTSUSSDIV[3:0]ビットの設定値の関係

ベースクロック周波数fb（MHz）	CTSUSSDIV[3:0]ビットの設定値
4.00≦fb	0000b
2.00≦fb＜4.00	0001b
1.33≦fb＜2.00	0010b
1.00≦fb＜1.33	0011b
0.80≦fb＜1.00	0100b
0.67≦fb＜0.80	0101b
0.57≦fb＜0.67	0110b
0.50≦fb＜0.57	0111b
0.44≦fb＜0.50	1000b
0.40≦fb＜0.44	1001b
0.36≦fb＜0.40	1010b
0.33≦fb＜0.36	1011b
0.31≦fb＜0.33	1100b
0.29≦fb＜0.31	1101b
0.27≦fb＜0.29	1110b
fb＜0.27	1111b

40.2.20 CTSU センサオフセットレジスタ 0（CTSUSO0）

アドレス CTSU.CTSUSO0 4008 1014h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CTSUSNUM[5:0]						CTSUSO[9:0]									
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b9-b0	CTSUSO[9:0]	CTSUセンサオフセット調整	電極が非タッチ状態のときの静電容量を調整します。 b9 b0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0：電流オフセット量0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1：電流オフセット量1 0 0 0 0 0 0 0 0 1 0：電流オフセット量2 ： 1 1 1 1 1 1 1 1 1 0：電流オフセット量1022 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1：電流オフセット量最大	R/W
b15-b10	CTSUSNUM[5:0]	CTSU計測回数設定	CTSUの計測回数を設定します。	R/W

CTSUSO[9:0] ビット（CTSU センサオフセット調整）

タッチ計測時に電極が非タッチ状態のときの静電容量により発生するセンサ ICO 入力電流をオフセットします。これは、CTSU センサカウンタのオーバーフローを防止します。次に計測する TS 端子の設定は、CTSU_CTSUWR 割り込みの発生後に行ってください。

CTSUSNUM[5:0] ビット（CTSU 計測回数設定）

CTSUSDPRS.CTSUPRRATIO[3:0] ビットおよび CTSUSDPRS.CTSUPRMODE[1:0] ビットで決定される計測パルス数を計測時間内に何回繰り返すかを設定します。繰り返し回数は（CTSUSNUM[5:0] ビット + 1）となります。次に計測する TS 端子の設定は、CTSU_CTSUWR 割り込みの発生後に行ってください。

40.2.21 CTSU センサオフセットレジスタ 1（CTSUSO1）

アドレス CTSU.CTSUSO1 4008 1016h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	CTSUICOG[1:0]		CTSUSDPA[4:0]					CTSURICOA[7:0]							
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b7-b0	CTSURICOA[7:0]	CTSUリファレンスICO電流調整	リファレンスICOの入力電流を調整します。 b7 b0 0 0 0 0 0 0 0 0：電流オフセット量0 0 0 0 0 0 0 0 1：電流オフセット量1 0 0 0 0 0 0 1 0：電流オフセット量2 : 1 1 1 1 1 1 1 0：電流オフセット量254 1 1 1 1 1 1 1 1：電流オフセット量最大	R/W
b12-b8	CTSUSDPA[4:0]	CTSUベースクロック設定	CTSUのベースクロックを生成します。 b12 b8 0 0 0 0 0：動作クロックの2分周（注1） 0 0 0 0 1：動作クロックの4分周 0 0 0 1 0：動作クロックの6分周 0 0 0 1 1：動作クロックの8分周 0 0 1 0 0：動作クロックの10分周 0 0 1 0 1：動作クロックの12分周 0 0 1 1 0：動作クロックの14分周 0 0 1 1 1：動作クロックの16分周 0 1 0 0 0：動作クロックの18分周 0 1 0 0 1：動作クロックの20分周 0 1 0 1 0：動作クロックの22分周 0 1 0 1 1：動作クロックの24分周 0 1 1 0 0：動作クロックの26分周 0 1 1 0 1：動作クロックの28分周 0 1 1 1 0：動作クロックの30分周 0 1 1 1 1：動作クロックの32分周 1 0 0 0 0：動作クロックの34分周 1 0 0 0 1：動作クロックの36分周 1 0 0 1 0：動作クロックの38分周 1 0 0 1 1：動作クロックの40分周 1 0 1 0 0：動作クロックの42分周 1 0 1 0 1：動作クロックの44分周 1 0 1 1 0：動作クロックの46分周 1 0 1 1 1：動作クロックの48分周 1 1 0 0 0：動作クロックの50分周 1 1 0 0 1：動作クロックの52分周 1 1 0 1 0：動作クロックの54分周 1 1 0 1 1：動作クロックの56分周 1 1 1 0 0：動作クロックの58分周 1 1 1 0 1：動作クロックの60分周 1 1 1 1 0：動作クロックの62分周 1 1 1 1 1：動作クロックの64分周	R/W
b14-b13	CTSUICOG[1:0]	CTSU ICOゲイン調整	センサICOとリファレンスICOの出力周波数ゲインを調整します。 b14 b13 0 0：ゲイン100% 0 1：ゲイン66% 1 0：ゲイン50% 1 1：ゲイン40%	R/W
b15	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　相互容量フルスキャンモード（CTSUCR1.CTSUMD[1:0] ビット = 11b）の高域ノイズ低減機能 OFF 状態（CTSUSDPRS.CTSUSOFF ビット = 1）では、CTSUSDPA[4:0] ビット = 00000b は設定しないでください。

CTSU_CTSUWR 割り込み発生後、CTSUSSC レジスタ、CTSUSO0 レジスタ、CTSUSO1 レジスタの順に書き込んでください。また、CTSUSO1 レジスタへの書き込みにより Status3 へ遷移します（表 40.6 および表 40.7 を参照してください）。CTSUSO1 レジスタに書き込む場合は、一度の動作で全ビットに書き込むようにしてください。

CTSURICOA[7:0] ビット（CTSU リファレンス ICO 電流調整）

リファレンス ICO の入力電流により、発振周波数を調整します。

CTSUSDPA[4:0] ビット（CTSU ベースクロック設定）

動作クロックを分周して、センサドライブパルスの元となるベースクロックを選択します。設定手順の詳細は、40.3.2.1　初期設定フローを参照してください。

CTSUICOG[1:0] ビット（CTSU ICO ゲイン調整）

センサ ICO とリファレンス ICO の出力周波数ゲインを調整します。通常は最大ゲインの 00b にしてください。非タッチ時ータッチ時の容量変化が、センサ ICO のダイナミックレンジを大きく超える場合は、このビットを適切なゲインに調整してください。

40.2.22　CTSU センサカウンタ（CTSUSC）

アドレス　CTSU.CTSUSC 4008 1018h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CTSUSC[15:0]															
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	CTSUSC[15:0]	CTSUセンサカウンタ	センサICOの計測結果を示します。オーバーフロー発生時はFFFFhが読み出されます。	R

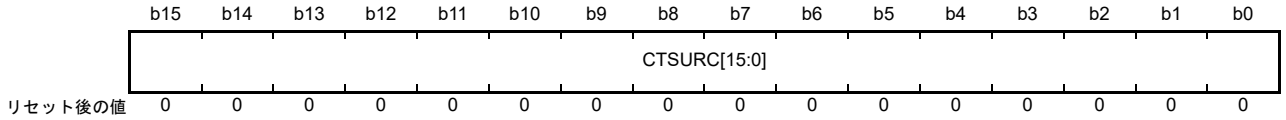
CTSU_CTSURD 割り込み発生後、まず CTSUSC カウンタ、次に CTSURC カウンタの順で読み出してください。

CTSUSC[15:0] ビット（CTSU センサカウンタ）

センサ ICO クロック用のインクリメントカウンタです。CTSU_CTSURD 割り込み発生後に読み出してください。本ビットは CTSURC カウンタ読み出し後、次の計測で CTSU 計測ステータスカウンタ値が Status4 に遷移（CTSUST.CTSUSTC[2:0] フラグが 100b に遷移）する直前にクリアされます。また、CTSUCR0.CTSUINIT ビットでもクリアされます。

40.2.23 CTSU リファレンスカウンタ（CTSURC）

アドレス CTSU.CTSURC 4008 101Ah



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b15-b0	CTSURC[15:0]	CTSUリファレンスカウンタ	リファレンスICOの計測結果を示します。オーバーフロー発生時はFFFFhが読み出されます。	R

CTSU_CTSURD 割り込み発生後、まず CTSUSC カウンタ、次に CTSURC カウンタの順で読み出してください。Status3 に指定した安定時間を経過しても、CTSURC カウンタが読み出されるまで Status3 が継続します。

CTSURC[15:0] ビット（CTSU リファレンスカウンタ）

リファレンス ICO クロック用のインクリメントカウンタです。リファレンス ICO はセンサ ICO によるタッチ計測を最適化します。CTSU に内蔵されたセンサ ICO とリファレンス ICO は個体により若干の偏差はありますが、ダイナミックレンジや電流－周波数の特性などはほぼ同様の特性を持っています。リファレンス ICO 電流調整ビットで設定できる電流量の範囲がほぼ、両 ICO のダイナミックレンジになるため、センサ ICO に入力する電流量もこのダイナミックレンジに収める必要があります。そのためには、ICO の個体差を確認するためにリファレンス ICO を使い、電流－発振周波数の特性を計測します。リファレンス ICO 発振周波数はリファレンス ICO カウンタで取得でき、リファレンス ICO 電流調整ビットに値を設定してリファレンス ICO カウンタを計測することで、入力電流に対する ICO 発振周波数（カウンタ値／計測時間）を計測できます。また、リファレンス ICO 電流調整ビットの最大値で計測されるリファレンス ICO カウンタの値が、ICO のダイナミックレンジの最大値となります。センサ ICO カウンタの値がこの値を超えないように、オフセット調整ビットでセンサ ICO の電流をオフセットする必要があります。

CTSURC[15:0] ビットは、CTSU_CTSURD 割り込み発生後に読み出してください。本ビットは読み出し後に、次の計測で CTSU 計測ステータスカウンタ値が Status4 に遷移（CTSUST.CTSUSTC[2:0] フラグが 100b に遷移）する直前にクリアされます。また、CTSUCR0.CTSUINIT ビットでもクリアされます。

40.2.24 CTSU エラーステータスレジスタ（CTSUERRS）

アドレス CTSU.CTSUERRS 4008 101Ch

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	CTSUICOMP	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b14-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。	R
b15	CTSUICOMP	TSCAP電圧異常監視	TSCAP電圧の異常状態を監視します。 0：TSCAP電圧正常 1：TSCAP電圧異常	R

CTSUICOMP ビット（TSCAP 電圧異常監視）

CTSUSO1 レジスタで設定したオフセット電流量が、タッチ計測時のセンサ ICO 入力電流を上回った場合、TSCAP 電圧が異常となりタッチ計測が正しく行われません。本ビットは、TSCAP 電圧を監視し、異常となった場合、1 になります。

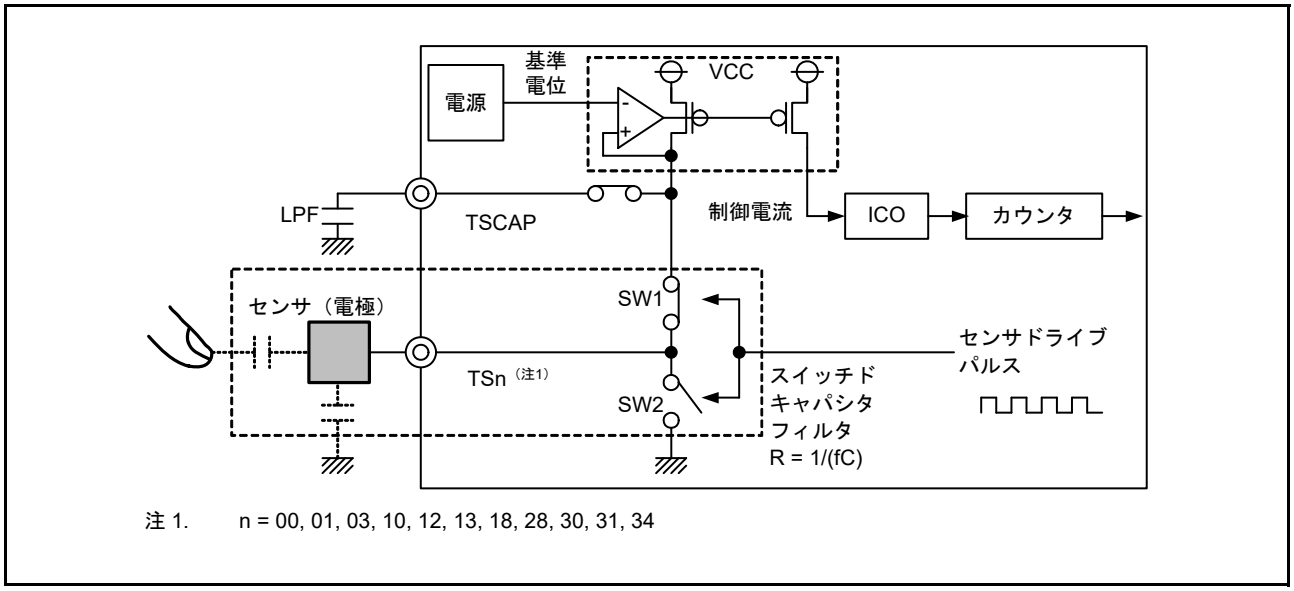
TSCAP 電圧が異常となった場合、センサ ICO カウンタの値は不定になりますが、タッチ計測は正常に終了します。そのため、センサ ICO カウンタの値から異常を検知することは困難です。CTSUSO1 レジスタの CTSU リファレンス ICO 電流調整ビット（CTSURICOA[7:0]）を 0 以外にした場合、タッチ計測終了時に本ビットを確認してください。

本ビットは、CTSUCR1.CTSUPON ビットに 0 を書き込み、電源 OFF とすることでクリアされます。

40.3　動作説明

40.3.1　計測動作原理

図 40.4 に計測部回路を示します。

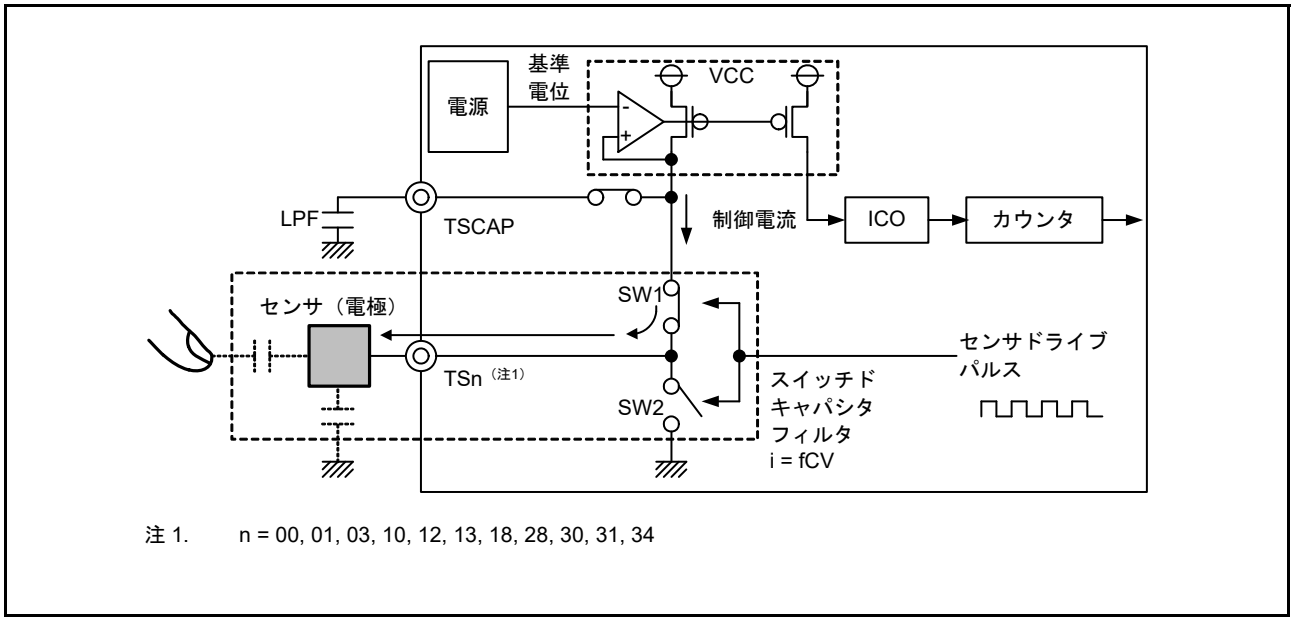


注 1.　n = 00, 01, 03, 10, 12, 13, 18, 28, 30, 31, 34

図 40.4　計測部回路

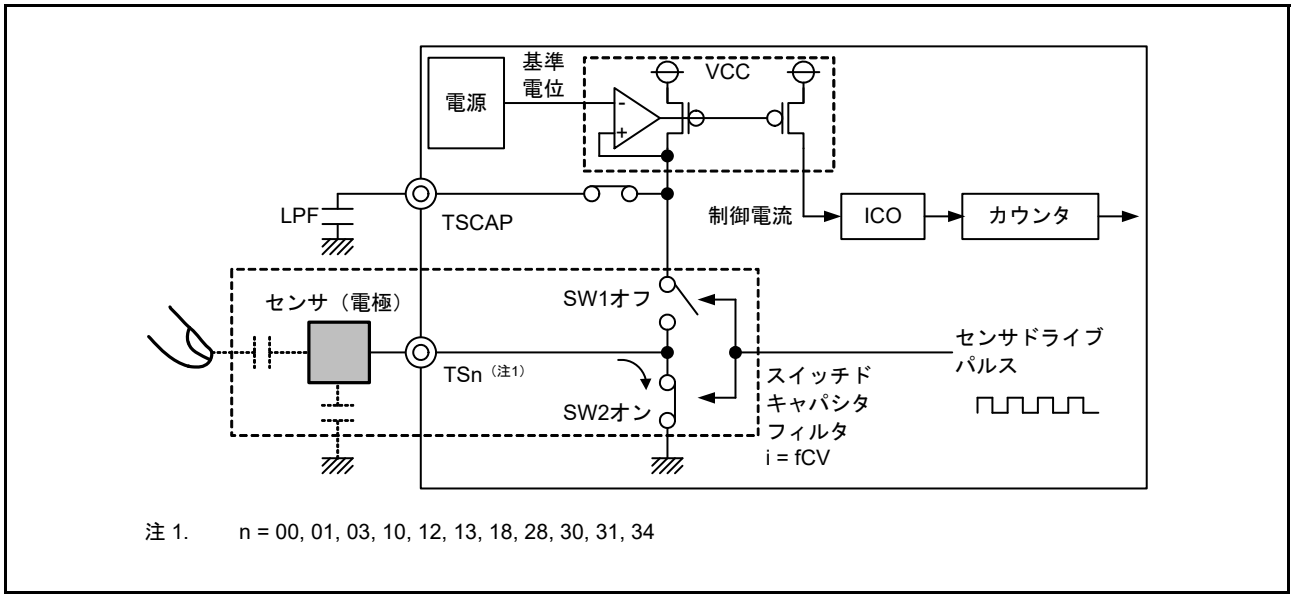
図 40.5 ～図 40.7 に CTSU の電流周波数変換方式の静電容量計測動作原理を示します。動作は以下のとおりです。

1. SW1: ON、SW2: OFF にすることで、電極の静電容量に充電されます。図 40.5 を参照してください。
2. SW1: OFF、SW2: ON にすることで、充電された容量は放電されます。図 40.6 を参照してください。
3. 手順 1. および 2. に示す電極の充放電を繰り返すことで、スイッチドキャパシタフィルタに電流が流れます。この時点で指が接近していれば、容量および流れる電流が変化します。TSCAP 電源を生成する回路からスイッチドキャパシタフィルタに流れる電流に比例した制御電流を ICO に供給することで、クロックを生成します。カウンタは、指が接近しているかどうかにより変化するクロック周波数を計測します。ソフトウェアは、カウンタから読み出した値に基づき指の接触を判断します（図 40.7）。



注 1.　n = 00, 01, 03, 10, 12, 13, 18, 28, 30, 31, 34

図 40.5　充電動作



注 1.　n = 00, 01, 03, 10, 12, 13, 18, 28, 30, 31, 34

図 40.6　放電動作

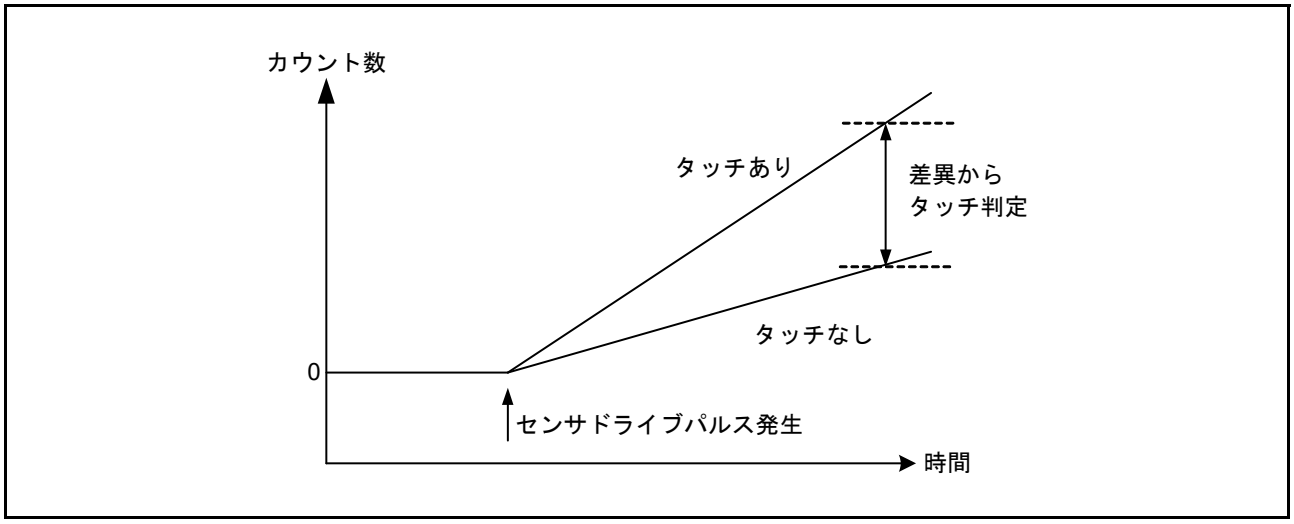


図 40.7　　接触／非接触による計測値の変化

40.3.2　計測モード

CTSU は、自己容量方式と相互容量方式に対応しています。図 40.8 に両方式の概要を示します。

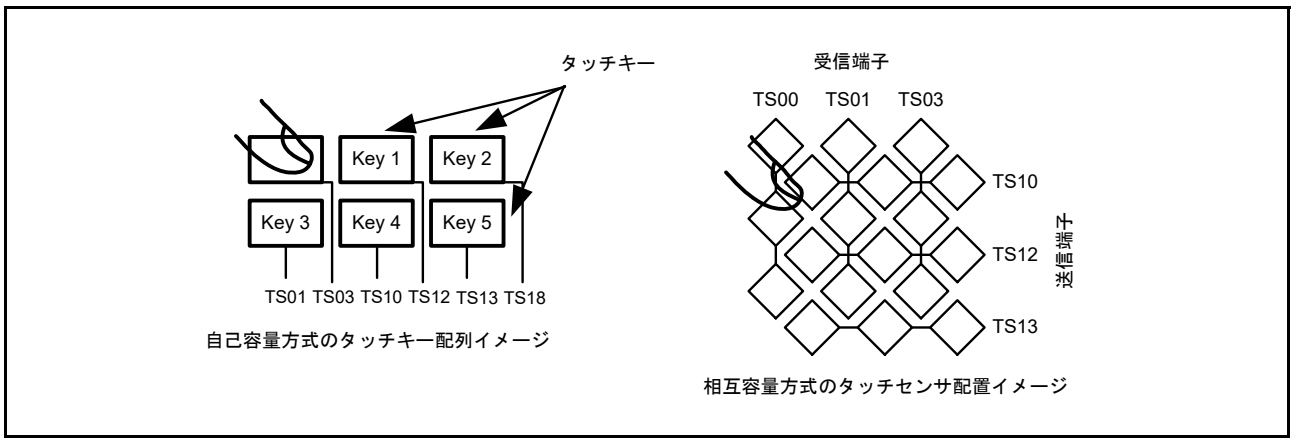


図 40.8　　自己容量方式と相互容量方式の概要

自己容量方式では、1 つのタッチキーに 1 つのタッチ端子を割り当て、それぞれにおける指の接近時の静電容量を計測します。この方法では、シングルスキャンモードとマルチスキャンモードの両方で容量を計測できます。相互容量方式では、対向する 2 つの電極（送信端子と受信端子）間の容量を計測します。

40.3.2.1　初期設定フロー

図 40.9 に、CTSU の初期設定フローを示します。

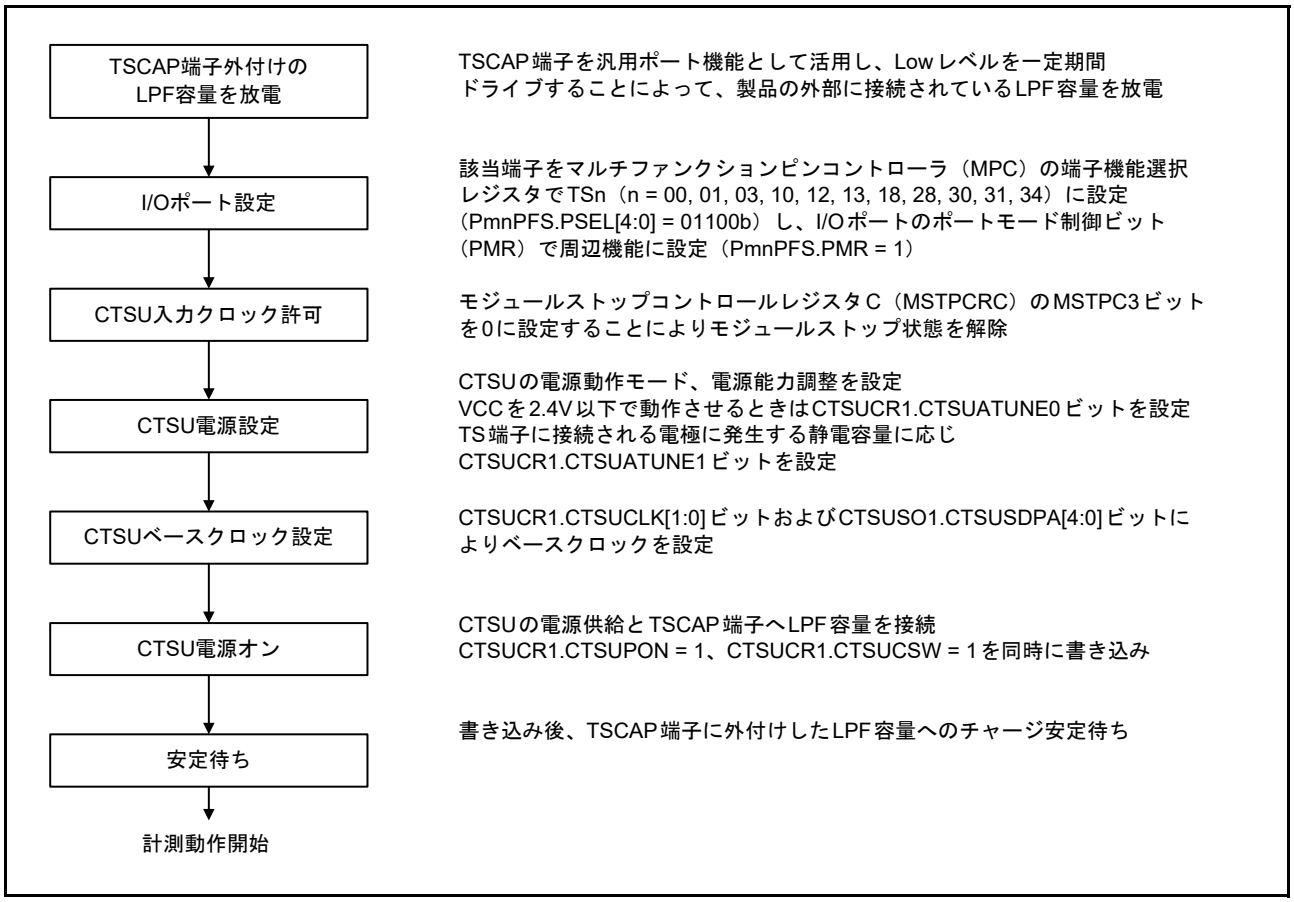


図 40.9　CTSU 初期設定フロー

図 40.10 に、CTSU の動作を停止させスタンバイ状態にするフローを示します。

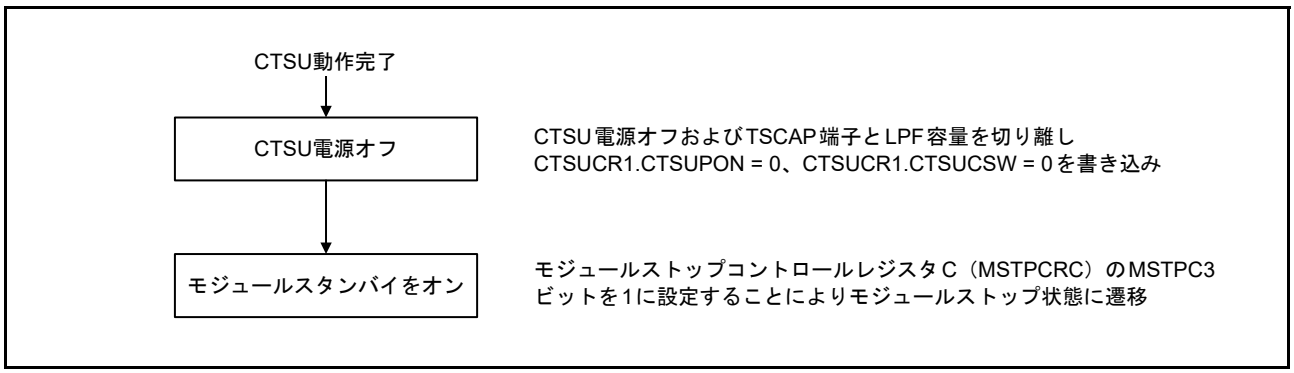
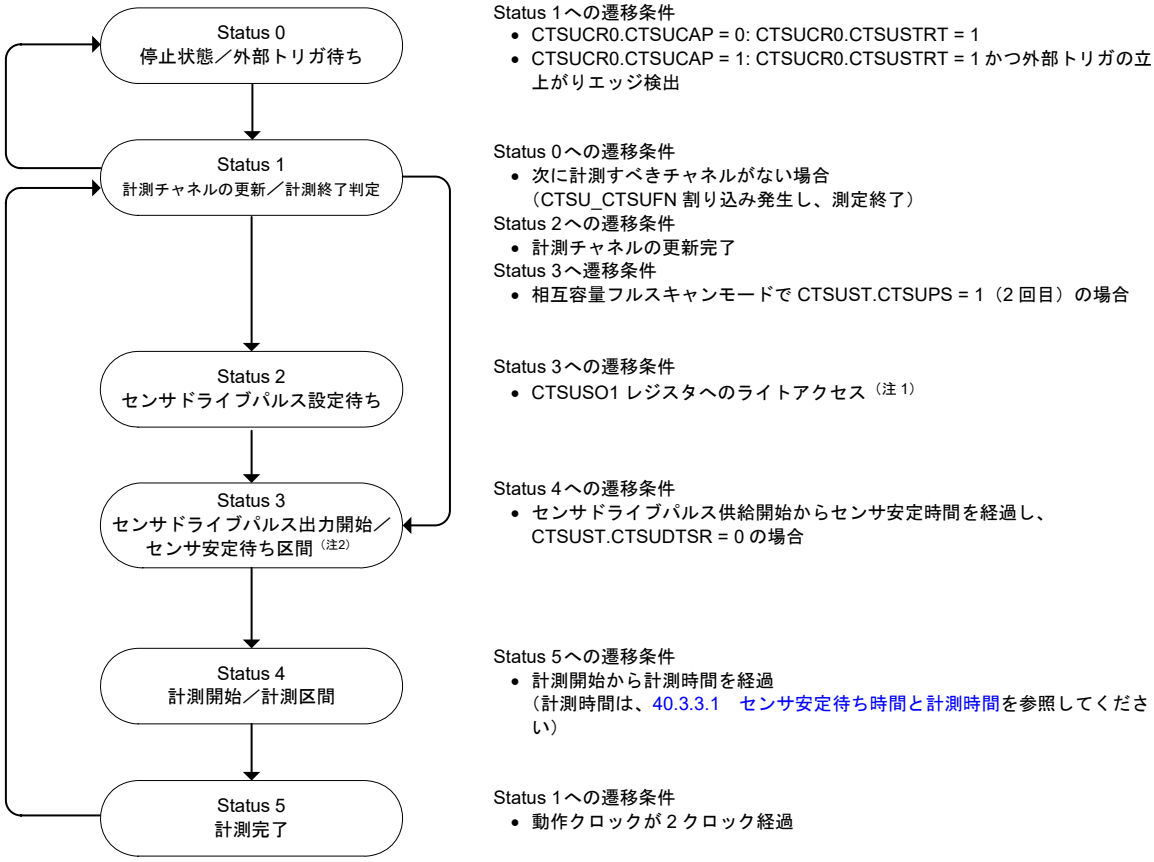


図 40.10　CTSU 停止フロー

動作を再開する場合は、図 40.9 の初期設定フローに従ってください。

40.3.2.2　ステータスカウンタ

CTSU ステータスレジスタ（CTSUST）の計測ステータスカウンタは、現在の計測ステータスを示します。計測ステータスは、3 つの計測モードに適用できます。図 40.11 にステータス動作遷移図を示します。



注 1.　CTSU_CTSUWR 割り込み処理時に DTC または ICU を使用してレジスタを設定する場合、CTSUSO1 レジスタへの書き込みは最後にしてください。
注 2.　CTSUST.CTSUDTSR = 1 の場合は、前の計測結果転送待ちとなります。

図 40.11　ステータス動作遷移図

ステータスカウンタは、指定したすべての計測チャネルの計測が終了すると Status0 に遷移します。

CTSUCR0.CTSUSTRT ビットは、ソフトウェアトリガではハードウェアにより 0 にされます。また外部トリガでは 1 が保持され、次のトリガの待機状態になります。

計測中またはトリガ待機状態で強制終了する（CTSUCR0.CTSUSTRT ビットに 0 を、CTSUCR0.CTSUINIT ビットに 1 を同時に書き込む）ことにより、Status0 に遷移して計測は停止します。

CTSUMCH0 レジスタ、CTSUCHAC0 ～ CTSUCHAC4 レジスタ、CTSUCHTRC0 ～ CTSUCHTRC4 レジスタに計測対象チャネルが設定されていない場合、Status1 への遷移直後に CTSU_CTSUFN 割り込みが発生して Status0 に遷移します。計測対象チャネルがないケースは以下のとおりです。

- CTSUCHAC0 ～ CTSUCHAC4 レジスタに計測対象チャネルが指定されていない場合
- 自己容量シングルスキャンモードで、CTSUMCH0 レジスタで指定したチャネルが CTSUCHAC0 ～ CTSUCHAC4 レジスタで計測対象外となっている場合
- フルスキャンモードで、CTSUCHAC0 ～ CTSUCHAC4 レジスタ、CTSUCHTRC0 ～ CTSUCHTRC4 レジスタの組み合わせで、計測する送信チャネルまたは受信チャネルがない場合

40.3.2.3　自己容量シングルスキャンモードの動作

自己容量シングルスキャンモードでは、任意の 1 チャネルの静電容量を計測します。図 40.12 にソフトウェアフローと動作例を、図 40.13 にタイミングを示します。

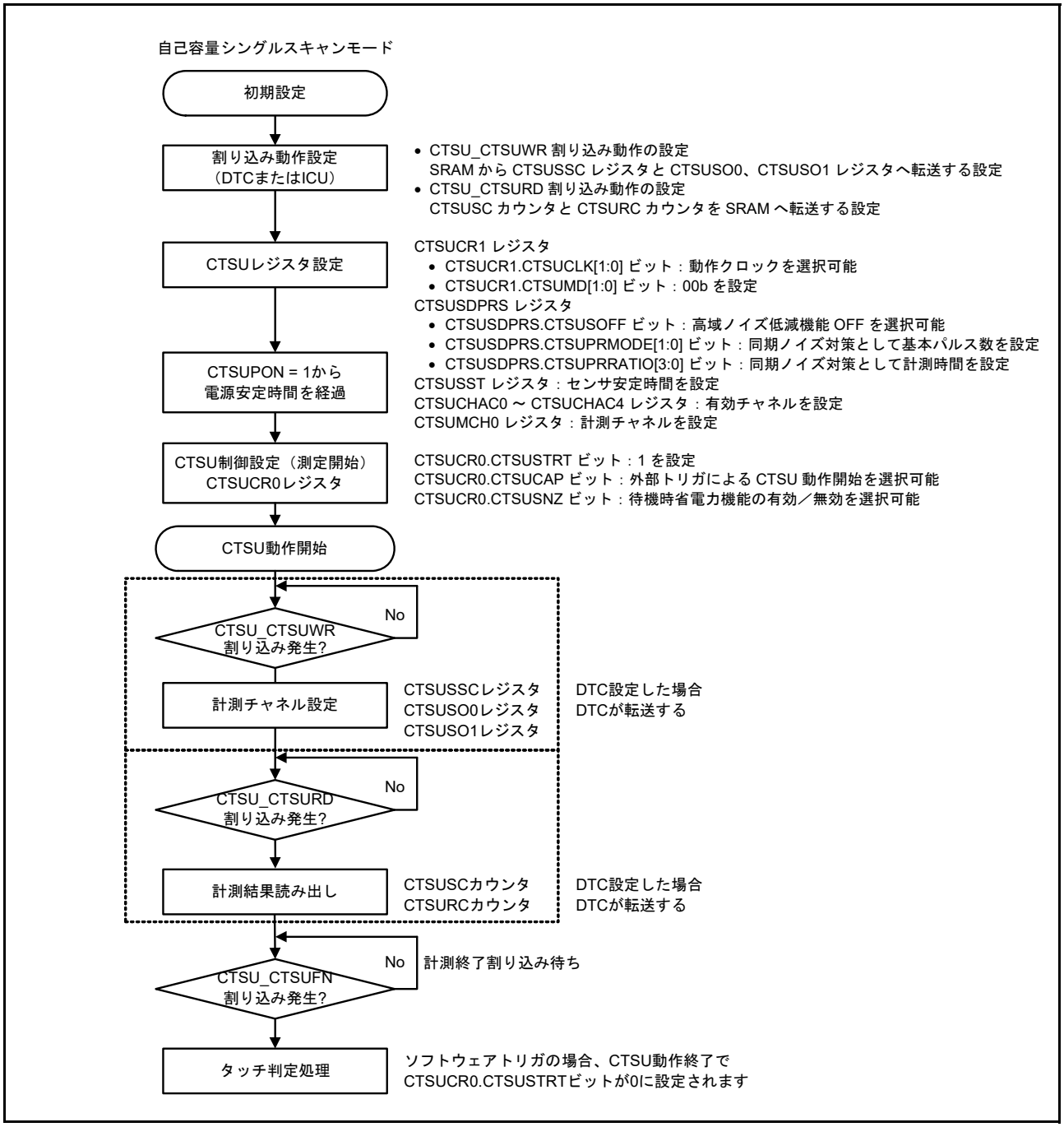


図 40.12　自己容量シングルスキャンモードのソフトウェアフローと動作例

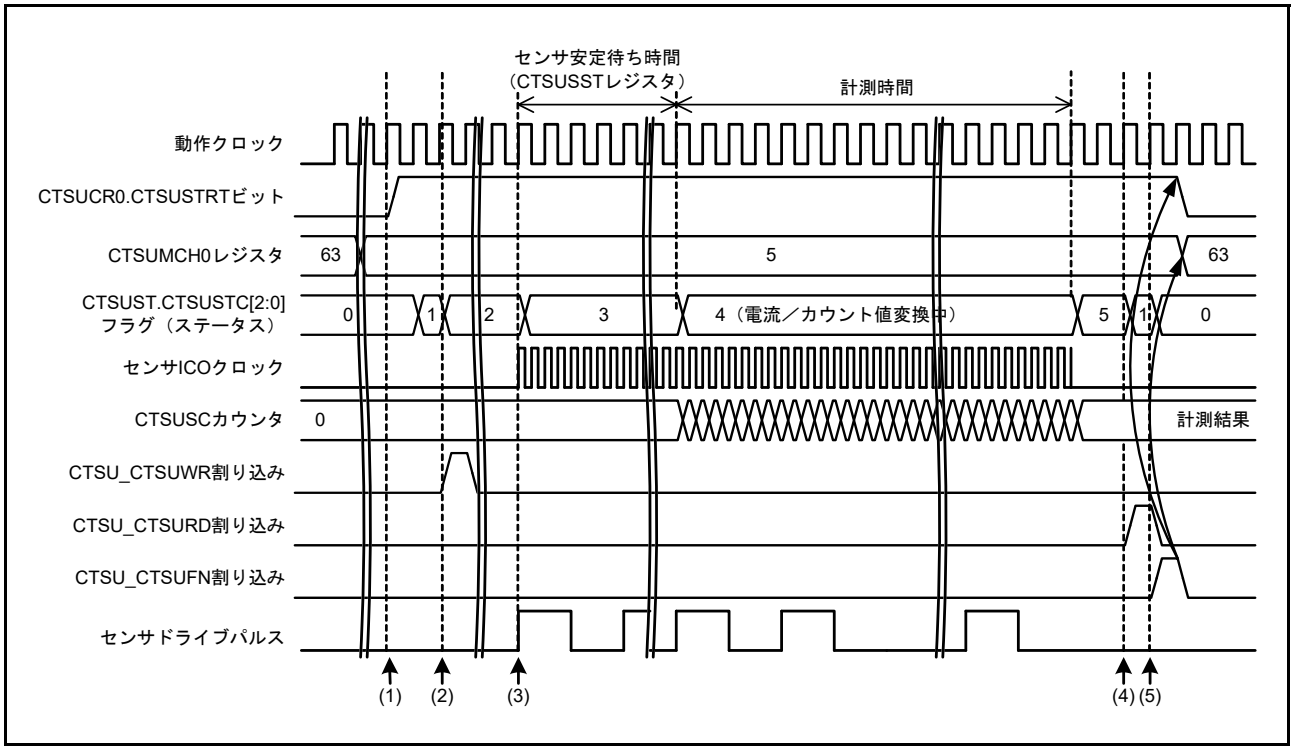


図 40.13　　自己容量シングルスキャンモードのタイミング（計測開始条件がソフトウェアトリガの場合）

図 40.13 に示した動作を以下で説明します。

1. 初期設定を実施後、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットに 1 を書き込むと開始します。
2. あらかじめ設定された条件に従って計測対象チャネルが決定された後に、そのチャネルの設定要求（CTSU_CTSUWR）を出力します。
3. 計測チャネルの設定書き込み（CTSUSSC、CTSUSO0、および CTSUSO1 レジスタ）が完了するとセンサドライブパルスが出力され、センサ ICO クロックとリファレンス ICO クロックが動作します。
4. センサ安定待ち時間、計測時間が経過して計測が終了した後、計測結果読み出し要求（CTSU_CTSURD）を出力します。
5. 計測終了割り込み（CTSU_CTSUFN）を出力して計測終了（Status0 へ遷移）します。

表 40.6 に自己容量シングルスキャンモードのタッチ端子状態を示します。

表 40.6　　自己容量シングルスキャンモードのタッチ端子状態

Status	タッチ端子	
	計測対象チャネル	計測対象外チャネル
0	Low	Low
1	Low	Low
2	Low	Low
3	パルス	Low
4	パルス	Low
5	Low	Low

40.3.2.4　自己容量マルチスキャンモードの動作

自己容量マルチスキャンモードは、CTSUCHAC0 ～ CTSUCHAC4 レジスタで計測対象に指定したすべてのチャネルに対して、静電容量を昇順で順次計測します。図 40.14 にソフトウェアフローと動作例を、図 40.15 にタイミングを示します。

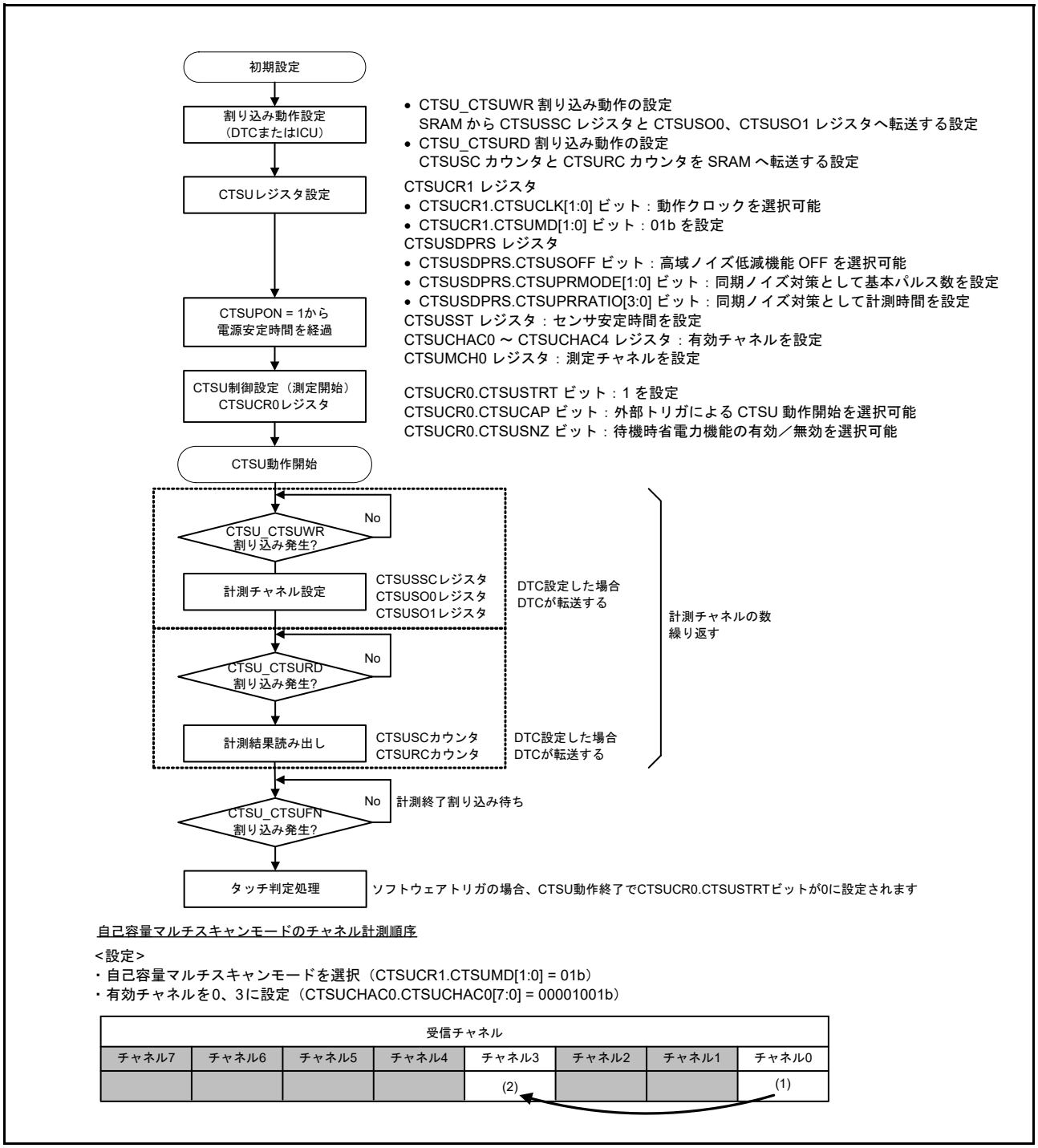


図 40.14　自己容量マルチスキャンモードのソフトウェアフローと動作例

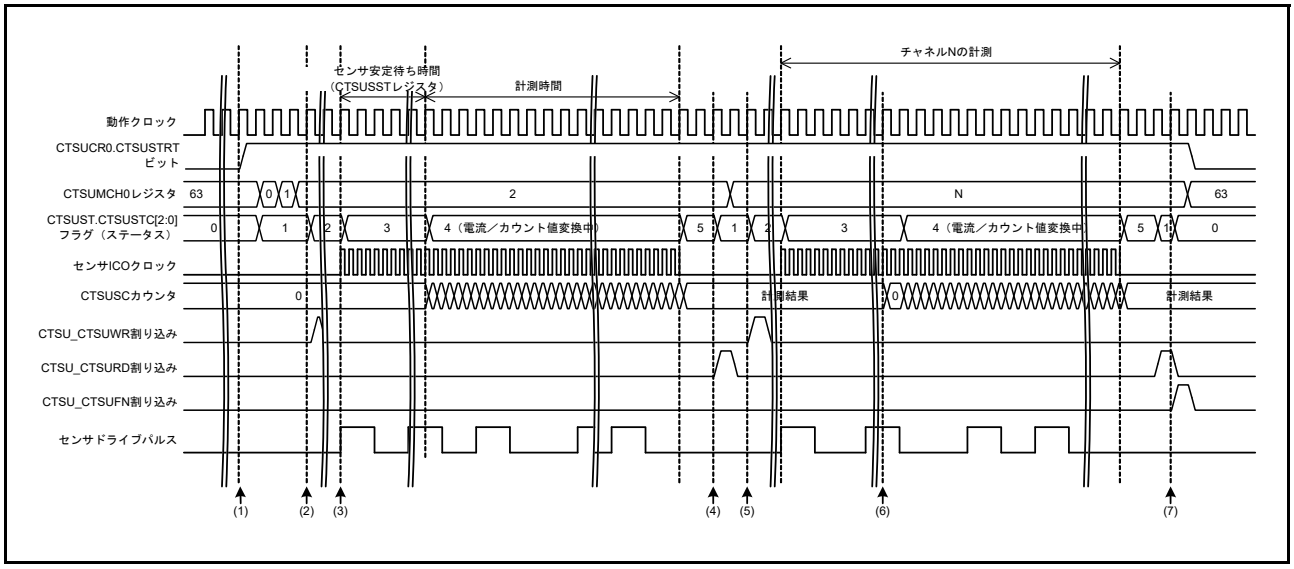


図 40.15　　自己容量マルチスキャンモードのタイミング（計測開始条件がソフトウェアトリガの場合）

図 40.15 に示した動作を以下で説明します。

1. 初期設定を実施後、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットに 1 を書き込むと開始します。
2. あらかじめ設定された条件に従って計測対象チャネルが決定された後に、そのチャネルの設定要求（CTSU_CTSUWR）を出力します。
3. 計測チャネルの設定書き込み（CTSUSSC、CTSUSO0、および CTSUSO1 レジスタ）が完了するとセンサドライブパルスが出力され、センサ ICO クロックとリファレンス ICO クロックが動作します。
4. センサ安定待ち時間、計測時間が経過して計測が終了した後、計測結果読み出し要求（CTSU_CTSURD）を出力します。
5. 次に計測するチャネルが決定した後、そのチャネルの設定要求（CTSU_CTSUWR）を出力します。
6. 安定待ち時間の経過、および前回の計測結果の読み出しによって、前回の計測結果をクリアし、計測を開始します。
7. すべてのチャネル計測が完了したら、計測終了割り込み（CTSU_CTSUFN）を出力して計測を終了（Status0 へ遷移）します。

表 40.7 に自己容量マルチスキャンモードのタッチ端子状態を示します。

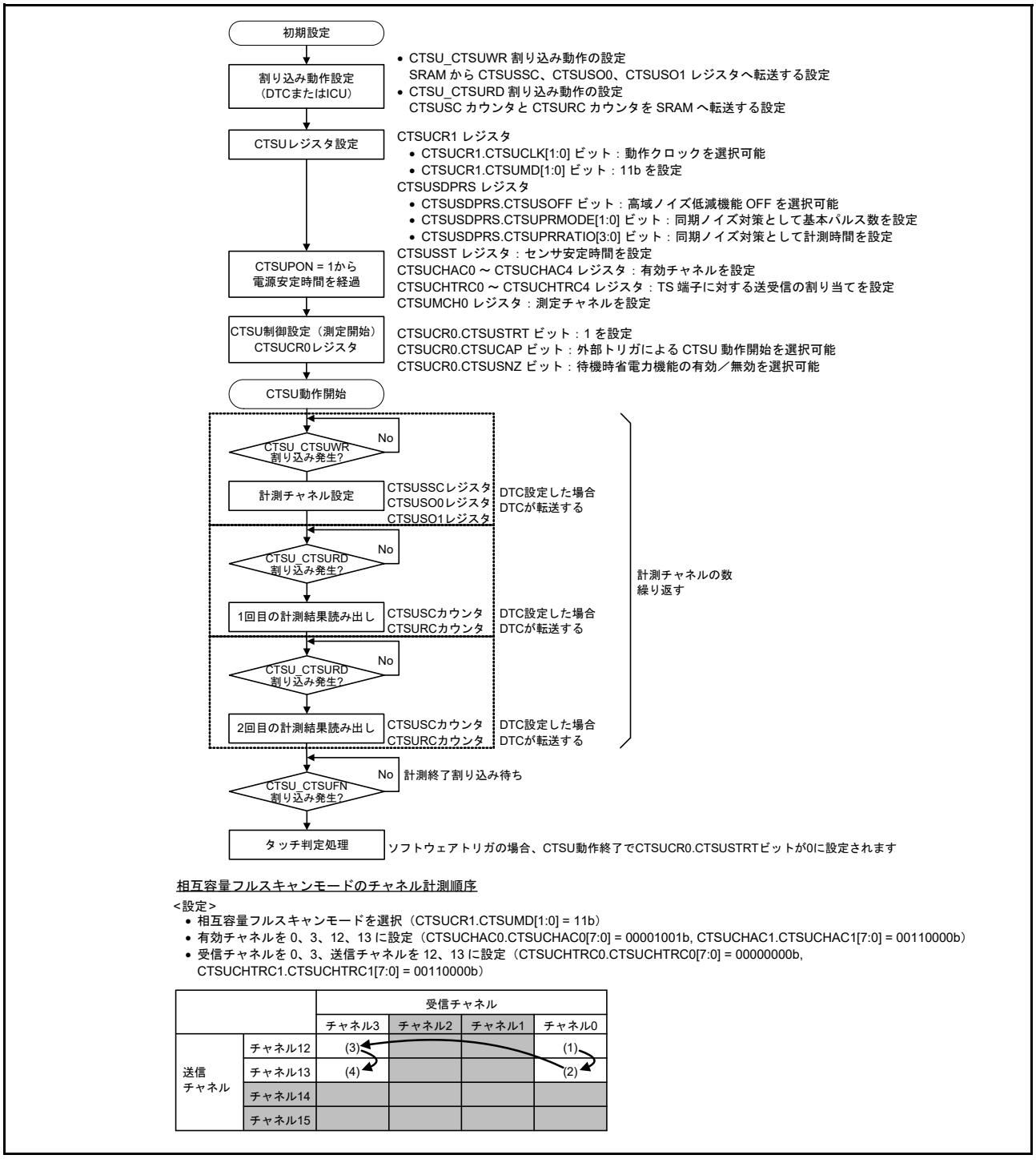
表 40.7　　自己容量マルチスキャンモードのタッチ端子状態

Status	タッチ端子	
	計測対象チャネル	計測対象外チャネル
0	Low	Low
1	Low	Low
2	Low	Low
3	パルス	Low
4	パルス	Low
5	Low	Low

40.3.2.5　相互容量フルスキャンモードの動作

相互容量フルスキャンモードは、受信チャネルのセンサドライブパルスの High 期間に対して、計測対象の送信チャネルにエッジを印加して計測を行います。1 計測対象に対して立ち上がりエッジと立ち下がりエッジの 2 回の計測を実施します。この 2 回の計測データの差分からタッチ判定を行います。これにより、より高いタッチ感度を実現します。

CTSUCHTRC0 ～ CTSUCHTRC4 レジスタで送信用または受信用に設定され、CTSUCHAC0 ～ CTSUCHAC4 レジスタで計測対象に設定されたチャネルに対して、静電容量を順次計測します。容量は、これらの信号を組み合わせて計測されます。図 40.16 にソフトウェアフローと動作例を、図 40.17 にタイミングを示します。



相互容量フルスキャンモードのチャネル計測順序

<設定>
- 相互容量フルスキャンモードを選択（CTSUCR1.CTSUMD[1:0] = 11b）
- 有効チャネルを 0、3、12、13 に設定（CTSUCHAC0.CTSUCHAC0[7:0] = 00001001b, CTSUCHAC1.CTSUCHAC1[7:0] = 00110000b）
- 受信チャネルを 0、3、送信チャネルを 12、13 に設定（CTSUCHTRC0.CTSUCHTRC0[7:0] = 00000000b, CTSUCHTRC1.CTSUCHTRC1[7:0] = 00110000b）

		受信チャネル			
		チャネル3	チャネル2	チャネル1	チャネル0
送信チャネル	チャネル12	(3)			(1)
	チャネル13	(4)			(2)
	チャネル14				
	チャネル15				

図 40.16　相互容量フルスキャンモードのソフトウェアフローと動作例

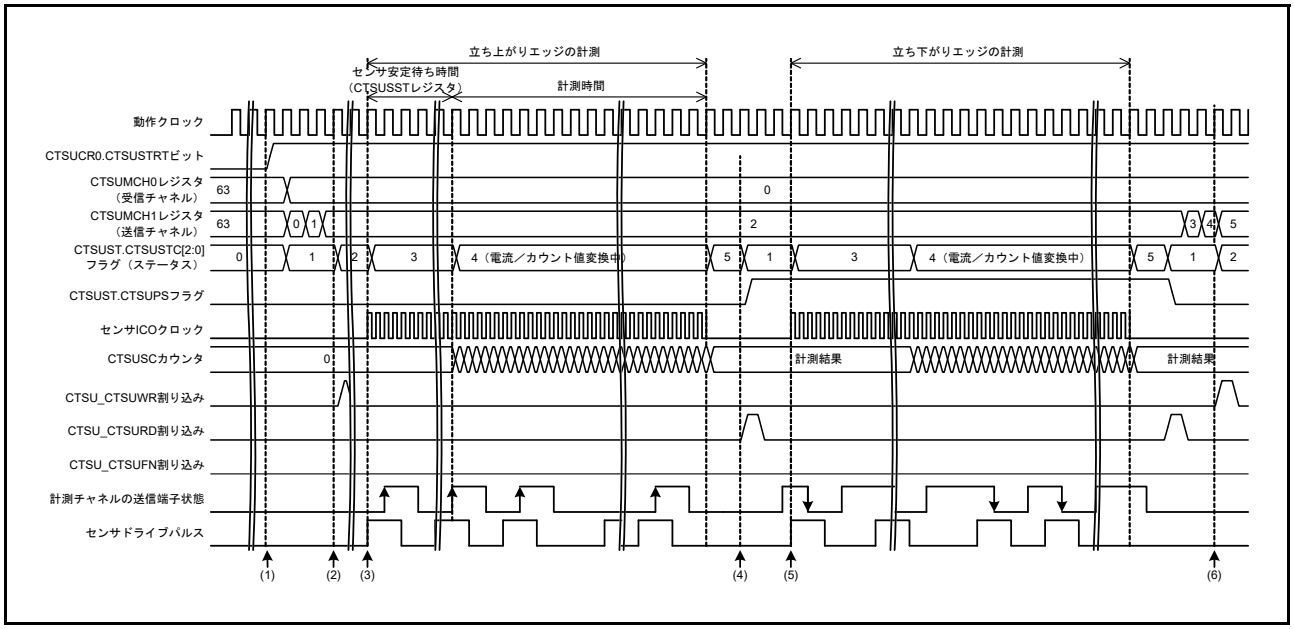


図 40.17　　相互容量フルスキャンモードのタイミング（計測開始条件がソフトウェアトリガの場合）

図 40.17 に示した動作を以下で説明します。

1. 初期設定を実施後、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットに 1 を書き込むと開始します。
2. あらかじめ設定された条件に従い、計測するチャネルが決定された後に、そのチャネルの設定要求（CTSU_CTSUWR）を出力します。
3. 計測チャネルの設定書き込み（CTSUSSC、CTSUSO0、および CTSUSO1 レジスタ）が完了するとセンサドライブパルスが出力され、センサ ICO クロックとリファレンス ICO クロックが動作します。同時に、センサドライブパルスの High 期間に対して、立ち上がりエッジで検出されたパルスを計測チャネルの送信端子に出力します。
4. センサ安定待ち時間、計測時間が経過して計測が終了した後、計測結果読み出し要求（CTSU_CTSURD）を出力します。
5. 同一チャネルに対して、センサドライブパルスの High 期間に、立ち下がりエッジで検出されたパルスを出力して計測を行います。
6. 同一チャネルに対して 2 回の計測を行った後、次に計測するチャネルを決定し、同様の計測を行います。
7. すべてのチャネル計測が完了したら、計測終了割り込み（CTSU_CTSUFN）を出力して計測を終了（Status0 へ遷移）します。

なお、CTSU 相互容量計測ステータスフラグ（CTSUST.CTSUPS ビット）は、Status5 から Status1 へ遷移するタイミングで変化します。

表 40.8 に相互容量フルスキャンモードのタッチ端子状態を示します。

表 40.8　　相互容量フルスキャンモードのタッチ端子状態

Status	受信チャネルのタッチ端子		送信チャネルのタッチ端子		備考
	計測対象チャネル	計測対象外チャネル	計測対象チャネル	計測対象外チャネル	
0	Low	Low	Low	Low	—
1	Low	Low	Low/High	Low	—
2	Low	Low	Low	Low	—
3	パルス	Low	パルス	Low	位相パルスは、1回目の計測では受信チャネルと同相になり、2回目の計測では逆相になります。
4	パルス	Low	パルス	Low	—
5	Low	Low	Low	Low	—

40.3.3　複数モードに関わる共通事項

40.3.3.1　センサ安定待ち時間と計測時間

図 40.18 にセンサ安定待ちと計測のタイミングを示します。

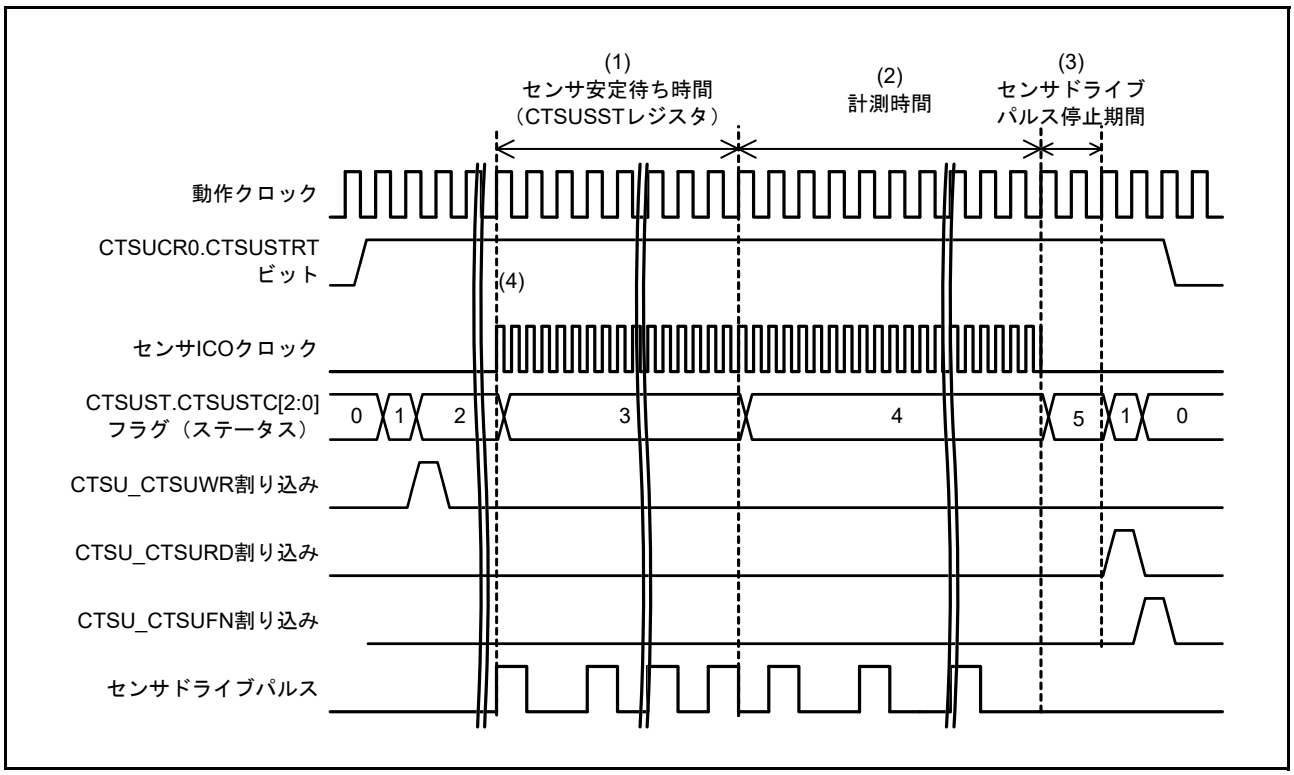


図 40.18　センサ安定待ちと計測のタイミング

1. CTSU_CTSUWR 割り込み要求に対して、CTSUSO1 レジスタへライトアクセスすることでセンサドライブパルスの出力を開始し、CTSUSST レジスタで設定した安定時間を待ちます。
2. センサ安定時間が経過し、かつ CTSUST.CTSUDTSR フラグが 0 にクリアされ、Status4 に遷移することによって計測を開始します。計測時間は、ベースクロックの周期と CTSUSDPRS.CTSUPRMODE[1:0] ビット、CTSUPRRATIO[3:0] ビット、CTSUSO0.CTSUSNUM[5:0] ビットの設定で決定します。計測時間が経過するとチャネルの計測を終了します。
3. 計測時間経過後、動作クロック 2 サイクルで Status1 に遷移し、CTSU_CTSURD 割り込みが発生します。CTSUSC カウンタと CTSURC カウンタからデータを読み出してください。このとき、センサドライブパルスは Low 出力になります。設定した全チャネルの計測が完了すると、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットは 0 にクリアされます。
4. センサ ICO クロックは、CTSUST.CTSUSTC[2:0] フラグ = 011b（Status3）または 100b（Status4）の期間に発振します。

40.3.3.2　割り込み

CTSU は下記の割り込みに対応しています。

- チャネルごとの設定レジスタ書き込み要求割り込み（CTSU_CTSUWR）
- 測定データ転送要求割り込み（CTSU_CTSURD）
- 測定終了割り込み（CTSU_CTSUFN）

(1)　チャネルごとの設定レジスタ書き込み要求割り込み（CTSU_CTSUWR）

計測チャネルごとの設定データを SRAM 上に用意しておき、あらかじめ CTSU_CTSUWR 割り込みに対応した DTC/ICU の転送設定を行います。CTSU_CTSUWR 割り込みは Status1 から Status2 へ遷移したタイミングで出力します。SRAM から関連する CTSUSSC、CTSUSO0、CTSUSO1 レジスタへチャネル設定を書き込みます（図 40.19）。CTSUSO1 レジスタへのライトアクセスにより次の Status への遷移が制御されるため、CTSUSO1 レジスタを必ず最後に設定してください。

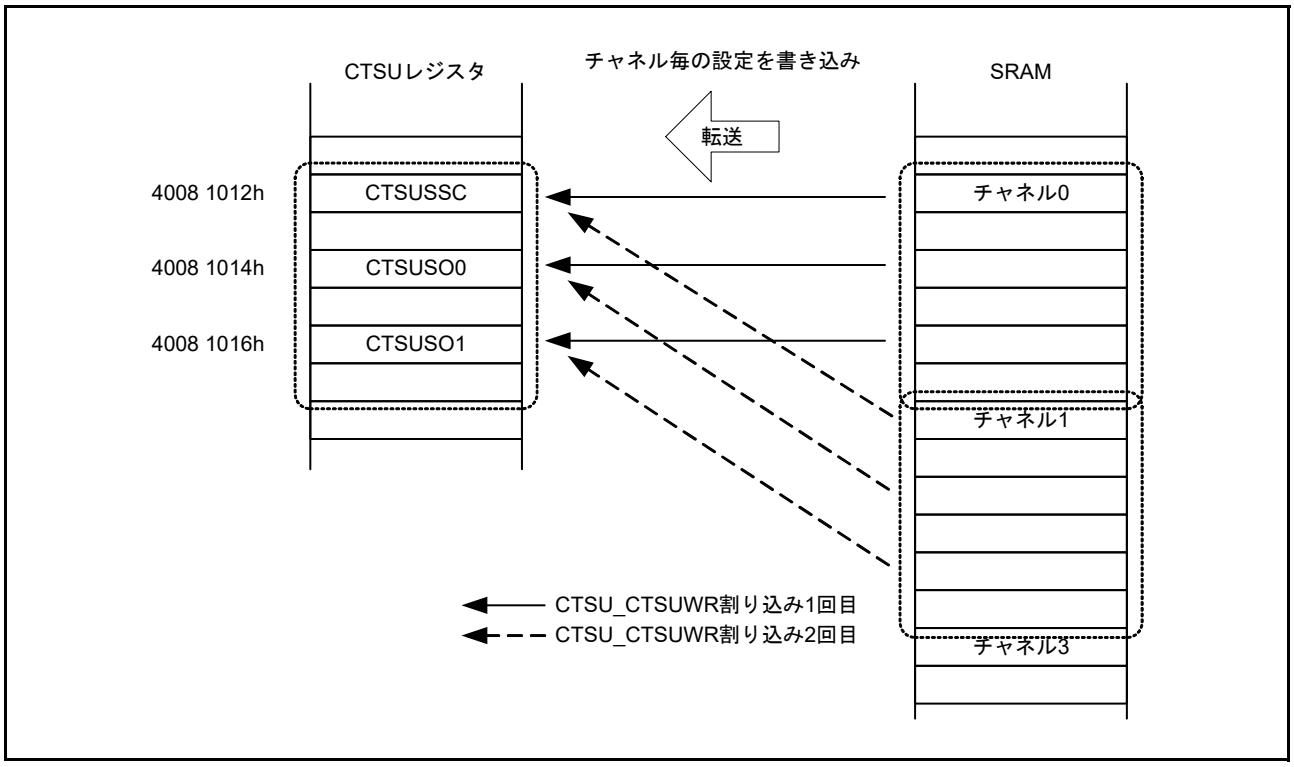


図 40.19　　CTSU_CTSUWR 割り込みを用いた DTC 転送動作例

設定するレジスタ（CTSUSSC、CTSUSO0、CTSUSO1 の各レジスタ）は、連続したアドレスに配置しています。CTSU_CTSUWR 割り込み発生では、以下のように動作を設定してください。

- 転送先アドレス：CTSUSSC レジスタのアドレス
- 転送先アドレスの処理：1 回の割り込みで 2 バイトのデータを 3 回転送。先頭バイトのアドレスは固定
- 転送元アドレス:SRAM 上に用意した設定の番号が最小のチャネルの CTSUSSC レジスタデータ格納アドレス
- 転送元アドレスの処理 : 1 回の割り込みで 2 バイトのデータを 3 回転送。先頭バイトのアドレスは前回の割り込み処理から継続
- 割り込み 1 回あたりの転送回数：計測する回数を指定

(2)　測定データ転送要求割り込み（CTSU_CTSURD）

あらかじめ、CTSU_CTSURD 割り込みに対応した DTC/ICU の転送設定を行います。CTSU_CTSURD 割り込みは、Status5 から Status1 へ遷移するタイミングで出力します。計測結果を CTSUSC カウンタと CTSURC カウンタから読み出してください（図 40.20）。

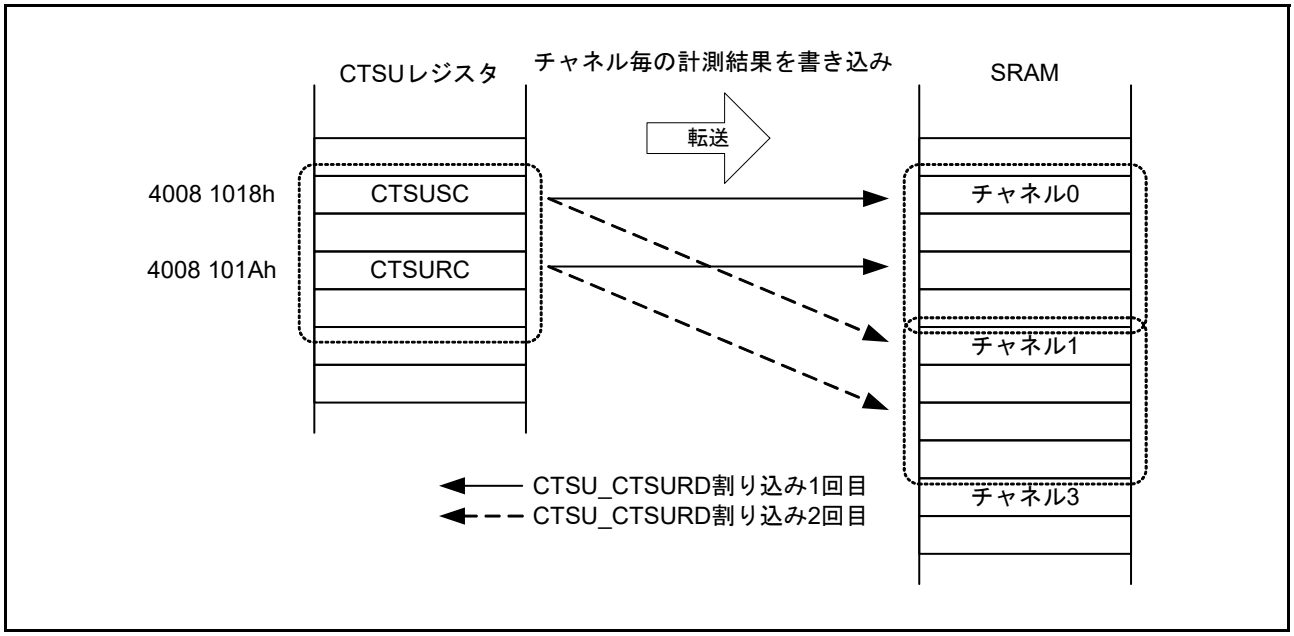


図 40.20　　CTSU_CTSURD 割り込みを用いた DTC 転送動作例

転送元である計測結果レジスタ（CTSUSC カウンタと CTSURC カウンタ）は、連続したアドレスに配置してあります。CTSU_CTSURD 割り込み発生では、以下のように動作を設定してください。

- 転送元アドレス：CTSUSC カウンタのアドレス
- 転送元アドレスの処理：1 回の割り込みで 2 バイトのデータを 2 回転送。先頭アドレスは固定
- 転送先アドレス：SRAM 上に用意した設定の番号が最小のチャネルの CTSUSC カウンタデータ格納アドレス
- 転送先アドレスの処理：1 回の割り込みで 2 バイトのデータを 2 回転送。先頭アドレスは前回の割り込み処理から継続
- 割り込みによる転送回数：計測する回数を指定

(3)　測定終了割り込み（CTSU_CTSUFN）

すべてのチャネル計測が終了した Status1 から Status0 に遷移するタイミングで割り込みを発生します。ソフトウェアによるオーバーフローフラグ（CTSUST.CTSUSOVF フラグと CTSUROVF フラグ）の確認と読み出された計測結果により、電極とのタッチの有無を判定します。割り込み要求の受付、禁止は割り込み制御部で行います。

40.4　使用上の注意事項

40.4.1　計測結果データ（CTSUSC カウンタ、CTSURC カウンタ）

計測中のリードアクセスは禁止です。アクセスした場合は、非同期のため正しくない値を読み出す場合があります。

40.4.2　ソフトウェアトリガに対する制限

CTSUCR1.CTSUCLK[1:0] ビットで 10b（PCLKB/4）を選択した場合、計測完了後に CTSUR0.CTSUSTRT ビットへ 1 を書き込み計測を再開させる場合は、割り込み発生から 3 サイクル以上待ってから書き込むようにしてください。

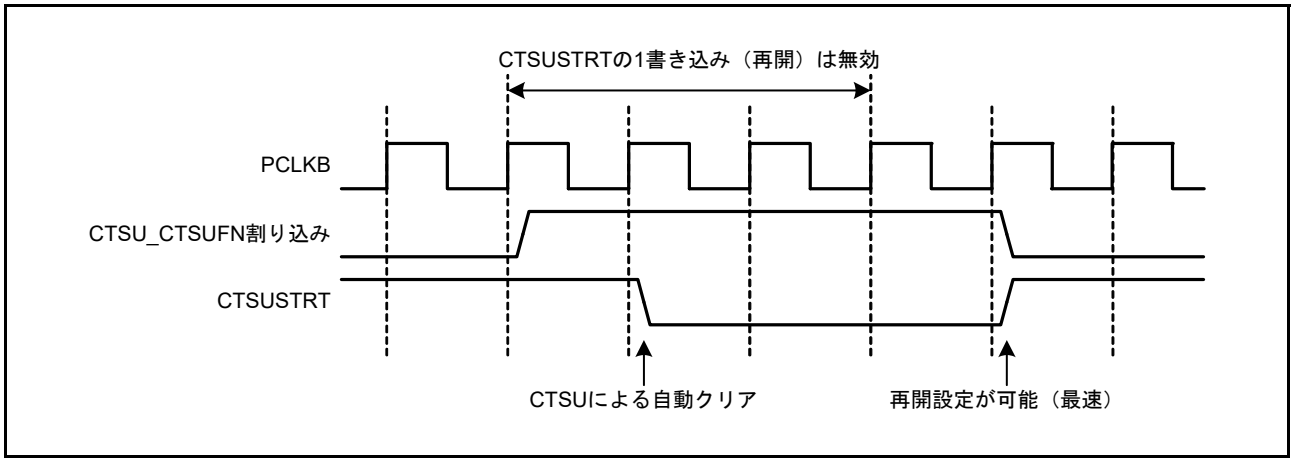


図 40.21　再開時の注意事項

40.4.3　外部トリガに対する制限

- 計測時間中に外部トリガが入力された場合、計測は開始されない。次の外部イベントは、CTSU_CTSUFN 割り込みが発生した動作クロックの 1 サイクル後から有効
- 外部トリガモードを終了する場合は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットの 0 と CTSUCR0.CTSUINIT ビットの 0 の同時書き込み（強制停止）で停止

40.4.4　強制終了に関する制限

動作中に強制停止させる場合は、CTSUCR0.CTSUSTRT ビットに 0、CTSUCR0.CTSUINIT ビットに 1 を同時に書き込んでください。動作が停止し、内部コントロールレジスタが初期化されます。

CTSUCR0.CTSUINIT ビットによる初期化では、内部計測状態の初期化に加え、以下のレジスタが初期化されます。

- CTSUMCH0 レジスタ
- CTSUMCH1 レジスタ
- CTSUST レジスタ
- CTSUSC カウンタ
- CTSURC カウンタ

強制停止した場合、内部状態によっては割り込み要求が発生することがあります。強制停止後、DTC/ICU の停止および無効処理も行ってください。搭載するシステムが何らかの要因で DTC 転送を停止する場合は、CTSU に対しても強制終了および初期化処理を行ってください。

40.4.5　TSCAP 端子

TSCAP 端子は、CTSU 内部電圧を一定に保つために、外部デカップリングキャパシタを必要とします。TSCAP 端子とキャパシタ間、およびキャパシタとグランド間の配線は、物理的に可能な限り短く幅広くしてください。TSCAP 端子に接続されたキャパシタは、スイッチを ON（CTSUCR1.CTSUCSW ビット = 1）して接続する前に、I/O ポート制御により Low を出力させ、十分放電させてください。

40.4.6　計測動作時（CTSUCR0.CTSUSTRT ビット = 1）の制限

計測中（CTSUCR0.CTSUSTRT ビット = 1）は、上位システムから「周辺クロックの停止」や「タッチ端子（TSn 端子、TSCAP 端子）に関わるポート設定の変更」を行わないでください。

これらの制限に違反する制御を設定した場合は、動作の強制停止（CTSUCR0.CTSUSTRT ビット = 0、CTSUCR0.CTSUINIT ビット = 1）後、CTSUCR1.CTSUPON ビットと CTSUCR1.CTSUCSW ビットに 0 を同時に書き込み、CTSUCR0.CTSUSNZ ビットを 0 にしてください。その後、図 40.9 の初期設定フローから再開してください。

41. データ演算回路（DOC）

41.1 概要

データ演算回路（DOC）は、16 ビットのデータを比較、加算、または減算する機能です。選択した条件に該当する場合、割り込みが発生します。

表 41.1 に DOC の仕様を、図 41.1 にブロック図を示します。

表 41.1 DOCの仕様

項目	内容
データ演算機能	16ビットデータの比較、加算、または減算
モジュールストップ機能	モジュール停止状態に設定して消費電力を削減
割り込みとイベントリンク機能（DOC_DOPCI）	割り込みは以下の条件で発生します。 • 比較された値が一致または不一致のとき • データ加算の結果がFFFFhより大きくなったとき • データ減算の結果が0000hより小さくなったとき

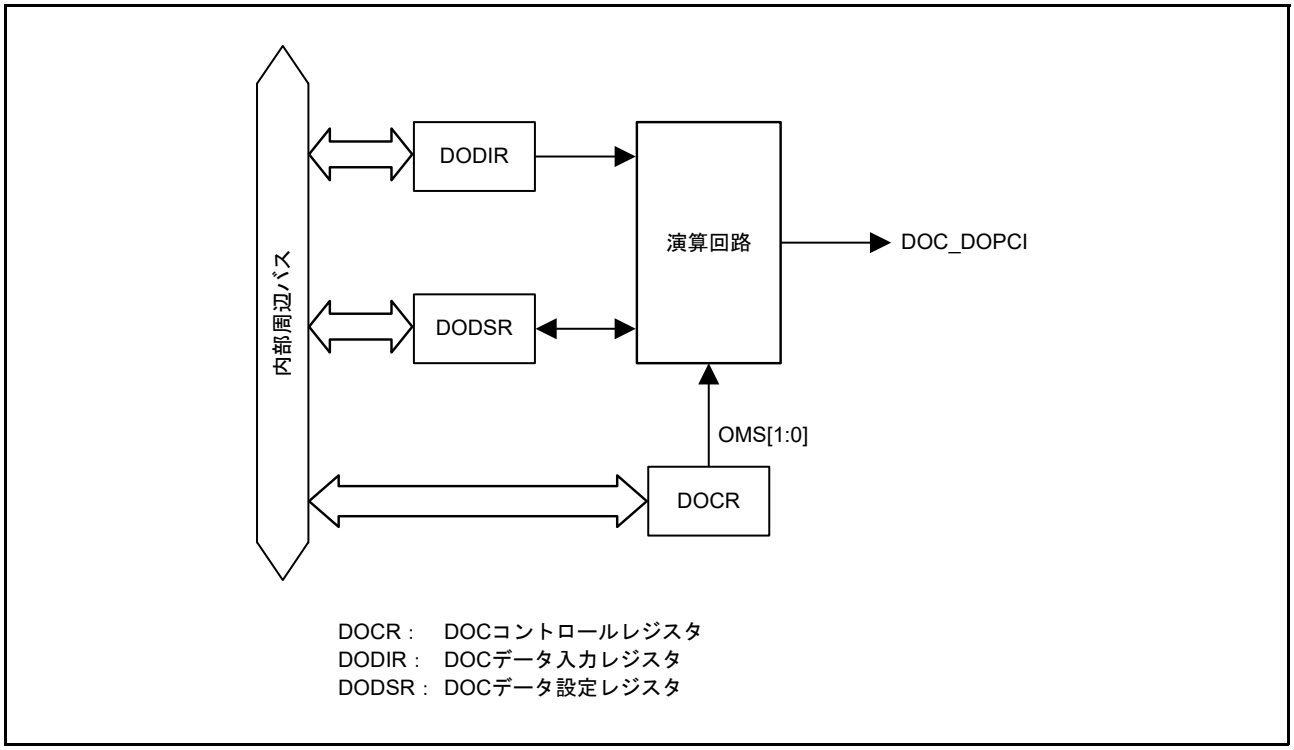


図 41.1 DOC ブロック図

41.2　レジスタの説明

41.2.1　DOC コントロールレジスタ（DOCR）

アドレス　DOC.DOCR 4005 4100h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	DOPCFCL	DOPCF	—	—	DCSEL	OMS[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	OMS[1:0]	動作モード選択	b1　b0 0　0：データ比較モード 0　1：データ加算モード 1　0：データ減算モード 1　1：設定禁止	R/W
b2	DCSEL（注1）	検出条件選択	0：データの不一致検出時にDOPCFを設定 1：データの一致検出時にDOPCFを設定	R/W
b4-b3	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b5	DOPCF	データ演算回路フラグ	演算結果を示します。	R
b6	DOPCFCL	DOPCFクリア	0：DOPCFフラグ状態を保存 1：DOPCFフラグをクリア	R/W
b7	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1.　データ比較モード選択時のみ有効

OMS[1:0] ビット（動作モード選択）

DOC の動作モードを選択します。

DCSEL ビット（検出条件選択）

データ比較モード時の検出条件を選択します。データ比較モード選択時のみ有効です。

DOPCF フラグ（データ演算回路フラグ）

動作結果を示します。

[1 になる条件]

- DCSEL ビットで選択した条件になったとき
- データ加算の結果が FFFFh より大きくなったとき
- データ減算の結果が 0000h より小さくなったとき

[0 になる条件]

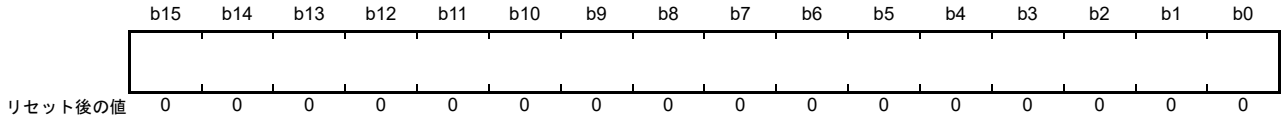
- DOPCFCL ビットに 1 を書き込んだとき

DOPCFCL ビット（DOPCF クリア）

本ビットを 1 にすると DOPCF フラグをクリアします。読むと 0 が読めます。

41.2.2 DOC データインプットレジスタ（DODIR）

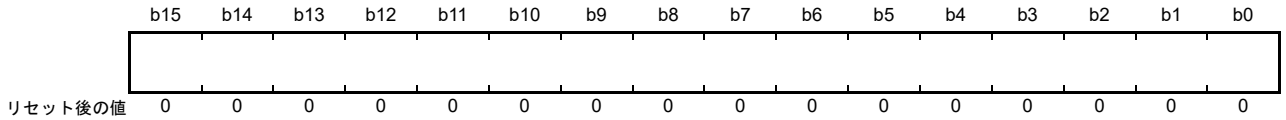
アドレス DOC.DODIR 4005 4102h



DODIR は、演算対象の 16 ビットのデータを格納する 16 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。

41.2.3 DOC データ設定レジスタ（DODSR）

アドレス DOC.DODSR 4005 4104h



DODSR は、データ比較モードで基準として使用される 16 ビットのデータを格納する 16 ビットの読み出し／書き込みレジスタです。また、データ加算モードおよびデータ減算モードでは、演算結果を格納します。

41.3 動作説明

41.3.1 データ比較モード

図 41.2 にデータ比較モードの DOC 動作例を示します。以下は DCSEL = 0（データ比較の結果、不一致を検出）設定時の動作例です。

1. DOCR.OMS[1:0] ビットに 00b を書き込むと、データ比較モードになります。
2. DODSR レジスタに基準となる 16 ビットのデータを設定します。
3. DODIR レジスタに比較する 16 ビットのデータを書き込みます。
4. 比較するデータの書き込みが完了するまで、続けて 16 ビットのデータを DODIR レジスタに書き込みます。
5. DODIR レジスタに書き込まれたデータが DODSR レジスタ内のデータと一致しなかったとき、DOCR.DOPCF フラグが 1 になります。

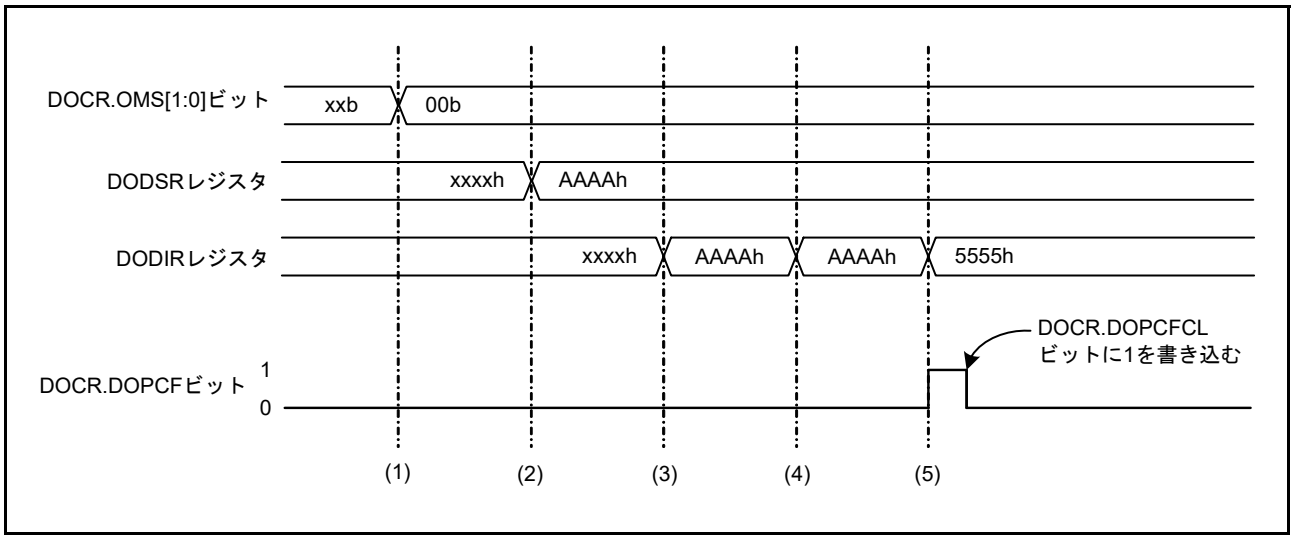


図 41.2 データ比較モードの動作例

41.3.2 データ加算モード

図 41.3 にデータ加算モードの DOC 動作例を示します。

設定方法は以下のとおりです。

1. DOCR.OMS[1:0] ビットに 01b を書き込むと、データ加算モードになります。
2. DODSR レジスタに初期値として 16 ビットのデータを設定します。
3. DODIR レジスタに加算する 16 ビットのデータを書き込みます。演算結果は DODSR レジスタに格納されます。
4. 加算するデータの書き込みが完了するまで、続けて 16 ビットのデータを DODIR レジスタに書き込みます。
5. 演算結果が FFFFh よりも大きくなったとき DOCR.DOPCF フラグが 1 になります。

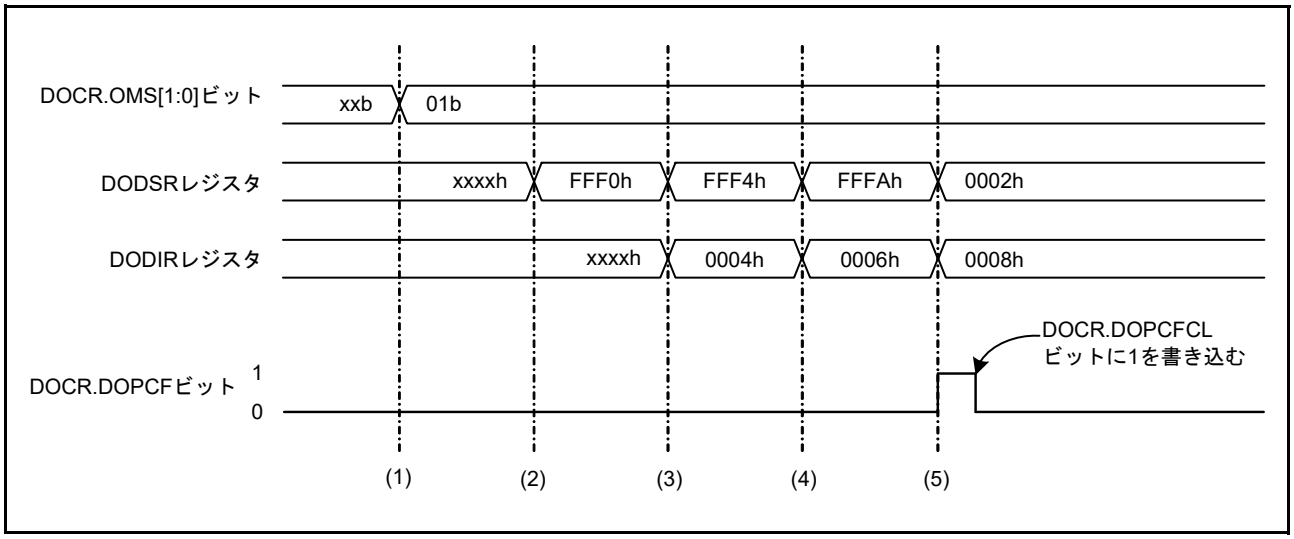


図 41.3 データ加算モードの動作例

41.3.3　データ減算モード

図 41.4 にデータ減算モードの DOC 動作例を示します。

設定方法は以下のとおりです。

1. DOCR.OMS[1:0] ビットに 10b を書き込むと、データ減算モードになります。
2. DODSR レジスタに初期値として 16 ビットのデータを設定します。
3. DODIR レジスタに減算する 16 ビットのデータを書き込みます。演算結果は DODSR レジスタに格納されます。
4. 減算するデータの書き込みが完了するまで、続けて 16 ビットのデータを DODIR レジスタに書き込みます。
5. 演算結果が 0000h よりも小さくなったとき DOCR.DOPCF フラグが 1 になります。

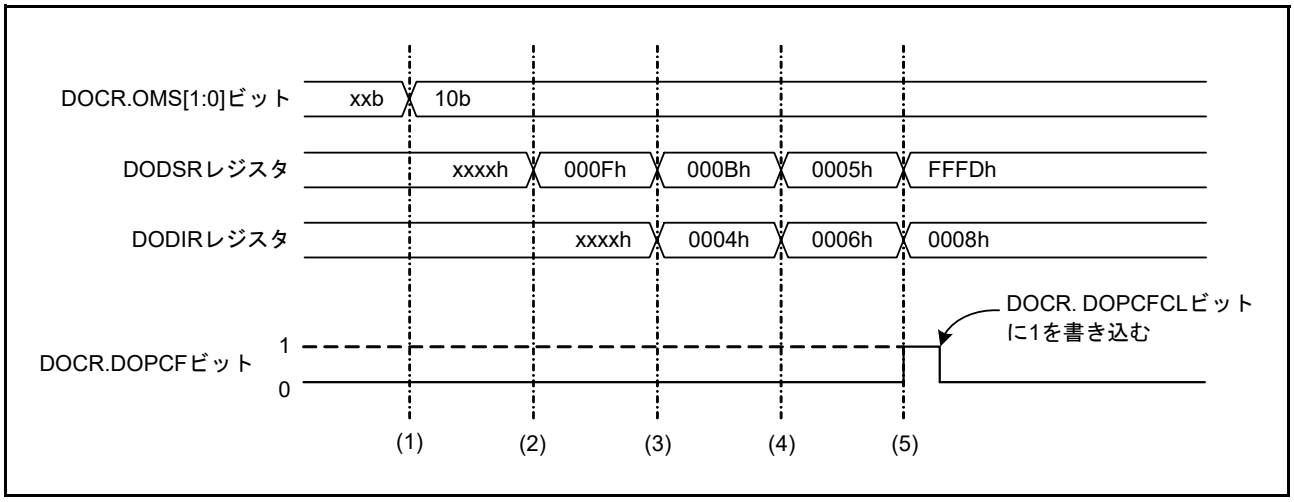


図 41.4　データ減算モードの動作例

41.4　イベントリンクコントローラ（ELC）への割り込み要求と出力

DOC は以下の条件で ELC にイベント信号を出力します。

- 比較された値が一致または不一致のとき
- データ加算の結果が FFFFh より大きくなったとき
- データ減算の結果が 0000h より小さくなったとき

この信号を使用して、あらかじめ設定していたモジュールの動作を開始させることができます。また、割り込み要求として使用することもできます。イベント信号が発生すると、データ演算回路フラグ（DOCR.DOPCF）が 1 になります。

41.5　使用上の注意事項

41.5.1　モジュールストップ状態の設定

モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC）によって、DOC の動作を許可または禁止することが可能です。DOC は、リセット後の初期状態では動作が停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。詳細は、「11.　低消費電力モード」を参照してください。

42. SRAM

42.1 概要

本 MCU は、パリティビットチェック機能または誤り訂正コード（ECC）を備えたオンチップ高速 SRAM モジュールを搭載しています。ECC の対象は SRAM0 の最初の 16KB 領域です。パリティチェックは、その他の領域で実行されます。SRAM の仕様を表 42.1 に示します。

表 42.1 SRAMの仕様

項目	ECCなし	ECCあり
SRAM容量	SRAM0: 80KB	SRAM0（ECC領域）: 16KB
SRAMアドレス	SRAM0: 2000 4000h～2001 7FFFh	SRAM0（ECC領域）: 2000 0000h～2000 3FFFh
アクセス（注1）	0ウェイト	
モジュールストップ機能	使用可能	
パリティ	8ビットデータと1ビットパリティの偶数パリティ	パリティなし
エラーチェック機能	偶数パリティエラーチェック	1ビット誤り訂正、最大2ビットの誤り検出

注 1. 詳細は、42.3.7 アクセスサイクルを参照してください。

42.2 レジスタの説明

42.2.1 SRAM パリティエラー検出後動作レジスタ（PARIOAD）

アドレス SRAM.PARIOAD 4000 2000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	OAD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OAD	検出後の動作	1：リセット 0：ノンマスカブル割り込み	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

PARIOAD レジスタは、パリティエラー検出時の動作を制御します。本レジスタへの書き込みは SRAM プロテクトレジスタ（SRAMPRCR）によって保護されています。まず、SRAMPRCR.SRAMPRCR ビットを許可にしてから本レジスタへの書き込みを行ってください。SRAM アクセス中は、PARIOAD レジスタへの書き込みは行わないでください。

OAD ビット（検出後の動作）

パリティエラーが検出された場合に、リセットまたはノンマスカブル割り込みのどちらを発生させるかを指定します。PARIOAD.OAD ビットは、SRAM0（ECC なし）で使用されます。

42.2.2 SRAM プロテクトレジスタ（SRAMPRCR）

アドレス SRAM.SRAMPRCR 4000 2004h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	KW[6:0]							SRAMPRCR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	SRAMPRCR	レジスタ書き込み制御	0：保護対象のレジスタへの書き込みを禁止 1：保護対象のレジスタへの書き込みを許可	R/W
b7-b1	KW[6:0]	書き込みキーコード	SRAMPRCRビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/W

SRAMPRCR ビット（レジスタ書き込み制御）

PARIOAD レジスタのライトモードを制御します。本ビットが 1 のとき、PARIOAD レジスタへの書き込みが許可されます。本ビットに書き込む場合、同時に KW[6:0] ビットに 78h を書き込んでください。

KW[6:0] ビット（書き込みキーコード）

SRAMPRCR ビットへの書き込みを許可または禁止します。SRAMPRCR ビットに書き込む場合、同時に KW[6:0] ビットに 78h を書き込んでください。それ以外の値を KW[6:0] に書き込むと、SRAMPRCR ビットは更新されません。KW[6:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

42.2.3 ECC 動作モードコントロールレジスタ（ECCMODE）

アドレス SRAM.ECCMODE 4000 20C0h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	ECCMOD[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	ECCMOD[1:0]	ECC動作モード選択	b1 b0 0 0：ECC機能は無効 0 1：設定禁止 1 0：ECC機能は有効／エラーチェックなし 1 1：ECC機能は有効／エラーチェックあり	R/W
b7-b2	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ECCMODE レジスタは ECC の動作モードを設定するレジスタです。本レジスタへの書き込みは ECC プロテクトレジスタ（ECCPRCR）によって保護されています。まず、ECCPRCR.ECCPRCR ビットを 1 にしてから本レジスタへの書き込みを行ってください。SRAM アクセス中は ECCMODE レジスタへの書き込みは行わないでください。

ECCMOD[1:0] ビット（ECC 動作モード選択）

SRAM の ECC 領域へのアクセスモードを設定します。

42.2.4 ECC 2 ビットエラーステータスレジスタ（ECC2STS）

アドレス SRAM.ECC2STS 4000 20C1h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	ECC2ERR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ECC2ERR	ECC 2ビットエラーステータス	0：ECC 2ビットエラー発生なし 1：ECC 2ビットエラー発生	R(/W) （注1）
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. ビットをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

ECC2ERR ビット（ECC 2 ビットエラーステータス）

SRAM の ECC 領域で ECC 2 ビットエラーが発生したかどうかを示します。ECC 有効／エラーチェックありの場合、2 ビットエラーが検出されると ECC2ERR ビットが 1 になり SRAM エラー信号がアサートされます。ECC2ERR ビットに 0 を書き込むことによって、2 ビット ECC エラーはクリアされます。SRAM エラーには、ECCOAD レジスタでノンマスカブル割り込みまたはリセットを指定できます。このレジスタに 0 を書き込む間、SRAM の ECC 領域にはアクセスしないでください。

42.2.5 ECC 1 ビットエラー情報更新イネーブルレジスタ（ECC1STSEN）

アドレス SRAM.ECC1STSEN 4000 20C2h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	E1STSEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	E1STSEN	ECC 1ビットエラー情報更新許可	0：ECC 1ビットエラー情報の更新禁止 1：ECC 1ビットエラー情報の更新許可	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

ECC1STSEN レジスタは、SRAM（ECC 領域）の ECC 1 ビットエラー発生時に、ECC 1 ビットエラーステータスレジスタ（ECC1STS）の更新を許可／禁止します。本レジスタへの書き込みは ECC プロテクトレジスタ（ECCPRCR）によって保護されています。まず、ECCPRCR.ECCPRCR ビットを書き込み許可にしてから本ビットへの書き込みを行ってください。

E1STSEN ビット（ECC 1 ビットエラー情報更新許可）

SRAM の ECC 領域における 1 ビットエラー発生時に、SRAM（ECC 領域）1 ビットエラーステータスレジスタ（ECC1STS）の更新を許可／禁止します。このレジスタは、割り込みまたはリセットマスクとしても機能します。

42.2.6 ECC 1 ビットエラーステータスレジスタ（ECC1STS）

アドレス SRAM.ECC1STS 4000 20C3h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	ECC1ERR
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ECC1ERR	ECC 1ビットエラーステータス	0：ECC 1ビットエラー発生なし 1：ECC 1ビットエラー発生あり	R(/W) （注1）
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 1. ビットをクリアするための 0 の書き込みのみ可能です。

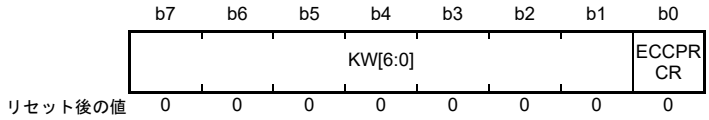
ECC1ERR ビット（ECC 1 ビットエラーステータス）

SRAM の ECC 領域で ECC 1 ビットエラーが発生したかどうかを示します。ECC 動作が有効で、誤り訂正が選択されており、1 ビットエラー情報の更新が許可されている場合、1 ビットエラーが検出されると 1 になり、SRAM エラー信号がアサートされます。ECC1ERR ビットに 0 を書き込むことによって、1 ビット ECC エラーはクリアされます。

SRAM エラーには、ECCOAD レジスタでノンマスカブル割り込みまたはリセットを指定できます。このレジスタに 0 を書き込む間、SRAM の ECC 領域にはアクセスしないでください。

42.2.7 ECC プロテクトレジスタ（ECCPRCR）

アドレス SRAM.ECCPRCR 4000 20C4h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ECCPRCR	レジスタ書き込み制御	0：保護対象のレジスタへの書き込みを禁止 1：保護対象のレジスタへの書き込みを許可	R/W
b7-b1	KW[6:0]	書き込みキーコード	ECCPRCR ビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/W

ECCPRCR ビット（レジスタ書き込み制御）

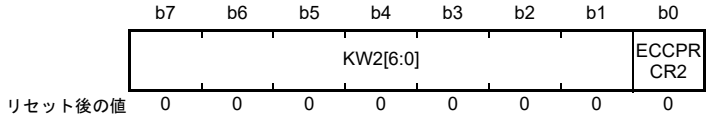
ECCMODE レジスタ、ECC1STSEN レジスタ、ECCOAD レジスタのライトモードを制御します。本ビットが 1 のとき、ECCMODE レジスタ、ECC1STSEN レジスタ、ECCOAD レジスタへの書き込みが許可されます。本ビットに書き込む場合、同時に KW[6:0] ビットに 78h を書き込んでください。

KW[6:0] ビット（書き込みキーコード）

ECCPRCR ビットへの書き込みを許可または禁止します。ECCPRCR ビットに書き込む場合、同時に KW[6:0] ビットに 78h を書き込んでください。それ以外の値を KW[6:0] に書き込むと、ECCPRCR ビットは更新されません。KW[6:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

42.2.8 ECC プロテクトレジスタ 2（ECCPRCR2）

アドレス SRAM.ECCPRCR2 4000 20D0h



ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	ECCPRCR2	レジスタ書き込み制御	0：保護対象のレジスタへの書き込みを禁止 1：保護対象のレジスタへの書き込みを許可	R/W
b7-b1	KW2[6:0]	書き込みキーコード	ECCPRCR2 ビットへの書き込みを許可または禁止します。	R/W

ECCPRCR2 ビット（レジスタ書き込み制御）

ECCETST レジスタのライトモードを制御します。本ビットが 1 のとき、ECCETST レジスタへの書き込みが許可されます。本ビットに書き込む場合、同時に KW2[6:0] ビットに 78h を書き込んでください。

KW2[6:0] ビット（書き込みキーコード）

ECCPRCR2 ビットへの書き込みを許可または禁止します。本ビットに書き込む場合、同時に KW2[6:0] に 78h を書き込んでください。それ以外の値を KW2[6:0] に書き込むと、ECCPRCR2 ビットは更新されません。KW2[6:0] ビットは読むと常に 00h が読み出されます。

42.2.9 ECC テストコントロールレジスタ（ECCETST）

アドレス SRAM.ECCETST 4000 20D4h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	TSTBYP
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	TSTBYP	ECCバイパス選択	0：ECCバイパスは無効 1：ECCバイパスは有効	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

本レジスタへの書き込みは ECC プロテクトレジスタ（ECCPRCR2）によって保護されています。このビットに書き込む前に、ECCPRCR2.ECCPRCR2 ビットを 1 にしてください（書き込み保護は無効）。SRAM アクセス中は ECCETST レジスタへの書き込みは行わないでください。

TSTBYP ビット（ECC バイパス選択）

ECC 機能をバイパスして、ECC コードへの直接アクセスを許可します。ECC バイパス機能が使用されている時、ECCMODE.ECCMOD[1:0] ビットは 00b になります。32 ビットデータに対して同じアドレスを使用し、ECC は 32 ビットでアクセスする必要があります。ECC コードは 32 ビットデータの下位 7 ビットに割り当てられます。ライトデータの上位 25 ビットは無視されます。このリードデータの上位 25 ビットは不定です。

注 . ECC テストの詳細については、42.3.4 ECC デコーダのテスト方法を参照してください。

42.2.10 SRAM ECC エラー検出後動作レジスタ（ECCOAD）

アドレス SRAM.ECCOAD 4000 20D8h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	OAD
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	OAD	検出後の動作	1：リセット 0：ノンマスカブル割り込み	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

本レジスタへの書き込みは ECC プロテクトレジスタ（ECCPRCR）によって保護されています。このビットに書き込む前に、ECCPRCR レジスタの ECCPRCR ビットを 1 にしてください（書き込み保護無効）。SRAM アクセス中は ECCOAD レジスタへの書き込みは行わないでください。

OAD ビット（検出後の動作）

ECC エラーが検出された場合にリセットとノンマスカブル割り込みのどちらを発生させるか選択します。ECCOAD.OAD ビットは、SRAM（ECC 領域）で使用されます。

42.3 動作説明

42.3.1 消費電力低減機能

モジュールストップコントロールレジスタ A（MSTPCRA）の設定により、SRAM へのクロック供給を停止することで、消費電力を低減することが可能です。MSTPCRA.MSTPA0 ビットと MSTPCRA.MSTPA6 ビットの両方を 1 にすると、SRAM0 に供給されるクロック信号が停止します（注 1）。

注 1. MSTPCRA.MSTPA0 ビットと MSTPCRA.MSTPA6 ビットは同じ値にする必要があります。

クロック信号の供給が停止すると、SRAM はモジュールストップ状態になります。モジュールストップ状態では SRAM にアクセスできません。SRAM アクセス中は、モジュールストップ状態に遷移しないでください。モジュールストップ状態のとき、SRAM へのアクセスは禁止です。アクセスした場合の動作は保証できません。

MSTPCRA レジスタの詳細については、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

SRAM0 のヘッド領域である 48KB（2000 0000h ～ 2000 BFFFh）を除き、SRAM0 の供給電圧はオフにできるため、ソフトウェアスタンバイモードでの消費電力はさらに低減できます。ソフトウェアスタンバイモードの詳細は、「11. 低消費電力モード」を参照してください。

42.3.2 ECC 機能

ECC 機能は、ECCMODE レジスタの設定によって、有効または無効に設定可能です。初期状態では、ECC 機能は無効です。また、ECC のチェックタイプは、SEC-DED（単一誤り訂正、二重誤り検出）です。ECC 機能が有効な場合、書き込み時は、32 ビットのデータに 7 チェックビットが付与されます。読み出し時は、SRAM（ECC 領域）から 39 ビットデータ（32 ビットデータと 7 チェックビット）が読み出されます。

ECC とエラーチェックの両方が有効の場合、1 ビットエラーが発生すると誤り訂正が実行され、ECC1STSEN.E1STSEN ビットが 1 のときは ECC1STS.ECC1ERR ビットが 1 になります。2 ビットエラーが発生すると、誤りが検出され、ECC2STS.ECC2ERR ビットが 1 になりますが、誤り訂正は実行されません。

「ECC 有効／エラーチェックなし」の場合、1 ビットエラーが発生すると誤り訂正が実行されますが、ECC1STSEN.E1STSEN ビットが 1 でも ECC1STS.ECC1ERR ビットは更新されません。2 ビットエラーが発生すると、誤りが検出されますが ECC2STS.ECC2ERR ビットは更新されず、誤り訂正も実行されません。

ECC 機能が無効の場合、1 ビットエラーまたは 2 ビットエラーが発生しても、誤り訂正と誤り検出は実行されません。そのため、ECC1ERR ビットと ECC2ERR ビットは更新されません。

エラーを検出した場所は確認できません。そのため、エラー発生後は SRAM に 32 ビットデータを書き込むことですべてのデータを更新してください。

ライトアクセスの後にリードアクセスが続いて発生すると、リードアクセスが優先的に実行されます。したがって、初期化中は、ライトアクセスの後に続けてリードアクセスを行わないでください。

42.3.3 ECC エラー発生

SRAM（ECC 領域）が「ECC 有効／エラーチェックあり」モードのとき、ECC 2 ビットエラーを示す ECC2STS.ECC2ERR ビット、または ECC 1 ビットエラーを示す ECC1STS.ECC1ERR ビットのいずれかが 1 になると、ECC エラーが発生します。

ECC 1 ビットエラーをマスクする場合は、ECC1STSEN.E1STSEN ビットを 0 にして、ECC1ERR ビットの更新を禁止してください。ECC 無効時、または「ECC 有効／エラーチェックなし」の場合、ECC エラーは発生しません。

ECC エラーは、ECCOAD レジスタでの選択に基づきノンマスカブル割り込みまたはリセットのいずれかを発生させます。ECCOAD.OAD ビットが 1 のとき、ECC エラーはリセット機能に出力されます。ECCOAD.OAD ビットが 0 のとき、ECC エラーはノンマスカブル割り込みとして ICU に出力されます。

42.3.4 ECC デコーダのテスト方法

図 42.1 に ECC デコーダのテスト方法を示します。

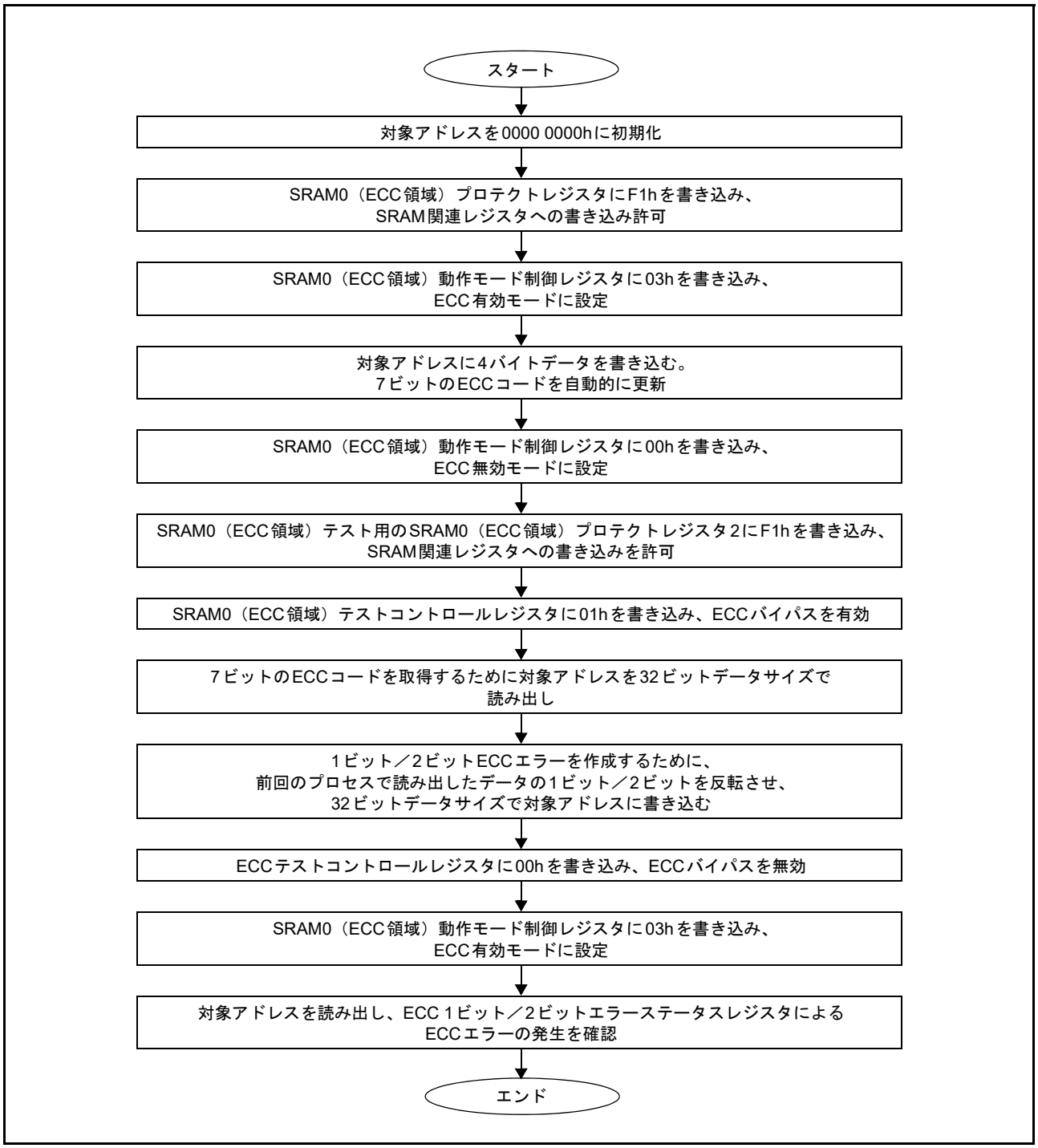


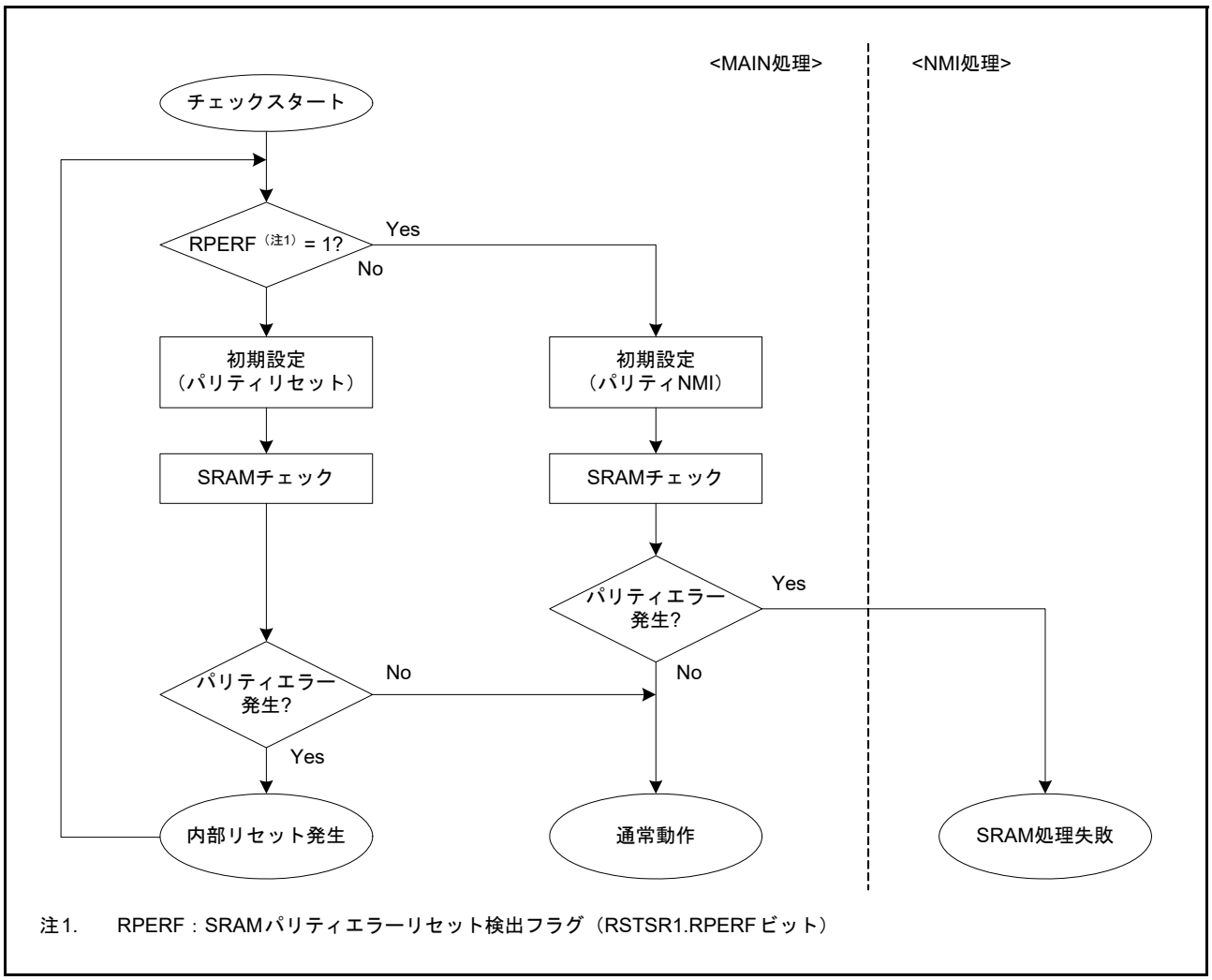
図 42.1 ECC デコーダのテスト方法

42.3.5 パリティ計算機能

IEC60730 規格に準拠するには、SRAM データのチェックが必要です。データ書き込み時に 32 ビットデータ幅の SRAM に格納されている 8 ビットデータごとにパリティビットが付与され、データ読み出し時にパリティチェックが行われます。パリティエラーが発生すると、パリティエラー通知が生成されます。この機能は、リセットを実行するためにも使用できます。SRAM0 の仕様は、ECC なしの場合、偶数パリティです。

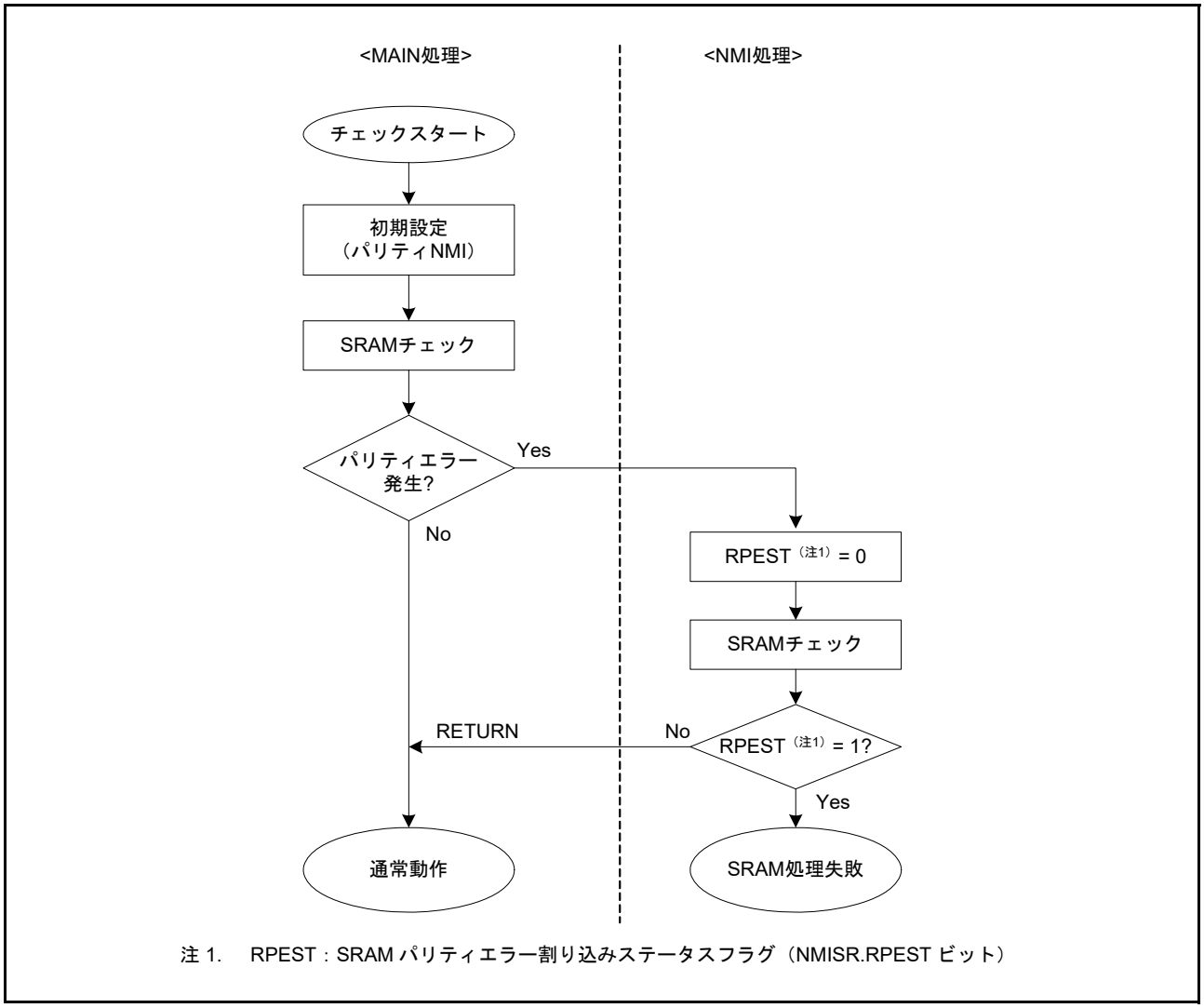
パリティエラー通知には、PARIOAD.OAD ビットで、ノンマスカブル割り込みまたはリセットを指定できます。OAD ビットが 1 のとき、パリティエラーはリセット機能に出力されます。OAD ビットが 0 のとき、パリティエラーはノンマスカブル割り込みとして ICU に出力されます。

パリティエラーはしばしばノイズにより発生します。パリティエラーの原因がノイズか破損かを確認するには、図 42.2 および図 42.3 に示されたパリティチェックフローを使用してください。



注1. RPERF：SRAMパリティエラーリセット検出フラグ（RSTSR1.RPERF ビット）

図 42.2 SRAM パリティリセット許可の場合の SRAM パリティチェックのフロー



注 1. RPEST：SRAM パリティエラー割り込みステータスフラグ（NMISR.RPEST ビット）

図 42.3 SRAM パリティ割り込み許可の場合の SRAM パリティチェックのフロー

42.3.6 SRAM エラー要因

SRAM エラーの原因は、ECC エラーまたはパリティエラーのいずれかです。ECC エラーおよびパリティエラーは、それぞれ ECCOAD.OAD ビット、PARIOAD.OAD ビットで選択したとおり、ノンマスカブル割り込みまたはリセットのいずれかを発生させることができます。

表 42.2 SRAMエラー要因

エラー要因	DTCの起動	DMACの起動
ECCエラー（ECCありのSRAM0領域）	不可能	不可能
パリティエラー（ECCなしのSRAM0領域）	不可能	不可能

42.3.7 アクセスサイクル

表 42.3 SRAM0（ECC領域 2000 0000h～2000 3FFFh）

ビット設定	リード（サイクル）		ライト（サイクル）	
	ワードアクセス	ハーフワード／バイトアクセス	ワードアクセス	ハーフワード／バイトアクセス
ECCオフ ECCMOD[1] = 0	2		2	
ECCオン ECCMOD[1] = 1	2		2	4

表 42.4 SRAM0（パリティ領域 2000 4000h～2001 7FFFh）

リード（サイクル）		ライト（サイクル）	
ワードアクセス	ハーフワード／バイトアクセス	ワードアクセス	ハーフワード／バイトアクセス
2		2	

42.4 使用上の注意事項

42.4.1 SRAM 領域からの命令フェッチ

SRAM0 を使用してプログラムを実行する場合、SRAM 領域を初期化して CPU が正確にデータをプリフェッチできるようにしてください。初期化されていない SRAM 領域から CPU がデータをプリフェッチすると、ECC エラーまたはパリティエラーが発生する場合があります。4 バイト境界のプログラムの終了アドレスから 12 バイト領域を初期化してください。

42.4.2 SRAM のストアバッファ

SRAM と CPU 間の迅速なアクセスのためにストアバッファが使用されます。SRAM のストア命令の後で、同じアドレスからの負荷命令が実行されると、負荷命令は SRAM データの代わりにバッファからのデータを読み出すことがあります。SRAM から正しくデータを読み出すには、下記のいずれかの手順を行ってください。

- SRAM（アドレス＝A）に書き込んだ後に、NOP 命令を使用し、SRAM（アドレス＝A）を読み出す
- SRAM（アドレス＝A）に書き込んだ後に、SRAM（アドレス＝A）以外の領域のデータを読み出し、それから SRAM（アドレス＝A）を読み出す

43. フラッシュメモリ

本 MCU は、最大 512KB のコードフラッシュメモリと 8KB のデータフラッシュメモリを内蔵しています。フラッシュコントロールブロック（FCB）は、フラッシュメモリのプログラムコマンドを制御します。本製品は、Silicon Storage Technology, Inc. よりライセンス供与された SuperFlash® 技術を使用しています。

43.1 概要

表 43.1 に、コードフラッシュメモリとデータフラッシュメモリの仕様を、図 43.1 に関連モジュールのブロック図を示します。図 43.2 にコードフラッシュメモリの構成を、図 43.3 にデータフラッシュメモリの構成を示します。

表 43.1 コードフラッシュメモリとデータフラッシュメモリの仕様

項目	コードフラッシュメモリ	データフラッシュメモリ
メモリ容量	• ユーザ領域：最大512KB	データ領域：8KB
リードサイクル	• 32MHz＜ICLK周波数≦48MHz キャッシュヒット：1サイクル キャッシュミス：2、3サイクル • ICLK周波数≦32MHz キャッシュヒット：1サイクル キャッシュミス：1サイクル	バイトアクセス時にはFCLK 6サイクルでのリード（FCLK周波数≦32MHz）
イレース後の値	FFh	FFh
プログラム／イレース方式	• レジスタに設定したFCBコマンドを使用してコードフラッシュメモリおよびデータフラッシュメモリをプログラム／イレース • 専用フラッシュメモリプログラマによるシリアルインタフェース通信を介したプログラム（シリアルプログラミング） • ユーザプログラムによるフラッシュメモリのプログラム（セルフプログラミング）	
セキュリティ機能	フラッシュメモリの不正改ざん／不正読み出しを防止	
プロテクション機能	フラッシュメモリの誤オーバーライトを防止	
BGO（バックグラウンドオペレーション）機能	データフラッシュメモリのプログラム中にコードフラッシュメモリの読み出しが可能	
プログラム／イレース単位	• ユーザ領域へのプログラム：64ビット単位 • ユーザ領域のイレース：2KB単位	• データ領域へのプログラム：8ビット単位 • データ領域のイレース：1KB単位
その他の機能	セルフプログラミング中の割り込み受け付け	
	本MCUの初期設定でフラッシュメモリ拡張領域（オプションバイト）の設定可能	
オンボードプログラミング	シリアルプログラミングモード（SCIブートモード）でのプログラム • 調歩同期式シリアルインタフェース（SCI9）を使用 • 転送速度は自動調整 シリアルプログラミングモード（USBブートモード）でのプログラム • USBFSを使用 • 専用ハードウェアが不要で、PCと直結可能 オンチップデバッグモードでのプログラム • JTAGまたはSWDインタフェースを使用 • 専用ハードウェアは必要なし ユーザプログラム中のコードフラッシュメモリ／データフラッシュメモリ書き換えルーチンによるプログラム • システムをリセットすることなくコードフラッシュメモリ／データフラッシュメモリのプログラムが可能	

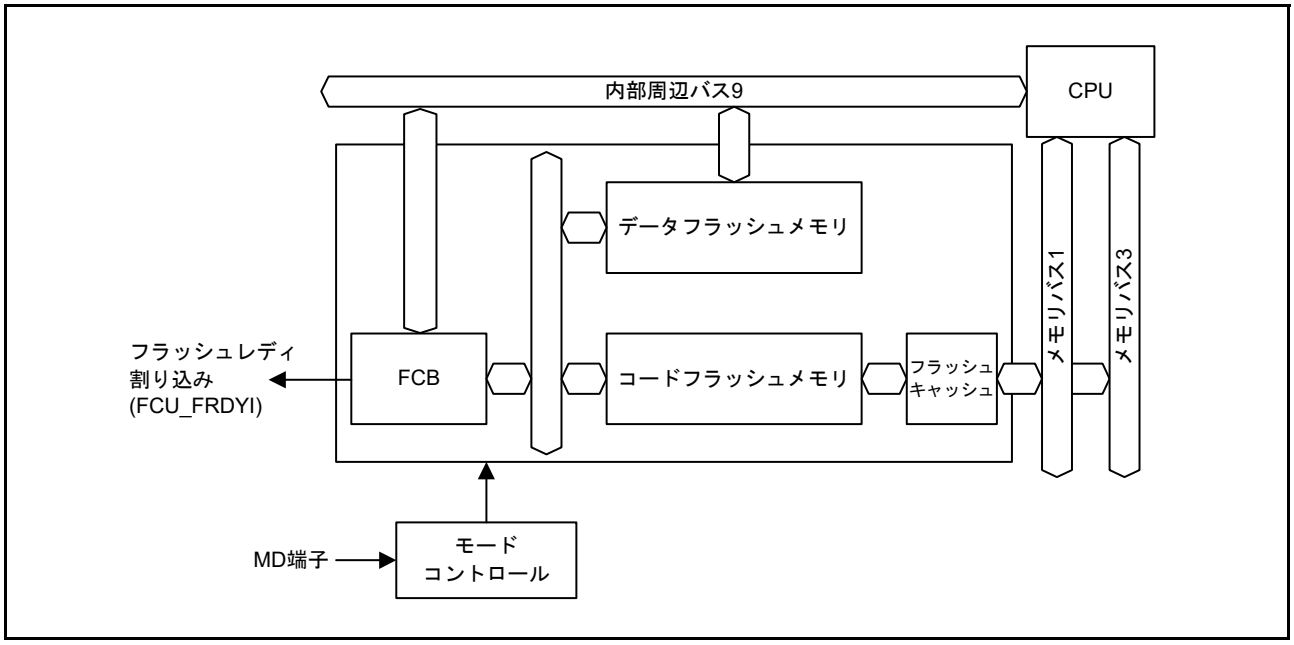


図 43.1 フラッシュメモリ関連モジュールのブロック図

43.2 メモリ構成

図 43.2 にコードフラッシュメモリのマッピングを、表 43.2 にコードフラッシュメモリのサイズ別のリードアドレスおよびプログラム／イレース（P/E）アドレスを示します。コードフラッシュメモリのユーザ空間は 2KB のブロックに分割されており、各ブロック単位でイレース可能です。ユーザ領域は、ユーザプログラムの格納に使用できます。

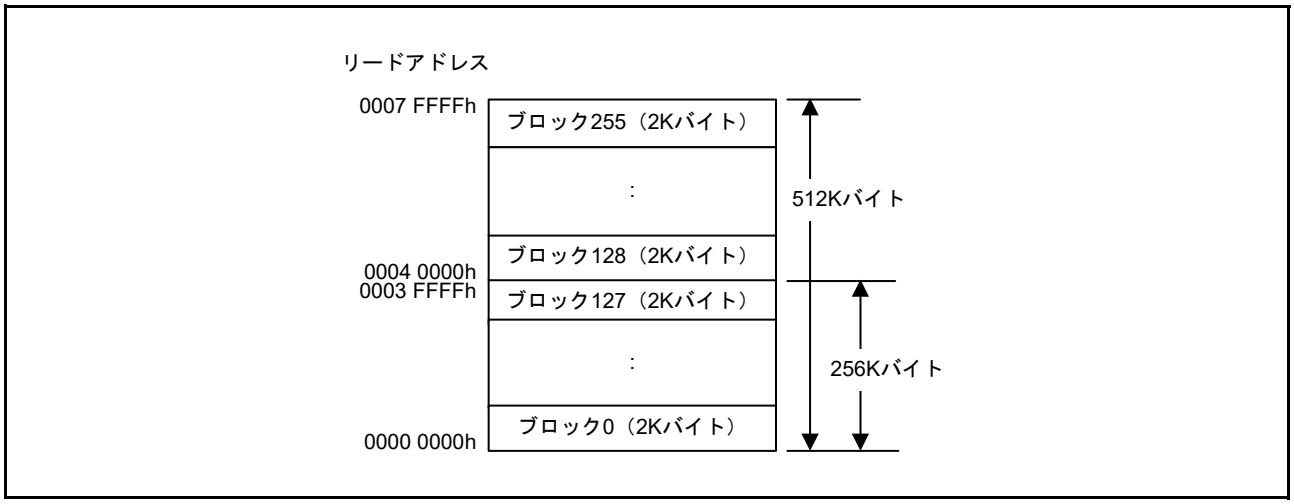


図 43.2 コードフラッシュメモリマッピング

表 43.2 コードフラッシュメモリのサイズ別リード、P/Eアドレス

コードフラッシュメモリのサイズ	リードアドレス	P/Eアドレス	ブロック番号
512KB	0000 0000h～0007 FFFFh	0000 0000h～0007 FFFFh	0～255

データフラッシュメモリのデータ領域は 1KB のブロックに分割されており、各ブロック単位でイレース可能です。図 43.3 にデータフラッシュメモリのマッピングを、表 43.3 にデータフラッシュメモリのサイズ別のリードアドレスと P/E アドレスを示します。

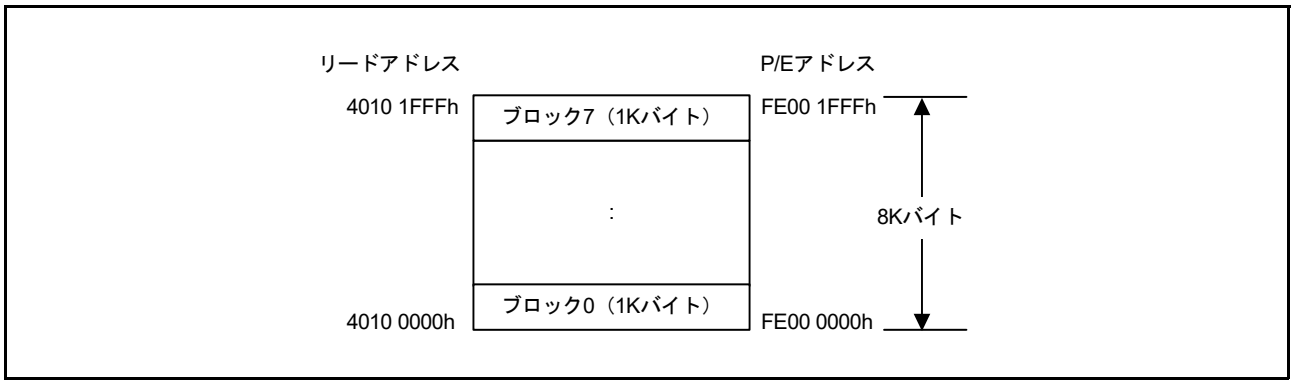


図 43.3 データフラッシュメモリマッピング

表 43.3 データフラッシュメモリのサイズ別リード、P/Eアドレス

データフラッシュメモリのサイズ	リードアドレス	P/Eアドレス	ブロック
8KB	4010 0000h～4010 1FFFh	FE00 0000h～FE00 1FFFh	0～7

43.3 フラッシュキャッシュ

43.3.1 概要

フラッシュキャッシュ（FCACHE）は、バスマスタからフラッシュメモリへのリードアクセスを高速化します。FCACHE には以下が含まれます。

- CPU 命令フェッチで使用する FCACHE1
- CPU オペランドアクセスと DMA で使用する FCACHE2
- CPU 命令フェッチのプリフェッチアクセスで使用する FLPF

表 43.4 フラッシュキャッシュの概要

項目	フラッシュキャッシュ 1（FCACHE1）	フラッシュキャッシュ 2（FCACHE2）	プリフェッチバッファ（FLPF）
キャッシュ対象領域	0000 0000h～007F FFFFh	0000 0000h～007F FFFFh	0000 0000h～007F FFFFh
対象バスマスタ	CPU命令フェッチ	CPUオペランドアクセスおよびCPU以外からのアクセス	FLPF
容量	128バイト	8バイト	16バイト
アソシアティブ方式	2ウェイセットアソシアティブ	フルアソシアティブ	—
	64ビット／エントリ（64ビット整列データ）、8エントリ／ウェイ	64ビット／エントリ（64ビット整列データ）、1エントリ	64ビット／エントリ（64ビット整列データ）、2エントリ、前のCPU命令の次のアドレス
アクセスサイクル	キャッシュヒット：0ウェイト キャッシュミス： SYSTEM.MEMWAIT レジスタに従う： MEMWAIT = 0：0ウェイト MEMWAIT = 1：1～2ウェイト	キャッシュヒット：0ウェイト キャッシュミス： SYSTEM.MEMWAIT レジスタに従う： MEMWAIT = 0：0ウェイト MEMWAIT = 1：1～2ウェイト	キャッシュヒット：0ウェイト キャッシュミス： SYSTEM.MEMWAIT レジスタに従う： MEMWAIT = 0：0ウェイト MEMWAIT = 1：1～2ウェイト

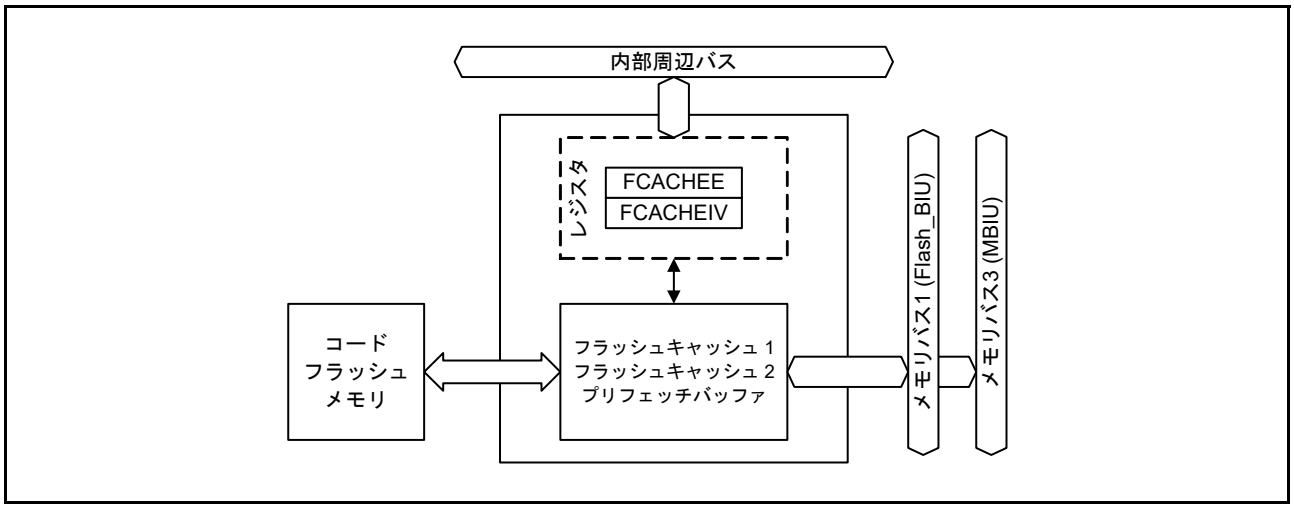


図 43.4 FCACHE のブロック図

43.3.2 レジスタの説明

43.3.2.1 フラッシュキャッシュイネーブルレジスタ（FCACHEE）

アドレス FCACHE.FCACHEE 4001 C100h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	FCACHEEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FCACHEEN	FCACHE許可	0：FCACHE禁止 1：FCACHE許可	R/W
b15-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

FCACHEE.FCACHEEN ビットは、FCACHE1、FCACHE2、FLPF のフラッシュキャッシュ機能を許可または禁止します。FCACHEIV.FCACHEIV には影響しません。FCACHE が許可されている場合、HPROT[3] ビット設定はそれがキャッシャブルなのかノンキャッシャブルなのかを決定します。15.5 フラッシュキャッシュ使用時の注意事項を参照してください。

43.3.2.2 フラッシュキャッシュインバリデートレジスタ（FCACHEIV）

アドレス FCACHE.FCACHEIV 4001 C104h

	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	FCACHEIV
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	FCACHEIV	フラッシュキャッシュインバリデート	• 読み出し： 0：インバリデートしない 1：インバリデートする • 書き込み： 1を書くとFCACHEをインバリデートします。0を書くと無視されます。	R/W
b15-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

FCACHEIV.FCACHEIV ビットに 1 を書くと、FCACHE1、FCACHE2、FLPF のフラッシュキャッシュデータがインバリデートされます。

43.3.2.3 データフラッシュコントロールレジスタ（DFLCTL）

アドレス FLCN.DFLCTL 407E C090h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	—	—	—	—	—	DFLEN
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b0	DFLEN	データフラッシュアクセス有効	0：データフラッシュアクセス無効 1：データフラッシュアクセス有効	R/W
b7-b1	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

DFLCTL レジスタはデータフラッシュへのアクセス（読み出し、書き込み、消去）を許可、あるいは禁止します。DFLCTL.DFLEN ビットを設定した後、データフラッシュからの読み出しや、プログラミング／イレースモードに入る前に、データフラッシュデータフラッシュ STOP 復帰時間（t_{DSTOP}）が必要です。

データフラッシュデータフラッシュ STOP 復帰時間は動作モードによって異なります。

［動作モードごとの設定時間］

- HS(High-speed) モード：5µs
- LS(Low-speed) モード：720ns
- LP(低消費電力) モード：720ns
- LV(low-voltage) モード；10µs

43.4 動作説明

フラッシュキャッシュを有効にするには FCACHEE レジスタを使用します。フラッシュキャッシュを設定してフラッシュメモリの書き換えに備えるには、以下を実行します。

1. FCACHEE.FCACHEEN ビットをリセットしてフラッシュキャッシュを禁止します。(注 1)
2. ICLK 周波数および OPCCR および SOPCCR 両レジスタに設定の電力制御モードについて、必要に応じて MEMWAIT.MEMWAIT ビットを設定します。
3. FCACHEIV.FCACHEIV ビットを設定してフラッシュキャッシュを無効化します。
4. FCACHEIV.FCACHEIV ビットが 0 であることを確認します。
5. FCACHEE.FCACHEEN ビットを設定してフラッシュキャッシュを許可します。

注 . フラッシュキャッシュ有効時、動作モード（読み出しモード、ウェイトモード）を変更しないでください。
注 1. リセット後の最初の設定でフラッシュキャッシュを禁止にする必要はありません。

43.4.1 フラッシュキャッシュ使用における注意

CPU からのアクセスでフラッシュキャッシュを使用する場合、Arm® MPU もキャッシャブルに設定しなければなりません。

ARM®v7-M Architecture Reference Manual および *ARM® Cortex®-M4 Devices Generic User Guide* を参照してください。

43.5 フラッシュメモリ関連の動作モード

図 43.5 にフラッシュメモリに関するモード遷移図を示します。モードの設定方法については、「3. 動作モード」を参照してください。

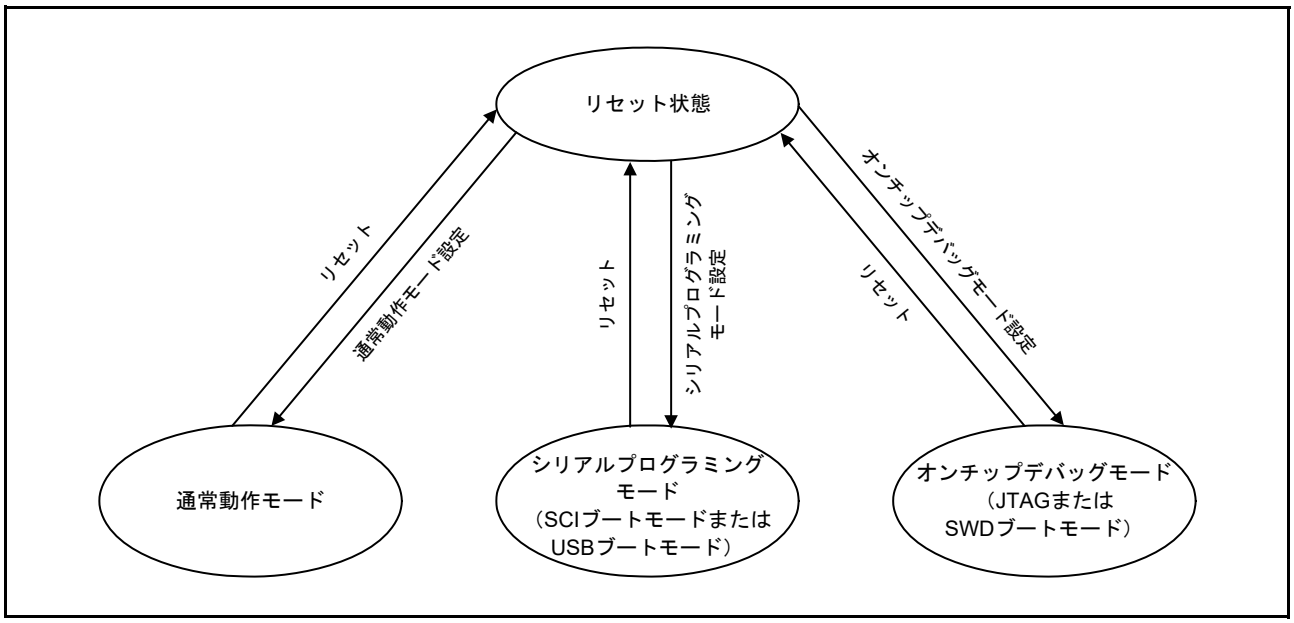


図 43.5 フラッシュメモリに関するモード遷移図

各モードでプログラム／イレースが可能なフラッシュメモリの領域、リセット後の起動プログラムを実行するフラッシュメモリの領域は異なります。表 43.5 に各モードの相違点を示します。

表 43.5 各モードの相違点

項目	通常動作モード	シリアルプログラミングモード（SCI/USB ブートモード）	オンチップデバッグモード（JTAG/SWD ブートモード）
プログラム／イレースが可能な領域	• コードフラッシュメモリ • データフラッシュメモリ	• コードフラッシュメモリ • データフラッシュメモリ	• コードフラッシュメモリ • データフラッシュメモリ
ブロック分割イレース	可能	可能	可能
リセット時の起動プログラム	ユーザ領域のプログラム	シリアルプログラミング用組み込みプログラム	デバッグコマンドに依存

43.5.1 ID コードプロテクト機能

この機能は、プログラミングとオンチップデバッギングを禁止します。ID コードプロテクト機能が有効な場合、本 MCU はホストが送信した ID コードをフラッシュメモリに格納されている ID コードと比較し、有効または無効にします。プログラミングとオンチップデバッギングは、この 2 つの ID が一致する場合に限り許可されます。

フラッシュメモリに格納されている ID コードは、32 ビットワード 4 つで構成されます。ID コードのビット 127 とビット 126 は、ID コードプロテクト機能が有効か判定し、ホストで使用する認証方法を決定します。ID コードがどのように認証方法を決定するかについて、表 43.6 に示します。

表 43.6 IDコードプロテクト機能の仕様

ブートアップ時の動作モード	IDコード	プロテクト状態	プログラマまたはオンチップデバッガ接続時の動作
シリアルプログラミングモード（SCI/USBブートモード） オンチップデバッグモード（JTAG/SWDブートモード）	FFh, …, FFh （全バイトがFFh）	プロテクト無効	IDコードは検証されません。IDコードは常に一致して、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続が許可されます。
	ビット127 = 1、 ビット126 = 1、かつ 16バイトのうち少なくとも1つがFFh以外	プロテクト有効	IDコード一致：認証を終了し、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続を許可 IDコード不一致：IDコードプロテクト待機状態へ遷移 プログラマまたはオンチップデバッガから送られてきたIDコードがASCIIコードのALeRASE（414C_6552_4153_45FF_FFFF_FFFF_FFFF_FFFFh）であると、ユーザフラッシュ（コードフラッシュおよびデータフラッシュ）領域および構成領域の内容は消去されます。 ただし、AWSC.FSPRビットが0であれば、強制消去は実行されません。
	ビット127 = 1かつ ビット126 = 0	プロテクト有効	IDコード一致：認証を終了し、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続を許可 IDコード不一致：IDコードプロテクト待機状態へ遷移
	ビット127 = 0	プロテクト有効	IDコードは検証されません。IDコードは常に一致せず、プログラマまたはオンチップデバッガへの接続は禁止されます。

43.6 機能概要

シリアルインタフェース経由（シリアルプログラミングモード）、またはJTAG/SWDインタフェース経由（オンチップデバッグモード）で、専用フラッシュメモリプログラマを使用して内蔵フラッシュメモリを書き換えることにより、ターゲットシステムへの実装前／実装後にかかわらず本MCUのプログラムが可能です。また、ユーザプログラムの書き換えを禁止するセキュリティ機能により、第三者によるプログラムの改ざんを防止できます。

ユーザプログラムによるプログラミング（セルフプログラミング）は、システムの製造／出荷後の更新が必要なアプリケーションに有効です。フラッシュメモリ領域を安全に書き換えるためのプロテクション機能もサポートしています。また、セルフプログラミング中の割り込み処理もサポートされており、外部通信およびその他の機能を実行している間もプログラミングを継続できます。表 43.7 は、プログラミング方式と関連する動作モードを示しています。

表 43.7 プログラミング方式

プログラミング方式	機能概要	動作モード
シリアルプログラミング	SCI9またはUSBFSインタフェース経由で接続されている専用フラッシュメモリプログラマを用いて、ターゲットシステムへの実装後もフラッシュメモリのオンボード書き換えが可能です。	シリアルプログラミングモード
	SCI9またはUSBFSインタフェースおよび専用プログラミングアダプタボードを経由して接続されている専用フラッシュメモリプログラマを用いて、ターゲットシステム実装前にフラッシュメモリのオフボード書き換えが可能です。	
セルフプログラミング	シリアルプログラミングによってあらかじめメモリに書き込まれたユーザプログラムを実行することによっても、フラッシュメモリの書き換えが可能です。セルフプログラミングによるデータフラッシュメモリの書き換え時には、バックグラウンドオペレーション機能によりコードフラッシュメモリからの命令フェッチおよびデータの読み出しが可能です。そのため、コードフラッシュメモリ上のプログラムを実行して、データフラッシュメモリを書き換えることができます。	通常動作モード
JTAG/SWDプログラミング	JTAG/SWD経由で接続されている専用フラッシュメモリプログラマまたはオンチップデバッガを用いて、ターゲットシステムへの実装後もフラッシュメモリのオンボード書き換えが可能です。	オンチップデバッグモード
	JTAG/SWDおよび専用プログラミングアダプタボードを経由して接続されている専用フラッシュメモリプログラマまたはオンチップデバッガを用いて、ターゲットシステム実装前にフラッシュメモリのオフボード書き換えが可能です。	

本 MCU は、セルフプログラミング用にプログラムコマンドをサポートしています。内蔵フラッシュメモリの機能一覧を表 43.8 に示します。シリアルプログラミングではシリアルプログラマコマンドを使用してください。セルフプログラミングでは、プログラミングコマンドを使用して内蔵フラッシュメモリの読み出しまたはユーザプログラムの実行を行ってください。

表 43.8 基本機能

機能	機能概要	サポートの有無	
		シリアルプログラミング	セルフプログラミング
ブランクチェック	指定したブロックがプログラムされていないことを確認します。イレース後にプログラムされていない状態のデータフラッシュメモリの読み出し結果は保証されません。イレース後にプログラムされていない状態を確認するには、ブランクチェックを使用してください。	×	○
ブロックイレース	指定したブロックのメモリ内容のイレースを行います。	○	○
プログラム	指定したアドレスのプログラムを行います。	○	○
リード	フラッシュメモリにプログラムしたデータを読み出します。	○	×（ユーザプログラムによる読み出しは可能）
IDコードチェック	ホストが送信したIDコードとフラッシュメモリに格納されているコードとを比較します。これら二つが一致する場合、FCBは待機状態に遷移してホストからのプログラミングとイレースコマンドを待ちます。	○	×（ID認証は行わない）
セキュリティ設定	シリアルプログラミング用のセキュリティ機能を設定します。	△（有効から無効への切り替えのみ許可）	△（有効から無効への切り替えのみ許可）
プロテクション設定	コードフラッシュメモリにおけるフラッシュ領域プロテクションのアクセスウィンドウを設定します。	○	○

内蔵フラッシュメモリは、ID コードセキュリティ機能をサポートしています。ID 認証は、シリアルプログラミングと JTAG/SWD プログラミングで使用できるセキュリティ機能です。内蔵フラッシュメモリでサポートされるセキュリティ機能を表 43.9 に、セキュリティ設定時の動作を表 43.10 に示します。

表 43.9 セキュリティ機能

機能	内容
ID認証	シリアルプログラミング時のシリアルプログラマ接続をID認証結果で制御可能です。

表 43.10 セキュリティ設定時の動作

機能	セキュリティ設定時のイレース／プログラミング／リード動作		セキュリティ設定に関する注意事項
	シリアルプログラミングとオンチップデバッグモード	セルフプログラミングモード	セルフプログラミングモード
ID認証	IDが不一致の場合： • ブロックイレースコマンド：× • プログラミングコマンド：× • リードコマンド：× • セキュリティ設定コマンド：× • プロテクション設定コマンド：× IDが一致した場合： • ブロックイレースコマンド：○ • プログラミングコマンド：○ • リードコマンド：○ • セキュリティ設定コマンド：○ • プロテクション設定コマンド：○	ID認証は行わない • ブランクチェック：○ • ブロックイレース：○ • プログラミング：○ • セキュリティ設定：○ • プロテクション設定：○	ID認証は行わない

○：サポートあり、×：サポートなし

43.6.1 構成領域ビットマップ

図 43.6 に、ID 認証、スタートアップ領域の選択、アクセスウィンドウプロテクション、セキュリティ設定機能で使用するビットを示します。ブートプログラムは、必ずこれらのビットを 16 進数データとして使用しなければなりません。

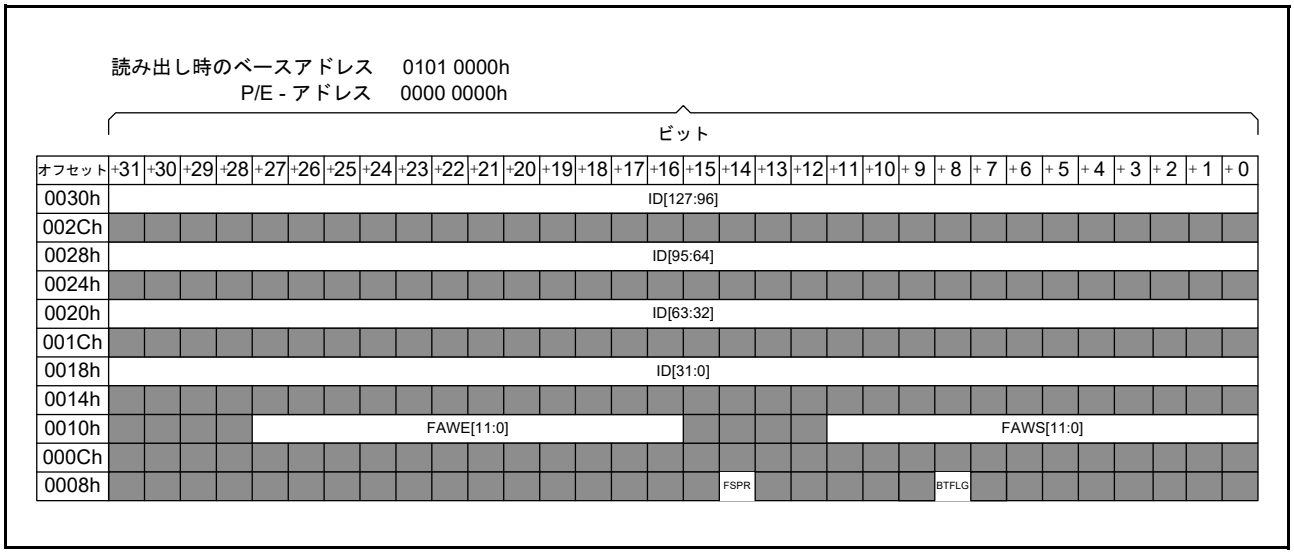
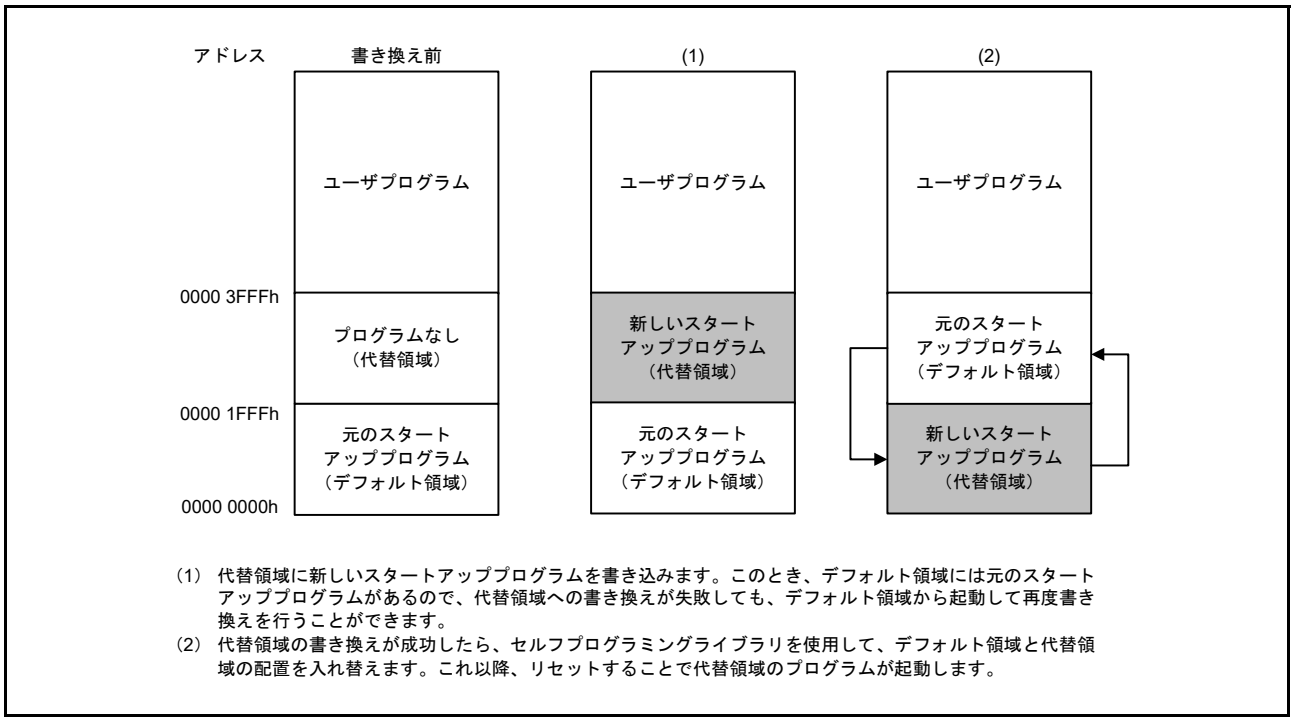


図 43.6 構成領域ビットマップ

43.6.2 スタートアップ領域選択

スタートアップ領域選択機能によって、ブートプログラムの安全な更新が可能になります。スタートアップ領域は、ユーザ領域に配置された 8KB の領域です。FCB は、AWSC レジスタに配置されたスタートアップ領域選択フラグ（BTFLG）の値に基づきスタートアップ領域のアドレスを制御します。スタートアップ領域は FSPR ビットでロックすることが可能です。

図 43.7 に、スタートアッププログラムのプロテクションの概要を示します。



(1) 代替領域に新しいスタートアッププログラムを書き込みます。このとき、デフォルト領域には元のスタートアッププログラムがあるので、代替領域への書き換えが失敗しても、デフォルト領域から起動して再度書き換えを行うことができます。
(2) 代替領域の書き換えが成功したら、セルフプログラミングライブラリを使用して、デフォルト領域と代替領域の配置を入れ替えます。これ以降、リセットすることで代替領域のプログラムが起動します。

図 43.7 スタートアッププログラムプロテクションの概要

43.6.3 アクセスウィンドウによるプロテクション

アクセスウィンドウの外側にあるフラッシュメモリ領域にプログラムまたはブロックイレースコマンドを発行すると、コマンドロック状態に陥ります。アクセスウィンドウは、コードフラッシュメモリのユーザ領域においてのみ有効です。アクセスウィンドウは、セルフプログラミングモード、シリアルプログラミングモード、およびオンチップデバッグモードにおいて、プロテクション機能を提供します。図 43.8 に、フラッシュ領域のプロテクション機能を示します。

アクセスウィンドウは、FAWS[11:0] ビットおよび FAWE[11:0] ビットの両方で指定されています。以下に、各種条件での FAWE[11:0] ビットおよび FAWS[11:0] ビットの設定を説明します。

- FAWE[11:0] = FAWS[11:0] : P/E コマンドは、コードフラッシュメモリのユーザ領域のどこでも実行できます
- FAWE[11:0] > FAWS[11:0] : P/E コマンドは、FAWS[11:0] ビットで指示されたブロックから、FAWE[11:0] ビットで指示されたブロックより 1 つ下のブロックまでのウィンドウにおいてのみ実行できます
- FAWE[11:0] < FAWS[11:0] : P/E コマンドは、コードフラッシュメモリのユーザ領域のどこでも実行できません

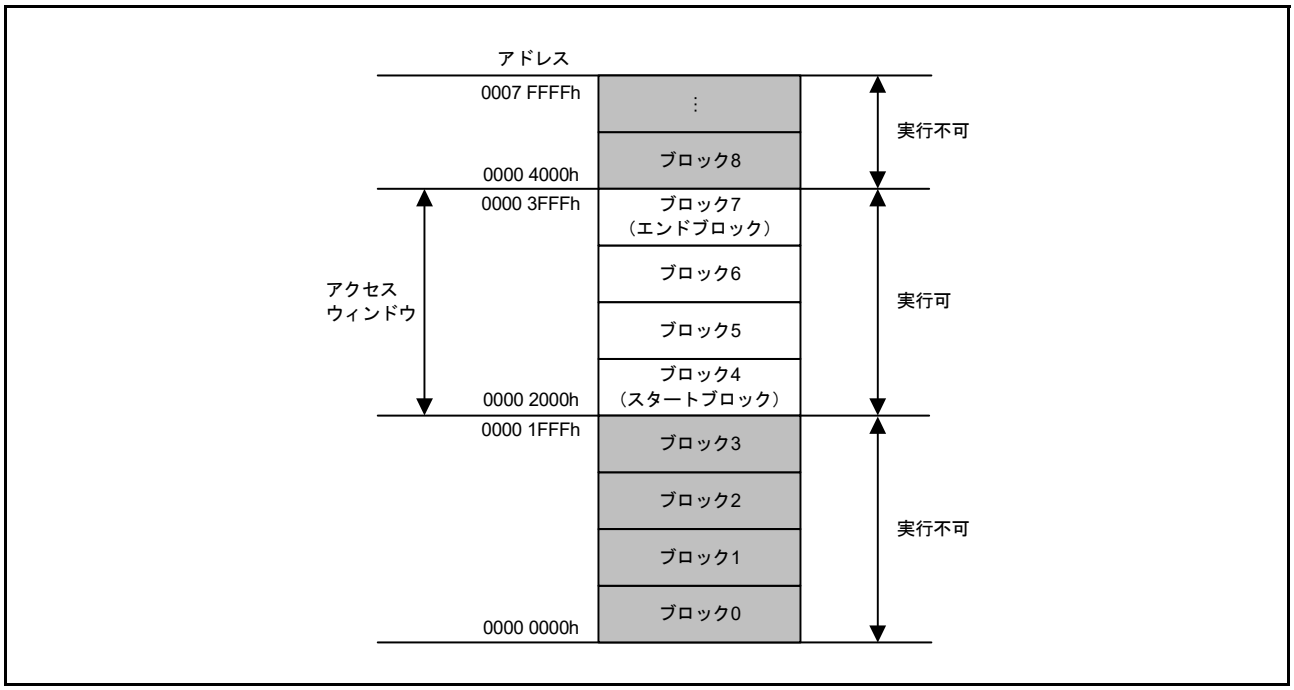


図 43.8 フラッシュ領域プロテクションの概要

43.7 プログラムコマンド

FCB は、プログラムコマンドを制御します。

43.8 サスペンド動作

強制停止コマンドは、ブランクチェックコマンドまたはブロックイレースコマンドを強制的に停止します。強制停止が実行されると、停止されたアドレスの値はレジスタに格納されます。これらのアドレス値をコピーすることにより、コマンド実行用レジスタをリセットした後、停止アドレスからコマンドを再開できます。

43.9 プロテクション機能

以下の種類のプロテクションが提供されています。

- ソフトウェアプロテクション
- エラープロテクション
- ブートプログラムプロテクション

43.10 シリアルプログラミングモード

シリアルプログラミングモードには以下が含まれます。

- SCI9 を使用する SCI ブートモード
- USBFS を使用する USB ブートモード

表 43.11 にフラッシュメモリ関連モジュールの入出力端子を示します。

表 43.11 フラッシュメモリ関連モジュールの入出力端子

端子名	入出力	適用モード	機能
MD	入力	SCI ブートモード USB ブートモード （シリアルプログラミングモード）	動作モードの選択
P110/RXD9	入力	SCI ブートモード	ホスト通信における SCI データ受信用
P109/TXD9	出力		ホスト通信における SCI データ送信用
USB_DP, USB_DM	入出力	USB ブートモード	USB データの入出力
USB_VBUS	入力		USB ケーブルの接続／切断の検出

注 . セキュリティ MPU が有効な場合、シリアルプログラミングモードは実行されません。

43.10.1 SCI ブートモード

SCI ブートモードでは、ホストから制御コマンドやプログラミングデータを送信して、コードフラッシュメモリ領域およびデータフラッシュメモリ領域へのプログラム／イレースが実行可能です。ホストと本 MCU 間の通信には、内蔵の SCI のチャネル 9 を調歩同期式モードで使用します。ホストには制御コマンドを送信するためのツールとプログラム用データを準備する必要があります。

本 MCU を SCI ブートモードで起動すると、シリアルプログラミング用の組み込みプログラムが実行されます。このプログラムは、SCI のビットレートの自動調整とホストからの制御コマンドを受けて、プログラムおよびイレースを制御します。リセット解除時に USB ケーブルが接続されていてはいけません。

図 43.9 に、SCI ブートモード時のシステム構成を示します。

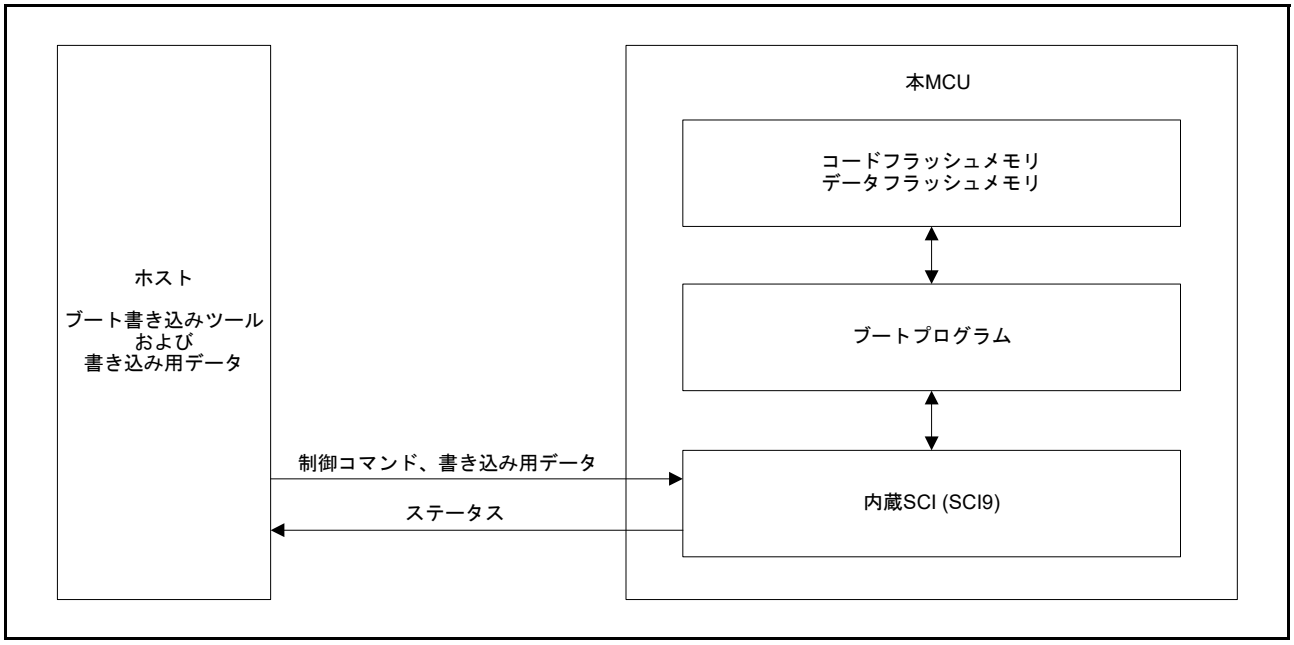


図 43.9 SCI ブートモード時のシステム構成

43.10.2 USB ブートモード

USB ブートモードは、USB インタフェースを経由して外部に接続されたホストから制御コマンドやプログラムデータを送信し、コードフラッシュメモリおよびデータフラッシュメモリへのプログラム／イレースを行うモードです。

USB ブートモードでは、制御コマンドやプログラムデータを送信するツールをホスト側に準備しておく必要があります。図 43.10 に、USB ブートモードでのシステム構成を示します。リセット解除時、USB ケーブルが接続されていなければいけません。

USB セルフパワードシステムでは、VBUS の総消費電流は 100mA を越えないようにしてください。

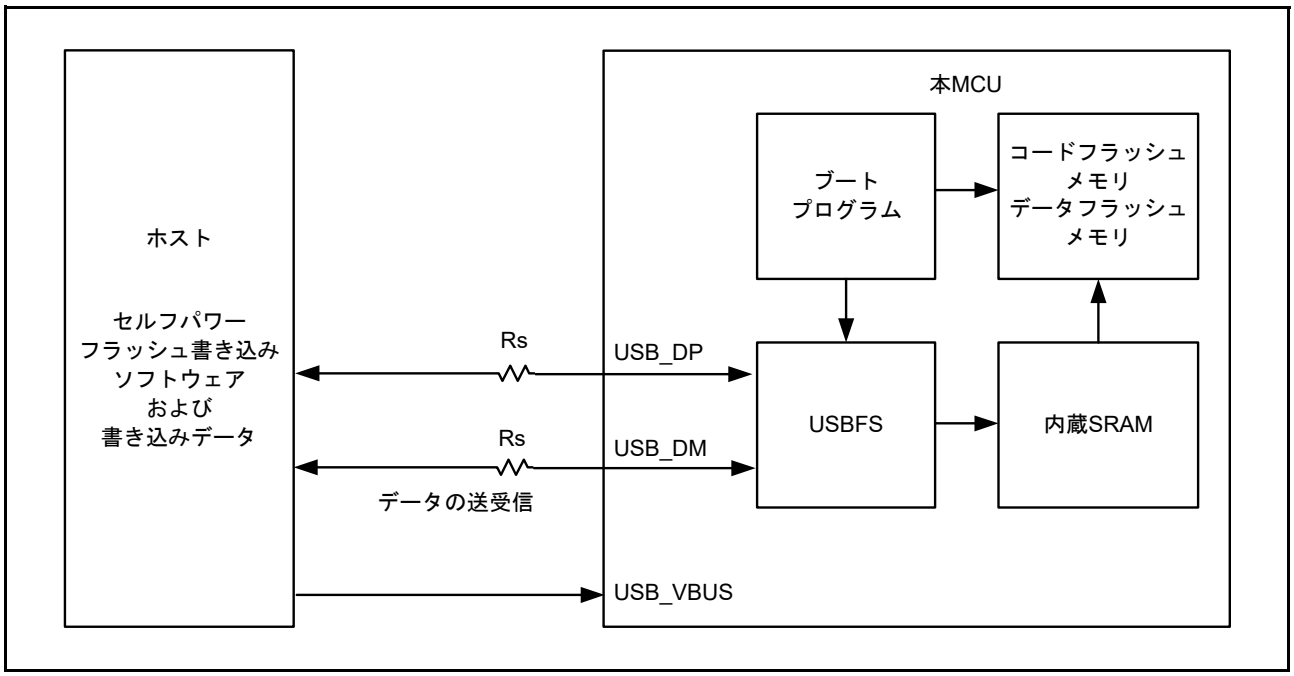


図 43.10 USB ブートモード時のシステム構成

43.11 シリアルプログラマを使用する場合

専用フラッシュメモリプログラマを使用して、シリアルプログラミングモードでフラッシュメモリのプログラムを行うことができます。

43.11.1 シリアルプログラミング

本 MCU は、シリアルプログラミング用にボードに搭載されています。ボードにコネクタを備えることにより、フラッシュメモリプログラマはプログラムを行うことができます。

43.11.2 プログラミング環境

図 43.11 に、本 MCU のフラッシュメモリにデータをプログラミングするための推奨環境を示します。

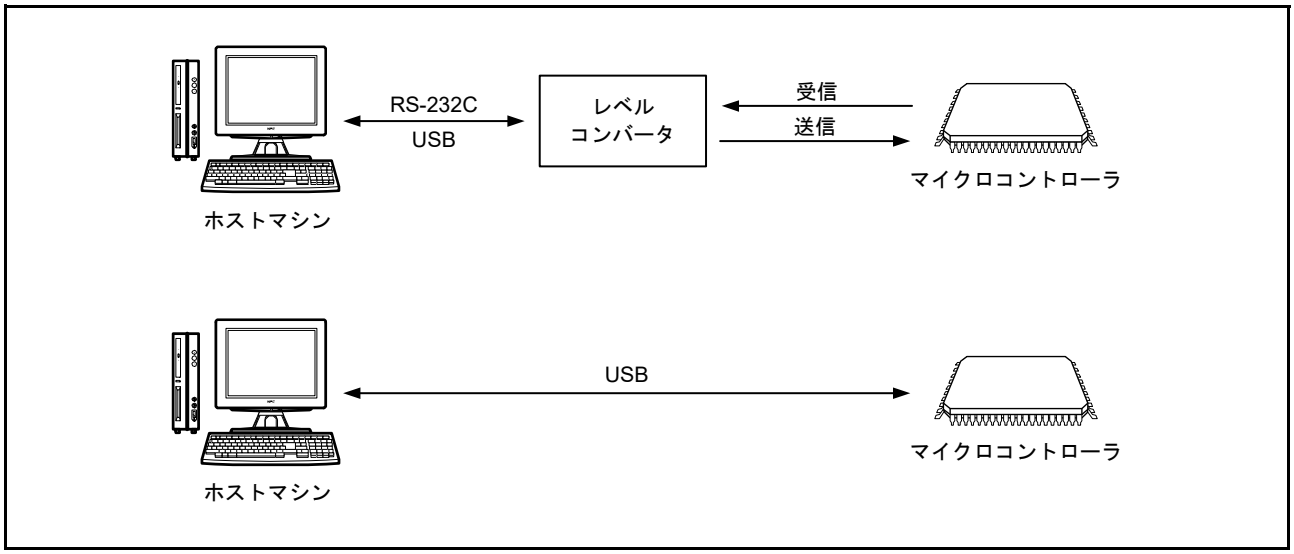


図 43.11 フラッシュメモリにプログラムを書き込むための環境

43.12 セルフプログラミング

43.12.1 概要

本 MCU は、ユーザプログラムによるフラッシュメモリの書き換えをサポートします。プログラムコマンドをユーザのプログラムで使用することにより、コードフラッシュメモリとデータフラッシュメモリを書き換えることができます。したがって、ユーザプログラムの更新と、定数データフィールドの書き換えが可能になります。

バックグラウンドオペレーション機能を利用して表 43.12 に示す条件でコードフラッシュメモリ上のプログラムを実行し、データフラッシュメモリを書き換えることができます。このプログラムを事前に内蔵 SRAM に複製し、そこから実行することも可能です。内蔵 SRAM から実行時、本プログラムはコードフラッシュメモリを書き換えることもできます。

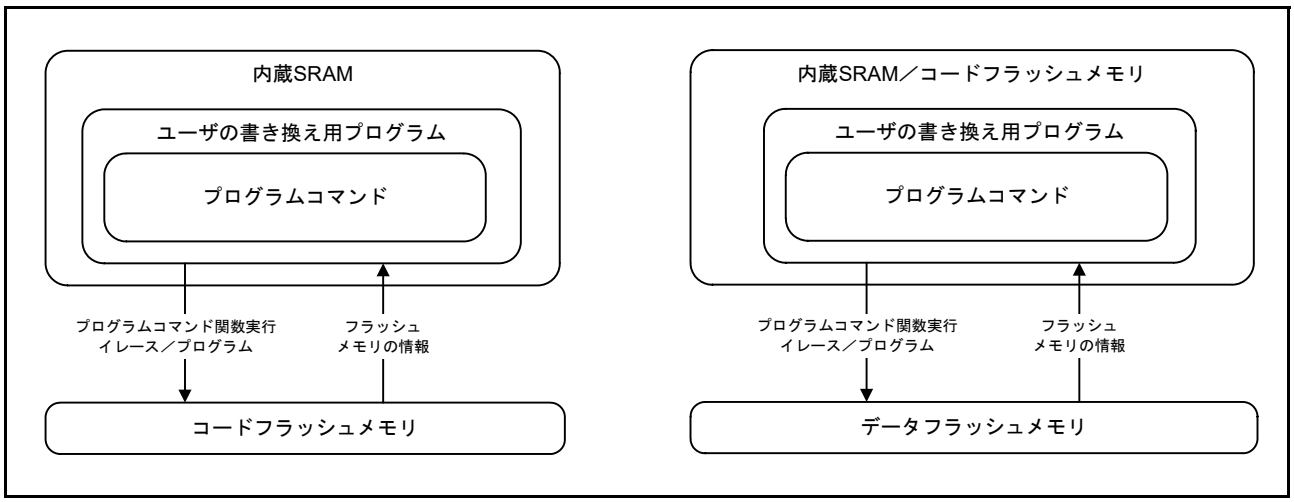


図 43.12 セルフプログラミングの概念

43.12.2 バックグラウンドオペレーション

書き込み対象および読み出し対象のフラッシュメモリが表 43.12 に示す組み合わせである場合には、バックグラウンドオペレーションを利用することが可能です。

表 43.12 バックグラウンドオペレーションの利用可能な条件

書き込み可能範囲	読み出し可能範囲
データフラッシュメモリ	コードフラッシュメモリ

43.13 フラッシュメモリの読み出し

43.13.1 コードフラッシュメモリの読み出し

通常モードでコードフラッシュメモリを読み出すのに、特別な設定は必要ありません。コードフラッシュメモリのアドレスにアクセスすることで、データを読み出すことが可能です。イレース後にプログラミングしていない（未プログラム状態の）コードフラッシュメモリを読み出すと、全ビットから 1 が読み出されます。

43.13.2 データフラッシュメモリの読み出し

通常モードでデータフラッシュメモリを読み出すのに、特別な設定は必要ありません。ただし、データフラッシュアクセス無効モードが読み出しを無効にするリセットを発行する場合を除きます。この場合、アプリケーションはデータフラッシュ読み出しモードへの遷移が必要です。イレース後にイレースされているが未プログラム状態のデータフラッシュメモリを読み出すと、全ビットから 1 が読み出されます。

43.14 使用上の注意事項

43.14.1 イレースを中断した領域

イレース動作を中断した領域のデータは不定です。不定データの読み出しによる誤動作を回避するためには、イレース動作を中断した領域でコマンドやデータリードを実行しないでください。

43.14.2 イレースサスペンドコマンドによる中断

イレース動作をイレースサスペンドコマンドで中断した場合、レジュームコマンドで動作を完了してください。

43.14.3 追加の書き込みに関する制限

構成領域を除き、同一領域に 2 回以上の書き込みを行うことはできません。フラッシュメモリ領域への書き込みが完了したら、その領域の書き換えを行う前にイレースしてください。構成領域は上書き可能です。

43.14.4 プログラム／イレース中のリセット

RES 端子からリセットを入力する場合、電気的特性で定義された動作電圧の範囲内で、t_{RESW} 以上（「48. 電気的特性」参照）のリセット入力時間を経過してからリセットを解除してください。

IWDT リセットおよびソフトウェアリセットでは、t_{RESW} 入力時間は必要ありません。

43.14.5 プログラム／イレース中に禁止されるノンマスカブル割り込み

プログラムおよびイレース中にノンマスカブル割り込み（注 1）が発生すると、コードフラッシュメモリからベクタがフェッチされ、不定データが読み出されます。そのため、コードフラッシュメモリのプログラムおよびイレース中に、ノンマスカブル割り込みを発生させないでください。本説明はコードフラッシュメモリに限り適用されます。

注 1. ノンマスカブル割り込みとは、NMI 端子割り込み、発振停止検出割り込み、WDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み、IWDT アンダーフロー／リフレッシュエラー割り込み、電圧監視 1 割り込み、VBATT モニタ割り込み、SRAM パリティエラー割り込み、SRAM ECC エラー割り込み、MPU バスマスタエラー割り込み、MBU バススレーブエラー割り込み、CPU スタックポインタモニタ割り込みです。

43.14.6 プログラム／イレース中における割り込みベクタの配置

プログラム／イレース中に割り込みが発生すると、コードフラッシュメモリからベクタをフェッチすることが可能になります。コードフラッシュメモリからベクタをフェッチしないようにするには、割り込み表でコードフラッシュメモリ以外の領域を割り込みベクタのフェッチ先に指定してください。

43.14.7 Low-speed モードでのプログラム／イレース

消費電力低減機能のために SOPCCR レジスタで Low-speed モードが選択されている場合、フラッシュメモリのプログラム／イレースは実行しないでください。

43.14.8 プログラム／イレース中の異常終了

プログラム／イレース中に電圧が動作電圧範囲を超えた場合、またはリセットや 43.14.9 プログラム／イレース中に禁止の動作に記載の禁止動作が原因でプログラム／イレース動作が正常に終了しなかった場合、その領域を再度イレースしてください。

43.14.9 プログラム／イレース中に禁止の動作

フラッシュメモリの破壊を防ぐため、プログラム／イレース中は以下の指示に従ってください。

- 動作電圧範囲外の MCU 電源を使用しない
- OPCCR.OPCM[1:0] ビット値を更新しない
- SOPCCR.SOPCM ビット値を更新しない
- FlashIF クロック（FCLK）の分周比を変更しない
- 本 MCU をソフトウェアスタンバイモードにしない
- コードフラッシュメモリへのプログラム／イレース中にデータフラッシュメモリにアクセスしない
- データフラッシュメモリへのプログラム／イレース中に DFLCTL.DFLEN ビット値を変更しない

44.　セグメント LCD コントローラ（SLCDC）

44.1　概要

本 MCU は、LCD ディスプレイおよび表示端子のコントローラを内蔵しています。SLCDC の仕様を表 44.1 に示します。

表 44.1　SLCDCの仕様

項目	内容
特長	• 液晶波形（AまたはB波形）の選択が可能 • LCD駆動電圧生成回路は、外部抵抗分割方式の使用が可能 • 表示データレジスタの自動読み出しによるセグメント信号と共通信号の自動出力 • LCDの点滅と点灯の選択が可能
端子数	端子数については、表 44.2　56ピン製品のSLCDC表示機能端子を参照してください。
ソースクロック	• メインクロック発振器 • サブクロック発振器 • 低速オンチップオシレータ • 高速オンチップオシレータ
モジュールストップ機能	モジュールストップ状態に設定して消費電力を削減

本 MCU の LCD 表示機能端子の本数は、製品によって異なります。異なるピン数の製品ごとの表示機能端子を表 44.2 に示します。異なるピン数の製品ごとの最大画素数を表 44.3 に示します。SLDC のブロック図を図 44.1 に示します。

表 44.2　56ピン製品のSLCDC表示機能端子

項目	64ピン															
LCDコントローラ／ドライバ	セグメント端子（SEG）の本数：9 コモン端子（COM）の本数：4															
マルチプレクスI/Oポート	b15	b14	b13	b12	b11	b10	b9	b8	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
ポート1	—	—	—	—	—	SEG 53	SEG 52	—	COM 3	COM 2	COM 1	COM 0	VL4（注1）	—	VL2（注1）	VL1（注1）
ポート2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SEG 12	SEG 20	SEG 23	—	—	—	—
ポート3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ポート4	—	—	—	—	—	—	SEG9	—	SEG 11	—	—	—	—	SEG6	—	—
ポート5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SEG 49	—
ポート6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ポート7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ポート8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ポート9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注 1.　VL1、VL2、および VL4 は、LCD を駆動するための電源端子です。

表 44.3　　56ピン製品の最大画素数

LCDドライバ用駆動波形	LCD駆動電圧生成回路	バイアス法	時分割数	最大画素数
A波形	外部抵抗分割	—	スタティック	9（9セグメント信号、1コモン信号）
		1/2	2	18（9セグメント信号、2コモン信号）
			3	27（9セグメント信号、3コモン信号）
		1/3	3	
			4	36（9セグメント信号、4コモン信号）
B波形	外部抵抗分割	1/3	4	36（9セグメント信号、4コモン信号）

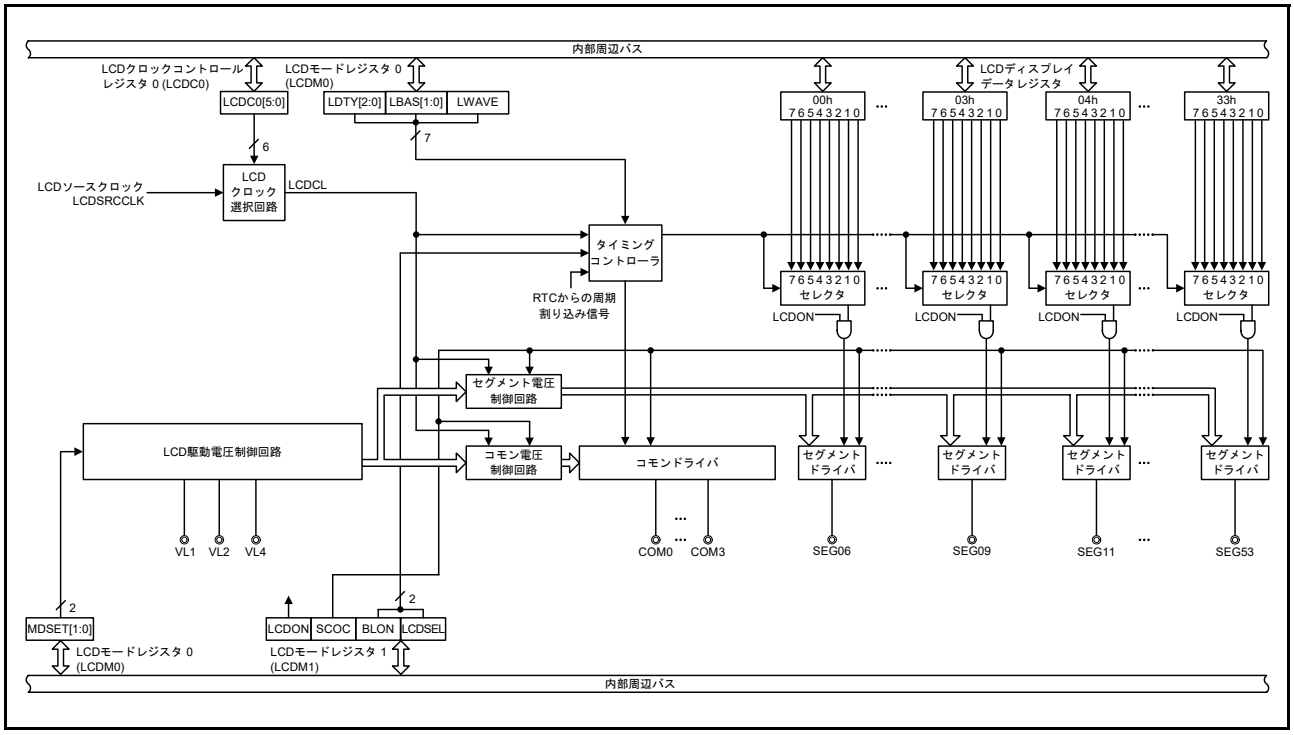


図 44.1　　SLCDC のブロック図

44.2　レジスタの説明

44.2.1　LCD モードレジスタ 0（LCDM0）

アドレス　SLCDC.LCDM0 4008 2000h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	MDSET[1:0]		LWAVE	LDTY[2:0]			LBAS[1:0]	
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b1-b0	LBAS[1:0]	LCD表示バイアス法選択	b1　b0 0　0：1/2バイアス法 0　1：1/3バイアス法 1　0：設定禁止 1　1：設定禁止	R/W
b4-b2	LDTY[2:0]	LCD表示時分割数選択	b4　b2 0　0　0：スタティック 0　0　1：2時分割 0　1　0：3時分割 0　1　1：4時分割 上記以外は設定しないでください。	R/W
b5	LWAVE	LCD表示波形選択	0：A波形 1：B波形	R/W
b7-b6	MDSET[1:0]	LCD駆動電圧生成回路選択	b7　b6 0　0：外部抵抗分割方式 上記以外は設定しないでください。	R/W

注 .　LCDM1 レジスタの SCOC ビットが 1 のときは、LCDM0 の値を書き換えないでください。
注 .　スタティック（LDTY[2:0] = 000b）を選択した場合、LBAS[1:0] ビットをデフォルト値（00b）にしてください。これらの禁止事項に違反した場合の動作は保証されません。
注 .　表示波形、時分割数、バイアス法の設定は表 44.4 に示した組み合わせのみサポートします。表 44.4 に示す組み合わせ以外は設定しないでください。

表 44.4　表示波形、時分割、バイアス法、およびフレーム周波数の組み合わせ

表示モード			設定値						駆動電圧生成方式
表示波形	時分割数	バイアス法	LWAVE	LDTY[2:0]			LBAS[1:0]		外部抵抗分割
A波形	4	1/3	0	0	1	1	0	1	○
A波形	3	1/3	0	0	1	0	0	1	○
A波形	3	1/2	0	0	1	0	0	0	○
A波形	2	1/2	0	0	0	1	0	0	○
A波形	スタティック		0	0	0	0	0	0	○
B波形	4	1/3	1	0	1	1	0	1	○

○：可　×：不可

44.2.2 LCD モードレジスタ 1（LCDM1）

アドレス SLCDC.LCDM1 4008 2001h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	LCDON	SCOC	—	BLON	LCDSEL	—	—	—
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b2-b0	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b3	LCDSEL	表示データ領域制御	b4 b3 0 0：Aパターン領域（LCD表示データレジスタの下位4ビット）のデータを表示 0 1：Bパターン領域（LCD表示データレジスタの上位4ビット）のデータを表示 1 0：Aパターン領域とBパターン領域のデータを交互に表示（リアルタイムクロック（RTC）の周期割り込み（RTC_PRD）タイミングに対応した点滅表示） 1 1：Aパターン領域とBパターン領域のデータを交互に表示（リアルタイムクロック（RTC）の周期割り込み（RTC_PRD）タイミングに対応した点滅表示）	R/W
b4	BLON	表示データ領域制御		R/W
b5	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W
b6	SCOC	LCD表示許可／禁止	b7 b6 0 0：グランドレベルをセグメント／コモン端子に出力 0 1：表示オフ（すべてのセグメント出力が選択解除される） 1 0：グランドレベルをセグメント／コモン端子に出力 1 1：表示オン	R/W
b7	LCDON	LCD表示許可／禁止		R/W

44.2.3 LCD クロックコントロールレジスタ 0（LCDC0）

アドレス SLCDC.LCDC0 4008 2002h

	b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	—	—	LCDC0[5:0]					
リセット後の値	0	0	0	0	0	0	0	0

ビット	シンボル	ビット名	機能	R/W
b5-b0	LCDC0[5:0]	LCDクロック（LCDCL）設定	b5 b0 0 0 0 0 0 1:（サブクロック）/ 2^2 または（LOCOクロック）/ 2^2 0 0 0 0 1 0:（サブクロック）/ 2^3 または（LOCOクロック）/ 2^3 0 0 0 0 1 1:（サブクロック）/ 2^4 または（LOCOクロック）/ 2^4 0 0 0 1 0 0:（サブクロック）/ 2^5 または（LOCOクロック）/ 2^5 0 0 0 1 0 1:（サブクロック）/ 2^6 または（LOCOクロック）/ 2^6 0 0 0 1 1 0:（サブクロック）/ 2^7 または（LOCOクロック）/ 2^7 0 0 0 1 1 1:（サブクロック）/ 2^8 または（LOCOクロック）/ 2^8 0 0 1 0 0 0:（サブクロック）/ 2^9 または（LOCOクロック）/ 2^9 0 0 1 0 0 1:（サブクロック）/ 2^{10} または（LOCOクロック）/ 2^{10} 0 1 0 0 0 1:（メインクロック）/ 2^8 または（HOCOクロック）/ 2^8 0 1 0 0 1 0:（メインクロック）/ 2^9 または（HOCOクロック）/ 2^9 0 1 0 0 1 1:（メインクロック）/ 2^{10} または（HOCOクロック）/ 2^{10} 0 1 0 1 0 0:（メインクロック）/ 2^{11} または（HOCOクロック）/ 2^{11} 0 1 0 1 0 1:（メインクロック）/ 2^{12} または（HOCOクロック）/ 2^{12} 0 1 0 1 1 0:（メインクロック）/ 2^{13} または（HOCOクロック）/ 2^{13} 0 1 0 1 1 1:（メインクロック）/ 2^{14} または（HOCOクロック）/ 2^{14} 0 1 1 0 0 0:（メインクロック）/ 2^{15} または（HOCOクロック）/ 2^{15} 0 1 1 0 0 1:（メインクロック）/ 2^{16} または（HOCOクロック）/ 2^{16} 0 1 1 0 1 0:（メインクロック）/ 2^{17} または（HOCOクロック）/ 2^{17} 0 1 1 0 1 1:（メインクロック）/ 2^{18} または（HOCOクロック）/ 2^{18} 1 0 1 0 1 1:（メインクロック）/ 2^{19} または（HOCOクロック）/ 2^{19} 上記以外は設定しないでください。	R/W
b7-b6	—	予約ビット	読むと0が読めます。書く場合、0としてください。	R/W

注 .　フレーム周波数は 32Hz ～ 128Hz の範囲内で設定してください。
注 .　LCDM1.SCOC ビットが 1 のときは、LCDC0 レジスタを設定しないでください。

44.3　LCD 表示データレジスタ

LCD 表示データレジスタは表 44.5 に示すようにマッピングされます。LCD の表示内容は、LCD 表示データレジスタの内容を変更することで変更できます。

表 44.5　　LCD表示データレジスタの内容とセグメント出力／コモン出力の関係

レジスタ名	アドレス	b7 COM3	b6 COM2	b5 COM1	b4 COM0	b3 COM3	b2 COM2	b1 COM1	b0 COM0	56ピン
SEG06	4008 2106h	SEG06（Bパターン領域）				SEG06（Aパターン領域）				○
SEG09	4008 2109h	SEG09（Bパターン領域）				SEG09（Aパターン領域）				○
SEG11	4008 210Bh	SEG11（Bパターン領域）				SEG11（Aパターン領域）				○
SEG12	4008 210Ch	SEG12（Bパターン領域）				SEG12（Aパターン領域）				○
SEG20	4008 2114h	SEG20（Bパターン領域）				SEG20（Aパターン領域）				○
SEG23	4008 2117h	SEG23（Bパターン領域）				SEG23（Aパターン領域）				○
SEG49	4008 2131h	SEG49（Bパターン領域）				SEG49（Aパターン領域）				○
SEG52	4008 2134h	SEG52（Bパターン領域）				SEG52（Aパターン領域）				○
SEG53	4008 2135h	SEG53（Bパターン領域）				SEG53（Aパターン領域）				○

○：可　×：不可

注 .　　LCD 表示データレジスタの初期値はすべて 0h で、全ビットとも読み出し／書き込み可能です。

時分割数がスタティック、2、3、または 4 の場合、LCD 表示データレジスタの各アドレスの下位 4 ビットは A パターン領域、上位 4 ビットは B パターン領域になります。

A パターン領域データと COM 信号の対応は、ビット 0 ⇔ COM0、ビット 1 ⇔ COM1、ビット 2 ⇔ COM2、およびビット 3 ⇔ COM3 になります。

B パターン領域データと COM 信号の対応は、ビット 4 ⇔ COM0、ビット 5 ⇔ COM1、ビット 6 ⇔ COM2、およびビット 7 ⇔ COM3 になります。

A パターン領域データは、BLON = LCDSEL = 0 が選択されているときに LCD パネルに表示され、B パターン領域データは、BLON = 0 および LCDSEL = 1 が選択されているときに LCD パネルに表示されます。

44.4　LCD 表示データレジスタの選択

時分割数がスタティック、2、3、または 4 の場合、BLON および LCDSEL ビットの設定に基づき LCD 表示データレジスタを以下のタイプから選択できます。

- A パターン領域（LCD 表示データレジスタの下位 4 ビット）のデータを表示
- B パターン領域（LCD 表示データレジスタの上位 4 ビット）のデータを表示
- A パターン領域と B パターン領域のデータを交互に表示（リアルタイムクロック（RTC）の周期割り込みタイミングに対応した点滅表示）

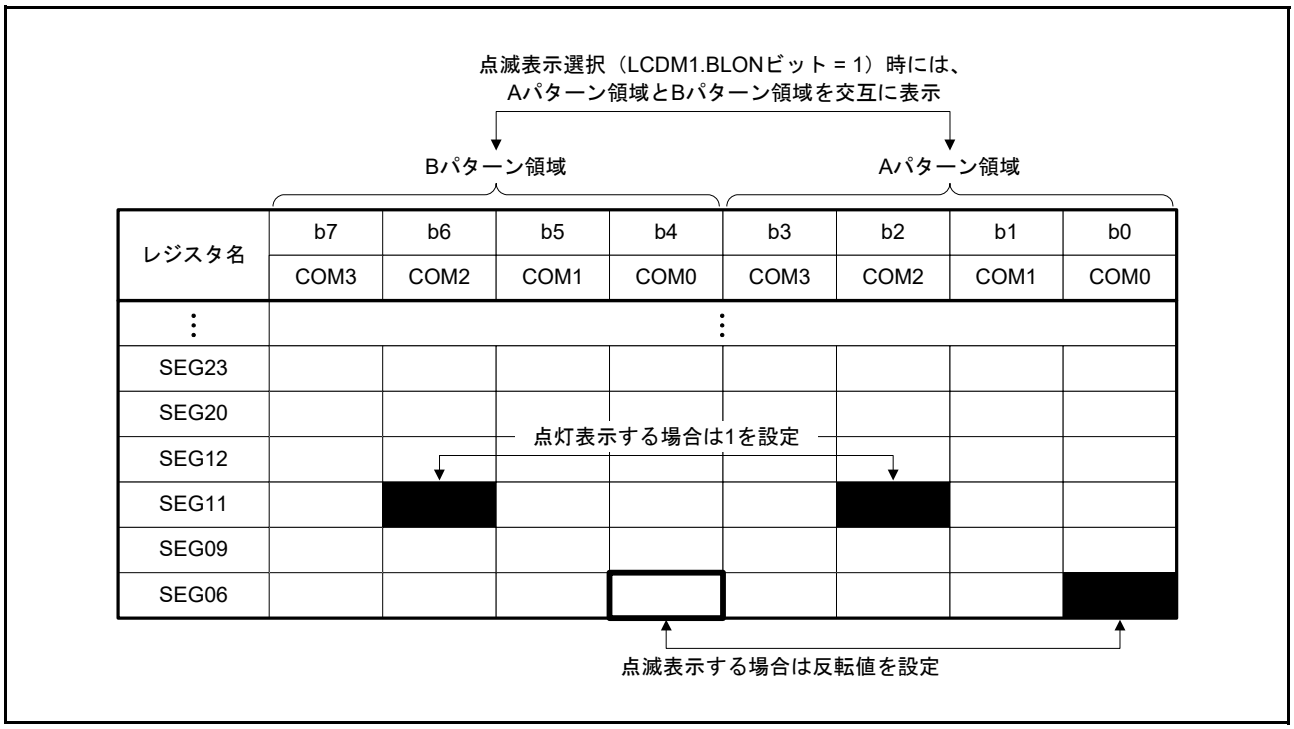


図 44.2　パターン切り替え時の LCD 表示データレジスタの設定例

44.4.1　A パターン領域と B パターン領域のデータ表示

BLON ビットと LCDSEL ビットがどちらも 0 のとき、A パターン領域（LCD 表示データレジスタの下位 4 ビット）のデータが LCD 表示レジスタとして出力されます。

BLON ビットが 0 で LCDSEL ビットが 1 のときは、B パターン領域（LCD 表示データレジスタの上位 4 ビット）のデータが LCD 表示レジスタとして出力されます。

表示領域についての詳細は、44.3　LCD 表示データレジスタを参照してください。

44.4.2　点滅表示（A パターン領域と B パターン領域のデータを交互に表示）

BLON ビットが 1 の場合、リアルタイムクロック（RTC）の定周期割り込みタイミングに従って、A パターン領域のデータと B パターン領域のデータを交互に表示します。RTC 定周期割り込み（0.5 秒設定のみ）のタイミングについては、「25.　リアルタイムクロック（RTC）」を参照してください。

LCD 点滅表示機能を使用するには、A パターン領域のビットに対応する B パターン領域のビットに反転値を設定してください。たとえば点滅表示するには SEG06 レジスタのビット 0 を 1 に、ビット 4 を 0 にします。点滅表示機能を使用しない場合は、A パターン領域および B パターン領域とも同じ値を設定してください。たとえば点灯表示するには SEG09 レジスタのビット 2 を 1 に、ビット 6 を 1 にします。表示領域についての詳細は、44.3　LCD 表示データレジスタを参照してください。

表示切り替えのタイミング動作を図 44.3、図 44.4 に示します。

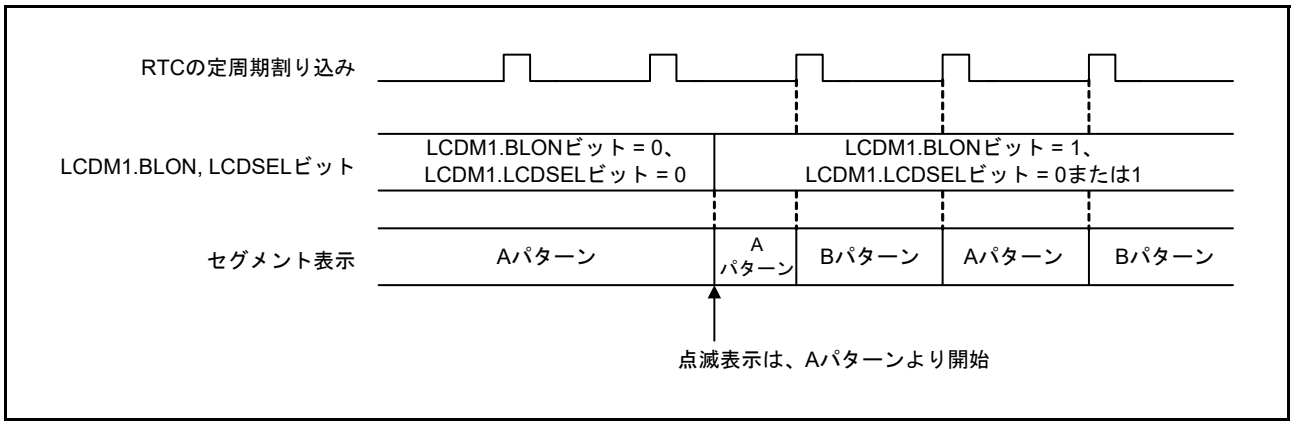


図 44.3　　A パターン表示から点滅表示への切り替え動作

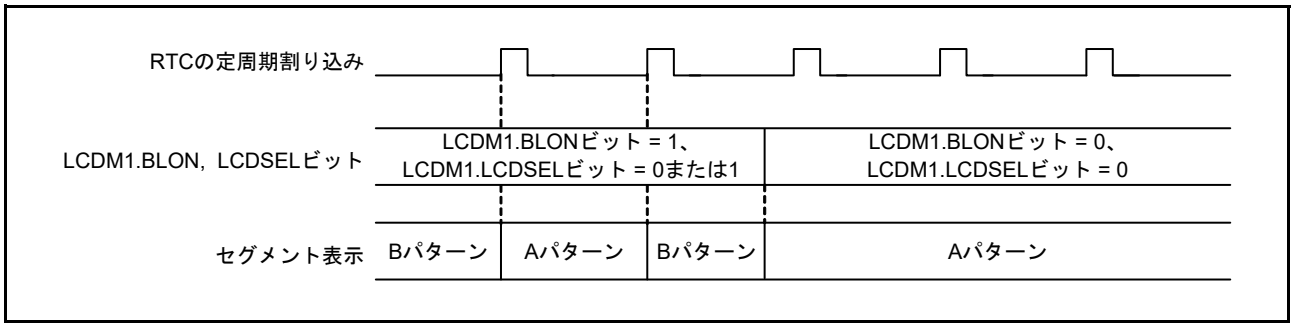


図 44.4　　点滅表示から A パターン表示への切り替え動作

44.5　LCD コントローラ／ドライバの設定

LCD コントローラ／ドライバを動作させるには、本節の (1) の手順に従ってください。設定手順に従わない場合、LCD の動作は保証できません。

(1)　通常液晶波形表示での外部抵抗分割方式

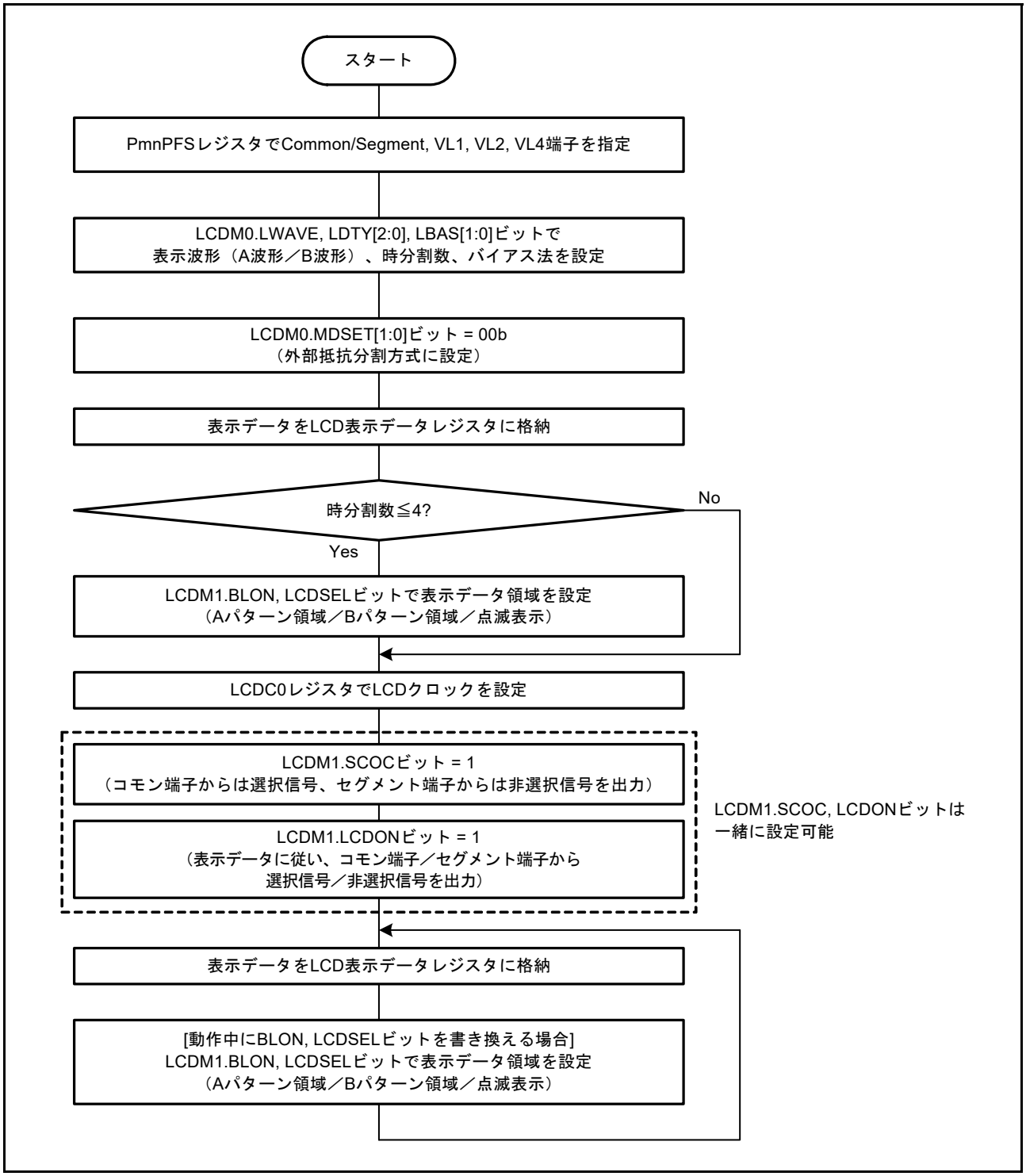


図 44.5　通常液晶波形表示での外部抵抗分割方式の設定手順

44.6　動作停止手順

LCD の動作を停止させる場合は、図 44.6 に示す手順で行ってください。

LCDM1.LDCON および LCDM1.SCOC ビットが 0 になると、LCD は動作を停止します。

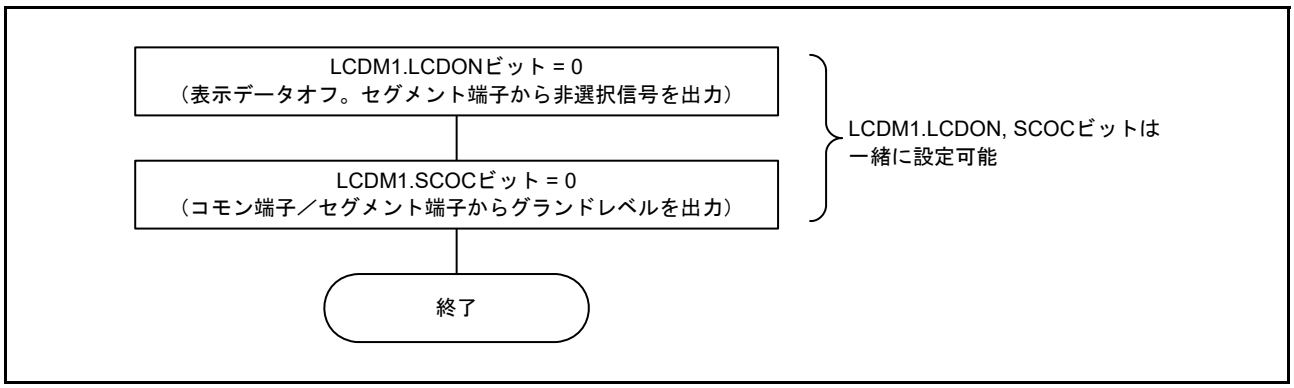


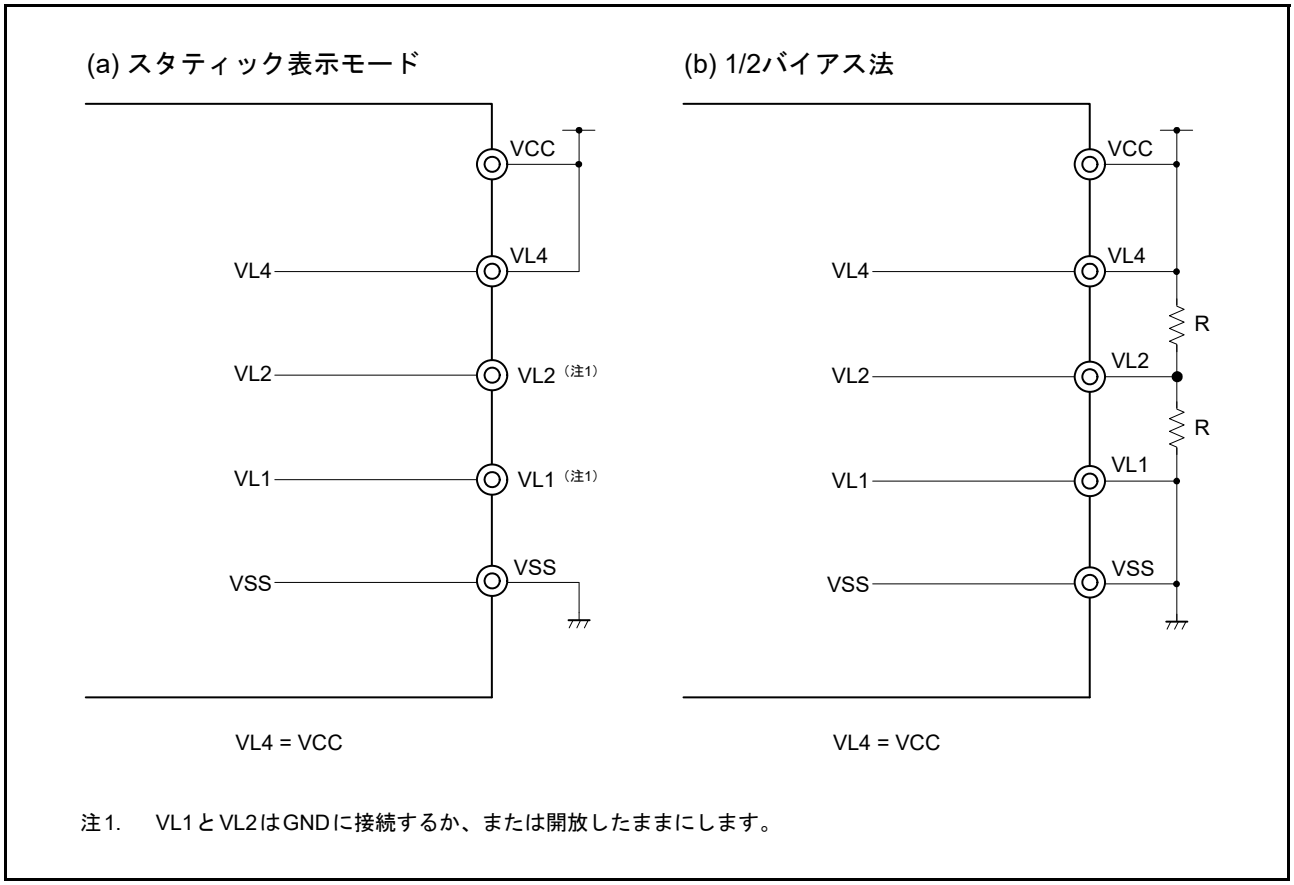
図 44.6　通常液晶波形（A または B）表示での動作停止手順

44.7　LCD 駆動電圧（VL1、VL2、VL4）の供給

LCD ドライバの電源電圧は外部抵抗分割によって生成できます。

44.7.1　外部抵抗分割方式

各バイアス法に対応する LCD 駆動電源の接続例を図 44.7 および図 44.8 に示します。



注1.　VL1とVL2はGNDに接続するか、または開放したままにします。

図 44.7　LCD 駆動電源の接続例（外部抵抗分割方式）（1/2）

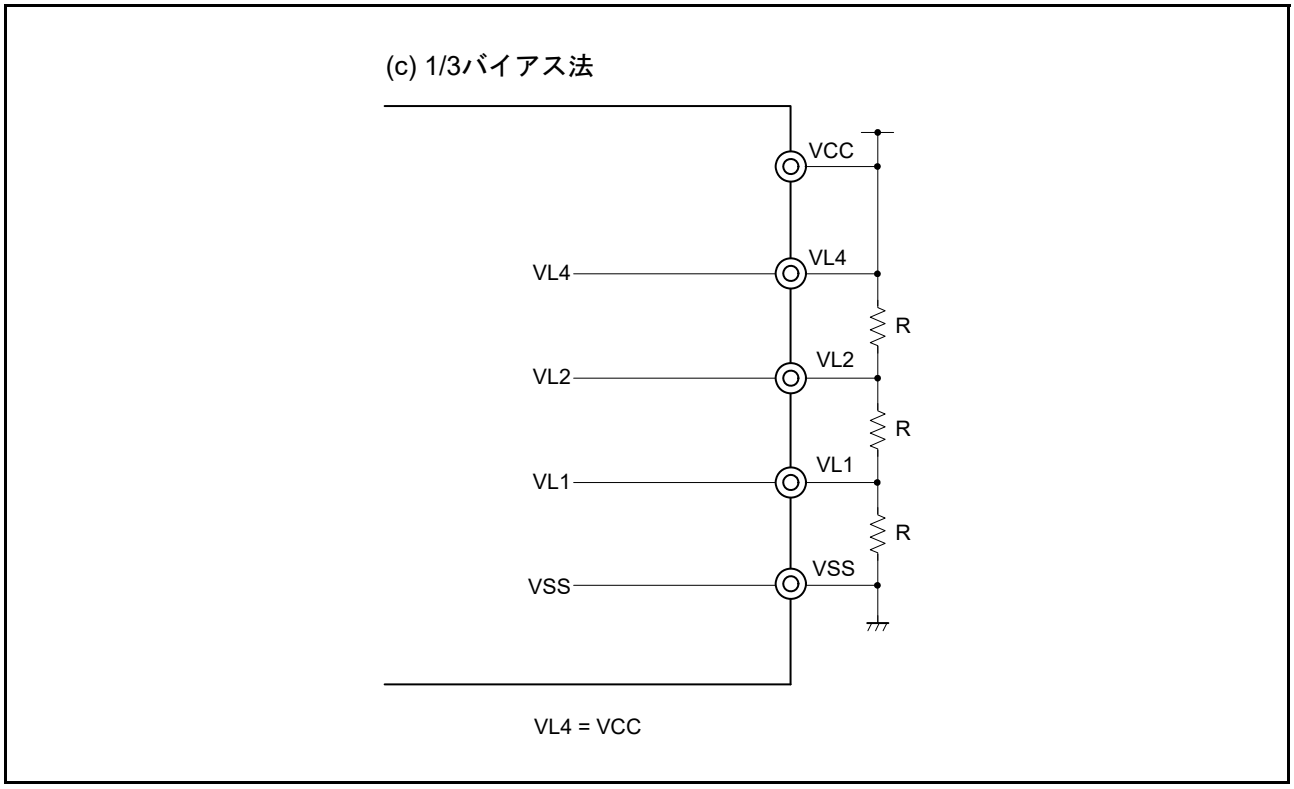


図 44.8　　LCD 駆動電源の接続例（外部抵抗分割方式）（2/2）

注 .　外部抵抗分割の基準抵抗値 R は、10kΩ ～ 1MΩ です。また、VL1 ～ VL4 端子の電圧を安定させるために、必要に応じて VL1 ～ VL4 の各端子と GND 端子の間にコンデンサを接続してください。コンデンサの基準容量は約 0.47μF ですが、使用する LCD パネル、セグメント端子数、コモン端子数、フレーム周波数、および動作環境によって異なります。使用するシステムに合わせた評価を十分に行った上で、容量を調整してください。

44.8　コモン信号とセグメント信号

LCD パネルの各画素は、対応するコモン信号とセグメント信号の間の電位差が特定の電圧（VLCD：LCD 駆動電圧）より高くなると点灯します。電位差が VLCD より低くなると、画素は消灯します。

LCD パネルのコモン信号とセグメント信号に直流電圧を印加すると、劣化の原因になります。この問題を避けるため、SLCDC は交流電圧で駆動します。

(1)　コモン信号

各コモン信号は、表 44.6 に示す特定の時分割数に従って順次選択されます。スタティック表示モードでは、同じ信号が COM0 ～ COM3 端子に出力されます。

2 時分割モードでは、COM2 端子と COM3 端子を開放状態のままにしておきます。3 時分割モードでは、COM3 端子を開放状態のままにしておきます。

表 44.6　　COM 信号

時分割数	COM0	COM1	COM2	COM3
スタティック表示モード				
2時分割モード			開放	開放
3時分割モード				開放
4時分割モード				

(2)　セグメント信号

セグメント信号は、LCD 表示データレジスタ（44.3　LCD 表示データレジスタ参照）に対応しています。

A パターン領域（1 バイト）のビット 0 ～ 3 が COM0 ～ COM3 と同期して読み出され、B パターン領域（1 バイト）のビット 4 ～ 7 が COM0 ～ COM3 と同期して読み出されます。ビットが 1 の場合は選択電圧に変換され、0 の場合は非選択電圧に変換されます。変換結果はセグメント端子に出力されます。

前面電極（セグメント信号に対応）および後面電極（コモン信号に対応）がどのような組み合わせで LCD 表示データレジスタの表示パターンを形成するかを確認し、目的の表示パターンと 1 対 1 に対応したビットデータを書き込んでください。

注 .　　実装されているセグメント出力端子は製品により異なります。

(3)　コモン信号とセグメント信号の出力波形

表 44.7 に示す電圧がコモン／セグメント信号として出力されます。

コモン信号とセグメント信号がどちらも選択電圧のとき、表示点灯電圧は ± VLCD となります。それ以外の組み合わせのときは消灯電圧になります。

表 44.7　　LCD 駆動電圧

スタティック表示モード

コモン信号	セグメント信号	
	選択信号レベル	非選択信号レベル
	VSS/VL4	VL4/VSS
VL4/VSS	-VLCD / +VLCD	0V / 0V

1/2 バイアス法

コモン信号		セグメント信号	
		選択信号レベル	非選択信号レベル
		VSS/VL4	VL4/VSS
選択信号レベル	VL4/VSS	-VLCD / +VLCD	0V / 0V
非選択信号レベル	VL2	$-\frac{1}{2}$ VLCD / $+\frac{1}{2}$ VLCD	$+\frac{1}{2}$ VLCD / $-\frac{1}{2}$ VLCD

1/3バイアス法（AまたはB波形）

コモン信号		セグメント信号	
		選択信号レベル	非選択信号レベル
		VSS/VL4	VL2/VL1
選択信号レベル	VL4/VSS	-VLCD / +VLCD	$-\frac{1}{3}$VLCD / $+\frac{1}{3}$VLCD
非選択信号レベル	VL1/VL2	$-\frac{1}{3}$VLCD / $+\frac{1}{3}$VLCD	$+\frac{1}{3}$VLCD / $-\frac{1}{3}$VLCD

コモン信号波形を図 44.9 と図 44.10 に示します。コモン信号とセグメント信号の電圧と位相を図 44.11 ～図 44.16 に示します。

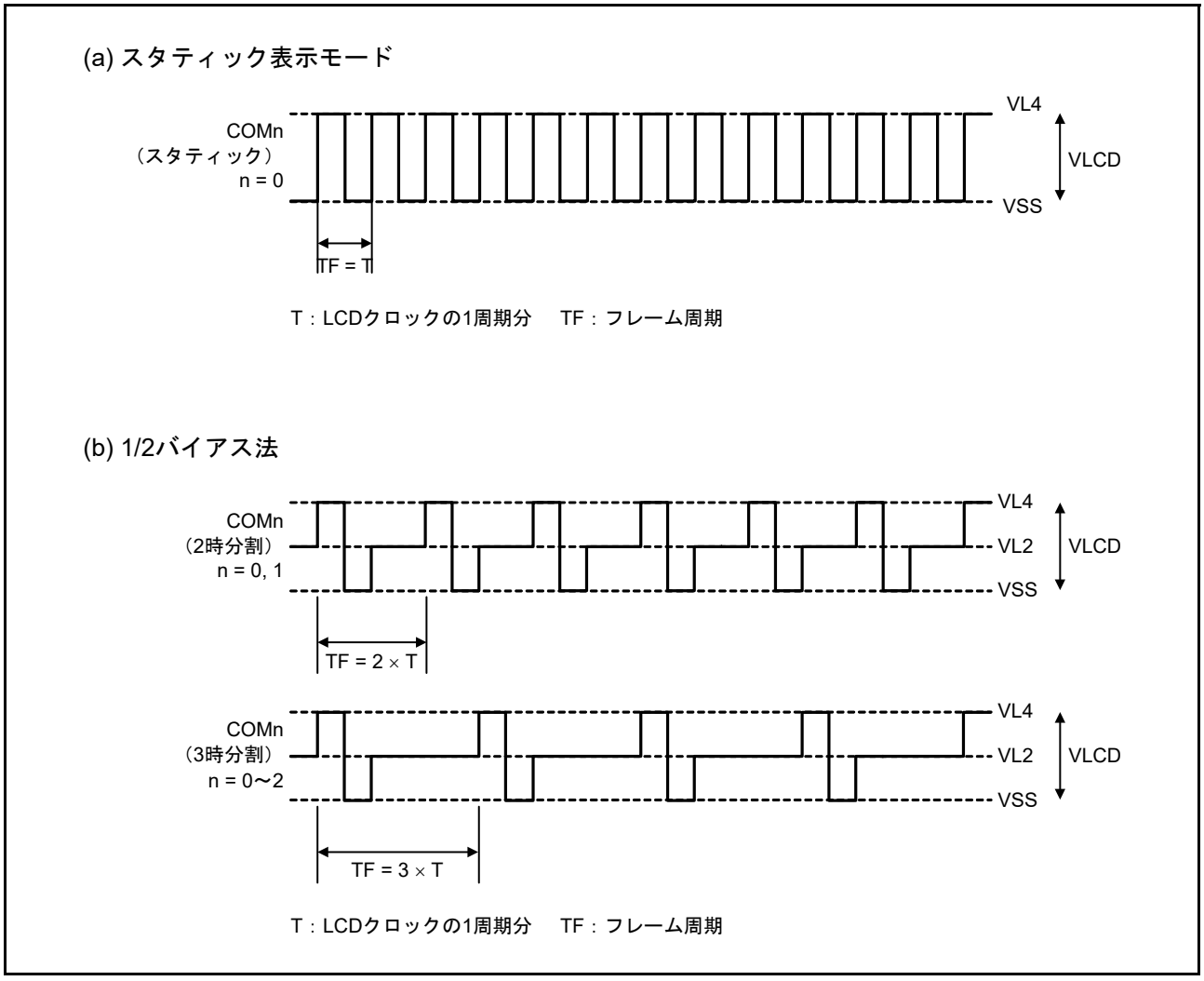
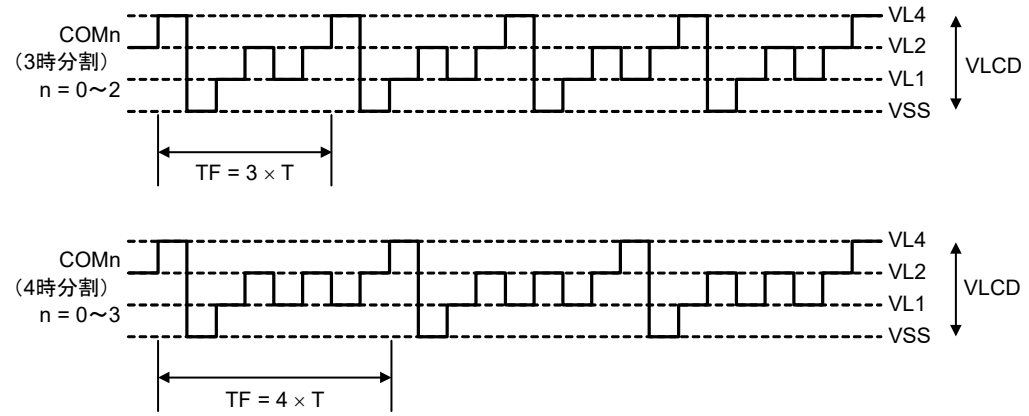


図 44.9　コモン信号波形（1/2）

(c) 1/3バイアス法

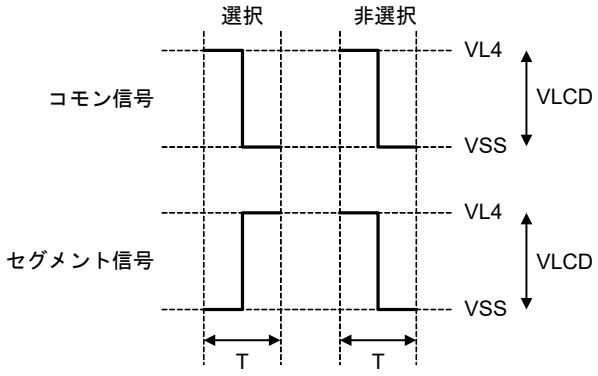


T：LCDクロックの1周期分　TF：フレーム周期

4時分割使用時のLCDフレーム周波数算出例
LCDクロック：$32768/2^7$ = 256Hz（LCDC0レジスタ = 06h設定時）
LCDフレーム周波数：64Hz

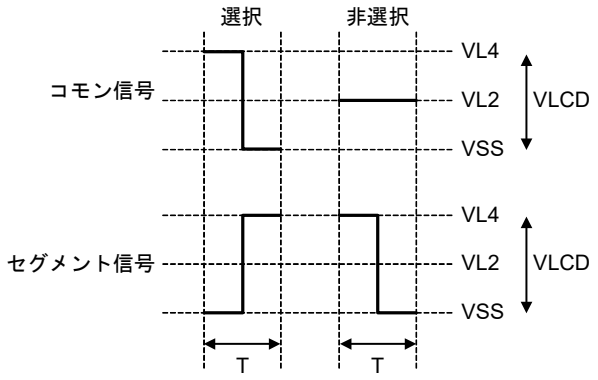
図 44.10　コモン信号波形（2/2）

(a) スタティック表示モード（A波形）



T：LCDクロックの1周期分

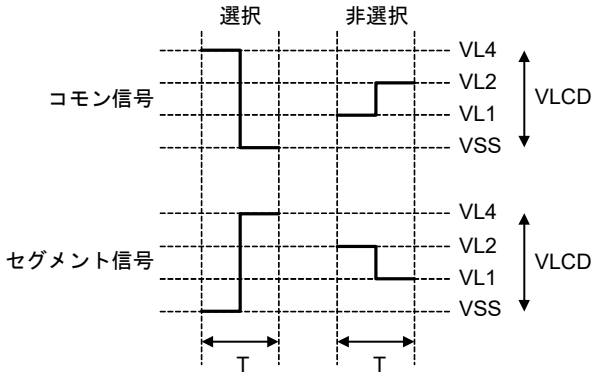
(b) 1/2バイアス法（A波形）



T：LCDクロックの1周期分

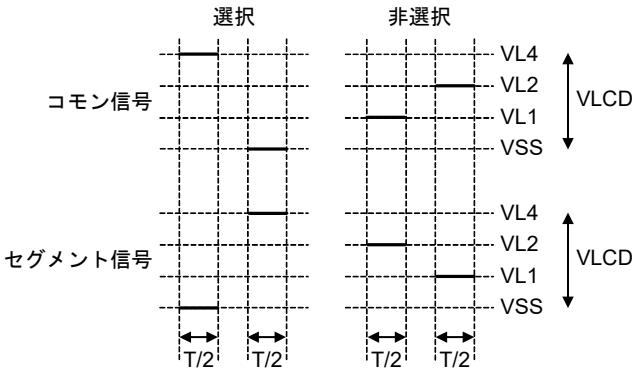
図 44.11　　コモン信号とセグメント信号の電圧と位相（1/3）

(c) 1/3バイアス法（A波形）



T：LCDクロックの1周期分

(d) 1/3バイアス法（B波形）



T：LCDクロックの1周期分

図 44.12　コモン信号とセグメント信号の電圧と位相（2/3）

44.9　表示モード

44.9.1　4 時分割表示例

図 44.14 に、図 44.13 の表示パターンを持つ 12 桁表示の LCD パネルと、セグメント信号およびコモン信号（COM0 ～ COM3）との接続関係を示します。この例では LCD パネルに「56.78」を表示します。表示データレジスタの内容はこの表示に対応しています。

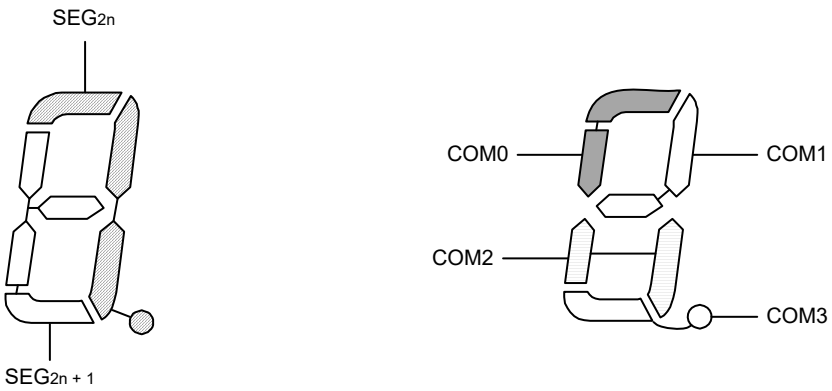
ここでは 7 桁目に表示される数字の「6.」（ 6. ）を例にとって説明します。LCD パネルに「6.」を表示するには、コモン信号 COM0 ～ COM3 の選択タイミングで、選択電圧または非選択電圧を SEG20 および SEG23 端子に印加する必要があります。セグメント信号と LCD セグメントの関係については、図 44.13 を参照してください。

表 44.8　選択（1）および非選択（0）データ（COM0～COM3）の例

セグメント / コモン	SEG20	SEG23
COM0	選択	選択
COM1	非選択	選択
COM2	選択	選択
COM3	選択	選択

表 44.8 の例では、SEG20 に対応する表示データレジスタ位置は 1101b を含む必要があります。

SEG20 信号と各コモン信号との間の LCD 駆動波形の例を図 44.15 に示します。COM0 のタイミングで SEG20 に選択電圧が印加されると、+VLCD / –VLCD の交流矩形波が生成され、対応する LCD セグメントが点灯します。



注 .　実装されているセグメント出力端子は製品により異なります。

図 44.13　4 時分割 LCD 表示パターンと電極接続

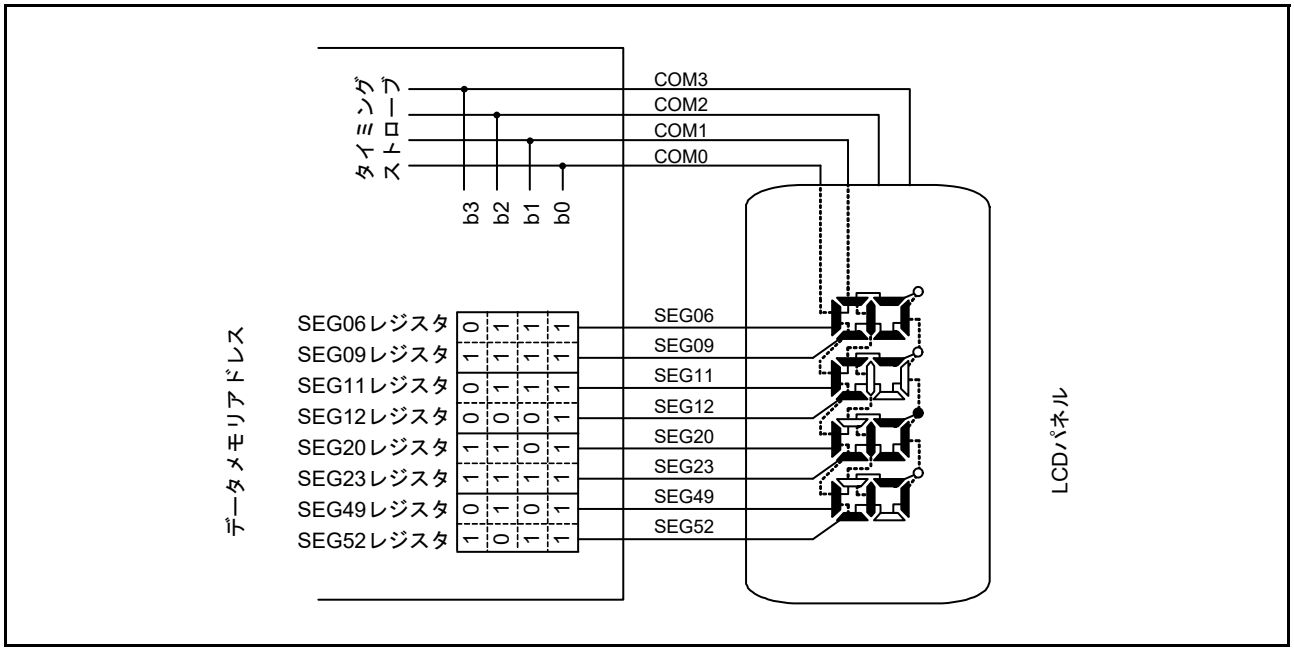


図 44.14　4 時分割 LCD パネルの接続例

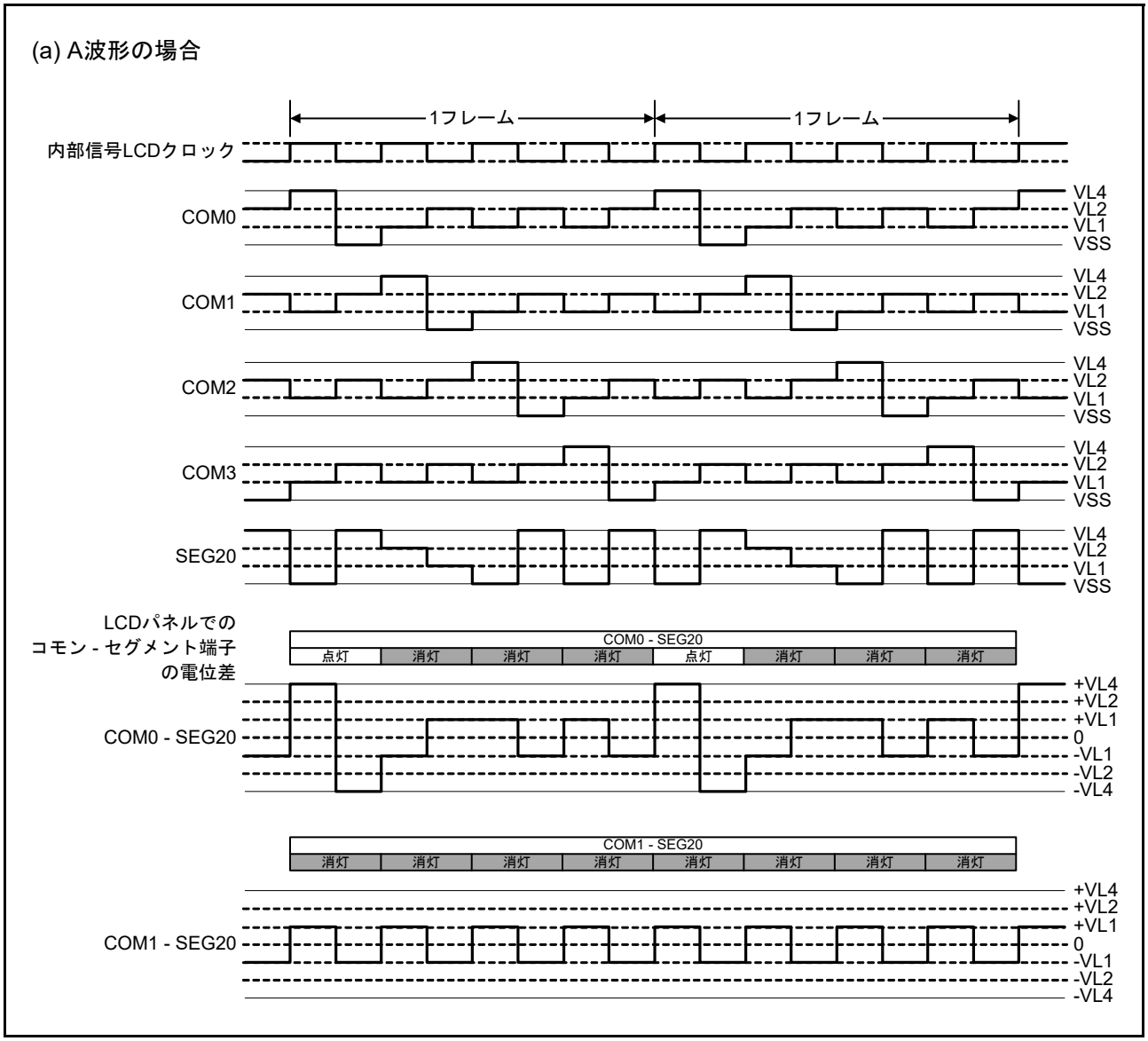


図 44.15　　1/3 バイアス法を用いた SEG20 と各コモン信号との間の 4 時分割 LCD 駆動波形例（1/2）

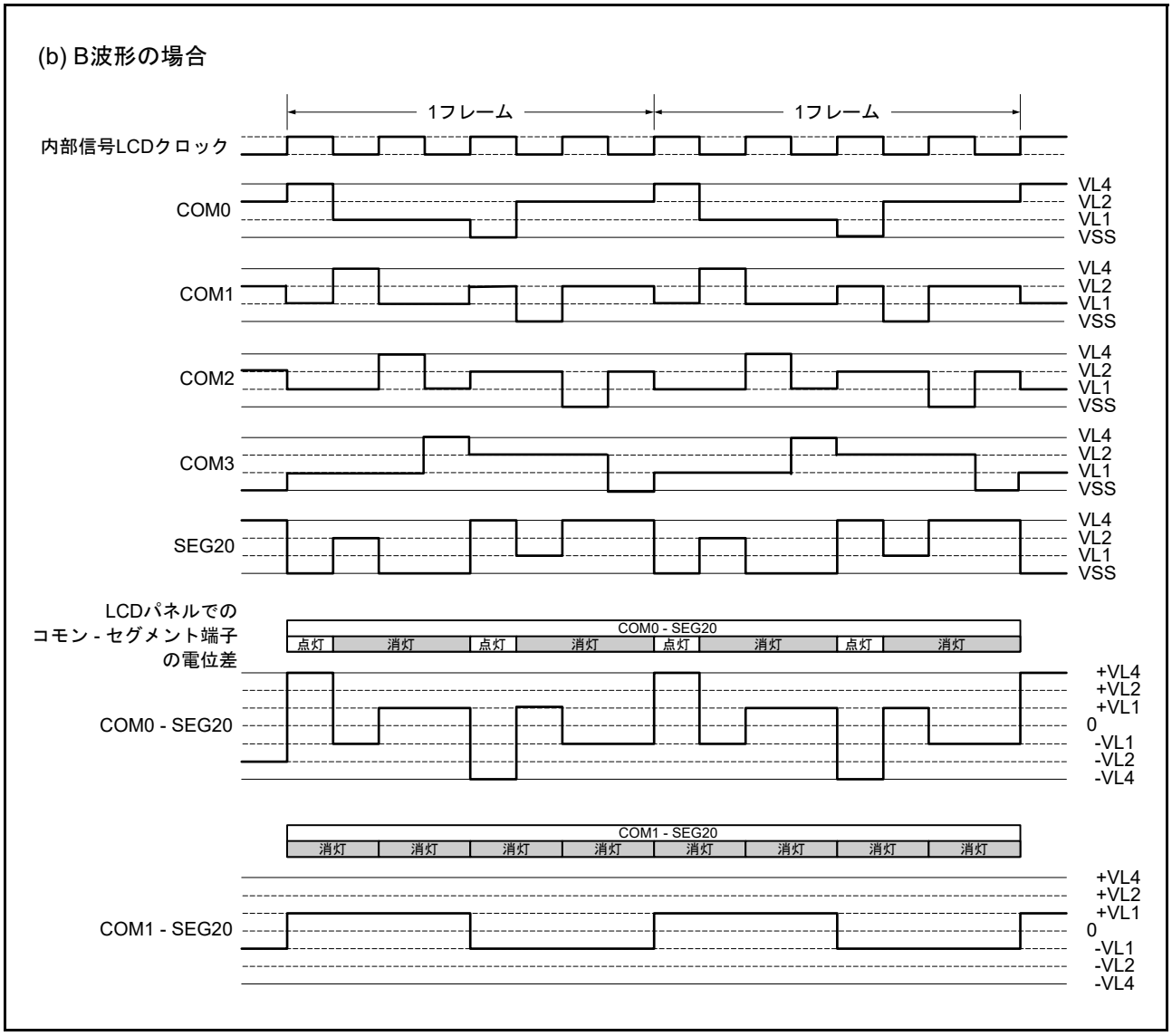


図 44.16　　1/3 バイアス法を用いた SEG20 と各コモン信号との間の 4 時分割 LCD 駆動波形例（2/2）

45. セキュア暗号エンジン（SCE5）

45.1 概要

本 MCU はセキュリティ機能向けにセキュア暗号エンジン（SCE5）モジュールを搭載しています。本モジュールは、アクセス管理回路と暗号エンジン、および乱数生成器で構成されています。

表 45.1 に SCE5 の仕様を、図 45.1 にブロック図を示します。

表 45.1 SCE5の仕様

項目	内容
アクセス制御	アクセス管理回路 • 不正プログラムやプログラム実行の暴走によりSCE5に異常なアクセスがあった場合、この回路は後続のすべてのアクセスを遮断し、SCE5からのデータ出力を停止します。
暗号エンジン	Advanced Encryption Standard（AES）：NIST FIPS PUB 197 アルゴリズムに準拠 • キーサイズ：128、256ビットのいずれか • ブロックサイズ：128ビット • 連鎖モード - ECB、CBC、CTR：NIST SP 800-38Aに準拠 - GCM：NIST SP 800-38Dに準拠 - XTS：NIST SP 800-38Eに準拠 - GCTR • 128ビットデータに対するスループット - 128ビット鍵に対して44 PCLKAサイクル - 256ビット鍵に対して61 PCLKAサイクル AES-GCM • AES-GCMはAES-GCTRとGHASHを組み合わせることにより実現 キー管理 • ラップされた鍵はSCE5でのみ有効
乱数の生成	32ビット真正乱数発生器
ユニークID	• MCU固有のID（ユニークID）では、アクセス管理回路から専用バスまでアクセスが可能 • ユニークIDと鍵生成情報を組み合わせることにより、他のMCUへの不正なデータコピーを防止
特権モード	• 特権モード信号はアクセス管理回路に接続されており、特権モードでのみSCE5を制御できるようにするのに使用
低消費電力	モジュールストップ状態の設定が可能

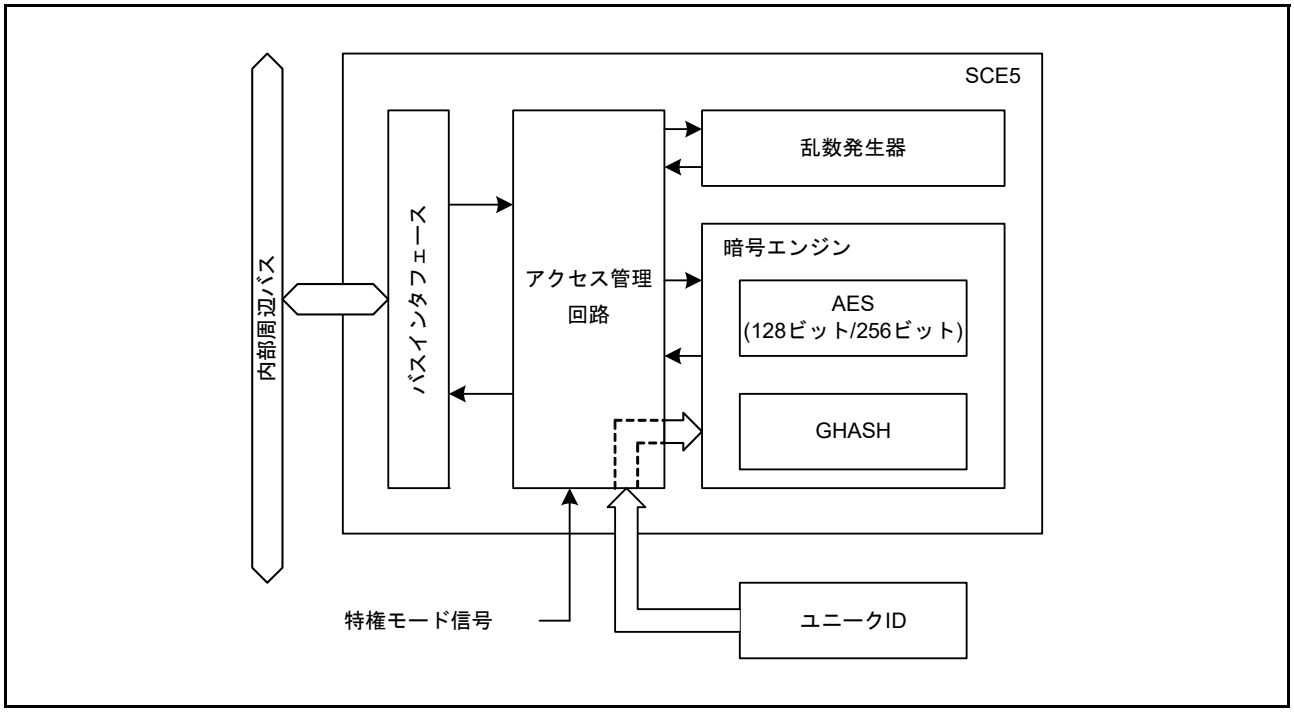


図 45.1 SCE5 ブロック図

45.2 動作説明

45.2.1 暗号エンジン

暗号エンジンは下記の機能をハードウェアで実行します。図 45.2 を参照してください。

- 平文から暗号文への暗号化
- 暗号文から平文への復号

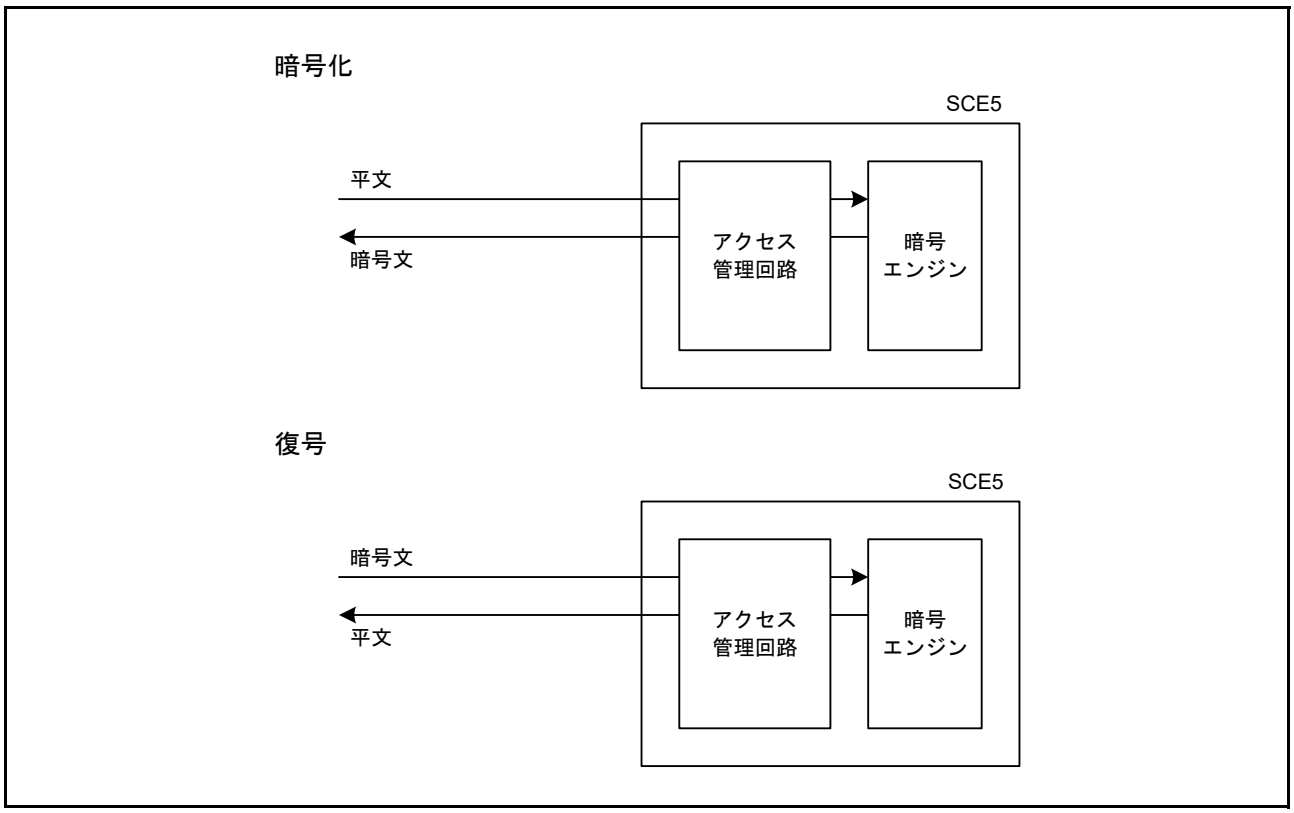


図 45.2 暗号エンジンによる暗号化と復号

45.2.2　暗号化と復号

データの暗号化または復号する方法：

1. 暗号化または復号するデータを SCE5 に入力する。

   SCE5 は平文を暗号文に、暗号文を平文に変換します。
2. 変換されたデータを読み出す

暗号エンジンは入力バッファと出力バッファを備えており、入出力データの暗号化 / 復号を並行して処理することが可能です。図 45.3 に暗号化と復号タイミングを示します。

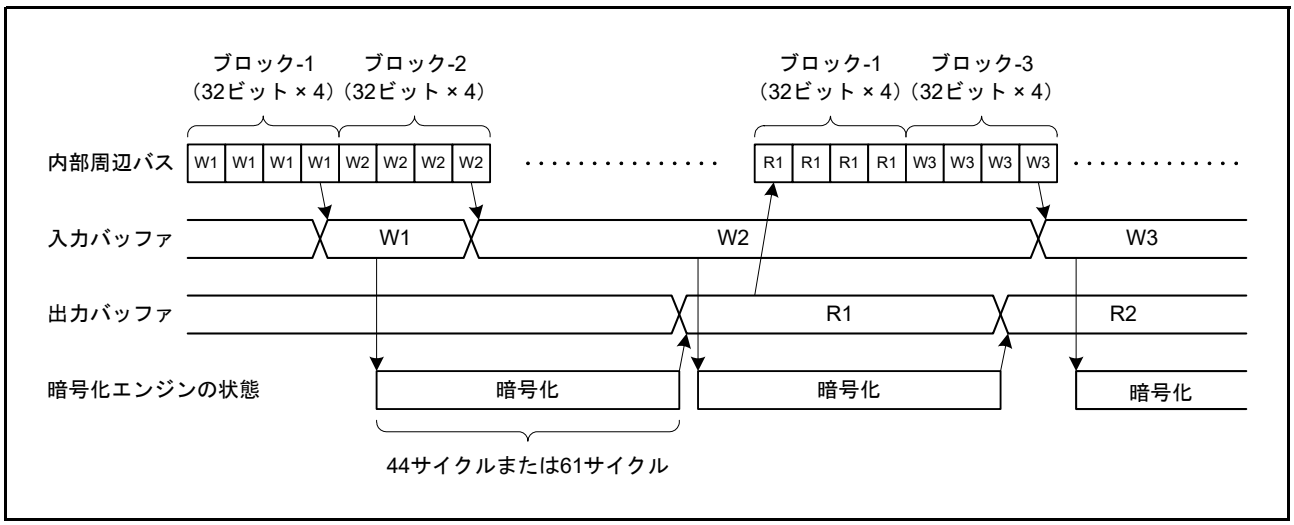


図 45.3　暗号化と復号タイミング（AES）

45.3　使用上の注意事項

45.3.1　ソフトウェアスタンバイモード

暗号エンジンの処理中にソフトウェアスタンバイモードへ遷移した場合、ソフトウェアスタンバイモードが終わっても適切な処理を再開することができません。そのため、ソフトウェアスタンバイモードへの遷移は、暗号エンジンが動作していない状態で行ってください。

45.3.2　モジュールストップ機能の設定

SCE5 の動作は、モジュールストップコントロールレジスタ C（MSTPCRC）を用いて有効または無効にすることが可能です。リセット後の初期状態では、SCE5 モジュールの動作は停止しています。モジュールストップ状態を解除することにより、レジスタへのアクセスが可能になります。

46. Bluetooth Low Energy (BLE)

本 MCU は、Bluetooth Low Energy (BLE) を内蔵しており、Bluetooth 5.0 Low Energy single mode に準拠した RF トランシーバと Link Layer と RF トランシーバ用電源で構成されています。

BLE の制御は、ルネサスエレクトロニクスが提供する Bluetooth ミドルウェアが行います。

46.1 概要

表 46.1 に BLE の仕様を示します。図 46.1 に BLE のブロック図を示します。

表 46.1 BLEの仕様

項目	内容		
特長	• Bluetooth 5.0 Low Energyに準拠したRF トランシーバおよびLink Layerを内蔵 • 整合回路内蔵により外部部品を削減可能 • BLE専用の高精度低速オンチップオシレータ（32.768kHz）を内蔵 • 送信電力は0dBm/+4dBmを選択可能 • 最小受信感度は–95dBm (1Mbps)、–92dBm (2Mbps)、–100dBm (500kbps)、–105dBm (125kbps)を選択可能		
Bluetooth 5.0機能	分類	機能名	備考
	デバイスアドレス	パブリック／ランダムアドレス	任意のアドレスに設定可能
	アドバタイジング機能	Extended/Periodicアドバタイジング	
		Muitipleアドバタイジング	最大セット数 = 4
		アドバタイジング／スキャンレスポンスデータ	最大データ長 = 1650バイト
	スキャニング機能	パッシブ／アクティブ／Periodicスキャニング	Periodicアドバタイジングへの同時同期台数 = 2
		ホワイトリスト／Periodic Advertiserリスト	ホワイトリスト登録台数：4 Periodic Advertisierリスト登録台数：4
	マスタ／スレーブ機能	データ送受信	最大ペイロード長 = 251バイト MoreData機能対応 マスタ／スレーブマルチロール機能対応
	その他	通信速度	1Mbps、2Mbps、500kbps、125kbpsに対応 送信／受信の通信速度組み合わせは任意
		周波数ホッピング	Channel Selection Algorithm #2に対応
		Bluetooth用暗号回路	Bluetooth専用AES-CCM（128ビット）内蔵
その他の機能	RF トランシーバ用電源（DC-DCコンバータ、リニアレギュレータ）を内蔵		

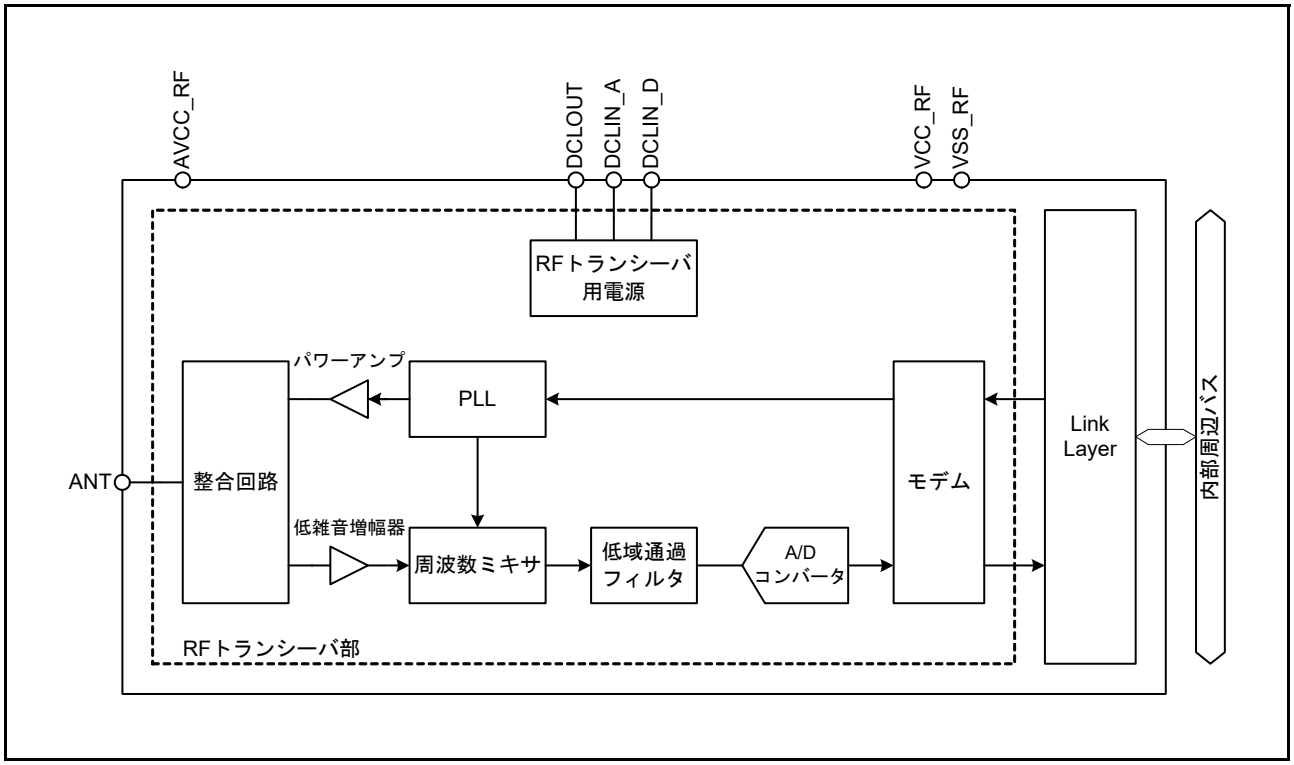


図 46.1 BLE のブロック図

表 46.2 に BLE の入出力端子を示します。

表 46.2 BLEの入出力端子

端子名	入出力	機能
ANT	入出力	RF トランシーバのRF単一入出力端子 （信号ラインは50Ωインピーダンスにしてください）
DCLOUT	出力	RF トランシーバ用電源出力端子
DCLIN_A, DCLIN_D	入力	RF トランシーバ用電源としてDC-DCコンバータを選択する場合は、DCLOUT端子との間にインダクタとコンデンサを接続してください。 RF トランシーバ用電源としてリニアレギュレータを選択する場合は、DCLOUT端子との間にコンデンサを接続してください。
VCC_RF	入力	RF トランシーバ用電源端子
AVCC_RF	入力	RF トランシーバ用電源端子
VSS_RF	入力	RF トランシーバ用グランド端子

表 46.3 に本 MCU がサポートする Bluetooth Low Energy 機能の一覧を示します。これらの機能を利用するには Bluetooth ミドルウェアが必要です。

表 46.3 サポートするBluetooth Low Energy機能一覧

機能	Bluetooth® core spec
Low Energy Controller (PHY and LL)	v4.0
Low Energy Host (L2CAP and Security Manager)	
Attribute Protocol and Generic Attribute Profile	
Appearance Data Type	v4.1
Low Duty Cycle Directed Advertising	
32-bit UUID Support in LE	
LE L2CAP Connection Oriented Channel Support	
LE Link Layer Topology	
LE Ping	
LE Data Packet Length Extension	v4.2
LE Secure Connections	
Link Layer Privacy	
Link Layer Extended Filter Policies	
LE 2M PHY	v5.0
LE Coded PHY	
High Duty Cycle Non-Connectable Advertising	
LE Advertising Extensions	
LE Channel Selection Algorithm #2	

46.2 動作説明

46.2.1 状態遷移図

図 46.2 に BLE の状態遷移図を示します。

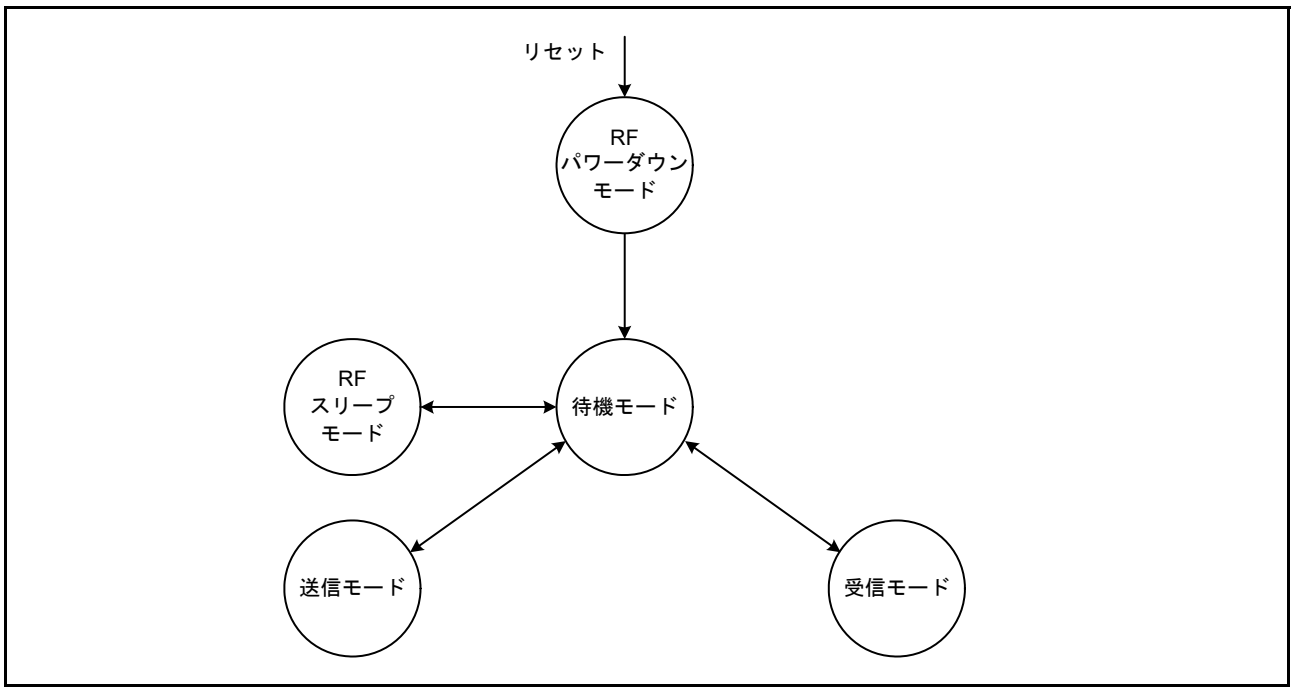


図 46.2 BLE の状態遷移図

RF パワーダウンモード

リセット解除後、最初に遷移するモードです。本 MCU に電源の供給はされますが、RF トランシーバには電源を供給していません。

待機モード

データ送受信要求やスリープモードへの遷移要求を待機しているモードです。

RF スリープモード

RF スリープモードとは、低消費電力な動作モードで LinkLayer 回路の一部を除き、電源供給が停止するモードです。

送信モード

データを送信するモードです。データ送信完了後待機モードに遷移します。

受信モード

データを受信するモードです。データ受信完了後待機モードに遷移します。

46.3 割り込み

表 46.4 に割り込み要因を示します。

Bluetooth ミドルウェアではこれらの割り込みを使用して処理を行っています。

表 46.4 割り込み要因

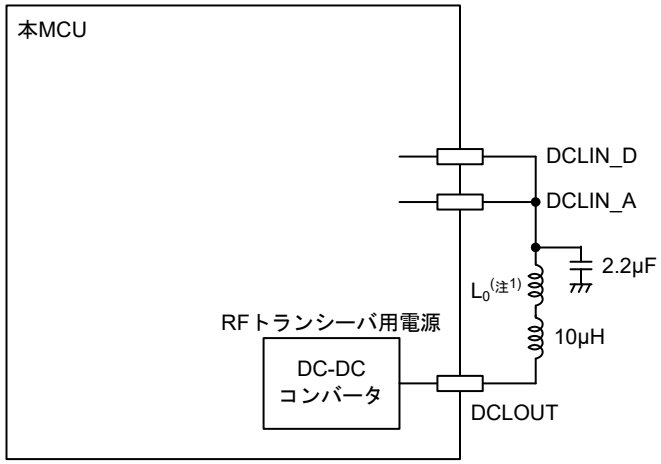
名称	DTC の起動	DMAC の起動
BLEIRQ	不可能	不可能

46.4 使用上の注意事項

46.4.1 RF トランシーバ用電源

RF トランシーバ用電源は DC-DC コンバータとリニアレギュレータの 2 方式から選択することができます。

図 46.3 に DC-DC コンバータ選択時の外部接続回路例を、図 46.4 にリニアレギュレータ選択時の外部接続回路例を示します。



注 1. DC-DC コンバータのノイズ低減のため、基板設計の際にインダクタ L0 のパターンを設ける事を推奨します。詳細は、Bluetooth 基板設計ガイドライン（R01AN4886）で説明していますので、最新版をルネサスエレクトロニクスホームページから入手して参照ください。

図 46.3 DC-DC コンバータ選択時の BLE 外部接続回路例

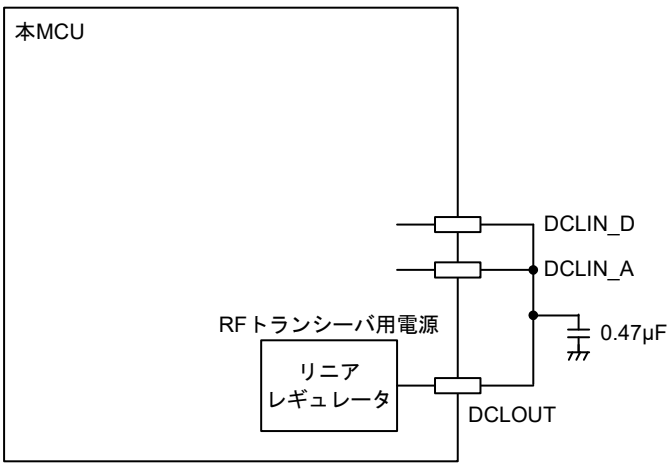


図 46.4 リニアレギュレータ選択時の BLE 外部接続回路例

DC-DC コンバータまたはリニアレギュレータいずれを選択した場合も、RF トランシーバ用電源の入出力端子（DCLOUT, DCLIN_D, DCLIN_A）には他の端子や外部回路を接続しないでください。

46.4.2 無線規格

国際規格および国内法規の規定により、無線レシーバおよびトランスミッタの使用に規制があります。使用する国の規格、法規を順守のうえご使用ください。

2.4GHz 帯の規格の代表的な規格を下記に示します。

- 日本：ARIB STD-T66
- 米国：FCC CFR47 part15.247 および part15.249
- 欧州：EN300 440 および EN 300 328

46.4.3 ボード設計上の注意事項

使用する無線規格によりボード設計上の注意事項は異なります。
ボード設計上の注意事項は、Bluetooth 基板設計ガイドライン（R01AN4886）で説明していますので、最新版をルネサスエレクトロニクスホームページから入手して参照ください。

47. 内部電圧レギュレータ

47.1 概要

本 MCU は、入出力、アナログドメイン以外の内部回路およびメモリに電圧を供給するリニアレギュレータ（LDO）を内蔵しています。

47.2 動作説明

表 47.1 に LDO モードの端子設定を、図 47.1 に LDO モードの設定を示します。LDO モードでは、内部電圧は VCC から生成します。

表 47.1 LDOモード端子の設定内容

端子	設定内容
全VCC端子	• システムの電源に接続してください • 0.1μFの積層セラミックコンデンサを介してVSSに接続してください。コンデンサは端子近くに配置してください
VCL端子	4.7μFの積層セラミックコンデンサを介してVSSに接続してください。コンデンサは端子近くに配置してください。

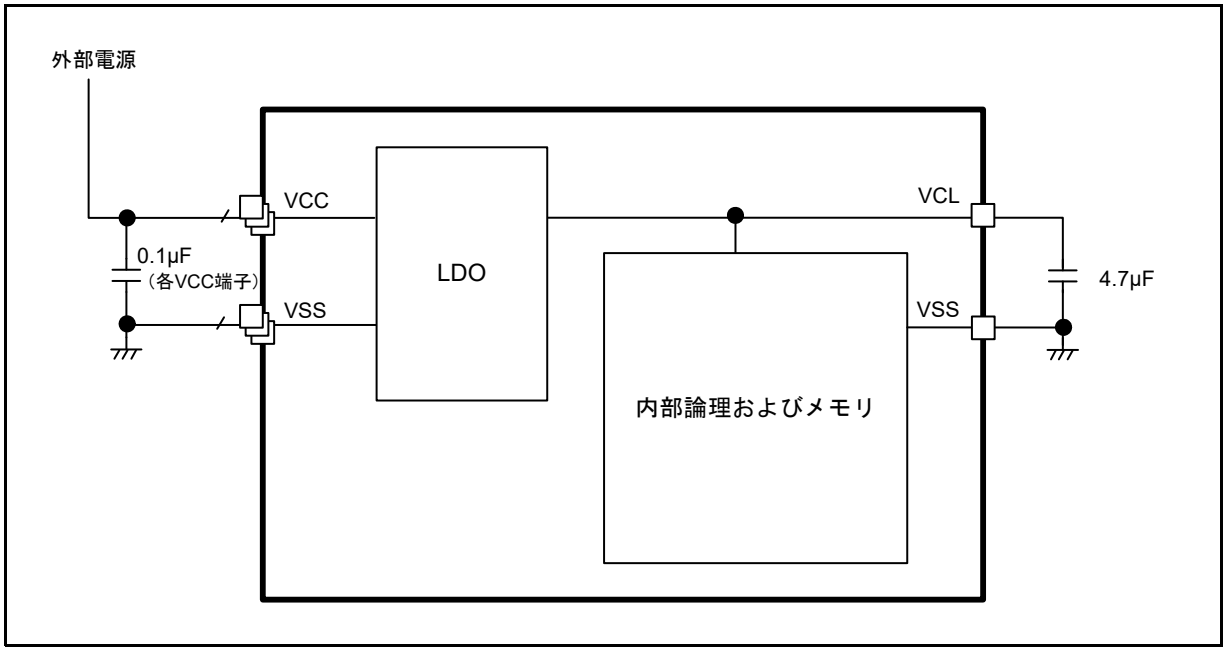


図 47.1 LDO モード設定

48. 電気的特性

特に記載のない限り、本 MCU の電気的特性は以下の条件で定義されています。

VCC (注 1) = AVCC0 = VCC_USB (注 2) = VCC_USB_LDO (注 2) = VCC_RF = AVCC_RF = 1.8 ～ 3.6V、VREFH0 = 1.8 ～ AVCC0、VBATT = 1.8 ～ 3.6V、VSS = AVSS0 = VREFL0 = VSS_RF = VSS_USB = 0V、Ta = T_{opr}

注 1. 通常は VCC = 3.3V に設定されます。
注 2. USBFS 未使用時

図 48.1 は、タイミング条件を示しています。

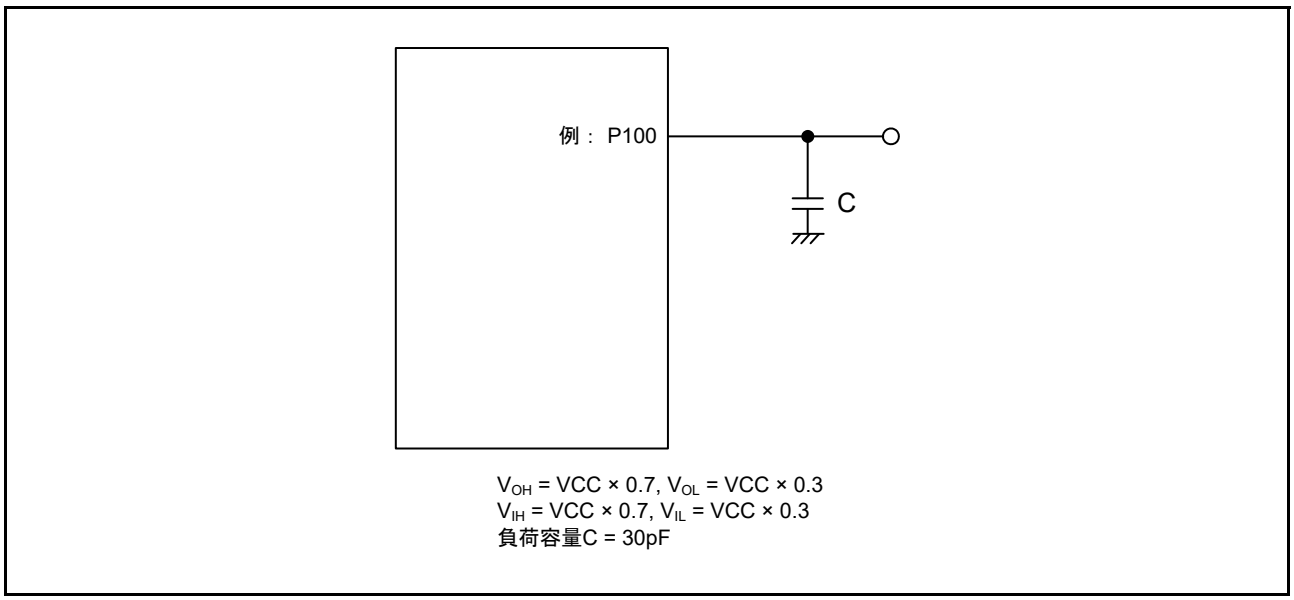


図 48.1 入出力タイミング計測条件

各周辺モジュールのタイミング仕様の計測条件は、最適な周辺動作に推奨されるものです。ただし、ユーザ条件に合うように、各端子の駆動能力を調整してください。

同じ機能に使用される各機能端子は、同じ駆動能力を選択してください。各機能端子の I/O 駆動能力が混在する場合、各機能の AC 仕様は保証されません。

48.1 絶対最大定格

表 48.1 絶対最大定格

項目		シンボル	値	単位
電源電圧		VCC	-0.5～+4.0	V
入力電圧	5V トレラント対応ポート（注1）	V_{in}	-0.3～+6.5	V
	P004, P010, P011, P014, P015		-0.3～AVCC0 + 0.3	V
	ANT		-1.0～+1.4	V
	XTAL1_RF, XTAL2_RF		-0.3～+1.4	V
	DCLIN_A, DCLIN_D		-0.3～+2.2	V
	その他		-0.3～VCC + 0.3	V
リファレンス電源電圧		VREFH0	-0.3～+4.0	V
VBATT電源電圧		VBATT	-0.5～+4.0	V
アナログ電源電圧		AVCC0	-0.5～+4.0	V
		VCC_RF	-0.3～+4.0	V
		AVCC_RF	-0.3～+4.0	V
USB電源電圧		VCC_USB	-0.5～+4.0	V
		VCC_USB_LDO	-0.5～+4.0	V
アナログ入力電圧	AN004～AN006, AN009, AN010使用時	V_{AN}	-0.3～AVCC0 + 0.3	V
	AN017, AN019, AN020使用時		-0.3～VCC + 0.3	V
LCD電圧	VL1電圧	V_{L1}	-0.3～+2.8	V
	VL2電圧	V_{L2}	-0.3～+4.0	V
	VL4電圧	V_{L4}	-0.3～+4.0	V
動作温度（注2）		T_{opr}	-40～+85	℃
保存温度		T_{stg}	-55～+125	℃

注 1. P205, P206, P402, P407 の各ポートは 5V トレラント対応です。
注 2. 48.2.1 Tj/Ta の定義を参照してください。

【使用上の注意】 絶対最大定格を超えて MCU を使用した場合、MCU の永久破壊となることがあります。
ノイズ干渉による誤動作を防止するには、VCC 端子と VSS 端子の間、AVCC0 端子と AVSS0 端子の間、VCC_RF 端子と VSS_RF 端子の間、AVDD_RF 端子と VSS_RF 端子の間、VCC_USB 端子と VSS_USB 端子の間、および VREFH0 端子と VREFL0 端子の間には周波特性の良いコンデンサを挿入してください。VCC_RF 端子は 2.2μF、それ以外の電源端子には 0.1μF のコンデンサを各電源端子になるべく近い場所に配置し、接続にはできるだけ短く重いトレースを使用してください。また、コンデンサは安定容量として接続してください。
VCL 端子は、4.7μF のコンデンサを介して VSS 端子に接続してください。コンデンサは必ず端子近くに配置してください。
デバイスの電源が切れている状態で信号や I/O プルアップ電源を入力しないでください。信号または I/O プルアップの入力による電流注入は、デバイスの故障や異常電流を引き起こし、内部要素を劣化させる恐れがあります。

表 48.2 推奨動作条件

項目	シンボル	値	Min	Typ	Max	単位
電源電圧	VCC（注1）（注2）	USBFS未使用時	1.8	—	3.6	V
		USBFS使用時 USBレギュレータ無効	VCC_USB	—	3.6	V
	VSS		—	0	—	V
USB電源電圧	VCC_USB	USBFS未使用時	—	VCC	—	V
		USBFS使用時 USBレギュレータ無効 （入力）	3.0	3.3	3.6	V
	VCC_USB_LDO	USBFS未使用時	—	VCC	—	V
		USBFS使用時	—	VCC	—	V
	VSS_USB		—	0	—	V
VBATT電源電圧	VBATT	バッテリバックアップ機能未使用時	—	VCC	—	V
		バッテリバックアップ機能使用時	1.8	—	3.6	V
アナログ電源電圧	AVCC0（注1）（注2）		1.8	—	3.6	V
	AVSS0		—	0	—	V
	VREFH0	ADC14基準として使用時	1.8	—	AVCC0	V
	VREFL0		—	0	—	V
BLE電源電圧	VCC_RF（注3）		1.8	—	3.6	V
	AVCC_RF（注3）		1.8	—	3.6	V
	VSS_RF		—	0	—	V

注 1. 下記の条件で AVCC0 と VCC を使用してください :
VCC ≧ 2.2V および AVCC ≧ 2.2V のとき、AVCC0 と VCC は動作範囲内で個別に設定可能
VCC ＜ 2.2V または AVCC0 ＜ 2.2V のとき、AVCC0 = VCC

注 2. VCC 端子および AVCC0 端子に電源を投入する場合、両方同時に電源投入するか、最初に VCC 端子、次に AVCC0 端子の順番で電源投入してください。

注 3. VCC = VCC_RF = AVCC_RF の条件で使用してください。

48.2 DC 特性

48.2.1 Tj/Ta の定義

表 48.3 DC特性
条件：動作温度（T_a）が-40～+85℃の製品

項目	シンボル	Typ	Max	単位	測定条件
許容ジャンクション温度	Tj	—	105（注1）	℃	High-speedモード Middle-speedモード Low-speedモード Low-voltageモード Subosc-speedモード

注 . Tj = T_a + θja × 総消費電力（W）となるようにしてください。このとき、総消費電力 = (VCC - V_{OH}) × ΣI_{OH} + V_{OL} × ΣI_{OL} + I_{CC}max × VCC です。

注 1. 動作温度の上限は、85 ℃です。詳細は、1.3 型名を参照してください。型名が動作温度 85 ℃を示している場合は、Tj の最大値は 105 ℃になります。

48.2.2 I/O V_{IH}, V_{IL}

表 48.4 I/O V_{IH}, V_{IL} (1)
条件：VCC = AVCC0 = VCC_USB = VCC_USB_LDO = 2.7～3.6V、VBATT = 1.8～3.6V、VSS = AVSS0 = 0V

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
シュミットトリガ入力電圧	IIC（注1）	V_{IH}	VCC × 0.7	—	5.8	V	—
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.3		
		ΔV_T	VCC × 0.05	—	—		
	RES, NMI IICを除くその他の周辺入力端子	V_{IH}	VCC × 0.8	—	—		
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.2		
		ΔV_T	VCC × 0.1	—	—		
入力電圧（シュミットトリガ入力端子を除く）	5Vトレラント対応ポート（注2）	V_{IH}	VCC × 0.8	—	5.8		
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.2		
	P914, P915	V_{IH}	VCC_USB × 0.8	—	VCC_USB + 0.3		
		V_{IL}	—	—	VCC_USB × 0.2		
	P004, P010	V_{IH}	AVCC0 × 0.8	—	—		
		V_{IL}	—	—	AVCC0 × 0.2		
	EXTAL P004, P010, P914, P915を除く入力ポート端子	V_{IH}	VCC × 0.8	—	—		
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.2		
V_{BATT}電源選択時	P402	V_{IH}	V_{BATT} × 0.8	—	V_{BATT} + 0.3		
		V_{IL}	—	—	V_{BATT} × 0.2		
		ΔV_T	V_{BATT} × 0.05	—	—		

注 1. P205、P206、P407（合計 3 端子）

注 2. P2205、P206、P402、P407（合計 4 端子）

表 48.5 I/O V_{IH}, V_{IL} (2)

条件：VCC = AVCC0 = VCC_USB = VCC_USB_LDO = 1.8～2.7V、VBATT = 1.8～3.6V、VSS = AVSS0 = 0V

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
シュミットトリガ入力電圧	RES#, NMI 周辺入力端子	V_{IH}	VCC × 0.8	—	—	V	—
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.2		
		ΔV_T	VCC × 0.01	—	—		
入力電圧（シュミットトリガ入力端子を除く）	5V トレラント対応ポート（注1）	V_{IH}	VCC × 0.8	—	5.8		
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.2		
	P914, P915	V_{IH}	VCC_USB × 0.8	—	VCC_USB + 0.3		
		V_{IL}	—	—	VCC_USB × 0.2		
	P004, P010	V_{IH}	AVCC0 × 0.8	—	—		
		V_{IL}	—	—	AVCC0 × 0.2		
	EXTAL P004, P010 を除く入力ポート端子	V_{IH}	VCC × 0.8	—	—		
		V_{IL}	—	—	VCC × 0.2		
V_{BATT} 電源選択時	P402, P404	V_{IH}	V_{BATT} × 0.8	—	V_{BATT} + 0.3		
		V_{IL}	—	—	V_{BATT} × 0.2		
		ΔV_T	V_{BATT} × 0.01	—	—		

注 1. P205、P206、P402、P407（合計 4 端子）

48.2.3 I/O I_{OH}, I_{OL}

表 48.6 I/O I_{OH}, I_{OL}

条件：VCC = AVCC0 = VCC_USB = VCC_USB_LDO = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位
許容出力電流（端子ごとの平均値）	ポートP212、P213	—	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
	ポートP409	低駆動（注1）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
		中駆動（注2）VCC = 2.7～3.0V	I_{OH}	—	—	-8.0	mA
			I_{OL}	—	—	8.0	mA
		中駆動（注2）VCC = 3.0～3.6V	I_{OH}	—	—	-20.0	mA
			I_{OL}	—	—	20.0	mA
	ポートP100～P111、P201、P204、P300、P501（合計16端子）	低駆動（注1）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
		中駆動（注2）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	8.0	mA
	ポートP914、P915	—	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
	その他の出力端子（注3）	低駆動（注1）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
		中駆動（注2）	I_{OH}	—	—	-8.0	mA
			I_{OL}	—	—	8.0	mA
許容出力電流（端子ごとの最大値）	ポートP212、P213	—	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
	ポートP409	低駆動（注1）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
		中駆動（注2）VCC = 2.7～3.0V	I_{OH}	—	—	-8.0	mA
			I_{OL}	—	—	8.0	mA
		中駆動（注2）VCC = 3.0～3.6V	I_{OH}	—	—	-20.0	mA
			I_{OL}	—	—	20.0	mA
	ポートP100～P111、P201、P204、P300、P501（合計16端子）	低駆動（注1）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
		中駆動（注2）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	8.0	mA
	ポートP914、P915	—	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
	その他の出力端子（注3）	低駆動（注1）	I_{OH}	—	—	-4.0	mA
			I_{OL}	—	—	4.0	mA
		中駆動（注2）	I_{OH}	—	—	-8.0	mA
			I_{OL}	—	—	8.0	mA
許容出力電流（全端子の最大値）	ポートP004、P010の総和		$\Sigma I_{OH\ (max)}$	—	—	-30	mA
			$\Sigma I_{OL\ (max)}$	—	—	30	mA
	ポートP914、P915		$\Sigma I_{OH\ (max)}$	—	—	-4.0	mA
			$\Sigma I_{OL\ (min)}$	—	—	4.0	mA
	全出力端子の総和（注5）		$\Sigma I_{OH\ (max)}$	—	—	-60	mA
			$\Sigma I_{OL\ (max)}$	—	—	60	mA

【使用上の注意】 本 MCU の信頼性を確保するため、出力電流値はこの表の値を超えないようにしてください。平均出力電流は、100µs の間に計測した電流の平均値を意味します。

注 1. PmnPFS レジスタのポート駆動能力ビットで低駆動が選択されている場合の値です。

注 2. PmnPFS レジスタのポート駆動能力ビットで中駆動が選択されている場合の値です。
注 3. 入力ポートである P200、P214、P215 を除きます。
注 4. PmnPFS レジスタのポート駆動能力ビットで IIC ファストモードに対して中駆動が選択されている場合の値です。
注 5. CTSU の許容出力電流の詳細については、48.11 CTSU 特性を参照してください。

48.2.4 I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性

表 48.7 I/O V_{OH}, V_{OL} (1)

条件：VCC = AVCC0 = VCC_USB = VCC_USB_LDO = 2.7～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
出力電圧	IIC（注1）		V_{OL}	—	—	0.4	V	I_{OL} = 3.0mA
			V_{OL}（注2）（注5）	—	—	0.6		I_{OL} = 6.0mA
	ポートP409（注2）（注3）		V_{OH}	VCC - 1.0	—	—		I_{OH} = -20mA VCC = 3.3V
			V_{OL}	—	—	1.0		I_{OL} = 20mA VCC = 3.3V
	ポートP004、P010	低駆動	V_{OH}	AVCC0 - 0.5	—	—		I_{OH} = -1.0mA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 1.0mA
		中駆動	V_{OH}	AVCC0 - 0.5	—	—		I_{OH} = -2.0mA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 2.0mA
	ポートP914、P915		V_{OH}	VCC_USB - 0.5	—	—		I_{OH} = -1.0mA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 1.0mA
	その他の出力端子（注4）（注6）	低駆動	V_{OH}	VCC - 0.5	—	—		I_{OH} = -1.0mA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 1.0mA
		中駆動（注5）	V_{OH}	VCC - 0.5	—	—		I_{OH} = -2.0mA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 2.0mA

注 1. P100、P101、P204、P205、P206、P407（合計 6 端子）
注 2. PmnPFS レジスタのポート駆動能力ビットで中駆動が選択されている場合の値です。
注 3. 特性データに基づき、製品試験は行っていません。
注 4. 入力ポートである P200、P214、P215 を除きます。
注 5. P212、P213 を除く
注 6. CLKOUT_RF を除く

表 48.8 I/O V_{OH}, V_{OL} (2)

条件：VCC = AVCC0 = VCC_USB = VCC_USB_LDO = 1.8～2.7V

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
出力電圧	ポートP004、P010	低駆動	V_{OH}	AVCC0 - 0.3	—	—	V	I_{OH} = -0.5mA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 0.5mA
		中駆動	V_{OH}	AVCC0 - 0.3	—	—		I_{OH} = -1.0mA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 1.0mA
	ポートP914、P915		V_{OH}	VCC_USB - 0.3	—	—		I_{OH} = -0.5mA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 0.5mA
	その他の出力端子（注1）（注3）	低駆動	V_{OH}	VCC - 0.3	—	—		I_{OH} = -0.5mA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 0.5mA
		中駆動（注2）	V_{OH}	VCC - 0.3	—	—		I_{OH} = -1.0mA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 1.0mA

注 1. 入力ポートである P200、P214、P215 を除きます。
注 2. P212、P213 を除く
注 3. CLKOUT_RF を除く

表 48.9 I/O V_{OH}, V_{OL} (3)

条件：3.0V≦VCC = AVCC0 = VCC_USB = VCC_USB_LDO = VCC_RF = AVCC_RF≦3.6V

項目		シンボル	Min	Max	単位	測定条件
出力Low	CLKOUT_RF	V_{OL}	—	0.3	V	I_{OL} = 0.5mA
出力High	CLKOUT_RF	V_{OH}	VCC_RF - 0.3	—	V	I_{OH} = -0.5mA

表 48.10 I/Oその他の特性

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
入力リーク電流	RES, P200, P214, P215	$\|I_{in}\|$	—	—	1.0	μA	V_{in} = 0V V_{in} = VCC
スリーステートリーク電流（オフ状態）	5Vトレラント対応ポート	$\|I_{TSI}\|$	—	—	1.0	μA	V_{in} = 0V V_{in} = 5.8V
	その他のポート（ポートP200、P214、P215、および5Vトレラントポートを除く）		—	—	1.0		V_{in} = 0V V_{in} = VCC
入力プルアップ抵抗	全ポート（ポートP200、P214、P215、P914、P915を除く）	R_U	10	20	50	kΩ	V_{in} = 0V
入力容量	P914、P915、P100～P103、P111、P200	C_{in}	—	—	30	pF	V_{in} = 0V f = 1MHz T_a = 25℃
	その他の入力端子		—	—	15		

48.2.5 低駆動能力の入出力端子出力特性

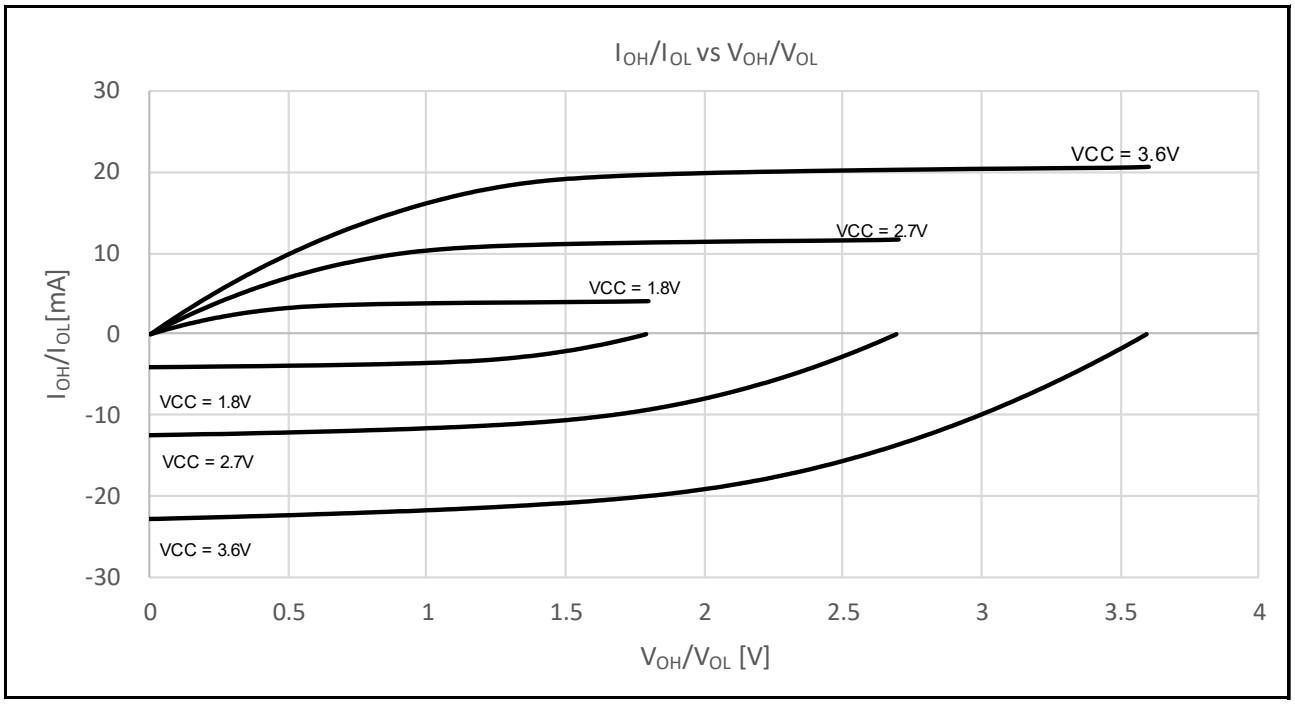


図 48.2 低駆動出力選択時の Ta = 25 ℃での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 電圧特性（参考データ）

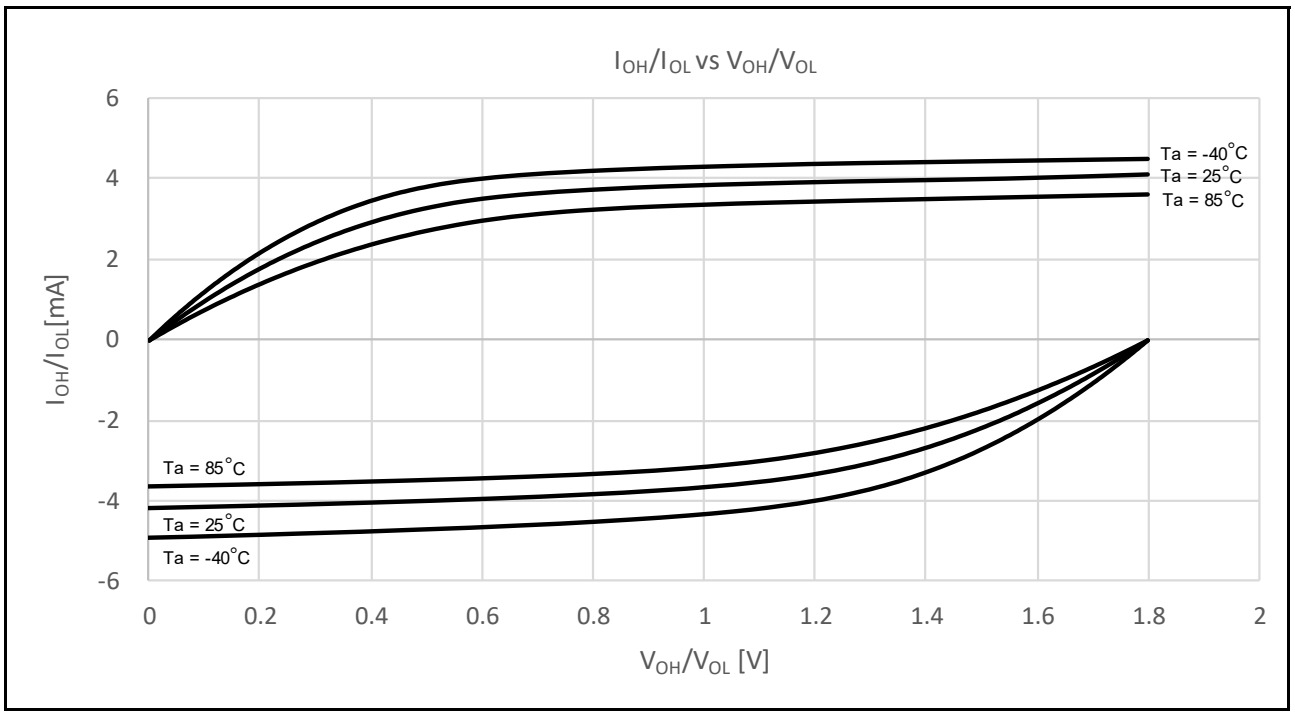


図 48.3 低駆動出力選択時の VCC = 1.8V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

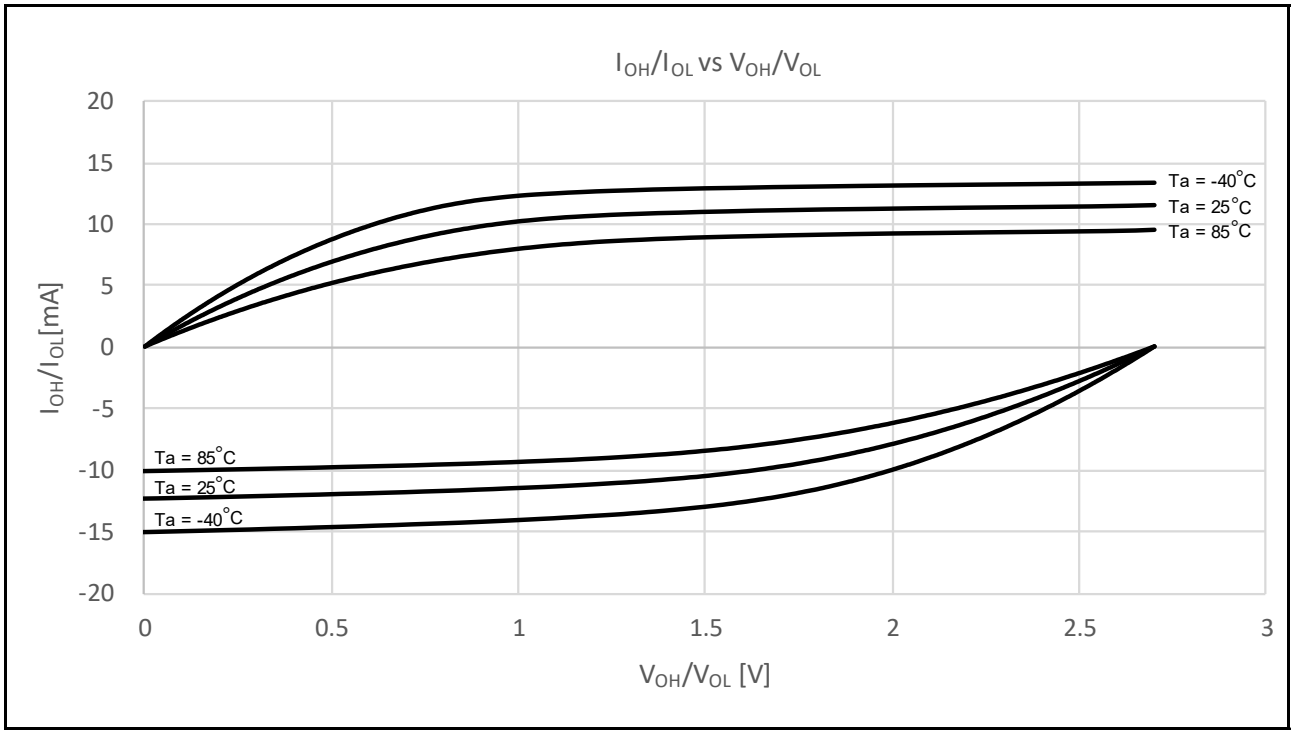


図 48.4　低駆動出力選択時の VCC = 2.7V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

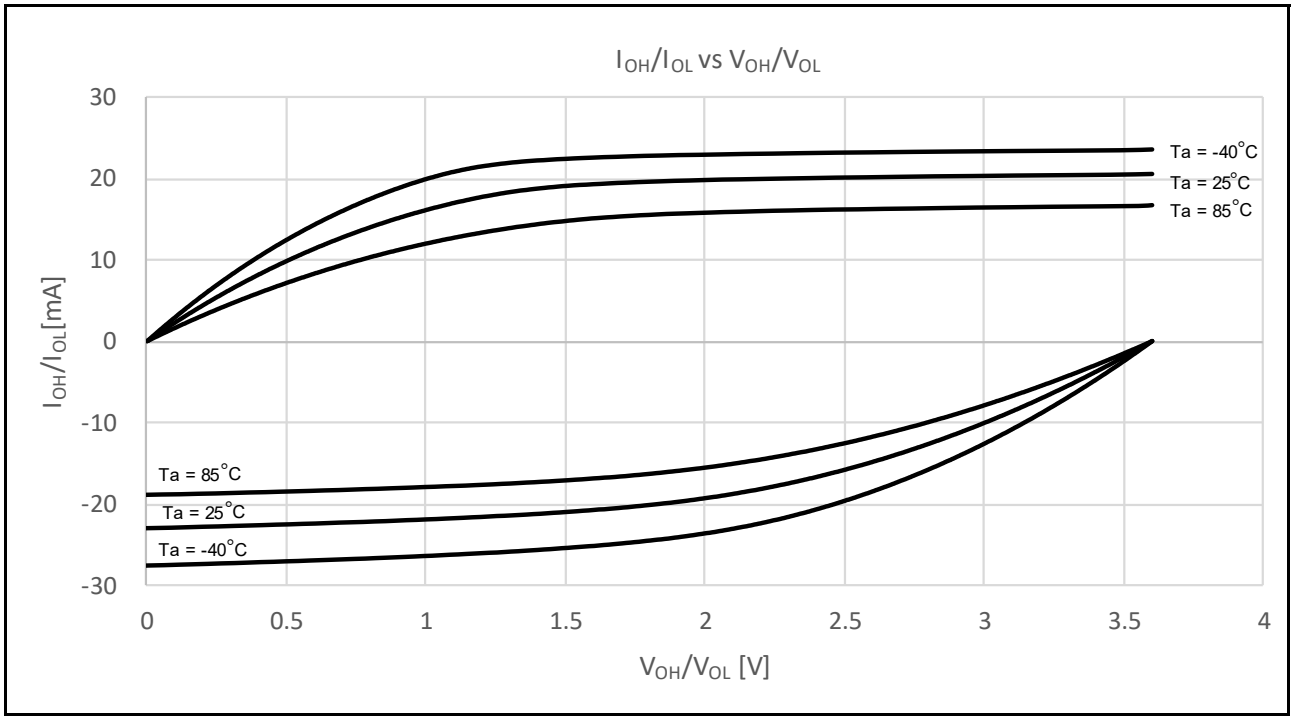


図 48.5　低駆動出力選択時の VCC = 3.6V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

48.2.6 中駆動能力の入出力端子出力特性

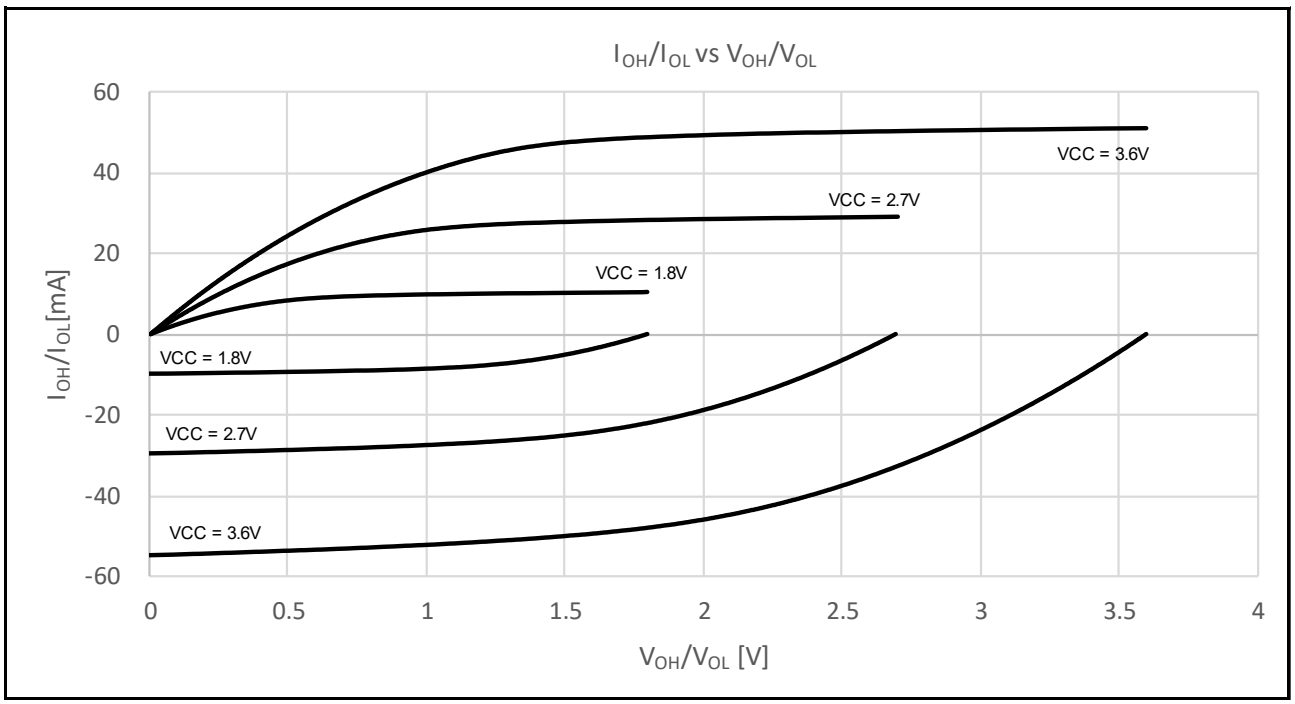


図 48.6 中駆動出力選択時の Ta = 25 ℃での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 電圧特性（参考データ）

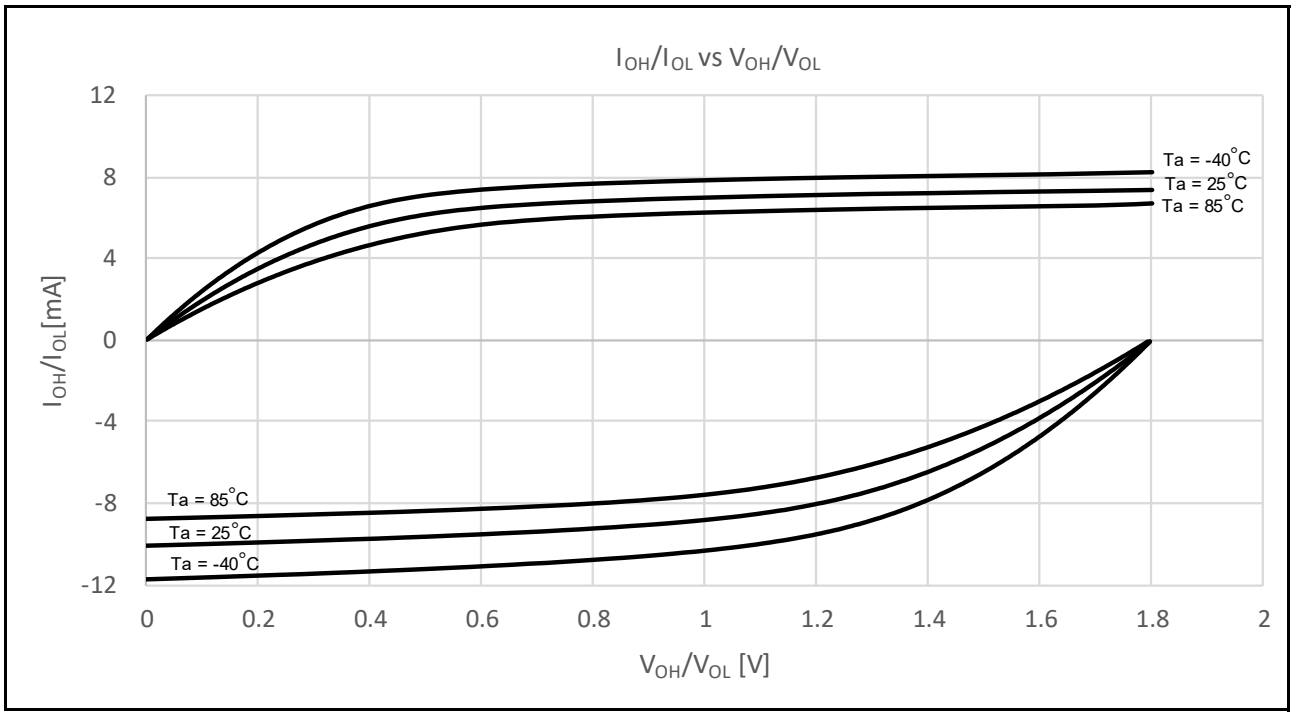


図 48.7 中駆動出力選択時の VCC = 1.8V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

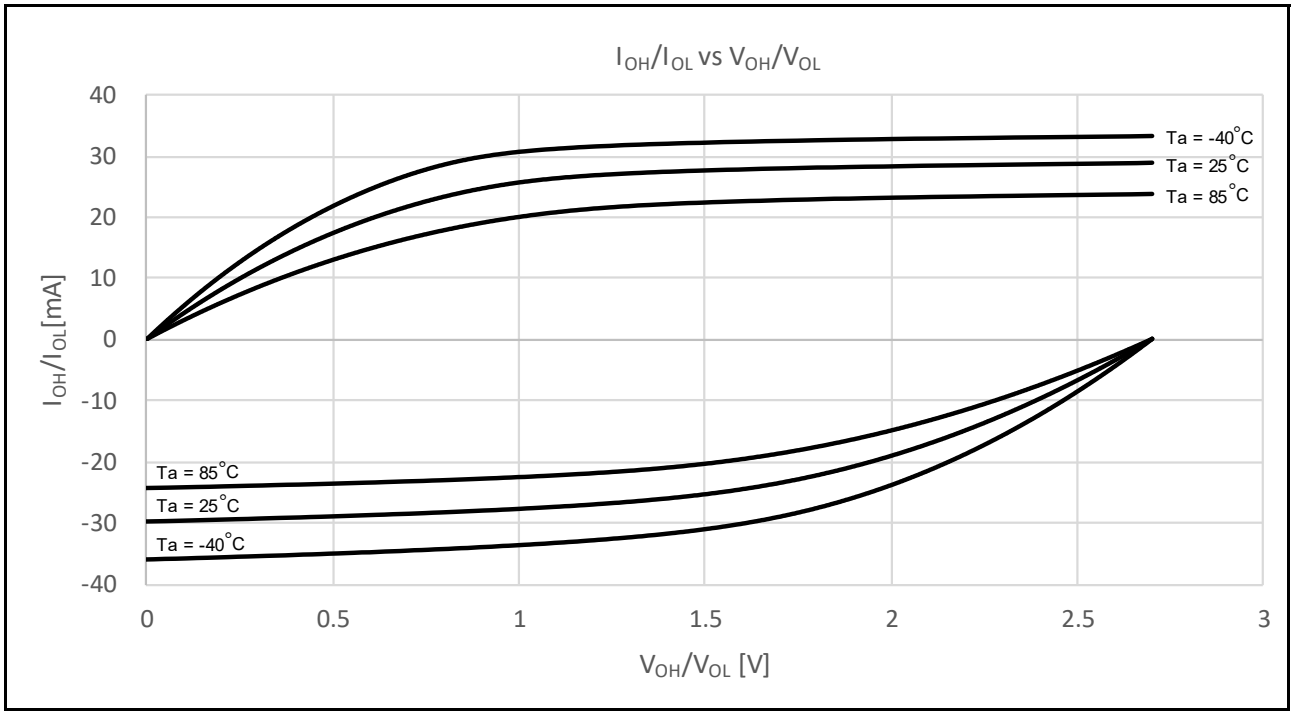


図 48.8　中駆動出力選択時の VCC = 2.7V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

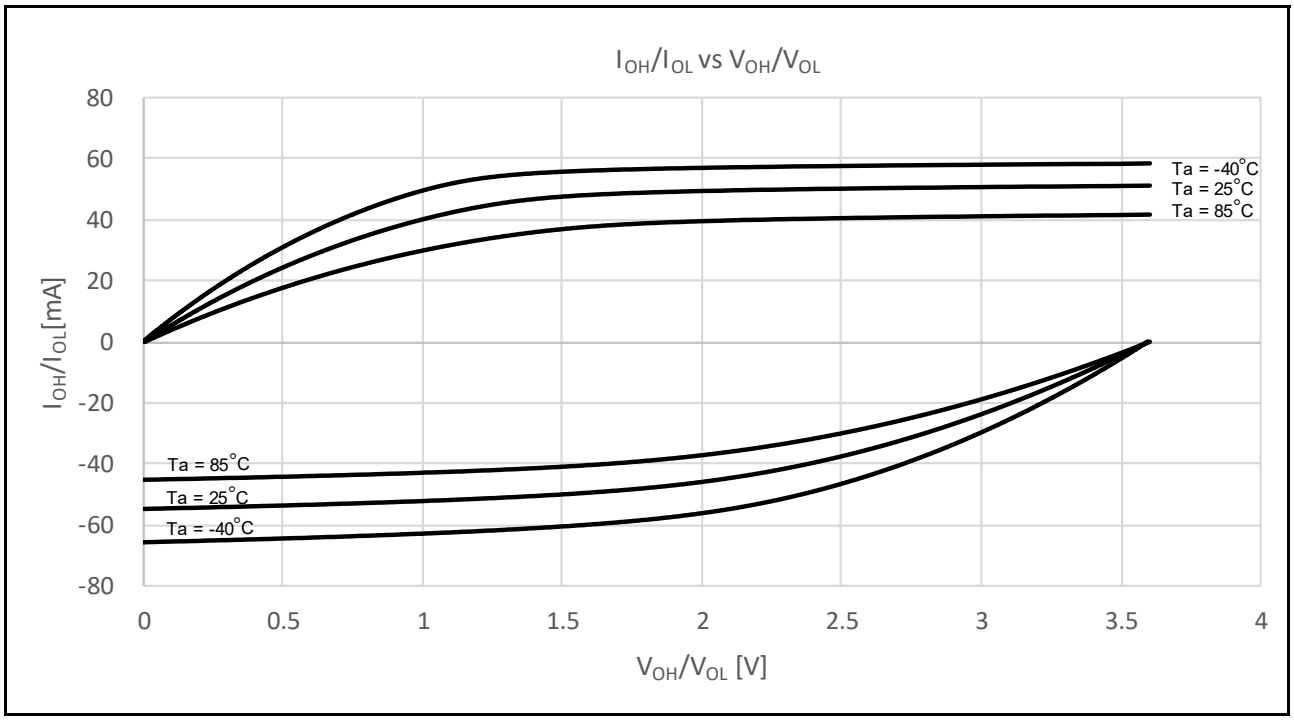


図 48.9　中駆動出力選択時の VCC = 3.6V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

48.2.7 中駆動能力の P409 入出力端子出力特性

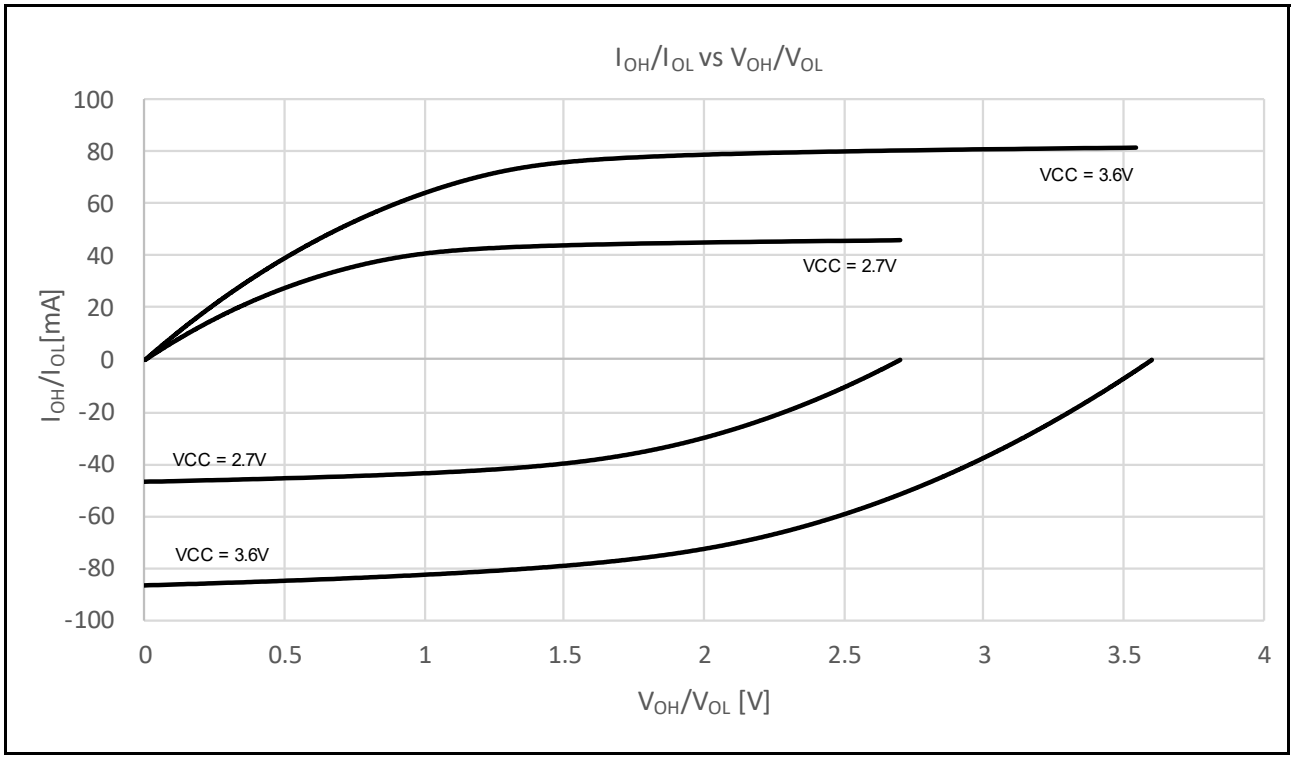


図 48.10 中駆動出力選択時の Ta = 25 ℃での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 電圧特性（参考データ）

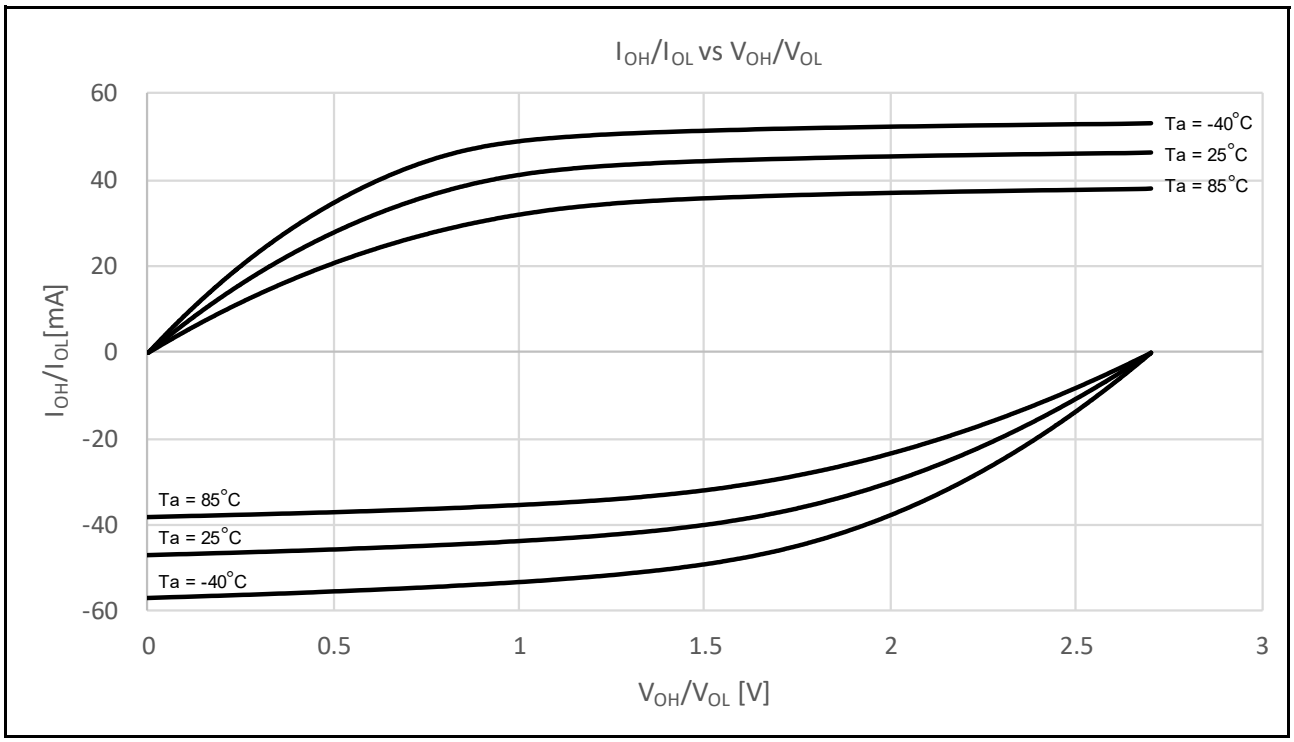


図 48.11 中駆動出力選択時の VCC = 2.7V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

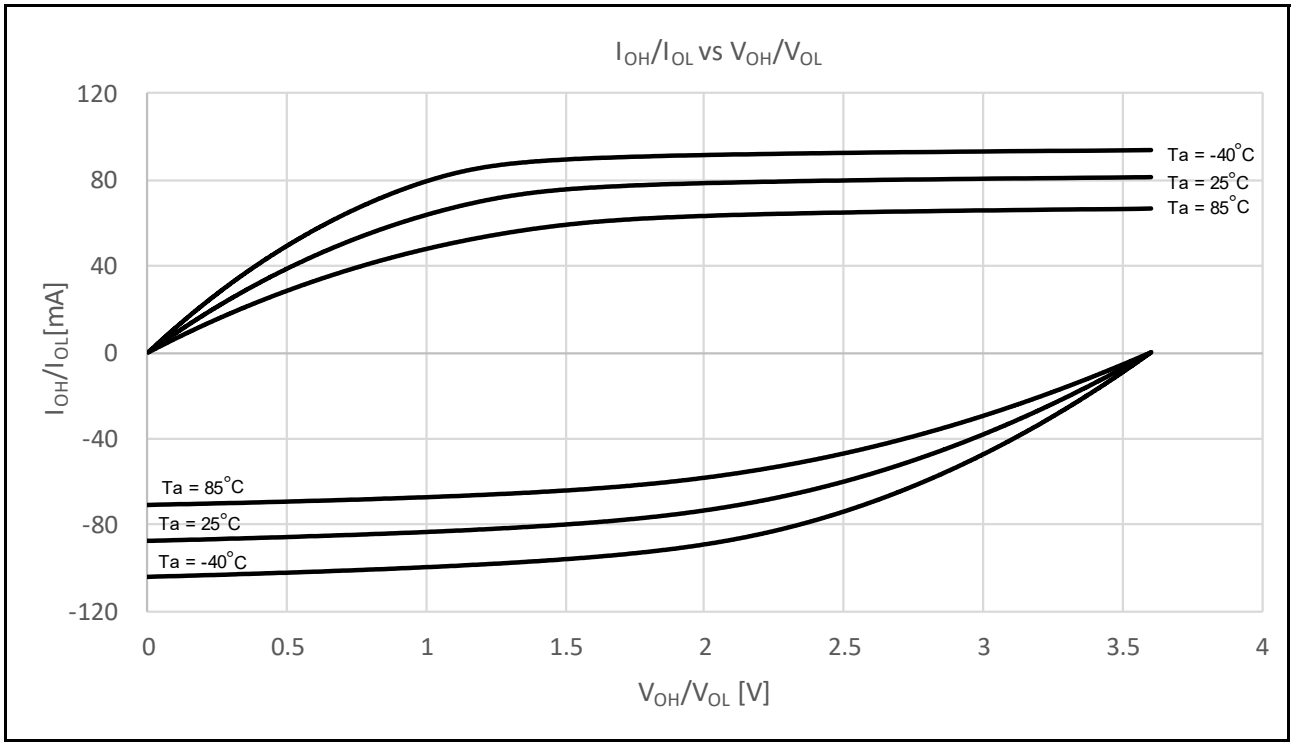


図 48.12　中駆動出力選択時の VCC = 3.6V での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 温度特性（参考データ）

48.2.8　IIC 入出力端子出力特性

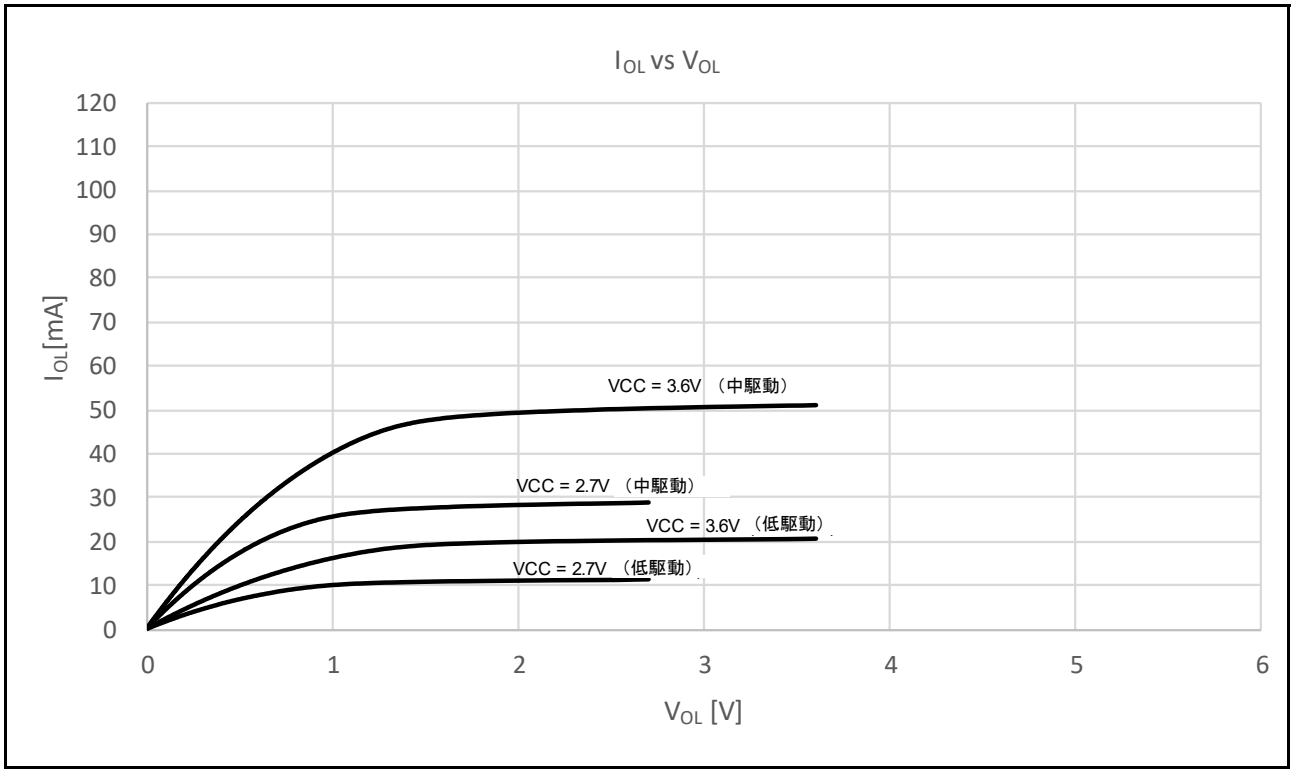


図 48.13　Ta = 25 ℃での V_{OH}/V_{OL} および I_{OH}/I_{OL} 電圧特性

48.2.9 動作電流とスタンバイ電流

表 48.11 動作電流とスタンバイ電流（1）(1/2)

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

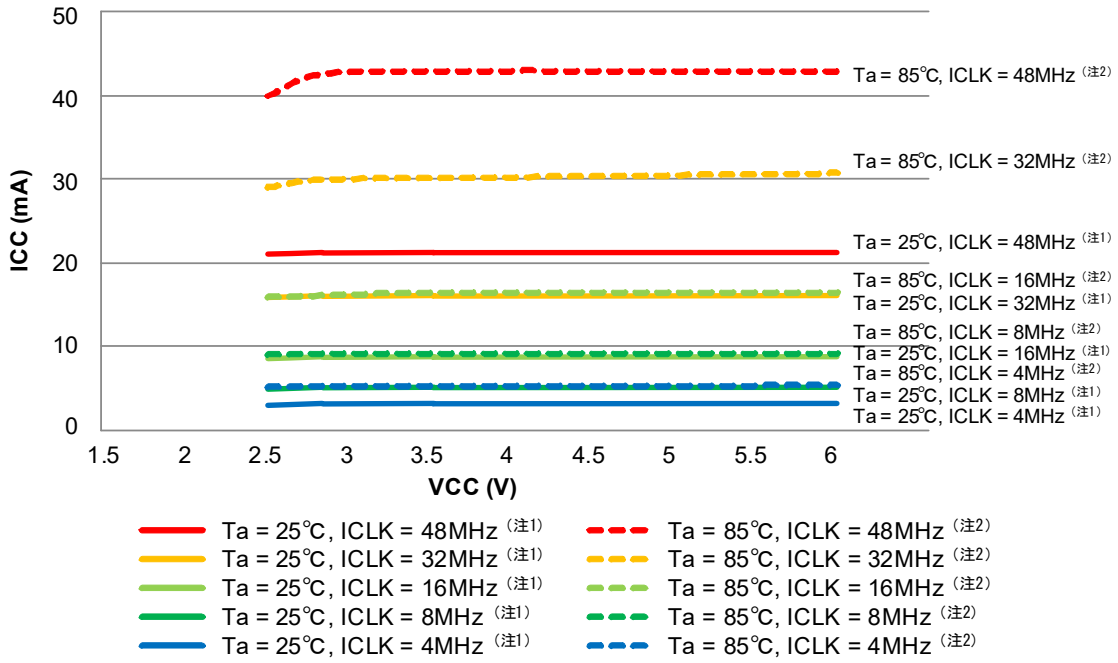
項目					シンボル	Typ（注10）	Max	単位	測定条件
消費電流（注1）	High-speed モード（注2）	通常モード	すべての周辺クロックが無効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 48MHz	I_{CC}	8.4	—	mA	（注7）
				ICLK = 32MHz		5.9	—		
				ICLK = 16MHz		3.5	—		
				ICLK = 8MHz		2.3	—		
			すべての周辺クロックが無効、CoreMarkコードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 48MHz		17.9	—		
				ICLK = 32MHz		12.4	—		
				ICLK = 16MHz		7.0	—		
				ICLK = 8MHz		4.3	—		
			すべての周辺クロックが有効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 48MHz		21.2	—		（注9）
				ICLK = 32MHz		16.0	—		（注8）
				ICLK = 16MHz		8.8	—		
				ICLK = 8MHz		5.1	—		
			すべての周辺クロックが有効、コードはSRAMから実行（注5）	ICLK = 48MHz		—	56.0		（注9）
		スリープモード	すべての周辺クロックが無効（注5）	ICLK = 48MHz		3.7	—		（注7）
				ICLK = 32MHz		2.7	—		
				ICLK = 16MHz		2.0	—		
				ICLK = 8MHz		1.5	—		
			すべての周辺クロックが有効（注5）	ICLK = 48MHz		16.4	—		（注9）
				ICLK = 32MHz		12.7	—		（注8）
				ICLK = 16MHz		7.2	—		
				ICLK = 8MHz		4.3	—		
		BGO動作時の増加分（注5）				2.5	—		—
	Middle-speed モード（注2）	通常モード	すべての周辺クロックが無効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 12MHz	I_{CC}	2.5	—	mA	（注7）
				ICLK = 8MHz		2.1	—		
				ICLK = 1MHz		1.0	—		
			すべての周辺クロックが無効、CoreMarkコードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 12MHz		5.2	—		
				ICLK = 8MHz		4.0	—		
				ICLK = 1MHz		1.3	—		
			すべての周辺クロックが有効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 12MHz		6.5	—		（注8）
				ICLK = 8MHz		4.8	—		
				ICLK = 1MHz		1.6	—		
			すべての周辺クロックが有効、コードはSRAMから実行（注5）	ICLK = 12MHz		—	23.0		
		スリープモード	すべての周辺クロックが無効（注5）	ICLK = 12MHz		1.4	—		（注7）
				ICLK = 8MHz		1.3	—		
				ICLK = 1MHz		0.9	—		
			すべての周辺クロックが有効（注5）	ICLK = 12MHz		5.3	—		（注8）
				ICLK = 8MHz		4.0	—		
				ICLK = 1MHz		1.5	—		
		BGO動作時の増加分（注6）				2.5	—		—

表 48.11 動作電流とスタンバイ電流（1）(2/2)

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

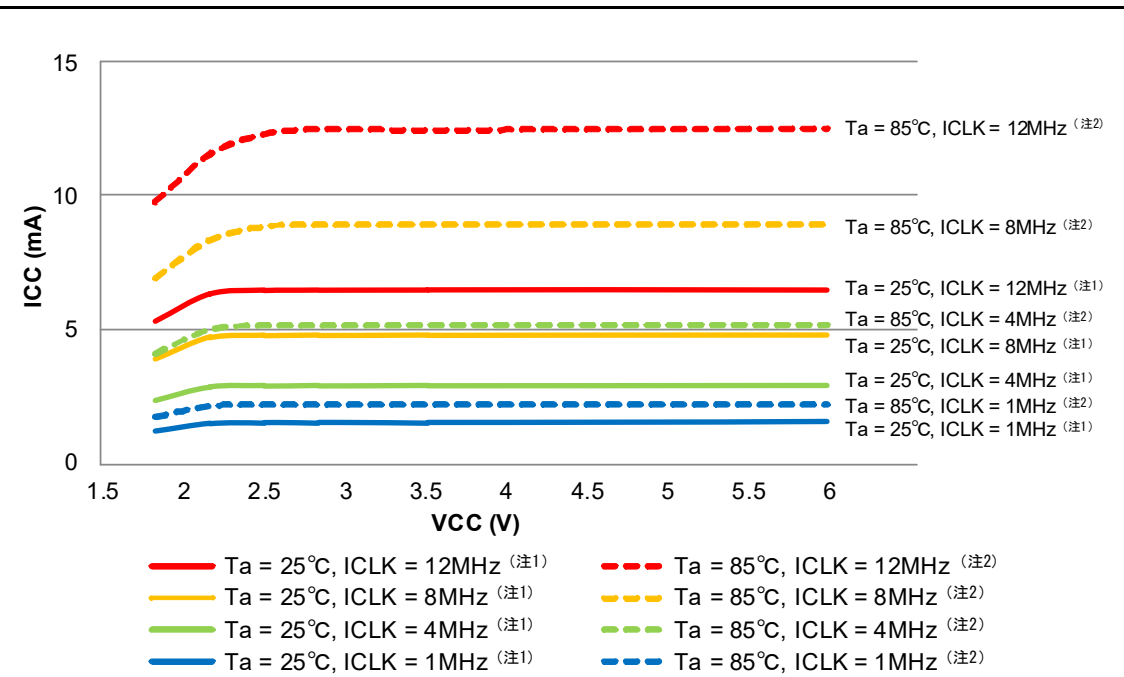
項目					シンボル	Typ（注10）	Max	単位	測定条件
消費電流（注1）	Low-speed モード（注3）	通常モード	すべての周辺クロックが無効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 1MHz	I_{CC}	0.4	—	mA	（注7）
			すべての周辺クロックが無効、CoreMarkコードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 1MHz		0.6	—		
			すべての周辺クロックが有効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 1MHz		1.1	—		（注8）
			すべての周辺クロックが有効、コードはSRAMから実行（注5）	ICLK = 1MHz		—	2.5		
		スリープモード	すべての周辺クロックが無効（注5）	ICLK = 1MHz		0.3	—		（注7）
			すべての周辺クロックが有効（注5）	ICLK = 1MHz		1.0	—		（注8）
	Low-voltage モード（注3）	通常モード	すべての周辺クロックが無効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 4MHz	I_{CC}	1.8	—	mA	（注7）
			すべての周辺クロックが無効、CoreMarkコードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 4MHz		3.0	—		
			すべての周辺クロックが有効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 4MHz		3.3	—		（注8）
			すべての周辺クロックが有効、コードはSRAMから実行（注5）	ICLK = 4MHz		—	9.0		
		スリープモード	すべての周辺クロックが無効（注5）	ICLK = 4MHz		1.4	—		（注7）
			すべての周辺クロックが有効（注5）	ICLK = 4MHz		2.9	—		（注8）
	Subosc-speed モード（注4）	通常モード	すべての周辺クロックが無効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 32.768kHz	I_{CC}	9.3	—	μA	（注8）
			すべての周辺クロックが有効、（1）コードはフラッシュから実行（注5）	ICLK = 32.768kHz		17.2	—		
			すべての周辺クロックが有効、コードはSRAMから実行（注5）	ICLK = 32.768kHz		—	106.0		
		スリープモード	すべての周辺クロックが無効（注5）	ICLK = 32.768kHz		6.0	—		
			すべての周辺クロックが有効（注5）	ICLK = 32.768kHz		14.0	—		

注 1. 消費電流値には、全端子からの出力充放電電流は含まれません。内部プルアップ MOS が OFF 状態のとき、この値が適用されます。
注 2. クロックソースは HOCO です。
注 3. クロックソースは MOCO です。
注 4. クロックソースはサブクロック発振器です。
注 5. BGO 動作は含まれません。
注 6. プログラム実行中に、データ保管のためのフラッシュメモリのプログラム／イレースを実行した場合の増加分です。
注 7. FCLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD は、64 分周に設定されています。
注 8. FCLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD は、ICLK と同じ周波数です。
注 9. FCLK、PCLKB は、2 分周に設定されています。PCLKA、PCLKC、PCLKD は、ICLK と同じ周波数です。
注 10. VCC = 3.3V



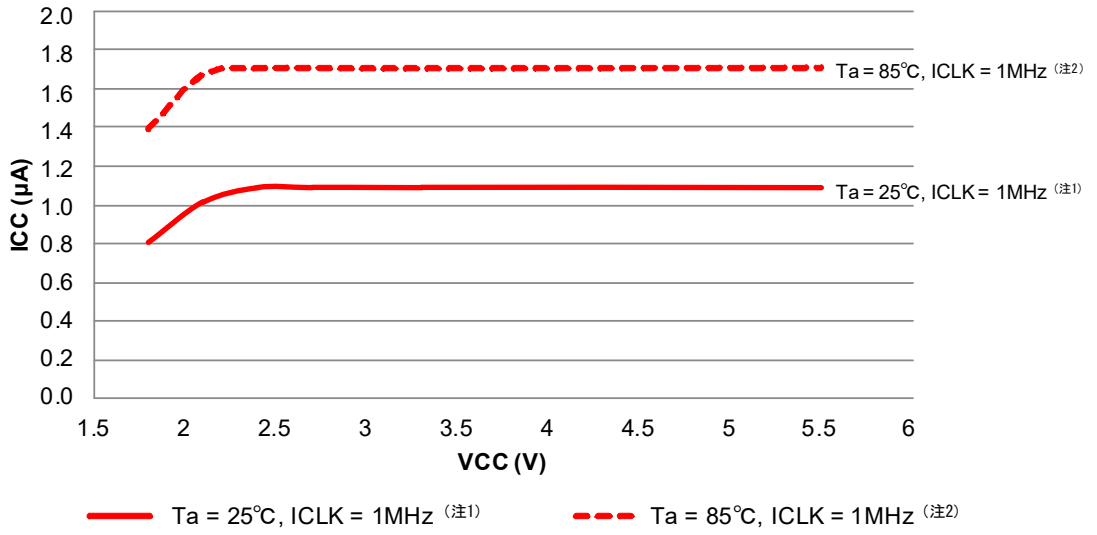
注1. BGO動作を除くすべての周辺動作が通常動作です。製品評価時における中心サンプル群での実測平均値です。
注2. BGO動作を除くすべての周辺動作が最大動作です。製品評価時における上限サンプル群での実測平均値です。

図 48.14 High-speed モードにおける電圧依存性（参考データ）



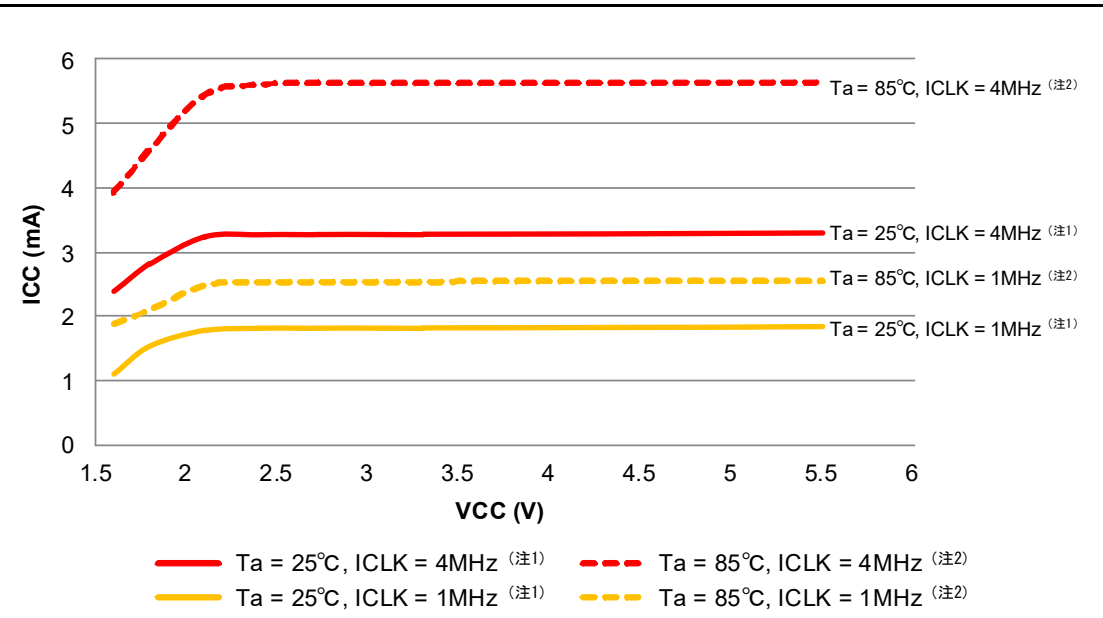
注1. BGO動作を除くすべての周辺動作が通常動作です。製品評価時における中心サンプル群での実測平均値です。
注2. BGO動作を除くすべての周辺動作が最大動作です。製品評価時における上限サンプル群での実測平均値です。

図 48.15 Middle-speed モードにおける電圧依存性（参考データ）



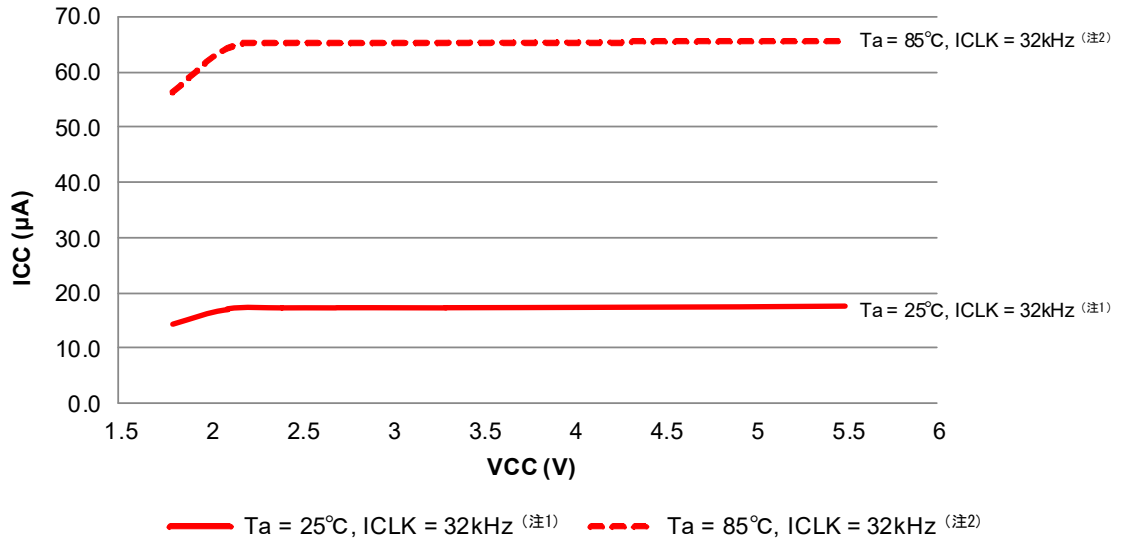
注1. BGO動作を除くすべての周辺動作が通常動作です。製品評価時における中心サンプル群での実測平均値です。
注2. BGO動作を除くすべての周辺動作が最大動作です。製品評価時における上限サンプル群での実測平均値です。

図 48.16 Low-speed モードにおける電圧依存性（参考データ）



注1. BGO動作を除くすべての周辺動作が通常動作です。製品評価時における中心サンプル群での実測平均値です。
注2. BGO動作を除くすべての周辺動作が最大動作です。製品評価時における上限サンプル群での実測平均値です。

図 48.17 Low-voltage モードにおける電圧依存性（参考データ）



注1. BGO動作を除くすべての周辺動作が通常動作です。製品評価時における中心サンプル群での実測平均値です。
注2. BGO動作を除くすべての周辺動作が最大動作です。製品評価時における上限サンプル群での実測平均値です。

図 48.18 Subosc-speed モードにおける電圧依存性（参考データ）

表 48.12 動作電流とスタンバイ電流（2）

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Typ（注4）	Max	単位	測定条件
消費電流（注1）	ソフトウェアスタンバイモード（注2）	T_a = 25℃	I_{CC}	0.9	5.0	μA	PSMCR.PSMC[1:0] = 01b（48KB SRAMをオン）
		T_a = 55℃		1.5	8.1		
		T_a = 85℃		3.6	22.1		
		T_a = 25℃		1.0	5.6		PSMCR.PSMC[1:0] = 00b（すべてのSRAMをオン）
		T_a = 55℃		1.6	8.4		
		T_a = 85℃		4.3	26.7		
	低速オンチップオシレータでのRTC動作時増加分（注3）			0.5	—		—
	サブクロック発振器でのRTC動作時増加分（注3）			0.4	—		SOMCR.SODRV[1:0] = 11b（低消費電力モード3）
				1.2	—		SOMCR.SODRV[1:0] = 00b（通常モード）

注 1. 消費電流値には、全端子からの出力充放電電流は含まれません。内部プルアップ MOS が OFF 状態のとき、この値が適用されます。
注 2. IWDT と LVD は動作していません。
注 3. サブ発振回路または低速オンチップオシレータの電流を含みます。
注 4. VCC = 3.3V

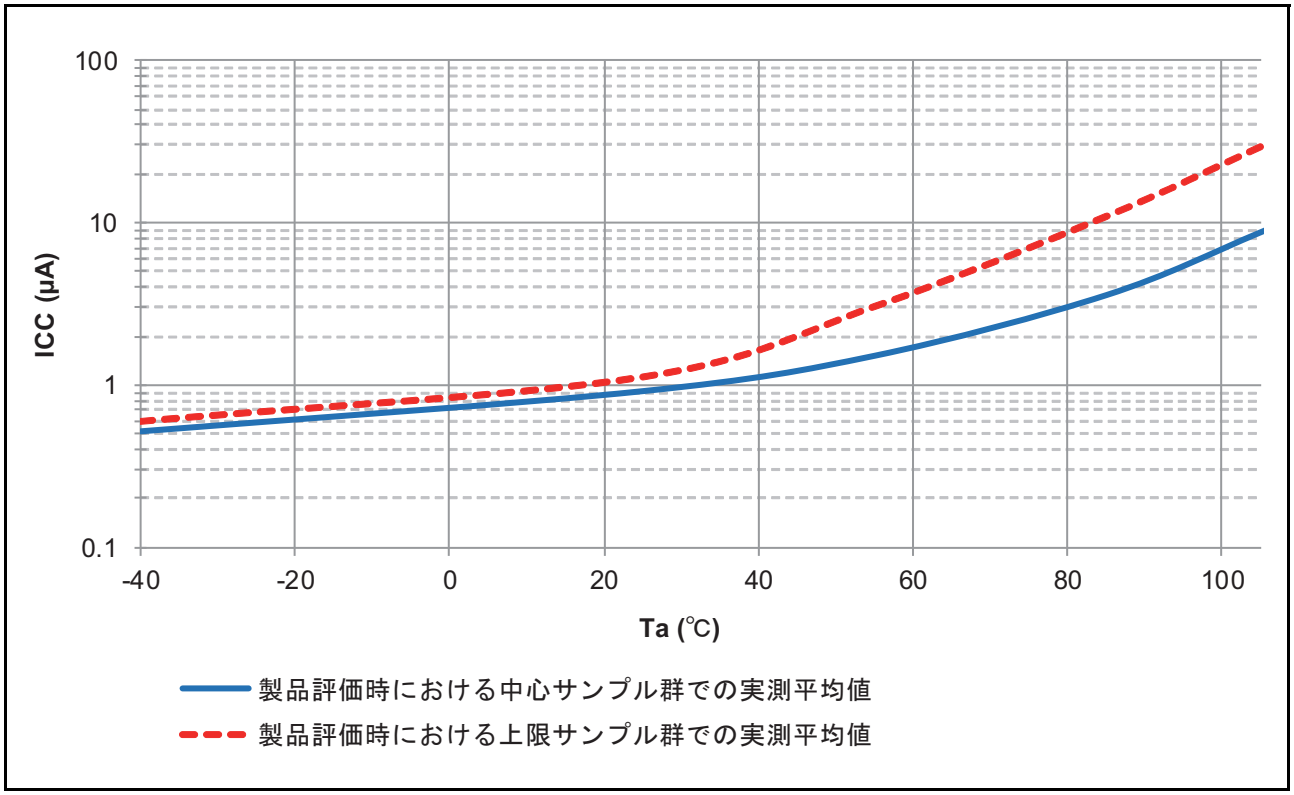


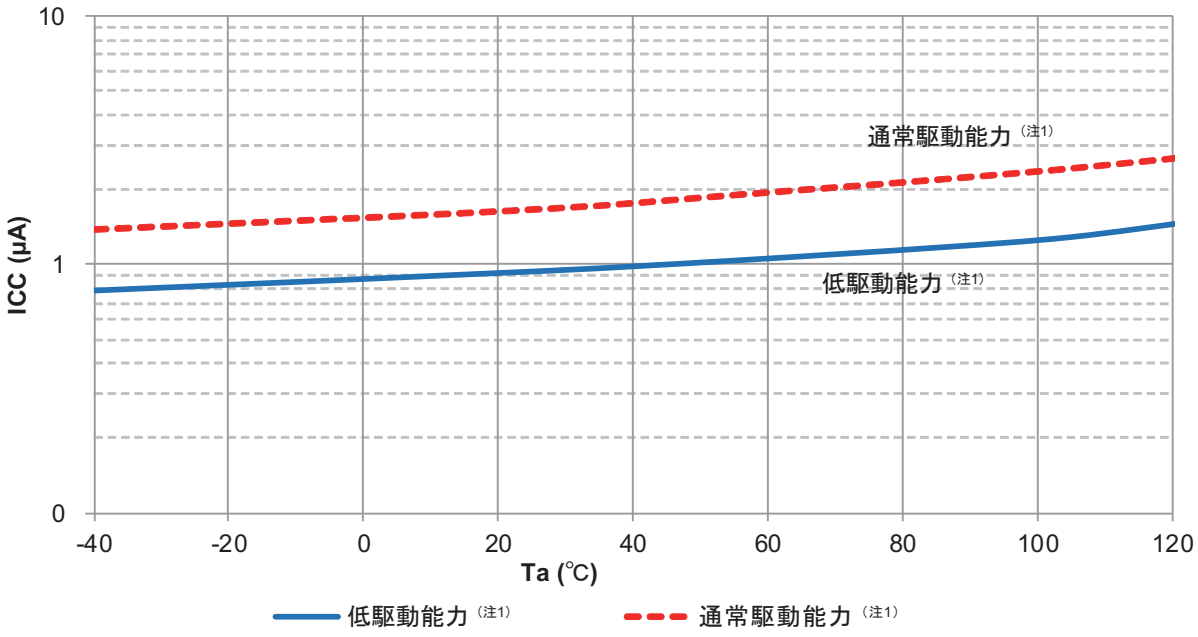
図 48.19　すべての SRAM がオンのソフトウェアスタンバイモード時の温度依存性（参考データ）

表 48.13　動作電流とスタンバイ電流（3）

条件：VCC = AVCC0 = 0V、VBATT = 1.8～3.6V、VSS = AVSS0 = 0V

項目			シンボル	Typ	Max	単位	測定条件
消費電流（注1）	VCCがオフのときのRTC動作	T_a = 25℃	I_{CC}	0.8	—	μA	VBATT = 2.0V SOMCR.SORDRV[1:0] = 11b （低消費電力モード3）
		T_a = 55℃		0.9	—		
		T_a = 85℃		1.1	—		
		T_a = 25℃		0.9	—		VBATT = 3.3V SOMCR.SORDRV[1:0] = 11b （低消費電力モード3）
		T_a = 55℃		1.0	—		
		T_a = 85℃		1.2	—		
		T_a = 25℃		1.6	—		VBATT = 2.0V SOMCR.SORDRV[1:0] = 00b （通常モード）
		T_a = 55℃		1.8	—		
		T_a = 85℃		2.1	—		
		T_a = 25℃		1.7	—		VBATT = 3.3V SOMCR.SORDRV[1:0] = 00b （通常モード）
		T_a = 55℃		1.9	—		
		T_a = 85℃		2.2	—		

注 1.　消費電流値には、全端子からの出力充放電電流は含まれません。内部プルアップ MOS が OFF 状態のとき、この値が適用されます。



注1. 製品評価時における中心サンプル群での実測平均値

図 48.20 VCC オフ時の RTC 動作の温度依存性（参考データ）

表 48.14　動作電流とスタンバイ電流（4）

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V、VREFH0 = 2.7V～AVCC0

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
アナログ電源電流	A/D変換中（高速変換時）		I_{AVCC}	—	—	3.0	mA	—
	A/D変換中（低速変換時）			—	—	1.0	mA	—
	D/A変換中（1チャネル当り）（注1）			—	0.4	0.8	mA	—
	A/D、D/A変換待機時（全ユニット）（注6）			—	—	1.0	μA	—
リファレンス電源電流	A/D変換中		I_{REFH0}	—	—	150	μA	—
	A/D変換待機時（全ユニット）			—	—	60	nA	—
	D/A変換中		I_{REFH}	—	50	100	μA	—
	D/A変換待機時（全ユニット）			—	—	100	μA	—
温度センサ			I_{TNS}	—	75	—	μA	—
低消費電力アナログコンパレータの動作電流	ウィンドウモード		I_{CMPLP}	—	15	—	μA	—
	コンパレータ高速モード			—	10	—	μA	—
	コンパレータ低速モード			—	2	—	μA	—
	DAC8を使用したコンパレータ低速モード			—	820	—	μA	—
オペアンプの動作電流	低消費電力モード	1ユニット動作時	I_{AMP}	—	2.5	4.0	μA	—
	高速モード	1ユニット動作時		—	140	220	μA	—
LCD動作電流	外部抵抗分割方式 $f_{LCD} = f_{SUB}$ = 128Hz、1/3バイアス、4時分割		I_{LCD1}（注5）	—	0.34	—	μA	—
USB動作電流	以下の設定および条件でのUSB通信動作時： • ホストコントローラ動作をフルスピードモードに設定 バルクOUT転送（64バイト）× 1 バルクIN転送（64バイト）× 1 • USBポートから1メートルのUSBケーブル経由で周辺デバイスを接続		I_{USBH}（注2）	—	4.3（VCC） 0.9（VCC_USB）（注4）	—	mA	—
	以下の設定および条件でのUSB通信動作時： • デバイスコントローラ動作をフルスピードモードに設定 バルクOUT転送（64バイト）× 1 バルクIN転送（64バイト）× 1 • USBポートから1メートルのUSBケーブル経由でホストデバイスを接続		I_{USBF}（注2）	—	3.6（VCC） 1.1（VCC_USB）（注4）	—	mA	—
	以下の設定および条件でのサスペンド状態時： • デバイスコントローラ動作をフルスピードモードに設定（USB_DP端子をプルアップ） • ソフトウェアスタンバイモード • USBポートから1メートルのUSBケーブル経由でホストデバイスを接続		I_{SUSP}（注3）	—	0.35（VCC） 170（VCC_USB）（注4）	—	μA	—

注 1.　D/A 変換の電源電流値には、リファレンス電源電流も含まれています。
注 2.　USBFS のみの消費電流です。
注 3.　強制待ち状態における本 MCU の電流消費に加え、USB_DP 端子のプルアップ抵抗からホストデバイス側のプルダウン抵抗へ供給される電流を含みます。
注 4.　VCC = VCC_USB = 3.3V のとき
注 5.　LCD コントローラのみの電流です。LCD パネルを流れる電流は含みません。
注 6.　本 MCU がソフトウェアスタンドバイモードの場合または MSTPCRD.MSTPD16（ADC140 モジュールストップビット）がモジュールストップ状態の場合

表 48.15 動作電流とスタンバイ電流 (5)

条件：VCC = VCC_RF = AVCC_RF = 3.3V, VSS = VSS_RF = 0V, Ta = +25℃

項目		シンボル	Min	Typ 送信出力電力 0dBm	Typ 送信出力電力 4dBm	Max	単位	測定条件
BLE動作電流（DC-DCコンバータ選択時）	送信モード、2Mbps	Idd_tx	—	4.5	8.7	—	mA	—
	送信モード、1Mbps		—			—	mA	—
	送信モード、500kbps		—			—	mA	—
	送信モード、125kbps		—			—	mA	—
	受信モード、2Mbps Prf = -67dBm	Idd_rx	—	3.3	3.5	—	mA	—
	受信モード、1Mbps Prf = -67dBm		—			—	mA	—
	受信モード、500kbps Prf = -72dBm		—			—	mA	—
	受信モード、125kbps Prf = -79dBm		—			—	mA	—
	アイドルモード	Idd_idle	—	0.5		—	mA	—
	ディープスリープモード	Idd_slp	—	1.5		—	µA	—
	パワーダウンモード	Idd_down	—	0.1		—	µA	—
BLE動作電流（リニアレギュレータ選択時）	送信モード、2Mbps	Idd_tx	—	10.2	18.1	—	mA	—
	送信モード、1Mbps		—			—	mA	—
	送信モード、500kbps		—			—	mA	—
	送信モード、125kbps		—			—	mA	—
	受信モード、2Mbps Prf = -67dBm	Idd_rx	—	6.9		—	mA	—
	受信モード、1Mbps Prf = -67dBm		—	6.9		—	mA	—
	受信モード、500kbps Prf = -72dBm		—	6.9		—	mA	—
	受信モード、125kbps Prf = -79dBm		—	7.1		—	mA	—
	Idd_idle	Idd_idle	—	0.7		—	mA	—
	Idd_slp	Idd_slp	—	1.5		—	µA	—
	Idd_down	Idd_down	—	0.1		—	µA	—

48.2.10 VCC 立ち上がり／立ち下がり勾配とリップル周波数

表 48.16 立ち上がり／立ち下がり勾配の特性

条件：VCC = AVCC0 = 0～3.6V

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
電源投入時のVCC立ち上がり勾配	起動時電圧モニタ0リセット無効（通常の起動）	SrVCC	0.02	—	2	ms/V	—
	起動時電圧モニタ0リセット有効（注1）		0.02	—	—		
	SCI/USBブートモード（注2）		0.02	—	2		

注 1. OFS1.LVDAS = 0 のとき

注 2. ブートモード時は、OFS1.LVDAS ビットの値にかかわらず、電圧モニタ 0 からのリセットは無効です。

表 48.17 立ち上がり／立ち下がり勾配とリップル周波数特性

条件：VCC = AVCC0 = VCC_USB = 1.8～3.6V

リップル電圧は、VCC上限（3.6V）と下限（1.8V）の範囲内で、許容リップル周波数$f_{r(VCC)}$を満たす必要があります。

VCC変動がVCC ± 10%を超える場合は、許容電圧変動立ち上がり／立ち下がり勾配dt/dVCCを満たす必要があります。

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
許容リップル周波数	$f_{r(VCC)}$	—	—	10	kHz	図 48.21 $V_{r(VCC)} \leqq VCC \times 0.2$
		—	—	1	MHz	図 48.21 $V_{r(VCC)} \leqq VCC \times 0.08$
		—	—	10	MHz	図 48.21 $V_{r(VCC)} \leqq VCC \times 0.06$
許容電圧変動立ち上がり／立ち下がり勾配	dt/dVCC	1.0	—	—	ms/V	VCC変動がVCC ± 10%を超える場合

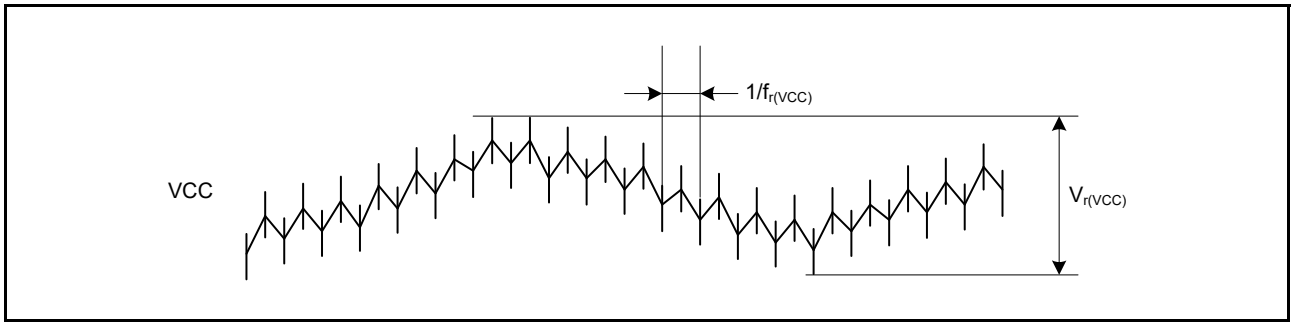


図 48.21 リップル波形

48.3 AC 特性

48.3.1 周波数

表 48.18 High-speedモードでの動作周波数

条件：VCC = AVCC0 = 2.4～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max（注5）	単位
動作周波数	システムクロック（ICLK）（注4）	2.7～3.6V	f	0.032768	—	48	MHz
		2.4～2.7V		0.032768	—	16	
	フラッシュインタフェースクロック（FCLK）（注1）（注2）（注4）	2.7～3.6V		0.032768	—	32	
		2.4～2.7V		0.032768	—	16	
	周辺モジュールクロック（PCLKA）（注4）	2.7～3.6V		—	—	48	
		2.4～2.7V		—	—	16	
	周辺モジュールクロック（PCLKB）（注4）	2.7～3.6V		—	—	32	
		2.4～2.7V		—	—	16	
	周辺モジュールクロック（PCLKC）（注3）（注4）	2.7～3.6V		—	—	64	
		2.4～2.7V		—	—	16	
	周辺モジュールクロック（PCLKD）（注4）	2.7～3.6V		—	—	64	
		2.4～2.7V		—	—	16	

注 1. フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。フラッシュメモリのプログラム／イレース時に FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。

注 2. フラッシュメモリのプログラムまたはイレース実行時の FCLK の周波数精度は ± 3.5% とします。クロックソースの周波数精度を確認してください。

注 3. 14 ビット A/D コンバータ使用時の PCLKC 下限周波数は、2.4V 以上で 4MHz、2.4V 未満で 1MHz です。

注 4. ICLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD、および FCLK 相互間の周波数関係については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

注 5. 動作周波数の最大値には内蔵オシレータの誤差は含まれていません。内蔵オシレータに誤差があっても動作保証は可能です。保証される動作範囲の詳細は、表 48.23 クロックタイミングを参照してください。

表 48.19 Middle-speedモードでの動作周波数

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max（注5）	単位
動作周波数	システムクロック（ICLK）（注4）	2.7～3.6V	f	0.032768	—	12	MHz
		2.4～2.7V		0.032768	—	12	
		1.8～2.4V		0.032768	—	8	
	フラッシュインタフェースクロック（FCLK）（注1）（注2）（注4）	2.7～3.6V		0.032768	—	12	
		2.4～2.7V		0.032768	—	12	
		1.8～2.4V		0.032768	—	8	
	周辺モジュールクロック（PCLKA）（注4）	2.7～3.6V		—	—	12	
		2.4～2.7V		—	—	12	
		1.8～2.4V		—	—	8	
	周辺モジュールクロック（PCLKB）（注4）	2.7～3.6V		—	—	12	
		2.4～2.7V		—	—	12	
		1.8～2.4V		—	—	8	
	周辺モジュールクロック（PCLKC）（注3）（注4）	2.7～3.6V		—	—	12	
		2.4～2.7V		—	—	12	
		1.8～2.4V		—	—	8	
	周辺モジュールクロック（PCLKD）（注4）	2.7～3.6V		—	—	12	
		2.4～2.7V		—	—	12	
		1.8～2.4V		—	—	8	

注 1. フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。フラッシュメモリのプログラム／イレース時に FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。

注 2. フラッシュメモリのプログラムまたはイレース実行時の FCLK の周波数精度は ± 3.5% とします。クロックソースの周波数精度を確認してください。

注 3. 14 ビット A/D コンバータ使用時の PCLKC 下限周波数は、2.4V 以上で 4MHz、2.4V 未満で 1MHz です。

注 4. ICLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD、および FCLK 相互間の周波数関係については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

注 5. 動作周波数の最大値には内蔵オシレータの誤差は含まれていません。内蔵オシレータに誤差があっても動作保証は可能です。保証される動作範囲の詳細は、表 48.23 クロックタイミングを参照してください。

表 48.20 Low-speedモードでの動作周波数

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max（注4）	単位
動作周波数	システムクロック（ICLK）（注3）	1.8～3.6V	f	0.032768	—	1	MHz
	フラッシュインタフェースクロック（FCLK）（注1）（注3）	1.8～3.6V		0.032768	—	1	
	周辺モジュールクロック（PCLKA）（注3）	1.8～3.6V		—	—	1	
	周辺モジュールクロック（PCLKB）（注3）	1.8～3.6V		—	—	1	
	周辺モジュールクロック（PCLKC）（注2）（注3）	1.8～3.6V		—	—	1	
	周辺モジュールクロック（PCLKD）（注3）	1.8～3.6V		—	—	1	

注 1. フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。

注 2. A/D コンバータ使用時における PCLKC 下限周波数は 1MHz です。

注 3. ICLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD、および FCLK 相互間の周波数関係については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

注 4. 動作周波数の最大値には内蔵オシレータの誤差は含まれていません。内蔵オシレータに誤差があっても動作保証は可能です。保証される動作範囲の詳細は、表 48.23 クロックタイミングを参照してください。

表 48.21 Low-voltageモードでの動作周波数

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max（注5）	単位
動作周波数	システムクロック（ICLK）（注4）	1.8～3.6V	f	0.032768	—	4	MHz
	フラッシュインタフェースクロック（FCLK）（注1）（注2）（注4）	1.8～3.6V		0.032768	—	4	
	周辺モジュールクロック（PCLKA）（注4）	1.8～3.6V		—	—	4	
	周辺モジュールクロック（PCLKB）（注4）	1.8～3.6V		—	—	4	
	周辺モジュールクロック（PCLKC）（注3）（注4）	1.8～3.6V		—	—	4	
	周辺モジュールクロック（PCLKD）（注4）	1.8～3.6V		—	—	4	

注 1. フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。フラッシュメモリのプログラム／イレース時に FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。

注 2. フラッシュメモリのプログラムまたはイレース実行時の FCLK の周波数精度は ± 3.5% とします。クロックソースの周波数精度を確認してください。

注 3. 14 ビット A/D コンバータ使用時の PCLKC 下限周波数は、2.4V 以上で 4MHz、2.4V 未満で 1MHz です。

注 4. ICLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD、および FCLK 相互間の周波数関係については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

注 5. 動作周波数の最大値には内蔵オシレータの誤差は含まれていません。内蔵オシレータに誤差があっても動作保証は可能です。保証される動作範囲の詳細は、表 48.23 クロックタイミングを参照してください。

表 48.22 Subosc-speedモードでの動作周波数

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位
動作周波数	システムクロック（ICLK）（注3）	1.8～3.6V	f	27.8528	32.768	37.6832	kHz
	FlashIFクロック（FCLK）（注1）（注3）	1.8～3.6V		27.8528	32.768	37.6832	
	周辺モジュールクロック（PCLKA）（注3）	1.8～3.6V		—	—	37.6832	
	周辺モジュールクロック（PCLKB）（注3）	1.8～3.6V		—	—	37.6832	
	周辺モジュールクロック（PCLKC）（注2）（注3）	1.8～3.6V		—	—	37.6832	
	周辺モジュールクロック（PCLKD）（注3）	1.8～3.6V		—	—	37.6832	

注 1. フラッシュメモリのプログラムまたはイレースはできません。

注 2. 14 ビット A/D コンバータは使用できません。

注 3. ICLK、PCLKA、PCLKB、PCLKC、PCLKD、および FCLK 相互間の周波数関係については、「9. クロック発生回路」を参照してください。

48.3.2 クロックタイミング

表 48.23 クロックタイミング

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
EXTAL外部クロック入力サイクル時間		t_{Xcyc}	50	—	—	ns	図 48.22
EXTAL外部クロック入力Highレベルパルス幅		t_{XH}	20	—	—	ns	
EXTAL外部クロック入力Lowレベルパルス幅		t_{XL}	20	—	—	ns	
EXTAL外部クロック立ち上がり時間		t_{Xr}	—	—	5	ns	
EXTAL外部クロック立ち下がり時間		t_{Xf}	—	—	5	ns	
EXTAL外部クロック入力待機時間（注1）		t_{EXWT}	0.3	—	—	μs	—
EXTAL外部クロック入力周波数		f_{EXTAL}	—	—	20	MHz	2.4≦VCC≦3.6
			—	—	8		1.8≦VCC＜2.4
メインクロック発振器発振周波数		f_{MAIN}	1	—	20	MHz	2.4≦VCC≦3.6
			1	—	8		1.8≦VCC＜2.4
メインクロック発振安定待機時間（水晶）（注9）		$t_{MAINOSCWT}$	—	—	—（注9）	ms	
LOCOクロック発振周波数		f_{LOCO}	27.8528	32.768	37.6832	kHz	—
LOCOクロック発振安定時間		t_{LOCO}	—	—	100	μs	図 48.23
IWDT専用クロック発振周波数		f_{ILOCO}	12.75	15	17.25	kHz	—
Bluetooth専用クロック発振周波数		f_{BLECK}	—	32	—	MHz	
Bluetooth専用低速オンチップ発振器発振周波数		$f_{BLELOCO}$	—	32.768	—	kHz	
MOCOクロック発振周波数		f_{MOCO}	6.8	8	9.2	MHz	—
MOCOクロック発振安定時間		t_{MOCO}	—	—	1	μs	—
HOCOクロック発振周波数		f_{HOCO24}	23.64	24	24.36	MHz	Ta = -40～-20℃ 1.8≦VCC≦3.6
			23.76	24	24.24		Ta = -20～85℃ 1.8≦VCC≦3.6
		f_{HOCO32}	31.52	32	32.48		Ta = -40～-20℃ 1.8≦VCC≦3.6
			31.68	32	32.32		Ta = -20～85℃ 1.8≦VCC≦3.6
		f_{HOCO48}（注4）	47.28	48	48.72		Ta = -40～-20℃ 1.8≦VCC≦3.6
			47.52	48	48.48		Ta = -20～85℃ 1.8≦VCC≦3.6
		f_{HOCO64}（注5）	63.04	64	64.96		Ta = -40～-20℃ 2.4≦VCC≦3.6
			63.36	64	64.64		Ta = -20～85℃ 2.4≦VCC≦3.6
HOCOクロック発振安定時間（注6）（注7）	Low-voltageモード以外	t_{HOCO24} t_{HOCO32}	—	—	37.1	μs	図 48.24
		t_{HOCO48}	—	—	43.3		
		t_{HOCO64}	—	—	80.6		
	Low-voltageモード	t_{HOCO24} t_{HOCO32} t_{HOCO48} t_{HOCO64}	—	—	100.9		
PLL入力周波数（注2）		f_{PLLIN}	4	—	12.5	MHz	—
PLL回路発振周波数（注2）		f_{PLL}	24	—	64	MHz	—
PLLクロック発振安定時間（注8）		t_{PLL}	—	—	55.5	μs	図 48.26
PLLフリーラン発振周波数		f_{PLLFR}	—	8	—	MHz	—
サブクロック発振器発振周波数		f_{SUB}	—	32.768	—	kHz	—
サブクロック発振安定時間（注3）		t_{SUBOSC}	—	—	—（注3）	s	図 48.27

注 1. 外部クロックが安定しているとき、メインクロック発振器停止ビット（MOSCCR.MOSTP）を 0（動作中）にしてからクロックが使用できるようになるまでの時間

注 2. PLL を使用できる VCC 範囲は 2.4 ～ 3.6V です。
注 3. SOSCCR.SOSTP ビットを変更してサブクロック発振器の動作が開始したら、発振器製造者の推奨値以上に設定したサブクロック発振安定待機時間を経過してからサブクロック発振器の使用を開始してください。
注 4. 48MHz HOCO は、VCC = 1.8 ～ 3.6V の範囲内で使用できます。
注 5. 64MHz HOCO は、VCC = 2.4 ～ 3.6V の範囲内で使用できます。
注 6. MOCO 停止状態で HOCOCR.HCSTP ビットを 0（動作）にした場合の特性です。
MOCO 発振中に HOCOCR.HCSTP ビットを 0（動作）にすると、この仕様は 1μs 短くなります。
注 7. 安定時間が経過したかどうかは OSCSF.HOCOSF ビットで確認できます。
注 8. MOCO 停止状態で PLLCR.PLLSTP ビットを 0（動作）にした場合の特性です。
MOCO 発振中に PLLCR.PLLSTP ビットを 0（動作）にすると、この仕様は 1μs 短くなります。
注 9. メインクロックを設定する場合、発振器メーカに発振評価を確認し、その結果を推奨発振安定時間として使用してください。MOSCWTCR レジスタを、推奨安定時間以上に設定してください。メインクロック発振器が動作するように MOSCCR.MOSTP ビットの設定を変更した後、OSCSF.MOSCSF フラグが 1 であることを確認してからメインクロックの使用を開始してください。

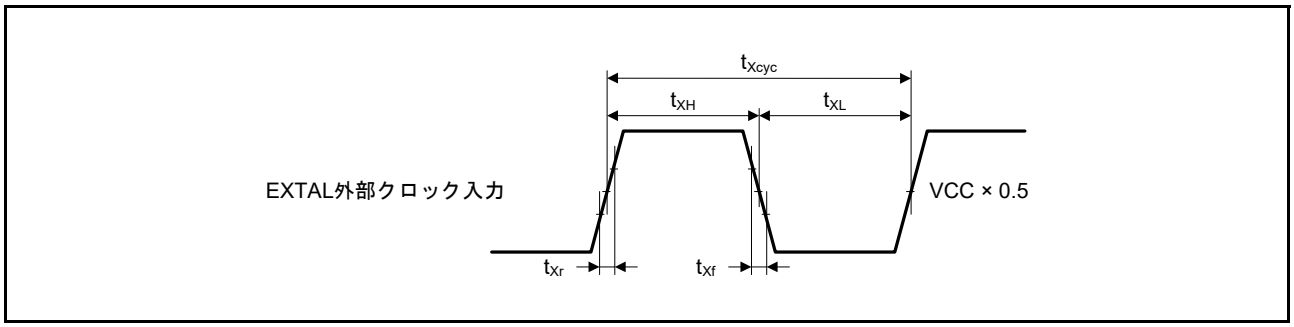


図 48.22 EXTAL 外部クロック入力タイミング

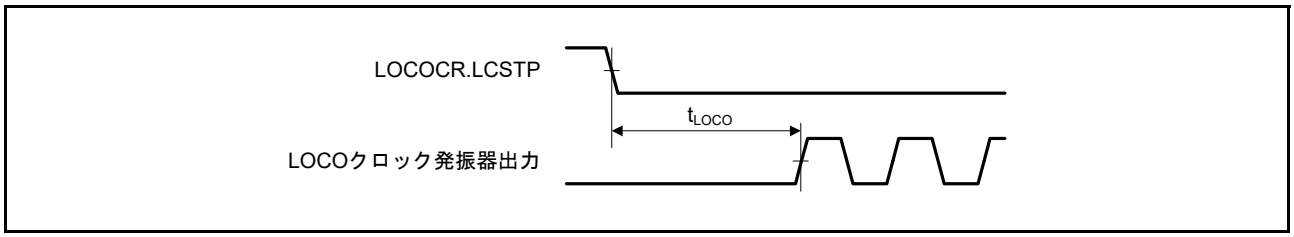
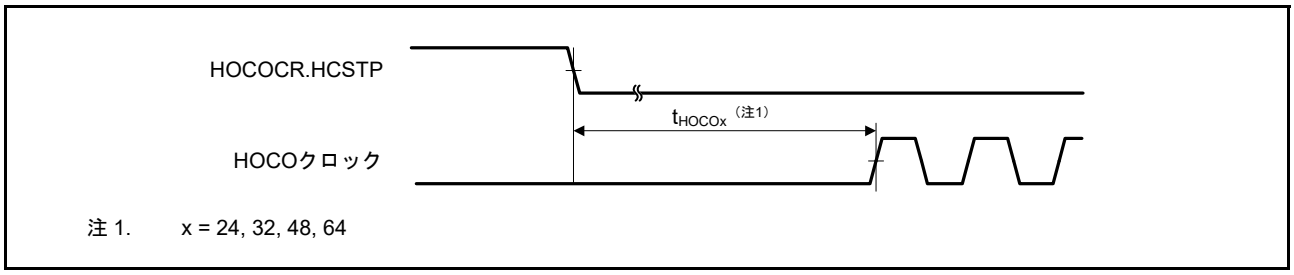


図 48.23 LOCO クロック発振開始タイミング



注 1. x = 24, 32, 48, 64

図 48.24 HOCO クロック発振開始タイミング（HOCOCR.HCSTP ビット設定による開始）

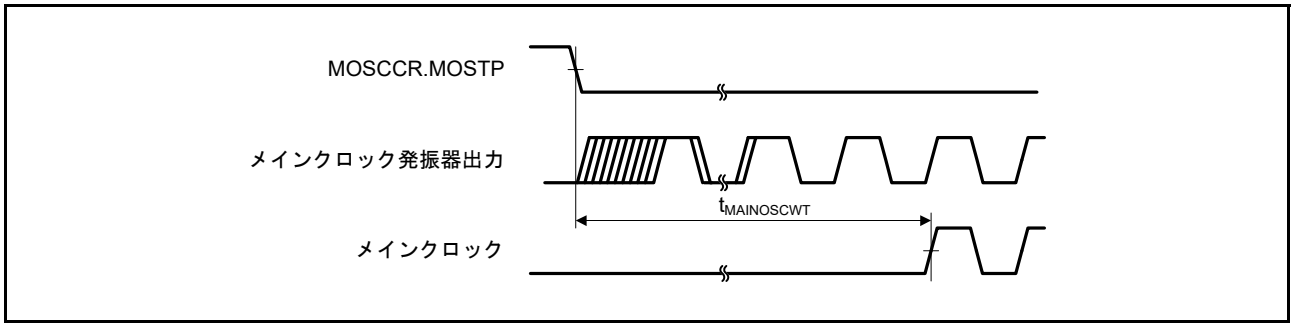


図 48.25 メインクロック発振開始タイミング

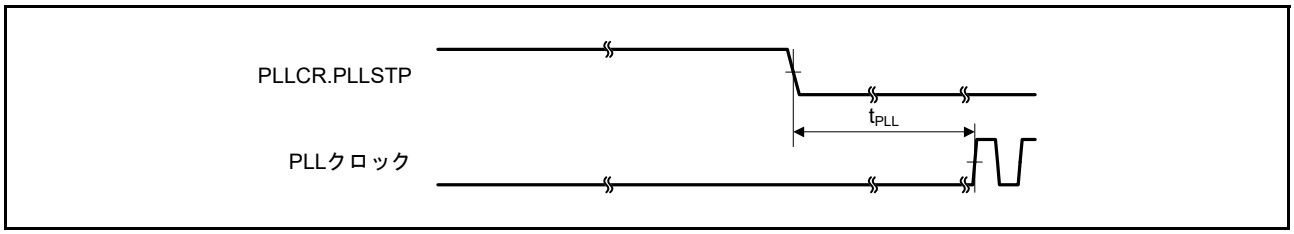


図 48.26 PLL クロック発振開始タイミング（メインクロックの発振安定後に PLL を動作させたとき）

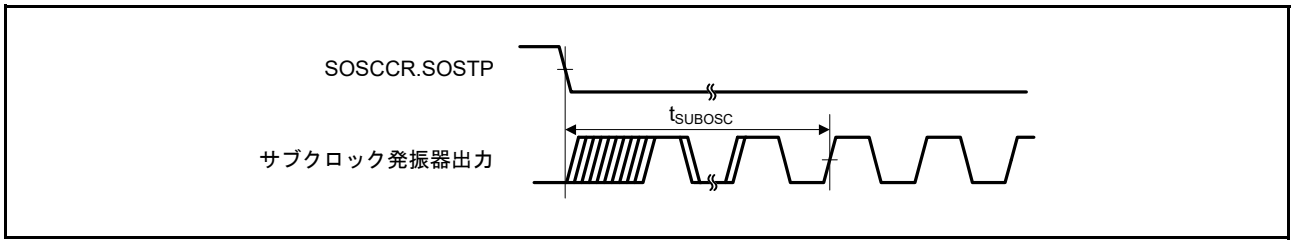


図 48.27 サブクロック発振開始タイミング

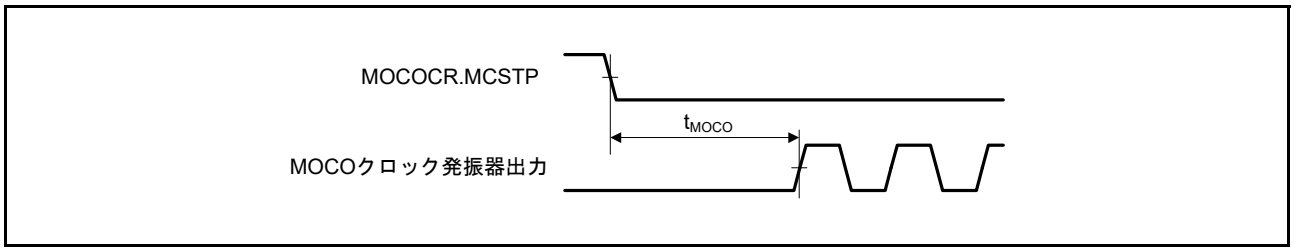


図 48.28 MOCO クロック発振開始タイミング

48.3.3 リセットタイミング

表 48.24 リセットタイミング

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
RESパルス幅	電源投入時	t_{RESWP}	3	—	—	ms	図 48.29
	上記以外	t_{RESW}	30	—	—	μs	図 48.30
RES解除後の待機時間（電源投入時）	LVD0：有効（注1）	t_{RESWT}	—	0.7	—	ms	図 48.29
	LVD0：無効（注2）		—	0.3	—		
RES解除後の待機時間（電源投入中）	LVD0：有効（注1）	t_{RESWT2}	—	0.5	—	ms	図 48.30
	LVD0：無効（注2）		—	0.05	—		
内部リセット解除時間（ウォッチドッグタイマリセット、SRAMパリティエラーリセット、SRAM ECCエラーリセット、バスマスタMPUエラーリセット、バススレーブMPUエラーリセット、スタックポインタエラーリセット、ソフトウェアリセット）	LVD0：有効（注1）	t_{RESWT3}	—	0.6	—	ms	
	LVD0：無効（注2）		—	0.15	—		

注 1. OFS1.LVDAS = 0 のとき
注 2. OFS1.LVDAS = 1 のとき

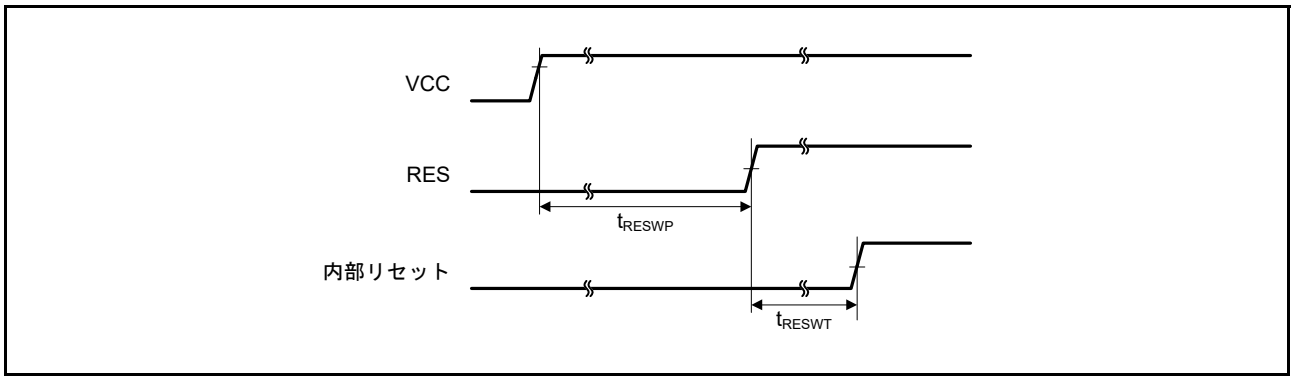


図 48.29 電源投入時リセット入力タイミング

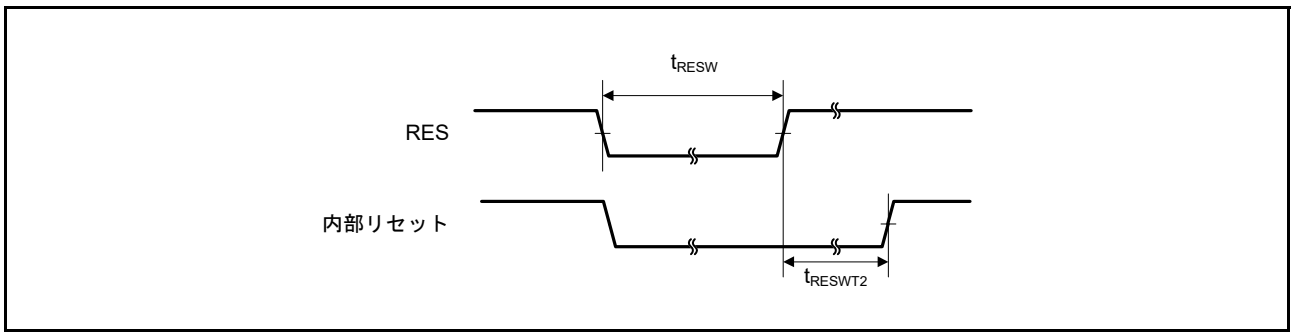


図 48.30 リセット入力タイミング（1）

48.3.4 ウェイクアップ時間

表 48.25 低消費電力モードからの復帰タイミング（1）

項目				シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
ソフトウェアスタンバイモードからの復帰時間（注1）	High-speed モード	メインクロック発振器に水晶振動子を接続	システムクロックソースはメインクロック発振器（20MHz）（注2）	t_{SBYMC}	—	2	3	ms	図 48.31
			システムクロックソースはメインクロック発振器を使用したPLL（48MHz）（注2）	t_{SBYPC}	—	2	3	ms	
		メインクロック発振器に外部クロックを入力	システムクロックソースはメインクロック発振器（20MHz）（注3）	t_{SBYEX}	—	14	25	μs	
			システムクロックソースはメインクロック発振器を使用したPLL（48MHz）（注3）	t_{SBYPE}	—	53	76	μs	
		システムクロックソースはHOCO（注4）（HOCOクロックは32MHz）		t_{SBYHO}	—	43	52	μs	
		システムクロックソースはHOCO（注4）（HOCOクロックは48MHz）		t_{SBYHO}	—	44	52	μs	
		システムクロックソースはHOCO（注5）（HOCOクロックは64MHz）		t_{SBYHO}	—	82	110	μs	
		システムクロックソースはMOCO		t_{SBYMO}	—	16	25	μs	

注 1. ICK、BCK、FCK、PCKx の分周比は許容周波数範囲の最小分周比です。復帰時間は、システムクロックソースにより決定されます。
注 2. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 05h です。
注 3. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 00h です。
注 4. HOCO クロックウェイトコントロールレジスタ（HOCOWTCR）の設定値は 05h です。
注 5. HOCO クロックウェイトコントロールレジスタ（HOCOWTCR）の設定値は 06h です。

表 48.26 低消費電力モードからの復帰タイミング（2）

項目				シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
ソフトウェアスタンバイモードからの復帰時間（注1）	Middle-speed モード	メインクロック発振器に水晶振動子を接続	システムクロックソースはメインクロック発振器（12MHz）（注2）	t_{SBYMC}	—	2	3	ms	図 48.31
			システムクロックソースはメインクロック発振器を使用したPLL（24MHz）（注2）	t_{SBYPC}	—	2	3	ms	
		メインクロック発振器に外部クロックを入力	システムクロックソースはメインクロック発振器（12MHz）（注3）	t_{SBYEX}	—	2.9	10	μs	
			システムクロックソースはメインクロック発振器を使用したPLL（24MHz）（注3）	t_{SBYPE}	—	49	76	μs	
		システムクロックソースはHOCO（24MHz）		t_{SBYHO}	—	38	50	μs	
		システムクロックソースはMOCO		t_{SBYMO}	—	3.5	5.5	μs	

注 1. ICK、BCK、FCK、PCKx の分周比は許容周波数範囲の最小分周比です。復帰時間は、システムクロックソースにより決定されます。
注 2. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 05h です。
注 3. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 00h です。

表 48.27 低消費電力モードからの復帰タイミング（3）

項目				シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
ソフトウェアスタンバイモードからの復帰時間（注1）	Low-speedモード	メインクロック発振器に水晶振動子を接続	システムクロックソースはメインクロック発振器（1MHz）（注2）	t_{SBYMC}	—	2	3	ms	図 48.31
		メインクロック発振器に外部クロックを入力	システムクロックソースはメインクロック発振器（1MHz）（注3）	t_{SBYEX}	—	28	50	µs	
		システムクロックソースはMOCO		t_{SBYMO}	—	25	35	µs	

注 1. ICK、BCK、FCK、PCKx の分周比は許容周波数範囲の最小分周比です。復帰時間は、システムクロックソースにより決定されます。
注 2. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 05h です。
注 3. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 00h です。

表 48.28 低消費電力モードからの復帰タイミング（4）

項目				シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
ソフトウェアスタンバイモードからの復帰時間（注1）	Low-voltageモード	メインクロック発振器に水晶振動子を接続	システムクロックソースはメインクロック発振器（4MHz）（注2）	t_{SBYMC}	—	2	3	ms	図 48.31
		メインクロック発振器に外部クロックを入力	システムクロックソースはメインクロック発振器（4MHz）（注3）	t_{SBYEX}	—	108	130	µs	
		システムクロックソースはHOCO		t_{SBYHO}	—	108	130	µs	

注 1. ICK、BCK、FCK、PCKx の分周比は許容周波数範囲の最小分周比です。復帰時間は、システムクロックソースにより決定されます。複数の発振器が起動している場合、復帰時間は以下の式で決定できます。
注 2. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 05h です。
注 3. メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ（MOSCWTCR）の設定値は 00h です。

表 48.29 低消費電力モードからの復帰タイミング（5）

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
ソフトウェアスタンバイモードからの復帰時間（注1）	Subosc-speedモード	システムクロックソースはサブクロック発振器（32.768kHz）	t_{SBYSC}	—	0.85	1	ms	図 48.31
		システムクロックソースはLOCO（32.768kHz）	t_{SBYLO}	—	0.85	1.2	ms	

注 1. Subosc-speed モード時のソフトウェアスタンバイモードでは、サブクロック発振器または LOCO 自体は発振を継続します。

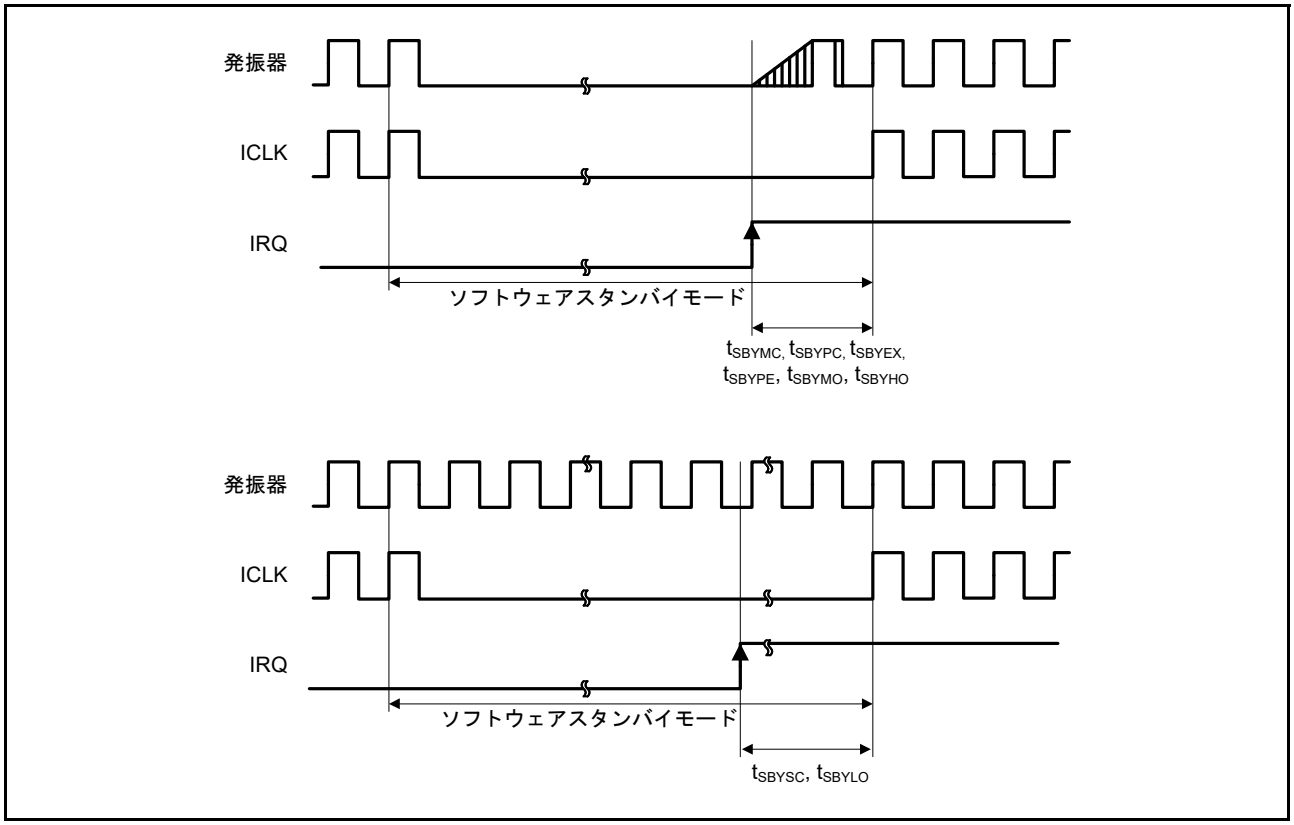
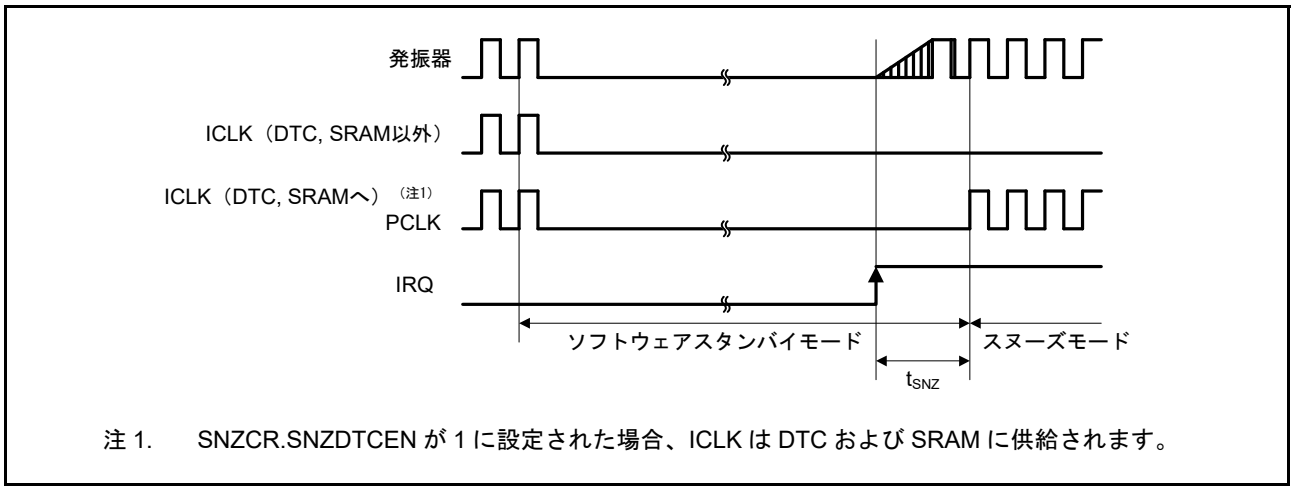


図 48.31　ソフトウェアスタンバイモード解除タイミング

表 48.30　低消費電力モードからの復帰タイミング（6）

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへの復帰時間	High-speedモード システムクロックソースはHOCO	t_{SNZ}	—	36	45	μs	図 48.32
	Middle-speedモード システムクロックソースはMOCO	t_{SNZ}	—	1.3	3.6	μs	
	Low-speedモード システムクロックソースはMOCO	t_{SNZ}	—	10	13	μs	
	Low-voltageモード システムクロックソースはHOCO	t_{SNZ}	—	87	110	μs	



注 1.　SNZCR.SNZDTCEN が 1 に設定された場合、ICLK は DTC および SRAM に供給されます。

図 48.32　ソフトウェアスタンバイモードからスヌーズモードへの復帰タイミング

48.3.5 NMI/IRQ ノイズフィルタ

表 48.31 NMI/IRGノイズフィルタ

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件	
NMIパルス幅	t_{NMIW}	200	—	—	ns	NMIデジタルフィルタ無効	$t_{Pcyc} \times 2 \leqq 200ns$
		$t_{Pcyc} \times 2$（注1）	—	—			$t_{Pcyc} \times 2 > 200ns$
		200	—	—		NMIデジタルフィルタ有効	$t_{NMICK} \times 3 \leqq 200ns$
		$t_{NMICK} \times 3.5$（注2）	—	—			$t_{NMICK} \times 3 > 200ns$
IRQパルス幅	t_{IRQW}	200	—	—	ns	IRQデジタルフィルタ無効	$t_{Pcyc} \times 2 \leqq 200ns$
		$t_{Pcyc} \times 2$（注1）	—	—			$t_{Pcyc} \times 2 > 200ns$
		200	—	—		IRQデジタルフィルタ有効	$t_{IRQCK} \times 3 \leqq 200ns$
		$t_{IRQCK} \times 3.5$（注3）	—	—			$t_{IRQCK} \times 3 > 200ns$

注 . ソフトウェアスタンバイモード時は最小 200ns です。
注 . クロックソース切り替え時、切り替えられたソースの 4 クロックサイクルを追加します。
注 1. t_{Pcyc} は PCLKB の周期を意味します。
注 2. t_{NMICK} は、NMI デジタルフィルタサンプリングクロックの周期を意味します。
注 3. t_{IRQCK} は、IRQi デジタルフィルタサンプリングクロックの周期を意味します（i = 0 ～ 15）。

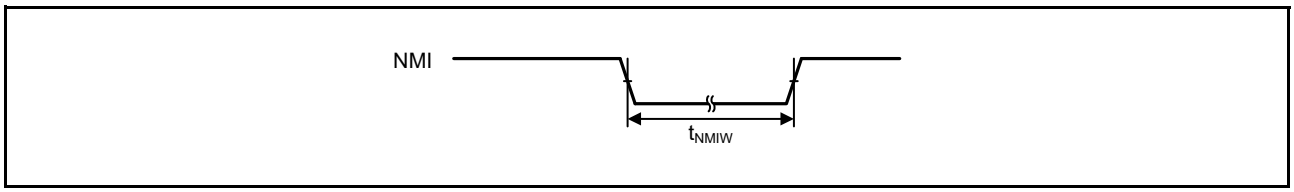


図 48.33 NMI 割り込み入力タイミング

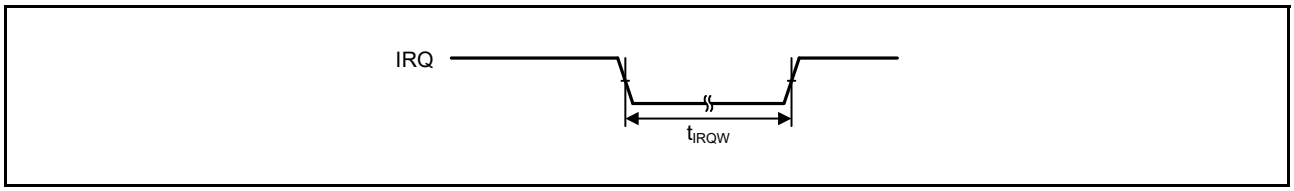


図 48.34 IRQ 割り込み入力タイミング

48.3.6 I/O ポート、POEG、GPT、AGT、KINT、ADC14 のトリガタイミング

表 48.32 I/Oポート、POEG、GPT、AGT、KINT、ADC14のトリガタイミング

項目			シンボル	Min	Max	単位	測定条件
I/Oポート	入力データパルス幅		t_{PRW}	1.5	—	t_{Pcyc}	図 48.35
	入出力データサイクル（P004）		t_{POcyc}	10	—	μs	
POEG	POEG入力トリガパルス幅		t_{POEW}	3	—	t_{Pcyc}	図 48.36
GPT	インプットキャプチャパルス幅	単エッジ	t_{GTICW}	1.5	—	t_{PDcyc}	図 48.37
		両エッジ		2.5	—		
AGT	AGTIO、AGTEE入力サイクル	2.7V≦VCC≦3.6V	t_{ACYC}（注1）	250	—	ns	図 48.38
		2.4V≦VCC＜2.7V		500	—	ns	
		1.8V≦VCC＜2.4V		1000	—	ns	
	AGTIO、AGTEE入力High レベル幅、Low レベル幅	2.7V≦VCC≦3.6V	t_{ACKWH}, t_{ACKWL}	100	—	ns	
		2.4V≦VCC＜2.7V		200	—	ns	
		1.8V≦VCC＜2.4V		400	—	ns	
	AGTIO、AGTO、AGTOB出力周期	2.7V≦VCC≦3.6V	t_{ACYC2}	62.5	—	ns	図 48.38
		2.4V≦VCC＜2.7V		125	—	ns	
		1.8V≦VCC＜2.4V		250	—	ns	
ADC14	14ビットA/Dコンバータトリガ入力パルス幅		t_{TRGW}	1.5	—	t_{Pcyc}	図 48.39
KINT	KRn（n = 00～07）パルス幅		t_{KR}	250	—	ns	図 48.40

注 . t_{Pcyc}：PCLKB サイクル、t_{PDcyc}：PCLKD サイクル

注 1. 入力サイクルの制約事項：
ソースクロック切り替えない場合は、$t_{Pcyc} \times 2 < t_{ACYC}$ としてください。
ソースクロック切り替える場合は、$t_{Pcyc} \times 6 < t_{ACYC}$ としてください。

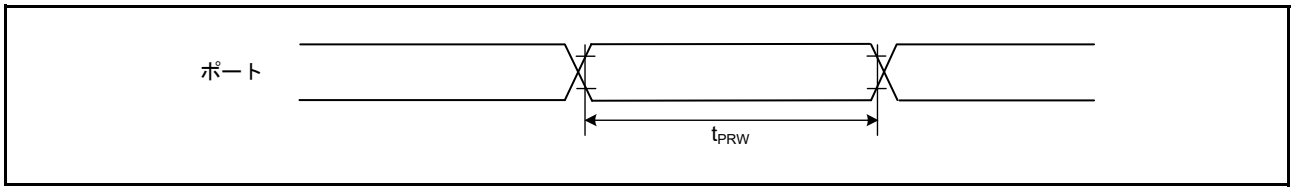


図 48.35 I/O ポート入力タイミング

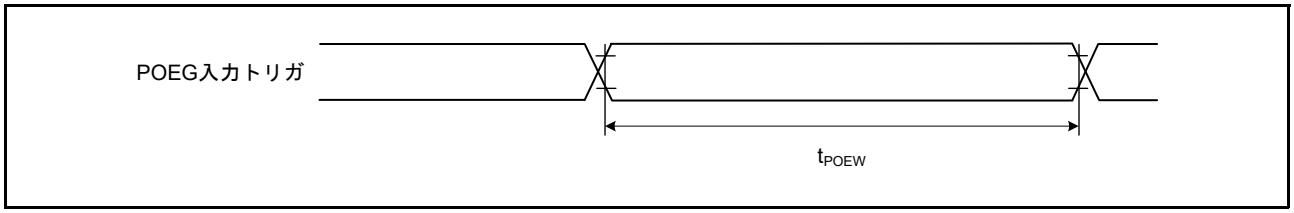


図 48.36 POEG 入力トリガタイミング

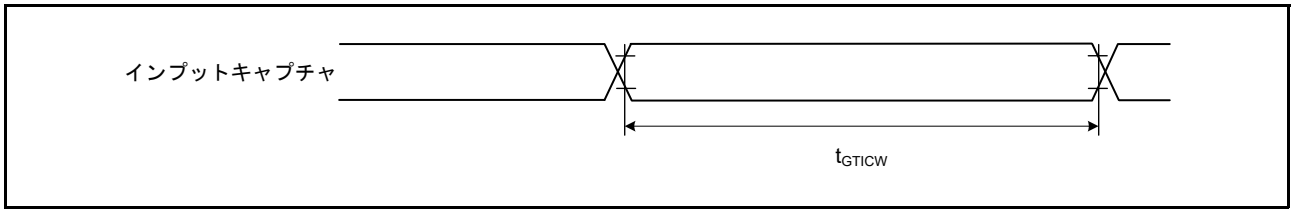


図 48.37 GPT インプットキャプチャタイミング

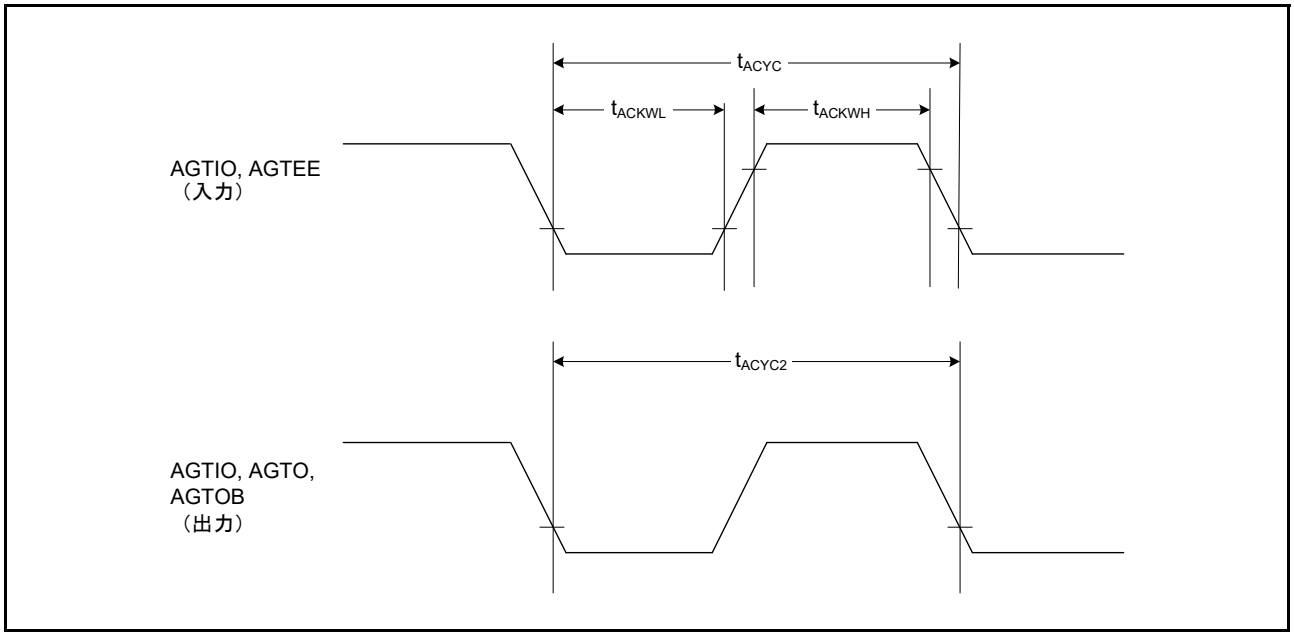


図 48.38　AGT 入出力タイミング

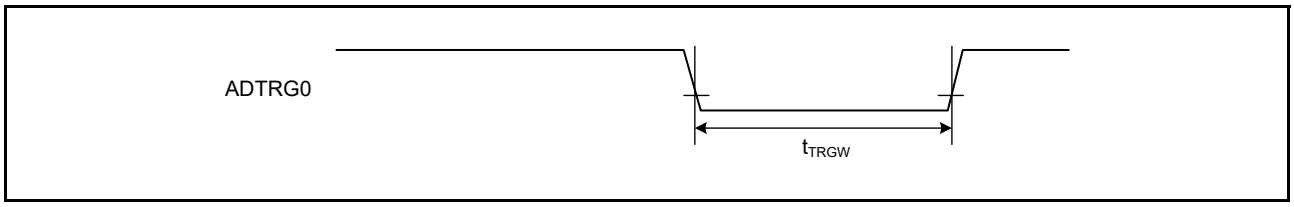


図 48.39　ADC14 トリガ入力タイミング

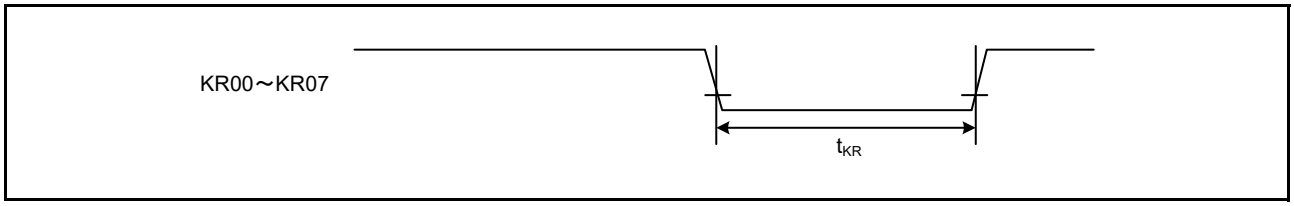


図 48.40　キー割り込み入力タイミング

48.3.7　CAC タイミング

表 48.33　CAC タイミング

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
CAC	CACREF 入力パルス幅	t_{PBcyc}（注1）≦t_{cac}（注2）	t_{CACREF}	4.5 × t_{cac} + 3 × t_{PBcyc}（注1）	—	—	ns	—
		t_{PBcyc}（注1）＞t_{cac}（注2）		5 × t_{cac} + 6.5 × t_{PBcyc}（注1）	—	—	ns	

注 1.　t_{PBcyc}：PCLKB の周期
注 2.　t_{cac}：CAC カウントクロックソースの周期

48.3.8 SCI タイミング

表 48.34 SCIタイミング（1）

項目				シンボル	Min	Max	単位（注1）	測定条件
SCI	入力クロックサイクル	調歩同期式		t_{Scyc}	4	—	t_{Pcyc}	図 48.41
		クロック同期式			6	—		
	入力クロックパルス幅			t_{SCKW}	0.4	0.6	t_{Scyc}	
	入力クロック立ち上がり時間			t_{SCKr}	—	20	ns	
	入力クロック立ち下がり時間			t_{SCKf}	—	20	ns	
	出力クロックサイクル	調歩同期式		t_{Scyc}	6	—	t_{Pcyc}	
		クロック同期式			4	—		
	出力クロックパルス幅			t_{SCKW}	0.4	0.6	t_{Scyc}	
	出力クロック立ち上がり時間		1.8V以上	t_{SCKr}	—	20	ns	
	出力クロック立ち下がり時間		1.8V以上	t_{SCKf}	—	20	ns	
	送信データ遅延時間（マスタ）	クロック同期式	1.8V以上	t_{TXD}	—	40	ns	図 48.42
	送信データ遅延時間（スレーブ）	クロック同期式	2.7V以上		—	55	ns	
			2.4V以上		—	60		
			1.8V以上		—	100		
	受信データセットアップ時間（マスタ）	クロック同期式	2.7V以上	t_{RXS}	45	—	ns	
			2.4V以上		55	—		
			1.8V以上		90	—		
	受信データセットアップ時間（スレーブ）	クロック同期式	2.7V以上		40	—	ns	
			1.8V以上		45	—		
	受信データホールド時間（マスタ）	クロック同期式		t_{RXH}	5	—	ns	
	受信データホールド時間（スレーブ）	クロック同期式		t_{RXH}	40	—	ns	

注 1. t_{Pcyc}：PCLKA の周期

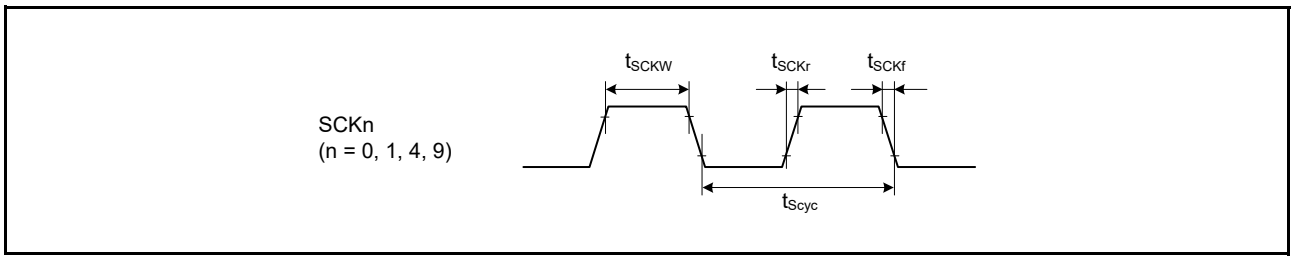


図 48.41 SCK クロック入力タイミング

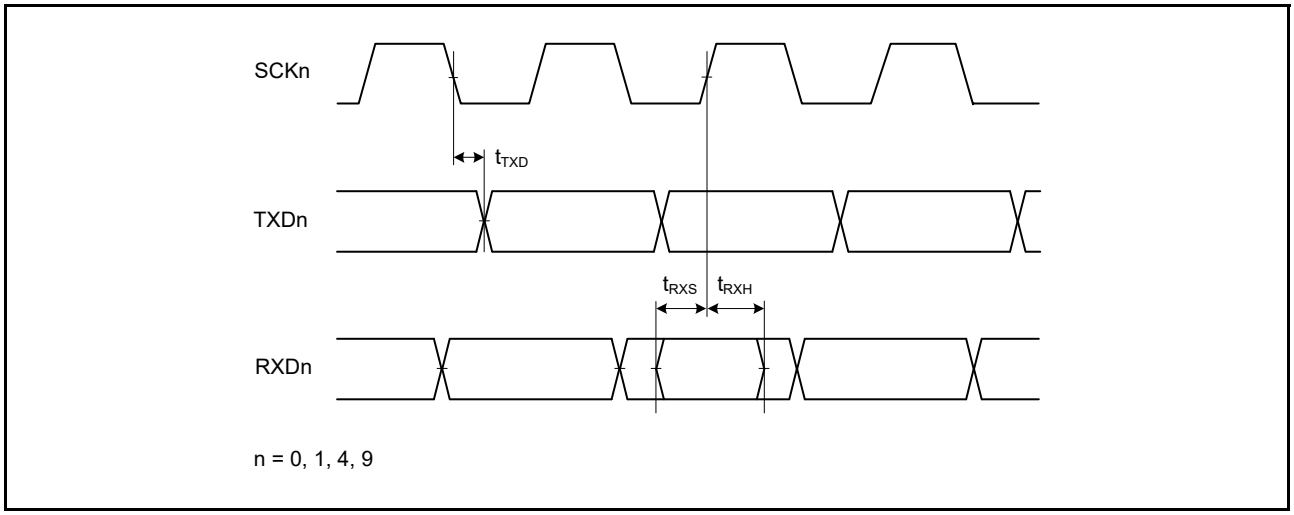


図 48.42　クロック同期式モードにおける SCI 入出力タイミング

表 48.35　SCIタイミング（2）

項目			シンボル	Min	Max	単位	測定条件
簡易SPI	SCKクロックサイクル出力（マスタ）		t_{SPcyc}	4	65,536	t_{Pcyc}	図 48.43
	SCKクロックサイクル入力（スレーブ）			6	65,536		
	SCKクロックHighレベルパルス幅		t_{SPCKWH}	0.4	0.6	t_{SPcyc}	
	SCKクロックLowレベルパルス幅		t_{SPCKWL}	0.4	0.6	t_{SPcyc}	
	SCKクロック立ち上がり／立ち下がり時間	1.8V以上	t_{SPCKr}, t_{SPCKf}	—	20	ns	
	データ入力セットアップ時間	マスタ 2.7V以上	t_{SU}	45	—	ns	図 48.44～図 48.47
		マスタ 2.4V以上		55	—		
		マスタ 1.8V以上		80	—		
		スレーブ 2.7V以上		40	—		
		スレーブ 1.8V以上		45	—		
	データ入力ホールド時間	マスタ	t_H	33.3	—	ns	
		スレーブ		40	—		
	SS入力セットアップ時間		t_{LEAD}	1	—	t_{SPcyc}	
	SS入力ホールド時間		t_{LAG}	1	—	t_{SPcyc}	
	データ出力遅延時間	マスタ 1.8V以上	t_{OD}	—	40	ns	
		スレーブ 2.4V以上		—	65		
		スレーブ 1.8V以上		—	100		
	データ出力ホールド時間	マスタ 2.7V以上	t_{OH}	-10	—	ns	
		マスタ 2.4V以上		-20	—		
		マスタ 1.8V以上		-30	—		
		スレーブ		-10	—		
	データ立ち上がり／立ち下がり時間	マスタ 1.8V以上	t_{Dr}, t_{Df}	—	20	ns	
		スレーブ 1.8V以上		—	20		
	スレーブアクセス時間		t_{SA}	—	10(PCLKA＞32MHz), 6(PCLKA≦32MHz)	t_{Pcyc}	図 48.46および図 48.47
	スレーブ出力開放時間		t_{REL}	—	10(PCLKA＞32MHz), 6(PCLKA≦32MHz)	t_{Pcyc}	

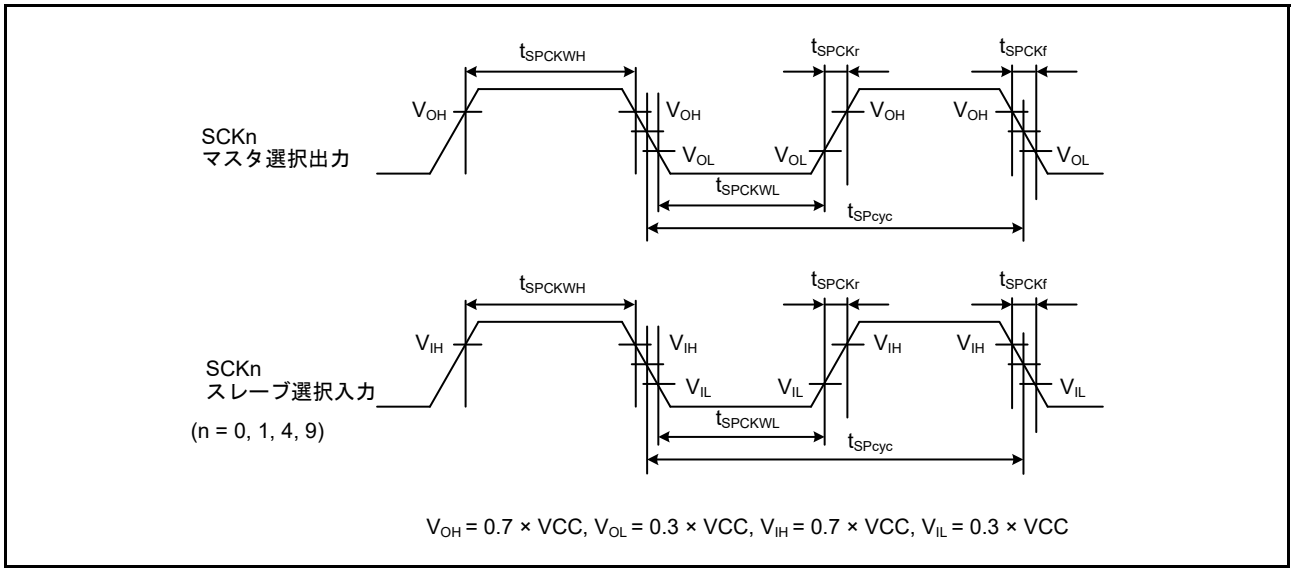


図 48.43　SCI 簡易 SPI モードクロックタイミング

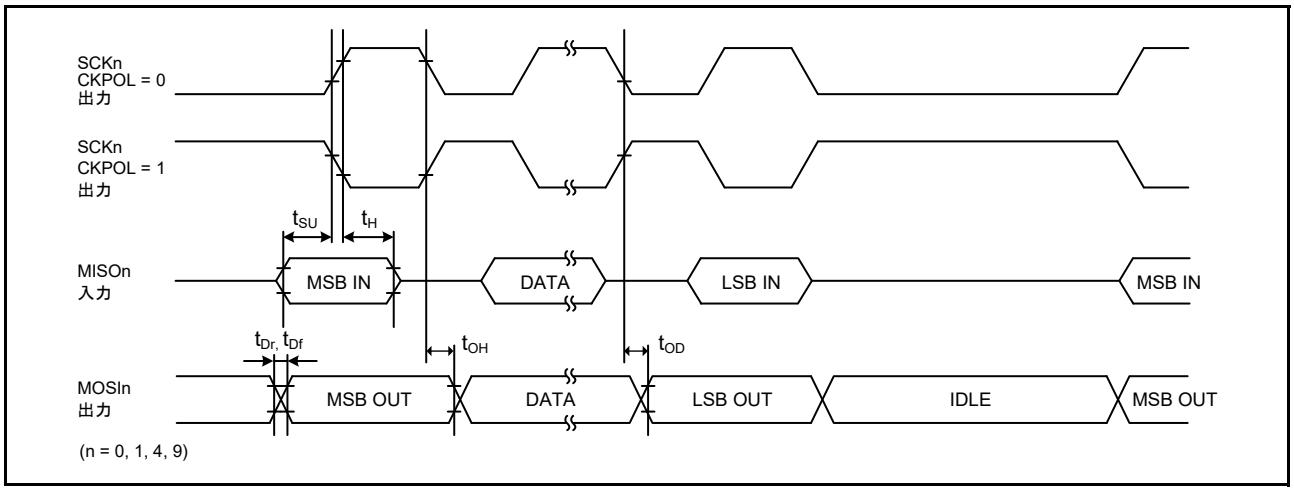


図 48.44　SCI 簡易 SPI モードタイミング（マスタ、CKPH = 1）

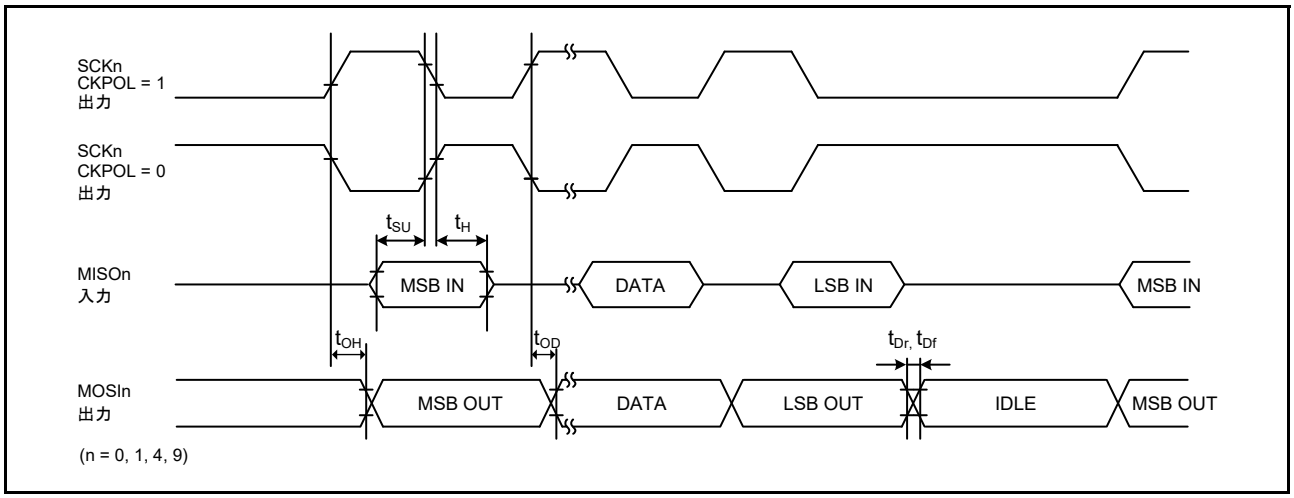


図 48.45　SCI 簡易 SPI モードタイミング（マスタ、CKPH = 0）

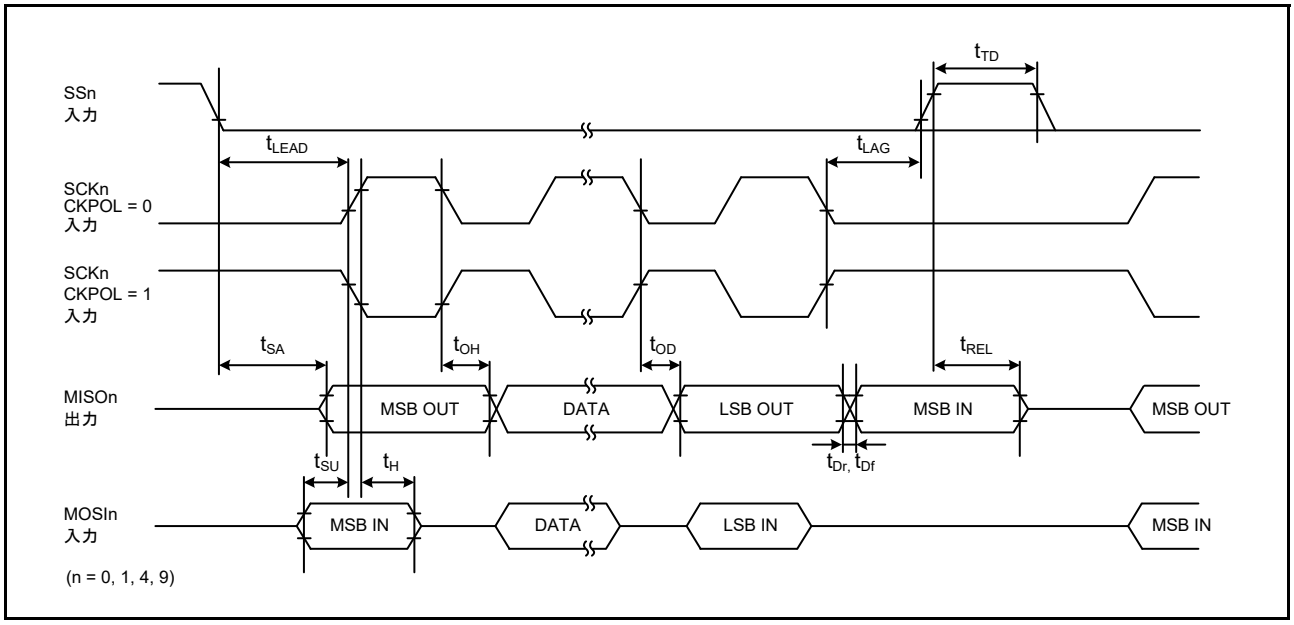


図 48.46　SCI 簡易 SPI モードタイミング（スレーブ、CKPH = 1）

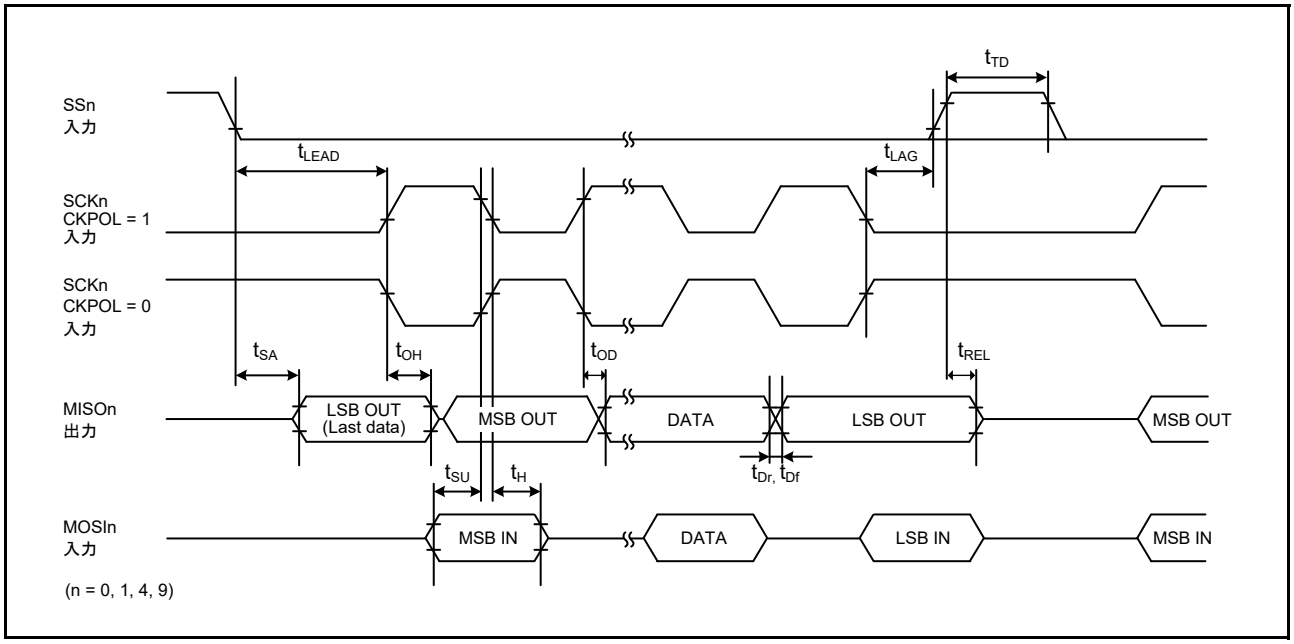


図 48.47　SCI 簡易 SPI モードタイミング（スレーブ、CKPH = 0）

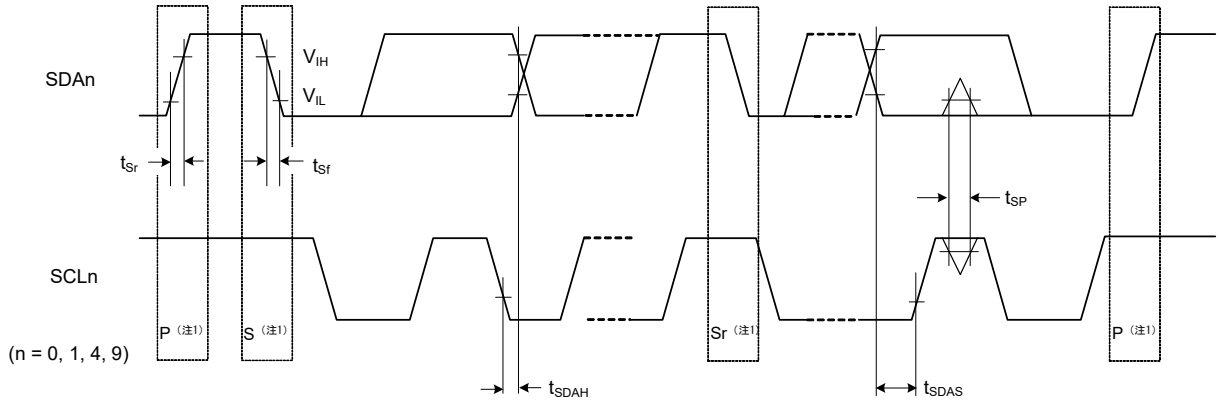
表 48.36　SCIタイミング（3）

条件：VCC = 2.7～3.6V

項目		シンボル	Min	Max	単位	測定条件
簡易IIC（標準モード）	SDA入力立ち上がり時間	t_{Sr}	—	1000	ns	図 48.48
	SDA入力立ち下がり時間	t_{Sf}	—	300	ns	
	SDA入力スパイクパルス除去時間	t_{SP}	0	4 × t_{IICcyc}（注1）	ns	
	データ入力セットアップ時間	t_{SDAS}	250	—	ns	
	データ入力ホールド時間	t_{SDAH}	0	—	ns	
	SCL、SDAの負荷容量	C_b（注2）	—	400	pF	
簡易IIC（ファストモード）	SDA入力立ち上がり時間	t_{Sr}	—	300	ns	図 48.48 全ポート、中駆動のPmnPFS.DSCRを使用してください。
	SDA入力立ち下がり時間	t_{Sf}	—	300	ns	
	SDA入力スパイクパルス除去時間	t_{SP}	0	4 × t_{IICcyc}（注1）	ns	
	データ入力セットアップ時間	t_{SDAS}	100	—	ns	
	データ入力ホールド時間	t_{SDAH}	0	—	ns	
	SCL、SDAの負荷容量	C_b（注2）	—	400	pF	

注 1.　t_{IICcyc}：SMR.CKS[1:0] ビットによって選択されたクロックの周期

注 2.　Cb はバスラインの容量総計を意味します。



測定条件：
V_{IH} = VCC × 0.7, V_{IL} = VCC × 0.3
V_{OL} = 0.6V, I_{OL} = 6mA

注 1.　S, P, Sr は以下の条件を示します。
S：開始条件
P：停止条件
Sr：再開条件

図 48.48　SCI 簡易 IIC モードタイミング

48.3.9 SPI タイミング

表 48.37 SPIタイミング (1/2)

条件：PmnPFS レジスタのポート駆動能力ビットで中駆動出力が選択されています。

項目				シンボル	Min	Max	単位（注1）	測定条件
SPI	RSPCKクロックサイクル	マスタ		t_{SPcyc}	2（注4）	4096	t_{Pcyc}	図 48.49
		スレーブ			6	4096		
	RSPCKクロック High レベルパルス幅	マスタ		t_{SPCKWH}	(t_{SPcyc} - t_{SPCKr} - t_{SPCKf}) / 2 - 3	—	ns	
		スレーブ			3 × t_{Pcyc}	—		
	RSPCKクロック Low レベルパルス幅	マスタ		t_{SPCKWL}	(t_{SPcyc} - t_{SPCKr} - t_{SPCKf}) / 2 - 3	—	ns	
		スレーブ			3 × t_{Pcyc}	—		
	RSPCKクロック立ち上がり／立ち下がり時間	出力	2.7V以上	t_{SPCKr}, t_{SPCKf}	—	10	ns	
			2.4V以上		—	15		
			1.8V以上		—	20		
		入力			—	1	μs	
	データ入力セットアップ時間	マスタ		t_{SU}	10	—	ns	図 48.50～図 48.55
		スレーブ	2.4V以上		10	—		
			1.8V以上		15	—		
	データ入力ホールド時間	マスタ（RSPCKはPCLKA/2）		t_{HF}	0	—	ns	
		マスタ（RSPCKは上記以外）		t_{H}	t_{Pcyc}	—		
		スレーブ		t_{H}	20	—		
	SSLセットアップ時間	マスタ	1.8V以上	t_{LEAD}	-30 + N × t_{Spcyc}（注2）	—	ns	
		スレーブ			6 × t_{Pcyc}	—		
	SSLホールド時間	マスタ		t_{LAG}	-30 + N × t_{Spcyc}（注3）	—		
		スレーブ			6 × t_{Pcyc}	—		
	データ出力遅延時間	マスタ	2.7V以上	t_{OD}	—	14	ns	図 48.50～図 48.55
			2.4V以上		—	20		
			1.8V以上		—	25		
		スレーブ	2.7V以上		—	50		
			2.4V以上		—	60		
			1.8V以上		—	85		
	データ出力ホールド時間	マスタ		t_{OH}	0	—	ns	
		スレーブ			0	—		
	連続転送遅延時間	マスタ		t_{TD}	t_{SPcyc} + 2 × t_{Pcyc}	8 × t_{SPcyc} + 2 × t_{Pcyc}	ns	
		スレーブ			6 × t_{Pcyc}	-		
	MOSI、MISO立ち上がり／立ち下がり時間	出力	2.7V以上	t_{Dr}, t_{Df}	—	10	ns	
			2.4V以上		—	15		
			1.8V以上		—	20		
		入力			—	1	μs	
	SSL立ち上がり／立ち下がり時間	出力	2.7V以上	t_{SSLr}, t_{SSLf}	—	10	ns	
			2.4V以上		—	15		
			1.8V以上		—	20		
		入力			—	1	μs	

表 48.37　SPI タイミング (2/2)

条件：PmnPFS レジスタのポート駆動能力ビットで中駆動出力が選択されています。

項目			シンボル	Min	Max	単位 (注1)	測定条件
SPI	スレーブアクセス時間	2.4V 以上	t_{SA}	—	$2 \times t_{Pcyc} + 100$	ns	図 48.54 および 図 48.55
		1.8V 以上		—	$2 \times t_{Pcyc} + 140$		
	スレーブ出力開放時間	2.4V 以上	t_{REL}	—	$2 \times t_{Pcyc} + 100$	ns	
		1.8V 以上		—	$2 \times t_{Pcyc} + 140$		

注 1.　t_{Pcyc}：PCLKA の周期

注 2.　N は SPCKD レジスタにより、1 ～ 8 の整数に設定されます。

注 3.　N は SSLND レジスタにより、1 ～ 8 の整数に設定されます。

注 4.　RSPCK の上限は 16MHz です。

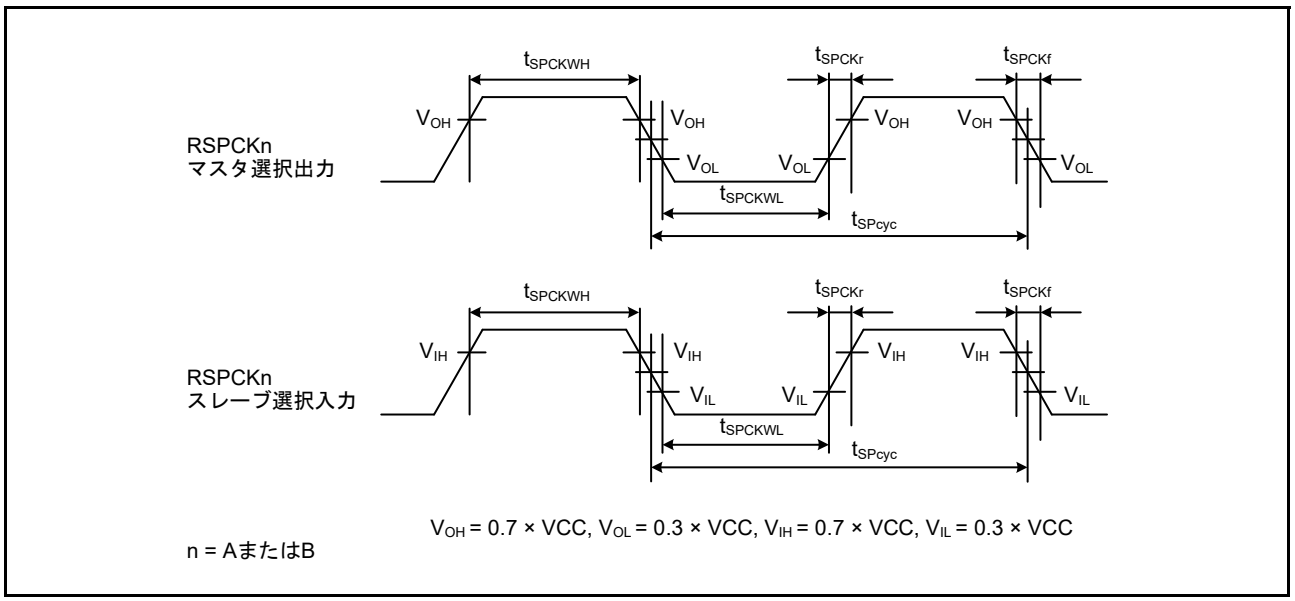


図 48.49　SPI クロックタイミング

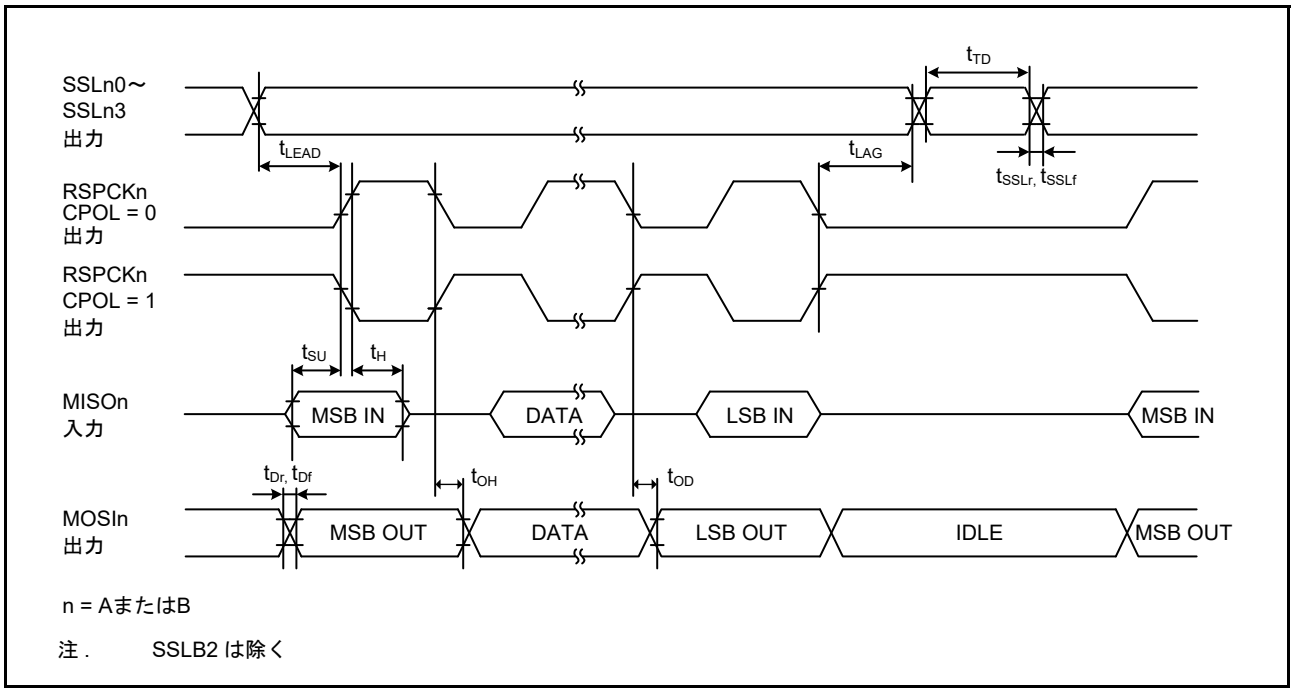


図 48.50　SPI タイミング（マスタ、CPHA = 0）（ビットレート：PCLKA を 2 分周以外に設定）

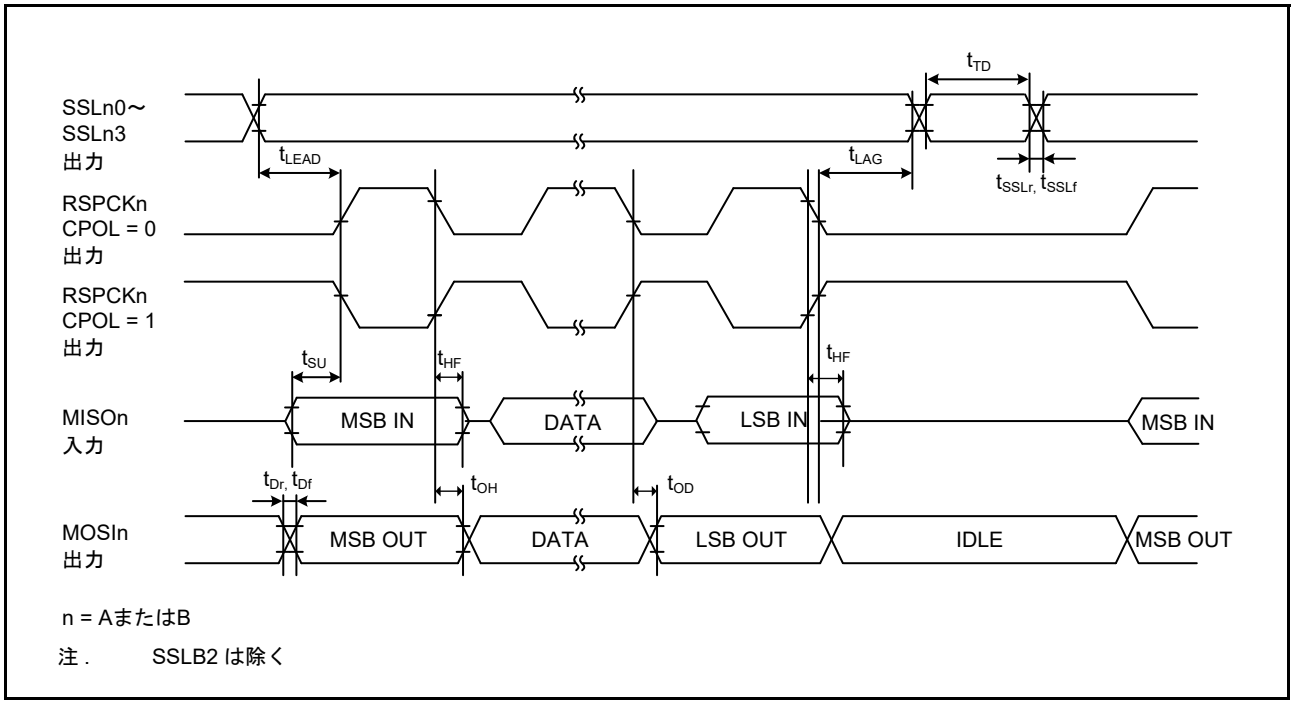


図 48.51 SPI タイミング（マスタ、CPHA = 0）（ビットレート：PCLKA を 2 分周に設定）

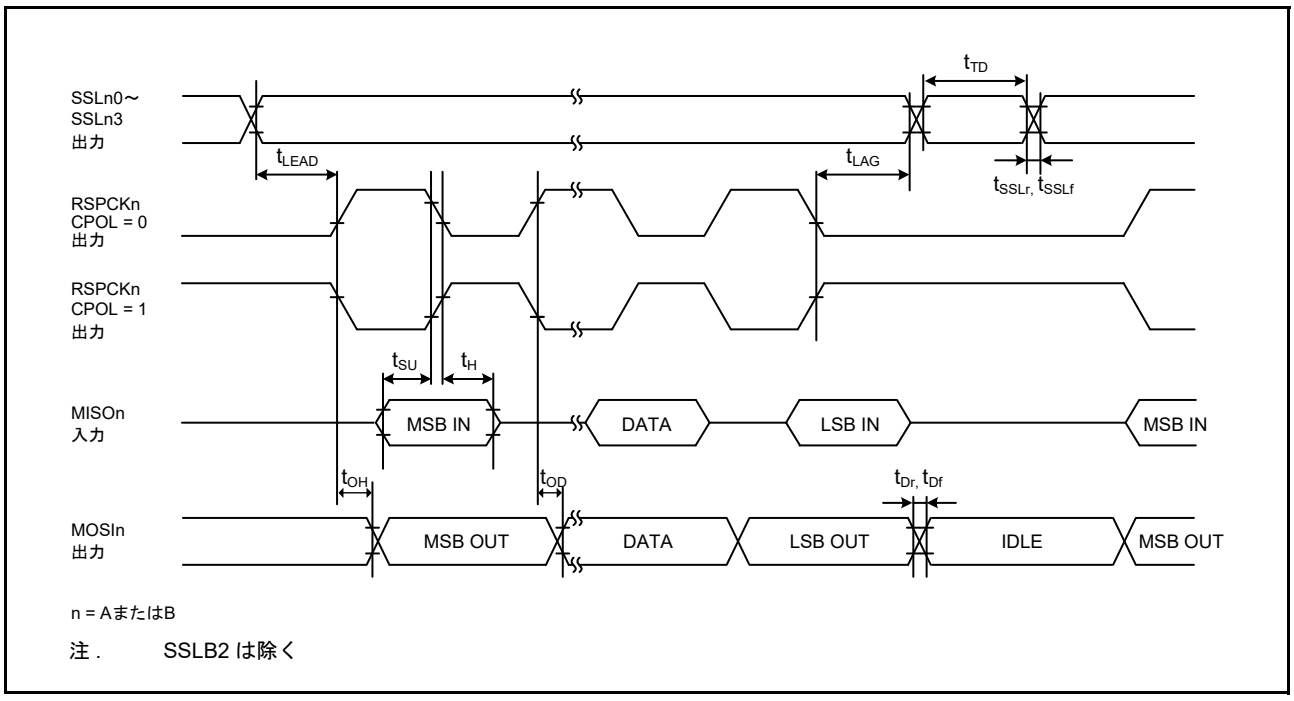


図 48.52 SPI タイミング（マスタ、CPHA = 1）（ビットレート：PCLKA を 2 分周以外に設定）

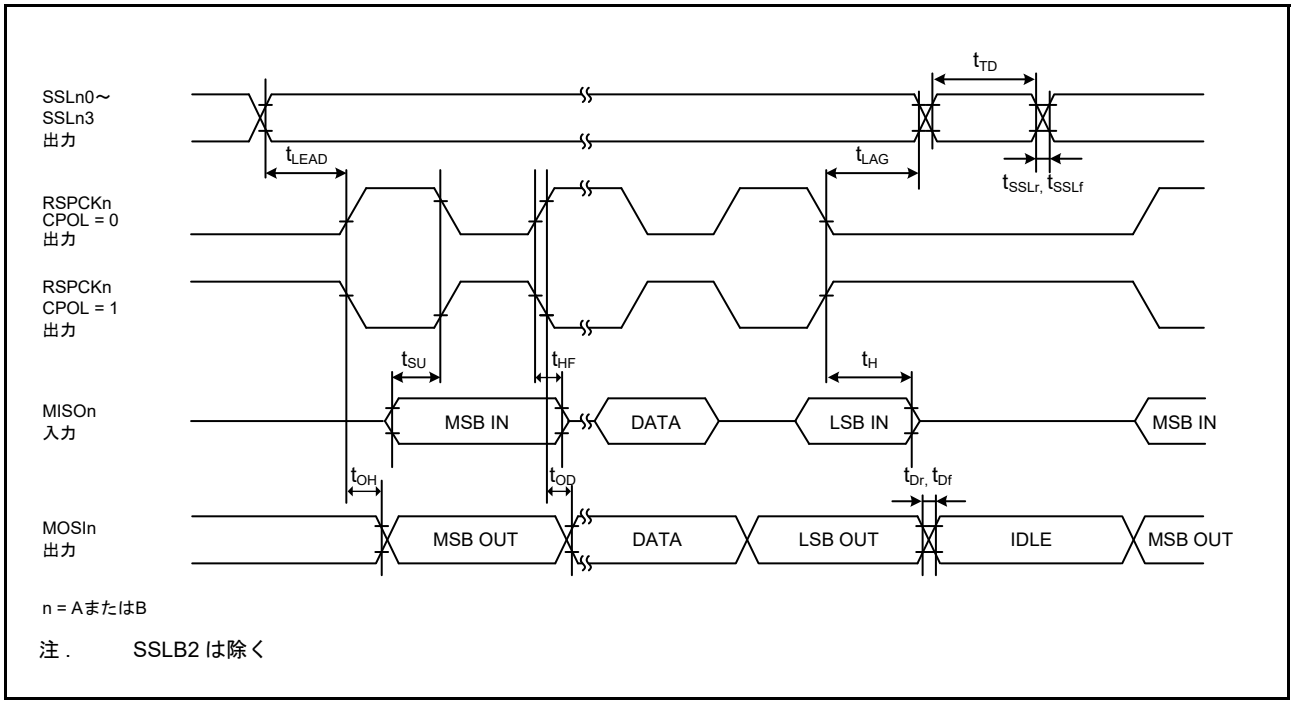


図 48.53 SPI タイミング（マスタ、CPHA = 1）（ビットレート：PCLKA を 2 分周に設定）

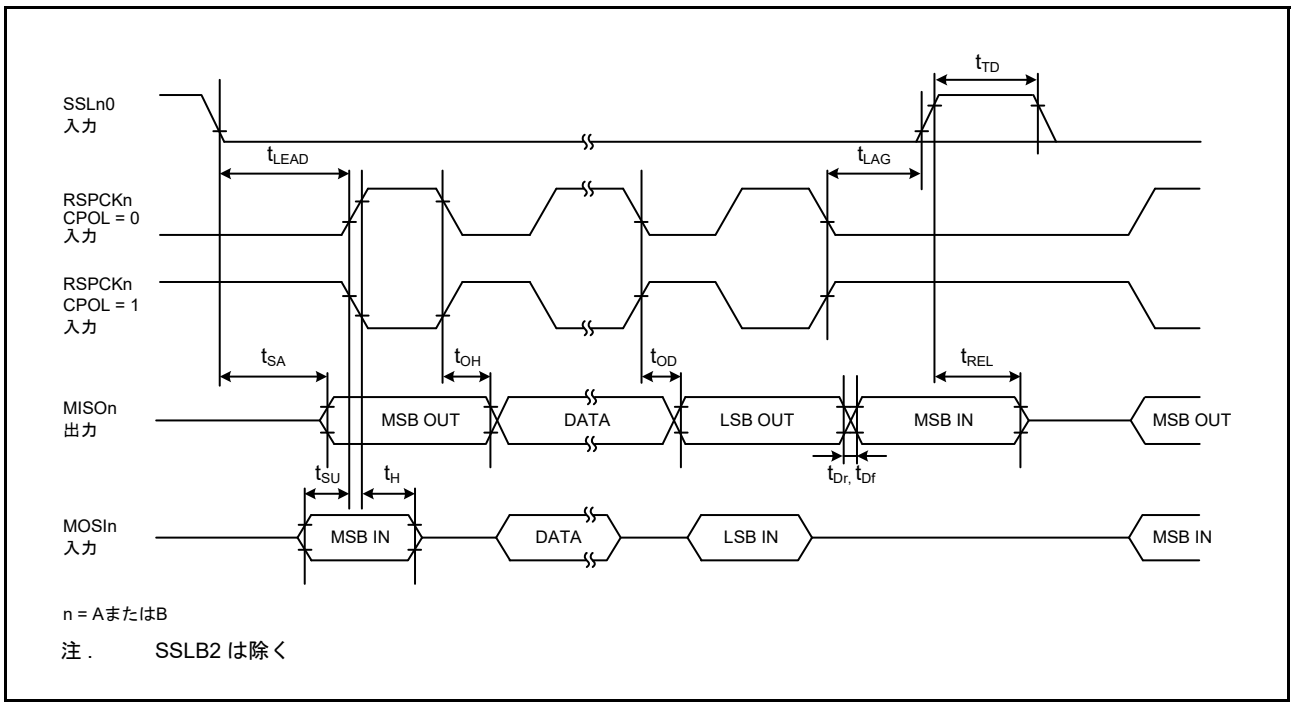


図 48.54 SPI タイミング（スレーブ、CPHA = 0）

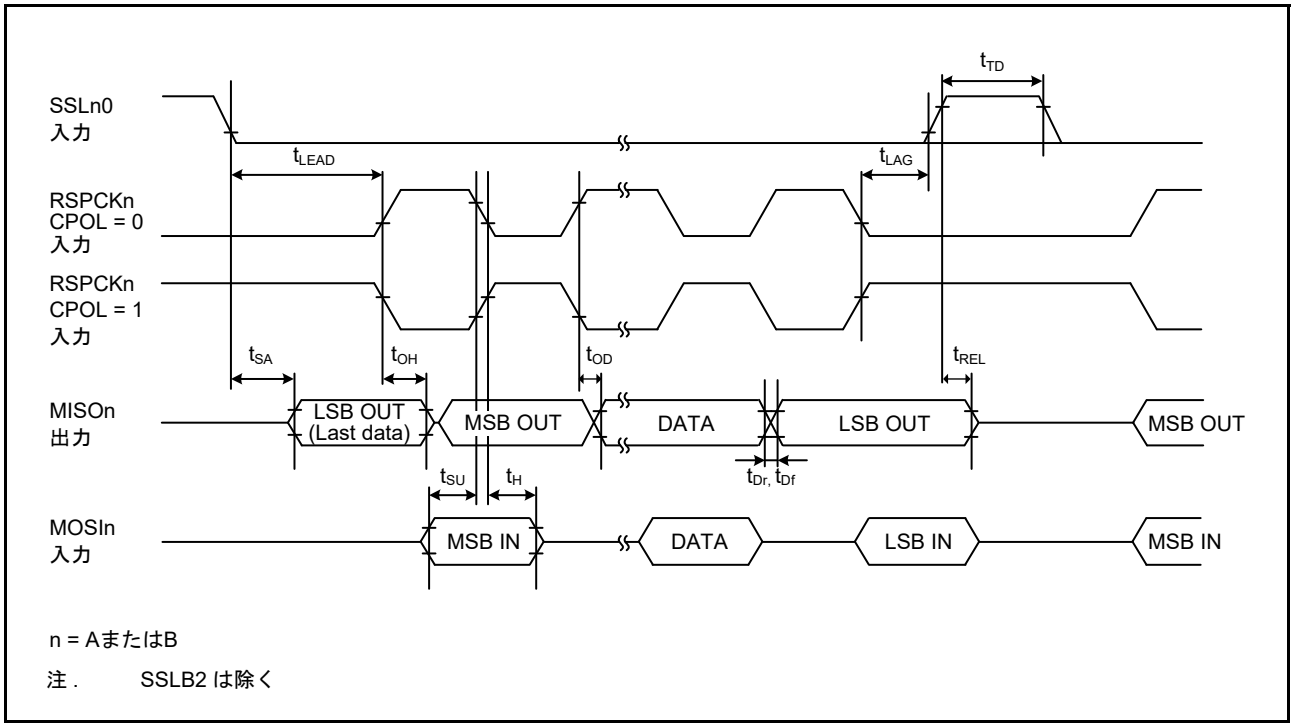


図 48.55 SPI タイミング（スレーブ、CPHA = 1）

48.3.10 IIC タイミング

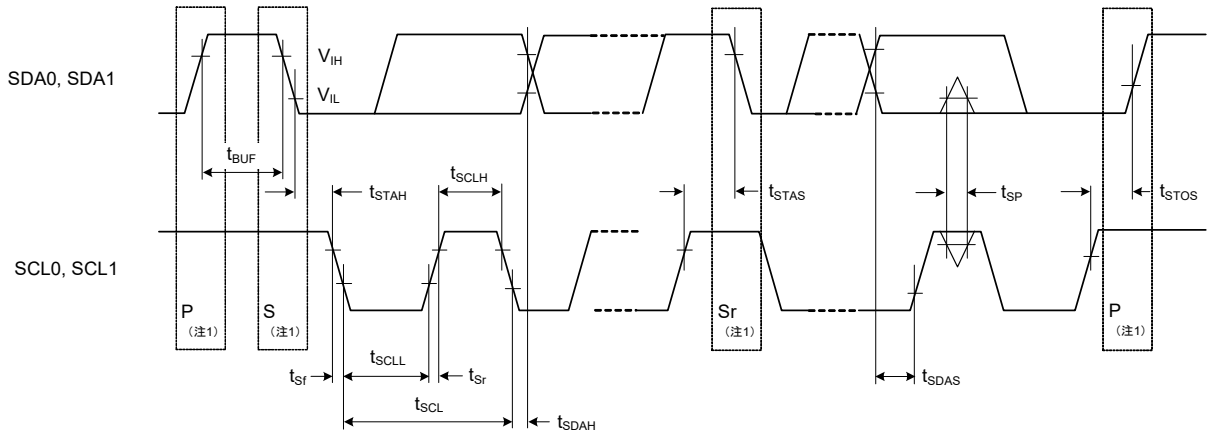
表 48.38 IICタイミング

条件：VCC = 2.7～3.6V

項目		シンボル	Min（注1）	Max	単位	測定条件
IIC（標準モード、SMBus）	SCL入力サイクル時間	t_{SCL}	6(12) × t_{IICcyc} + 1300	—	ns	図 48.56
	SCL入力High レベルパルス幅	t_{SCLH}	3(6) × t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	SCL入力Low レベルパルス幅	t_{SCLL}	3(6) × t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	SCL、SDA入力立ち上がり時間	t_{Sr}	—	1000	ns	
	SCL、SDA入力立ち下がり時間	t_{Sf}	—	300	ns	
	SCL、SDA入力スパイクパルス除去時間	t_{SP}	0	1(4) × t_{IICcyc}	ns	
	SDA入力バスフリー時間（ウェイクアップ機能無効時）	t_{BUF}	3(6) × t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	SDA入力バスフリー時間（ウェイクアップ機能有効時）	t_{BUF}	3(6) × t_{IICcyc} + 4 × t_{Pcyc} + 300	—	ns	
	START条件入力ホールド時間（ウェイクアップ機能無効時）	t_{STAH}	t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	START条件入力ホールド時間（ウェイクアップ機能有効時）	t_{STAH}	1(5) × t_{IICcyc} + t_{Pcyc} + 300	—	ns	
	再送START条件入力セットアップ時間	t_{STAS}	1000	—	ns	
	STOP条件入力セットアップ時間	t_{STOS}	1000	—	ns	
	データ入力セットアップ時間	t_{SDAS}	t_{IICcyc} + 50	—	ns	
	データ入力ホールド時間	t_{SDAH}	0	—	ns	
	SCL、SDAの負荷容量	C_b	—	400	pF	
IIC（ファストモード）	SCL入力サイクル時間	t_{SCL}	6(12) × t_{IICcyc} + 600	—	ns	図 48.56 全ポート、中駆動のPmnPFS.DSCRを使用してください。
	SCL入力High レベルパルス幅	t_{SCLH}	3(6) × t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	SCL入力Low レベルパルス幅	t_{SCLL}	3(6) × t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	SCL、SDA入力立ち上がり時間	t_{Sr}	—	300	ns	
	SCL、SDA入力立ち下がり時間	t_{Sf}	—	300	ns	
	SCL、SDA入力スパイクパルス除去時間	t_{SP}	0	1(4) × t_{IICcyc}	ns	
	SDA入力バスフリー時間（ウェイクアップ機能無効時）	t_{BUF}	3(6) × t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	SDA入力バスフリー時間（ウェイクアップ機能有効時）	t_{BUF}	3(6) × t_{IICcyc} + 4 × t_{Pcyc} + 300	—	ns	
	START条件入力ホールド時間（ウェイクアップ機能無効時）	t_{STAH}	t_{IICcyc} + 300	—	ns	
	START条件入力ホールド時間（ウェイクアップ機能有効時）	t_{STAH}	1(5) × t_{IICcyc} + t_{Pcyc} + 300	—	ns	
	再送START条件入力セットアップ時間	t_{STAS}	300	—	ns	
	STOP条件入力セットアップ時間	t_{STOS}	300	—	ns	
	データ入力セットアップ時間	t_{SDAS}	t_{IICcyc} + 50	—	ns	
	データ入力ホールド時間	t_{SDAH}	0	—	ns	
	SCL、SDAの負荷容量	C_b	—	400	pF	

注 . t_{IICcyc}：IIC 内部基準クロック（IICφ）の周期、t_{Pcyc}：PCLKB の周期

注 1. ICFER.NFE が 1 でデジタルフィルタが有効な場合、ICMR3.NF[1:0] が 11b であると（ ）内の値が適用されます。



注 1. S, P, Sr はそれぞれ以下の条件を示します。
S：開始条件
P：停止条件
Sr：再開条件

図 48.56 I²C バスインタフェース入出力タイミング

48.3.11 CLKOUT タイミング

表 48.39 CLKOUTタイミング

項目			シンボル	Min	Max	単位（注1）	測定条件
CLKOUT	CLKOUT端子出力サイクル（注1）	VCC = 2.7V以上	t_{Ccyc}	62.5	—	ns	図 48.57
		VCC = 1.8V以上		125	—		
	CLKOUT端子Highレベルパルス幅（注2）	VCC = 2.7V以上	t_{CH}	15	—	ns	
		VCC = 1.8V以上		30	—		
	CLKOUT端子Lowレベルパルス幅（注2）	VCC = 2.7V以上	t_{CL}	15	—	ns	
		VCC = 1.8V以上		30	—		
	CLKOUT端子出力立ち上がり時間	VCC = 2.7V以上	t_{Cr}	—	12	ns	
		VCC = 1.8V以上		—	25		
	CLKOUT端子出力立ち下がり時間	VCC = 2.7V以上	t_{Cf}	—	12	ns	
		VCC = 1.8V以上		—	25		
CLKOUT_RF（注3）	CLKOUT_RF端子出力サイクル		t_{CRFcyc}	250		ns	図 48.58
	CLKOUT_RF端子Highレベルパルス幅		t_{CRFH}	100		ns	
	CLKOUT_RF端子Lowレベルパルス幅		t_{CRFL}	100		ns	
	CLKOUT_RF端子出力立ち上がり時間		t_{CRFr}		5	ns	
	CLKOUT_RF端子出力立ち下がり時間		t_{CRFf}		5	ns	

注 1. EXTAL 外部クロック入力または発振器を使用して 1 分周（CKOCR.CKOSEL[2:0] ビット = 011b かつ CKOCR.CKODIV[2:0] ビット = 000b）を CLKOUT から出力する場合は、入力デューティサイクル 45 ～ 55%で上記を満たします。

注 2. クロック出力ソースに MOCO が選択されている場合（CKOCR.CKOSEL[2:0] ビットが 001b）、クロック出力分周比選択を 2 分周（CKOCR.CKODIV[2:0] ビットを 001b）に設定してください。

注 3. CLKOUT_RF 端子使用時の VCC_RF 電圧は 3.0V ～ 3.6V です。

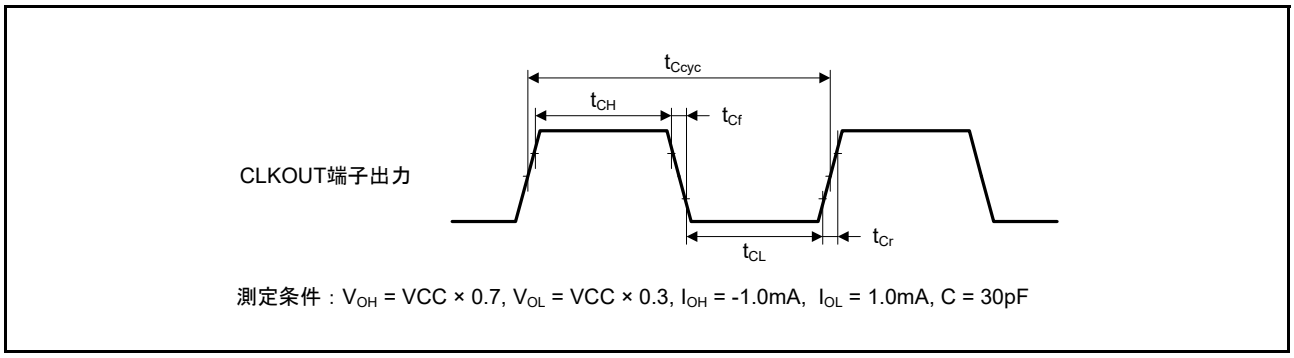


図 48.57 CLKOUT 出力タイミング

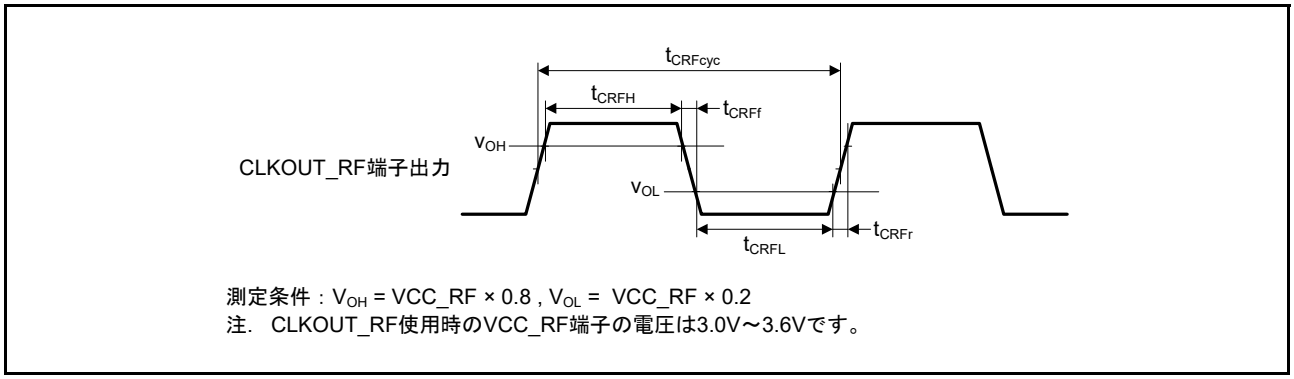


図 48.58 CLKOUT_RF 出力タイミング

48.4 USB 特性

48.4.1 USBFS タイミング

表 48.40 USB特性

条件：VCC = VCC_USB = 3.0～3.6V、Ta = -20～+85℃（USBCLKSEL = 1）

項目			シンボル	Min	Max	単位	測定条件
入力特性	入力Highレベル電圧		V_{IH}	2.0	—	V	—
	入力Lowレベル電圧		V_{IL}	—	0.8	V	—
	差動入力感度		V_{DI}	0.2	—	V	| USB_DP - USB_DM |
	差動コモンモードレンジ		V_{CM}	0.8	2.5	V	—
出力特性	出力Highレベル電圧		V_{OH}	2.8	VCC_USB	V	I_{OH} = -200μA
	出力Lowレベル電圧		V_{OL}	0.0	0.3	V	I_{OL} = 2mA
	クロスオーバー電圧		V_{CRS}	1.3	2.0	V	図 48.59、図 48.60、図 48.61
	立ち上がり時間	FS	t_r	4	20	ns	
		LS		75	300		
	立ち下がり時間	FS	t_f	4	20	ns	
		LS		75	300		
	立ち上がり／立ち下がり時間比	FS	t_r/t_f	90	111.11	%	
		LS		80	125		
	出力抵抗		Z_{DRV}	28	44	Ω	（外部素子の抵抗値調整は不要）
VBUS特性	VBUS入力電圧		V_{IH}	VCC × 0.8	—	V	—
			V_{IL}	—	VCC × 0.2	V	—
プルアップ、プルダウン	プルダウン抵抗		R_{PD}	14.25	24.80	kΩ	—
	プルアップ抵抗		R_{PUI}	0.9	1.575	kΩ	アイドル状態の間
			R_{PUA}	1.425	3.09	kΩ	受信中
バッテリチャージング規格 Ver 1.2	D+シンク電流		I_{DP_SINK}	25	175	μA	—
	D-シンク電流		I_{DM_SINK}	25	175	μA	—
	DCDソース電流		I_{DP_SRC}	7	13	μA	—
	データ検出電圧		V_{DAT_REF}	0.25	0.4	V	—
	D+ソース電圧		V_{DP_SRC}	0.5	0.7	V	出力電流 = 250μA
	D-ソース電圧		V_{DM_SRC}	0.5	0.7	V	出力電流 = 250μA

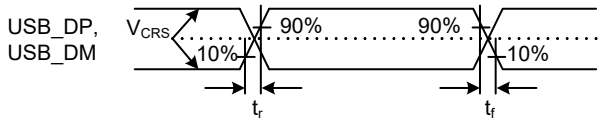


図 48.59 USB_DP および USB_DM 出力タイミング

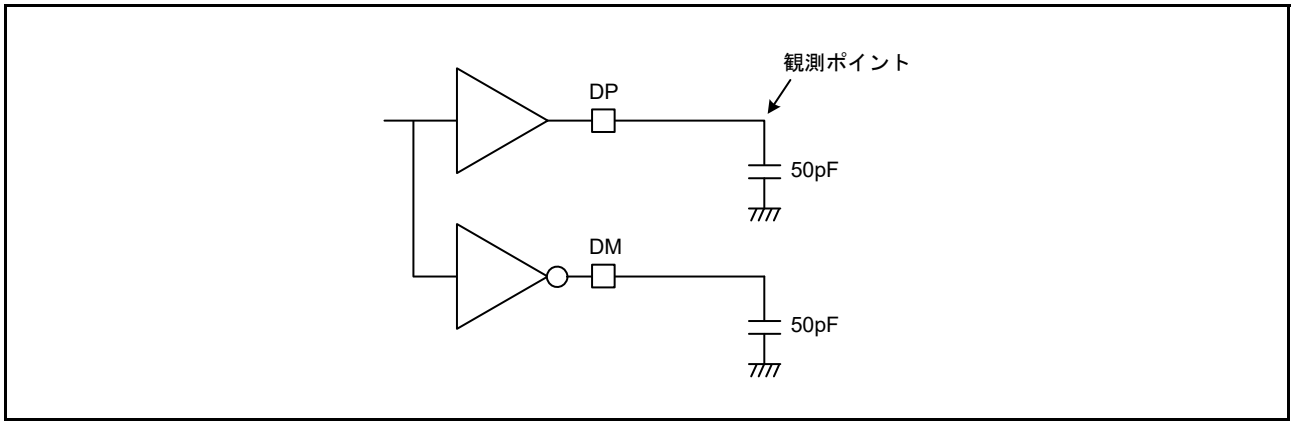


図 48.60 フルスピード（FS）接続の測定回路

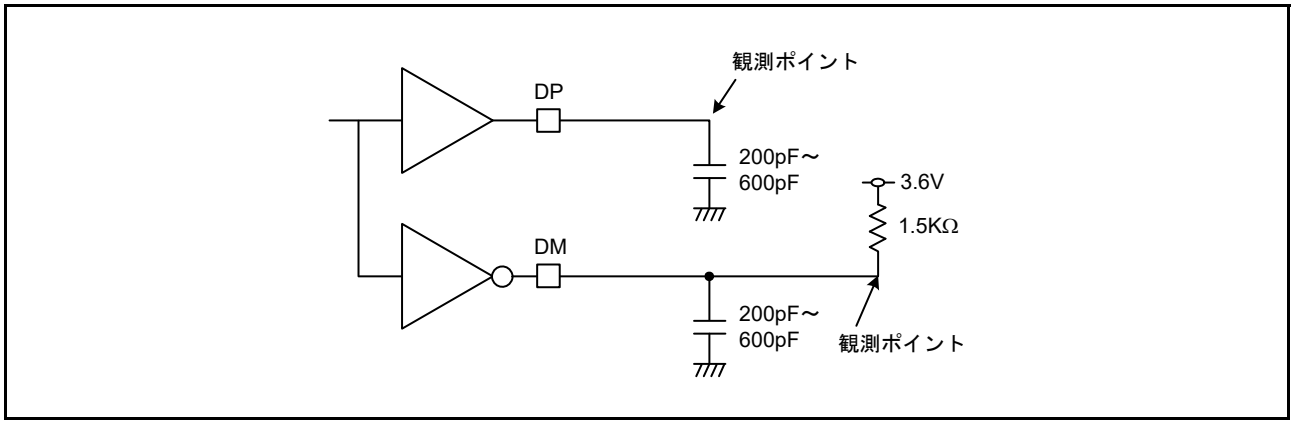


図 48.61 ロースピード（LS）接続の測定回路

48.5 ADC14 特性

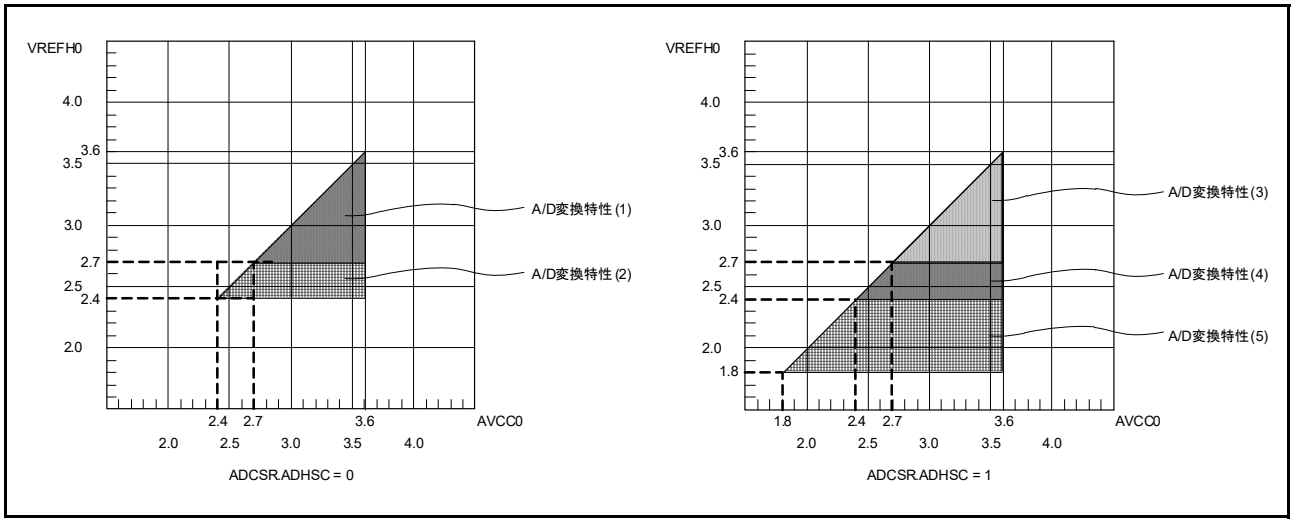


図 48.62 AVCC0 ～ VREFH0 電圧範囲

表 48.41　高速A/D変換モードにおけるA/D変換特性（1）

条件：VCC = AVCC0 = 2.7～3.6V、VREFH0 = 2.7V～3.6V
基準電圧範囲をVREFH0およびVREFL0に印加

項目			Min	Typ	Max	単位	測定条件
周波数			1	—	48	MHz	—
アナログ入力容量（注2）		Cs	—	—	8 （参考データ）	pF	高精度チャネル
			—	—	9 （参考データ）	pF	通常精度チャネル
アナログ入力抵抗		Rs	—	—	2.5 （参考データ）	kΩ	高精度チャネル
			—	—	6.7 （参考データ）	kΩ	通常精度チャネル
アナログ入力電圧範囲		Ain	0	—	VREFH0	V	—
12ビットモード							
分解能			—	—	12	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 48MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 0.3kΩ		0.94	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			1.50	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 0.5	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 0.75	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 1.25	± 5.0	LSB	高精度チャネル
			—		± 8.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 1.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 1.0	± 3.0	LSB	—
14ビットモード							
分解能			—	—	14	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 48MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 0.3kΩ		1.06	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			1.63	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 2.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 3.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 5.0	± 20	LSB	高精度チャネル
			—		± 32.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 4.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 4.0	± 12.0	LSB	—

注：　14 ビット A/D コンバータ入力以外の端子機能が使用されていない場合にこの特性が適用されます。絶対精度には量子化誤差は含まれていません。オフセット誤差、フルスケール誤差、DNL 微分非直線性誤差、INL 積分非直線性誤差に量子化誤差は含まれていません。
注 1.　変換時間はサンプリング時間と比較時間の合計です。測定条件には、サンプリングステート数が示されています。
注 2.　I/O 入力容量（Cin）以外は、48.2.4　I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性を参照してください。

表 48.42　高速A/D変換モードにおけるA/D変換特性（2）

条件：VCC = AVCC0 = 2.4～3.6V、VREFH0 = 2.4V～3.6V
基準電圧範囲をVREFH0およびVREFL0に印加

項目			Min	Typ	Max	単位	測定条件
周波数			1	—	32	MHz	—
アナログ入力容量（注2）		Cs	—	—	8 （参考データ）	pF	高精度チャネル
			—	—	9 （参考データ）	pF	通常精度チャネル
アナログ入力抵抗		Rs	—	—	2.5 （参考データ）	kΩ	高精度チャネル
			—	—	6.7 （参考データ）	kΩ	通常精度チャネル
アナログ入力電圧範囲		Ain	0	—	VREFH0	V	—
12ビットモード							
分解能			—	—	12	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 32MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 1.3kΩ		1.41	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			2.25	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 0.5	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 0.75	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 1.25	± 5.0	LSB	高精度チャネル
			—		± 8.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 1.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 1.0	± 3.0	LSB	—
14ビットモード							
分解能			—	—	14	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 32MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 1.3kΩ		1.59	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			2.44	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 0 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 2.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 3.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 5.0	± 20	LSB	高精度チャネル
			—		± 32.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 4.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 4.0	± 12.0	LSB	—

注：　14 ビット A/D コンバータ入力以外の端子機能が使用されていない場合にこの特性が適用されます。絶対精度には量子化誤差は含まれていません。オフセット誤差、フルスケール誤差、DNL 微分非直線性誤差、INL 積分非直線性誤差に量子化誤差は含まれていません。
注 1.　変換時間はサンプリング時間と比較時間の合計です。測定条件には、サンプリングステート数が示されています。
注 2.　I/O 入力容量（Cin）以外は、48.2.4　I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性を参照してください。

表 48.43　低消費電力A/D変換モードにおけるA/D変換特性（3）

条件：VCC = AVCC0 = 2.7～3.6V、VREFH0 = 2.7V～3.6V
基準電圧範囲をVREFH0およびVREFL0に印加

項目			Min	Typ	Max	単位	測定条件
周波数			1	—	24	MHz	—
アナログ入力容量（注2）		Cs	—	—	8 （参考データ）	pF	高精度チャネル
			—	—	9 （参考データ）	pF	通常精度チャネル
アナログ入力抵抗		Rs	—	—	2.5 （参考データ）	kΩ	高精度チャネル
			—	—	6.7 （参考データ）	kΩ	通常精度チャネル
アナログ入力電圧範囲		Ain	0	—	VREFH0	V	—
12ビットモード							
分解能			—	—	12	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 24MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 1.1kΩ		2.25	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			3.38	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 0.5	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 0.75	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 1.25	± 5.0	LSB	高精度チャネル
			—		± 8.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 1.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 1.0	± 3.0	LSB	—
14ビットモード							
分解能			—	—	14	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 24MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 1.1kΩ		2.50	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			3.63	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 2.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 3.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 5.0	± 20	LSB	高精度チャネル
			—		± 32.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 4.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 4.0	± 12.0	LSB	—

注：　14 ビット A/D コンバータ入力以外の端子機能が使用されていない場合にこの特性が適用されます。絶対精度には量子化誤差は含まれていません。オフセット誤差、フルスケール誤差、DNL 微分非直線性誤差、INL 積分非直線性誤差に量子化誤差は含まれていません。
注 1.　変換時間はサンプリング時間と比較時間の合計です。測定条件には、サンプリングステート数が示されています。
注 2.　I/O 入力容量（Cin）以外は、48.2.4　I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性を参照してください。

表 48.44　低消費電力A/D変換モードにおけるA/D変換特性（4）

条件：VCC = AVCC0 = 2.4～3.6V、VREFH0 = 2.4V～3.6V
基準電圧範囲をVREFH0およびVREFL0に印加

項目			Min	Typ	Max	単位	測定条件
周波数			1	—	16	MHz	—
アナログ入力容量（注2）		Cs	—	—	8 （参考データ）	pF	高精度チャネル
			—	—	9 （参考データ）	pF	通常精度チャネル
アナログ入力抵抗		Rs	—	—	2.5 （参考データ）	kΩ	高精度チャネル
			—	—	6.7 （参考データ）	kΩ	通常精度チャネル
アナログ入力電圧範囲		Ain	0	—	VREFH0	V	—
12ビットモード							
分解能			—	—	12	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 16MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 2.2kΩ		3.38	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			5.06	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 0.5	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 0.75	± 4.5	LSB	高精度チャネル
			—		± 6.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 1.25	± 5.0	LSB	高精度チャネル
			—		± 8.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 1.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 1.0	± 3.0	LSB	—
14ビットモード							
分解能			—	—	14	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 16MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 2.2kΩ		3.75	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
			5.44	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差			—	± 2.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差			—	± 3.0	± 18	LSB	高精度チャネル
			—		± 24.0	LSB	上記以外
量子化誤差			—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度			—	± 5.0	± 20	LSB	高精度チャネル
			—		± 32.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差			—	± 4.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差			—	± 4.0	± 12.0	LSB	—

注：　14 ビット A/D コンバータ入力以外の端子機能が使用されていない場合にこの特性が適用されます。絶対精度には量子化誤差は含まれていません。オフセット誤差、フルスケール誤差、DNL 微分非直線性誤差、INL 積分非直線性誤差に量子化誤差は含まれていません。
注 1.　変換時間はサンプリング時間と比較時間の合計です。測定条件には、サンプリングステート数が示されています。
注 2.　I/O 入力容量（Cin）以外は、48.2.4　I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性を参照してください。

表 48.45　低消費電力A/D変換モードにおけるA/D変換特性（5）

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V（VCC＜2.0Vのとき AVCC0 = VCC）、VREFH0 = 1.8～3.6V
基準電圧範囲をVREFH0およびVREFL0に印加

項目		Min	Typ	Max	単位	測定条件
周波数		1	—	8	MHz	—
アナログ入力容量（注2）	Cs	—	—	8 （参考データ）	pF	高精度チャネル
		—	—	9 （参考データ）	pF	通常精度チャネル
アナログ入力抵抗	Rs	—	—	3.8 （参考データ）	kΩ	高精度チャネル
		—	—	8.2 （参考データ）	kΩ	通常精度チャネル
アナログ入力電圧範囲	Ain	0	—	VREFH0	V	—
12ビットモード						
分解能		—	—	12	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 8MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 5kΩ	6.75	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
		10.13	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差		—	± 1.0	± 7.5	LSB	高精度チャネル
		—		± 10.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差		—	± 1.5	± 7.5	LSB	高精度チャネル
		—		± 10.0	LSB	上記以外
量子化誤差		—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度		—	± 3.0	± 8.0	LSB	高精度チャネル
		—		± 12.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差		—	± 1.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差		—	± 1.0	± 3.0	LSB	—
14ビットモード						
分解能		—	—	14	ビット	—
変換時間（注1） （PCLKC = 8MHzで動作時）	許容信号源インピーダンス Max = 5kΩ	7.50	—	—	μs	高精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 0Dh
		10.88	—	—	μs	通常精度チャネル ADCSR.ADHSC = 1 ADSSTRn.SST[7:0] = 28h
オフセット誤差		—	± 4.0	± 30.0	LSB	高精度チャネル
		—		± 40.0	LSB	上記以外
フルスケール誤差		—	± 6.0	± 30.0	LSB	高精度チャネル
		—		± 40.0	LSB	上記以外
量子化誤差		—	± 0.5	—	LSB	—
絶対精度		—	± 12.0	± 32.0	LSB	高精度チャネル
		—		± 48.0	LSB	上記以外
DNL微分非直線性誤差		—	± 4.0	—	LSB	—
INL積分非直線性誤差		—	± 4.0	± 12.0	LSB	—

注：　14 ビット A/D コンバータ入力以外の端子機能が使用されていない場合にこの特性が適用されます。絶対精度には量子化誤差は含まれていません。オフセット誤差、フルスケール誤差、DNL 微分非直線性誤差、INL 積分非直線性誤差に量子化誤差は含まれていません。
注 1.　変換時間はサンプリング時間と比較時間の合計です。測定条件には、サンプリングステート数が示されています。
注 2.　I/O 入力容量（Cin）以外は、48.2.4　I/O V_{OH}、V_{OL}、その他の特性を参照してください。

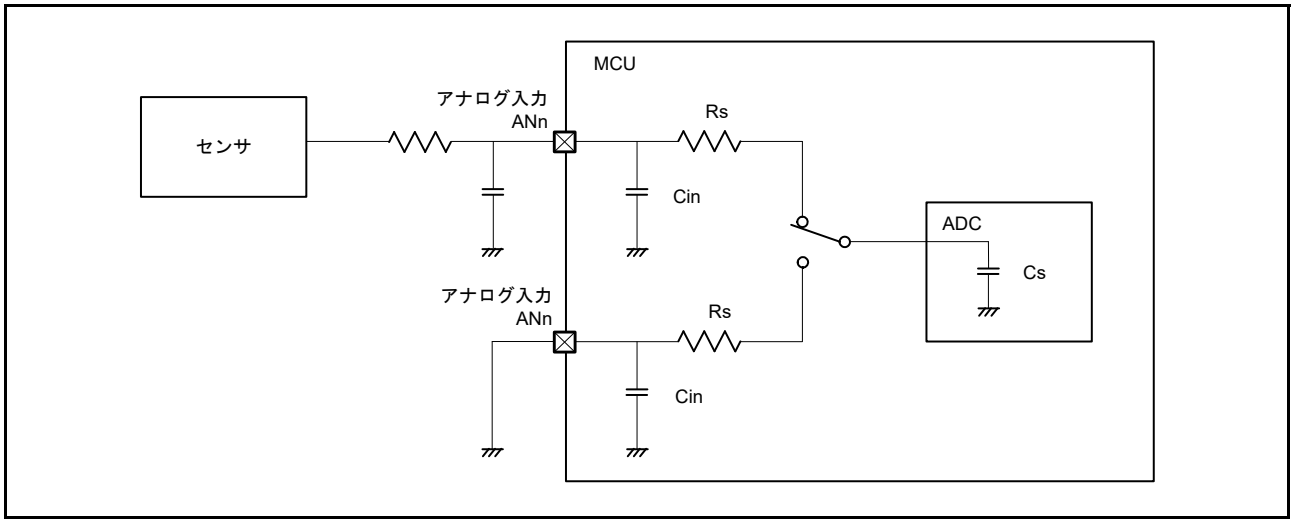


図 48.63　　アナログ入力の等価回路

表 48.46　　14ビットA/Dコンバータチャネル分類

分類	チャネル	条件	注意点
高精度チャネル	AN004～AN006, AN009, AN010	AVCC0 = 1.8～3.6V	A/Dコンバータ使用時AN004～AN006, AN009, AN010端子は、汎用入出力端子、IRQ3入力端子、TS送信端子としては使用できません。
通常精度チャネル	AN017, AN019, AN020		
内部基準電圧入力チャネル	内部基準電圧	AVCC0 = 2.0～3.6V	—
温度センサ入力チャネル	温度センサ出力	AVCC0 = 2.0～3.6V	—

表 48.47　　A/D内部基準電圧特性

条件：VCC = AVCC0 = VREFH0 = 2.0～3.6V（注1）

項目	Min	Typ	Max	単位	測定条件
内部基準電圧入力チャネル（注2）	1.36	1.43	1.50	V	—
周波数（注3）	1	—	2	MHz	—
サンプリング時間（注4）	5.0	—	—	μs	—

注 1.　AVCC0 ＜ 2.0V のとき、入力チャネルに内部基準電圧は選択できません。
注 2.　14 ビット A/D 内部基準電圧は、内部基準電圧が 14 ビット A/D コンバータに入力されたときの電圧を示します。
注 3.　内部基準電圧が高電位基準電圧として使用される場合の ADC14 用パラメータです。
注 4.　内部基準電圧が ADC14 のアナログ入力チャネルに選択された場合の ADC14 用パラメータです。

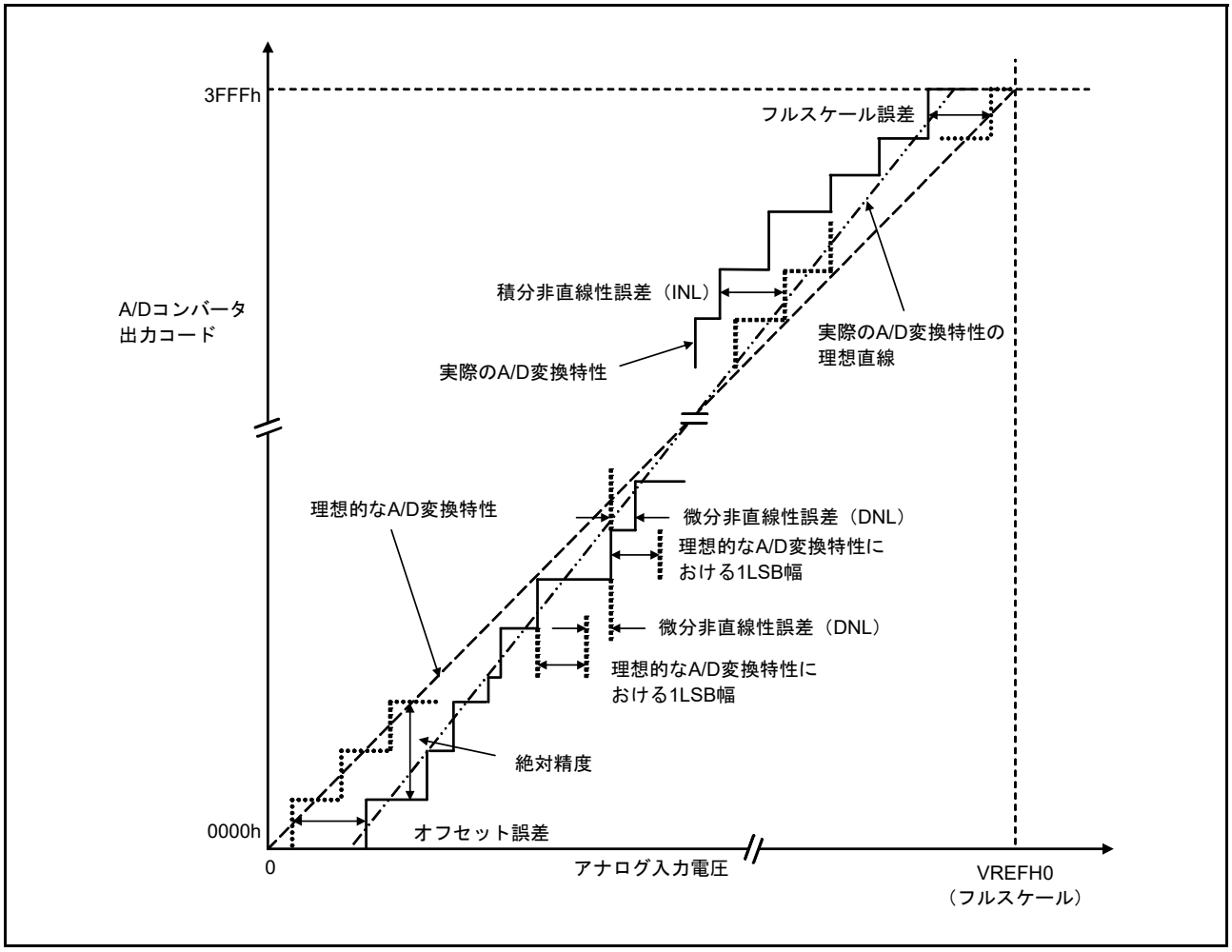


図 48.64　14 ビット A/D コンバータ特性用語の解説図

絶対精度

絶対精度とは、理論的 A/D 変換特性に基づく出力コードと、実際の A/D 変換結果との差です。絶対精度を測定する場合、理論的 A/D 変換特性において同じ出力コードが期待できるアナログ入力電圧の幅（1LSB 幅）の中点の電圧を、アナログ入力電圧として使用します。たとえば、分解能が 12 ビットで、基準電圧 VREFH0 = 3.072V の場合、1LSB 幅は 0.75mV になり、アナログ入力電圧には 0mV、0.75mV、1.5mV が使用されます。± 5 LSB の絶対精度とは、アナログ入力電圧が 6mV の場合、理論的 A/D 変換特性から期待される出力コードが 008h であっても、実際の A/D 変換結果は 003h ～ 00Dh の範囲になることを意味します。

積分非直線性誤差（INL）

積分非直線性誤差とは、測定されたオフセット誤差とフルスケール誤差をゼロとした場合の理想的な直線と、実際の出力コードとの最大偏差です。

微分非直線性誤差（DNL）

微分非直線性誤差とは、理想的 A/D 変換特性に基づく 1LSB 幅と、実際の出力コード幅との差です。

オフセット誤差

オフセット誤差とは、理想的な最初の出力コードの変化点と、実際の最初の出力コードとの差です。

フルスケール誤差

フルスケール誤差とは、理想的な最後の出力コードの変化点と、実際の最後の出力コードとの差です。

48.6 DAC12 特性

表 48.48 D/A変換特性（1）
条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V
基準電圧 = AVCC0またはAVSS0選択時

項目	Min	Typ	Max	単位	測定条件
分解能	—	—	12	ビット	—
負荷抵抗	30	—	—	kΩ	—
負荷容量	—	—	50	pF	—
出力電圧範囲	0.35	—	AVCC0 - 0.47	V	—
DNL微分非直線性誤差	—	± 0.5	± 2.0	LSB	—
INL積分非直線性誤差	—	± 2.0	± 8.0	LSB	—
オフセット誤差	—	—	± 30	mV	—
フルスケール誤差	—	—	± 30	mV	—
出力インピーダンス	—	5	—	Ω	—
変換時間	—	—	30	μs	—

表 48.49 D/A変換特性（2）
条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V
基準電圧 = 内部基準電圧選択時

項目	Min	Typ	Max	単位	測定条件
分解能	—	—	12	ビット	—
内部基準電圧（Vbgr）	1.36	1.43	1.50	V	—
負荷抵抗	30	—	—	kΩ	—
負荷容量	—	—	50	pF	—
出力電圧範囲	0.35	—	Vbgr	V	—
DNL微分非直線性誤差	—	± 2.0	± 16.0	LSB	—
INL積分非直線性誤差	—	± 8.0	± 16.0	LSB	—
オフセット誤差	—	—	± 30	mV	—
出力インピーダンス	—	5	—	Ω	—
変換時間	—	—	30	μs	—

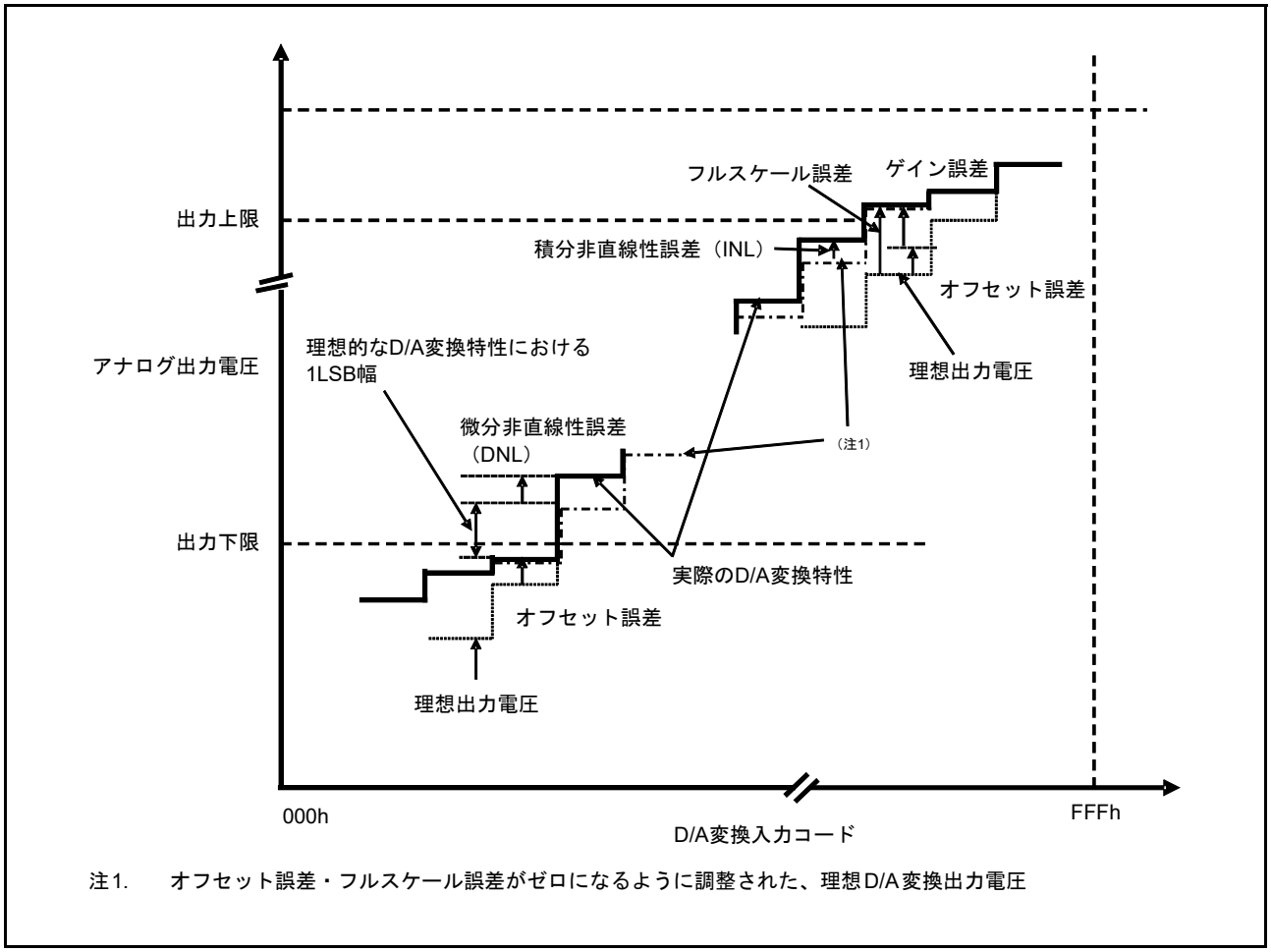


図 48.65 D/A コンバータ特性用語の解説図

積分非直線性誤差（INL）

積分非直線性誤差とは、測定されたオフセット誤差とフルスケール誤差をゼロとした場合の理想的な変換特性に基づく理想的な出力電圧と、実際の出力電圧との最大偏差です。

微分非直線性誤差（DNL）

微分非直線性誤差とは、理想的 D/A 変換特性に基づく 1LSB の電圧幅と、実際の出力電圧幅との差です。

オフセット誤差

オフセット誤差とは、出力下限を下回る一番高い実際の出力電圧と、その入力コードに基づく理想的な出力電圧との差です。

フルスケール誤差

フルスケール誤差とは、出力上限を上回る一番低い実際の出力電圧と、その入力コードに基づく理想的な出力電圧との差です。

48.7 TSN 特性

表 48.50 TSN特性

条件：VCC = AVCC0 = 2.0～3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
相対精度	—	—	± 1.5	—	℃	2.4V以上
	—	—	± 2.0	—	℃	2.4V未満
温度傾斜	—	—	-3.65	—	mV/℃	—
出力電圧（25℃）	—	—	1.05	—	V	VCC = 3.3V
温度センサ起動時間	t_{START}	—	—	5	μs	—
サンプリング時間	—	5	—	—	μs	—

48.8 OSC 停止検出特性

表 48.51 発振停止検出回路特性

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
検出時間	t_{dr}	—	—	1	ms	図 48.66

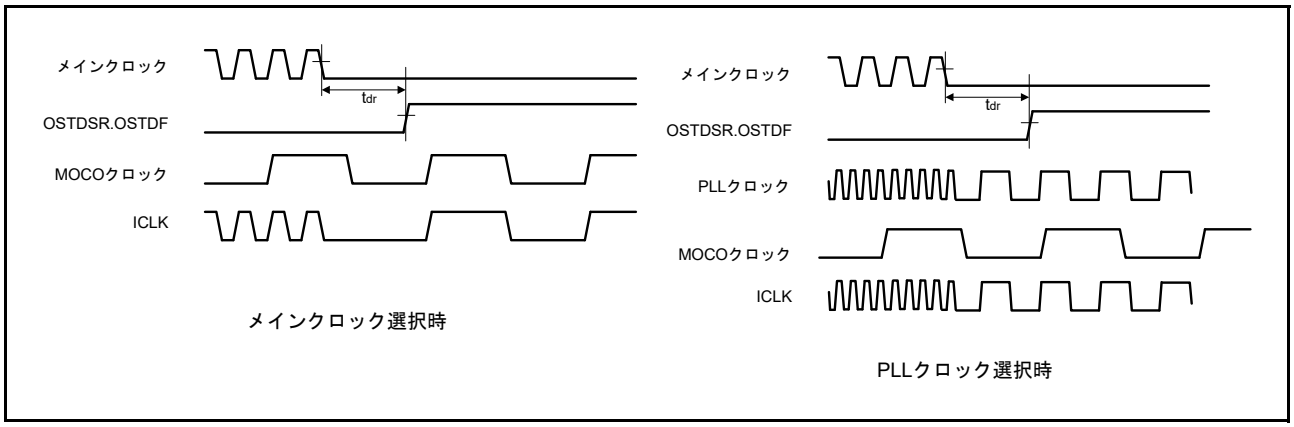


図 48.66 発振停止検出タイミング

48.9 POR/LVD 特性

表 48.52 パワーオンリセット回路、電圧検出回路の特性（1）

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
電圧検出レベル（注1）	パワーオンリセット（POR）	V_{POR}	1.27	1.42	1.57	V	図 48.67、 図 48.68
	電圧検出回路（LVD0）（注2）	V_{det0_1}	2.68	2.85	2.96	V	図 48.69 VCC立ち下がり エッジ時
		V_{det0_2}	2.38	2.53	2.64		
		V_{det0_3}	1.78	1.90	2.02		
	電圧検出回路（LVD1）（注3）	V_{det1_4}	2.98	3.10	3.22	V	図 48.70 VCC立ち下がり エッジ時
		V_{det1_5}	2.89	3.00	3.11		
		V_{det1_6}	2.79	2.90	3.01		
		V_{det1_7}	2.68	2.79	2.90		
		V_{det1_8}	2.58	2.68	2.78		
		V_{det1_9}	2.48	2.58	2.68		
		V_{det1_A}	2.38	2.48	2.58		
		V_{det1_B}	2.10	2.20	2.30		
		V_{det1_C}	1.84	1.96	2.05		
		V_{det1_D}	1.74	1.86	1.95		
		V_{det1_E}	1.63	1.75	1.84		
		V_{det1_F}	1.60	1.65	1.73		

注 1. これらの特性は、ノイズが電源に重畳されていない場合に適用されます。
注 2. $V_{det0_\#}$ の # は OFS1.VDSEL1[2:0] ビットの値を示しています。
注 3. $V_{det1_\#}$ の # は LVDLVLR.LVD1LVL[4:0] ビットの値を示しています。

表 48.53　パワーオンリセット回路、電圧検出回路の特性（2）

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
パワーオンリセット解除後の待機時間	LVD0：有効	t_{POR}	—	1.7	—	ms	—
	LVD0：無効	t_{POR}	—	1.3	—	ms	—
電圧監視0、1リセット解除後の待機時間	LVD0：有効（注1）	$t_{LVD0,1}$	—	0.6	—	ms	—
	LVD0：無効（注2）	t_{LVD1}	—	0.2	—	ms	—
応答遅延時間（注3）		t_{det}	—	—	350	μs	図 48.67、 図 48.68
最小VCC低下時間		t_{VOFF}	450	—	—	μs	図 48.67、 VCC = 1.0V以上
パワーオンリセット有効時間		$t_{W\ (POR)}$	1	—	—	ms	図 48.68、 VCC = 1.0V未満
LVD動作安定時間（LVD有効切り替え後）		$t_{d\ (E-A)}$	—	—	300	μs	図 48.70
ヒステリシス幅（POR）		V_{PORH}	—	110	—	mV	—
ヒステリシス幅（LVD0, LVD1）		V_{LVH}	—	60	—	mV	LVD0選択時
			—	60	—		V_{det1_4}～V_{det1_9}選択時
			—	50	—		V_{det1_A}～V_{det1_B}選択時
			—	40	—		V_{det1_C}～V_{det1_F}選択時

注 1.　OFS1.LVDAS = 0 のとき
注 2.　OFS1.LVDAS = 1 のとき
注 3.　最小 VCC 低下時間は、VCC が POR/LVD の電圧検出レベル V_{POR}、Vdet0、Vdet1 の min 値を下回っている時間です。

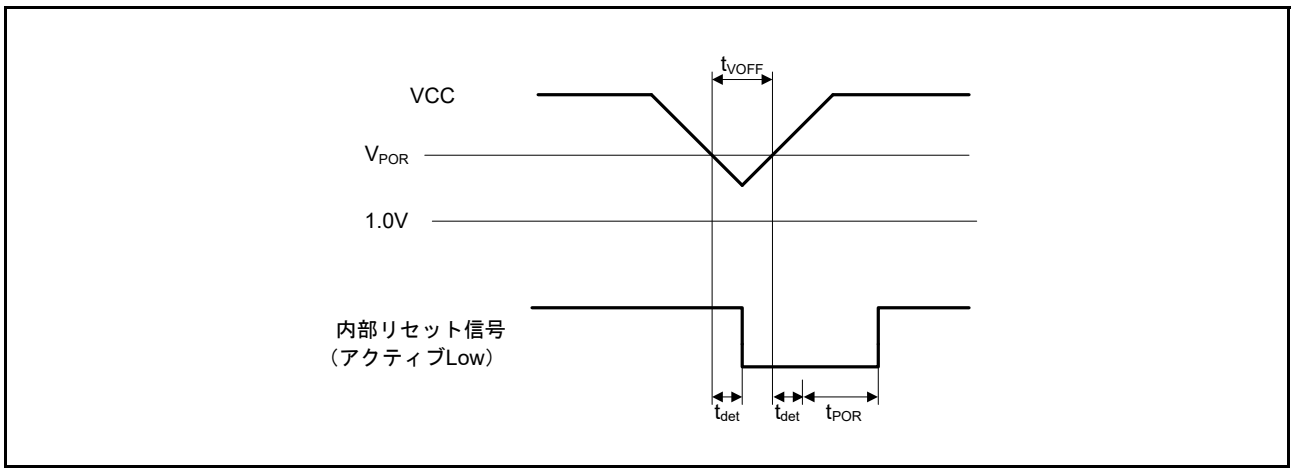
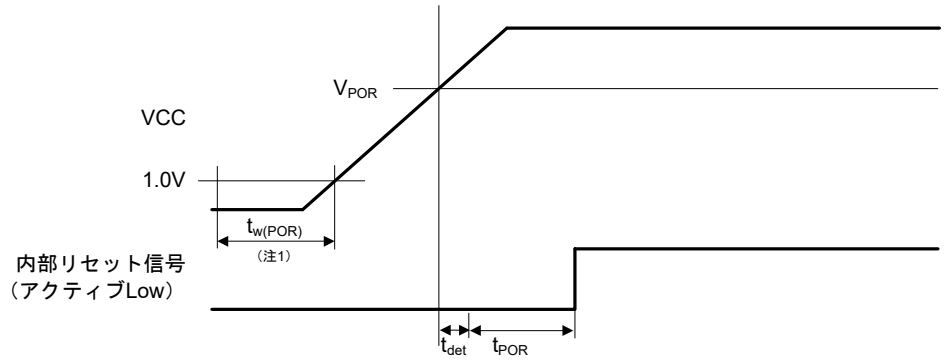


図 48.67　電圧検出リセットタイミング



注 1. $t_{w(POR)}$ は外部電源 VCC を有効電圧（1.0V）以下に保持してパワーオンリセットが有効になるために必要な時間です。電源を立ち上げるときは、$t_{w(POR)}$ を 1.0ms 以上保持してください。

図 48.68　パワーオンリセットタイミング

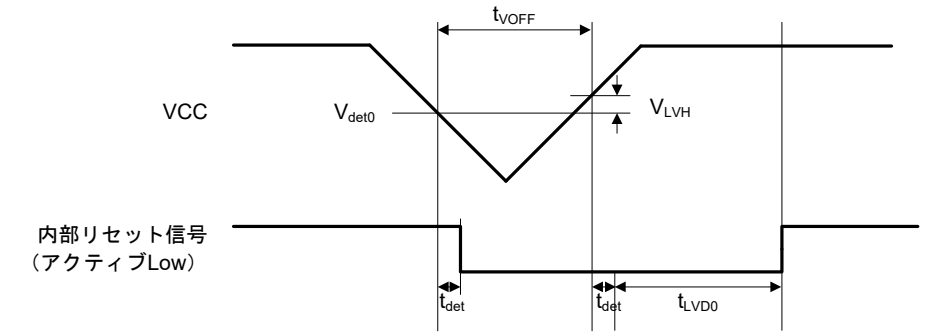


図 48.69　電圧検出回路タイミング（V_{det0}）

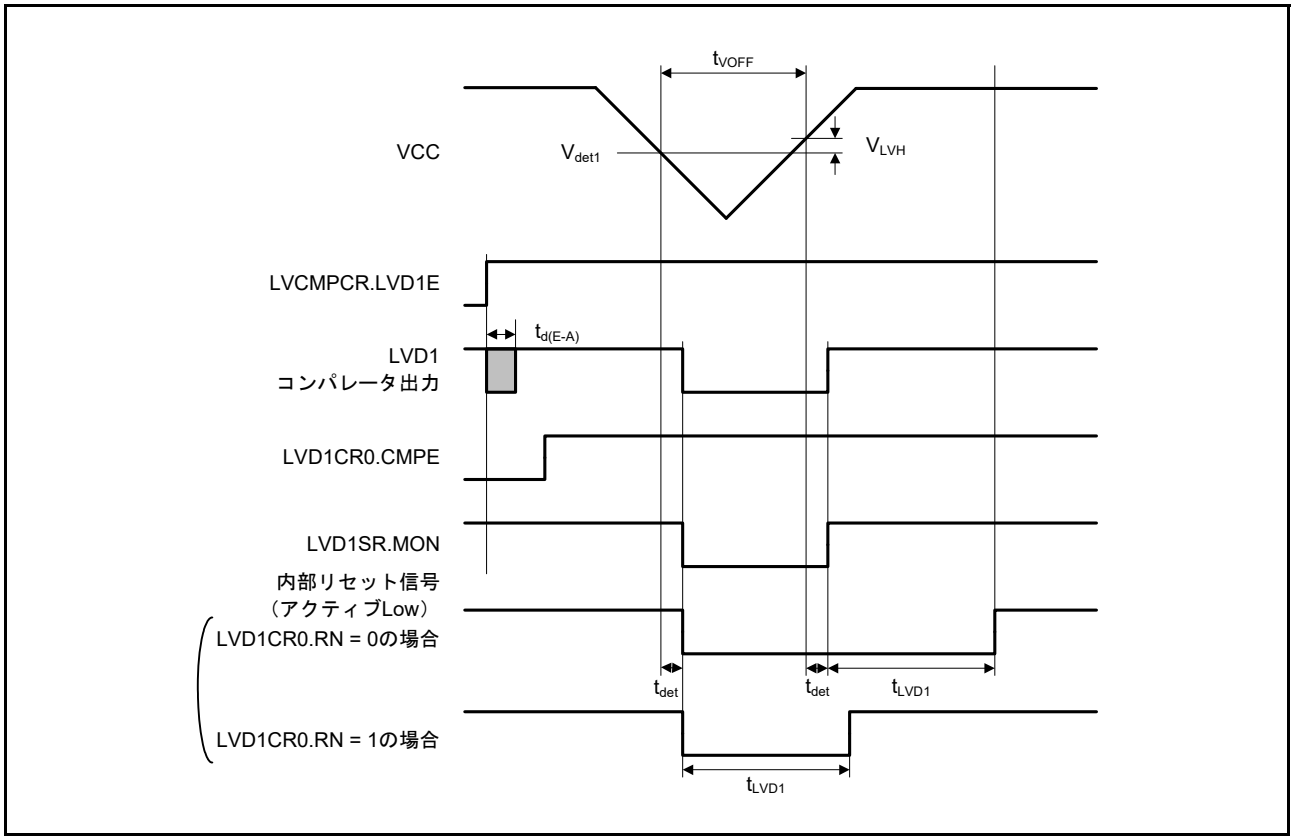


図 48.70　電圧検出回路タイミング（V_{det1}）

48.10 VBATT 特性

表 48.54 バッテリバックアップ機能特性

条件：VCC = AVCC0 = 1.8V～3.6V、VBATT = 1.6～3.6V

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
バッテリバックアップ切り替え電圧レベル（立ち下がり）		$V_{DETBATT}$	1.99	2.09	2.19	V	図 48.71、図 48.72
バッテリバクアップへの切り替えヒステリシス幅		V_{VBATTH}	—	100	—	mV	
電源切り替えVCCオフ期間		$t_{VOFFBATT}$	300	—	—	μs	—
電圧検出レベル VBATTパワーオンリセット（VBATT_POR）		$V_{VBATPOR}$	1.30	1.40	1.50	V	図 48.71、図 48.72
VBATT_PORリセット時間解除後の待機時間		$t_{VBATPOR}$	—	—	3	ms	—
VBATT端子の電圧降下検出レベル（立ち下がり）	VBTLVDLVL[1:0] = 10b	$V_{DETBATLVD}$	2.11	2.2	2.29	V	図 48.73
	VBTLVDLVL[1:0] = 11b		1.92	2	2.08	V	
VBATT端子LVDのヒステリシス幅		$V_{VBATLVDTH}$	—	50	—	mV	
VBATT端子LVD動作安定時間		t_{d_vbat}	—	—	300	μs	図 48.73
VBATT端子LVD応答遅延時間		t_{det_vbat}	—	—	350	μs	
許容電圧変化の立ち上がり／立ち下がり勾配		dt/dVCC	1.0	—	—	ms/V	—
VBATTバックアップレジスタアクセス用VCC電圧レベル		$V_{_BKBATT}$	1.8	—	—	V	—

注 . 電源切り替え VCC オフ期間は、VCC がバッテリバックアップ切り替え電圧レベル $V_{DETBATT}$ の min 値を下回っている時間です。

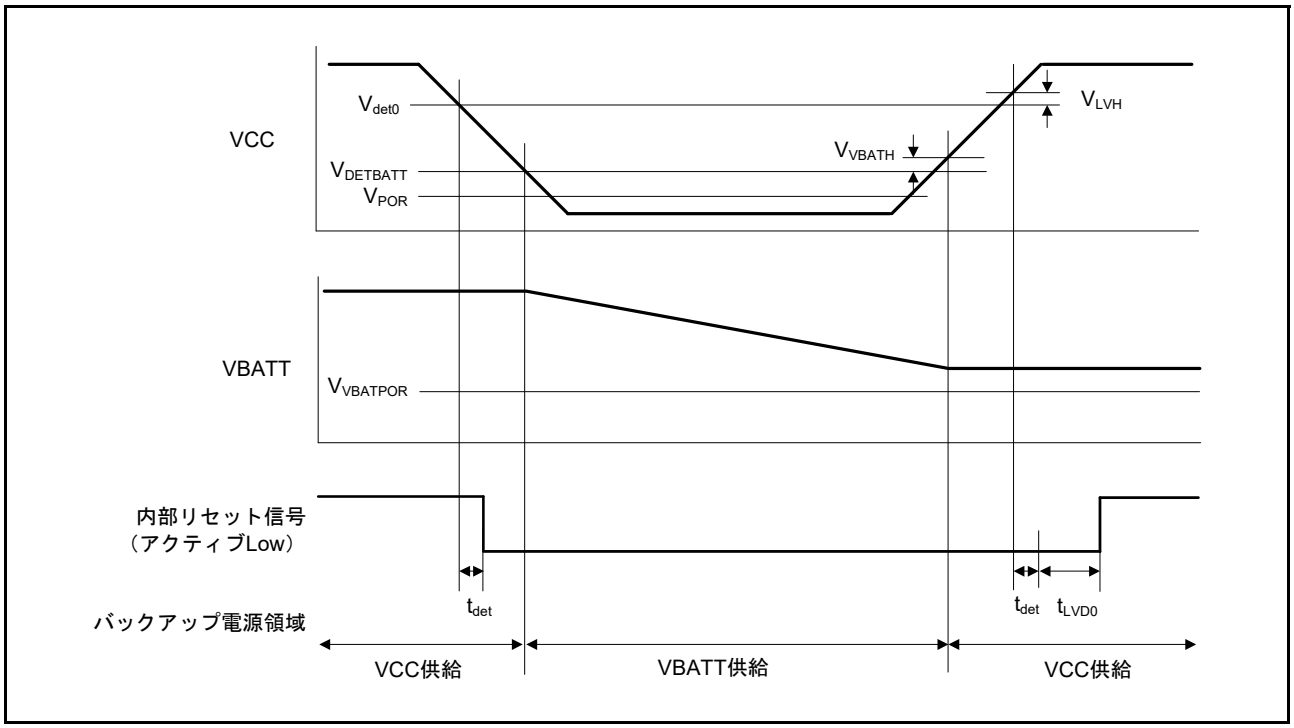


図 48.71 電源切り替えおよび LVD0 リセットタイミング

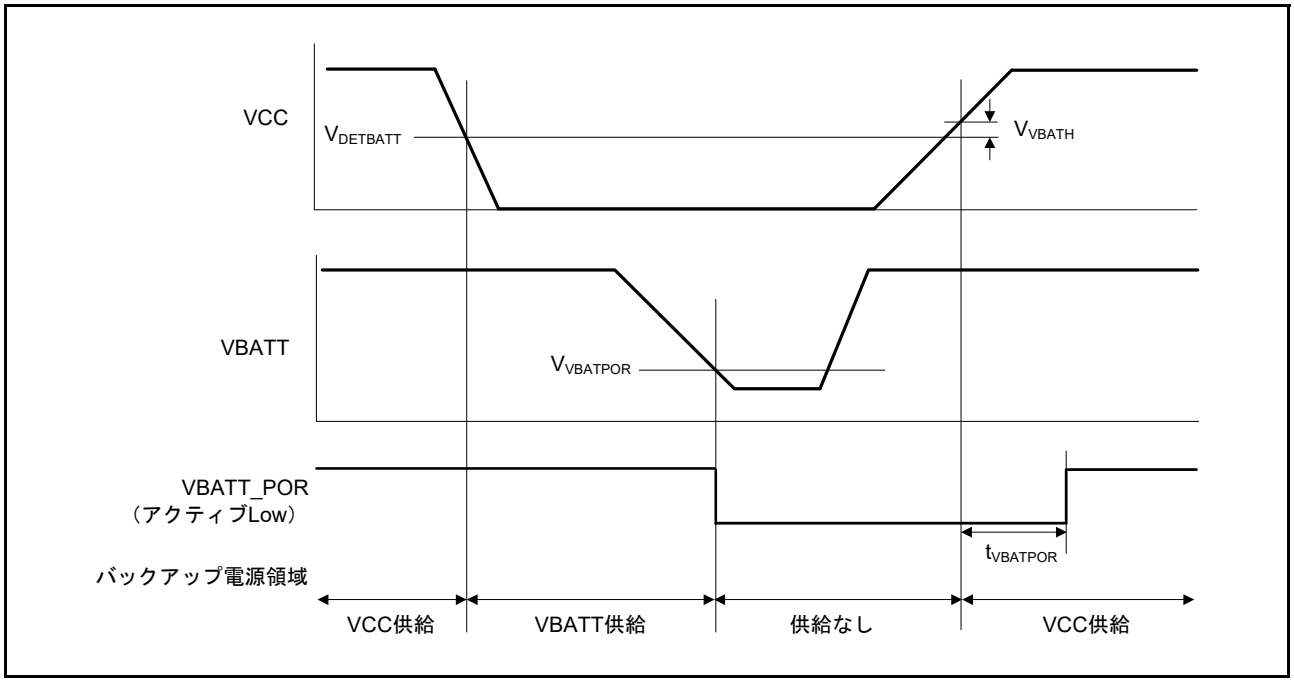


図 48.72　　VBATT_POR リセットタイミング

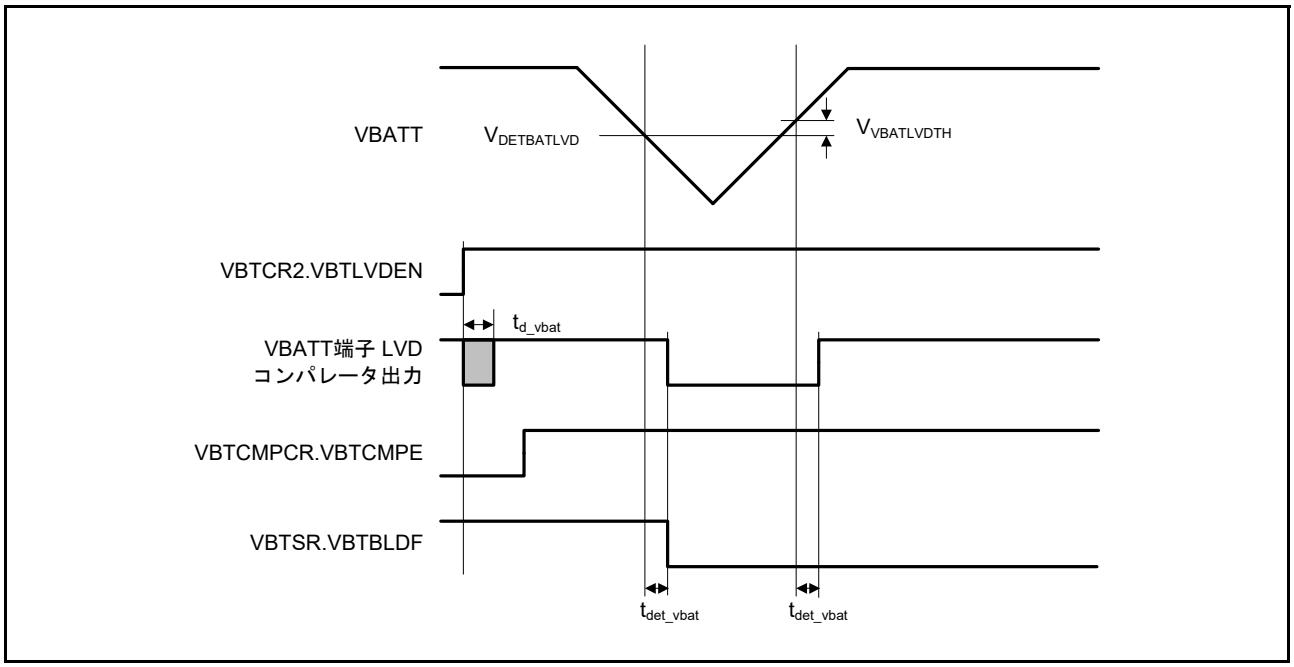


図 48.73　　VBATT 端子電圧検出回路タイミング

表 48.55 VBATTのI/O特性

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
VBATWIOnのI/O出力特性（n = 0）	VCC＞$V_{DETBATT}$	VCC = 2.7～3.6V	V_{OH}	VCC - 0.5	—	—	V	I_{OH} = -100μA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 100μA
		VCC = $V_{DETBATT}$～2.7V	V_{OH}	VCC - 0.3	—	—		I_{OH} = -50μA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 50μA
	VCC＜$V_{DETBATT}$	VBATT = 2.7～3.6V	V_{OH}	V_{BATT} - 0.5	—	—		I_{OH} = -100μA
			V_{OL}	—	—	0.5		I_{OL} = 100μA
		VBATT = 1.8～2.7V	V_{OH}	V_{BATT} - 0.3	—	—		I_{OH} = -50μA
			V_{OL}	—	—	0.3		I_{OL} = 50μA

48.11 CTSU 特性

表 48.56 CTSU特性
条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
TSCAP端子に接続された外付け容量	C_{tscap}	9	10	11	nF	—
TS端子の負荷容量	C_{base}	—	—	50	pF	—
許容大電流出力	ΣIoH	—	—	-24	mA	相互容量方式適用時

48.12 セグメント LCD コントローラ特性

48.12.1 抵抗分割方式

［スタティック表示モード］

表 48.57 抵抗分割方式LCD特性（1）
条件：VL4≦VCC≦3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
LCD駆動電圧	V_{L4}	2.0	—	VCC	V	—

［1/2 バイアス法、1/4 バイアス法］

表 48.58 抵抗分割方式LCD特性（2）
条件：VL4≦VCC≦3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
LCD駆動電圧	V_{L4}	2.7	—	VCC	V	—

［1/3 バイアス法］

表 48.59 抵抗分割方式LCD特性（3）
条件：VL4≦VCC≦3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
LCD駆動電圧	V_{L4}	2.5	—	VCC	V	—

48.13 コンパレータ特性

表 48.60 ACMPLP特性

条件：VCC = 1.8～3.6V

項目			シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
基準電圧範囲	標準モード	IVREFn (n = 0, 1)	VREF	0	—	VCC - 1.4	V	—
	ウィンドウモード（注2）	IVREF1	VREFH	1.4	—	VCC	V	—
		IVREF0	VREFL	0	—	VCC - 1.4	V	—
入力電圧範囲			VI	0	—	VCC	V	—
内部基準電圧			—	1.36	1.44	1.50	V	—
出力遅延時間	高速モード		Td	—	—	1.2	μs	VCC = 3.0 入力信号のスルーレート＞50mV/μs
	低速モード			—	—	5	μs	
	ウィンドウモード			—	—	2	μs	
オフセット電圧（注1）	高速モード		—	—	—	50	mV	—
	低速モード		—	—	—	40	mV	—
	ウィンドウモード		—	—	—	60	mV	—
動作安定待機時間			T_{cmp}	100	—	—	μs	—

注 1. 8 ビット DAC 出力が基準電圧として使用されている場合、オフセット電圧は最大 2.5 × VCC/256 まで増加します。

注 2. ウィンドウモードでは、IVREF1 - IVREF0 ≧ 0.2V でなければなりません。

48.14 OPAMP 特性

表 48.61 OPAMP特性

条件：VCC = AVCC0 = 1.8～3.6V（VCC＜2.0VのときAVCC0 = VCC）

項目	シンボル	条件		Min	Typ	Max	単位
コモンモード入力範囲	Vicm1	低消費電力モード		0.2	—	AVCC0 - 0.5	V
	Vicm2	高速モード		0.3	—	AVCC0 - 0.6	V
出力電圧範囲	Vo1	低消費電力モード		0.1	—	AVCC0 - 0.1	V
	Vo2	高速モード		0.1	—	AVCC0 - 0.1	V
入力オフセット電圧	Vioff	3σ		-10	—	10	mV
オープンゲイン	Av			60	120	—	dB
ゲイン帯域幅（GB）製品	GBW1	低消費電力モード		—	0.04	—	MHz
	GBW2	高速モード		—	1.7	—	MHz
位相マージン	PM	CL = 20pF		50	—	—	deg
ゲインマージン	GM	CL = 20pF		10	—	—	dB
入力換算ノイズ	Vnoise1	f = 1kHz	低消費電力モード	—	230	—	nV/√Hz
	Vnoise2	f = 10kHz		—	200	—	nV/√Hz
	Vnoise3	f = 1kHz	高速モード	—	90	—	nV/√Hz
	Vnoise4	f = 2kHz		—	70	—	nV/√Hz
電源低減比	PSRR			—	90	—	dB
コモンモード信号低減比	CMRR			—	90	—	dB
安定待機時間	Tstd1	CL = 20pF オペアンプのみ起動（注1）	低消費電力モード	650	—	—	µs
	Tstd2		高速モード	13	—	—	µs
	Tstd3	CL = 20pF オペアンプと基準電流回路が同時に起動	低消費電力モード	650	—	—	µs
	Tstd4		高速モード	13	—	—	µs
安定時間	Tset1	CL = 20pF	低消費電力モード	—	—	750	µs
	Tset2		高速モード	—	—	13	µs
スルーレート	Tslew1	CL = 20pF	低消費電力モード	—	0.02	—	V/µs
	Tslew2		高速モード	—	1.1	—	V/µs
負荷電流	Iload1	低消費電力モード		-100	—	100	µA
	Iload2	高速モード		-100	—	100	µA
負荷容量	CL			—	—	20	pF

注 1. 事前にオペアンプ基準電流回路が起動している場合

48.15 フラッシュメモリ特性

48.15.1 コードフラッシュメモリ特性

表 48.62 コードフラッシュ特性（1）

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
再プログラム／イレースサイクル（注1）		N_{PEC}	1000	—	—	回	—
データ保持時間	1000回のN_{PEC}の後	t_{DRP}	20（注2）（注3）	—	—	年	T_a = +85℃

注 1. 再プログラム／イレースサイクルは、ブロックごとの消去回数です。再プログラム／イレースサイクルが n 回（n = 1000）の場合、ブロックごとにそれぞれ n 回ずつ消去することが可能です。たとえば、2KB のブロックについて、それぞれ異なる番地に 8 バイト書き込みを 256 回に分けて行った後に、そのブロックを消去した場合も、再プログラム／イレースサイクル回数は 1 回と数えます。ただし、消去 1 回に対して、同一アドレスに複数回の書き込みを行うことはできません（上書き禁止）。

注 2. 弊社提供のフラッシュメモリプログラマおよびセルフプログラミングライブラリを使用した場合の特性です。

注 3. 信頼性試験から得られた結果です。

表 48.63 コードフラッシュ特性（2）

High-speedモード

条件：VCC = 2.7～3.6V

項目		シンボル	FCLK = 1MHz			FCLK = 32MHz			単位
			Min	Typ	Max	Min	Typ	Max	
プログラム時間	8バイト	t_{P8}	—	116	998	—	54	506	µs
イレース時間	2KB	t_{E2K}	—	9.03	287	—	5.67	222	ms
ブランクチェック時間	8バイト	t_{BC8}	—	—	56.8	—	—	16.6	µs
	2KB	t_{BC2K}	—	—	1899	—	—	140	µs
イレースサスペンド時間		t_{SED}	—	—	22.5	—	—	10.7	µs
スタートアップ領域入れ替え設定時間		t_{SAS}	—	21.7	585	—	12.1	447	ms
アクセスウィンドウ時間		t_{AWS}	—	21.7	585	—	12.1	447	ms
OCD／シリアルプログラマID設定時間		t_{OSIS}	—	21.7	585	—	12.1	447	ms
フラッシュメモリモード遷移待機時間1		t_{DIS}	2	—	—	2	—	—	µs
フラッシュメモリモード遷移待機時間2		t_{MS}	5	—	—	5	—	—	µs

注 . ソフトウェアによる命令実行からフラッシュメモリの各動作が起動するまでの時間は含みません。

注 . フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。

注 . FCLK の周波数精度は ± 3.5%でなければなりません。クロックソースの周波数精度を確認してください。

表 48.64　コードフラッシュ特性（3）

Middle-speedモード

条件：VCC = 1.8～3.6V、Ta = -40～+85℃

項目		シンボル	FCLK = 1MHz			FCLK = 8MHz			単位
			Min	Typ	Max	Min	Typ	Max	
プログラム時間	8バイト	t_{P8}	—	157	1411	—	101	966	µs
イレース時間	2KB	t_{E2K}	—	9.10	289	—	6.10	228	ms
ブランクチェック時間	8バイト	t_{BC8}	—	—	87.7	—	—	52.5	µs
	2KB	t_{BC2K}	—	—	1930	—	—	414	µs
イレースサスペンド時間		t_{SED}	—	—	32.7	—	—	21.6	µs
スタートアップ領域入れ替え設定時間		t_{SAS}	—	22.5	592	—	14.0	464	ms
アクセスウィンドウ時間		t_{AWS}	—	22.5	592	—	14.0	464	ms
OCD／シリアルプログラマID設定時間		t_{OSIS}	—	22.5	592	—	14.0	464	ms
フラッシュメモリモード遷移待機時間1		t_{DIS}	2	—	—	2	—	—	µs
フラッシュメモリモード遷移待機時間2		t_{MS}	720	—	—	720	—	—	ns

注．　ソフトウェアによる命令実行からフラッシュメモリの各動作が起動するまでの時間は含みません。

注．　フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。

注．　FCLK の周波数精度は ± 3.5%でなければなりません。クロックソースの周波数精度を確認してください。

48.15.2 データフラッシュメモリ特性

表 48.65 データフラッシュ特性（1）

項目		シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
再プログラム／イレースサイクル（注1）		N_{DPEC}	100000	1000000	—	回	—
データ保持時間	10000回のN_{DPEC}の後	t_{DDRP}	20（注2）（注3）	—	—	年	Ta = +85℃
	100000回のN_{DPEC}の後		5（注2）（注3）	—	—	年	
	1000000回のN_{DPEC}の後		—	1（注2）（注3）	—	年	Ta = +25℃

注 1. 再プログラム／イレースサイクルは、ブロックごとの消去回数です。再プログラム／イレースサイクルが n 回（n = 100,000）の場合、ブロックごとにそれぞれ n 回ずつ消去することが可能です。たとえば、1 バイトのブロックについて、それぞれ異なる番地に 1 バイト書き込みを 1,000 回に分けて行った後に、そのブロックを消去した場合も、再プログラム／イレースサイクル回数は 1 回と数えます。ただし、消去 1 回に対して、同一アドレスに複数回の書き込みを行うことはできません。（上書きはしないでください。）
注 2. 弊社提供のフラッシュメモリプログラマおよびセルフプログラミングライブラリを使用した場合の特性です。
注 3. 信頼性試験から得られた結果です。

表 48.66 データフラッシュ特性（2）

High-speedモード
条件：VCC = 2.7～3.6V

項目		シンボル	FCLK = 4MHz			FCLK = 32MHz			単位
			Min	Typ	Max	Min	Typ	Max	
プログラム時間	1バイト	t_{DP1}	—	52.4	463	—	42.1	387	μs
イレース時間	1KB	t_{DE1K}	—	8.98	286	—	6.42	237	ms
ブランクチェック時間	1バイト	t_{DBC1}	—	—	24.3	—	—	16.6	μs
	1KB	t_{DBC1K}	—	—	1872	—	—	512	μs
イレース実行中のサスペンド時間		t_{DSED}	—	—	13.0	—	—	10.7	μs
データフラッシュ STOP復帰時間		t_{DSTOP}	5	—	—	5	—	—	μs

注 . ソフトウェアによる命令実行からフラッシュメモリの各動作が起動するまでの時間は含みません。
注 . フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。
注 . FCLK の周波数精度は ± 3.5%でなければなりません。クロックソースの周波数精度を確認してください。

表 48.67 データフラッシュ特性（3）

Middle-speedモード
条件：VCC = 1.8～3.6V、Ta = -40～+85℃

項目		シンボル	FCLK = 4MHz			FCLK = 8MHz			単位
			Min	Typ	Max	Min	Typ	Max	
プログラム時間	1バイト	t_{DP1}	—	94.7	886	—	89.3	849	μs
イレース時間	1KB	t_{DE1K}	—	9.59	299	—	8.29	273	ms
ブランクチェック時間	1バイト	t_{DBC1}	—	—	56.2	—	—	52.5	μs
	1KB	t_{DBC1K}	—	—	2.17	—	—	1.51	ms
イレース実行中のサスペンド時間		t_{DSED}	—	—	23.0	—	—	21.7	μs
データフラッシュ STOP復帰時間		t_{DSTOP}	720	—	—	720	—	—	ns

注 . ソフトウェアによる命令実行からフラッシュメモリの各動作が起動するまでの時間は含みません。
注 . フラッシュメモリのプログラム／イレース時、FCLK の下限周波数は 1MHz です。FCLK を 4MHz 未満で使用する場合、設定可能な周波数は 1MHz、2MHz、3MHz のいずれかです。1.5MHz などの非整数周波数は使用できません。
注 . FCLK の周波数精度は ± 3.5%でなければなりません。クロックソースの周波数精度を確認してください。

48.16 ジョイントテストアクショングループ（JTAG）

表 48.68 JTAG（デバッグ）特性（1）
条件：VCC = 2.4～3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
TCKクロックサイクル時間	t_{TCKcyc}	80	—	—	ns	図 48.74
TCKクロックHighレベルパルス幅	t_{TCKH}	35	—	—	ns	
TCKクロックLowレベルパルス幅	t_{TCKL}	35	—	—	ns	
TCKクロック立ち上がり時間	t_{TCKr}	—	—	5	ns	
TCKクロック立ち下がり時間	t_{TCKf}	—	—	5	ns	
TMSセットアップ時間	t_{TMSS}	16	—	—	ns	図 48.75
TMSホールド時間	t_{TMSH}	16	—	—	ns	
TDIセットアップ時間	t_{TDIS}	16	—	—	ns	
TDIホールド時間	t_{TDIH}	16	—	—	ns	
TDOデータ遅延時間	t_{TDOD}	—	—	70	ns	

表 48.69 JTAG（デバッグ）特性（2）
条件：VCC = 1.8～2.4V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
TCKクロックサイクル時間	t_{TCKcyc}	250	—	—	ns	図 48.74
TCKクロックHighレベルパルス幅	t_{TCKH}	120	—	—	ns	
TCKクロックLowレベルパルス幅	t_{TCKL}	120	—	—	ns	
TCKクロック立ち上がり時間	t_{TCKr}	—	—	5	ns	
TCKクロック立ち下がり時間	t_{TCKf}	—	—	5	ns	
TMSセットアップ時間	t_{TMSS}	50	—	—	ns	図 48.75
TMSホールド時間	t_{TMSH}	50	—	—	ns	
TDIセットアップ時間	t_{TDIS}	50	—	—	ns	
TDIホールド時間	t_{TDIH}	50	—	—	ns	
TDOデータ遅延時間	t_{TDOD}	—	—	150	ns	

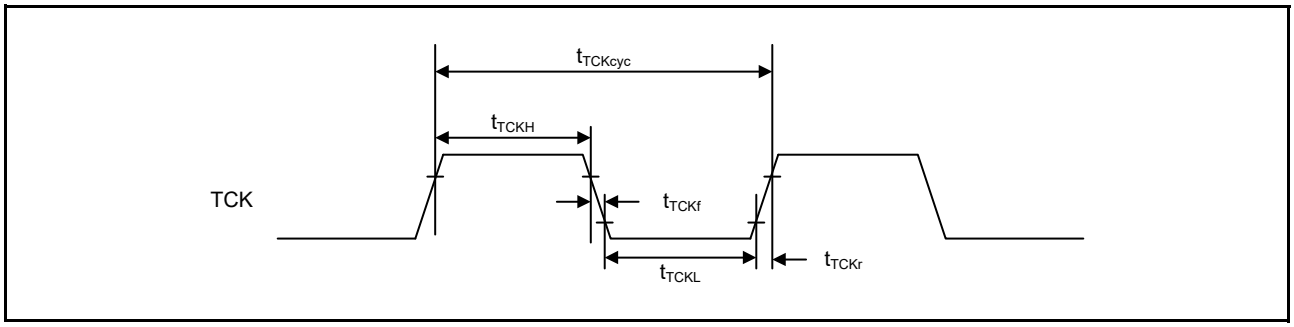


図 48.74 JTAG TCK タイミング

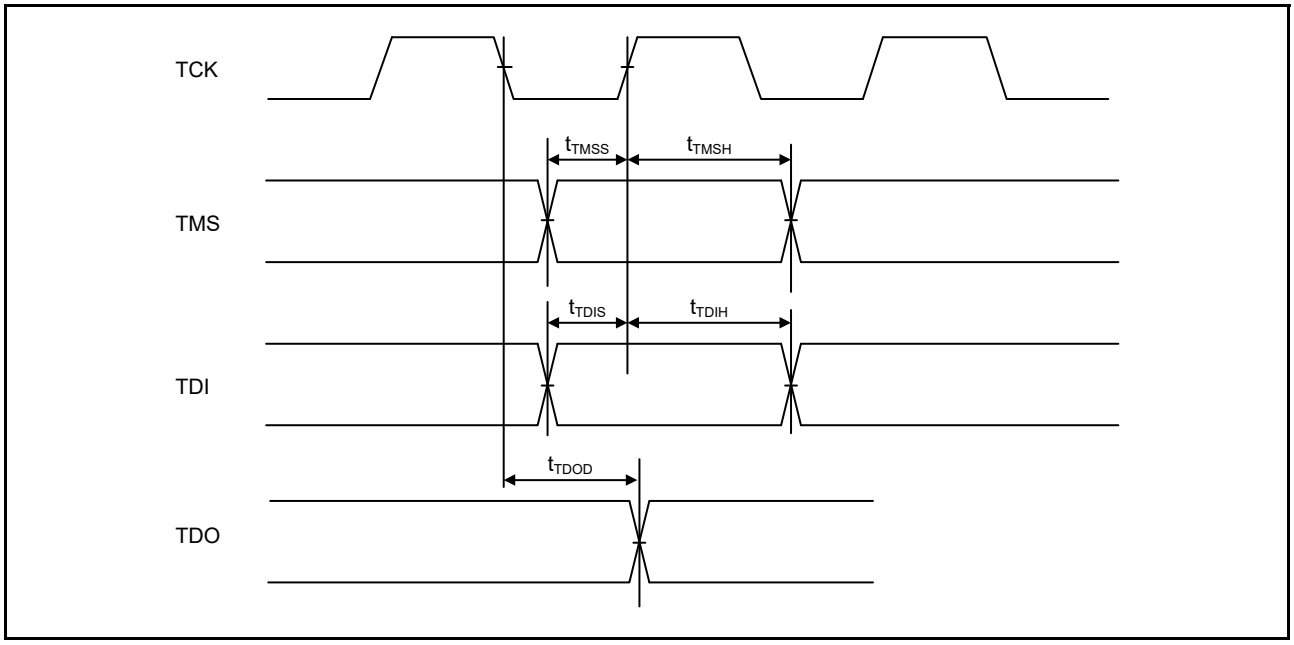


図 48.75 JTAG 入出力タイミング

48.16.1 シリアルワイヤデバッグ（SWD）

表 48.70 SWD特性（1）
条件：VCC = 2.4～3.6V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
SWCLKクロックサイクル時間	$t_{SWCKcyc}$	80	—	—	ns	図 48.76
SWCLKクロックHighレベルパルス幅	t_{SWCKH}	35	—	—	ns	
SWCLKクロックLowレベルパルス幅	t_{SWCKL}	35	—	—	ns	
SWCLKクロック立ち上がり時間	t_{SWCKr}	—	—	5	ns	
SWCLKクロック立ち下がり時間	t_{SWCKf}	—	—	5	ns	
SWDIOセットアップ時間	t_{SWDS}	16	—	—	ns	図 48.77
SWDIOホールド時間	t_{SWDH}	16	—	—	ns	
SWDIOデータ遅延時間	t_{SWDD}	2	—	70	ns	

表 48.71 SWD特性（2）
条件：VCC = 1.8～2.4V

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
SWCLKクロックサイクル時間	$t_{SWCKcyc}$	250	—	—	ns	図 48.76
SWCLKクロックHighレベルパルス幅	t_{SWCKH}	120	—	—	ns	
SWCLKクロックLowレベルパルス幅	t_{SWCKL}	120	—	—	ns	
SWCLKクロック立ち上がり時間	t_{SWCKr}	—	—	5	ns	
SWCLKクロック立ち下がり時間	t_{SWCKf}	—	—	5	ns	
SWDIOセットアップ時間	t_{SWDS}	50	—	—	ns	図 48.77
SWDIOホールド時間	t_{SWDH}	50	—	—	ns	
SWDIOデータ遅延時間	t_{SWDD}	2	—	150	ns	

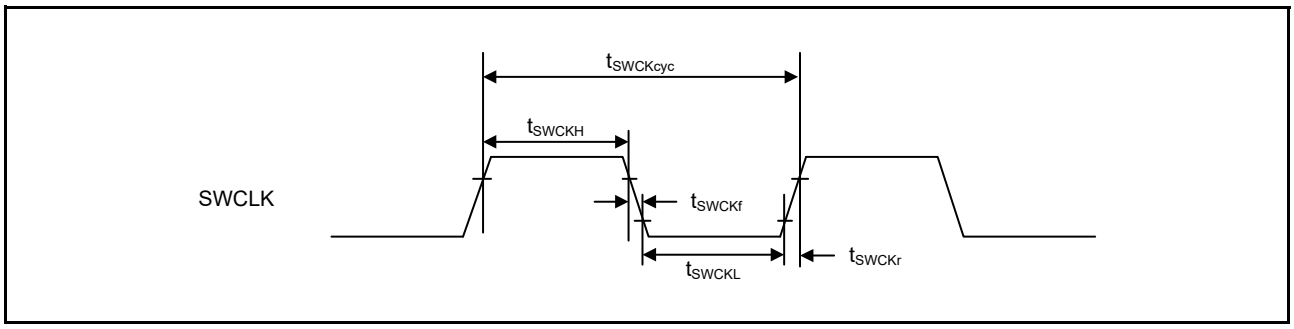


図 48.76 SWD SWCLK タイミング

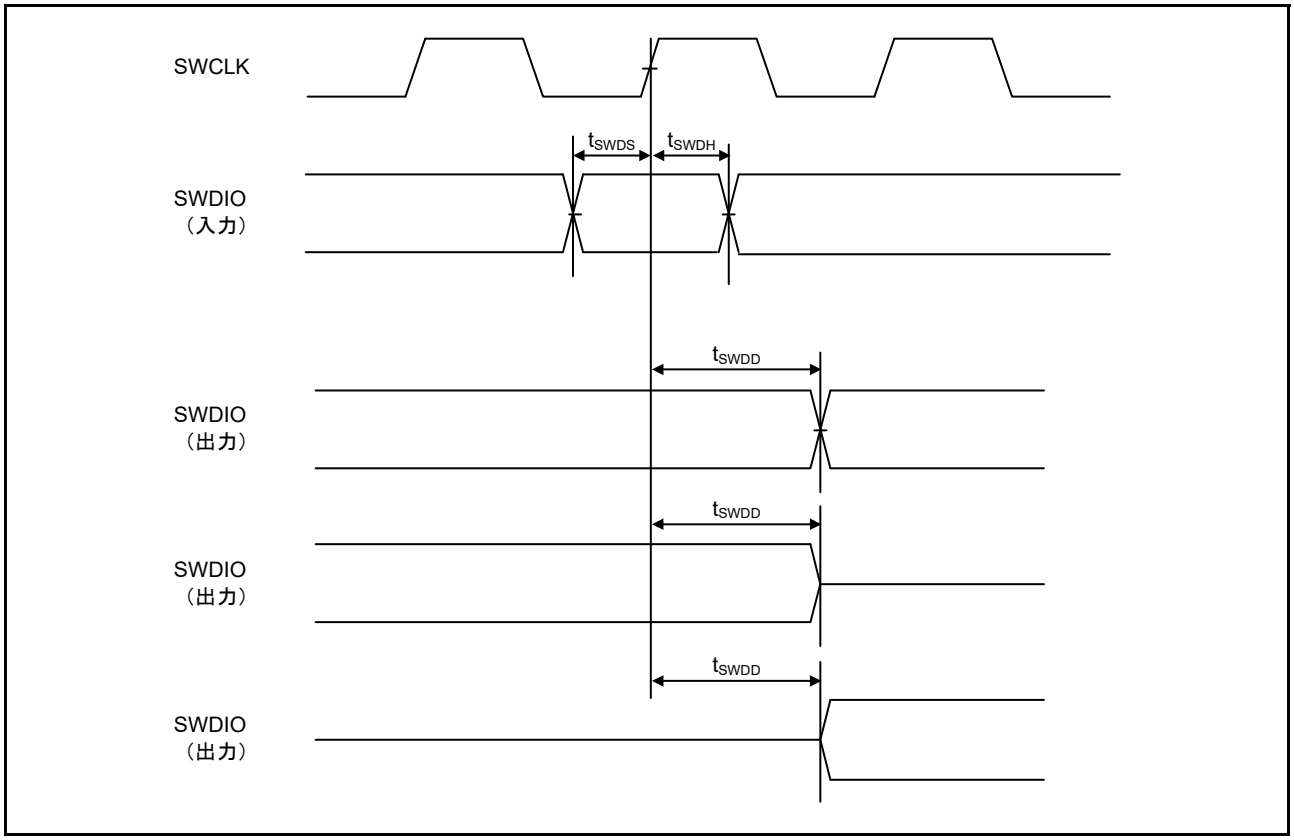


図 48.77　SWD 入出力タイミング

48.17 BLE 特性

48.17.1 送信特性

表 48.72 送信特性

条件：VCC = VCC_RF = AVCC_RF = 3.3V、VSS = VSS_RF = 0V、Ta = +25℃

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件
周波数範囲	RF_{CF}	2402	—	2480	MHz	
データレート	RF_{DATA_2M}	—	2	—	Mbps	
	RF_{DATA_1M}	—	1	—	Mbps	
	RF_{DATA_500k}	—	500	—	kbps	
	RF_{DATA_125k}	—	125	—	kbps	
最大送信出力電力	RF_{POWER}	—	0	2	dBm	0dBm出力モード
		—	4	6	dBm	4dBm出力モード
出力周波数誤差	RF_{TXFERR}	-10	—	10	ppm	（注1）

注 . BLE 以外の端子、機能を使用していない場合の特性です。

注 1. 水晶振動子の製造ばらつき、温度ドリフト、経年劣化などによる周波数誤差は含まない。

48.17.2 受信特性（2Mbps）

表 48.73 受信特性

条件：VCC = VCC_RF = AVCC_RF = 3.3V、VSS = VSS_RF = 0V、Ta = +25℃

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件	
入力周波数	RF_{RXFIN_2M}	2402	—	2480	MHz		
最大入力レベル	RF_{LEVL_2M}	-10	4	—	dBm	（注1）	
受信感度	RF_{STY_2M}	—	-92	—	dBm	（注1）	
副次発射強度	RF_{RXSP_2M}	—	-72	-57	dBm	30MHz～1GHz	
		—	-54	-47	dBm	1GHz～12GHz	
同一チャネル除去比	RF_{CCR_2M}	—	-8	—	dB	Prf = -67dBm（注1）	
隣接チャネル除去比	RF_{ADCR_2M}	—	2	—	dB	Prf = -67dBm（注1）	±2MHz
		—	35	—	dB		±4MHz
		—	39	—	dB		±6MHz
Blocking	RF_{BLK_2M}	—	-1	—	dBm	Prf = -67dBm（注1）	30MHz～2000MHz
		—	-25	—	dBm		2000MHz～2399MHz
		—	-21	—	dBm		2484MHz～3000MHz
		—	-10	—	dBm		＞3000MHz
許容周波数偏差（注2）	RF_{RXFER_2M}	-120	—	120	ppm	（注1）	
RSSI精度	RF_{RSSIS_2M}	—	±4	—	dB	-70dBm≦Prf≦-10dBm	

注 . BLE 以外の端子、機能を使用していない場合の特性です。

注 1. PER ≦ 30.8%, 37byte payload

注 2. RF 入力信号のセンタ周波数とチップ内部で発生するキャリア周波数の差

48.17.3 受信特性（1Mbps）

表 48.74 受信特性

条件：VCC = VCC_RF = AVCC_RF = 3.3V、VSS = VSS_RF = 0V、Ta = +25℃

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件	
入力周波数	RF_{RXFIN_1M}	2402	—	2480	MHz		
最大入力レベル	RF_{LEVL_1M}	-10	4	—	dBm	（注1）	
受信感度	RF_{STY_1M}	—	-95	—	dBm	（注1）	
副次発射強度	RF_{RXSP_1M}	—	-72	-57	dBm	30MHz～1GHz	
		—	-54	-47	dBm	1GHz～12GHz	
同一チャネル除去比	RF_{CCR_1M}	—	-7	—	dB	Prf = -67dBm（注1）	
隣接チャネル除去比	RF_{ADCR_1M}	—	-1	—	dB	Prf = -67dBm（注1）	±1MHz
		—	34	—	dB		±2MHz
		—	35	—	dB		±3MHz
Blocking	RF_{BLK_1M}	—	0	—	dBm	Prf = -67dBm（注1）	30MHz～2000MHz
		—	-24	—	dBm		2000MHz～2399MHz
		—	-20	—	dBm		2484MHz～3000MHz
		—	-4	—	dBm		＞3000MHz
許容周波数偏差（注2）	RF_{RXFER_1M}	-120	—	120	ppm	（注1）	
RSSI精度	RF_{RSSIS_1M}	—	±4	—	dB	-70dBm≦Prf≦-10dBm	

注 . BLE 以外の端子、機能を使用していない場合の特性です。
注 1. PER ≦ 30.8%, 37byte payload
注 2. RF 入力信号のセンタ周波数とチップ内部で発生するキャリア周波数の差

48.17.4 受信特性（500kbps）

表 48.75 受信特性

条件：VCC = VCC_RF = AVCC_RF = 3.3V、VSS = VSS_RF = 0V、Ta = +25℃

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件	
入力周波数	RF_{RXFIN_500k}	2402	—	2480	MHz		
最大入力レベル	RF_{LEVL_500k}	-10	4	—	dBm	（注1）	
受信感度	RF_{STY_500k}	—	-100	—	dBm	（注1）	
副次発射強度	RF_{RXSP_500k}	—	-72	-57	dBm	30MHz～1GHz	
		—	-54	-47	dBm	1GHz～12GHz	
同一チャネル除去比	RF_{CCR_500k}	—	-4	—	dB	Prf = -72dBm（注1）	
隣接チャネル除去比	RF_{ADCR_500k}	—	6	—	dB	Prf = -72dBm（注1）	±1MHz
		—	36	—	dB		±2MHz
		—	42	—	dB		±3MHz
Blocking	RF_{BLK_500k}	—	0	—	dBm	Prf = -72dBm（注1）	30MHz～2000MHz
		—	-23	—	dBm		2000MHz～2399MHz
		—	-20	—	dBm		2484MHz～3000MHz
		—	-7	—	dBm		＞3000MHz
許容周波数偏差（注2）	RF_{RXFER_500k}	-120	—	120	ppm	（注1）	
RSSI精度	RF_{RSSIS_500k}	—	±4	—	dB	-70dBm≦Prf≦-10dBm	

注 . BLE 以外の端子、機能を使用していない場合の特性です。
注 1. PER ≦ 30.8%, 37byte payload
注 2. RF 入力信号のセンタ周波数とチップ内部で発生するキャリア周波数の差

48.17.5 受信特性（125kbps）

表 48.76 受信特性

条件：VCC = VCC_RF = AVCC_RF = 3.3V、VSS = VSS_RF = 0V、Ta = +25℃

項目	シンボル	Min	Typ	Max	単位	測定条件	
入力周波数	RF_{RXFIN_125k}	2402	—	2480	MHz		
最大入力レベル	RF_{LEVL_125k}	-10	4	—	dBm	（注1）	
受信感度	RF_{STY_125k}	—	-105	—	dBm	（注1）	
副次発射強度	RF_{RXSP_125k}	—	-72	-57	dBm	30MHz～1GHz	
		—	-54	-47	dBm	1GHz～12GHz	
同一チャネル除去比	RF_{CCR_125k}	—	-2	—	dB	Prf = -79dBm（注1）	
隣接チャネル除去比	RF_{ADCR_125k}	—	12	—	dB	Prf = -79dBm（注1）	±1MHz
		—	39	—	dB		±2MHz
		—	45	—	dB		±3MHz
Blocking	RF_{BLK_125k}	—	0	—	dBm	Prf = -79dBm（注1）	30MHz～2000MHz
		—	-23	—	dBm		2000MHz～2399MHz
		—	-20	—	dBm		2484MHz～3000MHz
		—	-1	—	dBm		＞3000MHz
許容周波数偏差（注2）	RF_{RXFER_125k}	-120	—	120	ppm	（注1）	
RSSI精度	RF_{RSSIS_125k}	—	±4	—	dB	-70dBm≦Prf≦-10dBm	

注 . BLE 以外の端子、機能を使用していない場合の特性です。
注 1. PER ≦ 30.8%, 37byte payload
注 2. RF 入力信号のセンタ周波数とチップ内部で発生するキャリア周波数の差

付録 1. 各プロセスモードのポート状態

表 1.1 各プロセスモードのポート状態 (1/2)

ポート名	リセット	ソフトウェアスタンバイモード	
		OPE = 0	OPE = 1
P004/IRQ3	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P010/IRQ14	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P011/IRQ15	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P014/DA0	Hi-Z	[DA0出力（DAOE0 = 1）] DA出力保持 [上記以外（DAOE0 = 0）] Keep-O	
P015/IRQ7	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P100/RXD0/CMPIN0/KR00/IRQ2/AGTIO0	Hi-Z	[AGTIO0選択] AGTIO0出力（注2） [上記以外] Keep-O（注1）	
P101/CMPREF0/KR01/IRQ1	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P102/CMPIN1/KR02/AGTO0	Hi-Z	[AGTO0選択] AGTO0出力（注2） [上記以外] Keep-O（注1）	
P103/CMPREF1/KR03	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P104/RXD0/KR04/IRQ1	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P105/KR05/IRQ0	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P106/KR06	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P107/KR07	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P108/TMS	プルアップ	Keep-O	
P109/TDO/CLKOUT	TDO出力	[CLKOUT選択] CLKOUT出力 [上記以外] Keep-O	
P110/IRQ3/TDI/VCOUT	プルアップ	[ACMPLP選択] VCOUT出力 [上記以外] Keep-O（注1）	
P200/NMI	Hi-Z	Hi-Z	
P201	プルアップ	Keep-O	
P204/SCL0/USB_OVRCURB/AGTIO1	Hi-Z	[AGTIO1選択] AGTIO1出力（注2） [上記以外] Keep-O（注1）	
P205/USB_OVRCURA/IRQ1/CLKOUT/AGTO1	Hi-Z	[CLKOUT選択] CLKOUT出力 [AGTO1選択] AGTO1出力（注2） [上記以外] Keep-O（注1）	
P206/WAIT/IRQ0	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P212/IRQ3/EXTAL	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P213/IRQ2/XTAL	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P214/XCOUT	Hi-Z	[サブクロック発振器を選択] サブクロック発振器動作 [上記以外] Hi-Z	
P215/XCIN	Hi-Z	[サブクロック発振器を選択] サブクロック発振器動作 [上記以外] Hi-Z	

表 1.1　各プロセスモードのポート状態 (2/2)

ポート名	リセット	ソフトウェアスタンバイモード	
		OPE = 0	OPE = 1
P300/TCK	プルアップ	Keep-O	
P402/RTCIC0/IRQ4	Hi-Z	[上記以外] Keep-O（注1）	
P404	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P407/SDA0/USB_VBUS/RTCOUT/AGTIO0	Hi-Z	[RTCOUT選択] RTCOUT出力 [AGTIO0選択] AGTIO0出力（注2） [上記以外] Keep-O（注1）	
P409/IRQ6	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P414/IRQ9	Hi-Z	Keep-O（注1）	
P501/CMPIN1/USB_OVRCURA/IRQ11/ AGTOB0	Hi-Z	[AGTOB0選択] AGTOB0出力（注2） [上記以外] Keep-O（注1）	
P914/USB_DP	Hi-Z	Keep-O	
P915/USB_DM	Hi-Z	Keep-O	

H：High レベル

L：Low レベル

Hi-Z: ハイインピーダンス

Keep-O：出力端子は前の値を保持します。入力端子はハイインピーダンスになります。

注 .　LCD コントローラ／ドライバ端子機能（COM0 ～ COM3 および SEG6, SEG9, SEG11, SEG12, SEG20, SEG23, SEG49, SEG52, SEG51）が設定され、LOCO または SOSC が SLCDSCKCR.LCDSCKSEL[2:0] ビットで選択されている場合 LCD 出力を保持します。

注 1.　端子が外部割り込み端子として使用され、ソフトウェアスタンバイのキャンセル要因に指定されている場合、入力が許可されます。

注 2.　LOCO または SOSC がカウントソースとして選択されている間、AGTIO 出力が許可されます。

付録 2. 外形寸法図

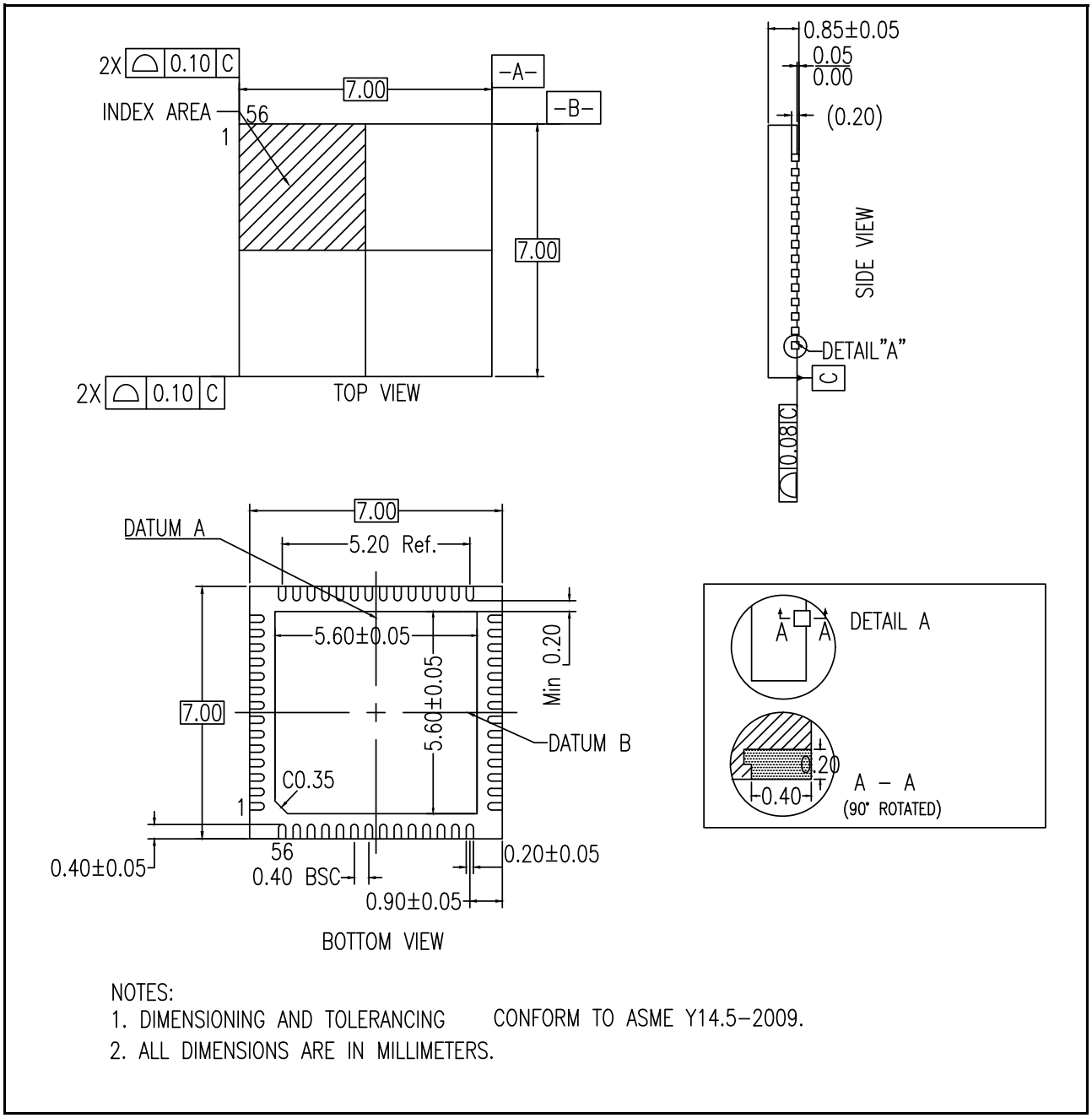
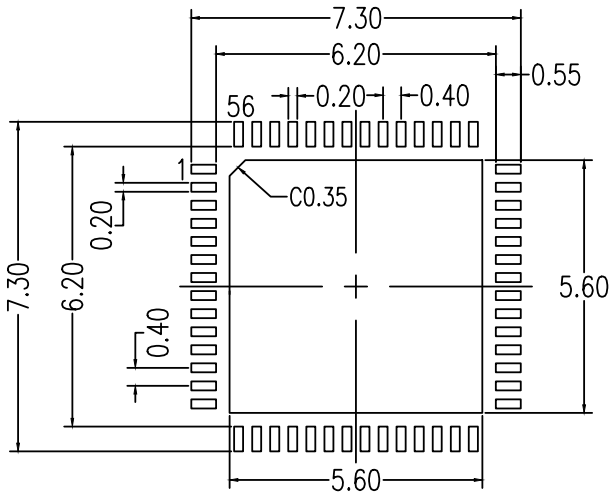


図 2.1 56-pin QFN



RECOMMENDED LAND PATTERN DIMENSION

NOTES:
1. ALL DIMENSIONS ARE IN MM. ANGLES IN DEGREES.
2. TOP DOWN VIEW. AS VIEWED ON PCB.

図 2.2 ランドパタン

付録 3. I/O レジスタ

本付録は、I/O レジスタのアドレス、アクセスサイクル、リセット値を機能ごとに説明します。

3.1 周辺機能のベースアドレス

本節では本マニュアルでとりあげた周辺機能のベースアドレスについて説明します。

表 3.1 に、各周辺機能の名前、説明、ベースアドレスを示します。

表 3.1 周辺機能のベースアドレス (1/2)

名称	内容	ベースアドレス
MMPU	バスマスタMPU	0x40000000
SMPU	バススレーブMPU	0x40000C00
SPMON	CPUスタックポインタモニタ	0x40000D00
MMF	メモリミラー機能	0x40001000
SRAM	SRAMコントロール	0x40002000
BUS	バスコントロール	0x40003000
DMAC0	ダイレクトメモリアクセスコントローラ0	0x40005000
DMAC1	ダイレクトメモリアクセスコントローラ1	0x40005040
DMAC2	ダイレクトメモリアクセスコントローラ2	0x40005080
DMAC3	ダイレクトメモリアクセスコントローラ3	0x400050C0
DMA	DMACモジュール起動	0x40005200
DTC	データトランスファコントローラ	0x40005400
ICU	割り込みコントローラ	0x40006000
DBG	デバッグ機能	0x4001B000
FCACHE	フラッシュキャッシュ	0x4001C000
SYSTEM	システム制御	0x4001E000
PORT0	ポート0コントロールレジスタ	0x40040000
PORT1	ポート1コントロールレジスタ	0x40040020
PORT2	ポート2コントロールレジスタ	0x40040040
PORT3	ポート3コントロールレジスタ	0x40040060
PORT4	ポート4コントロールレジスタ	0x40040080
PORT5	ポート5コントロールレジスタ	0x400400A0
PORT9	ポート9コントロールレジスタ	0x40040120
PFS	Pmn端子機能コントロールレジスタ	0x40040800
PMISC	その他のポートコントロールレジスタ	0x40040D00
ELC	イベントリンクコントローラ	0x40041000
POEG	GPT用ポートアウトプットイネーブルモジュール	0x40042000
RTC	リアルタイムクロック	0x40044000
WDT	ウォッチドッグタイマ	0x40044200
IWDT	独立ウォッチドッグタイマ	0x40044400
CAC	クロック周波数精度測定回路	0x40044600
MSTP	モジュールストップコントロールB、C、D	0x40047000
CAN0	CAN0モジュール	0x40050000
IIC0	Inter-Integrated Circuit 0	0x40053000
IIC1	Inter-Integrated Circuit 1	0x40053100
DOC	データ演算回路	0x40054100
ADC140	14ビットA/Dコンバータ	0x4005C000

表 3.1 周辺機能のベースアドレス (2/2)

名称	内容	ベースアドレス
DAC12	12ビットD/Aコンバータ	0x4005E000
SCI0	シリアルコミュニケーションインタフェース0	0x40070000
SCI1	シリアルコミュニケーションインタフェース1	0x40070020
SCI4	シリアルコミュニケーションインタフェース4	0x40070080
SCI9	シリアルコミュニケーションインタフェース9	0x40070120
SPI0	シリアルペリフェラルインタフェース0	0x40072000
SPI1	シリアルペリフェラルインタフェース1	0x40072100
CRC	CRC演算器	0x40074000
GPT320	汎用PWMタイマ0（32ビット）	0x40078000
GPT321	汎用PWMタイマ1（32ビット）	0x40078100
GPT322	汎用PWMタイマ2（32ビット）	0x40078200
GPT323	汎用PWMタイマ3（32ビット）	0x40078300
GPT164	汎用PWMタイマ4（16ビット）	0x40078400
GPT165	汎用PWMタイマ5（16ビット）	0x40078500
GPT168	汎用PWMタイマ8（16ビット）	0x40078800
GPT_OPS	出力相切り替えコントローラ	0x40078FF0
KINT	キー割り込み機能	0x40080000
CTSU	静電容量式タッチセンシングユニット	0x40081000
SLCDC	セグメントLCDコントローラ／ドライバ	0x40082000
AGT0	非同期汎用タイマ0	0x40084000
AGT1	非同期汎用タイマ1	0x40084100
ACMPLP	低消費電力アナログコンパレータ	0x40085E00
OPAMP	オペアンプ	0x40086000
USBFS	USB2.0フルスピードモジュール	0x40090000
DAC8	8ビットD/Aコンバータ	0x4009E000
FLCN	フラッシュI/Oレジスタ	0x407EC000
TSN	温度センサ	0x407EC000

名前 = 周辺機能の名前
内容 = 周辺機能
ベースアドレス = 最下位の予約アドレスまたは周辺機能で使用されるアドレス

3.2 アクセスサイクル

本項では、本マニュアルに記載の I/O レジスタのアクセスサイクル情報を示します。

以下の情報は表 3.2 および表 3.3 に適用されます。

- レジスタは関連するモジュールごとに分類されます
- アクセスサイクル数は、指定の基準クロックのサイクル数を示しています
- 内部 I/O 領域では、レジスタに割り当てられていない予約アドレスにはアクセスしないでください。アクセスした場合、動作は保証されません
- I/O アクセスサイクル数は、内部周辺バスのバスサイクル、分周クロック同期化サイクル、および各モジュールのウェイトサイクルによって異なります。分周クロック同期化サイクルは、ICLK と PCLK 間の周波数比によって異なります
- ICLK 周波数と PCLK 周波数が等しいとき、分周クロック同期化サイクル数は常に一定です
- ICLK 周波数が PCLK 周波数より大きいとき、分周クロック同期化サイクル数に少なくとも 1PCLK サイクル追加されます

注 . CPU からのレジスタアクセスが、外部メモリへの命令フェッチや、DMAC や DTC のような他のバスマスタからのバスアクセスと競合せずに実行された場合サイクル数に適用されます。

表 3.2 に、GPT 以外のモジュールのレジスタアクセスサイクルを示します。

表 3.2 GPT 以外のモジュールのアクセスサイクル (1/2)

周辺機能	アドレス		アクセスサイクル数				サイクル単位	関連機能
			ICLK = PCLK		ICLK＞PCLK（注1）			
	開始	終了	読み出し	書き込み	読み出し	書き込み		
MMPU, SMPU, SPMON, MMF, SRAM, BUS, DMACn, DMA, DTC, ICU, DBG, FCACHE	4000 0000h	4001 CFFFh	2				ICLK	メモリプロテクションユニット、メモリミラー機能、SRAM、バス、DMA コントローラ、データ トランスファコントローラ、割り込みコントローラ、CPU、フラッシュメモリ
SYSTEM	4001 E000h	4001 E3FFh	3				ICLK	低消費電力モード、リセット、低電圧検出、クロック発生回路、レジスタライトプロテクション機能
SYSTEM	4001 E400h	4001 E6FFh	7		5～7		PCLKB	低消費電力モード、リセット、低電圧検出、バッテリバックアップ機能
PORTn, PFS, PMISC, ELC, POEG, RTC, WDT, IWDT, CAC, MSTP	4004 0000h	4004 7FFFh	3		2～3		PCLKB	I/O ポート、イベントリンクコントローラ、GPT 用ポートアウトプットイネーブル、リアルタイムクロック、ウォッチドッグタイマ、独立ウォッチドッグタイマ、クロック周波数精度測定回路、モジュールストップコントロール
CAN0, IICn, DOC, ADC140, DAC12	4004 E000h	4005 EFFFh	3		2～3		PCLKB	コントローラエリアネットワークモジュール、I^2C バスインタフェース、データ演算回路、14 ビット A/D コンバータ、12 ビット D/A コンバータ
SCIn	4007 0000h	4007 0EFFh	5（注2）		2～3（注2）		PCLKA	シリアルコミュニケーションインタフェース
SPIn	4007 2000h	4007 2FFFh	5（注3）		2～3（注3）		PCLKA	シリアルペリフェラルインタフェース
CRC	4007 4000h	4007 4FFFh	3		2～3		PCLKA	CRC 演算器
GPT32n, GPT_OPS	4007 8000h	4007 8FFFh	表 3.3（注4） を参照してください。				PCLKA	汎用 PWM タイマ
FLCN	407E C000h	407E CFFFh	7		7		ICLK	フラッシュ I/O レジスタ
TSN	407E C000h	407E CFFFh	7		7		ICLK	温度センサ

表 3.2 GPT以外のモジュールのアクセスサイクル (2/2)

周辺機能	アドレス		アクセスサイクル数				サイクル単位	関連機能
			ICLK = PCLK		ICLK＞PCLK（注1）			
	開始	終了	読み出し	書き込み	読み出し	書き込み		
KINT, CTSU, SLCDC	4008 0000h	4008 1FFFh	2		1～2		PCLKB	キー割り込み機能、静電容量式タッチセンシングユニット、セグメントLCDコントローラ
AGTn	4008 4000h	4008 4FFFh	3		2～3		PCLKB	非同期汎用タイマ
ACMPLP, OPAMP	4008 5000h	4008 6FFFh	2		1～2		PCLKB	低消費電力アナログコンパレータ、オペアンプ
USBFS	4009 0000h	4009 03FFh	4		3～4		PCLKB	USB2.0 フルスピードモジュール
USBFS	4009 0400h	4009 04FFh	3		2～3		PCLKB	USB2.0 フルスピードモジュール

注 1. PCLK サイクル数が整数でない場合（たとえば 1.5）、最小値は小数点以下を切り捨て、最大値は小数点を四捨五入します。（たとえば、1.5 ～ 2.5 は 1 ～ 3）

注 2. 16 ビットレジスタ（FTDRHL、FRDRHL、FCR、FDR、LSR、CDR) へのアクセス時、アクセスは表 3.2 に示す値よりも 2 サイクル多くなります。8 ビットレジスタ（FTDRH、FTDRL、FRDRH、FRDRL）へのアクセス時、アクセスサイクルは表 3.2 に示すとおりです。

注 3. 32 ビットレジスタ（SPDR）へのアクセス時、表 3.2 に示す値よりも 2 サイクル多くなります。8 ビットまたは 16 ビットレジスタ（SPDR_HA）へのアクセス時、アクセスサイクルは表 3.2 に示すとおりです。

注 4. アクセスサイクルは、表 3.3 に示すように、ICLK、PCLKA、PCLKD 間の周波数比によって異なります。

表 3.3 に、GPT モジュールのレジスタアクセスサイクルを示します。

表 3.3 GPTモジュールのアクセスサイクル

ICLKとPCLK間の周波数比	アクセスサイクル数		サイクル単位
	読み出し	書き込み	
ICLK＞PCLKD = PCLKA	5～6	3～4	PCLKA
ICLK＞PCLKD＞PCLKA	3～4	2～3	PCLKA
PCLKD = ICLK = PCLKA	6	4	PCLKA
PCLKD = ICLK＞PCLKA	2～3	1～2	PCLKA
PCLKD＞ICLK = PCLKA	4	3	PCLKA
PCLKD＞ICLK＞PCLKA	2～3	1～2	PCLKA

3.3 レジスタの説明

本項では、本マニュアルに記載のレジスタに関する情報を示します。

表 3.4 に各レジスタのアドレスオフセット、アドレスサイズ、アクセス権、およびリセット値を示します。

表 3.4 レジスタの説明 (1/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
MMPU	—	—	—	MMPUCTLA	バスマスタMPUコントロールレジスタA	0x000	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				MMPUPTA	グループAレジスタの保護	0x102	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	16	0x010	0-15	MMPUACA%s	グループA領域%sアクセスコントロールレジスタ	0x200	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	16	0x010	0-15	MMPUSA%s	グループA領域%s開始アドレスレジスタ	0x204	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000003
	16	0x010	0-15	MMPUEA%s	グループA領域%s終了アドレスレジスタ	0x208	32	読み出し／書き込み	0x00000003	0x00000003
SMPU	—	—	—	SMPUCTL	スレーブMPUコントロールレジスタ	0x00	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SMPUMBIU	MBIUアクセスコントロールレジスタ	0x10	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SMPUFBIU	FBIUアクセスコントロールレジスタ	0x14	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SMPUSRAM0	SRAM0アクセスコントロールレジスタ	0x18	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	3	0x4	0, 2, 6	SMPUP%sBIU	P%sBIUアクセスコントロールレジスタ	0x20	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	—	—	—	SMPUEXBIU	EXBIUアクセスコントロールレジスタ	0x30	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SMPUEXBIU2	EXBIU2アクセスコントロールレジスタ	0x34	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
SPMON	—	—	—	MSPMPUOAD	スタックポインタモニタ検出後動作レジスタ	0x00	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				MSPMPUCTL	スタックポインタモニタアクセスコントロールレジスタ	0x04	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFEFF
				MSPMPUPT	スタックポインタモニタ保護レジスタ	0x06	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				MSPMPUSA	メインスタックポインタ（MSP）モニタ開始アドレスレジスタ	0x08	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000003
				MSPMPUEA	メインスタックポインタ（MSP）モニタ終了アドレスレジスタ	0x0C	32	読み出し／書き込み	0x00000003	0x00000003
				PSPMPUOAD	スタックポインタモニタ検出後動作レジスタ	0x10	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PSPMPUCTL	スタックポインタモニタアクセスコントロールレジスタ	0x14	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFEFF
				PSPMPUPT	スタックポインタモニタ保護レジスタ	0x16	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PSPMPUSA	プロセススタックポインタ（PSP）モニタ開始アドレスレジスタ	0x18	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000003
				PSPMPUEA	プロセススタックポインタ（PSP）モニタ終了アドレスレジスタ	0x1C	32	読み出し／書き込み	0x00000003	0x00000003
MMF	—	—	—	MMSFR	MemMirror特殊機能レジスタ	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				MMEN	MemMirrorイネーブルレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF

表 3.4　レジスタの説明 (2/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
SRAM	—	—	—	PARIOAD	SRAMパリティエラー検出後動作レジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SRAMPRCR	SRAMプロテクトレジスタ	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECCMODE	ECC動作モードコントロールレジスタ	0xC0	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECC2STS	ECC 2ビットエラーステータスレジスタ	0xC1	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECC1STSEN	ECC 1ビットエラー情報更新イネーブルレジスタ	0xC2	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECC1STS	ECC 1ビットエラーステータスレジスタ	0xC3	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECCPRCR	ECCプロテクトレジスタ	0xC4	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECCPRCR2	ECCプロテクトレジスタ2	0xD0	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECCETST	ECCテストコントロールレジスタ	0xD4	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ECCOAD	SRAM ECCエラー検出後動作レジスタ	0xD8	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
DMAC0-3	—	—	—	DMSAR	DMA転送元アドレスレジスタ	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				DMDAR	DMA転送先アドレスレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				DMCRA	DMA転送カウントレジスタ	0x08	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				DMCRB	DMAブロック転送カウントレジスタ	0x0C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DMTMD	DMA転送モードレジスタ	0x10	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DMINT	DMA割り込み設定レジスタ	0x13	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DMAMD	DMAアドレスモードレジスタ	0x14	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DMOFR	DMAオフセットレジスタ	0x18	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				DMCNT	DMA転送イネーブルレジスタ	0x1C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DMREQ	DMAソフトウェア起動レジスタ	0x1D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DMSTS	DMAステータスレジスタ	0x1E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
DMA	—	—	—	DMAST	DMACモジュール起動レジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
DTC	—	—	—	DTCCR	DTCコントロールレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x08	0xFF
				DTCVBR	DTCベクタベースレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				DTCST	DTCモジュール起動レジスタ	0x0C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DTCSTS	DTCステータスレジスタ	0x0E	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
ICU	16	0x1	0-15	IRQCR%s	IRQコントロールレジスタ%s	0x000	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	—	—	—	NMICR	NMI端子割り込みコントロールレジスタ	0x100	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				NMIER	ノンマスカブル割り込みイネーブルレジスタ	0x120	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				NMICLR	ノンマスカブル割り込みステータスクリアレジスタ	0x130	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				NMISR	ノンマスカブル割り込みステータスレジスタ	0x140	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				WUPEN	ウェイクアップ割り込みイネーブルレジスタ	0x1A0	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				SELSR0	SYSイベントリンク設定レジスタ	0x200	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	4	0x4	0-3	DELSR%s	DMACイベントリンク設定レジスタ%s	0x280	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	32	0x4	0-31	IELSR%s	ICUイベントリンク設定レジスタ%s	0x300	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (3/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
DBG	—	—	—	DBGSTR	デバッグステータスレジスタ	0x000	32	読み出し専用	0x00000000	0xFFFFFFFF
				DBGSTOPCR	デバッグストップコントロールレジスタ	0x010	32	読み出し／書き込み	0x00000003	0xFFFFFFFF
				TRACECTR	トレースコントロールレジスタ	0x020	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
FCACHE	—	—	—	FCACHEE	フラッシュキャッシュイネーブルレジスタ	0x100	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				FCACHEIV	フラッシュキャッシュインバリデートレジスタ	0x104	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
SYSTEM	—	—	—	SBYCR	スタンバイコントロールレジスタ	0x00C	16	読み出し／書き込み	0x4000	0xFFFF
				MSTPCRA	モジュールストップコントロールレジスタA	0x01C	32	読み出し／書き込み	0xFFBFFFBE	0xFFFFFFFF
				SCKDIVCR	システムクロック分周コントロールレジスタ	0x020	32	読み出し／書き込み	0x44044444	0xFFFFFFFF
				SCKSCR	システムクロックソースコントロールレジスタ	0x026	8	読み出し／書き込み	0x01	0xFF
				PLLCR	PLLコントロールレジスタ	0x02A	8	読み出し／書き込み	0x01	0xFF
				PLLCCR2	PLLクロックコントロールレジスタ2	0x02B	8	読み出し／書き込み	0x07	0xFF
				MEMWAIT	メモリウェイトサイクルコントロールレジスタ	0x031	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				MOSCCR	メインクロック発振器コントロールレジスタ	0x032	8	読み出し／書き込み	0x01	0xFF
				HOCOCR	高速オンチップオシレータコントロールレジスタ	0x036	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFE
				MOCOCR	中速オンチップオシレータコントロールレジスタ	0x038	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				OSCSF	発振安定フラグレジスタ	0x03C	8	読み出し専用	0x00	0xFE
				CKOCR	クロックアウトコントロールレジスタ	0x03E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				TRCKCR	トレースクロックコントロールレジスタ	0x03F	8	読み出し／書き込み	0x01	0xFF
				OSTDCR	発振停止検出コントロールレジスタ	0x040	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				OSTDSR	発振停止検出ステータスレジスタ	0x041	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SLCDSCKCR	セグメントLCDソースクロックコントロールレジスタ	0x050	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				MOCOUTCR	MOCOユーザトリミングコントロールレジスタ	0x061	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				HOCOUTCR	HOCOユーザトリミングコントロールレジスタ	0x062	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SNZCR	スヌーズコントロールレジスタ	0x092	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SNZEDCR	スヌーズ終了コントロールレジスタ	0x094	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SNZREQCR	スヌーズ要求コントロールレジスタ	0x098	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				FLSTOP	フラッシュ動作コントロールレジスタ	0x09E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				PSMCR	パワーセーブメモリコントロールレジスタ	0x09F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				OPCCR	動作電力コントロールレジスタ	0x0A0	8	読み出し／書き込み	0x02	0xFF
				MOSCWTCR	メインクロック発振器ウェイトコントロールレジスタ	0x0A2	8	読み出し／書き込み	0x05	0xFF
				HOCOWTCR	高速オンチップオシレータウェイトコントロールレジスタ	0x0A5	8	読み出し／書き込み	0x05	0xFF
				SOPCCR	サブ動作電力コントロールレジスタ	0x0AA	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				RSTSR1	リセットステータスレジスタ1	0x0C0	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xE0F8
				BKRACR	バックアップレジスタアクセスコントロールレジスタ	0x0C6	8	読み出し／書き込み	0x06	0xFF

表 3.4 レジスタの説明 (4/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
SYSTEM	—	—	—	USBCKCR	USBクロックコントロールレジスタ	0x0D0	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	2	0x2	1,2	LVD%sCR1	電圧モニタ%s回路コントロールレジスタ1	0x0E0	8	読み出し／書き込み	0x01	0xFF
	2	0x2	1,2	LVD%sSR	電圧モニタ%s回路ステータスレジスタ	0x0E1	8	読み出し／書き込み	0x02	0xFF
	—	—	—	PRCR	プロテクトレジスタ	0x3FE	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SYOCDCR	システムコントロールOCDコントロールレジスタ	0x40E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				RSTSR0	リセットステータスレジスタ0	0x410	8	読み出し／書き込み	0x00	0xF0
				RSTSR2	リセットステータスレジスタ2	0x411	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFE
				MOMCR	メインクロック発振器モードコントロールレジスタ	0x413	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				LVCMPCR	電圧モニタ回路コントロールレジスタ	0x417	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				LVDLVLR	電圧検出レベル選択レジスタ	0x418	8	読み出し／書き込み	0x07	0xFF
	2	0x1	1,2	LVD%sCR0	電圧モニタ%s回路コントロールレジスタ0	0x41A	8	読み出し／書き込み	0x80	0xF7
	—	—	—	VBTCR1	VBATTコントロールレジスタ1	0x41F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SOSCCR	サブクロック発振器コントロールレジスタ	0x480	8	読み出し／書き込み	0x01	0xFF
				SOMCR	サブクロック発振器モードコントロールレジスタ	0x481	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				LOCOCR	低速オンチップオシレータコントロールレジスタ	0x490	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				LOCOUTCR	LOCOユーザトリミングコントロールレジスタ	0x492	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTCR2	VBATTコントロールレジスタ2	0x4B0	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTSR	VBATTステータスレジスタ	0x4B1	8	読み出し／書き込み	0x01	0xEC
				VBTCMPCR	VBATTコンパレータコントロールレジスタ	0x4B2	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTLVDICR	VBATT端子低電圧検出割り込みコントロールレジスタ	0x4B4	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTWCTLR	VBATTウェイクアップコントロールレジスタ	0x4B6	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTWCH0OTSR	VBATTウェイクアップI/O 0出力トリガ選択レジスタ	0x4B8	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTICTLR	VBATT入力コントロールレジスタ	0x4BB	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTOCTLR	VBATT出力コントロールレジスタ	0x4BC	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTWTER	VBATTウェイクアップトリガ要因イネーブルレジスタ	0x4BD	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTWEGR	VBATTウェイクアップトリガ要因エッジレジスタ	0x4BE	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				VBTWFR	VBATTウェイクアップトリガ要因フラグレジスタ	0x4BF	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	512	0x1	0-511	VBTBKR[%s]	VBATTバックアップレジスタ[%s]	0x500	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00

表 3.4 レジスタの説明 (5/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
PORT0,5,9	—	—	—	PCNTR1	ポートコントロールレジスタ1	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				PODR	出力データレジスタ	0x00	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PDR	データ方向レジスタ	0x02	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PCNTR2	ポートコントロールレジスタ2	0x04	32	読み出し専用	0x00000000	0xFFFF0000
				PIDR	入力データレジスタ	0x06	16	読み出し専用	0x0000	0x0000
				PCNTR3	ポートコントロールレジスタ3	0x08	32	書き込み専用	0x00000000	0xFFFFFFFF
				PORR	出力リセットレジスタ	0x08	16	書き込み専用	0x0000	0xFFFF
				POSR	出力設定レジスタ	0x0A	16	書き込み専用	0x0000	0xFFFF
PORT1-4	—	—	—	PCNTR1	ポートコントロールレジスタ1	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				PODR	出力データレジスタ	0x00	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PDR	データ方向レジスタ	0x02	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PCNTR2	ポートコントロールレジスタ2	0x04	32	読み出し専用	0x00000000	0xFFFF0000
				EIDR	イベント入力データレジスタ	0x04	16	読み出し専用	0x0000	0x0000
				PIDR	入力データレジスタ	0x06	16	読み出し専用	0x0000	0x0000
				PCNTR3	ポートコントロールレジスタ3	0x08	32	書き込み専用	0x00000000	0xFFFFFFFF
				PORR	出力設定レジスタ	0x08	16	書き込み専用	0x0000	0xFFFF
				POSR	出力リセットレジスタ	0x0A	16	書き込み専用	0x0000	0xFFFF
				PCNTR4	ポートコントロールレジスタ4	0x0C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				EORR	イベント出力設定レジスタ	0x0C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				EOSR	イベント出力リセットレジスタ	0x0E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
PFS	—	—	—	P004PFS	ポート00%s端子機能選択レジスタ	0x004	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
	—	—	—	P004PFS_HA	ポート00%s端子機能選択レジスタ	0x006	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	—	—	—	P004PFS_BY	ポート00%s端子機能選択レジスタ	0x007	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
	4	0x4	10, 11, 14, 15	P04PFS	ポート0%s端子機能選択レジスタ	0x028	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
	4	0x4	10, 11, 14, 15	P04PFS_HA	ポート0%s端子機能選択レジスタ	0x02A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	4	0x4	10, 11, 14, 15	P04PFS_BY	ポート0%s端子機能選択レジスタ	0x02B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
	8	0x4	0-7	P10%sPFS	ポート10%s端子機能選択レジスタ	0x040	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
	8	0x4	0-7	P10%sPFS_HA	ポート10%s端子機能選択レジスタ	0x042	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	8	0x4	0-7	P10%sPFS_BY	ポート10%s端子機能選択レジスタ	0x043	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
	—	—	—	P108PFS	ポート108端子機能選択レジスタ	0x060	32	読み出し／書き込み	0x00010010	0xFFFFFFFD
				P108PFS_HA	ポート108端子機能選択レジスタ	0x062	16	読み出し／書き込み	0x0010	0xFFFD
				P108PFS_BY	ポート108端子機能選択レジスタ	0x063	8	読み出し／書き込み	0x10	0xFD
				P109PFS	ポート109端子機能選択レジスタ	0x064	32	読み出し／書き込み	0x00010000	0xFFFFFFFD
				P109PFS_HA	ポート109端子機能選択レジスタ	0x066	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
				P109PFS_BY	ポート109端子機能選択レジスタ	0x067	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD

表 3.4 レジスタの説明 (6/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
PFS	—	—	—	P110PFS	ポート110端子機能選択レジスタ	0x068	32	読み出し／書き込み	0x00010010	0xFFFFFFFD
				P110PFS_HA	ポート110端子機能選択レジスタ	0x06A	16	読み出し／書き込み	0x0010	0xFFFD
				P110PFS_BY	ポート110端子機能選択レジスタ	0x06B	8	読み出し／書き込み	0x10	0xFD
				P111PFS	ポート1%s端子機能選択レジスタ	0x06C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
				P111PFS_HA	ポート1%s端子機能選択レジスタ	0x06E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
				P111PFS_BY	ポート1%s端子機能選択レジスタ	0x06F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
				P200PFS	ポート200端子機能選択レジスタ	0x080	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
				P200PFS_HA	ポート200端子機能選択レジスタ	0x082	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
				P200PFS_BY	ポート200端子機能選択レジスタ	0x083	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
				P201PFS	ポート201端子機能選択レジスタ	0x084	32	読み出し／書き込み	0x00000010	0xFFFFFFFD
				P201PFS_HA	ポート201端子機能選択レジスタ	0x086	16	読み出し／書き込み	0x0010	0xFFFD
				P201PFS_BY	ポート201端子機能選択レジスタ	0x087	8	読み出し／書き込み	0x10	0xFD
	3	0x4	4-6	P20%sPFS	ポート20%s端子機能選択レジスタ	0x088	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
	3	0x4	4-6	P20%sPFS_HA	ポート20%s端子機能選択レジスタ	0x08A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	3	0x4	4-6	P20%sPFS_BY	ポート20%s端子機能選択レジスタ	0x08B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
	4	0x4	12-15	P2%sPFS	ポート2%s端子機能選択レジスタ	0x0B0	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
	4	0x4	12-15	P2%sPFS_HA	ポート2%s端子機能選択レジスタ	0x0B2	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	4	0x4	12-15	P2%sPFS_BY	ポート2%s端子機能選択レジスタ	0x0B3	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
	—	—	—	P300PFS	ポート300端子機能選択レジスタ	0x0C0	32	読み出し／書き込み	0x00010010	0xFFFFFFFD
				P300PFS_HA	ポート300端子機能選択レジスタ	0x0C2	16	読み出し／書き込み	0x0010	0xFFFD
				P300PFS_BY	ポート300端子機能選択レジスタ	0x0C3	8	読み出し／書き込み	0x10	0xFD
	4	0x4	2, 4, 7	P40%sPFS	ポート40%s端子機能選択レジスタ	0x100	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
	4	0x4	2, 4, 7	P40%sPFS_HA	ポート40%s端子機能選択レジスタ	0x102	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	4	0x4	2, 4, 7	P40%sPFS_BY	ポート40%s端子機能選択レジスタ	0x103	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
	—	—	—	P409PFS	ポート409端子機能選択レジスタ	0x124	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
				P409PFS_HA	ポート409端子機能選択レジスタ	0x126	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
				P409PFS_BY	ポート409端子機能選択レジスタ	0x127	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
				P414PFS	ポート4%s端子機能選択レジスタ	0x128	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
				P414PFS_HA	ポート4%s端子機能選択レジスタ	0x12A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
				P414PFS_BY	ポート4%s端子機能選択レジスタ	0x12B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
				P501PFS	ポート50%s端子機能選択レジスタ	0x140	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFD
				P501PFS_HA	ポート50%s端子機能選択レジスタ	0x142	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
				P501PFS_BY	ポート50%s端子機能選択レジスタ	0x143	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD

表 3.4 レジスタの説明 (7/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
PFS	2	0x4	14,15	P9%sPFS	ポート9%s端子機能選択レジスタ	0x278	32	読み出し／書き込み	0x00010000	0xFFFFFFFD
	2	0x4	14,15	P9%sPFS_HA	ポート9%s端子機能選択レジスタ	0x27A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFD
	2	0x4	14,15	P9%sPFS_BY	ポート9%s端子機能選択レジスタ	0x27B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFD
PMISC	—	—	—	PWPR	書き込みプロテクトレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFF
ELC	—	—	—	ELCR	イベントリンクコントローラレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	2	0x2	0,1	ELSEGR%s	イベントリンクソフトウェアイベント発生レジスタ%s	0x02	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFF
	10	0x4	0-9	ELSR%s	イベントリンク設定レジスタ%s	0x10	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	—	—	—	ELSR12	イベントリンク設定レジスタ12	0x40	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	5	0x4	14-18	ELSR%s	イベントリンク設定レジスタ%s	0x48	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
POEG	2	0x100	A,B	POEGG%s	POEGグループ%s設定レジスタ	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
RTC	—	—	—	R64CNT	64Hzカウンタ	0x00	8	読み出し専用	0x00	0x80
				RSECCNT	秒カウンタ	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT0	バイナリカウンタ0	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RMINCNT	分カウンタ	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT1	バイナリカウンタ1	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RHRCNT	時カウンタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT2	バイナリカウンタ2	0x06	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RWKCNT	曜日カウンタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT3	バイナリカウンタ3	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RDAYCNT	日カウンタ	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xC0
				RMONCNT	月カウンタ	0x0C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xE0
				RYRCNT	年カウンタ	0x0E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFF00
				RSECAR	秒アラームレジスタ	0x10	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT0AR	バイナリカウンタ0アラームレジスタ	0x10	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RMINAR	分アラームレジスタ	0x12	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT1AR	バイナリカウンタ1アラームレジスタ	0x12	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RHRAR	時アラームレジスタ	0x14	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT2AR	バイナリカウンタ2アラームレジスタ	0x14	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RWKAR	曜日アラームレジスタ	0x16	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT3AR	バイナリカウンタ3アラームレジスタ	0x16	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RDAYAR	日アラームレジスタ	0x18	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT0AER	バイナリカウンタ0アラームイネーブルレジスタ	0x18	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RMONAR	月アラームレジスタ	0x1A	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT1AER	バイナリカウンタ1アラームイネーブルレジスタ	0x1A	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RYRAR	年アラームレジスタ	0x1C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFF00

表 3.4 レジスタの説明 (8/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
RTC	—	—	—	BCNT2AER	バイナリカウンタ2アラームイネーブルレジスタ	0x1C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFF00
				RYRAREN	年アラームイネーブルレジスタ	0x1E	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				BCNT3AER	バイナリカウンタ3アラームイネーブルレジスタ	0x1E	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
				RCR1	RTCコントロールレジスタ1	0x22	8	読み出し／書き込み	0x00	0x0A
				RCR2	RTCコントロールレジスタ2	0x24	8	読み出し／書き込み	0x00	0x0E
				RCR4	RTCコントロールレジスタ4	0x28	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFE
				RFRH	周波数レジスタH	0x2A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFE
				RFRL	周波数レジスタL	0x2C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0x0000
				RADJ	時計誤差補正レジスタ	0x2E	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	3	0x2	0-2	RTCCR%s	時間キャプチャコントロールレジスタ%s	0x40	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	RSECCP%s	秒キャプチャレジスタ%s	0x52	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	BCNT0CP%s	BCNT0キャプチャレジスタ%s	0x52	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	RMINCP%s	分キャプチャレジスタ%s	0x54	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	BCNT1CP%s	BCNT1キャプチャレジスタ%s	0x54	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	RHRCP%s	時キャプチャレジスタ%s	0x56	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	BCNT2CP%s	BCNT2キャプチャレジスタ%s	0x56	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	RDAYCP%s	日キャプチャレジスタ%s	0x5A	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	BCNT3CP%s	BCNT3キャプチャレジスタ%s	0x5A	8	読み出し専用	0x00	0x00
	3	0x10	0-2	RMONCP%s	月キャプチャレジスタ%s	0x5C	8	読み出し専用	0x00	0x00
WDT	—	—	—	WDTRR	WDTリフレッシュレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				WDTCR	WDTコントロールレジスタ	0x02	16	読み出し／書き込み	0x33F3	0xFFFF
				WDTSR	WDTステータスレジスタ	0x04	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				WDTRCR	WDTリセットコントロールレジスタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFF
				WDTCSTPR	WDTカウント停止コントロールレジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFF
				IWDTRR	IWDTリフレッシュレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				IWDTSR	IWDTステータスレジスタ	0x04	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
CAC	—	—	—	CACR0	CACコントロールレジスタ0	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CACR1	CACコントロールレジスタ1	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CACR2	CACコントロールレジスタ2	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CAICR	CAC割り込みコントロールレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CASTR	CACステータスレジスタ	0x04	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				CAULVR	CAC上限値設定レジスタ	0x06	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CALLVR	CAC下限値設定レジスタ	0x08	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CACNTBR	CACカウンタバッファレジスタ	0x0A	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (9/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
MSTP	—	—	—	MSTPCRB	モジュールストップコントロールレジスタB	0x00	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				MSTPCRC	モジュールストップコントロールレジスタC	0x04	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				MSTPCRD	モジュールストップコントロールレジスタD	0x08	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
CAN0	32	0x10	0-31	MB%s_ID	メールボックスレジスタ	0x200	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000000
	32	0x10	0-31	MB%s_DL	メールボックスレジスタ	0x204	16	読み出し／書き込み	0x0000	0x0000
	32	0x10	0-31	MB%s_D0	メールボックスレジスタ	0x206	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D1	メールボックスレジスタ	0x207	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D2	メールボックスレジスタ	0x208	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D3	メールボックスレジスタ	0x209	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D4	メールボックスレジスタ	0x20A	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D5	メールボックスレジスタ	0x20B	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D6	メールボックスレジスタ	0x20C	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_D7	メールボックスレジスタ	0x20D	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00
	32	0x10	0-31	MB%s_TS	メールボックスレジスタ	0x20E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0x0000
	8	0x4	0-7	MKR[%s]	マスクレジスタ	0x400	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000000
	2	0x4	0,1	FIDCR%s	FIFO受信ID比較レジスタ	0x420	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000000
	—	—	—	MKIVLR	マスク無効レジスタ	0x428	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000000
				MIER	メールボックス割り込みイネーブルレジスタ	0x42C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000000
				MIER_FIFO	FIFOメールボックスモード用メールボックス割り込みイネーブルレジスタ	0x42C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0x00000000
	32	0x1	0-31	MCTL_TX[%s]	送信用メッセージコントロールレジスタ	0x820	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	32	0x1	0-31	MCTL_RX[%s]	受信用メッセージコントロールレジスタ	0x820	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	—	—	—	CTLR	コントロールレジスタ	0x840	16	読み出し／書き込み	0x0500	0xFFFF
				STR	ステータスレジスタ	0x842	16	読み出し専用	0x0500	0xFFFF
				BCR	ビットコンフィグレーションレジスタ	0x844	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				RFCR	受信FIFOコントロールレジスタ	0x848	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFF
				RFPCR	受信FIFOポインタコントロールレジスタ	0x849	8	書き込み専用	0x00	0x00
				TFCR	送信FIFOコントロールレジスタ	0x84A	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFF
				TFPCR	送信FIFOポインタコントロールレジスタ	0x84B	8	書き込み専用	0x00	0x00
				EIER	エラー割り込みイネーブルレジスタ	0x84C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				EIFR	エラー割り込み要因判定レジスタ	0x84D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				RECR	受信エラーカウントレジスタ	0x84E	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				TECR	送信エラーカウントレジスタ	0x84F	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				ECSR	エラーコード格納レジスタ	0x850	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CSSR	チャネルサーチサポートレジスタ	0x851	8	読み出し／書き込み	0x00	0x00

表 3.4 レジスタの説明 (10/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
CAN0	—	—	—	MSSR	メールボックスサーチステータスレジスタ	0x852	8	読み出し専用	0x80	0xFF
				MSMR	メールボックスサーチモードレジスタ	0x853	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				TSR	タイムスタンプレジスタ	0x854	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				AFSR	アクセプタンスフィルタサポートレジスタ	0x856	16	読み出し／書き込み	0x0000	0x0000
				TCR	テストコントロールレジスタ	0x858	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
IIC0	—	—	—	ICCR1	I²Cバスコントロールレジスタ1	0x00	8	読み出し／書き込み	0x1F	0xFF
				ICCR2	I²Cバスコントロールレジスタ2	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICMR1	I²Cバスモードレジスタ1	0x02	8	読み出し／書き込み	0x08	0xFF
				ICMR2	I²Cバスモードレジスタ2	0x03	8	読み出し／書き込み	0x06	0xFF
				ICMR3	I²Cバスモードレジスタ3	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICFER	I²Cバスファンクションイネーブルレジスタ	0x05	8	読み出し／書き込み	0x72	0xFF
				ICSER	I²Cバスステータスイネーブルレジスタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0x09	0xFF
				ICIER	I²Cバス割り込みイネーブルレジスタ	0x07	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICSR1	I²Cバスステータスレジスタ1	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICSR2	I²Cバスステータスレジスタ2	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	3	0x2	0-2	SARL%s	スレーブアドレスレジスタL%s	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	3	0x2	0-2	SARU%s	スレーブアドレスレジスタU%s	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	—	—	—	ICBRL	I²CバスビットレートLowレジスタ	0x10	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				ICBRH	I²CバスビットレートHighレジスタ	0x11	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				ICDRT	I²Cバス送信データレジスタ	0x12	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				ICDRR	I²Cバス受信データレジスタ	0x13	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				ICWUR	I²Cバスウェイクアップユニットレジスタ	0x16	8	読み出し／書き込み	0x10	0xFF
				ICWUR2	I²Cバスウェイクアップユニットレジスタ2	0x17	8	読み出し／書き込み	0xFD	0xFF
IIC1	—	—	—	ICCR1	I²Cバスコントロールレジスタ1	0x00	8	読み出し／書き込み	0x1F	0xFF
				ICCR2	I²Cバスコントロールレジスタ2	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICMR1	I²Cバスモードレジスタ1	0x02	8	読み出し／書き込み	0x08	0xFF
				ICMR2	I²Cバスモードレジスタ2	0x03	8	読み出し／書き込み	0x06	0xFF
				ICMR3	I²Cバスモードレジスタ3	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICFER	I²Cバスファンクションイネーブルレジスタ	0x05	8	読み出し／書き込み	0x72	0xFF
				ICSER	I²Cバスステータスイネーブルレジスタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0x09	0xFF
				ICIER	I²Cバス割り込みイネーブルレジスタ	0x07	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICSR1	I²Cバスステータスレジスタ1	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ICSR2	I²Cバスステータスレジスタ2	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	3	0x2	0-2	SARL%s	スレーブアドレスレジスタL%s	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	3	0x2	0-2	SARU%s	スレーブアドレスレジスタU%s	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF

表 3.4　　レジスタの説明 (11/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
IIC1	—	—	—	ICBRL	I²Cバスビットレート Low レジスタ	0x10	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				ICBRH	I²Cバスビットレート High レジスタ	0x11	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				ICDRT	I²Cバス送信データレジスタ	0x12	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				ICDRR	I²Cバス受信データレジスタ	0x13	8	読み出し専用	0x00	0xFF
DOC	—	—	—	DOCR	DOCコントロールレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DODIR	DOCデータインプットレジスタ	0x02	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DODSR	DOCデータ設定レジスタ	0x04	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
ADC140	—	—	—	ADCSR	A/Dコントロールレジスタ	0x000	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADANSA0	A/Dチャネル選択レジスタ A0	0x004	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADANSA1	A/Dチャネル選択レジスタ A1	0x006	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADADS0	A/D変換値加算／平均チャネル選択レジスタ0	0x008	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADADS1	A/D変換値加算／平均チャネル選択レジスタ1	0x00A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADADC	A/D変換値加算／平均回数選択レジスタ	0x00C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADCER	A/Dコントロール拡張レジスタ	0x00E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADSTRGR	A/D変換開始トリガ選択レジスタ	0x010	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADEXICR	A/D変換拡張入力コントロールレジスタ	0x012	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADANSB0	A/Dチャネル選択レジスタ B0	0x014	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADANSB1	A/Dチャネル選択レジスタ B1	0x016	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADDBLDR	A/Dデータ2重化レジスタ	0x018	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				ADTSDR	A/D温度センサデータレジスタ	0x01A	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				ADOCDR	A/D内部基準電圧データレジスタ	0x01C	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				ADRD	A/D自己診断データレジスタ	0x01E	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
	28	0x2	0-27	ADDR%s	A/Dデータレジスタ %s	0x020	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
	—	—	—	ADDISCR	A/D断線検出コントロールレジスタ	0x07A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADGSPCR	A/Dグループスキャン優先コントロールレジスタ	0x080	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADDBLDRA	A/Dデータ2重化レジスタ A	0x084	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				ADDBLDRB	A/Dデータ2重化レジスタ B	0x086	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				ADHVREFCNT	A/D高電位／低電位基準電圧コントロールレジスタ	0x08A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADWINMON	A/Dコンペア機能ウィンドウA/Bステータスモニタレジスタ	0x08C	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				ADCMPCR	A/Dコンペア機能コントロールレジスタ	0x090	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPANSER	A/Dコンペア機能ウィンドウA拡張入力選択レジスタ	0x092	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADCMPLER	A/Dコンペア機能ウィンドウA拡張入力比較条件設定レジスタ	0x093	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADCMPANSR0	A/Dコンペア機能ウィンドウAチャネル選択レジスタ0	0x094	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPANSR1	A/Dコンペア機能ウィンドウAチャネル選択レジスタ1	0x096	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (12/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
ADC140	—	—	—	ADCMPLR0	A/Dコンペア機能ウィンドウA比較条件設定レジスタ0	0x098	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPLR1	A/Dコンペア機能ウィンドウA比較条件設定レジスタ1	0x09A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPDR0	A/Dコンペア機能ウィンドウA下側レベル設定レジスタ	0x09C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPDR1	A/Dコンペア機能ウィンドウA上側レベル設定レジスタ	0x09E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPSR0	A/Dコンペア機能ウィンドウAチャネルステータスレジスタ0	0x0A0	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPSR1	A/Dコンペア機能ウィンドウAチャネルステータスレジスタ1	0x0A2	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPSER	A/Dコンペア機能ウィンドウA拡張入力チャネルステータスレジスタ	0x0A4	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADCMPBNSR	A/Dコンペア機能ウィンドウBチャネルステータスレジスタ	0x0A6	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADWINLLB	A/Dコンペア機能ウィンドウB下側レベル設定レジスタ	0x0A8	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADWINULB	A/Dコンペア機能ウィンドウB上側レベル設定レジスタ	0x0AA	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				ADCMPBSR	A/Dコンペア機能ウィンドウBステータスレジスタ	0x0AC	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				ADSSTRL	A/Dサンプリングステートレジスタ L	0x0DD	8	読み出し／書き込み	0x0D	0xFF
				ADSSTRT	A/Dサンプリングステートレジスタ T	0x0DE	8	読み出し／書き込み	0x0D	0xFF
				ADSSTRO	A/Dサンプリングステートレジスタ O	0x0DF	8	読み出し／書き込み	0x0D	0xFF
	5	0x1	4-6, 9, 10	ADSSTR%s	A/Dサンプリングステートレジスタ %s	0x0E0	8	読み出し／書き込み	0x0D	0xFF
DAC12	—	—	—	DADR0	D/Aデータレジスタ0	0x00	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DACR	D/Aコントロールレジスタ	0x04	8	読み出し／書き込み	0x1F	0xFF
				DADPR	DADR0フォーマット選択レジスタ	0x05	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DAADSCR	D/A A/D同期スタートコントロールレジスタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				DAVREFCR	D/A VREFコントロールレジスタ	0x07	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
SCI0,1	—	—	—	SMR	非スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SCMR.SMIF = 0）	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SMR_SMCI	スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SCMR.SMIF = 1）	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				BRR	ビットレートレジスタ	0x01	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				SCR	非スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCMR.SMIF = 0）	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SCR_SMCI	スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCMR.SMIF = 1）	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				TDR	送信データレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				SSR	非スマートカードインタフェースおよび非FIFOモード用シリアルステータスレジスタ(SCMR.SMIF = 0およびFCR.FM = 0)	0x04	8	読み出し／書き込み	0x84	0xFF

表 3.4　レジスタの説明 (13/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
SCI0,1	—	—	—	SSR_FIFO	非スマートカードインタフェースおよびFIFOモード用シリアルステータスレジスタ(SCMR.SMIF = 0およびFCR.FM = 1)	0x04	8	読み出し／書き込み	0x80	0xFD
				SSR_SMCI	スマートカードインタフェースモード用シリアルステータスレジスタ（SCMR.SMIF = 1）	0x04	8	読み出し／書き込み	0x84	0xFF
				RDR	受信データレジスタ	0x05	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				SCMR	スマートカードモードレジスタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0xF2	0xFF
				SEMR	シリアル拡張モードレジスタ	0x07	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SNFR	ノイズフィルタ設定レジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SIMR1	I²Cモードレジスタ1	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SIMR2	I²Cモードレジスタ2	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SIMR3	I²Cモードレジスタ3	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SISR	I²Cステータスレジスタ	0x0C	8	読み出し専用	0x00	0xCB
				SPMR	SPIモードレジスタ	0x0D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				TDRHL	送信9ビットデータレジスタ	0x0E	16	読み出し／書き込み	0xFFFF	0xFFFF
				FTDRHL	送信FIFOデータレジスタHL	0x0E	16	書き込み専用	0xFFFF	0xFFFF
				FTDRH	送信FIFOデータレジスタH	0x0E	8	書き込み専用	0xFF	0xFF
				FTDRL	送信FIFOデータレジスタL	0x0F	8	書き込み専用	0xFF	0xFF
				RDRHL	受信9ビットデータレジスタ	0x10	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				FRDRHL	受信FIFOデータレジスタHL	0x10	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				FRDRH	受信FIFOデータレジスタH	0x10	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				FRDRL	受信FIFOデータレジスタL	0x11	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				MDDR	モジュレーションデューティレジスタ	0x12	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				DCCR	データコンペアマッチコントロールレジスタ	0x13	8	読み出し／書き込み	0x40	0xFF
				FCR	FIFOコントロールレジスタ	0x14	16	読み出し／書き込み	0xF800	0xFFFF
				FDR	FIFOデータ数レジスタ	0x16	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				LSR	ラインステータスレジスタ	0x18	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				CDR	コンペアマッチデータレジスタ	0x1A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SPTR	シリアルポートレジスタ	0x1C	8	読み出し／書き込み	0x03	0xFF
SCI4,9	—	—	—	SMR	非スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SCMR.SMIF = 0）	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SMR_SMCI	スマートカードインタフェースモード用シリアルモードレジスタ（SCMR.SMIF = 1）	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				BRR	ビットレートレジスタ	0x01	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				SCR	非スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCMR.SMIF = 0）	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF

表 3.4　　レジスタの説明 (14/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
SCI4,9	—	—	—	SCR_SMCI	スマートカードインタフェースモード用シリアルコントロールレジスタ（SCMR.SMIF = 1）	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				TDR	送信データレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				SSR	非スマートカードインタフェースおよび非FIFOモード用シリアルステータスレジスタ(SCMR.SMIF = 0およびFCR.FM = 0)	0x04	8	読み出し／書き込み	0x84	0xFF
				SSR_SMCI	スマートカードインタフェースモード用シリアルステータスレジスタ	0x04	8	読み出し／書き込み	0x84	0xFF
				RDR	受信データレジスタ	0x05	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				SCMR	スマートカードモードレジスタ	0x06	8	読み出し／書き込み	0xF2	0xFF
				SEMR	シリアル拡張モードレジスタ	0x07	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SNFR	ノイズフィルタ設定レジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SIMR1	I^2Cモードレジスタ1	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SIMR2	I^2Cモードレジスタ2	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SIMR3	I^2Cモードレジスタ3	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SISR	I^2Cステータスレジスタ	0x0C	8	読み出し専用	0x00	0xCB
				SPMR	SPIモードレジスタ	0x0D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				TDRHL	送信9ビットデータレジスタ	0x0E	16	読み出し／書き込み	0xFFFF	0xFFFF
				RDRHL	受信9ビットデータレジスタ	0x10	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				MDDR	モジュレーションデューティレジスタ	0x12	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				DCCR	データコンペアマッチコントロールレジスタ	0x13	8	読み出し／書き込み	0x40	0xFF
				CDR	コンペアマッチデータレジスタ	0x1A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SPTR	シリアルポートレジスタ	0x1C	8	読み出し／書き込み	0x03	0xFF
SPI0	—	—	—	SPCR	SPIコントロールレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SSLP	SPIスレーブ選択極性レジスタ	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPPCR	SPI端子コントロールレジスタ	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPSR	SPIステータスレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0x20	0xFF
				SPDR	SPIデータレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				SPDR_HA	SPIデータレジスタ（ハーフワードアクセス）	0x04	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SPSCR	SPIシーケンスコントロールレジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPSSR	SPIシーケンスステータスレジスタ	0x09	8	読み出し専用	0x00	0xFF
				SPBR	SPIビットレートレジスタ	0x0A	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				SPDCR	SPIデータコントロールレジスタ	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPCKD	SPIクロック遅延レジスタ	0x0C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SSLND	SPIスレーブ選択ネゲート遅延レジスタ	0x0D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPND	SPI次アクセス遅延レジスタ	0x0E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF

表 3.4 レジスタの説明 (15/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
SPI0	—	—	—	SPCR2	SPIコントロールレジスタ2	0x0F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	8	0x2	0-7	SPCMD%s	SPIコマンドレジスタ%s	0x10	16	読み出し／書き込み	0x070D	0xFFFF
SPI1	—	—	—	SPCR	SPIコントロールレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SSLP	SPIスレーブ選択極性レジスタ	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPPCR	SPI端子コントロールレジスタ	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPSR	SPIステータスレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0x20	0xFF
				SPDR	SPIデータレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				SPDR_HA	SPIデータレジスタ（ハーフワードアクセス）	0x04	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SPBR	SPIビットレートレジスタ	0x0A	8	読み出し／書き込み	0xFF	0xFF
				SPDCR	SPIデータコントロールレジスタ	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPCKD	SPIクロック遅延レジスタ	0x0C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SSLND	SPIスレーブ選択ネゲート遅延レジスタ	0x0D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPND	SPI次アクセス遅延レジスタ	0x0E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPCR2	SPIコントロールレジスタ2	0x0F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				SPCMD0	SPIコマンドレジスタ0	0x10	16	読み出し／書き込み	0x070D	0xFFFF
CRC	—	—	—	CRCCR0	CRCコントロールレジスタ0	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CRCCR1	CRCコントロールレジスタ1	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CRCDIR	CRCデータ入力レジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				CRCDIR_BY	CRCデータ入力レジスタ（バイトアクセス）	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CRCDOR	CRCデータ出力レジスタ	0x08	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				CRCDOR_HA	CRCデータ出力レジスタ（ハーフワードアクセス）	0x08	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CRCDOR_BY	CRCデータ出力レジスタ（バイトアクセス）	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CRCSAR	スヌープアドレスレジスタ	0x0C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
GPT320-3	—	—	—	GTWP	汎用PWMタイマ書き込み保護レジスタ	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTSTR	汎用PWMタイマソフトウェアスタートレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTSTP	汎用PWMタイマソフトウェアストップレジスタ	0x08	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCLR	汎用PWMタイマソフトウェアクリアレジスタ	0x0C	32	書き込み専用	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTSSR	汎用PWMタイマスタート要因選択レジスタ	0x10	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTPSR	汎用PWMタイマストップ要因選択レジスタ	0x14	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTCSR	汎用PWMタイマクリア要因選択レジスタ	0x18	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTUPSR	汎用PWMタイマアップカウント要因選択レジスタ	0x1C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTDNSR	汎用PWMタイマダウンカウント要因選択レジスタ	0x20	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTICASR	汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタA	0x24	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTICBSR	汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタB	0x28	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (16/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
GPT320-3	—	—	—	GTCR	汎用PWMタイマコントロールレジスタ	0x2C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTUDDTYC	汎用PWMタイマカウント方向、デューティ設定レジスタ	0x30	32	読み出し／書き込み	0x00000001	0xFFFFFFFF
				GTIOR	汎用PWMタイマI/Oコントロールレジスタ	0x34	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTINTAD	汎用PWMタイマ割り込み出力設定レジスタ	0x38	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTST	汎用PWMタイマステータスレジスタ	0x3C	32	読み出し／書き込み	0x00008000	0xFFFFFFFF
				GTBER	汎用PWMタイマバッファイネーブルレジスタ	0x40	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTCNT	汎用PWMタイマカウンタ	0x48	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTCCRA	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタA	0x4C	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRB	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタB	0x50	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRC	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタC	0x54	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRE	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタE	0x58	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRD	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタD	0x5C	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRF	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタF	0x60	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTPR	汎用PWMタイマ周期設定レジスタ	0x64	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTPBR	汎用PWMタイマ周期設定バッファレジスタ	0x68	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTDTCR	汎用PWMタイマデッドタイムコントロールレジスタ	0x88	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTDVU	汎用PWMタイマデッドタイム値レジスタU	0x8C	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
GPT164, 5, 8	—	—	—	GTWP	汎用PWMタイマ書き込み保護レジスタ	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTSTR	汎用PWMタイマソフトウェアスタートレジスタ	0x04	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTSTP	汎用PWMタイマソフトウェアストップレジスタ	0x08	32	読み出し／書き込み	0xFFFFFFFF	0xFFFFFFFF
				GTCLR	汎用PWMタイマソフトウェアクリアレジスタ	0x0C	32	書き込み専用	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTSSR	汎用PWMタイマスタート要因選択レジスタ	0x10	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTPSR	汎用PWMタイマストップ要因選択レジスタ	0x14	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTCSR	汎用PWMタイマクリア要因選択レジスタ	0x18	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTUPSR	汎用PWMタイマアップカウント要因選択レジスタ	0x1C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTDNSR	汎用PWMタイマダウンカウント要因選択レジスタ	0x20	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTICASR	汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタA	0x24	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTICBSR	汎用PWMタイマインプットキャプチャ要因選択レジスタB	0x28	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTCR	汎用PWMタイマコントロールレジスタ	0x2C	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTUDDTYC	汎用PWMタイマカウント方向、デューティ設定レジスタ	0x30	32	読み出し／書き込み	0x00000001	0xFFFFFFFF
				GTIOR	汎用PWMタイマI/Oコントロールレジスタ	0x34	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTINTAD	汎用PWMタイマ割り込み出力設定レジスタ	0x38	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTST	汎用PWMタイマステータスレジスタ	0x3C	32	読み出し／書き込み	0x00008000	0xFFFFFFFF
				GTBER	汎用PWMタイマバッファイネーブルレジスタ	0x40	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (17/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
GPT164, 5, 8	—	—	—	GTCNT	汎用PWMタイマカウンタ	0x48	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTCCRA	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタA	0x4C	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRB	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタB	0x50	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRC	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタC	0x54	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRE	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタE	0x58	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRD	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタD	0x5C	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTCCRF	汎用PWMタイマコンペアキャプチャレジスタF	0x60	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTPR	汎用PWMタイマ周期設定レジスタ	0x64	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTPBR	汎用PWMタイマ周期設定バッファレジスタ	0x68	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
				GTDTCR	汎用PWMタイマデッドタイムコントロールレジスタ	0x88	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
				GTDVU	汎用PWMタイマデッドタイム値レジスタU	0x8C	32	読み出し／書き込み	0x0000FFFF	0xFFFFFFFF
GPT_OPS	—	—	—	OPSCR	出力相切り替えコントロールレジスタ	0x00	32	読み出し／書き込み	0x00000000	0xFFFFFFFF
KINT	—	—	—	KRCTL	キーリターンコントロールレジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				KRF	キーリターンフラグレジスタ	0x04	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				KRM	キーリターンモードレジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
CTSU	—	—	—	CTSUCR0	CTSUコントロールレジスタ0	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCR1	CTSUコントロールレジスタ1	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUSDPRS	CTSU同期ノイズ低減設定レジスタ	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUSST	CTSUセンサ安定待ち時間コントロールレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUMCH0	CTSU計測チャネルレジスタ0	0x04	8	読み出し／書き込み	0x3F	0xFF
				CTSUMCH1	CTSU計測チャネルレジスタ1	0x05	8	読み出し／書き込み	0x3F	0xFF
				CTSUCHAC0	CTSUチャネルイネーブルコントロールレジスタ0	0x06	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHAC1	CTSUチャネルイネーブルコントロールレジスタ1	0x07	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHAC2	CTSUチャネルイネーブルコントロールレジスタ2	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHAC3	CTSUチャネルイネーブルコントロールレジスタ3	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHAC4	CTSUチャネルイネーブルコントロールレジスタ4	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHTRC0	CTSUチャネル送受信コントロールレジスタ0	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHTRC1	CTSUチャネル送受信コントロールレジスタ1	0x0C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHTRC2	CTSUチャネル送受信コントロールレジスタ3	0x0D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHTRC3	CTSUチャネル送受信コントロールレジスタ3	0x0E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUCHTRC4	CTSUチャネル送受信コントロールレジスタ4	0x0F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUDCLKC	CTSU高域ノイズ低減コントロールレジスタ	0x10	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUST	CTSUステータスレジスタ	0x11	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CTSUSSC	CTSU高域ノイズ低減スペクトラム拡散コントロールレジスタ	0x12	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (18/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
CTSU	—	—	—	CTSUSO0	CTSUセンサオフセットレジスタ0	0x14	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CTSUSO1	CTSUセンサオフセットレジスタ1	0x16	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CTSUSC	CTSUセンサカウンタ	0x18	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				CTSURC	CTSUリファレンスカウンタ	0x1A	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
				CTSUERRS	CTSUエラーステータスレジスタ	0x1C	16	読み出し専用	0x0000	0xFFFF
SLCDC	—	—	—	LCDM0	LCDモードレジスタ0	0x000	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				LCDM1	LCDモードレジスタ1	0x001	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				LCDC0	LCDクロックコントロールレジスタ0	0x002	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	9	0x1	6, 9, 11, 12, 20, 23, 49, 52, 53	SEG%s	LCD表示データレジスタ%s	0x100	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
AGT0,1	—	—	—	AGT	AGTカウンタレジスタ	0x00	16	読み出し／書き込み	0xFFFF	0xFFFF
				AGTCMA	AGTコンペアマッチAレジスタ	0x02	16	読み出し／書き込み	0xFFFF	0xFFFF
				AGTCMB	AGTコンペアマッチBレジスタ	0x04	16	読み出し／書き込み	0xFFFF	0xFFFF
				AGTCR	AGTコントロールレジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AGTMR1	AGTモードレジスタ1	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AGTMR2	AGTモードレジスタ2	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AGTIOC	AGT I/Oコントロールレジスタ	0x0C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AGTISR	AGTイベント端子選択レジスタ	0x0D	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AGTCMSR	AGTコンペアマッチ機能選択レジスタ	0x0E	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AGTIOSEL	AGT端子選択レジスタ	0x0F	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
ACMPLP	—	—	—	COMPMDR	ACMPLPモード設定レジスタ	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				COMPFIR	ACMPLPフィルタコントロールレジスタ	0x01	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				COMPOCR	ACMPLP出力コントロールレジスタ	0x02	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				COMPSEL0	コンパレータ入力選択レジスタ	0x04	8	読み出し／書き込み	0x11	0xFF
				COMPSEL1	コンパレータ基準電圧選択レジスタ	0x05	8	読み出し／書き込み	0x91	0xFF
OPAMP	—	—	—	AMPMC	オペアンプモードコントロールレジスタ	0x08	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AMPTRM	オペアンプトリガモードコントロールレジスタ	0x09	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AMPTRS	オペアンプ起動トリガ選択レジスタ	0x0A	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AMPC	オペアンプコントロールレジスタ	0x0B	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				AMPMON	オペアンプモニタレジスタ	0x0C	8	読み出し専用	0x00	0xFF

表 3.4 レジスタの説明 (19/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
USBFS	—	—	—	SYSCFG	システムコンフィグレーションコントロールレジスタ	0x000	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SYSSTS0	システムコンフィグレーションステータスレジスタ0	0x004	16	読み出し専用	0x0000	0x0000
				DVSTCTR0	デバイスステートコントロールレジスタ0	0x008	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CFIFO	CFIFOポートレジスタ	0x014	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CFIFOL	CFIFOポートレジスタL	0x014	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				D0FIFO	D0FIFOポートレジスタ	0x018	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				D0FIFOL	D0FIFOポートレジスタL	0x018	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				D1FIFO	D1FIFOポートレジスタ	0x01C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				D1FIFOL	D1FIFOポートレジスタL	0x01C	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
				CFIFOSEL	CFIFOポート選択レジスタ	0x020	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				CFIFOCTR	CFIFOポートコントロールレジスタ	0x022	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				D0FIFOSEL	D0FIFOポート選択レジスタ	0x028	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				D0FIFOCTR	D0FIFOポートコントロールレジスタ	0x02A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				D1FIFOSEL	D1FIFOポート選択レジスタ	0x02C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				D1FIFOCTR	D1FIFOポートコントロールレジスタ	0x02E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				INTENB0	割り込みイネーブルレジスタ0	0x030	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				INTENB1	割り込みイネーブルレジスタ1	0x032	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				BRDYENB	BRDY割り込みイネーブルレジスタ	0x036	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				NRDYENB	NRDY割り込みイネーブルレジスタ	0x038	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				BEMPENB	BEMP割り込みイネーブルレジスタ	0x03A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				SOFCFG	SOF出力コンフィグレーションレジスタ	0x03C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				INTSTS0	割り込みステータスレジスタ0	0x040	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFF7F
				INTSTS1	割り込みステータスレジスタ1	0x042	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				BRDYSTS	BRDY割り込みステータスレジスタ	0x046	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				NRDYSTS	NRDY割り込みステータスレジスタ	0x048	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				BEMPSTS	BEMP割り込みステータスレジスタ	0x04A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				FRMNUM	フレームナンバレジスタ	0x04C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				USBREQ	USBリクエストタイプレジスタ	0x054	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				USBVAL	USBリクエストバリューレジスタ	0x056	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				USBINDX	USBリクエストインデックスレジスタ	0x058	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				USBLENG	USBリクエストレングスレジスタ	0x05A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DCPCFG	DCPコンフィグレーションレジスタ	0x05C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				DCPMAXP	DCPマックスパケットサイズレジスタ	0x05E	16	読み出し／書き込み	0x0040	0xFFFF
				DCPCTR	DCPコントロールレジスタ	0x060	16	読み出し／書き込み	0x0040	0xFFFF
				PIPESEL	パイプウィンドウ選択レジスタ	0x064	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF

表 3.4 レジスタの説明 (20/20)

周辺機能	Dim	Dim incr.	Dim index	レジスタ名	説明	アドレスオフセット	サイズ	アクセス	リセット値	リセットマスク
USBFS	—	—	—	PIPECFG	パイプコンフィグレーションレジスタ	0x068	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				PIPEMAXP	パイプマックスパケットサイズレジスタ	0x06C	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFBF
				PIPEPERI	パイプ周期コントロールレジスタ	0x06E	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	5	0x002	1-5	PIPE%sCTR	パイプ%sコントロールレジスタ	0x070	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	4	0x002	6-9	PIPE%sCTR	パイプ%sコントロールレジスタ	0x07A	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	5	0x004	1-5	PIPE%sTRE	パイプ%s トランザクションカウンタイネーブルレジスタ	0x090	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	5	0x004	1-5	PIPE%sTRN	パイプ%s トランザクションカウンタレジスタ	0x092	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
	—	—	—	USBBCCTRL0	BCコントロールレジスタ0	0x0B0	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
				USBMC	USBモジュールコントロールレジスタ	0x0CC	16	読み出し／書き込み	0x0002	0xFFFF
	6	0x002	0-5	DEVADD%s	デバイスアドレス%sコンフィグレーションレジスタ	0x0D0	16	読み出し／書き込み	0x0000	0xFFFF
DAC8	2	0x01	0,1	DACS%s	D/A変換値設定レジスタ%s	0x00	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
	—	—	—	DAM	D/Aコンバータモードレジスタ	0x03	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
FLCN	—	—	—	DFLCTL	データフラッシュコントロールレジスタ	0x90	8	読み出し／書き込み	0x00	0xFF
TSN	—	—	—	TSCDRH	温度センサ補正データレジスタH	0x228	8	読み出し専用	0x00	0x00
				TSCDRL	温度センサ補正データレジスタL	0x229	8	読み出し専用	0x00	0x00

周辺機能名 = 周辺機能の名称
Dim = レジスタ配列の要素数
Dim inc = アドレスマップにおいてアドレス配列の 2 つの隣接するレジスタ間のアドレスインクリメント
Dim index = レジスタ名においてプレースホルダー「%s」を置き換えるサブストリング
レジスタ名 = レジスタの名称
説明 = レジスタの説明
アドレスオフセット = レジスタの周辺機能により定義されるベースアドレスに関連するレジスタアドレス
サイズ = レジスタのビット幅
アクセス = レジスタアクセス権：

- 読み出し専用：読み出しのみ可能。書き込みを行うと結果は不定です
- 書き込み専用：書き込みのみ可能。読み出しを行うと結果は不定です
- 読み出し／書き込み：読み出し、書き込みともに可能。書き込みを行うとレジスタの状態に影響を与え、読み出しを行うとレジスタに関連する値が返されます

リセット値 = レジスタのデフォルトリセット値
リセットマスク = レジスタのどのビットにリセット値が定義されているのかを特定します。

改訂記録	RA4W1 グループユーザーズマニュアル　ハードウェア編

Rev.	発行日	章	改訂内容
1.00	2020.08.31	—	初版発行

RA4W1グループ ユーザーズマニュアル　ハードウェア編

発行年月日　2020年8月31日　Rev.1.00

発行　　ルネサスエレクトロニクス株式会社
〒135-0061 東京都江東区豊洲3-2-24（豊洲フォレシア）

ルネサス エレクトロニクス株式会社

■営業お問合せ窓口

http://www.renesas.com

※営業お問合せ窓口の住所は変更になることがあります。最新情報につきましては、弊社ホームページをご覧ください。

ルネサス エレクトロニクス株式会社 〒135-0061 東京都江東区豊洲3-2-24（豊洲フォレシア）

■技術的なお問合せおよび資料のご請求は下記へどうぞ。
総合お問合せ窓口：https://www.renesas.com/contact/

© 2020 Renesas Electronics Corporation. All rights reserved.
Colophon 3.1

RA4W1 グループ

ルネサス エレクトロニクス株式会社

R01UH0883JJ0100